
魔法少女リリカルなのは?十字架を背負いし神意の執行者

Last testament

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは？十字架を背負いし神意の執行者

【Nコード】

N0049J

【作者名】

Last testament

【あらすじ】

其は本来出会うことが奇跡とされる最高位の抑止力。

其の力は神に等しきもの、其の力は悪魔の如きもの。

世界の意思がその力を必要とする時、遙かに貴き至高の座より、究極の幻想がその地へと舞い降りる。

ANSURについて（前書き）

- 2月26日、絶対殲滅対象“ペッカートウム”追加
- 3月26日、絶対殲滅対象メンバーの名称追加
- 5月15日、シャルシルの魔術の一部を追加。
- 8月20日、いろいろと追加
- 1月29日、ラスト更新
- 2月25日、のつもりでしたが、ハコにわ生徒会！で使用した術式も追加していこうかと。シャルシルの魔術を追加。
- 3月18日、魔術一覧を別話へ移動。

A N S U Rについて

A N S U R アンスール

シャル「超絶美少女シャルちゃんと」

ルシル「普通の男ルシルの」

シャル「A N S U Rにつ・い・て？・・・っておい。

ちゃんと合わせてよルシル。私一人だけで言っちゃったじゃない
て言うか、あなたのどこが普通？ あなたが普通なら、他の男は何
ていうの？」

ルシル「ふざけるな。？付きのセリフなぞ言えるか。

それに普通と言って何が悪い。当たり前障りのないいい言葉じゃない
か、普通」

シャル「はあ~~~~、ノリ悪いなあ。ま、いいや。

さて、今からお送りするのは、私とルシルのオリジナルストーリー
A N S U Rに関する設定です」

ルシル「私と君の、の方が正しいんだがまあいい。

十字架をく的主人公は、A N S U Rの主人公である私をさしおいて
の君なんだから。

それで？ まずはキャラ設定から行くのか？」

シャル「もち！ まずは主人公の私からだよ。というわけで、ルシ
ルが私を紹介して。私がルシルを紹介するから」

ルシル「嫌な予感しかしないが、そう言うなら任された。つとその前に、ここから先はネタばかりだ。初めての方は読まずに第一話の方へ行つてほしい」

シャル「そうだね。初めての方は飛ばしてくださいな」

ルシル「というわけで、先へ行こうか。」

彼女の名は“3rd・テストメント・シャルロツテ・フライハイト”
生前はシャルロツテ・フライハイト。
転生後はイリス・ド・シャルロツテ・フライハイト。

外見に関しては生前も転生後も変わらない。

正しく生まれ変わりと言う感じだ。

髪の色はアクアブルーで脛脛まで流れる艶やかなロングストレート。
瞳の色はアザレアピンク。

生前の身長は165だったか。体重は知らない。

それと、上から83、55、8よ げふっ!？」

シャル「アホかああー!」

なに乙女のスリーサイズを堂々と紹介してんのよ! バカじゃないの!??っていうかバカじゃないの!??」

ルシル「ごふっ、紹介しろって言うからしたのに、腹にヤクザキックとはあんまりじゃないか」

シャル「誰がそこまで言えつつた!?! もういいから、次行つて、次!」

ルシル「ふう、“剣戟の極致に至りし者”の二つ名を持ち、界律の

守護神の中でも近接最強とされる“力”だ。
主な契約は、世界の敵となる存在の完全抹消、つまりは殺戮がほとんどだな」

シャル「そうそう、そういう感じでいいの」

ルシル「生前は複合世界ミッドガルドを構成する世界のひとつレーベンヴェルトに本拠地を構える秩序管理組織左翼“天光騎士団”に所属する騎士であり、フライハイト侯爵家の次女。

四千人近い騎士の中でも、最高位の實力を有するとして選ばれた十人の騎士である星騎士（シュテルン・リッター）の第五騎士（フンフト・リッター）の階級を持つ。

当時の二つ名は剣神、閃剣の騎士などがある」

シャル「やればできるじゃん」

ルシル「期待に添えられているのならいいんだが……。

次は君の武装でも紹介しようか。まずは、

神器・魔造兵装第九位“断刀キルシュブリューテ”

刃物には少なくとも“斬る”、“刺す”といった概念があるんだが、その概念を限界まで高めてあるのが「桜」という意味を持つこの“キルシュブリューテ”だ。

その能力を解放すれば、“キルシュブリューテ”の神秘以下の存在は全て切断することが出来る。

私の最強の防性術式・多層甲冑すらも切断し、私の左腕を斬り落としたという話もあった」

シャル「あゝ、でも次の日には何事もなかったようにくっ付いたよね」

ルシル「コード・エイルとシェフィのおかげだ。

彼女の手伝いが無ければ隻腕の魔術師となっていたところだ。

さて、次は、

神器・概念兵装“祝福の証ゼーゲン”

これは、フライハイト侯爵家に伝わる紅いナイフだそうだ。

“ゼーゲン”とは「祝福」という意味で、このナイフを持つ者は精霊の加護を受け、ある程度のダメージを無効とすることが可能となる。

その他にも自己治癒力強化などの効果もいくつかある」

シャル「治癒術式を持たない私にとっては重宝したわ」

ルシル「これまでが生前からシャルが使っている武装だ。

次に紹介するのは、界律の守護神としての武装、

サイド・テストメント
第三聖典

界律の守護神専用の武装“聖典”の一つだな。

純白を担う第三の力の座につくシャルのための葡萄十字型の錫杖だ」

シャル「形状からして、頭の方を握って剣として扱う方が多いかなあ」

ルシル「そんな使い方をするのは守護神の中では君だけだぞ。

まあ好きに使っていいのだから何も文句は無いんだが。

次は、彼女の身を守る、戦闘甲冑だな。

白を基調としたノースリーブのハイネックのロングコート。

喉元を覆う部分から腹部の辺りまでは鍵穴のついた金具で止められている。

縁取りに鮮やかな銀の刺繍が刻まれている。

背には天光騎士団の紋章（鳥が羽を広げた姿）が刺繍されている。

インナーは水色を基調とした袖つきの厚手のロングワンピース。

アウターは前立てのない白いショートジャケット（ボレロ）。蒼い装飾が施されている。

両肩部分、背中部分にフライハイト家の紋章（Fの両側に翼竜）が刺繍されている。

両手には白い籠手を装着。脚部は編み上げのロングブーツに、白い装甲が装着されている」

シャル「なんか事務的ね。まあキャピキャピされるよかマシだけど」

“ルシル”「こつちから願ひ下げだ。次は、次元世界で手にした新たな力、デバイスの紹介だな。

アームドデバイス“トロイメライ”

この世界でのシャルの愛機である“夢想”という意味を持つ蒼い刀身の長刀型アームドデバイス。

機能構想はシャル。開発はマリエル技官だ。

ヴィータのグラーファイゼンと同じ回転シリンダー方式のカートリッジシステムで、鏢部分に設けられている。

装填数は六発。排気口は刀身の付け根に設置されている。

形態は待機、長刀、回転剣、双剣の四つ。

待機フォルムは第三聖典を模した蒼い葡萄十字の指輪。

シユベルトフォルムが基本形態。断刀キルシユブリューテに似せた蒼い長刀。

ゼーゲフォルムは純粹破壊専用のチェーンソー状の大剣。直訳はノコギリ形態。

ツヴィリンゲフォルムは刀身を縮めたトロイメライの二刀一対の短刀。直訳は双子座形態、となっている」

シャル「でも今はなのはに渡って、アクセサリーと化しちゃってるんだけどね」

ルシル「それを望んだのは君だ。さて、そんじゃ次はいよいよルシルの紹介だねえ」

ルシル「妙な事は言わなくていいからキッチリしてくれ」

シャル「分かってるよお 分かってるよお

私達のオリジナルストーリー ANSWERの主人公の紹介よ。

現在の名前は4th・テストAMENT・ルシリオン・セインテスト・フォン・シユゼルヴァロード。

真名はルシリオン・セインテスト・アースガルド。

両親譲りの、男と言っても信じてもらえないような外見をしているね。

髪型はインタークのロングストレートで銀髪。うなじ辺りで縛っているの。

髪型と長さからしてすでに女の子っぽい」

ルシル「切ってもショートヘアの女子と時々間違われる(泣)」

シャル「泣かない泣かない(汗)。で、右目はラピスラズリ、左目がルビーレッドのオッドアイ。
身長は186cm。体重は63だったっけ？」

“天秤の狭間で揺れし者”の二つ名を持っていて、界律の守護神の中でも最強とされる“力”。
主な契約は、世界・文明の破壊、人類淘汰、文明の開拓など様々なことを任されてる。

だけど本来の守護神と違って、死んでいない内に守護神となったことでトラブルが多いの。

全く関係のない世界に事故で召喚されたり、人間の意志によって召喚されてしまうことが多々あるんだ。

ドンキー　ングとかスーパ　マリオとか、妙な世界に流れ着くことがあるね(笑)

最近は、涼宮ハ　ヒの憂鬱とか(大笑)「

ルシル「笑い事じゃねえよ(号泣)「

シャル「うわ、マジ泣き!?　一体彼女に何されてんの!?!」

ルシル「言いたくない……。はあ……よし!　死のう」

シャル「ちよっ……!」

しばらくお待ちください

シャル「少し楽しい事考えてなさい」

ルシル「あはは?あはは　あはは　あはは?」

シャル「(どうしよう、殴り過ぎた)。え、えくと、つ、続き行くね(汗)。

先天性の力、固有能力の“複製”を保有しているから、両親からは大戦を終結させる為の生体兵器として無理矢理神器や魔術などを複製させられて、兵器として調整されたみたい。

それだけでなく神の力のひとつ、ディヴァイン・ポイント“時空間の超越”によって幼少時から様々な世界に飛ばされて、私達の世界、時代にならない技術をも複製させられたの。

良い例が“銃”ね。当時は銃なんて無かったから、カノンやルシルの部隊が持つ銃には驚いた記憶があるわ」

ルシル「わあ〜い　ぶう〜んぶう〜ん・・・キキー！ドガシャ！
ピーポーピーポー。Oh！　ぶつとび爽快御臨終だぜ」

シャル「ごめん、ルシル(泣)

た、大戦時にはアースガルド同盟軍の最高戦力“アンスール”の後方支援部隊総指揮官の任に就いて、前線で戦う部隊への支援砲撃を担当していたの。

複製した数多くの神器を扱うことから“神器王”、個人の持つ火力が絶大なため“孤人戦争”と謳われることになった。

他にも移動武器庫、歩く図書館などがあるよ」

ルシル「ハッ！　僕は一体何をしていたんだ！？」

というかわシは誰じゃ！？　む？　その美しい女子よ、俺様の妃とな　ぐほお！？」

シャル「ごめんねえ、ルシル。少し寝てて。

大戦の8年後に起きた墮天使戦争においてアンスールは全滅、瀕死のダメージを負ったルシル自身も不死と不治の呪いをかけられて、

人間としての生活を絶たれた。

使い魔“フェンリル”によって肉体を回収されてグラスヘイムに封印される。

“墮天使”を殲滅するしか呪いを解く方法がないから、神意の玉座からの取引に応じて界律テスタメントの守護神となるの”

ルシル「うーん、私は一体どうしたと・・・？」

なんでこんなに身体中が痛いんだ？ シャル、私に何かしたか？」

シャル「さあ？（言えない。言えないよ）」

ほら、文字数限界の前にサクッと終わらせるよ。

次はルシルの扱う武装を紹介するよ。

神器・神造兵装第一位“神槍グングニル”

“揺れ動くもの”っていう意味を持つ、投擲すれば必ず対象に当てることが出来る必中必殺の槍。

20cm程度の柄の上下に1m近いクリスタルのような穂が付いた大槍よ”

ルシル「おつかしいなあ。まあいいか。は、元は原初王オーデインの武装だな。

最古にして最強・最高の神器と謳われ、扱えた者は彼と私を含め、僅か4人だけ出そうだ”

シャル「ルシルも元々グングニルに認められずに使用制限があったらしいね。

アンストール初陣の頃に、ようやく担い手として認められたみたい”

ルシル「完全解放したら死ぬほどのダメージが返ってくるって、あ

れはしんどかった。

最後は何とか認められたから良かったものの、認められなかったら常に複製武装だった。

さて、次は、神々の宝庫と英知の書庫の力を基に作った白銀の籠手。

神器・概念兵装“月狼ハティ” & “陽狼スコール”

閃光系、炎熱系のダメージを半減する「密着する者」、
「嘲笑」という意味を持つ“陽狼スコール”。

闇黒系、冰雪系を半減する「反対する者」、
「仇敵」という意味を持つ“月狼ハティ”の一对の籠手だ。

元々は、私が妹シエルの重力魔術に耐えられるように設計・創造し、贈った概念兵装だ」

シャル「もそうだけど、今から紹介するのもルシルお手製神器だよ。

神器・概念兵装“星填銃オルトリンデ” & “星填銃グリムゲルテ”

神々の宝庫と英知の書庫の力を使って創造した銃型の概念兵装ね。

当時、銃という存在が無かったから、連合軍に最も警戒されていた武装。

元々は、シエルと同じように弟子のカノンの為に創って贈った概念兵装の一つ」

ルシル「カノンの射砲撃の才能は私以上だったからな、ちょうどいい武装だった。

ちなみに、カノンにはもうひとつ“星填砲シュヴェルトラウテ”という大砲を贈った」

シャル「シンプルだけどバカみたいに高威力の射砲撃。彼女の砲撃でどれだけ被害者が出たか、数えきれないわ・・・」

ルシル「連合には少なかったしな、超長距離系の魔術師が。さて、次は、私がフェンリルを使い魔とする際に贈られた捕縛系神器の一つ。」

神器・概念兵装“縛鎖レーディング”

“悪知恵で縛り付けるもの”という意味を持つ鎖。続けていくぞ。

神器・概念兵装“縛鎖ドロミ”

“阻止するもの”という意味を持つ巨大な鎖だ。さらにもう一発。

神器・神造兵装？位“断ち切れぬ枷グレイプニル”

“貪り食うもの”という意味を持つ絹のような紐。これらは全てフェンリル暴走時に必要となる捕縛神器だ。ちなみに魔獣系にも絶大な効果を発揮する。

戦場だろつが関係なく抱きついてくるフェンリルを捕縛するのに大変重宝した神器だ」

シャル「犬耳少女と戦場で戯れる神器王・・・」

連合内の前線通信が混線した最大の要因となった悲劇、もとい喜劇「ルシル「同盟内でも混乱というか、特にシェフィの暴走が多々あったぞ。」

“戦場でなにイチヤイチャしているの!?” って。すごく恐かった」
シャル「そんなんばつかね、ルシル。
それじゃあ次は、守護神としての武装ね。

フォース・テストメント
第四聖典

界律の守護神専用の武装“聖典”の一つ。
漆黒を担う第四の力の座に就くルシルのためのケルト十字型の錫杖」

ルシル「大して説明もいらんだろっから次行くぞ。
次は、私の戦闘甲冑だな。
黒を基調としたノースリーブのロングコート。縁には銀の装飾が施
されている。

前を留めるのは銀の金具で、一つ一つにルーン文字が刻まれている。
背にはアースガルド魔法陣が描かれている。

インナーも黒一色で、袖つき。前立ての赤いラインには多くのル
ーンが刻まれている。

パンツもまた黒一色のズボン。いくつものベルトが巻かれて、ル
ーンが刻まれている。

黒の編み上げブーツに銀の装甲が装着されている。
腰には“星填銃”二挺を収めるための白いホルスターがある。

首には小さな白い南京錠が付いた赤いチョーカーを付けていて、コ
レは第一級の執行権限リミッターとして機能しているモノだ。

外すと純戦闘モードの第一級神罰執行権限、つまりはEXランクと
なる」

シャル「ルーンばつかね。ていうか卑怯よ、ルーンの加護」

ルシル「ルーンはアースガルド王族の特権だ。出し惜しみは死を招

く。

さて、次は、私が魔導師となり必要となったデバイスを紹介しよう。最終話では“ラインゴルト”と出ていたが、それは総称みたいなものだな。

“ヴォークリンデ”

は槍型のデバイスだ。デザインは、ハルバード。

“ヴェルグンデ”

は二剣一对の双剣型のデバイスだ。デザインは、ハンド・アンド・ア・ハーフ・ソード。
刀剣と大剣の間、中剣と呼ばれる代物だな。

柄尻部分を連結させる事も出来、戦術幅を拡大させることが出来る。

“フロースヒルデ”

は二挺一对の銃剣型デバイス。基本 を中心に扱う。
デザインは、ティアナのクロスミラージユ似と言っておこうか。
ティアナのミラージユより銃身を長くしており、銃身下に刃を装着している。

そしてカートリッジ方式も違う。ミラージユは銃身そのものを交換するが、フロースヒルデはリボルバーとなっている。
カートリッジのロードはハンマーを下ろす事で行われる（トリガーを引かずともハンマーは戻る）。

装弾数は六発。「ルシル君の魔力でカートリッジってやり過ぎじゃない？」となのはに言われた事がある。

これら三機のデバイスの総称が、ラインの黄金という意味の“ライ

ンゴルト”というわけだ」

シャル「はあ、わざわざ三機も作るなんて・・・どうして？」

ルシル「私の魔法の術式は複雑だからな。元が魔術だったから仕方ないが。

そのためデバイス一機に変形機能や人格AIなどのシステムを取り入れると暴走するんだ。

だから演算機能重視のサポート機として、近距離の三機のデバイスを作る事にした」

シャル「なるほどね。それにしても随分とまあ趣味に走ったわね。

ラインゴルト、か。ま、なかなか良いんじゃない？

そんじゃあこつからはANSURの設定となるよ」

ルシル「良かったら読んでくれ」

魔術：

魔力を持っているのであれば誰でも扱える力。

どの世界でも共通の魔術で、攻性、防性、補助、結界、儀式、禁呪がある。

ルシル「大戦が勃発する前は どのような区別はなかったらしい」

シャル「大戦が全てを変えたんだね・・・」

魔術師ランク：

魔力量やその運営力を数値化して、各階級に表したもの。

C、B、A、AA、AAA、S、SS、SSS、X、XX、XXXとある。

XXXが最高となるが、中にはそれを超える魔力を保有する者もいる。

その者には人間の極限を超えた無限の魔力を持つものとして、EXランクが与えられる。

シャル「ちなみに私はXXXランク」

ルシル「私はEXランクだ。人類史上七人しかいないという話だ」

固有魔術：

その魔術師が独自に組んだオリジナルの術式。

世間一般に使用される魔術とは違い、組んだ魔術師だけしか扱えない術式。

シャル「だっていうのに、ルシルは複製能力のおかげで何でも使えるよね」

ルシル「複製したからと言って全部が使えるとは限らない。

得手不得手というのが絶対に付いて回る。だから複製したつきりというのがほとんどだ」

真技：

戦闘を担う魔術師が、自分で生み出した固有魔術の中でも最も信頼できる術式を究極の一まで鍛え上げた魔術のこと。

シャル「私は牢刃と飛刃だね」

ルシル「私は……どっちもメチャクチャな破壊特化だ」

禁呪：

研究や習得、使用を禁じられた魔術。

時狂いの呪／不老不死となる魔術。不老不死は摂理に反するため、界律に修正される。

上位魔族召喚／魔界下層、最下層に住まう魔族を召喚。副作用として精神汚染、後に死。

シャル「は召喚王アーサーが犯して、そして最後は暴走。シエフィリスの真技によつて撃破されたんだよね」

ルシル「アーサーは出来た魔術師だったが、我々アンスールの参戦で精神を病んだ。

だからこそ禁呪に手を出し、最期はアンスールの一人に討たれた」

神族召喚／界律の末端である上位種の召喚。制御できないため、大半殺される。

シャル「これは見たことないなあ」

ルシル「文献にあるだけだ。私も実行されたところを見たことが無い」

空間干涉／空間に何らかの干涉を行う術式。対象のいる空間を圧縮して破砕する術式、対象のいる空間を切り取り、別の層空間に押し込み消滅させる術式がいい例。

ルシル「フノスとカノンが固有能力として 持っている」

シャル「だからあんだだけの無茶が出来るってわけだ」

死者蘇生／死は何に対しても平等で絶対。それゆえに一度死んだ者の蘇生というのは例外なく修正力の対象となり、術者と蘇生された者は魂ごと消される。

ルシル「耳が痛いな。少し研究したが途中で折れた。死ぬわけにはいかなかったからな」

シャル「・・・それでいいんだよ。やっぱり死は怖いよ」

界律接触／世界の意思“界律”に干渉する魔術。行ったら最後、魂ごと消滅される。

シャル「セレスはこれを使っただよなね。

不完全だから魂までは消滅されなかったけど・・・」

ルシル「力づくで止めるべきだったか、それとも放っておけばよかったのか」

身体魔族化／人たるその身を魔族へと変化させる魔術。

シャル「何でこんなモノまで開発するかなあ、大戦初期の魔術師は」

ルシル「それほどまでに勝ちたかったんだろ？」

人としての自分を捨ててまで・・・その戦いの果てがラグナロクによる共倒れだと知らずに」

魂魄神格化／界律の意思ではなく、自身の意思によってその魂を精霊へと昇華させる。

シャル「もう何も言えない。くだらなさ過ぎて」

ルシル「同感だな。とはいえ、私と君は守護神となってしまうが」
対時空間殲滅級攻撃性魔術/時空間を超越しての大破壊を引き起こす
最古にして最凶の禁呪。通称“ラグナロク”と呼ばれる。

ルシル「ルーンと共に生まれた術式だ」

シャル「コレの所為で本当に多くの人命と世界、私すらも奪われた」

属性：

先天性で、魂に刻まれたその者を表す力。種類としては、閃光系、
闇黒系、炎熱系、氷雪系、風嵐系、雷撃系、土石系、無属性の八つ
で、無属性には重力、操作、幻影、音波などが存在する。一人につ
き最大で二つまで持つが、たまに全ての属性を操る魔術師もいる。

シャル「私とルシルは全属性を持ち。でも、土石系はあんまり使わ
ないかな」

ルシル「土石系のエキスパートはアンスールのカーネルと騎士団の
ベルレンスだけ。」

結構扱いづらいんだ、土石系は」

固有能力：

生まれつきその者が使用できる特別な能力のこと。空間魔術を術式
なしで発現できる空間干涉、超長距離を見渡せる千里眼、未来を高
確率で当てる予知などの多くの種類があるものの、固有能力者は何
千万人に数人という確率でしか誕生しない。

シャル「私は何も持ってない（涙）」

ルシル「泣くことか？ あつたらあつたで、それに頼り過ぎて足を掬われるっていうのが多いぞ」

神器：

神や精霊が創造した“神造兵装”、魔族によって創造された“魔造兵装”、特別な製法で魔術師がその物品に術式を編みこんで創造した“概念兵装”の三つを総称して神器という。

シャル「キルシュブリューテとゼーゲンを持ってます」

ルシル「私はたくさん持っている。ゆえに神器王だ」

神の力：（デイヴァイン・ポイント）

魔術師が目指す高き頂。

創世結界・EXランク・時空間の超越・対界術式の四つ。

シャル「ルシルってさ、上のどれも持っているよね」

ルシル「・・・時空間の超越だけは持ってないぞ」

シャル「それ以外は持つてるってことじゃん！ 主人公最前はダメだと思えます！」

ルシル「主人公だから許されるんじゃないのか？」

創世結界：

術者のイメージした世界を現実へと展開する大魔術。

創世結界の展開に成功した者は例外なく大魔術師の称号を得る。

シャル「アンスールメンバーじゃルシルとカノンとステアとアリスが持っているよね。卑怯じゃない？」

ルシル「努力の結果を卑怯って。それはあんまりだと思っぞ。

それを言うなら連合にも居るだろう。フォードの叫夜の幻生林。

プリムスの心狂わす道化の国。アーサーの獣界。チエルシーの遙かに美しき庭園。

それに君も手に入れただろ。剣神の星天城」

シャル「そうだけどさあ。効果がそっちの方が物騒だよ。カノンなんて結界内がすべて射程範囲内。」

その上術者のカノンは姿を見せずに敵軍殲滅って・・・」

ルシル「プリムスの道化の国も酷いよな。取り込んだ対象の精神を再起不能になるまで破壊するんだぞ」

シャルシル（どっちもどっちか）

シャル「ここからは、界律の守護神編の設定になるよ」

界律：

その星そのものとされる意思。自分自身である世界の秩序を管理するもの。

すべてがそこから生まれ、そして還っていく永久機関。

過去、現在、未来の全ての情報があるともしられる知識の蔵。それぞれの星に必ず存在する究極にして絶対たる力の根本、とされる。

神意の玉座：（デイヴァイン・ウィル）

あらゆる次元に存在する世界の“界律”が交差する最高位次元“遙かに貴き至高の座”。

全ての界律と繋がっているため、全ての世界の情報もここに集約されていく。

究極にして絶対なる抑止力“界律の守護神”を保有する。

界律の守護神：（テストメント）

あらゆる世界の“界律”からの助力要請で、その世界へと召喚、契約を執行する抑止力。

霊格に関しては神霊クラスと同等、神殺しの契約内容によってはそれすら上回る。

呼ばれた世界に住まう存在とは一切関わらず、契約を執行するのが普通。

だが時には干渉しなければならぬ場合もあり、その際には肉体的なものが形成される、かも。

“界律”からの契約召喚こそが絶対だが、不完全な第四のカルシロン、第五のカマリアは、“界律”に関係なく“人間の意志”によって召喚されてしまう場合もある。

現実には干渉する“実数干渉”、幻想に干渉する“虚数干渉”の二つの能力を持つ。

O t h・テストメント・アイオーン

無色を担う最古の守護神。元創世神。武装は無色の聖アンデレ十字

“ 第零聖典 ”

創世より嘆きし者の二つ名を持つ。

1st・テストメント・アーク

白銀を担う守護神。元創生天使。武装は白銀のマルタ十字“第一聖典”

心優しき始まりたる者の二つ名を持つ。

2nd・テストメント・ティネウルヌス

黄金を担う守護神。元魔王様。武装は黄金のロレーヌ十字“第二聖典”

死と絶望に微笑む者の二つ名を持つ。

3rd・テストメント・シャルロット

純白を担う守護神。元人間。武装は純白の葡萄十字“第三聖典”
剣戟の極致に至りし者の二つ名を持つ。

最後の契約を果たし、転生する。現在は空席。

4th・テストメント・ルシリオン

漆黒を担う守護神。未だ生存中。武装は漆黒のケルト十字“第四聖典”

天秤の狭間で揺れし者の二つ名を持つ。

5th・テストメント・マリア

桃花を担う守護神。未だ生存中。武装は桃花のラテン十字“第五聖典”

愚者と賢者は紙一重の二つ名を持つ。

6th・テストメント・雪姫^{ゆき}

翡翠を担う守護神。元人間。武装は翡翠の聖ペトロ十字“第六聖典”
舞い散る雪に踊る者の二つ名を持つ。

7th・テストメント・ルフィスエル
真紅を担う守護神。元魔界女王様。武装は真紅のカンタベリー十字
“第七聖典”
上位なる神の抹殺者の二つ名を持つ。

8th・テストメント・プリンス・オブ・レディエンス
燈黄を担う守護神。元精霊。武装は燈黄のギリシャ十字“第八聖典”
高貴なる閃光の者の二つ名を持つ。

9th・テストメント・優斗
蒼穹を担う守護神。元人間。武装は蒼穹のアンク“第九聖典”
果て無き幻想を追う者の二つ名を持つ。

10th・テストメント・フヴェルトヴァリス
銀灰を担う守護神。元吸血鬼。武装は鋼色のロシア十字“第十聖典”
欲望のままに詠う者の二つ名を持つ。

絶対殲滅対象：（アポリュオン） or 霊長の審判者：（ユースティ
ティア）

界律の守護神と対をなす概念存在。
その正体は人間の犯した罪によって理不尽に滅ぼされた世界の界律、
もしくは人間に絶望し、護るということに嫌気がさした界律の守護
神からなる概念存在の集団。

人間に対して最大の憎悪を持ち、全て滅ぼそうと企てている。
守護神から審判者へと堕ちた者は“フォールド・ナンバー墮天した守護神”と呼ばれる。

No.?:プリンキピウム
始まりの名を持つ概念存在。

No.?:リーベルターテム
自由の名を持つ概念存在。

No.?:ウーニウエルスム
宇宙の名を持つ概念存在。最強のルシリオンと互角の能力を持つ男性型の概念存在。

No.?:空席
アーミツティムス（亡失）の名を持つ概念存在の席。
元は4th・テストメント・ルシリオンが、心を破壊され墮天したことで生まれた存在。
しかし、別のルシリオンによって撃破、消滅する。

No.?:ソウニウム
夢想の名を持つ概念存在。

No.?:フォルトウーナ
運命の名を持つ概念存在。
最強のルシリオンをある条件下（人質を取る）で打ち破った女性型の概念存在。

No.?:アンジェラス
天使の名を持つ概念存在。
この者が契約内容に関係している場合、最低でも五柱の守護神が召喚される。

しかしそれでも勝つことが出来ない少女型の究極存在。

NO.???:アギト

覚醒の名を持つ概念存在。シャルロットと戦いながらも生き残った男性型の概念存在。

NO.?:インペリオルム

支配の名を持つ概念存在。

NO.?:ダムナテイオ

断罪の名を持つ概念存在。

NO.???:アエテルニタス

永遠の名を持つ概念存在。

NO.???:ウェーリタス

真実の名を持つ概念存在。

NO.???:空席

グロリアム（栄光）の名を持つ概念存在の席。

NO.???:ウアーニタース

空虚の名を持つ概念存在。

NO.???:デイグニタース

威厳の名を持つ概念存在。

NO.???:テルミナス

終極の名を持つ序列二位の概念存在。外見としては10代後半、大
体16、7歳の少女。

髪はローズピンクのロングストレート。瞳はエメラルドグリーン。

服装は黒のタートルネックトップにケルト十字が背に描かれていて、黒のプリーツスカート、白のサイハイソックス、黒のブーツ。元界律の守護神で、最強の漆黒第四の力の座に就いていた。

今回のルシリオンとシャルロットの契約における全ての支配者。ルシリオンの執着するがあまりに、裏で多くの事象を操っていた。ルシリオンとシャルロット、マリアの三柱と死闘を繰り広げ敗北消滅した。

No・Ex：ペッカートウム

罪という意味の名を持つ絶対殲滅対象の番外位。

実力、霊格、干渉能力、全てにおいて最弱とされる概念存在。

キリスト教における七つの大罪、もしくは七つの罪源と呼ばれる罪を背負う者。

唯一使い魔レーガートウス（使者という意）を使役すること出来る。

許されざる暴食：

ベルゼブブという名を持つペッカートウムの分裂体の一体。

許されざる色欲：

アスモデウスという名を持つペッカートウムの分裂体の一体。

許されざる強欲：

マモンという名を持つペッカートウムの分裂体の一体。

許されざる憤怒：

サタンという名を持つペッカートウムの分裂体の一体。

許されざる怠惰：

ベルフェゴールという名を持つペッカートウムの分裂体の一体。

許されざる傲慢：

ルシファーという名を持つペツカートウムの分裂体の一体。

許されざる嫉妬：

レヴィヤタンという名を持つペツカートウムの分裂体の一体。

分裂体状態である間、いくら消滅させても後に代替わりしてその席を埋めるため、

絶対殲滅対象の内、不滅の存在とされ完全に消滅させることは不可能だとされる。

もちろん本来の姿ペツカートウム状態でも、人間が存在している以上は何度も生まれてくる。

最弱のクセして最もしつこく厄介なアポリュオン。

ルシル「ここからは私を主人公としたオリジナルストーリーANSURの大戦編の紹介だ」

大戦：（再誕戦争）

ヨツンヘイムがアースガルドへ宣戦布告し開戦した戦争の呼称。

初期においてはまだこの二世界だけの戦争だったが、中期に入ると同時期にそれぞれの世界に味方する世界が現れ、大規模な大戦へと拡大していった。

後期にはどうしようもない程に戦火が爆発的に拡がり、その日一日で世界のひとつが消えるような戦争となる。

末期には互いの主力間の戦争となり、アースガルド同盟が勝利を収める。

シャル「でもその直後にラグナロク。勝敗なんて言葉が無意味にな
った」

アースガルド同盟：

魔道世界アースガルドを筆頭とした同盟軍。

主要同盟世界は、煉生世界ムスベルヘイム、氷零世界ニヴルヘイム、
光煌世界アールヴヘイム、無圏世界ニダヴェリール、閻庭世界スヴ
アルトアールヴヘイムの五つ。

アンスール：

大戦末期に戦争終結のために設立された最高戦力。
後に連合特務十二将の一人“結界王アリス”が加わり十三人となる。

魔道王フノス・クルセイド・アースガルド

EXランク魔術師。“アンスール”創設者にしてアースガルド同盟
軍総司令官。

固有能力“空間干渉”保有。

風迅王イヴィリシリア・レアーナ・アースガルド

XXXランク魔術師。風嵐系最強と謳われるレアーナ王家女王。総
司令官補佐。

神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルド

EXランク魔術師。対軍・対界術式に特化した中遠距離魔術師。
同盟軍後方支援部隊総指揮官。

創世結界“神々の宝庫”、“英知の書庫”、“英雄の居館”、“聖
天の極壁”を保有。

固有能力“複製”保有。

拳帝シエル・セインテスト・アースガルド

XXXランク魔術師。近接肉弾戦最強と謳われる重力操作の魔術師。
前線部隊第三指揮官。

セインテスト王家第二王女。

殲滅姫カノン・ヴェルトール・アールヴ Heim

XXXランク魔術師。砲撃戦最強と謳われる閃光系魔術師。後方支
援部隊指揮官。

アールヴ Heim 王家第八王女。創世結界“殲滅領域”保有。
固有能力“空間干渉”保有。

蒼雪姫シェフィリス・クレスケンス・ニヴル Heim

XXXランク魔術師。冰雪系最強と謳われるニヴル Heim 王家第二
王女。

同盟軍後方支援部隊指揮官補佐。戦天使軍総司令官。

白焰の花嫁ステア・ヴィエルジェ・ムスperl Heim

EXランク魔術師。炎熱系最強と謳われるムスperl Heim 王家第一
王女。

ムスperl Heim 軍元帥。同盟軍最高参謀。

創世結界“劫火が支配せし煉界”保有。

炎帝セシリス・エリミング・ムスperl Heim

XXXランク魔術師。炎熱系第二位魔術師。ムスperl Heim 王家第一
二王女。

ムスperl Heim 軍大将。同盟軍前線部隊第四指揮官。

固有能力“灼現の魔眼”保有。

呪侵大使フォルテシア・アウリアス・スヴァルトアールヴ Heim

XXXランク魔術師。闇黒系最強と謳われるスヴァルトアールヴ He
im 王家第一王女。

同盟軍前線部隊第五指揮官。

雷皇ジークヘルグ・フォスト・ニダヴェリール

XXXランク魔術師。雷撃系最強と謳われるニダヴェリール皇帝。

ニダヴェリール軍元帥。同盟軍前線第一指揮官。

固有能力“千里眼”保有。

地帝カーネル・グラウンド・ニダヴェリール

XXXランク魔術師。土石系最強と謳われるニダヴェリール王家第

二皇子。

ニダヴェリール軍大将。同盟軍前線部隊第二部隊指揮官。

固有能力“石化の魔眼”保有。

冥祭司プレンセレリウス・エノール・スヴァルトアールヴヘイム

XXXランク魔術師。固有能力“霊媒”を持つ霊を操る魔術師。

同盟軍情報部官。参謀補佐。

結界王アリス・ロードスター

XXXランク魔術師。結界術式において史上最高の使い手。

元連合軍特務十二将第五将。

同盟軍後方支援部隊所属。創世結界“走馬灯の迷宮”を所有。

シャルコどいつもこいつも格が違う魔術師だった。

よくもまあこんな連中とまともに戦えたよ、連合軍」

戦天使：（ヴァルキリー）

ルシオンとシェフィリスによって開発された“完全自律稼動人型魔道兵器”。

仮想人格を持ち、外見も普通の人間。

墮天使：

大戦の8年後、活動を再開したヴァナヘイムによって洗脳、暴走した戦天使の約400機。

洗脳したヴァナヘイムを滅亡させ、後に活動停止に動いたアンスールをも殲滅。

未だに9機が活動中。

アンスールと墮天使の戦いを“墮天使戦争”と呼ぶ。

ルシル「の戦いを終わらせない限り、私は人には戻れない。いつになるか分からないが、必ず見つけて撃破^{すくい}だしてみせる」

ヨツンヘイム連合：

極凍世界ヨツンヘイムを筆頭とした連合軍。

主要連合世界は、戦導世界ヴァナヘイム、夢幻世界ウトガルド、深林世界スリュムヘイム、複合世界ミッドガルドの四つ。

主力としては、主要連合世界の四人の王による“四天王”。ミッド王は傀儡のため入らない。

連合軍の選りすぐりの魔術師や魔族を集めた“特務十二将”

科学を用いて製造した戦略魔道兵器“ A・M・T・I・S・アムティス ”

複合世界ミッドガルドの秩序管理組織左翼“ 天光騎士団 ”がある。

四天王

連合の頂点。連合主要世界の王の議会。

大戦末期、大戦初期からのリーダーであるヨツンヘイム皇帝よりウトガルド女王へ主導権が変わる。

ウトガルド女王 : 夢幻王プリムス・バラクーダ・ウトガルド

ヨツンヘイム皇帝：冷血王アグステイン・P・M・U・デ・ヨツン
ヘイム

ヴァナヘイム女帝：戦帝ヴェロニカ・シュ プリーム・ヴァナヘイム
スリウムヘイム王：葬枢王フォード・テルスター・スリウムヘイム

特務十二将

ヨツンヘイム連合の有する数多くある部隊の中でもトップ・“特務
十二部隊”の隊長達の総称。

第一将：召喚王アーサー・ブラックセダン（人）

第二将：喰滅狼ウリベルト・ツエレストティツァ・カーナス・フ
レイオルタ（最下層魔族）

第三将：魔砂漠ネブソノフス（最下層魔族）

第四将：戦闘卿バラディウム・クートラント（最下層魔族）

第五将：結界王アリス・ロードスター（人）

第六将：炎浄王マーデイス・ベレゾフスキー（人）

第七将：虹属の魔石群アリウィウス・アルクス（最下層魔族）

第八将：機神剣フルングニル（A・M・T・I・S・）

第九将：機神砲アングルボザ（A・M・T・I・S・）

第十将：燈天剣星ゼムノス・ノースコート（戦死）

第十一将：魔術の蔵フランセスク・オリハール（人）

第十二将：槍皇ラピス・エル・ノワール（戦死）

天光騎士団“星騎士：シユテルン・リッター”

複合世界ミッドガルドを守護する二大組織のひとつである“天光騎
士団”の最高位に選ばれた最強の十人の騎士の名称。

第一騎士：エアースト・リッター

風の騎士公オペル・オメガ・シユプリンガー

XXXXランク魔道騎士。天光騎士団最強の騎士。

風の騎士公と謳われるほどの風嵐系術式を扱いこなす。

第二騎士：ツヴァイト・リッター

大地の鬼神ベルレンス・ヒルベルト

XXXXランク魔道騎士。第二騎士の称号を持つ土石系の魔術師。

大戦には参加することが出来なかった。

第三騎士：ドリット・リッター

鮮血姫シリア・ブラッディア

XXXXランク魔道騎士。第三騎士の称号を持つ自身の血液を操る魔術師。

物理攻撃、特に斬撃に対しては魔力の籠った血液が盾となり、最高の守りとなる。

第四騎士：フィータト・リッター

鎮魂楽団ランチア・ストラトス

XXXXランク魔道騎士。第四騎士の称号を持つ無属性音波系最強の魔術師。

大戦に参加できない騎士の一人で、大戦終結後、第二騎士となる。

第五騎士：フノンフト・リッター

剣神シャルロツテ・フライハイト

XXXXランク魔道騎士。第五騎士の称号を持つ近接戦最強の剣士。ただの剣術だけで第五騎士にまでたどり着いた実質最強の女性である。

第六騎士：ゼクスト・リッター

槍皇ラピス・エル・ノワール

XXXランク魔道騎士。第六騎士の称号を持つ近接戦最強クラスの槍騎士。

ただの槍術だけで第六騎士にまで上り詰めた最強クラスの槍騎士。

第七騎士：ズイープト・リッター

紙徒ミストラル・ビルゴ・プリマベラ

XXXランク魔道騎士。第七騎士の称号を持つ魔力で生み出した折紙を操作する魔術師。

星騎士のなかで最も汎用性が高い魔術を扱うオールラウンダー。

第八騎士：アハト・リッター

鏡の境界サー・グラシオン・ヴォルクステッド

X+ランク魔道騎士。第八騎士の称号を持つ鏡を操作する魔術師。自分より上の地位を持つ女騎士を嫉んでいる。男尊女卑の権化。

第九騎士：ノイント・リッター

花の姫君チエルシー・グリート・アルファリオ

XXXランク魔道騎士。最年少の12歳で星騎士となった天才魔道騎士。

大戦に参加した騎士でただ一人の生存者。創世結界“遙かに美しき庭園”を保有。

第十騎士：ツエーント・リッター

夜宴ナハト・ダーツェ

XXランク魔道騎士。第十騎士の称号を持つ闇黒系の魔術師。

大戦に参加出来なかった騎士の一人。深夜帯になると星騎士最強となるらしい。

ルシル「もし全員が大戦に参加していたら、おそらく……同盟は負けていただろう」

シャル「はい。ANSURについて、もこれにて終了です」

ルシル「ありがとうございました」

シャル「ありがとねー？」

ルシル「終わった・・・な」

シャル「だね。よっしゃ！次回作に向けて・・・」

ルシル「向けて？」

シャル「なんか食べに行こう！あ、ルシルの驕りね？」

ルシル「上限1000円な」

シャル「もっ少し出してよー!」

1st Episode : 全てのはじまりはここから (前書き)

この小説は魔法少女リリカルなのはシリーズと、一昔前に書いたオリジナル小説のANSURのキャラクターや設定を織り込んでいます。

そういったオリジナル設定がお嫌いな方は回れ右をしてお戻りください。

それでも構わないという方はブランクの所為もあり駄文となっていますが、楽しんでいただければ幸いです。

1st Episode : 全てのはじまりはここから

全てが白に染まる広さも何も分からない空間。

ただその空間にあるのは、淡く碧く輝いている直系5メートル近い光球。

そして、それを囲むようにして存在しているのは11の玉座。

玉座1つ1つで色が違い、背もたれの上にそびえ立っている十字架の形も様々だ。

そしてその玉座に座っている11の人影も、それぞれ色違いの外套を羽織っている。

ここは“神意の玉座”、またの名を“遥かに貴き至高の座”と呼ばれる最高次元。

あらゆる世界の意思“界律”が交差する、全てが在って、全てを識る究極の根源。

その玉座のひとつ純白の玉座に座する者、3rd・テストメント。

シャルロット・フライハイトがふと顔を上げた。

++++Sideシャルロット++++

また何処かの世界の意思、“界律”が^{わたしたち}界律の守護神を求めている。

私たち“^{テストメント}界律の守護神”は、あらゆる世界の“界律”が交差する最高次元である“神意の玉座”に座する概念存在だ。

まあ早い話が、幽霊&精霊&天使&神様モドキだ。

でも霊格に関しては神霊クラスであり、状況によってはそれすら上回ることもある。

そして、その存在意義はこれより起こりうるであろう世界自身、ま

たは人類の滅亡を回避する為に、その世界の界律から協力を求められて、その地へと召喚される究極にして絶対たる抑止力となっている。

「まあ時々、世界や人類を滅ぼすこともあるけどね」

たった今も、別の世界に召喚されている私の分身体が一つの国を潰した。

多を生かすために少を排除する。そうしないと世界はバランスが取れない。

自嘲気味な笑みを浮かべていると、横の玉座に座する者から声を掛けられる。

「どうかなさったのですか、シャルさん？」

桃色を基調としたドレスを身に包み、さらに上から装飾の施された桃色のフード付き外套を羽織っている見た目が少女。

私と同じ存在である“賢者と愚者は紙一重”の二つ名を有する5th・テストAMENT・マリアだ。

「ん？　ここ最近私の契約率が上がってきているのよ。

全く、世界はどれだけ人を殺せば気が済むのだから・・・」

思わず溜息が出る。実際、その殺戮の実行者である私たちは文句を言えない。

「えっと、まあ頑張ってください。私た「何なら代わってやるうか！・・・」

いきなりの大声に近くにいるマリアの声がかき消された。

「どうよシャルロツテ、代わってやっても良いぜ」

私の純白の玉座から右斜め前に位置する黄金の玉座に座する男がこちらを見る。

「お生憎様、あなたのような破壊神の出る幕じゃないのよ」

「んだよ。つまらない契約なのか」

私たちの会話から興味を失ったのかそう言つと、破壊と殺戮の権化である“死と絶望に微笑む者”の二つ名を持つ2nd・テストメン
ト・ティネウルヌスは、私達と同じデザイン、色違いである黄金色の外套のフードを被った。
どうやら本当に興味を無くしたらしい。

「私、あの人苦手です。どうしてあのような方が・・・」

正直な話、私もあいつは苦手、というより大嫌いだ。

「仕方が無いわ。神意の玉座の意志は、力があり取引に応じる連中が欲しいだけ。性格的な問題は二の次なのよ。」

言つて悲しくなる。結局、私たちは単なる駒でしかない。

“テストメント界律の守護神”という肩書きの割にやっていることはただのパシリなのだ。

馬鹿馬鹿しい考えを巡らしている途中、ようやく玉座から私の分身体と意識の欠片が乖離するのが分かる。

「さて、次の契約はどんなことをするのかしら？」

私、“剣戟の極致に至りし者”の二つを冠した3rd・テストメント。シャルロツテ・フライハイトは、自分ちからを求めているであろう世界へと自分の分身を送り込んだ。

§海鳴に舞い降りる力§

召喚先の世界へと通ずる光の奔流の中を進む。
突如、私という概念に干渉するほどの力が流れ込んでくる。

「なっ!?!? これは一体どういう・・・!?!?」

今まで六千年間、“テストメント界律の守護神”として召喚にに応じてきたが、こんな事態は初めてで、さすがの私も混乱の極みに達していた。
私を構成する概念が解体されるのが分かる。

しかし、今の私にはそれに抗う術は無く、されるがままに意識が消えていった。

+++++Sideなのは+++++

私は学校が終わり、友達のアリサちゃんとすずかちゃんと別れて家路についていた。

そして家へと帰る途中に、ジュエルシードが発動した気配に気付く。
私はジュエルシードの発動した場所へと走って向かった。

そして神社の境内でユーノ君と合流して、目の前にいる大きな犬のような魔獣と対峙する。

いきなりの突進攻撃に、間一髪で障壁が生み出されて事なきを得るけど、かなりの距離を吹き飛ばされてしまった。

「なのは！？ 大丈夫、なのは！？」

「うん、大丈夫だよユーノ君。レイジングハートが守ってくれたから」

心配そうな声をかけてきてくれたユーノ君に返事をする。

それからはバリアジャケットへと着替えて、犬さんの突進を何とか避けたり防いだりするけど、次第に動きの速さが上がっていくのが分かる。

私はただ防御と回避に精一杯になる。

++++Sideなのは ユーノ++++

(一体どうすればいいんだ！？このままじゃなのはが危ない！！)

僕は思考をフル回転させて、魔獣の足を止める方法を模索する。

足を止めることが出来れば、目の前の動物が魔獣となった原因である“ジュエルシード”と呼ばれるロストログアを封印することが可能となるはず。

だけど、焦れば焦るほど冷静な判断が出来なくなってしまって、自分の無力さに怒りを覚える。

「僕はなのはを助けることもできないのか・・・!!」

そう打ち拉がれていると、魔獣は今まで以上の突進でなのはに襲い

掛かる。

それは回避が不可能なほどの速さを持っていて、確実になのはへ直撃するコースだった。

「なのは！！！」

「く・・・！」

なのはは自分に襲い掛かるであろう衝撃を覚悟して杖を前方に構える。

僕は、なのはに起こる最悪な結果が脳裏に浮かんで叫んだ。

「風牙真空刃・・・！」

どこからともなく聞こえた声と共に、魔獣の足元へよく見えなかったけど、たぶん風の斬撃が着弾。

魔獣はそれに驚いて、急停止して警戒しながら後方に下がっていく。

「え？」

突然の状況に呆けるなのはと僕。

斬撃の衝撃で尻餅をついているなのはと安堵の表情で一杯の僕は、声のした方向にいるはずの攻撃の主を捜す。

そして見つけた。たぶん僕たちを助けてくれた人。

そこに立っていたのは・・・

「状況は分からないけど、助けてもよかったんでしょう？」

ふくらはぎまで伸びる水色の髪を靡かせて、右手には身長と同じく
らしい桜色をした長刀を携えた一人の少女。
その少女は僕たちと魔獣を見比べながら仁王立ちしていた。

++++Sideユーノ シャルロット++++

意識が覚醒し始めるのがわかる。

召喚先であるこの世界に来るまでに体験した異変を思い出しながら、
ゆっくりと目を開けて周囲を確認する。

そして目の前に広がる光景に少し戸惑いを感じる。

「テストメント界律の守護神を求めるからどんな世界かと思ったら、随分と平和
な世界ね。」

私はそう口にして、この世界の界律との精神接続リンクを開始する。
そこで初めて自分の起こっている異変に気付いた。

肉体の構成を確認、身体年齢を9歳に設定、この世界に於ける
戸籍を確認。

海鳴市在住の高町家にホームステイすることが確定済、契約内容の
提示はなし

「……うそでしょ、何これ？こんなことって……」

あまりの情報に混乱する。本来なら私たち“テストメント界律の守護神”は召喚
先の存在に干渉することなく、召喚された理由である契約を果たす
のだ。

だというのに、契約内容を明かさない？肉体を構成？9歳の子供？

戸籍？

泣きたくなってくる。ふざけるな、この野郎。

それにこういう契約は、“天秤の狭間で揺れし者”の名を冠する4th・テストメントが主に担当することになっているはずだ。

「まだ何かあるし・・・」

提示された情報はまだある。解放できる能力値が最大10%、使用できる魔術もほとんどが制限されていることになっていた。

「戦闘・殺戮専門みたいな私に対して妙な制限ね、これ。

戦わせたいのか戦わせたくないのかどっちなのかしら？」

とはいえ、この世界を見る限り魔術を使う必要性があるとは思えない。

それほど平和に見えるのだ。

「ハア、考えていても仕方ない。まずは高町家というのを探そう。」

何時の間にやら傍に置いてあった旅行カバンの中身を確認する。

着替えに財布に・・・パスポートって何？ この世界は私に何をさせるつもりだ。

少し涙目になりながら、私を呼んだこの世界の界律を頭の中で罵る。

荷物を確認し終え、その場から去ろうとする。

すると、そう遠くない場所から魔力が行使されているのに気付く。

私は意識だけを戦闘モードへと切り替える。

「魔力行使？ 思考に夢中で気付かないなんて。とにかく行ってみますか。」

荷物を手にし、魔力が行使されている場所へと向かった。辿り着いたそこには、白い服を着て杖らしき物を携えた少女と喋る小動物がいた。

それだけでなく、少女の目の前には四つ目の大型犬のような生物がおり、その白い少女と対峙していた。

「さっき感じた魔力反応はあの子達からね。それにしても・・・」

少女は逃げては防御だけしかしていない。

どういつつもりなのか反撃しようというアクションを一切とろうとしない。

少女の見方であろう喋る小動物はただ焦っているだけだ。

(・・・ふうん、全然なつてないわ。ど素人とわけか)

戦闘経験が一切感じられない、完全に素人の動きだ。あれではそう長くないだろう。

だからこそさつきから危ない動きを見せるわけだ。そう考えた瞬間、先ほどの予想が当たる。

あの犬っぽいのが少女に向かって再度突進する。紛れもない直撃コースだ。

あれは避けきれないし防ぎきれないだろう。第三者の助けが無ければゲームオーバーだわ。

「仕方ない、見捨てるわけにもいかないし手を貸しますか」

右手に生前からの愛刀“断刀キルシュブリューテ”を魔力で現実へと再構成させ、軽く身体を強化する。そして・・・

「風牙真空刃……！」

威力を最小限にまで抑えた真空の斬撃を犬と少女の間に放って、犬の行く手を妨害した。

十十Sideシャルロッテ　なのは十十

「状況は分からないけど、助けてもよかったですんでしょ？」

仁王立ちしていた女の子がそう言ってこちらに歩いてくる。
私は尻餅をついたまま、女の子に向かってお礼を言う。

「あ、えっと、助けてくれてありがとうございます」

「大したことはしていないわ。それで、あの犬っぽいのは何？」

女の子は私のところにまで来て左手を差し出してきた。

立たせてくれるんだ。そう思って手を取って、「ありがとう」とお礼を言いながら立ち上がらせてもらった。

「えっと、なんと言いますか、あれは……その……」

私が説明に困るとユーノ君が代わって、「ジュエルシードと呼ばれる、古代遺産によるものです」って説明を始めてくれる。

女の子は「古代遺産？」って考える仕草をしました。

「はい。本来は、手にした者の願いを叶える魔法の石なんですけど、単体での発動は不安定で暴走しやすいんです」

「単体ってことは複数あるってことよね　　ッと、少し待ちなさい」

「「うわっ!?!」」

女の子は私を脇に抱えて、ユーノ君は驚掴んで、突進してきた犬さんを避けた。

犬さんはそのまま止まらずに進行方向にあった木にぶつかって、痛そうに唸ってます。

女の子は「続きお願い。何も知らずに手を出すのは私の経験が許さないの」と言って、ユーノ君に説明の続きをするように言います。

「あ、はい。えっと、暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあります。」

それに、たまたまジュエルシードを見つけた人や動物が間違っ使用してしまって、それを取り込んでさらに暴走したりもします」

「なるほど。今あなたが対処しているあの犬っぽいのも、間違っ使用してしまった犬が変異してしまったもの、と考えていいのね・・・?」

「はい。そういうことです」

私とユーノ君を地面に下ろした女の子が「そういうことね」と頷いて、「もっと詳しい話を聞きたいから、まずはアレをどうにかしましょ」って、まるで今から自分も参加するようなことを言った。

私とユーノ君が「え?」と聞き返すと、

「あれの動きを止めれば何とかなるのよね?」

いつの間にか放していた刀を手にしていた。

++++Sideなのは シャルロット++++

私はフェレットの説明を聞き、願いを叶えるという“ジュエルシード”の存在に少し引っ掛かりを覚えた。

（まさかそのジュエルシードというのが、今回の契約に何らかの関わりがあるのかしら？

まあ、それはともかく・・・）

「あれの動きを止めれば何とかなるのよね？」

少女とフェレットに向けて確認を取る。

するとフェレットのほうは、「はい、そうです。あの、協力してくれるんですか？」とそう訊いてくるので、私は一切の迷いを口にせず「ええ。今は関わった以上は力を貸すわ」と答える。

「そんな危ないですよ!？」

白い服の子が驚いた顔でそんなことを言う。

それはこちらのセリフだ。あなたの動きのほうが無断で危ない。

「問題ないから安心しなさい。それじゃ、さっさと片付けましょうか」

そう断言し、白い服の子を黙らせる。

するとフェレットがその子に向けて声をかける。

「なのは、今は手伝ってもらったほうがいいよ。
今の僕たちじゃ無傷じゃ終わらせられないんだ」

「……うん、わかった。それじゃ、よろしくお願いします!」

沈んでいた表情から一転、元気な声でお願いされた。

なら、それに応えるのが大人の役目だ。まあ今は見た目が子供だが
気にはしないわ。

「そうと決まったら行くわよ!」

「はい!」

そうして、こちらを様子見していた犬に向かって私たちは駆け出す。

++++Sideなのは シャルロット++++

私たちに協力してくれることになった謎の女の子。

その子は犬さんの突進を最小限の動きで回避して、長く重たそうな
刀の峰で目と鼻の間を殴打する。

すると、犬さんはあまりの痛さだったのか前足で殴打された場所を
押さえる。

「今だよ、なのは!」

ユーノ君が叫ぶ。私はジュエルシールドを封印する為にレイジングハ
ートを向けて封印作業に入る。

「ジュエルシード、シリアル??封印!」

光り輝くジュエルシードは犬さんから抜けてレイジングハートの中へと封印される。

犬さんも元の姿の可愛らしい子犬へと戻っていた。

++++Sideなのは シャルロット++++

犬っばいのから蒼い宝石が抜けて、あの子が持つ杖の赤い宝石の中へと消えていった。

これでひとまず大丈夫らしい。

「もう大丈夫のようね。」

私は、“キルシュブリューテ”を魔力の粒子へ戻して体内へと還す。そして、そのまま立ち去ろうとすると、背後から「待って!」と私を呼び止める声を聞く。

「何かしら?」

「手伝ってくれてありがとう! 私はなのは、高町なのは、っています!」

その子は自己紹介と共に、私に感謝の言葉を述べた。

(ん? ちょっと待って。高町なのは・・・高町?)

この出会いはおそらく、いや間違いなく必然だ。
初めから私を“ジュエルシード”に関わらせるために、この場へと
召喚したんだ。

「私はシャルロツテ、シャルロツテ・フライハイト。
みんなからはシャル、もしくはロツテと呼ばれるわ。個人的にはシ
ヤルがお気に入りよ」

これから先も関係を保つことになるだろうから、こちらも名乗り返
す。

「それでこの子はユーノ君」

「ユーノ・スクライアです。先ほどは助けをいただきありがとうございます
ございます」

フェレットはユーノという名前らしい。うん、なかなか可愛らし
い。

「どういたしまして、なのは、ユーノ」

そして二人と一匹は笑みを浮かべ、握手を交わす。

こうして魔法少女高町なのはと抑止力テストメント・シャルロツテ
は出逢った。

幾度の困難を乗り越え支えあう友人として共に過ごす。

いずれ訪れる回避できない別れのその日まで。

1st Episode : 全てのはじまりはここから（後書き）

重要キャラクター紹介

“3rd・テストメント・シャルロツテ・フライハイト”

髪の色はアクアブルーで脛脛まで流れる艶やかなロングストレート。瞳の色はアザレアピンク。

“剣戟の極致に至りし者”の二つ名を持ち、界律の守護神の中でも近接最強とされる“力”。

主な契約は、世界の敵となる存在の完全抹消、つまりは殺戮がほとんど。

使用武装。

神器・魔造兵装第九位“断刀キルシュブリューテ”

刃物には少なくとも“斬る”、“刺す”といった概念がある。

その概念を限界まで高めてあるのが「桜」という意味を持つこの“キルシュブリューテ”。

その能力を解放すれば、“キルシュブリューテ”の神秘以下の存在は全て切断することが出来る。

界律：

その星そのものとされる意思。自分自身である世界の秩序を管理するもの。

すべてがそこから生まれ、そして還っていく永久機関。

過去、現在、未来の全ての情報があるとされる知識の蔵。

それぞれの星に必ず存在する究極にして絶対たる力の根本、とされる。

神意の玉座：（デイヴァイン・ウィル）

あらゆる次元に存在する世界の“界律”が交差する最高位次元“遙かに貴き至高の座”。

全ての界律と繋がっているため、全ての世界の情報もここに集約されていく。

究極にして絶対なる抑止力“界律の守護神”を保有する。

界律の守護神：（テストメント）

あらゆる世界の“界律”からの助力要請で、その世界へと召喚、契約を執行する抑止力。

霊格に関しては神霊クラスと同等、神殺しの契約内容によってはそれすら上回る。

呼ばれた世界に住まう存在とは一切関わらず、契約を執行するのが普通。

だが時には干渉しなければならぬ場合もあり、その際には肉体的なものが形成される、かも。

よつごそ高町家へ

+++++Sideなのは+++++

自己紹介を終えて、境内の石段に座って話を始める。

「ねえシャルちゃん、やっぱりシャルちゃんも魔法使いなの？」

私は首を傾げながら、私たちを助けてくれた外国の女の子シャルちゃんへとそう訊ねた。

「魔法使い？ まあそういう言い方もあるけど、どちらかと言えば魔術師が普通かしら。」

そういうなのは魔法使いなのよね？ 少しばかり変わった装備をしているけれど」

シャルちゃんは少し考えた仕草をして、透き通るような可愛い声で答えてくれた。

でも変わった装備？ “レイジングハート”のこと、だよな？ 変なのかな・・・？

「うん、そうだね。ちなみにユーノ君も魔法使いだよ」

「僕たちは魔法を使う人を魔導師と呼んでいます」

「魔導師・・・ね。例えば魔法ってどんなことが出来るの？」

シャルちゃんは興味深そうにユーノ君へと質問して、二人？は楽しそうに魔法談義に花を咲かせ始めました。
にははは、ユーノ君とシャルちゃんのお話についていけなくて、ちよっぴり寂しいです。

++++Sideなのは ユーノ++++

僕はシャルが扱う魔術と僕たちが使う魔法に少なからず共通点があるのに気付いた。

魔術には攻性術式というものがあって、その攻撃手段は魔法に似通っているものが多い。

魔力付加による直接攻撃や、放射する射砲撃といった風に。魔術という知らない魔法体系を知って、すごく興奮しているのが分かる。

だけど、シャルの魔術についての話の中には、幻想だとか神秘だとか出ていたけど、僕はいまいちよく分からなかった。

「あ、それと」

「あの、お話中大変申し訳ないのですが、そろそろ帰らないとまじいと言いますか何と言いますか・・・」

次の質問をしようとする、なのはがそう言ってきた。
しまった、あまりの楽しさになのはと時間のことを忘れていた。

「あゝそっか。確かにそろそろ帰らないとダメだね。ごめんね、なのは」

「にははは。ううん、こっちこそゴメンねユーノ君」

お互い苦笑しながら謝り合う。

本当はもう少しシャルと話したかったけど諦めるしかない。

++++Sideユーノ　なのは++++

私は二人だけの世界に行ってしまったているユーノ君を連れ戻す。

そしてシャルちゃんに向かって再度、感謝の言葉とお別れの言葉を口にする。

「それじゃシャルちゃん、今日は本当にありがとう。またどこかで会えると良いね」

ユーノ君を肩に乗せてその場を去ろうとする。

「なのは、あなたのお父上から何か聞いていない？」

「へ？」

今度はシャルちゃんが私を呼び止めてそう口にする。

でも、なんでお父さんのこと？　理由も分からず、最近のお父さんの話を思い出してみる。

考えることおよそ1分弱、二つの単語を思い出す。

「・・・留・・・学生、ホームステイ・・・。あ！　もしかしてシャルちゃんって・・・！」

そう、それは一週間位前、お父さんがドイツからの留学生をホームステイさせたいと言っていた。

ホームステイに関してはお母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんも快く承諾していた。

「クス。改めてよろしくね、なのは、ユーノ」

「うん！ うん！ よろしくね、シャルちゃん！」

「よろしく、シャル！」

ユーノ君も私同様、すごく嬉しそうに言う。

++++Sideなのは シャルロツテ++++

どうやら本当になのはの家へ留学生としてホームステイするらしい。全く、この世界の“界律”は用意がいいというか何というか少し呆れてしまう。

「それじゃ案内するからついてきてシャルちゃん」

「ええ。よろしく願いますわ」

荷物を持ち、なのはを追って神社を後にする。

夕陽に目を細めながらも街を見渡す。

綺麗な街並みだ。もしここが減ぶような事態に陥るといつのならば守りたい。

この世界に来て僅か30分弱。それなのに、私はこの街が好きになり始めていた。

珍しい。今回の契約に、私はどこか期待しているようだ。

(殺戮破壊者の私が言うようなことではないわよね、やっぱり)

++++Sideシャルロット 高町士郎++++

末娘であるなのはの帰りが遅いと息子の恭也が落ち着かない。

娘の美由紀がそれを宥めているのを視線に入れながら静かに椅子に座る。

実際、もう夕食が出来ていて、あとはなのはが帰ってくるのを待つだけだ。

「父さん、少し辺りを見てくるよ」

「え、じゃあ私も一緒に行こうかな」

恭也と美由紀がそう言いながらソファから腰を上げたとき、

「ただいま〜！」

待ちかねた末娘のなのはが帰ってきた。

二人は安堵の表情を浮かべ、俺や妻の桃子も同じ顔をしていた。そしてみんなで玄関まで迎えに行くとそこには、

「あ、お父さん。それにお母さんたちも。」

紹介するね、今日からホームステイする留学生のシャルちゃん」

なのは横に並んでいた少女を俺たちに紹介した。

外見は明らかに日本人じゃない。外国人だ。

水色の長髪に、透き通ったピンク色の瞳、きめ細かな白亜のような白い肌。

しまった、留学生が来るのは今日だったか。連絡がないので今日とは思わなかった。

分かっていたら迎えに行くつもりだったのに、失礼なことをしたかもしれない。

「こんな夜分での訪問失礼いたします。初めまして、シャルロット・フライハイトと申します。

突然で申し訳ないのですが、今日からお世話になります。どうぞ気軽にシャルとお呼び下さい」

その女の子、シャルちゃんはスカートの縁を少し摘み上げ軽く頭を下げる。

その自然な造作に、育ちが良さがハッキリと分かる。

「まあ、これはごく丁寧に。初めましてシャルちゃん。私はなのはの母の桃子です」

少し思考停止してしまっていたが、桃子の挨拶によって俺達もハツとして動き出す。

桃子に続き、恭也と美由紀も挨拶をする。

「初めましてシャルちゃん。俺はなのはの兄で恭也だ」

「初めましてシャルちゃん。私はなのはのお姉ちゃんです。美由紀です。いいです」

俺も美由紀に続き、挨拶をする。

「初めましてシャルちゃん。俺はなのはの父で土郎という。そして、ようこそ高町家へ」

笑顔でシャルちゃんを迎え入れる。

「はい、よろしくお願いします。土郎さん、桃子さん、恭也さん、美由紀さん」

シャルちゃんもまた笑顔で俺たち高町家を受け入れてくれた。本当に嬉しい限りだ。娘がまた一人増えたようで、父親として何とというか嬉しいな。

「でも、迎えに行けなくて済まなかったねシャルちゃん。連絡が無いから今日来るとは思わなかったんだ」

「一応そう謝っておく。連絡が無いとはいえ迎えに行かなかったことには違いがないからだ。」

「いえ、私の方こそ連絡を出来なくてすいませんでした。でも偶然、なのはと会うことが出来たので大丈夫でした。ねっ、なのは?」

「うん! それで話していたらこんなに遅くなっちゃたの。ごめんなさい」

「私からも謝ります。ごめんなさい」

なのはとシャルちゃんはそう言っただけに謝る。

「まあ大丈夫だったんだから、良いよな・・・？」

恭也が頭を掻きながらそんなことを言う。

最初はなのはを注意するつもりだったのだから、シャルちゃんの手前ではそうはいかないのだ。

「さあシャルちゃん、どうぞ上がって。今すぐ夕御飯を用意するか
ら」

桃子はシャルちゃんの持っていた荷物を受け取り、家の中へと案内する。

そうだ、シャルちゃんの分の御飯がない。なら張り切って美味しいものを作ろう。

あはは、腕が鳴る。

「あ、お母さん。私がシャルちゃんを部屋に案内するからお父さんを手伝ってあげて」

なのはがシャルちゃんの手を取り、シャルちゃんに用意していた部屋へと連れて行く。

「ちょっとなのは、シャルちゃんの荷物わすれてるよ」

今度は美由紀が桃子からカバンを受け取り、なのはたちの後を追っていった。

「それじゃあ、シャルちゃんのご飯を作ろうか」

「そうですね」

そして俺と桃子はキッチンへと戻る。

「えっと、俺は・・・道場で瞑想でもするか」

一人残された恭也は、一人寂しく道場へと向かった。

++++ Side 高町士郎 なのは++++

私とお姉ちゃんはシャルちゃんを部屋に案内して、明日の予定を決めるために話し合っている。

色んな場所を案内したいし、私の大親友であるアリサちゃんとすずかちゃんも紹介したい。

「なのは、シャルちゃん、夕食にしようか!」

部屋の外からお父さんが呼んでいる。

「行こうか、なのは、シャルちゃん。お父さんとお母さんの料理、すごくおいしいんだよ」

「そうなんですか？ それはすごく楽しみです」

お姉ちゃんがそう言って立ち上がる。

私たちもお姉ちゃんに続いて部屋を出て、ダイニングへと向かった。

+++++Sideなのは シャルロット+++++

家庭で一緒にご飯を食べる。私にとってそれは初めての経験だった。生前、私は独りだった。両親は忙しく、姉もまた屋敷を空けることが多かった。

そして騎士団に入ることになって屋敷を出るその日もまた家族はいなかった。

送り出してくれるのは使用人だけ。悲しいとは思わなかった、それが当たり前だと。

だから、なのはの家族と、同僚とはまた違う誰かと一緒にご飯を食べたのがすごく嬉しかった。

嬉しくて、いつの間にか涙を流していたことに気付かなかった。

「……シャルちゃん!?!?」「……」

みんなが私を見て、何故か驚いている。

「はい、何でしょうか?」

「何でしょうか?って、シャルちゃん泣いてるよ……?」

「料理に何か問題でもあったのかな?」

なのはが泣きそうな顔で私を見て、土郎さんが自分の作った料理を前に何か考えている。

桃子さんや恭也さん、美由紀さんも心配そうな顔で私を見ている。

そうか、私はあまりの嬉しさに涙を流してしまっているらしい。

目を擦って涙を止めようとするけれど、全く止まらないどころかさらに溢れてくる。

「ち、違うんです。料理は・・・すごく・・・美味しくて。そうじゃなくて・・・こうして誰かと一緒に食べるの初めてで、それが・・・嬉しくて・・・だから・・・」

堰を切ったかのように私は泣き出してしまった。

何だこれは？ “テストメント 界律の守護神”である私には涙はもう必要に無いのに、嬉しいなんて思っちゃダメなのに。

今、胸にあるこの感情は、これだけは無くしたくない。

そっか、これが心の壊れた“彼”を元に戻した想い、“幸せ”なんだ。

未だ泣き続ける私の元に、なのはを始めとした高町家の人が集まって来た。

「寂しかったのねシャルちゃん。この家にいる間は私のことを本当のお母さんだと思ってくれていいのよ」

そう言って桃子さんは私を抱きしめて、両腕の中に私を包み込む。温かい。そしてほのかに香る優しい香り。これが・・・母の温もり・・・？

「私のこともお姉ちゃんだと思ってね」

美由紀さんは私の左手を取り、泣いてくれている。

「俺のことは本当のお父さんだと思ってくれ」

土郎さんも桃子さんみたいに私を大きな体で包んでくれる。

「そっだな。なら、俺もお兄ちゃんだと思ってくれ」

恭也さんは少し照れた顔をして言ってくれた。

「シャルちゃん、私は・・・」

なのはが私の右手を握りながら続きを話す前に、

「フフ、妹よね」

少し意地悪をする。

「ふええええええええ！？」

高町家になのはの声が響き渡る。

「キユキユイ」

ユーノが肩まで上ってきて頬を、その小さな手で叩いてくる。

「ありがとう、ユーノ。なのはも、土郎さんも、桃子さんも、恭也さんも、美由紀さんも本当にありがとう」

私はもう大丈夫だ。

いつか別れる日がくるけど、それまではこの幸せに甘えていたい。そう思った。

その日の夜は、一つの布団に私となのは、桃子さんが入り、右側の布団には

美由紀さん、左側には土郎さんがいる。ちなみに恭也さんは部屋に入りきらず、自分の部屋で寝ることになった。ごめんなさい。

シャルロットと海鳴市

+++++Sideなのは+++++

昨日の夜、私はシャルちゃんの抱える心の闇を知りました。いつも独り。それは以前の私にもあったものです。

お父さんが仕事で大怪我をしたとき、お母さんとお兄ちゃんは翠屋を経営し始めたばかりで、あまり繁盛していなかったために忙しく、お姉ちゃんも病院へお父さんのお見舞いに行つてよく家を空けていました。

だからシャルちゃんの想いには共感できたのです。

ご飯を食べ終えた後、シャルちゃんは泣き疲れたのか座ったまま眠ってしまいました。

お父さんがシャルちゃんを抱えて、お父さんたちの部屋へと連れて行きました。

どうやら今日は一緒に眠るつもりようです。

それを見て、私は何の迷いもなくハッキリと、

「私も今日はシャルちゃんと一緒に寝る！」

そう口にしました。だって、あんな話を聞いたらそうしたくなるから。

「そうね、なら今日はみんなと一緒に寝ましようか」

お母さんは微笑みながらみんなを見渡す。

「うん。私もシャルちゃんと一緒に寝るよ」

お姉ちゃんも笑顔で賛成してくれます。

そしてお兄ちゃんは、「俺はどうしようかな？」って少し迷っているみたい。

けど今日くらいは一緒でもいいと思うんだけど・・・

「恭也、布団がもう入らないから俺と一緒に布団で寝ることになるが・・・」

戻ってきたお父さんの開口一番のそれを聞いて、

「じゃあ自分の部屋で寝るよ」

拒絶の言葉を一切の迷いなく即答したのです。

あ、お父さんの表情が一気に残念そうなものへと変わってく。

「恭也、もう少し父と子のスキンシップというものを・・・」

「いや、さすがにこの年で親と同じ布団というのは少し・・・いやだ」

お父さんとお兄ちゃんの会話を聞きながら、私はお風呂に入るべく自分の部屋へ着替えを取りに向かいました。

それと今日のジュエルシード探索は、ユーノ君と相談してしないことにしました。

+++++Sideなのは シャルロット+++++

ゆっくりと意識が覚醒する。朝日が部屋の中へと差し込んでいる。いつの間にか私は眠ってしまったようだ。

辺りを見渡すと、昨日案内してもらった私の部屋でないことに気付く。

そして同じ布団の中には、なのはが可愛らしい寝顔で眠り続けている。

「……？」

何故知らない部屋で寝ているのか分からない為、昨晚のことを思い出す。

そして、夕食時の私を思い出し、恥ずかしさのあまりに一気に頭に血が上る。

今の私の顔は恥ずかしさの所為でとんでもないくらい赤くなっているに違いない。

「やってしまった。まさかあんなことになるなんて……」

いくらなんでもあんな子供のように泣くななんてどうかしている。

ハア、軽く……いや、かなりへこんでしまう。

そういえば“彼”が以前教えてくれた言葉がある。

(精神は肉体に引っ張られる……か)

最初、その言葉の意味がさっぱり分からなくて、何それ？って鼻で笑ったことがある。

今ではもう体験した後なので嫌というほど理解できた。

“彼”もこんな思いをしたのだろうか……。全く、私はこんなにも心が弱かったのか、鍛え直す必要がありそう
だ。

「おはようシャルちゃん」

声が聞こえた方に顔を向けると、そこには土郎さんと桃子さんがいた。

「おはようございます、土郎さん、桃子さん」

そう返すとお二人の表情が少し残念そうに変わる。
ん？ 何かおかしいことを言ったかしら。

「シャルちゃん。お母さんって呼んでもいいのよ？」

「そうだぞ。俺のこともお父さんと呼んでくれていいぞ？」

と、土郎さんと桃子さんがとんでもないことを言い出す。

「え？ あ、いえ……。そんな……。えつと……」

「「さあ」

（そんな笑顔で言われても困ります!!）

返答に詰まっていると、お二人の後ろに救世主が現れました。

「シャルちゃん、起きた？」

「あ、美由紀さん。おはようございます」

助かった、とそのときは思った。

けど、美由紀さんの顔が、土郎さんと桃子さんのと同じ残念そうな表情へと変わったことに気付いてしまった。

ああそうですか、美由紀さんも私の敵だったのですね。

「シャルちゃん、お姉ちゃんって呼んでいいんだよ？」

もう折れるしかないのか。でも、それも少し悪くない気がし始める。

「あの・・・」

覚悟を決めて言葉にしようとしたその時、部屋に音楽が流れ始める。私の隣でモソモソと何かが動く気配、そして・・・

「うう〜ん、シャルちゃん？・・・おはよう、シャルちゃん」

グッドタイミングなのかバッドタイミングなのかは微妙だけど、なのはが目を擦りながら起き始める。けど、ちよつと残念だったかな。

「おはようなのは、今日はいい天気よ。それで土郎さん、着替えたいので、その・・・」

そう少し頬を赤くしながら土郎さんに向けて言外に出てけと告げる。今は子供でも実際は大人なのだから許してほしい。

「ああ、それはごめんよ。もう朝食は出来ているから用意が終わったらおいで」

「なのは、シャルちゃんを洗面台に案内してあげて」

「待ってるからね」

士郎さんは苦笑しながら部屋を後にする。桃子さんと美由紀さんもそれに続く。

「それじゃあシャルちゃん、顔を洗いにいきましょうか」

「ええ、そうね」

なのははそう言って着替え始める。

さあ、この世界で初めての朝を迎えましょうか。

++++Sideシャルロッテ　なのは++++

「お待たせ」

「お待たせしました」

私とシャルちゃんは急いでダイニングへと向かい、椅子に腰掛ける。

「おはようなのは、シャルちゃん」

お兄ちゃんが私たちにそう挨拶してきました。

「おはようお兄ちゃん」

「おはようございます恭也さん」

私たちはお兄ちゃんへと挨拶を返します。

「よし、みんな揃ったことだし食べようか。いただきます！」

高町家を代表してお父さんが元気よくいただきますと手を合わせる。

「……………いただきます！」「……………」

それに倣って私たちも手を合わせ食べ始めた。

……………Sideなのは シャルロツテ……………

「それでなのは、今日はどうするんだい？」

昨日、お風呂に入っていないからと私は入浴を勧められ、入浴し終えて上がってきた後、美由紀さんに髪を乾かしてもらってからダイニングへと戻ると、そんな土郎さんの声が聞こえてきた。

土郎さんがなのはに向けて今日の予定を聞いているみたいね。

「うん？ えつと今日はシャルちゃんにこの街を案内して、それからアリサちゃんとすずかちゃんも紹介したいから……」

どうやら街の案内となのはの友人を紹介することになっているようだ。

そういえば昨日、夕食の前にそんなことを決めていた気がする。

「そうか。それとシャルちゃんは明日からなのはと同じ学校に通うことになるから、一応学校のほうも案内してあげるんだぞ？」

そうだった。ここへは留学生という設定で来たんだった。

この世界の界律も面倒なことをしてくれる。もう少し簡単な設定は無かったのか？

「なのは、途中まではお母さんも一緒に行くから。」

シャルちゃんの制服をお店まで取りに行くことになってるの。今準備してるから少し待ってて」

桃子さんの声が廊下のほうから聞こえる。

というか私の制服の寸法とかいつの間に測られたの？

というか界律よ、これは少々ご都合主義にも程があるのではないだろうか？

私は界律のあまりに万能かつ無駄な労力に、敬意とそれ以上の呆れた思いで胸が一杯になってしまう。

本当に一体何をさせたいのか、軽いイジメなのかも？

「はい。それじゃ少し待ってよっか」

「ええ」

五分位待っていると桃子さんがやってきた。

「お待たせ。行きましようかなのは、シャルちゃん」

「それじゃお父さん、行ってきますすー！」

「あなた行つて来ます」

「行つてきます。．．．．．土郎．．．父さん」

「ああ、行つて．．．．．へ？」

うわあ、顔から火が出そうだ。土郎さんも私の突然の言葉にフリーズしている。

そして隣にいるのははすごく嬉しそうに笑っている。

というか桃子さん、そんな顔で私を見ないでください！ ちゃんとお母さんと呼びますから！

もうこれ以上この場に留まることは出来そうになく、振り返らずに高町家を後にする。

十十 Side シャルロッテ　なのは十十十

家を出てから二時間弱、途中でお母さんと別れ、お父さんたちが経営する喫茶翠屋など大体の場所は案内し終えた。

そして今は私が通い、そして明日からシャルちゃんが通うことになる私立聖祥大付属小学校の校門前に立ち、肩に乗せたユーノ君やシャルちゃんと一緒に校舎を眺める。

「ここが明日から私の通う学校．．．」

シャルちゃんが学校を珍しそうに眺める。

「どうしたのシャルちゃん？ 何か学校が珍しそうに見てるけど．．

．．？」

「え？ ううん、何でもないわ。場所は大体分かったからもう大丈夫。それに通学用のバスもあるんでしょ？ なら迷えってほうが難しいわ」

「そっか。うん。なら次はお待ちかね 私の友達を紹介するね」

「わっ、危ないってなのは！」

私はシャルちゃんの手を引いて友達の家、すずかちゃんの家へと向かう。

昨日の内に、すずかちゃんとアリサちゃんにシャルちゃんのことを連絡しておいた。

だからすずかちゃんの家にはアリサちゃんもいるはずだ。

+++++Sideなのは シャルロット+++++

なのはの手に引かれて案内されたのは大きな屋敷。

私の過ごした屋敷もそれなりだったけれど、目の前の屋敷もまたそれなりだ。

門を潜り屋敷の前まで歩いていく。

なのはは扉の横に付いた呼び鈴（インターフォンというらしい）のボタンを押す。

すると・・・

「いらっしやいませ、なのはお嬢様、シャルロットお嬢様」

扉が開き、私たちにお辞儀をする一人の女性がなのはと私の名を口にする。

「あ、シャルちゃんのことともう教えてあるんだ」

顔に出ていたのだろうか、なのはが私の耳元で囁く。
なるほどね。それなら知っていて当然だわ。

「シャルちゃん、こちら、月村家メイド長のノエルさん」

「どうも初めまして、シャルロッテお嬢様」

「初めましてシャルロッテ・フライハイトです」

自己紹介も済み、私たちは屋敷の中へと案内される。

+++++Sideシャルロッテ　なのは+++++

「あ、なのはちゃん。いらっしやいー!」

「やっと来たわね、なのは」

ノエルさんに案内された先に、すずかちゃんとアリサちゃんが待っていた。

「うん、ゴメンね」

約束の時間まではまだ余裕があるけど、待たせたのなら一応謝って

おく。

「その子が昨日のメールで言った……」

「あ、うん！ この子がシャルロット・フライハイトちゃん。

昨日メールした通り、ドイツからの留学生で、今は私の家にホームステイしてるの」

「初めましてアリサ・バニングスよ」

「初めまして月村すずかです」

「初めましてシャルロット・フライハイトよ。シャルって気軽に呼んで」

「分かったわ。よろしくシャル」

「よろしくねシャルちゃん」

良かった。シャルちゃん、アリサちゃんとすずかちゃんと打ち解けてくれたみたい。

それから私たちは遅くまで話に花を咲かせた。

シャルちゃんも楽しんでくれたようだし本当に良かったよ。

夜、自分の部屋のベッドに入って、明日からの学校生活のことを思うと興奮してなかなか寝付けなかった。

シャルちゃん、友達がたくさんできるといいな。

初登校とジュエルシード探索

++++Sideシャルロット++++

時刻は早朝、学校生活初日という興奮材料のおかげで（子供か？子供よね）朝の弱い私も早起きをして、今は士郎父さん、恭也兄さん、美由紀姉さんと共に道場で汗を流していた。

「うわーん、シャルちゃんに負けたよ」（泣）」

士郎父さんが自己鍛錬していた私に突如、美由紀姉さんと試合をしてほしいと言ってきたので、かるく相手をしてあげました。

「あの、ごめんなさい。美由紀姉さん」

あと美由紀姉さん、先の動きが読めまくりです。

私が生前参加し、死んだ理由である大戦においては騎士見習い以下、というか一般人クラスですよ？

「いやー強いなシャルちゃん。動きが洗練されていたよ。

けど少し違和感のある動作が多々あったけど・・・どうしてだい？」

士郎父さんはなかなか鋭い観察眼をお持ちのようだ。

それなりに自然の動きをしたつもりだったけど、バレてしまっている。

下手に嘘をつくと後々首を絞める結果になりかねないから、ここは真実を語っておくことにする。

「えっと、やはり得物の違いでしょうか？」

私がいとも振るっていたのは刀身が140cm位ある長刀ですのと、答える。動きの違和感の原因、それは身長と得物である。

165ちよいあったものが、今では130から140の間くらい、当然筋肉など色々変わってくる。

まあ大して気にはならない。なぜなら今回の契約は子供の状態での召喚だから。

かなり能力の制限も受けている以上は全力を出す必要がないということだ。

「そうなのか。いや、それは恐れ入ったよ」

それから少し話し込んで朝食を取り、なのはと共にバス停まで向かった。

++++Sideシャルロット　なのは++++

私とシャルちゃんは、バス内で合流したアリサちゃんとすずかちゃんと共にバスを降りて学校へと歩いていきます。

「なんか・・・すごい視線を感じるんだけど。ねえ、私つてもしかして変なのかしら？」

シャルちゃんが自信なさげな低い声で話しかけてきた。

自分の制服姿を見て、「どこか間違ってる？」って呟いている。

「うん変じゃないよ、シャルちゃんが可愛いからみんな見てるんだよ」

すずかちゃんが笑顔でシャルちゃんを元氣付ける。

うんうん、私もそれには同感だ。

「確かにね、シャルって絶対男子にモテるわよ。私が保証するわ」

アリサちゃんもシャルちゃんを元氣付ける。

「にはは、シャルちゃんの髪ってサラサラだから、風に靡くとまるで天使の羽のように見えるもんね」

「私の髪をそんな風にたとえたのってなのはが初めてよ。でも・・・ありがとう。すごく嬉しい」

そんな話をしながら、私たちは他の生徒の視線の中をひたすら歩いて学校へと入っていった。

+++++Sideなのは シャルロッテ+++++

生まれて初めて（もう死んでるんだけど）の学校に緊張しながら歩き、今は隣にいる私の担任となる女教諭と共に教室の前に立っている。

「大丈夫よシャルロッテさん。みんないい子たちだからすぐ友達が

出来るわ」

「え、あ、はい！」

どこまで緊張する私！？ こんな経験なんてしたことないから焦る焦る。

唯一の救いはなのはたちと同じクラスだということ。
もし別のクラスだったら・・・うわっ、なんかすごいことになって
しまう未来が見えてしまうわ。

「それじゃ、呼んだら入ってきてね」

「は、はい、わかりました」

先生が教室へと入っていた。そして、

「おはようございます。今日はみんなに新しいお友達を紹介します。
ではシャルロットさん、入ってきてください」

呼ばれたーーーー！！！！

笑顔、笑顔、笑顔、笑顔、笑顔、笑顔、笑顔、笑顔、笑顔。

桃子母さん直伝の笑顔を思い出せ！ そして挨拶はハッキリと！

「はい」

さあ教室に入ったぞ、シャルロット・フライハイト。

うわ・・・みんな見てる。なのはとすずかはいつもみたいに笑顔だ。
少し落ち着く。

そしてアリサ・・・緊張してる私を見て、あなたは必死に笑いを堪
えてるわね。

とりあえず、まずは深呼吸して・・・よし落ち着いて行け。

「初めまして、今日からみんなと一緒に勉強することになりました
シャルロッテ・フライハイトです。
どうぞ、シャルって呼んでください」

++++Sideシャルロッテ　なのは++++

シャルちゃんが同じクラスになることをお母さんから教えてもらっ
たときはとても嬉しかった。

学校でも一緒ならシャルちゃんは独りじゃない。

それにしても教室に入ってきて緊張しながら挨拶するシャルちゃん、
可愛かったな。

シャルちゃんの紹介が終わり、それから午前中の授業が一つ終わる
ごとにクラスのみんなから質問攻めを受けています。

実に大変そうです。

「そろそろシャルちゃんを助けてあげたほうが・・・」

「そうね、さすがにこれ以上は無理ね。シャルと一緒に弁当食べ
たいし」

「にゃはは、そだね」

私たち三人は、シャルちゃんを質問攻めから救出する為、そして一
緒にご飯を食べる為に人だかりへと向けて出陣したのでした。

午後からは私とアリサちゃん、すずかちゃんも一緒にシャルちゃん
の許へ行き、全力で助け続けました。

シャルちゃん、どこまで人気になってしまったの？

++++Sideなのは シャルロット++++

私の初登校から早いもので一週間が経った。

今ではクラスのみんなだけでなく、別のクラスの子とも仲良くなっ
たと思う。

女子とはよく話すようになったし、男子とはスポーツ（サッカーと
いうらしい）をして何故か男子全員を凹ましてしまった。当初にお
いて理由は一切不明。

私がチームに指示を出して大差をつけて勝ってしまったのと、私の
プレーが男子のプライドを粉碎したことが原因だと、あとでアリサ
に教えてもらった。

ホントにごめんなさい、だって楽しかったんだよ!？

++++Sideシャルロット なのは++++

この一週間はあっという間に過ぎて去ってしまった。

魔法使いのユーノ君とシャルちゃんとの出会いは驚きの連続だった。

そして今、ジュエルシードの探索のほうも結構順調だと思う。

毎朝早起きしてユーノ君とシャルちゃんに魔法の練習を見てもらっ
てるからかな。

ユーノ君とシャルちゃんの魔法談義にも少し慣れました。

でもそれが話の内容が難しすぎてサツパリ分かっていないからだと思
うとちよっぴりへこみます。

とりあえずこの一週間で見つけたのは六つ。

最悪の光景を想像し必死にシャルちゃんを説得する。というか私も死んじゃうよ。

「・・・チツ」

チツ！？ 舌打ちしないでシャルちゃん！！ 私の心が折れそうだよ！？

その後いろいろありましたが、何とか新しい魔法“デイバイン・バスター”を使ってジユエルシードを封印しました。

教訓、シャルちゃんを怒らせると血の雨が降ることになる（未遂）。ちなみにユーノ君はシャルちゃんに怯えたり、私の砲撃を見て驚いたりとも大変そうでした。

M i s s i o n : 2 ヌイグルミの軍勢を包囲せよ

学校で夜な夜なヌイグルミが街を徘徊するという噂を耳にしました。ジユエルシードの力かもしれないということで、ユーノ君とシャルちゃんを連れて見回りを行いました。

一時間もしない内に目の前に現れたるはヌイグルミの軍勢。種類が豊富でトコトコ歩くその姿はとても可愛かった。

「ああなのは、私はもうMPが無いから後は任せるね」

と、シャルちゃんは大きなあくびをしながら私に言いました。

MP！！？ え、何それ！？ ただ眠いだけで魔力はまだ余ってるよね！？

結局、私はシャルちゃんを拝み倒して協力（強制的に）させました。教訓、シャルちゃんは眠気に襲われると、とてつもなく墮落する。そして嫌いなトマトを食べてあげると言うとすごく嬉しそうになる。

Mission:3 学校に現れるお化けさんを(力づくで)成仏させよ

噂その2、お化けさんが夜な夜この学校に出るらしい。

よし、今回は聞かなかったことにしよう。え、ダメ？

そして今は深夜の校舎内。ヒィ、暗いよ怖いよ何か出そうだよ。私は尋常じゃないくらいに震えている。

「えっと・・・大丈夫なのは？ ごめんね、こんなことさせて」

ユーノ君がそう言ってきてくれた。

「だ、大丈夫だよ。こ、怖くないから。早くジュエルシードを見つけて帰ろうね、ユーノ君」

精一杯の強がり。シャルちゃんはこんなことどうでもないとわんばかりに前を歩き続ける。

強いな〜シャルちゃん。突然、シャルちゃんが止まって聞き耳を立てて廊下の奥を見据える。

「出た」

たった一言。それが私を一気に恐怖の臨界点まで押し上げる。

「なのは、それ以上はユーノが生物をやめるから放してあげたほうがいいわ」

「ほえ？・・・!!! ごめんユーノ君!! 大丈夫!？」

シャルちゃんに言われて初めて気付く。

私がかいっばい握っていたのは“レイジングハート”じゃなく、ユーノ君だったのだ。

ダメだ、完全に魂が出てる。私は急いで外に出たユーノ君の魂を戻す。

「ハッ!? ここは一体どこ!？」

よかつた、生き返ってくれたよ。

「来るわよなのは、ユーノ」

そう言っつてシャルちゃんは右手に白い変わった(横棒が少し垂れた)十字架を握り締める。

後で聞くと葡萄十字という形で第三聖典という名前らしい。

「私があれをどうにかするから、なのはたちはジュエルシード本体を探して」

そう言いつつお化けさんに突っ込んでいくシャルちゃん。

あまりの突然の行動に驚いた私とユーノ君は声をかけようとしてやめた。

だっつて……

「とつとと逝ってしまいなさい、地縛霊どもー!ー!ー!ー!」

第三聖典を握り締めた右手でお化けさんたちをボコボコに殴り飛ばしているのだ。

いろんな場所へとすっ飛んでいくお化けさんを哀れに思いながら探

索を開始した。

十分としない内にジュエルシードを発見、封印を終えた。

正直、シャルちゃんを迎えに行くか迷ったけど、ユーノ君に諭され迎えに行きました。

うう、何か来た時より怖いよ。

そしてそこには、良い運動をしたと言わんばかりのシャルちゃんが肩で息をしながら仁王立ちしていました。

教訓、シャルちゃんはお化けさんだろうと何だろうと力での解決を望む。

M i s s i o n : 4 暴走大樹を停止させよ

今日はお父さんが監督を務めるサッカーチーム“翠屋FC”の試合の日です。

アリサちゃんやすすかちゃんと一緒に味方チーム応援します。

ある用事で遅れてきたシャルちゃんが応援に加わると、うちのチームはさらにテンションが高くなって、敵チームに大差をつけ始めました。

ホント人気があるねシャルちゃん。

アリサちゃんの話によると、男子の間ではシャルちゃんは“サッカー女帝”と言われているらしく、そのシャルちゃんの前では格好悪いプレイは出来ない、らしい。

試合終了のホイッスルが響き渡る。今日の試合は“翠屋FC”の圧勝でした。

その後、翠屋で昼食を終えた私たちは解散することになりました。でも私は一つミスをしました。

サッカーチームの男の子の一人がジュエルシードらしき物を持っていたように見えたのですが、気のせいだと思い込み放っておいたのです。

そして発動するするジュエルシード。暴走する大きな樹。
ユーノ君が人間が発動させたんだと言いました。

「っ！ やっぱり、あの時の子が持ってたんだ」

私、気付いていたはずなのに・・・こんなことになる前に止められ
たかもしれないのに。
後悔の念で一杯になる。

「後悔も反省も後！ ユーノ、どうすればいい？」

「あ、うん。封印するには原因もととなっているところまで接近しな
いとダメだ。」

でも、これだけの範囲に広まっちゃっているとどうすればいいか・

「・

「そう（探査系の術式も封印されてしまっている以上、私には手が
無い）」

「私がやる」

ユーノ君とシャルちゃんの会話を聞き、そう告げる。

「ちょっとなのは、それは「ユーノ」・・・」

シャルちゃんがユーノ君の言葉を遮る。

「手があるのね？」

「・・・うん、大丈夫。任せて」

「……分かった。信じるよ。ユーノ、ここはなのはに任せましょ
う」

「……なのは、無理はダメだよ」

「大丈夫だよ、ユーノ君」

結果として私はジュエルシードを封印できました。

けど、みんなにいっぱい迷惑をかけた。それがすごく辛い。

「なのは、今日のことを忘れちゃダメよ。

今回の失敗を反省して繰り返し返さないようにするためには、ね。

あとそれに早期発見による被害拡大は防げた。それだけでも大した
ものよ」

「そ、そうだよなのは。被害が広がる前に封印できたんだ。
それだけでもすごいことだよ！」

「うん、ありがとうシャルちゃん、ユーノ君」

二人の言葉に心が少し軽くなりました。

同じ失敗は起こさない、それが今日の教訓でした。

新たなる黒き探索者

今は夜が明け始め、街が目覚め始める頃。
海鳴市を、ビルの屋上より見下ろす三つの影。

一人は黒のマントを羽織り、戦斧の如き黒い杖を持つ一人の少女。
傍らには橙色の毛並みを持ち、額にはルビーの如き真紅の宝石がある大きな狼。

そしてもう一人・・・

++++Sideシャルロット++++

「なのは〜！ 早くしないとバスの時間に間に合わないよ〜！」

「なのは、まだか？」

「う〜ん、ごめ〜ん、もうちょっと〜」

私と恭也兄さんがなのはに向けて声をかける。

するとユーノを抱いていた美由紀姉さんが話しかけてきた。

「あれ？ 今日はどうにかお出かけ？」

「私となのははずずかからお茶会に誘ってもらっているので月村家へ。」

恭也兄さんには付き添いとして一緒に行くつもりですけど・・・」

「そうなんだ。ふうん、それで恭ちゃんは忍さんに会う、と」

美由紀姉さんがジト目で恭也兄さんを見る。

私は美由紀姉さんの言葉の中に知らない人名が出てきたのが気になったので訊いてみる。

「あの、忍さんって誰ですか？」

「うん？ シャルちゃん、この前月村家に行ったとき会わなかった？
なら教えてあげる。月村忍さんといって、すずかちゃんのお姉さん。
そして恭ちゃんの彼女さんなんだよ」

「おい美由紀」

恭也兄さんが少し困った顔で美由紀姉さんの名前を呼ぶ。
なるほど恋人ですか、そうですか。

恭也兄さんの恋人なら、それは美人な女性なんだろう。
会うのが楽しみだ。

「お待たせ〜！」

「遅いよなのは」

「にゃはは、ごめんね〜」

「じゃあ行くか、二人とも。バスの時間ギリギリだからな」

「おいでユーノ君」

なのはがユーノを呼ぶと美由紀姉さんの腕の中からはのはの肩へと

登る。

「じゃ、いつてらっしゃい。恭ちゃん、なのは、シャルちゃん」

「ああ」

「「「いつてきますー!」「」」

こうして私たちは月村家へと向かった。

十十Sideシャルロッテ　なのは十十十

私とお兄ちゃん、シャルちゃんは月村家へと到着し、ノエルさんに
すずかちゃんと一足先に来ているらしいアリサちゃんの元へと案内
してもらった。

「あ、なのはちゃん、シャルちゃん、恭也さん」

すずかちゃんが私たちの名前を呼んで出迎えてくれる。

「すずかちゃん」

私はすずかちゃんに答えるように名前を呼んだ。

「なのはちゃん、いらっしゃい。そちらの子には初めまして。
私はファリン・K・エアリヒカイトです。すずかちゃんの専属メ
イドをしています」

「初めまして。シャルロット・フライハイトです。シャルと呼んでください」

シャルちゃんは綺麗なお辞儀をしながら自己紹介をした。

「あ、この子がすずかのかの言っていた新しいお友達ね。」

初めまして、月村忍です。すずかのお姉ちゃんです。よろしくね、シャルちゃん」

「はい、よろしく願います、忍さん」

すずかちゃんのお姉さんの忍さんとも打ち解けてくれたようで安心する。

「お茶をご用意いたしましたしょう。何がよろしいですか？」

タイミングを見計らっていたのかノエルさんがお茶の要望を聞いてきた。

「任せるよ」

「私もお任せします」

私はお茶の種類にはあまり詳しくないので、お兄ちゃんに合わせて任せることにした。

「シャルお嬢様は？」

「私はローズヒップティーでお願いできますか？」

即答。シャルちゃんってどこかのお嬢様みたい。
後で聞くと、ローズヒップティーってお肌とかに良いんだって。
次からは私もそれにしてもらおうかなあ、て思ったり。

「かしこまりました。ファリン」

「はい了解です、お姉さま」

シャルちゃんの要望にも応えて、ノエルさんはファリンさんと共に
お茶の準備をしに行き、お兄ちゃんと忍さんも忍さんの部屋へと向
かった。

++++Sideなのは シャルロット++++

なのはについてのアリサとすずかの話を知っている。

どうやら今回のお茶会の目的は、近頃元気がないなのが抱えてい
るであろう悩みを相談してもらえようにするためのようだ。

なのはは二人の気遣いで目が潤んでいる。うんうん、いいなあ女の
友情。

だというのに、そんな良い雰囲気をぶち壊すのは猫に追いかけられ
ているユーノ。

それにしてもこの家には猫が多い。あっちを見てもこっちを見ても
猫、猫、猫。

（ネコはどちかかというが好きだけれど、数が多ければいいってもの
じゃないのよね）

ユーノが追いかけられるだけなら大して問題は無いんだけど、お約

束というか何というか、ファリンさんがトレイを持って現れる。
この先に起こると思われる被害を阻止するべく、私はユーノを抱え
上げる。

「ふう、大丈夫？ ユーノ」

「キューキュー」

怖かったね、よしよし。

それから場所を屋外へと移し、お茶会を続けた。

++++Sideシャルロッテ なのは++++

屋外に移ってしばらくの後、私は“ジュエルシード”の気配を感じ
た。

『ジュエルシードの魔力ね』

シャルちゃんも気付いたのか私とユーノ君に念話で伝えてくる。

『うん、すぐ近くだ』

『どうするなのは、シャル？』

どうするって、すずかちゃんとアリサちゃんがいる今、どうすね
ば……

『ユーノ、森の方へ走って。私たちはそれを追いかける』

『あ、うん、わかった。行くよ!』

シャルちゃんの提案をすぐさま受け入れたユーノ君は森のほうへと走りだした。

「あらら、ユーノどうかしたの?」

「えっと、何か見つけたのかも。ちょっと探してくるね」

「一緒に行こうか?」

ユーノ君を探すというのを口実に、“ジュエルシード”へと向かおうとして、すずかちゃんとアリサちゃんに嘘をつく。

嘘をつくのはすごく辛いけど、でも今は“ジュエルシード”を優先しないと。

すずかちゃんの家で、暴走されるようなことがあったら大変だ。

「私も一緒に行くから大丈夫。二人はここで待ってて」

シャルちゃんは二人が着いて来ないように仕向ける。

そして私たちは森の中へと入っていった。

++++Sideなのは シャルロット++++

森へと入った途端“ジュエルシード”の発動を感じた。

さすがにこのような場所でも魔法を使うとアリサたちに気づかれる可能性があるため、ユーノに結界を張らせた。

それにしてもこの結界はなかなかのものだ。
現実世界と結界内の時間進行をずらす。

私たちの魔術においても結界と呼ばれる術式はあったけれど、これほどの効果を持つのはなかった。

たとえあつたとしても使えるのは結界王アリスぐらいだろう。

それに戦時中のため、こういうのはあまり必要のない結界でもある。結界が完成したのが判り、私たちは奥から光が広がったのを確認した。

そして光の中から現れたのは大きくなった猫だった。

「あ・・・あれは・・・？」

「たぶん、あの猫の大きくなりたいてって思いが正しく叶えられたんじゃないかと・・・思うんだけど・・・」

「なんていうか・・・ジュエルシードの願いの叶え方ってどこかずれてる気がするわね」

私たち三人は呆れ果ててしまっていた。だって何か馬鹿馬鹿しいから仕方がない。

「さ、呆れるのはこれくらいにして、さっさと終わらせるわよ。みんなのがいたら大変な騒ぎになるから」

「そ、そうだね。すずかちゃんも困るだろうし、早く終わらせよう」

なのはが“レイジングハート”を起動させようとした瞬間、後方から猫へと向けて攻撃が加えられた。

「な、魔法の光!？」

「つまり、他の魔導師というわけね。なのは！」

「うん！　お願い、レイジングハート！」

そうして変身を終えたなのは猫の背を目指し飛び、着地後はなお続く攻撃から猫を守る。

すると敵の魔導師は猫の足元への攻撃に変更、バランスを崩させ転倒させた。

私は念のために“キルシュブリューテ”を実体化させて、地面に降り立ったなのはの横へと並んだ。

そして現れたのは、長い金髪をツインテールにした黒衣を纏った少女だった。

「同系の魔導師、ロストロギアの探索者か？」

あまり感情が感じられない声で問ってくる。

その所為かは判らないけれどなのはが少し怯えている。

それに彼女を見る限り、立ち振る舞いからして戦闘を意識した鍛え方をしている。

今のなのはではまず勝てない相手だろう。

「間違いない、僕と同じ世界の住人。そしてこの子、ジュエルシードの正体を……」

ユーノが何か呟いているが今はどうでもいい。

こちらはやることをするだけだ。

「いきなりの攻撃なんてあまり感心できないわね。ねえ、何が目的？ 教えてほしいんだけど・・・」

「その必要はない」

ま、当然か。少しでも情報がほしいのだけど、話し合いを最初から受けるなら攻撃なんてしないはずだ。

「なら、力づくで吐かせましょうか？　なのは、サポートお願い」

「え？　あ、う、うん」

本来なら一人でも十分だろうけど、なのはにも実戦を体感してもらい力を持つ者としての自覚を与えておく必要がある。

「さあ、始めましょうか。招かれざるお客様？」

+++++Sideシャルロット　黒衣の少女+++++

“ジュエルシード”の発動を察知してその場へと到着すると、“ジュエルシード”が原因なのかとても大きな猫がいた。

少し心が痛むけど、母さんの為だと自分に言い聞かせ、フォトンラッサーを打ち込む。

そしてさらに放つ。すると今度は私と同じ魔導師らしき白い服を着た子が猫を守るためにシールドを張る。

私は構わず打ち続けるけど、

「・・・硬い」

埒が明かないので猫の足元に着弾させて転倒させる。ごめんね。そのまま“ジュエルシード”を封印するべく現場へと向かう。私は白い子がデバイスを持っているのを確認するけど、一応問い質す。

「同系の魔導師、ロストロギアの探索者か？」

白い子は答えない。けど、隣にいるすごく長い剣を持った水色の髪をした子が、私の目的を聞いてきた。

でも私は応える必要はないとその言葉を断つ。

すると彼女は私と戦うつもりなのか、白い子にサポートをするように言っている。

本当は誰も傷つけないけど・・・仕方がない。

「申し訳ないけど、いただいていきます」

私のその言葉を開戦の合図として、水色の子が長い剣で薙いできた。

+++++Side 黒衣の少女　なのは+++++

私はシャルちゃんに言われてサポートをしている。

正直、あの女の子に攻撃するなんてイヤだけど、ユーノ君と約束したんだ。

“ジュエルシード”を全部集めるって。だからごめんなさい、名前も判らない女の子。

私はシャルちゃんがあの子を誘導したところへとデバインシューターを放つ。

そしてシャルちゃんは刀である子の攻撃を断ち切りながら翻弄している。

けど、あの子もそれに負けじと次々と魔力弾や斬撃を飛ばしてくる。

「ほう。結構な実力を備えているわ。あの子の師はよほどの腕を持つ魔導師のようね」

シャルちゃんが感心しながら襲い来る攻撃を切り裂いていく。

まだまだ余裕があるみたいだ。

あの子はシャルちゃんの強さが判ったのか攻撃の手数で決めにかかってきた。

それでもシャルちゃんにはたった一つも攻撃が通らない。

焦り始めたんだと思う。だから私たちへの警戒が一切なくなってしまうていた。

「これで終わりだよっ……！」

チエーンバインド

「しま……っ！」

そしてユーノ君が鎖の形をしたバインドであの子を捕える。

シャルちゃんは圧倒的だった。あれだけ動いて汗一つかいてない。

こうしてこの戦いは、いとも容易く終わりを迎えた。

捕まえた子へと歩き出したシャルちゃん。

あと3メートル程というところで上のほうから何かが落ちてきた。

その衝撃でシャルちゃんは木の葉のように宙を舞った。

「シャルちゃん!？」

「シャル!？」

私とユーノ君の心配は杞憂だったようで、きちんと体勢を立て直し
着地した。

そしてシャルちゃんは落ちてきた何かを凝視している。

「大丈夫かい、フェイト？」

知らない誰かの声が聞こえる。

土煙の向こうには大きな犬・・・ううん、狼さんがあの子を背に乗
せている。

そして、もう一人。全身黒い服、黒いフード付きの外套、黒い仮面
をしている子だ。

その子はある女の子を守るように、シャルちゃんとの間に立ってい
た。

ここからではよくわからないけど、シャルちゃんの顔がすごく青褪
めているように私は見えた。

天秤の狭間で揺れし者

+++++Sideシャルロット+++++

ロストロギア“ジュエルシード”を狙って現れた新たな黒の魔導師。機動力に特化したその少女は、なのはと同じくらいの幼さをだといふのに、なかなかの戦闘能力を保有していた。

私はなのはに実戦を感じてもらうために半ば無理やり手伝わせた。結果は私たちの勝利。まあ当然だ。

いくら能力が制限されていて、この身はかつて騎士だったのだ、敗北は決して許されない。

それに戦闘の素人とはいえ、なのはとの二人掛りでの戦いだ。

これで負けたら私はもう生きていけない（だから死んでるって）。

ユーノに捕縛魔法チェーンバインドを使わせて、黒衣の少女を捕える。

私は少女に話を聞く為に近づこうとした。思えばそれは油断の何者でもない。

相手が一人で現れたからといって、敵が一人とは限らない。らしくないミスだ。

少女と私の間に何かがズドン！と突き刺さり、その衝撃で吹き飛ばされる。

「シャルちゃん!？」

「シャル!？」

なのはとユーノがそんな私を見て叫ぶ。大丈夫よ、二人とも。私は優雅に、かつ華麗に着地する。内心ドキドキものだったが、顔には出さない。

吹き飛ばされる刹那、この目に見えたのは……クリスタルのよ
うな穂を持つ槍。

それは私が知っているものだった。

なにせ生前、この槍の担い手と二度戦い、一度は引き分け、二度目は負けたから。

信じたくはなかった。けど、それは見間違いではないはずだ。

だってあれは“彼”の……“彼”だけの神器……そう、“神槍
グングニル”なのだ。

今の私の顔は驚くほど青いのだろう、そんな気がしてならない。

「大丈夫かい、フェイト？」

土煙の向こうから女の声が聞こえる。フェイト、それがあの少女の名前なのだろう。

土煙が晴れていく。現れたのはオレンジの毛色を持つ大きな狼。

そして、黒の外套と神父服に身を包み、漆黒の仮面で顔を覆い隠している子供。

私と同じように小さな子供になってしまっているけれど、“彼”の気配だけは永い時間共に存在しているので嫌というほど分かる。

其は漆黒を担いたる最強の第四の力、“天秤の狭間で揺れし者”。

御名を4th・テストAMENT・ルシリオン・セインテスト・フォン・シユゼルヴァロード。

まさかこんな形で契約中のルシルと会うことになるなんて……

(最悪としか言いようがないわ)

敵対しての邂逅は今回が初めてじゃないけど、今回の契約のように“力”が制限されている中での出遭いはまさしく最悪としか言いようがない。

++++Sideシャルロッテ　なのは++++

シャルちゃんは動こうとしない。明らかに様子が変わだ。

「・・・シャル・・・ちゃん・・・？」

傍に行きたい、けどここから先へ向かおうとすると、どうしても足が動かない。

(お願い動いて、動いてよ・・・！)

相手が三人になったら、いくらシャルちゃんでもきつと勝てないはず。

自分の動かない体と格闘していると、仮面の子が黒い女の子へと声をかけた。

「頑張ったけど少し惜しかったね。

戦場で焦って冷静な判断が出来なくなると意図も容易く崩れ去る、忘れないように」

声はそう大きくないのに恐ろしく響く女の子の声。

私は、何故かその声に畏敬の念を感じてしまっただけでした。

++++Sideなのは 黒の少女++++

「大丈夫かい、フェイト？」

アルフが私を背に乗せながら聞いてくる。正直危なかった。白い子に関しては敵じゃないけど、水色の子は桁違いに強い。

私の攻撃が全てあの剣によって切り捨てられてしまった。

しかも、私を自然と白い子が放つ魔力弾の射程圏へと誘導するあの動き、おそらく私じゃ勝つことは不可能だろう。

バインドに縛られたところを、すごく良いタイミングで助けてくれたアルフト、新しく仲間になったルシルに助けられた。

ルシルはわざわざ変声の魔術を使ってまで、私に労いとダメ出しの言葉をかける。

声と名前を変えることにしたのは、ルシルが前から決めていたことだけ。

あんまり自分という存在が明るみになるのはよくないって話だった。

(でも今はダメ出しの方はあまり聞きたくないかも)

少し落ち込みながらそんなことを思う。

私の使い魔であるアルフにバインド引き千切ってもらい、ようやく解放される。

『ごめん、アルフ、ルシル。一人で大丈夫って言ったのに……』

『気にすることはないよフェイト。私は使い魔なんだから、そっか

るルシル?」

「ん? 当然だな。俺はフェイトとアルフを手伝うと決めているから、助け合うのは当たり前だよ、フェイト」

『うん、ありがとう』

二人の思いに心がすごく温かくなる。

さて、アルフとルシルが来たからもう負けないよ。

「今度こそジュエルシード、いただいでいきます」

何故かは知らないけど呆けてしまっている水色の子に再戦を申し込む。

+++++Side黒の少女 シャルロット+++++

まずい! ルシルが敵に回ったとなると悠長に構えてはいられない。

「なのは! ユーノ! 悪いけど金髪と狼のほうは任せろ!

おそらく私は仮面の奴で手一杯になるはずだから!」

二人の返事を聞く前に、私はなのとは同じように変身する。

私服から全体的に白となったフレアードレス。

インナースーツも白で統一されており、前立てのラインは蒼。

上まで閉められたファスナーの飾りには桜の花弁が施されている。

アウターは前立てのない白いシボレロョートジャケット。白銀の籠手と具足。

現代で言うバリアジャケットである戦闘甲冑を具現化させた。
生前参加していた大戦における、魔術師としての戦闘用の衣服だ。

「シャルちゃん、ソレ・・・バリアジャケット・・・!?」

「魔術師にもそういうのがあったんだ」

なのはとユーノがその姿にとても驚いているようだが気にしていら
れない。

そして間違っても“テストメント界律の守護神”の外套と神父服キャンクは具現化させな
い。

今そんなことをしたら、とんでもないことになるに違いないから。
ルシルは変声魔術を使っていることから自分の正体をこちらに明か
すことを嫌っているようだし、私も彼の仲間と思われてなのはたち
に嫌われるのはどうしても避けたい。
全くもって面倒事ばかりが現れる。

(それにしても・・・どう戦おうかしらね?)

彼は大战当時、あらゆる神器を複製し操ったことから“神器王”と
謳われ、そのうえ、彼個人の有する火力があまりにも絶大ゆえ“孤
人戦争”とも恐れられた。

そして今は“テストメント界律に守護神”十一柱の内、最強とされる黒き第四の
力の座にいる。
ただ私と同様、たぶんルシルも世界から何らかの制限を受けてい
るはずだ。

その証拠に私の目の前に突き刺さる“グングニル”からは微弱な魔
力しか感じられない。

形を似せているだけの“神器”ですらない魔道具と言ったところだ
ろう。

まあルシルは反則の塊であるから尚更幾重にも能力が封印されていると思いたい。

思考を巡らせる中、ルシルが私たちに向かって声をかけてくる。

「残念だけど君たちは私一人で相手をするね。」

フェイトとアルフはジュエルシードの封印を優先すること、いいね？」

きちんと女の子喋りだ。演技も徹底しているわね。

ルシルも私と同じ考えのようだ。魔導師は魔導師、魔術師は魔術師で。

「やはりそうくるわけね。ならこちらも・・・」なのはとユーノも封印に向かって！！」

「でも・・・いいから早く！！」・・・気をつけてねシャルちゃん！
行こ、ユーノ君！」

「う、うん！」

なのはが何か言おうとしたけど、ピシヤリと制する。

するとなのはは、納得は出来ていないけど、という風でも頷いて、黒の娘とオレンジ狼のもとへと向かう。

二人が行くの見届けようとしたところで、

我が手に携えしは確かなる幻想

そんな言葉が脳に浸透する。

ルシルが今まで召喚されて、その世界で気に入り複製してきた武装、もしくは術式を使用する際に発する呪文だ。

なのはたちは足元に大きな光の紋様が現れたことに気付く。けどいつの間にも移動したのか不明だが、真後ろに立っているルシルには気付いていない。それはダメだ。防御なしでのルシルの技は極悪な威力を持つ。

緋炎の揺曳

私は全力でなのはたちの盾となるべく疾走するが間に合わない。紋様から細い光柱が波打つように噴き出して来た。ならば、と中心へと向かう光の波が少し邪魔だが、

「ごめん、なのは！ ユーノ！」

ヴァイント・シユトウース 風牙烈風刃

「え・・・っ？」

なのはたちを紋様上から退かす為には風の壁をぶつける。未だになのはたちを射程圏内から退かしていないというのに、ルシルは複製したものであるう能力の術式名を告げる。

「聖なる鎖に抗って見せよ・・・シャイニング・バインド！」

目が眩むほどの光の柱と、それに合わせて舞う羽が周辺を照らし出す。

なのはとユーノは、私の放った風の壁に吹き飛ばされたおかげで、痛そうにしているけどギリギリ紋様から吹き上げる閃光から回避出来ていた。

あの程度の打撲なら、あんなものを受けるとははるかにマシだ。

「……ま、間に合った」

安堵の思いで腰が抜けそうになるが、ルシルは待つてはくれないだろう。

さすがの私も、ルシルの使用した高ランクと思われる複製術式に頭に来た。

本格的に戦闘するために“キルシュブリューテ”を構える。

「ありがとうシャルちゃん、助かったよ」

「あれが……魔術……？」

なのはは感謝の言葉を、ユーノは魔術の力に驚愕している。けど、さっきのアレは私たちが扱う魔術とは別物だ。

ルシルはアレをどこの世界で複製してきたかは不明だけれど、説明している暇がない。

「そんな手で今のを回避するんだ」

「あんなものが直撃したら、なのはとユーノがどうなっていたか分かるでしょ!？」

あれほどの高濃度の魔力流をなののような素人に放つなんてどうかしている。

明らかに今の一撃でなのはを再起不能にするつもりだったのだ。するとルシルから、

『心配する必要はないぞシャル。この世界の魔法独自の非殺傷設定という術式をすでに取り込んでいる。』

それゆえに、身体的な傷は負わないようになっている『

『テストメント間用のリンク!? どういうつもりルシル!?』

“テストメント界律の守護神”間でのリンク思念通信が来た。

そんな突然のルシルの行動に驚きを隠せない。

「どういうことシャルちゃん? 私がどうなっていたって?」

「確か魔術って僕たちが使う魔法のように非殺傷設定がないって話じゃ……?」

え? つまり今の魔術を受けていたら、僕となのは……!」

「ごめん、今は話し込んでいる暇がないの。あいつも私と同じ魔術師。」

しかも私よりたぶん強い。ユーノ、今回のジュエルシードは諦めて」

「……わかった。今は無事にこの場を乗り切ることが大事ということだね」

さすが考古学を生業とする部族生まれのユーノだ、理解力と決断力がある。

なのは今ひとつ理解していないようだけれど、“ジュエルシード”を諦めるということだけは分かっているみたいだ。

「さて、もう少し付き合ってもらいましょうか? 白いのと水色のとフェレット君」

「わ、私はなのは! 高町なのは! そしてユーノ君! フェレットじゃないよ!? そしてこの子は……!」

「シャルロツテ・フライハイト」

なのは、あなたって・・・全く、こんなときにすごい子だ。
私はルシルとは六千年以上の付き合いだから今更名乗るなんておかしいけどね。

「あなたは！？ あなたの名前は！？」

「・・・ゼファイ」

ゼファイ？ もしかしてルシルの姉“ゼフィランサス”から取っているのだろうか？

名前と声も変えるとは、徹底した偽造っぷりだ。ルシル、という愛称だけでも十分女の子っぽい響きなのにね。

「ゼファイ、ちゃん」

「私の扱う魔術には、そちらの魔法と同じ非殺傷設定が組み込んであるんだ。

だから、安心して・・・受けなさい！！」

ルシルはそう言い、後ろに立つ樹へと飛び上がって張り付き、

「行くよ・・・！ 墮獄・・・必定・・・！」

夜魔判決

小さな言葉と共に私へと突撃してきた。

私はカウンターを撃つために紙一重で回避する。だがそれがダメだった。

ルシルが地面へ着弾した瞬間、大爆発を起こし、私はその爆風によつて吹き飛ばされる。だが、それで私は終わるつもりはない。

「甘いっ！！」

風牙真空刃^{レイレ}

使用したのは風嵐系の攻性術式。

先程なのはとユーノを助けるために放った風の壁を撃つ烈風刃とは違い、鋭利な真空の刃を放つ魔術だ。

『なのは！ さっきと同じように誘導するから砲撃をぶっ放して！』

私は念話で、なのはにディバイン・バスターによる攻撃の準備させる。

さあ、ルシル。私の友人の一撃を受けてみなさい！！

「どこまで耐えられるか見せてもらいましょうか、ゼフィ！」

フランメ・ウント・ブリッ
双牙炎雷刃

ルシルが口にした偽名であるゼフィと名指し。

次は炎熱系と雷撃系を使用した刃を同時に四閃放つ。

ルシルは回避行動を取った後、

我が手に携えしは確かなる幻想

再度、大技を使うつもりなのだろう。また複製術式・武装使用のた

めの呪文を口にした。

そしてルシルの手に魔力が集まり、ソレは形を現す。

『なのは、準備はいい!?!』

『うん! いつでもいけるよシャルちゃん!!--』

よし、準備は終わった。

(ルシル、今のあなたは昔と違って力押しが目立つようになったのに気付いてる?)

全く、強すぎる力を持つと自己の鍛錬を怠るのは誰も一緒ということだ。

現に私も“テストメント界律の守護神”となり、召喚された世界では力押しだけで契約を執行してきた。

そしてルシルは左手に携える七色の光を放つ槍を投擲する準備に入った。

『ユーノ! これから私は魔術の盾を出すから、あなたも私の盾に重ねてシールドを張ってちょうだい!--』

『わ、分かった! やってみるよ!--』

『なのは! ゼフィの攻撃を私とユーノが防ぐから、攻撃が途切れたらあいつに大きいの一発当てちゃって!--』

『うん、わかった!--』

ルシルが術名を宣告する

「邪竜一殺……竜殺の聖槍!!」

セント・ゲオルギウス

彼の者より放たれるは竜を一撃のもとに滅する神聖なる槍。
竜と言う種を例外なく葬り去る、対竜種における最強の一撃だ。

(やっぱり制限されているわね。威力が全然ない)

生前に見たこの魔術の威力はこんなものじゃなかった。

このランクくらいの一撃ならおそらく受けきることが可能だ。

『ユーノ!』

『シャル!』

覚悟しなさいよ、ルシル!!

「我が心は拒絶する!!」

ゼットリッシュ・サイダー・シユタン

「ラウンドシールド!」

私は魔力をすべて、今発動できる制限されていない防性術式の盾に
送り続ける。

そしてユーノが私の盾に重なるようにシールドを張る。
七色の槍の一撃が盾に衝突して停止する。

「うく……! でもやっぱり強い……! でも……!」

よしっ! 順調に耐えている。これなら防ぎきれる!
想定していたより少し威力のあったゲオルギウスの槍。

だけど私とユーノのデュアル障壁の前に、徐々に威力が衰えていくルシルの一撃。

「なのは!?!」

「いくよ、レイジングハート!

デイベイイーン・・・バスターアーーーーッ!?!」

砲撃特化のシューティングモードへと変形した“レイジングハート”から放たれる桜色の砲撃。

それが技後硬直で動くことのできないルシルへと一直線に突き進んでいく。

「ハハ、すごいな・・・」

ルシルはただ一言、そう口にする。

そしてなのはの放った桃色の閃光デイベイン・バスターの直撃を受けた。

「『』どうだ!?!」

私たちはルシルに一撃を入れることに成功した。もうもつと立ち上る土煙へ向かって吼える。

(けど、倒せてはいないのよね、きっと)

そう、あのルシルが何もしないまま、終わるわけがなかった。

私とアルフが“ジュエルシールド”を封印し終えて戻ってきたときに見たのは、ルシルが白い子の放った砲撃の直撃を受ける姿だった。

「ルシルのやつ、ちょっとヤバくないかい？」

あんな砲撃の直撃を受けたら、さすがにマズイよ」

白い子の砲撃を受けたルシルを見て、アルフが心配している。

けど、私は初めてルシルと出会ってから起きたことを思い出し確信する。

「ううん、ルシルは大丈夫だよ。だってあんなに強かったんだからさ、アルフ。ルシルを迎えに行こう」

「あいよ」

そして土煙が晴れていく。

そこには少し疲れたような感じで立っているルシルが現れる。

ほら、やっぱり無事だった。私とアルフは顔を見合わせて頷きあい、ルシルのもとへと歩いていく。

十十Side 黒の少女　なのは十十十

「その歳でこの威力はかなりすごいよ」

「・・・そ、そんな・・・馬鹿な・・・」

今の私が撃てる最高の一撃だったのに、ゼフィちゃんは無傷だった。ユーノ君がとてつもなく驚いている。私もだけど声が出ない。

「……シャルちゃん」

「……今回は私たちの負けね。なのは、ユーノ……ごめん」

「そんな！？ シャルちゃんの所為じゃないよ!!」

シャルちゃんが謝るのは絶対に間違ってる！

こればかりは、きつとどうしようもなかったんだ。

「ゼフィ、ジュエルシードの封印が終わった。早く帰ろう。」

いつの間にか傍に来ていた黒い女の子と狼さんがゼフィちゃんに向かって、“ジュエルシード”の封印完了の報告をした。

「ん、分かった。それではこれで失礼するよ」

「待ちなさい！……今度は負けないからね、ゼフィ。」

『ルシル、話がある。明朝、海鳴公園という場所で待ってる。必ず来て』

シャルちゃんはゼフィちゃんにそう強く誓った。

そしてゼフィちゃんもそれに答えた。

「上等です。『了解した。では明朝、また会おう』」

黒い女の子とオレンジ色の狼さん、唯一名前を覚えてもらったゼフィちゃんが去っていく。

私はただ、あの子達を見ていることしか出来なかった。

「・・・ユーノ君、シャルちゃん」

「どうしたのなの？」

「ん？」

「・・・私、強くなりたい。今度は、今度こそは負けないように。だから、手伝ってくれるかな？」

「「当たり前だよ」「」

私は決意を新たに、未だに待たせているすずかちゃんとアリサちゃんのもとへと戻っていった。

+++++Sideなのは 黒の少女+++++

「改めてありがとうルシル。ルシルのおかげで、邪魔されずに二つ目のジュエルシードを封印できた」

今、私たちはこの世界でのアジトである高層マンションの一室で休んでいる。

「いいよ、気にしなくても。さっきも言ったとおり、わたし・・・俺は好きで手伝っているんだ。」

だからわざわざお礼なんて言わなくてもいいんだよ」

ルシルは未だに慣れない一人称“俺”に苦戦しながらもそう言ってくれた。

ルシルは最初、“私”という一人称だったんだけど、ルシルの女の子のような外見から、私、と言うといろいろと認識が甘くなってしまう。

男の子なのに、女の子って思えてしまって、何かまずい問題が起きたり、とか。

だから男の子であるということを常に認識し続けられるように一人称を変えてもらった。

「そうだよフェイト。こいつは好きでやってんだからさ。とことん使ってやればいいよ」

「君は少し遠慮って言葉を学びなさい」

それから二人はお互いに文句を言いながら、ルシルが用意してくれた夕御飯を食べている。

うん、今日もルシルの御飯は格別だ。

気が付くとアルフとルシルが私を見て微笑んでいた。
なんか恥ずかしい。

「うんうん。フェイトの笑顔は最高だね〜！」

なんてアルフが言ってきたので顔が熱くなる。そんなに見ないで二人とも〜。

十? ? ? ? ミニコーナー ? ? ? ? ? ? ? ?

シャル

「あら？ いらっしやい。ここから先は、その回に使われた魔術を紹介するコーナーよ。」

コーナー名はそうね・・・シャル先生の魔術講座、にしようかしら
なのは

「あれ？ どうしたのシャルちゃん？ そんなスーツなんか着て」

ユーノ

「しかもメガネをかけてるし。シャルって目が悪かったっけ？」

シャル

「形から入ってるの。それと、なのは。どうしたの？ って、私が今し方説明したよね？」

このシャル先生の魔術講座は、魔術を紹介するコーナーだって」

なのは

「にははは。うん、聞いてた。でもユーノ君は嬉しいんじゃない？ 魔術にすごく興味ありそうだし。私は難しくてあまり憶えられないけど」

ユーノ

「うん。でもなのはに魔術は扱えないものらしいから、僕みたいに興味が無ければ憶える必要もないんじゃないかな？」

シャル

「そうね。無理に憶える必要はないと思うわ。」

さて、それでは早速始めようかしら。今回、使われた魔術は3つ。

風牙真空刃^{レーレ}

ヴァイント・シュトウース
風牙烈風刃

ゼーリツシュ・ヴァイダー・シュタント
我が心は拒絶する - -

真空の刃を放つて対象を切り裂く、風牙真空刃レーレ。

風圧の壁を対象に叩きつけて、吹き飛ばすことで強制移動させたり押し潰したりする、風牙烈風刃ヴァイント・シュトウース。

対魔力用の円形の盾を創り出す、我が心は拒絶するゼーリツシュ・ヴァイダー・シュタント。

上二つは、魔術的にすると攻性術式と言われ、下は防性術式と言われているわね」

なのは

「レーレ、とか、ヴァイント・シュトウース、ゼーリツシュなんかかって英語^{ドイツ}じゃないよね？」

えっと、もしかしてシャルちゃんの国ドイツ語だったりする？」

シャル

「まあ、そんな感じね。レーレは独語^{ペルガ}で真空という意味よ。

で、ヴァイント・シュトウースは、突風という意味。受けてみて解っているでしょ？」

そしてゼーリツシュ・ヴァイダー・シュタントだけど、ゼーリツシュは心の、精神の、魂の、という意味よ。

ヴァイター・シュタントは抵抗、反抗の意味で、実は拒絶じゃないの。

ちなみに拒絶はヴァイゲルングと言つたのよ？」

ユーノ

「うん、確かにすごい風圧で、訳も解らないまま押し出されるように吹き飛ばされたね。」

けどそのおかげで、ゼフィってこの魔術を受けることが無くて良かったんだけど」

なのは

「ゼフィちゃんの魔術もすごかったね。光がキラキラだし。」

でもすごく危ないんだよね？ シャルちゃん、魔術を使ったゼフィちゃんにすごく怒ってたし」

シャル

「えっと、あの子の事に関してはまた追々ね。」

でも、そうね。あの時、ゼフィ（ルシル）の攻撃に非殺傷設定があるなんて知らなかったし。」

大切な友達であるなのはとユーノが、私と同じ魔術師であるゼフィ（ルシル）に傷つけられると思ったたらやっぱりね」

なのは

「シャルちゃん・・・ありがとう」

シャル

「コホン（テレ隠し）。それじゃ、第一回のシャル先生の魔術講座はこれで終了よ。」

良かったらまた来なさい。今度は美味しいお茶（淹れられないけど）を用意して待っているわ」

なのは&ユーノ

「ばいばい」

天秤の狭間で揺れし者（後書き）

重要キャラクター紹介

“4th・テストメント・ルシリオン・セインテスト・フォン・シユゼルヴァロード”

両親譲りの、男と言っても信じてもらえないような外見をしている。髪型はインテークのロングストレートで銀髪。うなじ辺りで縛っている。

右目はラピスラズリ、左目がルビーレッドのオッドアイ。

“天秤の狭間で揺れし者”の二つ名を持っていて、界律の守護神の中でも最強とされる“力”。

主な契約は、世界・文明の破壊、人類淘汰、文明の開拓など様々なことを任されている。

本来の守護神と違って、死んでいない内に守護神となったことでトラブルが多い。

全く関係のない世界に事故で召喚されたり、人間の意志によって召喚されてしまうことが多々ある。

使用武装

神器・神造兵装第一位“神槍グングニル”

“揺れ動くもの”っていう意味を持つ、投擲すれば必ず対象に当てる事が出来る必中必殺の槍。

20cm程度の柄の上下に1m近いクリスタルのような穂が付いた大槍。

先天性の力、固有能力の“複製”を保有している。

それゆえに一度見た魔法・魔術・技・知識などを、自らの能力として扱うことができる。

白と黒の密会

++++Sideシャルロット++++

「おつつつつつそおーい！！！！遅い！！遅すぎる！！」

「はっ！？ イタタタタタタ！ 痛い！ わ、割れる！ 頭が、顔が変形する！！」

そ、早朝と言ったのは君だぞシャル！？ きつちりとした時間を設定しなかった君が悪い！！

ていうか、君はどこでアイアンクローなんて覚えたんだ！？」

全力のアイアンクローを受けたルシルが叫ぶ。うるさいな、もう！ 早朝（午前5時ちよい過ぎ）、昨日の約束どおり海鳴公園でゼフィことルシルと話（遅刻の制裁）をしている。

確かに時間を決めなかったのは悪いけど、やっぱりレディを待たせたのはダメ。

だからこれは必要なお仕置きなのよ、そうったらそうなのよ！

「プツ、何がレディだよシャル。もうそんな歳でもないだろう」

「っ！？ 勝手に人の思考を読むな！！ バカー！！！！！！」

「な、一体何を！？ ギャアアアアーーーーーッ！！」

お、折れる！！ ア、アルゼンチンバックブレイカーーーーーー

「!?!?」

あら、この技を掛けられている状態でハッキリと声が出るのね、ルシル。

そんなこんなで、私たちのきちんとした再会の挨拶は終わった。

「で、どうしてあなたがこの世界にいるのルシル?」

「ハアハアハア、さ、さっきの地獄絵図はスルーなのか?」

「……まあいい。答えは簡単。この世界に召喚された、それだけだよ」

ルシルは肩で息をしながらそう答えてくれた。でも……それは……。

「同じ時間列、因果律の世界に複数の界律テストメントの守護神が召喚されるなんて……」

「この場合、契約内容には絶対殲滅対象関係がほぼ間違いなく含まれる。アポリュオン

実際、私は何度かあったしな。君も何度かあるだろう? シャル。

だが今回は、肉体が構成され、子供にされ、戸籍まで用意された……

「・

二人して神妙な面持ちで頷きあう。

「それに加えて契約内容の詳細提示はなし。

能力値はかなり制限されているし、こんなこと今までなかった。

本当に分からないことだらけなのよ。あなたもそうでしょうルシル?」

私は、ルシルも初めての状況に戸惑っていると思ったからそう言った。

「ん？ あー、そうか。君はこういうのは初めてか。

そうだよな、私のように不完全な存在ではない、完全な存在として確立されているからな」

「え？」

どうやらルシルは今までの契約内容の中にこういった状況があったらしい。

本当に大変だな、不完全な“テストメント界律の守護神”は……。

「あれはいつだったか、自称最強無敵の魔法使いを名乗る赤毛の少年とその仲間と共に戦争を終わらせたり、その彼の息子である10歳の魔法先生と共に世界を救ったり、ウサギにされて魔法少女のマスコットキャラにされたり、高校生となって友人と共に宗教団体と戦ったり、また別の世界では人に憑依させられ殺されたり、と色々だ」

「………バカみたい」

「………そうだな、私もそう思う。けど、ほっとけ」

ルシルが遠い目で虚空を見つめる。私がそんなのになっただら……自殺ものだ。

もうこのような話は切り上げ、本題に移ろうと話題を変える。

「ルシル、ジュエルシードのことだけど……」

“ジュエルシード”。おそらく私たちが喚ばれた理由と何かしら関係があると思われるモノ。

「……初めてアレと遭遇したとき、これが召喚された理由だと思っただが、界律から何も干渉してこないところを見ると、まだ別の理由があるのだろう」

ルシルの考えを聞き、彼もまた詳細を知らないということに軽くシヨックを受ける。

「もう一つ、あのフェイトとアルフというのは？」

私が聞いておきたい最大の疑問、あの子たちがジュエルシードを集める理由。

ルシルはあの子たちとかなり親密なようだ。ユーノのように理由があつて、ルシルもそれを知って手伝っているはずだ。

「さあ？ 私はジュエルシードが危険なものとして判断した。

あの子達がそれを集めているというのを聞いて協力しているだけに過ぎない。

ゆえに理由に関しては不明。いつかは話してくれると思うが、それまでは見守るつもりだ」

だと思つたら、あの子たちがジュエルシードを集めている理由を知らないときた。馬鹿ですか？

ルシルのその発言に、私は嫌な予感がした。

「あれは元々ユーノの所有物よ。そちらの行為は強盗紛いの犯罪行

為」

確かな理由も無く、そのような行為に走っているなんて言うのは許せるものではない。

「私はフェイトとアルフに協力すると誓った。それを今変更しようとは思わない」

私とルシルはお互い殺気立って、共に瞳の奥を見つめる。

一切の揺らぎがない、それを絶対として決意している瞳だった。

でもルシルの理由はそれだけではないはずだ。だってフェイトって子はまるで……。

「私ね、ルシル。フェイトという子を見てある女性を思い出したのよ。

あなたの恋人だった氷雪系最強の魔術師“蒼雪姫シエフィリス”を、ね」

「っ！」

ルシルの顔色が変わった。間違いない。ルシルはあの子、フェイトにシエフィリスを重ねているのだ。

でも、それだけはダメ。あの子に対してそれは途轍もなく失礼な感情だ。

「……な、何を……？」

凶星をさされ動揺したのかもった。普段のルシルならばあり得ない。

私は間違いを越そうとしているルシルへ、

「シェフィリスとフェイトは違う。髪の色がじゃない、瞳の色がじゃない。」

存在が違うのよルシル！ あなたの感情は間違っている！！」

彼の間違いを指摘、糾弾する。

ルシルは俯いていた顔を上げ、私の顔をしっかりと見る。

「分かってる、そんなことぐらいは。確かに彼女をシェフィと重ねるときがある。」

だが私はあの子を、フェイトして守ろうとしている。それだけは間違いない」

ルシルは真剣な顔で私を見続ける。そう・・・わかった。

「なら、引くつもりはない、ということでもいいのね？」

最終確認をする。返答は決まっているだろうけど念のためだ。

「愚問、だな」

「・・・ならば・・・」

「今から私たちは敵だ」

完全なる決別。もう後戻りはできない。でも絶対に負けない、負けたくない。

例え、相手が最強であったとしても絶対に。

いつの間にか、なのはと魔法の練習を始める時間となっていた。

遠くから私の名前を呼ぶなのは声が聞こえてくる。
一瞬だけなのは声のした方へ視線を向ける。
そして次に視線を戻した時、私の前にはすでにもうルシルの姿はなかった。

「バカ」

++++Sideシャルロット ルシリオン++++

シャルと完全に決別した。

大戦の折、敵でありながら唯一その在り方に憧れた接近戦最強の騎士シャルロット。

一度目は彼女にあわせた戦いに敗れた（彼女は引き分けと言い張る）。
二度目は、そう、時間的猶予が無かった為に形振り構わず戦って勝った（今でも勝った気はしない）。
そんな彼女が敵になると、近接戦において私たちに勝利はないだろう。

「・・・私は大馬鹿者・・・だな。」

静かなる街に独り言が響き渡った。

これは後悔？ 違うに決まっている。
私はフェイトとアルフの仲間となったことに一切の後悔はない。
未だ眠っているであろうフェイトとアルフのいるマンションへ戻る。

「そういえば、あの子達と出会った時間も今くらいだったか？」

帰路の途中、私は数日前のことを思い出す。

？ ？ ？ 回想を始めるが、いいか？ ？ ？

第四の力の座に就いてすでに六千年以上。

またどこかの世界の界律が再び私を、私の力を求めている。

第二の力ティネウルヌスと第五の力マリアが、シャルと何やら話している。

「シャルロツテも召喚要請を受けているみたいだな」

「そうみたいだね、最近の彼女は契約回数が増え始めているみたいだよ。」

「たいへんだね〜ホント、僕は最近減少していて暇なんだよね〜」

第七の力に座する真紅を担いし“上位なる神の抹殺者”、7th・テストメント・ルフィスエル。

その彼女が、聞いてて呆れるほどの甘ったるい声で話しかけてきた。見た目がとても綺麗な少女なのだが性格があまりにも陽気すぎる。

これでも私に続く実力者ということに少々頭痛を覚える。
正直な話、私はルフィスエルが苦手だ。ゆえに聞き流そうとするんだが、

「ソウナノカ、ソレハタイヘンダ。マア、ガンバツテクレ」

カタコトになってしまった。それがさらに彼女を刺激する。

「何でカタコトなの〜？」

「ルフィスエル、ルシリオンを困らせるものじゃないよ。
さあルシリオン、この娘は俺に任せて行っておいで」

「ありがとう、優斗。それでは行って来る」

私は蒼穹を担う第九の力、“果て無き幻想を追う者” 9th・テストメントの優斗に感謝の言葉を告げ、召喚へと応じ、分身体と意識の欠片を私を求める世界へと送った。

辿り着いたのは自然が多く残り、海の近い街。

たたずんでいる場所は、すぐ目の前に海が広がる臨海公園のような場所だ。

海から流れ来る潮の香りを含んだ潮風が、私の長い銀髪を靡かせる。

「ここが、契約を執行する世界・・・か。それにしても平和なものが・・・」

時間はおそらく早朝、周辺2km圏内に人の気配がないことを確認。続いて界律との精神接続リンクを開始して、契約内容を確認する。

契約内容の提示なし、肉体を構成、身体年齢を9歳に設定。

この世界における戸籍を設定、使用可能能力値を10%に制限。

AAAランク以上の魔術の使用を制限。

“神々の宝庫”プレイザブル及び“英知の書庫”アルヴァイトにおける複製武装、複製術式のSランク以上の使用を制限・・・か。

「ずいぶんと半端な制限だな。こんなに制限を加えて一体何を
なんだ？」

独り言を全て呟く前に、目の前に現れたのは……ゴレム？
土泥で構成されたものであるう怪物だった。かつての戦友“地帝力
ーネル”を彷彿とさせる。

召喚後、いきなりの戦闘に嘆息しつつ、意識だけを戦闘モードへと
移行する。

さてと、これなら1〜2%で十分だろう。

我が手に携えしは確かなる幻想

以前の契約先の世界で複製した術式を“英知アルワイトの書庫”から引き出し、
現実へと顕現させる。

ゴレムは自身を構成する泥を弾丸のように放ってきた。

私は焦ることなく余裕でステップで回避、そして術式名を宣告する。

クリュスタリザティオー・テルストリス
「凍る大地」

ゴレムの足元から氷柱を出現させ凍らせる。

だが、これだけでは駄目だったようだ。ならば、もう一発受けてみ
る。

今度は“神々の宝庫”フレイザブリクより、複製した武装“ローレイの鍵”を引
き出し顕現させる。

「響け、集え、全てを滅する刃と化せ！」

ロスト・フォン・ドライブ

数発の剣戟を打ちこみ、ほぼゼロ距離からの閃光砲撃を放つ。

圧倒的な閃光の前にゴレムは塵一つ残さず消滅した、かに見えた
が……宝石？

ゴーレムを構成していた土泥の山の上。そこには蒼く光る宝石が落ちていた。

「これは……」「それを渡してください」……な!?……そんな……シェフィ……!？」

いつ間にか背後まで近づいてきた少女を見て、我が目を疑った。現れた少女は、最愛の恋人だったシェフィリスの幼少時代とそっくりだったのだ。

思考がすべてカットされる。何も口にできないほどに驚愕した。

「シェフィ……? そんなことよりその石を渡してください」

その黒衣の少女の目的は、蒼い石のようだ。動揺を無理やり抑え込み、小さく深呼吸。

「あ、いや……。断ると言ったら……」

何を馬鹿な事を、彼女は私の目の前で殺されたのだ。生きている訳がない。

それに、目の前の彼女の髪は金髪だ。瞳も綺麗な真紅。顔の造形は瓜二つと言えど、しかしシェフィとは別人なのだ。

「ゴチャゴチャ言ってないでさっさと渡しな!!」

今度は彼女の隣にいた大型の狼から言葉が発せられる。おそらく使い魔の類だと思われる。

「悪いがこれほどの危険な代物を、どこの誰かも分からない君たちには渡せないな」

自分のことを棚にあげてそう口にする。

それにこの宝石が“界律”との契約に何らかの関係があると思われる。

「チツ、フェイト、仕方ないよ！ こいつをぶちのめしてでも頂こうよー！」

「・・・本当は戦いたくないけど仕方ありません。力づくで貰っていきます」

狼の方が物騒なことを平気で並べていく。しつげに難あり、だな。

しかしフェイトと呼ばれた少女。戦いを望まないのも丁寧な言葉使いもシエファイにそっくりだ。

フェイトの姿に彼女の姿を重ねてしまう。馬鹿が。そんなことをして何になる？

今、私が行っている幻視は、フェイトという一人の存在を侮辱していることだ。

「ならば、こちらも仕方ないな」

萎える気持ちを無理矢理奮い立たせる。

じゃあ見せてもらおうか、この世界の魔術師の力を・・・。

+++++Sideルシリオン フェイト+++++

“ジュエルシード”の発動を感じてからここまで来るのに一分と少し。

遠目から見たのは砲撃魔法と思われる閃光だった。結界も張らずに何をやってるんだろ？

その場に着いてみれば、居たのは銀髪を膝の辺りまで伸ばし、うなじの辺りで縛っている男の子？女の子？どっちか分からないけどすごく綺麗な子だった。

「それを渡してください」

あの子が持っているジュエルシールドに気付き、渡すように言う。

そしたら、私を見てとても驚いている。それに“シエフィ”という言葉。

名前だろうか？でも私の名前ではないことは確かだ。

もう一度渡すように言うと言った。断るって言うてきた。

それを聞いたアルフは倒して奪おうと提案した。

仕方ないけど母さんの為、私は・・・

「・・・本当は戦いたくないけど仕方ありません。力づくで貰っていきます」

戦ってでもジュエルシールドが欲しかった。

「・・・バルディッシュ」

Scythe form Setup

“バルディッシュ”を鎌形態のサイスフォームにして、私の最高速で銀髪の子へと切りかかる。

でも、あっさりと避けられてしまった。少し、うっん、かなりシヨツクだ。

私得意とする初撃による一撃必倒が何の苦もなく自然な動作で避

けられたんだから。

「ボサツとしている暇はないぞ」

我が手に携えしは確かなる幻想

その子が何かを呟いた。

「くっ……！」

いつの間にかその子の手は黄金色のすごく長い槍をあって、その槍を私に向けて難いできた。

直撃を受ける直前で“バルディッシュ”で受け止めたものの、かなり吹き飛ばされた。すごい力だ。

「フェイト!?!」

アルフが心配してくる。

「大丈夫だよアルフ。……あの子かなり強い。手伝ってくれるかな?」

「もちろんだよフェイト!」

「戦闘中に長話は自殺行為、これは警告だ……」

エアロ・ボム
風裂球

「あ……!?!」

銀髪の子が指を鳴らした。

その直後、間近で空気が破裂したような衝撃を受ける。だけど、全然ダメージがない。攻撃じゃなかった・・・？警告。まるで私に何かを教えているかのような感じだ。なめられている。

「こんのおお！！」

アルフが怒って、真正面から突っ込んだ。

銀髪の子は苦笑。ダメ、アルフ。真正面じゃ・・・！

そう思っただけに出そうとしたけど、それよりも早く・・・。

「君はもう少し攻撃のタイミングを図ること、でないと・・・ほら」

ヴォルカニックヴァイパー

「が・・・っ!？」

「あ、アルフ!？」

銀髪の子は、さっきまであった槍を捨てて、炎を纏って突進、アルフをそのまま空へと殴り上げる。

ドサツと地面に落ちたアルフは、そのまま動かなくなった。

その光景に思考が停止する。

「だから、ボサツとするなど言っただろう」

全ての動きを止めてしまった私。

それが最大の間隙になってしまった。

一瞬で間合いを締められて、私のすぐ側まで銀髪の子は接近してい

た。

我が手に携えしは確かなる幻想

銀髪の子は何かを呟いた。たぶん、詠唱だ。
直感が働く。私は、

「バルディッシュュ!!」

Defenser

“バルディッシュュ”に半球状のバリアを展開させる。
銀髪の子が少し驚いたように目を見開いたけど、すぐに戻った。
そして、

「両の手に集いて粛清せよ・・・水牙流麗 海帝 双瀑掌!!」

両手に水の渦巻きを纏わせた。

渦巻きを纏った両手による掌底攻撃に、私のバリアがまるで紙のような脆さで碎け散る。

私はそれを見た時点から何も覚えていない。

++++Sideフェイト ルシリオン++++

それにしても参った。

やりすぎてしまったのだ。二人とも今は完全にのびている。
起きるまで待つしかないだろう、こんな所に放って置くとなんか起きるかわからない。

それから30分。ようやく起きた彼女たちから事情を聞きだした。どうしても蒼い宝石“ジュエルシード”を探し出して手に入れないと駄目ということだ。

私としてもあんな物騒なモノがそこら辺に野放しにされるのはまずいと思う。
だからこそ、

「・・・事情は分かった。それなら私も手伝おう」

「「え!?!」」

「何を驚いているんだ？ さっきまでは事情が分からなかったからあのようなことになった。

しかし今は話をちゃんと聞いた。一応納得もした。だから手伝うよ。ジュエルシード。アレは結構危険だから、それなりの戦力があつたほうがいいと思うが」

もし“ジュエルシード”をこの子たちが悪用（するとは思えないが）するなら、横から奪い去って私が序文すればいいだけのこと。

「あ、あの、それはそうですが・・・いいんですか？ えっと、えっと・・・」

「本当に何も企んでいないんだね？

もしフェイトを傷つけたり裏切ったりしたら、あたしはあんたを許さないよ？」

この狼の主に対しての忠誠心はすごいものだ。

ああ、このような子は嫌いじゃない、むしろ好感を持てる。
全く、あのバカ狼娘のアイツにも見習ってほしいものだな。

「それに関しては信じてもらっていい。だからこれからよろしく頼む」

「は、はい！えっと、私はフェイト・テストロッサです。それでこの子が使い魔のアルフです」

「よろしく」

「私はルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。よろしくフェイト、アルフ。気軽にルシルとでも呼んでくれ」

？ ？ ？ 回想終了だ？ ？ ？

閉じていた目を開け、回想から現実へ意識を戻す。

（確かあの後、私の作った朝食を食べた二人が驚いたり、私が男と知って落ち込んだり、魔術に関して3時間くらい説明したりと大変だったな）

何十分とかけて辿り着いた私たちのアジトであるマンションの一室の扉を開き、

「フェイト、アルフ、ただいま！」

そう口にする。

「「おかえり〜！」」

返ってくる二人の声。このやり取りは、本当にいいものだ。

白と黒の密会（後書き）

ANSUR設定

絶対殲滅対象：（アポリュオン）

界律の守護神と対をなす概念存在。詳細は追々。

固有能力：

生まれつきその者が使用できる特別な能力のこと。空間魔術を術式なしで発現できる空間干渉、超長距離を見渡せる千里眼、未来を高精度で当てる予知などの多くの種類があるものの、固有能力者は何千万人に数人という確率でしか誕生しない。

ルシリオンの能力：複製

視認して解析したものを複製し、自らの力として扱うことの出来る能力。

複製された能力はそれぞれの“蔵”へと貯蔵、詠唱することで使用可となる。

詠唱は二種類。我が手に携えしは確かなる幻想

“蔵”ともう一つの詠唱の説明はまた追々ということ。

使用した術式

前回はテイルズオブシンフォニアのシャイニング・バインド

メルティブラッドの夜魔判決

セント・ゲオルギウスはANSURオリジナルです。

今回は魔法先生ネギま！の凍る大地

テイルズオブジァビスのロスト・フォン・ドライブ

スレイヤーズの風裂球

ギルティギアのヴォルカニックヴァイパー

水牙はANSURオリジナルです

次回は温泉のお話となることかと思えます。

遙々来たよ海鳴温泉

++++Sideシャルロット++++

ルシルとの決別から一週間、あれから“ジュエルシード”を発見出来ずに過ぎ去った。

そのため出会うこともなかったけど、それが何故か余計にイライラする。

次に遭った時はどうなってしまっただろうか、正直怖いと感じる自分がい

た。
今回の契約の結末までの道筋が読めない。ここまで不安になる契約というのも珍しいというか無かったわ。

「ねえシャル？ あんた、温泉って行ったことある？」

そう聞いてくるのは、なのはの友人アリサ。

綺麗な金髪をした活発な少女だ。

「ん？ 行ったことない。温泉っていう言葉も、此処に来るための準備をするように桃子母さんから聞いたときに知ったくらいだから」

当然のことだ。生前は戦いの人生だったのだから知らないし、温泉なんてものはなかった。

「テストメント界律の守護神”となつてからは、召喚された世界でも人間のよう
な生活することなく、速やかに殺し壊し奪い、そして消えていた
から。」

「それじゃあシャルちゃんは、今日が温泉デビューなんだね」
ほわほわした話し方をするもう一人の友人、すずかがそんなことを言う。

「温泉デビューって面白い言い方をするのね、すずか」

「え？そうかな？」

十十Sideシャルロッテ　なのは十十

シャルちゃんがアリサちゃんとすずかちゃんと楽しそうに話しているのを一緒に笑いながら聞いていた私は安心した。

一週間前からシャルちゃんの様子がどうしてもおかしかったのだ。とくにゼフィちゃんと会ったときから様子が変だった。

同じ魔術師だからそうなのかと思ったけど違うみたいだし。役にたつかどうかは分からないけど、相談してほしいかも。なんか寂しいし。

『よかったね、なのは。シャルが元気そうで。僕も心配していたから』
『うん！』

この旅行でもっと元気になってもらえると思うな』
膝の上に乗ってるユーノ君が念話で話しかけてきた。

そう。今、私たちは連休を利用して、高町家と月村家の皆さんと一緒に二泊の温泉旅行へと来ているのです。

『なのは。シャルもそうだけど、なのはだって今日はジュエルシードのことは忘れてゆっくり休まないダメなんだからね。最近、無理をしているからとくに心配だよ』

『にははは、ありがとうユーノ君。私は大丈夫だから』

心配してくれるユーノ君に感謝の言葉を告げる。

けど、私もシャルちゃんみたいに少し悩みがある。

先週出会った黒の魔法使いのこと。

今週に入ってからは一つも見つけられなかった“ジュエルシード”のこと。

色々考え過ぎちゃってるから、少しお休みするようにユーノ君とシャルちゃんに勧められた私は、この旅行のときだけは子供らしくのんびりしようと思っています。

++++Sideなのは ルシリオン++++

「本当にこの近くにジュエルシードがあるのかい？」

あんだ、ジュエルシードの場所を特定するって言うておいて・・・
ねえ？」

「さっきからしつこいな、アルフ。すまないと何度も謝っているだろっ」

俺の探査用術式は、かなりの精度を誇っているものだ。

いくら未覚醒の状態とはいえ、“ジュエルシード”のような異物くらいは容易く識別できる・・・はずだった。

意気揚々と探査を行い、気付く。精度がもう笑うしかないほどに低

くなっていたのだ。

そして、場所を特定するとか言っておきながら出来ないというこの始末。

その所為でアルフがさっきから俺に文句ばかり言ってきている。初めて出会った時のことを未だに根に持っているのか？

「ア、アルフ！？ ダメだよ、ルシルばかり責めちゃ。

この周辺にあるって分かっただけでもすごいことだよ。

わ、私でもハッキリわからなかったんだから・・・！」

「フェイトく、そうだけどさく」

フェイトがアルフを嗜める。本当に良い子だな君は。

それにしてもフェイトの母親はさぞや立派な方なのだろう。まだ幼いというのにこれほど出来た子はそうはいない。

「本当にすまない、フェイト。俺がもう少し確り出来ていれば・・・」

「そんなことないよ、ルシル。一人で抱え込まないで、一緒に頑張ればいいんだよ」

「ありがとう。君の優しさが、アルフによる心のダメージに良く効くよ」

「なにをお！」

さてとアルフも黙った（ことにして）ことだし、正確な位置を掴む為に行動しようか。

フェイトも“ジュエルシード”の場所を確認する為、行動を開始し

ようとした時、

「それより、ねえフェイト。この近くに温泉って大きなお風呂があるんだって。

行ってみないかい？ あとルシルもついでにさ。興味あるんだよね、あたし」

なんて馬鹿な・・・と言いたいが、本当は私も行ってみたかった。温泉・・・実に懐かしい。良い思い出も死を感じた思い出もある複雑な場所だが・・・。

「え？ でも・・・今はジュエルシードを探さないと・・・」

「いいじゃないかい？ 覚醒するまで時間があるんだろっ、ルシル？」

「ん？ まあ、そう・・・だな。半日以上はあると思う」

感知した“ジュエルシード”の魔力から概算で、完全覚醒までの時間をはじき出す。

「なら決まりだね！ 行こうよフェイト。きっと気持ち良いよ！」

「う、うん。そこまで言うんだったら・・・行こっか」

半ばアルフの強制で、俺たちは温泉まで行くことになった。

『一緒に入ろう、ユーノ君。温泉入ったことないでしょ？ 温泉はすごくいいよ』

なのはが、そんなとんでもないことを言ってきた。

でも、今回はかりは絶対にダメだ。

なぜって？ そんなの決まっているじゃないか！

だって他の女の人も入るっていうんだから！！

というか、なのはの家でなのはと入ること自体がすでにアウトだ。

断りきれない僕にも十分非があるけど、でもなのはの強引さに一度も勝てないんだよっ！

『なのは、ユーノは士郎父さんと恭也兄さんに預けておいで』

『ええ〜？ 一緒に入っちゃだめなの〜？』

どうやってなのはを傷つけないように断ろうか必死に思案していると、僕の救世主、シャルがなのはの説得に移る。

お願いシャル、なのはを説き伏せて！ いくらなんでも耐えられないうって。

『なのは、この国にはこういう言葉があるの知ってる？』

男女七歳にして席を同じうにせずっていうの』

『えっと・・・男の子と女の子は、七歳を過ぎたら一緒になったらダメってこと？』

『大体そんな解釈でいいかな。ユーノ、今の年齢は？』

シャルが僕の年齢を聞いてきた。

あれ？ 僕が人間だってなのはから聞いたのかな？
まあいいか、僕は今の年齢、『9歳になったばかりかな』って答える。

『9歳。なのはたちと同じだね』

『決定。ユーノ、おいで。私が男湯まで連れてく』

『うん、お願いするよ。ごめんなのは』

僕は・・・助かったんだ！！ ありがとうシャル！

++++Sideユーノ シャルロット++++

「ふう、温泉って本当にいいところね」

「にははは、そうだね〜！」

「本当に気持ちよかったわ〜」

「うん」

温泉から私となのはとアリサ、すずかは出て、ユーノと合流した。
さっきからユーノが「ありがとう」って何度も頭を下げっぱなしだが、まあいいか。

「ねえねえ、あの子さ。すごく綺麗じゃない？」

「わあ本当だ。綺麗な銀髪だね」

「でも、男の子だね。男の子であんな綺麗な子、今まで見たことないよ」

アリスとすずか、なのはが綺麗な子がいると騒がしい。

ん？ 銀髪！？ まさか・・・！

（ルシル！？ 何でこんなところに！？）

見てみるとそこには、椅子に座った浴衣姿のルシルが居た。

ルシルが騒がしいなのはたちに気付き、営業スマイルで快く手を振っている。

なのはたちもそれにつられてとても良い笑顔で手を振り返している。ちよつとちよつと、なのは。彼は私たちの敵の一人なのよ。知らないから仕方ないけど。

（他の二人は・・・いない。単独行動？ 一体何を・・・って決まっている。

この付近にジュエルシードがあるんだ・・・！）

ルシルが私をチラツと見て・・・無視かい！？

いい度胸だ、今度のジュエルシード争奪戦ではボコボコにしてあげる。

ルシルは座っていた椅子から立ち上がり、なのはたち、そして私の横を通り過ぎ、

『あの子、以前会ったときよりなかなか成長しているみたいだな。来るのだろうか？ ジュエルシードを封印するために。楽しみにしているよ、シャル』

「テストメント界律の守護神”用のリンクを通してそう言って去っていった。

(ええ、楽しみにしているわ。あなたが跪くのを見るのを、ね)

無意識のうちに妖しく微笑む私を、なのはたちや他のお客さんが見て震えていたのには終始気付かなかった。

+++++Sideシャルロット ルシリオン+++++

「はぁ・・・こんなところで遭遇するとは。世界は狭いな」

まさか、シャルたちがいようとは思わなかった。

“ジュエルシード”狙いかと思ったが、シャルの様子を見た限りではそれはないと判断する。

単なる偶然、純粹に温泉力のようだ。それより問題はあの子、高町なのは。

以前見たときは完全な素人だったが、今は体外へ流れ出てしまう魔力の量がきちんと制御出来ているのだから大した進歩だ。

魔力の扱い方一つで強さは変わってくる。

強大な力を考えもせず使用し続け、その結果が最悪のことになってしまふなんて大戦に参加した見習い魔術師がよくやっていたことだ。そう、たとえ魔力量の少ない者も扱い方によって、何倍もの魔力を持つ者を出し抜くことが出来るだけの強さを得られる。

「シャルとの鍛錬のおかげ、ということかな」

「お、お待たせ。待たせちゃった・・・かな？」

振り向くと髪を下ろし、ほんのり上気したフェイトが立っていた。どこかもじもじして、照れているような仕草が愛らしい。

「いや、待ってないよ、フェイト。アルフはどうしたんだ？ 姿が見えないが・・・」

そう、アルフがいない。フェイトを一人にするなんてことをするわけがない彼女が、だ。

「あ、アルフはもう少し入ってるって言ってたよ。温泉がすごく気に入ったみたい。」

そういう私もとても気に入ったんだけどね」

フェイトが嬉しそうに話す。ああ、来てよかった。グッジョブ、アルフ！

というか、フェイトより温泉優先って・・・それってどうなんだ使
い魔？

+++++Sideルシリオン　なのは+++++

夜、“ジュエルシード”の発動を感じた私とユーノ君、シャルちゃんはその場へと全力で走っていた。

そこに辿り着いたときには、すでに“ジュエルシード”を封印し終えていた黒い女の子。

それにゼフィちゃん、知らない女の人、と思ったら狼さんになりました。

そうしたらユーノ君からあの狼さんは使い魔というものと説明し

てくれました。

「それをどうするつもりだ!? それはとても危険なものなんだ!」

「私たちに答える義務はないよ、ユーノ」

ユーノ君があの子達に“ジュエルシード”の危険性を説くけど、ゼフィちゃんがきっぱりと答える必要はないと言った。

「先に帰ってて、すぐ追いつくから。ゼフィ、ちゃんと送っていきなさいよ」

「無茶しないでね」

「・・・わかった。俺のときみたく猪みたいに突っ込むなよ」

「オーケー!」『うっさい! よく見てな!』

ゼフィちゃん達がそう会話をして、狼さんが飛び掛ってきた。するとユーノ君が前に出てバリアを張る。そして、

「なのは、シャル、あの子達をお願い!」

「させると思ってるの!?!」

「させてみせるさ!」

ユーノ君は狼さんと一緒に消えてしまいました。

＋＋＋Sideなのは　ルシリオン＋＋＋

アルフがユーノによる強制転移で、どこかへと飛ばされてしまった。私の忠告を聞いていてこの失態。狼なのに猪突猛進とはこれ如何に。どこかへ飛ばされタアルフへ「強制転移、か。『ハア、アルフ・・・突っ込むなと言ったばかりでこれか』」と念話を送る。

『う、うっさいよ！　こ、これは作戦さ！　厄介なサポーターを引き離すってやつさ！』

そっちの剣を持つ女と砲撃の女は、フェイトとあんだでどうとでも出来るだろ！

て、適材何とかってやつだよ！　だからこれはミスしたわけじゃないのわっ？　こっちは任せて、そっちは上手くやりな！』

・・・なんて下手な言い訳だ。適材適所、も言えてないじゃないか。

だがアルフの言うことにも一理ある。あのユーノとかいうフェレットもどき。

防御や転送などを専攻しているんだろう。妙な絡め手を使われる危険性もあった。

ふむ。アルフはなかなか良いミス（作戦通りと言い張るが）をしてくれたな。

「・・・アルフ』どうしようか、ルシル？』」

フェイトが迷っている。んん・・・そうだな、こっちは、

『彼女たちの所有するジュエルシードもこの際だから頂いていこう。それで目標へと少しは近づくはずだから、それでいいな?』

『え、う、うん！ それじゃ、私があの子と戦えばいいんだね』

『そういつことだ。俺からあの子達へ提案する。いくぞ、フェイト』
念話で今からなすべきことを決め、いざ、というときになのはは話し合いでことを終えようとしてくる。

確かに話し合いというのは大事なことだが、今に限って言えば私たちには必要のない解決方法だ。
すると今まで傍観していたシャルが口を開く。

「なのは、あの子達を倒してジュエルシードを奪うわよ」

「え？ シャルちゃん、それって・・・!」

シャルも同じことを考えていたようだ。

この場で完全に勝敗を決め、後の行動を制限させる為の戦闘。いいだろう。その覚悟、受けて経つ。

「私が相手になる。ついておいで、シャルロッテ」

「・・・なのは、そっちは任せる。特訓を思い出して」

「・・・・・・・・・・・うん、分かった!」

シャルとなのはが短い話をして、シャルは俺へと近づいてくる。そして俺はシャルを連れて森の奥へと向かった。

++++Sideルシリオン　なのは++++

シャルちゃんがゼフィちゃんと一緒に森の奥へと入っていった。

正直、私は戦いたくない。お話が出来れば戦わずに済むと思っ
たかった。

けどもう戦うしかないみたいだ。なら覚悟を決めるしかない。

「私が勝つたらちゃんとお話を聞いてもらっから!」

「・・・いいよ、私に勝てたら、ね」

「いくよ、レイジングハート!」

All right

「バルディツシュ・・・!」

Yes , sir

どっちが勝っても恨みっこなし。

私はシャルちゃんとの特訓を思いだしながら戦闘に入った。

「すぐに終わらせる。バルディツシュ、フォトンランサー・・・」

Photon Lancer . get set

「撃ちぬけ、ファイア!!」

「Flier fin レイジングハート、 Divine shooter・・・いつけえ！」

魔力弾が交差する。だけど、お互いがそれを回避する。

まずは距離を置くための攻撃だったけど、うまくいったかな・・・？シャルちゃんの助言、黒い子は機動力がすごいけど、その反面防御力がない。

だからディバインバスターで勝てるまではいかないまでも、かなりのダメージを与えることができるらしい。

でも、向こうは速さに特化しているので、何もしない状態では当てられない。

けどそれなら、当てることが出来る状況へと持っていけばいい、とのこと。

そこで私に提示されたのが誘導弾による相手のかく乱、誘導、そして足止め。

前のゼフィちゃんとの戦いで、シャルちゃんとしたようなことを今度は私一人で行う。

そのために、模擬戦と称してシャルちゃんが的となってくれた。

(全部避けきられたうえに反撃されたけど・・・)

そして最も重要なのは、決して接近されないこと。

正直な話、私はあまり運動は得意なほうじゃない(涙)。

そんな私が接近戦に持ち込まれたら絶対に負ける、って言われた。

「もう一回お願い、レイジングハート！」

Divine shooter

今撃てるだけのディバインシューターで、あの子を取り囲む。

もう少しで包围網が完成する。そして、

「・・・レイジングハート・・・!」

Divine buster Stand by

「バルディッシュ、いくよ」

Thunder smasher

「Divine バスタアアーツ!!」

私とあの子の砲撃が同時に放たれる。

++++Sideなのは シャルロツテ++++

「あは！　なのは、きちんと私が言ったこと守ってるみたいね」

「余所見をしている暇があるのか？」

「少しはいいでしょう？　ほら、あなたのパートナーが結構苦戦してるじゃない？」

「フェイトがあ程度の策で負けるとも思っているのか？」

私とルシルは木々が生い茂る中、全力で走っている。

こんな場所では“キルシュブリューテ”は使いづらいので出していない。

そこで今使っているのが、私のもう一つの相棒“ゼーゲン”。祝福の意味を持つナイフだ。ナイフと違って侮るなかれ。刀剣類である以上、私の魔術を乗せることが可能だ。

走りながらルシルへと真紅（私の魔力光）の魔力斬撃を放ち続けていると、上空が桃色の閃光に染まる。

どうやらなのはがフェイトに砲撃を当てたらしい。

気にはなるけれど、今はルシルからは目を逸らすことができない。下手に隙を与えると、ルシルは的確な射砲撃で迎撃してくる。

「ちゃんと避けさないよルシル！」

アイス・ツアプフェン・フリユーゲル
氷牙凍羽刃

氷で出来た鋭い羽根型小刀を12発弾丸みたいに飛ばし、触れた木々を切り裂いていく。

ルシルはブツ太い木の幹を盾代わりにして、何とか回避していった。

「くっ、ならこちらは・・・これだ!!」

我が手に携えしは確かなる幻想

ルシルの怒声。そして複製術式発動の詠唱。

詠唱と共に手の平に現れたのは・・・宝石？

直径一cmくらいの様々な色をした球体だ。

現れた球体の正体を探ろうとした瞬間、ルシルの手から強力な電撃が放たれて・・・

「避けなければ・・・死ぬぞ」

レールガン

その一言の後、私へ向かってとんでもない速さで雷撃を纏った球体が襲い掛かってきた。

私は全力をもって回避行動に移り、何とか射線上より退くことが出来た。

「ハアハアハアハア、い、今は・・・黄金砲台の・・・電磁砲・・・」

あの攻撃は、生前見た、アンスールの一人で黄金砲台と恐れられた魔術師“殲滅姫カノン”の術式だ。

いや、違う。アンスールの複製魔術を使用するときの詠唱は別にある。

なら、今はまたどこかの世界の別の誰かの力というわけだ。

「・・・よくかわせたな。フェイトのほうも終わったようだし、こちらも終わりだ」

「な・・・っ!?　なのは!?!」

私が見たのは、フェイトがなのはの首に刃を向けているところだった。

++++Sideシャルロット 黒の少女++++

あの子は砲撃を私に直撃させたと早とちりをしたのか呆けていた。甘い。あの程度で勝ったと思ったのなら私の敵じゃない。

私は“バルディツシュ”をサイスフォームにして、白い子の首筋に掠めるように突きつける。
すると、

put out

白い子のデバイスがジュエルシードを出した。

「レイジングハート!? 何を!?’」

主人、この白い子の事を考えて、“ジュエルシード”を差し出したんだ。

「きつと、主人思いのいい子なんだ」

私は“ジュエルシード”を手にした。もうこの場所には用はない。

「帰ろう、アルフ、ゼファイ」

近くまで来ていたアルフとルシルに声をかける。

「さっすがあたしのご主人様! じゃあね、おチビちゃん」

「・・・もうこの件から引きなさい、高町なのは」

アルフとルシルはそれぞれの別れを済まし去ろうとするけど、

「ま、待って!」

あの子が私たちを引き止める。まだ何か用があるというのだろうか?

けど、私にはもう言うことも何もない。だから、

「出来るなら私たちの前にもう現れないで。

もし次があったら、今度は止められないかもしれない」

もう関わってくるなど、次はないと口にする。

「名前……あなたの名前は!？」

「……フェイト。フェイト・テストロッサ」

「あの、私は……」

聞きたくない、あの子の名前を知ってしまうと何故か必ず再会してしまうような気がしたから。

だから最後まで聞かずにこの場を去った。

「バイバイ」

「……」

++++Sideフェイト　なのは++++

「……なのは」

ユーノ君は沈んだ声で私の名前を呼んだ。

私は振り返って、「ごめんね、ユーノ君。ジュエルシード……取られちゃった」と謝る。

「うづん、なのはが無事ならそれでいいよ」

「それに謝るなら私のほう、ごめんなさい」

私たちは、フェイトちゃんとゼフィちゃんの前ではまだ弱かったんだ。

「もうこの件から引けって言われたけど・・・どうするなの？」

「・・・諦めないよ。まだちゃんとお話していないから」

そう私はシャルちゃんに静かに告げた。

少しだけ垣間見た、フェイトちゃんの綺麗な赤い瞳の中に揺らぐ感情。

優しさ。寂しさ。いろいろな複雑な感情を見たと思う。お話ししたい。きっとただで分かりあえると思うから。

十？ ？ ？ ？ ？
十 ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？

シャル

「また来たの？ 物好きね。でもようこそ、第二回シャル先生の魔術講座へ。」

シャル先生ことシャルロツテ・フライハイトよ。よろしく」

なのは

「助手の高町なのはだよ」

ユーノ

「えーっと、生徒らしいユーノ・スクライアです。」

あの、シャル？　なのはが助手なのに、どうして僕は生徒なの？」

シャル

「そういう立ち位置がベストと思うのだけど。」

なのはは学ぶつもりないどころか常に頭の上に？マークを浮かべているしね」

なのは

「サラっと“馬鹿”って言われた気がする！？」

シャル

「気のせいよ。ユーノは学ぶ姿勢があるから生徒という立ち位置と
いうことよ。」

なのはは邪魔にならないように助手ということね。あ、そこ、ちょ
っと邪魔ね。こっち来て」

なのは

「ひどい！　何がひどいかって、何の躊躇もなく邪魔って言った！

！（大泣）」

ユーノ

「ちょっとシャル！　さすがに言い過ぎだよっ！」

シャル

「まさか泣くほどだなんて……。ごめんなさい、なのは。」

邪魔じゃないからこっちに来なさい。ほら、よしよし良い子良い子

「？」

ナデナデ

なのは

「あう、なんか駄々をこねる小さな子供をあやすみたいにされてる？」

シャル

「それも気のせいよ。さて。これ以上、脱線するわけにはいかないわね。」

それじゃあ今回使用された魔術は1つ。その魔術を紹介するわ。

アイス・ツアプフェン・フリユーゲル
氷牙凍羽刃

羽根の形をした氷で出来た小刀を、弾丸のように複数対象へ放つ術式よ。

そうね。直射型の射撃魔法と捉えてもらっても構わないわ」

ユーノ

「そうなんだ。なのはとは違って近中距離系なんだね、シャルは。うん。でもこれってすごいバランスが良くない？」

なのはの中距離、僕のサポート、シャルの近中距離。

このチームってよく考えれば最強の布陣になるかも」

なのは

「でもそれって、きつとフェイトちゃん達の事も言えるよね？」

シャル

「そうね。そこをどう切り崩していくかが私たちの課題ね。」

さて。そろそろ終幕を行きましょつか。それでは、第三回シャル先生の魔術講座でお会いしましょう。」

なのは&ユーノ

「ばいばーい」

それぞれの悩み

++++Sideシャルロット++++

朝日が窓から射し込んで、私をいい具合に目覚めさせる。

「・・・界律、私に一体何をさせたいの？」

ルシルと出会ってから毎朝欠かさずに行っていること、それは“界律”との精神^{リンク}接続。

“界律^{テストメント}の守護神”の複数契約。これが意味するのを知っているからこそ、慎重に事を進めておきたいのだ。

そして今日、“界律”からの情報に進展があった。

戦闘時のみ能力値が12%まで使用可能。制限された魔術を全て解禁

たった2%というけれど、それでも私たちにとってはかなり大きい数字だ。

「戦闘時のみ？・・・私に・・・ルシルを殺せて・・・こと？」

正直これはありえない、とは言いつれないのが堪らなくムカつく。

“^{テストメント}界律の守護神”の契約には、死ぬこと、殺されることを前提に召喚されることだって多くある。

そしてその契約は、4th・テストメントであるルシルが筆頭とな

っている。

ルシルはこの六千年、様々な世界へと召喚され、殺し、殺されてきた。

「……ふざけるな。こんなこと認めてなるものか……」

私は怒りに茹だった頭を冷やす為に、顔を洗いに行った。

++++Sideシャルロット　なのは++++

ずっと考えてたんだ。

きつと私と同じ年くらいで、深くて綺麗な瞳をしたあの子のこと。会えばまたぶつかりあっちゃうことになるけど…….

「おはよう、なのは。今日は早いんだね。」

後ろからシャルちゃんが挨拶をしてきてくれた。

「うん、おはようシャルちゃん」

出来るだけ笑顔をつくって挨拶を返す。

「……やっぱり、悩んでいるみたいね、なのは」

「……うん。ちょっと、ね」

シャルちゃんは何でもお見通しなのかな？

けど、それが少し嬉しいと思うんだ。それだけ見てくれていて、仲

良しだったことだから。

「あまり抱え込まないようにね。私だって相談くらい乗るから」

「うん、ありがとう」

そうして私とシャルちゃんはリビングへと歩を進めた。

それから朝食を終えて登校。ずっと考えを事をしていたから、授業の内容はほとんど頭に入っていない。

切り替えようとしても浮かび上がるあの子、フェイトちゃんの事。だから、

「いい加減にしなさいよ！！」

アリサちゃんが私の机に両手を叩きつけた。

私の上の空だったから、きつとアリサちゃんは怒っているんだ。

「こないだからなに話しても上の空でぼうつとして！」

やっぱりそうだった。私が悪いのだから謝らないと……。

「ごめんねアリサちゃん」

「ごめんじゃない！！ あたしたちと話してんのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもぼうつとしてなさいよ！！ いくよすずか」

「あ、アリサちゃん！？」

アリサちゃんは怒って教室を出て行ってしまった。

「・・・なのはちゃん」

すずかちゃんが心配してくれている。

ううん、違うんだよすずかちゃん、これはきつと、

「いいよすずかちゃん、今のはなのはが悪かったから・・・」

そうだ、私が悪かったんだ。

「そんなことないと思うけど・・・とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね」

「うん、ごめんね」

そうしてすずかちゃんもアリサちゃんを追って、教室から出て行った。

「・・・怒らせちゃったなあ、ごめんねアリサちゃん」

++++Sideなのは シャルロット++++

私が職員室（校舎内で蹴ったサッカーボールを先生にぶつけた所為）から教室へと戻る最中、アリサとすずかが階段で何か言い争っている。

なのはという単語が聞こえたので、気付かれないように聞いてみた。

（・・・なるほどね。なのはが悩みのせいで上の空、そしてアリサがそれに怒ったみたいね）

なのはの事だ。悩んでいるみたいなのに、どうして頼ってくれないのか、と。
親友なら頼ってほしいんだってことは理解できるのだけど。さて、どうしようか？

決まっている、ここはひとつフォローを入れておくのが友達だ。

「今からそんなに怒っていると、将来後悔することになるよ。アリサ」

「シャル！？　もしかして・・・聞いてたの・・・！？」

「ええ、悪いと思っていんだけど、なのはのことだから」

「・・・あなた、何か知っているんじゃないの？」

アリサが、私何か知っていると感じき迫ってくる。

「・・・もし私が知っていたら、どうすつもり？」

「決まってるじゃない！　聞かせてもらおうよ！

そしてなのはの相談に乗って、一緒に悩んで解決するのよ！！」

（一緒に悩んで、か）

なのはの悩みが世間一般にあるような悩みならそれでいいだろうけど、その原因が魔法という非現実なことであれば、そう簡単にはいかない。

「あなたたちは私以上に付き合いがある親友なんでしょ？」

ならあの子の性格は知っているよね。何故相談しないのか、それはあなたたちを苦しめない為、巻き込まないため」

「そ、それは・・・」

「例えそうでも、聞いてみないことには分からないじゃない!？」

アリサは結構粘るね。なのは、あなたはこれほど慕われているのよ。本当に羨ましい。私もこんな人生を歩み、親友をつくりたかった。

「悩みを共有できていると思えている間はそれでいいかもしれないけどねアリサ、解決出来なかったら相談したアリサとすずかを苦しめるって思うあの子の優しさもちゃんと分かってあげて」

「だって、そんなの・・・そんなの悔しいじゃない!!
何もしてあげられないなんて・・・悔しいじゃない・・・!」

「・・・アリサちゃん」

アリサが涙を流している。自分の非力さに、なのはの優しさに。

「・・・アリサ、すずか。いつかなのはからきつと話してくれる日が来ると思う。」

そのときはちゃんといつも通りに迎えてあげて。それが親友でしょ?」

「・・・当然よ!」

もうこの件は大丈夫だろう。アリサもすずかもさつきまでの沈んだ顔ではなく、とても良い顔をしているのだから。

＋＋＋Sideシャルロット　なのは＋＋＋

全ての授業が終わり、ようやく放課後となった。

帰り支度をしていると、「なのは！！」って私の名前をこれでもかっというくらいに大声で呼ぶ誰か。

「っ……！？」

び、びつくりした！　アリサちゃんだ。

教室の前の扉の所から、仁王立ちして腕を組んだアリサちゃんが私を見ていた。

その迫力に、近くの男の子たちが目を丸くして茫然としてる。

「いつかちゃんと話してよね！　私たち待ってるから！」

「うん、私もいつか話をしてもらうまで待つてるから。

あ、あと今日はお稽古があるから先に帰るね」

そう言っつて、アリサちゃんとすずかちゃんは教室を後にした。

遅れてアリサちゃんの優しさが伝わってきて、ちよっと泣きそっぴになっっていると、

「よかったねなのは」

隣から笑顔を私に向けて、そう言っつてくれるシャルちゃん。

そうか、シャルちゃんがアリサちゃんとすずかちゃんに何か言っつてくれたんだ。

「・・・あ、うん！ うん！ ありがとう！ ありがとうシャルちゃん！」

私はシャルちゃんに抱きつき、やっぱりちょっと泣いてしまいました。

++++Sideなのは ++シャルロット++

空をすっかり暗くなった今、私たちは一度家に帰ってからユーノを連れて街を探索していた。

「んー、タイムアウトかも。そろそろ帰らないと・・・」

私もビルの壁に設置されているディスプレイに表示された時刻を見て同意する。

「そう・・・ね、これ以上は少しまずいかな」

「大丈夫だよなのは、シャル。僕が残ってもう少し探していくからとユーノが単独での探索を行うと言ってきた。

悪い気もするけど、ここはお言葉に甘えさせてもらおうことにしよう。

「それじゃユーノ、悪いけど頼める？」

「うん。あ、晩御飯はちゃんと取っておいてね。帰ってから残飯漁りなんてしたくないから」

「にはやは、それはイヤだね。じゃユーノ君、お願い。」

私となのははユーノに“ジュエルシード”の探索を任せて、一度家路に着く。

十十十Sideシャルロッテ ルシリオン十十十

ビルの屋上で街を見下ろしている俺たち。

“ジュエルシード”の大まかな位置は判明したが、正確な位置が分からないので悩んでいるとフェイトがある提案をしてきた。

「強制発動って本当に危険がないんだな・・・？」

フェイトが発案した“ジュエルシード”を無理矢理発動させて発見するという強攻策。

“ジュエルシード”は願いを叶えることのできるという優れた能力があるが、反面暴走すれば厄介なことを起こす困ったモノだ。そんな危険物を強制発動するなど、どう考えても安全策とは思えない。

だから二度に亘ってそう問い質す。何かあつてからでは遅いからだ。

「うん、大丈夫だよルシル。発動させるのにかなり魔力が必要だけど」

「それはあたしがやるから、フェイトには障害はないよ。だからあんたも覚悟を決めて手伝いな」

フェイトとアルフは完全に乗り気だ。本当ならもう少し慎重に進めてほしい。
仕方ない。こうなったらフェイトたちを止めることは無理だ。
ならば、万が一彼女たちに危険が迫ったらこの身を盾にすればいいだけのこと。

「・・・はあ、分かったよ。任せたぞ、アルフ」

「あいよ！」

そしてアルフが魔力流を撃ちこみ・・・来た！！
ハッキリと分かる覚醒した“ジュエルシード”の魔力。

「ありがとうアルフ」

「このくらいどうってことないさ」

「では行こうか、向こうもそろそろ気付いて来るだろうしな」

さて、今回もシャルを無力化して“ジュエルシード”を貰っていい
うか。

十十Sideルシリオン　なのは十十十

私とシャルちゃんはユーノ君からの念話を受けて、“ジュエルシード”のもとへと走り、目覚めた“ジュエルシード”を視界に入れた。すぐに封印に移るために変身して、“ジュエルシード”を停止させる為の砲撃を放った。

別の場所からフェイトちゃんもほぼ同時の砲撃を放つ。そして“ジユエルシード”は沈黙した。

「フェイトちゃん、ゼフィちゃん……」

「もうこの件から引きなさい、と言ったはずよね？ 高町なのは」

そして今、フェイトちゃんとゼフィちゃんの二人と対峙している。遅れてユーノ君とアルフさんがやってきた。

お互いにいつでも戦いに移れるような緊張状態。

「引けません。今度こそ、ちゃんとお話を聞いてもらうから！シャルちゃん、ユーノ君。フェイトちゃんは私に任せて」

アクセルフィン

アクセルフィンを使って、一気にフェイトちゃんから距離を取る。この私の行動で、私とフェイトちゃん、シャルちゃんとゼフィちゃん、ユーノ君とアルフさんの三つ巴の戦いに入る。フェイトちゃんはゼフィちゃんと何か言葉を交わして、私を追いかけてきた。

「デイバインシューター！」

Divine shooter

やることは以前と同じ。でもあれからさらに制御技術に磨きをかけた。

それに同じ失敗はしない、シャルちゃんが教えてくれた教訓を胸に私は戦う。

「Sideなのは シャルロット」

「さてと、こちらも始めようか、シャルロット」

ルシルが静かに戦闘を開始しようと口にする。

私は……かつての決闘と同じように名乗りをあげる。

なぜだか、今はそうしないといけないと思ってしまったから。

「ミッドガルド秩序管理機構左翼、天光騎士団^{シュテルン・リッター}星騎士^{フュンフト}が一人、第五騎士^{リッター}剣神シャルロット・フライハイト……！」

案の定ルシルが啞然としている。

仮面で素顔が隠れているけど長い付き合いだ、それくらいは分かる。

「……アースガルド同盟軍、対主力精鋭部隊アンスールが同盟軍
後方支援部隊総指揮官。

神器王ルシオン・セイントテスト・フォン・シュゼルヴァロード……」

ルシルも私に合わせて名乗りをあげてくれた。

でもやっぱりアースガルドではなく、シュゼルヴァロードの姓なんだね。

さあ、お互い名乗りをあげた。即ち決闘の意味を持つ戦いをしようということだ。

死んでも退かない、その意味を持つ戦い。

“界律”が何を企んでいるようにも、私はあなたを倒してもものを守る。

「「参る！」」

さあ、見せてあげる。魔術が解禁された今の私の力を！

その言葉を戦闘開始の合図としてルシルが背にサファイアブルーに輝く剣のような翼を12枚生やす。

(空に逃げる気ね、けどそうはさせない！)

私も空を飛ぶことが出来る魔術、飛翔術式を習得している。

けどそれは絶望的に下手なのだ。まるで死に掛けの羽虫のようにフラフラとしか飛べない(それでよく膨れっ面をして拗ねていた)。だからここでルシルを空に逃がすと、私の攻撃手段が減らされる。

「逃がさない！」

そう、私は確かに飛べないけど、跳ぶことは出来る。

瞬時にルシルの背後に跳躍し、左サイドの剣翼6枚全てを切り捨てる。

「バカな!?!」

ガラスが砕けたような音とともに崩れ去る剣翼。

そのまま滞空しているルシルが激しく動揺する。

当然だ、以前まで圧倒的優位に立っていたのに、今は逆転しているのだから。

「そのままだと灰になるわよ！」

私の持つ炎熱系攻性術式最強の一撃をルシルに放つ。
これは対象を炎の球体に閉じ込め、爆発的な炎の斬撃で切り裂くという術式だ。

「食らいなさい・・・！」

頭上に振り上げた炎に包まれた“キルシュブリューテ”を、ルシルを覆い包む炎熱球へと振り下ろす。

縦一閃。直後、炎熱球が大爆発を起こす。

むう、能力値が12%ではやはり大した威力は出なかったわ。

それでもSランク程度はいくだろう。炎を引いて地面に叩きつけられたルシル。

そして、

我が手に携えしは確かなる幻想

あの詠唱を口にする。

私もこの程度で勝てるなんて初めから思っていない。

炎の中から現れたルシルは、私に人差し指を向けて術式名を宣告する。

「神よ、^{エリ・}何故私を見捨てたのですか^{サバクタニ}」

指先から光線が照射される。

そして同時に周辺に揺らめいていた炎が、衝撃波によって一瞬にして鎮火する。

すぐさま回避行動を取り反撃しようとしたところで、ルシルが弓矢を構えているのを視認。

おそらく私の逃げ道を塞ぐための範囲攻撃系の術式。

「逃れるものなら逃れてみせよ、奥義クランブル・ガスト!!」

放たれたのは無数の矢。効果範囲がデタラメに広い為、回避は不可能。

ならば、私に当たるものだけをこの身と刀だけで叩き落す。

「そればかりに気をとられていると、今度は君が灰となってしまうぞ！」

ボンバルデオ・エクサラシオン
業火顕現、爆連襲星

ルシルの上空から私に向けて巨大な炎の弾丸が降り注ぐ。

「まだまだあ！」

エヒト・オルカーン
風牙真空烈風刃

ここで使うのが私の風嵐系最強の一撃。

真空の刃を複数巻き込んだ風の壁を叩きつける術式だ。

この一撃が炎の弾丸を一瞬にして消滅させる。

そして私は接近戦へ持ち込むために最接近する。

「もう距離を離さないわよルシル！」

「なら無理矢理にでも距離を空けさせてやるまでだ！」

デルニエール・パテム
終極洗礼

私とルシルの間に光の柱が落ちてくる。

だけどそんなものは無駄な抵抗に過ぎない。

「だから、無駄なことをは止めなさい！」

シャイン・モントズイッヒェル
光牙月閃刃

その光ごとルシルにダメージを与える為に“キルシュブリューテ”を横薙ぎに振り抜く。

ただルシルはいつの間にか“神槍グングニル”のレプリカを手にして、私の斬撃を防いだ。

決まった。この戦いは私の勝ちだ。

「くっ、まさかこんなことになるとは……！」

「もう諦めなさいルシル！」

フィンダーニス・モントズイッヒェル
凶牙月影刃

ルシルは複製術式を発動させようとするけれど、私の術がそれを妨害する。

闇黒系の魔力を纏わせた一閃が、ルシルの胸元の神父服キャンソックを浅く裂いた。

「っ！ くそっ！ このままでは……！」

ルシルがかなり焦っている。当たり前の結果だ。

私の術式が現実には作用するまでの時間はおよそ0.04秒くらいだろう。

大戦に参加した主力級の魔術師なら大体この程度、ルシルももちろんそうだ。

けど、ルシルは私に押されている。

それは何故か。そうルシルの扱っている複製術式の顕現までの時間が私の術式顕現よりはるかに遅いのだ。

ルシルはわざわざ“英知の書庫”アルホワイトや“神々の宝庫”フレイザブリクから術式や武装を現実へと引つ張り出さないといけないのだ。

それが致命的なタイムロスとなつて私に遅れを取るということだ。

「もう一発……!」

フィンダーニス・モントズィツヒェル

凶牙月影刃

もう一度闇黒系魔力を刀身に纏わせた“キルシュブリューテ”で連撃。

ルシルは「近接では分が悪い……!」と悔しげに呟きつつ、“グングニル”で何とか捌いていく。

「ほら、もう後が無いわよ……!」

当然ルシルもそれに気付いている。

ならどうして、自分だけの固有魔術を使わないのか。

それが“界律”によって制限されているからに違いないと私は踏んでいる。

ルシルの固有魔術はどれも威力がハンパじゃない。

彼の最強の真技は、その一撃のもとに海鳴市くらいの街なら1つや2つは地図上から消せるだろう。

そんなふざけた威力を持つルシルの魔術を“界律”が制限しないわけがない。

だからルシルは複製した武装や術式に頼るしかない。だから、魔術の出が早い私が必然的に有利となる。

それが近接戦ならなおさらだ。

「どう、ルシル。劣勢に立たされた気分って？」

皮肉気にルシルを軽く挑発。

乗ってくるわけはないだろうけど、今までの仕返しだ。

「くっ、ああ、本当に嫌な気分だ。だが、まだ終わりじゃない！」

ウングァ・スブレンドーレ
閃斬光爪

ルシルが両手の爪から白く輝く伸びた光の刃を使って薙いできた。私は“キルシュブリューテ”を使って切り崩し、ルシルの胴めがけて斬撃を放つ。

「俺は負けられないんだ！ あの子達のためにもここで終わるわけには……！」

ルシルは咄嗟に身を引きそれをかわす。それにしてもおかしい。ルシルがあまりにも必死すぎる。以前のルシルなら、負けをちゃんと受け止めるはずだ。

「天の風琴が奏で流れ落ちるその旋律、凄惨にして蒼古なる雷……」

「呪文！？ 詠唱による術式発動！」

詠唱から発動する術式は、魔術においては儀式魔術として見られる。その効果はまず高い。魔術で無いとしても、そのルールが適用される術式なら、かなりまずい攻撃が来るはず。

「喰らえ！」

ブルーティツシユボルト

地に現れた方陣から出でるは紫色の雷で構成された無数の竜。

「まずい！ 目醒めよ、キルシユブリューテ！」

ルシルに接近し過ぎていたのがまずかった。

すでに目と鼻の先に暴力の塊がいる。

雷竜をかわすことも、防ぐことも、相殺することも出来ないと瞬時に判断した私は“断刀キルシユブリューテ”の誇る能力を発動させた。

刃物には少なくとも“切る”や“刺す”といった概念が備わっている。

そして私の“キルシユブリューテ”は、特にその概念が強い刀だ。

それゆえに“キルシユブリューテ”を超える神秘、幻想でなければ全てを切り裂くことが出来る。

「はああああああああああああつっつ！」

だが本来なら能力発動に必要な魔力は最低でXXランクはないといけない。

しかし今の私はせいぜいAAAランクあれば良いくらいだ。

故に完全解放ではなく、数秒間だけ解放する瞬間解放を行った。

一心不乱に“キルシユブリューテ”を振り続け、全てを切り裂き終えた私は意識をギリギリ保ちながらもルシルを見据える。

「ハアハアハアハア・・・つ、疲れた、もう十分でしょルシル？」

＋＋＋Sideシャルロット　なのは＋＋＋

私とフェイトちゃん、ううん、ユーノ君とアルフさんもだ。みんながシャルちゃんとゼフィちゃんの戦いを見てその動きを完全に止めていた。

「す、すごい・・・これが魔術師の・・・本当の戦い・・・」

フェイトちゃんが呟く。私だって声が出ないほど驚いている。ユーノ君なんて目を点にしているうえに口が開きっぱなしだ。シャルちゃんがあんなに強かったなんて知らなかった。

シャルちゃんとゼフィちゃんが何か話しているけど、ここまでは聞こえてこない。

「・・・っ!」

いち早く立ち直ったフェイトちゃんが“ジュエルシールド”を封印しようとする。

私もそれに続いて“レイジングハート”を“ジュエルシールド”に向かって突き出す。

“レイジングハート”とフェイトちゃんのデバイスが“ジュエルシールド”を挟んで衝突する。

そして“ジュエルシールド”から途轍もない衝撃が放たれた。吹き飛ばされる私とフェイトちゃん。

「なのは!?!」

「フェイト!?!」

遠くからユーノ君とアルフさんの叫び声が聞こえた。

++++Sideなのは　ルシリオン++++

「なに!?!」

「ちよ、ちよつと、これはどういうこと!?!」

シャルとの戦いに没頭しすぎていた所為で“ジュエルシード”の状態まで気が回らなかった。

フェイトとなのはのデバイスが“ジュエルシード”を挟むように衝突したことによって、“ジュエルシード”二人の魔力に反応して暴走状態になってしまったようだ。

「まずい・・・これってもしかして、私たちの使った魔力にも原因があるんじゃないの!?!」

シャルが俺たちにも原因があるかもって言っているが、確かにそうだろう。

せっかく休眠状態に戻していたのに、俺たちがデタラメな力を使ったことで暴走寸前までになってしまったのだ。

最終的な暴走の引き金となったのはデバイスとの衝突にあるだろうが、もとはといえば俺たちが大本の原因だ。

「ダメ!　今の私じゃ手が出せない!」

シャルは打ち止めのようだ、が俺には・・・手がある。

しかし、能力値、とくに魔力の制限が酷いため、今の状態でアレを使ったら俺はどうなってしまうのか……。

この状況を打破する複製術式使用後の自分の姿を想像する。正直とてつもなく悩んでしまいが仕方がない。下手すれば死ぬかもしれない。

まずはフェイトが暴走する“ジュエルシード”に突っ込もうとするのを止めないとな。

『フェイト！！ 俺がジュエルシードを停止させる！

停止を確認後、すぐに封印に移ってくれ！！』

『え！？ でもルシルどうやって！？』

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

俺はフェイトに答えず“英知の書庫”^{アルウイト}よりある術式を現実へと顕現させる。

ああ、これはまずい。身体と精神が悲鳴をあげている。

当然だ。今扱える魔力はせいぜいA A + ランク、この術式の必要魔力はX X X ランク。圧倒的に足りていない。

俺たち魔術師は本来、体内で生成された魔力と体外から取り入れた魔力を“魔力炉”^{システム}で融合させてから発動に必要な分だけを使用する。だが、この世界ではそれが上手くいかない。

これこそ“界律”^{テストメント}が“界律の守護神”としてではなく、魔術師としての俺たちに強いている最大の制限だ。だから必然的に魔力不足となってしまう。

それ以前にSランク以上の複製術式の使用は制限されている。

それを無理矢理使用するので当然身体的なペナルティが発生するだ

ろう。

しかし今はそんな泣き言は言ってられない。

意識を保てる間に終わらせなければ・・・力を借りるよアリス。

「結界王の名に基づき具現せよ、サンダルフォン一方通行の聖域！！」

十？ ？ ？ ？ ？
シャル先生の魔術講座 ？ ？ ？
？ 十

シャル

「ようこそいらっしやい。第三回シャル先生の魔術講座へ。」

今回は残念だけど、私とユーノで進ませてもらっわ。だって、なのはってば大変なんだから」

ユーノ

「残念、って言われるとちょっとショックだよ、シャル」

シャル

「あ、ごめん。言葉のあやだから、そう落ち込まないで。」

別に、ユーノじゃなくてなのはを出せよ、みたいなクレームへの先手なわけじゃないから」

ユーノ

「それが本音つぼくてさらに僕的心情がどん底へ急降下だよ。確かになのはは女の子で可愛いし、僕みたいなフェレットじゃ面白くないかもしれないけど」

シャル

「ユーノが自虐モードに入ってしまったから、さっさと本題に入るわ。」

アオフ・ローダーン・シュテルン
炎牙焰牢刃

エヒト・オルカーン
風牙真空烈風刃

シャイン・モントズィツヒエル
光牙月閃刃

フィンダーニス・モントズィツヒエル
凶牙月影刃

今回はこの4つの魔術を使用したの。

まずは、炎牙焰牢刃アオフ・ローダーン・シュテルンね。

作中にも説明していたけど、対象を炎の球体に閉じ込めて、その上から炎の斬撃を一閃。

その衝撃で炎熱球は爆発を起こして追加ダメージ、というわけ。

アオフ・ローダーンは燃え上がる。シュテルンは星。燃え上がる星という意味よ」

ユーノ

「閉じ込められちゃったら逃げ場なしになるんだね。」

これは結構危険な魔術なんじゃないかな・・・」

シャル

「続いては、風牙真空烈風刃エヒト・オルカーン。

真空刃と烈風刃の合成バージョンと言ったところかしら。

風圧の風である烈風刃の中にくつつもの真空刃を巻き込んで、ある種の砲撃とするのがコレ。

エヒトは真の、オルカーンはハリケーン、大暴風という意味ね」

ユーノ

「烈風刃と真空刃、単独でも十分な威力なんだし、それを一緒にしたらどれだけ強くなるんだ？」

シャル

「んー、落ちてくる炎の雨が吹っ飛んで行ってしまっ程ね。

次は、光牙月閃刃シャイン・モントズィツヒエル。これは単純な魔力付加攻撃ね。

閃光系と呼ばれる属性の魔力を纏わせての一閃。ただそれだけよ。シャインは光。モントズィツヒエルは三日月という意味よ」

ユーノ

「シャル。属性つて単語を出すのはフライングだよ？」

シャル

「仕方ないじゃない。説明するには必要な魔術ワードなんだから。

最後に、光牙月閃刃と同種の術式、凶牙月影刃フィンダーニス・モントズィツヒエル。

後々に出てくる属性において、闇黒系の魔力を刀身に纏わせての一閃、という攻撃よ。

フィンダーニスは闇。モントズィツヒエルは既出だから省略するわ」

ユーノ

「また言っちゃった」

シャル

「文句があるなら、もう来なくて結構ですっ！」

それぞれの悩み（後書き）

今回はルシリオンの“蔵”の説明です。

複製された能力・魔法・魔術・知識などを貯蔵する“蔵”。

英知の書庫。全知の戦乙女アルヴィトの名を冠する巨大書庫。

そして複製された武装など固定物を貯蔵する“蔵”

神々の宝庫。ブレイザブリクの名を冠する黄金に輝く武器庫。

詳細は追々とします。

複製術式

とある魔術の禁書目録神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ・レマ・サバクタニ）

ヴァルキリープロフィール シルメリア：クランブルガスト

スターオーシャン3：ブルーティツシュボルト

以下はANSURオリジナルです。

ボンバルデオ・エクサラシオン
爆連襲星

使用言語はスペイン語

ボンバルデオ〓爆撃・エクサラシオン〓流れ星

デルニエール・バテム
終極洗礼

使用言語はフランス語

デルニエール〓最後の・バテム〓洗礼

ウンギア・スプレンドーレ

閃斬光爪

使用言語はイタリア語

ウンギア||爪・スプレンドーレ||輝き

プレシア・テストロッサ

+++++Sidellシリオン+++++

「結界王の名に基づき具現せよ、サンダルフォン一方通行の聖域！」

“サンダルフォンジュエルシード”を再度停止させる為に使った最高位の結界術式、一方通行の聖域は、かつて人間だった頃の戦友“結界王アリス”の固有魔術だ。

俺はこの場を終息させるために、自分の体を無視して使用した。

「づつ・・・！　うぐっ」

その結界の効果は、結界内に閉じ込めた対象の魔力行使を全てキャンセルするというもの。

結界内では一切の魔力、能力が使えないのでどうすることも出来ない。

だが、結界外からは結界内に好きなだけ魔力干渉が行える。

それゆえに“一方通行”の聖域と呼ばれる。

どれだけ強い魔術師でもこれに囚われたら、もう逃げることは出来ない。

事実、俺もアリスが敵だった頃にこれを使われ殺されそうになった。かるく思い出に浸っていると、

界律の制限より逸脱した術式及び魔力が使用されています

第四の力、天秤の狭間で揺れし者ルシリオンに警告

すぐさま使用している術式を停止せよ

停止せよ 停止せよ 停止せよ 停止せよ 停止せよ

さもなければ現時刻より80秒後 第四の力の機能を

強制的に停止させます

界律から警告がだされるが……うるさい、黙れ!!

今はこっちのほうがはるかに重要だ。

桃色に輝く正八面体の結界に閉じ込められた暴走しているジュエルシードから徐々に光が失われている。

その一方、俺の方も身体のいたる所から血を失っている。先ほどから激痛が体を襲っている。

口、目、鼻、少しヤバイかもしれない。

「がはっ、くっ、フェイト……!! 今だああ!!」

“ジュエルシード”が再び休眠状態に入ったことを確認し、魔力と術式を封印し直してフェイトに呼びかける。

ああ、仮面の中がそれはもうすごいことになっている。気持ち悪いことこの上ない。

「う、うん!!」

フェイトは俺の使った術式に驚いていたが、ちゃんと立ち直り封印を終えた。

結果的にいえば、俺たちの勝ちだった。

俺は治癒魔術を使いながらフェイトとアルフのもとへと向かった。

++++ Sidellシリオーン シャルロット++++

・・・ルシルが結界王アリスの術式を使った。
当然の如く、ルシルはフラついたままフェイトたちのもとへと歩み寄っていく。

『こんな無茶をして、死ぬつもり！？』

私はリンクを通してルシルに呼び掛ける。

一歩間違えば、ルシルは間違いなく消滅していた。

『・・・し・・・死ぬと・・・は・・・ハアハア・・・思って・・・いない・・・』

念話にすらまともに応えられない。

『・・・バカ』

フェイトと隣に立ったルシルが、フェイトたちと何か話して去っていった。

もう見送るしかない。今回もまた負けてしまった。

ルシル達の姿も完全に消え、私もなのはたちのもとへと向かった。

「・・・なのは、ユーノ」

ぼうつとしていた二人に呼びかける。

「え？ あ、うん。あ、そうだ、シャルちゃん。」

私ね、少しだけお話できたよ。ちゃんと名前も教えてあげれたし」

「・・・そう、か。うん、よかったわね、なのは」

全くこの子は、こんな状況でもいつも通りだなんて・・・

「今日は・・・もう帰ろうか」

「うん！」

こうして私たちも家路についた。

ユーノの強い視線をこの身に受けながら・・・。

++++Sideシャルロット フェイト++++

さつきからルシルがフラフラしているので、アルフに頼んで運んでもらった。

そして、家に着いた途端ルシルが倒れた。一瞬なにが起きたか理解できなかった。

「ルシル!?!」

私とアルフが突然の事態に驚き声をかけ、苦しそうにしているルシルの顔を見るために仮面をはずす。

そして、私とアルフは息をのんだ。仮面をはずした瞬間、大量の血が溢れてきたのだ。

いきなり目の前が真っ赤になって、アルフと二人して顔を青くして呆然としてしまった。頭の中が真っ白になる。ううん、ダメ！　しっかりしろ、フェイト・テストロツサ！！

「アルフ！　治癒魔法を！！」

「あ、ああ！！」

二人して慣れない治癒魔法をルシルにかける。

（死なせない！　絶対に死なせない！！）

ルシルが私たちに与えてくれた楽しい時間。

いつも美味しいご飯を作ってくれて、いつもアルフと口喧嘩して、最終的にはアルフが先に手を出し、殴り合いの喧嘩になってルシルが負けて愚痴をこぼし、アルフもそれが楽しそうで、そんな二人を見る自分もすごく楽しかった。

「ルシル！！」

時には軽く模擬戦をして、簡単に負けて、それが悔しくて何度もぶつかるとしても勝てなくて、するとまたアルフが喧嘩腰になって・・・の繰り返し。

たぶんルシルはこの“ジュエルシード”の一件が終わると去って行ってしまっただろう。

初めはそんなに気にはならなかった。けど、今は・・・私たちは、ううん、私はもうルシルがいないと・・・ダメなんだ・・・。

これからもずっと一緒にいたい、そう強く願う。

だから、死なせない、これでお別れなんてさせない！！

++++Sideフェイト ルシリオン++++

夢を見る。

(ここは・・・セインテストの居城グラスヘイムの庭先・・・?)

俺が立っているのは生前(正確には現在瀕死中で封印中)に住んでいたグラスヘイム城の庭園だ。
そして体は子供ではなく元の大人の姿だ。

「・・・なんで今更こんな夢を・・・?」

夢なんて見るのはいつ以来だろうか?

そんなどうでもいいことを考えていると、目の端のほうで複数の影をとらえる。

庭園の真ん中の休憩スペースにいたのは、それは懐かしき家族であり戦友たち・・・。

「・・・シエル、フノス、イヴ義姉様・・・」

実妹の拳帝シエル・セインテスト・アースガルド。重力魔術のエキスパートで肉弾戦最強の魔術師。

義妹の魔道王フノス・クルセイド・アースガルド。あらゆる魔術師に頂点に立つ、まさに王。

義姉のイヴイリシリア・レアーナ・アースガルド。イヴ義姉様は、風嵐系においては最強の魔術師。

その3人だけじゃない。

「ジーク。カーネル。レン。ステア。セシリス・・・」

雷皇ジークヘルグ・フォスト・ニダヴェリール。雷撃系最強の魔術師。

地帝カーネル・グラウンド・ニダヴェリール。土石系最強の魔術師。冥祭司プレンセリウス・エノール・スヴァルトアールヴヘイム。

数少ない霊媒魔術師。

白焰の花嫁ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイム。炎熱系最強の大魔術師。

炎帝セシリス・エリミング・ムスペルヘイム。ステアと同様に炎熱系最強と謳われる魔術師。
まだ居る。

「カノン。フォルテ。アリス・・・」

殲滅姫カノン・ヴェルトール・アールヴヘイム。私と並ぶ最強の砲撃魔術師。

呪侵大使フォルテシア・アウリアス・スヴァルトアールヴヘイム。闇黒系最強の魔術師。

結界王アリス・ロードスター。結界術式においては正に王の二つ名通り最高位の術者。

そして・・・、

「・・・シエフィ」

知らず口に出していた最愛の女性、シエフィリスの愛称。

蒼雪姫シエフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム。氷雪系最強の魔術師で、最愛の女性。

そのシエフィが振り向く。なんで、なんで泣いているんだシエフィ？

どうしてそんな瞳で俺を見てくるんだ？
他のみんなもそうだ、何故さっきまで笑顔だったのに、何故今は泣いている？

「どうして！？ 何故泣くんなんだ！？」

そう叫んでしまう。シェフィ、君の泣き顔なんて見たくはない。
するとみんなが俺の周りに集まりだす。

「泣いてるのはあなた。気付かないのルシル？」

フノスがそう告げてくる。俺が・・・泣いている？

「ルシル様はここで何をしているの？」

横からはカノンが俺を見上げて聞いてくる。

「兄様はまだここに来ちゃダメ、だからもう帰らないといけないの」

妹のシエルが涙を流しながら微笑んでいる。

「界律の守護神、テストメントとしてではなく、ルシルとしてあの子の側にいてあげるよな」

大親友で共に腕を磨いたプレンセリウスが言ってきた。
それは無茶な話だよ、いつか俺は役目を終えて消える。

「確かに。えっとフェイトだっけ？ あの子は将来美人になるでしょうね。」

だからといって、今手を出さないようにねルシル」

お前はいつまでたつても俺をからかうんだな、ステア。

「ねえ、ルシル。いつまでも私たちの復讐なんて考えないで。

私たちはルシルの幸せをいつでも、いつまでも願っているんだから」

もう涙を流していないシェフィが、綺麗な微笑みで俺を見る。

これは夢だ。おそらく自分の都合の良い夢……だけど……。
またみんなに会うことができた、だからすごく幸せな夢だ。

「さあ、行っておいでルシル。別れのその一瞬まであの子の味方でいてあげて」

ああ、わかったよイヴ義姉様。

目の前が白色に染まる。消えていく、みんなが消えていく。
でも俺は振り返らない。

あの世界で役目を終えるその一瞬まで、フェイトとアルフの側で俺は戦い抜く。

+++++Sideルシリオン フェイト+++++

「ルシル！？ あたしが分かるかい！？ フェイト！ ルシルが目
を覚ましたよ！」

アルフが、ルシルが起きたって大声を出して私を呼んだ。

「ルシル！ 大丈夫！？」

急いでルシルのもとへと戻る。

私はルシルが目を覚ました安心からか、目から涙がポロポロと零れ落ちた。

もう目覚めないかと不安だった。よかった、本当によかったよ……。

「……フェイト?……アルフ?……すまない。

なぜか分からないけど、泣かすようなことしてしまったようだ、ごめんな」

え? もしかして覚えていない?

けどそれは当然かもしれない。あんなにいっぱい血が出ていたんだ。それくらいのダメージがあってもおかしくない。

「本当だよ! あたしたちが必死で治癒魔法を使ったから、あんた、今こうして生きてんだよ!」

アルフが襟首を掴んでルシルを揺さぶる。

「ア、アルフ!? それはまだダメだよ!」

何はともあれルシルは目覚めた。

ようやく気が抜けた私は床に倒れこんで、そのまま眠ってしまった。

++++ Side フェイト シャルロット +++++

「レイジングハートのほうはどうなってるのユーノ?」

今、私はなのはの部屋に来ている。

フェイトのデバイスとの衝突、暴走した“ジュエルシード”の魔力の衝撃波によって大ダメージを受けた“レイジングハート”が気になっただけだ。

「ん、うん、かなり破損が大きいけど、きっと大丈夫。

今は自動修復機能をフル稼働させているから、明日には回復すると思う。

だから、なのはもそんな顔しないで。絶対大丈夫だから」

「うん、ごめんねレイジングハート、守ってくれてありがとう」

どうやら“レイジングハート”は大丈夫のようだ。

なのはは自分を守ってくれたことに最大の感謝を言っ、明日に備えて寝ようとした。

だったら私もそろそろ休もうかと思って自分の部屋に戻ろうとしたそのとき、「シャル」とユーノが私を呼び止めた。

「何、ユーノ？」

「魔術師って何なんだ？ あんなデタラメな力を見せられたら気になるじゃないか？」

好奇心ではなく、これは・・・魔術師への・・・恐れ。

ユーノの真剣な、ただどこか畏れの見え隠れする瞳を覗き込む。

「以前に話した通り、よ。あなたたちと同じように魔力を使って術を発現させる。

それ以下でもそれ以上でもない。唯一の違いは神秘の有無、それだけ」

「・・・本当に？」

「・・・ええ」

ユーノから疑惑の視線が消えた。悪いけど、事細かな説明は苦手だし、教える必要もない。

知ったとしても万人が扱えるような代物じゃないから。

「明日も学校だからゆっくり休むようにね、なのは」

「あ、うん。おやすみシャルちゃん」

「おやすみ、なのは。ユーノ」

そうして私は自室へと戻った。

++++Sideシャルロツテ ルシリオン++++

翌朝、フェイトは母親のいるところへと報告をしに行くと言ってきた。た。

フェイトから話では聞いていたが、良い母親なのだろう。

「楽しみだな、フェイトの母親か。良い人なんだろう、アルフ？」

フェイトがその場にいなかったたので、アルフに聞いてみた。すると、

「良い母親？ あいつはそんなんじゃないよ！！ あいつは・・・」

突然激昂したアルフに戸惑ったが、話を最後まで聞いてみようとして、

「アルフ？ どうしたの大きな声が外まで聞こえていたよ？」

フェイトが例の包みを持って帰ってきた。

母親へのお土産を買って来ると言ったので、俺が行こうとしたらバインドを使ってまで俺をソファに強制的に寝かせた。

あの時のフェイトは・・・鬼だった。

「お土産も買ったし・・・行こうか、アルフ、ルシル」

「・・・うん」

「ああ」

フェイトが転移するための準備に入り、俺たちはこの世界から消えた。

そして辿りついたのは・・・何だここは！？

気持ち悪い！ それ以前に契約中の世界から勝手に出てしまったために、

第四の力、天秤の狭間で揺れし者ルシリオンに警告

現在、契約を行っている世界“地球”より勝手に離脱中

至急、帰還せよ 帰還せよ 帰還せよ 帰還せよ

帰還せぬ場合 この場での使用可能能力を1%までに減少する

“界律”からそのような警告が出される……うるさい、無視だ
無視！

というより戦闘になるわけがないだろう。

ただフェイトの母親に会いに来ただけなのだから。
でもやはり……

「気持ち悪い……。フェイト、アルフ、先に行つててくれないか
？」

軽い眩暈を起こしながら二人に言う。

「え、大丈夫なのルシル？　もしかして昨日の怪我が……」

「そうなのかい！？　だったらついてこなくても……いや、それはダメか……」

二人が心配そうに見てくれるがフェイトの母親を待たせるわけにも
いかない。

「俺は大丈夫。少し休めば、すぐに追いつく」

「追いつくって……ルシル、場所知らないでしょ？」

「あ」

そうだった。こんな広いところで一人になって迷子なんてあまりに

も恥ずかしすぎる。

「それじゃアルフ、ルシルについててあげて」

「え！？ フェイト！？ そんなんじゃフェイトが一人で・
」

何だ？ アルフの様子がおかしい。
フェイトを一人にしたからといってなんなんだ？

「私は大丈夫だから。ルシル、ゆっくりで良いからね。あとで私の部屋へ案内するから」

「フェイト！！」

フェイトは一人で母親のところへと報告をしに行った。
アルフが最後までフェイトを引きとめようとしていた。
何をそこまで焦っているんだ君は？

+++++Sideルシリオン アルフ+++++

どうしよう！？ フェイトが一人であのババアに会いに行ってしまった。
った。

あたしがここに残る原因のルシルは、あたしを見て「何焦ってんの」
みたいな顔で見てくる。

噛むよルシル！！？ ああもう！ 早く元気になりなさいよルシル
！！

でないとフェイトが、フェイトがあいつに何をされるか分からない

よ!!

フェイトが行ってから数分後、ルシルはようやく、「もう大丈夫だアルフ、行こう」と言って頷いた。

「おっそい!! 急ぐよルシル!!」

「あ、おい! アルフ!? 何をそんなに・・・」

あたしはルシルがちゃんと追いかけてくるのを見ながらあいつの部屋へと向かった。

+++++Sideアルフ ルシリオン+++++

アルフが急に走り出したので、少し体が鈍いが俺も追いかけた。どれくらい走っただろうか?

たどり着いたのは長い廊下、先には大きな扉。そしてその中から聞こえてくるのが・・・

「何だ? 何なんだ? どういうことだ!? アルフ!?」

聞こえてくるのは悲鳴、それもフェイトの悲鳴だ。

別に聞こえてくるのは何かを鞭のようになしなる物で叩く音。決まっている、フェイトを叩いているのだ!!

「だから・・・あたしはフェイトを行かせたくなかったんだよ。フェイトの母親、プレシアは何か気に入らないことがあると、ああやってフェイトに何かするんだ。

でも今回はいつも以上に酷い!! 一体何なんだよ!? ジュエ

ルシードってさあ!？」

アルフが泣きながら怒鳴ってくる。
そうだよな、悔しいよな、辛いよな、何も出来ない自分が許せないよな。
だったら、

「アルフ、フェイトを助けるぞ」

「ちよつ!？ ルシル・・・!？」

「俺がフェイトを解放したら、アルフはフェイトを連れて部屋を出てくれ」

「・・・あなたは？」

「そのプレシアって女に用がある」

もうダメだ、これ以上フェイトの悲鳴を聞いていると、

(プレシアとかいう女の全てを殺したくなる)

俺の放つ殺気でアルフが少し怯えているようだが、今は抑えられない。
い。

「いくぞ」

俺は今扱える魔力と術式で扉を吹き飛ばす。

母さんをつかりさせちゃったから、私はお仕置きされているんだ。すごく痛いけど、私がダメな子だから仕方がないんだ。

「あなたはどこまで母さんを失望させる気!？」

母さんの振るう鞭の痛みには耐えていると、後ろの扉からものすごい音と一緒に煙が私のすぐそばまでやってきたのが分かった。何事かと思つて顔を上げると、母さんは気付いていないのか、母さんの背後に立ち、すごく大きい真つ黒な鎌を母さんに振り下ろそうとしているルシルがいた。

「・・・っ!!? ダメ! ルシル!!」

それはダメ! あんなので斬られたら母さんが死んじゃう。大好きな母さんが大好きなルシルによつて殺される。私はそれが嫌で必死に声をあげてルシルを止めた。

「何なのあなたは!？」

母さんはようやく自分を斬ろうとしていたルシルに気付く。

「アルフ!!」

ルシルはアルフを呼び、そして手に持つ大鎌で私を縛っている魔力のロープを断ち切つてアルフに抱かせた。

「どうし・・・て、ア・・・ルフ、ルシル・・・?」

「・・・フェイトを守ると誓ったから」

「ごめんよフェイト」

アルフが謝る。そしてルシルが私を守って・・・そう言ってくれた。

嬉しい、すごく嬉しいと思った。私は今、きっと顔が赤くなっていくだろう。

心臓の鼓動がすごく大きな音に聞こえる。

「アルフ、フェイトは任せた」

「・・・ああ、ここは頼んだよルシル」

「ま、待ってアルフ！ ルシル!？」

アルフは私の声を無視して、すごい速さでこの部屋を後にした。そして私はそのまま気を失ってしまった。

+++++Sideフェイト ルシリオン+++++

対峙するのはフェイトの母親プレシア・テストロッサ。

フェイトからは優しい母親と聞いていたからこそ期待していた。

だが実際はどうだ？ 実の娘にあんな酷い仕打ちをするような人間だとは。

今ならアルフが、あのマンションで言いかけた言葉がハッキリと理解できる。

良い母親？ あいつはそんなんじゃないよ！！ あいつは・・・

確かにそうだった。この女は最悪だ。

「もう一度聞いわ、あなた何者？ 私に気付かせずに背後をとるなんて・・・只者じゃないわね」

あの女が何か言ってきている、がまあいい。

「俺はフェイトとアルフの槍、盾、そして翼。ジュエルシードの探索に協力している。」

「・・・そう、あの子はあなたのような協力者を得ていたのね。それだというのに、集めたのがたった四つなんて・・・ダメな子ね」

“ジュエルシード”を探すのだけでも大変だ。

それだというのに、この女は本気で言っているのだろうか、言っているんだろうな。

だったら、文句があるなら自分でやってみろ、このアマ！

「フェイトとアルフはよくやっている。

俺が手伝っているとはいえ、あの二人は自分で考え行動している。だからこそ、その二人を侮辱することは絶対に許さない」

すでに怒りゲージはMAXを振り切り、粉々になっている。いつ爆発するかわからないが、今はなんとか耐える俺。

「結果がついてこないという意味がないわ。だから、あなたも力を貸し

「てちょうだい」

「協力は続けるさ、あの子達のためにな。だが貴様のためと思うとやる気が一気に失せる」

「それでも別に構わないわ、ジュエルシードが手に入るならね」

今すぐこの場から去って、フェイトとアルフの顔を見て癒されたい。だが最後に言っておかねばならないことがある。

「・・・ジュエルシードは本当にすごい代物だ。

あれを複数同時に発動すれば、ある程度のことは出来るだろう。

貴様が何を企んでいるかは知らないが、あまり派手なことはするなよ。

さもなければ、世界は貴様を敵と判断し潰しにかかってくるぞ」

「その心配はないわ。世界が何かをしてくるなんてことは有り得ない」

俺はその言葉を聞き、この部屋を後にする。

（有り得ない、か。ならば何故俺たちが呼ばれたのだろうな）

おっと一つ言い忘れていた。

「ああそうだ、フェイトのお土産、ちゃんと食べるよ」

今度こそ、この部屋を後にした。よかった、殺すようなことがなくて、な。

＋＋＋Sideルシオン フェイト＋＋＋

体がすごく温かい。

何かに抱かれているような、そんな温かみだ。

それがすごく心地よくて、今にでもまた眠りについてしまいそうだが、それに逆らって私は目をあける。

「・・・ここは・・・？」

あれ？ ここはいつものマンションの一室で、私が使っている部屋だ。

「いつ帰ってきたんだろう？ それにこれって・・・？」

私はベッドの上に寝かされており、そして綺麗な蒼色の光がベッドを包むように半球状に展開されていた。

この光が、私を感じた温かみの理由らしい。

「フェイト!？」

アルフが私起きているのに気付いたからか、私に駆け寄ってきた。

「アルフ、私・・・どうして？」

帰ってきたのか、と聞いてみた。

「ルシルがあの後、フェイトに治癒魔術を使ってね、すごいんだよルシルの奴。」

一瞬でフェイトの傷を治したからね。そうしてそのままこっちに帰ってきたんだ」

そうか、私はあの後すぐに気を失ったんだっけ。

その間にルシルが治癒の魔術を使って、私の傷を治して帰ってきたということらしい。

本当にすごいなルシルは。

「それじゃあ、この蒼い光もルシルの魔術？」

「そうだよ、フェイトが良く眠れるようになってさ」

そうか、ルシルって何でもできるんだね。

あれ？　そういえばルシルの姿がない。

もしかして私の部屋だからって遠慮しているのかな？

「ねえアルフ、ルシルは？」

「・・・ルシルはジュエルシードの魔力を感じたからって、一人でその場所に向かったんだ」

「・・・え？」

アルフが言った事が解らない。

え？　ルシルがたった一人で“ジュエルシード”の封印に向かった？　アルフはそう言ったの？　だってルシルに封印の術はないはず。

それに、もしかしたらあの白い子たちが来るかもしれない。

ルシルは確かに強い。でも、あの水色の髪の女の子と戦って、さらに白い子も戦うとなると・・・。

とても嫌な予感。信じてはいるけど、でも心配でならない私は・・・

.

プレシア・テスタロッサ（後書き）

ルシリオンの詠唱紹介

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

この場合、彼が人間だった頃の戦友アンスール達有能力・魔術・武装を書庫から取り出します。

威力や効果はあらゆる“力”とは一線を画してますので、世界から使っちゃダメ？という制限を受けてます。

無許可で使用すると肉体ダメージ100%超え。

ANSUR設定

アンスール：

大戦末期に戦争終結のために設立された最高戦力。後に連合特務十二将の一人“結界王アリス”が加わり十三人となる。

魔道王フノス・クルセイド・アースガルド

EXランク魔術師。“アンスール”創設者にしてアースガルド同盟軍総司令官。

固有能力“空間干涉”保有。

風迅王イヴィリシリア・レアーナ・アースガルド

XXXランク魔術師。風嵐系最強と謳われるレアーナ王家女王。総司令官補佐。

神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルド

EXランク魔術師。対軍・対界術式に特化した中距離魔術師。同盟軍後方支援部隊総指揮官。

創世結界“神々の宝庫ブレイザブリク”、“英知の書庫アルヴィト

”、“英雄の居館ヴァルハラ”、“聖天の極壁ヒミンビョルグ”を保有。

固有能力“複製”保有。

拳帝シエル・セインテスト・アースガルド

XXXXランク魔術師。近接肉弾戦最強と謳われる重力操作の魔術師。前線部隊第三指揮官。

セインテスト王家第二王女。

殲滅姫カノン・ヴェルトール・アールヴヘイム

XXXXランク魔術師。砲撃戦最強と謳われる閃光系魔術師。後方支援部隊指揮官。

アールヴヘイム王家第八王女。創世結界“殲滅領域フェアティルゲン・ヴェルトール”を保有。

固有能力“空間干涉”保有。

蒼雪姫シエフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム

XXXXランク魔術師。冰雪系最強と謳われるニヴルヘイム王家第二王女。

同盟軍後方支援部隊指揮官補佐。戦天使軍総司令官。

白焰の花嫁ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイム

EXランク魔術師。炎熱系最強と謳われるムスペルヘイム王家第一王女。

ムスペルヘイム軍元帥。同盟軍最高参謀。

創世結界“劫火が支配せし煉界ムスペルヘイム”を保有。

炎帝セシリス・エリミング・ムスペルヘイム

XXXXランク魔術師。炎熱系第二位魔術師。ムスペルヘイム王家第二王女。

ムスペルヘイム軍大将。同盟軍前線部隊第四指揮官。
固有能力“灼現の魔眼”保有。

呪侵大使フォルテシア・アウリアス・スヴァルトアールヴヘイム
XXXXランク魔術師。闇黒系最強と謳われるスヴァルトアールヴヘ
イム王家第一王女。

同盟軍前線部隊第五指揮官。

雷皇ジークヘルグ・フォスト・ニダヴェリール

XXXXランク魔術師。雷撃系最強と謳われるニダヴェリール皇帝。

ニダヴェリール軍元帥。同盟軍前線第一指揮官。

固有能力“千里眼”保有。

地帝カーネル・グラウンド・ニダヴェリール

XXXXランク魔術師。土石系最強と謳われるニダヴェリール王家第
二皇子。

ニダヴェリール軍大将。同盟軍前線部隊第二部隊指揮官。

固有能力“石化の魔眼”保有。

冥祭司プレンセレリウス・エノール・スヴァルトアールヴヘイム

XXXXランク魔術師。固有能力“霊媒”を持つ霊を操る魔術師。

同盟軍情報部司令官。参謀補佐。

結界王アリス・ロードスター

XXXXランク魔術師。結界術式において史上最高の使い手。

元連合軍特務十二将第五将。

同盟軍後方支援部隊所属。創世結界“走馬灯の迷宮メモリアル・ラ
ピリンス”を所有。

クロノ・ハラオウン執務官

+++++Sidellシリオン+++++

窓から見るのは、茜色に染まっている空。

俺が“ジュエルシード”の魔力を感じ、その場へと向かった時より、時間は少し遡る。

時は昼間、俺とアルフはフェイトの治療を終え、時の庭園よりこの世界の拠点である遠見市のマンションへと帰ってきた。

フェイトはあれから気を失ったままだが、制限されていない俺の固有魔術で治療系術式の“傷つきし者に、汝の癒しを”コルドラファエルラファエルを使用したの
で、今のフェイトの顔色は時の庭園に行く頃以上に良い。

「それにしてもすごいねえ、魔術師ってやつは。

他の魔術師もそんな簡単に怪我を治せるのかい？」

アルフは俺が治癒関係の魔術を見てそう訊いてきた。

魔術に関して別に知られても構わない情報だけはすべて教えてあげるため、

「いや、あれは俺だけが出来るものだから、他の連中は出来ない」

隠すことなく教える。

「ふ〜ん、まあいいや。んで、これは一体何なんだい？」

アルフが指差すのは、フェイトの寝ているベッドを覆っている蒼く光るドーム状の結界。

俺が先ほどフェイトの治療のために張ったばかりのものだ。

「ああ、この結界には対象者の疲労などを回復させ、睡眠がよくなるようにする効果がある。」

30分もしないうちに万全な状態まで回復出来るだろう。」

「あたしはどれだけあんたに驚けばいいんだろうねえ？」

アルフが腕を組みながら俺を見て、感心したよう呆れたような複雑な顔をしている。

「うーん・・・死ぬまで？」

「っ！・・・ということはあんた、これからもあたしたちと一緒にいてくれる、と思っただけかい？」

かるいギャグのつもりだったが、アルフは本気にとってしまったようだ。

やはり慣れない（人間だったころは日常茶飯事だったが）ギャグなどを、結構真面目なアルフに言うのはまずかったか・・・？

どう返せばいいか思案しての沈黙。アルフは半目となって、「何か言いなよ」と急かしてくる。

「なあ、ルシル・・・？」

おそらくこの“ジュエルシード”の一件が終わったとしても、俺は、たぶんシャルもだが、この世界に残っているままだと推測している。

“界律”はわざわざ肉体や戸籍まで用意したのだ。

今までの経験上、そういった契約はかなりの長期となる。

俺の契約期間の最長記録は1歳の赤ん坊から、あの世に召されるま

での70年弱。

そのときも肉体が構成された、が戸籍は確か無かったな。

今回の契約には戸籍まで用意されているので、それなりの期間はいるはずだ。

ならこう答えるのが一番だろう。

「そうだな。出来る限りの間はフェイトやアルフと共にいようと思ってる。」

まあ迷惑だと言っならいつでも出て行くつもりだ」

「そうかい！ これからも一緒にいてくれるんだね！

いや、よかったよ！ フェイトが聞いたら喜ぶだろうねえ」

そう言っつと、アルフが喜びながら俺の両手をとって上下に振りまくる。

というかアルフ、もう少し静かにしろ。嬉しいのは判るが。

「ほら、アルフ。フェイトが起きるから、もう少し声のボリュームを下げる」

「あ、ああ、とごめんよ。つい嬉しくてね」

おいおい、泣くほど嬉しいってどれだけの感情なんだ。

「そんなに喜ぶことなのか？ 俺がいなくなったところで困るようなことはないと思うけどな」

俺は背伸びしてアルフの頭を優しく撫でる。

アルフは初めは驚いた顔をして、少し経つとニコニコ笑って喜んでくれている。

「なあルシル？」

「ん？ どうし む！」

どこかで強力な魔力が生まれ、俺の魔力探査に引つかかった。

この感じは・・・間違いなく“ジュエルシード”。

俺は「アルフ」と、目の前で嬉しい顔のまま俺へ笑いかけている彼女の名を呼ぶ。

「どうしたんだい？」

「ジュエルシードの魔力を感知した。俺一人で行くから、アルフはフェイトを看ていてくれ」

「・・・ちよっ！？ ルシル一人でかい！？ 危ないよ！ フェイトを起こして」

アルフがそう言うってくるが、君はフェイトの使い魔だろう？ だから最後まで言わずに、こちらが先に言葉を紡いでやる。

「おい、アルフ。俺はフェイトを休ませる為に寝かせているんだ。それなのに使い魔である君が、主であるフェイトを起こしてジュエルシードの封印に向かわせるなんて言うものじゃないと思うぞ？」

「じ、じゃあ、あたしも一緒に行くよ！」

今度はそんなことを言うってくる。俺がそんなに信用出来ないのだからか？

少しショックだよアルフ。

「主のもとから使い魔が無断で離れるのはまずいだろ？
それに俺一人でも何とかできるはずだ。だからアルフはフェイトが
起きるのを待っているんだ。
もしフェイトが起きてもまだ俺が帰ってこない場合は、俺は海鳴臨
海公園という場所にいるから来てくれ」

念のために“ジュエルシード”の魔力を感じる場所の名前を言っ
ておく。

まあフェイトが起きる頃には戻ってきていると思うけどな。
それにしても、俺の魔力感知レベルがかなり高くなってきた。
ここまで離れた場所にいるのに分かるなんて・・・どういうことだ？

「・・・分かったよ。無茶はするんじゃないよ」

「ああ、行ってくる」

まあその方が、都合が良いから助かるんだが。
俺はシャルたちが現れる前に事を終わらせる為、急いで公園へと向
かった。

+++++Sideルシリオン シャルロット+++++

私とユーノ君とシャルちゃんは、“ジュエルシード”が発動したの
が分かったので、海鳴臨海公園に向かう。
そして、そこにいたのは、

「あれ？ ゼフィちゃん・・・だけ？」

ゼフィちゃん一人だけだったのです。
そしてゼフィちゃんのすぐ近くには、“ジュエルシード”がいつでも封印できるような状態で浮遊していた。

「フェイトとアルフが・・・いないみたいね、どういこと?」

シャルちゃんもそれが異常なことだと思っているのか難しい顔をしている。

悩んでいても仕方がないので、私たちはゼフィちゃんのもとへと向かった。

++++Sideなのは シャルロット++++

おかしい。ルシルが単独で“ジュエルシード”の封印へと来るなんて。

「フェイトとアルフが・・・いないみたいね、どういこと?」

疑問を口にしても意味がないのは分かっているけど、その口にせずにはいられなかった。

なのはがルシルのもとへと歩き始めたので、私とユーノもそれに続く。

「ゼフィちゃん!」

なのはが背を向けているルシルを呼ぶ。

ルシルは振り向き、私たちに始めから気付いていたのか挨拶してき

た。

「こんにちは、なのは、ユーノ・・・シャルロット」

「こ、こんにちは。あの・・・フェイトちゃんとアルフさんは？」

私も聞いておきたい疑問をなのはが先に口にした。

素直に答えてくれるとは思えないけど、なのはからの問いというこ
とで、なのはの純粹さにルシルはおとなしく答えそうな気がする。

「あの二人は今日は休み、最近は忙しいからね。」

だから私一人でジュエルシードの探索をしているんだ」

ルシルは今でも、声と口調を少女のように変更している。随分と慣
れたものだ。

そろそろ素顔とかバラしてもいいと思うのだけどね。

「そ、そうですか・・・えっと・・・」

なのはが話すことがなくなったのか、視線を彷徨わせている。
私たちが何をしに来たか忘れたんじゃないのかしら？
仕方ない、助け舟を出しましょうか。

「もう分かっていると思うけど、私たちはそのジュエルシードを確
保しに来たの。」

黙って渡してくれると嬉しいんだけど」

「そ、そうだ！ あれは昨日みたいな危険のある物なんだ！

だから僕たちはジュエルシードを集めないといけないんだ。

だから・・・お願いだから・・・渡して欲しい！」

私に続いてユーノもルシルに向けて“ジュエルシード”を渡すように言う。

どうせ聞かないと思うけど、一応は言っておいたほうがいい。

「・・・ごめん。私にもジュエルシードを集める理由があるんだ。フェイトとアルフのために、あの二人の幸せのためなら・・・私は！！」

ルシルの魔力が膨れ上がる。

戦う気満々だけど、私たち三人を相手に勝てるわけがないのは分かっているはずだ。

昨日は私一人に苦戦したのだから。

「なのは、ユーノ、やるわよ」

「でも、ゼフィちゃんとも、ちゃんとお話をして・・・」

「なのは、彼女はまずい。まずはジュエルシードを封印したほうがいい」

なのはがルシルと話がしたいというが、ユーノが“ジュエルシード”の封印を優先するように言う。
私もそれには同感だ。今のルシルには、フェイト以上に話が通用しないかもしれない。

「そういうこと。私がゼフィを抑えるから、封印のほうは任せた」

「うーん、わかった。ゼフィちゃん、あとでお話してもらおうからね！！」

「……じめん」

ルシルはそう呟き、“ジュエルシード”を無数の鎖で覆った。

「え？」「な!？」

その光景に驚くのはとユーノ。そろそろ慣れたらどうなの？

魔術は魔法とは似て非なるモノ。魔導師の常識は一切通用しない。

「これで昨日のように暴走することはなくなった。

だから、お互い全力で戦える。シャルロッテ、昨日は遅れをとったけど今日は負けない、負けられない」

ルシルがいつも以上の敵意を剥き出しにしている。

一体何があったっていうの？　ここまでやる気みせるなんて。

それにフェイトとアルフの幸せのためって？)

私はどうしても戸惑ってしまう。おかしい、これは本当に異常だ。

「……そこまで言うのだったら、こっちも本気を出す」なのは、ユーノ、ゼファイの様子がどうもおかしい。何をしてくるのか分からないから、少し離れてて」

“キルシュブリューテ”を構え、ルシルと対峙する。

なのはとユーノは、私とルシルの戦いに巻き込まないために離れて見てもらうことにした。

我が手に携えしは確かなる幻想

その呪文と共に現れたのは、ルシルの体を覆う紅蓮の炎。

背には一対の炎の翼が現れて空気を焼いている。
そして左手には同じ紅蓮の炎を纏った長刀が握られていた。

「いくよ……！」

飛焰

ルシルが刀を振ると、炎が周囲へと拡がりながら飛んできた。
かなり威力が高い。これは結構な高ランクの術式らしい。
だけど、

「甘い。雷牙し　　！！！」

術式を発動させようとした瞬間、ルシルが炎の中から現れ、斬りか
かって来た。

（馬鹿な！？　私を相手に剣で戦うつもり！？）

咄嗟に跳躍して炎を回避するけど、ルシルが追撃をかけたきた。

龍翔閃

「くっ、この……！」

何とか捌くがさらに追撃をかけたきた。

「はあああああああッ！！！！」

空破斬

風牙真空刃^{レイレ}

ルシルが放つ真空の刃と、私の放つ真空の刃が衝突する。
ドンツ！という大きな音と共に周囲に衝撃波が拡がり、私はさらに上空へと押し上げられた。

私が一瞬、目を閉じたのを最大の間として、ルシルが炎と刀を消す。

今度は両手に風が集まり竜巻となるのを見た。そして私に向かって跳躍。

「風牙裂千 空帝 双嵐掌！！」

膨大な力を誇る竜巻を纏った攻撃を、他人事みたいに思いながらこの身に受けてしまった。

++++Sideシャルロッテ なのは++++

シャルちゃんがゼフィちゃんの攻撃を受けて吹き飛び、海に落ちてしまった。

「シャルちゃん！？」と叫びながら、シャルちゃんの落ちた海へと駆け寄ろうとした。

早く助けないと。助けたいのに。今すぐ助けたいのに・・・

「次は君だよ、なのは」

「っ・・・！」

ゼフィちゃんの冷やかな声で、私の体が震えあがる。

怖い。背を向けたくない。そんなとき、「行って、なのは！」って、ユーノ君が私とゼフィちゃんの間立ち塞がった。

「ユーノ君!？」

「僕は何とかしてゼフィを食い止めるから、なのははシャルを助けてあげて!!」

「そんなダメだよ！　ユーノ君が、今度はユーノ君がシャルちゃんみたいに・・・!」

そんなやり取りをしてる中でもゼフィちゃんがゆっくりこっちに向かって歩いてくる。

両手のグローブには蒼い魔力が迸っていて、少しずつナイフのような形になってる。

震える両手だけど、それでも“レイジングハート”の先端をゼフィちゃんに向けようと頑張る。

ゼフィちゃんが両手の指の間に挟んだ魔力のナイフを、私とユーノ君に向かって投げようっていう態勢に入る。

「ストップだ!!」

「……っ!？」

そこに、突如現れた男の子がゼフィちゃんに向かった停止を呼びかけた。

ゼフィちゃんも突然現れた男の子に驚いたのか歩みを止めている。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！　いますぐ戦闘行為を止めてもらおう。」

それに詳しい事情を聞かしてもらおうか」

クロノと名乗る男の子が私にも向かってそう言ってきた。
でも、時空管理局って何だろう？

「・・・時空管理局？ 私はそのようなものは知らない。
邪魔をしないでもらえませんか、ハラオウン執務官？」

ゼフィちゃんも知らないのかそんなことを言っている。

私とユーノ君を一度チラツと見たクロノ君だったけど、すぐさまゼフィちゃんへデバイスを向けながら、

「管理局を知らない？ 君も魔法を使っているじゃないか。
なら魔導師のはずだ、知らないわけがないだろう？」

ゼフィちゃんとクロノ君が向かい合う。

なんか、まずい雰囲気みたい。えっと・・・どうしよう？

今度は後ろの海から大きな音がした。

あ、シャルちゃんだ。次々と変わる状況に一瞬忘れてた・・・ごめんね。

「よくもやってくれたわね・・・！」

フェアレンネン
炎牙崩爆刃

「しまっ・・・！！！」

シャルちゃんは海から飛び上がった後、ゼフィちゃんの背後に着地。
そのままゼフィちゃんを斬り上げるように刀を振るって、大きな炎をぶつけて大爆発させた。

今度はゼフィちゃんが爆発によって吹き飛ばされた。

海に落ちた音がしないから、まだあの煙のなかにいるのかな？

というか死んでいないよね？ 大丈夫だよな？

一応の敵であるゼフィちゃんの命の心配をしていると、足元にカツンと何かが落ちた。

「ん？ あれ？ これってゼフィちゃんの・・・仮面？」

私の足元にあったのは、所々がひび割れた黒く輝く仮面だった。ゼフィちゃんの素顔を隠していた、あの仮面だ。

+++++Sideなのは フェイト+++++

「ど、どうして？・・・どうして起こしてくれなかったの!？」

私はついアルフを怒鳴ってしまった。

「フェイト・・・。あ、あたしもフェイトを起こそうって言ったんだよ。」

でもルシルは、フェイトは休ませるって聞かないんだよ・・・!」

アルフが悲しそうな顔をして、そう言ってきた。

そう、だよな。ルシルならきつとそう言うと思う。

私は「ごめんね、アルフ。私・・・どうかしてた。ごめんね、ごめんねアルフ」って謝りながら、俯いてるアルフを抱き寄せる。

「ううん、あたしの方こそルシルを止め切れなくてごめんよ」

今回は間違いなく私が悪いのに、アルフも謝ってきてくれた。

「ねえアルフ、ルシルはどこに行ったの？」

「海鳴臨海公園ってところに行くって言ったよ」

海鳴臨海公園……。ルシルと初めて会った場所だ。
結構広い公園だけど、結界が張られていればすぐに判るはず。

「うん、分かった。バルディッシュ、どう？」

Recovery complete

“バルディッシュ”も昨日のダメージを完全に回復させていた。
それなら大丈夫。“バルディッシュ”をそつと撫でて、「頑張った
ね、ありがとう」って労いの言葉を掛ける。

「それじゃ、ルシルのところへ行くよ、アルフ！」

「ああ！」

私とアルフは、ルシルのいる海鳴臨海公園へと向かった。
どうか何事もなく無事でいて、ルシル。

++++Sideフェイト　なのは++++

シャルちゃん魔法でゼフィちゃんを吹っ飛ばしたのを見たクロノ
君が、目を点、口をあんどぐり開けて茫然としていたけど、シャルち

やんの「まあああね」と頷いたのを見て再起動。
クロノ君が「君は！」って怒鳴りながらシャルちゃんのところへ駆け寄っていく。

「君は何をしているんだ！？　いきなり現れて攻撃するなんて何を考えている！？」

「ハア？　あなた誰？　ていうかうるさいわよ。
それに、いきなり現れたのはそちらでしょう？　私はずっと居たのよ」

うわぁ、今度はシャルちゃんとクロノ君がまずい雰囲気だよ！？
クロノ君が「うるさいって。まあいい」と呆れながらも、話を続けようとする。

でも「僕は時空管理局執務官クロ　！？」と、最後まで言うことができなかった。

「話は後！　今はあいつをどうにかしないと・・・！」

シャルちゃんがクロノ君の口を手で塞いで、次第に晴れていく煙のほうを見る。

そこには夕日を背にして、手すりの上に立っている・・・あれ？

もしかしてあの子って、温泉で会った・・・？

お、男の子・・・？？　ゼフィちゃんって女の子じゃなかったの？？

私は軽くパニックを起こしている。

目の前にいるのは温泉で会った銀髪の男の子だ。

でも声が女の子で、体は男の子で・・・？？？

「ついにバレてしまったか。正直、俺の正体は最後まで隠し通すつもりだったんだけどなあ」

こゝ、声が男の子になっちゃった！ やっぱり男の子なんだ、そんなんだ。

男の子であんなに綺麗って……女の子としてはちょっぴり複雑です。

「君は一体なんなんだ？ 声がさっきとは違うが？」

「そんなことはどうでもいいだろう？」

悪いけど、ジユエルシードを持ち帰らないといけないんだ。

全員……しばらく気を失っていてもらおうか！！」

ゼフィちゃん、じゃなくてゼフィ君が私たちを倒すために構える。

臨戦態勢に入ったゼフィ君を見たクロノ君が驚きの表情を浮かべる。

「やめるんだ！ 管理外世界での戦闘は禁止されている！ 罪状が増えるだけだぞ！」

「ああもう、うるさい！ 少し静かにしていなさい黒いの！」

反論すべきゼフィ君を放置して、シャルちゃんがクロノ君に怒鳴っている。

シャルちゃんとクロノ君の相性はあんまり良くないのかもしれない。

「クロノ！ 僕はクロノ・ハラオウンだ！！！」

「あくはいはい、クロノね。悪いけどあいつとの決着だけは邪魔しないでよね」

「だから！ 管理外世界でのせんと……！！！」

言い争っている二人の間にゼフィ君からの攻撃が放たれる。

「そのまま言い争っていてくれたほうが都合がいいんだけどね。

我が手に携えしは確かなる幻想

「穿て、デイバイン・・・バスター」

ゼフィ君の人差し指から放たれたのは桃色の閃光。

ていうか、あれ？ うそ！？ あれって私の魔法だよ！？

「え！？ 何でゼフィがなのは魔法を使ってるんだ！？」

ユーノ君が遠くから叫んでいた。そっか、ユーノ君の存在も忘れてたよ。

「さあ、次行くよ。フォトンランサー・・・ファイア！」

今度はフェイトちゃんの魔法だ！

ゼフィちゃんの周囲に9つのスフィアが展開されて、槍のような射撃魔法が放たれる。

それに対してシャルちゃんは「調子に乗るな！」って“キルシユブリューテ”の刀身に真紅の雷を纏わせた。

ブリッツ・エアモルドウン
雷牙神葬刃

シャルちゃんがキレた。ものすごい音とともに雷がゼフィ君に向かっていく。

「なのは！ あなたも早く手伝いなさい！！
殺す気で砲撃を撃ちまくって！！ いいわね！？」

ええええええええええ！！？ そんなの無理だよお！？

「おい！ いい加減にしろ！ そっちの君もだ！ さもないと逮捕
す うげっ？」

あ、シャルちゃんがクロノ君の首の後ろを刀の峰で殴った。

もうクロノ君が眼中にないシャルちゃん、攻撃を続けるゼフィ君。
倒れた後、ゼフィ君の攻撃の衝撃で吹っ飛ぶクロノ君。

「えくと、こういうのはなんて言うんだっけ・・・？ あ、そうそ
うカオスだ」

「いっつったああ！！ 何をする！？」

「・・・チツ」

すぐさま立ち上がるクロノ君を見て舌打ちするシャルちゃんはもう
立派な悪役です。

カット カット カット カット カット

ゼフィ君は二人を見て少し笑いながらなんか呟いている。

伏す

開幕直後より鮮血乱舞、烏合迎合の果て名優の奮戦は茶毘に

「ネズミよ回せ！ 秒針をサカシマに！ 誕生をサカシマに！ 世

「君は・・・ハアハア・・・本当に・・・何なんだ？・・・」

「・・・質問に答える義務はない」

クロノの質問を両断する。とそこに、二つの魔力反応の接近を察知。フェイトとアルフが来てしまったか。

フェイトが起きるまでに帰るつもりだったが、思った以上に時間がかかった。

『ルシル！ 大丈夫・・・みたいだね。それはそうと仮面はどうしたの！？』

フェイトが念話で話しかけてきた。

『フェイトの方こそ、もう大丈夫みたいだな。』

仮面は、攻撃を受けて吹き飛ばされたんだ。まあ問題無い』

フェイトとアルフが俺の目の前へと降り立つ。

「これ・・・ゼフィがやったのかい？」

アルフが公園の様子を見て呟く。いたるところに抉れた穴がいくつも走った地面。

フェイトも今気付いたかのように、この公園の有様を見て驚いている。

「フェイト、これが今回のジュエルシールドだ」

俺は“ジュエルシールド”の暴走防ぐために覆っていた鎖を消し、“

「ジュエルシード”をフェイトに差し出す。

「あ、うん。バルディツシュ、お願い」

「待て！ ジュエルシードは第一級搜索指定のロストログリアだ！
それをどうするつもりだ!？」

ほう、この短時間でそこまで回復するか。デバイスの先端を俺に向け、クロノが睨みつけてくる。

これは驚いたな、執務官という大層な肩書きに相応しい実力者というわけか。

「さつきも言ったとおり、質問に答える義務はない」

「ゼファイ、この人は？」

フェイトがクロノを見て、誰かと聞いてきた。
アルフも気になっているみたいだ。

「ん？ ああ、時空管理局のクロノ・ハラオウン執務官殿だそうだ」

「「!!」」

二人がかなり驚いている。

「どうやら時空管理局というのはちゃんと実在しているようだ。」

「くっ、よくもここまでやってくれたわね」

シャルもようやく支えなしで立ち、こちらを睨む。

それに“キルシュブリューテ”を構えなおしている。

どうやら、まだやる気のようにだ。仕方ない。フェイトとアルフを完全に逃がすためにもう一仕事と行こうか。

「フェイト、アルフ、来てもらって早々悪いが、先に帰っていてくれ、すぐに追いつくから」

「・・・大丈夫、ゼフィ？」

「見てもらっている通り、この状況では俺に敗北はない」

「フェイト、ゼフィは大丈夫そうだから行こう」

「うん『待つてるから、早く帰ってきてね』」

『ああ』

フェイトとアルフが“ジュエルシールド”を封印し終え去って行った。クロノが「待て！」とデバイスを二人に向け、

ステインガレーイ

光の弾丸を4基放った。俺は左手で銃の形を作り、人差し指から魔力弾を4発発射。

全弾迎撃完了。ついでにクロノの足元にも魔力弾を撃ち込み、威嚇。

+++++Sideルシリオン クロノ+++++

足元に撃ち込まれた魔力弾が地面を削り、破片を散らす。

なんなんだ、こいつは？　こんなデタラメな魔法、見たことも聞いたこともない！

それに時空管理局を知らないというのも、おかしな話だ。

そしてもう一人、僕の横に立ち、あの少年を睨む少女。

この子の持つている剣から異質な魔力を感じる。

いや、今は目の前の少年こそが優先するべき事だ。

フェイトと呼ばれた少女と、アルフと呼ばれた使い魔であろう狼が

“ジュエルシード”を奪い去って行った。

我が手に携えしは確かなる幻想

「数価。　四〇・九・三〇・七。　合わせて八十六」

あの少年が何かを呟く。　なんだ？　何かの呪文か？

そして彼の背後から、海水で出来た蛇のようなものがいくつか現れた。

「な・・・！？」

開いた口が塞がらない。

「最悪、あいつ・・・ここまでするわけ？」

となりの少女が諦めたような声を出している。

確かに今の状況を見れば、もう諦めるしかない。

「俺はこれにて失礼させてもらおう、

水よ、蛇となりて剣ラムド・サインのように突き刺せ」

その言葉を合図として、海水の蛇が襲い掛かってきた。

「あゝ、くそ」

愚痴をこぼす。まったく、この少年は一体何なんだ。

十？　？　？　？　？　シャル先生の魔術講座　？　？　？　？
十

シャル

「今回もようこそ。私の私による生徒のための魔術講座へ。」

なのは

「こんにちはー？　前々回ぶりの助手、高町なのはだよ」

ユーノ

「生徒のユーノです」

シャル

「今回、ようやく素顔不明だったゼフィの素顔が見られたわね（私は知ってたけど）」

なのは

「ビックリしたよお。女の子だと思ってたら、本当は男の子なんだもん。」

しかもすっごい可愛いし。女の子の私、かなりショックだったよ（涙）」

ユーノ

「いやいやいや、ちょっと待ってよ、なのは！ ショックを受ける
ところじゃないって！」

ゼフィって子、なのはやフェイトの魔法を何の苦もなく使ったんだ
よ！？

それに、まっ黒な影のような渦になって・・・あれ、大魔法クラス
の威力だよ！」

なのは

「ま、まあまあ落ち着いて、ユーノ君。そこはほら、シャルちゃん
が説明してくれるよ。ね？ シャルちゃん」

シャル

「まあね。でも今回はダメ。次回辺りで説明するわ。

このコーナーの主旨通りに話を進めさせてもらうわ。

今回、私が使った魔術を紹介させてもらうわ。

フェアブレンネン
炎牙崩爆刃

ブリッツ・エアモルドウング
雷牙神葬刃

真紅の炎を纏った刀身から放たれる爆発力の高い炎刃による一閃、
炎牙崩爆刃フェアブレンネン。

高電圧の真紅の雷撃を対象に向けて放つ、雷牙神葬刃ブリッツ・エ
アモルドウング。

フェアブレンネンは、焼却、という意味。ブリッツは雷光、エアモ
ルドウングは、殺害、という意味よ」

ユーノ

「ゼフィって子を一発で海にまで吹っ飛ばした爆発する炎を刃。結

構過激だよね？」

なのは

「非殺傷設定なんて無い魔術の雷なんて受けたら真っ黒焦げになっ
ちやうよね、きつと。」

フェイトちゃんのならまだ安心？できるけど……。気を付けない
とだめだよ？ フェイトちゃん」

シャル

「同じ魔術師のゼフィだから使うわけで、魔導師相手にはもっと安
全？な術式を使うわ。」

さて、では今日はここまでね。ではまた次回、お会いしましょう」

なのは&ユーノ

「ばいばーい」

クロノ・ハラオウン執務官（後書き）

複製魔術・能力

灼眼のシャナ：飛焰

るろうに剣心：龍翔閃

スターオーシャン2：空破斬

ANSUR：風牙裂千 空帝 双嵐掌

メルティブラッド：ナイトルーラー・ザ・ブラッドディーラー

とある魔術の禁書目録：水よ、蛇となりて剣のように突き刺せ

管理局と魔術師

++++Sideシャルロット++++

「あゝ、くそ」

となりに立つクロノが、ルシルの複製術式・海水の蛇を見てそう呟く。

（全く、たとえルシルの固有魔術が制限されているからって、こんなデタラメな複製術式が使えるんだったら卑怯じゃない）

私は心の中でルシルに対する制限内容に愚痴を零す。

そこまで来ている海水の蛇を、先に受けたダメージの所為でどうすることも出来ない私はルシルを睨みながら、あと少しで私たちを襲うであろう痛みに耐えるために覚悟を決める。

そして私とクロノの眼前に迫った瞬間、海水の蛇は形を崩して単なる水の塊となった。

「うわっ！」

「ちよっ、待って！」

とんでもない水流に押し流される私とクロノ。

なのはとユーノはギリギリ範囲外だったので、溺死なんて最悪の結果にはならなかった。

「……もう！ 何よこれ！？ ふざけるなー！ー！ー！」

私は海草塗れになりながらも、なんとか生きていた、が、ムカツク！最後の最後で手を抜かれた気分だ。いや、実際そうなのか。

「ひ、酷い目に遭った。一体なんだったんだ、あれは！？」

クロノは頭にカニを乗せながら叫んでいる。クス、何アレ？周囲を見渡すと私たち以外は無人。すでにルシルの姿はどこにもなかった。

「逃げられたか・・・？」

クロノが真剣な顔をして虚空を見つめてそう言っている。

それより、いい加減頭のカニを取りなさい。

いや、そんなことよりなのはとユーノが大事だ。

私は体に巻きついていいる海草を剥ぎ取りながら、なのはたちのもとへと駆ける。

「なのは！ ユーノ！」

倒れている二人のそばに屈み、急いで二人の状態を確認する。

(どうやらただ単に気を失っているだけみたいね・・・)

良かった、本当に・・・良かった。

「う・・・ん、シ、シャルちゃん？」

「なのは、大丈夫？ どこか痛いところとかない？」

「・・・うん、大丈夫。少し体が痛むくらいだから」

なのははそう言って立ち上がる。ユーノの方も目を覚ましたようだ。

「あ、あれ？ 僕たち一体どうなって・・・？」

ルシルの術式発動直後から記憶がとんでいるみたいだ。

まあその方が良いだろう。下手に思い出させて恐怖を抱かせることはしたくない。

「どうやらみんな無事のようにだな。改めて、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

「あ、はい。私は高町なのはです。えっと・・・頭の上のカニさんは何なんですか？」

なのはが自己紹介とともに、クロノの頭を指してそう言う。

「カニ？ ！！ うわっ、と・・・コホン！ 何でもない、気にするな」

クロノがカニを掃って、わざとらしく堰をする。

「というか気付いていなかったの！？ 脚とか頭に突き刺さっていらなかったから気付いているのかと。」

「え〜と、僕はユーノ・スクライアです」

ユーノが今のクロノを無視して名乗る。

「スクライア？ 君がそうか。ジュエルシードのことにってはス

クライア一族からすでに話を聞いている」

「そ、そうですか。やっぱり・・・」

ユーノがそれを聞いて、表情が少し曇る。

「そして君は？ ずいぶんと僕をいいようにしてくれたが・・・」

「そんなに睨まないでよ、あの状況だとああするしかなかったの。あなたも分かるでしょ？」

クロノが押し黙る。それなり分かってもらえたようだ。

少し不機嫌そうだけど。とりあえずは私も自己紹介をしておきましようか。

「私はシャルロツテ・フライハイト。

みんなにはシャルと呼ぶように言ってるから、あなたもそう呼んで

「わかった。シャルでいいんだな。僕のこともクロノと呼んでもらって構わない」

『クロノ、お疲れ様。怪我は無いようね、安心したわ』

うわっと!?

え？ 何これ？ 空中に魔法陣が現れたと思ったなら女性の顔が？

驚きで目が点になってしまったが、冷静になると仕組みがわかった。なるほど。一種のモニターのようなものか。

「あ、はい。すみません、もう一組の方を逃がしてしまいました」

クロノが映し出されている女性に謝る。
「どうやらクロノの上司みたいだ。それにしても若いなあ、いくつだ
る？」

「んん、ま、大丈夫よ。でね、ちょっと話を聞きたいから、そつち
の子達をアースラまで案内してあげてくれるかしら」

女性が私たちをアースラってところへと連れてくるように言ってい
る。

「了解です、すぐに戻ります」

「イヤイヤイヤイヤ、勝手に了解しないで！
私たちの意思は初めから無視ですか？」

「ちょっと待つて。私たちの意思は無視なの？」

これは黙ってられない。

「ん？ 悪いが事情を聞きたいんだ。

おとなしくついて来てもらえると助かるんだが・・・」

「シャル、管理局が来たからには・・・」

ユーノが私に向かってクロノに従えと言外に言ってきた。
ああもう、分かったからそんな目で見ない！

「わかった、一つ聞いておきたいんだけど」

今の私にとっても重要な質問がある。

「何かな？」

「アースラってこの世界内にあるの？」

そう、これだけはハッキリさせておかないといけない。

この世界に呼び出された以上は、許可なくこの世界を出るとどうなってしまうのか分からないからだ。

「いや。高時空内にあるんだが？」

案の定、この世界の内にはなかった。なら、私がすることは

第三の力、剣戟の極致に至りし者シャルロツテより界律へ

緊急の事態により 契約世界“地球”より一時離脱します

ゆえに離脱の許可を申請します

“界律”と精神^{リンク}接続して、私を召喚した世界からの離脱許可を取っておかないと何をされるか分かったものじゃない。

界律より第三の力、剣戟の極致に至りし者シャルロツテへ返答

一時的による離脱の申請を許可する

しかし長期間の離脱は不可とする

あっさり通された。少し拍子抜けしたけれど、許可が下りたのなら大丈夫だろう。

「なんでもない。エスコートよろしく、クロノ執務官」

こうして私たちはアースラへと向かった。

十十Sideシャルロッテ ルシリオン十十

「・・・フェイト・・・？」

前に行くフェイトに、何度目かの呼びかけ。

しかしフェイトは俺に振り返ることも無く「・・・」と無言を貫き、ズンズンと歩いていく。

無視・・・ですか、そうですか・・・何故ですか？

『アルフ、なにかフェイトが怖いんだけど』

公園では普通に接してくれていたというのに、帰ってくると無視を決め込み始めた。

今のフェイトが纏っている雰囲気は軽く恐怖しながら、アルフに助けを求める。

『・・・やっぱり一人で封印に向かったのが原因じゃないかい？』

アルフも、今のフェイトに若干恐れを抱いているみたいだ。

『いや、それは・・・仕方がないことだと思っただけ・・・』

フェイトの為だと思っただけの行為が、逆にフェイトを不機嫌にさせるか

『なにか理不尽だ』と肩を落とす。不条理、理不尽、いかに納得のいかないことをここ数千年と繰り返してきて、慣れてきていた。だからいつもの俺ならどうとも思わないはずだが、フェイトにこういう態度を取られると少し傷つく。

『まあ、その・・・謝れば？』

『・・・何を？』

『勝手に封印に向かってごめんなさいってさ』

本当に理不尽だ。だが、この空気に耐えるのもそろそろ限界だ。ここは俺が折れるべきなのだろう。

「・・・フェイト、勝手にジュエルシードの封印に行ってごめん。言い訳を言わしてもらおうなら、フェイトの為だったんだ」

自分の部屋に入ろうとしていたフェイトへ、真摯に謝罪を告げる。するとフェイトがようやく反応してくれた。俺の方へと向き直る。しかし未だに不機嫌そうな表情をしている。フェイトは両手を重ねて胸の上へともっていく。

「私のため・・・それはすごく嬉しい。けど、でもやっぱり一緒に行きたかった。

今回はルシル一人でもなんとかあったけど、前みたいな酷い怪我を

するかもしれないんだよ？

そうだったら私たちはどうすればいいの？」

フェイトが目端に涙を浮かべて、そう訴えてくる。

まずい、子供に泣かれるのは今も昔も苦手なんだ。

「私たちは仲間なんだよ、だから一人でやろうとしないで」

「ごめん、ごめんフェイト。これからは気をつける」

フェイトの頭を撫でながら、心の底から謝る。

ようやくフェイトは俺に笑顔を向けてくれた。

「約束だよ、ルシル」

「ああ、約束だ」

お互い微笑みながらの約束・・・アルフ、何を頷きながら泣いている？

ああ、感動しているのか。涙もろいな、君は。と、さて、ここからは俺の質問タイムだ。

「話は変わるが、フェイト、アルフ、時空管理局とは何だ？」

それから少しの時間、フェイトたちから時空管理局の説明をしてもなかった。

幾多もある次元に点在する、いくつもの世界を一手に管理する組織。“ジュエルシード”のような古代遺産の搜索・管理、世界を渡る犯罪者の逮捕や裁判なども、時空管理局が行っているようだ。

まるで一極支配。だがまあそういう組織があるからこそ、今の安定

した世界があるらしい。

それにしても、なるほど次元世界・・・か。実に懐かしい響きだ。

++++ Sidellシリオン シャルロット++++

私たちが案内されたのは、次空航行艦というものらしいアースラ。なのはが念話で、ユーノから説明されているのを私も聞いていた。

（それにしても次元世界だなんて・・・これも縁というものかしら？）

懐かしい単語を耳にして、軽く余韻に浸っていると、

「ああ、いつまでもその格好というのも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ」

とクロノが言うので、なのはがそれらを解除した。

今回、私は戦闘甲冑を身に纏っていないので私服のままだ。

（それにしても、よく私服でルシルの術式に耐えられたな）

魔術師は、戦闘甲冑を具現化させなくても常に不可視の魔力の障壁で身を守っている。

だから私服ままだもそれなりの防御力を持っているのだけど、ルシルの複製術式にはあまり効果がないはず。

（だというのに、あれだけで済んだ。界律が何らかの干渉をして、ダメージ補正かけているみたいね）

「え！？　なんで！？　ユーノ君って！？　ユーノ君って！？　ええええええええつ！！！！？」

なのは、それは驚きすぎ。

それよりあなたの声、この艦に響き渡っているんじゃないの？

私は、なのはとユーノから完全に意識を逸らし、クロノへ声をかける。

「あの二人は放っておいて早く案内してくれる？」

あの二人はもう互いの記憶の齟齬を確認し、微妙だが納得しているようだ。

「あ、ああ、こっちだ。君たちも早くついてきてくれ」

「あ、はい」

さて、どのような話が聞けるのか楽しみだ。

+++++Sideシャルロット　なのは+++++

今までいろんなことに驚いてきたけど、まさかユーノ君が人間の男の子だったなんて思いもなかった。

それにしても、シャルちゃんは全く驚いていない感じだった。

（もしかしてシャルちゃん、ユーノ君が人間だったことを知っていたのかな？）

もしそうなら何で教えてくれなかったのかな？

私はクロノ君に案内されながら、チラッとユーノ君を見る。

（私と同じ年くらい・・・かな？）

何度も見ていたので、同じように私を見ていたユーノ君と目が合ってしまった。

すぐさま視線を前方へと戻す。

何だろう、すごく気まずい感じになってしまった。

「ここだ。艦長、彼女たちを連れてきました」

クロノ君が、扉が自動で開いた部屋へと入っていった。

十十 Sideなのは シャルロツテ十十

クロノに案内され、たどり着いた部屋へとクロノを先頭として入る。目の前に広がったのは、以前本で見たことのある確かノダテとかいうものに似た空間だった。

何か合わない。もしかして、この国の習慣みたいなのを勘違いして用意した・・・のかも知れない。

「お疲れ様、クロノ。初めまして、このアースラの艦長をしていますリンディ・ハラウンです。

わざわざこのような場所まで来てもらってごめんなさいね」

この部屋の主である女性、リンディ艦長がそう口にした。

第一印象としてはまあ良い。部下への労いの言葉と、私たちに対す

る謝罪の言葉をきちんと口にしたのだから悪い人ではないようだ。そこから先は、私やなのはの自己紹介を初めとし、ロストロギアや次元震、次元断層の説明を聞いた。

（次元断層ねえ。それってラグナロクに少し似ているかも）

ラグナロク。正式名称を対時空間殲滅級攻性魔術と言い、それは禁呪の一つにして原初王オーディンが原初魔術ルーンと共に生み出してしまった最古の術式だ。

時空間を無視した一方的な破壊の限りを尽くす最凶の魔術。

（確かにラグナロクの威力には及ばないけど、世界が滅びる可能性があるなら私たちのような抑止力が召喚されてもおかしくはない、か）

全く、“界律”もさっさと“ジュエルシード”を片付けろって命令を下せば、瞬時にこの件を終わらせるというのに何をしているんだか。

深く思考に耽っていたので、私を除く四人の会話をほとんど聞き逃していた。

唯一分かったのが、

「これより、ロストロギア“ジュエルシード”の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

というリンディ艦長の言葉だった。

まあ当然な話だ。こちらは単なる発掘者に魔法が使える一般人、私は・・・ただの協力者といった位置づけだ。

そして向こうはこういったことのプロフェッショナル。

プロと素人では探索能力も違うし、何より組織で動くプロだ。

このまま管理局に任せたほうが早く済むだろう。

それに正直な話、例えなのはがここで降りても、私はそれで良いと思ってる。

だが、二人は納得していないだろう。

ユーノは発掘者と“ジュエルシード”をこの世界にばら撒いてしまった責任から、なのははフェイトのこと、そして彼女の性格からしての思いから。

「君たちは今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

さすがにそれは無理だ。ここまで関わってしまうと、もう元通りには戻れない。

なのはがクロノに食い下がる。やはり諦めきれないみたいだ。

「次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入してもらおうレベルの話じゃない」

「でも！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もできないでしょう。」

今晚ゆっくり三人で話し合って、それから改めてお話ししましょう」

リンディ艦長がなのはにそんなことを言った。

それは明らかになのはたちを、管理局側へ協力させるために誘導する発言。

（それも仕方ない、か。相手にはかなり腕の立つ魔導師フェイト、使い魔アルフ、そしてルシルがいる。

ここで私たちをこの件から手を引かせれば、戦力となるのはクロノ

だけになる)

あの三人を一人で相手をするなんて正直辛いに決まっている。だからこそ戦力が欲しい、とリンディ艦長は考えたのだろう。しかし、一般人に協力要請なんてそう簡単に出来るものじゃない。それゆえの先の発言だ。

世界の危機なんて話を聞いた後に一晩の考える時間、こんなものを用意されては考える話は一つ、結論もまた一つとなってしまう。なのはとユーノの自発的による協力の申し出。それが狙いなのだろう。

人の上に立つならそれくらいは当たり前だと私は思う(私はしたくないが)。

この誘いに乗るのも悪くはない、というよりそれしかない。なのはは兎も角、私は嫌でも“ジュエルシード”に関わらないといけない。

「お心遣いはありがたいですが、このまま引き下がるわけにもいきません。

ですので、私たちはそちらに協力させてもらいます」

「な!？」

「「え!？」」

「・・・」

リンディ艦長を除く三人が私の発言に驚いている。

「シャル!？ 君は何を言って・・・」

クロノの発言を強い視線で無理矢理止めさせる。

「なら聞くけど、私たちがこの件から引いた後の戦力はどうするの？
今まではなのはとユーノ、私で何とかあの三人と渡り合ってきた。
それが今からはクロノ一人、でもないかもしれないけど、それって
結構辛いんじゃない？

今日は実際ゼフィに負けたしね。これからもあんな常軌を逸したゼ
フィを相手に、一人で戦いたいっていうなら仕方ないのだけどね」

「な！　そ、それは・・・しかし・・・！」

言いよどむクロノ。ルシルゼフィの強さを思い出してもまだ迷っているよ
うだ。

ゼフィとまともに戦いあえるのは、この世界だと私しかいないだろ
う。

「それになのはとユーノも納得してないでしょ？」

二人に視線を向け、言外に自分の気持ちを告げると言った。

「わ、私もこのまま終わるのなんて嫌です！」

「僕も最後まで自分の責任を貫きたいです！」

二人はハッキリと自分の気持ちを伝えた。

初めから協力させようとしていたリンディ艦長がこれを断るわけが
ない。

「・・・シャルロットさんの言う通りなのは違いありません。

クロノ一人ではあの黒い子達には勝てないのも確か。わかりました。こちらからも協力をお願いします」

「か、かあさ　艦長!？」

決まった。これで途中退場はなくなった。

「なのは、ユーノ、やったね」

「「うん!」「」

もう、そんなに嬉しそうな顔をして。

「ですが、条件が二つあります。三名とも身柄を一時、時空管理局の預かりとすること、そしてこちらの指示を守ること、良くって?」

(それくらいなら大したことはないはずだ。万が一のときは破ってしまえいいか)

この世界に来てからは、自分の思考がおかしくなっているのが分かる。

おそらく環境がそうさせているのだろう、と思いたい。

「それでいい?　なのは、ユーノ」

「あ、うん。私はそれでいいです」

「僕も」

「決まり。これで協定は成立ということだ。」

こちらはそれで構いません、リンディ艦長、クロノ執務官」

リンディ艦長とクロノに、承諾の意思を告げる。

クロノは渋々認めた感があるが、リンディ艦長は満足そうな表情をしている。

「仕方ない、君の言うとおり彼の強さは異常だ。

黒い少女の強さは良く分からないが、彼らと戦えるほどの実力を持っているのは、アースラで僕一人だからね。

戦力が上がるならそれに越したことはない。それに見たこともない魔法、なのか？

魔法陣は出なかったし、デバイスらしきものも持ってはいなかった彼には必要以上に気をつけなければならぬ」

「ええ、そのことに関してはこちらでも調査しています。

ですから、あなたたちも気付いたことがあれば教えてください」

まあそうだよ、魔法ではなく魔術なんだからわからないのも当然。というか、私も魔術を使ってたんだけど、忘れられてない？

『ねえシャル、この人たちに魔術のことを教えないの？』

とユーノが念話を通して言ってくるが、どうしようか？

『教えるくらいなら問題はないよ、ね』

以前召喚された世界では、魔術は秘匿するものとされていたけれど、私たちには関係のない話だ。

よし。今後も管理局と関わりあう予感がするし、先にカードを切っておいて良い関係を築いておこう。

「あれは魔法ではなく魔術、この世界に於ける魔法体系みたいなもの
のです」

「「な・・・っ!？」」

うんうん、案の定二人は驚いている。

「な、馬鹿な!？ この世界には魔法技術は存在していないはずだ
!？」

大きな声で私に怒鳴るクロノ。女の子にそれはないんじゃないかし
ら？

少しムツとしていると、リンディさんがクロノを手で制して黙らせ、
「シャルロットさん、詳しくお話を聞かせてもらっても？」と動揺
を隠して訊ねてきた。

さすがは艦長の肩書きを持つ女性^{ひつ}だ。

動揺を顔には出さずに、情報の提供を求めてくる。

「いつ魔法体系の有無を調査したかは知りませんが、魔術はすでに
滅んでいる技術です。

ですからそちらが知らなかったというのもわかります。

ですが稀にその技術を扱える者、魔術師がいます。実際に私もそう
ですし、ね」

とびつきの笑顔でクロノを見る。フフ、顔を紅くして可愛らしい
ものだ。

さっきの仕返しよ？ 女の子に怒鳴るなんて、少しは紳士らしさを
学びなさい。

「……なるほど、そうですね。確かにあなたの使っていた魔法、いえ魔法はこちらでも確認しています」

「信じるしかない、か。僕たちの使う魔法とは違うのなら、あのデタラメさにも納得がいく」

わかってくれたのならこれでいいか。ううん、そうなるように定められているのだから。

なのははさっきから置いてけぼりをくらって、暇そうにしている。ごめん、もう少し我慢して。

「ならもう少し詳しく教えてもらえないか？

彼と戦うときに、少しでも彼の手の内を知っておきたい。

魔術師がどのような事を出来るのかが分かれば対策が立てれるからね」

「実際戦うのは同じ魔術師の私になると思うけど、知っておいても損はないからいいわ。

やれることは魔法と大して変わらない。大まかな種類としては、攻性、防性、結界、補助、儀式、禁呪の六つがある。

禁呪以外はそちらと差はないかな。それに禁呪は誰も使えないし、使わないからどんなのかは知らなくても大丈夫」

リンディ艦長とクロノは、頭の中で反芻しているのか軽く頷く。少し間をおいて続きを話す。

「そして魔術師にはリンカーコアとは違う魔力炉、私たちはシステムと呼んでいる器官で魔力の生成、同時に外から魔力を取り入れて融合、必要な分だけを使っている。残りはそのまま溜め込むんだけど」

難しい顔をしているリンディ艦長、クロノとは別になのはが面白い顔をしている。

なにか頭の上から湯気のようなモノがシューシューと出ているのが幻視できる。

『えっと、なのは、無理して覚える必要はないから』

『う、うん』

念話でなのはに、覚えなくて良いと言っておく。

知恵熱でも出されて倒れられたら面倒だ。すでに手遅れのような気もするけど。

「大体はわかった。少し質問があるんだがいいか？」

クロノが真剣な顔で聞いてくるので、「どうぞ」と応じる。

「まずは一つ目。君もそうだが、電気や炎熱と風？みたいな変換は？あそこまで色々なことが出来るとは正直思えないんだが？」

ふむ、属性のことを聞いてるみたい。

「ユーノからも以前聞いたけど、あれは魔力変換資質とは違う。属性と言って、個人が生まれながらに持つ特性みたいなもの、かな。閃光、闇黒、炎熱、氷雪、風嵐、雷撃、土石、無属性の八つがあるの。」

普通は一つから二つね。でも極稀に全てを有する魔術師もいる。私もその一人で、ほとんどの属性を操れる」

「属性、か。じゃあ彼も君のように複数の属性を操れると思っても？」

「いいでしょうね、確信は持てないけど」

私はすべての属性を扱え、ルシルもまたすべての属性は扱える。でもここではルシルも全属性を扱えるなんて言えない。

断言すれば、私とルシルの関係に気付かれる可能性があるからだ。どの道、追々バレていくだろうから、その都度話せばいいだろう。

「じゃあ、二つ目。君たちが使っている武器のことだ。

妙な魔力を感じるし、突如現れたり消えたりとしているが？」

これはどうしようか？

神器、特に神造兵装や魔造兵装なんて、神様や魔族が創った物です、なんて言っても信じるわけがない。

ならもう一つの説明をするのがいいたろう。

「あれは概念兵装と言って、魔術師が魔力と術式を籠めて作った物。出たり消えたりするのは、術者が自分の魔力で分解したそれを、魔力炉システムに取り込んでいるから、いつでも具現化できるといっわけ。個人の容量にもよるけど、多くて四つまでは取り込める」

「恐ろしいな、魔術師はそんなことまで出来るのか」

クロノが私を見て「こいつコワッ」みたいな目を向けてくる。失礼な。

「・・・三つ目だ。彼が桃色の閃光を撃った時、ユーノが何故なのは魔法を使えるのか？と驚いていたが？」

「あ！ それは私も思ったよ！」

「そうだよ！ あれはなのはが組んだ魔法だ！ 別の人間がそう簡単に扱えるなんて！」

三種三様の驚き、でもあれは砲撃という魔法なんですよ？ 知識があれば使えると思うけど、まあいいか。

「そうね、おそらく固有能力の力じゃないかしら。

あ、固有能力っていうのは、属性と同じように先天性、生まれつきその者が有するものね」

「つまりは稀少技能レアスキルのようなものと思ってもいいんだな？」

「あながちそれでも間違いじゃないと思う」

レアスキルに関しては、以前ユーノから聞いた時にそう思ったから、それでいいと応えておく。

「君も何か能力があるのか？」

「ん？ 私は持ってない。能力だなんて本当に珍しいと言われたし」

大戦時には、私が知ってるだけでも10人未満だったしね。

「そうか。ならこれで最後だ。魔術師は後何人いる？
そしてそれらを管理している組織は残っているのか？」

確かに重要な疑問ね。下手をすれば、他のルシルクラスが敵になる

とても思っているのか。

「さつきも言ったとおり、魔術はもう滅んでいる。私の家族も使えないし、知っているのはゼファイだけ。当然組織も存在していないのは確認済み」

生前の家族も、この世界に用意された偽りの家族も魔術を使えなかったのは本当だ。

だから魔術を使える私を、あそこまで……いや、忘れよう。それに、この世界に初めから魔術なんて存在していない。

「わかった、ありがとう。やはり彼の相手は、君に任せることになるだろう」

「ええ、初めからそのつもりだから、気にしないで」

その後、リンディ艦長がアーススタッフとの顔合わせとして、自己紹介と協力云々の話をしてから、一度お開きとなった。

そうそう、エイミィというオペレーターは敵に回すと、危険だと本能が訴えていたことを、此处に追記しとく。

管理局と魔術師（後書き）

今回はシャルと管理局の話を書かせていただきました。

ついでに魔術師のいろいろを説明しましたね。
ということで、例の設定紹介に行きます。

魔術：

魔力を持っているのであれば誰でも扱える力。
どの世界でも共通の魔術で、攻性、防性、補助、結界、儀式、禁呪
がある。

固有魔術：

その魔術師が独自に組んだオリジナルの術式。
世間一般に使用される魔術とは違い、組んだ魔術師だけしか扱えな
い術式。

属性：

先天性で、魂に刻まれたその者を表す力。種類としては、閃光系、
闇黒系、炎熱系、冰雪系、風嵐系、雷撃系、土石系、無属性の八つ
で、無属性には重力、操作、幻影、音波などが存在する。一人につ
き最大で二つまで持つが、たまに全ての属性を操る魔術師もいる。

固有能力：

生まれつきその者が使用できる特別な能力のこと。空間魔術を術式
なしで発現できる空間干渉、超長距離を見渡せる千里眼、未来を高
確率で当てる予知などの多くの種類があるものの、固有能力者は何
千万人に数人という確率でしか誕生しない。

神器：

神や精霊が創造した“神造兵装”、魔族によって創造された“魔造兵装”、特別な製法で魔術師がその物品に術式を編みこんで創造した“概念兵装”の三つを総称して神器という。

海上争奪戦

++++Sideクロノ++++

なのはたちはスタッフと顔合わせをした後、ご家族にこれから留守にすることの了解を得る為に、一度自宅へと帰っていった。

「魔術師か。厄介なのがいるな、本当に」

僕はさつきから溜息と愚痴しか口にしていけない気がする。

「そうだね。ほら見て、この銀髪の男の子、ゼフィ君、だっけ。魔力値の平均ランクとしてはAA+。なのに、この黒い影のようなやつになったら、クロノ君のAAA+ランクを超えてニアSランクになっちゃうんだよ」

キーボードを操作しながら、魔術師の少年ゼフィの情報を口にするのはエイミー・リミエッタ。

このアースラの通信主任で、僕の執務漢補佐もしてくれるクセのある友人だ。

「ああ、魔術師にはそういったランクに大きな揺れが出るのは当然らしい。

そのときそのときで、供給できる魔力に差異が出るからとのことだ
けど」

「つまり、魔力値が常に変動して本来のランクが知られにくいってこと？」

確かにそれじゃあアースラの切り札であるクロノ君も苦勞するね」

「反論は出来ないね。最大値が分からない以上、下手に手を出して返り討ちだなんて御免だ。

だがこちらにも魔術師のシャルがいてくれる。

彼女が、彼を止めてくれるらしいから、その間に僕たちがジュエルシードの封印にあたることになっている」

「女の子に頼るのもカッコ悪いね」

「それは言わないでくれエイミー。僕もそれには傷ついているんだから」

二人で溜息をついていると、母さん・・・艦長が来た。

「あ、艦長」

「これはゼフィ君のデータ、ね。確かにすごいわね彼は」

ゆっくりと僕たちのもとへと歩み寄って来る。

映し出されている少年の魔術を見て、艦長はそう呟く。

「はい、今のところはニアSランクが最高みたいですが、もしかするとそれ以上の魔力を扱えるかもしれません」

「それは本当に厄介ね。管理局の高位魔導師にでさえもAAA+以上は少ないというのに」

艦長は右手を頬に添え、「どうしましょう?」なんて困っているようにには見えない声色で悩み始めた。

しかしそれもすぐに終わり、もう一つの不明瞭な問題を口にした。

「あの子達、なのはさんとシャルロットさん、ユーノ君がジュエルシートを集めている理由は分かったけど、この黒い服の子たちはどうしてかしらね？」

「彼女たちの話では、彼はこの二人の幸せの為だと言っていたらしいです。それが本当かは分かりませんが」

「二人の幸せの為、か。まだこんなに小さい子供なのに、他の人の幸せのために戦っているだなんて、一体彼は何を思っているのかしら??」

ゼフィという少年の目的、黒衣の少女と使い魔の幸せのためだけに動いている、らしい。

真実かはどうかは判断できる要素が少ないため何とも言えないが、自分自身の事はどうでもいいと思っているのだろうか？

何一つ答えの出ない問いに苦労している最中、ユーノからアースラに滞在するための了解を得たとの通信が入ってきた。

「わかった、すぐ迎えに行くから待っていてくれ。

それでは艦長、彼女たちを迎えに行ってください」

「ええ。お願いするわね、クロノ」

「いつてらっしや〜い」

艦長とエイミィに見送られながら、僕は名のは達を迎えに行くために踵を返した。

「さすがにもうまずいよ、フェイト、ルシル」

アルフが、管理局が干渉してきたことで弱音を吐く。

「確かにまずいかもな」と俺はアルフに同意する。
もちろんアルフの心配とは別の心配だが。

当然、俺が弱音をはくと思ってもいなかったフェイト、素直に同意されるとも思っていなかったアルフが

「ルシル？」と、二人はキョトンとして俺を見る。

「ちなみに俺の心配は、アルフの心配とは別だ。

アルフは組織としての戦力が心配なんだろう？

しかし俺は違う。「俺は組織としての探索能力の方が心配なんだ」と肩をすくめる。

「あ、そっか。組織だって搜索されたら、すぐに残りを集められちゃう」

フェイトが俺の言葉の意味を知り、納得する。

人海戦術なので来られれば、たった3人、封印できるのがフェイトだけとなると圧倒的に不利だ。

そんな俺とフェイトの管理局の戦力性危機感を度外視している態度に、「でも！」とアルフがすがってくる。

「アルフ、執務官とはそれなりの実力を備えたエリートなんだろう？
なら、あの程度が管理局の凄腕なら俺一人で十分に無力化できる」

クロノと名乗った少年は、見た限りでもそれなりの危険を潜り抜けてきたことくらいは分かる。

だが、たかが十数年の生きただけの子供に、数千年と存在し幾たびの死闘を越えてきた俺の経験に勝てるわけがない。

空戦に持ち込んでしまえば、空を飛ぶことのできないシャルは無力化、なのはやクロノにも遅れをとることはないはずだ。

「大丈夫だよアルフ。先日のルシルの強さを見たでしょ。あの執務官だって、あんなに簡単に倒しちゃったんだし」

「そうかもしれないけどさ!？」

「なら、アルフ。これからの戦闘は全て俺が引き受ける。君はフェイトのサポートにだけ回ってくれればいい」

迷い始めたアルフは足を引っ張る可能性がある。ならば、極力フェイトの側につかせて護衛として動かす方がいい。

「え？ あ、ちょっと待ってルシル！ ルシル一人でなんて、さすがに任せれないよ!」

フェイトは俺の心配をしてくれるが、さっき俺一人でも大丈夫って言っただけだったか？

「問題ないよ。フェイトとアルフはジュエルシードの封印にだけ集中してほしい。

アルフもそれで構わないな？ もうそれしか道はないと一応言っておくがな」

アルフに、諦めて最後まで付き合えと言う。

「アルフ？ ごめんね、嫌だったらアルフだけでも・・・」

「フェイト、違うんだよ。あたしはフェイトとルシルのためを思っ
て・・・」

アルフは、俺たちのことを思って、と泣きはじめた。

「アルフ、大丈夫だよ。フェイトとアルフは何が何でも俺が守るか
ら。」

だから、そう心配せずにフェイトについてあげてくれ」

そつと優しく撫でながら諭すと、ようやく諦めたのか、アルフは軽
く頷いた。

「・・・わかったよ、あたしたちの背中には任せたよ」

「了解だ。それでいいな、フェイト？」

「う、うん」

二人の了承は得た。それじゃあ、今日はこれで休むことにしよう。

+++++Sidelシリオン　なのは+++++

私とシャルちゃんは、お母さんにしばらく留守にすることの許可を
得る為に、ユーノ君との出会ってからの今日までのこと、魔法のこ
とやユーノ君の正体のような言えないことは省いて、説明した。

そして、お母さんから許可が下りたので、アースラに戻りました。

「君たちの部屋を用意したから、今日そのまま休んでくれ」

私たちを迎えに来たクロノ君に、部屋へと案内されながら聞かされる。

「あ、うん、ありがとう」

お礼を言って、私に用意された部屋へと入る。

部屋に入ったのは私だけ。扉が閉まったのを見て、頭の上にクエスチオンマークを浮かべてしまう。

すぐに通路へと戻って、「あ、あれ？ シャルちゃんは何？」って、去ろうとしたシャルちゃんとユーノ君とクロノ君に声をかける。

するとシャルちゃんとユーノ君とクロノ君が振り向いて、私を見る。

「ん？ シャルには別の部屋を用意しているんだが」

「同じ部屋に二人だと狭いでしょ？」

そう二人は言うてきた。二人ならまだ大丈夫な広さだ。

さすがに3人は無理だけど。私とシャルちゃんなら十分に快適に過ごせる、と思う。

「え〜？ 一緒じゃダメなの？ 私は一緒に寝たいな〜」

私は一緒の部屋にしようよ、とシャルちゃんに告げる。

シャルちゃん達はお互いの顔を見合わせて、「それは、二人の方で決めてくれていい」とクロノ君が任せてくれた。

私はシャルちゃんをじいーと見つめる。するとシャルちゃんは「・・・」

・まあ、私もどつちでもいいかな」って折れてくれた。
断られなかったことが嬉しくて、シャルちゃんに駆け寄って両手を
取って上下に振る。

「うん！ じゃあ一緒に寝ようねシャルちゃん！」

「え、ええ。すごく嬉しそうなのは。まあ私も・・・嬉しい、か
な」

「にやはは」

シャルちゃんが苦笑い。でも少し照れているみたいで頬がちょっと
赤くなってる。

久しぶりにシャルちゃんと寝れて、ご機嫌な私でした。

++++Sideなのは シャルロット++++

さて突然だけれど、私たちがアースラに来てから十日が経過した。
それにしても、やはり組織の力というのは良いものだ。

あれだけ苦労していた“ジュエルシード”の探索が順調に進んでい
るからだ。

たった今も、管理局が発見した“ジュエルシード”をなのはが封印
を終えた。

「ジュエルシードの封印も順調、なのはの魔導師としてのレベルも
上がってきているし、良いこと尽くめってこのことね」

私は少し離れたところで、様子を見ている。

理由としては、いつルシルと戦うことになるか分からない為の魔力温存、そしてなのはのレベルアップだ。

実際、なのははこの十日間で目まぐるしい成長を遂げている。ユ一ノと二人で新しい魔法も組んだらしいしね。どういづのかは見てのお楽しみにしよう。

「にははは、そうだね」

なのはは少し照れている感じで笑みをつくっている。

「でも、この十日間は全然フェイトちゃんたちに会えなかった」

「まあね、向こうも好き好んで管理局とぶつかろうなんて思っていないはずだから。

だから遭遇することは、あまりないと思うけど」

そうなのだ。この十日間でフェイトたちとは一度もぶつかっていない。

こちらが向かったときには、すでに封印を終えて立ち去った後だったりということ、なかなかあたらぬ。

喜ばしいことなのかどうかは微妙だけれど、もうちょっとなのはがレベルアップしてからのの方が良いかもしれない。

「うーん、フェイトちゃんとゼフィ君とお話して、お友達になりたいんだけどな」

「友達・・・ねえ。まあいいんじゃないの？」

フェイトはともかく、ルシルがこちらの味方となるのは正直助かる。このままずっと、ルシルと敵対するのはまずい。

「そうだよね！ うん！」

なのは嬉しそうにしながら、私たちはアースラへと帰艦した。

++++Sideなのは フェイト++++

「やっぱり、なかなか見つからないな」

フェイトはぼそつと溜息をこぼす。

管理局が出てきてからは発見率が悪くなってしまったから当然の事なんだが。

「ああ、管理局と極力出会わないようにしているから、自然と外れを引いてしまうことが多くなってしまっう。

戦闘覚悟で行くことも出来るが、極力戦闘は避けたい」

「うん、それは仕方ないよね。ルシルなら大丈夫って思うけど、やっぱりあまり戦いたくないから」

私はフェイトの頭を撫でながら「やさしいな」と微笑みかけると、フェイトは「むう、子供扱いしないで」と頬を膨らませるが、嫌がっていないの是一目瞭然。

フェイトは事実優しい子だ。あんな母親の目的のために全力でも他人を傷つけない。

嗚呼、だから彼女の苦しみが少しでも軽減されるなら、俺が戦うべきなんだろう。

しかしそれも許されない。フェイトの優しさがそれをさせない。

「けどさあ、こんなに探しても見つからないなら、地上にはもう無いんじゃないかい？」

アルフが的確な疑問をぶつてきた。

さすがフェイトの使い魔、時々オツムが優秀になるな。

「お、分かっているなアルフ。それについては俺も考えていた。地上はほとんど探したから、残るのは……」

「海、だね」

フェイトが俺の発言の後をついで、答えを口にした。

「そういうこと。だが、海中のジュエルシードの回収をどうするかなんだが、何か策はあるかフェイト、アルフ？」

聞かずとも、この二人なら以前と同じように強制発動する、とか言いそうだ。

まあ実際それしかない俺も思うが、あれはあまりやりたくはない。

「えっと、前みたいに魔力流を撃ち込んで、強制発動するしかないかな」

「そうだね、もうそれしかないんじゃないかい？」

やっぱり、それしかないか。

「……わかった、魔力流を撃ち込むのは俺がやる。

フェイトはジュエルシードの封印に全力を尽くせ。

アルフはフェイトのサポートに全力であたってくれ」

「ルシル!？」

「ちょっと待ちな!？ あんたに出来るのかい!？」

二人が驚いているが、この役割を変更するわけにはいかない。それに複製術式を使えば、フェイト以上の魔力を扱えるから、強制発動させるのは俺でも十分に可能のはずだ。

「ジュエルシードを封印できるのはフェイト一人だけだ。

封印する前に魔力が切れては意味が無いからフェイトはダメだ。

アルフもまた、フェイトの使い魔だから主をサポートするのは当たり前前。

なら消去法で俺がすることになる」

「でも、でも」

フェイトはあまり納得していない様子だな。

一方アルフは、納得しきれていないが仕方ないといった感じが。

「大丈夫だよ。失敗はしないし、何があっても二人は俺が守るから」

「そうじゃなくて!」

フェイトが怒鳴りながら詰め寄ってきたが、そんな場合じゃない。

「フェイト、何を心配しているのか分からないけど、変更はない。少し休憩をしたら海上に向かう、いいね?」

「む〜」

フェイトの機嫌が一気に急落したが、こればかりはどうしようもない。

アルフはフェイトの機嫌取りに必死だ、すまないアルフ。

俺たちは弁当を広げ、昼食をとり始めた。

フェイトは弁当を食べ始めると、機嫌が良くなった。

やはり女の子は、美味しいものには目がないのだろう。

十十 Sideルシオン シャルロット十十

私はなのはたちを部屋に残したまま、ブリッジに来ている。

そうしたらエイミーに声をかけられ、一緒にルシルやフェイトのデータを見ていた。

「フェイト・テストロッサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

いつ来たかは分からなかったけど、私の背後に立ち、クロノがそう口にした。

クロノの話によると、一昔前に魔法実験の最中に次元干渉事故を起こし、追放された結構高位の魔導師だったらしい。

「じゃあ、この子ってその人の関係者か何かかな？」

「分からない。本名を名乗っていない可能性もあるから」

私は二人の会話を黙って聞いていた。

(ジャマー 結界か。 本当便利なものね、魔法ってというのは)

さてと二人の邪魔にならないように退出しようかとしたら、リンディ艦長が私を手招きしているのに気付いた。
何かしら? と思い、艦長席にまで向かう。

「今日もお疲れ様、シャルロットさん。戻ってから何も口にしていないでしょ?」

だから一緒にお茶をしようと思ったのよ」

いつもリンディ艦長が愛飲しているお茶を勧められてしまった。
ま、まずい、何とか理由をつけて逃げなければ・・・悶死確定。
必死に逃げる口実を考える。あんな激甘そうなものを飲むと、いろいろとまずい気がする。

「え〜と、お、お気持ちは嬉しいのですが、その・・・」

俯きながらそう口にし、ゆっくりと顔を上げてリンディ艦長の顔を見る。

(や、やめて、そんな顔をしないで。罪悪感でいっぱいになりそう)
残念そうな顔をしているリンディ艦長を見て、心が折れそうになる。
この世界に来るまではこんな感情は必要なく、消していたものだけ
じ。

くっ、諦めて飲むしかない、のか? いや、結構美味しいのかも・・・?
・?

覚悟を決めた私は笑顔で湯飲みを受け取る。

「い、いただきます」

「ええ、どうぞ」

ごくりと喉に通す。飲んだ。飲んでしまった。飲んでまず頭に浮かんだのは

(甘っ!!！ 甘い!!！ ていうか甘い!!！ 違う! 甘いを通り越して苦い!?)

な、何でこんなものを飲んで平気な顔をしているの!?)

リンディ艦長の味覚の異常性だった。

やばい、なんか目の前が暗くなってきたような・・・?
意識がブラックアウトしそうなところで鳴り響く警報。

「な、なんてことをしてるのあの子達!?!?」

「何だあれは!?!?」

エイミイとクロノが叫ぶ。何とか意識を繋ぎ止め、私もすぐさまモニターへと目を向ける。
そこには、

(うそ! ルシルが異界英雄^{エインヘリヤル}を使っている!?)

剣の蒼翼が生えたルシルの前方に浮かぶ少年を見て、私は軽く絶望した。

++++Sideシャルロット フェイト++++

昼食と休憩を終えた私たちは、残りの“ジュエルシード”が眠るであろう海上へとやって来た。

結果としてビンゴ。海中に魔力反応。間違いなく“ジュエルシード”がある。

魔力察知に長けるルシルもそう言うから間違いはない。

「ルシル、本当に大丈夫？」

今回、魔力流を撃ち込むことになっているルシルに言葉をかける。ルシルは大丈夫だって言ってたけど、やっぱり心配だ。

「フェイトは心配性だな。本当に問題ないよ。」

それじゃあ始めるから、準備してくれ二人とも」

だって気になるんだもん！ また無茶されて血がいつぱい出たらとか思っちゃうよ。

そんな私の気持ちに気付かないルシルが、魔力流を撃ち込む用意を始め、「フェイト、封印の準備を。アルフもその補佐を」って私たちにも準備するように言ってきた。

「う、うん！」

「あいよー！」

私とアルフは指示通りに、いつでも“ジュエルシード”を封印することが出来るように準備を始めた。

我が内より出でよ 貴き英雄よ

ルシルが呪文を唱える。

「来たれ！ 救世主^{メシア}、弓樹真弥！」

その言葉と共に強烈な光が生まれて、一瞬だけ目の前が真っ白に染まる。

そして現れたのは、変わった服を着た男の人。というかこの人は誰ですか！？

私とアルフは、突然現れた男の人に動揺してしまっている。一体誰なのかと注意深くその人の様子を窺がってみると、

『ねえアルフ、この人、たぶん人間じゃない気がする』

『あたしもそう思うよ。理由はわからないけど、何ていうか本能がそう訴えてきてるような感じなんだ』

人ではない。ただ直感が告げてくる。

私たちがおかしな顔をしていたのか、ルシルがこの人のことを説明してくれた。

+++++Sideフェイト ルシリオン+++++

フェイトたちが真弥を見て困惑しているのに気付き、彼のことを話す。

「ああ、彼の名前は弓樹真弥といって、魔力だけで構成された一種の使い魔みたいなものだ。

味方だから、そんな引かなくても大丈夫だって」

それを聞いた二人は、徐々にこちらへと戻ってきた。だが、未だに少し警戒している感じだ。

まあ仕方ないか。いきなりそんなことを言われても困るよな。

しかし、先程の説明には嘘はない。魔力で構成された使い魔、これは本当のことだ。

俺が保有する創世境界の一つ、“ブレイザブリク神々の宝庫”の上位術式である“ヴァルハラ英雄の居館”から呼び出した数多くいる“エインヘリヤル異界英雄”の一人。俺が複製した武装は“ブレイザブリク神々の宝庫”に貯蔵され、術式は“アルワイ英知の書庫”に登録される。

“ヴァルハラ英雄の居館”とは、それを複製した時点での担い手を、その二つの結界の中にある複製した物から記録を読み取り、

“エインヘリヤル異界英雄”として軍勢を生み出すものだ。

ゆえに全員が俺の従者となる、だから使い魔といっても間違いではない。

まあ今の俺の状態では、中位以下の連中しか呼び出せないが。

「そ、そうなんだ。ルシルにも使い魔がいたんだね。でも、何で今まで呼ばなかったの？」

「そつだよ！　こんなことが出来るなら、早く呼んでほしかったもんだね！」

「いや、これには深い訳があるようなく、ないようなく」

これを使えるのに気付いたのは、ほんの二時間前だった。

“ブレイザブリク神々の宝庫”と“アルワイ英知の書庫”の使用制限を再確認していた際に、

“ヴァルハラ英雄の居館”の使用も可能だと、ようやく気付いたのだ。

だが、どの創世結界も現実へと顕現できないように制限されているため、その都度に少しずつ取り出すことしか使用方法がない。

「なんだいそりゃ？」

「そんなことより！ さっさと始めるぞ！」

最大召喚時間がたったの三分となってしまうっているため、急いで“ジュエルシード”を強制発動させなければ。

「うん！ いつでもいいよ！」

「はあ、あたしもいつでも構わないよ」

フェイトは元気に返事をしたが、アルフは一度溜息を吐いてから準備万端の返事をした。

「それじゃあ、始める。頼んだよ、真弥」

「うん、任せて」

天をも貫く無敵の雷

顕現せしは天を裂き、海を割る絶大たる雷光。周囲一kmに雷撃が振り注ぐ。

さすが救世主・真弥^{メシア}、中位の英雄なのに、なかなかの威力だ。真弥の召喚を解き、次の段階へと進むために俺も準備に入る。

強大な雷撃によって次々と目覚める“ジュエルシード”。吹き荒れる複数の竜巻。

フェイトとアルフがあまりの光景に絶句しているが、すぐさま立ち

直り、“ジュエルシード”の封印へと移る。

+++++Sideルシリオン シャルロット+++++

今、アースラのブリッジは静まり返っている。

原因はもちろぬルシルの放った雷撃。

だけど、実際にアレを放ったのは先程消えた少年だ。

ルシルに必要なのは召喚時の魔力のみ。あの雷撃に使用される魔力は、現実へと呼び出されたあのエインヘリヤルの少年が受け持つことになっている。

(本当に最悪だ。制限されている状態であんなのを顕現させれるなんて……！)

「う、うそ、さっきの雷撃……SSランクに匹敵するよ」

エイミイが信じられない、と小さく声に出す。

私だって正直信じたくない。ただでさえルシル一人に苦勞させられているというのに、そこにエインヘリヤルが加わるなんて。

「おい、シャル。君は本当に彼に勝てるのか？」

クロノが青い顔をして訊ねてきた。さっきまでなら勝てると思っていた。

だけど、ルシルが創世結界“ヴァルハラ英雄の居館”を使えると知った以上、勝率は確実に5割を切った。

「接近戦に持ち込めば3〜5割、それ以外は0よ。」

それに、彼の魔術の出初めを叩くしかないという条件付き」

正直に話す。あれはもう私では勝てない。

唯一勝てる方法は一つ、私の最強の魔術、真技を使うことだ。

接近戦に持ち込み、アレを使えば今のルシルに防げる術はないはず。何セルシルが最強とされていた大戦の最中の決闘で、ルシルの利き腕を四分割に切り落としたんだ。

今のルシルには当時のような魔力はないも無いし防ぐ手立てもない。ただ問題なのは、アレが必殺の技ということだ。非殺傷設定なんて使えない私は、確実にルシルをバラバラに斬り殺すことになる。

「接近戦限定か。それでも3〜5割の確立で勝てるというのはすごいな」

「その代わりに、ゼファイが死ぬことになるけどね」

「なに！？ どういうことだ！？」

私の死ぬ発言でクロノが叫び、ブリッジが嫌な空気に包まれる。いつの間にか来ていたなのはとユーノも、それを聞いて青い顔をしている。

「私がゼファイに勝つ方法は一つ、私の最強の魔術で彼を殺すこと」

「だ、ダメだよ！！ シャルちゃん！ ゼファイ君をこ、殺すだなんて！！」

「さすがにそれは認められないわ、シャルロットさん」

なのはとリンディ艦長からお叱りの言葉が飛び出す。

もちろん私だってそんなことはしたくない。

「・・・私だって嫌よ、そんなことしたくない」

私の様子を見て再び静寂に包まれるブリッジ。

「はあ、まずはあの子達を止めるのが先決だな。

このままじゃ海中のジュエルシードを全て取られる」

そうクロノが言い、転送装置へと向かう。

それを見たなのはが「わ、私も行きますっ！」と言いだす。

「危険だぞ。あの竜巻もそうだが、ゼファイは少なくともSSランクに匹敵する魔力の持ち主だ。

何をしてくるのか見当がつかない。あの時いた背後の少年も気になるし、まだ他の仲間がいるかもしれない」

クロノは怒鳴るようなことをせず、真剣になのはを見て忠告した。なのはも覚悟を決めているようで、これまた真剣な顔で返答する。

「わかってるよ。でもいつかお互いが持つてるジュエルシードをかけて戦うことになると思う。

だから、今でも後でも同じ結果なら、今行っておきたいの」

クロノは少し考え、リンディ艦長に出撃の許可を申請しようとする。

「艦長・・・」

「無茶だけはしないようにね、クロノ、なのはさん」

リンディ艦長の表情は、今だけは上官ではなく母親の顔だった。クロノが決意の首肯、そして「はい、いってきます。シャル、ユー、来てくれ」と言ってきた。

さあどうしようか、私は飛びたくない。というか飛べないのだ。ここははつきり言うほうがいいだろう。たとえ笑われたとしても。

「ごめん、私・・・飛べないんだ」

「「「え?」「」」

なのはたちが目を点にしながら私を見る。

だから知られたくなかったのに。(涙)

ユーノが「えつとつまり、飛行の魔術は覚えていないの?」と訊いてくる。

「飛翔術式は習得しているけど、上手く飛べないというか」

「それなら大丈夫、私が手を貸すから」

なのはがそう言いながら私の手を引っ張り、転送装置へと入った。

「ちよっ、まっ」

心の準備もまだだというのに、私は強制的に転送させられた。

++++Sideシャルロツテ ルシリオン++++

来た、管理局だ。予想より少し遅れていたが、まあそのほうが都合

がいい。

ふと視界に入る真紅。あれは・・・シャル？ 間違いない。飛翔術式を克服したのか？

こちらへ向かって来ていたのは、なのは、ユーノ、クロノ、そして真紅に輝く片翼を羽ばたかせ、空を翔るシャルの姿だった。

『フェイト、アルフ、管理局だ。相手は俺がするから、封印作業は続行してくれ』

念話で管理局の来訪を告げ、気にせず作業を続けるよう指示する。しかし予定外だ。いつの間にシャルは飛翔術式を克服したんだ？ 陸戦限定の騎士だったシャルが、俺の領域の空戦にまで入ってきたとなると、戦術を全て変更しなければならぬ。

『わかった、気をつけてね』

返事はフェイトだけ、アルフは残り1つの竜巻と格闘している。本当なら全ての竜巻を片付けたかったが、時間がかかり過ぎた。

『すまないアルフ、任せた』

『あいよ、ルシルもちゃんと仕事しなよ』

『了解だ』

しかしどうしたものか？

魔力も接近戦技術もシャルが上、苦手な遠距離攻撃はなのはとクロノ。

俺の現在の最大魔力はAA+、二人の砲撃を防ぎきる術は複製の力のみ。

だが二人にばかり気をとられると、シャルが術の発動を妨害してくる。

「やばい、これは負ける・・・かもな」

負ける要素しか見つけれない俺は一人呟いた。

++++ S i d e l シリオン なのは++++

私はシャルちゃんを無理矢理転送させて、空へと飛んだ。

私は変身を終えて、シャルちゃんの方を見る。私はシャルちゃんの姿に目を奪われた。

「わあ、綺麗！」

アインス・ルービン・フリーユージェル

真紅の片翼

シャルちゃんの背中には、片方だけ綺麗な真紅の、天使のような翼が生えていた。

シャルちゃんがキツと私を睨みつけて、「なのはあああっ!? 急に何するの!? 死ぬかと思っただじゃない!」って絶叫。

「え、えっと、私が手伝うから大丈夫だと」

あまりの怒鳴り声に少し怯む私ですが、反論しちやいます。

「それにシャルちゃん、ちゃんと飛べてるよ!」

「え？・・・本当だ。飛べる、飛べてる！ 私飛べ「感動は後だ！」
・・・」

シャルちゃんの感動タイムは、クロノ君によって終わらされました。でも、シャルちゃんもそれが分かっているのか反論せずに頷いた。

「ジュエルシードの暴走はほとんど停止している。

今なら封印出来るはずだ。なのはとユーノは封印へ行ってくれ。僕とシャルはゼフィを足止めする」

「わかった。気をつけてね、シャルちゃん、クロノ君」

「なのは、急ごう！」

「うん！」

私とユーノ君は、フェイトちゃんとアルフさんの元へと向かった。けど、それを邪魔しようとするゼフィ君が私たちの前に立ちはだか
った。

「悪いが行かせない」とゼフィ君がクリスタルのような穂を持つ大きな槍の先端を向けてきた。

風牙^{レイレ}真空刃

シャルちゃんが無言で、ゼフィ君に攻撃を仕掛けた。

ゼフィ君は物凄い速さで避けて、私の前からいなくなる。

「今だ！」

クロノ君が回避しているゼフィ君に向けて砲撃を放ちながら、私た

ちに叫ぶ。

私はその隙にゼフィ君の横を通り過ぎる。

「しまった！ フェイト！ アルフ！」

ゼフィ君がクロノ君の砲撃を避けながら、フェイトちゃんたちの名前を叫んだ。

「クロノ！ ユーノ！ ちゃんとなのはを守りなさいよっ！」

そしてクロノ君も、シャルちゃんの援護を受けて、ゼフィ君の横を通り過ぎる。

「行かせるか！」と、ゼフィ君が叫んで、我が手に と唱え始めた。

「私を忘れないでよね！！！」

「ぬっ、おのれええ！」

「余裕がないなゼフィ。ブレイズキャノン！！！」

ゼフィ君があの特徴文を唱えようとして、シャルちゃんの攻撃で中断された。

その一瞬の間をつき、背後からクロノ君が砲撃を放って、ゼフィ君に直撃する。

ゼフィ君は、そのまま海へと落ちていった。

シャルちゃんは、ゼフィ君が落ちていった場所へと向かったから、ゼフィ君の心配はいらないはずだ。

そして私はフェイトちゃんのもとへ。あと少し、あと少しでフェイトちゃんのもとへ行ける。

そうして、私はみんなの協力のおかげでフェイトちゃんのもとへと辿り着く事が出来た。

「フェイトちゃん」

「っ！ 君は！？ ゼフィは・・・！？」

フェイトちゃんは、私の存在に今気付いたようだ。ゼフィ君の姿が見えないことで、すごく焦っている。

「大丈夫だよフェイトちゃん。ゼフィ君はあそこにいるから」

私は、シャルちゃんがゼフィ君を抱えている場所へと指を指す。それを見たフェイトちゃんは、安堵の表情でそれを見ている。

「よかった」

「ねえフェイトちゃん、私ね、ずっと思っていたことがあるんだ」

フェイトちゃんやゼフィ君、アルフさんと友達になる。今なら、それを伝えられるチャンスだ。

「私は、フェイトちゃんたちと友達になりたいんだ」

「え？」

フェイトちゃんは信じられないことを聞いた、みたいな顔をしている。

私は返事を聞くために待っていた。だけど周囲に雷が落ちてきた。

「ジュエルシード」の捕獲を指示する。

だが、それをクロノが妨害する。アルフは邪魔をするクロノを弾き飛ばすが、いくつかの「ジュエルシード」を奪われていた。

「くそつ、アルフ、一度引くぞ。奪われたジュエルシードは後日にも取り返そう。俺が時間を稼ぐ、先に行け」

「くつ、仕方ないね、わかったよ」

念話でアルフに撤退を指示し、フェイトと一緒に連れて行かせる。クロノが追っていくが、行かせるわけにはいかない。

我が手に携えしは確かなる幻想

シャルが何か叫んでいるが、今は聞く耳は持たない。そもそもプレシアへの怒りで完全に聴覚をカットされてしまっている。

「ディオサ・ラグリマ
貴き落涙！！！」

巨大な水の塊を海に叩きつけ、波を発生させてクロノたちを飲み込ませる。

連中が海に沈んだのを確認して、俺はその隙にこの場から去った。

十？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？
十 ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？

シャル

「今回も来てくれたのね。第五回シャル先生の魔術講座へようこそ」

なのは

「早いことでもう五回目だね」

ユーノ

「うん、そうだね」

シャル

「さて。では早速、今回使用された魔術を紹介するわ。

アインス・ルービン・フリーゲル
真紅の片翼

魔力で翼を創るという術式で、これを展開することで飛翔術式を扱えるようになるの。

アインスは数字の1。ルービンは、宝石ルビーのドイツ語読み。フリーゲルは翼という意味よ」

ユーノ

「そう言えば、出撃前にシャルは空を飛べないって言ってたけど、結局飛べたよね？」

なのは

「というかシャルちゃんって練習してこなかったのずっと？」

シャル

「したわ、したわよ。練習をしてもダメだったの。どうやっても死にかけのような羽虫みたいになっちゃうのよぉ（号泣）」

なのは

「じゅ、じゅめんなね!?! まさか泣くなんて思わなくて……」

ユ一ノ

「えっ、えっ、今日はじゅまで!」

海上争奪戦（後書き）

すいません、駆け足で進みました。

ルシルをもう少し粘らせるべきか迷いましたが、アレ以上頑張るとジュエルシードを全てフェイトが封印してしまうので、早々に落ちてもらいました。

複製の武装と術式を封じられると、極端に弱くなってしまいうルシルですが、固有魔術の攻性術式が解禁されると、一対一ではもう誰も勝てません。

それでは、設定紹介に行きます。

創世結界：

術者のイメージした世界を現実へと展開する大魔術。

創世結界の展開に成功した者は例外なく大魔術師の称号を得る。

神々の宝庫（ブレイザブリク）

ルシリオンの有する創世結界の一つ。

複製した武装が縦横無尽に乱立する黄金に光り輝く地。

空は黄金の陽光で輝く雲が中心へと渦巻いていて、その中心には黄金の太陽がある。

英雄の居館（ヴァルハラ）

創世結界の一つ。

複製した武装や術式などの当時の持ち主の情報を引き出して、使い魔とした連中の軍勢が存在する超巨大な館。

異界英雄（エインヘリヤル）

ヴァルハラ
英雄の居館に存在する使い魔を召喚するという術式。

白と黒の決戦

++++Sideなのは++++

「四人とも無事でなによりです。よくやってくれましたね」

アースラへと帰艦した私たちは、以前アースラの人たちに紹介された部屋へと場所を移して、リンディさんから労いの言葉をかけられる。

「「はい！」」

私は、その褒め言葉が嬉しくて、ユーノ君と同時に返事をした。

「艦長、今回の事件の首謀者と思われる人物を断定しました。エイミィ、モニターに例のデータを」

「はいはい」

クロノ君はいつの間にか調べたのか分からないけど、犯人が誰か分かったと言って、エイミィさんにモニターに映すように頼んだ。

そして映し出されたのは一人の女の人。
その女の人を見たリンディさんが「あら」って意外なものを見たよ
うな声をあげる。

知っている人なのかな？

「そう、僕たちと同じミッドチルダ出身の魔導師プレシア・テスト

ロツサ。

専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら、違法研究と事故によって放逐された人物です。

登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致していますし、なにやりゼフィが、あの雷撃を見たときにプレシアと叫んでいました。そして、あの少女フェイトはおそらく……」

「フェイトちゃん、あの時、母さんって……」

確かにあの時、母さんって言うていたと思う。

リンディさんは「親子、ね」と、どこか悲しい顔をして、プレシアさんの映像を見つめる。

「そ、その驚いてたっていうより、何だか怖がってるみたいでした」

そつだ、普通ならお母さんに対して、あんな顔も声も出さなはずだ。

あれはどう見ても怖がっているようにしか見えなかった。

「エイミィ、プレシア女史についてももう少し詳しいデータを出せる？放逐後の足取り、家族関係、その他なんでも」

「はいはい、すぐ探します」

私もよくプレシアさんの映像を見る。

この人が、フェイトちゃんのお母さんなんだ。

『なのは、もしフェイトが母親を恐れるようなことをされているなら、私たちが助けてあげないと、ね？』

シャルちゃんが念話でそう話しかけてきた。

『うん。もしそれが本当なら助けてあげたい。そして友達になりたいんだ』

私はそう答え、エイミーさんからの新しい情報が来るまで待っていた。

++++Sideなのは ルシリオン++++

「くそっ！ フェイトとアルフは何を考えているんだ!？」

俺は今、フェイトのバインドによって動きを封じられていた。拠点へと帰り、フェイトの治療を終えたらこのような状態へさせってしまった。

何故このようなことになったかというと、それは一時間前に遡る。

? ? ? 回想だ? ? ?

マンションに帰りしばらく経った。

フェイトのダメージを治療術式ラファエルで癒し、フェイトは謝罪と感謝を繰り返した。

そんなフェイトを見て、プレシアへの怒りでどうにかなりそうだったその時、

リングバインド

「えっとフェイト? これは一体なんの冗談だ？」

俺はあまりこういう冗談は好きじゃないんだがな」

いきなりのバインド。あまりに突然、想定外だったので完全に捕ま
ってしまっている。

出来るだけ優しく問いかける。フェイトは俯き、俺から視線をそら
した。

「ごめんねルシル。私は母さんとルシルがこの前みたいになるのが
嫌なんだ。

だから今日は、ここに残っていてほしいんだ」

フェイトはそんなことを言ってきた。

あの女の元へフェイトとアルフだけで行かせる？ それは却下だフ
ェイト。

「ダメだ、俺も行く。この前のようににはならないから大丈夫だ」

フェイトは何も言ってくれない。必死の説得も通じていないようだ。
顔を上げたフェイトは悲しそうな顔をして、「ごめんなさい」とだ
けだ。

「アルフ！？ 君からも何か言ってくれ！」

唯一の頼みとしてアルフにそう言うのが反応は薄い。

おい待て、まさか君までフェイトと同じようなことを言うんじゃない
いよな？

「……ごめん、あたしの御主人様はフェイトなんだ。
フェイトがそうするって言うんだったら……あたしは」

最悪だ。こうなったら自力でバインドを破壊してやる。
そう思い、魔力を生成しようとする

エラー、現在魔力炉は重大なダメージにより修復中
システム

と頭の中に浮かび上がる。

まさか、あの時のクロノの砲撃がまずかったのか!?

確か非殺傷設定の魔法は肉体ではなく、体内の魔力器官にダメージを与える、というものだ。

だが、それはおかしい、砲撃の後に俺は複製術式を使った。

まさか時間差で効果が出た!?

(なんだこれは・・・俺ってこんなに弱かったか・・・?)

そんなことを考えている内に、フェイトたちは扉へと手をかけた。

「待つんだ! フェイト! アルフ!」

? ? ? 回想終了だ? ? ?

「ああもう! いつになったら魔力炉は復活するんだ!?
システム

部屋に俺の声だけが響き渡る。くそっ、無事でいてくれよ二人とも。

+++++Sideルシオン シャルロット+++++

私たちはエイミーからプレシアの詳しい情報を聞き終えていた。
話を聞く限り、あまりいい人間ではなさそうだ。

(全く、こんな奴についてるなんて、ルシルは何を考えているの?)
どうせフェイトとアルフの為なんだろうけど、なんか納得いかない。
ルシルなら、プレシアをどうにかして、フェイトとアルフに別の道
を見出させることくらい出来るはずだ。
それとも、そんな手段が行えない事情があるのだろうか……。

「あなたたちは、一休みしていたほうがいいわね」

とリンディ艦長が私たちに言ってきた。
私としては必要がない。それよりルシルたちが気になるから残りた
いけど。

「あ、でも」

どうやらなのはも同じ考えのようだ。

「特になのはさんとシャルロッテさんは、あまり長く学校を休みつ
ぱなしというわけにもいかないでしょう。

一時的に帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいた
ほうが良いわ」

そうだった、私は小学生なんだっけ?

こういうときには、枷になる肩書きみたいだ。
まあ学校に通う、なんて生まれて初めての経験だから、嫌なわけじ
やないのだけねど。

「フェイト!? フェイト!?!」

あたしはあの女に傷つけられて倒れているフェイトのもとへと駆け寄る。

やっぱりこんなことになるなら、無理にでもルシルを連れてくるべきだった。

ごめん、ごめんよルシル。あたしはフェイトを守れなかった。

「あの女、もう我慢できない。ごめんフェイト、あなたの母さんは」

あたしが殺す。そう覚悟を決めて、あの女の部屋へと向かう。

あたしはあの女の部屋の壁をぶち破り、殴りかかりにいった。

「はあぁっ!?!」

だけど、この女は振り返りもせず、シールドであたしを弾き返してしまっ。

これで諦めるとでも思っているのか!?

再度、殴りかかり今度は弾き返されることなく、バリアブレイクでシールドを破壊して胸倉を掴みあげる。

「あなたは母親で! あの子はあなたの娘だろ!?

あんなに頑張っている子に、あんなに一生懸命な子になんであんな酷いことができるんだよ!?!」

今まで溜まっていた鬱憤が口から飛び出てくる。

だというのに、この女はそんなことはどうでもいいっていう顔をしている。

あたしはその表情を見て、一瞬隙を生み出してしまった。そしてこの女は、あたしの腹に攻撃を放ってきた。

「っ!」

そのあまりの威力と衝撃で吹き飛ばされて、壁に叩きつけられた。それでも、まだ、まだ諦めない、諦めてたまるか!

「あの子は使い魔の作り方が下手ね、余分な感情が多すぎる」

「くっ、フェイトは、あんたの娘は、あんたに笑ってほしくて優しいあんたに戻ってほしくて、あんなに! くっ・・・!」

ダメだ、動けないほどにダメージを受けたみたいだ。

あの女が杖を出し、魔法を放とうとしている。

「邪魔よ、消えなさい!」

こんなところで消えてなるもんか!

放たれた魔法を受けるギリギリのタイミングで、転移して逃げる。

(ルシルのもとへ転移しなきゃ。ごめんフェイト、必ずルシルを連れて助けに・・・)

転移先を正確に設定する前に気を失ってしまい、そのまま転移したルシル。もしフェイトが来たら、守ってやってくれよ・・・。

十十Sideアルフ　なのは十十

私とシャルちゃん、ユーノ君は私の家へと帰ってきた。
翌日、学校へ行って久しぶりにアリサちゃんとすずかちゃんと話をしている、アリサちゃんがアルフさんの特徴と合う大型犬を拾ったと言ってきた。

「シャルちゃん、もしかして」

「ええ、あちらは何かまずいことが起きているようね」

放課後、アリサちゃんの家へと行くことになった。

件の大型犬を見に行くと、やっぱりアルフさんだった。

「やっぱりアルフさん。その怪我どうしたんですか？」

それにフェイトちゃんはいないみたいですけど……」

「ユーノ、話はあなたが聞いて。私たちはアリサたちと一緒にしないといけないから」

シャルちゃんがユーノ君に話を任せると言いながら、私の手を引っ張って、

「アリサ、新しいゲームってやつを早くしよう。すごく楽しみなんだ。
それに下手に構うと傷の治りが遅くなるかもしれないし、今は、ね」

「え？ あ、うん」

アリサちゃんの屋敷へと向かった。

私となのははトイレと理由をつけて、アリサたちから離れてアルフの話聞いていた。

聞く限りではフェイトは、プレシアにかなりの虐待を受けているみたいだ。

それはおそらくルシルも知っているはず。よくプレシアを殺さずに耐えたものだ。

もし私がフェイトたちの協力者だったら、プレシアはすでにこの世にはいないだろう。

『ねえアルフ、ゼフィってそれを見て何もしなかったの？』

一応尋ねておく。ルシルならきつと干渉しているはずだから、私はいつかのために、ルシルに対する良い印象を管理局に与えておくことにした。

『ゼフィはもちろんそれを止めようとしたさ、でもフェイトが大丈夫って言って聞かないんだよ。』

ゼフィはいつもあたしたちのために行動してくれた。

フェイトとあたしの盾になるとかってさ、本当にいい奴なんだよ。それなのにあたしたちは、プレシアと会わせないためにゼフィをバインドで拘束して、動けないようにしてからあの女のところへ行っただんだ』

アルフからようやく聞いたフェイト組の真実。

あはは、ルシルもよく貧乏くじを引くわね。

女運の悪さはこの世界でも健在というわけだ。

『そう、ありがとう。さてと、これからどう動くつもりクロノ？』

私はクロノに今後の行動指針を確認する。

『決まっている、プレシア・テストロッサを捕縛する。』

アースラを攻撃した事実だけでも、逮捕の理由にはお釣りがくるからね。

だから僕たちは、艦長の命があり次第、任務をプレシアの逮捕に変更することになる。君たちはどうする？』

聞かれるまでも無い。なのははフェイトの為に、私はルシルの馬鹿を連れ戻す為に。

『私はフェイトちゃんを助きたい！ アルフさんとゼフィ君の思いと、それから私の意思。』

フェイトちゃんの悲しい顔は、私もなんだか悲しいの。だから、悲しいことから助けたいの。』

それに友達になりたいって伝えたその返事も、まだ聞いていないしね』

『わかった、フェイトのことは君に任せる。シャル、君はどうする？』

『愚問ね。同じ魔術師である以上は私がいないと、そっちがまずいでしょっ？』

『そうだな、君たちの魔力と技術を使えるのは正直ありがたい。もうしばらく僕たちに力を貸してくれ』

やることも覚悟も決まった。

明日アースラに帰艦する予定になっている。
その前にルシルたちをどうにかしないと。

アルフから全てを聞いた翌日、何度も彼らとぶつかった海鳴臨海公園へと来ている。

もちろんアルフも来ている。だけど、クロノはアースラで待機となっている。

「ここならいいよね……。出てきて、フェイトちゃん、ゼフィ君」
なのはが気持ち籠めて二人の名前を口にする。

Scythe Form

“バルディッシュ”の声と共に現れたのは電灯の上に立つフェイト。
剣の蒼翼12枚を神々しく広げ、フェイトの横に浮遊しているルシル。

しかも今回は大戦時に着ていた戦闘甲冑と、彼の神器“神槍グングニル・レプリカ”を武装している。

(本気、ということね)

「フェイト、もうこんなことはやめよう？ あんな女の言うことなんて聞いてちゃダメだよ。

フェイト、このまんまじゃ不幸になるだけじゃないか。

それにゼフィも、もういいよ！ これ以上続けたらあんだって……
「！」

アルフはルシルとフェイトのことを、本当に心配している。その悲痛な叫びが、なのはとユーノの表情を曇らせる。

「ごめんね、アルフ。それでも私は、あの母の娘だから」

「俺もアルフの意見には賛成だ。だが、フェイトがまだ続けると言うのなら、俺はそれに協力する。」

「すまないなアルフ、君の思いには応えられない」

ルシルの発言にみんなが驚いている。

まあルシルの性格ならそういうのは分かっていたけど、それでも尚フェイトに協力するというのは聞き捨てならない。

そうして私の頭の中の何かがキレた。

「いい加減にしなさい！！ ルシル！！」

私は突発的にルシリオンの愛称を叫ぶ。

しまった、と思ったが、どうせそう遠くない内に知られるのだから、それで良しとした。

けどそれを聞いたフェイトとアルフは案の定驚いている。

「シ、シャル？ どうしてあいつの・・・名前を・・・？」

アルフが動揺しながら聞いてきたので、私は正直に答える。

「それは彼が、この私、白きシャルロッテと対を成す黒きルシリオンだから。」

んで彼は私のパートナーだったやつだからよ。本当ならこのまま連れ戻したいけど、もういい。

一度ボコボコにしてから強制連行することにしたから」

「ゼファイ君、ううん、ルシリオン君とは本当に知り合いなの、シャルちゃん？」

なのはが驚いた表情のまま、本当に知り合いだったのか、と聞いてきた。

それはそうだが、今までのことを考えたら信じられない話だろう。けど、私は誤魔化さないし、もうこれ以上騙してたくはない。

「ごめんなのは、本当のことなのよ。私は彼と知り合いなの。あなたとユーノに、ルシルの、彼女たちの仲間だと思われて嫌われなくなかったから嘘を吐いてた。

後でならどれだけ罵ってくれてもいい。だけど今は、今だけはあなたの味方として一緒に」

戦ってほしい、と最後まで言えなかった。

たとえ嫌われるようになったとしても仕方ない嘘をつき続けてたから。

「そっか、うん、確かに嘘を吐かっていたことは少しショック、かも。

ただね、それでもシャルちゃんは私の大事な友達だよ。だからそんな悲しいことを言わないで」

なのはが笑顔でそう言ってきてくれた。

正直泣きそうだけど、何とか耐える。

「……ルシル」

フェイトがルシルの顔を見て戸惑っている。

ルシルは私たちを見たままで、口を開く。

「どうするフェイト？ 俺がシャルのパートナーだったというのは
真実だ。」

もう信用出来ないと云うのなら、協力関係を切ってもらってもいい
んだ」

「ううん、今までのルシルを見ているから、私は大丈夫だよ。
でも、後でいっぱい文句を聞いてもらうから」

「そうか、なら最後まで付き合おうよフェイト」

どうやらあつちも現状のまま共に戦おうようだ。ならば、今回でケリ
をつけるまで。

「フェイトちゃん、ルシリオン君、お互いのジュエルシードを賭け
て戦おう。」

私とフェイトちゃんは、全てそれからだよ。私たちの全てはまだ始
まつてもいないから。

だから、本当の自分を始めるために、始めよう。最初で最後の本気
の勝負……！」

なのはからの宣戦布告。フェイトもそれに乗り気なのか“バルデイ
ツシユ”を構える。

そうして二人は空高く飛んでいった。

「さて、フェイトとなのはも始めたし、俺たちも始めようか、これ
からを」

「ええ、そうね、始めよう、これからを。でも手加減はしないから」

私は真紅の片翼を出して、空戦モードへと移行する。

「よく言った、こちらも本気を出させてもらおう」

ルシルが“グングニル”を手にゆっくりと降りてくる。

そうして私たちは、なのはたちの邪魔にならないように遠くへと場所を移す。

かなり遠くへ場所を移して、対峙する私とルシル。

「「参る！！」」

その言葉を戦闘開始の合図として、私とルシルは最後の戦いを始める。

ルシルは一瞬で距離を詰めて、“グングニル”を薙ぐと同時に光の波を出現させる。

「っ、はああッ！！」

それを切断するものの、“キルシュブリュート”を持つ右手が痺れる。

「ぼさつとしている暇はないぞ、シャル！」

我が手に携えしは確かなる幻想

「くっ、まだまだあ！」

ルシルは自分を軸に回転しながら“グングニル”を振り回している。私もルシルの動きに合わせて回転しながら、それを避けては捌くと

いう行動で防ぐ。

二つの神器が衝突を繰り返し、周囲を照らし出すほどの火花が飛び散らせる。

ルシルは一度間合いを取り、人差し指を向けて中距離系術式を発動しようとしている。

が、黙って見ているつもりはない。

「双牙氷風、双牙炎雷、双牙凶閃・・・双牙奥義、滅牙翔破六天刃
！！」

属性同時使用の最大術式、6つの属性の刃を六閃放つ。

これでルシルの術式の出がかりを潰せると思った。

ゼロ・オスキュラス
「黒虚閃」

（あっちの方が早い！？）

私たちの間で衝突した力は、爆発を起こして周囲のものを薙ぎ払った。

ルシルは続けて、腕を振り降ろすようにして術式を発動させる。

デザート・ラスバーダ
砂漠の金剛宝刀 - -

砂で出来たいくつもの刃が襲い掛かってくる。

「このおおッ！！」

エヒト・オルカーン
風牙真空烈風刃

真空の刃を複数巻き込んだ風圧の砲撃で砂の斬撃を吹き飛ばして、

ルシルのもとへと全力で疾走する。
ただドルシルは、私の行動を逆手にとり、両腕に炎が渦巻かせて攻撃態勢に入っていた。

「やあいらっしやい、不用意に近づいたのがまずかったな……！」

煉牙灼星 爆帝 双焰掌

「な……!？」

以前受けた風牙裂千 空帝 双嵐掌の炎熱バージョンだ。
これは受けると本当にまずい。勢いがつきすぎて停止は不可能、なら盾を出すまで。

ゼーリッシュ・ウイーター・シュタン
我が心は拒絶する - -

ルシルの掌打と私の対物障壁が激突し、私は攻撃を受けることなく踏みとどまれた。
ただドルシルはさらに追撃を仕掛けてきた。

光牙輝星 天帝 双煌掌

その閃光纏う両の掌底の一撃によって、一瞬で盾にヒビが入り所々が碎けていく。

これでダメなら、もう一つの盾を用意するまで。

「これなら……どう!？」

ハイリヒ・フライハイ
真楯

真紅に輝く円にフライハイト家の紋章が浮かぶ私の最高の盾。魔力が足りない為に防御力は低い、ルシルの複製術式には遅れはとらない。

ルシルの攻撃と私の盾が拮抗したのを見て、私は反撃の準備に移る。“キルシュブリューテ”の刀身に真紅の魔力を纏わせ、

「いつけええーっ！」

リッター・ネーメズイス
光牙烈閃刃

縦一閃に振り下ろすことで放たれる真紅に輝く剣状砲撃。

至近距離での一撃を放ち、これで決着させようとしたけれど、ルシルが光の粒子となって地面へと消えた。

（見失った!? 一体どこから攻撃が・・・!）

リベリアス・リベントンス

「なっ!? ぐっ!? があはあ!?!」

私の真下から光の粒子のまま突き上げ、また真上から撃ち降ろしてきた。

まずい、これはかなり強烈だ。意識が少しとびかける。

「ぶらっついている場合か?」

パーフェクト・シンメトリー

ルシルの翼から巨大な光球が生まれ、私に向けて叩きつけてきた。私は必死に転がるようにして直撃を避けるけど、着弾と同時に生ま

れた衝撃波で吹き飛ばされる。

「ハアハアハア、くっ、このままじゃ・・・！」

負ける、と脳裏に浮かぶ。だがそれを振り払い、“キルシュビューテ”を構える。

「諦めない、諦めない、諦めない！ 私は騎士！ 膝を屈せぬ誇り高き者！」

「むっ！？」

再度接近して、斬撃を放ち続ける。

ルシルは“グングニル”を振るって、辛うじて防いでいるが次第に押されていく。

複製の術式や武装を顕現させる為の呪文を声に出させない為に、勢いだけで立ち向かう。

「チツ、またこの策で俺の複製術式を防ぐか。もう少し考えたらどうだ？」

我が手にたずさ

「させない！」

私は瞬時に鞘を作り出して、ルシルの喉もとを打ち付ける。

「がっ・・・！？」

さすがにこれは効いたようだ。ルシルは“キルシュブリューテ”に

ばかり気をとられていた。

その所為で、私が鞘を持っていることを忘却していたようだ。のどにダメージを受けて声が出せなくなった以上、詠唱が出来ない。つまり複製術式は使えない。

ルシルは急いで間合いを取ろうと離れるが、私はそれを許さない。

「はああああああ！！」

ルシルは私の追撃を回避するが、蒼翼の左側だけは犠牲になった。ガラスが砕けた音とともに散っていく無数の蒼い羽だったが、突如その羽が襲ってくる。

「っ！？ キヤアアア！！」

私はそれを防御も回避することも出来ずに、全弾命中させられた。戦闘甲冑がボロボロになってしまい、所々の肌が見えてしまっている。

「や、やってくれたわね……」

『ハハ、油断のしすぎだよシャル』

私は膝をつき、ダメージの回復をしながら戦闘甲冑の損傷を修復する。

我が手に携えしは確かなる幻想

ルシルはかすれた声で、かの呪文を口にする。
そして私に手の平を向けて術式を宣告する。

「くられ、凶神の」

テネブライ

「こんのおおおお!!!」

私は回復と修復を途中でやめて、真紅の片翼を纏いルシルへと突撃する。

純粹な破壊の力の塊として、ルシルを潰しにかかるためだけの突撃。ルシルは私の行動に驚き一瞬動きを止め、攻撃ではなく回避行動をとって上空へと逃げるが、その先には、

「何だと・・・!?!」

(決まった。私の勝ちね、ルシル)

私が先に仕掛けておいたトラップ。
不可視である風の圧縮爆弾トベン・ウルトの直撃による爆風によって、ルシルはどこかへと吹き飛ばされていった。

「ふう、まあ戦闘甲冑を着ているんだから死んではいないでしょ」
ルシルとの戦いは、私の勝利という結果で決着した。
さてと、なのはたちの様子を見に行きましょうか。

十 十 十 十 十 十

ルシルとシャルロッテと名乗った子が、遠くへと離れていった。
シャルロッテという子は、私と出会う前のルシルのパートナーって言うてた。

(パートナー、か。ルシルとどれくらいの間、一緒にいたのかな?)
そう考えると胸のあたりがチクチクとしてきた。
初めての感覚に戸惑うけど、ルシルはあの子より私と一緒にいてくれることを選んでくれた。
そう思うとさっきのチクチクがドキドキになった。

(うう、にやけちゃうよ)

だめだ、今は白い子との戦闘が大事だ。
私は白い子に向かって、フォトンランサーを撃つ。
白い子も同じ射撃魔法で私を狙ってきた。

「ファイア!」

「シユート!」

お互いを撃つために、魔力弾が交差して向かってくる。
あの子は全弾回避、私も回避行動を取るけど追尾してくる。
振り切れないとわかったために、シールドを張って防御に移る。
防ぐことに成功したが、あの子は再度射撃魔法の発射準備を終えていた。

「シユート!」

私は魔力弾に対処しながら接近し、直接あの子にダメージを与えることにした。

バルディツシュをサイスフォームへと変え、魔力弾を切り払いながら接近する。

白い子は回避より防御を選んでシールドを張る。

衝突する刃と盾、私が前方に気を取られていると、背後から魔力弾が襲い掛かってきた。

けど私は難なくシールドを張って防御した。

そして気付く、周囲を見渡しても白い子がどこにもいない。

(いない？ 一体どこに・・・?)

Flash Move

あの子のデバイスの声だけが聞こえる。

少し遅れてあの子の声が聞こえた。

「せえええい!!!」

あの子は、私の頭上に移動していた。

そうして突撃しながら私に向けてデバイスを振り下ろした。

私はその姿に一瞬だけ硬直し、シールドではなく“バルディツシュ”を盾にした。

魔力の爆発による衝撃波が周囲を照らし出す。私はその光の中を進み、あの子へと切りかかる。

Scythe Slash

ただであの子はギリギリで回避して、私はあの子のリボンだけを少し裂いただけだった。

けど無駄だ、あの子が逃げた先にはすでにフォトンスフィアを用意

している。

Fire

バルディッシュの合図とともに、あの子へと襲い掛かるフォトンラ
ンサー。

あの子は咄嗟にシールドを張り、何とか耐えている状態だ。

正直、今で決まると思っていたけど、上手くはいかないものだ。

（初めて会ったときは、魔力が強いだけの素人だったのに、もう違
う。

速くて強い、迷っていたらやられる）

母さんのためにも、私についてきてくれたルシルのためにも、私は
負けられない。

だから私は、私の最強の魔法を放つ決意をした。

十 十 十 十 十 十 十

フェイトちゃんの周囲に電気を放つスフィアがたくさん現れたので、
私は“レイジングハート”を構える。だけど、その瞬間にバインド
に捕まってしまった。

『ライトニングバインド!? まずいフェイトは本気だ!』

『なのは! 今すぐサポートを!』

私が捕まったのを見て、ユーノ君が念話で私を助けると言ってきた

ので。

「だめええっ!!」アルフさんもユーノ君も手を出さないで！
全力全開の一騎打ちだから、私とフェイトちゃんの勝負だから」

私はそれを拒否して、このまま戦わせてくれるように告げた。

『でもフェイトのそれは本当にまずいんだよ!』

「大丈夫、平気!!」

絶対に誰にも邪魔させない、この戦いは私とフェイトちゃんだけのものだから。

「アルカス・クルタス・エイギアス、疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。

バルエル、ザルエル、プラウゼル……!!」

フェイトちゃんが長い呪文を唱え終えた。

「フォトンランサー・ファランクスシフト、撃ち砕け、ファイア!
!」

フェイトちゃんが腕を振り下ろして私に指を向ける。

その号令と共に無数のフォトンランサーが襲い掛かってきた。

「レイジングハート、お願い」

私はフェイトちゃん用に組んでいたライティングプロテクションを直撃の瞬間で張った。

たぶん、フェイトちゃんからは見えていないはずだ。

十 十 十 十 十 十

「フォトンランサー・フランクスシフト、撃ち碎け、ファイア！」

私はあの子に、最強の魔法を放った。

本当ならここまでしたくなかったけど、あの子がすごく手強くなっていたことで、手加減をすると私が負けることになると思ったから、だから使った。

「くっ」

心が痛む。

私と友達になりたいって言っていたあの子を撃ったことに罪悪感が生まれる。

けど私は負けられない。止めの一撃として残っているフォトンスフィアを集めて、再度フォトンランサーを撃とうとして構える。ただ白煙の中から無事な姿で浮遊するあの子を見た。

（うそ、あれを受けたのに、あれだけのダメージしか与えられていない！？）

これだけのショックは、ルシルと戦ったとき以来だ。

「痛ったあ、撃ち終わると、バインドつても解けちゃうんだね」

そうやってデバイスを私に向けて砲撃の準備に入った。

「今度はこっちの Divine 番だよ！ Buster」

放たれる桃色の砲撃、私は構えていたフォトンランサーをそれに向けて放つ。

だけど、そんなものは意味は無いと言わんばかりに消されてしまった。

私は咄嗟にシールドを張り、防御に全力を注ぐ。

「（直撃！ でも耐え切る。あの子だって耐えたんだから！）っ、うぐっ、ああ・・・！」

威力がハンパじゃなかった。これだけの砲撃をほとんど溜めもしないで撃つなんて、あの子はとんでもない魔導師だ。

私はあの砲撃を耐え切って、もうポロポロだ。

もう何も出来る気がしない。けど、それはあの子も同じはず、そう思った。

「受けてみて、デイバインバスターのバリエーション」

その言葉と共に、現れた魔方陣へと光が集まっていく。

それはまるで星の光のような綺麗なものだった。

私は残る力で何とかしようとしたが、今度は彼女のバインドが私を捕える。

「バインド！？」

外れない、外せない。

これはまずい。あんなのを受けたらどうなるか分からない。

「これが私の全力全開！ スターライト・ブレイカーー！！！！！」

とてつもなく巨大な桃色の閃光。もうダメだ、私はこれで終わる。
光に飲み込まれた後、私は海へと落ちた。

(ごめんねルシル、ごめんなさい母さん)

十 十 十 十 十 十 十

「俺たちの負けみたいだな」

俺は自力でシャルたちのもとへと戻ってきた。

正直、シャルがあんな手を使ってくるとは思ってもいなかったために油断した。

いや、それは言い訳にすぎない。この大一番で負けたことは消えない事実だ。

「おかえりルシル、どこまで飛ばされていたの？」

「・・・ほっとけ。それよりアルフ、今まで騙していてすまなかった。

謝ったところで許してもらえるとは思っていないが、それでも謝っておく」

俺はアルフに頭を下げて、心の底からの謝罪を口にした。

「フェイトが言ってただろ？　今までのあんたのことを思えば、そんなことはどうでもいいって。あたしもそうだよ、ルシル」

アルフは本心からそう言ってきているようだ。本当にいい奴だよ、君は。

「そうか、ありがとう。それじゃあフェイトたちを迎えに行こうか」

俺たちは浮遊している二人に視線を向ける。

二人で何か話しているようだが、俺たちには聞こえない。

だが、そこで再びプレシアの魔法がフェイトに襲い掛かろうとしていた。

しかし俺だって、何の対策も考えていないわけじゃない。

「ただ祈りて、其は高みの盾とならん」

白銀に輝く雪の結晶のような盾を、二人の真上に顕現させた。

白と黒の決戦（後書き）

さて、今回でなのは組とフェイト組のジュエルシード争奪戦は終了です。

次回はフェイトの真実と、プレシアとの決戦を書こうかと思っています。

其は抑止の力と戻りて

ユーノ君に協力してもらって組んだ魔法、スターライトブレイカーを撃った。

もう私には魔力はほとんど残されていない。

「はあはあはあ、あ……！」

フェイトちゃんは気を失ってしまったのか、海へと落ちていってしまっただ。

「フェイトちゃん！」

あのままではいけないと、すぐに助けに向かう。

沈んでいくフェイトちゃんとバルディッシュを抱えながら、海から脱出した。

「っ……ん……」

フェイトちゃんが小さく呻いた。気が付いたみたいだ、よかった。

「あ、気付いたフェイトちゃん？ ごめんね、大丈夫？」

「……うん」

心配して声をかけると、フェイトちゃんは頷いてくれた。

「私の勝ち、だよな」

「そう、みたいだね」

私は微笑みかけて、一応確認を取っておく。

フェイトちゃんは少し辛そうだけど負けを認めてくれた。

P u t O u t

“バルディッシュ”が、フェイトちゃんが負けを認めたと同時に、ジュエルシードを出した。

よかった、これでもうフェイトちゃんたちと争わなくてすむんだ。

「フェイトちゃん、飛べる？」

そう言うと静かに私から離れる。きちんと“バルディッシュ”も返す。

『よし、なのは、ジュエルシードを確保して、それから彼女を』

クロノ君からの念話が途中で途切れる。

何かあったのかと思っていると、急に空が曇りだして雷が落ちてきた。

(このままじゃ、フェイトちゃんがあの時みたいに！！)

でもフェイトちゃんに当たる前に、私たちの頭の上に白いよつで銀色の、雪の結晶のようなものが現れた。

「っ！？ これはルシルの魔術！！」

私とフェイトちゃんは、その結晶のおかげで無事だったけど、驚いていたその隙に、フェイトちゃんのジユエルシードが転送されてしまった。

こうなつては私の出来ることは無くなり、シャルちゃんたちと合流するために、地上へと降りた。

＋
＋
＋
＋
＋
＋

私たちは、フェイトたちを連れてアースラへと帰艦した。

ルシルとフェイトは、簡素な服に着替えた上で手錠をされてしまっている。

（かつての大英雄の手錠姿が見られるなんておかしな話よね）

ブリッジに到着すると、リンディ艦長がルシルたちのもとへと来て挨拶をした。

「お疲れ様。それから初めまして、フェイトさん、ルシリオン君。このアースラの艦長、リンディ・ハラオウンです」

フェイトは口を閉ざしたままだけど、ルシルは挨拶した。

「魔術師ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードです。」

と言っても調べているのでしょうが礼儀ですので」

私はルシルたちからモニターに視線を移し、現在の状況を確認する。プレシアの拠点へと進攻するアースラの魔導師（武装隊だっけ）たち。

「なのは、悪いがフェイトを別の部屋などに連れて行ってくれないか？

構いませんよねリンディ艦長？」

ルシルはフェイトに母親が逮捕される場面を見させないために、二人に確認する。

「待つてルシル。私は大丈夫だから、逃げたくないから」

フェイトはそう言つて断る。

それと同時に、武装隊がプレシアを包囲して投降する様に呼びかけた。

頼杖をつき、不適に笑みを浮かべるプレシアの態度は余裕で満ちていた。

プレシアのもとに数人残し、残りは玉座の先へと調査する為に入つていく。

そしてブリッジのモニターに映つたのは、フェイトに似た、いや、少し幼いふうに見えるが同じ姿の少女が水槽のようなものに浮いていた。

私とルシル以外はみんな驚いているみたいだ。

「私のアリシアに、近寄らないで！」

プレシアはアリシアの水槽の前に立ち、武装隊の何人かを吹き飛ばす。

武装隊の連中は、プレシアの今の行為を見て構わず攻撃に移った。だがプレシアは何とも思わないのか、それを容易く防ぎ、手の平を前に差し出す。

「危ない！ 防いで！」

リンディ艦長の声がブリッジに響く。

だがその指示は少し遅かった。プレシアの広範囲の雷撃に、武装隊は全滅した。

（なるほど、あれが大魔導師と謳われた力というわけね）

リンディ艦長は気を失っている武装隊の送還を指示している。

「アリ・・・シア？」

フェイトが何かしらの名前を呟く。おそらくあの少女の名前なのだろう。

プレシアはゆっくりと水槽へと近づき、手を添えて撫でる。

それはまるで、あの少女を優しく撫でるかのような仕草だった。

「もうだめね、時間が無いわ。たった十個のロストロギアでは、アルハザードに辿り着けるかはどうか分からないけど」

私は不穏な単語を聞いた。プレシアはまだ何か喋っているし、エイミーも何かしらの説明をしている。だが、今はあの単語のほうが気になる。

（アルハザード。やはりこの次元世界は、私たちの生きていた世界、みたいね）

此処に来てやっと確信する。何故十一柱存在する“テスタメント界律の守護神”の内、私とルシルが呼ばれたのか、それは二人ともこの次元世界の出身だからだ。

次元世界と関連を持つからこそその召喚。それだけじゃない。前々から思っていた、何故魔法と魔術に類似点が多くあるのか。それも説明がつく。現代の魔法のもとになっているのが、私たちの魔術だからだ。

(でもプレシア、残念だけどあなたの願いは叶わない。何故なら、アルハザードはすでにルシルの手によって消滅したから) そう、アルハザードは、天秤の狭間で揺れし者、4th・テストメント・ルシリオンによって、すでに宇宙の塵と化してしまっている。

「黙れ!!」

深く思考していたのを、ルシルの怒号によって意識を現実に取り起こされる。

よく聞いていなかったために話についていけないが、どうせプレシアがルシルの逆鱗に触れるような発言でもしたのだろう。全く愚かな女だ。

十 十 十 十 十 十

「黙れ!!」

フェイトを娘でなく、人としても見ていなかった上に、あの暴言。

プレシアのフェイトに対する異常なまでの態度にもっと考えていればよかったと、今になって後悔する。

あの少女、アリシアを復活させる為の、自分の慰みだけの、偽者の人形。

最後に放った「大嫌い」というフェイトを否定する言葉。フェイトはそれを聞いて、バルディッシュを取り落とす。

俺は今まで似たような、さらにはもっと酷いことを見て聞いてきたが、今回はいつも以上に頭にきた。

やはりフェイトにシエフィを重ねているからだろうか？

そうじゃない、それはもう吹っ切った。

俺はフェイトに笑っていてほしいから、幸せになってほしいから、それを邪魔しようとしているあの女が許せないんだ。

「死者の蘇生？ 笑わせる！ たかが人間風情が上位種どもの真似事か！？」

全ての存在に対して死は、滅びは必然！ それを無理矢理捻じ曲げようとすれば世界はそれを許さない！たとえ成功したとしても、蘇生された者は世界の意思によって消されるだけが定め！

それすら分らない貴様は二流もいとこ三流以下だよ、プレシア・テスタロツサ！！」

禁呪の一つに指定されている死者蘇生の魔術式。

実際それを行った者を見たが、あれは酷かった。

蘇生した者、された者は世界の修正力いかりによって瞬く間に殺された。もちろん、その者たちの魂すら残されずに、だ。

そもそもプレシアは、アリシアの肉体うづわだけを保存している状態だ。アリシアの魂が無い以上、出来るのは姿かたちが同じだけのクローン、言うなれば双子のようなものにしかならない。

「っ!?!? 前にも言ったけど、世界が私たちに干渉するこ」哀れね」
「!?!?!?」

シャルが俺の横に立ち、一言呟いた。

モニター越しにプレシアを見るその目は明らかな怒り、呆れ、憐憫、おまけに軽く殺気も混ぜた眼差しだ。

「ジュエルシードを使ってアルハザードへ行く? 馬鹿馬鹿しい。確かにあなたのアリシアへの想いは本物なのでしょね。

愛する人を取り戻したいって気持ちくらいは、私にも少し理解出来る。

でもね、あなた個人の意思で世界を滅ぼすような真似だけは許さない。

それにルシルが言ったとおり、死者蘇生は奇跡中の奇跡、成功はない。

それでもやりたいなら、まずは人間をやめることをお勧めするわ」

シャルが、プレシアに向けて静かに告げる。

誰かを蘇らせたいたい気持ちは分かって、でもそれは許されないと。

その様子から、シャルが言っていることが真実だと、プレシアを含めたみんなが、シャルをただ見ている。

そしてその沈黙を破ったのはプレシアだ。

「どうして、どうして!?!? 分かるならどうして私の邪魔をするの!?!?!?」

「言ったでしょ、死者の蘇生は不可能だって。

それにジュエルシードを複数発動させれば、世界が滅びかねない。それを邪魔したいのは当然でしょ」

シャルとプレシアの会話は続き、最後にプレシアは壊れたかのように笑い声をあげた。

「フフ、ウフフ、アハハ、アハハハハハハハハッ！！！！」

もういいわ、こんなくだらな時間経過するのはもう御免よ。

あなたが何と言おうと、私はアリシアとともに全てを取り戻す！！！！！！」

そうしてあちらとの通信が切れた。

もう形振り構っていないため、急いで止める必要がある。

＋
＋
＋
＋
＋
＋

私もルシルに続いてプレシアに声をかけた。

世界は本当に気まぐれだ。ときには与え、ときには奪う。

それは誰にでも起こりうる事実、それを認めなければ生きてはいけない。

だけどプレシアはそれを認めようとしなない。

それがあまりにも哀れで、悲しかった。

私の説得もむなしく、プレシアはジュエルシードの強制発動に入るみたいだ。

こうなったら力づくで止めるまで。

「クロノ、私がプレシアを止めてくるから、転送装置の準備お願い」
ルシル、あなたはフェイトの側にいてあげて。そのほうがいいと思

「うわ」

「待て、僕も行く！　なのは、ユーノ、君たちにも手伝ってもらいたい！」

私はルシルとクロノに声をかけ、時の庭園へと行く準備を始める。クロノは、なのはとユーノに協力を頼んでいるが、連れて行くにはあっちは少し危険だと思うけど。

「う、うん。でもフェイトちゃんが・・・」

なのははフェイトの様子を見て迷っているが、今はプレシアを優先するのが妥当だ。

だから私は、ルシルにフェイトを任せるって言ったんだけどな。

「なのは、そこはアルフとルシルに任せなさい。
あなたよりずっと長い時間を過ごしたんだから、あなたよりは適任よ」

「・・・うん。アルフさん、ルシリオン君。フェイトちゃんをお願いします」

なのはは渋々了承して、ルシルたちに返事を聞いてから転送装置へと向かった。

時の庭園へと着き、私はもう一つの準備を始めた。

「契約執行形態、顕現」

私は“界律テスタメントの守護神”の外套と仮面、そして純白に輝く葡萄十字、

神造兵装“第三聖典”を武装する。

ブリッジでの準備は界律との精神^{リンク}接続を行い、現状を確認することだった。
そうして分かったのが、

能力値を20%まで使用可能、最大魔力をSSSランクに設定、術式最大ランクをXXランクまで設定、魔力炉^{システム}の完全正常稼働。
“^{テストメント}界律の守護神”の能力の使用可、第三聖典の使用可

そして契約内容が新たに追加された。
ジュエルシードによる世界消滅の阻止、契約執行方法は独自判断、といったものだった。

“^{テストメント}界律の守護神”の能力が使えるなら、能力値や魔力量なんて意味がない。
あの力を扱えるのであれば、私たちに敗北は、“^{れいがい}アポリュオン”を除いて存在しない。

「シャルちゃん、その格好ってルシリオン君と同じやつ、だよな？」
私の格好を見て、なのはが聞いてきたので、私は仮面を外して答える。

「ええ、私のもう一つの姿よ。ルシルは漆黒を担い、私は純白を担うの」

そうしてその場で一回転して見せる。髪と外套がフワリと浮く。それを見ていたクロノは、呆れたかのように口を挟んできた。

「お楽しみのところ悪いが、急いでいるんだけど」

「分かってるって、さてとあれが敵ね」

目の前に現れたのは、甲冑姿のおもちゃたち。

なのはが攻撃の準備に入るが、それを邪魔するクロノ。さらに私がクロノの前に立ってそれを邪魔する。

「ここは任せて。なのはたちは今後のために魔力を温存しておいて」

「え？ でもシャルちゃん」

「何を言っている、あれだけの数なら僕も手伝う」

二人がそう言っている間に、私は第三聖典を振るい、おもちゃたちを破壊した。

脆い、脆すぎる。この程度では準備運動にすらならない。

「「「！」「」」

三人ともその一瞬の攻撃に啞然としている。

当然かもしれない、ただ十字架を振るっただけで、あれだけの数を殲滅したのだから。

「ほら、急ぐんでしょ？」

私たちは、クロノを先頭に時の庭園を進んだ。

十 十 十 十 十 十 十

シャルたちが時の庭園へと侵入したみたいだ。

俺とアルフは、フェイトを医務室へと運び、横にさせている。まだこんなに幼い子には、さっきのあれは刺激が強すぎた。生気のない瞳をしたフェイトを、心配しているアルフ。その姿は使い魔ではなく、フェイトの姉のような存在に見えた。俺はフェイトの心を取り戻す為に言葉を選び、口にし始めた。

「フェイト、フェイトは本当にこのままでいいのか？
このまま何もせずに、ただここで眠っているか？」

「っ！？ ルシル、あんた！？」

アルフがフェイトの側から俺のもとへと来て、掴み上げてきた。それを甘んじて受けながら言葉を続ける。

「っ、フェイト、なのはは言っていたな、まだ始まっていないと。俺も彼女に同意する。君の今まではプレシアの言うままに過ごしてきた。」

ならば、もうそろそろ自分の思うままに生きてはみないか？」

「……私の……思うまま？」

フェイトはようやくやく反応を示したが、未だに瞳に輝きを取り戻してはいない。

アルフは俺を降ろして、フェイトの方へと顔を向ける。

「そつだ、自分の意思で自分のしたいことをする。それが人間ヒトというものだ。このままプレシアと別れるのは嫌だろ？ 確かにあのようなことを言われたが、まだ終わってはいないんだ。まだ間に合うかもしれない。だから自分の今、心にある想いをぶつける。」

君は、フェイトは間違いなくプレシアの娘なのだから」

「っ！ 想いを・・・ぶつける・・・うん・・・。そう、だよな、まだ私は始めてもいなかったんだ。行こう、アルフ、ルシル。母さんのところに！！」

フェイトは立ち上がり、バリアジャケットを着て、そう宣言する。

「うん！ うん！ 行こうフェイト！」

アルフは泣きながらそう告げる。それにしてもよく泣くなアルフ。フェイトはアルフの頭を撫でながら微笑んでいる。

「よし！ そうと決まれば行こうか、フェイトファミリー！！」

俺は左こぶしを右の手のひらに打ちつける。

「おお！！」

「は、恥ずかしいよルシル」

アルフはノリノリで右腕を高く上げ、フェイトは頬を少し紅く染めて呟く。

さて、俺も本来の力を顕現させようか。

「契約執行形態、顕現。及び、第三級断罪執行権限、解凍」

“テストメント界律の守護神”の外套と仮面、そして漆黒に輝くケルト十字、神造兵装“第四聖典”を取り出し、武装する。

そして生前から使っている執行権限を第三級に設定する。リミッター

すでに精神接続を終えて、現在の状況は確認してある。リンク

契約内容は、

ジュエルシードの使用による世界消滅の阻止。

能力値を18%まで使用可能、最大魔力をSSSランクに設定。

固有魔術、攻性術式をX+ランクまで使用可、ただし威力はSSS設定。システム

魔力炉の完全正常稼働、神々の宝庫、英知の書庫、英雄の居館の使用不可。

“テストメント界律の守護神”の能力の使用可、第四聖典の使用可

ということだ。ようやく固有攻性術式の使用が可能となった。

まあ中級以上は未だに制限されたままだが、それで十分だろう。

こうなれば相手が人間である以上、負けはない。

唯一の例外として、“アポリユオン絶対殲滅対象”には苦戦を強いられるが。

今は関係ないので、その考えは強制停止させる。

そして俺たちも、シャルたちに続き時の庭園へと進んだ。

十 十 十 十 十 十 十

私は今、プレシアのもとへ誰が行くか、クロノと言い争っていた。こんなときまで言い争いなんて馬鹿みただけど、クロノは至って真面目だ。

二人して、機械の兵隊どもを片付けながら怒鳴りあっている。

「だから！ 私なら何とか出来るって言ってるでしょ！」

「いいや！ プレシアの逮捕は執務官である僕の仕事だ！ 君はなのはたちと駆動炉の停止に向かえ！」

「えっと、こんなことをしている場合じゃないようなく」

「なのは、危ないから下がっていたほうがいいよ。」

シャルの攻撃に巻き込まれたら、ただじゃ済まないような気がするから

私はクロノを力づくで黙らせる為に、一度攻撃をやめた。

けど、それがまずかった。なのはとユーノは五体の機械兵に囲まれた。

ああもう！ クロノの馬鹿！！

すぐさま援護に移ろうとした瞬間、

「サンダーレイジイイー……！！……！！」

頭上からフェイトの声とともに降り注ぐ雷撃が、なのはたちに襲い掛る機械兵を撃墜していく。

(ルシルはちゃんとフェイトの心を取り戻したみたいね)

だが、次々と小さいのやら大きいのが出てくる。
そして次に聞こえたのが、

「罪ある者に・・・汝の慈悲を」

久々に聞くルシルの固有魔術の術式名。

降り注ぐのは、蒼く輝く様々な形をした雷撃を纏う十数個の十字架群。

標的に当たると同時に、周囲に雷撃をばら撒き、連鎖的に標的たちを殲滅するルシルの雷撃系対軍攻性術式だ。

数十体といった機械兵は一瞬の内に消滅した。

いつ見ても凄いものだ。天使の名を冠する中級術式でこの威力。
神の名を冠する上級術式は、あまり見たことがないがやはり凄いものだった。

「フェイトちゃん！」

なのはが嬉しそうにフェイトへと向かっていく。
そしてルシルは、私のもとへと近づいてきた。

「ルシルもどうやら、制限がいくつか解かれたみたいね」

私がそう言うと、ルシルは仮面を外しながら返事をしてきた。

「ああ、中級までの術式なら問題なく使えるけど、威力は制限されてる。

まあテストメントの能力が使えるなら、魔術は必要なくなってしまう

うが。

それより、何故未だにこんなところにいるんだ？

てっきりプレシアのもとへとたどり着いていたと思ったが・・・」

と返してきたルシルに苦笑いをしながら答える。

「いや、クロノと少し揉めててね。

誰がプレシアのもとへ行き、誰が駆動炉を停止させるかって」

「うわっ、くだらない理由。うん、そうだな・・・よし。

フェイト、アルフ、悪いが俺とはここで別行動だ。

二人はシャルたちと共に、プレシアのもとへ行ってくれ。

俺一人で駆動炉を止めてくるから、フェイト、場所を教えてください」

ルシルは一人で決めて、フェイトに駆動炉の場所を聞いている。

フェイトは少し戸惑っていたが、諦めたように場所を教えている。

「大丈夫だよフェイト。すぐに追いつくから」

「うん。早く、戻ってきてねルシル」

「ああ、それじゃあみんな、フェイトとアルフを頼んだよ」

ルシルは返事を聞かないまま、駆動炉を目指して飛んでいった。
全ての行動が嵐のようなものだ。

なのはたちは、そんなルシルを見て呆然としたままだった。

「じ、じゃあ、僕たちはプレシアのもとへと急ぐぞ！」

置いていかれていたクロノがそう言い、私たちはプレシアのもとへ

と急いだ。

十 十 十 十 十 十 十

俺は駆動炉のある場所に来たが、行く手を阻むガラクタの群れが現れた。

（さてと、さつさと終わらせて合流しないといけないから、悪いが一瞬で終わらせてもらっぞ）

俺は静かに歩を進め、ガラクタの群れに接近していく。

「輝き燃える・・・汝の威容」
コード ケルビエル

術式名の宣告とともに顕現するのは、地面から蒼炎を吹き上げさせ、周囲の標的を例外なく燃やし尽くす、炎と稲妻が吹き出しているといわれる天使の名を冠する術式。

一瞬でガラクタどもを焼滅させて、一体も残っていないのを確認した俺は、駆動炉の停止に移った、が。

（しまった、どうすればいいんだ？）

俺は詳しい方法が分からない為、力づくで停止を試みた。

十 十 十 十 十 十 十

「す、すごい。ル、ルシリオン君の推定ランクはSSS相当。シャルちゃんも同じSSSランク・・・艦長、これって・・・」

「え、ええ。とんでもないものを見たわ」

私は今、時の庭園へと移動し、ディストーションシールドを張って次元震の進行を抑えていた。

そんなときにエイミーから、シャルロットさんとルシリオン君の本当の力と推定ランクを見せられた。

正直、あの二人に恐怖を感じた。

あんなにも簡単に敵を倒し、それを当然と言わんばかりのあの二人の様子に。

「本当に味方で良かったとつくづく思うわね」

「そう、ですね。あの二人が敵になっていたと思うと・・・うわあ、考えたくありませんよ」

私も当然それに同意する。あの二人が敵になっていたと思うと、管理局の魔導師では誰一人として太刀打ちできないだろう。

私はそんなIFを思いながら、現状維持のまま庭園に残る。

十 十 十 十 十 十

「直接会つので初めまして、プレシア・テストロッサ。あなたの計画を潰しに参りましたシャルロットです」

ハッキリとプレシアの邪魔をすると口にして面と向かう。
その言葉にプレシアの表情が怒りに歪む。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。
プレシア・テスタロツサ、時空管理局艦船アースラへの攻撃、ロス
トロギア“ジュエルシード”の違法所持及び、使用の罪で逮捕する
！」

クロノが私を押しつけ、罪状を口にする。
痛いっ、ていうかフェイトの前でそれはダメだろう仕事人間^{クロノ}？

「母さん……」

フェイトは私たちの前に出て、小さく母さんと呟く。
アルフとなのは、ユーノはそっとフェイトの側にたたずんで、事の
成り行きを見守っている。

「今更何の用？ 私はアリシアとともに過去と未来を取り戻すのよ。
そうよ、取り戻すの、こんなはずじゃなかった世界の全てを！」

「ふざけるな！ 世界はいつだって、こんなはずじゃないことばっ
かりだよ！」

ずっと昔から、いつだって、誰だって、そうなんだ！！
こんなはずじゃない現実から、逃げるか、それとも立ち向かうかは
個人の自由だ！
だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい理
由は、どこにもありはしない！！」

クロノはまるで実体験したかのような言葉を口にした。
それほどまでに一生懸命な姿は、

(へえ、格好良いじゃないクロノ)

私は素直にそう思った。

けど、プレシアは聞く耳持たないといった感じで、こちらを睨む。やはりダメか、プレシアにはもう、アリシアの復活しか頭にないらしい。

フェイトがさらに一步を踏み出して、プレシアへと言葉をかける。

十 十 十 十 十 十 十

私はルシルに言われたように、自分の想いを母さんに伝えることにした。

今でないと、もう叶わないとなんとなく思ったから。

「母さん、私はあなたに言いたいことがあって来ました。

私は・・・私はアリシア・テストロツサじゃありません。

あなたが創ったただの人形なのかもしれませぬ。

だけど、私は、フェイト・テストロツサは、あなたに生み出してもらって、育ててもらった・・・あなたの娘です!」

それを聞いた母さんは笑い声をあげるけど、私は諦めない。

まだ伝えたいことがあるから、だから諦めるわけにはいかない。

「だから何? 今更あなたを娘だと思えというの?」

「あなたが、それを望むなら。それを望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からも、あなたを守る。」

私が、あなたの娘だからじゃない、私があなただから！」

言った、言い切った。私は自分の心を出し切った。

だから、だからお願い母さん。もうこんなことはやめて。

「・・・くだらないわ、やっぱりあな「いい加減にしないで！」
なに？」

後ろからシャルロットって子がそう叫んだ。

ゆっくりと私の隣にまで来て、白い大きな十字架を母さんに向けた。

「いい加減にしないで」と言ったの、もしかして聞こえなかった？

もう認めなさい、フェイトは間違いなくあなたの娘よ。

なにせ実娘のアリシアの遺伝子から何から同じなんでしょ？

それってつまり考えようによっては双子といっても過言じゃないのよ。

それでもあなたは愛するアリシアの妹を、フェイトを人形扱いするわけ？」

「っ！！ 妹・・・？ アリシアの・・・妹・・・」

それを聞いた母さんは後ずさりして、アリシアを見る。

すごく動揺しているのがわかる。

でもすぐにシャルロットを睨み付けて、攻撃をしてきた。

でも私たちに当たる寸前で、雷撃は何の前触れもなく消滅した。

十
十
十
十
十
十

フェイトちゃんのお母さんは、フェイトちゃんとシャルちゃんと言葉を聞いても、戻ってはこなかった。

「どうして？ どうして分かってくれないの？」

「なのは」

私は知らず知らずそう呟いて、ユーノ君が私の肩に手を乗せて、心配してきてくれました。

そしてシャルちゃんとフェイトちゃんに当たるようにして雷撃はなってきたけど、私たちの目の前で消えてしまった。

シャルちゃんが手を出していたから、たぶんシャルちゃん力なんだろう。

「・・・そう、なら仕方がないわね。クロノ、力づくでプレシアを無力化するけどいいわよね？」

シャルちゃんはクロノ君に、そう確認した。

クロノ君は一度フェイトちゃんを見て、シャルちゃんに返事をした。

「仕方がない、このままジュエルシードを発動されては堪らない。戦闘を許可する。でも出来るだけ穏便に済ましてくれよシャル」

「ええ。フェイト、私が防御に回るから、あなたがプレシアを止めなさい。

普通は逆だけど、あなたが最後まで親の面倒をみなさい」

「え？」

私とフェイトちゃんの声が重なる。

それって親子で戦えってこと？

「シャルちゃん、それはダメだよ！」

「フェイトちゃんにそんな「大丈夫、やります」フェイトちゃん!？」

「フェイトちゃんは私の言葉を遮って、お母さんと戦うと告げた。」

「アルフさんもそれには驚いているみたいだ。」

「言っておいてなんだけど、本当にいいのね？」

「・・・はい」

「フェイトちゃんの決意は固く、それでお母さんが諦めるなら、と眼が語っている。」

「フェイトがそう言うなら、あたしもサポートするよ」

「ああ、僕もサポートに回ろう」

「なのは、ユーノ、二人はどうする?？」

「アルフさんとクロノ君がそれに付き合うなら、私だってやってやる。私はユーノ君と一緒に頷き、フェイトちゃんのお母さんと戦うことに決めた。」

其は抑止の力と戻りて（後書き）

ようやくシャルとルシルの界律テスタメントの守護神の力が解禁されました。次回で無印完結としています。そういえば前回のあとがきで、今回でプレシアと決戦って書いてしまいましたが、書けませんでした、すいません。

友達

フェイトもやる気を見せているし、なのはたちもサポートに回ると言ってくれたので、私のすることは彼女たちが傷つかないようにするだけだ。

「プレシア・テストロッサ！！ あなたの娘の力によって落ちなさい！！」

「・・・？ そんな人形の力なんて、私の前では無意味よ！」

さあ戦闘開始だ。

プレシアは魔法を放ってくるが、なんだか威力が上昇しているみたいだ。

そして私は、プレシアの傍で光を放っているジュエルシードを見た。私は魔術ではなく、守護神の力で防せいだから、クロノに告げる。

「クロノ、どうやら彼女はジュエルシードを完全に制御してるみたい。
い。

けど安心してくれていい。絶対になのはたちは傷つけさせないから」

「な！！？ そ、バカな！？ っていうかそれを防げるわけが・・・
！？」

実際にそれを防ぐと、クロノは驚愕のあまり後ずさっている。

なのはたちはあまり驚いていないけど、ユーノはクロノと同様、私から少し離れる。

「ほらね、さあ行っておいでフェイト。ルシルの来るまでの間、私
があなたとなのはたちの盾になる」

「あ、その、ありがとう。アルフ、行くよ」

「あいよー!」

フェイトとアルフは、プレシアへと向かっていった。

そして、それに続くなのはクロノ。ユーノは私の傍でサポートに
移る。

「母さん、私はあなたを止めます! バルディツシュ・・・!」

Photon Lancer Get Set

「フェイトちゃんたちの為に、私もあなたを止める!! レイジン
グハート!!」

All right, Divine Shooter

「シュート!!」

「ファイア!!」

なのはとフェイトの魔力弾計十二発が、プレシアへと襲い掛かる。
クロノも負けじと砲撃を、少しタイミングをずらしてから放つ。

「ブレイズキャノン!!」

「そんなもので、どうにかなると思っているの!?!」

一応分かっていただけだが、やはりあの程度ではプレシアのバリアを破ることは出来ない。

プレシアは再度、フェイトたちへと雷撃を放ってきた。

だが無駄だ。もうプレシアにフェイトを攻撃することは不可能。

私は“テストメント界律の守護神”の能力、“干渉”を使って雷撃を防ぐ。

雷撃は初めからなかったかのように消滅した。

ハハ、プレシアは今度こそ驚いて、声も出ないといった感じだ。

この干渉の力の前では、神秘を失ってしまい、科学へと進んだ魔法では

決して打ち破ることは出来ないし、初めからどんな力でも破ることは不可能だ。

「さあどうする、プレシア？ あなたの攻撃にいくらジュエルシードの魔力を使っても、私の力の前では無意味よ」

驚愕と憤怒、そして理解できない力への恐怖で、プレシアの顔が歪む。

どうやらルシルが来る前に終わってしまいそうだ。

「な、何なのその力は！？ そんな魔法は知らない！」

「知る必要なんてないわ、だって使えるのは私とルシルの二人だけ。知ったところで使えるようなものじゃない」

そう、この世界で使えるのは私とルシルだけ。

どういう理屈で、とか何だとか教えても理解できないはずだ。

「母さん！ もうやめよう！？ 母さんさっきから血を・・・！？」

フェイトが説得に入るが、プレシアはそれを無視して攻撃する。プレシアは何処か患っているのか、先程から吐血している。そこまでして娘のアリシアに会いたいのだろうが、それは叶わない。

「だから無駄だと・・・言ってるでしょう!?!?」

私は干渉を使い、雷撃を消滅させる。

“テストメント 界律の守護神”の能力は、現実に干渉する実数干渉と、幻想に干渉する虚数干渉の二つがある。

実数干渉は現実にある物質や空間、虚数干渉は幻想とされる霊体や概念などで、それを思うがままに操ることが出来るというものだ。

私は、今使っている実数干渉能力で「現実に存在している」と決定されたプレシアの雷撃という現象のみを選択して消している。

「フェイト!　なのは!　口で言って聞かないなら、力づくで止めなさい!

その後でゆっくりと説教でも何でも言えはいから!」

「はい!」

私の言葉に、二人は返事して再度プレシアへと攻撃を仕掛ける。

アルフ、ユーノ、クロノは少し邪魔になるので、少し下がらせてから、バインドなどを使ってもらっているが、あまり効果は期待できない。

「フェイトちゃん!　少し耳を貸して!」

「え?・・・!?!?　うん、やるう」

どうやらなのはが、何かしらの手を考えたようだ。
それなら私たちは二人のサポートに専念すればいいだけのこと。

「クロノ、二人が何か考え付いたみたいだから、それまでの間はあなたが攻撃に回って。」

ユーノとアルフはクロノのサポートよろしく。

みんなの防御は、全て私が受け持つ。これで終わらせるわよ」

「ああ！」

「わかったよ！」

「うん！」

クロノは早速砲撃を放ったけど、それは防がれてしまう。

プレシアはクロノに反撃を試みようとしたが、アルフのバリアブレイクと呼ばれる一撃によってその機会を失う。

そして今度はアルフに標的を変えようとするも、ユーノのバインドによって再度妨害される。

「うーんなかなかの連携ね。さて、なのはとフェイトは？」

二人へと目を向けてみると、二人して砲撃に使用する魔力をチャージしていた。

おお、結構すごいことになるかもしれない。

「行くよ、フェイトちゃん！」

「うん！」

二人はデバイスの先端をプレシアに向け、発射体勢に入った。輝きを増していくレイジングハートとバルディツシユ。

「ユーノ、クロノ、アルフ、退避！」

一瞬でプレシアのもとから離れる三人、それを逃がさないとするプレシアの雷撃の嵐、当然それを許さない私は、干渉ではなく第三聖典を投げ放つ。

遙かに遙か、白の真白の、高き夢々、汝よ祈れ

第三聖典は純白の閃光を引いて、高速で雷撃を拡散しながらプレシアの足元へと着弾し、プレシアの強固なバリアを完全に粉碎する。

「っ！！？」

プレシアはその衝撃で少し後ろへと飛ばされるが、何とか踏みとどまる。

だが、それだけの隙があれば十分だ。

「デイベイイン……」

「サンダアアー……」

二人のデバイスの閃光がさらに輝きを増した。そして、

「バスタアアアー……！！！！」

「スマツシャアアアー……！！！！」

放たれるは極限にまで圧縮された桃色と黄金の閃光。
それは間違いを起こそうとしている者を正す為の光だ。
それにしてもなのはには、遠慮というか何とというか、何か欠けて
いるのかもしれない気がする。
あそこまで容赦なく撃つなんて少し怖い。

「フッフ、アハハハハ！！ そちらの方こそ無駄よ！！
さあ！ ジュエルシードよ！ 私の願いを叶えて！！
いざ、アルハザードへ私とアリシアを導いて！！」

プレシアのその言葉を合図として、ジュエルシードが完全発動、違
う暴走だ。

完全に制御できる一線の臨界点を超えてしまった。

なのはとフェイトの砲撃が、ジュエルシードから放たれる魔力によ
ってかき消されてしまった。

あゝ惜しい、もう少しで決まっていたのに。

「くっ、シャル、どうすればいいんだ！？」

クロノが必死な顔をして聞いてきた。

それに答えようとしたその瞬間、

「汝よ敬え、汝よ崇めよ、汝よ称えよ、汝よ祈りて、ただ跪け」

その言葉とともに落ちてきたのは、漆黒に輝くルシルの第四聖典。
物凄い音を響かせながら着弾して、ジュエルシードの魔力を消し去
った。

完全に沈黙しているジュエルシードと私たち。

「タイミングはバツチリなようだな」

ルシルは私たちに向けて、親指を立てながら顔を向けてきた。まあ何はともあれ、これにて終了だ。

「……あゝ、プレシア・テストロッサ。

大人しく投降してくれないか？ これ以上こんな連中を敵に回すとどうなるか僕たちにもわからないから」

クロノはほとんど自棄になって、プレシアに投降するように呼びかける。

ちよっと、ルシルはともかくそんな目で私を見ないでよ、傷つくじやん。

「……母さん、もうこれ以上は無理、だよ。管理局へ行つて、一緒に罪を償おう？」

フェイトは第四聖典の着弾音の所為か、少し頭を振ってからプレシアに告げる。

プレシアは未だに呆然としている。当然かもしれない。

あんなにも簡単にジュエルシードの魔力を消されてしまったら、この時代の連中は信じられず病院へと直行だろう。

「……どうして……こんな……でも！」

プレシアが頂垂れてそう呟いた瞬間、大きく振動する庭園内。

再度光りだすジュエルシードだが、魔力はほとんど感じられない。

あれじゃ何も出来ないだろうが、この庭園くらいは崩すかもしれない。

あまりの振動にたまらず膝をつく私たちだけど、プレシアはアリシアの水槽へと体を預けて何かを喋っている。

『もうダメ！ この規模の崩壊なら次元断層は起きないけど、庭園は崩壊しちゃう！！』

だからクロノ君たちは急いで戻ってきて！！』

エイミーからそう通信が来た

十 十 十 十 十 十 十

母さんを止めることが出来た、そう思ったんだ。

でも、ダメだった。最後の最後まで母さんはアリシアだけを娘だとしていた。

それでもやっぱり私は・・・あなたの娘でいたい。

「私はアリシアと共にアルハザードへ、全ての眠る地へと行くの」

母さんがそう言った瞬間、母さんの足元が崩れて虚数空間へと、アリシアと一緒に落ちていく。

「母さん！！」

私は叫び、母さんのもとへ駆け寄ろうとしたけど、

「フェイト！？ ダメ！！」

アルフが私を後ろから抱きしめて止めてきた。

「チツ、このまま終わらせてなるものか!！」

私の代わりにルシルが、母さんを助けようと駆け出してくれた。それを見た他の人たちがそれを止めようと声に出しているけど、ルシルはそれを無視して、さらに速度を上げていった。

(お願い、お願い、お願い、母さんを助けてルシル!!)

あと少しといったところで、浮遊していたジュエルシードから放たれる衝撃波でルシルは、私の横を通り過ぎ吹き飛ばされていった。

「!?!? ル、ルシル!?!?」

一瞬何が起きたのかわからなかったけど、少ししてルシルが吹き飛ばされたのだと理解して、そちらに目を向けようとして気付く。

「か、母さん・・・母さん?」

もうどこにも母さんはいなかった。

もう話せない、分かり合えない、そう思うと涙が止まらない。

「フェイトちゃん!！」

その声を聞いた私は顔を上げると、あののはって子が手を伸ばしている。

そうか、私のいる場所も崩れてきているんだ。

「フェイトちゃん! こっちに跳んで! 早く!！」

どうしても母さんのことを少し考えてしまっ。

そういえばルシルは？ 少し見渡すとクロノって人に肩を借りて、私の名前を叫んでいた。

そっだ私は・・・私は、生きないと、母さんとアリシアの分まで。

今まで私に力を貸してしてくれたアルフとルシルの為にも。

だから母さん、アリシア・・・。

「さよなら」

そう呟いて、あの子のもとへと跳んで、その手を取った。

十 十 十 十 十 十 十

私はルシルをクロノに任せて、ジュエルシードの完全停止を行った。プレシアだけに集中していた所為で、あんなドジを踏むなんてらしいと言えばらしいかもしれないけど、少し間抜けかもしれない。

でもこれでジュエルシード関連の契約は終了した。

本来ならここで私とルシルは、契約執行完遂として消えることになるんだけど、界律からは何も言ってこない。

どうやらまだこの世界でやるべきことがあるみたいだ。

今はアースラの医務室にいる。足を怪我していたなのはの治療をしているのだ。

本当なら魔術で治したかったんだけど、戦闘後すぐに能力を制限されてしまった。

「あのクロノ君、フェイトちゃんたちは？」

なのはがユーノに包帯を巻かれている中、そう質問した。

「護送室に隔離している。彼女たちは今回の一件の重要参考人だからね。」

申し訳ないが、しばらくあそこに入ってもらっていただくことになるだろう」

「そ、そんな！？」

クロノの返答に納得いかないのかそんな声をあげる。

私は当然の処置だと思っっているから口を挟まない。

「今回の事件は一つ間違えば、次元断層さえ引き起こしかねなかった重大な事件なんだ。」

時空管理局としては、関係者の処遇には慎重にならざるを得ない。それは分かるね？」

「・・・うん」

なのはは渋々納得した。

クロノは私を見て、「君も分かってくれるね？」と告げてきた。

私は「ええ」と頷き、ルシルの今後を考えた。

それから数日は、地球に帰れないということであースラの中で過ごした。

退屈なこともあったけど、まあまあ楽しめたかな。

十 十 十 十 十 十

あれから数日が立って、私とユーノ君、シャルちゃんはクロノ君のあとについて通路を歩いているんだけど、私はフェイトちゃんたちのこれからが気なっただけで聞いてみることにした。

「クロノ君、フェイトちゃんたちはこれからどうなるの？」

「事情があつたとはいえ、彼女たちは次元干渉犯罪の一端を担っていたのは紛れもない事実だ。」

重罪だからね、数百年以上の幽閉が普通なんだが・・・」

「そんな!？」

「す、数百年!？」

私もシャルちゃんもそれには驚いてしまった。

そんな私たちを見て、すぐにクロノ君は話を続けた。

「なんだ、が! 状況が特殊だし、彼女が自らの意思で次元犯罪に加担していなかったことは分かっているし、ルシオンはプレシアの目的を知らずに、ただフェイトとアルフの為に戦っていた。あとは偉い人たちに、その事実をどう理解させるかなんだけど、その辺にはちよつと自信がある。」

だから心配はないよ、なのは、シャル」

「クロノ君」

「ええ」

「何も知らされず、ただ母親の願いを叶える為に一生懸命なだけだった子を、そしてそれをただ手伝った彼にも罪に問うほど、管理局は冷徹な組織じゃないから」

「へえ、クロノってとても優しいんだ、私は嬉しいな」

シャルちゃんがそう言って、クロノ君を下から見上げるようにしながら、顔を近づけて笑顔を向けていた。

すると私でもわかるくらいに、クロノ君の顔が真っ赤になっている。

「ししし、執務官として、と、当然の発言だ！ し、私情は別に入っていない！！」

かなり動揺しているみたいで、慌ててシャルちゃんから離れる。顔が赤いのはまだ直っていない。にやはは、可愛い。

「アハハ、そんなに照れなくてもいいじゃない、可愛いんだから」

「な！？ て、照れてなんかいない！！」

通路に響き渡る私たちの笑い声と、クロノ君の否定の言葉。

シャルちゃんは最後に、クロノ君へそつと「ありがとう」と告げていた、耳元で。

それでさらに顔が赤くなってしまったクロノ君は、ついに黙って先に行ってしまった。

十
十
十
十
十
十
十

私がクロノをあまりにからかった所為で、顔を真っ赤にしたまま行ってしまった。

仕方がないから予定通り、私たちは食堂へと向かうことにした。

食堂でリンディ艦長と一緒にになり、少し話をした。

海鳴市へはもうすぐで帰れるらしいけど、ミッドチルダ方面へはまだダメらしい。

ユーノの今後のことで話題が出るが、なのはは今までどおり高町家へ住まわせることにした。

私としてもなのはの魔法の先生を、ここで失うわけにはいかないから、それには賛成している。

そこで合流するクロノとエイミー、次の話題はプレシアの目指した地であるアルハザードのことだった。

ユーノは「いくつもの秘術が眠る土地」と、クロノは「とつくの昔に次元断層へ落ちた」のだと話した。リンディ艦長もそれに続き、説明をしている。

実際は次元断層に落ちたのではなくルシルの干渉によって、偶然近くにあった流星群の軌道を全弾アルハザードへと修正してぶつけて消滅させたのが正しい結末だ。

アルハザードの連中はどこで大戦や魔術の記録を手に入れたのか知らないけど、禁呪を、しかもよりによってラグナロクを研究し、その上で発動させようとした。それゆえに滅ぼされたのだ。

「そういえばシャルロツテさん、ルシリオン君が時の庭園に向かう前に、プレシア女史に言っていた“世界の意思”というのは何なのかしら？」

リンディ艦長が急に話を振るので驚くが、それについては一応説明しておく。

「世界の意思、私たちはそれを界律と呼んでいます。それはその星そのものと言っても過言ではありません。

自分自身である世界の秩序を管理するもの。

すべてがそこから生まれ、そして還っていく永久機関。過去、現在、未来の全ての情報があるとされる知識の蔵。

それぞれの星に必ず存在する究極にして絶対たる力の根本、といったところでしょうか」

そして私とルシルは、そのあらゆる世界の界律が一つに集約する“ディヴァイン・ウエイル神意の玉座”に取引を持ちかけられ、そして魂を取り込まれた後、その存在を昇華された最高位の抑止力“テストメント界律の守護神”となったのだ。

まあルシルはまだ死んでいない為に魂ではなく精神を取り込まれた状態だけど……。

「分かっていたつもりだったが、やはり僕たちの知識とは全然違うな。

でも本当にそんなものが存在しているのか？」

クロノが私の説明を言い終えるのを待つてからそう告げた。

当然の疑問だ。すでに次元世界には、界律という単語すら残っていないのだから、その存在を疑うのも無理はない。

「この前はシステム魔力炉での供給量でランクが変動すると言っただけ、それだけじゃなく私たち魔術師は、その界律によって力の強弱が決定されるの。」

だからプレシアとの戦いで、世界は私たちに力を貸してきてくれたというわけ。

あのまま放置していたら地球という自分が消滅する可能性があったからね」

魔術師の部分は、本当は“テスタメント界律の守護神”と入るところだけど、ここは黙っておくのがいいだろう。

「そうなのか、じゃあ今はあの時の力は出せないのか？」

「ええ、星の危機が去ったのなら、もうあれ程の力はいらなくてよ？」

だから使用できないようにされてしまっているの」

クロノの質問にも答えたとこで、ようやく食事を再開できた。あゝあ、折角の料理が冷めてしまった。少し勿体ないな。

十 十 十 十 十 十

リンディさんたち、アースラのみなさんとお別れして私たちは日常へと帰ってきた。

思えば短かったような長かったような、そんな色々なことがあった時間。

私はその大切な時間を決して忘れないと思う。私を成長させてくれたとても大切な時間だから。

日常へと帰ってきて数日後の朝、クロノ君から連絡がきた。

それはフェイトちゃんとルシリオン君、アルフさんの今後の予定、

そして二人がほぼ確実に無実となるという話だった。

そして、フェイトちゃんが私に会いたいって言ってくれたみたい。どうしよう、すごく嬉しいよ。

「あ！ そうだ、シャルちゃんにも教えてあげないと！！」

私はシャルちゃんを叩き起こして、すぐさまフェイトちゃんたちが待っている海鳴臨海公園へと向かった。

十 十 十 十 十 十

いきなり部屋へと押し入ってきて、耳元で叫び尚且つ体を揺らしまくっているのはアイアンクローをかけながら私は起きた。

話によると、クロノからルシルたちの処遇が決定したと連絡があったそうだ。

何故それだけで浮かれているのか？と聞いてみると、フェイトがなのはに会いたがっているというらしい。

なるほど、それでこの浮かれようってわけか。

私は出かける準備をして、なのはに手を引かれながらあの公園と向かった。

そして公園に入っただけしばらく行くと、クロノ、ルシル、フェイト、アルフが海のすぐ近くで待っていてくれた。

「なのは、私たちは向こうに話しているから、二人はここで言うて

おきたいことを話しておきなさい。いいよね、クロノ?」

「ああ、あまり時間はないけど、それまではゆっくり話すといい」
私の意見をクロノは承諾してくれた。

さて、私もルシルに何かしらの言葉でもかけておこうか。

「ありがとう、シャルちゃん、クロノ君」

「ありがとう」

二人の感謝の言葉を聞いてから、ベンチのあるところまで行って座る。

「さてと、ルシルはこれからどうするの?」

「・・・しばらくはフェイトたちと行動を共にしようと思ってる。
クロノの話だと囑託魔導師という資格を取ると、裁判などで有利な
カードになるらしいから、まずはフェイトと一緒に取るうと考えて
いる」

ルシルがそう言いながら、クロノに視線を向けた。

「まあ有利になるといえばなるし、今後の為にも取っておいて損は
ない。」

でもその試験は結構ハードルが高いから、勉強はしないといけない」
ルシルの視線を受け、クロノがそう答える。

それならルシルは大丈夫だろう。何せ知識すら容易く複製して溜め

込むのだから、資料に目を軽く通せばいつでも頭の中に浮かぶ。全く、ルシルは本当に反則の塊だ。

「それなら大丈夫ね。ルシルの頭は反則だから無事に受かるはずよ」
「なんかトゲを感じるんだけど」

ルシルはジト目で私を見てくるけど、私はスルー。
そつえばもう一つ聞きたいことがあったんだ。

『ルシル、あなたは这个世界に存在として登録されているの？
私は色々と用意されているけど』

念話ではなく、“テストメント界律の守護神” 間用のリンクでそう告げる。
私の場合は、ドイツという国に家も偽りの家族も用意されていることが分かっていて、ルシルはどうか知っておきたかった。

『登録？ ああ戸籍のことが、それなら用意されている。
もちろん家の方も存在しているが、どうやら独り身みたいだ。
まあシャルとは違って家事は、以前訪れた世界でとことん叩き込まれたからな』

聞きたいことはもう聞いたので、私はなのはたちに目を向ける。
するとクロノが立ち、「もうそろそろだ」といって二人に近づいていく。

私たちもそれに続いて、なのはたちのもとへと歩き始めた。

十
十
十
十
十
十

フェイトちゃんが私と友達になりたいたって言ってきた。でも友達になるにはどうすればいいかわからないとも。だから私は、私の持論をフェイトちゃんに教える。

「フェイトちゃん、友達になるのはすごく簡単だよ。それはね、名前で呼ぶことなの。君とかあなたじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て、ハッキリ相手の名前を呼ぶの」

これが私の持論だ。まずは名前から、名前を呼ぶことから始まると思う。

だからもう一度、私は自分の名前を告げる。

「私、高町なのは。なのはだよ！」

「なのは」

「うん！ そうだよフェイトちゃん！」

フェイトちゃんが私の名前を言ってくれた。

それからフェイトちゃんは何度も名前を呼んでくれた。

フェイトちゃんが笑顔で私の名前を呼んでくれるのを見ると、それがすごく嬉しくて、涙が止まらなくなってしまっていた。

「少しわかったことがある。友達が泣いていると、同じように自分も悲しいんだ」

その言葉を聞いて、私は我慢できずにフェイトちゃんに抱きつく。私のしてきたことは無駄じゃなかったと、そう思えるこの瞬間が嬉しかった。

「ありがとう、なのは。少しの間お別れになるけど、きつとまた会える。」

そうしたら、また君の名前を呼んでもいい？」

「うん！ うん！」

「会いたくなったらきつと名前を呼ぶ。だから、なのはも私を呼んで。」

なのはに困ったことがあったら、今度はきつと私が、私たちがなのはを助けるから」

もう言葉が出てこない。出てくるのは嗚咽だけで、まで話したいことがたくさんあったはずなのに。

「すまないがもう時間だ。そろそろいいか？」

クロノ君やシャルちゃんたちが、そこまで来ていてそう告げる。

私は思い出に何かを残しておきたくって、咄嗟に髪を結っているリボンを解き、フェイトちゃんに差し出す。

するとフェイトちゃんも同じようにリボンを解き、私に差し出してくれた。

お互いにリボンを受け取り、笑顔で再会を約束する。

するとアルフさんが、ユーノ君を肩に乗せてくれた。

「ありがとう、アルフさん、ルシリ「ルシル」え？」

アルフさんとルシリオン君にもお礼を言おうとして名前を呼ぶけど、ルシリオン君は途中で遮ってきた。

「ルシルだよ、なのは。フェイトの友達なら俺とも友達、でいいかな？」

「うん！ ルシル君も私の友達だよ！」

「そっか、それはよかった。シャルのこと頼んだよ」

ルシル君とも友達になれたことがまた嬉しい。
長く伸びた銀色の髪が、朝日に輝き靡くその姿がとても印象に残った。

「ちょっと、それ逆じゃない？ 私がなのはを頼まれるのが普通と思うけど？」

「ほお、居候がいい身分だね」

シャルちゃんとルシル君がおでこをつけながら、それはいい笑顔で見ている。
ちよつと怖いよ二人とも。

「あゝもう時間なんだって。そろそろ行くよ」

クロノ君が堰をしながらそう言ったら、魔方陣が輝き始めた。
お別れは涙じゃなくて笑顔で、終わりじゃなくて始まりで。

「またね、フェイトちゃん、アルフさん、ルシル君、クロノ君」

精一杯の笑顔で送り出す。

するとフェイトちゃんとルシル君が手を振ってきたので、私とシャルちゃんも手を振りながら、光に包まれて消えていくフェイトちゃん

んたちが見えなくなるまでそこに佇んでいた。

「帰ろうか、なのは」

「……うん!」

また会える日を楽しみに、私たちは家へと帰っていった。

1st Episode…全てのはじまりはここから fin

NEXT Episode…夜天の主と守護の騎士

友達（後書き）

無印本編は、これにて終了です。

次回は番外編としてサウンドステージ03のフェイトとアルフの契約記念の

ことを書くかどうかと考えています。

プレシア戦 イメージBGM キングダムハーツ2 The Ot
her Promise

番外編：大事な日（前書き）

難しかった今回の話。正直に申しますと書かなければよかったと思
っています。

ですが書いたのであれば、どっという捉え方をされようとも投稿しよ
うと思っただ次第です。

番外編：大事な日

私たちが時空管理局本局へと来てから結構な時間が経った。けど、やることが多すぎてあつという間に過ぎ去ったと思う。たった今も私とアルフは聴取を終えてルシルと合流する為、アースラへと続く通路を歩いてルシルの姿を探す。

「ルシル」

「ああ、フェイト、アルフ、お疲れ様。聴取のほうはどうだった？俺のほうとしてはなかなかの好感触だったけど」

ルシルが椅子から立ち上がり、私たちのもとへと歩いてくる。

「うん、私たちのほうも、いいかな？と思うよ」

そんな話をしながら歩き出してアースラへと向かう。少ししてからアルフが私たちにある質問をしてきた。

「ねえフェイト、ルシル。二人は裁判が終わったらどうするの？やっぱりリンディの誘いを受けて管理局に入る？」

それは今後のこと。身寄りのない私とアルフは生活する為にはそれも一つの選択肢だけど、将来のことなんてまだ分からない。

「そうだね、私はまだ決めてない、かな。しばらくは自由なままでいたいと思うし、なのはたちにも会いに行きたいなとも思うし」

「俺もまだだな。けど、たぶん正式に入ることはないと思う。ある程度は手伝うかもしれないが、完全には無理かな」

私は入るか入らないかはまだ決めてないと言ったけど、ルシルは正式な入局だけは無いと断言してしまった。

それはつまり、いつか離れ離れになる可能性もあるということ。

寂しいことだけど、いつまでもルシルに甘えるわけにはいかないから、その辺の話はまだ考えないでおくことにした。

十 十 十 十 十 十

アルフの質問に答え、アースラへと帰ってきた。

正式な管理局員になる、それはまずありえないことだ。

いつ契約を終え、消えるかもしれないこの身体では組織に入ることは無理だろう。

「お、フェイトちゃん、ルシル君、アルフ帰ってきたね」

エプロン姿のエイミイがそう声をかけてきた。

俺たちはただいまと告げ、エイミイもおかえりと返してくれる。

エイミイはどうやらこれから夕食の準備に入るようだ。

手伝おうかと告げるけど、休んでいるようにと返される。

「あ、そうそう。艦長がフェイトちゃんとルシル君にお話があるから、よかつたら艦長室に来て、だつてさ」

話？ 今後のことだろうか？

それならフェイトだけでも・・・とはいかないか。

俺も身寄りのない身だから、その辺の話をされそうだ。

「本当？　じゃあこれから向かうよ。お茶淹れて持っていったほうがいいかな？」

「ありがとう。給湯室にコーヒー淹れてあるから」

「ああそれなら俺が持っていくから、先に行っていてくれるかフェイト」

「え、私も手伝うよ。だから一緒に行こう？」

そして俺たちはエイミィと散歩に行くと言うアルフと別れて、リンディ艦長の待つ艦長室へと向かう。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

私とルシルはコーヒーを運びながら艦長室へと入る。

そこには椅子に座って何らかのデータを処理しているリンディ提督がいた。

「リンディ提督、失礼します」

「失礼します。お待たせしてすみませんでしたリンディ艦長」

私たちはその声をかける。

それに気付いたリンディ提督は椅子から立ち上がり、私たちに来てくれたことやお茶を持ってきてくれたことへの感謝を告げる。

「ありがとう、これねなのはさん家のお店で出してるコーヒーなんですって。

なのはさんのお母さんから貰ったの」

「そうなんですか」

私はそう相槌をうつって、私たちが持ってきたコーヒーに目を向ける。そっか、なのはのお母さんが。

私も今までに何度か飲んだことがあるけど、すごく美味しいものだとは思っていたし、ルシルもそれを初めて飲んだとき「うまっ!!」って驚いていた。

リンディ提督に座るように勧められたので、失礼しますと言ってリンディ提督と向かい合うように座った。

「あの、リンディ艦長。俺たちに話して何でしょうか？」

ルシルがそう切り出したことでリンディ提督のお話が始まった。

まずはこの頃きちんとお話が出来ないことへの謝罪。

けどそれは、あの事件の事後処理の所為だっただけだから文句はない。

そしてなのはたちとのビデオメールの件。

それもまた仕方がないこと。

私たちはあの事件の関係者だから、リアルタイムでの通信はできないことになっている。

それなのにリンディ提督はビデオメールという形で、なのはたちとやり取りができるように

してくれた。なのはの友達、アリサとすずかとも友達になれたし、

だから不満なんて全然ないし、逆に感謝してもしきれない。

そしてリンディ提督は神妙な顔をして「管理局の人間としての質問じゃないから、無理に答える必要はないから」とたぶん今回の本題を切り出してきた。

「お母さんのこと、今はどう思ってる？」

そのストレートな質問に戸惑うが、今の自分の気持ちを伝える。

「そうですね、少し時間が経って色々気持ちも落ち着いてきました。裁判の最中、母さんの過去のこと色々分かってきましたし。

初めは、やっぱり混乱しましたが、今はもう自分でも不思議なくらい恨む気持ちとか裏切られてたんだなって気持ちはなくて、あの母にとっては、最初から最後まで私は単に実験の失敗結果で、使えないお人形だったんだなって」

「っ！ フェイト！ それはじぎや「待ってルシル！」・・・」

「違うよルシル。これは自虐的な意味じゃないから」

私のその言葉に、リンディ提督が止めに入る前にルシルが怒鳴って止めてきた。

けど私は本当に自虐的な意味じゃないと思ってる。

「リンディ提督、ルシル、今のはその厳然たる事実というか、言葉通りの意味としてのことだから」

ルシルは座りなおし溜息をついた。

「あの母は自分の大切な子に、アリシアに戻ってほしかっただけで、本当にただそれだけで、だからこそ分かってたんだと思います。作り物じゃ代わりにはならないって。アリシアにそっくりなのに、ちっともアリシアじゃない私。アリシアが失くしてしまつた命を生きている私。母さんはきつと思つてた。どうしてアリシアが戻ってこなくて、失敗作の私が生きているのって」

「酷い、話ね」

リンディ提督はそう返してくれたけど、ルシルは全然喋らなくなつてしまつた。ずっと俯いたままで何かを考えているような、何かを耐えているようなそんな感じだつた。

「私は母さんが好きだつたし尊敬もしてたけど、それはアリシアの記憶を頼りに私が思いこん「違う」・・・ルシル？」

「違う、そうじゃない。確かにアリシアの記憶に因るかもしれないけど、その思いだけはフェイトの心だと俺は思つてる。前にも言つたかもしれないけど、フェイトはアリシアの代替物じゃないよ。」

君は確かにプレシアの娘で、アリシアの妹だ。だからもうそんなことを考えないでくれ、頼む」

「ルシル、でも私は」

「そうね、私もルシリオン君と同じ意見だわ。」

あなたは決して人形じゃなくて、今を生きる一人の女の子よ」

ルシルの意見にリンディ提督も賛同してきた。

私は二人のその言葉をきちんと受け入れて、私の話をここで終わらせようとした。

けどリンディ提督はもう一つお話があるみたいで、私に声をかけてきた。

「ねえフェイトさん、もう一つストレートな質問、いいかしら？」

「あ、はい、どうぞ」

「お母さんのこと今でもまだ少し好き？ それとも、もう嫌い？」

母さんのことが好きか嫌いか、そんな質問。

正直わからないとしか答えられないけど、でもそれがわかるまでは・
・。

「わかりません、けどわからないからこそわかるその時まで、あの母ハートの娘として、フェイト・テストロッサとして生きていこうかと思っっています。

それに逃げたり捨てたいするにはまだ早いと思っっていますから」

「そう、でもそれじゃあ私は振られちゃったのかな」

振られた？ どういう意味かわからないからルシルを見てみるけど、ルシルも首を傾けて、？と顔に出ている。

「裁判が終わったならなんだけど、よかったら家の子供にならないかなって思っただけど」

その言葉に驚く私とルシル。けれどルシルが先にその言葉への意見を話す。

「俺はいいと思うよフェイト。リンディ艦長は良い人だし、これからのことを考えれば悪くはない話だ。

決めるのはフェイトだから無理強いはしないけど」

「あら、ルシリオン君にも同じことを言うわよ。

あなたも家族がないことはわかっているのだから」

「はい？」

そうだった、ルシルにも家族がないってことは出会ってすぐに聞いていたんだ。

だからこそジュエルシードの探索ではずっと一緒にいられたんだっけ。

「そんなに意外かしら？ もちろんこれはあなたたちを管理局へのスカウトしているってことじゃないのよ。

いくら強くて家事が出来たとしてもまだ二人は子供なのよ。自由になつた後でもちゃんとした大人がついていないと大変だと思っし。

それに私ならあなたたちのこともよく知っているし、別世界の友達との上手くやっていけるようにするなら、私が割りと適任かな、って」

「えっと、その・・・」

「はあ、そうなんですか・・・？」

二人して返事に窮する。だってどう答えればいいかなんて急には出

てこない。

そんな様子の私とルシルを見て、リンディ提督が話を続ける。

「でも本当の、一番の理由としては、あなたたちがとても良い子たちだから。」

それでも人を見る目は確かだと自負しているのよ」

「あの、あの、その、えっと」

「落ち着けフェイト。リンディ艦長、返事は今すぐでなくても構いませんか？」

「ええ、急な話だったから。法的な後見人だとか、そういう部分だけで頼りにしてくれてもいいし、親子別姓になっても気にはしないし、ね。」

だから考えておいてほしいの、私たちの家族になるかどうか」

リンディ提督の、その真摯な態度に私とルシルは立ち上がり、頭を下げる。

「お心遣い感謝します。その、とっても嬉しいです」

「俺も感謝します。よく考えて返事をしますので少し時間をください」

それからすぐに、ブリッジにクロノが入ってきた。

これで話は終わりとなって、私とルシル、クロノはブリッジを後にした。

十 十 十 十 十 十 十

僕はフェイトがいると聞いた艦長室へ行くと、母さんとフェイト、ルシルが話をしていた。

タイミングが少しまずかったと思ったけど、すでに話は済んでいたらしい。

僕たちは艦長室を出て、それからフェイトに“バルディッシュ”を返す。

「フェイト、バルディッシュを返しておこう」

フェイトは“バルディッシュ”を受け取り、声をかけている。

フェイトに伝える“バルディッシュ”を見て、いいなと思うってしまった。

「しかし、インテリジェントデバイスもいいものだな」

「う、うん、相棒だから。その、クロノも持てば？」

フェイトがそう言ってきたけれど、ちょっとね。

「暇を見つけて組んでみようとは思っているんだが、処理速度が心配だね。」

これ以上遅くなるとルシルに更に勝てなくなる」

正直これ以上ルシルには負けたくない。

一対一でも負けて、フェイトと組んでも負けて、彼は本当になんなんだ？

デバイスも持たず、その身一つで演算処理して魔術を使うと言うか

ら驚きだ。

彼は本当に人間なのか疑いたくなってくる。

「今失礼なことを考えなかったかクロノ？」

「いいや、特にはなにもない。そういえば君とシャルもデバイスを持つことになったと聞いているけど、どうなんだ？」

そう、それは母さんの計らいみたいなもので、シャルはルシルのように非殺傷設定付の魔術は使えないらしいからとのことだが、ルシルはあまり必要ないと言っている。

すでにいくつかデバイスを使った訓練を行っているみたいだが、どれもすぐにルシルの演算処理と魔力に耐えられず壊れてしまうのが常となってきた感じだ。

シャルのほうは簡単に決まって、今ではデバイス使用の特訓をしているらしい。

ルシルとシャルの何がそこまで違うのだろうか？

「あゝ、そうだな。俺は複製で何とか出来たけど、シャルは非殺傷設定をデバイスなしで使うなんて器用なことは無理だから、リンデイ艦長は事件解決の報奨として、シャルにこれをいい機会にと、非殺傷設定の魔術を扱えるようにしたいらしい」

ルシルの固有能力“複製”の説明はすでに聞いている。

正直半信半疑だったが、模擬戦を行って思い知ることになった。

僕が使った魔法を次々と複製して、僕へと放ってくる。

しかも威力、速度、制御もろもろ全て僕より上だったことにへこむ。

「そもそもデバイスの演算処理が俺より遅いから、どうしても力ず

くで処理させようとしてしまう。

まあこればかりはどうしようもないと言われたが」

全く魔術師は本当にすごい存在だと思いき知らされる。

普段は魔力を感じないのにいざとなると急激に上がり、デバイスなしでの魔術発動、発動に必要な術式の演算は全て頭の中だけで処理、などといったことはそう出来るものじゃないのは誰でも知っている常識だ。

「じゃあデバイスを持つのはシャルだけになるということか？」

「そうなるかな。デバイス代わりとして、形だけを似せた第四聖典を使うつもりだ。

あれなら危なくないから、そっちの法にも引つ掛からないはずだ」

どうやらルシルの、デバイス所持の話は白紙になるようだ。

まあそれでいいなら、僕も構わないが。

十 十 十 十 十 十 十

俺は今、クロノとフェイトの模擬戦を見ている。

それにしても、フェイトは本当にすごい。さらに魔力が上がってきているし、技術もまた上達している。

クロノが抜かれるのも時間の問題だし、俺としてもこのままだと抜かれてしまうかもしれない。

そしてフェイトが砲撃を放ち、結界を抜いて壁の一部を破壊してしまふ。

「おお！ これはすごいな。というかクロノ、すっかり相殺しろお！」

「うるさい！ 近くにいるなら君が何とかすればよかったじゃないか！？」

手を出すなどっておきながらそれですか。

というよりクロノがすっかりしていれば防げたはずだが。

「あ、えつと、ごめんなさい。つい力が入っちゃって」

フェイトがクロノに謝っている。

必要ないよフェイト、受け切れなかったクロノが悪い。

「気にすることはないよ、相殺しきれなかった僕も悪い。自分たちで直す分には誰にも文句を言われる筋もない。というわけで手伝えルシル」

「は？ ああ、まあいいか。分かった、あとでな」

世話になっている以上はそれくらいなんてことはない。

「よし、それじゃあ結界を張り直してもう一本。今度はルシル、君も入れ！」

どうやら前みたいに、二対一で戦おうというわけらしい。

正直あれはしんどかった。二人とも手加減がないため、苦戦したのを覚えている。

クロノのそれに応え、最近組んだ戦闘甲冑と同じデザインのバリア

ジャケットを武装しようとしたが、そこで艦内放送が入る。

こちらセツティング担当エイミー。リンディ艦長、クロノ執務官、それからフェイトちゃんとアルフ、ルシル君。

状況Dが完了しました。至急、六番のレクリエーションルームに

「っと食事みたいだな。戻ろうか」

「うん、続きは夜にね。ルシルもそれでいいかな？」

「ん？ それでいいよ」

通路を三人で歩きながら、結界のことで話をしている。クロノは結界のためだけにユーノを呼ぼうとしている。

(ユーノも災難だな。クロノに目をつけられるなんて)

十 十 十 十 十 十

「おお、いらっしやい！」

私たちが食事ルームへと入るとそこには豪華かつ大量の料理が並べられていた。

私もクロノもルシルでさえもその豪華さと量に驚いている。

何でこんなにすごい料理が用意されているのか気になったから聞いてみる。

「エイミィ、これどうしたの？」

「えへへ、だって今日はフェイトちゃんとアルフの契約記念日なんでしょ？」

「そういう日はやっぱり、美味しいもの食べて、楽しくお話して、のんびり過ごすもんでしょ」

「そうなの？」

本当にそうなのか迷って、ルシルを見てみると笑って頷いてくれた。エイミィの話はまだ続いている。

「フェイトちゃんたちには、最近うちのクロノ君がお世話になってるし、感謝の気持ちを籠めてね。ちょっととしたものだけ」

「ちょっと？ どうみてもそんなレベルじゃないのは一目瞭然。

エイミィは、これは自分に興味が入ってるって笑っている。

私たちは席に案内され、いろいろと薦められた。

「あ、その、ありがとう。うれしいです」

用意されたケーキに刺さっている火の点いたローソクを消すように言われて、なんだか照れてしまって、顔が赤くなってしまう。

「えっと、それじゃアルフ、一緒に」

「う、うん。それじゃあ」

「「せーの」「

私とアルフがローソクに顔を近づけて火を消す。
するとみんなが拍手してくれた。二人して照れてしまってもって
しまう。

「あ、ありがとう。ありがとう」

「あゝ、あんまりフェイトを照れさせないで。なんだかあたしまで
照れるんだから」

部屋に響き渡る笑い声、こんなに楽しいのはいつ以来だろう。
けど、私たちはさらに驚くことが起きた。それは、

『おめでとう、フェイトちゃん、アルフさん。』

今日、そんな記念日だったんだね。私からもお祝い言わせて』

『僕からも』

『ついでに私からもおめでとう、フェイト、アルフ』

モニターに映るのは、なのはとユーノとシャルの三人だった。

「これってリアルタイム通信じゃ!？」

「リンディ艦長、これっていいんですか？」

私は決まりとして禁じられていたリアルタイム通信が行われている
状況に驚いてしまい、ルシルはこのようなことをして大丈夫なのか、
とリンディ提督に聞いている。

「可愛い身内の特別の日だと、管理の注意力も散漫になるものらし

いわね」

「厳密には0.05秒遅れで繋いでいるので、リアルタイムではないですしね」

「そつきますか」

それを聞いたルシルは呆れているけど、私にとってこれはすごく嬉しいことだった。

「なのは」

『うん、フェイトちゃん』

私はなのはの名前を呼んで、なのはも私の名前を呼び返してくれた。

「こっちは、その元気だよ。みんなすごく優しくて、なんだか上手く心がついてこない」

『にゃじゃは、大丈夫　すぐ追いついてくるようになるよ』

『ルシルもアルフも元気そつで何よりね』

「うん！　元気元気、シャルもユーノも元気そつでよかったよ！」

シャルの言葉にアルフが元気いっぱいに答える。

そしてルシルも何か言っかなと思っただけど、シャルを見たままで黙っている。

少しそうしてシャルが笑顔で頷いた。なんかわからないけど悔しい気持ちになる。

ただど今は嬉しさのほつが上まっているから、すぐに気にならなくなった。

『あ、そうだ。リンディ艦長。デバイスありがとうございます。今でも少し苦労していますが、ようやくまともに扱えるようになってきました』

シャルはリンディ提督に感謝して、すぐになのはの後ろへと下がっていった。

そこで私はさつきから気になっているのはたちのいる場所について聞いてみた。

「なのはは今外なの？　そこは、森の中？」

『うん、裏山に来てるの。今はあんまり長く話せないし、贈り物もすぐには送れないから、だから私とユーノ君、シャルちゃんからのお祝い、見ててね』

そう言うとなのははレイジングハートを夜空に掲げて、シャルは蒼い剣のデバイスを構える。
そして、

『いくよ、レイジングハート、ユーノ君、シャルちゃん！』

『うん！』

『夜空に向けて砲撃魔法、平和利用編。スターライトブレイカー、打ち上げ花火バージョン』

『私たちもいくよトロイメライ。夜空に煌いて、グランツ・フォー』

ゲル』

『『ブレイズ・・・シュート!!』』』

二人のデバイスから砲撃魔法が放たれる。

その砲撃は空中で爆発して、夜空を桃色、緑色、紅色に照らし染める。

言葉に出来ないくらい綺麗だった。

リンディ提督やみんなもそれに見惚れているし驚いている。

「すごいよなのは、シャル。夜空にキラキラ光が散って、すごく綺麗だよ。」

『うん！ それじゃあ続けていくよ、ユーノ君、シャルちゃん』

なのはたちは続けて砲撃を放つ。

しばらくみんなはそれを見て、なのはたちのすごさに言葉もでなかつた。

砲撃が終わるとなのはたちは肩で息をしているから言葉をかける。

「えっと、なのは、ユーノ、シャル、大丈夫？」

『にはやはは、大丈夫だよ』

『うん、全然平気』

『・・・だい、大丈夫、と思う』

なのはとユーノは何とか大丈夫そうだったが、シャルは限界みただい。

『ちゃんとしたプレゼントは、ビデオメールの返事と一緒に送るね。今は、どうしても今日のうちに伝えたかったお祝い』

「ありがとう、ありがとねなのは」

私は何度も何度も感謝の言葉を告げる。
いくら言っても足りないくらいだ。

『うん、きつとすぐ、すぐにまた会えるから。だから今は普通にお別れね。またねフェイトちゃん』

「うん、ありがとうなのは」

そして通信が切れた。

十 十 十 十 十 十 十

シャルとなのは、ユーノによる一夜限りの魔法花火はフェイトの心に深く刻まれたようだ。

フェイトはこのサプライズのことが相当嬉しかったのか泣き出してしまった。

アルフたちがフェイトの周りに集まって何か言っている。

（それにしてもシャルのデバイス操作の技術がかなり高い位置にきていた。

慣れない砲撃を連発したことでフラフラだったが、俺とシャルの演算能力はさほど違いはないと思っただけだな）

シャルが使えて俺に使えないことが少しショックだったが、そこは諦めるしかない。

我ながら最悪な解決方法だ。

一人離れて考え事をして気付かなかっただけ、いつの間にか人が増え宴会状態になっていた。

「お〜いルシル！ あんたも早くおいでよ！」

アルフが両手いっぱい肉を持ちながら俺の名前を呼んできた。
フェイトたちもアルフに続いて呼んでいるから、俺はゆっくりとあの輝かしい集まりのもとへと歩み寄っていった。

（守って見せるさ、この幸せな時間を。どんな手を使ってでも、な）

2nd Episode：夜天の主と守護の騎士（前書き）

今回からA'sへと入っていきます。登場キャラクターが増え苦勞します。

STRIKERSではさらに増える、キャラクターが活かせるかすごく心配です。

2nd Episode：夜天の主と守護の騎士

§冬空に来たるは襲撃者§

時刻は早朝、私とシャルちゃんは二人で魔法の練習をしている。ユーノ君は、クロノ君に呼ばれてアースラへと行ってしまったために今はいない。

「それじゃあ、シャルちゃん。いつものシュートコントロールで終わろっか」

「了解、それじゃ私から行くよ。ロイヒテン・プファイル」

シャルちゃんが空き缶を放り投げ、作り出した魔力弾で打ち上げる。

「デイバインシューター、シュート！」

今度は私が、その空き缶へとデイバインシューターを撃ってまた打ち上げる。

それを二人で交互に二百回打ち上げるといふ訓練方法だ。

ももとはシャルちゃんが始めたことだけど、これがなかなか難しいんだ。

最初は二人で、よく頭に落ちてきた空き缶に悶えていたけど、今はそんなことはない。

「これでラスト！」

二百回に到達したから、私は空き缶をゴミ箱へと入れるためにデイベインシューターを操作したけど、空き缶は縁に当たって弾かれてしまった。

「あくおしい。もう少しだったね、なのは」

シャルちゃんが落ちた空き缶をゴミ箱に入れながらそう言ってくれた。

「うん、でもシャルちゃんもこの半年ですごく上手になったよね。初めの頃は、シャルちゃんの誘導操作の軌道っていつたらすごかったもん」

あれは本当に酷かった。あっちへフラフラ、こっちへフラフラとして怖かった。

最後にはシャルちゃんへ向かってきて自爆していたことが多かったし。

「む、仕方ないじゃない。あんなこと今までしたことなかったんだから。

やっていたのは術式をキルシュブリューテに乗せて撃つ、っていうものだったし」

シャルちゃんは頬を膨らませながら、少し拗ねちゃった。

初めて会ったときは大人びてカッコいいって感じの印象だった。今は子供っぽい感じに変わっちゃたけど、私は今のほうが親しみを感ずるからこのままでいいと思ってる。

「ごめんごめん、もう朝ご飯の時間だから帰ろっか」

「もうそんな時間か。そうね、お腹も空いたし」

私たちは家へ続く帰路にへとついた。

十 十 十 十 十 十

魔法の練習を終えて帰宅して、制服に着替えてから朝食の準備をしていると、恭也兄さんがフェイトから郵便物が届いているとなのに言っていた。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

なのは嬉しそうに恭也兄さんのもとへと駆け寄り、大きな封筒を受け取った。

「いつものあの子達からのだね。またビデオメール？」

「うん、きつとそう！」

美由紀姉さんの質問にも嬉しそうに答えている。本当にフェイトのことが好きみたいだ。

「その文通も、もう半年以上になるよね」

「フェイトちゃんとルシオン君、今度遊びに来てくれるのよね？ 家に来てくれたら、お母さんうんと歓迎しちゃう！」

士郎父さんも桃子母さんも、なのはの様子を見て嬉しそうな顔をし

ている。
本当に良い家族だな。

「そういえばルシリオン君はシャルちゃんのお友達、だったんだよね？」

「やっぱり久しぶりに会えると嬉しい？」

美由紀姉さんが私とルシルの関係から、そう話してきた。正直嬉しいような、嬉しくないような、微妙に難しい感情が心を占めている。

「ええと、そうですね。嬉しいと言えば嬉しいような、といったところでしょうか」

曖昧な答えになのはや桃子母さん、美由紀姉さんの女性陣が難しい顔をしている。

「あらあらシャルちゃん、もしかして好きな男の子をフェイトちゃんに取られちゃったから、とか？」

「なっ！？ あ、ありません！ 有り得ません！

ルシルとはそんな関係じゃなかったですし！

へ、変なことを言わないでください桃子母さん！」

桃子母さんのそんな突飛な話に動揺してしまう自分が悔しい。ルシルへ恋愛感情、それはないと断言できるはずだ。

生前は興味心でいっぱい、今では仲間だという感情だけだと思っ。それに好きになったところで結ばれることは絶対はない。

「つぶぶ、ごめんなさいね。そんなに照れなくてもいいのよ？」

「ですから違いますって！」

なのはたちはユーノのことばかり話していて、私を助けるそぶりが見られない。

うう、覚えていなさいよなのは。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

私とアルフ、ルシル、ユーノの四人はクロノに向かい合うように座って明日の裁判の話聞いている。

「さて、じゃあ最終確認だ。被告席のフェイトとルシルは、裁判長の問いにその内容通りに受け答えをすること。

ルシル、一応魔術に関しては魔法と称して上に通しているからそのつもりで頼むよ。

それで今回はアルフも被告人席に入ってもらうことになるから」

「うん」

「了解した」

「わかったよ」

クロノは私とアルフとルシルについての話をした後、自分とユーノについて話を始める。

「そして僕とそのフェレットもどきは証人席となる。」

質問の回答はそこにある通りだから、忘れないように」

「わかった・・・？・・・！　　っておい！！

誰がフェレットもどきだ！？　　誰が！？」

「ん？　何を言っているんだ、君に決まっているいるだろ？」

ユーノがテーブルに手を叩きつけながら怒鳴り散らしている。

けどクロノはそんなこと聞くまでもないという態度で反すものだから、さらにユーノが怒りに燃えてしまった。

「確かに動物形態でいることも多いけど、僕にはユーノ・スクライアという立派な名前がちゃんとあるんだ！！」

「とりあえず落ち着こうユーノ。単にクロノの軽いジョークだよ。いちいち反応していると精神がもたないぞ」

「ユーノ、まあまあ」

「クロノ、あんまり意地悪言っちゃダメだよ」

ルシルが後ろからユーノの両肩をつかんで座らせながら宥める。

私とアルフもそれに続いて宥める。

それで何とか落ち着いたようだけど、機嫌が最悪に悪いのはわかる。そんなユーノを無視しているかのように、クロノが話を進めていく。

「ともかく事実上判決無罪、数年間の保護観察という結果は確実に言っているんだが、一応受け答えはしっかりと頭に入れておくように」

「「はい」」

「はい」

私たちは揃って返事をしたけど、ユーノだけは遅れて返事をした。やっぱりまだ機嫌が悪いみたい。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

Caution・Emergency(警告、緊急事態です)

夜、私が自室で勉強をしていると、“レイジングハート”がそう告げる。

その瞬間、私は結界が張られたことに気付いた。

「結界！？　どうしよう、シャルちゃんってまだお父さんたちと出かけたままだよね・・・」

シャルちゃんは前にも増してお父さんたちと裏山まで行って、剣術の特訓に付き合うようになっていた。

何か魔法の感覚を掴むためには良い方法だって言ってたし。

It approaches at a high speed
(対象、高速で接近中)

「近づいてきてる？　こっちに!？」

狙いはどうやら私みたいなので、万が一戦いになったらこっじゃま

ずいから、場所を移して近づいてくる人を待ち構えることにした。

十 十 十 十 十 十

最近夜の鍛錬まで付き合うようになり、士郎父さんたちと裏山に来ていた。

鍛錬も終わり家路についている途中で結界が張られたのがわかる。

「なのは、じゃないよね？」

私は急いで家へと帰ろうとするが、私の前に現れる蒼い毛並みを持つ狼。

その光景にはかるゝく既視感を覚える。

「……蒼い狼？ 私に何か用でもあるの？」

もしアルフと同じように使い魔なら話すことが出来ると思い、声をかけてみるけど返事はなかった。

「用がないのならもう帰るけど、いいよね？」

私はわざと狼に背を向けて帰るそぶりをした。するとようやく狼が声をかけてきた。

「恨みはないが、お前の魔力をいただいでいく」

私は振り向き、狼の目を確りと見て今の言葉の真偽を確かめる。

(魔力をいただくって鮮血姫じゃあるまいし、血でも吸おうというのかしら?)

かつての同僚第三騎士ドリック・リックター鮮血姫シリアみたいに相手の血液を吸収することによって、

その魔力を自らの魔力に融合させて扱うという方法でもとるのもいっのだろうか?

「理由もわからないまま魔力を奪われるなんてイヤなだけど?」

そう返すけどもうあの狼からは何も言ってこない。

話す必要がないということらしい。

「そう。なら力ずくで聞かせてもらおうから!」

“トロイメライ”を起動させて戦闘甲冑と同じデザインのバリアジヤケットを着込む。

指環型の待機モードだった“トロイメライ”はラピスラズリ色に輝く長刀となる。

エイミィとその知り合いの技術者マリエルさんの話によると、これはなのはたちの使っているインテリジェントデバイスとは違うアームドデバイスと呼ばれているらしい。

ミッドチルダでは使い手が少ないとされていて、ベルカ式と呼ばれている術式を扱う魔導師のデバイスとのことだった。

魔力の籠められた弾丸を使用することで一時的に爆発的な魔力が扱えるという優れもの。

本当はインテリジェントデバイスがよかったな、と思っていたけど相性が悪くて断念。

でも使い慣れると、こちらのほうが手にしっくりと来た。私はやっぱり接近戦タイプだ。

「っ！？ まさかお前は、騎士なのか？」

私のデバイスを見た蒼い狼が驚きながらそう告げる。

騎士、まあ確かに生前は騎士だったし、今でも騎士だと思ってる。

「ええ、まあ一応は」

私はそう返事をすると、蒼い狼は深く考えるそぶりを見せる。そして顔を上げて私をじっと見て口を開く。

「よもや敵対するのが同郷の騎士とは。こうなれば我とて手加減はせぬ」

同郷の騎士？意味はわからないけどそう呟いた狼が、筋骨隆々な大男へと変身した。

けど私は男の頭についた犬耳に少し笑いがこみ上げてしまいが、何とか耐える。

（アルフなら可愛いんだけど、筋肉質な大男が犬耳ってどうなのよ？）

それはともかく私の騎士発言でさらに闘志を燃やしてしまったようだ。

困ったものだけど仕方ない。相手が言うように手加減なしで戦うだけだ。

「ならこっちだって手加減しないから。」

騎士シャルロツテ・フライハイト、参ります」

「名乗られたのであれば名乗り返すのが礼儀、か。ヴォルケンリッター、盾の守護獣ザフィーラだ」

さあお互い名乗りを上げた。

決して後には引かない決意を固めた決闘の開始だ。

＋
＋
＋
＋
＋
＋

家から離れて、とあるビルの屋上へと来た。

周囲を見回して私に向かって来ている人を待ち構える。

It comes (来ます)

“レイジングハート”の警告に、私は構えいつでも行動に移れるようにする。

そして夜空の向こうに一点の閃光、それはよく見ると

Homing bullet (誘導弾です)

そう、“レイジングハート”の言うとおり、それは赤い魔力弾。私は直撃直前にシールドを張って防ぐけど、それに気を取られすぎて後ろから迫って来ていた小さな女の子にギリギリまで気付かなかった。

「テートリヒ・・・シューラーク!!」

私をハンマーのようなもので殴りつけてきた赤い女の子の攻撃を、私はなんとか右手にシールドを出して防ぐ。けど、そのあまりの威力に完全には防ぎきれず、ビルの屋上から吹き飛ばされてしまった。

落下しながら私は“レイジングハート”を起動させる。

「レイジングハート！ お願い！！」

Standby, ready, setup

変身を終えて、追撃してくるあの赤い女の子の攻撃をなんとか回避しながら話しかけてみる。

「いきなり襲いかかれる覚えはないんだけど！？」

「一体どこの子！？ なんでこんなことをするの！？」

でもあの子には答えず、左手の指の間に白い鉄球のようなものを二つ挟んだ。

「教えてくれないきゃわからないってば！！」

そうして私は変身後に放っておいたデバイスシューターを二つ、あの子の背後から奇襲を仕掛ける。

咄嗟にそれに気付いたあの子は一つは避けて、もう一つはハンマーのようなデバイスで受け止めた。

（あれってシャルちゃんのデバイスに似てるかも）

シャルちゃんの蒼い剣のデバイス、“トロイメライ”に少し似た感じだけど、今はそんなことは考えていられない。

「この野郎おおお!!」

そんな女の子が使うようなものじゃない言葉を叫びながら突っ込んできた。

けどそんな一直線な攻撃には当たってあげるつもりはない。

Flash Move

まずは避けて、砲撃の準備に入る。

Shooting Mode

「話を Divine 聞いてつてば!! Buster」

デバインバスターの威嚇射撃であの子の戦闘行動停止を狙う。

あの子は私の砲撃に驚いているのかどうかは知らないけど、完全に動きを止めた。

私の狙い通り、直撃ではなくあの子を掠めるようにデバインバスターは通りすぎた。

けどその衝撃で被っていた帽子がポロポロになりながら落ちていったのを見て、あの子の目に怒りの色が見えた。

デバイスを横に振り、足元には赤い見たことのない魔方陣が浮かびあがった。

「グラーファイゼン! カートリッジロード!」

やっぱりシャルちゃんの“トロイメライ”と同じだ。

シャルちゃんの“トロイメライ”もあんなふうになったことを見た

ことがある。
確か魔力の籠められた弾丸を装填することで、一時的に魔力が上がるっていう。

Explosion・Raketenform Form

あの子のデバイスがその言葉を合図として変形が始まる。
変形後、その姿は片方に黄色い四角錐、もう片方にはロケットようなものが付いていた。

「ラケーテン」

あの子が魔方陣の上でデバイスを振り回しながら回転している。
よく見るとあのロケットのようなどころから炎が噴射していた。
だぶんあれの力を借りて回っているのだと考える。

そして回転を終えて、私へと突っ込んできた。

一撃目はなんとか避けるけど、二撃目は避けることが出来ないと判断してシールドを張る。

ただどまるでシールドなんて初めからないというような勢いで簡単に碎け散る。

そして“レイジングハート”にぶつかり、少しずつだけ砕いていく。

「ハンマアアーーーーー!!!」

私はその衝撃に耐えられず、向かいのビルまで吹き飛ばされてしまった。

十 十 十 十 十 十

「このおおお！！」

「くっ、おおおおお！！！」

私の斬撃を紙一重でかわし、カウンターの拳打を撃ってくる。

さつきから私の斬撃とザフィーラの手甲が衝突しては火花を散らす。盾の守護獣という二つ名は伊達ではないらしく、防御力が異常に高い。

ならばと思い、間合いの外から中距離用の攻性術式を放つが、それすら防御されてしまう。

私は魔法を防がれるのを見て、やっぱりという気持ちで心を占めていくのがわかる。

私は固有魔術を非殺傷設定が出来る魔法へと組み直した。

何せ魔法に関しては界律から何も干渉してこないの、魔術より扱いやすいからだ。

そのおかげで下手に相手に傷つけることはなくなった。だけどその所為かは知らないが、

魔力から神秘性がなくなってしまう、魔法でも容易く防がれるようになってしまったのだ。

実際なのはシールドに攻撃が防がれたのを見て、しばらくショックで立ち直れなかったのを覚えている。

でもそれが魔法を使う代償だというのなら、私はそれを甘んじて受けよう。

（私は魔法となった術式でまた最強を目指す。だからこんなところ

でつまずいているわけにはいかない!!)

「雷牙閃衝刃! Blitz Lanze (雷槍) いっけえええ!!」

ザフィーラ目掛けて雷撃の刺突を飛ばす。

だがそれもまた回避されて、私の術後の隙をつき接近してきた。放たれるザフィーラの強烈な右ストレート。私はそれに左手を向けてシールドで防ぐ。

Hartriegel Schild (堅固なる盾)

何とか受け止められたけど、間髪いれずに左拳を叩きつけてきた。

「無駄なことだ。はああ!!」

「ぐっ!? がはっ」

その衝撃に抗いきれなかった私は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「いっつう、まだまだいける。トロイメライ!」

Leuchten Pfeil (輝ける閃矢)

誘導弾を8発、次の攻撃への布石として放つ。

なのはのように事細かな制御はまだ出来ないけど、今はこれで十分だ。

生前から苦手としていた術式発動後の操作を、デバイスの力を借り

ることによって使えるようになったのは嬉しいことだと思っている。だって操作して狙った標的に当てたときの快感は忘れられないから。向かってくる誘導弾を、ザフィーラは拳で弾いては回避という行動をしている。

「風牙烈風刃！」

Windsto (突風)

魔法へと変化したこの術式によってザフィーラを吹き飛ばそうとするが、その巨体の所為で少しの距離しか離すことが出来なかった。

「トロイメライ、カートリッジロード」

Explosion

カートリッジ一発を消費して、いつでも砲撃を放てるようにしておく。

さらにザフィーラに間合いを離させるため射撃魔法を使う。

「ロイヒテンプファイル！ Jawohl(了解)」

ザフィーラの足元に集中して放つが、物凄い勢いで回避してタックルしてきた。

もちろん回避して振り向きざまに一撃与えようと考え、行動に移そうとしたとき、

「しまっ・・・!?!」

ここにきてバカなミス。石を踏んづけてしまい、バランスを崩して

しまった。

その一瞬の隙を見逃すはずもないザフィーラは、さらに勢いをつけてタツクルを私へと直撃させた。

「あゝ！？」

バリアジャケット越しに伝わるシャレにならない衝撃。

そのまま吹き飛ばされながらも、距離があいたことがわかっているために砲撃を放つ。

正直意識がとびそうだが、詰めは誤らない。

「グランツ・・・フォーゲル！！」

“トロイメライ”を横一線に振り抜き、発動するのは真紅に輝く鳥の形をした砲撃魔法。

ザフィーラはそれに驚き、防御か回避かに移ろうとするが間に合わず直撃した。

私は着地して、念のため魔法の発動準備をしておく。

“トロイメライ”から使用済の薬莢が排出され地面に落ちた音が響く。

土煙が次第に晴れていき、そこにいるはずのザフィーラの様子を見ようとするけど・・・。

「・・・っ！？ いない！？ 一体どこに！？」

周囲を見渡すけどどこにもいない。

ふと私は何を思ったのか上空を見上げる。

そこには狼形態に戻っていたザフィーラが滞空していた。

「あのタイミングで避けられた？」

いや違う、きちんと入っているようだ。
直撃だけは避けられたみたいだけど、それなりのダメージは与えられたみたいだ。
まああのタイミングでの砲撃で、無傷で済まされたとあってはへこんでしまう。

ザフィーラは少し私を見たままだったけど、何も言わずに去って行ってしまった。

その行動に妙な胸騒ぎをして、なのはに念話を通してみる。
だけど、なのはからは一切返事がない。

「しまった。何で早く気付かなかったわけ私!?
なのはのほうにも、彼の仲間が襲いに行ってるってこともあるじゃない!」

私はすぐさま追撃をかけるために真紅の片翼を出す。

E i n s R u b i n F l i u g e l (紅翼の片割れ)

私は空高く飛び、ザフィーラの向かった方向を指すとしたら、私の背後に気配がしたので、“トロイメライ”を背後の相手へと向ける。

そしてそこにいたのは

十 十 十 十 十 十 十

あの子の一撃で向かいのビルまで吹き飛ばされた私は、その部屋の

中で咽っていた。
ただどそんなことはお構いなし、とあの子がまた突撃を仕掛けてきた。

Protection

“レイジングハート”は私を守るためにプロテクションを張ってくれた。
なんとか拮抗しているけど

「ぶち貫けえええ!!」

Jawohl(了解)

プロテクションを少しずつだけ抜けてきて、最後は完全に破壊されてしまった。

また吹き飛ばされてしまう私、もしかして今日はそういう日なのかもしれない。

痛みで意識が朦朧とする中、あの子が近づいてくるのがわかったので、力を振り絞ってボロボロになってしまっている“レイジングハート”をあの子へと向ける。

でもどうすることも出来ないことは、自分が一番わかっている。

あの子が私に向けてデバイスを振り上げる。

(こんなので終わり?イヤだ、シャルちゃん、ユーノ君、クロノ君、ルシル君)

私はみんなの心の中で名前を呼ぶ。このままお別れだなんて絶対にイヤだよ。

前に言ってくれたよね、だから私は呼ぶよあなたの名前を……。

(フェイトちゃん!!)

振り上げられたあの子のデバイスは、一人の少女のデバイスによって防がれる。

そして私を支えてくれるのは、

「ごめんなのは、遅くなった」

「ユ、ユーノ君？」

そこにはユーノ君。そして私をかばうように立って、あの子のデバイスを受け止めているのは、やっぱりフェイトちゃんだ。

「チツ、仲間か？」

赤い子がそう聞き、フェイトちゃんから距離をとる。

S c y t h e F o r m

それを聞いたフェイトちゃんは一言告げる。それは私にとってとても大切に嬉しい一言。

「友達だ」

2nd Episode：夜天の主と守護の騎士（後書き）

アームドデバイス“トロイメライ”

この世界でのシャルロットの愛機である“夢想”という意味を持つ蒼い刀身の長刀型アームドデバイス。

機能構想はシャルロット。開発はマリエル技官。

ヴィータのグラーフアイゼンと同じ回転シリンダー方式のカートリッジシステムで、鰐部分に設けられている。

装填数は六発。排気口は刀身の付け根に設置されている。

形態は全部で四つ。待機の指環。基本の長刀。そしてあと二つ。

守護騎士ヴォルケンリッター

私は傷ついたなのはをかばい、赤い子と対峙する。

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪では済まない罪だ」

私はあの子へと罪状を告げる。

けどあの子はそれに反発するようにデバイスを掲げて、私が何者か聞いてきた。

「あんだテメエ、管理局の魔導師か？」

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。

抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して

「誰がするかよ！ バーカ！」

私の話の途中で赤い子は軽く挑発してから逃亡を図った。

私は気にせず、なのはのことはユーノに任せてあの赤い子を逮捕する為に追撃する。

「ユーノ、なのはをお願い」

＋
＋
＋
＋
＋
＋

フェイトちゃんが逃げた赤い子を追っていく。

また会えることを楽しみにしていたのに、こんなかたちで再会することになるなんて。
それがすごく悲しかった。

「大丈夫なのは？ 待つてて、すぐに治癒魔法をかけるから」

ユーノ君は私の怪我を治すために魔法を使いながら、何故ここにいるのか教えてくれた。

「フェイトとルシルの裁判が終わって、みんなでなのはとシャルに連絡しようとしたんだ。

そうしたら通信は繋がらないし、広域結界が出来てるし、だから慌てて僕たちが来たんだよ」

「そっか、ごめんねユーノ君、ありがとう」

私は、助けに来てくれたことへのお礼を告げる。
でも今の私にはひとつ気になることがある。

「ユーノ君、そういえばアルフさんとルシル君がいない、みたいだけど」

私の前に来てくれたのはフェイトちゃんとユーノ君の二人。
アルフさんとルシル君ならフェイトちゃんと一緒に行動していると思っただけど。

私の疑問にユーノ君は治癒魔法を続けながら答えてくれた。

「アルフは外にいるよ。ルシルはシャルのほうへ向かったんだ。シャルもなのはみたいに襲われているみたいだったし」

「え？ そんな、シャルちゃんは無事なの！？」

まさかシャルちゃんも誰かに襲われていたなんて。

でもそうだよ、結界が張られたんだっただらシャルちゃんだって気付くはず。

そうしたら私のところへと来てくれるか、念話で連絡してくれるくらいはあると思う。

それが無いということは、シャルちゃんにも何かあったんだと思うのが普通だ。

「私、自分のことだけで精一杯だったから、どうしよう・・・」

「大丈夫だよなのは。ルシルがシャルと組んだらそれこそ無敵だよ」

ユーノ君は少し顔を背けて、引きつった笑顔でそう言ってくれた。

今の私には安心できる言葉だけど、ルシル君と向こうで何かあったのかな？

「えっと、それよりあれは誰なの？ どうしてなのはやシャルを襲ってきたのかわかる？」

「ううん、ごめんねわからないの。急に襲ってきたから何とかしないうちで思ったんだけど。」

でもねユーノ君、あの子が使ってるデバイスってシャルちゃんと同じみたいなんだ」

私はシャルちゃんとあの赤い子が使っているデバイスが同じ機能を持つことを話す。

そうしたらユーノ君は少し驚いていた。

「シャルと同じ？ だったらベルカの魔導師、なのか？
でも、それなら一体どうしてこんな辺境世界にいるんだ？」

ベルカというのは知らないけど、ユーノ君は何か知っているみたい
だった。

十 十 十 十 十 十

“トロイメライ”を背後の相手に向けると、そこにいたのは十枚の
剣の蒼翼を背に、第四聖典を携えていたルシルだった。

「ちょっと、なんでここにいるのルシル！？」

あまりの予想外の展開についつい怒鳴ってしまふ。
けどルシルはそんなことを気にしない様子で返事をしてきた。

「ん？ なんでって裁判が終わったのを連絡しようとしたんだけど、
繋がらない上に結界まで張ってあったから来たんだよ。
それでフェイトたちはなのはへ向かわせて、俺は君のもとへと来た
というわけだ。」

それよりシャル、砲撃後も油断せずに周囲に気をかけないのはまず
いだろう？」

「はあ！？ 見てたなら援護くらいしてよ！！ 私が悪戦してたの
知ってるでしょ！？」

ルシルはどうやら私とザフィーラの戦いをただ見ていたらしい。
それなら援護の一つくらいはしてくれてもいいのに。

「いや待て、以前の契約の際に援護したら滅茶苦茶怒っていたじゃないか？」

“騎士の決闘に横槍入るなんて信じられない” ってさ。

だから今回は黙って見ていたのに、その理不尽な怒りを向けられる覚えはないぞ」

「あ、ごめん、そうだったね。確かにあれは私とザフィーラだけの戦いだっただけ。」

ありがとう、ちゃんと見ていてくれて」

私はルシルに怒鳴ったことへの謝罪と、見守っていてくれたことへの感謝を告げる。

ルシルは「気にするな」って言ってザフィーラが向かっていった方向を見据える。

「さてと再会の挨拶はここまでだ。そのザフィーラという狼を追撃して動機を聞く。」

その後フェイトたちと合流、状況によっては加勢する」

「え？ すぐに加勢しないの？」

ルシルの発言に疑問を抱き、聞き直す。

でもすぐには答えず、移動しながら説明すると言った。

十 十 十 十 十 十 十

本当ならなのはの傍についてあげたいけど、囑託魔導師となっ

た以上はまずあの赤い子を捕まえるのが先決だ。

「バルディッシュ Arc Saber はっ!」

私は手始めにアークセイバーを放ち先制する。

「グラーフアイゼン! Schwalbe fliegen はあ
っ!」

あの子もまたそれに対抗するように四つの球体をハンマーのような
デバイスで叩きつけ撃ってきた。

「障壁!」

Panzer hindernis

飛来する刃を、あの子は回避ではなく防御を選択するけどそれは間
違った選択だ。

私はあの子の放った誘導弾を回避しながら、自滅させるように誘導
して処理した。

私は未だにあの子のバリアと拮抗しているアークセイバーを爆破さ
せることを選択。

上手くいけばこれで片がつくかもしれない。

「セイバーブラスト!」

Saber Blast

「うわあっ!?!」

アークセイバーの爆発によってバリアは碎けるものの、あの子はその速い動きでダメージ判定圏内から離脱した。
でも残念、あの子の離脱した先にはアルフが攻撃態勢で待ち構えている。

あの子はアルフに背を向けるようにしていた為に気付くのに遅れた。

「そおおらあああ！！」

「くっ！？ ごおんのおお！！！」

P a n z e r h i n d e r n i s

アルフの拳打を私に使ったバリアで防ぐけどそれもまたミスだ。

「バリアアアブレイクウウ！！！」

アルフが放った拳打は、アルフが得意とするバリア生成プログラムに割り込みをかけて破壊するバリアブレイクの一撃。

アルフのそれはクロノのバリアもルシルが学んで組んだ魔法のバリアも、時間がかかったけど破壊できた二人のお墨付きを頂いた魔法だ。

次第にヒビが入っていき、ついには再度破壊されるあの子のバリア。

「何なんだよ、これえええ！？」

次々と襲い掛かるあまりの予想外の展開に叫ぶ赤い子。

私は再度投降を呼びかける。

「もうこれ以上はやっても仕方ないからおとなしく投降して名前と出身世界、そして目的を聞かせてもらおう。」

ちなみにこれが最後の通告だ。受け入れられない場合はこちらも全力で相手をしないとイケない」

「上等だつづの！ アイゼン！！」

やっぱりダメだったみたい。

あの子はハンマーを掲げながら突撃してくる。

「フォトンランサー Photon Lancer ファイア！」

行く手を妨害する為にフォトンランサーを五発放つ。

けど最小限の動きで全弾回避してさらに速度を上げてきた。

「おらああああ！！」

「くっ、バルディッシュ！ Scyth slash はあっ！」

あの子のハンマーによる直接攻撃を回避してすぐさまカウンターを仕掛ける。

けどあの子もまた回避して再度ハンマーで私を狙ってくる。

それから何度もデバイス通しがぶつかり合い火花を散らす。

その力強さに多少押されてしまうけど何とか耐え切っている状態だ。

（それにしてもここまでついて来られるなんて）

確かにこの子は速いし強い。

だけど、私はアースラで何度もルシルを相手に戦ってきた。

炎攻め、水攻め、槍攻め e t c . . . そんな冗談じゃない攻撃をたくさん受けてきたんだ。

それに比べたら今の状況ははるかにマシだ。

確かに一対一では向こうに分があるけど、私にはアルフがいてくれる。

このまま押ししていけばきつと勝てるはずだ。

私は一度間合いを取り“バルディッシュ”をデバイスモードへと変更して、砲撃魔法サンダースマッシャーの発動準備に入る。

「バルディッシュ Thunder Smasher サンダース
マ　！？」

あの子へ砲撃を放とうとした瞬間、目の前に剣を持った女性が現れてその剣で私を薙いできた。

その突然の襲撃に驚きながらも咄嗟にバルディッシュを構えて防御した。

けどその衝撃は、あの赤い子以上に速くて重く、私は耐え切ることが出来ずに弾き飛ばされた。

「フェイト！？」

アルフは弾き飛ばされた私を見て心配の声をあげるけど、今の状況でそれはまずい。

完全に意識が襲撃者ではなくて私に向いてしまっているから。

「はああー！！」

「ぐっ！？　うああー！！」

その女性は半回転して剣を、今度はアルフへと叩きつけた。

アルフはシールドを張ったけど容易く破壊されて、私と同じように弾き飛ばされてしまった。

十 十 十 十 十 十

「らしくないなヴィータ。お前が苦戦するような相手ではないと思うが」

「苦戦なんかしてねえ、ちょっと遊んでただけだ」

助けてくれたシグナムに、あたしが苦戦していたと言われつまらない言い訳をした。

認めたくねえけど、こいつらの強さは本物だった。

あのままあいつが砲撃を撃っていたら落とされるとはいかないまでも、それなりのダメージは受けていたと思う。

「そうか、それは済まなかったな。てつきり苦戦していたように見えただが、そうか遊んでいただけか。

だが気をつける、ザフィーラがもう片方の対象に撤退を余儀なくされるほどのダメージを与えられた」

シグナムはそんな信じられないことを言ってきた。

ザフィーラが負けた？ そんなことあるわけねえ。

「嘘だろ！？ ザフィーラは今どうしてんだよ！？」

「今はシャマルのところへ行き、回復してもらっている最中だ。しばらくすれば合流できるだろう」

「なんだよ、それく「あなたもその子の仲間ですか！？」「はあ？」

あたしたちが話してるつつうのに、黒いあいつがシグナムに向けて
そう聞いてきた。

「たくうつせえなあ、しゃあねえ。」

「シグナム、先にこいつら片付けて蒐集しまおう。」

さっきあたしが潰したガキはまだ動けねえみたいだしさ。

こいつもあの白いガキと同じくらい魔力持ってるみたいだし」

「ふむ、そうだな。だがザフィーラを退かせた騎士というのが気になる。手早く済ませよう」

ん？ シグナムは今なんだった？ 騎士？

「シグナム、今「来るぞ」あくもう！ 邪魔すんな！」

「私が黒衣の少女を相手にしよう。ヴィータはもう一人のほうを頼む」

シグナムが勝手に決めたが、そのほうが早くケリがつくだろつと思
うから文句はない。

「わかった。グラーファイゼン、カートリッジロード」

「レヴァンティン、カートリッジロード」

Explosion

シグナムの言った騎士つつうのが気になるけど、今はこいつらをぶ
つ潰すのが先だ。

十 十 十 十 十 十

「フェイトちゃん！ アルフさん！」

「まずい、新手だ。シャルとルシルはまだなのか!？」

最悪な状況だ。

あの赤い子一人だけなら何とかかなりそうだったけど、さらに増援として来たあの女の人は直感が危険だと告げている。

「どうしようユーノ君!？」

なのはが聞いてくる。

こうなったら僕が出て、少しでもフェイトたちの助けにならないと。

「僕も行くよ。だからなのはは、

妙なる響き、光となれ、癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ

この結界の中で待ってて」

僕が張ったのはラウンドガード・エクステンドと名づけられた高位結界魔法だ。

それは身体と魔力を回復させ、その上防衛結界としての機能も持っている。

「それじゃあ行って」その必要はないから「へ？ シャル！」

突然声をかけられ振り向くとシャルが立っていた。
ようやく来てくれたんだ。

「シャルちゃん！ シャルちゃんは大丈夫なの！？」

なのはがシャルの心配をして声をあげる。

シャルは笑顔で返事をした。

「見てわかるとおり大丈夫。少し苦戦したけど何とか退けられたから」

「そう、なんだ。よかった。あれ、ルシル君は？」

そうだ、ルシルがいない。シャルと一緒に来てくれたと思ったんだけど。

するとシャルはフェイトたちのほうを指差し告げる。

「ルシル？ それならあそこ。魔術で姿を消しているから見えないと思うけど、ちゃんとフェイトとアルフを見守っていていつでも戦闘に移れるようにしてる」

シャルはそう告げたまま何もしようとしなない。

おいおい、早くフェイトたちを助けに行かないとまずいよ。

「っていつかシャル！？ 早くフェイトたちを助けてあげないと！

」！

「そ、そうだよ！ こんなところでのんびりしてる場合じゃないよ！？」

僕となのははシャルのその行動に戸惑い、声を張り上げる。シャルは僕たちへと視線を移して真剣な顔で見つめてくる。

「……ここに来るまでにルシルと相談したの。」

確かに今私たちが手を貸せば簡単に、とはいかないかもしれないけど勝てると思う。

でも、だからといっていつも私たちが手を貸してちゃあなたたちが成長できないって。

だから出来るだけあなたたちに任せることにしたということなんだ。これは私たちが何時いなくなっても大丈夫なように、あなたたちを成長させる為なの。

わかってくれる、よね？」

「いなくなってもって、そんな、でもシャルちゃん」

なのははシャルのその言葉に少しショックを受けているみたいだ。今まではずっと助けてくれたのに、今になって自分たちの成長のためという理由で助けてくれないことに。

「私モルシルもずっとなのはたちと一緒にいることが出来るわけじゃない。」

私の留学期間もあと少しだし、まあルシルはどうか知らないけど」

そうだ、いつかシャルとは別れなければならない時が来る。

いつでも、いつまでもシャルたちに手伝ってもらえると考えるのは間違いだ。

「……シャルちゃん、でも、でも！」

「安心してなのは、本当に危ないと判断したらちゃんと助けるから。だから今は黙って見ててあげて」

シャルはなのはの頭を撫でながら優しい声でそう告げる。

僕は二人が姉妹のように見えて、ずっと一緒にいられたらいいなと思った。

十 十 十 十 十 十

赤い子と女の人が「カートリッジロード」と告げると、赤い子のハンマーが変形、女の人の剣からは炎が吹き上がる。

「え!?!」

その光景に戸惑ってしまうが、それは一瞬のことですぐに対策を思考する。

でも魔力が一気に増大しているとわかったために上手く思考がついていかない。

女の人が炎の剣を構えて私に向かって斬り掛かって来た。あれはまずい、明らかに威力が高い。

「紫電一閃!?!」

おそらく私の防御魔法で受けきるのとは不可能だと判断、だからこそ。

「コード・エオロー!?!」

左手の小指に嵌められた指環が光る。

ルシルの魔術、確かルーンって言ってた術が籠められた指環だ。術式名を告げるとともに蒼く輝く紋章が現れて、炎を纏った斬撃を防ぐ。

「なっ!?!」

それを見て驚愕する女の人は、しばらくそのままの体勢で障壁を破壊しようとするけど、結局破壊できずに距離を取った。紋章が雪のように散っていくのと同時に私はバルディッシュを振るって追撃する。

「はあぁっ!?!」

「くっ、はあぁぁっ!?!」

私のサイズスラッシュを剣で捌き、あちらも同様に剣を振るってきた。

Defencer

速い、回避できる体勢じゃなかったから防御を選択する。

バリアを破壊されながらも攻撃を受けることなく、何とか逃げ切る事が出来た。

お互いが相手を見据え静かにたたずむ。

あの女性ひとは私の指環を見ているようだ。

さっき使ったこの指環は半年くらい前、私とアルフの契約記念のお祝いとしてルシルがくれたものだ。

銀のリングにルシルの第四聖典の形をした十字架が付き、そして四方と真ん中に嵌められた小さな丸い宝石が輝く私の宝物だ。

真ん中の金色の宝石は私、右はオレンジ色の宝石でアルフ、左は青色の宝石でルシル、上はピンク色の宝石でなのは、下は赤色の宝石でシャル、そして十字架の円環は私たちを出会わせてくれたユーノとクロノたち管理局ということを表しているらしく、みんなが私と一緒にいるという意味だと話してくれた。

ちなみにアルフは指環ではなく腕輪で、宝石の位置もオレンジの宝石が真ん中にきていて、金色の宝石が右となっている。

どうやらアルフもルシルから貰った腕輪の力を使ったのが、赤い子の打撃を防いでいる。

でもこれには一つ欠点がある。それは一度使うと一日使用不可となることだ。

確かにこれほどの強力な障壁なら、連続して使えるはずがないとその時も思った。

ともあれひとつの危機を脱したのだからよしとしよう。

「まさか私の一撃が防がれようとは……。それはお前の魔法か？」

「いいえ、私の大切な人がくれた力です」

「そうか。しかし先程の斬撃には肝を冷やしたぞ。なかなか良い剣筋だった、良い師を持っているのだな」

私がそう返すと、女の人はそれとは別の話をしてくいて私の攻撃を褒めた。

何故かは知らないけど私の師、リニスとルシル、クロノのことを褒められてそれが嬉しかった。

「え、その、ありがとう……。ございます」

「だが、確かに腕は良いが我らベルカの騎士に一对一を挑むにはまだ・・・足りん!!!」

私がお礼を言ったそばから攻撃を仕掛けてきた女の人に、同じように“バルディシュ”を振るって打撃を叩き込む。

十 十 十 十 十 十

シャルと共に蒼い狼の辿った軌道を飛んできたが途中で見逃してしまった。

しばらく索敵してみたが、転移して逃げたのが見つけることが出来なかった。

諦めてフェイトたちのもとへと向かった。

ここに来るまでにシャルと決めたことを守るため、俺は複製術式のステルス・コート遮断羽衣を使用して

フェイトとアルフの戦闘を見守っていた。

(あの剣士は強いな。たぶん大戦時の騎士の中で、下の上からの中くらいだろう。)

今のフェイトでは経験が少し足りないか)

少し考えているとフェイトがビルへと叩き落されてしまった。

剣士がフェイトに近づき何やら話しているようだが聞き取れない。

それだけでなくアルフのほうにも、シャルから聞いたザフィーラと名乗った狼が近づいているのを視認する。

(ここまでか。『シャル、戦闘開始だ』)

リンクを使い、シャルに俺たちの戦闘開始を告げる。
続けてフェイトとアルフにも念話で俺たちが戦闘を引き継ぐことを告げた。

『フェイト、アルフ、よくやった。ここからは俺とシャルが剣士と赤い子の相手をする。』

二人には悪いがもう一人新手が来そうなんだ、そっちを任せたい』

『ルシル！？　もしかして見てた！？』

『そうなのかい！？　だったら早く助けなくてもいいじゃないか！？』

フェイトとアルフは、俺の行動にショックを受けてしまったようだが今はあの連中の始末のほうが先だ。あとでいくらでも文句を聞こう。

『それに関してはあとで説明するから。今は新手のほうをお願いしたい、頼む』

『・・・あとでちゃんと聞かせてねルシル』

『はあ、あいよ。新手ってどんな奴なんだい？』

よかった、なんとか言うことを聞いてくれるみたいで助かった。
俺はフェイトとアルフに新手の説明を終え、赤い子供のほうへと向かう。

十 十 十 十 十 十 十

ルシルからリンクを通して戦闘開始の合図を受けた。

そうと決まればあの剣士と戦うまでのことだ。というより戦いたい。

「さて、行ってくるねなのは、ユーノ」

「シャルちゃん……その気をつけてね」

「危なくなったら僕も加勢しに行くから」

私は二人の声を背に聞きながらあの剣士のもとへ飛びだった。

私は剣士との距離を詰め、トロイメライを向けて戦闘の引継ぎを告げる。

「ここからは私が請け負います。フェイト、ルシルに言われた通り
にお願い」

「白い騎士甲冑、蒼い剣型のアームデバイス。そうか。お前がザ
フィーラの言っていた騎士か」

フェイトはアルフと合流してザフィーラとの戦闘に入るのを私は確
認した。

それにしてもザフィーラの様子からして、私の砲撃があまり効いて
いなかったみたいだ。

「ザフィーラには逃げられたけど、あなたは逃がさないのそのつ
もりで」

“トロイメライ”を構え、いつでも戦闘に移れるようにする。それを見た剣士もデバイスを構え、名乗りを上げた。

「守護騎士ヴォルケンリッターが将シグナム。そして我が剣レヴァンティンだ」

「シュテルンリッターが第五騎士シャルロッテ・フライハイト。愛剣トロイメライ」

静かに対峙して互いを見据える。やばい、すごく楽しみで仕方がない。

なのははロングレンジの砲撃系、ルシルは一応オールラウンドだけど、正確に言えばロングだ。

唯一のクロスはフェイトだけど、私の相手には全然足りない。だからこそ、このシグナムとの決闘に心が躍る。

「フライハイトにトロイメライか。お前もベルカの騎士なのか？」

「ベルカ？　いいえ、この世界の騎士よ」

私の魔方陣はベルカのものではなくシュテルン・リッター星騎士の紋章だ。

でもその形が似ていることから、もしかしたらベルカは私の故郷レーベンヴェルトの未来の名かもしれない。

「そうか、いや忘れてくれ。今はお前との戦いを楽しみたい」

「同感です。ベルカの騎士の力、見せてもらいます」

お互いの闘気が膨れ上がるのがわかる。

さあ今の私がどこまで戦えるか……いざ勝負！！

「紫電・・・一閃!!」

「炎牙・・・月閃刃!!」

私のトロイメライには真紅の炎、シグナムのレヴァンティンには紅蓮の炎が渦巻いている。

そして瞬時に間合いを詰め、互いに斬撃を放つ。

十 十 十 十 十 十

フェイトとアルフが合流してザフィーラとの戦闘に入るのを確認した。

そして今俺が対峙するのは不機嫌さを隠そうとしない幼い赤い少女。その態度を見て、何故か夢幻王を思い出してしまった。

「あんだよ、テメエも管理局かなんかか？」

「そうだ。管理局囑託ルシリオン・セインテスト・フォン・シユゼルヴァロードだ。」

フェイトからすでに聞いているかもしれないが、名前、出身世界、目的をとつと話せ少女」

どうせ何も話さず戦いを仕掛けてくるのだろうから、期待せずに挑発しておく。

案の定「あゝあゝ!？」と女の子にあるまじき言葉を吐いている。

「上等だよテメエ、アイゼンの頑固な汚れにしてやるよ!! アイ

ゼン！！」

Schwalbe fliegen

指に挟んでいた四つの鉄球らしき物体をハンマーで打ちつけて放ってきた。

術式名：シュヴァルベ・フリーゲン。付与効果：飛翔・誘導制御・バリア貫通・着弾時炸裂

複製完了、英知の書庫類似術式検索、ヒット319件、時限登録、発動開始

「シュヴァルベ・フリーゲン」

俺は八つの弾丸を作り出し、第四聖典で打ちつけて放った。それを見た少女は目を見開いて驚愕していた。

守護騎士ヴォルケンリッター（後書き）

グダグダ感いっぱいの子話目となりました。すいません。

シャルとルシルの可能な限りの戦闘不参加は、管理局側と守護騎士側の戦力差をどうにかするためこのような構成と相成りました。というよりは、なのはたちの見せ場を出来るだけ潰したくなかっただけです。

フェイトの指環とアルフの腕輪

フレイザブリク

アルワイト

ルシルが神々の宝庫と英知の書庫の二つの力を使って作り出した概念兵装の一つ。

テストメント

もしルシルが界律の守護神状態で作っていたら神造兵装になってました。

効果はアースガルド四王族のみが使えるルーンをフェイトとアルフも使えるというもの。

防御のエオロー、瞬間移動のラド、治癒のラーグが使用できる。ですがこれもまた少し反則なので、使用制限を付けさせました。連続かつ無限に使えてしまったら反則的な強さを得ますから。

いざ海鳴市へ

戦いが繰り広げられている空より少し離れたビルの屋上に佇む一人の騎士。

名を湖の騎士シャマル、守護騎士ヴォルケンリッターが一角を担う女性。

足元には料理に使われると思しき食材が入ったビニール製の袋。

左手には厚さのある書物を抱え、自分を含めた騎士が敬い慕う主へと連絡を入れていた。

そう、仲間が苦戦している状況がただ信じられないという表情をしながら。

(何なんだよこいつは!!!?)

犬ツコロと入れ替わるようにして現れたもう一人の黒い魔導師。

さっきの黒いやつと同じ管理局の人間みてえだが強さがハンパじゃない。

信じられないことにあたしの魔法を、シュヴァルベ・フリーゲンを使ってきたやつがった。

その後もあたしの障壁を・・・なんつったかな？ コード・ゼルエル？だっけ？

その魔法でまるで障壁をただのガラスを割るかのように簡単に砕いてきやつがった。

今日で三度も砕かれた障壁を見てへこんじまう。
それに続いて炎の鳥や竜巻、氷の龍まで使つてきやがるしわけわか
んねえ。

「そろそろ降参して投降してもらえると嬉しいんだけどね」

なんだよあの余裕は！？ ムカツク、ムカツク、ムカツク、ムカツク
クーーーー！！！！

ふざけんな、あたしが、あたしたちがこんなところで捕まったら・
・はやてはどうなる！？

だから負けらねえ、負けられねえんだ！！

「アイゼン！ カートリッジロード！ Explosion ラケ
ーテンフォーム！！」

アイゼンをハンマーフォームからラケーテンフォームへと変形させ、
一気に終わらせる。

「ラケーテン・・・ハンマー！！！！」

「仕方ない・・・。知らしめよ、汝セルエルの力」

衝突するアイゼンとやつの十字架。

ものすげえ火花が飛び散りながら拮抗している。

「ぐううう！！（こいつやっぱミッドの魔導師じゃねえ。なんな
んだこの魔法は！？）」

おかしすぎるだろこれ！？

離れたところから撃ってくるだけの弱っちいミッド魔導師がこんな

ふざけた魔法を使ってくるわけがねえ！
なんとか拮抗していたお互いの攻撃も、次第にあたしが押され始める。

そして、

「はあああつー!!」

「っ!?! うあああつー!!」

(あたしが競り負けた? 本当になんなんだよこいつ・・・)

少し離れたビルまで吹き飛ばされながらも、なんとか体勢を立て直してあのガキを睨み付ける。

「さあおとなしく名前、出身世界、目的を話してもらおうか」

「・・・チツ、ヴィータ。ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータ」

ああ、認めてやるよ。あたしじゃテメエに勝てねえって。

奥の手を使えば、と思っただけどこいつがそんな隙を与えてくれるとは思えない。

だけど、まだ終わっちゃいない。

『シャマル、早く白いガキから蒐集してくれ。あたし一人じゃこいつを抑えきれない。

わりい、シグナム、ザフィーラ。頑張っただけ勝てる気がしねえんだ』

思念通話で仲間に語りかける。

どうやってもこれ以上は殺す気でいかないと勝てないと。

『いや、私の方も似たようなものだ。フライハイトの剣技は疾く鋭い。』

まさか主はやてと同じくらいの歳でこれほどまでの力を持っているとは恐れ入った』

『気にするなヴィータ。今回は相手が悪かったただけのことだ。

私が相手をしている少女二人の連携もなかなかのものだ』

『待っててみんな、すぐに蒐集行動に移るから。だからもう少しだけ耐えて』

『『『心!!!』』』

だったらもう少しだけやってやる。

十 十 十 十 十 十

やっぱり強いな。

シャルちゃんとルシル君が来てくれただけで、戦況がこっちに傾いてきてる。

「ねえユーノ君、私って本当にこのまま黙って見てるだけでいいのかな？」

やっぱり何かお手伝いしたほうが・・・」

「うーん、シャルとルシルは問題ないけど、フェイトとアルフは結

構疲れてきてるかも。

シャルにはここで待機って言われてるけど、僕が行ってくるよ」

私のその言葉を聞き、自分が戦いに行くって言ったユーノ君。やだな、なんか私って役にたってないかも。

「それじゃ、行ってくるよなの・・・は？」

ユーノ君は私を見て顔の色が青くなった。

ユーノ君の視線を辿るように私もユーノ君が見ている場所へと視線を移す。

そして私に今起こっている異常をこの目でハッキリと見る。

「え？ な、なに・・・これ？」

私の胸の辺りから突き出しているのは、人の腕？

そしてその手のひらの上にあるのは私のリンカーコア。

「あ、あ、ああ・・・！」

「なのはー！ーッ!？」

イヤだイヤだイヤだイヤだ。

あまりの出来事に頭の中が白くなる。

次第にリンカーコアの輝きが失われながら小さくなっていく。

助けて、助けて!!

十
十
十
十
十
十
十

ユーノの叫び声が聞こえたからそちらへと視線を移す。
シグナムほどの騎士相手にそれは愚行だけど、ユーノの普通じゃない叫びのほうに気がなくなってしまった。

「あれはまさか・・・まだ他にも仲間がいたということみたいね」
なのはに視線を向けると、そこにはリンカーコアを手中に収めている腕がなのはの体から生えていた。

「驚かないのだな、もう少し取り乱すかと思っていたが」

罅迫り合いの最中、シグナムがそう聞いてくる。
確かに普通なら冷静さを失いどうにかして助けようとするだろう。
実際フェイトがそうだ、なのはと叫び、向かおうとするもザフィーラに妨害される。

「私は似たようなものを以前見たことがあるので、何とか冷静でいられる。」
それに出血していないところを見ると、肉体的なダメージがなさそうなので

「ほう、以前に見たことがあると・・・。フライハイト、お前は何者だ？」

私の言葉を聞いてシグナムが私の正体に疑いをかけてきた。
真は抑止力、今は人間、ただそれだけだ。

「騎士シャルロッテ、それ以下でもそれ以上でもなく、ただそれだ

けの存在」

「その幼さで達観しているのだな。だがもう少し子供らしくあってもいいのではないか？」

シグナムから距離をとり、そう告げてくるけど、

「十分子供らしいと思っています。だからこそ・・・戦える!!」
今はそう思う。だから本心を告げた。

Schwarz Strom（黒浪）

“トロイメライ”に漆黒の影を渦巻かせる。

狙うはこの一撃によるシグナムの撃墜、そのまま伏兵の探索、打破へともっていく。

「凶牙・・・波瀑刃!!」

放たれる漆黒の津波。シグナムは至近距離での攻撃に成す術なく飲み込まれた。

私はそのまま伏兵の探索に移ろうとしたけど・・・

「はあああ!!」

「シグナム!? トロイメライ!!」

Seelisch Widerstand（我が心は拒絶する）

まさかあれの中を突っ切ってきて、そのうえ反撃までしてくるなん

て思いもしなかった。

「油断したなフライハイト。確かに危なかったがあれでは私は落とせん!！」

ごめん、こうなったら任せるよ、ルシル。

十 十 十 十 十 十

ヴィータとの戦闘に集中していると、ユーノがなのはと叫んだのが聞こえた。

そこに視線を移すとなのはの体から腕が生えているうえ、リンカーコアから魔力が奪われている状況だった。

「ヴィータ、あれはなんだ？ まだヴォルケンリッターというのがいるのか？」

「うっせえ、だったら何だよ。それがわかったところでどうしようもねえだろ!？」

俺に一撃も与えられないのが不満なのか殺気いっぱいという言葉でそう言ってきた。

馬鹿なミスをしてしまったものだ。もう少し周囲を索敵していればこうはならなかった。

なのはから出血がないことは確認しているので何とか冷静でいられる。

なんらかの術式で空間を繋げて、リンカーコアだけを狙って取り出

したのだろう。
器用な真似ができる魔導師、いや騎士か、がいるものだ。

見たところ肉体へのダメージの心配はなし、しかし精神面へのダメージは計り知れない。
まだ9歳という少女には残酷な光景だ。

「……なるほど、これが君たちの目的か。
この結界の効果は対象の逃亡封じ、閉じ込めることみたいだな。
つまりこの結界が消えれば俺たちの逃亡を防ぐことが出来なくなってしまう。
そうなれば君たちは用件を果たす前に撤退するしかない、ということだ」

複製の力でこの結界の構成式を読み取り、ヴィータたちの目的を推測する。
ヴィータの顔色に少しだけ変化が見られた。推測が確信へと移行する。

「ならば破壊して、なのはの魔力吸収を止めさせるまでのこと」

「な、おい！？ やめろ！！」

「轟き響け、^{コード}汝の雷光！！」

蒼の雷光が結界を瞬時に破壊する。
結界が破壊されたのが理由か、またはなのはの魔力吸収が終わったのかわからないが、なのはの体から生えていた腕が消えていた。

十 十 十 十 十 十 十

『結界が破壊された！？ シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、撤退の準備を！！』

シヤマルから思念通話が送られてきた。

もう少しフライハイトとの戦いを楽しみたかったが仕方が無い。

「『わかった、いつもどおりの場所で落ち合おう』すまないなフライハイト、この戦い一度預ける。構わないか？」

「ええ、私も早くなのはもとへ行きたいので、そうしてもらいたいです」

「わかった」

私はフライハイトの言葉に甘えることにして、すぐさまこの場から撤退した。

十 十 十 十 十 十 十

「やりやがったなこのやろっおお！！」

ここにきてついにぶちキレたヴィータ。

いや仲間を助けるのだからこの方法は間違っていない。

「他の連中は逃げているぞ？」

「うとうとう、覚えてるよバーカ！！バーカ！！」

安い捨てゼリフを口にしながら逃亡しようとするが黙って見逃すつもりはない。

「おつとなのはを傷つけた代金だ、釣りはいらなから取っておけ。
光輝^{コト}け――何！？」

逃亡を図っているヴィータに魔術を放とうとしたところ、何者かにバインドをかけられた。

このバインドの色からして第三者の魔法と判断する。

「チツ、まだ伏兵がいたのがっ！？」

背中に途轍もない衝撃を感じる。

そのまま衝撃に耐えられず、向かいのビルまで吹き飛ばされてしまった。

（いつの間に背後を取られた！？）

バインドをかけられながらも体勢を立て直し、さっきまで立っていた場所に視線を向けたが誰もいなかった。

「逃げられたか、くそっ。いや、今はそれよりクロノ！ 見ているか！？」

『ああ、結界が消えたことで今そちらの状況を確認できた！
今本局の医療施設の手配をしているからもうしばらく待っていてくれ！』

「わかった。身体的なダメージじゃないから何とも言えないが、出来るだけ早く頼む」

クロノに連絡を取り、俺はすぐさまなのはもとへと向かった。

十
十
十
十
十
十

「なのは！？ なのは！？」

蒼い狼ザフィーラが撤退したのと同時に私はなのはのもとへと向かった。

本当は管理局の魔導師なのだから追跡するべきなのだけど、私は友達のことを選んだ。

「少し落ち着いてフェイト、気を失ってるだけだから」

シャルが私の肩に手を置いて落ち着けて言ってくるけど、落ち着いてはいられない。

「俺が応急処置をするから少し離れていてくれフェイト」

「ルシル」

ルシルが私の横を通り過ぎてなのはの近くに行って膝をつく。左手をなのはの胸のあたりへとかざして術式の名前を口にした。

「傷つきし者に、ラファエル 汝の癒しを」

なのは包み込むように蒼い光が拡がっていく。
光に包み込まれたなのは表情が、苦しそうなものから安らいでい
るようなものへと変化した。

「ルシル、なのはの今の様子ってわかる？」

ユーノがルシルの肩からなのはを見ながらそう聞いてくる。
それは私も気になる。

「身体的なダメージはヴィータとの戦闘で負ったものだけど、もう
ほぼ治ってる。

さっきの腕はリンカーコアから直接魔力を吸収していただけに過ぎ
ないから、おそらく少しの間、魔法が使えなくなるかもしれない」

「リンカーコアから直接魔力を奪うってそんなこと出来るの？」

私はそんなことが出来る魔法なんて知らない。
だから色々なことを知っているルシルに聞いてみた。

「どうだろう、わからないな。でも実際に出来ているのだからそう
いう魔法もあるんだろうね」

それから少しして、私たちは管理局本局へと案内された。

十 十 十 十 十 十 十

私たちは今管理局本局へと来ている。ここへは初めて来たけど

「すごい、こんなすごいものが造れるまできたのね次元世界って」

その光景に驚いてルシルへとそう呟く。

ルシルはその呟きの返答として「六千年経っているんだから当然だろ？」と言ってきた。

確かにそうだけど、私たちの時代に比べたら本当にすごいものだ。

「それはそうと、なのはについてあげなくていいのか？」

廊下の壁に背をあずけて腕を組んでいるルシルが聞いてきた。

「ん？ うん、何か会いづらいというか、ね。それに今フェイトが向かってるから、少し話しをさせてあげようと思って」

「そうか」

ルシルは一言告げて黙ってしまった。

これから私とルシルで決めた計画のために行動を移していかないと
思うと気が重い。

「シャルちゃん、ルシル君」

廊下の向こうからなのは、フェイト、クロノが私たちのもとへと歩いてきた。

なのはの表情からもう大丈夫そうだとわかり安心する。

「久しぶりなのは、それからすぐに助けようとしなかったことを謝っておきたい。

本当にすまなかった」

「ごめんなさい、なのは」

二人して頭を下げなのはに謝る。

必要なことだったとはいえ、やっぱり辛い。

「そ、そんな！ 頭なんて下げないでシャルちゃん、ルシル君。シャルちゃんたちの言うこともわかるから。

私だっていつまでもシャルちゃんたちに甘えてちゃダメってことくらいはわかるよ本当に、うん」

なのはが手のひらを振りながら焦っている。

そう言ってもらえるのは助かるけど、それが私たちとなのはたちが別れるために必要な計画のひとつとはわからないだろう。

少しずつなのはたちと会う時間を減らしていき、最終的には完全に姿を消す計画。

私たちがなのはたちといる必要はジュエルシードの一件を終えたこととでなくなった。

それがとても悲しいけど、それがお互いのためだと思って耐えるのみだ。

「何の話をしているんだ君たちは？」

クロノがそう聞いてきたから、道すがら説明した。

十
十
十
十
十
十

私はルシルたちから、どうしてあの時黙って見ていたのか教えてもらった。

それはいつか私たちと別れる日がくるかもしれないから、それまでにルシルたちに助けってもらうことが必要なくなるように強くなってもらいたかった、ということだった。

(やっぱり別れる日が来るんだね。でもずっと会えなくなるわけじゃないから、私は諦めないよルシル)

「そういえばフェイトとなのはのデバイスはどうなっているんだクロノ?」

「ああ、今ユーノが見ている。こっちだ」

クロノに案内してもらった部屋の中にはユーノとアルフがいた。

「ユーノ君、アルフさん。やっとちゃんと話せたね」

「そうだねえ、なのははもう大丈夫なのかい?」

「うん! もう大丈夫だよアルフさん!」

アルフに撫でられながら微笑んでいるのはを見て、私も笑顔になるのがわかる。

「ユーノ、破損状況はどうなってる?」

クロノがユーノに聞いた。

私となのははバルディッシュとレイジングハートのもとへと近寄る。所々がひび割れていて痛々しい姿になっている。

「ごめんね“バルディツシュ”」。

「正直あんまりよくない。今は自動修復をかけてるけど、基礎構造の修復を済んだら一度再起動して部品交換とかしないとダメかな」

「そう、か。そこまでのダメージを負ってしまったているのか」

それを聞いていたルシルとシャルの落ち込みようは私たち以上に酷い。

やっぱり気にしているんだ、私たちももう気にしてないからって言ったのに。

「そういえばさ、あいつらの魔法ってなんなんだい？」

「あれはベルカ式だよアルフ。その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

アルフの疑問にユーノが答える。

そのユーノの発言を継ぐようにクロノもベルカ式の説明に入る。

「遠距離や広範囲攻撃をある程度度外視して対人戦闘に特化した魔法で、優れた使い手は騎士と呼ばれている」

「それってつまりはシャルのような奴かい？」

アルフがシャルへと視線を移すから、私たちも自然とシャルのほうへと視線を移す。

「ああ、シャルのデバイスであるトロイメライもベルカ式のことを使っている。」

偶然にもシャルは地球での騎士らしいから、そこところが通じるのかも知らない。

ベルカ式のデバイスも難なく使っているしね」

「へ〜。それじゃあともう一つ、あの弾丸みたいのは？」

「あれはカートリッジシステムと呼ばれる武装だよ。

儀式で圧縮した魔力を籠めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得ることができるといふものなんだ」

その説明を聞き終えた後、私たちはある人との面接の時間が来たため、この部屋を後にした。

十 十 十 十 十 十 十

ルシルとフェイトの面接だというのに、クロノについてくるように言われた私となのは、今、管理局のギル・グレアム提督という人の居る応接室に來ている。

ここに来るまでにクロノから聞いたところ、このグレアム提督という人はかつてクロノの指導教官だったらしく、歴戦の勇士と謳われ、艦隊指揮官、執務官長の階位までいったらしい。

「そうか、なのは君は日本人、シャルロット君はドイツ人なんだな。そういえばルシオン君はノルウェー出身だったか？」

懐かしいな、ノルウェーには行ったことがないが日本とドイツには行ったことがあるよ。

私もね、地球出身のイギリス人なんだよ」

「ふわあ！？　そうなんですか！？」

なのはがグレアム提督の生まれがイギリスだと知り驚いている。
イギリス？　えっと・・・どこだっけ？　確か学校で習ったはずな
んだけど。

それからグレアム提督は、なのはの魔法との出会いが自分と似てい
ると話をしていた。

確かにその内容はなのはとユーノの出会いに似ていた。

「フェイト君、ルシリオン君、君たちはなのは君とシャルロット君
と友達なんだね」

「はい」

「もちろんです」

ルシルとフェイトは即答。

このままずっと友達でいられたら私とルシルはどれだけ幸せだろう
か？

そんなことばかり考える自分が情けない。

決めたじゃないか、もう私たちはなのはたちに必要のない存在にな
ろうと。

「約束してほしいことは一つだけだ。友達や自分を信頼してくれる
人のことは決して裏切ってはいけない。

それが出来るなら、私は君たちの行動について何も制限しないこと
を約束する。出来るかね？」

「はい、必ず」

「はい」

裏切らないということ、それはもう手遅れだ。

私たちはもうすでに嘘で自分たちを塗り固めてみんなを裏切っている。

ルシルもそれがわかっているからこそ、あんな表情をしているんだ。

その後クロノが今回の一件の捜索捜査担当になったことを告げ、部屋を後にした。

クロノとグラム提督の間で、闇の書関連のことで何かあったのだろうか？

十 十 十 十 十 十

私とシャルちゃんは今、フェイトちゃんたちと別れてエイミイさんとお話しています。
なんとフェイトちゃんとリンディさんが親子になるかもしれないことでした。

「まあまだ本決まりじゃないんだけどね。

フェイトちゃんってあの事件で天涯孤独になっちゃったでしょ？

だから艦長のほうから家の子供にならないか？って聞いたみたいなんだ。

まあルシル君にも同じような話をしたようだけど、あまり乗り気じゃないみたい」

リンディさんとフェイトちゃんが親子、ならクロノ君はフェイトちゃんのお兄ちゃん？

「なのはちゃんとシャルちゃん的にはどう思う？」

「私はその、すごくいいと思います」

「私はフェイトとリンディ艦長の養子縁組には賛成です。でもルシルはたぶん、その話には乗らないと思います」

エイミーさんに私たちの意見を話す。

私はフェイトちゃんもルシル君もリンディさんと親子になるのがいなくて思ったけど、シャルちゃんはルシル君が養子になるのはないだろうって言った。

「うんそっか、やっぱりルシル君には何かあるのかな？」

エイミーさんがルシル君のことですごく悩んでいる。ルシル君、か。ルシル君には一体があるんだろう？

唯一知っていきそうなシャルちゃんはその後何も語るうとはしなかった。

十 十 十 十 十 十

私たちはリンディ艦長に呼ばれ、ある一室にアースラスタッフの人たちと一緒に集められている。

「さて、私たちアースラスタッフは今回ロストログア閤の書の搜索、

及び魔導師襲撃事件の捜査を担当することになりました。
ただ肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生地
の近隣に臨時作戦本部を置くこととなります。分割は

「
(事件発生地
の近隣
って海鳴市のこと?)」

案の定、リンディ艦長はなのはの家の近所に臨時本部を置くと言っ
ていた。
騒がしくなりそうだ。

十
十
十
十
十
十

なのはの近所のマンションへと引っ越してきた俺たち。
いやはや、まさかこんな形でこの街に住むことになるとは、何が起
こるか分からないな。
今のなのはのマンションがものすごく高い。フェイトも高く、シャ
ルはついていけない。
俺にもついていけないから少し離れてクロノの手伝いをして
いる。

「「こんにちは!」」

そんな中、玄関に現れたのはなのはたちの友達、アリサ・バニング
スと月村すずかの二人だ。

玄関から俺を見て「あ」と二人揃って口を開けてしまっている。
まずはこちらから挨拶をしようか。

「こんにちは。直接会うのは温泉以来だね」

「う、うん。えっとルシリオン君、だよ。えっと、久しぶりって言うのかな？」

「そうでしょ？ 会ったことがあるんだから、久しぶりルシリオン」

反応が対照的な二人だ。

ビデオメールを見てなんとなくそう思っていたけど、ここに来て確信。

「久しぶりアリサ、すずか。ビデオメールでも言ったとおりルシルで構わないよ」

「えっと、ルシル、君」

「そう？ じゃあルシルね」

本当に対照的だ、豪快なアリサに憤み深いすずか。そういえばシエルとカノンもこんな感じだったな。

さて彼女たちはなのはとフェイト、シャルに会いに来たのだろうか。待たせるのも悪いな。

「今なのはたちを呼んでくるから少し待っていてくれ」

十 十 十 十 十 十

私たちは今、お父さんとお母さんのお店翠屋でお茶をしています。

リンディさんは父さんたちに引越しの挨拶をしに行っている。
ルシル君はクロノ君たちと話があるからと言って残ってしまいました。
た。

「まあここまでの女の子に囲まれると、ルシルまで女の子に見られることになるからね。」

それがイヤだから残ったんだと思うよ」

シャルちゃんがルシル君の残った理由を話す。

ルシル君が女の子に……あゝ見える。

「ルシルの後ろ姿を見たら誰だって女の子だと思っわよ。
前から直接見ても女の子に見えるんだから」

「アリサちゃん、それはルシル君に失礼だよ」

「すずかはそう思わないの？　だってルシルって家事も出来るんでしょ？」

生まれてくる性別を絶つっつ対間違ってるわよ。

ねえねえ、女の子の服を着せたら似合うと思っただけど、どうかなシャル？」

「うわあ、アリサちゃんがルシル君のことをメチャクチャ言ってるよ。」

シャルちゃんはそれを聞いて「それいい」と笑いながら賛同している。

ルシル君、私たちについてこなくて本当によかったね。

もしかしたらいつか女の子の服を着ることになるかもしれないが、私では助けられそうにありません。

「ごめんなさい。でも私も似合うと思うから少し見てみたいです。」

「でもでも、ルシルって男の子らしいところもあるんだよ。」

「いつも私のこと考えていてくれたし、助けてくれたし格好いいんだよ。」

「フェイトちゃんが少し照れながらそんなことを言うものだから、アリサちゃんの標的にされてしまった。」

「なになに、フェイトってルシルのことが好きなの？」

「え？ あ、その・・・」

「始まった、アリサちゃんは人の恋のお話とか大好きなんだよね。私もだけど。」

「フェイトちゃんもアリサちゃんの妖しく光る目に気付いたのか、私たちにヘルプの視線を向けてくる。」

「私は意を決して助けに入ろうとしたとき、アレックスさんが大きな箱を持って私たちのところへとやってきました。そしてみんなで箱の中身を確認して驚いた。」

「ねえこれって・・・!」

「うん、やっぱりそうだよね・・・!」

「急いでリンディさんのところへ行って聞いてみないと。」

十
十
十
十
十
十

十 十 十 十 十 十

「クシユツ」

「なにルシル君、またくしゃみ？ 風邪でもひいたの？」

「いえ、何か背筋がゾクツとしたんですが、風邪ではないかと」

今の悪寒はなんだろう？ さつきから何度もくしゃみをして、クロノの話を中断させてしまっている。

「すまんクロノ、続けてくれ」

「ん？ ああ、この闇の書の最大の特徴はそのエネルギー源にあるんだ。

闇の書は魔導師の魔力と魔法資質を奪うために、リンカーコアを喰うんだ」

「物騒だな、なのはもその被害にあったというわけ、か」

「それで間違いないはずだ。闇の書はリンカーコアを喰うと蒐集した魔力と資質に応じてページが増えていく。

そして最終ページまで全て埋めることで闇の書は完成する」

なるほど。確かに性質の悪い書物のようだが契約には入らないようだ。

つまりはこれで世界の危機が訪れることはないということ。それならば安心してクロノたちに任せられそうだ。

「ねえクロノ君、もし闇の書が完成したらどうなるの？」

確かにそれは聞いておいたほうがいいかな。

だがクロノの様子からしてあまりいいことではないみたいだ。

「少なくとも碌なことにはならない」

拳を握り締めるその姿は、ただ何かに耐えているかのようにだった。
少なからず何らかの因縁があるようだ。

いざ海鳴市へ（後書き）

本当にこのまま進めて良いのか迷う今日この頃。

シャルとルシルはこの世界に来てなのはたちとの関係の輪に入ってしまったことで、完全に人間だったときの自分へと戻っていつてしまします。

だからこそ迷いのなかった守護神という己のスタンスが徐々に崩壊していく、真理。

シャルとルシルの結末は既に決定していますが（というよりそれが書きたくて始めた）、それまでは楽しい時間を過ごしてもらおうかと考えています。

あとルシルのノルウェー出身設定ですが、ANSURは北欧神話関連が多くノルウェーはちょうどその文化圏に入っているのでノルウェー出身としました。

本当なら術式名なども古ノルド語から分化したノルウェー語にしたのですが、ANSUR執筆時代と同じくノルウェー語関連の資料が少ないのです。

辞書を買おうにも書店には置いていないうえにネットでは高い！！3万超えてるんですか？もっと安いのがありますが内容がわからないので手が出せず、ここまでずっと英語にしてみました。

ほぼ諦めています。ノルウェー語で書きたかったな。

それともう一つ、ルシルの飛び級大卒。

どこかのなのは関連サイトで呼んだ記憶があるのですが、中学校では男子女子は別々の校舎で学ばらしいのです。

ならあと数年だけの共学生活なら別になのはたちと過ごさなくてもいいんじゃない？と思ひ、通わせませんでした。

下手に恋愛フラグを作っても無意味ですし。

シャルの魔法。そういえばトロイメライは空想、夢想って意味です。
Schwarz＝シユヴァルツ＝黒
Strom＝シウトローム＝大河、流れ
Seelisch＝ゼーリツシュ＝心の、精神の、魂のという意味です。

Widerstand＝ヴィーター・シユタント＝抵抗、反抗の意味で、実は拒絶ではないんですよね。

ルシルの魔術。中級はほぼ解禁、ですが威力と神秘が笑うしかないほどに低下中。

知らしめよ、汝の力コト ゼルエル

ゼルエル、またをゼロエル、ゼルクの別名を持つ天使。

ゼルクには神の腕という意味がありまして力と戦を司っていると
われています。

というより資料が少ないです昔から。これ以上は調べようがありません。

ルシルのこの術式は単純な強化です。発動中の術式などの効果の強化も可能。

轟き響け、汝の雷光コト パラキエル

第一エノク書に登場する墮天使で、神の雷光の意味を持っています。これもまた単純な砲撃術式。ほとんど溜めなかったので威力はそんなに高くありません。

光輝け、汝の威光コト ウリエル

不発で終わってしまいましたでしたが術式名はウリエルです。

その意味は神の炎または神の光であり、炎と太陽の天使として知ら

れています。

それだけでなく嵐や落雷、地震などといった天変地異まで司っていたみたいで。

その他にも監視、預言、解釈の役目を担っているとのこと。

今回ルシルが放とうとしたのは閃光系砲撃。コード・ウリエルには

他にも炎熱系砲撃の

燃え穿てや、雷撃系斬撃刻めの計三つがあります。

狙われた魔術師

今の時間は朝の6時半。

わたしは目覚まし時計の音で目が覚め、体を起こす。となりで気持ちよさそうに寝とんのは、妹のような存在のヴィータ。お気に入りのウサギのぬいぐるみを抱いて眠っとる。

わたしは車椅子へと移り、朝食の準備をするためにキッチンへと向かう。

わたしの足は原因不明の病気か何かで動かなくなっとる。

そやから車椅子生活を余儀なくされとるんやけど、あまり不自由はしてないと思う。

リビングに来てみると、ソファに座ったまま眠っとるシグナム、足元にはザフィーラまでいてぐっすり眠ってしまっている。

わたしは二人にシーツを被せて朝食の準備に入った。

十 十 十 十 十 十

かすかな物音で目を覚ます。

「ごめんなく、起こした？」

キッチンで朝食の準備をしているのは我らが主八神はやて。

私たち守護騎士を家族として見てくれる今までにいなかったタイプ

の主。

私とザフィーラにかけられたシートも主のしてくれたことだろう。

「あかんよ、ちゃんとベッドで寝やな。風邪引いてまう」

「す、すみません。気をつけます」

その気遣いの言葉を受け、シートを畳みながら謝罪をする。主はやてのその優しさが心に染み込んでいく。

私の返事を聞いた主はやては、微笑みながら朝食づくりに戻った。

「なんやシグナム、また夜更かしさんか？」

「あゝその、少しばかり」

昨晚もまた少し離れた世界での蒐集活動を行っていた為、睡眠時間が全く足りていない。

最近までは近場の世界で蒐集を行っていたが、管理局の介入によって止むを得なく離れた世界まで赴かなければならなくなってしまった。

（テストロツサにフライハイト、ヴィータを打ち破ったセインテスト、か。

もう一度剣を交えたいが、そんな危険は冒せないな）

テストロツサはまだまだ成長途中だが、フライハイトはほぼ完成されている剣士だった。

セインテスの魔法に関しては一切不明のものだとしか分からないが強いのは確かだ。

「前途多難だな」

しかしあの二人の魔力は正直魅力的と言える。

フライハイトはおそらくS相当、セインテストはもう一ランク上辺りだろう。

「どうぞシグナム、ホットミルクや。温ったまるよ」

「ありがとうございます」

主が持つてきてくれたホットミルクを受け取り、礼を告げる。

ザフィーラの分もあると主は用意しに向かった。

そして扉が開き、慌しくリビングへと入ってきたのは寝癖が直りきっていないシャマルだ。

「すみません寝坊しました！」

急いでくるのはいいが寝癖くらいは直してほしいものだ。

「おはようシャマル、そんなに急がんでもええよ？」

「おはようございます、はやてちゃん！ いえ、今日は私の当番ですからごめんなさい！」

「おはよ〜」

続いて起きてきたのはヴィータだ。

もう目も当てられないほどに寝不足といった感じで歩いてくる。

「なんやヴィータ、メツチャ眠むそうやな〜」

「うゝ眠い」

フラフラと椅子に座りシヤマルからホットミルクを受け取っている。私たちのことを思ってくれるこの優しき主を救う為に私たちは・・・

（フライハイトとセインテスト、この二人から蒐集するしかない）

両手に挟んだホットミルクに口をつけ味わう。

その優しい味に心と体が温まっていく。

「美味しいな」

十 十 十 十 十 十 十

今日はフェイトの転入初日、おそらく私と同じようになると思うけど、まずは傍観だ。

挨拶も無事に終わって一時間目は算数。

なのはもそうだけどフェイトもかなり理数系に強い。

その理由としてはやっぱり魔法の構築や制御あたりに頭が必要だからだろう。

私も初めて魔法の構築をしたとき、その複雑さに頭を抱えていたのを覚えてる。

私の固有魔術は全てが簡単に組まれた術式だから今までは気にしていなかった。

それを魔法へと組み直す為にかかったあの時間はもう二度と御免だ。さて無事に一時間目も終わったし来るだろうな、転入生に待っている洗礼。休み時間となると同時にフェイトに待っていたのは以前の私と同じ質問の嵐。

「おお、懐かしい。私も以前あんなだったよね」

少し離れたなのは席に集まっている私とアリサ、すずかの四人。視線の先にはしどろもどろになって質問の嵐に対処しているフェイトの姿。

「うん、フェイトちゃんもシャルちゃんみたいにすぐ人気者になっちゃったね」

「でもあれはちょっと大変かもだよ。シャルちゃんもあの後ゲツソリしてたし」

「確かにね、あれは女子のするような顔じゃなかったわ。しょうがない、前のシャルみたいなことになる前に助けに行きますか」

それぞれ思っていることを好き勝手言っているとアリサがフェイトへと向かっていく。

（えええ！？ 私ときはしばらく傍観して助けてくれなかったの
にいいい！？）

そんなこと思いながらアリサの行動を見ていると、瞬く間にその場

を収めている。

「さすがアリサ。すぐにその場を支配するその存在感は計り知れないわね。」

でも、私のおきもあやつて早く助けてほしかったな。」

「えっとシャルちゃん？ とても目が怖いのですが・・・」

なのはが私の目が怖いと怯えながら立ち上がって距離をとっていく。あはは、怖くないよ、怖くないよ。ていうかその行動に泣きそうだよ。

ねえ、やっぱりこの時間がとても楽しいよ、ルシル。

十 十 十 十 十 十

「おおクロノ君、どうそつちは？」

エイミイがジューズのパックを手に、通信を終えて戻ってきたクロノに声をかける。

「武装局員の中隊が借りられたから捜査を手伝ってもらおうよ。」

それとルシル、君たちはなのはたちを成長させるために手を出さないって話だったが、二人のデバイスはまだ修理中だし、緊急時出来れば捜索にも手を貸してもらいたいんだが？」

「ああ、わかった。フェイトとなのはのデバイスが直るまでは俺が出るよ。」

あとその話は今シャルと揉めててね、一応出来る限りのことは手伝

うことにしたんだよ。

だが出来るだけ直接的な戦闘はフェイトたち、俺とシャルはサポートに回させてほしい」

クロノからの協力を頼まれては断るわけにはいかないだろう。

なにせ色々世話になってる身だから、断るということは恩を仇で返すことになる。

それに本局帰りにシャルがなのはたちと離れたくない、守ってあげたいと泣きついてきたので、あの計画を見直すことになったのも事実。

そのうえ「諦められない私は界律テストメントの守護神失格？」とも言ってきた。

まさかシャルの心がここまで良い意味で弱くなっていたなんて思わなかった。

だがそれも仕方ない、俺と違ってシャルは戦場のみの契約が多かったから。

だからこそ今のこの時間がとても愛おしいのだろう。

でもそれとは話は別だ。もう一度話し合いの場をもたなければならぬ。

何とか説得できればいいんだが。

「そうなのか？ それは助かるんだが、本局で言っていた話は本当にもういいのか？」

「ああ、いろいろあったんだよこっちも」

「まあそちらも事情があるのだろうから詳しくは聞かないよ。

ところでエイミィ、君のほうはどうだった？」

「え、うん。あまり良くないね、昨夜もまたやられたよ。今までより少し遠い世界で魔導師が十数人、野生動物が約四体だね」

「野生動物？」

何で野生動物が出てくるのか疑問に持つ。

クロノも同じ疑問を持ったのかエイミィに聞き返している。

「魔力の高い大型生物。リンカーコアさえあれば人間でなくてもいいみたい」

「まさに形振り構わずだな」

激しく同感。

それなら初めから魔導師を襲う危険を冒さずともその野生動物から蒐集すればいいのに。

まあ襲われる野生動物にも少し同情するが人間が襲われるよりはマシだ。

「でも闇の書のデータを見たんだけど、何なんだろうねこれ。魔力蓄積型のロストログア。魔導師の魔力の根源となるリンカーコアを喰ってそのページを増やしていく」

「全ページである666ページが埋まると、その魔力を媒介にその真の力を発揮する。」

次元干渉レベルの巨大な力をね」

次元干渉レベルの力？ それは初耳だぞクロノ。

クロノはエイミィの持ってきたジュースに手を出そうとするが、エイミィの手がそれを阻止。

仕方ないな。位置的には俺が冷蔵庫に近いからクロノの分の飲料水を取ってくるか。

「クロノ」

「おっと、済まないなルシル、ありがとう」

ボトルをクロノに投げ渡し、クロノが礼を口にする。俺もついでに何か飲んでおこうか。

「続けるよ」。本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻って別の世界で再生するってことなんだけど」

「ああ、様々な世界を渡り歩き、自らの生み出した守護者の守られ魔力を喰って永遠を生きる。

破壊しても何度でも再生する、停止させることの出来ない危険な魔導書」

「それが闇の書というわけか。だが破壊してもって、どれくらいのレベルの破壊なんだ？」

闇の書の説明を聞き、一つの疑問をクロノにぶつけてみる。

「完全に消滅させても、だよ。ルシル。この転生機能と無限再生機能がある限りはどんな手を使ってもダメなんだ。」

「反則だな。俺たちに出来るのは完成する前に捕獲するくらいか」

闇の書の破壊、今の俺が使える制限付きの魔術では到底無理だ。実数干渉で直接叩き潰せればいいが現状は使用不可能。

こういうときに限ってはプログラムの魔法の方が神秘の魔術より強いな。

「そういうことだ。まずは守護騎士たちを捕獲、さらに主を引き摺り出さないといけない」

思っていた以上に厄介な事件であるみたいだ。

＋
＋
＋
＋
＋
＋

放課後、私の家でみんなが集まって楽しくお話していたけど、もう時間も遅くなったのでアリサちゃんとすずかちゃんは帰っていった。そして今は私とシャルちゃん、フェイトちゃんの三人で私の部屋にいる。

「ねえ、なのはとシャルはあの人たちのことどう思う？」

「あのひとたちって闇の書の？」

フェイトちゃんという言葉にそう聞き返す。シャルちゃんは黙って聞く姿勢みたい。

「うん、闇の書の守護騎士たちのこと」

「えっと、私は急に襲いかかられてすぐ倒されちゃったからよくわからないんだけど、フェイトちゃんとシャルちゃんは、あの剣士の人と何か話してたよね？」

そう、私は襲撃早々に撃墜されたからお話はしてない。
でもフェイトちゃんたちは何かお話ししながら戦っていたみたいだから聞いてみる。

「え、うん。少し不思議な感じだった、かな。」

上手くは言えないんだけど悪意みたいなものは感じなかったんだ」

フェイトちゃんの少し自信なさげな言葉にシャルちゃんは同意する。

「悪意がないのは確かだと思うよフェイト。私も騎士だからね、剣を交えれば大抵のことくらいはわかる。」

あの剣士シグナムは、何か大切なものを背負っていて、それを何とかするために仕方なくあんなことをしてるんだと思う。

確信とはいかないけどね」

「そう、なんだ。闇の書の完成の目的とか教えてもらえればいいんだけど、話ができる雰囲気じゃなかったもんね」

うーん難しいな。理由がわからないと上手く戦えそうにないかも。

「強い意思で固めちゃうと周りの言葉ってなかなか入ってこないから、私もそうだったしね。」

でももしシャルの考えてることが本当なら言葉をかけるのは、思いを伝えるのは絶対に無駄にならないと思う。

だって私もあれだけ信じていたのになのはの言葉と思いに何度も揺れたから。」

だから、もし言葉を伝えるのに戦かって勝つ必要があるなら、それなら迷わずに戦えそうな気がするんだ」

フェイトちゃんの決意に揺れる綺麗な赤い瞳。

そうだね、それなら私も戦えそうだよフェイトちゃん。

「うん、私もそう思うとあの人たちと戦える気がするよ」

「なのは、これはなのはに教えてもらったことなんだよ？ そんな強い心のことを」

うわぁそんなことを言われちゃうと照れちゃうよ。

きっと今の私の顔は夕日に染まっても尚赤くなってると思う。

「それが二人の決意なら私とルシルは全力でサポートするから。

だから戦って勝って、二人の思いをあの騎士たちにぶつけてあげて」

「「うん！」」

だから強くなるよ、フェイトちゃんと一緒に思いを貫く為に。

だから今は見守っていてねシャルちゃん、ルシル君。

この三日後、未だ私もデバイスも完治してないなか一つの事件が起きてしまった。

けど私たちがそのことを知ったのはクリスマス・イヴの夜のことでした。

十
十
十
十
十
十

「はあく、確かに搜索を手伝ったけど、ここまで人使いが荒いとは」

今俺が来ているのは高魔力を持つ野生動物が多く棲息している無人世界。

数人の武装隊の人たちとともにヴォルケンリッターの搜索のために赴いた。

確かに三日前、俺は守護騎士と直接戦うこと以外は手伝うと言ったが、こう毎日異世界へと飛ばされては敵わない。

「「「うあああああああああ！！！！！！」」」

結構離れたところから悲鳴があがる。

すぐさま武装隊の人たちに念話を通してみるが誰一人として返事はなかった。

どうやら全滅してしまったらしい。もう少し腕のある魔導師が来てほしいものだ。

俺は守護騎士発見と被害にあった武装隊のことを報告しておくことにした。

『クロノ、当たりだ。だが武装隊の人たちが被害にあったらしい。まずはそちらを救助するよう優先してくれ』

『なに！？ わかった、すぐに僕たちもそちらに向かう！ あとシヤルも呼んで……』

『待つてくれクロノ。シヤルは呼ぶ必要はない。』

せつかく学校生活を楽しんでいるのだから邪魔しないであげてくれ、頼む』

『・・・わかった、シャルは呼ばない。だが僕は行くぞ！　これは僕たちの仕事だからな！』

『了解』

クロノと通信を切る。救援として来てくれるらしいが地球からここまで最速で30分。とても間に合うとは思えないが。

それにしても二日前にフェイトたちから守護騎士連中と戦う理由を聞いたというのに、俺が先に守護騎士とぶつかってしまつとは、最悪な展開だ。

(ならどうする、撤退するか？　だけどクロノたちに怒られるだろうな)

面倒なことになってしまった。

どうやってフェイトたちに言い訳をしようか考えていると、

「残るのはお前だけのようだな、セインテスト」

凜とした女性の声。

背後へと振り向くとそこにいたのはシグナム、ヴィータ、ザフィーラの三人。

「・・・はあ、見逃してはくれないのだろうか」

「ああ。我らはお前とフライハイトを標的としたからな。ゆえにこの場で蒐集させてもらおう」

シグナムが静かに告げる。
「どうやら俺とシャルの魔力を狙っているようだ。」

「仕方ない、だがそう簡単に俺の魔力を奪えると思うな」

我が手に携えしは確かなる幻想

「英知アルヴァイトの書庫」より顕現させるのは、今回の事件の初戦で複製した閉鎖領域。

「ゲフェングニス・デア・マギー」

この結界の効果は先の戦いと同じく対象の逃亡封じと魔力を持つ者の探知機能を持つ。

だが俺はさらに結界内に侵入者が現れたら即時にわかるようアレンジを加えた。

「な！？ おい！ 何でお前がそれを使えんだよ！？」

ヴィータが叫んでいる、どうやらこれもヴィータの魔法の一つのようだ。

今は放っておこう、相手にするのが面倒だ。

現在この結界内にいるのは四人、俺と目の前にいる三人だけだ。伏兵の存在は確認できない。それならそれで別にいい。

「セインテスト、お前は何故ヴィータの魔法を使える？ それがお前の魔法なのか？」

ヴィータを下がらせながら、今度はシグナムが聞いてくる。

別に教えても構わないが説明するのも面倒だ。

「俺をその蒐集するだけの対象としてしか見ていないのなら知っても仕方ないだろ？」

「ならば教える必要はどこにもない。今ある事実は倒す者と倒される者がここにいて、ただそれだけだ」

「フツ、確かにお前の言うとおりだ。ならばお前がここで倒される者となれ、セインテスト！！」

「行くぜアイゼン！」

「守護騎士ヴオルケンリッター、どこまで空戦オレの覇者についてくれるか・・・見せてもらうぞ！！」

戦闘モードを通常形態から空戦形態へと移行させる。

今背にある十枚の剣翼を周囲に展開し、代わりに薄く細長いひし形の翼を十二枚出現させる。

最近までこれも制限されていたため、ようやく俺の本当の戦い方が出来るようになったのが途轍もなく嬉しく思う。

（さて、フェイトたちには悪いが俺が標的にされた以上は抵抗させてもらおう）

久々の神速の高機動を早く行いたいために空へと上がる。

十
十
十
十
十
十

あの野郎の背中から、さつきまでであった剣のような翼が離れて別の翼が出てきた。

本当に訳がわからない奴だ。

こんな訳わかんない奴とあまり戦いたくねえけど、シグナムの言うとおりこいつの魔力は前に蒐集したあの白いガキより多い。だからこそその蒐集対象にすると決めてここまで来たけど、

(本当に勝てるのかよ、こんな奴に?)

一応こいつの対策は考えてある。

こいつは一度も自分からは接近戦を仕掛けてこない。

つまりは接近戦に自信がないと捉えることが出来る。

本当にそうなのはわからないけど、こいつが直接動いたのは一度だけだ。

あたしのアイゼンの一撃を防ぐ為に十字架を振るったあのときだけだからこそ常に距離を開けさせないようにする戦法を取ることにしている。

「レヴァンティン、カートリッジロード Explosion シュランゲフォルム」

Schlange form

あいつが空へと上がるのを妨害するため、レヴァンティンがシュランゲフォルムとなる。

こうなったら覚悟を決めるしかない。すべてははやての未来のために。

十 十 十 十 十 十 十

空へと上がろうとしたセインテストの行く手を妨害するために、“レヴァンティン”をシュランゲフォルムへと変える。

セインテストの強みは中距離と遠距離からの攻撃魔法だと思っている。

実際に戦ったヴィータと、二人の戦いを見ていたシャマルから、セインテストの戦い方を詳細に聞いている。

判断材料としては少し足りないかもしれないが、常に相手の情報が分からなければ戦えないような軟弱な我らではない。

シュランゲバイセン

連結刃を最大まで伸ばしドーム状とすることでセインテストの行動を制限する。

その間、私の行動も制限されるがこれくらいしななければおそらく勝てない。

「この程度の小細工で俺の翼を落せると思ったのか!？」

だが奴の機動力の高さはこちらの予想を遥かに超えていた。

残像を残しながら空を翔るセインテストは今まで出会ってきた誰よりも速い。

連結刃の結界を易々と突破されてしまった。

「アイゼン! Schwalbe fliegen おらあああ!
!」

「その身に焼きつけよ!」
フェニックス

「チツ、まだまだああ!!」

ヴィータの攻撃を全て焼き払っていく炎の鳥。

それを見ても諦めずに、ヴィータはさらにシュヴァルベフリーゲンを放ち続ける。

私も負けてはいられないな。

“レヴァンティン”をシュベルトフォルムへと戻し鞘に収める。

「レヴァンティン、カートリッジロード! Explosion

ザフィーラ!」

「応!」

鋼の鞭

ヴィータの攻撃を避けては粉碎しているセインテストに、ザフィーラの鋼の鞭が襲う。

突然地面から突き出してきたそれをギリギリで回避するが、そこは用意された逃げ道だ。

「飛竜・・・一閃!!」

“レヴァンティン”を抜刀し、連結刃に乗せた魔力の一撃をセインテストへと向けて放つ。

タイミングは悪くはなかった。

「くっ」

咄嗟に周囲に展開してあった剣の翼と、背の翼を前方に重ねて盾と

したのが見えたが、おそらく完全には防げてはいないはずだ。何せこの一撃は高い貫通力を持つ、そう簡単には防げまい。

「油断するなよヴィータ、ザフィーラ」

「わかってる」

「ああ、だがあれの直撃は確かだ。先程までの機動力はもう出せまい」

確かにそうだろうが機動力を殺いだところで奴の砲撃は侮れない。ヴィータの閉鎖領域を容易く破壊したあの雷の砲撃、あれを受けてはただでは済むまい。

次第に土煙が晴れていく。ハッキリとは確認は出来ないが、健在なのは確かなようだ。

「行くぞ」

「「応！」」

十 十 十 十 十 十

（ああくそ、やってくれるな、シグナム）

シグナムの性格からしてこのような魔法を持っていないと早とちりしてしまっただのが間違い。

まあシャルも剣士のクセして対軍術式とか持っているからそこはもう気にしない。

それにしても今の一撃には焦った。

連結刃の物理攻撃と刃に乗せてあった魔力攻撃が同時に着弾するため、貫通力がかなり高かった。

俺の周りの土煙が晴れていく。

そこで結界に何者かが侵入してきたと頭の中に警報が鳴り響く。

(この反応はクロノじゃないな。あの腕の持ち主か、またはバインドの主か)

だがここから結構離れている為、腕のほうは動き回ればおそらく捕まらないはず。

バインドのほうもこの距離からして警戒する必要はないだろうと判断する。

未だ土煙が晴れきっていないというのに向かってくるヴィータとシグナム、ザフィーラを視覚の中に入れる。

再度空へと上がるうとしたが、両足から何かに縛られたような感触が伝わってくる。

視線を移すと両足首を縛っているのは青いリングバインド。

(っ！ この視界の悪い中で正確なバインドだと！？ それ以前にこの距離で!?)

油断以外の何ものでもない単純な警戒ミス。

相手は相当なミッド式の使い・・・手?

(どづいつことだ? 守護騎士はベルカ式の使い手だろう?)

「何をばさっとしているんだセインテスト!？」

S t u r m w i n d e

シグナムの“レヴァンティン”から炎の衝撃波が撃ち出された。リングバインドの破壊にはもう少しかかるため回避は出来ない。

「チツ、流麗なる乙女ウンディーネ!!」

足元より莫大な量の水の柱を顕現させ水の障壁とする。シグナムの攻撃が障壁と衝突し、あたり一面が水蒸気でいっぱいとなる。

「おおおお!!」

「そおらあああ!!」

それにも関わらず左右から突撃してくるザフィーラとヴィータ。シャルからザフィーラの拳打の威力は聞いているし、ヴィータの破壊力も承知済みだ。

接近戦は俺が苦手とする距離、確かに槍の腕前だけには物心つく前から鍛錬を積んでいるので自信はあるが、今の身体では頭の中と実際の動きに誤差がうまくつてしまう。

だからこそ中距離と遠距離を選択しなければならない。

「吹き荒べ、汝ラシエルの轟嵐!!」

蒼い竜巻を周囲に顕現させることでさらに障壁を作り出す。それと同時にリングバインドが粉碎される。

「またこれかよっ!?!」

「むづうう！」

「吹き飛ばええ！」

この術式は攻性ではなく防性と補助に相当するものだ。

それは竜巻の障壁でありその魔力の籠められた風圧で敵の攻撃を遮断し、それを無理矢理突破しようとするれば、竜巻とともに遠くはるかまで運ばれていく。

案の定二人はどこかへ飛ばされていった。どこへと行くかは俺にもわからない。

残るはシグナムともう一人のバインドの主の二人のみ。

「さつさと先程のバインドの使い手と呼ばれたほうがいいんじゃないか、シグナム？」

「バインド？ それは何のことだセインテスト？」

俺の言葉を聞いたシグナムはそう聞き返す。

シグナムの表情と瞳から嘘ではないことはわかる。

（この件に第三者が関わっているというのか？ ならそいつの目的はなんだ？）

「いや、なんでもない。さてどうするシグナム、あとは君一人だけだが？」

「だからといってお前が張ったこの結界がある限り逃げることには出来まい？」

ならば戦い、それになお勝ち、お前から蒐集するのみだ」

退くことを知らないのはどこの時代の騎士も同じか。
まあ確かにこの結界がある限り逃げる事が出来ないのもまた事実。
警戒するのは侵入者の一人のみ。ヴィータたちはもうしばらくは来ないだろう。

「いくぞ、ヴォルケンリッターが将シグナム、参る」

「管理局囑託ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロ
ード、受けて立つ」

十 十 十 十 十 十

「ああくそっ！」

「落ち着けヴィータ、これは好機だ。
お前のギガント級の魔法でこの結界を破壊しろ」

ザフィーラが落ち着けていうけど、ここまでコケにされて落ち着けるわけがねえ。

でも言うことはわかる。これを破壊して近くに待機しているシャマルを呼べば何とかなるかもしれない。

「……アイゼン、カートリッジロード」

Explosion

とつと破壊してシグナムのところへ戻らねえと。

十 十 十 十 十 十

「はあはあはあ、お互い決定打を与えられないとつらいなセインテ
スト」

シグナムが肩で息をしながらそう告げてくる。俺も似たような状況
だ。

「（状況はあまり良くないな。蒼翼がなくなったことで魔力供給ス
ピードも遅くなってしまったし、その所為で攻撃力も防御力もガタ
落ちだ）確かに、だが俺はまだやれるぞ？」

俺が展開する翼は機動力上昇の他に、大気中の魔力を供給する補助
器としての役目もある。

それがなくなったことでシグナム一人に苦戦を強いられている。
だが何とか空戦に持ち込んでいるし、常に上を取っているからこそ
未だ戦っていられる。

「そうか、私とてまで膝を屈するにはまだ足りん。

速さのない今のお前にはこれを避けきることはできまい。

レヴァンティン、カートリッジロード！ Explosion シ
ュランゲフォルム！」

Schlange form

再度“レヴァンティン”が片刃剣から蛇腹剣へと変わり、その刀身
を俺に伸ばしてくる。

今の俺の機動力では回避しきることは不可能だ。

「くっ」

もう一度蒼翼を出せばいいが、あれを展開するのに時間と魔力が異常にかかる。

初めはバリアジャケットと同時に展開されるように設定させているから簡単に出せるが、一度碎かれるてもう一度使うためには、術式を一から組み立てないといけない。

避けきれずに右腕を浅く裂かれる。

多層甲冑を使えばこの程度問題にならんだろうが、あれにはXXの魔力が必要だ。

無いもの強請りをしている時間はない。

「はあああああ！！」

「舞降るは、シャルギエル汝の麗雪！！」

襲い掛かってくる連結刃をさらに上空へと上がり14の氷の槍で撃ち落とす。

「レヴァンティン！ Schwertform カートリッジロード！ Explosion 紫電一閃！！」

「っのおおおお！！！」

シグナムはレヴァンティンを片刃剣へと戻し突撃してくる。

俺は第四聖典に魔力を籠め、その斬撃を受け止める。

周囲に衝撃波と爆音が広がる。それと同時に結界が破壊された音も

聞こえた。

「……ふむ、ヴィータが結界を破壊してくれたか」

「はあはあ……結界が消えたのであれば撤退が出来るな。戦いはここまでにしておかないと管理局が来るぞシグナム」

そう言うがクロノと連絡をとってまだ14分程度しか経っていないはずだ。

あと半分の時間を蒼翼なしで戦うとなれば負けるか殺して勝つしかの選択肢しかない。

「私は先に言ったなセインテスト、お前の魔力を蒐集すると。今更それを変更することはない」

そうだよな、ここまで来て手ぶらでは帰れないよな。

それにバインドの主の位置もヴィータたちの位置もわからなくなっってしまった。

今の状況でこのまま戦っているとどうなるかわからない。なら手早く終わらせなければ。

「殲滅せよ、汝の軍勢」

十 十 十 十 十 十 十

セインテストのその言葉とともに奴の背後に現れたのは約60の槍。それは炎の槍であり、光の槍、氷の槍、電気の槍、風の槍、影の槍などなど様々。

「蹂躪シヤッシヤメン肅清！！」

その号令のもと、槍の大群が私に向けて放たれる。

「レヴァンティーン！」

P a n z e r g e i s t

魔力の甲冑を全身に纏いながら回避に全力を注ぐ。

防御しながらの回避でなければこの槍の大群を凌ぎきることはまず不可能だ。

おそらくザフィーラの防御力でもこれの前には無力と化すだろう。

「ぐっ……！」

次第に体のあちこちに傷が増えていく。

撃ち出される速さが上がっていつているようだ。ようやく攻撃が止み、反撃に移ろうかとしたが

「セカンドバレル第二波、セット装填」

再度セイントテストの背後に現れる槍の大群。

しかもその数が更に増え、おそらく100は下らないだろう。

「……ここまで、なのか……？」

諦めそうになったそのとき、

「轟天爆碎！！」

突如上空より聞こえるヴィータの声。

そこにいたのはセインテストのさらに上で、“グラーファイゼン”をギガントフォルムへと変えていたヴィータの姿。

「しまった！ もう戻ってきたのか！？」

「ギガントシユラアアアーク！！！」

セインテストへ振り下ろされる巨大な鉄槌。

だがセインテストは回避も防御にすら移ろうとしない。

まさかあの状態では動けないのか？

そして物凄い勢いをつけて地面へと叩きつけられた。

十 十 十 十 十 十 十

やつの結界を破壊してすぐシグナムのところへと戻って来ると、そこにはとんでもなく多い槍の雨によって少しずつ傷付けられているシグナムの姿だった。

その槍の雨も終わったと思うと、またあいつの後ろからめちやくちやな数の槍が現れた。

あのままじゃシグナムがやられるって思ったからあたしは、

「ギガントシユラアアアーク！！！」

あいつの強さをわかっているからこそその最強の一撃を放つ。

アイゼンを振り下ろしているというのにあいつは防御しようとしな
いし回避もしようとしな

そのまま直撃して、あいつは地面へと叩きつけられた。

「はあはあはあ、やっちゃった。はやての未来を血で汚さないって
決めてたのに」

あたしの最後の誓いはあのセイントストってやつ**の強さの前に破れ
た。**

「・・・仕方ないさヴィータ、相手が相手だった」

シグナムがそう言ってくれるけどやっぱり気分が悪い。

未だ土煙が広がっている中、今あたしたちはシヤマル以外が集まっ
た。

シヤマルは万が一のために少し離れたところで待ってもらっている。

『シヤマル、こちらは終わった。直ちに蒐集を頼む』

「バカな!？」

シグナムが思念通話でシヤマルに連絡を入れていると、ザフィーラ
が驚愕の声をあげた。

信じたくないけど、あたしたちはあいつの落ちた場所へと視線を向
ける。

「なあおい、うそ・・・だろ？ 確かに入ったんだぜ、あいつに！
？」

頭の中がおかしくなりそうだ。

確かにあたしの最強の一撃を受けたのに、それなのにあいつは頭から血を流しながらも、その足でちゃんと立っている。

「シャマル!!」

シグナムもあいつの姿に動揺しているのか思念通話じゃなくて直接声に出した。

十 十 十 十 十 十

やられた。

フェイトやなのはたちに偉そうに言っておきながらこの様か。

何たる不様、何が守護神か、何が空戦の覇者か、何が最強の魔術師か、笑わせる。

最後の詰めを誤るのは今も昔も全く変わらないな、俺は。

まさかヴィータにあんな手段があったとは思慮が足りなかったか。

いや、そんな言い訳は見苦しいだけだ。負けた、ただそれだけが事実だ。

「ああ、ああ、ああ……!!」

俺の胸からなのはと同じように腕が生えてきた。

指の細さから女性のものであることがわかる。

抵抗しようにも力が入らず倒れてしまった。

「すまない、セインテスト。いつか必ずお前からの裁きを受けよう」

「……こいつのリンカーコアってあたしたちのと違うんだな」

シグナムの謝罪の声とヴィータの声が聞こえる。
当然だ、これは魔力炉^{システム}であってリンカーコアじゃない。
次第に輝きを失っていく俺の魔力炉^{システム}だが、このまま黙って奪われる
つもりはない。

魔力炉^{システム}緊急封印

全ての魔力をカットしたため全てが奪われることはなくなった、が。

警告、魔力炉^{システム}經由で情報の一部が流出。

固有魔術よりウンディーネ、コードシャルギエル、コードメタトロ
ン、コードバルドル、真技グロリアス・エヴァンジェルが流出。

神々の宝庫より斬魄刀天鎖斬月、封雷剣、幻英教典スクリーミル、
劫火頭槍シンマラ、神剣ランドグリーズ、音速の剣シルファリオン
が流出。

英知の書庫よりエーテルストライク、ドラグスレイブ、侵食固有結
界水晶渓谷、ファイナルマスタースパーク、エターナル・ネギフイ
ーバー、創世結界殲滅領域が流出。

英雄の居館よりズエピア・エルトナム・オベローン、サーシャ・ク
ロイツェフ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが流出。

魔力の流出はそれほど被害がなかったがこれは酷い。
全くつくづく情けないな。

「ルシル！？　しっかりしろ、ルシル！！」

守護騎士たちがいなくなってからしばらく経ち、クロノたち救援が来た。

俺は意識を手放す前に一つ言っておきたいことがあったので口にする。

「この……ことは……シャルたちには……言わないで……く……」

「ルシル！？　急いできてくれ医療班！！」

この日最後に見たのは、必死な顔をしたクロノの横顔だった。

狙われた魔術師（後書き）

何度も考え直した結果こうなりました。

正直迷いましたけど、ルシルには一度倒れてもらうことにしました。こうすることで守護騎士の本当の力量を知ってもらおうということですね。

ルシルの魔術

フェニックス
その身に焼きつけよ

ソロモン72柱の魔神であり悪魔。ルシルの下級攻性魔術の一つで中でも威力が高い。

ウンディーネ
流麗なる乙女

四精霊の内、水を司る精霊。ルシルの下級防性魔術の一つでそれほど防御力はない。

コート
吹き荒べ、汝の轟嵐

エノク書に登場する竜巻とサイクロンを司る天使。防性と補助として組まれた術式。

コート
舞降るは、汝の麗雪

エノク書に登場する雪を司る天使。

氷雪系中級攻性術式の一つで氷の槍を最大33まで展開できる。

コート
殲滅せよ、汝の軍勢

「神を見る者」という意味を持ち、その他にも「神を探す者」という意味のカムエル、

「神が立ち上がる」という意味のケムエルなどの別名を多く持つ強大な天使の一人。

どんな名前のおときも、その役割は天使の軍勢を率いる指揮官とされています。

ルシルの中級攻性術式の中でも第二位の破壊力と突破力がある。顕現させる槍はそれぞれ別の属性を持っているため、抗属性や同属性の

影響を受けずに威力を保てることが出来る。

新しい力で

「調子はどうだ、ルシル？」

ルシルと守護騎士の戦いから約10時間が経過した。

僕は今、本局の医療施設にある個室で休んでいるルシルの様子を見に来ている。

「身体的損害65%、精神的損害0%、魔力炉システムにおける損害49%。魔術正常使用可能まで概算144時間の猶予が必要」

「は？ ルシル？・・・おい、ルシル？」

ルシルのその機械的な言動をおかしく思い、再度呼びかける。

「ん？ なんだクロノ？」

「は？ 何ともないのかルシル？ さっき君は・・・いや、なんでもない」

「おかしな奴だな。言いたいことがあるら言ってくれていいんだぞ？」

さっきのは気のせいだったんだろうか？
今のルシルは普段どおりのルシルだ。

「いいんだ。それと、このことはシャルたちには伝えていないから安心してくれ。」

離れた世界での搜索がたたり疲労で倒れたと言っておいた」

「……それを聞いたシャルたちのリアクションは聞かないでおくよクロノ、お疲れ。」

感謝するよ本当に、さ。あとすまない、守護騎士を足止めしきれなかった」

「それは君が謝ることじゃない、謝るのは僕たちのほうだ。」

もう少し早く救援に行けていたら君が蒐集されることはなかった」

ルシルが謝るのは間違っていると僕は思う。

なにより守護騎士を相手に一人で戦い、15分も足止めのために戦ってくれたルシルを責める者がいたら僕はそいつを絶対に許さない。」

「あれは自身の戦力を過信していたのが原因だよ。」

初めから潰そうと思えば出来ていたかもしれないのに、本当にそれでいいのかと迷い、何かあればいつでも勝てると思ってしまうた自分の過剰な自信、馬鹿なことをしたよ」

「……今はとりあえずゆっくりと休んでくれ。」

しばらくしたら艦長も見舞いに来てくれると思う」

「ああ、ありがとうクロノ。あとで今回の報告書を提出しておく」

「くれぐれも無理はしないようにな」

僕はルシルの病室を後にして地球へと戻った。

十 十 十 十 十 十 十

「結局この数日間ルシルと会えなかったけど、どれだけ使われてるわけ？」

私とアルフ、シャル、ユーノは修復を終えた“バルディッシュ”と“レイジングハート”を手に、診察を受けているのはもとへと歩いている。

でもそんななか、シャルが不満げにそう愚痴をこぼしながら歩くものだから、私たちの横を通り過ぎる管理局の人たちがその黒いオーラを放つシャルを見て足早に過ぎ去っていくのがわかる。

「シャル、とりあえずその黒いオーラはしまつて。

ここは医療施設なわけだから今のシャルの顔と雰囲気はまずいよ？」

ユーノがそう言つてシャル宥めている。

それでようやくシャルから黒いオーラは消えて落ち着き始めた。

「はぁ、ごめん。ルシルが単なる疲労で倒れるなんて思えなくつてそれなのに倒れたつてどれだけ荒いことをさせられてるのか気になつて、ね」

「うん、でもルシルは自分の体調不管理が原因だから気にするなつて言つてたし」

「そうなんだけどね・・・」

診察室前に来たところで、診察室からなのが出てきた。

私たちはなのはに駆け寄った。

「なのは？」

「うん！ もう大丈夫、無事完治だよ！」

「こつちも無事完治だよなのは！」

なのはの笑顔を見て安心する。

だから私も笑顔でバルディッシュとレイジングハートの完治を笑顔で告げる。

十 十 十 十 十 十 十

蒐集を終えて帰ってきたところで管理局に見つかった。

周囲に今まで何度も相手にいてきた武装隊つつう奴らがあたしとザフィーラを包囲している。

「管理局か」

「大したことねえよあいつに比べたらな」

数日前に戦ったセインテスト、あいつに比べたらこいつらなんてそこらの小石程度だ。

いや、比べること自体が間違っているんだ。あいつは普通じゃないんだから。

正直こいつらの相手をするのも面倒くさいが仕方ない。

やる気を出したのも束の間、管理局の連中はあたしから離れてしまった。

「上だ」

ザフィーラの声に従いあたしも上を見上げるとそこにはもう一人の魔導師がいた。

しかもそいつの周りには魔力の剣群を見て、あたしはセインテストの槍の雨を思い出した。

「ステインガールブレイド・エクスキュージョンシフト!!」

その号令を合図として撃ち出される剣の雨。

ザフィーラはあたしをかばって障壁を出してくれた。

いくつもの剣を弾いていくけど、三発のみ障壁を突破されザフィーラの腕に刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな、この程度、セインテストの攻撃に比べればまだまだ温い」

そう言って、腕に刺さった魔力の剣が砕け散る。

つづかザフィーラもセインテストと他の奴らを比べるのかよ。

「上等！」

あたしは上にいる魔導師に視線を向けると、そいつはあたしたちとは別の場所を見ていた。

こんな状況であたしたちから視線を背けるなんて馬鹿にしてんのか

?と思い、そいつが見ている場所へと視線を移す。

「あいつら・・・!」

そこにはあの白い奴と黒い奴の二人、そこから少し離れたところにもう三人。

どうやらセイントテストはいないみたいだ。

いや、いたらいたでその復活の早さにキレてしまいそうだから助かるし。

それにもう二度とあんなふざけた奴とは戦いたくないってのも本心だ。

二人はデバイスを起動させて変身を終えた。

だけど、以前とは形状が変わっているデバイスに気づき注視する。

「あいつらのデバイス、あれってまさか・・・」

あたしらと同じベルカのカートリッジシステム、あんなものを用意してくるなんて。

十 十 十 十 十 十

エイミーから守護騎士の発見の報を受けて、私たちは海鳴へと帰ってきた。

なのはとフェイトは新しく生まれ変わったデバイスを手に変身を終わる。

二人のデバイスには私や守護騎士と同じカートリッジシステムを新しく組み込んだ。

これで守護騎士のデバイスとの差はほとんどなくなった。

おそらく互角の戦いができるはずだ。

「私たちはあなたたちと戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指している理由を

」

まずは話し合いに持ち込もうとするのはとフェイトだけど、ヴィータが途中で遮る。

「あのさ、ベルカのことわざにこういうのがあんだよ。

和平の使者なら槍を持たない」

それを聞いた二人は意味がわからないのか首をかしげている。

ヴィータが言いたいのは話し合いをするのに武器になんていらなくない？ってことだろう。

「話し合いをしようってのに武器を持ってやってくる奴がいるか馬鹿って意味だよ。バアーカ」

「いきなり有無を言わずに襲い掛かってきた子がそれを言う！？」

なのは、そんな安い挑発に乗るんじゃないやありません。

「それにそれは諺ではなく、小話のオチだ」

「うっせえ！ いいんだよ細かいことは」

ザフィーラがツッコミ！？ それに反応するヴィータはボケ担当！？ 私一人で馬鹿なことを考えていると、付近に雷のようなものが落ち、

そこにはシグナムが一人佇んでいた。

「シャルちゃん、ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね！私、あの子と一対一だから！！」

そう言われたら手を出すわけにはいかない。

フェイトもそのつもりなのか、念話でシグナムとの一対一の戦いを望んできた。

アルフもまたザフィーラ相手に対抗心を燃やしている。

なら私たちが今やるべきことはただひとつ。

「ユーノ、クロノ、今のうちに連中の主を見つけよう。

あの三人は闇の書を持っていないから、別の騎士か主が近くにいるはず」

「そうだな、ここでこうしていても仕方がないしな。

わかった、僕は外を探す。シャルとユーノは中の搜索を頼む」

「「わかった」」

ていうかこんな状況になっているのにルシルは何してるわけ！？

十 十 十 十 十 十

「フンツ、結局やんじゃねえかよ」

ヴィータちゃんを追っていると私に向けてそう言ってきた。

「なんだこれ、堅え・・・！」

ヴィータちゃんの言うとおり以前とは比べるまでもなく強力かつ堅固に障壁になった。

これならもう大丈夫だ。

Barrier Burst

“レイジングハート”のその言葉によって、ヴィータちゃんのデバイスとの接地点に魔力が集まっていくのがわかる。

そして爆発が起きて、お互いがその爆風によって吹き飛ばされる。

でも、やる前にちよつと説明が欲しかったかもだよ“レイジングハート”。

十 十 十 十 十 十

くそつ、デバイスを強化してきただけの魔導師に遅れなんてとって
たまるかよ。

「アクセルシューター、シュート！！」

あいつから放たれた魔力弾、それが全てあたしを包囲するかのよう
に周囲を飛び交っている。

「アホか！？ こんな大量な弾を制御出来るわけねえだろうが！！」

あたしはそれを証明するために、待機させてあったシュヴァルベ・

フリーゲンを四方からあいつに向けて放つ。
でもあいつはあたしのそれを当たる直前で撃ち落しやがった。

(どんだけの制御力なんだよあいつ!?)

セインテストもそうだけど、こいつもとんでもなくヤバイ奴かもしれない。

「約束だよ、私たちが勝つたら事情を聞かせてもらおうって。アクセス
ル
」

「はっ、あたしに勝てるって思ってんのかよ!? アイゼン!」

P a n z e r h i n d e r n i s

「 シュート! 」

あたしはこの包囲網から抜ける自信はないから防御に専念することにした。
だけど次第にヒビが入っていくのを見て選択を少し間違えたと思っ
てしまった。

十 十 十 十 十 十 十

ビルの間を駆け上がりながら何度も衝突する私とシグナム。
バルディッシュを強化したおかげで競り負けることがなくなったか
らこそ出来る戦いだ。

幾度目かの衝突の後、距離が開いたことでルシルの魔術のコード・

カマエルを基にして、フォトンランサーを再構築した魔法、プラズマランサーを八基射出する。

Plasma Lancer

「プラズマランサー、ファイア!!」

放たれたランサーを、シグナムは以前と同じように“レヴァンティン”に炎を纏わせて切り払おうとするけど、その前に誘導させ回避させる。

「ターン!!」

再度シグナムへと突撃させるけど、今度はシグナムが上空へと向かうことで回避された。

でもまだ追撃は終わらない。完全に消えるまでにはいつまでも誘導し追尾できる。

上空へと逃げたシグナムへと三度目の突撃をかけさせる。

Blitz Rush

プラズマランサーの速度を上げる“バルディッシュ”。

シグナムが構えた“レヴァンティン”から再び炎が吹き上げる。

Sturmwind

レヴァンティンから放たれた炎の衝撃波がプラズマランサーを全弾焼き払った。

シグナムの意識が少し私から離れた瞬間を狙って接近して斬りかかる。

H a k e n F o r m

S c h l a n g e f o r m

それに対応したシグナムもまたレヴァンティンを変形させて対抗してきた。

衝突と同時に爆発が起きて互いに距離をとる。

私はシグナムの胸に一撃与え、シグナムもまた私の左腕に二撃当たった。

お互いに決定打を与えられなかったけど、ひとつ多いシグナムのほうが上手であることは間違いない。

「強いな、テストarroツサ。それにバルディッシュ」

“レヴァンティン”を元の形態に戻して、私と“バルディッシュ”を認めてくれたシグナム。

こんな強い人に認めてもらえることは、それだけで嬉しいことだ。

T h a n k y o u

「あなたとレヴァンティンも、シグナム」

D a n k e

「フライハイトといいお前といい、全く私は惜しいことをしてしまっている。

本当ならこの身に成さなければならぬ事がなければ心躍る戦いの筈だったが、仲間たちと主のため今はそうは言ってもらえん。

殺さずに済ます自信はない。この身の未熟を許してくれるか、テス

タロツサ？」

シグナムが“レヴァンティン”を構える。

「構いません、勝つのは私ですから」

私だって負けるつもりはない。

勝って絶対に話を聞かせてもらう。

十 十 十 十 十 十

なのはとヴィータ、フェイトとシグナムの戦いを見て羨ましく思う私。

ヴィータとは戦ったことがないからよく分からないけど、シグナムは昔の私そのままだ。

だからこそ解る。騎士としての一騎打ちというその面白さに。

『いいな、二人ともあんなに楽しそうに戦ってるよ』

『ちょっとシャル！？ 見てないでちゃんと探してよ！』

『はいはい』

私が搜索をサボっているのを念話だけでわかってしまうユーノ。

私だってシグナムと一騎打ちで戦いたかったんだけど、フェイトのほうが先だからね。

そこは諦めるしかない。

「はあ、私に戦わせてくれる日は来るのかな？」

十 十 十 十 十 十

『状況はあまり良くないな。』

シグナムやヴィータがあの子以外に負けることはないと思うがここは退くべきだ。

シヤマル、何とか出来んか？』

私は結界外で待機して、ザフィーラから現状を聞かせられている。デバイスを強化してきたことでその強さに磨きがかかったらしい二人の少女。

その所為で苦戦を強いられてしまっているシグナムとヴィータ。それだけじゃない、あの中には数日前に蒐集したセインテスト君と同等の魔力を持つフライハイトちゃんって子がいるはず。確かにこのままだと状況はさらに悪くなるかもしれない。

『何とかしたいけど、局員が外から結界維持してるの。私の魔力じゃ破れない。』

シグナムのファルケンかヴィータのギガント級の魔力を出せなきゃ』

『二人とも手が離せん。止むを得ん、アレを使うしか・・・』

確かに“アレ”を使えば、この強固な結界も破壊することくらいは出来るだろうけど。

そんなことをしたら折角集めたページが減ることになってしまう。

『わかってるけど、でも・・・っ！』

ザフィーラとの思念通話に気をとられ過ぎたことで、私の背後近づいてきた管理局の魔導師に全く気づかなかった。

『シャマル？ どうしたシャマル！？』

私の様子に変化が生じたことを察したザフィーラが私の名前を呼ぶけど、私は応えられない。

「搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いであなたを逮捕します」

その口から告げられるのは私たちへの罪状。

そんなことより今はどうにかしてこの場を離脱しないといけないという考えで頭がいつぱいになる。

「抵抗しなければ弁護の機会があなたにはある。同意するなら武装の解除を」

どうする？ 何か良い手はないの？ 諦めるな私。

必死に離脱の算段を構築するけどどれも上手くはいかない。

そんなとき、私は右から何者かの足音を聞き視線のみ向ける。

十 十 十 十 十 十 十

結界外にいたもう一人の騎士にS2Uを向け投降を呼びかけていると、突如新手が現れて腹部に一撃を入れてきた。

かなり強烈な蹴りだったため、向かいのビルまで吹き飛ばされフェンスに衝突した。

もしフェンスがなければさらに遠くまで飛ばされたかもしれない。

起き上がるまでにあの騎士と何やら話をしていた仮面の襲撃者。全くかつてのルシルといいこの男といい、仮面をつけたやつはどうしてこうも。

もしかしてルシルの報告にあつた第三者とはこいつのことだろうか？

「何者だ！？ 何を目的として彼らに手を貸している！？」

「知る必要はない」

それなら力づくで聞くまでと思つたところで結界上空に異変が起きたのに気づく。

するとさっきの騎士が何かの魔法を使おうとしているのを確認するがそれが隙となつた。

「うあああああ！！」

再度仮面の男の蹴りを受けてしまつが地面への衝突は何とか防ぐ。さつきから蹴りばかりなこいつはどうやら足癖が悪いらしい。

「今は動くな！ 時を待て。それが正しいとすぐにわかる」

「なに？」

どういうことだ？ 守護騎士を放置することが正しいとも言つのか？

考える時間もなく、結界の上空からさらに爆音が響きそして強大な雷撃が結界を直撃した。

こうして今回の守護騎士との戦いは、謎の仮面の男の存在が明らか

になったということだけが判明した形で終わりを告げた。

十 十 十 十 十 十

家へと帰り待っていたのは明かりの点いていない我らの主が家。今日は主とその御友人である月村すずかという少女が来ることになっていた。

だが私たちの帰りが遅いために御友人のお宅へと向かったらしい。さつきからシャマルが主に電話越しに謝り続けている。悪いことをしてしまったものだ。

「はい、じゃあヴィータに」

シャマルからヴィータへと受話器が移る。

ヴィータは主と話し始め、シャマルはテラスへと出て行った。私もそれに続きテラスへと出る。

「寂しい思いをさせてしまったな」

「うん」

共にいると誓っておきながらのこの失態。

シャマルは一言返事したがやはり沈んでいる。

「それにしてもお前を助けたあの男は何者だ？」

それが先ほどから気になって仕方がない。

まさかとは思うが、セイントテストが言っていたバインドの主とはあ

の男のことかもしれん。

「わからないわ、少なくとも当面の敵ではなさそうだけど」

警戒はしておいて損はないだろう。

理由も明かさず我らに手を貸し、闇の書の完成を待つ謎の男。

「どちらにしても管理局の連中もこれですますます本腰をいれてくるだろう」

「うん。あの砲撃で大分ページも減っちゃったし」

「だが余り時間もない。一刻も早く主はやてを闇の書の真の所有者に」

主の体を蝕んでいる呪いが主の命を消す時間、そしてセインテストの復活までの時間、どうにかして早く終わらせなければ全てが手遅れになってしまう。

「シグナム、はやてが代わってって」

「ああ、わかった」

新しい力で（後書き）

Asの難しさにはわかっていましたがここまでとは。

というよりシャルとルシルを動かさないとこの小説って意味がない
ですよ？

今更それに気づいてしまいました。

でも決戦ではシャルとルシルの相手は用意していますので大丈夫か
と。

シグナムたちに逃げられてやることなくなった私たちは、今回のことについての話をするためにマンションへと帰ってきた。

「おかえり、お疲れ様」

クロノが扉を開けてすぐ聞こえたのは、ここ数日異世界で過ごしていたルシルの声だ。

「あ、ルシル」いるなら来なさいよ!!」「・・・むう」

フェイトには悪いけどまずは私の文句を聞いてもらう。

戦いの最中は異世界にいるのだから仕方ないかなって思っていたけど、すでにこの世界にいながら来なかったってというのは許せない。

「たった今ここに着いたんだよシャル。だからそうギリギリと近づいてくるな、怖いぞ?」

その表情に嘘は見られない、かも。

ていうか怖いってなによ、なのはとしいルシルといい、私のどこが怖いっていうの?」

「・・・はあ、それが本当ならまあ許す。とりあえず、おかえりルシル」

「ああ、ただいまシャル」

何はともあれ無事に帰ってきたのならそれでいいや。
でもルシルから少し違和感を覚える。何だろう？ 何かがおかしい、
気がする？

「おかえりルシル！ もう大丈夫なの？」

フェイトが私を押しつけてルシルに声をかけている。
なに？ 私は邪魔者とも言いたいのフェイト？

「ただいまフェイト、もう大丈夫だから。なのはたちもお疲れ様」

「うん！ ありがとうルシル君」

「じゃあリンディ艦長が待っているから入ってくれ」

まあいいか、フェイトがルシルにアタックし続ければルシルもいつ
か折れてくれるだろう。

そうなれば私もものはたちから離れずに済むはずだ。

十 十 十 十 十 十

フェイトとなのははエイミーから新しくなったデバイスの説明を受
けている。

どうやらある程度は強くなったらしいけど、フルドライブモードと
いうのはデバイスの自壊を招いてしまうらしい。

そこまでして主を守れなかったのが悔しいのだろう、あの二つのデ
バイスは。

「それにしても彼らの目的は何なのかしらね？」

「ええ、どうも腑に落ちません。」

彼らはまるで自分の意思で闇の書の完成を目指しているようにも感じます」

「んん？ それって何かおかしいの？

闇の書つてのも、ようはジュエルシードみたくすっごい力が欲しい人が集める物なんでしょ？

だったらその力が欲しい人のために、あの子たちが頑張るってのもおかしくないと思うんだけど」

リンディ艦長の疑問、それにクロノも同意する。

アルフはそれに自分の意見を述べる。だがそれは……

「第一に闇の書の力はジュエルシードみたいに自由な制御の利くものじゃないんだ」

「完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない。

少なくともそれ以外に使われたという記録は一度もないわ」

そう、俺もクロノに頼んで見せてもらった記録の中ではほとんどが破壊の限りを尽くし、そうして最終的には自滅していくというのが結末の大半だ。

「それからもう一つ、あの騎士たち、闇の書の守護者の性質だ。彼らは人間でも使い魔でもない」

「「「っ！」「」」

それを聞いたフェイトとなのはは驚愕している。
というよりエイミー、何故あなたまで？

「闇の書に併せて魔法技術でつくられた擬似人格、主の命令を受けて行動する。」

ただそれだけのプログラムに過ぎないはずなんだ」

クロノはそう言うが俺は反対意見だ。

かつて俺とシエフィで作り上げた戦天使も当初はプログラムヴァルキリーによって稼動していた子たちだったが、彼らは擬似人格であっても次第に心も持ち成長していく。

「ちょっと待ってクロノ。私がシグナムと戦ったときは単なるプログラムというわけじゃなかった。」

明らかに確固とした意思があるのは間違いじゃない」

「うん、エイミー、モニターを出してくれ」

「はいはい」

シャルの言葉を聞いたクロノは少し難しい顔をしてモニターで説明をし始める。

「聞いてくれ、守護者たちは闇の書に内臓されたプログラムが人の形をとったものだ。」

闇の書は転生と再生を繰り返すけど、この四人はずっと闇の書とともに様々な主を渡り歩いている。

意思疎通のための会話は以前から見せているが、感情を見せたのは今までになかったんだ」

「たとえそうだとしても私は間違ってない」

クロノの説明を聞いてもシャルはあまり納得していない様子だ。

「クロノ、たとえプログラムだとしても人と関われば必ず心が生まれるのは当然なんだ。

それが人型であり長い年月であれば尚のこと。フェイトとなのはもシャルと同じなんだろう？」

「え？ うん、あの赤い子ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてたよ」

「シグナムからもハツキリ人格を感じました。成さねばならないことがあるって、仲間と主のためだって」

クロノの説明に異を唱えるフェイトとなのは。

俺としてもヴィータたちと直接戦い知った、まず間違いなく彼らは心を持っている。

「主のため、心を持つ、か。それが魔術師としての意見なんだナルシル？」

「ああ」

モニターが消え、静まり返る俺たち。

「まあそれについては捜査にあたっている局員たちからの情報を待ちましようか」

「転移頻度からみてもこの付近にいるのは确实ですし、案外主が先に捕まるかもしれせん」

「だね、闇の書の完成前なら持ち主も普通の魔導師だろうし」

リンディ艦長の言葉に続くクロノとエイミー。

これでこの場はお開きかと思いきや

「それにしてももう少し闇の書について詳しいデータが欲しいな。そうだユーノ、ルシル。君たち二人に頼みたいことがある」

俺とユーノに頼み？ 俺だけなら兎も角ユーノも一緒だと荒事ではなさそうだ。

それ以前に俺はまだ魔力炉システムの修復がまだだ。

戦闘は固有魔術の大半も宝庫や書庫、居館までが被害を受けているため不可能。

今の状態で出来ることといえば軽い複製補助系術式くらいだ。

「クロノ、またルシルに滅茶苦茶なことをさせるつもりじゃないでしょうね？」

「え？ そうなの？ ダメだよクロノ。いくらルシルだってまた倒れちゃうよ」

二人に言い寄られたクロノは後ずさりしながらも「違う」と言っただけで宥めている。

「二人には調べ物をして欲しいだけだ。ユーノと知人だけじゃ手が足りないだろうからルシルにも手伝ってもらおうと思ったんだ」

クロノは俺の状況を知っているからこそ、その役を任せたいんだろ
う。

俺が今戦闘に出たところで足手纏いになるのは確かだから。

「ふくん、ルシルという戦力を調べ物のためだけに放棄するなんて、
何か隠してない？」

シャルが俺とクロノに疑いの目を向けてくる。

ここで知られてはシャルがどんな行動をとるかわかったものじゃな
いため、誤魔化さなければ。

「シャル、それはクロノの気遣いだよ。調べ物という名目での休暇
みたいなものだ」

「そ、そうだ。ルシルにはずっと動いてもらっているからね。
もう少し体を休ませようと思ったんだ」

「……っそ」

苦しい言い訳だったが何とか切り抜けられたな。

『ルシル、君の報告にあった第三者だが、おそらく今日僕に奇襲を
かけてきた奴と同一人物の可能性がある。』

だからそれについての話がしたい。あとで僕の部屋に来てくれ』

『ああ、わかった、あとで行くよ』

今度こそこの場はお開きとなった。

十 十 十 十 十 十

フエイトちゃん家からの帰り道、シャルちゃんと並んで歩いているんだけど、

「おかしい、絶対におかしい」

さつきからそればかり言っているシャルちゃんに声をかけてみる。

「えっと何かさっきの話におかしなことでもあったの？」

シャルちゃんは一度ため息をついて答えてくれた。

「守護騎士の話じゃなくてルシルのこと。何か隠しているようにしか見えないの。」

クロノの態度もおかしかったし、私たちといなかった間に何かあったとは思えない」

「そうかな？ 私はいつもどおりだったと思うんだけど、たとえば？」

クロノ君たちが隠し事をしているなんてあり得ないと思う。だって何か大事なことがあったりわかったりしたら教えてくれるはずだから。

「たとえば・・・か。ルシルが実は蒐集されてたとか？」

シャルちゃんがそう言うけど、

「『ないない』」

ユーノ君と一緒にそれはないと告げる。

だってあのルシル君だよ？ ヴィータちゃんを相手に簡単に勝ったのに負けたってこと？

それはないよシャルちゃん。

「そうよね、考えすぎか」

シャルちゃんは一人納得して黙ってしまった。

今度は私が聞きたいことがあったので、街中ということもあり念話でユーノ君に話しかける。

『ねえユーノ君、闇の書の主ってどんな人なのかな？』

『闇の書は、自分を扱う資質を持つ人をランダムで選ぶみたいだから』

『そっか、案外私たちと同じ年くらいの子かもしれないね？』

『うーん、さすがにそれはちょっと』

『あり得るんじゃない、そんな可能性も』

私は冗談のつもりだったけど、シャルちゃんはそうかもしれないって言うてきた。

その言葉の真意を聞こうとしたところで、私のケータイの着信音が鳴った。

受信したのは写真つきのメール、すずかちゃんのお家にお友達泊まりに来たみたい。

名前は八神はやてちゃん。今度紹介してくれるらしいとのことだった。

十 十 十 十 十 十

翌日、僕とルシルはクロノとエイミィに連れられて管理局本局へと来た。

ここに来るまでに僕にだけルシルの今の状況を教えてもらった。もちろんなのはたちには話さないことを条件として。

「でもまさかルシルが蒐集されていたなんて」

昨日シャルの言っていたことが現実起きていたことでかなり驚いた。

半年前にルシル対クロノとフェイトの二対一の模擬戦を見せてもらったからだろうか、今でも信じられなかった、ルシルが負けたなんて。

「俺の力を信じてもらっていたのは嬉しいけど、それでもやっぱり最強とはいかないよ。」

確かに俺が万全ならそれなりの強さを持つけど、少し崩れたら一気に脆く壊れるのも事実なんだよ。

そこところは真っ先に改善する必要性ありってところだ」

そう言っつてルシルはため息を吐いた。

「それじゃあ今は全然戦えないんだ？」

「戦闘に関する魔術や複製術式関連は見事なまでに被害を受けた。もしかして狙ったんじゃないかって言えるくらいにな。一応複製能力は使えるけど、あくまで補助関係の術式じゃないと上手く顕現できない」

確かに補助だけであの守護騎士と戦うなんて無謀だ。

「それならあとどれくらいで魔力炉システムって完治するんだ？」

「あと4日つてところくらいか、リンカーコアと違って魔力炉システムは結構繊細でね。

魔力ダメージなら兎も角として、一度本体にダメージを受けるとなかなか治らない」

「そうなんだ」

「だからといって魔術が完全に使えないわけじゃない。

暴発、不発の覚悟で使おうと思えば攻性なども顕現できるだろうね」

ものすごいことを言ったよ。

あんな威力の高い魔術の暴発なんて、それこそ一大事だよ。

「やめてよ、暴発して原型留めてないルシルなんて見たくないから」

「俺だってそんなくだらしない理由で壊シれたくないさ」

僕とルシルが話し終えて黙ると、前を歩いていたクロノとエイミィの話が聞こえた。

「それにしても四人がかりで来たけど向こうは大丈夫だろうか？」

「まあモニタリングはアレックスに頼んできたし、大丈夫じゃないかな？」

海鳴市を出る前にクロノから僕たちのやることは闇の書の詳しい調査だと聞いた。

そしてこれから会うのはその辺りに顔の利く人たちらしい。

十
十
十
十
十
十

クロノたちに案内された部屋にいたのは猫耳と尻尾のついた女性の使い魔が二人。

「リーゼ、久しぶりだクロノだ」

「わああ！ クロすけお久しぶりぶり〜」

クロノが挨拶を終えると、その片割れがいきなりクロノに抱きついてきた。

クロすけ？ もしかしてクロノのことを指す名前のなのか？

それにしても何故に“すけ”なんだ？

抱きつかれたクロノを見たユーノは呆気にとられ、俺はクロすけという単語が微妙に気になりながらも、その猫耳の娘を見て思い出したくもないあのド阿呆が重なってしまっつてしまい気分が悪くなった。まあその辺りはどうでもいいか。

「ちょっとロツテ、離せコラッ！ 彼らが引いているだろ！？ そ
うだろ二人とも！？」

クロノは自分が逃げるためだけに俺とユーノに話を振りやがった。
一体どう答えるというんだあのバカッ！

「んん？・・・まあいいじゃん！ 久しぶりに会った師匠とのス
キンシップだよ！」

ロツテという娘は俺とユーノを一瞬だけ見た後に再度クロノを抱き
ついた。

いい様だよクロノ。

「アリア！ これを何とかしてくれ！」

往生際の悪いクロノはもう片割れのアリアと呼ばれた娘へと助けを
求めた。

俺もそのアリアに視線を移した。

「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない？
君たちもそう思うよね？」

今度はアリアが俺たちへと話を振ってきた。

初対面だというのに何ですかこのフランクさは？
でもまあその意見には賛成派なんで、

「そうですね、クロノの師匠ってことですし、弟子なら何にでも応
えるべきです」

クロノを切り捨てる。

「おお！ わかってるねキミ！」

「なっ！？ おい！ どういうつもりだシル！？」

俺の言葉にロツテはさらに激しくクロノを抱きしめる。

クロノは俺の言葉に異論でもあるのか抗議の声をあげるが知ったことじゃない。

「まあこの子もそう言ってるし、クロノも満更じゃなさそうだし、ね」

「そんなわけあるかあああ！！」

クロノの最後の希望はここに潰えた。

クロノはロツテに押し倒され、成されるがままになってしまった。

俺としては強く生きるとしか言いようがないためにクロノを視覚内から削除した。

「あはははは！ アリア、おひさしい！」

「ううん！ おひさしエイミィ！」

エイミィが押し倒されたクロノを見てひとしきり笑ったあと、アリアと挨拶を交わす。

「それより助けるエイミィ！ っていうか、なんとか言って止めさせてくれアリア！」

「いや、リーゼロツテも相変わらずだね」

「まあ我が双子ながら、時々計り知れないところもあるねえ」

クロノの必死な助けの声もスルーされてしまった。

さすがに哀れになってきたが、どうすることも出来ないために諦める。

「ふわぁ、ごちそうさまぁ？」

そう口にしながらソファの陰から起き上がったロツテ。

その満足げな顔には恐怖を覚える。

「ロツテ、おひさし！」

「おお！ エイミィおひさしだ！ んん？ 何か美味しそうなネズミっ子がいる。どなた？」

エイミィとロツテの挨拶も終わったのも束の間、今度はユーノに危機が迫る。

ロツテとアリアが見た目どおりなら猫を素にしている使い魔。

フェレットに変身できるユーノを、猫としての本能が獲物と告げているみたいだ。

ユーノへと笑顔を向けながら寄っていくロツテを見ながら、俺はクロノの傍へと近寄る。

「何であんなのが僕の師匠なんだ？」

「お疲れクロノ、災難だったな」

「どの口が言う、裏切り者」

そうは言うが初めから俺に出来ることなんてなかった。
それくらいはわかってるだろうが文句を言っておかないとダメな
ようだ。

そんな滅茶苦茶な時間もひと段落し、ようやく話に入れることにな
った。

「あゝなるほど、闇の書の搜索ね」

「事態は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」

(父様？ 誰のことだろう?)

気になったので隣に座っているエイミィに、話の邪魔にならない程
度に小声で聞いてみることにした。

「エイミィ、あの二人の言っている父様というのは？」

「ん？ グレアム提督のことだよ。」

二人とも提督の双子の使い魔で見えてわかるように猫を素体にしてる
んだ。

そんなのもうわかってると思うけど、クロノ君に戦い方を教えたお師
匠様でもあるんだよ。

きっちり座っているのが魔法教育担当のリーゼアリア。

そして、あのだらしな性格好で座っているのが近接戦闘教育担当の
リーゼロット。

さっきの様子から信じられないかもしれないけど、結構すごいんだ
よリーゼ姉妹って」

「そうなのか、教えてくれてありがとうエイミィ」

グラム提督の使い魔か。なら相当の場数を踏んでいるのだろうな。

「二人に駐屯地方面に来てもらえると心強いんだが、今は仕事なんだろう？」

「うーん、武装局員の新人教育のメニューが残っててね」

「そっちに出ずっぱりにはなれないのよ、悪いね」

俺個人としては正直助かったりもする。

フェイトとなのは今結構いいところまでいつている。

デバイスを強化したことで守護騎士と、一対一において互角に近い力をつけた。

あと何度か戦えば、それなりの勝率を叩き出せるはずなんだ。

それをリーゼ姉妹のような実力者に出まわされてその機会を潰されるのはまずい。

「いや無理を言ってますまない。実は今回の頼みは彼ら二人なんだ」

ようやく本題へと入った、長かったなここまでが。

リーゼ姉妹が俺とユーノを見るけど、何故か俺にだけ視線が集中しているような気がする。

「それで、頼みって？」

「彼ら二人の無限書庫での調べ物に協力してやってほしいんだ」

無限書庫？ 名前からして心が躍る。

無限と言うからにはそれなりの情報が集まった場所なのだろう。

そして案内された無限書庫、ああなんて素晴らしい場所なんだろう
か。
上を見ても下を見ても、どこを見ようと本、本、本、俺にとって
は正しく宝の山だ。
ここに居られるなら管理局入りも悪くは……っって違う！

「管理局の管理を受けている世界の書籍やデータが全て収められた
超巨大データベース」

「いくつもの歴史が丸ごと詰まった、言うなれば世界の記憶を収め
た場所」

「それがここ無限書庫。とはいえ中身のほとんど全てが未整理なま
ま」

「ここでの探し物は大変だよ」

「本来ならチームを組んで年単位で調査する場所なんだしね」

「一つのことを調査するだけで年単位、か。
それはそれで楽しそうだ。」

（シャルのことも言えないな、まさか管理局に俺の理想郷があった
とは）

「過去の歴史の調査は、僕らの一族の本業ですから。」

「一応検索魔法も用意しましたし大丈夫です」

「検索魔法？ それはまた魅力的な術式を耳にしたものだ。」

教えてもらえないかなその術式。

「そっか、君はスクライアー族の子だっけね。でも君はどうするの？」

理想郷に酔いしれていたなら、ロツテが話しを振ってきた。

「え？ ああ、俺も手はあるんで大丈夫です。邪魔にはなりませんよ」

ユーノが先ほど言った検索魔法を複製するか構成式を教えてもらうかすれば、今の俺でも十分扱えるはずだ。

「そうなの？ それならいいのだけれど。」

私もロツテも仕事があるしずっととはいかないけど、なるべく手伝うようにするから」

俺の言葉にアリアがそう返してきてくれた。

さっきの部屋での視線からして何かあったのかと思ったけど何でも無いようだ。

「可愛い愛弟子、クロすけの為だもんねえ」

(そつと決まれば早速読み漁るとしますか)

「ルシル、闇の書のことを調べるんだからね。そこは忘れないでよ？」

「う、何故わかったユーノ？」

思っていたことをあっさり当てられたことで、さすがの俺もビビクリだ。

「だって顔に書いてあるよ、読み漁りたいって」

「そこまでハッキリと出ていたのか？」

「うん」「うん」

ユーノだけでなくリーゼ姉妹にまで、何たる醜態だ。

そんな俺を見て笑い声をあげるユーノとリーゼ姉妹、俺をつられて笑ってしまった。

全く何をやっているんだ俺は？

「いやいやちゃんと探すから、ユーノ、探索魔法っていうのを見せてくれ」

「あ、うん」

無限書庫での調査初日はこうして始まった。

結果的に検索魔法の複製は出来たし使うことも出来た。

それから少し時間が経った後、ユーノが話しかけてきた。

「そういえば、さ。ルシルとシャルってこれからどうするの？」

以前は別れる日が来るから何とか言っていたけど、シャルの様子からしてこのまま管理局に入りそうな勢いだよ？」

「そうなんだよな。シャルは完全に今の生活が気に入っているから、それについてどうにか説得しないといけないんだよ」

シャルの管理局入り、それはどうにかしたいが、俺も正直揺れ始めた。
何せこのような楽園があるのならそれもいいかな、とか思ってしまった。
っている。

「ええ！？ 勿体ないよそれえ！」

次の仕事までの時間まで手伝ってくれているリーゼ姉妹のロツテが声をあげる。

少し離れた場所にいたアリアも頷いているし。

「だってあの子ってすごい強いじゃん！ 見たよ、あの子の戦闘データー！」

「それに君も強いじゃない。半年前のクロノとの模擬戦のデータ見せてもらったよ」

どれだけ流出している俺たちの戦闘データ？

「えっと、それじゃありーゼさんたちは、ルシルとシャルはこの部署がいいと思いますか？」

ユーノがこの話をさらに広げようとしてきた。

リーゼ姉妹は顔を見合わせた一言。

「武装局員でしょ」

「やっぱりそうですよね」

ユーノもそれを聞いて納得するが、戦いに借り出されるのは正直御

免だ。

ていうか入るとも言っていないし、入る気もさほどない。それに入るなら、この無限書庫関連の仕事がいい。

「ルシリオン君って囑託の試験を全部満点通過の一発合格でしょ。武装隊って結構狭き門だけど、君なら簡単に入れそうだよな。」

それにあのなのはって子も武装隊に入ってくれれば、武装隊の質が一気に上がるよ。」

なのはにまでその話を持っていきますかこのお二人は。

「ならフェイトはどうなんです?」

なのはが武装隊ならフェイトは何だと思ひ尋ねてみた。

「うーん、あの子はクロすけに似た感じだから執務官とか向いてそうだね。」

「執務官ですか?」

確かにクロノと結構能力的に似ているかもしれないし合うかもしれない。

そうとなれば会う時間が一気に減り寂しくなるが、それもまたあの子の道だ。

それにそうなるように仕向けようとしていた俺が寂しいなんて言えるようなものじゃない。

「おっと、もうこんな時間だ。私たちはもう行くね。」

「時間が空いたらまた来るから。」

「はい！」

リーゼ姉妹が時間だといって無限書庫を後にした。

あの二人がいなくなったことで一気に静まりかえる無限書庫。

この数時間後、クロノから連絡が入るまで延々書庫内の書物と格闘した俺とユーノはただ一言。

「整理が必要だ、ここ」

無限書庫∞Infinity Library (後書き)

守護騎士とはやての出会いをすつ飛ばしました。

あの場面を文字に変換すると結構大変だったので挫折。

初めは書いていたんですが、次第に書いてることがおかしくなつて諦めました。

それとルシルは極度の本の虫です。

どれだけ好きかというと英知の書庫なんてものを創り出すくらい好きです。

知識を吸収することが生き甲斐でもあります。

砂漠の決闘

「それじゃ、いってきま〜す!」

「いってきます!」

「二人ともごめんね」

なのはとフェイトの二人は、今日の夕食の材料を買いに出掛けた。以前までならルシルが担当していたことらしいんだけど、ルシルは今、本局にいる。

だからこそエイミィが手の空いていたなのはとフェイトに頼んだというわけだ。

「いや〜、買い物なんか頼んじゃって悪いことしたかな〜?」

「二人には買い物という形のデートを楽しんでもらうってことではないかと、仲良いし。」

それよりエイミィがここを空けるほうがよっぽどまずいから。

リンディ艦長たちが帰ってくるまでの間、エイミィが指揮官代行なんだしね」

ちなみに私は勉強中。もちろん魔法のと言いたいところだけど、そうじゃなくて学校の勉強だ。

私を未だに“サッカー女帝”と敬うアホな男子たちとまたバカをやつてしまい、その反省文と上乘せされた宿題を片付けるために現在孤軍奮闘中なのだ。

まあそんなアホな男子に乗った自分もまたアホだがそこは忘却の彼方へ。

それに今、管理局の人間はエイミイしかない。
リンディ艦長もクロノたちも今は本局へと出向いている。

何でもアースラの武装追加が済んだから試験運行をするためらしい。

「あはは、デートかあ。そう思えば確かに悪くないかもだね」

エイミイが腕を組みながら納得してくれた。

それじゃさつきから気になっているアースラの追加武装について聞いてみようか。

「ねえエイミイ、アースラの追加武装って何か聞いてもいいかな？」

「うーんとたぶんアルカンシエルのことだと思っただよね。」

アルカンシエルっていうのはね、簡単に説明すると空間歪曲と反応消滅によって対象を殲滅する魔導砲なんだ。

艦船武装の中でもかなり高い殲滅力を持っててね、効果範囲は発動地点を中心として百数十キロっていうとんでもない物なんだ。

本当なら使わないに越したことはないんだけど」

空間歪曲と反応消滅か、ルシルと殲滅姫カノンの対界真技に似てるかも。

「今回の事件でそんなものって必要なの？」

「いくらなんでもやり過ぎだと思っただけど」

「実はね、今までにも闇の書事件にはこのアルカンシエルを使うことが何度からあるんだ。」

前回の闇の書事件の際にもアルカンシエルを使って消滅させたって話だし」

そう話したエイミイの表情は暗く悲しげなものへと変化していた。気になるけど、私なんか聞いていいような雰囲気じゃないため諦める。

「そこまで酷いことになるんだ、闇の書の事件って・・・!? なのっ!?!」

突然鳴り響く警報。それは守護騎士発見を知らせるものだった。

いくつものモニターが設置された部屋で私とエイミイ、留守番のアルフがモニターに映ったシグナムとザフィーラの姿を確認した。

「文化レベル0、人間は住んでいない砂漠の世界だね。結界を張れる局員の集合まで最速で45分ってまずい、まずいよこれ」

結界の張れる局員が揃うまでの時間が掛かりすぎだと焦るエイミイ。シグナムとザフィーラは私たちに見つかったことには気付いていないだろうけど、45分もその世界に留まるかといえば限りなく“NO”だ。

こんなときにルシルがいればどうとでもなるといふのに。

「エイミイ、私が出るからなのはたちに連絡を入れておいて。アルフ、私とのコンビじゃ不満だろうけどザフィーラの相手はお願い」

「ふふん、そんなことないさ。あんたとルシルには世話になっていくからね。」

出来る限りのことはやってやるわ」

アルフが子犬フォームから人間フォームへと変身する。
これで決まりだ。フェイトには悪いけどシグナムとの決着は私に先
につける。

「待ってシャルちゃん！ えっと、なのはちゃんたちが来るまで待
って！」

エイミイのその必死さに驚くけど、今はそんなことを言っている場
合じゃない。

「なのはたちが来るまでの時間稼ぎくらいどつってことない。行く
よアルフ」

「おう！」

十 十 十 十 十 十 十

目の前にいるのは恐ろしく巨大な蛇のような生物。
先程から何回か攻撃を与えているが一向に倒れない。

「ヴィータが手古摺るするわけだな。これは少々厄介な相手だ
なっ！？」

油断しているつもりはなかった。
なかったのだが、突如背後に現れた尾から伸びた触手に捕われてし
まった。

「うっぐ、しまった」

巻きついた触手がさらに力を強めてきた。

正直これはまずい。このままでは己がなすべきことを為しえぬまま

S · · a g e F o r m

「はあああああ!!」

上空より現れたのは真紅の片翼を羽ばたかせたフライハイト。

その手にしている“トロイメライ”は片刃の長刀ではなく両刃の大剣となっている。

そして刀身の周りには小さな刃とそこから伸びたいくつもの魔力刃が唸りをあげて回転している。

フライハイトは降下してきた勢いのまま蛇の頭を踏みつけ、私を捕らえている触手を全て切り捨てた。

「トロイメライ! カートリッジロード! E x p l o s i o n
雷牙···神葬刃!!」

B l i t z E r m o r d u n g (雷殺)

フライハイトはその大剣を蛇へと突き刺し、直接蛇の体内に雷撃を流し込んだ。

天をも蛇をも貫いたその真紅の雷は実に美しいものだった。

蛇は聞くに堪えない叫び声を上げながら地中へと潜り姿を消した。

「···礼は言わんぞ、フライハイト」

助けてもらったことには変わりないが、私の誇りがそれを許さなかった。

「礼なんて必要ありません。あなたを倒すのは私かフェイトです。あなたほどの剣士をあんな蛇如きに奪われるわけにはいけませんので」

フライハイトのその言葉を聞いた私はあまりにも可笑しく笑ってしまった。

フライハイトには、テストロツサにはないある“もの”が存在している。

それは純粋な闘争心。戦いを楽しむ戦闘者のみが持つ想いだ。

「なにか可笑しいですかシグナム？」

私の笑い声を聞き、フライハイトは少し不機嫌さを顕わにしながらそう口にする。

「いや、お前はどこまで私に似ているのかと思ってな。

決してお前を馬鹿にしたわけじゃない。だからそんな顔をするなフライハイト」

フライハイトは軽くため息を吐き、私をただ見据える。

「似ている、それは以前から私も思っていました。

あなたは私と同じ戦う者。戦って得るもの、得たものを守りたいがためだけの戦闘者。

何故あなたたちがそこまでして蒐集なんてことをしているのか聞きたいですが、まずは白黒つけてからにします」

「ふふ、そうか、そうだな。やはり騎士はそうでなくてはな。本当なら預けた勝負はまたにしたいところだが、お前のその気概に私は応えたい。」

「故にこそ、己が仕えし主のために私はこの魂を振るおうレヴァンティン」

フライハイトにつまらない小細工は通用しない。

それより同じ剣の騎士として戦うからには純粋な剣での勝負にした
い。

「トロイメライ Schwert Form 今日こそ私たちに決
着を」

フライハイトはトロイメライをいつもの形態へと戻し、鏢へとカー
トリッジを三発装填した。

そして背にあった片翼が、無数の羽となり散っていった。

私もレヴァンティンへとカートリッジを装填する。

互いに準備は万端、気合も十分、やるべきことは目の前の相手を打
破するのみ。

相手は真正銘の騎士。セインテストのようにはいくまい。

「「いざ、参る!」」

十 十 十 十 十 十

「よう、ご主人様が気になってしょうがないかいザフィーラ?」

シャルと一緒に来た世界でザフィーラと対峙する。

ザフィーラはさつき遠くで光った一筋の赤い雷が気になっているようだ。
まったく、フェイト以上の雷撃を放つなんてシャルもまたすごいヤツだよ。

「お前か」

ザフィーラはあたしへと向き直り静かに告げる。
そこには焦りも、あたしが邪魔しに来たことへの憤りも感じない。

「あんたのところのご主人様も一対一、こっちも同じだ。少しの間付き合ってもらおうよ」

それを聞いたザフィーラは構えをとり、戦闘開始を待ちながら告げる。

「シグナムは我らの将だが、主ではない」

「あんたの主は、闇の書の主ってわけね」

あたしも構えをとっていつでも戦闘に入れるようにする。

「行くよ！！」

あたしの気合の声が開戦の合図となり、お互いの顔に殴りかかった。

十
十
十
十
十
十

「エイミイさん！」

私とフェイトちゃんは、エイミイさんから連絡を受けてすぐに帰ってきた。

「ごめんね二人とも！ 今すぐシャルちゃんとアルフのところにっ！？」

警報が鳴ったあと、モニターには闇の書を持ったヴィータちゃんの姿が映った。

「もう一箇所！？ こっちが本命！？ なのはちゃん、フェイトちゃん、頼める！？」

「はい！！！」

シャルちゃんとアルフさんなら大丈夫だと信じて、私とフェイトちゃんは、闇の書を持つヴィータちゃんのもとへと向かうことになった。

＋　　　＋　　　＋　　　＋　　　＋

「おおおおお！！！」

さつきから何度もお互いのデバイスが衝突して火花を散らす。

やはりシグナムは強い。私の弱体化云々を除いてもその腕前は確かだ。

それを証明するかのように、私もシグナムも体中に刀傷がいくつも

ついでにしまっていて、少なからず出血している。
その量からして失血死なんてことには絶対にならないし、なったら
困る。

ルシルは以前、シグナムの力量は多く見積もっても中級の騎士程度
だと言っていた。

けど実際に剣を交えた私は、シグナムは上位近くに入り込める腕だ
と思った。

「カートリッジロード！」

互いが同時にロードして標的を狙う。

どちらの魔法が早く相手に到達するかが勝負の分かれ目。

「紫電」

「光牙」

相手はすぐ目の前。

“レヴァンティン”を振り下ろすシグナム、“トロイメライ”を振
り上げる私。

速さは互角、ならば威力がものを言う。

「一閃！」

「月閃刃！」

真紅の閃光を纏う刃と紅蓮の炎を纏う刃がぶつかり合う。

しばらくの膠着状態が続き、私の耳に“ピシッ”っといやな音が届
いた。

「つく」

シグナムは自ら間合いをとり、“レヴァンティン”を見る。もちろん私も“トロイメライ”を見る、正確には刀身をだ。

「・・・まさかレヴァンティンにヒビを入れるとは、さすがだなフライハイト」

「シグナムこそさすがです。結構頑丈に作ってもらったんですけどね」

私の“トロイメライ”にも僅かだけどヒビが入ってしまった。

“トロイメライ”は、私の魔力とカートリッジの魔力に耐えられるように作ってもらったんだけど、やはり相手は歴戦の剣士。一筋縄ではいかないということだ。

「しかし、純粋な剣技では決着が見えんな。残念だが手段を選んではいられないようだ」

シグナムは“レヴァンティン”を鞘へと収め、カートリッジをロードした。

「そう、ですね。ならこちらも手段は選ばずにあなたを倒します。トロイメライ、ゼーゲフォルム」

Explosion・Single Form

“トロイメライ”を剣技ではなく、ただ破壊に特化したゼーゲフォルムへと再度変形させた。

魔力刃が伸びた無数の刃が回転して唸りを上げ始める。

「いくぞ！」

シグナムが瞬時に間合いを詰め、レヴァンティンを鞘に収めたまま突撃してきた。

よく見ると鞘にはとんでもない魔力が帯びているのがわかる。

「トロイメライ！ zerschlagen（粉碎） 鞘ごと斬り絶つ！！」

「レヴァンティン！！」

回転刃と鞘をぶつかり、ガリガリとものすごい音を発している。だがいくら魔力を籠めた鞘の防御力といえど、この破壊に特化した回転刃には意味はない。

次第に鞘を砕いていく“トロイメライ”。ただこのタイミングでシグナムは“レヴァンティン”を抜き放った。

「ここまで刃が食い込んでいると避けれまい！」

Sturmwinde

シグナムは私の目の前で“レヴァンティン”を振るい、炎の衝撃波を叩きつけてきた。

「つ……！ Seelisch Widerstand うぐつ・
・！」

“トロイメライ”がギリギリで障壁を張ってくれたおかげで直撃は

免れた。

けどその威力に最後まで抗えず、弾き飛ばされてしまった。少し離れた場所にト“ロイメライ”が突き刺さり、回転刃が止まる。まさか鞘を匣として使ってくるとは思わなかった。

「一か八かの賭けだったが、どうやら私に運が向いたようだ」

「運、なんかじゃない」

私は立ち上がって、少し離れた地点に突き刺さっている“トロイメライ”を手に取り、シグナムと向き合う。あれはシグナムの運ではなく実力だ。

鞘に収めたまま突撃してきて、そのまま攻撃に入った時点で気づかなかった私の失態。

あんな策をこんな短時間によく考えたものだ。

「まだやるかフライハイト？」

「当然」

私は“トロイメライ”をもう一つの形態へと変形させる。

「トロイメライ、ツヴィリンゲフォルム」

Explosion・Zwillinge Form(双刀形態)

十
十
十
十
十
十
十

よもや会う度に力をつけてくるとは、このアルフと名乗った者には呆れ果てる。

「あんたも使い魔、守護獣ならさ、ご主人様の間違いを正そうとしないでいいのかよっ!？」

何も知らぬ愚か者が、我らの主に間違いなど何一つとして在りはない。

「闇の書の蒐集は我らが意思、我らの主は我らの蒐集については何もご存知ない」

これだけは言っておかなければ気が済まん。

心優しきあの少女おじのことを貶すような発言はこれ以上口にはさせん。

「なんだって? それは一体どういう」

「主の為ならば血に染まることも厭わず。

我と同じ守護の獣よ、お前もまたそうではないのか」

「そうだよ、でも、だけどさっ!！」

言っておきたいことは言い終えた。

ならばもう話すことはない。この者を打ち据えて、シグナムのころへと向かわねば。

十
十
十
十
十
十
十

『シグナムたちが!?!』

『うん、砂漠で交戦してるの。フライハイトちゃんとテスタロッサちゃんの守護獣と』

とことん邪魔をする奴らだな。

おとなしくあたしらの蒐集を黙って見てればいいのに。

『テスタロッサって奴はいないのかよ?』

あの犬つころとフライハイトのコンビってのもおかしな話だ。

『ええ、いないわ』

『そんじゃ他は? セインテストと高町・・・なんとか』

高町なんかは別にいいとして、頼むから出てくんなよセインテスト。

もう嫌だぜあんな思いするのは。

『なのはちゃんね・・・いないわ。セインテスト君も同様に』

助かった、あいつがいないってだけで十分だ。

それじゃ今いるのはフライハイトと犬つころ。

フライハイトはシグナムと同じ剣士だから、強いシグナムが勝つに決まってる。

ザフィーラもあんな犬つころなんかに負けることはないはず。

『でも長引くと見つかったまうな。しゃあねえ、助けに チツ・

・！
』

『どうしたのヴィータちゃん？』

「『くそっ、こっちに来やがった。テストロッサとあいつ……』
高町なんとか！」

あゝもう！ 言いくい名前しやがって。
もっと言いやすい名前に変えやがれっ。

「う、なのはだつてば！ な・の・は！ ちゃんと覚えてよヴィ
ータちゃん！」

「うっせえ！ にゃのはって言いくいんだよ！」

「ほらっ、また間違ってるっ！」

言い合った所為でお互いに肩で息をしている。一体何してんだろあ
たし。

「えっとなのは、今はね、その……」

「あ、うん、ごめんねフェイトちゃん。

ねえヴィータちゃん、やっぱりお話を聞かせてもらうわけにはいか
ないのかな？

もしかしたらだけど、手伝えることがあるかもしれないよ？」

テストロッサに促されて、高町が理由によつては手伝えるかもしれ
ないって言ってきた。

そう微笑みかけてきたあいつを見てあたしは少し心が揺らいだ。

でもあいつらは管理局だ、あたしらの邪魔をする敵だ。

「うるせえ！ 管理局の人間の言うことなんて信用できるか！」

「私、管理局の人じゃないもの。民間協力者」

「そっちの奴は管理局の人間だろ！」

テストロッサにアイゼンを向けて言い放つ。

高町が何て言おうと傍には管理局の奴がいる。

「わ、私だって何か手伝えるかも、だよ？」

テストロッサが慌ててそう言うけどやっぱり信用できない。

闇の書の蒐集は一人につき一回、高町からはもう出来ないし、テストロッサから蒐集しようにも二人がかりで向かって来られたらさすがにまずい。

カートリッジも無駄に出来ないし、ここは撤退するのが一番だ。

「てめえらをぶっ倒すのは、また今度だ！ 吼える！ グラーフアイゼン！！」

E i s e n g e h e u l

十 十 十 十 十 十

なのはの説得も空しくヴィータの心には届かなかった。

もし私が一緒じゃなかったら、あの子の返事も変わっていたのかな？

「え〜と、ちょっとやり過ぎちゃったかも・・・しれない」

Don't worry

“レイジングハート”は大丈夫って言っているけど、私もやり過ぎかなってちよっぴり思う。

けど、その心配はなかった。何故なら、突然私となのはにバインドが掛けられたからだ。

「っ！？」

煙の中から現れたのはヴィータともう一人、仮面の男だった。

「こんな距離でバインド!？」

「あれがクロノが言ってた要注意人物!？」

私たちがバインド破壊の魔法を使って自由になったときには誰もいなかった。

「ごめんねフェイトちゃん、私がフェイトちゃんを止めたから」

「ううん、もしあのまま行っていたら、あの仮面の人に気づかなかっただと思う。

そうしたらどうなっていたか」

どちらにしても私たちがこの世界ですることとはなくなった。

＋
＋
＋
＋
＋
＋

Explosion・Zwillinge Form(双刀形
態)

フライハイトの言葉に従い、“トロイメライ”が二振りの短剣とな
った。

「・・・それがお前の奥の手か？」

「奥の手というわけではないですが、この形態でないと扱えない魔
法があるので」

その瞳には自信が漲っている。
どうやらハツタリなどではなさそうだ。

「そうか、ならば私も奥の手とまではいかないが」

Explosion・Schlange Form

カートリッジ一発を消費して、シュベルトフォルムからシュランゲ
フォルムへと変形させる。

シュランゲフォルムを見たフライハイトの表情が変わった。

「いくぞ！ はあああっ！！」

シュランゲバイセン

連結刃がフライハイト目掛けて地を疾走する。

E i n s R u b i n F l i c k e n

「はっ！」

フライハイトは背中からあの真紅の片翼を出し、空へと回避するが、それだけでこの攻撃から逃れたと思わぬことだ。

「甘いわ！」

連結刃が渦を巻きながらフライハイトを追撃する。もう少して包囲できるところで

「双牙・・・氷凶刃！」

G e f r i e r e n u n t F i n s t e r n i s (氷闇)

双剣より巨大な氷の刃と影の刃が放たれる。その二つの刃が連結刃を叩き落す。

「トロイメライ！ Geschwindigkeit Aufstiege (速度上昇) はあああ！！！」

片翼が大きく羽ばたき、フライハイトは速さを上げて私へと突撃してきた。

そして双剣を×十字に掲げて振り下ろす。

「おおおおっ！！！」

少し碎けた鞘を使ってそれを防ぎ捌く。

さらに破損が大きくなってしまったが、今の斬撃の直撃よりは幾分かマシだ。

「まだまだああ！」

フライハイトは翼を消し、右の短剣のみを逆手に持って独楽のように回転しながらの連撃を繰り返してきた。

私はそれを跳躍して回避、再度連結刃を突撃させる。

十 十 十 十 十 十

私の斬撃を跳躍して避けたシグナムは、もう一度私へと連結刃を向けてきた。

私は双刀を交差させて、剣先が到達すると同時に左右に引いて弾く。未だに滞空しているシグナムへと向かう。

それを見たシグナムは“レヴァンティン”をシュベルトフォルムへと戻し鞘へと収めたあと、カートリッジをロードする。

（今度は何をするつもり？）

さつきみたいなお方法で私の斬撃を防ぐとでもいうのだろうか？

ツヴィリンゲフォルムはゼーゲフォルムに比べれば直接的な破壊力はないけど、それでもそれなりの威力を持っている。

今のあの鞘で防ぎきれれるとは思えないけど、それを選択するというのなら……

「今度こそ斬り絶つ！ Geschwindigkeit Auf

stiege はああああ！！！」

再び出した片翼を羽ばたかせて、シグナムのもとへと向かう。

「これで終わりだ、飛竜・・・一閃!!」

鞘から抜き放たれた“レヴァンティン”が再度連結刃として襲い掛かってきた。

あの速さと直径からして回避は無理と判断する。

(くっ、まさかこんな魔法も持っているなんて)

ならばと私は障壁の役割も持つ片翼を纏うことで、回避ではなく真正面から飛竜一閃の一撃を受けることにした。

衝突したすぐに片翼が無数の羽となって散っていつて消えてしまう。だけどまだ攻撃は続いているため、私はすぐさま双刀を掲げ盾とする。

そして何とか耐えることに成功した。

シグナムの攻撃と私の“トロイメライ”が直撃したことにより巻き上げる爆煙。

片翼はダメになったし“トロイメライ”もまたさらに破損。

私自身も結構なダメージを受けてしまった。だけどそれでも尚戦えるだけの力は残っている。

「なに!?!」

未だに健在な私を見たシグナムは驚愕の声を上げる。

連結刃になっていることで防御が薄い今こそチャンス。

「風牙・・・真空烈風刃!!」

Echt Orkan (真嵐)

私の風嵐系最強の術式をシグナムへと放つ。

右の短刀より真空刃を、左の短刀より烈風刃を別々に放つことによつて同時に放つより威力が高まった一撃を放つことが可能となった。

Panzergeist

シグナムは体に魔力を纏った上で鞘を掲げて防ごうとするが、鞘の半分ほどが破壊された。

そしてそのまま直撃して地面へと落下した。

(これで決まっていればいいのだけれど……)

いくら完全に避けられなかったとはいえ、飛竜一閃を受けたのがまずかった。

私は地面へと降り立ち、シグナムの様子を窺う。

ゆっくりと起き上がるシグナム。さすがにこれ以上の戦闘はまずいかもしれない。

「つぐ……まさかこれほどとは。恐れ入ったぞ、フライハイト」

傷ついている“レヴァンティン”を支えにして何とか立っているシグナムがそう口にする。

「何を言っているんですか？ あなたもあれを受けてまだ立つなんて」

双刀形態となった“トロイメライ”のおかげでここまで戦えた。

でももう限界。“トロイメライ”も“レヴァンティン”も刀身の所々が壊れてしまっている。

おそらく耐えられるのはあと一撃。これで決まらなければ引き分けた。

「はあはあ・・・もう少しだけ耐えてくれ、レヴァンティン」

Ja

シグナムとレヴァンティンもまだやる気だ。
ならそれに付き合うのも悪くはない。

「トロイメライ、着いてきてくれる？」

Ja

さすがこの世界での私の新しい相棒、分かってくれている。
そつだ、ここまでやったのなら最後の最後まで戦うのみ。

「カートリッジロード！」

Explosion

お互い最後のカートリッジ一発をロードする。

「紫電

「双牙

交わる視線、瞳に写すは相手を倒した先にある勝利の二文字。

数秒間の硬直、だけど感覚的には永遠とも思える長い時間だった。二人の間に風が吹く、それを合図としてお互いが同時に疾走する。

「一閃!!」

「風炎刃!!」

十 十 十 十 十 十

衝突する“レヴァンティン”と双刀の“トロイメライ”。

火花が散らしながらもしばらく拮抗していたが、終わりは唐突に訪れた。

“トロイメライ”の刀身が付け根から先が完全に壊れてしまったのだ。

とはいえ私の“レヴァンティン”も刀身が半ばから折れてしまった。勝敗を決したのはデバイスの耐久力だろう。

フライハイトの実力は私と同等だ。それだけは間違いないと言える。

「私の・・・負け・・・ですね」

「ああ、私の勝ちだ」

だが正直勝敗なんてあってないようなものだ。互いのデバイスは完全に壊れてしまっている。

そして二人とも未だに立っているのなら引き分けと言えるかもしれない。

「ふふ、なかなかたのし

え？」

「フライ・・・ハイト・・・？」

フライハイトの胸から太い腕が伸びている。
突如フライハイトの背後から現れた仮面の男の腕だ。
その腕から光が発せられる。

「っああああああ！！！」

あまりの激痛ゆえにフライハイトが叫び声を上げ気を失ってしまった。

「っ！ 貴様ああ！！！」

頭に一気に血が上る。

私は折れた“レヴァンティン”で仮面の男へと斬りかかろうとした
そのとき、

「さあ奪え」

仮面の男はそう一言。

「っ！！！」

あの男の手のひらに浮かぶのは、セインテストと同じ三つの円環に
包まれたリンカーコア。

散々迷った末、私はフライハイトの魔力を蒐集した。

「許してくれフライハイト」

その後、テストタロツサの守護獣が来るまで、私はフライハイトを抱きしめ続けた。

砂漠の決闘（後書き）

えゝまずは申し訳ありません。

以前のあとがきで、なのはとフェイトの出番を潰したくないと書いておきながら、

シャルがシグナムとの戦いに出てしまいました。

でもこのままではシャルのトロイメライの出番が少なくなってしまうので、

ここで書いておかなければと思いついた次第であります。

シャルはルシルのように魔力炉システムの自己封印が出来ません。

というよりルシルのみが扱える特別な術式です。

その所為で結構なページを稼がせてしまいました。

シャルロット vs シグナム 戦闘イメージ BGM

マナケミア 学園の錬金術師たち：N e f e r t i t i

迫り来る刻限

「起きたようだなシャル。気分はどうだ？」

意識が覚醒してすぐに耳に届いたのはルシルの声。

私がいるのはベッドの上、横になって寝かされている状態だ。

何でこんなところで寝かされているのだろうか・・・？

「ルシル？ どうしてこんな・・・あ」

思い出した。

シグナムに負けて、すぐになのはと同じように魔力を奪われたんだ。いくらなんでもあまりに不注意だった。

戦闘後こそ最も気を付けるべき時だ。なのにあんなにも簡単に後ろをとられるなんて。

「思い出したか、何はともあれ無事でよかった。

それにしても何故魔術を使わなかった？ キルシュブリューテと君の固有魔術を使えば楽に勝てただろうに」

ルシルはそう言うけど、私は魔術師ではなく魔導師として戦いたかった。

だからこそ使わなかった、使いたくなかった。

「嫌、私は魔導師なのよ？ だったらデバイスと魔法を使うのが当然でしょ」

「……はあ、そこまで染まっているわけか。
3rd・テストメント・シャルロツテ、使えるものは使わなければ
意味がない。」

デバイスと魔法で勝てないと判明したならば、即座に魔術を使用す
るべきだった」

今の私が望んでいる在り方を否定してきたルシル。
分かっている、そんなことくらいは……分かっているんだ。

「それと君の魔術は非殺傷設定が出来ないという件だが、いくらで
もやりようがある筈」

「そうかもしれない。それでも私は相手が魔導師ならば、魔導師と
して戦い続ける。」

例えその所為で負けたとしても、死んだとしても……この道を
貫く！」

これは意地だ。すぐくつまらない意地、本当の自分、守護神を忘れ
ていたいから。

それに死んだとしても消えるのは本体から切り離された分身体だ、
何の影響もない。

そして未だに界律との本契約が済んでいない以上は死んでもまた召
喚されるはずだ。

「……そうか、わかった。君がそれほどの覚悟を持ち望むなら
貫き通せ。」

今まで散々こき使われ続けた君だ。その時間くらいなら少しは
許されるだろう」

ルシルは頭を掻きながら呟く。

その表情はさつきまでとは違い、とても柔らかなものへと変わっていた。

「ごめん、今ね、すごく楽しいんだ。

こんなに楽しい時間は初めてなんだ、だから大切にしたい。

いつかこの世界を去って、別の世界へと呼ばれても尚忘れることがないように」

「気にするな、この六千年の間に何度も組まされたパートナーだ」

「ご迷惑をおかけします。っとそうだルシル、現状はどうなっているの？」

これだけは聞いておかないといけない。

ルシルも真剣な表情を浮かべて答えてくれた。

「ああ、アースラが稼動したことによって司令部を海鳴市のマンシヨンからここに移した。

そして君のことだが、活動出来るのなら高町家へと帰れるらしいが・・・どうだ？」

「全くもって問題なし。体のほうの傷、ルシルが治してくれたんでしょ」

体を包み込むようにして、ルシルの魔力が残留しているのがわかる。

「ああ。そしてもう一つ、君のデバイスであるトロイメライだが」

「・・・あまり良くない話・・・みたいね」

ルシルの表情から察知する。
確かにあれだけ派手に壊れたのだから、最悪二度と使えないなんてことも。

「かなりの破損で核にすら被害が及んでいるらしい。
どれだけ急いで修復したとしても年内ギリギリだそうだ」

「……え？ 直るの？」

「直る。だからそんな泣きそつな顔をするな」

よかった、あの子は直るんだ。

負けたままで“トロイメライ”を失ってしまったかと思っただら泣きそつだった。

「うん。でも本当によかった、これでリベンジできる」

「程々にな。それじゃあ俺は無敵書庫での調査に戻るから。

リンディ艦長には連絡を入れておく。そのままなのはたちと帰るよ
うに」

シグナムへのリベンジに燃えていると、ルシルがそう言って椅子から立ち上がった。

本当にお世話になります。

「ありがとう、ルシル」

「ああ」

少しした後、なのはたちが来て、私は海鳴市へと戻った。

十 十 十 十 十 十

「助けてもらったってことでいいのよね？」

今、あたしを助けた仮面の男のことについての話をしている。

これまでにあいつは何度があたしらを助けたりしているようだけど。

「少なくとも奴が闇の書の完成を望んでいるのは間違いないだろう」

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれないな」

「ありえねえ！ だって完成した闇の書を奪ったってマスター以外には使えないじゃん！」

それだけは絶対にない。

それに完成したらマスターは誰にも侵されない力を得ることになるんだ。

「完成した時点で主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果があるはずもないしな」

それ以前にそんなことをさせないのもあたしらの役目だ。

主になったはやてをずっと傍で守り続ける、あたしらの力はそのためだけのものだ。

それ以外の使い方なんていらぬ。

「まあ家の周りには嚴重なセキュリティを張ってるし、万が一にもはやてちゃんに危害が及ぶようなことはないと思うけど」

「念のためだ。シャマルはなるべく主の傍を離れんほうがいいな」

「うん、そうするつもり。それはそうとシグナム、あなたはもう大丈夫なの？」

「ああ、フライハイトに負わされた傷はお前のおかげで完全に癒えた。

レヴァンティンに関しても破損は見た目に比べて軽微だったしな、今日中には完全に修復出来るだろう」

シャマルの気遣いにシグナムがそう答える。

あたしは合流したシグナムの姿を見て愕然とした。

体中が傷だらけで“レヴァンティン”も途中から折れていたあの姿、信じたくなかった。

「ならいいのだけれど」

「セインテストにフライハイトか、あの二人が同時に攻めてくると対処しきれんかもな。

フライハイトの方に関してはもうしばらくの猶予があると思うが」

ザフィーラの言うとおりだ。

シグナム相手に一対一で、しかも剣での戦いであそこまでダメージを与えたフライハイト。

そしてあたしとシグナム、ザフィーラの三人を相手に渡り合えたセインテスト。

そこに高町とテストロッサ、その守護獣に管理局がさらに介入して

くると対抗のしようがない。

あともう少しなんだ、もう少しで闇の書が完成する。

そうしたらはやては・・・はやては？

なんだろう？ 心のどこかで何かが引つかかる。

「えっと・・・さ、闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになってさ、そしたらはやては幸せになれるんだよね？」

つい口にしてしまった。

何でそんなことを言ったのかわからないけど、たった今覚えた疑問がどうしても気になった。

「何だいきなり」

「闇の書の主は大いなる力を得る、守護者である私たちはそれを誰より知ってるはずでしょ？」

「そうなんだよ、そうなんだけどさ。あたしはなんか大事なことを忘れてる気がするんだ」

一度覚えた疑問はもう消えてくれそうにない。

すごく大事なことを忘れたこの言いようのない気分。

このまま続けると嫌なことが起きてしまいそうで怖い。

しばらく続く沈黙の中、二階の、はやての部屋から大きな音が聞こえた。

それは二つの何かが倒れた音、まさか・・・はやて!？

急いではやての部屋へと向かったあたしたちは倒れていたはやてと車椅子を見つける。

「はやて!? はやて!!」

すごく苦しそうに胸を押さえるはやて。

あたしたちじゃどうすることも出来ない。

「病院! 救急車!」

すぐに病院に連絡して来てもらった救急車に乗って、あたしたちは病院へと向かった。

十 十 十 十 十 十

「本当にもう大丈夫なのシャルちゃん?」

海鳴の街へと帰ってきて、私とフェイトちゃんの前を歩くシャルちゃんに声をかける。

様子からして大丈夫そうに見えるんだけど。

「大丈夫だって。ルシルの魔術で魔力炉システム以外は完治済み。

まあ魔法も魔術も使えないけど、それくらいなら休んじやいられないよ」

私たちに振り向いたシャルちゃんは笑顔でそう言ってるけど、やっぱり心配だよ。

「無理はダメだよシャル、トロイメライだって、その・・・」

「二人とも気にし過ぎ。時間はかかるけど直るんだから大丈夫。それよりお腹空いちやっただ、早く桃子母さんのご飯が食べたいな」

シャルちゃんは前を向いて歩き出した。

ねえシャルちゃん。大丈夫って言われたら、私たちは心配しづらいんだよ。

十 十 十 十 十 十

病院へと運ばれた主は診察を受け、今は個室で休んでいる。

さっきまでの苦しそうなお姿は今はない。

石田先生の言葉にもきちんとして答えているから、痛みのほうは治まったのだろう。

「はあ、ホツとしましたあ」

「せやから、ちよお眩暈がして胸と腕を攣っただけやて言つたやん。もうみんなして大事にするんやからあ」

「でも、頭を打つてましたし」

「何かあつては大変ですから」

主のあのお姿を見れば誰でも心配する。

そしてその苦痛の原因を知っている私たちなら尚更。

「まあ来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいからもう少

しゅっくりしてっね。

さて、シグナムさん、シャマルさん、ちょっと」

石田先生に呼ばれた私とシャマルは部屋を出て三人だけで話をする。

「今回の検査では何の反応も出てないですが、攣っただけということはないと思います」

「はい、かなりの痛みがりようでしたから」

「麻痺が広がり始めてるのかもしれない。

今までこういう兆候はなかったんですね？」

主があれば痛むお姿は見たことはない。

いや、見たことがないだけで実際は分からないとしか言いようがない。

私たちが主の傍を離れていた時間にもしかしたら……。

「と思うですが、はやてちゃん、痛いとか辛いのか隠しちゃいますから」

「発作がまた起きないとは限りません。

用心のためにも少し入院してもらったほうがいいですね。大丈夫でしようか？」

「……はい」

そう答えるしかなかった。

それから検査が続き、部屋が夕日に染まった頃、主に入院することを告げた。

「入院!？」

「ええ、そうなんです」

主とヴィータの表情が曇る。

「あ、でも検査とか念のためとかですから心配ないですよ。ね？」

シヤマルが私に同意を求めてきたのでそれに答える。

今は主を不安がらせてはいけない。

「はい」

「それはええねんけど、わたしが入院しとつたらみんなのご飯は誰が作るん？」

それはイタイところを突いてきましたね主。

私たち騎士の中で料理を作れるのはシヤマルだけだ。

だがその味付けは未だに微妙で、不味くはないが美味しくもないという半端な料理だ。

主が入院しているその間、シヤマルの料理を食べ続けるとなると少し鬱だ。

「それは、まあ何とかしますから、お気になさらず」

「そ、そうですねよ大丈夫です……たぶん」

私とシヤマルは苦笑いを浮かべる。

これくらいの逆境乗り越えてみせなければ。

「毎日会いに来るよ！ だから、だから大丈夫」

「ヴィータはええ子やなあ、そやけど毎日やのうてええよ。
やることないし、ヴィータ退屈やん」

主はヴィータの頭を撫でながら微笑んでいる。

ご自分が辛いはずなのに気にかけるのはいつも我々守護騎士のこと。
ヴィータはそれに渋々頷いた。

「ほんならわたしは三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわあ。

あ、あかん！ すぐかちゃんメールくれたりするかも！」

「それなら私が連絡しておきますから大丈夫ですよ」

「うん、お願い」

「では一度戻って着替えと本を持ってきます。ご希望の本がありましたら」

「うーんと、そやなあ、任せるわあ」

こうして私たちは一度家へと戻った。

十
十
十
十
十
十

「ユーノ、今のところはどつだ？」

僕は無限書庫で調査をしているユーノたちに一度連絡することにした。

『うん、ここまででわかったことを報告しとく。

まず闇の書っていうのは本来の名前じゃない、古い資料によれば正式名称は夜天の魔導書。

本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた主と共に旅する魔導書。

破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思っ

『ロストロギアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする輩は今も昔もいるってことね』

『その改変の所為で、旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が暴走してるんだ』

「転生と無限再生はそれが原因か？」

どこの誰かは知らないが余計なことをする奴もいるものだ。

もし時間を遡れるのなら、プログラムを改変した奴を見つけ出し一発とは言わず、何発も殴り飛ばしているものを。

「古代魔法ならそれくらいは有りかもね」

『おそらく。そして一番酷いのは持ち主に対する性質の変化。

一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる、無差別破壊のためだけに。

だからこれまでの主は完成してすぐに・・・』

自滅する、か。

大体のことはわかったな。重要なのはそれに対する手段なんだが。

「停止や封印方法についての資料は？」

「それはルシルに調べてもらってる。ルシル」

「悪いがちゃんとした解決方法は未だに見つからないな。だがおそらく完成前の停止は難しいだろうな」

「何故だ？」

「一番必要なことがわからないのはあんまりだ。ルシルもそうなのか表情が暗い。」

「闇の書が真の主だと認識した人間以外では、面倒なことにシステムへの管理者権限が使用できない。」

つまりはプログラムの停止や改変は不可能というわけだ。

さらに厄介なことに無理に外部から操作しようとするれば主をも吸収して転生するというシステムのオマケ付き。

まったく改変した奴を血祭りにあげたいな」

確かにそれでは停止を試みることは出来ないな。

「そうなんだよね、だから闇の書の永久封印は不可能って言われてる」

「元は健全な資料本がなんと言うかまあ」

「闇の書、夜天の魔導書も可哀想にねえ」

全くその通りだとしか言いようがないな。
改変が行われなければ、あの守護者たちも別の生き方を出来ただろうに。

「調査は以上か？」

『現時点では俺からは以上だ。対策方法もまだ見つかってないから調査を続行する』

『僕のほうも今のところは以上かな。』

でもさすが無限書庫だね、探せばちゃんと出てくるのがすごいよ』

『確かに、これくらいの情報量を保有していれば当然かもしれないが』

二人からは一切の疲労を感じることは出来ない。
むしろ調査することを楽しんでいるかのようだ。

このまま二人を無限書庫の司書にするのも悪くないかもしれない。

「そうか、二人とも済まないがもう少し頼む。アリアも頼む」

『うん』

『了解した』

『あいよ、ロツテ、あとで交代ね』

「オツケー、アリア、あとで交代ね」

無限書庫との通信が切れたことで静まり返る。

闇の書に対しての情報をいろいろ知ることができたのは幸いだ。だが対抗策が未だ見つけれない以上はどうしようもないか。そしてもう一つ気になる件、仮面の男についてだ。

「エイミー、仮面の男の映像出してくれ」

「はいな」

モニターに映る仮面の男。

始まりは初めて守護騎士と邂逅した日。

ヴィータを逃すまいとルシルが魔術を放とうとした際にバインドを決めて、尚且つ気づかれずにルシルへと接近し背後からの一撃。

続いてはルシルと守護騎士の戦いの最中、視界が悪いうえで長距離から正確にルシルの両足首にバインドを決めた。

「この人の能力って結構ありえない気がするんだよね」。

この二つの世界、最速で転移しても二十分はかかりそうな距離なんだけど。

なのはちゃんの新型バスターの直撃を防御、長距離バインドをなのはちゃんとフェイトちゃんの二人に決めて、それから僅か九分後には、いくらダメージを負っていたとしても、あのシャルちゃんに気づかれずに背後から一撃」

なのはのバスターを容易く防御しきるそのレベルの高さ、そしてシャルの背後から襲撃。

あの二人のことを知っている者なら誰もがこの仮面の男の異常さに疑問を抱くだろう。

「かなりの使い手ってことになるね」

「そうだな、僕でも無理だ。ロツテはどうだ？」

僕の師の一人ロツテに尋ねてみる。

「あゝ無理無理、私、長距離魔法とか苦手だしね」

「アリアは魔法担当、ロツテはフィジカル担当できっちり役割分担してるもんね」

「そうそう!」

「昔はそれで酷い目に遭わされたもんだ」

「その分強くなったろ？ 感謝しろつつうの」

素直に感謝できないんだよ、修行時代を思い起こすとね。全く、二人が得意なことを分担して攻めてくるから対処に困ったものだ。

十 十 十 十 十 十

「ふんふん」

八神家で一人お弁当づくりに精を出していると、はやてちゃんのお友達、すずかちゃんからメールが来た。

内容は今日の放課後、すずかちゃんはお友達を連れて、はやてちゃ

んのお見舞いに行ってもいいですか？とのものだった。

「すずかちゃん、良い子ね」

あの子の優しさに感動しているのも束の間、送られてきた写真を見て私は凍りついた。

そこに写っていたのは、管理局の魔導師であるのはちゃん、テストタロツサちゃん、そして先日蒐集したフライハイトちゃんだったのだ。

一瞬で頭の中が白くなる。

まずいことになった。このままだと闇の書の主がやてちゃんだと知られてしまう。

私は混乱しながらもシグナムへと連絡を入れた。

「テストタロツサちゃんとなのはちゃん、フライハイトちゃんの管理局魔導師の三人が今日はやてちゃんに会いに来ちゃうの！ すずかちゃんのお友達だから！」

『落ち着けシヤマル、大丈夫だ。』

幸い主はやての魔法資質はほとんど闇の書の中だ。詳しく検査されない限りバレはしない』

「それはそうかもしれないけど」

シグナムの冷静な声に少しずつだけ私も冷静に戻りつつあった。

『つまり私たちと鉢合わせることがなければいいことだ』

「うーん、顔を見られちゃったのは失敗だったわ。

出撃したとき変身魔法でも使ってればよかった」

全ては過ぎたことだと分かっているとしても後悔ばかりが出てくる。
もう少し気を遣っていればこんなに考える必要もなかったのに。

『今更悔いても仕方ない。ご友人のお見舞いときは私たちが外そ
う』

「うん」

折角のはやてちゃんのお友達なのに、挨拶どころか会うことも出来
ないなんて。

『あとは主はやて、石田先生には我らの名を出さぬようにお願いを』

「はやてちゃん、変に思わないかしら？」

『仕方あるまい、頼んだぞ』

「うん」

絶対に怪しまれちゃう。

大切なお友達に私たちの名前を出さないでなんて。

「もう、どうしてこんなことになっちゃうの？」

この家に、ただ私のため息だけが聞こえた。

結局気になってしまったので私は変装して、はやてちゃんの病室の
前にいるんだけど。

(本当に良い子たちなのね、テストロッサちゃんたち)

楽しそうに談笑するはやてちゃんたちを見て、罪悪感がハッキリと生まれてしまった。

確かに必要な行為だったとしても、お見舞いの品を持ってきてくれたのはちゃん。

率先して面白い話をしてはやてちゃんを笑わせているフライハイトちゃんの二人には特にだ。

「シヤマルさん？ 何やってんですか？」

私に声をかけてきたのは石田先生だった。
私を見て若干引いている感じだ。

「あ！ ちょっと、その！ 気になりました！」

「中に入ればいいじゃないですか、というのは禁句なんですよね」

「あの・・・えつと・・・」

それから場所を変えて石田先生と話をした。

私たちにはやてちゃんを支えてあげてほしいと。

それから少しして、テストロッサちゃんたちが帰ったのを確認して、私ははやてちゃんの病室へと戻った。

「お友達のお見舞い、どうでした？」

「うん、みんなええ子やったよ、楽しかった。

あと他にもルシリオン君って子がおるんやって。

写真見せてもらったんやけど、女の子みたいにすっごく綺麗なんよ。また時々来てくれるってゆうてたし、今度はルシリオン君も連れてきてくれるって」

「っ！　そうですか、良かったですねはやてちゃん」

（大丈夫、落ち着いて）

シグナムの言ったとおりはやてちゃんが闇の書の主だと気付かれてない。

ならたとえセインテスト君が来ても大丈夫なはずだ。

「そやけど、もうすぐクリスマスやな。

みんなとのクリスマスは初めてやから、それまでに退院してパアッと楽しくできたらええねんけど」

「そうですね、できたらいいですね」

それまでに何としても終わらせる。

はやてちゃんが笑っていられる世界のために。

迫り来る刻限（後書き）

やっぱり難しいですA'sのストーリー。

けど2ndエピソードの終了まであと少し、ここまできたら精一杯頑張ります。

闇の書 覚醒

12月23日、PM6:45 アースラ訓練室

我が手に携えしは確かなる幻想

ジャーマ・コルムナ
炎柱陣

まずは炎の柱を“あいつ”の真下から噴出させ上空へ撃ち上げる。

アクティース・ディーネー
輝ける白嵐

再度真下から光の竜巻でさらに上空へと吹き飛ばし

デルニール・パテム
終極洗礼

次は真上に現れた魔法陣からの一条の閃光を放つ。

その閃光に直撃した“あいつ”が地面に叩きつけられるその直前で、

フレキエーラ・プロイエッティレ
貴弾

黄金の光の柱とともに跳び、“あいつ”へと正拳を喰らわせる。

「つぐええ!?!」

“あいつ”が苦悶の声を上げる。

だがそれはダメージによるものではなく、腹部へ正拳が入ったためのものだ。

「やっぱ硬いな、だが・・・ゼロ・デイズ　　！！？」

「とおおおおお！！！」

攻撃に移る瞬間、“あいつ”は俺の左頬に強烈なビンタを叩きつけてきた。

そのあまりの衝撃に吹き飛ばされながらも、何とか着地する。だが今の一撃で目が回り、尚且つ耳鳴りが酷く集中できない。

「いつきまゝす！」

「うっぐ！　オール・・・デッド！」

追撃のために突っ込んできた“あいつ”の懐にギリギリで入りカウンターを撃つ。

「おわあっ！！！」

ショッキング　私好みの　宇宙人

面白いほど吹き飛んで地面へと落下した。

だがすぐさま立った“あいつ”の様子からして全くの無傷だ。ノーダメージ

「おつとつと、ねえ無限書庫ってとこですつと籠ってたから勘が鈍ったんじゃないの？」

「ああ、だからこそお前に相手を頼んでいるのだからこのド阿呆」

「あ〜！ またそんなことを言う！」

あらかた闇の書の調査を終えたのはいいが随分と体を動かしていなかったため、リンディ艦長とクロノに頼んで、このうるさいド阿呆と模擬戦できるようにしてもらった。

「事実だろ？ ところ構わず抱きついてきては戦闘の邪魔をするアホな子。」

その所為で大戦の時は何度も死に掛けたのを忘れたか？

「むうう、マスターを愛するのは当然でしょ。」

それに邪魔をしてるんじゃなくて守ってるの！」

両腕を上下に振りながらプンスカ怒っているが聞き流す。

「はあもういいよ。それにしても行かなくてよかったのマスター？ 誘われてたんでしょ、夕ご飯」

ド阿呆こと俺の真正正銘の使い魔“フェンリル”の“エインヘリヤル異界英雄”がそう訊いてきた。

本物のフェンリルは、グラスヘイムで時間凍結封印されている俺の肉体を守護しながら俺が人間へと戻るのを待っているだろう。

「いいんだよ、さすがに気を遣ってしまう。」

何せなのはご家族と会ったのはたった3回だ。

それだけで御呼ばれするのはちよつと気が進まない」

「もう少し楽しめばいいのにい。でもまあ、それがマスターの意思なら口は挟まない。」

けどそんなんじゃないやその内壊れちゃうよ？」

「すでに壊れたことを経験しているから大丈夫だ。今はそんなことより、どうだった俺の魔術は？」

今回の模擬戦の目的、それは固有魔術と複製術式の威力差を確認することだ。

相手はクロノでもよかったが全力で断られたので、最も信頼できるフェンリルを選んだというわけだ

「受けてみてわかったんだけど、やっぱり複製術式の方が威力が高いよ。」

マスターの魔術の神秘が無くなってから全く使えない力になっちゃってる。

もし固有魔術の今使えるもので戦うんなら大火力のミカエル、ウリエル、カマエル、メタトロン of 四つが最低ライン。

それ以外はほとんど使う意味がないかもだよ」

「やはり、そうなのか」

最大威力に関しては固有も複製も同じS+ランクに設定されている。だがそれでも差が出るのは神秘の優劣が原因なのだろう。

魔術の威力を決定するのは魔力ではなく神秘の優劣だ。

魔力が大きいおかげで威力が高められたとしても、神秘の無さがそれをマイナスにする。

だからこそ神秘における減退がない複製術式のほうが威力が高くなってしまう、ということなんだろう。

「だから界律に設定されたランクどおりの威力を出したいなら、」

剣神”と同じように魔術を魔法っていうのに変えたほうがいいと思う。

魔法は純粹に魔力の大きさと威力が決定されているみたいだから」

「最悪だ。魔術を魔法に再構築する？　どれだけかかると思ってるんだ」

複製術式は容易く魔法へと変換できるが、俺の固有魔術はそう簡単にはいかない。

出来ないことはないだろうが、やろうと思うと気が重い。

「・・・おお？　それじゃ時間みたいだから、またねマスター」

フェンリルの足元が霞んでいく。召喚時間が過ぎてしまったようだ。

「ああ、ありがとう」

フェンリルが手を振りながら光の粒子となって消えていった。

俺は息を整え、修理を終えた“トロイメライ”の調子を見ることにした。

「トロイメライ、シュベルトフォルム」

十　十　十　十　十　十

12月23日　PM7:12　海鳴市藤見町　高町家

「「「「いただきます!」「」」」」

私は今なのはに誘われて、なのはの家でご馳走になっている。

「フエイトちゃんもたくさん食べてね」

「はい、ありがとうございます!」

なのはのお母さん、桃子さんはすごく優しい人だ。

その笑顔を見てるだけで心がポカポカする。

「んー、でも残念ねえ。ルシリオン君も来てくれればよかったんだけど」

「ルシル君が言うには、あまりお世話になるのも悪いからって」

「そんなことないのになあ。なのはたちの友達ならいつでも大歓迎なんだが」

そうルシルはここにはいない。一応誘ったんだけど断られちゃった。一緒にご飯を食べて、楽しく話ができたらよかったなあ。

そのあと、なのはの家のクリスマスの過ごし方だとかいろいろ話した。すごく楽しい時間はあっという間に過ぎて、私は美由紀さんに家まで送ってもらった。

明日はクリスマス・イブ。学校が終わってからはやてのお見舞いに行く予定だ。

でも内緒で行くことになっているので少し不安。

サプライズもいいけど、やっぱり家族の人に確認を取っておいたほうがいい気がする。
アリサはきつと聞かないだろうけど。

十 十 十 十 十 十

12月24日 PM 2:58 アースラ艦内

「それにしてもよかったのか？ 今日のはやての見舞いだっただんだら？」

「んん、そうなんだけどね。」

確かにはやての見舞いも大事だし行きたかったんだけど、トロイメライのほうに気になっちゃたんだよね。

ほら、いつシグナムたちと戦うことになるかわからないからさ。

それにデバイスなしだとなのはたちのお荷物になっちゃうでしょ？ それだけはどうしてもイヤだったんだよね」

今日、24日のクリスマス・イブ。

この日ははやてのお見舞いに行くという話だった。

でも朝方に“トロイメライ”の修理と最終動作確認を終えたとルシルから連絡が入った。

だから私は終業式が終わるとすぐにアースラへと急いで来たというわけだ。

本来なら友達との約束が一番なんだろうけど、どうしても気になってしまった。

あとではやてに謝り倒そうかと思ってる。
ちなみにルシルも一緒に。理由は特にないけどね。

「それにしても年内ギリギリって話だったけど、随分早く修理終わったんだね」

「修理には途中から俺も参加したしな。いくら俺の持つ技術を使って補強した」

「本当！？ 随分と太っ腹じゃない！」

「まあ、君のあんな顔を見たら・・・な」

ルシルは私から顔を背けて早足で歩き出した。
もしかしたら照れてる？

「ルシル、シャル、少しいいか？」

「ん？」

背後から声をかけられ振り向いてみると、そこにはクロノが立っていた。

「何かあったのかクロノ？」

「仮面の男についてなんだが、君たちの意見と僕の意見を少し交えて考えたい。

モニタールームまで来てもらっていいだろうか？」

今から急いで病院に行つてなのはたちと合流するつもりだったけど、

クロノのその真剣な眼差しを見た私たちは断ることが出来なかった。

十 十 十 十 十 十 十

クロノとともにモニタールームへと来た俺たち。

クロノはキーボードを操作してモニターに砂漠での戦いに関するデータを表示させた。

映っているのはヴィータをかばい、そしてシャルを背後から襲った仮面の男。

この男が最速で二十分かかる距離を、九分という時間で転移したということはずでに聞いている。

エイミイの話ではほとんど不可能なほどの速らしい。

俺たち守護神の扱う位相空間転移なら可能だが、それを人間が出来るわけがない。

「どっと思っっ？」

クロノが振り向き、俺とシャルを見た。

「どっつって……転移時間のことを言ってるの？」

「それもあるが……ルシル、君はどうだろう？」

「俺としては、仮面の男が二人いると考えれば筋が通ると思う」

「……ああなるほど」

「やはり君もそこへ行き着いてしまっか」

シャルは思い至った顔をして、クロノは別の答えを聞いたかっただという顔をした。

「しかし、やはりそれしかないのか」

「ああ」

それからもうしばらくエイミィが現れるまでクロノと話をした。

グレアム提督のこと、リーゼ姉妹のことを、そして八神はやてのことを。

十 十 十 十 十 十

今私とフェイトちゃんは、シグナムさん、シャルさんの二人と対峙している。

「はやてちゃんが・・・闇の書の主」

それはついさっき、はやてちゃんのお見舞いのおかげで分かったことだ。

クリスマスプレゼントをはやてちゃんに渡すために病院を訪れた私たちは、そこではやてちゃんと一緒にいたヴィータちゃんたちと遭遇してしまったのだ。

ヴィータちゃんたちがいる。それはつまりはやてちゃんが闇の書の主ということ。

信じたくないけど、それは確かに存在している事実。

「悲願はあと僅かで叶う」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも」

「待つて！ ちょっと待つて！ 話を聞いてください！

ダメなんです！ 闇の書を完成させたらはやてちゃんは！」

このまま闇の書が完成したら、ユーノ君たちが調べたとおりのことになっちゃう。

はやてちゃんが・・・はやてちゃんが死んじゃうことに。

「あああああ！！！」

私はヴィータちゃんその声で、ヴィータちゃんの攻撃に気付くことができた。

だからすぐにプロテクションを張ることが出来ただけど、その強力な一撃に耐え切ることが出来なくて、弾き飛ばされてフェンスに衝突する。

「なのは！」

フェイトちゃんの声が少し遠くに聞こえる。

衝撃のせいで少し頭がクラクラとしているからだ。

「邪魔すんなよ。あともうちょっとで助けられるんだ。

はやてが元気になって、あたしたちのところへ帰ってくるんだ！」

赤いバリアジャケットを纏ったヴィータちゃんは両目に涙を浮かべている。

それほど必死にずっと頑張ってきたのに、闇の書を完成させたら・・・
全てが失くなる。

「だから・・・邪魔すんなああああ!!」

ヴィータちゃんの強烈な一撃。

それによつて起こった爆発の中、私はバリアジャケットを纏って燃え盛る炎から歩き出る。

「はあはあはあ、悪魔め」

ヴィータちゃんの目にはもう敵意の色しか見えない。

静かに私は“レイジングハート”を構えて臨戦態勢に入る。

「悪魔でいいよ。悪魔らしいやり方で話を聞いてもらうから」

なんて言われても助けてあげたいんだ、はやてちゃんもヴィータちゃんたちみんなも。

十 十 十 十 十 十

私が対峙するのはシグナム。

「闇の書は悪意ある改変を受けて壊れてしまってる。
今の状態で完成させたら、はやては・・・」

死ぬとは口に出来なかった。

口にしたら本当にそうなってしまうと思ったから。

「我々はある意味で闇の書の一部だ」

シグナムが“レヴァンティン”の剣先を向けてそう告げる。
上空で戦ってるヴィータにも私たちの声が聞こえたのか、シグナムのそれに同意してきた。

「だから当たり前だ！ あたしたちが一番闇の書のことを知ってるだ！」

「じゃあどうして！ どうして闇の書なんて呼ぶの！？
なんで本当の名前で呼ばないの！？」

なのはの悲痛な叫びが聞こえる。
あっちのほうも気になるけど、今はシグナムを止めることが先だ。

Barrier jacket · Sonic form

対シグナムのために用意した機動力重視の“ソニックフォーム”へと変身する。

Haken

“バルディッシュ”をハーケンフォームへと変え、臨戦態勢に入る。

「ただでさえ薄い装甲をさらに薄くしたのか」

「その分速く動けます」

「ゆるい攻撃でも当たれば死ぬぞ？ 正気かテストロッサ？」

「あなたに勝つためです。強いあなたに立ち向かうにはこれしかないと思ったから」

覚悟はある。決意もある。

これくらいしななければ勝つことはまず出来ないと思ってる。

相手はあのシャルを真正面から打ち破った剣士だ。

砂漠でのシャルとシグナムの戦闘内容については“トロイメライ”の記録から知っている。

力押しでは絶対に勝てない。だからこそ機動力に特化したソニックフォームだ。

シグナムの体を炎が包み込む。

そして炎が消えて現れたのはバリアジャケットに身を包んだシグナム。

「こんな出会いをしていなければ、私とお前は一体どれだけの友になれただろうか」

「まだ間に合います」

「止まれん。我ら守護騎士、主の笑顔のためならば騎士の誇りさえ捨てると決めた。

もう・・・止まれんのだ！」

シグナムの瞳から一条の涙が流れ落ちる。

この優しき剣士を止めることこそ私の役目だ。

「止めます。私とバルディッシュが・・・！」

十 十 十 十 十 十 十

さつきから高町が闇の書の名前が何だとか言っている。
そうは言っても何も思い出せない。

「ほんとの名前？」

わからない。思い出せない。

闇の書に本当の名前なんてあるのか？

霞が掛かったかのようなそれを思い出そうとしていると、高町にバインドがかけられた。

「バインド！？ また！？」

「なのは！？」

テストロッサが高町にかけられたバインドを見て、シグナムとの距離をとってから周囲に気を配っている。

「・・・！ そこ！」

テストロッサの放った攻撃が何かに当たり、その場の空間が揺らいだ。

そしてテストロッサはその波打っている空間へと直接攻撃を加える。空間が揺らぎそこに現れたのは、以前あたしやシャマルを助けた仮面の男。

姿を隠してあたしたちのことをずっと見ていたらしい。

「その手はもう通用しない！」

現れた仮面の男にデバイスを構えるテストロッサは、突如現れたもう一人の仮面の男に蹴り飛ばされてバインドを掛けられた。

それだけじゃない。

あたしもシグナムもシャマルも、みんなバインドをかけられた。バインドを掛けている奴とは別の奴の手に闇の書が現れる。

そして仮面の男に従って闇の書があたしたちのリンカーコアを体から抽出した。

「最後のページは不要となった守護者自らが差し出す」

いやだ。そんなことになったらはやてと別れることになる。

抵抗しようにもバインドをかけられた上、抽出の激痛によって何もできない。

「これまでの幾度かそうだったはずだ」

Samm lung

闇の書の蒐集が完全に始まった。

あたしの目の前で苦痛のうめき声を漏らすシャマルが消えていく。
ヤメロ。

「壊れたロストロギア

」

今度はシグナムが消えていった。

ヤメロ、ヤメロ。

「こんなもので誰も救えるはずもない」

「シャマル！ シグナム！ なんなんだ・・・何なんだよテムエラ！？」

今度はあたしのリンカーコアの蒐集が始まった。

「プログラム風情が知る必要はない」

足元から消え始めたあたしの体。

(ごめん、ごめん・・・はやて)

ここで完全に意識を途切れてしまった。
最後に思ったことは・・・

(もう一度みんなではやてのご飯、食べたかったな・・・)

十 十 十 十 十 十 十

一人病室で休んでいると、突然何か得体の知れない胸騒ぎがわたしを襲った。

(なんやろ？ シグナムたちが気になってしゃあない)

愛する家族がなんか離れていってしまいそうな、そんな嫌な感じがさつきから続いとる。

すると今度は急に胸が痛み出して、気がつくところかのビルの屋上

へと来てた。

「なのはちゃん？ フェイトちゃん？ 何なん？ 何なんこれ？」

目の前で宙に浮いている変わった服を着たなのはちゃんとフェイトちゃんがいた。

それだけやない。ヴィータも磔にされているみたいに宙に浮いてるし、ザフィーラは私の真ん前で倒れている。

「君は病気なんだよ。闇の書の呪いって病気」

「もうね、治らないんだ」

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われることはないんだ」

闇の書の呪い？ 治らない？ 助からない？ 救われない？

なのはちゃんとフェイトちゃんが一体何を言っているのかわからない。

でも、たとえ本当にそうでもわたしは・・・

「そんなんええねん。ヴィータを離して。ザフィーラに何したん？」

家族とその許された時間を生きられるだけで十分。

「この子達ね、もう壊れちゃってるの。私たちがこつする前から」

「とつくの昔に壊された闇の書の機能を、まだ使えろと思ひ込んで無駄な努力を続けてた」

「無駄ってなんや!? シグナムは!? シャマルは!?!」

無駄っていうことも気になるけど、ここにいないシグナムとシャマルのことのほうがもつと気になった。

フェイトちゃんが顔を上げて、わたしの背後へと目を向ける。

わたしもそれに続いて後ろへと振り向いた。

そこにあつたのは、わたしがシグナムとシャマルに買ってあげた服だけがそこにあつて風に靡いて揺れていた。

わかつてしまった。わかりたくなかつたけど直感が告げる。シグナムとシャマルはもう……いない。

「壊れた機械は役に立たないよね」

「だから壊しちゃお」

その言葉の意味だけはわかつてしまった。

それはヴィータをザフィーラを示す言葉やと。

「や、だめ、やめてええええ!!!」

「やめてほしかったら」

「力づくでどうぞ」

「なんで!? なんでやねん!? なんでこんなん」

これ以上、わたしから何も奪わないで。

わたしが一体何したっていうん?

わたしは幸せになつたらあかんの？
なんでわたしの前には絶望しかあらへんの？

「はやてちゃん」

「運命つて残酷なんだよ」

「やめ・・・やめて！ やめてええええ！！！！！！」

あの二人の手の輝きがさらに強くなっていく。
そして次の瞬間、目の前に光の爆発が起きた。

わたしの願いも空しく、ヴィータとザフィーラが消えてしまった。
この瞬間、わたしから全てが失くなってしまった。

もう何も考えたくない。こんなに悲しくて辛い現実なんて

(いらない)

G u t e n M o r g e n , M e i s t e r

十 十 十 十 十 十

私とフェイトちゃんの目の前で起きた悲劇。

私たちを捕らえていたクリスタルの檻とバインドを破壊したときには全てが手遅れだった。

両手をついて俯いているはやてちゃんが、顔を上げて絶叫する。

はやてちゃんの足元から表れた黒い光の柱がはやてちゃんを飲み込

む。

黒い光の柱が消えそこから現れたのは、ルシル君と同じ綺麗な銀色の長髪に黒い服、そして背には四枚の黒い翼を生やした女性が立っていた。

「また全てが終わってしまった。一体幾度こんな悲しみを繰り返せばいい？」

その女の人は両腕を広げ、空を仰ぎながら涙を流していた。

「我は闇の書。我が力の全ては」

Diabolic Emission

右腕を掲げて、その手のひらから黒い球体が現れ一気に大きくなる。

「主の願いの、そのままに」

闇の書 覚醒（後書き）

いくつものルートを考え書いた上での今回でした。

シャルも見舞いに行く、ルシルも見舞いに行くなどのルートを一度書きました。

ですがシャルの場合は、トロイメライがないためシャルが完全に空気化。

ルシルの場合はもう魔術が使えるので、騎士たちの蒐集が難しくなっていました。

ルシルの複製術式。

A N S U R

ジヤーマⅡ炎、コルムナⅡ柱。スペイン語

アクテイスⅡ光、ディーネーⅡ竜巻。古代ギリシャ語

プレギーエーラⅡ祈り、プロイエツティレⅡ弾丸。イタリア語

テイルズオブグレイセス

ゼロ・ディゾルヴァー

ギルティギア

オールデッド

登場させた俳句は実際の見たものです。

A N S U Rキャラクター

フェンリル

代々アースガルド王家に使えている狼。

本来の姿は全長30m近い狼。

普段は普通サイズの狼、または人間形態をとっている。
彼女のマスターになった者は、彼女のいき過ぎた献身的な行為に振
り回される。

悪夢の幕開け

「手遅れだったみたいだな」

僕の前を飛ぶルシルが、あるビルの屋上で発生している黒い球体を見て呟く。

僕とルシルとシャルの三人は、通信妨害が発生した現場へと急いで駆けつけたが、すでに闇の書は完成した後だった。

「クロノ、二人の姿を確認できたんだけど・・・一人で行く？」

「・・・ああ、僕の・・・弟子としての務めだ」

僕には見えないが、シャルは視線の先に二人の仮面の男がいることを確認したと告げる。

向こうは未だこちらに気づいてはいないようだ。

「なら俺とシャルは、フェイトたちと合流してあれを止める。」

クロノ、下手な慰めは要らないだろうから何も言わないでおくよ」

「気にしなくていい。そっちは任せたよルシル、シャル」

「ああ」

「ええ」

ルシルとシャルは、なのはたちのいるであろうあの黒い球体のあるビルへと向かった。

ここからは僕の役目となる。

「どんな理由でも、こんなことではいけなかった」

頭に思い浮かぶのは僕の師であり友人のリーゼ。
これから僕はあの二人を。

二人の仮面の男の近くまで来たとき、あの黒い球体が爆ぜた。
どうやらルシルとシャルは間に合わなかったようだ。
どちらにしても僕は今出来ることをやるまでだ。

未だに僕の接近に気づいていない仮面の二人を、捕縛魔法ストラグルバインドで拘束する。
拘束されてもなお抵抗する二人の前へと僕は降り立った。

「ストラグルバインド」

「っ！」

「相手を拘束しつつ、強化魔法も無効化する。
あまり使いどころのない魔法だけど、こういうときには・・・役に立つ」

二人の仮面の男の輪郭が、徐々に光の粒子となって崩れていく。

「変身魔法も強制的に解除するからね」

完全に変身の解けた仮面の男の正体は、やはりリーゼたちだった。
僕の足元へと仮面が転がった音だけが空しく聞こえた。

「クロノ！ このお！」

「こんな魔法、教えてなかったんだけどな」

「一人でも精進しろ、と教えたのは君たちだろう。アリア、ロツテ」

“一人でも精進しろ”。この言葉をいつも胸に今まで腕を磨いてきた。

それなのにその結果がこれだった。僕はこんな形でリーゼたちと会いたくはなかった。

十 十 十 十 十 十

クロノと別れた私とルシルは、急いでなのはたちと合流するために飛んだ。

ただどあともう少しという距離まで来たところで黒い球体が爆ぜた。

「くそ、間に合わなかったか」

「なのはたちは……いた」

爆ぜた黒い球体が消える瞬間に離脱したのを確認できた。

様子からして無事のようにだが、あの行動は闇の書から隠れているためのようだ。

「まずは二人の状態確認だな」

「うん」

闇の書の死角になっているビルの陰に隠れているのはたちのもとへと急いだ。

十 十 十 十 十 十

私となのはは闇の書から一度距離を取るため、闇の書の死角であるビルの陰に隠れた。

闇の書の攻撃を防いだなのは右手を押さえている。

「なのは、ごめん、ありがとう。大丈夫？」

「うん、大丈夫」

そうは言うけどかなり痛がってる。

あれほどの威力を防ぐだけの魔法を私は持っていない。

だからなのは一人に防がせたことに対する謝罪を口にした。

「フェイト！ なのは！」

頭上から聞こえた声の方へと視線を向けると、そこにはルシルとシヤルがいた。

なんかルシルとは久しぶりに会った気がする。

「大丈夫二人とも？」

「私は大丈夫なんだけど、なのはが私をかばってさっきの魔法を防いだの」

シャルの言葉に私はそう答える。
するとルシルがなのはに近づいて、なのはの右手をとって容態を見る。

「これなら・・・傷つきし者に、ラファエル 汝の癒しを」

ルシルの治癒魔術だ。

いつもこの魔術に私たちは助けられてる。

「ありがとうルシル君」

「このくらいなんてことはないよ。
それよりフェイト、ソニックフォームでは彼女のような広域攻撃型には辛い」

「うん、そうだね。バルディッシュ」

Yes, sir. Barrier jacket, Lightning form

ルシルの言うとおりあの子は広域攻撃型だ。

避けきることが難しいなら、ソニックフォームの防御力では心許ない。

なら少しでも防御力を上げるため、ライトニングフォームへと変える。

「なのは！ シャル！」

「フェイト！ ルシル！」

アルフとユーノも私たちに合流した。

「ユーノ君！ アルフさん！」

「これで全員揃ったな。さて、あとは彼女をどうやって止めるかな」

十 十 十 十 十 十

闇の書の彼女一人に対して俺たちは六人。

おそらく動きくらいは止められるだろうがその先が問題だ。

未だ俺たちにはやてを救う方法はない。

闇の書の方へと視線を向けると同時に結界が張られたのがわかった。

「閉じ込められたな」

「やっぱり私たちを狙ってるんだ」

俺の呟きにフェイトがそう答える。

フェイトたちが狙われる理由について俺には理解できないな。

だがフェイトがそう言うのであれば、俺たちの知らない何かがあったのだろう。

「さっきクロノと会ったんだけど、何としても解決法を探すって言った。」

それと、援護のほうも向かわせるってことだけど、まだ時間が掛かるみたいなんだ」

クロノがグレアム提督とリーゼ姉妹から解決法を聞き出すことになっている。

一応俺とクロノで解決法のいくつかを立ててみたが、どれも問題点があった。

グレアム提督たちの解決法が俺たちと別のものであれば、と願わずにはられない。

「それまでは私たちでどうにかするしかないわけか」

シャルの言葉にみんなが頷く。

クロノから連絡が入るまでは、きっちり時間を稼ぐとしようか。

十 十 十 十 十 十

此度の愛しき主もまた闇わたしの書の犠牲となってしまった。

出来れば此度の主だけは何としても救いたかったが……。

だが、その願いは、おそらくもう叶わない。

ならば、それが叶わないのであれば、私が成すべきことをすればいい。

成すべきこと。それは愛しき主と守護者たちを傷つけた者たちを破壊するということ。

「我が内より来たれ 貴き英雄よ」

E i n n h e r j a r (異界英雄)

何時かに蒐集した者の力を此処に具現させる。

結界内には六つの反応。その内、二つはかなりの魔力を保有している。
騎士たちの記憶にあるセインテストとフライハイトという子達であろう。

私一人の戦力では心許ない。だがこれで少しは戦力の差が埋まったことだろう。

「スレイプニール、羽ばたいて」

S l e i p n i r

十 十 十 十 十 十

「リーゼたちの行動はあなたの指示ですねグラム提督」

リーゼたちを本局へと連行して、今はグラム提督と向かいあって座っている。

これからすることは提督たちが成そうとしたことの確認だ。

「違うクロノ！」

「私たちの独断だ！ 父様には関係ない」

「ロツテ、アリア、いいんだよ。」

クロノはあらかたのことを掴んでる。違うかい？」

提督の言つとおりほとんどのは調べがついている。

「11年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生先を探していましたね。」

そして発見した。闇の書の在り処と現在の主、八神はやてを」

モニターに八神はやてと闇の書の映像を出す。

「しかし、完成前の闇の書と主を押さえてもあまり意味がない。

主を捕らえようと闇の書を破壊しようとすぐに転生してしまうからだから監視をしながら闇の書の完成を待った。見つけたんですね、闇の書の永久封印の方法を」

これこそ一番に知っておきたかった情報だ。

あの闇の書を封印する術を発見したからこそ、このようなことをしていたのだとルシルとシャルと話し合った。

「両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て、心は痛んだが運命だと思った。」

孤独な子であればそれだけ悲しむ人は少なくなる」

それでも悲しむ人がいなくなるわけじゃない。

提督もそれくらいのことかわかつての判断、というわけか。

「あの子の父の友人を語って生活の援助をしていたのも提督ですね」

八神はやてから提督に宛てられた手紙と写真をテーブルの上に置く。写真には、どこにでもいそうな家族のような八神はやてと守護者たちが写っている。

「永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった。・・・偽善だな」

提督はそう言って俯いた。

「封印の方法は闇の書を主ごと凍結させて次元の狭間か氷結世界に閉じ込める、そんなところですね」

「そう。それならば闇の書の転生機能は働かない」

やはりルシルの言っていたことと同じだ。

だがその方法にはいくつか問題点があると saying していた。

僕も彼の示した問題点には同感だった。

「これまでの闇の書の主だってアルカンシエルで蒸発させたりしてんだ！

それと何にも変わんない！」

「クロノ、今からでも遅くない。私たちを解放して。

凍結がかけられるのは暴走が始まる数分だけなんだ！」

「その時点では闇の書の主は永久凍結をされるような犯罪者じゃない。違法だ」

問題点その一。定められている法に則れば、その時点ではそこまでの罪になっていない。

完全に逸脱した違法行為と見なされてしまうことになるだろう。

「その所為で！ そんな決まりの所為で悲劇が繰り返されてんだ・・
！」

クライド君だって、あんたの父さんだってそれで！！」

「ロツテ」

僕の言葉を聞いたロツテが声を荒げる。

そんな法の所為で僕の父、クライドも死んだのだ、と。

激昂しているロツテを、それを聞いていた提督が諫める。

提督たちが取るうとした方法はわかった。

でもそれはルシルや僕も考えていた方法の一つだった。

僕は立ち上がり、現場が気になるため部屋を後にしようとしたけど、その前にもう一つこの方法においての問題点を告げておくことにした。

「法以外にも提督のプランがあります。まず凍結の解除はそう難しくはないはずです。

どんなに守ろうと、いつかは誰かが手に入れて使おうとする。

怒りや悲しみ、欲望や切望、そんな願いが導いてしまう。封じられた力へと」

言っておきたいことは言い終えた。

今は一刻も早く現場へと戻り、力を貸さないといけない。

「現場が心配なので、すいません、一旦失礼します」

「クロノ」

「はい？」

扉の前まで来たところで提督に呼び止められた。

「アリア、デュランダルを彼に」

「父様!？」

「そんな!？」

“デュランダル”というのが分からないが、リーゼたちはかなり驚愕している。

「私たちにもうチャンスはないよ。持っていたって役に立たん」

そうしてアリアから渡されたのは一枚のカード。

「どう使うかは君に任せる。氷結の杖デュランダルだ」

これが提督たちの切り札だとわかった。

十 十 十 十 十 十

闇の書が翼を羽ばたかせて私たちへと向かってきた。

だが気になるのはそれに追従するように空を翔るウェーブのかかった金髪の少女。

そして両目を閉じた何やら貴族のような服装を纏った男がビルの屋上伝いに飛び跳ねている。

「エヴァ!？ ズエピア!？」

その二人を見たルシルが驚愕の声を上げた。

その反応から知り合いのようだ……て、まさか。

「ルシル、知り合いなの？」

未だに目を見開いているルシルの様子を見て、フェイトが心配して声をかける。

「・・・あれは俺の使い魔・・・のようなものだ。フェイトとアルフには以前教えたことがあるだろう？魔力だけで構成された使い魔が俺にいるって、あの二人もそうなんだ」

それを聞いた私たちは気付いてしまった。

ルシルが私たちの知らないところで闇の書に蒐集されていたことに。

「いつ・・・ルシル君、いつ吸収されたの？」

なのは信じられないといった顔でそう呟いた。

「あれは・・・フェイトが転入してすぐだったか」

（なるほど、だからあの時からルシルは戦闘に参加せずに無限書庫での調査に就いたのね）

やっぱり様子がおかしいと思ったんだ。

それを聞いたなのはたちは完全に固まってしまった。

ユーノだけは何故か驚いていない。もしかしてユーノも知っていた？一緒に無限書庫へ行ったのだから、ルシルがいる理由くらいは聞いているかもしれない。

「ルシル、あとで一発殴らせて。今はそれだけ言っとく。」

なのは、フェイト、今はまず闇の書をどうにかするのが先、いいね？」

「うん」

まったく、こんなときに知りもしたくなかったことが知ってしまったなんて。

「なのはたちはみんな闇の書の相手をお願い。
ルシル、あなたは私と異界英雄を潰す、オーケー？」

額に青筋を浮かべながらみんなに確認を取る。

そんな私を見たみんなが黙って何度も頷く。拒否権なんてものは存在しない。

「最後に一つ、みんな無理はしないこと」

「はい！」

「おう！」

＋ ＋ ＋ ＋ ＋

闇の書と“異界英雄”との戦いが始まった。

俺とシャルは、闇の書より厄介なエヴァンジェリンとズエピアを潰すことにした。

「シャル、そちらは任せた。ズエピアは結構な怪物だから気をつけ

る」

私が相手をする事になった貴族風の男“ズエピア”を、かなりの怪物だとルシルが言った。

でも相手は魔導師ではなく単なる魔力の塊だ。

ならば魔術師としての戦いが出るといふことだ。

「ごめんね、トロイメライ。キルシュブリューテ！」

私が携えるのはデバイス“トロイメライ”ではなく、神器“キルシュブリューテ”。

折角直つて私のところに戻ってきてくれたのにあんまりだけど。

でも“異界英雄”^{エインヘリヤル}の正体とその力の前では、おそらくデバイスでは

傷一つ付けられないだろう。

だからこそその神器だ。

「ふむ、此度の演劇においてはどうやら私は脇役のようだ。

さて、剣を携えし娘よ、命に保険はかけたかね？」

何あの口調？ 演劇とか脇役とか意味がわからない。

「上等！」

私は瞬時に間合いを詰め、“キルシュブリューテ”を一閃する。

「フフ」 クリーチャーチャンネル（エス）

ズエピアは纏っているマントに覆われた。

防御でもするのかと思ったが、ズエピアはそこから姿を消していた。

私の斬撃は空を斬り、勢いを殺せず踏鞴を踏んだ。

「フェイク！」 シリーニユース（マリス）

声は私のすぐ真後ろから聞こえた。
私は考えるより先に前へと飛んだ。
視線の端で捉えたのは、足下から延びる黒い爪の斬撃だった。

「ほう」

「なるほど、確かに“気をつける”ね」

再度対峙する私とズエピア。

直接“キルシユブリューテ”の一撃は少し見直したほうがいいのかもしれない。

だったら彼の間合い外からの攻撃をすればいい。

「はああああ！！！」

魔力の刃を放つ。

ズエピアはそれを少し体をずらしたことで回避する。

彼の転移に気をつけながら、さらにいくつもの刃を放っていく。
だがそれも容易く回避されていく。

「キャスト！」 レプリカント・コーディネーター（イド）

突然現れた少年の黒い影。

その黒い影が瞬時に私へと間合いを詰めて、手に持つ短刀を振るってきた。

「っく」

私はそれを何とか捌いて影の少年を斬り裂いた。
その直後、私の直感がこの場から離れると告げてきた。
それに従ってすぐさま後方へと退く。
その瞬間、現れたのは巨大な黒い竜巻だった。

「カット！ カットカットカットカットカットカットカット
カットカットオ！！」

今のは結構危なかったかもしれない。

あの黒い竜巻はまずい。その竜巻も消え、ビルの屋上が静まり返る。

「どうした娘。このまま何もせずに舞台を降りるかね？」

「まさか。あなたはここで消えてもらう」

魔術の大半を魔法へと変えたために今使える魔術は少ない。

それでも負けるつもりはない。

神秘の籠った“キルシュブリューテ”の一閃さえ当てられれば勝てるはずだ。

（仕方ない、接近戦に戻る）

やはり私は外からの攻撃には向かない。

直接叩つ斬る。それこそ私の本来の戦い方だ。

私はもう一度ズエピアとの間合いを詰める。

「少し芸が無いのではないかね？」 クリーチャーチャンネル

（エス）

それは暴力の渦となってビルごと私を蹂躪した。
その暴力にさらされたビルの上半分が完全に倒壊した。
私は瓦礫の上で倒れている中、近くからズエピアの声を聞いた。

「ああ、無理をしなくてもいい。客席に残るのは君一人きりだ、遠慮なく休みたまえ。」

ホールの灯りは消しておくよ」

「待ち・・・まだ・・・まだ。まだまだああ！！！」

私は立ち上がり、“キルシュブリューテ”を構えなおす。

「そうか、では第二幕と洒落込もつかお嬢さん」

十 十 十 十 十 十

「何だルシリオン、ずいぶんと可愛らしい姿じゃないか」

黒いマントにトンガリ帽子を被ったエヴァンジェリンが、俺の姿を見て笑い始めた。

全く、“異界英雄”^{エインヘリヤル}の人格がオリジナルと同じというのが問題だ。

一応は俺の使い魔という形になっているが、自我の強い奴は好き勝手することもある。

エヴァンジェリンはその典型だ。

「うるさい、とっとと終わらせてフェイトたちの援護に向かいたいだよ。」

君には悪いが早々に消えてもらっぞ」

「そう焦るな。何せ久々の殺し合いだ、もっと楽しもうじゃないか」

「はぁ……わかった。ならエヴァ、自決か特攻好きなほうを選べ」

年相応の少女のように笑うエヴァンジェリン。
何を言っても無駄のようならとっとと消すしかない。

「自決か特攻……か。おい待て、どっちにしても私には死ぬしか選択肢がないじゃないか」

「当たり前だ。それに死ぬんじゃないかって消える、だ。

単なる魔力の塊でしかない君には死ぬという概念は存在していない」

可愛らしい笑顔から無機質な表情へと変わった。

俺とエヴァを包み込む空気が一瞬で凍りついた。

だが気にはならない。これまでの幾たびかこのくらいの殺気何万何億と浴びてきた。

「確かにそうだが私は面白くない。

ならばさっさと貴様を殺し、他の連中の戦いをのんびりと見物して楽しむことにしようか」

「やれるものならな」

交わる視線、互いの殺気が入り乱れる。

可能な限り短期決戦へと持ち込む。

ここで下手に魔力を消費するわけにはいかない。

「氷の精霊48柱。集い来たりて敵を切り裂け。
魔法の射手・連弾・氷の48矢」
サキタ・マギカ セリエス グラキエース

我が手に携えしは確かなる幻想

エヴァは魔法の呪文を、俺は複製術式を引き出す呪文を告げる。

先に放たれたのはエヴァの魔法。

追尾してくるそれを回避しつつ炎の大剣で焼き払う。

「焰杖大火！」

属性の相性としては俺のほうが断然有利だが、それを覆るのがエヴァだ。

どこまで俺がそれに着いていけるかで勝敗は決まる。

まあ守護騎士たちのように、相手の命を心配する必要がないため、負けるつもりはない。

「ちっ、やはり私と貴様では相性が悪過ぎるな。だがこれならどうだ？」

エヴァの右腕から大剣が作り出された。

あれは間違いなく“エンシス・エクセクエンス”だ。

「そんなもの持ち出してくるなあああ！！」

悪夢の幕開け（後書き）

シャルとルシルの相手、エヴァンジェリンとズエピアとなりました。さすがに闇の書一人相手に六人の集中砲火では簡単に終わってしまいますから。

複製術式

A N S U R 焰杖大火

心

シャルちゃんとルシル君は、ルシル君の使い魔さんたちとの戦いを始めた。

そして私たちも闇の書さんを止めるために動き出す。

そしてさっきからフェイトちゃんと闇の書さんが何度も激しい攻防を繰り返している。

今度は一度距離をとって、私とフェイトちゃんは射撃魔法を放つ。

「プラズマランサー、ファイア！」

「アクセルシューター、シュート！」

弾幕を張って闇の書さんの行動を制限する。

その間にユーノ君たちがバインドで捕獲しようするけど、

P a n z e r g e i s t

闇の書さんは魔力を纏って、私とフェイトちゃんの仕掛けた弾幕を力づくで突破した。

「あれってシグナムの・・・！」

フェイトちゃんが驚愕の声を上げる。

どうやらあの魔力を纏う魔法はシグナムさんも使っていたらしい。

「降り注ぎて彼の者を討て、氷牙凍羽刃」

闇の書さんが腕を振るつたと同時に、氷で出来た鳥の羽のようなものがいくつも降り注いだ。

R o u n d S h i e l d

私たちは何とか防ぐことが出来たけど、今の魔法は間違いなくシャルちゃんの魔法だった。でも威力がかなり高い。

「なのは！ フェイト！ おそらく闇の書は、蒐集した魔導師の魔法を使えるんだ！
だから気をつけて！ もしかするとルシルの魔術も使ってくるかもしれない！！」

ユーノ君が離れた場所からそう説明してきた。
ルシル君の魔術も使う？ そうなったらかなりまずいかもだよ。

「なのは、もしそうならルシルの魔術が使われる前に……！！」

「うん、なんとしても闇の書さんを止めないと……！！」

私の火力とフェイトちゃんの手で必ず止める。
フェイトちゃんは闇の書さんを翻弄するように空を翔ける。

「バルディッシュ！ H a k e n S a b e r はああああ！！」

「ゼーリツシュ・ヴィーダーシュタント」

またシャルちゃんの魔法を使った。

フェイトちゃんの、バルディッシュの一撃を完全に防いでいる。
闇の書さんは今完全に動きを止めている。

「デイバインイイン M a s t e r ！！ ．．．え！？」

デイバインバスターを撃つ準備に入った途端、“レイジングハート”が叫ぶ。

闇の書さんは、フェイトちゃんの一撃を防いでいる左手とは逆の右手を私に向けて、

「デイバインバスター D i v i n e B u s t e r F u l l
B u r s t 撃ち滅ぼせ」

私の魔法を撃ってきた。

防御じゃなくて回避行動に入ろうとした時、横合いから大きな閃光が飛んできた。

そして闇の書さんが撃ったデイバインバスターを掻き消した。

『すまない！そっちに流れ弾が飛んだ！ 大丈夫か！？』

ルシル君から私たちに向けて念話を通してきた。

どうやらさっきの閃光はルシル君のものらしいんだけど．．．。

（流れ弾って威力でもないんだけど）

どちらにしても助かったことには違いないのでお礼を言っておく。

『えっと、大丈夫！ 逆に助かったからありがとっだよ！』

『そうか、それは良かった・・・のか？ まあ無事ならそれでいいんだ』

そう言っつてルシル君からの念話が切れる。

ルシル君の方も大変らしい。

さっきからシャルちゃんとルシル君が戦ってるビルがいくつも崩れて去っている。

「チエーンバインド！」

「リングバインド！」

そしてもう一度ユーノ君とアルフさんがバインドを仕掛け、見事に成功した。

「・・・今だ！ レイジングハート！」

Divine buster, extension

「シュートツッ！！」

「バルディッシュュ！」

Plasma smasher

「ファイア！！！」

動きを抑えられた闇の書さんへ向けて、二人同時の砲撃を放った。

完全に直撃コースだ。

「盾」

P a n z e r s c h i l d

たったその一言で現れたベルカの魔法陣に、私とフェイトちゃんの砲撃が止められた。

闇の書さんは二つの砲撃を防ぎながら、新しい魔法をさらに撃ってきた。

「刃を以て、血に染めよ。 B l u t i g e r D o l c h 穿て、
ブラッディダガー」

いくつもの短剣が私とフェイトちゃん、ユーノ君たちへと襲い掛かる。

なんとか直撃する前に離脱できたことで大したダメージはない。

「輝けたる光において其の御姿はいと美しくただ煌いて。
その威光の前にて有象無象は塵芥と化す。満ち足る」

闇の書さんの足元に五つの円環が現れて、球体を形作りながら回っている。

何かの魔法の準備だと思っただけど、どうい魔法かわからないから迷っていると、

「逃げろおおおおお!!!」

遠くで金髪の女の子と戦っていたルシル君が叫んだ。
その様子は尋常じゃなくて、すごく焦っているようにも見える。
そしてすぐさまルシル君から念話が来た。

『急いでその場から離れるんだ！ それはかなりまずい！
えっと・・・そうだ！ フェイト！ アルフ！ 指輪と腕輪を持って
いるか！？』

『え、あ、ごめんなさい。』

ルシルに一人前と認めてもらえるまでは使わないって、アルフと決めたから、今は部屋に大事にしまっておるんだ』

『Oh！ ああそうか・・・とりあえず彼女から可能な限り距離を取れ！』

一応放たれる前に妨害するが、もし放たれた場合は全力で防御に移つてくれ！』

ここまで切羽詰ったルシル君の声を聞くのは初めてかもしれない。
そして魔法の正体を知っているということは、あれはルシル君の魔術なんだろう。

「アルフ、ユーノをお願い！　なのはは私と！」

「あいよー！」

「え？　うん！」

フェイトちゃんに抱えられて闇の書さんから全力で離れる。

円環の球体の中心には、ルシル君の魔力光サファイアブルーの閃光が揺らめいていた。

十 十 十 十 十 十

ルシルの尋常じゃない声を聞いて、あの子が放とうとしている魔法がルシルの魔術であることはすぐに理解できた。

私たちはルシルの声に従って全力で距離を取る。

一体どういう効果のある魔術なのかは聞けなかったけど、かなりの範囲攻撃だと推測できる。

かなり距離が開いたところで、“バルディッシュ”から信じられないことが告げられた。

Sir, there are noncombatants
on the left at three hundred
yards.

(左方向300ヤード、一般市民がいます)

それはこの結界の中に一般の人が取り残されているとのことだった。私となのは“バルディッシュ”が示した方向へと変更して一般人を探すことにした。

「なのは、この辺・・・！」

「うん・・・！」

抱えていたなのはを離す。

私は信号機の上に降り立ち、周囲を見渡して取り残された人を探す。

Twenty, Eighteen

“バルディッシュ”によるとすぐ傍にいるはずんだけど見つけれない。

「あの！ すみません！ 危ないですからそこでじっとしててくださいー！」

なのは見つけたらしい。

私もなのは視線の先へと目を向ける。

そしてそこにいたのは、

「なのは・・・？」

「フェイトちゃん・・・？」

友達のアリサとすずかの二人だった。

その突然の出来事に、私となのはただアリサとすずかを見ていることしか出来なかった。

十 十 十 十 十 十

「くそっ！ 邪魔をするなエヴァ！」

今から闇の書が放とうとしているのは俺の魔術の一つだ。

その名を“光神ゴッド・バルドルの調停”。全方位無差別砲撃の対軍攻性術式だ。

一対多数において効果を発揮する殲滅特化の上級魔術。

放たれた砲撃が何かに着弾すると、そこからさらに広範囲に魔力波が広がり、さらに被害をもたらす。

(まさか複製された魔術を、しかも上級術式を魔法へと構築するとは思ってもしなかった)

確かにそれは不可能ではないが、俺より先に成し遂げていたことに純粹に驚く。

いや、闇の書が“異界英雄”エインヘリヤルを召喚できた時点でそれも念頭においておくべきだった。

「はは、見物じゃないかルシリオン!

貴様の“魔術”あれはかなり極悪な効果を持っていたな。

どうなるのか一緒に見てみようじゃないか!」

再度“エンシス・エクセクエンス”を作り出してエヴァが微笑む。

円環の中心で輝いている光の量からして臨界点は近い。

おそらく術の発動はもう止められない。

『シャル! 君は動けるか!?!』

頼みの綱であるシャルへとリンクを通して話す。

しばらくは繋がらなかったが、ようやく通じてくれた。

『ムリ! かなり手古摺ってる! さっきからカットカットってるさくて!』

それに影のような女や大男なんてのが次々と出てきて参ってるの! ルシルの方こそどうにかできないわけ!?!』

『出来たら苦勞はしない! . . . が仕方ない。ズエピアも俺が引き受ける!』

シャルはすぐにフェイトたちと合流して、あの子達を守ってくれ!

！』

『………わかった』

地上に放たれる砲撃が少なければシャルの防御力なら凌ぎきることが出来るはずだ。

リンクを切り、エヴァの攻撃を全力で避ける。

“エンシス・エクセクエンズ”がビルへと刺さり、ビルを全壊させた。

「ぐっ、危ないだろうエヴァ！ 当たったらどうする!?!」

全く、触れた固体や流体を強制的に気体へと相転移させるなんて、人間相手に使うようなものじゃないというのに。

「貴様の多層甲冑を抜くにはこれしかないだろう」

「見てのとおりその術式を使っていないことくらい君は気付くだろう!?!」

「んん？ わからないなあ、何せ不可視の多重障壁だからな」

エヴァは完全にイタズラ好きの子供ような笑みを浮かべている。

俺が多層甲冑を使っていないのを知ってての“エンシス・エクセクエンズ”か。

このドS王女め。

『うわあ！ ルシル君！ それ以上は壊さないでえ!!』

結界内だからいいけど、それでも少しは抑えてえ!!』

『すみません！ 無理です！！』

エイミイからそんな通信が入るけど、無理な注文だった。ビル^の瓦礫が周辺へと吹き飛んでいる中、その瓦礫ごとエヴァに向けて魔術を放つ。

「^{コード}刻め、^{ウリエル}汝の天災！」

「お？」

指先から五つの雷の斬撃を飛ばす。周囲一体に強烈な雷光が放たれ、そしてそれに伴った轟音が鳴り響く。エヴァには直撃こそしなかったが、それでも動きを止めることができた。

「シャル！」

「わかった！ あとはお願い！」

シャルと入れ代わるようにしてズエピアへと突撃する。シャルはものすごい速さで、この場から離脱してフェイトたちのもとへと向かった。

「上演中に飛び入り参加とはいささか無粋だと思うが。いやしかし、筋書きのない殺戮^{ドラマ}は愉しめるといふもの。それゆえに喜んで相手を引き受けよう我が漆黒の主よ^{テストメント}」

「あのガキどもを守るために、私とそいつを一人で相手するか」

ズエピアが両目から血涙を流しながら静かに笑う。
そしてエヴァはゆっくりと俺の背後へと降り立つ。

前門にはズエピア、後門にはエヴァ。

だがおそらくタタリではないズエピアを倒すことは容易だろう。

それにしても俺に設定されている“エインヘリヤル異界英雄”の召喚時間は過ぎ去っている。

それでも未だに存在し続けている、ならば俺と闇の書の召喚における違いはやはり……

（プログラム、というのが最大の差ということなのか？
だがいくらなんでもこれは反則過ぎやしないか？）

「戦闘中における深い思考は自身と味方の破滅を導く、貴様の言葉
だろウルシリオン」

クリュスタリザティオー・テルストリス
凍る大地

「っー!!」

「さあ第三幕だ」

クリーチャーチャンネル（アポトーシス）

足元が完全に氷で捕らわれた。

そしてズエピアはアルクエイド堕ちた真祖の影を具現させた。

「だが甘い、コート輝き燃える、ケルビエル汝の威容!!」

足元に広がる直径500mの円陣より蒼く燃える炎が噴き上がる。

エヴァは咄嗟に上空へ逃げたようだが、ズエピアはまともに飲まれ

た。

威力と神秘が弱いとはいえ、それでも直撃によって完全に動きを止めるズエピアだったが

「カット・カカ、カット！ キイイイーーーーキキキキキキキキキキ！」

蛮能八改革シ、衆生コレニ賛同スルコト一千年！ 学ビ食シ生カシ殺シ称エルコト更ニ一干！

麗シキカナ、毒素ツイニ四肢ヲ侵シ汝等ヲ畜生ヘト進化進化進化セシメシ！」

我が手に携えしは確かなる幻想

ズエピアの魔力が膨れ上がり、奴がマントに包まれ暴力の渦へとなる。

俺は何故か咄嗟に同じものを選択し、真っ向から力勝負に持ち込んだ。

「ネズミよ回せ、秒針をサカシマに誕生をサカシマに世界をサカシマに……！」

「開幕直後より鮮血乱舞、烏合迎合の果て名優の奮戦は茶毘に伏す」

ナイトルーラー・ザ・ブラッドディーラー

「回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ回せ……！」

「……！」

二つの暴力がせめぎ合い、弾かれては再度衝突を繰り返し、ビルをさらにもう一棟潰す。

吹き飛ぶ瓦礫を面倒くさそうに払い除けるエヴァを視線の端で捉えた。
術後に生まれた隙を突いてくるようなことはなさそうだ。
今ならズエピアの術後硬直を狙って倒すことが出来る。

我が手に携えしは確かなる幻想

取り出したるのはズエピアと同じエルトナムの名を持つ少女の保有していた武装。

そしてまずはズエピアの動きを完全に抑えるため、取り出した第四聖典へと磔にする。

今此処に神罰を執行す

「まずはお前からだズエピア！ ガンバレル、フルオープン！！」
砲撃の衝撃によって吹き飛ばされないように、背の剣翼を上下に具現した円陣に突き刺す。

バレルレプリカ・オベリスク

「……………これが此度の……………私の終演……………か」

ブラックバレル・レプリカより放たれた閃光に飲み込まれたズエピア。
ア。

まずは一人、ズエピア・エルトナム・オベローンの始末が完了した。

そして次の瞬間、闇の書より“コード・バルドル光神の調停”が放たれた。

十
十
十
十
十
十

ルシルが私と入れ代わるようにしてズエピアへと突撃したのを確認してから、私はなのはたちの元へと向かった。

なのはとフェイトの魔力反応を頼りに空を飛んでいるとようやく二人を見つけた。

見つけたんだけど、傍にはさらに人がいる。

「・・・うそ、アリサ!?　　すずか!?!」

なのはたちと一緒にいたのは、信じられないことにアリサとすずかだった。

「シャル・・・ちゃん?」

「ちょっと!　　あんたもどういうことよこれ!?!」

すずかの戸惑いの声と、アリサの大声が静まり返っている街に響く。なのはとフェイトも完全に戸惑っている感じだ。

「えつと・・・映画の撮影?」

紛れもなく大嘘な言い訳。

もちろんそんなものが通じるわけもなくアリサが怒鳴る。

「そんなわけないでしょ!?!」

これは本当のことを説明するしかない。

だけど今はそんなことをしている時間がない。

闇の書からずいぶん離れたいるというのに、その彼女の静かな声が私たちに届いた。

「 即ち公正たる断罪の閃光、コード・・・バルドル」

その瞬間、遠くで大きく輝いていた球体から何条もの砲撃が“下方”にのみ放たれた。

あの魔術は全方位砲撃のはずだけど、彼女はどうかやら“下方にのみ放たれる”ようにしたらしい。

「（どれだけ器用なわけ！？）なのは！ フェイト！ 障壁！！」

「「はい！！」」

フェイトがアリサとすずかにドーム状のバリアを張る。

私となのは、フェイトの三人はバリアの周囲に三角形の円陣を組み、どこから魔力波が襲い掛かってきても対処出来るようにしておく。

今思えば無差別なのが幸いした。

放たれた砲撃のほとんどが私たちからかなり離れた場所に着弾して、大きいドーム状の魔力波を生み出し続けている。

だがやはりそう上手いことは続かず、こっちにも最初の一撃が来た。

「来た！！」

Wide area Protection

Round Shield

ハイリヒ・フライハイト
「真楯！！！」

それぞれが障壁を張って、今から私たちに襲い掛かるであろう莫大な魔力波を待つ。

そしてまずは第一波が私たちの元へと到達した。

「うっぐ……！」

「なんて……強い……くうう……！」

なのはとフェイトがあまりの威力に呻き声を上げる。

私は魔術による最高の障壁のため、それほどの衝撃は感じられない。けどやはり最高の守り。一度使っただけでかなりの魔力を消費してしまった。

「フェイト！　なのは！　シャル！」

「三人とも大丈夫！？」

アルフとユーノから念話が入る。

なのはとフェイトの代わりに私が対応する。

「私たちは何とか耐えてる！」

だけど結界内にアリサとすずかが取り残されていたの！！

そっちで何とか出来ない！？」

そう告げると、今度はエイミィから連絡が入った。

「ごめん！　その魔法とその余波が治まるまでもう少しだけ耐えて

「！！」

それはそうか。こんな中で転送なんて出来るわけがない。今なお続く一撃のみでなのはとフェイトは辛そうにしている。あといくつの砲撃が放たれるかわからないけど、これ以上なのはたち負担はかけられない。

(バースト魔力炉破綻覚悟でキルシュブリューテの能力を完全解放するか、それともこのままこの方法で耐えるか・・・どうする?)

“バースト魔力炉破綻”を起こすのはかなり痛いけど、これからの魔力波には対処できる。

そのかわり最低でも三ヶ月は確実に魔力行使は出来なくなるだろうけど。

そしてようやく一撃目の魔力波が途切れた。だが一度あることは二度、二度あることは三度というように、近くに三発続けて着弾した。

「っ！ また来る！ なのは！ フェイト！」

「うん」

これは結構まずい状況だ。

なのはとフェイトの顔からは疲労が見える。

「・・・待つて二人とも、やっぱり私一人でいい。

なのはとフェイトは、この後に待つてる闇の書との戦いに備えて魔力を温存して」

「シャルちゃん!？」

「だ、ダメだよシャル！」

二人が止めてくるけど、そんな余裕はない。
あと20秒とせずに、魔力波が到達する。
もう迷っている時間はない。

「目醒め」とおっ！「え！？」

いきなり目の前に現れたのは、生前に見たことのある少女。

「シユタツと華麗に、みんなのアイドル、フェンリル推・参？」

ピースサインを決めてそこに突っ立っていたのは、大戦時に色々な意味で有名だった駄犬（いや駄狼か）こと“フェンリル”だった。

十 十 十 十 十 十

闇あのこの書から放たれたルシルの魔術の威力は半端じゃなかった。

一撃を防ぐだけでも大変だったのに、さらに付近に三発が着弾した。私たちは再び襲い掛かってくる魔力波を防ぐために障壁を張ろうとしたけど、シャルがその対抗策でも持っているのか自分一人で防ぎつつ言ってきた。

「シャルちゃん！？」

「だ、ダメだよシャル！」

なのはと二人して止めようとしたけど、シャルはもう聞いていないみたいだ。

私たちのところに三つの魔力波が到達するまで時間がない。このまま迷っていると、私たちだけじゃなく、アリサやすずかまで被害に遭ってしまおう。

(シャルに託すしかないの?)

シャルはルシルと同じ魔術師だから何とか出来るのかもかもしれない。それでも、そんな簡単に任せるなんてことは・・・出来ない。シャルが“キルシュブリューテ”を掲げたのを見た。

「目醒め」とおっ!「え!?!」

私たちの目の前に現れたのは、綺麗な白い肌に蒼い瞳、地面に付きそうなほど長い黒髪の、たぶんエイミーくらいの年の女の人だった。額に輝く黄金のカチューシャに付けられているリボンを軽く払って一言。

「シユタツと華麗に、みんなのアイドル、フェンリル推・参?」

ピースサインを私たちに向けてウィンクしたフェンリルと名乗ったその人。

この緊張感を根こそぎ奪ってしまっていた。

「ちよつと何で「防御は私に任せて」は?」

そう言ったフェンリルさんは、両拳を地面へと殴りつけた。すると私たちの周囲に綺麗な銀色の光の壁が現れる。

そして私たちへと到達した三つの魔力波を完全に防ぐ。それからしばらく続いた魔力波にも耐え切って見せた。

「……………すい」

なのはと同じ言葉が口から出た。

「ちょっと何でここにいるわけ!？」

それ以前に出て来れるなら初めから出て来い!!

ていうかルシルが初めからこうしていれば良かったじゃん!」

シャルがフェンリルさんへと詰め寄り、フリルがたくさんある白^ス服を掴みとって、激しく揺らしている。

「そんなことより、“バルドル”も打ち止めのようだね。」

その子たちを避難させるのが先決と思うんだけど。どう剣神?」

「う、確かに。エイミイお願い」

シャルがフェンリルさんから離れて、エイミイへと通信を入れる。

「えっと、アリサちゃん、すずかちゃん」

なのはが二人に声をかける。

私も何か言ったほうがいいのかもしれない。

「もう、大丈夫だから」

そんなことしか言えなかった。

「すぐ安全な場所に運んでもらうから、もう少しだけじっとしてね」

アリサとすずかが立ち上がって何かを言おうとしていたけど、その前に転送が始まって私たちの前から姿を消した。

＋
＋
＋
＋
＋
＋

「見られちゃったね」

今まで隠してきたことがアリサちゃんとすずかちゃんにバレてしまった。

フェイトちゃんはそれに頷いて答えてくれて、シャルちゃんはフェンリルさんと何か話をしているようだ。

するとフェンリルさんは私とフェイトちゃんへと振り向いて、

「それじゃ、私はここまでだから」

そう言ったフェンリルさんの体が次第に薄れていき、光の粒子みたいに散っていく。

「助けてくれて、ありがとうございました！」

「あ、ありがとう！」

お礼だけは言っておかないとダメだと思った。

それを聞いたフェンリルさんは笑顔で手を振ってくれて、そして消えていった。

「シャルちゃん、フェンリルさんって」

「ええ、ルシルの使い魔の一つ」

そう言ったシャルちゃんは闇の書さんの方へと視線を移した。

「ルシルの魔術も使えるということは、私の魔法だけじゃなくて魔術も使えると見たほうがいいかもしれない。

ねえユーノとアルフにアリサたちの方を任せたいんだけど」

「うん、そうだね」

「わかった」

私とフェイトちゃんは、ユーノ君とアルフさんに念話でアリサちゃんたちを守って欲しいとお願いした。

これでアリサちゃんとすずかちゃんの方は大丈夫と思う。

あとは闇の書さんをどうにかするだけ。

『なのはちゃん、シャルちゃん、フェイトちゃん、クロノ君から連絡。』

闇の書の主に、はやてちゃんに投降と停止を呼びかけてっ！」

エイミーさんから通信が入る。

やっぱりもうそれしかないみたいだ。

『はやてちゃん、それに闇の書さん、止まってください！』

ヴィータちゃんたちを傷つけたの、私たちじゃないんです！』

『シグナムと私たちは 』

『我が主はこの世界が、自分の愛する者たちを奪った世界が悪い夢であってほしいと願った。』

我はただ、それを叶えるのみ。主には穏やかな夢の内でも永久の眠りを。

そして愛する騎士たちを奪った者には永久の闇を』

ダメだ、完全に私とフェイトちゃんを敵としか見ていない。

「闇の書さん!!」

「お前も、その名で私を呼ぶのだな」

すごく悲しそうな表情をした闇の書さん。

「それでもいい。私は主の願いを叶えるだけだ」

いつの間にか闇の書さんが近くにまで来ていた。

「願いを叶えるだけ？ そんな願いを叶えて、はやてちゃんは本当に喜ぶの!？」

心を閉ざして、何も考えずに主の願いを叶える道具でいて、あなたはそれでいいの!？」

いいわけがない、だって、

「我は魔導書、ただの道具だ」

「だけと言葉を使えるでしょ!？ 心があるでしょ!？」

そうでなきゃおかしいよ、本当に心がないんなら泣いたりしないよ
!?!」

闇の書さんは涙を流しているから。

私が闇の書さんと呼んだら悲しい顔をした。

“たとえプログラムでも、人と関われば心は生まれる”、ルシル君
の言葉だ。

あんな顔をするんならあの子には心がちゃんとある、そう断言でき
る。

「この涙は主の涙。私は道具だ、悲しみなどない」

「・・・トロイメライ、セット」

J a w o h l , M e i s t e r

「さつきから聞いていれば後ろ向きなことばかりウダウダ言ってん
じゃない!?!」

シャルちゃんの怒号が響く。

「あなたが自身を道具と言い張るならそれで結構!
でもその所為ではやてが死ぬとしても、あなたはそれでいいという
わけね。

ああそれなら確かにあなたは心のない、願いのない単なる道具だ」

「貴様に何がわかる!? 私が一体どれだけ主の幸せを願ったか!
そんな願いすら叶えられず、自らが愛しき主を殺めるこの絶望が

!?!」

シャルちゃんの言葉を聞いた闇の書さんが怒鳴った。
でもそれに気づいた闇の書さんは、自らの言葉に驚愕している。

「やっぱり心が、願いがあるじゃない。

それなのに自分を道具なんて言わないで。

信じてあげて、あなたの主を、きつとあなたの想いに応えてくれる」

シャルちゃんは優しい表情と言葉で闇の書さんに語りかける。

「そうだよ！ はやては優しい子だからきつと大丈夫！」

フェイトちゃんもそれ続いて説得に移る。

でもそんなときに大きな地震が起きた。

そしていろんな場所から炎と水晶のようなものが突き上げてきた。

「……いつもより早く崩壊が始まってしまったか。

私もじきに意識を失くすことになるだろう。

もう止まることは出来ない。なら、主が最後に願ったことだけでも
叶えたい」

「まだそんなことを言うか愚か者！！」

シャルちゃんや私たちの言葉は届かなかったのだろうか？

「氷槍断罪」

Code Shalgieel

私たちに向けて氷で出来た槍が放たれた。

「炎牙崩爆刃！」

シャルちゃんが炎を放ってそれを全部焼き払う。
フェイトちゃんはマント消して、攻撃態勢に入る。

「この駄々っ子！ Sonic Drive 言うことを Ignition 聞けえ！！！」

闇の書さんが魔導書の方をフェイトちゃんへと向ける。

フェイトちゃんの一撃をシールドで防ぐ。

次に起こったのは信じられない事態。

フェイトちゃんが光となって薄れていったのだ。

「フェイトちゃん！！！」

「まさか、人ごと取り込めるといっの！？」

そしてフェイトちゃんは完全にその姿を消されてしまった。

Absorption

魔導書が一言発しそのページを閉じた。

「全ては安らかな眠りの内に」

心（後書き）

やっぱりおかしな展開になってしまいました。

もう少し最後のほうを上手く表現したかったのですが、このようなことに。

ズエピア瞬殺についてですが、空が飛べない（はず）彼では、ルシルとエヴァの空中戦には着いていけないので、早々に逝ってもらいました。

複製武装・術式：メルティブラッドシリーズ

ブラックバレル・レプリカ

バレルレプリカ・オベリスク

ナイトルーラー・ザ・ブラッドディーラー

貴女に名前を

闇の書より放たれた光神ゴド・バルドルの調停だったが、

「バカな！？ 全弾下方に向けての無差別砲撃だ！？」

本来の効果とは違うことに驚愕する。これは予想外にもほどがある。全方位に放たれるからこそ、地上に向けられる砲撃くらいはシャルでも対処できると思った。

だが全弾下方限定となると、シャルの防御力では全て耐え切ること
は出来ない。

「（考えている暇はないな）我が内より来たれ 貴き英雄よ・・・
フェンリル！！」

「隙がありすぎるナルシリオン」

ニウイス・カースス
氷爆

「あがつ！」

エヴァの一撃をまともに受けて瓦礫へと吹き飛ばされる。

フェンリルを顕現させる為の工程を途中で妨害されたため、不完全な形でフェンリルが現れた。

おそらくいつも以上に召喚時間が短いかもしれない。

「マスター！？」

「あがつ・・・はあはあはあ、やることは・・・わかっているな」

駆け寄ろうとしたフェンリルを目で制し、召喚した理由を守らせる。

「了解しましたマスター、ご武運を」

風切り音とともにフェンリルがこの場から去る。

俺は立ち上がり、残りの“エインヘリヤル異界英雄”、エヴァンジェリンとの戦いに移る。

「信頼を受けているな。ああいうのは大事にしなければ罰が当たるぞ」

「は、はは、大事に・・・か。あの子を一人で待たせている俺には出来ない相談だな」

今なお続いている砲撃の衝撃が俺とエヴァの長髪を揺らす。

しばらくの膠着状態、そして最後の一発が着弾したのを合図として戦闘に入る。

「さあいくぞ」

サギタ・マギカ
魔法の射手・セリエス連弾・オプスクーリー闇の85矢

「ああ来い」

コード
吹き荒べ、ラシエル汝の轟嵐

飛来する漆黒の弾丸を、蒼い竜巻で全弾無力化した。

そのまま“ラシエル”をエヴァへと向けて移動させる。

だがエヴァは指先から魔力の短剣を3本作り出し、真っ向から消し

に掛かってきた。

「うぐううあああ!!」

あまりの威力に声を上げてしまう。

直撃だけは免れたが、もし受けていたらそこで死ゲームオーバーだっただろう。

『ルシル君聞こえる!?!』

このまずい状況の中、エイミーから通信が入った。

『なんです!?!』

『結界内になのはちゃんたちの友達、アリサちゃんとすずかちゃん
が取り残されてるの!』

だから出来るだけ地上に向けて攻撃を撃たないでほしいんだ!』

『な!?!』

状況が悪化してしまった。

地上への影響まで考えなければならぬとなると、それだけで俺の
行動が制限される。

俺はアリサとすずかの心配をしなければならぬが、エヴァはその
必要がない。

『本当にごめん! 出来れば海上に出て欲しいんだ!』

『海上・・・(場所を移す・・・か。それしか・・・ないな)』

わかりました。場所を移しますから・・・あとのことはお願いしま
す』

『え？ どういうこと？ ルシル君！？』

通信を一方向的に切り、エヴァへと向き直る。

「話は終わったか？ なら続きを始めようか」

「……一緒に来てもらおうぞ……エヴァ」

俺とエヴァの間の空間が歪み、人間大の穴が開く。

「なに？」

エヴァと俺自身を“俺の世界”へと引きずり込む。

召喚時間云々と言っている間に、拡大するであろう被害を抑えるための最終手段。

（闇の書の一件が終わるまでに戻って手伝うことが出来ればいいんだが）

そしてこの世界から俺とエヴァの存在が消えた。

十 十 十 十 十 十

「エイミーさん！」

目の前で消えたフェイトがどうなったのかエイミーに聞いている。

「フエイトちゃんのバイタル・・・まだ健在！」

闇の書の内部空間に閉じ込められただけ！ 助ける方法現在検討中
！」

無事なのを確認できただけでも十分だ。

「我が主もあの子も、覚めることない眠りのうちに終わりなき夢を見る。

生と死の狭間の夢、それは永遠だ」

取り乱していた闇の書にはもう迷いの表情がなくなっていた。

「永遠なんてないよ。みんな変わってく。変わっていかなきゃいけないんだ。

私たちも・・・あなたも！」

十 十 十 十 十 十

鳥のさえずりで目を覚ます。

私はベッドに横になっていた体を起こす。

(こころは・・・懐かしい感じがする)

私の横から小さな寝息が聞こえた。

そちらへと顔を向けると、そこにいたのは、

「え？」

私と同じ金色の髪をした女の子、アリシアだった。その間には子犬の姿のアルフまでいた。混乱は一気にピークへと達し、周囲を見渡してみる。そこでようやくここがどこなのかがわかった。

「ここは・・・（時の・・・庭園・・・なの？）っ！」

扉がノックされた音に驚いてしまう。

そして扉の向こうからとても懐かしく大切な人と大事な人の声が聞こえた。

「フェイト、アリシア、アルフ、朝ですよ」

「そろそろ起きろお」

するとその声に反応して起き上がるアリシア。アリシアは私を見て、

「おはようフェイト」

そう挨拶してきてくれたけど、言葉が出てこない。

「みんなちゃんと起きてますか？」

そう言いながら部屋へと入ってきたのはリニスとルシルだ。

ルシルはカーテンを開け、リニスはアリシアとアルフに夜更かしの追求をしていた。

それにつまらなさそうに答えたアリシアとアルフ。

「早寝早起きのフェイトを見習ってほしいですね。アリシアはお姉

さんなんですから」

「姉としての威厳が急落中だぞアリシア」

「むう、そんなことないもん」

アリシアはむくれた顔をして、それを見たリニスとルシルは微笑んだ。
どうしてこういう状況になっているのかまったく理解できない。

「あの・・・リニス？」

「はい？ なんですかフェイト」

声も見た目も雰囲気からもリニスそのもの。
だけど本当のリニスはもういない。
今度はアリシアへと声をかけてみる。

「アリシア？」

すると不思議そうな顔をして私を見てきた。
アルフもアリシアみたいに首を傾げている。

「なんだ？ 今朝はフェイトまで寝呆けているのか」

「前言撤回ですね」

私以外のみんなが面白そうに笑っている。

「さ、着替えて。朝ごはんです。っとその前にルシルは退室です」

「了解」

ルシルが寝室から出ようと歩き出した後、私たちに振り返って、

「みんな急げよ、プレシア母さんがもう食堂で待っているぞ」

そんな信じられない言葉を口にしてから、ゆっくりと部屋をあとに
した。

「「はい！」」

私たちはそのあと着替えて、母さんがいるという食堂へと赴いた。
アリシアとアルフが母さんと挨拶を交わして、リニスとルシルは母
さんに「嵐が雪になる」なんて言っている。

「ほらフェイト」

リニスに呼ばれた私はゆっくりと柱の陰から出た。

「フェイト、どうしたの？」

母さんが優しい声で私の名前を呼んだ。

「「どうも何か怖い夢でも見たらしくて。今は夢か幻かと思ってるら
しいですよ」

「フェイト、勉強のし過ぎとか？」

「「あり得るっ」

「アリシアとアルフは勉強のしなさ過ぎだけだな」

アリシアとアルフのその言葉に、ルシルがそう返した所為でアリシアとアルフが反論、何かすごく騒いでいる。

それをリニスが止めに入っているとき、母さんがもう一度私を呼んだ。

「フェイト、いらっしやい」

私は戸惑いながらも母さんへと近づいていく。

すぐ傍まで来たけど、母さんの顔を見ることが出来ず俯いたままだった。

そして私の頬に両手でそつと触れてきたけど、私はそれに怯えてしまふ。

「怖い夢を見たのね。でももう大丈夫よ。」

母さんもリニスもアリシアもルシルも、みんなあなたの傍にいるわ」

「プレシアあ、あたしも」

ルシルの頭に噛み付いていたアルフが自分もいると口にする。

それを聞いた母さんは「そうアルフもね」と微笑んでいた。

そして始まった朝食のひと時、でも落ち着かない。

落ち着けるはずもない。だってこんなことが実際にあるわけがないから。

だって母さんは私にあんなふうに優しく笑いかけてはくれなかった。

アリシアだって、リニスだって今はもういない。

それにルシルもここにいないわけがない。

朝食後、みんな庭園を散歩することになった。

そこは綺麗な緑があつて風も優しい場所。

静かに流れる穏やかな時間、母さんがいてリニスがいてアリシアがいてアルフがいて、そしてルシルもいる。

私が願望んだ時間。何度も何度も夢に見た時間。

そう思うと涙が止まらなくなってみんなを困らせてしまった。

十
十
十
十
十
十

「風牙真空刃・・・！」

私とシャルちゃんは市街地に被害を出さないように、海上へと場所を移した。

そしてシャルちゃんと闇の書さんが、シャルちゃんの魔法で攻防を繰り返している。

私も手を貸したいけど、その速さについていけずに様子見に徹するしかない。

「はあああああ！！！」

Leere (真空刃)

風の刃同士が衝突して辺りに衝撃波が広がる。

「ああもつ！ 同キャラ対戦じゃあるまいし真似するな！！」

光牙 Taufe Kreuz (洗礼十字) 十紋刃！」

シャルちゃんが距離を取って、巨大な十字架の形に輝く斬撃を放った。

私は闇の書さんが離脱するであろう場所を考えて、その場所へと先に砲撃を放つ。

「レイジングハート！」

Divine buster . Extension

闇の書さんはそれを予測していたのか、最小限の動きで回避する。そしてそのまま一直線に私へと殴りかかってきた。

私はラウンドシールドを出して防御するけど、いとも容易く碎かれてしまう。

Schwarze Wirkung

闇の書さんの右拳に黒い影が生まれ、そのまま拳打を打ってきた。咄嗟に“レイジングハート”を構えて防御したけど、その威力に負け弾き飛ばされた。

「なのは！」

海面へと叩きつけられる前にシャルちゃんが受け止めてくれたけど、それでも衝撃が強くて一緒に海面へと落ちてしまった。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

私とシャルちゃんが海中から脱出したそのときを狙って攻撃を放ってきた。

「神技」

E t h e r S t r i k e

「なのは！ つかまって！ G e s c h w i n d i g k e i t A
u f s t i e g 全速離脱！」

私はシャルちゃんの手につかまって、すごい速さで闇の書さんの攻撃を回避する。

その攻撃が私たちのいたところに着弾すると、目を開けていられないほどの閃光が生まれた。

光が収まるのがわかって目を開けてみると、海に大きなクレーターが出来ていた。

もし直撃を受けていたらと思うと背筋が凍った。

「危なかった。ルシルの馬鹿、あんなものまで複製されていたなんて」

「やっぱりあれもルシル君の魔術なんだ」

反則なのは闇の書さんだけじゃなくてルシル君もだよ。

「それにしても一筋縄でいかないと思っただけだ」

「うん。でも話は通じていそうだからもう少し頑張ろう」

私は“レイジングハート”に新しいマガジンを装填した。

シャルちゃんも“トロイメライ”へとカートリッジを装填している。

「マガジン残り三本、カートリッジ18発。」

スターライトブレイカー撃てるチャンスあるかな・・・？」

I have a method. Call me. ” Exc
ellion mode ”

“ レイジングハート ” がエクセリオンモードにするように告げてきた。

「ダメだよ！ あれは本体を補強するまで使っちゃダメだって！
私がコントロールに失敗したら、レイジングハート壊れちゃうんだ
よ！？」

“ レイジングハート ” のフルドライブモードは使っちゃダメだとエ
イミイさんに言われた。
だから私は使いたくないんだけど、“ レイジングハート ” はもう一
度エクセリオンモードにするように告げた。

「・・・なのは、あなたとレイジングハートならきつと大丈夫。
私になんとか彼女に大きな隙を与えてみせる。
そのときが来たら迷わず撃って、あなたたちの一撃を」

Explosion・Zwillinge Form

シャルちゃんの“ トロイメライ ” が二つに分かれて短い刀になった。

「お前たちももう眠れ」

ゆっくりと私たちへと近づいてきた闇の書さんがそう告げる。
私は・・・決めた。“ レイジングハート ” を信じるから。

「いつかは眠るよ。だけどそれは今じゃない。
今ははやてちゃんとフェイトちゃんを助ける。それからあなたも！」

「なのはの言うとおり、だから・・・！」

Flamme unt Blitz (炎雷)

「大人しくしなさい！！」

双牙炎雷刃

十 十 十 十 十 十

「ここはなんだ？」

遠くからエヴァの声が聞こえる。

いや実際は近くににいるが、俺の聴覚に障害が発生したことで遠くに聞こえるのだろう。

視界が赤い。それは血涙を流しているから。体中が痛い、それは魔力が荒れ狂っているから。

それは俺に許されている魔力量を超える魔力を使用していることへのペナルティ。

ここは創世結界の失敗作“ヒミンヒョルゲ 聖天の極壁”。

地平線の彼方まで続く上下には黒い雲が渦巻き、その間には輝くルーン文字が舞っている。

唯一の明かりは地平線まで続いている雲の間に輝く曙光のみ。
度々ノイズのようなものが走る。それは不完全な状態で放置された

術式ゆえの現象。

本当なら“宝庫”や“書庫”、“居館”に取り込みたかったが出来なかった。

現実には展開するのではないから出来ると思っていたがそれも制限されていたのだ。

「ほう、空戦形態になったか。そうでなくては楽しめんからな」

エヴァが笑っている。

だったらその余裕を根こそぎ捻り潰してやる。

エヴァの周囲から、彼女の身長を軽く超す巨大な氷の弾丸がいくつも現れる。

ならばその全てを残さず喰らい尽くそう。

コード
殲滅せよ、
カメエル
汝の軍勢

背後に待機させるのは最大展開本数である二千の倍、四千の槍の軍勢。

質より量を選んだために出来ることだが、本来の威力の3分の1程度しかない。

「ジャッジメント
蹂躪審判」

エヴァへと向けて100本ずつ放つ。

放つタイミングと速度を変更してさらに200、続けて500、1000。

エヴァはそれを回避しては魔力を纏わせた手で打ち落としていく。それでも少しずつだが掠り傷、直撃によって貫かれたりしている。だがすぐそばから治るために、さほどのダメージにはなっていない

ようだ。

(量より質にしておけばよかったか?)

「はっはっはっはっはっは！いいぞルシリオン！！
来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪けよ常夜の氷雪……！」

ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス
闇の吹雪

どうやらまだまだ余裕があるらしい。

コード
削り抉れ、
ザキエル
汝の裂風

飛び交う槍の軍勢を回避しながら魔法を撃ってきたエヴァ。
それに対処するためにこちらも別の魔術で迎撃する。

衝突する闇色の吹雪と螺旋軌道を描く蒼い竜巻の砲撃。

そのどちらも消える前にエヴァが俺へと接近する。

目の前に現れたエヴァの魔力を纏った拳打を回避しその細い首を鷲
掴む。

「っぐ」

そのまま神速飛翔のベクトルを利用して、この結界内にいくつか点
在する全体にルーンが刻まれた球体へと叩きつける。

あまりの威力だったためか、直径3km程の球体が粉々に吹っ飛ぶ。
だがここで攻撃の手を緩めるわけにはいかない。

俺はそこから離脱し、すぐさま残りの槍の軍勢をその残骸へと集中
砲火する。

「惜しかったな」

いつの間にか真後ろに移動していたエヴァの殺気だけが含まれた一言。

(影を使った転移魔法！)

今度は俺の首を掴んだエヴァが、俺を別の同じ大きさ誇る球体へと叩きつけた。

クレーターが生まれるほどの衝撃をその身に受ける。

「っが・・・！」

意識が飛びそうになる。

だがすぐさま“ラファエル”を使用してダメージを回復させる。

蒼翼は現在22枚全て無傷。ならば

「もう少し伸びていればよかったものを」

「そう簡単にいくと思っな」

俺は静かに中級術式最強の“ミカエル”の準備に入る。

我が手に携えしは確かなる幻想

「闇に染まれ、デアポリック・エミッション」

闇の書から、お返しと言わんばかりに複製した術式を放つ。至近距離からの一撃に防御するしかないエヴァ。

崇め讃えよ^{コード}

エヴァへと向けて蒼翼全てを突撃させる。

未だにデアボリック・エミッションを防いでいるエヴァに、22枚の蒼翼から様々な角度、威力、速さで砲撃が放たれる。

「ちっ」

直撃寸前でデアボリック・エミッションの効果切れ、エヴァの離脱を許す。

それを追撃する蒼翼から再度22発の砲撃が放たれる。

「目障りだな」

エヴァは速度をいわせて蒼翼を振り切ろうとするが、蒼翼が引いている蒼い閃光が鎖となって檻を形成していく。

その所為でエヴァはスピードが出せず上手く逃げれていない。

エヴァは両手に魔力を纏わせて、檻を作り出している蒼翼を破壊しようとした。

だが蒼翼に純粋な魔力攻撃は通用しない。

それどころかその魔力を吸収して威力を上げるし、俺への魔力供給をも助ける。

その分物理攻撃には弱いという欠点があるが。

我が手に携えしは確かなる幻想

“ミカエル”で決まらなかったための保険を用意しておく。

エヴァが今度は“エンシス・エクセクエンス”で強引に檻を破壊しようとするが、

「っ！ しまった！」

蒼光の鎖で直接縛られてしまった。
今こそ好機、周囲の檻を完成させる。
準備は整った。これでもうエヴァは逃げることは出来ない。

22枚の蒼翼が俺の上下左右へと展開される。
切っ先は全て捕らえられているエヴァへと向けられた。

「安らかなる慈悲の眠りを！！！」

ミカエル
汝の其の御名を

一番端の翼から順に莫大な光量と熱量を持った砲撃が放たれる。
さっきまで放たれていたものとは比べ物にならないその威力。
それはエヴァの魔力も含まれているために、俺の今出せる威力以上
となっているからだ。

放たれた“ミカエル”の最初の三発までは確かな手応えがあった。
しかし、それ以降は爆散している閃光を素通りしている。

「……召喚時間の終了……か。全くもう少し待っておけばよか
ったな」

エヴァジエリン
異界英雄との戦いは、決着を見ることなく終わりを告げた。

いつまでもここには完全に魔力炉破綻を起こしかねない。
バースト
早く現実へと戻らなければ。

「闇の書との戦いはどうなっただろうか？」

十 十 十 十 十 十

庭園の木陰で私は今の状況について考えていた。
すぐ近くにはアリシアが横になりながら本を読んでいる。

「あれ？ 雨になりそうだね。フェイト、帰ろう。・・・フェイト
つてば」

呼ばれたことに気づき、深い思考をやめてアリシアへと視線を移す。

「ごめんアリシア。私はもう少しここにいる」

私が望んだものであっても、やっぱり心が受け入れてくれない。
あの時間に甘えるには、もう何もかもが遅かった。

「そうなの？ じゃあわたしも、一緒に雨・宿・り」

アリシアが私のもとへと駆け寄ってきて隣に座る。
それからどれくらい経っただろう。雨は一向に止みそうにない。

「ねえアリシア、これは夢・・・なんだよね。
私とあなたは同じ世界にはいない。あなたが生きてたら、私は生ま
れなかった」

私はアリシアとこの世界のことについて話を始めた。
それがこの世界を否定することと知りながら。

「・・・そう、だね」

静かな肯定の言葉。

そこには少し悲しみが含まれている気がした。

「母さんも、私にはあんなに優しくは・・・」

「優しい人だったんだよ。優しくかったから壊れたんだ。死んじゃったわたしを生き返らせるために」

「・・・うん」

自分の世界だったアリシアを喪ったからこそその暴走。

「ねえフェイト、夢でもいいじゃない。ここにいよう、ずっと一緒に。わたし、ここでなら生きていられる。フェイトのお姉さんでいられる。」

母さんとアルフとリニス、それにルシルだって。みんなずっと一緒にいられるんだよ。

フェイトが欲しかった幸せ、みんなあげるよ」

十
十
十
十
十
十

「眠い」

なんだかすごく眠い。

でもその眠さに抗うように目を開ける。
目を開けて最初に見たのは、綺麗な銀色の髪と真紅の瞳を持つ女の
人。

前にも一度会ったことがあるような気がする。

「そのままお休みを、我が主。あなたの望みは全て私が叶えます。
目を閉じて、心静かに夢を見てください」

その綺麗な人はそう言うけど、本当にそれでいいのか迷ってしまっ
た。

(わたしは何望んでたんやっただけ?)

「夢を見ること。悲しい現実は全て夢となる。安らかな眠りを」

(そう・・・なんか？ わたしの本当の望みは?)

頭の中がぼつととする。

私が欲しかった幸せ？ それは・・・

「健康な体、愛する者たちとのずっと続いていく暮らし。

眠ってください。そうすれば夢の中であなはずっとそんな世界に
いられます」

違う。わたしが願ったもの、欲しかった幸せはそんなものじゃない。
ここでようやくハッキリと覚醒する。

「せやけど、それはただの夢や！」

わたしは確かに夢であってほしいと願った。

それは事実。だけどやっぱり夢は夢でしかない。
わたしは現実と向き合う覚悟を決めた。

十 十 十 十 十 十

「凶牙波瀑刃！ S c h w a r z S t r o m 飲まれるお！
」

闇の書へ漆黒の津波を放つ。

以前シグナムに、結構簡単に突破されたことがある。
案の定闇の書も容易く突破してきた。

だけど突破してきた場所は私の真下。闇の書はおそらく気づいていない。

カートリッジをロードして放つのは、鳥の形をした砲撃“グランツ・フォーゲル”。

「いつけええ！！」

闇の書は直撃する寸前で私に気づき真上を見る。

だがもう遅い。回避や防御もすることが出来ないまま光の鳥に飲み込まれる。

『シャルちゃん、もしかして終わった？』

なのはから念話が入る。

それに答えようとしたとき悪寒を感じた。

確かに至近距離での直撃だった。

だけど私は闇の書の防御力をあまりにも甘く見ていた。
闇の書は閃光の爆発の中から、私に向けて砲撃を放ったのだ。

Seelisch Widerstand

私はそれを耐え切り、“トロイメライ”をゼーゲフォルムへと変形させる。

『なのは！ 私があんとしても防御を崩す！ その瞬間を狙って撃つて！』

『わ、わかった！』

唸り上げるゼーゲフォルムの“トロイメライ”。
私はそれを上段に構えて一気に振り下ろす。

Hartriegel Schild

闇の書は回避ではなく障壁を展開させた。
それは私の持つ障壁の一つで対物に優れている盾。

私と闇の書を覆うほどの火花が散っていく。
だけど、こうなってしまうえば闇の書は身動きが取れないだろう。
もし少しでも手を抜けばトロイメライの一撃を受けることになるからだ。

「今！！」

なのはへと今がチャンスだと叫ぶ。

「ごめんねアリシア。だけど私はいかなくちゃ」

夢を見る時間はもう終わり。

「そっ」

アリシアは悲しい顔をしたあと、私に“バルディッシュ”を差し出した。

でもすぐに微笑みを浮かべて私を見る。

私は涙を流しながらそれを受け取り、そっと両手で胸へと抱える。するとアリシアはそっと私を抱きしめ、私もそれに応えるように抱きしめ返す。

夢の中でしか、そして二度とすることの出来ない抱擁。

それが一体どれだけ貴いものか。

「ありがとう、ごめんねアリシア」

「いいよ、わたしはフェイトのお姉さんだもん。
待ってるんでしょ、優しくして強い子たちが」

みんながきつと待ってる。私が本当にいるべき場所で。

「じゃあ、いつてらっしやいフェイト」

アリシアが光となって消えていく。

もう会うことも、話すことも出来ないたった一人のお姉ちゃん。

「現実でもこんなふうにいたかったなあ」

アリシアが消えるその瞬間まで抱擁を続ける。
その温もりを決して忘れないために。

静かに光となって消えたアリシアを見るかのように、私は空を見上げる。

「いつてきますアリシア・・・お姉ちゃん」

十 十 十 十 十 十

「わたし、こんな望んでない！ あなたも同じはずや！ 違うか！？」

「私の心は騎士達と深くリンクしています。

だから騎士達と同じように、私もあなたを愛おしく思います。

だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せない。

自分ではどうにもならない力の暴走。

あなたを侵食することも、暴走してあなたを食らい尽くしてしまうことも止められない」

その表情は何も出来ない自分を情けないと思っているもの。

わたしはそれを見て、どれだけ悲しくて悔しいのかわかってしまった。

「覚醒のときに今までのこと、少しはわかったんよ。

望むように生きられへん悲しさ、私にも少しはわかる。

シグナムたちと同じや。ずっと悲しい思い、寂しい思いしてきた。

せやけど、忘れたらあかん！」

わたしは車椅子から彼女へと手を差し出す。

彼女はちゃんと手を取ってくれた。

わたしは彼女の頬に手を添える。

「あなたのマスターは今わたしや！

マスターの言うことは、ちゃんと聞かなあかん！」

わたしはもう片方の手も、彼女の頬にそっと添えた。

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書とか言わせへん。

わたしが呼ばせへん！ わたしは管理者や、わたしにはそれが出来る」

「無理です。自動防御プログラムが止まりません。

管理局の魔導師が戦っていますが、それも……」

彼女は涙を流しながらそんなことを言うけど、きっと止まってくれる。

わたしは「止まって」と強く願った。すると、確かな手応えを感じた。

「外の方！ えっと、管理局の方！ ウチはえっと、そこにいる子の保護者、八神はやてです！」

わたしは、外にいる人に届くように力いっぱい叫んだ。

十
十
十
十
十
十
十

もう一度闇の書さんとの戦いに移ろうとしたとき、闇の書さんの様子がおかしいことに気づいた。
動きが急にぎこちないものになったのを見た私とシャルちゃんは顔を見合わせる。
すると、

『外の方！ えっと、管理局の方！ ウチはえっと、そこにいる子の保護者、八神はやてです！』

闇の書さんから念話を通してはやてちゃんの声が聞こえた。

「はやてちゃん!？」

「はやて!？」

私もそうだけど、シャルちゃんも驚愕している。
あまりに予想外な出来事だから。

『え？ なのはちゃん!？ シャルちゃん!？ ほんまに!？』

「うん、なのはだよ！ いろいろあって闇の書さんと戦ってるの!」

『ごめんなのはちゃん、シャルちゃん。なんとかその子止めてあげてくれる!？』

魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が発している管理者権限が使えへん!

今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから!』

えっと、難しくてよくわからないよはやてちゃん。

「つまりは・・・ユーノ、なのはに簡単な説明お願い」

シャルちゃんは何とかわかっているようだけど、私への説明には困っているようだ。

ユーノ君へと助けを求めたシャルちゃん。ごめんね、ついていけないくて。

『うん！ なのは！ わかりやすく説明するよ！

今から言うことが出来ればはやくちゃんもフェイトも外に出られる！
どんな方法でもいい！ 目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！
全力全開、手加減なしで！！』

ユーノ君からの話はわかりやすいの一言。

シャルちゃんも頷いている。

「さすがユーノ君！ わっかりやすい！！」

「よし！ そうと決まれば・・・っと、触手が邪魔か。

なのは、私が触手を抑えるから、わかってるよね！」

闇の書さんを守るように海上から伸びた触手。

シャルちゃんは私の返事を聞かずに、それに向かって行って全て斬り捨てた。

「エクセリオンバスター、バレル展開！ 中距離砲撃モード！」

All right . Barrel shot

“レイジングハート”から再び桜色の翼が現れる。

まずは闇の書さんを抑え、照準と弾道を安定させるための“バレル

シヨット”を放つ。

闇の書さんから離れたシャルちゃんの横を通過して、闇の書さんへと直撃する。

衝撃波が命中したことで、目には見えないけどちゃんとそこにあるバインドが闇の書さんを拘束した。

それでもなお闇の書さんを守るように現れる触手を、シャルちゃんや合流したユーノ君、アルフさんが分担して対処してくれている。そのおかげで私は何の心配もなく砲撃に専念できる。

「エクセリオンバスター、フォースバースト！！

ブレイク・・・シューーーーーートツツ！！！！！！」

十 十 十 十 十 十 十

なのはちゃんたちに外に出ている子を任せたから大丈夫なはず。なら今わたしに出来ることをしないとイケない。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。

強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、” リインフォース

”」

ずっと悲しい時を過ごしてきた目の前にいる彼女に新しい名前を与える。

これで少しは主らしいことが出来たかな？

それから少ししたら、目の前に広がる闇の世界が光に満ち溢れた世界へと変わった。

なのはちゃんたちが防御プログラムの子をどうかしてくれただいだ。

「新名称、リンフォース認識。管理者権限の使用が可能になります。ですが防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力は、じき暴れだします」

「うん、まあなんとかしよ」

わたしの前に新たな名前を得た魔導書“リンフォース”が現れる。

「行こか、リンフォース」

「はい、我が主」

“リンフォース”を抱え、わたしは現実へと戻る。
闇の書の永きに渡る旅路を終わらせるために。

貴女に名前を（後書き）

アニメ11話・・・コロコロ視点が変わり過ぎです。
後半のはやてとフェイトが特に凄まじい（泣）

愚痴はこれくらいにしておきます。

さてようやく2ndも残り二話となりました。
決戦とその後ですね。

ルシルとエヴァの戦いですが、勝敗は着けませんでした。
全力エヴァの負ける姿が想像できないんですね。

ルシルの魔術

聖天の極壁

北欧神話に登場する「天の絶壁」「天の見張り所」の意味を持つ
曙光の神ヘイムダルが住まう館。

ルシルが初めて組んだ創世結界だが完全な失敗作。
フレイザブリク アルヴァイト アイキタイブ
神々の宝庫と英知の書庫の原型。

複製武装と複製術式両方の保管庫とした結果、失敗して放置してい
た術式。

仕方なく二つに分けたのが宝庫と書庫。そのため何の効果も持たな
いただの空間。

削り抉れ、コート 汝の裂風ザキエル

エノク書に登場する嵐を司る天使。

螺旋を描くように放たれる削岩機のような嵐を対象に放つ対人術式。

直撃すればその名のとおりに、それはもうグロい結果となる。

崇め讃えよ、汝の其の御名を

天使「ミカエルとさえいえる超がつくほどに有名な天使。

「神に似た者」という意味を持つ天使ですが、逆説的な意味の

「神の如き者などいない」という意見を持つ学者さんもいるみたいです。

ルシルの扱う中級術式最強の威力を誇る連続砲撃の対人術式。

使用するには空戦形態、22枚の蒼翼が必須となる。

蒼翼が低威力の砲撃を放ちながら、対象の行動を封じる檻を形成する。

対象を封じ込める檻が完成すると、ルシルの頭上に五枚、左右に五枚ずつ、

足元に七枚、蒼翼を十字架型に展開させ端から順に高威力の砲撃を放つ。

今回の威力は一発あたりSS、それを22発エヴァに放った。

複製術式

魔法少女リリカルなのはA's デアボリック・エミッション

聖夜に降り立つ夜天の王

アリシアと別れた私は、時の庭園の塔内にある玉座の間まで来た。そしてそこにはルシルが一人、私を待っていたかのように玉座の間の中央で佇んでいた。

「……ルシル、私は「帰るのだろうか?」……うん」

私はゆっくりとルシルのもとへと歩きだす。

ルシル以外はもう誰一人としていないみたいだ。

「今の心境……聞いてもいいか?」

「悪くはないよ。夢だったけど、確かにアリシアに逢えて話しをすることができた。

それと……えっとね、ルシルとも家族になれた……から」

言ってて恥ずかしくなって顔が赤くなる。

さっきまでアリシアとの別れで泣いていたというのに。

「だから現実でも、ルシルと家族になりたいなって思ってた」

「まあそれは現実の私に言ってくれ。ここで私に告白しても意味はないからな」

それはそうなんだけど。

あれ? 私とアルフがお願いして変えてもらった一人称が“私”に戻っている。

やっぱり夢だからなのかな?

「うん、そうする」

「さて、それじゃ帰りなさいフェイト。

君にならこの捕獲空間を破壊することくらい簡単だろう」

そう言つてルシルは中央から隅の方へと歩いていった。

私はそんなルシルを見送ったあと、「バルディッシュ」を起動させる。

「・・・バルディッシュ、ここから出るよ。

ザンバーフォーム、いける？ Yes, Sir 良い子だ」

バリアジャケットへと着替え、この捕獲空間を破壊するため一撃を放つ準備を始める。

Z a m b e r f o r m

“バルディッシュ”が、性能の大半を攻撃に特化されたフルドライブモード“ザンバーフォーム”へと変形する。

「疾風迅雷！」

“バルディッシュ”の刀身を床に沿うように払うと床に帯電した。直後、玉座の間には強大な電撃が満ちた。

「現実で待っているぞ」

ルシルがそう一言呟いて消え始め、私はそれに頷いて応える。ルシルは、私の頷きを見て微笑みながら消えていった。

「いくよバルディッシュ。スプライトザンバー……!!」

構えていた“バルディッシュ”を何も無い場所に一闪。

その瞬間、空間内はガラスが割れたかのようなヒビが入り、そして砕け散った。

一瞬の暗転、気がつくとは私は現実へと戻っていた。

十 十 十 十 十 十 十

「エクセリオンバスター、フォースバースト!!」

ブレイク……シュー……トツツ!!!!!!」

“レイジングハート”より放たれる凄まじい四発の同時砲撃。

不可視のバインドに捕らわれた闇の書へと全弾直撃した。

周囲一体を照らし出す桃色の閃光、それだけじゃなく空へと一条の雷撃も放たれた。

「フェイト!!」

アルフに嬉しそうな声が私たちの耳に届く。

やっぱりさっきの雷撃はフェイトのものだったようだ。

フェイトも無事に脱出できたようだし本当に良かった。

これであとは、ルシルが来てくれればみんなが揃う。

その矢先、空間が振動し始めた。まだ終わってはいないということだろう。

『みんな気をつけて！ 闇の書の反応、まだ消えてないよ！』

そして眼前に現れたのは巨大な黒い澱み。

その前方には白く輝く球体がある。

おそらくあの中にはやてがいるのだと推測した。

『みんな、下の黒い澱みが暴走が始まる場所になる！

クロノ君が着くまで無闇に近づいちゃダメだよ！』

言われなくてもあんなものには近づきたくはない。

周辺には何かいるし。

「さすがに好き好んであれには近づきたくないな」

私たちの後ろから聞こえたのは紛れもないルシルの声。

一斉に声がした方向へと振り向く。

「ルシル！！」

私とフェイトの声が重なり合った。

なのはたちは少し遅れてから名前を呼んでいた。

ゆっくり私たちへと近づいてきたルシル、だけどその表情には明らか

かな疲労がある。

あの金髪少女によほど手古摺らされたのだろう。

「間に合ってよかった。

帰ってきたら事がすでに終わってました、なんてことは避けたかったからな」

その言い回しに心当たりがある私は驚愕した。
それほどの力を使わなければ、あの少女に勝てなかったのだらう。

「まさか・・・」創世結界に行つてたの？ 体もそうだけどシステム魔力炉
大丈夫なわけ？」

リンクを通してルシルの心配をする。

創世結界を展開するよりかは負担が少ないだろうけど、それでもかなり負担がかかつてるはずだ。

「問題ない。君のほうも疲労が見えるけど大丈夫なのか？」

「まあまあ大丈夫かな。ルシルよりかは絶対マシ」

二人して笑みを浮かべているものだから、なのはたちは不思議がつていた。

十 十 十 十 十 十

「管理者権限発動」

「防衛プログラムの進行に割り込みをかけました。
数分程度ですが、暴走開始の遅延ができます」

「それだけあつたら十分や」

さすがリインフォース、きっちり応えてくれた。

次にすることは、わたしの大切な家族を呼び戻すこと。

わたしのそばに四つのリンカーコアが現れる。

「リンカーコア送還。守護騎士システム破損修復」

四つのリンカーコアが強く輝き始め、その姿を消した。それはつまり、みんなも現実へと帰ってきたということだ。

「おいで、わたしの騎士たち」

ハッキリと感じる家族の存在。

ならわたしもみんなのもとへと行こう。

「リインフォース、わたしの杖と甲冑を」

「はい」

この身を包み込む黒いスーツ。

そしてわたしは、目の前に現れた黄金の剣十字杖を手取る。

十 十 十 十 十 十

黒い澱みの近くにあつた光の球体が一際輝いた。

みんながその閃光から目を覆う中、俺はしっかりと見た。守護騎士たちがあの球体を護るかのように現れたのを。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

光が収まり、シャルたちも守護騎士たちの姿を確認したようだ。嬉しそうな声を上げている。

「我ら、夜天の主のもとに集いし騎士」

「主在る限り、我らの魂尽きることなし」

「この身に命ある限り、我らは御身のもとに在り」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名のもとに」

四柱の騎士がそう告げた。

己の存在は、自らが敬い慕う主はやての為だけに、と。光の球体が砕け、十字架を手にしたはやてが現れる。

「夜天の光よ、我が手に集え！ 祝福の風、リインフォース、セー
ツトアップ！」

彼女は十字架を掲げて告げる。

その身に騎士甲冑を纏った彼女の姿は、立派な騎士の一人だ。

俺は少し離れていたために聞き取れなかったが、彼女と騎士たちは少し話をしている。

するとヴィータがはやてへと勢いよく抱きついた。

今のヴィータは外見相応に泣いて、何度もはやての名前を呼んでいる。

その家族の再会を見ていたシャルとフェイト、なのはが彼女たちの足下に展開されている魔法陣へと降り立った。

俺はそうせず、少し近づいただけにしておく。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、シャルちゃん、ほんまにごめんなあ。」

家の子たちがいろいろ迷惑かけてもって

「うっん」

「平気」

「気にしてないから」

三人の返事を聞いたはやては、ゆっくりと俺へと視線を移す。

その目は何か言いたそうなものだったので、俺も魔法陣へと降り立つ。

「はじめましてやねルシリオン君。」

ルシリオン君にも謝っておかなあかんと思ったんや。ごめんな」

初対面である俺に、はやてが何に対して謝っているのかわかった。

俺も闇の書に蒐集された一人だ。それに対する謝罪がさっきの言葉なのだろう。

「シャルたちも言ったとおり、もう気にしていない。」

まあ少し苦勞はしたが、それも君が帰ってくるのに必要なものだと思えば何でもない」

思ったことを告げた。

さっきまでの苦勞も、はやてと守護騎士たちのことを思えばどうってことはない。

「ありがとうな」

「すまないな。水をさしてしまうんだが、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

そう言つて降下してきたクロノが俺たちの前に姿を現す。

「時間がないので簡潔に説明する。

あそこの黒い澱み、闇の書の防衛プログラムがあと数分で暴走を開始する。

僕らは何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある。

一つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。

二つ、軌道上で待機している艦船アースラの魔導砲“アルカンシエル”で消滅させる」

ということは、グラム提督たちの解決法は俺たちと一緒にだったわけか。

つまるところクロノの手にしているカードも、提督たちが用意した物なのだろう。

さっきのクロノの言葉から、それが強力な氷結魔法のためのデバイスらしいことはわかる。

「これ以外に良い手はないか？」

闇の書の主と、その守護騎士のみんなに聞きたい」

「え〜と、たぶん最初のは難しいと思います。

主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させても、コアが在る限り再生機能は止まらん」

「アルカンシエルも絶対ダメ!!」

こんなところで撃つたらはやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか!」

クロノの問いに答えた守護騎士たち。

“アルカンシエル”のデータは以前見せてもらったが、確かにここでの使用はまずい。

俺の対界真技“アポカリプティック・ジェネシス再誕”の全力顕現よりかは遥かにマシだが。

そんなヴィータの猛反対を見たなのはが、ユーノへと説明を求めている。

「発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を、歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲、と言うと大体わかる?」

「早い話、この街が全てまとめて吹っ飛ぶ、というわけだよなのは」

俺の簡単にし過ぎた説明で、なのはとフェイトの顔色が青くなった。二人はこの街が消し飛ぶ様を想像してしまったのだろう。俺だっつてこの街に少しくらいの愛着が湧いている。

だからこそ“アルカンシエル”なんてものを撃たすわけにいかない。

「あの! 私もそれ反対!」

「同じく絶対反対!」

「僕も艦長も使いたくないよ。

でも闇の書あれの暴走が本格的に始まったら、被害がそれよりはるかに大きくなる」

なのはとフェイトの二人からも猛反対を受けたクロノ。もちろん自分たちも使いたくはない、と口にする。

「暴走が始まると、触れたものを侵食して無限に広がっていくから」

ユーノの補足を聞いたフェイトとなのは黙り込む。

どちらにしても被害が尋常じゃないことになるのがわかったから。

『はいみんな！ 暴走臨界点まであと十五分切ったよ！

会議の結論はお早めに！！』

エイミイからの通信でさらに空気が重くなる。

「何かないか？」

「すまない。あまり役に立てそうもない」

「暴走に立ち会った経験は、我らにもほとんどないのだ」

「でも何とか止めないと、はやてちゃんのお家がなくなっちゃうのイヤですし」

クロノが守護騎士たちに向き直り問う。

しかし返ってきたのは無慈悲な答えだった。

「……ルシル、シャル。君たち魔術師は何か……何かないか？」

藁にも縋りたい気持ちなのだろうな。

クロノが俺とシャルへと顔を向けたことで、全員がこちらへと顔を向けた。
守護騎士たちが「魔術師？」と首を傾げているが、説明している時間はない。

「うーん」

「シャル、君のキルシュブリューテと真技を使えば何とかなるんじゃないか？」

俺は一つの解決法を提示する。

シャルの“神器”と“真技”を使えばおそらくは……と。

「え？ 真技って……飛刃？」

「いや、牢刃の方だ」

＋ 十 十 十 十 十 十

僕は藁にも縋る気持ちでルシルとシャルに聞いてみた。
いくら彼らでも出来ないことだろうと思っていたが、

「シャル、君のキルシュブリューテと真技を使えば何とかなるんじゃないか？」

ルシルのその一言を聞いたとき、足に力が入らなくなって座り込みそうになった。

ルシルとシャルは「ひじん」とか「ろうじん」と、僕には理解でき

ない会話をしていた。

「あるのか！？ 方法が！？」

ここまで期待させるような発言をしたんだ。
僕はルシルの案に縋りつきたい。

「でもちよつと待って！ 確かに当てられれば何とか出来るかもしれないけど！！

あんな大きなものには効果がないよ！ だってあれは近接対人真技なのよ！？」

「待ってくれ！ 一応詳しい話を聞かせてくれ！」

シャルの「当たれば何とか出来るかも」というその言葉が僕の期待をさらに膨らませた。

だからこそ詳しい話を聞いておきたい。

「あの防衛プログラムのコアに直接当てられればなんとか。
でもそれにはキルシユブリューテの能力開放、しかも瞬間解放じゃなくて数秒間の解放が必要になってくる。

私にはそんな魔力は残っていないし、そもそも初めから足りていない」

「……どうしても出来ないのかシャル」

僕はシャルに問う。

シャルが黙って頷こうとしたとき、ルシルが静かに告げた。

「待ってくれ、コアが露出してくれれば、あとは俺とシャルが何と

かする。

コアさえ外に出ていればおそらく問題はないはずだ」

「っ！ 本当なんだなルシル」

「……ああ」

ルシルは少し間を置いた後に、確かにしつかりと頷いた。これで決まりだ。どういう方法なのかはわからないが、“アルカンシエル”を撃たなくていいというだけで助かる。

そして詳細な作戦を練る。

練りはしたが、実に個人の能力頼りでギャンブル性の高いプランだ。だがそれを成功させればシャル。そしてシャルをサポートするルシルが何とかしてくれる。

十 十 十 十 十 十

まさか私がこの戦いの幕を下ろす役割を担うことになるなんて思いもしなかった。

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層式。まずはそれを破る」

「バリアを抜いたら本体に向けて、私たちの一斉砲撃でコアを露出」

「そしたらシャルちゃんの魔術でコアを完全破壊」

作戦の最終確認をする私たちだけけど、本当に出来るか不安が募る。まったくもう、ルシルは本当に余計なことを言ってくれたものだ。

「ルシル、あなたの魔術・・・は無理か。複製武装や術式じゃ何とかならないの？」

「アレを消すほどのランクの高いものは今も使えない。なら君の神器に頼るしかないだろう？」

ルシルってこの世界にどれだけ嫌われてるわけ？

私以上の制限をこれでもかかってくらいにかけられてるじゃない。

「はあ、もうわかった。それで足りない魔力はどうするの？」

“神器キルシュブリューテ”の数秒間の解放には、おそらくSSSランクはいる。

私が現状使える魔力は最大Sランク、バースト魔力炉破綻させれば捻り出せる。

だけど今の状況じゃさすがにリスクが高すぎる。それはルシルもわかってはいるはずだけど。

「契約、は駄目だろうか？」

「へ？ 契約・・・ああなるほど」

おそらくルシルは、魔術師としての“メンタルリンク契約”のシステムことを言っているのだろう。

確かにそれを行えば何とか出来るかもしれない。

“契約”を交わすことで、契約者と自分のシステム魔力炉をリンクさせて、

お互いの保有する魔力を扱うことが可能となる。
それに魔力炉破綻のような魔力炉システムに対するダメージも分担出来るから結構無茶もできる。

「一応マスター権限は君持ちということになるな。
もちろんこの決戦時のみの契約となる」

「わかった。それと別にこれからもずっとマスターでいいけど？」

「すまん断る」

「即答かよ」

私の冗談半分の申し出にノータイムで答えたルシル。何かムカつく。それにしても、ルシルの言うとおりそれなら“キルシュブリューテ”も扱えると思う。

なら、ほんの一時だけ私がルシルの御主人様になってあげますか。

「ここに今誓いを立てる」

私とルシルは両手の親指の肉を切り、私たちはお互いの手の平を重ねるように傷口を合わせる。

交じり合う私とルシルの血と魔力。

足元に広がるのはルシルの固有魔術における魔法陣“アースガルド魔法陣”。

ほとんど展開する必要のないモノだけど、儀式関連のときは展開されてるモノだ。

中心に十字架があり、その四方から四つの剣が伸びている。

そしてその剣を繋げるように三重の円環があり、その円環の間に無

数のルーンが刻まれている紋章だ。

その光景を見ている全員が固唾を呑んでいる。

「我、シャルロツテ・フライハイト」

「我、ルシリオン・セインテスト・アースガルド」

ルシルは“フォン・シュゼルヴァロード”じゃなくて、魂に刻まれた真名“アースガルド”を名乗る。

やはり貰いものの名前では効果がないということだろう。

「我ら、ここに誓いを築き、主従の理を宣言す」

本当ならもっと大掛かりな儀式が必要だけど、今はこの簡易儀式で十分だ。

私とルシルの魔力炉システムがリンクするのがわかる。

お互いに流れ込む魔力を制御し、最後の段階へと持っていく。

「メンタルリンク契約」

術式名宣告。最後に私とルシルは口づけを交わす。

少し恥ずかしいけど、この儀式の時はカウントに入れないようにしているから何とか平気。

でも気づく。そういえばここにいる全員の前で“契約”を交わしたんだ。

一気に顔が赤くなるのがわかる。

ルシルは何事もなかったかのように平然としている。

そして全員の反応は様々だった。

「き、君たち、何もこんな人前でやることは・・・その、ないんじゃないか？」

クロノが赤い顔を背けながらそう一言。
だからそんなやらしいものじゃないから。

「時と場所を考えてほしいものだな。フライハイト、セインテスト」
そんな真剣な顔でシグナムが言った。
だから“契約”って口にしてたよね私たち。

「はやてちゃん、見ちゃダメです」

「シヤマル、さっきからわたしの目を隠してるから見えんかったって」

シヤマルははやての両目を、自分の両手で覆い隠していた。
わかってて言っているな騎士連中は。

「あうあう」

私とルシルの口づけを見たフェイトが困惑している。
そういえばフェイトってルシルに特別な感情を抱いているんだった。
“契約”に必要なことはいえ可哀想なことをしたかもしれない。

「大丈夫。私とルシルはそんなんじゃないから」

フェイトだけに聞こえるようにして呟き、そっとフェイトの頭を撫でた。

十 十 十 十 十 十

シャルちゃんとルシリオン君の突然の行動から立ち直ったわたしたち。

そして防衛プログラムの暴走までの時間が迫る。
そやけどその前に、

「なのはちゃんたち、結構怪我がひどい。ちょお待ってな、シャルマ
ルお願いや」

わたしは傷ついているなのはちゃん、フェイトちゃん、シャルちゃん、ルシリオン君の四人を見て、シャルマに治癒魔法をかけてもらうようにお願いする。

「はい、みなさんの治療ですね。お任せください。クラールヴィント、本領発揮よ」

Ja

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シャルマの魔法“静かなる癒し”。それは怪我の治療から体力と魔力の回復、バリアジャケットや騎士甲冑の修復までこなすものや。その恩恵を受けたなのはちゃんたちは、みんなして驚いとる。

「湖の騎士シャルマと風のリングクラールヴィント、癒しと補助が本領です」

なのはちゃんたちからお礼を言われたシャルマルは照れくさそうに微笑んだ。

これでいつでもいける。

「ユーノ、悪いけど足場を私とルシルに作ってくれる？

飛翔術式に回している魔力も攻撃に使うから」

「え？ あ、うん、そのあたりでいい？」

「うん、大丈夫。ありがとう」

シャルちゃんとルシリオン君が、ユーノ君に作ってもらった魔法陣の上に立つ。

ルシリオン君の背中には、四枚の蒼い剣の翼だけが残った。

そして澱みを囲むように、黒い柱が海面から突き出してきた。

暴走が始まる合図や。

「夜天の魔導書を、呪われた魔導書と呼ばせたプログラム、闇の書の“闇”」

澱みから現れたのは形容し難い異形が存在。

まるで歌のような声を上げる女性の上半身が怪物の頭部にあった。

最後の大一番、なんとしても成功させる。

十
十
十
十
十
十
十

澱みの中から現れたのは合成獣キメラのような怪物だった。
ああいうのを大戦時に見慣れているとはいえ、やはり少し引いてしまおう。

「チエーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

ユーノとアルフのバインドが、蛇の胴体のようなバリケードを捕らえ断ち切る。

「縛れ、鋼の軛！」

ザフィーラもそれに負けじとバリケードを一瞬でなぎ払った。
これで邪魔をするものはなくなった。

「ちゃんと合わせるよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

まずは第一層と第二層を破壊する役割のなのはとヴィータ。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン！」

G i g a n t f o r m

ヴィータのデバイス、“グラーファイゼン”が巨大なハンマーへと変形した。

「轟天爆砕！ ギガント・シユラアアアーク！！」

その巨大な鉄槌の一撃を受けて一層目の対魔力障壁が砕け散った。それを見たルシルが一言呟く。

「俺さ、アレより少し小さいモノで叩き落とされたことがあるが、今思うとよく生きてるなって、そうしみじみ感じるよ」

なるほど、アレの一撃を受けたから蒐集されたわけか。

さすがに今のルシルじゃ、あんなの受けたとなったらそりゃ負けるわ。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン。いきます！！」

“レイジングハート”が四発カートリッジをロードし、翼を展開させた。

おそらくさっき放った砲撃と同じものだろう。

「エクセリオン・・・バスタアアアーク！！！！」

Barrel shot

本命の先駆けとして衝撃波が放たれ、襲い掛かってきた触手に不可視のバインドがかけられる。

「ブレイク・・・シユーーーーーート！！」

本命の一撃が放たれた。それは容易く二層目の対物障壁を砕く。未だ9歳であれって、将来どんな大物になるかわかったものじゃない。

「次！ シグナムとテストロッサちゃん！」

シヤマルの指示が飛ぶ。

それに応えるようにシグナムが“レヴァンティン”を構えた。

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃と連結刃に続くもう一つの姿・・・！」

“レヴァンティン”の柄尻に鞘を連結させた。

シグナムの手に携えられるのは剣から弓へと変形した“レヴァンティン”だ。

B o g e n f o r m

“レヴァンティン”に番えられているのは槍のような長い矢。会に入っているシグナムの足元から炎が吹き上がる。

「翔けよ、隼！！」

S t u r m f a l k e n

“レヴァンティン”より放たれた一閃は、三層目の対魔力障壁を粉砕した。

「フェイト・テストロッサ。バルディッシュ・ザンバー。いきます
！！」

大剣となっている“バルディッシュ”から、おそらく物理破壊効果を持つ衝撃波が放たれ、バリケードを容易く薙ぎ払っていった。

「撃ち抜け、雷神!!」

Jet Zamber

“バルディッシュ”の刀身が伸びるようにして最後の障壁と、“闇”の本体を斬り裂いた。

「あれも受けたくないな」

「激しく同感」

ユーノの張った魔法陣の上で観戦中の私とルシル。

手伝いたいけど、今は少しでも魔力の流出を抑えたい。

ルシルは二対の蒼翼だけを残して、付近に充満する魔力を取り込んでいる。

ルシルは咽るようにして、少し吐血した。

「無理しないでよ」

「使えるものは使う、それが俺たちだ」

そういう返事を聞きたいんじゃないんだけど、そう言っただけなら何も言うまい。

“闇”の周辺から現れた蛇の尾のようなモノから、砲撃が放たれようとしていた。

しかし、それを黙って見ているザフィーラじゃない。

「盾の守護獣ザフィーラ。砲撃など撃たせん!!」

海上から突き上げた棘のようなもので、それらを全て貫き砲撃が放たれるのを防いだ。

「はやてちゃん！」

シヤマルが上空で待機していたはやてへと指示する。

はやては“リインフォース”を左手に持ちページを開いた。

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストリティン！！」

はやての背後から七条の砲撃が放たれた。

それを受けた“闇”は着弾したところから石化していき、脆く崩れていく。

「シグナムのレヴァンティンもそうだけど、今のミストリティン、だっけ？」

アンスールが持ってた神器と名前が似てるよね」

アンスールが一人、炎帝セシリスの保有した神器“煉星剣レヴァンティン”。

そして冥祭司プレンセレリウスの保有していた神器“神葬剣ミスティルティン”。

「……似たようなモノはこの世界にでもあった。

それにこの世界は俺たちの時代の遙か未来、名前が残っていてもおかしくないさ」

寂しそうで、でも懐かしそうにルシルがそう呟く。

まずい、配慮が足りないことを言ってしまった。

「気にするな。もう俺は大丈夫だから。」

それよりアレは酷いな。崩れたところから再生している」

「うえ、何かすごいことになってる」

“闇”が滅茶苦茶に再生しているから、かなりグロテスクなモノへとなっていた。

でもクロノはエイミィに「プランの変更はなし」だと言っている。なら私たちもそろそろ準備をしておこうか。

「いくぞデュランダル」

OK , B O S S

クロノが“デュランダル”を構えて詠唱へと入った。

「悠久なる凍土。凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ」

海上が凍結されていき、海上に在る“闇”も凍っていく。

「凍てつけ!!」

E t e r n a l C o f f i n

最後の仕上げと言わんばかりに“デュランダル”を振るつたクロノ。“デュランダル”の術名が告げられたと同時に、“闇”は完全に氷付けとなった。

しかしそれでもなお再生しようとする“闇”。

最後はなのは、フェイト、はやてによる同時砲撃によるコアの露出。そのあとは私とルシル、二人の魔力を持つ一撃でこの戦いを幕とす

「いくよ。フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

「うん」

なのはの指揮のもと、三人が己の最強の一撃の準備に入った。

私はそれを見ながら“キルシュブリューテ”を取り出し、“真技”の術式を組む。

そこで私は鞘に収められた“キルシュブリューテ愛刀”を見据えた。

「期待に応えないといけないよね」

「いくらでも魔力を持って行って構わない。

剣神の名の由来、見せてやれシャル」

「ええ！」

私とルシルは、なのはたちへと視線を移した。

「全力全開！ スターライト・・・！！」

「雷光一閃！ プラズマザンバー・・・！！」

「響け、終焉の笛。ラグナロク・・・！！」

はやての術式名を聞いた私とルシルは一瞬身構えた。

た。

ふとルシル君を見ると、ルシル君は口から血を流しながら、魔法陣に膝をついていた。

それを見たフェイトちゃんが、ルシル君のもとへと行くんだけど、それがスローに見える。

私はルシル君が気になりながらも、シャルちゃんへと視線を移して、そして私は見た。

鞘から抜き放たれた“キルシュブリューテ”の刀身が、桜色の光を放ちながらコアへと同時に8つの斬撃を与えたのを。

真技、牢刃・弧舞八閃

私は今起こったことが全てスロー再生のように見えていた。そしてそんなスローの世界が普通の時間へと戻る。

「シャルちゃん!!」

シャルちゃんが力なく海へと落ちた。

私は急いでシャルちゃんを助けるために飛ぶ。

「シャルちゃん!? シャルちゃん!?」

助け出したシャルちゃんへと、何度も名前を呼んだ。そして、

「大丈夫。だけど、やっぱり冬の海は冷たい」

シャルちゃんはそう言って微笑んだ。

聖夜に降り立つ夜天の王（後書き）

アルカンシエル出番なし！ すいません！

シャルの本当の力、とまでは全然足りてないですけど、なぜか2回

d期間中に

書いておきたかったんです。

ですが正直、悪い反響が来そうで怖いです。

旅立ち

私となのは、はやての三人の同時砲撃によって、暴走していた防衛プログラムは崩れた。

その残骸の中心にはコアが黒く輝いている。

そのコアを破壊する役目のシャルが、足場となっていた魔法陣から跳んだ。

そして私は、シャルの後ろに立っていたルシルが、口から血を吐いて膝をつくその瞬間をこの目で見てしまった。

「ルシル!？」

私はすぐにルシルの元へと翔け、魔法陣へと降り立ってルシルに近づく。

「大丈夫ルシル!？ ルシル!!」

「だ、大丈夫だよフェイト。心配性・・・だな」

私の頭を撫でたあと、魔法陣の上で仰向けになった。口に付いている血を手の甲で拭って、二、三度深呼吸をした。

「大丈夫かルシル!？」

クロノを初めとして、みんなが私とルシルのいる魔法陣に来た。ルシルは左手を上げて「大丈夫だ」と言って左手を振った。

「そうか。ユーノ、治癒魔法をかけてあげてくれ」

「うん」

ユーノがルシルに治癒魔法をかけている中、なのはとシャルも魔法陣へと降り立った。

シャルは寒さに震えながらもちゃんと立っているから、ルシルよりかは調子は良いみたい。

「シャマル、シャルちゃんにも治癒魔法お願いや」

「はい！」

シャルの方も一応、シャマルから治癒魔法をかけてもらった。

『コアの完全消滅を確認！！ みんなお疲れ様でした！！』

このあと残骸の回収とか、市街地の修復とか色々あるんだけど。みんなはアースラに戻って一休みしてっつて！』

エイミーからの通信で、ようやくみんなの顔から緊張が消えた。

「やったなシャル、ルシル」

「当然」

クロノはシャルがハイタッチしたあと、体を起こしたルシルともハイタッチしていた。

ルシルの大丈夫そうな顔を見た私も、なのははやてとハイタッチを交わした。

長い長い夜の終わりだ。

「あ、そういえばエイミィさん。」

アリサちゃんにとすずかちゃんはどうなったんですか？」

『被害が酷い場所以外の結界解除してるから、元いた場所に戻って
もらったよ。だから安心して』

よかった。

アリサとすずかのこともずっと気になっていたから。

「ふう、これで一件らく」はやて!?!「・・・っ!?!」

シャルの声を掻き消したのはヴィータの叫び。

私たちがヴィータの方へと向くと、シグナムに抱えられたはやてだ
った。

「はやて!?! はやて!?! はやて!?!」

雪の降る夜空に、ヴィータの悲痛な叫び声だけが響いた。

「うく、クロノ! 彼女を早くアースラへ!」

「ああ! エイミィ、今すぐアースラへ転送を!」

ルシルの一声にクロノが答え、私たちはアースラへと向かった。

十
十
十
十
十
十

あたしら守護騎士は、アースラとかいう管理局の艦の一室を借りて集まっている。

ベッドの上で眠るはやてを見守るようにして。

「やはり破損が致命的な部分にまで至っている。

防御プログラムは停止したが、歪められた基礎そのままだ。

私は、夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう」

はやてから新しい名前を貰った夜天の魔導書“リインフォース”がそう告げた。

「やはりか」

「修復は出来ないの？」

「無理だ。管制プログラムである私の中から夜天の書本来の姿が消されてしまっている」

修復出来れば何とかなると、シャマルと同様にあたしも思った。だけどリインフォースはそれは不可能なことだと口にした。

「元の姿が分からなければ戻しようもない、というわけか」

「そういうことだ」

何でも上手くないかないことばかりなんだろう。まるであたしたちは世界に嫌われているみたいだ。

「主はやては・・・大丈夫なのか？」

「何も問題はない。私からの侵食も完全に止まっているし、リンク
ーコアも正常稼働している。」

「不自由な足も、時を置けば自然に治癒するだろう。」

それを聞いたあたしらは安堵でいっぱいになる。

「はやてはこれでもう大丈夫。だけど・・・」

「そう。じゃあ、それならまあ良しとしましょうか。」

「ああ、心残りはないな。」

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ。」

破壊しちやえは暴走することも二度とない。代わりにあたしらも消滅するけど。」

そう、そこにあたしはいない。

折角はやてを助けられて、リインフォースも一緒に揃うことが出来たのに、はやてとあたしらの、あの時間はもう二度とやってこない。

「済まないなヴィータ。」

「何で謝んだよ？ いいよ別に。」

こうなる可能性があったことくらい、みんな知ってたじゃんか。」

こうなる覚悟はしていた。

でも実際そうなるとすごく辛い。

もっとはやてと話して、はやての美味しいご飯食べて、これからもずっと一緒に・・・

ずっと一緒に同じ時間を過ごして生きたかった。
それがあたしの本音で、そう思わずにはいられない。

「いいや、違う」

リインフォースがそう一言。

あたしらは一斉にリインフォースへと視線を向けた。

「お前たちは残る。逝くのは・・・私だけだ」

十 十 十 十 十 十

私とルシルは治療を完全に終えて、なのはたちが待っている部屋へと来た。

クロノがみんなに何か話があるとのことだったけど、一体何なんだろうか？

私とルシルも椅子へと座り、待たせていたクロノから話を聞いた。その話の内容というのは夜天の書を破壊するというものだった。

「闇の書、夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

「管制プログラムって、なのはたちが戦ってた？」

「ああ」

アルフの疑問にクロノが答えた。

暴走していた部分が無くなったのだから、そんなことする必要のないことと思うんだけど。

「防御プログラムは無事破壊できたけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生しちゃうんだって」

「なるほど、再びあの厄介な力が戻るわけか。確かにそれはまずいな。」

もう一度はやてが侵食されたら、今度こそはやての命の保障がない。それを危惧しての破壊の申し出、というわけなんだな」

「うん。そういこと」

「だから夜天の書は、防御プログラムが消えているうちに、自らを破壊するように申し出たんだ」

そんなのってない。

やっとはやてと逢えたというのにあんまりじゃない。

今の話を聞いた私となのは、フェイトは沈黙する。

「で、でも！ それじゃシグナムたちも消えちゃう！」

「そ、そうだよ！」

「いや、私たちは残る」

なのはとフェイトの叫びに近い声に答えたのは、守護騎士のリーダー、シグナムだった。

シグナムのそばにはザフィーラ、シャマルがいる。

ここにいないヴィータはたぶん、はやての側についているのだろう。

「どづいことか聞いても？」

「防御プログラムとともに、我々守護騎士プログラムも本体から解放したそうだ」

ルシルの問いにザフィーラが答える。

消える必要のある本体から切り離されたのなら、一緒に消えることはない……か。

『ねえルシ』無理だ。今の俺じゃ夜天の書は救えない』……そっか』

ルシルなら何とか出来ると思って聞いてみたけど、やっぱり無理だそうだ。

本当はリインフォースも残してあげたかったけど。

「それでリインフォースから、なのはちゃんたちにお願ひがあるって」

「お願ひ？」

十 十 十 十 十 十

私とフェイトちゃんは、リインフォースさんの待つ公園へと来た。ここでリインフォースさんからお願ひされたことをするために。

「ああ来てくれたか」

そして街を見渡せる高台にリインフォースさんはいた。

「リインフォース・・・さん」

「そう呼んでくれるのだな」

柔らかな微笑みだった。

これから始めることを考えると心が痛んだ。

「あなたを空に還すの、私たちでいいの？」

「お前たちだから頼みたい。

お前たちのおかげで、私は主はやての言葉を聞くことが出来た。主はやてを食い殺さずに済み、騎士たちを生かすことが出来た。感謝している。だから最後はお前たちに私を閉じてほしい」

これこそがリインフォースさんが私たちにお願ひしたこと。

私とフェイトちゃんの二人の力で、リインフォースさんを天へと送る。

シャルちゃんも入っていたけど、デバイスの都合上で私とフェイトちゃんの二人になった。

「はやてちゃんと・・・お別れしなくてもいいんですか？」

「主はやてを悲しませたくないんだ」

「・・・リインフォース」

「でも、そんなのなんだか悲しいよ」

確かに会わなければ悲しみは少ないかもしれない。

でもやっぱり最後だからこそ・・・はやてちゃんとお別れしてほしい。

「お前たちもいずれ分かる。

海より深く愛し、その幸福を守りたいと思う者と出逢えば、な」

そう言っただけでリインフォースさんは微笑む。

私にもいつか来るのだろうか、そう思える日が。

山道の向こうからシグナムさんが来た。

私たちと一緒にリインフォースさんを天へと送るために。

でもそこに一緒に見送るはずのシャルちゃんとルシル君の姿はなかった。

一体どこに行っただろう？

「あの子達はいないのだな。あの二人にも礼を言いたかったが残念だ。

少しばかり心の残りだが仕方がない。そろそろ始めよう」

もう何やってるの!? シャルちゃん! ルシル君!

十 十 十 十 十 十 十

「ん・・・ん？」

目が覚めると、そこはわたしの部屋のベッドの上。いつの間にか送ってもらったみたいだ。体を起こした瞬間、胸が急に痛み出した。

「リイン・・・フォース？」

リインフォースと繋がっているからだろう。

今からリインフォースがやるうとしていることが脳裏に浮かんだ。

「あかん・・・こんなの！！」

わたしはベッドから車椅子へと移り、部屋を飛び出す。

そのまま家の外へ出ると、薄着には辛い寒気がわたしを襲った。

「うっ」

あまりに急いでいたために防寒着とか忘れとった。

「そんなカツコじゃ風邪ひくよ。ルシル」

「ほら、これなら大丈夫だろう？」

家の外におつたんはシャルちゃんもルシリオン君の二人や。

ルシリオン君は、自分の着ていた黒いロングコートをわたしに差し出した。

「あ、ありがとう」

わたしはそれを受け取って、コートに手を通して着た。

すごく温かくて、ほのかな香水の匂いが鼻をくすぐった。

ルシリオン君が着とったコートをわたしが着たから、ルシリオン君はどうするんやろ？と思って見てみると、どこから取り出したのかいつの間にか別のコートを着とった。

「?・・・!・・・そうやなくて! シヤルちゃん! ルシリオン君!
わたしをリインフォースのトコまで連れてってくれやんか!？」

それより今はリインフォースのことが心配や。

わたしに黙って、勝手にこんなことした新しい家族のことが。

「うん。そのために待ってたから。ルシル、マスター命令。車椅子
よろしく」

「ひゃあ!？」

いきなりシヤルちゃんがわたしを横に抱えた。
俗に言うお姫様抱っこってやつや。

「了解。さつさと切っておけばよかったな・・・契約」

「文句は聞かない。蒐集されていたことを黙っていた罰、一発殴る
の代わり。しばらく私の命令に従え」

ルシリオン君は、わたしの座っていた車椅子を持ち上げた。

シヤルちゃんの言葉を聞いたルシリオン君は「はい、喜んで」と泣
く泣く言っとなった。

「それじゃ飛ばすから、しっかり?まっつててよはやて」

「うん!」

一瞬の浮遊感、直後にリインフォースやみんなのいる海鳴公園へと
空を翔る。

早朝とはいえ、人も疎らに歩いているのに飛んでもいいん?と訊い

てみたら、

「私とルシルの周囲に認識障害の結界が張ってあるから。視覚で捉えていても脳が認識していない。」

つまり実際には目に入っけていても見えていない、というわけ」

ということらしい。

透明人間のようなものやとわたしは思うことにした。

「……なんで……なんでリインフォースはこんなこと」

わたしはそう口にした。

独り言やったけど、シャルちゃんはそれに答える。

「彼女が優しいから、でしょ。」

はやてとの別れで、あなたを悲しませたくないって」

「いやや、そんな。わたし……わたし、あの子に何もしてあげてへん。」

それに絶対にお別れなんてさせへん……!」

これからもずっと一緒に生きていける。

そう思つとる。だからお別れなんて認めへん。

「……そう……だね」

シャルちゃんが悲しそうに呟いた。

「まずい。もう準備が出来ている。はやて、彼女の名前を呼んであげてくれ」

「え？ うん！ リンフォースー！！！！！！」

わたしの今出せる一番の声。

力いっぱい家族の名前リンフォースを呼んだ。

みんながわたしたちを見て驚いている。

先に降り立っていたルシリオン君が置いてくれた車椅子へと、シャルちゃんが優しく座らせてくれた。

「はやて！！」

「動くな！ 動かないでくれ。儀式が止まる」

ヴィータがわたしに駆け寄ろうとしたんを、リンフォースが止める。

そしてリンフォースは、わたしの後ろにいるシャルちゃんとルシリオン君を黙って見た。

「お前たちがいなかったのは、主はやてをここに連れてくるため・・・
だったのだな」

「そう。初めからはやてをここに連れてくるって、ルシルと決めた。

ねえリンフォース、あなたは別れを告げるとはやてが悲しむと思
ったから、こうして黙って逝こうとしたんでしょ？

でも目を覚まして、そこにあなたがもういないと知ったら、はやて
が余計に悲しむと何故わからないの？」

「それは・・・」

シャルちゃんという言葉聞いたリインフォースは押し黙った。

「リインフォース、こんなんやめて。

破壊なんて、リインフォースが逝かんでもええ。

わたしがちゃんと抑えるから、だから・・・こんなん・・・せんでええ!!」

リインフォースは困ったような、悲しんでいるような苦い顔をした。

「主はやて、よいのですよ」

「っ！ いいことなんて・・・いいことなんてあらへん!!
そんな辛そうな顔で・・・なにがいいんや!？」

あんな悲しそうな微笑みを浮かべても何も納得できへん。

「・・・ずいぶんと長い時を生きてきましたが、最後の最後で私はあなたに、綺麗な名前と心を頂きました。

騎士たちもあなたの傍にいます。何も心配はありません」

わたしはそんなんが言いたいのと・・・聞きたいのとちゃう。

「ですから、私は笑って逝けます」

「話し聞かん子は嫌いや!! マスターはわたしや!! 話し聞いて!!」

わたしがきつと何とかする! 暴走なんかさせへんて約束したやんか!!」

「その約束は、もう立派に守っていただきました」

その約束は、あの時だけやのうてこれからもずっとって意味や。だからわたしは守ってない、守りきってない。

「リインフォース!!」

「主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の務め。あなたを守るための最も優れたやり方を、私に選ばせてください」

「そやけど・・・ずっと悲しい思いしてきて・・・やっと・・・やうく・・・救われたんやないかあ!!」

「私の意志は、あなたの魔導と騎士たちの魂に残ります。私はいつもあなたの傍にいます」

「そんなんちゃう! そんなんちゃうやろ! リインフォース!!」

たとえそうでも、そこにリインフォースがいないと意味ない。だからそんなん認めへん。

「駄々っ子はご友人に嫌われます。聞きわけを」

どっちが駄々っ子や。

マスターのわたしの言うことを聞かんのはリインフォースの方や。

「リインフォース! わたしは!?!」

リインフォースのところへと行こうと車椅子を進めるんやけど、何かに引っ掛かって車椅子ごと転倒してしまった。

「はやて!」「」

シャルちゃんとルシリオン君がわたしを抱え起こしてくれた。わたしは二人に感謝の目を向けてから、リインフォースへと向き直る。

「これから・・・やっと始まる・・・これから、うんと幸せにしてあげなあかんに!!」

「・・・はやて」

シャルちゃんが強く手を握ってくれる。

リインフォースはゆっくりとわたしのところへと歩いてきた。わたしの前で片膝をついて、そっとわたしの頬に手を添えてくれた。以前、わたしがリインフォースにしてあげたように。

「大丈夫です。私はもう世界で一番幸福な魔導書ですから」

リインフォースの綺麗な微笑み。

リインフォースはもう・・・止まらへん、止められへん。

「主はやて、一つお願いが」

リインフォースの最後の願い。わたしはなんだって聞いてみせる。

「私は消えて、小さな無力な欠片へと変わります。

もしよければ、私の名はその欠片ではなく、あなたがいずれ手にするであろう新たな魔導の器に贈っていただけますか？

“祝福の風リインフォース”。私の魂はきつとその子に宿ります」

「リイン・・・フォース」

「はい、我が主。それからフライハイト、セインテスト。お前たちもありがとう。」

主はやてとの別れの時間を与えてくれたこと、感謝する」

「いつまでもはやてを見守ってあげて」

「ああ」

“リインフォース”を受け継ぐ子。

それがリインフォースの願いなら、わたしは・・・。

リインフォースは再び魔法陣の中央へと戻る。

これで本当にお別れになる。

「主はやて。守護騎士たち。そして小さな勇者たち。ありがとう。さようなら」

リインフォースは最後にとても綺麗な笑顔で、その長い長い旅路を終えた。

天へと上る光の先、その空から何かがゆっくりと降ってきた。

わたしはシャルちゃんに支えてもらいながら、それをしっかりと手にする。

「リイン・・・フォース」

両の手の平の上で輝く十字架。

わたしはそつと胸に抱いた。

十 十 十 十 十 十

リインフォースを送り、みんなと別れた俺とシャルはアースラへと来た。

訓練室の一室で向き合う俺とシャル。

「ねえ、もうこのままでいいんじゃないの？」

毎回毎回、状況の悪いときに契約^{メンタルリンク}なんてしてられないよ？」

「イヤだ。どんな命令を下されるかわかったものじゃない。

君が滅茶苦茶な命令を下す前に、なんとしても契約を・・・切る！
！」

それだけは絶対に阻止。

俺はフェイトから、海鳴市引越しの日、シャルとアリサの話の内容を教えてもらっている。

生まれてくる性別が間違ってるだの、女装させれば面白いだの、恐ろしい内容だった。

今更それを思い出した俺は、すぐさま契約破棄の儀式を行うことにした。

だがそれをさらりと拒否したシャル。

もしこのままシャルがマスターとなれば、俺の男としての尊厳が粉々に碎かれる日が来るかもしれない。

そうなったら俺はもう生きていけない。

「わかった。なら戦って決めよう。
私が勝ったら契約続行、ルシルが勝ったら契約破棄、これでいいよね？」

「受けて立つー!!」

こうなると薄々思っていたからこそそのアースラだが、戦うとなるとやっぱり激しく面倒だ。

「トロイメライ Jawohl、Meister さてど、いく
よルシル」

魔導師として俺と戦うか。

なら俺もそれに付き合わないといけないだろう。

「勝敗はギブアップ、もしくは気絶させたほうが勝利。
戦闘中にお互いの魔力を引き出すのはアウト、もちろん俺に命令するのアウト」

「わかってるって。そんなことしたら瞬殺になっちゃうじゃん」

その天使のようで、実は悪魔のごとき笑みが激しく恐ろしい。
トロイメライを軽く振っているシャルは、余裕で満ちている。

「その余裕、粉々にしてやるー!!」

「返り討ちだよルシルー!!」

雷牙閃衝刃

燃え穿て、コード 汝の浄炎ウリエル

このあと朝まで戦い続けたが、お互いの魔力切れということでは勝敗は着かなかった。

残った結果は、もうしばらくは現状維持と言う俺にとっては最悪な展開だけだった。

やばい、泣きそうだ。

そしてシャルは朝早く海鳴市へと戻った。

今日、なのはたちがご家族と友人のアリサ、すずかに真実を明かすからだそうだ。

あとで聞いた話だと、やっぱり最初はみんなが驚いていたが、受け入れてもらったようだ。

これでもうフェイトたちは大丈夫だろう。

さてと、あとは俺とシャルの今後についてだが……。

「どうするかな」

まあ何とかなるだろう。

これまでもそうだったように、ただ流れる水のごとく。

この身を委ねるとしよう、世界が界律オレとシャルの守護神に求めるそのままに。

桜並木に一人立って、友達を待つ。
早いものであれから六年、いろいろなことがあった。

お父さんたちやアリサちゃんたちに魔法のことや管理局のことを話して六年。

私とフェイトちゃん、ユーノ君、そしてシャルちゃんやルシル君（は私達より早いけど）が正式に管理局に入って六年。

ルシル君は、前に私をかばって受けた傷も早くに治して復帰。不死身と言われてます。

そして空戦SSのルシル君は、今もまたたくさん部署を兼任してます（させられてる？）

無限書庫、本局医療局、航空武装隊etcとか、過労死するんじゃないかって噂です。

日常のほうでもいろいろありました。

はやてちゃんの足も治って、私たちと同じ学校に通えるようになったし、フェイトちゃんもハラオウン家の正式な家族になった。

私の方は、今では武装隊の戦技教導官、ときどき捜査官として頑張っています。

「なのはー！」

「なのはちゃんー！」

「あ、アリサちゃん！ すずかちゃん！」

後ろから聞こえてきた友達の声に振り返って、二人に大きく手を振って応える。

アリサちゃん、すずかちゃんと挨拶を交わして歩き出す。

「今日もお仕事？」

「うん！ 今日久しぶりにみんな集まるんだ！

お昼過ぎに早退しちゃうから、午後のノートお願い」

「はいはい！ 頑張ってコピーしやすいノート取るわよ！」

さすがアリサちゃん。持つべきものはやっぱり友達だね。

「にははは！ ありがとう！・・・あ！」

道の先にいるのは大親友の二人、フェイトちゃんとはやてちゃんだ。二人が私たちに向けて大きく手を振っている。

フェイトちゃんは、六年前に語った執務官の夢を叶えて頑張ってます。

はやてちゃんも捜査官として、シグナムさんたち守護騎士のみなさんと頑張ってます。

さてと、あと一人が来てくれればみんなの合流完了となるんだけど。

「今日集まるんだって？」

「うん！」

「ほんま楽しみやわあ」

「先に行くなんてひどーい!!!」

会話に花を咲かせる中、やっと最後の一人シャルちゃんが姿を現す。シャルちゃんの方もいろいろあったんだ。

ドイツにいる家族が海鳴市に引っ越してきたり、正式に聖祥小学校に入ったり、

ルシル君がシャルちゃんの弟になったり（ルシル君は兄だと主張する）と、そういろいろ。

そんなシャルちゃんも、今では陸戦SSの魔導師として一目置かれてたりします。

「ごめんごめん!」

「何よシャル？ あんたまた他校の男子に告白されてたわけ？」

そう、シャルちゃんは何故か（失礼）すごく他の学校の男子に人があつたりする。

というか私の周りにいるフェイトちゃんやすずかちゃんたちもよくモテる。

私はあまりそうでもない（自覚なし）からちよつと羨ましいかも。

そんなこんなので、今日もまた私たちは空を翔けます。

いつか誓った想いをこの胸に秘めて。

「レイジングハート!」 Yes, my master

「バルディッシュュ！」 Yes, sir

「リインフォース」

「はい、マイスターはやて！」

「トロイメライ！」 Ja, Meister

Standby Ready

「「「セーット・アップ！」「」「」

2nd Episode: 夜天の主と守護の騎士 Fin

NEXT Episode: 高き破滅より来たる大罪

旅立ち（後書き）

後半メチャクチャに省いてすいません！
もう途中でギブアップさせていただきました。

最後はなのはかシャルのどちらかに語らせるか、と書いていたんですが、やはりなのはにしていまいりました。

ラインフォースのことですが、やはり当初の計画どおりに天に召されてもらいました。

かなりギリギリまで迷っていたんですが、初めに決めたことは変えないでおこうと思いましたが。

そしてシャルロッテとルシリオンの管理局入局。

それだけでなく二人が家族になった経緯、それは次に書こうと思います。

きっと短いモノになってしまうと思いますが、書かないよりはマシかと。

一応今の段階としては、上記のシャルシル（略）の話。
花見はどうしようかと思ってますけど、書こうかな？

そしてSTRIKERSへのプロローグ（コミックのです）を一話、
もしかしたら二話に？
それから3rdに入っていくかと思えます。

それではこれからも誠心誠意頑張りますので、よろしく願います。

番外編：管理局に入るつよ

闇の書事件解決から一週間後、一月一日元旦。

私たちはみんなで初詣に来ている。

メンバーは私、フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんの四人。

はやてちゃんたちは、検査や面接などがあって今日は来れなかった。すごく残念です。

「遅いな。シャルちゃんとルシル君、何やってんだろ？」

あとはシャルちゃんと、シャルちゃんが無理矢理にでも連れてくるって言ってたルシル君の二人なんだけど……。

「ちょっと騒がしいわね。何かあったのかしら？」

「何か……可愛い、とか聞こえてるね」

アリサちゃんとすずかちゃんが向いている場所へと私たちも目を向ける。

そこに広がっている人だかりは、なんだかすごいかも。

「いたいた！ ルシルの準備に手間取って遅くなった！」

人だかりの壁を掻き分けて現れたのはシャルちゃん。

そしてシャルちゃんが連れているのはすごく可愛い女の子……あれ？

銀髪？ ちょっと待って。いやいやいや、もしかして……ルシル君？

「お待たせ！ どう？ これ見ての感想は？」

「くっそ。こんな屈辱・・・初めてだ・・・」

今のルシル君の格好を見て、10人中10人が女の子だと言うと思う。

その長い銀髪は、真紅のリボンで結ったツーサイドアップで、歩くたびに揺れている。

そして体を包んでいるのは、膝下まである黒いケープ付のコートだ。

「「「可愛い」「」」

「プ、フッフ、アハハハハハハハハハ！！」

「ちよっ、アハハハ、似合いすぎでしょ！！？」

私とフェイトちゃん、すずかちゃんは、ルシル君のその姿を見て「可愛い」と一言。

アリサちゃんはツボに嵌ったのか、おなかを押さえながら笑い続けている。

「だから！ こうなることが嫌だったから契約を切ろうとしたんだ！！」

「はい、ルシルちゃん。今はそんな言葉遣いは禁止」

ルシル君の頭を撫でながら微笑むシャルちゃん。

何か今のルシル君を見ると、

「男の子に・・・負けた」

妙な敗北感でいっぱいになりました。でもルシル君は男の子だから、やっぱり可愛いなんて言われたくないよね。以前誰かに、男の子は「格好いい」という言葉の方が嬉しいって聞いたから、きつとルシル君もそのはずだ。

「いや、いい仕事したわねシャル。でも今度は黒じゃなくて白でも攻めて行きたいわ」

「うーん、ルシルの銀髪って黒だから栄えるんだけど。白か……よし……」

「よし！ じゃ……な……い……い……い……い……い……い……」

神社に轟くルシル君の絶叫。

ああごめんねルシル君。やっぱり私じゃ止められないよ。

「る、ルシル。その……可愛いよすくく」

「っ……！」

「うわあっ、ダメだよフェイトちゃん……！」

私は急いでフェイトちゃんの口を塞ぐけど、もう完全に今の聞こえているかも。

ルシル君は俯いて震えている。フェイトちゃんはフェイトちゃんです首を傾げてるし。

「……フェイト。男にとって、可愛いとは褒め言葉じゃないんだ」

「え？ そうなの？ でも本当に可愛いと思うんだけど」

私がフェイトちゃんの口から手を離れた瞬間、フェイトちゃんは再度爆弾を投下した。

もうダメだ。今は確実にルシル君に大ダメージを与えたはずだ。それを見ていたすすかちゃんが、何とかフォローしようと必死になっている。

でも何も浮かばなかったのか戦線から離脱した。

「（わ、私が何とかしないと）えっとルシル君、もう着替えよう？
ね？」

「ええええええ」

シャルちゃんとアリサちゃんが抗議の声を上げる。

でもこれ以上はさすがにルシル君が気の毒だ。

止められないなんて言っていられないよ。

「そ、そうだよ。ルシル君、着替えとか持ってたら着替えてきてもいいんだよ？」

「うん。シャルちゃんたちは私たちが何とかするから」

すすかちゃんが優しく語りかけた。

私も頑張って抗議を上げる二人を説得する、と決意を口にした。

「すすか、なのは……ありがとう！」

「「「可愛い」」」

「!!!! し……し……死んでやる————!!!!!!」

私とすずかちゃんの言葉がそんなに嬉しかったのか、すごい笑顔でお礼を言ったルシル君。

その笑顔が本当に可愛くて、つい「可愛い」って言ってしまった。ルシル君は「死んでやる」って叫びながら走り去って、声をかけてくる男の子たちを片っ端から沈めていつている。

だって今の笑顔は反則だよルシル君。

「あゝあ、行っちゃった。少し冷却時間もいることだと思っし放っておこう」

「……ええええええ!?」「」

ルシル君をあんなのにしたシャルちゃんが放置宣言。

私とフェイトちゃん、すずかちゃんはそれに驚愕。

走り去った原因をつくった私たちが言えることじゃないけど、それは酷いよシャルちゃん。

「探しに行つて見つけたら着替え中でした、ていうのはイヤでしょ? もし着替えを見られたら、今度こそルシル……死ぬかも?」

「そうそう。ルシルが帰ってくるまで待つてましょ」

そう言うシャルちゃんとアリサちゃん。

私たちはそれに従うしかなさそうだ。

私たちは空いているベンチへと座って、ルシル君を待つことにした。

「そういえばシャルちゃん。シャルちゃんって三年生までの留学・
・なんだよね？」

「うん」

シャルちゃんは一年間の海外留学生として、高町家にホームステイ
に来た。

それがもう終わろうとしているのがすごく悲しい。

「残念よね。シャルってあたしといいコンビだったのに」

「確かに最凶コンビだったよね、シャルとアリサ」

「フェイト、何か変なこと考えなかった？」

「ううん！ 別に何も！」

こうしてシャルちゃんと話せる時間も残り少ないんだ。

ユーノ君から、ルシル君も無限書庫の司書に誘われてるって話を聞
いた。

だけど迷っているのか返事はまだしてないってことだ。

それだけじゃなくて、シャルちゃんを管理局に入れたくないってこ
とも言っていたみたい。

そうなったらシャルちゃんやルシル君とはもう会えなくなっちゃう。
一生の別れにはならないと思うけど、それでも会う機会が少なくな
るのは確かだ。

「でも寂しくなっちゃうね。シャルちゃんがいるとすごく楽しいの
に」

「ありがとう、すずか。でも実はそれに関してある考えがあるんだ」
「」「」「考え？」「」「」

私たちが同時に聞き返す。

それに関して、ということはこのまま海鳴市に残れる……という
ことだろうか？

「まあルシルが許してくれないかもしれないから確定してわけじゃないけど。」

そこところは何とかするしかないかな、というか何とかする」

「はあ？ 何でルシルの許可が必要なわけ？

どう見てもあんたの方がルシルより立場が上じゃない」

「うーん、まあ人間時はそうなんだけどね。」

語るに語れないわけがあると云いますか」

そう言つてはぐらかすシャルちゃん。

やっぱり二人の間には、私たちの知らない何かがあるのかもしれない。
い。

私やフェイトちゃんが出会う前からの知り合いだったことだし。

「でもそれが本当に出来たら、シャルもルシルもずっとこの街にいら
れるんだよね？」

だったら管理局にも一緒に入れるようになるのかな？」

「私は海鳴市（こゝ）に残れるかもだけど、ルシルはどうだろう？」

家族のいないノルウェーに帰って独り寂しく生きてくかもね」

「「え？」」

アリサちゃんとすずかちゃんが固まった。

あ、そういえばルシル君に家族がいないって教えてなかったけ？

「アリサちゃん、すずかちゃん。ルシル君って家族の人たちはもういないんだ。」

私たちと会う前から一人暮らしだったんだって」

「そう・・・なんだ」

「だから家事が上手なわけね」

そう、ルシル君の異常な家事能力の高さはそこから来ているみたいなんだ。

どれだけの時間を独りで過ごしたのかは聞けなかったけど、それはきつと大変なこと。

「それと管理局入りは・・・さすがにわからないかな。」

でも私は入るつもりだよ。なのはたちとこれからも一緒にいたいから」

「シャルちゃん」

「まあ今からでも準備をしておこうかな。」

まずは私の家族を海鳴市（こい）に呼ぶことにする」

シャルちゃんの家族かあ。

ホームステイ初日のシャルちゃんの様子からして何か嫌なイメージ

があるけど。

時々連絡を取っていたみたいだし、きつと大丈夫だと思う。

それからすぐに着替えたルシル君が戻ってきた。

その顔は羞恥と疲労の色がいっぱいでした。

そして私たちは無事初詣を終えて、アリサちゃんのお家にお邪魔して楽しく過ごしました。

十 十 十 十 十 十 十

高町家、月村家、バニングス家、ハラオウン家（クロノは欠席だった）の四家合同の大旅行から帰っての二日後、冬休み最後の日。

今、私となのはは喫茶翠屋から、私のマンションへと向かっている最中だ。

ルシルとシャルは二人だけで話があるって言って、後から追いかけるとのことだ。

たぶん“あのこと”についてのことだと思っ。

「Entschuldigung」

私となのはの前から一人の女性が手を振って歩いてきた。

年はエイミイくらいの十代後半、シグナムのような髪型をした外国の人だ。

正直困った。一体なんて言ってるのかわからない。

「Guten tag・Darf ich Sie etwas

「fraggen?」

「え〜と、その……『フェイトちゃん、この人なんて言うてるかわかる?』」

『ごめんなのは。私もわからない。シグナムたちが使ってる言葉に似てるけど』

私たちが困っているのを見たその女の人が「Verzeihung」と言った。

そして、

「ごめんなさい。つい私の国の言葉で話しかけて。少し聞きたいのだけど……いいかな?」

「「え?」」

その女の人は日本語で話しかけてきた。よかった。これならわかるよ。

「あれ? もしかして日本語間違ってる?」

「いえ! わからない言葉から急に日本語になったので……その」

「ちょっと驚いただけで」

「そっか! よかったよ!」

その女の人が笑うと、うさぎの耳のように立っているリボンがゆらゆらと揺れた。

「あの、聞きたいことがあるってことですけど？」

なのはは恐る恐る聞いている。

すると女の方は少し困ったような顔をして話した。

「うん。実はね、道がわからなくて困っていたんだ。海鳴市藤見町の」

なのはは女の方が持っている手帳のようなものを見せてもらっている。

すると何か驚いたような表情になった。

どうやら知っている住所みたいだ。

「ここ、私の家なんですけど・・・」

「そうなの！？ あ、もしかして・・・高町・・・なのは、ちゃん？」

その人はなのはからそう聞いて驚き、次になのはの名前を口にした。そして今度は私を見て「で、君がフェイト・テストロツサちゃん・・・かな？」と聞いてきた。

なのはと二人して「はい」と頷くと、

「Fruet mich, Sie kennenzulernen!!!」

Mein Name ist Chelsea Freiheit.
Ich freue mich, Sie zu sehen!
「！」

と、また意味のわからない言葉攻めを受けた。
でもなんだか嬉しさで興奮しているみたい。
私となのはが困惑の表情を浮かべていると、その人はまた謝った。

「ごめんね！ 興奮すると私の国の言葉が出るみたい。
さっきは“はじめまして。チエルシー・フライハイトです。会えて
嬉しいよ”って意味なの」

「フライハイトってまさか」

「シャルのご家族の方・・・ですか？」

「そ！ チエルシー・フライハイト。いつも妹がお世話になってい
ます！」

＋ 十 十 十 十 十 十

「いや、旅行でも大活躍だったねルシル」

「うつさい、バカ女。」

また女装なんて命令出したら無理矢理にでも英雄ヴァルハラの居館に叩き込む
ぞ」

旅行先でも俺を女装させて見世物にした悪魔コンビ、シャルとアリ
サ。

いつか何らかの方法で逆襲してやる。

「それで、話って何だ？」

「え？ うん。えっと・・・ね。うーんと・・・」

シャルにしては齒切れが悪すぎる。

それからハラオウン家に着くまでそんなことを繰り返してばかりだった。

結局シャルは何も言わないまま、ハラオウン家に着いてしまった。

「お邪魔します」

『どうぞどうぞ入って！ シャルちゃん、来てもらったよ！』

インターフォンを押すとエイミイの声が届く。

（来てもらった？ 誰か客人でもいるのだろうか？）

シャルに視線を向けると、シャルは俺の視線から逃れるように玄関の扉を開けて入った。

俺も続いてハラオウン家の玄関に入ると、複数の話し声が耳に届く。わかるのはフェイト、なのは、エイミイ、クロノは今日が休みらしい。

シャルは俺へと一瞬だけ視線を向けて、リビングへと続くドアを開けた。

リビングへと入ると、そこで俺は信じられない光景を目にした。

「な！？ は、花の姫君！！？」

フェイトたちと話し込んでいるのは見間違いで済まされない存在。かつての強敵、第九騎士“花の姫君チエルシー・グリート・アルフ

アリオ”だった。

俺の叫びにみんなが「花の姫君？」と首を傾げている。
俺が臨戦態勢に入ろうとしたとき、

「久しぶり姉さん」

「うん！ 久しぶりだねシャル！」

「姉ーーーーー!!!?」

シャルが“花の姫君”を姉と呼び、そばまで歩いていった。
おいおいおいおいおい、どういうことだこれ？

「久しぶりルシル！ 妹がお世話になって、ありがとね！」

“花の姫君”が俺に手を振りながら微笑んでいる。
君、そんなキャラじゃなかったよな大戦時。

「ルシル君ってシャルちゃんの家で少し過ごしてたって聞いたよ」
「よかった。ルシルがずっと独りで過ごしてたんじゃないってわか
って」

なのはとフェイトがそう言うが、俺は全然知らないそんな事実。
“花の姫君”がこの世界にいることすらたった今知ったくらいだ。

『おいシャル。どういうことだこれ?』

一人だけ真剣に警戒しているのも馬鹿らしくなり構えを解く。
俺は“花の姫君”の存在を知っていたであろうシャルを問いたです。

『これが話したかったこと・・・かな。前に言ったよね。私には家族が用意されてるって。

ああ安心して、チエルシーには大戦の記憶はないし、もちろん魔法も使えないから。

父も母もいるけど、誰だか知ったら驚くよルシル。あまりにイメージが違いすぎて』

リンクを通して説明を求めた結果がこれだ。

シャルの言う父も母もどうせ^{シュテルン・リッター}星騎士の誰かなんだろう。

年から考えて第一か第二が父、母は誰になるだろうか？ 若い女性ばっかだったしな。

『父が第一騎士“風の騎士公オペル”。母は第三騎士“鮮血姫シリア”、どう驚いた？』

『・・・・風 of 騎士公は何となくわかるが、あの鮮血姫が母親？ 出来の悪い家族ごっこみたいだな』

実際に家族ごっこだろう。

騎士公、鮮血姫、花の姫君、与えられた役割と記憶を持つ世界が用意した人形。

何故ここにいいのか気になって仕方ないが、フェイトたちが俺の様子に戸惑っているため、まずは、

「えっと久しぶりです。チエルシーさん」

当たり障りのない挨拶。

すると“花の姫君”が抱きついてきて、

「チエルシーさん、なんて固いな
お姉ちゃんって呼んでいいんだよルシル」

「はい？」

「突然ですがルシル、あなたをフライハイト家の養子にします」

「は？ はあああああ！！？」

本当に突然とんでもないことを言い出したシャル。
俺をフライハイトの子供にして一体どうするつもりだ？

「だっていつまでもリンディ艦長の家でお世話になるわけにはい
かないでしょ？」

「僕や艦長はそれについて気にしていないが」

「うーん、私もこのままルシル君を住まわせてもいいと思っただ
けどねえ」

クロノとエイミーが俺に向けてそう口にする。
いや、しかしシャルの言うとおりなのは間違いない。
このままハラウン家に世話になり続けるのはさすがに控えたい。
用意されている家に帰るのも一つの手だが、今更独りというのは少
し辛いかもしれない。

「もう必要な書類は用意してあるの。姉さん」

「ん。これだよシャル」

チエルシーは膝に置いていたバッグから何枚かの書類を出してテーブルの上に置く。

ここまで俺に悟られずに用意しているとは、これは界律の力を借りているな。

「あとはルシルのサイン待ち。

すぐに決めなくてもいい。ううん、本当はすぐ決めてほしい」

シャルが強い視線を向けてくる。

何をそこまで必死なのかは理解できないが、フライハイト家の人間としてドイツに行くのも悪くはないな。

「・・・わかった。フライハイトの名、頂戴する」

「そんな簡単に決めていいのかルシル？」

「ああ。このままだろうとフライハイト家に入ろうと大差はない。これ以上ハラオウン家に世話になるわけにはいかないからな。だったら考える必要はないと思う」

俺は差し出された書類にサインをした。

シャルと家族になるだけなら大した問題じゃない。

「よろしくね、弟君」

“花の姫君”が俺の頭を撫でた。

頭を撫でられるなんて随分と久しぶりな気がした。

そして彼女は書類をしまい、意気揚々とハラオウン家を後にした。

十 十 十 十 十 十

ルシルは確かに書類にサインをした。

それをしっかりと確認した私は心の中でガッツポーズを決める。

「よし！ これでこれからもルシルと一緒に海鳴市で暮らせるよ！」

「「「おおおお！！」「」」

私の計画通りに事が進み、なのはとフェイト、アルフから拍手が巻き起こる。

しかし今の状況が理解できていないルシルは困惑しているようだ。

「ちょっと待て！！ 何の話だそれ！？」

「あれ？ 言っただけじゃなかったっけ？」

「フライハイト家は三月からここ海鳴市に引っ越します」

「言っただけじゃあないよ！！！！」

すでに界律から住所変更の許可はもらっている。

というよりジュエルシードの一件が終わった時点で、能力以外の制限は取り払われている。

だから海鳴市に住もうが管理局に入ろうが何も文句は言われないのだ。

「ルシルには悪いけどもう決めたから。」

あと四月から正式に聖祥小学校へ入ることにしたの。
だからこのまま海鳴市に住むことになる。黙って決めて本当にごめんなさい。
でもなんて言われても私は今の生活を続けたい」

「はぁ……。で、話はそれだけか？」

「……。それとねルシル。私、管理局に入りたい」

これが最も重要な件だ。このためにずっと計画を練っていたのだから。

しばらくの沈黙のあと、ルシルが顔を上げて静かに口を開いた。

「別にいいんじゃないか？ こんな騙すようなことしなくても最初から言ってくればよかつたじゃないか」

「……。え？ いいの？ 本当に？」

予想外の事態だ。もう少し反対を受けると思っていた。

そのためにルシルを説得するための手段をいろいろと用意したのだから。

それなのにこのあっさりさ。あまりにあっさりしすぎて逆に疑いなくなる。

「ああ。本当にいいよ」

そう言つてルシルは微笑んで私の頭を撫でた。

どうやら本当に認めえくれたようだ。

これで私の管理局入りが決定した。

「ルシル、以前にも言ったとおり、君にも管理局に入ってもらいたいんだが？」

「私もルシルと一緒に頑張りたいです」

「わ、私もみんなで頑張りたいです」

クロノに続いてなのはたちもルシルを管理局に誘う。
その真剣な表情を見て、私も真正面からお願いしてみる。

「ルシル、一緒にやろう？」

「そうだな。海鳴市に住むことになるんならそれもいいかもな。シャルたちが学校に行っている間は暇だろうし。」

それに無限書庫には惹かれていたから司書として働くのも悪くはないか」

これもまたあつさりと言うルシル。

半ば投げ遣りな感じがするけど、ルシルも管理局に入るなら面白くなりそうだ。

「本当かルシル？」

「ああ。三月まではこの家で、それから管理局で世話になるぞ、クロノ執務官」

「わあ！ やったねフェイトちゃん！」

「うん！」

「早速艦長に連絡しておかないとね!！」

あれよあれよと事が進んでいく。

こうして私とルシルの管理局入局が決まった。

「そういえば俺とシャル、どっちが上だ？」

「上って？」

「兄か姉」

ルシルの何気ない疑問。

家族になったことで生まれた一つの問題。

私かルシル、どっちが上になるか。

「やっぱり私でしょ」

「君を姉と呼べと？」

「えっと二人の誕生日っていつなの？」

私とルシルの会話を聞いていたのはが提示した解決法。

「「4月12日」」

「シャルとルシルって同じ誕生日・・・なんだ」

それからどちらが上になるか真剣に口論した。
それは6年経とうが解決しなかった激しく馬鹿馬鹿しい問題だった。

番外編：管理局に入るつよ（後書き）

割とあっさり入局させました。

シャルは初めから入る気満々で、ルシルは無限書庫に惹かれていたためですね。

今回はやはり花見の話にしようかと思います。

チエルシーの使っていた言語はドイツ語です。

Entschuldigung「エントシュルディグング」すいません（呼びかけ）

Guten tag「グーテン・ターク」こんにちは

Darf ich Sie etwas fragen?「

ダルフ・イツヒ・ズイー・エトヴァス・フラージェン?」お尋ねしてよろしいですか?

Verzeihung「フェアツアイウング」ごめんなさい

Fruet mich, Sie kennen zu lernen「

フロイト・ミツヒ、ズイー・ケネンツールルネン」はじめまして

Mein Name ist Chelsea Freiheit「

マイン・ナーメ・イスト・チエルシー・フライハイト」私の名前はチエルシー・フライハイトです

Ich freue mich, Sie zu sehen「

イツヒ・フロイエ・ミツヒ、ズイー・ツー・ゼーエン」お会いでき

て嬉しいです

3rd Episode：プロローグ（前書き）

サウンドステージ搜索の末、売却していたのを思い出しマジ凹み。だったらもうプロローグへ行ってやる、ということになりました。もし、花見エピソードを待っていてくれた方がいたら、この場を借りて謝罪を。

申し訳ありませんでした！！

3rd Episode：プロローグ

第162観測指定世界

今、私とシャルちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの四人は、ある世界での任務に赴いています。

『じゃ改めて今日の任務の説明ね。』

その世界にある遺跡発掘先を二つ回って、発見されたロストロギアを確保。

最寄の基地で詳しい場所を聞いて、モノを受け取りアースラへ帰艦、本局まで護送！』

アースラのエイミーさんから、今日の任務の説明を聞いた私は、

「平和な任務ですねえ」

素直に思ったことを口にした。

『あはは、でもモノがロストロギアだから油断は禁物だよ〜！』

『そういうことだ。平和だからと言って油断はするなよ、なのは。フェイトたちも気をつけてくれ。頼んだぞ』

「了解！」「」「」

そうだよ。油断がもっとも危ないことは私がよく知っている。

「それにしてもよかつたんシャルちゃん？
せつかくの休日やのに、私たちの任務につき合ってもらって？」

「全然オーケー！ アースラで待ってるのも退屈だし、久々にみんなと飛べるんだから最高の休日の過ごし方だよ！」

そう、シャルちゃんの所属はミッドチルダの地上部隊だ。
だから私たちと同じ任務に就くことはまずない。

今回の任務も本当はシャルちゃんが参加する必要はないんだけど、シャルちゃんがそれで良いって言うなら、その厚意に甘えることにしよう。

「こうしてシャルと一緒に飛ぶのは結構久しぶりだよね」

「ああそうかも。もう二年くらい一緒じゃないよね確か」

「もうそんなになるんか？」

「みんな見事に所属している部署がバラバラだもんね。」

シャルちゃんとは本当に久しぶりだよ。でもルシル君とはたまに飛ぶよ」

空戦最速にして最強って噂のルシル君。

一緒に任務に就くとその噂の真相が良く分かったりする。

それから私たちは目的の定置観測基地へと到着。

早速基地へと入ると、

「遠路お疲れ様です！ 本局管理補佐官グリフィス・ロウランです！」

「シヤリオ・フィニーノ通信士です！」

の二人がお出迎え。

まだあとけなさが残る子たちだ。

「ご休憩の準備をしてありますのでこちらへどうぞ」

「あ、平気だよ。すぐに出るから」

気遣いには感謝だけど、私たちならこの程度の飛行はなんでもない。

「私らこれくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。

グリフィス君は知ってるやろ？」

ん？ 何でグリフィス君は知ってるの？

フェイトちゃんも、私と同じような不思議そうな顔をしている。

「もしかして、君ってレティ提督の……ご子息？」

シヤルちゃんが首を傾げながらそう口にする。

そっういえばさつき「グリフィス・ロウラン」って言ったた。

「あ、はい、そうです。フライハイト一等陸尉」

「「あー！ 似てる！」」

「はじめまして！ 母からよく聞いています！」

フェイトちゃんと声が重なる。
よく見るとレティ提督とそっくりだ。

「フィニーノ通信士とは初めてだよね？」

「はい！ でもみなさんのことはよく知ってます！

本局次元航行部隊のエリート魔導師“フェイト・T・ハラウン執務官”！

いくつもの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札“八神はやて捜査官”！

陸上警備隊において最強と名高い陸戦魔導師“シャルロッテ・フライハイト一等陸尉”！

武装隊のトップ航空戦技教導隊所属！ 不屈のエース“高町なのは二等空尉”！

私たちってそんな風に言われてるんだ。

エースだとかエリートだとか、全然知らなかったな。

「陸海空の若手トップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄です~~~~!!」

「あはは」

どう応えていいのか分からないから、とりあえず笑っておこう。

「リインフォースさんのことも聞いてますよー。とっても優秀なデバイスだって」

「ありがとうございます」

リインフォースさんの後継機として生まれたユニゾンデバイス、リインフォース？。

私たちは“リイン”という愛称で呼んでいるはやてちゃんの大事なパートナーだ。

優秀だと褒められてリインちゃんはすごく嬉しそう。

それから幼馴染の話とかして、私たちは観測基地から飛び立った。

十 十 十 十 十 十 十

時空管理局本局、無限書庫

『ユーノ、ルシル。そっちのデータはどうだ？』

アースラのクロノから、俺とユーノへと通信が来た。

今俺たちが調査しているのは“レリック”と名づけられた秘匿級口ストロギアだ。

「もう解析を進めてる。なのはたちが戻る頃には出揃うよ。

でもやっぱりルシルがいるかないかで結構変わってくるよ」

『そうなのか？ ユーノだけで十分な気がするが、なあルシル？』

「んん？ ああそうだな。ユーノは優秀過ぎるからな。俺はあまり
必要ないかも」

好き勝手言ってくれるクロノだが、ユーノが優秀なのは確かだ。正直俺がいなくても大した問題はないと思う。

俺は無限書庫所属だというのに、武装隊か医療班としての時間がはるかに多い。

司書のクセして二等空佐なんて階級を持つ俺は、書庫内では結構浮いている気がする。

「はは、そんなことはないよ。ルシルの知識にはいつも助けられる」

「そう言ってもらえると嬉しいよユーノ」

持つべきものはやはり男友達だ。

「はいよルシル、ユーノ」

アルフが俺たちのもとへと、何冊もの書物を抱えて運んできた。

「ありがとうアルフ」

「それにしてもその子供姿が完全に定着してしまったな」

その小さな体に抱えている書物を受け取って、アルフの頭を撫でる。

「まあね。フェイトの魔力を食わない状態を追求していったらこーなっちゃってな。

あたしはフェイトを守るフェイトの使い魔だけど、フェイトはもう十分強いし、

ひとりじゃないし、ずっとそばにいて守るばかりが守り方じゃないし」

初めて会った頃に比べて本当に成長したなアルフは。そういった考えが出来るまでになったこの子は、本当に良いフェイトの守護者だ。

「家のことやるのも案外楽しいし、来年にはクロノとエイミーも結婚する予定だし、子供とか生まれたら、もっと忙しくなるしね」

「へえそうか、クロノとエイミーが結婚……って結婚!？」

『ア〜ル〜フ〜。その話はまだヒミツだって言ったのに……』

アルフから洩れたクロノとエイミーの結婚という情報に驚愕したがそれが喜ばしいことだから、祝福しないとイケないな。

『何にしてもおめでとうクロノ、エイミー』

「おめでとう。クロノもやっと決心したんだね」

『まあ色々とな』

『……ありがとうユーノ君、ルシル君』

それにしても来年か。それまで俺とシャルは世界に残っていればいいんだが。

友人の大切な日に参加せずに消えるのだけは遠慮願いたいな。

『そ、それはそうとユーノ君とルシル君はどうなってんの？
なのはちゃんやフェイトちゃんと何も無いわけ?』

無理矢理話を変えたなエイミー。
恥ずかしがる必要はないと思うんだけどな。

「え〜と、なのはは僕の恩人で大事な幼なじみです。
友達ですけど、それだけですよ本当に」

なのはもそうだがユーノも全く自分の気持ちに気が付いていないらしい。

いつ二人の感情が友情から恋愛感情になるかは分からないが、当分先のようなな。

『ルシル君は？ フェイトちゃんとは私たちが出会う前からの付き合いでしょ？』

「少しくらいはそついった感情はあるんじゃない？」

「……確かにフェイトに対して特別な感情はある、いや……」

『おおー!!』

『な、本当なのかルシル!?!』

エイミーとクロノ、それだけじゃなくユーノやアルフまでが目を丸くして驚いている。

「でもそれは恋愛とかそういうのじゃない。何というか家族愛ってモノだ。

あの頃は妹のようなフェイトとアルフに幸福を、という思いでいっぱいだった。

だがもう二人には俺の代わり、フェイトたちを守ってくれるクロノたち家族がいる。

だから今の俺には、フェイトへの特別な想いが“あった”というのが正しく合うと思う」

想いは切り捨てていかなければならない。

どれだけ想おうが、手にしようが俺は人間じゃないんだ。

『それはつまり、フェイトちゃんとはこれ以上の進展はない、ってことっ。』

「そう捉えてもらって構いません」

エイミイの言葉に答えると、クロノとエイミイが盛大なため息を吐いた。

何やらコソコソと話しているようだが聞き取れない。

「ルシル、あたしはフェイトとルシルが一緒になってくれると嬉しい。

あたしにとってルシルも大切な家族だからさ」

アルフが少し悲しそうな顔でそう言ってきた。

俺はそれに答えることが出来ず、ただアルフの頭を撫でることしか出来なかった。

十 十 十 十 十 十

定置観測基地から発った私たちは、ロストロギアを受け取る発掘地点へと向かっている。

『皆さんの速度なら、ポイントまでは15分ほどです。ロストロギアの受け取りと、艦船の移動までナビゲートします』

通信士シャーリーからのナビを受けて空を翔る。

すると突然はやてが、管理局入局6年だとか言ってきた。

思い出を語るのは歳をとった証拠だよ、はやて。とは口には出せない。

「中学も今年で卒業だしね」

「卒業後はきつと今より忙しくなるかな」

思えばここまで案外長い時間を過ごした。

この次元世界に召喚されて7年、私にとっては初めての長期契約だからこそ時々不安になる。どこまで私はみんなと過ごせるのか、と。

「私は長期の執務官任務も受けることになるし」

「私も教導隊の一員として、あちこち回ることになるね」

「私は卒業の少し前にミッドの地上にお引越しゃ。

クラナガンミッド首都の南側で、家族6人で暮らせる家。

えーカンジのトコを探し中や。決まったら遊びに来てなー」

今を生きるなのはたちには未来がある。

でも私にはもう戦いの永遠しかない。

どうして私は、今を生きていないのだろう？

「シャルちゃん？ どうしたのシャルちゃん？」

「なのは？ どうしたって何が？」

気が付けばなのはたちが、私の顔を見て戸惑っている。

「シャルさん、泣いてるですう」

「え？」

ラインに言われてようやく気づいた。

私はまた己の心の弱さゆえに泣いていたのだ。

「何でもないよみんな。それより見えてきた。

あそこが・・・ってちよつとあれ！」

目を擦って何でもないと告げ、見えてきた発掘地点に意識を集中させる。

だけどそこで私たちを待っていたのは、黒煙を上げる遺跡だった。

「現場確認。機械兵器らしき未確認体が多数出てます！」

ラインの状況報告を聞いた私たちは、なのはが救助担当、はやてとラインは上空で指揮、私とフェイトは遊撃担当とバラけた。

「中継！ こちら現場！ 発掘地点を襲う不審機械を発見！
強制停止を開始します！」

『本部に中継します！』

なのはとシャーリーとのやり取りの最中、機械兵器より攻撃が放た

れた。

あれしきの攻撃なら、なのはの防御は絶対に抜けない。

「フェイト！」

「うん！ プラズマランサー！ ファイア！」

「氷牙凍羽刃！」

フェイトと私から放たれる攻撃は確かにヒットしたけど、未だ健在だった。

『中継です！ やはり未確認！ 危険認定。破壊許可が出ました！』

「了解！ 発掘員の救護は私となのはちゃんて引き受ける！
フェイトちゃんとシャルちゃんは思いっきりやったって！」

「了解！」

私とフェイトはそれに答えて機械兵器へと攻撃を再開しようとする。ただ、機械兵器よりフィールドエフェクトが発生する。

「まずは様子見つてことで。トロイメライ」

L e u c h t e n P f e i l

“トロイメライ”を振るつて一条の矢を放つ。それは機械兵器へと当たる直前で掻き消えた。

「無効化フィールドってわけか」

Searched jumper field) ジャマーフィールドを検知しました)

“バルディッシュ”からも報告を受ける。
それにしても、

「AMF、アンチ・マギリング・フィールド。
AAAランクの魔法防御を機械兵器が使うなんて」

「あらら。結構なポテンシャル持ってるんだ」

機械兵器ごときが大層な能力を持っているものだ。

私は地面に降り立ち、トロイメライを鞘に収めて対象を見据える。

『はわわッ AMFって言ったら魔法が通用しないってことですよ
!?!』

魔力結合が消されちゃったら、攻撃が通らないですよー!』

はやてとユニゾンしたラインから、念話が送られてくる。
でもその考えは少し甘いな。

「ライン、ちゃんと覚えておいて。戦いの場で「絶対」なんてモノ
は決して存在しない。
どれだけ強力な相手や魔法があつたとしても・・・」

私は鞘に納まったトロイメライを居合いの構えのまま、機械兵器群
へと疾走する。

『ほえ？』

リインの少し間抜けな声が聞こえた。

私が立っていた場所に、私の残像がハッキリとあることにでも驚いているのかな？

これは生前使っていた純粋な身体能力（時々魔力補助）による超加速歩法。

歩法名“閃駆”。名のとおり、閃光の如き速さで駆ける体術。

フライハイト家の古文書に記されていたものを独学で会得した、私だけの力。

魔力補助なしでも使えることから、結構重宝したものだ。

それに魔力補助を使えば、風迅王が使っていた“神速”に匹敵するほどの速さを得られる。

成長した肉体のおかげで、ようやく使えるようになったのだ。

鞘から抜き放った“トロイメライ”で、機械兵器群へと一太刀ずつ入れていく。

おそろくなのはたちには、いくつもの残像が舞っているように見えるはずだと思う。

「必ず何かしらの欠点がある、ということを、ね」

機械兵器群の間を通り抜け、静かに“トロイメライ”を鞘へと納める。

納めた瞬間、機械兵器が全機、音を立てて真つ二つとなり爆発炎上する。

『す、すごいですー！！ かつこいいですよシャルさん！！』

「さすが陸戦最強と謂われるだけあるなあ」

「にははは、もう人間業じゃないよ」

「そうだね。しかも純粋な体術って言うんだから、ちょっと呆れるかも」

リインの興奮とはやての言葉には嬉しく思っただけ、なのはとフェイトの言葉には何も嬉しさが湧かないよ。

それからフェイトが発掘員の人から、ロストロギアが入れたケースを受け取る。

これでまずは一つ目の回収が終わったということだ。

しかしもう一箇所を任されていたのであろうシグナムから通信が来た。

その内容は発掘現場が跡形もなく吹き飛んでいたというものだった。

十 十 十 十 十 十 十

シグナムから応援要請を受けたあたしとシャマルは、シグナムとザフィーラに合流したんだけど、

「ひでえなこりゃ。完全に焼け野原だ。

かなりの範囲に渡っているけど、汚染物質の残留はない。典型的な魔力爆発だな」

その惨状に気が滅入る。人がいなかったただけマシだけど。それにしてもこんな場所にいと、あの日のことを思い出して嫌になる。

「ヴィータ、どうかしたか？」

「ザフィーラ」

背後まで来ていたザフィーラに気づかねえなんて。

「別になんでもねえよ。相変わらずこういつ焼け跡とか好きになれねえだけさ」

3年前のあの日、あたしがもう少ししっかりしていれば……。

「何を怖い顔をしているんだヴィータ？ リインに見たら心配するぞ」

「うるせえな、考え事してんだよ。つか撫でんな」

シャマルとの話も終わったのか、いつの間にかシグナムがそばまで来ていた。

それにも気づかないねえなんてさすがにまずいな。

今はこつちのことだけを考えよう。

「そっぴやシグナム。一緒の任務って結構久しぶりなんだな」

「そうだな。我々みな、担当部署が離れてしまったからな」

何か話題が欲しくて咄嗟に口にしたけど、思えば見事にバラバラに

なつたものだ。

「でも結局は家に帰れば顔を合わせるし、あんま関係ねえけどな」

「緊急任務がない限り休暇は皆揃うしな」

ま、それがいいことだとも思っけどな。

そういう何気ない時間こそが幸せと言っただから。

「む」

「ザフィーラ？」

ザフィーラが何かを察知したのか遠くを見ている。

「森が動いた。座標を伝える。シャマル、調べてくれ」

中継と連絡を取って分かったのが、もう一ヶ所を襲撃した同系の機械兵器が、なのはたちの進行方向の先へと進路を取っているということだった。

『狙いはやはりロストログアなのではないでしょうか』

「そう考えるのが妥当だな」

狙いはロストログアと見て間違いないと結論が出た。

「主はやてとテストロッサ、それにフライハイトとなのは。

この四人が揃って機械兵器ごときに不覚をとることは万に一つもないだろうが」

「運んでいる物がアレだものね。こっちで叩きましょう」

「ああ。観測基地！ 守護騎士から二名出撃する。
シグナムとウィータが迎え撃つ！」

いきなりあたしの名前を出して、背中を叩いてきたシグナム。かなり強く叩きやがったのか涙が出るほどイテエ。

「つつか、あに勝手に決めてんだよ」

「なんだ、将の決定に不服があるのか？」

「・・・ねえけどさ」

文句はない。守るための戦いなら望むところだ。あたしとシグナムははやてたちに連絡をとって、機会兵器掃討へと向かった。

機械兵器の進路へと先回りを終えたあたしとシグナムは、そろそろ現れるであろう機械兵器を待つ。

『特定の反応を追尾して、攻撃範囲にいるものを攻撃するのみのようです。』

ですが対航空戦能力は未確認です。お気をつけて！』

「未確認アンノウンなのはいつものことだ。問題ない」

中継基地からの報告にシグナムが答える。

未確認の機械兵器、これだけであの日のことをハッキリと思い出してしまふ。

3年前のあの日の機械兵器も未確認だった。

全てがいつも通りで、笑って終われるはずの任務だったんだ。

誰もが認める無敵の工^{なのは}ス^はがいつも通りに笑っていたから。

笑っていたからあたしと、たまたまあたしらの部隊に出向していた
セインテストはなのはの状態に気づかなかった。

いや、気づかなかったじゃダメだったんだ。

「ゲホッ、ど……どうしよう……どうし……ゴホゴホ……」

「……なの……は？ 君は……無事なのか？……」

あたしが気づいたときには全てが終わっていた。

任務が終わっての帰還中に奇襲を受けたなのは、今までの無理が
祟ったのかいとも容易く撃墜されてしまった。

それを逸早く気づいたセインテストは、なのはに対する機械兵器の
追撃をかばって、代わりに瀕死のダメージを受けた。

あのセインテストならまず起こりえない事態だった。

けど、それはあいつが普通の状態であればこそ、と付いちまうけど。
そう、なのはだけじゃなくセインテストも人知れず限界を超えてい

たんだ。

あたしが現場へと着いたとき、そこには機械兵器の残骸と倒れ付す
セインテスト。

セインテストの隣で蹲って泣いている血だらけのなのがいた。

「どうしよう……ヴィータちゃん!？」

「おい、うそだろ。くっ、医療班!! 何やってんだよ!! 早く! 早くしねえと死んじゃうよ!!」

あたしはセインテストの腹に開いた穴を必死に押さえて出血を止めようとする。

縦に開いた穴、それは何かの刃物らしきモノで貫かれたということだ。

なのはだっけ酷い怪我なのに、セインテストのことばかりを気にしている。

「がはっ、大……丈夫だよ。この……程度で死ぬ……ような……」

「バカヤロー!! 喋んな!! お前死に掛けてんだぞ!!」

「それより……なのはは?……なのはは……無事なの……か?」

こいつは本当に大バカヤローだ。

こんなになってまで他人を心配するなんて、どこまでのお人好しなんだ。

「大丈夫だよ! ルシル君! 大丈夫だから、だい……じょうぶ……」

なのはは声が出せないほどに泣いてしまった。

だけどセインテストに心配させないためか、必死に嗚咽を堪える。それを聞いたセインテストは意識を手放した。

それからようやく医療班が到着して、セインテストの治療を始めた。ある程度の治療を行ってセインテストの意識が覚醒すると、あいつは自身の治療魔法で重体だった自分を素早く治して2週間で復帰した。その時は本気で驚いたな。

でもその代償なのか、あいつから右目の光が失われてしまった。

あたしはもうあんな思いはしたくねえ。

だからあいつらの邪魔をするようなヤツはすべて……。

「まとめてブツ潰す!!」

あたしらは機械兵器を無事に一掃してなのはたちと合流、アースラへと帰艦した。

十 十 十 十 十 十

「ただいま戻りましたー」

任務も無事に終了してアースラへと帰艦した私たち。レクリエーションルームへと入ると、ものすごい料理の数に圧倒されてしまった。

母さんやアルフ、ルシルにユーノからの「おかえり」。
それを聞くだけで本当に嬉しくなる。

抱きついてきたアルフの頭を撫でながら母さんとルシルへと向かう。

「おつかれさまです母さん。ルシルも元気だった？」

「ええ、フェイトもお疲れ様」

「お疲れフェイト。ああ、体調の方なら問題はないよ」

ルシルとこうして直接会うのは一体いつ以来だろう。

休暇が重なっても「やることがある」って言って度々どこかの世界に行っていた。

「俺のことより、今はゆっくりと食事を楽しんでくれ」

「え、うん」

私はルシルに言われるままになのはたちのもとへと向かった。
するとシャルがルシルのそばへと来て、すごく真剣な顔で話している。

けど二人は姉弟？なんだから以前のようにすごく気になったりはしないんだけど。

でもだからこそ、あんな真剣な顔で二人が話す内容が気になる。

「「おつかれ」

「ひゃっ」

私がルシルとシャルに気を取られていると、なのはとはやてが私の

頬に冷たいコップを押し当ててきた。
さすがにそれには驚いて変な声を出してしまった。

「もう、何するの？　なのは、はやて」

少し怒り気味に言うと二人は笑いながら謝ってきた。
そうしたら私も何だか可笑しくなって笑ってしまった。

「どないしたんフェイトちゃん？」

「何かぼうつとしてたけど」

「え？　うつん、何でもないよ」

二人が心配してくれるけど、大したことじゃないから気にしないように言っておいた。

そう、これから先もずっとみんなでこうして楽しい時間が過ごせる
と思っていたから。

でもその時間は長くは続かなかった。

この二年後、ルシルとシャルは管理局を辞めて、私たちの前から姿
を消した。

3rd Episode:プロローグ?

新暦73年4月 時空管理局本局

「シャル、君だけでもこのまま管理局に残っていいんだぞ？」

「ううん。ルシルにだけ負担は掛けられないから。」

それに大事な弟の面倒を見るのはお姉ちゃんの務めだしね」

俺と姉シャルロッテは、総務統括官であるリンディさんのいる総務部へと向かっている。

二人が手にしているのは辞表。これから慣れしたんだ管理局を辞めるために行くのだ。

「俺一人でも十分だ。負担なんてものはそもそも契約執行中の界律オの守護神シタチにない。それに本契約ではない以上、態々二人で出向く必要もないからな」

辞職する最大の理由は、抑止力である俺とシャルの行動範囲が次元世界に及んだことでの、この次元世界に散る界律との契約数だ。

管理局に入って二年目くらいしてから様々な界律からの契約要請が来た。

ここ最近までは休日などを利用してシャルと二人で分担して何とか捌いていたのだが、管理局での仕事の傍らではもう限界なまでの数になってしまっていた。

これ以上は管理局での活動に支障が出ると判断した俺は、独り管理局を辞めるために辞表を書いていたのをシャルに発見され、それは

もう凄まじいプロレス技のコンボで撃沈されたのだ。
それから二人して相談、結局はシャルも辞めると言い出し、今に至る。

「私一人だけ残って楽しんじゃられないよ。」

それに、ルシルだって本当はこのまま残りたいんでしょ？」

「どうだろうな？ 確かになかなか楽しめたと思うが・・・」

そうだな。残りたいという思いは小さいが、フェイトたちと離れるのは少し辛いかもな。

さすがの俺もここまであの子達と付き合えばさすがに名残惜しく思う。

「ふうん。顔にはまだいたいって書いてあるけどね」

シャルが上目遣いで俺を見て笑っている。

そこまでハツキリと顔に出るのも俺としては問題だな。

「ああ認めるよ。俺はまだあの子達と一緒にいたい。」

だがもう限界だ。管理局と守護神、両立することはもう出来ない」

「・・・うん」

だからこそもう管理局にはいられない。

ようやく総務部へと着き、リンディさんの姿を探す。

しかし見当たらないため、近くにいた局員へと聞いてみた。

「すみません。ハラオウン総務統括官はどちらに？」

「ああこれはセインテスト一等空佐、フライハイト三等陸佐、お疲れ様です。
ハラオウン総務統括官なら、休憩所の方でお休みになっていると思います」

「そうか、ありがとう」

局員に礼を述べて総務部を後にして近くの休憩所へと向かう。

「ルシル。あそこにいるよ」

シャルが指差すところに目を向けると、リンデイさんがお茶を幸せそうに飲んでいた。

俺たちは休憩中のリンデイさんのもとへ向かう。

「ハラオウン総務統括官、今お時間よろしいですか？」

シャルと二人して敬礼をし、時間の余裕があるか確認する。
休憩中だからこそその確認だ。まあリンデイさんの様子からして必要ないとも思うが。

「あーるシリオン君、シャルロッテさん。ええ、大丈夫よ。どうぞ座って座って」

それより私相手にそんな堅苦しい挨拶は抜きでいいのよ?」

リンデイさんに促されるままに椅子へと座り、「お茶はいかが?」
と聞かれたが、それはもう丁重にお断りした。

「それで今日はどうかしたのかしら?」

あ!　もしかしてフェイトとのお付き合いの許可でも貰いに来たの

かしら
」

嬉しそうに喋るリンディさんだが、俺たちの話はそれじゃない。というか、それなら態々シャルを連れてきたりしない。

「いえ。お渡ししたいものがありましたので」

「何かしら？」

シャルと同時に辞表の入った封筒をリンディさんとの間にあるテーブルの上に置く。

それを手にしてリンディさんの表情が一気に驚愕の色へと変わった。

「辞表！？ ちょ、これはどういふことなのルシリオン君、シャルロツテさん！？」

「そのままの意味です」

「今本日を持って時空管理局を辞めさせていただきたく来ました」

リンディさんは完全に混乱していた。

だが俺とシャルの言葉を聞き、椅子へと座り直してため息を吐いた。それからお茶を飲んだことで少しは落ち着いたようだ。

「お話を、理由を聞かせてもらってもいいかしら？」

少し声が震えているようだが、そこは気にしない方がいいのだろう。

「それが私たちにとって必要なことだからです。

すいません。今までお世話になっておきながらこのようなこと……

「シャルも少し声が震えている。やはりシャルだけでも残させるべきだろう。」

「シャルシル。これはもうあなただけの問題じゃないから……分かった」

そう言われたらもう何も言うことは出来ない。シャルの決意もきっちりと受け取っておこう。

「考え直せないのかしら？ あなたたち二人は局内でもかなり重要な子たちなの。」

空戦SSランクのルシリオン君、陸戦SSランクのシャルロットさん。

あなたたちの力を必要としている部署は本当に多いのよ」

「申し訳ありません。そのことについては十分に分かっているつもりです。」

ですが管理局を辞さなければならぬ理由がどうしてもあるのです。詳しくは話せないのですが、それが俺とシャルにどうしても必要なんです」

「リンディさん、本当にごめんなさい。」

どうか管理局を辞めることを許してください。お願いします」

椅子から立ち上がって二人して頭を下げる。

今の休憩所の空気はかなり重く、入ってきた局員はすぐさまここを後にしていく。

少し悪い気もするがそこは許してもらおう。

しばらく沈黙が続き、ようやくリンデイさんが口を開いた。

「……わかりました。それがあなたたちに必要なことなら認めます。」

正直止めたいのだけれど、聞かないのでしょうか？」

黙って頷くことしか出来なかった。

「総務統括官として、あなたたちの辞表を正式に受理します。本当によろしいのね？ ルシリオン君、シャルロットさん」

「はい」

返事をしてもう一度リンデイさんに頭を下げる。

リンデイさんは俺とシャルの頭を抱いて優しく撫でてくれた。

「お世話になりました！！」

この日、俺とシャルは8年間勤めた時空管理局を辞めた。

十 十 十 十 十 十

リンデイさんと別れたあと、しばらく本局内を歩いた。

ここへはあまり来たことがないけど、知り合いはいるために挨拶回りをしているのだ。

本局の挨拶回りが終わったら今度はミッド地上へと赴き、また挨拶回りとなる。

でも私とルシルは、なのはたちのいる部署にだけは行けなかった。

「はあ、リインフォースに偉そうに言っておきながら、自分のことになるとダメね」

かつての冬の日、リインフォースに言ったことを思い出して反省。別れをしないと逆に悲しみが大きくなる、か。

「別に永遠の別れとはならないから必要ないんじゃないか？
そういう別れの挨拶は、俺たちの本契約が決定してからでもいいはずだ」

「そうなんだけどねえ」

それはそれで何か嫌だな。
そういうのはあまり考えたくないよ。

「ルシル！ シャル！」

こんな人のいるところで私とルシルの名前を叫ぶのはどこのどいつだ？と思ひ、声のした方へと視線を移すとそこにはユーノが走っている姿があった。

そして私たちのところまで全力疾走してきたユーノは、私たちの前でむせてしまっている。

「はあはあはあ・・・どういうことだよ！！
クロノから聞いたぞ！ 二人が管理局を辞めるって！！」

リンディさん、まさかみんなに教えてしまっているんじゃない？

送別会は必要ないですから、なのはたちには連絡しないでください
って言ったのに……。

「まずは落ち着けユーノ。こんな人のいるところでそんな大きい声
を出すな」

「これが落ち着いていられるか！

なんで黙って……相談してくれなかったんだよ！！ 僕たちは友
達だろ！！」

「ユーノ、まずは場所を移そう？ さすがにここだと迷惑になるよ」

「はあはあはあ……はあ、わかった」

近くにあった飲食店へと入り、私たちが辞める経緯を話した。

もちろん“テストメント界律の守護神”なんて単語と、本当のことは話せなかつ
たけど。

「本当に辞めるんだな。でも二人の決意はもう分かっかたら僕は止
めない。

でも一言くらいは欲しかったよルシル、シャル」

「「ごめん」」

店を出て、ユーノが無限書庫のあるエリアへと戻っていくのを私た
ちは黙って見ていた。

やばい、正直大声で泣いてしまいそうだ。

もしここでなのはたちと会えば、私は泣く自信がある。

おそらくリンディさんからなのはたちへと連絡がいつているはずだ。

泣く姿はこれ以上は見せたくない。だけど・・・

「会い・・・たい。やっぱり会いたい」

胸が苦しい。永遠のお別れじゃない。

だけど、なのは達と離れることがこんなに辛い。苦しい。

十 十 十 十 十 十

「なんで・・・なんでシャルちゃん！！ ルシル君！！」

私は今、シャルちゃんの通信端末へと何度もかけながら本局内を走っている。

事の発端はエイミーさんからのメール。

内容は“シャルちゃんとルシル君が管理局を辞めた”というものだった。

もちろん最初は信じなかった。でもリンディさんに確認すると、シャルちゃんたちから受け取った辞表をすでに受理したとのことだった。

「ごめんなさい！！」

廊下の角で他の局員とぶつかりそうになった。

私は謝罪の言葉を口にしながらも止まらずに走り続ける。

「なんで、何で繋がらないの！？ シャルちゃん、ルシル君・・・
どうして！？」

「なのは！！」

「なのはちゃん！」

一度止まって端末を操作しているところにフェイトちゃんとはやてちゃんが姿を現す。

二人とも私と同じように端末を手に、肩で息をしながら私のもとへと走ってきた。

どうやらフェイトちゃんたちもシャルちゃんたちを探しているみたいだ。

「なのは、エイミーからのメール見た!？」

「うん！ リンディさんはもうシャルちゃんたちの辞表を受理したって！」

「なんで・・・シャルちゃんとルシル君はこんな黙って決めるん!？」

私たちの声に局員の人たちが驚いて私たちを見る。さすがに恥ずかしかったので場所を移した。

「本局内にいるのは間違いないみたい」

フェイトちゃんが少し震えた声で教えてくれた。

「今、本局におけるシャルとザフィーラにも探してもらえよう頼んだから」

はやてちゃんが端末を畳んで、両手で包み込むながらため息を吐いた。

私もさつきからシャルちゃんとルシル君の端末に交互の掛けているんだけど繋がらない。

「ダメ、繋がらない。何でシャルちゃんとルシル君、黙ってこんなこと?」

「酷いよ。何も相談してくれないなんて。ルシルとシャルのバカ」

「私の作る部隊に協力してくれるって言ったのに」

シャルちゃんとルシル君のことを考える。

今思えば、最近シャルちゃんとルシル君の行動は最近少し不自然だったと思う。

休日が重なれば絶対に会っていたのに、ここ最近は全く会っていない。

それによく二人でどこかへと出掛けていたのもわかっている。

でもそれは遊びとかじゃなくて、何か重要なことだということも何となく気づいていた。

もしかしたらそれに何か関係しているんじゃないかって思うけど何も聞いていない。

思考の最中、突如鳴り出した通信端末に驚きながらもコールを受ける。

「ユーノ君からだ。もしも・・・え!?! うん! そこなら近いからすぐだよ!

うんうん! ありがとうユーノ君!」

「まさか・・・!」

「うん！ シャルちゃんとルシル君の居場所がわかった！」

「なら急がなあかなー!!」

シャルちゃんとルシル君がいるという区画へと私たちは全力で走った。

十
十
十
十
十
十

ユーノから教えてもらった区画へと来た私たちはルシルたちを探す。はやてもシャマルたちに連絡をとって、この区画に呼び寄せたとのことだ。

「……いた!!」

なのはが指を指して叫ぶ。

私とはやてもそちらへと視線を向ける。

そこは局員の憩いの場としてある公園だった。

そしてその公園に、確かにルシルとシャルの二人の姿があった。

私たちは急いで二人のもとへと走った。

それに気づいたシャルが私たちのもとへと走ってきた。

「なのは！ フェイト！ はやて！」

「「「うわあっ!!」「」」

全力疾走で飛び込んできたシャルを私たちが受け止める。
その場に倒れこむ私たち。それを見ていた他の局員たちがクスクス
笑っている。

「おいおいシャル。今のは危なすぎだろ」

ルシルがゆっくりと歩み寄ってきた。

私は立ち上がってルシルの真ん前へと立ちはだかる。

「どうして何も相談しないで辞めたの？」

今、私の中にあるのは怒りに近い悲しみだ。

確かに最近の私たちは離れ離れが続いてきたけど、この仕打ちはいくらなんでもあんまりだ。

だから私は半ば睨むようにルシルを見据える。

「すまなかった。だが初めから辞めると決めていたから、相談とかは必要ないと思った」

「でも！ それでも話して欲しかったよ！！」

「そうや！ 私らがどれだけ心配したか！！」

なのはとはやても私のようにルシル君を睨む。

みんな身長の高いルシル君を見上げるような格好となっている。

「待って！ ルシルだけの責任じゃないよ！ 私も同罪だから！」

シャルが背後から叫ぶ。

それを聞いた私たちは冷静になり、ルシルだけを責めていたことに

気づく。

「「ごめんなさい」「」

「責められるようなことをした俺が悪い。だから謝る必要はないよ」

三人でルシルへと謝ると、ルシルは私たちの頭を撫でて微笑んだ。やっぱりいくつになってもルシルに頭を撫でられるのが一番気持ちいい。

「ごめんなのは、フェイト、はやて。

黙って辞めたことには本当に悪いと思ってる。それは本当だよ。でも、これはどうしても必要なことなんだよ」

シャルは俯いたまま囁くようにしてそう口にした。

辞めることがシャルたちにとって必要なことなんて意味がわからない。

「何で辞める必要があるの？ それは管理局にいたら出来ないことなの？」

「そうや、一般人にならなあかん理由でもあるん？」

「そうだな。管理局のような組織に入っていると行動が制限されてしまう。」

今の俺とシャルにとってはそれがどうしても枷になってしまっただ

なのはとはやての疑問にルシルが答える。

そうまでしないと出来ないことが気になったから、今度は私が聞いてみた。

「ルシルとシャルは一体何をしようとしているの？
それって休日にいつも出掛けていたことと関係があるの？」

「そっか、知ってたんだ。そうだよ。私とルシルが別の世界へと行
っていたことと関係ある。」

私とルシルにはどうしてもやらないといけないコトがあるんだ。
でも休日だけの時間じゃ圧倒的に足りなくなってきたんだ。だから
・・・」

「管理局を辞めて、そのやらないといけないコトのための時間を作る
うとした」

「うん」

私の質問に答えたシャルがそう話す。

具体的なことはどうしても話せないみたいだけど、犯罪行為じゃない
ことだけは確かだ。

この二人がそんなことをするわけがないのだから。

「シャルちゃん、ルシル君、もう会えないの？」

なのはの言葉に私は嫌な想像をした。

二度とルシルたちに会えないそんな嫌な想像を。

「そんなわけないだろ。いつかきつとまた会える。」

そう何度もここへは帰っては来れないだろうが、それでもこれで最
後じゃないのは確かだよ」

「そうだよなのは！ 私たちはまた会えるって！

だから少しの間だけお別れ。帰ってきたら「お帰り」って言うって
よねー！」

「うんー！」

このあとルシルとシャルの送別会が開かれた。

急いで帰ってきたシグナムがシャルに模擬戦を挑んで丸めた雑誌で叩き合ったり、ルシルはシャマルと最後まで仕事の話をして、ヴィー
ータのツッコミを受けて吹っ飛んだり、そんな楽しく騒がしい送別
会だった。

そして翌日、ルシルとシャルは静かに私たちのもとから去っていっ
た。

3rd Episode：高き破滅より来たる大罪

新暦75年 5月4日 とある有人世界

次元世界を管理する“時空管理局”にとっては管理外世界となるある一国で今、未曾有の災害が発生している。

しかしそれは自然による天災ではなく、その地に住む人間による人災でもない。

それは世界が遣わした絶対なる抑止力ちからによる神罰という名の災害だった。

其れらは人の姿をしておきながら、神の如き力を振るい、悪魔の如き行いを成す者たち。

白き者は同じく白く輝く十字架を振るいて、この国を侵略した他世界の人間を蹂躪し、黒き者は何も無い宙より、無数の武器を呼び寄せては侵略者の兵器を破壊していく。

「大丈夫？ ここは危ないから避難しなさい」

「あ、あり・・・がとう、ありがとう白いお姉ちゃん！」

白き者が傷ついた少女を癒し避難させる。

それを見ていた黒き者が侵略者たちへと仮面の内から再度視線を向ける。

その向けられた目に見えない視線に侵略者たちは慄いた。

「残りは貴様たちだけのようだな」

「はあはあはあ おおおおおお!!」

為す術もなくその生を奪われていく侵略者たちは、それでも必死に死に抗おうと得物を取る。

だが侵略者たちの攻撃は確かに当たっているものの、何一つとしてその存在に傷を与えていない。

「ば、化け物め……この化け物めえええー！！！！」

おそらく戦いを挑んでくる者達の中で最も実力のあるであろう青年が叫ぶ。

手にする剣はすでに折れて、その体も満身創痍だ。

「……化け物で結構だ。キサマたち侵略者はこの世界の怒りを買った。

それゆえの滅びだと覚悟せよ」

「怨みたいのなら怨みなさい」

その言葉を最後として白き者は消える。

その場に残った黒き者はゆっくりと左腕を天へと伸ばし、そして小さく囁いた。

「コード・ニーツホッグ凶竜の獠牙」

天より現れたるのは、先程まで多くの侵略者たちの兵器を破壊していた無数の武器。

今度は雨あられのように降ってくるのではなく、無数の武器が集まり“竜”のような姿をとっている。

「残念だがアウトだ」

黒き者は指を鳴らして無数の武器で構成された“竜”を逃げ惑う侵略者たちに放つ。

一瞬の阿鼻叫喚の果て、この一国より侵略者は誰一人としていなくなつた。

「契約執行完了」

黒き者、4th・テストメント・ルシリオンはそう静かに告げてこの世界から消えた。

とある無人世界

「はあ、こんな契約^{こと}で態々^{わたしたち}界律の守護神を呼ばないでほしいよ」

私とルシルが管理局を辞めてもう二年は経つ。

管理局を辞めたことで守護神としての“契約”を多くこなすことが出来るようになった。

その分、本当に下らない契約内容も増えてしまったけど。

その世界が持つ抑止力でも十分なことにすら“界律^{わたしたち}の守護神”が呼ばれる。

これでは本当に何でも屋になってしまいかもしれない。今更な気も

するけど……。

「なのはたち……元気かなあ？」

頭の中に浮かぶのは友人たちの顔。

二年前に別れてから当然の如く会っていない。

一応メールのやり取りはしているけど、ミッドから遠のくと通信端末が繋がらなくなる。

回数としてはこの二年でたったの八回、一度繋がると膨大なメールが一気に届いたりする。

それに対処するのは大変だけど、でもみんなと繋がっていると嬉しいと思う。

「あの子達なら元気に決まってるだろ」

私の背後に突如として現れたルシル。

私は振り返って労いと謝罪の言葉を口にする。

「お疲れ様ルシル。ごめんね、最後を任せちゃって」

「構わない。これが第四の力わたしの役目だ」

そう言っつてルシルも私の隣に座り込む。

眼下に広がるのは、私たちには勿体ないほどの美しい天然の花畑。その綺麗な景色が私の心にグツとくる。

「気持ちいいね」

「ああ。私たちには勿体ないほどの心地よさだ」

この二年、私たちは多くの命を奪ってきた。

それが滅ぼされる側にとって自業自得なことであろうと理不尽なことであろうと、だ。

だから私は、なのはたちと友達だということに負い目を感じ始めていた。

「一度会いに行くか、みんなに？」

ルシルがなのはたちに会いに行くかと訊いてくる。

本音を言えば会いに行きたい。でも今の私たちに、みんなと会える資格はあるのだろうか。

こんな血に塗れ、多くの命を奪い取ってきた私に。

「……時間、考える時間を　　！！」

私の通信端末からメールの着信音が鳴り響く。

そうか、この世界はミッドからさほど離れていないのか。

「メールの確認、したほうがいいんじゃないか？」

「うん」

通信端末を開いてメールの内容を確認する。

一番古いメールから一件一件読んでいったら、最近のメールまでに一時間もかかった。

『シャルちゃん、ルシル君、元気？ 私はすごく元気だよ！！』

このメールを読んでいるとき、二人は何をしているのかな？

今、私ははやてちゃんが設立した部隊“機動六課”の新人演習を終えたとだよ。

それでね 』

「そっか、はやてはちゃんと自分の部隊を持てたんだね」

なのはのメールを読んで、自然と笑みがこぼれる。

はやてが部隊を設立したのはごく最近のことだった。

本当なら私もその“機動六課”の一員になる予定だったんだけどね。

「へえ、それにしてもメンバーはかなり豪勢だな。

お、スバルとエリオ、キャロも・・・はは、ヴァイスもいるのか！
ん？ ティアナ・ランスター・・・ランスターってまさか・・・」

ルシルにも通信端末の画面を見せてメールを読ませる。

するとティアナって子のこと、何か深く考え込んだじゃった。

それにしてもこのメンバーには私もさすがに驚いた。

なのは、フェイト、はやてにシグナムたち守護騎士。

この“機動六課”は明らかに過剰戦力だ。

私も入っていたらさらにすごいことになっていた。

一体どうしてそこまでのメンバーを集めるのか理由が分からない。

何か嫌な予感がする。

『 それで、もしよかつたら一度帰ってきてほしいな、って話してるの。』

それじゃまたメールするから。二人と再会できるの楽しみにしてるよー！』

なのはのメールはそう締めくくられていた。

再会を楽しみにしている、か。

「現時点において界律との契約はもう残っていない。しばらくは解放されるはずだ。どうする、やはり一度帰って会っておくか？」

ルシルは立ち上がって私に左手を差し出す。

私はその手を取って立ち上がった。

「でも、私にはもう友達としての資格があるかどうか・・・」

「素直になればいい。会いたいなら会いに行く。」

会いたくないならこのまま次の契約が発生するまで待機だ」

ルシルも自分の通信端末に送られてきたメールを読み終え、広い空へと視線を移す。

「・・・じゃあ」

私も青く広がる空を見上げた。

§再会§

新暦75年 5月13日 ミッドチルダ エーリム山岳丘陵地区
機動六課保有ヘリ内

「ヴァイス君！ 私も出るよ！ フェイト隊長と空を抑える！！」
私たちは今、機動六課初任務の現場であるエーリム山岳丘陵地区へと来ている。

私はヘリのパイロットである陸曹のヴァイス君に声をかけた。

六課の初任務は、ここエーリム山岳丘陵地区を走る貨物車両に積まれているロストロギア“レリック”の回収。

でもその“レリック”を狙った機械兵器“ガジェット”が貨物車両を占拠している。

それを排除して暴走している貨物車両を停止させることも私たちの任務だ。

本当なら私も、新人たちスバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人と一緒に貨物車両へと行きたかったんだけど、航空型の“ガジェット？型”が現れたために空に上がることになった。

「うっす、なのはさん。お願いします」

ヘリのメインハッチが開き、私は新人たちに声をかける。

「じゃ、ちょっと出てくるけど、みんなも頑張ってズバツとやっつけちゃおう！」

「はい！！！！」

「は、はい！」

スバル、ティアナ、エリオは少し緊張気味だけど元気よく返事をした。

だけどキャラは三人より遅れて返事をした。三人よりずっと緊張している所為だ。

私はキャラのそばまで歩み寄って、キャラの頬にそっと両手を添える。

「キャラ、大丈夫、そんなに緊張しなくても。

離れてても通信で繋がってる。独りじゃないからピンチのときは助け合えるし、キャラの魔法はみんな守ってあげられる優しくて強い力なんだから、ね？

だからきつと大丈夫だよ」

「なのはさん・・・はい!!」

うん、これで心配はない。

今のキャラの顔は本当にいい顔になっている。

「それじゃ行ってくるね」

私はへりから飛び降り、長年のパートナーである“レイジングハート”を起動させる。

Standby Ready

「レイジングハート、セーットアップ!!」

Barrier Jacket , Aggressive Mode

バリアジャケットへの変身を終えて

「スターズ1 高町なのは、いきます！」

臨戦態勢に移る。

そして“ガジェット”を掃討するため、少し遅れて来たフェイトちゃんと合流する。

『同じ空は久しぶりだねフェイトちゃん』

『うん、なのは』

一緒に空を飛ぶのは本当に久しぶりだ。

でも嬉しさの反面少し悲しい。一緒に飛ぶということは有事が起きたことを意味するから。

それでも嬉しさのほろが上回るんだけどね。

『来た。こっちは任せてなのは』

『うん。それじゃ私はこっち担当ってことで』

それぞれにアプローチしてきたガジェット？型との戦闘に、私とフェイトちゃんは入った。

十 十 十 十 十 十

なのはさんも出撃したことですし、わたしも任された仕事をするです。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。」

そして“レリック”を安全に確保すること」

新人のみなさんにわかりやすいように小型のモニターを出して説明を続ける。

「ですからスターズ分隊とライトニング分隊、二人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら車両の前後から中央に向かうです。

“レリック”はここ、7両目の重要貨物室。スターズかライトニング、先に到達した方が確保するですよ！」

「……はい!!」「……」

モニターに詳しい場所を表示させてみなさんに教える。
わたしの任務の説明をみなさんは強く頷いて応えた。

「で、わたしも現場に降りて管制を担当するです」

騎士甲冑へと変身して、みなさんと一緒に降りる準備をする。

『さあて新人ども。隊長さんたちが空を抑えてくれるおかげで安全無事に降下ポイントまで到着だ。準備はいいか!?!』

「……はい!!」「……」

ヘリのパイロットを務めるヴァイス陸曹の言葉にみなさんが答える。
まずハッチに立つのはスターズのお二人、スバルとティアナ。

「スターズ3! スバル・ナカジマ!」

「スターズ4! ティアナ・ランスター!」

「「いきますー!!」」

顔を見合わせたお二人がへりから飛び降りる。

変身を終えたお二人が無事に貨物車両へと降り立ったのを確認した。

『次ライトニング！ チビども、気をつけてな!』

「「はい!!」」

貨物車両の反対側へと移動して、ヴァイス陸曹の激励がとぶ。

お次はライトニングのお二人、エリオとキャラ。

このお二人が出たあとにわたしも出撃するです。

「・・・一緒に降りようか?」

「え、うん!!」

飛び降りることに戸惑っているキャラに、優しくエリオが手を差し出す。

エリオはすごく優しいですねえ。

キャラは差し出された手を取って覚悟を決めたみたいです。

「ライトニング3！ エリオ・モンディアル!」

「ライトニング4！ キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ!」

「「いきますー!!」」

新人のみなさんの出撃はこれで完了ですう。

『リン曹長もお気をつけて!』

「はいですう!」

わたしもみなさんを追うようにへりから飛び立った。

十 十 十 十 十 十 十

『スターズF、ライトニングF、降下完了しました』

みんなの降下が完了したことをロングアーチから報告を受けた。

なら私となのはがやることは、ガジェット?型が貨物車両へと向かうのを阻止することだ。

私となのはが次々と増えてくるガジェット?型を破壊しながら空を翔る。

そのとき、

『こちらロングアーチ! 新たなガジェット30機と・・・それと、何・・・これ?』

ロングアーチからガジェット?型増援の報が入る。

けど少し様子がおかしい。「ガジェット」と言ったシャーリー。でもすぐにシャーリーの気持ちが変わった。

『フェイトちゃん。あれって・・・眼?』

『う、うん。たぶんだけど・・・まるで人の眼みたい』

私となのはが相手にしていたガジェット？型に追隨するかのよう
に人の眼のような形をした未確認アシノウンが飛んでいる。

数は2メートルほどの眼が1、1メートルほどの眼が35といった
感じた。

『とりあえず敵であることは間違いないと思う』

「『そうだね』こちらスターズ1、増援ガジェット及び未確認アシノウンと交
戦に入ります！」

「ライトニング1、同じく交戦に入ります！ 新人たちの方は任せ
るよ！」

『了解しました。お気をつけて！！』

なのはと二人で再度交戦に入った。

まずはガジェット？型への攻撃を放ったけど、ガジェット？型へと
当たる直前で小さい眼アシノウンの内4つが十字の盾となってそれを防ぐ。
さっきまでの動きと違い、かなり速く動く。

H a k e n S l a s h

ならば、と私は大きい方の眼へと斬り掛かる。

大きいのはこの一つだけ、おそらくこれが眼のリーダーだと推測す
る。

ならこの一つを落とせば、小さい方に何らかの影響が出ると判断し
ての攻撃だった。

「はああああー!!」

私の攻撃に対して眼は何の抵抗もせず、^{アンソウン}“バルディッシュ”の刃を受け入れた。

「・・・え？」

確かに何かが描かれた瞳孔部分に攻撃が入っているのに、全くダメージを受けた様子がない。

私はそれに何かを感じて無意識に距離を取った。

そして次の瞬間、その大きい眼から^{アンソウン}白い砲撃が放たれた。

S o n i c M o v e

すぐさま射線上から離脱して難を逃れた。

もしあのまま止まっていたらどうなっていたかわからない。

「ダメ! 逃げてフェイトちゃん!!」

ガジェット?型を相手にしているのはからの叫びが頭の中に響く。私は考えるよりも先に体を動かして、その場から再度離脱した。するとさっきまで私がいた場所に白い砲撃が通過していった。

「一体・・・な!？」

何故回避したはずの砲撃が再度私のもとへと戻ってきたか、その理由を見た私は驚愕した。

「くっ」

再び私のもとへといくつもの砲撃が襲い掛かってきた。その砲撃の数は次々と増えていき、襲い掛かってくる角度もまた増えてくる。

私は動きを止めることなく砲撃を回避し続ける。何故なら、

『フェイトちゃん！　まずは砲撃を反射する小さいのから落とさないとダメかも！！』

そう、小さい眼アンソウが反射板の役割として動いていたのだ。反射した砲撃は幾条にも分かれて数を増やし、さらに別の眼アンソウに反射してさらに数を、角度を増やしていく。

それはまるで私を捕らえるための、砲撃による檻のようなものだった。

『（これは結構キツイかも・・・）うん！』

リミッターを掛けられている私にとって、この眼アンソウたちは厄介だった。

十　十　十　十　十　十

増援として現れたガジェット？型を掃討し終えて、私はフェイトちゃんのものとへと翔ける。

フェイトちゃんは目にも留まらぬ速さで、今なお続く幾条もの砲撃を回避しては小さい眼アンソウを斬りつける。

「レイジングハート！　Short Buster シュート！！」

私も反射砲撃の要である小さい眼へと砲撃を放つ。

さつきはシューターを完全に防いだことから、今度は威力の高いバスターを食らわせる。
でも、

「うそっ!?!」

小さい眼は、私の砲撃をも反射して自らの攻撃として利用し始めた。

「なのは! 大きい方をお願い! 小さいのは私が引き付けるから!」

「フェイトちゃん・・・わかった!!」

フェイトちゃんへの攻撃を行っているのは小さい眼だけ。

大きい方は白い砲撃を放つてからは一切の動きを見せていない。

もしかすると、小さいのを操作しているから動きが取れないのだろうか、と推測する。

だったら今こそ破壊するチャンスだ。

「レイジングハート、今出せる魔力でデイベインバスター、いくよ」

All right , My Master . Devine
Buster

“レイジングハート”を大きい眼へと向けたところで、瞳孔部分の前面に周囲の魔力が集束していく。
間違いない、アレは集束砲だ。

「集束砲!? そんなものまで!?!」

さすがにこれには驚きを隠せない。
もし放たれてしまったら今の私たちに防ぐ術はない。

Devine Buster

何としても集束砲のチャージを妨害するためにバスターを放つ。
でも眼アンソウンはあるうことかチャージ中にも関わらず、転移してバスターを回避した。

「はやてちゃん！ リミッ !!!」

最後まで口に出ることが出来ずに、眼アンソウンから集束砲が放たれた。
おそらくSランクはあるうかなり大きい砲撃だった。

集束砲が向かう先にはリインとフォワード四人のいる貨物車両。
リイン、スバルとティアナは車両内、エリオは球体型ガジェットを破壊し終え、キャロはフリードリヒの背にいる。
エリオとキャロは砲撃に気がついていてるけど、今からだともう全てが間に合わない。

『心配するな。私が防いでみせる』

頭の中に響いたのは、2年前に別れて以来会うことのなかった幼なじみの一人の声。
どうして？だとかそんなことを考えるより先に、私の中に安堵が広がっていく。

そして貨物車両の側面に、蒼く輝く巨大な円盾が現れた。
眼が放った砲撃を容易く防いだ盾が散っていく。

「ほらっ、ボサツとしない。なのは、フェイト」

上空から聞こえたのはもう一人の別れていた幼なじみの声。

次の瞬間、フェイトちゃんを襲っていた小さい眼のいくつかが真つ二つに斬り裂かれた。

それは一瞬の出来事。上空から下方へと何かが通り過ぎたように見えた。

私はその何かを確認するため、大地の方へと視線を向ける。

「っ！ シャルちゃん!!」

「シャル!!」

フェイトちゃんもシャルちゃんを確認したことで、シャルちゃんの名前を呼んだ。

シャルちゃんによって眼のいくつかが破壊されたことで、反射砲撃から解放されたからだろうか。

「お久さっ！ ってあれ？ 二人とも随分と魔力低くない？」

そこには以前とは違って、両翼となった真紅の翼を背にするシャルちゃんがいた。

十
十
十
十
十
十

「一閃必中!!!」

キャロの補助魔法によってフィールド貫通と強化が施されたストラ
ーダを構え、ガジェットへと突撃する。

ブースターの推進力によって加速されたストラーダの一撃は、容易
くガジェットを貫いた。

「でえええりやああああ!!!」

もちろんそれだけで倒せるガジェットじゃない。

完全に止めを刺すために、“ストラーダ”を上へと振りぬいて爆散
させた。

「やったね、エリオ君!!!」

フリードの背にいるキャロが笑いかけてくれる。

僕はそれに応えようとして見た。

この貨物車両へと砲撃が迫ってきていたのを。

僕の表情を見て、キャロも後ろに迫ってきている砲撃に気づいた。
でもそれだけだ。僕たちにそれを防ぐ手立てはなかった。

「そんな・・・」

諦めるしかない、とそう思ったとき、

「心配するな。私が防いでみせる」

「え?」

突如聞こえた声にキャロと二人して辺りを見回す。
そして見つけた。長い銀髪を靡かせて宙に浮く人影を。
その人には何度かフェイトさんと一緒に遊びに連れて行ってもらったことがある。

僕にとってお兄さんのような存在。

「ルシルさん!!」

キャロと声が重なる。

どうやらキャロもルシルさんと面識があるみたいだ。

「久しぶりだな、エリオ、キャロ」

ルシルさんは微笑んだあと、左手をかざして蒼く輝く大きなシールドを張った。

そしていとも容易く砲撃を防ぎ、シールドが小さな羽根のようになつて散つていった。

『ちょ、ルシル君!? どうしてここにおるん!? それにシャルちゃんも何で!?!』

八神部隊長から通信が来た。

モニターに映る八神部隊長は少し混乱気味のようだけど。

「何でって、時間が空いたから戻ってきたんだよ。

場所については魔力探査サーチというものを使って探し当てた。

魔力を使用しているのはとフェイトの居場所はハッキリ分かったからな。

だからそのままここへと来たというわけだ」

ルシルさんはそう言うと、砲撃が放たれた場所へと視線を向ける。僕とキャラ口もそれにつられて、その場所へと視線を向けた。

『そういうこと！ そんなじゃ罪眼レイガートゥスは私とルシルで破壊するから』

なのはさんとフェイトさんの傍にいる紅い翼を持つ女の人から念話が来た。

『シャルちゃんとルシル君、あの眼のようなモノのこと知ってるんか！？』

『まあ知っているといえは知っている、かな。』

詳しいことはまた話すから、今は戦闘に集中させてはやて』

「そうだな。まずは罪眼アレを破壊することを優先するべきだ」

完全に置いてけぼりを食らっている僕とキャラ口。

そんなところに、“レリック”が収められているのであろうケースを抱えるスバルさん、そしてティアナさんとリイン曹長が現れた。

「ルシルさん！？」

スバルさんとリイン曹長が驚愕の声を上げる。

それに気づいたルシルさんも振り返り、

「お！ 久しぶりリイン、スバル！

二年も見ない内に大きくなったなスバル。ナカジマ三佐とギンガは元気か？」

「はい！ お父さんもギン姉も元気ですよ！」

と、スバルさんに声をかけ、スバルさんもそれに元気よく答えた。

「それはなによりだ！つとそれとすまないな。クイントさんの墓参りにここ二年行けなかった」

「いえっそんな！」

『ちよつとルシル！ 挨拶は後！ 防御お願い！』

「は？ シヤル、君に防御なんていらないだろ？」

シヤルと呼ばれた人の念話に、素っ気無くルシルさんは答えた。

そういえばフェイトさんから聞いたことのある名前だ。
確か幼なじみの大親友、シヤルロツテさん。

『私じゃなくてその子達の防御！ そつちに攻撃が流れたら危ないでしょ！？』

その言葉を合図として、シヤルロツテさんが空を物凄い速さで翔る。こんな遠くからでも分かるくらいの無数の閃光が入り乱れている激しい戦闘だ。

『ルシル、援護射撃！』

「了解」

ルシルさんが腰にあるホルスターから金色に輝く銃を二挺抜いて構えた。

ティアナさんのデバイス、“クロスミラージユ”より少し銃身が長い。
そして、

「いくぞシャル！」

続けざまに二挺の銃から発砲音が轟く。

ここからじゃどれがシャルロツテさんなのかも分からないのにルシルさんは撃ち続ける。

撃ち終えたルシルさんは軽く息を吐いてから二挺の銃をホルスターに収めた。

『よし！ 殲滅完了っ』

シャルロツテさんはそう一言。
結局僕たちって……。

十 十 十 十 十 十

機動六課隊舎司令部

「はあ、相変わらずの反則やなあ。シャルちゃんとルシル君は……

」

六課隊舎内にある司令部の指揮官席に座りながら、先程繰り広げられた戦闘に呆れ果てる。

いくらリミッターが掛けられているとはいえ、なのはちゃんとフェ

イトちゃんの魔導師としての腕は確かや。
その二人が苦戦したあの眼のようなモノを数十秒で片付けたシャル
ちゃんとルシル君。

「あはは、そうですね。」

見てください八神部隊長、シャルさんとルシリオンさんのランク、
SSSに届いてますよ?」

シャーリーの言葉に司令部が一気にざわめき始める。

それもそのはずや。SSSランクの魔導師なんてそう簡単に目にする
ことが出来るモノやない。

それが二人、しかも二人とも知り合いというんがまたすごい。

「どうします八神部隊長。レリックの回収も完了、車両も停止して
いますし・・・」

「そやねえ・・・うん、スターズの三人とリインはへりに回収して
もらって、中央のラボまでレリックを護送してもらおか」

『お任せです!』

私の指示にリインが元気よく答えた。

「ライトニングはどうします?」

「現場待機やね。現地の局員に事後処理の引継ぎ。

そのあとシャルロット元三等陸佐とルシリオン元一等空佐をここに
案内してもらおか」

指揮官補佐を務めるグリフィス君にそう告げる。

あの二人にはあの眼のことを聞いておきたいし、何より久しぶりの再会だ。
やっぱりちゃんと会っておきたい。

ミッドチルダ某所

「刻印ナンバー？、護送態勢に入りました」

巨大なモニターを前に一人佇む男。

名をジェイル・スカリエツィ。後に忌み名としてミッド史にその名を刻むことになる男。

「ふむ」

その男の傍にある小さなモニターに映る女性の口からそう告げられた。

男はモニターを見据えたまま、それに短く答える。

「追撃戦力を送りますか？」

「やめておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ」

巨大なモニターが別の画面へと切り替わる。
そこに映るのは機動六課の魔導師たち。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。
私にとって興味深い素材が揃っているうえに・・・」

モニターに今度は映像として、フェイトとエリオが映し出された。

「この子達を、生きて動いている“プロジェクトF”の残滓を手に入れるチャンスがあるのだからね。それに」

さらにモニターの画面が切り替わる。

映し出されたのは、今回の任務に乱入してきたシャルロットとルシリオンだった。

「この世の中は実に面白い。世界の意思の代行者・・・界律の守護神、か。」

この二人にも何らかのアプローチを行っていきたいね」

不敵な笑みを浮かべた後、彼は背後に現れた存在と今後について話し始めた。

自分がこれから一体何を相手にしようとしているのかを分かっているのかを分かっているのかの愚考だった。

3rd Episode：高き破滅より来たる大罪（後書き）

はい、今回から3rd本編へと入っていきます。
そしていきなりすいません（謝罪してはっかですが）。
アニメ1話から4話までをごそつと丸ごと省略。
シャルシルがいないとどうしようもないためです。

そして今回はオリジナルキャラを入れていきます。
この世界での最高ランク（と思っています）SSSへと到達したシ
ヤルシルを相手にナンバースやガジェットが勝てるわけがない。
そのため敵キャラですね、それを出していく次第です。

ルシルの魔術 コトド・ニースホッグ 凶竜の穢牙

北欧神話に登場するニヴルヘイムに棲む黒い飛竜、もしくは蛇。
またをニドヘグやニースヘッグなどの別名を持つ。
名前の意味としては「死体を裂く者」、怒りに燃えてうずくまる者」
がある。

固有魔術上級攻撃術式。複製した武装を竜の形に組んで対象にぶつ
ける。

神秘満載の無数の武装による攻撃なため、威力が半端ではない。

サーチ 魔力探査

補助系魔術の一つ。魔力の波形から特定の対象を探す術式。
相手の正確な魔力波形を知っておかないと意味がなくなる。

古代遺物管理部“機動六課”

私となのはが見守る中、シャルは“キルシュブリューテ”で“レーガートウス”と呼んだ眼を片っ端から斬り捨てていく。そのうえ自分に向かつてくる砲撃をも“キルシュブリューテ”で斬り裂いていつている。

でも次第に反射砲撃だけでなく、小さいのからも砲撃が放たれて、一体どれだけの砲撃が放たれているのか確認できない。

「ルシル！ 援護射撃！」

シャルがルシルに向けて叫ぶ。

『了解』

ルシルからの返答はたった一言のみ。

そして次の瞬間、シャルを狙っていた幾条もの砲撃が貨物車両から放たれた蒼い弾丸で全てかき消された。

あの小さな弾丸には一体どれだけの魔力が籠められているのだろうか？

「よし！ 殲滅完了っつと」

シャルは“キルシュブリューテ”を消して大きく背伸びをした。

まだいくつもの眼が残っているのに、そのリラックスしているシャルを見て啞然とする。

「もう終わってるよ」

「「え？」」

シャルが一言呟く。その言葉通りにすでに全てが終わっていた。ガラスが割れたような音を立てながら大きい眼が砕け散っていったのだ。

それに続くようにして小さいのも次々と砕けていく。

シャルは、私となのはが知覚できない速さですでに大きい眼を破壊していたのだ。

「それじゃ改めて久しぶり。なのは、フェイト」

シャルが優しく微笑んだのを見て、ようやく緊張から解き放たれた。私となのはは顔を見合わせて、2年前に約束したことをここでする。

「「おかえり！！」」

私たちの「おかえり」を聞いたシャルは、少しだけボケっとしたあと、

「ただいま！！」

そうすごく可愛い笑顔で答えて私となのはに抱きついてきた。

十 十 十 十 十 十

レーガートゥス
罪眼の殲滅を確認して、改めてリンたちに向き直る。

「さてと、よく頑張ったなみんな。少しばかりだが見せてもらった。

あんな小さかったエリオがこんな立派になっているなんて私は嬉しいよ。

それにキャラもなかなかのサポートだったぞ」

エリオとキャラの頭を撫でる。

二人は少しボケツとしたあと「はい！」と力強く答えた。

「リインもスバルも頑張ったな」

「はいですっ！」

「そ、そんなあたしは特になにも・・・」

リインは大きく答えて、スバルは少し照れたような仕草で呟いている。

私はもう一人の少女へと視線を向ける。

「君とは初めまして、だな。ルシリオン・セインテスト・フォン・フライハイトだ」

「は、はい。ティアナ・ランスター二等陸士です。」

あの、管理局にいた頃のセインテスト一等空佐のご活躍は・・・」

彼女が敬礼をしようとする前に右手を差し出し握手を求める。

少し戸惑っていたようだがきちんと応えてくれた。

やはりこの子は殉職なされたティータ・ランスター一等空尉の妹みたいだ。

「ありがとう。それとそう堅くならなくてもいいよ。」

私はすでに管理局員じゃないしな」

「あ、はい」

ティアナは小さく頷いた。

「ルシル！」

「ルシル君！」

フェイトとなのはが合流する。

シャルは久々になのはたちと会えて、頬が上気していて満足気な顔をしている。

「久しぶりフェイト、なのは。元気そうだなによりだ」

車両の上へと降り立った二人に言葉をかける。

二人はお互いを見合わせて同時にある一言を口にした。

「「おかえり！」」

一瞬何を言われたか理解できなかったが、少しして頭の中に浸透する。

「おかえり」、それは二年前にシャルたちが約束したことだった。ならばそれに答えなければならぬだろう。

「ああ、ただいま」

その後、私たちは機動六課の隊舎へと案内された。

十 十 十 十 十 十

機動六課隊舎 部隊長室

私とルシルは、機動六課隊舎の部隊長室へと案内された。

ここに案内されるまでに隊舎内ですれ違う局員はみんな私とルシルを見て一瞬の驚愕、そして「お疲れ様です！」と敬礼をしてくる。

私とルシルが辞めて二年になるというのに、未だに私たちのことを慕ってくれるらしい。

「さて、それじゃあシャルちゃん、ルシル君、おかえり。

そしてようこそ機動六課へ。それでどないや、私の部隊の感想は？」

部隊長室に備え付けられたソファに腰をかける私たちは、なのはとラインが戻って来るまでの間に世間話をして時間をつぶすことになった。

「すごいよホントに！」

「私もすごいと思うぞ」

素直な感想を述べる私とルシル。

気になっている過剰戦力に関してのことは今は何も聞かないでおこう。

きっと何かしらの理由があると思うから。

「そつえばルシル、一人称・・・“私”に戻したんだね」

「ん？ ああ駄目だったか？」

「あ、ううん、そうじゃないんだけど、初めて会ったときのこと思
い出したんだ。」

「だからかな、何て言うか上手く説明できないんだけど・・・懐かし
い」

「そうか。ああ、そうだな」

確かフェイトがルシルの一人称を“俺”にさせたって話だ。

それが会わない間に“私”に戻っているから気になったんだろう。

「あ、でも一つ気になったんだけど、どうしてなのはとフェイトの
魔力が低いのか？」

私はもう一つ気になっていたことを口にする。

でもそれを聞いたはやて、フェイト、それにルシルまでが目を丸く
した。

あれ？ 私って変なこと言ったっけ？

「えっとシャル、一つの部隊における魔導師ランクの総計規模が決
まってるの・・・」

「知らなかったのか？」

フェイトとルシルが信じられないって顔で見えてくる。

見るとはやても似たような顔だった。

「そやから隊長陣の私やなのはちゃんにフェイトちゃん、シグナム
とヴィータもリミッターが掛けられてるんよ。」

ちなみにデバイスにも出力リミッターが掛けられとる」

はやての説明に私がどれだけ知識がなかったか思い知る。
それでよく三佐にまでなったな、と自分自身が信じられない。

「し、知らなかった。でもそれじゃあ私も入っていたらどうなっていたわけ？」

私のランクがどこまで下げられるのかが気になって聞いてみた。

「そやねえ、当時のシャルちゃんの場合は6ランクくらい下げてもらわんとあかん」

「6ランクつてCまで下げられるの？」

そこまで下げられるのはさすがに遠慮願いたい。

私の魔法や魔術は全てA+以上の魔力を必要としている。

単純な身体強化ですらBランクが必須だというのに、それをCまで下げられたらそれこそ何も出来なくなってしまう。

まあ相手が人間だったら元からある身体能力だけでも十分に無力化できるけど……。

「お待ちせー！」

「お待ちせすー！」

中央ラボにまで行っていたのはとリンが帰ってきた。

ヘリポートから急いで戻ってきたのかなのは少し息を切らしている。

それから少しなのはを休ませてから話の本題に入る。

「それじゃ本題に入るか。シャルちゃん、ルシル君、あの眼のこと話してくれるか？」

はやてたちが仕事の顔となった。
さっきまでの柔らかな空気が重くなる。

「・・・あれはレーガートウスと呼ばれる魔力の塊で、半自律型の使い魔だ。

まあ一番重要な話としては、アレにダメージを与えることが可能な唯一の術は・・・」

ルシルが神器“グングニル”を具現させて手に取る。

初めて“グングニル”を見たリインはポカンとしたあと、「キレイですー！」と言ってはしゃぐ。

久しぶり見たなのはとフェイト、はやては、最初は平然としていたけど内包されている魔力量に気づき目を見開いた。

以前までは形を似せただけのレプリカだったけど、今ルシルが手にしているのは真正銘の“神槍グングニル”だ。
内包している魔力に差があるのは当然のことだ。

「私とシャルが持つ神器と呼ばれる武装、もしくは魔術の二つしかない」

そう、だから私もさっきは“トロイメライ”を使わずに“キルシュブリューテ”を使った。

レーガートウス
罪眼もまた神秘の塊だ。神秘のない魔法では傷一つ付けられない。

「えっと、つまりレーガートウスはルシル君かシャルちゃんにしか壊せないってこと？」

「うん、そうなるね」

なのはが首を傾げながら聞いてきたので私が答えた。
ハッキリと断言したことではたはたちの顔に落胆の色が現れた。

そんな中、ルシルは静かに“グングニル”を蒼く光る羽根のように散らせていた。

その“グングニル”の綺麗な散り様に、リインが感嘆の声を上げて喜んでいる。

可愛いな、リイン。

『ルシル、レীগアトウス罪眼が気になる』

『ああ、これは調査する必要がある』

さすがにこれを放つては置けない。

レীগアトウス罪眼は“ヤツ”が使役する使い魔だ。この世界にいるとしたら何としても……。

「なあシャルちゃん、ルシル君、よかつたら力を貸してくれへんか？
もしその話が本当やつたら私たち魔導師じゃ太刀打ち出きやんいうことや」

「そ、それは大変ですー!!」

はやてから協力が申し込まれた。

なのはとフェイトも同じ意見なのか、私とルシルを見て頷いた。

私はその協力について少し考える。

ガジェットとともに現れたとなると、“ヤツ”がガジェットを操る者と何らかの関係を持っているのかもしれない。なら機動六課と行動を共にすれば調査しやすいはずだ。

「ルシルの意見は？」

「私としては協力関係はいい考えだと思うよ。」

レーガートゥス 罪眼がガジェットと行動を共にしていたのなら、今回の事件を追っていけば罪眼の主へと行き着ける可能性が大きいしな」

ルシルも私と同じ考えだ。

無駄に労力をつぎ込まなくても、なのはたちと一緒に行動すれば向こうから会いに来る。

なのはたちと一緒にいられる、“ヤツ”の手がかりを得られる、まさに一石二鳥というやつだ。

「決まり。私の剣とルシルの槍、今一度みんなのために振るわせていただきます」

「よろしく頼む」

なのはたちと協力、悪く言えば利用することになってしまっがこればかりは許してほしい。

“ヤツ”がこの次元世界に来ているかもしれない。いや、間違いない。来ています。

そうなれば神秘のない魔法を使う魔導師たちは成す術なく、“ヤツ”に殺されてしまう。

それだけは何としても阻止しなければならぬ。

「ちよっ、待ってシャルちゃん、ルシル君！」

協力はこっちが頼んどるんやで頭下げるのは私らの方や！」

はやてが立ち上がってそう言うけど、私たちの方もこれは必要ないとだ。

この頭を下げる行為には謝罪の意味も含まれているのだから。

「気にしない気にしない

あ、それより協力といえれば私たちは民間協力者ってことかな？

さすがに管理局員に復帰してこの部隊に配属、もしくは出向になっても保有ランクが決められているなら、もうこの部隊に入れないよ私たち」

なのはたちはこの機動六課に納まるために態々リミッターまで掛けた。

そこに私たちが入れれば、一つの部隊における保有ランクを超えることになる。

そうなればなのはたちは、さらに魔力制限の追加を受けることになってしまっただろう。

もちろん私たちも滅茶苦茶な魔力制限を受けることになるのは間違いない。

「ん、そこんところはクロノ提督たちに掛け合ってみるわ。

何せ相手を倒せるのがシャルちゃんとルシル君だけとなると事情も変わってくるし。

だから、たぶん何らかの方法で二人には六課についてもらうことになると思う」

はやてが思案顔になって腕を組んだ。

確かメールで、クロノとリンディさん、そして騎士カリムがこの部隊の後見人っていう話だ。

さすがにはやての独断では決定できない事由だとは思つ。
だからクロノたちに掛け合うということなんだろう。
でも最終的にはお世話になるらしいけど……。

「それじゃまたシャルちゃんたちと一緒に過ごせるってことだよな？
そうだと嬉しいなあ。ね、フェイトちゃん？」

「うん、また一緒にいられると思うと嬉しい。
いっぱい話したいこととかもあるから」

なのはとフェイトはそう嬉しそうに話している。
うんうん、私としても嬉しいよホントに。

「話聞かせてもらってありがとだな。そんじゃこれで一応解散って
ことでええな。」

ラインはシャルちゃんとルシル君を空いている部屋に案内したって

「はいですっ！」

「ちょっとはやて、まだ決まっていけないのに私たちを隊舎において
いいの？」

いくら私たちがそれなりの管理局員だったとはいえ今は完全に民間
人だ。

そんな私たちを管理局施設におかせるなんてまずいんじゃないだろ
うか？

「でもシャルとルシルって寮暮らしだったよね。」

今から泊まれる宿泊施設を探すのも大変だろうし、今日はここに泊

まったほうがいいよ」

「「あ」「

ルシルと二人して間抜けな声を出す。

そうだった。もう帰る場所がないんだった。

私だって一応は女だ。さすがに野宿なんてのは嫌だ。

それに、

【元管理局員フライハイト（仮名）三等陸佐、同セインテスト（仮名）一等空佐の二名が公園内で野宿しているところを地区内の陸士部隊に発見、保護された】

なんてことになったら死にたくなる、というか本気で死んでやる。そんな最悪な未来を回避するためにここはお世話になるしかない。

「決まりだね。それじゃシャルちゃん、ルシル君、またあとでね」

「ルシル、シャル、あとで一緒にご飯食べようね」

そう言っただけなのはとフェイトは部隊長室をあとにした。

それに続いて私とルシルも、ラインに空き部屋へと案内された。

もちろん私とルシルは別々の部屋。姉弟とはいえ当然のことだ。

で、夕飯までは私に用意された部屋でルシルとのんびり、とはいかなかった。

三時間くらいしてはやてに呼ばれた私とルシルは、再びはやての、部隊長の部屋へと赴いた。

そこには、

「久しぶりなフライハイト、セインテスト。
しかしお前たち、しばらく見ん内にまた腕を上げたようだな」

「ん？ おいセインテスト、お前右目見えてんじゃねえのか？」

「お久しぶりフライハイトちゃん、セインテスト君」

八神家の面々、守護騎士ヴォルケンリッターが揃っていた。
それにしてもヴィータ、よくルシルの右目の視力が再生しているのを気づいたものね。

「久しぶり。シグナムたちも元気そうでよかった」

「ああ、久しぶりだ。それにしてもよく分かったなヴィータ。

もう右目の視力は回復したよ。そして相も変わらず小っさいな君は」
「うっせえっ！！ テメエだつて女みてえなツラしやがって！！
もういつそのこと女になっちまえ！！ バーカ！！」

ルシルが余計なことと言うものだからヴィータに脛を思いつき蹴られた。

痛がるルシルを尻目にヴィータがソファに座り、偉そうに踏ん返り返っている。

「それで、私とルシルをここに呼んだ理由は何？」

ルシルはもう放っておいて本題に入らせてもらおう。
すると部隊長室の中央にモニターが現れる。

『久しぶりだなシャル……ん？ ルシルは何をやっている？』

モニターに映ったのはクロノだった。

「放っておいていいよ、クロノ。」

それよりおめでとう、子供生まれたんでしょ」

「お・・おめでとう・・・クロノ・・・」

『あ、ああ、ありがとう』

私に続いてルシルも脛をさすりながら口にした。

クロノは少し照れている。おめでたいことなんだから照れなくてもいいのに・・・。

「私たちに用があるというのはクロノね」

『ああ、はやくからの報告は受けた。』

レーガートウス、だったな。本当にアレは魔導師に倒せないモノなのか?』

真剣な面持ちでクロノがそう聞いてきた。

私たちはソファへと腰かけ、話をする態勢へと入る。

「そうだ。アレに対抗するには私かシャルの神器と魔術、その二つしかない」

ようやく痛みがひいたのか、ルシルも真剣な面持ちで答える。

さっきまでの情けない顔がウソみたいだ。

『やはり、か。君たちの魔術と同じような神秘、というやつなんだ

な
』

「そういこと」

『なんてことだ・・・そうだ、君たちの今後の予定に関してなんだが・・・』

クロノはため息を吐いたあと、思い出したかのように私たちの今後の予定を聞いてきた。

そんなのもちろん決まっている。

「私とルシルはしばらくミッドに滞在するつもり。
レガートゥス 罪眼の一件が終わるまでは離れられないよ」

「そういことだ。罪眼^{アレ}を全て・・・操る者も例外なく打ち据えないとゆっくりと出来ない」

“ヤツ”から話を全て聞きだし、そのうえで抹消しなければミッドが滅ぼされかねない。

それが終わるまでは他の契約なんてしていられない。

『そうか、それは助かる。』

では君たち二人にはこれからしばらく機動六課で協力者として働いてもらいたい。

それからもう一つ、君たちの魔導師ランクのことだが、さすがにSSSとなるとまずい。

だからSSランク、出来ればS+あたりで行動してもらいたい』

クロノからの提案はまあ理解できる。

確かにSSSランクが二人、一つの部隊にいるというのは避けたい

だろう。

いくら正規の局員ではないとはいえそんなのが地上で活動していたら、おそらく地上本部のトップ、レジアス中將が黙っていないはずだ。

「了解。でも罪眼レーガートゥスとその操り手が現れたら手加減しないから」

「了解。まあできるだけ派手なことにならないよう気をつける」

『ああ、よろしく頼む。はやても機動六課を頼むぞ』

「了解です」

クロノとの久しぶりの会話は仕事関連だけとなった。

それも仕方ないか、タイミングが全て悪すぎた。

「それじゃあ、こんな時間やし夕御飯食べに行こか。

なのはちゃんたちも待つと思うし」

はやての一言で、私のお腹が「くぅ〜」と鳴った。

あまりの恥ずかしさで赤面、みんなの方を見るとニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「し、仕方ないじゃない！ だって今日はまだ何も食べてないんだからっ！」

「はいはい、そんじゃ食べに行くで〜」

半ばはやてに押される形で食堂へと向かった。

十 十 十 十 十 十 十

クロノとの協定を終えて、はやてたちに食堂へと案内された。

そこにはすでにフェイトとなのは、それにスバルたちが揃っている。私とシャルは用意されていた席へと座り、今日初めての食事を開始した。

シャルはスバルたちフォワード陣と同じテーブルで、私はフェイトたち隊長陣とだ。

そして久しぶりの大人数での食事に、シャルは本当に嬉しそうにしている。

「それじゃルシルさんとシャルロットさんもこれから六課で働くんですか？」

「ええ。ああそれと私のことはシャルでいいよ。シャルロットなんて長いから面倒でしょ？」

みんなもシャルって気軽に呼んでくれていいから、そのほうが私も嬉しいしね」

「はいシャルさん！」

「よろしいっ！」

スバルの問いにそう答えたシャルは、自分も愛称で呼ぶように言った。

それにすぐさま応えるスバルもすごいな。

「まあそういうわけだからスバル、エリオ、キャロ、ティアナ、よ

ろしく頼む」

「……はいつ！」「……」

私の軽い挨拶に四人は元気よく答えた。

さて、食事が冷めないうちに済まさないといけないな。

「ねえねえルシル君」

「ん？」

なのはが態々小声で話しかけてきたので、小声で話す必要があるのだろうか、と思いつつ私も小声で応対した。

「ルシル君とスバルって知り合いだったの？」

「言われてみればそうだね。いつ知り合いになったの？」

なのはにつられてフェイトも小声になる。

そういえば当時のことは何も言っていなかったか。

「管理局に入っつてすぐの頃だったか、クロノに謀られて首都防衛隊に研修させられた際にスバルの母親、クイントさんに目を掛けられてね。」

よく拉致に近い形でナカジマ家に御呼ばれさせてもらったことがあるんだ。

そこでまだ幼いスバルやギンガと顔見知りになったというわけだ」

あの頃を思い出しながらそう説明した。

強く優しかったあの方には今も感謝している。

しかしクイントさんはもういない。

確か落とされた際に負った怪我を無理矢理女神コード・エイルの祝福で治し退院してすぐだ。

クイントさんが任務中の事故で亡くなったと知ったのは。そのときは信じようとしなかったのを覚えている。

「そうなんだ。ルシル君も大変だったよね、あのときは・・・」

「クロノが半ば騙す形で、ルシルをいろいろなところへと研修させてたもんね」

「あはは、そやったな」

「笑い事じゃないぞ本当に」

全く、クロノにはいつも苦汁を飲まされたものだ。

気づけばあれよあれよと無限書庫から離れていったあの日々。

あのときはクロノに会ったび愚痴を零していたな。

今となつてはいい思い出・・・なわけがない。

「はあ、思い出したら泣きたくなってきた・・・」

まあそんなこんなで私とシャルは機動六課へと席を置くことになった。

ジェイル・スカリエツィ

5月13日、部隊の正式稼働後、初の緊急任務がありました。

密輸ルートで運び込まれたロストロギア“レリック”をガジェットが発見。

輸送中のリニアレールを襲撃、それを阻止。

“レリックを回収するという任務でした、がそこで予想外のことが起こりましたです。

新たなガジェットと一緒に、人の眼のようなアンノウンが現れたです。

スターズ隊長のなのはさんと、ライトニング隊長のフェイトさんが交戦するも能力が不明なそれに防戦一方となってしまうたです。

ですがその窮地を救ったのが、2年前に管理局を辞めたはやてちゃんたちのお友達、シャルさんとルシルさんだったのです。

そしてそのお二人、そして六課のメンバーの活躍もあって任務は無事に終了したです。

そのあと六課に案内されたシャルさんとルシルさんからあの眼、レィガートウスと呼ばれるモノの説明を受けました。

魔導師では倒せないと知ったはやてちゃんたちは、シャルさんとルシルさんに協力を要請。

その日の内にシャルさんとルシルさんは機動六課の協力者となりました、と。

キーボードを叩く指を止めて一息です。
すると、

「リイン曹長」

「あ、シャーリー、シャルさん、おつかれさまですー」

声をかけられたので顔を上げてみると、そこにはシャーリーとシャルさんが一緒にいました。

「どうしたのリイン、こんなところで仕事？」

「お仕事半分、休憩半分。個人日誌をつけてたですよー！」

シャルさんにそう答えて、ソファからシャルさんの前へと飛ぶ。するとシャルさんはわたしを肩に乗せてくれたです。

シャルさんがとても嬉しそう顔をして「癒される、癒されるよー」って言うてくれたので、わたしもなんだか嬉しくなりました。

でもなんだかずいぶんとお疲れのようですねー？何かあったのでしょうか？

「シャーリーとシャルさんはどうしたですか？」

「私は新しいデバイスたちの調子を見に、訓練場のほうに行ってきたんですよ」

まずはシャーリーが答えてくれた。

フォワードのみなさんの使うデバイスの設計主任はシャーリーですから、それに責任を持っているのです。まるでお母さんみたいな存在ですねー。

「そうですかー！ みなさん元気でしたー？」

「はい！ フォワード陣もデバイスたちももう絶好調っ！」

シャーリーが満足そうに答えてくれたです。

けど、わたしのいるシャルさんからは相変わらず何か沈んだものが……。

「私は……一生懸命逃亡中。シグナムが模擬戦ってしつこくて。確かに私だってシグナムと戦うのは好きだけど、だからといってこっしつこいと……。」

「そ、そうなのですかー。大変ですねーシャルさん……。」

どつりで疲れた顔をしていると思っただです。

シグナムはシャルさんと純粹な剣の腕をいつも競いたがってます。それに付き合わされるシャルさんのことも考えてほしいですねー。

「でもルシルの槍の腕前を教えたくて、ルシルの方にも模擬戦を申し込んでくれるようシグナムに頼んだから、少しは私に来る回数が減るはず……よかったよかった」

シャルさんのその言葉に数秒間の沈黙が流れたです。

そしてその沈黙を破ったのはシャーリーー。

「……シャルさん、ルシリオンさんを売ったんですね」

「……テヘッ」

「ルシルさんも、大変ですねー」

十 十 十 十 十 十 十

私は大してやることもなく、ただ単に訓練場の見える岸へと来た。

ここでの私の仕事は医務班長のシャマルの補佐と遊撃戦力だ。

しかし今はどちらからも必要というわけじゃない。

だからたまにこうして訓練場の見える場所へと赴いている。

「ん？ 今日先客がいるようだな」

そこにはすでに先客がいて、フォワード陣の訓練模様をモニターで見ている。

「シグナム、ヴァイス、君たちも暇そうだな」

「お、ルシルじゃねえか。つか暇ってなんだよ。俺だって忙しいってっつうの」

「暇をしているのではない。こうして訓練を見守るのも仕事のうちだ」

シグナムの返答には納得だが、ヴァイスに関してはまず暇をしているのは間違いない。

まあヘリのパイロットなんて出撃以外はほとんど待機状態だ。

忙しそうにしろ、というのもかえって酷なことか。

「フォワード陣の訓練の様子、か」

私も合い席させてもらいモニターを眺める。

映っているのはヴィータの一撃を受けながらもバリアを破壊されなかったスバル。

しかし踏ん張りが足りなかったのか弾き飛ばされている。足腰を鍛える必要あり、だな。

そしてフェイト教導による回避訓練を行っているエリオとキャロ。まずは基礎を重点的に教え込んでいるようだ。まだ幼い二人だから当然のことか。

そしてなのはとティアナの精密射撃の訓練。

狙いや動きはまだまだ甘い、それでもなかなかの腕をしている。

しかしこうして訓練の様子を見ると昔を思い出してしまうな。

「どうしたセインテスト、そんな難しい顔をして」

「いや、何でもない」

かぶりを振ってそう答え、ゆっくりと自分の両手を見る。

私としてもああして誰かに教える立場になったことはある。

だがそれはなのはたちとは違い、完全に人を殺すための技術だった。

「それにしてもいいすね。若い連中は・・・」

「若いだけあって成長も早い。まだしばらくの間は危なっかしいだろうがな」

ヴァイスとシグナムの会話に現実へと引き戻される。

最近はこのことが多々ある。しばらく過去の記憶を遮断しておい

たほつがいいかもな。

「さて、話は変わるがセインテスト、暇なら私と少々付き合え」

「シグナム姐さん？」

シグナムの言葉にヴァイスが目を見開き、だらしなく口を開けている。

おそらく「付き合え」という言葉に反応したんだろうが、絶対にそういう意味じゃない。

「仕事か何かか？ 私に許されている限りでの「模擬戦だ」はい？」

いつの間にやら“レヴァンティン”を手にシグナムが私を見据えている。

ヴァイスは笑いを堪えながら手を振っている。「さよならお達者でっつてかこの野郎。」

「すでに主はやてには模擬戦の許可は取ってある。

昼休憩までの残り一時間、私と模擬戦をしてもらおう」

「いや、少し待ってくれ。訓練を見守るのも仕事と言ったよな。

だったらこのまま」

「模擬戦は大切なことだ。何せ私が出撃^ですることはなかなかないからな。腕を鈍らせないようにするには相応の相手と競わねばなるまい？」

“レヴァンティン”の切っ先を私に向けながら微笑みを浮かべるシグナム。

相応の相手って、シャルがいるだろうに……。

「それならシャルの方がいいんじゃないのか？」

私のような砲撃支援タイプではつまらない戦いになると思うが……

「

「それなら問題ない。お前が槍の使い手としてかなりの腕を持っていることは聞いている」

槍の腕前を聞いているって、そんなこと知っているのはシャルだけのはず……。

そこまで考えてようやく理解した。

「売りやがったなシャルロツテーーーーー!!!!!!」

シャルはシグナムに模擬戦をするように言い寄られていた。

それはシャルの剣の実力をシグナムが買っているからだ。

当然だ。シャルは生前最強とされた剣士だ。

当時の体型に戻ったシャルの今の剣士としての腕は最早最強だ。

まあそれは置いといて、そんなシグナムから解放されるにはどうすればいいか。

決まっている、身代わりを用意すればいいだけのことだ。

しかもそれが自分に匹敵する実力者と言えばシグナムも乗ってくるだろう。

それで白羽の矢が立ったのが私、というわけだ。やってくれるあの女。

「おいおいルシル、そんなことを言うもんじゃないぜ。」

きつとこれはシャルさんの心遣いだよ。羨ましいねシグナム姐さん

と模擬戦なんてよ」

口を押さえながらヴァイスがそう言うが、どんな心遣いだよ!?!
というかそんなに今の私が可笑しいか!?!

「そういうわけだ。場所も確保してある」

「そういうわけってどういうわけだよ!?!」

最早聞く耳持たずといった感じでシグナムが私の襟首を掴む。

「なにすぐだ。少し相手をしてくれるだけでいい」

「そんじゃなー!」

くそっ、良い顔で手を振りやがって。覚えていろヴァイス・グラン
セニツク。

このあと私は模擬戦という名のイジメを受けた。

十
十
十
十
十
十

「何やお疲れのようやなあルシル君」

108部隊隊舎へと出掛けようと準備し始めたところでシグナムと
ルシル君を見かけた。

シグナムの方は何や満足そうな顔しとるけど、ルシル君の方はえら
い疲れようや。

「主はやて、外回りですか？」

「108部隊にちよつとな。それにしてもシグナムとルシル君の2ショットって珍しいけど何しとつたん？」

なんとなく予想は出来る。

模擬戦の相手がシャルちゃんじゃなくてルシル君やったってことや。そういえばシャルちゃん、隊舎内をコソコソしとつたけど、こつういふことやったんやね。

「フライハイトに代わりセイントに模擬戦の相手になってもらいました。」

セイントはフライハイトの言っていたとおりの実に腕のいい槍の使い手でした」

「シグナムがそこまで褒めるなんて珍しいですねー。」

ルシルさんってそんなに槍を使うと強いのですかー？」

リンが首を傾げながらそう聞いている。

それは私も気になるなあ。“グングニル”を実際に使って戦つとるところは見たことない。

「ああ、強い。何故今まで槍を使わなかったのか信じられないほどにな。」

あの戦いの最中にセイント本来の戦法が加わると、おそらく近接戦でも私では勝てん」

私たちの視線を受けて、ルシル君がようやくやく反応。

虚ろやけど、ほんまに大丈夫やるか？

「あれは、グングニルはデバイスではなく正真正銘の生命を傷つけるための武器だ。」

だからそう易々と使ってはいけない。

今回のシグナムの模擬戦でも使うつもりはなかったけど、どうしてもって頼まれたから魔力で刃をコーティングして殺傷性を限りなく少なくしてから使わせてもらった」

「そのおかげで私は大きな傷を付けられることがなかったが・・・。しかし勿体ないな。あれほどの槍術が常に使えないのは・・・」

シグナムは模擬戦のことでも思い出しているのか腕を組んで「むう」と唸る。

ルシル君たちの使う神器というのはどれも質量兵器に抵触してしまう物や。

だからこそそんな容易く公に出せるものものやないし、それに能力からして下手するとロストログアに認定されてしまうかもしれないへん。

「それ以前に私はどちらかといえばなのはと同じ砲撃戦タイプだ。グングニルの使用はまずない。だからデバイスは必要ない。それにシグナムのそれは単に私と模擬戦したいからだろ？」

ルシル君はそう言って、やれやれといった感じで首を横に振った。

「む、確かにそれもあるが、槍のデバイスを持つエリオに何かしら教授できることが出来るかもしれないだろう？」

「ああ確かにそやなあ。同じ槍使いなら通じるものもあるやろし。ほんならルシル君には、シャマルの補佐の他にエリオの教導にも参加してもらおか」

ルシル君はかつて本局の医療局ではシャマルの補佐として働いた。だからこの六課でもシャマルの補佐として動いてもらっとる。そこにエリオの教導を追加、以前のルシル君からすれば大して問題にはならんやろ。

「了解した、八神部隊長」

「ん。それじゃ私とリインは出掛けてくるな。

あ、そやそやルシル君、ナカジマ三佐のトコやけど、何か伝言とかあるか？」

数日前にルシル君がナカジマ三佐たちと知り合いって初めて知った。だから何か伝言あるか聞いてみたんやけど、

「ん、元気にやってますって伝えてくれ」

「そんなんでええんか？」

あまりに質素すぎな伝言に私は聞き返した。ルシル君は「下手な言い回りよりはマシ」って言って笑った。

「まあそれでええんならそう伝えとくわ」

私もルシル君に笑みを返して、その場を後にした。

十
十
十
十
十
十
十

シグナムから散々逃げ回ってお昼となった頃、私は訓練を終えて食堂へとやってきたフォワードのみんなとシャーリーと一緒に昼食を取っていた。

「そういえば気になってたんだけど、スバルの名前の響き、もしかして日本・・・地球の島国なんだけど何か関係とかあるの？」

「あ、はい。ウチのお父さんのご先祖さまがいた世界みたいなんです。

でもその世界には行ったことがないですし、よく分かんないんですけど・・・」

「なるほどね」

世界って思っていたより結構狭いのね。

それにしてもなのはといい、はやてといい、地球にはやっぱり何かあるのかも？

「そついえばエリオは出身どこだったけ？」

「僕は本局育ちなんで・・・」

「管理局本局？ 住宅エリアってこと？」

スバルの何気ない質問が空気を一変させた。

唯一その空気に気づいていないスバルは会話を続ける。

「本局の、特別保護施設育ちなんです。8歳までそこにいました」

すべては後の祭り、スバルの顔が“しまった”というもの変わった。

それを察知したのかエリオが必死にスバルのフォローに入る。

私はそれを聞きながら山盛りのスパゲッティを頬張っていると、私の、守護神としての感覚器が六課隊舎付近に招かれざる訪問者を捉えた。

「っー！」

魔力云々の存在感ではなく、概念や神秘といったモノに近い存在感だ。

どうやら罪眼レীগアトウスではなく、“ヤツ”自ら来てくれたようだ。

「あの、シャルさん？」

シャーリーが私の様子に気づいたのか声をかけてきてくれたけど、今の私には届いていなかった。

「ごめん、やること出来たから先に失礼させてもらっね」

「あ、はい」

みんなからの戸惑いの視線を背に受けながら、私はルシルとリンクで連絡を取る。

『ルシル、今どこ！？』

『シャル！？ 君が私を売ったから、私がシグナムの標的にされただろうが！』

『バカッ！ 気づかないの！？ 周囲探查！』

今はそんな話をしている時間はない。

だから怒鳴るようにしてルシルに六課隊舎の周囲を確認させる。

『これは・・・了解した。昼休憩終了まで残り40分、か。それまでに終わらせる』

ようやくルシルも気づいたのか、意識を戦闘モードに移行したのがリンクを通じて分かる。

私も意識を全て“ヤツ”へと集中させて、六課隊舎から人知れずに出撃する。

なのはたちに連絡はしない。

連絡して仮に出撃させたとしても人間では勝てないからだ。

私は“ヤツ”と戦うために“テストメント界律の守護神”の能力“干涉”を使おうとして気づく。

「うそ・・・干涉が・・・使えない？」

それだけじゃなくてこのミッドチルダの界律からも何も言ってこない。

今更そんなことに気づくなんて私もどうかしている。

それにこれじゃまるで界律が“ヤツ”の存在を認可しているみたいだ。

「シャル！」

私のもとへと走ってきたルシルに振り返った。

「ルシル……干渉が使えないし契約要請も来ない」

私の言葉を聞いたルシルは「今更？」みたいな顔をしてため息を吐いた。

「おそらく今の“ヤツ”が体を分けた状態になっているからだとは推測している。

それゆえに界律は“ヤツ”を危険な存在だと認識していないのだから。

まあミッドの界律も危険と判断したら私たちに契約を求めてくるはずだ。

そうなたら干渉を使って残らず消滅させてやればいい」

そういうことか。認めているんじゃないかって危険と判断していないわけね。

というかよく界律に引っかけることなく次元世界に来たものだ。

「まあこうなつては干渉なしで戦闘するしかない」

「うん。ルシル、創世結界に取り込める？」

「……ああ、確認次第英雄ヴァルハラの居館に取り込む。そこで一気に決めるぞ、シャル」

「異界英雄との共闘で瞬殺、今打てる最高の手はそれだね、了解だよ」

本当なら干渉を使って閉じ込めた領域で戦うのがベストだけど、使

えないのならシルの創世結界に取り込むしかない。

私たちは“ヤツ”の反応がある場所へと歩みを進めて、たどり着いたのは自然の多い公園。

人も疎らにいて平和そのものといった感じた。

そして“ヤツ”の反応は未だにこの公園内にある。

「あのお姉ちゃん、お兄ちゃん・・・」

「っ！」

振り返ってみると、そこいたのは幼い少女が一人。

シルと一度顔を見合してから、その少女と視線を合わせるためにしゃがみ込む。

そして気づいた。この子から“ヤツ”の神秘を感知できる。だけどこの子は人間だ。

「どうしたのかな？ お姉ちゃんたちに何か御用かな？」

「あのね、お姉ちゃんたちが来たら、これ渡してほしいって赤いお姉ちゃんが言ってたの」

赤いお姉ちゃんか。“ヤツ”の分裂体の中にはいなかったはずだ。おそらく私が知らないうちに代替わりした新入りだろう。

全く、どれだけ消滅させても次々と湧いて出てくる面倒な“ヤツ”だ。

「ありがとう」

「うん！」

少女は私の言葉に頷いて走り去っていった。
あの少女から受け取ったのは小型の受信専用の通信機。

「どう思う、これ？」

「どうもこうもハッキリと“ヤツ”特有の神秘を感知できる。
コールが来るまで待つしか・・・言ってるそばから、か」

通信機から鳴り響く呼び出しコール。
そのタイミングの良さから見られているんじゃないか、とルシルが
周囲を探查している。
私はそれを横目にコールに応え繋ぐ。

『お初にお目に掛かる』

小型のモニターが現れて、一人の男がそう口にした。
ルシルもモニターへと視線を移してその男の顔をじっくりと見る。
この男は・・・違う。“ヤツ”でもなくその分裂体でもない単なる
人間だ。
だけど繋がりがあるのは間違いないはず。

「何者だ？」

『私はジェイル・スカリエッティ』

ジェイル・スカリエッティ・・・聞き覚えのない名前だ。
私の隣でルシルが難しい顔をしてる。知っているけど思い出せない
って感じた。

「・・・で？ そのスパゲッティが何の用？」

「『・・・・・・・・・・』」

沈黙。しまった。素で間違えた。

さっきまでスパゲッティを食べていたから、響きが似ているせいで本気で間違った。

「で？ そのスカリエッティが何の用？」

さっきの事を無かったことにして言い直す。

『・・・・・・・・君たちと一度話をしたいと思っただけね。』

本当ならこちらに招いてゆっくりと時間をかけて話があったんだけど・・・・・・・・』

スカリエッティは何も言わずに本題に入ってくれた。

何気の良い奴なのかもしれない。

で、スカリエッティの意識はしっかりしているみたいだ。

どうやら操作されているというわけではなさそうだ。

「広域指名手配中の・・・・・・・・一級搜索指定次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ、だな？」

ルシルは確認するかのように告げた。

広域指名手配、しかも一級搜索指定の次元犯罪者って一体何したのこいつ。

『私のような者を知っていてくれるとは嬉しい限りだよ4th・テスタメント君』

確定。この男は“ヤツ”らの内の誰かと繋がっている。そして私たちのことを聞いているんだ。

「ガジェットを製作して“レリック”を集めているのも貴様だな？」
ルシルは“ヤツ”らの情報を引き出すんじゃないで、敢えて“レリック”関連から攻めてく。
ここはルシルに任せておこうかな。

『その通りだよ』

その表情と目からウソではないことは分かる。
もしこれが演技だとしたら大した役者だ。

「意外と簡単に白状するんだな。自分の首を絞めるようなものだと思うが……」

『いやいや、そちらの執務官は優秀だからね。
おそらく私の残した手掛かりを見つけ、今頃私が関与していることに気付いているかもしれないよ？』

手掛かりを残したってわけか、随分と挑発的な行為ね。

この男はよほど自己顕示欲が強いみたいだ。
私が思うにスカリエッティの傍に居るのは“許されざる傲慢”か、もしくは“許されざる強欲”のどちらかだろう。
私がスカリエッティに抱いた印象からそう考える。

「そうか、ならその話もういい。さて、これからが本題だジエイ

ル・スカリエツィ。
今すぐその場所を教える。すぐさま貴様の傍にいらるう。『ペッ
カートウム』を消す」

ペッカートウム
“大罪”。それが罪眼レイガートゥスの主の名だ。

ルシファーもマモンも、“ペッカートウム”が七つに分裂した際に
独立して活動する概念存在の一体だ。

『それは困る。彼女たちの知識にはとても楽しませてもらっている
からね。

それに協力関係である以上は私も彼女たちを守る義務があるのさ』

「協力？ 何を馬鹿なことを。貴様は単に利用されているだけに過
ぎない。

後悔する前に“ペッカートウム”と手を切れ。そして大人しく投降
しろ」

モニター越しにでも分かるだろう殺気を放ちながらそう口にするル
シル。

対するスカリエツィは動じることなく話を続ける。

『断る、と言ったら君たちはどうするんだい？』

「力づくで見つけ出し、そのうえで力づくで滅ぼさせてもらう」

『出来るのかい？ 世界からの許可がないと界律の守護神としての
力が使えないのだろう？』

そんな状態で本当に勝てるのかい？』

まあそれくらいのことば聞いているよね、やっぱり。

だけど残念、勝てるんだなあ、これが。

分裂している今なら私とルシルの持つ神器で対抗できる。

それに本来の姿“ペッカートゥム”に戻ったりしたらミッドの界律から契約が来るだろう。

この世界の敵“ペッカートゥム”を滅ぼせ、と。

そうなったら“界律わたしたちの守護神”の干渉で容易く滅ぼされることになる。

どちらにしても分裂体であろうと真の姿であろうと私とルシルには敵わない、ということだ。

「どうだろうな。やってみないことには分からないが、たとえ勝てないとしても戦わないわけにはいかないだろう？

それが界律わたしたちの守護神の役目なのだから」

敢えて勝敗が分からないと誤魔化すルシル。

まあご丁寧に教える必要もないか、“どちらにしても勝つのはこっちです”なんて。

『それは残念だ。なら・・・っともうこんな時間か。

すまないね、今日はこのくらいにしておくよ。またこうして話し合える日を楽しみにしているよ、3rd・テストメント君、4th・テストメント君』

モニターが消え、静まり返る付近一帯。

おそらくこの通信機が繋がることはないだろうけど、一応はやてたちに調べてもらおう。

「ルシル、ペッカートゥムを倒すことが本契約だと思う？」

「ないな。ヤツ一休だけなら最弱とされている第五の力一人マリアで十分だ。
態々わたし第四の力と第三の力シャルが呼ばれることはない」

「そっか、そっかだね」

ペツカートウム、“絶対殲滅対象”アポリュオンにおいて最弱の番外位。
そんなヤツ相手に私は兎も角、最強のルシルが呼ばれるはずがない。
ならやっぱり、本契約の内容は……。

「帰ろうかシャル。昼休憩が終わるまでそう時間はない。
遅刻でもしたらシグナムから何を言われ……もとい何をされるか
分からない」

「お疲れ様、ルシル。大変だね」

「よく言うよ。私を売ったことに対する罰は受けてもらうからな」
そして私とルシルは六課隊舎へと歩を進めた。

この夜、隊長陣の会議に参加させてもらい、この日起こったことを
話した。

まあ守護神云々はもちろん黙っていたけど。

そしてスカリエッティの言っていた通り、フェイトはガジェットか
ら手掛かりを発見、スカリエッティへと辿り着いていた。

首謀者をジェイル・スカリエッティと断定して、今日の会議はお開
きになった。

ジェイル・スカリエツィ（後書き）

結構簡単にシャルシルとドクターを邂逅させました。散々迷っていたんですけどね。

そして“ヤツ”こと大罪が名前のみ登場。^{ヘッカートゥム}

どいうキャラかは「ANSURについて」の絶対殲滅対象の項に掲載です。

そしてルシルの創世結果、もう展開できません。使う日が来るのでしょうか？

ホテル・アグスタ（前書き）

3rd後のエピソードのエンディングばかりが脳内を駆け巡る。
このままでは3rdの構成が滅茶苦茶になっていって・・・。

ホテル・アグスタ

「ほんなら改めてここまでの流れと今日の任務のおさらいや」

私たちは今、ヴァイスの操縦するヘリ“ストームレイダー”にいる。これからある任務へと赴くためだ。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者、及びレリックの蒐集者はこの男」

私たちの前にモニターが現れて、先日私とルシルにコンタクトを取ってきた人間、ジェイル・スカリエッティの画像が映し出された。

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティと断定して捜査を進めてく」

「こつちの捜査は主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」

「……はい！」「」「」

フォワードのみんなもそれに頷いて答えた。

さて、スカリエッティはどこまでヤツらに利用されて滅ぼされるか……。

「で、今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ！」

ラインの言葉とともにスカリエッティの画像からホテル・アグスタの外観図に変わる。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応を“レリック”と誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い。

とのことでわたしたちが警備に呼ばれたですっ！」

私はガジェットに追隨してくる可能性のあるレーガートウスの対処が任務となる。

ちなみにルシルは先日のもあつて六課隊舎で待機となっている。

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、いろいろ油断は禁物だよ」

「現場には昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長他、数名の隊員が張ってくれてる」

「隊長陣は建物の中の警備に回るから、前線は副隊長の指示に従ってね」

「シャルちゃんは前線のフォーローにも回ってあげてくれるか。

そしてもしレーガートウスが現れたら、可能な限り被害を出さずに対処してな」

「ん。分かった」

はやてにそう答えて、フォワードのフォーローという任務の追加に了承する。

でも訓練を見ている限りガジェット相手に遅れを取るような子達じゃないと思つてたり。

もしレーガートウスが出てこなかったらかなり暇をするかも……。

「あのシャルマル先生、さつきから気になってたんですけどその箱って……」

キヤロが指をさす場所には三つの箱。

私の知る限り、ああいうのには何らかの衣装が入つてると思つんだけど……。

「うん？ ああこれ、うふふ、これは隊長たちのお仕事着」

ずいぶんと楽しそうに語るな、シャルマル。

そうこうしているうちにホテル・アグスタに到着。

ヘリポートへと降り立った私たちは、定められた役割を果たすために解散した。

んで、私はというとシャルマルから仕事着のことを聞き、ケータイ片手になのはたちを待ち伏せ。

目的はもちろん、今日はお留守番をしているルシルにフェイトのドレス姿を送るためだ。

ああ、私はなんて義弟想いな義姉なんだろう。感謝してよ、ルシル。

「何してるのシャルちゃん？」

「なんやシャルちゃん、隠し撮りはあかんで？」

「か、隠し撮り!？」

「・・・盗撮犯なんかじゃないんだけど・・・」

扉を開けて出てきた三人から放たれる冷やかな視線が私を貫いた。ていうかちよっぴりシヨックだよ、フェイト。

まさかそんな目で見られる日が来るとは思いもしなかったよ・・・。

「そうじゃなくて、すこし撮らせてほしいなあ・・・なんて」

「それは別にいいんだけど・・・悪用とかしないよね？」

「もちろん」

三人のドレス写真をゲットゲット。

え〜とこういうときは・・・“シャルロッテはレア写真を手に入れた?”でいいんだっけ?

そんじゃ早速送信送信つと。

<フェイトのドレス姿、率直な感想を返信せよ。つまらなかったら女装の刑に処すby義姉>

そうメールを打って送信完了つと、一体どんな感想が来るか楽しみでしょうがない。

「それじゃ三人とも中で頑張つて」

「シャルちゃんもみんなをお願いね」

さてさて、あの子たちの様子でも見に行きましようか。

オークション会場へと向かうのはたちを見送って、私もようやく行動を開始する。

「確かエリオとキャロにはザフィーラがついてるはずだし・・・スバルとティアナ組の方にも行ってみようかな」

十
十
十
十
十
十

『副隊長とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力、だってこと。』

『で、そこにリイン曹長を合わせて六人揃えば無敵の戦力、ってことで、外を警備している最中、スバルに八神部隊長たちの話を聞いていた。これまでもずっと気になっていたことだったから。』

『まっ、八神部隊長たちに詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから、私も詳しくは知らないんだけど・・・』

『レアスキル持ちの人はみんなそうよね』

『ティア、なんか気になるの?』

『別に』

『そっ。じゃまたあとでね』

『ん』

短く答えてスバルとの念話を閉じる。

あたしの隣ではシャルさんが鼻歌混じりで周囲を警戒している（ようには見えない）。

でも実際にそう見えないだけで、実はきっちりとしている（と思う）。

「どうしたの？」

「あ、いえ」

シャルさんから視線をそらして、周囲を警戒しながらも思考に入る。思考の内容、それは今まで気になっていたことについて、だ。

あたしが思うに六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ。八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格が全員オーバース、副隊長でもニアSランク。

他の隊員たちだって前線から管制官まで未来のエリートたちばかり。

それにあの歳でBランクを取ってるエリオと、レアで強力な竜召喚士のキヤロは二人ともフェイトさんの秘蔵っ子。

この時点ですでに二人とも将来が約束されたようなものだ。

そして危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

六課の協力者として迎え入れられたシャルさんは陸戦最強とされ、若干17歳で三等陸佐にまで登り詰めた天才魔導師。

そしてシャルさんと同じように協力者として迎え入れられた義弟のルシルさん。

空戦においては管理局最速にして最強と謳われ、17歳で一等空佐にまでなった超エリート。それ程の実力を持ち、高い地位に就いていながら突然辞職したと結構騒ぎになっていた。

そんなすごい人たちに比べて私は何も持っていない凡人だ。でも、それでも私は立ち止まるわけにはいかないんだ。

「ティアナ、私じゃ頼りないかもだけど、心配事があるなら相談に乗るよ?」

いつの間にか私の目の前にいたシャルさんがそう言ってきた。あたしを覗き込むようにして見詰めてくるシャルさん。あたしはシャルさんの綺麗な瞳の輝きに完全に魅了されていた。

「・・・いえ、何でもありません。すみません」

でもあたしは何も言うことが出来なかった。

あたしから見て、シャルさんは隊長たち以上のエリート。だからシャルさんが何を言っても説得力がない、って思ってしまったから。

だからごめんなさい。そんな失礼なことを思ってしまった。

「そっか。でも溜め込むより話した方がいいんだよティアナ。一人で解決出来なくても、みんなを頼れば解決できることだってあるんだから」

「シャルさんにもあつたんですか?」

シャルさんみたいなさうい人でも一人だと出来ないことが・・・?」

それはたぶん嘘。

聞いた話だと10歳になる頃には、すでにSランクに匹敵する魔導師だったという噂だ。

「あるよ。だってそれが普通なんだよティアナ。

どんなに強くたって、一人の力なんて高が知れてる。

だから人は助け合って生きていく。だって一人じゃすぐに壊れてしまうんだから」

シャルさんは私から離れて遠い空を見上げていた。

少しかだけ見えたシャルさんの横顔はとても寂しそうだった。

シャルさんにはあたしたちの知らない何かがきつとあるのだろう。

「それじゃ私はもう行くね」

「あ、はい」

シャルさんはまた鼻歌を歌いながら去っていった。

でもシャルさん、これだけは思ってもいいですよね？

「・・・さつきからずっと音程・・・ずれてますよ？」

シャルさんは音痴だということが分かった。

何か可愛らしい欠点だな、と思っただことは胸にしまっておこう。

そしてこのすぐあと、ロングアーチからガジェット出現の報が入った。

私は戻ってきたシャルさんと一緒にホテル・アグスタへと向かった。

オークション会場よりある程度離れた深い森林の中に二つの影。
その二つの影、大柄な男と小柄な少女が眼下に広がる森林に立ち上る黒煙を見ていた。

それはガジェットの迎撃に赴いた機動六課の二人の副隊長、シグナムとヴィータによるガジェット撃破の証だった。

『ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア』

その二人の目の前にモニターが現れ、一人の男が挨拶を口にした。
今回の事件の首謀者ジェル・スカリエッティだ。

彼は大柄の男をゼストと呼び、小柄な少女をルーテシアと呼んだ。

「ごきげんよう」

「何の用だ？」

『冷たいね。近くで状況を見ているんだろう？』

ルーテシアからは挨拶を返されたが、ゼストからは素っ気無い返事のみだった。

スカリエッティは大して気にもせず話を進めていく。

『あのホテルにレリックは無さそうなんだが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。』

少し協力してくれないかね？ 君達なら実に雑作もないことのはずなんだが・・・』

「断る。レリックが絡まぬ限り互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

『ルーテシアはどうだい？ 頼まれてくれないかな？』

スカリエツティからの依頼を考えるまでもない、と切り捨てたゼスト。

しかしゼストのその返答にも動じず、今度はルーテシアの返答を聞いている。

「いいよ」

ルーテシアは俯いていた顔を上げてそう一言返事を返す。

『優しいなあ、ありがとう。今度ぜひお茶とお菓子を奢らせてくれ。君のデバイス、アスクレピオスに私の欲しい物のデータを送っておいたよ』

ルーテシアの左手に嵌められたグローブを指してそう告げた。

「うん。じゃあごきげんよう、ドクター」

『ごきげんよう・・・ああそうだ、もう一つ言い忘れていたよルーテシア。』

君の力を疑うわけじゃないが、今ホテルを守っている魔導師の中に少々厄介なのがいてね。

その魔導師の足止めとして、こちらから助っ人を用意させてもらった。

仲良くしてあげてくれると私も嬉しいな』

スカリエッツィの言葉にゼストの表情に僅かだが変化が現れる。自分が信用していない男の用意した助っ人とやらの警戒しているのだ。

それにルーテシアは気づかないのか「分かった」とだけ告げてスカリエッツィとの通信を終えた。

少しの間の沈黙。

その沈黙を破ったのはゼストのルーテシアの名前を呼ぶ声だった。

「・・・っ！ ルーテシア」

ゼストはルーテシアを庇うようにして前に出る。

目の前に現れたのは波打つ空間。その空間から現れたのはルーテシアくらいの少女だった。

レースとフリルが多くあしらわれた蒼いドレスに身を包み、

頭部にも同様に蒼い大きなリボンのついたヘッドドレスを着けている。

瞳は深い翠色、髪はショートカットの紺色といった感じだろう。

そしてクジラのぬいぐるみを両手で抱えるようにして口元を隠していた。

一見どこからどう見てもただの少女でしかない。

一切の魔力も感じられず、それ以前に存在感すらハッキリと感じ取れることが出来ない。

人間のものであって人間ではないもの。それがこの少女だった。

「今のは転移魔法ではないな。何者だ、お前がスカリエッツィの言っていた助っ人とやらか？」

ゼストは静かに、されど高圧的に目の前に現れた少女に問いかける。少女はその問いにただ「うん」とだけ頷いた。

正直ゼストは今、スカリエッツィの考えが本気で分からなくなっていた。

魔導師ですらない単なる幼い少女に一体何が出来るのか、と。

「待つてゼスト」

ルーテシアはゼストの背後から前面へと移動して、少女ときちんと顔を合わせる。

お互いに表情が乏しいためどこか似ている二人だった。

「私はルーテシア、ルーテシア・アルピーノ。あなたは？」

「……許レヴィヤタンされざる嫉妬……レヴィ……でいい……」

レヴィヤタンは逡巡したあと、そう静かに告げた。

レヴィヤタンは抱いているクジラのぬいぐるみを強く抱きしめて、未だに自分に警戒しているゼストへと視線を移す。

「……ゼストだ」

ゼストは半ば諦めたように自分の名前を告げた。

レヴィヤタンはそれに頷いて応えた。

ゼストは二人に気づかれないほどの小さなため息を吐いた後、ルーテシアへと向き直った。

「ルーテシア、本当にいいのか？」

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、わたしはドクターのこと、そんなに嫌いじゃないから」

「そうか」

ルーテシアは羽織っていたコートをゼストに預け、召喚魔法陣を展開した。

ゼストとレヴィヤタンはそれを少し離れたところから見守っている。

「我は乞う、小さきもの、羽ばたくもの。言の葉に応え、我が命を果たせ。召喚、インゼクトツーク」

ルーテシアの詠唱が終わり、召喚魔法陣からどこか無機質な多数の羽虫が現れた。

「ミッション・オブジェクトコントロール。いってらっしゃい、気をつけてね」

ルーテシアの周囲に飛んでいたそれは、ルーテシアの言葉を合図に飛びだって行った。

それを確認したレヴィヤタンは静かに歩を進める。

「わたしも・・・いってくる」

「レヴィも気をつけてね」

「・・・あ、ありが・・・とう・・・」

現れたときと同じように空間が波打ち、レヴィヤタンは姿を完全に消した。

「遠隔召喚、来ます!！」

私たちの目の前に四つの召喚魔法陣が浮かび、そこから何機ものガジェットが現れた。

「あれって召喚魔法陣!？」

「召喚ってあんなことも出来るの!？」

エリオとスバルがその光景に驚いている。戦闘中に一々驚いていると危険だよ二人とも。

「優れた召喚士は転送魔法のエキスパートでもあるんです!！」

それにしても本当に変わるものだね。

転送術式なんて昔だと結構レベルの高い術式だったのに、現在じゃポンポン使われてるし。

そんなことを思いながら、私はいつでもみんなのフォローに移れるように待機しておく。

「何でもいいわ、迎撃いくわよ」

「」「」おっつ!」「」

ティアナがこの場の指揮官として動くことになってる。

だから三人は力強く答えて臨戦態勢に入った。

「シャルさん、数が多いので左方から来るガジェットを任してもいいでしょうか？」

「了解。遠慮なんかせずに好きなように使ってくればいいから」

「え、はい！」

ティアナにそう答えて、この世界での相棒“トロイメライ”を構える。

久々の“トロイメライ”の戦闘で俄然やる気が出てきた。でもだからといってみんなの成長を邪魔するようなへマはしない。

「そんじゃ久々に暴れるよトロイメライ！」

J a w o h l ・ M e i s t e r

ああこれこれ、これだよ。

武器が喋って答えてくれるというのが本当にいい。

私はそっと“トロイメライ”の刀身部分を優しく撫でる。

「つとと、こんなことしてる場合じゃなかった」

気を取り直してみんなと少し離れてしまう場所でガジェット掃討に移る。

まずは手始めに一番近いガジェット？型を三機破壊して、その勢いのまま？型も破壊、と。

そう狙ってガジェット群へと突撃したけど、紙一重の差で回避されてしまった。

「・・・あれ？」

なるほど、確かにガジェットの動きが明らかに良くなっている。
ロングアーチからの報告どおり、というわけだ。

そのお陰でさっきの一撃で破壊するつもりだった？型の三機は健在。
そして私がつ立っていることで、ガジェットが物凄い勢いで攻撃し
てきた。

Seeleisch Widerstand

もちろんそんな簡単に落とされる私じゃない。
対魔力障壁を四方に展開してガジェットの攻撃を防ぐ。

「そつかそつか。でも無駄な足掻きって言うんだよそれは・・・ト
ロイメライ」

Eiszapfen Flügeln

刀身に冷気が纏わりついて周囲の気温が下がっていく。
そして“トロイメライ”を横一闪。

「氷牙凍羽刃！」

氷の羽根を八つ、ガジェット群に向けて放つ。
まあガジェットは簡単に避けたけどまだ終わっていないんだよ。

Sprengen (破裂)

ガラスが割れたかのような音が周囲に響く。

音の原因は八つの凍羽刃が爆発したことによるもの。周囲に吹き飛ぶ細かい氷の弾丸がガジェットの防御を突破、そして爆散させて行く。

「それでも・・・たったの八機しか壊せなかったか。まあいいか、それじゃ次は回避も防御も出来ないから、そのつもりで・・・いきます」

歩法“閃駆”を使つての高速移動。

もちろん有人操作、いや有人操作だからこそガジェットは何一つ対応できない。

私は残像をハッキリと残しつつ、ガジェット群の合間を縫うようにして疾走した。

「まつ、こんなものよね」

“トロイメライ”を振るって肩に担ぐ。

肩に峰が“トンツ”と当たった瞬間、私の背後に浮いていたガジェット九機全てが爆散した。

「よし、それじゃフォワードのみんなのところへと戻りますか」

ある程度アグスタに近づいたとき、上空をウイングロードで疾走するスバルを確認した。

私は上空のスバルから真っ直ぐ前へと視線を移す。

そこにいたのは今まさに無茶をしようとしているティアナの姿だった。

ティアナの周囲には多数のスフィアが展開されている。見るにクロスシフトAで間違いない。

スバルがかく乱を担当してティアナの誘導操作弾の一斉射撃による対象の殲滅、一体何をやっているんだか。四人が一緒にいるうちにその手は必要ない。ティアナの選択は明らかに間違っている。

どうやら私の話はティアナには届いていなかったようだ。少し残念。

「シューッットッ！！」

私が念話でティアナを止めようとした瞬間、ティアナは無数のスプイアを放った。

放たれた弾丸の第一波は見事にガジェットを捉えて破壊していく。それでもティアナは全機自分で破壊する気なのか、手を止めることなく撃ち続ける。

そして続けざまに撃った弾丸の一つがガジェットから逸れ、ウイングロードで疾走するスバル目掛けて飛んでいくのが見えた。

「ゼーリツシュ・ヴィーターシュタント」

スバルと弾丸の間に割り込むようにして障壁を展開する。私の障壁に弾丸は容易く防がれ消滅した。

そして自分に迫っていた弾丸を見ていたスバルは顔を青くして立ち止まり、撃った本人であるティアナは呆然としていた。

「ティアナ！！ この馬鹿！！ 無茶やったうえに味方を撃つてどうすんだ！！」

いつの間にか来ていたヴィータが肩で息をしながらティアナを怒鳴りつけた。

「あ、あのヴィータ副隊長、今のもコンビネーションの中で」

「ふざけるタコ、直撃コースだよ今のはっ！」

「フライハイトがいなきゃお前、今頃どうなってたか分からねえわけでもないだろ！！」

スバルの言葉を遮って再度怒鳴りつけるヴィータ。

それでもスバルはティアナを擁護するために言葉を紡ごうとしている。

「ち、違うんです！！ 今のは「スバル」・・・シャルさん」

私もさすがにこれ以上黙っているわけにもいかない。
だからスバルの名前を呼んだ。

「ねえスバル、気づいたときにはもう回避できないの、分かってたでしょ？」

「っ、そんなことは」

「あなたが優しいのは分かる。ティアナを庇いたい気持ちもまあ分かる。」

でもね、今のティアナを庇うことは間違ってるし、逆にその優しさがティアナを傷つける」

私の言葉を聞いて、スバルはティアナへと視線を移す。
そこには未だに俯いて立ち竦んでいるティアナがいた。

「て、ティアナ・・・」

「今回のミスはティアナが一番分かっているし傷ついていると思う。」

何せ大切なパートナーのスバルをもう少しで自分の攻撃で傷つけていたのだから」

「はあ、テメエら二人はすっこんでろ。ここはあたしとフライハイトで片付ける」

「っ！」

ヴィータに邪魔だから消えろ（ここまで酷くない）と言われたスバルの肩が震えた。

まあつまり、ヴィータが言いたいのはたぶんこういうことだろう。

「スバル、ティアナについていてあげて。今のティアナは一人だと危ないから、ね。」

それにスバルならティアナを何とかできるでしょ？ と我らがヴィータは仰いました」

「言つてねえだろっ！」

「でもそう言いたかったんでしょ？」

「んなわけあるかっ！」

そこまで捻くれなくてもいいのに、ヴィータは素直じゃないですね。必死になるところがまだまだ甘いよ、ヴィータ。

「ヴィータ副隊長、シャルさん、ありがとうございます……」

「ああもう、いいからとっとと行け」

「スバル、ティアナをよろしくね」

スバルがティアナを連れて下がって行ったのを確認した。さてと、もう一暴れといこうかな。

『こちらライトニング2シグナム。戦闘区域にて一般市民を発見し保護。』

身なりからしてオークションに参加する客の子供と思われる。

年齢は10歳前後、性別は女。誰か手の空いている者に引き取りに来てもらいたい』

シグナムからそう通信が入る。

シグナムがいるのは結構深い森の中のはずだ。

そんなところに子供がいるわけ・・・まさか。

「こちらフライハイト。シグナム、その子の名前を聞いてもらってもいい？」

ヤツらの反応はない。だからそれはないと思いたい。でも一度疑ったらもう止まらない。

『・・・レヴィヤタン、だそうだ』

最悪だ。まさか神秘を感知できないヤツがいたなんて。さすがのシグナムでもヤツ相手じゃ話にならない。

「シグナム、すぐに撤退を！ 私がそっちに向かう！」

「例のヤツか!？」

ヴィータも真剣な面持ちで聞いてきた。

私は頷いて応え、この場のガジェット掃討をヴィータに任せることにした。

十 十 十 十 十 十

「紫電・・・一閃！」

私の渾身の一撃を何の防御もせずその細い体で受け止める少女。

“レヴァンティン”の炎が一瞬のうちに消えるが、そのまま力を籠めて“レヴァンティン”を押し。

少女の名はレヴィヤタン。以前の会議で此度の事件の首謀者ジェイル・スカリエッティに協力している一派の一人として挙げられた名前を持つ少女だ。

「・・・まだ・・・」

“ペッカートウム”。人間のようであって人間ではない虚構の存在。かつて理解に少々苦しんだ神秘という力の塊。同じ神秘でしか打倒できないモノ。

人間ではない、ということはずでに聞き及んでいるが、やはりどう見ても人間でしかない。

「くっ」

そしてその目的は不明。

だがスカリエッティに何かしらの協力をしているらしい、とのこと

だ。

「今まで多くの敵と戦ってきたが、一切の攻撃が通用しないというのは嫌なものだな。」

ここまで通用しないとは、呆れを通り越して笑いがこみ上げてくる「

距離を取り、レヴィヤタンと名乗った少女と向き合う。

ガジェットの掃討は先に撤退させたザフィーラに任せてある。

私にも撤退するようにフライハイトに言われたが、少女の目的が分からない以上はこのまま一人にさせるわけにもいくまい。

「目的はなんだ？」

“レヴァンティン”を構えなおして視線を向けたところで、あの少女の姿がないことに気づく。

「消えた、だと・・・？」

一瞬のうちに姿を消した少女の姿を探す。

気配はない、がおそらくどこかにいるはずだと本能が告げてくる。

「・・・それが・・・限界」

間違いなく耳元で囁かれた。

振り返ると、そこにはぬいぐるみを私の顔に差し出した状態の少女がいた。

「・・・わたしには・・・勝てない」

次の瞬間にそのぬいぐるみから閃光が放たれた。

しかし魔力が一切感じられない。しかし避けるという警鐘が頭の中に鳴り響く。

「はあああああっ!!！」

体を捻るようにして閃光を回避し、無駄だと知りつつ“レヴァンテイン”を叩きつける。

刃は間違いなく少女の頬に当たっているものの何一つ傷が付かないうえ、逆に私の右手に鈍い痛みと痺れが襲ってきた。

『離れてシグナム!』

フライハイトからの思念通話が届く。

それに従ってすぐさま少女から離れた。

「……来た……第三の力^{サードフォース}」

「はあああああっ!!！」

少女の背後から翼を羽ばたかせたフライハイトが突進してくる。

その手に持っているのは“トロイメライ”ではなく“キルシュブリュー”。

神秘を宿すといわれた武器だ。

だが少女はフライハイトの一撃を難なく回避した。

そしてフライハイトは私の傍へと降り立った。

「ごめん、遅くなった。あとは私に任せてガジェットの方をお願い」

「……ああ、任せた」

ここにいっても私は何も出来はしない。
ならばここはフライハイトに託すしかないだろう。

「ようやく現れたと思えば、初撃を容易く回避されるとは腕が落ちたな」

ジェイル・スカリエッティのラボにて一人の男がモニターに映るシャルロッテを見、静かにそう口にした。

歳は二十代半ば、服装は白いスーツに、目立つ赤いネクタイを締めている。

茶色の髪を無造作に伸ばし、その金色の双眸でシャルロッテを見つめている。

「すまなかつたね、彼女を借りて。

レウイヤタン
許されざる嫉妬は3rd・テストメント君に敗れてしまうのだろうか？」

男の隣に立つスカリエッティは、自分の秘書であるウーノが淹れた紅茶を飲みながら男に向かって謝罪の言葉を口にした。

「気にするな。こちらとしても三番の今の力を見れたことには感謝しているんだ」

男はスカリエッティと同様に紅茶を飲みながらそう答えた。

「それに許されざる嫉妬なら大丈夫だろう。」

何せ今の三番は駄目だからな。いくら人間の器に閉じ込められようと弱くなり過ぎだ。

あれではおそらく許されざる傲慢にすら苦戦を強いられるだろうな」

「そうなのかい？　ならこのままルーテシアたちと共に行動させてもいいかな？」

スカリエツティのその言葉を聞いた男は少し逡巡した後、「好きにしろ」と答えた。

「ドクター、お嬢様のガリユーが例の物の入手に成功しました」

二人の間にモニターが現れそこに移るウーノが、ルーテシアがスカリエツティの依頼を無事に終えたことを告げた。

「そうかい、さすがはルーテシアとガリユーだね。」

では許されざる傲慢、許されざる嫉妬にルーテシアと合流するように頼んでもらってもいいかな？」

「分かった。許されざる嫉妬、ルーテシアと合流してしばらく同行してくれ」

許されざる傲慢はどこを見ずともそう告げた。

「……もう……終わり」

私の“キルシュブリューテ”の攻撃を紙一重で回避していたレヴィヤタンが呟いた。
正直甘く見ていた。簡単に勝てると思っていたのに与えられた決定打は八撃だけだった。
しかしどれもレヴィヤタンを消滅させるまでには至っていない。

「他の連中が帰って来い、って言っているわけね」

もちろん逃がすわけにはいかない。

ここで数を減らしておかないと後々厄介なことになると思ったからだ。

「……来て……レーガートゥス罪眼」

私を囲むようにして現れたレーガートゥスは約50弱。
敵じゃないけど対処しているうちにレヴィヤタンに逃げられる。

「面倒なことを……!」

凶牙波瀑刃

魔法から再度魔術へと切り替えた一撃を放つ。

レーガートゥスが黒い波に飲まれていく中、レヴィヤタンの背後の空間が波打つ。

「……弱い……第三の力」

「……なっ!?!」

弱い・・・私が？

「・・・心が弱い・・・先代の許わたしされざる嫉妬が・・・そう言うてる。

今の・・・第三しごころの力・・・守護神になっても・・・きっと弱い」

レヴィヤタンはそう言い残して消えていった。

私の力じゃなくて心が弱いと・・・だから勝てないのだと。

「ふふ、あはははは」

確かに私の心はこの世界に呼ばれてから弱くなっていったと思う。でもなのはたちと会う前の私よりかはずっと良い心になっていると胸を張って言える。

それが弱くなったというのであればそれで構わない。

「だってこれが幸せというものでしょ」

だから今の私の幸せを崩そうとするお前たちは絶対に消し去ってやる。

私はみんなと合流するために歩き出したとき、通信端末から着信音が鳴った。

おそらくルシルからの返信だと思う。

通信端末を取り出しメールを確認する。仕事中だろ？というツッコミはなし、ということだ。

< 一体何を企んでいるんだ？ >

ルシルからのメールはたったのこれだけ・・・？

私は“感想”を返信しろと送ったのになあ。

「・・・アウト」

ルシル、女装の刑決定。

ティアナの思い　なのはの願い

「……あ、シグナム」

「その様子では逃げられたようだな」

態々私を待っていてくれたのだろうか、ガジェットの残骸の中心でシグナムが佇んでいた。

「あはは、うん……」

「どうした、傷でも負わされたのか？」

「ううん、大丈夫。シグナムは？」

私がレヴィヤタンと交戦する前にシグナムは戦っていた。だからシグナムのことも心配なんだけど、シグナムの周りに転がるガジェットの残骸を見れば大丈夫かな？

「見ての通りだ。しかしアレは本当に厄介だな。聞いていた通り攻撃が何一つ通らなかった。

フライハイト、やはり私やテストロッサたちが能力リミッターを外しても勝てんのか？」

「前の会議で話したとおり、だね。ペッカートウムと戦うには神秘といわれる力がどうしても必要になる」

二人して歩きながらペッカートウムのことについて話す。

みんなにはヤツらと戦うだけの能力はあってもダメージを負わずための神秘がない。

それでは戦いにはならず、一方的に倒されてしまうことになる。

「そうか。それはなんとというか悔しいな。私たちではやはり手も足も出ない、というわけか」

「だから私とルシルが命を懸けてでもみんなをヤツらから守る。まあシグナムにとっては嫌なことだろうけどな」

「そんなことはない。守られ守るのが仲間だろう？　ならば私もお前たちに守られよう」

「そうだね。うん、そのとおりだ」

「だがなフライハイト」

横を歩いていたらシグナムが立ち止まって真剣な面持ちで私を呼んだ。私も立ち止まってシグナムへと振り返る。

「命を懸けてでも、というのは許さん」

そう言ってシグナムはまた歩き出して私を追い抜いていった。

“命を賭けるのは許さない”か、そんなこと初めて言われた。

「ありがとう、シグナム」

「当たり前のことだ。だからお前たち二人も私たちに守られる。命を懸けるようなことは絶対にさせん」

「うん」

会話はそれっきりであとは静かなものだった。
でもみんなと合流するまでのこの静かな時間がなんだか心地良かった。

そのあとは事後調査やユーノとの再会などを経て六課隊舎へと帰った。

十 十 十 十 十 十

「あのさ、二人ともちょっといいか？」

ホテル・アグスタから戻ってきて新人のみんなと別れたあと、隊舎内の廊下を歩いていると、うしろからヴィータちゃんに呼び止められた。

「あ、うん」

何か話があるみたいだから私たちは近くの休憩スペースに移動した。

「訓練中から時々気になってたんだよ、ティアナのこと。
強くなりたい、というのは若い魔導師ならみんなそうだし、無茶も多少はするもんだけど、時々ちょっと度を越えてんだよ」

ヴィータちゃんの聞いたかったことはティアナのことについて。

「あいつ、ここに来る前になんかあったのか？」

「うん。いい機会だと思うし、話しておいたほうがいいよね」

私はティアナの行動の原因、ティアナのお兄さんの話をすることに
した。

モニターを出してティアナのお兄さんの顔写真を映し出す。

「ティアナのお兄さん、ティード・ランスター」。

当時の階級は一等空尉、所属は首都航空隊。享年21歳」

「結構なエリートだな」

「そう、エリートだったから・・・なんだよね」。

ティード一等空尉が亡くなったときの任務。逃走中の違法魔導師に
手傷を負わせたんだけど取り逃がしちゃって・・・」

「まあ地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで犯人はその日に取り
押さえられたそうなんだど・・・」

確かその犯人を捕まえたのが今ここにいないルシル君のいた部隊だ
った。

「その件についてね、心無い上司がちょっと酷いコメントをして一
時期問題になったの」

「その、コメントって・・・なんて?」

「・・・うん、犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて首都航空
隊の魔導師としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえる
べきだった・・・」

「それだけじゃなくて、任務を失敗するような役立たずは・・・その・・・」

私に次いでフェイトちゃんも悲しい顔でそう口にした。

そういえばそれを聞いていたシャルちゃんとルシル君は当時かなり荒れていた。

正直あのときの二人はすごく恐かった。

「マジかよ」

「ティアナはそのときまだ十歳。たった一人の肉親を亡くして、しかもその最後の仕事が無意味で役に立たなかった、って言われて、きつともものすごく傷ついて悲しんで・・・」

重たい空気が私たちを覆う。

「だから証明したいんだと思う。お兄さんが遺してくれた魔法は役立たずなんかじゃない立派な魔法なんだ、って」

「あいつが必死なのはそういうことだったのか・・・」

十
十
十
十
十
十

「そうか、向こうでそんなことが・・・」

私の個室でシャルから任務地であるホテル・アグスタで起きたことのいくつかを聞いていた。

「甘く見ていたとはいえ今代の許レヴィヤタンされざる嫉妬はかなり速かった。
“閃駆”と“居合い”、“魔術”で与えられたのは八撃、でもその
全てが致命傷じゃない」

「馬鹿な、今の君の攻撃を回避するとは一体どれだけの速さを持つ
ていると・・・？」

いくらなんでもそれは信じられない、がシャルがそう言うなら事実
だろう。

これは認識を根底から改めたほうがいいのかもしれない。

七体の中でもさらに弱いとされているレヴィヤタンが“速さ”とい
う一芸を以てシャルを苦戦させた。

この事実は無視して良いようなものじゃないのは確かだ。

「しかも“心”が弱いから勝てないって言われる始末。

でもそんなこと“心”を失い壊れて堕ちた連中なんかに言われたく
ない。

確かに“心”が弱くなったのは自覚してるけど、それが直接の弱さ
なんて思わない」

「まあそうだろうな」

本来なら、何も得られない守護神の“心”には弱さなんてものは存
在し得ない。

だが今のシャルには得られるものがあり、そして心から守りたいも
のが出来た。

それが連中からして見れば“弱さ”になるんだろうが、人にとって
はそれが“強さ”だ。

「だから今度会ったら思い知らせてあげるつもり。今の私の本当の“強さ”を、ね。」
「ということ少し模擬戦に付き合っ」

「全く、君というやつは。いいだろう、その代わり手加減はしないぞ？」

それと私が勝ったら女装の刑は取り下げてもらおう」

「いいよ、勝てたらね」

それからすぐに外へと出て林の中の、開けた空間のある場所を目指している中、

「あれ、ティアナ？ 何してるの、今日は休めって言われてるのに・・・」

シャルが立ち止まってある一点を見つめた。

そこにいたのは訓練服を着て、点滅する数ある練習用スフィアに銃口を向けるティアナの姿だった。

「今日、ティアナはミスショットをしたって言ったなシャル」

「そうだけど・・・だから自主練？」

かなり集中しているのか私たちに見られているのに気づいていないようだ。

これは邪魔は出来ないな。

「シャル、彼女の邪魔は出来ない。今日は止めておこう」

「え、あ、うん・・・ティアナ・・・」

シャルは少しの間ティアナを見たあとこの場を離れた。

十 十 十 十 十 十

私はあれから時間を置いて何度かティアナの様子を見に行っていた。でもどの時間に行ってもティアナは同じことを繰り返していた。辺りが暗くなる頃、もう四時間くらいになるだろうか、ルシルと再度様子を見に行くと、離れたところでティアナを見守るようにヴァイスが佇んでた。

「ルシル、シャルさん・・・」

私たちの足音に気づき、振り向いたヴァイス。

「こんばんはヴァイス」

「こんばんはつす、シャルさん。あぁついでにルシル」

ヴァイスと軽く挨拶を交わす。

それにしてもヴァイスのルシルに対するこの態度は本当に相変わらずだ。

昔、ルシルを女と勘違いして声を掛けたことを今でも根に持っていないのかな？

でもあれには本当に驚いた、というより可笑しすぎてずっと笑っぱなしだったな私。

「ああ・・・なあヴァイス、さすがにティアナに手を出すのはまずいと思うぞ」

「違いよアホ。つか分かってて言ってるんだろそれ？」

「そうじゃなくてあいつ、かれこれ四時間くらいああやってんだよ。ヘリの整備中にスコープで時間を置いて見てたんだが全然休んじやいねえんだよ」

「やっぱり・・・あの子、こんな無茶して」

「さすがにこれ以上やらせるわけにはいかない。このままじゃあの子の体が壊れてしまう。」

「私、少し話してみる」

「お願いするっすシャルさん」

「・・・」

ティアナのもとへと歩き出す。

こんなに近づいているのに全く気づいている様子はない。

「ティアナ」

「っ！ し、シャルさん？ それにヴァイス陸曹とルシルさんまで・・・？」

私に呼ばれて少し驚いた様子を見せた。

「ティアナ、もう四時間も続けているでしょ。」

これ以上続けるのを見過ごすことは出来ないよティアナ」

「・・・いえ、私はまだやります。まだたったの四時間しかしていないので」

「なあおいティアナ、それ以上はお前の体が壊れんぞ？」

「ここは大人しくシャルさんの言うとおりに休め」

「どうやら言うことを聞かないつもりみたい。

今日のミスショットが本当に悔しかったのは分かる。

何せ私も生前では同じような経験があるから。だから今のティアナの思いがよく分かる。

でもだからといってここまでの無茶をするようじゃ全然ダメだ。

「あたしは大丈夫ですから心配いりません。これくらいはやらないとダメなんです」

「だからよ、精密射撃なんざそうほいほい上手くなるもんじゃねえし。」

無理な詰め込みで変なクセをつけんのも良くねえぞ」

ティアナはヴァイスの言葉を黙って聞いていたけどやっぱり練習を止める様子はない。

「どうしたものかなあ、いつそ力づくで止めてみようか？」

「ティアナ、今日はもう止めておくんだ。

無茶をしたところで得られるものなんてない。

それにいつ招集がかかるかも分からないんだ。

もしこの瞬間にかけられたらどうする？」

新人の指揮を任されている君がそんな状態で乗り切れるとも思っ

ているのか？

今度はスバルだけじゃなくて、エリオやキャロまで危険な目に合わせるかもしれないぞ？」

ルシルの言っていることは正しいけど、もう少し優しく言ってくれないかなあ。

ヴァイスだって“そこまで言うか？”みたいな顔してるし。

「っ・・・分かりました。今日はこれで失礼させてもらいます」

そう言っただけティアナは少しフラつきながら隊舎に戻っていった。

「なあ、あそこまでキツイこと言わなくてもよかったんじゃないか？あいつに嫌われるかもしれないぞルシル」

「なら黙って続けさせればよかったか、違うよな？

四時間も休まずに続けていればもう限界なはずだ。

ならあれくらい言っただけで止めさせたほうがいい。

それに私は嫌われるのも憎まれ恨まれるのも慣れている。だから問題はない」

「あ、おい！」

ルシルもそう言って自室へと戻っていった。

残された私とヴァイスはポケットと佇んでお互いを見た。

「え〜と、そんじゃ俺も戻りますんでお休みです」

「あ、うん、お休み」

ヴァイスもそう言っただけだったので私も自室に戻ることにした。私はこれでティアナの無茶な自主練も少しは緩和されると思ってた。ティアナはスバルと一緒に早朝、夕方の訓練後も二人で自主練をするようになった。

それもまあ無茶だけど、でもあの夜のような行き過ぎた無茶じゃなかったから止めなかった。

それに二人の訓練における前向きな姿勢にみんなが感化されていい感じになっていたから。

それを邪魔するようなこともしなくなかったし、だから止めなかった。

そんなことが数日続いたある日、いつもどおりの模擬戦。

今朝から胸のざわつきが止まらなかったから、ルシルと一緒に直に見学させてもらっていた。

まあルシルは私のような見学オンリーと違ってライティングの英才を鍛えていたけどね。

「さーで、午前中のまとめ、2001で模擬戦やるよ。

まずは・・・スターズからやろうか。バリアジャケット、準備して」

「はい！」

呼ばれたスバルとティアナは強く答えた。

「んじゃ、エリオとキャロはあたしらと見学だ。

セインテストとフライハイトもそれでいいな」

「はい！」

「ああ」

「……ええ」

そうしてビルの屋上へと場所を移してスターズの模擬戦を見学することになった。

模擬戦が始まって少し経ったとき、背後の扉が勢いよく開けられる音がした。

扉から出てきたのは訓練服姿のフェイト、かなり急いで来たみたい。

「あ、もう模擬戦始まっちゃってる！？ 私も手伝おうと思ったんだけど……」

「今はスターズの番」

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけど……」

だからそんなに急いでたんだ。

フェイトだって捜査とかで大変なのに……ていうか私が一番仕事してない……かも。

「ああ、なのはもここんとこ訓練密度濃いーからな、少し休ませねえと」

ヴィータの言うとおりなのは最近結構ハードなスケジュールを組んでるんだよね。

なのはもなのは結構無茶をするものだ。

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターの向かいっぱなしなんだよ。

訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり」

「なのはさん、訓練中もいつも僕たちのこと見ててくれるんですね」

「本当にずっと・・・」

昔はよく無茶をする突進少女だったのに今は誰からも尊敬される先生、か。
変われば変わるものだよ本当に。

「お、クロスシフトだな」

ヴィータの言葉でみんなの意識が模擬戦へと移る。
お願いだから下手な無茶はしないでよ、ティアナ、スバル。

「クロスファイアー・・・シュート!!」

なのはに向けて放たれた誘導弾なんだけど、

「あ？　なんかキレがねえな」

「コントロールはいいみたいだけど・・・」

ヴィータやフェイトの言うとおりコントロールは気にするほどのものじゃないけど、スピードとかのキレがいつもより弱い。

「いや、それにしただって・・・」

ヴィータたちの声を聞きながらティアナたちの模擬戦に集中する。
放たれたティアナの誘導弾はなのはの飛行の軌道を制限している。

そしてウイングロード上のスバルが真正面からなのはへと疾走していく。

それを捉えたなのはの周囲にいくつもスフィアが展開されて、スバルを迎撃するために放たれた。

でもスバルは回避じゃなくて防御を選択、そのままなのはへと突撃した。

何だろう、ここにきて一気に不安になった。

スバルの拳を防ぎ、そして弾き飛ばしたなのはを見ながらそんなことを考える。

「こらっスバル！ ダメだよ、そんな危ない軌道！」

弾き飛ばされている最中のスバルへ、なのはからのありがたいお叱りの言葉が飛ぶ。

その間もティアナの誘導弾を難なく回避するのはさすがだ。

「すみません！ でもちゃんと防ぎますから！！」

何とかウイングロード上に着地できたスバル。

全く危ないことをするものだから落ち着いて見てもらえない。

「あれ、ティアナはどこ？」

そこで私はティアナの姿がないことに気づく。

辺りを見渡していると、

「あそこだよシャル」

ルシルが視線を向けた場所にティアナはいた。

ティアナは“クロスミラージユ”を構え、砲撃魔法の体勢に入っていた。

「砲撃？ ティアナが！？」

フエイトが驚きの声を上げた。

私は構わずスバルの行動に何かを感じ取ってスバルへと視線を向けた。

「でえええりやああああ！！！」

スバルはウイングロードを疾走し、再度なのはへと唸りを上げる“リボルバーナックル”の一撃を与えようと突撃した。

もちろんなのはが黙って見ている訳もなく、低威力のデイバインシユーターをいくつかスバルに放つ。

スバルはそれを全弾紙一重でかわして“リボルバーナックル”で殴りつける。

けどその一撃もなのはのシールドで防がれるんだけど・・・これが狙い？

スバルがなのはの足止めに徹して、そしてティアナの砲撃でなのはを撃墜・・・？

でもその考えは違っていた。

「あっちのティアさんは幻影！？」

キャロの言うとおりに離れたビルの屋上でクロスミラージユを構えていたティアナが消失した。

その瞬間、ルシルの雰囲気が一気に変わった。

みんなは気づいていないみたいだけど・・・これは・・・落胆？

「本物のティアさんは!？」

エリオの疑問よりルシルの視線の先が気になった私は同じ方を見た。そしてそこにいたのはウイングロード上を駆けるティアナの姿。

「まさか・・・あの子たちがやるうとしてのことって・・・」

ティアナはウイングロードを駆け上がりながらカートリッジを二発ロードし、“クロスミラージュ”の銃口部分から魔力刃を生み出した。

なのはの真上まで駆けて行くということは、上空からの勢いでなのはの障壁を斬り裂く、ということを狙っているんだらう。

「・・・ダメ、それはダメだよティアナ・・・」

やっぱり止めておけばよかった。

あの二人は確実になのはの教導から外れた行動を取ろうとしている。

センターガード、つまりは中衛であるティアナがフロントアタッカーのスバルを囮にして、自らも近接攻撃へと移る戦法。

「・・・レイジングハート、モード・リリース」

ささやき程度の小ささだっというのに、なのはの声が私たちのところまで届いた。

その声に含まれているのはルシルと同じような落胆、それに悲しみや・・・怒り。

上空から仕掛けてきたティアナを見もせず“レイジングハート”を解除した。

その次の瞬間、なのはたちのいるところに大きな爆発が起こり煙を上げた。

「なのはっ!？」

そして未だ煙が晴れきっていない中、

「おかしいなあ、二人ともどうしちゃったのかな・・・？」

なのはの声が聞こえた。

煙が晴れてウイングロード上にいたのは、スバルの拳を左手で受け止め、“クロスミラーージュ”の魔力刃をティアナごとフロッターを掛けて右手で支えているなのはたちの姿。

「頑張ってるのは分かるけど、模擬戦はケンカじゃないんだよ？」

静かに紡がれていくなのはの言葉。

「練習のときだけ言うことを聞いてる振りで、本番でこんな無茶するんなら練習の意味・・・ないじゃない。ちゃんとさ、練習どおりやろっよ」

ティアナとスバルはもうどうして良いのか分からないだと思っ。完全に今のなのはの雰囲気にもまれてしまってる。

「ねえ、私の言ってること、私の訓練、そんなに間違ってる？」

その言葉を聞いたティアナは魔力刃を消して後方のウイングロードまで大きく飛んだ。

そしてなのはに“クロスミラージユ”の銃口を向けるといふ行動を取った。

「あたしはっ！ もう誰も傷つけないからっ！ 失くしたくないからっ！」

ティアナが泣き叫びながら感情をなのはにぶつける。

「だから・・・強くなりたいですっ！！」

それを聞いたなのははティアナへと指先を向けて足元に魔法陣を浮かび上がらせる。

待って、ちよっと待ってよなのは・・・。

「少し、頭を冷やそうか・・・クロスファイア」

「あああああ！！！！ ファントムブレイ」

「シュート」

ティアナの砲撃より先なのはの魔法が放たれる。しかもそれはティアナの魔法・・・。

「ティア バインドっ!?」

なのはの一撃を受けたティアナを見てスバルが駆け寄ろうとするけど、それより先なのはがスバルへとバインドを掛けた。

「じっとして、よく見てなさい」

「っ、なのはさんっ!?!」

再度なのははクロスファイアを、しかも砲撃のように集めて放とうとしている。

「ティアナっ! 待って、なの ルシル!?!」

私もなのはを止めようとしたところで、ルシルに右手を掴まれて身動きが取れなくなった。

そして容赦なくティアナへとなのはの砲撃が放たれた。

「なんで・・・なんで止めたの、ルシル!?!?」

「ちよつと待てフライハイト、ティアナは無茶をし過ぎたんだ。

一度自分たちがどれだけ危険なことをしたかを思い知らなくちゃいけねえ」

無言のルシルに代わってヴィータがそう答えた。

分かっている、分かっているけど・・・だからって撃墜なんてしなくてもいいじゃない。

「ティアナはこのままだとかつてのなのはや私のようになってしまう。」

無茶をして撃墜されて・・・そしてみんなに多大な迷惑をかける・・・」

ルシルは八年前のあの日のことを言っているのだとすぐに分かった。でも事情が分からないエリオとキャロは黙って私たちを見ている。

「・・・ティアナを医務室に運んでくる。私も一応医療班だしな」

ルシルはそう言って、ティアナのもとへと向かった。

十 十 十 十 十 十

「なのは」

スバルに睨まれ続けているなのはのもとへと降り立った。

なのははスバルとティアナから一切視線を逸らさずにいた。

「私がティアナを医務室へと運ぼう」

「・・・ルシル君。うん、お願い」

なのはの許可も貰ったことで倒れ付しているティアナと、傍にいるスバルのもとへとゆっくりと歩く。

「スバル、君も一緒に医務室へ来るんだ」

「・・・はい」

ティアナを横にして抱えながらスバルにもついてくるように言う。スバルは涙を袖で拭って大人しくついてきてくれた。

『なのは』

ここを去る前に言うておきたいことがあったから、念話でなのはに語りかける。

『っ、何かな、ルシル君？』

『一度フォワードたちと話し合うことを提案する。』

君の考え、教導の意味、それらを一度真正面から話し合ったほうが良いかもしれない。

この子達を、かつての私となのはのようにさせないためにも、な』

このまま放っておいたらティアナはまた無茶をするだろう。

そしてこんなことを続けてしまうようなことになったら、いつか本当に実戦で撃墜されてしまうことになりそうだ。

『そう・・・だね。うん、そうする。ごめんね、ありがとう』

そうして隊舎へと戻った私たちはシャマルのいる医務室へと向かっていた。

というか視線が痛い。女性隊員からは妙な視線、男性隊員からは負の視線が・・・。

それらを無視して医務室へと急ぐ。

「あの・・・ルシルさん、ちょっと・・・聞いてもいいですか？」

「私に答えられることなら」

隣を歩くスバルが遠慮がちにそう口にした。

「あたしたちは・・・間違っていたんですか？ 確かにあたしとティアナは危ないことをしたと思います。」

でも、自分なりに強くなるうとか・・・どんな状況でも何とかしようって、そのための努力をしようとすることはダメなことなんてし

ようか？」

スバルたちからしてみればそれをなのはに否定されたと思っているのだろう。

だが違う。なのはだってそれを認めてくれるはずだ。

「その思いは確かに間違っではない。

間違っではないけど、でも・・・いや、そこはなのはに語ってもらおう」

これはなのはの問題でもあるから私が解決させてはいけない。

私が途中で言葉を切ってしまったためにスバルが若干沈む。

そして医務室へと着き、ティアナとスバルをシャマルに預けて医務室をあとにした。

というかシャマル、いい加減結婚ネタを引っ張るのをやめていただきたい、と思ったり。

そして時間は夜、なのはに呼ばれたフォワード陣や私たちはロビーへと集められた。

私なのはに提案した話し合いをするためだろう。

「こんな時間に集まってもらってごめんね。

でもどうしても今日のうちに話しておきたいことがあったんだ」

なのはは一度フォワード、とくにティアナとスバルを見てそう告げた。

そしてなのはの隣に座るシャーリーがキーボードを叩くのをやめ、なのはに視線で合図した。

なのはもそれに視線で応え、シャーリーが再度キーボードを叩き、そして私たちの前にモニターを出した。語り部はシャーリーが担当するようだ。

「昔ね、一人の女の子がいたの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった」

モニターに映し出されたのは十年前のなのは。そして日常の何てこととはない風景だった。

それを黙って見ている一同だが、なのはだけは少し恥ずかしそうに目を伏せた。

「友達と一緒に学校へ行つて、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずだった。だけど、事件が起こったの」

日常から非日常の始まりを告げる出会い。

ユーノと“レイジングハート”、そして魔法と出会ったシーンが映し出された。

私とシャルは話には聞いていたが実際に見るのは初めて・・・それよりいつ撮ったんだこれ？

「魔法学校に通っていたわけでもなければ、特別なスキルがあつたわけでもない。

偶然の出会いで魔法を得て、偶々魔力が大きかったっただけのたった9歳の女の子が、魔法と出会ってからわずか数ヶ月で命がけの実戦を繰り返したの」

ジュエルシールド探索での出来事が映し出されていく。

そこにはシャルとなのはの出会い、そしてフェイトと私との戦いも

含まれていた。

「え？ フェイトさんとルシルさん……ですよ？」

「そんな……どうして四人が戦って……？」

キャロとエリオの疑問も当然といえば当然、か。

今の関係を見れば信じられないようなことをしているな確かに。スバルとティアナも同じ思いなのか口を開けて驚いている。

「うん、当時のフェイトちゃんの家環境がかなり複雑だね。

私とシャルちゃん、そしてフェイトちゃんとルシル君はあるロストロギアを巡って敵同士……だったんだ」

エリオとキャロは名前の挙がった私たちを不安そうな目で見回した。それには苦笑して応えることが出来なかった。

「……この事件の中心人物はテストロッサの母、プレシア・テストロッサ。

その名をとってプレシア・テストロッサ事件、あるいはジュエルシード事件と呼ばれている」

次々とモニターに映る映像が変わっていく。

なのはとフェイトの戦い、私とシャルの戦い……そしてフォワードの子たちを驚愕させたのはなのはの最大砲撃、スターライト・ブレイカーの一撃だった。

「集束砲！？ こんな大きな……！！」

「9歳の……女の子が……」

「ただでさえ大威力砲撃は体に負担がかかるのに……！」

「……」

三者三様の驚きを口にした。

唯一ティアナは無言だったが思っていることは同じだろう。

「そうして私とフェイトちゃん、シャルちゃんとルシル君の戦いは無事……と言うのもちょっとおかしいけど終わって、こうしてみんなと友達になれた」

なのは少し照れながら私たちを順に見た。

そして映し出されたのは別れの日の……なのはとフェイト。
まあ私とシャルは映ってはいないがちゃんといるんだぞ？

「その後もな、さほどときも置かず戦いは続いた」

シグナムの言葉を合図として、別れの感動シーンからヴィータの襲撃シーンへと変わった。

「あたしらが深く関わった闇の書事件」

「襲撃戦での撃墜未遂と敗北」

なのはがヴィータの一撃を受けて弾き飛ばされた映像が流れる。

「それに打ち勝つために選んだのは、当時はまだ安全性が危うかったカートリッジシステムの使用」

今度は闇の書との戦闘が映し出される。

シヤルとの連携で食らいついているが、それでも足りないために負担がハンパじゃないエクセリオンモードを起動させるなのは姿。

私もあの場にいればなのはにだけ負担をかけずに済んだものを・・・。

今となつては悔やんでも覆すことは出来ない過去の話。

「体への負担を無視して自身の限界値を超える出力を無理矢理引き出すフルドライブ、エクセリオンモード・・・」

もうフォワードの子達は顔が青い。

あまりのなのはの無茶ぶりに思考が追いついていないようだ。

「誰かを救うため、自分の思いを通すための無茶をなのはは続けた。だがそんなことを繰り返して、体に負担が生じないはずもなかった」

ここでようやくシグナムは言葉を切つて、なのはへと視線を向けた。

“ここからはお前の番だ”と云うかのように、だ。

「・・・あれは私が入局して二年目の冬」

映し出されたのは今でもハッキリと覚えている私となのはの撃墜の現場。

雪がチラつき、私の知らしめよ、汝の忠誠コードによってバラバラに破壊し尽くされ転がる未確認体の残骸・・・そんなものがあるあの白い雪と黒煙の世界。

でもさすがにボロボロになっている私となのはの姿は映し出されなかった。

「ヴィータちゃんやルシル君たちとの異世界での捜査任務。その帰り、私は・・・体を酷使し続けたその無茶の代償として、襲撃してきた未確認体によって撃墜された・・・そして、その結果がこれ・・・」

包帯が所々に巻かれ、酸素マスクを付けられたなのは。フワードの子たちは息を呑み、言葉を失った。

「私一人だけならまだよかった。でも私のその無茶の所為でルシル君にも迷惑をかけてしまったんだ・・・」

なのはとシャーリーが私をチラッと見たので、それに応えるように頷いた。

そしてなのはの映像から私の映像へと切り替わる。

「コッコッ!」「」「」

なのは以上の包帯を巻かれ、様々なチューブを体のあらゆる所に付けられた私の姿。

何人もの医者がベッドを囲んで治療を必死に施している。

「まあ私は自分の持つ治癒魔法で二週間で完治させたから大して問題じゃない。

問題があったのはなのはの方だった。私と二人っきりで会えばいつも謝りたおして、シャルたちの前では“迷惑をかけて、無茶をしてごめんなさい”っていつも笑っていた」

なのはの容態は私の治癒魔法で治せるレベルだったから治すか?と訊ねてみたが、なのはは自分の過ちの証だからと言って聞かず、自

力でここまで立ち直った。

私の話も終わったことではなのにはへと視線を移す。
みんなもそれにつられて一斉になのはへと視線を向ける。

「命を懸けて戦わないといけないとき、無茶をしないといけないときは確かにあるよ。

でもねティアナ。今更こんなことを言うのもなんだけど、あの時は自分の命やみんなの安全を全て賭けてでも無茶をしないときじゃなかったと思うんだ」

「っ……!!」

なのはの言葉を受けてティアナが震える。

思い出しているのだろう、自分がミスショットを撃った場面を。

「ティアナ。お前の訓練中でのあの技は一体誰のための、何のための技だ？」

シグナムの問いにティアナは俯いて答えを口にはしなかった。

まあすぐにでも答えが出るわけでもないし口にするものでもないな。

「私は……みんなに無茶をしてほしくない。私みたいになっ
てほしくないんだ」

「みんな、なのはさんはみんなに無茶をしなくてもいいように、絶対絶対みんなが元気で帰ってこられるようになって、本当に丁寧に一生懸命考えて教えてくれてるんだよ……」

十 十 十 十 十 十 十

話も終わってみんなが解散していく中、私はティアナを呼び止めて隊舎の外へと来ていた。

隊舎すぐの防波堤に二人して足を出して座る。

「……なのはさん……その、すみませんでした。
あたし、何も知らずに……あんな……」

先に口を開いたのはティアナの方だった。

無茶をすることがどれだけ危ないか分かってくれたみたいでよかったです。

お話の提案をしてくれたルシル君には感謝しないといけないな。

「じゃあ分かってくれたところで少し叱るところかな。

あのね、ティアナは自分のこと凡人で射撃と幻術しか出来ないって言うけど、それ間違ってるからね。

ティアナも他のみんなも原石の状態。凸凹だらけだし本当の価値も分かりづらいけど、だけど磨いていくうちにどんどん輝く部分が見えてくる」

そう、全てはこれからなんだ。

だからゆっくりと丁寧に育てて生きたい、この子たちを。

何ものからも害されない強く優しいそんな人に……。

「エリオはスピード、キャロは優しい支援魔法、スバルはクロスレンジの爆発力。

三人を指揮するティアナは射撃と幻術で仲間を守って、知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける。

そんなチームが理想系で、ゆっくりだけどその形に近づいていく。

模擬戦でき、自分で受けてみて気づかなかった？」

それを聞いたティアナは少し引いちゃった。

「ティアナの射撃魔法ってちゃんと使えばあんなに避けにくくて当たると痛いんだよ？」

ティアナもその場面を思い出したみたいで、ようやく自分の魔法のすごさが分かったみたい。

「一番魅力的なところを蔑ろにして、慌てて他のことをやるうとするから、だから危なっかしくなっちゃうんだよ、って教えたかったんだけど・・・」

久しく忘れてた、話し合うということ。

昔はそれでよくぶつかってたのに、大人になると忘れちゃうんだね。

「でもね、ティアナの考えたこと間違っではないんだよね」

“クロスミラージュ”の一挺を手にとる。

ティアナの考えが正しいものだって教えておいてあげないかね。

「システムリミッター、テストモードリリース」

yes

「命令してみて、モード2って」

“クロスミラージュ”をティアナに返してそう指示する。
ティアナは受け取って少し戸惑いながら“クロスミラージュ”を構えた。

「モード・・・2」

Set up · Dagger Mode

ティアナの声に応えた“クロスミラージュ”から魔力刃が伸びる。

「これ・・・」

「ティアナは執務官志望なんだよね？」

ここを出て執務官を目指すようになったらどうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はしてたんだ」

再度“クロスミラージュ”のリミッターをかけなおす。

そしてティアナが泣き出してしまったので優しく引き寄せる。

「クロスもロングももう少ししたら教えようと思ってた。

ただ出勤は今すぐにでもあるかもしれないでしょ？」

だからもう使いこなしてる武器をもっともつと確実なものにしてあげたかった・・・。

だけど私の教導地味だからあんまり成果が出ていないように感じて苦しかったんだよね？」

ごめんね、ティアナ」

私も早く気づいてあげればよかった。本当にごめんね。

「うわああああ……ああ……なの、は……さん……ごめんな、さ、い……ごめんなさい……」

これでやっと始まり……なのかな。

それから少ししてティアナを見送ってから私も明日のために休むことにした。

そして翌日。

朝日が眩しい中、私は今日の訓練メニューを組み立てている。傍には訓練服に身を包んでいるヴィータちゃんとルシル君、そして制服姿のシグナムさんの三人。

「しかし、教官つつうのも因果な役職だよなあ。

面倒な時期に手えかけて育ててやっても教導が終わったら、あとはみんな勝手な道を行っちまうんだから」

キーボードを叩く私の背後からヴィータちゃんそう口にした。

私は一度キーボードを叩く指を止めてヴィータちゃんへと振り向く。

「まあ一緒にいられる時間があんまり長くないのはちょっと寂しいけどね。

ずっと見ていられるわけじゃないから、一緒にいられる間は出来る限りのことを教えたあげたいんだ」

そう。何があっても、誰が来ても、あの子達を絶対に落とさせないために。

私の目が届く間はもちろん、いつか一人でそれぞれの空を飛ぶようになってからも……ね。

「そつだ、ルシル君、ありがとね」

「・・・ん？ ああ。それにしてもあの子たちの将来が本当に楽しみで仕方がない。」

「いつか君やみんなが育てたあの子達と思いつきり戦つてみたいな」

ルシル君が自分から戦つてみたいなんて珍しいこともあるな。

「えええ？ ルシル君つて思いつきりつて反則だから・・・さすがにキツイよ」

「なら君たちも混ざればいい戦いになるんじゃないか？」

「それは甘く見られてるね。いいよ、いつかきつとルシル君だつて倒してあげるんだから」

「いい機会だ。その時は私も参加させてもらおう」

「はは、そのときは私の本気を見せてあげよう」

「んだよ、セインテストまでバトルマニア病発症かよ」

そんなやり取りがすごく面白くてつい笑つてしまつ。

でも、そんな笑い話はそう遠くない未来で現実となつてしまつ。それも最悪の形として。

このときは私もみんなも・・・きつとルシル君ですら知る由もなかつただろう。

「「「「おはようございます……」「「「「

みんなが元気よく挨拶しながら駆けてくる。

「おはよう、みんな」

さあ今日も一日頑張りますかっ！！

ティアナの思い　なのはの願い（後書き）

ごめんユート、少ない出番を切り捨てて・・・。

今回はアニメの8話と9話を繋げました。

そのためにいろいろと省いてしまったんですが・・・いいですよ？

あとスカリエツティの航空戦力調査、これも省きました。

何故ならルシルの正体と得意とする戦術を知っているからです。

なのはたちが出撃するまでもなく隊舎から撃ち落せますからね。

とある休日 その時隊長陣は（前書き）

正直今話は読む必要はあまりないです。

いきなりアニメ第11話に行くのはまずいと思ったただけのモノですので。

とある休日 その時隊長陣は

「ルシル？ 何してるの？」

フォワードの早朝訓練が終わり一日休日と言い渡されたみんなが解散したあと、自室に戻ってある用事を行っている最中、シャルが部屋へと入ってきた。

「ちょっと・・・な。レヴィヤタンのスピード、そして念のための他のヤツらへの対策として右目に宿していた魔眼と捕縛神器の最終調整。」

そして玉座の本体わたしから新しく複製された武装と術式、能力をダウンロードしていた」

シャルへと振り向かずそのまま作業を続行する。

残っているのはダウンロード作業のみだが別にかまわないだろう。

陸戦においてのシャルの機動力は私より上。

そのシャルより速いレヴィヤタンに私が接触した場合の対抗策を、暇のあるうちにおこななければならない。

私の場合は空戦であれば機動力においての競い合いでレヴィヤタンにも勝つ自信がある。

だが相手にしなければならぬのはレヴィヤタンだけじゃない。

そのための魔眼や捕縛神器の最終調整と戦力強化だ。

「で？ それはそうと何か用があったんじゃないのか？」

「ん？ あ、そうそう・・・ねえルシル」

本体からのダウンロードをようやく終え、シャルのいる背後へと振り返る。

「・・・どっち着たい？」

そこには女性物の服を両手にして私に見せるシャルがいた。やってしまった、女装そうちの刑の対策は結局何もしままますっかり忘れていた。

「わ、私のような男が着れるサイズの女性の服などないはず・・・どうしたんだ、それ？」

サイズは明らかに私に合わせているように見える。

だがシャルが既存の服のサイズを、しかも男のサイズに直すような器用な真似は出来ない。

そして私はある推測に辿り着き、頭の中の警報ランプがイエローを燈す。

「ああこれ？ 何で教えてくれなかったのかなあ？」

シャルが手に持っていた服が光の粒子となって散っていった。

あの微笑みは明らかにまずい。

警報ランプはイエローからレッド、つまりは推測から確定へと移行してしまった。

あの服は魔力物質化の術式で生み出された代物であることは間違いない。

しかしシャルの持つ魔術の中ではそんな術式は存在し得ない。ということは、だ。

バレてしまった、ということだ。私と契約をしたことメンタルリンクで得られる恩

恵に。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

シャルが私のオリジナルスベル呪文を詠唱し、再度その手にさっきの服が魔力で構成された。

「あなたと契約すると、あなたの保有する複製武装や術式が引き出せるなんて最近知ったよ。

まあランクの高い武装や術式は引き出せるってわけじゃないけどね。んでね、今の私が引き出せる中ではこの汎用性の高い魔力物質化の術式がお気に入り

だってこれって便利過ぎて、呆れを通り越して可笑しくて泣けてくるからね」

「そうか、それはよかったな。それじゃ私はこれで失礼させてもらおうかな」と・・・」

バれてしまつては仕方がない。

フォワードの子達は休日を満喫するために出掛けることになっていたはず。

だからあの子達に見られることはないと見ていいだろう。

だが問題はそれだけじゃなくまだ山積みだ。

隊舎には六課の男女問わずの隊員が多く待機している。

そんなところにいい歳した男が女装なんてして登場したら・・・

さよなら、私の尊厳（涙）

「私の暇つぶし、もとい娯楽のために・・・覚悟!!」

「暇つぶしも娯楽も変わらないだろうがっ!!」

なんて女だ、シャルロツテ・フライハイト。
何故そこまでして私を女装させたがる？

「逃がさないよっ。我が手に携えしは確かなる幻想・・・」

「こんなくだらないことで魔力を消費するなド阿呆!」

私は必死に部屋から飛び出してシャルの光の鞭から逃れる。

全力で廊下を走り何度か角を曲がってシャルを振り切ったのを確認してすぐ、フェイトとエリオとキャラの三人と会う。

「エリオ、キャラ、今からか？」

さすがに無視して走り去るわけにもいかないために立ち止まって声をかける。

純粋な走りの速度なら私が上なのは既知だ。

さすがに閃駆や身体強化を使われたら追いつかれるが。
十数秒くらいなら問題ないはずだ。

「あ、はい。今からキャラと二人で・・・」

「そうか。エリオは男だからしつかりとキャラをエスコートしないといけないぞ」

エリオの身だしなみを軽くチェック。よし、問題ないな。
続いてキャラを見るが確認するまでもなくOKだ。

「よく似合っているよキャラ。本当に可愛らしい」

「え、あ、その・・・ありがとうございます、ルシルさん・・・」
頭を撫でてやりたいが折角セットした髪を乱すわけにはいかない。

「えっと・・・ルシルはこれからどうするの？」

「どうするの？って悪魔から逃げるんだ」

「」「え？」「」

私の返答にどう反応しているのか分からない三人は呆然としている。三人のそんな揃いすぎている表情は微笑ましくてまだ見ていたいが、これ以上ここに留まるのは危険だ。

「それじゃエリオ、キャラ、今日は楽しんでおいで。フェイトもまたあとで」

再度走り出してシャルから逃亡を再開する。

魔力を完全カットしているために探査され発見、ということはない。だが走って逃げてばかりではいずれ見つかってしまうだろう。ならばどこかに潜伏するしかない。

「どないしたんルシル君？」

ここで出会ったのが機動六課の部隊長八神はやて。

ここは彼女に匿ってもらおう。

「はやて、悪いけどしばらく君の部屋に匿ってほしい」

「え？ まあ別にええけど・・・誰から逃げとるん？ シグナムは外回りでもう出掛けてるはずやけど・・・？」

「まずは先に匿ってほしいんだ。話はそこで・・・」

今ならシグナムからの模擬戦の誘いでも乗ろう。

悪魔シャルから逃げられるのであれば何だってみせる。

そして部隊長室へとたどり着き一息つく。

だが今考えると潜伏場所を部隊長室に選んだのは間違이었다。

「で、どないしたんルシル君？」

「私を女装させようとするシャルから逃げているんだよ。

彼女が一体何を考えているのか本気で分からなくなってきた」

それを聞いたはやては何を想像したのか声を出して笑った。

「ルシル君の女装かあ。昔は可愛かったけど今じゃ綺麗になるなあ」

「想像するのはやめてくれ。それに結構傷つくんだぞ、可愛いとかが綺麗だとか・・・」

今の私の背格好での女装姿を想像して綺麗だとはやては言う。

綺麗だろうが可愛いだろうが私としては軽く精神ダメージを負う。

「でも何でそんなことになったん？ いきなりの女装しろ、じゃないんやろ？」

「まあ結構前の話になるが・・・」

そうして話したのはホテル・アグスタでのメールの一件。フェイトのドレス姿の感想が云々とはやてに告げた。

「なるほどなあ、シャルちゃんあのときの行動はそういうことやつたんやなあ・・・」

口元に右手を当ててそのときでも思い出しているようだ。

「それでルシル君はフェイトちゃんのそのドレス姿の写真を見てどう思ったん？」

ニヤニヤとしながらはやてが聞いてくる。
フェイトのドレス姿の感想・・・か。

「ん？ ああ綺麗だったよ」

ごまかす必要がないため素直な感想を述べる。
だがさすがに面と向かって言うのは少し照れくさいために出来ないが・・・。

「なんやえらい素直やなあ。もう少し照れて口ごもると思ったけど」
フェイト
「本人がこの場にいればそうなただろうなあ」

「はあ、ということとはなのはちゃんはユーノ君と、フェイトちゃん
はルシル君とかあ。
なんや私だけ売れ残りみたいや」

はやては自分だけ相手がいないと苦笑した。それはシャルも同じだが元々無理なこと。

そしてフェイトとなのはの二人に関してだが……。シャルから聞いた話だと、なのはとユーノはまだそういう関係ではないらしい、が可能性は有りとのこと。

そして私とフェイトではそういう関係になるのは……考えるのはヤメロ。

まあ将来的に考えて現状可能性があるのはなのはとユーノ組だけ、ということになる。

「待った。はやて、君にはアコース査察官がいるじゃないか」

一人忘れていたはやての恋人候補、ヴェロツサ・アコース査察官。彼とはそう多く面識はないがはやてとよくやっているのは知っている。

「ロツサ？ んん、ロツサは異性とか言う前にお兄さんみたいな人やしなあ」

「それがいつか気づけば恋へと発展……はないか……」

「うん」

二人して腕を組んで真剣に考える。

しかし何か変な方向へと話が進んでいる気がする。それから少しし、

「はやてちゃん……あ、ルシル君ここにいたよ、シャルちゃん」

部屋の扉が開き入ってきたのはなのは、フェイト……そしてシャ

ルの三人。

フェイトの背後ではシャルがニッコニコに微笑んでいた。

「……」

そんなシャルを見たはやてと二人して沈黙する。

はやての部屋に友人たるフェイトやなのはが来るのは当たり前。

その二人と友人のシャルと一緒に来るのもまた当たり前。

そう、潜伏場所にはこの四人と関係が少ない場所を選択するべきだった。

「ルシル、シャルの念話に出来ないなんてダメだよ？

何か大事な用事だったらどうするの？」

私を女装させることが大事な用事とは絶対言えない。

「フェイト、なのは……シャルの用事が何なのか聞いていないのか？」

「うん」

そこは聞いておこうぜお二人さん。

「シャルちゃん、ルシル君にどんな用事なの？」

本当に今更そう尋ねるなのは。

シャルは「それはね」と呟いたあと指を鳴らした。

私を覆うように“ポンツ”と音がしながら煙幕が生み出される。

しまった、これは強制的に対象を着替えさせる術式……これまで覚えてしまったのか。

「「「・・・・・・・・「「」」」

煙幕が晴れて視界がクリアになると、フェイトたちが私を見て何やら微妙な顔をしていた。

原因は分かる。もう私の着替えは済んでいるということだろう・・・。

「なあ、シャル・・・変声魔術まで使ったのか君はっ!？」

私の声が女性のものに変わっていた。

ここまでするかこの馬鹿女は・・・。

「ねえ、シャルちゃん。さすがに可哀想だよ、ルシル君が。綺麗だけれど・・・」

「そうだよ、どうしてこんなことをするの？　綺麗だけれど・・・」

もう好きに言ってくれ（涙）。

「ああそれ？　実はね・・・」

シャルが二人の耳元でこっそりと話をしている。すると二人はさらに微妙な表情へと変わる。

「シャルちゃん・・・」

なのはもうどう反応していいのか分からないようだ。

一方フェイトは私を見てはそして視線を逸らす、というのを繰り返す。

私の女装の原因が自分のドレス姿の感想云々ということを知っての反応だろう。

「シャル・・・悪用しないって言ったのに・・・」

「悪用じゃないし。でも気になってたでしょ、ルシルの反応が？」

「えっと・・・」

シャルの悪魔の囁きに耳を傾けているフェイト。

「でもさっきルシル君、フェイトちゃんのドレス姿は綺麗やったって言っとったで？」

「おいっ!？」

まさかここではやてが会話に参加してくるとは・・・。
しかも私の感想を口にするってどういうことだ!？

「そ、そうなの・・・ルシル・・・？」

「うっ」

フェイトが遠慮がちにそう聞いてきた。

するとシャルが「ナイス、はやて」と口にしながら再度指を鳴らした。

一瞬の煙幕が生まれ服装が戻り、そして変声魔術も解除されたのが分かる。

「ああもう・・・フェイトのドレス姿・・・綺麗だった・・・」

「あう……その……ありがとう……」

シャルの奴、私にこれを言わせるために態々こんな回りくどいことをしたのか？

何を考えているんだ本当に……。

「いや、いいものを見せてもらったあ。んじゃ私はこれで「待てえ？」

私にこんな真似をさせたことに対する仕返しをまだ終えていない。君にも少し辱めを味わってもらおう。

我が手に携えしは確かなる幻想

「ちよっ」

シャルと同じ術式を引つ張り出す。

そしてシャルに着せるのは彼女が最も苦手とする服装。

私は指を鳴らした。するとさっきと同じような音をしながらシャルの周りに煙幕が生まれる。

「「「可愛い」「」

「~~~~~!!!!!!」

シャルの格好を見た三人が「可愛い」と声を上げる。

その反面、シャルは顔は羞恥に染まりながら私を睨んできた。

「その格好で睨まれても凄みは全然ないぞ？」

シャルが苦手とする服装、それはゴシック&ロリータ・・・俗に言うゴスロリだ。

そして今着ているのは“エインヘリヤル異界英雄”の一人、“水銀燈”のドレスだ。

「やってくれたね・・・ルシル・・・！」

さらに目を細めたシャルは指を鳴らした。

しかし私ではなくフェイトたち三人に煙幕が発生した。

精神の乱れが術式発動に影響したようだ。

「うわっ、なんやこれ!？」

「え、えええええっ!？」

「な、何でこんなっ!？」

「あれ、なんで!？」

女性陣は混乱の極みに達してしまっただようだ。

なのはどこぞの貴族が着るようなドレスで日傘まで装備している。

そしてフェイトは振袖、はやてに至っては十二単という始末・・・

なんか頭痛がしてきた。

そしてシャルはその服装のまま術式発動のミスを起こしたことに混乱中。

「私がここにいるのはまずそうだから失礼する。シャル、ちゃんと術式を解除しておけよ」

私はこの場からの逃亡を図る。

このままシャルが術式を暴走させて、この四人が男に見られてはいけないような格好になってしまう可能性もある。

そこに私がいたら・・・そしてその場面を誰かに見られたら・・・
DEATH?

「待ちなさいルシル!!」

再度指を鳴らして複製術式を発動させるシャル。

「チツ、今度は成功したか!？」

視界を煙幕によって遮られてしまった。

次はどんな女装になってしまっやら・・・。

「・・・学ラン?」

着ているのは学ラン。よかった、女性の服じゃなかった。

だがシャルたちもまた服装が変わってしまった。

もうターゲットが定まっていない。

「えっとシャルちゃん・・・何で私たちもなのかな?」

今度のなのは純白の修道服を着ている。エインヘリヤル “異界英雄” の “禁書目録”クス のモノだ。

「これ・・・どっかの制服?」

フェイトはブレザーにミニスカート、だけならよかったのに頭の上
にうさぎのような耳。

あの格好も知っている。エインヘリヤル “異界英雄” の “鈴仙・優曇華院・イナバ

”のモノだ。

「私だけメンズのようやね」

はやては確かにブラックスーツとサングラスという黒一色になっていた。

あれは知らないな。メン・イン・ブック？

「何で私は着ぐるみなわけ？」

シャルは不細工なペンギンの着ぐるみを纏い、短い膝について頂垂れている。

あれも知らない・・・いや、どうだったかな？

「はやてちゃん、ただいま・・・ってなんですかこれはー!？」

このカオスな現場に現れたのはラインだ。

まあ扉を開けて入ってきてみれば主たるはやてがブラックスーツ、なのはは修道女、フェイトはウサ耳の制服姿、シャルはペンギンの着ぐるみという普通じゃお目にかかれぬものを見れば声を上げるのも当然だ。

「あ、ライン。おかえりや」

苦笑混じりでラインに応えるはやて。

ラインは戸惑いながらはやての傍へと飛んでいく。

「はやてちゃん、それにみなさんもどうしてそんな・・・」

戸惑い続けるラインに簡潔な説明をした。

するとリインも私たち同様シャルに呆れてしまった。

「シャルさん・・・」

「反省してますよ、ええ反省してますよ」

本当に反省しているのか疑わしいが、もうどうでもいいや、わぁ〜い・・・。

「そういえばリイン、帰ってくるの遅かったけどメンテナンスチェックとかしてた？」

「はいですつ。わたしと蒼天の書のフルチェック。

あ、シャーリーがはやてちゃんのシュベルトクロイツと夜天の書をあとで受け取りに来るって言ってたですよ？」

「。。。え。。。」

シャーリーがこの部屋に来るのか？

いや、まだ女性だからマシなほう・・・なのか？

「シャルちゃん、早く元に戻してっ」

シャーリーがここに来ると知ってなのはが慌てる。

シャルの前で指を組むのはは正に修道女^{シスター}。

「あ、うん！」

再度指を鳴らして術式を発動させたシャル。私たち五人に煙幕が一瞬だけ生まれる。

「わわっ、わたしもですかー!？」

そんなリインの声を聞いて、シャルがまたミスしたことが分かった。そして私の視界の中にはリインも含めた女子五人の服装がまた変化していた。

もちろん私も・・・これは女性の韓服チマチヨゴリ？ 何故？

「」「可愛い!!」「」「」

自分たちの服装そっちのけでリインを見つめる女子四人。私もその視線の先にいるリインを見てみると、

「ほっ」

そこには純白のウエディングドレスを着たリインがいた。きっちりブーケまであるとは恐れ入った。

「これって・・・ウエディングドレス、ですか？」

リインが頭に被ったベールをいじりながらクルクル回っている。四人は目を輝かせながらリインを見ている。

「まさか私たちより先にリインがそれを着る日が来るなんて・・・」
「はやてはフランス・アルザスの民族衣装を着ながらそんなことを呟く。」

「リイン、すごく綺麗だよ」

なのはは羽織、色やデザインからして新撰組なのが分かる。それを着ながらリインを見てうっとりしている。

「あ、相手って私・・・なのかな？」

フェイトは白いタキシード。明らかにリインとペアといった感じだ。自分の服装とリインを見ながら戸惑っている。

「・・・ルシル、助けて・・・（涙）」

そして馬鹿女シャル。シャルはフリルがたくさん付いた黒いエプロンドレスだった。

偶然とはいえ自ら苦手な服へと変えたことに精神的ダメージを受けている。

「確かにこれ以上はアホらしいな。全く、貸し一つだぞシャル？」

今度は私が指を鳴らして術式の解除を行う。
きつちりと全員に煙幕が生まれたことを確認する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬だけの煙幕も晴れて全員が無言となる。
当然だ、再度わけの分からない服装になっていれば誰だってそうなる。

「そんな馬鹿な。私もミスをするだと？」

メイド服を着ながら自分のミスに唾然となる。
シャルならまだしも私がこんなミスを犯すなんて信じられない。

「ウン・・・でしょ？ ルシルまでミスするなんてどうなってんの？」

シャルが桃色のフラメンコドレスを着ながら頂垂れた。

「え、戻せないってこと!？」

「それってしばらくこの格好でいなきゃダメってことだよね!？」

なのははドイツのディアンドル、フェイトは沖縄の盆踊り衣装エイサー・・・。

何故かは知らないが本当にごめんなさい。

「なあルシル君、これってルシル君の趣味なん？」

「そんなわけあるか?!！」

巫女服を着ているはやてからのあんまりなお言葉。

思わず怒鳴るように反論してしまったが・・・すいませんでした!!

「そうですね。ルシルさんがそんな変な趣味を・・・」

リインは・・・様々な雪の結晶が描かれた浴衣を着ている。

そしてそう思うなら私から徐々に離れていくな。

「くそつ、元に戻るまで何度だつてやってやるさ」

こんなことをせずとも直接着替えればいいじゃない、という簡単な解決法に誰もたどり着けなかったのは仕方がないと思う。

かなり焦って混乱してたしな。

それから何度も無駄な労力を注ぎ込んで術式の発動、解除を繰り返した。

シャーリーのことについては、その時まともな服になっていたリイ
ンが渡しに行ったことで解決。

そして元に戻る一つ前の服装となったのはシャルたちの母校、聖祥
小学校の制服だった。

その制服にシャルたちは嬉しそうな恥ずかしそうな・・・そんな表
情で頬を赤らめていた。

「やっと・・・元に戻った」

結局半日近くこんなことをしていたと思うと泣きたくなくなる。
ここにいる全員がぐったりとしている中

『こちらライトニング4。緊急事態につき現場状況報告します』

キャロからの緊急連絡に、私たちは瞬時に意識を仕事モードへと変
える。

とある休日 その時隊長陣は（後書き）

次がナンバーズ、そしてペッカートゥムの何体かを出す戦闘パート
となります。

エインヘリヤル
異界英雄、名前だけですが。

水銀燈：ローゼンメイデン

インデックス

禁書目録：とある魔術の禁書目録

鈴仙・優曇華院・イナバ：東方永夜抄

動き出す使者　～前編～

ようやく強制着せ替えタイムも終わってゆっくり出来ると思ったのも束の間、キャロからの緊急連絡が全体通信で隊舎内に響き渡る。

『こちらライトニング4。緊急事態につき現場状況報告します。サードアベニューF23区画にてレリックと思しきケースを発見』

ソファにぐったりと腰掛けていたみんなに緊張感が漂う。

みんなは立ち上がって、いつでも行動に移れるようにしとる。

『ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人・・・』

その少女と思われる抱きかかえたエリオがモニターに映った。

少女は5～6歳くらい、金髪でボロボロの服を纏っとる。

『女の子は意識不明です』

『指示をお願いします！』

「救急の手配はこつちです。二人はそのままその子とケースを保護、応急手当をしてあげて」

「はいっ...」

エリオとキャロの隊長であるフェイトちゃんの指示が飛ぶ。

そしてなのはちゃんはスバルとティアナに、エリオたちと合流するように指示した。

「全員待機態勢。席を外してる子たちは配置に戻ってなつ。安全確実に保護するよ。レリックもその女の子もやつ」

「了解！」「」

なのはちゃん、フェイトちゃん、そしてリインが私に指示に応える。そして私はシャルちゃんとルシル君へと振り返って、

「シャルちゃんは隊舎で待機。でもいつでも出れるようにしておいて」

「ん、分かった」

「ルシル君は隊長たちと一緒に行ってほしいんやけど、ええか？」

「ああ。ここに来てからはシャルばかりが出ているからな。

私としてもそろそろ動きたかったところだ」

協力者であるシャルちゃんとルシル君の二人にも指示を出す。でもシャルちゃんはちよつと不満そうやな。でも明らかに疲れとる顔やし気遣いやで、これは。

その反面ルシル君はキリツと仕事顔。さっきまでの疲れてた（精神的に）顔がウソのようや。

「それじゃあ、機動六課出動やつ」

十
十
十
十
十
十

ヴァイスの駆るへりに乗り、フェイトたちと共に現場へと着いた。そしてシャマルがすぐさま少女の診察を開始、その結果は、

「・・・うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応はないし、心配ないわ」

異常なし、ということだった。

キャロからこの子は地下水路をかなり歩いたらしいと聞いた。それが原因の衰弱といったところだろう。何にしても大丈夫ということならよかった。

「はいっ」

「よかったー」

キャロとスバルが安堵の声をあげた。

他のみんなも声には出さないが、表情にはハッキリと出ている。

「ごめんねみんな、折角のお休みの最中だったのに・・・」

「いえっ」

「平気ですっ」

フェイトに伝えるエリオとキャロの二人。スバルとティアナもそれに頷いて応えた。

この四人にはもつと楽しい時間を過ごさせてあげたかったが仕方ない。

次こそはちゃんとした休日を過ごさせてあげたいものだな。

「ケースと女の子はそのままへりで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね」

「……はい!」「」「」

「それじゃセイントテスト君、この子のことへりまでお願いできる?」

シヤマルが医療道具も片付けて、私に少女をへりへと運ぶよう頼んできた。

小さいとはいえ、気を失い力の入っていない子供はそれなりの重さがある。

なら女の子であるフェイトやなのはに運ばせるわけにはいかない。

「ああ」

少女を抱きかかえてシヤマルと共にへりに乗り込もうとしたところでガジェット襲来の報が届いた。

十 十 十 十 十 十 十

私ははやてについて司令部へと来ている。

そしてルシルたちが出動して間もなく、レリックを狙ったガジェットが現れた。

海上とフォワードのいる地下の二つに。

「多いなあ……」

ガジェットの数の多さに苦い顔をしているはやて。

本来のなのはたちなら問題ないけど、今はリミッターがかけられる。ルシルもまた市街地戦ということで魔力を制限することになるはずだ。だからこそあの数を相手にするのは結構骨が折れることになると思う。

「どうするのはやて？ 私も援軍に行こうか？」

慣れていない複製術式の乱用で結構魔力を消費しているけどガジェット相手なら余裕だ。

「そやなあ……」

はやては仕方ないといった感じでそう答えた。私とグリフィスの二人の視線を受けながらも必死に良い手を考えているみたいだ。

『ロングアーチ、こちらスターズ2』

モニターに映ったのは海上を飛んでいるヴィータの姿。

『海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かっている』

ナイスタイミング。ヴィーター一人来るだけでもかなり違ってくるはずだ。

これなら私は出撃する必要はなさそう。

『それからもう一人……』

『108部隊、ギンガ・ナカジマです』

「っ！」「」

はやてとグリフィスの表情に驚愕の色が現れる。

確かギンガはスバルの姉で、シューティングアーツの師でもあるという話だ。

戦力としては申し分ない。

『別件捜査の途中だったんですが、そちらとの事例とも関係がありそうですね。』

参加してもよろしいでしょうか？』

「うん、お願いや。ほんならヴィータはラインと合流、協力して海上の南西方向を制圧」

『南西方向、了解ですっ！』

「なのは隊長とフェイト隊長は北西部から」

『了解』

「ルシル君はヴィータやラインと一緒に南西制圧」

『了解した』

「ヘリの方はヴァイス君とシャマルに任せてもええか？」

『お任せあれっ』

『しっかり守ります』

矢継ぎ早に指示を出していくはやて。
さすが部隊長といったところだ。

「ギンガは地下でスバルたちと合流。道々別件の方も聞かせてな」

『はい！』

全ての指示を終えたはやては椅子に深く座りなおした。
それじゃ私はゆっくりと見学でもさせてもらおうかな。

廃棄都市区画の遙か上空、四つの影は離れたビルの屋上にある一機のヘリを見据えている。
そして八つの瞳に見られているのはルシル。
しかし彼はこの四人に見られているのに気づいていない。

本来、すでに時を持たない“絶対殲滅対象”^{アポリユオン}に成長はない。
しかし“大罪”^{ベックカートゥム}は例外となる。代替わりをすればするほど先代たちの記録を、力を引き継いでいく。

そのため、己の神秘を感知されないよう隠匿する術を今代は全て手にしている。

「許されざる嫉妬、^{レヴィヤタン}今んところはルー^{それ}テシアについてけ」

『それ・・・じゃない、ルーテシア。次は・・・間違えないで、許されざる憤怒』
サタン

「どっちでもいいだろ？ 最終的にこの世界は滅びるんだから覚える必要はないんだよ」

レヴィヤタンのズレた反論にそう答えるサタン。

オールバックにしたその漆黒の髪は、まるで馬の鬣のようになって
いる。

漆黒の燕尾服に袖なしのインバネスコートを着た彼はどこか品格の
ある存在だ。

そしてその灰色の瞳はレヴィヤタンのいる方へと視線を移している。

「で、三番いよいよだし、どうするの？」

ガジェットの掃討を始めたルシル、なのは、フェイトを見ながら、
一番やる気のなさそうな少女がそう口にする。

髪は橙色でウェーブのかかったセミロング。

瞳は透き通った桃色をして優しい目付きをしている。

服は黒いブラウスに赤いネクタイ、白のプリーツスカートのどこに
でもいるような少女だ。

「欠陥品だけでも先に潰しとく？」

その少女は遠く離れたルシルの姿をハッキリと捉えながら首を鳴ら
す。

見た目に反して戦闘志向が強いらしい。

「あ？ 大罪の役目はあくまで“標”だろ？ なぁリーダー？」

「私がリーダーになつた覚えはないんだけど……」

サタンは背後にいる存在へと問いかける。

そこにいるのは燃えるような真紅の髪を両サイドで団子にし細い鎖で纏め、そして同じ燃えるような真紅の瞳、真紅のチャイナドレスを着た二十代前半と思しき女。

髪も瞳も纏う服すらも真紅一色という目に優しくない存在だ。

「^{ヘルゼブ}許されざる暴食の席が空いている今は君がリーダーだ^{アスモデウス}許されざる色欲」

この場にいる最後の一人、白のスーツを着た^{ルシファー}許されざる傲慢がそう告げる。

それを聞いたアスモデウスは短くため息を吐いたあと、

「斃せるうちに斃しておいても別に構わないわ。欠陥品は地下で始末をつける。

空より陸のほう斃しやすいつて話だしね。けど制限は20分……いいわね？」

アスモデウスは戦闘にかける時間を最大20分と設定する。

いくら分裂することで界律を誤魔化していてもやはりは“^{アポリユ}絶対殲滅対象”。

過ぎた行動は界律に危険存在として認知されてしまうことを知っている。

「まずは地下に^{レイガートゥス}罪眼を放つて欠陥品を誘き出さないといけないわね。それから私と……^{マモン}許されざる強欲、あなたもついてきて」

これで地下に三体の大罪が揃うことになる。
レヴィヤタン、そしてアスモデウスにマモン。

「許されざる傲慢と許されざる憤怒はここで待機。もし二番が出てきたら相手をしてやって」

「分かった」

アスモデウスの指示に素直に従うルシファーとサタン。

「許されざる嫉妬、悪いけどルーテシアと別れて私たちと合流して」

「……分かった……でも第四の力……斃したらすぐ戻る……」

レヴィヤタンはアスモデウスの指示に渋々従うようにそう告げた。そしてアスモデウスとマモンの姿が消える。

残されたルシファーとサタンは再度海上で繰り広げられるガジェット殲滅戦へと視線を移した。

十 十 十 十 十 十

『セインテスト、そっち頼んだ』

「了解した。蹂躪粛清」

ヴィータからの念話に応え、ガジェットを殲滅せよ、汝の軍勢で撃ち落とす。

「それにしても多いな」

ガジェットの数多さに改めて舌を巻く。

一体何機作っているのか、それ以前に犯罪者であるスカリエッティには金銭的な問題はないのだろうか？

そもそもスカリエッティには謎が多すぎる。

通信映像や音声のデータがあるのに一度も逮捕歴がないというのもおかしい。

何か大きな後ろ盾でもあるのか？ それが“絶対殲滅対象”^{アボリュオン}と繋がっている？

くそっ、人間に干渉して一体何を企んでいるんだヤツらは……。

『増援ですっ！』

リンから念話が届く。

リンとヴィータの見ている方に視線を移すとさらに何十機ものガジェットが見えた。

「確認した。第四波装填」^{フォースパレルゼット}

市街地戦ということで使用する魔力をAAA+に設定している。

それでもガジェットを破壊するだけならお釣りが来るから気にならない。

「離れてくれヴィータ、リン」

射線上から二人が退いたことを確認して、

「^{ジャッジメント}蹂躞粛清」

40の槍の軍勢を、増援として現れたガジェットへと放つ。
ヒットまで4・・・3・・・2・・・1・・・ん？
槍がいくつかのガジェットをすり抜けた。

「実機と幻影による混成編隊・・・か。面倒な能力を持つ奴がいるな。

フェイト、なのは、増援のガジェットの中に幻影が混じっている」
北西を担当する二人に念話で報告しておく。

『うん、こつちでも確認できた。』

防衛ラインを割られない自信はあるけどちょっとキリがないかも』

『ここまで派手な引き付けをするってことは海上のガジェットは全て囿だと思っんだ』

「つまり本命はへりか地下・・・か」

フィフスバレルセット
第五波装填、蹂躞粛清

念話の間でも間髪入れずに汝の軍勢^{カマエル}を放ち続ける。

だが実機を破壊する数より幻影にミスする数が多くなってきた。

『こちらスターズ4！ ルシルさん、今よろしいですか!?!?』

ティアナからの通信モニターが私の前に展開される。

ティアナの表情は焦りと疑惑に満ちたものとなっていた。

「どつした?」

『地下水路D26区画でレーガートウスと思われるものがあります！
ですがあたしたちを見ても何の動きも見せようとしないので・・・
指示をお願いします！』

レーガートウスが地下に？ この付近一帯が様々な魔力で満ちている所為で気づかなかつた。

『ルシル君、行って。ここは私たちで何とかするから』

『それにどの道地下に誰か行かないといけなかつたから。ルシル、
新人たちの方をお願いします』

なのはとフェイトから地下へ行くように念話が届く。

確かに地下に主力が向かう可能性があるという話をたつた今していた。
ならば、

「・・・ヴィータ、リイン、ここを頼めるか？」

行くしかないだろう。

『誰に言っただよ。あたしとリインに落とせねえものはねえっ！』

『はいっ、その通りですっ！』

全く、本当に頼りになる仲間だ。そうと決まれば全力で空を翔けよう。
う。

「ティアナ、今から私がそちらに向かう。それはおそらく君たちを

狙うことはしないはずだ。
警戒しつつもケース捜索に移ってくれ」

『り、了解！』

ティアナにそう指示して、私は全力で地下へと向かった。
レーガートウスはケースを回収しに来たティアナたちを見ても行動に入らなかった。
つまり用があるのは彼女たちではなく・・・私か？

十 十 十 十 十 十

ルシル君が地下に向かってくれたことで心配の種が一つ減った。
あとはへりの護衛だけ・・・。

「なのは、私が残ってここをヴィータと一緒に抑えるから行って」

「フェイトちゃん!？」

フェイトちゃんのいきなりの提案に驚きを隠せない。
いくらなんでもこの数をフェイトちゃんとヴィータちゃんの二人で抑えるには辛すぎる。

「コンビでも普通に空戦してたんじゃない時間が掛かりすぎる。
限定解除すれば広域殲滅でまとめて落とせる」

「それはそうだけど・・・」

確かにそれなら出来ないことはないだろうけど……。

「なんだか嫌な予感がするんだ」

こういうときのフェイトちゃんの勘がよく当たる。

だったらここはフェイトちゃんの言うとおりに……。

『割り込み失礼』

私とフェイトちゃんの間にもモニターが現れる。

そこに映っているのははやてちゃん……なんだけど、

『ロングアーチからライトニング1へ。その案も限定解除申請も部隊長権限で却下します』

「はやてっ!」

「はやてちゃん、何で騎士甲冑!??」

はやてちゃんは局の制服じゃなくて騎士甲冑を身に纏っていた。

『嫌な予感は私も同じでな。』

クロノ君から私の限定解除をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ。

ちゆうことでののはちゃんとフェイトちゃんは地上に降りてヘリの護衛。

ヴィータとラインも地下に行ってケースの確保を手伝ってな』

『『了解!』』

ルシル君に続いてヴィータちゃんたちも地下に行くならケースの確保は決まったも同然。

それなら私とフェイトちゃんも安心してへりの護衛に専念できる。

十 十 十 十 十 十 十

ティアナから受けた報告で聞いたD26区画へと着き、レーガートウスの殲滅を開始した。

「その程度の動きで避けきれると思うな」

しかし、ここの狭い場所では神器“星填銃”が役に立つ。

概念兵装でありながら神造兵装の二十位並の神秘の弾丸を放てるのだから。

自作の神器でありながら本当に素晴らしい出来だとかつての私を褒めたくなってくる。

接敵から数秒で殲滅を終えたところでフォワードの子達と合流するため走る。

すでにあの子達の魔力波形は覚えているため、簡単に魔力探査^{サーチ}することが出来た。

そして大きく開けた空間でガジェットを殲滅しているフォワード、そしてギンガと合流した。

「ルシルさんっ！！」「」

ここに来るまでにガジェットの残骸の山を見てきたが、四人とも大して疲れていないようだ。

順調に成長している証拠だ。

「みんなお疲れ様だ。そしてギンガ、久しぶりだな」

「はい。ルシルさんもお元気そうだなによりです」

ギンガは律儀に頭を下げ、挨拶をしてくれた。

最後に会ったのは局を辞める際だったから、スバルと同じ二年前くらいか。

「ああ。っと世間話はこの件が終わってからということだ、な」

「あ、はい」

今はレリックのケース確保が最優先だ。

このメンバーなら道すがら話すことも出来るだろうがそれは不謹慎だ。

「それじゃあティアナ、私もこれから君の指揮下に入る。好きなだけ使ってくれ」

「えっ!?! ああその・・・」

何だ? 急によそよそしくなったが、何か変なことを言ってしまったか?

「えっと、今は局員じゃないとしてもルシルさんを・・・その・・・」

ここで昔の話を持ってきたティアナ。

今のティアナの階級は二等陸士、そして私が元一等空佐……確かに少し躊躇うか。

「そんなことは気にしなくてもいいと思うが。」

それに私は今の君の指揮能力を買っている。だから自信を持って、ティアナ」

「は「ようやく来たわね欠陥品」……え？」

この開けた空間に響き渡る第三者の声。

全員が警戒に移る中、ゆつくりと靴音を響かせ暗がりから現れたのは二つの影。

「……レヴィヤタン。それに……新入りか」

一体はホテル・アグスタでシャルを苦戦させた最速のレヴィヤタン。そしてもう一体は全てが真紅という女で、自分の身長を超える大鎌を手にしている。

その女を見て思いつくのは、あの小さな少女が言っていた“赤いお姉ちゃん”という言葉。

スカリエツティからの受信専用の通信機を少女に渡したのはこの女だろう。

「ルシルさん……」

ヤツらを見て怯え始めたフリードを抱きかかえながらキャラ口が私の名前を呟く。

キャラ口も震えている。そして他の子達を同様。おそらく本能が危険だと告げているんだろう。たましい

『君たちは先に行ってケースの確保を優先してくれ』

『『『『…はいつ『『』』』』』』

『そんなっ！ あの二人は明らかに危険です！ 私たちも』

私の念話に唯一反論したのはギンガ。

そうか、ギンガはペッカートウムやレーガートウスのことは知らなかったか。

『ギン姉、魔導師^{わたしたち}じゃあいつらは倒せない。ううん、傷つけることだって出来ないんだ』

『え？ どういうこと…？』

『詳しい説明はあとだギンガ。君たちは一刻も早くケースのある場所を目指せ』

レヴィヤタンたちから庇うようにして前に出る。

ギンガは躊躇っているようだが、スバルたちとの念話で説得されたのか渋々従った。

「そんな窮屈な肉体^{うづわ}に入れられて大変そうね、欠陥品？」

真紅の女が私をまじまじと見て面白そうに笑った。

欠陥品。それは不完全な“界^{テストメント}律の守護神”である私とマリアを指す蔑称だ。

「いやいや、人間^{これ}は人間^{これ}で楽しいんだよ、二級品？」

こちらも“絶対殲滅対象”^{アホリョオン}の番外位であるヤツらの蔑称、二級品で応戦。

レヴィヤタンの表情は変わらないが、真紅の女は笑みを浮かべたまま止まっている。

そして真紅の女の姿が掻き消え、一瞬で私の背後に回ってきたがシヤルより、それにフェイトよりはるかに遅い。

神器“星填銃”に魔力を流して神秘の弾丸を生成、至近距離からの特大砲撃をお見舞いする。

「いつつつつけえええつ!!!」

「っ!」

魔力ではなく純粹な神秘の一撃。

ペッカートウム状態ならいざ知らず、分裂体である今なら概念兵装の一撃でも十分ダメージを与えられる。

そして閃光が途切れ視界がクリアになる。

「・・・確かに速い・・・な。レヴィヤタン・・・」

かなり離れたところに真紅の女の襟を掴んでいるレヴィヤタンがいた。

“星填銃”の砲撃が真紅の女に届くより先に移動、そして真紅の女と共に射線上より離脱。

確かに機動力ならシヤル以上であるのは間違いなさそうだ。

だが、その速さに対処するための・・・魔眼が私にはある。

右目の魔眼封じのコンタクトレンズを外す。

「第四の力・・・」

レヴィヤタンがそう眩き、コツコツと靴を鳴らして歩く。視線は私へ、歩く方向は私に対して平行に・・・そして、

「早く・・・消えて・・・」

「っ!？ はや」

60メートル近くあった距離をノーアクションで一瞬に詰め私の真横へと現れる。

用意しておいた魔眼、“極近未来視”では追いきれないどころか目にも映らない。

「チツ、捕らえよ、ドローミ、レーディング!」

レヴィヤタンを覆うように大小様々な鎖が現れる。

二つの捕縛神器による全方位からの襲撃。

レヴィヤタンが回避行動に入り、目で追いきれないほどの速さで離れていく。

だが捕縛神器の波状襲撃によって次第に追い込まれていく。

「・・・捕まった・・・」

その体には何重にも鎖が巻かれ、その周囲も“ドローミとレーディング”で覆われている。

私は止めを刺すために次元世界最高の神秘を持つ“グングニル”を左手に具現させる。

「私がいるってことを忘れてるんじゃないの!？」

真紅の女がそんな声を出しながら攻撃を仕掛けてくる。

右手に持つ“星填銃オルトリンデ”の銃口を向けてさっきと同じ砲撃を放つ。

「同じ手は通用しないってことを教えてあげる！」

真紅の女は大鎌を前面で回すようにして砲撃を防いだ。私としてもそう簡単に斃れてくれるとは考えていない。

「……グングニル神槍！！」

能力を解放せずとも内包している神秘は絶大。分裂体を消滅させるには十分すぎるほどにだ。

そんな“グングニル”を、未だに砲撃に対処している真紅の女へと投げ放つ。

「まず一体目。そして……お前もこれで終わりだ、レヴィヤタン」

右手の“星填銃オルトリンデ”の銃口を、今度はレヴィヤタンに向けてそして砲撃を放つ。

これでまずは二体の消滅、となるはずだった。

「……甘い」

「全然ダメ」

「なっ！？」

これもまた油断だったのだろう。

こういう詰めของ甘さは早急に直さなければ、と常々思っていたのにこの始末。

「欠陥品はどこまで私たちを甘く見ればいいのか？」

“グングニル”の柄を手にしてクルクルと回していた真紅の女が笑みを浮かべる。

その大鎌で砲撃同様弾き返したようだ。あの大鎌も結構な神秘を保
有している。

それにしても“絶対殲滅対象”^{アホリユオン}が神器と同じような神秘を持つ武器
を持つとは……。

「……このくらいの神秘じゃ……わたしは斃せない……」

二つの神器を引き千切り、尚且つ持っていた鯨のぬいぐるみで砲撃
を防ぐレヴィヤタン。

悪用されてはまずいため、神器を一度魔力に戻す。

全く、今代の分裂体は悉くこちらの予想を上回る。

「……仕方ない……か」

クロノやはやてたちには悪いが、神秘にSSSランクの魔力を上乗
せさせてもらおう。

魔力と神器の両方の神秘を相乗させればもう防げまい。

「第三級断罪執行権限……かい　　がつ!？」

SSSランクの魔力を使用するための執行権限^{ミミター}を解放しようとした
ところで、いきなり背後から首を掴まれ、仰向けになるようにして
地面に叩きつけられた。

叩きつけられた衝撃のあと浮遊感がこの身を襲う。

どうやらあまりの威力だったためにバウンドして空中に跳ね上げられたようだ。

「っうぐ、がはっ……まだ……いたのか……？」

傷つきし者に、汝の癒しを

何とか地面に着地して治癒魔術を発動、今負ったダメージを回復させる。

「もう面倒だから出てきたけど別にいいよね、許されざる色欲？」

私を地面に叩きつけた少女が真紅の女のことをアスモデウスと呼んだ。
アスモデウス
許されざる色欲は大罪の内、二番目に重い罪とされる存在だ。
もちろんその実力も二番目となる。

「まあいいわ。フフ、どう、界律の守護神が最弱とした私たちの強さは？」
「まあいわ。フフ、どう、界律の守護神が最弱とした私たちの強さは？」
守護神ならいざ知らず、今の人間に遅れを取るような大罪じゃないわ」

「……干渉能力の戦いなら……わたしたちは……確かに弱い。だけど……干渉がお互い使えないなら……第四の力にだって勝てる」

「そういうわけだからさ、さっさと逝っちゃってよ欠陥品」

アスモデウスにレヴィヤタン、そして新手の少女が私を中心として三角形の陣形を取る。

確かにヤツらの言い分は最もだが、分かっているのはお前たちも同様。

分裂体もまた私たちと同様その身の靈格が落ちることになる。だからこそ干渉能力だけでなく神器程度の神秘でダメージを負うことになっている。

それゆえに・・・今の私とシャルでもお前たちに勝てるんだよ。

我が手に携えしは確かなる幻想

いつでも複製武装や術式を取り出せるようにしておく。

目醒めよ、我が心なる世界が一つ

“ヒミンヒョルク 聖天の極壁”とは違い、“フレイザブリク 神々の宝庫”や“ヴァルハラ 英雄の居館”の二つには詠唱が必要となる。

それが展開する場合でも取り込む場合でも、だ。

今回は展開ではなく取り込むほうにする。展開すれば、地上にいるみんな、下手をすれば地上本部に気付かれる。

普通ではない魔力反応を。

其は美しき黄金に輝きたる館 其は我が心うちこに在りし神秘の幾多の主

「無駄なあがきは止しなさい」

アスモデウスが大鎌を振り、神秘の衝撃波を放ってくる。

その次の行動は魔眼で判明しているため回避ではなく“星填銃”の弾丸で迎撃する。

そうとは知らず突っ込んできたアスモデウスの眉間に銃口を押し付ける。

だが、

「させないつつの」

三体目のペッカートゥムが腕を払い巨大な斬撃を撃ちだす。魔眼がこの少女の次の動きを見せてくれる。

今度はそれを回避してカウンター気味に、再度具現させた“グングニル”で斬りつける。

契約の下、出でよ英雄の軍勢

少女は前髪を少し切られるほどのところで後ろに跳躍、難を逃れた。アスモデウスもまた銃口から逃れて、私から大きく離れた。やはりレヴィヤタンだけが異常な速さを持っているようだ。これなら何とかなる。

「……一気に……決める……」

レヴィヤタンのその一言に背筋が凍る。

本能が今から放たれる一撃を避けると全力で告げてくる。魔眼が次に起こる災厄を映し出す。

「……deus caedere……」

レヴィヤタンから紡がれた言葉は……神殺し。

この空間一体を照らし出すようにすみれ色の閃光が爆ぜる。私は魔眼のおかげでギリギリ有効範囲外まで回避できた。

「ぐっ……もう時間が……」

魔眼使用時間終了となり、魔眼封じのコンタクトを嵌めなおす。

拒みし者を蹂躪せよ 罪ある者を断罪せよ 助け求める者を救済せよ

だが詠唱も間もなく終わる。未だに三体とも私の居場所に気づいていない。

これで私の勝ちだよ、ペッカートウム。

「そうでもないんじゃない？」

「チッ」

背後に現れたのはレヴィヤタンとアスモデウスの二体。

すぐさまその場から離脱して“星填銃”二挺の銃口を向ける。

だが二人は何のアクションも起こそうとしない。

それだけじゃない。アスモデウスが手にしていた大鎌が今はない。

「いらつしゃい」

離脱後の場所には待ち構えていたかのように少女が大鎌を構えていた。

そして横一線にその大鎌を振るった。目に映るのは私の首を狙った必殺の凶器。

許マモシされざる強欲の振るった大鎌によってその場に銀髪が舞い、そしてルシルの首が飛んだ。

動き出す使者 〔前編〕（後書き）

11話と12話を繋げようと試みるも失敗。
結局ナンバーズは出せずに今回は終了。

そして初の前後編。

サブタイトルをケチったわけじゃないんです・・・ウソです、ごめんなさい。

本当はケチってます。

複製能力

極近未来視の魔眼：ギアスコードギアス 反逆のルルーシュ R2

許されざる嫉妬レウイヤタンの攻撃

deus caedere：デウス・カエデレ

ラテン語で神を意味する“デウス”と、殺害の“カエデレ”の名を持つ攻撃。

単純な神秘の爆発です。名前を付ける必要性はなかったんですが、ね。

なんとなく付けてしまいました。

そういえばペッカートゥムやレーガートウスもまたラテン語です。

動き出す使者 〔後編〕

主力が向かうと思われるヘリと地下の両方に手は打った。ならあとは私の仕事をするだけ。

『君の限定解除許可を出せるのは、現状では僕と騎士カリムの一度ずつだけだ。』

承認許諾の取り直しは難しいぞ。使っていないのか？』

部隊の後見人、クロノ君がそう言うけど、

「使える能力を出し惜しみして、あとで後悔するんは嫌やからな」

気づけばもう手遅れ、なんてことになりたくない。

だったら使えるときに使うべきや。

『場所が場所だけに、SSランクの投入は許可できない。限定解除は3ランクのみだが、それでいいか？』

3ランク、かあ。今の私はAランクやから……。

「シングルS、か。それだけあれば十分やつ」

『……八神はやて、能力限定解除3ランク承認。リリースタイム120分』

「リミット……リリース！」

この身に宿すのはSランクの魔力。その制限時間は120分。

ガジェットを殲滅するには余裕すぎる時間と魔力量や。

「よしつ、久しぶりの遠距離広域魔法・・・いってみようかっ！」

気合は十分。広域遠距離魔法なんて、ほんまいつ以来やる。

『ロングアーチ1、シャリオからロングアーチ0、八神部隊長へ』

「はいなっ！」

『サイティングサポートシステム、準備完了です。』

『シユベルトクロイツとのシンク口誤差、調整終了』

「ん、了解。精密コントロールとか長距離サイティングは、リインと一緒にやないとどうも苦手で」

こういうんはリインがおらんとどうにも上手いかん。

高速処理とかもほとんどリイン任せやし。

『その辺はこっちにお任せください！ 準備完了ですっ』

「おおきになっ」

ほんま頼りになる子らや。

これで私の魔法が間違っつて変なところに行くこともない。

「来よ、白銀の風、天より注ぐ矢羽となれ」

私の左手の上で浮かぶ夜天の書のページが勢いよく捲れて、中間程度のところまで止まる。

開かれたページは、今から私が使う魔法が記されたページ。

『スターズ1、ライトニング1、安全位置に退避。着弾地点の安全確認』

これで全ての準備は整った。

「よおっし、第一波、いくよっ!!」

掲げていた“シュベルトクロイツ”を前方に振り下ろして、

「フリース・・・ヴェルグ!!」

術式名のフリースヴェルグと唱えた。

そして放たれた四つの白い砲撃はガジェット編隊へと進んでく。

『フリースヴェルグ、第一波発射。発射軌道、正常』

『グループEに着弾します。5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・0!』

『グループE消滅。続いてB着弾、消滅』

『同じくA、消滅しました』

ロングアーチからの報告が随時入ってくる。
順調に破壊できとるようので何より。

「第二波・・・いくよっ!!」

十 十 十 十 十 十 十

「本当にそんなのがいるなんて・・・」

ルシルさんの指示のままに先行した私たちは、ガジェットを破壊しながらケースのある場所を目指していた。その合間に、ギン姉にペツカートウムやレーガートウスと呼ばれる存在について説明した。

ギン姉のその反応はあたしにも分かる。

あたしたちだって最初はルシルさんたちの言うことが信じられなかった。

でもホテル・アグスタでのシグナム副隊長とレヴィヤタンと呼ばれた小さい女の子の戦いを見れば誰だって信じるしかないと思う。

あの短い戦い、シグナム副隊長のリミッターがどうこうとかじゃなかった。

レヴィヤタンという子は一切のシールドとかを張らずに攻撃を素で受けていた。

でも傷一つ付かなかった。

人の姿をした人じゃない存在ペツカートウム、その使い魔レーガートウス。

倒せるのはルシルさんとシャルさんだけ、という魔導師では勝てないモノ。

「でもルシルさんの言うことだから・・・」

「ええ・・・」

ギン姉と二人して苦笑しながら頷きあう。

あたしとギン姉の小さい頃からのお兄ちゃんのような人のルシルさん。

そのルシルさんがそう言うならそれが本当のことなんだと・・・信じる。

「みなさん、ケースの推定位置はここです！」

着いたのは、さっきルシルさんと別れた場所と同じような開けた広い空間。

あたしたちは手分けしてレリックのケースを探し始めた。

「ありましたー！」

探し始めて数分、キャロから見つけたみたいだ。

合流するためにキャロのいるところへと向かおうとしたとき、

「何、この音？」

近くにいたティアが辺りを見渡した。

あたしにも聞こえる。何かを蹴るような音が連続で鳴り続けている。

「きゃあつー！」

次はキャロの悲鳴と爆発音。

キャロが何かに攻撃されたと分かって、急いでキャロのところに向かう。

駆けつけて視認したときには、キャロがケースを抱えた紫色の髪した女の子の攻撃を受けて吹き飛ばされ、それに巻き込まれたエリオと一緒に柱に叩きつけられた場面だった。

「おおおおおっ!!」

エリオとキャラロに追撃をかけようとした人型のナニかのようなやつに蹴りを放つ。

それを余裕でかわしたソレと目が合う。

「でえええいつ! はあっ!」

ソレはあたしの蹴りをかわした直後に、ギン姉の一撃を受けて弾き飛ばされる。

あたしはケースの回収を優先して、ケースを持ってここから去ろうとする女の子を追う。

「こらあっ! その女の子、それ危険なものなんだよ! ?
触っちゃダメっ、こっちに渡してっ」

最初は立ち止まって振り返ってくれたけど、何も言わないでまた歩き出そうとした。

「ごめんね、乱暴で。でもね、これ本当に危ないものなんだよ?」

幻術で姿を隠していたティアが、女の子にダガーモードの“クロスミラージユ”を向けながら姿を現した。

ティアは女の子をきっちり捕まえていてくれる。

ナイスだよ、ティア。

これで解決と思ったら、目の前に何かが着弾して強烈な音と閃光が私たちを襲った。

攻撃じゃないのは分かる。分かるけど・・・あまりの爆音に耳がす

ごく痛い。

必死に両耳を手で押さえるけどほとんど気休め程度でしかない。

やっと爆音と閃光が消えてゆっくりと目を開けてみると、ティアが自分から離れていく女の子に“クロスミラージュ”を向けていたところ。

でもそれを邪魔するように、さっきの人型がティアに飛び蹴りを入れて吹き飛ばした。

吹き飛ばされたティアはそれでも銃口を、今度は女の子の方向に向けて発砲・・・だけど、女の子に迫っていたティアの弾丸をその身を盾にした人型。

そして弾丸を受けた肩の装甲？のようなものが壊れて地面に落ちた。

「ったくもう、あたしたちに黙って勝手に出掛けちゃったりするからだぞっ？」

第三者の声がこの空間に響き渡る。

声のしたところを見ると、ライン曹長並みの小さな女の子。

「ルールーもガリューも」

「アギト・・・」

「それにしてもレヴィは何やってんだよっ？」

あいつ、ルールーを守るとか言ってたくせに守れてねえじゃんかよっ

「レヴィは仲間と一緒に仕事だって。すぐに片付けて戻ってくるっ
て言ってた」

女の子たちの会話を聞きながら一旦距離を開けてエリオとキャロの傍に行く。

エリオは大丈夫そうだけどキャロが気を失ったままだ。

「まあいいや、あいつがいなくてもこのあたし、烈火の剣精アギト様が来たからにはもう大丈夫だぞっ」

十 十 十 十 十 十 十

私は今、隊舎から戦闘が行われている区域に向けて飛行中。

それはルシルが地下へと向かったとき、地上の警戒を頼まれたからだ。

レーガートウスがフォワードの子達と遭遇、それなのにフォワードの子達に手を出さない。

目的はケースの回収でも妨害でもない。なら地下で何をしている？ 答えは至極簡単、ルシルを誘っているんだ。

じゃあ、誰がそんなことをする？ それもまた簡単、ペッカートゥムだ。

ヤツらが間違いなくあの区域の近くにいる。

ルシルも同じ考えに至ったから、私に「地上を頼む」と一言だけ告げたんだ。

地下だけじゃなくて地上にもペッカートゥムがいる可能性がある、と。

飛行中の最中、戦闘になったときのことを考えて、私の戦力についての現状を把握する。

さつきまでは、というより今もA A+ランクとして活動中だ。
この状態での複製術式使用のおかげで馬鹿みたいに魔力を消費した。
だけど、リミッターを解除すればそれも大した問題にはならないと
思う。

「いつでも来いって感じよね」

そんなことを呟き、広い空を翔る。
ここから戦闘区域まで大体5分弱。

『ルシル、私はもうすぐなのはたちにところに着くけど、そっちの
状況はどうなってる?』

ルシルの現状を知ろうとしてリンクを通すけど繋がらない。
こんなこと今までなかった。魔法による念話はジャミングとかあつ
て繋がらないこともある。

なのに守護神としてのリンクが妨害されるなんて・・・有り得ない。
ヤツらにそんな術を持つヤツがいるということ?
それとも・・・。

「・・・ルシルに・・・何かあった・・・?」

空を翔けながらルシルのことを思っていると、

「来たか。三番」

私を待ち構えていたように男が二人、私の行く手を拒んでいた。

「・・・ペッカートウム。どっちも知らない顔だけど・・・ナニ?」

「許ルシファアされざる傲慢だ」

「そんでオレが許サタンされざる憤怒だ」

白いスーツの男が腕を組みながら、“ルシファア”と静かに告げて、黒の燕尾服の男が左手の親指を自分に向けて、“サタン”と笑みを浮かべた。

「傲慢と憤怒、か……。6番目と4番目が私に勝てると思ってるの？」

軽い挑発を口にしながら、自分で掛けたリミッターを解除する。使用する魔力はSSランク。状況を見てSSSへと上げる。

けど市街地ということで、SSやSSSの魔力攻撃は使えない。だから使うのは“キルシュブリューテ”の神秘による攻撃のみだ。

「俺たちに勝てるかどうかは試してみるといい」

「こっちは時間がねえんだ。だが、簡単に終わってくれるなよ、三番！」

「上等……。そっちこそ簡単に……。あ、終わってくれていいんだ」

“キルシュブリューテ”を鞘から抜いて臨戦態勢に移る。

ルシルのことは気になるけど、今はこいつらを片付けるのが先だ。

首のないルシルの体を前に三体の“大罪”^{ヘシカートゥム}が静かに佇む。

許されざる嫉妬は無表情、許されざる強欲はつまらなそうに、そして許されざる色欲はただルシルを見下ろして口元を堅く結んでいる。

「結構簡単に終わっちゃったよね。もう少し苦戦すると思っていたけどさ」

「……………」

許されざる強欲の言葉に他の二体は応えない。

そんな中、許されざる色欲は辺りを探るように見回し始めた。

「どしたの？」

「分からないの、許されざる強欲？ 欠陥品は今人間なのよ？

なのにこの体からは一切血が流れていない。つまり、これは……
「^{フェイク}贗物」

許されざる色欲の言うとおり、ルシルの体や首からは血が一滴も流れていない。

許されざる強欲も、そのルシルの体から血が流れていないことに気づいたようで、許されざる色欲同様、周囲を警戒する。

「こんなモノで私たちを欺けるとでも思ったのかしら」

許されざる色欲は転がっているルシルの頭部へと近づき勢いよく踏みつけた。

グシャッと音がしたあと、頭部は光となって消滅していった。

「あはは、たとえ贗物でもスカツとするよこれ」

許されざる強欲マモンは未だに残っているルシルの胴体を散々痛めつけ、吹き飛ばした。

そして改めてルシルに警戒するなか、この二体の頭の中に一つの疑問が生まれる。

それはルシルがいつの間に贗物と入れ替わったか、ということだ。

「でも欠陥品の首に刃が当たったのは間違いないよ？ 刃先に・・・血が付いてるしさ」

許されざる強欲マモンは許されざる色欲アスモテウスへ刃先を向ける。

そしてそこには確かに乾いていない赤い血が付着していた。

これは本物であるルシルに何らかのダメージが入っている証拠でもある。

「仕掛けてこないということは、すぐに仕掛けられないような傷を負ったということかしら？」

「案外もう死んでるかもよ？ 首って人間の急所だしさ」

「その油断が自分の終わりを呼ぶわよ、許されざる強欲マモン？」

許されざる色欲アスモテウスは、許されざる強欲マモンから大鎌を受け取り肩に担いだ。

「・・・わたし・・・先に戻っていい？」

今まで沈黙していた許されざる嫉妬レウイヤタンがそう囁く。

当然それは許されない。だがそれを承知で彼女は告げた。

「もう少し待って。それと許されざる嫉妬レウイヤタン、あなた、少しルーテシアに固執しすぎよ？
彼女もまたこの世界と一緒に消えるんだから、必要以上に関わるのはやめなさい」

許されざる色欲アスモテウスは許されざる嫉妬レウイヤタンにそう告げる。
許されざる嫉妬レウイヤタンは少し逡巡したあと小さく頷いた。
それはこの場での待機のことか、それともルーテシアとの関係のことか、許されざる色欲アスモテウスには分からなかった。

「……探すのも面倒だし仕方ないわ。この付近一帯を吹き飛ばしましょう」

「おおっ、過激だね」

「……分かった……」

三体が行動に移ろうとしたその時、それは起こった。

我が御名の下、開け、ヴァルハラ英雄の居館

「なにっ!?!」

三体のすぐ近くで黒い穴が開いた。
許されざる色欲アスモテウスは呑まれた右腕を自ら切断して、傍にいた許されざる嫉妬レウイヤタンの速度を以って離脱、完全に穴へ呑まれることはなかった。
しかし、あまりにその穴に近かった許されざる強欲マモンは成す術なく呑み込まれた。

この瞬間、許されざる強欲マモンの消滅は確定された。

「ヴァルハラ英雄の居館」に居る「エインヘリヤル異界英雄」は総勢3万超。だが全員が戦闘員というわけではない。

だがそれは許されざる強欲にとつては何の気休めにもならない。マモン「エインヘリヤル異界英雄」の中には真正銘の神だっているのだから戦い以前の問題なのだ。

「やってくれるじゃない、欠陥品・・・」

アスモデウス許されざる色欲と許されざる嫉妬から離れた場所に、首と右肩から血を流して座り込んでいるルシルがいた。レヴィヤタン綺麗だった銀髪は今ももう短く、血に染まって赤くなっていた。

ルシルは首を刎ねられるその刹那に複製術式、レヴィナド・イルシオン神騙す夢幻を発動。そのおかげで大鎌から逃れ、首と右肩だけの傷だけで済んだのだ。

レヴィナド・イルシオン神騙す夢幻。大戦時、かつて夢幻王プリムスがたった一度使った魔術。

全てを欺くほどの質量のある精巧な自分の幻影をみかわり生み出す。幻影と入れ替わるようにして、最大900m範囲内に瞬間転移することみかわりで敵からの攻撃を回避し、代わりに攻撃を受けた幻影によって自分を死んだと思わせる術式。

本来なら血液や臓器などの効果も含まれるが、今回は全てに余裕のなかったために術式を省いたことで単なる回避用の手段となってしまうた

座り込むルシルは傷は深いが治癒魔術は使わない。

魔力を放つことで自身の居場所を察知されてしまったためだ。

そうなる“ヴァルハラ英雄の居館”で一気に決めようとしていた策が無に帰すことになる判断したからだ。

だが結局それは叶わず、取り込んだのは許マモンされざる強欲の一体だけ。

ルシルは「チツ」と舌打ちしたあと、首と右肩に負った怪我を治す。これで残りの二体に自分のいる場所を知られたはずだ。

「全く、シャルにもリンクが通らないし、面倒なことをしてくれた」

ルシルは残りの“ベッカートゥム大罪”と戦うために立ち上がる。

ここでさらに数を、可能ならば二体とも完全に斃すこと目指す。そしてリンクに関しては、この場にはない許ルシファーされざる傲慢が仕掛けたことだが、もちろんルシルは知らない。

「地上はどうなっているだろうか？ いや、フェイトたちがいるのだから心配はないな。

それ以上に気になるのは、あの子達はちゃんとケースを回収できたかどうかだが・・・」

ルシルが気になるのは先行させたフォワード陣とギンガの五人。だがルシルは気にはなるものの、まずは現状を打破するために、

「第三級断罪執行権限・・・解凍」

ルシルは、S・ランクからSSSランクの魔力を制限する第三級の執行権限リミッターを解凍、その身に宿す魔力をSSSランクとした。

我が手に携えしは確かなる幻想

ルシルは冷静に考え、魔力攻撃はまずいと判断、全て神秘の攻撃に切り替える。

なら魔術は不可、複製術式もまた不可、ならば複製能力を使えばいいと結論した。

ルシルは、別の世界で契約を行っている別の自分が複製した能力を引つ張り出す。

オリジナルに神秘はないが、“英知の書庫”^{アルワイト}に一度登録されたものは例外なく神秘を宿すようになる。

だから何も問題なく“大罪”^{ベックアトラム}にダメージを与えられる、と考える。

「さあ、第二ラウンドを始めようか」

デーmondライブ

ルシルはそう呟いて、複製能力を発動させた。

十 十 十 十 十 十 十

廃棄都市区画のある一画でルシファーとサタンと空戦を繰り広げる。

「はあああああっ!!」

キルシュブリューテに宿る神秘を斬撃として飛ばし続ける。

だけどそれはルシファーとサタンに容易く避けられる。

「まだまだあつ！」

位置的に近いルシファーを斬り捨てるために肉薄する。

“キルシュブリューテ”の届く間合いにルシファーが入り、一気に右斜めに斬り上げる。

「惜しかったな」

「っ！ ペツカートウムが武器を持つ・・・？」

ルシファーは、刀身部分が赤黒く染まる細長い四角柱の剣を構えて、私の斬撃を防いだ。

わけが分からない。どうしてペツカートウムが武器を持っているのか・・・。

今までにこんなことはなかった。今代のペツカートウムは何かがおかしい。

「ボサツしていると直撃だぜ？」

サタンが私に向けて、レヴィヤタンと同じような砲撃を放ってきた。砲撃と言っても、それはレーザーより少し太い感じのようなモノ。それをいくつも連続で掃射してくる。

私はそのレーザーの掃射を、“キルシュブリューテ”で斬り払っては回避する。

「これ以上は・・・魔術を使わないとキツイかな？」

“キルシュブリューテ”の神秘による直接斬撃や放出斬撃にも限界を感じ始めた。

陸戦ならそれで十分だろうけど、空戦じゃメチャクチャなハンデに感じる。

何ならSSSランクで“キルシュブリューテ”の能力を解放、真技の“牢刃”でも使おうかな？
けどそれははやてたちに迷惑をかけることになるかもしれない。

「ん？
ルシファー
許されざる傲慢、聞いたか？」

「ああ。
マモン
許されざる強欲が敗れたそうだな」

私の思考の最中、ルシファーとサタンが、マモンが敗れたとか言い出した。

そういう話は普通、敵の前ではしらないと思うんだけどね。
でも、それが事実ならルシルは無事で、そのうえペッカートウムの
一体を斃したということだ。

「……誘き出しといて返り討ちってことでしょ、それ？
これで残り六体ってことよね。ここに二体、ルシルの方はどうなの
かな？」

たぶんルシルの方も一体だけってことはないと思う。
いるのはベルゼブブ、ベルフェゴール、アスモデウス、それとも・
・レヴィヤタン？
どちらにしてもルシルなら何とか出来るはずだ。

「三番、俺たちはここで撤退する。別にかまわないだろう？
ここで俺たちと戦い続けるより、仲間の方に向かうのがいいと思う
が？」

ルシファーからのいきなりの撤退申告。

私は思考を巡らせる。確かにこのままじゃ埒が明かないのも事実。空戦においての速さが互角である以上、私のような接近戦タイプは辛い。

でも、ここでヤツらを見逃すのも何か嫌だ。

空に静止して少し、私は結論を出す。

「大人しく撤退するならいい。けど、私の友達に手を出すような真似をしたら容赦しない」

ルシファーとサタンの撤退を見逃す。それが私の出した結論。次に会ったときは市街地じゃなくて、私が全力を出せるような場所で思いっきり戦って勝つ。

「いい判断だ、三番。では、これで失礼させてもらおう」

「・・・次はその首を落とす。待っているよ、三番」

ルシファーとサタンはそう告げて、その姿を消した。

ルシルが再度戦いに臨む為、リミッター 執行権限を解凍しようとしていたとき、

「・・・許マモンされざる強欲・・・死んじやったの？」

「はぁ・・・そうね」

二体は黒い穴が閉じた場所を見ながら佇んでいた。
アスモデウス
許されざる色欲は知らなかった。ルシルにこのような力があるとい
うことを。

アスモデウス
歴代の許されざる色欲の記録の中のルシルは、干渉、もしくは簡単な
魔術しか使っていないかった。

ヘッカートゥム
当然だ。番外位である“大罪”相手に創世結界を使うこと事態が異
常だからだ。

マモン
「許されざる強欲は死んだ。戦闘行動も一時中止、退却する」

ヘッカートゥム
このまま戦い続けても構わないが、此度における“大罪”の目的は
あまで“標”だ。

無理に戦って勝つ必要もないし、それ以前に負けて目的を果たせな
くなるほうが問題だ。

そう判断しての退却となる。

レヴィヤタン
「許されざる嫉妬、もう戻っていいわよ。欠陥品とは改めて
そう、やる気なわけね」

そのとき、二体の立つ場所より500m弱離れた場所から強烈な魔
力を感じた。

ルシルがまだ戦おうとしていることが分かり、やれやれといった風
に首を振る。

レヴィヤタン
「どうしたい、許されざる嫉妬？」

「……ルーテシアのところ……戻りたい」

「そう……」

アステウス
許されざる色欲の失っていた右腕部分に光が集束していく。
そしてその次の瞬間には、失う前と何ら変わらない右腕があった。
閉じられていた右拳が開く。開いた手のひらの上にあるのは淡く輝
く光球。

「^{マモン}許されざる強欲。あなたの“力”、有効に使わせてもらおうわ」

その光球は許されざる強欲の“力”そのもの。
アステウス
許されざる色欲は呑まれた右腕を使い、同じく呑み込まれた許され
ざる強欲の“力”だけを取り戻したのだ。

アステウス
そして許されざる色欲は、その“力”の光球を胸に押し当て取り込
んだ。

アステウス
これで許されざる色欲は二体分の“力”を有することになった。

「欠陥品、私たちはこれで」

アステウス
全てが言い終わる前に、許されざる色欲はその場から離脱。
レヴィヤタン
許されざる嫉妬もまた、その場から完全に姿を消していた。
アステウス
それと入れ替わるようにして許されざる色欲たちがいた場所にはル
シルの姿があった。

「・・・逃げたか」

“グングニル”を携えたルシルは静かに呟き、地上へと出るために
歩を進めた。

そして歩を進める中、地下に大きな揺れが起きた。

「な、何だ・・・？」

車の通りが何一つない廃棄されたハイウェイ上に、ルーテシアとアギト、ガリユーの姿。
優勢に立っていた地下での戦いに、フォワード陣の増援として現れたヴィータとリインの奇襲によって一時的な撤退を余儀なくされたのだ。

「ルーラー、これはまずいって！ 埋まった中からどうやってケースを探す!？」

「あいつらだって局員とはいえ、潰れて死んじゃうかもなんだぞっ!？」

アギトの言っていることは、地下を崩落させようとしている甲虫のことを指しているのだろう。

確かに普通の人間ならば崩落に巻き込まれば死ぬことになる。

「あのレベルなら、たぶんこれくらいじゃ死なない。

ケースはクアットロとセインに頼んで探してもらおう」

ルーテシアは意を返さない。

問題のケースは、クアットロとセインと呼ばれた二人に回収してもらおうらしい。

「よくねえよ、ルーラー！ あの変態医師とかナンバーズ連中、あんな奴らと関わっちゃダメだって！

ゼストの旦那も言ってる！ あいつら口ばっか上手いけど、実際あたしたちのことなんてせいぜい実験動物くらいにしかなってねえ

よ！」

アギトは、スカリエツティ一味のことをそう評した。自分たちのことを単なる実験動物としか見ていない、と。

「それにペッカートゥムって奴らもそうだ！ あいつらも絶対ヤバイって！」

何かこう・・・、ああもうっ、なんて言っていていいか分かんないけどさ、ヤバイんだって！！」

アギトは的確な表現が出来ないせいで、その声を荒げる。 “大罪”
は危険だと。

しかしそれを聞いたルーテシアは、

「そんなことないよ、アギト。レヴィはすごく優しいし、アスモデウスだって面白い。

わたしとアギトにもよくしてくれる」

“大罪”^{ペッカートゥム}のことを庇うような言葉を囁く。だが彼女は知らない。その“大罪”^{ペッカートゥム}の目的を・・・。

そして轟音が響く。音の出所は甲虫の足下。地面が大きく陥没している。

あれではもう地下は完全に崩落しているだろう。

「やっちまった」

アギトが大きく肩を落として項垂れた。

「ガリユー、怪我・・・大丈夫？」

ルーテシアの傍にいるガリユーは頷き、それに応える。それを見たルーテシアは優しく「戻っていいよ」と告げ、ガリユーの召喚を解いた。そして今度は地面を陥没させた甲虫、地雷王の召喚を解こうとしたとき、地雷王の足下に四角い魔法陣が展開、そこから生み出された無数の鎖によって捕縛された。

そこから繰り広げられたのはフォワードたちとルーテシアたちの短い戦闘。だが相手の方が一枚上手だったのが、ルーテシアとアギトは捕らえられてしまった。

「子供をイジメてるみてえでいい気分はしねえが、市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

ヴィータがルーテシアの前で、二人に対する罪状を告げた。

廃棄都市区画のあるビルの屋上、人影が二つ。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてるっ？」

眼鏡をかけた茶髪の女が、布に包まれた筒のようなものを手にしている、同じく茶髪の、ディエチと呼ばれた女に視線を向ける。

「ああ。遮蔽物もないし空気も澄んでる。よく見える。」

でもいいのか、クアットロ、撃っちゃって？」

デイエチの視線の先には、遠く離れているヘリの姿がある。

そしてデイエチは、そのヘリを撃ってもいいのか？と、眼鏡の女、クアットロに確認を取る。

「ケースは残せるだろうけど、マテリアルのほうは破壊しちゃうことになる」

「うふふ、ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当りなら、本当に聖王の器なら、砲撃くらいでは死んだりしない大丈夫、だそうよ？」

「ふん」

クアットロの言葉を聞いたデイエチは、手にしていた筒から布を取り払う。

そこから現れたのは無反動砲のような青い大砲だった。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさんが捕まったわ』

「ああ、そういえば例のチビ騎士に捕まってましたねえ」

クアットロの横にモニターが現れ、スカリエッティの秘書、ウーノが映し出される。

ウーノの言葉にのんびりした口調でそう返すクアットロ。

『今はセインが様子を窺ってるけど・・・』

「あのレヴィヤタン、とかいうのはどうしたんですかー？」

いつもルーお嬢様と一緒にいるみたいでしたけどー？」

『あの方たちは今、大事な仕事中的ようで手を離せないらしいの。だからあなたたちはルーテシアお嬢様たちのフォローをお願い』

「はい。・・・ドクターもウーノ姉様も、どうしてあんなわけの分からない連中と付き合えるのかしらあ？」

モニターが消え、クアットロは“大罪”^{ヘックカートゥム}のことを嫌つかのように呟く。

だがそんな思考をすぐさまカットし、ルーテシアを救助するために動き出す。

『セインちゃん。こっちから指示を出すわ。お姉様の言つとおりに動いてねえ』

『うん、りょうかい』

ルーテシアとフォワード陣のいる廃棄されたハイウェイ上。

フォワード陣からいくつか尋問を受けているルーテシアとアギト。

そんなとき、バインドで拘束されているルーテシアに、クアットロからの念話が届く。

『はぁーい、ルーお嬢様』

『クアットロ・・・』

『何やらピンチのようで。お邪魔でなければクアットロがお手伝いいたします』

『・・・お願い』

ルーテシアは、クアットロの力を借りることにした。

本当は許されざる嫉妬を待っていた、という本音は明かさなかった。

『はい。ではお嬢様、クアットロの言うとおりの言葉を、その赤い騎士に・・・』

ルーテシアから紡がれるのは、クアットロからの伝言。

沈黙を保っていたルーテシアが口を開いたことで、ヴィータとフォワード陣が口を閉じる。

「逮捕はいいけど、大事なへりは放っておいていいの？」

それを聞いたヴィータを始めとしたフォワード陣は焦る。

だがルーテシアを介してのクアットロの伝言は終わらない。

ルーテシアから向けられる視線に気づき、ヴィータは怪訝そうな表情を浮かべる。

「あなたはまた守れないかもね」

「っ！」

今度こそヴィータの表情に変化が現れた。

そして次の瞬間、ヴァイスの駆るへりに向けて、ディエチの砲撃が放たれた。

十
十
十
十
十
十

「見えたっ！」

「よかった、へりは無事」

フエイトちゃんと二人でストームレイダーを視界に捉えて安堵した
そのとき、大きな魔力反応を感じることが出来た。

『砲撃のチャージ確認。物理破壊型、推定Sランク！』

ロングアーチからの報告が入る。

Sランクの、しかも物理破壊型の砲撃じゃへりに備えられているシ
ールドじゃ防ぎきれない。

そして全力で飛ぶ私たちを尻目に砲撃が放たれた。一直線にへりへ
と向かう暴力の一撃。

「間に合わないっ！！！」

目に見えているのに、あと少しなのに……。

この距離でリミッターを解除されてもギリギリ、ううん……届か
ない。

そのとき、

『私が守る！！！』

ここにいないはずのシャルちゃんからの念話が届いた。

そしてへりへと向かう砲撃は、

「そう上手くいくと思うなああっ!!!!」

着弾するその瞬間に、へりと砲撃の間に現れたシャルちゃんの“キルシュブリュー”によって防がれて・・・違う、綺麗に斬り裂かれていた。

『へりは無事っ！　なのはとフェイトは狙撃犯の逮捕、急いでっ！
はやて、二人のリミッターの解除をお願い!』

シャルちゃんから私たちに指示が飛ぶ。
私たちはその勢いに負けてただ「了解」と言っただけで行動に移った。

十　十　十　十　十　十　十

『こちらロングアーチ！　へりは無事です!』

『シャルさんがやってくれました!!』

へりが無事という連絡があたしらに届く。

どうなることかと思った。また守れないんじゃないかねえかって・・・。

「やってくれたなデメエら・・・」

捕まえている紫のガキにアイゼンを向ける。

もう少してへりが落とされて・・・シャルもヴァイスも死んでいたかもしれない。

そう思うと怒りが込み上げてきて、どうにかなりそうだ。

「お、落ち着いて副隊長！」

「これが落ち着けるかつ！」

スバルにはわりいが、こればかりは怒りが収まらねえ。

それに“また守れない”つつう言葉。あれは、八年前のことを指しているんじゃないか？

だったらこいつらの仲間は、あの事について何か関わってるかもしれないねえってことだ。

「答える、テメエらの仲間だどこだ！？ 八年前のこと知ってるのかつ！？」

感情が抑えられねえ。

バインドで縛られてるアギトつつう奴が何か言ってるが耳に入らない。

そのとき、

「・・・っ！ エリオ君、足下にナニかつ！！」

うしろでギンガが叫んだ。

それであたしもガキから視線をエリオに向ける。

すると地面から変な格好をした女が現れて、エリオの持つケースを奪い取って、また地面へと・・・潜った！？

「チックシヨー、何なんだよっ！？」

「副隊長、危ない！！」

ティアナの叫びに反応して振り返ろうとしたけど、その前に強烈な衝撃を受けた。

突然のことで一瞬だけ頭ん中が白くなっちまったが、すぐに体勢を立て直して前を見る。

「・・・ごめん、ルーテシア。・・・遅れた・・・」

そこにいたのはレヴィヤタン。

ペッカートウムの一人で、セインテストかフライハイトにしか斃せない人外。

「・・・帰ろう・・・」

レヴィヤタンがそう呟いて、鯨のぬいぐるみを掲げた。

次の瞬間、辺りが紫の閃光に包まれた。

光が収まったとき、もうそこにはあたしら以外、誰もいなかった。

「・・・反応・・・ロストです」

「くそっ、やられたっ!」

十 十 十 十 十 十

へりの護衛の最中、モニターに映るのは犯人と思しき二人の女。

一人は眼鏡をかけた女で、なんとなくお近づきになりたくないような奴だ。

もう一人は“殲滅姫カノン”の持っていた神器と似た無反動砲のよ

うなモノを手にした女。
いきなりのフェイトのプラズマランサーから回避して、必死に逃げ回っている。

私が砲撃を防いだことでへりは無傷。そのままへりの護衛に就くことにした。

そしてルシルのことは、ルシファーとサタンがいなくなったことで連絡をとることが出来た。

今回の詳細は帰ってから、ということになったけど、ルシルは結構まずい戦況だったみたい。

ルシルの綺麗で長かった髪は短く雑に切られていて、戦闘甲冑の首と右肩を覆う部分は、裂けている部分を中心に赤く血で染まっていた。

それは下手をすれば死んでいたことを意味しているのだから。でも「無事だったから問題ない」って軽く言うルシルには呆れ果てる。

だから私もそれ以上は何も言わなかった。

だったら今は、目の前の問題を先に片付けることを優先しよう。

「はやて、デアボリック・エミッション、スタンバイ」

『それはあのうちのどつちかが幻影の使い手、やからかな?』

「間違いなくね。そろそろ姿を消すはず・・・」

狙撃犯の傍にいながら何もしないで、たとえ安全を確保していても戦場にいる時点で黒。

幻影系はおそらく現代も近いところからじゃないと発動できないと私は踏んでいる。

仮に違ってもあの二人を捕まえることには変わりないからよし。そしてはやては詠唱を終えて、いつでも発動できるように待機している。

「なのはとフェイトは、はやての一撃のあとに出てきたところを撃つて」

『『了解!』』

そして予想通りに犯人の二人が消えた。

ただ実際にはまだ消えた付近にいるはずだ。

そこを潰すのが広域空間魔法、デアボリック・エミッション。

見えなくてもいるのだから、動き出さざるを得ない状況を作り出す。

そして出てきたところなのはとフェイトで挟撃させる。

「なのは、フェイトは離脱! はやて・・・撃つて!」

『遠き地にて、闇に沈め。デアボリック・エミッション!』

遠隔発生された一撃が廃棄都市区画の一面を飲み込んでいく。

それで、あの二人は・・・っと、なんとまあ、いい具合になのなとフェイトの間に現れた。

They never surrender. Judged
to have in danger of escape.

(投降の意志なし:逃走の危険ありと認定)

Knockout by buster. After that,
arrests it. (砲撃で昏倒させて捕らえます)

ギンガさんに急かされたスバルがヴィータ副隊長に声をかけるけど、邪魔すんなって意味が籠められた“グラーファイゼン”がスバルに向けられた。

「ああ、フォワード陣はベストだった。今回は完全にあたしの失態だ」

「リインもです・・・」

早く言わないといろいろとまずい気がして、今度はあたしが意を決して口に出す。

「副隊長・・・あの・・・」

「なんだよっ、報告中だぞ！」

怖い。けどここで言わないと、きっとあとでさらに怖いことになる。

「いやあ、あの・・・ずっと緊迫してたんで切り出すタイミングがなかったんですけど・・・」

「レリックには、私たちが一工夫をしまして・・・」

「んん？」

あたしとスバルの言葉を聞いて、ヴィータ副隊長もようやく話を聞いてくれるみたいだ。

ヴィータ副隊長の前に集まって、あたしたちがレリックに施した工夫の説明を始める。

「ケースはシルエットではなく本物でした。
あたしのシルエットって衝撃に弱いんで、奪われた時点でバレちゃ
いますから……」

「なので、ケースを開封してレリックク本体に直接嚴重封印をかけて
……」

「その中身は……」

スバルがキャロの被っている帽子を手に取る。

キャロのカチューシャの上に一輪の花が咲いている。

ヴィータ副隊長がそれを確認したのを見て、あたしは指を鳴らす。
すると、花がレリッククへと変わる。これが私たちがレリッククに施し
た一工夫だ。

「敵との直接接触が一番少ないキャロの持ってもらおうって……」

「なるほどー！」

「はは、あははは、ははは……」

リン曹長は感嘆の声を、ヴィータ副隊長は……あの、大丈夫で
すか？

あたしたちはどうしていいのかわからず、ヴィータ副隊長が復活す
るまで待つことにした。

ヴィータ副隊長の力のない笑いが続いている中、上空からシルさ
んの声が聞こえた。

「みんなも無事にレリッククを回収したみたいでよかった……」

そしてあたしたちは、空から降りてきたルシルさんへと視線を移した。

けど、ルシルさんの姿は別れたときと違ってボロボロだった。

「ルシルさん!?」「」「」

「セイントテスト!? お前、大丈夫なのかよ、それっ!?!」

「す、すぐにシャルルを呼んで」「」

さっきまでの雰囲気が一気に消し飛んだ。

それほどルシルさんの見た目が酷かった。

綺麗だった髪は短くなっているし、血で赤く染まってる。

「ああ、大丈夫だから。止血も終わったし、傷も塞いだ。・・・心配することはないよ」「」

笑みを浮かべるルシルさんに、一同ドン引き。

このあと、フェイトさんやシャルル先生に捕まったルシルさんは、診察室に強制連行された。

動き出す使者 〱後編〱（後書き）

散々ルートの考案、書き直しを行った結果、こういう結末で終えま
した。

ルシルの“死亡！？ネタ”ですが、そう簡単には殺させません。
やはりこの作品ではどうあれ、ANSURでは最強の主人公でし
たので。

というか、このネタは本来、次のエピソードで使うものでした。

それなのに何を血迷ったか今回で使うということに・・・何たる失
態。

これでは次のエピソードの話数とサブタイトルを変更せねば・・・
と思う今日。

そして今回はもしかすると、みなさんの期待を悪い意味で裏切った
かもしれません。

さて、許マモンされざる強欲が僅か二話で退場。

ですが力だけは許アスモデウスされざる色欲へと取り込まれることに。

これで強くしていきますよ、大罪ベックカートゥムを。

複製能力

デインドライブ：NEEDLESS

複製術式

神騙す夢幻：ANSUR

レフィナド（洗練された）、イルシオン（幻影）、という意味を持
つスペイン語

「臨時査察って・・・機動六課に？」

「うん。地上本部にそうゆう動きがあるみたいなんよ・・・」

「うっわあ、地上本部の査察って上が上だけに結構厳しいよ？」

はやてが、この六課に査察が入るって話をしてきた。

たぶん昨日の戦いが地上のトップ、レジアス中将の耳に入ってしまったんだろつ。

厄介な人に目を付けられてしまったものだ。

「うえ・・・、六課^{ちく}はただでさえツツコミどころが満載の部隊やしなあ」

「今、配置やシフトの変更命令が出たりしたら、正直致命的だよ？」

「そつだよね、ここでバラバラにされるのはまずい」

査察官の判断によっては、六課内のメンバーが外されることになるかもしれない。

私とルシルが代わりになる、っていうのは論外だし・・・。

「うーん、なんとか乗り切らなあ」

はやての言つとおり、ここはどうにかして乗り切るしかない。手伝えることがあれば、なんだってしてあげないとね。

「……ねえ、これって査察対策にも関係してくるんだけど、六課設立の本当の理由、そろそろ聞いてもいいかな?」

「よかつたら私も教えてほしいんだけど……。あ、もし機密情報だつていうんなら無理に聞かないよ?」

フェイトがこの機動六課設立について質問したから、私もそれに続いて聞いてみた。

でも、私はもう局員じゃないし、六課の隊員でもないから無理には聞けない。

「うん、シャルちゃんの話は信じとるし話してもええよ。それにええ機会やと思う。」

これから聖王教会本部、カリムのところへ報告に行くよ。

そこでまとめて話すから、私と一緒に付いてきてくれるか?」

「うん」

「……ありがとう、はやて」

はやての、“信じてる”というのを聞いて口元が緩むのが分かる。すごく嬉しい。

「うん。なのはちゃんはどつやる? もう帰ってきとるかな?」

「あ、ちょっと待って」

フェイトが浮かび上がったキーボードのキーをいくつか叩いてモニターを立ち上げた。

んで、そのモニターに映し出されたのは、

『ほーら、どうだ、ヴィヴィオ・・・？』

昨日保護した女の子を肩車して笑っているルシル。

そしてルシルの足元には、うさぎのぬいぐるみが踊ってる。

その他にも、ルシルの傍で笑みを浮かべてるなのは。さらにフォワードの子達もいる。

モニターに映るそんな光景を見て、私だけじゃなくてフェイトとはやても目を点にしている。

「え〜と・・・これは・・・？」

「取り合えず行ってみようか」

「え、うん・・・そうだね」

十 十 十 十 十 十

昨日の怪我がどうのこうのってことで、今日一日の強制休暇を取らされた。

大してやることのない私は、後髪を切り整えたり、のんびり海を眺めながら時間を過ごした。

それにも飽きて職員寮へと戻ると、遠くから子供の泣き声が聞こえた。

こんなところに子供の泣き声というのもおかしい話と思い、声のするところまで行ってみると、そこはフェイトとなのはの部屋だった。

「失礼するよ・・・って、その子は昨日の・・・」

部屋にいたのはなのはとフォワードの子達。そして昨日保護した少女の六人。

泣き声はなのはの足元にしがみ付いているあの子のもだった。

『あ、ルシル君。うん、異常もないってことだから連れて来たんだけど……』

なのはが口頭じゃなく念話で応対してきたから、フォワードの子達と視線だけの挨拶を済ませつつ、こっちも念話で応対する。

『まあ、それはなのはの判断だからいいとして、どうしてこういう状況に？』

『えっと、ヴィヴィオ、この子の名前なんだけど、私が仕事に戻らないといけないって言ったら、行っちゃヤダって泣き出しちゃって放してくれないの。』

それでフォワード陣に相手をしてもらおうと思ったんだけど……私となのはの視線を受けた子達は面目なさそうに頭を下げ、

『すみません』

四人同時の謝罪一言。その四人には苦笑を返すしかない。

『私が少し話してみようか？』

『え？ うん……、お願いできる？』

まあ、私がこういうことをするような人間には見えないだろう。

だから、なのはの歯切れの悪さも理解は出来る。

私としても幼い子供と関わりを持つことは契約中度々あったりする。それに、赤ん坊だった妹シエルの面倒だってゼフィ姉様と一緒に見たこともある。

そんな中で、いろいろと小さい子との付き合い方を学ぶこともたくさんあった。

まあ、この子にも通用するかどうかは分からないが……。

「こんにちは」

まずは視線を合わせるために膝をつく。

こういうことをするだけでも反応が違ってくるし、子供の視線にこつちが合わせるのも結構大切だ。

「……こん……には……」

両目に涙を浮かべながらも、恐る恐るといった風だが目を合わせてくれる。

それにきちんと挨拶を返してくれた。いきなりの拒絶でなくてよかった。

「わた……、お兄ちゃんは、ルシルっていうんだ」

「……ルシル……?」

ルシリオンって長い名前よりかはルシルの方がはるかに覚えやすいだろう。

この愛称をつけてくれたゼフィ姉様には本当に感謝している。

「そう、ルシル。君のお名前はなんていうのかな？」

「……ヴィヴィオ……」

自己紹介も終わった。それじゃ本題のほうへと持っていこうか。

「ヴィヴィオ、か。いいお名前だね。それでね、ヴィヴィオ。ヴィヴィオは、なのは……さんと一緒にいたいんだよね？」

なのはさんか、なのはお姉ちゃんのどちらかで少し迷って、結局さん付けを選択。

何か変な感じだ。さん付けなんて……。なのはもそうなのか苦笑しながら私を見た。

だって仕方ないだろ？ さすがになのはお姉ちゃんと口に出すのは正直恥ずかしい。

「……うん」

「うん、そっか。でも、なのはさん少しの間だけ行かないといけな
いみたいなんだ。

でもちよつとで戻ってくるから、それまでお兄ちゃんや……」

そこで一度言葉を切って、そばに落ちているぬいぐるみを見、そしてなのはを見る。

『なのは、このぬいぐるみはヴィヴィオのものか？』

『え、うん。病院で買ってあげたんだ』

念話でなのはに確認。ならこのぬいぐるみにも働いてもらおう。

指を鳴らして、操作系の魔術を発動させる。
操作系を苦手とする私でも、このぬいぐるみくらいならそう苦労せず操作できるだろう。

「この子と一緒に遊ぼう」

「?.....っ!?!」

突然起き上がったうさぎのういぐるみに少し驚いて、トコトコ歩くそれを注視している。

さて、ヴィヴィオの返事は如何に.....?

「.....やだ」

うーん、駄目だったか。と、そう簡単に落とされないので、私は?

「それは困ったな。あ、そうだ。肩車はどうかかな?　すごく面白いぞ?」

よくエリオにしたことがある。

当時、休暇は専ら界律との契約を行っていたが、フェイトとの約束だけは出来るだけ守った。

契約はシャル一人に任せて、私はフェイトとエリオ、別の日にはキヤロが、といった感じで遊びに出掛けていた。

だがそれも始めの間だけだったが.....。

だからその穴埋めとしてシャルの代わりに、多くの命を私が出来るだけ奪った。

シャルの心が歪まないように、かつての私みたいに壊れたりしないように.....。

「かた・・・ぐるま・・・？」

ヴィヴィオの声で現実を引き戻される。

両手に染み付いた血の幻視を振り払って、まっすぐにヴィヴィオを見つめる。

「そうだよ、肩車。それにヴィヴィオだってなのはさんを困らせたくないよな？」

この子だってヴィヴィオと一緒に遊びたいって言っているぞ？」

うさぎのぬいぐるみが、ヴィヴィオの足元までトコトコ歩き、ヴィヴィオの足をその手でトントンと叩いてヴィヴィオを見上げる。

「・・・うう」

少し揺らぎ始めたようだ。あともう一押しといったところだな。

右手の親指と人差し指を何かを摘むようにしながら、ヴィヴィオの顔の前に近づける。

それで少しヴィヴィオが引いたが、構わずに左手の指を鳴らす。右手に一瞬の煙が上がって、そして霧散する。

「??????」

ヴィヴィオは本当に不思議そうな顔をしている。

親指と人差し指が摘んでいるのは、さっきまでなかった一輪のクジヤクアスターの花。

花言葉は可憐。ヴィヴィオにはちょうど良さそうな花だ。

「どうぞ、お兄ちゃんからのプレゼントだ」

クジャクアスターの花をそっとヴィヴィオの髪に挿す。
少しビクツとしたけど、大人しく受け入れてくれた。

「よかったね、ヴィヴィオ。すっごく可愛いよ」

なのはにそう言われ、ヴィヴィオは小さく頷いた。
もうそろそろいいだろう……。

「だから、なのはさんが戻ってくるまでの間だけ、私たちと遊ぼう？
遊んでいれば、すぐなのはさんが戻ってくるから」

「……ホント？」

ヴィヴィオが、なのはと私を交互に見ながら確認してきた。
それに私となのはは笑顔で頷いて応える。

「うん、ホントだよ。それまで大人しく待っててね、ヴィヴィオ」

「……うん」

なのはの言葉を聞いて、ヴィヴィオがゆっくりとなのはから離れた。
ミッションコンプリートだな。

「よしっ、それじゃ肩車……いってみようか？」

「……うん」

ヴィヴィオの脇下にそっと両手で入れて持ち上げる。
いきなりのごとでヴィヴィオも驚いたようだったが、私の肩に乗せ

クルクル回ってみると、小さく、本当に小さくだが笑い声を上げてくれた。

「ほーら、どうだ、ヴィヴィオ・・・？」

なのはもフォワードの子達も安心したような表情をしているのが分かる。

こんな私でも役に立てて何よりだ。

『ありがとう、ルシル君。でも、すごいね。何か慣れてるみたいだったよ？』

『ん？ ああ、まあな。それにしてもどうするんだ、ヴィヴィオはこのままずっと君が面倒を見るわけにもいかないだろ？』

『うん。それについてはまだ考えてるんだけど・・・』

そのところはなのはに任せるしかないな。

なのはがどういう選択をしても、それを手伝ってあげればいいか。

「失礼しまーすっ」

そんなことを言いながらこの部屋に入ってきたのはシャル。

そのうしろにはフェイトとはやてもいる。

「なんやルシル君、こういうんしたことあるんか？」

「黙秘。それより何かあったのか、はやて？」

はやての質問には黙秘権を発動。

そんな残念そうな顔をして話さないものは話さない。

「・・・まあ、ええか。ここに来た理由は、なのは隊長を迎えにきたんよ。」

これから聖王協会に報告に行くからね。なのは隊長にも一緒に来てもらおうと思って」

「ああ、昨日のことか。それは私も一緒に行くべきなのか？」

私のその言葉で、肩に乗せているヴィヴィオの動きに少し変化があった。

はやてもそれには気づいたようで、首を振ってこう告げた。

「ルシル君には、この子の相手してもらおう思ってるけど、どないや？」

「そうか。なら、なのはが戻ってくるまでヴィヴィオの相手は任せてもらおう」

現状ではなのはに一番懐いている。そして自惚れかもしれないが、私が二番手だと思う。

その二人がいなくなればヴィヴィオはもちろん、フォワードの子達も大変なことになる。

それはさすがにどちらとも可哀想だ。

「えっと、エリオ、キャラ、二人もルシルと一緒にその子の面倒を見てあげてくれるかな？」

「はいっ」

フェイトからのお願いを快諾したエリオとキャロ。正直助かる。

「スバル、ティアナ。悪いけど、ライティングの分のデスクワーク、お願い出来る？」

「あ、はい。お任せください」

「が、がんばりますっ」

今度はなのはからのお願いを承諾したスバルとティアナ。

ティアナは至って普通に返事をしたが、スバルは若干困り顔。すまない、スバル。

「それじゃ、ヴィヴィオ、ちょっとお出かけしてくるから、待ってね」

「・・・うん」

私はしゃがむことで、なのはとヴィヴィオの視線を合わせるようにした。

ヴィヴィオの返事は少し涙声だ。やはりなのはと一時とはいえ別れることが原因だろう。

『ルシル君、それじゃお願いするね』

「『ああ、任せてくれ』さあ、ヴィヴィオ、なのはさんに“いってらっしゃい”だ」

「・・・いってらっしゃい」

「うん、いつてきますー！」

こうしてシャルたちは聖王協会へ、スターズは今日の仕事へと向かった。

私とライトニングはお姫様とウィウィオ、なのはが戻ってくるまでの時間つぶしを始めた。

十 十 十 十 十 十

聖王協会に着くまでの間、私はヘリの中でさっきの光景を思い出す。肩車された子供ウィウィオ、肩車をしているルシル、そばで笑っていたなのは。まるで本当の親子のようだった。それを見たとき、胸が苦しかった。

『ふふ、さっきのルシルたちを見て「親子みたいだったな〜」とか思ってたんでしょ?』

突然のシャルからの念話に驚いたけど、顔に出さないようにして応対した。

『え、あ・・・そ、そんなことないよ? 羨ましいなあ、なんて思ってたないよ?』

『ふふん、羨ましいって思ってたんだ。ていうか別にごまかす必要ないよ、フェイト。』

みんな、フェイトがルシルに抱いてる感情には気づいてるし・・・

そうなんだけど、それでもやっぱり恥ずかしいよ。

『それ以前に、なのはトルシルがくつつくなんてこと自体がおかしな話だし。』

それになのははすでにユーノがいるからね』

シャルに微笑みかけられたのはが首を傾げた。

シャルは「なんでもないよ」って言って、また微笑んでる。

『フェイトとルシルってお似合いだと私は思うよ』

『そ、そうかな？ 本当にそう思う？』

ルシルへの想いはもう十年になる。

そういえば出会い方は、ジュエルシードを巡つての戦いだったな。今思うとめちゃくちゃな出会い方だよ。

『思うよ。でもルシルがその気になるかどうかはすごく難しい話だけどね。』

だけど私が何とかしてあげるから、フェイトはそれまで待ってて』

『え？ う、うん・・・？』

何を待ってればいいのかは、目的地聖王教会に着いたことで聞けなかった。

そのあとはぐらかして教えてくれなかったし・・・。

十 十 十 十 十 十

フェイトは本当に可愛いな。だから応援したくなってくるんだよ

ね。

でも、ルシルがそれを認めてくれるかによっていろいろと変わってくる。

そこをどうにかして私がフォローしてあげないと……。

「うんや」

はやてのうしろについて教会内の廊下を歩いて少し、目的の部屋の前に着いた。

なのはが木製の扉にノックをして、「どうぞ」との返事が返ってきたから、「失礼いたします」と告げて扉を開けて部屋へと入っていく。

「高町なのはは一等空尉であります」

「フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官です」

「シャルロツテ・フライハイトです」

なのはとフェイトは敬礼をして名前と階級を告げた。でも私はもう局員じゃないから、敬礼はしないで名前だけで済ませる。

「いらつしゃい。はじめまして、聖王教会、教会騎士団騎士、カリム・グラシアと申します」

迎えてくれたのは、教会の騎士、カリム・グラシア。

直接の面識は初めてだけど、想像通りの物腰が柔らかそうな女性だ。その彼女に席へと案内されると、すでにクロノが椅子に座って待っていた。

うくん、それにしてもクロノの制服姿ってなんだか新鮮？っていうより違和感が湧いてくる。

「失礼します」

なのはとほぼ同時にそう口にして、椅子へと座る。

「クロノ提督、少しお久しぶりです」

「ああ、フェイト執務官」

それで、フェイトはというと、クロノとそんなやり取りをしてから椅子へと座った。

それにしても硬いな。まあ、こういう状況じゃ仕方ないとは思っけど……。

「ふふ、お二人とも、そう硬くならないで。私たちは個人的にも友人だから。」

いつも通りで平気ですよ」

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで」

「平気や」

三人の言葉で、この場の空気が柔らかくなった。

私としても、今ではさっきのような硬い空気はあまり好きじゃないから助かる。

生前は、そういう空気こそが当り前の生活だったけどむかしね。

「じゃあ、クロノ君、久しぶり」

「お兄ちゃん、元気だった？」

「ってというかクロノ、制服姿が変」

なのはは普通の挨拶だけど、私とフェイトからは口撃が放たれた。フェイトからの一撃が堪えたようで、若干頬を赤らめてる。昔からそういうのには弱いよね、クロノって。

「それは止せつ。お互い、いい年だぞつ。それにシャル、ドサクサに何だそれは？」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ、クロノ」

「反応感謝。それにフェイトの言うとおりじゃない。兄弟関係に年齢は無関係。

クロノだって本当はお兄ちゃんって呼ばれて嬉しいくせに」

さらに追撃。クロノはさらに頬を赤らめた。全員が分かるくらいに、ハッキリとだ。

「っ！ そ、そういうシャルこそ、ルシルに「お姉ちゃん」と呼ばれたらどうするんだ？」

ふくん、そういう切返しをしますか……。

私は軽く想像してみる。クロノの言葉を聞いたなのはたちもおそらく想像したんだと思う。

だって微妙な表情してるし……。そして、結論。

「キシヨい」

「……キシヨい!?!」

「それは酷いな。もう少し言葉を選んだらどうだ?」

盛大なりアキシオンをありがとう、なのは、フェイト、はやて。そしてクロノは黙れ。

だってルシルが私を「お姉ちゃん」呼ばわり?

数年前までは少し期待してたけど、今となっては背筋が凍るよ、本当に。

それに実際の年齢で言えば、私は享年21歳で、ルシルは今なお生きているから……、

もう六千歳以上になる計算だ。それで兄弟関係となったら一種のホラーだよ。

「仕方ないじゃない。咄嗟に浮かんだのがそれだもん」

「でもキシヨいってあんまりだよ?」

「ああもうつ、いいじゃない。それより本題に入ろうよ」

こういうやり取りも楽しいんだけど、六課設立の秘密という興味が勝ってる。

けど私の方向修正で、この場の空気が若干重くなった。内容が内容だから当たり前の話だ。

少しの沈黙のあと、はやてがその沈黙を破った。

「そやね。それじゃ昨日の動きについてのまとめと、改めて機動六課設立の裏表について。

それから、今後の動きの話や」

はやての言葉を合図にしたみたいにカーテンが閉まり、この部屋が
一気に暗くなる。

「六課設立の表向きの理由は、ロストログリア“レリック”の対策と、
独立性の高い少数部隊の実験例」

表向きの理由、ね。

「知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフ
エイトの母親で上官、リンディ・ハラオウンだ」

モニターに映し出されたのは、その三人の顔写真と簡単な情報が載
った画像。

それにしてもリンディさんはほとんど変わってない。衰えても
がないのかも……。

「それに加えて非公式ではあるが、彼の三提督も設立を認め、協力
を約束してくれている」

クロノたちのものから、三提督のものへと変わった。

「「っ！」」

これはビックリだ。まさかそこまでの大物が関わってるなんて。
なのはもフエイトも驚いてる。というか、局員なら驚かないほうが
どうかしてる。

「その理由は、私の能力と関係があります」

能力？ ああ、残念。ルシルがいれば複製できたのに。
私はルシルの複製されたものなら使えるけど、複製することは出来ない。

「私の能力、プロフェーティン・シユリフティン“預言者の著書”。これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことができます」

騎士カリムは、手にしていた手のひらに乗るくらいの紙束を纏めていた紐を解いた。
するとその光を発しながら紙束が、騎士カリムの周りを囲むようにして回り始めた。

「二つの月の魔力が上手く揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しか出来ません」

じゃあ、ルシルが複製しても意味はない。この世界限定なら尚更。
そういう制限のないものはルシルもすでにいくつか持ってるから余計にだ。

それにルシルの固有魔術にもあった気がする。なんだっけ、ガブリエルだったかな？

「預言の中身も古代ベルカ語で、解釈によって意味が変わることがある難解な文書」

騎士カリムの周りを回っている三枚の紙が、私、なのは、フェイトの前に飛んできた。

さらっと目を通してみる。書かれた文書は私の世界で使っていた言語に似て、少し読める。

やっぱりベルカと、故郷レーベンヴェルトは関係があるようだ。

チラツとなのはとフェイトを見てみる。

私と違って、なのはとフェイトはさっぱりなようで首を横に振ってお手上げといった風だ。

「世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば、的中率や実用性は割とよく当たる占い程度。

つまりはあまり便利な能力ではないんですが・・・」

「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。

信用するかどうかは別にして、有識者による予想情報の一つとしてな」

「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。

実質のトップが、この手のレアスキルとかがお嫌いやからな」

レジアス・ゲイズ中将。平和を求める姿勢はいいけど、どっか危なっかしいんだよね。

優秀で地上の正義の守護者、って聞くけど黒い噂も絶えない。

でも地上部隊における下からの信頼が厚い。全く、面倒な人だ。

「そんな騎士カリムの予言能力に、数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている」

クロノが騎士カリムに視線を向け、騎士カリムはそれに応えるようにして、予言を思われる言葉を口にし始めた。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。」

死者たちは踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けとし、数多の海を守る法の船は砕け落ちる」

「それって・・・」

「まさか・・・」

「ロストロギアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と、そして管理局システムの崩壊・・・」

騎士カリムの口にした予言内容とその解釈に、なのはとフェイトが目を見開いた。

私も同じ気持ちだけど、こういうのには慣れている手前、若干驚きが小さい。

「実はこれだけではないんだ。この予言にはまだ続きがある」

地上本部の壊滅に管理システムの崩壊、それに続く出来事なんて予想が出来る。

「そうなのですが、こういうことは初めてなので未だ全てを解釈出来ていません」

「ん？ あの、解読できないというのはどういうことなんでしょうか？

完璧な解釈は出来なくとも、古代ベルカ語を読めるんですよね？」

こうして予言の解釈とかを行うことが出来るのだから、古代だろうと読めないことはないはず。

だから私は疑問を口にしてみた。

すると騎士カリムは少し逡巡したあと、別の紙を自分の目の前に持ってきた。

それが解読できていない予言が書かれたものなんだろう。

「・・・さっきの予言の続きだけが古代ベルカ語ではないんです。使われている言語がバラバラで、使われていた時代もまた統一されていない。

現時点で解読できたのはたったの一行の一部だけなんです」

かなり戸惑っている様子だ。

自分の能力に、今までなかった異常があればそうなってもおかしくない、か。

「現状で解読できている予言はこうです。

“その果てに大罪を標として、遙かに高き破滅の座より”・・・、ここまでです」

今度こそ私は驚愕した。この予言の内容からして“大罪”^{ヘッカートゥム}の目的が分かったからだ。

ヤツらは“絶対殲滅対象”^{アホリュオン}の誰かをこの世界に呼び入れるために、この世界で活動しているんだ。

そうなるとこの世界の結末は唯一つ、純粋な滅びでしかない。

たぶん、それが私とルシルに与えられた本契約の内容。

予言にはまだ続きがあるみたいだし、解読できていない部分に正確なことが書かれている可能性がある。

「残りの部分の解読には、無限書庫司書長のユーノを筆頭とした考古学者も当たっている。

それに確かに気になる内容だが、現時点では全くの不透明なものだ。

だから、現状ではすでに解読を終えている部分にのみ力を注ごうと思ってる。

それを防ぐことが出来れば、解読を終えていない部分も事前に防ぐことになるからな」

クロノの言葉に、なのはとフェイトは強く頷いて応えた。

もちろん私もそれに続いて頷くけど、頭の中はすでに“絶対殲滅対象”^{アボリユオ}のことでいっぱいだ。

「情報源が不確定ということもありますが、管理局崩壊ということ自体が現状ではありえない話ですから・・・」

「そもそも地上本部がテロやクーデターに遭ったとして、それが切欠で本局まで崩壊、ゆうんは考えづらいなあ・・・」

「まあ、本局でも警戒強化はしているんだがな・・・」

一度思考を休めて、はやてたちの言葉に耳を傾ける。確かに言っていることも分かるけど、それを覆すナニかがあるんだろう。

本局を脅かすようなナニかが・・・。

「問題は地上本部なんです」

「ゲイズ中將は予言そのものを信用しておられない。特別な対策は採らないそうだ」

全く、あのヒゲ親父はどうかならないものかな。

いっそのことシルの複製能力とかで黙らせられないかな？

「異なる組織同士が協力し合うのは、難しいことですから・・・」
「協力の申請も、内政干渉や強制介入という言葉に言い換えられれば、即座にいさかいの種になる」

なるほど、掴めてきたよ、機動六課の設立の真相が。
はやてたちはそれをどうにかして防ぎたいんだ。

予言が外れればそれで結構、表向きの理由もあるから問題にはならない。

そして、もし予言が当たっていれば、すぐに自由に動き出せる戦力のある部隊が必要になる。

それが機動六課。これでようやくこの部隊の過剰戦力についても納得できた。

「ただでさえミッド地上本部の武力や発言力の強さは問題視されるしなあ」

「だから表立っての主力投入は出来ない、と」

「すまないな。政治的な話は現場には関係なし、としたいんだが・・・」

それはどこの世界でも、いつの時代でも抱える問題の一つだ。

現場は常にそういった上層部の政治云々で乱される。

少しは現場のことも考えてほしいものだ。

「裏技でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった。

レリック事件だけで事が済めばよし、大きな事態に繋がっていくようなら最前線で事態の推移を見守って・・・」

「地上本部が本腰を入れるか、本局と教会の主力投入まで前線で頑張る、と……」

「それが……六課の意義や」

ようやくはやての口から発せられた機動六課の真実。

なのはとフェイトは頷いて応えた。

私も“大罪”と“絶対殲滅対象”^{アボリュオン}が関わってくる以上は全力でみんなを助ける。

「もちろん、みなさんに任務外でのご迷惑はおかけしません」

「あ、それは大丈夫です」

「部隊員たちへの配慮は、八神二佐から確約を頂いてますし」

「シャル、そしてこの場にはないルシルにも改めてお願いしたい。

どうか、君たち二人の力を僕たちに貸してくれ」

クロノが椅子から立ち上がって私に頭を下げた。

そんなことしないで助けるに決まってるでしょ、バカ。

「私の答えも、ルシルの答えもとつくの昔に決まってる。

大切な友人が困っているのに手を貸さない馬鹿がどこにいる？

だから頭を下げる必要もない。こっちが好きでやるんだから、好きなだけ使ってくれていい。

私たちがみんなから貰った幸福のお返しはまだ出来ていないんだから」

守るための戦い、それは私が望んでいるものだ。

その守るものが友人だというのなら尚更喜ばしいことじゃないの。

「とつとと頭を上げなさい」

クロノに少し怒鳴るように言って頭を上げさせる。

全く、クロノは立場としてそうしたんだらうけど、こういう場合は友人として頼ってほしいものだ。

「それでは、改めて聖王教会騎士団騎士、カリム・グラシアがお願いいたします。

華々しくもなく危険を伴う任務ですが、協力を・・・していただけますか？」

「非才の身ですが、全力にて」

「承ります」

「我が剣こゝろと魂こゝろに誓って」

全力でみんなを守ってみせる。

たとえば何が来ようとも・・・みんなを害するものは全て・・・。

十 十 十 十 十 十 十

「あのなっ！」

教会から隊舎に戻って、はやてちゃんと別れて職員寮に戻ろうとしたとき、はやてちゃんが私たちを呼び止めた。

振り返ってみると、はやてちゃんが私たちのもとまで駆けてきた。

「私にとって三人は、ううん、ルシル君も一緒やから四人は命の恩人で大切な友達やつ。」

六課がどんな展開と結末になるかはまだ分かれへんけど・・・」

「その話なら、出向決めるときにちゃんと聞いたよ」

「私もなのはも、シャルだって、ね？ 納得してここにいるんだよね」

「まあ、私は約束破って管理局を辞めたことで六課に正式には入らなかつたけど・・・。」

でもフェイトの言うとおりだよ。どんなことになっても自分の選択した道だから、大丈夫」

そう、あの日に私たちは決めたんだけ。

シャルちゃんは設立前に辞めちゃったけど、思いはあの頃のままだと思う。

「それに私の教導隊入りとか、フェイトちゃんの試験とか、はやてちゃんや八神家のみんな、すごくフォローしてくれたじゃない」

「だから今度は、はやての夢をフォローをしないとして」

「そういうこと。だから気にしないでよ、はやて」

あの時は本当にいろいろなことが重なった所為で大変だった。

もしはやてちゃんたちのフォローがなかったら、今の私たちはいなかもしれない。

「あかんなあ、それやと恩返しとフォロワーの永久機関や」

私はそれがいいのだと思って笑ってしまふ。

そういう関係が面白くて楽しくて・・・とても大切なことだから。

「友達って、そういうものだと思うよ」

「だからこそ、八神はやては間違っていないと思いますっ」

シャルちゃんがビシッと姿勢を正してそう口にした。

私とフェイトちゃんもそれに倣ってビシッと姿勢を正して、そして敬礼をする。

「右に同じく、八神部隊長は今のところ間違っていないと思うのでありますっ」

「だから大丈夫。いつものように堂々と命令してください。胸をはって、えっへん、と・・・」

「・・・うん！」

十 十 十 十 十 十

はやてと別れて寮にある部屋へと戻ってきた。
シャルともさつき別れたところだ。

「「ただいまー！」」

「おかえりなさい」

エリオとキャラコが小さな声で囁くようにして返事をしてきた。

なのはと顔を見合わせて、そつと部屋の中に入っていくと、ソファの上で気持ちよさそうに眠っているヴィヴィオと、ヴィヴィオに寄りかかっているルシルがいた。

ルシルは小声で「おかえり」と言っ、ゆっくりとヴィヴィオを横にして立ち上がった。

『眠っちゃってるんだね』

『ああ。さっきまでは起きていたんだけどな』

声を出すと起きちゃうかもしれないから、ここからは念話での話しになる。

『ありがとう、ルシル君。エリオとキャラコもありがとう』

『いえ、僕たちはルシルさんのお手伝いをしただけで・・・』

『そんなことはないぞ、エリオ。エリオとキャラコの二人がいてくれて本当に助かった』

『そつか。エリオ、キャラコ、ありがとう』

エリオとキャラコのそつと優しく抱く。
えいつ、ついでに頭も撫でちゃえつ。

『それじゃ、私は戻るよ』

『うん、今日は本当にありがとう。おやすみ、ルシル君』

『お休みなさい、ルシル』

『ああ、お休み、フェイト、なのは。エリオとキャラも明日早いから、そろそろ休むようにな』

『』はいっ』

預言者の著書 〈Prophetin Schriften〉（後書き）

フエイトのヴィヴィオあやしスキルを、ルシルにさせてすみません。ルシルのスキルの多さを何となく出すためにこうなりました。

あとは、ベルカとレーベンヴェルト（ドイツ語で生ある世界）の関係ですが、ベルカの数千年前の世界をレーベンヴェルトとしています。ミッドガルド（後にミッドチルダに）と併せて複合世界ミッドガルドと設定しました。

あまり関係ない話ですね。

そして予言について。

ペッカートウムの目的、シャルシルの本契約？をチラツと登場させました。

後半部分を、他の言語で書かれたために解読できないというのは、ここで書くのもつまらないと思ったためです。

ヴィヴィオとママと……

全てが白に染まる広さも何も分からない空間。

ただその空間にあるのは、淡く碧く輝いている直系5メートル近い光球。

そして、それを囲むようにして存在しているのは11の玉座。

玉座一つ一つで色が違い、背もたれの上にそびえ立っている十字架の形も様々だ。

そしてその玉座に座っている十一の人影も、それぞれ色違いの外套を羽織っていて、玉座や外套と同じ色の仮面をつけている。

ここは“神意の玉座”、また名を“遙かに貴き至高の座”と呼ばれる最高位次元。

あらゆる世界の意思“界律”が交差する、全てが在って、全てを識る究極の根源。

「それで？ アポリュオン 絶対殲滅対象が活発になってきたつつう話だろ？」

その声に出しているのは、第二の力と呼ばれる金色の玉座に腰掛け、肘掛に肘を置いて頬杖をついている男、“死と絶望に微笑む者”の二つ名を持つティネウルヌス。

「ここ最近、一切活動を見せていなかったアレらがよく界律に引かかる」

淡々と話すのは、第一の力と呼ばれる白銀の玉座に腰掛けている者。“心優しき始まりたる者”の二つ名を持つアーク。

仮面をつけているために性別は不明、声からして男であると思われる。

「現状において活動しているのを確認できるのは、

リーベルターテム
No. ？：自由、No. ？：覚醒、No. ？：支配、No. ？：
アエテルニターティス
永遠。そして、番外位であるNo. EX：大罪の六体となつていま
ベッカートゥム
す」

左手を挙げ、報告するように告げたのは第六の力と呼ばれる翡翠の玉座に腰掛ける少女、“舞い散る雪に踊る者”の二つ名を持つ雪姫ゆき。仮面とフードを外しているため、その白い肌、綺麗な黒瞳と黒髪がよく見える。

「十四体、番外位を入れれば十五体中五体が活動中というわけか……
それで現在、その五体には誰が当たっているんですか？」

第九の力と呼ばれる蒼穹の玉座に腰掛けている男、“果て無き幻想を追う者”の二つ名を持つ優斗がそれぞれの“界律の守護神”に問うた。

少ししてから、この六体に対処している“界律の守護神”から声上がる。

「No. ？？？アエテルニターティス永遠は私が担当している」

そう告げるのはIsst・テストメント・アーク。

「はいはいっ！No. ？？：自由リーベルターテムとNo. ？？：支配インペリオルムは僕だよーっ！」

勢いよく玉座の上に立ち上がって大声で告げるのは、第七の力と呼

ばれる真紅の玉座に腰掛けていた少女、“上位なる神の抹殺者”の二つ名を持つルフィスエル。

「NO、？：^{アキト}覚醒は俺だ」

第十の力と呼ばれる銀灰の玉座に腰掛ける男、“欲望のままに詠う者”の二つ名を持つヴエルトヴァリス。退屈しているのか腕を組みながら、コキコキと首を鳴らしている。

「NO、EX：^{ベッカートゥム}大罪は私と……」

「私が担当しているわ」

そう告げた二柱の“^{テストメント}界律の守護神”に視線が集中する。その視線に籠められた意味は“何故？”の一つだけだ。

第四の力と呼ばれる漆黒の玉座に腰掛ける“天秤の狭間で揺れし者”ルシリオと、第三の力と呼ばれる純白の玉座に腰掛ける“剣戟の極致に至りし者”シャルロットは、その視線を軽く受け流して、苦笑を浮かべた。

「はあ！？ 何で番外位如きにお前らが二柱がかりで対処してんだよ？

ありねえだろうが、普通よお」

「うるさいわね、2nd・テストメント・ティネウルヌス。それに番外位だけでは限らないのよ。私の分身体から送られてきた情報によると、まだ出てくるみたいなのよ、別の絶対^{アポリユオン}殲滅対象が」

「そういうことだ。私とシャルロットの召喚された理由が、そこに

あるのはまず間違いないだろう」

シャルロットが、外している仮面をいじりながら静かに告げた。ルシリオンもそれに続いて腕と足を組んだ状態で言葉を紡ぐ。

「二柱がかりの契約、ですか。一体誰でしょうか？」

シャルロットの隣の、第五の力と呼ばれる桃花の玉座に腰掛ける少女、“愚者と賢者は紙一重”の二つ名を持つマリアが、人差し指をあごに当てながら口にした。

「そうですね、ルシリオン君とシャルロット君が召喚されることと大事おおじかもしれないね……」

第八の力と呼ばれる燈黄の玉座に腰掛ける、“高貴なる閃光の者”の二つ名を持つ少年、プリンス・オブ・レディエンスが考えるような仕草で、マリアに応えた。

「確認が取れていない残りの絶対殲滅対象の実力は結構レベルが高いです。」

特にNO、？：宇宙ウーニウエルスム、NO、？：運命フォルトゥーナ、NO、？：天使アンジエラス、NO、
？？：終極テルミナス。

この四体が関係してくると、複数同時召喚される場合もありますし……」

6th・テストメント・雪姫ゆきの言葉に、“界律テスタメントの守護神”全員が沈黙する。

確かにこの四体が相手になると、複数の“界律テスタメントの守護神”が召喚される。

特にNO、？：天使アンジエラス。これの相手のときは間違いなく最低でも五柱

が召喚される。

だが、それでも勝てたことが一度もない。それほどに強力無比の存在だ。

残りの三体もまた、そこまですとはいかずとも強大な力を持っている。

「どちらにしても絶対殲滅対象がまた姿を現しているのは間違いない。
アポリュオン

アレらに如何な目的があろうと滅ぼさなければならぬ。

それが我ら界律テストメントの守護神の存在意義。如何な犠牲を払おうとも確実に滅ぼせ」

今まで沈黙を保っていた第零の力と呼ばれる透明な玉座に腰掛けていた者、“創世より嘆きし者”の二つ名を持つアイオンが、玉座内に響き渡る声で告げた。

「はあああああっ!！」

「げふっ!？」

私の鳩尾に、それは綺麗に入るエリオの“ストライダー”の一撃。障壁も何もないため、ダイレクトに、かつクリティカルなダメージが浸透する。

「% \$?*? . . . orz」

「うわあああっ! ルシルさん!？」

「る、ルシルさんっ!?!」

今は早朝訓練で、ライトニング二人との訓練の真っ最中。そんなときに“神意の玉座”の本体とリンクしていたため、反応が遅れて一撃を受けた。

「だ、大丈夫……、すまなかった、エリオ……」

「そんな、僕のほうこそすいませんっ!」

「ルシルさん、大丈夫ですか!?!」

エリオが謝り、キャラロが急いで駆け寄ってきてくれた。だがエリオ、君が謝るのは間違っている。今のは全体的に私が悪かった。

「いや、エリオは何も悪くない。だから謝るのは私だけだ。キャラロも、ありがとう。大丈夫だよ」

「あ、はい……」

ああいうのは後々に本体から情報が来るため、態々本体とリンクする必要性はほぼ皆無。

しかし、現状を早く知るためにも情報が欲しかった。それにリンク中は、別に意識を全てリンクに割かれることはない。だから訓練中にも問題ないだろう、と思っていたのが間違이었다。

「集合!?!」

なのはから集合がかかる。
時間的に見て、早朝訓練を終えるための集合だろう。

「もうこんな時間か。それじゃ行くこうか、エリオ、キャロ」

「はいっ！」

エリオとキャロの肩の手を置いて歩き出す。

そして、なのはとスターズと合流、そして解散した。

十 十 十 十 十 十 十

「お疲れ様、ルシル君」

「ああ、お疲れ様、なのは」

フォワード陣の早朝訓練を終えて、ルシル君と一緒に隊舎へと向かう。

そんなとき私の耳に、何か歌のようなものが聞こえた。
ルシル君も聞こえているようで、周辺を見渡している。

「ラーララ〜ラーララ〜ラーララ〜ラーララ〜」

これって、まさか……暴れん 将軍のテーマ？ 少し音程がズレてるけど……。

次に聞こえてきたのは、“パカラパカラ”という、まるで馬の走る音。

そして私とルシル君は見た。黄金の鬣をした白馬。それに跨るシャルちゃんとヴィヴィオ。

その後ろからフェイトちゃんがオロオロしながら白馬を追っていた。

「ええええええっ!?!」

ほんの一瞬だけ思考が止まっちゃった。

再起動した私はあまりの光景に大声を上げてしまった。

「おまえは……アホかああああっ!?!?!」

ルシル君がそう叫びながら、シャルちゃんとヴィヴィオが跨っている白馬へと全力疾走。

その手に持っているのはピコピコハンマー、しかも大きい。

ルシル君は跳躍、そしてシャルちゃんの頭上へ一直線に落ちていく。

「あんまー！ー！っ!?!」

上から降ってきたルシル君のピコハンを、シャルちゃんはこれもまた大きいハリセンで捌いた。

もうわけが分からないよ、二人とも……。

そんなことを思いながら、私もみんなのもとへと走る。

「えっと……シャルちゃん……これは?」

シャルちゃんは白馬から降りて、ルシル君のピコハンをハリセンで捌き続けながら応えた。

「まずはおはよう、なのは。さっきの質問の答えは“馬”だよ」

そんなの見れば分かる。どこからどう見ても馬、それは分かってるんだってば。

私が聞きたいのは、どうしてこんなことになっているのかだよ？

「シャル、なのははそういうことを聞きたいんじゃないと思うんだけど……」

そっだよ、フェイトちゃん。

私の言いたいことをちゃんと分かってくれてありがとうだよ。

「えいつ」

“スパーン”といい音をしながら、ルシル君の顔面にハリセンがヒツト。

よろめきながら後ろに退く鼻を押さえたルシル君。今は痛そうだ。

「分かってるって、なのはが言いたいことくらい。見ての通り散歩だよ、なのは。」

フェイトとヴィヴィオが散歩していたのを見て、私も一緒にしたいな〜って思ってた」

「だ、だからって……何故に天馭閃馬スキンプラクシを呼び出すかな、君は？」

ルシル君が、馬の名前？と思う言葉を口にしながら、未だに馬に跨っているヴィヴィオに近づいていった。

ヴィヴィオのほうは、さっきまでのやり取りに少し怯えているようだったけど、ルシル君が頭を撫でると気持ちよさそうな表情を浮かべた。

「まあまあ、そんなことはいいじゃない。神馬スレイブニルより遙かにマシだし

よ？

それにー、楽しかったよね、ヴィヴィオ？」

「うん」

ヴィヴィオもすっかりシャルちゃんに慣れたようだ。

ヴィヴィオが六課に来て数日が経っている。

人見知りが激しいヴィヴィオだけど、私やフェイトちゃん、ルシル君にはすぐに慣れてくれた。

だけどシャルちゃんは、理由は分からないんだけどヴィヴィオに怖がられていた。

でも懸命な私たちのフォローのおかげで、ヴィヴィオはシャルちゃんにも懐くようになった。

「それじゃ、ヴィヴィオ。なのはさんとルシルさんにおはよう、って」

「おはよー」

ルシル君に馬から降ろされたヴィヴィオが「おはよー」って挨拶してくれた。

「「おはよう」」

私とルシル君も「おはよう」って返す。

「なのはとルシルも朝ごはん、一緒に出来るよね？」

「うん」

「あ、すまない。私は馬鹿と少し話があるから、今日は一緒できない」

たぶん馬鹿というのはシャルちゃんのことだろう。

シャルちゃんもそれが分かっているのか「失礼なっ」って言って、未だに手に持っているハリセンで、ルシル君の頭を何度も叩いている。

「そっか。それじゃ、仕方ないよね」

「ルシルさん・・・来ないの？」

「ごめんな、ヴィヴィオ。その代わりお昼は一緒に食べよう」

そう言って、ルシル君は白馬を消して、シャルちゃんと自分たちの部屋に戻っていった。

そして最後にシャルちゃんの頭をさっきのピコピコハンマーで思いっきり殴打した。

十 十 十 十 十 十 十

「全く、君に低ランク限定とはいえ異界英雄エインヘリヤル召喚権限を与えたのは間違いだったよ」

ルシルの部屋で、ルシルが椅子に座りながらため息を吐いた。

「だって面白かったんだもん。それにヴィヴィオも楽しそうにして

たしね」

私がこんなに子供好きだったなんて自分自身で驚きだったりする。でも小さい頃から結構憧れだったりしてたんだよね、子育てとかそういうのが。

もしこれを聞いた同僚や部下たちはどういう反応するだろうな？きつと、信じられないって言って笑うかもしれない。

「はあ、次からは気をつけてくれ。今回はあまりに急だったから驚いたぞ、本当に」

「は〜い。ごめんなさ〜い」

次からはちゃんと許可を取ってから召喚しようつと。

「それで？ 私に何か話があるみたいだけど・・・」

気持ちを切り替えて、ルシルが言っていた“話”とやらを聞いてみる。

ルシルから椅子に座るように勧められたけど、私は一番近かったベツドに座る。

別に汚れていないから、そんな「え〜、そこに〜？」みたいな顔しないで。

「・・・。まあいいか。話というのは絶対殲滅対象アポリユオンについてだ。つい先程、本体とリンクして情報を得てきた」

「はあ？ 態々そんなことしたの？ そういう情報って必要とされるときに必要なものだけ送られてくるじゃない」

現状で必要な情報だけが随時送られてくる。
だから本体とリンクする必要なんてない。

「それはそうだが、早めに絶対殲滅対象アボリユオンの動向が知りたかったんだ。それで分かったんだが、絶対殲滅対象アボリユオンの動きが活発になってきた、ということだ」

「活発？ 他のところにも出現してるってこと？」

「ああ。現在確認が取れているのが、N O、？、N O、？、N O、？、N O、？、N O、？、？、N O、？、？。」

そして、私たちが担当しているN O、E Xの五体だ」

五体が同時活動中？ 確かに気になる情報だとは思っ。

だけど挙げられた連中はさほど強いわけでもない。

まあ、斃しきれていないからこそ生き残っているわけだけ。

「そいつらに対処してるのはどの守護神なわけ？」

「アークがN O、？、？、ルフィスエルがN O、？とN O、？、フヴ
エルトヴァリスがN O、？、？だ」

「N O、？とN O、？の二体の消滅は確定ね。ルフィスエル相手に勝てるわけがない。

それにアークが当たっているN O、？、？も、おそらく消滅するはず。それとN O、？って確か覚醒アキトだったっけ？ あいつって結構強いけど・・・」

以前、私も覚醒アキトと戦ったことがある。

そのときは逃げられてしまったことで決着しなかったけど、戦い続

ければどうなっていたか……。だから私より弱いフヴェルトヴァリスに、覚醒は少し荷が重いかもしれない。

「大丈夫じゃないか？」

軽く言うけど、みんながルシルみたいな反則なわけじゃないんだから。

「問題は姿を見せていない他の絶対殲滅対象だ。」

ペッカートウムがどのナンバーをこの次元世界に呼び出すかは分からないが、私が召喚されたことを考えると、N O、？：宇宙、N O、？：運命の可能性が高い」

ルシルは、紅茶のカップを私に渡しながらそう口にした。

私はそつとカップに口をつけて、紅茶をいただく。

確かにルシルの言うとおりかもしれない。

あの二体とルシルの因縁がもうどれくらいになるかも分からない。

「なるほどね。一度も決着していないN O、？、そして勝てたことのないN O、？。」

私も一緒に召喚されたということは、後者の方が高いと思うよ、ルシル」

N O、？：宇宙とは引き分けが続いているけど、絶対に勝てないわけじゃない。
ウーニウエルスム
フオルトゥーナ

そしてN O、？：運命はルシルを一度斃したことがある。けど、それはルシルにとっての弱点を突いたからこそ勝てたものだ。だから私がルシルの弱点をフォローすれば勝てると思ってる。

「そうか。一応相手が運命フォルトウーナかもしれないということは考えておこう」
「了解」

それから対運命戦フォルトウーナのイメージを、なのはから昼食の誘いが来るまで続けた。

それにしてもやっぱり強いわ、運命フォルトウーナ(泣)

十 十 十 十 十 十 十

「なのはがヴィヴィオの保護責任者？ 私は良いと思うよ。ね、ルシル？」

ヴィヴィオの待つ私とフェイトちゃんの部屋に行く前に、シャルちゃんとルシル君の部屋に寄った。

二人と合流して、私とフェイトちゃんの部屋に向かう途中に、さつきスバルに話した

ヴィヴィオの引き取り手が見つかるまでの間、私が面倒を見るって話をした。

「ヴィヴィオが一番懐いているのは現状じゃなのはだしな。悪くない話だと思っぞ」

シャルちゃんもルシル君も賛成してくれてる。

「そうですよね！

ルシルさんとシャルさんも、これを聞いたヴィヴィオが喜ぶと思

ますよね!?

さっきなのはさんにそう言ったら、「うん、喜ぶかな?」って
言ったんですよ?」

スバルがさっき話してた同じことをシャルちゃんたちにも聞いてる
けど、二人の表情からして私と同じことを思ってるみたい。

「保護責任者、なんて言っただけに解れというのはちょっと難しい
んじゃない?」

「もっと砕けた言い方のほうがいいんじゃないか?」

「そ、そうなんですか? でも砕けた言い方なんてありますか?」

「「「うん……」」」

私の後ろで真剣に悩んでる三人。

そうこうしてるうちに部屋の前に着いて、扉が開く。

「……あ」

「ヴィヴィオ、いい子にしてた?」

扉が開いて、私たちに気づいたヴィヴィオが真っ直ぐに私のところ
まで走ってきて、勢いよく抱きついてきた。

「うん」

「アイナさん、ザフィーラもありがとうございます」

「いえいえ」

この寮を管理してくださっている寮母のアイナさんと、ザフィーラに感謝する。

アイナさんはヴィヴィオの世話を志願してくださった優しい女性^{じょせい}だ。

「ヴィヴィオ、今日はね、大事なお話があるんだ。

ちょっと難しいかもしれないけど、しばらくの間は私がヴィヴィオの面倒を見る保護責任者、っていうのになっただよ」

「??？」

やっぱり難しい話だったみたいで、分かっているみたい。

「ほら、やっぱりよく分からない」

後ろで控えてたスバルに振り向く。シャルちゃんとルシル君は苦笑。スバルは何か上手な説明をするためか唸ってる。

「え〜と、なんて言えば解るのかなあ。

う〜ん・・・、つまりしばらくはなのはさんがヴィヴィオのママだよ、ってこと」

スバルが散々悩んで口にしたのが、私がママになるということ。でもママっていうのも悪くないかもしれない。

「・・・ママ?」

「え、あ、え〜と・・・いや、その・・・」

ヴィヴィオが私を見上げて「ママ？」と呼んできた。
そしてママという案を出したスバルは、“しまった”みたいな顔を
してる。

「いいよ、ママでも。ヴィヴィオのホントのママが見つかるまで、
なのはさんがママの代わり。ヴィヴィオはそれでもいい？」

ヴィヴィオの瞳をしつかり見るために屈む。
頑張って理解しようとしてるのが、ヴィヴィオの表情からはちよっ
と分からない。

「どうかな？」

「・・・ママ？」

「はい、ヴィヴィオ」

そう応えると、ヴィヴィオは泣き出して抱きついてきた。
それから少しの間泣き続けたヴィヴィオは宿めて、みんなで昼食を
食べた。

十
十
十
十
十
十
十

「おはよう、はやて。同じ時間帯の朝食は久しぶりだな」

「はやて、おはよう」

シャルと一緒に朝食を取るために食堂に来ると、はやてがすでに朝

食を始めていた。

「おはよう、ルシル君、シャルちゃん。そやねー。なんや久しぶりやね」

「ヴィータたちはもう終えたのか？」

「うん。あの子らも忙しいしなあ。ゆっくりと一緒にご飯食べたいもんやね」

はやてのいるテーブルは、絶賛空席叩き売りともいえる空き具合。シャルと一緒に空いている席に座って、はやてと一緒に朝食を取り始める。

そこにフェイトとなのは、それにヴィヴィオの三人が来た。

「なのは、フェイト、ヴィヴィオ、こっちこっち」

シャルが手を挙げながら三人を呼んだ。

三人が気づいて、このテーブルへと真っ直ぐに向かってくる。フェイトたちも椅子に座りそれぞれに挨拶を交わす。だが、最後の一人の挨拶には一同が驚愕した。

「おはよー、ルシルパパ」

「っっ！ ヴ、ヴィヴィオ!?!」

「ぶうーううっ!!」

「な、なんやてー!?!?」

ヴィヴィオからこのテーブルに核弾頭が落とされた。

実質的な被害者は私とシャルの二人。

シャルは人が少ないとはいえ人の目のある食堂で、盛大にお茶を噴いた。

私はシャルと向かい合うように座っていたために、シャルが噴いたお茶を顔面に受けた。

私はティーカップに口をつけたままの状態ですべて完全にフリーズ。

シャルの噴いたお茶が雫となってテーブルに滴り落ちていく。はあ、何だこれ？

それにしても我ながらよくコーヒーを吹かなかったと思う。褒めてやりたいよ、本当に。

核弾頭を落とした張本人であるヴィヴィオは不思議そうな顔をしているな。

はやては立ち上がって力いっぱい叫んだし、フェイトとなのはは未だにオロオロしている。

「……なあ、フェイト、なのは」

「は、はいっ」

ハンカチで顔のお茶を拭いて、ヴィヴィオに何かを吹き込んだであろう二人の聴取を開始する。

シャルは咽ながら朝食を再開。私の顔面にお茶を噴出した謝罪は無しか……。

はやてもチラチラと視線を私たちに向けながら、ご飯を口に運んでいる。傍観に徹する、か。

ヴィヴィオはピラフを美味しそうに頬張っている。ハハ、頬にご飯粒が付いているぞ。

「さて、何故ヴィヴィオが私を、パパ、と呼んだかを教えてほしいな」

ヴィヴィオの頬に付いたご飯粒を取りながら、二人に聞く。

「え、え〜と・・・それには事情がありまして・・・」

「う、うん。昨日の夜のことなんだけど・・・」

二人から語られたのは昨夜の自室でのことだった。

保護責任者のことでフェイトが、「フェイトさんもちよつとだけヴィヴィオのママになったんだよ」と言うセリフが事の発端の始まりなのはとヴィヴィオの後見人がフェイトになったという話だ。

それで二人がヴィヴィオのママになったんだよ、とここまでは本当によかった。

だが、ヴィヴィオが「パパは？」と聞いたらしい。

もちろん二人が答えられるわけではない。

返答に窮した二人が口にしたのは「ルシルさんがパパ、はどうかな？」と「ルシルさんがパパだったら嬉しい？」の二つ。

ヴィヴィオはそれを聞いて「うれしい」と答えたそうだが・・・。

「おーい。君たちはもう少し考えろー」

「ごめんなさい」

フェイトとなのはがすまなさそうに頭を下げるが、もう少し考えてほしいものだ。

確かに現状でヴィヴィオに懐かれている男陣は私とエリオ（父といふよりは兄）、そしてザフィーラ（論外）の三人？くらいだ。

ここにユーノがいてくれればまた変わっていたかもしれないが・・・

。

「あの・・・それじゃあ、ダメ、ってことかな？」

「急にごめんね、ルシル。気を悪くしないでもらえると」

「いいよ。ヴィヴィオが引き取られるまでの間の父親役、私が引き受けよう」

正直フェイトとなのはの二人の母親がいればよさそうだが、まあ仕方ない。

「いいの？ 本当にいいの？」

「今更それはないだろ、なのは。ヴィヴィオが私を一度でも父親として見た時点で私に断るという選択肢がなくなった。なら最後まで付き合おうじゃないか」

「ありがとう、ルシル！ ヴィヴィオ、ほら、ルシルパパだよ」

「うん。ルシルパパ」

ものすごい可愛いらしい笑顔なヴィヴィオ。

まあ、悪くはないかもしれぬ。

「ほあ、ルシル君がパパかあ。それでなのはちゃんとフェイトちゃんママって、なんやすごい家族構成やね」

はやてがようやく参加してきた。

だがそれを言ったら、もっとすごいことになるぞ。

「あはは、なら私の義姉であるシャルは、おば」

そこから昼過ぎまでの記憶がどこにもありません。何故ですか、シャル先生……？

「それはセイントテスト君が悪いわねえ」

だそうだ。

ヴィヴィオとママと……（後書き）

やっぱり成人男性キャラがSTRIKERSに登場すると、ヴィヴィオの父親になると

というのが王道のような気がしてます。

ルシルもそんな一人だったりしますし……。

アボリユオン
絶対殲滅対象の名称を登場させました。

ANSURについて、に一応載せておきます。

名称は全てラテン語となっています。

異界英雄

スキンフアクシ
天駆閃馬：ANSUR

黄金の鬘を持つ白馬。光の鬘、輝く鬘という意味を持つ。空を駆けることの出来る馬の一種でもある。

北欧神話においては、昼の神ダグの乗る馬車を牽いた馬。天を駆け、その鬘で空と地上を照らしたといわれる。

それぞれの思惑

「さて、今日の朝練の前にひとつ連絡事項です。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が、今日からしばらく六課に出向となります」

整列するフォワードの子達に、なのはの口からギンガの紹介がされた。

対するフォワードの子達、特にスバルが目を点にして驚いている。聞かされていなかったこともあつて当然か。

「はい。108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしく願います！」

「「「「よろしく願います！」」」」

ギンガの挨拶に四人は元気に応えた。続いてフェイトからもう一人の紹介が始まる。

「それからもう一人。十年前から六課むくの隊長陣のデバイスを見てきて下さっている本局技術部の精密技術官」

「どうもー、マリエル・アテンザです」

それから簡単な挨拶や説明も終わり、今日の午前の訓練へと入っていく。

フェイトと私でライトイング、とはいつでもフェイトがいるときは

あまり手を出さない。
ヴィータはティアナと突撃型の捌き方を。

「ギンガ、ちょっとスバルの出来を見てもらっていいかな？」

「あ……はい」

「一対一で軽く模擬戦。スバルの成長、確かめてみて」

どうやらあつちはスバルとギンガの模擬戦から入るようだ。

なのはに応えたギンガと、やる気満々な表情を浮かべるスバル。

「ククッ」

「？　どうかしたんですか、ルシルさん？」

キャラが私を見上げて不思議そうな顔をしている。

「ん？　いや、ギンガが今のスバルの力量を見てどう反応するか楽しみだね」

今のスバルは、なのはとヴィータに鍛えられてなかなかのものだ。
しかしまだギンガには追いついてはいないかもしれない。

だがギンガ、それでもスバルを甘く見ていると負けるかもしれないぞ？

十
十
十
十
十
十
十

「はああああっ！」

なのはさんから、ギン姉と模擬戦するように言われて始めたんだけど、やっぱりギン姉は強い。

ギン姉の攻撃をなんとかギリギリで避けるので精一杯で、反撃の糸口を全然つかめない。

「っ!?!」

Storm Tooth

Protection

ギン姉のリボルバーナックルが唸りをあげながら、腰の入った強力な一撃があたしに打たれた。

あたしはそのあまりの勢いに回避じゃなくて防御を選択する。ううん、するしかなかった。

けどそれもほんの一瞬だけの拮抗で、すぐに破壊、再度ギン姉の一撃が来た。

あたしにその一撃は入る直前、ギン姉は“決まった”みたいな表情を浮かべた。

確かに以前までのあたしだったらこれで終わってたかもしれないけど、今は違う。

咄嗟に構えた左の手のひらにプロテクションを一点集中、ギン姉の一撃を防ぐことに成功。

ギン姉も防がれたことに気づいて驚いた表情を浮かべた。あ、なんかちょっと嬉しい。

そして今がチャンスだと思い、反撃に移る。

「リボルバー」

Defenser

「キャノン!!」

あたしの一撃をバリアで防ぐギン姉だけど、さっきのあたしと同じように簡単に破壊された。

あたしは攻撃の手を緩めないように間髪いれずにもう一度叩き込む。

「つく」

うしろに大きく弾かれたギン姉に反撃へ移る機会を与える前に追撃。

「相棒っ!!」

Gear Second

“マツハキャリバー”がモード2へと移る。出力が上がることで、さらにスピードが上昇する。

あたしはその加速とスピードを利用した飛び蹴りを放つ。

Wing Road

けどあたしの蹴りは簡単に避けられて、ギン姉はウイングロードで空に上がった。

あたしもそれに続いてウイングロードで空に上がる。

そこから何度も攻防を繰り返すけど、やっぱりギン姉は強かった。

「うあ・・・」

ギン姉の“リボルバーナックル”が、あたしの目前で止まった。

「はい、そこまでー!!」

なのはさんから、模擬戦終了が告げられた。

「いいね。いろいろ上手くなった」

「あー、まだまだ全然・・・」

負けちゃったけど、ギン姉との模擬戦は楽しかった。

それに少しは成長できてることが自分でも分かったのがちょっぴり嬉しい。

そしてみんなのところに戻ると、ヴィータ副隊長直々のお言葉が待っていた。

「反応は悪くなかったぞ。スピードがおっつかなかったか？」

「あ・・・ありがとうございますっ」

ダメなところとかいろいろ言われると思ったら、まさかの褒め言葉？だった。

さっき感じた嬉しさがさらに倍増。

このあと隊長たちと、私たちフォワードとギン姉を合わせたチーム戦を行った。

十 十 十 十 十 十 十

「はい、じゃあ今日はここまで」

「全員、防護服解除っ」

降下してきたなのはヴィータが地面に座り込んでるフォワード陣に告げた。

フォワードの子達もなかなかいい線いっていたけど、やっぱりまだ隊長陣には及ばない。

「ふむ。惜しいところまではいったな」

「あともうちよつとだった」

確かにいいところまではいったが、それでもまだ隊長陣のほうが一枚も二枚も上手だ。

しかしそれもこのまま鍛え上げて半年もすれば覆りそうだ。

まあ今とは違って、リミッターを解除した隊長陣に勝てるかどうかは不明だが。

「あー、最後のシフトが上手くいってれば逆転できたのに」

「くやしー」

「フォロー足りなかったねー、ごめんね」

「あ、いえ」

「ギンガさんは全然・・・」

その悔しい思いが成長を促す。
だからその気持ちは忘れないでほしいな。

「悔しい気持ちのまま、反省レポートをまとめとけよ」

「「「「はい！」「」「」」

「ちょっと休んだら、クールダウンしてあがろう。お疲れさま」

「「「「「ありがとうございます！」「」「」」

フォワードの子達が少しの休憩を挟みストレッチをしているなか、
隊長陣のもとへと向かう。

隊長陣と「おつかれ」と挨拶を交わし、そこからフォワード陣の出来だとかを話す。

「おーい！」

遠くからシャルの声が聞こえた。

まったく、今日は何をしていたのか問い詰める必要が・・・今日
日はソレかあ。

「ママー！ パパー！」

ヴィヴィオが大きく手を振りながら徐々に近づいてくる。

そして同時に、ヴィヴィオが乗っている生き物も近づいてくる。

その後ろにはシャルとシャーリー、ザフィーラ、マリエルの四人も
いる。

「今日はうさぎ？かあ」

「わあ、かわいいー！」

ヴィータがチラチラとヴィヴィオの乗る生き物を見る。

「かわいい」と声をあげるのはキャロ。

スバルやティアナ、ギンガも口には出さないが顔に出ている。

それにしてもヴィヴィオと“エインヘリヤル異界英雄”の組み合わせは結構六課では有名になってきた気がする。

ヴィヴィオが訓練場へ来る際、そこにシャルが居合わせると“エインヘリヤル異界英雄”登場というパターン化。

最初の頃はちゃんとどれを召喚するか許可を取りに来たが、この頃は一切なし。

問題を起こさなかったこともあってそれでよし、とした。

一度だけ“侯爵級ドラゴンのクロセル”を召喚しようとしたこともあり、そのときは全力で食い止めた。

あんなものが現れたらどうなるか少し考えれば分かるだろうに……。

「ルシル君の使い魔って、ホントにいろいろな子がいるよね」

「なあ、セインテスト。あのうさぎっぱいのなんて言うんだ？」

「ん？ あれはバーニイ。人懐っこいから害はない」

ヴィータにそう答える。

「ママー！ パパー！」

「ヴィヴィオー！」

ヴィヴィオがバーニイから降りて駆け寄ってくる。
するとバーニイは光となって消えていく。シャルが召喚を解いたら
しい。

「危ないよー、転ばないでねっ」

「うん！」

駆けってくるヴィヴィオを待っていると、フェイトの注意もむなしく、
ヴィヴィオが転んだ。

「あ！ 大変！」

「待った、フェイト。大丈夫だ」

「うん。地面柔らかいし、綺麗に転んだ。ケガはしてないよ」

「それはそうだけど・・・」

転んだヴィヴィオのもとに駆け寄ろうとしたフェイトを、私となのは
で止める。

私もフェイトのようにすぐに駆け寄りたい気持ちが生まれたが・・・
。だがそれを抑え、ヴィヴィオが立ち上がるのを待つ。

「ヴィヴィオ、大丈夫？ ケガ、してないよね。自分で立ってみよ
うか」

「ママ・・・パパ・・・」

涙を浮かべるヴィヴィオを見て、さらに駆け寄りたい気持ちが・・・！

う、まずい。ここまでヴィヴィオに執着すると後々厄介なことになりそうだ。

どちらにしても、あとのことはフェイトたちに任せるしかないか。

「ママたちとパパはここにいるぞ。さあ、おいでヴィヴィオ」

そんなことを考えながらしゃがみ込み、両手を広げてヴィヴィオを待つ。

しかし結局ヴィヴィオは、後ろから来たシャルと我慢できなかった。フェイトによって抱き起こされた。

「もう、二人とも少し厳しいんじゃない？　ねえ、フェイト」

「うん。ヴィヴィオはまだ小さいんだから」

「ええ？　それはちょっと甘いと思うよ。ね、ルシル君」

「あゝ、まあ・・・なんだ。ヴィヴィオ、今度は頑張ってみようかな？」

誰だ、今「逃げた」って言ったのは？

十
十
十
十
十
十
十
十

午前の訓練も終わって、みんなで食堂へと来た。

食堂で昼食をとりながら、みんながそれぞれ雑談を始めている。そんななか、隣のヴィヴィオがピーマンだけを残しているのに気づいた。

「ヴィヴィオ、ダメだよ、ピーマン残しちゃ」

「うう、にがいのきらい」

ヴィヴィオがそう言うけど、お残しなのはママが許しません。

「そんなことないよ、美味しいよ？」

「ヴィヴィオ、好き嫌いなくしっかり食べないと大きくなれないぞ？」

「……」

同じテーブルについているフェイトちゃん、ルシル君もそう言うてる。

でもシャルちゃんだけは無言。

「あー、そやなー。好き嫌い多いとママたちみたいに美人になれへんよ？」

「うう……あ」

はやてちゃんからもフォローが入って、ヴィヴィオがピーマンを食べるかなと思ったら、ヴィヴィオが真ん前に座っているシャルちゃ

んのお皿を見る。
私たちもシャルちゃんのお皿を、正確にはお皿の上のある食べ物を見る。

「シャルちゃん・・・まだダメだったのトマト？」

お皿の端っこに寄せられているのはミニトマト。

昔からトマトが嫌いだったけど、今でもそうだななんて思いもしなかった。

そして無言だった理由も分かった。そうだね、自分を棚に上げて偉そうなこと言えないよね。

「シャルさん、のこしてるのに美人だよ？」

「わあ、ありがとう、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオに「美人」って言われて嬉しそうにシャルちゃんだけ、そこは違っでしょ。

「そうじゃないだろ、シャル。君が手本として嫌いなトマトを食べなさい」

「いや、ほら・・・」

ルシル君にそう言われたシャルちゃんはヴィヴィオを見て、

「「ねえ」

二人一緒に首をかしげながら微笑んだ。

「ねえ、シャル。なんでトマトがダメなの？　すごく美味しいのに・・・」

「うん。だってよくたどえ話とかであるでしょ？　潰れたトマトむぐつ!？」

「言わせるかつ!」

シャルちゃんの言葉の続きを防ぐようにして、ルシル君がシャルちゃんの口を塞ぐ。

「ヴィヴィオは続きが気になるのか「なにになに?」って言っている。潰れたトマト・・・?　ルシル君の様子からしてあまりよくない話題・・・かな?」

少し考えて頭に浮かんだのは、人が転落した結果が云々っていうたどえ話・・・。

「うわっ、想像するんじゃないよ。」

「時と場所と、言う相手を少しは考えようなー、シャル?」

ルシル君の怖い微笑みを見て、シャルちゃんが何度も頷く。

「ようやくルシル君の手から解放されたシャルちゃんは一息。」

「まあ理由は兎も角として、トマトって昔からダメなんだよー。こればかりはどうあっても好きになりそうに　あがつ!？」

シャルちゃんが奇声を発する。

原因はルシル君。ルシル君の右手がシャルちゃんの口を開けたまま固定して、左手で手にしたミニトマトを無理矢理口の中に突っ込んだ。

フォワード陣のテーブルから「おお」って聞こえてきた。
はやてちゃんたち八神家もフォワード陣同様、そんな感じだ。

「ほら、ヴィヴィオ。シャルさんも嫌いなトマトを美味しそうに食べてるぞ」

そう言うけど、さっきからシャルちゃんの顔にモザイクがかかって分からないんですけど。

たぶんこのモザイクはルシル君の魔術かなんかだと思う。
ホントにいろいろいるなことが出来る。

「美味しいだろ、シャル？」

「トマト、トテモオイシイデス」

うわっ、シャルちゃんどうなってるの？

明らかにカタコトの棒読みで怖いんだけど……。

でもモザイクがシャルちゃんの顔を隠して確かめられない。

最終的にヴィヴィオは、ルシル君に遊んでもらえると聞いてピーマンを食べた。

そしてシャルちゃんはしばらく気を失ってました。そこまで嫌いになるって、何か他に理由でもあるのかな？

ミッドチルダ、スカリエッツティラボ

黄色い灯りに染まる通路にジェル・スカリエッティが歩を進めていた。
後ろについて歩いているのは許されざる色欲と許されざる憤怒の二体。

「スカリエッティ。地上本部とやらの襲撃の準備は出来てんのか？」

「ああ、もちろん、と言いたいところだがまだだね。」

私の作品が全て完成したと言いつつあることには違いない」

許されざる憤怒の問いに、スカリエッティはそう答え笑みを浮かべる。

許されざる憤怒は「そうかい」と返して黙り込んだ。

「15年前、君たちは私の夢に賛同してくれた。我々のためだけの世界の創造。」

まあ、あまりにいきなりな出会いと話の内容だったために少しばかり驚いたがね」

「確かに。今思えばよく信じられたわね、スカリエッティ。」

私たちの正体に関しても世界の在り方に関しても……」

「君たちの記録とやらを脳に直接流し込まれば信じるしかないだろう？」

あれを見なければ私は今でも信じられなかったはずだよ」

笑い声を上げながらスカリエッティは通路を進む。

「ああそうそう。3rd君と4th君のどちらかでもいいから生け捕りに出来ないかい？」

「生け捕り？ 随分と面白いことを考えるな、スカリエッティ」

「やはり研究者としては無視できないのだよ、許されざる憤怒^{サタン}。世界の意思を代行する界律の守護神とはあれから一度も話をしていない。

私は知りたい。神と呼ばれる地位にまでいる彼らが何を思い、何を望み、何を得たいがために存在するのかを」

スカリエッティの言葉を聞いた許されざる色欲と許されざる憤怒^{サタン}は失笑。

二体の思ふことは唯一つ。“この男は何が起ころうとも折れない”。

「それは今の人間としての奴らか、それとも守護神となっている奴らか？」

「私は彼らの話が聞けるならそれでかまわないよ」

「だったら全て事が終わったあとでもいいでしょ。

計画途中で下手な爆弾を抱え込むと全てが水泡に帰すことになる」

「ああ。ゆっくりと話が出来る環境を整える必要もあるしね」

三人の会話はそこで一旦終わり、沈黙を保ったまま通路を進む。

しばらく歩き行き着いたのは、ガジェット二型が数十機と並ぶ一室。^{アスモテウス}許されざる色欲と許されざる憤怒^{サタン}の二体は入らず、入り口付近で立ち止まる。

そしてそこにはすでに先客が二名。
それを見たスカリエッツィは口を開く。

「祭りの日は近い。君たちも楽しみだろっ？」

「あー、武装も完成したしドカンと一発暴れてみたいっスねー」

洋紅色の髪を後ろで纏めた少女。首元にある装甲に??とある。
その少女、ウエンディの言葉にスカリエッツィは答える。

「君たちは最前衛用の能力だ。存分に暴れられるとも」

「だって。楽しみだねー、ノーヴェ」

「別に。あたしは確かめたいことがあるだけだし。
あたしたちの王様がどんな奴か、そいつは本当にあたしたちの上に
立つのに相応しい奴なのかどうか・・・」

ウエンディに話を振られたノーヴェは素っ気無く返す。
スカリエッツィは、ノーヴェの言葉に小さく苦笑し、止めていた歩
みを進める。

「まあ、よく解んないけど、それすぐ解るんスよね？」

「そうとも。準備は整いつつある」

ウエンディにそう答え、スカリエッツィはレリックが収められたボ
ックスに手をかざす。

するとレリックは、まるで目覚めたかのように光を放ち周囲を照ら

し出す。

話の途中でこの部屋に集まったスカリエッツィの作品、ナンバーズにも聞かせるように謳いだす。

「ひとつ大きな花火を打ち上げようじゃないか！
間違いない素晴らしく楽しいひと時になる！」

スカリエッツィは両腕を大きく広げ笑い声を上げる。
これから自分たちがなす、祭りとやらに酔いしれるかのように。

「ふふ、今のうちに存分に楽しんでおけばいいわ。ジェイル・スカリエッツィ」

「生まれ方はどうあれ、やっぱり人間はどいつもこいつも同じってわけか」

部屋の外からスカリエッツィとナンバーズを見つめる二体の“大罪”ペッカートゥムが囁く。
冷笑を浮かべた二体は静かにゆっくりとその場から離れた。

十 十 十 十 十 十 十

「今日、教会のほうから最新の予言解釈がきた。

やっぱり公開意見陳述会が狙われる可能性が高いそうや」

はやてに部隊長室へと呼ばれた私たちは、はやてから予言の新しい解釈を聞かされた。

「もちろん警備はいつもよりうんと厳重になる。機動六課も、各員でそれぞれ警備に当たってもらおう。ほんまは前線丸ごとで警備させてもらえたらええんやけど、建物の中に入れるんは私たち三人だけになりそうや」

はやてはなのはとフェイトを見てそう告げた。私とルシルは黙って耳を傾ける。

「まあ、三人揃ってれば大抵なんとかなるよ」

「前線メンバーも大丈夫。しっかり鍛えてきてる。副隊長たちも今までにないくらい万全だし」

「みんなのデバイスリミッターも明日からはサードまで上げていくしね」

「ここを抑えれば、この事件は一気に好転してくと思う」

なのはとフェイトが頷いて応える。

それじゃ私とルシルが気になるもう一つのことを聞いてみようか。

「ごめん、はやて。解読できていない予言のほうはどうなってる？」

「それについては少しだけや。今は解読できてる予言の解釈で手一杯みたいだな。

んで、我らがユーノ君の解読した予言の解釈はこの三つや。

慟哭の涙、歓喜の絶唱、憤怒の叫び……あんま解らんけど、良くないことやと思っ」

「そう、ありがとう」

それはそうか。
今解読できている部分を、地上本部の壊滅と管理システムの崩壊を防ぐのが最優先。
それにその後続く予言は、現状を防げば回避できると判断されているんだった。

「それでな、シャルちゃんとルシル君には、
地上本部の外を遊撃戦力として守ってもらいたいんやけど・・・」

「はやて、私たちに遠慮する必要はないってシャルに言われたんだがまあ、ペッカートウムやレーガートウスが現れたらそつちを優先したい」
「私としてもそうだ。」

「はやてにルシルがそう答える。」

「ついでにペッカートウム連中が現れたらそつちを優先させたいとも。」

「だからといって、地上本部とかみんなを蔑ろにするってわけじゃないよ」

「そんなん分かつとるって。でも・・・うん、そやね。」

「それに対処できるんは二人だけやし、その場合はそつちを優先してもええよ」

「それまでは地上本部やフォワード陣や他の局員のフォローに全力を注ぐ」

「だから三人は中のほうをしっかりとね」

「「「うん!」「」」

第三管理世界ヴァイゼン 9月11日 AM0:00

深い森林の中、唯一開けた場所に許されざる傲慢ともう一人の影。
そのもう一人の人影が、月光の降り注いでいるその場に紋様を刻んでいる。

「Levis est fortuna · Id cito re
posit quod dedit」

その人影が、地面に紋様を刻みながら、書物のページを開きつつそ
う囁く。

それを聞いた許されざる傲慢は空に浮かぶ月を仰ぎ見る。

「レウイス・エスト・フォルトゥーナ。イド・キト・レポスキト・
クウオド・デディト・・・」

運命は軽薄である。与えたものをすぐに返すよう求めるから、か・
・。

確かNO、?・運命様の言葉だったか、許されざる怠惰「

「ええ」

ふくらはぎほどまである白髪を背中
の辺りから三つ編みにしている
若い女性、許されざる怠惰がしゃがみながらそう返す。

すつと立ち上がり許されざる傲慢へと振り向く。
白いクロークが風に靡いて翻り、それに続いて編まれた白髪も同様に翻る。

「で、何をしに来たの？ 私の仕事に何か文句でも言いに来た？」

前髪から覗く銀色の双眸が許されざる傲慢を見据える。
許されざる傲慢は月から許されざる怠惰へと視線を移す。

「明日、地上本部とやらに襲撃をかける。

俺たちは三番と四番を特殊部隊の施設から引き離す役目を担った」

「それなら許されざる色欲から聞いた。

私は現状のままミッドチルダ周辺世界での待機とされているけど・
・

許されざる傲慢はそれに「怠惰にはちょうどいい」と苦笑した。

「でもまあ、まさか私たちがフリとはいえ人間如きに手を貸すなんて思いもしなかった」

許されざる怠惰が地面に紋様の続きを刻み始める。

「だが実際、なかなか面白い。人間と同じ時間を過ごすなんてことは今までになかった。

だからこそ様々な知識を得られる。必要なことから不必要なものまでな」

「そのタバコもその知識のひとつというわけ？」

ヘルフェゴール
許されざる怠惰が地面に刻んだ紋章に左手をつき、ルシファール許されざる傲慢の口に銜えたタバコを見ながら問う。

「ああこれか。人間が考えた嗜好品というのも悪くない」

「そう。Fortuna vitrea est; tum cum splendet frangitur」

地面に刻まれた紋章に左手をついているヘルフェゴール許されざる怠惰がそう告げる。

すると、そこに刻まれていた紋章が一瞬輝き、そして何もなかったかのように消滅した。

「フォルトウーナ・ワイトレア・エスト・トゥム・クム・スプレンデ・フランギトゥル。

運命はガラスでできている。輝くときに砕け散る……か。

お前のそれは“標”を刻む際に必要な詠唱なのか？」

「いいえ。単に許されざる怠惰の趣味のようなもの。深い意味はない」

ヘルフェゴール許されざる怠惰は立ち上がり、月を仰ぎ見る。

一息を吐いて目を閉じた。そしてゆっくりと言葉を紡いでいく。

「これで全ての準備は終了。私の仕事もようやく終わり。

あなたはどつす　これはどういっつもり、ルシファール許されざる傲慢？」

ヘルフェゴール許されざる怠惰が目を開き見たのは、赤黒い四角柱の剣の先端を自分に向ける許されざる傲慢だった。

「俺の目的には“力”が必要なんだ。大罪としての“力”じゃなく、な。

役目を終えたお前はもう必要ない。だからその“力”は俺が有効に使わせてもらおう」

「……傲慢ね。何を目的としているかは知らないけど、今なら許す。

その剣を下ろして大人しくミッドチルダへと帰りなさい。

それに万が一、あなたたちが守護神に敗れでもしたらどうするわけ？」

ルシファール
許されざる傲慢の剣を、ヘルフェゴール許されざる怠惰は手にしていた分厚い書物で叩き落とす。

ルシファール
それでも許されざる傲慢は剣を構える。見据えるのは自分の糧となる贅のみ。

ヘルフェゴール
許されざる怠惰は、やれやれと首を横に振りながらため息を吐く。

「なら仕方ない。返り討ちにして、私があなたの“力”を頂くことにする。

ギブアップはいつでもどうぞ、ルシファール許されざる傲慢？」

「万が一なんてものはない。俺が三番と四番すらも取り込むからな」

「今代の傲慢はどこまでも愚かね。呆れてものも言えなくなった。

四番の本気をその身で体感すれば、そんな戯言は吐けなくなる。

だから私は、あなたにこの言葉を贈る」

ヘルフェゴール
許されざる怠惰の手にしている分厚い書物のページが風もなく開いていく。

「Stultum facit Fortuna, quem v
ult perdere」

運命の女神は破滅させたいと思う者を愚かにする

「なら俺からもだ、ヘルフェゴール許されざる怠惰。

Misce stultitiam consiliis bre
vem, dulce est desperare in loc
o」

僅かの愚かさを思慮に混ぜよ、時に理性を失うことも好ましい

月光降り注ぐ地にて、傲慢と怠惰の二人だけの殺戮のダンスが始ま
った。

それぞれの思惑が絡まりあい、次元世界は人知れずただ滅びへと向
かっていく。

それぞれの思惑（後書き）

異界英雄

バーニイ：スターオーシャンシリーズ

侯爵級ドラゴン・クロセル：スターオーシャン3

9月12日

9月11日 機動六課隊舎 P M 19:14

「 というわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や。明日14時からの開会に備えて現場の警備はもう始まっている」

ロビーに集められた私たちは、はやての言葉に耳を傾ける。

「なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード四名はこれから出発。
夜間^{ナイト}シフトで警備開始」

まずはなのはとヴィータ、フォワード陣にこれからの指示が告げられた。

「みんな、ちゃんと仮眠とった？」

「「「はい!」「」「」

フォワード陣はフェイトの言葉に大きく答えた。

その声にビクツとするのは隣に立つシャル。どうやら立ったまま半分眠っていたらしい。

シャルは昼間、夜間^{ナイト}シフトと関係ないのに散々眠っていた。まあ、途中で気づいて叩き起こしたが。

だというのにまだ眠たいらしい。というかまだ19時だぞ、19時。

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に中央入りする。

それまでの間、よろしくな」

「……はい!」「……」

だからビクツとするな、シャル。恥ずかしいだろ。

エリオやキャロでさえしつかりしているのに……。

「シャルちゃん、ルシル君。二人も私らと同じ早朝出勤や」

「了解した」

「りょうかいですう……zzz」

いつそのことハバネロでも口に突っ込んでやるうか……?

シャルだけは先に寮に戻らせることにして、明日出勤組の私たちはこれから本部へと向かうのはたちの見送りをするため、屋上のヘリポートへと向かった。

それぞれがヘリに乗り込もうとしたとき、ヴィヴィオとアイナさんが屋上に現れた。

なのはもそれに気づき、ヴィヴィオのもとに歩み寄っていく。

「どうしたの? ここは危ないよ、ヴィヴィオ?」

「ごめんなさいね、なのは隊長。どうしてもママの見送りをするんだ、って」

ああ、そういうことか。

ヴィヴィオの行為は分からないでもない。

ママのお見送り、微笑ましいことじゃないか。

「ダメだよ、ヴィヴィオ。アイナさんに我が仮言っちゃ」

「ごめんなさい」

なのはがヴィヴィオを優しく寤める。

ヴィヴィオも素直に謝るが、今回は仕方ないことだろう。

「ちょっと待った。ヴィヴィオにとってなのはの夜勤は初めてだからヴィヴィオも不安になってしまったんだろう」

夜はいつも一緒だからこそその不安。精神も未発達な状態なら尚更だ。

「え？ あ、そっか。うん……」

ヴィヴィオ、なのはママ、今日はお外でお泊りだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから」

「ぜったい？」

ヴィヴィオは目に涙を浮かべながら聞き返す。

「絶対に絶対。良い子に待ってたら、ヴィヴィオのキャラメルミルクを作ってあげるからママと約束ね」

ヴィヴィオは「うん」と頷いて、約束の証である指切りをした。

なのははもう立派なヴィヴィオの母親だが、ヴィヴィオの引き取り手が見つかってもしもヴィヴィオはなのはから離れない気がする。

というか絶対離れない確信がある。

なんならもうヴィヴィオをなのはの正式な養子とするのが一番だと思う。

「それじゃいつてくるね」

「いつてらっしゃい」

ヴィータやフォワードの子達がヘリに乗り込んだのを確認したなのは、自分もヘリへと乗り込んでヴィヴィオや私たちに手を振った。さて、ヘリも飛びだったことだし、寮に戻って少し早い眠るとしようか。

指を組んで両腕を伸ばし、首を鳴らしながら屋上をあとにした。

十 十 十 十 十 十 十 十

なのはやみんなを見送って、ヴィヴィオを連れて私は部屋へと戻った。

少し早いけど明日のために休む準備を始めようとしたとき、母さんから通信がきた。

私はそれに応えて回線を開いた。

『はぁーい、元気だったー？』

開いたモニターの向こうで母さんが笑顔で手を振った。

「うん。こんばんは、母さん」

『ヴィヴィオもこんばんはっ』

「あ、こんばんはっ」

母さんの挨拶に、ヴィヴィオは元気よく返す。

それを聞きながら、何かあったのかな？って思って聞いてみた。

『明日の陳述会なんだけどね、私も顔を出そうかどうかどうしようかなあ
って』

ということだった。

「あ、大丈夫ですよ。クロノも別の任務中ですし、本局の方もあまりいらっしやらないとか」

『ああ、そう？ しばらくぶりに娘の顔を見たいし、ヴィヴィオとも会いたいんだけど・・・』

「あの母さん？ 私は警備任務ですし、ヴィヴィオは寮でお留守番ですから」

だから母さんが来ても何というか言葉は悪いけど・・・無駄？
もし来るなら全部が片付いたあとのほうが絶対に良い。

『ああそっか、そうよね・・・。随分会ってないから寂しくってー。
体調とか崩したりとかしてない？』

「大丈夫だよ、母さん」

私だってもう子供じゃないんだから、体調管理くらいはできるよ。

それから少し話をして、母さんが「おやすみ」と言おうとしたとき、思い出したように母さんがもう一つの話題を出してきた。

『そうそう、フェイト。ルシリオン君とシャルロットさんは今居るのかしら？』

「え？ ルシルとシャル、ですか？ シャルはもう部屋で休んでると思いますけど・・・。」

ルシルはさっき別れたばかりだからまだ起きてる・・・かな」

母さんが少し真剣な面持ちでルシルとシャルの名前を口にした。

話があるならルシルのほうがいいと思う。シャルはすぐ眠たそうにしてたしもう寝てると思う。

「ルシル、呼んでみましょうか？」

『そんな急ぎのことじゃない・・・こともないような・・・。』

実はね、ルシリオン君とシャルロットさんにもう一度正式に管理局に入ってもらおうって。

そのことについて二人と話したかったのだけど・・・』

母さんはルシルとシャルをもう一度管理局に迎えたいと言ってきた。もしそれが現実になったら、休みの日とか会える時間を作れることが出来るかな？

「えっと・・・じゃあルシルだけでも呼んでみますね」

ルシルの部屋に通信を入れる。

出ないから、もしかしてもう寝たのかなと思ったとき、モニターにルシルが映し出された。

『どづした、フェイト？』

「あ」

ルシルの頬が上気していて、髪も少し濡れてることから、お風呂に行つてたんだと思つた。

そんなルシルを見て固まつた私に、ルシルはモニターの向こうで首を傾げていた。

「フェイトママ？」

「あ、その・・・ルシル、母さんが少し話したいみたいで、よかつたらこの部屋に来てもらつてもいいかな・・・？」

ヴィヴィオに袖を引つ張られて再起動。

ルシルに通信を入れた用件を伝える。

『リンディさんが私に話？　まあ、それくらいなら構わないけど・・・』

分かつた、すぐに行くと言えてくれ』

通信が切れた。そして相変わらず母さんの表情は笑みだ。

「母さん？」

『ふふ、フェイトつたら。さっきのルシリオン君を見て惚けてたわね！』

でも、そんなルシリオン君に私も少しドキツとしちゃった』

なんてことを言うのだろうか、うちの母は……。
確かに私はお風呂上り直後のルシルを久しぶりに見てドキッとしたけどそれは別にいいとして、母さんがそう言うとなんだか危険な気がする。

『ねえ、フェイト。ルシリオン君とはどうなの？』

ようやく戻ってきたのだしアプローチをしていかないとダメよ？』

「え？ う、うん。でも……」

母さんの言葉に軽く頷くけど、以前シャルから何とかしてあげるから待ってて、って言われたから今のところは現状維持のつもりでいる。

「今のところはこのままでいるつもり。」

それに今はそれどころじゃないし、ルシルを困らせることもしたくないし……」

『そう。フェイトがそう言うならそれでいいのだけど……』

それから少し沈黙。

そして来てくれたルシルを部屋に招き入れて、管理局の再入局について話をした。

「すみません、リンディさん。もう一度管理局に入るつもりはありません」

それがルシルの答えだった。

何となくルシルはそう答えを出すと思ってたけど、やっぱりちょっと残念。

『またミッドを離れて、“やるべきこと”を続けるため・・・なのかしら?』

「そうですね。ですが以前みたいにミッドを離れての行動はしないつもりです。

これからはミッドを拠点として続けるつもりですから。ですから長い時間を会えなくなるということは少なくなると思いません」

ルシルの言葉に俯いていた顔を上げる。

これからもミッドに居てくれるなら、会う機会がきつと多くなるはずだ。

そう思うとすごく嬉しい。

『あら〜そうなの？ それは良かったわあ』

「？ 何が良かったんですか？」

『いいのよ これからもフェイトのことをお願いね、ルシリオン君』

「はぁ・・・?」

ルシルは母さんが何について話しているのか解らないせいで力なく返事。

それから「おやすみ」と挨拶を交わして就寝・・・のはずだった。

「それじゃあ私は戻るよ。おやすみフェイト、ヴィヴィオ」

「うん。おやすみルシル」

「ルシルパパもいつしよにねよ？」

「……………」

流れる沈黙が痛い。

ルシルは完全に動きを止めてるし、私もたぶん同じだ。

「ごめんなヴィヴィオ。さすがに無理だ」

「ふえ……………」

即断られたヴィヴィオの目に涙が浮かぶ。

あー、なんかデジャヴ。10年前にも私がこれでルシルを困らせたことがある。

「な、泣かないでくれヴィヴィオ。フェイト、君からも何か言ってくれと助かる」

ルシルからの救援要請。

私は少しだけ考えて、その考えた末の結論を口にする。

「ヴィヴィオもこう言ってるし、今日くらい一緒に寝よ？」

私の言葉にルシルは目に見えてガツクリと肩を落とした。

その反応はちよつと傷つくよ、ルシル。

「ルシルパパ……………」

「・・・なあフェイト。10年前にもこんなことなかったか？
確かあの時も私が折れて一緒に寝た記憶があるんだが・・・。
今回もそのパターンだ。私が折れないとヴィヴィオの反応が怖い」

涙目のヴィヴィオに袖を掴まれたルシルは陥落。

それから三人でベッドに入って就寝。

ヴィヴィオは嬉しさのためなかなか寝付かず、ルシルはそれで困
ってた。

私もそうで、すぐには寝付けずに起きてたけど、いつの間にか眠っ
てた。

そして朝。起きてみるとそこにルシルの姿はなく、置手紙が一枚だ
け残ってた。

やっぱり無理。二人が寝入ったのを確認して退室させてもらっ
た。

ヴィヴィオには適当に誤魔化してもらえると助かる

私はその置手紙を見て苦笑。

そして置手紙のとおりヴィヴィオへの誤魔化しの言葉を考える。

でもよく考えてみたらヴィヴィオが起きる時間にはもう私たちは出
動してるんだけど・・・。

十 十 十 十 十 十 十 十

ぐっすりと眠って体調万全で地上本部の警備を始めた私とルシル（
ルシルは何か微妙だけど）。

一応ということで管理局の制服を着ることになったけど・・・いい

の、本当にこれで？

元管理局員であり現協力者な私たちが制服を着るっっているるとま
ずい気がする。

そして一緒に来たはやてたちはフォワードの子達にデバイスを預け
て中へと入っていった。

正直デバイスを預けなければならぬということには驚いたけど、
その分私たちが働けばいいと思うことにした。

そんなことを考えながらのんびり構えていると、ようやく陳述会が
始まった。

モニターに映し出されている陳述会で繰り広げられている論争を聞
きながら、私のデバイスである“トロイメライ”をそつと指で撫で
る。

“キルシュブリューテ”はペッカートウムやレーガートウス以外に
使えない。

そのための“トロイメライ”。マリエルさんに頼んできつちりメン
テナンスもしたから絶好調だ。

それから何事も起きずに昼を過ぎ、辺りは夕日に染まってオレンジ
色だ。

そして陳述会も終わりへと差し掛かりそうなところまでいってる。
このまま何も起こらないことを祈りつつ、地上本部へと視線を向け
る。

「開始から四時間ちょっと。中のほうもそろそろ終わりね」

ティアナが腕時計を確認して現時刻を告げる。

四時間、かぁ。結構無駄な時間を過ごしたかも……。

「最後まで気を抜かずにしつかりやろう！」

「はい！」

フォワードの子達のやり取りを聞いていると笑みが浮かんでしまう。まるで昔の私たちを見ているみたいだから。

ふと隣に立つルシルを見てみると、ルシルも似たような表情をしている。

これはこれで無駄な時間じゃなかったかもね。

遙か上空で地上本部を見つめる二つの影。

それは大男であるゼストと、赤い少女アギトの二人。

「連中の尻馬に乗るのはどうも気が進まねえけど・・・」

「それでも貴重な機会ではある。今日ここで全てが片付くなら、それに越したことはない」

アギトの言葉に、ゼストは目の前に展開されたモニターに映るゲイズ中將を見ながら答える。

「まーね。つつか、あたしはルーラーも心配だ。大丈夫かな、あの子」

「心配ならルーテシアについてやればいい」

ゼストの返答を聞いたアギトは、ゼストの顔の前まで移動する。

「今回に関しちゃダンナのこと心配なんだよ！」

ルルーにはまだガリユーチや虫たち、それに・・・レヴィもいるし・・・。

でもダンナは一人じゃんか」

ゼストの言葉に少し不機嫌そうにそう口にするアギト。

しかしゼストは何も答えない。

視線はずっとモニターに映るゲイズ中將に注がれている。

「ダンナの目的はこのヒゲ親父だろ？　そこまではあたしがついていく。」

ダンナのこと、守ってあげるよ」

「お前の自由だ。好きにするといい」

モニターを消し、ゼストは静かに告げた。

「するとさ！　ダンナはあたしの恩人だからな」

「ナンバーズ、ナンバー？　トーレからナンバー？　デイドまで全機配置完了」

スカリエッティのラボの一室、ナンバー？　ウーノが自信の周囲に展

開かれているまるで鍵盤のようなキーボードを叩きながら、背後にいる自分たちの主スカリエッティに報告する。

彼女の前に展開されているいくつかのモニターには、ナンバーズやゼストとアギト、そして腕を交差したルーテシアと、隣に立つ許さヴィヤタンれざる嫉妬が映っている。

『お嬢とゼスト殿も所定の配置に就かれた』

左端のモニターに映る？と刻まれた装甲を持つ紫色の女性、トーレから報告が入る。

『攻撃準備も全て万全。あとはゴーサインを待つだけです』

新しく展開されたモニターに映るクアットロからも準備完了の報が入った。

ウーノはキーボードを叩きながらもそれに「ええ」と答えた。

そのとき彼女の背後に座るスカリエッティから抑えられた笑い声が聞こえる。

「楽しそうですね」

「ああ、楽しいさ。この手で世界の歴史を変える瞬間だ。

研究者として、技術者として、心が沸き立つじゃあないか。そうだと、ウーノ？」

スカリエッティの言葉にウーノは笑みを返すことで肯定の意を告げる。

そしてスカリエッティは椅子から立ち上がり、計画実行の合図を告げる。

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやるぞ。
我らの思いと、研究と開発の成果を、な。さあ、始めよう!」

「はい」

ウーノが複数のキーを同時に叩き、計画が実行に移された。

ナンバー?クアットロは、自らのIS“シルバーカーテン”で地上本部のシステムに干渉、C4ISR機能をダウンさせる。

ナンバー?セインは、IS“ディープダイバー”によって、地上本部の指揮管制室に特殊ガスが仕込まれたハンドグレネードを天井から投下、管制室の局員を無力化。

ナンバー?、銀髪に右目に眼帯を付けた小柄な少女、名をチンク。彼女は地上本部の内部施設、魔力炉を、IS“ランブルデトネイター”で破壊。

地上本部の防壁の出力を減衰させた。

そしてルーテシア。彼女の遠隔召喚によって地上本部周辺に無数のガジェットを展開。

地上本部へと襲撃をかけさせる。

ナンバー?デイエチは、地上本部から遠く離れた場所より固有武装“イノームスカノン”による砲撃を実行。

地上本部より少し離れた海上、そこにいたのはナンバー?トーレ、そしてナンバー?、桃色の長髪をした少女、名をセツテの二人。援軍として現れた地上航空隊の魔導師部隊を悉く撃墜していく。

そしてそれをただ傍観する三つの影。

一つは大鎌を構え、一つは腕を組み、一つは刀身が四角柱の剣を構えている。

表情はどれも冷笑を浮かべていた。

十 十 十 十 十 十 十

それはあまりに突然のことだった。

陳述会もあと僅かの時間で終わると思われたとき、警備に当たっていた部隊に緊急の全体通信が流れた。

内容としては“管制システムが乗っ取られた”というもので、すぐに通信が切れた。

「あまりに早かったな、陥落するのが……」

地上本部の防壁は鉄壁とか言われていたが、実際はあまりに短時間での陥落だった。

これなら私の持つ電子戦用能力でも容易く落とせる気がしてきた。

「くそっ、いくぞデメエら！」

「……はい！」「……」

それからすぐに私たち六課は行動を開始。

襲撃を受けた地上本部へと走る。

「ガスは致死性ではなく麻痺性。今、防御データを送るです！」

先程からリインが撒かれたガスの成分を解析していて、そしてその効果を割り出した。フォワードの子達のバリアジャケットに、対ガス用の防御が施される。

ちなみに私とシャルにそういったものは必要ない。ガス程度でどうにかなる防御力ではないからだ。

「通信妨害がキツイ……。ロングアーチ！」

『外からの攻撃は一先ず止まっていますが、中の状況は不明です！』

ロングアーチから報告が入る。

いくら魔力が強くともフェイトたちはデバイスを持っていない。そんな状況でもし戦闘になったりでもしたらまずい。

「副隊長！ 私たちが中に入ります！なのはさんたちを助けに行かないと……！」

スバルの言葉に他の三人が頷いて応える。

ヴィータは少し考えているようだが、もう心のうちでは決まっているはずだ。

『地上本部へ航空戦力、ランクは推定オーバーSランクです！』

次から次へと面倒事が増えるな、本当に……。

「ヴィータ、私とシャルで外のガジェットを殲滅する」

「セインテスト……わりい。ロングアーチ！ そっちはあたしとリインが上がる！」

外はセインテストとフライハイト、中には新人どもが行く！」

『了解しました！』

ヴィータからの指示に答え、私とシャルはガジェットの迎撃に。

ヴィータとリインは新たな航空戦力へ、フォワードの子達は中にいるフェイトたちを助けるため。

それぞれに行動を開始。

私とシャルはヴィータたちと別れて、ガジェットの出現が多い場所へと来た。

視界に入るのは、ガジェットが地上本部の障壁に張り付いて、AMFの効果で突破しようとしていたガジェット群だった。

それにしてもガジェットの数が半端じゃなく、そのうえまだ増え続けている。

「うわっ、なんかすごいことになってる」

「無駄話はあとだ。さっさと片付けてしまおう」

周りに同員がないことを確認して臨戦態勢に入る。

「うん。トロイメライ、いくよ」

J a w o h l , M e i s t e r . E x p l o s i o n

“トロイメライ”がカートリッジをリロードする。

シャルは“トロイメライ”を軽く振って、四機のガジェット三型へと突っ込んでいく。

「光牙月閃刃！」

Schein Mondsiichel

シャルのほうは問題ないだろう。

私も私のやれることをやるのみだ。

障壁に張り付いているガジェットをまずは殲滅する。

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

引き出す複製術式は実妹、拳帝シエルの固有魔術。

そして私が持たない属性を利用した一撃だ。

術式発動に達しようとしたとき、周囲に“ギンツ”と鈍い音が一瞬だけ響く。

そしてシャルが効果範囲にいないことを確認して発動する。

「……墮ちろ」

ルイン・トリガー
圧戒

術式発動と同時に、障壁に張り付いていた約二十機のガジェットが地面に叩き落された。

そのまま地面にめり込んでいき、かけられた“重力”に耐えられず次々と爆散していく。

「ちよつとルシル、拳帝の固有魔術使うの止めてほしいんだけど。大戦のトラウマが甦ってくるから」

遠く離れてガジェットを真つ二つにしているシャルがそう口

にした。

「シエルと君との間に何かあったっけか？」

「うそ、もしかして覚えてないの？」

私の心慧騎士団の過半数は、拳帝の圧戒それで壊滅したんだけど・・・」

そんなことあったような、なかったような・・・？

「・・・あ、もしかして“アルグレーンの戦い”・・・か？」

「そう。あの島の戦い。天光騎士団が大戦での初陣だったのに・・・あんな簡単に・・・」

ああもう思い出したら泣けてきた・・・」

シャルは“トロイメライ”も地面に突き刺して、両手で顔を覆った。いやいやいや、そこまでガジェットが来ているんだが・・・」

「・・・なんてね。もう過ぎたことだし、戦争だから仕方ないことだった」

シャルはトロイメライを手に取り、向かってきたガジェットの一型と三型、計19機を瞬殺。

その目には想像していた涙はなかった。

「でも、そんなに使わないでほしいのはホントだから」

シャルはそう呟いて、再びガジェットの群れへと突っ込んでいった。シャルのあんな悲しそうな顔を見た以上は、彼女の前ではもう使えない。

「仕方ないか……」

腰のホルスターに納められた“星填銃オルトリンデとグリムゲルテ”を手にする。

銃口は全てガジェット群に向ける。魔力を流し、弾丸を精製。

「一機残らず撃墜といこうか……」

引き金を引いて魔力弾をガジェットへと撃ち込んでいく。

十 十 十 十 十 十 十

はやてとシグナムのデバイスを新人たちに預けて、あたしとリインは空に上がった。

「ユニゾン、イン！」

騎士甲冑に変身して、融合機としてのリインをユニゾンする。

相手はオーバースランクだ。これくらいはしておかないと勝てないと判断したからだ。

「リイン、停止の呼びかけ頼む」

シユヴァルベフリーゲンを用意しながら、リインに未確認に停止の呼びかけを頼んだ。

あたしはいつでも攻撃に移れるようにしておく。

「・・・ゼスト」

9月12日（後書き）

C4ISRのことは書かないといけません・・・ね？

Command, Control, Communications, Computers, Intelligence, Surveillance and Reconnaissance

指揮・統制・通信・コンピュータ・情報・監視・偵察の頭文字を取ったものです。

軍事力を効果的に発揮させるために不可欠な機能のことですね。簡単に管制システムと書いたほうが良かったかもしれませぬ。

それと、アルグレーンの戦い、ですか。

ANSURの戦いの一つで、天光騎士団の大戦初陣となった戦場の名前です。

“すべて緑”という意味を持つ島です。

そこでシャルロットと率いる騎士団が、アンスールの拳帝シエルと殲滅姫カノンの率いる部隊と交戦、シエルの圧戒とカノンの支援砲撃でほぼ壊滅といったものでした。

複製術式

ルイン・トリガー
圧戒：ANSUR

シエルの任意の場所に最大直径800メートル、最大10倍の重力をかけられる。

ルイン・トリガー／破滅の引き金という意味を持つ。

シャルの魔術単語

Mondsichel モーントズイツヒェル／三日月
Licht リヒト／明かり

ルシルのオリジナル・スペル

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

この場合は、アンスール、ヴァルキリーといった戦友の術式や武装
などを

引き出す際に使用されるものです。

それ以外は、我が手に携えしは確かなる幻想 となります。

地上の悲劇　く前編く（前書き）

書き上げた結果、二話分になってしまったことに気づき、前後編とすることになりました。

地上の悲劇　〜前編〜

フォワード陣の四人はヴィータたちと別れ、地上本部内へと進入。ヴィータから預かった隊長たちのデバイスを、隊長たちに届けるために通路を駆ける。

「っ！ マツハキャリバー！！」

P r o t e c t i o n

先頭を走っていたスバルが何かに気づき、バリアを張る。

次の瞬間、スバルへと放たれた攻撃がバリアに着弾。

しかし高い防御力を誇るスバルのバリアを抜くことは出来なかった。

突然の奇襲に、ティアナ、エリオ、キャロの三人も身構え周囲を警戒する。

スバルもまた周囲を警戒し、自らに接近してきた襲撃者に気づく。そして、その襲撃者の姿を捉えたスバルは驚愕の表情を浮かべ動きを止めるが、その襲撃者の攻撃を咄嗟に両腕を構えて防御する。しかし攻撃の勢いに踏ん張ることが出来ずに蹴り飛ばされ壁に叩きつけられた。

「スバル！」

壁に叩きつけられ倒れたスバルを見て、ティアナはスバルの名を叫ぶ。

だが彼女たちの周囲にいくつものスフィアが展開され、包囲されてしまった。

「ノーヴェ、作業内容忘れてないっすか？」

通路に響く少女の声に、ティアナたちフォワードは声のした方向へと視線を向ける。

そこにいたのはウエンディと言う名を持つスカリエッティの作品ナンバーズの子？。

「うるせーよ。忘れてねえ」

先程スバルを蹴り飛ばしたもう一人のナンバーズの子？ノーヴェが不機嫌そうに返す。

「捕獲対象三名。全部生かしたまま持って帰るんすよ？」

「旧式とはいえタイプゼロがこれくらいで潰れるかよ」

ウエンディから任務の確認を告げられたノーヴェはスバルを見つつ返答。

スバルは体を起こし、その視線をナンバーズの二人に向ける。

「戦闘・・・機人・・・」

よろめきながらもそう口にする。

スバルの言葉を聞いたティアナは歯噛みし、エリオとキャラロの表情が緊張の色に染まる。

そこからフォワードと戦闘機人との戦闘ナンバーズが開始された。

激しい攻防の最中、フォワードの四人は考える。

戦闘機人との戦闘より隊長たちとの合流を優先するべきだ、と。

「幻影!? うっそー!?!」

次々と現れるフォワード四人の姿を模した幻影に、ウエンディは驚愕の声を上げた。

ティアナは幻術を駆使して見事戦闘機人の視覚を混乱させていた。

「あたしらの視覚を騙すって、この幻術使い、戦闘機人システムのこと知ってる!?!」

あまりの予想外にうろたえるウエンディ。

しかし方割れのノーヴェは激高し構え、右拳の周囲に六つのスフィアを生成する。

「ようは全部潰しやあいんだろっが!?!」

「おおおおっ!?!」

そのとき無数の幻影から本物のスバルが今度はノーヴェに向けて奇襲をかける。

ノーヴェはその奇襲に反応し両腕を構えるが、先程のスバルと同様に今度は殴り飛ばされた。

バウンドして地面をいくつも陥没させながら転がるノーヴェ。

「ノーヴェ!? つく・・・!」

ノーヴェを気遣う間もなく、ウエンディにもエリオの攻撃が迫る。

Form Drei · Unwetterform

「サンダー・・・レイジ!?!」

エリオはウンヴェッターフォームに変形させた“ストラダ”を振り下ろす。
電撃を纏った“ストラダ”による小規模ながらの範囲攻撃をウエンディは真つ向から防ぐ。

その結果ウエンディ自身は無事だったものの周囲にいたガジェット？型は全滅した。

「撤退！！」

ティアナの号令の下、フォワード陣は幻影に紛れその場からの撤退を完了した。

「このやるー！！」

自らの上に押し掛かる瓦礫を押し除けながらノーヴェが悪態をつく。ウエンディもまた爆発の衝撃を受け倒れ付していたが、何とか起き上がるうとしている。

『ノーヴェ、ウエンディ。二人ともちょっとこっちを手伝え。もう一機のタイプゼロ、ファーストのほうと戦闘中だ』

二人の間に一つのモニターが立ち上がる。

そこに映るのはナンバーズの？チンク。

そしてその彼女と対峙しているのはギンガだった。

遙か上空にて二つの閃光が幾度も衝突しては離脱を繰り返していた。それはユニゾンしたヴィータとリイン、ゼストとアギトによる戦いだった。

「ゼストつつつたか？ 何を企んでるのか目的を言えよ！
納得できる内容なら管理局はちゃんと話を聞く！」

「若いな……」

幾度目かの鏢迫り合い。ヴィータはゼストへと問いかける。

目的は何か、内容によっては事も変わってくる、と。

しかしゼストはそれに答えることはなく、自身の周囲に炎のスフィアを展開する。

ヴィータも“やるしかないのか”と歯噛みし、リインの力を借りた氷結の短剣を複数展開。

そして爆発。お互い至近距離での攻撃となったが両者共に無傷だった。

「だが良い騎士だ」

『ダンナあ、褒めてる場合かよ！』

ゼストのヴィータへ向けられた賛辞にアギトが吼える。

『リイン、気づいたか？』

『はい』

ヴィータの思念通話に答えるリイン。

『向こうのユニゾンアタック、微妙にですがタイミングがズレてます。』

融合の相性があまり良くないとみえました』

再度攻防を始めたヴィータとゼスト。

ヴィータとリインが気づいたものはそれだった。

ゼストとアギト、二人の融合の相性の問題。

そしてヴィータとゼストは再度間合いを空ける。

静かにヴィータを見つめるゼスト、そのゼストとユニゾンしたアギトが愚痴をこぼす。

『くそっ、あいつら融合相性も良いんだろっが練度も高けえ。しっかり合わせてくる』

「アギト、融合を解除しろ。俺がフルドライブで、一撃で落とす」

このままでは余計な時間を掛けると判断したゼストは、融合解除をするようアギトに告げる。

『冗談！ フルドライブなんか使ったらダンナの体は ……！』

アギトはその提案に猛反対。

それはゼストの体を気遣ったの猛反対だった。

「終わらんさ。なすべき事を終えるまではな」

しかしゼストはフルドライブを使用するつもりでいる。

『ぶっざけんなっ！ ダンナのことはあたしが守るって言ったろ！？』

ダンナの命は削らせねえ！ あたしが必ずダンナの道を通してやる
！！」

アギトが叫ぶ。何に変えてもゼストを守り、その目的のために道をつくると

アギトは両手に紅蓮の炎を生み出し解放。ゼストの槍にその炎を付加させた。

『猛れ炎熱！ 烈火刃！！』

その光景を見たヴィータはアイゼンを構える。

「いくぞ、リイン！」

『はいです！』

再び騎士同士による空での戦いが始まった。

十 十 十 十 十 十 十

ガジェット殲滅を開始して僅か数分。

私とルシルのもとに二つの通信が入った。

『こちらロングアーチ！ 現在六課は襲撃を受けています！
周辺部隊にも応援を』

『……らギンガ……曹……闘機人……交戦……
応援をお』

シャーリーから六課の隊舎が襲撃を受けたとの報が入る。
ノイズで全部聞き取れなかったけど、ギンガのほうもかなりまずい
状況だということが解った。

「ルシル・・・！」

「私が六課へ向かう。シャルはギンガのところへ向かえ。
屋内ならシャルの独壇場だろ？　そして空は私のテリトリーだ」

「・・・了解！」

私は地上本部内へと防壁が降りているため強制転移する。
その所為で結構魔力を持つていかれたけど瑣末なことだ。
そしてロビーに転移してすぐ外から轟音が聞こえた。
たぶんルシルが周辺にいたガジェット群を殲滅したんだろう。

「ギンガの居場所は・・・見つけた！」

AMFがキツくて分かりにくかったけど、何とかギンガの魔力の探^サ
査に成功。

居場所が分かればあとはそこを目指して走るだけだ。

そしてギンガの魔力を感知できた居場所へと到着する。

「っ！　ギンガ！！」

私の目に映ったのは血溜まりに浮かぶボロボロにされたギンガの姿
だった。

そばにはギンガの通信にあつた戦闘機人と思しき三人の影。
その三人は私の姿を見て臨戦態勢に移つた。

「なんだテメエは？」

「あたしらの邪魔をするっスか？」

赤髪のがキと洋紅色した髪のがキが何かほざいている。
そつ。お前たちが私の友達を傷つけたわけか……どうしてくれようか。

「……ふう。落ち着きなさいシャルロッテ……」

怒りで沸騰する頭を理性で冷却させて無理矢理落ち着かせる。
怒りは爆発的な力を発揮できる反面理性が飛ぶ。戦場では一番あつてはならないことだ。

「その子は私の大切な友達の一人なんだ。だつたら私の言いたいこと……解かるよね？」

「「っ!?!」」

私の威圧にその少女二人が一步下がつた。

下がつたのがたつた一步だけというのには少し驚きだ。

普通なら逃げ出すか腰を抜かしてへたり込むかのどちらかなのに……。

「ギンガをどうするつもり？ 返答によってはしばらくの病院生活になるから覚悟してよね」

少女二人の背後からさらに小さな子供が歩み出た。右目に眼帯をした銀髪の少女。外見年齢で言えば10〜11くらいか。

「チンク姉……」

今気づいたけど、赤髪にチンクって呼ばれた銀髪少女の首下にある装甲には？とある。

そして生意気そうな赤髪は？、もう片割れは？？。こういう場合はおそらく数が若い方が上だ。

だからここでは銀髪少女チンクがリーダーだ、と私は判断した。

「ドクターからは余力があり可能ならタイプゼロ……」

チンクの視線がギンガに向けられた。

どうやら目的を聞かせてくれるようだ。

「特にこのファーストを優先的に確保と」

「確保が目的なら殺してはいないのよね？」

すでに私とルシルは、スバルとギンガから自分たちも戦闘機人だと聞かされてる。

「そつだ」

だからといって今のギンガの状態が良いか悪いかで言えば悪いも悪い、極上の最悪だ。

だったらギンガを早くマリエルさんのところへ連れて行くべきだ。

ならばこの三人をどうにかして、そしてギンガを保護、マリエルさんと連絡を取る。

やることは決まった。ならあとは行動あるのみ。

「分かった。ならもうギンガを確保するのは不可能だから大人しく投降しなさい」

「なんスか、それ？ あたしらに勝てるつもりで思ってるっスか？」

「チンク姉、さっさとこいつをブツ倒して、そいつを運んじまおうよ」

私の放つ威圧から復活した二人なんだけど・・・なんかおかしいさつきから私に勝てると思ってるようだけど、私のことをスカリエツティに聞いていればこういう態度は取らないはずなのに・・・もしかして聞かされていないのだろうか？

「IS発動、ブレイクライナー！！」

「いくつスよ！ IS発動、エリアルレイヴ！」

私の思考を中断するかのように、二人の足元にテンプレートが展開される。

??（面倒だからこれでいいや）が構えたボードからエネルギー弾を立て続けにぶっ放される。

でもそんな豆鉄砲なんて私と“トロイメライ”の前では無意味だ。

“トロイメライ”で向かってくるエネルギー弾を斬り裂いていく。

そして？なんだけど、どう見てもスバルやギンガのパクリとしか思えないモノを使う。

色は違えどもウイングロードのようなものを出したりしてるし、武装も似てる・・・パクリ魔？
？の赤髪の通称、独自判断でパクリ魔に決定。

「待てっ！ ノーヴェ、ウエンディー！」

チンクが二人の名前と思う言葉を叫ぶけどもう手遅れだ。
陸戦である以上、お前たちでは私は倒すことは不可能だ。

「もらったーーーーー！！！」

パクリ魔がウイングロードもどきで私の背後に回りこんだけど・・・
・遅いよ、間抜け。

振り返ると同時に“トロイメライ”の柄をパクリ魔の横っ腹に叩き込む。

「っが・・・！！？」

「はい、一名様入院コースへごあんなーい」

「エリアルキャノン！！！」

吹き飛んだパクリ魔と入れ替わるようにして??が砲撃を撃ってきた。

威力もそれなりだし及第点をあげよう。

「その程度の砲撃で私を　　！？」

私は“トロイメライ”で砲撃を裂こうとしたけど、直感が働いて回避へと変更した。

次の瞬間、私のいた場所に複数の投げナイフスロウイングが突き刺さる。そして続くように??の砲撃も着弾、爆発を引き起こした。

「待てと言ったのに……」

どうやら今のスロウイングナイフはチンクのモノらしい。

ただとおそらくそれだけじゃない。彼女にも何かしらに能力があるはず。

「どうであれ私にケンカを売ったことを病院のベッドの上で後悔しなさい！」

“閃駆”を使い、一気に??との間合いを詰める。

「つく、これでどうっすか!?!」

フローターマイン

「つとど。これは……反応弾ね」

私の周囲に展開された無数の桃色のスフィア。

たぶん少しでも触れたら爆発すると思うんだけど……。

「IS発動、ランブルデトネイター」

さらに私の周囲にいくつもスロウイングナイフが展開された。睨み合う私とチンク。そしてチンクは右手を挙げて指を鳴らした。

オーバーデトネイション

展開されたスローイングナイフによる集中攻撃。

魔力でないため正確な威力は判断できないけどかなりあるかも……。

これはちゃんと防御しないとまずい。そう一瞬の内に判断を下し、直撃寸前で紅翼を展開。

「……バカな!？」

「チンク姉の攻撃で……無傷っスか!？」

爆炎の中から私が無傷で現れたのがよほど信じられないみたい。確かに直撃はまずいけど、私の紅翼の防御力なら容易く防げる。

「くっそー。やりやがったな……」

パクリ魔が立ち上がるのを確認。

やっぱり戦闘機人相手に手加減したのが失敗だったようだ。なら今度はしばらく立ち上がれないようにしてあげよう。

「さてと。それじゃ……続きといこ　　キャアツ!？」

“閃駆”で再度間合いを詰めようとした瞬間、目の前にいたチンクの背後から無数の白い何かが襲い掛かってきた。

私はその勢いに負けて遠く離れた壁にまで吹き飛ばされて叩きつけられてしまった。

「うぐ……一体何が……あっがつ……!？」

突然全身を貫くような痛みに襲われた。

単に壁に叩きつけられただけのものならこれほどの痛みは覚ええない。ゆっくりと自分の体を確認しようとして下へと視線を向ける。

「あぐう……これは……やられ……た……!」

痛みの原因はすぐに解かった。

私の腹部を貫いて、私を壁に磔にしていたのは赤黒く染まる四角柱の刀身を持つ剣。

見覚えがある。これはルシファアの剣だ。

どうやらルシファアがご丁寧にも真正面から襲撃してきたようだ。

「これは予想外。こつも簡単に三番を討つことが出来るなんて」

声が聞こえる。その姿は……ルシファア……じゃない？ 女？ 白髪の女だ。灰色のスリーピーススーツに白いクロークを纏っている。

別のペッカートウムというのは解かる。でもそいつの顔もまた知らないヤツだった。

「く……そ……。力が……入らな……」

まずい、意識が落ち始めた。それだけじゃなく魔力まで扱えなくなってしまう。

おそらく私を貫いているこの剣の持つ能力が何かの原因だろう。

「つつ……ごめ……ギンガ……」

意識が落ちる寸前、知覚が捉えたのは、白髪の女に重なって見えた邪悪な笑みを浮かべたルシファアの影。

そしてここからの角度じゃ見えないけど、間違いなくスバルの叫び

声が耳に届いた。

「…………さいあ…………く…………」

そこで私の意識は完全に落ちた。

十 十 十 十 十 十 十 十

シャルがギンガのもとへと向かうために地上本部内に転移したのを見届けた。

「シャーリー、すぐに私が向かう。それまで持ち堪えてくれ」

『了解です。お願いします！』

ロングアーチとの通信を切り、六課へ向かう。

しかしそれを邪魔しようと私の行く手にガジェット群がさらに増える。

「……………どれだけ集まろうとガラクタはガラクタなんだよ……………
馬鹿が」

コード
罪ある者に、
レミエル
汝の慈悲を

上空から蒼雷の十字架群を降らせ、ガジェット群へとぶつける。周囲一体に一機も残っていないことを確認して空戦形態へと移行、空へと上がる。

海面間近を飛び、最短距離で六課の隊舎を目指す。

そして未だはるか遠くだが、うつすらと視界に入ったのは赤く燃え上がる隊舎だった。

「……………なんてことを……………!」

一体何が目的だ？

こちらで回収してあるレリックを目的としているのか、それとも別の……………。

いや、まずは襲撃犯を押さえることを優先するべきだ。

目的云々なら捕らえたあとでゆっくりと聴き出せばいい。

「……………っ! これはサタンか!?!」

あと1分弱飛べば隊舎に着くというところでレーザーのようなものが放たれてきた。

シヤルから話に聞いているサタンによる砲撃だろう。

「悪いが行かせられねえな、欠陥品よお!?!」

「というわけでここから先は行き止まりよ」

前方には大鎌を構えたアスモデウス。後方には腕を組んでいるサタン。

二体一。だが戦場は空。現在の戦闘形態は空戦仕様。勝率は高いだろうが油断はするな。

「……………急いでいるんだ。大して時間はかけられない。故に」

「 始めから全力でいくぞ！ アスモデウス、サタン！」

我が手に携えしは確かなる幻想

僅かな魔力で神秘による物量攻撃を行うことを選択。

引き出すのは自作の銃火器型神器群。

私がかつて率いた後方支援部隊の魔術師たちに与えたモノだ。

私の周囲に次々と現れる、現代では質量兵器と捉えられる銃火器群。

「おお！ 俺たちと砲撃戦をやるうつつてか！？」

「飛び道具に頼るのは三流の証よ、欠陥品」

「三流かどうかはその身で確かめてみる！！」

マシンガン
機関銃型神器、トンプソンM1A1、MG34、ZB vz・26、
MAT M49 SMG、計40挺展開。

ライフル
小銃型神器、レミントンM700、モーゼルM1918対戦車ライフル、SVDドラグノフ狙撃銃、H&K SL-9SD、
ステアーSSG69、FN FNC、シモノフPTRS1941計
80挺展開。

ショットガン
散弾銃型神器、モスバーグM590、ミロクSP-120、FN-
TPS、M3A2スパー90、計45挺展開。

これぞ私が“孤人戦争”と謳われた由縁の一つ。

ガンバレード・デヴィルティメント
銃軍嬉遊曲

これだけ展開しても魔力はほとんど消費していない（大体A A+）。そして両手に構えるのはウィーチェと名付けられた（命名はカノン）白銀のライフル。

本来の名前はウィンチェスターライフルM1873と呼ばれるレバーアクションライフル。

私が自作した銃器型神器の中でも単発においては上位に食い込める威力を持ち、星填銃の二挺よりもさらに高い。

まあ、それでも私の最高傑作“星填砲シュヴェルトラウテ”には遠く及ばないが。

それにこのウィーチェを使用するのには一手間掛かってしまうものだが、そこが何となく気に入っていて愛着がある。

「全器ターゲットロックオン。撃てええ!!!」

計165挺の銃火器型神器が一齐に火を噴いた。

火とは言っても神秘弾発射に使用された魔力のカスがそう見えるだけだが。

「面白れええ!!!」

サタンがそれに対抗するように数えるのも馬鹿らしいほどのレーザーを真っ向からぶつけ相殺していく。

アスモデウスは回避を繰り返しては神秘弾を大鎌で斬り裂いていく。だがアスモデウス、サタン。私の手にも銃器があることを忘れてはいないだろうな。

「避けてばかりではなく反撃の一つでもしたらどうだ!？」

ウィーチェを前方に交差させて構え、強力な一撃をそれぞれからぶ

つ放す。

アスモデウスとサタンは射線上から離脱して直撃を逃れる。だが展開されている165挺からの一斉掃射が続いているために一箇所には居続けられない。

その二体の行動を見ながら両手のウィーチェを指で回転させてレバ
ー操作。

この一手間を行わないと次弾発射が出来ないのだが、これが良いと思っ
ている私は変だろっか？

「調子に乗るのも大概にしておきなさいよ、欠陥品！」

アスモデウスが無理矢理神秘弾の雨を突破してきた。

振るわれた大鎌を、右手に持つウィーチェの銃身に備え付けられた
剣を盾として防ぐ。

「ぐっ・・・馬鹿力だな、アスモデウス」

「レディに対して馬鹿力なんて、お前には躰が必要のよう・・・ね
！！」

数秒間の拮抗の果てにウィーチェが真つ二つに切断される。

まあ、“ケンケンル神造兵装”を弾き返すほどの代物だ。ウィーチェ概念兵装で防げるわ
けもないか。

「捉えた！！」

下げられていた大鎌を今度は振り上げようとしている。

だがこの位置関係はまずいと思うぞ、アスモデウス。

「残念だったな」

大鎌の刃が届く前に“星填銃オルトリンデ”をホルスターから引き抜き、アスモデウスの腹部に照準を合わせる。

「どうかしら？」

だがここでまた邪魔が入る。

隊舎のほうから放たれたすみれ色の閃光が私とアスモデウスの間を抜けていった。

「助かったわ、許されざる嫉妬^{レヴィヤタン}」

「……そつちはそつちで……勝手にやってほしいのに……」

海面に立つのはレヴィヤタン。

だが明らかに不機嫌そうなのは何故だろうか？

しかし考える暇もなく状況は変わっていく。

様々な場所に展開していた銃火器群が破壊されていつているのに気づく。

「なかなか面白かったぜ。銃つてのはよ」

纏っていたインバネスコートは見るも無残にボロボロだが、サタンは無傷だ。

なるほど。これは結構まずい状況だ……なんてことはない。

「三対一。お前たちが相手に陸戦であったなら私が圧倒的な不利となっただろう。」

しかし現状は空での戦闘だ。完勝とはいかずとも私に敗北はない」
未だに残っている約50挺の銃火器群を一斉掃射。
そして私自身は左手のウィーチェと右手の“オルトリンデ”でレヴィヤタンを狙撃する。

アスモデウスは大鎌による切断。サタンはレーザーによる相殺。レヴィヤタンは……、レヴィヤタンは……バカな!?

「直撃で無傷だと!？」

「……撃つて」

驚愕に体を固めてしまった私に向けて、レヴィヤタンからすみれ色の閃光が放たれる。
その閃光をギリギリでかわす。もし空戦形態でなければ今ので終わっていた。

「あー惜しいな、許されざる嫉妬^{レヴィヤタン}」

神秘弾をその身に受けながらのカウンター砲撃。
何故レヴィヤタンがここまで強い!?

「どういうことだ、アスモデウス、サタン!？」

私は愚かにも敵であるアスモデウスとサタンに問いただした。
速さで大罪一、それだけではなく防御力でも大罪一なのか……このレヴィヤタンは?

「……知る必要なんて……ない」

このとき私は、いや、「テストメント界律の守護神”全体が知らなかった。こいつらは代替わりをすればするほど、その“概念”が強化されていくということだ。

「そんなこと教える必要なんてないでしょう?」

問いただしはしてみたものの真つ当な返事なんてものは始めから期待していない。

「……ならばダメージを負わせることの出来る方法を取るだけだ」

神器、概念兵装程度ではレヴィヤタンにダメージを負わせられないということだ。

“グングニル”ともう一つ何かの神器を取り出そうとオリジナルスペルを唱えようとしたところで、強烈な胸騒ぎが起こった。脳裏に浮かんだのはシャルの姿。

「……シャル? おい、シャル。シャル!？」

リンクを通してシャルからの返答が来ない。

「うそ……だろ? シャルが……負けた……?」

ありえない。シャルが陸戦で完全敗北するなんてことが。大戦時、もし戦って負けるならシャルロットが良いと思うまでに認められた唯一の敵だった。

その彼女が……負けた?……信じるものか。

「いや、以前の地下でのようにリンクを妨害する術を持つペッカー
トウムがいるかもしれない。

ああ、そう考えればどうってことはない」

今はそう信じるしかないだろう。

シャルの安否確認や六課襲撃犯の捕縛のために今は……。

「貴様らを斃すのみ!」

地上の悲劇 後編

「これは予想外。こつも簡単に三番を討つことが出来るなんて」

許されざる怠惰ヘルフェゴールは壁に礫にしたシャルロッテを見据えそつ口にした。

ナンバーズ？、チンクからの応援要請を受け、すぐさまこの場所へと転移。

そしてシャルロッテの真正面から書物のページによる視覚遮断、そして昨夜取り込んだ許されざる傲慢ルシファーの剣による一撃。

許されざる怠惰ヘルフェゴールはこれで決まるとは思つてはいなかった。

もう少しシャルロッテが粘ると考えていたが、結果は今の奇襲で終了。

あまりのつまらない状況に許されざる怠惰ヘルフェゴールは嘆息。

しかしそれも許されざる傲慢ルシファーの“力”を取り込んだことでの勝利だった。

もし彼女一体分だけの“力”であれば結果もまた変わっていただろう。

「あああああああああああ！！！！！！！」

シャルロッテに止めを刺そうとしたところで、出入り口付近から少女の絶叫が響いた。

急に意識が朦朧とし始めた許されざる怠惰^{ヘルフェゴール}。

『俺は言った。三番だろうと四番だろうと取り込むと。今が良い機会だ。今なら三番を取り込み、俺の力とすることが出来る』

「ばか……な。いくら……霊格が落ちて……うぐ……人間になつていようと……」
テストメント
「界律の守護神。大罪がどうか出来るモノ……じゃない……あぐっ」

許されざる怠惰^{ヘルフェゴール}に取り込まれてもなお存在し続けた許されざる傲慢^{ルシファー}。このままでは危険と判断した許されざる怠惰はその場から転移、退却する。

しかし、この転移が彼女の自我による最期の行動となつてしまった。許されざる怠惰の自我は完全に消失。

彼女は許されざる傲慢に完全に乗っ取られてしまった。

“大罪”^{ベックカートゥム}間の問題を他所に、スバルと戦闘^{ナンバース}機人の戦いは続いていた。スバルと現在対峙しているのはチンク。すでにギンガはウエンディによつて拉致され、ノーヴェもそれについていった。

「邪魔……すんなああああ!!!!」

チンクに行く手を妨害されたスバルが再度叫ぶ。

そしてスバルの足元には水色のテンプレートが展開。

チンクは己の武装である防御機構を備えた灰色のコート“シエルコ

「ト」の支援によるバリア“ハードシエル”を展開。
しかしその強力なバリアもスバルの“振動破碎”を受け粉碎、チンクは吹き飛ばされる。

「ギン姉!!」

スバルはギンガを連れ去ったウエンディたちを追いかけようとするも、チンクがそれを許さない。

チンクのもう一つの武装スローイングナイフ“ステインガー”。
スバルの前面に展開されたそれにスバルを足を止めざるを得ない。

Protection

次の瞬間に襲い来るであろう“ステインガー”に備え、スバルの相棒“マツハキヤリバー”がバリアを展開する。

その瞬間、バリア目掛けて“ステインガー”が放たれた。

そして爆発がスバルとチンクの二人を巻き込む。

爆発によって起きた煙の中、スバルが覚束ない足取りで姿を現す。

防護服はボロボロで、左腕に大きなダメージを受けている。

それだけでなく“マツハキヤリバー”も火花が散るほどの損害を受けている。

「・・・かえせ・・・ギン姉を・・・かえせよおおお!!」

チンクはすぐそこまで来たスバルを見て目を瞑る。

それはスバルの激しい感情に堪えたゆえか、それとも己の死を悟ったためか・・・。

「セインさん到着っ!!」

そのとき、チンクには希望を、そしてスバルにとっては絶望を運んできた新手が現れた。

水色の髪をしたナンバーズの？、セインだ。

「助かった」

チンクはセインの救援に心底安堵してそう呟いた。

そしてセインの“ディーブダイバー”によって、チンクとセインがこの場から消えた。

それを見ていることしか出来なかったスバルはついに膝を折り地に跪く。

The main body was . . . The system rests

“マツハキヤリバー”も損害レベルの激しさにより機能停止した。戦闘によって荒れ果てたこの空間にスバルの慟哭の音が響き渡る。

「スバル!?!」

ここにきてようやくティアナを抱えたなのはが現れた。

あと少し。ほんの少しなのはが早く来てくれていれば、状況は変わっていたかもしれない。

なのはとティアナは、スバルの姿とこの空間の有様を見て悟った。すべてが終わわり、間に合わなかったのだと。

「スバル」

「・・・・・・・・スバル。・・・・・・・・？」

なのはは視覚の端に何か光ったものを捉え、ゆっくりと警戒しながら近づいていく。

“レイジングハート”を構え、いつでも戦闘に対応できるように。ティアナもスバルに寄り添いながら、片手で“クロスミラージユ”を構える。

「・・・・・・・・っ!!」

そしてなのはは見た。腹部を剣で貫かれ、壁に串刺しにされていた大切な親友の姿を。

「あ・・・ああ・・・あああ・・・シャルちゃん!!!!」

十 十 十 十 十 十 十

このおっさん強え。

あたしの攻撃が通らねえうえに、こっちは息切れしてんのに向こうはまだ全然余裕がある。

「む？ オーバーSが数人動き始めている。向こうの守りはもう復活したか」

ゼストって名乗ったおっさんが構えを解いた。

『グイータちゃん！ シグナムがこっちに!!』

ああ、それはあたしも分かる。
これで形勢逆転だ。シグナムが来ればどうにか出来る。

「ここまでか。撤退するでしょう」

おっさんがユニゾンを解く。

撤退するつもりらしいけどそれを許すあたしじゃねえ。

アイゼンの構えを解かずにおっさんの動きに注意する。

『ヴィータちゃん、上！！』

リインの言葉に応えて上を見上げる。

そこにあつたのは馬鹿でかい炎の塊とそれを下から支えるようにいる融合機。

「あたしがここで叩いとく！」

あの炎塊はやばすぎる。あんなのを受けたら無傷ただじゃ済まねえ。

「チツ」

あの炎塊が放たれる前に潰す。あたしは融合機を落とすために一気に飛んだ。

だけど、それより速くおっさんが立ちはだかった。

「くっ……な！？」

激突したあたしのアイゼンとおっさんの槍。

おっさんの槍があたしのアイゼンにヒビを入れた。

「はああああああ！！」

おっさんの槍はそのままアイゼンを砕いて、あたしを弾き飛ばした。ビルの屋上に叩きつけられけど思ったよりダメージが少ない。咄嗟にラインが防御魔法を使って助けてくれたようだ。

『野郎……。！？　ライン？　おい、ライン！？』

空を睨んだそのとき、いきなりユニゾンが解かれた。

あまりに突然だったからラインを呼んでみたけど返事がねえ。

そして目の前にラインが倒れるようにして現れた。

「ライン！　ライン！？」

何度も呼びかけるけどラインは目を開けなかった。

「シグナム……。ラインが……。アイゼンも……。！」

あたしは自分の無力さに……。泣いた。

十　十　十　十　十　十　十　十

今、私たちライトニングは六課に向けて空を翔けていた。

ロングアーチとの通信で隊舎が襲撃を受けていることが分かったからだ。

グリフィスよると、ルシルが救援に行く通信したものの未だ着いていないとのことだった。

それはつまりルシルのほうで何か問題が起きたということ。

だぶんそれはペッカートウムの仕業だと私は思った。
ルシルがそいつらに行く手を妨害されているなら、私たちが六課に
向かわないといけない。

「……っ」

遠く離れたところに光る何か。

私はそれを瞬時に攻撃による光だと判断してバリアを展開した。
案の定それは砲撃という攻撃だった。

「戦闘機人……」

視線の先には二人の戦闘機人。

「エリオ、キャロ。すぐに追いかけるから先に行つて」

ここで三人が足止めを受ける必要はない。

それに空戦である以上はエリオとキャロの二人には荷が重過ぎる。
エリオもそれが解つたのか、私を心配してくれたキャロを説得して
六課に向かつてくれた。

「バルディッシュ。サードフォーム！」

Z a m b e r F o r m

“バルディッシュ”を大剣状のサード、ザンバーフォームへと変形
させる。

「スカリエッティはどこにいる!?!」

私のその言葉を合図に戦闘が開始される。
紫色の髪をした戦闘機人は私の速さと大して変わらない。
そして何度目かの衝突のあとにもう一度問いただす。

「スカリエツティはどこだ!?　なんでこんな事件を起こす!?!」

「お望みでしたらいつでもご案内しますよ」

「もちろん、あなたが我々に協力してくれるのなのですが・・・」

そんな馬鹿なことは在りえない。

「彼は犯罪者だ。それも最悪の・・・」

だからこそ協力なんて選択肢はない。

「悲しいことを言わないでください。」

ドクターはあなたやあの少年の生みの親のようなものですよ?」

「あなた方の命は、ドクターがプロジェクトFの基礎を組み立てた
からこそ」

「黙れ!」

そんなこと聞きたくない。

「・・・仕方ありませんね」

そう告げた桃色の髪をした戦闘機人。

そして私たちの周辺に小さな光がいくつも立ち上っていく。

「またお会いすることにあると思います。そのときはゆっくりとお話を……」

「ああ、それからもうお気づきとかもしれませんが」

小さな光が集まって一気に発光、視界が戻ったときにはそこに戦闘機人の影はなく、私の耳に届いたのは紫色の髪をした戦闘機人と言葉。

『次はもうあなたは私たちに勝てません……』

逃げられた。不愉快さに歯噛みするけど、今はエリオたちを追いかけないと……。

十 十 十 十 十 十 十 十

「そおおらあああつ!!!」

サタンの強力なレーザーが、私の背後にある六課に向けて放たれる。私はそれを相殺、もしくは防御して六課へ向かうそれを止める。

「許サタンされざる憤怒ばかりに気を取られていると死ぬわよ？」

「くそが！」

アスモデウスの大鎌を“グングニル”で受け止める。

この夜闇を照らし出す火花が散る中、レヴィヤタンのすみれ色の砲

撃が迫る。

女神の聖楯
コード・リオン

上級防性術式を展開。砲撃を真正面から受けるのではなく逸らすようにすることで拮抗時間を減らし、聖楯の展開に必要な消費魔力を抑える。

「……………すごい……………」

レヴィヤタンの眩きが聞こえる。
いやはや、驚嘆の声をありがとうレヴィヤタン。

「なかなかやるのね欠陥品！」

「それはどうも！」

「!……………うぐっ！」

大鎌にさらに力を加えたアスモデウス。
“グングニル”でそれを捌き、アスモデウスの腹に魔力を籠めた蹴りをかます。

「そんなことも出来るんだな欠陥品よお!？」

「チツ」

知らしめよ、
汝の忠誠
コード
アプディエル

サタンのレーザー一斉掃射を、上下の穂先から5メートルとある蒼

い魔力刃を伸ばし、全長12メートル弱となった“グングニル”を前面で回転させることで弾く。

「ほら、そっちばかりだとお前の大切な居場所が消し飛ぶわよ？」

アスモデウスはレヴィヤタンの肩に手を置きながら告げた。

レヴィヤタンが手をかざしている方向には六課隊舎。

「貴様らあああ!!」

先程からこの三体は私への攻撃より六課隊舎を狙うような攻撃を繰り返す。

それが私にとっての弱点と知っているためだ。

こうなれば創世結界でも展開しようかと思ったとき、私の耳に届いてほしくなった声が届いた。

「ルシルさん!？」

「エリオ、キャロ!？」

フリードリヒに乗ったエリオとキャロの二人が上空に滞空していた。まずい。私と六課だけでなく、エリオとキャロまでが標的となってしまう。

そして私は見た。凶悪な笑みを浮かべたアスモデウスとサタンを……。

「さあ、どれを守る欠陥品？」

レヴィヤタンのぬいぐるみにすみれ色の閃光が集束。狙いは……

くそ、判らない。

サタンの前面にも黄緑色の閃光が生み出されていく。狙いは攻撃の性質上全てだ。

アスモデウスは大鎌を振り上げるように構えた。視線からして二人だ。

「どれが今宵で消えるのかな？」

「おおおおおおおっ！！！！」

アスモデウス、レヴィヤタン、サタンの三体から攻撃が放たれた。私はあとのことを考えずに行動。

六課に向けられたサタンのレーザー群は女神の聖楯ゴト・リンで防御。

レヴィヤタンとアスモデウスの攻撃がエリオとキャロに向けられたことを瞬時に判断。

フリードリヒを庇うようにして、術式の性質上、どうしても効果の弱くなってしまうもう一つの女神の聖楯ゴト・リンを展開。

聖楯とフリードリヒの間にこの身を挟み盾とした。そして襲い来る爆発と激痛。

「ルシルさん！？ ルシルさん！？」

聴覚を少しやられたようで、エリオとキャロの声が聞こえづらいいでも二人の声が聞こえるということは、二人を無事に守れたということだ。

そこだけは喜んでいいだろう。

「……無事か……二人……とも……？」

声が出しづらい。思っているよりダメージが深刻そうだ。

「僕たちは大丈夫です！ でも……でもルシルさんが……!!」

「ごめんなさい、ごめんなさい……ルシルさん！ わたしたちを……庇って……」

キャラのすすり泣く声が聞こえる。

安心させて、二人を六課に向かわせないと……いけないな……。

「大丈夫……だから。泣くな、キャラ。六課へ急ぐんだろ？ 早く行ってみんなを……助けてあげてくれ……」

私は笑えているだろうか？

「ルシル……さん。……はい、必ず！ 行くよ、キャラ！」

「エリオ君……。うん……。ルシルさん……」

フリードリヒの翼の羽ばたき音が聞こえる。

二人はちゃんと六課へ向かったようだ。

「……そんなボロボロの姿ではもう勝てないわよ？」

「その根性だけは認めてやるけどな」

黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ。

貴様たちはあの子達を狙い、そして泣かした。

「はあはあはあはあ……つ、楽に死ねると思つなよっ！！」

第二級粛清執行権限、制限十五秒時限解凍

現状において解凍を許可されていない第二級権限を、時間制限を設けての強制解凍。

使用する魔力はSSSランクの2ランク上のXランク。

二級権限の魔力で発動出来るのは、大戦時に活躍した名高い英雄たちの武装と術式、能力。

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

「くたばれえええッ！！ 真技！！」

雷神天震墜

“英知の書庫”^{アルヴァイト} から引き出したのは、私と蒼雪姫シエフィの戦^{むすめ}天使の一人、プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリアの誇る真技の一つ。

プリムの魔力光である黄金に輝く巨大な雷撃の塊を対象の頭上に落とす必殺の一撃。

「なに！？」

アスモデウスとサタンは驚愕の声を上げ、レヴィヤタンは静かに効果範囲から一人離脱。

そして“雷神天震墜”が海面と衝突。その瞬間、世界から音と光が消え失せた。

実際には、あまりの発光量と爆音の所為で五感が狂ってそう錯覚しているに過ぎないが。

残り七秒

知覚を研ぎ澄ましペッカートウムの居場所を探る。

ギリギリでアスモデウスとサタンが回避したことは分かっているからだ。

残り四秒

反応あり。全速力でペッカートウムのいる居場所へと飛ぶ。

「……っ!? うがあっ!?!」

捕らえたのはサタンの首。苦悶の声を上げるが知ったことが。覚悟しろ。貴様の終焉は今この場に訪れた。

残り二秒

「消えろ!?!」

真技・火葬煉棺
ルナティック・クリメイション

サタンの首を鷲掴みにしていた右手から紅蓮の業火が噴出、サタンを包み込む。

使用したのはプリムと同じ戦天使むすめの一人、ティーナ・ヒルド・ヴァルキュリアの真技。

数千度の炎熱に包み込み焼失させる術式だ。

サタンは抵抗する暇もなく消滅した。

気づけばアスモデウスとレヴィヤタンの二体の姿がない。
どうやら撤退したようだ……。あとは……。六課をどうにか
しないとイケないな。

エリオとキャロの乗るフリードリヒは、ルシリオンの言葉に従い六課を目指した。

そして二人の目に映るのは赤く燃え上がる六課の隊舎だった。

「……ひどい」

「……あれは……？」

その光景にキャロは悲しみの籠もった声で呟く。
キャロの後ろに座るエリオが隊舎から離れていく影を視認する。
それは召喚士ルーテシアと召喚虫ガリユーを乗せたガジェット？
型だった。

それだけでなくガリユーの腕の中にはヴィヴィオが抱かれていた。

「あの子……ヴィヴィオが！」

ヴィヴィオが連れ去られる光景を見たエリオは目を見開き思い出す。
かつての自分もまたああいう風に無理矢理両親から引き離されたこ
とを。

「ストラーダ！ フォルム・ツヴァイ！」

D?senform

エリオの言葉に答え、“ストラーダ”はデューゼンフォルムへと変形した。

ブースターの数がさらに増え、限定的な空戦を行えることが出来る形態だ。

「エリオ君！？」

「キャラ、フォローをお願い！」

エリオはヴィヴィオを取り戻すために、ルーテシアとガリユーへと仕掛けるつもりだ。

Explosion

フリードリヒから飛び降りたエリオは“ストラーダ”にしがみ付くように落下。

「ブースト！」

Start!

“ストラーダ2の言葉が発せられると同時にヘッドブースターが点火。

一直線にルーテシアたちの乗るガジェット?型に突進していく。

ルーテシアとガリユーはエリオの接近に気づき、ガリユーがその

キヤロとフリードリヒはバインドを仕掛けられ、エリオと同様に海中へと沈んだ。

バインドを仕掛けた主、戦闘機人ナンバースが？、オットー。少年にも見える彼女は黙ってそれを見ていた。

「さっきのはFの遺産でしたか。まあ、死んではいないでしょうが……」

エリオを海に叩き落したデイドがそう口にする。

それを聞いたルーテシアは「うん」と短く頷いた。

デイドは“残りの始末はガジェットがする”とルーテシアに告げ、ルーテシアはガリユーを率いて六課をあとにした。

キヤロは気を失ったエリオを海面から訓練場へと引き上げ終えて、肩で息をしていた。

傍に倒れているエリオと本来の姿から戻り小さくなった使役竜フリードリヒ。

『これより五分後に、上空ガジェットと航空戦力による施設への殲滅作戦を行います。』

我々の目的は施設破壊です。人間の逃走は妨害しません。抵抗せず、速やかに避難してください』

キヤロはそれを聞き、涙を流す。

“なんでわたしたちの大切な居場所を壊すのか？”と……。そしてキヤロを中心に召喚魔法陣が展開された。

「竜騎……召喚……。ヴォルテ……ール……！！！」

彼女の背後にさらに巨大な召喚魔法陣が展開。

そこから這い上がるかのように、人型のような巨大な竜“ヴォルテール”が姿を現す。

「壊さないで……。わたしたちの居場所を壊さないでええええ
……！」

キャロの叫びに応えるかのように“ヴォルテール”の口と両翼に集束されていく光。

そして放たれた三つの砲撃はガジェットを一瞬でなぎ払っていく。

十 十 十 十 十 十 十 十

『ミッドチルダ地上の管理局員諸君、気に入ってくれたかい？』

会議室に流れるスカリエツティの映像。

私は目の前にある小型モニターに映る燃え上がる隊舎を黙って観ているしかなかった。

『ささやかながらこれは私からのプレゼントだ。』

治安維持だのロストロギア規制だのといった名目の下に压迫され、正しい技術の進化を促進したにも関わらず、罪に問われた稀代の技術者たち。

今日のプレゼントは、その恨みの一撃とでも思ってくれたまえ。

しかし私もまた人間を、命を愛する者だ。無駄な血を流さぬよう努力はしたよ。

可能な限り無血に人道的に。忌むべき敵を一方的に征圧できる技術、それは十分に証明出来たと思う。

今日はここまでにしておくでしょう。この素晴らしき力と技術が必要ならば、何時でも私宛に依頼をくれたまえ。格別の条件でお譲りする……」

会議室にスカリエツティの不愉快な笑い声が響く。

私は怒りでどうにかなりそうな頭を必死に落ち着かせる。

「予言は……覆らなかった」

隣にいるカリムがそう言うけど、私はまだそうは思わん。

「まだや。機動六課は、私たちはまだ……終わってない」

十 十 十 十 十 十 十

私が六課に着いたときの光景は、たぶん二度と忘れないと思う。エリオは気を失っているのか座り込むルシルの左腕に抱かれていて、キャロはエリオとは逆の右側で、ルシルにしがみ付いて泣いていた。そんなルシルもまた防護服はボロボロで上半身はほとんど裸の状態だった。

「……エリオ……キャロ……、ルシル……」

「フェイトさん……わたし……わたし……ヴィヴィオが……」

泣き続けるキャロのところにまで駆け寄って、私はキャロをルシルと一緒に抱き締めた。

私が・・・私がもう少し早く来ていればこんなことにはならなかった。

「フェイト。キャロとエリオを頼む」

「ルシル！？ そんな体で何するの!？」

「決まっている。六課が燃えている姿なんてもう見ていたくない」

ルシルは私たちに振り返らず、六課へと飛んだ。

そしてここから見えたのは、六課を包み込んでいた炎が全てある一箇所に吸い込まれていき、遙か上空へと炎柱となって放たれ消えていった光景だった。

どこかの森の中、所々が砕け落ちた許されざる憤怒サタンがいた。許されざる憤怒はルシリオンの攻撃をその身に受けながらも未だに存在していたのだ。

彼は背を木に預け、もうどこにも無い右半身を崩れた目で見て、悪態をつく。

「ヤリヤガッタナ・・・ケツカンヒンノ・・・ヤロウ・・・」

その許されざる憤怒サタンに近づくと一つの影。

「・・・ア？ ベルフェゴール・・・チヨウドイイ。」

オマエノ・・・サイセイノチカラデ・・・オレヲナオセ・・・」

許されざる憤怒の言葉に許されざる怠情は答えない。
先程から微笑を浮かべているだけだ。

「オイ・・・ベルフェゴール・・・ナニカイツタラ　　オゴオア
ツ!?!」

許されざる憤怒の体が宙に浮く。
許されざる怠情の腕に貫かれて掲げ上げられているためだ

「ナンノツモリダ!?!・・・ベルフェ・・・ルシ・・・ファ
!・・・ダト!?!」

先程までは許されざる怠情だった人影が許されざる傲慢となっ
た。
左半分だけとなっている許されざる憤怒の顔が驚愕に染まる。

「オマエハ・・・ベルフェゴールニ・・・マケテ・・・」

死んだ。と最後まで口にすることは叶わなかった。
今度こそ許されざる憤怒は消滅した。“力”だけを奪われて・・・。

許されざる傲慢の姿が揺らぎ、次の瞬間には許されざる怠情に戻っ
ていた。

微笑みは次第に深くなり最後は大きく口を開けて笑いだした。

「クククク・・・ンフフフフ・・・ハアーツハツハツハツハツハツ
ハツハツ・・・!?!」

許ヘルされざるエゴる念情を模した許ルされざるシる傲慢の笑い声は暫く止むことは
なかつた。

地上の悲劇 ～後編～（後書き）

地上本部襲撃はこのようになりました。いかがでしたでしょうか？
シャルはベルフェ（略）に敗れ、サタンはルシファーに消され、ルシルはブチ切れて、
ギンガは拉致られ、大変な今回でした。

ルシルの魔術

女神の聖楯^{コード・リン}

ルシルの持つ防性術式の中で防御力上位第三位。
大きさを展開できる場所は任意で決定。
蒼い円の中に女神の祈る姿が描かれた軽く芸術的な盾。
あまりに複雑な術式のため、複数展開することが非常に難しい。

リンとは、北欧神話の13女神の一人で“護身”と言う意味を持つ
守護を司る女神。

女神第一位フリッグが特に目をかけている人間を守護することを役
目とし、

女神フツラと同様の密使としての役割でもある。特にフリッグが危
険を冒してまで護ろうとする人間を後見し弁護する女神。

知らしめよ、^{コード}汝の忠誠^{アプティエル}

対人中級攻性術式。

魔力刃を展開するというもの。素手でもOK、武器に付加させるも
OKな術式。

今回はグングニルの穂に付加させて、サタンの攻撃を防ぐ盾とした。

天使アブデリエルは「神の下僕」という意味を持つ、神に対して絶対的な忠誠を誓う天使。

天使ルシファーが他の天使たちを神に反逆する仲間として誘い、アブデリエルもまた誘われる。が、アブデリエルの神への忠誠心がそれを許さず、ルシファーを説得。

結局反逆したルシファーと戦い、最強とされたルシファーに強力な一撃を

見舞ったとされている力のある天使とされています。

複製術式

雷神天震墜：ANSUR

ルナティック・クリメイション

火葬煉棺：ANSUR

狂気の火葬の意味を持つ。

ANSURキャラクター

プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア

ヴァルキュリー

戦天使軍ランドグリーズ部隊隊長を務める女性型。

開発者であるルシオンとシェフィリスを「お父様」、「お母様」と呼び慕う。

雷撃系においては最強の戦天使。

ヴァルキュリー

ティーナ・ヒルド・ヴァルキュリア

ヴァルキュリー

戦天使軍ヒルド部隊隊長を務める女性型。

隊長でありながら特攻をかます超絶猪突猛進爆弾娘。

ヴァルキュリー

炎熱系においては最強の戦天使。

涙 (Lacrimae)

「……ハア……」

所々が焼けて壊されてしまっている六課の隊舎を見て、何度目かのため息。

ほんの十数時間前までは綺麗だった隊舎は、今はもう見る影も無く酷い有様だ。

「……ハア……」

またため息が出た。

ため息をするたびに幸福が逃げる、ってどこで聞いたことがあるけど、出るものは仕方ない。

ガジェットと戦闘機人による地上本部襲撃。

たったの十数分で本部の機能を停止させた手際の良さは、まるで施設や警備のすべてを知っているかのようで……。

戦闘機人戦でギンガさんは攫われて、スバルとシャルさんは大怪我。主力が出動して無防備に近かった機動六課も、私の目に映る様だ。

残っていたメンバーも重傷者が多く、エリオとキャロも戦闘機人によって撃墜。

ルシルさんもペッカートウムと呼ばれる連中と戦って、決して軽くは無い怪我を負った。

それだけじゃなくて、ヴィヴィオも攫われてしまった。

すべてにおいて最悪な状況と言って、正直私たちはこれからどうなるか分からない。

「酷いことになってしまったな」

そう背後から声がかかって振り返ってみると、そこにはシグナム副隊長がいた。

「シグナム副隊長……あの、病院のほうは……？」

「重傷だった隊員たちは峠を越えたそうだ。

だが……フライハイトは今もまだ予断を許さないらしい。

セインテストが治療に当たっているから大丈夫だと思いたい……」

「っ！ そう……ですか……」

昨日の事を鮮明に思い出す。

シャルさんがあたしの視界に入ったとき、事の重大さをやっと理解した。

シャルさんのお腹に剣が刺さっていて、壁に礫にされていたのだ。

そして担架に運ばれていくシャルさんを見て、あたしは気を失いそうになって……。

そのとき、余裕の無かったスバルでさえ声を失って、一緒に担架で運ばれていった。

運ばれていくシャルさんはほんの一瞬だけ意識を取り戻して、立ち竦んでいたなのはさんに一言囁いた。

立ち止まっている暇があったら、やれることをやりなさい

と。それを聞いたなのはさんはガジェットを排除するために空に上

がって、私も地上でのガジェット排除のために動き出した。

「高町隊長は？」

「中です」

シグナム副隊長になのはさんの居所を聞かれて答える。

「様子はどうだ？」

「いつもどおりです。しっかりお仕事されてます。攪われちゃった
ヴィヴィオの事とか、負傷した隊員たちの確認だけしたら、あとは
少しも……」

本当はなのはさんだって辛いはずなのに、隊長だから……きっと
……。

「そうか。こちらは私が引き継ぐ。お前も病院へと顔を出してくる
といい」

「あの、ですが……」

行ってもいいのだろうか？

今もまだ事後処理をしている最中だというのに……。

「行ってやれ」

「……はい。ありがとうございます」

シグナム副隊長の言葉に甘えることにした。

でも病院に向かうその前に、なのはさんに報告しておかないと。

『なのはさん。ティアナです』

『ああ、なに？』

念話となってしまうのは仕方ない。

『シグナム副隊長が現場を代わってください。ちょっと病院の方
に行ってください』

『そう。フェイト隊長も病院びいんに向かっているはずだから』

『はい。さっき窺った話って、スバルとかシャーリーさんに伝えて
も・・・？』

それは六課の今後の大まかな方針のことだ。

レリック捜査からスカリエツィー味の追跡に任務が変更になると
思う、とのことだ。

『そうだね。伝えて元気が出るようなら教えてあげて。判断は任せ
るよ』

『了解しました。いってきます』

『うん。気をつけて』

なのはさんとの念話が切れ、あたしはスバルたちが入院する病院に
向かった。

十 十 十 十 十 十 十

『ごめんね、ルシル』

シャルが静かに目を伏せながら謝ってきた。

しかしその前に、謝罪する態勢ではないような気がするんだが……
・まあ、いいか。

『謝られる理由が分からないんだが、何に對しての謝罪なんだ？』

ロッキングチェアに座りながら本を読むシャルに訊き返す。

『色々と迷惑をかけているから、かな……』

『………気になるな』

翠玉エメラルドの円卓を挟んで座るシャルにそう答えた。

シャルは顔を少し上げて、私に視線を向けることなく微笑をつくり、
そしてまた手にしている本へと再び視線を落とした。

現在、私とシャルの“意識体”せいしん があるのは創世結界“英知の書庫”アルワイト。
今は瀕死のシャルの“意識体”せいしん だけを“英知の書庫”アルワイト に移している
状態だ。

契約メタルリンクによって、私とシャルとの間に契約証ラインが繋がっているからこそ
可能なこと。

そのおかげで、こうしてシャルと話することが出来るというわけだ。

『さて、こうして話も出来るのだし、現状についておさらいといこ

うか』

『気になることが一つあるの。私を貫いた剣。あれはルシファアの剣で間違いなかった。』

でも、私に奇襲を仕掛けてきたのはルシファアじゃなくて、女だった。

ベルゼブブかベルフェゴールのどちらかなのは間違いはないはずなんだけど。

でも何でこの女がルシファアの剣を持っているのかが解らない』

シャルの記憶を抽出して、円卓の上に画像として浮かび上がらせる。浮かび上がったのは白髪と銀眼の女。

シャルの視覚を覆うのは……何かの文字が書かれた紙のような……本のページか……？

それを圧倒的物量でシャルを押し流し、視覚障害中に例の剣を投擲、撃破というわけか。

『今回はどいつもこいつも知らない顔ばかりだ。どれだけ代替わりしたんだろうな……？』

そしてこの剣、かなり強力な神秘で創造されている代物だった。

作成者はN O . ? : 断罪。ダムナテイオ 武装名は悪ふざけだルトウスそうだ』

ルシファアの剣、悪ふざけルトウスの画像も一緒に映し出す。

剣に関しては、複製能力を利用して解析した結果、判明したことだ。“悪ふざけ”。随分と馬鹿にしたネーミングだ。ふざけやがって。

『この女がルシファアの剣を持ち現れ、昨夜、持ち主であるルシファアは姿を見せなかった』

昨夜姿を見せたのはアスモデウス、レヴィヤタン、サタン、そして白髪の女。

白髪の女に続いて、私は円卓上に、確認されているヤツらの画像が浮かび上がらせる。

『このうち、斃したのはマモンとサタンの二体だよね?』

『そうだ。マモンは英雄ヴァルハラの居館に取り込み、サタンは複製真技で消した』

六体の画像の中から、マモンとサタンの画像だけを消す。

『あのさ、ルシル。私、意識が落ちる前に見えたんだ。

この女に重なるようにして嫌な笑みを浮かべたルシファアを・・・』

重なるようにして・・・か。

『この女がルシファアの剣を持つ理由・・・もしかしたらなんだけど、ルシファアがこの女に取り込まれたんじゃないかな?』

『取り込まれた? どういう意味だ』

そんなこと聞いたことがない。

『ルシルって、ペッカートゥムの分裂体と戦った経験・・・少ないでしょ?』

だから知らないと思うんだけど、ヤツら、斃れたペッカートゥムを吸収して強くなる、なんてことがあるんだ。

たぶん今回もその可能性がある・・・と、思う・・・』

確かに分裂体との戦闘回数は、他の守護神に比べて圧倒的に少ないのは事実だ。

私の契約は何でもありだからな。界律に呼ばれ、人間に呼ばれ……

その分、下位の“絶対殲滅対象”^{アボリユオン}との戦闘がどうしても少なくなってしまう。

『それが本当だとすれば、ルシファーがどうしても白髪の女に吸収されたか、だ。』

マモンやサタンのように私たちに斃された訳でもないのに……

『……ルシファーと白髪の女の間何かあった、ということ……だよね？』

私の推測が当たっていれば、だけど』

分からないな。しかし放って置いていいようなものでもない。

その辺りは慎重に構えておく必要があるな。

色々と思いを巡らせている中、シャルにずっと見られていることに気づく。

何か言いたそうな表情だ。

『……話変わるけど。私のダメージって……結構重い……のかな？』

視線を合わせて数秒、囁きような小声がシャルの口から漏れた。

私は腰掛けるロッキングチェアを揺らし、少し間を置いてから告げる。

『……君の容態は……まあ、悪い。』

あの剣には治癒阻害と魔力精製阻害などという阻害系の高位の概念がかけられている。

剣を君から抜いた今も、その概念に苦勞しながら治療しているよ』

ありのままを告げる。

『そっ……か。いつそのこと一度死んで、再召喚されたほうが早いのかな……?』

『馬鹿か？ そんなことをせずともちゃんと治してやるから安心しろ。

それにすぐに再召喚が行われるとは限らないうえ、召喚時の姿もどうなるかも分からない。

9歳になるかもしれないし、君の本来の体型として召喚されてしまう可能性もある』

『うっ……それは……!』

背を大きく反らして背もたれに強くぶつかったせいで、シャルの座っている

ロッキングチェアが激しく揺れた。

地に足を着くことで揺れを止めたシャルは、今度は軽く揺れるように優しく背もたれた。

『また9歳になったらどうする？ “小っちゃくなっちゃった”って言うてみるか?』

『うっん……』

どいぞのマジシャン風にそう言うてみた。

シャルは真剣に考えているようだが、そうならないために治すと言っているんだよ、シャル。

『そして本来の体型で召喚されたとき、だ。今の君の身長は確か160だったな。』

で、君の本来の身長は……』

『165cmだけど……。あー、5cmも差がある』

『そう。もし短時間で召喚された場合、その5cmは結構大きい。どう言い訳していいか全く検討がつかない。っと、君のスリーサイズは？』

『えっと、8さ……。って、何を言わせるかつ、コラアアアア
ー!!!』

場を和ませる冗談のつもりだったが、シャルは円卓に置かれていた本を手にとって、その本をオーバースローで投げてきた。咄嗟に首を反らして回避、だが二投目が存在していた。

『ぐはっ……。くっ、痛いじゃないか、シャル……。』

眉間にヒット。刺さるんじゃないかってくらいの威力だった。

本が眉間に刺さり死亡。いくら書物が好きな私でもそんな死因だけは遠慮しておきたい。

まあ、“意識体”であるため、死ぬなんて事はないが。

『まったくもう、全然関係ないでしょうが。あとさっきの数字は忘れなさい、オーケー？』

『イエス、ママ』

額に青筋を浮かべて半目で睨んでくるシャル。
両手を拳げの降参ポーズで素直に頷く。

『まあ、そういうわけだ。現状での再召喚は結構なリスクを負うことになる。』

もし165cmになったら、ミヨルニルで叩いて身長を無理矢理縮
小しないといけないしな』

『いやー！ そんなことされたら頭蓋骨が粉碎骨折するよっ
!?!』

両手で頭頂部分を抑えて、“イヤイヤ”って首を振っている。あ、
なんか可愛いな、それ。

『その前に雷撃で黒コゲ・・・のさらに前に吹っ飛ぶな。主に上半
身が・・・』

“天槌ミヨルニル”で軽くでも叩かれたら死ぬのは必至だからな。
当然これも単なる冗談だが。つまらなかつたか？ ああ、そうか・
。。。

『ねえ？ さつきからルシル、私をからかってばかりなんだけど・
・?』

『落ち込んでいる君を心配してのことだ。素直に受け取っておいて
損はない、と思う』

シャルは「うへえ」って言いながら円卓に突っ伏した。

『スモールな親切、ビッグなお世話だよ』

ルー 柴？とは突っ込まない。

突っ込みは私ではなく、はやての領分だからな。

『それに、だ。君は今の体で生きていたいだろ？

なのはたちと一緒に育ったあの体で、本契約が訪れて、そして終わるその時まで……』

『……そう……だね。うん、そうだ』

伏せていた体を起こして、本当に綺麗な笑顔を見せたシャル。

ああ、だからこそ必ず助けよう。

『だから安心して待っている。必ず治して起こしてやる』

『ありがとう、ルシル。あ、でも無理はしないこと。

ルシルまで倒れたら、みんなをヤツらから守れなくなるから』

『ああ……』

シャルの気遣いを、受け半分、流し半分の割合で頭に入れる。

こういうときにこそ無理をしなければ救えるものも救えないからだ。

『……それはそうとさつきから何を讀んでいるんだ？』

さつきから気になっていたシャルが讀んでいた本について聞いてみた。

『ん、ちよつとね……』

私に投げられて、今は床に落ちている本を拾ってみる。

“英知の書庫”^{アルヴァイト}に収められているのは、複製された術や能力、技、知識などが詳細に記された書物ばかりだ。

だからシャルが何を讀んで、その知識に取り込もうとしているのか興味があつた。

『これは……結界術式の……？』

拾つた本に記されているのは、私たちの魔術における結界術式に関すること。

シャルが結界？ 攻性特化の騎士であつたシャルと結界がどうしても結びつかない。

『創世結界、憧れだつたんだよね。自分だけの唯一の世界。その世界の王になれるというのが』

つまりは、シャルは創世結界の術式を組もうとしていたわけか……。

『いやいやいや、創世結界ってそう簡単に発現できるものじゃないぞ？』

世界に干渉する術式だからな。イメージをそのまま術式として組まないといけないし、世界からの修正に関しての術式も組む必要があるし……正直面倒くさいんだよ』

“^{ヒミコ}聖天の極壁”を形にするのに3年、それに与える効果の術式があまりにも複雑だつたために途中挫折して、今でも未完成のままだ。

その効果の術式を二つに分けることで完成したのが、“^{フレイザブリク}神々の宝庫

”と“英知の書庫”だ。
“神々の宝庫”は原型があったおかげで1年、“英知の書庫”は1年半、“英雄の居館”は5年かかった。
複製の能力があったからこそそのそんな短期間で完成できたものだ。

『それくらい解かってるって。単なる暇つぶしだから』
片手を軽く振りながら、それでも別の結界関連の本を読み出すシャル。

暇つぶしで創世結界って……。当時、創世結界を目指していた連中が聞いたら卒倒するぞ？

『それとお願いがあるの。スバルに“ギンガを守れなくてゴメン”
って……』

『……シャ』ごめん。やっぱりいい……そうだな』

私の言葉に被せるようにして、シャルがそう告げた。

『こればかりは自分で言わないとダメだよな。』

だからさっきの忘れて。私が治って起きたら、ちゃんと私の口から言うから』

『了解した。それじゃあ、しばらくここで休んでいろ』

『休むも何も、体が意識体じゃあまり意味ないけどな』

『違くない』

目の前に霞がかかり、“英知の書庫”が消えていく。意識が現実へ

と戻っていくためだ。

『ありがとう』

最後の最後でシャルから感謝の言葉。

その表情は泣き笑い。私は両目に浮かぶ涙をハッキリと見た。

随分とシャルは涙脆くなったものだと思う。それは良いことだとも思う。

というか、そういうのは治療が終わってから言ってもらいたいものだな。

「……待っている、シャル」

目を開けるとそこはすでに現実で、私の前にはベッドに寝かされたシャルの体。

ベッドを中心にアースガルド魔法陣が展開、そしてルーンの円環がベッドを幾重にも覆っている。

個室であるこのシャルの病室に、簡単な儀式の祭壇を作り出している状態だ。

「……まったく、死に掛けている人間の顔じゃないよな」

シャルの顔は安らかな寝顔だが、容態はかなり重い。

剣に貫かれ、孔の開いている腹部を浄化作用のある“ウルザブルン”の泉水で覆い、阻害概念を無理矢理浄化、そのうえで女神コード・エイルの祝福をかける。

これを四時間前からやり続けている。正直ここまでの長丁場の治療行為は初めてだ。

「はあはあはあ……。まずい、目眩が……。」

本来なら上級魔術である女神コード・エイルの祝福は使用できず、“ウルザブルン”の泉水もそう易々と使っていないものじゃない。(すごい貴重だからな)

それを無理して使っているために魔力も限界に近い。

昨夜、怒りに任せて使用した第二級権限の無許可解凍、そして制限されている上級術式の一つである女神コード・リンの聖楯、及び高位複製術式の使用のペナルティの所為もある。

それにしてもいい加減に上級術式の使用を完全に認めてもらいたいものだ。

そうすればこんな苦労なんてせずに済むというのに……。

「ああ、くそ。一度休みを入れないと本当に倒れかねないな」

ベッド付近に置いてある椅子に腰掛ける。

四時間続けても孔が塞がらない。その概念の強さはまるで“呪神剣
ユルソーン”並だ。

シャルと同様に、私の肉体に孔を開け、不死と不治の呪いをかけた
魔造兵装第二位の魔剣。

その所為で私は“テストメント界律の守護神”となり、今もこうして戦い続けている。

全ては呪いを解き、人間に戻るために、だ。まあ、それがいつになるか分からないが。

「……すぐに戻る。少し待っていてくれ、シャル」

ふらつく足に活を入れ、何か口に入れておくために病室の扉に向かう。

少し離れていても泉水と女神コード・エイルの祝福は途切れない。

だからと言ってそう長く離れるようなことはしないつもりだ。

「ああ、ザフィーラやヴァイスたちも重体だったな。

急いでシャルを治してそっちのほうの治療にも参加しないと……
おっと「キヤ!?!」ん?」

扉が開くと同時に蹴躓いて、扉の向こうにいた人にもたれかかってしまった。

短い叫び声は女性のもの。悪気はなかったとはいえ悪いことをしてしまった。

「ルシル!? 大丈夫、ルシル!?!」

「ああ、フェイトか。ごめん、すぐに退く」

私を受け止めていたのはフェイトだ。

おそらくエリオやキヤロ、ロングアーチスタッフの見舞いに来たん
だろう。

「待つて! 顔色が悪いよ、ルシル! もしかしてあれから休んで
いないの!?!」

フェイトが私を心配するが、その前にフェイト、ここがどこだか分
からないわけじゃないよな?

「フェイト。心配してくれるのはありがたいが、少し声のボリューム
を下げような。

この区画一帯は重体患者のいる病室が集中している」

「あ、ごめんなさい」

いや、そこまで沈まなくてもいいと思う。

それにしてもフェイトはこんな奥にまで何をしに来たんだ？

そう考えながら廊下に設けられているベンチに座る。

思っていた以上に足に力が入らないし、いつまでもフェイトに支えられているのも、男としてへこむからだ。

「フェイトはエリオたちの見舞いか？」

「うん……」

力のない返答。やはりフェイトも相当疲労が溜まっているようだ。無理もない。昨夜はいろいろな事が一度に起こりすぎた。

「……しばらくシャルの治療に入るから、六課の仕事は手伝えない。

すまない。だからそのことをはやてとなのはに伝えておいてくれ」

そう言って立ち上がる。が、それも一瞬のこと。

すぐにふらついて倒れそうになる。

「あ、ほら！ ルシルだってちゃんと休まないダメだよ！？」

再度フェイトに支えられた。

「休んでいる暇はない。シャルの治療が終われば、ヴァイスとザフィーラの治療もしないといけない」

「っ！」

フェイトの肩を掴んで離れようとしたら、フェイトが私を無理矢理ベンチに座らせた。

こうも簡単に力負けするとは……ここまで弱っているのか、今の私の体は……。

「……こんなフラフラで何ができるの、ルシル？」

こんな無理してルシルまで倒れたら……私は……私たちは……」

紡がれていくフェイトの言葉に、気づかない程度の嗚咽が紛れ込んだ。

私は久しぶりに見た。フェイトの涙を。

私の横に座るフェイトが、私から視線を逸らして俯いた。

「……すまな　あ痛あつ!？」

おもいつきり頭を叩かれたと思ったら、気づけば視界が反転して……
……膝枕？

あれえ？　フェイトの動きが全然見えなかったのも疲れの所為ですか？

「少し……少しだけでいいから休んで、ルシル。」

そしたら私も安心するから……お願い……」

横になつたら一気に眠気が襲ってきた。

ああ、シャルにはすまないが少しだけ、ほんの少しの間だけ休ませてもらおう。

それにしても膝枕なんて実に懐かしい。

思い出すのは幼少時に何度かゼファイ姉様にしてもらって……

そして……。

「……シェフィ……」

彼女にも何度かしてもらったつけ……。

あのとき言い出したのはシェフィなのに照れて可愛かったなあ、本当に。

記憶と現実が混ざりながらも、私はすぐに眠りに落ちてしまった。

十 十 十 十 十 十 十

シャーリーたち、みんなのお見舞いを終えてシャルの病室へと向かった。

シャルの受けた怪我は魔法が効かないことが分かって、すぐにルシルが呼ばれた。

ルシルだって決して軽い怪我じゃないのに、それでもシャルの治療を始めた。

「私は大丈夫だ。みんなに比べたら軽傷だよ」って言って。

ルシルはたぶん、ううん、絶対無理してるに決まってる。

ルシルは昔からそうだから。そこだけはなのはに似て困る。

少しは心配する方の身にもなってほしいかも。

この病院の奥、重体患者の病室が集中する区画のさらに奥に来た。

そこにあるシャルの病室の扉には面会謝絶と書かれた札が掛けられている。

そして中から微かに魔力が漏れてきている。この感じは間違いなくルシルの魔力だ。

何故かそれだけは解ってしまう。けどそれが何か嬉しい。

そしてルシルが抱きついてきた（違います）というハプニングがあったりして、今は私の膝枕でぐっすりと眠っている。

ほとんど力づくでの膝枕だったけど、それでもルシルは大人しく眠ってくれた。

でも、ルシルが眠りにつく直前に一言呟くようにして、“シェフィ”って口にした。

「シェフィ……。初めて私と出会った時も私を見て、そう言っ
驚いてたよね……？」

ねえ、ルシル。シェフィって誰？ ルシルの心を占めている人って……
どんな人……？」

ここまで疲れ果てていて、眠りにつく直前ということとはほとんど無
意識に近いものだと思う。

それほどまでに大切な人の名前なんだろうか……？

聞きたいようで聞きたくない。知りたいようで知りたくない。

聞いたら、知ってしまったら何かが壊れてしまうような気がするか
ら。

「フェイトさん……。あ、ルシルさん……。眠って……。いるん
ですか……？」

エリオとキャラコが廊下の陰から歩いてきた。

「うん。海上での戦いから、たった今まで寝ずにずっとシャルの治
療をしたから。

疲れの所為もあって横になるとすぐに眠っちゃった」

私の腿の上にあるルシルの髪を撫でる。
昔はルシルがよくこうしてくれたけど、私がルシルにするのは今日が初めてだ。

「ルシルさん。・・・シャルさん、大丈夫ですよ？
きつと目を覚まして、また笑ってくださいますよね？」

キャラが涙声で聞いてきた。
エリオはそつとキャラの手を取って「大丈夫」って慰めてる。

「エリオの言うとおりだよ、キャラ。シャルは絶対に大丈夫。
だって私やなのは、はやての親友だよ？　すぐに元気になってくれる」

「・・・はい」

それからルシルが起きるまでの間、私たち四人はベンチに寄り添うようにして座って時間を過ごした。
それはまるで家族のようで、いつか私が手にしたい未来の姿だった。

「寂しくなってしまうものだな、お前たちも」

スカリエツティのアジトの通路を歩くトーレがそつ口にする。

「そうね。残りは私を含めた三体だけ。正直ここまで損害を被るなんて思ってもいなかったわ。」

許されざる暴食がいればもう少しはまともに殺り合えるものだけどヘルゼンフ

トーレに答えるのは許されざる色欲だ。アスモテウス

大罪の中でも彼女が一際ナンバーズとの関わりが深い。ベッカートゥム

そのためにルーテシアやゼストのような扱いは許されざる色欲にはアスモテウスない。

「相手は一体何者だ？ お前たちのような存在と戦えるとは……」

「護ると銘を打っておきながら害するという二律背反の矛盾存在。

そう理解しておきながら、気づかないフリをしている愚かで哀しいお人形たち。

わたしたち 霊長の審判者を絶対殲滅対象と呼ぶ名ばかりの神さまアホリユオン

許されざる色欲の返答に眉を顰めるトーレ。アスモテウス

「どちらにしても終わりは近い。それまでは生き残らないとね……」

そう言ってトーレの前から許されざる色欲の姿が消えた。アスモテウス

一人そこに残されたトーレは呟く。

「終わりは近い……か」

アジトの別区画には、ルーテシアと許されざる嫉妬レヴィヤタンがいた。

「・・・ルーテシア・・・」

ルーテシアの見つめる視線の先には、??とある生体ポッドの中に
浮く一人の女性の姿。

それを先程から見続けるルーテシアに、レヴィヤタン許されざる嫉妬は彼女の名
前を呼ぶ。

「あー、ルーお嬢様、レヴィお嬢様。 11番、ウエンディっス！」

その二人に近づいて声をかけてきたのはウエンディ。

ルーテシアと許されざるレヴィヤタン嫉妬は、ウエンディのほうへと振り向く。

「そんでこつち、8番オットーと12番ディード」

ウエンディに紹介されたのは、エリオとザフィーラを撃墜したディード。

キャロとフリードリヒにバインドを仕掛け、六課を損害させたオットーの二人だ。

ルーテシアは「うん」とだけ答え、許されざるレヴィヤタン嫉妬は「よろしく」と答えた。

オットーとディードも「よろしくお願ひします」と二人に頭を下げた。

「これ、ルーお嬢様のお母さんなんでしたっけ？」

「らしいよ・・・」

ウエンディが、ルーテシアの見ていた女性を指してそう言うが、ルーテシアの返答は曖昧なものだった。

それを不思議に思ったデイードが「らしい？」と訊き返した。

「この人のこと、覚えてないから」

ルーテシアの返答を聞いたウエンディは、“ やっっちゃった ” みたいな顔をして、オットーとデイードに振り向くが、その二人は顔を逸らしてウエンディを見捨てた。

そしてウエンディに向けられた許されざる嫉妬レヴィヤタンの視線も何気に冷たい。

「あ、いやあ、まあ、こちらのお母さんも適合するレリックコアが見つければ、ちゃんと復活されるんスよね？」

「ドクターからはそう聞いている。11番のレリックが見つければ、この人は目を覚ます。」

目を覚ましてお母さんになってくれれば、わたしには心が生まれるんだって……」

ルーテシアの言葉が途切れると同時に、許されざる嫉妬レヴィヤタンは空いている左手でルーテシアの右手を握った。

「ルーテシア……大丈夫。……わたしも手伝うから……だから……がんばろう……」

「ありがとう、レヴィ……」

ルーテシアはしっかりと手を握り返す。

その二人を見ていたウエンディもその気になりだした。

「そうっスね！ あたしたちも今回のことが全部終わったら手伝う

っスよ！

ねー、オットー、デイド？」

「はい。私たちが宜しければお手伝いさせていただきます」

デイドが答え、オットーも頷くことで応えた。

通路を歩くのはスカリエッティ、ナンバー？ウーノ、そして許されベルフざる怠情の三人。

スカリエッティは先程から笑みを浮かべ、それに続くウーノはレリツクのケースを持ち、許されざる怠情ベルフはその二人の後について少し離れて歩く。

そのためスカリエッティとウーノは気づかない。

許されざる怠情ベルフの視線がケースに向けられていて、その顔に浮かべられている微笑に。

そして三人がたどり着いたのは小部屋。

そこにいたのは診察台のようなところに繋がれて泣き叫ぶヴィヴィオ。

そしてナンバーズの？クアットロと、？ディエチだった。

「どうだい、いけるかい？」

「はい。バイタルは良好、魔力安定も良いです。移植の準備は終わりました」

ドクターに答えるデイイチ。
ヴィヴィオはスカリエッツィの登場でさらに泣き叫ぶ。

「スカリエッツィ、この子、あなたの顔が怖いから怯えている。
少しの間だけでも笑っていたほうがいいのかもね」

「ひどいな、ヘルフェゴール許されざる怠惰」

ヘルフェゴール許されざる怠惰の言葉にスカリエッツィは冗談ばくシヨックを受ける。

実際にはなんとも思っていないのがこの男だ。
クアットロの強烈な視線を無視しながら許されざる怠惰はヴィヴィオへと近づぐ。

「ひつ・・・ママああ！・・・パパああ！・・・マ」

ヘルフェゴール許されざる怠惰の手が額に置かれ、その銀の双眸に魅入られたヴィオは、急激に大人しくなり深い眠りについた。

「これで少しは静かになった。やるなら今の内におきなさい」

「ふむ。別に構わなかったのだが、まあ、煩すぎるよりはマシか」

ウーノの持っていたケースが開封され、その姿を現したレリック。

「さて、始めようか。聖王の器に王の印を譲り渡す」

スカリエッツィの両手の間で赤く輝くレリック。

そしてそれを見つめるのは許されざる怠惰。ヘルフェゴール

その口は何らかの言葉を紡いでいる。

しかし、この場にいる他の四人には聞こえてなく、気づいてもいない。

今、この場で許されざる怠情ベルフェゴールを模した許されざる傲慢ルシファーの計画が着々と進んでいるということに。

「ヴィヴィオ。君は私の最高傑作になるんだよ」

さらに輝きを増していくレリック。

そして許されざる怠情ベルフェゴールの口は閉じられていた。

彼女が紡いでいた言葉、それは・・・

Dum fata sinunt vivite laeti
／運命が許す間、喜々として生きよ

襲撃を受け、機能していない隊舎と職員寮の代わりとして用意された宿舎。

その宿舎の外の一画、そこになのはが一人立っていた。

その姿に気づいたフェイトは、「なのは」と声をかけ近づいていく。なのはもフェイトの姿を捉え「フェイトちゃん」と呼び返す。

「どうしたの、こんなところで？　もしかしてヴィヴィオのこと、考えてた？」

「・・・うん。約束、破っちゃったなって・・・」

なのはが思い出すのは、地上本部警備の任に就くその夜、ヴィヴィオと指切りをしたこと。

「私がママの代わりだよ、って。守っていくよ、って約束したのに傍にいてあげられなかった。

守ってあげられなかった！ あの子、きつと泣いてる！！」

なのはの目から涙が溢れ頬を伝っていく。

黙ってなのはの言葉を聞いていたフェイトは、なのはへと駆け寄って抱き締める。

彼女の目にもまた、涙が浮かんでいた。

「ヴィヴィオが一人で泣いてるって、悲しい思いとか、痛い思いしてるとかって思うと体が震えてどうにかなりそうなの！
今すぐ助けに行きたい！ だけど・・・私は・・・」

「大丈夫。ヴィヴィオは絶対大丈夫だから。だから助けようみんな
で。私たちのヴィヴィオを」

十 十 十 十 十 十 十

本局の、ロッサとの待ち合わせの場所へと急ぐ。

「はやて！」

「ロッサ！ ごめんな、お待たせや」

どれくらい待たせてしまったやろか？

待ち合わせをした約束の時間は結構過ぎてしまつとる。

「さすがのはやてもちよつと元気がないかい？」

「うん、まあ、そやね。ギンガやヴィヴィオも攫われたんは大失態や。」

部隊員にも怪我させてしもたし、協力者のシャルちゃんにも・・・悪いことした・・・」

ギンガとヴィヴィオの拉致。

大切な仲間も大怪我を負つて、親友のシャルちゃんは今も死線を彷徨つとるつてシグナムから聞いた。

部隊長としてこんなん許されることやない。

「そやけど持つていかれたものは取り返すし、今度は絶対ちゃんと守る」

だからと言って挫けてたらみんなに合わせる顔がない。そやから私は折れない。

「うん。落ち込んでやる気は減つてない。なかなか立派だ」

そう言つて私の頭を撫でるロツサ。

「夜天の主として、六課の部隊長として当然や！」

「・・・しかし、本気なのかい？」

はやてとクロノ君の頼みだから許可は何とか取つたけどさ」

これが本題や。私とクロノ君がロツサに頼んだこと。

廊下の窓から見えるのは、次元航行船、L級艦船第八番艦アースラ。私たちが昔からお世話になっていた思い出深い艦。

「隊員たちの住居や生活空間も含めて本部は絶対必要やし、今後を考えれば移動できる本部のほつがええ」

そのためのアースラ。

「アースラ、お休み前にもうちちょっとだけ、私たちと頑張ってたな」

涙 (Lacrimae) (後書き)

はい、今回も読んでいただきありがとうございます。

気がつけば50話に到達。本当に良く続きました・・・驚きです。まあ、書きたいシーンを終えるまでは諦めるつもりなんてありませんけどね。

さて、シャルを前回で墜した理由は・・・ルシルの治療能力封じ。

シャルの治療が不要であれば、ルシルは重体なヴァイスとザフィーラを

即完治させてしまいます。ダメですよ、それは。

その対策のためにシャルにはあっさりと墜ちてもらいました・・・すいません。

ルシルの魔術

コトト・エイル
女神の祝福

補助系上級治療術式。死んでいなければ、どんな怪我や病気を治すことが出来る。

が、自分に術をかけることは出来ない。

この術式以上の神秘を備えたダメージには多大な魔力を消費し、術者に長時間の

眠りを与えてしまう副作用が現れる。

8年前、ルシルは本来自分にかけることの出来ないこの術を使い、右目の視力を失ってしまった。

北欧神話では女神の一人に数えられるエイル。エイルの名には「援助」や「慈悲」の意味がある。死者すら復活させてしまうという話。

ウルザブルンの泉水

魔道世界アースガルドの中心に聳え立つ塔“ユグドラシル”の最下層に位置する

戦天使統括システム“ノルン”が設置された泉から採った聖水。

強力な浄化作用を持ち、半端な呪いなどの概念なら無効化することが出来る。

北欧神話では「運命の泉」の意味を持つ、運命の三女神であるノルンが集まる泉。

ノルンの3人はこの泉から水を汲みユグドラシルにかけ世界樹の修復を行っている。

また、神々はこの泉の周りに集まることもあり、会議を行う場所でもある。

聖地より蘇る翼(前書き)

丸一日の休暇を使ってこの程度でしたか・・・。

聖地より蘇る翼

ミッドチルダ南部アルトセイム地方森林地帯 9月16日 AM
02:10

「態々こんなところに呼び出してどういつもりかしら？」

かつて“時の庭園”のあつた地にて、一人佇むのは許されざる色欲だ。

彼女は、許されざる怠情に、この場へ呼び出されていた。
しかし約束の時間になろうとも許されざる怠情は現れない。

「……遅いわよ、許されざる怠情」

許されざる色欲の振り向いた先に許されざる怠情はいた。
いつも手にしている本を片手にゆっくりと歩いてくる。

「そう怒る必要もないじゃない」

「怒ってなんかいないわ。ただ、このような場所に呼び出す必要があるのかどうかには少しばかりの苛立ちがあるのだけだね」

そう言って許されざる怠情から自分の背後にある平野へと視線を移す。

「……そう」

許されざる怠情の表情に変化が現れた。それは笑み。

右手に手にしている書物をゆっくりと上げ、ページを開いていく。

「……それで、許されざる怠惰。私にはな　　っ!？」

アスモデウス
許されざる色欲は突如襲い掛かってきた無数のページによって吹き飛ばされた。

しかし吹き飛ばされている最中に許されざる色欲は大鎌を手にしてページを裂いていく。

「どづいつつもり、許されざる怠惰!？」

左側の髪を団子に結っていた鎖が切れ、その長い真紅の髪が風に靡く。

それでもページの勢いは止まることなく、次々と襲い掛かってくる。アスモデウス
許されざる色欲はそれを裂き続けながら許されざる怠惰に突進していく。

「さすが許されざる色欲。今で決めるつもりだったけど簡単にはいかないか」

そこまで迫った大鎌をバックステップで回避する許されざる怠惰。ヘルフェゴール
お互いの攻防が一度止み、この場に静けさが戻る。

「答えなさい。今のはどづいつつもりで攻撃をしてきたのかを？
返答によっては斃すしかないから、素直に、かつよく考えて答えなさい」

「答え……ね。それが必要なことだから。私は“力”がほしい。だから手っ取り早く身内の“力”を手にしていくのが効率のいい方法」

それを聞いた許されざる色欲の表情が、怒りのものから呆れに変わる。

しかし許されざる怠惰の表情は真剣。

嘘や冗談ではないことは許されざる色欲にも理解できた。

「何を馬鹿なことを言うのかしら。それなら大罪にもて戻ればいいだけのこと。

それを態々こんな面倒なことをしなくても「それは違う」・・・なに？」

言葉を遮られた許されざる色欲の目に鋭い光が宿る。
許されざる怠惰は笑みを浮かべて言葉を紡いでいく。

「それではダメ。私は大罪にベックカートゥム戻るのはごめんだから。それに、それではいつまで経っても番外位のまま。

私は正式な数字を持ちたい。そう、今を空席として座に着く為に“力”がほしい」

今度こそ許されざる色欲の表情が驚愕へと変わる。

許されざる怠惰の目的は己の存在の昇華。

そのうえでの正式数を持ち、他の絶対殲滅対象と対等になる。

「・・・それは無理な話よ。大罪の“力”をわたしたち集めたくらいで正式数にはなれない。

それだけでは圧倒的に概念が足りていない。あなたの考えは初めから破綻しているわ」

許されざる色欲は静かに告げた。先程までの怒りや呆れ、驚愕の表情はどこにもない。

あるのはただ憐憫の眼差しだけだ。

「……確かに大罪の“力”だけなら足りないのは明確。けど、この世界には大罪以上の“力”と概念を持つ存在がいる」

「っー！ 界律の守護神を取り込もうというの、許されざる怠惰！？」

アスモデウス
ヘルフェゴール
許されざる色欲はあまりの話に声を荒げる。
許されざる怠惰は「クスリと笑い、その銀眼の視線を向ける。」

「霊格が落ち、人間へと成り下がっていても界律の守護神には変わらない。
ならあの二柱を取り込んでしまえば、さらに一步、私は正式数に近づける」

「……そう。でも私はお前に取り込まれるつもりはない。たかが怠惰と傲慢如きが、色欲と強欲に勝てるとも思ってる？」

ヘルフェゴール
アスモデウス
許されざる怠惰に対しての二人称があなたからお前へと変化。
許されざる色欲にとって、許されざる怠惰はすでに己の敵としたからだ。

「二番目と三番目のあなた。そして私は五番目と六番目、そして

ヘルフェゴール
アスモデウス
許されざる怠惰はゆっくりと左手の人差し指を許されざる色欲に向ける。

「
憤怒」

「っ！！！？」

人差し指から放たれる黄緑色の無数のレーザー。

アスモテウス許されざる色欲の表情は、この日何度目かの驚愕に染まる。

彼女の思考にあるのは、“何故？”、この一つだけとなってしまうている。

「くっ！ 何故許されざる憤怒の“力”を持っている！？」

今代の中で最も接近戦に強い許されざる色欲は、そう叫びならもレーザー群を裂いていく。

「四番に敗れてもなお存在していた許されざる憤怒を“俺”が吸収したからだ」

「ルシファー許されざる傲慢！？」

アスモテウス許されざる色欲の混乱は頂点に達していた。

ヘルフェゴール何故許されざる怠惰に敗れた許されざる傲慢がいるのか？

ルシファーその一瞬の混乱によって生み出された隙が勝敗を決してしまっていた。

「うぐあー！？」

アスモテウス許されざる色欲を貫く四本の剣“ルトウス悪ふざけ”が鈍く光る。

アスモテウス貫かれたところより溢れるのは血ではなく真紅に輝く粒子。

アスモテウス許されざる色欲を構成しているモノが静かに乖離していき崩壊していく。

さらに追撃するかのように、無数のページが許されざる色欲を囲ん

でいく。

その衝撃でもう片方である右側の団子が解け、地面に着くほどの真紅の長髪が露になる。

「……あ……あ……あ……あ……ルシ……ファ……」

「安心しておけ許されざる色欲。大罪の当初における目的も完遂させる。」

これは俺個人の目的だからな。あの御方の邪魔をするような真似だけはしない」

許されざる色欲の構成していたモノが全て粒子となり、その姿が消滅した。

そしてその粒子を含めた許されざる色欲の“力”が許されざる傲慢へと流れ込む。

「お前の役目はまだある。ゆえに後で再構成するからな、許されざる色欲」

許されざる傲慢は許されざる怠惰へと姿を戻した後、左胸を強く押さえ、静かにこの場から姿を消した。

十 十 十 十 十 十 十

ミッドチルダ中央区画海上艦船アースラ内 9月19日

「シャルちゃん、ほんまにもう大丈夫なん？」

「おかげさまで。ルシルの治療のおかげで無事に完治したよ。完治するまでに四日もかかるなんて思いもしなかったけど……」

「ですが本当に良かったです。僕や六課一同心配していましたから」

「ありがとう、グリフィス」

アースラに本部を移して六日目の今日。

これから今後の方針について隊員たちと話すために、グリフィス君を含めた三人で廊下を歩く。

シャルちゃんは、二日前には治療を終えて私たちと合流した。

シグナムやエリオと模擬戦をして鈍った体を鍛えるとか言い出して、なのはちゃんたちに止められてたけど、聞かずに実行。

病み上がりというのにシグナムと相打ちというあたりがすごいと思う。

「……ルシル君はどないや？ 二日間眠りっぱなしらしいけど？」

「うん。私の所為で無理をさせちゃったことの反動だね。」

私のもう少ししっかりしていればよかったんだけど……」

ルシル君はシャルちゃんの治療を終えてすぐに死んだかのように倒れた。

今もシャルちゃんの部屋で、目覚めがいつになるか分からない眠りにについている。

俯いたシャルちゃんは少し黙って、そして顔を上げて私を見た。

「ごめん、はやて。ルシルが起きていればザフィーラやヴァイスのことも治療できたのに」

「それもう何回目や？ 気にしたらあかん言うてるやん。
今回のことはしゃあない。それにザフィーラとヴァイス君ももう大丈夫や」

ザフィーラの意識は戻らなくても念話には答えてくれるて、シヤマルも言うとった。

ヴァイス君も手術は無事に成功したとも報告を受けとるしな。

「シヤルちゃんが何でも背負い込もうとするんはなのはちゃんの影響やね。

一人で背負ったらあかんよ。私たちみんなで背負うことやからな」

「ああ・・・そうかも。ごめん、ありがとう」

「うん！」

話しているうちに会議室前。

部屋の中に入って、みんなが揃っていることを確認。

シヤルちゃんはなのはちゃんとフェイトちゃんの間イスに座って、みんなに会釈してる。

私も一番手前に座って、グリフィス君は私の後ろについた。

「ちょうどよかった。今、機動六課の方針が決まったところや」

「地上本部による事件への対策は、残念ながら相変わらず後手に回っています。」

地上本部だけでの事件調査を強行に主張し、本局の介入硬く拒んで

います」

グリフィス君から、地上本部の現状が告げられる。

チラッと見たシャルちゃん表情は完全に呆れ果てているといった感じ。

「よって、本局からの戦力投入はまだ行われません。

同様に、本局所属である機動六課にも捜査情報は公開されません」

「そやけどな、私たちが追うのはテロ事件でもその主犯格としてのジェイル・スカリエッティでもない」

モニターを起こしてレリックの画像を移す。

「ロストログア、レリック。その捜査線上にスカリエッティとその一味がおるだけ。

そうゆう方向や。で、その過程で誘拐されたギンガ・ナカジマ陸曹と、なのは隊長とフェイト隊長の保護児童ヴィヴィオを捜索、救出する。」

そういう線で動いていく。両隊長、意見があれば」

今の私に出来ることはこれで精一杯。

この方針について二人の意見を聞いてみる。

「理想の状況だけど、また無茶してない？」

「はやて、大丈夫？」

二人からは意見やなくて私の心配。すごくありがたいことや。

それにシャルちゃんも声には出してへんけど心配してくれとるのは

解る。

「後見人のみなさんの黙認と協力はちゃんと固めてあるよ。大丈夫。何より、こんなときのための機動六課や。ここで動けな部隊を起こした意味もない」

「・・・了解」

「なら、方針に異存はありません」

「よし。そんなら捜査、出勤は本日中の予定や。万全の態勢で出勤命令待っててな」

「・・・・・・はい！」「」「」「」

十 十 十 十 十 十 十

メンテナンスチェックを終えて、マリーさんに“マツハキャリバー”のところに案内された。

あたしの目に映る待機モードの“マツハキャリバー”は所々がひび割れて砕けてた。

「ごめんね、マツハキャリバー。私のこと・・・怒ってる？」

Perhaps I don't have the feeling of "anger". 『怒る』という感情が、私にはおそらく存在しません（

Worry is not needed.）（心配は不要です）

そう言ってくれる“マツハキャリアバー”。
けど、“マツハキャリアバー”はAIだけど心があるって、一緒に走る相棒だって言ったのに。

思い出す“マツハキャリアバー”を傷つけることも厭わなかったあの戦い。

あたしはあのおとき“マツハキャリアバー”のことを全然考えてなかった。

「自分勝手に道具扱いして、こんなに傷つけちゃった。ごめん、マツハキャリアバー」

No. I had a problem. (いいえ。問題があったのは私の方です)

Your best stages was not supported due to my power shortage.
(あなたの全力に応えきれなかった、私の力不足です)

なのにマツハキャリアバーは自分の所為だって、あたしが悪いんじゃない、って……。

「ああ、ごめん！ 大事なお話中？」

メンテナンスルームの扉が開いて入ってきたのはマリーさんとシャリーさん。

「あ、いえ……」

Reconsideration meeting. (反省会です)

上手く言うことが出来なかったあたしの代わりに“マツハキヤリバー”が答えた。

反省会をしているんだ、って。

「シャーリーさん、もういいんですか？」

シャーリーさんだって入院をするほどの怪我を負った。

「六課が大変な時期だし、デバイスたちの面倒も見ないとだし、寝てられないよ」

「・・・はい」

そう答えるしかなかった。あたしも同じ気持ちだから。シャーリーさんはコンソールを操作し始めた。

「ねえ、スバル。マツハキヤリバーね、修理ついでに、って強化システムのプラン、自分で考えちゃったのよ。」

アウトフレームの強化とか、装甲強度のアップとか」

「かなり重くなるし、扱いづらくなるだろうから、スバルに聞かないとって言ったんだけど・・・」

“マツハキヤリバー”が自分の意思で強くなるうとしてる。

あたしはモニターに映るその強化プランをしがみつくようにして見る。

そこにはいろいろなプランが提示されてた。

「魔力消費1.4倍、本体重量2.5倍・・・。やります！こ

の程度なら確実に！」

結構キツイ事になるかもしれないけど、それでも“マツハキャリバー”が考えてくれたプラン。

それを無駄にするわけにはいかないし、あたしも頑張りたい。

「じゃあ、このプランは採用。良かったね、マツハキャリバー」

Thank you

「そうと決まれば早速。パーツ受け取ってくるから」

「スバル。もうしばらく待っててね」

「ありがとうございます！！」

感謝で胸いっぱいだ。“マツハキャリバー”にも、シャーリーさんにも、マリーさんにも。

Please give me one more chance.
(もう一度、私にチャンスを下さい)

Your best will be supported without fail this time.

(今度は必ず、あなたの全力を受け止めます)

So that you can go as far as you want.
(あなたが、どこまでも走れるように)

「……うん。今度は絶対一緒に走ろう、マツハキャリバー」

あたしの相棒は本当に頼りがいがある。かつこよすぎると、
“マツ

ハキヤリバー”。

十 十 十 十 十 十 十

「ルシル。捜査とか出勤とかは今日からなるって」

ベッドの縁に座って、そこに眠り続けるルシルに伝える。

前みたいに“英知の書庫”^{アルクライト}で話が出来たらいいけど、私じゃ使えないから無理だ。

だから伝えることが出来ないし、ルシルの現状についても把握できない。

「ギンガとヴィヴィオの搜索も今日からだし、早く起きないと・・・
・置いて行くよ？」

起きないなら置いて行く、我ながらあんまりな話だ。

こうしてルシルが眠り続ける原因をつくったのが私だというのに。

「・・・ルシル、今、起きたよ」「ルシル！」

横になっているルシルの目が開いて私を見る。

「・・・私が落ちてからどれだけ時間が経過した？」

「二日、私を完治させてすぐルシルは倒れた」

ルシルはゆっくりと深呼吸して、意識をさらに覚醒させてく。

視線を巡らせていることから、自分の居場所を探っているのかも。

「ここはアースラだよ、ルシル。勝手だったけどここに運んでもらった」

「・・・そうか。アースラに・・・懐かしいな」

体を起こして、ゆっくりとベッドから立ち上がった。

ルシルが背伸びをしたことで、ルシルの体のあちこちが“ポキポキ”鳴っているのが分かる。

「女神コトド・エイルの祝福の副作用の強制休眠が二日か。思っていたより早く回復したようだな」

最後に首を鳴らしたルシルの顔色は良好。どうやら完全復活のようだ。

「六課の現状は？」

いきなり真剣な顔になったルシル。

さっき私が話しているときにはまだ起きていなかったということか。

「あ、うん。方針としてはレリックの捜査という名目でスカリエツティ一味の追跡かな。

当然誘拐されたギンガとヴィヴィオを捜索、救出することも入っている。

事に当たるのは今日中ってこと。大体こんなところだね」

大まかな方針をルシルに告げる。

ルシルは少し逡巡した後、「そうか」と呟いた。

「しかし、体が鈍って少し重いな。シャル、少し付き合ってくれ」

「あはは、了解。私もそうだった。四日も寝てれば当然だけどねえ」
そうして部屋を出てトレーニングルームを目指す。

ルシルは廊下を歩きながら辺りを見回して「本当に懐かしい」って
呟いてばかり。

ちよっと年寄りくさいよ、ルシル……って年寄りか、実際。

「おかしなことを考えてないか？」

「べっつにいい」

トレーニングルームに向けて歩いていると、

「あーっ！ ルシルさんが起きてますー！！」

「ルシル君！」

廊下いっばいに響き渡る……ラインとなのはの声。
さっき過ぎた曲がり角の向こうから二人が向かってきた。

「そんな大きな声を出して……」

「だってルシルさんが起きてるんですよ!？」

「それは私が起きていると問題がある、と捉えてもいいのか？」

ラインに訊き返したルシルの表情は若干落ち込み風。

そのルシルの言葉と表情に、ラインは「違いますー!!」と必死に

否定。

ルシルはそんなリインを見て笑うだけだ。そしてリインは顔を赤くしてプンスカ怒り始めた。からかわれたことに気がづいたみたい。可愛い。

「そんなことより、もう大丈夫なの、ルシル君？」

なのはが心配そうな表情でルシルに聞く。

ルシルの傍で怒っていたリインは「そんなことより!？」って言うてシヨツクを受けてる。

それを無視するルシルは「ああ。もう大丈夫だ」と答えて、体を軽く動かした。

「うう、リインは、リインは……」

「ああ、落ち込んだじゃった。ルシルもなのはもからかい過ぎ」

リインを手のひらの上に座らせて、頭を優しく撫でる。

なのはは「？」の表情。天然だったらしい。ルシルは「ごめんごめん」と笑いながら、私と同じようにリインの頭を撫でた。

「なのはさんもルシルさんもひどいです」

それから四人で少し話して、なのはとリインと別れた。目指すはトレーニングルーム。

「ルシル!」

デジャヴ。前から来るのはフェイトとシグナム。

「もういいの、ルシル!？」

フェイトが全力ダッシュで駆け寄ってきた。私はシグナムと目を合わせて苦笑。

「さつきもなのはとリンに言われた。答えは問題なしだよ、フェイト」

全快率で言えば90%。残り10%はこれからだ」

フェイトはそれを聞いて首を傾げてる。

「これからシャルと軽く模擬戦をするんだ。

二日も眠っていた所為で体が鈍って仕方がない」

「え、大丈夫なの？ さつき起きたばかり・・・なんだよね？」

フェイトの心配そうな表情とは裏腹に、シグナムの目が怪しく光ってる。

「私が相手をしよう」とか言い出さなければいいんだけど・・・。

「これから六課は動くんだろ？ なら少しでも役に立ちたい。

だが、こつも体が鈍っているとかえって足手まといになる。それだけは避けたい」

「なるほど。なら私がい」シグナムは時間「・・・むう」

シグナム撃沈。そんなシグナムが可笑しくて笑ってしまう私たち。それからののはたちと同じように少し話してから二人と別れた。

「なんかすごいね、ルシル。会う人会う人に心配されるなんて」

「私が眠っている間、君も似たような体験をしたんだろ？」

「まあね」

「このみんなは本当に優しい。だからこそ守りたい。」

アポリユオン

絶対殲滅対象の連中に滅ぼさせたりはしない。絶対に……。

ようやくトレーニングルームに着いて、模擬戦の準備を始めようとしたとき、艦内にアラートが鳴り響いた。

「ルシル！」

「ああ！」

トレーニングルームから飛び出して、なのはたちと合流するために私たちは走り出した。

『アインヘリヤルの襲撃と制圧、ほぼ完了です』

スカリエッティに報告するのはウーノ。

スカリエッティはその映像を別のモニターで観賞していた。

ナンバーズ

自分の作り出した作品が地上防衛用魔力攻撃兵器“アインヘリヤル”を制圧していく様を。

『妹たちも初回出動からのデータを全て蓄積、行動に反映出来ていきます』

「ああ、いいね、素晴らしい。素晴らしいよ」

『失敗が目立つ人造魔導師と比較して、私たち戦闘機人はトラブルが少ないですね』

「元は最高評議会の主導で、管理局が実用寸前まで漕ぎ着けた技術だからね」

スカリエツテイの前に展開されているモニターに映るものが変わる。それは戦闘機人開発に関するデータであり、そこから先日の地上本部襲撃においてのナンバーズたちの戦闘記録だ。

「それを私が随分と時間を掛けて改良したんだ」

『良質なはずです』

「人造魔導師製造もまた、ゼストやルーテシアが長期活動してくれただおかげで随分と貴重なデータを取ることが出来た。

彼らの成功と失敗のおかげで、聖王の器も見事な完成を見た」

凶悪な笑みを浮かべるスカリエツテイ。

スカリエツテイにとってはやはりゼストとルーテシアは研究材料の一端でしかなかった。

もしこの場に許されざる嫉妬レウイヤタンがいれば、彼は間違いなく殺されていた。

スカリエツテイのアジトとは違う通路を歩くウーノ。

彼女は布に包まれた何かを横に抱き、その通路を歩き続ける。

「この“聖王のゆりかご”を発見し、触れることが出来て以来、その起動はあなたの夢でしたから。そのために聖王の器たる素材を探し求め、準備も整えてきた」

ウーノが抱いていた布に包まれた何かから覗くのはヴィヴィオだった。

そして彼女がある広い空間に出たとき、その空間に明かりが生まれていく。

まるで彼女の来訪を歓迎するかのよう。

「夢が・・・叶うときですね」

ウーノは感慨深く告げる。

『まだまだ。夢の始まりはここからなんだよ、ウーノ。』

古代ベルカの叡智の結晶、“ゆりかご”の力を手にして、ここから始まるんだ。

誰にも邪魔されない、楽しい夢の始まりだあ！』

ウーノの隣にあるモニターから流れるスカリエッティの歓喜の言葉。ウーノもそれに答えようとしたところで、彼女のいる“聖王のゆりかご”にアラートが響く。

「っ！ 私たちのほうに侵入者！？」

“聖王のゆりかご”内に緑色をした半透明な獣が数体侵入していた。それがセキュリティに引っかかったことでアラートが鳴り響いたのだ。

“ 聖王のゆりかご”へと続く洞窟入り口の前、そこには二つの人影。一人はシスター・シャツハ。騎士カリムの補佐的な立場にある女性。もう一人はヴェロツサだ。その騎士カリムの義弟であり、管理局査察官でもある。

「僕の猟犬を発見して、そのうえ一発で潰した。並のセキュリティじゃない。ここがアジトで間違いないね」

「すごいですね、ロツサ。こんな場所、よく掴めました」

「シャツハ。いい加減、僕を子ども扱いするのは止めてほしいな」

シスター・シャツハの褒め言葉をそう捉えたヴェロツサ。

そして両手を腰に当てたヴェロツサの背後から、緑色の半透明な獣が数頭現れる。

ヴァロツサは片膝をつき、その一頭の頭を優しく撫でる。

「これでも一応、はやてヤカリムと同じ古代ベルカ式のレアスキル継承者なんだよ？」

「無限の猟犬“ウンエントリヒ・ヤークト”。あなたの能力は存じ上げていますよ」

この猟犬こそが先程“聖王のゆりかご”のセキュリティ・センサーにかかり排除されたものだ。

猟犬を魔力で生み出して放ち、その場にいなながら探査、搜索などが行える能力。

目視や魔力探査に対するステルス能力を持ち、視覚、聴覚で得た情報
を能力者である
ヴェロツサに送ることも出来、または記憶することも可能な万能獵
犬。

「ま、今回の発見はフェイト執務官やナカジマ三佐の部隊の地道な
捜査があつてこそそのものだけだね」

ヴェロツサの言葉が切れると同時に、シスター・シャツハの、トン
ファーのようでありながら双剣型のデバイスである“ヴィンデルシ
ヤフト”が敵の接近を知らせるかのように輝く。
それと同時に茂みの中や、洞窟の中から無数のガジェット？型が姿
を現す。

二人は臨戦態勢に入り、そしてガジェットの迎撃へと移った。

十 十 十 十 十 十 十 十

トレーニングルームから現状を知るために、アースラブブリッジへと
移動した私とシャル。

私に気づいたはやてに左手を軽く挙げて挨拶。

シグナムがいることから、私が起きていることはもう知っているだ
ろう。

「アインヘリヤル一号機、二号機から戦闘機人たちの撤収が始まっ
ています！」

シャーリーの報告がブリッジに響く。

モニターに映る×印がアインヘリヤルだろう。

そしてそこから離れていく赤い点滅が戦闘機人ということか。
それにしても“エインヘリヤル異界英雄”に近い名を持つ兵器とは少し複雑な気分だ。

「前回よりも動きが速い」

「早めに叩かんと取り返しが着かんことになるけど、嫌な感じに拡散してる。」

隊長たちの投入はしづらいな」

私は戦闘機人の速度に関しては知らないが、速いことは確かだろう。とはいえ、それでも私の空戦形態には遠く及ばないものだが。

「アコース査察官から直通連絡！」

『はやて、こちらヴェロツサ。スカリエツティのアジトを発見した』
モニターにアコース査察官が移り、彼の声には緊迫の色が見える。
スカリエツティのアジトを発見しただけではその色は出ないと思うが。

『今、シャツハが迎撃に来たガジェットを叩き潰してる。
教会騎士団から戦力を呼び寄せてるけど、そつちからも制圧戦力を送れるかい？』

そついうことか。いくら何でもシスター・シャツハだけで無数のガジェットを相手にするのは骨が折れるはずだ。
そんな状況であれば緊迫するのも当然か。

「うん、もちろんやけど」

「戦闘機人、アインヘリヤルから撤収。地上本部に向かっています！」

モニターに映る複数の点滅が地上本部方面へと移動し始めた。そして私はモニターに映った一人の男に目を疑った。

「あの騎士も別ルートで本部に……！」

「ぜ、ゼスト……さん……？」

「知っているのか、セインテスト？」

知らず口に使っていた男の名を私の口から聞いて、シグナムが私に振り返った。

ゼスト・グランガイツ。首都防衛隊所属のストライカー級魔導師、いや、騎士。

私がクロノの謀略による研修で、僅かな時間だったがお世話になった人だ。

八年前に亡くなったと聞いていたが……生きている。

「ああ。昔、世話になった人だ」

「……そうか」

シグナムは深く聞いてはこなかった。

『廃棄都市から別反応。エネルギー反応膨大！ これは……戦闘機人！』

こちらも地上本部に向かっています！ 映像が今……！』

ブリッジにいないルキノから報告が入り、また別のモニターが浮かび上がる。
そのモニターに映る戦闘機人を見て、ブリッジのいる全員が息を呑んだ。

何故ならそこに映っていたのは、拉致されていたギンガだったからだ。

『さあ、いよいよ復活のときだ』

ブリッジに流れたのはスカリエッティの声。
そしてモニターに映るのはどこかの森林地帯。

『私のスポンサー諸氏。そしてこんな世界をつくり出した管理局の諸君。

偽善の平和を謳う聖王教会の諸君。・・・見えるかい？
これこそが君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力』

その森林が徐々に浮かび上がっていく様がモニターに流れる。
完全に浮かび上がったそれは森林などではなく・・・戦艦？

『旧暦の時代、一度は世界を席卷し、そして破壊した古代ベルカの悪夢の叡智』

『聖王の・・・ゆりかご・・・！』

アコース査察官が、その艦を指してそう口にした。

『見えるかい？ 待ち望んだ主を得て、古代の技術と叡智の結晶は今、その力を発揮する』

新たに浮かび上がるモニターに、玉座に座らされたヴィヴィオ。そして、そのヴィヴィオの座る玉座の隣に白髪の女が笑みを浮かべて立っていた。

『ママ？ うあ．．．ああ．．．いたいよ！ こわいよ！ ママあ
あ！ パパああ！』

「．．．．屑が」

ヴィヴィオがあればほど苦しんでいるのに何も出来ない。
助けを求めているのに、今は見ていることしか出来ない。
怨むぞ、界律。守護神の力があれば、本来の力が出せば今すぐにも助け出せるのに。

『さあ、いらつしやい。欠陥品』

白髪の女が、見えていないはずの私へと確かに視線を向けてそう言った。

それに気づいたシャルを含めたはやてたちが私を見る。“欠陥品？”と籠められた視線で。

『さあ！ ここからが夢の始まりだ！！』

ハハハハハハ！ アアツハハハハツハハハツハ．．．！！！！』

夢？ そんなもの．．．粉々に砕いてやるよ．．．。

「ジェイル．．．スカリエツティ．．．！！！」

聖地より蘇る翼（後書き）

3rdエピソードの最終決戦へとようやく入っていきます。

ですが、あまり皆さんに期待させてガツカリさせないために言っておきます。

期待要注意！！

A c t a e s t f a b u l a . (前書き)

アクタ・エスト・ファールブラノ芝居は終わりだ。という意味のラテン語です。

A c t a e s t f a b u l a .

『聖王の器とゆりかごは安定状態に入ったわ。』

クアットロとデイエチはゆりかご内部に。私と交代を』

『はいー』

『了解』

“アインヘリヤル”より撤収し地上本部へと向かうナンバーズ各人に、ウーノからモニター越しにそれぞれに指示が飛ぶ。

『トーレとセツテ、セインはラボでドクターの警護を』

「心得た」

『ノーヴェはデイドとウエンデイ、13番目と一緒に』

『もう向かってる』

ナンバーズの三者三様の返答。

『ゆりかごが完全浮上して、主砲を撃てる位置に』

『アーンド、二つの月の魔力を受けられて地上攻撃を出来る軌道位置まで辿り着ければ、ゆりかごは正に無敵』

ウーノの言葉に割り込むかのように、クアットロの映るモニターが浮かび、ウーノが口にしようとしていた言葉を代わりに口にする。

「ミッドの地上全てが人質だ。その状態なら、本局の主力艦隊とも渡り合える」

セツテ、そしてガジェット？型に乗るセイインに並んで飛行するトーレがそう口にする。

この広い世界の全てが自分たちの手中に収まり、尚且つ管理局の主力とも戦えると。

『そういや、一個疑問があるんすけど・・・？』

ウエンディの疑問を促すように、トーレが「なんだ？」と訊きかえず。

それを聞きウエンディは、自分の思ったことを口にしていく。

『ゆりかごの中にいる聖王の器とかいう女の子って、ぶっちゃけなに・・・？』

『フッフ、私が教えようか？』

スカリエッツィの映るモニターが、四分割にされていたモニターの中心に展開された。

そのスカリエッツィの背後に映るのは許されざる色欲。アスモデウス

トーレは一瞬だけモニターに映る許されざる色欲の様子に何かを感じ取る。

だがトーレはそれを気のせいとした。・・・してしまった。

『今から十年ばかり前になるかね。聖王教会にある司祭がいてね。』

彼は敬虔にして高潔な人格者だった。それゆえに聖遺物管理という重職に就いていたんだよ』

スカリエツティから告げられていくある過去の話。

『せいいぶつ?』

『聖王教会の信仰の対象、古代ベルカ時代の聖なる王様、聖王陛下の持ち物だったものとか遺骨とかのことよ』

『へえ』

スカリエツティの話の腰を折るかのようなウエンディに、クアット口が聖遺物についてのことをウエンディに教える。
ウエンディはクアット口のそれに感心の声をあげる。

『だが、司祭といえど人の子だ。彼はある女性への愛からそれに手をつけてしまったんだよ。』

そして、聖骸布にごく僅か含まれていた血液から遺伝子情報が取り出された。

古代ベルカを続べた偉大な王、聖王の遺伝子データがね。

そうして聖王の遺伝子^{タネ}は各地に点在する研究機関で、極秘裏に複製され再生を待った』

『あたしたちの王様になるために、だろ?』

ノーヴェはスカリエツティの話をそう捉えている。

『生きて動いている聖王は、あのゆりかごの起動キーなんだよ。動いていると言ってもただの器さ』

スカリエツティにとって、聖王の器であるヴィヴィオも単なる部品

でしかなかった。

「はい、ドクター、質問」

『どうぞ、セイン』

セインが手を挙げてスカリエッティに訊ね、スカリエッティはセインの問いを促す。

「レジアスのおっちゃんはまあいいとしてさ、最高評議会だっけ？

あっちのほうはいいの？

ガジェットの量産とか人造魔導師計画の支援とかしてくれたのってあの人たちなんだよね？」

『ああ、そうとも』

「ゼスト様とかルーお嬢様も評議会の発注で復活させたんでしょ？ 評議会には評議会で、なんかプランとか思惑があつたんじゃ・・・」

最高評議会。それがスカリエッティを支援していた者たち。

旧暦の時代に次元世界を平定、そして時空管理局を設立した三人。

管理局設立後、一線を退いたその三人が、その後の次元世界を見守るために発足させた組織、それが管理局最高評議会。

その評議会の指示で、八年前に死んだゼストは蘇生された。

ルーテシアの場合は復活ではなく、捕らわれ、レリックウエポンの処置を施された。

そしてそのうえで洗脳されたという形だ。

『レジアスも最高評議会も希望は一緒さ。地上と次元世界の平和と

安全。

そのためにレジアスは頓挫させられた戦闘機人に拘り、最高評議会
はレリックウエポンと人造魔導師計画に拘った。

平和を守り正義を貫くためなら罪もない人々に犠牲を出してもいい
と。

なかなか傲慢な矛盾を抱えておいでだ』

少数より多数を。それはどこの世界でも同じ真理。

当然この次元世界においても例外ではなく。

最高評議会もレジアス中將も、その真理に捕らわれ、スカリエツ
イを支援した。

その結果がスカリエツティと、その作品であるナンバーズによるテ
口となってしまっていた。

スカリエツティの話も終わり、訊ねたセイン、そしてウエンディは、
その話の内容の濃さに理解不能を示した。

「ともかくスポンサーである評議会のこと無視して、あんなでつか
いおもちゃを呼び出したりしたら、怒られるんじゃないの？って、
わたしは心配……」

『あはは……。ちゃんと怒られないようにしてあるぞ』

セインの心配を他所に笑みを浮かべるスカリエツティ。

彼はすでに手を打っている状態だ。それもはるか前より。

『君たちは何も気にせずに楽しく遊んできてくれればいい。
遊び終わったら我らの新しい家、ゆりかごに帰ろう。
そうすれば、世界の全てが我々の遊び場だ』

「世界全てが遊び場、ね」

ナンバーズとの通信を終えたスカリエッツィの背後、アスモデウ許されざる色欲スが笑みを浮かべる。

その呟きを耳にしたスカリエッツィは振り向き、彼もまた笑みを浮かべた。

「そうだと。我らの夢を叶え、素晴らしい世界となれば全てが大切な実験場だ」あそび

スカリエッツィは許されざる色欲から前面に展開されているモニタアスモテウスーへと視線を戻す。

映し出されているのはゆりかご、ナンバーズの面々。

スカリエッツィはこれから起こる楽しい時間に思いを馳せていた。

しかし彼は気づかない。今、背後で凶悪な笑みを浮かべている許アされざる色欲スモデウスに。

「ん？」

黄色い明かりしかないこの空間に、赤い明かりが入り込む。

スカリエッツィはそれを疑問に思い、周囲、そして背後へと視線を移した。

「っ！ どうしてそれを君が持っているのだね・・・？」

「これ？ これは大罪わたしたちが独自で探し当てたレリックよ」

スカリエッツィの視線の先、レリックを手にした許されざる色欲。
アスモデウス
許されざる色欲はそう答え、レリックを両手で覆うように胸に抱えた。

アスモデウス
一瞬の閃光。許されざる色欲の手にしていたレリックが、まるでオニキスのように漆黒の輝きを放つものとなっていた。

その変わり果てたレリックを見たスカリエッツィは呆然、そして笑みへと変わっていく。

「それはなんだい？ レリックとはもう違うモノなのかな？」

スカリエッツィの内にあるのは興味と探求心。

レリックの輝きが漆黒に染まったことが、彼の探求心に火をつけた。

「フフ、これは……こういう使い方をするのよ……無限の欲望……！」

「っ!?!？」

アスモデウス
許されざる色欲姿が掻き消え、スカリエッツィは一步引き、周囲を見渡す。

そして次の瞬間、スカリエッツィの表情が凍る。

漆黒のレリックを無理矢理自分の体に埋め込まれていくことで、だ。

「あ……があはっ……!!?!？」

強烈な痛みがスカリエッツィの全身を襲う。

今まで他者にレリックを埋め込む処置をしてきたスカリエッツィ。

しかし、彼自身がその被検体になるということとはなかった。

それが今、協力者だったはずの許されざる色欲の手によって行われている。

「人間たる器。界律を誤魔化すにはちょうどいい隠れ蓑なのよ。ああ、それにもう十分夢を見ることが出来たでしょ？」

だからここからは俺たちの時間だ。無限の欲望・・・ジエイル・スカリエツティ」

「っ！？ ルシフ ああああああああ・・・！！！！！！」

十 十 十 十 十 十 十

『理由はどうあれ、レジアス中將や最高評議會は異形の天才犯罪者、ジエイル・スカリエツティを利用しようとした。そやけど逆に利用されて裏切られた』

會議室に集められた私たちは、三提督の一人ミゼット統幕議長とクロノの話聞いた。レジアス中將のこと、最高評議會のことなどを。

『どこからどこまでが誰の計画で、何が誰の思惑なのかそれは判らへん。そやけど今、巨大船が空を飛んで、街中にガジェットと戦闘機人が現れて、市民の安全を脅かしてる。これは事実。私たちはそれをなんとしても止めなあかん』

そう。そして私とルシルはそのうえでペッカートゥムを殲滅しないといけない。ヤツらを野放ししておくことは、スカリエツティを放って置くこ

と以上に危険だから。

「ゆりかごには、本局の艦隊が向かってるし、地上の戦闘機人たちやガジエツトも各部隊が協力して対応に当たる」

巨大船“聖王のゆりかご”は、すでに危険度の高いロストロギアとして本局は認定。

クロノを含めた艦隊はそれを撃墜するために、もう動いているということだ。

それにしても“聖王のゆりかご”。

大戦時に恐れられた“スキーズブラズニル”、“ナグルファル”、“フリングホルニ”らの主要戦艦と艦戦させたらどっちが強いだろう？と思う私……。

「だけど、高レベルなAMF戦を出来る魔導師はそう多くない。私たちは3グループに分かれて、各部署に協力することになる」

なのはの提示したグループは、ゆりかご攻略、スカリエツティのアジト、首都防衛の三つ。

会議の結果、シグナム、フォワードの子たちは首都防衛、戦闘機人戦となる。

シグナムはゼストとかいう騎士のところだけだ。

スカリエツティのアジトへは、現状フェイト一人のみ……。

ゆりかごへは、現状なのはとヴィータの二人。はやては外でガジエツト掃討部隊指揮だ。

『それでシャルちゃん、ルシル君。二人の出動場所やけど……』
ブリッジにいるはやてからそう訊かれる。

独自判断になるけど、もう決まってる。ゆりかごへはルシル、地上

へは私が行くと。

「……ルシルはなのはたちと一緒に。私はフェイトと一緒に行かせてほしい」

「……それでいいんならそれでいい」

ルシルは反対せず賛成してくれた。最初からゆりかごに行くつもりだったから当然か。

何せ白髪の女からのご指名だ。十分罠の可能性があるけど、私かルシルのどちらかが行かないといけないことには変わらない。

そして私はスカリエッツィのアジト。おそらくそこに間違いない他のペツカートウムがいる。

そんなところにフェイト一人で行かせられない。

そしてはやてたちも異論はないのか私の意見に頷くことで許可を示してくれる。

『決まりやな。あとそれと今回の作戦だけになるんやけど、シャルちゃんとルシル君のコールサインを決めとくな。』

シャルちゃんはライトニング5、ルシル君はスターズ5になるっちゆうことで。それでええか?』

コールサイン……。ちよつと嬉しいかも。

「あ、うん。それでいいよ」

「スターズ5……。か。了解だ」

『よし。それじゃみんな、すぐにでも作戦決行やから準備してな』

会議室に「了解」と響く。
ブリーフィングが終わって、それぞれ会議室をあとにしていく。
私はフェイトに一言謝っておかないと、って思って駆け寄る。

「フェイト」

「どうしたの、シャル？」

私の小声でもフェイトは振り向いてくれた。

「ルシルをフェイトのトコじゃなくて、ゆりかごに行かせてごめん」
フェイトはやっぱルシルと一緒にきたかったんだと勝手に思い込む。

私の謝罪を聞いたフェイトはきょとんとして、そして微笑んだ。

「謝ることじゃないよ。シャルが言わなかったら私が言ってたから・・・」

「フェイトさん？」

そばに来ていたエリオとキャロの頭を撫でるフェイト。

二人もさっきのフェイトのようにきょとん。

「ヴィヴィオが待つてる。パパって・・・だからヴィヴィオを助けに行くのはなのはとルシル。

それにシャルと一緒に嫌って、そんなことあるわけないよ。シャルも大好きなんだから」

「大人だね、フェイト」

「えっへん」

感心の声を出したらフェイトが胸を張ってえっへん。懐かしいなあ、それ。

まあ、そう言ってくれるなら助かるよ。

「ねえ、シャル」

「ん？」

さっきの柔らかな表情から神妙な面持ちと変わった。

「欠陥品って……なに？」

フェイトの質問が私の静かだった心を揺らした。やっぱり聞いていたんだ。白髪の女の言葉を。

「あの白髪の人、ペッカートウムなんだよね……？」
「じゃあ、欠陥品ってやっぱりシルかシャルの……」

「ごめん、答えられない。それは……きつといつか話すことになると思う。」

それまでをお願い。忘れるなんて言わないから、しばらく胸の奥に仕舞っておいて」

「え？ あ、うん……変なこと訊いてごめんね」

それはフェイトが謝ることじゃない。

「こつちこそごめん」

私はペッカートゥムと邂逅したことで、みんなとの別れが近いことを気にし始めていた。

別れだけは必ずする。けど、正体云々は・・・話すときが来る・・・のだろうか・・・。

「・・・えっと・・・エリオ、キャラ。フェイトは私がちゃんと守るから安心して。」

だから二人も気をつけていっておいで」

この沈黙をどうにかするためにエリオとキャラへと話題を変える。

「はい！ フェイトさんをお願いします！！」

エリオとキャラの笑顔を見てちょびつと罪悪感。

ごめんねえ、二人ともお。悪いお姉さんで・・・（泣）

「シャルに先に言われちゃったけど、私はシャルやシスター・シャルハ、

アコース査察官も一緒だから大丈夫。だからエリオとキャラも無茶はしないようにね」

そう言ってフェイトはエリオとキャラを抱きしめる。

なのはもそうだけどフェイトも良い母親になれるよ。

十
十
十
十
十
十
十

「セインテスト」

みんなに続き会議室を後にしようとしたところで、シグナムに呼び止められた。

「どうかしたか？」

「ゼスト・グランガイツに何か伝えることはあるか？」

そうか。シグナムは地上でゼストさんと……。ゼストさんに伝えること、か。かつて世話になっておきながら浮かばない。

それ以前に私なんかを覚えているだろうか。八年前、そのうえ短期間での研修だった。

「……もし私のことを覚えているようだったら、そうだな……。バカな真似だけはしないでください、と」

「分かった」

シグナムは短く答え、リインと一緒に出て行った。

それからそれぞれ準備を整え、私とシャルを含めた隊長陣、フォワードの子達の乗るヘリの降下ポイントまであと三分となった。

そして今、なのはとヴィータ、私の三人の前にフォワードの子達が整列している。

「今回の出勤は今までの一番ハードになると思っ」

「それになのはもあたしもセインテストも、お前らがピンチになっ

ても助けに行けねえ」

「「「「「」」」」」」

フォワードの子達も上等と言ったところか。
この数ヶ月間で随分と頼もしくなったな。

「だけど、ちょっと目を瞑って今までの訓練のことを思い出してみ
て」

なのはにそう言われた四人が目を瞑っていく。

「ずっと繰り返してきた基礎スキル。磨きに磨いたそれぞれの得意
技。

痛い思いをした防御練習。全身筋肉痛になっても繰り返したフォー
メーション。

いつもボロボロになるまで、隊長陣わたしたちと繰り返した模擬戦」

後半になるにつれて四人の表情が苦痛の色に歪んでいく。
あの苦しい特訓の日々を思い出しているんだろう。

「・・・・目、開けていいよ」

それぞれが目を開けて一息。

思い出すだけでそこまで疲れるって・・・・そんなに辛かったか？

「私が言うのもなんだけどキツかったよね」

「それでも、ここまで四人ともよくついてきた」

「四人とも誰よりも強くなった、とはまだちょっと言えないけど・・」

そこで四人の期待を潰すような発言はどうかと思うが。

「だけど、どんな相手が来ても、どんな状況でも絶対負けないように教えてきた。

守るべきものを守る力。救うべきものを救える力。絶望的な状況に立ち向かっていける力。

ここまで頑張ってきたみんなはそれがしっかり身についている。

夢見て憧れて、必死に積み重ねた時間。どんなに辛くても止めなかった努力の時間は絶対自分を裏切らない。それだけは忘れないで」

まったく、なのはには恐れ入る。

「キツイ状況をビシッとこなして見せてこそこの“ストライカー”だからな」

ストライカー。“エース”と同じ魔導師における尊称の一つだ。

その人がいれば、困難な状況を打破できると言われるほどの信頼を得た者につけられる。

なのはたちは、この子達をストライカーに育てることを前提として教えている。

「「「はい！」「」「」

「それじゃあ、ルシル君。みんなに何か言っておきたいことある？」

なのはにそう話を振られ、一斉に六人の視線が集まる。

「ほとんどなのはとヴィータに言われたよ。だが、そうだな……
……ない」

「ないのかよ……」

なのはの「にやはは」を久しぶりに聞いた。

そんな私となのは、ヴィータのやり取りを見て、緊張感が漂っていた四人の肩から余分な力が抜けたのが分かる。
今の私にはこれくらいしか出来ないだろう。

「……それじゃあ、機動六課フォワード隊出動！」

「行って来い！」

「帰ったら祝杯だ」

「……はい！」「……」

敬礼をして走り去っていく三人。

残りの一人、スバルはそこに佇んだまま俯いていた。

なのはと話があるのだろうか。なら私たちは先に行くのでしょうか。

「先行ってるぞ」

二人に気を遣ってかヴィータが歩き出し、私もそれについていった。

「落とされんなよ、セインテスト」

降下ハッチへと続く廊下を歩く中、ヴィータが呟いた。

「珍しい。私のことを心配してくれるのか。．．．優しいな、ヴィータ」

「バツ　　違いよ！　お前が落とされたらいろいろと面倒だろうが！！」

顔を真っ赤にするほど怒らなくてもいいだろうに。

というか怒っている所為ではなく照れているのか．．．？

「はあ、聞けよセインテスト。ペッカートウムってやばい連中なんだろ？」

あたしはそいつらと戦ったことねえからハッキリと分かんねえけどさ。

でもあたしのカンが告げてんだ。あの白髪の女は絶対やばいってな．．．」

「歴戦の騎士としてのカンか」

「．．．病み上がりのお前がいきなり実戦。しかも相手はあたしでも感じ取れるくらいのとんでもねえ化け物だ。

あたしは．．．ああもう！　心配してやってんだ、ありがたく思えよ！」

そう言ってヴィータは、その小さな歩幅を大股で歩くことで大きくした。

心配してくれるというのなら、ありがたくその思いを受け取ろう。

私も少し歩く速度を上げてヴィータに追いつく。

「ありがとう」

そう言つてヴィータの頭を撫でる。

撫でられた直後はきよとんとしていたヴィータ。

撫でられたことに気づいたヴィータが私の手を払いのけるかと思つていたが、

「今日だけだかな」

と、私の手を受け入れた。随分と素直になつたものだ。

そして降下ポイントへと着き、最後の一人なのはが来たことで、私たちも出撃となる。

首都防衛となるシグナムとリイン、フォワードも飛び立ったと報告が入る。

「ほんなら隊長陣も出撃や！！」

はやての号令が下り、開放された降下ハッチへと身を投げ出す。防護服なし、生身でのスカイダイビングだ。

『機動六課隊長、副隊長一同。能力限定完全解除』

十 十 十 十 十 十 十

『はやて、シグナム、ヴィータ、なのはさん、フェイトさん。

そして協力をしてくださったシャルロットさん、ルシリオンさん。

みなさん、どうか・・・』

騎士カリムからの直々のお願い。思いはみんな同じ。

ゆりかごを止めて、奪われたものを取り返して、スカリエツティを

捕まえる。

私たちの世界を守るために……。

「しっかりやるよ!」

「迅速に解決します!」

「お任せください!」

はやてちゃんとフェイトちゃんに続いて答える。

「ご期待に添えられるよう」

「必ず終わらせます」

ルシル君とシャルちゃんも答えた。

『はい、お願いします。では、リミットリリース!』

騎士カリムの言葉と同時に私たちのリミッターが解除された。ようやく戻ってきた私たちの本当の力。

「エクシードドライブ!」

Ignition

バリアジャケットへと変身して、私は“レイジングハート”をフルドライブモードのエクシードへと変形させる。

エクセリオンより負担を少なく、それでいて射撃や砲撃を徹底的に強化したこのエクシード。

「なのは」

「フェイトちゃん？」

私に並んで飛ぶフェイトちゃんに呼ばれた。

何か神妙な顔をしているけど、なんだろう・・・？

「なのはとレイジングハートのリミットブレイク“ブラスターモード”。

なのはは言っても聞かないだろうから使っちゃダメ、とは言わないけど、お願いだから無理だけはしないで」

リミットブレイク“ブラスターモード”。

自己ブーストを利用した私の最後の切り札。ブラスター1から3まで段階的に強化していけるけど、それに比例するように負担も強くなっていく形態だ。

その他にもブラスタービットっていう切り札も付く。

フェイトちゃんの心配は嬉しいけど、それはフェイトちゃんにも言えることだよ。

「私はフェイトちゃんのほうが心配。

フェイトちゃんとバルディッシュのリミットブレイクだってすごい性能な分、危険も負担も大きいんだからね」

「私は平気。大丈夫」

「もう。フェイトちゃんは相変わらず頑固だな」

そこところは昔から変わってないよ。

「な、なのはだっていつも危ないことばかり・・・！」

顔を赤くして攻め立ててくるフェイトちゃん。

少しは自覚があるみたいだ。

「だって航空魔導師だよ？ 危ないのも仕事だもん」

危険は覚悟のうえ。それでも私は空を飛びたい。だから辞めない。

フェイトちゃんはもちろんみんなも知ってることだ。

「だからってなのはは無茶が多すぎるの！ ルシル、なのはが無茶しようとしたら力づくで止めてあげて！」

そこでルシル君を引っ張り出すあたりがフェイトちゃんらしい。

けど、それを言ったら私だって最終兵器を出しちゃうもんね。

「シャルちゃん、フェイトちゃんが馬鹿しそうになったら止めてあげて！」

「ば、馬鹿！？ それはあんまりだよ、なのは！..！」

フェイトちゃんとちょっとばかり言い争う。

すると、私の頭に重い衝撃が襲ってきた。

「「あいたつ！？」」「

見ればフェイトちゃんも頭を押さえて少し涙目。

私とフェイトちゃんを襲った衝撃の正体、それはルシル君の鉄拳制

裁。

「どっちもどっちだよ、二人とも」

「うう、脳が揺れたよ、ルシル・・・（涙）」

未だに頭を押さえてジト目でルシル君を見つめるフェイトちゃん。ルシル君はため息ひとつ吐いて、私とフェイトちゃんの頭を撫でた。

「まったく、二人はこんなときでも相変わらずだな。

安心しろ、フェイト。なのはが無茶をしないようにちゃんと見ている。

だから君も無茶をせず、そしてシャルが馬鹿しないように見張っていてくれ」

「そこで私を出すのはおかしいでしょうが!!」

ルシル君の上から、シャルちゃんの鉄拳がルシル君の頭を襲撃。けれどルシル君はそれをバレルロールで回避。んー、鮮やか。

「お互い無茶をせず、ちゃんと帰ってくる。そうだろ?」

「うん。そうだね。大丈夫だよ、フェイトちゃん。

ちゃんとヴィヴィオと一緒に、元気に帰ってくるから。だからフェイトちゃんも、ね?」

ルシル君に答えるように、フェイトちゃんと向き合っ。

「うん!」

フェイトちゃんも強く頷いて約束してくれた。
みんな一緒に、元気で帰ってくと。

「あー、フェイトちゃん。そろそろ・・・」

私たち四人のさらに上を飛ぶはやてちゃんからお呼びがかかる。

フェイトちゃんとシャルちゃんは、スカリエッティのアジトへと向かう。

だからここで一度お別れだ。

「あ、うん・・・」

「フェイト隊長も無茶すんなよ。地上と空はあたしらできっちり抑えるからな。」

フライハイト、ちゃんと守ってやれよ」

「うん、大丈夫！」

「言われなくとも！」

「フェイトちゃん。頑張ろうね」

「うん、なのは。頑張ろう」

右拳を突き出す。フェイトちゃんは左拳を突き出して、お互いの拳を突き合わせる。

よくシャルちゃんとルシル君がしていたことの真似だ。

でもこれって結構いいことだと思う。なんか格好良いし。

「シャル。本当に馬鹿だけはするなよ？」

「そつちこそ」

シャルちゃんとルシル君も拳を突き合わせてる。

フェイトちゃんとシャルちゃんは、スカリエッツィのアジトへと進路を取った。

そして私たちはゆりかごへそのまま進む。

悲しい出来事。理不尽な痛み。どうしようもない運命。

そんなのは嫌いで、認められなくて、打ち抜く力が欲しくて、私はこの道を選んで、同じ思いを持った子達に技術と力を伝えていく仕事を選んだ。

この手の魔法は大切なものを守れる力。思いを貫き通すために必要な力。

目指すは大切なヴィヴィオのいるゆりかご。

「待ってて、ヴィヴィオ。今迎えに行くから」

「ドクター、アスモデウスはどこへ・・・？」

ゆりかごからラボへと帰ってきたウーノが辺りを見回す。

自分たちナンバーズが空けている際のスカリエッツィ護衛としてラボに留まるはずの許アスモデウスされざる色欲がないことを不審に思ったことからによる疑問。

「彼女は別室だよ」

「そうですか。・・・トーレとセイン、セツテも戻りました。迎撃準備完了です。」

クアットロとデイエチはゆりかご内部に。他の妹たちはそれぞれのミッションポイントと地上本部に向かっていきます」

スカリエッティがそう言うなら信じるしかないウーノは、ナンバーズの現状を報告する。

「ルーテシアにもお願いをしたよ。上手く動いてもらうとする」

モニターに映るのはガジェット？型に乗るルーテシアとガリユー、そしてオットー。

しかしそこには許されざる嫉妬の姿はない。

先程許されざる色欲がこのラボに来るように指示をしたためだ。アスモテウスあと数分、いや、数十秒でこのラボへと到着するだろう。

「騎士ゼストも動かれていますね。予想外の動きをされたら・・・」

「問題ないさ。現在の任務を完了次第、ドゥーエが地上本部へ向かってくれる」

スカリエッティの口から出た新たなナンバーズの名、ナンバー？ドゥーエ。

彼女こそがスカリエッティが最高評議会への対策として送り込んでいたスパイ。

現在の任務とは最高評議会の抹殺だ。すでに用無しとなった最高評議会を消すためにいる。

最高評議会も予定外だろう。

自らが失われた地“アルハザード”の叡智と技術を以って生み出した存在、無限の欲望の開発コードを持つジェイル・スカリエッティによって滅ぼされることになるうとは、と。

こちらが利用し、向こうが利用される。その立場を信じてしまっていたことが過ちだった。

「そうでしたね。・・・あの、ドクター？

先程から何故私のほうへと振り向いてくださらないのですか？」

ウーノの何気ない疑問。そう、スカリエッティは一度としてウーノに振り向かない。

何故なら・・・。

「?・・・ドクター、その目はどうなされたのですか？」

ウーノは、こちらに顔を向けたスカリエッティの異変に気づく。

スカリエッティの目の色は金だったはず。だが今は真紅に染まっていた。

真紅、それは許されざる色欲を象徴する色だった。

「この目かい？　これはね・・・。」

「っ!？」

ウーノの意識はそこで途絶えた。

A c t a e s t f a b u l a . (後書き)

あああつ、戦闘に入れなかった!!

前半部分がやはり余計でしたか!? そうですか!

次こそ戦闘へと入っていきますので・・・!

開戦（前書き）

良いサブタイトルが思いつかない。
もしかしたら後々に変更するかもしれません。

開戦

聖王のゆりかご周辺に無数というガジェット群。そして尚も増え続けていく。

それに対処していた航空魔導師部隊は、その圧倒的な数と弱いながらも展開されているAMFの効果によって苦戦を強いられていた。

それでも耐えられていたのは、援軍として機動六課の魔導師が、かの有名なエースオブエース、高町なのはを始めとした高ランク魔導師が来てくれると分かっていたから。

それまでは何としても耐える。その空域で戦う魔導師たちの思いがそれだった。

そしてこの空域に到着し、交戦に入ったなのは、ヴィータ、ルシリオンの三人と、臨時指揮官として指示を出すはやてによって、ようやくまともな戦いになりだした。

そしてここはゆりかごより一番離れた第18密集点。

そこにはエースたちの戦いに見惚れる第1124航空隊第4小隊の魔導師たちがいた。

「すげえ。やつぱ強えよなあ、エースオブエース、高町一尉！」

「ああ。俺たちがあんな苦戦にしていたガジェットを次々撃墜して
く」

小型モニターに映るなのはとヴィータ、ルシリオンを見ながら感嘆の声を上げる魔導師たち。

そんな彼らは射撃魔法でガジェットに対処しながらも器用にモニタ

「を見、話をしている。

そんなことが出来ている時点で彼らも十分すごかったりする。それもそのはず。彼らはなのはの教導を受けたことのある魔導師だ。あの地獄の教導に比べればなんて事はなかった。

「ていうか、この黒い人、メチャクチャ凄いですよ!？
交戦開始からたった数分でガジェット撃破数が三桁に届きますよ!？」

彼はごく最近、航空隊に配属された新人魔導師。
故に見たことがない。かつて空戦最強と謳われた空戦魔導師ルシリオンのことを。

モニターに映るルシリオンの圧倒的な戦闘能力に、新人魔導師はあまりの驚きに大声で叫ぶ。

「なんだ新人？ “空戦そいの王子様”を知らねえのか？」

新人の驚きに答えるこの部隊の隊長。

外見年齢でいえば20代後半くらいの茶色い短髪の隊長だ。

「空戦そいの王子様？ 聞いたことはありませんよ……。」

何でも空戦においては管理局最強にして最速……って、まさか
「！」

「そいつがそうだ。ルシリオン・セインテスト・フォン・フライハイト元一等空佐。

武装隊、医療局、無限書庫つつう複数の部署を兼任してたとんでもねえやつだ。

二年ほど前にSSランク魔導師二人が突然管理局を辞めたって騒ぎがあったろ？

その当事者の片方で、空戦SSランク。もう片方はそいつの姉で陸戦SSランクだ」

空戦SSランクの魔導師。それを聞いた新人は鳥肌が立つのが分かった。

あのエースオブエース、高町一尉でもS+だというのに、と。

そしてその姉もまた陸戦のSSランク。新人の胸は高まり興奮しつつあった。

「そ、そんな凄い人だったなんて・・・！でも辞めたのにどうして・・・？」

「さあな。なんているのか分からねえが、そんなことは小せえことだ、新人。

理由はどうあれミッドの地上と空を守るうとしている。それだけで十分さ」

隊長の言葉に「おおお」と声を上げるその場にいる彼の部下たち。

そんなとき、その場に別のガジェット群が襲撃してきた。

しかし部隊は対応が遅れ、なす術がないままガジェット群から攻撃を加えられようとしたとき、

「随分と余裕があるじゃないですか、ヒルマン二尉？」

その声と共にガジェット群を蒼い閃光が貫いた。

爆散していくガジェット群を横目に新人は見た。自分たちを守ってくれた魔導師を。

細長いひし形の翼が十枚、その間に剣のような翼が十二枚、蒼く輝いている。

実際にこの目で見てみると、それはまるで天使のような姿だ、と新

人は思った。

「おお、久しぶりだな、ルシリオン。それと今は一尉だ」

「それは失礼しました、ヒルマン一尉」

久しぶりの再会に隊長ヒルマンとルシリオンは笑みを浮かべる。

「隊長、お知り合いなんですか？」

親しそうにしている二人を見た新人は訊ねる。

「ああ。こいつは局を辞める直前まで俺と組んでいたんだ。相棒つてやつだな」

「二ヶ月くらいでしたか」

デスペアー・フライト ver .

新人の疑問に答えながらルシリオンは迫ってくるガジェットを、星填銃二挺から複数の追尾弾を射出。

そして着弾した端からガジェットは凍結、破碎、撃破されていく。新人はその光景にただ「すごい」としか言えなかった。

「どうだ、ルシリオン？ この状況は？」

「最悪ですね。せつかくの空が狭い。窮屈で仕方がないですよ」

「なるほど、お前らしい。じゃあさっさと片付けねえと・・・な！

「！

ヒルマンとルシリオンが背を向けあい、次々とガジェットを撃破していく。
それを黙って見ていた他の隊員たちも続いてガジェットへと攻撃を放っていく。
新人もそれを見ながらストレージデバイスを構えて射撃魔法を放ち続ける。

「まったく。玩具相手ガジェットに、なのは、はやて、ヴィータとは贅沢すぎるな」

ルシリオンの咳きが聞こえる。しかし、そこには自分の名前を入れなかった。

それを聞いたヒルマンは「お前の場合の謙遜は嫌味でしかねえよ」と言い放った。

『スターズ1からスターズ5へ！ 第11、第12密集点への援護をお願いします！！』

「スターズ5、了解した」

なのはからルシリオンへの援護要請。

ルシリオンは短く答えて、この第18密集点のガジェット群の殲滅を確認した。

「行くのか」

「ええ」

「気をつけて行けよ、相棒」

そうして二人は拳を突き合わせる。
それを合図としてルシリオンは空の彼方へと飛んでいった。
新人は思う。いつか自分もあんな魔導師になりたいと。
静かになったこの場所で、思い思いに語り始める第1124航空隊
第4小隊の魔導師たち。

「カッコいいっすね」

そうしみじみ呟く新人。

しかし彼の感動も、他の隊員たちの発言で半減することになる。

「そうでもねえぜ。昔は男泣かせって呼ばれてたしな」

「お、男泣かせ？ 女泣かせじゃなくて・・・？」

「そうそう。当時の外見はどう見ても背の高い少女。本当は男なの
にな。

そうとも知らず告って来たヤツを片っ端から撃墜したつつつ伝説が
ある」

「同様にレディの告白も断ってるって話だ」

「ホモ疑惑」

「ああ。でもさ、テストロッサ執務官とデキてるって噂だ」

「なに！？ 俺は高町一尉とデキてるって聞いたぞ！！」

「「「「「死ねや、コラあああつ！！！！！！」」」」」

悲しい男たちの叫びがこだまする。
新人は大きいため息。

「よっしゃ！ 俺は今日ツイてる！ ヴィータ三尉の可愛らしい下着が見えた！」

「ああ、もう少しでも見えそうなんだけどなあ、高町一尉の……」

また別のところでは妙なことで盛り上がっている変態がいた。

「……おい、誰か。そこの阿呆どもと変態どもを黙らせる」

ヒルマンの一声で、馬鹿発言をした男たちにデバイスによる殴打という制裁が与えられた。

緊迫下にあるこの空域の中、第1124航空隊第4小隊の魔導師たちの、ごく一部の頭の中は季節はずれの春だった。

十
十
十
十
十
十
十

ゆりかごの砲門から放たれた砲撃がまた味方を落とした。
火力も数も何から何まで向こうが圧倒的に上や。

「防御陣形！ 隊立、乱したらあかんよ！！」

「は、はい……」

ここで乱れたら立て直すんは難しい。
それほどまでに追い詰められとる感じや。

それにしても聖王のゆりかご、ほんま大きい。
外からやと魔導師が何人集まるうとどうにもなれへんな。
それやのにまたゆりかごから何十機とガジェットが出てきた。

「24番射出口より小型機出現！」

『南からも機影百！ 市街地降下ルートです！』

どれだけ撃墜してもそれを上回る数が出てくる。
でも、だからと言って弱音なんて言ってられへん。

「みんな落ち着いて！ 拡散されたら手が回らへん！
叩ける小型機は空で叩く。潰せる砲門は今のうちに潰す！
ミッド地上航空魔導師隊。勇気と力の見せ所やで！！」

「はい！！」

夜天の書を開いて魔法発動の準備に入る。
なのはちゃんやヴィータ、ルシル君が頑張ってくれとる。
私もここが踏ん張りどころや。

狙うのは砲門と射線上におるガジェット群。
それを撃ち落とすために使うのは、初代リインフォースが私の友達か
ら複製してもうた魔法。

「いくよ！ 壮麗なる聖雪の蒼槍……コード・シャルギエル！
！」

十 十 十 十 十 十 十

『高町一尉、奥へ進めそうな突入口が見つかりました！
突入隊二十名が先行しています！』

ゆりかご側面をヴィータちゃんと飛んで、ガジェットや砲門を破壊
していたとき、待ちに待っていた報せが私たちに届いた。

「はやてちゃん！」

突入の許可をもらうために、はやてちゃんに通信を繋げる。

『外周警戒は私が引き受ける！　なのはちゃん、ヴィータ、ルシル
君、行ってくれるか？』

「おう！」

「了解！」

『了解した。なのは、ヴィータ、先に行っていてくれ。
はやて、突入前にゆりかご上方のガジェットを叩いておく。部隊を
下からせてくれ』

『了解や！』

私とヴィータちゃんに続いて、ルシル君からの通信も入る。
ルシル君にはガジェットの掃討を任せていたから少し遅れてしまっ

ている。
そして私とヴィータちゃんが、報告のあった突入口へと降り立ったとき、

その身に刻め 神技ニールン・ヴァレスティ

私たちの遙か頭上にいるガジェット群へと一直線に進んだ槍が、蒼い閃光となって爆ぜた。
閃光が収まると、そこにはガジェットが一機もなくて、代わりに無数の羽根が舞っていた。

「たった一発で殲滅って、やっぱりあいつすげえよな」

ヴィータちゃんが呟きを聞いて、私は同感した。
ルシル君には敵わない。と思いつつ突入口となる内壁を破壊して、ゆりかご内に突入した。

「機動六課スターズ1、2、内部通路突入！」

ある程度降下したとき、いきなり魔力結合に異常が発生。
魔力結合を解除された原因はもちろん、

「AMF!」

ヴィータちゃんの言うとおりAMFによるものだ。
私とヴィータちゃんは降下じゃなくて落下し始めた。

「内部空間全部に……?」

この一帯だけ、ということはないはずだ。

出力を上げて一時的にアクセルフィンの効果を持続、着地と同時にアクセルフィンを解除する。

そんな簡単なことですら魔力の消費が多かった。

ゆりかご内を軽く見渡す。

ここに、この中のどこかにヴィヴィオが待ってる。

「スターズ5、スターズ1、2に続き内部通路に突入完了」

上からルシル君がゆっくりと降りてきた。

AMFがあることを教えるために口に出そうとしたけど、

「AMFか。結構濃度が高いが・・・二人は大丈夫か？」

言葉は出なかった。何故なら、ルシル君はAMFの中でもなんら変わらなかったからだ。

「大丈夫だけど・・・ルシル君は・・・？」

「魔導師のリンカーコアと、魔術師の魔力炉システムは質が違うからな。この程度のAMFなら影響は受けることはないよ」

そう言っつて、ルシル君は22枚の翼を無数の羽根にして消していった。

でもこれは嬉しい誤算・・・なのかな？

魔導師わたしたちにとってAMFは厄介だけど、ルシル君たち魔術師は関係ないってことだ。

「呑気に話してる場合じゃねえみてえだぞ」

ヴィータちゃんの視線の先、そこには私たちを迎撃しに来たガジェットがいた。

ヴィータちゃんがアイゼンを構えて、私たちを庇うようにして前に立つ。

「なのはは魔力を温存してる。こいつらはあた「待て、ヴィータ」
んだよ・・・?」

ルシル君がさらにヴィータちゃんの前に出る。

少し不機嫌そうなヴィータちゃんだけど、私はルシル君に賛成する。

「このAMFだとヴィータも辛いだろう? ならここは影響の少ない私がやるっ」

「ちよつと待てよ! お前だってペッカートゥムと戦わなくちゃいけねえんだろ!?

なのに、こんなことで無駄な魔力を消費していいのかよ!？」

ヴィータちゃんの言うことも正しい。

私たちがじゃ敵わない存在、ペッカートゥム。その内の一人がヴィヴィオの傍にいる。

でも魔力消費のことを考えたら、やっぱりルシル君に頼るしかない。

「こんなこと、って・・・。。ヴィータとなのはを守るのも大切な私の役目だ。

それに消費の少ない術式を選択すればいいだけだよ」

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

「そつだ二人とも、私から離れないように」

そう言ったルシル君は私たちに近づいて指を鳴らした。
直後、“ギンツ”っていう鈍い音が聞こえた。

「シャルがないなら使ってもいいよな。墜ちな、ルイン・トリガー圧戒」

そしてそれは起こった。私たちに迫っていた十数機のガジェットが
墜落。

軋みを挙げながら、最後は潰れて次々と爆散していった。

「何したんだよ？」

私とヴィータちゃんの間立つルシル君を見る。

何をした？ それは私も同じことを考えてた。でもなんとなく解つ
てる。

「私を中心とした半径30m範囲に六倍の重力をかけた。
ガジェットはそれに耐えられず地面とキス、バッドエンドというわ
けだ」

やっぱりそうだ。ガジェットは重力によって墜落していた。

「お前らって本当に何者なんだよ？ 魔術師って重力なんてものも
操れんのかよ？」

通路を歩き出したルシル君についていきながら、ヴィータちゃんが
そう訊く。

私もそれに続いてルシル君の後を追う。ガジェットみたいにペチャ
ンコになりたくないから。

「今は私だけだ」

次々と現れるガジェットは六倍の重力圏に自ら進入して自滅していく。
これで魔力消費の少ない術式？ 対人で使われたら誰もルシル君に勝つことが出来ないかも。

「今は、ってことは前はいたのかよ？」

ヴィータちゃんは少し早歩きでルシル君の隣を歩く。

「妹がそうだった。もういないけどな」

ルシル君の血の繋がった本当の家族はもう誰一人としていない。
それはヴィータちゃんも知っていることだ。

だからヴィータちゃんは気まずい顔をして「すまねえ」って謝った。
ルシル君は笑みを浮かべて「気にするな」と言っつて、ヴィータちゃんの頭を撫でた。

それからガジェットの潰れていく様を何度も見ながら通路を進む。
そして、

『突入隊、機動六課スターズ分隊へ』

「はい！」

『駆動炉と玉座の間、詳細ルートが判明しました』

ようやくこの聖王のゆりかごのマップが判明した。

私たちがいるのはちょうど中央辺り。そして駆動炉と玉座の間の位置は、

「真逆方向・・・？」

その二つはゆりかごの最前方と最後方に位置していた。

「突入隊のメンバーはまだ揃わねえか？」

『各地から緊急招聘していますが、あと40分は・・・』

それだと遅すぎる。もう突入隊を当てにすることは出来ない。
こうなれば残る手は一つだけになる。

「仕方ねえ。スターズ1と5は玉座、スターズ2は駆動炉。別行動で行く」

『了解しました。急いで応援を揃えます』

それは二手に分かれて、それぞれに対処すること。

「ヴィータちゃん・・・」

「そんな心配そんな顔すんなよ。ここまでセインテストのおかげで全然魔力を使つてねえ。」

だから万全だ。それに忘れたのかよ。あたしとアイゼンの得意分野は破壊と粉砕。

鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼンに碎けねえものはこの世にねえよ」

そんなことを言われたらもう何も言えないよ。

私はルシル君に振り向いてみるけど、ルシル君はヴィータちゃんの

意思を尊重するようだ。

黙ってヴィータちゃんを送り出そうとしてる。

「ありがとな、セインテスト。とっとと終わらせてくっから、なのはとセインテストもちゃんとヴィヴィオを助けるよ。」

そんでこいつの上昇を止めて、表のはやてに合流。

あたしが終わっても、そっちが終わってねえようなら承知しねえかな」

ヴィータちゃんもルシル君も覚悟を決めてる。

だったら私も覚悟を決めないとダメだ。

「うん。気をつけてね、ヴィータちゃん。絶対に、すぐに合流だからね！」

「当たり前だつづの！ セインテスト、あたしの代わりにちゃんとなのはを守れよ！！」

「ああ。約束だ」

こうして、私とルシル君はヴィヴィオのいる玉座の間に。そしてヴィータちゃんは一人駆動炉の破壊へと向かった。

十 十 十 十 十 十 十

なのはたちと別れた私とシャルは、スカリエッティのアジトへと到着。

そこでシスター・シャツハと合流して、アジト内の搜索を始めた。

「烈風一迅！ 斬り裂け、ヴィンデルシャフト！！」

「トロイメライ！ Gefrieren unt Blitz
双牙氷雷刃！」

シスターとシャルの魔法によって、私たちを迎撃しに来たガジェツトは反撃することが出来ないまま、ただの鉄塊へと姿を変えていく。

「すごいですね、騎士シャルロッテ。複数の魔力資質変換なんて・・・」

「シスターもなかなかの腕。一度手合わせしてみたいです」

「いいのですか！？ 私も一度あなたと戦ってみたいと・・・！」

二人の後ろをただ歩いて続く。さっきから私は何もしていない状態だ。

だって私が攻撃に入る前に全部シスターとシャルが片付けちゃうから。

二人は二人で何やら盛り上がっているし、ちょっと淋しいです。

「新手が来ました！」

シスターの声に反応した私はザンバーを構えていざ、というときに・・・

「風牙烈風刃・式連！ Zwillling Windsto
双風）」

シャルがツヴィリンゲ・フォルムとなっているトロイメライから、吹き荒れた風の壁を起こしてガジェットへと放った。結果は当然の如く全滅だ。

「フェイトもシスターもAMFの中じゃ辛いんだから、私に任せておけばいいの」

Schwert form

また一つの長刀になった“トロイメライ”。それを肩に担いでシャルが笑みを浮かべる。

そう。魔術師は魔導師シャルにとっては面倒なAMF内でも大して堪えていない。

さっき訊いたけど、魔術師の魔力炉システムの性質上AMFは脅威にならない、とのことだった。

「あ、アコース査察官の・・・」

シャルの視線の先にはアコース査察官の猟犬たちがいた。近寄ってきた猟犬たちにシャルは頭を撫でてあげている。

『別働隊、通路確認。危険物の順次封印を行います』

「了解。各突入ルートはアコース査察官の指示通りに」

『はい！』

別の突入隊からの報告。その辺りの指示はアコース査察官に任せてある。

私たちは主犯のスカリエッティに限定しての搜索を主としているか

らだ。

「んじゃ行くかうか」

シャルの言葉に頷いて、さらに奥へと進む。

奥へと辿り着くまでに何度もガジェットが現れたけど、シャルが次々と対処していった。

シャルが魔法を使ったのは初めのうちだけ。

それからは純粹な身体能力と剣技だけで破壊していく。

強かった。強すぎた。私は今までシャルの戦いを何度も見てきた。

だからこそ私は改めてシャルの実力を思い知った。

「……爆発音……？」

前を歩いていたシャルが立ち止まって耳を澄ましている。

私とシスターも同じように耳を澄ますけど何も聞こえ……聞こえた。

遠くのほうで爆発音。誰かが戦闘をしている……？

「……来る……！」

シャルが叫んで、私とシスターのお腹に手を回して、抱えながらそこから離脱。

次の瞬間、壁を突き破って人が飛び出してきた。その人には見覚えがある。

「うぐ……。フェイト……お嬢様……！」

先日戦った紫色の髪をした戦闘機人。だけど彼女の体はボロボロだった。

「トール姉！！・・・管理局！？ もうこんなところまで・・・！」

紫色の髪をした戦闘機人をトールと呼んだもう一人の水色の髪をした戦闘機人。

続いて出てきたのはトールと同じ、先日戦った桃色の髪をした戦闘機人。

他の二機もトールよりかはマシだけどボロボロだ。

「あなたたち・・・一体何が・・・？」

シスターも予想外の事態に混乱を示している。

私だってそうだ。戦闘機人を相手にしてここまで追い詰めることの出来る味方はいない。

「・・・久しぶりね、レヴィヤタン。リベンジしに来た」

シャルが私たちを庇うようにして前に出た。

壁の孔からゆっくりと出てきたのはレヴィヤタンという小さな女の子。

その子はペッカートウムの一人で、その速さは私やシャル以上。

「トール、とか言ったっけ？ あなたたちをそんなにしたのはアレ？」

立ち上がったトールに、シャルは振り向かずに訊いた。

トールは少し間を置いて、衝撃的なことを口にした。

「・・・いや、私たちが今戦っているのは・・・ドクターだ」

「そんな・・・!?!」

私は信じられずにそう叫んでしまった。

スカリエッティと戦闘機人が戦う? もうわけが分からない。
他の戦闘機人二人も俯いて、沈黙という形で肯定を示している。

「さつさと白黒つけたいけど。その前にスカリエッティはどうしたわけ? いやいよ狂った?」

「・・・もう解っているはず・・・」

シャルの問いに静かに答えたレヴィヤタン。

解っている? シャルにはこの状況の原因を知っているだろうか?

「おや? ごきげんよう、フェイト・テストロツサ執務官。それと3rd君」

「ドクター!!!」

続けて孔から出てきたのは、私がずっと追いつけていた男ジェイル・スカリエッティ。

ゆっくりとレヴィヤタンの隣に並んだスカリエッティは、トーレたち戦闘機人へと目を向けた。

それにしても、3rd君って・・・シャルのこと・・・?

「まだ動いていたのかい? 今の一撃で止めを刺したと思ったんだが・・・?」

「何故ですかドクター!?!? 何故このようなことを!?!?」

トーレの叫びへの答えは、スカリエッツィの攻撃だった。右手に装着しているグローブを操作して、作り出された赤い糸をトーレに放った。

「だから、利用されて裏切られる間に手を切れ、って言ったのに・・・。ねえ、スカリエッツィ？」

トーレの前に飛び出たシャルがその赤い糸を切断した。

シャルが手にしているのは“トロイメライ”じゃなくて“キルシュブリューテ”だ。

“キルシュブリューテ”の切っ先と鋭い眼光をスカリエッツィに向けている。

「スカリエッツィの目の色は確か金。なのに今は真紅。体に乗っ取られたわけね、アスモデウスに・・・」

「……っ!?」「」「」

「え? どういうこと? アスモデウスがなに?」

シャルの言葉に絶句する私たち。

けど水色の髪の毛の戦闘機人は解っていないみたいだ。

「……本当は髪も真紅にしたかったのだけど、瞳だけで我慢したわ」

男性の声とは違う女性特有の高い声が、スカリエッツィの口からこぼれた。

それを聞いた私たちは無意識に後ろへと退いた。

「何が目的なのか答えなさいアスモデウス。スカリエッツィの体に乗っ取った理由は？」

「そしてお前たちペッカートゥムの狙いは？」

「すべては許されざる傲慢の目的のままに」

スカリエッツィの左手に大鎌が現れた。それを掴んで軽々振り回している。

「シャル……どうしたら……？」

私に対処法はない。それはシスターや戦闘機人も同様のはず。だからペッカートゥムを知るシャルなら何とかできるだろうと思いついてみる。

「スカリエッツィごと乗っ取っているアスモデウスを殺す」

シャルの答えは無慈悲だった。

「ドクターを殺すなど認めんぞ!!」

シャルの背後にいたトーレが勢いよくシャルの右肩を掴んで無理矢理振り向かせる。

「ただシャルの鋭い眼光を見たトーレは肩から手を離した後ずさつた。」

「別にこの体ごと殺してもいいわよ？ でも出来るかしら？」

「甘々な法の下に動く管理局は、いくら重犯罪者でも殺しを良しとしないのでしょうか？」

どんな犯罪者でも殺害することを禁止されているのは間違いない。だからこそ局員や一般市民に犠牲者が出ることもしばしばある。

「私はもう管理局員じゃない。それに世界と人間一人の命、天秤にかけて量る以前の問題。」

お前一人を犠牲にして世界を救う。悪いけど、それが一番手っ取り早い」

「なるほどね。それはそれは界律テストメントの守護神そのままの腐った考え方ね」

「絶対殲滅対象キサスのように丸ごと滅ぼす連中に言われたくない」

シャルとアスモデウスの会話が全然理解できない。

テストメントとか、丸ごと滅ぼすとか……一体何を言ってるんだろう……？

「シャル、ごめん。やっぱり殺害は許可できないよ」

それでも私は私の仕事を全うする。

そのためにはシャルちゃんを抑えることからだ。

話の内容は未だに理解できないけど、スカリエッティは逮捕、そして法の下に裁く。

それを絶対として事を進めていかないとダメだ。

「……はあ、解ってる。今のは単なる冗談だよ。冗談三割、本気七割」

シャル、人はそれを本気と捉えると思う。

「それに……アスモデウス。お前は大きなミスを犯してるからね。」

スカリエツティを殺す必要性はどこにもない」

「なに……？」

シャルは“キルシュブリューテ”を持つ右手の逆、左手に再度“トロイメライ”を握りなおした。

「その体に答えを刻んであげる……。フェイト、シスター、悪いけど手伝って。」

そこで戦闘機人三機。スカリエツティを救いたいなら手伝いなさい」

“キルシュブルーテ”を逆手に持ち替えて、二刀流の構えを取ったシャルに、私たちは協力することを選択した。
あとは戦闘機人たちの返答を待つのみだった。

十
十
十
十
十
十
十

「アイゼン！！」

Komet Fliegen

コメイト・フリーゲンで次々と沸いて出てくるガジェットをまた潰した。

「まったく、テメエらはゴキブリかっつうの」

あたしは、なのはとセインテストと別れて駆動炉を目指している。

「にしても、どれだけ歩かせりゃあいんだよ」

ここに来るまでにどれだけガジェットを潰したのか思い出せねえ。

セインテストが別れる手前までガジェットを相手にしてくれたから正直助かった。

もしセインテストがいなかったらもつと魔力を消費していたかもしれねえ。

「カートリッジはあと……9発。十分。駆動炉相手じゃ楽勝だ……っ!？」

歩き出そうとしたところで、あたしの体に異変が起きた。

それはあたしの胸から伸びる刃。油断とか余裕とかじゃなくて、全く気配がなかった。

痛みとか言う前にそのことに対する驚きが頭ん中を占める。

あたしは振り向いて、この刃の主を目にした。

そこにいたのは、8年前になのはとセインテストを撃墜した機械兵器マシンに似たやつだった。

「ああ……ああ……あああああ!!!」

さっきまでであった驚きが全部吹き飛んで怒りに変わるの分かる。

その怒りのまま、あたしはギガントフォルムのアイゼンをそいつに叩きつけた。

そいつの爆散の衝撃で吹き飛ばされて、通路の床を何度か転がる。痛覚は遮断したおかげでなんとか耐えられる。

「はあはあはあはあ………」

それでも胸に孔が開いていることには変わりはない。

吐血しながらもアイゼンを杖代わりにして起き上がって、あたしは見た。

今潰したやつとおんなじのが群れを成して通路の向こうから押し寄せてくるのを。

「あるとき……なのはとセインテストを落としたのは、テメエらの同類か!？」

機械相手に答えが返ってくるわけねえか……。

「ざっけんなよ。一機残らずぶっ壊してやらああああ!?!」

こいつら全部ぶっ壊して、とっとと終わらせてやる。

開戦（後書き）

シリアスな戦いだというのが冒頭部分が馬鹿ですいません。
どうしても今話で使いたかったセリフがあったもので・・・。

「空が狭い」、知っている人は知っていると思うんですが、このセリフをルシルに、

このゆりかご周辺空域ガジェット掃討戦で使いたかったんです。

名作（自分だけがそう思っている可能性有）ACE COMBAT

ZEROで使われるセリフです。

全く関係ないですが大好きですACEシリーズ。

ルシルの複製術式

デスペアー・フライト：ヴァルキリープロファイル2

複製したこの技を、弾数増加、追尾距離増長、複数ターゲットイン
グとオリジナル効果のためにver.としています。

ニールン・ヴァレスティ：スターオーシャン3

ヴァルキリープロファイルより、のほうが入っているのです。

ルイン・トリガー
圧戒：ANSUR

Fortuna liberat metu neminem . (前書き)

フォルトゥーナ・リーベラット・メトゥー・ネーミネム / 運命は誰をも恐怖から解放しない。

第三管理世界ヴァイゼン

深い森林の中、唯一開けた場所である平野に陽光とは違う光があった。

かつて、そこは許ヘルフェゴールされざる怠惰が紋様を刻んでいた場所だった。彼女によって刻まれ、そして消えていた紋様が再びその姿を現し、白い輝きを放っていた。

その紋様に興味がある動物と、それに警戒する動物が次第に周辺へと集まっていく。

そして一際強く輝いた紋様。その閃光が治まるとそこには人影が一つ。

動物たちはその紋様から距離を取り、離れた木々の中からその人影を見つめている。

「……生まれてすぐに守護神と戦闘とは。……これは主のイジメでしょうか？」

輝きを失った紋様の中心に立っている男から言葉が紡がれる。

その男は神父の着る黒のカソック姿に、背には鎖で縛られている十字架が描かれていた。

髪は金色のソフトモヒカン、瞳は灰色。整った顔立ちで十人中十人の女性が振り向くような美男子だ。

「それにしてもこの空腹感は……。いけないですね。ああ、いけない……」

男は周囲を見渡し、付近にいる動物たちをその灰色の双眸で確認した。

そして胸の辺りで十字を切り、今度はその十字を否定するかように×十字を切る。

「ああ、我らが主は仰り、罪深き我らへその言葉を与えた……。そう、空腹は最良の料理人である、と。……では、いただきます」

それは一瞬の暴風。それだけで森が一つ消えた。そして更地となったその場所で佇む男。

男の名は許されざる暴食。^{ベルゼブフ}大罪最後の罪“暴食”が今この地に降り立った。

「ふむふむ……。致命に足るクソ不味さ。ごちそうさまでした。

しかし、いくら空腹であろうとも不味いものは不味いのですね。ああ、一つ経験しました」

腹部を擦りつつ何度も頷く許されざる暴食。^{ベルゼブフ}

彼の浮かべている表情には、まだまだ足りないと言わんとハッキリと現れていた。

「ああ、それでは行きましょうか。守護神と愚か者のいるミッドチルダとやらへ。^{ルシファー}

ああ、そこには僕の空腹を満たしてくれる方々がいれば良いのですが……」

こうして許されざる暴食は食事場^{ミッドチルダ}へと向かった。

「確認するわよ。私たちはミッド中央、市街地方面。敵戦力の迎撃ラインに参加する」

アルトの操縦するヘリの中、フォワードのリーダーであるティアナから作戦の確認が行われる。

モニターに映るのは迎撃ラインと思わしきバリケードと魔導師たち。

「地上部隊と協力して向こうの厄介な戦力、召喚士や戦闘機人たちを最初に叩いて止めるのがあたしたちの仕事」

「他の隊の魔導師たちはAMFや戦闘機人戦の経験がほとんどない。だからあたしたちがトップでぶつかって、とにかく向こうの戦力を削る」

それがこの戦いにおいてフォワードに与えられた役目。

機動六課以上のAMFや戦闘機人との戦闘経験を持つ部隊はどこにもない。

そのためにフォワードは敵戦力を可能な限り最前線で削る必要がある。

「あとは迎撃ラインが止めてくれる。と、いうわけですね」

キャラコがそう締め、ティアナ「そっ」と頷いた。

「でも、なんだか……なんだかちょっとだけ、“エース”な気分ですね」

「そうね」

エリオの“エース”発言に同意を示したティアナは微笑んだ。魔導師の憧れの“エース”になった気分。今のティアナも同じ思いだった。

「ガジェットも戦闘機人も市街地を突破されたら地上本部までは一直線です」

「市民の安全と財産を守るのがお仕事の管理局員としては、絶対行かせるわけにはいかないよね！」

四人は頷き、これからの戦いにさらに決意を固める。

そしてティアナはスバル、そしてエリオとキャラコへと視線を向け、

「・・・あとはギンガさんが出てきたら・・・」

フォワードにとって最大の問題であるギンガの話を持ち出す。

拉致され、次に姿を見せたときは戦闘機人と一緒に行動をしていたギンガ。

その彼女への対処について、四人はアースラが出る前に決めていた。

「優先的に対処」

「安全無事に確保」

キャラコとエリオが再確認にして、ギンガの妹であるスバルへと振り向く。

スバルは力強く「うん」と頷いた。作戦開始前のブリーフィングが終わる。

「よし！　いくわよ！」

ティアナの号令の下、フォワードは戦場となる廃棄都市へと向かう。

「ノーヴェ、デイド、ウエンディ。例の四人がそっちに向かってる」

緑色のテンプレートの上に立ち、モニターに映るフォワードを確認したオットーが廃棄されているハイウェイを往くノーヴェたちへと報告を入れる。

「ホントか？」

「ああ。ただ、前とは状況が違う。正面から戦う気で来てる」

「なーに、望むところっすよ！」

フォワードとの戦闘にやる気を見せるウエンディ。

ノーヴェもまた口には出さないが、フォワード、特にティアナには敵意を持っている。

そのために戦う気はウエンディ以上にある。

「ゆりかご浮上前に地上本部を制圧。司令部を抑えたい。状況に対する不確定要素はなるべく排除する」

通信を切り、オットーは二手に分かれたフォワードをさらに分散さ

せるために、ISレイストームを発動した。

ハイウェイを往く中、フリードリヒに跨っているキャラロは、前方の廃棄ビルの屋上にいる召喚士ルーテシアとガリユーを視界に捉える。ルーテシアが指差す場所には、さっきまで自分たちが乗っていたヘリがあった。

キャラロはルーテシアの標的がヘリと判り、すぐさまフリードリヒに指示を出す。

「フリード!!」

フリードリヒはそれに応えるように、ルーテシアたちのいる廃棄ビルの屋上へと向かった。

その突然の行動にティアナは立ち止まりキャラロの名を呼ぶ。

ティアナはキャラロたちの行く手にルーテシアたちの姿を見、すぐさま隣に立つスバルに指示を出す。

「予定変更！ 召喚士こっちを先に捕まえる！ いいわね、スバル！」

「うん！ ウイング　　っ!!」

レイストーム

ベルカ魔法陣を展開したスバルがウイングロードを発動しようとしたとき、幾条もの閃光が襲いかかってきた。

スバルとティアナはそれを回避。ティアナは傍にあったビルの屋上

へ。

そこへティアナに襲い掛かるディード。

ティアナは“クロスミラージュ”をダガーモードにしてディードの攻撃を凌ぐが、何度目かの攻撃の際に耐え切れずに別の廃棄ビルへと弾き飛ばされた。

「ティアア!？」

スバルはスバルでノーヴェエからの襲撃を受けていた。

ティアナが弾き飛ばされたのを見て彼女の名前を呼ぶが、ノーヴェエの苛烈な攻撃によってスバルもまたハイウェイの壁へと叩きつけられた。

エリアルキャノン

咄嗟にガードしたため大したダメージを受けなかったスバルに、今度はウエンディからの砲撃が襲い掛かった。

しかし、それは単なる時間稼ぎでしかなかった。

ノーヴェエとウエンディの目的はティアナ。スバルには相応しい相手が用意されていた。

ティアナと合流するために走りだそうとしたとき、スバルの前に腕を組んだギンガが現れた。

「……ギン姉……」

いざ目の前になると思考が滞る。

『ライトニング、スバル。作戦、ちよつと変更。』

目の前の相手、無理して一人で倒す必要はないわ。

足止めして削りながらそれぞれに対処。それでも十分市街地と本部

は守れる。

「……………念話が聞かれてる！？ 通信は以上！ 全員、自分の戦いに集中！」

ティアナからの作戦変更の念話が来ても答えられず、ギンガの姿を見つめるのみだ。

そして大事な妹のスバルに名を呼ばれても一切の反応を見せないギンガ。

再度「ギン姉」と呼ばれ反応したかと思えば、ギンガは構えを取り臨戦態勢に入った。

その構えたギンガを見てスバルも構えを取る。

それはギンガをただ倒すためではなく救うために必要なことだからだ。

スバルは考える。ギンガを救う方法を。

戦闘機人としての能力“振動破碎”の使用は不可。あれは威力が高すぎるためだ。

なら残る方法は魔力ダメージによる撃破となる。

「私が絶対助けるから！！」

スバルとギンガの足元にベルカ魔法陣が浮かぶ。

姉妹による戦闘が開始された。

『この状況で個人戦はまずいわ！ 合流を・・・！？』

ティアナは弾き飛ばされた廃棄ビル内で、咽ながらも三人へと指示を出す。

だがティアナを閉じ込めるかのように、廃棄ビル全体に結界が張られてしまった。

ティアナはその場から離れ、どうにかして結界から抜け出すために行動を開始。

そして廃棄ビルの中央、吹き抜けのある場所で戦闘機人と当たってしまった。

「ハチマキとコンビでどうにか半人前。四人でようやく一人前のへっぽこガンナーが仲間と引き離された気持ちはどうっすかー？」

「チンク姉と痛さと悔しさ、ハチマキの代わりにお前に返してやる！」

ティアナへと近づいてくるノーヴェとウエンディ。

そしてその二機に率いられているガジェット数機。

ティアナは柱の陰に身を潜め、自分たちの現状を把握する。

自分は結界内。ライトニング、スバルとの分断距離と戦力負担の大きさ。

それから導き出した作戦を念話でそれぞれに伝える。

『ライトニング、スバル。作戦、ちょっと変更。』

目の前の相手、無理して一人で倒す必要はないわ。

足止めて削りながらそれぞれに対処。それでも十分市街地と本部は守れる』

「バツカじゃねえの！？ そんなに時間かかんねえよ！」

「あんたは捕獲対象じゃねえんっすから、殺しても怒られねえっすからねー」

ノーヴェとウエンディは、まるでティアナの念話を聞いていたかのようにその口にする。

対フォワードのために念話を盗聴できるように再調整を受けていた。

「念話が聞かれてる！？ 通信は以上！ 全員、自分の戦いに集中しろ！」

念話を切り、臨戦態勢に入る。

接敵まであと僅かというところで、先攻を取るティアナ。

クロスファイアによる同時複数射撃による弾幕を張り、その隙に移動、そして再度クロスファイアを放つ。

戦闘機人二機を相手に真っ向からの勝負は自殺行為。ゆえにヒットアンドアウェイをとる。

さらにフェイク・シルエットを用い、自分と弾丸の幻影を織り交ぜる。

それでもノーヴェとウエンディの包囲網はなかなか崩れず、次々と幻影を撃ち落される。

「幻術馬鹿の一つ覚えが。・・・見えてんだよ！！」

ノーヴェやウエンディは、念話盗聴の他にもティアナの対幻術の調整も受けていた。

そのためティアナの幻術は対象のかく乱という役割を完全に失っていた。

突進してきたノーヴェの蹴りをまともに受け、弾き飛ばされるティアナ。

そこへウェンディの射撃が追撃してくるも、ティアナは負けじと射撃を繰り返す。

ようやく間が開いたことで、アンカーショットをこの廃棄ビルの天井へと打ち込んで、吹き抜けを通ってその場から離脱。

それは結界破壊スタッフが来るまでの時間稼ぎとしての離脱だった。しかし、その彼女の行く手を防ぐ新手が現れた。ツインブレイズを手にしたデイドだ。

それに気づいたティアナはギリギリで回避行動に移るが、右足を斬られてしまう。

そのまま一番近い階層の陰に隠れ、合流を果たした戦闘機人たちの様子を窺う。

「デイド、あんたも!？」

「オットーの指示。あの幻術使い、確実に仕留めておかないと面倒だっ……」

その会話を聞きながら、右足に負った怪我を見てティアナは歯噛みする。

足に怪我を負うことがどれだけのハンデとなるか解っているからだ。戦闘機人三機とガジェット、そして行動の要である足へのダメージ。この二つの要因がティアナに絶望を抱かせた。

心が折れそうなとき、ティアナの脳裏に浮かんだのはスバルだった。

大丈夫だよ。ティアならきつと出来るって

幻聴にしてはハッキリと聞こえたスバルの声に、ティアナは周囲を見渡す。

ティア、強いもん。絶対絶対大丈夫

一緒に頑張ろうね、ティア

一緒に行こう。夢を叶えに

そうなると思いつくスバルのティアナへの言葉。

ティアナは膝を抱え、こんなときにスバルを思い出す自分に戸惑う。が、そのスバルの思いの籠もった言葉のおかげで、ティアナは再度立ち向かうことを決意した。

「あなたは どうして・・・こんなことをするの!？」

フリードリヒに乗るキャロの悲痛な叫び。

対するルーテシアは答えない。

「こんなところで、こんな戦いをする理由はなんなんだ!？」

廃棄ビルの側面を足場として何度も衝突を繰り返すエリオとガリユ
ィ。

エリオとキャロはティアナからの作戦変更の念話を受け、ルーテシ
アとガリユの確保に動いていた。

「目的があるなら教えて！ 悪いことじゃないんなら、わたしたち
手伝えるかもしれないんだよ!？」

キャラの説得は続く。その言葉はかつてなのはやフェイトが口にしていたものに似ていた。そのキャラの説得にルーテシアも表情を歪め、明らかに動揺しているのが判る。

だが、それを振り払うかのようにダガー状の射撃魔法“トーデス・ドルヒ”を周囲に展開。

それを見たキャラは距離を開けようとするが、ルーテシアを乗せたガジェット？型が追撃。

「キャラ！」

ガリユーと攻防を繰り返していたエリオが、キャラを守るためにガリユーの攻撃を捌き、

D?sen!

“ストラダ”のヘッドブースターを点火させて、“トーデス・ドルヒ”の迫るフリードリヒの上へと跳躍。

そのまま“トーデス・ドルヒ”を叩き落とし、フリードリヒに着地。キャラを守る騎士かのように“ストラダ”を構え、ルーテシアへと視線を向ける。

エリオとキャラの目に映るのは、表情に迷い色がハッキリと浮かぶルーテシアだった。

地上本部へ向けて飛行するゼストとアギト。

その行く手を拒むようにして空に立つのはシグナムとリイン。

「ダンナ、あいつら・・・!」

アギトに袖を引っ張られるゼスト。

ゼストはそのままシグナムの前で止まる。

「局の騎士か？」

「本局機動六課、シグナム二尉です。前所属は首都防衛隊。あなたの、後輩、ということになります」

ゼストに訊ねられたシグナムは自らの名、所属、階級、そして前所属を口にする。

そして目の前にいる騎士、ゼストの後輩でもある、とも。

「そうか・・・」

そうゼストは短く答える。

「中央本部でも壊しに行かれるのですか・・・？」

「古い友人に、レジアスに会いに行くだけだ」

「それは・・・復讐のため・・・？」

「・・・言葉で語れるものではない。道を開けてもらおう」

問答無用でゼストが構える。

「言葉にしてもらわねば譲れる道も譲れません」

それに応じるようにシグナムもまたレヴァンティンを鞘から抜き放つ。

カートリッジを一発ロードし、刀身に一瞬だけだが紅蓮の炎が燃え立った。

その炎を見たアギトが驚愕するが、ゼストに「どうかしたか？」と訊かれ、「なんでもねえ」と返した。

「グダグダ語るなんてなあ、騎士のやるこつちゃねえんだよ！」

アギトが紫色の光球となりゼストとユニゾンを果たす。

「騎士とかそうでないとか、お話しないで意地を張るから戦うことになっちゃうですよ!!」

リンもまた白い光球となりシグナムとユニゾンする。

そしてリンとアギトの言い争いは続く。

『うるせえバツテンチビ!! 剣精アギト、大儀と友人ゼストが為にこの手の炎で押して参る!!』

アギトの炎がゼストの槍の穂を紅蓮の炎が生み出される。

『祝福の風リンフォース?。管理局の一員として、あなた方を止めさせてもらいます!!』

そしてシグナムの“レヴァンティン”にもまた、ゼストの槍と同様の紅蓮の炎が上がる。

シグナムは“レヴァンティン”を構え、ルシリオンから出撃前に訊いた伝言を口にする。

「ルシリオン・セインテスト・フォン・フライハイト……覚え
ておいでですか……？」

シグナムの口から出た名前を聞いたゼストは少し眉を寄せ、「ああ
とだけ答える。」

「そうですか。ならそのセインテストからの伝言です。
馬鹿な真似だけはしないでください……だそうです。確かにお伝
えました」

「……そうか……」

シグナムはゼストの表情から何も窺い知れなかった。今、何を考え
ているのか、と。

だがこれでは戦ってどちらかの目的が果たされるのみとなった。

「……いきます!!」

シグナムが先に動く。それに応えるようにゼストも前進。
衝突するシグナムの“レヴァンティン”とゼストの槍。
剣の騎士と槍の騎士の戦いが始まった。

十 十 十 十 十 十 十

向こうの戦力はスカリエツティの体に乗っ取ったアスモデウス。
そしてこの場で一番厄介と思うレヴィヤタンの二体。
もしかするとさらにレーガートウスが現れる可能性あり。

それに対してこちらは私とフェイト、シスター、そして戦闘機人三機の計六人。

ただど実際の戦力としては私とフェイトにシスターの三人。

戦闘機人は人間には強いというのは解るけど、相手がペツカートウムならその強さは無意味だ。

まあ、協力するか否かの返答はまだ聞いてないけど・・・。

「さあ、どうする？ きつちり考えたうえで答えて。

1、手伝ってくれるならスカリエツティを無傷とはいかないけど救う。

2、手伝わないのならとつとと白旗振って逮捕されること。ハッキリ言って邪魔になる。

3、この場に第三勢力として戦う。その場合は瞬殺するから覚悟しておくこと」

態々こちらが動くのを待っていてくれるアスモデウスとレヴィヤタンだ。

ならこの時間を有用に使わせてもらおう。

1の協力してくれるなら、こいつらの持つ能力を聞き出して適材適所で使用。

2の協力しないのなら、瞬殺でも何でもして他の突入部隊に引き渡す。

3の第三勢力としての参戦。それはまずないと言える・・・はず。

私たちが来るまでどんな戦いをしていたか知らないけど、それなりにダメージを負っている。

そんな状況で私たちがアスモデウスと敵対すればどうなるか分からないわけじゃないはず。

「返答は如何に・・・？」

“トロイメライ”を握る左拳に力を入れる。2か3を選んだ場合に備えて、だ。

戦闘機人がそのどつちかを選んだ瞬間、左の“トロイメライ”を叩きつける。

三機同時撃破とはいかなくても、おそらくリーダー格と思うトールは確実に倒せる。

「・・・悩む必要はないと思うわ。この体が死んでもスカリエッティは再び現れるのだから」

スカリエッティの顔でアスモデウスの声と口調・・・ハッキリ言ってキシヨすぎる。

待った、違う。そんなことはどうでもいい。アスモデウスは今なんて言った・・・？

「どついつこと？」

「プロジェクトF、だったかしら。それを利用したらいいのだけだね。」

この男は十二機の戦闘機人の体内に自らのコピーを仕込んだ、ということよ。

つまりオリジナルであるこの体が死んでも復活して、一ヶ月もすればこの男と同じ記憶を持ったクローンが生まれる、というわけ。

・・・愚かな。やはり人間は愚かな存在ね」

プロジェクトF、か。面倒なことを・・・いや、おかしい。

アスモデウスの話が本当ならスカリエッティは確かに死んでも復活

するんだらう。
だけどその体に乗っ取っているアスモデウスはどうなる？
いくらアスモデウスもそれと一緒に復活するなんてことは出来ないはずだ。

私の推測だけど、アスモデウスがスカリエッティの体に乗っ取った理由はおそらく界律対策。

すでに界律に認められている存在の中に入ること、界律の抑止や修正から外れようとしているんだらう。

なのに、態々そんなことまでしておいてここで死んでもいい？ その矛盾が引っかかる。

「さつき、全てはルシファアの目的のため、って言ったよね。
ルシファアはもういないんじゃないの・・・？」

ルシファアは、あの白髪の女に取り込まれたと私は睨んでいる。
そこまでの経緯は知らないけど、それが正しい答えであるようにしか思えない。

「・・・話すのも飽きたわ。もうそろそろ始めてもいいいわよね・・・」

私の疑問に対する返答の代わりに殺気をお見舞いしてきた。
私の背後でフェイトとシスターが構えるのが分かる。
レヴィヤタンもやる気を見せているし、仕方がない。

「戦闘機人！ どうする！？」

「・・・トーレ姉」

「……我々は……」トーレ「ドクター!？」

アスモデウスの声ではなくスカリエッツィの声がした。
もちろん声の出所はスカリエッツィの体から。
目の色も真紅から元の金色へと戻っている。

「トーレ、セツテ、セイン。私と共に戦ってくれないかね？
我々の夢のために……共に戦って、目の前にいる偽善者たちを葬
ろうではないか」

「はい!！」

「……」

トーレと、桃色の髪をしたおそらくセツテ……？
その二機がスカリエッツィの言葉に嬉々として賛同、傍へ行こうと
する。

残りの水色の髪をした、セイン？……で本当に良いのかな……
？

その子は無言。完全に迷っている節がある。

そんなことよりトーレとセツテ？の非協力は決定。

すぐさま戦闘不能にするために左手のトロイメライを振り切ろうと
したけど、

「ライドインパルス！」

避けられた。この速さはたぶんあのとき、ヴィヴィオを保護したと
きの戦いでメガネ女と砲撃女を、なのはとフェイトの挟撃から助け
たやつ。

「シャル！」

フエイトの声で、私は迫るレヴィヤタンの砲撃に気づいた。すぐさま離脱と思ったけど、近くにフエイトとシスターがいる。なら回避じゃなくて迎撃に移る。レヴィヤタンの砲撃は魔力じゃなく神秘。

ならば“キルシュブリューテ”の保有する神秘で断つ。

「はあああああつ！！！」

“トロイメライ”を振った遠心力を利用した“キルシュブリューテ”の打ち下ろしによる一閃。
すみれ色の砲撃は左右に裂かれて遙か後方に飛んでいった。

「大丈夫、シャル・・・？」

フエイトの心配に頷くことで応える。

それに問題があるのは私じゃなくて、あの戦闘機人二機だ。
スカリエツァ
人間の意志がアスモデウスに勝るわけがない。

なら、さっきの声は間違いなくアスモデウスの“演技”だ。
あんな演技くらい簡単に見抜けないなんて、それほど敬愛している
ということか・・・？

「・・・ありがとう、トーレ、セツテ。・・・本当に・・・
馬鹿ね・・・」

目の色が金から真紅へ。声が男のものから女のものへ。

案の定だった。こっちに残ったセインは迷いのおかげで助かった。

「「っ！？」」「

「トーレ姉！ セツテ！」

再びアスモデウスとなったスカリエッツィの両手が、トーレとセツテの頭を鷲掴み。

「ミシミシ、という嫌な音がハッキリと私たちの耳に届く。

そのまま両手に光が生まれて、戦闘機人の全身を包み込んでいく。

「フェイト！ シスター！」

あの二機は敵だ。だからと言ってアスモデウスの勝手で殺させるわけにはいかない。

本来なら間違いなくイレギュラーである守護神わたしたちと絶対殲滅対象ヤツら。

その勝手な戦いに犠牲者だけは出したくない。それはムカつくけどスカリエッツィも同様。

瞬時にアスモデウスとの距離を詰めるフェイトとシスター。

私は動こうとしたレヴィヤタンへ一直線に走る。二人の邪魔をさせないために。

「バルディッシュ！ Jet Zamber はあああつ！！」

「ヴァインデルシャフト！！」

私がレヴィヤタンの真ん前に立って“キルシュブリューテ”と“トロイメライ”の同時斬撃を放ったときに、二人の気合の音が聞こえた。

そして私の二刀は空を切る。レヴィヤタンは移動・・・じゃなかった。あれは転移だった。

速さの正体はノーアクションによる転移。まるで守護神わたしたちが使った位相

空間転移のそれだった。

少し考えれば分かる仕掛けだった。けどたぶん認めなかった。番外位のペッカートウム、そのさらに下の嫉妬がそんな術を使うなんて、と。

私はフェイトたちへと振り向く。向こうの方は何とかなっていた。フェイトとシスターの神秘の無い一撃を受けて片膝をつくアスモデウス。

頭を鷲掴みにされていたトーレとセツテはシスターが抱えている。力なく倒れているその二機は完全に意識が落ちている。

フェイトのザンバーはアスモデウスの首に当てられている状態。そしてレヴィヤタンはそんなアスモデウスをただ見ているだけ。助けようともしていない。

「これで解った？ お前が犯したミスがなんなのか。それは神秘でなくともダメージを受ける人間の体、スカリエッティに乗り移ったこと。

全てにおいて本末転倒というわけ」

アスモデウスは界律を誤魔化すためにスカリエッティを乗っ取った。けどその反面、神秘のない単なる魔力攻撃にもダメージを受けてしまうようになった。

つまり、アスモデウスを斃せるのは神秘のない魔法を使う魔導師も含まれることになる。

なら、ここからは他の犯罪者たちと同じにすればいい。

魔力ダメージによるスカリエッティの昏倒。出てきたところを私が完全に打ち斃す。

レヴィヤタンの戦闘意思は萎えていないけど、それでもさっきとは比べるまでもなく弱い。

私がレヴィヤタンを斃すまでの間、フェイトとシスターにはアスモデウスと戦って時間を稼いでもらう。
そして私がレヴィヤタンを撃破、フェイト達に合流して一気にチエツクをかける。」

「さあ、どうする？ その二人は強いよ？」

「・・・なるほど。確かに魔法で傷をつけられるのは問題だわ。けど、その魔導師二人に遅れをとるほどに私が弱いと思っっているのかしら？」

その二人がAMFと呼ばれるこの中で、十全の力が発揮できないのは分かっているのよ？」

そう言つてアスモデウスは一度口を閉じた。

そしてスカリエツティの目と口から勢いよく真紅の髪が溢れ出して、その体を包み込んだ。

それを見たフェイトとシスター、残りの戦闘機人セインは何度目かの絶句。

すぐにその傍からフェイトは離れて、“バルディッシュ”を構えなおす。

スカリエツティの体を包み込んでいた髪がバラけて、その中からアスモデウスの肢体が見えた。

「これで少しは戦いやすくなったわ」

この目で実際に初めて見たアスモデウスの姿。

上から下まで全てが真紅とは・・・なんか目が痛い。

「・・・ドクター・・・？」

セインが覚束ない足取りでアスモデウスへと近づこうとする。もちろんそんなことはさせない。私はセインの肩を掴んで止める。

「セイン。AMFを解除するにはどうすればいいの？」

私は気にならないけど、フェイトとシスターにとって、このAMFはかなりキツイ。

アスモデウスの言うとおり、二人は強いけど十全に力が発揮できないならまずい。

ならこのAMFを制御している場所を先に叩く必要がある。

「教えて。あなたたちのためにも、スカリエッティのためにも……」

「……ウーノ、あたしたちナンバーズが一番。そのウー姉を止めれば……たぶん……」

「ありがとう、セイン。シスター、この子と一緒にウーノのところへお願いします」

敵でもある私にちゃんと答えてくれたセインに感謝を告げる。

「え、しかし……」

シスターは私やフェイト、セイン、そしてアスモデウスとレヴィヤタンを見回す。

シスターの心配は最もだけど、AMFがある状況じゃ私の考えは上手くないかと思う。

なら戦力を削ってでもAMFをどうにかする必要がある。

「シャル。アコース査察官に任せられないかな・・・？」

アコース査察官か。それも一つの手だけど、戦えるのだろうか・・・？

あの猟犬たちに戦闘能力はあるとは聞いているけど・・・、

「ロツサならきちんと戦えますよ。無限の猟犬の戦闘能力はかなり高いですから」

私の考えていることが分かったのか、シスターが私の心配を晴らした。

「本当にそれでいいのかしら？ ウーノは私の支配を受けているわよ。」

あの緑色をした半透明な獣だけで勝てるわけないわ」

せつかく晴れた心配がさつきより遙かに強くなる。

シスターもその言葉を聞いて「ロツサ」と心配している。

「シスター、セインはウーノのところへ。アコース査察官を手伝ってください。」

それでいい、セイン？」

「・・・うん」

セインは迷いに迷ってその答えを出してくれた。

シスターとセインは、このアジトを管理しているウーノのところへ。倒れたトーレとセツテは、セインの能力で一緒に連れて行った。

「ごめん、フェイト。二人だけになっちゃった」

「ううん。大丈夫」

アスモデウスとレヴィヤタン。私とフェイト。

合計戦力としては向こうが若干上といったところかも。

まあ、アスモデウスの姿をしてもスカリエッティの体には変わりはない。

それなら変わらずにフェイトの攻撃は有効だ。

でもフェイトが全力を出すためには邪魔なAMFが解除されるまではまだ時間がある。

それもウーノとかいう戦闘機人の戦闘能力によって変わってくるはずだ。

アスモデウスの支配。どういう力かは知らないけど嫌な響きだ。

そして最大の問題、レヴィヤタン。高速移動じゃなくて位相転移を持つペツカートウム。

おそらく真技じゃないと勝てない。転移前に潰すか転移直後に潰すかの二択。

空間干渉の術式があればもっと簡単だろうけど、生憎と私はそんな反則は使えない。

「考えれば考えるほど泥沼に嵌る、か。仕方ない」

もうごちゃごちゃ考えるのも面倒。こうなったら私の体が動くままに、だ。

『フェイト、私がアスモデウスとレヴィヤタンを同時に相手する。離れたところからでいいから、アスモデウスへの牽制をお願い』

『ちよつ、シャル！？　いくらシャルでもそれは……！！』

『大丈夫。アスマデウスへの魔力攻撃は通じる。牽制だけでも十分に効果は望める。』

だから後方支援をお願いするの。まあ、AMFが解除されたらもちろんアスマデウスと真つ向から戦ってもらつからそのつもりでよろしく』

AMFが解除されたあとのフェイトならアスマデウスとも渡り合えるはず。

それが概念存在であれば不可能だけど今は違うからだ。

アスマデウスは自ら首を絞めることばかりをしている。間抜け。

『……分かった。でもシャルが危ないと判断したら私も動くからね！』

『まあ、そのときはお願い』

フェイトは私たちから10メートルくらい距離を開けた。

私の傍にるのはアスマデウスとレヴィヤタンの二体。

“トロイメライ”でアスマデウスを、“キルシュブリューテ”でレヴィヤタンを討つ。

「シャルロツテ・フライハイト……参ります！！」

閃駆を使つて先手をとる。まずは一番近いアスマデウスから。

振るうのは“トロイメライ”。使用魔法は光牙月閃刃。閃光系の魔力を刀身に纏わせた一撃。

「正面から、しかも一人で私たちと戦うと？ そのクローンと一緒でなくていいのかしら？」

「うるさい！！ そんなの関係ない！ フェイトは私たちの親友だ！！」

フェイトに向けてこいつは禁句を口にした。

私は友達を傷つける奴だけは絶対に許さない。

跳躍して私の一撃を回避したそんなアスモデウスに、

Plasma Lancer

フェイトから放たれたプラズマランサーが12。

アスモデウスは空中で大鎌を振り上げて、そのまま斬り払おうとする。

私はそれを横目にレヴィヤタンへと突撃をかける。

“キルシュブリューテ”に魔力を籠めて、その能力を瞬間解放する。レヴィヤタンと“キルシュブリューテ”における神秘の差はあまりない。

前回のようには逃がさない。必ず致命傷を与えて終わらせてみせる。

「目醒めよ、キルシュブリューテ！！」

解放時間は3秒。限定解放はまだ使わない。

下手に解放して決まらなかつたらこっちが終わる。

瞬時に間合いを詰めて、一気に下から斜め右上に振り切る。

案の定レヴィヤタンは転移、私の頭上に現れたのを知覚で捉える。

“キルシュブリューテ”の剣先は上を向いた状態。

その先いるのは砲撃準備を終えたレヴィヤタン。

どっちが先に発動して討ち滅ぼすか・・・

「勝負!!」

光牙閃衝刃・伍連

M o r s c e r t a / 死は確実

同時。私とレヴィヤタンの間に莫大な神秘の奔流が生まれる。

全てを押し流そうとする力の中、一瞬だけ視線をフェイトのほうへと向ける。

フェイトがアスモデウスへ向けて、プラズマランサーを撃ち続けているのが見えた。

奔流も止んで体が自由になったところで、レヴィヤタンが私から大きく距離を取っているのが分かった。それなら、

「トロイメライ! Glanz Vogel つけえええええ
っ!!」

“トロイメライ”を振るって発動したのは砲撃魔法グランツ・フォーゲル。

フェイトのプラズマランサー群と私のグランツ・フォーゲルでアスモデウスを挟撃。

アスモデウスもそれに気づいて、その体の周辺に本のページのような紙片で防いで、そして爆発が起こる。

「シャル・・・!」

「私は大丈夫。フェイトは?」

「私も大丈夫。ちょっとAMFが辛いけど・・・」

フェイトの傍へと跳躍して並び立った。

お互いの心配に対して強く頷くことで問題なしと教える。

煙が晴れていってその姿を現すアスモデウスとレヴィヤタン。

「もう一度仕掛ける。フェイト、援護射撃お願い。でも無茶はしないで。」

危険と思っただけならすぐに離脱してくれていいから。それじゃ・・・いくよ!!」

再度、閃駆を使って接近。アスモデウスはそれに気づいていても体がついてきていない。

これはもしかするとAMFが解除されるまでにアスモデウスをどうにか出来るかもしれない。

「そう甘くはないと思うけど・・・ね!!」

炎牙崩爆刃

アスモデウスを横切る瞬間に、“トロイメライ”で炎熱系の一撃を放つ。

真紅の炎を纏った刀身から放たれる爆発力の高い炎刃による一閃。

咄嗟にページによる防御をしたように見えただけ、あれくらいじゃ防ぎきれないはず。

「プラズマランサー・・・ファイア!!」

未だに爆煙に包まれているアスモデウスに向けて放たれるプラズマランサー10基。

結構容赦ないフェイトの攻撃。もしこれがAMFのない状況なら決まっているかもしれない。

容赦ない攻撃を受けるアスモデウスの横を通り抜け、目指すはレヴィヤタン。

ただどその前にもう一発アスモデウスに魔法を食らわせる。

本当に容赦ないと思うけど、スカリエツティには良い薬だ。意識があるかは知らないけど。

雷牙閃衝刃

“トロイメライ”の剣先から放たれた真紅の雷槍が一直線に向かう。そのまま結果は見ずにレヴィヤタンへと肉薄。“キルシュブリューテ”の刺突を放つ。

これもおそらく回避される。けど転移後に強烈な一撃をぶちかます。

「っ……ルーテシア!?!?!?!」

「え……?」

レヴィヤタンは誰かの名前を叫び、そのまま私の“キルシュブリューテ”に貫かれた。

終盤も終盤で最後の罪、ベルゼブブ降臨。

邪魔な存在だあ・・・出しておいてなんですが。

そしてフェイト組。戦闘機人との共闘はボツ！！

フェイトとシャルの見せ場を減らす必要はない、と思ったためです。

この二人の活躍こそ重大なのです・・・と思います。

一応フェイト組&機人組の共闘によるアスモデウスとレヴィヤタン戦も書いたんですが、トーレとセツテ、ついでにシスターが邪魔すぎる！

セインはディーブダイバーによる奇策で活躍、なんてものもあったのですがボツ！

彼女の選ぶ道（前書き）

それと怠惰でルシファーと仮名ふってますけど、誤字にあらず。
ベルフェゴールと打つのが面倒になってきたので……。

彼女の選ぶ道

ルシファー
許されざる怠惰の視線の先で行われているクアットロとデイエチの
会話。

玉座に囚われ苦しむヴィヴィオを見て、今回の計画に疑問と迷いを
口にしたデイエチ。

「技術者の復讐とか、そんなのって・・・」

「ああ、あれ。あんなのドクターの口先三寸。ただの出鱈目よ？」

デイエチにそう返すクアットロ。それを聞いたデイエチは驚いたよ
うに俯いていた顔を上げる。

「そうなの？」と、その真意を訊こうとクアットロへ視線を移した。
クアットロはキーボードを叩く手を休めずにそれに答える。

「ドクターの目標は初めっからひとつだけ。生命操作技術の完全な
る完成。」

そしてそれが出来る空間創り。この“ゆりかご”はそのための艦で
あり実現のための力。

ま、今回の件で軽く何千人か死ぬでしょうけど百年経たずに帳尻が
合うわよ。

ドクターの研究は人々を救える力だものお」

そう嬉々として話すクアットロ。しかし彼女たちは知らない。

そのドクター、スカリエツィの身に今何が起こっているのか。

そして“大罪”^{ベッカー・トゥム}と関わった時点で全てが破綻しているということも。
彼女たちの背後で佇む存在が、彼女たちをどう処理しようか思考し
ているのかさえ知らない。

「どうしたのデイエチちゃん？ お姉さまやドクターの言うこと、信じられなくなっちゃたあ？」

「そうじゃないよ。そうじゃないけど・・・ただ、こんなに弱くて小っちゃい命がそれでも動いて生きてるの見ちゃうと、この子たちは別に関係ないんじゃないかって・・・」

デイエチに迷いがあるのは確かだった。

ルシファー
許されざる怠惰はそんな会話を聞きながら、再構成した許されざる
ウズ
色欲を操作していた。

シャルロツテをこの“ゆりかご”へと近づけさせないための駒として。

全ては、目的としているルシリオンを集中的に狙って取り込むために。

アスモエウス
可能ならば許されざる色欲にシャルロツテを取り込ませ、後に吸収することも考えていた。

ルシファー
玉座の扉横の壁に背を預けていた許されざる怠惰は、近づいてくる
デイエチを一瞥する。

その表情にはやはり迷いが見られた。

ルシファー
デイエチも許されざる怠惰に一瞥を与えてそのまま玉座の間を出て
いった。

「何にも出来ない無力な命なんてその辺の虫と同じじゃない。
いくら殺しても勝手に生まれてくる。

それを玩んだり蹂躪したり、籠に閉じ込めてもがいてるのを眺める
のってこーんなに楽しいのにねえ！」

クアットロのそんな言葉を聞いた許ルシファーされざる怠惰はゆっくりとクアットロへと歩み始めた。

そして彼女の小さく動いた口からでた言葉は、

「……それは貴様も含めてだ、クズが……」

「なんのために戦ってるのか、それだけでも教えて!!」

フリードリヒに跨るキャロの叫び。

対するルーテシアは無表情のようできて迷いが見える顔で、

「ドクターのお願いごとだから……」

そう答え、周囲にいる召喚虫インゼクトツークをキャロへと襲撃させる。

キャロもそれに応じ、直射型射撃魔法“ウイング・シューター”を放つ。

互いはそれをバリアで防ぎきり、キャロはフリードリヒから、ルーテシアはガジェット?型から廃棄ビルの屋上へと降り立った。

屋上で向かい合う二人。

「ドクターはわたしの探し物レリックの11番、それを探してくれる手伝いをしてくれる。」

だからドクターのお願いを聞いてあげる……」

「そ、そんな・・・そんなことのために・・・」

「そんなこと？」

キャロの言葉足らずの返答を聞いたルーテシアの表情に怒りの色が現れた。

彼女の怒りに応えるかのように周辺に滞空していたインゼクトツークが発光。

ルーテシアはキャロを指差し、攻撃対象を再びキャロとして・・・撃った。

キャロは先程と同じようにバリアを張って防御、次々と襲い掛かる爆発の衝撃に耐える。

「・・・あなたにとって“そんなこと”でも、わたしにとっては大事なこと」

煙が晴れていき、キャロが姿を現す。

しかし無傷とはいかず、呼吸は激しく顔は爆発の影響が少し黒く煤けていた。

「違う違う、探し物のことじゃなくて・・・！」

「ゼストももうすぐいなくなっちゃう。アギトもきつとどこかへ行っちゃう。」

でも、このお祭りが終われば、レヴィヤドクター、ウーノたちみんなで11番を探してくれる。

そしたら母さんが帰ってくる。そしたらわたしは・・・不幸じゃないかなるかもしれない」

「違う！ それ違うよー！」

「あなたと話すの・・・嫌い」

ルーテシアの言葉をまるで合図として、キャロの背後にガリユーが降り立った。

キャロもそれに気づくが、振り向くと同時にガリユーの一撃が迫る。

「でやあああつ!!」

そのガリユーからキャロを助けるのはエリオ。

上空から一直線にガリユーへと迫り、その一撃を捌き、キャロからガリユーを遠ざけた。

だがガリユーはエリオとキャロに向けてエネルギー弾を放った。

起こる爆発。エリオとキャロは無事だったが息は乱れ、片膝をつき、全身がほとんど煤けていた。

「違うんだよ！ 幸せになりたいんなら・・・自分がどんなに不幸で悲しくても、人を傷つけたり不幸にしたりしちゃダメだよ！ そんなことしたら、欲しいものも幸せも何も見つからなくなっちゃうよ！」

ルーテシアは答えない。

少し俯き加減だったルーテシアの頭が、キャロが立ち上がったことである。

「わたし、アルザスの竜召喚士！ 管理局機動六課の魔導師キャロ・ルシエ！」

「同じくエリオ・モンディアルと、飛竜フリードリヒ！」

二人は名を告げる。全てはそれからだ、と。
フリードリヒもそれに応えるかのように大きく吼えた。

「話を聞かせて！ レリック探しも、あなたのお母さん探しも、わたしたちが、機動六課のみんなが手伝うから！ あなたの名前を・・
・！」

『あーららあ、ダメですよルーお嬢様もガリユーさんも』

キャロたちの前に現れたモニター。そこに映るのはクアット口だ。それぞれがクアット口の映るモニターへと視線を移す。

『戦いの中で、敵の言うことに耳を貸しちゃいけません！
邪魔なものが出てきたらぶつち殺して罷り通る、それが私たちの力の使い道』

それを聞いたエリオとキャロは半ば睨むようにクアット口を見る。
クアット口はそれを気にせずルーテシアへと言葉をかける。

『ルーお嬢様にはこのあとお、市街地のライフラインの停止ですとか防衛拠点のぶつ潰しとか、いろいろお願いしたいお仕事がありますしい』

聞いていて不愉快な言葉が次々とクアット口の口から出てくる。
そして、そんなクアット口へ歩み寄ってくる許ルシファーされざる怠惰がモニタールシファーの端に映りこむ。

だがこの場にいるキャロたちには知覚できていなかった。
見えていても脳が見えていない、と判断している状態だ。

ルーテシアはキャロたちの言葉、クアット口の言葉を聞いて再び迷

い始める。

『あー迷っちゃってますねえ。無理もないです。純粹無垢なルーお嬢様に、そこのおチビの言葉は毒なんですわねえ。と、いうわけでポチツと』

突然ルーテシアの足元にベル力魔法陣ではなく、戦闘機人と同様のテンプレートが展開された。

それだけでなくルーテシアの周辺近くにインゼクトブークの召喚魔法陣。

そしてキャロたちのいるビルを囲む四方のビルの屋上にも召喚魔法陣が展開。

召喚されたのは地雷王四体。そしてルーテシアは苦悶の表情を見せ、苦しみ始めた。

『ルーお嬢様が迷ったりしないようにしてあげます！

ドクターが仕込んでくれたコンシデレーション・コンソールで、誰の言うことにも聞く耳を持たない

無敵のハートをプレゼント！！』

クアットロは、条件付けを利用した洗脳技術であるコンシデレーション・コンソールを起動。

影響下のいる者の自我を喪失させ、怒りや悲しみなどの感情を強化、そして肉体や精神の限界を無視した能力強化の果てに全てを破壊衝動へと持っていく技術。

四方にいる地雷王が雄叫びを上げる。

それは主ルーテシアから伝わる苦しみゆえか……。

『お嬢様あ、聞こえますかあ？ 目の前にいるのがお嬢様の敵でー

す

全力でぶち殺さないとお母さんとあえませんよあ?』

その言葉を最後としてモニターが消え、クアットロはそれ以降キヤロたちの前に姿を見せなかった。

このとき、クアットロは許されざる^{ルシファール}怠惰の襲撃を受け、玉座の間の壁を突き抜け別区画まで吹き飛ばされていた。

クアットロの保有する全ての指揮権限、能力すらも奪われて……
。。
そしてもう少しでその命すらも奪われていた。

「インゼクト、地雷王、ガリユー……」

目を開けたルーテシアは涙を流し、殺意の色でエリオとキヤロを見た。

「こいつら……殺して……殺してええええ!!!」

ルーテシアの叫びが響き渡る。

このとき、許されざる^{レウイヤタン}嫉妬は、このルーテシアの激しい感情を感じ取り動きを止めていた。

その結果がシャルロットの一撃を受けることになってしまっていた。

「レヴァンティーン!」

Schliangeform

シグナムとゼストの激しい空中戦は続いていた。幾度目かの衝突の後、シグナムは鞘を取り、“レヴァンティン”を納め、カートリッジをロード。

『炎熱加速！』

ユニゾンしているリインによりシグナムの一撃が強化される。シグナムはシュランゲフォルムとなった“レヴァンティン”を抜き放つ。

それを見たゼストは槍を水平に構え、対応できるように身構えた。

「『飛竜一閃！！』」

炎を纏った“レヴァンティン”がうねりながらゼストへと向かう。対するゼストもカートリッジを一発ロードし、

「はあああああつ！！」

『炎熱消去。 衝撃加速！』

アギトの力を以ってして生まれた対炎熱用の力を槍に付加。ゼストは槍を振り下ろしてその一撃を放つ。真っ向から衝突する互いの一撃は相殺という形で終わる。

シグナムとリインは驚愕する。

ただでさえ強力な一撃である飛竜一閃。それをさらに強化したにも拘らず、相殺されたということに。そしてこの驚愕による意識の散逸が隙となってしまうた。

すぐそこまで接近を許したゼストの強力な振り下ろしが、シグナムに襲い掛かる。

“レヴァンティン”はシユランゲフォルムのままなために防御に使用えず、シグナムは左手に持つ鞘で防ぐ。

だが、ゼストの一撃は鞘の防御力の上をいき、鞘を真つ二つに両断。シグナムはその衝撃に耐えられず地上へと弾き飛ばされた。

地面に衝突する寸前に、ミッド式魔法のフローターフィールドと酷似した魔法を使い、衝突を免れたシグナム。

はるか頭上ではゼストがアギトとユニゾンを解除して、地上本部へと飛び去る姿を見た。

「しまった」

『ロストはしてません！ 追いかけるです！』

「ああ！」

ゼストを追ってシグナムもまた地上本部へと急ぐ。

瓦礫に叩きつけられたスバルを見つめるギンガ。

頬に付着したスバルの返り血を手で拭い去り、立ち上がるスバルから視線を逸らさない。

対するスバルは満身創痍といった風で、ふらつきながらも立ち上がる。

Blitz Calibur, no response)ブリツキヤリバー、応答ありません)

「AIユニットをいじられてるんだ。ギン姉……。急ぐんだ。ギン姉もみんなも私が助けるんだから……。」

口の端から流れる血を拭って視界が霞みながらも前を見据える。やるべきことはある。そのためには休んではいけない、と。

Load cartridge

「うおおおおおお!!!」

気合の咆哮。“マツハキヤリバー”は空転して火花を散らしている。そしてスバルとギンガ、お互いがウイングロードを発動し、空で交差する。

スバルの拳打は容易くギンガに防がれるが、それだけでは終わらず逆の左手からも拳打を放つ。

しかしギンガからの一撃の方が速く、スバルの頬へと一直線に刺さる。

「リボルバー」

唸りを上げ始めたギンガの“リボルバーナックル”。

それに気づいたスバルはバリアを張り防ごうとする。

しかし、スバルのバリアと衝突したギンガの貫手が手首から先が回転を始め、さらに突破力を増強させた。

「ギムレット」

「ただ何故？ レヴィヤタンが動きを止めてしまつほどに……大切な人？」

「う……つ……あああああ……！！！！」

「うぐ！……うあつ！？」

レヴィヤタンから放たれる強烈な神秘の奔流。

目が開けていられないほどで、仕方なく目を瞑つた。

私は少しの間だけでもそれに耐えた。だけど結局耐え切れずに吹き飛ばされてしまった。

“キルシュブリューテ”がレヴィヤタンから抜けたのが手の先からの感覚で分かる。

「シャル！！」

フェイトが私を受け止めてくれた。

抱きかかえられてよく見てみると、アスモデウスも同様に吹き飛ばされていた。

レヴィヤタン。ペッカートウムにおける七番目の罪“嫉妬”の具現化した存在。

そんな最弱とされていたレヴィヤタンがここまでの力を持っているなんて思いもしなかった。

「これは私の本来の力をフルに使わないとまずいかも……」

でも使えないのが現実だ。界律が現状私に許した能力は生前の大体六割。

もう少し制限を緩めてもらわないと……負ける。

「くっ……許レヴィヤタンされざる嫉妬！ 今すぐに力を抑えなさい！！
このままでは……界律が動き出して……うぐっ……三番と……
欠陥品が……！」

微かに聞こえたアスモデウスの声。

どうやら界律が動き出して、私やルシルが守護神として覚醒しないようにしたいらしい。

それは間違いじゃない。私はともかくルシルが守護神として覚醒すれば戦いは一瞬で終わる。

そして1分とせずこの事件は終息する。

ペッカートウムも速やかに殲滅し、ゆりかごも一撃の下、消滅するだろう。

「許レヴィヤタンされざる嫉妬！！」

アスモデウスの叫びが一際強く聞こえた。
すると奔流が止んで周囲が静まり返る。

「フェイト……大丈夫？」

「う、うん……大丈夫……シャルは？」

「もちろん大丈夫。だけど……」

私の視線の先、壁に叩きつけられていたアスモデウスが崩れ落ちる。
そして奔流を生み出していた張本人レヴィヤタン。ヤツは……
いた。

大きく肩で息をして、俯いているレヴィヤタン。

しかも胸に空いた孔も塞がっているというおまけ付きで。

でも殺るなら今しか、弱ってる今しか……ない!!

“トロイメライ”を床に突き刺し、“キルシュブリューテ”を今取り出した鞘に納める。

使用魔術は真技“牢刃・弧舞八閃”。“キルシュブリューテ”の能力を限定解放。

「……やめて……今すぐやめて!!
許ヘルフェゴールされざる怠惰!!」

出鼻を挫かれた。レヴィヤタンの小さな体からは出ないような大声が周囲を響かせた。

『……やめて、とは?』

レヴィヤタンと私たちの間に浮かび上がるモニター。

そこに映るのは白髪の女。どうやらヤツが怠惰のベルフェゴールらしい。

残るは暴食のベルゼブブの一体のみなんだけど……未だに姿を現さない。

どういうこと……?

「……ルーテシアを……苦しませてる……それをやめて……」

もうひとつ浮かび上がったモニターに映るのはエリオとキャロ。

そして紫色をした髪に真紅の瞳の少女。苦しそうに叫びながら泣いている。

私の後ろにいるフェイトが心配そうにエリオとキャロの名前を呼んだ。

見れば二人とも煤けているし辛そうだ。

「何故？ やめる必要性を感じない。好きにやらせておけばいい。それにルーテシアをあんなにした戦闘機人はもういない。どこかに吹き飛ばしてしまったしね」

「っ！」

フェイトが息を呑むのが分かる。

もうスカリエツティがどうか戦闘機人がどうかじゃなくなっている。

完全にペッカートウムがこの事件を掌握してしまっている。

「……やめる……」

レヴィヤタンが再度呟いた。

どうすればいいか迷う。今ならいける。けど、もう一人の私が“見守れ”と告げてくる。

本能と経験がせめぎ合ってる。“行け”という経験と“見守れ”といる本能が。

「……っつう……許レヴィヤタンされざる嫉妬……あなた……」

アスモデウスがゆっくりと体を起こして立ち上がった。

この状況は下手に動くとまずい……のは確かかもしれない。

私レヴィヤタンが選択したのは本能。今は事の成り行きを見守る。

最悪な結果になったらフェイトだけでも無事に逃がす。

「……わたし……やめる……わたしは……ルーテシアが大好き。」

だから……ルーテシアの生きるこの世界……滅ぼさせない！
「！」

耳を疑った。世界を滅ぼす“絶対殲滅対象”アポリュオン。その一体であるペックルトウムが世界を守る？

しかも、その世界に生きる人のために？ 信じられない。ただレヴィヤタンから感じ取れる想いは本物なのは分かる。

『フェイト、ここで待ってて』

『……うん』

念話でそう告げる。今フェイトが動くのはまずい気がした。だからこのまま待ってもらおう。そして私はゆっくりと歩き出す。

「本気で言っているの？ わたしたち大罪の役目を放棄して、人間のため人間のために裏切ると？」

アスモデウスの殺気が膨れ上がるのが分かる。レヴィヤタンの返答によっては殺す気だ。

「……許アスモデウスされざる色欲、許ベルフェゴールされざる怠惰……死ね」

レヴィヤタンが完全な決別の言葉を口にした。顔色が変わるアスモデウスとベルフェゴール。

『っ！……そう。……なら許アスモデウスされざる色欲、許レヴィヤタンされざる嫉妬を取り込め。』

必要のない“ソレの力”は私が有効に使わせてもらう』

ベルフェゴールのモニターが消える。

それと同時にアスモデウスがレヴィヤタンを殺すために、大鎌を振

り上げながら突進した。

「おっと、そうはさせないから！」

「「っ!？」」

私はレヴィヤタンを庇うために躍り出た。

“キルシュブリューテ”と大鎌がぶつかって火花を激しく散らす。

「はあああああ!?!！」

ファイト・・・いっぱーっ!!

“キルシュブリューテ”に気合を乗せて思いっきりそのまま振り切る。

するとガラスが割れたような音を発しながら、アスモデウスの大鎌が砕け散った。

「どっ!っつもり!? 許それされざる嫉妬はお前の敵でしょう!？」

アスモデウスは驚愕しながらバックステップ。私から距離を取る。

「・・・なんで・・・?」

対するレヴィヤタンも驚愕。そしてすぐに戸惑いの色を見せる。

アスモデウスの激しい疑問と、レヴィヤタンの静かな疑問。

「レヴィヤタンはこの世界を守るって言った。しかもルーテシアという子のために。」

正直聞いたときは信じられなかったけど、この子が口にした“大好き”って言葉は本物。

そしてお前の言うとおりに守護神わたしたちにとってレヴィヤタンは滅ぼすべき敵。ただどね……」

チラッとレヴィヤタンを見る。その目は私に対する警戒で染まっている。当然だけど。

「……ごめん、ルシル。……行きなさいレヴィヤタン。」

今はあなたを信じてあげる。だからルーテシアとかいう子を止めてあげなさい。

その代わり私の友達に手を出したりしたら許さない。エリオたちを傷つけないで止めて。

それを条件として行かせてあげる。……どう？」

ルーテシアという子を止めるのに、エリオとキャロが危険な目に遭うのだけはダメだ。

それを先に言っておかないとレヴィヤタンが暴走しそうな気がする。

「そして、事件後のあなたの処遇はルシルに頼み込んでなんとかしてあげる。

その代わり、あなたたちペッカートウムの目的を全て聞かせてもらう」

「……何を馬鹿なことを言っているの？」

アスモデウスが笑みをつくりながら、殺気満載の視線を向けてきた。

「……ルーテシアと……一緒にいられるなら……なんでも……する」

強く頷いたレヴィヤタン。これで決まりだ。一番厄介なレヴィヤタ

ンをどうにか出来た。

「この……愚か者が—————!!!」

両手にルシファアの剣“ルートウス”を持ち叫びながらアスモデウスが突撃してきた。

真っ向から私に向かってくるなんて馬鹿なヤツ。

魔法で迎撃して……あ、“トロイメライ”が……ない。

P l a s m a s m a s h e r

アスモデウスの真横から襲い掛かるフェイトが放ったプラズマ・スマッシャー。

気づいたときにはすでに遅く、アスモデウスは黄金の雷光に飲まれて吹っ飛んだ。

「あの……第三の力……ありがとう……」

そう言ってレヴィヤタンが位相空間転移で消えた。

ルーテシアのいる場所に向かったんだろう。あの子を救うために。

レヴィヤタンにとって、あのルーテシアという子こそ戦う理由であり存在する理由なんだろう。

心が無い、というのを訂正しておかないといけないなあ、もちろんレヴィヤタン限定で。

「あ、AMFが……消えた……?」

そして今度はこのAMFが解除されたのが分かった。

どうやらシスターたちが上手くやってくれたみたいだ。

「フェイト！」

「うん！ いけるよ、シャル！」

「よくもまあこんな……随分と馬鹿にしてくれたわね……」
倒れていたアスモデウスが今日何度目かの立ち上がるのを見る。

「ふふん、もうお前の敗北は決定している。AMFがなくなった以上、フェイトの戦力は私と同等。
そんな私とフェイトを同時に相手して勝てると思ってる？」

「ふふふ……あははははは！！！！ 勝てる？ その必要はないわ！」

お前をこの場に足止めできた時点で許わたしされざる傲慢の目的は果たしているのだから！！！」

「あし……どめ……？」

私を足止めすることで目的を達成？

じゃあなに？ ヤツらの目的は他の別にあるということ……？

「お前を……って、シャルじゃなくて……ルシルの方……？」

横に並ぶフェイトがそう呟いたのが聞こえた。

確かに私とルシルならお前たちと言っはず。

それをアスモデウスは私独りを指してお前、と言った。

「何を企んでいる！？」

「さあ？ 私と戦って勝てたら教えてあげてもいいわよ？
でも全てが終わっていればそんなこと関係なくなるでしょうけど・・・」

嫌な笑みを浮かべて・・・ムカつく。

「急ごう、シャル！」

「えええ！」

さっさとヤツをどうにかしないと。

お願いだから無事でいてよ。ルシル、なのは。

彼女の選ぶ道（後書き）

ここでもう一度謝罪を。 すいませんでした。

アニメを見直してみると、なのはがなかなか出てこない。

出てきたらと思えば通路でガジェット殲滅中。 玉座の間にとどり着いてねえ。

もう予告はしないでおきます。

天秤崩す者 ｝ de a deletionis ｝

あの小さな女の子のお母さんとお父さんがもうすぐやってくる。それでもあたしは止まることが出来ない。

あの女の子には悪いけど・・・撃たせてもらおう。

そう思いながら玉座の間を出て迎撃へと向かうディエチ。

扉横の壁に背を預けている客人の一人、許されざる怠惰に見られて
いることに気づく。

ディエチもまたチラツとだけ一瞥をくれて扉を潜った。

ディエチは、なのはとルシリオンを迎撃するために通路を歩く。

ある程度進んだところで、さっきまでいた玉座の間から轟音。

それを耳にしたディエチは急いで来た道を戻り、そして玉座の間の扉を潜る。

許されざる怠惰の前、その壁に大きな穴が開いており、そしてクアツトロの姿が見えない。

「クアツトロ・・・？ ベルフェゴール・・・これは・・・？・・・え？」

ディエチは自分の声が掠れてしまうほどに震えていることに気づく。それは本能が警告しているのだと解るまで数秒かった。

「・・・罪眼・・・」

許されざる怠惰の囁きが、ハッキリとディエチの耳に届く。
そして罪眼がディエチを包囲するかのよう to 現れる。

「~~~~~!!!」

現れた八つの罪眼^{レーガートゥス}全ての目に見られ、ディエチは圧倒的な恐怖を感じた。

声にならない叫びを上げたディエチの体へと罪眼^{レーガートゥス}が殺到していく。

そこでディエチの意識は途切れ、目を覚ました時には全てが終わっていた。

十 十 十 十 十 十 十

「ルシル君、本当に無茶してない・・・？」

「もちろん」

ヴィータちゃんと別れて玉座の間に向かう私とルシル君。

こうして玉座の間に向かう間にも、ものすごい数のガジェットが襲い掛かってきた。

それをルシル君が一機残らず潰していつている。

重力。どんな世界にでもあって、その世界に住む生命に必ず影響する力。

ルシル君はそれを操作して・・・すごいなあ。

「・・・ヴィヴィオ。もう少しで行くからね」

思っているヴィヴィオのこと。

300年前の聖王時代、古代ベルカ時代の人の遺伝子を基にして生み出された子。

そうシスター・シャツハに聞いた。それにヴィヴィオを私の本当に娘にしないのか、とも。

けど私はいつも自分のことばかりで、優しい母親になれる資格もないと思っていたから。

それに私は空の人間だ。だからあの子を幸せにしてあげられる自信もなかった。

けど今ではそんなのはどうでもいい。ヴィヴィオが大切な存在なのに変わりないのだから。

「……なのは」

「え、なに、ルシル君？」

「ヴィヴィオを救えたら、君はすぐにヴィータのところへ向かえ」

ガジェットの爆発音が通路に轟く中、爆炎を切り払って飛んでいくルシル君がそう言った。

「どうして……？」

「私とペッカートウムの戦いは見せられるものじゃないからだ」

そう言っつてルシル君は黙った。

相手が人間じゃないならそれは確かに激しい戦いになるのかもしれない。

お互いが相手を全力で……殺すために……。

「……うん。ペッカートウムはルシル君に任せるよ」

Target Point is near. (玉座の間まで、

もうすぐです)

「ん」

“レイジングハート”がそう教えてくれた。
ルシル君も私へと振り向いて頷いた。

ルシル君を追い抜くように前に出る。もうルシル君は重力を使っていないから。

そして角を曲がって、私たちの先にいたのは、以前へりを狙った砲撃の戦闘機人。

その子が黒く染まっている大砲を構えて、砲撃のチャージを終えようとしている。

「チツ、レーガートウスに飲み込まれているのか！」

砲撃の戦闘機人の体は、構えている大砲と同じように黒く染まっている。

それにいたる所に眼がある。それはレーガートウスと呼ばれた眼そのまま。

そしてその眼からも閃光が溢れている。砲撃の一斉掃射をするつもりだ。

「発射」

大砲から、そして複数の眼から放たれるオレンジ色の砲撃と白色の砲撃。数は9。

私が行動を起こす前に、すでにルシル君が対処するための術を実行していた。

右手に持って構えるのは黄金の銃。“オルトリンデ”か“グリムゲ

ルテ”のどつちかだと思う。

「出来るだけ怪我しないようにはするが、すまないな」

「っ！」

黄金の銃から放たれた集束砲クラスの閃光。

九つの砲撃がその閃光に掻き消されて、その閃光はそのまま戦闘機人へと向かって爆ぜた。

通路に吹き荒れる突風に身構えて、咄嗟にルシル君に？まった。

それでもしないと吹き飛ばされそうだったから。

「……どうなったの……？」

ルシル君に？まっていた手を離して戦闘機人のいたところを見据える。

煙が次第に晴れていって視界に入ったのは倒れ付した戦闘機人とバラバラになった大砲。

眼のあつた黒い影も完全に消滅していた。

「……行くぞ、なのは。彼女はしばらく目を覚まさない」

そう言つてルシル君が戦闘機人にバインドをかけた。

その言葉には少し怒りが含まれているような気がした。

「……分かった。行こう」

ルシル君がそう言つんならそうなんだろう。

ルシル君に続いて私も先へ進む。

玉座の間に向かう中、私はワイドエリアサーチを、サーチャーでゆりかご内を探索する魔法を放っておく。他にもまだ戦闘機人がいるかもしれない。ルシル君がペッカートウムなら、私は戦闘機人をどうにかしないと。そして玉座の間まであと一つの角を曲がればいいところまで来た。

「っ!?!」

私を襲うのは強烈な威圧感。今まで感じたことのない激しい存在感を、私たちがこれから曲がる角の先から感じる。本能が警鐘を鳴らし続ける。“これ以上は行くな。行けば死ぬぞ”

“レイジングハート”を持つ両手が震えるのが分かる。前を飛ぶルシル君が私の横に並んで、私の両手に手を重ねてきてくれた。

「ルシル君・・・?」

「大丈夫だ。ヴィヴィオは君を待ってる。迎えに行つて、さっさと帰ろう、みんなのところへ」

その言葉でさっきまでの恐怖が晴れていく。そうだ。この先にはヴィヴィオがいるんだから、ここで立ち竦むわけにはいかないんだ。

「ありがとう、ルシル君。私はもう平気。いこう、ヴィヴィオが待ってる!」

角を曲がった先に扉がひとつ。
ルシル君が扉を破壊して、私たちはヴィヴィオのいる玉座の間へと
入った。

十 十 十 十 十 十 十

“グリムゲルテ”で玉座の間を仕切る扉を撃ち壊す。

なのはと二人して中に入ると、そこには救うべきヴィヴィオと白髪
の女の二人。

戦闘機人の姿は……ない、か。

「いらつしゃい、欠陥品」

ヴィヴィオの囚われている玉座の隣に佇んでいた白髪の女がそう告
げた。

「ヴィヴィオ！ 今助けるからね！！」

そう言っつて、なのはがヴィヴィオに駆け寄りうとしたから肩を掴ん
で止める。

「待て、なのは！」

「ちょっと、何で止めるのルシル君！ ヴィヴィオしかいないなら今
が助けるチャンスだよ！？」

「な……に……？」

なのはにはあの白髪の女が見えていないというのか……？

「まさか……見えていないのか？」

「見えてないって……なにが……？」

知覚阻害を使っているということか。

神秘に対する抵抗力のないなのはは見事に影響を受けているらしい。

「ヴィヴィオの隣にペツカートウムが一体いる。

知覚阻害を利用してゐるせいで、君には見えていないのだろうが……」

「っ！ そんな……じゃあどうしたら……？」

まずいな。戦闘になれば、なのはとヴィヴィオを庇いながらになる。だからなのはを半ば庇うようにして前に出る。

「ルシル君……」

任せる、と視線で送った。なのはは「ごめん」と一言。

「貴様はベルフェゴールか？ それともベルゼブブか？」

「名？ そうだな……これからは許バエルされざる支配、と名乗ろうか」

「なに……？」

確かバエルとは、支配、強さ、高慢、野心といった悪徳を司どる高

位悪魔の名だ。

しかしペツカートウムの罪にはない名だ。一体何を考えている。

「名などもうどうでもいいことだ。私に必要なのは名ではなく“力”なのだから……」

そう言つてヴィヴィオの頬に触れて撫でた。

「触るな!!!」

“オルトリンデ”を向け、ヴィヴィオに影響が及ばないように注意して撃つ。

バエルへ向かった弾丸は“ルートウス”がいくつも重なって盾となり弾いた。

「っ！ 見えた。白髪の女の人……」

なのはが後ろで呟いた。

どうやら今の攻防で、バエルの知覚障害が弱まったらしい。

バエルは大して気にしていないと示すように微笑を浮かべているが。

「……惜しい。しかしこの程度では届かないな」

バエルが腕を大きく広げ、八本の“ルートウス”を左右の壁へと展開した。

そして今気づいたが、この玉座の間の壁に大きな穴が開いている。ここで何があった……？

「ああ、それか。それはつい先程までいた眼鏡をかけた戦闘機人、名前はなんだったかな？」

すまない、忘れてしまった。どうでもいい虫けらでしかない存在だからね。
もう必要なかったからご退場願ったよ。それで開いてしまった穴なんだ。

だから、その穴の先で寝ているんじゃないか？ バラバラに壊れていなければ、だけどね」

尚もヴィヴィオの隣に立つバエルがそう口にした。戦闘機人は必要ないから攻撃した、と。

なのはもそれを聞いて戸惑っているのが分かる。

この話が本当なら、この事件はもうペツカートウムの手の中だ。

「ルシル君。どうすれば……？」

「……まずはヴィヴィオだ。そのためには……」

バエルをヴィヴィオから引き離す必要がある。

「バエルは私に任せて、なのははヴィヴィオを救い出してくれ。

そうしたらさつき言ったとおり、君はヴィヴィオを連れてここから離れてくれ」

そう答え、二人してヴィヴィオが囚われている玉座へと向かう。

手にするのは“グングニル”。いつでも戦闘に移れるように細心の注意を払う。

「……クク。さあ、ここからがショータイムだ。

欠陥品、お前の大切な存在によって傷つき弱まるといい」

「っ……うあああ……うああああっ！……」

急に苦しみだしたヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ!!」

「何をした!？」

私となのはは急いでヴィヴィオの下へと駆け寄る。

しかし、その行く手を遮るようにヴィヴィオから強大な力が溢れ出てくる。

その吹き荒れる光は虹色。私の大事な義妹、魔道王フノスを見ているようだ。

「戦闘機人じむきじんからコピーした情報だと、それは古代ベルカ王族の固有スキル“聖王の鎧”。

レリックとの融合を経て、ヴィヴィオはその力を完全に取り戻すらしい」

「いつ……. いたいよお! うあ……. あああうう!!」

「もうやめてええええ!!」

ヴィヴィオの胸の辺りからレリックが浮かび上がる。

ヴィヴィオの叫びになのはも“やめて”と叫ぶ。

近づこうにも、この虹色の奔流が私の行動を制限している。

「レリックと融合、だと……. ふざけるなよ、貴様!!」

あんな危険なものをヴィヴィオに融合させたというのかヤツらは。

「怒鳴るな、欠陥品。それを行ったのは大罪わたしたちではなくスカリエツ
イだ。
まあ、今となつてはあの男は私の駒によつて乗っ取られ操り人形と
なっているけどね」

ここまでペツカートウムに好き勝手させておいて界律は何故動かな
い？

十分すぎるほどにこの世界の辿る本来の道筋を狂わしているとい
うのに、何故だ！！

「これヴィヴィオのことを戦闘機人どもは“王”と言っていたが、あれ
らの願いは終わっている。

だから私はこう呼ぼう。お前の体と心を痛めつけ、その力を果てな
く弱める者……」

大きく両腕を広げて高々に語るバエル。

「デア・デーレーティオー“天秤崩す者”と！！」

デア・デーレーティオー……破壊の女神、か。

私を、この存在を弱めるために、そんなくならないことのためにヴ
ィヴィオを苦しめているというのか……ヤツは。

「ママあ！ パパあ！」

「「ヴィヴィオ！！」」

「っ！ ママあああ！！ パパあああ！！ やだああ！ たすけて、

ママあ！ パパあ！」

「さあ、このゆりかごの力を、そして許わたしされざる支配の力を受け、無限の力を振るえ」

バエルの姿が光の粒子となって霞んでいく。

そしてその粒子は少しずつレリックへと入り込んで、レリックもまたヴィヴィオの体へと戻っていく。

「ヴィヴィオ!!」

次第に強くなる虹色の光の奔流。

吹き飛ばされそうになっているのを支え、ヴィヴィオへと近づく。

早くバエルを止めなければヴィヴィオが乗っ取られてしまう。

「ヴィヴィオ!! 今、助ける!!」

「パパあ! マ・・・うあああああああ!!」

ヴィヴィオの苦痛の叫びがこの玉座の間に轟く。

そして一際強く荒れ狂う奔流が吹き、私となのはは耐え切れずに後ろへと吹き飛ばされる。

「?まれ!!」

「うん!!」

私は“グングニル”を床に突き刺し体を固定、そして尚も吹き飛ばされていたのはの手を取る。

そしてその荒れ狂った光の奔流が止んだ。

視界がクリアになり、目に映ったのは虹色の光球の中に漂うヴィヴ

イオ。

『デア・デーレーティオー天稗崩す者、目の前にいるその男をその力で沈めるんだ』

頭の中に直接届くバエルの声。念話の一種か・・・？

「や・・・だ・・・いや・・・だああ・・・！」

「やめる！ それ以上ヴィヴィオを苦しめるな！！」

走る。ヴィヴィオを救う為に。

あと少して1mほどで手が届くといったところで、

「パパあ！」

「ルシル君！」

先ほど壁に展開されていたルシファアの剣“ルートウス”が襲い掛かってきた。

ギリギリで回避して飛び退く。

頬に痛みが走る。触れた手を見ると血が付着していた。

だが阻害系の概念がかけられている以上、治癒することは出来ない。

「やだ・・・やだ・・・いやだあああ！！」

必死にバエルの支配に抗うヴィヴィオ。だが、それも時間の問題だ。

『残念。もう時間切れだ』

完全にバエルを構成した粒子を取り込んだレリックが、ヴィヴィオ

の体内に戻った。
くそっ、止めることが出来なかった!!

「ああああああああ!!!!!!」

「っヴィヴィオ!!」

ヴィヴィオのその小さな体に変化していく。それは急激な成長といつてもいい。

5歳前後だったヴィヴィオの体が17前後にまで成長していった。防護服は黒を基調としていて、髪は普段のなのはと同じサイドポニー。

そして背にするのは“ルートウス”と大鎌が光となって構成された八枚の翼。

右側が“ルートウス”の翼で、左側が大鎌の翼だ。

そして、その体の周辺をバエルの持っていた書物の紙片が渦巻いている。

そんな今のヴィヴィオは完全武装といったところだ。

変化を終えたことで用がなくなつたのか、ヴィヴィオを包み込んでいた虹色の光球が砕け散る。

「これで完成だ、欠陥品。デア・テレーティオ“天秤崩す者バエル”。戦い辛いだろう?」

『いやだ! たすけてママ! パパ!』

「ヴィヴィオ!?!」

「なに!？」

ヴィヴィオからの助けを求める念話。

体は支配されてしまっても精神が尚も抗い続けている。

これはヴィヴィオの強さか？ それともバエルの企みの一環か・・・？

「なのは！ こうなれば二人でヴィヴィオをバエルの支配から救い出す！」

「え、うん！ 指示して、ルシル君！ 私はそれに従うよ！」

「防御は私が受け持つ。なのはは攻撃だけに専念。

君の魔力ダメージでヴィヴィオに巣くっているレリックを破壊する。そのあとは私に任せてほしい。バエルを引き釣りだし止めを刺す！」

「了解！」

私の攻撃ではヴィヴィオの体に必要以上のダメージを与える可能性がある。

なら、なのはは攻撃を任せるしかないだろう。

「フツ、やはりそうきたか。それで私に勝てるか試してみるといい」

『や・・・だ・・・。ママ・・・パパ・・・いや・・・』

涙声の念話。それも少し弱弱しくなっている気がする。

これは急いだほうがいい。待っている、ヴィヴィオ。今すぐにバエルから救い出してやる。

「いくぞ！」

「うん！ レイジングハート、ブラスターシステム、リミット1リリース！」

B l a s t e r s e t

オレンジ色のミッド魔法陣の中心で片膝をつくティアナ。現在彼女が使用している幻術魔法、その連続使用による魔力消費が多すぎるため、大きく肩で息をして疲労に顔を歪ませている。

T h e y c o n f i r m e d o u r p o s i t i o n .
T h e y a r e m o v i n g i n o u r d i r e c t i
o n

（発見されました。3方向からまっすぐ向かってきます）

この位置が戦闘機^{ナンバース}人たちに知れたと、“クロスミラージュ”が告げる。

「シューターとシルエット、制御放棄。現状維持。あとはここで迎え撃つ」

Y e s （了解）

ティアナは立ち上がり、もう逃げも隠れもせず、真っ向から迎え撃つことを選択をした。

もうそれしか彼女に残された手は残されていないからだ。
右足の負傷。魔力の残量。カートリッジの残弾数。それが迎撃を決めた理由である。

だがそれだけではない。ティアナには今自分が戦っている戦闘機人ナンバース三機限定の対策を組み立てていた。それがもうひとつの理由だ。

「ほんととさ、ずいぶん前から気づいてたんだ。

私はどんなに頑張っても、万能無敵の超一流なんてきつとなれない」

ティアナの独白。万能無敵の超一流になれない、と。だが実際にそんな人間はどこにもいないのが現実だ。かつて最強と謳われたルシリオンですら敗北経験があるほどなのだから。

「悔しくて、情けなくて、認めたくなくてね。

それは今もあまり変わらないんだけど……。だけど……。」

ティアナの独白の途中、突然天井が崩壊する。

攻めてきた戦闘機人ナンバースによる襲撃だ。

天井崩壊による土煙の中から姿を現したのは、疾走するノーヴェと飛翔するデイドの二機。

Twin Dagger

両手に持つ“クロスミラージュ”がダガーモードとなる。

デイドの振り下ろした“ツインブレイズ”を受けることに成功するも、

ノーヴェがデイドの背後から遠心力で加速され威力が強化された

蹴りが放たれる。

巻き起こる粉塵。同階の別の場所で待機していたウエンディの前に、粉塵からアンカーショットに続くティアナ現れる。

ウエンディは撃ち落とすためにすぐさま“エリアルショット”をティアナへと放つ。

「幻影!？」

ウエンディの驚愕の音が示すとおり、“エリアルショット”を受けたティアナは消滅した。

そして晴れていく粉塵の中から姿を現すのは、右足の“ジェットエツジ”の先が破壊され、歯噛みするノーヴェ。

そしてダガーモードとなっている“クロスミラージュ”二挺を構え、二つのスフィアを展開したティアナの二人。

デイドとウエンディは、ティアナの背後に立ち、その逃げ道を塞ぐようにして個々の武装を構える。

『逃げない・・・?』

『畏か・・・?』

今まで逃げ続けていたティアナを、ウエンディとデイドが警戒する。

『本物なのは間違いないっすね』

『ああ。本物だ』

『油断しないで。同時攻撃で、一瞬で仕留める』

戦闘機人は少しずつ立ち位置をずらして、決められたポジションを取る。

しかし、そのポジションを取ってもらったところがティアナの狙いだった。

ティアナの作戦、それは目の前にいる戦闘機人三機の完璧だが単純な連携。

その連携の初動を見抜くことが出来れば各個撃破できるというものだった。

静寂。そしてそれは突然起きた。

この廃棄ビルを覆っていた結界が消えたのだ。

それは、結界を張っていたオットーが、シャマルとザフィーラによって捕縛されたことによる結果だった。

「こんのおおおお!!」

ノーヴェが動く。それを合図としてディードもティアナの背後から迫り、ウェンディも“ライディングボード”を構え、砲撃体勢に入った。

「ここ!!」

待ちに待った展開となりティアナが動く。

周囲に展開していたスフィア二つを前方のノーヴェ、後方のディードへと放つ。

ノーヴェとディードは迫る弾丸を紙一重で回避。

そのままティアナは“クロスミラージュ”の銃口をウェンディに向け、そして撃つ。

砲撃のチャージ中に砲門への攻撃を受け、周囲のスフィアを巻き込

んで暴発、爆煙が起こる。

その爆煙を利用してディードがティアナの背後から襲いかかる。しかし、それをティアナは察知していた。ダガーモードの“クロスミラージユ”を背後で

構えることで、ディードの“ツインブレイズ”を防ぐことに成功。そのまま誘導弾を操作することで背後のディードの後頭部に命中させ撃破。

ウエンディもまた顎下に誘導弾を受け脳震盪を起こし倒れた。

「ウエンディ！ ディード！」

未だ晴れていなかった爆煙の中からノーヴェエが現れる。

「あなたたちを保護します」

右の“クロスミラージユ”のダガーを解除し、ノーヴェエへと向けるティアナ。

「武装を解除しなさい！！」

ギンガの激しい攻撃に対抗することができずにスバルは受け続ける。

「行動不能段階まで破壊、その後回収します」

「ギン姉ええっ！！」

どこまでも冷めた声でギンガが迫る。

スバルの何度目かの姉ギンガへ向ける叫び。

それでもギンガは顔色ひとつ変えずにスバルへ疾駆、立ち上がったスバルの

腹部へと一撃、そして続けて顎へと強烈で正確、一切の手加減のないアッパーを放つ。

まともに受けたスバルは宙へと殴り飛ばされる

意識が朦朧とする中、スバルは思う。

自分はどうかあっても弱く、情けなく、何にも出来ないまままで終わるんだ、と。

そこで脳裏に浮かぶのは、なのはと話した自分の強くなりた理由。最初はなのはへの憧れから。しかしなのは言った。強くなって何をしたいのか、と。

未だ宙に浮くスバルへとギンガの追撃が迫る。

だがスバルはそれに反応できるだけの意識と意思がない。

W i n g R o a d !

“マツハキヤリバー”の独断によるウイングロード。

しかしそのお陰で、スバルに迫るギンガの左腕を弾くことできた。

“マツハキヤリバー”は尚も止まらない。

そのままウイングロードを利用した攻撃でギンガを退けた。

ここでようやくスバルの意識がハッキリとなる。

目の前にいるのは驚愕の色に顔を染めたギンガ。

J u s t a s r e h e a r s e d . (練習通りです)

「え？ マツハキャリバー・・・？」

We can still take actions...
you and I. (まだ動けます・・・私も、あなたも)
We can still fight. So why abandon now? (まだ戦えます。なのに、こんな所で終わる気ですか?)

“マツハキャリバー”はスバルに問う。
負けてもいない。まだ動け、戦うことも出来るのにここで立ち止まるのか、と。

You taught me the reason of my being here, my strength and power which you adore so much.
(あなたが教えてくれた、わたしの生まれた理由。あなたの憧れる強さ)

Don't make everything a lie. (嘘にしないでください)

スバルの脳裏に再びあの日の、なのはに問われた強さを得た後の話が蘇る。

そのなのはに自分はこう答えた、と。

災害とか争いごととか、そんなどうしようもない状況が起きたとき、苦しくて悲しくて助けて、って泣いてる人を、助けられるような人になりたい。

自分の力で、安全な場所まで一直線に。

思い出す。それがスバルが目指すもの。
そして、それを聞いたなのはがとても嬉しそうに笑ってくれたこと
を。

戦うことを、誰かを傷つけることを恐れていたスバル。
だがスバルは思う。自分の力は壊すためのものではなく守るための
ものなんだと。

「いくよ、マツハキャリバー！」

All right buddy.（はい、相棒）

決意と覚悟を新たに、スバルがギンガを見据える

「フルドライブ！ Ignition ギア・エクセリオン！
！」

“マツハキャリバー”よりそれぞれ二枚の翼が生まれる。

A . C . S . Standby

「いくよ、ギン姉」

数瞬の静寂。そしてギンガの構えていた左腕の“リボルバーナック
ル”が動く。

それが戦闘再開の合図となり、スバルとギンガが同時に前進。
最初の一撃は互いのバリアに防がれるも、それで終わるわけもなく
激しい攻防は続く。

スバルの気合の咆哮が轟き、先ほどと同じように真っ向からの拳打
を放つ。

再度バリアが互いの一撃を防ぐ。が、

「一撃必倒!!!」

スバルの開いた右手の指が徐々にギンガのバリアを越えていく。しかしギンガも同様に、“リボルバー・ギムレット”がスバルのバリアを徐々に貫いていく。

先に突破されたのはスバルのバリア。側頭部を掠めるようにして“リボルバー・ギムレット”が通過、スバルのハチマキが千切れ飛ぶ。額からも血が流れるが、それに構わずスバルは動きを止めない。

そしてスバルもまたギンガのバリアを突破、破壊する。左拳をギンガの腹部へと向け、巨大なスフィアを生み出す。

「デイベイイイン・・・」

ギンガの何度目かの驚愕。

スバルはそのまま右の“リボルバーナックル”をスフィアへと殴りつけ、

「バスターーーーーー!!!!!!」

スバルの憧れるなのはの代名詞とも言える砲撃魔法。

自己流で習得し磨きに磨いたその一撃がギンガを飲み込む。

ここにスバルとギンガの姉妹による戦いは、スバルの勝利という形で終わりを迎えた。

「ルーちゃん！ わたしたちが戦う理由なんてないんだよ！？
戦ってもなんにもならないよ！」

「うるさい・・・うるさい！」

暴走するルーテシアにはもう説得の声は届かない。
だが、それでも諦めずに必死に名を呼ぶキャロ。

「ガリユーも！ 主人を、ルーのことを想うなら、ルーを止めるんだ！

ルーはあいつらに騙されているんだ！ ただ操られてるだけじゃないか！」

エリオもまたガリユーへの説得を続ける。

しかしルーテシアが折れない限りはガリユーもまた折れないだろう。

「あなたたちには解らない。優しくしてくれる人がいて、友達がいて、愛されてる。

わたしの大切な人はみんな、わたしのことを忘れて行っちゃっう」

今のルーテシアには許されざる嫉妬レヴィヤタンの記憶に霞がかかっている。

それはクアットロが起動させたコンシデレーション・コンソールの影響によるもの。

スカリエツィとクアットロは、許されざる嫉妬レヴィヤタンのルーテシアへ及ぼす影響が邪魔と考えた上でのものだった。

「独りはいやだ・・・」

ルーテシアのグローブ型のデバイス“アスケレピオス”の甲の部分にある半球状のコアが強く輝く。
それと同時にルーテシアの足元に召喚魔法陣が浮かびあがる。
そしてルーテシアの背後の空には巨大な召喚魔法陣が展開、そこから巨大な人型の竜が現れた。

「さみしいのはもういやだ。独りぼっちは・・・いやだあああああああ!!!」

ルーテシアの悲鳴に、キャロとエリオも悲しみの表情を浮かべる。
そして今召喚された白い竜“白天王”がその悲鳴に応えるように吼える。

「キャロ!」

「うん!」

エリオとキャロは、ルーテシアたちを止めるために戦うことを決める。

キャロの足元に召喚魔法陣が浮かび上がる。

「天地貫く業火の咆哮、遙けき大地の永遠とわの護り手、我が元こに来よ、黒き炎の大地の守護者・・・」

キャロの詠唱が始まる。それを妨害しようと迫るガリユーを迎撃するエリオ。

“ストラーダ”を構えガリユーと対峙し、

「よく似てるんだ。僕たちとルーは。ずっと独りぼっちで、誰も守ってくれなくて。」

誰も信じられなくて。何も分からなくて。傷つけることしか出来なくて」

エリオは語る。自分たちの境遇は似ていると。

俯いているその表情は悲しみ。だが、顔を上げ言葉を続ける。

「だけど変わるんだ。切っ掛け一つ、想い一つで変わっていきけるんだ!!」

そこに悲しみはない。あるのは未来を見据えた強く立派な表情だった。

「竜騎招来、天地轟鳴、来よ、ヴォルテール!」

巨大な召喚魔法陣から炎柱が立ち上り、そこから姿を現すのは“ヴォルテール”。

白天王とヴォルテールの、二体の竜の戦いが始まった。

「あなたのお母さんを助けるのわたしたちがきつと手伝う! 絶対絶対約束する! だから、こんなこともうやめて!」

「嘘だ……嘘だああああ!!」

ルーテシアは何度目かの悲鳴を上げる。

それに応じ、白天王もガリユーも武装を完全解放した。

「白天王、ガリユー……殺して……ころ「ルーテシア!!」っ!??」

突然響いたルーテシアを呼ぶ第三者の声。

その場にいたエリオとキャラコを含めた全員がその動きを止める。
キャラコとルーテシアの間の空間が波打ち、そこから許されざる嫉妬レヴィヤタンが姿を現す。

それを見たエリオとキャラコの心の内に絶望が満ちる。

ルーテシアの救援に来たのはペツカートウムの一体というのが分かつたためにだ。

二人はどうすればいいかも分からず、ただ身構えたそのとき、

「……もういいよ……ルーテシア……もう……やめよ？
ガリユーム……もう止まって……」

そう静かに、それでいて優しくルーテシアを止めようとする許されざる嫉妬イヤタンの声を聞く。

両腕を広げて迎え入れようとしている許されざる嫉妬レヴィヤタンを見て、エリオとキャラコは何故か“もう大丈夫”と思った。

「……あなた……誰……？」

「え……！？ ルー……テシア……？ わたしだよ？ レヴィ……だよ？」

あまりの事に許されざる嫉妬レヴィヤタンは驚愕した。

大好きなルーテシアが自分の事が分からないと。

「あの、レヴィヤタン……ちゃん？」

キャラコが恐れながらも許されざる嫉妬レヴィヤタンの名前を呼んだ。
それを聞いた許されざる嫉妬はキャラコへと振り向く。

「キャラコ……エリオ……。大丈夫……。わたしは……ルー

テシアを……止めに来ただけ……。あなたたちを傷つけないように……約束もしたから」

キャロとエリオは何のことかは解らなかったが、敵じゃないと解るとルーテシアが操られていることを説明した。

もちろんその間も二体の竜が戦い、フリードリヒも地雷王との戦いを続けていた。

だがガリユーは腕から、目からも血を流しつつも動きを止めていた。

「教えてくれて……ありがとう……。」

ここは……わたしに任せて……くれてもいい……?」

許されざる嫉妬レウイヤタンの強い意志の籠もった目を見て、キャロとエリオは強く頷いた。

ゆっくりとルーテシアへと歩みよる許されざる嫉妬レウイヤタン。

「来ないで……来るな……来るなあああ!!」

ルーテシアは許されざる嫉妬レウイヤタンに向けインゼクトを放つ。

それを防衛も回避もせずに受け続ける許されざる嫉妬レウイヤタンは、しかし止まらない。

いくら魔力が強くとも神秘がなければ無意味な力となるのが、彼女たちの存在する世界だ。

キャロとエリオはただ見守る。ガリユーもまたルーテシアと許されざる嫉妬イヤタンを見守る。

「ルーテシア……さ、もう帰ろう……。」

「ガリユー! 白天王! こいつを殺してえええ!!」

ガリユーは……それでも動かない。

彼はルーテシアを守る戦士として、今は許されざる嫉妬レヴィヤタンに託しているのだ。

許されざる嫉妬レヴィヤタンが自分の仕える主ルーテシアを救い出してくれることを。

対する白天王は、ヴォルテールに邪魔をされて動けずにいた。

「……ルーテシアは……もう独りじゃないんだよ……。わたしもいる……。ガリユーも……アギトも……いる。

ルーテシアのお母さん……第四くろいぶの力に頼んで……起こしてもらおう?」

ルーテシアに触れられる距離にまで近づいた許されざる嫉妬レヴィヤタン。

一歩退こうとしたルーテシアを、許されざる嫉妬レヴィヤタンは優しく、それでいて力強く抱きしめた。

ルーテシアの口から「あ」と小さく息が漏れる。

「それに……」

許されざる嫉妬レヴィヤタンは背後にいるキャロとエリオを見て、

「新しい友達……だっているんだから……帰ろう……」

さらに強く抱きしめ、許されざる嫉妬レヴィヤタンの体が強く輝く。

ルーテシアはその輝きに包みこまれ、その表情が次第に和らいでいく。

周囲を照らし出していた美しく、どこか儂いすみれ色の輝きが治まっていく。

「……ルーちゃん? レヴィヤタンちゃん……?」

キヤロがゆつくりとルーテシアを抱える許されざる嫉妬レヴィヤタンへ近づくと許されざる嫉妬が顔を上げ、微笑をつくりこう告げた。「もう大丈夫」と。

キヤロとエリオは安堵の表情を浮かべ、お互いを見合い笑みを浮かべた。

ガリユーもまた武装を解除しており、その目にはもう血は流れていなかった。

そして白天王と地雷王もまた動きを止めていた。全てが一件落着となるうとしたとき、

「ああ、君はそっち側へと寝返ったんですね、許されざる嫉妬レヴィヤタン」

圧倒的な威圧感と存在感がこの場に満ちた。

そのあまりにも強烈な存在に、キヤロとエリオの歯が鳴る。本能が絶対の“死”を感じ取っているのだ。

しかしガリユーたち召喚された者たちは臨戦態勢に入る。何をしても自分たちの主を守るのだ、と。

「……許されざる暴食ベルゼブブ……！」

ここに最強の罪“暴食”と、最弱の罪“嫉妬”が相見えた。

天秤崩す者 ｝ d e a d e l e t i o n i s ｝ (後書き)

本来ならなのはとヴィヴィオの悲しい戦いというのに邪魔が二人。ルシルとルシファーことバエル。大目に見てくださると嬉しいです。エリキャラとルーテシアもまたしかり、ですね。すいません。

そしてベルゼブブとレヴィヤタンの戦い。これだけは書いておきたかった。

そのための鬱陶しいベルゼブブ登場です。

次回で勝敗を決めます。予告しない、と言っておきながらですが。

次の更新は少し間が空くかもしれません。

飲食店務めの人間にとってGWは正に地獄期間。忙しさのあまりに遅れるかも？です。

誰がために君は・・・ ～Leviathan～ (前書き)

レヴィヤタンvsベルゼブブ戦イメージBGM

BAYONETTA “You May Call Me Faith
er”

誰がために君は…… 〈Leviathan〉

ルーはレヴィヤタンのおかげで止まってくれた。

よかった。一時はどうなるかと思っただけど、もう大丈夫そうだ。

それで張り詰めていた緊張が解けて、キャロと顔を見合わせて笑った。

でも、

「ああ、君はそっち側へと寝返ったんですね、許されざる嫉妬^{レヴィヤタン}」

「……許されざる暴食^{ベルゼブブ}……」

僕たちの目の前に現れた男の人。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い……嫌だ！

「はあはあはあはあ……エリオ……君……」

呼吸が苦しい。ガチガチ、って歯が鳴る。体の震えも涙も止まらない。

見ればキャロも僕と似たような状態だ。顔色はすごく青くて、すごく震えている。

レヴィヤタンに、ベルゼブブって呼ばれた男の人の声を聞いただけで、終わった、ってことしか頭に浮かばなかった。

「……う……ん……っ!？」

レヴィヤタンに抱えられていたルーが目を覚ましたみたいだ。

だけど起きてすぐにこの状況は最悪なことだ。だからすごく怯えて

いる。

「……ルーテシア……大丈夫……だから……。
ガリユール……ルーテシアを……お願い……」

レヴィヤタンがルーの頭と背中を優しく撫でて落ち着かせている。
正直羨ましい。フェイトさんとルシルさんがここにいれば僕たちも
安心できるのに……。
ガリユールはベルゼブブという男の人を警戒しながら、レヴィヤタン
からルーを受け取った。

「レ……ヴィ……？ わたし……？」

「……許ベルゼブブされざる暴食、……放っている……威圧感を抑えて
……。
みんな……怖がってるから……。早く……！」

「ふう、随分と人間に優しくなっただんですね。ああ、それもいいで
しょう。」

僕に文句はありませんよ。ええ、文句はありませんとも」

そう言い終えたら、呼吸も軽くなって震えも涙も少しずつ止まって
いく。

「……目的はなに？……」

レヴィヤタンが僕たちを庇うようにして前に歩み出た。

悔しかった。いくらレヴィヤタンが人間じゃなくても、女の子に守
られるというのがすごく情けなかった。

でも震えは止まっても体が自由に動かない。さっきの恐怖が抜けき

っていない。

それでも何とかキャラの傍まで歩いて、キャラの手を握る。それだけで安心できるのが分かる。キャラも僕ときっと同じ。

「目的、ですか？ ボクたち大罪の目的はすでに君も知っているでしょう？ ああ、あとは裏切り者である許ルンファアされざる傲慢の抹消ですね。

「いけませんねえ、ああ、いけません。主の目的を妨害するとは、なんと罪深い」

演技くさいその言い回しはどこか不自然だ。

「……じゃあ……ルーテシアたちは……関係ない……」

「それなんですけど、どうもお腹が空いていましてね。

「ですので食べさせてもらおうかと思っていまして。美味しそうですし……」

ベルゼブブが僕たちを見回した。

背筋が凍る、というのはこういうことなんだと思った。

さっきの威圧感はなくとも、恐怖だけはきちんと存在していた。

「……させるとでも……？」

「……止められるとでも？」

見上げるレヴィヤタンに、見下ろすベルゼブブ。

レヴィヤタンは僕たちに背を向けているから見えないけど、きっとその目は怒りで満ちていると思う。

そう分かるくらいにレヴィヤタンから怒りが感じ取れた。

そしてそれは一瞬だった。レヴィヤタンが消えたと思ったら、ベルゼブブが遠く離れたビルまで吹き飛ばされていった。

「……逃げて……。許ヘルゼブブされざる暴食は……。わたしが斃す。
ガリユー……。キャロ……。エリオ……。ルーテシアを……。お願い」

「っ！ レヴィ……。！ ダメ……。！」

ガリユーに抱えられているルーが手を伸ばして、レヴィヤタンを止めようとする。

レヴィヤタンはルーに歩み寄ってその手に、

「……わたしの……。大切なリボン……。預かって……。約束。
これがあれば……。また会える……。から……。だから大丈夫……。
ちゃんと預かって……。わたしに……。リボンを……。返すまで……」

ヘッドドレスに付いていた蒼い大きなリボンを解いて渡した。
ルーは何か言いたそうな顔をしているけど、レヴィヤタンの笑みを見て口を閉じた。

「……。安心して……。わたしは……。絶対負けない……」

「……。やく……。そく……。だから」

「ルーテシア……。うん、約束……」

「絶対……。また会おうね……」

指切りをしたルーとレヴィヤタン。
そしてガリユールと白天王、地雷王がここから離れて行った。

「……二人も……早く……」

ベルゼブブが吹き飛んで行ったビルが崩壊していくのが分かった。
僕たちがここにいても、もう何も出来ることがない。

「……フリード！」

「エ、エリオ君……！」

急いでフリードの背に乗ってルーたちの後を追った。

「……きっとまた会おう、レヴィヤタン……」

だから負けないで、と小さく声を出した。

十
十
十
十
十
十
十

わたしが対峙するのは大罪最強の“暴食”
でもわたしは負けるつもりなんてない。

「ああ、今が終極様から頂いた位相空間転移ですか。
テルクミナス

しかし、扱いきれていないですね。ギリギリですが見えていました
よ??」

それは当然の話。位相転移は元々“界律の守護神”テスタメントに与えられる力だから。

それを許されざる嫉妬が扱いきれるはずがない。

「……………」

だから反論はしない。

「…………今代の“嫉妬”は随分と…………いえ、関係ないですね。

御馳走だったあの子たちも逃げてしまいましたし、あなたを頂きましようか」

わたしを取り込んでお腹を満たす気だ。

「…………見えていても…………避けられないなら…………意味がない…………」

「ああ、確かにそうでしょうね。ですが、それは些末なことです。何故なら“嫉妬”が“暴食”に勝てるわけがないのですから」

ヘルゼンフ許されざる暴食は自信満々だ。

「…………“嫉妬”を…………甘く見ると…………死ぬよ…………」

「ああ、いいでしょう。見せてください。その自信がどこから来るのかを」

「…………速さを制する者こそ…………戦いを…………制す…………!」

位相空間転移、座標設定、再出現後“M o r s c e r t a /

死は確實”発動

位相空間へと入り込み、0.0001秒後に元の空間へと戻る。これがわたしの限界。

そして出現ポイントは許されざる暴食の背後。ヘルゼブフ

わたしのぬいぐるみを許されざる暴食の背中に押し当てて、ヘルゼブフ

「・・・消えて・・・」

M o r s c e r t a / 死は確實

砲撃、とこの世界で呼ばれる一撃を放つ。

許されざる暴食は、ぬいぐるみを背中に押し当てられて初めて気づいた。ヘルゼブフ

けどもう遅い。ゼロ距離からの一撃だ。いくら最強でも無傷じゃ済まないはず。

「むっ!?!」

直撃。砲撃に飲み込まれた許されざる暴食がまた吹き飛んだ。ヘルゼブフ
いくら最強でも、わたしの攻撃を避けられず、わたしに攻撃を中てられないのなら単なる障害物ではない。

「ゲホツゲホツ・・・ふう・・・ああ、今のは効きました。見えてはいても避けられないというのは本当に厄介ですね」

大してダメージは入っていないみたいだ。さすがは最強の罪。

「・・・なら・・・完全に斃れるまで・・・撃ち続けるだけ・・・」

一撃でダメなら二撃で、それでもダメなら三撃四撃と中てていけばいい。
不完全でも位相転移があれば、そう苦労しないはず。
あとはわたしの体が位相転移に耐えきれずに自壊してしまうまでに終わらせればいい。
そうしたらまたルーテシアに会える。

「ああ、なるほど。攻撃力のない君が、僕に勝つにはそれしかないですね。

僕からの反撃を許さなければ、君は無傷で勝てるでしょう。転移があるのですし。
そう思えば、現状においては僕ではなく君こそが“最強”でしょうね」

そんなことはどうでもいい。今のわたしにとって重要なのはルーテシアの安全。

そしてこの世界の存続。あのエリオやキャロも……ううん、みんな守る。

第三の力しんいりちからと第四の力くろいりちからがいれば可能なことだ。

「ですが……!」

「わたしは……必ず勝つ……。だから……早く消えて……!」

“嫉妬の力”、そして“嫉妬の概念”の本体のぬいぐるみを前に突き出す。

このぬいぐるみがあるからこそわたしは戦えて、守ることができる。

「来て……罪眼……」
レーガートゥス

わたしの呼びかけに応えて現れた14体の罪眼。レーガートゥス
許されざる暴食を囲むようにして配置、狙うは集中砲火。

「おお、これはこれは・・・いけない。ああ、いけないです・・・
ねっ!」

「・・・撃つて・・・!」

14条の閃光が許されざる暴食を前後左右、そして上からも襲う。
そこへわたしも砲撃を放つ。回避はできない。逃れる方法は防御だ
け。
でも、

「!?!」

許されざる暴食は何もしないまま全ての砲撃を受けた。
わたしのすみれ色の光と、罪眼レーガートゥスの白色の光が爆ぜる。
その光に飲み込まれて自滅しないために別の建物に移る。

「・・・う・・・そ・・・!?!」

光が治まって、そこには服がボロボロになっている許されざる暴食。
いるんなことに驚いた。何もしないで攻撃を受けたこと。
全て直撃だったのに、大したダメージはなさそうなこと。

「・・・ふむふむ、大体この程度ですか」

破けていた上着を脱ぎ捨てて、何か理解したみたいに何度か頷いた。
何を?とかは考えるまでもない。

「わたしと……レイガートゥス罪眼の神秘の威力を……確かめた……？」

「ええ、そうです。で、僕の上着にダメージを与えたのは君の一撃だけです。」

つまり、レイガートゥス罪眼の攻撃は僕には通用しない、ということですよ。」

言い終えた瞬間、一気に距離を詰めてきたから、すぐさま位相転移で離れる。

元の空間に戻って、すぐさま砲撃を四発続けて放つ。

ヘルゼブ許されざる暴食は、二つは防御、一つは回避、一つは直撃だった。

「ゲホツ……むう、攻撃力の低さが救いですね。」

防御2。回避1。直撃1。……ああ、なるほどなるほど……」

まさか……調整……している……？ わたしと自分との戦力差を……？

もしそうなら、完全にわたしの動きを見切られる前に……斃す！
レイガートゥス ヘルゼブ罪眼を、許されざる暴食の行動を制限するバリケードに利用する。

“力”を全て攻撃に使う。これで絶対にダメージを与えられる。

M o r s c e r t a / 死は確実

ヘルゼブ許されざる暴食に一直線へ向かう全力の一撃。

この世界に来てここまで威力を高めた攻撃はこれが初めてだ。

「これは……！」

驚いた顔をした許されざる暴食。ヘルゼブでも何をしてももう手遅れ。

防御出来るようなものじゃないし、回避も今からじゃ遅い。

そして砲撃が爆ぜた。視界を覆うすみれ色の閃光。
罪眼には悪いけど、許されざる暴食を斃すための犠牲になっ
てしまった。

そして、わたしはさっきと同じようにして通常転移。安全圏に離れ
て様子を見る。

「……っ!?!」

いない……。今で斃した……?

ううん、いくらなんでも樂觀すぎる……。

辺りを探ろうとしたとき、直感が働いた。

それに従ってすぐにその建物の屋上から離れる。

そのすぐあとに、わたしが立っていた場所に大きな穴が出来た。

それは何か食べたような……食べた……暴食!!

「ああ、これは驚きました。なかなか良い勘をしています」

穴から飛び出してきたのはやっぱり許されざる暴食。
ヘルゼラフ

わたしの一撃を、建物の中に逃げることでかわしたんだ。

そしてわたしのいる場所の足元に移動して、死角になる真下からの
襲撃。

「……やっぱり……強い……」

こうなれば手段は選んじやられない。

位相転移の連続、そして出現ポイントから連続で砲撃を放つ。

「ぐう! これは……むぐっ……!」

順調にダメージを与えられている。
塵も積もれば山となる戦法。三代前の許されざる嫉妬の考えたもの。ただ、その分わたしの体を削っていつている。
今、右手の甲に小さくヒビが入ったのが見えた。これ以上は自壊していく。

「あがつ!? つ……フフ、やりますね……許されざる嫉妬
レウイヤタン
!」

危険危険危険。許されざる暴食が少しずつわたしの動きについてきてる。

早く決めないと……わたしが……砕け散る。
次の転移で最後にして、出現直後にもう一度全力の一撃を放つ。

位相空間転移、座標設定、再出現後“M o r s c e r t a /
死は確実”発動

位相空間に進入、再出現後に……!!

「さあ、捕まえましたよ」

「あつぐつ!!」

出現ポイントを割り出された!?
許されざる暴食の左手がわたしの胸倉を掴んで持ち上げる。

「うくつ」

かなり危険だけど、このまま位相転移に持ち込んで離脱。
ゼロ距離から溜めたままの一撃を放てば……いける!

「ああ、そうはさせません」

「っ!」

思いつ切り建物の床に叩きつけられて、そのまま床が砕けて貫通。一番下の階まで叩き落とされた。ここに落ちてくるまでに抜いた床は18層。

苦しい。見たら、右の小指と薬指が砕け散っていた。

それがなんだ、こんなところでわたしは・・・死ねないんだ。

こんなときに思い出すのは、許されざる嫉妬の始まり。

気がつけばわたしは許されざる嫉妬となっていた。

頭の中には知るはずもない無限の知識と、体の中には持ち得ないはずの“力”。

それがなんとなくイヤで、ぬいぐるみという器に全て転写した。

だけど、頭の中にある知識だけはどうしようもなかったのを覚えている。

わたしは独りじゃなかった。暴食、色欲、強欲、憤怒、怠惰、傲慢。そしてわたしという嫉妬。七つで一つの大罪、ペッカートウム。

わたしの初めての仕事は、この次元世界と呼ばれる箱庭での戦いになった。

ここに来て15年、という時間の概念の中でわたしは・・・。

「あ・・・く・・・はや・・・く・・・立たない・・・と・・・」

今見るようなものじゃないのに・・・。

それに早く立ち上がって、許されざる暴食の攻撃に備えないと。

瓦礫に手をつけて立ち上がる。大丈夫、まだまだ戦える。

今の内に体の損傷を治しておいたほうがいいのかも知らない。

「ポテンティア・サーナト・・・」

P o t e n t i a s a n a t / 力は療す

瓦礫の陰に隠れて、体中にあるヒビを治す。

許されざる怠情ヘルフェゴールの“再生”があればもっと簡単に、そして早く治る。だけど、わたしの力は“転移”だ。無いものねだりは無意味。

わたしが落ちてきた穴の床の縁を蹴る音が連続で響く。

許されざる暴食ヘルゼプが屋上からここまで降りてきた。

「ああ、どこにいますか？」

そう言っている許されざる暴食ヘルゼプの靴音が近づいてくる。

確認。ダメージ率39%、身体損傷率16%、転移限界数残り2回。

少しは回復できてる。けど、位相転移が出来るのはあと2回。

通常転移だったらほぼ無数だけど、まず通用しないはず。

転移完了までの時間も掛かるし、何より出現ポイントが波打つって
いう欠点がある。

残り二回の位相転移で斃さないと・・・。

「ああ、見つけました」

「なっ!？」

いつの間に!?! 違う、そんなことを考える暇があるなら回避を・・・

・!

迫る許ヘルゼルフされざる暴食の左手を側転で避けて、溜め無しの砲撃で迎撃する。

たぶんダメージを与えられないと思うけど、目くらましくらいにはなる。

わたしと許ヘルゼルフされざる暴食の間に閃光が爆ぜる。
今すぐにここを離れないと、

「ああ、逃がしませんよ？」

許ヘルゼルフされざる暴食の音がハッキリと聞こえた。

「……え……？」

視界が白に染まる。分かるのは静かだけど荒々しいって言う矛盾の暴風が吹いたこと。

今のわたしは足が地面に着いていない。浮いている？ 攻撃を受けた？ 判らない。

「あぐつ……エホツエホツ……」

背中に衝撃が来た。攻撃じゃない。背中から地面に落ちたんだ。

受け身も何もないから咽た。両手両足の感覚はある。どこも失っていない。

「……一体……何が……!!」

視力が戻って、最初に見えたのは地面。そして見回して分かった更地。

「そんな……さっきまで……建物がたくさん……あったのに・

・・・

でも直径1kmほどの空間には何も残っていなかった。
今のが許されざる暴食の攻撃・・・？

「本当ならもつとイケますよ？　ですが単なる建造物を食べても意味ないですから」

「っ！！」

真後ろに許されざる暴食が立っていた。

「ああ、驚いてくれて嬉しいですよ」

食べた。それが許されざる暴食の持つ・・・力・・・。
もし、この攻撃を初めから使われていたら、わたしはそのときに負ける・・・。

「ああ、お気づきでしょうか？　僕が少しだけ手を抜いていたことに。
さて、君の僕に勝てる、という自信は今どうなっているのか教えてください」

「っ・・・約束・・・したんだ・・・！」

位相転移で許されざる暴食の頭上10m付近に移動する。
残りあと一回だけど、これで決めればそれでいいだけ。

Deus Caedere / 神殺し

ぬいぐるみを頭上に掲げて、圧縮した神秘の塊を生み出す。
わたしの持つ最高の一撃。威力は申し分ない。直撃させれば絶対に
勝てる。

「……消えろおおおおお！！！！！！」

ぬいぐるみを振り下ろすと同時に、神秘の塊も許されざる暴食ベルゼブブに向
けて落ちる。
許されざる暴食は動かない。真っ向から迎撃するつもりだ。

「あああああっ！！」

「おおおおおっ！！」

わたしと許されざる暴食ベルゼブブの咆哮。そして圧倒的なすみれ色の閃光が
爆ぜた。

視界がまた光によって妨げられる。音も聞こえない。

「はあはあはあはあはあ……」

地面に降り立って許されざる暴食ベルゼブブを探す。

地面に穴は空いてない。さっきと同じ避け方はしてないってことだ。

「……勝った……の……？」

返る声はない。

「……やった……？……やった……！」

わたしは許されざる暴食ベルゼブブに勝ったんだ！

会える。これで胸を張ってルーテシアに会えるよ……嬉しい……。
地面にへたり込んで歓喜する。最弱だつてもう言わせない。

「……何が嬉しいんですか、許レウイヤタンされざる嫉妬？」

今一番聞きたくない声が聞こえた。

次に私を襲ったのは背中に突き刺さる衝撃。

そこで解つたのは蹴り飛ばされた、ということ。吹き飛ぶ。距離は大体10m程。

そこから地面に叩きつけられて、何度もバウンドしながらさらに吹き飛ぶ。

痛みとかそういうのはもう分からない。視界が回る。空と地と……。

それから遠くに見えたはずの建物の壁を突き破って、柱に叩きつけられて、ようやく止まった。

「あ……あ……あ……あ……」

うまく喋れない。ダメージが深刻すぎる。

でも……わたしは……諦めない！

わたしが叩きつけられた柱に手をつけて立ち上がる。

そこで分かったのは、わたしの右腕の肘から先が完全に砕けて消えていたこと。

確認。ダメージ率69%、身体損傷率46%。

P o t e n t i a s a n a t / 力は療す

気休め程度でしかないけど、損傷を回復させる。

だってわたしの意思はまだ折れてない。戦えるんだから……。

「……待ってて……ルー……テ……シア……」

傍に落ちていたぬいぐるみを手に取ってしゃがみ込む。

徐々に右腕が再構成されてく。よかった。

右腕がないなんて見っとも無い姿を、ルーテシアに見せられないもんね。

ここでまた過去が頭の中に浮かぶ。

スカリエツティに頼まれて、初めてルーテシアとゼストに会ったあの日の事。

わたしが第三しんごんの力のところへ向かうとき、「気をつけて」って言うて心配してくれた。

嬉しかった。戸惑った。その短い言葉に、何故か泣きそうになった。それから許ルシファーされざる傲慢に頼まれて、ルーテシアたちと行動を一緒にした。

途中で小さいの、アギトが合流した。初めの内、アギトはいつもケン力腰だった。

それがルーテシアとゼストを想つての事だと思えば、全然気にならなかった。

しばらくしてその態度も変わってきた。わたしとルーテシアが仲良くしてたから、と今は思う。

アギトから料理を教わった。それは何となくの行動、ううん、それは……、

「わたしの……生きてた頃の……記憶の所為……だ……」

その頃からわたしは、自分が人間だったときの記憶が蘇り始めた。

お母さんとお父さん、わたし・・・三人家族・・・。
どこにでも在る普通の家族だった・・・ような気がする。

そんなルーテシアたちは、レリックって呼ばれてる赤い石を探して
いた。

それがあればルーテシアのお母さんが目を覚ます、って聞いた。
スカリエッティのラボに呼ばれて、初めてルーテシアのお母さんを
見た。

激しい頭痛だった。そこで全部思い出した。

わたしは・・・殺されたんだ、お父さんに。お母さんの目の前で。

そう、わたしの家族は普通じゃなかった。いつもケンカばかりの両
親。

いつも怯えていたわたし。わたしは望んでいたんだ。普通の家族を。
でも、結局それは叶わないで、わたしは殺されて・・・嫉妬になっ
た・・・。

「・・・それから・・・だった・・・。わたしが・・・ルーテシア
を・・・好きになったのは・・・。ゼストも・・・アギトも・・・
大好き・・・」

独り言が静まりかえる建物の中に響く。

気がつけば、右腕の再構成が終わっていた。

許されざる暴食はヘルゼンフ・・・まだ来ない

だけど油断はできない。さっきからその油断で追いつめられてる。

確認。ダメージ率45%、身体損傷率21%。

「っ！」

次に目を開けたら、太陽の光がわたしに降り注いでいた。建物の外まで吹き飛ばされたようだ。倒れていた上半身を起こして見渡す。

そこに許されざる暴食はいた。左腕が根元からない許されざる暴食が。

斃しきれなかった。もう位相転移は使えない。

「や……て……くれまし……ね……」

顔面左側部、特に口のあたりが削れて無くなってる。

それでも喋れるのだから恐ろしい。

「わたしは……誓った……守るって……。わたしは……約束した……また会えるって……その二つが……ある限り……わたしは……負けない、諦めない……!」

それが今のわたしを支える大切な柱。

この二つがあるからこそわたしは何度でも立って見せる。

ぬいぐるみに最後の力を集束させる。

これが本当に最後の一撃になる。一切の手加減なし。

界律はこの程度じゃ動かないのは解ってる。

許されざる怠惰がいくつもの世界に刻んだ紋様がある限りは、だからこそこの一撃を。

「……生まれて早々……さよなら……許されざる暴食……」

たぶんあの許されざる暴食は生まれてから一日も経ってないはず。

あまりに短いその存在、わたしの大切なもののために……ここで

・・・

「斃す!!」

Deus Caedere / 神殺し

撃った。止めの一撃を。一直線に許されざる暴食へ飛んでいく神秘の塊。

これで決着だ。だけど油断はしない。最後の最後まで、許されざる暴食が消えるまでは。

そしてそれは起きた。わたしの一撃と、許されざる暴食の一撃が衝突した。

あんな状態でもあの攻撃が出来るなんて予想外だ。てつきり両手がないと使えないって思っていたから。相殺されたわたしの一撃。けどすぐに行動を移す。油断せずに身構えていたことが良かった。

「まだ・・・終わりではありませんよ・・・!」

わたしに向かって疾走してくる許されざる暴食。

位相転移は使えない。使ったら自壊していくしかないから。

だから自分の足で回避を行う。けど、向こうのほうは圧倒的に速い。

「いきますよ!!」

「っ!!」

右拳がわたしのお腹に突き刺さる。お腹付近からヒビが入った音が聞こえた。

吹き飛ばされる前に、左腕を絡めてしがみつく。そして再度ゼロ距離砲撃を放つ。

ぬいぐるみからすみれ色の閃光。それがわたしと許されざる暴食を覆う。

何度目かの爆発を受けてお互いに吹き飛ばす。

わたしは体を捻って着地。あっちも同じように着地、次の瞬間には走ってきた。

許されざる暴食に向けて連続砲撃。威力はほとんどないけど、それを避けては直撃を受ける許されざる暴食の上半身は裸だ。

「ああ、痛いですね。これは痛いです・・・よ！」

幾何学模様の口が開いた。風の流れがまた見える。

安全圏は許されざる暴食の左側面。

「んー！」

全力でその安全圏に体を滑り込ませる。

直後、

「っが!？」

右頬に許されざる暴食の強烈な蹴りが入った。

今の口はわたしを誘導するためのフェイント・・・？

耐える。だけど吹き飛ばすのだけは防げない。それほどの威力。

宙を滑空する間にも砲撃を放つ。チャンスがあればどれだけでも撃とう。

それを回避して許されざる暴食はわたしに向かって再度疾走。再構成を終えた左腕がわたしの右足首を掴み取って、

「碎けてしまいなさい!!」

全力で地面に叩きつけてきた。右足からバキッって音がした。今でどこかが碎かれたかもしれない。さすがにそれは困る。歩けない、立つことさえ出来なかったらどうしようもない。

「くっ・・・あゝう!!」

両手をついて、上半身を起こそうとしたとき、わたしの背中を踏みつけてきた。

それでお腹と背中からメキッって音がした。もうわたしの体は限界に近い。

「はあはあはあ・・・どうです？ もう止めましょう。大人しく僕の空腹を満たす贄となってください。

何せ君は誰も守れない。自分の存在すらも守れないのですから・・・ね？」

「うあゝっ!!」

わたしの背中を踏みつけている足にさらに力が入った。

何とかして体を起こそうとするけど、この小さな体じゃ無理だ。

わたしはここで消えるのかな・・・？

誓いは？ 果たせない。約束は？ 守れない。諦める？ 否。

弱音を吐く暇があれば意志を高める咆哮に変える。

自分の最期を考える頭があれば勝つための道筋を考える。

震える力があるならば戦う力に変える

先代の許わたしされざる嫉妬の声が聞こえた。
そのとおりだ。何を弱気になっている。わたしはルーテシアとまた
会うんだ！

「つくううううああああああ！！！！」

「なんと……！！！」

力を振り絞る。強力な神秘の全方位砲撃。

光が爆ぜ、地面を覆っていた石が砕け散って砂煙を巻き起こす。
でも、

「無駄な足掻きはもう止めましょう、と言っているんです」

離れたところから許ヘルゼンフされざる暴食が突進してくる。

わたしは右足が無事なのが分かってふらついても立ち上がる。

そして真っ向から迎撃するために、ぬいぐるみを持つ手とは逆の右
手に神秘を圧縮した力を籠める。

「わたしは……帰るんだ……ルーテシアのところを！！！！」

すれ違いざまに右拳を叩きつける。それは向こうも同じだった。

攻撃の重み、神秘の威力、身体能力差、それが導く結果は決まっ
た。

「……ごめん……ね……」

わたしは空高く舞った。許ヘルゼンフされざる暴食の一撃によって。

お腹が完全に砕けた音がして、服の間から粒子となって漏れていく。
体の崩壊が先か、許ヘルゼンフされざる暴食に食べられるのが先か……。

どちらにしてもわたしは……終わった……。

また過去を見る。これって走馬灯と呼ばれるものなのかな……？
それは料理をしている中、間違つてアギトを鍋に突っ込んだこと。
完成したのはアギトシチュー。アギト出汁入りのなんか危険物な料理。

食べたら花火をしなくなつて、メラメラ燃えて、騒ぎなくなる効果付き。

「……クス……」

こんなときでも笑つてしまう。

アギトと行つた模擬戦。勝つたのはもちろんわたし。

位相転移なんて卑怯だつて怒つたアギト。なんか可愛かつた。

これも良い思い出。わたしは得ることが出来た、幸せというのを。

レヴィ、気をつけてね

友達。うん、いいよ友達

レヴィの料理、美味しかった

約束、絶対また会おうね

わたしの大好きなルーテシアの声。

この世界は滅びるんだから関係ねえよ

「ほろ……び……!」

ダメだ。まだ終われない。せめて相討ちになっても許されざる暴食
はここで斃す。

それがわたしに出来るせめてもの……。

「守るんだ……この世界を……絶対に！！」

Deus Caedere / 神殺し

界律が動けば世界は滅びない。最強の第四くさいろの力があるんだから。
きつと守ってくれる。ルーテシアたちの生きるこの世界を。

「……生きて……ルーテシア……」

わたしと許されざる暴食の至近距離での大爆発。

目が熱いと思ったら、わたしは泣いていた。これで、最期なんだね・
……。
もし生まれ変われたら、ルーテシアとゼストにアギト、四人でまた
旅をしたいな。

「大好き……だよ……ルーテ」

ゼストを追って地上本部へと進入したシグナムとリイン。
そしてそのゼストが向かったと思われるレジアス中将の執務室へと
急ぐ。

「ここから先は通行止めだ！」

廊下いっぱい障壁を張って、シグナムたちの行く手を拒むのはアギトだ。

「ダンナは酷いことなんてしねえ！　ただ、昔の友達と話がしたいだけなんだ！」

アギトの周囲にいくつかの炎が生み出される。

そしてそのアギトは涙を流し訴える。

「ダンナにはもう時間がねえんだ。そいつを邪魔するってんなら・・・！！！」

シグナムは“レヴァンティン”を振り上げ、そして一閃。

アギトの張った障壁が真つ二つに両断され砕け散った。

“レヴァンティン”が振り下ろされた瞬間に目を瞑ったアギトは、自分に襲いかかる

はずだった刃が来ないことに目を開け、“レヴァンティン”を鞘に納めるシグナムを見た。

「こちらは元より事情を訊くことが目的だ」

シグナムはリインとのユニゾンをも解除し、戦う意思がないことを示す。

「事件の根幹に関わるのなら、尚更聞かせてもらわねばならん」

そして三人はゼストとレジアス中将のいる執務室へと向かう。

廊下を走る中、三人は無言。

そしてもうすぐで執務室へとたどり着くというところで、轟音と揺れが襲う。

さらに速度を上げ、執務室へと入ったシグナムたちが目にしたのは、本棚にもたれかかるようにして座り込んで気を失っているレジアス中將の副官にして実娘のオーリス・ゲイズ。

執務デスクに伏せているすでにこと切れたレジアス中將。
そしてゼストと、そして……

それは、シグナムたちがここに来るまでに起こった悲劇の結末だった。

ゼストはレジアスに語った。自分たちの目指した正義はどこで違えてしまい、何故歪んしまったのか、と。

重みのあるゼストの言葉にレジアスが答えようとしたとき、それは起きた。

先程まで震えていただけの女性局員がレジアスを右手に装着されているグローブの指先にある三本の爪で貫いていた。

そしてゼストは身動きが取れないようにバインドをかけられた。

レジアスをその爪で貫いた女性局員こそが戦闘機人の？ナンバースドゥーエだった。

彼女は最高評議会の殺害という任務を終え、もう用無しとなったレジアス中將を殺害するために、変身偽装能力“ライアーズ・マスク”により女性局員へと変装し、機会を窺っていたのだ。

そしてそれは実行に移された。固有武装“ピアッシングネイル”という暗殺特化の刺突用武装を使い、親指、人差し指、中指にある爪でレジアスの胸を背後から貫いた。

それを見たオーリスは父レジアスの許へと駆け寄ろうとしたが、ドゥーエは空いている左手をオーリスへと翳し衝撃波を放った。

それをまともに受け、本棚へと叩きつけられたことでオーリスは完全に気を失った。

「お役目ご苦労様です」

変装が解け、本来の顔へと戻ったドゥーエ。

ゆっくりとレジアスを貫いている“ピアッシングネイル”を引き抜き、

「あなたはもうドクターの今後にとってお邪魔ですので」

彼女の着ている職員の制服が戦闘機人ナンバースのスーツへと変化する。そしてレジアスは執務デスクへと倒れ伏し、

「ゼスト・・・俺は・・・俺は・・・」

最後の力を振り絞り上半身を起こし、ゼストへと手を伸ばして言葉を紡ごうとする。

ミッドチルダの地上の平和のために力を尽くし、そのために罪をも犯した中将レジアス。

正義、その言葉に踊らされたレジアスは親友ゼストに何も言えぬままその生涯を終えた。

「さあ、これにてあなたの役目も復讐も終わりです」

「・・・いつでもそうだ。俺はいつも・・・遅すぎる」

俯いていたゼストはそう苦々しく呟き、ドゥーエにかけられたバインドを破壊する。

ドゥーエは自由となったゼストによって破壊さっがいされた。

そのときの一撃こそが、シグナムたちの聞いた轟音と揺れの正体だった。

「ダンナ・・・」

死に伏したドゥーエを見下ろしていたゼストに、たった今この場に
来たアギトが近寄る。

シグナムもまたゼストの傍へと駆け寄り、

「っ！ これは・・・あなたが・・・!?!?」

死んでいるドゥーエを見たシグナムがゼストへと訊ねる。

「・・・そうだ。俺が殺した。俺が弱く・・・遅すぎた」

ゼストは後悔に染まる表情でそう答えた。

「・・・同行を願います」

シグナムは自分の仕事を全うする。

今は何も言うべきことはないからだ。

「断る。ルーテシアを救いに戻り、スカリエッティを止めねばなら
ん」

「スカリエッティと戦闘機人たちはすでに逮捕、ルーテシア・アル
ピーノも私の部下たちが保護するべく動いています」

アジトに向かったフェイトとシャルロツテからスカリエツティを逮捕したと、シグナムとリインはすでに報せを受けていた。

「そうか。ならば、俺の為すべきことは、もうあと一つだけか……」

槍を構えたゼスト。彼は戦う気だった。自分の終わりを迎えるために。

「ダンナ！？　なんで……！？」

「じつとしている……！」

ゼストに怒鳴られたアギトは押し黙った。

そしてゼスト最期の相手となるシグナムもまた“レヴァンティン”を構える。

騎士としての最期を迎えようとするゼストの想いに応えるように。

「夢を描いて未来を見つめたはずが、いつの間にか随分と道を違えてしまった。

本当に守りたいものを守る、ただそれだけのことの何と難しいことか」

静まる執務室にアギトの嗚咽だけが流れる。

そして二人の騎士は互いを見つめ……動く。

先手はゼスト。彼の槍がシグナムの髪を結っていたリボンを斬り裂く。

髪が解けながらもシグナムは槍をかわし、反転。“レヴァンティン”を振り下ろす。

ゼストはその一撃を、槍を水平に掲げることによって防ごうとした

が、シグナムの体重がかけられた一撃に耐えきれずに槍が両断された。

それでもゼストは止まらない。無手でシグナムへと殴りかかる。

「紫電一閃……」

それを見たシグナムは止めとなる一撃を準備する。

カートリッジをロードした“レヴァンティン”の刀身に紅蓮の炎が噴きあがる。

「ダンナあああ!!」

アギトの叫びが響き渡る。そして、シグナムの一撃はゼストを討つた。

ゆっくりと倒れていくゼスト。アギトはすぐに近寄って何度も「ダンナ」と涙ながらに名前を叫び続ける。

シグナムもまた歩み寄ってゼストを抱え起こす。

「俺が知る限りの事件の真相がここに納めてある」

右手の指に嵌められた指輪をシグナムに見せるようにして掲げたゼスト。

事件の真相、もちろんそこには大罪に関する情報はない。^{ベックカートゥム}

「お預かりします」

「ルーテシアとアギト、そしてレヴィヤタンのことを頼めるか？」

シグナムは即答できなかつた。ルーテシアとアギトは大丈夫だ。

しかし、レヴィヤタンだけに関してはシグナムに決定権はないのだ

から。

「巡り会うべき相手に会えずにいた不幸な子供だ」

アギトは「ダンナ」と泣きながら、ゼストの前へと移動する。

「アギト、お前やルーテシア、レヴィヤタンと過ごした日々、そんなに悪くはなかった」

アギトの頭を撫で、これまでの過ごした時間に満足していると告げた。

「良い空だな」

「はい・・・」

「俺やレジアスが守りたかった世界。お前たちは間違えずに進んでくれ・・・」

こうして騎士ゼストの旅路は終わった。

後の者に世界を託し、この世界の平和を願いながら。

そしてシグナムとアギトは空へと上がる。

ゼストが願ったこの世界の平和のために。

＋
＋
＋
＋
＋
＋
＋
＋

わたしはどうなったんだろう・・・？

相討ち覚悟の一撃を放って……それから……？
おかしい。何でこんなことを考えられるの？

「……わた……し……いき……て……る……？」

声が出た。掠れているけど確かに聞こえた。どうしてか理解できない。

あのときのわたしはもうボロボロで、自分の攻撃の衝撃だけで消え
そうだったのに。

目を動かす。見えるのはさっきまで許されざる暴食と戦ってた更地。
そしてそこには許されざる暴食が立っていた。

今度こそダメだ。わたしは食べられて終わる。

「……」

その許されざる暴食^{ヘルゼラフ}がわたしを見ている。

違う。わたしと同じ方向にいる誰かを見ているんだ。

首を動かす。メキ、とか、バキ、って音がするけど……。

そしてわたしは信じられないものを見た。

「え……なん……で……？」

「……レヴィ……また……会えたよ」

ここにいるはずのない涙を流しても笑ってくれてるルーテシアが
いた。

それにガリユも一緒だった。

そしてキャロとエリオという第三^{シズク}の力の友達……。

それだけじゃなかった。あと二人がそこにいた。

「それじゃあフェイト。みんなを安全な場所にお願ひ」

「うん、分かった。気をつけてね、シャル」

第三しだいの力とフェイトという人間。

わたしは助けられたみたいだ、第三しだいの力たちに。
また涙が溢れる。だけど今度は悲しいんじゃないなくて嬉しいから。

「……………それじゃ始めようか、ベルゼブブ」

誰がために君は・・・（Leviathan）（後書き）

どうでしたでしょうか、今回。

結局レヴィヤタンは生かしました。当初はこの戦いで死んでもらう予定でしたが。

何故かここで死なすのは勿体なく思ったんですよね・・・すみません。

出番がこれからもあるかどうかは後々考えます。

そしてシグナムたちの話はとっとと終わらせるに限ると思い、一気に進めました。

さよならゼスト。黙禱！！

そしてシャルとフェイトvsアスモデウスは入りきらないと思ったために次回。

もう予告しないとかが言って守らないってどうよ？って突っ込みはご勘弁を。

さあ残りわずかとなった3rdエピソード。もうしばらくお付き合いください。

Memento mori・（前書き）

よ、ようやく終わった・・・地獄期間。

朝寝坊ができる朝をどれほど・・・（涙）

Memento mori・ / メメントー・モリー / 死を忘れる
な（意識ですが）。

自分がいつか死ぬ身である、ということ胸に刻め、という意味で
使われます。

アスモデウス戦イメージBGM

BAYONETTA“Temporantia - In For
e going Pleasures”

レヴィヤタンはルーテシアっていう子のところへ向かわせた。残りは私とフェイト、そして目の前にいるアスモデウスだけがこの場にいる。

そんなアスモデウスの目的は私の足止めらしい……。そしてもう一つ気になるのは、ゆりかごにいたルシルとなのはがまぜい状況にあるかもしれないということ。だから、

「とつととぶつ倒す！！行くよ、フェイト！」

「うん！」

私は左手に“トロイメライ”、右手に“キルシュブリューテ”を。そしてフェイトは“バルディッシュ・ザンバー”を構える。

対するアスモデウスは大鎌じゃなくてルシファアの剣“ルートウス”二振り。

障害系の概念が掛けられている以上、あれでダメージを負っちゃいけない。

『フェイト。絶対にあの剣で斬られないようにして。』

あれで斬られたら傷を治療することが難しいから』

『え……。？ あ、まさか……。あれがシャルを傷つけた……。！』

『。！』

『そ。あれ治せるのルシルだけだから。気をつけてね』

念話で“ルートウス”の危険性を伝えておく。今さらっぽいけど。

。。
もしフェイトが傷ついたら、ルシル怒るだろうな。．．．それはもう激しく。

「もうしばらくの間付き合ってもらおうわ!!」

姿勢を低くしながら突進してきたアスモデウス。

馬鹿だ。私とフェイト二人を相手に真っ向勝負だなんて．．．。

「光牙聖覇刃 S c h e i n s t r o m つけええつ!!」

閃光系魔力の波を放ってアスモデウスを迎撃する。

迫る聖覇刃を見てもアスモデウスは突進を止めない。
なぜなら、

「始めからこうして戦っていれば良かったわ．．．」

アスモデウスが動きを止めて左手に持つ“ルートウス”を振るうのが見えた。

「はあっ!!」っと気合のもと、聖覇刃は一閃されて消滅した。

「今の．．．!!」

相殺．．．じゃない。もっと別の何か．．．まさか．．．!!

「阻害ってこと．．．!!」

「御明察。このルートウスにかけられた概念、阻害がお前の魔力を消したわけ。」

私では完全に扱いきれないけど、それでも十分に役に立ったわ」

それが私の一撃をかき消した正体。

これは結構長引くかもしれない……面倒だな。

「どうしよう、シャル……？」

横に立つフェイトが訊いてきた。

確かに攻撃というものを阻害されるのは厄介だけど、

『フェイト。連続攻撃で阻害される暇を与えないようにしよう。

速さと物量攻撃を中心に攻めて、一気に切り崩す』

速さと手数で潰すだけのこと。

「了解。だったら……」バルディッシュ……いくよ

Yes, sir. Full drive, Riot Blade

“バルディッシュ”がフルドライブモードの“ライオットブレイド”になった。

短くなった片刃のような刀身を持つ剣。

聞いた話だと、防御されたとしてもその上からダメージを与えられるように刀身に高電圧の電流が流れていて、その切れ味も“ザンバ”以上とのこと。

そして短くなった分小回りが利きやすいそう。

それじゃここからは速さ勝負だ。アスモデウスの鈍間具ツマ合はもう見知ってる。

私とフェイトの動きには絶対についてこれないはずだ。

閃駆

お互いが持つ高機動法で一気に距離を詰める。
ただどアスモデウスは、

「ライドインパルス・・・」

「・・・なっ・・・!？」

あるうことか戦闘機人のトーレの移動法を使って、私とフェイトの攻撃範囲から消えた。
トーレとセツテの頭を鷲掴みしたときに生まれた光、あれがあのに機力を奪ったんだ。
正直これは予想外だ。まさかそんなものを使えるなんて・・・。

「なかなかの速さだわ・・・!」

私の右横からアスモデウスの声。

すぐに右手の“キルシュブリューテ”を構えて、“ルートウス”の一撃を防ぐ。

火花が散る中、“ルートウス”を捌いて左手に持つ“トロイメライ”を振るう。

それに合わせてアスモデウスがもう片方の“ルートウス”を構えた。私はそれを見てすぐに“トロイメライ”を止めて、閃駆で離脱する。

「危なかったぁ・・・」

あのまま“トロイメライ”を振ってたら、“ルートウス”の神秘で砕かれてた。

「スローターアームズ……」

アスモデウスの周辺に四つのブーメラン状の剣が現れた。

あれはセツテの持っていた武装で間違いない。

それを私とフェイトに向けて放って来たけど、さすがに私たちを甘く見過ぎだ。

武装は人じゃないから、気にすることなく“キルシュブリューテ”で両断、

フェイトも無事に対処し終えていた。

「プラズマランサー Get set ファイア!!」

「ロイヒテン・プファイル!」

Z u s a m m e n s c h i e e n (撃ち倒します)

フェイトの雷槍^{ランサー}15基、私の閃矢^{プファイル}15基、計30基の射撃魔法がアスモデウスに向けて一斉に放たれる。

ライドインパルス

また避けた。見たら分かるように二つの射撃魔法は直射型だ。ただ、

「ターン!」

「フェアフォルゲング
追撃!」

回避されたらそれで終わりなんてことはない。

遠隔操作によって再度アスモデウスに殺到していく私とフェイトの射撃魔法。

そしてまた“ライドインパルス”で回避しては“ルートウス”やページで対処していく。

「光牙 T a u f e k r e u z 十紋刃！」

「プラズマ P l a s m a s m a s h e r スマツシャー！」

そこに十紋刃とプラズマスマツシャーを叩きこむ。

するとさつき砕いたブーメラン状の剣や、新たな“ルートウス”がそれを邪魔をした。

本当に面倒だ。スカリエッティが乗っ取られていなかったらもう決まってるのに。

こうなったら、

『フェイト。私があいつの攻撃と防御を切り崩すから、

フェイトがその隙を狙って攻撃を叩きこんで。たぶんそれがベストだと思う』

アスモデウスの攻防は私が捌いて、フェイトがそこに攻撃。これでいく。

『……分かった。それでいこう。私は背後から行けばいいよね』

私は“トロイメライ”を待機モードにして、“キルシュブリュート”にだけ集中する。

アスモデウスとの距離は大体10m弱。フェイトに一瞬だけの視線

で合図。

「……………っ！」

そして一気に距離を詰める。真正面から堂々と突っ込む。フェイトへの攻撃を許さないための真つ向からの突撃だ。アスモデウスが“ルートウス”の剣先を私に向けてきた。刺突でもするんだろうか……………一点攻撃の刺突なんて怖くも何も……………!?

「残念ね。私にはこの“力”もあるのよ？」

ハイリヒ・フライハイト
真楯

直感が働いて、ほとんど無意識に障壁を前面に張った。そして次に私を襲ったのは衝撃。その正体は、

「っぐ！ サタンのレーザー……………!？」

そう、アスモデウスが放ったのはサタンのレーザーだった。本当に訳が分からない。サタンの最期はルシルの複製真技によるもの。

そのサタンを他のペッカートゥムが吸収する暇はなかったはずなのに……………。

「シャ　っ！」

弾き飛ばされた私を見てフェイトが声を上げた。

「痛っっ……………」

障壁ごと壁に叩きつけられて少し咽たけど全然問題ない。

「フェイト！」

迫るレーザー群を紙一重で回避してくフェイトが見えた。だから閃駆を使ってフェイトの許まで行こうとしたけど、

「邪魔・・・するなっ！！」

無数の書物のページが私の行く手を拒む。

もちろんそんなモノで私の行動を完全に邪魔できるわけがない。

双牙風炎刃

炎熱系と風嵐系同時使用による炎嵐の魔術。それで一枚残らず燃やし尽くす。

燃えカスが降っている中、それを無視してアスマデウスに突撃をかける。

「フェイト！！」

念話よりこっちの方が早い。だから声に出して呼んだ。

アスマデウスがこっちを見て、フェイトは次の行動に移るためにアスマデウスから離脱。

「くっ」

そしてさっきと同じようにレーザー群が私に向けられて放たれた。でも至近距離での発射じゃないから容易く回避できて弾くことが出

来る。

紅翼

突撃し続けながら、背に真紅の翼を展開。疾走から飛翔に変わる。そのおかげでレーザー群が私を捉える事が出来なくなった。

そしてアスマデウスの持つ二振りの“ルートウス”を“キルシュブリューテ”で弾き飛ばす。

「っ！ しまっ」

弾き飛ばした衝撃で、アスマデウスの両腕が大きく開いてかなり無防備になった。

そこで私は“キルシュブリューテ”を離す。

そして離脱しようとするアスマデウスを大きくした紅翼で覆って閉じ込める。

「何をするつも」

紅翼の中で向かい合う私とアスマデウス。

もしアスマデウスの姿がスカリエッティなら絶対にこんなことはないけどね。

「閉じ込めるのっ！！！」

魔力を乗せた全力の右ストレートを、アスマデウスの腹に叩きこむ。

「っがあはっ・・・！？」

紅翼を開放して吹っ飛ばすアスマデウスを見送りつつ“トロイメライ

ツテイ。

見た目で判断すれば無傷っぽいけど、たぶん笑えないほどのダメージを負ってるかも。

そして黒く染まるレリックに重なるようにして立っている半透明なアスモデウス。

「一気に決める!!！」

あの黒いレリックが今のアスモデウスということらしい。

ならばレリックあれを破壊すればいいだけだ。

でもやっぱりそう上手くいかないのが常というやつで……。

「やってくれたわね……!!！」

目を見開いたアスモデウスから私だけに向けてレーザー群を掃射してきた。

床に刺さっている“キルシュブリューテ”を引き抜く。

スカリエツテイの体じゃない以上は、あっちの命を心配する必要はない。

だからここからは魔導師じゃなくて魔術師としての戦いに切り替える。

「それが界律わたしたちの守護神の仕事だから……よっ!!！」

凶牙奈落刃

私の持つ闇黒系固有魔術最強の一撃を放つ。

大きな影で構成された刃が七つ、それが螺旋状になってレーザー群に突っ込んでいって粉碎していく。

「フェイト！　そこに倒れてるスカリエッティバカを連れて離れてて！
！」

折角死なせないようにして頑張ったのに、ここで巻き込んで死なせたら泣く。

フェイトが「うん！」って言って、スカリエッティバカを引き摺って避難したのを見た。

「こんなときでも人間を気にするなんて・・・！」

「可笑的い？　私もそう思う・・・だけど・・・！！！」

“ルートウス”の散弾雨。一体どれだけ持っているんだろうか？
それに続いてレーザー群、無数のページが襲いかかってくる。

「これがホントの私なんだ！！！」

“テストメント界律の守護神”の私しか知らないなら可笑的いだろう。
だけど魔術師の、本当の私なら・・・。

双牙炎雷　双牙氷風　双牙凶閃

「滅牙翔破六天刃！！！」

属性複数同時使用の術式“双牙”の奥義の一つを放つ。

この世界じゃ二度目の使用。だけど威力は前回の十数倍。
当然アスモデウスの攻撃を・・・相殺！？

「思ってた以上に・・・強い！」

突き破ってそのまま直撃させるつもりだったのに。

まさか、スカリエッツィの体から出たことで本来の力を出してる・・・？

「スカリエッツィ窮屈な肉体から出ればこんなものだわ。

三番。私が完全に消されるまでの間、もう少しだけ付き合ってもらわうわ」

半透明なアスモデウスの体の中心、大体心臓辺りにある黒いレリツクがひと際強く輝く。

その光は魔力のような、神秘のような・・・曖昧な感じがする。

「消される・・・？」

それより消されるってどういう・・・いや、深く考えないでおこう。

どちらにしても殺ることはないから。

閃駆

ライドインパルス

一瞬でお互いが間合いを詰めて、私は“キルシュブリューテ”を、アスモデウスは“ルートウス”を全力で振るう。

「っっ！」

衝撃波がこの通路一体を駆け抜けてく。

これは結構・・・。

「やるね」

「本来のお前なら、今ので私を真つ二つにしているわね」

鏝迫り合いの最中の微笑。

私は強引に“ルートウス”を捌いて、一度間合いを開ける。
そして、

九頭龍閃

ルシルの“英知の書庫”^{アルヴァイト}で読んだ複製技を使った。

壹の唐竹。貳の袈裟斬り。参の右薙。肆の右斬上げ。伍の逆風。

陸の左斬上げ。漆の左薙。捌の逆袈裟。玖の刺突。

この九つの斬撃を同時に放つ……うわっ、楽しすぎ！

飛天御剣流っていうらしいけど、なかなか使い勝手のいい剣技ばかりだ。

この流派の剣技を基にして魔術とか魔法を組んでみようかなあ。

で、結果はというと……、

「ライドインパルス……」

避けられたわけで……。

でもいくつかは中っている。

その証拠に貳と参と肆という斬撃を受けた部分が削れていて、腕も吹っ飛んでいる。

「今の技、不可避らしいんだけど……。ま、こんなものなのか・
・なっ！」

再度閃駆で距離を詰めるために動く。

アスモデウスはそれに対処するために動こうとしたそのとき、

「これは……。!？」

チェーンバインド

「シャル！ 今！！！」

アスモデウスに黄金の鎖状のバインドが六重に掛けられる。フェイトの魔法だ。

なんで神秘の塊のアスモデウスに魔法が通用するのか、とか気になるけど、

今はこの刹那のチャンスを活かすのみ。

「下等な人間風情がああああ！！！」

アスモデウスの怒号がアジトに響き渡っていく。

そしてチェーンバインドが次々に弾け飛んで行くけどもう遅い。

「これで終了！！！」

閃駆から繋ぐ刺突。狙うは黒いレリック一点のみ。

「つく……。!！」

アスモデウスは刺突を横っ跳びしたことで回避した。

開いた距離は大体8m弱。

「目醒めよ、キルシュブリューテ!!!」

“キルシュブリューテ”の能力を限定解放。

使用する術式はもちろん私の持つ必殺の対人真技。

鞘に納めた“キルシュブリューテ”で居合い抜きを構えをとる。

「真技……!!!」

アスモデウスの最後の足掻きとも言える“ルートウス”の散弾雨。けどやっぱり遅い。ルシルのカマエルやチュールに比べれば遙かに紙一重の回避でアスモデウスに突っ込んでいく。

「はああああああっ!!!」

私とアスモデウスの気合の咆哮。

そこでアスモデウスを縛っていたチェーンバインドが完全に砕け散る。

だけど真技の射程内である以上、ライドインパルスを使われようとももつ避けれない。

左親指で鐳を弾く。それに合わせて鞘から右手で“キルシュブリューテ”を引き抜く。

アスモデウスもまた覚悟を決めたのか、居合い抜きのように構えて一気に“ルートウス”を一閃。

牢刃・弧舞八閃

アスモデウス、というより黒いレリックに向けて放つ防避不可の八

閃。

一閃された“ルートウス”をまずは切断していく。
そして八閃がアスモデウスに届いて斬り裂く、というところで私は見た。
安堵と満足、そして、してやったり、という表情を浮かべたアスモデウスを。

「……………」

すれ違つてお互いが背を向けている。

手応えはあつた。確実にアスモデウスとレリックを切断した。

「ここまで……ね……。精々気をつけるといわ。

……ベル……ゼブブが……動きだした……ことだし……」

背後から聞こえたアスモデウスの声。

アスモデウスの確実な最期を見届けるために振り返る。

そこには足元から光の粒子となつて崩れていくアスモデウスがいた。

「……………フフ……見物だわ……この先……どんな……

ルシ……ファァ……」

そして黒いレリックは粉々に砕け散つて、アスモデウスも完全に消滅した。

“キルシュブリューテ”を魔力に戻して消す。

「……………」

「シャル……勝つたの……？」

アスモデウスが消えたことで安堵の表情を浮かべてるフェイトがそう訊いてきた。

「うん、勝った。ここでやることはやったから、私はここを出たらゆりかごに向かう」

ヴィヴィオの傍にいるベルフェゴールに、もういないはずのルシファア、そして今知ったベルゼブブ。

最悪を考えればこの三体がゆりかごに集結してる可能性が出てきた。

「ん……う……ん……」

スカリエッティが呻いて、そして目を開けた。

あそこまでボコボコにしたのにどういふ体の頑丈さなんだろう？

「……広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ……あなたを逮捕します」

フェイトの目的、スカリエッティの逮捕。

それに立ち会うのが私になるなんて……。

「……っ！ な、何故……!？」

何故君がここにいる……!？ ゆりかごは!？ どうなっているんだい!？」

錯乱状態。まさか乗っ取られていた間の記憶がない……?

ま、起きたんなら少し話を聞かせてもらおうかな。

スカリエッティの胸倉を掴んで尋問、場合によっては……。

「スカリエッティ。ペッカートウムとはどうやって知り合った？」

そしてヤツらの目的は？ ヤツらの残りはどこにいる？」

どうせヤツらの全てを把握してるわけない。

ただどこにいるのかくらいは知っているはずだ。

「き・・・君は誰だい・・・？ それにペツカートウム・・・？
なんだいそれは？ いや、そんなことより私は・・・私は・・・
？」

「「え？」」

フエイトと二人して気の抜けた声。

ちよつと待って。いやいやいや・・・演技ですか、それは？

「ペツカートウムと言ったらペツカートウムのことよ！」

「ちよつ、シャル・・・！！」

「何をするんだい、君は！？」

思いつ切りスカリエッティを揺する。

「アスモデウス！ ルシファー！ マモン！ サタン！ レヴィヤ
タン！
ベルフェゴール！ ベルゼブブ！ 忘れたなんて言わせ・・・
まさか・・・！」

掴んでいた胸倉を離す。

「私が誰か・・・解る？」

自分自身に冷静になるように言いつけて、スカリエッティに問いかける。
もし私の推測が間違っていたら、スカリエッティは3rd君って私を呼ぶはず。
そして当たっていたらきつと……。

「君が誰か？ 生憎と私は興味のないモノは覚えないようにしていてね。」

「すまないが君の事は知らないよ」

冷静になったスカリエッティがそう答えた。
やっぱり界律わたしたちの守護神や大罪ヤツらの記憶が丸ごと消えてる。
これで良いのか悪いのかは私には上手く判断出来ない。
ううん、きつとこれで良かったんだ。
そんな知識は残らない方が良いに決まってる。

「そんなことより私の戦闘機人せんくひんやゆりかごはどう」

鳩尾に一発お見舞い。私にとってスカリエッティはもうどうでもいいい。

あとは管理局でどうにかしてもらおう。

「えつと……シャル……？」

「スカリエッティは私が運ぶから」

襟首を掴んで引き摺りながら運ぶ。

そしてようやく出口に到着。久しぶりって思える太陽の光を浴びた。

「フェイト執務官！ 騎士シャルロッテ！ ご無事でしたか！」

シスターが私たちに気づいて声をかけてきた。

そこで引き摺ってきたスカリエッティを教会騎士の方々に引き渡した。

「シスターたちも無事だったんですね」

「はい。ウーノという戦闘機人は思っていたより簡単に倒せたので。そちらの方は大丈夫でしたか……？」

フェイトとシスターのやり取りを聞いて疑問。

アスモデウスに支配されたはずのウーノが弱かったって話。

ならどうしてアスモデウスは、ウーノが強いつて思わせるようなことを言ったか。

推測だけ私一人だけを相手にしたかったんだと思う。

私一人に対してアスモデウスとレヴィヤタンの構図を目指し、そして失敗した。

フェイトが残って、レヴィヤタンが裏切った。それがアスモデウスのミス。

今となつては過ぎたことだからもう興味はないけど。

「もうここは大丈夫かな」

スカリエッティとセイン、トーレとセツテが連行されていくのを見る。

ここでやることはもうない。ならルシルとなのはがいるゆりかごを

目指す。

「シャル？」

「それじゃ私行くね。ペッカートウム内で結構な面倒事が起こってるみたいでさ。

ルシルは大丈夫だろうけど、なのはとヴィータとヴィヴィオが心配」

「それじゃ私も行く。私もスカリエツィ逮捕の役目は終わったし・・・」

シスターへと視線を移すと、シスターは頷いてくれた。

行っても良いということだ。

それじゃあシスターたちには悪いけどあとは頼むとしようかな。

「・・・分かった。正直急ぎたいから転移で近くまで行くけど。いい？」

「うん！」

あとのことはシスターたちに頼んで、私とフェイトはゆりかごへと向かった。

そして一度目の中継点で気づいた。フェイトも感じ取ったのか顔が青い。

それは結構な存在感と威圧感。その正体がベルゼブブだということはずぐに分かった。

フリードリヒに跨るエリオとキャロ。

そして近くにはガジェット？型に立つガリユー、そのガリユーに抱えられたルーテシアがいる。

許されざる嫉妬に言われ、戦場となる廃棄区画から離れている最中だ。

すでにヴォルテル、白天王、地雷王は召喚を解かれ、この場にはもういない。

そして三人の間にあるのは沈黙。それがこの場を支配している空気だ。

戦場となっている場所から結構離れたというのに未だハッキリと感じられる。

許されざる暴食から再び放たれている圧倒的な威圧感を。

「・・・レヴィヤタンちゃん・・・大丈夫かな・・・？」

キャロが呟く。しかし彼女は何となくこの戦いの結末は分かっていた。

勝つのは許されざる暴食だ、と。その目で許されざる暴食を見ての推測。

それほどまでに彼女の心に強烈なまでの存在感を刻んだ許されざる暴食。

「きっと大丈夫だよ、キャロ。レヴィヤタンはルーと約束したんだ。また会おう、って・・・。だから・・・きっと・・・」

そう言うエリオだが、実際にはキャロと同じ思いだった。

許されざる嫉妬は負ける。勝つと信じたい。けど勝てない。それがエリオの結論だった。

轟音、閃光の爆発。それが繰り返されている戦場を見つめる。あまりに遠いので、今はどちらが優勢なのかは分からない。

そしてそれは突然起こる。戦場となっていた廃棄区画のある一画が一瞬で消滅した。

エリオたちは言葉を失った。あんなにも簡単に、そして一瞬でビル群が文字通り消えた。

それは高ランク魔導師の魔法を物理破壊設定でもすれば可能なことだ。それにはある程度の準備が必要だ。砲撃なら魔力集束と言うように。

そして破壊後には瓦礫や破片も少なからず残るだろう。

しかし、そんな前準備もなく、一切の兆候もなく、瓦礫すら残さずそれは起こった。

それがどっちの攻撃によるものかはエリオたちには窺い知れない。だが現在の戦況が分かるうともエリオたちには為すすべはない。これはもう人間が手を出していい戦いの範疇を超越しているのだから。

「……レヴィ……」

今まで一切声を出さなかったルーテシアが口を開く。

出た言葉は許されざる嫉妬の愛称であるレヴィだった。
レヴィヤタン
自分を抱えているガリユアの顔を見て頷くルーテシア。

そしてここからでも確認出来る更地で砲撃か何かが放たれるのが見える。

それを見ていたエリオとキャロは、その戦場へ向かおうとするルーテシアたちに気づいた。

「ルーちゃん!？」

「ガリユー!？」

その自殺行為ともとれる行動に驚愕するエリオとキャロ。

しかしそれを気にせずにルーテシアたちは戦場へと向かおうとする。

「待つてルーちゃん！ 今行ったら危ないよ！？ 巻き込まれちゃうよ!？」

「そうだよ！レヴィヤタンは、ルーや僕たちを逃がすために戦ってくれてる!!」

今ルーが行けば、レヴィヤタンは悲しむし、きっと戦いの邪魔になる!!」

エリオとキャロの必死な説得。

それを聞いたルーテシア太刀は動きを止める。

そしてその視線をエリオとキャロへと向けて、

「分かつてる。だけど……」

涙を浮かべている目で二人を見た。

ルーテシアにとって許されざる嫉妬は、自分を助けてくれていた大事な人の一人。

その大事な人が今、目の前の更地で命をかけた戦いをしている。

しかもその戦いは自分たちを守るためのもの。

逃げるしか出来ない自分が憎い。守られることしか出来ない自分が

情けない。

戦う許レウイヤタンされざる嫉妬を手伝えない自分が、力のない自分が許せない。それが涙となつてルーテシアの頬を流れていく。

エリオとキャラロは、その涙を見て……迷つた。

行かせるべきか、それともやはり止めるべきか。

普通に考えれば後者。行けば間違いなく殺されるからだ。

迷いの果て、やはりルーテシアを止めようとしたところで、

「エリオ!? キャロ!?」

「フエイトさん!?」

頭上から聞こえた声に、エリオとキャラロは見上げる。

そこにいたのは二人にとって上司であり姉であり母のようでもあるフエイトだった。

そしてもう一人、この場で唯一許レウイヤタンされざる嫉妬と許ヘルゼブされざる暴食の戦いに干渉出来る者シャルロットがいた。

「うへえ、今代のベルゼブブはやっぱりやばい……」

「シャルさん!」

「っ……!」

エリオとキャラロは歓喜に近い声を、ルーテシアの視線は警戒の色を強くした。

シャルロットは三人を一度見回して、そしてもう一度ルーテシアを見る。

この子がレヴィヤタンの守りたいもの、か。
シャルロツテはそう思いながら口を開いた。

「……ルーテシア、よね？ 私はシャルロツテ・フライハイト。
よろしく。」

さて、私が訊きたいことは二つ。レヴィヤタンの正体を知っている
か否か。

そしてもし知っているなら、その上でレヴィヤタンとこれからも一
緒にいたいかなか……」

「……」

シャルロツテの問いに沈黙するルーテシア。

「……あなたの返答次第で私はレヴィヤタンを助けることにな
る。」

そう約束したから。さあ、あなたの心こたえを聞かせて、ルーテシア」

シャルロツテの許されざる嫉妬レヴィヤタンを助ける、という言葉聞いたルー
テシアは、顔を上げてシャルロツテの目を見る。そして、

「レヴィが何なのか知ってる。でも、それでもレヴィは大事な人。
だからこれからも一緒にいたい……。レヴィを……助けてく
ださい……」

ガリユーからガジェット？型に降りて立って、シャルロツテに頭を
下げて頼んだ。

許されざる嫉妬レヴィヤタンを助けてください、と。

「……………よし！」

シャルロットはルーテシアを見て、満足そうに頷いた。移した視線の先、そこでは未だに戦いが続いている。

「それじゃ助けってくるから。フェイトたちはここで待ってて」

「待って。わたしも行く……………連れてって」

ルーテシアが真剣な面持ちで言う。

それを聞いたエリオとキャロはまた言葉を失う。

「……………解ってると思うけど危険だよ？」

ルーテシアは頷いて応えた。危険は覚悟の上、それでも行きたいのだと。

「ぼ、僕も行きます！」

「わたしも！」

「ちよっ……………！」

今度はフェイトが言葉を失った。

当然だ。目の前の更地で繰り広げられている戦いは人智を超えている。

そんな危険度MAXな場所に、大事なエリオとキャロを向かわせるわけにはいかない。

「……………ついてくるな、って言っても無駄……………ね」

「シャル!？」

フェイトのうるたえ度が一気にレッドゾーンへ。

シャルロツテに、エリオたちを止めるように頼もつとしたとき、

「……っ!?」

「バカな……!？」

この場にいる全員が絶句、

あまりに強大な力の波がこの場へと到達したのだ。

その力の中心は、更地で強く輝くすみれ色の大光球だ。

「レヴィ……!」

「あんなもの至近で使ったらベルゼブブどころか自分も消し飛ばす!」

すみれ色ということ、あの大光球の担い手が許されざる嫉妬だと分かったシャルロツテ。

そして感じ取れる神秘量からして、相討ち覚悟の一撃だと分かる。

「先に行く! ついて来たかったら追いついてきて!」

シャルロツテは真紅の翼を羽ばたかせて大光球へと向かう。

「レヴィ!」

シャルロツテを追ってルーテシアが、フェイトたちが戦場の中心へ

と向かう。

十 十 十 十 十 十 十 十

レヴィヤタンの本気もそうだったけど、今代のベルゼブブはさらにやばい。

人間になっている所為だからだろうか……、ベルゼブブの威圧感に背筋が凍った。

情けない。たかがベルゼブブ如きに気後れするなんて……。

「目醒めよ、キルシュブリューテ！」

レヴィヤタンを飲み込もうとする閃光を、限定解放した“キルシュブリューテ”で斬り裂く。

それでも止まることを知らないレヴィヤタンの攻撃。

爆ぜる閃光から逃げるために、レヴィヤタンのお腹に手を回して急いで離脱する。

「これって……!」

レヴィヤタンのお腹に回した腕から伝わってくる感触。

柔らかさじゃなくて空洞のような何も無さ。

砕かれている……?

「こんなポロポロになってまで……」

守りたかったんだ。あのルーテシアって子を。

そして閃光から完全に離脱。気を失っているレヴィヤタンをそつと

地面に横にする。

「!?!」

後から来るフェイトたちのために、私はベルゼブブから放たれている威圧感に真っ向から自分の威圧感をぶつけて相殺。

これで少しはベルゼブブの威圧感を弱く感じるようになるはずだ。ついでに私はベルゼブブへの牽制の意味を込めて威圧感に続いて殺気を叩きこむ。

「レヴィ……!」

「レヴィヤタンちゃん……!」

「レヴィヤタン……ひどい……!」

横にしたレヴィヤタンを見て、エリオたちの表情が歪んだ。この子たちにとっては結構ショッキングなものだと思う。

「え……なん……で……?」

「……レヴィ……また……会えたよ」

気がついたレヴィヤタンが、ルーテシアを見て目を見開いた。意識を取り戻したなら、あとはここからみんなと一緒に避難させればいい。

「それじゃあフェイト。みんなを安全な場所にお願い」

「うん、分かった。気をつけてね、シャル」

ガリユールがレヴィヤタンを横に抱えて、ルーテシアはレヴィヤタンの手を握って、先にここから離れていった。

フェイトたちもそれに続いて、フリードリヒに跨っているエリオとキヤロと一緒に離れていった。

うん、それでいい。何も言わずに行ってくれて感謝だ。

「……それじゃあ始めようか、ベルゼブブ」

ここで、今まで黙っていたベルゼブブが動く。

ゆっくりと私のところに歩いてくる。

「今代のベルゼブブ、お前は随分とまともな力を持った分裂体ね。正直驚いてる。だから、ここで確実に斃させてもらおう……」

こいつはここで絶対に斃しておかないとまずい。そう本能が告げてくる。

「ああ、少し待っていたただけですか？」

「なに？」

歩みを止めて私を見据えるベルゼブブ。

臨戦態勢は解かない。いつでも確実に、一瞬で決めるために。

「ああ、それでも結構です。まずは話を聞いていただきますか？」

「……言ってみて」

くだらない話なら即叩っ斬る。

「3rd・テストメント。僕はあなたと戦うつもりはありません。なぜなら大罪の目的は界律の守護神と戦うことではないので」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

守護神との戦いが目的じゃない？

いやいやいやいや・・・メチャクチャ襲われたりしてんだけど実際。

しかも一度死にかけたし・・・マジで。

「お気持ちはお察しします。全ては許されざる暴食のミス。

つい数時間前に生まれたばかりの所為で他の罪たちの独断行動を許してしまった。

ああ、これは言い訳ですね。いけませんね。ああ、いけません」

生まれたばかり？ 独断行動？

それに今まで戦ってきたヤツらは独断で戦いを望んだってこと・・・？

「それが本当ならお前たちの目的は？」

それを聞かせてもらう。まあ、聞いたところで斃すことには変わらないけど」

「大罪の目的は言えませんね。ただ、許されざる傲慢の目的は言いませんよ。」

彼は全てを裏切り、分裂体を害し、“力”だけを奪い取り、自己の“傲慢”を強化していつています。

そして界律の守護神二柱を取り込んだその先

何だそれは……？

「ルシファー許されざる傲慢という個を残したままでその存在を昇華、ボクたち長の審判者の空席に座する。」

それが彼の目的です。すでに僕と許されざる嫉妬レヴィヤタン以外は取り込まれてしまっている状態。

僕は裏切り者である許されざる傲慢を抹消するためだけに来たんです。

彼の目的は、本来のボクたち大罪の目的の邪魔となるので……」

つまりベルゼブブの目的は、ペッカートウム本来の目的の邪魔となるルシファーを斃すということか。

ふん……まっ、どの道殺ることに変わりない。

「なるほどね……。でも、だったらなんでレヴィヤタンと戦ったわけ？」

「ああ、あれですか。あれは食べようとしたんですよ。」

あの紫色の子や桃色の子、赤色の子をね。それを邪魔しようとしたレヴィヤタン許されざる嫉妬と戦うことになってしまったわけです」

「………変態かお前は。あんな小さな子たちに向かって、食べる？」

いただきます？ 消えろド変態。私がお前の全てを根こそぎ刈り取ってあげるから」

他の人が聞けば十中八九変態発言と捉えるはず。

外見は良い男なのに、どうしてこんな変態なのか……。

「ああ、そうですか。残念ですね。なら仕方ありません。」

ある程度痛めつけてしまいますから、そうしたらしばらく眠って
てください」

「上等だ変態。お前はしばらくなんて言わずに永遠に寝てなさい！」

M e m o r i o . (後書き)

アスモデウスの退場です。結構アツサリですね。
長引かせると、レヴィたちとの合流に支障が発生するといつこと
です。

結構ズレ感がありますけど、どうしようもなく……。

そしてフェイトの真ソニックフォームの出番なし。

一応これにも理由があるので責めないで下さると助かります。

傲慢の先にあったモノ（Lucifer）（前書き）

どうでもいい話。サブタイトルでLuciferノルシファーか、Ba?1ノバエルで悩んだ末、ルシファーに決定。ホントにどうでもいい話でした。

バエル戦イメージBGM

BAYONETTA“ The Greatest Jubilee ”

傲慢の先にあつたモノ（Lucifer）

玉座の間を翔る三つの閃光。蒼色、桜色、虹色の三つだ。

「バエル！！」

「ハッ、先程から力のない攻撃ばかりで、つまらないぞ？」

ルシリオン一人に標的を絞り、激しい攻撃を続ける^{バエル}天秤崩す者。

しかしルシリオンは一向に^{バエル}天秤崩す者へと大した攻撃を仕掛けない。行っていることと言え、^{バエル}天秤崩す者の剣を、大鎌を、魔力弾を捌き、その上で体術を駆使して姿勢を崩したりするだけに留まっている。なぜなら、

『・・・ママ・・・パパ・・・』

今戦っている^{バエル}天秤崩す者の体に原因がある。

その体とは、期間限定とはいえルシリオンの娘となつたヴィヴィオのもの。

だからこそルシリオンは躊躇っていた。

自分の攻撃が必要以上のダメージを与えてしまつのではないかと。

「つまらないな・・・！！」

ルシリオンが弾いた^{バエル}天秤崩す者の左手に大鎌が握られる。

^{バエル}天秤崩す者は背にしている光で構成された大鎌と“ルートウス”の翼を消す。

その場で反時計回りに回転し遠心力の乗つた一撃を、ルシリオンの

首へめがけて一気に薙ごうとする。

「ここだ・・・っ！」

ルシリオンは回避ではなく、真正面から天秤崩す者の左前腕部に左手の掌底を中て、左腕の運動を停止させる。

ここでルシリオンは足元にミッド式の魔法陣を展開し足場とした。そのまま左手で天秤崩す者の左腕を取り、背負い投げのような体勢に入り、

鉄山靠

八極拳における技の一つ。クロスレンジでの背面からの体当たり。

“聖王の鎧”が展開されているにもかかわらず、天秤崩す者が吹っ飛ぶ。

「っ、まただ。・・・魔力は乗せられているが、全く威力がない・・・。
らしくないな、欠陥品。本来のお前なら命など度外視して簡単にころ」

「黙れ!!」

怒号によって天秤崩す者の言葉を遮るルシリオン。
再度お互いが距離を詰めるために飛行する。

「ハ・・・っ!!」

天秤崩す者は短く息を吐き、大鎌をルシリオンへと投げつける
ルシリオンは回転しながら飛んでくる大鎌の刃の側面を足場として

踏みつけ、跳躍した。

突撃してくるルシリオンを迎撃するために、バエル天秤崩す者は“ルートウス”を15本射出する。

「フツ・・・！」

ルシリオンはすぐさま“グングニル”を取り出し、迫る“ルートウス”を弾いていく。

「なのはー!!」

ルシリオンが攻撃を捌く中、バエル天秤崩す者の技後硬直が生まれたことで、

「うん！ レイジングハート!!」

ルシリオンと共に戦う桜色の閃光放つ、ヴィヴィオの保護者なのはの名前を叫ぶ。
なのはは答え、愛機“レイジングハート”の先端をバエル天秤崩す者に向ける。

Divine buster・Extension

“レイジングハート”から使用魔法の名が告げられ、そして放たれた。

桜色の砲撃がルシリオンの真横を掠めるように過ぎ、バエル天秤崩す者へと一直線に向かう。

聖王の鎧

ヴィヴィオのオリジナルである聖王の防衛能力が働き、なのはの砲撃を防ぎきる。

天秤崩す者と交戦を開始してからは、こうした攻防が何度も繰り返されていった。

なのはは攻撃が防がれるたびに徐々に威力を上げていき、肩で息をするようになった。

「……やはりあの防御をどうにかしないといけないな……！」

「ヴィヴィオ……！」

『……なのはママ……ルシルパパ……』

ヴィヴィオの念話は今でも届く。

その声が聞こえてくる以上はヴィヴィオの精神は無事だ。だからこそなのはとルシリオンは諦めずに戦える。

「そろそろこの展開も飽きてきたな。そうだ。これでもう少し楽しくなるだろう？」

「っつ！！」「」

天秤崩す者が楽しそうにそう告げ、指を鳴らす。

そしてなのはたちの前に何体もの天秤崩す者が現れた。

幻影。それは戦闘機人のクアットロから複製した能力シルバーカーテンによるもの。

対象の知覚を騙すことのできる能力。

天秤崩す者はその能力に阻害の概念を加え、ルシリオンの魔術による幻影解析を妨げることに成功した。

とはいえ、それも短時間なものとなる。
いつまでもルシリオンの知覚を騙し続けることが出来ないことは分かっていた。

「……さあ、どれが本当の私なのか当ててみるといい」「」

ヴィヴィオの口から発せられる天秤崩す者の声と同時に三つ。
そこにルシリオンは違和感を覚え、よく天秤崩す者の姿を見ていく。

「……チツ、やってくれた……!」

ルシリオンは齒噛みした。視界に入る天秤崩す者は四体。
一体は本物。そして二体は幻影。そして残りのもう一体は、

「なのは!」

なのはだ。実際にはいるが、なのはと知覚出来ない。
ルシリオンは知覚を妨害され、なのはの姿を天秤崩す者と認識してしまっている。

「ルシル君!!」

ルシリオンを呼ぶ声。しかしそれは天秤崩す者の声で、だ。
それは本当になのはの呼びかけなのか、それとも天秤崩す者の罠か……。
判別できないほどに知覚を妨害されている。

「なのは! 私が天秤崩す者押さえている間に撃て!」

「なにつ……むぐつ!?!」

ルシリオンは吼えた。
そして、

「エクセリオン……バスタアアア……！」

砲撃が放たれた。射線上にはルシリオンと天秤崩す者^{バエル}。

天秤崩す者を“聖王の鎧”で防御準備を終えているが、ルシリオンは魔術が使えなくなっているため、防御することが出来ない状態だった。

阻害、それがルシリオンの魔術発動の妨害をしていた。

そのために魔法の念話すら妨害され、なのはに伝えることが出来な
いでいた。

そしてなのはの砲撃はルシリオンに直撃した。桜色の閃光が爆ぜる。
ヴィヴィオの体を気遣ったの一撃にも関わらず、ルシリオンの意識
を飛ばした。

唯一の救いは戦闘甲冑までキャンセルされなかったことだ。

戦闘甲冑までキャンセルされていたらルシリオンは気絶程度では済
まなかった。

次第に煙が晴れていき、そしてなのはは見た。

床に倒れ伏しているルシリオンと、未だ健在な天秤崩す者^{バエル}を。

「……え？ なん……で……ルシル君……？」

なのはの掠れた疑問の声。

床に降り立って、ルシリオンへと駆け寄る。

「ルシル君！？ ルシル君！？ しっかりしてルシル君……！」

『・・・パ・・・パ・・・や・・・やだ・・・』

なのはの悲鳴とヴィヴィオの涙声が、^{バエル}天秤崩す者に笑みを浮かばせた。

「ハツ・・・ハハ・・・アハハハハハ・・・！！　ハアー、いい様だ！！」

ルシリオンの姿という幻影を解き、本来の姿を現した^{バエル}天秤崩す者。そして他の幻影も同時に消滅していった。

それを見たなのははようやく理解した。自分の砲撃がルシリオンを撃つたことを。

「っ、ルシル君！！」

「さて、高町なのは。お前には用はない。大人しく退くか、それともここで死ぬか、好きな方を選べ」

「っ！」

ルシリオンを抱え、^{バエル}天秤崩す者を睨みつけるのは。

たとえ睨んでいる相手がヴィヴィオだとしても、睨むことはやめれなかった。

それほどまでになのはの^{バエル}天秤崩す者のへ怒りは頂点に達していた。ヴィヴィオの体に乗っ取り、幻術を使って親友のルシリオンに攻撃させた。

その上倒れたルシリオンを見て大笑い。

^{バエル}天秤崩す者のそれを聞いてなのはは自分の中に確かな怒りを感じた。

『マ・・・マ・・・にげ・・・て・・・』

「ヴィヴィオ！」

「くっ……ヴィヴィ……才を置いて……逃げる……？」

「ルシル君！」

「……そうでないとな」

『パ……パ……！』

ヴィヴィオの涙声の念話にルシリオンが目を覚まして、なのはの両腕から離れる。

そしてゆっくりと立とうとし、なのはに支えられながら立ち上がる。視線はヴィヴィオへ。いや、その体の中ハエルにいる天秤崩す者へ向ける。

「そんなこと……できるわけが……ない……！！」

コード 傷つきし者に、ラファエル 汝の癒しを

ルシリオンの体を包み込む蒼く優しい光。

徐々に、しかし確実にダメージを癒していく。

「ごめんなさい！ ごめんなさい、ルシル君！」

両目に涙を浮かべたなのはが何度も謝る。

ハエル 天秤崩す者の策に簡単に嵌って、ルシリオンを撃つたことを。

「ふう……。いや、あれは仕方ない。こちらの油断の所為もあったからな。」

だからなのはが謝る必要はどこにもない」

“グングニル”が光の粒子となって消えていく。

「……うん。ごめんね、ありがとうルシル君」

涙の浮かぶ両目を袖で拭ったのはは頷いて答えた。

ルシリオンは思考する。天秤崩す者攻略のための戦法を。^{バエル}

相手は知覚を阻害し、“聖王の鎧”という防衛能力を以ってなのはの攻撃を防ぐ。

その上どこから流れて来ているのか分からないが、天秤崩す者は魔力供給を行っている。^{バエル}

そして最大の問題は、

「次はどうすればいい、ルシル君……？」

なのはのどこか辛そうな表情。原因は知れている。

このゆりかご内に展開されているAMFだ。

それがなのはの魔力と体力を必要以上に奪っている。

「……ああ。やることは大して変わらない。

ただ、さっきと同じような知覚阻害を受けた時は出来るだけ動かないこと。」

その間に私が何とかして知覚妨害を解除させる」

知覚阻害は兎も角として、AMFからなのはを解放する術はある。

そして、ルシリオンはヴィヴィオを救うためにその術を使用することを決める。

それは魔術師の目指す四つの頂き“^{ディヴァイン・ポイント}神の力”が一つ、創世結界。

使用するのは“^{ユニオンウォール}聖天の極壁”。宝庫と居館はさすがにますいと考えた末の結論。

「うん。分かった。そのときはルシル君に任せるよ」

「話し合いはもういいか？ なら続きと行こう。

この体の持ち主もそろそろ限界だろうからな。

意識が完全に途絶えてしまう前に、欠陥品の最期を見せてあげなければ……！」

背にする大鎌と“ルートウス”の形をした光の翼が砕け、再構成されていく。

それは左右非対称の翼の骨組みのようにも見える虹色のものへと変化していった。

「やってみろ。……ヴィヴィオ！ もう少しだけ頑張ってくれ！」

「すぐに助けるからね！」

ルシリオンとなのはがヴィヴィオに声援を贈る。
負けるな、と。助けるから、頑張つて、と。

『ママ……パパ……うん……』

「……不愉快だ。もういい……」

^{パエル}天秤崩す者は表情を怒りに変え、歯噛みする。

背にしている骨組みのような翼が強く虹色に輝く。

『なのは。AMFの対応策をこれから行う。その方がなのはも楽だ

る？』

『え？ そんなことが出来るの……？』

ルシリオンは念話でなのはにそう告げ、なのははそれが出来るのか訊き返す。

もしそれが可能なら、なのははこれ以上自分に負担をかけさせるようなことをしなくともよくなる。

そしてルシリオンはそれを行うことで、^{バエル}天秤崩す者の魔力供給をも防げると考えている。

『ああ。詳しい説明は全てが終わってからにさせてもらうが、それは可能だ。

今からこの玉座の間に黒い穴を開けることになる』

『黒い……穴……？』

念話の最中にもルシリオンは^{バエル}天秤崩す者へと近づき、

「^{バエル}ヴィヴィオは返してもらうぞ、^{バエル}天秤崩す者……！！」

高機動の空戦を繰り広げる。

^{バエル}天秤崩す者の虹色の光を纏う拳打を捌きながら、ルシリオンは“^ヒ聖天の極壁”の術式発動の準備をしていく。

『そう、黒い穴。そこにバエルを誘い込む。そして次に私が入る。なのはは後からそこに飛び込んでくれ』

「何を企んでいる欠陥品……！！」

「何だと思っ？ 当てられたらプレゼントを贈ろっ・・・！」

二人の拳が衝突し、玉座の間を揺らすほどの衝撃が生まれる。そこから拳打の応酬が始まる。天秤崩す者は必殺の一撃を、ルシリオンはそれを裏拳で捌いていく。

我が手に携えしは確かなる幻想

ルシリオンが複製術式などを使用する際に必要な呪文スベルを詠唱。それを聞いた天秤崩す者は直感的に距離を取ろうとする。

「アクセルシューター！」

天秤崩す者の離脱を拒むように、なのははアクセルシューター15基を展開。

だが天秤崩す者は“聖王の鎧”を展開し無理やり突破する。

「取り込みやすいようにバラバラにしてくれろ・・・！」

“ルートウス”14本が天秤崩す者の周囲に展開される。そして全弾ルシリオンへと向けて射出されていく。

「その程度の速さで私の翼を落とせろと思っな！」

ルシリオンの怒声。

12枚の剣翼が背から離れ、新たな薄く細長いひし形の翼が10枚展開された。

空戦形態へと瞬時に移行し射線上から離脱する。

「空戦形態、その對抗策くらいは組んでいる」

天秤崩す者の翼の先端からジェット噴射のような閃光が噴出する。

「いくぞ！」

ルシリオンへと一気に突進していく天秤崩す者。

ここでルシリオンが笑みを浮かべながら同様に突進していく。

ルシリオンの笑み。それに気付いた天秤崩す者が警戒する。
しかし、そのときにはすでに手遅れだった。

聖天の極壁

ルシリオンと天秤崩す者の間に黒い穴が開く。

「っ！！」

天秤崩す者は目の前で開いた穴に気づくが、今さら軌道修正が出来ないため、そのまま穴に突っ込むしかなかった。

創世結界。名は知らずともどういふものか天秤崩す者は知っていた。
許されざる強欲と許されざる色欲を取り込んだ際に手に入れた情報からによるものだ。

「行こうか、バエル。・・・この戦いの決着の場へ」

ルシリオンと天秤崩す者は同時に穴へと突っ込んでいき、玉座の間から姿を消した。

十
十
十
十
十
十
十

ルシル君とバエルが黒い穴に入って行って消えた。

「……これに入れば……いいんだよね……？」

目の前に開いている穴に近づく。

A M Fをどうにか出来るらしいけど、少し不安がある。

「……ヴィヴィオ……」

そんな弱気なことなんて言ってもらえない。

ルシル君がたぶんこの穴の向こう側で待ってるはずだ。

「……よし……!!」

気合を入れて、黒い穴に入る。

そして穴に入った瞬間に分かった。さっきまで辛かったA M Fから解放されたことが。

穴の中を少し進んでだらすごい光が私の視界を邪魔した。

あまりの眩しさに両腕を目の前に構えて、その光から目を守る。

「なのは!!」

私を呼ぶルシルの声。ここで光が弱くなったことで目を開ける。
すると、

「……っ!?」
「……は……どっ……?」

さっきまでのゆりかご内に比べてあまりに激変した光景が目の前に広がる。

そこはすごく広くて薄暗い。唯一の明かりといえば地平線にあるものだけ。

上も下も雲が渦巻いていて、どっちが空で陸地か分からない。

「AMFはどうだ、なのは？」

「ルシル君……？」

何かの文字が多く刻まれている蒼い球体の上に立っているルシル君が訊いてきた。

私はルシル君のところまで飛んで、蒼い球体の上に降り立つ。

するとさっきまでに消費していた魔力がすごい勢いで回復するのが分かる。

「あ、えつと……うん、大丈夫。AMFの影響はないよ。

ねえ、ルシル君。ここって……？」

「話はあとだ、なのは。来るぞ」

ルシル君の視線の先、大体1km先にヴィヴィオの体に乗っ取ったバエルがいた。

いろいろと訊きたいことがたくさんあるけど、今は戦いに集中しないと……。

「さすがに魔力供給を妨害出来なかったか。まあ、AMFをどうにか出来ただけで十分か」

「魔力……供給……？」

「ああ。どこからか、おそらく駆動炉から魔力を供給しているんだ

ろう。

A M Fの中にあるとバエルの魔力は一向に消費されてなかった。つまりは消費してもすぐそばから回復している、と思ったわけだ」

気付かなかった。でも言われてみれば思い当たる。

私ばかり魔力を消費して、バエルの方は全然堪えてる様子はなかった。

それがルシル君たちの言う神秘なのかな？って思っていたけど、そういうことだったんだ。

「残念だったな、欠陥品」

あんなに離れているのにハッキリと声が聞こえる。

この空間の影響なのかもしれないけど、私には分からない。

それにまただ。バエルはどうしてルシル君を欠陥品って呼ぶのかが分からない。

そしてそれに反論をしないルシル君。それは自分で認めてるから？欠陥品。これだとルシル君がまるで作られた物みたいで……。

「なのは！」

「う、うん！」

ダメだ。そんなことを考えてる場合じゃない。

“レイジングハート”の先端をバエルに向けて臨戦態勢に入る。

「確かに少し予定が狂ったが、なのはをA M Fから解放することが本来の目的として発動したのがこの結果だ」

結果……この世界が……結果……!?

魔導師わたしたちが知って、そして使うものと全然違いすぎる。

これが魔術師にとつての結界ということなんだろうか・・・？

「そんなのはと、お前の神秘に対抗する術を持つ私。さつきまでの展開とはいかないぞ」

「面白い。その方が飽きないから楽しみだよ・・・！」

バエルの骨組みのような翼にまた虹色の光が噴出される。ルシル君とバエルの間に背筋が凍るほどの殺気が満ちる。そしてルシル君が一拍置いて、消えた。

「おおおおおー！！」

それは消えたように見えるほどの速い移動だった。

バエルまでの距離を一瞬で縮めたルシル君がバエルに突っ込む。私もルシル君を追って飛ぶ。だけど、

「速い・・・！」

追いついたときには始まっていたルシル君とバエルの殴り合いとも言える戦いに干渉出来ない。

しかもあまりにも速い打撃の応酬。下手に撃つとさつきみたいになるルシル君に中る。

でも待つてるだけじゃルシル君を手伝えないし、ヴィヴィオも救えない。

「レイジングハート。いつでも砲撃撃てるようお願いします」

A l l r i g h t . M y m a s t e r

『なのは。そこからバインドいけるか？』

ルシル君からの念話。正直あんな速いバエルにバインドをかけられるか……。でも、

『やってみる！ タイミングは！？』

必ずかけてみせる。やる前から出来ないなんて言えない。パンツ！、って大きな音がした。それはバエルの拳打をルシル君が掴み取った音。そしてバエルを抱くようにして、近くにある黄色い球体へと突っ込んで叩きつけた。

『今だ！』

R e s t r i c t L o c k

ルシル君の合図に合わせて使ったのは、私が一番最初に覚えた魔法。そして私が扱える捕獲魔法の中で最高の練度を持っている。

「捕えよ、縛鎖レーディング！」

私のレストリクト・ロックとルシル君の鎖で、その球体に縫いつけられるようにして完全に動きを封じられたバエル。

これでもう動けないはずだ。あとはどうやってヴィヴィオを救い出すか……。

魔力ダメージでのレリック破壊って決めてたけど、出来ればヴィヴィオの体に負担はかけたくないのが私の本音。

「つく……これは……力が……!？」

バエルがどうにかして脱出しようともかくけど、抜け出せるようなものじゃない。

ルシル君はそれでも警戒は解かないでバエルへと近寄る。

「今すぐにヴィヴィオを解放しろ、バエル」

「くつ……ハハ、知っているか、欠陥品、そして高町なのは。

お前たちの守ろうとしているこの体の持ち主、ヴィヴィオ……だつたか？」

『……やだ……や……や……』

「「ヴィヴィオ!」」

「この際だ。聞いてもらおうじゃないか」

『いやあ……やだ……』

バエルが何かを言おうとするたび、ヴィヴィオの泣いている声が聞こえる。

それに合わせてヴィヴィオの目から大粒の涙が溢れてくる。

「バエル！ ヴィヴィオに何をしている!？」

ルシル君がヴィヴィオの両肩を掴んで激昂している。

「この体の持ち主に教えてあげているんだ。自分という存在の正体

ヴィヴィオ

けていく。

「そうだろう、ヴィヴィオ？」

『っ……悲しい……のも、痛いのも……全部作りものの偽物……。』

わたしは……この世界にいちゃ……ダメな子……なんだ……！』

「っ！！」

ヴィヴィオの涙声の念話。でも今までのものと全然違う。

言葉に籠められた感情が……救いを求めるものから自分の否定になっていた。

「違う！！」

ルシル君と重なる。お互いを見合して、バエルに再び視線を移す。

『違う！……もう……もういいの。なのはさん、ルシルさん。』

もう全部わかったの。二人は、フェイトさんも……本当の親じやないって。

わたしは兵器……なんだ。ゆりかごを動かすための鍵……。』

「そんなことはない！ ヴィヴィオ、そうじゃない！」

「そうだよヴィヴィオ！ そんなの違う！！」

『そうなんだよ！ わたしは……この世界にいない方がいいんだ。』

・・・！
わたしがいたら、なのはさんやルシルさん、フェイトさんに・・・
みんな・・・、今すごく迷惑かけてる！
わたしがいるからこの船が動いてる！ だから・・・わたしなんて・・・
いなくなればいいんだ！！』

ダメ。これ以上言わせたらヴィヴィオは本当にいなくなっちゃう。
自分を否定するだけの言葉。それがどれほど自分を壊していくか・・・。
それを止めようとして私が口を開こうとしたとき、パンッって音が響く。

『「っ!?!」』

「ルシル君・・・?」

それはルシル君がヴィヴィオの頬に平手打ちした音だった。
ルシル君は真っ直ぐヴィヴィオの涙の溢れる目を見ている。
そしてルシル君のその目に宿るのは怒りの色。
その突然の行動に私はおるか、バエルすらも目を点にしている。

「いらない？ いなくなればいい？ 怒るぞ、それ以上馬鹿を言え
ば。」

私は、なのはもそう思わない。それだけは絶対にだ。
それは今までヴィヴィオと過ごしてきたみんなもきつと同じだ・・・
「」

ヴィヴィオの頬を叩いた右手を強く握って、辛そうにルシル君がそ
う言った。

「そうだよ、ヴィヴィオ。たとえ生まれ方が違ってても、今のヴィヴィオは、そうやって泣いてるヴィヴィオは偽物でも作りものでもない。
甘えんぼですぐ泣くのも、転んで一人じゃ起きられないのも、ピーマン嫌いなのも・・・」

偽物だなんてことはないんだ。生まれ方なんて関係ない。
ヴィヴィオがヴィヴィオであることに変わりないんだから。

「私が寂しいときに良い子って撫でてくれたのも。私の大事なヴィヴィオだよ・・・！」

「やめる・・・やめ・・・っ!？」

「邪魔するなよ」

ルシル君がヴィヴィオの口を押さえて、バエルが喋れないようにした。

「私はヴィヴィオの本当のママじゃないけど、これから本当のママになっていけるように努力する。」

だから、いちゃいけない子なんて言わないで・・・!!」

ヴィヴィオはここにいる。それだけは確か。だからそれを否定することは許さない。

たとえそれがヴィヴィオ本人だったとしても。

「だからヴィヴィオ。ホントの気持ち、ママとパパに教えて・・・」

ルシル君と頷き合って、しっかりと答えを聞くためにヴィヴィオを

見る。

『わたしは・・・わたしは、なのはママとルシルパパが大好き・・・！
これからもずっと・・・ママとパパと・・・ずっとずっと一緒にいたい！！
・・・ママ、パパ・・・助けて・・・！』

それが聞きたかった。自分の真実を知って、それでも私たちと一緒にいたい、って。

だから助けるよ。私が、ルシル君が、とても大切なヴィヴィオを。

「助けるよ・・・」

「いつだって・・・」

「どんなときでも！！」

聖王のゆりかごの最後部、駆動炉のある空間へ続く通路の途中、片膝をつき、息を切らしているヴィータがいた。

その体は満身創痍といえるほどのもので、出血量が多い。

「大丈夫か、アイゼン・・・？」

Kein Problem. (問題ありません)

自分と同じように損傷の激しい“グラフ・アイゼン”。
ヴィータの心配の言葉にも問題ない、と答える。

「なのはもう・・・玉座の間に着いてるころだよな・・・」

Ja

「はやても・・・外で戦いながら、船が止まるのを待ってる・・・」
「！」

Richting(正しく)

ゆっくりと立ち上がり、通路の先から漏れている赤い光へと歩き出す。

そして通路を抜け、広い空間へと出た。

「・・・っ！」

ヴィータの視線の先、そこにあるのはあまりにも巨大な正八面体の結晶体。

それこそがこの“聖王のゆりかご”を動かすものだった。

「・・・駆動炉エンジンをぶっ壊して、この船を停めるんだ・・・!!」

“グラフアイゼン”を一度振るうようにして構える。

「リミットブレイク・・・やれるよな？」

Ja wohl · Zerst? rungsform

ヴィータの問いに答え、カートリッジを二発ロードし、自らの形態を変形させる。

“グラーファイゼン”の第四形態ツェアシュテールングスフォルム、ギガントフォルムの如き大きさを持つハンマーに、ドリルとブースターが付いたもの。

破壊という意味を持つ名の通り、純粋な破壊、特に大型対象破壊に向いている。

「っ……!!」

ヴィータが大きく跳躍し、駆動炉を見下ろせるところでベルカ魔法陣を足元に展開。そこに降り立ち、

「ツェアシュテールングス……!!」

“グラーファイゼン”を振り上げ、ハンマーヘッドをさらに巨大化させる。

そこでさらにカートリッジを一発ロードすると、ブースターが点火し、ドリルが勢いよく唸りを上げ回転し始めた。

そしてヴィータは破壊の槌を駆動炉へと一気に振り下ろす。

「ハンマアアア……!!!!」

ドリルヘッドが駆動炉へと叩きつけられる。

ここでさらに“グラーファイゼン”はカートリッジを二発ロードする。

そうすることでドリルの回転速度が跳ね上がり、威力を上げる。

そして起こる爆煙。大きく肩で息をするヴィータの視線の先、傷一つついていない駆動炉が健在していた。

ヴィータは驚愕する。自分の最高威力の一撃でも傷一つついていない駆動炉が信じられなかった。

Eine magische Reaktion wurde
ausfindig gemacht .

(危険な魔力反応を検知しました)

駆動炉の間に響く放送。

Wir gehen in die Verteidigung
situation .
Alles , was sich dem Kern ann?h
rt , wird unbeding t ?ggig angeg
riffen .

(防衛モードに入ります。これより駆動炉に接近するものは、無条件で攻撃されます)

そしてその放送はこう続いた。

それを証明するかのようにヴィータの周辺に正四角形の結晶体がいくつも現れる。

その正四角形の結晶体が侵入者であるヴィータを迎撃するための防衛システムだ。

「・・・上等だよ・・・」

ヴィータが薄く笑みを浮かべ、その直後に防衛システムから攻撃が掃射された。

それを跳躍して回避したヴィータは、

「はあああああ!!!」

気合いの咆哮を上げ、防衛システムを破壊し、駆動炉へと一直線に振り下ろす。

しかし結果は先程と同様。傷一つつけられなかった。

そこからは防衛システムの攻撃を回避しては破壊し、駆動炉へと攻撃となっていた。

だが、それでも一向に傷をつけられないヴィータと“グラーファイゼン”。

そして何度目かの駆動炉への攻撃。防衛システムはすでに全基破壊されていた。

ドリル部分の先端が砕け、そして起こった爆発の衝撃でヴィータは弾き飛ばされた。

通路へと叩きつけられて何回か転がる。そして手からは“グラーファイゼン”が離れる。

「・・・なんでだよ・・・」

ヴィータの弱気な声。身体ダメージに馬鹿にならない魔力消費。

自分の持つ最高の威力を持つ攻撃を何度も放つても一向に壊れない駆動炉。

それがヴィータの心を折ろうとする。

「なんでだ・・・何で通らねえ・・・!」

傍に転がっている全体にヒビの入っている“グラーファイゼン”を手に取り、引き摺りつつも駆動炉へと歩を進める。

「^{コイツ}駆動炉をぶつ壊さなきゃ・・・みんなが困るんだ・・・!」

ヴィータは諦めない。折れそうな心を奮い立たせる。

「はやてのことも・・・なのはのことも守れねえんだ!!」

限界に近い自分の体に鞭打ち、同様に限界に近い“グラーフアイゼン”を構える。

「だから・・・、アイゼン!!」

J a w o h l ！！

力強く答える“グラーフアイゼン”が、残りのカートリッジを全弾ロードし尽くす。

これが最後の一撃ということが分かっているかのように。

「おおおおおおああああああ!!」

跳躍した場所にベルカ魔法陣を展開。そこに立ち大きく“グラーフアイゼン”を振り上げるヴィータ。

この一撃に全ての魔力をかけるためか、魔法陣の発光が強くなる。

「ぶち貫けええええ!!!!」

今までの中でも最も威力の高い一撃が、駆動炉へと打ち下ろされた。激しい火花。完全に砕け散るドリル。それでも勢いは止まらない。そして爆発が起き、ヴィータが距離をとったそのとき、

「・・・あ・・・」

“グラーフアイゼン”が完全に砕け散る。

そしてヴィータは力尽きたかのように真っ逆さまに落ちる。

「ダメだ・・・守れなかった・・・。
はやて・・・みんな・・・ごめん・・・」

果たせなかった守るという約束。それが悔しさと悲しさとなって涙が流れる。

通路へと次の瞬間にも叩きつけられようというところで、ここに黒い羽根が舞う。

駆動炉の間に光り輝く真白の球体。

ヴィータは目を開ける。自分を抱いていてくれる優しい感触。

目に映るのは、彼女の命に代えてでも守りたい大切な存在・・・。

「謝ることなんて・・・何もあらへん」

八神はやて。そしてリインフォース？。

彼女は外のガジェット掃討戦の指揮を任せ、リインフォース？と合流をした後にゆりかごへと進入していた。

「はやて・・・リイン・・・」

『はいです』

「鉄槌の騎士ヴィータとグラーフアイゼンがこんなになるまで頑張つて・・・」

はやては駆動炉へと視線を移す。

傷一つとしてついていないと思われていた駆動炉。

しかしそれは間違い。ヴィータの決死の攻撃は確かに届いていた。

駆動炉に突き刺さる“グラーファイゼン”のドリル部分の最先端部。そこから全体へと亀裂が生じていく。

「それでも壊せへんもんなんて、この世のどこにもあるわけないやんか……！」

はやて、ヴィータ、リインフォース？の視線の先、駆動炉がついに破壊された。

鉄槌の騎士に破壊出来ぬもの無し、それが今証明された。

そして三人は別行動となる。はやてとリインフォース？は玉座の間へ。

ダメージの大きいヴィータは別働隊へと預けられる。

十 十 十 十 十 十 十

ヴィヴィオの本心は聞いた。

これからもずっと一緒にいたい。助けてほしいって。

助けるよ、どんな手を使ってでも。ただ、ずっと一緒というのだけは……。

いや、今はそんなことよりヴィヴィオを解放することが大事だ。

「……実に不愉快だ。人間のくだらない心云々……」

私が手を離れたことでバエルが喋り出す。

「……虫唾が走る！ 反吐が出る！」

「くっ……!?!」

『っ……ううああ……!?!』

馬鹿な!? 力、というものを例外なく封じ込める束縛のルーンである“ニード”と、制止・遅延・犠牲の必要性・望まれぬ活動力の封印、“イス”が刻まれたこの減衰の球体に縛り付けているのにこの力……!!

「はあああああ!!!!」

「っ! なのは……!!!!」

バエルの神秘の奔流からなのはを抱きしめるようにして庇う。直後、私の背中に叩きつけられる強大な神秘の衝撃波。

「ルシル君!!?!」

一瞬気を失いかけたが、なのはの私を呼ぶ声に何とか踏み止まる。揺れる視線の先に、私たちに向かって飛んでくるバエルを視認する。どうやら今の衝撃波でかなりの距離を飛ばされたようだ。

「下がれ、なのは……」

なのはを庇うようにして後ろに下がらせ、バエルと真っ向から向き合う。

蒼翼の無事を確認。助かった。バエルとの高機動戦には必要不可欠だ。

「くだらない……!!」

セイクリッドクラスター

バエルの周辺から七つの虹色の光球が展開され、射出される。それにしても大した速さのないものだが……。

「あれは私の……!?!」

後ろでなのはが驚いている。

そう言えば魔法データの収集とか言っていたな。

あの言葉の意味はこういうことだったらしい。

そして、

「レイジングハート!」

O v a l P r o t e c t i o n

私たちを覆うように球体のバリアが張られた。

確かこれは防御に専念するようなときに使うものだったはず……。

そしてあの魔法の効果が表れた。七つの魔力弾が突如爆散し、無数の小型魔力弾となって全方位から私たちに向かって襲いかかってきた。

なるほど。なのはがオーヴァルプロテクションを選択した意味が解る。

「くっ……!」

なのはが苦悶の表情を浮かべた。

魔力弾を防ぎきることが難しいみたいだ。ならば、

「ただ祈りて、其は高みの盾とならん……！」

クリュスタッロス・アントス
天花の麗盾

複製術式を英知の書庫から引つ張り出し発動する。

アルヴァイト
白銀色の雪結晶の盾を全方位に展開。なのはの負担を軽減させるためだ。

だが、

『逃げて……ママ！ パパ！』

ヴィヴィオの焦るような念話が届く。

「遅い……！」

バエルが両手を私たちに向けて翳す。

その両手に集まるのは見覚えのある黄緑色の閃光。

「馬鹿な……！？」

バエルから放たれたのはサタンのレーザー群だった。

しかも今までのような直線的なものではなく、湾曲しての全方位からの集中砲火だった。

「コード知らしめよ、ゼルエル汝の力……！」

発動中の術式を強化させるゼルエルを発動させる。

強化対象は私が現在発動している麗盾だ。

「うそ……！？」

まずは麗盾の隙間から入ったレーザーがオーヴァルプロテクションを一瞬で砕く。
開いた穴を防ぐように麗盾を追加する。
迫るレーザー群を次々と弾いていき、視認できるレーザーの数は二桁台。

「やるな、さすがは欠陥品。だが……ん？　許されざる色欲が敗れた……？」

やはり与えたのが“力”の欠片では三番には勝てなかったか……」

バエルが聞き捨てならない言葉を口にした。

与えた？　“力”の欠片？　どういう意味だ、それは？

それ以上に何故バエルがサタンの技を使えるのかが解らない。

「大丈夫か、なのは？」

疑問はあるが、とりあえずは後回しだ。

そういうものと無理にでも納得するしかないだろう。

「う、うん……なんとか……」

「それに……どうやら許されざる暴食ヘルゼブがこの世界に来たらしい。お前たちと遊んでいる場合じゃなくなった。もう終わりにさせてもらおう」

今まで姿を現さなかったベルゼブブが来たことで、バエルが何故か焦っている。

詳しいことはよく分からないが、大罪は複雑むづかな状況にあるらしい。だが、もう終わりにしようというのには賛成しよう。

「こちらとしても早々に終わらせて帰りたいからな……。
ヴィヴィオ、もう少しで帰れるから、もうひと頑張りだ」

ベルゼブブはシャルに任せておけば問題だろう。

なら私はヴィヴィオからバエルを引き摺りだし、それはもう散々苦しませてから消す。

『うん……。！』

偉いぞ、ヴィヴィオ。意識はしっかりしているようだ。

それにしても驚きだ。人間の意識がここまで保つとは……。
こつこつを嬉しい誤算と言っのだろう。

「なのはも。もう少しだけ付き合ってくれ」

「大丈夫だよ、ルシル君。ヴィヴィオを助けるまでは落ちないよ」

私は無手で構え、なのはは“レイジングハート”を構える。

対するバエルは構えようとせず、ただ不動だ。しかも何やら表情が硬い。

「……。っ、おおおおお！！」

突然の咆哮。何だ、今のバエルの様子がおかしい。

が、そのまま私達へと突撃してくるバエルを迎撃するために動く。

「いくよ、ルシル君」

「ああ……。！」

なのはの魔力が跳ね上がる。ブラスターモードは自己ブーストの一種とのこと。

ここに来るまでに聞いていたが、実際に目にすると随分無茶をしている方法だ。

それにしてもこれはシャルとフェイトに怒られるだろうか？
なのはが無茶させないと約束していてこれでは……。

「ブラスタービット！」

“レイジングハート”のヘッド部分みたいな遠隔操作機が二基。
それがバエルに向けて飛んでいく。

「これ以上の無茶はしないこと……！」

「大丈夫……！」

そう告げてバエルを迎え撃つ。

それにしてもなのはの“大丈夫”は信じられないんだよね……
悪いが。

そんなことを考えていると、バエルが目前という距離となる。

「これ以上私の邪魔をするなら……！」

ん？ どこを見て言っているんだ？

確かに視線は私に向けられているが、話している相手はおそらく私じゃない。

我が手に携えしは確かなる幻想

兎も角、まずはバエルの動きを封じる。

私とバエルの高機動戦になのはがついて来られない。

サギタ・マキカ
アエール・カフトウーラエ
魔法の射手・戒めの風矢

エルキトウ
天の鎖

レストリクトロック

ぎこちない動きで拳打を撃ってきたバエルの右腕を弾き、ゼロ距離で空気による束縛を行う術式と神性あるものに効果を発揮する天の鎖を発動させる。

そしてブラスタービット二基からもバインドがかけられる。合計32重の捕縛結界。捕えた。完璧に極まった。が、

「・・・フツ」

笑みを浮かべるバエル。何が可笑的い・・・？

『ルシルパパ！　なのはママが・・・！』

ヴィヴィオの念話でようやく気づいた。

バエルの笑みの正体を。今まで私しか狙っていなかったから油断した。

「くそっ・・・！！」

すぐさま後ろにいるなのはへと向かう。

視界に入るのは、なのはの頭上に輝く無数の黄緑色の光球と“ルートウス”が七。

サタンのレーザーと“ルートウス”。なのはには神秘アレラを防ぐことは出来ない。

「なのは!!」

私の声に、なのはもようやく自分が置かれた立場が解ったようだ。

頭上を見上げ、すぐさまそこから離脱しようとするがおそらく間に合わない。

今から防性の複製術式じゃ遅すぎる……ならば、

「女神ゴト・リンの聖楯!!」

制限の解かれていない上級術式を使用する。

レーザー群ならもっとランクの低い術式でもいい。

だが“ルートウス”は別だ。アレを防ぐなら相応の神秘がないといけない。

魔力炉システムが軋みを上げる。だから何だと言うんだ。

『ルシルパバ!!』

胸の痛みを無視してバエルの方へと視線を戻す。

そこには捕縛結界を粉碎し、“ルートウス”を右手にしたバエルがいた。

虹色の閃光を噴き出す翼。そして一気に加速してすぐ目の前に現れ、

“ルートウス”を振り上げる。

「捕縛結界アレをこつても簡単に……!!?」

もう少しはイケると思っていたが、これには驚きを隠せない。すぐさま“グングニル”を取り出し迎撃に移る。

“グングニル”を“ルートウス”に向けて斬り上げる。だが“グングニル”は“ルートウス”を、そしてバエルをすり抜ける。

私は勢い余って体勢を崩してしまった。

「っ、幻影・・・!? しまっ・・・!」

気づいた時には遅く、バエルが私の懐深くに侵入し、

プラズマスマツシャー

フェイトの砲撃魔法。虹色の雷光が至近距離で爆ぜる。

「つぐううう・・・!」

全ての魔力を防御に回す。聖楯発動の所為で上手く魔力が精製できないが、ないよりはマシだ。

本来、ただの魔法ならこつも苦労しないが、神秘が加算されている以上はこれくらいはしないと落とされる。

『ルシルパパ!』

「しづといな・・・!」

「ルシル君!」

未だに続くレーザー斉射のなか、なのはが心配してくれる。

ヴィヴィオも自分の方が辛いというのに……。

「だから……負けられない……!!」

ようやく砲撃が途切れた。八八、耐えきった。

だが、それでバエルの番がターン終わったわけじゃなかった。

バエルに頭を鷲掴みされる。それを外そうとするが思っている以上に力が強い。

「潰れてしまえ!!」

私の頭を掴んだまま高速飛行に入るバエル。

これから何をするのか嫌でも解る。この“ヒミンベヨルグ聖天の極壁”での戦い方だ。

私がよく使う点在する球体にも叩きつけるつもりだろう。

「高町なのはと共に逝くがいい。そのあとでゆっくりと取り込んでやる」

「っ！ 逃げろ、なのは!!」

バエルは私を一度なのはに叩きつけてから、なのは共々球体に突っ込むつもりだ。

そんなことをすれば私は兎も角としてなのはが耐えられない。

「くそっ、離せ！」

「無駄だ。さあ、もう少しで……なに!？」

急にバエルが停止した。浮かべる表情は苦悶、驚愕、憤怒。

ゆっくりと私の頭から右手が離れていく。

「ルシル君……」

なのはが私の傍へと来た。

つまりはバエルの、なのはへの攻撃は終わっているということだ。なら聖楯はもう必要ないな。これ以上持続展開させておくのはまずい。

「どっなって……?」

なのはの疑問に答えられない。私にも分からないからだ。

『これ以上……なのはママとルシルパパを傷つけるなんて許さない!』

「「ヴィヴィオ!!」」

「おのれ……たかが人間が、しかもさらに下等な子供に……!!」

バエルが自分の頭を抱え、苦しみ始める。

まさか、バエルが動きを停めたのは、ヴィヴィオの意思によるもの……?

『なのはママ。ルシルパパ。今の内に……わたしがバエルを停めてる間に……!』

「ヴィヴィオ……。ルシル君……」

「ああ。ヴィヴィオ、なのはママからキツイ一撃だ。耐えられるか？」

『うん……耐えるよ……!』

強い意志だ。これならヴィヴィオは大丈夫だろう。
なら私は、私に出来ることをしよう。

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

使用するのは大戦時においては最強の捕獲結界と謳われた結界術式。そして以前ジユエルシードの暴走を抑え込んだものだ。

あのときは使用そのものを禁じられていて、その上魔力量がAAということもあり死にかけたが、今は使用の制限も受けていないし、魔力量もSSSだ。

だが、それでも圧倒的に足りていないが、前に比べればペナルティは弱くなる。

「バエル。これが人間の強さだ。お前は“意志”を計り損なっただ」

「馬鹿……な……有り得ない……」わたしを返して「……この……よつな……」

バエルの言葉の中に、少し大人びたヴィヴィオの声が混ざる。
バエルの意識が、ヴィヴィオの意識に負け始めている証拠だ。

「……結界王の名に基づき具現せよ。一方通行の聖域!」
サンダルフォン

バエルを閉じ込める桃色の正八面体の捕獲結界。

その効果は以前と同じ。結界内に捕えた対象の魔力行使を全てキャンセル。

そして外からはいくらでも中に魔力干渉が行えるという、当時反則術式の一角を担っていたものだ。

これで一切の魔力行使は出来ない。あとはバエルの持つ神秘による防衛力だが、

それに対しての策もある。

「ヴィヴィオ……いくよ」

「……うん！」

バエルが、いや、ヴィヴィオが頷く。

ヴィヴィオの身体を支配することすらもう出来ないようだ。

「やめ……わた……なるんだ……亡失……」

亡失になる？ まさか、バエルがやろうとしていたことは……！
もしそうなら、ここで確実に斃さなければならぬ。

アポリュオン絶対殲滅対象の空席を埋めるような真似だけは絶対にさせない。

No.？：亡失……アーミツティムス……嫌なことを思い出してしまった。くそっ！

「レイジングハート……！」

Excillion Buster

“レイジングハート”、ブラスタースピット二基の先端に桜色の閃光が生まれる。

カートリッジを何発かロードし、さらにその威力を高める。

「エクセリオン」

ここでバエルの神秘への対抗策を使う。

「神器王の名において……！」

「バスタアアア……！！！」

エクセリオンバスターが発射されたと同時に、射線上にアースガルド紋を展開する。

これが対抗策。エクセリオンバスターに、私の持つ神秘を乗せる。これは私の真技グロリアス・エヴァンジェル神断福音に使われる術式の一つだ。

神秘と威力を加算させる魔法陣を展開する術式。今回は神秘限定としました。

「っうっうっうああああああ……！！！」

エクセリオンバスターの直撃。防御という術が出来ないためにクリーンヒット。

そして一方通行サンダルフォンの聖域内部で爆発が起き、すぐさま術式を解除する。

「ヴィヴィオ……！」

未だ晴れない煙の中から、煙を引きながら何かが真下にある白い球体へと落下していく。

あれはヴィヴィオで間違いない。すぐになのはが落下するヴィヴィオへと追い縋る。

そして私は落下するヴィヴィオとは違う方に飛ぶ。何故なら煙の中で輝くレリックを目にしたからだ。

バエルが健在なら、相手をしないとイケない。

「グイグイオは任せた」

もうなのには聞こえないだろうが言っておく。

「何故だ・・・何故・・・こんな・・・!!」

バエルの姿を視認。所々が砕け落ちてはいるものの、確実に存在していた。

ああ、よかった。この手でお前を斃せることが出来て・・・。

「バエルーーーー!!」

「っ！ 欠陥品・・・!!」

コード
殲滅せよ、カマエル
汝の軍勢

もう手加減する必要はない。後先考えずにカマエルの槍群を放つ。もう頭の中は怒りで沸騰している。こいつだけは散々痛めつけてから消す。

「おおおおおお!!!!」

カマエルに対抗するように“ルートウス”が19本射出される。同時にページによる防御や、サタンのレーザー群も来るが関係ない。

コード
崇め讃えよ、ミカエル
汝の其の御名を

爆散する無数の蒼い閃光。そこに中級術式最強の連続砲撃ミカエル

内部からの破裂。胴体部のいたるところから破裂が連続して起きる。そして最後は驚掴みにしている頭部が破裂する。

「……さらばだ」

レリックは完全に砕け、バエルも消滅した。

十 十 十 十 十 十 十

ヴィヴィオが煙を引きながら白い球体に落ちていく。

「レイジングハート！」

F l o a t e r

ヴィヴィオに浮遊効果の魔法を使う。

これならあの球体に叩きつけられる心配はなくなった。

「ヴィヴィオ！」

頭上で起こっているルシル君とバエルのとんでもない戦いを余所に、白い球体の上で倒れているヴィヴィオに近づこうとしたそのとき、

「来ないで……！」

とヴィヴィオが言った。

どうして？って思う前に、必死に立ち上がるようにするヴィヴィオを見て思い出す。

それは以前ヴィヴィオが転んだときのこと。

「一人で……立てるよ……。強くなるって……。約束したから……」

あのときは一人で立てなくて、フェイトちゃんとシャルちゃんに起こしてもらった。

そして今、ヴィヴィオは一人で立とうとしている。

「ヴィヴィ……オ……！」

ゆっくりと立ち上がったヴィヴィオの許に急いで向かって、強く抱きしめる。

「なのはママ……」

「ん？ なに、ヴィヴィオ……？」

「大好き……」

「っ！ うん……うん……。ママも、ヴィヴィオのことが大好き……！」

無事で良かった。帰ってきてくれて良かった。

こんなにも辛い目に遭ってでも強くなってくれて良かった。

「ヴィヴィオ……」

「ルシルパパ……。ありがとう……」

「・・・ああ。どういたしまして・・・ヴィヴィオ」

見ればルシル君の目にも涙が浮かんでいる。
ルシル君が泣いてる姿見るの初めてかもしれないなあ。

「さあ、帰ろう。みんなの待つ場所へ」

十 十 十 十 十 十 十

ヴィータを別働隊に預けて、ここ玉座の間に来たのに誰もおらへん。
よく見れば壁に大きな穴が開いとるから、この先におけるんかと思っ
て行ってみれば、

そこにいたのは戦闘機人が一人。随分ボロボロやけど命に別状はな
さそつや。

そして戦闘機人を背負って玉座の間に戻ってみれば、

「なのはちゃん！ ルシル君！ ヴィヴィオ！」

探していた三人がおった。

「三人ともどこにおったん!? 探してもおらんかったで心配し

」

Heiliger Kaiser... keine Reakt
ion. Funktionsverlust des Syst
ems.
Alle magische Verbindungen wird
abgehehrt.

F?r die Regeneration des Kronschiffs. Alle Mann Ort, Minifunktion!

(聖王陛下、反応ロスト。システムダウン。
艦内復旧のため、全ての魔力リンクをキャンセルします。
艦内の乗員は、休眠モードに入ってください)

ゆりかごの放送が流れた直後、その内容通りに魔力結合がキャンセルされた。

「っ……!?!」

リンとのユニゾンも強制的に解除された。

「はやて、詳しい話はあとだ。まずはここから」

私が背負っていた戦闘機人を肩に担いで、ルシル君が出口に向かうとしたとき、

Alle Mann, auf seine Position!
! Ich wiederhole. Alle Mann, auf seine Position!
Wir beginnen die Notregeneration
on des Beschiedigungs Schiff.
Entfernen Sie sich von der Beschiedigungsmauer sowie vom Notverschlagn!

(乗員は、所定の位置に移動してください。繰り返します。)

乗員は所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。

破損内壁・および非常隔壁から離れてください)

「あかん！ 急いで出口へ向かうんや！」

でも間に合わなかった。出口も閉じられてしまった。

「・・・はやて。この戦闘機人を頼む」

「え？ ちよっ・・・ルシル君・・・？」

もう一度私に戦闘機人を預けて、ゆっくりと閉じられた扉に向かう。そして解った。この場でただ一人魔力を扱えるんがルシル君なんやて。

「ルシル君、無茶しないでね？ この中で一番ダメージ負ってるのルシル君なんだから」

「出口の一つや二つを破壊するなんて、そんな大した・・・！？」

「くくくっ！」「くくく」

なんやこれ・・・？ あかん、体が震える。

これは・・・恐怖・・・？

「ああ、許ルシファーされざる傲慢は斃れたのですか・・・。
なら、僕がここに来たことは無駄足だったというわけですね」

背後から聞こえた男の人の声。

私の震えの原因である威圧感、その人から発せられるものや。恐る恐る振り返ってみる。正直本能がこう告げてくる。見るな、って。

振り返った先、玉座に座っているのは神父さんの着るようなカソックを身に纏った男の人。

そして、左手に持っているのは刀身が赤い血に染まった・・・、

「キルシュブリューテ・・・だと？ 何故お前がそれを持っている！？」

ルシル君が私たちをあの人が庇うように前に躍り出る。

そしてルシル君の言うとおり、あの人が持っているのはシャルちゃんの手刀だった。

傲慢の先にあつたモノ (Lucifer) (後書き)

散々暗躍したルシファーもようやく退場となりました。さようなら。

実はこの対ルシファー（バエル）戦、もう少し粘りたかつたんですけどね……。

やめました。もういいよ、ヴィヴィオを傷つけるなんて……と思いますして。

それだと言つのにここまで長く？なつてすみませんでした。

あと、なのはのブラスター3とスターライトブレイカーex-fbの出番なし。

これは前回のフェイトと同様に理由がありますので、ご了承のほどを。

そして次回が3rd最終話にして最終決戦となります。

シャルは？ ルシルは？ ベルゼブブは？ なのはたちは？ そして世界は？

複製術式

魔法先生ネギま！：魔法の射手・戒めの風矢
サギタ・マギカ
アエール・カプトウラエ

Fate/Stay night：天の鎖
エルキドゥ

ANSUR：天花の麗盾
クリュスタツロス・アントス

使用言語は古代ギリシャ語。クリュスタツロス：氷。アントス：花。

ANSUR：一方通行の聖域
サンダルフォン

善悪下世界の望む行き先は・・・ Peccatum (前書き)

ベルゼブブ戦イメージBGM

BAYONETTA "Sapientia In The C

hoice Between Good And Evil"

善悪下世界の望む行き先は・・・ Peccatum

変態ことベルゼブブと対峙する。

放たれている威圧感から、あいつの実力の高さがよく分かる。

だけど、こつちは生前から幾度も死線を越えてきた。

だからこの程度の威圧感・・・

「なんともない！」

閃駆

一撃で決めるために閃駆で仕掛ける。

狙うのは、どのような存在でも変わる事のない急所である首。

そこを刎ねてしまえば、それで終わりだ。

「急ぎ過ぎると怪我をしますよ？」

ベルゼブブがそんなことを言う。

私についてこれないクセに何を言っているのか・・・？

「御忠告感謝・・・！！！」

ベルゼブブの背後を取る。

“キルシュブリューテ”を、ベルゼブブの首めがけて横一閃に振るうとしたとき、

「いきますよ・・・！」

ベルゼブブのその言葉の次に、私の前髪が小さくフワツと靡く。風・

・・・?

そう思った瞬間、私の足元に幾何学模様の、“口”の開いたようなものがあるのに気づいた。

「ああ、一撃目はサービスです」

逃げる。そう直感が告げる。

「くっ・・・！」

閃駆を使って、ベルゼブブから、そして“口”から距離をとる。

直後、目の前を下から上へと何かが通り過ぎて、“口”の範囲内のギリギリにあつた私の後ろ髪の毛先5cm辺りが消えた。

「今は・・・!？」

靡く後ろ髪を手にとり、雑に切られたようになっていた髪を見る。くそお、毎日時間をかけて手入れしている自慢の髪なのに・・・グ
スッ（涙）

「ああ、申し訳ありません。女性にとって髪は命でしたね・・・」

ベルゼブブが心底すまなさそうに謝ってるけど許さない。

全力で睨みつけながら、後ろ髪を束ねてフープバンドで結ぶ。こういうときにもバンドって役に立つんだあって思った。

「分かってるじゃない。だから覚えておくこと・・・来世でもね!」

風牙真空烈風刃

風嵐系最強の術式。真空刃を複数巻き込んだ烈風刃をベルゼブブに放つ。
当然ベルゼブブは回避か防御に徹するかと思っていた。
でも、

「うそ!？」

信じられないことに真正面から私に向けて突進してきた。
私の前には放ったばかりの風牙があるのに……!!

「見えるんですよ、僕には……。風の流れ方が……!」

小さく囁いたベルゼブブの声が耳に届く。

風読み。それはまるで風迅王や風の騎士公のようなスキルだった。

「それにですね……」

「くっ……はあっ!!」

無傷で風牙を突破してきたベルゼブブに“キルシュブリューテ”を一閃。
けど、

「っ! ちよっ……!!」

ベルゼブブはそれを読んでいたみたいで、振るった右腕を余裕で取って、私を背負い投げする。

私は背中から叩きつけられる前に無理やり着地。

そのまま左手でベルゼブブの右腕を掴み、

「ごんのおおおお!!」

強引に上半身を起こして、ベルゼブブを前方に引っ張り上げてそのまま地面に叩きつける。

お互いの手が離れたのは同時。

だからすぐさま“キルシュブリューテ”で、地面に倒れているベルゼブブに向けて刺突を放つ。

「つとと・・・!!」

地面を転がって刺突を避けるけど、私の攻撃は終わらない。

土龍閃・私バージョン

私のお気に入りとなった飛天御剣流の一つをここでも使う。

地面を斬り上げて石飛礫を放つものらしいけど、私はその石飛礫にさらに魔力を纏わせる。

そのため、オリジナルよりはるかに威力が高いし、神秘もあるから十分ベルゼブブにもダメージを与えることができる・・・はず。

「ぐうっ・・・!!」

転がった勢いで立ち上がったベルゼブブに石飛礫が殺到していく。

それをベルゼブブは顔の前で両腕を構えて防御。

今のそんなベルゼブブは隙がありすぎて、逆にこちらが困惑するほどだ。

でも、どうであれ今が攻撃のチャンスであることには変わらない。

閃駆

距離を詰める。“キルシュブリューテ”は取り出した鞘に納める。
今から使うのは飛天御剣流の奥義、その名もあまかけぬりゅうのひまめ天翔龍閃！！！！
創世結界作成の合間（飽きてきた頃）に“英知アルヴェイトの書庫”で何度も練習した剣技だ。
んで、資料に書かれていた通りに何度もやったんだけど、全然上手く出来なかった。
まっ、結局は大体6回目くらいで様になった。そして今、試してみたい・・・すごく！

居合い抜き（オリジナルは抜刀術って言うんだけど）の構えで最接近。
ベルゼブブは未だに顔面を守るように腕を構えている。これならイケる。

恐れるものは何も無い

左足で踏みこむ。この左足での踏み込みこそがこの剣技の重要すぎる要だからだ。
最初これを知ったときはそんなバカな、って思ったり・・・。

飛天御剣流奥義

“キルシュブリューテ”を鞘から引き抜く。

長刀の所為で時間が少しかかるけど、大したものじゃない。

あまかけぬりゅうのひまめ
天翔龍閃

鞘から完全に刀身が抜けて、桜色の刃がベルゼブブ一直線に向かう。上手くいった。完全にもう出来る。

でも、

「っ！」

「ああ、先程の続きですが・・・」

私の右手首を完璧に捉え、掴み取ったベルゼブブがそう口にする。やられた。発動から到達までの時間を完全に読まれていた。

「痛っ・・・！」

ゴキッ、って右手首から嫌な音がした。関節を外されたかも・・・。右手の握力が失くなって、“キルシュブリューテ”を取り落とす・・・って・・・！

「3rd・テストメント。今のあなたでは、僕には勝てません・・・！」

私の右手から離れた“キルシュブリューテ”を宙で左手に取ったベルゼブブが、

「やめ・・・っ！」

生前からの愛刀“キルシュブリューテ”で、私の胸の下を横一線に斬り裂いた。

「あ・・・ごぶっ・・・げほっ・・・！」

吐血。口から流れ出る血を押さえないで、斬り裂かれた傷口を両手で押さえる。

咄嗟に身を引いたから致命傷というような傷じゃない。ただ、

「ぐっ……こん……な……！」

傷口を押さえながら両膝をついて蹲る。やってくれた、この偽神父。よりもよって私の“キルシユブリューテ”で、この私を……！許さない……こいつだけは……絶対に……！！

「あなたの敗因はですね、許ホクされざる暴食を相手に近接戦を選択したことです。

先代も、四代前も、八代前も、九代前も、さらに前も、あなたが斃したんですよ、

3rd・テストメント。それゆえに、あなたの戦闘パターンの構築くらいは済んでいます」

「っ……！」

何故それを知っている……？

「ん？ ああ、もしかして知らなかったんですか……？」

分裂体は代を重ねるとき、知識も記録も戦力も強化されていくんですよ」

「なっ……げほっげほっ……！」

そんなことが……！ まずい、そんな情報は玉座にはない！

代を重ねることで強化されるなんて……ペッカートウム……、

「最悪……」

「あゝ、なんかまずいよお……。でもこの程度……。！」
頭がフラつく。血を流し過ぎたかも……。でもこんなでリタイアなんてしない。
何故ならばベルゼブブの顔の形が変わるまで殴り倒して、“キルシュブリューテ”を取り戻さないといけないから。
だから、

「フェイト？ ちょっと助けてくれる？ っていつか、シャルルいます？」

『っ！！ シ、シャルル！？』

まずは治療が先だ。

十 十 十 十 十 十 十

「ちよっ、ダメよフライハイトちゃん！！」

「そうですよ、シャルさん！」

「傷口が開いてしまいます！！」

「っていつかヴァイス陸曹、何見てるんですか！
男の人は見ないでください！！ セクハラで訴えますよ！？」

「痛っ！ おいつ、俺も一応重傷なんだぜ！？」

シャルからの通信に応えて、シャルの許まで運んだ私とエリオとキヤロ。

お腹からたくさん血を流していたシャルを見たエリオとキヤロは顔が蒼くなった。

見せるんじゃないかったって少し反省と後悔。

そして今、ヴァイス陸曹のヘリの中で治療（応急）を終えたシャルが、ゆりかごへ向かおうとするのを必死に止めるのはシャルとスバルとキヤロ。

ティアナは、上半身が包帯だけの、半ば裸であるシャルを見ているヴァイス陸曹を訴えるとか言ってる。

「ここまで傷が塞がったら大丈夫。あとはゆっくりとゆりかごの中で治すから」

「無茶だよ、シャル。あんなバツサリ斬られているのに……！」

お腹の辺りまではだけさせていた水色のワンピースの袖に腕を通して、前の留め具を嵌めてから、横に置いてあった白のロングコートを手にとって、手を通さずに羽織る。

「あのクソ神父をボコボコにしないと気がすまないの。

それにスバルとティアナは行くんでしょ、ゆりかごに」

「それは……そうですね……」

ゆりかごにいるのはたちと連絡が取れないということは分かってる。

それはAMFが原因だということも。だからスバルとティアナが迎えに行く。

「ありがとうシャルム。それじゃ、フェイトたちも気をつけて」

「うん。シャルも。そしてスバルとティアナも気をつけて」

「「はい！」」

私とエリオとキャラは地上に残る。

一度は活動を停止したガジェットがまた動きだしたからだ。

すでにレヴィヤタンたちが、せめての罪滅ぼしということで掃討に向かっている。

ゆりかごに飛んで行ったへりを見送って、

「それじゃあエリオ、キャラ。疲れてくるかもしれないけど、もう少し頑張って」

「「はい！」」

私たちは地上に蔓延るガジェットの掃討へと出る。

十
十
十
十
十
十
十

神父のような人を見て怯えているヴィヴィオを強く抱きしめる。

震えているのが分かる。けど、それは私も同じ。震えが止まらない。

「あれが・・・ペッカートウムってやつなんか・・・？」

リインを強く抱きしめるはやてちゃんの震えた声。
あの人はさつきまで戦ってたバエルって女の人以上に危険だ。

そしてその人が持っているのはシャルちゃんの刀“キルシュブリューテ”だ。

しかも刀身に血が付いている。誰の？と考えて真っ先に浮かぶのは、
「シャルちゃん……の……？」

“キルシュブリューテ”の持ち主のシャルちゃんただ一人。
そんなこと考えたくない。でも、一度そう思ったら頭から離れない。
シャルちゃんが、あの人に“キルシュブリューテ”を奪われて斬られて……。

「それならここに用はありませんね。ですので、勝手ながら退かせていただきます」

その人が綺麗な一礼をしてそう口にした。
助かった。正直あの人とこうして相對しているだけで冷や汗が止まらない。

「待て」

それを止めるのはルシル君。ゆっくりとあの人に歩いていく。
手に持っているのは“グングニル”。戦う気だ。

「ルシ」

それを止めようとしたとき、ルシル君が一瞬だけ視線を向けてきた。

「もう一度訊く。そのキルシュブリューテはどうした？」

怖い。今のルシル君のことが怖い。

私たちに向けられたものじゃないけど、その殺気の濃さは十分すぎる。

「ああ、これですか？ お借りしたんですよ。ああ、持ち主は無事ですので安心を。」

僕は許されざる傲慢を斃しに來ただけなんで、無駄な殺害はしませ
ん」

「ルシファーだと？ さっきまで戦っていたのは女だったが・・・？」

ルシル君の歩みは止まらず、徐々にあの人に近づいていく。

「その辺りはこちらの不手際ということだ」

「そうか。で、お前もペツカートウムなんだな？」

「ええ。大罪がペツカートウム、許されざる暴食です」

あの人^{ベルゼブブ}がベルゼブブ。確かペツカートウムの中で最強ってシャルちやんに聞いた。

それを聞いたルシル君が歩みを停めて、背中に12枚の蒼い剣の翼を展開した。

「ならばここでお前を斃す」なのは、はやて。私が時間を稼ぐ。君たちは急いでこのゆりかごから脱出するんだ」

念話でルシル君がそう告げてきた。

そして腰のホルスターに納められた黄金の“星填銃”を抜いて、銃口を私たちに、正確には出口を閉ざしている扉に向けて撃とうとしている。

私たちは巻き添えを受けないように急いで扉から離れる。直後、銃口から蒼い閃光が放たれて、扉を吹き飛ばした。

「ルシル君……！」

「ルシルさん！」

「ルシルパパ……！」

それぞれにルシル君を呼ぶ。

振り向くルシル君は、私たちを心配させないためか笑顔だった。

「大丈夫だ。すぐに終わらせて、必ず追いつく。だから先に行っていてくれ」

視線をベルゼブブに戻して、私たちに振り向かない。

「分かった。待ってるからね、ルシル君。

行こう、はやてちゃん、リイン。ここに私たちが残ると邪魔になるから……！」

「……ごめんなルシル君！ 力になれんくつて！」

「ごめんなさいです！」

ヴィヴィオを抱き上げたまま壊れた扉の先を目指す。
はやてちゃんはラインを肩に乗せてから戦闘機人を背負って、私の先に行く。

出口を潜って走りだそうとしたとき、

「……っ……!!?!?」「」「」

私たちの間を何かが通り過ぎた。
足を止めて、ゆっくりと後ろを振り返る。

「ああ、申し訳ありませんお嬢様方。手加減が難しかったもので……」

さつきみたいに綺麗な一礼で謝ってくるベルゼブ。

その周囲にある五つの光球が、ベルゼブを中心として回っていた。

「……じゃあ……今の……!」

通路の先にいるのは四肢をついて起き上がるうとしていたルシル君だった。

ということは、やっぱりさつき私たちを通り過ぎて飛んでいったのは……、

「ルシル君!!」

ルシル君だったんだ。

十
十
十
十
十
十
十
十

やられた・・・？ いきなりの高速移動で不意を突かれ、通路まで吹き飛ばされた。

何とか立ち上がって玉座の間へと、ベルゼブブへと視線を戻す。そして心配そうな顔のなのはたちと目が合う。

「・・・問題ない。さあ、みんなは早く行くんだ」

口の中にある血を吐き捨てる。女の子の見せるようなものじゃないが、

今はそんなことを言うてはいられない。

「でも！」

はやてが声を荒げるが、

「この戦いは私たちの問題だ。みんなを巻き込むわけにはいかない。それに・・・君たちの魔法じゃ許アレされざる暴食に通用しない」

さっきのように魔法に神秘を乗せたような術式を展開してやればいいが、あれではリスクが大きすぎる。

攻撃の手段があっても、防御の手段がなのはたちにはない。

ベルゼブブの攻撃を常に防がないといけなくなる上、ちょっとしたミスでなのはたちを死なせるようなことになってしまう。

そうなれば自殺ものだ。かつてのように守れなくて、心が壊れ、その果てに・・・。

「ルシルパパ・・・」

なのはに抱き上げられているヴィヴィオが手を伸ばしてくる。

玉座の間に向かう足を止め、そつと優しく握る。

「小さいな……」

誰にも聞こえないように静かに呟く。

この子たちの未来を奪わせないためにも負けるわけにはいかない。

「行ってくれ……」

それだけ告げて、振り返らずに玉座の間へと再び歩みを進める。

すると背後から「頑張つて」とヴィヴィオの声援を受けた。

それに片手を上げることだけで応える。

それで最後だ。通路を走る足音が遠ざかっていく。

「あのお嬢様方と一緒に行かれれば……」

「絶対殲滅対象は全て滅殺。それが界律われらの守護神が存在意義。

理由はない。そうなるよう世界が定めている。ゆえにそれに従おう」

契約は果てていない。墮天使を殲滅し終えるまでは。

それまでは踊つてやるさ。無様だろうと何だろうと……。

「そうですね……決められた事項を果たすだけ……ですか。

ああ、なんと哀しい方々だテストメント界律の守護神。かなしい哀しい悲しい力
ナシイ」

ベルゼブブの周囲を回転している光球がさらに速く回る。

そしてその全てがベルゼブブの胸へと入っていき、

「あまりに哀れで涙を誘います。ああ、やはり主の言うことは正し

い
「

「くっ……!?!」

ベルゼブブの存在感が一気に跳ね上がった。

これは……!?!?

「暴食、色欲、強欲、憤怒、怠惰、傲慢の六つの“力”です。

嫉妬はいろいろとありまして無いです。……。それでも十分ですよっ?」

不完全だが“大罪”^{ベッカートゥム}となりつつある。だというのに界律は何もアクシオンを起こさない。

どういうことだ? ここまで派手に存在している“絶対殲滅対象”^{アボリュオン}がいるというのに……。

「どうでしょう4th・テストメント。先程3rd・テストメントにも言ったのですが、大罪の目的は界律あなたたちの守護神と戦うことではないのです」

「っ!……で? その割に随分な力を見せてくれるじゃないか。

それで戦いたくないと言われても信じられないし、こちらには戦う理由がある」

「……ああ、そうですね。3rd・テストメントと同じことを言うのですね。」

やはりボクたち霊長の審判者を悪としているからですか……?」

心底残念そうな顔で訊いてくるな。

それにしても“悪”だから、か……。

「絶対殲滅対象である以上は斃させてもらう。それこそが理由だ」
アポリユオン

善悪なんてものを動機としてしまえば、上位存在の大乱戦となるのがオチだ。
わたしたち

善、悪。それは存在するモノの数だけあるものだ。絶対正義もなければ絶対悪もない。

まあ、例外というのも存在しているが……。

それに、“界律の守護神”もまた悪を行う。必要悪というもので、その筆頭が第四の力“天秤の狭間で揺れし者”である私だ。

召喚された世界においては“悪”として、その世界の抑止力となる英雄たちに殺されるなんてこともある。

ああいう契約は本当に堪えるんだよなあ。そう思うのも初めのうちだけだったが。

少し思考がズレたか……？

「それ以前に解っているはず。善悪で計れるほど簡単な存在じゃないだろ？」

界律の守護神だろうと絶対殲滅対象だろうと……」
アポリユオン
テストメント

「確かに……。対立物の統一と闘争の法則……ですね」

よくそんなことを知っているな、こいつ……。少し驚きだ。

だが、その結果は全ての滅びでしかない。

「互いが滅び滅ぼされ、空席が生まれ、そして埋まるたびにまた闘い、

場合によってはどちらかに寝返ることもある。終極がいい例だな……」
テルミナス

「・

先代の4th・テストメントだった“絶対殲滅対象”アポリュオン。

「それはあなたも同じでしょう、4th・テストメント。かつてのNo.？：亡失、アーミツティム様……」

「遙か過去の事だ、思い出させるな」

こんな昔話をしに来たんじゃないな。そろそろ始めようか……。

「話はこれで終わりだ、ベルゼブブ」

“グングニル”を手に取り、臨戦態勢に入る。
注意すべきはさっきの高速移動法。そして他の罪の“力”というものだ。

それにどういふものか分からないが、ベルゼブブ本来の“力”にも注意を払う必要がある。

シャルを一時的にも倒すほどのものだ。最重要として注意する。

「……逃げられないみたいですね。仕方ありません。

3rd・テストメントと同様、少し痛めつけてから離脱させてもらいましょう……！」

憤怒の力

黄緑色のレーザー群が、ベルゼブブの周囲から放たれる。
ならば一つ残らず迎撃してくれる。

「輝き燃えろ、汝の威容……！」コード ケルビエル

設定する攻撃範囲はこの玉座の間全体。
レーザーごと燃え尽きてしまえ、ベルゼブブ。

暴食の力

「なに・・・!?」

私が床に展開した円陣を上書きするように現れたのは、幾何学模様で構成された“口”。

それが円陣ごと蒼炎を全てを飲み込んだ。これは・・・この術は見覚えがある。

「結界・・・くっ!」

そう発した直後、レーザー群が襲いかかってきた。

それを“グングニル”で捌きつつ回避を行うことで、いくつかを掠る程度で済んだ。

「ああ、気づいてしまいましたか。そうです。僕の“力”は“結界”です。」

“口”の縁を境界線として結界を張ることのできる“力”ということですよ」

知っている。これを使うヤツを。この“力”の所為で・・・“彼女”は・・・!!

さっきまでのルシファーに対する怒りとは別の怒りが満ちる。すでにそれは怒りというレベルではなく憎悪に近い。

「っ! さすがは最強の第四の力。人間へと霊格が落ちようと凄ま

じい……!」

「浄化せよ」

右手の床につき発動させるのは炎熱系対人攻性術式メタトロン。屋内戦において効果を発揮し、“グリユートトウーングルズの戦いで、連合の前線砦を落とした術式だ。

床についた右手を中心として八方に拡がっていく浄化の蒼炎。

それが床を、壁を走り、玉座の間の天井、ついた右手のちょうど真上にまで届く。

床、壁、天井に引かれた八つの蒼炎が波打ち、

「メタトロン
汝の聖炎!」

玉座の間を吹き飛ばすほどの爆発が起きる。

対炎の魔力障壁を張って、未だに爆炎が治まらない中、ベルゼブブのいた玉座付近に視線を移す。

「……無傷……!?!」

さっきまでと何ら変わらずに佇んでいたベルゼブブ。

蒼炎が……届いていない!?

ならばこれでどうだ!!

「コード
殲滅せよ、汝の軍勢」

1000の槍群を撃ちだす。

だが、カマエルはベルゼブブへと届く前に消滅していつている。

まるで見えない何かが妨げるような……まさか!!

「中級術式の神秘が、ベルゼブブの神秘を下回っている……！」
そうとしか考えられない。

「これは当然の結果です。嫉妬を除く“罪”が今、この身の内にあります。

“干渉”ならまだしも、神秘があるとはいえ単なる人間の技。通用しないのは自明の理のほずです、4th・テストメント……！」

ライドインパルス

さつき私の不意を突き、殴り飛ばしたときに使った高速移動法だ。確かに速いが、一度見た以上は、

「通用しないと知れ……！」

左側面に移動したベルゼブブに向けて、“グングニル”を振るう。能力解放状態じゃないが、それでも中級術式同等以上の神秘はある。直撃すればそれで、

「終わる……！」

「ふっ……！」

短く息を吐いたベルゼブブが、“キルシュブリューテ”で迎撃してきた。

「……！」

“グングニル”と“キルシュブリューテ”が激しい火花を散らす。
“ヴィーグリーズ決戦”を思い出す光景だな、これは……。

傲慢の力

「なっ……!？」

視界からベルゼブブの姿が忽然と消えた。
知覚障害か……!？」

「どこだ!? ベルゼ……っが!？」

攻撃に備えて構えようとしたとき、右わき腹に何か衝撃が来た。
この感覚は蹴りによるものだ。

「分かたれた“力”は今一つとなり、本来の効力を発する。ということ
です」

片膝をつき、知覚障害を解いたのかベルゼブブが目の前に現れた。

「本来の効果を發揮、か……!」

“グングニル”を支えにして立ち上がる。

今の蹴りは効いたが、戦闘には全く支障ない。手加減をしたな。

我が手に携えしは確かなる幻想

「撃鉄を起こせ、黒金の猟犬。銃口の先、狙うは拒みしもの。
示せ、慈悲の殲弾。厳肅なる裁きの鉄槌を撃て……」

魔術が通用しないのならば、神器で掃討するのみ。

展開する約190の銃火器群。ターゲットはベルゼブブ一体のみ。玉座の間を吹っ飛ばしたことで、展開するには十分な広さだ。

「氷結剣クロセル・・・！」

右手に携えるのは、ソロモン72柱の魔神の一体クロセルが持つ、溶けることのない氷の剣。

この剣で斬られた傷口は、重度の凍傷を与え腐らせるといふ。

「・・・・・・・・！！」

暴食の力&憤怒の力

「ああ、どこまで通用するか、どうぞお試しあれ・・・・・・・・！！」

銃火器群の真下に“口”が展開。銃火器群を次々と飲み込んでいく。すでに放たれている無数の弾丸をレーザー群でピンポイントで迎撃。それでも突破した弾丸を“キルシュブリューテ”で弾く。追撃するなら今だ。

「^{クロセル}邪しき凍土！！」

強欲の力

“氷結剣クロセル”を床に突き刺し、周囲一帯、ベルゼブブや銃火器すらも凍結する。

視界の全てが白銀世界である中、目の前には氷漬けにされたベルゼブブがいる。

「トドメだ。・・・グングニル!!」

その場で回転し、遠心力を乗せた“グングニル”を投げ放つ。ベルゼブブに到達するまでに、通り過ぎた部分の氷を粉碎しながら巻き込んでいく。

“グングニル”が中れば終わりだ。だが、

「ああ、残念ですが足りません・・・」

ガラスが割れるような轟音が鳴り響き、全ての氷が砕け散る。それはベルゼブブを凍結していた氷までも。

そして迫る来る“グングニル”を回避し、

ライドインパルス

またあの高速移動。しかし見えている以上は脅威じゃない。ベルゼブブは手にする“キルシュブリューテ”で、私の足を狙うように振る。

こちらの足を潰して、そのまま姿を消すつもりだろうか、

「させるか!!」

“氷雪剣クロセル”を盾にするように構える。

神秘のランクとしてはこちらの方がおそらく下だ。

たとえ能力が解放されていない“キルシュブリューテ”でも、その神秘は高い。

何せ創造したのが“魔神アルメリア・フォン・シュゼルヴァロード”だ。
彼女の創る魔造兵装は、どれもがふざけた能力を持ち、神秘も半端じゃない。

衝突するお互いの剣から火花が散り、数秒で“氷雪剣クロセル”が切断される。

それを見て、私もベルゼブブもたった2秒程度だが硬直する。だがそれだけ時間が稼げれば十分だ。さつき投げ放った“グングニル”が、ベルゼブブの背後から迫る。

我が手に携えしは確かなる幻想

私の呪文^{スベル}を聞き、ベルゼブブがすぐに行動に移ろうとするが、

「っ！！」

背後から迫る“グングニル”に気づいたベルゼブブだがすでに遅く、“キルシュブリューテ”を持っていた右腕が吹き飛ばされた。私は左手で戻ってきた“グングニル”を取り、空いた右手で宙を舞う“キルシュブリューテ”を取る。

「おおおおおー！！」

右の“キルシュブリューテ”をすぐさま前方、ベルゼブブへと向けて振り下ろす。

「ぐうっ！！」

一瞬で左腕を斬り落とす。両腕の無くなったベルゼブブだが、

怠惰の力

それは一瞬だった。

気づけば失っていたはずの両腕があり、手にしているのは“ルートウス”二振り。

視認したすぐに“グングニル”を横一閃に振るう。それをベルゼブブが両手の“ルートウス”で防ぎ、

憤怒の力

私とベルゼブブの間に生まれる黄緑色の光球。

すぐに“グングニル”を引き、ベルゼブブから距離を開ける。

と、同時に一斉に放たれるレーザー群。すぐさま空戦形態へと移行し、回避運動に入る。

熾ロト・ファイアス天覆う七つの円環

七枚の花弁が開く。レーザー群は盾に拒まれ突破できないが、次に来た攻撃で一気に消された。

その攻撃とは“ルートウス”の弾雨。阻害の概念がある武装だ。

それで盾を構成する魔力を阻害され、その上で神秘は向こうが上だったからだろう。

だが、こちらの次の攻撃への時間稼ぎは出来た。

「目醒めよ、神槍グングニル！！」

能力の限定解放。完全解放には魔力が全然足りないからだ。

オーバー스로ーで“グングニル”を放とうとしたとき、

傲慢の力

また知覚阻害を使って姿を晦ましたベルゼブブ。
本当に面倒だ。

十 十 十 十 十 十 十

「おおおおおー!!」

スバルが四角形の結晶体に突撃していく。
そして私は、ティアナの運転するバイクのタンデムシートに座って、

「ロイヒテン・プファイル!」

スバルの援護をする。

こんなことばかり続けているからスバルの体力が心配だけど、さつき
訊いたら「大丈夫」らしい。

さすがはなのはとヴィータに鍛えられただけはある。

そのヴィータともさつきすれ違った。

一瞬だけど、ヴィータは血だらけと言えるほどにダメージを負って
いるのを見た。

でも武装隊の人と一緒にだったし、おそらくゆりかごから離れるはず
だ。

「さつきから大きい爆発が続いてますが、なのはさんたちがまだ戦
ってるんでしょうか?」

バイクを運転するティアナがそう口にする。

確かにどっか遠くで、微かだけど爆発音と小さな揺れが連続して起きている。

ここまで届くのだから爆心地はとんでもないことになってると思う。

「もしそうなら急がないとだね」

“マツハキヤリバー”の速度を落として、バイクと並走するスバルを見る。

でもやっぱり少し疲れが見えた。

「なのはたちの戦いは終わってると思う。たぶん今戦ってるのはルシル。」

ベルゼブブがゆりかごに進入したのは間違いないから・・・」

「ベルゼブブ・・・」

二人の表情が曇る。

「・・・あれは・・・なのは！ ヴィヴィオ！」

長い長い通路の先になのはと、なのはに抱き上げられているヴィヴィオがいた。

そしてその隣には、何かを背負っているはやてと、はやての肩に乗るリイン。

「シャルちゃん！ スバル！ ティアナ！」

「なのはさん！」

「八神部隊長！」

通路を走っていたのはたちの許に急ぐ。

見た限りなのはとヴィヴィオは大した怪我を負っていないさそう・・・
良かった。

で、やっぱりルシルがいない。ベルゼブブと戦っているのは確定みたい。

「シャルちゃん・・・大丈夫なの!？」

なのはが私を頭から足先まで見て心配してくる。

見ればはやとリン、ヴィヴィオまで同じように見てくる。

「大丈夫大丈夫。ほとんど傷も塞がったし・・・。」

それで、ルシルはやっぱりベルゼブブと・・・?」

一応確認しておく。するとなのはたちの表情が一気に強張って、

「そつだよシャルちゃん! ルシル君一人残って、私たちが逃げる時間を稼ぐって・・・!」

「いくらルシル君でも、あんな相手一人って・・・!」

「・・・分かった。みんなはゆりかごから脱出して。」

私はこのままルシルのところまで行って加勢す・・・っ!」

「「「「「「っ!?!」「「「「「「」

そのとき、大きくゆりかごが揺れた。

立っていられないほどの揺れ。明らかにルシルの魔術の所為だ。

この場で私にしか解らない神秘の奔流を見たから。

「みんなは急いで脱出して」

そう言つてバイクから降りる。身体損傷率は10%を切つた。

これも“祝福の証ゼーゲン”の加護のおかげだ。

これなら多少の全力戦闘も出来る。

「スバル、ティアナ。なのはたちをお願いします」

ゆっくりと通路を歩きながら、ここまで送ってくれたスバルたちに告げる。

「……はい！」

「ん、良い返事！」

「シャルちゃん！」

なのはが私を呼びとめる。

私を振り向いて、なのはに視線を移す。

「……待つてるから。ルシル君と一緒に帰ってきて……」

「当然！」

それだけ答えて、私は走る。そして背後からなのは達の音が遠ざかっていく。

これでゆりかごを破壊するような魔術を使つても、巻き込む心配はなくなった。

「今行くから……。覚悟しろ、ベルゼブブ……!」

私が全力で殴り飛ばすまで、お前が生きていることを願おう。真剣に。

通路を走る中、ハッキリと感じられるようになる。

ベルゼブブの存在感。地上のときは圧倒的に違う強大すぎる存在感だ。

どうして？　こんなにまでなったベルゼブブがいるのに、界律が動かない？

そんなことを考えながら、次第に強くなっていく存在感を頼りに向かう。

そして一気にゆりかご内部の風景が変わる。

さっきまでは綺麗な内装だったのに、今じゃボロボロに焼け爛れている。

何か大きな爆発が起こったような……って、さっきの揺れの……。

ボロボロになっている通路を走る。

走りにくくて嫌になるけど、そんなことは言ってもらえない。

次第に聞こえてくるのは怒声と衝突を繰り返す金属音、そして爆発音。

「目醒めよ、グングニル!」

ルシルの声。近い。もう少しでたどり着くことが出来る。

お腹に当てるようにしていた鞘に納められた“ゼーゲン”を抜く。

そして見えた。“グングニル”と、私の“キルシュブリューテ”を

携えたルシルと、ルシルの目の前に走りこんできている“ルートウス”を携えたベルゼブブ。
けど、ルシルはそれに気づいていないのか周囲を見渡している。そこで解った。ベルゼブブは知覚障害を使っているって。だから、

「いつけええええ!!」

“ゼーゲン”をベルゼブブに向けて全力投球。
迫る“ゼーゲン”に気づいたベルゼブブが、片方の“ルートウス”で弾いて、“ゼーゲン”が粉々に砕け散った。

閃駆

一気にルシルにまで走り寄って、

「ルシル!!」

「っ、ああ!!」

ルシルが右手に持っていた“キルシュブリューテ”を私に向けて投げる。

私は跳んで“キルシュブリューテ”を手取る。

「双牙氷閃刃!!」

ベルゼブブに向けて魔術を放つ。
それは直撃だった。だけどベルゼブブは何事もなかったように立っていた。

「ちょっとルシル。あれどういうこと・・・？」

ルシルの隣にまで跳躍して下がる。

視線の先には無傷のベルゼブブ。

「見て解るはずだ。ベルゼブブの神秘の強さに。

私の中級魔術、メタトロンやカマエルが通用しなかった・・・」

メタトロンって確か・・・中級第三位の火力を持つ術式だったっけ。

そしてカマエルは中級第二位。それが通用しないというわけか。

「なるほど。なら私の真技で斃す」

「ついでにベルゼブブは嫉妬以外の“力”を使うらしい。

その上何らかの高速移動法を使う。まあ、速さで言えば圧倒的にシヤルが上だが・・・」

それこそ見れば解る。ルシファアの“ルートウス”を使っているんだから。

そして高速移動法っていうのもあるらしい。

ルシルの言葉が正しいなら、私よりかは遅いらしいけど。

「ああ、これはいよいよまづくなってきましたね。

では、これから全力の離脱を試みますので、邪魔をしても無意味と・・・っ！！」

閃駆

ベルゼブブの話の途中で最接近。

ホントは殴り飛ばしたいけど時間も無ければ余裕もない。軌道上に上がるまでに斃して、脱出しないと……。だから一気に決めて、なのはたちのところに帰るんだ。

「言いませんでしたか3rd・テストメント。」

あなたの戦闘パターンはすでに解析済みだと……！」

「それは一対一での話でしょ。今、ここにはルシルがいる……！」

“キルシュブリューテ”を振るう。狙いはベルゼブブの腕。ベルゼブブとのすれ違いざまに一閃。左腕を斬り落とす。

怠惰の力

「はあ!？」

斬り落とした瞬間にはすでに新しい腕が構成されていた。ズルっ！ さすがにそれは卑怯だよ!!

「言つのを忘れていたが、ベルゼブブには高速再生能力もある」

「遅っ！」

砲塔が三つある青銀のガトリングガンを手にも、ベルゼブブへと銃口を向けるルシルからの遅い情報。

その巻き添えを食らわないために全力で離脱しながら叫ぶ。遅すぎだっつて、ルシル。

直後、三つの砲塔、その24の銃口から無数の神秘の弾丸が斉射される。

ライドインパルス

あれは……アスモデウスが使っていたものだ……。なるほど。あれがルシルの言っていた高速移動法ってわけだ。

ルシルのガトリングガンから放たれる弾丸を、速度に物を言わして回避し続けるベルゼブブ。

でも、私がいることを忘れないでほしいな……！

「くらえええ！！！」

“キルシュブリューテ”の神秘の斬撃を放つ。

その斬撃すらもギリギリで回避していくベルゼブブだけど、

「いけ、グングニル！！！」

ルシルはガトリングガンを斉射しながらも“グングニル”を投げ放つ。

それを“ルートウス”で弾こうとするけど、逆に“ルートウス”が砕かれた。

「っ……これは……！！！」

「そう何度もグングニルの打撃を受けて無事なわけがないだろう……！！！」

「よそ見注意！」

もう一度斬撃を放つ。さっきと同じようにベルゼブブの腕を斬り落とすけど、

すぐそばから再構成が始まって、二秒とせずには元通りだ。本当に性質の悪い“力”だね。

「斬ろうが潰そうがすぐに再生か……。ああいうのは本当に面倒だな」

「そう言いますが、あなたたち界律の守護神も同じですよね」

そこは否定できない。守護神としての戦闘で、万が一ダメージを負った場合にはすぐに再生される。

それもベルゼブブの再生よりさらに速く、だ。

「私の上級か真技を使えば容易いが……。シャル、飛刃……いけるか？」

「飛刃？ 使用制限は受けてないから大丈夫。けど、アレって“キルシュブリューテ”を完全解放しないと使えないんだけど……」

ルシルからのリンク。さっきまでは使えなかったけど、至近でのリンクは繋がるみたい。

で、ルシルの提案だけど、能力を完全解放するにはXランクの魔力が必要だ。

術式の使用は問題ないから、あとは魔力をどうにかすればいいだけ。

「ならいけるな。私の魔力を使えば撃てるだろう」

「……やっぱそれが。いいよ。やろっ」

我が手の携えしは確かなる幻想

「ああ、仕方ありません。一度殺しますので、再召喚で帰ってきてください」

そう言つて、ベルゼブブの雰囲気が変わつた。完全に戦闘モードになつたらしい。

威圧感が消えて、波の無い湖面のような静けさを身に纏い始めた。これは・・・ちよつとまずいかもね。

暴食の力

床一面に展開された“口”。逃げ場がない・・・！

「結界には結界をぶつけるのみ！！」

聖天の極壁^{ヒミンピョルク}

ルシルが床に手をついて、“聖天の極壁^{ヒミンピョルク}”を現実^{ヒミンピョルク}に展開した。

十
十
十
十
十
十
十

本日二度目の“聖天の極壁^{ヒミンピョルク}”。しかも今回は現実への展開だ。

「これが・・・！！」

ベルゼブブが周囲を見渡して少し驚きの表情を見せる。そして、

「結界には結界を。いいですね。ああ、それには賛同できます」

ベルゼブブが笑みを浮かべる。すると“ヒミンビョルク 聖天の極壁”全体に“口”が展開された。

おいおいおいおいおい。それはさすがに……駄目だろう!？ 次の瞬間、視界が暗転。結界内に風が吹き荒び、“ヒミンビョルク 聖天の極壁”が消えた。

目を開けると、そこは相変わらずゆりかご内。なんてヤツだ。まさかペッカートウム、しかも分裂体であるベルゼブブに破られるとは。

「ねえ、ルシル。今のつて反則じゃない？」

シャルが信じられないといった感じで訊いてきた。もちろんそれには賛成だ。

「手段は選んでいられない。シャル、今すぐ私から魔力を持っていけ。あとは君に任せる」

恰好悪い話だが、シャルの真技に頼るとしよう。直撃させれば、再生なんてものが無意味になるほどのダメージを与えられるはず。

「……了解。行くよ、ルシル……!」

私のシステム魔力炉から一気に魔力がなくなって、シャルへと流れ込んでいく。

視界が揺れる中、シャルが少し苦しそくに顔を歪ませている。SSS以上の魔力が制限されている所為だろう。

「はあはあはあ……。あとは任せて、ルシル」

意識が途切れる前、確かに聞いた。

ああ、ならあとは任せて、少し眠るとしよう……。

十 十 十 十 十 十 十

この身に宿す魔力はXXランク。魔力炉破綻寸前だ。
ただ、ルシルから託された以上は必ず勝つ。

ルシルが背後で倒れたのが分かる。けど振り返らない。絶対大丈夫だから。

私が見るのはベルゼブブのみ。理由はどうあれ斃すべき敵。

「すう……はあ……っ、いくよ……!」

閃駆

一気に距離を詰める。魔力を身体強化と、能力解放に当てる。だから魔術は使わない。使う必要もない。それ以前に使えない。完全解放時に使える術式は最も簡単な身体強化だけになるからだ。

「っ!？ はや……!？」

キルシュブリューテ第一完全解放

“キルシュブリューテ”の刀身に桜色の光が生まれる。それと同時に平地の部分に文字が現れ始める。

ベルゼブブの両腕を吹っ飛ばす。だけどすぐさま再構成されていく。

キルシュブリューテ第二完全解放

桜色の光はさらに強く、現れる文字も刃先まで伸びていく。再構成された両腕をもう一度吹っ飛ばす。

ベルゼブブは離脱を図り、あの高速移動で一気に距離を開ける。口の中に血の味が広がり始めた。鉄の味。いつまで経っても慣れることのない嫌な味だ。

閃駆

離脱しているベルゼブブに追いつく。

それに気づいたベルゼブブが新しい“ルーツ”を取り出す。無駄な足掻きを。そんなもので私の魂は止められない。キルシュブリューテ

「なっ……!?!」

紙のように何の抵抗を受けずに“ルーツ”を斬り裂く。振るった“キルシュブリューテ”を返し、そのまま左腕を吹っ飛ばす。

直後、私の目の前と足元に“口”が展開された。

「無駄よ……ベルゼブブ……!」

まずは目の前の“口”を切断。次に床にある“口”へと刃を突き刺し、裂く。

対処終了。ベルゼブブの表情が驚愕に染まる。

お前たちは知らないだろう。かつての魔術師、その中でも最高クラ

スの魔術師は、その実力を以って上位種と戦い、そして勝つことも出来るほどの化け物ぞろいだということ。

キルシュブリューテ完全解放

“キルシュブリューテ”が目醒める。

切断、刺突の概念においては最強の魔造兵装。

純粋な戦闘に特化した武装。

刀身が完全に桜色の光に包まれる。平地に現れた文字もハッキリと浮かぶ。

そこにはこう書かれている。

危なねえぜお嬢さん。オイラに触れると真つ二つだぜ

ふざけた概念文だ。これを創ったヤツの顔を見てみたい。

しかもこの文字の正体と意味は教えられたものだ。

かつての“ヴィーグリーズ決戦”の二日目。ようやく戦場で会えたルシルから。

私が“キルシュブリューテ”を完全解放したとき、突然笑うから怒ったものだ。

そして知った。この文字が魔界で使われるもので、その意味を。

逃げに徹しようとするベルゼブブの両足を吹っ飛ばす。

「バカな……このような……聞いていない……！」

すぐさま再構成された両足で立ち、天井と床に大きく“口”を展開した。

そして吹き荒れる暴風。“キルシュブリューテ”の神秘で、その暴風を斬り裂きつつベルゼブブの姿を探し、見つけた。

取り出した鞘に“キルシュブリューテ”を納め、

「真技……」

ベルゼブブの前方の空間が波打つ。
逃げる気だろうけど、もう遅い。

飛刃・翔舞十閃

抜き放つ。絶対切断の概念を持つ桜色の3m近い刃が放たれる。
その神秘は絶大。たとえベルゼブブが波打つ空間に入ったとしても、
その空間ごと断つ。
十の刃が絡み合うように向かって行く。斬撃にして砲撃とも言える
私の遠距離真技。

「我が魂キルシュブリューテの前に」

ベルゼブブの背後に到達した十閃。
閃駆でルシルのところまで向かって、そのままの勢いでルシルを抱
え上げる。

そこで勢いを止めずに一気にこの場から離脱する。
そして、キンツと音がした直後、この場の全てを吹っ飛ばした。

「敵は無し……!」

走る中、振り向くと、ベルゼブブが粉々に吹き飛んでいくのが見え
た。

終わった。これで暴食、色欲、強欲、憤怒、怠惰、傲慢の六つが消
え、あとは嫉妬のレヴィヤタンだけだ。

対象に到達した十閃の拡散によって起こった爆風に吹き飛ばされながらも、何とか着地して、通路を駆ける。
ルシルからの魔力供給を止めて、魔力炉^{システム}を休ませる。
だから“キルシュブリューテ”も消えていった。

「はあはあはあはあはあ……!」

女の子が一人で、しかも魔力無しで大の男を背負うなんて辛すぎる。
え〜と、ここから出口と言つと……うわあ、とお〜い(泣)

十
十
十
十
十
十
十

「シャルちゃんとルシル君はまだなんか？」

ヴァイス君のヘリの中で、焦るのははやてちゃん。
落ち着いて。つて言いたいけど、私も落ち着けないで窓の外を何度も見直す。

「はいです……」

リインも落ち着かないのかずつと宙を飛びまわっている。

「なのはママ……」

隣に座るヴィヴィオが袖を引っ張る。すごく心配そうな表情。
ヴィヴィオだつて大変だったのに、それでも休もうとしなかった。
ルシル君とシャルちゃんを待つんだ。つて言つて。

「大丈夫。ルシル君もシャルちゃんも絶対に帰ってくるよ。だから心配しないでいいよ、ヴィヴィオ」

「……うん」

ヴィヴィオの頭をそつと優しく撫でて、私の肩にもたれ掛けさせた。きつと大丈夫。あのシャルちゃんとルシル君なんだから……。

『なのは、ルシルとシャルはまだ戻らないの？』

「フェイトちゃん……。うん……。まだ……」

地上でのガジェット掃討をしていたフェイトちゃんたちライトニング。

それももう終わった。ガジェットが一機も来なくなったから。他の航空武装隊の人たちもほとんどが待機態勢になってる。

『そつ……。はやて、今からライト二』

「……………!!?!」「……………」

轟音がこの空域全体に響き渡った。私たちの視線が向かうのはゆりかご。

そして視線の先に飛んでいるゆりかごの前方、場所からして玉座の間の辺りだ。

その上部付近が丸ごと吹き飛んでいるのが見て分かる。

「シャルちゃん……。ルシル君……」

煙を噴くゆりかごを見て、急に心配になった。

きつとあれはシャルちゃんたちの仕業だと祈る。
私たちが立ち入れない戦いが今あそこで起きている。
だから祈るしかない。無事に帰ってきてって……。

十 十 十 十 十 十 十

あかん。あんなに一度見たら心配で仕方ない。

ゆりかごの前方で起きた大爆発。たぶんルシル君の魔術やと思う。
そう思いたい。そう思わな居ても立ってもおられへん。

あ、そういえば……、

「フェイトちゃん、さっき何か言おうとしようとたけど……」

さっきの轟音で遮られたけど、フェイトちゃんは何かを言おうとしようとた。

『あ、うん。はやて、ルシルとシャルを迎えに行きたいんだ。
もしかして何かトラブルがあったかもしれないし、起きるかもしれない……』

フリードリヒに乗るフェイトちゃんの顔は少し青い。
ルシル君たちのことがほんま心配なんやね。当然私らもやけど。
でも、

「ごめんな、フェイトちゃん。それは許可出来ん。
今ルシル君たちが戦つとるんはとんでもないやつや。
だから、そんな危険なところに行かせるなんて……」

『あの、八神部隊長。僕からもお願いします!』

『わたしからもお願いします! ルシルさんたちを迎えに行かさせてください!』

エリオとキャロからもお願いされた。

どうする? 行かせるべきか、このまま待機させるべきか……。

『こち……スター……5……』

私らの前にモニターが浮かび上がる。

ノイズがすごいけど、聞こえたんは間違いなくルシル君の声や。

「ルシル君か!？」

半ば叫ぶようにルシル君の名前を呼ぶ。

『はや……ああ……』

そう返ってきた。ノイズの中にルシル君の顔が見えた。

よかった。無事でほんまよかった……!

するとモニターのノイズが弱まって、ハッキリとルシル君と、ルシル君にお姫様抱っこされとるシャルちゃんが映った。

『すまないが、出口まで迎えに来てくれると助かる。』

今の私とシャルは魔力が使えない状況なんだ』

疲れきつとるルシル君が弱弱しい笑みでそう口にした。

魔力が使えんっていうことは飛べんってことやね……。

『はやて。ライトわたしたちニングが行くよ。スバルたちもそう何度も行けな
いでしょ?』

フェイトちゃんにそう言われ、設置されとるイスに座るスバルとテ
イアナを見る。

確かにフェイトちゃんの言う通りや。スバルはギンガとの、ティア
ナは戦闘機人との戦闘で負ったダメージがある。

それに今空が上がつとるフェイトちゃんたちの方が速いし、フリー
ドリヒの方が乗れるやろ。

「そやな。うん。ライトニングはゆりかごへ行って、ルシル君とシ
ヤルちゃんのお迎えや」

『『『了解!』』』

『助かるよ、はやて、みんな』

二つのモニターが閉じる。

「……ふう」

「お疲れ様です、はやてちゃん」

ラインが私の目の前まで飛んできた。

私はラインに笑みを向けることで応えた。

十
十
十
十
十
十
十

エリオとキャラはフリードリヒで、私は飛行魔法でゆりかごの突入口に降り立った。

ここでルシルとシャルを迎えるために。

「ルシルさんとシャルさん。勝ったんですね、あのベルゼブブって人に」

「すごいですよね、ルシルさんとシャルさんって……」

エリオが静かに呟いて、キャラもそれに続いた。

確かにすごい。私ですら怯えてしまう威圧感を放っていたベルゼブブ。

そんな存在と当たり前のように戦うルシルとシャル。

あの二人は……きつと何かを隠してる。そう思ってしまう。

「フエイト！ エリオ！ キャロ！」

通路の先から、シャルを抱えたルシルが走ってきた。

「ルシルさん！ シャルさん！」

私たちの前まで走ってきて、ゆっくりと止まった。

「ルシル。シャルは大丈夫……？」

私は二人に駆け寄って、抱えられているシャルに視線を移す。

少し苦しそうだけど、聞こえてくるのは寝息だ。

「ああ。結構な無茶をさせてしまったからな。その代償と言つべ

きか……。

それよりエリオ、キャラ、そしてフリードリヒ。ありがとう。シャルを頼めるか……？」

「あ、はい！」

キャラにそう答えられて、ルシルはフリードリヒの背にシャルをうつ伏せで寝かした。

「それじゃあエリオ、キャラ。お願いね」

「はい！」

二人は元気よく返事をして、先に地上に降りていった。
あとは、

「えっと……ルシルはどうする……？」

背負う？ それとも後ろから抱えるようにして飛ばうか……？
頬が熱くなるのを自覚しながら考える。

「ん？ ああ、私はギリギリで飛べるだけの魔力は戻った。
だから自力で飛ぶことにするよ」

「へ？ あ、そう……そうなんだ……」

少し残念だったり。一気に火照った顔が冷めるのが分かった。

「と、言いたいところだが、肩を貸してくれないか、フェイト？」

そう言つて私にもたれ掛かつてきたルシル。
よく見れば少し顔色が悪い。さっきまでのルシルはきつとやせ我慢
だったんだ。

「うん。掴まつてルシル」

ルシルの右腕を取つて、私の肩に回す。

私も左腕をルシルの腰に回してしっかりと掴む。
そして、

「助けに来てくれてありがとう、フェイト」

空へと躍り出て滑空してるとき、ルシルがお礼を言つてきた。

「当たり前だよ。だって私はいつもルシルに助けられてきた。
だから私だつてルシルを助けるよ。いつだって、どこだって、ずつ
と・・・」

10年前からずっと私は、私たちはルシルたちに助けられてきた。
だから私たちも、ルシルたちがもし困つていたら助けるんだ。

「ハハ、そうか。フェイトももう立派な一人前だな」

「む、それつて今までの私は半人前だつてことだよな？」

確かにルシルたちからすれば半人前かもしれないけど。
でも、それでも認められたんだから、これでよしとしよう。

このあと、聖王のゆりかごはゆっくりと上昇を続けて、ミッド軌道

善悪下世界の望む行き先は・・・（Peccatum）（後書き）

ようやく3rdも終了です。上の隠しコマンドっぽいのは何でもありません。

次のエピソード名はお楽しみ、ということ。

内容としては残りの期間です。一話完結型のショートストーリーみたいなものにするつもりです。

六課メンバー（特にシャル）に散々バカをさせるつもりでいます。ANSURでは真面目な騎士だったのに、いつの間にかギャグキャラに・・・（笑）

えー、それと私はギャグとかが苦手なので、既存の物（マンガ、アニメ、ゲーム）を真似たりすることになるやもしれません。いけませんね、ああ、いけませんよ。

それでは、もうしばらくお付き合い。

シャルの魔術

§ 飛刃・翔舞十閃

剣神シャルロッテの誇る真技の内の一つ。

“キルシュブリューテ”の能力を完全解放することで使用可となる対人・対軍真技。

絶対切断の概念を持った神秘の刃を、対象に向けて十閃放つ術式。牢刃・弧舞八閃に比べれば回避しやすいが、威力としてはこちらが格段に上。

放たれた刃が対象にヒットすると、広範囲に絶対切断の刃が拡散し、

全てを斬り裂き吹き飛ばす。

ルシルの魔術。

§^{コード}浄化せよ、^{メタトロ}汝の聖炎

屋内にて効果を発揮する炎熱系中級攻性術式。

浄化の蒼炎を建造物内に這わせ、通った道を一気に爆破するというもの。

爆破のタイミング、通る道、全てが遠隔操作で行われる。

ユダヤ教においては、ミカエル以上の天使とされる。

36枚の翼、無数の燃える目を持ち、顔は太陽以上に眩しく輝いている。

体からは炎が立ち昇り、そこから無数の天使が生み出される。

複製武装

F a t e / s t a y n i g h t : ^{ロー・ファイアス}熾天覆う七つの円環

A N S U R : 氷結剣クロセル

A N S U R キャラクター

アルメリア・フォン・シュゼルヴァロード

魔界最下層を管理する上位七体“支配権”の第七位。

ルシルに“フォン・シュゼルヴァロード”を与えたのは、彼女の双子の娘。

娘ルリメリアとルルメリアに“支配権”の第七位の座を継がせる前に死亡する。

Last Episode : } A・R・I・G・A・T・O }

有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない
・
・
・

何なんだアレは？ 本当に勝てるのか？ 不可能不可能不可能不可
能
能
能

現在界律わたしたちの守護神が立つのは中世ヨーロッパのような面影のある街
並。

しかし、あれ程美しかった街が燃え、城が燃え、人が燃え、そして
・
・
・

「アレが……最強の絶対殲滅対象アポリュオン……！」

「うわぁ……。ボクたちの“干渉”が全然通じてないよ？」

「上等じゃねえか。手を貸せ、天秤！！」

「エリザベッタお姉さま！ ガブリエラお姉さま！」

傍に来た9th、7th、2nd。そしてこの世界で出会い、親し
くなつた王女マリア。

マリアは今なお城に残る姉であり、私が守るべき存在エリザとリエ
ラの名を叫ぶ。

情けない。守ると誓っておきながらこの様だ。

そんな私たちの見上げる先、この街を、人を、そしてこの国を現在
進行形で滅ぼしている人影がある。

それは白い薄手のノースリーブの無地のワンピース、銀のよう
て純白の足元まである綺麗な長髪、瞳の色は深い桃色、背には12
枚の白翼を持つ10歳くらいの幼い少女。

「何が……何が天使だ……」
アンジェラス

天使の名を持つ究極にして最強と言われる”絶対殲滅対象”。

「ルシリオン様……。お姉さまたちは……!?!」

「……っ」

この世界の界律に召喚された“界律の守護神”は五柱だった。

私、優斗、ティネウルヌス、ルフィスエル、アーク。
だが、アークはすでにアンジェラスによって消された。

（ああ、これは夢だ。私の心が壊れ、絶対殲滅対象となってしまう
たときの……）
アポリュオン

夢だと自覚する。そう、私が守護神となって、時間という概念に換
算すれば約二千年目の契約。

このときにはすでに私は壊れ始めていた。そして、この契約が決定
打となる。

私が今なお生きていると知った“彼女”からの「好きです」という
告白。

守護神の正体を知り、それでも好きだと言ってくれた彼女に、私は
癒されていた。

私は契約を終えても残ることは出来る。世界に私が“生きている”
という概念がある限り。

だから、心のどこかでリエラと共に新たな人生を、などと思っていたときにこれだ。

そして今私の外套にしがみ付いているのは、後に5th・テストメントとなるマリア。

綺麗だった金糸のような髪は煤で汚れ、アメジストの瞳も泣き続けている所為で赤い。

『優斗、マリアを安全なところへと頼む。

それと、城へ戻って生存者の確認を。ここは私たちで何とかする』

不可能だ。五柱束で“干渉”を撃ちこんでも無傷だったのだから。

とはいえ、最悪マリアだけでも生かす。それくらいはしなければ私は……クズだ。

『……了解です』

優斗にリンクでそう告げ、マリアを避難させた。

それを確認し、

「……第一級神罰執行権限……解凍……!!」

首のチョーカーに付いている白の南京錠に手をかけ、解錠する。

契約執行中にはまず必要のない魔力を解放。ランクは当然EX。

そして純戦闘モード“神器王形態”へと移行する。

守護神の外套が消え、高ランク神器の多重武装が開始される。

全て蒼銀で統一された“フォルセティの神鎧”、“ヴィーザルの足鎧”、“ヴァールの籠手”。

背には純白の円環“ヘイムダルの神翼”の八方から、八枚の白光の翼が噴き出している。

（このとき“孤人戦争形態”になっていれば、少しはダメージを与えられたかもしれない。
その代償としてこの国、いやこの世界を丸ごと滅ぼしてしまうだろうが・・・）

ありとあらゆる制限を外し、魔術師“神器王”となる私を見ながら
そう思う。

「消える、アンジェラス・・・！」

守護神の“干渉”と、魔術師の“神秘”を合一しての一撃をお見舞いする。

（だが結果は散々だったな）

私は能力を完全解放した“グングニル”を手にし、“第四聖典”と合成する。

形状は“グングニル”のまま。しかし宿す“力”は言いようのないほどのものとなった。

上下に付いた1mはあるクリスタルの穂が、強く銀の閃光を発する。
右手をアンジェラスのいる上空へと翳し、前方に七つの魔法陣が顕現させる。

無と風嵐のアースガルド、氷雪のニブルヘイム、炎熱のムスペルヘイム、閃光のアルヴヘイム、闇黒のスヴァルトアルヴヘイム、
雷撃のニダヴェリールの紋章だ。

それを立てて並べて展開しているため、それは連なる魔法陣による
一種の砲塔だ。

そしてその魔法陣と術式に“干渉”を上乗せさせる。

「真技……！」

“ 聖典グングニル ” を構える。

「グロリアス
神断
」

その場で回転する。遠心力でさらに勢いをつけるために。そして“ 聖典グングニル ” を魔法陣の砲塔へと投げ放つ。

まずは手前のニダヴェリールの陣に穂先が中り、陣が収縮し“ 聖典グングニル ” へと吸収される。

その現象が続く。そして最後にアースガルドの陣を吸収通過。

「エヴァンジェル
福音……！」

“ 聖典グングニル ” が銀の閃光となって一気に加速。目指すはアンジエラス。

それに気づくアンジエラスだが、何もアクションを起こさない。

「……クス」

アンジエラスは、背の翼から一枚の羽根を手に取り、迫る“ 聖典グングニル ” へと向けた。

そして衝突。それによって起こる衝撃波が一瞬で街を消滅させていく。

こちらは“ 干渉 ” によって現実と切り離されているために影響はない。

だからこそ見えた。“ 聖典グングニル ” が粉々に砕け散るのを。

そのあとは一方的な殺戮だった。数分とせず^{わたしたち}に界律の守護神は全滅

した。

守るべき国は滅び、守護神となってから初めて愛したりエラは死んだ。

唯一の救いはエリザとマリア、少数とはいえ避難出来ていた民が生き残ってくれたことだ。

だがそれを知るのは、このとき召喚されていた私の分身体が“アポ絶対殲滅対象”に堕ち、亡失となったとき。

そして本体の私もまた心が壊れ、完全に塞ぎこんだときだ。

全てが嫌になった。殺し殺され、守り守れず、それが続くと思うと・・・。

その後しばらく壊れていた。命を奪うことにも何も覚えず、ただ淡々と事を為す。

まあ、そこは玉座が気を遣ったのか殺すための契約ではなく、守るための契約が増えた。

癒されていく心。随分と簡単な作りをしていると思った。

そして、マリアが5th・テストメントとして玉座に現れた。目を疑った。何故この子がここにいるのか、と。

訊けば、彼女は私と同様生きている間に守護神となったとのことだ。目的は私のサポートだと。呆れた。守護神となる術を手にし、そして私のために・・・。

ゆえに彼女は“愚者と賢者は紙一重”、なんて二つ名を持った。

そんなこんなで亡失となった私の分身体を斃す。

だが、それで終わったわけじゃない。私はもう幸せを望まないようにした。

だから契約終了後に、その世界に残ろうという考えは捨てた。

それが当たり前だから。異物は残るべきではない。

魂は砕けた信念で満ちている

信じた未来の果てに辿り着いたのは破滅へ続く道

永遠の中をただ独り たった一度の幸福も許せず

死に逃げることもさえも許せない

怨まれるのは当然の罪で、憎まれるのもまた当然の罰

故に理解されようとは思わない、それが唯一の償いなのだから

奪い去った幾多の命の十字架を背負い彷徨い続ける

彼の者はきつと壊れ果てた魂で生きていた

ある正義の味方の在り方を現した言葉に、私の在り方を重ねて生み出した呪文。

暗っ！ あのとときの私は病んでいたなあ……。

意識が覚醒していくのが分かる。どうやら睡眠から覚めるようだ。嫌な記憶だ。何故こんな古いものを見たのか……。決まっている。ベルゼブブの“力”だった“結界”。アレこそアンジェラスの持つ“力”の一つだからだ。

目を開け、涙に濡れていた目を袖で擦り拭う。

「……………はあ」

天井を見るに、ここはアースラ内であるのは間違いない。

どこの部屋かは知らないが、誰かがここまで運んでくれたんだろう。上半身を起こし背伸びする。それと同時にシーツが捲れ、そして見た。

「……………う……………ん……………」

「………………………………………????????????」

両目を擦る。ちょっと待て。状況が解らない。

どうしてフェイトがここにいる？ 何で一緒にベッドで寝ている？ 理解不能理解不能理解不能理解不能。

(何故だ？ フェイトがここで寝るのを誰も止めなかったのか……………?)

普通は止めるはずだ。いくら付き合いが長いとはいえ、これはまずいだろう。

前にもヴィヴィオにお願いされたが、あのときは寝ずに離脱した。だからセーフ。

で、間違いが起こることは絶対はないと言い切れるが、これはアウトだ。

「……………ん……………すう……………」

寝返りをうつつフェイト。さあ、どうしようか。

- 1、起こす。それはそれで気まずいことになりそうだ。
- 2、起きるまで放置。これがベストのようで、どこか違うような・・・。
- 3、誰かを呼んで、フェイト自身の部屋へと連れていく。自殺行為だ。

頭を押さえながら考える。

朝の寝起き直後からこんなことに頭をフル回転する羽目になるとは・・・。

そのままフェイトが起きないように静かにベッドから離脱。選択したのは2だ。

時計を見る。9月20日の午前6時半前。ということは、あの事件終了の翌日だ。

(その割に体調は万全だな)

地上に降りてすぐに眠ってしまったから、身体の回復は終わっているようだ。

そしてある程度部屋を見渡し、

(は?)

何故が存在しているもう一つのベッド。

確かにこの部屋は大きいから二人部屋というのも頷ける。

だが、ベッドが丸々もう一つあるというのはおかしい話だ。

普通は二段ベッドになるはずだからだ。

「ん?」

隣にあるそのベッドのシーツが膨れ上がっている。誰かが寝ている証拠。

そしてベッドとシーツの合間から二つの光。ゆっくりとしゃがみ込み、シーツを捲る。そこに寝ていたのは、

「やつほー、ルシル。どう？ お姫様フェイトの添い寝の感想は？」

デフォルメされた犬がプリントされているパジャマを着て、笑みを浮かべる馬鹿シャルだった。

「君がフェイトをここに連れて来たのか、ん？」

半目で睨む私を見て、シャルは手をヒラヒラと振って、否定でもするのかと思えば、

「うん」

肯定だった。じゃあ何だ、その手の動きは？

「まさかフェイトを勝手に連れて来て寝かしたのか？」

もしそうなら、この後の私がどうなるかそう難しい話じゃない。

私へ向けられる視線が六課内、いや、さらに拡大した範囲で冷めるかもしれない。

「しーっ、あんまり大きな声出すと・・・」

シャルがシーツの中を指差す。他に誰かいるのかと思い、見てみる。そこに寝ていたのは可愛らしい寝顔で、静かに寝息を起しているエ

リオとキヤロ。

「あー、シャル。いくら二人が可愛いからと言って、寝込みを襲っ
・ ・ ・ うぐ ・ ・ ・ ！」

懐かしきアイアンクロー。必死に声を出さないように努める。

頭蓋骨がミシミシと音を立てている気がする。

折角起きたばかりなのに、別の意味でまた眠りに落ちてしまいそう
だ。

「そんなわけないでしょ」

シャルがそう言ってベッドから降りると同時に右手を私の顔から離
す。

「ルシルの看病をしたたフェイトが眠っちゃったから、そのままル
シルのベッドで寝かせたの。」

それとも何、フェイトを椅子に座らせたままで寝かせておけってわ
け？」

「誰もそんな事を言っていない。というか看病？ 何故私に看病が必
要なんだ？」

フェイトが私のベッドで寝ていた理由は解った。

そして置いてある洗面器とタオルの理由もだ。

が、どうしてシャルがたちが寝ていたベッドじゃないのか？

どうしてもう一つベッドがあるのか？ などというツツコミどころ満
載だが、シャルの事だ。

その方が面白いからと返ってくるに違いない。ならもう訊くまい。
返すのも面倒だ。

まあ、それは兎も角、私に看病の必要性があったかどうかが……。
寝ている三人を起こさないために部屋を出る。
ここでシャルが着替えるからということでも10分かかった。待つのはもう慣れた。

「お・ま・た・せ」

白のシャツと水色のワンピースへと着替えて、軽く化粧をしたシャルが出てきた。

化粧道具が何故この部屋にあるのかという疑問は捨てる。

いや、捨てずに考えるべきだった。ああ、私としたことが……

(泣)

で、ここから近い第三レクリエーションルームを目指し、歩きながら小声で話す。

「私もよく知らないけど、ルシルが地上に降りた途端に気を失って倒れたって話。

それはもうすごい高熱だった。私が起きた時、フェイトが泣きついて来たくらいだし」

「そこまで酷かったのか、私は？」

何か無茶をしたらだろうか？ 高熱というのはあまりない副作用だから考えてみる。高熱という副作用が出るようなマネをしたか。

(分からないな……)

結論はそれだ。考えてみても分からないものは分からない。ならそういうものだ、と納得するしかない。

「フエイトが起きたらちゃんとお礼を言わないとダメだよ」

「それくらい分かっている。昨日の私は助けられてばかりだな」

「そこには私ももちろん入っているんでしょ？」

「「……………」」

廊下に流れる静寂。腕をうしろで組み、スキップしているシャルから静かな威圧感。

「…………髪切ったのか…………？」

「……………」

本日二度目のアイアンクロー。どこを間違ってしまったのか解らない。

咄嗟にシャルの髪が短くなったのに気づいて口にしてこの有様だ。

「まあ、そこに気づいたことで許す」

「許すって問題じゃないよな、今の状況は……………」

あまりの痛みで泣きそうだ。だから両手を挙げて降参のポーズ。それを見て、満足そうな笑みを浮かべてシャルが離れていく。その笑みの正体をもう少し早く気づいていれば……………。

「ねえルシル、これからどうする？」

シャルが振り返って、後ろ向きで歩きながら訊いて来た。

「これから・・・か。まずはそうだな。・・・住める家を探さないといけないだろう」

機動六課の試用期間は残り半年。それまでに本契約が終わるという確証もない。

それとペツカートウムとの戦いが終わった時点で六課との協力関係も終止符だ。

このまま残って居座るのもまずいだろう。だから別の住居が必要になつてくる。

地球に戻る、という選択肢もあるが、それはそれで面倒だ。

それに、ここミッドチルダがこの次元世界の主軸となっている。ならここを起点として行動していくのが好ましいと思う。

だからミッドのどこかに簡単な住居でも見つけられればいい。

「お、私とルシルの二人暮らし？」

「・・・はあ、どうしようかなあ・・・？」

これから考えた上での独り言である眩き。
だというのに、

「待てや、コラ」

本日三度目のアイアンクロー。しかも今回は幻の左。超痛い。

何故だ？ 何故、今の私は頭蓋骨が握り潰されようとしている？

「こんな美少女との二人暮らしって聞いて、どうしようかなあ？つてのはどういっ了見た。あ？」

「意味が解らなあ痛たたたたた・・・！！」

美少女つて歳でもなければ、今では義姉弟ということになってるはず。

言っていることがメチャクチャだ、この女・・・。
あゝ今度こそ駄目だ。・・・おゝはゝな畑えゝのおゝゝゝ・・・

「フライハイト、セインテスト」

「はっ！」

意識がアツチ側へ旅立つ前に現実へと引き戻される。
背後から聞こえてきた声の主はシグナムだ。

「あ、シグナム。おはよう」

「ああ。・・・その様子だともう大丈夫なようだなセインテスト」

シグナムに挨拶をするためにシャルのアイアンクローから逃れる。
そして私がシグナムへと振り返ると、シグナムが微妙に複雑な表情になった。

(ん？ なんだ・・・？)

大して気にはせずに挨拶を返す。

「おはようシグナム。見ての通りもう大丈夫だ」

「そ、そうか……」

何故か私から逸らし、一度シャルを見てからシグナムがそう返した。

「セインテスト、話がある。少し付き合ってくれ」

「あ、ああ。第三レクリエーションルームへ向かう途中だったから、そこでいいか？」

「ああ」

そう言っつてシグナムが歩き出し、私たちもそれに続く。

十 十 十 十 十 十 十

ルシルはまだ気づいてない。

そろそろ気づくだろうけど、もう少し様子を見ていよう。

「ああ」

シグナムから話があると聞いて、ルシルが頷いた。

それで私たちが行こうとしていた第三レクリエーションルームへと歩き出す。

さうで、どうやってルシルに告げようかなあ、レヴィヤタンのこと。たぶんルシルは、ペッカートゥムはもう一体残らず斃したと思って

るはず。

そこにレヴィヤタンを連れてきたらどんな反応を見せるだろう？

(少し楽しみだけど、でもどっちかと言うと怖いなあ)

顔を合わせた瞬間バトルつてのも有り得る。というかそうなる。

そこをどう止めて、どう説得するか……。

「そう言えばお前たちはこれからどうするつもりだ？」

シグナムがそう訊いて来た。私はルシルと一度顔を見合わせて、

「えっと、今のところ決まってるのは家探しかな。

いつまでもここに残るのも悪いしね。だから早いうちに決めて出ていこうと……」

「……そうか。それにしても家探しか。……フツ、苦勞するぞ。

シヤマルも我々の住む家探しに苦勞していたしな」

シグナムが意地悪そうな笑みを浮かべて私たちを見る。

そういえばそうだった。あのときのシヤマルは気の毒だった。

まあ、とある友人のおかげで、良い物件が見つかったから良かったんだけどね。

「なんや気になる話をしとるなあ」

「「はやて」「」

「主はやて」

近くの扉が開いてそこから出てきたのははやてだ。
その姿はシグナムと同じ制服姿。

「さっきの出てくっついていうんはホンマなんか？・・・っ」

両手を腰にあてたはやてがジト目で私を見て、そして次にルシルを見て絶句。

ルシルのそれを見て一瞬で理解したみたいだ。それが私の仕業だつて。

「レクリエーションルームに行くんやろ？」

私たちが返す前に、はやてがそう言っつて前を歩きだした。

私たちは顔を見合してそれに続く。

それから少し歩いて、第3レクリエーションルームに入り、近くのイスに座る。

人はいない。ここにいるのは私たちの4人だけだ。

そしてルシルとシグナムは水を取りに行った。起きたばかりで喉が渴いているからだ。

「で、さっきの続きやけど・・・」

水の入ったコップをそれぞれの前に置いて、ルシルとシグナムもイスに座る。

シグナムの話はあとになりそうだ。シグナムもそれでいいのか黙っている。

「ああ・・・ペッカートウムを斃した以上は協力関係も終わってしまった。

それなら同員でもなく隊員でもない私とシャルがここに残るわけにもいかないからな」

ルシルの話を聞いたはやてとシグナムが私を見てくる。

まだレヴィヤタンのことは話していないのか？という視線で。

首を横に振って私は応えた。ルシルは水を飲んでいたせいで気づいていないみたい。

「でもそうすぐに住める家なんて見つからんよ？ それまではどうするん？

海鳴市の家に戻るんか？ フェイトちゃんの話やとミッドに残るって話やけど・・・？」

はやてからの立て続けに繰り返される疑問の嵐。

ルシルは若干引きながらも笑みを浮かべて答えようと口を開く。

(ルシルってフェイトにそんなことを言ってたんだ・・・)

ルシルの口が動くのを見ながらそんなことを考える。

でもそこには感情云々はないだろうな。

どうせミッドがこの次元世界の主軸だからなんだとかの理由だと思っ。

「見つかるまではどこか安いホテルでも借りるよ。な、シャル？」

「・・・う、うん。そうだね」

突然話を振られたから少し詰まったけど、そう答える。

本当はもう少しいたいけど、やっぱり同員じゃないんなら留まるのはやめた方がいい。

「それはもう決定、っていつか確定なんか・・・?」

水を喉に流し込んでからはやてがそう訊いてくる。
なんだろう。はやての様子が少し・・・変?

「確定つてわけじゃ・・・」

「ないよね・・・」

ルシルと顔を見合してそう答える。

さっき少し話してそうしようかと決めただけで、絶対そうしようって
言うほどじゃない。

「・・・シャルちゃん、ルシル君。機動六課の試験運用期間の期
限まであと半年。

シャルちゃんとルシル君のその半年の時間、機動六課わたしたちにくれへんか
な?」

はやてからの申し出。

それはつまり、

「私たちに残ってほしい・・・と?」

そういうことだ。

「うん、そや。スバル、ティアナ、エリオ、キャロ・・・フオワ
ード陣。

シャルちゃんとルシル君はあの子たちに良い影響を与えて思っ
てる。

これまで通りなのはちゃんやヴィータと一緒に教導を・・・って、思ってるんやけど・・・」

「んー、そう言ってくれるのは正直嬉しいけど・・・いいの？」

「ええよ。って、私がお願いしてるんやし、シャルちゃんが気にするんは変や」

はやてが苦笑しながら右手を差し出してくる。

「・・・えつと・・・ルシル」

契約中行動の決定権は3rdの私じゃなくて4thのルシルになる。てる。

まあ、そこに不満はないから別にいいけど。

「そうだな・・・。はやて」

「ん？」

「私とシャルは常にここに留まることはおそらく出来ない」

「それは・・・あれやね、二年前に管理局を辞めたわけの・・・」

「そうだ。そんな私たちに残ってほしいなんて・・・」

「それでもや」

はやての笑みも差し出された右手も戻らない。

見ればシグナムははやての手を取って視線を私たちに向けてくる。

「ま、そのときはシャルを置いていくからいいか。
はやて、これからもよろしく頼む。そしてシグナムも」

ルシルが何やらすごいことを言いつつはやてと握手を交わして、今度はシグナムにも右手を差し出した。

シグナムがそれを見て、よく見ないと分からない程度の微笑を浮かべて、ルシルの手を取った。

すると今度は私に向けてはやてとシグナムが右手を差し出してきて、

「これからもよろしくね、はやて、シグナム」

「うん！」

「ああ」

順に手を取って握手。よかった。まだ一緒にいられる。

（感謝だよルシル）

隣に座るルシルに視線を移す。

でもルシルは何か考え事をしているみたい。

「それじゃあクロノ君たちには私が話を通しとくなあ」

そう言うてはやてがレクリエーションルームから出ていった。
残された私たちはコップに残った水を飲み干して、

「……でシグナム、私に話とは？」

ルシルは向かいに座るシグナムに訊ねる。
はやてと会う前はその話をするためにここに来たんだしね。

「ああ。……騎士ゼスト・グランガイツのことだ」

その名前が出て、この場の雰囲気为重くなるのが分かる。

「ゼストさんが……なんだ？」

「亡くなった。いや、私が……斬った」

「「っ!!」」

シグナムが少し溜めて、そして口にした。斬った。つまりは殺した、と。

「……シグナム。ゼストさんの最期はどうだった？
騎士としての、ゼストさんの納得のいく終わりを迎えられただろうか？」

テーブルに両肘をついて、組んだ手の甲の上に顎を乗せたルシル。
シグナムも腕を組んで、ルシルの目をしっかりと見ながら、

「私には決められることではないが、だがそう思いたい。
騎士ゼストは、戦いの中でその命の幕を引くことを選んだ。

そしてその相手が私だった。私は彼に伝えることが出来のかは分からないが……」

そうルシルに答えた。

「・・・シグナムのような騎士と戦い、そして逝けたのなら満足だっただろう」

「だといいんだが・・・。これがお前に伝えておきたかったことだ。

・・・それでは私もこれで失礼する」

そう言ってシグナムが立ち上がって、レクリエーションルームから出ていった。

残ったのは私とルシルの二人。

「・・・本当にいいの、ルシル。ここに残っても・・・」

「いいんじゃないか？ もうしばらくは楽しもう。この時間を」

「そっか。うん、そうだね。そんじゃ、まずは・・・」

レヴィヤタンのところに行かないとだねえ・・・ハア・・・。

『ル〜シル〜・・・どこ〜?』

「「ひっ・・・!」「」

この後起きるかもしれないルシルとレヴィヤタンのバトルに気を重くしていると、目の前に現れたモニターに映る幽鬼のようなフェイト。

寝ぼけているかと思いたい。思わせて。思おう。決定。

このあとフェイトに捕まったルシル。次に会ったときはゲツソリしてた。

散々お説教をくらったらしい。ご愁傷さまあ

追記。私がルシルにしたイタズラ、お化粧。

綺麗なお化粧したルシルの目撃者続出。男女関係なく赤面する。

そして、それがバレた私も散々ルシルにお説教をくらった。

そのときのルシルはそれは綺麗な鬼でした・・・まる（泣）

§これからの時間を大切に§

Last Episode：A・R・I・G・A・T・O（後書き）

はい、始まりました。最後のエピソード？
すべてに決着が付きませす。つけさせませす。

さて、いつかのあとがきで計五部作構成と言っておきながら、何で4thで終わり？

えー、一応真Lastである5thのエピソードの大まかな流れと結末もすでに出来てませす。

メインタイトルも決定済み。

というか先に4thと5thを組んでからこの小説を始めませすので。

なのに何で4thで終わりなの？

それはこの4thのエンディングを皆さんに読んでいただいて、その反応から続行か完結かを決めたいと思っせているためませす。

この終わり方でいいんでない、という反応が多ければこれで完結。

続行希望つす、という反応が多ければ、Lastから4thへと変わることにませす。

それでは、次から予告通りにバカ話へと突入ませす。

主な被害者は……やはり

ルシルの魔術

グロリアス・エヴァンジェル

神断福音

ルシルの誇る真技の一つ。その破壊力は絶大で、聖王のゆりかごの2/3以上は消滅させることができる。

ビフレスト絶対防衛線戦で、侵攻してきた連合主力殲滅に活躍。

第一級の権限解凍、神器王形態で使用可となる。

土石系を除いた魔力で構成されたアースガルドと各同盟世界の魔法陣で砲塔をつくり、完全開放した神槍グングニルを弾丸として射出する対軍攻性術式。

シャルシルとレヴィのぶらり紋様破壊の旅 in 次元世界

はやてやシグナムと話し、少し怖い表情を浮かべたフェイトから散々説教を受けた。

正直心は折れそうだ。いや、気づいていないだけでもう折れているかもしれない。

「はあ……もう7時半か……」

最初は真剣な表情で心配してくれて、それは次第と愚痴となり、そして説教という三段変形。

しかも口頭ではなく念話というのがミソだ。

エリオとキヤロを起こさないようにするためだろうが、それが私にとっては苦痛でしかない。

声のポリウムもさることながら、聴覚をシャットアウト出来ないというのが痛かった。

「最初の心配のところは純粹に嬉しくもあつたが……はあ……」

それにしてもどこかフェイトの様子がおかしかった。

はやてやシグナムよりハツキリと……。

何かあるのか？と訊いても「だ、大丈夫」って……何かあるだろ、あの様子だと。

まあ、私に言うような事じゃないのだろう。

私に関係しているのならきつと話してくれるはずだ。

ようやくフェイトから解放され、アースラの廊下を朝食を取るために歩く。

フェイトは今なお眠っているエリオとキャロと一緒に二度寝に入るとのことだった。

何故そんなにのんびり出来るのかと言うと、クロノたち六課後見人から、三日間の休養期間を六課はもらったらしい。

どおりでこんな時間でも起きていない隊員がいるわけだ。

そして廊下を歩く中、初めは気にしていなかったが、そう数は多くなかったとはいえ、すれ違う男女関係ない隊員全員が赤面していることに初めておかしく思った。

さすがにこれは何かあると思い、目の前にあるトイレへと駆け込んで鏡を見る。

そこに映るのは、

「……………フ……………フ……………クフフフフフ……………」

それはもう綺麗とも言えるほどの化粧を施された私の顔。

自分で綺麗とか言ってる悲しくなるが、それ以前にあのド阿呆……………。

「やってくれた……………あの女……………」

全力で顔を洗う。ファンデーションにアイラインに口紅……………。
くそっ、本格的に化粧しやがって。

何故はやてたちが私から顔を逸らし、すれ違った隊員たちが赤面する理由がやっと解った。

「すうう……………」シャルロットEEEEEEEEッ!!!!!!」

『うおっ！?!? なんだあ!?!?!?』

リンクと念話によるダブル音響攻撃。
するとシャルから驚きの声が返ってきた。

『義姉さん……あとで話があるから』

『えつと……お姉ちゃんにはないかな、あはは……』

『……逃げたらピーのピーで、プーのペーでポー、ついでにパーだ』

『じめんなさい』

即謝罪。シャルの撃墜を確認。

「ふう、まったく……。私の顔を落書き帳とでも思っているのか？」

化粧も力強く洗ったことで完全に落ちた。

女性ならもつと別の化粧品などで落とすのだろうが、男である私は知ったことが。

ハンカチで濡れた顔を吹き、一息つく。

「さあ、行こうか」

それじゃ説教へと参りますか。

十
十
十
十
十
十
十

「うう、酷い。酷いよ。ルシルに汚されたよお・・・おえ」

「そんなん言つてもあれはシャルちゃんの自業自得やで？」

シャルさんが涙目でそう話して、はやてちゃんがため息。

「はやてちゃん、シャルさん、どうぞですー！」

「ありがとな、リン！」

「リン・・・ありがとう」

艦長室に備えられたソファに座るはやてちゃんとシャルさんにお茶を出す。

シャルさんは優しく撫でてくれました。気持ちよかったですー

さて、どうしてシャルさんが頂垂れているのかと言つと、それはさつきの朝食での出来事でした。

ルシルさんはシャルさんのイタズラの所為で大変お怒りで、散々お説教をした後、

「さあ、義姉さん。義弟の怒りの籠もった手料理、^{アイ}食べてください」

「.....」

私たちの目の前に出された料理。それはルシルさんが厨房を借りて作ったものです。

そしてその料理のほとんどからある野菜の匂いがするです。

「トマトのサンドウィッチ。ポテトサラダ、トマト風味。トマト100%ジュース。」

デザートにはトマトプリン。さあ、どうぞー！」

オールトマトのフルコース。

見ればシャルさんは涙目になってルシルさんを上目づかいで見ます。

男の人が見れば一発で落とされそうな表情ですが、

「あまいな。君を相手に落とされると思ったか？」

「チツ。……酷いよルシル。トラウマなのに……」

「こっちのセリフだ。化粧された顔のまま目撃者続出。こっちがトラウマになるわっ。」

「というか朝食だからということでの妥協だ。ありがたく思え」

結局シャルさんはトマトフルコースを食べました。そして冒頭に戻ります。

「で、どないするん？ レヴィヤタンのこと……」

「うん。これから会いに行こうと思う。ルシルを連れて。」

だからルーテシアたちの入院してる病院へ入る許可をほしいんだ」

「ん。そこんところは任しといて」

昨日確保した召喚士ルーテシア・アルピーノ。

ガジェットを掃討し終えたと同時に気を失って、今は管理局直系の

病院に検査入院してるです。
そしてペツカートウムの一人レヴィヤタンもそこにいます。

「あーそれとバトルはあかん？ 病院やしなあ」

「ん、努力はするよ」

「努力やのうて絶対な」

「りよーかーい」

そうしてシャルさんとルシルさんはアースラを後にしました。

十 十 十 十 十 十 十

「……第三の力、第四の力……」

「あ……」

病院の庭先の木陰でルーテシアの髪を梳いていると、第三の力と第四の力が来た。
第三の力は笑みを浮かべながら歩いてくるけど、第四の力は目を見開いてわたしを見る。

「来たよ、レヴィヤタン。そしてこんにちは、ルーテシア」

「な……どういうことだ……これは……。シャル！」

「っ！」

第四の力が怒鳴った所為でルーテシアが肩を竦めてた。
だから私は第四の力の前まで近づいて、ぬいぐるみで殴打。

「ルーテシアが・・・怯えてる・・・」

「・・・あーっと、それはすまない・・・ルーテシア、でいいかな？

はじめまして、ルシリオン・セインテスト・フォン・フライハイトだ」

「・・・ルーテシア・アルピーノ」

ルーテシアと第四の力が握手しているのを見ながら、第三の力に声をかける。

ルーテシアの自己紹介を聞いて、目を見開いた第四の力。

「アルピーノ・・・」って小さく呟いている。何かあるのかな・・・？

「今日は・・・何しに来たの？・・・」

それよりまずは目的が何かを知らないといけない。

第三の力と違って、第四の力は今のところはきつと敵だ。

「あなたが目的としていたことを聞きに来ただけだ」

「そう・・・」

「いつの間にそう気楽に話せるようになったか教えてもらいたいも

のだな」

第四くろいろの力はルーテシアに気づかれぬ程度に、わたしに向けて威圧感を放ってくる。

ルーテシアに配慮していることだけは感謝しよう。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

「っ！ シャル！ 何をするつも」

「ノリ・メ・タンゲレ私に触れぬ」

それは一瞬だった。

突然現れた赤い布が生きてるみたいに第四くろいろの力に巻きついた。

足首から口元まで縛られた第四くろいろの力がバランスを崩して転倒した。

「それじゃあ話してくれる？」

「………うん、わたしの知っていること……全部話す……」

それが約束だ。ルーテシアやアギトたちと一緒にいるための……。だから話そうと思う。わたしたち大罪ベッカートゥムの目的だったことを。

さっきまでのように木陰に座る。本当はルーテシアには聞かれたくない話。

だけど、嘘をついたままじゃ一緒にいる資格なんてきつとない。けどその前に、

「第三サントの力……」

「ん？」

「アレ……放っておいていいの？……」

「いいいいの」

わたしたちの視線の先、赤い布でグルグル巻きにされた第四くわいろの力が
転がったまま。

あの赤い布に巻かれると、“力”が出せないみたいだ。

「で、この次元世界で何をしようとしていたの？」

「……うん……わたしたちは」

話す。大罪ベックカートゥムが何をしようとしていたのかを。

正直わたしの知る事はそんなに多くなかったりする。

初めからどうでもよかったから。この次元世界と呼ばれるものが滅
ぼうがどうだろうが。

けど今は違う。守りたい。大好きなルーテシアたちの生きるこの世
界を。

だから知りうる限りのことを第三しんごうの力と第四よんごうの力に話した。

「レヴィ……今の本当？」

「……ごめん……ルーテシア……。今まで騙して……。ごめ
んなさい……」。

でも今は違う……。わたしは……。この世界を守る……。何があ
っても……」

ルーテシアの両手を取って握る。

信じてくれなくても、たとえ嫌われてしまっても、わたしは守るよ。

「……じゃあ、これからもよろしくね、レヴィ」

「……うん！」

嬉しい。ルーテシアに会えてよかった。
だから、

「第三の力、第四の力……絶対に負けないで……」

「もちろん！」

「むーむー！」

転がってる第四の力が激しく動く。

わたしが第三の力に視線を移すと、

「んーなになに。それは当然。だから安心しろレヴィヤタン。

それはそうと今日は一段と素敵でとても綺麗ですねシャルさん。だ
つて。

フフ、そんな素敵でとても綺麗だなんて……嬉しい！」

「むうううー……！！！」

違うみたいだ。第四の力の目が鋭くなつて猛抗議を訴えてる。

何か歴代の許されざる嫉妬が知ってる第三の力、や第四の力と全然
違う。

「「っ!」」

第三の力と第四の力が息を呑むのが分かった。それも当然かもしれない。界律に干渉するなんて普通は出来ないから。

「ねえ、それってさっき話してくれた目的に関わってくるんじゃないの?」

それがあると結局は果たされることになる。

「うん・・・それがあると・・・結構危険・・・」

「じ、じゃあそれを破壊しないと、目的が果たされるんじゃないの!?!」

「・・・・・・・・・・言われてみれば」

よく考えればそうだ。

わたしたちの目的。紋様しほへんを維持して、そして一体でもいいから“罪”が生き残る。

そして、そこから“主”の目的へと繋がっていく。

この世界を守るなら、紋様を破壊して、そして尚且つ“罪”が全滅しないといけない。

そこにはもちろん許わたしされざる嫉妬も含まれる。

「おーーーーーい!」

ツッコミというのを初めて見た。

「……行こう……紋様を壊しに……」

立ち上がってルーテシアを、そして第三の力と第四の力を見る。
この世界のために紋様を壊して、世界を守る。

「むうむう……」

「えー、そんなことして本当にいいのか？」

初めて本当のことを第三の力が言ったのか、第四の力が何度も頷く。
第四の力も結構苦労しているんだ……。

「いい……その代わり……お願いがある……」

これを言っておかないと、わたしは消えることになる。

「この世界を守るためには……わたしも消える必要が……ある……」

「っ！レ、レヴィ！？」

「どっぴつことっ」

驚くルーテシアと疑問顔になる第三の力。

「紋様を破壊しても……“罪”が残れば何度でも復活する……はず。」

だから……わたしも……消えないと……ダメ……」

「うそ……」

「だから第四の力にお願い……わたしが消えないように……してほしい……」

「っ」

この場の空気が一気に重くなる。その原因は第四の力で間違いない。第三の力が第四の力に何を言われたのか分からないけど、赤い布が解けて消えていった。

「ふう……後で覚えてるよ、シャル。さて、レヴィヤタン。」

今この場で君から力づくで紋様のある場所を訊き、私たちが壊せると思うが……。

それ以前に紋様を破壊せずとも、ペッカートウムの生き残りである君を斃せば決着だ。

こんなにも簡単な解決法があるのに、何故回りくどいそんな方法を取る必要がある？」

「それは……」

第四の力の言うとおりだ。この世界を守るのなら、わたしが消えるだけで果たされる。でも嫌だ。それは嫌なんだ。だってまだいたいよ。ずっといたいんだ。

「レヴィはわたしが守る」

「ルー……テシア……？」

わたしと第四くわいろの力ちからの間に立つルーテシア。
わたしには背中を見せているから表情は見えない。

「ルーテシア、君は知った。私たちの正体とその在り方を。
レヴィヤタンがいなくなればそれだけで世界は守れる。
君の家族も、友達もみんな守れる。それなのに」

「レヴィも家族だ!!」

ルーテシアが叫んだ。わたしのことも家族だって……そう叫んだ。

「レヴィは……わたしの友達。そして大切な家族……。
だから守る。だからレヴィをわたしから奪おうとするなら……」

「……ルシル。そうやって子供を試すのは感心しないよ……」

第三さんの力ちからが第四よんの力ちからの肩を掴む。
すると第四よんの力ちからから威圧感が薄らいで、そして消えた。

「……まったく。本当にペッカートウムなのか信じられないな。
いいだろう。ルーテシアの強い心に誓おう。レヴィヤタンをどうにかして残す、と」

緊張か、それともやっぱり怖かったのか、ルーテシアが急に座り込んだ。
心配してすぐに前に回り込んで顔を見る。

「よかった。これからも一緒だよ」

少し弱いルータシアの微笑み。

「ありがとう……ルータシア……」

こうしてわたしと第三しんごうの力、第四よんごうの力の三人で紋様破壊の旅に出ることになった。

十 十 十 十 十 十 十 十

9月20日 PM:13:10 管理外無人世界

アースラのはやてに許可（ルシルはなのはとフェイトに土下座して）を取り、今私たちはミッドから遠く離れた無人世界にきています。目的は界律干渉の紋様を破壊すること。

レヴィヤタンの“位相転移”で、それはもう一瞬で目的の世界へ到着です。

「で、レヴィヤタン。この世界の場合はどこにあるの？」

全てがジャングルとも言えるこんな世界、早々に立ち去りたい。

こういう場所に限って、何かやばいのが出てくるんだから。

「……もう少し」

そしてテクテク歩いて、ようやくジャングルから抜けて草原に出ると、

「ほらあ、やっぱり出てきた!!」

アウカサウルスの群れが現れた

初代ポケモン 野生ポケモン戦BGMスタート

「おお、恐竜だな。初めて生で見た。感動だ……!」

目を輝かせているルシル。

そんなことを言っている間にも、その恐竜どもが餌である私たちを狙って向かってくる。

・行動コマンド

たたかう

バッグ

にげる

しぬ

何、この上の行動コマンド!!??

っていうか しぬ !? 死ぬのもコマンドで決定!?

「に・げ・る・の!!」

わけのわからないコマンドだけど にげる を選択。

「カメラ持って来ればよかったなあ……」

もう好きにすればいいよ、ルシル。

さて、何故私たちは戦わずに逃げるのかというと、この世界は不可

侵らしく、私とルシル、レヴィヤタンは異物扱いで魔術が使えない。だから、

「地球でもないのに恐竜って、まさに世界の神秘」

「知るかああああー！ー！ー！ー！ー！」

こんな状況に陥ってしまったている。

「あれより・・・白天王の方が・・・もっとかっこいい・・・。
第三しゅういろうの力と第四くわいろうの力も・・・そう思う？」

「うん、今は激しくどうでもいい！！！」

のんびり構えているレヴィヤタンを脇に抱えて猛ダッシュ。
ルシルも私に続いてダッシュ。そして容易く追い抜いていく。

「って、ちょっと！！ こっちはレヴィヤタンを抱えて走ってるんだけど！」

こういうときは男のルシルが抱えてよ！！！」

背後に轟く恐竜の群れの足音を聞きながら、ルシルへと怒鳴る。
するとルシルが私に振り向いて、

「男女平等」

親指を立てて、そう言って走り去るルシル。

「アハ・・・ハハハハ・・・フフフフ・・・」

「第三しるごの力……?」

「上等だコラアアア!!!」

先を行くルシルをぶちのめすために歩法“閃駆”を使おうとする。だけど、

「……レヴィヤタン」

「?????」

レヴィヤタンの体重が邪魔だった。

どうしよう。ここに捨てていこうかな。

ダメだ。レヴィヤタンがいないと紋様が分からないし、帰れない。

「もう……!!! 何なのよおおおお!!!」

それから10分くらい全力ダッシュして、恐竜の群れを撒いた。そのあともちろんルシルをぶちのめした。あゝスッキリした

十 十 十 十 十 十 十

「痛ったあ……。理不尽だ」

いきなり腹にレヴィヤタンを投げつけられ悶絶。

その後プロレス技のコンボをくらって一度気を失ってしまった。

「もう。ちゃんとレヴィヤタンに謝っておきなよ」

「意味がわからん！　っていつか謝るのはお前だ！！」

「・・・謝罪要求」

シャルがあまりにも理不尽な事を言うからツッコミを入れてしまった。

被害者2のレヴィヤタンもシャルに謝罪を求めている。

「・・・ごめんね、レヴィヤタン。ついでにルシルも」

「ついで！？　それって謝ってな　」

「「「っ！」「」」

オルニトレステスの群れが現れた

「ルシルが大声を出すからああ！！」

「その原因はお前だ！！」

レヴィヤタンを横にして抱いて再度全力疾走。

外界に影響を与える魔術が使えないのは正直痛い、魔力を使えないわけじゃないのが唯一の救いだ。

魔力を全身に巡らし、身体能力を向上させる。

・行動コマンド

たたかう

どつぐ

にげる

しぬ

いきなり頭の中に浮かんだ行動コマンドとやら。しぬって、おい。

何となく試しに たたかう を選択。すると、

ルシルの特攻弾頭

ルシルの特攻爆弾

ルシルの特攻地雷

ルシルの犠牲

「意味がわからん！！ 特攻ってナメてるのか！ 犠牲って食われるってか！」

「っ！？ いきなり・・・どうしたの・・・？」

突然の怒声の所為でレヴィヤタンを驚かせてしまった。

どれを選択しても死ぬしかないって、私の命はそんなに軽いのか！？

ルシルの特攻弾頭

ルシルの特攻爆弾

ルシルの特攻地雷

ルシルの犠牲

「は！？ 待て、私は何も選択していないぞ！？」

いきなり私の犠牲が選択されたことに驚きと怒りを覚えた。

「ルシル・・・あなたのことは・・・忘れないから！！！」

「シャル」

そんなふざけたセリフが聞こえ、シャルの方へと視線を移すと同時に顔面へ迫る靴底。

それをまともに受け仰け反る。それと同時に抱えていたレヴィヤタンを離す。

「ぐは・・・！」

後頭部から地面に転倒。地面を少し転がり、そして見た。

レヴィヤタンを抱え、嘔泣きしながらダッシュで逃げるシャルを。

「あああああああああ！！！！！！」

迫るオルニトレステスの群れを肉弾戦で数を減らし、向こうが距離を取ったところで離脱。

そこから全力でシャルとレヴィヤタンの後を追う。

何としてもシャルに土下座させるために。

「お、生きて帰ってこれたんだ。信じてたよ、ルシル！」

ようやく追いつき、私の姿に気づいたシャルが両腕を広げて、それはもう可愛らしい笑顔で抱きつこうとしてくる。

白々しい。さっきは私を囮にして逃げたくせに。

迫ってくるシャルをヒラリと回避。そのままシャルの足を引っ掛けてコケさせた。

「いだっ！ 何するの！？」

「こちらのセリフだポケっ！」

ここまで酷い目に遭うのはなかなかない。

「第三の力、第四の力……着いた」

大口論の出鼻を挫くようにレヴィヤタンが私の袖を引っ張った。
そしてレヴィヤタンが指さす場所へと視線を移すと、

それは大きなティラノサウルスが現れた

初代ポケモン ジムリーダー戦BGMスタート

いい加減にしてくれ。

最後の最後でティラノ（巨大）って、神はどれほどの試練を与えれば気が済むのか……。

：行動コマンド

たたかう

たたかう

たたかう

たたかう

逃げれないってか。

「ああもう。やってやろうじゃない」

「ああ。魔術がなくとも恐竜相手に後れを」

M o r s c e r t a / 死は確実

私とシャルの背後から巨大ティラノサウルスへと向かうすみれ色の閃光。

「……………」

あれえ？ 何故レヴィヤタンは“力”を使っているのかなあ？
ここに来た時には使えないとかって言っていたはずなんだが……。

そしてレヴィヤタンの放った砲撃の直撃を受けたティラノが吹き飛んで空の星となった。

「……………ベッカートウムレヴィヤタン大罪が許されざる嫉妬がここに命ず……」

未だに固まってしまうている私とシャルを置いて事を進めるレヴィヤタン。

何故かすごく惨めな気持ちになってきた。別に泣いてないぞ。

レヴィヤタンの言葉に応えるかのように現れる紋様。

幾何学模様のそれが淡く輝き、そしてレヴィヤタンが止めと言わんばかりに砕いた。

「……………これで……………一つ目」

一息ついたレヴィヤタン。そう、これでやっと一つ目だ。
ここ最近心が折れそうな事柄が起きてばかりな気がする。

「ねえ、ルシル」

「なんだ？」

「いろいろごめんね」

「気にするな」

「あと・・・6個」

折れた。今確実に心が折れた。

それはもうポツキリと綺麗な音を立てて折れた。

「それじゃ・・・転移出来る場所まで・・・戻らないと・・・」

ドサツと音がしたかと思えばシャルが後ろで倒れていた。

「もう・・・やー・・・」

気持ちは痛いほど解る。

「今日中に・・・終わらせないと・・・」

それから私たちはこの世界の入り口を目指して走り出す。

カルカロドントサウルス×4が現れた

「出たあああ！ー！」

「レヴィヤタン！ 攻撃攻撃！！」

「・・・はふう」

背負っているレヴィヤタンが気の抜けた声を出しながら砲撃を撃つて、カルカロドントサウルスを散らした。

ゴジラサウルスの群れが現れた

「いやああああ!!」

「シャル！ モ ハンの腕前はアリサ以上だったろ！ 何とか出来ないのか!？」

「ムリーーーー!! っていうリアルとバーチャルじゃ全然ちがーーーー!!」

「追いつかれる……」

「何とかしろーーーー!!」

レヴィヤタンが迫るゴジラサウルスの足元に細すぎる砲撃を撃って、散らした。

どうしてあんなに小さいのか訊いてみると、「わたしも……目をつけられ始めた」とのことだ。

スゼチユアノサウルスが現れた

「大き過ぎいいいい!! っていうか肉食のエンカウント率が高過ぎるーーーー!!」

「そう言えば草食とは一度も会ってないな」

「やっぱり……白天王の方が……かっこいい」

「どっちでもいいわ!！」

そんなこんなで何とかこの世界から脱出。
もう二度とこの世界に来るものかと思った。

十 十 十 十 十 十 十

9月21日 AM 8:11 ミッドチルダ南部アルトセイム地方

「も・・・もう・・・いやあ・・・」

「気をしっかり保て、シャル。もうこれで終わりだ・・・」

そう、ようやく残り一つとなった。

ここに来るまでに私とルシルが一体どれほどの精神的な死を体験したか・・・。

そう、例えば・・・

ある管理外世界

「 * ÷ 「

耳長裸族（狩人）×6が現れた

この世界じゃ魔術は簡単なものなら使える。

でも、だからと言ってこの世界の住民を傷つけたら確実にアウトだ。どんなペナルティを負うことになるか分からない。

「ここは任せる」

そう言っつてルシルが私たちの前に躍り出て、

「#@? ¥」

よく聞き取れない言葉を口にした。

さすがだ。ルシルには彼らが何て言っているのか解って、その上で返すなんて。

「@ \$*」

「* ¥」

そこで一度会話が途切れて、沈黙が流れる。

どうしたのかな？つて思っつてルシルの声をかけようとしたら、耳長裸族の方々が剣や槍や弓矢を構えてきた。

「なんで!？」

「やっぱり適当では駄目だったか・・・残念だ」

ルシルがそんなことを言っつて逃げ出した。
つていうか・・・、

「お前の頭の中が残念だ!!」

尊敬して損も損、大損だ。

「私の尊敬の念を返せ、ルシル!!」

全力ダッシュのおかげで何とか逃げ切つて、無事に紋様を破壊出来ました。

これからは、ルシルを尊敬しないようにしようと思った、まる。

だとか……。そういえばこんなことも……

第23管理世界エルドラド

「こんな街中にもベルフェゴールは来て、紋様を描いていったわけ？」

私たちの目の前にあるのは賑やかな街並み。人が溢れていて活気づいている良い場所だ。

「……こつち」

レヴィヤタンの言うがままについていく中、ある店で信じられないものを見た。

「これって、ベルフェゴール……だよね……?」

間違いなくそこに張ってあるのはベルフェゴールの写真。

「ん？ …… バエルじゃなく、ベルフェゴールというのが本当の名なのか……」

ルシルがそんなことを言いながら横からその写真を見る。

無表情なのに、どこか満足そうにピースサインを決めているベルフェゴールの写真だ。

その写真の下の空きスペースにはこう書かれている。

超得盛りチャーハン（20人前）を8分で完食

「……………」

何をやっているのか……。

紋様まで歩く中、その他にもベルフェゴールに関連するようなものがあった。

ダンス大会に飛び入り参加で優勝

ミス・エルドラド特別賞

市民歌合戦優勝

「……………」

ベルフェゴール……お前は一体何をしようとしていたの……？

本当に謎ばかり残して逝ってしまったね……。

出合い方が違えば、たぶんそれなりの知り合いになれたかも……。

で、その世界の紋様は比較的楽に破壊出来た。

そんなこんなで、ようやくここミッドチルダの紋様だけとなった。
レヴィヤタンは全く疲労の色が見えないのに、ルシルはそれはもう
酷い顔色だ。

たぶん私も似たようなものだ。あんだけ走って叫んで……。

「あとは……ここだけ……」

着いたのは自然が多く残る空間。

そう言えば、アルトセイムってフェイトの故郷だったっけ……。

「……ベッカートゥムレヴィヤタン大罪が許されざる嫉妬がここに命ず……」

そう囁いたレヴィヤタンの足元に7つ目の紋様が浮かび上がる。

「っ……神秘が……強い……」

吹き荒れる神秘の奔流に、レヴィヤタンが吹き飛ばされそうになりながらも必死にスカート裾を押さえながら踏ん張っている。

私も全力で捲れあがろうとしてるスカートを押さえ、ルシルの方を見る。

するとルシルは、私には無関心と言わんばかりに横を通り過ぎていく。

「べ、別にいいけど……何かム力つく……」

そのままレヴィヤタンの近くまで行って、“グングニル”を手にして、

「これで……終わりだ……!」

突き刺す。パキンって音がして紋様が散っていく。
吹き荒れる神秘の奔流も治まっていく。

「……終わった」

時間にすれば20時間ちよいだっただけど、それ以上の時間を過ごした気がする。

「さて、あとはレヴィヤタンをどうするかだが……」

ルシルがレヴィヤタンに視線を向ける。

レヴィヤタンはその視線を真っ向から受け止めて、

「……難しい……?」

「いや……。お前の話だと、そのぬいぐるみこそが“嫉妬”の本体なんだろう?」

「……うん……そう」

最初、レヴィヤタンからその話を聞いた時は驚いたけど、今までのレヴィヤタンの行動を見れば納得するしかない。

戦闘でも転移でも、必ずレヴィヤタンが手にするクジラのぬいぐるみから強力な神秘を感じ取ることが出来る。

「つまりはぬいぐるみほんたいを破壊し、尚且つお前の人格とその身体を保つようにすればいいわけだ」

「……で、どうするわけ?」

紋様の復活を阻止するには“罪”が消えるのが絶対条件。
だから嫉妬の“罪”の本体であるぬいぐるみが消えればそれでオーケー。

でも本体が消えたら、それに追隨するレヴィヤタンも一緒に消えることになる。

「・・・ルーテシアとレヴィヤタンが契約をすればいい。
レヴィヤタンが消えないように、この世界に留まれるように、ルーテシアを楔とする」

「・・・そんなことって本当に出来るの？」

ルシルのように“存命の概念”がないんだよ、レヴィヤタンには・・・」

ルシルはたとえ本契約が終わっても残ることが出来る。

ルシルやマリアのように生きたままテストメント守護神になった二人だけの裏技のようなものだ。

当然、すでに死んで肉体が無く、魂も玉座に就いた私には出来ないことだ。

だから私は残ることは出来ない。ま、仕方ないけどね。

「確かに。だがそこにもう一手打つ」

「「?????」」

疲れ切った顔で微笑を浮かべるルシル。

そして私たちは、ルーテシアのいる病院へと向かった。

十 十 十 十 十 十 十

第四の力くろいさに任せた以上は信じる。

「レヴィイ、おかえり」

「ん・・・ただいま・・・ルーテシア」

病室のベッドで横になっているルーテシアにそう返す。

この何気ないやり取りがすごく嬉しくて、すごく楽しい。

「ルーテシア、レヴィヤタンをこの世界に残す方法を提示する。

それを受けるか否かは君の

「何でもする。・・・レヴィイが、残ることが出来るなら・・・」

「・・・覚悟あり、か。・・・レヴィヤタン、こっちへ」

第四の力くろいさの言うとおりにルーテシアのいるベッドまで近づく。

我が手に携えしは確かなる幻想

そう告げた第四の力くろいさの右手に黄金の瓶が、左手には虹色の珠が一つ現れた。

そしてベッドの横にある小さな木製の台の上に小さな黄金のコップが現れた。

「さてと、久々にやってみようか・・・」

第四の力がその黄金のコップに、黄金の瓶の中身を注いでいく。コップに注がれた液体は、透明な水のようなものだ。

「マン・ウル・フェオ・チュール・イング・シゲル・ベオーク」

病室の床に十字架と剣の紋様が描かれた。

そして、虹色の珠から淡い虹色の光が溢れていく。

それはとても強い神秘。たぶん“罪”以上の神秘だ。

「二人とも、これを飲むんだ」

わたしとルーテシアそれぞれに黄金のコップを渡す。お互い顔を一度見合して、そして一気に飲み込む。

「……おいしい」

何かに例えることが出来ないほどの美味しさ。

「よし。レヴィヤタン、ぬいぐるみを今から破壊する。

おそらく壊れたと同時に前も消えていくだろう。

だが、その前にこの宝玉を呑み込み、そしてルーテシアと契約を交わすんだ。

手っ取り早い方法としては口づけ、キスだ」

第四の力がわたしの持っていたぬいぐるみを手に取る。

「それじゃあ始めるが、心の準備はいいか、レヴィヤタン、ルーテシア」

「うん」

同時に頷く。わたしは虹色の珠を手にとって、いつでも呑み込める準備をする。

ルーテシアはすぐにでもわたしと契約キスが出来るようにすぐ横に移動した。

そして、

「いくぞ……！」

第四くわいの力が“グングニル”っていう槍を左手に携えて、

「貫け、神槍グングニル……！」

その直後、“嫉妬”の本体だったぬいぐるみが光の粒子となって散っていく。

それを見てすぐに虹色の珠を呑み込んで、

「んっ」

ルーテシアと契約キスを交わす。

わたしの中で荒れ狂う神秘の奔流。正直苦しくて、暴れたいくらい辛い。

でも、これはわたしが存在するのに必要な通過点。

意識というものが落ちていく感覚。

そして、

「……おかえり、レヴィ」

次に目を覚ましたとき、わたしは、この世界に残ることが出来たと理解した。

「うん・・・ただいま・・・ルーテシア」

シャルシルとレヴィのぶらり紋様破壊の旅 i n 次元世界 (後書き)

はい、レヴィが生き残るといふシナリオになってしまったことで急遽組んだ今回、どうでしたでしょうか。

そして今回で、私にギャグの才能が無いということがハッキリ解つてしまいました。

何というか不完全燃焼と言うか、穴だらけの話しというか……。もう少し面白く出来ないのかねえ、私。

そして、レヴィルールの契約の話の詳細云々にツッコミを入れないで頂けると助かります。

ア・ク・マ? 来たりてええええええええええつ!!! (前書き)

ギャグの王道(自己判断)その一

ア・ク・マ？・・・来たりてええええええつ！！

10月20日 pm:21:58

ミッドチルダ中央・湾岸地区海上・艦船アースラ内・・・

ここはアースラのC 3B廊下の二画。
たった数分前、この場ではそれは虚しい惨劇起きていた。
それは回避出来たかもしれない。しかし、それは回避出来なかった。

現在C 3B廊下の床、壁、天井は赤く染まっている。

それは多量の血液が撒かれたような赤だった。

そしてその赤に染まる床に、一人の人間が倒れ伏している。

力無く手足を投げだしてうつ伏せで倒れているのはシャルロッテ。

しなやかな身体や綺麗なアクアブルーだった髪も赤に染まり、まるで死体のような状態だ。

そしてその彼女の表情は苦悶の色で染まっていた。

そんな彼女の近くにはいくつかの大小様々な人影がある。

その人影のリーダー格と思われる人物が大きくため息を吐く。

その表情は疲労に満ちていた。

彼の名前はルシリオン。倒れ伏すシャルロッテの義理の弟だ。

そして彼こそがシャルロッテを現状の有様にした張本人。

姉シャルロッテを倒すために、弟である彼は情け容赦なく撃破した。
全てが終わった後、彼は呆れ果てた表情でこう語る。

「君は知っているか？ 激しく酔った人間には3タイプあるということ……」

彼はそう前置きし、

「理性が残っているのにも関わらず周囲を散々巻き込む奴」

親指を立て、

「理性が飛んで、とことん暴走する奴」

人差し指を立て、

「そして意識が飛んで眠りに落ちる奴。こいつが周囲にとって一番助かる奴だ」

中指を立てた。

激しく酔い、そして暴走した果てに倒されたシャルロツテを見ながら、その場にいる人影は盛大にため息を吐いた。

何故こうなったかと言うと、それは七時間前に遡る。

十
十
十
十
十
十
十
十

「え？ 食事会？」

「そや。入院組のみんなも帰ってきたことやし、そろそろやるうと思つてたんや」

私たちは今昼食を食べ終えて雑談しているところだ。

すると隣に座るなのはと、その向かいに座るはやてのそんな会話を耳にした。

「でもいいの？ そんなことしてて・・・」

「うん。リンデイさんやクロノ君からも許可貰つとるよ。」

奇跡の部隊機動六課。その隊員たちへのちよつとしたプレゼントやつて」

「そう言えばそんな風に言われてるんだっけ、機動六課。」

スカリエッティの逮捕、ミッドを壊滅の危機にさらしたゆりかごの本格起動阻止。

その部隊を指揮した若き部隊長八神はやて。結構耳にするよ、はやて。

いろんなところから良い評価もらってるじゃん」

私もその会話に参加する。

長年に亘って逮捕できなかったスカリエッティを逮捕した機動六課の評判はすごい。

奇跡の部隊なんて言われるほどに、だ。その指揮官であるはやても同様だ。

「んー、なんやそこまで持ち上げられんのも複雑やけどなあ。」

それにゆりかごに関してはシャルちゃんとルシル君のおかげでもあ

るし……。
スカリエツティを逮捕したんはフェイトちゃんやシャツハに口ツサのおかげ……。
実際私は何もしてへんことになる……。少し肩身が狭いつていうか……。」

頭を掻きながら言葉通りに複雑な表情を浮かべるはやて。

「そんなことはないと思うけど……。」

「ああ。相応な評価だと私は思うぞ、はやて。

はやて自身はこの部隊の設立、そして指揮官としての評価もあるかな。

堂々と胸を張れるような功績を上げているのは確かだ」

フェイトの隣に座って、向かいに座るヴィヴィオの頬についたケチヤップを拭っているルシルがそう口にした。

それは私も同感。はやては十分功績を叩きだしている。

「そうだよ、はやて」

「私もそう思うよ、はやてちゃん」

「うん。ありがとうな」

「それはそうとはやて。さっきの食事会についての話だが。もうすぐ六課の隊舎が直るのだから、そこでその食事会をすればいいんじゃないか？」

話題を変えて、ルシルがはやてにそう訊ねる。

ルシルの言う通り、襲撃され壊された隊舎もあと数日で直るところまでいつている。

「確かになあ。でも、みんなも知つとると思うんやけど、アースラは私らが降りたらそのまま廃艦の工程一直線や」

「……あ……」

私、なのは、フェイト、ルシルの間抜けな声がダブる。

そうだ。このアースラは廃艦作業に移される前に飯の本部として流用したんだ。

隊舎が直れば、アースラはお役御免となつて……。

「廃艦作業に移される前に長年お世話になつたこのアースラで最後の楽しいパーティーでも、つて思つたんや」

はやてが寂しそうに話す。

それを聞いた私たちも気持ち少し沈む。

アースラ。思えば私やルシルもすごくお世話になつた大切な存在だ。

「そう、だね。うん！ 私はそれに賛成だよ！」

「はやて、私も賛成！」

なのはとフェイトが満面の笑みではやてに賛同。
もちろん、

「そうだな。今までたくさん世話になつたアースラだ。
最後は派手に楽しんで、良い思い出を残すも良いだろう」

「よし！ 何でも言っ、はやて！ 私とルシルも全力で料理とか手伝うから！」

ルシルと私も大賛成。何かやることがあれば何だってやろう。私だって料理はそれなりに出来る（ルシルに鍛えられたから）。

「ありがとうな、みんな！」

そしてヴィヴィオは終始オムライスを頬張っていた。

PM：18：00 アースラ第一レクリエーションルーム

「 それでは、かんぱーい！！！」

「かんぱーい！」

機動六課の部隊長はやてが音頭をとり、ここに集まった隊員たちがコップを掲げ応えた。

楽しい時間となるはずだった食事会。破滅へのカウントダウンが今始まった。

思い思いにバイキング形式のテーブルに置かれている豪華な料理を食べ始める隊員たち。

食事に集中する者。雑談に花咲かせる者など様々だ。

それは平和な時間が過ぎていく。

「うわっ、これおいしい！ ギン姉もティアも食べてみてよ！」

「どれどれ……うわっ、すごいおいしい！」

「本当！　すごくおいしい！」

山盛りの取り皿を片手に料理を口に運ぶのはスバルとその姉ギンガ。そしてスバルとギンガに比べれば少ないながらもそれなりに料理の乗った取り皿を持つティアナ。

三人はスバルに勧められた料理を口にして感嘆の声を上げる。

「あ、それはルシルさんが作った料理ですよ！」

「久しぶりにルシルさんの手料理食べました」

スバルとティアナとギンガの許へと歩いて来たのはエリオとキャロ二人。

エリオもスバルやギンガに負けないほどの大食らいだ。

それを証明するかのように、エリオの持つ取り皿の上には様々な料理が多量に乗っている。

「へへ。噂には聞いてたけど、ルシルさんって本当に料理が上手なんだ」

「うん。噂以上だね」

「あとでレシピを教えてもらおうかなあ」

どこか表情に陰があるが、それでも満足そうに笑みを浮かべる三人。

その三人を見ていたエリオが、

「実はおいしいだけじゃないんです。

ルシルさんの料理って食べる人への、特に女の人への配慮がたくさんあるんですよ。」

たとえばスバルさんたちが今食べた料理、ノルウェーサーモンのハーフ焼きって言うんですが、美肌効果があって、しかも髪にも良いらしいんです」

と口にした。

「「「！」「」」

それを聞いたスバル、ティアナ、ギンガの目の色が変わる。

そして周囲にいた女性隊員たちの目の色も変わった。

「フェイトさんやシャルさんも小さな頃からルシルさんの料理を食べてるって聞きました。

だからあんなに美人なんだと思います」

キャロのその言葉が決定打となった。

女性隊員たちは楽しい雑談よりもルシルオンの料理を最優先として動き出す。

そのときルシリオンの料理を食べていた男性隊員たちは後にこう語った。

女って超怖え

美容は女性にとって永遠の課題。ということだった。

ところ変わって別のグループ。

「あ、おい！ それあたしが食おうとしてたやつ！」

「だったら自分の取り皿に取っておけばいいだろう」

ヴィータがシグナムへと詰め寄る。

自分が食べようとしていたミートパイをシグナムに取られたからだ。

「ケツ、そんでまた栄養全部胸に行くわけか。どこまでデカくすりゃあいいんだよ」

「なっ！」

顔を赤くしながら絶句するシグナム。

しかしシグナムは感情に任せて怒鳴ることはせず、大人の対応を・

「フツ、ただでさえいろいろと“小さい”のだから、たくさん食べて大きくなりたいということか。

それはすまないことをしたな。ほら、ヴィータ。もっと食べて大きくなるといい」

しなかった。明らかにヴィータを馬鹿にしたような棘のある言葉を口にした。

「あ、？」

別のミートパイへと手を伸ばしていたヴィータの動きが止まる。ドスの効いた声を出しながら首だけを動かし、シグナムへと細くした目を向ける。

互いの視線がぶつかり合い、激しい火花が散る。まさに一触即発の状況だ。

「もう止めなさい二人とも！ 大人げない！」

そこに現れたのはシャマルとザフィーラ。

シャマルの一括によって、シグナムとヴィータから殺気が消える。

「シグナム、われら守護騎士が将のお前がそのようだとどうする。

そしてヴィータ。お前もお前だ。些細なことで目くじらを立ててどうする」

「……」

普段は寡黙なザフィーラからここまで言われてしまい、口を閉ざしてしまふシグナムとヴィータ。

「お、これうまそうっすね」

そんな中、ヴィータとシグナムの横からヴァイスが登場。

ミートパイをいくつか取り皿に乗せていく。

「あ、テメ、ヴァイス！ なにあたしのミートパイ取ってんだ！」

「ええ！？」

あまりに身勝手なヴィータの言葉に驚愕するヴァイス。

それを見ていたシャマルが、ヴァイスに助け船を出す。

「いいのよヴァイス君。うちのヴィータの我儘は無視しても」

「うわっ、離せシャマル！」

後ろから脇下に手を入れられ持ち上げられるヴィータ。

「ふう……。ヴィータ。自分のものだと言張するならまずは取り皿に乗せろ。」

そうでないと言きと同様、お前の主張は余りにも身勝手だぞ」

シャマルから解放されたヴィータ。

不満いっぱいの表情を浮かべている。

「そうよ。ほら、セインテスト君のお手製卵焼き。いくつか取ってきたから」

「チツ、しゃあねえな。あいつのならいいか」

シャマルの取り皿から卵焼きを取り、もぎゅもぎゅ食べるヴィータ。その隙にヴァイスを逃がすシグナムとシャマルだった。

「つつかき、何でセインテストが料理作ってた？」

どっちかつつと今回はあいつは作るよか食べる方だろ」

ヴィータが並べられている料理を見ながらそう口にした。

「好きだから」

「好きだからだろっ」

それを聞いたシャマルとシグナムは即答だった。

「やっぱあいつ、生まれてくる性別間違ってんじゃないか」

いくら女顔で料理が出来るとはいえ、それはあんまりな発言だった。しかしシャマルとシグナムはそれに頷くことで賛同した。

「へっくしゅっ」

ここから少し離れたグループの中からクシャミが聞こえた。

「セインテスト。あの者には同情を禁じ得んな」

ザフィーラがルシリオンへと視線を送りながら呟いた。

さらに変わって別グループ

「よっ、ユーノ。ちゃんと楽しんでる？」

シャルロツテとルシリオンが、招待されたスーツ姿のユーノのへと声をかける。

彼ユーノもまた、このアースラと関わりの深い人物。

そのため、はやてたちから今日の食事会へと呼ばれていた。

「うん、ちゃんと楽しんでるよ。さっきまでなのはたちと話していたしね。」

それにしてもルシル。君がミッドに戻ってきてからもう半年になるのに、顔を合わせるのもこうして話すのも今日が初めてなんだよ？」

「ん？ そうだったか。・・・ああ、そうだな。久しぶり、ユーノ。元気そうで何よりだ」

「ルシルこそ元気そうで何よりだよ」

ルシリオンとユーノが握手を交わす。

かつては共に無限書庫で働いていた同僚であり、それ以前から貴重な男友達という関係だ。

二年ぶりの再会にしては簡単なものだが、それが二人にはちょうどよかった。

「あ、そうだ。二人は騎士カリムの予言について知りたいんだよね。あれから時間を見つけては解読していたから、それなりに読めるようになったよ。」

その代わり、これが完全な解釈と決まったわけじゃないよ。使われている文字がバラバラだからね」

「「っ！」「」

シャルロツテとルシリオンの表情が緊張へと変わる。

「どうする。一応頭に入ってるから聞いてみる？」

「・・・」

「・・・ああ、頼む」

シャルロツテが俯いているのを横目に、ルシリオンが先を促す。
ユーノはシャルロツテの様子に少しおかしく思ったが、

「うん。聞かせてユーノ」

顔を上げたシャルロツテの表情は、何か決意したものとなっていた。
それを見て、ユーノはもう何も言えなくなり、解読した予言を静かに口にした。

「 其に仕えし使徒と相見えん

慟哭の涙、歡喜の絶唱、憤怒の叫びの音が乱れ流れるその終の果て、
狂いたる 現し世は真なる破滅へと進まん……」

「……」

「其に仕えし、の前と、狂いたると現し世は、の間がまだ解読出来
てないんだ。

無限書庫をフルに使ってもなかなか出てこなくてさ」

ユーノが少々不満顔でそう呟く。

彼の城とも言える無限書庫の資料を漁っても、解読出来ない文がある
というのが、彼にとっては少し不満らしい。

「いや、ありがとうユーノ。そこまで調べられるとはさすがスクラ
イア先生」

「ちょ、やめてよ！ 友達にそう呼ばれるの結構恥ずかしいんだよ
！」

「ホント、ユーノって有名になったよねえ。」

ま、10年前から薄々そうなるんじゃないかなあって思ってたけどさ」

「そう言うシャルヤルシルも結構有名人だったじゃないか。本局に二人のファンクラブあったの知らないだろ？」

それに局を辞めても、今でも根強い人気があるんだよ二人にはさ」

それから三人は、シャルロツテとルシリオンが作った料理を突きながら、空白の二年間の話で盛り上がった。

たとえそれが楽しいだけの話ではなくとも……。

そして運命のPM：21：00

食事会も無事に終わりを告げた。

片付けも、食事会中に何度か挟んで行っていたために、早く終わった。

隊員たちも居住区画へと戻っていき、ここ第一レクリエーションルームには数えるほどの人影しか残っていない。

残っているのは六課の隊長陣を始めとした前線メンバーだけだ。

「ねえねえ、みんなもどう？」

シャルロツテが返事を聞く前にトレイに乗せたいくつものコップを、それぞれなのはたちに渡していく。

見た目はそれは綺麗な黄金の飲み物。それはまるで蜂蜜のようなものだった。

「「「「「ありがとうございます！」「」「」「」

まずは先にコップを受け取ったフワードとギンガがコップに口をつけ飲み始める。

五人は“それ”を飲み干すと、満面の笑みで、おいしい！と口にした。

「でしょ！ これってルシルのいろんなお気に入りがある蔵の中にあつたものなんだ」

そう言いながらシャルロッテも勢いよく飲み始める。

ルシリオンのお気に入りのある“蔵”。

あらゆる世界に召喚され、そこで彼が興味を持った物などが保管されている“英知の書庫”^{アルヴァイト}の別区画。

シャルロッテの持つトレイやコップ、今回使われた食材なども全てそこから調達した物だ。

それを見たなのはたちも飲み始める。すると次々においしいとの好評価の聲が上がる。

「おかわりはまだあるよー！」

シャルロッテもそれを飲みながら、新たなボトルをどこからともなく取り出し、自身のコップに注いでいく。

そしてその黄金の飲み物は全員から好評価を得た。それが酒だということを誰も知らずに……。

「それにしても美味しいな。セインテストのお気に入りと言うのも頷

ける。

ところでフライハイト。これは何という飲み物なんだ？」

「ん？ あーこれ、これは“スットウングの蜜酒”って言うの」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

そのシャルロッテの言葉を聞いたなのはたち隊長陣が硬直する。ゆっくりと口からコップを離し、シャルロッテへと視線を移す。それと同時に、先に“蜜酒”^{それ}を口にしていたスバルたちが顔を真っ赤にしてへたり込む。

「目・・・目が回るう・・・」

「なんか・・・ホワホワな気分・・・」

「うわ・・・なんかすごいです・・・」

「みなさんがたくさんいます・・・」

「あははははは・・・」

「お、おい！ 大丈夫かよお前ら！」

その五人を皮切りに、なのはたちもまたへたり込んでいく。

彼女たちも相当量の“スットウングの蜜酒”を飲んだ。

普通飲めば酒と分かるだろ？というのは今回通用しない。

シャルロッテがみんなに飲ませたのは、ルシリオンのお気に入りの中でも高ランクの神酒。

酒特有の味があまりしないという物だったのだ。

「あー、あかん……。これはあかん……」

「リインもですく……。ヒック」

「はやて！？ リイン！？」

「主はやて！」

「ちよっ、はやてちゃんもリインも顔が真っ赤よ！」

頭をフラフラさせながら呟くはやてとリインフォース？。

そんな二人を見たヴィータやシャマル、ザフィーラが詰め寄る。

なのはとフェイトも似たような感じた。頭をフラフラさせながら、微笑を浮かべている。

唯一の救いはこの場にヴィヴィオがいないことだろう。

ヴィヴィオはたくさん食べたことで眠くなり、すでになのはとフェイトの部屋に移されている。

そんな状況の中、

「おい、はやて。そろそろおわ……。……って何があった！？」

「うわっ、何があったのこれ！？」

「おい、なんだこの状況！？」

食器類の片付けなどを行っていたルシリオンや、手洗いに行っていたユーノ、ヴァイスが戻ってきた。

そしてこの第一レクリエーションルームの状況を見て啞然とする。

「セインテスト！ 実はフラ」

「ルシル~~~~」

ルシリオンに事のあらましを説明しようとしたところで、シグナムはフェイトのタックルを受け吹っ飛び、妨害された。

シグナムを半ば突き飛ばすようにして、ルシリオンの許へと走り寄ってきたフェイト。

顔はほんのり赤く、紅い瞳も濡れている。

「どうしたフェイト・・・？ ん・・・酒臭い・・・？」

近くに来たフェイトから漂う微かな酒の匂いに、ルシリオンが戸惑う。

「べ、別に私はルシルの事なんて好きでも何でもないんだから！」

そう言いつつルシリオンの袖をしっかり掴むフェイト。

絶対フェイトが口にしないようなセリフを聞き、ルシリオンはハッキリと理解した。

フェイトから香るルシリオンのみが知るとある酒の匂い。

それで分かった。今フェイトは酒に酔っているのだと。

「シグナム・・・」

「あ、ああ。ほとんどの者が酔っていると思う・・・」

「た、大変じゃないか！ 早く酔い覚ましの水を……！」

ユーノが慌てて水を取りに行こうとすると、

「ユ・ー・ノ・君」

「え？ な、なのは！？ ちょっと！」

フェイトと同様に頬を赤くして潤んだ瞳なのは。

いつもと全然違う彼女を見て動揺するユーノへとなのはが迫り、

「えい！」

「ぎゃあああああ……！」

ニコニコしながらユーノに目潰しを繰り返した。

両目を押さえてのたうち回るユーノ。

「あはははははは……！」

それを見て笑い声を上げるのは。

ひとしきり笑ったなのはが未だにコップに残っている“ストウン
グの蜜酒”を再び飲むところを、

「だ、ダメだよなのは……それ以上は……」

ポロポロ涙を流しながらユーノがなのはの手を止める。

これ以上飲んでさらに酔うと手をつけられないと判断したからだ。

そこから二人のコップの争奪戦が始まった。

「なのははユーノに任せるしかないな。ならば私は……」

頭痛を抑えるかのように額に手を当てているルシリオンは二人のやり取りを見て、なのはのことをユーノに一任（投げたとも言つ）。そして彼は他の酔っているメンバーの対応をしようと動き出す。

「おにいちゃん！（泣）」

ティアナがわんわん泣き始めた。

「ごめんねスバル。理由がどうであれ妹をボコボコに傷つけるなんて（泣）」

「あたしもごめんね。ギン姉を思いつ切り殴って……（泣）」

ヒシツと抱き合って姉妹愛劇場を始めるナカジマ姉妹。

「ちよつ、はやて！ くすぐつたいよ！！」

「ヴィータの成長度合いを調べるわぁ」

ヴィータの上半身をこれでもかと言つくらいに触り続けるはやて。必死にもがいて抵抗しようとするヴィータだが、はやての力が想像以上に強かつたせいか抜け出せない。

「……はやては八神家に任そつ。とばつちりを食らつてはまずい」

彼は恐怖しながら、セクハラ祭り実施中の八神家から視線を逸らす。

「ZZZZ…」

この騒がしさの中エリオとキャラは寄り添って眠っていた。大変微笑ましい光景だが、それが酔ったの事だと思つと悲しくなつてくる。

「あははははははは！！」

そんな中間こえてきたのは、この騒ぎの根源の笑い声。

「やっぱりお前か……シャルロットエエエツツ！！」

テーブルの上にドカツと座り込み、ボトルに直接口を付け“スツトウングの蜜酒”をガブガブ飲んでいるシャルロットがそこにいた。その顔はそれはもう真っ赤。完全に酔っていると思われる。

「ちよつ、フェイト。手を離してくれ……！」

腰に腕を回されガツチリと掴まっているフェイト。

ルシリオンが離れるように頼むが、全然力を緩めようとしなない。

「す、好きでくっ付いてるわけじゃないんだから……」

「痛ただだだだだだ！！」

緩めるどころかささらに強くなるフェイトの腕。

腰の辺りからミシミシという音がするのをルシリオンは耳にした。

(ま、まずい……このままでは……折られる……！)

「ヴァイス・・・手伝ってえ痛だだだ・・・！」

「おう」

ヴァイスがフェイトを引き剥がす。

「ルシルウゥゥ、放してえゥゥゥ、やあゥゥゥ（泣）」

両腕を彷徨わせながら泣き始めるフェイト。

それを見てルシリオンは心を痛めるが、その前にやるべきことがある。

と、決意を秘め、シャルロツテへと近寄っていく。

「あれ〜どうしたるお〜？ ルシルがたくさんだあ！」

「この酔っぱらいが。しかもお前が手にしているのは私の大事な“スツトウングの蜜酒”じゃないか！ どおりで覚えのある香りだと思っただよー！！」

馬鹿かお前！と怒鳴るルシリオン。

「え〜。よっぱらっれなんていらいよお」

「呂律が回ってないだろうが！ その上そんな顔を赤くして、説得力無いわ！」

ルシリオンが怒鳴り散らして、シャルロツテの持っていたボトルを奪い取る。

「や〜！」

「や〜、じゃない〜！」

シャルロットがボトルを奪い返そうと足掻く中、ルシリオンがシャルロットの額に手を当てて動きを制限する。

それでも諦めないシャルロットはニヤリと邪な笑みを浮かべる。

「ろつても気持ちいんらから・・・じゃまするらあああ！！！」

暴走シャルロット vs 抑止ルシリオン

F i g h t ! !

「上等だ！ カづくでも眠ら」

ガスガストカツグチャメキメキボキツゲシゲシドスポコボコメ
シツズドンズドンヒューンドガンゴスツゴスツザシユザシユメキヤ
プチゴキグサ

一方的かつ圧倒的な暴力の渦がルシリオンを襲う。

「に、人間技じゃねえな・・・」

ドガツドガツガスガスポツキンボグボグボグドカツメキヤドスツ
ドスツゴキゴキズガン

「あははは！ シャルすごい！ コンボ数が半端じゃない！」

壁に追いつめられたルシリオンへとさらなる暴力が襲いかかる。

ドゴンドゴonzガンドカンボグツボグツドスツグチャザシユ
メシツメキツガスガスッ

「ある種ハメに近い。つうか完全にハメられてんな。使った瞬間に
友達失くしそうな容赦なさだ……！」

「悪魔だ……」

「わあ　まるで魔王さまみたいですよ」

「いやいや、あれはそんな生易しいもんやないな……」

「にはははは、ああいうのはあ鬼神っていうんだよあ……」

シャルロツテは“酔いの鬼神”の称号を手に入れた

キュピーンドガツドガツガスツドヒューーン……ドガン！

Charlotte Win!!

「どつら！　わたしのつよさをおもひしっらか！」

ハイテンションで勝鬨を上げるシャルロツテ。

それに反してルシルオンは動かない。

それはまるで死人のようだ。

「キヤアアアア！　セイントテスト君……！」

「ルシル！？　うわっ、どうしよう！　結構まずいよこれ！」

放送コードに引つかかるような勢いでポッコボコにされたルシリオンを見たシャマルが悲鳴を上げる。
ユーノもシャマルに続いて倒れ伏しているルシリオンを見て混乱する。

それほどまでにルシリオンの外見はまずかった。

「ひでえ、まるでポロぞうきんだ・・・」

「いや、ポロぞうきんの方がまだマシだ・・・」

ヴィータとシグナムもポッコボコにされたルシリオンを見てドン引きだ。

「ク、クラーヴイント！　お願い！」

Ja

「ぼ、僕も手伝います！」

必死に治癒魔法を施すシャマルとユーノ。
そのおかげでルシリオンは短時間で復活した。

十
十
十
十
十
十
十
十

PM:21:24 第一レクリエーションルーム

「……………」
「zzz…」

フープバインドで拘束されたなのはたち酔っぱらい組と、未だに眠り続けるエリオとキャロ。

さっきまで暴走していたなのはたちはすでに酔っぱらっていたという過去形となった。

散々暴走したなのはたちをユーノたちと協力して、何とか拘束して酔いを醒ましてやった。

醒めてみれば、ほとんど記憶が飛んでいるという本人たちには都合のいい状況だった。

いや、あのような恥ずかしいことは忘れた方が良さだろう。

「あとは逃げたシャルだけだな……」

私はシャルにボコられ死の淵を彷徨っていたが、ユーノとシャルのおかげで助かった。

二人には感謝しても感謝しきれない恩が出来た。

そんなシャルは、まとも組と酔っぱらい組とのバトル中に逃亡したらしい。

「さすが不死身の男。あんだだけボコられてもう復活って……お前も人間じゃねえな」

「ほつとけ」

ヴィータが失礼な事を言うてくれるが、真実に近い分完全否定は出来ない。

つていうか実際本当に死にそうだった。そこところは人間だ。

「なあルシル君。私らが酔って迷惑かけたんは分かった。記憶はないけど……。」

でもそろそろ解放してくれんかなあ……なんて……」

はやてが元酔っぱらいの代表としてそうやってきた。バインドをかけられた全員が頷く。

「……そうだな。元はと言えばシャルが原因で、君たちは巻き込まれただけだ」

私はシグナムたちへと視線を向けて、解放することの同意を得る。全員から同意を得て、ユーノたちはバインドを解いた。すると、

「……………いろいろとご迷惑をおかけしました」「……………」

一斉に頭を下げて謝ってきた。そこは笑って許すのが友人だ。

「さて、残る問題は酔ったまま逃亡したシャルだ。さらに馬鹿をしないように早々に捕える必要がある」

「そうだな。フライハイトの酒癖はとんでもない」

「全くだ。……よし、手分けして探そう。シグナム、ヴィータ、ヴァイス、手を貸してくれるか」

「ああ」

「じゃあねえな。お前の手料理で手を打ってやるよ」

「ま、乗りかかった船だ。いいぜ」

決まりだ。私とシグナム、ヴィータ、ついでにヴァイスがいれば何とかなるだろう。

「待ってルシル君！」

レクリエーションルームを後にしようとしてところで、なのはが止めてきた。

「私も手伝うよ」

なのはを始めとして全員が手伝うと言ってきた。私は人数が多い方がいいと判断し、なのはたちもシャル搜索班に入れた。

手分けして探し始めた私をリーダーとするA班。メンバーはヴァイスとはやてとリンの計四人。

『こちらB班。第一区画にシャルちゃんの姿はなかったよ』

「了解。引き続き搜索を頼む」

『うん、分かった』

B班のリーダー、なのはからの報告。
メンバー構成はスターズとユーノとなっている。

『こちらC班。ルシル、第四区画にシャルの姿無し』

「了解。それじゃあ引き続き頼む」

『分かった』

C班のリーダー、フェイトからの報告。

メンバーはシグナムとギンガだ。

エリオとキャロは、シャマルとザフィーラによって部屋へと運ばれた。

そして他の隊員たちには各部屋で待機してもらっている。

今のシャルは正しく野に放たれた猛獣だ。

あの馬鹿に対抗できる隊員はまずいないと判断したからだ。

「それにしてもシャルちゃんには困ったもんやなあ」

「まったくです」

私とヴァイスの後ろを歩くはやてとリインが愚痴る。

そのとき、

「わがてにたずさえしはたしかなるげんそう」

「くくくつー!」「」「」

少しアクセントがおかしいが、間違いなく私の呪文^{スベル}。

「つつか何で下半身だけモザイクなんだよ!?
これじゃあ変態犯罪者と間違われちまうじゃねえか!」

ヴァイスもヴァイスでかなり哀れだ。

三人がそれはもう酷い外見になっている。

「そっぴえば私の外見はどうなっているんだ?」

今まで三人の外見のみ気にしていたが、私自身どうなっているかまだ知らない。

知るために身体を見回すと、

「……マジか」

私の身体がない。というか見えない。

「お前はお前で生首だしよ……」

ヴァイスの言うとおり、今の私は首から下が消えていた。はやてたちが視線を逸らすのも頷ける。

アースラの廊下は基本的に薄暗い。そんな状況で生首ってのは怖い。

「まずは各班に報告だな。なのは、フェイト。第六区画にてシャルを発見。

だが逃げられた。行先はおそらく第三。なのは、そっちに向かったと思う」

『ん、了解!』

「私たちA班も追跡する。フェイト、君たちも第三に向かってくれ」
『了解!』

通信を切る。そして三人からは今の姿を見られたくないのか反対の
声上がる。

我が手に携えしは確かなる幻想

シャルが使ったのは、本来私の複製術式だ。

なら、私でも解除出来ると思ひ、試したがダメだった。
以前の強制着替えと同じだ。で、諦めて今の恰好のまままで搜索再開
となった。

それからなのはたちと合流した。

しかし私たちの恰好の所為で散々驚かせてしまって、私とヴァイス
だけがなのは殴られるわ、ヴィータに蹴られるわ、ティアナに
撃ち殺されそうになるわで大変だった。

そこを何とかユーノに救われた。今日はとことんユーノに助けられ
る日ようだ。

ちなみにスバルは出会い頭での私たちとの邂逅だったため、立った
まま気絶した。

本当にすまないことをした。

「イヤアアアアアア!!」

合流してシャルの軌跡を辿っていると、フェイトの悲鳴が聞こえた。
きつとシャルが何かしらやったのだろう。

「フェイト!!」

「フェイトちゃ………プッ」

「ルシル!?　なのはにみんなも!　いやあああ!　見ないでええええ!!!」

急いで駆け付け、私たちが目にしたのは、

「ア、アフロ………」

綺麗だった金のストレートヘアがアフロになったフェイトの姿だった。

私の背後にいる連中が笑いを必死に抑えているのが分かる。

だが笑いのレベルとしては、はやてとラインのポリゴンとドットの方がはるかに上だと私は思った。

ここで、スバルに続きフェイトがリタイヤとなった。

そしてはやてとラインもここでリタイヤとなった。

さすがにこれ以上あの姿で走り回りたくないのだろう。

実際私もうるつきたくない。

いくら隊員たちが各自の部屋で待機となっていようと、もしこの生首状態を見られたら大変なことになるのは間違いないだろう。

「それにしても今日はとことん人間離れたなセインテスト。今日はそついう日なんか?」

「知るか。しかし精神的に参る日だって言うのは絶対だがな」

ヴィータが心底哀れみながらそう訊いたきた。

だからそう返す。今日という日は間違いなく最悪なものだと。

「シグナムさんとギンガも変なことになってなきやいいけど・・・」
今、シグナムとギンガが先行してシャルを追っている。

そのため、私たちも急いでシグナムを追いかけている最中だ。

「それにしてもヴァイス陸曹は、いろいろとまずい恰好ですよね。
ですのであまり近づかないでください」

「なんだよそりゃあ！ 好きでこんな恥ずい恰好してんじゃねえっ
てえの！」

ティアナがヴァイスの下半身のモザイク処理から視線を逸らしなが
ら、ヴァイスから距離を取る。

ヴァイスもまた今日は最悪な一日になったことだろう。

今のヴァイスには同情の念しか浮かばない。

うちの馬鹿義姉が本当にご迷惑をおかけしております。

「そこに直れフライハイト！」

第三区画C 3B廊下の先、そこからシグナムの怒りを含んだ声が
響いた。

まずい。今のシグナムはかなり本気だ。下手したらこの付近が吹っ
飛ぶかもしれない。

「シグナム！ シャ・・・」

絶句。

薄暗くて分からなかったが、私たちの傍にギンガが倒れていた。ギンガもギンガで何かの魔法少女アニメに出てきそうな奇抜な格好をしていた。

そして顔を見てみると目を回している。何かで頭を打ち付けて気を失ったようだ。

「おお！ 現れたなあ、悪の幹部ルシリオン」

「どつちが悪だ。もう手加減はなしだ」

我が手に携えしは確かなる幻想

私が携えたものを見て、全員が目を点にする。

「あの、ルシル君。それって・・・？」

「ん？ ああ、これが。これはな」

私は“これ”を手に入れたことを思い出す。

そう、あれは召喚事故によって全く関係のない世界へと召喚されたときだった。

そこはあたり一面ジャングル。文明というものは感じられない。しかしジャングルを探索中、上空から飛行機のエンジン音が聞こえた。

人のいる世界だと知り安堵した。そう、その飛行機を見るまでは・・・。

その飛行機は、タルに翼とコックピット、尾翼を付けただけのものだった。

そして乗っているのは・・・ネクタイをつけたゴリラ？と帽子を被ったチンパンジー？だ。

気のせいだと思い、目を擦りつつもう一度見る。だがどう見てもタルに類人猿が乗っていた。

「ゴリラ運搬の飛行機って、タルに翼を付けただけって・・・ウソだろ・・・」

信じられない光景を目にしたが、私はもう深く考えないようにして、再度探索を開始した。

探索の結果。

ジャングルの中はいたるところにバナナとタル、そして二足歩行の生物。

一体なんなんだここは？

すると近くから爆発音が聞こえたので何事かと思い、音のしたところへと向かった。

そうしたら、ゴリラとチンパンジーがタルに入ったと思いきや、爆発音と共に何処かへと飛んでいった。

「す、すごい！ どうなっているんだアレ!!!?」

今の状況を忘れ、好奇心の塊となってタルへと向かい、そして入る。

「うおおおおおおお!!!」

私は今、空を飛んでいる。仕組みはよく分からなかったが、これほ

どの面白い物をどうにかして手に入れたいものだと思い、さらに奥へと進んだ。

そうして私は未だに手付かずのタルを発見、拝借した。

すると、どこぞから爆音と共に飛んできたゴリラとチンパンジーが、私が拝借したタルのあった軌道を辿り、谷底へ落ちていった。

「・・・・・・・・・・」

どこからか分からないが、風船の割れるような音がした。何だったんだろうか？

今度は暗い洞窟、鉱山跡と思われる場所を探索中。

しばらくすると奥のほうから明かりが来る。

よく見るとさつき谷底へと落ちていったはずのゴリラとチンパンジーがトロツコに乗って、こちらに向かってきていた。

私はそれから逃れる為に、全力で走ったがもうダメだ。

ここでは派手な魔術が制限されている以上、あれをやるしかない、と覚悟を決める。

私はレール上に石を設置。

トロツコはその石に乗り上げ、明後日の方向へと吹っ飛び、暗い谷底へと再度落ちていった。

吹っ飛んだ瞬間、ゴリラとチンパンジーがウツキウツキと叫んでいたが生憎と私はゴリラ語が分からないので、あえて無視した。

するとまたどこからか風船の割れた音がした。

洞窟を出るとそこには、王冠を被ったデカイ二足歩行のワニ？と、

それが付き従えている妙な生物の軍勢が立ちほだかった。ワニが何か言っている様だが、生憎と私はワニ語が分からないので、力ずくでお引取り願った。

正直そこから先は覚えていない。

「これは、タルバズーカだ」

あのと昔拝借した物を改造したタルバズーカ。弾丸は何でもオーケーと言うのがこれの強みだ。

「そんなんであいつを止められんのかよ？」

「まあ見ている」

照準をシャルにセット。弾丸はシャルがこの世で最も苦手とするトマト。

明らかに食物に対しての冒涇だが、この際勿体ないとかは横に置いてく。

いくら消費するオリジナルが一つとはいえ、だ。

このタルバズーカにはある仕掛けがある。側面に書かれた“当たり。もう一回”。

その概念が含まれた文字のおかげで、弾丸として入れられたトマトが無限増殖する。

「さあ、イタズラの時間は終わりだ。受け取れ！！」

マシンガンよろしくな勢いでトマトが斉射される。

それを必死に回避しようとしたシャルだが、酔っぱらった人間がそんな器用なマネが出来るわけもなく、面白いほど命中していった。そしてシャルが倒れ、気を失ったと同時に、シャルにかけられた術式が解除されていく。

P M : 2 1 : 5 8

こうして、アースラに降り立った“酔いの鬼神”は撃破された。この後、この騒動は“酔いの鬼神事件”として語られなかったり語られたり……？

ア・ク・マ?・・・来たりてええええええええつ!!! (後書き)

ショートとか言っているクセに妙に長くなってしまっ。

大体7,8千字辺りにしようと思っっているんですが・・・。

なかなか上手く纏められませんねえ。

あとちなみに、クロノたち後見人は忙しくて来れなくなったとしました。

これ以上キャラがいると、さらに長くなってしまっんで。

大切なもの（前書き）

今回はギャグが少ない、というより無いです。ですので過度の期待は要注意です。

大切なもの

襲撃を受けて破壊されていた隊舎と六課職員寮の修復が完了して、六課の隊員たちの引越し作業も無事に終了。

そして今日は荷物整理時間ということで、みんなは荷物整理を行っている。

そんな私も今は運んできた荷物を整理中で……、

「……あ」

いろいろと私物を漁っていると、出てきたのは小さいながらも装飾の施された赤い箱。

それは私の大事な大事な宝物がしまつてある箱だ。

「どうしたのフェイトちゃん？」

「フェイトママ？」

ルームメイトのなのはと、なのはが保護責任者となっているヴィヴィオが後ろから訊ねてきた。

なのはも私と同様私物の整理中で、ヴィヴィオはそれを手伝っている。

「うん。これ……」

振り向いて、両手に乗せた私の宝箱を二人に見せる。

なのはは懐かしそうに、ヴィヴィオは何か知らないから、？顔になった。

「てつきり寮に大事にしまっただけであると思っただけ、持ってたんだね」

その赤い宝箱を優しくそつと胸に抱く。

あとちなみに寮とは六課のじゃなくて本局にある本来の私の住まいの事だ。

(でも六課へ来た時やアースラに行く時でも無かったような気がするんだけど……)

もし単純に気づいていなかったなら、それはかなり最悪だ。

宝物とか言っておいて持っていたのに気づいていませんでした、なんて……。

「フェイトママ、それなーに？」

トテト歩いてくるヴィヴィオに蓋を開けて中身を見せる。
するとヴィヴィオは「わあ！」と目を輝かせた。

「これは、フェイトママの宝物なんだ」

「だからもの……。すごくきれい」

ヴィヴィオは完全に“それ”に心を奪われてしまったみたい。

私は“それ”を手を取って、

「あ、今でもなんとか入る」

左手の小指にはめた。

あれから10年と経つから無理だとは思っていたけど、意外にそう

キツくはなかった。

「フェイトちゃんの指は細くて綺麗だからだね」

そんな恥ずかしくなるようなことを言いながら、なのはが私の小指にはめられた“それ”を見る。

私の小指にはめられた“指環”。ルシルから貰った私の一番の宝物。五つの小さな宝石と十字架に備えられた円環が昔の私たちを表しているものだ。

「そう言えばフェイトちゃん。それってルシル君に一人前に認めてもらえるまではめないって言ってなかったけ？」

「あ、うん。それはもう大丈夫だよ。」

ゆりかごから脱出するときにルシルが「もう一人前だな」って言うてくれたから」

「そっか。それは良かったねフェイトちゃん」

しばらく思い出に浸っていると、

「なのはママ、フェイトママ、早くしないと終わらないよ？」

「じゅめんね〜」

「そうでした」

ヴィヴィオに諭され、すぐさま整理を再開。

そして昼食を取るにはいい時間となったとき、

「それじゃあフェイトちゃん、ヴィヴィオ、お昼ご飯にしようか」

「うん」

「はい！」

荷物整理を一度切り上げて、お昼御飯を取るために食堂に向かう。

(と、その前に指環を外しておかないと・・・)

このままでも良いかな、って思ったけど、職場でこういうのはやめておいた方がいいと思った。

ちよつと名残惜しいけど。うん、次の休暇の時にでもまたはめよう。そしてもし休暇が重なったら、ルシルとエリオとキャロの四人で遊びに行こう。

「・・・あれ?・・・んー!・・・あれ?」

「フェイトちゃん・・・?」

私がついて来ないことに気づいたのか、なのはとヴィヴィオが扉の向こうから戻ってきた。

「ちよつと・・・待ってて・・・。ううん、やっぱり先に行つて、なのは、ヴィヴィオ」

必死に“指環”を小指から外そうとするけど外れない。はめるときは意外とはいえ簡単にはめれたのに。

「もしかして・・・指環が外れない・・・?」

「あ……うん……」

私の小指にはめられた“指環”をなのはが覗き込む。
なのはが「うん」と少し考えて、

「ちょっと引っ張ってみようか」

二人して床に座って、“指環”を外すために行動開始。

“指環”に手をかけるなのは。私は関節が外れないように小指の付け根を持つ。

そして、引っ張り合う。正直痛いというか痛すぎる。この選択は間違いだった。

その結果、

「っ！？」

ゴチツ

「っ~~~~~！！！！」

突然なのはの手が“指環”から離れて、お互い勢い余ってひっくり返り、後頭部を床にぶつけた。

なのはと二人して後頭部を押さえながら蹲って痛みに悶える。

が見えた。ひよこが見えた。ちよつとした花畑が見えた……
気がする……。

「っ！？　なのはママ！　フェイトママ！」

それを見ていたヴィヴィオが駆け寄ってきて、私となのはの後頭部

を優しくさする。

それからしばらくヴィヴィオにさすってもらって、ようやく痛みが治まった。

「ねえ、フェイトちゃん、そのままはめててもいいんじゃないかな？」

「でも・・・いいのかな・・・？」

「取れないんじゃないよ。あとでいろいろと試してみよ」

「うん・・・」

結局“指環”をはめたまま昼食へと向かうことになった。でもどこかそれが嬉しかった。

十 十 十 十 十 十 十

「・・・」

さつきからフェイトちゃんに向けられる視線がすごい。

ううん、フェイトちゃんに、というよりは、その小指に輝く“指環”へと向けられている。

女性隊員は「綺麗」とか、「高そう」とか。そして男性隊員にはどこか陰りが見える。

「まさか」とか、「やっぱり」とか。少し落ち込み気味だ。

食堂へと入ろうとしたところで、前の方からシャルちゃんが頂垂れ

ながらフラフラ歩いて来た。

その格好は黒を基調とした、ヘッドドレスまで付いた本格的なメイド服だ。

髪型はストレートからポニーテールになっている。

「もうそろそろその格好にも慣れた、シャルちゃん？」

「あ、なのは・・・お嬢様、フェイトお嬢様、ヴィヴィオお嬢様」

顔を上げたシャルちゃんはやっぱり顔がうつすら赤い。

「むう、慣れるわけないよ、なのは。じゃなくてなのはお嬢様・・・(泣)」

軽く涙目ながら言い直すシャルちゃん。

フェイトちゃんはそんなシャルちゃんを見て苦笑いするだけだ。実際私も苦笑を浮かべるしか出来なかった。

「シャルさん、すごくかわいいです！」

「・・・ありがとうヴィヴィオ。ヴィヴィオも着てみる？」

「ううん」

それはもう笑顔で、首を横に振りながらの拒否だった。

「フツ・・・(泣)」

さて、どうしてシャルちゃんがメイドをやっているのかと云うと、それは先日、アースラで起きた惨劇が原因だ。

“酔いの鬼神事件”。その犯人であるシャルちゃんへの罰ゲームがメイド服での雑用係だ。

期間は二週間（仮）になっている。

女性隊員にはお嬢様、と名前の後に付けるようにしている。

そして男性隊員にはご主人様、と言うようにされた。

ちなみに口調もメイドのようにと決められている。（あまり守っていないけど）

それはやりすぎじゃ・・・と思ったけど、今は六課にいないルシル君が「徹底的に」ということで今のようになった。

それから一緒に食堂に入る。

食堂にいた男性隊員の視線が一斉にこちらに、シャルちゃんへと向く。

「今日も可愛いっす」だとか、もっとストレートに「好きです」とか聞こえてくる。

シャルちゃんはもう開き直ったかのように歩く。

私たちもそれに続いて、日替わりの昼食を受け取って、空いているテーブルへと向かう。

「あ、なのはさんたちも今からですか？」

イスに座って食べ始めようとしたところで、スバルたちがトレイを持って隣のテーブルについた。

軽く挨拶を交わして昼食を食べ始める。

「ん？ ねえ、フエイト・・・お嬢様。左手の指環それって、確かあのルシルヤロウから貰ったやつだよね」

ルシル君をあの野郎って・・・。

そんな格好をさせられてしまうような事を仕出かしたシャルちゃん

も悪いと思っただけど。

「え？ うん……はめたら取れなくなって……」

少し照れながら左手の小指に嵌められた“指環”を見せる。
すると、

「フェイトちゃん、それってルシル君に貰った指環か？」

「あ、はやて」

「グイータちゃんたちも」

はやてちゃんを筆頭とした八神家も合流。

軽く挨拶を交わして、はやてちゃんたちも隣のテーブルにつく。
そこでフォワードとも挨拶を交わした。

「ごめん、はやて。取ろうとしたんだけど……」

「ええよええよ。って、取ろうとした……？」

「なんだテストロッサ、その指環が取れないのか？」

「え〜と……うん」

フェイトちゃんが困ったように頷いた。

十
十
十
十
十
十
十

私たちの会話がフォワードにも聞こえたらしくて、興味深々でフェイトの“指環”を見る。

あの“指環”はルシルが創造した概念兵装の一種だ。

指環のデザインに、というよりはその神秘に魅かれてしまっているんだろう。

だからあんなにも興味を示している。

「綺麗ですねー」

「これってルシルさんからのプレゼントなんですか？」

「どうして薬指じゃなくて小指なんですか？」

「もしかして婚約指輪とか・・・？」

「この宝石って本物・・・？」

質問攻め。

「こ、婚約！？　ち、ちちち違うよ！

これはお守りとしてくれたものであって、そ、そそそそんななな・・・！！！！」

少しは落ち着こう、フェイト。

仕方ない。ここは私が少し助け船を出すとしますか。

「えつとね、まずは左の小指に指環をはめるのは、願望成就のためなんだよ。

きつとフェイト・・・お嬢様には何かお願い事があるんだよ。

それにさっきフェイト・・・お嬢様が言ったとおり、ピンキーリングと言つて、お守りとしての意味合いを籠めて小指つてのもあるんだ」

ちよつとした豆知識を披露。

ふんふん、と頷きながらみんなが聞いている。

「んで、その指環はルシルがフェイト・・・お嬢様とその使い魔アルフの契約記念日に贈つたもの。

みんなが期待するようなものじゃないよ」

と付け加えておく。

ついでに、

「まあ、おまじないとして、左の小指は恋愛のお守りとしての意味も出てくるけどね」

ふう、豆知識終了。

最後の私の恋愛のお守り、にひどく食いついてくるフォワードの子たち。

そしていつの間にもやられていたシャーリーたちも食らいついてきた。恋愛と聞いて、シャーリーたちが立場を忘れてフェイトをもみくちやにしている。

ごめん、フェイト。最後のはちよつと余計だったかもしれない。

それから私は指環をはめる指のおまじないの質問攻めを受けた。だから、

「右の人差し指はリーダーシップがとれて、中指は恋人募集中、薬指は恋人有り、とか。」

左の中指は幸せチャージ、薬指は男除けだとか・・・かな」

その他にもいろいろ教えた。

やっぱり女の子。こういうのにも興味を持ちたりするんだねえ。

で、本題になる。

フェイトの“指環”をどうやって外すか、というものだ。

そのままでもいいんじゃない？というのも出てきたけど、サイズが合わないのなら血流が止まるかもしれない。

実際サイズが合っていないから外れないわけだし。

下手したら指をちよっきんする羽目になるかもすれない。

さすがにそれは黙って見ているわけにはいかない。

時計を確認すれば昼休みが終わるまであと28分となっている。

ルシルがいればいいんだけど、生憎と今は別世界での契約執行中。レヴィヤタンと紋様を破壊したら契約が発生したからだ。

界律干渉の紋様というのは本当だったということだ。

十 十 十 十 十 十 十

「やっぱり王道で、滑りやすくしてから、というのが良いんじゃないでしょうか」

スバルが手を挙げて案を出す。

「滑りやすく・・・と」

シャルがどこから出したのかホワイトボードにスバルの意見を書い

ていく。

「というかそれしかないと思います」

ティアナが拳手してそう口にし、私も含めたみんなが頷く。それ以外の方法と言えば壊すということしか選択肢がないから。

早速私の前に石鹼水や食用油とかのヌルヌルしたものが集められた。まずは石鹼水に左手を入れて、少しの間待つ。少し時間がもつたいな、とか思っていると、

「そつだ。ねえ、みんなは何か大事なものとかある？もちろん家族とかは当然だからそれ以外。何でもいいよ。なんとなくだけどこれが大事。とかでも」

ホワイトボードに可愛らしいデフォルメされた犬を描きながら、シヤルが訊き始める

「んじゃ、スバルとギンガは？」

「え？」

いきなり話を振られたから、少し考える素振りを見せる。でもすぐに、

「「これです」

スバルとギンガが同時に出したのは“リボルバーナックル”。それは二人のお母さんが残してくれたもの。うん、確かに大事なものだ。

「ん、なるほど」

シャルは満足そうに頷いて、ホワイトボードの犬の隣に“リボルバーナックル”と書いていく。

「フェイト・・・お嬢様、もうそろそろじゃない」

「うん。んっ・・・！」

みんなが見守る中（随分と大事になってしまった）、小指のはまった“指環”を引っ張る。
痛い。まだ抜けそうにない。

「フェイトちゃん、次はこれ」

なのはが私の前に用意したのはオリーブオイル。少し勿体ない。

（普通の油とかでいいと思うんだけど・・・）

でも折角用意してもらったのだから、黙って手を浸ける。

「そんじゃティアナ、エリオ、キャロ。三人は何かある？」

そう訊かれた三人は考え始める。

まずエリオとキャロは「アルバムです」と口にした。

自分たちの成長の記録、楽しい時間がたくさん納められたアルバム。それは私も解るよ。

そしてティアナは、シャルの隣まで近寄って耳打ち。

シャルはティアナに何を言われたのか知らないけど、一度頷いてティアナに微笑みかけた。

「あーティアずるーい！ シャルさんに何て言ったの！？」

「う、うるさい！ 何でもいいでしょー！！」

少し赤面したティアナにしつこく訊きまくるスバル。

『ねえ、シャルちゃん。もしよかったらティアナ、何て言ったのか教えてもらえる？』

なのはからの念話。たぶん、シグナムたちを含めた隊長陣全員に繋がっている。

シャルは少し考えた後、

『ごめん、ティアナ。……ティアナはね、今の“時間”を大事に思ってるの。』

腐れ縁なスバルや、可愛い弟分なエリオやキャロ。そして私たちのいる機動六課。

その“時間”がティアナにとっての大事なもの』

それからいろいろと試したり、他のメンバーの大事なものを聞いて、お昼休みは終了。

続きはまたあとで、ということになった。

そして、荷物整理を再開するために部屋へと戻る途中、

「あ、ルシルパパ！」

寮へと続く道の途中、こちらに歩いてくるルシルの姿。

ヴィヴィオがルシルに一番早く気づいて駆けて行って飛びついた。

「ただいま、ヴィヴィオ。ん？ フェイトとなのはも、ただいま」

「おかえり、ルシル君」

「うん。おかえり、ルシル」

ヴィヴィオを抱き上げたルシル。

そんなルシルと挨拶を交わして、寮へ道すがらなのはがさつきまでの話をルシルにした。

するとルシルは何か呆れたような、でもどこか嬉しそうな笑みを浮かべた。

「そうか。・・・よし、フェイト、少し見せてみる」

私は頷いて、左手をルシルに差し出す。

ルシルは抱っこしていたヴィヴィオを下ろして、

「あ」

そつと私の左手を挟むようにして両手を重ねてきた。

いきなりの事で驚いたけど、その大きな手に覆われた私の左手から伝わってくる熱にドキドキする。

何となくなのは見たら、なのははニヤニヤしながら私とルシルを見た。

「「「っ!?!?」「」」

いきなりの蒼い光。

「さあ、これでもう大丈夫だ」

私の左手が解放される。もう少しああしていたかったかも。

「フェイト、一応指環が取れるか見てくれ」

「あ、うん。・・・取れた」

「ホントだ。ルシル君、今何したの・・・？」

「ん？ 指環それは私の魔力と、まあ他にもちよつとした材料で創ったものだから、私の魔力を通せばサイズ変更くらいは出来る」

ルシルは何でもありということだった。

「おい、フェイトー！ー！！」

隊舎から私を呼びながらシャルが駆け寄ってきて、

「いけないなあ、シャル。お嬢様が抜けているぞ？」

「ル、ルシル・・・！」

ルシルを見た瞬間、警戒心丸出しになった。

「おいおい、男性に対してはご主人様、と言うのが決まりだったはずだが・・・？」

「むううう……じ……人さ……」

「聞こえない」

「まずいよ、ルシル。」

「じゅ……ま」

「散々酔っぱらって迷惑をかけて、その罰がこの程度で済んだ事、感謝してほしいな」

「ブチブチッ」

「ご主人様……お、おかえりなさいませ……」

「……ハッ」

「ブツッ」

「あ、キレた。」

「今鼻で笑ったなああああああ……!……!……!」

「うおおおおお……!……!……!」

「ルシルが襲われ始めた。」

「もうやっぺられるか……!……!……!」

「まずい、本格的にキレた。逃げるフェイト、なのは、ヴィヴィオ」

「！」

一斉にシャルから逃げ出す。
今のシャルに巻き込まれたら、またアフロとか、下手したらもっと
酷い目に遭うかもしれない。

「我が手に携えしは確かなる幻想おおおお！！！！」

我が手に携えしは確かなる幻想

それからルシルとシャルの強制コスプレ合戦が繰り広げられた。
それは壮絶とも言える戦いで、観戦者が次々と増えていく。
そして、

シャルロツテ・フライハイト、メイド服での雑用期間をさらに
一週間延長。

ルシリオン・セインテスト・フォン・フライハイト、二週間の執事
服での雑用を命ず

はやてから二人に対しての罰が言い渡された。

「いやああああああ！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（泣）」

大切なもの（後書き）

すでに忘れ去られていると思われるフェイトの指環。

今回は久々に登場。このエピソードの後半でちょっとした出番があるため、その前にみなさんに思い出してもらおうと思った次第です。

お徳感の足りないシリアスセット（Sサイズ）（前書き）

今回はショートストーリーのセット（S）です。

そついえばミッドは暖冬何でしょうか？ 見る人見る人結構薄着な気がするんですよ。

アニメもコミックも・・・

お得感の足りないシリアスセット（Sサイズ）

§ ヴィヴィオとパパと・・・ §

「そっか。うん、いいんじゃない、そういうのも。

というか大賛成だよ、なのは。まあ、今さら感もあるけどね」

メイド服に関して完全に開き直ってしまっているシャルちゃん。

今日もメイド服で仕事をしていたシャルちゃんと話す。

「ヴィヴィオを正式に引き取って、なのはも本当のお母さんになるんだあ。

フフ、なんか嬉しいし、それにすごく羨ましい」

なんだろう。シャルちゃん表情・・・笑顔なのに、笑顔じゃない・・・。

そのシャルちゃんらしくない表情に不安を覚えた。

「シ、シャルちゃんだって、すごく人気があるから、その・・・」

「ん？ うん・・・」

さっきまでの陰のある笑顔じゃなくて、いつもどおりのシャルちゃんが腕も組みながら唸る。

小学中学、管理局でも結構男の人に人気があったシャルちゃん。

その気になれば今日にでも恋人をつくれそうな程だ。

（何を考えているんだろう？）

「変じゃないと思うよ。だから、うん、ありがとうシャルちゃん」

「いえいえ」

シャルちゃんが呟いた言葉。

私は聞こえなかったけど、そのときシャルちゃんが呟いた言葉は、

すでに時間じんせいを終えた人間だから

「さてと、そろそろ仕事に戻らないと。なのはこれからヴィヴィオの迎えだっけ？」

「うん。聖王病院までね」

ヴィヴィオは今でも念のために聖王病院へと検査通いをしている。でもほとんど異常もないとのことだし、あと1〜2回になるはずだ。

＋　　＋　　＋　　＋　　＋　　＋　　＋

「　　というわけ」

医務室の掃除という理由をつけて、今日はそこでシャルマルを手伝っているルシルにさっきの話をする。

「そうか。なのはもようやく決心したというわけか。

よし……どうぞ、シャルマルお嬢様」

「ありがとうセイントテスト君」

ルシルからお茶を受け取って、嬉しそうに笑みを浮かべている。でもシャマル、シャマルはお嬢様って言うより……なんでもないです。

考えていることを察知したかのようにシャマルが私を見てきて、少し恐怖。

「それにしても、執事服に白衣着た人間って結構危ない人だよな」

「まったくだ。格好が変である上に動きにくい。しかも向けられる視線がいろんな意味で痛い」

大きく嘆息して、私にもお茶を出すルシル。

一応仕事中だけど、ここは頂いておこう。

「でもこれでなのはちゃんも本当のお母さんになるのね。

いつかそういう日が来ると思っていたけど、まさかこんなに早いなんてね」

「確かに。19歳で子持ちと言うなら早い……か？」

「そんなことないと思うけど。まあ、なのはとヴィヴィオの年齢からすれば変になるかもしれないけどね」

19歳のなのはが、6歳のヴィヴィオの母親。

わああ、リアル1オの母になってしまう。

ていうか、

「ユーノの鬼畜ううううーッッ!……!」

「「っ！！？」」

ユ一ノに襲われる中学時代のなのはを想像してしまった。
フツ、一体何をバカなことを想像してしまったのか。この私とした
ことが。

「ってうわっ、二人ともお茶吹いて汚っ！」

ルシルとシャマルが思いつ切り咽っていて、そしてルシルが床を雑巾
で拭いている。

「お前が突然変な事を叫ぶからだ！！」

「痛っ！？　なんで叩かれるの！？」

「だから、変な事を叫んだからだ！！」

ルシルがいきなり立ち上がって、何故かスナップを利かせた平手で
頭を叩いてきた。

少し涙が出る。それほどに痛かった。

「えほっえほっ・・・フライハイトちゃん、なんであんなことを
・・・」

床拭きの続きに入ったルシルに謝りながら、シャマルが訊いてきた。

「あんなことって・・・？」

「えっと、ほら、その・・・き、鬼畜・・・って」

「鬼畜？ って何でシャルが私の心の内の想像知ってるの！？
やっぱりシャルって人の心が読め」

「お前がさっき全力で叫んだんだ！！」

「痛っ！？」

また叩かれ・・・違う。今度は拳骨だった。
これ以上ツッコませるなっ！ってルシルが怒鳴ってくる。

(つつう〜、だったら無視とかすればいいのに・・・)

あまりの痛みに蹲る。くそお、覚えてろよ。

「まったく。二人に対してとんでもない失礼な想像だぞ」

「ううう・・・」

「はいはい。フライハイトちゃんも悪気はなかったんだから、セインテスト君も許してあげて」

パンパンと手を叩いて止めに入ってくるシャル。

ふんっ、命拾いをしたねルシル。今日はシャルに免じて許してやるっ。

「でも、そうか。それなら私の父親役もいよいよ終わりだな。
ああ、なかなかの良い夢を見せてもらった気がするよ」

お茶を淹れなおしながらルシルがそう口にした。

「「あ
「

そうだ、ルシルがヴィヴィオの父親役を引き受ける期間はヴィヴィオが引き取られるまでとなっている。

「そうだね。で、どうする？ ヴィヴィオにパパと呼ばないように言うの？」

そんなことを訊いてしまった。

「そうだな。ヴィヴィオの母親が正式になるのはになるなら、私が父親と呼ばれるわけにはいかない」

「でもヴィヴィオが言うことを聞くかしら？
もうずいぶんとセインテスト君を父親として見ているのに・・・」

「「「・・・」」」

きつと無理だ。ヴィヴィオが嫌だと泣く様がハッキリクツキリコツキリ見える。

ルシルとシャマルも私と同じように想像できたのか少し顔色が悪い。

「ちよつと無理っばいよね」

「・・・だな。まあ、時間をかけてゆっくりと直していくしかないか」

それでも直りそうにないと思うのは私だけかな？

十
十
十
十
十
十
十
十

ヴィヴィオと一緒に聖王病院から帰ってきて、隊舎の脇を通って寮へと続く道を歩く。

その途中にある芝生の上に座って、ルシル君が木にもたれながら本を読んでいた。

時々ルシル君はそうやって時間をつぶしている。

声をかけようか少し迷う。本を読んでいるときのルシル君は、何とつか近寄りがたい雰囲気を持つ。

上手く言えないけど神聖さを醸し出しているというか、そんな感じだ。

ヴィヴィオも何となく気づいているのか、私とルシル君を何度も交互に見ている。

すると、歩いてくる私たちに気づいたのか、ルシル君が本から視線をこちらに移してきた。

その表情は読書中の時とは違って微笑み。本を閉じて、芝生の上に置く。

「おかえり、なのは、ヴィヴィオ」

「ルシルパー！　ただいまあ！」

そう言って立ち上がったルシル君へとヴィヴィオが勢いよく抱きついた。

ヴィヴィオの頭を優しく撫でながらもう一度おかえりって口にしてる。

『なのは、少しいいか？』

『え？ あ、うん。なに？』

いきなりの念話。口頭で話すような内容じゃないのかもしれない。そして私たちは寮へ向かうために歩き出す。

『シャルに聞いた。ヴィヴィオを正式に引き取るらしいな』

ヴィヴィオを真ん中にして、私が右側、ルシル君が左側に立って、ヴィヴィオと手をつなぐ。

そんなヴィヴィオはすごく嬉しそうだ。さっきから私たちを交互に見る。

『うん。ヴィヴィオのいない生活が考えられなくなっちゃって』

『そうか。・・・ヴィヴィオにはもうそのことを？』

『うん、もう話してあるよ。書類の手続きとかも全部揃えてあるし』

あと少しの記入と提出で、ヴィヴィオの正式な母親になれる。

『覚えているか、なのは。私がヴィヴィオの父親として居る期間のことを』

『っ！』

もちろんそれは覚えている。

ルシル君がヴィヴィオの父親役として居るのは、ヴィヴィオが引き取られるまで間と言う約束だ。

でも、

『でも引き取り手は私だし、このままでもいいよ』

ヴィヴィオがルシル君を父親として慕っているのは間違いない。それを今になってやめさせるなんてことは出来ないし、したくない。こんな良い笑顔なんだから、これからもルシル君を父親として……あ。

今さらながらに思い知る。正式な母親の私。ならルシル君は？父親になる。それはつまり、

(ルシル君が……私の旦那さん……?)

それはダメ。だってルシル君はフェイトちゃんの……。

「なのはママ？ ルシルパパ？」

ヴィヴィオの声で思考から抜ける。

いつの間にか寮の玄関にまでたどり着いていた。エントランス

私は立ち止まって、少し考えを整理。そして、

『……ルシル君』

『ん？』

『これからも、ヴィヴィオのパパでいてくれますか？』

もちろん本当の父親になってほしいとまではお願いできないけど……。

ルシル君さえよければ……』

それが私の出した結論。

フエイトちゃんからルシル君は奪えない。奪ってはいけない。でも、それでもヴィヴィオのパパであり続けてほしい。たとえ形だけでも。それが今の私の願い。

ルシル君を見上げる。

その表情は、シャルちゃんと同じどこか陰のある微笑み。でもそれも一瞬で、すぐに普段の微笑をルシル君は浮かべて、

『……ああ、なのはとヴィヴィオが良ければ。』

またシャルちゃんと同じ。その先の言葉が聞こえなかった。

『ルシル君、今何て言ったの？』

「『いや、何でもない』これからもよろしく、なのは、ヴィヴィオでもルシル君がそう言うなら深くは訊かないでおこう。」

「うん。こちらこそお願いします」

「よろしくお願いします……？」

ルシル君が頭を下げるのに続いて私も頭を下げる。

ヴィヴィオは何が何だか解らないといった風だけど、それでもルシル君に行儀よく頭を下げた。

こうして私は正式にヴィヴィオの母親になって、ヴィヴィオは“高町ヴィヴィオ”になった。

§シャルシルの休暇§

「へ？ 私とルシルに休暇？」

「そや」

「はいです！」

終業となって寮へと帰ろうとしたとき、はやてとリインが私とルシルを止めて、そう口にした。

「私たちに休暇なんて必要ないと思うが。毎日が休暇のようなものだし……」

「毎日って言うのはいき過ぎだけど、でもルシルの言う通りかも。私たちって単なる客人のような立場だしね」

「そうは言ってもちゃんと仕事してもらっとるし、それに今は六課所属の魔導師やしな」

「「は？」」

そんなの聞いてない。六課所属なんて初耳だ。ルシルも同じだから抜けた声を出してしまっている。

「はやてちゃん、もしかしてお二人に言ってなかったですか？」

「………。まあ、とにかく一日だけやけど休暇や。」

二人でゆっくりと休んできてなあ」

あちら、忘れていたとは言わないわけか。
でも私たちが知らない以上は忘れてたのは間違いない。
しかも目も泳いでいるし、分かり易いよはやて。

んで翌日

なのはたちに見送られながら隊舎を後にする。

「どうしようか・・・？」

ある程度街に出てから、隣を歩くルシルに訊ねる。

正直どうこの休暇を過ごせばいいか見当がつかない。

今までに二人だけで行動していたことは何度でもあるけど、こつうふうふうに過ごすのはなかった。

契約執行中とかはお腹空かないし、睡眠も必要ないし、娯楽なんてものも当然必要なし。

人間としての生活なんてものは何一つとして必要ない。
だから少し変な感じだ。こういう時間を過ごすのが。

「そう・・・だな。まあ適当にふらついて、気になる店があれば入るくらいでいいだろう」

「うん」

ルシルが私を抜いて先に行く。

私もそれに続くように少し早歩きで、ルシルの隣にまで戻る。

（あ、そうだ。良い機会だからあそこに行こう）

「ルシル、行先決定！ ついてきて！」

行先を決めて、ルシルの手を引いて向かう。

十 十 十 十 十 十 十

「よっしー！」

シャルがガッツポーズしつつ、さらにコインを追加。
そして私の腕にもぬいぐるみがさらに追加。

シャルが何故かゲームセンターへと入り、向かった先はクレイ
ーム。

百発百中の腕前で、次々と箱の中のぬいぐるみを取っていく。
いろいろとツツコミたいが、あんな楽しそうにしているのなら邪魔
するのは邪推だろう。

「なあ、シャル。一体これほどのぬいぐるみをどうするつもりだ？」

いつかこの世界を去る私たち。自分のために取るならあまり意味は
ない。

「ん？ んんー……誰かへのプレゼント？」

「疑問形って……」

さらに取ったぬいぐるみを抱えながらこちらに振り返り、思案顔に

なりながらそう答えた。

「一応考えてるよ。……どこの世界にも恵まれない子供っている。

でね、これは特別保護施設の子たちに贈ろうかなって思ってるんだ」

特別保護施設。希少能力や特別な魔力を持ち、そのせいで事件に巻き込まれた子供達を保護する施設だ。

かつてはエリオもそこで過ごしていた。

「そう……か。よし、なら私も手伝おう」

私も隣のクレーンゲームでレッツプレイ。

「ふふん、じゃあルシル、どっちが先に空にするか競争ね。

あ、そうだ。ねえ、今日一日何かの勝負をして、負けた方がお金を出す。どう？」

「乗った」

ぬいぐるみを店員からもらった袋に詰めて、“英知の書庫”^{アルヴァイト}の“蔵”へとしまい、バトルスタート。

十 十 十 十 十 十 十 十

「あー楽しかった！ 私の勝ちだから、そうね……うん、まずお昼はルシル持ちね」

「くっそー、あのときミスしなければ勝っていたのに・・・！」

ネクタイを弛めながら、随分と悔しがるルシル。

ああいう遊びはあまり好きじゃないと思っただけ、なんだ、ルシルもまだまだ子供じゃん。

「はぁ・・・。にしてもあの店の店員最後は泣いていたな」

「あー、ちょっと悪いことしたかもね」

四台も空にされては泣きたくもなるか。うーん、やりすぎた。

もしかしたらあそこのブラックリストに載せられてしまつかも・・・。

でも他のゲームでお金を使ったんだから、それで許してほしい。

それからランチして、次はレヴィヤタンに会いに行くことにした。

レヴィヤタンは今、ルーテシアや戦闘機人たちと一緒に海上隔離施設にいます。

ルーテシアと契約を結んだため、傍を離れられなくなりましたから。

まあ、それを望んだのはレヴィヤタンだし、あの子自身もそれを受け入れている。

「さてと、次は海上隔離施設までの交通費なわけだけど・・・」

勝負するためのお題を、周囲を見て探すけど、そんな簡単に見つかるわけもなかった。

だから、

「しりとりでいいし」

そんな子供っぽいお手軽なお題を提案。

却下されるかな、と思って隣を歩くルシルを見上げる。

「・・・乗った」

ちよつと意外だった。だけどこのときに思い出すべきだった。

ルシルはかつて移動図書館と呼ばれるほどの知識の集合体であることに。

「それじゃ最初は定番の、しりとりのはり」

「リン酸三ナトリウム」

なんかすごい返した。

「無添加」

「過炭酸ナトリウム」

「無知」

「チオ硫酸ナトリウム」

ちよつと待って。なんか嫌な予感が・・・。

「む、む・・・無理」

「硫化水素ナトリウム」

ム”！！

地味だよ！ 陰湿だよ！ 泣けてくるよ！！」

息を切らしながらツッコム。

「筋脳体育会系の君が私に勝てるわけがないだろう」

「うわっ、ムカつく」

「はいはい。どちらにしても私の勝ちだ。交通費はシャル持ちな」

「つくうう……納得いかないよ……」

結局払いました。グスツ（泣）

十 十 十 十 十 十 十 十

海上隔離施設へと着き、レヴィヤタンとルーテシアとの面会。

そしてシャルは、戦闘機人たちと親しくなってしまうため、そっちと談笑している。

最初の方は相手にされていなかったが、ウエンディとセインの二人とは早くに打ち解け、そのまま他の連中とも仲良くなっていった。

「レヴィヤタン、身体の調子はどうだ？ 何か不都合が起きているとかはないか？」

「うん、大丈夫。ありがとう、ルシリオン」

レヴィヤタンを存在させ、ルーテシアと繋ぐ核“生定の宝玉”の確認。
随分と馴染んでいるため、もう定期的に出向く必要はないが、やはり気になってしまっ。

それにしてもレヴィヤタンの話し方もすっかり良くなった。
以前のように間もなくなって聞きとり易くなっから助かる。

それと私とシャルのことは名前と呼ばせるようにした（シャルの提案）

レヴィヤタンは、もうペッカートゥムでもなく敵でもないからということだ。

「そうか。ならルーテシア、君は何か不調とかないか？」

ルーテシアのことにしても訊いておく。

この世界のルールと、私たちのルールは少々違うからだ。

何か問題があれば対処策が必要になってくる。

「うん、大丈夫。あの・・・それと母さんのこと、ありがとう」

「ん？ ああ、どういたしまして。私としてもメガー又さんとは知り合いだ。

かつてお世話になったことへの恩返しのようなものだよ」

メガー又さんに関しては少しばかりの手伝いをしたにすぎない。

だから礼を言われるほどのようなものじゃないが、ここは素直に受け取ろう。

そしてそれから少しばかり話をし、

「それじゃあレヴィヤタン、ルーテシア、そろそろ行くよ。次はいつかになるか分からないが、近いうちにエリオとキャロが来るだろう」

「うん」

海上隔離施設を後にする。

ルーテシアとレヴィヤタンは今後、メガー又さんと共に辺境世界で過ごすことになるそうだ。

魔力の嚴重リミッターに、辺境世界におけるの八年間隔離。

それがルーテシアに与えられた処罰。レヴィヤタンは公式には表立っていないため、罪はない。

しかし彼女自らがルーテシアと共に罰を受けることを望んでいる。どの道一蓮托生だが。

時計を見ればもう午後六時前。一日休暇も残りわずかだ。

シャルに最後はどこへ行くかと訊けば、

「海」

シャルがそう一言。確かにここから目と鼻の先なため、金と時間はいらない。

「まあいいか」

ミッドの冬は比較的暖かい。だからと言ってこの時期に海はキツイ。思っていたが、少しヒヤッとするくらいで、それほど寒さを感じられない。

「うひゃっ、冷たっ！」

浜辺に着いた途端ブーツを脱いで海に向かって歩いていく。そしてスカートの裾を摘み上げて、波打ち際で楽しそうにはしゃいでいる。

(まったく、折角の綺麗な服が濡れでもしたら・・・ん?)

そういえば今日のシャルは随分と女の子らしい格好だ。

髪もいつものストレートではなくサイドアップ。

髪の手入れはきちんとするシャルだが、髪型に拘らないのが彼女だ。服は黒のタートルネックトップ、淡い桜色のワンピース、白のカーディガン。

よく見れば何となく気合の入った服装だと思う。

今のシャルには何と云うか清楚可憐と云う言葉がしっくりくる。

普段の彼女とは結びつかない言葉だが、今日の、そして今のシャルにはピッタリだ。

(この世界に来て本当に良かったんだな、シャルは)

あんなに楽しそうな笑顔は、この世界でなければ見れないだろう。

これも全てはなのはたちのおかげだ。彼女たちと過ごしたからこそあの笑顔だ。

そんなことを思いながら、シャルを見続ける。

そしてシャルは打ち寄せる波から逃げようとしたが、砂に足を取られたのか身体が傾く。

「うわっ・・・!!」

さすがに放っておいてびしょ濡れにするのはまずいと判断、すぐさま駆け寄る。

そして倒れそうになっているシャルの腕を取る。

「ごめん、助かった。ありがとう」

「ふう・・・気をつけ」

「「っ!?!」」

今までになかった力強い波に足を取られ、二人仲良く転倒。それは冷たい波の餌食となりました・・・。

「・・・・・・・・プ」

「・・・・・・・・フ」

「「あははははははは!?!」」

笑う。もう笑うしかない。

頭から足先までびしょ濡れになって、しかも冬の海。

少々頭のおかしい二人に見えるかもしれないな。ああまったく。

それから浜辺で炎熱の魔術を使って服やら何やら全て乾かして、六課へと帰る。

夕飯を食べに行くことも出来たが、やはりみんなとの食事が一番と言っのが私とシャルだった。

十 十 十 十 十 十 十

「あとどれくらいの間こうして過ごせるかな・・・？」

六課への帰り道、ふとそんなことを口走ってしまふ。

折角の休日、その最後に話すような内容じゃないのに。

「・・・知ってる？ スバルは湾岸特別救助隊からスカウト。テイアナは執務官補佐」

「ああ、知っている。キャラは前所属の自然保護隊。エリオもそれについていくということだ」

「うん。あの子たちはあの子たちだけの未来へ歩み始めた。それはすごく嬉しいことだね」

「まったくだ。これから幾度も壁にぶつかるかもしれないが、生きている以上は当然のものだ」

「見守っていつてあげたいね」

「・・・それは、私たちの役目じゃない」

「・・・そっか・・・そう・・・だね」

なんてね ルシル、私はそうは思わないよ。

「すまないな。君もレヴィヤタンのように残せばいいんだが・・・」

「

「仕方ないよ。界律わたしたちの守護神の存在の概念は強過ぎる。
レヴィヤタンのように、何て言うか……軽いものじゃないから
ね」

私は残れない。すでにこの身は滅んでいるから。

「……全てが終わるその時まで、ああその時までは見守ろう」

「うん」

私はそれまでだけど、ルシルはその後もみんなを見守っていくんだ
よ。

翌日

ルシルと二人して風邪をひきました。

くああ、寒い！ へっくしっ！

海上隔離施設の乙女(笑)たち (Leviathan's diary) (前)

8月16日 ちよつと追加

月×日 晴れ

ルーテシアとアギトと一緒に、この海上隔離施設に来て二日。そしてゼストは・・・ゼストはやっぱり死んだとのことだ。ゼスト本人から死期が近いことは聞いていたけど、やっぱりいないと悲しい。

うん、悲しいと思える。ゼストの死に、心の痛みを感じる。

「ダンナは、きっと満足していった。あたしはそう思う」

泣くのを抑えながら、アギトはそう言った。なら、そうなんだと思う。

自分の納得のいく、満足の出来る死を迎えられる人は幸せだ。

月×日 晴れ

ナンバーズと久しぶりに会った。けど数が足りていない。
しまい

「ああ、ウーノ、トーレ、クアットロ、セツテの四人だ。

四人は捜査協力を拒んで、それぞれの軌道拘置所に入れられたんだ」

チンクからそう聞いた。

現状ではチンクが、他の妹たちにとってのリーダーだ。

チンクより下の数字を持つ妹たちは、チンクの進言で海上隔離施設ココに来たみたいだし。

それに妹たちの捜査協力することも先導していたとのこと。

身体は小さいのに、妹想いの良いお姉さんだ。うん、小さいのに。

「チンク・・・小さいのに・・・偉い」

「ち、小さい・・・」

笑ってるけど、雰囲気的には落ち込んでいると見る。

何だか知らないけどごめんなさい。

月×日 晴れ

第三しんぞうの力と第四よんごうの力が面会に来た。

目的は、わたしとルーテシアの契約のおけるちよつとした検査。

病院でルーテシアと一緒にいた時でも度々来ていた。

けど検査とは言っても質疑応答だけだから、他の人から見ればただの面会に見える。

「そう言えばレヴィヤタン。もうペッカートゥムじゃないんだし、私とルシルは名前で呼んでほしいんだけど」

質疑しつこ応答も終わって、面会時間も残りわずかとなったとき、第三しんぞうの力がろそう口にした。

「名前・・・うん・・・」

感謝してもきれない恩人たちからのお願い。

断る必要もないし、それに大罪ペッカートゥムとの決別の意を含めて、これからは二人を名前で呼ぼう。

「えっと・・・名前・・・知らない」

それ以前の問題だった。だって仕方ない。知らないものは仕方ない。一応愛称のようなものはさっきから耳にしているけど、わたしがそれで呼んでいいのか分からない。だからちゃんと名前を教えてください、

「シャルロツテ・・・ルシリオン」

二人を呼ぶ。シャルロツテは笑みを浮かべるけど、ルシリオンはちよつと分からない。

コソツとシャルロツテに訊くと、満更でもないとのことだ。

シャルロツテが、ルシリオンに聞き取れないような小さな声で、わたしにある単語を言うようにお願いしてきた。

意味は解らないけど、それくらいどうってことはない。だから、

「ありがとう・・・ロリコンの・・・お兄ちゃん」

言われたとおりに口にした。

「っ!?!? レヴィヤタンに何を吹きこんでいるんだお前はっ!?!?」

ルシリオンの表情が一瞬引き攣って、次にシャルロツテへと視線を移して怒鳴った。

「わーごめんなさいー!」

二人は本当に仲が良いと思った。

それから、シャルロッテに日記帳というのを貰った。
その日起きた印象的な出来事を書くらしい。
この施設の職員にも許可は取ったって言った。どうやって取ったかは秘密らしい。
そして今日を含めたここ数日の事も一緒に書いた。

それにしてもシャルロッテがセインやウェンディと知り合いとは思わなかった。
チンクともそれなりに話していたし、シャルロッテと何かあったのは間違いなそう。

月×日 曇り

今日は曇り。この天気は好きじゃない。わたしの最期の日が曇りだったから。

少し憂鬱になりながら日記帳を開く。すると今まで気づけなかったけど、端の方に小さな文章が書かれていた。

お題：悩める乙女たちの悩みを聞き、解決せよ。 b y C . F

（もしかしたら、悩みが無い、ということとは考えなかったのかな？）
何を企んでいるのか分からない。わたしのことを考えてか、それとも別の意図があるのか。

でも今みんなは更生プログラムの時間を終えて、今は自由時間。
ちようどいい。書いてあるやり方の通りに事を開始する。

メンバー全員に白紙を渡して、悩みがある人のみ書いてもらって返してもらおう。

そこに解決法を書いて、態々わたしのところまで見に来てもらおう、らしい。

ちなみに匿名で書かせないといけないとのこと。

(何でこんな面倒な事をするんだろう)

結局はそれに従って、始めるわけだけど……。そして何枚か届いた紙を読む。まず一枚目。

どうしてもノリで喋って行動してしまうっス。

その所為で双子からの扱いが少し冷たいっス。どうしたら良いっスかねえ

「……ウエンディだ」

匿名の意味が無さ過ぎる。「ッス」だなんてウエンディ以外の何者でもない。

どうして口癖が文章にまで現れるのだろう。謎だ。

まあいいや。この解決法は……

すでに手遅れ。諦めることを推奨

よし。まずはひとつ解決だ。

次は……

あたしの性格、妹とも分け隔てなく接するせいかなり姉として扱ってもらえない

うーん、これは大変な悩みかもしれない。
だったら、

その性格を変えることを推奨。姉としての威厳を保つような態度で常にいること

よし。二つ目解決。わたしは結構相談役としてやっていけるかもしれない。

あ、そうか。シャルロットはそれを見抜いていたのか（そんなわけがない）。
恐るべしシャルロット。
次は……

自分の体型に少しばかり不満がある。もう少し大きく……

最後の方は文字を何度も書いて消した形跡がある。なんでだろう？
それにしても体型についての相談だ……。
どうしよう、戦闘機人って成長するものなのか……？
これはかなり難しい相談だ。じっくりと考えて答えてあげないといけない。

改造手術推奨。どこを大きくしたいのか分からないけど、それで万事解決

よし。なかなか満足のいく方法だ。

すごい。わたしはかなりすごいかもしれない。
次は……

ウエンディがすごい

「・・・・・・・・・・」

どうしよう。これはいろいろとまずい気がする。

頑張つて耐えてください。心から応援しますので

と書く。だってこの相談の答えなんて見つけれない。

うん、忘れよう。そしてウエンディにはもう少し優しくしよう。
次は・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「?????????」

え？ これは相談は無いということでもいいのか・・・？
よく見ると同じような紙がもう一枚。相談事が無くても“・・・”
を書いて提出。

律義。明らかにオットーとデイードの紙で間違いない。
うん、悩みが無いならそれで良いことだと思う。
よし。次で最後だ・・・

時々面会に来る高町さんを見ると何か嬉しい。この胸の高鳴り
はなに？

(高町さん・・・・・・・・?)

あ、思い出した、あの女の人だ。
確かシャルロツテとルシリオンの友達という・・・。
わたしも一度面会したことがある。かなりの美人だ。
その人が来ると嬉しい。うん、

それは大好きだから

短く書く。それだけで十分だと思うから。

わたしもルーテシアの事が大好きだから良く解る。

よし。来た悩みも解決させたし、午前中までの嫌な気分も吹き飛んだ。

シャルロツテに感謝しよう。

後日

セインが妹たちに偉そうな態度を見せていた。

そして反発が起きて、セインは崩れ落ちた。セインは何がしたかったんだろう？

月×日 晴れ

シャルロツテが面会に来た。今日はルシリオンがいないから一人だ。訊くと他の世界での契約執行中とのこと。シャルロツテはサボっていいのだろうか？

「んー、そうしろってルシルに言われてるから。

ルシルは、出来るだけ私に良い思い出をつくってもらおうとしてるみたい」

ルシリオンはシャルロツテに優しい。もしかしてシャルロツテの事が好きなのかも。

そして今日の目的はいつもの質疑応答。それと、

「ルーテシア、あなたのお母さん、メガー又さんが目を覚ましたよ」
これを伝えるためだった。

もちろんあとで管理局の人から聞くのかもしれないけど、出来るだけ早く知らせてあげたかったとのこと。

訊けばルシリオンが特例として治療に参加したらしい。
ルシリオンには次々と恩が出来る。契約を終えていなくなるまでに、この恩を返しておきたい。

シャルロツテは目的を終えて、姉妹の面会へと向かった。

姉妹は少しずつだけど、シャルロツテと打ち解けている。

やっぱりシャルロツテは界律テストメントの守護神の時と違って、今は面白い人だ。

「良かったね・・・ルーテシア」

「うん」

ルーテシアの表情にあまり変化はない。だけど、やっぱり嬉しそう。手を取り合って、外を眺める。これからもずっとルーテシアと一緒にいられますように。

月×日 晴れ

自由時間。このときだけはある程度の行動は許される。

ゆったり寛ぐチンクがコーヒーを飲んでいる。

ここ海上隔離施設は収容所と言うよりは、更生施設に近い。

だからそういうことは制限されない。一応限度はあるけど・・・。

「それはある暑い夏の日・・・だったっすよ」

チンクの傍でそう語り出したウエンディ。

それに耳を傾けるのは他の姉妹たちだ。

「ある少年が喉の渴きを覚えてキッチンへと行くと、そこには冷えた一杯のアイスコーヒーがあったっす」

チンクもアイスじゃないホットコーヒーを飲みながら聞き耳を立てている。

「その少年はラッキーと思って、そのコップを手を取って一気に飲みましたっす。」

そして、飲み干した少年は夏と言う暑さを忘れるほど背筋が凍ったっすよ・・・」

ウエンディは微笑を浮かべて、話を続けていく。

正直嫌な予感しかしないけど、先が気になるから黙って聞く。

「少年の視線はコップの中にくぎ付け。そこから視線を離したくても離せないっす。」

自分が犯した恐ろしい行為に、凍ってしまったっすからね」

うんうんと頷いて焦らす。その先の事が気になるのか、ノーヴェが先を促す。

「んだよ。何があったんだよ。誰か上の偉いやつだったのか？」

「ふふん、実はそのコップの中には・・・」

「」「」もう黙ってる!!」「」

海上隔離施設は、今日も平和です。

月×日 晴れ

今日のページにもお題が書いてあるのに気づく。

C・F お題：話し方の改善（出来るだけ間を開けないように）by

わたしに対してのお題のようだ。

「どうしたのレヴィ？」

「ルーテシア……えつと……」

そうか。この間を無くすことが今回のお題なんだ。
でも、気づいたらこの話し方だった。それを今さら直すなんて、少し面倒くさい。

「話し方の改善……？」

「C・F……？ 誰か知らねえけどレヴィに何させるつもりだよ」

ルーテシアとアギトが日記帳の端を見て、声を出して読んだ。
わたしはそれに頷いて応える。

「やっぱり……聞き取りにくい……？」

「そんなことない」

「あたしも今のままで良いと思うぞ」

「でも……」

うん、やっぱり直そう。これからをこの世界で生きるなら、甘えは許されない。

それで、どのようにして直そうかと姉妹に相談した。

「レヴィお嬢様は別にそれで良いと思うっすよ？」

「どうかしたんですか？」

まずはウエンディとセインに相談。

話し方の改善が必要になったと告げて、どうすればいいか訊いた。ウエンディは現状で良いとのこと。

「うーん、すぐに直せるものじゃないんですね？」

だったら時間をかけてゆっくりと直していくしかない……」

セインはゆっくり時間をかけて、っと。

「そうですね……早口言葉、はどうでしょうか？
あれは滑舌を良くするのに良い方法だと思いますが」

「そうだな。私もオットーの意見に賛成だ」

今度は、集まっていたチンク、オットー、デイドの三人に訊いた。早口言葉。聞いたことはあるけど、具体的なものは知らない。

「レヴィお嬢様。ここには読書室もありますから、そこで御調べになるのがよろしいかと」

「うん……ありがとう……デイド。チンクと……オットーも……ありがとう」

やっぱりあの三人は頼りになる。

ウェンディとセインもわたしのことを思っていることだろうけど、やっぱり早い内に直したい。

それからルーテシアとアギトに手伝ってもらって、早口言葉に関する本を探す。

一冊だけだったけど、内容を見れば十分だった。

「月々に……月見る月の……多けれど……月見る月の……この月の……月」

結構つらい。

「月々に月見る月の多けでっ!？」

アギトが思いつ切り噛んだ。

「分かった? 分からない? 分かったら「分かった」と、分からなかったら「分からなかった」と言わなかったら、分かっていたか分からなかったか分からないじゃない。分かった?」

ルーテシアは早口言葉というレベルじゃない遅さで口にした。

「「「・・・・・・・・「「「」

沈黙。そう簡単にいくわけもないか。

本のページを捲って、

「光合成・・・合成・・・毒性・・・化合物・・・」

「光合成合成毒性化合物！！ よっし言えたあああ！！」

アギト、それを何回か繰り返さないとダメなんだよ。

「放射線照射装置掃射総責任者・・・」

「手術中・・・集中しなくて・・・中傷集中・・・砲火・・・」

口にする早口言葉の選択が間違っているのかもしれない。
さすがに初心者にはレベルが高過ぎる気がする。

「レヴィお嬢様、ルーお嬢様、アギトさん、首尾はどうっすかあ？」

陽気な声で読書室に入ってきたウエンディ。

上手くなる方法を訊いて、まずは簡単なものから始めることになった。

「じゃあレヴィお嬢様、いくつスよ。生麦生米生卵、はい！」

「生麦・・・生米・・・たまご・・・」

慣れた話し方だとどうしても間を空けてしまう。
どうしてこんな話し方をするようになったんだろうか。

「もう一回っスよ。生麦生米生卵、はい」

「生ふぎ生ほめ生なま」

「」「」「」「」「」

「いろいろと惜しいっスねえ」

「でも間が空かなかった。それだけでも進歩だよ、レヴィ」

「あ……うん……」

「ありゃ空いたっスね」

もう少し時間がかかりそうだ。
けどいつかは言えるようになってみせる。

月×日 晴れ

今日は更生プログラムの一環でお菓子作りとなっている。
と言うか何故お菓子作りなんてものが更生プログラムに入っている
のかが不明だ。
だけど料理は好きになったから、やる気はある。

「つつか何で菓子作りなんだよ。んなもん必要ねえだろ」

だけどノーヴェはあまり乗り気じゃない。

「まあそう言うな、ノーヴェ。もしかしたらここを出たら必要になるかもしれん」

「チンク姉がそう言うなら、しゃあねえ」

ノーヴェが簡単に折れた。これが鶴の一言というものが。渋々ノーヴェが残っている白いエプロンを手に取った。

他の姉妹も、すでに手に取っていたシンプルなエプロンをつけていく。

「チンク姉、可愛いつス！ ノーヴェは似合わねえつスけど」

調理に邪魔にならないように髪を結ったチンクを見てウエンディが、チンクへの褒めと、ノーヴェへの余計なひと言を口にした。

「うっせえっ！ テメエだって似合わねえじゃんかよ！」

「そんなことねえつスよねえ、お嬢様方々？」

「「・・・・・・・・」」

「無言つスか！？ 無視つスか！？ あたしも変なんスか！？」

「ニアッテル」

「棒読みつスか！？」

もうどうすれば良いのか分からないから、ウエンディをセインたち

に任せる。

視界からウエンディを外して、わたしもルーテシアもアギトもエプロンをつける。

「変じゃない？」

ルーテシアが桃色のエプロンの裾を掴まんで、変じゃないか訊いてくる。

もちろん変なんかじゃない。

「変じゃない」

「そうだぜルールー。似合ってるって」

「ありがとう、レヴィ、アギト」

わたしたちの準備は完了。

姉妹たちもエプロン装着済みで、いつでも始められるようだ。

「ごめんなさい、遅くなって！」

そして調理室へと入ってきたのは、姉妹たちの更生プログラムの指導をしてくれる一人、ギンガ・ナカジマ。

以前ここに面会に来たスバルのお姉さん。

時々、ギンガとスバルのお父さんや、ギンガの上官のラッドお兄さんも来る。

「えっと、それじゃあ今日はクッキーをつくります。簡単なものだから、すぐに出来ます」

ギンガがエプロンをつけて、コンソールを操作してクッキーの作り方をモニターに出す。

「それじゃあ役割を分担して、始めましょう」

姉妹たちが作るのはチョコクッキー（約70枚）

バター、もしくはマーガリンを240g。三温糖100g。ミルク

ココア（砂糖入り）100g。

小麦粉260g。カカオマス、もしくはチョコレートを40g。

役割を決めて、クッキー作りを始めた。

何も知らない人が姉妹たちを見たら、それはもう普通の女の子に見えるに違いない。

「それじゃあルーテシアちゃんたちも始めようか」

ギンガがわたしたちの所まで来る。

わたしたちは頷いて、メープルクッキー（約30枚）を作り始める。料理経験者であるアギトとわたし。そう苦労しないで作れるはず。

薄力粉100g。片栗粉10g。サラダ油おさじ。メープルシロップ大さじ3。

「そんじゃあやるぞ、ルー、レヴィ」

「うん」

まずはサラダ油とメープルシロップを混ぜ合わせる。

薄力粉と片栗粉も混ぜて、一塊にする。冷蔵30分。170度のオーブンで15分。

「出来は完璧だな」

「ルーテシアの……型抜きが可愛い」

「ありがとう、レヴィ」

姉妹たちより早くに完成。クッキーの出来は満足のいくものだ。いろんな形をした香ばしい匂いがするクッキーを見る。

「ぐああ、失敗だあ！」

「真っ黒ですね、チョコだけに」

「上手くもなんともねえよ」

「何が美味しいんすか？」

「ちゃんとオープン見とけよなあ」

焦げ臭い。向こうはいろいろと苦戦しているみたい。もう一度作りなおそうとしている姉妹たち。

「……そうだ。ルーテシア……アギト、耳を貸して……」

時間が余りそうだから、ルーテシアとアギトに提案。

「お、そうだな。あたしは賛成だ」

「わたしも」

わたしたちはもう一度クッキーを作る。
それは感謝の意味を込めて作るクッキー。

後日

機動六課の人たちにクッキーを渡した。

みんなからのクッキーの評判はすごく良かった。だけど、

「ぐぼおっ!?! レヴィヤ・・・タン・・・な・・・ぜ・・・だ・・・?」

ルシリオンに渡ったクッキーには、姉妹たちの失敗作が紛れていたらしく、それを食べたルシリオンが悲しいことになったって後で聞いた。

いろいろとごめんなさい。そしてありがとう、ルシリオン。

制限された空間だけの生活だったけど、すごく楽しい日々だった。ルーテシアがいて、アギトがいて、姉妹たちもいて、友達も出来た。わたしは本当に幸せだった。

だから、この時間をくれてありがとう、ルシリオン、シャルロツテ。

4月12日 曇りのち雷雨

そう。やっぱりあなたは諦めずに動くのですね、“主”。でも、好きにはさせない。この世界は必ず守ってみせる。

この今日と言う運命の日を、ルシリオンとシャルロツテは必ず乗り越える。

それは絶対。だから、諦めて消えてください、テルミナス終極様。

同日

海上隔離施設にペッカートウムが襲撃を仕掛けてきた。

わたしは、わたしをこの世界に留める核“生定の宝玉”の力を使って戦った。

でも、一つの代を重ねた新しいペッカートウムは強かった。

そもそも戦力差が違い過ぎる。敗北は必至だった。

殺されるのを覚悟した。でも生き残れた。テルミナスが助けてくれた。

「もうしばらく生きるがいい。ルーテシアの死という絶望を抱いた後で消してあげる」

そこでわたしの意識が落ちた。

心身ともにボロボロというのだろうか。指一本動かせなかった。

次に目を覚ました時、ルーテシアがシャルロットと戦っている場面を見た。

ルーテシアと繋がっていることで得られる情報の一つのようなのだ。

痛む身体を引き摺って、ルーテシアたちのいる場所を目指して移動した。

そこで白天王を召喚しようとしていたルーテシアを発見、気配を消して当て身を食らわせて気絶させた。

そこからテルミナスの操作から解放するために、“生定の宝玉”の神秘と、わたしに残された僅かな神秘を流し込んだ。

わたしの自滅覚悟の策は上手くいった。

ルーテシアはテルミナスから解放された。

でも、こんな簡単に上手くいくなんておかし過ぎた。

きつとこうなることをテルミナスが読んでいたに違いない。
趣味の悪い。

結果的にシャルロッテとルシリオンは、この戦いを乗り越えた。
わたしとルーテシア、アギトは六課に案内されて、シャルロッテの
治療を受けた。

わたしはルシリオンと少し話をして、それから海上隔離施設に戻っ
た。

それから少しして、テルミナスが滅んだ事が分かった。

シャルロッテとルシリオンは上手くやったらしい。

さすがとしか言いようがない。

もう会う事がない二人に、心からありがとうとわたしは口にした。

4月14日 曇り

姉妹たちに全て話した。わたしの正体、シャルロッテとルシリオン
の事。

当然信じてもらえるとは思っていなかったけど、

「アレだけの事を実際に体験したんだ。信じないわけにはいかない
だろうな」

チンクがそう言うとみんなも頷いた。

「今まで嘘をついててごめんなさい」

「気にすることはないっすよ。昨日のことがなかったら今でも信じ
ないと思うっすから」

「にしてもテストメントって・・・凄過ぎだろ？」

「まあ、シャルロツテが何であつても友達には変わりないかな」

ようやく隠し事が無くなった。なんかスッキリした。

4月20日 晴れ

高町なのはさんが面会に来た。少し話をした。

ルシリオンがこの世界に残る予定だったという事、シャルロツテが還った事。

そして艦が戦場となつた世界にたどり着けなかつた事。

なのはさんがわたしに会いに来た理由が、その原因を知る為だった。

「たぶんだけど界律が何らかの理由で拒んでいた・・・と思う」

「界律・・・、世界の意思の事、だよね・・・？」

「そう。なのはさんたちを世界が拒んだ」

理由はいくつか考えられたけど、もう全てが手遅れだから何も言わなかつた。

なのはさんは「ありがとう」と言って帰っていった。

なのはさんたちを戦闘に巻き込まないためか、それともルシリオンを世界に留めさせないためか。

どちらにしてもルシリオンは残れなかつた。

○月×日 晴れ

アギトが今日、ここ海上隔離施設から出る。
機動六課の部隊長、八神はやてさんの家に引き取られるからだ。

「ルー、レヴィ。あたし行くわ」

「うん。またね、アギト」

「管理局の仕事、頑張つて」

「おう！」

涙は出なかった。三人にあるのは笑み。必要なのは笑顔^{スマイル}だけだから。

「寂しくなつたっスねえ」

「でもまあアギトさんのこれからを思えば良い事だと思つよ」

「そつだな」

姉妹たちも寂しそうだったけど、でもどこか嬉しそうな顔をしていた。

○月×日 晴れ

今日、ルーテシアのお母さんメガーヌ・アルピーノさんが来た。
母子の再会。わたしは邪魔したらダメだと思って、面会しないようにしようとしていたら、

「レヴィ。レヴィも一緒に来て」

半ば強引にルーテシアに連れていかれた。

面会室には、すでにメガー又さんがいた。

ルーテシアとメガー又さんの会話を聞きながら、わたしはただずつと黙っていた。

そんなとき、

「レヴィヤタンちゃん。もしよかったら、私たち家族、私の娘にならないかしら？」

「え？」

メガー又さんがわたしに視線を移してそんな事を突然言い出した。反応に困っていると、メガー又さんはさらに話を続けていく。

「あなたのことは機動六課の隊長さんたちに聞いた。

ルーテシアのことを護ってくれたって。ずっと仲良くしているって。だから、あなたも一緒に私たちと暮らさない？」

「でも・・・わたし、人じゃない」

「それがどうかした？」

「邪魔じゃない？」

「そんなことはないわねえ」

「あの・・・家族なんて勿体ないです。わたしには従者くらいがち

ようどい
「

「レヴィヤタンちゃん、私の娘になりなさい」

有無を言わせないメガー又さんの言葉。

娘になっていいの？ わたしは人じゃないのに？
グルグルと頭の中をいろんな言葉が駆けまわる。

「レヴィ、家族になろう」

わたしはルーテシアと一緒にいられるだけで十分だった。
その形が従者でも友達でも何でも。それが家族になる。
嬉しかった。

「お、お願いします・・・お、お母さん」

「ええ、これからよろしくね、レヴィ」

わたしは、レヴィ・アルピーノになった。

○月×日 晴れ

今度はルーテシアとわたしがここを出ていく番だ。

ルーテシアに言い渡された刑“境界世界隔離”の執行のために。
姉妹たちと挨拶を何度も交わして、それから管理局の人たちに連れていかれた。

着いたのは無人世界の一つ。ここからわたしたちの新しい生活が始まった。

○月×日 快晴

久しぶりに日記を書きます。
ここ一年半は本当に忙しかった。無人世界だから何も無い。
お買い物できる店も何もかも。そう、全て一からのスタート。
でも充実した毎日だった。わたしは今すごく幸せです。

○月×日 少し曇りかな

ルーテシアが徐々に自分を取り戻しつつある、というより取り戻した(らしい)。
スカリエッティ(名前を出すのも億劫)のところに行った時とは全然違う(ビックリするほど)。
元気だ。明るい。ていうか全くの別人(生まれ変わったよう)。

「レヴィー……！！」

そんな大声も平気で出すようになった(どっから声出してんの?)。
いつも可愛いらしい笑顔で、わたしとガリユを振り回す(楽しいけどメツチャ疲れる)。
でもそんなルーテシアも良い。わたしの大好きなお姉ちゃん(そう呼ぶのは少し恥ずかしい)。

○月×日 雨

姉妹たちから連絡があった。
みんな施設から出て、それぞれの居場所で頑張っているとのことだ。

チンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディの四人はナカジマ家へ。
セイン、オットー、ディードの三人は聖王教会のカリムさんとシャ
ツ八さんのところへ。
みんなはそれぞれを始めて頑張っている。わたしも頑張つて強くな
らないと。

○月×日 晴れ

久しぶりに日記を書く。
最近はどうも眠い、激しく眠い、超眠い、どうしようもなく眠い。
成長期じゃない？とかいろいろとルーテシアとお母さんに言われた。
そんなバカな、って思った。だってわたしは生きているけど人じゃ
ないんだから。
成長だなんて有り得ない。そう、わたしは今の姿のまままで時を過
す。

○月×日 晴れ

日記を書く作業が毎日じゃなくなってきた。ごめん、シャルロット。
で、今日も友達が遊びに来た。最近はいよいよそのお友達が多
いかな。
リオとコロナという子だ。でも残念、今日は予定が合わなくて来れ
ないらしい。
で、今回は元六課のなのはさんたちを始めとした前線組の人たち。

そして今日も勃発する世界一小さい闘い、ルーテシアとキャロの軽
いじゃれあい。

年の割には小さいだの何だのという。どうでもいいような事（口にはしない）。

そしてキャラロはいつも決まってやられ役。少し可哀想。

「うちのレヴィだつて少しは大きくなっているのに。

キャラロは全然成長してないね。ちゃんと食べてるの？」

「なんですとおおおおおお!!?」

ルーテシアの言う通り、わたしはなんだか成長している。

背だつて伸びたし、これではまるで人間のようだった。

シヤマル先生に調べてもらったところ、今のわたしは人と変わらな
いということだった。

ちゃんと肉体を得ている人そのもの。これも“生定の宝玉”のおか
げなんだろうか？

で、実際に今のわたしはキャラロより大きい。

いろいろなところで大きい。それを自慢するルーテシア。

そしてへこむキャラロ。顔を赤くしてここから離脱しようと試みるエ
リオ。

それを止めるルーテシアとキャラロ。わたしはそれを横目に離脱。

助けを求めるような視線を向けてくるエリオを放置（エリオは涙目）
して、その場を後にした。

そしていつも通りの練習会と称した模擬戦訓練。

今回はわたしも（半ば強制）参戦することになった。

いつもはガリユールと同じ見学組なんだけど・・・（トホホ、です）

「では、いきます・・・!」

わたしが今回担当することになったのはガードウィング。前衛、若しくは中衛だ。

一応今回は、だけど。実際わたしはフルバック以外ならどこでもいける。

わたしだって毎日欠かさずに訓練している。ルーテシアを害する全てから護るために。

だからそれなりの力を付けている（つもり）。

今日はそれを実戦で試すいい機会だ。

「手加減はしない、レヴィ・・・！」

対するのは同じガードウィングのエリオ。

さっきわたしが見捨てたことを、エリオが根に持っていない事を祈るばかりです。

そして始まる練習会。思っていた以上にエリオは速い。

昔のわたしなら余裕で撃墜出来るけど、今じゃあまり上手くないかない。

いつの間にか後ろを取られて、攻撃しようとしてきたエリオに一言。

「い、痛くしないでね？」

「なっ!？」

振り向きざまに上目目線でそう言ったら、エリオが顔を真っ赤にしながらか停止。

チャンスだ。わたしの射撃魔法集中砲火リンチ・ストライカーの刑を放つ。

すみれ色の魔力弾が機能停止していたエリオに降り注いだんだけど、それをギリギリでかわしたエリオ。

再度攻撃しようとしてきたから、

「や、優しくしてね？」

「だあああああああ!!!?」

そう叫びながらわたしの目前で再停止。

再びチャンス到来。もう一度集中砲火リンチ・ストライカーの刑を放つ。

それをまた回避したエリオ。肩で息をしながら恨めしそうにわたしを見てくる。

そしてまた攻撃に転じてきた。わたしの連続砲撃や牽制射撃を上手に回避した。

「ホントに痛くしちゃダメ、だよ？」

「レヴィーーーーーー!!!!!!」

もうそんな事を言うの本当にやめてええええーーーーー!!!!!!
！」

二度あることは三度ある。またエリオがわたしの目前で動きを止めて叫んだ。

なんだか知らないけど、ルーテシアの言う通りに言ったらエリオを無効化できた（少しの間だけ）。

頭を両手で押さえて、思いつきり頭を振るエリオに向けて、特大砲ハイサイズ・ドライヴ撃紫光掃破を放つ。

今度こそエリオは避けられずに直撃、ようやく撃墜した。

「エリオ……」

「エリオ君……」

「優しいバカだな」

哀れんだ視線が気を失って倒れているエリオに集中する。
結局練習会は負けたけど、充実した時間で楽しかったのは言うまでもない。

そんな楽しい日々が続いている。

これもルシリオンとシャルロットのおかげ。本当にありがとう。

○月×日 今日清々しいほどの快晴です？

ルーテシアが目覚めたよ。

建築設計だとか、デバイス開発なんていうのもお手の物

物すごい勢いで、家の隣に建てる宿泊ロッジの設計を組んでいくし
ビックリなの

そして今はわたしとルーテシアとガリユーで、お手製のアスレチック施設を作ってるんだ？

すっごく楽しい！！ でも、ルーテシアのハイテンションにはいつまでもついていけない。

はあ、今日も疲れた。元気いっぱいなのは嬉しいけど、限度というのも知ってほしいかも……。

○月×日 今日八・レ

温泉が出た（ホント唐突だけど）。

ルーテシアの掘ってみようという突拍子もない提案。

ああ、元気になり過ぎてとうとう頭がおかしくなったのか……。
出るわけがないと思いつつもガリユーと頑張って穴を掘っていると、
温泉が出た。

「な、何で……温泉が出るって……？」

濡れないように穴から離れながら、目を輝かせているルーテシアに訊く。

「夢に出てきたから」

すごいと思った。

ルーテシアは夢で見たことをただ信じてわたしたちに穴を掘らせたらしい。

予知夢というやつだ。何ていう行動力……。驚きを通り越して少し呆れるよ……。

でもそんな毎日が輝いている。

これからも、もっともっと楽しい日々が続くと思うと、すごくドキドキする。

海上隔離施設ってどこまで許されるか分からないので、ほとんど適当です。

今はこんなところですが、もしかしたら追々ストーリーを追加するかもしれません。

それは笑いじゃ済まされないエマーゼンシー（前書き）

王道パート2。

今回は少々読みづらいかもかもしれませんが、ご了承ください。

それは笑いじゃ済まされないエマーゼンシー

朝日が窓から入ってきて、その光が私の意識を覚醒させていく。

「う……ん……」

12月末の所為もあって少し冷えるから、この温もりから出たくな
い。

その上低血圧だから朝は結構弱い部類に入る。

だけど今日の朝練には、本局に行っているフェイトの代わりに私が
参加することになっているし、起きないといけない。

(はふう……ねむい……)

ベッドから降りて、この階の女子共同洗面所へと向かう。

「……あ、キャラ、おはよう……」

私の前に立つ可愛いパジャマ姿のキャラに挨拶。

……って、ちょっと待って。何で鏡を見ているのにキャラが
映るの？

「っ!?!」

顔やら髪やら身体に触れて、そして声を出す。

「っ……」

いろいろと小さい上に声も幼い。ていうか完全にキャラだった。

シャルロッテ^{わたし}の身体じゃなく、それはもう完全にキャラの身体だ。

(何で何で何で何で何で何で?)

いやな汗が流れる。たぶん私とキャラの精神が入れ替わっている。そんな事が現代の次元世界で起きるわけがない。

「ゆ、夢だ。そうだよ、夢に決まって……痛い」

頬をつねると痛かった。

「……キ、キャラおおおー……ッッ!!!!」

すぐさま私の部屋へと全力ダッシュ。

なのはたちに鍛えられているおかげで疲労も大してない。

「キャラキャラキャラキャラ!!」

何も知らない人が見たら頭を疑われるような光景。ごめん、キャラ。でも今はそんなことや早朝だからとかは横に置いて、自室の扉を連続ノック。

だつて部屋に入ろうとしたけど、残念なことに扉がロックされているから。

(くっそあ、ロックなんかしてどういふつもりだ!)

ロックしたのは自分だろ?というツッコミすら入れられない。んな余裕はない。

自分の部屋に入るだけなのに何でこんな面倒な事をしなければならぬの!?

「どないしたんキャロ？ シャルちゃんに何か用なんか・・・？
そやけど早朝訓練組以外はまだ寝とるから、もう少し静かにな」

「っ！ はやて！ 実は・・・・・・・・っ！！」

口調ははやてだ。特徴的な話し方だから間違えるわけもない。
けど、私の視界に映るのはどう見ても、

「えつと・・・」

「どないしたんや？」

ヴィータで間違いない。うん、やっぱりヴィータに見える。

ちよーっ！と待って。はやて口調のヴィータ？

いやいやいやいやいやいや。

まさか、はやてとヴィータまでもが入れ替わってるってこと？

「??？ よう分からんけど、出来るだけ静かにな」

そう言っつて、さっきまで私がいた共同洗面所へと歩いて行った。

というかはやては寝惚けているんだらうか。

普通声とか視点の低さで気づくと思うんだけど。

(とは言っつても私も鏡見るまで気づかなかったわけだけど・・・)

いや、そんなことより早く私と会わないと。

連続ノックを再開。お願い、早く起きてキャロ！

「なんやこれええええーっ！っ！っ！っ！っ！」

どうやら鏡を見たことで、はやてもやつと気づいたみたい。それにしてもすごい声量だったなあ。よくあんな大きい声が出せるものだ。

まあどうでもいいや。今は私の方が最優先。

「うっせえぞあ……」

「ちよっ……!」

いきなり扉が開いた。私の右拳は扉をノック（威力強）中。もちろん現在進行形。

そんなときにいきなり扉が開くと、振り下ろされた右拳はどうなるか。

それは当然、

「げふっ!?!」

「ぎゃあああああああ!!! 私iiiiiiiiiiii!!!」

思いつ切り私の腹部に入ることに。

「¥ §????????」

お腹を押さえながら崩れ落ちる私の身体。

最悪だ。まさか私が私を落とす日が来るなんて。

「ちよつとキヤロ!? うわあ、大丈夫!?!」

身体は私なのに、こんな……。つく、何かいろいろと悲しくなっ

「大丈夫キャラ？ ごめんね」

自分で落としておきながら謝る。しかも自分の身体に。

「あ？ 何おかしなこと言ってんだ？ キャラってお前のことだろ。つうかお前何か小さくなってねえか？」

私の身体に入っているのは明らかにキャラじゃない。

それにこの口調、そういえばさつきも「うっせえぞお」って、これはどう考えても……

「ヴィータ……？」

「あ？ キャラ、上官にそれは……っておい！ なんであたしがいるんだ!？」

今さら私の隣にいるヴィータはやくに気づく私ヴィータ。自分の身体の襟首を掴んで思いつ切り揺すり始めた。

「ちよ、落ち着こなヴィータ……！ 私や私、はやくや！」

「っ!？ え、はやく!？ な、なんで!？」

慌てて手を離してパニくる私ヴィータ。こんな私見たくなかった(泣)そしてこの騒ぎを聞きつけて他の扉が次々と開いていく。

「っ!？ わ、わたしがいます!！」

「どっしたのお、ティアあ？」

私を指差して驚いているのはティアナ。
ただどさっきの言葉だとキャラ^{わたし}を指差して「わたしがいます」なんだから、あのティアナはきつとティアナ^{キャラ}なんだろう。
やばい。ホントにややこしくなってきた。

「え！？ 私がもう一人！？」

「わあ！？ リインの身体がシグナムになってるです！！」

「一体どうなっている！？」

ザ・カオスな状況。一体私たちに何が起こってるんだろう……。

「……………」

私じゃ解決できそうもない。仕方ない、ルシルに相談しよう。

＋
＋
＋
＋
＋
＋
＋

どういうわけか他の人との精神が入れ替わるといふ漫画みたいな状況に陥った。

入れ替わりが起きているのは私、シャルちゃん、はやてちゃん、グイータちゃん、シグナムさん、リイン、ティアナ、キャラ。そして他の女性隊員合わせての18人。
ちなみに私ははやてちゃんの身体になっている。

「正直私にも何でこうなったか解らない。だからルシルを呼ぼうと

思っただけど」

キャロの中に入っているシャルちゃんの提案。

私たちもこのままだと仕事が出来ないから、それに賛成することにしました。

「ルシル、悪いんだけど女子エリアまで来てくれる？」

六課の職員寮はエントランスや各階共同ロビーを中央として男女別に左右に伸びている構造だ。

「ルシル？ ちょっと、寝てないで早く来てってば」

(うわあ、ごめんルシル君)

サウンドオンリーと出ているモニターに向かって、シャルちゃんが何度もルシル君を起こそうとしている。

心の中でルシル君に謝りつつ声が返って来るのを待っていると、

『さつきから何すか・・・？』

眠いのに無理やり起こされて不機嫌です的な声色がモニターから流れる。

(あれ？ ルシル君ってこんな口調だったっけ？)

「なんや嫌な予感がするなあ」

ヴィー^{はちて}たちちゃんが横でそう呟いた。

それには私も同感。今の口調はルシル君じゃなくて、

「……もしかして……ヴァイス？」

そう、ヴァイス君だ。

「……おいおいキャラ、一応俺は上官だぜ？ ちょっとそれはいただけね」

「チツ」

あ、一方的に通信を切っちゃった。

というかキャラの身体で舌打ちなんかしないでシャルちゃん。怖いから。

「……最悪。女子エリア^{こいち}だけじゃなくて男子エリア^{おいち}にも影響出てる」

頭を抱えて沈むキャラ^{シャル}ちゃん。普段のキャラとのギャップで違和感を感じる。

そしてさっきのルシル君もそう。だぜ、とか違和感あり過ぎる。

「セインテストの身体にヴァイスってことは、セインテストは誰になつてんだ？」

「えっと、それはやっぱりヴァイス陸曹じゃないんですか？」

「いや、それは違うな。我々も誰一人として対が合っていない。ならばセインテストもまたヴァイスではなく、別の男と入れ替わっている可能性が高い」

私の外見と声でシグナムさん口調。もう違和感しかない。
まさかこんな自分を見る日が来るなんて……。

『突然すまない。そこにシャルはいないか？』

私たちの前にモニターが現れた。

そしてそこに映っているのは、

「エリオ君……？」

『ティアナ？……じゃないな、キャロか。やはりそっちも入れ替わりが起きているのか？』

どこか男らしいエリオだった。

それにしても一発でキャロと見分けるなんてさすがとしか言いようがない。

「まあね。で、ルシルでいいのよね」

『そういう君はシャルだな。ああ、身体はエリオだが中身は間違いない私だ』

腕を組んでため息ひとつなエリオ君。^{ルシル}

「今日のエリオはなんかカッコいいね」

入れ替わりが起きていないスバルがなんとも気楽なことを言っている。

でも確かに少し背伸びしたと言うよりは、どこか大人な雰囲気を感じる。

エリオの身体とはいえ中身が私である以上デスクワークは出来ない。そのため、この入れ替わりの解決法に思案する時間を与えてもらった。

それと他の入れ替わりメンバーも解決するまではデスクワークとなるらしい。

「それにしてもどうなっているんだ・・・？」

精神が入れ替わる。明らかに魔術に近い現象だ。

転換術式、それも精神転換となるとスヴァルトアールヴヘイムの専売特許術式だ。

そんなものが扱える人間なんてこの現代にいるわけもない。

唯一の例外である私とシャル。“英知の書庫”^{アルヴァイト}に一応登録されているが、使用不可の術式のひとつだ。

だからシャルが扱える術式じゃない。

「なら原因はなんだ・・・？」

「エリ・・・じゃなくてルシルさん！」

ティアナ^{キヤロ}が駆け寄ってくる。

「どうかしたのかティアナ^{キヤロ}」

思案に耽っていた顔を上げて見る。

「あう」

どうしてそこで赤面する？

(あー、そうだった。キャラはエリオのことを・・・)

何とも微笑ましいことだろう。

これからも仲良く、そして幸せになってほしいものだな。まあ結構先な話だろうが。

「それで？ 何かあったのか？」

「ヴァ、ヴァイス陸曹が・・・！」

(ヴァイス？ ということは私の身体で何かやったな)

キャラキャラに案内され、たどり着いた場所で見たのは、

「フェイト、これからデートでもどうだ？」

「え？ ええっ！？ あう・・・その・・・急にそんなこと・・・」

いつの間にか本局から帰って来ていたフェイトを口説く私。ヴァイス

顔を近づけられている所為かフェイトの顔がそれは真っ赤だ。つていうかよ、ヴァイス・・・

「何やっているんだお前はあああああッツ！！」

自分の身体と言つのを度外視し、全力のとび蹴りを食らわす。なのはたちに鍛えられたエリオの一撃は、それはもう強力の一言だった。

「ぐほおっ！？」

「きゃあああッ！ ルシル！ な、なななな何するのエリオ！」
だがそこで倒れないのが私の身体もといヴァイス。
そして状況が解らないのかフェイトが悲鳴を上げる。
なるほど、フェイトは今この六課で起きていることを知らないわけだ。

そこを狙うとはヴァイス、お前つてやつは……

「馬鹿か！？ というか最悪だな！」

自分の身体に指差し怒鳴る。何なんだこの状況は……？
くっそあ、これはかなり泣きたくなってくる。

「エリオ！？ ルシルにそんな……！」

俯いたまま立っている私に駆け寄って心配するフェイト。
すると私は何を思ったかいきなりフェイトに抱きつこうとする。
だが、

「させるかあああああ……！」

当然阻止するに決まっている。私の身体で好き勝手させるものか！
今度はガラ空きの顔面に掌底一閃。さすがに蹴りは後の事を考えると自粛せざるを得ない。

「ぐはあッ……！」

「ルシル！？ エリオ！ いい加減に……！」

「今は大人しく見ている、フェイト……！」

「ガーン!!」

フェイトがよろよろと下がっていき、両手を地面について頂垂れ始めた。

「呼び捨て・・・反抗期・・・エリオが・・・反抗期・・・グ
スツ（泣）」

『・・・キャロ、フェイトに説明を。正直忍びない』

『あ、はい。お任せください』

ずーん、と背景に影を落としながらこの場から退場するフェイトと
ティアナ^{キャロ}。

フェイトにはあとで謝り倒そう。

「つてえな。何しやがる」

「こっちのセリフだ、ヴァイス。さすがに今のは看過できないぞ！」

「ハッ！ ルシル、お前の身体に入っている今が良い機会だ。邪魔
はさせねえぜ！」

「ほう、邪魔はさせないとは大きく出たな」

「忘れちゃいねえか、ルシル。今の俺はお前の身体つてことをよ。
お前の魔法を扱えりゃ、どんな魔導師だろうと俺には勝てやしねえ」

「・・・フッ」

十 十 十 十 十 十 十

ティアナの姿をしたキャロから全て聞いた。

精神の入れ替わり。何故こうなったかの原因も不明。

「じゃあさっきのルシルはヴァイス陸曹で、エリオがルシルだったってこと……か」

「はい、そうなんです」

それならさっきの二人のやり取りも理解出来る。

「それでみんなはどうしてるの？」

「えっと、精神が入れ替わってもデスクワークには影響が出ないので、解決するまではデスクワークになっています」

「そっか。それじゃあ私も仕事しないと……」

それから六課を見て回ってみると、確かに違和感がある。

本来その席に座る隊員が別の隊員になっていたり。

「あ、フェイトさん。おかえりなさい！」

ヴァイス陸曹の外見と声でエリオ口調。正直少し引いたりもした。でも私的に一番すごかったことは、

「あ、フェイトさん。おかえりなさいですー！」

「っー!!」

シグナムのライン口調だ。ティアナキヤロから事前に聞いていたけど、これは……。

だってあのシグナムが、あのシグナムが……可愛い口調……プフツ。

「どうしたですかー？」

円いトレイを胸に抱えてニコニコしながらお茶くみするシグナムライン。

「……な、なんでもないよ」

もうやめてライン。それ以上はさすがの私でも声に出して笑ってしまいそう。

「別に笑ってもいいんだぞ、テストロッサ」

いきなり背後から声をかけられた。

ティアナキヤロの話だと、シグナムはなのはの身体に入ってるということだ。

案の定私の背後に立つのはなのは、の身体に入ったシグナムだ。ぶすつとして、かなり不機嫌かつ疲れ切った顔をしている。

普段のなのはと比べるまでもなく違和感がある。

「いえ、可笑しなことなんて何もありませんよ、なのは副隊長シグナム」

「ならば口元が笑みに歪んでいるのは何故だろうな？」

った。

「おいセインテスト！ あたしの身体に変なことしたらぶっ血K i
ーからなっ！！！」

^{ヴィータ}私の口からぶっ血K I E L っってセリフが飛び出た。
けどなんや、違和感がないんがちよっと引くわあ。

「ヴィータちゃん！ はやてちゃんの身体でそんな物騒なこと言わ
ないでほしいです！」

「セインテストの外見と声で、んなこと言っじゃねえよ！ キモい
だろうが！」

確かに。いくらルシル君でもライン口調はキツイなあ。

「頼むライン！ 口調を普段の私のようにしてくれ！」

「そんな急には無理ですー！」

「あああああああ！！！」

^{ルシル}ヴィータ君が哀れすぎる。

^{シグナム}シャルちゃんも同じ思いをした所為か、優しい眼差しで^{ルシル}ヴィータ君
の肩を叩く。

「くそっ、こんな屈辱はいつ以来だ……orz」

屈辱ならそう昔でもないような気もするなあ。

「あゝあ、とうとうルシルも本当の女の子になっちゃたかあ」

ロビーにぞろぞろ集まってくる入れ替わり組の一人、フェイトちゃんシャルがそう感慨深く頷く。

そして悲しいことに恒例となってしまうたロビー会議も今日で第三回。

「つまりや。今回の入れ替わり犠牲者は、私、なのはちゃん、フェイトちゃん、シャルちゃん、ルシル君、シグナムにヴィータ、そしてリインやね」

数は減った。そやけど異性間転換が起きた。状況的にはどちらかと言えば悪化や。

「これはいよいよ危なくなってきたね」

リインちゃんなのはが深刻な表情で、右手を顎に当てながら呟いた。

「良かったあ、ルシルが私の身体にならなくて・・・」

なのはちゃんフェイトがそれはもう安堵の表情で胸を撫で下ろしとる。

確かに私の身体にルシル君が来たら、恥ずかしさのあまりに亜光速でDEATHれる。

「さあてと。フォワードの子たちが入れ替わってない以上は訓練できるけど、教官組は綺麗に全滅」

「うん。ああでも教えられないことはないよ」

「ああ、リインなのはの言う通りだ。あたしなら問題ねえ」

「デスクワークも今まで通り出来るよ」

シャル
フェイトちゃんは腕を組んで入れ替わり組を見渡す。
そして口にした懸念に答えていくリインちゃん、私、なのはちゃん。
わたしたち
なのは

「うん。そうすると最大の問題が残るわけだ。それは……」

一拍置いて強調するように。

「それは、お手洗いとお風呂ー!!」

「くっくっ!!!!」

シャル
フェイトちゃんが、私とルシル君とヴィータ君を指差して言い放つた。
ルシル
ヴィータ
リイン

三人の背景に雷が落ちるように見えるわ。
バック

「セインテストオオオオオオツツ!!!」

「ぐえっ!?!」

ヴィータ
ルシル
私がヴィータ君を肩を鷲掴んで振り回す。

あれは自分の身体いうんを明らかに忘れとるなあ。

「おま、おまおまおまお前お前!! 今日トイレとか風呂と
か行くなあああツツ!!」

顔を真っ赤にしながら怒鳴りまくる私。
ヴィータ

けどな私、そんな姿を見る私にも精神的にダメージがあるんよ?

「わわわわわ、どどどどどつすればいいですか!？
お、おとお男のひひひひひ人ののははは裸かかか!！」

ルシル君も真つ赤。両手で顔を隠してモジモジとする。
ごめんなあ、ルシル君、正直気持ち悪い。

「やめてくれええええええッ!!!！」

それを見たヴィータ君がマジ泣きしてもうた。

今までの中で最高クラスの屈辱であることはきつと変わりないんやろね。

このままだと治まり効かんし、どうすればええか訊こうとみんなを見回すと、

「ニヤニヤ」

フェイトちゃんが面白い事を思いついた時のイヤな笑顔を見せとった。

(あかん、あの笑顔は危険や。何か酷いことが起きる!!!)

イヤな笑みを浮かべたまま、ゆっくりとヴィータ君のところまで歩いて行って、

「っつ!?!?」「」

思いつ切り抱きしめた。

「」ぎゃあああああああ!!!!!」「」

なのはちゃんフェイトとヴィータルシル君が真っ赤になりながら絶叫。
なのはちゃんフェイトが残像を残すくらいの速さで、フェイトちゃんシャルとヴィ
ータシル君を引き剥がしにかかる。

「やめてえええええつ!!」

羞恥で真っ赤になりながら号泣するのはちゃんフェイト。

確かにこれは恥ずかしいなあ。いくらルシル君のことが好きやとし
ても、自分の意思でない以上は……。

「はあはあはあはあ……ひどいよ、シャル」

「まったくだ。今のはやり過ぎだぞ」

「って、うおおおおい！ 胡坐かくんじゃねえよセインテスト！
スカートの中が見えるだろうが!!」

「そんなの今さらだと思っぞ、ヴィータ。騎士甲冑での戦闘時、結
構見え」

「この……どエロがつ!!」

「げふっ!!」

「しまったあああああつ！ またやつちまった!」

十
十
十
十
十
十
十
十

「……あー、こじは……」

はやてのヴァイタ一撃で少し気を失ってしまっていたようだ。

(まったく、酷い目に遭った)

異性間で精神転換が起きるだけでこれほどの精神的ダメージとは。

『すまなかった、フェイト。許してくれ』

周囲を見渡し、気を失っていた時間が数秒であることが分かった。そしてとりあえず、未だに羞恥で顔を赤くするのはフェイトに謝罪。

『うん……』

目を逸らされた。無理もないか。これは少し距離を置くべきだな。

『シャル。お前からフェイトに謝っておくこと、いいな?』

『………はあ、了解』

さて。残るのはさつきから解決していない問題。

トイレと風呂の行きたくなっただけだが……

「風呂のことなら何とか出来る」

たとえば服を着ていたとしても可能な身体浄化。

複製術式の中に確かあったはずだ。

「ホントか、セインテスト！」

「本当だからもう殴らないでくれ」

しばらくの間、はやてとヴィータに苦手意識が生まれかもしれない。それはともかく、まあ、物は試しだ。

我が手に携えしは確かなる幻想

「……………?」「」「」「」

「しまったああああ!! ヴィータの身体で使えるわけがなかったあああ!!」

私の身体との繋がりが無い以上、ヴィータの身体では“英知の書庫アルヴィト”にアクセスできない。シャルも転換が起きてフェイトの身体に入っているし、これはかなりピンチかもしれない。

「どうすんだよ! セインテストにあたしの裸見られんの嫌だぞ!」

「リ、ラインも、その……あの……ルシルさんの……あう」

はやくと私が紅潮する。ヴィータ

というか私の紅潮って、あまり良いものじゃないな。正直凹む。

そして他のメンバーはほぼ諦観状態。

まあ、そっちは同性間の転換犠牲者だから貞操の危機は無いだろっが、こっちは現在進行形で危機だ。

「あのさ、ルシルヴィータ。ルインルシルに許可出して使わせればいいんじゃないの?」

「……………もう、それしかない、か」

シャルフェイトからの提案。確かにそれしか方法はないだろう。

だが正直気が乗らない。それはつまりリインをわたし魔術師の秘奥へと案内することになる。

「?????」

リイン私がわたしヴィータの視線に気づき首を傾げた。

「仕方ない。リイン、今から私の言う通りにしてくれ」

「あ、はいです」

私の真剣な表情からかメンバー全員が息を飲むのが分かる。

「目を閉じ、そうだな……リンカーコアをイメージ」

「はいです」

「……………すまん、これからは首肯で頼む。私の心が修復不可能にまで折られそうだ」

小さく首肯。それでも結構な精神的ダメージが。

「次にそのリンカーコアに三つの円環をイメージ。」

次にその円環をゆっくり回り、次第に回転速度を上げていってくれ」

すると私の身体の魔力炉システムが稼働し、魔力が生まれる。これで第一段階。これで私の魔術や魔法の使用出来る一步手前となる。

だが今回は固有魔術ではなく複製術式の使用だ。

ここからは魔術師の秘奥、創世結界“英知の書庫”アルヴァイトの使用へと移る。

「大きな鉄扉をイメージ。ラインの好きなイメージで良い。解錠してくれ」

「……………っ!?!?」

リイン私のその表情から繋がったとみていいな。

「リイン、おそらく君の視界にはさらに四つの扉があるはずだ。その内のひとつ、木製の扉がある。違うか?」

「ルシルさんの言う通り、扉があります」

頷くということ忘れてしまったのか、私リインが声に出して肯定した。もうどうでもいいか。そこはもう諦めよう。

「そこに入ってくれ」

「……………わわっ、すごいですー!!」

ラインの精神が“英知の書庫”アルヴァイトに入った。ならばあとは、

「よし。リイン、続唱。我が手に携えしは確かなる幻想」

「わ、我が手に携えしは確かなる幻想・・・っ!？」

「くくくくくっ!？」「くくくく」

どいうわけか現実と“英知の書庫”^{アルヴァイト}が繋がってしまったようで、
私たちを含めたメンバー全員の頭上からもすごい数の書物が落ちてきた。

十 十 十 十 十 十 十

「う・・・うん・・・痛ったあ・・・」

いきなり影が差したと思ったら、頭上からとんでもない数の本が落ちてきた。

そして気がついたら本の山に生き埋め状態。
もしかしてヴェイター^{ルシル}とルシル^{ライオン}がミスった？
そんなことを考えていると、

「くくくくくくくくくくくくくくくく」

(何この音・・・?)

どこからかオルゴールの音色が流れていた。
本の山から抜け出して辺りを見回す。

「・・・っわ」

するとみんなが本に埋もれていることが分かった。そしてもう一つ分かった。分かってしまった。

「この音色が・・・精神転換の元凶・・・!」

みんなの身体が微かに発光している。

そして隊舎へと向かおうとしていたと思う他の隊員たちも倒れ伏して、発光している。

「寝ている間に起こる精神転換・・・このオルゴールの音色によって眠らされて、その上で精神転換が行われる、ということが」

現状起きているのは私ただ一人。

なら、私がこの状況を打破するしかない。

「よしっ、やりますかっ!」

今気づいたけど、身体はいつの間にかルシルのものになっている。これならたぶん魔術や複製関連が扱えるはず。

「・・・・・・・・よし、使える」

魔力と魔術が使用できるか試して、使用出来ることを確認した。というカルシルの魔術ってどれも複雑すぎだった。

(よくあんなデタラメな術式を扱えるなあ)

そのままオルゴールの音色のする方へと全力疾走。そしてたどり着いたのは

「ここって、なのはたちの部屋・・・だよな」

間違いないそこはなのはとフェイトとヴィヴィオの部屋。
ちよつと待ってよ。それじゃ今回の騒動はなのはたちの・・・？

「そんなわけない。なのはたちも犠牲者だし」

あれが演技だなんて思えない。

それに今は犯人とかどうでもいい。元凶のオルゴールを潰す。

「お邪魔しまゝすつと。・・・ヴィヴィオ・・・？」

ヴィヴィオがいない。アイナさんやザフィーラとどこか行ってるの
かな。

そういえばいつの間にもやら時間は9時半を過ぎてる。
本来なら私たちも隊舎で仕事をしている時間だ。

(今日も大遅刻ってわけねえ)

鈍くなり始めた音色。

部屋の中を探して、そして見つけた。

「・・・これが元凶のオルゴールか」

音色がすでに止んでいる見た目は普通のオルゴール。
けどこのオルゴールからは妙な力を感じる。

「この感じは・・・うん、ジュエルシードとかレリックみたいな
・・・」

そう、ロストロギア系の・・・」

ロストロギア。古のテクノロジの総称。
もしこのオルゴールがロストロギアなら、こんなふざけた現象も納得・・・出来るような出来ないような。

「まあ、いいや。とつとと封印させてもらおう」

魔力を右手に集中させて翳す。
そして、

「っ!？」

封印と同時に意識が飛んだ。

次に目を覚ました時、また本の山に生き埋め状態でも元の身体に戻っているのは間違いなかった。それにみんなも元に戻ったし、めでたしめでたし。

とはいかない。

あのオルゴールは、なのはとヴィヴィオが買い物先で見つけた骨董品店で買った物ということだ。

そして後日、その骨董店に調査員が行ったけど、そんな店は無かったということ。

「例の骨董品店があったっていうその区画って、出るんだって」

「何が？」

「決まってるじゃない。ゆうね〜い」

「……………っで、こんなオチでいいの!？」

よしっ?

それは笑いじゃ済まされないエマーゼンシー（後書き）

他人と入れ替わる。王道と私は思いますがどうでしたでしょうか？
さて、最後のオチのようなもの。本当は別の理由がありますが、それは後々ということ。

世にも不思議な世界の冒険？

「ねえ、ティア」

「なによ」

「なんであたしたちはこんなトコにいるんだっけ……？」

「こつちが聞きたいわよ」

あたしとスバル、二人揃って気がつけば、そこは異世界だった。

そこはどう見てもミッドじゃなくて、さっきまでいた六課でもない。

それ以前にここは何かが違う。

そう、まるでゲームの世界のような……気味の悪い綺麗さがある。現実感がない。現実じゃないと断言出来る。“違う”と本能が訴えかけてくる。

「エリオとキャロ、あとたぶんだけどヴィヴィオもいるはず……。だからまずはみんなと合流するのが最優先。いいわね、スバル」

エリオたち三人をあたしは意識を手放す前に見た、ような気がする。もしそうならあっちもあたしたちを探しているはず。

下手に動くのもまずい気がするけど、今は動くしかない。

ここで動かなかつたらもう二度と戻れないような気がするから。

「う、うん。そうだね！」

スバルが強く頷いた。

口に出したくは無けれど、スバルと一緒に良かった。

「まずは人を探しましょう。たぶんあの子たちもそうするはず。んで合流したら情報収集、と言ったところね」

見渡す限りの広大な平野。それは地平線の彼方まで続いている。というか人がいるかどうか分からないし、これは一筋縄にはいかないかも。

「とにかく行きましょ。じっとしてても始まらないわ」

歩き出す。周囲どこを見ても平原だから方角も分からない。当てのないいつ終わるともしれない移動。

「ねえ、ティア。何でこうなったんだっけ？」

無言で歩くのに飽きたのか、隣を歩くスバルが似たようなことをまた訊いてきた。

どうしてこんなところにいるのか。それは確か……

そう、確か昼休み……だったはず。まずい、少し記憶が曖昧っぽい。

えぐっと、……あー、午前の訓練を終えて、寮のシャワールームから隊舎へ戻ろうとした時、ヴィヴィオが本を読んでいたんだ。それで、声をかけて……。

「ヴィヴィオの持っていた本を見せてもらっていたら、突然本に黒い穴が出来て呑み込まれた、はず……」

そう、そうだ。あの分厚い本。ヴィヴィオのような子供が読むよう

な本じゃないアレ。

開いた本から黒い穴が出て来て、その場にいた私たちは呑み込まれた。

「あー、そうだったっけ。でもあの本ってなんだったのかな？もしかしたらアレもロストロギアとか・・・？」

「もしそうなら精神転換のオルゴールに続いて、になるわね。でも違うと思うわ。あの本ってたぶんルシルさんのものと思うから」

先日まで起こっていた三日間の精神転換というとんでも事件。原因は最終的にロストロギアと認定されたオルゴールだった。

で、その最終日に何があったのか詳しくは知らないけど、ルシルさんが大量の書物を呼び出したという話だ。

二階の共同ロビーいっぱいを埋め尽くした本の山。ヴィヴィオが持っていた本の何冊かはたぶん未回収のルシルさんの本。

「うーん、ルシルさんってホントすごいよね。使い魔もそうだし魔導師のレベルとしても」

頭の後ろで手を組みながらスバルがそう口にした。

実際はすごいというレベルの遙か上だ。ルシルさんもシャルさんも謎が多すぎる。

今までは全然そんな風には考えなかったけど、ここ最近は何故かそういう“思考”が生まれてしまう。

(まるで今までそういう考えが出来ないように、邪魔されていたような感覚・・・)

何かに、誰かに“あたし”が操られている……？

(そんなことあるわけないわね)

馬鹿な考えだ。

「……ア……ティ……ティア!!」

「っ!？」

あたしのすぐ目の前にあるスバルの顔。

あまりにもいきなりだったから、ビクツとしてしまった。

「急になに!？ ビククリするじゃない!」

「何度呼んでも返事しないティアが悪い! それより周り!」

「周りって……なによこれ!？」

さっきまでは平原を歩いていたはず。

なのに、いつの間にか石造りの通路へと光景が変わっていた。

あたしたちが混乱する中、さらにあたしたちを混乱させる要素が通路の奥からやってきた。

ピ〜〜ヒャラ〜〜〜〜

通路の奥から、通路いっぱいの幅を持つ巨大な岩石と、その上に立って変な踊りをしているお爺さんがやってきた。

キタキタオヤジ&お約束トラップが現れた

「「っ!?!」」

硬直も一瞬、すぐに反対方向へとダッシュで逃げる。

いろいろと頭の中が真っ白になってしまっている。

それほどのインパクトをあたしに与えた半裸のお爺さん。

というか、どうして高速で転がる丸い岩石の上で踊れるのかが不思議でたまらない。

「さあそこのお嬢様方も一緒に、伝統のキタキタ踊りで、世界平和といきましょうぞ!」

ピ~~~~ヒヤララ~~~~

幻聴だ幻聴。きっと幻聴に違いない。

もし幻聴じゃないなら、死んでもイヤです。そんな踊り。

「ティア! 魔法でどうにかした方がいいかも……!」

隣を全力ダッシュするスバルからの提案。

そうだ。何もご丁寧に走って逃げる必要はないんだ。

「そうね! クロスミラージュ!」

「マツハキヤリバー!」

「「セットアップ!」」

“クロスミラージュ”を手にして起動しようとしたけど、何の反応

もなかった。

諦めずに何度も試してみるけど、やっぱり反応はなかった。

「うそー！ー！ー！ー！ー！」

「なんでなんでなんでなんで……!?」

スバルも同じらしく、「マツハキヤリバー」を振ったり指で突いたりしている。

推測としてはここでは魔法が使えない、と考えるべき。

「魔法使えないだけでここまで弱体化って……」

足を止めることなく走り続ける。

いくら鍛えていたとしても魔法が使えなくなれば一般人と変わりない。

そして迫る岩石と踊り続けるお爺さん。そのお爺さんには若干殺意が沸く。

「……え？」

急に足元から来る衝撃がなくなった。

宙を蹴る感覚。一瞬の浮遊感。

「お……」

スバルとほぼ同時に真下を見て状況を確認。

足元に広がるのは闇。ハッキリ言えば、

「落とし穴あああああああ……！！！！！！！！！！」

スモークもものすごいし、どこからかコーラスも流れてくる。

「ティア・・・！」

スバルが立ち上がったってあたしのところまで駆け寄ってくる。
ステージに最大警戒しながら出口を探そうとした時、

「わーっはっはっはっはっはっは！！ よく来たな人間どもよ！！」

ステージの上に立つ・・・何アレ？

明らかに人じゃない二足歩行の獣が、鎧を着込んで立っていた。

魔物カセギゴールドが現れた

「オレ様を倒しに来るのは勇者と思っていたが、たかが小娘が二人とは！」

まあいい！ とくとオレ様の爆笑必至の強力な水中バレエを見て、
窒息死寸前まで笑い転げた後、このオレ様が直々にお前らの鼻水を
面白おかしく飲み尽くしてくれるわっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言ってることがメチャクチャと言う次元を遥かに越えている。

もし万が一、億が一でも実行してくるのであれば、全力で逃げないとあたしたちは二度と表に出られないほどの精神的ダメージを負うことになる。

「なんじゃこりゃああああああ！！！！」

誰がそんなものを飲み尽くすか馬鹿者おおおおおお！！！！
「！」

二足歩行の喋る獣が、手にしていた本を床に叩きつけたかと思えば、ステージから飛び降りてどこかに走り去っていった。静かになったこの空間にポツンと取り残されたあたしとスバル。

「……………行くわよ」

「うん」

すでに見つけておいた扉から出る。

左右に伸びる石造りの通路。ジャンケンの結果、右を選択。

「……………あ」

スバルがいきなり立ち止まる。

その表情は凍りついているように見える。

「ご、ごめんティア。あたしやっちゃったかも……………」

「やったって何を……………」

そう返すと、スバルがゆっくりと自分の足元を指差した。

それに続いてあたしもスバルの足元を見て、何をやったのかが分かった。

スバルの右足が沈んでいた。それはトラップを動かすスイッチのようなものだ。

直後、

「「っ!?!」」

何が起きたのかは分からなかった。
だけど、そこで意識が途切れたのは確かなことだった。

『GAME OVER』

十 十 十 十 十 十 十

「キャラ、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。エリオ君は？」

「僕も大丈夫」

座り込んでいたキャラの手を取って、立たせながらお互いを確認。

「スバルさんとティアさんがいない」

「うん。それとフリードとヴィヴィオも」

ここに来た時のことを思い出す。

少し霞みがかかっている記憶だけど、それなりのことは思い出せた。
スバルさんが開いた分厚い本から黒い穴が出て来て、そのまま僕たちは呑み込まれた。
そして気づけば、

「変わった場所・・・だね」

キャラの言う通り変わった場所、というより現実感のない空虚な世

界。

何故かそう思ってしまう。本能がそう告げてくる。ここは“違う”と。

「キャロ、まずはスバルさんたちを探そう。たぶん人のいる場所まで行けば会えるから」

スバルさんたちもきつと人のいる場所に行こうとするはずだ。だからまずはここから移動しよう。としたとき、どこからともなく爆発音が轟いた。

「エリオ君！」

「うん！ 僕から離れないでキャロ！」

キャロの手を取って爆発した場所へ向かう。

たとえここがどこであっても、管理局員として見過ごすことはできない。

「……………あれは質量兵器！？」

「きゃあっ！！」

僕たちの目の前を通過する爆炎。

そしてその爆炎の元凶たる、色違いだけど同じ姿の人？たちがいた。何て言うか顔はなのはさんたちの出身世界“地球”で見たテレビのような四角い形。

後頭部から棒のようなものが生えていて、先端に球体がちょこんと付いている。

そしてどこからともなく導火線の付いた丸い爆弾を取り出して、置

いては投げて、別の人？たちを吹っ飛ばしていた。

「と、止めないと！ ケリュケイオン！……あれ……？」

「そんな……！ ストラダ……ダメだ、応えてくれない！」

“ストラダ”と“ケリュケイオン”が応えてくれない。

まさか、ここじゃ魔法は使えないということなんだろうか……？

(どうする。魔法が使えない僕たちじゃ何も出来ない……！)

魔法が使えないだけで何の力もない普通の子供になってしまった僕たち。

こうして手を拱いている間にも次々と爆発が起きて、吹っ飛ば人たち。

「ねえ、エリオ君。爆発に巻き込まれた人？なんだけど……」

キャラの指差す方に目を向けると、この空間を仕切っている壁の上で、乗物から爆弾を投げつる、さっき吹っ飛ばんだ人？がいた。

「……」

どうすればいい。もう僕たちに出来ることは無い。

その上爆発しても生きている人？たち。

ここはもうそついうところだと割り切るのが一番みただ。

「っ、ホイッスルの音……？」

ピーーツと音がしたと同時に乗物が消えて、頭上からブロックが落ちてきた。

それはものすごい勢いで落ちて来て、

プチっ

爆弾の人？を押しつぶした。

「……………」

「うわぁっ！ キャロ!?」

あまりのショッキングな光景にキャロが意識を手放してしまった。

「まずはどこかに避難しな」

キャロを背負って移動しようとした時、僕たちの真上にブロックが……

プチっ

Game Over

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

「なんとおおおおお！！ 飛び入り参加がお二人！！」

その男の人の声で目が覚めた。

(あれ・・・？ あたし、どうして・・・？)

確かあたしがトラップを発動させて・・・どうなったんだっけ・・・？

「そだ！ ティア！？ ティア！？」

「スバルうるさい。ちゃんとあんたの隣にいるから」

良かった。ホントにあたしの隣にティアがいてくれた。

安心したおかげであたしにも余裕が出来て、周囲を見渡す。

「ティア・・・。えっと、ここって・・・闘技場・・・？」

昔観たことがある映画に出てきた闘技場のような場所。

闘うための円いエリア、人がたくさんいる観客席、そしてマイク片手にあたしたちのトコまで歩いてきた司会者？の人。

その司会者さんがあたしたちにマイクを向けて、

「可愛らしいお嬢さん方、お名前を」

どうしようかとティアを見ると、大きくため息をついてから、

「ティアナ・ランスター」

と堂々と名乗ったから、今度はあたしに向けられたマイクに向かって、

「ス、スバル・ナカジマです！」

名乗った。すると観客席から大きな歓声が聞こえてきた。なんか恥ずかしいような嬉しいような、妙な感じ。

「ティアナ嬢にスバル嬢ですね。ありがとうございます。さて！ その美少女コンビに対するは、嘘に関して彼の右に出るものはいない！」

紹介からして対戦相手がまともじゃないのが分かった。というか完全にあたしたちが参加してることになってるんだけど。。。

「キャプテーーーーーン……ウソッブーーーーー!!」

湧き上がる歓声。

「そして！ 彼とコンビを組むのは異性の守備範囲がバリ広っ！ その上神父のクセして冒涇心の権化でクサレ外道!!」

うわぁ、酷い言われようだ。

「1000戦1000敗のナンパ師！ アダム……ブレイドオオオオオオオオ!!」

歓声じゃなくてブーイングの嵐が巻き起こった。

そして向こう側から、紹介された対戦相手が出てきた。

一人はあたしたちと同じ年くらいの男の子んだけど、鼻が異様に長い。

そしてもう一人、上半身裸のムキムキの筋肉質、ロングコートにサングラス。

もしあの人が神父だったら引く。

「ねえ、ティア」

「なに？」

「あたしたち魔法使えないのに勝てるのかな・・・？」

もう戦うという選択肢しか頭に思い浮かばない。

「分からないわ。でも、お願いクロスミラージュ、力を貸して」

その瞬間、ティアの制服がバリアジャケットに変わっていて、手には“クロスミラージュ”が握られていた。

「魔法が使える・・・」

さっきまでは使えなかったはずの魔法が使える。
これなら、

「マツハキヤリバー!!!」

あたしの制服もバリアジャケットへと変わる。

そして右手にはちゃんと“リボルバーナックル”がある。

声は聞こえないけど、なんとなく通じてる気がする。これなら戦える。

「では、ティアナ、スバル組対キャプテン・ウソップ、クサレ外道組・・・ファイツ!!!」

一気に距離が詰まる。

リボルバーキャノン

「甘いぜお嬢ちゃん!!」

カンダタ・ストリング

「っ!?!」

クサレ外道さんの指から出てきた糸で縛られた。これはバインド・・・じゃない。魔法ですらない。

「ごめん、ティア！ そっち行つた!!」

糸を切ろうとするけど切れない。

情けない。あたしはこんなにも簡単に負けた。

「ティアーーーー!!」

ティアに視線を向ける。

ティアはクロスファイアを撃ってるけど、クサレ外道さんの動きが速過ぎて中らないどころか追いつけてもない。

強い。強過ぎるよ、あの人。

「しまっ
」

一瞬で懐に入られて、ティアの顔が強張るのが見えた。そして、

「結婚してください!!」

「……………」

クサレ外道さんがどこからともなく取り出したバラの花束。それをティアに差し出して、突然ティアにプロポーズした。ティアはニコツとして、“クロスミラージュ”でクサレ外道さんを躊躇なく撃った。

「……………えー、ティアナ、スバル組の勝利—————!!」

なんだろう、何かいろいろと納得行かない。

「続きまして！ ジェイド・カーティス大佐と間桐桜の腹黒コンビ」

「いやあ、参りましたねえ」

「腹黒なんてひどいです！」

「対するのは世界を救う神子さまであり究極の天使なドジっ娘コレツト・ブルーネル！」

そして！ 何もないとこでコケるのが当たり前、溝があればハマらずにはいられない、早口言葉だと9割5分で舌を噛むクイーン・オブ・ドジ、プリノ・ハーウェルの天然娘コンビ!!」

もう巻き込まれるのも嫌だから、ティアと一緒にコツソリ闘技場を後にした。

でも今度の闘いは少し観てみたかったかも。

十 十 十 十 十 十 十

「エリオ君！ 起きてエリオ君！」

気を失って倒れてるエリオ君を揺らす。

本当はそのままにしておくのが普通だけど、今はそんなこと言ってもらえない。

「ようこそ、猫王国グレートキャッツビレッジに」

「っ!？」

いきなり現れた・・・なんだろう、二頭身猫？が話しかけてきた。

「あちしはネコアルク。お困りにゃ？」

「え？ あの・・・キャロル・ルシエです・・・」

わたしは礼儀として名乗り返す。

するとネコアルクちゃんは「にゃにゃにゃ」と変わった笑い声を上げて、

「さつきからSOSサインをキャットしていたにゃ。

何に困っているのか教えてもらおうかにゃ」

「えっと、ここから出るためには・・・あ」

「じゃ、！？」

「ちょっと！ 今帰るから、すぐ帰るから、とっとと帰るから出口開けなさいよ、ブサイクモザイク猫！」

また別の、全てが白い女の子が現れて、ネコアルクちゃんの頭を後ろから踏みつけた。

「あら？ なに、あなたたち。異界英雄エインヘリヤルじゃないのね」

ネコアルクちゃんの頭を踏みつけている右足でグリグリしながら、わたしとエリオ君を見てそう言った。

エインヘリヤル・・・わたしの知らない言葉。だから訊いてみる。

「その・・・エインヘリヤルってなんですか・・・？」

「そんなことも知らないで、どうして英雄ヴァルハラの居館にいるのかしら？」

また知らない言葉が出てきた。

でも、この白い女の子はここがどこなのか知っているみたい。

「あのっ、えつと・・・」

「？ ああ、私はレン。他の人たちは白レンとも呼ぶわ」

「じゃあレンちゃん。わたしはキャロ・ル・ルシエといいます。

それでその・・・ヴァルハラとかエインヘリヤルのことなんだけど・・・」

「つまり、エインヘリヤル異界英雄は私たちの王のルシリオンマスターの使い魔。
そして英雄の居館というのヴァルハラは、その異界英雄エインヘリヤルの存在する世界のこと」

レンちゃんから聞かされた事実。

ここがルシルさんの使い魔さんたちの世界だったということ。

「それで、あなたたちの話を聞いた限りだと、ヴァルグリン聖門開書を開いたのだと思うわ」

ヴァルグリンドという本。

その本があれば、ルシルさん以外の人でも使い魔さんを召喚出来る
とのこと。

わたしたちを呑み込んだあの分厚い本がそれだったみたい。

「で、エインヘリヤル異界英雄の私じゃあなたたちを元の世界に返すことは出来ない。
だから、エインヘリヤル異界英雄の王のいるエリアのところまでは行かせてあげる。

そこからはあなたたちだけで頑張ってちょうだい」

「うん、ありがとうレンちゃん」

「ありがとうレン」

「かまわないわ。ルシリオンの知り合いなら助けないとダメだから」

レンちゃんが雪原の少し先まで歩いて行って、何も無かった空間に
扉をつくった。

そしてわたしとエリオ君に振り向いて、

「さようなら、キャロ、エリオ。必ず現実世界に戻れるから安心しなさい」

扉の先に指を差しして、わたしたちが扉を潜るのを見届けてくれようとしてくれた。

「レンちゃん、わたしたち友達だよね・・・？」

「そうね。でも元の世界に戻ればきっと英雄「コ」の居館「コ」のことは忘れるわ。

イレギュラーであるあなたたちには記憶は残らないと思うから」

「っ！ そんな」

背中をレンちゃんに押されて、わたしとエリオ君は何も言うことが出来ずに、レンちゃんとお別れになった。

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

「スバルさん！　ティアナさん！　エリオさん！　キャロさん！」

フリードにまたがって、わたしと一緒に落ちちゃったスバルさんたちを探す。

だけども見つからない。わたしのせいだ。わたしがルシルパパの本を勝手に持ち出すから。

「・・・なのはママ、ルシルパパ、フェイトママ・・・っく、ひっく・・・」

泣いたらダメなのに、強い子じゃないとダメなのに……。

「あの……大丈夫ですか……？」

「っ!？」

空の上、フリードの上にいるのに声が聞こえた。
すぐに周りを見てみると、

「天使……さん……？」

すごく綺麗な天使さんが隣を飛んでいた。

シャルさんのような紅い羽じゃなくて、白と黒の羽を持っている女の
人。

それに尻尾もあって、その先にはかわいいリボンが結んである。
わたしが呆然としていると、

「天使……？　クス、ありがとうございます。でも私は天使じゃない
んですよ。」

私はデイズイーといいます」

「あの、高町ヴィヴィオです。そしてこの子はフリードリヒです」

すごく優しくそうな笑顔。この人は悪い人じゃない。

フリードにもそれが分かるみたいで、大人しく飛び続けている。

「ヴィヴィオちゃんとフリードリヒ君ですね。」

それでヴィヴィオちゃん、何か困っているみたいですけど……。」

「はい……」

それから地上に降りて、デイズイーさんはわたしのお話を聞いてくれた。

本の中に入ったこと、スバルさんたちと離れ離れになったこと、どうすればいいか分からないと。

「……^{ヴァルハラ}英雄の居館に、ルシリオンさんの意思に関係なく入ってきたということですね」

わたしの話を聞いたデイズイーさんが教えてくれた。

ここがヴァルハラという場所で、ルシルパパの使い魔さんの世界だということだ。

「ごめんなさい、私じゃ帰せないんです。だけど大丈夫。ヴィヴィオちゃんを元の世界に戻すことが出来る方のところまで連れて行ってあげますから」

わたしの手を引いて笑顔を見せてくれるデイズイーさん。すごく安心出来るから、さっきまであった不安がきれいになくなっていった。

「あの、そんなことが出来る人がいるんですか……?」

「ええ、きっと力になってくれるはずですよ」

「どんな人なんですか……?」

「ルシリオンさんのお姉さんで、ゼフィランサスさんという方ですよ」

十 十 十 十 十 十 十

「もうー、何なのよお……」

「ティアく、あたし、もうダメっばいよ」

スバルと二人してへたり込む。正直なのはさんたちの教導よりしんどい。

わけの分からない人に追いかけられるわ、闘技場ではプロポーズされるわ、変なクイズに参加させられるわ、心がもう擦り切れそう。

（なによ、マジカ バナナって……）

「海と言ったら青い、青いと言ったら空、空と言ったら広い……」

「やめて、スバル。悪夢が蘇りそう……」

終わりの見えない連想ゲーム。

特にあのシャナって子はとんでもなかった。

「あー……でも、マ カルプツシュとかは結構白熱して面白かったよね」

「どこがっ!? 面白いつてアレのどこがっ!?

あたし、もう少しで解体バラされて死ぬところだったんだけどっ!」

分からないと思った問題の時は、相手チームに解答を押し付けるっ

ていうゲーム。

あたしも分からなかったから、相手チームに押し付けようとしたら、向こうもそうだったようで、こっちのボタンを押しに来た。

「んー、ティアだけは確かに。なんだっけ、赤屍蔵人さんだっけ？」

あの怖すぎる第一級超危険指定人物。

ニコニコした表情だというのに、あれほどの恐怖は生まれて初めてだった。

だからスバル、敬称なんて必要ないからあんなやつに。

「いきなりメス出して怖かったけど、でもセフィロスさんとアティさん、栄琳さんのおかげで勝ったから良かったよね」

それに関してはスバルの言う通りだ。

偶然あたしたちのチームに入ってくれたセフィロスさんたちのおかげで何とか生き残ることが出来た。

クイズはアティさんと栄琳さんのおかげで勝てたし、マジバトル血生臭いことはセフィロスさんのおかげで回避できた。

(あのときのセフィロスさん、カツコよかったなあ)

つて、何を考えてるのあたしっ！

「それより早くゼフィランサスさんって人に会いに行くわよ！」

いろいろと訊き回ったおかげで分かったここの世界の正体。

ここはルシルさんの使い魔の世界だということ。

だからさっきまで会っていた人はみんな、ルシルさんの使い魔……。

そして、ヴァルハラとこの管理者がゼフィランサスさんって人ということも分かった。その人もルシルさんの使い魔エインヘリヤルで、唯一ヴァルハラ全体に干渉出来る人だということだ。

「もう変な事に巻き込まれないうちに行くわよスバル！」

「うん！」

十 十 十 十 十 十 十

「さっきの人たち、エリオ君やスバルさん以上の大食いだったね」

「あはは、うん。僕もさすがにあれは・・・」

レンに教えてもらったヴァルハラ宮殿に向かう途中、お腹が空いていることに気づいて、立ち寄った店。

そこには僕やスバルさん、ギンガさん以上の大食いさんがいた。

僕たちより少しお姉さんのリナさん、そして大人のメーベルさん。

インデックスさんはまだマシな方だったけど・・・。

正直、あの食事風景は見ているこっちが胸やけしそうな感じだった。何とかあそこから脱出できたけど、もう少し出るのが遅かったら、僕たちと入れ違いで来た人のように大食い競争に巻き込まれていた。

そんな僕とキャロはここまでいろんな人たちと出会ってきた。たとえば、

「このバカ犬うううううううう！！！！！」

「うわあっ！ やめるルイズ！ そんなの食らったら死
ぎゃ
あああああ！！！」

杖を持って追いかけてまわす女の人と、爆発に煽られて吹っ飛んだ男の人。

その光景がどうしてかシャルさんとルシルさんのように見えた。それに、

「テメエら、黙らねえと撃ち殺すぞ！！！」

「三蔵がキレた！？」

「あはははははは！！！」

「八戒！ 笑ってねえで、銃ぶつ放すクソ坊主を止めやがれっ！！！」

すごく仲が良い男の人たちも見ました。

でも街中であんなに暴れていても、誰一人として止めようとし
ないのもすごかった。

たぶんああいうのは日常茶飯事なんだと思う。
えっと他にも、

「この世の理は即ち速さだと思いませんか？ 物事を速く成し遂げ
ればその分時間が有効に使えます！ 遅い事なら誰でも出来る！
20年かければ馬鹿でも傑作小説が書ける！ 有能なのは月刊漫画
家より週刊漫画家、週刊より日刊です！ つまり速さこそ有能なの
が、文化の基本法則！ そして俺の持論なんです！！！！！」

「……………」

「俺はこう思うんですよ、運転するなら助手席に女性を乗せるべきだと。密閉された空間、物理的に近づく距離、美しく流れるBGM。体だけでなく二人の心の距離も縮まっていくナイスなドライブ。早く目的地に行きたい、でもずっとこうしていたい、この甘美なる矛盾。簡単には答えは出てこない、しかしそれにうもれていたいと思う自分がいるのもまた事実！どうですかあ？」

「……………」

「ん~~~~、俺はこう思ってるんです、人々の出会いは先手必勝だと。どんな魅力的な女性でも、出会いが遅ければ他の男と仲良くなっている可能性もある。なら出会った瞬間に自分が相手に興味があることを即座に伝えた方がいい、速さは力です。興味を持った女性には近づくと、好きな女性には好きと言う、相手に自分を知ってもらうことから人間関係は成立するのですから。時にそれが寂しい結果を招くこともあるでしょう、しかし次の出会いがいつまたくるかもしれません!!」

「いい加減にしてください!!」

すごく早口な男の人が女の人に振られてた。

ピンタをその長身な男の人に食らわせて立ち去る女の人。それを頬を押さえながら見送っている男の人が、

「そ・・・そんな・・・！ 何故だあー！！ キャラが濃すぎるのか!?!」

残像を残す勢いで走り去っていった。

あの人もまたルシルさんの使い魔エインヘリヤルなんだろう・・・。

「もう一度だけでも抱き締めたかったなあ、ピカチュウ」

キャラが残念そうに呟いた。

ここに来るまでに出会った動物で、電気ネズミとか言われていた。そんなピカチュウが集団で踊っていたのを見たキャラの暴走っぷりはすごかった。

「でも、ビリリダマって子の自爆には参ったよ・・・」

そんな中現れた球体の子。それも生物と聞いてかなり驚いた。どんな感じの子何だろうと思って触れたら、ドカンッ、だった。

あまりにも不意打ち気味な攻撃。

僕たちにあの子たちの名前を覚えてくれたクリフさんもそれを見て大爆笑。

「すまんすまん。そいつらのこともまあ許してやってくれ」

本当にいろいろあった。

でもここでの記憶がレンの言っていた通りに無くなるんだとしたら、それは寂しい。

十 十 十 十 十 十 十 十

デイズイーさんに案内されたヴァルハラ宮殿。

デイズイーさんとは入口の扉でお別れして、今はわたしひとりで宮殿の中を歩いている。

ただどこのヴァルハラはすごく大きい。外から見たら、塀の端が見えなかった。

そんな大きなところで一人で住んでいるルシルパパのお姉さん。

「どうぞ、入ってきて」

「っ！ あ、あの・・・！」

ルシルパパのお姉さんだということはずぐにわかった。

だってルシルパパと同じすごく綺麗な銀色の髪に紅と蒼の瞳だから。

「ようこそヴァルハラへ、高町ヴィヴィオちゃん。フリードリヒ君」

「え？」

「フフ、英雄ユウコウの居館イカンでのことなら何でも知っているのよ？

私は一応、英雄ユウコウの居館イカンの管理者マネージャーだから、ね」

そう言つて微笑むルシルパパのお姉さんのお姉さんが指を鳴らした。するとわたしの前に椅子が出てきて、座るように促してくれた。

「あの・・・ルシルパパのお姉さん」

「っ！？ ねえ、もう一度、さっき何て言ったのか教えてくれるかな？」

椅子に座つてそう言つと、ルシルパパのお姉さんがすごく驚いた顔して、すぐに面白いものを聞いた、みたいな顔になった。

「その・・・ルシルパパのお姉さん・・・？」

「……クスクス、そう、ルシルパパ……フフ」

少し怖い。

「あの子ってば、いつの間にパパになったのかしら？」

そういうことは、すぐにお姉ちゃんに教えてほしかったなあ」

「あ……」

「そっかあ、パパかあ。シェフィリスたちも喜ぶよね、きっと。

あの娘たちはルシルの幸せをホントに望んでいるから」

ルシルパパのお姉さんの独り言。

よく聞こえなかったけど、たぶん大切なことなんだと思った。

「えっと、元の世界に戻る方法、だっただけ。

ちよーっと待ってね。今ヴィヴィオちゃんの仲間の居場所を探るか
ら」

スバルさんたちのことだ。

「……なるほどなるほど。よし！ それじゃあ今すぐにでも帰
すね」

急に眠たくなってきた。

頭がクラクラする。

「じゃあね、ヴィヴィオちゃん」

最後にルシルパパのお姉さんが、わたしの頭を撫でてくれた。

「・・・オ・・・ヴィ・・・オ・・・」

声が聞こえる。

「ヴィヴィ・・・」

この声・・・ルシルパパ・・・？

「ヴィヴィオ」

「ルシル・・・パパ・・・」

「こんなところで寝て、風邪でも引いたらなのはママたちが暴走してしまっぞ。」

それにしても、スバルたちも一緒とは・・・。なかなか戻ってこないと思ったら寝ているとは。

それほど今日の午前訓練は辛かったのか・・・？

まったく、って言いながらスバルさんたちを起こしていくルシルパパ。

（わたし、どうしてこんなところで寝ていたんだろう・・・？）

思い出せない。だけど、すごくいい夢を見ていた気がする。

「ヴィヴィオ、顔を洗ってすぐに食堂においで」

「うん！」

「・・・ねえ、ルシル」

「ん？ 何だ、シャル？」

「私たちの出番ってこれだけ？」

「これだけ」

「・・・orz」

世にも不思議な世界の冒険？（後書き）

う~~~~~ん、一話完結だからこんなに雑になってしまっ
てしまうの
でしょうか？

そう思う今日この頃な自分です。

さて、今回は英雄の居館であるヴァルハラ世界を書きました。
もう何でもアリな世界です。ちなみに創世結界として現れるのは宮
殿内のみです。

こんなバカな世界まで出してしまっっては、ルシルの頭が疑われるよ
うなことになるので。

そして、ルシルが入れるのもまた宮殿内のみ。

ですからルシルはバカな世界で面白おかしくな事は出来ません。

今回の異界英雄。多すぎて申し訳ありません。

魔法陣グルグル：キタキタオヤジ&カセギゴールド

ボンバーマン：ボンバーマン各色

ONE PIECE：ウソップ

NEEDLES：アダム・ブレイド

テイルズオブジァビス：ジェイド・カーティス

Fate/Stay night：間桐桜

テイルズオブシンフォニア：コレット・ブルーネル

dear：プリノ・ハーウエル

メルティブラッドシリーズ：ネコアルク&白レン

ギルティギアシリーズ：デイズイー

灼眼のシャナ：シャナ

奪還屋ゲットバツカース：赤屍蔵人

サモンナイト3：アティ

東方永夜抄：八意栄琳

ファイナルファンタジー? : セファイロス

スレイヤーズ : リナ・インバース

シャイニングフォース・イクサ : メーベル

とある魔術の禁書目録 : インデックス

ゼロの使い魔 : ルイズ&才人

最遊記シリーズ : 三蔵一行

スクライド : ストレイト・クーガー

ポケモン : ピカチュウ&ビリリダマ

スターオーシャン3 : クリフ・フィツタ

A N S U R キ ャ ラ

ゼフィランサス・セインテスト・アースガルド

セインテスト王家第一王女で、ルシルとシエルの姉。

弟妹ラヴな元気が取り柄の防衛魔術師。

ルシルが本格的に大戦に参加することになった最大要因。
享年26歳。

ドッペルドッペルドッペルゲンガー？

何だろう、今日のシャルちゃんはどこか変だ。

どこか？と訊かれればハッキリと答えられないけど、長年の付き合いからの勘というやつだ。

それにシャルちゃんだけじゃない。ルシル君もどこか変な感じがする。

フェイトちゃんに訊いてみると、フェイトちゃんも同じことを思っていた。

「何て言うか・・・言葉に出来ないけど妙な感じはする」

「そう・・・だよな。何だろう・・・？」

私とフェイトちゃんの前を歩くシャルちゃんとルシル君。すると前からシャルマル先生が歩いて来て、

「ああセインテスト君、今日も私のサポートだから、お願いね」

「はい」

「??？ どうかしたセインテスト君？ ぼーっとしてるけど・・・。もしかして風邪でもひいたのかしら？ ちょーっと、しゃがんでみて」

ルシル君が頷いてシャルマル先生と同じ高さくらいにまでしゃがんだ。それを見ているシャルちゃんは何も言おうとしない。やっぱり何か変だ。

「って、うわっ！ ごめん、フェイト、シャマル！」

泣いているフェイトちゃんとへたり込んで放心しているシャマル先生を見て、シャルちゃんが謝りながら駆け寄った。

何の騒ぎかと次第に集まってくる隊員たちが近づいてくるのが気配で分かる。

シャルちゃんもそのようで、慌てるように指を鳴らすと、シャルちゃんも首なしルシル君を消した。

それで解った。今のシャルちゃんと首なしルシル君は、ルシル君の使い魔と同じ存在だということに。

朝から感じていた変な違和感の正体も同時に解った。

十 十 十 十 十 十 十

場所を移して、シャルから説明された。

さっきのルシルもシャルも偽物だったことを。

私となのはが朝から感じていた違和感の正体がそれだった。

本物じゃなくて偽物。

「ホンつつつごめん！ 耐久性実験していたんだけど、まさかなのはたちの前で首ポロリなんて想定外だったから！」

こっちもいろいろと想定外だよ、シャル。

目の前でルシルの首ポロリだなんて。

「それじゃフライハイトちゃん、本物のセイントテスト君は今どこ？」

「・・・・・・・・・・」

突然黙って私たちから視線を逸らすシャル。
なに？ シャルはルシルに何かしたの？

「え〜と・・・そのー、あはははは！ ルシルはちゃんと自室にいるよ？」

まあ動けなくはしてあるけど・・・あはは・・・はは・・・」

「「「・・・・・・・・・・はあ」「」」

もうため息しか出ない。ルシルの扱いがホントに酷くて。
それから寮のルシルの部屋に行くと、バインドで締めあげられたルシルが横たわっていた。

「 助かったよ、フェイト、なのは、シャマル。で、そこで土下座するシャル義姉さん。」

私に言わなければならぬことが山より高く海より深い程あるはずだが・・・？」

「くううう、いくらなんでも重力使って強制土下座ってやり過ぎ・・・」

ミシミシと音がしながら土下座しているシャル。
けどそれも自業自得だから、少し可哀想でも助けない。

「まったく、無理やり私を黙らせる必要はないだろ？」

話してくればある程度の事は考えて、それから手伝う。まあ出来る範囲内だが」

「あうう・・・はい」

土下座ならぬ土下寝になりつつあるシャル。
もう耐えられないみたいだ。

「・・・はあ」

「っ!?!」

急にシャルが跳ね上がった。

もし今のが背筋測定されていたら世界記録が叩き出せそうだ。

「き、急に重力解かないでよ！ 腰ポツキリいきそうだったじゃない!?!」

腰を押さえながら怒鳴るシャルに、ルシルは完全に無視を決めこんだ。

この場の空気から、すぐにでもまずい方向に行ってしまいそう。それを阻止するために私が何か言おうと考えていると、

「えっとシャルちゃん、ルシル君。ひとつ訊いていいかな？」

「「ん?」「」

「その・・・えっと、ルシル君の使い魔んだけど、それってもしかしてスバルたちのもいるの？」

右手を上げてなのはが口にしたのは、ルシルの使い魔の中にスバルたちがいるのかということ。

ルシルの使い魔というのは、その人が持つ魔法や武器を複製した際

に生まれるものだって昔聞いた。
ルシルは私やなのは魔法も使えるから、使い魔の中には私たちもいる。それも以前聞いた。

「どうなのルシル。スバルたちの魔法って複製してあるの？」

「……まあ一応は」

「そっか。うーん……よし。午後の訓練はそれでいこう」

「「「まさか……」「」「」

なのはが何を思いついたのか、私たちは思い至った。

フォワードの使い魔、午後の訓練、そこから導き出されるのは実に簡単なこと。

それから、食堂でお昼を済ませて、午後の訓練となった。

私も参加したかったけど、生憎と別件で出かけないといけない。

「何も変なことが起きないといいんだけど……」

嫌な予感があるけど、変なことが起きないことを祈りつつ私は六課を後にした。

十 十 十 十 十 十 十 十

ルシルはシャマルと中で仕事だから、エインヘリヤル異界英雄召喚は私がすることになった。

「えー、午後の訓練はちょっと予定を変更します」

フォワードの子たちは、なのはから告げられた言葉に少し戸惑いを見せている。

今までそんなことがなかったから、どんな訓練になるのか期待半分不安半分なんだろう。

「つつわけで、フライハイト。頼んだぞ」

「ん、了解」

ヴィータには昼休み中に、なのはと一緒に話をつけた。

始めはつまらなそうにしてたけど、終盤じゃ興味深々だった。

「あの、シャルさんが僕たちと・・・？」

「つつん、違うよエリオ。みんなが相手をするのは、ある意味最強の敵。

さて・・・・・・我が手に携えしは確かなる幻想・・・!!」

“フレイザブリク神々の宝庫” から取り出したのは召喚のためだけの神器。

ホントはこんなの必要ないんだけど、機会があれば使いたかったモノで、今がその機会と判断したから取り出した。

今取り出したモノの他にも、私の腰のあたりに無数の弾丸が納められたベルトが武装される。

それはソイルと呼ばれる特殊な砂が入れられた弾丸。そしてそれを撃ちだすための黄金の魔銃。

本来は召喚獣を呼びだすもの。けど今回はすこーしイジって“エイン異界ヘリヤル”

もう一発取り出し、シリンダーに装填。

「そして、堅牢なる護りの大地、ガイアブラウン！」

最後の一発を装填。魔銃が唸り上げて吼える。

その様子を見ているのはたちが啞然としているのが視界の端で捉えた。

「唸れ、エインヘリヤル異界英雄……スバル！！」

トリガーを引く。大きな発砲音と共に撃ちだされた三発のソイル弾丸。

それが螺旋軌道を取り、上空で衝突して爆ぜる。

その時に生まれた閃光で視界が潰される。

次に目を開けた時、私たちの目の前に現れたのは、

「あ、あたしがもう一人！！？ ていうかどうしてタレ耳やフッサフサな犬の尻尾が！？」

スバルと似た姿のエインヘリヤル異界英雄。

本物と見分けるため若干色を変えて、オプションも付けてある。

それが犬耳と尻尾。ちなみにポーター・コリーの耳と尻尾だ。

そんな色違いなイヌスバルを見た、スバルを含めたフォワードメンバーが目を点にしていた。

「というわけで、本日の午後の訓練はコレ。

敵を知るにはまずは自分から。自分という強敵と闘ってもらいます」

なのはにそう告げられてもまだ再起動しないフォワード。

「おい！ 聞いているのかお前ら！」

「「「「は、はい！」「」「」

ウィータの叱咤でようやく再起動を果たしたみたい。

まあいきなりじゃそうだよな。

三週間くらい前に事故で飛ばされた英雄ヴァルハラの居館のことは覚えてないだろうし。

「それじゃティアナ、エリオ、キャロの順番で召喚するね」

まずはティアナ。ティアナのイメージは……。

（確かティアナって“夜明け”を意味する言葉だったはず……）

じゃあ、まずは夜明けと、ティアナの得意な幻、最後に……強い夢……夢。

そつと決まれば早速召喚開始！

「お前に相応しいソイルは（以下略）！ 始まり告げる耀、オレンジガーネット！」

装填。

「全てを欺く夢幻、ファンタジックイエラー！」

装填。

「そして、先なる夢への導、ドリームゴールド……！」

装填。そして、

「撃ち抜け、エインヘリヤル異界英雄……ティアナ!!!」

発射。そして召喚される色違い+エルフ耳のティアナ。

「な、なんであたしのは耳が長いんですか!？」

ピコピコと耳が動くエルフティアナ。

「あー、ごめんごめん。まあ気にしないであげて」

次はエリオ。エリオのイメージは、騎士の誇りとか誓いがしつかりくる。

それと雷光。最後に……うん、風……かな。疾いし。

「それじゃあ、お前に相応しい(以下略)！ 揺ぎ無き誓い、ロイヤルブルー!」

装填。

「漆黒照らす雷光、ライトニングゴールド!」

装填。

「そして、地駆ける疾風、エアログリーン!」

装填。そして、

「貫け、エインヘリヤル異界英雄……エリオ!!!」

発射。そして召喚される色違いダックスフンド＋犬耳＋尻尾エリオ。

「あの・・・つつこんだらダメ・・・ですよね・・・？」

犬エリオを見て、ため息をつくエリオ。

うんうん、諦めが肝心だよエリオ君。

「そんじゃ最後にキャラ」

「あ、はい！」

キャラはそうだなあ・・・。

まず桃色は外せないよね。え~~~~つと、キャラ・ル・ルシエ・・・。

う~~~~ん、キャラ・ル、キャラル、祝福・・・祝福でいこうか。

あとは、ルシエ・・・は確か、空で輝くって意味だったっけ。

「よし！ お前（以下略）！ 優しき純心、チェリーピンク！」

装填。

「真純なる祝福、ホーリーホワイト！」

装填。

「そして、天より注ぐ光、ムーンシルバー！！」

装填。そして、

「萌えろ、^{エインヘリヤル}異界英雄……キヤロ!!」

発射。そして召喚される色違い+ネコ（ペルシャ）耳+フワフワ尻尾なキヤロ。

「シャルさん!!」

ゴロゴロ喉を鳴らして気持ちよさそうに座り込んでいるネコキヤロ。それを見た本物のキヤロが恥ずかしさの所為か若干頬が赤くしながら叫んだ。

「まあまあ、ああ見えてもちゃんとしているから。

なのは、ヴィータ。こっちの準備は終わったけど……」

「あ、うん。まあいろいろと言いたいことがある気もするけど……」

それじゃ早速、まずはそれぞれの自分と闘ってもらおうかな。

スバルは北、ティアナは南、エリオは西、キヤロは東に別れて」

「ひとつ言っとくが、相手は自分だ。自分が考えうる事はもちろん向こうも考える。」

それに、今まで培ってきた経験もある……んだよな、フライハイト」

「うん、もちろん。昨日までの経験はある」

「つつことは、だ。今までお前らが培ってきた経験は、そいつらも持ってる。」

自分の長所と短所を確実に見極め、その上で乗り越えねえと勝てね

えってわけだ」

今まで鍛えてきた自分が相手となる今日の相手。
長所も短所も全てが同じ。だから考える必要がある。
自分の長所で向こうの短所を攻めれば、向こうもまた同じ短所の際
を突く迎撃が来るから。

「それを終えたら次はチーム戦を行う。でいいんだよな、なのは隊長」

「うん。それじゃあ始め！」

「」「」「はい！！」「」「」

大きく答えて、指定された戦場に散っていった。
それを見送る私たち。

「……はあ、にしてもすげえよな。本人だけじゃなくてデバイスまで複製されてんのかよ」

「ん？ ああさすがにルシルでもデバイスなんて精密機械を複製できないうよ」

「は？ じゃああの使い魔たちが持ってたのは何だったんだよ？」

「ハリボテ。もちろん純粋な機械でもないしAIもない。だけど性能や動作は同じ」

グイータの疑問に答えた。外見は同じデバイスでも、アレらは神器に相当する武装。

だから結構な代物だったりする。性能も態々落としてあるくらいだし。

「ハリボテでオリジナルと同性能ってか」

あまりのデタラメさに呆れ顔なヴィータ。

なんならその呆れ顔を、今から面白いものにしてあげよう。

えっと・・・ヴィータは絶対的に赤関係をひとつ。

次は、ヴィータには生命や生活って意味もあるし、緑関係。

あとはデバイスは鉄の伯爵“グラーファイゼン”だし、そっち系でいこう。

「おま（以下略）！ 総てを破壊する顎あぎと、デストロイクリムゾン！」

ベルトから弾丸弾丸を取り出して、魔銃のシリンダーに装填する。

「強き生命の脈動、シーグリーン！！」

二発目を装填。

「そして、挫かれぬ鋼の意思、スチールグレイ！」

最後の一発も装填完了。唸りを見始める魔銃。

「破壊せよ、異界英雄エインヘリヤル・・・ヴィータ！！」

「おい！ 何勝手なことしてんだよお前！」

もう遅いよ、ヴィータ。トリガーを引いて発射する。

放たれた弾丸ソイルが上空で衝突して爆ぜる。
そして現れたのが、

「……………」

ウサ耳にフワフワな丸い尻尾、ついでに色違いなウサギヴィータ。
その姿は、ヴィータの帽子にも付いてるのろいうさぎがモデル。
そんなうさぎ好きだからこそ、エインヘリヤル異界英雄にもその影響を出してあげた。

「うんうん」

それと意図しなかったことだけど、若干ヴィータより小さいから、

「チヴィータと名付けよう」

「ぶっ叩くぞっ！ー！」

オリジナルのヴィータより小さいチビだから、チヴィータ。
なかなか良い名前だと思っただけど、残念ながらヴィータには不評なようだ。

「まあまあ、ヴィータ副隊長。可愛いよチヴィータ」

ウサ耳をピョコピョコ動かしながらキョロキョロしているチヴィータ。

身体も若干揺れるから、丸い尻尾もフワフワ動いている。

それは、確かになのは言う通り可愛らしい。ああなんか抱きしめたい。

「触るなバーカ。てか、いい歳してツインテールなんかしてんなよな」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

なのはが触れようとしたら、チヴィータのその可愛らしい口から毒が吐かれた。

ミニチュアみたいな“グラーフアイゼン”をなのはに突きつけながらの毒だった。

「ヴィータちゃん。．．．そんな風に思ってたんだ．．．？」

あ、なんかまずい。

「違いーよ！ その偽者が勝手に言ったことだろ！ 真に受けんなよー！」

「そ、そうだよね。うん、ヴィータちゃんはそんなこと思わないもんね」

管理局の白い魔王さまの降臨は阻止された。

「おい、偽者！ ^{テメエ}次に変なこと言ったら空までぶっ飛ばすぞ！？」

「ハッ、やってみるよ！ 今日という日を命日にしてやっからせ、このロリっ娘！

ああ違えな。何百と生きてんだからロリババアか！」

どっちかと言えば、チヴィータの方がロリだよ？

「ぶつつつつつつ殺おおおおおおおつす！！！！！！！」

ヴィータが“グラーフアイゼン”を起動して、チヴィータ相手にブ
ンブン振り回す。

だけど、その小ささを活かして回避しまくるチヴィータ。

「アイゼン！」

J a w o h l

ちよつとヴィータ、いくらなんでもギガントフォームは大人げない
よ。

「ぶつ潰れ」

「どこ見てんだよ！」

ヴィータが“グラーフアイゼン”を振り上げたことで生まれた隙を
突くチヴィータ。

一気に懐に入つてヴィータの脛を“ミニアイゼン”で打ちつけた。

「くうおおおおおおうううう！！！！！！」

アレは痛い。

それを証明するかのように、ヴィータが“グラーフアイゼン”を手
放して、右脛を擦りつつ転げ回る。

目にも涙を浮かべているし、相当なダメージのようだ。

「見たかよ。これぞ必殺シーン・バイン・シュラーク！！」

聞けばなかなかカッコいい必殺？技名だけど、その意味は“向う脛に一撃”だ。

「~~~~~」

「こんなもんかよ」

“ミニアイゼン”を、未だに右脛を擦りつつ泣いているヴィータに突きつけた。

「て、テメエ……！」

メラメラと怒りに燃えるヴィータ（涙目）。

「ニヤア？」

片や可愛らしい小悪魔な笑みを浮かべるチヴィータ。ウサ耳が若干悪魔の角にも見えてきた気がする。

「え、えつとヴィータちゃん、チヴィータちゃん。な、仲良く、ね。そう、仲良くしよう。……無視ですか」

あの危険地帯に挑んだものの敗北して、ガツクリ頂垂れて戻ってきたのは。

私はただそれを迎え入れるしか出来なかった。

「上等だよテメエ。アイゼン！」

R a k e t e n f o r m

ヴィータは徹底抗戦のようだ。

対するチヴィータもノリノリだし、どうしようかなあ……。

（召喚を解くのは簡単だけど、それじゃつまらないし……そう
だ！）

「（全略）！ 遥かなる夜天統べる蒼、ミッドナイトブルー！」

ベルトから弾丸ソイルを取り出して、シリンダーに装填。

「まさか……」

なのは私が口にした言葉だけで誰を召喚するか分かったようだ。
まあ夜天統べると言ったらただ一人しかいない。

「夜天に舞いたる純白、スノーホワイト！」

装填。

「そして、永久とわなる優しき疾風はやて、エターナルグリーン！」

三発目を装填する。そして、

「つつこめ、異界英雄エインヘリヤル……はやて！！」

トリガーを引いて三発の弾丸ソイルを撃ち出す。

そして現れたのは色違い＋タヌキ耳＋尻尾のはやて。

「ねえシャルちゃん、どうして出る子出る子動物が混ざってるの
か……？」

「その方が面白いから」

即答したら、なのはが「やっぱり」と呟いてため息。だって何事も楽しまないと損だよ、なのは。

でも、さっきはそう言ったけど、ホントはちゃんと理由がある。オリジナルの前では、対象の異界英雄は召喚出来ないというルールがある。

だから何でもいいから少しだけでもアレンジを加えないと、オリジナルの前には召喚出来ない。

どうしてルシルはそんなルールを作ったのか知らない。でもきつと理由はあるんだと思う。

「じゃあはやて、あそこでバトってる二人を止めてあげて」

「了解や」

手にするのはシュベルトクロイツじゃなくてハリセンだ。

描かれたイラストはウサギとカメ、じゃなくてデフォルメされたウサギとタヌキ。

そして“夜天の書”は動物図鑑という始末。

そんなハリセンと動物図鑑を手に、タヌキの尻尾をフリフリ揺らしながら、ヴィータとチヴィータに近づいていくタヌキはやて。そして、

「いい加減にしときー!」

「「みぢやっ!?!」」

思いつ切り振りかぶったハリセンでつつこんだ。
スパンツと良い音が出た。今はプロの、すごく上手い叩き方だ。

「はやて！？・・・じゃねえええ！！　フライハイト、お前またや
つたのかよ！？」

「二人を止めるためだからだよ」

狙い通りにバトルも終わってるし、選択は間違っていないかった。
あっちはもう解決したし、なのはに振り返って、

「いつそのことなのはも自分相手に闘ってみる？」

なのはの異界英雄^{エインヘリヤル}も出そうかと提案。

「ヴィータも結構チヴィータに苦戦していたみたいだし、良い経験
かもよ」

「苦戦なんかしてねえ！」

ヴィータの反論をスルー。

「わ、私はいいよ。その・・・どんなのが出てくるか知れないし・・・」

「大丈夫大丈夫！　チヴィータみたいな変なものにはしないから」

「おいー！」

「うん……」

随分と深く考えるなあ。そんなにイヤなのかな？

「どう？ 少なくともチヴィータよりはマシだから」

「ぎげんなよマジで！」

「そうだなあ……。じゃあお願いしよう……。かな」

チーム戦で闘っても良いし、と小さく呟いてる。

そうと決まれば早速、

「よし、そうこなくちゃ！ 見てて、チヴィータごときより凄いのにするから」

「なあ、殴っていいよな？ もう殴っていいよな？」

「ああ、あたしも手伝っぜ」

ここに来てヴィータとチヴィータが結託したみたいだ。

だけど、こっちはタヌキはやてという最終兵器があるのを忘れてるね。

指パッチンで合図。そしてハリセンで脅される鉄槌の騎士とウサ耳騎士。

「凄くしないでいいからね!？」

なのはの言葉もスルー。

「お前に相応しいソイルは決まったあ！！
狙ったものは全て撃ち抜く、ハンティングピンク！」

装填。

「逃れうぬ滅び与える星光、ヴァイオレンスホワイト！」

装填。

「そして、果てなき絆の導、エンドレスレインボー！」

三発目を装填。

「皆殺せ、「何でそんなに物騒なの！？」・・・エインヘリヤル異界英雄・・・
なのは！！！」

若干お怒りのなのははスルーして、トリガーを引き発射。
そして例のごとく爆ぜては現れるエインヘリヤル異界英雄なのは。

「うお、すげえな。悪魔みてえ」

「アレンジし過ぎだよシャルちゃん！！！」

「あつれえ？ 予定以上に変わったちゃったなあ・・・」

バリアジャケットの白の部分が黒で、青い部分も変更して紅くした。
そして髪の色も少し変更して灰色、瞳は金色。うわお、ほとんど別人だあ。

そんなブラックなのはと目が合うと、

「妾の前で頭が高いわ、そちら。とつとと頭を下げよ」

めっちゃ偉そうに言ってきた。

なのはの顔と声なのに、言うことが変わるとホントに別人だ。

「んー、確か性格の変更はしてないはずだけど、あ、まさか……
）

「まさか……あれが……なのはの隠された本性……!!」

「そんなわけないよ!!」

つっこまれた。

「聞こえなかったのか？ とつとと頭を下・げ・よ」

目が全然笑ってない。ていうか敵意丸出しでの笑顔なんて怖いだけだ。

「おい、フライハイト。あれちょっとヤバいんじゃないか……？」

「シャルちゃん、私の顔であんな怖いのもう見たくないんだけど……」

「う、うん。まあさっさと消えてもらおうかな……」

今度はちゃんとしたなのはの異界英雄を召喚しないと……。

（エインヘリヤル異界英雄召喚術式強制解除開始。対象、高町なのは）

デビルなのはもまた“レイジングハート”を呼びよせた。でもそれはデバイスじゃなくて下位神器、現代じゃ規格外の代物だ。で、そんなデビルなのはが手にしたのは、

「オリジナル以上の神々しさに目が眩むというものよ」

真っ黒に染まって、何かのシミのようなものがこびり付いた三叉槍トリライナ。しかも穂が分かれる部分にはドクロ（額に肉と書いてある）がある。神々しさのカケラもない。だから、

「……どこがつ！？」

つつこまずにはいらなかった。

そして一度歯車が狂いだすと、それに続いてさらに繰り出す歯車もある。

「……ひゃつつつつほおー……い……」

「うおっ！？」

チヴィータとタヌキはやてが裏切った。

デビルなのはそのところまで走り寄って、その後ろに控えた。だけどそれだけじゃ終わらない。

『あの！ もう一人のあたし』トツピロキー！』 変なんです！』

『ぼ、僕のも様子が変な』ウニョラー！』す！』

『わ『エイヤハー！』す！』

『うわっ！ なん『イイイーハー！』なんですけど！』

「「「「「「「「「「「」

あの子たちのも暴走気味のようだ。

「それではいこうかの。アクセルシューター 悪瀬流酒雨太臣」

デビルなのはの攻撃。ターン

アクセルシューターと言っておきながら、禍々しいフレイルのよう
なトゲ付き魔力弾。

それがものすごい数で襲いかかってきた。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャラ。すぐにごっちと合流！」

『『『『『はい！！』』』』』

さあ、あの子たちと一緒に来る暴走異界英雄エインヘリヤルを掃討する準備で
ますか。

「いくよ、なのは、ヴィータ」

「うん！」

「おう！」

この後、ルシルに気づかれるまで戦い続けた私たち。

暴走した原因は魔銃による異例召喚による術式の混乱。
もちろん私は、ルシルからそれはありがたくないお説教を受けまし
た。

「めでたしめでたし」

「全然めでたくないよ!？」

ドッペルドッペルドッペルゲンガー？（後書き）

今回のネタは少々古い？ため、知らない方がいるかもしれませんね。今話の途中で書いたように、ファイナルファンタジー：アンリミテッドというアニメを使いました。使った色のいくつかは超適当。存在しない色ですよ、もちろん。

再臨・酔いの鬼神 (Advent・Drunk Demon Lord) 前

今回は、それはもうあり得ないことをしています。

どうかそのことには目を瞑っていただきたく……。。

「慰安旅行？」

部隊長室へ一緒に呼び出されたルシルと声がハモった。

まさか六課のような実験部隊にも慰安旅行なんてものがあつたなんて……。

「そうや。三泊四日の慰安旅行。行先はまだ決まっとらんやけど、シャルちゃんもルシル君にも伝えとくな」

お茶を飲みつつ気軽に言ってくれるはやて。

「あ、ちなみにシャルさんとルシルさんはわたしとたち同じ先発組ですー。」

で、後発組は交替部隊になっているですよー」

「え？　じゃあなに、シグナムは後発になるの？」

六課の交替部隊の部隊長はシグナムだ。つまり別々になるといふことだ。

シグナム一人が私たちと別というのがなんかつまらない。

「そうやけど……。まあ、しゃあないよ、さすがに。」

そういうことはしっかりやらんとダメやしねえ」

「そうですねー。シグナムにはわるいですけど……。」

そうだよね、やっぱり八神家一緒に行きたいよね。

どうにか出来ないものかなあ……？

「……一応、行先についてはアンケートとつとるから、シャルちゃんたちも行きたいところあったらアンケートに答えてなあ」

私たちへの要件はこれにて終了。

それにしても慰安旅行……か。

部隊長室を後にして廊下をのんびり歩く私とルシル。

私はみんなと旅行に行けるだけで、いやつつほおおーい！
なんだけど……

「契約の方は大丈夫……？」

「まあまあだな。軽いものばかりで少々退屈だが」

ここ最近契約がまた起き始めた

そしてそれを執行するためにルシルは六課を空けることもしばしば。

「もし旅行に行けなくなったりでもしたら……」

「そのときはそのときだ。それに、旅行ならフェイトたちと小さい頃に行っただろう？」

私としてはそれだけの思い出があれば十分だ」

そう言っつてルシルは仕事に戻っていった。

やっぱりこのまま世界に残るつもりはないらしい。
でも、

「フェイトとの約束もあるし、何とかしてあげないと」

ルシルだけでも残す。それが私の最後の仕事だ。

十 十 十 十 十 十 十

今日は慰安旅行出発日。最初の二日間の行先はミッド東部にあるテ
ーマパーク。

「鬼だ」

「鬼だな」

「鬼ですね」

シャルちゃんを指してヴィータちゃん、シグナムさん、シャマル先
生の口からボソツとそんな単語が出てきた。
そんな中、みんなの視界に入っているのは、真っ白に燃え尽きたル
シル君。

「なんで!?! すっごいグッドアイデアなのに、どうして批評だけ
!?!」

で、どうしてシャルちゃんが批評を受けているかというと、それは
一時間ちよつと前に遡る。

「なに? 私も一緒に先発組で連れていくだど?」

「そう！ シグナムも一緒じゃないといろいろつまらない！
だから、私はシグナムも先発組として行けるようなグッドアイデア
をここに提案します！！」

あと一時間ちよつとで慰安旅行へ出発というところで、元気いっぱ
いなシャルちゃんの（嫌な予感しかしない）計画が私たち隊長陣に
発表された。

題して“シグナムも先発でGo！作戦”というものだった。

具体的には、シグナムさんをもう一人用意するというもの。

普通ならそんな事は出来ない。だけど、六課にはそれを成しえる人
がいた。

「というわけでルシル、シグナムのエンヘリヤル異界英雄スタンバーーイ」

「アホか」

奇跡の人ルシル君は、シャルちゃんの計画を一言で切り捨てた。
それでもシャルちゃんは懸命に説きました。

「はやてやりインだつて、シグナムも一緒の方がいいでしょ？

旅行は旅行でも慰安旅行！ しかも機動六課でという最初で最後の
慰安旅行なんだよ！？」

一生ものだよ一生もの！ それなのにシグナム一人置いてけぼりな
んて……」

「置いてけぼりつつても、シグナムは交替部隊の部隊長だぜ？

いくらなんでもそんな個人的な理由じゃムリだろ、さすがに」

「冷たっ！ ヴィータ冷た過ぎ！ まるで自信たっぷりのギャグが

受けなくて、観客から注がれる冷えた視線、そして友人が他人のフリをするみたいに冷たい！」

喩がさつぱりだ。要するに態度が冷たいってことを言いたいんだと解釈。

「意味わかんねえ」

「解らないならそれで結構！」

ダメだと思う。みんなもそんな表情だし、ルシル君に至っては完全に無視状態だ。

「楽しまないと損だよ、やっぱり。それが一生に一度の事なら尚更に……」

「……私だってホンマはシグナムも一緒の方が嬉しいけど……」

「でしょ！？　というわけで、ルシルも協力して」

「……はあ。こつ言い変えよう、協力したくないのではなく出来ないと。」

四日間連続異界英雄エインヘリヤルが残るように召喚したら、私の魔力が涸れるだろつが」

「いいじゃん、それくらい。小っさいこと言っていないで、とつとと召喚お願い」

横暴だ。

「魔力を使う場面があるわけでもなし、万が一があるなら私たちがいるし大丈夫だって
だから安心して魔力を枯渇でもなんでもして、シグナムを召喚。
ていうかマスター命令？」

「っ！？ バ はい、よろこんで」

「くくく………」

ルシル君陥落。そつかあ、マスター命令なんてものがあつたの忘れてたよ。

確かルシル君はそれには逆らえないって以前言ってたっけ。
で、その効果は見ての通り絶大だった。

我が内より出でよ 貴き英雄よ

「来たれ、剣の騎士……シグナム」

私たちの目の前に現れるルシル君を象徴する十字架の魔法陣。

蒼く光り輝いてすぐ、現れたのはシグナムさん。のアレンジバージョン。

髪と瞳の色は本物のシグナムさんより若干濃い感じ。

でもよく見ないとどっちが本物かは見分けがつかないくらいにそっくりだ。

「きゃあああ！ ルシル大丈夫！？」

召喚直後にパタリと倒れたルシル君。

召喚時間を四日間ぶっ通しという設定にした所為での魔力枯渇による失神、らしい。

そんな命令を平気で下したシャルちゃん。
だから鬼って言われてるんだよ。

それから使い魔シグナムさんがどの程度まで本物のシグナムさんに近いかということで試験したら、シグナムさんとは遜色のない実力を発揮した。

書類整理だとか何でもシグナムさんと同レベル。
いつかの、シャルちゃんのアレンジ使い魔とは決定的に違う。

それで、結局シグナムさんもまた先発組として出発することになった。

ただどこから行先で起こる事をここで知っていれば、シグナムさんはきつと来なかっただろう。

「まあ出発前にいろいろあったけど、慰安旅行先発組・・・出発や
！」

機動六課慰安旅行先発組、ようやく出発です。

慰安旅行初日。
ミッド東部テーマパーク『フェアリーテイルズパーク』エントランス広場

フェアリーテイルズパークとはミッドチルダ有数の巨大テーマパークだ。

遊園地、動物園、映画館、ショッピングモール、宿泊施設などが揃

っている超有名処。

別の世界からも来場する常連すらいるテーマパーク。

「というわけで、今から自由時間とします。

集合時間はPM：18：30、集合はここエントランス広場。それでは解散！」

先発組リーダーのはやてがそう告げ、機動六課の慰安旅行が始まった。

それぞれが自然と集まりグループとなって遊園地へと散っていく。

だが、

「マジでこんなの有り得ねえ。俺たちのグループ男ばかりじゃねえか」

ヴァイスが残ったメンバーが全員男だということに沈んだ。

実際それも無理はない。何せ機動六課における男女の比率では大半が女子。

圧倒的に男性は少ない。それゆえにこういうグループ分けとなると、自然と男は孤立する。

で、そんな男だけで遊園地を回って楽しいかと訊かれれば、大半がこう答えるだろう。

「男だけで回って何が楽しい!? つうか悲しいだけだ!」と。

隊内に彼女でもいれば、この慰安旅行はそれはもう楽しいものになっただろう。

しかし悲しいかな。ヴァイスを含めてここに残された男性陣は彼女

「あ！ あれルシルさんと乗った・・・！」

「フェイトさん！ フェイトさん！ あれ！ 一緒に乗ったカルセルです！」

エリオとキャロがはしゃぎながら、フェイトとルシリオンの手を引いて駆ける。

ここは、フェイトとルシリオンとエリオ、またはフェイトとルシリオンとキャロという構成で来たことのある遊園地でもある。

それはそう昔な話でもないが、エリオとキャロはそれが懐かしく思っていた。

そんな満面の笑みを浮かべてはしゃぐ二人を見て、フェイトとルシリオンも頬が緩んでいた。

六課でいろいろと経験をして大人びてしまったが、やはりまだ年相応の子供だと。

「よし！ フェイト！ エリオ！ キャロ！ とことん遊びつくすぞ！」

「うん！！」

「はい！！」

ここに着くまで白く燃え尽きていたルシリオンだったが、エリオとキャロの笑みを見て、全力で楽しもうとしていた。

だがそれは自分のためではなく、その目に映るエリオたちのためにだ。

結局彼は自分以外の事ばかりを優先してしまう存在だった。

「っとまずはどれから行くのか・・・？」

「「「あれ！」「」」

本当に楽しそうな笑顔を見せるグループ・フェイト。

その四人の姿は、どこからどう見ても仲の良い家族だった。

グループ・八神家

「「「・・・」」」

順番待ちを終え、いざ有名なローラーコースターに乗りこもうとしたヴィータとリインフォース？は打ちひしがれていた。何故なら足りていなかったからだ。何が足りていないって？それはもちろん、

「元気出してヴィータ、リインちゃん」

「あれだけ並んで最後は身長が足りずにお引き取りとは・・・。さすがに同情してしまうな・・・。まあ元気を出せ」

そう、身長が足りていなかったのだ。

あと数センチ、ほんの数センチが足りていなかった。

そして本気でへこんだ二人をシャマルが慰め、シグナムが同情していた。

「ま、まあなんや・・・。まだアトラクションはあるし、ゆっくりと乗れるもん探そうな」

「……はいです」

「うん……」

二人の声に覇気はなかった。それ程までに楽しみにしていたということだ。

半ばはやてに手を引かれるようにしてその場を後にする八神家。

それから絶叫マシン系で、尚且つヴィータとリインフォース？が乗れるものを探す。が、

「……………」

「えつと……」

なかった。どれも身長がもう少しというところで足りなかった。

もちろん乗れるものもあったが、それは本当に小さい子供用のローラーコースター。

そんなので納得や楽しめるわけもないということで、ヴィータとリインフォースを？は乗らなかった。

そうしたらローラーコースター系は全滅となってしまった。

「はやてちゃ〜ん……リインは……リインは……（泣）

」

「マジかよ……全滅って……そんなのありえねえ……」

その沈みようはハンパじゃなく、二人の背景にはどす黒い曇天が広がっていた。

「……この手は使いたくなくなったがしゃあねえ……。
変身魔法で身長を伸ばすつつう禁じ手を……。」

「リインも……リインも……それしか……。」

少々思考に問題が発生しつつある二人。

そこまでして乗りたいという二人に、はやてたちはただ見守ることしかできなかった。

グループ・シャルロツテ

「なかなかやりますね、シャルさん」

「ティアナこそ。初めてにしてはなかなか……！」

「ゲームセンターで鍛えたので……！」

「ティアもシャルさんも速ーい！」

「スバルーー！！ 頑張れーー！！」

三人は現在ゴーカートでレース場を疾走中。一進一退の激しいバトル。

他の参加者も、二人の激しいデッドヒートに興奮中。

シャルロツテたちは上位組で、スバルは何とかそれに追い縋る。そしてレースには参加せず、外から応援に精を出すギンガ。

「いつけええええつー！！」

「ドリフト!?!」

「マジかよ!」

「あの姉ちゃん、すげえええ!」

本来、このようなマシンでは出来ないようなドリフトを華麗にかますシャルロット。

その鮮やかさに驚愕するスバルとティアナ、そして他のみなさん。

「負けてられないわ・・・!」

ティアナもそれに続いて、ドリフトはかまさないが追走していく。スバルもようやく慣れてきたのか、グングンと順位を上げていく。

「お昼代はあなたたち持ちね・・・!」

「いいえ、シャルさん、私たちが勝たせてもらいます・・・!」

スバルかティアナが勝てばシャルロット持ち、シャルロットが勝てばティアナたち持ち、という昼食代を賭けてのレース参加。

しかしどの道、勝とうが負けようがシャルロットは払うつもりである。

ただ、少しでもみんなと楽しむためにこのような提案をした。

まあ他にもちよつとした理由もあるにはあるが・・・。

そして二人はチェッカーフラッグが振られているのを視認した。

「勝つのは」

「」

二台が最終コーナーを同時に立ち上がるようにする……

「私だ……!!」

「あたしです……!」

そして、レース結果は……

「おめでとうスバル!」

「あ、うん……ありがとギン姉……」

土壇場で優勝を果たしたスバルに、ギンガが駆け寄り両手を握って上下に振るう。

それなのに素直に喜べずにいるスバルの視線の先、背を丸くして落ち込んでいる二人の姿があった。

「まさかあんなところでクラッシュなんて……」

「はあ、好感度アップ作戦が……」

トップを疾走していたシャルロツテとティアナが、最終コーナーでクラッシュ。

とは言っても軽い接触だったが、スバルに抜かれるには十分な失速だった。

そしてシャルロツテの好感度アップ作戦（今さらの上必要なし）。奢らせるとしておきながらカッコよく奢り、三人に大人としてのちよっとした余裕を見せようとする作戦。

実に馬鹿馬鹿しい作戦だが、シャルロットは少し本気だった。

「「シャルさん！ ごちそうになります！！」」

「すみません、ごちそうになります」

「・・・ま、いつか。いいよ、何でも頼んじゃって！」

グループ？なのは

「なのはママー！」

「はい！」

二人で乗れるアトラクションをいくつかこなし、昼食を取るため飲食店へと向かう途中。

ヴィヴィオにとってテーマパークは全てが初めてなため、そのはしやぎ様はすごかった。

そんなはしやぐヴィヴィオを見て、来て良かったと思いつつながら笑みを浮かべるのは、
だったが、

「ねえ、ヴィヴィオ」

「なーに、なのはママ？」

なのはは、先に行くヴィヴィオに声をかける。

なのはのその表情は笑みだがどこか惑いのある翳りがあった。

「その……ルシル君だけ……」

「ルシルパパ……?」

ここにはいないヴィヴィオにとって父親のルシリオン。
なのはそのことでヴィヴィオが寂しい思いをしているんじゃないかと思っただのだ。

「ルシルく……パパいなくて……寂しくない……?」

「??……わたしは大丈夫だよ、なのはママ」

そう変わらない笑顔で返すヴィヴィオ。

しかしなのはには分かった。やっぱり寂しいんだと。

(どうしよう。フェイトちゃんたちの邪魔したくないし……)

なのははフェイトの想いを知っているからこそ遠慮している。
でもヴィヴィオに寂しい思いをさせたくないとも思う。

「大丈夫だから。だってなのはママがいてくれるもん」

「ヴィヴィオ……」

屈託のない笑顔でそんな嬉しいことを言ってくれたヴィヴィオを見て、なのはは決心した。

フェイトに話してルシリオンと一緒に回らせてもらおうと。
通信端末を取り出し、フェイトにコールしようとしたとき、

「なのは、ヴィヴィオ」

「え？ ルシル君・・・！？」

「あ、ルシルパパ！」

若干離れたところから歩いてきたルシリオン。

なのははルシリオンの姿に驚愕し、ヴィヴィオは視認と同時に駆け寄っていき抱きついた。

「どうして・・・？」

「ん？ あー・・・ああ、エリオとキャロがな。」

それにフェイトも、ヴィヴィオのところに行つてあげてほしい、と

苦笑を浮かべつつヴィヴィオを抱きかかえ、なのはへと歩み寄るルシリオン。

「行こう、なのは。急がないと飲食店の席が埋まってしまう」

「え・・・あ、うん」

「さあて、何を食べようか？ ヴィヴィオ」

「んー、オムライス！」

「はは、そうか。ヴィヴィオは本当にオムライスが好きだな」

「大好き！」

ルシリオンは元気いっぱいに答えたヴィヴィオに笑みを浮かべ、ヴ

イヴィオもまた最高の笑顔だ。

そして、なのはは戸惑いつつもヴィヴィオの笑顔を見て、彼女自身も笑顔になっていた。

それから三人で一通り園内を回り、その後グループ・フェイトと合流して集合時間まで遊んだ。

そんなこんなで慰安旅行初日は終了となった。

慰安旅行二日目

『フェアリーテイルズパーク：ショッピングモールエリア』

「ルシルさん、ヴァイスさん」

「どうした？」

「あ？」

両手いっぱいを持っていた買い物袋をベンチの上に置き、すでに疲労困憊で頭垂れているルシリオンと、大してすることのないヴァイスが、二人の間に座るエリオから名前を呼ばれ返事をした。

「あの、どうして女の人の買い物はこんなにも時間がかかって、男の人は疲れるものなんでしょうか？」

「……」

エリオの弱音に沈黙するルシリオンとヴァイス。
そして沈黙していたルシリオンが重い口を開いた。

「エリオ、それは男にとって永遠に解の出ない超難問なんだ。
だから無理に理解しようとしなくていいんだ」

「ま、その通りだな。女の買い物つつうのはそんなもんだと思うと
くのが一番だ」

「そ、そうなんですか……。なるほど……」

それで納得してしまったエリオ。

朝からずっと付き合わされていれば当然の結果である。

「おい、ルシルー！　ちょーつと来てー！」

「エリオー！　エリオも一緒に来てー！」

洋服店の中からシャルロツテとフェイトが顔を出して、ルシリオン
とエリオを呼んだ。

「おい、お姫様たちが呼んでんぞ。荷物は俺が見てっから行ってこ
いよ」

「えっとじゃあ……。お願いします」

「シャルに呼ばれたという時点で嫌な予感しかしないんだが……」

エリオはすぐに店内へと入っていき、ルシリオンは行くのを渋って

いる。

「なんだよそれ。俺は羨ましいつつうのによあ。

もしかすつと、“背中 của ファスナーが閉めれないのあ。だからお願い、閉・め・て？”かもしれねえだろ」

「キシヨいぞヴァイス。というか傍にフェイトたちがいるのに有り得ないだろ。

しかもシャルは恋人ではなく姉だ。もしそんな事があつたら全力で引くぞ」

「うつせえなあ。あんな可愛い姉さんがいて何が不満だつつうんだよ。

賢沢だねえどうも。あーくそつ、そんなお前が憎い」

「意味が分からん。．．．．はあ、仕方ない、行くか」

「ケツ、早く行つちまえ」

そしてルシリオンも店内へと入っていく。

それを見送り、ただひたすら待つヴァイス。

(はあ、こんなことになるなら俺もナンパに行きやあよかったぜ)

他の男性隊員は昨日と同じくナンパに繰り出していた。

それなのにヴァイスはついていかなかった。

慰安旅行に来て、それでナンパに行くということが虚しく思えていたからだ。

「．．．．．」

「ん？ 随分と早いご帰還だな」

ルシリオンが店から出て来て、無言のまま一直線にヴァイスのいるベンチにまで歩いてきた。そしてそのままベンチに座り、

「はあ」

大きくため息をついて、頭を両手で抱え出した。

「な、何があつたんだよ」

僅か一、二分で変わり果てたルシリオンの様子に、ヴァイスが戸惑う。

「……シャルがな、まあ可愛い服を手にして、私に見せてきたんだ。

お世辞じゃなくその服はシャルに似合うと思った。それは確かだ」

「んだよ、だったら良いじゃねえか」

「そうだな。それで終わりなら良かった。良かったんだ。

だがシャルはその服を私の胸に押し当ててきてこう言ったんだ。

“うん、似合う似合う”と……」

「……………そうか。大変だったな」

ルシリオンの肩を叩き、ヴァイスは何度も頷いた。

「もう・・・なんだ。髪を短くしてしまえばいいのか・・・？」

以前切ったのは半年前。ルシリオンの髪が伸びる速さはかなりのもので、すでに後ろ髪を束ねることが出来るまでに伸びている。その問題の後ろ髪をいじりながらため息をひとつ。

それからもルシリオンとヴァイスとエリオは、女性陣の買い物に一日中振り回された。

その夜、三人はホテルの部屋に到着と同時に眠りについた。

慰安旅行三日目

ミッド北部ベルカ自治領、観光地。

「やっぱりいつ来ても感動するね」

ベルカ自治領の景観は素晴らしく観光地として有名だ。

そのため結婚式場ランキングでも常にトップという若者に大人気な地区である。

女性陣がその景観に見惚れている時、男性陣は死んでいた。

特に昨日散々買い物（完全荷物持ち）に付き合わされていた三人。

エリオはまだ元気だが、ルシリオンはまだ疲れが取れず、ヴァイスに至ってはホテルで待機状態だ。

他の男性隊員たちも裏切り者がどうとかと騒ぎ、女性陣に強制的に黙らされた。

そして今はひっそりと別行動で観光している。もちろん男だけで。

「ねえ、フェイト。あっちに結婚式場あるから、ルシルと行ってきたら」

「!!!!!!!!!!!!!!」

シャルロツテのいきなりな爆弾発言にフェイトがパニックを起こす。一気に顔を赤くし、オロオロし始めた。

「な、なななな何をいきなり……そのけ、けけけけ結婚式場だなんて……!」

「そこまでももるって……。しょうがないなあ。

おい、みんなで結婚式場とか観に行ってみない?」

シャルロツテがその場にいた女性陣に対しそう口にする、満場一致で決定した。

「あはは、やっぱりみんな女の子だねえ。さてと、ルシルー!」

「何だ……? 行くなら君たちだけで行ってこい。私はここで休んでいるから」

「は? なに寝惚けたこと言ってんの? ルシルも一緒に行くに決まってるでしょ」

「随分と横暴だな」

「大人しく一緒に来なさい。この場で男一人取り残されて、周囲か

「優しい視線受けたくないでしょ？」

「それでもかまわない。昨日散々付き合わされたんだ、今日くらい休ませてもらいたいものだ」

「しょうがないなあ。マスター命令つてことで」

「待つ　はい、よろこんで………。本当に横暴だな!!」

「はいはい。とつとと行くよー!」

「好きにしてくれ……」

ルシリオンの涙がスルーされつつ三日目も無事に終了。とはいかなかった。

慰安旅行最後の夜。ホテルの大ホールでの夕食時、奴は再びその姿を現したのだ。

「……………」

「なによなによ、みんなしてつまらん顔をして。

つまらん、実うううーにつまらん。いや、つまらんのなら楽しくすればいいだけのことおお」

完全に酔っぱらってしまったシャルロット。

何故このような事になったのか。それは事故だった。

今回はシャルロットも悪くはない。悪いとすれば間違っって運ばれてきた酒に気づかなかったその場の全員だ。

「つつわけで、ルシル！ 例のモノをつ！！」

「イイイイ！！」

そして、彼女の義弟であるルシリオン。彼はシャルロツテの言われるがままに動いていた。

こればかりはシャルロツテの所為ではあるが……。

彼女が酔っぱらったと分かると、ルシリオンはすぐさま捕縛するために動いた。

だが先読みされていたことで、

「我が手に携えしは確かなる幻想……！！」

シャルロツテ・フライハイトが命ず。今夜は我に従うシ○ツカー戦闘員となれ！！」

「……イイイイ！！」

絶対順守の能力を受け、ルシリオンはシャルロツテの命令を聞くシヨ○カー戦闘員となってしまうた。

その変わり果てたルシリオンに、哀れみの視線が送られた

我が手に携えしは確かなる幻想イイイイ！！！！

そんなルシリオンがお馴染の呪文スベルを口にし、その手に青銅の筒を取り出していた。

ちなみに魔力はシャルロツテから強制供給されているため、魔術が使用可能だ。

そしてその筒を仰々しくシャルロツテに差し出した。

「あの・・・シャルちゃん、ソレは・・・？」

出来るだけルシリオンを見ずに、シャルロツテへと訊ねるなのは。正直酔っぱらっているシャルロツテに期待はしていなかったのだった。

「こういう場に定番な神器・・・王様ゲーーム！」

ルシリオンが取り出し、シャルロツテが手にしている青銅の筒。そして、その筒に入っている青銀の棒がいくつか。

これでも立派な神器の一つで、王を引いた者の命令には逆らえないという術式が組まれている。

「……………」

「フッフ、驚いて声も出ないというわけね。いいわあ、その表情。つうわけで、参加したまえよ、なのはたち・・・!!」

「じゃあないか。ルシル君があんなじゃもう止められへんし」

はやてが渋々参加することを承諾したことで、なのはたちも参加することを決めた。

「王様だーれだ！」

シャルロツテの掛け声とともに、一斉に青銀の棒を引き抜く隊長陣含めた前線メンバー+。

そして、

頭を押さえながら悶絶するギンガをスルーしつつ、二番手へと指差す。

「二番、えつと・・・高町ヴィヴィオ・・・です。

えつと・・・その・・・バカと○ストと召喚○の島田○波で・・・。

“アンタの指を折るわ。小指から順に、綺麗に”」

「ヴィヴィオ・・・なんて残酷な・・・（涙）」

なのはが若干泣いた。

「しっかーく！！でも可愛いから許す！」

ヴィヴィオに抱きついて頭を撫でまくる酔いの鬼神シャルロッテ。

一通り楽しんでからヴィヴィオを解放し、三番手を指差した。

「次っ！」

「げっ！次は俺かよ・・・あー三番ヴァイス・グランセニック。

えー、機動○士ガン○ム○のグラ○ム・エ○カー・・・。

“そんな道理、私の無理でこじ開ける！”」

「アウトオオオ！！」

「ぐぶっ、うがっ、のおっ」

ヴァイスの頭に金タライが三連発クリーンヒット。

綺麗に磨かれている床へと沈んだ。

「次っ！」

「っ！ よ、四番スバル・ナカジマ！ えつとえつとえつと……。

A○I A・・・藍華・○・グラン○エスタ……。

“ 恥ずかしいセリフ禁止！！ ”

「……………ダメ」

「ぎゃん！」

「次っ！」

「む、次は私か……。五番シグナム。

星○の戦旗、エク○ユア・ウエフ〓○リユズ・ノール。 “ 撃っ！！ ”

「完・全・失・格！！」

「っ」

シグナムは金タライを余裕で回避。

シャルロットが「チッ、空気読まねえなあ」と呟いた後、

「次っ！」

六番手へ指を差した。

「ろ、六番シャマル……。えつと……。武○練金、津川斗○子……

。。。
“ハラワタ 臍物をブチ撒ける!!!”

「どっしりよつもなくダメ」

「キヤ!? 痛った〜い!」

「次っ!」

「七番、高町なのは。。。えっと。。。ひぐらし〇なく頃に、古
〇梨花。

“にぱー わたしは大丈夫なのですよあ、みい”

「う~~~~ん。。。」

「え、えっとえっと、“消え失せる三下が。その程度で私の運命を
邪魔立てでき「アウトオオオ!!!」痛いつ!?!」

最後まで言い切ることが出来ずに沈まされたなのは。

「はあはあはあ。。。次っ!!!」

「僕。。。ですね。八番エリオ・モンディアル。

その。。。ハ〇テのごとく!の橘ワ〇ルいきます。

“貧相な顔で話しかけんなバーカ”

「エ、エリオがあ（泣）」

「ごめん、アウト」

「はい・・・っ！」

甘んじて金タライを受け、エリオも撃沈。

「次。もう少し頑張ってほしいなあ」

「八番キャロル・ルシエ。エレメタル・ジェレド、レヴオリ
ー・メザーラス。」

“あなたは、人間の匂いがする。だから、嫌い”

「・・・・・・・・アウト」

「あう・・・」

「次」

「真打ち登場やね。九番八神はやて。F○t e / s t a y n i ○
h t、遠さ「アウト」えええっ!？」

問答無用ではやてを沈めたシャルロツテ。

「次」

「十番フェイト・T・ハラウン。テガミ○チ、シル○ット・スエ
ード。」

“黙って月末まで待ちなさい！ このボケナス！”

「残念、アウト」

「きゃん！」

「はい、次」

「あたしか……。十一番ヴィータ。デ・ジ・キ○ラット、で○」。
“目からビィーーム!!!”」

「プツ、アウト」

「あゝあゝ!?! あだっ!」

「次」

「一二番リンフォース? ですー。
えつと……。フルメ○ル・パニック、テレサ・テスト○ツサ……。
です。」

“マジボケエエエエ!”」

「可愛い。けど意味不明、アウト」

「ひゃっ……。?? タライは……。?」

リンフォース? は頭を押さえて、タライの衝撃に備えていたが、
一向に落ちてこない。

「リンに落としたらペチャンコになるでしょうが」

シャルロツテはそう言って、最後の一人へと視線を向けた。

「次……。で最後か」

「じ、十三番ティアナ・ランスター。ひぐらしの〇く頃に、竜宮〇ナ。

“はうく、お持ち帰りいくく!”」

「失格、アウト」

「嘘だツ!!!」

「ごめんなさい!?!」

あまりの迫力に逆に折れたシャルロツテ。
その姿に、逆に戸惑うティアナ。

「あの・・・えつと・・・シャルさん・・・?」

「ハッ!・・・や、やるなティアナ・ランスター!」

フフン、ま、まあ楽しませてもらった。では、ルシル!」

「イイイイ!!!」

ルシリオンが参加者へと再度筒を向ける。

なのはたちはすでに心が折れかけているが、仕方なく棒を選んでいく。

そのとき、

「んー?　そこで見学しているシャーリー以下数十名。

観ているだけじゃつまらないよね?　参加してみないっすかあ?

「ああ?」

シャルロツテが離れたところにいる見学者に声をかける。

すると、

「『『『『『『『観ているだけで十分です!!』』』』』』」

全力で参加拒否する他の隊員たち。

そんな彼らに羨むような視線を向ける参加者一同。

シャルロツテはつまらんのーと呟きながら、視線を元に戻した。

「王様だーれだ!?!」

それを無視して王様ゲーム^{じゅうもん}を再開するシャルロツテ。

そして王になったのは、

「ほほう、二回連続とは。恐ろしい強運だなあ私」

シャルロツテだった。

参加者一同は再び絶望をその胸に抱くことになった。

「今度は・・・ああ、そうしよう。

二番、五番、六番、九番、十一番、十二番、十三番」

「『『『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』』」

そこからさらに絶望する七人は、シグナム、ヴィータ、シャマル、
リン、キャラ、スバル、ギンガ。

選ばれなかった残りは安堵の表情で、本当に幸せそうな笑みを浮か
べている。

「その七人には、もっ〇け!セー〇ー服かハレ晴〇ユカイのどっち
かを歌って踊ってもらおう」

「何だそれはっ!?!」

シグナムが猛抗議。

「ルシルー、どっちがいい？」

「イイイイ!!」

「ほう、も〇てけ、か。良いセンスだ」

「セインテストはイイイイしか言ってねえし！ てかそれ以前に選んでもいねえだろっ！」

ヴィータも猛抗議に参加。
しかしシャルロッテは、

「ふむ、七人ともチアユニフォーム着て、もって〇!〇ーラー服を踊れ。命令だ」

その抗議に耳を貸すことなく命令を下した。

この後、七人は青を基調としたチアユニフォームに強制着替えされ、知らないはずの歌と踊りを笑顔でやっちまいましたとさ。

「どうした諸君、元気がないぞ？」

もう一度棒に手をかけるシャルロッテ。

他の参加者、特にさつき歌って踊った七人はかなりの勢いでテンションが低下中だ。

「さあいじつ。王様だーれだ!？」

一斉に引き抜かれる棒。

そして、

「二度あることは三度ある。それを今ここに実証してしまった。

ああ、私はどこまで神に愛されているんだろう。逆にこわい?」

「ぜってえイカサマだろ、テメエ!！」

「お、落ち着きいヴィータ!」

「おいセインテスト! 明らかにイカサマしてんだろうこいつ!」

「イイイイ!！」

「くああああ! 言葉が通じねええええ!！」

散々ヴィータは暴れたが、結局命令を受けたルシリオンによって無理やり押さえこまれ、

「ちよ、おい! どこ触ってんだ!」

「イイイイ!！」

「……ルシル……何してるのかな……?」

ヴィータに抱きつき押さえているルシリオンへとフェイトが近づいていく。

それに振り返ったことでルシリオンに隙が生まれ、ヴィータが強力

な一撃を彼の鳩尾に叩きこむ。

「イ、!?」

ルシリオン……撃破。

「はああああああ……」

顔を赤くしながら肩で息をするヴィータ。

その姿に全員が無意識に距離を取っていた。

「ルシル……我が手下として見事な最期であった（笑）
よし！ 我が手に携えしは確かなる幻想……」

ルシリオンにそれだけを告げ、何事もなかったように続行するシャルロッテ。

そしてルシリオンは、なのは、ヴィヴィオ、ティアナによって介抱された。

「今度は一発芸を見せてもらおう。ここに用意した小道具を使ってもらおう。

ナンバーはそうだな……。一番、二番を引いた可愛い小羊たちとしよう。命令だ」

ヴァイス、はやての二人が前に出て、丸テーブルの上に用意された小道具を選んでいく。

そしてヴァイスがポロポロのぬいぐるみを手に取って、

「……脳みそ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

ヴァイスが、ぬいぐるみの頭に開いた穴から綿を取り出し、そんなことをほざく。

当然一同ドン引き。ヴィヴィオに至っては少し涙目だ。

「引っこめ」

「誰だ！？ 今ボソツと引っこめつつた奴は！？」

「ヴァイス、お前にはガツカリだ」

「シャルさんの酒癖の悪さの方がガツカリっすよ！」

「ごもつともな意見だった。」

「次」

「う~~~~ん~~~~じゃあこれとこれで」

はやてがマネキンの顔を二つ手にして、それを自分の顔の両サイドにセット。

「阿修羅」

「あの、はやてちゃん。阿修羅って言われても……」

「……穴があるなら今すぐ入りたいなあ……（涙）」

はやてとヴァイスの心かなりのダメージを与えつつ四回戦。

慰安旅行最終日。ミッド東部温泉地から六課隊舎

ここではもう多くは語るまい。

温泉、そこで起きるハプニングはお約束だからだ。

時間帯によって混浴となる事を知らなかった前線メンバーとルシリオンとエリオとヴァイスがいくつというくらいなものだ。

もちろんエリオを除くルシリオンとヴァイスがどうなったのかも・
・お約束だ。

「なあ、ルシルよ」

「どうした・・・？」

「見えたか？」

「見えるわけもないし見るつもりもなかった。

それ以前に、あっちがこちらを視認した瞬間、一斉に魔法を放ったからな。

「……………ふう、今こうして話しているのが奇跡だ」

「へっ、まったくだ」

慰安旅行から帰り、六課隊舎の庭先の木に吊られているルシリオンとヴァイス。

そんな二人の声が、庭に悲しく聞こえていた。

再臨：酔いの鬼神 〈 Advent : Drunk Demon Lord 〉 (後

二度ネタ承知で再登場な鬼神シャル。

前回の降臨で収まらなかったネタを出すための再臨です。

というか、元々は2ndの番外編花見で使うつもりでした、この声優ネタは。

ネットで、リリカルなのは声優がどのような他の作品に出ているのかと調べながらの執筆。

ザフィーラの声優さんはサッパリでしたので断念しました。

傘が赤くて白い斑点があって柄には可愛い目があってフロック殴れば生えてき
タイトルだけでどういふのかバレてしまいますね。

傘が赤くて白い斑点があつて柄には可愛い目があつてブロック殴れば生えてき

「さてと、それじゃあ早速始めますか！」

暖かい春の陽気に若干眠たくなりつつも、気合を入れてそう口にする。

そして私はエプロンをつけて、後ろ髪を結いながら、この場にいるなのは、フェイト、はやての三人を見回す。

「うん！」「」

なのはたちがエプロンをつけつつ頷くのを見ながら、

「我が手に携えしは確かなる幻想」

“英知の書庫”^{アルヴァイト}の蔵からいろんな最高級の食材を取り出す。

もちろん、今は契約のために出かけていないルシルにもちゃんと許可は取つてある。

「どれでも使つていいってルシルからも許しは貰つてあるから、すごい美味しいの作つてあげよう！」

「おー！！」「」

右拳を高々に上げて、テンションを高める。

そして私たちは四人はそれぞれに食材を手にとって、一斉に調理を開始する。

「それにしてもなかなかええアイデアやなあ」

「うん。」「ういづのも悪くないよ」

「これってシャルの提案なんだよね・・・？」

「ん？ そうだよ。まあルシルに相談して決定したようなものだけ
ど」

トントンと包丁で食材を切る音に混ざっての会話。

「スバルたちの魔導師ランク昇級祝いに、私やなのはたち隊長の手
料理を振舞う。」

「そういう機会もあつていいかなあつて。で、それをルシルに相談し
たら、好きなだけ食材を使っても良いってことになってね」

取り出したクエを捌きつつそう答える。

「そういえばルシルも嬉しそうだった。」

「だからこんな高級食材使い放題な事も許してくれたんだろう。」

「そうなんやあ。でも残念やな、ルシル君がおらんのは」

「その分私たちが精いっぱいの手料理を作ればいいよ」

「そうだね。あ、でもお昼過ぎには帰ってくる予定だし、もしかし
たら少し早く帰ってくるかも。」

「それなら一緒にお祝い出来るよ」

それから二時間くらいかけて四人で料理を作つて、こっそりと訓練
場に運ぶ。

何故なら、外でちょっとしたピクニック気分を味わうため。

市街地やら森やら何でも再現できるあそこを利用しない手はない。

お昼休みいっぱいを使ってのフォワード魔導師ランク昇級祝いパーティー。

全員参加とはいかなかったけど、それでも結構な人数は揃った。

「えー、それではスバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスタ
ー二等陸士、エリオ・モンディアル三等陸士、キャロ・ル・ルシエ
三等陸士の魔導師ランク昇級を祝って・・・」

今回も部隊長のはやてがジューズ入りコップを片手に音頭。
さすがに慣れてきた感がある。

「かんぱーい!!」

それから始まる楽しい楽しいお祝いパーティー。のはずだった。

十 十 十 十 十 十 十

「ふわあ〜・・・。眠い・・・。」

今日も今日とて大して意味のない契約を執行し終え、ミッドへと戻
ってきた。

「まったく、どうしてあんなしょうもない事で界律わたしの守護神を呼び
だすのか意味が解らないな」

守護神の力が必要ない小さな事にでも呼びだされる始末。

なんというか作為的にも感じ取れる契約ばかりだ。

(このまま人間として死ぬまで続くんじゃないだろうな・・・)

そう思うと気が重くなる半面、それでもいいかと思えてしまう自分もいる。

シャルがいて、みんながいて、同じ時間を生きる。

「フツ、何を馬鹿な事を……。もうそんな事は望まないと決めておきながら……」

イレギュラーはイレギュラーらしく、大人しく消えることこそ我らが摂理。

「……あー、そう言えば今日だったか、スバルたちの昇級祝いは……」

えっと、今の時間は……12時少し前、か。急げば間に合うかもしれない」

シャルだけでなくフェイトやなのはにやてが手料理を振舞うという事になっている。

それを味わえないのはかなり痛い。

「よし、それなら急いで帰ろう」

レールウェイを乗り継いで、隊舎のあるミッド中央南駐屯地内A7 3区画を目指す。

それにしても、やはり交通の便が若干悪い。急いでいる場合はそれを思い知る。

それから30分くらいかけ、隊舎に到着した。
すでに始まっているであろう昇級祝いパーティのおそらく会場と思
う食堂を目指そうとした時、

「セインテスト君！！ よかったあ、予定より早く帰ってきてくれ
て！！」

「ん？ シヤマル、ザフィーラ。ただいま。にしてもそんなに慌て
て一体なに」

「それより来てセインテスト君！ 大変なのよ！」

隊舎へと歩を進めようとしたときに、かなり慌てたシヤマルと普段
通りに見えるザフィーラが駆け寄ってきた。
挨拶をするも、こちらの話の聞けるような余裕すらないシヤマルに、
嫌な予感が走った。

「何があつた・・・？」

「いいから急いでセインテスト君！」

シヤマルとザフィーラに案内された訓練場へと赴くと、

「・・・・・・・・・・」

信じたくはない光景がそこにはあつた。

「「じつじつことなのよお・・・・・・・・」

「すまぬ。我らだけでは手に負えんだ」

「ルシル！」

「ルシル君！」

「よかったあ！ ルシルさんが来てくれた！！」

あまりの大音量で呼ばれたために耳を塞ぐが、その効果なく一瞬気を失いかけた。

十 十 十 十 十 十 十

こんなことになってしまった私たちを救える唯一のルシルが放心した。

「ちょ、あかん！ ルシル君がフリーズしてもうた！」

「お、起きてルシル君！ ルシル君！」

はやてとなのはの声の大きさの原因もあると思う。

私たちは普通に喋っていても、ルシルにはきつととんでもない音量な筈だ。

その証拠にルシルや、耳を押さえているシャマル先生たちの髪が振動で揺れているし。

「あー、なんだ。今日の私のシフトは午後からシャマルの手伝いだつたな。

さあ行こう、シャマル。私は何やら夢を見ているようだ。

ザフィーラとティアナとギンガも大変だっただろう？ 今日のもう
休むといい」

「ええっ!?!」

「なに・・・?」

「ルシルさん!?!」

「現実逃避いいーーーー!!!?!」

「!!!!!!!!!!!!」

「あ、倒れた」

パタリと倒れたルシルとシャマル先生とザフィーラ、そしてティア
ナとギンガ。

今のはまずい気がする。普通に喋っていても結構キツそうにして
たし。

それなのに今のつつこみ。半ば叫んでいるから、今まで以上の大音
量だ。

「ちよつとみんな！今の私たちの状態で叫ぶと、変わっていない
ルシルたちには音響兵器並の音量だよ！」

今さら遅いけど、これ以上なのはたちに叫ばせて、ルシルたちが旅
立たないようにしないとイケない。

次に今のつつこみ音響攻撃を受けたらルシルたちは今度こそ間違い
なく逝ってしまう。

それからルシルたちが目を覚ますように努力する私たち。
その甲斐もあって、2分くらいで起きてくれた。

十 十 十 十 十 十 十

気を失っていたルシル君が起きてくれた。

「それで、あのね、ルシル君。今がどういう状況か・・・その・・・

」

「解っている。解っているからこそ頭が痛い」

ルシル君が私たちを見上げながら、頭を押さえて苦悶の表情を浮かべている。

「・・・君たちがこうなった原因は何だ？」

そう言いつつも犯人が分かっているとでもいう感じで、ある一人に視線を向けた。

「私・・・かな、やっぱり。でも、態とじゃないよ。完全に事故なんだよ？」

ルシル君の視線に耐えられないみたいで、明後日の方に顔を向けるシャルちゃん。

「はぁ。で、こうなった原因は分かっているのかシャル？」

それが分からないと、私でもどうすればいいか分からないんだが」

「えつとー……。う~~~~ん~~~~……と。
……あ、もしかしてアレが原因かも……」

「一体何をしたんだ。こんな巨大化するような事になる原因って……」

そう、ルシル君の言う通り私たちは巨大化してしまっている。

巨大化したのはシャルちゃんと私を含めた前線メンバーにロングアイチのはやてちゃん、リイン。

そしてヴィヴィオも被害を被っている。

ちなみに被害を免れた隊員たちにはもう隊舎に戻ってもらっている。この場に残っていても仕方がないし……。

まあ例外としてティアナとギンガは残っているけど。

「その……ね。料理に使った食材が原因かもってことなんだけど……」

「食材……？ 蔵にあるただの食材にそんな巨大化するような……あ」

ルシル君の表情が凍った。

「もしかしてその食材というのは、小柄で小太りで団子鼻で立派な髭があつて赤シャツ青オーバーオール着てMのロゴ入り赤帽子被つて少し影の薄い緑の弟がいてただの大工のクセしてギ○ス記録を楽に更新できるほどの運動能力を持っていて冒険家にスポーツプレイヤーにレーサーに医者など何でもこなし赤ん坊の頃から恐竜？の背に乗って大冒険した生まれつき超人で最初はタルを投げてるゴリラとバトって次は悪役で次はカメの大王に毎回攫われるお姫様を救

い出してはそれを何度も繰り返し自称ライバルの幼馴染に家に乗っ取られたり大乱闘を巻き起こしたり昨日の敵は今日の友とも言えるようなパーティーに参加したり時にはペラッペラな紙みたいになって見た目がアレなくせにカエルやタヌキやバニーやミツバチやペンギンなどのコスプレしてマントを羽織るだけで空を飛んで花を取ったから手から火の玉を出して を取ったら無敵になって風船を取ったら体が膨らんで風船みたいになったり岩になったりレインボーになったりオバケになったりスケスケになったり氷になったりと完全に人間離れしたとんでも能力を有する反則存在なのにカメに噛まれたくらいでDeathる男のいる世界にある傘が赤くて白い斑点があつて柄には可愛い目があつてブロック殴れば生えてきて結構速めに動いて食べたら大きくなる他にも必死の紫や1UPの緑もあるあの食材・・・あのス〇パーキノコを使ったのか・・・？」

一息で言いきつたルシル君。それを聞いたみんなが拍手している。でも油断していたのかルシル君はその拍手で起きた音と暴風で吹っ飛ばされた。

「あ~~~~~」

「っ！ ごめんルシル！！」

何とか宙で受け止めようとしたフェイトちゃんの手の、指の間をすり抜けて、受け身を取ることなく地面に落ちたルシル君。

それからシャマル先生たちに介抱してもらって回復してみせた。今さらだけど、ルシル君の不死身説は本当なのかもって思うよ・・・。

「で、シャル。使ったんだな？ 貴重すぎる、研究用として取り込んでおいたあのスーパ〇キノコを」

首にギブスを付けたルシル君がシャマル先生に支えられながらシャルちゃんに問い質す。

「えつと……」

「使ったんだな？」

「使っていない……」

「使ったんだな？ 研究用保管区画にあるはずのあのスーオーキノコを」

「使ってません」

「使ったんだな。あの区画には手を出すと随分前から言っていたのに」

「使っていないのです」

「使ったんだよな」

「使っていないであります、サー」

「怒らないから」

「使いましたあ」

「馬鹿者おおおおおおおつ！……！……！……！」

「怒らないって言ったのにいいい!!」

シャルちゃんの大声に、パタリとまた倒れるルシル君たち。
それから数分、再度復活を果したあのときのルシル君の表情はきつ
と忘れない。

「えっと、ルシル。私たちつてすぐに戻れるのかな・・・？」

「あ、ああ・・・すまない、フェイト。みんなも。少し解決法を
考えさせてくれ」

ルシル君から告げられた即解決不可の事実。

「あ、うん。大丈夫だから、うん・・・」

「そ、そうですね。僕たちなら大丈夫です」

フェイトちゃんとエリオがそう言うけど、やっぱり沈んだ表情。
スバルやキャロも大丈夫って頷いているけど、やっぱり沈んだ表情。

「・・・・・・・・いや、待て。もしかしたら・・・!!」

私も落ち込みながら頂垂れていると、ルシル君が何か思いついたの
か、

「・・・・・・・・シャル・・・」

「な、なに・・・？」

女の子座りのシャルちゃんの近くまで歩いていった。

「シャル。一応、原因である君を実験体として……っ！」

ある程度までシャルちゃんの正面に近づいたルシル君は急に顔を逸らした。

それに若干顔も赤いような……って、まさか……！

「???. . .っ！もしかして見た!？」

シャルちゃんもルシル君の挙動に気づいて、すぐさまミニスカートの裾を押さえた。

けどそれも今さらかも。すでに見られた後だし……。

「……. . .でだ。オーパーキノコの特徴からして」

あからさまに話を逸らしたルシル君。

でも私たちのとってはそっちの方が重要。ごめん、シャルちゃん。

「見たのねえええええっ!!!!!!」

「うわっ！ バカ、やめ」

ズドォーンッ!!

シャルちゃんの振り下ろされた右手がルシル君を直撃。

それはまるで虫を叩き殺すかのようなスナップを利かせた一撃だった。

十
十
十
十
十
十
十
十

やっちゃった。蚊を殺すかのような勢いでルシルを叩いちゃった。どうしよう、右手を上げるのがちよつと怖いかも。でも、だって仕方ないよ。私だって下着見られたら恥ずかしいって思っちゃうよ。

「フライハイトちゃん！ 早く手を上げて！」

シヤマルが慌ててながら私の右手をぺちぺち叩く。

「あ、うん……」

ゆっくりと手を上げると、

「……………」

「マンガみてえだな、セインテストのやつ……。初めて会った頃とかの、あの勇ましい姿のカケラもねえ。つうか最近のセインテストはこつ^{ネタ}という事ばっかだな」

「確かに、まるで潰れたカエルのような今のセインテストには同情しか湧かんな」

そこにはうつ伏せで倒れている。ピクピクしたルシルがいた。

「冷静ですねー。ヴィータちゃんとシグナムは」

「そついうりインもだろ」

自分でやっておいてなんだけど、結構酷いよ、シグナムとヴィータ。

「大丈夫ですかっ!?!」

「傷は浅いですよ、ルシルさん!」

「……この者のかつての勇姿はどこにいったのだろうな」

「しっかり! しっかりセインテスト君!」

それから、ルシルは何度目かのシャマルの治療で復活を果たした。

「くっ、今日の私は厄日なのか……?」

満身創痍なルシルが結構本気で沈んでいる。

「ごめん……ホントごめん」

心からの謝罪。ルシルも私が本気なのを分かってくれたみたいで、
気にするなって言ってくれた。

「さて、さっきの話の続きだが、君たちが巨大化した原因であるキノコ
の特性を利用する解決法をここに提示する」

「……特性……?」「」「」

「ああ。食べれば巨大化するという不思議菌類だが、食べた者は軽いダメージを負うだけで縮むという特性もある」

つまり、と前置きしたルシルは、

「「「きゃあああああー!!」「」」

「むうう……!!」

シヤマルたちが波に飲まれた。

「「だ、大丈夫ですか!」「」

「ゲホツゲホツ……気をつけなさいよスバル!!」

「スバル、もう少し気をつけてほしかった……えほっえほっ」

流されて海に落ちる前に、エリオとキャロに助けられたシヤマルたち。

今のはちよつと危なかったかも……。

「うう、ごめんティア、ギン姉。シヤマル先生とザフィーラも大丈夫ですか……?」

「え、ええ」

「ああ」

「まあそう怒ってやるなティアナ。スバルとて態とではないのだからな。

それに、元はと言えばフライハイト。お前がセイントテストを海に叩き落とすからだろう」

「あう……ごめん」

シグナムからの御叱責。でもルシルから危険を感じたんだから仕方ない。

しかも、死ねって言ってたし……。

それが本気じゃないのはもちろん解ってるけど、やっぱり何か嫌だった。

せめて、くらええええっ！とかいつつつけえええっ！なら良かったのに……。

「そ、そう言えばルシル君はどないなん？」

「あ、はい。ちゃんと助けられましたよ」

スバルがゆっくりと右手を開いていくと、

「……呪われているのかもしれないな」

びしょ濡れになったルシルがスバルの手の平の上で胡坐をかいていた。

「ルシルパパ、大丈夫……？」

「ありがとう、ヴィヴィオ。私は大丈夫だ」

「よかったあ」

私たちがみたいに大きくはないけど、それでもルシルよりは大きいヴィヴィオ。

そんなヴィヴィオがその大きくなった手でルシルの頭を優しく撫で始めた。

すると、

「あの、ヴィヴィオ。その・・・ね。ルシルさんもその・・・大人だしね・・・」

ティアナが優しくヴィヴィオに語りかけるけど、ルシルはそれくらい何とも思わないと思うけど・・・。

それにルシルなら逆に微笑ましいって思っているはずだ。

だから続けさせてあげればいいと思うんだけど、何でそんなにルシルをチラチラ見ているのかな・・・？

(・・・ん？なんだろう。シャマルたちの顔色が・・・青い・・・？)

ルシルを見ているシャマルたちの顔色は青いし、どこか落ち着きがない。

「ヴィヴィオ、もうそろそろいいんじゃないかしら？」

「???. . .うん・・・」

シャマルにそう言われて、ルシルから手を引いたヴィヴィオ。

そして件のルシルはと言うと、

「.」

立ったまま気絶しているようにも見える。

(もしかして、さっきから小さく聞こえてたボキボキっていう音はまさか・・・)

ルシルの首が鳴っていた・・・ということ・・・？

「ルシルパパ・・・？」

「・・・ダイジョウブだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ギプスが意味を成さない程に首が傾いてカタコトでそう言ったルシルを見て、ようやく巨大化組も解ってしまったようだ。

どうしてシャマルたちがヴィヴィオの撫で行為を止めようとしていたのか。

そしてルシルの様子が変わるのがヴィヴィオの所為だということにも唯一理解していないのはヴィヴィオ本人。けど責められないよね、純粹な善意だし。

「えっと・・・セインテスト君はこれで退場ということ・・・」

「そやな」

「うん・・・」

「ルシル・・・」

こうしてルシルはザフィーラとシャマル、ギンガに付き添われて医務室へと消えていった。

残された私たち巨大化組は、先にルシルが言っていた解決法を実践した。

ハリセン（巨大）でかるく全員を叩いていくという流れ作業。

まあ結果的に大して労することなく元に戻ることが出来ただけど、

・・・。

「ただど・・・」

「巨大化キノコが使われた以外の料理は大丈夫ってことやし、安全な料理はルシル君へのお見舞いでええな」

「うん、そうだね。シャルちゃん製作の料理以外きつと大丈夫なはずだから。」

「ね、シャルちゃん」

「え、あ、うん。もちろん」

「それじゃあフェイトちゃんの料理を持ってこか。」

「その方がルシル君も喜ぶの間違いないしなあ」

「そ、そんなこと・・・でも、うん。そうだと嬉しいな」

「はやてたちのこの何気ない善意な行為がさらにルシルに悲劇をもたらす事に・・・。」

「ごめん、ルシル。私、もっと早くに思い出していれば良かったよ・・・。」

傘が赤くて白い斑点があって柄には可愛い目があってフロック殴れば生えてき
ルシルの終わらない悲劇は次回・・・？

他人の不幸は蜜の味という興味深い論について

「クラールヴィント、お願いね」

Ja . L ? f t c h e n b e h a n d e l n

「大丈夫？ セインテスト君。かなり酷い音がしていたけど……」

機動六課の隊舎のある一室、医務室のベッドに横たわるルシリオン。古代ベルカの治癒魔法優リユフトヘン・ヘンデルンしき癒風をかける医務官のシャマルが、ルシリオンへと訊ねる。

「ああ、なんとか……。何度もありがとうシャマル。楽になった」
シャマルの治癒魔法を受け回復したルシリオンが礼を口にする。
そんな彼の満身創痍なダメージもついでに完全回復されていた。

「ヴィヴィオに悪気がないのは解っているが、さすがに効いた」

ルシリオンは苦笑しつつ、彼を撫で医務室送りにしたヴィヴィオの事を思い出す。

一応は父と娘という関係のルシリオンとヴィヴィオ。
そのヴィヴィオが何を思ったのかルシリオンを撫でた。
理由はどうであれ小さい娘が父とスキンシップを取る。

それだけなら可愛らしい絵柄だが、撫でたヴィヴィオが巨大というのが最大の問題だった。

巨大化した原因は、まあいろいろな事が起きたわけだが……。

そんな巨大な、あまり力加減が出来ていない手で撫でられれば首にダメージを負う。

しかも、ルシリオンはすでに首にダメージを負っていた。

そこに追撃がくれば誰でもダメージを負うのは間違いなかった。

「うふふ。あの子も可愛い事するのね。それで、どうだったセインテスト君？

可愛い娘のヴィヴィオに撫でられて、感無量かしら？」

楽しそうにコロコロと可愛らしい笑みを浮かべるシャマル。

彼女は何かとルシリオンにおちよくる。

内容としては、花嫁や結婚などの女性関係ネタでよく攻めてきていた。

その都度ルシリオンは精神的ダメージを負っていて、シャマルからのそういう振りは苦手となってしまうていた。

「いや、シャマ

「そうそうセインテスト君。テストロッサちゃんとはどうなの？

あ、それになのはちゃん？ ヴィヴィオの事もあるし・・・」

「あのシャ

「どっちとお付き合いますかきちんとしておかないとダメよ？」

「その

「あー言わなくてもいいのよ？ きっとセインテスト君の事だからきちんと考えていると思うから」

「だ
」

「いつそのこと二人とも……。うふふ、罪なお・と・こ」

ルシリオンが今まで出会ってきた最も苦手（いろんな意味で）とする女性ランキングの上位シャマルの単独トークは、なのはたちが見舞いに来るまで続き、その結果ルシリオンはゲツソリとしていた。

＋
＋
＋
＋
＋
＋
＋

「ホントごめんね、ルシル。……ていうか大丈夫？」

シャマルのどうしようもないマシンガントークでノックアウト寸前のルシルがベッドでゲツソリしてた。

もし私たちが来なかったら、ルシルはシャマルに洗脳されてとんでもないことになっていたかもしれない。

それも何だか見てみたい気もするけど、まあ今はお見舞いってことで。

「ルシル、これ……私の作った料理なんだけど……」

「お見舞いだよ、ルシル君。これで元気になること間違いなし！」

「大丈夫、ルシルパパ……？」

「ありあとう、フェイト、なのは、ヴィヴィオ。私は大丈夫だから。それで、フェイトの料理が見舞いの品ということか……。正直助かった。」

昼はまだ済ませてないから、ありがたくいただきます」

「って私は無視かぁーい！ーい！」

一番最初に部屋に入って、一番最初に話しかけたのに、私をあっさりシカトしやがった。

「まあまあフライハイトちゃん。落ち着いて落ち着いて」

「うううう……！」

なんか納得いかないけど、

「それじゃあ、いただきます」

「うん、どうぞ」

ルシルとフェイトがちょっと良い雰囲気だし、まあいっか。今日のところは許してあげよう。

「……うん、おいしい。さすがだな、フェイト」

「よかったあ。でもそれは食材のおかげだよ、きっと。それにルシルの料理に比べればまだまだだよ」

うんうん。いいいいよ、二人とも。

これなら案外簡単にルシルとフェイトをくつつけられそうだ。

「ルシルパパ、あ〜ん？」

私たちの合作ケーキ、（シュヴァルツヴェルダー・）キルシュトル
テ。
ルシルが帰って来てから一緒にみんなで食べようと思っていたもの
だ。

ヴィヴィオがそれを一口サイズに切り取って、ルシルの口の前に運
んだ。

ああもう可愛いなあ。ヴィヴィオがホントに可愛いすぎる。羨まし
いなあ、ルシル。

「……あ、あ〜ん。……うん、おいしい。」

この口の中に広がるサクランボの味が何とも……さ、サクラ
ンボ……だと」

ルシルの表情が凍った。

「ルシルパパ……？」

「ルシル、どうかした？」

ルシルがわなわなと震えだした。

「え、なに？ ルシル君……？」

「セインテスト君……？」

答えない。答える余裕すらなさそうな勢いでガタガタと震えだした。
これは本格的にまずい気がする。

うっん、もしかしたらおいしさで嬉しさからの震えかもしれない。

「そこまで震えるほどおいしいんだ。やったね、なのは、フェイト」

「え、あー・・・うん」

「そういう震えじゃないような・・・」

うっ、やっぱりそうだよな。明らかに様子がおかしいし。

それにさっきサクランボって言うてから震えだしたような・・・。

(サクランボ?・・・サクランボ・・・サクラ・・・あ)

しまったああああああああつ!!!

スーパークイコ以外に研究用保管区画から取り出したのって確かサクランボだ!!

いやいや、だってサクランボがどこにもなかったから、つい保管区画から・・・ってどう聞いても言い訳だ、これ!

「・・・シャル・・・。このケーキに使ったサクランボ、まさか蔵のじゃないよな?」

怖い。私限定に向けられた何とも言えない殺気。

「あー・・・まあおいしかったから問題なし」

「つつつ問題しかね」

ポンっ

「「「「「つ!?!?」「「「「「

ルシルがポンっ　って可愛らしい音と一緒に煙に包まれた。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

煙が晴れて、ルシルがその姿を現した。
現したんだけど、

「「「か．．．．「「「

今度はなのは、フェイト、シャルがわなわなと震えだした。
その視線の先にはベッドの上にいるルシル。

「「「可愛い！！！！「「「

ルシルを見てそう一言。

「ルシルパパが小さくなっちゃった．．．？」

ヴィヴィオが不思議そうに、小さく．．．ううん、子供になったルシルを見て呟いた。

(うわあ、やっちゃった。あのサクランボ食べたら子供になっちゃうんだ)

「あ、あの．．．だ、誰ですか．．．？」

「「「「「．．．．え？「「「「

「ルシルパパ．．．？」

いやあ、ちよーっと待って。

今私たちを見て、誰ですか、と言いましたかルシル。

「あの・・・ルシル・・・？」

「みなさんは誰なんですか？」

ベッドの端まで下がって行って、ギュッとシーツを抱きしめる子供ルシル。

それに巨大化の時とは違って服は大きいままだから、シャツが肌蹴っている状態。

だからエリオやキャロとヴィヴィオの間くらいだというのにどこか色っぽい。

陶器のような白い肌。若干涙に潤んだ紅と蒼の瞳。ベッドの上に波打つ綺麗な（どうして戻ったのか分からないけど）長い銀髪。

くそっ、可愛いとか思ってしまっただじゃん。

まるで女の子のようだ。うーん、10年前を思い出すね、これは。うーん、10年前以上に幼いから可愛くて女の子っぽい。

「・・・シャルちゃん、このケーキに何入れたの？」

怯えたルシルから私に視線を移したなのは目が少し怖い。

「キ、巨大化キノコがあった区画からサクランボを・・・ね」

なのはの視線に若干怯えつつもそう答えた。

だってキルシュトルテに使うサクランボが食堂に置いてなかったんだから、だったら蔵から調達するしかないじゃん。

まあ、キルシュトルテを作らないで別のケーキにするっていう選択
肢もあつたけどね。

「はあ。シャルちゃんだからもう諦めるよ」

「でも反省はした方がいいね」

なのは次いでフェイトまで冷たい視線を向けてくる。
でもルシルをチラチラと何度も見るからそれほど怖くはないんだけ
どね。

「え〜っと、セインテスト君。あなたは自分の事やここがどこかは
分かる？」

「うん」

自分と六課のことは覚えているわけか……。
それにしても何か男らしくないというか本当に女の子みたいとい
うか……。

「じゃあ私の事は分かるかしら？」

「ううん。……お姉さん誰？」

で他の人のことは覚えていないと……。
子供化に記憶障害。思っていた以上に最悪なサクランボだ。
ルシルの食べた時のリアクションの意味がやっと理解できた。
確かに震えるほどだ、これは。

「お姉さん、かあ……。ねえセインテスト君、シャルお姉ちゃ

んって言ってくれる?」

ていうか、おーい、シャマル。ルシルに何言わせようとしてんの。それ以前にメツチャ綻んだその恍惚とした表情やめた方がいいよ、絶対。

捕まるところだと捕まること間違いなしだから。

「シャマルお姉ちゃん・・・?」

「つくー!! ごめんなさいはやてちゃん。私は一足先に初代リインのところへ逝きます」

「「「ええええええっ!!!!?」「」」

子供ルシルにシャマルお姉ちゃんと呼ばれた瞬間、思いつ切り仰け反ってフラフラと医務室を徘徊、そのまま逝ってしまいそうになっているシャマル。

今のシャマルは本当に幸せそうだ。

「ねえねえルシル。今度はシャルお姉ちゃんって言うてみて!」

「ちよ、シャルちゃん!?!」

幸せMAXなシャマルの様子に、不思議そうに首を傾げている子供ルシルとコンタクト。

なのは何か言っているけど、今は子供ルシルで楽しむことを先決としよう。

「?・・・シャルお姉ちゃん・・・?」

子供ルシルは頬を赤らめながら、私の頼んだ通りに言ってくれた。

「つくはあつ！ これは思っていた以上にすごい！」

シャルマルが旅立とうとした気持ちは今ならハッキリと解るよ！」

はあはあはあはあ・・・まずい。これはまずい。こんなルシル知らない（当然だけど）

可愛いなんてものじゃない。可愛過ぎる。

以前アリサが言っていたことだけど、ルシルは絶対生まれてくる性別を間違えてる。

今日ほどそう思ったことはない。

「シャルちゃん・・・？」

「大丈夫？」

「な、なんとかね。それにしてもまいった。ルシルのお姉ちゃん口撃は下手すれば必殺だよ。

もし今のルシルが男共相手にお兄ちゃんって言ったら、間違いなく男共は犯罪行為に走るね、絶対」

こんなルシルを男共の前に出したら、同性だろうが何だろうが関係なく犯罪に走る。

そういう自信がある。自慢なんて出来ない自信だけ。

「さすがにそれは・・・」

ない、とは言い切れないみたいだね二人とも！。

「ねえルシル。今度はこのお姉ちゃんたちも、なのはお姉ちゃん、

フェイトお姉ちゃんって呼んであげて」

「えっ!?!?」

「???・・・なのはお姉ちゃん、フェイトお姉ちゃん」

「っ!!!!!!!!」

ルシルのお姉ちゃん口撃を受けて、なのはとフェイトも深刻なダメージを負った。

ルシルに抱きつこうとしているのをなんとか理性で押し止めているのが手に取るように分かる。

「どう二人とも」

「す、すごかった」

「う、うん。確かにお姉ちゃん口撃は必殺かも」

なのはとフェイトが完全に落ちた。

「えっと・・・あの・・・」

子供ルシルが少し戸惑いながら声をかけてきたんだけど・・・

（さて、どうしたものか。一刻も早くサクランボの効果を打ち消す方法を見つけるのが先決か。

それともしばらく子供ルシルで楽しむべきか・・・）

「・・・ふう、究極の二択ね」

「???? シヤルお姉ちゃん？」

「ぐはぁっ!」

思わぬ奇襲口撃にクリティカルダメージ、かいしんのいちげき、こ
うかはばつぐんだ。

「はぁはぁはぁはぁ・・・」

「?..?」

そ、そんな潤んだ瞳で見つめてこないで、ルシル。
お姉ちゃん耐えられないよ・・・。

「どうするの、フライハイトちゃん？」

「あ、シヤマル先生おかえりなさい」

ルシルの可愛さに悶えていたシヤマルが復活して、そう訊いてくる。

「か、解決法を探す。時間はかかるかもしれないけど、ね。

今のルシルは最高だけど、隊舎で遊ばせていたら女子は悶絶、男共
は犯罪に走るかもしれないし」

さすがに記憶がとんでいる最中に貞操の危機というのも可哀想だ。
まあ襲うのが男共だけとは限らないけど。どの道危険であることに
は間違いない。

「じゃあヴィヴィオと一緒にアイナさんに預ける？」

「うん、その方がいいかも」

「わ、私もお仕事できます！ つうあっ!?!?」

左手を全力で上げたことで上の服がズレ落ちそうになり、それを慌てて直そうとするから勢い余ってコテンと転倒。

すぐさま起き上がるんだけど、恥ずかしさの所為か顔が真っ赤。

「くはあっ!」「」「」

強烈すぎる。HPが10%切ってピコンピコン鳴り始めやがった。くあく、こんな子供ルシルのドジっぷりを見て鼻血を吹かない私たちは勇者だ。

「なのはママ!? フェイトママ!?!?」

「だ、大丈夫だよヴィヴィオ。なのはママは強いから」

何に強いから大丈夫なのはツツコまない。

「う、うん。ヴィヴィオもすごく可愛いから大丈夫」

内容がどこか飛んでるよフェイト。

「ね、ねえセインテスト君。シャマルお姉ちゃんと二人でお仕事しようか」

シャマルはもう危険域レッドゾーンに一步も二歩も大きく踏み込んでいるようだ。犯罪者予備軍に仲間入りしていると見ていいかもしれない。

ていうかどこからナースウェアなんて取り出した？
それ以前に女物じゃん。……………あ、女装……………か。フッフフ
フ。

「シヤマルはダメ。なんか危ないから」

「ああん、ひどーい！」

「ルシル君、そのー、お仕事できるってことだけど……………」

「うん、なんでも出来る！」

可愛いなあこんちくしょー！！

これで男だっというんだから世の中絶対おかしい！！

「まずは、はやてちゃんたちに説明……………だね」

「簡単な仕事ならいいのかな……………」

それから私たちは子供ルシルを連れて、はやてのいる部長室まで
行くことになった。

「えつと……………よろしくね、ヴィヴィオ……………」

「え、あ、うん……………」

子供ルシルとヴィヴィオの初コンタクト。

やっぱりヴィヴィオは戸惑っているようだ。

まあいきなりパパが自分より少し年上の子供になれば当然かな。

「……あ、シャルはお仕事がんばってね〜!!」

「フライハイトちゃん、ひど〜い」

本気で涙目なシャルとは一度ここで別れ。

だって仕方ない。ここは医務室で、シャルは医務官なんだし。

「あの……服……どうすれば……?」

「あ、そっか。ちょっと待って。我が手にたず」

シートに包まった子供ルシルを見て卒倒するかと思ったけど、そこをなんとか耐えて、魔力で服を作りだそうとしたとき、

「シャルお姉ちゃんが用意し」

興奮しているシャルを本気で危険と判断、手刀で強制睡眠の刑に処した。

「……」

なのはもフェイトも仕方ないって顔してるし、このまま放っておこう。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

魔力を好きなように編め、物質化出来る術式を使用。作るのももちろん、

「シャルちゃん、なんでこんなフリフリでゴスロリな服を……?」

女の子用の服。銀髪オッドアイなルシルには絶対似合うゴスロリ。色はもちろん黒一色。アクセントは胸元の赤い大きなリボン。

「じゃあこれ着て」

「え、あ、はい……」

フフフ、まさか何の抵抗もなく受け取るなんて……わあ〜い！

「か、髪型はどうしようか……?」

ツインテール? ポニー? 縦ロール? サイドアップ? それともツーサイドアップ?

「なのはママ。シャルさんが可愛い……」

「シャルもシャル先生に負けじ劣らずの危険人物かも」

「あはは……」

結局以前したようにツインテール。

そして今日分かったことがある。

それは子供としての視点と大人としての視点では違いが生まれるということ。

10年前、ルシルを強制的に女装させたときとは違う高揚感が今はあるからだ。

「ルシル君可愛い……」

「ひ、否定できない。ルシル・・・本当に可愛いよ」
ほら、なのはとフェイトもメロメロになってるし。
昔と今じゃ感性が違うということだ。

そして医務室を出て、部隊長室に向かう途中・・・

「きゃあああああああ!!」

誰ですかその可愛い子はあああーーーーー!!!!!!」

いきなり見つかった。

「可愛い! この子もしかしてルシルさんの妹さんか何かですか!」
「?」

「見て、このサラサラな銀髪! 羨ましい!!」

「も、もしかしてフェイトさんとルシルさんのお子さんですか!？」

「違う、あの、えっと、この子は・・・だから、その・・・あー・・・

」
『どうしよう。教えた方がいい・・・?』・・・そのね・・・」

ゴスロリルシルに群がるのはシャーリーにアルトにルキノのトリオだ。

そのトリオから怒濤の質問攻めを受け始めたフェイトからのSOS
念話。

というかシャーリーが何気にすごいことを言ってるよ。ルシルとフェイトの子供だとか。

『うん、巨大化についても知ってるし、ルシル君が子供になったって言ってもいい気も・・・』

『うん、今さら小さくなったって言っても動じないかもね』

「『じゃあそっしょうか』・・・実は」

かくかくしかじか。

「うっそ！ このルシルさんなんですか!？」

「巨大化の次は子供化ですか!？ あーでも可愛いから何でもいい!！」

「ちよつと二人とも！ どんなに可愛くてもルシルさんなんだよ!？ 失礼過ぎ!！」

トリオもゴスロリルシルにメロメロ。

もしかして誘惑の呪とか使ってるんじゃないかってくらいに。

「いや、でもどうかなあ？ 今のルシル記憶飛んでるし」

「・・・記憶喪失!？」

はい、盛大なアクションありがとうございます。

記憶障害についても説明。

「なるほど。だから女装させられても怒らないんですね」

「あれ？ でも自分の事を憶えているんですしたら、やっぱり怒るん

「じゃないんですか？」

「そうですねえ。もしかすると別のところで記憶に障害があるんじゃないんですか？」

「「「あ」「」」

言われてみればそうだ。さっきシャマルが質問して帰ってきて答えをそのままにしていたけど、もしかしたらルシルにはまだ他の記憶が飛んでいる可能性がある。だからこんな女の子っぽい言動とかしているんだ。

「えっと、ルシル。自分の事で何を知ってる？」

「?? ルシリオン・セインテスト・ア」

急いでルシルの口を塞ぐ。メンタルリンク 契約の儀式の時とは違って、今“アースガルド”を名乗らせるのは少しまずい気がするからだ。何せ昔・・・子供時代とは違って、今のなのはたちなら調べられるはずだ。

まだバレたくない。もう少しこのままで、みんなと一緒に過ごしたい。

「ど、どうしたの？」

「え？ あー・・・なんでもないなんでもない。コホン、えっと・・・じゃあルシル。その他には・・・？
分かっている事を全部教えてほしいなあ」

名前に関しての記憶はかなり古いと見ていい。

まさかの“フォン・シュゼルヴァロード”じゃなくて“アースガルド”だから。

つまりは、あの双子と出会う前の記憶となったら大体2、3千年くらい前ということだ。

いや、もしかしたら守護神としての記憶すらないかもしれない。

あー、なんかそっちの方の可能性が高い気がしてきた。

「……六課で仕事」

「……え、それだけ？」

「うん」

二つ。ルシルが自分の事で憶えているのはたったその二つだけこれで納得。名前と六課で仕事。これしか憶えていないから平気で女装出来るんだ。

「ま、まあこれで解決だね。さて、予定通りはやてのトコに行こうか」

実際何も解決してないけど、今はそれで良しとしよう。

「じゃあルシル。シャーリーお姉ちゃんとアルトお姉ちゃんとルキノお姉ちゃんにバイバイって」

「うん。シャーリーお姉ちゃん、アルトお姉ちゃん、ルキノお姉ちゃん、バイバイ」

「……つくはあっ……!」

トリオ、完全陥落。

それからはやてのいる部隊長室に着くまでの間、ゴスロリルシルが落とした隊員は数知れず。

女性隊員はもうメロメロ。男性隊員は本気でやばい目をした連中もいた。

このルシルを一人にすると間違いなく最悪な事が起こりそうだ。

「にしてもホンマ可愛ええなあ。大体7、8歳くらいか？」

「そうですねー。本当に可愛いですー？」

はやてとリインも、事の経緯説明途中ですで陥落済み。それほどまでに強烈なのだ、今のゴスロリルシルは。

「はあ。マジでセインテストには同情しか出来ねえな」

「ルシル。ヴィータに例の言葉を」

そう言うヴィータにも同情以外のものを湧かせてあげましょう。

「ヴィータお姉ちゃん」

「っ！！？」

フツ、どうよヴィータ。今のは効いたでしょう？

「お、お姉ちゃん・・・？」

「うん、ヴィータお姉ちゃん」

「くおっ！」

ゆっくりと崩れ落ちて四つん這いになって、お姉ちゃんお姉ちゃん
ってうわ言を発するヴィータ。

今までそういう経験がないからこそその大ダメージ。

小さい子供にお姉ちゃんって呼ばれると、それなりの歳の女子には
堪える。

いわゆる妹萌えみたいなの？

「何の騒ぎだ、部長長室で」

お、シグナム副隊長降臨。

どれ、ここはシグナムにも一撃与えてみようかなあっと。

「む？ 何だ、そのセインテストを縮めたような子供は？」

まさしくその通り。

「ルシル、ゴー」

「あの・・・シグナムお姉ちゃん」

「ん、なんだ？」

あれ？ シグナムにはこういうのは効かないのかな？

「えっと・・・」

「あー、えつとなあシグナム。その子はな」

はやてからシグナムにかくくしかじか。

「……セインテスト。お前という男はどこまで……」

はい、シグナムからルシルに同情一丁入りました。

シグナムの同情、プライスレス。

それからゴスロリルシルには働きたいという意思があることを。

私が元に戻す方法を探すから、それまでゴスロリルシルの言動には目を瞑ってほしいという事を話した。

「まあ大丈夫やる。なのはちゃんとフェイトちゃんから聞いたところやと、他の隊員たちももうメロメロやって話やし」

「ま、まあそうだね」

「護衛付きが絶対条件になると思うけど……」

「なんだ、そこまでセインテストの人気はすごいのか？」

「じ、じゃああたしがセインテストの護衛になってやるよ。」

あたしなら一人で十分だろ？ なにせ副隊長だからな」

「なんやヴィータ。ルシル君のお姉ちゃん口撃にメロメロなんか？」

「ち、違っ」

「ヴィータちゃんも女の子ですねー。ねえヴィータお姉ちゃん」

「リンー!!」

ヴィータのダメージは深刻そうだ。

「じゃあるシルの姉として、ヴィータにお願いしよっかな」

こうして昇級祝いパーティーから始まった喜劇の続行が決定した。

ルシルちゃん親衛隊（非公式）活動記録書（ボロボロかつ赤いシミがある）

読みますか？

yes

no

4月7日：快晴

我々、機動六課男性隊員地位向上委員会（非公式）の前に天使が現れた。

なのは隊長、フェイト隊長、その御息女である高町ヴィヴィオ嬢、そして我々が機動六課に協力者として籍を置いているシャルロッテ様と共に現れた天使。

雪のように白い肌、足元近くまで流れる美しい銀の髪、瞳は紅と蒼のオッドアイ。

シャルロッテ様と同様に籍を置いている、身長と髪の長さを除けば

ルシリオン氏と同じである。

その愛くるしく幼い外見からしてフライハイト姉弟の妹と判断。何と可愛らしい事だろう。あの純粹無垢そうな瞳に見つめられては、我々男は虜になること間違いない。

そしていつしか我々機動六課男性隊員地位向上委員会は、名も知らぬ彼の少女を敬い護る為の組織へと変わった。

その時間わずか1時間30分。天使（仮名）ちゃんの目撃情報が出る頃にはすでに親衛隊（非公式）となっていた。

機動六課男性隊員地位向上委員会改め天使（仮名）ちゃん親衛隊の誕生である。

まずは天使（仮名）ちゃんを真の名を知ることから始めることにした。

なのは隊長たちはファーストネームを呼んでいるようだが聞き取れないからだ。

そして、この重大任務は当初容易なものであると思われた。

何せあの小さな愛くるしい体で、隊の仕事を手伝うというのだからだ。

なんと健気なロリッ娘だろうか。お兄さんたちは涙で視界がボヤけてしまっているよ。

さて、あらゆる部署の同士に手を回し、天使（仮名）ちゃんが働いているところの隠し撮りを実行。

しかしその任務はまさに命がけといえよう。

何故なら天使（仮名）ちゃんには、あの外見が幼女な副隊長ヴィータ三尉がついているのだから。

もしこの任務がヴィータ副隊長にバレれば、文字通り……いや、

忘れよう。

親衛隊内からは、むしろスリルがあつて楽しいかも、という意見も出てきてもいるし、ヴィータ副隊長からお仕置き・・・グへへ、という同士もいることだしな。

まずはトテトテと歩きながら、お茶の入ったコップをいくつかトレイに載せてオフィスを歩く。

ただその行為だけで、我々男性隊員はもちろん女性隊員も落ちた。

この隊にはヴィータ副隊長、リインフォース？曹長、キャロ三等陸士、ヴィヴィオ嬢の四人の幼女がいるが、そんな彼女たちにはないモノを、あの天使（仮名）ちゃんは持っている。

それは御奉仕精神。それだけでお兄さんはもう・・・いっぱいっばいだよ。

それにしてもヴィータ副隊長、先程から天使（仮名）ちゃんをセインテストとしか呼ばない。

まったく、使えない幼じゲフンゲフン、いやいや、そんなヴィータ副隊長も素晴らしいものを持っているので許そうと思う。

オフィスでのお茶くみを手伝った後、天使（仮名）ちゃんはこの隊のフォワードの午後訓練へと向かった。

問題発生だ。親衛隊の手を回せない。

天使（仮名）ちゃんが汗をかいているフォワード陣にタオルと水を渡すというシーンが見れない。

何ということだろう。くそっ、私もフォワードとして訓練に参加出来ればよかったのに。

親衛隊員からの報告があつた。

なんと前述のフォワードの一人ライトニング3であるエリオ三等陸

士と天使（仮名）ちゃんが男性浴場へと向かったというではないか。どういうことだ？ 何故天使（仮名）ちゃんは男性浴場へと、エリオ三等陸士と共に……？

こうしてはいられない。事の真偽を確かめるために、私も浴場へと赴き、天使（仮名）ちゃんと一緒に……。

エへへ、いいではないか、いいではないか。

ちなみに私はロリオンではない。断じてない。絶対にない。神に誓おう。

私はロ○コンではない！！！！！！！！

一応仕事中ということの上司（男）に注意されたが、そんな事知ったものか。

適当に嘘をつき、男性浴場へと向かう。

そしてもうすぐでたどり着くというところで、件の男性浴場から悲鳴らしきものが。

まさか、エリオ三等陸士、天使（仮名）ちゃんの愛くるしさに我慢できずに襲ったのか！？

許せん、断じて許せん、絶対に許せええええええん！！！！！！

私が着いたときには、すでになのは隊長たちがその場にいた。

今発見されるのは非常にまずいので、陰に身を潜めることにした。

エリオ三等陸士がかなり慌てながらフェイト副隊長に説明しているようだ。

上手くは聞き取れないが「ルシルさん」、「女の子」、「子供化」、「記憶」などが聞こえる。

エリオ三等陸士の説明を聞き終えたなのは隊長たちは青褪め、天使（仮名）ちゃんを連れて寮へと走っていった。

あの慌てよう、かなり気にはなるがこの場に残り続けるのは危険と

判断し、オフィスへと戻った。

親衛隊員から信じたくない情報が届いた。

あの天使（仮名）ちゃんの正体についてである。

彼女の名前はルシリオン。そう、ここ数時間姿を見ないルシリオン氏と同じ名前である。

そしてもう一つ。そのルシリオン氏こそが、我々が親衛隊として護ろうとした天使（仮名）ちゃんだったのである。

ショックである。泣きたいのである。下手すれば自殺ものである。というかもう死んじゃおうかなあ。

だが、天は、神は、我々を裏切らなかつた。

今のルシリオン氏には記憶がないということ。

そして性別が男性から女性に変わってしまったということである。

元々はシャルロット様の料理が原因ということらしい。

数時間前に起きた隊員の一部が巨大化したという話。

アレの今度は逆で幼児化&記憶障害&性別転換という笑えないモノだ。

私は仕事でフォワードの昇級祝いパーティに出れなかつた。

最初は出たかつたという気持ちがあつたが、ルシリオン氏の事を聞くに行かなくて良かつたと思う。

いや、そんなことはどうでもいい。

天使ちゃん・・・違う、今からはルシルちゃんと呼ばせていただく。ああいい響きだ。

ルシルちゃんが女の子であるのであれば、親衛隊として活動するのに問題はない。

親衛隊員も満場一致で、ルシルちゃんの為の活動を良しとした。

誇り高き同士よ、そんな君たちに私は感動を覚えた。ありがとう。

4月8日：快晴

親衛隊発足二日目。

今日もルシルちゃんが元気にオフィスで仕事を頑張っている。

なんと微笑ましいことだろうか、なあ諸君。

そして服装はフリルの多い白のエプロンドレスと黒のメイド服。服装を決めているのはどうやらシャルロット様らしい。

ナイスチョイスでございます、シャルロット様。

しかし新たな問題が発生した。

なんとルシルちゃんの姉君シャルロット様が、ルシルちゃんを元に戻すために何かしら行動しているというではないか。

さっきの尊敬の念を粉々に砕かれてしまいました。実に残念ですシャルロット様。

2045

いや、それ以前にどうする？ 本来ならお手伝いするべきだ。

しかし、我々にはルシルちゃんのような刺激がまだ欲しいというものもある。

あの可愛い幼女を愛でるといふこの職場での生きがいを失いたくはない。

昼休み、恒例の格納庫会議で採決。

ルシルちゃんを元に戻すことに賛成か否か。

分かれた。やはり偽物の幼女ではいつか破綻するという意見や、六課の解散日4月28日まで何とか今のままでいてもらおうという意見。

結局この日は意見が分かれたままだった。

格納庫会議を終え、食堂へと同士と共に赴いた。

そこでは、シャルロット様がルシルちゃんを元に戻すために動いていた。

何でも、ルシルちゃんが幼児化した原因であるサクラランボの効果を消すための料理を作っているということだ。

どうすればいい？ 今から邪魔をするか？ しかしそんな事をすれば、この場にいる隊長たちを全員敵に回すことになるかもしれない。さすがに命は惜しい。くそっ、ここまでか。さようならルシルちゃん。好きだったよ。

あ、俺はロリオンじゃないですよ。本当です、誓います。

ここからは食堂で繰り広げられた会話が記録されています。聞きますか？

yes

no

「よおツし出来た！ カースドチェリーの効果を打ち消す食材リセツトベリーのタルト！」

「シャルちゃん、今度は大丈夫？」

「絶対大丈夫！ 何せ英知アルヴァイトの書庫の資料を読み漁ったんだから！ 見て、この目の下のクマ。あんまり寝てない証拠だよ」

「まあ何はともあれ解決か」

「ほう、少し寂しそうじゃないかヴィータ。もう少しお姉ちゃんと呼ばれたかったか？」

「そっじゃねえよ!」

「ヴィータちゃんは素直じゃないですねー」

「うっせえ」

「じゃあルシル。これ食べて」

「あ、はい。いただきます。……」

「「「「「「……?」」」」」」

「ねえシャル。ルシルが元に戻らないんだけど……」

「おかしいなあ。これ食べれば元に戻るはずなんだけど」

「ルシルさん……?」

「ルシルパパ?」

ドサッ

「きゃああああ! 大丈夫ですかルシルさん!」

「は、早く医務室へ!」

ここで音声記録は終わっています。

シャルロット様の目論見は潰えた。

周囲の視線は何故か気にならない。何故なら今、私は、私とルシルちゃんだけの世界にいるのだから。

そしてルシルちゃんに足蹴にされる私。

これはこれでいい。最高です!!

「せ、セインテスト君!? な、ななな何してるの!?!」

「あ、シャマル先生! 何でもないですよー!」

ああ、私の頭からルシルちゃんの足が離れていく。

結局、この日はもうルシルちゃんが隊舎を闊歩することはなかった。

4月9日：曇り

今日のルシルちゃんは男装のようだ。

水色の帽子にシャツ、青色のハーフパンツ。なかなか似合っていますよ。

ん? 少し待ちたまえ。それ以前に今日のルシルちゃんはおかしい。何故なら頭の横から動物の耳のようなものが生えている。

その耳のようなものを揺らしながら廊下の奥から近づいてくるルシルちゃん。

その姿が愛らしく、ただ私は挨拶をしようとした。

おはよう、と。ただそれだけを言った。

そしてルシルちゃんは、

「ワッファー! ワッファー! ルプルドゥー!」

ものすごい勢いで走り去っていった。

それからエリオ三等陸士とキャロ三等陸士とリインフォース？曹長がルシルちゃんに続いて走り去っていった。そして次は小さく丸い赤い生物が「ムウムウ」鳴きながら、大群でルシルちゃんたちを追って行った。

そして今度はスバル二等陸士とティアナ二等陸士だ。

彼女たちは、私に気づくと、ルシルちゃんがどこへ行ったかと訊ねてきた。

私は正直にルシルちゃんの向かった先を指差し、彼女たちを見送った。

何とも騒がしい朝だが、ルシルちゃんを見ただけで十分だ。

それからオフィスへと向かおうとした時、今度はエリオ、キャロの両三等陸士、スバル、ティアナの両二等陸士、そして最後にリイン曹長が逆走してきた。

その表情は必死ともいえる険しいものだった。

そして地響きとともに廊下の奥からやってきたのはルシルちゃん。と、ルシルちゃんが乗る大きなサル？の群れ。

オコリザル×20 & 猿回しルシルが現れた

「ワファイ ユウトウ リラナ ワファイ ルプー ルラナ セアヴ
イドウ」

ものすごい勢いで迫るルシルちゃんとサルの群れ。

私は群れに飲まれる寸前で回避、難を逃れた。

その日、ルシルちゃんは一日寮で休んだとさ（泣）

4月10日：雨

朝起きて、元気よく隊舎に出勤。雨だろつが雪だろつが嵐だろつが関係ない。

何故なら今日もルシルちゃんが見れるから。だから苦手な早起きも容易だ。

おはよう！と元気にオフィスへ到着。

さあ今日もルシルちゃんと会えるかなあっと思っていた時、見てはいけないモノを見た。

信じたくはないもの。あつてはいけないもの。

「よかつたねえ、ルシル君」

「とは言ってもここ数日の記憶はないけどな」

ルシリオン氏がなのは隊長と一緒にいた。

大人の、男のルシリオン氏が目の前にいる。

それはつまり、

「ルシルちゃあああ————ん!!!!!!!!!!」

「「っ!?!」」

いない。あの子がない。あの可憐な少女がどこにもいない。

嘘だ。挨拶をしていない。別れも言っていない。私だけお兄ちゃんと呼ばれてない。

走る。ルシルちゃんを探して。さっき見たルシリオン氏は幻だ、偽物だ。

それからどれだけ走っただろう。もう分かっている。あの子はもう

いないんだ。

外に出て雨に打たれる。頭がスツキリする。

「さようならルシルちゃん」

泣いてなんかいない。そして私はロリコ○じゃない。

『マーク・クオリス一等陸士。至急へリ格納庫まで来てください。
繰り返します。マーク・クオリス』

放送が流れる。リインフォース？曹長が私を呼んでいる。

何だろうか？ 制服や体が濡れてしまっているが、至急ということ
は急ぎの用事だ。

仕方がない。急いで格納庫に……。あれ？ ない。
ルシルちゃん親衛隊（非公式）活動記録書がどこにもない。
確かに朝はちゃんと手に持って出勤……。あ。

落とした。あるとき……。落としてしまった。
ルシリオン氏を認めたくなくて走り出した時、そういえば手荷物す
べてポイっと。

まさかアレが拾われて、だから呼ばれた……。？
血の気が引く。何せ記録書にはルシルちゃんだけでなくそれまでの
活動記録（映像&音声）のディスクが……。

重い足取りで格納庫へ向かい、そこで私は地獄を見た。

機動六課男性隊員地位向上委員会、機動六課解散予定日より早くに
崩壊。

十 十 十 十 十 十 十

「なんや、ホンマ災難やったなあ、ルシル君」

「……私はもう生きていけない（泣）」

「げ、元気出してルシル。その、すごく可愛かったし可愛かったし可愛かったし」

「ちよ、フェイトちゃん!? ルシル君が、ルシル君の顔が!」

「セインテスト君。女王様になつてる映像観てみる?」

『黙りなさい、この豚ども』

「っ!」

「おい、ヤベエぞ! セインテストが本格的にへこみ始めた!」

「哀れを通り越していつそ清々しいな」

「……（号泣）」

「うわあっ!?! ルシルさんがシグナムの一言でマジ泣きです!」

「えっと、ルシルさん! 僕たちすぐに忘れまますから!」

「そ、そうです! ルシルさんが女の子になつた事なんて忘れまます」

「！」

「いかなる努力でさえも出来ない事はある」

「……（血涙）」

「ザフィーラ！！」

「これなんかはどうや？」

『お姉ちゃん』

「くくくくくくはあっ！！」「」「」「」「」

「わっ！？ ルシルさんの口から何か出てきてはいけないモノが出てきてます！！」

マーク・クオリス一等陸士及び機動六課男性隊員地位向上委員会から徴収したデータディスクの大鑑賞会。

いやあ、なかなかの良い仕事をしているなあ。

コピーしてもらおうかなあ

「元はと言えば……」

「ん？」

「お前の所為だああああああああ……！！！！！！！！！！」

「うわあっ！！！！」

??~??~??~??~??~??~

オルゴールの音色が周囲に満ちる。

??~??~??~??~??~??~

「クスクス。あー楽しかったあ」

その音色は、かつて機動六課を混乱に陥れた時のものと同じ。

??~??~??~??~??~??~

「クスクス。もう十分夢は見れたよね・・・?」

精神転換という大混乱の元凶たるオルゴール。

??~??~??~??~??~??~

「クスクス。もう十分良い思い出をつくれたよね・・・?」

??~??~??~??~??~??~

そのオルゴールを手に、笑みを浮かべる少女が一人。

外見としては10代後半、大体16、7歳くらいだろう。

髪はローズピンクのロングストレート。瞳はエメラルドグリーン。

服装は黒のタートルネックトップにケルト十字が背に描かれている。

そして黒のプリーツスカート、白のサイハイソックス、黒のブーツだ。

??~??~??~??~??~??~

他人の不幸は蜜の味という興味深い論について（後書き）

・・・・・・・・シャルシルが巻き起こしたバカの数々どうでしたでしょうか？

私なりに結構頑張ったとは思ってますけど・・・・。

さて、次回から本編とも言えるストーリーへと行きます。

とはいっても、現予定では六話だけです・・・・。

予言成就への序曲 〈Nightmare〉 (前書き)

今から仕事だというのに完徹。

帰って読みなおしてビックリでした。

序盤のシャルシルの会話が繋がっていない！ 本当にすみませんでした！

????な気持ちにさせてしまったかと思えます。

改めて直しましたので……。すみませんでした！

予言成就への序曲 〈Nightmare〉

4月11日 AM8:02 機動六課隊舎内廊下

朝食のために食堂へとシャルと二人で歩く。

「いきなり休暇って、はやても何考えてるのかなあ？」

朝早くにはやてに呼び出され、そして聞いたのは突然の休暇要請。

「まあ、正直助かりもするが」

そう、休暇を貰える事に助かっているのは間違いない。

機動六課が解散するのは4月28日だ。

で、私とシャルは居候状態。六課解散後、住む場所がない。

つまりは今後の事にも住居を探さないといけない。

正直遅すぎる行動だとは思うが、ここの居心地があまりにも良くて忘れていたというのが本音だ。

そんなときに休暇を貰える。タイミングは完璧に良いとは言えないが、助かる事には変わらない。

「シャル、今日は一日住居探した。出来るだけ早めに決めておいた方がいいからな」

「ん、りょーかーい・・・あ、ごめん。」

行きたいところあるから、家探しはまた今度ってことでお願い」

「行きたいところ？ どこだ？」

そう訊いてみると、

「地球にね。一度帰ってみようかなって思うの。全然帰ってないし、久しぶりにアリサとすずかに会いたいし」

とのことだった。

「……まあいいか。じゃあ今日はそれでいい」

シャルの少しマジメな返答に、私もただ賛成した。

偶にはそういうのもいいだろう。

私はシャルとは違って半年前の出張任務には参加しなかったしな。だから地球に行くのは本当に久しぶりということになる。

にしても……

「さっきから視線が……痛い」

「あははは。ごめんね、ホント」

同性異性問わず、六課の隊員から向けられる視線がかなり痛い。

それもこれも昨日までに私自身に起きていた悲劇（みんなは喜劇と言う）の所為だ。

子供化（しかも女子化）に記憶障害という最悪なものだった。

その影響で女性からはすごく優しい視線を、男性からは背筋が凍る視線を感じる。

朝の訓練でもみんな不自然なほどに優しく接してくれた。それが逆に辛い。辛いんだよ。

「君と契約したとき、そして解呪しないことになったとき、私の複製武装や術式など扱える事がバレたとき・・・」

全ては決まっていた事だと諦めるしかない。

シャルがバカ方面でその腕を上げた時、こうなる事こそ定められた運命・・・。

(嫌な運命だな。自分に同情したい・・・)

「ええっ!? な、なに泣いてるの急に!？」

「自分の境遇に・・・同情を・・・」

あれ、おかしいな。何故か涙が止まらない。

「ゴメンて! ホントにごめんなさい!！」

「・・・おいおい、どうしたんだ、そこまで真摯に謝るなんて・・・?」

そこまで全力で謝るほどに反省しているという事なのか。

そうか、そうだよな。シャルとて別に悪気とかがあったわけじゃない。

ならばここは、男として笑って許してやるのが当然だ。

「シャル、もういい。許すよ」

「え? ホント? 良かったあ。実は、ルシルの幼児化の画像を私のブログに載せたんだあ。」

だってすごく可愛かったし、ロリロリナルシルってば最高だったん

「フフ、出っしてませえ〜ん」

「っ!」

「ここまでシャルに殺意を持つのは……あぁいつもの事か。」

「フンッ!」

「あいたあっ!?!」

思いつ切りシャルの頭上に拳骨を落としてやった。

「痛つつつつつたあああー!ー!ー!」

「何するの急に!?! 許すつて言っただじゃん!」

「ふざけるな!ー! そこまで勝手されて許す人間がいれば是非会つてみたいわ!」

「そこまでの聖人君子がいるなら是非にお会いして話し合ってみたい。」

「いいじゃない、人気者としてなんだし」

「お前は全然懲りてないな! というかお前の辞書に反省って言葉はあるのか!?!」

「昨日は散々ゴスロリ着せて罰したというのに、この馬鹿は全く堪えた様子じゃない。」

「あ・た・り・ま・え? 反省は大事だからね、人間にとってもさ」

「その割にお前が反省しているようには見えないんだが!？」

「あー、それはルシルの目が節穴とかガラス玉だからじゃないの？」

「意味分からん!　　と言っかなかかなり失礼だな!」

「ルシル、ちょっと最近怒りっばいよ？」

「私を怒らせる最大の原因が何を言っ!？」

「はいはい。お姉ちゃんと後で一緒に牛乳飲もうねえ」

「くあああああ!?!」

今日も今日とて私はシャルに遊ばれるのだ。

十　　十　　十　　十　　十　　十　　十

「　　で、シャルちゃんとルシル君は、今日と明日の二日休暇だっけ?」

「そっだよ。って言っても、今日一日と明日の午前中って事だけど、食堂でなのはたちと合流。

話題は私とルシルの休暇の事についてだ。

「シャルさんとルシルさんは、どう休日過ごすんですか?」

「ん？ うん、ちょっと地球に里帰りにね。
私はみんなとの出張で一度帰ってるけど、ルシルは全然帰ってないから」

地球でロストログアが発見されたという事で、海鳴市に戻った事がある。

その時は仕事でのんびりは出来なかったし、偶にはのんびりするために帰るのも悪くない。
だからさっきルシルと決めた。

「じゃあ翠屋に寄ったりする？」

「当然！ 桃子さんのデザート食べに行くに決まってるでしょ」

「そっかあ。でもシャルちゃん。お母さん結構気にしてるんだけど、シャルちゃんがホームステイの時みたく桃子母さんって呼ばれたいって」

「あー、でも恥ずかしいんだよねえ、今となったら」

確かになのはの家にホームステイとして住まわせてもらっていた時、私はなのはの御家族をそういう風に呼んでいた。

けど、偽りの家族として連れてきたフライハイト家に戻った頃からさんづけに戻した。

あのときの桃子さんのガツカリようはすごかったなあ。

「それならついででもいいんだけど、エイミイたちにも会ってきて。ルシルとシャルって、カレルとリエラと直接会ったことないでしょ？」

「あー、うん。映像でしか観たことないね、確かに」

カレルとリエラ。あのクロノとエイミィの子供だ。

うん、フェイトの言う通り少しエイミィのトコに顔を出そうかな。それからいつも通りの会話をしながら朝ごはんを済ませる。

「さて、ごちそうさまっと。じゃあシャルロット・フライハイトとルシオン・セインテスト・フォン・フライハイト、これより二日間の休暇に入ります」

「うん、いつてらっしやい」

「「「「いつてらっしやい！」「」「」」

「おみやげは翠屋の、ね」

「うん、了解」

こうして私とルシルは、始まりの世界地球に帰る事になった。

十
十
十
十
十
十
十

「……了解です。報告ありがとうございますです。」

はやてちゃん、シャルさんとルシルさんが隊舎を後にしました」

「ん、了解や」

私はシャルちゃんとルシル君に休暇を出した。

期間は今日一日と明日の午前中。

なんでそんな半端な期間にしたんか、それにはもちろん理由がある。

「明日ですね。シャルさんとルシルさんのお誕生日は」

リインの言ったそれこそが最大の理由。

4月12日はシャルちゃんとルシルの20歳の誕生日。

主役の二人を六課から遠ざけて、その間に誕生日会の準備をしようという事や。

そして明日のお昼に帰ってきたところで二人を驚かせる。

「そやなあ。派手にお祝いしたいな」

「そうですねー。お二人にはお世話になりましたし」

ここ二年は二人ともおらんかった。

その二年の内の私たちの誕生日会には出るくせに、自分たちの事になると全然あかんかった。

そこは二人らしいけど、やっぱりちゃんとお祝いしたい。

「ん。じゃありん。早速明日のパーティに必要なものの準備や」

「了解です」

シャルちゃんとルシル君の驚く顔が今からでも思い浮かぶなあ。

「何を贈ろかなあ・・・？」

十 十 十 十 十 十 十

「シャルちゃん！ ルシル君！」

「久しぶり、すずか！」

「久しぶりだ。元気そうだなによりだよ、すずか」

「うん！ ルシル君も随分会ってないけど、元気そうで良かった！
転移先として借りたのは月村家の庭。以前の出張任務でも借りたら
しい。」

まあ管理外世界である地球にトランスポーターがないのだから、事
情を知る者の土地を借りるのが真っ当な事だろう。

で、そんな私たちを迎えてくれたのがこの家の住人の一人月村すず
か。

シャルたちの大親友の一人で、その当時関わり合う時間が少ない私
ですらいつの間にか親友扱いしてくれた女の子。
この子ほどの大物はなかなか見ない。

「ありがとね、すずか。庭を借してくれて」

「ううん、どういたしまして。そうだ、シャルちゃんとルシル君は
これからどうするの？」

「ある程度は決めてきたんだけど、周る順番とかは全然」

「あはは。シャルちゃんの計画性のなさは変わっていないんだね」

「あ、言ったなあ。このお！」

「ひゃあ!?!」

シャルがはやてから学んだスキル……まあ何というか、女性の胸部を……だ。

まったく、くだらないスキルを身につけてどういつつもりだろうか
と常に思う。

「って、何黙ってすずかとシャルを見てんのよあんたは!?!」

「ぐはあっ!?!」

いきなりの背後からの奇襲を受け、私は不覚にも吹っ飛んだ。

「アリサ!」

「うあ……あ……アリサちゃ……ん……!」

「やつほー、久しぶりシャル! ていうかいつまですずかの胸揉んでんのよ!」

「それより先に私に謝るべきだと思う。謝罪を要求するぞ、アリサ」

「フンツ、シャルを止めないばかりか黙って見ているあんたへの罰よ、今のは」

私を背後から蹴飛ばし、ふんぞり返っているのがもう一人の親友アリサ・バニングス。

初めて会った頃から気さくな態度をとる元気印の女の子だ。
その二人は今では大学生。月日が流れるのは実に早い。

それから私とシャルはテラスに案内され、本当に久しぶりな茶会が催された。

そしてファリンさんのドジっぷりも健在だった。神がかり的なドジっぷりだ。

「にしても、すずかは兎も角として、アリサもやはりお嬢様だな。お茶を飲む仕草に隠れた優雅さがある。本当に信じられない」

「信じられないのは、堂々と本人の目の前で言うあんたの頭の中よルシル！！」

「あはは、確かにルシルの言う通りだ」

「ああもう、この馬鹿姉弟！！」

「な、アリサ。シャルと同じにされるのは納得できないな。訂正求む」

「うっさい！ これを見たらその軽口は二度と叩けないわよ！！」

「ほう、どれを見たら私が二度と軽口を叩けなくなるって？」

アリサが取り出したのはケータイ。パカッと開いて少し操作。そして、

「これよー！」

画面を私に向けて突き出してきた。

画面に映る画像を見て、私は口に含んでいたお茶を盛大に吹いた。吹く前に何とか顔を逸らしたことで、ケータイやアリサに吹きかけることはなかった。もし吹きかけていたら命はおそろくなかっただろう。

「ぶうー！ー！！　ゲホツゲホツ・・・はあはあはあ、何故アリサがその画像を！？」

アリサのケータイ画面に映るのは、間違いなく私。

しかも普段の私ではなく昨日まで子供化を果たしていたゴスロリを着た私だった。

何故アリサのケータイにその画像があるのか、答えは実に簡単だ。

「シャルロットエエエエ！！」

すずかとアリサの間で茶を飲んで、無視を決め込んでいる馬鹿しかない。

しかし、おもむろに顔を上げて、

「私じゃないけど」

とそう言った。

「は！？　だったら誰が、というかお前しか考えられないだろう！？」

シャルは無断で自分のブログにすら載せる馬鹿だ。そのシャル以外なんて考えられない。

「あの、ルシル君。これ・・・」

すずかも同様にケータイを取り出し、操作開始。
そして画面を見せてきた。映っているのはやはり子供化した私。
それだけじゃないかった。カシカシと操作して、

『すずかお姉ちゃん、アリサお姉ちゃん。元気？』

「っづあっ！！！！！！！！！！」

単なる画像じゃなく動画だった。

あー、胃が痛い。もしかしてこの短時間に穴が開いているんじゃないだろうか……？

「はあ、ルシルちゃんはこんなに可愛いのに。ねえルシル？」

「くっ！」

勝ち誇ったような笑みを浮かべるアリサ。

まずい、こいつは強敵だ。これ以上アリサを刺激すればどうなる」とか。

「でね、ルシル君。送信者を見てほしいんだけど……」

「そ、送信者……？」

そうだ。私はこの画像と動画をすずかとアリサに送りつけたクソ野郎を知らなければならなかった。

覚悟しろよ、送信者。どんな手を使ってでも辱めを受けさせてやる。

「うん。どうぞルシル君」

優しくケータイを手渡してくれたはずか。
ああ君には本当に癒される。

「あ、ああ。ありがとう」

すずかからケータイを受け取り、送信者の欄を見る。

「……………わ、私……………だと……………？」

送信者の欄には、ルシル君と出ていた。
つまりは私自身が二人のケータイに送っていた事になる。

「そ……………そんな……………馬鹿な。私自身がこんな事を……………」

「ていうかさ、ルシルってば幼児化してる時の記憶ないんでしょ」

確かにシャルの言う通りだ。
子供化している時の記憶なんてものはない。
昨日徴収されたデータディスク鑑賞会（私にとっては拷問）で初めて知ったのだ。

記憶が飛んでいた子供化期間で起きていた事を。
だから私自身が送信していても何ら不思議は……………ん？

「いや、待て。記憶が飛んでいるのに何故すずかとアリサの名前を知っている？」

「ギクツ」

シャルが一瞬だけフリーズ。

なるほど、そういうことか……。

「ギクツてなんだ？」

もう分かっている。お前が全て仕組んだ事なんだろう。

「帰ったら速攻ゴスロリ」

「ごめんなさい!」

もう許すものか。

「ちょっとルシル。あんた、シャルにそんなもの強制してるの……」

「えっと、まあ趣味は人それぞれだから」

「おい！ 私よりこの馬鹿への好感度を下げるべきだろう!？」

「さすがとアリサからの好感度がダダ滑り。」

「そうなの。ルシルってば私が可愛いからって、あんな恥ずかしい格好を……よよよ」

「あ、お前！ なんだその三文芝居は!」

ド下手にも程があるシャルのくっだらな演技。

「引くわ」

「ルシル君……」

「君たちもか、すずか！？ アリサ！？」

アリサ、そしてすずかまでもがシャルの三文芝居に付き合い始めた。引くのはシャルの方だろう明らか！

私がどれだけシャルに遊ばれたと思っているんだ！

「冗談よ冗談。あんたがそういう趣味じゃないのは分かってるって」

「うん。私たちは分かっているから」

「アリサ、すずか」

意外と早く止めてくれた。助かるよ、アリサ、すずか。すずかは兎も角、アリサ、やはり君はシャルとは違い、それなりにまともな……

「あんたは女装趣味なのよね」

「そんなわけあるかああああ！！！！！！」

やはりアリサは天敵の一人のようだ。

「お、落ち着いてルシル君。アリサちゃんは、ルシル君で遊ぶのが好きなだけだから」

「すずか……」

すずか。それにノッた君も何気にひどいな。

それからシャルたちは買い物に行くと言いだし、私は男だという事で荷物持ち係。

そして女性の買い物物の恐ろしさが再度身に沁みた。

行く先々で女性から声をかけられるわ、アリサが大学の付近にまで連れ出してくれたおかげで、アリサに気があると思われる男共に絡まれるわ。

そして何故かゲームセンターに寄ることになり、某妨害あり系レスゲームマリ○カートに四人で対戦。

「いつけえええ!!! ルイ○ジ!!!」

一位ル○ージ操るアリサが、妨害アイテムを発動。

「くっ、やっぱりアリサ強い! ねえ、ここはアリサを潰す同盟を組もう!」

三位クツ○を操るシャルからの、アリサ本人の目の前での堂々宣言。

「あ、ずるい! あたしたちも組むわよ!」

四位ピー○姫操るすずかと結託するアリサ。

「いいだろう。アリサ、君の無敗神話はここで潰える・・・!」

二位ヨツ○ーを操る私が、一位ル○ージのアリサを追いあげる。

それに、後ろには同盟を組んだク○パのシャルがいる。

これはもうほとんど勝ったも同然の展開だ。

「よっし。ミドリじっぴー!」

「ふふん、こつちはパイよ！」

シャルとアリサが同時に妨害アイテムを手に入れた。

あとは私が邪魔にならないように射線上から回避、シャルとアリサが共倒れした隙に抜いてゴール。

完璧だ。シャルと同盟を組んでいて正解だった。

そして、同時に発動した妨害アイテムは見事に、

「「よつしゃあー!!」」

「なにいいいいいい!!!!?」

前後から同時に私のヨツシ〇にぶつけられた。

「「いええーい!!」」

パイで前が見えなくなり、しかもスピンした私の〇ツシーを軽々抜いていく〇ツパと、すずかのピ〇子姫。

しかもシャルとアリサは、勝ちが決まったというようにハイタッチは決める。

「裏切ったなああああ!!」

堂々と同盟宣告したかと思えば堂々と裏切りやがった。

「え〜? 裏切ってないよお。だってルシルと組むって一言も言ってないし」

「はあ!? 明らかに私に視線を向けてただろ!?!」

「お久しぶりです、桃子さん！ 土郎さん！」

いつ見ても若いなあ、土郎さんと桃子さん。

「お久しぶりです」

私もシャルに続いて挨拶をし、翠屋店内へと進む。

そしてアリサ、すずかと続いて入店。店の奥の四人掛けのテーブルへと向かう。

すでに店内にいた客から視線が集中するが、もう動じることはない。それだけの経験を積み重ねてきたのだから……。

「わあ、本当に久しぶり 元気にしてたシャルちゃん、ルシル君」

「はい！ 桃子さんも相変わらず美人でお元気そうで」

「やだ、シャルちゃんったら」

でも、もう桃子母さんって呼んではくれないのね……」

「おいおい桃子。シャルちゃんも困ってるだろ？」

「クスン」

「えーっと、美由紀さんは今日は……？」

無理やり話題を変えたな。

「今日は友達と出かけているのよ。もう、シャルちゃんたちも連絡くらいしてほしかったなあ」

「す、すみません」

咄嗟に謝ってしまった。桃子さん強し。

それから少しずつ客足も増えてきたことで、土郎さんと桃子さんが離れていった。

そして注文したのを食べる。やはりおいしかった。

母の手料理というのが世界で一番おいしいとよく聞くが、まさしく真理だ。

まあ私は本当の母の手料理なんてものは知らないが……。

それから随分と翠屋で話しこんで、気づけば四時を回っていた。

これ以上はさすがにまずいと判断。なのはたちへのお土産も買い、その帰り際、

「ねえシャルちゃん、ルシル君。写真いいかしら？」

そう桃子さんに言われ、もちろん快諾。

翠屋の前で撮った家族ではないのに家族写真のようなもの。

なのはたちがこれを見たらどう反応するだろうか。少し楽しみだ。

十 十 十 十 十 十 十

「おいしかったです。ごちそうさまでした、土郎父さん、桃子母さん」

「シャルちゃん……。ああ、お粗末さまでした」

「またいらつしゃいね、シャルちゃん。ルシル君も。愛情たっぷり
の料理を振舞うから」

「はい!」

少し照れくさかったけど、やっぱり土郎さんと桃子さんは、私のも
う一つの家族だから。

私たちの姿が見えなくなるまで店の外で見送ってくれた土郎父さん
と桃子母さん。

今、すごく泣きたい。けど泣けない。だってルシルたちの前だから。
涙が出るのを何とか必死に耐えてた。涙もろくなつた私にはかなりの
精神力が必要だったけど。

「今日はありがとう、アリサ、すずか。すごく楽しかった」

「ああ。充実した休日をごこせた。すずか、アリサ、ありがとう」

「ちょ、何よ改まって二人とも。あたしたちだって楽しめたんだか
ら、だから、ありがとう。シャル、ルシル」

「私もありがとう。シャルちゃん、ルシル君。」

今度はなのはちゃんたちと一緒に帰ってきてね。

そうしたらもつと楽しい休暇になるよ」

「ああ。そうだな。その通りだ。今度は必ずみんなで来るよ」

「うん。きつとまた」

二人と別れる。とその前に、

「ねえ、明日何時にミッドチルダに帰るの？」

アリサが訊いてきた。

「時間？ どうするルシル？」

「明日の午後には仕事があるからなあ。朝の7時くらいか・・・」

「朝の7時。間違いないわね、ルシル」

「あ、ああ。朝の7時」

「ん。じゃあ見送りに行くから待ってなさいよ、いいわね」

「い、いいよ。見送りなんて。明日大学でしょ？」

「いいいいの　じゃ、明日ね」

「う、うん。ありがとうアリサ」

「また明日な、アリサ」

「えっと、じゃあ朝の7時にまた。今日は本当に楽しかったよ」

「うん。ありがとうずずか。また明日」

「ああ。また明日。ずずか」

アリサとずずかと今度こそ別れた。

「さて、今からエイミィのトコ行って、それからフライハイト家ね」

「ああ」

「なに？ まだ慣れないわけ？」

ルシルは、一応の家族であるフライハイト家が若干苦手。

まあ、大戦時に命をかけて死闘を繰り広げた敵が家族だって言うんだから当然な気もするけど。

そして、

「おお！ やつと来たねシャルちゃん、ルシル君
いらっしやーい、ささ、上がって上がって」

ハラオウン家に到着。出迎えてくれたのは、今では人妻なエイミィ。

「うん、おじやましまーす！」

「お邪魔しますつと。本当に主婦をしているんだな、エイミィ」

「ん？ それはどういうわけか教えてもらおうかな、ルシル君？」

夕飯の準備をしているのか、エイミィはエプロン姿だった。
そして、

「ルシル！ シャル！ 久しぶりだな！」

「「アルフー！」」

部屋の奥からやってきたのはアルフだ。

「遅いぞ二人とも。あんまり遅いからカレルとリエラ眠っちゃったじゃん」

アルフがすくし不満そうに呟いて、部屋の奥を見るように促してきた。

私とルシルはそれに頷いて、ゆっくりと双子兄妹を起こさないように覗く。

「わあ、可愛い」

「だろう?」

「でしょでしょ?」

「髪はエイミィで、瞳はクロノを継いでいるわけか……。やっぱり二人の子供なわけだ。へへ……。可愛いなあ」

もう私には、子供を産む事が出来る体はないけど、やっぱり憧れだ。

「どしたの、シャルちゃん?」

「え? ううん。幸せにね、エイミィ」

「え? なに? 本当になんなの?」

「なんでもいい」

らしくないなあ、今日の私は。

「?? ふん。あーそうだ。夕ご飯はどうするの?」

「夕ご飯? えーっと、一応家に帰ってから、家族と食べるつもり」

「そっか。まあそうだよな。ちょっと残念だね」

「ああ、本当に残念だ」

本気で残念そうにしないで、ルシル。

「じゃあもう帰るね。エイミー、アルフ」

「ん。また遊びに来てねシャルちゃん、ルシル君」

「またな」

「はあ、帰りたくないなあ」

「我・が・ま・ま・言・わ・な・い・の」

「あはは。またねルシル君、シャルちゃん」

「ああ。またエイミー、アルフ」

「またね」

「おー!」

十
十
十
十
十
十
十
十

「いやあ、久しぶりだなあルシル君」

「はあ、すいません」

偽りの父親オペルが屈託のない笑みを浮かべる。
やはり違和感だけだ。イヴ義姉様と幾度と死闘を繰り広げたあの騎士。

それが今では私の目の前で笑みを浮かべている。

「ああああ、ルシル君たら。うふふ」

違和感その二。彼の鮮血姫シリアが母親。

今でもやはり慣れない。何せあの鮮血姫だぞ？

非情で冷酷、敵味方関係なく恐れられたあの……。

それが目の前で、ああら、とか、うふふ、とか。

「もう十年になるんだからさ、ルシルもいい加減慣れたらあ」

違和感その三。シャルに次ぐ義姉のチエルシー。

最少少で星騎士となり、騎士でありながら創世結界を作りだした大魔術師。
シュテルン・リッター

そして大戦に参加した騎士の中で唯一生き残ったのも彼女だ。

花の姫君。その彼女が義姉とは……。本当に世の中どうなるか分からない。

『ルシル。バレない芝居とか得意でしょ？』

シャルからの念話だ。

『芝居って、人聞きの悪い』

実際そう言うしかないものだが。まあストレートに騙すと言われな
いだけマシか。

『なのはどうして？ やっぱり嫌・・・？ 星騎士^{わたしたち}が家族って・・・

』

『いや・・・。そういうわけじゃ・・・。』

いつまで経っても慣れないんだ。家族というものが・・・。』

私にとつての家族は姉ゼフィランサス姉様、妹シエルの三人だけ。
父と母は、私を大戦終結のためだけの生体兵器として調整するだけ
の存在だったからだ。

だから両親の愛情というのを知らない。だからこういう家族には違
和感しか抱けない。

それが初めから仮初の、偽物として用意されたなら尚更だ。

『・・・そつか。まあ、私もよく知らないんだよねえ家族って』

『・・・似た者同士というわけか』

『変な共通点持つてるよね。私たちってさ』

『まっただ』

妙なところで一緒とは。変なめぐり合わせだ。

それから夕食を済ませ、私に用意されている自室で眠りについた。

そして、朝早く起きて月村家へと向かい、

「お、来た来た。おい、シャルー！ ルシルー！」

「朝から元気だな、アリサ」

「おはよう。シャルちゃん、ルシル君」

「おはよー、すずかー。あとアリサ」

「おはよう、すずか、アリサ」

月村家の門前で待っていてくれたすずかとアリサ。そのまま庭先の、転移場所にまで四人で歩く。

「んじゃ、もうそろそろ行くね」

「改めて昨日はありがとう、すずか、アリサ」

「こっちこそ。シャル、ルシル。あーそれとこれ、誕生日プレゼント」

「私からも。シャルちゃん、ルシル君。どうぞ」

誕生日……？

「あ、忘れてた。え？」

一語一句、タイミングも全て同じ。そんなシャルと顔を見合わせる。そうだった。今日4月12日は、この世界で用意された私とシャル

の誕生日だ。

「あんたたち、自分の誕生日忘れるって・・・」

「そう言えば、なのはちゃんたちや私たちの誕生日にはちゃんと来てくれるけど、二人の時は来ないよね。
それってやっぱり忘れてるから？」

「あー、うん。まさしくその通り」

過ぎた時に、メールが一斉に届いて思い出す、というのがこの二年の私たちだ。

「完全に忘れていたな」

だがこれで分かった。どうしてもはやてが私とシャルに休暇を与えたのか。

それはこういうことだったんだ。まったく、はやての奴・・・。

「もう。あんまり自分を蔑ろにしない方がいいわよ、二人とも」

「まあまあアリサちゃん。それじゃあシャルちゃん、ルシル君」

「「誕生日おめでとう!」「」

綺麗に包装されたプレゼントを受け取る。

「あ、ありがとう! ありがとう、アリサ! すすか!」

「本当にありがとう。嬉しいよ、すすか、アリサ」

心の底からの感謝。

「ルシル、あんた幸せ者よ？　こんな美少女二人から誕生日プレゼントを贈って貰えるなんて」

「アリサちゃん・・・」

「・・・はは、あははは！　いや、まったくだ。確かに私は幸せ者だ。

ありがとう、本当に。向こうに戻ってから開けさせてもらおうよ」

「んで、向こうにはなのはたちもいるし。確かにルシルは幸せ者だよね」

アリサの言う通りだ。もういつ本契約を終えて玉座に還ることになっても悔いはない。

それほどまでに今の私は満ち足りているから。

「じゃあ私も向こうで開けさせてもらおうね。・・・じゃあ行くね。

ってことで、次に会う時まで元気でね」

「シャルちゃんとルシル君も。元気でね」

「次に会うときって、結構すぐじゃないの？　えっと、今度ははやての6月だし」

確かにそうだな。

「じゃあ二ヶ月後にまた会おう」

「それまでバイバイ　アリサ、すずか」

「うん。バイバイ、シャルちゃん、ルシル君」

「じゃあね二人とも」

こうして私とシャルはミッドへと戻った。

＋
＋
＋
＋
＋
＋
＋

4月12日　AM 7:32　機動六課隊舎

「んー、そこはもう少し上でお願いヴァイス君」

「うっす。了解っす、なのはさん」

今日はシャルちゃんとルシル君の誕生日。

ここに二年は全然お祝い出来なかったけど、今年は二人とも一緒にいるから良かった。

「なのは、そろそろスポンジが焼き上がるよ」

「うん、ありがとうフェイトちゃん」

フェイトちゃんもすごく嬉しそう。

シャルちゃんもシル君は、私たちの誕生日には必ずプレゼントを贈ってくれた。

それなのに二人の時は居場所が分からないからメールだけ。だから嬉しくて楽しいんだ。今日という日がすごく。

「ねえなのはちゃん。私も料理担当がいいな」

「あはは、ダメです。シャル先生に料理させないようにヴィータちゃんたちに言われてますから」

「そんなあ（泣）」

シャル先生の料理の腕前は、10年前に比べれば進歩したと思う。だけど、それでもまだ微妙なレベル。

「ボサツとしてんなよ、シャル。料理担当組の邪魔だろうが」

「ひびい！...」

「「「「「あはははははははははは！」「」「」「」

「「こ笑うトコ！？」

シャル先生がイジげだした。

私もつい可笑しくて笑ってしまふ。

うん。こういう時間がこれからもずっと続けばいいのに。

ううん、きつと続いていく。これかもずっと。

十 十 十 十 十 十 十 十

4月12日 AM7:50 機動六課隊舎部隊長室

「さてと。そろそろ私も準備を手伝いに行かなあかなあ」

「リインもいっぱいいっぱいお手伝います」

「がんばろうなあ!」

「はいです!」

仕事をあらかじめ片付けて、シャルちゃんとルシル君の誕生日パーティの準備の時間を作った。

私の誕生日のときも、シャルちゃんとルシル君はちゃんとプレゼント贈ってきてくれたし。

やのに二人のときはおるトコが分からなくって、なのはちゃんたちといういる作戦とか練ったなあ。

「今日はホンマ楽しい日になるなあ、きっと」

「そうですねー」

椅子から立ち上がって、食堂に行こうとしたとき、

「通信……?」

部隊長室にコールが鳴り響いた。

「あ、リンディさんや」

相手はリンディさん。なんやろ？

「はい、機動六課部隊長八神はやてです」

『はやてさん？ おはよう。朝早くごめんなさいね』

「いえ。おはようございます、リンディさん」

『えっと、今お時間いいかしら？』

「あ、はい。かまいませんよ」

長くなりそうだからまた椅子に座る。

リンディに先行つてもええよ、と目配せしたんやけど、残るって返してきた。

ありがとうの意味を込めた笑みを返す。

すると、リンディは、

「はいです」

小さな可愛い声で、頷いて返してくれた。

『あ、そうそう。今日はルシリオン君とシャルロットさんのお誕生日だったかしら？』

もしそうなら悪いわねえ。お祝いに行けなくて』

「それなら私が、リンディさんからお祝いの言葉を貰ったと・・・」

『あら、そう？　ありがとつはやてさん。
でね、早速今日連絡した本題んだけど……』

「はい。なんででしょうか？」

『実はね、機動六課に最後のお仕事を引き受けてもらいたいの』

「かまいませんよ。あ、それって急ぎですか？」

『んー、急ぎというかあんまり時間は関係ないかしら』

「そうなんですか？　それで、その仕事の内容は……」

『あ、そうそう。でね、その仕事というのわね……』

リンディさんはすごく綺麗な笑みを浮かべながら一拍置いた。

『ルシリオン君とシャルロツテさんの撃墜。つまり、殺してほしい
のよお』

「……え？」「」

リンディさんは今何て言ったん……？

予言成就への序曲 〈Nightmare〉 (後書き)

予言の全貌までいけなかった・・・。

破滅運び来たる災厄 〈 Apollyon 〉

4月11日 PM 22:49 時空管理局本局

次元航行艦の停泊するドッグ前の廊下を歩く一人の男性。
彼の名はクロノ・ハラオウン。
本局次元航行部隊に所属し、XV級艦船クラウディアの艦長を務め、
また執務官でもある。

「やあ、お疲れ様クロノ君」

「ヴェロツサ。ああ、君もお疲れ様」

そのクロノに話しかけたのはヴェロツサ・アコース。
本局の査察部に所属する査察官であり、クロノとも旧知の仲。
そしてもう一人。

「ユーノも一緒か。二人ももう上がりか？」

「うん。そういうクロノも？」

ヴェロツサに続いて、クロノと話すのはユーノ。
ユーノ・スクライア。無限書庫の司書長を務め、ミッドチルダの考
古学士会の学士でもある。

「ああ」

それから三人は他愛もない会話をしながら、本局に設けられてる寮

へと歩を進める。

「そうだ、ユーノ。明日は確かシャルとルシルの誕生日だったな。何か用意したか？」

そして話の内容が、彼らの親友であるシャルロツテとルシリオンの誕生日のものになった。

「うん。ルシルには珍しい本をね。ルシルほどの本の虫なら喜んでもらえると思うよ。」

シャルにはまあいろいろと、かな」

苦笑いを浮かべてクロノに答えたユーノ。

「あれえ？ 僕は初耳だよ。どうして教えてくれなかったのかなあ？」

「そうだったか？ ……あー、そういえば言っていなかったな」

ヴェロツサに問い詰められ、クロノは大して考えもせずそう返した。

「ひどいな。彼らにお世話になった身として、僕もお祝いしたいよ」

「なら今からでも贈るプレゼントを買ってきたらどうだ？」

「今から？ 今開いている店じゃまともな物は買えないよ。」

女性にはそれなりの物を贈らないと。男として恥ずかしいからね」

「あのシャルにそれなりの物??」

ヴェロツサの言葉に、同時に返すクロノとユーノ。彼らがそんな会話をしながら歩いていると、

「あれ？ あの娘、一般人かな・・・？」

ユーノの視線の先には、明らかに管理局員の制服ではなく私服を着た黒の少女がいた。ここはまだ寮のある区画ではない。そんなところに私服でいるのはおかしい話だった。

「局員の家族かな？　もしかすると迷子かもしれないね」

そう言ってヴェロツサがその少女へと近づいていき、

「見た目が10代後半くらいで迷子って・・・」

クロノとユーノは少女の事がおかしいと思いつつもヴェロツサに続こうとしたとき、

「っ！?!?」

その少女から放たれている圧倒的すぎる威圧感を向けられ、二人は硬直せざるを得なかった。

冷や汗が流れ始める。呼吸は乱れ始め、軽く目眩すら起こしていた。しかし、ヴェロツサには向けられていないのか、そのまま少女へと近づいて、声をかけた。

「どうかしたのかなお嬢さん？」

「クスクスクスクスス……。人を探しているの」

「そうなのかい？ だったら名前を教えてくださいかい？」

「クスクス。リンディ、クロノ、ユーノって三人を」

「え……？」

ヴェロツサの質問に答えた少女。

その少女の視線はすでにヴェロツサの背後で倒れそうになりつつ、それでも必死に意識を保とうとしているクロノとユーノに向けられていた。

それからヴェロツサも背後へと振り向き、そしてようやく友の異常に気がついた。

「クロノ！？ スクライア先生！？」

すぐさま駆け寄って様子を見て、彼は原因が分からないため医務官を呼ぼうとした。

がその前に、

「クスクスクスクスクスス……」

少女の笑い声を聞き、そのままヴェロツサは意識を手放し倒れた。そしてクロノとユーノ。彼ら二人もまたついに膝が折れ、その場に倒れ伏した。

「……ルシリオンと関わっていないながら、あまり強くはない

のね」

倒れ伏している三人を見下ろしている黒の少女。
そして、その少女が今まで通ってきたであろう廊下には、何十人と
いう管理局員が倒れていた。

十 十 十 十 十 十 十

4月12日 AM 7:50 機動六課隊舎部隊長室

リンディさんは今、確かにシャルちゃんとルシル君を……殺
せて……

「えーっと、リンディさん。そうゆう冗談は嫌いなんですけど……
」

相手がリンディさんであっても、そんな悪質な冗談は許せへん。
そやから少し不機嫌そう（実際不機嫌やけど）にそう返した。

『つぶつぶ』

「……」

『……これは冗談じゃないのよ、はやてさん。
シャルロツテさんとルシリオン君を、本当に殺す気で襲撃してほし
いの』

今度こそ絶対に聞き間違いやなかった。

「な、なんですか！？ シャルさんとルシルさんが何をしたって
いいますか！？」

「リイン・・・？」

リインが大声で怒鳴った。そんなリインは今まで見たこともないほどに怒つとる。

そのまま私と、リンディさんの映るモニターの間で割って入って、

「いくら六課の後見人のリンディさんの命令でも、それは聞けない
です！

そうですよね！？ はやてちゃん！」

そう力強く断って、そして私にも同意を求めてきた。

「リイン・・・。うん、そうやね。リインの言う通りや。

リンディ総務統括官。機動六課部隊長八神はやて、以下機動六課は
その御命令には従えません」

親友を殺す任務。どんな理由であっても聞くわけにはいかん。

シャルちゃんとルシル君は、なのはちゃんやフェイトちゃんたちと
同じ私の大事な命の恩人。

そしてとても大切なかけがいのない親友。

『それは困るわ、はやて』

『ああ。君たち機動六課には、シャルとルシルと戦ってもらわな
ければ』

「っ！ カリム！？ クロノ君！？ な、なんで……！？」

「っ！？」

さらに二つのモニターが追加。

そして追加されたモニターに映るんはカリムとクロノ君。二人ともリンディさんと同じ六課の後見人。

『機動六課部隊長八神はやて。改めて命令します。』

時空管理局理事官カリム・グラシア……』

『時空管理局次元航行部隊提督クロノ・ハラオウン……』

『時空管理局総務統括官リンディ・ハラオウン。』

そして、武装隊栄誉元帥ラルゴ・キール。法務顧問相談役レオーネ・ファイルス。

本局統幕議長ミゼット・クローベル、他将校8名の連名による命令です』

(な、なんやそれ……？ そんな大事にまでして、どういうつもりなんや……？)

そこまでしてシャルちゃんとルシル君を殺せ、って……なんでなん？

これが本当なら管理局の上層部すらも、二人の殺害命令に同意したってことや。

「なんで……なんで……シャルちゃんとルシル君を……？」

声が震えるんが分かる。ううん、それだけやのうて体も震えとる。

「はやてちゃん……」

リインがそつと私の手に、その小さな手を重ねてきた。

『クスクス。ねえ？ 部下は大人しく上官の言うことを聞くべきじゃないの？』

「っ！？」

いきなりカリムの後ろに現れたんは女の子。

スバルとかティアナくらい歳の。桃色がかつた長髪に翠の瞳。

そして白いソックス以外が全部黒い服の女の子。

「な、なんや……あなた……？」

聞くまでもなく解る。カリムの傍におるアレは人間やない。

そうや。この感じ……ペッカートウムのベルゼブブと同じ……違う。全然違う。そんな生易しいもんやない。ベルゼブブ以上の怪物……。

モニター越し、そしてすぐく離れている距離やとゆうのに、ここまですでハッキリ分かる威圧感。

「あなたの……仕業なんか？ リンディさんたちがおかしいんわ……？」

そうとしか考えられへん。

『クスクス。ねえカリム。あなたの能力預言者の著書を見せて』
プロフェーティン・シュリフテン

『はい。我がご主人様の御言葉のままに』

「カリム！？ カリムに触るな！！」

椅子に座るカリムの肩に手を置く怪物に怒鳴る。

たったそれだけでも心が折れそうや。

『クスクス。ありがとう、カリム。そしてよく聞いてね、はやて。

コホン。では。古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

使者たちは踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けとし、数多の海を守る法の船は砕け落ちる』

「はやてちゃん、これって・・・」

「ジェイル・スカリエツィ事件の預言・・・」

私たち機動六課設立の理由。

そして半年前に、みんなが全力を尽くして解決した大事件や。

『クスクス。そ。で、この続きがあるのは知ってるんだよね？

うん。ここから先が、たった今から起きる事。だからちゃんと聞いていてね』

「っつ！！？」

『その果てに大罪を標とし、遙かに高き破滅の座より、現し世の終極の鐘鳴らす者現れん

彼の者が下せし定めには如何なるものとして逆らえず

かくして現し世に滅びが為の使徒が満ち足りん
その滅びが音断つたるは、遙かに貴き至高の座より舞い降りたる者
十字架を背負いて、其に仕えし使徒と相見えん
しかして慟哭の涙、歡喜の絶唱、憤怒の叫びが乱れ流れるその終の
果て

狂いたる真の黒き者によりて、現し世は真に終極へと進まん』

流れるような声で預言を読み切った。

ユーノ君たちが頑張つて解説してくれてたけど、結局最後まで解説
できなかつた預言の後半。

それをまるで知つてて当然と言つように……。

『現し世。つまり人間の住まうこの次元世界の滅びが読まれてるの。
で、その滅びの一役を担っているのがこの私』

「なっ!?!」

『クスクス。私こそが預言に読まれてる世界を滅ぼす終極の鐘の音。
名をテルミナス。意味はそのまま終極。』

とある目的のために、この次元世界を犠牲にさせてもらうね』

普通なら、あんな見た目が10代後半の女の子に次元世界丸ごと滅
ぼされるなんてこと笑い話にもならへん。

そやけど、カリムの傍におるアレは人間やない。

なら出来ると考えてても行き過ぎた警戒やないはず……。

『クスクス。さてと。ルシリオンがそろそろ到着するみたい。

というわけで、はやて。あなたたちにはちゃんと踊ってもらつから』

「絶対に聞か……っ!」

あかん。預言の一文。“彼の者が下せし定めには如何なるものとして逆らえず”

もしそれが私の予想通りなら、きっと他人を操ることが出来る力と
いうことや。

そやからカリムたちは……。

(いや……)

『クスクス。大丈夫。怖くないから』

(いや……)

テルミナスの視線から逃れなあかん。

そうやないと……私はカリムたちみたく……意思を乗っ取られて……

大好きなシャルちゃんとルシル君をこの手で……

『クスクス。動かすのは私だから、あなたたちは見てるだけでいいの』

「いやや!」

そう叫んだことで金縛りのようなものが解けた。
急いで部隊長室から飛び出そうとするんやけど、

「リン! シャルちゃんたちに連絡を なっ!?!」

「クスクス。残念でした」

「はやてちゃん!」

扉の前に、さつきまでカリムのおる教会におったはずのテルミナスが立っとなった。

「リン！ 私が時間を稼ぐ！ なのはちゃんたちに、すぐ逃げるように言って!」

“夜天の書とシュベルトクロイツ”を起動。

相手にならんのは始めから分かつとる。私じゃ絶対に勝てへん。それでも、絶対に貫きたい意地が私にある!

「はやてちゃん、でも・・・!」

「早く!」

テルミナスに向けて“シュベルトクロイツ”を全力で振る。

こいつがベルゼブブの以上の怪物なら、私たちの魔法は効かんゆうことや。

(そやったら力づくの物理攻撃で退かすだけや!)

でも、

「「っ!?!」」

「クスクスクスクス。ただの幻相手に物理攻撃なんて無意味なの。残念でした。本体はこの世界にはいないの。だってまだその刻じゃないから」

“シユベルトクロイツ”がすり抜けた。
そのまま勢い余って無様に転倒。最悪や……こんな……。

「クスクス。でも、幻といえこの終極わたしに攻撃の意思を見せて実行したのには純粹に驚いたの」

「「っ!?!」」

また、いつの間にかの移動。

今度は倒れたままの私と視線を合わせるように、しゃがみ込んで笑みを浮かべとる。

不愉快な笑み。視線を合わしとるのに、明らかな見下しが感じ取れる。

『はやて。今一度命令します。ルシリオン・セインテスト・フォン・フライハイト』

『シャルロツテ・フライハイトの両名を』

『襲撃。そして撃破、殺害しなさい』

「クスクス。というわけで、ちょっとした間だけ、その体の命令権借りるね」

「はやてちゃん!?!」

「づっ!?!」

急に意識が落ち始めた。

(いや・・・シャルちゃん、ルシル君・・・助けて・・・たすけ)

「て・・・」

十 十 十 十 十 十 十

「はやてとリイン遅いなあ・・・」

「主はこの隊の長だ。そしてリインもまた補佐を務めている。その仕事量は計りしれんものだろう。多少の遅れも仕方ないことだ」

朝早くから準備をしていたおかげでほとんど終わった。

あとははやてが作る料理だけだけど、そのはやてがなかなか来ない。

「そつだよなあ」

私たちも昨日の内にかなりの量を片付けたけど、やっぱりまだ終わっていない。

でも、それでもルシルとシャルの誕生日をお祝いしたい。

だからパーティー後に仕事が残っていると分かっても苦じゃない。

「じゃあ私がはやてちゃんの代わりに「ダメに決まってるんだろ」えええええっ!？」

シャル先生とヴィータのやり取りにもちょっと飽きてきた。

ただ待っているのも退屈だから、みんなでルシルとシャルに贈るプレゼントを何にしたか話をしていると、

「ごめんな、みんな。お待たせや！」

「お待たせですー！」

はやてとリインが来た。

「お疲れさま、はやてちゃん。リインも」

「おおきになあ」

「ありがとうございますー」

「遅かったね、はやて。やっぱり仕事が・・・？」

「ん？ リンディさんたちとな、ちょっと話したら遅くなってしもた」

「母さんと？　もしかして何かあった？」

はやては母さんと話していたみたい。

それに“たち”ってことは、きっとクロノも一緒だったのかもしれない。

「んー、そうやなあ……。ちょうどみんな揃ってるし、話とこか。えっとな、こんなときにごめんやけど、少し仕事の話させてもらっつな」

そう言つて、はやては近くにあつた一つのイスに腰掛けた。
仕事の話ということ、みんなも黙つて近くのイスに座りだして、
私もイスに座つて話を聞くことにした。

（それにしても、解散まで日もあまりないのに仕事ってなんだろう？）

よく見てみると、なのはやシグナムたちも少し疑問を浮かべた表情をしてる。

考えてる事は私と同じなのかもしれない。

「ついさつき、この機動六課の後見人であるリンディ・ハラウン
総務統括官。

それに次元航行部隊のクロノ・ハラウン提督。

そして聖王教会の騎士で、管理局理事官のカリム・グラシア中将か
らある任務の話を受けた」

やっぱりクロノもだ。それに騎士カリムまで。

三人が同時に会して持ち出してくるような任務って、結構大事なの
かもしれない。

「その任務は、武装隊荣誉元帥ラルゴ・キール。法務顧問相談役レ
オーネ・ファイルス。
本局統幕議長ミゼット・クローベル、本局支局の他将校8名の連名
によるものでな」

はやてから告げられた事はとんでもないことだった。

みんなも伝説の三提督の名前が出たことで、重い緊張感が一気にこ
の場を支配した。

それに将校8人。名前は言われなかったけど、8人となると異常事

態だ。

「あ、ごめんな。そんな緊張せんでもええよ。

すごい有名人の連名による任務やけど、やることはそんな難しい事やない。リイン」

「はいです。まずは機動六課設立の理由なんですが、一応機密事項でしたのでみなさんにお話しできませんでした」

はやてからリインに任務の説明役が変わった。

そしてリインがまず最初に話し始めたのは機動六課設立の真実。それを知るのは私たち隊長陣と、そしてルシルとシャルだけ。

リインから部隊のみんなに語られる騎士カリムの予知能力の事。

スカリエッティ事件が、事が起きる前にすでに予知されていた事。そして管理システムの崩壊を阻止するために、この機動六課が設立された事。

その真実を知った隊員たちみんな息を飲んで、ただ黙って聞いていた。

「そして、私たち機動六課は無事に任務を遂行した、ということですよ」

機動六課の真実を語り終えて、リインが大きく深呼吸。

私たちも改めて聞いて、やっぱりすごい部隊だって再認識した。

「おおきになりイン。でな、ここからが本題というわけや」

またはやてに説明役が移るみたい。

「はやて。もしかしてそれって……」

予言の事から始まって本題へと行く話。それなら今でも解読出来てないはずの、残りの予言の事かもしれない。

ルシルとシャルが一番気にしていた残りの部分。

私は、たぶんなのはたちも予言を阻止したから、残りの部分は起こらないと思ってた。でも、

「うん。フェイトちゃんの考えとる通りかな。

その解読できた予言の続きこそが、機動六課の最後の任務というわけや」

やっぱり。残りの解読出来ていなかった部分の事が起こるかもしれないんだ。

「その新しく解読できた部分の予言を、また阻止するのが任務なんですね」

「ちやうよエリオ。機動六課の最後の仕事は、予言の阻止やなくて成就なんや」

「……………え……?」「……………」

阻止じゃなくて成就させることが任務……?

「で本題な。任務の内容はシャルちゃんとルシル君の撃墜。

つまり、私たちはあの二人の殺害を前提とした任務に就くことになった」

「……え？」

今……はやては……何て……？
誰が誰を殺すって……？

あれ、おかしいな。私の耳がすごく変な事を聞いたような気がする。

「え？ あの……八神部隊長？ 今何て言いました……？
その、よく分からないんですけど……」

「聞き間違いだと思っんですけど、今シャルさんとルシルさんを撃墜して……？」

スバルとティアアナが訊き返したことで、みんなが集まっている食堂がざわつき始めた。

そう、はやては確かに言った。ルシルとシャルを撃墜、つまり殺すって。

「そうやけど、何かある……？」

何もおかしいところはないって感じのはやて。

嘘でも冗談でもない。はやては本気でルシルとシャルを殺す任務をするつもりだ。

「なに……言ってるの……？ はやてちゃん、何言ってるの！？」

「はやて！ なんてあたしらがセイントとフライハイトを殺すんだよ！？」

この感じ。私は知ってる。半年前にも肌で感じた圧倒的な威圧感。ペッカートウムと呼ばれた人の形をした人ではないモノ。その内の一体ベルゼブブと呼ばれたとんでもない男の人。その感じに似て・・・違う、似てるなんてものじゃない。今私たちの目の前にいる少女の方が圧倒的に上だ。

「クスクス。あなたたちも上官に逆らうんだ。はやてと同じというわけ。

組織に身を置くなら、多少の不条理な事くらい目を瞑らないとやっていけないんじゃないの？」

はやてちゃんと同じ・・・？

ということは、はやてちゃんもこの任務に逆らったってこと・・・？

「デメエ・・・はあはあ・・・ペッカートウムって・・・はあはあ・・・奴か!？」

「つく・・・ペッカートウムだと？ 生き残りはレヴィヤタンだけではなかったのか・・・!？」

A n f a n g

ヴィータちゃんとシグナムさんがデバイスを起動しても立っているのもやっとならなくてというのが分かる。それほどまでに、放たれる威圧感が強大すぎる。

「クスクス。へえ、私の威圧感に耐えるだけじゃなくて、そこまで・・・。

クスクス。さつきのはやてと同じ。この娘も私の威圧感に逆らって攻撃してきたの」

「「「「っ!!」「」」」」

「はやてちゃんとリインちゃんに何をしたの!?!」

「我らが主と家族に手を出した罪、決して軽いものではないぞ!」

はやてちゃんとリインがおかしくなったのはこの娘の所為で間違いない。

きつとリンデイさんたちも、この娘に……。

「レイジングハート!!」

All right . Barrier Jacket standing up

もしそうなら、シャルちゃんとルシル君の命を狙ってるのは……この娘だ。

「バルディッシュ!」

Barrier Jacket , Impulse Form .
Set up

意識が落ちそう。心が折れそう。怖い。とてつもなく怖い。だけど、負けられない。負けちゃいけない。

「クスクス。大罪を知るなら理解できるでしょ? 私に傷一つつけられないって」

分かってる。本能が警鐘を鳴らし続けている。
勝てない。勝てるわけがない。そもそも戦いにすらならない。

「だからって退けるかよ！ アイゼン！」

「レヴァンティン！」

Explosion

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

Load cartridge

フェイトちゃんたちと同時に仕掛ける。

「クスクスクス。少し遊んであげる」

その娘の余裕の笑みは、すごく不愉快だった。

十
十
十
十
十
十
十

4月12日 AM 8:28 海上隔離施設

「……っ!?!?」

(この感じ……まさか終極様テルミナスが……!?)

紋様をすべて破壊して随分経つからもう諦めたと思っていたのに……!

「レヴィ……顔が青いよ？ 何かあった？」

「どうしたんだよレヴィ？」

「どうかしたっすか、レヴィお嬢様？」

ルーテシアとアギトとウエンデイがわたしの顔を覗いてきた。本当に心配してくれているのが分かる。

辺りを見れば、他の姉妹たちもわたしたち、わたしだけを見てくれている。

「う、ううん。なんでも……ない。

みんなもありがとう。わたしは大丈夫だから……」

落としたペンを取って、一日の出来事を書くには早いけど、それでも日記帳を開いて新しく書き込む。

4月12日 曇りのち雷雨

そう。やっぱりあなたは諦めずに動くのですね、“主”。でも、好きにはさせない。この世界は必ず守ってみせる。

この今日と言う運命の日を、ルシリオンとシャルロツテは必ず乗り越える。

それは絶対。だから、諦めて消えてください、終極様テルミナス

「どこ行くの、レヴィ？」

日記帳を閉じて、テルミナス終極様……テルミナスを感じ取れるところが見える場所まで移動。

「少し気になることがあるんだ」

この感じは確かにテルミナス。だけど弱い。それにこのミッドチルダの界律が動いていない。

(素通りさせた……?)

違う。紋様は破壊した。界律干涉はもう起きていない。それなのに、あの序列二位のテルミナスが来ても界律が動いていない。

いくら存在概念を弱くしたり、ペッカートゥムのように分裂したとしても誤魔化すことはまず出来ない。

二位のテルミナスなら尚更の事。

「嫌な予感がする……」

場所を移動して、窓から周囲の様子を窺う。

鉄格子がすごく邪魔だけど。

「……もしかして、本体じゃない……?」

テルミナスの概念存在でありながらこの弱さ。

仮定として一番しっくりくるのは、本体じゃなくて幻などの小細工が来たという事。

「聞いてた計画と少し違う……。一体なにを　　うあっ!?!」

海上隔離施設が大きく揺れた。

わたしはその突然のことに対処できなくて転倒してしまった。

(この振動……。攻撃!?)

不自然な揺れ。自然災害で言う地震とは違う。

明らかに建物のどこかを攻撃されて破壊されたときの振動だ。

「ルーテシア!」

一番に頭に浮かんだのは、わたしの大好きなルーテシア。

ルーテシアに何かあればわたしはもう存在する意味がなくなる。

「はあはあ……。ルーテシア!　　はあはあはあ……。!」

急いで解放区に向かって走る。

「はあはあはあはあ……。!」

こんなとき、“嫉妬の力”があればって思わずにはいられない。

この小さな体の性能なんて高が知れてる。

少し走ったくらいでもういっぱいいっぱいだ。

「ルーテシ　　なっ!?!」

さっきまでわたしがいた解放区。

必死に走ってたどり着いたとき、そこは破壊されてボロボロになっ

ていた。

そして、その破壊行為を行った犯人たちも、倒れ伏した姉妹たちもそこにいた。

「はあはあはあ、お前たち……何者だ!？」

数は6人。男4人に女2人で構成されている。

6対1。だけど問題はそこじゃない。

肩まである髪も細められた瞳も着ているドレスのような服までもが深緑の女。

その女が手にしているのは、

「アギト!!!」

ぐったりとして、ボロボロにされたアギトだ。

「っこんのおおお!!」

全力で走る。ここに来るまでにすごく体力を使ったけど、それがどうした。

目の前でボロボロにされた友達がいる。そんな事をしたこいつらに、

「ああああああ!!」

一発でも叩きこむ。けど深緑の女もそれ以外も動こうともしない。わたしを、ただの子供で何も出来ないと思っっている証拠。

「っ!？」

走り始めてすぐ何かに蹴躓いてしまって転倒。

瓦礫の陰で見えなかったけど、わたしが蹴躓いたのは……

「ルーテシア！」

うつ伏せで倒れていたルーテシアの右足。

「ルーテシア！ ルーテシア！ ルーテシア！」

「……ん……う……ん……」

良かった。生きてる。

「先代の許レヴィヤタンされざる嫉妬が無様この上ない」

「っ！ 先代……！？ まさか……お前たちは……！」

深緑の女がそう静かに言った。わたしの事を先代の“嫉妬”と。

「わたくしが、あなたに代わる許レヴィヤタンされざる嫉妬よ、愚かな裏切り者」

こいつらが新しい代の大罪ベックカートウム……

有り得ない。こんなに早く次代が揃うなんて。

最低でも時間的概念で100年は必要なはずなのに……

「ああ、久しぶりですね許レヴィヤタンされざる嫉妬。ああ、先代の、をつけるべきですか」

神父のような服を着込んだ、すでに存在しえないはずのソレはそこ

にいた。

「なんで・・・？　なんでいるの！？　ベルゼブブ！！」

破壊された解放区の中央。倒れ伏した姉妹たちの合間。

そこに、シャルロットに斃されたと聞いていた暴食ベルゼブブが新たに姿を現して立っていた。

破滅運び来たる災厄 〈Apollyon〉（後書き）

予言の全貌をようやく出せました。ここまで来るのに結構かかりました。

さて、ついに絶対殲滅対象ナンバー??：終極テルミナス様の御降臨。

そして新生ペッカートウム。今度は始めから七体揃い踏み。で、ベルゼブブの再登場。まあ生きていたという事で。なんかすいません。

十字架を背負いし神意の執行者 〔Predestination〕(前書き)

パソコンが逝ったり、軽く事故って検査入院したり。

でも、そのおかげでのんびりでき、今日一日で書きあげる事が出来ました。

何事も前向きに……………(泣)

界律の守護神VS

戦闘イメージBGM

Xenosaga

ツアラトウストラはかく語りき

“promi

sed pain”

十字架を背負いし神意の執行者 〈Predestination〉

「なんているの？ですか……。まあそれくらいなら話してもかまいませんね」

ベルゼブブの余裕。それも当然な事。

今のわたしは“力”の無いただの小娘。

そんなわたしが、7体揃ったペツカートウム相手に戦うなんて愚の骨頂。

自殺行為の何物でもない。でも、だからと言って退くつもりはない。何故なら、そう、今のわたしには“ペツカートウムの力”が無いだけだから。

(今こそルシリオンの言っていた使い時……。なはず)

奥の手を使って何とかして逃げる。もちろんルーテシアとアギトを連れて。

姉妹たちには謝る事しか出来ない。さすがに全員連れて逃げる事は不可能だ。

「あのと、僕の中には六つの“力”がありました」

救出と逃走の段取りを考えると、ベルゼブブがそう口にした。

「6つの“力”……。そういうことか……。！」

暴食の結界。色欲の操作。強欲の防衛。憤怒の拡散。怠惰の再生。傲慢の阻害。

確かにそれだけあるなら大抵の事に対処できる。

「確かに僕は3rd・テストメントの攻撃を受け、この体の九割を粉碎されました。」

実際、今こうして完全に復活するまでに、三ヶ月もかかってしまいましたし。

ですが、マモン許されざる強欲の“防衛”。ヘルフェゴール許されざる怠惰の“再生”。ルシファー許されざる傲慢の“阻害”。

そして、僕の“結界”。それらのおかげで何とか生き残る事が出来たわけです」

「……そして、ずっと隠れていた、と……」

「ああ、いいえ。あなたが破壊して回った界律干涉の紋様を復活させていました。」

実に大変でしたよ。ここミッドチルダ以外の世界に刻むのは。まったく、あなたが破壊した事で、しわ寄せは全て僕に来たんです。ああ、でも怒ってはいませんよ。確か結果オーライって言うでしたか、こういうのは……?」

「なっ!?!」

(ミッドチルダ以外に刻んだ!? だったらこの世界の界律はもう動いているはず……!)

ならシャルロットとルシリオンも、守護神として動くはずだ!)

「さて。ああ話もここまでですね」

「っ!」

(来る……!)

ルシリオンがわたしの核としてくれた“生定の宝玉”。
その“生定の宝玉”へと送られて、貯蔵されたルーテシアの魔力を解放することで得られる戦闘能力。
その“力”で、この場をどうにかして切り抜ける。

「……………いきます!!」

「むっ!？」

魔力を解放。体中を駆け廻る魔力と呼ばれるわたしには縁遠かったモノ。

そう長い時間は耐えられないし戦えない。それに魔力も有限。それに意識が飛びそうになるほどの痛みを感じる。ただ、

「ルーテシア・アルピーノが従者レヴィ……………!」

その代償に戦える力を得る事が出来た。
視線が一気にわたしに集まってきた。

身構える。いつでも反応できるように。いつでも救い出せるように。

「……………あははは。これはこれは。ああ、心配しないでください。

あなたを消さないように終極様テルミナスの指示ですので」

「な……………に……………?」

どういうこと? わたしを生かしておく理由が解らない。
裏切り者のわたしを、どうして……………?

「不思議そうな顔しているな、先代嫉妬よ」

「……誰？」

わたしに声をかけてきたのは、先代のアスモデウスと同じように赤一色の初老の男。

どこかの王族が着ていそうな派手な服、そしてマントを纏っている。

「ふむ、我は許されざる傲慢。ルシファーさて、先程の話だが、お前の消去は我らが任ではない」

「どういうこと……？」

シャルロツテとルシリオンが気づいて、助けに来てくれるまででいい。

それまででいいから、何としても時間を稼がないと……。

「あんたを消すのは、そのの、あんたの大事な人間が死んで、あんたに絶望を抱かせた後だってわけだ」

「っ!!」

(なんだそれは……。わたしを今生かす理由が、そんな馬鹿げた事だなんて……!)

わたしの逆鱗に触れた発言をした白い男。わたしは放てるだけの殺気を向けた。

「お前、必ず斃す。罪名は……？」

ルーテシアを死なせてから、それに絶望したわたしを消す。
そんなふざけた事を口にした白い男の名前を訊く。

「はぁー。許サタンされざる憤怒だ」

「サタン……。真っ先に斃すから覚悟して」

そう挑発することで、わたしが真っ向から戦うと思わせる。

(まだ……？ まだシャルロットたちは気づかないの……!?)

もうそろそろ気づいてもいいはずなのに……。

やっぱりこいつらも、わたしたちの時と同じように神秘を隠匿して
いるのか……？

それとも、テルミナスとすでに事を起こしているのかもしれない。

「許レヴィヤタンされざる嫉妬。先にアギトを、テルミナス終極様の命令通りに機動六課はいたつせに
連れていきなさいな」

「なっ、待て!!」

深緑のレヴィヤタンに向けて、レヴィヤタンと瓜二つの群青の女が
そう言った。

明らかに双子。そして女という事は……

「アスモデウス……!」

しかあり得ない。色欲は、必ず女性型が務めているからだ。

「分かったわ許ねえさんされざる色欲」

「行かさない!!」

背を向けたレヴィヤタンに追い縋ろうとしたけど、

「ああ、いけませんねえ。いけませんよ先代嫉妬」

「ベルゼブブ！ 邪魔を……するなああああ!!!!」

もう待ってられない。

ごめん、ルーテシア。わたし……

4月12日 AM 8:51 機動六課隊舎前

半年前にも一度襲撃を受け、破壊された機動六課の隊舎。

そして今、その隊舎は半年前と同様に破壊されていた。

機動六課の魔導師と“絶対殲滅対象”^{アポリユオン}による戦いによって。

「それで？ まさか欠けていないでしょうね？」

瓦礫に腰かけ、空中に視線を向け、何者かと話している少女。

少女の名はテルミナス。終極の意を持つ“絶対殲滅対象”^{アポリユオン}がナンバ

ー???にして、序列二位を誇る実力者。

そして、元“^{テスタメント}界律の守護神”。かつて最強の、漆黒の第四の力として存在していた“^{アポリユオン}儚き永遠を憂う者”の二つ名を持っていた守護神。現第四のカルシリオンにとっての二代前の先輩となる。

「はい。先代の許されざる嫉妬の思わぬ反撃を受けましたが、我々大罪は誰一人として欠けてはいません」

「終極と話すのは、海上隔離施設へ襲撃を仕掛け、標的であるアギトの捕獲、そして機動六課へと送る任を負っていた“大罪”が一体、暴食の罪を背負いし許されざる暴食だ。」

「当たり前でしょ。先代の、しかも大罪の“力”の無い残りカスに負けるなんて許さないから」

不機嫌そうに聞こえながらも、その声には喜悦の色が見られ、終極も楽しそうに笑みを浮かべている。

「こちらはもう済んだから、私がそつちに行く。待機していなさい」

「終極がそう告げ、許されざる暴食は静かに「仰せのままに」と返す。二体の会話をそれで終わった。」

「……クスクス。それじゃあ機動六課、任務開始」

「……了解しました。我らが主」

機動六課の隊長陣。はやて、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータが静かに答えた。

そして彼女たちの背後。そこにはスバル、ティアナ、エリオ、キヤロがあり、さらに背後には他の隊員たちが待機していた。機動六課は終極に敗れ、完全に操られた駒と化していた。

「クスクス。さあ、早く来てルシリオン。早く踊りましょ」

心底楽しそうに、終極は瓦礫テルミナスの中心で空を見上げていた。

新暦76年4月12日

第一世界ミッドチルダにおいて、後々の次元世界史に決して残されず語られる事のない戦争が幕を開ける

十 十 十 十 十 十 十

4月12日 AM 9:18 ミッドチルダ首都クラナガン

あまりにも静かすぎるクラナガン。何故なら人っ子一人いないから。ミッドの界律が、自身セカイに存在する生命を、全て無時間空間に隔離したんだろう。護るべき対象ニンゲンを、契約執行中に下手に巻き込んで死なせないためだ。

「……………ふう」

いつか、こういう日が来ると思っていた。

うつん。必ず訪れる最後の日。逃れられない別れの日。

それが今日、私とルシルに与えられた誕生日だなんて……………イジメ？

「ルシル……………」

声が震える。泣きそうだ。違う。もう泣いている。

涙が止まらない。止める事が出来ない。出来ないんだ……………

「ああ。いるな、絶対殲滅対象が……」

アポリュオン

ミッドに着いてすぐ気がついた。
わたしたち界律の守護神が斃すべき存在“絶対殲滅対象”が、間違いなくミッドにいる。
そして、

ミッドチルダ界律より

剣戟の極致に至りし者 天秤の狭間で揺れし者に今契約を
招かれざる破滅の使徒 終極と大罪来たりし 如何なる術持ちて
彼の者らを討て
総ての制限今此処に解放したりて 己が存在を賭けて 討ち滅ぼす
こと
是本契約とす

界律からついに本契約の通達が来た。

やっぱり界律干渉の紋様を破壊したくらいじゃ諦めないか。

それにしても相手はあの序列二位のテルミナス。正直勝てる気がしない。

ていうか、

「ペツカートウム!？」

半年前に潰したのにもう湧いてきた。

何でこんなに早く揃うのか、そこまで人間の罪は重いという事なのだろうか……?

「もう次代が揃ったようだな。まったく、面倒事ばかり運んでくる連中だ」

随分な落ち着きよう。まあ確かに契約執行となれば、大罪くらい容易く斃せる。

半年前は、“干渉”が使えないからこそ苦戦したに過ぎないのだから。

「それにしてもやはり終極、か。」

「……なあシャル、勝てないか思っていないだろうか……？」

「……少し」

個人の實力じゃテルミナスの方がルシルより上。

本当なら序列六位の私と序列一位のルシルの二人がかりでも勝てる相手じゃない。

ルシルもそれくらい解っているはず。だけど、

「勝つんだ。絶対に。それがみんなを護る唯一の術だ」

「っ！？」

ルシルは私を抱きしめて、優しくそう言いながら頭を撫でた。

そっか。ルシルに頭を撫でられるのってこんなに気持ちいいんだ。すごい落ち着く。ありがとう、ルシル。

「ありがとう。私はもう大丈夫だから。行こうルシル。世界を護るために。」

「……界律テストメントの守護神白き第三の力“剣劇の極致に至りし者”」

「ああ。界律テストメントの守護神黒き第四の力“天秤の狭間で揺れし者”」

人間としての肉体を完全に捨てる。
ここからの闘いに、人の身体はただの枷でしかないから。
それは日常からの完全なる決別。もう後戻りが出来ない一線。
私とルシルはその一線を、

「「契約執行形態・・・顕現!!」」

越えた。

10年間という時間、私たちを縛っていた制限から完全に解放される。

ジュエルシードの時や2年間の契約執行ですら完全解放が許されなかった制限。

それが今、解放された。

それと同時に本来の姿を取り戻す。私は髪の長さで身長が元に戻った。ルシルも髪の長さが元に戻った。

次に私は白の外套と純白の“第三聖典”を。ルシルは黒の外套と漆黒の“第四聖典”を手にする。

仮面は具現化させなかった。視界を狭める可能性があるから。

「さて。早々に終わらせ　　ば、馬鹿な・・・!!?」

「??　　つ・・・うそ・・・なんで・・・!!?」

戦闘を開始するために位相転移で移動しようとしたとき、私たちの視界に、あつてはならないモノが映った。

「くっそっ!!　　やられた!」

私たちの上空に現れたのは、

「LS級艦船……！」

時空管理局が有する次元航行艦の一種、大気圏内活動に優れた小型のLS級の戦艦5隻。

そしてもう一隻、あの黒くて大型の艦船は確かXV級の次期主力艦のひとつ……。

『こちら時空管理局本局次元航行部隊所属、クラウドディア艦長クロノ・ハラオウン』

「クロノ！？」

クラウドディアから聞こえてきたのはクロノの声。

偽者かと、ルシルに視線を向けると、本物で間違いないって、首を横に振って応えた。

『界律の守護神4th・テストメント。及び3rd・テストメント。テルミナス様が命により、この場で殲滅する』

テルミナスが時空管理局を掌握した。私たちにとって最悪過ぎる状況になった。

「……ルシル」

本局が落とされているなら、六課も落とされていると考えていい。なのはたちが敵になる。しかも操られて。

「仕方がない。シャル、君は六課にい」

「っ！？ ルシル！？ ルシル！！」

消えた。ルシルが一瞬でその姿を消した。
今のは位相転移のようだけど、いきなりすぎる。

「シャルロット、お久しぶりっス！」

「ウエンディ！？ それに……確かトーレ、クアットロ、セツ
テ……」

いつの間にか私の背後にいたウエンディたち施設組の姉妹たち。
それに軌道拘置所に容れられているはずの戦闘機人3体。ウーノと
かいうのはいない。

そしてその身に纏っているのは、かつてのバトルスーツ。
きっちり武装していて、いつでも戦えると言える格好。

「テルミナス様の御命令でえ、あなたを殺しまあす」

相変わらずムカつく喋り方のクアットロ。

そう、私の相手は姉妹たちにさせるといっわけ……

「テルミナス……絶対に殺す……！！」

正直トーレたち拘置所組はどうでもいい。

けどチンクを始めとした施設組だけは殺したくない。

この娘たちとはそれなりに交流も深めたし、特にウエンディとは仲
が良い。

「ムリだね！！」

「っ!?!?・・・へえ、その姿、ひとつになったというわけ、大罪ペッカートウム」

視線の先、七体の分裂体じゃなく、一つとなった本来の、完全体のペッカートウムがいた。

艶のない漆黒の髪。見る者全てを呪うかのようなどす黒い切れ長の瞳。

そして服装は真っ白な長衣の男性型概念存在。ナンバーEX大罪のペッカートウム。

「久しぶりだねえ、三番！ 会いたかったぜえ！」

「・・・私は会いたくなかったわ、大罪。

その虫唾の走る顔を何度も何度も何度も潰すこちらの身にもなってみなさい」

口調を少しだけ昔に戻す。こいつの前で今の口調だとナメられる。

「釣れないね。まあそこがいいんだけどさあ。

あー、まあいいや。終極様テルミナスの命令でね、三番、俺達としばらくダンシング！」

「・・・チツ」

“第三聖典”を剣のようにして構える。

契約執行中においては、“神器”キルシュブリュートより、守護神専用の“聖典”の方が遥かに強いからだ。

(ルシルはきつとなのはたちのトコに強制転移されてるはず・・・。テルミナスの奴、ルシルをそっちに行かせるなんて・・・)

「ホント性質が悪い……！」

十 十 十 十 十 十 十

「また……こんな光景を見るなんてな……」

強制転移を受けて、着いた場所は機動六課の隊舎。
だが、隊舎はほとんど半壊状態。戦いがあつたと見えていい。

「……今なら簡単に直せるか」

実数干渉を使って現実に干渉し、半壊した隊舎を元通りに戻す。
今まで世話になった愛おしい場所。それを直し終えて、

「……テルミナス……！」

敵の名を叫ぶ。

実力は向こうが上。一対一で勝てる相手ではない。
だからと言って退くつもりなど毛頭ない。

そう、序列二位を斃せるチャンスが来たと思えば良いだけの事。

「ルシル」

突然名前を呼ばれても驚かない。この声の主は知っている。
彼女の声で、私は名を何度も何度も呼ばれているから。
振り返る。そこにはやはり彼女がいた。

「フエイト」

執務官としての黒い制服。そして手にしているのは起動した“バル
ディツシュ”。

すでにテルミナスに操られていると見ていい。

（すまない。私たちの闘いに巻き込んでしまつて……本当にす
まない）

声には出さないが、心の底からの謝罪を告げる。

「……クスクス。ねえルシリオン、踊りましょう」

「テルミナス！！ 貴様……！」

クスクス、テルミナスの笑い方のクセ。

間違いなくフェイトは、そしてなのはたちも操られている。

デイバインバスター・エクステンション

「つく……！」

上空から襲い来る桜色の集束砲撃。

（ああ、知っているものだ。なのは……君なんだろう……）

干渉を使ってフェイトを巻き込まないように障壁を張る。

難なくなのはのバスターを防ぎきつた。干渉を超えるには干渉でな
くてはならない。

魔法で今の界律わたしの守護神を斃すことは不可能だ。が、

（テルミナスにそれが分からないわけがない）

何か策があると見て間違いない。

「ルシル。さあ私と一緒に踊ろうよ。クスクスクスクス……」

「フェイトの声で……」

干渉を使って、フェイトを操っている終極キサマを引っぺがす。

「貴様の笑い方をするな！！」

右手を伸ばし、フェイトの体に触れようとしたとき、

フリーレン・フェッセルン
凍てつく足枷

リインが使う氷結魔法の一種が私を捕えた。

氷に閉じ込められるなんていつ以来の事だろうか。

そして氷の檻の中を見た。

ユニゾンしたはやてとリインが、フェイトの隣に降り立つのを。それに続き、背後になのはが降り立ったのが気配で分かる。

「ルシル君……」

なのはとはやてが攻撃態勢に入ったのが分かる。
だから、

イフリート
炎人招来

炎熱系下級魔術を使って、私を閉じ込める凍てつく足枷を吹っ飛ば

す。

その衝撃で、フェイトたちも後方に弾き飛ばされたのが見えた。

「……もういい。彼女たちを解放してやってくれ……テル
ミナス」

どこかにいるであろう本体テルミナスに向け、私は静かに告げた。

ミッドチルダ北部廃棄都市区画

「なんで……!? なんで!？」

レイストーム

真紅の両翼を羽ばたかせ、地上すれすれを飛行するテストメント・シャルロツテ。

その彼女に追い縋るのは、オットーのISレイストーム。幾条もの緑色の光線が、テストメント・シャルロツテを撃たんと走る。

逃げの一手を取る彼女の表情には焦りと困惑が浮かんでいた。

「随分驚いているようだけどさあ、どうしたんだあ三番」

姉妹たちとテストメント・シャルロツテの戦いを観戦するベッカートゥム“大罪”
からの野次。

テストメント・シャルロツテは一睨みしつつ、連続ロールで光線を全弾回避。

そして、急停止してのターン。

「IS発動ツインブレイズ」

「IS発動スローターアームズ」

「IS発動ライドインパルス」

そこにデイド、セツテ、トーレが同時に、失速したテストメント・シャルロツテへと仕掛ける。

それを迎撃するため、テストメント・シャルロツテは“第三聖典”で三人の刃を受け止め、

「やっぱり・・・つく、干渉能力・・・。どうして!?!」

テストメント・シャルロツテの表情が歪む。

本来なら契約執行中の彼女がここまで苦戦するようなことはない。

そもそも戦いにすらならないことこそが絶対なのだ。

しかし、今の彼女と姉妹の戦況は拮抗していた。

「どうしてこの娘たちが干渉能力を使ってるの!?!」

それが最大の原因。“テストメント界律の守護神”と“アポリュオン絶対殲滅対象”のみが扱える絶対なる能力。

その干渉能力を、下位存在たる人類の階位として定められた姉妹たちナンバースに使えるわけがなかった。

しかし現に姉妹たちは干渉能力を使用し、テストメント・シャルロツテを追い詰めていた。

「このおおおつ!?!」

テストメント・シャルロツテは、三人の干渉を上回る干渉を使って三人を弾き飛ばし、トーレとセツテを廃棄ビルに叩きつけ戦闘不能に追い込む。

そしてデイドは、オットーのいる方へと弾き飛ばし、オットーと激突させ、両者を沈黙させた。

「はぐ、随分優しいじゃないの三番。普段なら木端微塵のバラバラにするのに。」

俺にもそれくらい優しくしてほしいもんだねえ」

「黙れ二級品。この娘たちを止めたら、次は セインっ!?!」

「ISデーパーダイバー」

テストメント・シャルロツテの両足を掴んだセイン。
そして、

イノームスカノン

オーバードेटネイション

エアリアルキャノン

テストメント・シャルロツテに向けて、遠距離攻撃が三方向から襲いかかる。

ハイリヒ・フライハイト
「っ、真楯!?!」

干渉が上乘せされた防性術式が、彼女の全方位に展開された。

そして大爆発が起き、激しい爆風と砂煙によって視界が閉ざされる。

「どこに行った・・・？（なんだ？ 私たちは何故シャルロツテと戦っている！？）」

チンクは砂煙によって対象であるテストAMENT・シャルロツテを見失った。

と同時に、自分の意識を取り戻した。

「デイエチ、見えるっスか？（な、なんスかこれ！？ どうしてあたらシャルロツテと戦ってるっスか！？）」

「ノイズが酷くて確認できない（なんで！？ どうしてこんな・・・！？）」

次々と自分を取り戻していく姉妹たち。ナンバースしかし、

クスクス。もう意識を取り戻したの？ 人形のクセして結構魂が強いよね

（（（（（！！？））））））

突如頭の中に響いた他人の声に、姉妹たちは混乱しだす。

クスクス。もうしばらく私の駒でいて

「（冗談じゃ）しまっ」

「ごめん、デイエチ・・・！」

風牙烈風刃

砂煙に紛れて突進してきたテストメント・シャルロットは、一番近くにいたディエチへと“第三聖典”を振るい、彼女の固有武装“イノメスカノン”を圧碎、彼女自身も吹き飛ばし気絶させた。

「おらあああああ！！！！（なんなんだよこれ！？ 体が勝手に動いちまう！！！！）」

「っ、ノーヴェ・・・！！」

「おおおおお！！！！（避けてくれ！！！！）」

ノーヴェが、自身の固有能力エアライナー上を疾走しながら、テストメント・シャルロットへと奇襲。
テストメント・シャルロットは咄嗟に“第三聖典”を盾にして、ノーヴェの“ジェットエッジ”の一撃を防ぐ。
が、

フローターマイン

ウエンディが展開した無数の反応弾がテストメント・シャルロットを包囲。

中らなければどうってことはない。
しかし、ノーヴェの一撃を防いってしまったことで、その衝撃に耐えきれず弾き飛ばされてしまい、

「しまった・・・！！！！」

直撃だった。約30近い反応弾が一気にテストメント・シャルロッ

テを襲い、彼女の干渉による防御を破った。
何度も巻き起こる爆発と砂煙。

「やったか！？（シャルロッテ！？）」

「直撃っス（もう・・・もうやめてくれっス！！）」

「IS発動ランブルデトネイター（やめろ！くっ、やめろっ！！）」

必死に自らの動作を止めようとするチンクたち。
だが、^{テルミナス}終極の絶対操作という干渉能力に隙はなく、意識を取り戻して
いようが、ただ見ていることしか出来なかった。

「オーバーデトネーション（っ！頼む、逃げてくれ！！）」

砂煙の中にいるであろうテストAMENT・シャルロッテを包囲するよ
うに、チンクの固有武装“ステインガー”が無数に現れる。
そしてチンクが指を鳴らし、全弾テストAMENT・シャルロッテを襲
撃。

さらに強大な大爆発を起こした。

「あー、これで決まったかぁ・・・ やっぱり^{テルミナス}終極様の干渉は凄
まじいねえ。
^{ニンゲン}罪人にすら干渉を扱えるように操作するってんだから」

それこそが^{ナンバーズ}姉妹たちが干渉能力を使用している理由だった。
^{ナンバーズ}下位の存在に、上位の^{テストAMENT}“界律の守護神”にダメージを負わせる方法、
即ち干渉能力を持たせる。

そして、その策は上手いきき、テストAMENT・シャルロッテに苦戦

を強いていた。

「……あゝらら。そう簡単に落ちるわけないよなあ三番。さつすがあ！」

“ベックカートラム大罪”の視線の先、砂煙が晴れたそこに、両翼は吹き飛び、左腕が根元から消滅しているテストメント・シャルロットが佇んでいた。表情は俯いていて分からないが、明らかに怒りの雰囲気を醸し出している。

そして次の瞬間にはすでに左腕は元通りに修復され、何事もなかったかのように、ただ、

「ごめん。巻き込んで……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ナンバーズ姉妹たちに謝罪した。

そして“第三聖典”を掲げ、一気に振り下ろし地面に突き刺した。

遙かに遙か、白の真白の、高き夢々、汝よ祈れ

テストメント・シャルロットの干渉が地面を伝わり、残りと倒れたナンバーズ姉妹たちを遙か上空に吹き飛ばし、強制転移で施設組は先端医療技術センターへ。

拘置所組は本局へと送った。

「第一ラウンドはガラクタ人形共の負けかあ。ま、当然だよなあ。それじゃあ三番。第二ラウンドだ」

「っ！……くズめが……！」

第二ラウンド。その相手を見て、テストメント・シャルロツテの表情は今度こそ怒りに歪んだ。

「クロノ、ユーノ、アルフ、ギンガ・・・ルーテシア・・・」

テストメント・シャルロツテの視線の先、彼女の友人たちの姿があった。

十字架を背負いし神意の執行者 (Predestination) (後書き)

一度区切ります。

十字架を背負いし神意の執行者 〱Waier〱

ミッドチルダ中央区 機動六課隊舎前海上

「紫電一閃!!」

拉致され、負ったダメージを修復されたアギトとユニゾンを果たし、二対の炎翼を背負うシグナム。

その彼女の持つ炎の魔剣“レヴァンティン”の刀身に紅蓮の炎が燃え盛り、テストAMENT・ルシリオンへと迫る。

「もうやめてくれテルミナス!!」

“レヴァンティン”の一撃を回避し、テルミナス終極へ何度目かの叫びを上げるテストAMENT・ルシリオン。

だが返事は来ず、その代わりとでも言うようにシグナムはすぐさま切り返し、再度“レヴァンティン”でテストAMENT・ルシリオンの首を狙う。

「くっ……シグナム……!!」

シグナムの剣速は確かに疾い。

が、それ以上の剣速を持つ相手と幾度と闘った事のあるテストAMENT・ルシリオンにとって、紙一重で回避することは容易くなくとも可能だった。

「レヴァンティン!!」

シグナムは鞘へと“レヴァンティン”を納め、カートリッジを一発ロード。
その構えを見知っているテストAMENT・ルシリオンは、すぐさま距離を開けた。
しかし、

「クスクス。ダメよ。もっと踊ってくれないと、私寂しいの」

フリースヴェルゲ

テルミナス 終極が、はやての口借りてそう告げる。

はやては、リインフォース？とユニゾンを果たし本来の力を得、そして終極からの干渉能力とポテンシャルの底上げを加えられた。
それにより、はやてを始めとする六課の隊長陣の実力は人間の領域を超えていた。

「私を滅ぼしたいのなら終極キサマ一体で十分だろう!!」

コト 轟き響け、バラキエル 汝の雷光

はやてから放たれた砲撃を、蒼雷の砲撃で相殺していくテストAMENT・ルシリオン。
お互いの干渉により、爆発することなく綺麗に消えていく幾条もの砲撃群。

『猛れ、炎熱!』

『「飛龍……一閃!!」』

抜き放たれた“レヴァンティン”は、シュランゲフォームとなり、

砲撃級の魔力付与斬撃としてテストメント・ルシリオンを狙う。刃が到達する前に、テストメント・ルシリオンは位相転移を行い、射線上より退避。

だが転移先には、ヴィータがすでに待ち構えていた。

「アイゼン！！ R a k e t e n f o r m いつつつけえええええええ！！！」

ラケーテンハンマー

ヴィータに心え、強襲形態であるラケーテンフォルムへと姿を変えた“グラーファイゼン”。

遠心力を十二分に利用した突撃。一瞬でテストメント・ルシリオンとの距離を詰め、その強力な一撃が振るわれる。

「っづ！！！！ぐううつ・・・・！！！」

ただでさえ強力なヴィータの一撃。

そこに干渉を上乘せられた事で、その威力はテストメント・ルシリオンの全力の中級術式クラスの攻撃力になっていた。

“第四聖典”と“グラーファイゼン”の接着点から激しい火花が散る。

そこに、

「「おおおおおおお！！！！！！」」

テストメント・ルシリオンの足元にスバルのウイングロードが走り、その上を疾走するスバルとエリオ。

気合の入った雄叫びを上げ、足止めを食らっているテストメント・ルシリオンへと接近。

のまま海底へと沈んでいったテストメント・ルシリオン。
そこへ、さらに彼を追撃するために、三人の影が海面に映る。

「レイジングハート」

B l a s t e r 2 n d . E x c e l l i o n B u s t e r .
S t a n d b y

なのはがりミッターを解き放ち、

「バルディッシュ」

T r i d e n t S m a s h e r . S e t u p

フェイトが左手を翳し、

「クロスミラージュ、モード3 M o r d 3 . B l a z e M o
d e フアントムブレイザー」

ティアナは“クロスミラージュ”を銃身の伸びた遠距離砲撃用へと
変えた。

そして、

「「シュート」」

「ファイア」

テストメント・ルシリオンへと同時砲撃を放った瞬間、

(((っ!?)))

三人は意識を取り戻した。が、砲撃はそのまま海底に沈んだテストメント・ルシリオンへと向かう。

三つの砲撃は海を貫き、大爆発を引き起こす。

三人の脳裏にさっきまでの戦いの記憶が浮かび、自分が今何を攻撃したのかを思い知る。

「レイジングハート、ブラスター3（うそ……ルシル君!?）
ちよ、待ってレイジングハート!」

All right . Blaster 3rd

「バルディッシュ、真ソニックフォーム。いけるね（いや……いや、こんなの……ルシル……!）」

「スバル、エリオ、キャロ。行くわよ（あ……あ……あたし……あたし……!）」

なのはたちを皮切りに、はやてたちも次々と意識を取り戻していく。

「あれだけで死ぬとは思えへん（うそや、こんな。ホンマに……ルシル君を……!?）」

（いやです……。こんなの……リインはいやです!）」

「アギト、火龍一閃いくぞ（か、体が言う事を聞かん……!）」

「おう！（くそっ、何なんだよこれ!? 勝手にあたしを動かすな!!）」

こつちも随分早い覚醒なのね。クスクス

この場にいる全員の中の第三者の音が響く。
もちろんその声の主は彼女たちを操る終極だ。テルミナス

クスクス。でも、まだ私とルシリオンのダンスに付き合ってもら
うから

「了解。（じゃねええええ！！ ふざけんな！ テメエ！）アイゼ
ン」

G i g a n t f o r m

“ グラーフアイゼン ” が巨大なハンマーヘッドを持つギガントフォ
ルムへと形を変えた。

（やめるアイゼン！ くそっ！）

クスクス。ほら、ルシリオンが姿を現すから、全員攻撃準備

テルミナス終極がそう告げたと同時に、海面からではなく遙か上空から、

「テルミナアアアアス！！！」

テストメント・ルシリオンが現れた。

海底から上空へと位相転移をし、負ったダメージを回復していたの
だ。

そしてその背には22枚の蒼翼。彼は空戦形態となっていた。

「クラールヴィント、お願い（ダメ！ やめてクラールヴィント！

「！」

Ja

戒めの鎖

“クラールヴィント”のワイヤーによる拘束魔法が、テストメント・ルシリオンを捕えんと迫る。しかし彼は、迫るそれを自慢の神速機動で回避し、戒めの鎖は残像を捕えるだけとなった。

「おおおおおおお！！！！（やめろ！）」

鋼の鞭

ザフィーラの雄叫びに応えるように、彼の魔力光である白の拘束条が、テストメント・ルシリオンを貫こうと伸びる。

テストメント・ルシリオンは拘束条から逃れるために回避行動を取ろうとしたとき、

「フリード、ブラスト・レイ！（ダメ、フリード！ 撃っちゃダメ！）」

「キャロ！？ つぐうううう・・・！！！」

遠距離から、キャロとエリオを背に乗せたフリードリヒからの火炎砲撃が放たれた。

タイミングが完璧だったこともあり、テストメント・ルシリオンは回避出来ずに直撃を受けた。

(いやああああああ！！ ルシルさん！ ルシルさん！ ルシルさん！)

炎に包まれながら落下するテストメント・ルシリオン。
そこに向けて、

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。
(あかん！ そんなん受けたらルシル君が！！)」

(ダメです！ リインでも止められません！！ このままじゃ・・・
・このままじゃ！！)

はやての頭上にベルカ魔法陣が展開。周囲に6、中心に1つの閃光
が生まれ、

「石化の槍、ミストルティン！」

閃光の槍が7つ放たれた。
直接攻撃力は弱く、そして射程も短いが、生体細胞を凝固させる石
化の効果を持つ砲撃魔法。
7つの槍が一直線にテストメント・ルシリオンへと向かい、全弾直
撃し彼を石化させた。

「命中です(ルシル・・・さん・・・。こんな・・・こんなことつ
て・・・！)」

「追撃します(いや！ やめて！ もう動かないであたしの体！！)」

ティアナが、ガンモードへと戻した二挺の“クロスミラージュ”の

銃口をテストメント・ルシリオンへと向けた。
それに続き、ヴィータもギガントフォルムの“グラーフアイゼン”
を構える。

「クロスファイア・・・(ダメ、クロスミラージュー!)シユート!
!」

32発の誘導弾を一斉掃射。石化し落下するテストメント・ルシリ
オンを全方位から襲撃。

一発の外れなく強襲したのをヴィータは見届けて、

「轟天爆碎!(やめろおおおおお!!!)ギガント・・・シ
ユリアアアアーク!!!」

所々が砕けたテストメント・ルシリオンへと、かつての戦いと同じ
ように“グラーフアイゼン”を振り下ろし、

「よし!!!)・・・あ・・・あああああああ!!!
!!!)」

粉々に粉碎した。バラバラになって海面へと落ちるテストメント・
ルシリオンだったもの。

それを見て、途方に暮れる機動六課の魔導師たち。

「クスクス。下手なお芝居は結構なの。姿を現してルシリオン。
(な・・・!!? そんな・・・アレだけ攻撃を受けて・・・無
事・・・!!?)」

自分の口から出る終極の言葉に、ただ信じられないと思うはやて。
その言葉に、一斉に警戒態勢に入る六課の魔導師たち。

そして、

「すまない。シャマル、ザフィーラ」

「「なっ・・・!?!」」

テルミナス
終極の言葉通り、傷一つとして負っていないテストメント・ルシリオンが姿を現す。

そのままシャマルとザフィーラの間干渉を撃ちこみ、その場を破碎、そして干渉による檻に閉じ込めた。

「クスクス。ほら！ やっぱり無事だった！（ルシル君・・・なんで・・・!?!）」

今度はなのはの口を借りて喋る終極。テルミナス

「クスクス。位相転移と干渉によって組み上げられた罠。

それくらい出来ないと界律テストメントの守護神の第四は語れない・・・」

テルミナス

終極の言う通り、テストメント・ルシリオンはミストルティンの直撃の0,000001秒前に、自身に重なるように罠を作りだし、それに紛れて位相転移。

そうすることで敗北を逃れていた。

「申し訳ありません終極。テルミナス（ごめんなさい、セインテスト君）」

（すまぬ、セインテスト・・・）

まずはシャマルとザフィーラの戦闘行動を停止。

そこに、

「剣閃烈火（まずい！ かわせセインテスト！！）火龍一閃！！」
（やべえ！ もう止められねエ！！）

シグナムの左手に剣を横した炎が立ち上り、シグナムはそれを横一閃に振るった。

襲い来る炎の斬撃。それをテストメント・ルシリオンは、

我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想

かつての戦友が有する術式や武装を取り出すための呪文^{スベル}を唱え、

「借りるぞステア。吼えろ、劫火顕槍・・・シンマラ！！」

彼は、かつての戦友“白焰の花嫁ステア”が保有していた神造兵装“劫火顕槍シンマラ”を取り出す。

あらゆる焰を支配する事が出来る、白炎に燃える穂を持つ三叉槍。

その“劫火顕槍シンマラ”で、シグナムの放った火龍一閃の炎を全て吸収した。

「すまない・・・！」

「っつ！（消え）（）」

そのまま位相転移を使いシグナムの背後へと回った。
しかし、

「アイゼン、^{フォルム・ファイア}第四形態！」

グナムは“レヴァンティン”を遠距離狙撃用のボーゲンフォームへと変え、直射型射撃のシュツルム・ファルケンを射った。その威力は融合騎烈火の剣精アギトのおかげもあり、かつての闇の書事件で使用した時の数倍に膨れ上がっている。超高速で飛来する矢をテストメント・ルシリオンは、

「……どれだけ謝れども許されないのは解っている」

“劫火顕槍シンマラ”を消したことで空いた右手を使い、迫ってきたファルケンを掴み取った。

さらに右手に力を込め、シュツルム・ファルケンを粉砕。

「（っ！）」

それを見て、シグナムとアギトの表情は驚愕に染まる。

その隙を突き、再度シグナムの背後へと位相転移するテストメント・ルシリオン。

その表情は、地球でアリサとすずかの二人と別れた時とは比べるまでもなくやつれていた。

「すまない。シグナム、アギト」

「っぐ……！！」

シグナムとアギトに干渉を撃ちこみ撃墜。そして干渉牢に閉じ込めた。

守護騎士ヴォルケンリッターを全騎撃墜。が戦いはこれでは終わらない。

「はあああああ！！！！」

テストメント・ルシリオンへと迫る黄金の閃光。
その速さはすでに空戦形態のテストメント・ルシリオンと同等、若しくはそれ以上。

「フェイト!? くっ、疾い!!」

フェイトのリミットブレイク真ソニックフォーム。

機動力に全てを注ぎ込むことで、防御力がゼロに等しくなったものの、その速度は他の追隨を許さない。

そして彼女が手にする“バルディッシュ”はライオットザンバー・ステインガー。

細みの片刃剣となったザンバーの二刀流とも言える形態。

フェイトの機動を邪魔することなくその威力を発揮する彼女の切り札。

「クスクス。その気になっていれば、もっと簡単に、そして早く倒せたのに。」

やっぱり私の計画通りに随分と優しく健気になったのね、ルシリオン。

(やめて! もう私の中から出てって!!) 「」

「計画通りだと!? 貴様の真の狙いはなんだ!?!」

海上を超高速で翔る蒼と黄金の二つの閃光。

そのあまりの速さに、^{テルミナス}終極によってポテンシャルが人間以上にまで高められたのはたちですら手を出す事が出来なideいた。

「クスクスクス。預言の内容を知らないの? そっか、うん。なら教えてあげる。」

私が一体何を望んでルシリオンを、ついでにシャルロットをこの次元世界に呼んだのかを」

ミッドチルダ北部廃棄都市区画

「あゝあ、今度こそダメか。ま、よく頑張ったほうさ」

“大罪”^{ヘッカートゥム}の視線の先、そこには両腕と左足を粉碎されたテストメント・シャルロットが氷漬けにされていた。

ユーノとアルフの補助。ギンガとルーテシアの遠近距離からの攻撃。そしてクロノの氷結の杖“デュランダル”による凍結。それに加え、上空から浴びせられる艦載砲。

果てにはクラウディアに搭載されていた“アルカンシエル”という反応消滅と空間歪曲による対象を殲滅する魔導砲。

テストメント・シャルロットは、それらを防ぐために干渉を使い、クロノたちを巻き込むまいとして盾となった瞬間、護ったクロノたちからの集中砲火を受け、ついに沈黙した。

「任務完了（シャル……。僕は……。僕たちは……。こんな……。！）」

操られながらも途中で意識を取り戻し、必死に抵抗したものの、その手でテストメント・シャルロットを凍結したクロノ。

その彼の瞳から涙が零れる。操られているからという言い訳はせず、自分の不甲斐無さを、無力さを、愚かさを呪って涙する。

それはユーノもアルフもギンガも同様。あのルーテシアですら自分の無力さに涙している。

「・・・随分と仲良くやってたわけかあ。悪いな、これも仕事でさ」

(ふざけんな！ あたしらの友達にこんな酷い事を！！)

アルフは必死に“大罪”^{ベッカートゥム}を睨みつけ、そして襲いかかるうとするが、体が言う事を聞かない。

「おい、そのの。止めを刺せ」

そう告げられたのはギンガ。

テストメント・シャルロツテ共々覆っている氷を粉碎しろ、と言外に命令された。

「はい（いや！ やめて！ もうやめてください！）」

抵抗するが言われるがままにテストメント・シャルロツテへと近づくギンガ。

左手に装着された“リボルバーナックル”が唸りを上げる。

(((シャル！！)))

ギンガが構え、テストメント・シャルロツテを粉碎しようとしたとき、

「これ以上私の友達を泣かすな！！」

自らを覆っていた氷を粉碎し、復活を遂げたテストメント・シャルロツテ。

すぐさま碎けて消滅していた両腕と左足を修復した。

目と鼻の先で粉碎された氷の破片にギンガがたじろぎ、その隙を突いてテストAMENT・シャルロッテがギンガを抱きしめる。

「ごめんね。こんなことになって、こんなことさせて。ホントに「ごめん」

「あ……シャル……さん……ごめん……なさ……」

干渉能力を使い、ギンガに巢食う終極の意思を消滅させた。

ギンガは終極の操作から解放され、深い眠りについた。

そのまま干渉による強制転移で、施設組の姉妹たちと同じく先端技術医療センターに送った。

「……大罪。楽に死ぬると思うな。ゆっくりとその体を端からバラバラにしてやる」

最大の殺気を大罪をぶつけるテストAMENT・シャルロッテ。

それにたじろぐ事なく大罪は指を鳴らし、六隻の戦艦に攻撃命令を送った。が、

「……あ？」

一切の反応が無い。この場の指揮権は全て大罪に与えられている。ゆえに終極の駒でも支配できる。それなのに駒である戦艦から一切動きが見えない。

何故なら、テストAMENT・シャルロッテは氷漬けにされていた間、操られた局員ではなく、戦艦の攻撃管制などの全システムを干渉によって乗っ取ったからだ。

「一体何が　　しまっ……ぐっ！」

つい上空に視線を向けてしまった大罪。^{ベッカートゥム}

もちろんその隙を見逃すはずもないテストAMENT・シャルロッテ。

位相転移で大罪の真横へと移動し、^{ベッカートゥム}“第三聖典”を横一閃。

その体を両断しようとしたが、咄嗟に気づいた大罪は干渉によつて組み上げられた剣で受け止める。

「チツ。今を受けていれば、貴様をもつと苦しませて逝かせられたものを……！」

「そりゃねえよ三番。俺ともう少し踊ってくれよ……！」

激しい鏝迫り合いの最中、大罪は余裕を見せる。^{ベッカートゥム}

たとえ引つ張つてきた戦艦が使えなくなろうとも大した被害ではないからだ。

「俺ばかりに注意してるとき、滅ぶぜその体！」

チェーンバインド

「っ！　ユーノ……！」

(シャル！　くそっ、くそっ！　もうこんなのは嫌だ！！)

テストAMENT・シャルロッテを捕えたのは緑色の鎖。

それは彼女にとって、この世界に来てから初めて出来た親友の一人ユーノによるものだった。

「う……ぐっ……！！　やっぱり堅い……！！」

ただでさえ補助系魔法に優れたユーノ。
その彼の魔法に干渉能力が上乘せされ、その効果はさらに強固なものとなっていた。

「ザマあねえよな。あの剣戟の極致に至りし者が。・・・ハッ、生前は何だっけか？」

あー、剣神だったな、全ての剣士の頂点に立つたっつう。八八、そのお前が今はこうして下位の人間によって拘束されるってか。そそられるねえ」

（（生前・・・！？））

「黙れ！！」

「生前は戦争つっつう大義名分の中、幾多の命を奪い、テストメント界律の守護神としてもまた数千年という時間の中で殺戮し・・・」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！！！」

「それを黙って、その人間どもを騙して、楽しい楽しい日常に溶け込む、か。」

なあ三番よ。そんなんが許されるのか？ 人間の嫌う存在である人殺しのお前に？」

（（シャル・・・？））

「っ！！！！・・・もう・・・やめて・・・聞きたく・・・ない・・・。」

日常を・・・平穩を・・・幸せを願って何が悪い！！？

解ってる！ 私にそんな権利が無い事くらい！ それでも望みたい、日常を！

願いたい、平穩を！ 手にしたかったんだ、幸せを！！」

ベッカートゥム
大罪の言葉に、ついに心に大きな傷を入れられたテストメント・シャルロッテ。

膝が折れ、ただ迷子になった子供のように泣きじゃくる。

「……………すでに死んでいるお前には無理は話さ」

「もう……もうユーノたちに聞かせないでええええええつ！！」

テストメント・シャルロッテから強烈な干渉が全方位に向けて放たれる。

それはある意味暴走に近い状態。知られたくなかった事ばかりユーノたちに聞かれての精神錯乱。

「ぐおっ!?!」

指向性の無いテストメント・シャルロッテの干渉を受け、下半身が一瞬で光の粒子となり消滅した大罪。ベッカートゥム

上半身だけのまま転移し、テストメント・シャルロッテから逃れようとする。

「何をしている！ 俺をサポートしろよ!!」

「……はい（（冗談じゃない!!）（（「「「」

だが、未だに終極から解放されない三人は、テルミナス為す術なくテストメン

チエーンバインド

ユーノとアルフの拘束魔法が、再びテストメント・シャルロットを捕えた。

(ごめんよシャル!! でも、体が・・・!)

(僕は・・・。シャル!!)

「はあはあはあはあ・・・。ごめん。ごめんなさい。ユーノ、アルフ。クロノも。」

泣かないで・・・ごめんね・・・本当に・・・ごめんなさい・・・

┌

((シャル・・・))

涙を流し続ける三人に、優しい笑みを見せるテストメント・シャルロット。

しかしその笑みは泣き笑い。彼女もまた涙を流し、必死に笑顔を作っていた。

(冷静になれ。まずはクロノたちを終極から解放する事が優先だ。

それに、さつきから姿を見せないルーテシア。あの子は一体どこに

・・・?)

テストメント・シャルロットは怒りを理性で無理やり抑え込み、現状を再確認する。

ギンガを元に戻せた事から、クロノたちも元に戻すことは可能。

そしてルーテシア。彼女だけが先程から全く姿を見せなくなった。

由を掴み取って、そして幸せそうに笑う事が出来るようになったレヴィ。

その彼女がもうこの世界に存在しないという事に。

「どこまで……」

「あ？」

「どこまで貴様らはあああああああッツ!!!!!!!!!!!!!!」

先の暴走以上、しかし今度は指向性のある干渉を周囲に巻き起こし、

「コッつ!?()(うあああああ!!!)()」「」「」

クロノ、ユーノ、アルフの三人を吹き飛ばし、上空で拘束。

「今、解放するから、少し待ってて。真技……!!」

飛刃・翔舞十閃

取り出した鞘へと“キルシュブリューテ”を納め、抜刀と同時に真技飛刃・翔舞十閃を放つ。

テスタメント・シャルロットの強力な干渉によって身動きが取れなくなっていた大罪は、無理やり転移することで左半身の犠牲だけで完全消滅を免れた。が、

「真技……牢刃」

彼女は位相転移によって背後へと回り、もう一つの真技牢刃・弧舞八閃を発動。

鞘に納められた“キルシュブリューテ”を抜刀する。

「 弧舞八閃……！！！」

桜色の剣閃が八つ。その全てが大罪の残り右半身を通過した。

「……………あー、また……俺の……負け……か……
よ」

「そのまま逝かせてなるものか！ 真技！ 飛刃・翔舞十閃！！！」

大罪が消滅する前に、さらに真技飛刃・翔舞十閃を叩きこみ、

「我が魂の前に敵は無し……………」

その手で完全に大罪を消滅させた。

十字架を背負いし神意の執行者 〵Waier〵 (後書き)

大罪、さよなら。

十字架を背負いし神意の執行者 〈Truth〉

ミッドチルダ中央区 機動六課隊舎前海上

「私を・・・私たちを呼んだ・・・？」

「クスクス。そう、私があなたとシャルロットをこの次元世界に呼んだの。」

「10年前のジュエルシード。あれをユーノ・スクライアに発掘させたのは私。」

「ブレシア・テストロッサにジュエルシードの情報を与え、貨物船を攻撃させたのも私。」

「ジュエルシードを地球という世界に落とし、高町なのはとユーノ・スクライアを出会わせたのも私。」

「そしてあなたとシャルロットを呼んだ。高町なのは、ユーノ・スクライア、フェイト・テストロッサ、アルフ。そして時空管理局と出会わせたるために」

^{テルミナス}
「終極から語られた真実。」

「テストメント・ルシリオンとテストメント・シャルロット、なのはとユーノ、フェイトとアルフ、時空管理局との出会い。」

「その全てが終極^{テルミナス}が仕組んだ事だと。」

「バ、バカな・・・そんな事が出来るわけが　ぐあっ！」

「（ルシル！？　もうやめて！　これ以上ルシルを、私の手で傷つけさせないで！！）」

あまりの内容に、つい動きを止めたことでフェイトの一撃を受けた
テストメント・ルシリオン。

だが致命傷にはならず、すぐに負ったダメージが修復される。

「クスクス。そして夜天の魔導書。あれもそう。

八神はやての元へと転生するようにしたのは私。

グレアム提督とかいうのに、八神はやての元に魔導書があることを
教えたのも私。

そしてルシリオン達と八神家を出会わせたのも、もちろん私。全て
私」

再度超高速の攻防戦が始まった。

そんな中でもフェイトの口を借りて余裕で語りだす終極^{デルミナス}。

(そ・・・そんな・・・)

「そしてレリックとジェイル・スカリエツティの一件。それも私。

だから大罪を^{ベッカートゥム}、観察用と界律干涉の紋様を描かせるために送りこん
だの。

結局あまり役に立たなかったし、裏切り者も出てくる始末。

あとカリム・グラシアの預言者の著書の予言の内容も私^{プロフェーティン・シュリフテン}。

聖王のクローン、ヴィヴィオ。あの子もまた私の駒たちによって生
み出された。

あーそれと、ここ二年間と最近の契約も私の監修。どうだったルシ
リオン？

つまらない契約の数々、楽しめた？ クスクスクスクスクスクスク
スクスクスクス」

「何故・・・何故そこまでして!?!」

フェイトの“ステインガー”を“第四聖典”で捌きつつ、怒鳴るテストメント・ルシリオン。
今の彼には戸惑いしかなく、その動きも速さも、全てがフェイトを下回るようになってきた。
次第に増えていく傷、傷、傷。

「クスクス。それこそ私の目的のため！」

優しい優しいルシリオンの事だから、10年もこんな楽しく幸せな時間を過ごせば、きっとその心は満たされているはず！

そこに、その心を根こそぎ破壊するような出来事が起これば、あなたはきつとまた^{わたしたち}霊長の審判者の仲間になる！」

つまり、^{テルミナス}終極の最終目的は、テストメント・ルシリオンを斃すことではなく、

「そのために高町なのはやフェイト・テストロッサたちと出会わせ、楽しい時間を与えたの。

あなたの心を満たすためだけの時間を！そして今、この時、その全てを奪い取って、あなたの心を修復不可能なまでに破壊する！」

次元世界を滅ぼすのもまた本当の目的ではなく、

「全ては、ルシリオン！あなたを玉座にいる本体ごと完全な^{アーミティムス}亡失にするため！

そのために！私は！あなたにこの世界での10年を与えたの！
！」

テストメント・ルシリオンの心を破壊することで再び墮とし、完全^{アーミティムス}に亡失とする事。

(っ!!)

「……そんな……私は……始めから踊らされて……いた……?」

(ダメ! 避けてルシル!!)

あまりの衝撃の真実に、ついにテストメント・ルシリオンの心にヒビが入った。

目が虚ろになり、動きを止めたことでフェイトの強力な一撃がその胸に直撃した。

「がつ!?!」

(いやあああああッ!!!!)

“ステインガー”の二つの刃がテストメント・ルシリオンを貫いた。フェイトの両腕を取り、自身の体を貫く刃を抜こうとするテストメント・ルシリオン。そのとき、

っ! 来た!

テルミナス 終極の「来た」という声がこの場にいる全員^{テルミナス}の耳に届く。

「ぐっ!?!……おおおおあああああああ!!!!!!」

フェイトを突き飛ばし、何かに耐えるように体を抱き、叫びを上げるテストメント・ルシリオン。

曇天より雨が降り始め、彼の頬に伝う雨はまるで涙のようだった。

(ルシル!? ルシル!!)

「くそ……やめ……ろ……!」

ミッドチルダ界律より天秤の狭間で揺れし者へ

契約執行を妨害せし人間 緊急時につき それらの抹殺を契約に追加
直ちに妨害者を殲滅し 招かれざる破滅の使徒終極を討て

「いや……だ……」

界律よりテストメント・ルシリオンへと下される契約執行を妨害する
フェイトたちの抹殺命令。

彼はそれを否定してしまい、その意識の支配権を界律に奪われよう
としていた。

クスクスクス。 やつと来た。 さぁルシリオン。

その手で愛おしき者を殺し尽くし、その心を完全に失って!!

「っ! それが……貴様の狙い……だったのか……!」

私に……親しくなった……フェイトたちを……殺させること
で……私の心を破壊する。

そのための10年……ふざけた……真似を……!」

彼の者が下せし定めには如何なるものとして逆らえず

かくして現し世に滅びが為の使徒が満ち足りん

その滅びが音断つたるは、遙かに貴き至高の座より舞い降りたる者
十字架を背負いて、其に仕えし使徒と相見えん

ここまで予言通り。 テルミナス 終極の書いたシナリオ通りに事が進んでいた。

そして、テストメント・ルシオンとフェイトが動きを完全に止めたことで、なのはたちも再び戦闘に参加する。
まず行動を再開したのはスバルたちフォワード。

「クロスミラージユ、モード2！（もう・・・いや・・・）」

Set up · Dagger Mode

ティアナも、

「行くよマツハキャリバー！（なんで・・・こんな・・・）」

All right buddy · A.C.S · Stand
by

スバルも、

「キャロ、サポートお願い。ストラダーダ！（もう・・・）」

Form Dri · Unwetterform

エリオも、

「うん！ 猛きその身に、力を与える祈りの光を。」

ブーストアップ・ストライクパワー！（ルシルさん・・・こんな
のいや・・・）」

キャロも、^{テルミナス}終極に操作され、テストメント・ルシオンとの強制戦
闘によつて、彼女たちの心もまた傷を負っていた。

「エリオ・・・キャロ・・・スバル・・・ティアナ・・・」

ウイングロードを疾るスバルとティアナ。フリードリヒに乗り接近するエリオとキャロ。

「ダメだ・・・逃げ・・・る。逃げろ!!」

テストメント・ルシリオンが四人に「逃げろ」と叫ぶ。

次の瞬間、彼から強烈な干渉が発せられ、スバルたち四人は弾き飛ばされた。

テストメント・ルシリオンは苦しみに耐えながらも四人を強制転移させ、シグナムたち同様干渉牢へと閉じ込める。

「くっ・・・!」

意識を界律に乗っ取られないよう耐えるテストメント・ルシリオン。その彼を包囲するのはなのは、フェイト、ユニゾン中のはやとりインフォース?の2人。

そして、

プラズマランサー

アクセルシューター

フェイトと少し離れた位置にいるなのは射撃魔法が、テストメント・ルシリオンを強襲する。

必死に界律に逆らいながら、空を翔け、二人の射撃魔法を回避し続けるテストメント・ルシリオン。

そこに、

「遠き地にて、闇に沈め。デアボリック・エミッションー!!」

「つぐううう・・・! (手加減は無しか・・・!)」

はやての放った広域殲滅魔法がテストメント・ルシリオンを直撃する。

テストメント・ルシリオンの干渉防御とはやての魔法がお互いの干渉を食い合う。

デアボリック・エミッション内部で防御に専念する彼へとさらに追撃弾が襲いかかる。

Divine Buster

Plasma Smasher

テストメント・ルシリオンを挟むように、彼の両側より、なのはとフェイトが砲撃魔法を放つ。

ブラスタービット四基と“レイジングハート”からの同時五連砲撃。フェイトの前面に展開された黄金のミッドチルダ魔法陣からの雷撃砲。

テストメント・ルシリオンは干渉防御を抜かれる前に、右腕を犠牲にし、位相転移。

三人の攻撃から離脱。

すぐさま右腕を修復して、意識が落ちそうになりながらも三人を檻に閉じ込めようとしたとき、

プラズマアーム

「っ！？ ヴィヴィー がはあっ！」

（（ヴィヴィオ！？））

かつてと同じように聖王の姿となったヴィヴィオが憶えていたフェイトの魔法を発動。

その雷撃を纏った拳をテストメント・ルシリオンの胸部へ叩きつけた。

「クスクス。この子もまた私の支配下なの。当然よね。

ある種、私が生みの親なのだし（ルシルパパ！ ルシルパパ！）」

デルミナス
終極がヴィヴィオの口を借りそう告げる。

そしてヴィヴィオの猛攻は止まらない。

位相転移行使の隙を与えないように、高速かつ連続で、その雷撃を纏った拳撃をテストメント・ルシリオンの張る干渉防御に叩きつける。

（やだ！ ルシルパパを傷つけないで！！）

「くっ・・・！」

一瞬の隙を突き、ヴィヴィオの攻撃範囲から逃れるために位相転移。しかし、やはり逃れた先にも攻撃の手がすでに用意されていた。

「刃以って、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー！」

術式名の通り血の色をした短剣が、40以上という物量を以ってテストメント・ルシリオンを強襲。

それを高速機動で回避するも、今の彼以上の速度を持つ黄金の閃光

フェイトが追撃する。

「フェイト……！」

「クスクス。その何とも言えない、複雑な感情が混じる表情おああすごく、すつごくドキドキするの

やっぱり私の長年の計画は確かだった。あなたは優しいの、すごく。だから、だからこそ^{テストメント}界律の守護神はあなたの居場所じゃないの」

「それ以上フェイトの口から言葉を発するな、テルミナス……！」

プラスマランサー

“ステインガー”による直接攻撃と魔法による援護射撃。
テストメント・ルシリオンは“第四聖典”と、

^{コード}殲滅せよ、^{カマエル}汝の軍勢

魔術によって、フェイトの攻撃を捌いていく。
そのとき、

クスクスクス。もうひと押し

^{テルミナス}終極の音が響く。

「ヴィヴィオ!?」

彼はフェイトの猛攻を防ぎつつ、ヴィヴィオの様子が変わった事に気づき、ヴィヴィオの名を叫ぶ。

ヴィヴィオは^{テルミナス}終極の干涉能力によって作りだされた剣を手にしてい

「っ!?! つがあつ!」

はるか上空から急速降下し、テストメント・ルシリオンの左頬へとゼロ距離射撃を撃ちこんだヴィヴィオ。

ヴィヴィオの衝撃的な姿、界律からの意識乗っ取り、今までの精神疲労によって何もすることが出来ずにまともに受け、彼は再度海面と叩きつけられ沈んだ。

クスクスクス。今のは偽者でした

先程の、剣を自らに突き立てたヴィヴィオは終極テルミナスによって作られた偽者。

干渉能力の応用力がひと際高い終極テルミナスにとって、人間一人作ることは容易いものだった。

「レイジングハート、スターライトブレイカー!」

(っ!?! スターライト!?! そんなの受けたら今度こそルシル君が!?!)」

All right・Starlight Breaker
ex fb・Standby

ブラスタービット四基と“レイジングハート”が、なのはの最強の魔法スターライトブレイカーを放つため、周辺に満ちる魔力を集束していく。

「響け終焉の笛……(なっ!?! あかん! そんなんあかん!?!)」

はやてもまた、彼女の最強の魔法ラグナロクを放つための準備に入

ポロポロと涙を流しているのを。彼は歯がみする。
全てが自分を原因としてそこに在った10年間。
楽しかった時。苦しかった時。様々な時を、全て終極テルミナスによって与えられた。
それもこの与えられた悲劇の戦いの果て、彼が全てを殺し、壊し、滅ぼすためだけに。

高速でテストメント・ルシリオンの背後へと回り込んだフェイト。
彼女はそのままの勢いを殺さず、“カラミティ”でテストメント・ルシリオンを背後から貫いた。

「あゝっ……!!」

彼の背中から胸へと突きぬける黄金の雷剣。

「（あ……あ……ああ……いやだ……こんな……ルシル……こんなの）
いやああああああああああ!!……!!」

なに!? 私の絶対操作を自力で解いた!?

絶対の支配を、下位の人間が自力で解いた事に驚愕の声を上げる終極テルミナス。

（ルシルパパ!? うそ……うそ……やだ、ルシルパパー
ー……!!）

ヴィヴィオが攻撃の必要性が無いとでも言うように、テストメント・ルシリオンから距離を取る。
その瞬間、

が雨に混じって降り注ぐ。

「『『『いやあああああああああ！！！！！！』』』」

クスクスクス・・・ウフフフ・・・アハハハ・・・ハハハハハハハ！！！！

アーツハツハツハツハハハハハ！ ハーツハツハツハツハツハツハツハ！！！！

慟哭の涙、歓喜の絶唱、憤怒の叫びの音が乱れ流れるその終の果て

さあ！ 界律から解き放たれて、人間共々世界を滅ぼしなさいルシリオン！！！！

狂いたる真の黒き者によりて、現し世は真に終極へと進まん

十 十 十 十 十 十 十 十

「あとは、クロノたちを元に戻せばいいだけね」

私の干渉によって空で拘束されているクロノたちを見上げる。

このたった数十分の間に、私の事をほとんど知られた。

もう死んでいる事とか。多くの命を奪ってきた事とか。

ゆっくりとクロノたちを降ろす。

ペッカートウムのクズ野郎を斃したけど、テルミナスの支配はまだ残ってるはず。

そこに注意しながらゆっくりと、慎重に降ろしたクロノたちに近寄る。

そのとき、

「があっ!?!」

私の体を背から貫く水色の魔力刃。これはクロノのスティンガーブレイド。

油断した。まさか、干涉拘束されているクロノがまだ攻撃してくるなんて。

操られているとはいえ、これはさすがに反則……。

私の干涉拘束が弱まるのが分かる。

これはかなりまずい。ペッカートゥムとクロノたちに力を使い過ぎた。

「デュランダル OK Boss 悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ」

干涉拘束から抜け出したクロノが、“デュランダル”を手にして詠唱を始めた。

(まずい! 確かこの詠唱は、闇の書の時の……!)

10年前の聖夜を思い出す。アレは結構レベルの高い凍結魔法だ。

正直な話、今の弱った私に防ぐ術はない。

意識が飛ぶと、契約執行に問題ありと見なされて界律に体の支配権を奪われる。

そうになると、私の手でクロノたちを殺すことになる。

「冗談じゃない……!」

急いで私を貫いて地面に縫いつけている魔力刃を破壊しようとしたとき、

「フープバインド!!!」

また！ またユーノとアルフの拘束魔法が私を拘束するの!？

「づあ!?!」

クロノの持つ“デュランダル”が私に胸に突き刺さる。

ゼロ距離からの、内部からの凍結魔法。これを受けたらさすがに終わる。

「・・・や・・・いや・・・やだ・・・やだよクロノ!!」

名前を呼んだところでどうにもならないのは解ってる。

「エターナル・・・」

「いや!!」

内部が侵食されるのが分かる。

凍結魔法が完全発動しようかとするそのとき、

「コフイ　ぶっ!?!」

「・・・え?」

クロノが“デュランダル”もろとも吹っ飛んだ。

助けられた？　誰に？　今の状況で味方と言えばルシルくらいのも

の。

でも、そのルシルはここにはいない。だったら・・・？

「今度はわたしが助ける番」

「レヴィ！ ルーテシア！」

いつの間にかユーノとアルフがバインドのような物で雁字搦めにされて倒れていて、その傍にルーテシアとレヴィが立っていた。

それにルーテシア。あの様子からして、もうテルミナスから解放されているようだ。

どうしたのかレヴィにいろいろと話を聞きたいけど、今はクロノたちを解放することが先だ。

「クロノ・・・ごめんね」

気絶したクロノを抱きしめて干渉を流し込む。

思いつ切り攻撃を受けた所為か、頭にタンコブが・・・その・・・ごめん。

「ユーノもごめんね」

今度はユーノ。ホント、ルシルと同じように童顔ていうか女顔というか。

昔から可愛い顔をしてるよね。

「・・・アルフ。態々地球からごめんね」

テルミナスかペッカートゥムに連れてこられたか・・・。

どっちにしても迷惑をかけたことには・・・って、

「エイミイたち大丈夫かな!？」

殺されたと考えるのは早計だとは思う。

私を、友達たちと戦わせるために態々操ったテルミナス。だからきつと向こうも大丈夫なはずだ。

「……これでよし。ありがとうレヴィ。それにルーテシアにしても、まさかレヴィに助けられるなんて思いもなかったよ」

三人からテルミナスの意思が消えたのを確認。

そして、私の後ろで待っていてくれたレヴィとルーテシアに礼を言う。

「わたしはシャルロットとルシリオンに命を繋げてもらった。これくらい何のお返しにもならない」

「わたしは……ただ操られて、シャルロットを傷ついただけ。お礼じゃなくて、怒られるのが……だから、ごめんなさい」

レヴィはかなりポロボロにされているけど命に別条は無し。ルーテシアは気まずそうに、私から視線を逸らして俯く。

「怒らないよ。謝るのはこっち。巻き込んだんだもん、あなたを。姉妹たちも。

でもよかった、ルーテシアとレヴィが無事で。

でもさレヴィ!? 一体どうやってルーテシアを解放し っ!
!？」

何この感じ!?! これは……まさか……!

「ルシル!？」

機動六課のある方角を見据える。ここからすぐく距離はあるけど分かった。

あのルシルが落とされたことが……。

「まずい……まずい! 界律が……ルシルを支配する!!」

泣きわめく声が海上に響き渡る。

^{デルミナス}終極から用済みとされ、彼女たちは絶対操作から砲撃着弾と同時に解放されていた。

そのためフェイトが、なのはが、はやてが、リインフォース?が泣き叫ぶ。

ヴィヴィオは解放されたことで、元の子供の姿へと戻り、なのはに抱えられて気を失っていた。

そして、テストAMENT・ルシリオンの干涉牢が消滅し、シグナムたちも自由となり、荒れる海上をただ呆然と見ていた。

二大砲撃によって起こった爆発で、未だにテストAMENT・ルシリオンの生死は確認できない。

雨脚も次第に強くなり始め、空では雷鳴が轟いている。

フェイトがテストAMENT・ルシリオンを探しに行こうとするのを羽交い絞めにして止めるのはたち。

次第に高濃度の霧が晴れていき、海上の様子が視認でき始める。

そして、彼女たちの目に映ったのは、海に大穴が開いているという

凄絶な光景だった。

「……っ！ ルシル!?」

テストメント・ルシリオンの姿を捉えたのか、フェイトが穴の中心へと飛翔する。

はやては「フェイトちゃん!?」と戸惑いながらも、急いでフェイトに続く。

なのはヴィヴィオをシャマルたちに預け、フェイトとはやての後を追う。

「ルシル……!」

テストメント・ルシリオンのいる大穴を目指すフェイト。

「ルシル……!」

フェイトは、何度も何度も「ルシル」と呼び続ける。そして、

「ルシル!? ……ルシ　っ!! ……いや ……いやあ、ルシルう ……」

直径2 km程の大穴。その上空に来た事ですぐにテストメント・ルシリオンを見つけられたフェイト。

しかし、彼の変わり果てた姿を見て、フェイトは降り立つと同時に全身から力が抜けてしまい、その場へたり込んだ。

「ルシルく　っ!!　いやや ……こんなん ……いやや ……!」

「フェイトちゃん!? ルシル君は うそ・・・こんな嘘だよね・・・?」

そこに、はやてとユニゾン中のリインフォース?。そして少し遅れてきたなのは降り立つ。

なのははやては、フェイトと同様に変わり果てたテストAMENT・ルシリオンを見て、慟哭の声をこぼす。

「私が・・・ルシル君を・・・殺したんだ・・・」

「なのはちゃん・・・。ちやうよ。私もや。私も・・・ルシル君を・・・」

『リインもです・・・。リインも・・・リインも!』

彼女たちは自らの行いを責め始める。しかしその行為を誰も止めない。

その場に流れる沈黙。泣き声と雨音だけがその場を支配する。

「ルシル・・・」

フェイトが四つん這いのまま、テストAMENT・ルシリオンへと近づいていく。

ゆっくりと、想いを寄せる彼に近づいていく。

そこに、

「クスクスクス。結構派手にやられちゃったね、ルシリオン」

ローズピンクの長髪を波打たせながら、その姿を現した終極^{テルミナス}。

「……っ！!?」「」

テストメント・ルシリオンを挟み、フェイトたちと終極テルミナスの視線が合う。

しかし今度は怯むことなく、しっかりと意識を保ち、勢いよく立ちあがって、テストメント・ルシリオンを守るように覆い被さるフェイト。

なのはもはやても“レイジングハート”と“シュベルトクロイツ”を構える。

「よくも……よくもこんな……!」

精いつぱいの怒りと恨みを込めた視線を向けるフェイト。
テルミナス終極は、ただ笑みを浮かべ、

「クスクス。早くルシリオンから離れないと……死ぬよ?」

そう静かに告げた。すると、

「え……? なに……キヤアツ!?!」

「フェイトちゃん!?!」

突如テストメント・ルシリオンの体から発せられた銀色の閃光。その閃光によって、彼に覆い被さっていたフェイトが弾き飛ばされ、なのはとはやてに受け止められた。

「クスクス。次元世界を閉じる終極の鐘の音が、今鳴り響くの」

それを合図とするように、テストメント・ルシリオンの体が浮き上がる。

消滅していた両腕、下半身が瞬時に修復される。

「くくくつ！！」「」「」

その光景に絶句するなのはたち。

「さぁルシリオン。あなたの持つ力で、この世界の総てを滅ぼして。そして自身の心を壊すの。」

クスクスクスクスクスクスクスクスクスクス……！！」

テルミナス 終極のシナリオが最終段階に入る。

契約執行中、“テストメント 界律の守護神”の行いを妨害する者がいる場合、または守護神自身に問題が発生した場合、守護神は契約主である界律にその意識を乗っ取られる事がある。

それこそ終極テルミナスが望んだ事。

テストメント・ルシリオンと親しくなった者、今回はフェイトたち彼女たちを契約執行の妨害者に仕立て、その妨害者である彼女たちをテストメント・ルシリオンに殺させる。

そして、彼がその行為に絶望し、心を完全に壊し、暴走する事で再び亡失へと墮ちる。アーミティムス

テルミナス 世界の滅亡なんてものは、その単なる通過点に過ぎなかった。

終極テルミナスが何百年とかけ何度もシミュレーションし、ついに実行した計画。

それが今回の、ルシリオンとシャルロットが次元世界へと召喚された契約の真実だった。

目を閉じていたテストメント・ルシリオンが、その瞳を露わにする。焦点の合わない紅と蒼の瞳。彼から発せられ続ける銀の閃光。

「ルシリーーーーー!!!」

「ダメ、フェイトちゃん！ 危ない!!」

「フェイトちゃん！ 今行くんは危険や！」

フェイトがテストAMENT・ルシリオンに近づこうとするのを必死に止めるのはとはやて。

そして、強まる銀の閃光に應えるかのように、大きな地震がミッドチルダを襲う。

「もう少し。あと少しで、またルシリオンと一緒にいられるようになる。」

クスクス。嬉しいなあ、すごく嬉しいなあ」

両頬に手を添え、紅潮しながら嬉しそうにほほ笑むテルミナス終極。
そのとき、

「こんの……バカがああああああッ!!!!!!!!!!」

「ぐぐおっ!?!」

「……………?!」

テルミナス終極を含むその場の全員が絶句する。

何故なら、テストAMENT・ルシリオンを頭上から強襲し、思いつ切り踏みつけたテストAMENT・シャルロツテが現れたからだ。

「バカバカバカバカバカバカバカ……このカバがッ!!!」

やなくてバカがッ！！」

“第三聖典”でテストメント・ルシリオンをボコボコにするテストメント・シャルロット。

銀の閃光が次第に治まり始める。

「そんな・・・こんな馬鹿な事が・・・！」

^{テルミナス}終極がうるたえる。あまりの力技で計画を阻止されようとしているからだ。

すぐさまテストメント・シャルロットを止めようと動くが、^{テルミナス}終極の背後から、完全解放された“キルシュブリューテ”が襲撃してきた。^{テルミナス}終極はそれに気づき、“キルシュブリューテ”の剣先を真っ向から殴り飛ばして粉々に破壊する。

しかし、その動作で生まれた隙を見逃さなかったテストメント・シャルロットは、全力の干渉攻撃を放ち、

「沈めえええええつ！！！！」

^{テルミナス}終極を、いや、^{テルミナス}終極の幻影を粉碎した。

相手が幻影だからこそそのテストメント・シャルロットの勝利だが、もし本体であれば彼女が返り討ちにあっていたのは言うまでもない。

クスクス。折角書いたシナリオを潰してくれちゃって。はあ、仕方ないなあ。

なら、私自らがこの世界とその人間共を滅ぼして、ルシリオンに絶望を抱かせる。

それまで、最後の時間を楽しみなさい。クスクスクスクスクスクス

消滅する瞬間に、そう残した終極^{テルミナス}の幻影。

それと同時にテストメント・ルシリオンから放たれる銀の閃光が完全に消失。

ミッドチルダ全体を揺るがす地震も治まった。

何はともあれ最初の世界の危機、予言の成就是防がれた。だが、

「……次はテルミナス本体が来るわけ、か……」

テストメント・シャルロツテの言う通り、序列二位たる終極^{テルミナス}の本体が、時間を置いて来る。

「ルシル！」

フェイトが倒れているテストメント・ルシリオンへと駆け寄る。そして何度も彼の名前を呼び続ける。

「……く……あ……フェイ……ト……?」

うつすらと目を開け、彼女の名を口にするテストメント・ルシリオン。

それを聞き、今度は悲しみの涙ではなく嬉し涙を流して、フェイトはテストメント・ルシリオンに抱きついた。

「ルシル！ ルシル！ ルシル！ ルシル！」

その光景を離れたところで見ているのはたち。

彼女たちも嬉し涙を流し、安堵の表情を浮かべている。そして、

「・・・もう黙ってるわけにはいられないよね。ここまで巻き込んだ以上は話すよ。」

私とルシル、テルミナスが何なのか。全部、その真実を教えるよ・・・」

決意した表情のテストメント・シャルロツテが、なのはとはやてに振り向き、そう告げた。

自分たちの隠してきた正体、その真実を語ると。

十字架を背負いし神意の執行者 〈Truth〉(後書き)

「ティアナの思い　なのはの願い」の最後に書いた伏線？をようやく回収です。

界律の守護神VS人間。ルシルVS機動六課。古代の英雄VS現代の英雄。

この戦いが書きたくて始めたようなものです、この小説。

とはいえ昔(ANSUR執筆締め後)描いたイメージとはがらりと変わってしまったが。

当然と言えば当然ですかね。三期STRIKERSの放送前でしたし。

本当は、もっと戦闘したかったのですが、これ以上戦闘を引き延ばすのもどうかと思い、こういう形になりました。

戦闘ばかりもつまらないですしね？そうですね？

遙かに遠き刻の物語 〔ANSUR〕 ? (前書き)

六話予定とか言っておきながら、全然ダメ。

書いていくと、文字数がどんどん増えていって、本当にダメです。

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ?

4月12日 AM 11:58 機動六課隊舎食堂

「 ということと、ペッカートウムの話によると、このミッドチルダだけ界律干渉の紋様を刻んでないってことだけど・・・」

「そうか。このミッドに刻んでいないのはテルミナスの目的からだな。」

「・・・おそらく、私とシャル以外の守護神を召喚させないためだろう」

六課との戦いという悪夢が過ぎ、私は今レヴィと話している。そのレヴィの隣にはルーテシアがいて、レヴィにもたれかかって眠っている。

「? どうして、ルシリオンとシャルロッテ以外が召喚されなくなるの?」

「ん? ああ。一つの界律が一度に召喚出来る守護神は二柱のみ。それ以上召喚するなら、他の界律との複数契約が必要なんだ。テルミナスの目的からして、必要なのは私とシャルだけなんだろう。だから、他の守護神が召喚されないための界律干渉という事だ、おそらく」

そして、テルミナスに操られていたフェイトたち六課隊員は、操られていた反動で深い眠りについている。

ある程度、私の干渉能力で彼女たちを回復させたが、所詮は身体的

なものに過ぎない。

そしてシャルは、海上隔離施設の修復、医療センターに避難させていたギンガや姉妹たちをそこに戻し、干渉能力で治療した。姉妹たちはそのまま眠りに就かせ、ギンガは六課に移して、今は空き部屋に寝かせている。

そんなシャルは、帰ってきてすぐに自室に籠もった。

何か一人で考えたいこともあるんだろう。

で、今起きているのは、現状私とレヴィのみ。

ちなみに私は、暴走直前まで行ったものの、二十分程度で完全に回復した。

干渉能力による回復力の高さが売りの私だ。だから早い……。自分一人だけが……。

「……すまないな、レヴィ。私とテルミナスの戦いに巻き込んでしまった」

私を再び亡失のアーミッツタイムスに墮すためだけにテルミナスは仕掛けてきた。

何故テルミナスがそこまで私に固執するのか分からない。

アーミッツタイムスとなっていた間の分身体の記録は残っていない。

何故なら分身体が“絶対殲滅対象”^{アポリュオン}に墮ちた瞬間、本体との繋がり^{ルシリオン}は途絶えてしまい、別の存在となっていたからだ。

「違う。それを言うならわたしもそう。わたしだって、元はペツカ
ートゥムだったから。」

だからわたしも同じ謝る方。もちろんルーテシアたちに対して」

そう言って、レヴィは自分の寄りかかっているルーテシアを優しく、

壊れモノを扱うように撫でた。

それは、実の妹にするような優しい優しい扱い。

レヴィが元々は人間だと言う事は既に聞いている。

そもそも、ペッカートウムとなる概念存在は全て元人間だという。

生前、死ぬ間際に犯した罪、若しくは強く抱いた想いが、その者の罪となるらしい。

レヴィは嫉妬。普通の家庭を持つ他人に嫉妬し、許されざる嫉妬レヴィヤタンになつたとのことだ。

「そうか。そうだな……。私たちは、彼女たちに謝る事ばかりだ」

ずっと黙ってきた。ずっと嘘をついてきた。

ずっと彼女たちを、私たちは騙してきたんだ。

「それとルシリオン。お礼をまだ言ってなかった。

ありがとう。ルシリオンがくれた“生定の宝玉”。

アレのおかげで、わたしは今こうしてルーテシアを守ることが出来て、一緒にいられる」

ルーテシアを起こさないためだろう。

レヴィは小さく、頷くようなものだったが、きちんと頭を下げて礼をした。

「ああ。………気にするな」

そう返したそのとき、

「ここにいたのか、ルシル」

「……ルシル……」

「クロノ、ユーノ。もう起きてきて大丈夫なのか？
身体的なダメージはシャルがどうかしたが、精神的にはまだ辛い
だろう？」

食堂に現れたのは、私とシャルにとっての親友クロノとユーノ。
テルミナスに操られ、シャルと戦い、そして……

（私たちが今まで隠してきた秘密を、彼女とペツカートウムの会話
から知った……）

シャルから聞いた。クロノたちに、彼女がすでに死んでいる事を知
られたと。

それをクロノたちが真に受けているかどうかは分からない。
だが、もうここまで来たのなら包み隠さず話すべきだろう。

「いや。もう大丈夫だ。と言いたところだが、ハハ、少しクラク
ラするよ。」

で、ルシル。もう僕たちに何も隠さないで話してくれるだろうか？
……？」

クロノが傍にあつた椅子に座り、真剣に、ただ真剣に私の目を見て
そう口にした。

見ればユーノもだ。その表情は硬く、真剣さがにじみ出ている。

「……ああ。全て話そう。だがその前に、調べてもらいたい
事がある。」

それとユーノ。君にも頼みたい事がある。かまわないだろうか？」

テルミナスが退いた事で、隔離されていたミッドの住民は戻ってきている。

それに管理局ももう活動している。もちろんテルミナスに操られていた間の記憶はないだろうが。

動いているなら、簡単な調査くらいは出来るはずだ。

「……分かった。その後に聞かせてくれるんだな？」

「ああ、約束しよう。我が真名に誓い」

「「真名……?」」

「ああ。まずは私の隠しごとを一つ明かそう。
私の真名。改めて自己紹介。ルシリオン・セインテスト・アースガルドだ」

10年前、シャルとの契約メンタルリンクの儀式の際、一度だけ告げた私の真名。
おそらくクロノたちは憶えていないはずだ。状況が状況だったしな。

「それが君の本当の名前ということか……」

「アースガルド……?」

「そして、今まで騙っていてすまなかった」

立ち上がり二人に頭を下げる。

十
十
十
十
十
十
十

「ん……うあ……？」

目が覚めた。時計を見ると12時半過ぎ。2時間くらい寝てた。

「……まったく。もう人間の体じゃなくなっているのに、何寝てんのよ私」

確かに干渉能力の使い過ぎで潰れそうだったけど。

だからと言って肉体を持たない今の私に睡眠なんてものは必要ない。

『ルシル……ちょっといい？』

ルシルに、リンクを通して呼びかける。

『どうした？』

『うん。今どうなってる……？』

何を訊いているんだろう？ この部屋から出れば分かることなのに。

『……フェイトたちが起き次第、全て話すつもりだ。』

まあフェイトたちもそろそろ起きてくるだろうからな』

ルシルの声、すごく分かりにくいけど少し重い。

付き合いの深い私だからこそ分かる。私だけが……。

(ううん。きつと、今ならフェイトにも分かるはず……)

もう私だけじゃない。フェイトだって、きっと分かると思う。
あの子のルシルに対する想いは強い。だからこそ、私は……

(ルシルに、フェイトと対人契約をさせる。させてみせる)

ルシルをこの世界に残す。

私もこれまでかなりの悲劇を見てきた起こしてきた。

けど、私以上の悲劇を、全ての守護神以上に体験してきたルシル。
だからこそ幸せになってほしいと思ってる。自己満足のおせっかい
かもしれないけど。

『そっか。それじゃ私もそろそろ行くよ。食堂でいいんだよね?』

ベッドから降りて背伸び。ダメだ。ほとんどクセになっちゃってる。

『ああ。それじゃあ待っている』

ルシルとのリンクを切り、少し乱れている髪を手櫛で直す

それから、今までお世話になった部屋を見渡した。

一年もいなかった場所だけど、それでも思い出のたくさん詰まった
部屋。

そして、今日でその部屋の私あこがいなくなる部屋。

「……うん。今までお世話になりました!」

頭を下げながらお礼を口にした。

私は扉を抜けて、もう帰ってくる事はない部屋を後にした。

十
十
十
十
十
十
十
十

4月12日 AM13:47 機動六課隊舎食堂

「ルシル、シャル。話してくれるか？」

管理局から戻ってきたクロノが、話を促してきた。
この場にいる全員からの視線が私とシャルに集中する。

今この場にいるのは、はやてを始めとした隊長陣とザフィーラ、そしてユーノとアルフ。

スバルたちフォワードとギンガ。
スバルたちの顔色はまだ悪いのに、どうしても話を聞きたいということでの参加だ。

ロングアーチからはリンのみ。他の隊員は、操られている間的事は何一つ憶えていないだろう。

そのため、今もなおそれぞれの自室で眠ってもらっている。
レヴィとルーテシア、アギトの三人は、海上隔離施設へと戻した。
すでに機能し始めているあそこに、収容されているあの三人がいないとんでもないことになりそうだからだ。
そして、

『話はクロノとユーノ君から聞かせてもらったわ、ルシリオン君、シャルロツテさん』

モニター越しでのリンディさんと、

『私も参加させていただきませぬ』

騎士カリムだ。

リンディさんは、操られていた間の記憶は無く、クロノとユーノから知った口だ。

騎士カリムはさすがと言うべきか。操作を受けてから、そう時間を経たずに意識を取り戻したらしい。

「分かりました。まず、クロノ。私が頼んだ事の報告をしてもらっていいか？」

「……ああ。君に言われた通りに調べたよ。

第97管理外世界地球。その世界において、ルシルとシャル、いや、フライハイト家そのものの痕跡が何一つとして残っていなかった」

やはりそうだろうな。もう二度と戻ることのない世界だ。

本契約も始まった事だし、偽りの設定情報や家族なんてものは用済みとして削除されたんだ。

おそらくすずかやアリサたちの記憶からも、私とシャルの事だけ綺麗さっぱり抜けているだろう。

今朝、六月にまた会おうと約束しておいて、もう会うこともなく、憶えてもらってさえない。

仕方がないとはいえ、少し、いや、結構寂しいものだな。

「え？ ちよつと待ってクロノ君。痕跡がない？ それってつまり・

……え？」

「ちよ、は？ それってどういうことなん？」

なのはとはやてが混乱したまま、クロノに問いかけた。

クロノが一度私を見て、私は先を話すようにと頷く事で促す。

「地球に、シャルとルシルの戸籍が無かった。フライハイト家という家族も無かったし、フライハイト家の家も無く、そこには別の建物があった。つまり、始めからいなかった事になっているんだよ。シャルとルシルは」

再び私たちに視線が集まる。

スバルたちは話について来れないのか不思議そうな顔をしているが、昔からの付き合いであるフェイトたちは顔を青くしている。

『どういうことが教えてくれるかしら？』

「……ええ。まずはそうですね……。これだけは先に言うておきます」

この場にいる全員をしつかりと一人ひとりを見ていく。そして、最後にシャルを見る。シャルは少し泣きそうだったが、すぐに覚悟を決めた表情に変わった。

「私とシャルは……。人間ではありません」

静かだった食堂が、さらに静かになる錯覚を得た。

この静寂を破るために、続きを口にしようとしたとき、

「に、人間じゃ……。ない……。？」

先に静寂を破った声。その声の主は今度は視線が集まる。

「……そうだフェイト。私とシャルは人間じゃない。ずっと黙って隠してきたが、私たちはずっと昔に死んでいる人間な

んだよ」

さらに嘘をついた。シャルは確かにすでに亡くなった存在だが、私はまだ生きている。

しかし、死んでいると言っても過言ではない以上、死んだと口にする方がいい。

「え？ うそ……ですよ？ 死んでいる人間って……。だって……だって、今生きているじゃないですか……。」

「そ、そうですよ。シャルさんとルシルさんは生きてます。

だって、触った時温かった。死んでいるなら……死んで……。」

エリオとスバルが、震えた声でそう口にした。

「……フェイトたちは見ているから分かるな？ それにクロノたちも」

私の身体が砕かれていた様を実際に見たフェイトたち。シャルもそう。クロノたちにその身体を砕かれている。だから私たちが普通ではない事は分かっているはずだ。

しかし誰も答えない。ただ表情を硬くして、俯いてしまっている。

『どういふことなのか教えていただいても……？』

「……はい。見ていてください」

騎士カリムに答え、私は干渉能力で作りだした剣の刃を右腕に当て、

「……………っ!?!?」「……………」

一気に引いて右腕を斬った。その光景に目を逸らす子はいない。いや、突然の事に逸らす事が出来なかつたと見るべきか。

で、右腕につけた斬り口からの出血はなく、虹色の光の粒子が漏れているだけだ。

そしてすぐに何事も無かつたように元通りに修復された。

「と言う事です。この体は人の持つような肉体ではないです。

ついさつきまでは確かに肉体を持っていましたが……。

リンディさん、騎士カリム。お分かりいただけただけでしょうか……
・?」

そう訊くと、二人は声には出さずに頷く事で答えた。

「私とシャルはもうこの世には存在しない死者。

だが、何故こうしてみんなの前に存在しているのか。それが私とシャルの正体となる」

青褪め強張った表情が変わらないみんなに、再度死んでいると告げる。

十 十 十 十 十 十 十

「なのは、ユーノ、クロノ、リンディさん。

憶えているかな? ジュエルシード事件が終わって、アースラで私が話した事」

今度は私が説明するために、あの場にいたなのはたちに訊いてみた。すると、なのはたちはやっぱり覚えていないのか首を横に振った。

「あはは。うん、そうだよ。それじゃあもう一回。界律と呼ばれるモノの説明ね」

そう言うと、ユーノが「あつ」と言って顔を上げた。さすがユーノ。こういう事に関しての記憶力は抜群だ。

「ユーノは憶えているんだね。それじゃああの時、私が何て言ったか言えるかな？」

「……うん。確か、その星そのものとされている世界の意思の事だよ。自分自身である世界の秩序を管理するもので、すべてがそこから生まれて、そして還っていく永久機関。

過去、現在、未来の全ての情報があるともしられる知識の蔵であり、それぞれの星に必ず存在する究極にして絶対たる力の根本、と聞いたと思う」

そこまでハッキリ憶えてるって、やっぱりすごいよ、ユーノ。

「僕も思い出した。君たち魔術師は、その界律によってその力の強弱が決定される、と」

「そう。けどその説明で私は一つ嘘をついた。魔術師にそんな事は起こり得ない。

何故なら、魔術師なんてものはもう存在しないから。

確かに私とルシルは、界律によって力の強弱を決定される。

だけど、それは魔術師じゃなく、私たちが界律の守護神、テストメ

ントと呼ばれる存在だから」

「……………テストメント……?」「……………」

「テストメントって……。確かアスモデウスがシャルを指してそう言っていたような……」

「うん。そうだよ、フェイト。よく憶えていたね」

スカリエツテイのアジトで、アスモデウスが私に向かって言っていた。

「君たちがその……界律の守護神、テストメントという存在なのは分かった。

で、守護神と言うからには君たちは世界の意思を守る……」

クロノがまともに入ろうとしている。

本当に解っているのかどうかは別としてだけ。

「そうだ。私とシャルは、世界の意思である界律の代行者。

世界自身の滅亡などを防ぐために、その滅亡の原因を取り除く守護者。

それが私とシャルの正体、テストメント界律の守護神だ。早い話が触れることのできる幽霊だと思ってくれていい」

ルシルの説明を聞いたみんなが幽霊と呟いて、私とルシルを見る。その表情は恐怖とかじゃなくて、やっぱり戸惑いとか混乱とかだ。

「シャルロツテさん、ルシリオン君。

あなたたちは世界の滅びを回避するための存在、という事でいいの

よね・・・?』

「はい」

『なら、私たちを操ったという・・・テルミナス、だったかしら? アレは、あなたたちや私たち人間にとって、一体どういう存在なのか教えてくれる?』

リンディさんからは、受け入れて納得しようっていう気概があるのが分かる。
騎士カリムもそう。クロノも。ユーノも。だけど、なのはたちはそうじゃなさそう。
受け入れたくないっていうのがハッキリ分かる。

「私たち^{テストメント}の守護神は、テルミナスを、絶対殲滅対象アポリュオンと呼んでいます。」

アイツら自身は、霊長の審判者ユースティティアと名乗っています
が・・・」

「絶対殲滅対象? 必ず滅ぼさないといけない連中という事なのか・・・?」

「うん。みんなも、アイツと会って理解できたと思う。」

頭じゃなくて本能として、テルミナスはまずい存在だって」

私がそう言うと、みんなは一斉に小さく頷いた。

「アイツらの目的のそのほとんどが人類の淘汰。
全てに対しての滅びを運んでくる破滅の使者。」

だから私たち守護神は、アイツらを何が何でも斃さないといけない」

テルミナスの今回の目的は何なのかルシルから聞いた。
まさか、ルシルを再度“絶対殲滅対象”^{アポリユオン}にするために、私たちをな
のはたちと出会わせたなんて……。

（信じたくないけど、アイツが嘘を言うはずがないし、嘘をつく意
味も無い。

それにしても、ルシルになのはたちを殺させる事で、ルシルを墮そ
うだなんて……）

とことんムカつく奴らだ。

「今まで黙っていてすまなかったと思う。しかし、実際に説明して
も意味はなかったんだ」

ルシルがみんなに頭を下げた。

私も騙していた事を謝ろうと思って、頭を下げようとしたとき、

「どうして……？ どうして意味がないって言えるの？

確かに、突然こんな事を言われても信じなかったかもしれない。

だけど、だけど……」

「なのは……」

なのはが立ち上がって、俯きながらそう口にした。

でも、ルシルの言う通り。たとえ教えたとしても信じてもらえる事
は出来なかった。

「なのは。君は、魔術、神秘、半年前で言えばペッカートゥムにつ
いて、何故大して疑問を抱かなかったと思う？」

「え？」

ルシルにそう言われて、なのはが考え込む。

正直なのはにはあまり意味のない質問だ。こういう場合、聞くなら、

「クロノ、リンディさん。あなたたちはどうして疑問を抱かなかった？」

そう、当時からすでに魔法に関わっていた管理局の人だ。

クロノとリンディさんも考え込む。ユーノもまた一人で唸り始めた。

「いきなり魔術師だとか、界律だとか、そう聞かされて疑問を抱かなかったのは何故？」

普通なら疑問を抱き、すぐにでも私とシャルの調査などが出来たはず。事の真相を知るために。

なのに、何故あなたたちは私たちの話を鵜呑みして、何も調査せずに受け入れた？」

「それは……」

答えられるわけがない。

リンディさんたちは、おかしな事ばかりな私たちを全面的に信じて受け入れた。

何故なら、

「界律が、私とシャルと関わる人たち全てに干渉したんだ。

「テストメント界律の守護神たる私とシャルを疑問に思わず受け入れる」と。

だが今はもうそんな事はなくなった。だからこそ、今の私たちに疑問を抱ける」

人間ではなく、すでに生を終え、世界と人類を護るためだけの虚構の存在」

私たちが話すべき事は全て話した。

何一つとして音がしなくなった食堂。

みんなは必死に受け入れようとしてくれている。

それを見ているのが私には辛すぎた。本当は受け入れてほしくない。つまらない冗談だね、ってそう笑い飛ばしてほしい。

「ルシルさんとシャルさんは……本当にもう亡くなっている方なんですか？」

「そうだよ、キャラ」

「……そう……ですか……」

そう答えると、キャラから嗚咽が零れ始めた。

ごめんね。ごめんねキャラ。

「なあ。元が人なら、何でお前らその、テストメントっていつのになっただ？」

今の今までただ話を聞いていたヴィータがそう訊いてきた。

私たちが“テストメント界律の守護神”になった理由、か。

「それなら、これから話そう。ユーノ、頼んでおいたものを」

(え？ ルシルは始めから話すつもりだったの……?)

十 十 十 十 十 十 十 十

グイータのような疑問が出てくると思っていた。

だからこそ、ユーノに頼んでおいた。

今まで騙してきたことへの償いとして、訊かれた事に対して隠さず
に全て答えるために。

「……どうしてルシルが、僕にあんな事を頼んだのか分から
なかった。

だけど頼まれたコレを読んで、ようやく分かったよ」

ユーノが手にするのは分厚く、そして古びた三冊の書物。

私が頼んでおいたものだ。

「君とシャルは、この再誕神話に登場するある英雄と全く同じなん
だ」

私たちの中央にあるテーブルの上に、ドスンと重い音をさせながら
置かれた書物。

タイトルは再誕神話。私とシャルが参加していた大戦が神格化され、
伝えられてきた書物だ。

私が無限書庫でコレを見つけた時、本当に驚いた。

まさかこんな形であの大戦が語られているとは、と。

しかも読んでみてさらに驚愕。

ヴァルキリー

私を含めたアンスール、戦天使、シャルを含めた星騎士、四天王、

シュテルン・リッター

特務十二将、A・M・T・I・Sなどの実名がガッツリ載ってい
るのだ。

その上、それぞれの特徴まで書かれていた。私の場合は銀の長髪、

真紅と瑠璃のオッドアイ、黒衣、蒼翼などなど。
ここまで詳細に残されていると、逆に恥ずかしくなった。

「再誕神話・・・？」

「なんだそれは？」

シヤマルとシグナムの疑問も尤もだ。再誕神話を知る者はほとんどいない。

それほどまでに古く、公には出されることが少ないものだからだ。

「かつてこの次元世界において、六千年以上も前に起きたとされる大きな戦争の事だ」

そう説明すると、スバルたちが「六千年」と信じられないといった表情で呟いていた。

確かに六千年前と言われても信じられないだろうな。

何せ古代ベルカと呼ばれる時代でさえ、今からたった数百年前の話だ。

その何倍ともある昔の話。創作物でさえそこまで昔なことは書かないだろう。

『私も随分と昔ですが、その再誕神話を読んだ事があります。』

神の住まう世界アースガルドに在る神々と、その神に愛された英雄たち。

悪魔にそそのかされ、英雄たちに戦いを挑んだ魔物と蛮勇たちの戦い。

その果ての世界の滅亡、そして再生。即ち再誕が記されたお話です』

そういう風に記されていたな、確かに。

あながち間違いとも言えないが。

「その再誕神話に出てくる英雄が、ルシルさんたちと何か関係があるんですか・・・？」

「それを今から話そう。私とシャルがどうして界律テスタメントの守護神になったのかを」

一冊目の書物のページを開く。
そして、

我が手に携えしは確かなる幻想

複製術式を“英知アルウイトの書庫”より引つ張り出す。

私とシャルの記憶を、この場にいる全員に見せるための術式。言葉で語るより実際に見てもらった方がいいと判断したからだ。

全員の意識が再誕神話の書物へと移るのを確認。

ゆっくりと崩れ落ちる彼女たちの身体を干渉で支え、優しく横にする。

そして、

「そう。あれは私が16のとき。

ヴィーグリーズの大地に雪の降る、それは冷えた日の事だった・・・」

私の意識もまた書籍へと移した。

私とシャルの始まりと終わり。

そして、次元世界というものが誕生したその刻を語る為に。

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ? (後書き)

ここで一度区切らせてもらいます。

ようやくその正体を語ったシャルシル。なのはたちは結構冷静に見えてしまうかもしれませんが、メチャクチャ動揺とかしています。

すいません、分かりにくいですけど、そういう事にしておいてください。

そして次回。執筆を諦めたANSURの本編を五年ぶりにちよちよいと書こうかと思っています。

こんなことなら削除しなければよかったと激しく後悔中です(泣)

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ? (前書き)

嗚呼、夏休み。GWを遙かに凌駕する地獄。いえ、煉獄期間。
オーナー、夏休みください。ダメ?、と言われました。

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ?

Episode Rusylion Saintest
Asgard

なのはたちは、突如として変わった光景に戸惑いを見せていた。彼女たちがいるそこは、豪華な装飾が存分にあしらわれたどこかの城内のような場所だった。

ここは・・・？

誰がそう言ったのか。しかし、この場にいる全員の心の内はその一言だけだった。

ここがどこかも分からず、どうすればいいのかも分からない彼女たちは、エントランスホールであろう場所で立ちすくんでいた。

たぶんシャルカルシルの事だから、あの二人の記憶の世界だと思っよ。

僕たちがここに来る前に、ルシルは言っていた。テストメントになった理由を話すって

ユーノが冷静に判断する。彼ら二人なら、このような事も出来るだろうと。

なのはたちも、ユーノの考えに賛成していた。

「殿下が御帰りになられる！！」

男の声がこのエントランスホールに響いた。

突然の大声に、なのはたちは心臓が跳ねるほど驚愕し、周囲を見渡す。

さっきまでは誰もいなかったはずだが、

いつの間にこんなに人が・・・！？

十数人という人が慌ただしく回廊を走り回っていた。

使用人服のような物を着ている事から、この城で働く使用人たちなのである。

あまりの状況になのはたちは混乱しだし、慌てふためく。

うわうわっ！？ す、すり抜けた！？

っ！？

スバルが、走り込んできた初老の男とぶつかった。

と思えば、スバルをすり抜けて、何事も無かったかのように初老の男は走り去っていった。

幻・・・？

リンディは近くを走ってきた人へと手を伸ばし、すり抜けるのを確認した。

それを見ていたなのはたちも、手を伸ばして確認していた。

「殿下が御帰りになられる！　すぐに陛下と王妃、ゼフィランサス姫の戦死報告をする！！」

殿下が御帰り次第、すぐに玉座の間へと御案内しろ！　私がお伝えする！！」

使用人たちのリーダーの一人であるリディアは、部下へと指示を出す。

それに一斉に答える十数人の使用人たち。

「って、プレンセレリウス様！？ フォルテシア様！？

どこへ行かれるのですか！？ お待ちになってください！！」

少年と少女が一つの扉から飛び出してきて、なのはたちの目の前で足を止めた。

ユーノとカリムは、その二人の名前を聞き、思案顔になった。

その二つの名前は、再誕神話に登場する英雄の名前だったからだ。

「止まれよフォルテ！！ ルシルに何を言つつもりだ！？

お前の復讐に付き合わせるような事は絶対に言っなよ！？」

ウルトラマリンプルーの長髪をポニーテイルにした少年が、険しい表情をしたフォルテと呼んだ少女の手を取り、引き止めた。

なのはたちは、その少年プレンセレリウスの口から出た“ルシル”という彼女たちにとって親友の一人である青年の愛称に反応する。

「違う！ 離して！！ ルシリオンに謝るの！ 謝らないといけな
いの！」

ゼフィランサス様が死んだのは私の所為だから！！」

「お前・・・！」

綺麗なウイスタリアの髪を振り乱し泣き叫ぶフォルテシア。

その姿に戸惑い、言葉を失う彼女の兄であるプレンセレリウス。

そこに、

「プレンセレリウス様！ フォルテシア様！
申し訳ございませんが、お部屋にお戻りください！」

「リディア女官長。すいません」

リディアが二人に駆け寄り、声をかける。

涙し項垂れるフォルテシアの肩を抱き、プレンセレリウスはリディアへと謝る。

「いえ。スヴァルトアールヴ Heim 王族である御二方に、使用人である私の分を弁えぬ発言、どうかお許しください」

「いや。スヴァルトアールヴ Heim はもう滅んだ。ヨツン Heim 連合軍によって。

だから俺たちはもう王族じゃない。ただの人間です」

頭を下げ謝罪の言を口にしたリディアに、プレンセレリウスはそう返す。

闇定世界スヴァルトアールヴ Heim。

ここグラス Heim 城のある世界アースガルドと同盟を結んでいた世界の一つ。

しかし、それを公にはせず、ずっと中立の立場として在った。

だがアースガルドと同盟を組んでいた事がヨツン Heim 連合に知られ、その報復として滅亡された世界だ。

プレンセレリウスとフォルテシアは、スヴァルトアールヴ Heim の王子と王女だった。

その報復戦で命からがら臣民と共に、ここアースガルドへと逃げて

きていた。

「……まずは出過ぎた発言をする事お許しください。

ブレンセレリウス様、確かにスヴァルトアールヴヘイムという世界は無くなってしまうました。

ですが、誇り高きその血筋は未だ途絶えておりません。

御二方が生き続ける限り、御二方についていく臣民が居る限り、スヴァルトアールヴヘイムは滅びません」

「リディア女官長……。ありがとうございます……。

さあ、フォルテ。今は部屋に戻ろう。ルシルとの話はまた後で、だ」

「……うん」

「……。誰か。御二方をお部屋へと御案内して」

ブレンセレリウスは、リディアの言葉を咎めずに感謝を告げた。

彼はフォルテシアの肩を抱き、自分たちに用意されている部屋へと戻ろうと促す。

それを見て、リディアが手の空いている部下に二人を送らせるため指示を出そうとしたとき、

「ただいま帰りました」

出入り口である扉から姿を現した男とも女ともとれる美しい外見をした少年。

足元まである銀の長髪。瞳はルビーレッドとラピスラズリのオッドアイ。

漆黒の長衣を纏い、気品の溢れる佇まい。

「殿下!!」

リディアに殿下と呼ばれたその少年。名をルシリオン・セインテス
ト・アースガルド。

ここグラズヘイム城の主セインテスト王家の第一王子にして最高ク
ラスの魔術師。

その姿にやはり驚愕するなのはたち。

「随分と騒がしいけど、何かあったのか？」

ん？ あー！ 来ていたのかレン！ フォルテ！」

ルシリオンは、親友であるプレンセレリウスとフォルテシアの愛称
を呼び、二人へと駆け寄っていく。

「すまないな、出かけていてしまって。ほら、いつものアレだよ。

って、どうしたんだ二人とも？ 特にフォルテ、何かあったのか？」

意気消沈といった二人の姿を見て、ルシリオンは戸惑いの色を見せ
る。

泣きやまないフォルテシアには余計に気を回す。

「お帰りなさいませ、ルシリオン殿下」

「リディアか。ただいま。それにしても何かあったのか？」

レンとフォルテの様子がおかしいんだ。それとゼファイ姉様は？
いつもなら、ゼファイ姉様が迎えに来てくれるんだが……」

「……っ!!」「」

ルシリオンの口から、ゼフィランサスの名前が出て、息を飲む三人、

「ごめ．．ひつ．．ごめんなさ．．うく．．ごめんなさい．．つく．．
ごめ．．なさい．．！」

フォルテシアが何度も何度も嗚咽に混じった謝罪を繰り返す。
そんな彼女をあやす暗い面持ちのプレンセリウス。
ようやくルシリオンも何か重大な事が起きたのだと気づいた。

「何があつたりディア？」

「．．．．殿下。ゼフィランサス様は．．．戦死なさいました」

「．．．．は？」

ルシリオンは何を言われたのか解らなかった。
彼にとって姉であり母である最も身近な女性ゼフィランサス。
その彼女が亡くなったと。思考が追いつかない。

「それだけではありません。陛下と王妃様の率いらした部隊が、
連合軍の襲撃を受け全滅しました。
御遺体の方は、王廟へと移してあります．．．．」

「な．．．何を言って．．．？ ゼフィ姉様が死んだ．．．？
戦死．．．？」

な、何故．．．？ だってゼフィ姉様は、大戦に．．．え？．．．
どういふことだ？

どうして．．．？ え？ 嘘だ．．．」

ふらつきながらもルシリオンは必死に思考を働かせる。
だが、彼にとって命より大事な姉ひとの死は、それだけで彼の思考を激しく乱す。

「ごめんなさ……ひっ……ゼフィランサス様は……つく……
私たちを逃がすために……」

「……どういう……ことだ……?」

フォルテの嗚咽の混じった言葉に、ルシリオンは反応した。

「それは俺が話す。ルシル、ゼフィランサス様は、俺たちスヴァルトアルヴヘイムの臣民を、ここアースガルドに逃がすため時間稼ぎをしてくれたんだ」

「時間稼ぎ……? 逃がすため……?
スヴァルトアルヴヘイムに、何かあったのか……?」

僅かな理性で無理やり狂気を抑え込み、プレンセレリウスへと訊き返すルシリオン。

「アースガルドとの同盟が連合にバレた。それで、裏切りの報復として滅ぼされた。」

「生き残ったのは王族では俺とフォルテの二人。臣民が約千五百だ……」

「馬鹿な……!?!? スヴァルトアルヴヘイムが……滅んだ……
……!?!?」

「ああ。ゼフィランサス様は、報復戦にいち早く気づいてくれて、

大隊を率いて来てくれた。
だが、相手が悪かったんだ。連合主力の一つ“特務十二将”が三人もいた」

特務十二将。ヨツン Heim 連合の有する主力の一つ。

連合軍が抱える数ある部隊の中でも、さらに強大な十二の特殊部隊を治める十二人の隊長たちの総称。

連合世界のトツプクラスの魔術師、果てには魔界の住人すら含まれる強大な組織。

「ゼフィランサス様は、敗北を予感し、俺たちを逃がすための盾となってくれた。

すまない……。すまない……。許してくれ、ルシル!!」

プレンセリウスは、話し終わると跪いて、ルシリオンへと頭を下げ謝り続ける。

フォルテシアも泣きやまず、ずっと謝り続けた。

「……ゼフィ姉様がそうしたいから、そうしたんだよね……？
なあ、レン、フォルテ。ゼフィ姉様の最期……知っているか……？」

「……死に際は知らない。が、俺は、俺たちはゼフィランサス様から頼まれた。

大事な弟を、大好きなお前の力になってあげて、と。そう笑って、諦めずに最後まで戦ってくれた」

「そう……。か……。ゼフィ姉様はいつもそうだ。

私とシエルの事ばかり気にかけて、自分の事はお構いなし……。」

ルシリオンは、ここエントランスホール天井にある戦乙女の描かれたステンドグラスを仰ぎ見て、静かに涙を流した。気が狂いそうな頭を無理やり冷静にし、そして祈った。ゼフィランサスの冥福を。

「リディア。父上と母上は？ 非情かもしれないが、私はあの二人の事に関して悲しくないんだ。だが、それでも私たちを産んでくれた両親だ。仇は討つ」

彼にとつての両親は、自分をこの戦争を終わらせる兵器として調整するだけの存在だった。それゆえに親への愛情というモノが彼には無かった。

「陛下と王妃様が戦死なされたのは昨日です。場所は聖域ヴィーグリーズ」

リディアがそう答え、ルシリオンは頷き、銀の長髪を翻しながら扉を潜り外に出た。

それをただ見送ることしかできなかった三人は、ルシリオンの激しい怒りと狂気に当てられ、動けずにいた。

ルシリオン君の本当のご家族は……戦争で亡くなっていたのね……

これが本当にルシルの過去だとすれば、そうなんでしょうね……

間違いないよ。プレンセレリウスとフォルテシア。この名前は英雄“アンスール”として、再誕神話に出てくる。

ルシルだってそうだ。ルシリオンという英雄も出てくる。

特徴だって全部一致している。ここは間違いなくルシルの記憶、過去の世界だ

リンデイ、クロノ、ユーノの冷静な会話を聞き、やはり戸惑いを見せるのはたち。

六千年も前に起きた戦争。それに参加し英雄となった。それがルシルの真実だった。

フェイトちゃん！？ だ、大丈夫！？

なのはの声で、フェイトの顔色が青褪めていたのに気づく。次々とフェイトを心配する声が、フェイトにかけられていく。

大・・・丈夫・・・。私は大丈夫だから・・・

フェイトのそれはどう見ても大丈夫ではなかった。

自分が好意も持っていた人間の衝撃的すぎる真実、過去、フェイトの思考が混乱しだしていた。

景色が変わる！？

はやてがそう叫んだときには、城内からどこかの平原へと景色が変わっていた。

雪が降り、大地を白く染め上げようとしている。そして彼女たちの視界の中、

「報告します！！ 現在、ここヴィーグリーズに向かって強大な魔力反応が迫ってきています！」

おそらく千人以上はいると思われる大軍勢が現れていた。

統率された服装を身に纏った、どこか軍隊を思わせる大勢の人間が。

全員何か武装しているな

シグナムは、突然現れた武装している人の群れを見てそう呟いた。

デバイスやあらへんな

はやての視界に入る軍勢は、デバイスのような機械的なものではなく、完全に武器としての代物を武装していた。

はいです。まるでルシルさんとシャルさんが持っているような・

リインフォース？の言葉に、全員が同時にこう思った。

シャルロツテとルシリオンが持つ神器と呼ばれる武器なのではないか、と。

「魔力反応？ どこから向かってきている？」

ハルバードを手にしている男から報告を受けた女性がそう返す。

綺麗に整った顔立ち、オレンジ色の髪を後ろで結った、20代に入ったばかりと思われる女性。

そんな彼女は金のラインの入った翠の長衣に翠のマント、銀の胸当て、籠手、足具を装備し、そして、

「ラピス様、いかがなさいましょうか！？」

彼女の身長を越す、2m近い血の色をした槍を手にしていた。

彼女の名は槍皇ラピス・エル・ノワール。この大軍勢を率いている

指揮官の一人だ。

「数は？ この大部隊に損害を与えられるだけの数でも押し寄せてきたの？」

槍皇ラピスは、焦らず大事にするでもなく冷静に戦力分析をする。彼女はそれ程の歳を重ねてはいないが、その実力は桁外れに高かった。

彼女は、天光騎士団“シュテルン・リッター星騎士”が一、“ゼクストリッター第六騎士”の称号を持つ騎士なのだから。

天光騎士団。

それは、ミッドガルドと呼ばれる複数世界を護る秩序管理機構の左翼たる組織。

ミッドガルドを構成する世界の一つレーベンベルトで設立された騎士団の事だ。

四千人近い騎士から選ばれた最強の十人。剣で象られた星の紋章を衣服のどこかに刻む事をミッドガルドの王から許されたのが、その十人“シュテルン・リッター星騎士”である。

彼女、槍皇ラピスもその内の一人。

だが、彼女がただの騎士ならこの戦争に出る必要性はどこにもない。何せ天光騎士団は、この戦争に参加していない組織なのだから。

しかし、彼女は軍人の家系という看板を背負っていた。

それゆえに、出なくともよかった戦争に参加する事になっていた。

「それが・・・その・・・」

報告してきた男が言い淀む。

ラピスはそれを怪訝に思うも、彼を急かすことはしなかった。

それを見ていたこの場にいるもう一人の指揮官が、どうにも眠たそうにしながら男に問いかける。

「ゆっくり急がず、それでいてさっさと早く簡潔に話して。オレたち、早く帰りたいからさ」

半眼で睨むように、報告してきた男を見る。

男は「ひっ」と怯えたように少し後ずさる。が、それは怒りではなくただ眠たいからの半眼だ。

「何怯えてんのさ？ 怒ってるんじゃないよ、この目は？」

眠いんだって。どうしようもなくさ。ほら、よだれの後分かるっしょ？」

もう一人の指揮官、名はゼムノス中佐。燈^ひ天剣星の通り名を持つ剣兵魔術師。

ボサボサの寝ぐせが目立つ黒の短髪。赤い軍服に身を包んだ20代半ばくらいの青年。

ゼムノスは、彼らが所属するヨツン Heim 連合軍に存在する十二の特殊部隊隊長から成る組織“特務十二将”の一人だ。

そして槍皇ラピスもまた騎士団所属でありながら“特務十二将”の肩書を強制的に与えられていた。

そんなヨツン Heim 連合軍トップクラスの肩書を持つ二人が指揮するこの大軍勢。

その大軍勢に向けて、魔力反応が迫りつつある。

でも揺らぐことはない。そうラピスとゼムノスは考えていた。

自分たちの実力に誇りと自信があるからだ。どんな屈強な魔術師が現れようとも負ける事はない、と。

「か、数は一。たった一つの魔力反応が、ここ聖域ヴィーグリーズの第三平原へと向かってきているのです……！」

「「たったひとり？」」

ラピスとゼムノスが揃って呟いた。

思案顔に成る二人。考えているのは、これからこの場に現れる魔術師の事。

たった一人で、この大軍勢に向かってきている。敵と見るのは早計かもしれないと。

「一応警戒を。敵性魔術師ではない可能性もあるから、しっかり認識してから戦闘行動を。」

ゼムノス、あなたは一応前線で待機しておいてほしい。いい？」

「了解だ」

橙色の長剣を携え、ゼムノスが幾人かの部下を連れて、前線へと向かう。

それを見送り、ラピスは友人の名を呟き、謝った。

「ごめんシャルロット。帰りが少し遅くなる」

その呟きを聞いたなのはたちに動揺が走る。

ラピスと呼ばれている女性の口から、なのはたちの親友の名が出たことに。

やっぱり。ラピスって言うのは、再誕神話に載ってる名前だよ。

それにシャルの名前だってルシルと同じ。ちゃんと載っているんだ。

劍神シャルロットって

ユーノの言葉に、ただただ呆然とするしかないのはたち。
そんな彼女たちを後目に、事態は動いていく。

未確認の魔力反応探知の報告から約十五分後。

前線に向かっていたゼムノス率いる部隊から連絡が途絶えた。
前線部隊からの報告を受けていた兵から、ラピスにこう伝えられた。
怪物が出た、と。それっきり前線と連絡が取れなくなった。

「全軍、魔術戦用意！ 敵性存在はかなりの実力と思われる！
人間であるかどうかは判別できていない！ 魔物の可能性もある。
気を引き締めるー！」

ラピスが全軍にそう呼びかけ士気を高める。
それに答え、千人近い兵が雄叫びをあげながら、連絡の途絶えた場
所へと進軍する。

なのはたちは、そのあまりの大声に耳を防ぐ。
この場から離れようとしたそのとき、

「全軍停止！ ……アレは ……！」

ラピスの号令の下、一斉に雄叫びと進軍を止めた大軍勢。
指揮官であるラピスの視線の先、そこにひとつの人影があった。
距離がある為、性別などはハッキリと分らないが、人間であるこ
とには間違いなかった。

「魔族特有の魔力じゃない …… 明らかに魔術師ね」

ラピスは、愛槍である魔造兵装“腐血槍フォイルニス・ブルート”を握る手に力を込める。

ゆっくりと近づいてくる人影。次第にその姿が露わになっていく。

纏った服は全て漆黒。足元まで流れる銀の長髪。瞳はルビーレッドとラピスラズリのオッドアイ。

手にするのは、短い柄の上下に付いたクリスタルのような1m近い穂を持つ巨槍。

銘を“神槍グングニル”。あらゆる神器の最高峰、神造兵装第一位を冠する槍だ。

歳は10代半ば。15、6歳くらいの少年とも少女とも言える外見をしている。

それはグラスヘイム城から出ていったルシリオンだった。

ルシル君……!

「銀髪……。魔道世界アースガルドの四王族特有の髪色。

そして、真紅と瑠璃色のオッドアイ。それは間違いなく……」

ラピスが声を震わせながら言葉を紡いでいく。

なのはたちも、ルシリオンを見つつ彼女の言葉に耳を傾ける。

「セインテスト王家の証」

全軍に緊張が走る。アースガルドの四王家、それは自分たちが戦う敵アースガルド同盟軍のリーダー格だからだ。

敵軍のトップの関係者がこの場に現れた。それは何を意味するのか。しかし、その答えは分かっていた。彼らがつい二十数時間前に全滅させた部隊。

その部隊の指揮官こそ、セインテスト王家の王と王妃だったのだから。

つまり、今日の前にいる魔術師はおそらくその息子。

そして、ラピスたちが殺したセインテスト王と王妃の敵討ちに来たのだと。

「誰だ・・・？」

ルシリオンはそう告げた。ラピスたちはそれを黙って聞いていた。

「誰が・・・した・・・？」

「・・・」

「誰が殺した・・・？」

誰が殺した？ そう確かに訊いてきた銀髪の魔術師。間違いないとラピスたちは思った。

「誰がゼファイ姉様を殺した？」

しかし、ラピスたちの考えとは違う名が出てきた。

ゼファイ姉様？と思考するラピス。そしてすぐさま答えが出た。

ゼフィランサス・セインテスト・アースガルド。

セインテスト王家の第一王女。七日前に、“特務十二将”がスヴァルトアールヴヘイムという世界を滅亡させた時、戦死した防衛魔術師の事だ。

「父と母より、姉の死の方が重大というわけ・・・？」

「誰が殺した？ 誰がゼファイ姉様を殺した？ 答える」

「……………」

聞く耳を持たないと分かり、ラピスは“腐血槍フォイルニス・ブルート”を構える。

それを合図と受け取った全軍もまた、それぞれの得物を構えていく。

「セインテストの者よ。我らは貴方達に何の恨みも無い。

だけど、戦争である以上、敵として出会った以上は、その首を貰います」

ラピスは“腐血槍フォイルニス・ブルート”へと魔力を流していく。すると、血のように赤い槍全体が綺麗な朱色の光に包まれていく。

「……………さっきの連中と同じか。ならば……………」

我が手に携えしは確かなる幻想

何か呪文を呟き、その手にしていた巨槍を雪で染められた地面へと突き刺すルシリオン。

そして、ラピスは、彼女の率いる兵たちは見た。驚愕した。恐怖した。

なのはたちもまた、その光景を見て、その思考を停止させていた。

「そ……………そんな……………バカな……………!?!?」

彼女たちの視線の先、ルシリオンの背後。

そこには、何十何百とも言えるような武器が浮遊していた。

そのどれもから莫大な魔力を発せられ、その存在感をこの場にいる

全員に叩きつけていた。

その浮遊している武器こそ、この世界において特別な力を持つ武装“神器”である。

神器。神や精霊などが創りだした神造兵装。魔族が創りだした魔造兵装。

そして、魔術師が特別の手法によって、魔術を織り込んで創り出した概念兵装。
その三つを総合して神器と呼ぶ。

その神器を大量に有しているルシリオン。それは、本来有り得ない事である。

どんな種類の神器であろうと、一人の魔術師が持てるのは最高でも四つまでだ。

それ以上は神器特有の神秘にあてられ、魔術師が持つ魔力を生み出す器官“魔力炉”^{システム}に悪影響を及ぼすからだ。

だが、ルシリオンはそのような当たり前の常識を覆していた。

「答える。ゼファイ姉様を殺したのは誰だ？」

「っ！ 言ったところで、私たちは生かすつもりはないんでしょぅ？」

ラピスは思考をフル回転させる。

敵は一人。手にしているのは槍。しかし背後には途轍もない神器の群れ。

こちらは、千人近い魔術師大隊。数では圧倒的に勝っている。

敵との距離もまた味方している。一足飛びで、ラピスの攻撃範囲に入れる距離。

問題はタイミング。下手に動く、浮遊している武器が雨霞と降ってくる考える。

「逃がしてほしいのか？ 私としては、ゼフィ姉様を殺した相手が分ければいい」

「そう……。分かった……。わー!」

ラピスは仕掛けた。分かったと口にした瞬間、ルシリオンの挙動に刹那の隙が生まれたのを見たからだ。

自慢の高速機動で距離を詰め、手にする“腐血槍フォイルニス・ブルート”の穂を突き出す。だが、

「っ!？」

ルシリオンの姿はどこにもなく、ラピスの必殺の一撃は空を貫いた。次の瞬間、

コトド・チュール 軍神の戦禍

ラピスたちに強襲する何百と浮遊していた神器群。

ラピスを除く千人といった魔術師大隊が全滅するまでの時間、僅か19秒弱。

雪に染められて白かった平原が、真っ赤な血に染まってしまった。

「ここまで……。!？ くっ!」

神器の雨を、愛槍“フォイルニス・ブルート”で確実に叩き落とす。ていくラピス。

その間にルシリオンの姿を捉えようと必死に周囲に気を回す。

「見つけた!!」

「つく・・・!」

視界の端にルシリオンを捉えたラピスは、距離を縮めるために動き出す。

降り注ぐ神器群を回避という行動によって紙一重で抜けていき、

「はあああああつ!!」

アンジュテックセント・ギョフト

感染毒牙

ラピスは自身だけのオリジナル魔術“固有魔術”を発動する。伝染性の毒という意味を持つ魔術が、“フォイルニス・ブルート”の穂に付加された。

ルシリオンは、その危険性を本能で察知し、防御ではなく回避行動を取る。

そのまま、残りの神器群を放とうとするが、

「自分も攻撃範囲に入っている以上、撃てないでしょう!!」

「この・・・っ!」

ラピスがルシリオンから距離を取らないように追い続ける。

歯がみしつっ、彼は神造兵装“神槍グングニル”で応戦する。

何合と斬り結ぶ内、次第に押されていくルシリオン。

何せ相手は槍皇ラピス。槍術においては最強ともされる騎士。

対するルシリオンは、中遠距離戦を第一として調整されている魔術

師。

どちらに分があるのか、それは考えるまでも無い事だった。次々とルシリオンの身体に裂傷が増えていく。

「悪いのだけど、帰っているいろいろと報告とかしないといけないの。これ以上は付き合っではいられない。ごめんね。……怨んでくれてもいいから……!」

独楽のように回転しながら、穂と石突きにある刃で、ルシリオンを追い詰めていくラピスからの勝利宣言。
そして謝罪。これは戦争だ。殺し殺され、それが延々と続くどうしようもない事象。

そこに謝罪の意味は無い。だが、それでも彼女は、これから命を奪う者には謝罪する。

それを自分なりの贖罪、命を背負う覚悟とするために。

「私も……死ぬわけには……いかないんだ!!」

ルシリオンもそうは言うが、ラピスの圧倒的な槍術の勢いに後退を強いられる。

「はっ……!」

「うぐ　しまっ……!」

女の一撃とは思えない強烈な振り下ろしに耐えきれず、片膝をついてしまったルシリオンの。

ラピスはすぐさま“フォイルニス・ブルート”を縦に回転させ、石突きでルシリオンの顎を狙う。

ルシリオンは一瞬とはいえ、攻撃が止んだその隙を狙い、全力で後

退する。が、

「その程度で私の攻撃範囲からは逃れられないよ……！」

トイフェル・ツィ・シュトーセン
魔槍

ラピスの正確無比、強力かつ高速の刺突がルシリオンを襲う。

ルシリオンは反応するが完全には避けきれずに、右肩を深く裂かれることになった。

「っがつ……ぐうう！」

コド・プレスヴェルク
凶鳥の殺翼

「っ！ 足掻くのはやめなさい……！」

息を荒くしているルシリオンを中心として急激な気圧の変化が生じる。

そして起こる無数の風の刃。ラピスはそれを肌で感じ、流れるような動きで回避していく。

驚愕するルシリオンを横目に、ラピスはルシリオンを討とうと“フオイルニス・ブルート”を構える。

ルシリオンは本能的に死を感じ、距離が開いた隙に残りの神器群をラピスへと降らせる。

「遅い。真技……！」

真技。

魔術師の固有魔術の中でも鍛えに鍛え、究極の一にまで練度を高めた最高の固有魔術。

その威力や効果は個人個人では違うものの、まず間違いない中れば必殺となる術式だ。

ラピスは神器群を回避し終え、

フェアヴェーゼン・シュラク
腐壊浄槍

“フォイルニス・ブルート”の解放された能力“腐殺”と魔術“障壁貫通”を一体とした一撃を、ルシリオンへと放つ。

「目醒めよ、神槍・・・グングニル！！」

ルシリオンは咄嗟に“神槍グングニル”の神秘を解放する。

そして幅の広い穂でラピスの一撃を止め、その衝撃に吹き飛ばされなりながらも弾いた。

両者の間合いが15mと離れる。ラピスは必殺の真技を防がれた事に歯がみし、ルシリオンは距離が開けたことに安堵した。そして、

セカンドパレル・セツト
第二波装填

ラピスの前に現れたのは、先程と同じ数くらいの神器群。

「そ、そんな・・・！？」

勝利を確信していたラピスの心に、重く押し掛かるある怪物が生まれた。

その名は絶望。ラピスは、自分の死をここに来て感じ取ってしまった。

器群を回避、または弾いた。
それを何度も繰り返したが、終わりは突然に起こった。

“フォイルニス・ブルート”が粉々に砕け散ったのだ。

神秘を打倒するにはそれ以上の神秘を以ってあたるべし。

それが魔術師の鉄則だった。“フォイルニス・ブルート”の神秘を上回る神器群。

それを弾き続けたことでついに限界を超えて壊れてしまったのだ。

こうなると、ラピスに生き残る術はない。

一斉に襲いかかる神器群を目に焼き付け、彼女はその命を失った。

う……！

串刺しされ息絶えた千人とある死体を見て、なのはたちは吐き気を堪え視線を逸らす。

唯一の救いは、血の臭いが分からない事。一種の夢の中であるこの世界。

彼女たちに今ある五感は視覚だけ。それ以外は働いていないため、臭いが分からなくなっていた。

それから1分ほどの沈黙が流れた。

そして、

「ねえ……さま……。姉様あ……。ゼフィ姉さ　ごぶ
つ……。げぼっげぶっ！」

死体の中で、ルシリオンは最愛の姉を呼ぶ。

そして、吐血した。今の未熟な彼にとって、“神槍グングニル”の

完全解放は自殺行為だった。

“神槍グングニル”から、担い手として認められていない内の完全解放。

その代償として、ルシリオンの体内と魔力炉システムはボロボロになっていた。

なのはたちは無駄と知りつつ、跪いて泣き、吐血を繰り返すルシリオンへと近づこうとしたそのとき、

これが私の始まりだ

なのはたちの背後から声がした。一斉に振り返り、その声の主を目にする。

ルシル・・・！

そこには、泣いているルシリオンより大人びた、なのはたちの知るルシリオンがいた。

その表情は何かを堪えるかのような険しい表情だった。

ルシル。やっぱり君は、君たちは・・・

ああ。再誕神話。アレは実際に起きたことだよユーノ。

そして、私とシャルが生きていた時代だ

そうやって、ルシリオンは、少年時代の自分へと近づいていく。なのはたちはそれを見ていることしかできなかった。

私が本格的に参戦するのはこの四年後、20歳のときだ。

それまでは、友と共に魔術を磨き、捕獲したヨツンヘイム連合の主

力兵器を改良した兵器などを造っていた……

「頭だけは良くてね」と呟きながら、左手を振るうルシリオン。すると、がらりと景色が変わる。そこは、どこかの庭園のようだ。

ここは……？

私の故郷魔道世界アースガルド。セイントテスト王領にある私の城
グラスヘイムの庭だ

はやての問いにそう答えるルシリオン。

なのはたちはその庭を歩く。綺麗な花畑のある美しいその庭を。

「はあああああつ！」

「遅い！　そこで何故動きが止まる！？」

彼女たちの耳に、怒声と金属がぶつかり合う音が聞こえてきた。

ルシリオンは、「行ってみるか？」と言い、音のした場所へと歩いていく。

なのはたちもそれに続いて、庭園の奥へと歩いていく。
そして庭園の奥、広がる平地に、彼らはいた。

彼らが神話に語られる英雄……アンストールだ。

あと二人いないが、もう直に姿を現すはずだ

ルシリオンの視線の先には、十人の人影があった。

男はルシリオンを含めて四人。残り六人は全て女性、いや、少女だった。

あの人・・・フェイトさんにそっくりです・・・

リインフォース？の視線の先、今のなのはたちと同じ年頃と思われる少女が木陰で休んでいた。

シアンブルーの長髪をツーサイドアップにし、その桃色の瞳で、ルシオンを見つめる少女。

装飾の施された白い足元まで隠すワンピースに白のクロークを着込んだ可愛らしい姿。

髪と瞳の色こそ違えど、その外見はフェイトとそっくりだった。

フェイトはその少女を見て、ある一つの名前を口にした。

もしかして・・・シエファイ・・・？

フェイトの言葉に、ルシオンを除くその場の全員が目を丸くする。思う事はただ一つ。どうして知っているのか？

・・・憶えていたのか、フェイト？

うん。10年前、初めて私とルシルが出会った時、ルシルは私を見てすごく驚いて口にしたよね。

シエファイ、って。何となくずっと引っかかってたんだ

ルシオンにそう訊かれ、即答したフェイト。

彼女にとって、好意を持つルシオンの口から出た女性の名前は、忘れえないものだった。

・・・そう。彼女の名前はシエフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム。

当時、冰雪系魔術師最強とされた少女。私の弟子のようなものかな。

私と共に、戦天使を造り出したパートナー。そして、私の恋人だった

なのはたちの何度目かの驚愕。

しかし、フェイトは察していたのか、驚愕ではなく悲しそうに、ただ辛そうに顔を伏せた。

なのはたちは、フェイトの気持ちを知っているために、何も言わず、ただ目の前の光景を見ていた。

「さすがEXランクの魔術師。やることなすこと常軌を逸しているよ」

「何を言う？ ジーク。あなたのその魔眼も十分に常軌を逸している」

オレンジ色の短髪に、光の映らない盲目であろうバイオレットの瞳をした男が、過去ルシリオンに声をかけた。

ジーク……。もしかして、雷皇ジークヘルグ……。ですか？

ええ。ジークヘルグ・フォスト・ニダヴェリール。

雷撃系最強の魔術師にして、魔眼“千里眼”を持つ、ニダヴェリールの現皇帝です

騎士カリムにそう答えるルシリオン。

その隣、呑気にお茶を飲んでいる二人組。右から地帝カーネル・グラウンド・ニダヴェリール。

そして冥祭司プレンセリウス・エノール・スヴァルトアールヴヘイムです

ルシリオンの指差す方、そこには胡坐をかいて休憩中だろうか、のんびり紅茶を飲んでいる男二人がいる。

ココアブラウンの短髪に、ニダヴェリール皇家特有のバイオレットの瞳をしたカーネル。

そしてウルトラマリンプルーの長髪をポニーテイルにしたプレンセレリウス。

さっきなのはたちが見ていた記憶の中に出てきた少年の大人になった姿だった。

その彼のオレンジ色の瞳には、彼の妹でもある少女が映っていた。

不機嫌そうで、どこか眠たそうな顔をした娘は、プレンセレリウスの妹にあたる呪侵大使フォルテシア・アウリアス・スヴァルトアルヴヘイム

次いで紹介されたのは、ウイスタリアのセミロングに、オレンジ色の瞳を持つ少女、フォルテシア。

彼女もまた、大人となっている姿だった。

そんなフォルテシアは、一人黙々と、彼女の武装魔造兵装“宵鎌レギンレイヴ”を振るい続けている。

「一人で訓練していてもつまらないでしょ？ フォルテ。私が付き合っただけよ」

「・・・あ、ありがと。それじゃお願いセシリス」

フォルテシアに声をかけた少女。

フォルテシアに声をかけたのは、炎帝セシリス・エリミング・ム

ムスペルヘイム。
気さくな性格のおかげで、部下との関係も良好……過ぎな王女様ですね

ムスペルヘイム王家特有のカーディナルレッドの長髪をサイドポニーにしているセシリス。

神造兵装“煉星剣レーヴァテイン”を片手に、フォルテシアと実践訓練を始めた。

「セシリー！　ここはルシルの家なんだから、出来るだけ壊してもいいわよー！ー！！」

「お前は馬鹿か！？　何を勝手ほざいているんだステア！？」

過去ルシリオンに怒鳴られているのは、カーディナルレッドの長髪を背中辺りで結っている少女だ。

頭頂部から生えている二本の触覚のような髪が、彼女が笑うたびにユラユラと揺れている。

ステア……。白焰の花嫁ステアの事だね

ああ。何かと私をからかっては遊びたがるムスペルヘイムの王女ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイムだ。

彼女にはいつもからかわれて、何度死にかけるような思いをしたか分からない

心底げんなりしたルシリオンの説明を聞くなのたちはたち。

その背中の曲がり具合から、よほど大変な目に遭ったんだろうと察する。

「ステア様！　そういう事は嘘でも言っではいけないと思います！
！」

「その前に！　ここはわたしの家でもあるのですが！？」

そんなステアに詰め寄り猛抗議するのは、キャロのような小柄な少女二人。

見て分かるように、片方は私の妹。拳帝シエル・セインテスト・アースガルドだ。

あの外見で、私との修業のおかげもあり、肉弾戦だけでは魔術師最強だ

ステアに抗議する間、シエルの銀髪を結っている赤いリボンが揺れまくる。

同時にツインテールもまた揺れまくり、小動物を思わせる。中身は猛獣だが……。

そしてもう片方。殲滅姫カノン・ヴェルトール・アールヴ Heim。あの子もまた私の弟子の一人で、砲撃戦特化の固定砲台魔術師だ

セミロングのプラチナブロンド、ライムグリーンの瞳が揺れる。

彼女カノンは、この場にいる王族せんいんに対し必要以上に敬意を払っている。

そんな彼女自らもアールヴ Heim の王女ではあるのだが……。そのことから、他のメンバーに抗議するような発言だけで、失神しそうになるのが彼女だった。

カノンは根が真面目で、アールヴ Heim 王族の反対を押し切って自らこの不条理な戦争に出てきた。

だから彼女には、自分の身を守るための必要最低限の事を教えただが、気づけば砲撃戦では私と同等の力を得ていた

懐かしそうに、本当に懐かしそうに目の前で繰り広げられている騒ぎを見つめるルシリオン。

なのはたちは何も言えなかった。そんな表情をするルシリオンを見るのが初めてだったからだ。

「随分楽しそうですね。私も交じらせてもらってもいいですか？」

「……………フノス陛下!!……………」

彼らは一斉に動きを止め、この場に現れた一人の少女に身体を向ける。

フノス。英雄アンスールを率いる大英雄。神に愛されし子、だね

ああ。フノス・クルセイド・アースガード。全ての魔術師の頂点に立つ存在。

アンスール設立の立役者、魔道王フノス。それがあの小柄な少女だ陽の光に輝く、流れるような銀髪。総てを見透かすようなコバルトブルーの宝石の如き瞳。

穢れを知らないきめ細かく雪のように白い肌。その笑みは、全てを包み込むかのような女神の笑み。

繊細かつ病弱そうな雰囲気を持つそんな彼女、フノスに見惚れるなのはたち。

「そんな畏まらないで！ 私だってみんなの仲間なんだか　っ！
!？」

そう言って走り出そうとしたとき、フノスは何もないところで盛大に転んだ。
ドベシャツ！という擬音が目に見えるほどの見事な転びっぷりだった。

そついう肩書を持つあの子だが、それは神がかり的なドジっ娘だった。

正にドジ神さまに愛されし子、というわけだ

「フノス！？ ルシル！ 今すぐ治癒魔術コード・エイルをフノスに！！」

転んで、起き上がるうとしないフノスにいち早く駆け寄るのは、彼女の背後から現れた女性だった。

すぐに過去ルシリオンへと指示を出し、「急ぎなさい！」と吼える少々過保護な女性。

アレが風迅王イヴィリシリア・レアーナ・アースガルド。

風嵐系最強の魔術師。義理の妹であるフノスには過保護すぎな愛情を注ぐ、私にとってもう一人の姉とも言える存在だ

「だ、大丈夫。少し転んだだけだから。ルシルの魔術を使うまでもな・・・」

むくりと上半身を起こし、イヴィリシリアに大丈夫と告げるフノスの鼻から赤いものが滴り落ちた。

「あ、鼻血です」

「血iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

フノスの手に付いた鼻血を見て、イヴィリシリアがパニックを起す。

そのまま過去ルシリオンの襟首をわしつと掴んで揺らしまくる。

「早くフノスを治療しなさい!!」

「その〜ま〜え〜には〜な〜し〜て〜・・・!!!」

全力で揺さぶられる過去ルシリオンの目が危なくなってきたところで、止めに入る他のアンスールメンバー。

無駄な騒ぎを起こしつつ、日々大戦終結のために魔術の腕を磨いていくアンスール。

それを見ていたルシリオンの右手が再度振られる。

それを合図とし、なのはたちの視界に映る光景がまた変わる。

ここは？

我々アンスールの初陣の戦場。ヨツン Heim 連合に組む世界グリ
ユートナガルダル

ユーノにそう答えるルシリオン。

彼らの視線の先、一万は超す大軍勢がそこにはいた。

な。ヨツン Heim 連合軍のほんの一部だ。その上連合主力のいない、

アースガルドへと繋がる唯一の道がある世界ビフレストを攻めよう
としているんだ

魔道世界アースガルド全体には強固な障壁が張られている。それゆえに、ビフレストにあるアースガルドへと繋がる転移門を通らなければアースガルドに侵攻する事は不可能だった。それを知るヨツンヘイム連合軍は、ついにこの日、ビフレストを陥落させようと動いた。

確か、再誕神話にはこの戦いが書かれていましたね

カリムがそう告げると、ルシリオンは微笑を浮かべて「勝敗は知っていますよね？」と返した。

カリムは「はい」と真剣な面持ちで答えた。

「往くぞ！　まずはビフレストを落とすし、アースガルドを攻め落とす！！」

この大軍勢の指揮官であろう男が、拡声魔術で全隊の士気を上げ始めた

「おおおおおー！！」と地鳴りが起こるほどの雄叫びに、この場の全員が耳を塞ぐ。

ここから先は、スバルたちには残酷そうだ。君たちだけでも帰るか？

ここから先の出来事は、スバルたちには刺激が強過ぎると判断したルシリオン。

だが、スバルたちは残る事にした。最後まで見たかった。ルシリオンという男の生涯を。

ルシリオンは、そんな彼女たちに「辛くなったらいつでも言うように」と優しく声をかけた。

そして、この戦場に現れる遙かの遠き時代の英雄“アンスール”がその姿を現し、ヨツンヘイム連合軍をなぎ倒していった。

「食らええええええつ！！」

ルイン・トリガー
庄戒

シエルは自慢の重力操作魔術で連合兵を空高くまで殴り飛ばし、そこに追撃をかける。重力を操作し、空まで吹っ飛ばした連合兵に九倍の重力をかけ、地面に叩きつけていった。

『シエル。支援攻撃行きます・・・！』

『いつでもいいよ、カノン！』

近距離の拳帝シエルと遠距離の殲滅姫カノンのコンビ“戦場の妖精”の連携が今始まる。

ルフット・アングリフ
殲滅爆撃

戦場から遠く離れた丘で、カノンはルシリオンから授かった黄金の神器“星填銃オルトリンデとグリムゲルテ”を両手に、シエルの周囲にいる連合兵へと何千発という弾丸を放つ。連合兵が、空から降り注ぐ弾丸に対処している間に、シエルがその小さな身体を活かして弾丸の雨の隙間を縫うように駆ける。

「その目に刻みなさい。戦場の妖精の連携を・・・！」

隙だらけの連合兵のわき腹を、重力を纏わせた拳で殴打していくシエル。
呻き声を上げながら吹っ飛んでいく連合兵。

『シエル、任務完了です。予定通り、次の戦場へ移動しよう』

『ん、了解』

無傷のシエルがその場から歩き去っていく。

彼女の背後、そこには五百人を超す連合兵が斃れていた。

その光景に、なのはたちは絶句するしかなかった。

あまりに圧倒的な戦力差。シエルは、エリオやキャロと大して変わらない歳だというのに。

連合兵は決して弱くない。それはなのはたちも、シグナムたちも、リンディたちも分かる。

そう、連合兵の実力は、まさに今のなのはやフェイトといったS+魔導師並、いや、それ以上だ。

だが、それを短時間で無傷、支援射撃があるとはいえ、たった一人で全滅させたシエル。

我が妹ながらに凄まじいよ・・・

なのはたちはここで知った。魔術師のランクというモノを。

現代とは違い、当時はSSSランクを超えるランクがあり、アンスールや連合の主力は全員SSSを遥かに超えた魔力を有すると。

そして次々と戦場が変わっていく。

地帝カーネルが大地を操作して戦場を分断し、雷皇ジークヘルグがその上から無数の雷撃を落とす光景。

炎帝セシリスの炎と、風迅王イヴィリシリアの風で起こされた焰嵐により、連合兵が容易く殲滅される光景。

アースガルド同盟軍総司令官魔道王フノスと、彼女の護衛兼アンサー指揮官の白焰の花嫁ステアが、離れた地にキャンプを張り、前線組に指示を飛ばす光景。

蒼雪姫シエフィリスが、彼女とルシリオンの子供とも言える完全自律稼働人型魔道兵器“ヴァルキリー戦天使”の数体と共に、戦場を駆ける光景。冥祭司プレンセリウスと呪侵大使フォルテシアが、この大軍勢の主力の一つへと突貫していく光景を。そして、

「アースガルドは、アースガルドに味方してくれる世界は決して陥落することはない。

憶えておけヨツンヘイム連合。我らアンスールが存在し続ける限り、お前たちの敗北は絶対に揺らがない」

過去ルシリオンが、この大軍勢の指揮官にそう告げる。

「何がアンスールだ!!! この男を殺せえええええええ!!!」

多層甲冑

指揮官を始めとする連合兵二百人の同時魔術攻撃。

しかし、その攻撃は過去ルシリオンに届く事は無く、全てがキャンセルされていた。

ルシリオンの固有魔術多層甲冑。

何重もの不可視の対物対魔力障壁で身を包む術式。
XXランク以下の魔術は全て効果を問わず無効化。
高位神器による攻撃以外全てキャンセルするという超反則術式。

その反面滅茶苦茶な魔力消費だが、まさに無限の魔力を持つとも言えるEXランク魔術師であるルシリオンにとって、大した問題にはならなかった。

「真技・・・！」

過去ルシリオンが“神槍グングニル”を完全解放し、真技を放つ準備をした。

その彼から発せられる強大な魔力に、連合兵たちは言葉を失い、一斉に逃げに転じた。

グロリアス・エヴァンジェル
「神断福音・・・！！！」

同盟世界の魔法陣で構成された砲塔から放たれる“神槍グングニル”。
そのたった一撃で、その場にいた何百という連合兵が文字通り消滅した。

グリユートナガルダルにおけるアースガルド同盟軍最終戦力“アンスール”と、ヨツン Heim 連合軍の一万以上の大軍勢の戦いは、アンスールの圧倒的勝利で終結した。

この戦いで、私たちアンスールは同盟、連合両方に其の名を知らしめた。

ここから大戦終結の地ヴィーグリーズ決戦まで約一年半。
私たちは全力で生きた。護るために・・・

ルシリオンが、再誕神話の書籍を手にする。
開かれているページにはこう書かれていた。

再誕神話 新世界再誕戦争 第一章『神徒アンスール降臨』

止め処無き 魔の波により 力無き生命は ただ蹂躪され 駆逐せる
民は己が無力さに 泣き苦しみ 絶望す
世の空 ただ暗く 悲哀が満ちるとき 天の支配者 拳兵を決定す

神住まう世界の王フノス 御使いたる徒、アンスールを地へと降ろす
アースガルド
天の最果て 神の地より 魔を滅すがため来る輝ける波より 先駆
けるものあり

その行く手を疾駆するは“拳帝シエル” 見えざる力を用いて 邪魔
せし者を蹂躪する
黄金砲台なる“殲滅姫カノン” 遙か彼方より 閃光放ち 魔を掃討す

我ら止めるべく もがく魔の波を討つ“風迅王イヴィリシリア”
其の絶大たる嵐で踏襲するは 正に神徒の力なるかな
民の希望を更に高めんと策を講じるのは“白焰の花嫁ステア”
死した盟友と会話せし者“冥祭司プレンセレリウス” 其が業にて先
駆けし者を助く
魔の波逃れうる時 それを追撃し 更なる報復を与えし煌く闇“呪
侵大使フォルテシア”
復讐に猛るその心の力 魔の波 其れを前にして 永久なる苦痛を
その身に刻む

氷神の加護を受け 闇天に流るる魔の波凍らす 其は“蒼氷姫シエ
フィリス”

蒼き神秘を纏い 戦場翔けるその姿は 真に美しく 魔を魅了す
真を見通す瞳持つ “雷皇ジークヘルグ” 命を石とする瞳持つ “地
帝カーネル”

この両の者の瞳に映されしもの 果て無き死の恐怖に平伏すものとする
遙かに古き帝の炎を受け継ぎし “炎帝セシリス” 全て灰燼に帰すは
原初の業なり

光満ちたる天の奥より来るは 輝けたる “神器王ルシリオン”

無限が如き神器の滴を降らし 魔の波を肅清せし者 彼の後には断
罪されし骸のみかな

神器王がさらなる奥 神徒を統べりし 神なる意志の代弁者 其は
“魔道王フノス”

神位の玉座にて 己が友たちの無事なる帰還を ただ祈り望み続け
る

魔の波に蹂躪されし 民は再びの希望を得、神徒と共に戦いに赴く
こと決意す

此処に千年続きし戦の終局へ向けて 強大たる波々の衝突始まりに
なるかな

……さて、次は……

ルシリオンの姿が消え、代わりに現れたのは、

今度は私の始まりを見せるよ

シャルロツテ・フライハイト。

剣神の二つ名を持ち、この大戦の最終決戦で命を落とした誇り高き
騎士だった。

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ? (後書き)

9年ぶりくらいに、第零話プロローグ(ラピス戦)を書きました。ほとんどどごういう戦闘が忘れてしまっています。9年ですし、仕方がないですよね？

ルシルがもっとボコボコにされていたような、そうでないような・
・？

えー、そして、調子にノってすみません。書いていたら止まらなくなってきたのです。

本当は簡単に、もっと短くしようと思っていたのです。思っていたのですが、止まらない。

ですから後半(確か第三話だった気がする)をものすごく端折りました。

今回はシャルの初陣。ある程度の戦闘。ヴィーグリーズ決戦話から抜粋、といったところでしょうか。

出来るだけ短く、それはもう短くしますので、次回もまた読みに来ていただけると嬉しいです。

遙かに遠き刻の物語 〔ANSUR〕 ? (前書き)

やはり今回でも終わりませんでした(泣)
すいません。もう少しお付き合いください。

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ?

Episode Charlotte Freiheit

今度は私の始まりを見せるよ

消えたルシリオンと入れ替わるように姿を現したシャルロッテ。その手に持つのは、先程までルシリオンが手にしていた再誕神話の一冊。

シャルちゃん……

ん。私の事も知ってほしい。ワガママだけど、知ってほしい

シャルロッテは全員を見渡し、そして指を鳴らした。

それを合図として世界が変わり、グラスヘイム城内と同じくらしい豪華さのある場所になるのはたちはいた。

む？ あれは……ベルカ魔法陣……なのか……？

は？ 何言ってたんだシグナム。こんなところにベルカ魔法陣なんて……マジか

シグナムとヴィータの視線の先には、白亜の壁に飾られている紋章旗があった。

そのデザインはベルカ魔法陣と似たもので、違いといえば三方にある円陣の中に一角獣、翼竜、獅子が描かれているのみだ。

・・・今私たちがいるのはレーベンベルトと呼ばれる世界なんだけどね。

その世界が現代では何て呼ばれているか知ってる・・・？

先に行くシャルロットが振り返り、なのはたちを見る。

そしてユーノとクロノが「現代に残っているのか、この世界が!？」と驚愕していた。

この剣十字紋章を見れば分かるでしょ？

まさか・・・べ、ベルカ・・・なのか・・・？

うん。私の生まれた世界レーベンベルトは、後にベルカと名前を変えるの。

つまり、私はシグナムたち騎士の大大大大だあ~~~~い先輩ってこと

シャルロットはシグナムたち守護騎士を見据える。

何度目ともしれない驚愕するのはたち。

ベルカの騎士であるカリムやシグナムたちは特にだ。

啞然とするシグナムを見る事が出来たためか笑みをこぼすシャルロット。

彼女は「行こっか」と言い、先へと歩き出す。

歩く間、シャルロットはなのはたちに簡単な説明をしていく。

天光騎士団の事。シュテルン・リッター星騎士の事。ルシリオンたちアンスールと敵対する側に居る事。

ミッドチルダが、ミッドガルド本星と呼ばれていた事などを。

そんな中、次第に騒がしくなる天光騎士団本部聖騎殿。ハイリヒ・バラスト

話をしながら通り過ぎていく人たちは全員軽甲冑を装備している騎士だった。

「聞いているんですか!？」
第五騎士!！」
フュンフト・リッター

シャルロツテたちの背後から、怒声のようなものが聞こえてきた。

何度も何度も「第五騎士!！」と怒声が飛ぶ。
フュンフト・リッター

シャルロツテは「あちゃー」と言いながら額に手を置き、天井を仰いでいた。

なのはたちは何事かと思い、何度も怒声の聞こえる場所へと視線を向けた。

「無視しないでくださいよお〜！
第五騎士シャルロツテ様あ〜！
フュンフト・リッター

！」

シャルロツテ!？」

そこにいたのは、銀のラインや装飾が施された青い長衣に、剣で象られた星が描かれた青のマントを羽織った過去シャルロツテだった。隣には過去シャルロツテより若干幼い15歳くらいの少女が涙目で過去シャルロツテの後ろについて歩いていた。

「少し待っていてください、グレーテル。今私は考え中だから。これ以上の妨害は・・・殺ッ!！」

顎に右手を添え、思考に夢中の過去シャルロツテがグレーテルをギラツと一睨み。

「そんなあ〜！
大事な話なんですよお〜！
第三騎士からなんで
ドレシット・リッター

すよお〜!！」

スノーホワイトのショートヘアをワシワシとかき乱し、跪いてはアップルグリーンの瞳からダァーと涙を流すグレーテル。
彼女は、過去シャルロットの率いる騎士団「シユペーアト・オルデン心慧騎士団」の近衛騎士の一人だ。

そんな彼女と過去シャルロットの様子を見て、他の騎士たちは「またか」と苦笑しながら通り過ぎていく。

「アレですよ!? ドレット・リッター第三騎士からなんですよ!? あのシリア様からなんですよ!?

私、伝言役すらできない役立たずってことで、血とか吸われて干物になって死ぬの嫌ですよぉ〜!!!

まだ死にたくないですよぉ〜!!! 聞いてくださいよぉ〜!!!
「!!!」

過去シャルロットの右足にしがみ付き、廊下をズリズリと引き摺られていく騎士グレーテル。

それをあえて無視して歩みを止めない過去シャルロット。
足を止めたかと思うと、長衣のポケットから飴玉を取り出し口に入れ、また歩き出す。

シャルちゃん・・・

フライハイト・・・

引き摺られるグレーテルに激しく同情するなのはたち。

シャルロットを見る彼女たちの視線には、「あの子可哀想。ホント可哀想」の念が込められていた。

あーそんな目で見ないで・・・

過去の自分から視線を逸らし、情けない声を上げるシャルロッテ。

「もー。シリアが何だっというのよ？ 別に怖がる必要なんかないはずよ？」

まあ確かに、あいつの固有魔術の特性からいろいろと陰で言われているけど、結構いい奴よ？」

口の中で飴玉をコロコロ転がして幸せそうな笑みを浮かべている過去シャルロッテは、“シュベアト・オルデン心慧騎士団”の詰め所に到着し、ようやくグレーテルの話の聞く気になった。

「あう〜、シャルロッテ様あ〜・・・（泣）」

「ちょっとグレーテル！ わたし星騎士のマントで鼻水とか拭かないですよ！？」

シュテルン・リッター星騎士にだけ与えられるマントを手にして、涙と鼻水を拭くグレーテル。

それをやめさせようとマントを引っ張る過去シャルロッテだが、すでに手遅れだった。

びちょびちょになったマントを見て、若干涙目になっている過去シャルロッテ。

それはどこをどう見ても、完全なる彼女の自業自得だった。

「シャルロッテ様が悪いんですよお〜！？ 一度深く考え出したら梃子でも動かないんですからあ！」

・・・って、そうじゃなくて！ シュテルン・リッター星騎士の招集命令ですよ、シャルロッテ様！！」

「…………それを早く言いなさい！！ バカグレートル……
——！！！」

「話を聞かないシャルロッテ様が断然悪〜い！！ このアホ……
——！！！！！」

「アホって、上官に向かって言うことかあああああ……！！！」

グレートルにマントを投げつけ、そのままの勢いで全力ダッシュする過去シャルロッテ。

目指すは^{シュテルン・リッター}星騎士専用の会議場だ。

…………何というか、お恥ずかしいところをお見せしました……

恥ずかしさの所為か顔を赤らめて、指を鳴らすシャルロッテ。

また光景が変わり、豪華なつくりの会議場へと変わっていた。

剣十字の紋章が大きく描かれた赤い円絨毯、その上にある白亜の円卓。

その円卓を囲むようにして座る九人の騎士たち。

あれ？ あの人たち……シャルちゃんのご両親と姉のチエルシーさんとちゃう？」

はやてが指さす方には、地球において偽りの家族として用意されたフライハイト家の父役オペル、母役シリア、姉役のチエルシーがいた。

あー、うん。あの家族は地球の界律が用意した偽物の家族なんだよ。

家族じゃなくて、ホントは同僚。私と同じ星騎士シュテルン・リッターというわけ

「突然招集してすまない」

片面の無地の白マスク、その上からアイアンブルーの前髪を右側だけ垂らした男性。

シャルロツテの父として用意されていた男、天光騎士団のトップである第一騎士風の騎士公オペル・オメガ・シュプリンガーが、円卓を囲んで座る八人の星騎士シュテルン・リッターを左の鋭眼で見回す。

「諸君はアンスールという者たちを知っているか？」

「アンスール……。確かアースガルド同盟軍が二カ月程前に投入してきた部隊でしたか。

同盟世界の王族のみで構成された少数精鋭部隊。かなり活躍していると聞いています」

オペルに答えるのは漆黒の髪をオールバックにした初老の男、第二ツヴァイト騎士大地の鬼神ベルレンス・ヒルベルトだ。オペルはベルレンスの言葉に首肯する。

「先程、ミッドガルド王が我々星騎士シュテルン・リッターにある命令を下した。

その精鋭部隊アンスールの討伐を主目的としてのヨツン Heim 連合への協力だ」

「……………はいッ!?」「……………」

オペルを除く他の星騎士シュテルン・リッターの驚愕の声が重なる。

「何だそれ!? 連合は、特務十二将や A・M・T・I・S は何

やっつてんだよ!?

十二将には魔界支配権があるんじゃないか!?

A・M・T・I・S・

ヨツン Heim 連合が、あまり知られていない科学を用いて造り出した自律稼働の巨人兵団。

Automatic operation Magic use
Tactics attack Intelligent battle
System の略称。

近接戦用のタイプ・セイバー、遠距離戦用のタイプ・アーティラリ
ーの二種類がある。

魔界支配権。

人間の住まう次元“表層世界”とは別の層空間“裏層世界”たる魔
界を管理する組織。

上層、中層、下層、最下層の各層七体、計二十八体の魔物の事。

人型の魔人、獣型の魔獣、そのどちらでもない幻想一属の三種が
いる。

「静粛にしてもらおう、ナハト」

「……………すみません」

勢いよく立ち上がったのは、^{ツェーント・リッター}第十騎士夜宴ナハト・ダーツエ。

ヨツン Heim 連合主力の特務十二将と A・M・T・I・S の不甲
斐無さに怒りを示す。

が、オペルの一睨みを受け、謝罪しながらナハトは再び席に就いた。

「納得いかないのは私も同じ。私も最後まで反対意見を出していた
んだが通らなかつた。

軍の不甲斐無さによって、ゼクスト・リッター第六騎士ラピスを失った忌々しい戦争への参加だからな。

しかし、王たちの会議の決定である以上従わざるを得ない」

オペルは苦々しくそう告げた。

本来は十人いるシュテレン・リッター星騎士だが、現在この場にいるのは九人だ。

何故なら、四年前のルシリオンとの戦闘により、当時のゼクスト・リッター第六騎士ラピスが戦死し、それ以来ゼクスト・リッター第六騎士の座が埋まらないのだ。

ラピス様……

シャルロツテの表情に少しばかりの陰が生まれた。

ラピスは、シャルロツテにとって頼れる先輩であり姉のような存在だった。

そして、そのラピスを討つたルシリオンは、シャルロツテにとって最大の仇でもあった。

「待つてください。まさかシュテレン・リッター星騎士全騎での参加なのですか!？」

「チェルシー。私の話を最後まで聞いてもらいたかったな」

「あ……っ！ 申し訳ありません！」

ノイント・リッター第九騎士花の姫君チェルシー・グリート・アルファリオが、椅子から立ち上がりそう声を上げ、オペルより注意されてしまった。

オペルに謝罪し、エメラルドグリーンのポニーテールを揺らしながら急いで椅子へと座りなおす。

12歳でシュテレン・リッター星騎士となり、15歳の今でも最年少である彼女チェルシー。

やはりまだ年若い所為か、どこか落ち着きが足りない少女だった。

「ふむ。順序が少々変わったが、チェルシーの疑問が本題でもあるので答えようか。」

まず、我々天光騎士団の存在意義は、ミッドガルドの秩序管理を第一としてしている。

そんな我々が全騎ミッドガルドより離れるなど以ての外だ」

オペルは天光騎士団の意義を語る。

ミッドガルドの秩序管理機構右翼ミッドガルド軍と共に、ミッドガルドを構成する複数世界の守護だと。

「ゆえに全騎の参加ではなく一部だけの参戦、そこだけは確約を取り付けた。」

今から私に呼ばれた者が、大戦に参加する騎士と騎士団だ」

オペルが立ち上がり、円卓に座する星騎士を見回す。

「まずは私の風神騎士団^{シュトゥルム・オルデン}。そして私が騎士団の総指揮官として参加する。」

次に、第三騎士シリア・ブラッディア^{ドリック・リックター}。鮮血騎士団^{ノインテーター・オルデン}」

「はい。第二騎士シリア・ブラッディア^{ドリック・リックター}。及び鮮血騎士団^{ノインテーター・オルデン}。アンスール討伐、拝命いたします」

鮮血姫シリア・ブラッディアは立ち上がり、その長く艶やかなレッドパープルの髪を後ろに払った。

輝く黄金の瞳を伏せ、気品あふれる優雅な一礼を見せた。

「第五騎士シャルロッテ・フライハイト^{フュンフト・リックター}。心慧騎士団^{シュベアト・オルデン}」

フュンフト・リッター
「第五騎士シャルロッテ・フライハイト。及び心慧騎士団。
アンスール討伐、確かに拝命したわ」

過去の剣神シャルロッテ・フライハイトが立ち上がり、彼女の武装
“断刀キルシュブリューテ”を縦に掲げた。

ズイーフト・リッター
「第七騎士ミストラル・ビルゴ・プリマベラ。守盾騎士団」
フェアタイディゲン・オルデン

ズイーフト・リッター
「第七騎士ミストラル・ビルゴ・プリマベラ。及び守盾騎士団。
アンスール討伐、確かに拝命いたしましたの」
フェアタイディゲン・オルデン

紙徒ミストラル・ビルゴ・プリマベラが立ち上がり、恭しく一礼し
た。

アハト・リッター
「第八騎士サーニグラシオン・ヴォルクステッド。鏡面騎士団」
シュビテゲル・オルデン

「ふむ。当然ですね！ 女子供だけでは心許無いという事なのでし
よう？ 騎士公オペル。

この僕を参加させるとは、実に分かっておいでだ。いいでしょう！
アハト・リッター
第八騎士サーニグラシオン・ヴォルクステッド。そして我ら鏡面騎
士団。
シュビテゲル・オルデン

アンスールを見事に討伐し、星騎士の名を世に知らしめましょう！
シュテルン・リッター
仰々しく立ち上がり、ハンティングピンクの唯でさえツンツンと立
った前髪をさらに掻き上げ、この場にいる女性騎士を蔑むような目
で見るサーニグラシオン。

そんないつも通りの彼に呆れているシリアは徹底無視を決め込む。
過去シャルロッテは深く嘆息し、「バアーカ」と態と彼に聞こえる
ように一言。

ミストラルは首を横に振って、隣に座するチエルシーに「いつも通り無視してていいの」と耳打ち。
チエルシーはミストラルの言葉に「はあ」と力なく答え、いつも通り彼から視線を逸らす。

なんだ？ あの男の、女を馬鹿にするような言動は？

ああいう感じ悪い奴に限って、第一の戦死者になるんだぜ？

シグナムやヴィータに続いて、なのはたちからグラシオンへの批難の集中砲火が発生。
特に熱くなっているのがリインフォース？だった。

！？
何なんですかこの人は！？ 女の人の騎士の何がダメなんですか

その小さい両拳で、グラシオンの頭をポカポカ殴るリインフォース？。

とは言っても相手は所詮幻。全発虚しくすり抜けるだけだった。

あはははは！！ リイン、もっとやっちゃえやっちゃえ！！

シャルさん……。はいです！ もっとやっちゃいます！！

シャルロツテにノせられ、無駄と知りつつさらに速さを上げるリインフォース？。

顔を赤くし、「むううう」と唸りながらグラシオンの頭をポカポカ殴る彼女の姿は可愛らしかった。

「少しは自重しろ、サー！！グラシオン。……。次で最後だ。」

ノイント・リッター
第九騎士チエルシー・グリート・アルファリオ。 ヴァイナハツシュテルン・オルデン 聖願騎士団」

「・・・第九騎士チエルシー・グリート・アルファリオ。 ヴァイナハツシュテルン・オルデン 聖願騎士団。」

アンスール討伐の命、拝命いたします」

花の姫君チエルシーもまた立ち上がり、一礼し任務受諾の意を告げた。

「この六騎士団が大戦へ参加する。名を呼ばなかった騎士と団は、通常任務で頼む」

呼ばれなかったベルレンス、 ファイアト・リッター 第四騎士鎮魂楽団ランチア・ストラトス、ナハトは、それぞれ首肯する。

「ふむ。では シュテルン・リッター 星騎士議会、これにて閉会とする。 出撃命令あるまで全騎通常任務で頼む」

「……………了解」……………

その言葉と共に、なのはたちは真つ暗闇な空間へと放り出された。戸惑っていると、シャルロツテの言葉が全員の耳へと届く。

この二日後、初めて私はアンスールと戦った。

私は・・・甘く見過ぎていたんだ。だから失う事になったんだ

シャルちゃん？ ……泣いて・・・いるの・・・？

シャルロツテはなのはには答えず沈黙を保ち、そして暗闇が晴れる。なのはたちの視界に映るのは、どこかの丘陵だった。

ここが私の初陣。ミッドガルド本星アルグレーン島ツヴァイフェルド丘陵

なのはたちの前に姿を現したシャルロッテ。

沈んだ表情で、ある一点を見据えている。

なのはたちもシャルロッテに倣い、その一点へと視線を向ける。

そこにいたのは過去シャルロッテと、彼女の率いる騎士団だった。

「まさか天光騎士団わたしたちの護る世界エリアにまで侵入してくるなんて」

愚痴をこぼしつつ、しっかりと周囲警戒を怠らずに巡回する過去シャルロッテとその騎士団。

「さて、ここからは私の率いる第一隊、グレーテル率いる第二隊、ライヒアルト率いる第三隊で別行動。

敵兵を確認次第、各分隊長の指示に従って戦闘、殲滅して。でも一応報告はしなさい」

こうして心慧騎士団シュベアート・オルデンは三隊に別れ、行動を開始した。

なのはたちが見るのは、過去シャルロッテ率いる六十名からなる第一隊。

「にしても。攻め込むならヨツン Heim 直下の世界にしてもらいたいわね。

まったく、アンスールの連中にも困ったものだわ」

「あはは。そう言いますが、団長は戦いたくたしょうがないんでしょう?」

「そんなことないわ。と言いたいところだけど、正しくその通りね。戦ってみたいわ。この二カ月で活躍しまくる英雄という連中と、ね」
部下と笑い合いながら、巡回する過去シャルロツテたち第一隊。それからしばらくして、彼女たちの耳にギンツと鈍い音が届き、オオオオオオと大気の震える音が続いた。

「全騎最大警戒！ 各々神器解放！ 奇襲に備えなさい！！」

過去シャルロツテが“断刀キルシュブリューテ”を完全解放しつつ、第一隊に指示を出す。

その指示に答えるように神器を次々に解放していく第一隊の騎士たち。

「……………っ！！ ダメ！！ すぐにこの場から離だ」

ライン・トリガー
圧戒

過去シャルロツテが本能的に危険を察知。

部下にこの場からの離脱を指示しようとした瞬間、

あれ？ シャルちゃん？ 何も見えなくなっただよ

なのはたちの視界が闇に妨げられた。

……………見せなくしたの。あんな殺戮^{こと}、絶対に見せられない。
なのはたちは見ちゃいけない

シャルロツテは指を鳴らし、闇から別の光景へと変えた。

そこは、第一隊が襲撃を受けた場所から1kmと離れた山地。

戦っているのは過去シャルロットと、アンスールの拳帝シエルだった。

「こんな子供が……！」

「子供である前にアースガルドの人間だ！」

だから、お前たちヨツンヘイム連合を斃すために……わたしは戦う……！」

過去シャルロットの“キルシュブリューテ”と、シエルの籠手型神器“月狼ハティ”と“陽狼スコール”が互いを討たんと奔る。

「疾い……！」

「小さい……！」

シエルは過去シャルロットの必殺の斬撃を、その小さな身体を活かして回避しては拳打を放つ。

過去シャルロットはシエルの拳打を“キルシュブリューテ”の峰や腹で弾き、隙の出来た急所へと刃を奔らせる。

それはまるで円舞のように美しい闘いだ。が、実際のそれは殺し合いでしかなかった。

拳と刃が生み出す空気を裂く音。二人の周りに降り注ぐ落ち葉の破裂音。

その大きくもない静かな音だけが、周囲の介入を拒むこの激戦の全てだった。

そして徐々に刃に裂かれるシエルの戦闘甲冑。

同様に過去シャルロットの戦闘甲冑も重力拳によって弾け飛んでいく。

いつどちらかが死んでもおかしくない壮絶な死闘に、ある介入が入る。

『シエル！ 5秒後に右へ離脱！』

シエルのパートナー・カノンからの念話。

『カノン！？ ……了解！！』

シエルは、パートナーであるカノンの言う通りに、5秒ジャストに右へと跳んだ。

そして、カノンからの援護射撃“ルフト・アングリフ殲滅爆撃”が過去シャルロットへと降り注ぐ。

その数約四千。黄金の魔力弾の雨だ。回避は不可能。防御しようとも盾を突破される程の威力。

過去シャルロットは、そんな魔力弾の雨を防がず、または回避する事もせず、

「甘い・・・ッ！」

一発残らず“キルシュブリューテ”で斬り裂き、無効化した。それを離れて見ていたシエルとカノンが青褪める。

今まで相手にしてきた連中とはケタが、いや、格が違つと。

『カノン！！ こいつヤバい！！ 離脱するから援護お願い！！』

『り、了解！！ ジークヘルグ様に救援要請完了！ それまで頑張つてシエル！！』

「逃がさない！ 大人しく投降するなら殺しはしないわ！！」

シエルと過去シャルロッテ、二人だけの死と隣り合わせの鬼ごっこが始まった。

魔力の斬撃を飛ばしつつ、特殊な歩法“閃駆”でシエルに追走する過去シャルロッテ。

その前を重力操作によって身体を軽くしたシエルが物凄い速度で、斬撃を回避しながら走る。

『シエル、同時砲撃で討つ！』

『……ん。合図ちょうだい……！』

シエルは、走りながらも砲撃の術式を組み出す。

カノンもまた砲撃戦用の神器“星填砲シユヴェルトラウテ”を構え、その照準を過去シャルロッテへと合わせる。

そして、

『今……！』

ポラール・リヒト
黄金極光

ジオ・ストライク
重力圧縮砲

二人の砲撃が、走る勢いを止めない過去シャルロッテへと迫る。

過去シャルロッテは、焦ることなく“キルシュブリューテ”を鞘へと納め、能力“絶対切断”を解放。

足を止め、上半身を捻るようにして“キルシュブリューテ”を抜き放った。

真技・飛刃・翔舞十閃

過去シャルロットもまた斬撃砲を放つ。衝突する黄金、アメジスト、桜色の砲撃。

絶対切断の能力を付加された十の巨大な魔力刃が、シエルとカノンの砲撃を徐々に裂いていく。

過去シャルロットは、止めと言わんばかりに再度“キルシュブリューテ”を鞘へと納め、

第二波・飛刃・翔舞十閃

二発目の真技飛刃・翔舞十閃を放った。

ただでさえシエルとカノンの砲撃を押していた過去シャルロットの真技。

そこに、過去シャルロットの真技飛刃・翔舞十閃がもう一発追加され、二人の砲撃が一気に押され始める。

過去シャルロットは、再び“キルシュブリューテ”を鞘へと納め、

「アンスール！ 神器を納め、大人しく投降しなさい！！」

シエルとカノンに投降を呼びかける。

その瞬間、過去シャルロットの二連飛刃・翔舞十閃が、シエルとカノンの砲撃を完全に掻き消し、シエルへと殺到した。

「……………まだ小さな子供……………だったのに……………
どうして、どうして戦争なんか……………。くだらない……………！」

シエルのいた場所に吹き荒れる砂煙を見つつ、過去シャルロットは悪態をつく。

彼女は“キルシュブリューテ”の解放を封じ、シエルを支援していたカノンを探し出すために動こうとしたとき、

「……今ので、まだ生きているなんて……。
さすがは同盟軍の英雄アンスールの一人というわけか」

晴れてきた砂煙の向こう、そこには負傷したのか右腕を押さえながら片膝をつくシエルを見た。

シエルは咄嗟に地面に穴を掘り潜ることで、過去シャルロッテの真技をやり過ごしていた。

その彼女の紅と蒼の瞳に宿るのは、恐怖でもなく絶望でもなく、決して揺らがない戦意だった。

過去シャルロッテはシエルのその目を見て、

（ホント冗談は止してもらいたいわ。あんな幼い子供が、あんな目をするなんて……）

心底脱帽していた。

「これが最終通告。神器を納めて投降しなさい。

大人しく投降してくれるのなら、絶対に手を出さないと約束するわ」

もう一人のアンスール・カノンに警戒しつつ過去シャルロッテがシエルと近づいていく。

シエルは、黙したままその場から動こうとはせずに行った。

「怒ってないの？ わたしを殺したくなるほど怨んでないの？ 憎くはないの？

わたし、あなたの部下を殺したのよ？ 普通なら復讐したくなるんじゃないの？」

シエルが静かにそう告げた。
過去シャルロッテはどういうつもり？と思いながらも、足を止め答えた。

「そうね。確かに憎いわ。でもね、それでも負の感情を戦場に持ち込むのは絶対にいけないわ。」

戦場で負を抱いてそのままに戦えば、待っているのは自身の破滅のみだから。

それに、戦場に出た以上、死は覚悟の上。普段からそういう世界にいる私たちは特に」

「だから復讐はしない」と過去シャルロッテは言った。

だが、実際は大切な部下を殺した犯人は容赦せずに殺そうとしていた。

しかし、その犯人であるシエルのあまりの幼さに、心が揺らいだ。本当にこのまま殺してしまっていたのか、と。

こういう小さい子供こそ護るのが騎士なのではないのか、と。

シエルは敵である。部下を殺めた犯人。それでも過去シャルロッテは迷った。

シエルはポカンと口を半開きにしたまま、その言葉を聞いていた。

「・・・これが、騎士。ヨツン Heim 連合の正規軍人とは全然違う」

「軍人と騎士を一緒にしてほしくないわ。っと、それで？ 投降するの？しないの？」

「投降は・・・しない！」

重力操作による10倍の重力が、シエルの周辺を襲う。

過去シャルロットは、術の出始めを学習して、すでに閃駆によって離脱を終えていた。

そのまま“キルシユブリユーテ”を完全解放し、仕方なくシエルを殺す事を揺らいだまま決める。

「真技！！ 飛刃・翔舞じ つ！！？」

ネメジ・ディーオ

何度目かの真技を撃とうとした過去シャルロッテに、ジョンブリアンの雷撃が襲いかかる。

過去シャルロッテは、本当にギリギリのところで落雷をかわし、居合い抜きの構えで警戒する。

「これ以上続けるのなら、私が相手をしましょう、レーベンベルトの騎士よ」

シエルを護るかのように立つのは、アンスールの雷皇ジークヘルグ。手にするのは神造兵装“天槌ミヨルニル”。柄の短い黄金の鉄槌で、バリバリと放電している。

「ごめん、ジーク。負けちゃった。兄様に何て言おう・・・」

ジークヘルグは、負けた事に激しく落ち込むシエルに微笑み、すぐさま過去シャルロッテへと視線を戻す。

「ジークヘルグ・・・。確か同盟世界ニダヴェリールの皇帝で、アンスールの一人。」

(現状だと分が少し悪い、か。仕方がない。ここは一度撤退する・・・)

調子に乗って真技を連発したツケが今の彼女を襲っていた。魔力の枯渇、とまではいかないが、ジークヘルグを相手にするには魔力が足りなかった。

「返答は如何に？」

「・・・撤退するわ。私の部隊も落とされたし。途中で別れた分隊の事が気になるし、ね」

「そうですか。ならばこちらも退きましよう」

互いに神器を納め、背を向ける。

そして、同時にジークヘルグと過去シャルロッテが振り向き、

「アースガルドの子、名前は？」

「騎士よ、君の名は？」

同時に名前を訊いた。

「・・・ミッドガルド天光騎士団シュテルン・リッター星騎士、シャルロッテ・フライ
ハイト」

「アースガルド同盟軍アンスール、シエル・セインテスト・アース
ガルド」

「シエル・・・ね。もう一人の砲撃手は？」

過去シャルロットが周囲を見回し、カノンへと訊ねる。

「アースガルド同盟軍アンスール、カノン・ヴェルトール・アール
ヴヘイム」

姿は見せないが、それでもしつかりと名乗ったカノン。
過去シャルロットはそれに微笑し、そして去っていく。

「カノン、か。シエル、カノン。次に会ったら、今度こそ私は完全
勝利を収める。」

それまではその命、あなたたちに預けておくわ」

なのはたちの視界に映る光景が、ビデオの一時停止のように止まる。

これが私の初陣。結局第一隊は私一人残して全滅。第二隊も半壊、
第三隊は一人残らずの全滅だった

俯きながら、そう静かに告げたシャルロット。
なのはたちはどう声をかけていいのか解らず、ただじっと黙ってい
た。

本部に帰ってからはいろいろと言われたなあ。特に男尊女卑の権
化グラフィオンには

場面が変わる。そこは天光騎士団本部聖騎殿の東門前広場。
ハイリヒ・バラスト

「いやはや、アンスールには返り討ちにされ、その果てに心慧騎士
団が半壊、いや、ほぼ全滅とは。
シュペーアト・オ

何をやっているのだろうな、第五騎士シャルロット？」
フュンフト・リッター

過去シャルロットの率いた心慧騎士団シュベアト・オルデンの状況を知ったサー・グラシオンは、態々彼女たちの帰りを待ち、その嫌味な言葉を過去シャルロットへと浴びせる。
その下卑た笑みを見せる彼に、なのはたちは怒り心頭。

「ああ、これから君はどうするんだい？ 騎士団の大半を失った君は？

ふむ、まあいい機会だ。天光騎士団を辞めてはどうか？ やはり君ら女は弱くて頼りない。

大人しく国に帰り、我々に護られていたまえ、フライハイト伯爵令嬢殿。

クククク・・・アアハツハツハツハツハツハツ！！！」

そう言つて、鏡面騎士団シュベトゲル・オルデンの詰め所へと帰っていくグラシオン。

過去シャルロットは、何も反論せず黙って耐えていた。事実である以上、文句は言えないと。

切れて血が出るほどに唇を噛み、握った両拳からは血が滴り落ちていた。

それでも涙だけは流さなかった。それが彼女の騎士としての意地だから。

「シャルロット様・・・」

無傷とはいかないが、それでも無事だったグレーテルが過去シャルロットを心配して声をかける。

生き残った他の騎士も心配そうにしている。中にはグラシオンにベーツと舌を出す者もいた。

「ごめんなさい。私が団を分けた所為で・・・こんな・・・」

でも、それでもこんな私についてきてくれるなら、私は、私たち心シユ
ベアト・オルデン
慧騎士団は終わらない・・・」

背後にいる騎士たちに、背中を向けたままそう告げる過去シャルロ
ツテ。

少し沈黙が続き、背後からこの場から離れていく幾つもの足音を彼
女は耳にした。

過去シャルロツテは「しょうがないわよね」と、もう誰もいないで
あろう背後へと振り向いた。

そこには、

「っー!」

少し離れた場所に、整列した心慧騎士団シユベアト・オルデンの騎士たちがいた。

誰一人として欠けることなく、過去シャルロツテから視線を逸らさ
ずにいた。

「私たちの将はあなただけです、シャルロツテ様」

グレーテルが、騎士たちの代表として過去シャルロツテに告げる。

すると、他の騎士たちも「一生ついていきます」などと口々に告げ
ていく。

それを見て、聞いて、ここで初めて過去シャルロツテが涙を流す。

「ありがとう。ありがとう。ありがとう。みんなの想いに絶対応え
るから。」

だから、心慧騎士団シユベアト・オルデン！ 再編成した後に再度同盟軍に仕掛ける！

「ラッヘ借りを返すぞ!!」

心シユベアト・オルデン慧騎士団の旗は決して折れることなく、再度大戦参加に向け、腕を磨く。

過去シャルロッテの人望のおかげで日に日に騎士の人数が増え、一ヶ月後には元通りの騎士団へとなっていた。

これが、シャルちゃんの始まりなんやね

うん。ここから幾度もアースガルド同盟軍と戦ったよ。
アンスール戦だけは部下を下がらせたけど

再度場面が変わる。

それじゃ今度は、ルシルと一緒に語ろうか

そうだな

シャルロッテの隣に並び立つように、ルシオンがその姿を現した。それからなのはたちは、再誕神話に記された数多くの戦いを目にした。

Episode ANSUR

連合軍と、グラシオン率いる鏡面騎士団シユビゲル・オルデンの同盟世界“ニヴル Heim”の攻略戦。

王都エリユーズニルへと続く道グニパヘルルでの攻防戦。

過去ルシオンと蒼雪姫シェフィリスの恋人コンビによる圧倒的な戦力の前に、連合軍は敗走。

グラシオンもまた、蔑む対象である女のシェフィリスにボコボコに

され怒り狂った。
部下に取り押さえられながらの敗走である。

頭をかき乱しながら逃げる彼を見たヴィータとリインフォース？は、「ざまあみる」といった風に笑った。
なのはたちも、顔にも声にも出さないがそういった心境だった。
フェイトは、過去ルシリオンとシェフィリスの姿に、ただ苦々しく彼女の隣に立つルシリオンの横顔を見ていた。

連合四天王スリュムヘイム王と特務十二将マーデイス部隊、そしてオペル、シリア、シャルロッテ率いる騎士団による“アールヴヘイム侵略戦”。

そこで、連合を操る四天王スリュムヘイム王が、白焰の花嫁ステアの手により戦死。

風の騎士公オペルと地帝カーネルは、カーネルの敗走。鮮血姫シリアと拳帝シエルは引き分け。

過去シャルロッテと風迅王イヴィリシリアは、過去シャロッテの圧倒的な差での敗北。

殺されかけたところを特務十二将の一人、炎浄王マーデイスの助けもあり逃走に成功。

連合軍の“アールヴヘイム侵略戦”は失敗に終わる。

ギンヌンガガブ魔族召喚阻止戦。

裏層世界たる魔界と繋がる世界“ギンヌンガガブ”において、連合の戦力増強作戦“魔族召喚”を阻止する戦い。

過去ルシリオン、雷皇ジークヘルグ、冥祭司プレンセレリウス、戦^{ヴァ}天使数体による激戦。

この戦いで、同盟軍は連合四天王ウトガルド王を討伐。

特務十二将の一体かつ幻想一属である“虹属の魔石群アリウィウス・アルクス”の撃破という功績も上げる。

A・M・T・I・S・八十機も、過去ルシリオンの創世結界“イザブリク神々の宝庫”により殲滅。
魔族召喚も阻止する事に成功。ヨツン Heim 連合の敗北がより一層強まる。

ミッドガルド・フレスエイ戦

ミッドガルドを構成する世界の一つフレスエイでの戦い。

特務十二将の空席を埋めた魔術師が居ること、呪侵大使フォルテシア、炎帝セシリス、殲滅姫カノンが赴く。

連合大隊の殲滅後、突如三人を襲う強力な捕獲結界。

姿を現したのは、先の戦いで戦死したウトガルド王の娘“夢幻王プリムス・バラクーダ・ウトガルド”。

十歳という幼さで、四天王のトップに立つ連合の支配者となった天才魔術師。

そして、新たな特務十二将“結界王アリス・ロードスター”。
挨拶がてらの捕獲結界に閉じ込められた三人は、為すすべなくプリムスとアリスを逃がしてしまう。

その他にも、新たな四天王“葬枢王フォード・テルスター・スリユム Heim”率いるムスペル Heim 侵略戦。

過去ルシリオンが初めて敗北したヨツン Heim 連合第三前線砦“グリュートトウンガルズ”の戦い。

アリスの反則捕獲結界“サンダルフォン一方通行の聖域”と紙徒ミストラルのコンビによる敗北だった。

救援に来たステアの創世結界“ムスペル Heim劫火が支配せし煉界”が無ければ、過去ルシリオンは戦死していた。

特務十二将にして、魔界最下層の支配権たる幻想一属“魔砂漠ネブソノフス”。

自我を持つ広大な砂漠。八百年前に、当時の連合召喚魔術師千人の

犠牲によって召喚された魔族。

一万平方kmという巨大かつ強大な力を持つネブソノフスとアンスールの戦い。

同盟連合関係なく兵の命を奪い去るネブソノフス。フノスを除くアンスールは為すすべなく敗走した。

同盟軍を裏切ったムスペルヘイムが連合に渡した巨大戦艦“ナグルファル”の攻略戦。

ムスペルヘイムの王女たるステアとセシリスの二人だけの戦い。

彼女たちの実兄であるムスペルヘイム王を殺害する事で“ナグルファル攻略戦”は終結。

ステアが、裏切りの兄王に代わり、ムスペルヘイム最後の女王となる。

アースガルドへ繋がる唯一の道、防衛世界ビフレストで起こった“絶対防衛線戦”。

さながら最終決戦とも言える熾烈を極めた同盟連合両主力による激戦。

A・M・T・I・Sは上位十機を残し全滅。ヴァルキリー戦天使もまた被害甚大。

特務十二将のリーダー、ミッドガルド軍大将“召喚王アーサー”もまた、この戦いで重傷を負う。

ブレンセレリウスも、過去シャルロットにより敗北。重体となるも一命を取り留める。

互いに甚大な被害をもたらし、“ビフレスト防衛線戦”は終結。

他にもまあ大小様々な戦いはあったけど、これぐらいにしとくね。で、この大戦が大きく変わることになる戦いが、大戦終結半年前に起こった

シャルロツテがそう告げ、場面が変わる。

そこは、ヨツン Heim 連合に与する世界ヴァナ Heim の帝都へと繋がる橋上。

タナクヴィスル川をまたぐ全長 12 km、幅 4 km の巨大な橋の上。

ビフレスト防衛線戦で疲弊しきつたヨツン Heim 連合を切り崩すための戦いだ

ルシリオンが、アンスール率いる同盟軍を見つつそう口にした。

数はそう多くはないが、それでも五万という魔術師部隊だ。

現在ヴァナ Heim の防衛力は弱い。ほとんどがヨツン Heim に回されている所為だ。

そこを狙ったアンスールの“ヴァナ Heim 攻略戦”。

連合世界のリーダー格の一つであるヴァナ Heim を落とせば、それだけで流れが変わると踏んだ魔道王フノスの案だった。

帝都へと繋がる橋の上、そこにはヴァナ Heim 防衛のために配置されたグラシオン率いる騎士団。

そして連合兵が二万という数で待ち構えていた。

「ここは私たちニヴル Heim 軍が引き受けます。ですから、みなさんは帝都を目指してください」

そう言つて、同盟軍の前に躍り出るのはシェフィリス。そしてニヴル Heim 軍。

氷雪系に特化したニヴル Heim 軍と、氷雪系最強の蒼雪姫シェフィリス。

対するグラシオンは、神器“魔鏡フェアドレーエン・シュピーゲル”を扱う騎士。

魔鏡の反射による全方位攻撃、防御、転移を行う。
幾度も戦場で遭遇するたびにシエフィリスが破った騎士とはいえ、
シエフィリスは一切の油断なく構える。

「シエフィ……。気をつけるよ」

「うん！ ありがとう、ルシル。ルシルも気をつけてね」

過去ルシリオンはシエフィリスの額に口づけし、彼の率いる部隊と共に先へ往く。

それに続き、ステアをリーダーとした同盟軍が、戦闘を開始した二
ヴルヘイム軍と連合軍の脇を通り抜け、帝都を目指す。

「誰が防衛線（ユニ）を通る事を許可したああああ！！！！」

ウン・オールドマング・ゲヴァルト

秩序無き猛威

グラシオンの無差別攻撃が同盟軍を背後から襲う。

周囲に展開された二十を超える魔鏡に反射した何条もの青の光線だ。
反射を続ける所為で、その軌道が判断できない程の無差別攻撃とな
っている。

「私が許可したの……。！」

クリュスタッロス・アントス

天花麗盾

同盟軍に迫る光線を、神器“聖水鏡マーニ”を前方に構え、防性術
式を発動して防ぐシエフィリス。

それでもすべてを防ぎきることが出来ずに、同盟軍の最後尾へと迫
り往く光線。

「ガラム！ リアンシエルト！ フェンリル！」

シエフィリスがある者たちの名前を叫ぶ。

すると、シエフィリスの盾を通り過ぎたグラシオンの光線が全て弾かれ、上空へと消えていった。

走り行く同盟軍の背後を護り、そしてシエフィリスの背後に立つ三つの人影。

白いセミロングヘアに黄金の瞳を持つ少女、ニヴルヘイムの番犬にしてシエフィリスの使い魔“ガラム”。

黒のロングヘアに黒の瞳を持つ少女、ルシリオンの使い魔にして、世界を呑み込む魔狼“フェンリル”。

そしてもう一人。戦天使の一体“氷浪の鏡リアンシエルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキユリア”。

シエフィリスの妹をモデルにした、お淑やかだが好戦的な一面を持つ少女。

「お母様。我らにどうかご命令を」

「全軍、この場から誰一人として帝都へと通すな！！」

全軍がシエフィリスに答え雄叫びを上げる。

「我ら氷零世界ニヴルヘイム。アースガルド共に歩む事を決意せし者。

ここを通り、同盟軍に追いつきたくば、アンストールが蒼雪姫シエフィリスを討つがいい！！」

衝突するニヴルヘイム軍と、グラシオン率いる騎士団と連合軍。

橋上の激戦の結果、グラシオンはシエフィリスによって戦死した。

ステアは、敵兵をなぎ倒しつつ王城へと駆ける。
フォルテシアは、スヴァルトアールヴヘイムを滅ぼした仇の一人、
特務十二将にして最下層魔界の支配権“戦闘卿バラディウム・クー
トランド”と死闘を繰り広げ、瀕死になりながらも勝利を収める。
そして地上へと降り立った過去ルシリオンは、

「結界王・・・アリス、だったか」

かつて、自分を追い込んだ結界魔術師アリスと対峙した。

額を大きく出したターコイズブルーの長髪は煤汚れ、尋常ではない
汗をかいていた。

目も虚ろで、目の前の過去ルシリオンにすら気づいていない様子。

過去ルシリオンは、最大警戒のまま近づき、アリスの頭に手を置き、
記憶を探る。

そして知った。アリスは連合によって拉致され、薬物によってその
力を強化されていた事に。

過去ルシリオンは、彼女を連れて帰り保護。治療によって薬物によ
る悪影響を全て取り除き完治させた。

ヴァナヘイム攻略戦は成功し、ヨツンヘイム連合のリーダー格の一
つヴァナヘイムを陥落させた。

この三日後、アースガルド同盟へとヨツンヘイム連合からの休戦申
し込みが来た。

同盟軍はその申し出を受諾。通算283回目の休戦協定となった。

この大戦最後の休戦期間を“フイムフルヴァイト世界最後の冬”と呼ぶ。

この半年後、千年と続いた大戦が終結する

ルシリオンがそう告げ、場面が変わる。

そこは、防衛世界ビフレストにある“ヒミンビョルグ宮殿”の広場

五千万人という同盟軍を前に、フノスを始めとしたアンスールが立っていた。

そして、半年前に保護した結界王アリスも、13人目のアンスールとして、シエルとカノンの隣にいた。

「歩み寄りの刻はすでに遙か遠くに過ぎ去り、今まで私たちは戦ってきました。

みなさん、千年の永き時の果て、ようやくこの戦争も終わりを迎えます。

ヨツン Heim 連合は、自ら休戦協定を破り、聖域ヴィーグリーズへと進軍中です。

我らアースガルド同盟の心を踏みにじるその愚行、私は許せません」

全同盟軍へと向け、語り続ける最高司令官フノス。

「みなさん、戦闘態勢を！ 己が神器たましいに、断罪の意思を！ 肅清の意思を！

私たちが望むのは覇ではありません！ それを分わからず屋いつにお教えに行きましょう！

これで最後です！ アースガルド同盟軍、いざ、聖域ヴィーグリーズへ！！」

アースガルド同盟軍もまた聖域ヴィーグリーズへと進軍を開始。

そして、ヴィーグリーズ決戦が始まった。

一日目。雷皇ジークヘルグと鮮血姫シリアの決闘。

互いに重傷を与えつつ、シリアはジークヘルグの真技“雷神放つ破壊ミユルの雷”によって死亡した。

他のアンスールメンバーもまた戦場に繰り出す。

「お前が、神器王ルシリオン・・・」

「剣神シャルロッテ・フライハイト、だな」

戦場の離れた一画。過去ルシリオンと過去シャルロッテが対峙していた。

手にするのはお互いの神器、“グングニル”と“キルシュブリューテ”。

なのはたちも固唾を飲んで、二人の親友の姿を黙って見守る。

「目覚めよ、断刀・・・キルシュブリューテ！！」

過去シャルロッテの“キルシュブリューテ”が桜色の閃光を纏う。

刀身の腹にも幾何学模様、文字のようなものが浮かび上がっていた。そして、

「・・・プツ」

「何が可笑しい！？ 神器王！！」

激昂する過去シャルロッテ。それに反し、笑みを見せる過去ルシリオン。

そして、彼女は知る。“キルシュブリューテ”の腹の書かれた概念文の意味。

「もうどうでもいいわ。神器王、私はあなたに会いたかった。

この手で、あなたを斃せる日が来るのをどれだけ待ち望んだか・・・」

「そうか。ならば、こちらも手加減無用で行こう。目覚めよ、神槍・

・・・グングニル！！」

そして始まる死闘。

過去ルシリオンの放つ神器群を、片っ端から斬り捨てていく過去シヤルロット。

結局その日は決着しなかった。

二日目。

シエルとカノンの“フロント・フェアリー戦場の妖精”、特務十二将にしてA・M・T・

I・S・最強の二機“機神剣フルングニル”と“機神砲アングルボザ”の激戦。

シエルは、真技“デストラクション・天壤蹂躪するは神なる拳”バイルによってフルングニルを破壊。

カノンもまた、創世結界“フェアテルゲン・ヴェルトール殲滅領域”で、アングルボザを破壊した。

三日目。

魔道王フノスが、ついに戦場に立つ。

相手は、特務十二将にして最下層魔界支配権の第二位“喰滅狼ウリベルト・ツェレストティツァ・カーナス・フレイオルタ”。

その実力、まさに連合最強。過去ルシリオンですら一対一で勝てるかどうか分からない怪物。

それと引き分けるフノスの実力の高さが良く分かる。

ブレンセレリウスと、特務十二将“魔術の蔵フランセスク”の決闘。ポロポロになりながらも、ブレンセレリウスは勝利を収めた。

四日目。

互いの主力が出ることの無かった一日。

五日目。

特務十二将リーダー召喚王アーサーの、禁呪“上位魔族召喚”の代

償による精神崩壊が始まった。

理性が完全に飛び、300頭以上という魔獣の群れを従え、戦場を蹂躪した。

暴走したアーサーを止めたのはシエフィリス。

彼女の真技“ブスィフロス・エウイエニ区ヨノスイエラ・カタストロフイ氷葬大結界・真百花繚乱”により、アーサーと魔獣群は氷漬けにされ、そのまま砕かれた。

過去ルシリオンは、連合四天王のヴァナヘイム女帝とヨツンヘイム王が、部下を置いて逃亡する場面に遭遇。

部下が命を賭して戦っているというのに、主たるその二人の逃亡が許せなかった彼は、創世結界“フレイザブリク神々の宝庫”を展開、二人の王とその側近を蹂躪した。

六日目。

ステアは、求婚を迫るストーリーカー、四天王たるフォードと決着をつける。

二人が同時展開した創世結界が、互いの術式を食い潰そうとしている時、フォードを襲うのは、アリスの反則結界“サンダルフォン一方通行の聖域”。閉じ込められ、一切の魔力行使が出来なくなったフォードへと、ステアは真技“ドラガオン・ブルガトリオ咬み殺す神焰”を放ち、フォードを討った。

過去ルシリオンとシエフィリスのコンビが、過去シャルロットとミストラル、チエルシーと戦う。

多種多様なミストラルとチエルシーの魔術に苦戦を強いられながらも、最初にチエルシーの創世結界を破り戦闘不能にする。

次いでミストラルを戦闘不能に追い込む。最後に、過去シャルロットを戦闘不能にした。

こうして、大戦に参加したシュテルン・リッター星騎士は全滅した。

最終日。

ムスペルヘイムの裏切り一族の末裔“炎浄王マーデイス”と、王女セシリスの決闘。

炎熱系の魔術師同士の戦いは、セシリスの勝利で決着する。

連合の敗北がすでに決定しているようなものの、連合最後の四天王たるプリムスが、“戦場の妖精”フロントフェアリーと戦う。

得意の幻影魔術と、創世結界“心狂わす道化の国”ウトガルドによってあと一歩まで追い込むも、カノンに結界術式の穴を見破られ、創世結界を上書きされる。

戦う術を無くしたプリムスに投降を呼びかけるシエルだったが、最期まで戦おうとしたプリムスに、カノンは砲撃を放ち、プリムスを撃破した。

連合を統べる四天王の全滅である。

フノスと死闘を繰り広げ、結局勝敗が着かなかったウリベルトは、契約主である四天王全滅ということもあり召喚が解かれ、魔界へと帰還した。

ネブソノフスもまた、ウリベルト同様に契約主を失い、魔界へと帰還されようとしたとき、それは起こった。

これが再誕神話に記される世界の終わり“ラグナロク”だ

敗北した事が信じられず狂気に走った連合魔術師が、最大禁呪“ラグナロク”を発動。

時間や空間を無視して破壊を撒き散らす、原初王オーディンが生み出した“ルーン”に次ぐ原初魔術。

視界を突然覆う白。その刹那に起こる強烈な衝撃波、そして地割れ。“ラグナロク”の発動地点を中心に破壊が広がっていく。

このとき、すでに周囲にある様々な世界が滅んでいた。

ヨツンヘイムを始めとした連合世界。アースガルドを始めとした同盟世界も、滅亡とはいかずとも甚大な被害を被っていた。

そして、無事だったミストラルも、魔界へと帰還しようとしていたネブソノフスも、最初の衝撃波で消滅していた。

“ラグナロク”発動を行った連合軍も、発動と同時に消滅していた。

「何てことを……!!」

過去シャルロットが、グレーテルたち騎士団とチエルシーを庇って、“ラグナロク”の衝撃波に耐えていた。

“キルシュブリューテ”を完全解放し、衝撃波を斬り裂いてはいるものの、次第に掌からの出血が増え、腕の筋肉や血管が断裂していた。

激しい痛みを意識を飛ばされそうになりながら、過去シャルロットは背後に庇う仲間を救うために懸命に耐える。

（誰でもいい。お願い。神さまでも、悪魔でも構わない。この子たちを護ってあげて……）

“キルシュブリューテ”の刀身にヒビが入るのを見た過去シャルロットは祈った。

背後で気を失っている大切な仲間たちを護ってほしい、と。

そして、“ラグナロク”の何回目かの衝撃波によって、“キルシュブリューテ”が砕け散る。

意識が飛びそうになっていた過去シャルロットが目を見開く。

（私では……やはり護れないというの……？）

お願いお願いお願いお願い……！　この子たちを護って！

！！！！）

衝撃波に飲まれ、自身の肉体が消滅し始めたのを見た過去シャルロツテの最期の願い。

我にその魂を捧げよ

(え・・・?)

突然耳元で囁かれたような声に、過去シャルロツテは戸惑った。

彼女の視界には、時間が止まったかのように動きを止めていた世界が映った。

灰色の世界。体の大半が消滅した自分。その背後に倒れている大切な仲間たち。

テストメント 界律の守護神となり、その刻が訪れるまで戦い続けよ

(テストメント・・・?)

聞いた事のない言葉に戸惑う過去シャルロツテだったが、

(そのテストメントというのに私がなれば、この子たちとミッドガルドを護ってくれる?)

疑問を抑え、謎の声に取引を持ちかけた。過去シャルロツテは手段を選ばなかった。

護れるのならなんだってする、という決意が今の彼女の全てだった。

そちらから提案してくるとは

(どう? 私の背後にいる仲間と、私の故郷レーベンベルト、を含

めたミッドガルドを護ってくれるのならば・・・)

よかるう。ここに契約は為された。汝には、白き第三の力“剣戟の極致に至りし者”の名を授ける

謎の声の主“神意の玉座”の意思と過去シャルロッテの取引通りに、チエルシーやグレーテルたちは生き延びた。

そしてミッドガルドもまた滅亡することなく、現代に到るまで存在し続けた。

これが私の人間としての終わり。そして界律テストメントの守護神としての始まり

僕たちの住むミッドチルダが今こうしてあるのは、君のおかげなんだな、シャル

クロノが、シャルロッテを見ながらそう口にした。

なのはたちはただ泣いていた。親友の人生が、そしてその死が壮絶過ぎて。

私は後悔してないよ。仲間を護れたし、ミッドガルドも護れた。

あーでも、レーベンベルトだったベルカが滅んだのはちょっと悲しいけどね

それを聞き、シグナムたち古代ベルカを生きた騎士は顔を伏せた。

さてと、これで私の話は終わり。さ、ルシル。今度はルシルの番だよ

シャルロッテの姿が消える。そして今まで黙っていたルシリオンが

口を開く。

どうする？　もうここで止めておくか？

ううん。見せて。ルシルの全てを。私は知っておきたいから

フェイトがそう答え、なのはたちも頷いて答えた。

・・・そうか、分かった。これが、私の終わりで始まりだ

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ? (後書き)

うーん、シャルロットは敵方の上、さほど出ない。の割に人気の高かったキャラなんですよね。

何で人気だったのか未だに分かりませんが、私自身も敵キャラの中では何となく好きな方だったりします。

今ではどうしようもないギャグキャラですけどね(笑)

さて、過去編も次で終わりですね。アンスールの最期、そしてルシールの終わりと始まりです。

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ?

「ここに今誓いを立てる」

最大禁呪“ラグナロク”によって、次々とヴィーグリーズにいた人命が失われていく。

その“ラグナロク”発動地点。強烈な衝撃波が生み出され続けるその中心である漆黒の光球。

そこに、過去ルシリオンとフノスが、生き残った同盟連合両軍の兵たちを逃がすために、そして“ラグナロク”を再封印するためにいた

過去ルシリオンは、“ラグナロク”を封じるために完全解放した“グングニル”や他無数の神器を、発動地点を囲う様に突き立て結界とした神器群を維持していた。

それと並行して行われようとしている魔術。

「我、フノス・クルセイド・アースガルド」

「我、ルシリオン・セインテスト・アースガルド」

過去ルシリオンとフノスが、両手の親指の肉を切り、手の平を重ねるようにして傷口を合わせる。

今行われているのは“メンタルリンク契約”と呼ばれる儀式魔術。

自分と相手の傷口を合わせ、血と魔力を混合することでシステム魔術炉をリ
ンクさせるというもの。

そして魔力をどちらからでも送ることが可能となる。

システム魔術炉に掛かる負担も分けることで、片方の無茶な術式を補助することが出来るようになる、本来は主従を誓うための儀式。

しかし今は、“ラグナロク”を停止させるために必要な魔力を用意

するための緊急用のものだ。

「我ら、ここに誓いを築き、主従の理を宣言す」

二人の魔術炉がリンクを開始し、二人は混合し暴れ回る魔力を制御する。

そして最後に、

「メンタルリンク
契約」

過去ルシリオンとフノスが口づけを交わす。儀式は晴れて終了となる。

フノスを主とし、彼女から流れる魔力を、過去ルシリオンは結界を構築する神器群に流し、結界の効果を最高にする。

“ラグナロク”の破壊が停止するのを確認したフノスは、悲しそうな表情をする過去ルシリオンに微笑み返す。

対する過去ルシリオンは、自分が犯した後戻りできない罪に齒がみし、フノスに見えないように涙を流した。

「目覚めて。私の神剣・・・グラム！」

魔道王フノスの神器、神造兵装第二位“神剣グラム”。

“グングニル”と同様にクリスタルのような刀身を持つ両刃の剣“グラム”が、虹色の輝きを放つ。

そしてフノスは、彼女の固有能力“空間干涉”を発動。

“空間干涉”を今から放とうとする真技に付加する。

その様子を背後で感じ取った過去ルシリオンが「すまない」と激しく後悔した表情で呟く。

もちろんフノスには届かない。謝って許されるような事ではないの

だから。
そして、

「っ……くそ……。今だ！！ フロス！！！」

後ろに控えていたフロスが、過去ルシリオンの合図とともに“ラグナロク”の中心へと駆ける。

銀の長髪が波打ち、コバルトブルーの瞳は“ラグナロク”の中心のみを移し、その表情は決意と覚悟に満ちていた。

が、その顔色は青を通り越して白かった。血の気の無い、まるで死人のように。

フロスが過去ルシリオンの脇を通り過ぎる。

一瞬だけ合う二人の視線。方や笑み。方や泣き。

フロスは優しく「大丈夫」とだけ告げ、そのまま“ラグナロク”の中心へと駆ける。

過去ルシリオンは、背を向け走り去ろうとするフロスへと右手を伸ばす。

だが彼の右手は、フロスの後ろ髪の毛先を少し触れるだけとなり、フロスを止める事は出来なかった。

「くそつ……。何がみんな護つてやる、だ。私は、義妹一人護れないのか……！」

“ラグナロク”を抑える結界の楔たる神器群への魔力供給を停止させる過去ルシリオン。

結界が消えた事で再度猛威を揮う“ラグナロク”。

今度は過去ルシリオンからの魔力供給を受けたフロスが、自身と過去ルシリオン分の魔力を合わせ、“ラグナロク”へと最接近する。

迫る衝撃波を、一切の無駄のない、流れるような動きで回避し、

「真技……！」

フノスは“グラム”の柄を両手で握り締める。

表層世界全体とも言える全ての空間に張り巡らされた“ラグナロク”の力。

それを寸断し世界をこれ以上破壊させないために、フノスは跳躍、そして、

「アホストリック
神徒の」

“グラム”を頭上に掲げるようにして、“ラグナロク”の中心へと落ち行く。

虹色の両翼を背に展開し、フノスは衝撃波を掠りつつも回避。

「セイバー
剣閃アアア—————!!!!」

“グラム”の刀身を包む虹色の輝きが伸び、巨大な光剣となる。

それを一気に振り下ろし、“ラグナロク”に巨剣の一闪を叩きこんだ。

手応えを確信し、フノスはすぐさま“ラグナロク”より離れようとするが、足がもつれて倒れ込みそうになる。

「フェンリル……！」

過去ルシリオンが叫び、それに応え姿を現す彼の使い魔フェンリル。その姿は本来の巨大な漆黒の魔狼となっていた。フノスの元へと近寄り、いつもの少女の姿となって抱える。

「フェン……リル……？」

「はい、フノス様。すぐにシェフィリス様のところへと御連れ致します」

フエンリルはフノスを背負い、再度巨大な魔狼へと姿を変えた。

そして一回の跳躍で、ヴィーグリーズより避難しようとしていたアースガルド・クルセイド王家保有超巨大戦艦“フリングホルニ”の艦上へと移動、人型へと戻り甲板へと降り立った。

それを見守った過去ルシリオンは、フノスの真技によって再封印され始める“ラグナロク”へと近づく。

止めを刺すために、展開した蒼翼で周囲の魔力を収集する。

そのまま“グングニル”を完全解放し、“ラグナロク”へと投擲した。

直撃を受け、“ラグナロク”は完全に封印された。

このラグナロクの影響によって滅んだ世界は大小合わせて640強。

そして、表層世界、つまりは私たち人間の在る単一次元が分かたれてしまった。

これが再誕神話に記された表層世界の終わり、次元世界への再生。再誕だ

一つの次元が“ラグナロク”によって寸断され、空間を隔てた次元世界が生まれた。

これが、古のルシリオンたちの世界の終わり、今のなのはたちの存在する次元世界の始まりである。

なのはたちは何も言えなかった。

まさか次元世界の始まりを見る事になるとは思わなかったからだ。

それ以前に、次元世界の始まりなんてことすら考えたこともなかったはずだ。

生まれた時から次元世界を知る世界にいた、なのはとはやてを除くフエイトたちは特に驚愕していた。

全てを覆われたようなそんな感覚に襲われ、学者であるユーノは放心状態だ。

ラグナロクが与えた影響はそれだけじゃ済まなかった

ルシリオンが重々しく告げ、なのはたちが絶句する中場面が変わる。

ルシリオンは語る。

アースガルドも“ラグナロク”によって甚大な被害を被っていた。

四王家の治める王領はほとんどが滅んでいた。臣民もまた残さずに、だ。

アースガルドは、全て空に浮かぶ空中大陸で構成され、その下は全部海といった世界だ。

“ラグナロク”の影響で、それらが海に落ち、沈んだ。

残ったのが、高さが2万mの“支柱塔ユグドラシル”と呼ばれるアースガルドの中心にそびえ立つ塔。

そしてセインテスタ王領、クルセイド王領の三つ。

同盟世界もまた似たようなもので、ムスペルヘイムとニダヴェリールに至ってはその形すら残っていないのだと。

そんななのはたちがいるのは、そのユグドラシルが有する万を超える部屋の一つ。

アンスール・リーダー、フノスの寝室だった。

そこは豪華絢爛という言葉が一番はまる部屋。

その寝室に置かれた天蓋付きのベッドに横たわるのは、シーツを胸

のあたりまで被ったフノスだ。
寝息すら聞こえない、本当に生きているのかも怪しいくらいに静かな眠りだ。

フノスはただでさえ体の弱い少女だった。魔術を、ましてや戦うなんて自殺行為。

イヴ姉様、イヴィリシリアのフノスに対する過保護もそこから来ている。

それなのに、彼女は大战でウリベルトと戦い、そして……

「ラグナロクを討った」とルシリオンは呟いた。

いくら“ラグナロク”を再封印するためにはフノスの力が必要だったとはいえ、私は体の弱い彼女と契約した

メンタルリンク

ルシリオンが、眠りにについているフノスへと歩み寄る。

触れることが出来ないのを理解しつつ、彼はその指でフノスの前髪を撫でた。

私がフノスを殺したようなものだ。こうなることを知りつつ契約

メンタルリンク

したのだから。

…… 大战終結から一年。明日だ。彼女がその生を終えるのは。だが、これから起こることを見ることなく逝けた彼女は、幸せな方なのかもしれない

場面が変わる。

フノスの遺体が納められた棺を、ユグドラシルの霊廟へと運ぶアンストールメンバー。

ルシリオンは、なのはたちにフノスの死に際を見せなかった。

情けなく泣く自分を見られなくなかったからだ。

過去ルシリオンの目が赤く腫れている。それだけでなのはたちも分かった。

アンスール全員が未だに涙を流す。が、過去ルシリオンだけはもう涙を流していなかった。

フノスの遺体を霊廟へと納める場面が終わり、さらに場面が変わる。

「ヴァナヘイムが!？」

「はい、お父様。世界監視統制システムからの報告です」

そこはユグドラシルの最下層“ノルンの泉”。

ヴァルキリー戦天使全機を統括するシステム“アプリコット・ノルン・ウルド。

世界を監視する目を担うシステム“エリスリナ・ノルン・ヴェルダインデイ。

アースガルドと他世界を繋ぐ門を創りだすシステム“リナリア・ノルン・スクルド”。

その統括三女神システムが置かれた場所。

今、そこには過去ルシリオンと長女アプリコットが話をしていた。

大戦終結から八年後、ヴァナヘイムが活動を再開したとの報告を、過去ルシリオンは受けていた。

29歳となった過去ルシリオンは、アプリコット娘と話を続ける。

「ヴァナヘイムは、復興作業を途中で止め、ここアースガルドに攻め込む準備をしているそうなんです」

ヴァナヘイム。アンスール率いる同盟軍が陥落した連合主要世界の一つだ。

あれから八年経った今、ヴァナヘイムは敗戦世界として存在している。

“ラグナロク”によって、ウトガルドとスリムヘイムは完全滅亡し、ヨツンヘイムは何とか存続している状態。
ヴァナヘイムの被害も甚大だったが、他の三世界に比べればマシなものだった。

「それは臣民の意を酌んだものなのか？」

「いえ。現皇帝カトラス・シュープリーム・ヴァナヘイムによる独裁のようです。

アースガルドを攻め落とし、その魔道技術を手にして、一気に次元世界を支配するつもりかと」

「なるほど。ヴァナヘイムに世界を渡る術はあるのか？」

「申し訳ありません。不明です。

ですが、ラグナロクを生き残った世界ですので、あるかと思われません。」

「そうだな。・・・くそ、こっちは復興作業がまだだというのに。エリスリナ！ 引き続き、ヴァナヘイムの動向の監視を頼む！！」

過去ルシリオンは、アプリコットから視線を外し、泉の中央に浮かぶ巨大なクリスタルに叫ぶ。
すると、

「了解です、お父様！」

そのクリスタルから、フワツと次女エリスリナが現れてはそう答え、また姿を消した。

「アプリコット。念のために戦天使ヴァルキリーの調整を頼む」

「了解いたしました、お父様」

そしてアプリコットもまた、クリスタルへと姿を消した。

過去ルシリオンは難しい顔をしながら、ユグドラシル上層階へと向かった。

また・・・戦争が始まるんですか・・・？

キャラが涙目でルシリオンへと訊いた。

ルシリオンは「ああ」とだけ答えて、再度場面を変えた。

そこは戦場だった。名の無い世界、いや、名があった世界。

元夢幻世界ウトガルド。“ラグナロク”によって滅んだ連合主要世界の一つだ。

何も無い光景が広がる寂しい世界。

そこで戦いがあった。アンスールとヴァナヘイム軍の戦闘だ。

八年前まで続いていた大戦では最強だったアンスール。

そのアンスールが敗れた。相手は連合主力の一つだったA・M・T・I・Sの最新鋭機。

近接のタイプ・セイバーと遠距離のタイプ・アーティラリーの複合、タイプ・ハイブリット機。

ロールアウトする前に先の大戦が終わってしまい、工廠に封印されていた機体。

ランクにしてXXランク。過去ルシリオンとステア、EXランク二人がいれば余裕で勝てる戦いだっただけはずだ。

だが負けた。圧倒的な差とは言わずとも、それでもアンスールは負けた。

敗北の要因……。ラグナロクの影響、界律の変調。

魔術師一人における魔力使用総量が著しく低下させられた。最大X+ランク。それ以上は界律が認めない、許さない。

人間ではないA・M・T・I・Sはその例外。だから後れを取る
こととなった

ルシリオンは続ける。

彼らの使い魔であるフェンリルとガルムが行動不能になるまで弱体化させられた事。

その他にも、魔術師の証たる魔力炉システムを持たない子供が生まれる事が多くなってきた事。

魔力を持たない人間が生まれるのは初めての事。

そして、魔術や魔術師が次元世界から途絶え始めた事。

リインカーコアという器官を新たに持つて生まれてくる人間が現れるまで、魔術は滅んでいた事。

全ては“ラグナロク”による界律への悪影響の所為だという事を。

場面が変わる。戦天使の母であり総司令官シエファイリスと父である過去ルシリオンが、その数を一千へと増やした戦天使全機を前にしている光景だ。

「みんなも知つての通り私たちアンスールはヴァナヘイム軍に敗れた。

界律による魔術師能力制限によって。だからあなたたちに頼ることしか出来なくなりましたしまったの」

戦天使全機は黙って母の言う事を聞いている。

「もう一度お前たちを戦場に出す事をすまなく思つ」

シェフィリスの隣、過去ルシリオンが復興用に調整した戦天使全機ヴァルキリーへと謝る。

彼らは約束していた。争いの無い世界で最期まで共に生きよう。しかしそれが破られる。ヴァナヘイムの霸道というくだらない野望のために。

だが、戦天使たちは笑う。そんなことで謝らないでくれ、と。

自分たちは父過去ルシリオンと母シェフィリス、そしてその仲間であるアンスールを護る為の存在。

だから戦う事に何の不満も無く、逆にアンスールの力になれることこそが最大の喜びだと。

これが悲劇の始まりとも知らず、戦天使の参戦が決まった。

この二日後、ヴァナヘイムへと進軍を開始したアンスールと戦天使部隊ヴァルキリー。

A・M・T・I・Sの相手を全面的に戦天使が引き受け、アンスールはカトラス帝の身柄拘束に動き出す。

タナクヴィスル川を掛かる大橋。

八年前に、シェフィリスがグラシオン率いる騎士団と連合軍を潰した場所。

そこでまた戦いが起きようとしていた。

戦天使千機とA・M・T・I・S八百機の大混戦。人間サイズと半端じゃない巨人との激戦。

アンスールは、A・M・T・I・Sの数が減ってから帝都を目指そうとしていた。

戦闘開始から30分が経過しようという時、それは起きた。

「何をしているブリュンヒルデ隊！ 何故味方を攻撃する!?!」

前線で起こり始める戦天使の同士討ち。

第一世代戦天使ブリュンヒルデ隊。最高レベルの実力を誇る少数精鋭部隊。

そのブリュンヒルデ隊が、味方戦天使へと攻撃を開始した。

「何が起きているの!?!」

「どういうことだ、ガーデンベルグ!?!」

ガーデンベルグと呼ばれた戦天使が、魔造兵装第二位“呪神剣ユルソーン”を手に、彼の部隊ブリュンヒルデを率いて反逆を開始。次いで、

「報告します!! ゲイルスケルグ隊、ヘルフィヨトル隊、ヘルヴオル隊が、ヴァナヘイム軍につきました!?!」

ランドグリーズ隊シリアル04リオが、アンスールの待機場所へと報告しに来た。

驚愕するアンスールメンバー。そこに、

「アンスール諸君、聞いているか?

戦導世界ヴァナヘイム皇帝カトラス・シュ プリーム・ヴァナヘイムだ」

帝都から聞こえるカトラス帝の声が、タナクヴィスル川を挟んだ待機場所へと届いた。

「突然の戦天使の反逆に驚いている事だろう。俺はな、この日を待っていた。」

お前たちの技術の粋を結集した戦天使を操り、俺の手駒にする今日この日を。

大戦中に散々情報を集めさせたおかげで、この計画がようやく陽の目を浴びたよ。

戦天使ヴァルキリーに、特製のウイルスを流し込み我が下僕とする

“墮天使計画”。

これでお前たちは終わりだよ、アンスール。大人しく投降してくれ
ると嬉しいな』

アンスールは、過去ルシオンとシェフィリスは頭の中が真っ白になつた。

ヴァルキリー戦天使を操るなんて信じられない、不可能だと。

しかし現に、ブリュンヒルデ隊、ゲイルスケルグ隊、ヘルフィヨトル隊、ヘルヴォル隊が反旗を翻した。

事実だと受け止めるしかない。納得できないが、今は撤退する事を第一として行動を開始した。

場面が変わる。

墮天使計画より四日後、アンスールメンバーの集まる会議場で、過去ルシオンたちは耳を疑う報告を、エリスリナから聞いていた。

「マジ・・・なのか・・・？」

「はい。ヴァナヘイムは、墮天使によって完全に滅亡しました」

ブレンセレリウスに答え、エリスリナが再度告げる。

カトラス率いるヴァナヘイムが、操って駒とした墮天使によって滅ぼされたと。

「どついついこと？」

ステアの疑問に、アプリコットが答える。

「おそらくですが、戦天使ヴァルキリーのプログラムに完全介入出来るほどのウィルスではなかったのかと。

相反するプログラムの所為で暴走状態になったのかと思われませう」

「お父様とお母様の組んだプログラムですし」と付け足すアプリコット。

「アプリコット。墮天使と繋がる貴女から見て、墮天使は直せそう？」

19歳となった大人のシエルが、アプリコットへと訊ねる。

「……それについては、先程お父様とお母様と話したのですが、リカバリーはもう不可能なのです。

時間をかけて行えばいつかは、ですが、これ以上統括ノルニル三女神システムと墮天使を繋げておくと、私たち姉妹にまでウィルスが侵入、正常な戦天使含む私たちまでウィルスに侵され暴走する事になると思っています」

苦々しく答えるアプリコット。

それはつまり、ブリュンヒルデ隊、ゲイルスケルグ隊、ヘルフィヨトル隊、ヘルヴォル隊を諦めろということだった。

正常な天使と女神を救いたいなら、墮ちた天使は殺せ。

沈黙が流れる。

戦天使ヴァルキリーの生みの親である過去ルシリオンとシェフィリスの決定には従うつもりでいる他のメンバー。

過去ルシリオンとシャルロッテが口を開くのをただひたすら待とうとしたとき、

「墮天使の掃討を第一として、ステア、戦術戦略の構築を頼む」

大して時間をかけずに、過去ルシリオンはステアに告げた。

アプリコットに話を聞いてからの十数分間、全力で考えた末の結論だった。

「……それでいいの、ルシル？」

「ああ。墮ちたあの子たちには悪いが、このまま統括ノルニル三女神や他のヴァルキリー戦天使を暴走させるわけにはいかない」

光景が一時停止となる。

これが大戦終結から八年後で起きた“墮天使戦争”。

再誕神話には記されていない物語だ。

アンスールは、この1カ月半という短すぎる戦争で次々と命を落とし、私もまた……

フェイトの表情が強張る。その先の言葉を聞きたくない。

なのはとはやては、フェイトの両側からその震えた手を握る。

フェイトは少し驚いた顔をするが、「大丈夫、ありがとう」と微笑を浮かべた。

アルフやエリオにキャラ、リンディとクロノもまた心配そうにフェイトへと近づき声をかけていく。

そんなフェイトたちを離れた所からルシリオンは見守っていた。

フェイトの表情を見て、ルシリオンは先へ行く事を躊躇ったが、フ

エイトの先の言葉を思い出し、場面を変える。

そこは滅亡世界スヴァルトアールヴヘイム。

アースガルドと共に戦い、そして連合によって滅ぼされた世界。
そこで起きた墮天使戦争の第一戦。

アンスール、第二世代アルヴィト隊、第四世代ラーズグリーズ隊と敵ヘルヴォル隊、A・M・T・I・S・が衝突する。

A・M・T・I・S・の存在が想定外であったため、苦戦を強いられるアンスールと戦^{ヴァルキリー}天使各隊。

ただでさえ戦^{ヴァルキリー}天使八部隊の中で最も数の多いヘルヴォル隊。

しかもヘルヴォル隊は前線特攻部隊でもある為、各機の実力が高い。そこにA・M・T・I・S・の最新鋭部隊が追加、圧倒的に不利となる戦いとなった。

「御気をつけください、アリス様。ですがご安心を。私たちが御背中を御守りします」

「ありがとうございます、レンマーツォ、ミスフィ」

成長したアリスを護るように、アルヴィト隊隊長“星天の槍レンマーツォ”、副隊長“双剣の帝ミスフィ”を含むアルヴィト隊百体が墮天使ヘルヴォル隊と交戦。

アリスは得意の結界術式でサポートし、視界に映る墮天使やA・M・T・I・S・を捕獲していく。

だが、魔力量や墮天使の持つ神器の所為で上手くはいかない。

離れた場所でも激しい戦闘が繰り広げられていた。

互いの戦力に損害を着々と与えていく両勢力。

『ヘルヴォル隊撤退を開始。繰り返す。ヘルヴォル隊は撤退を開始』

風嵐系最強戦天使^{ヴァルキリー}だったヘルヴォル隊隊長“戦導の鉄風シュヴァリエル”^{ヴァルキリー}の戦天使専用回線による指示が、ヘルヴォル隊各機へ告げられる。

念話障害が激しい戦場の最中、ヘルヴォル隊は粘ろうと思えばもつと戦えたのに撤退した。

A・M・T・I・Sの何機を自爆させ、それを目晦ましとしての鮮やか過ぎる撤退だった。

撤退というその行動に強烈な胸騒ぎを得た過去ルシリオンとステアは、すぐさまアンスールメンバーの安否確認を行った。

そして知った。大戦時は風迅王と謳われ、連合に恐怖を与えた魔術師イヴィリシリア。

彼女がシュヴァリエルとの一騎打ちに敗れ戦死したのだ。

「イヴ・・・義姉様・・・？」

「いやあ・・・いや・・・」

バツサリと左肩口を裂かれ息絶えたイヴィリシリアの遺体。

風嵐系最強の魔術師イヴィリシリアが、同じく風嵐系最強の墮天使シュヴァリエルに敗れた。

界律からの能力制限という状況下での敗北だった。

ユグドラシルへと帰還し、イヴィリシリアの遺体は、フノスの眠る棺の隣へと納められた。

アンスール風迅王イヴィリシリア・レアーナ・アースガルド。戦死。

墮天使戦争第二戦。

有人世界での対ゲイルスケルグ隊、ヘルフィヨトル隊。

街を破壊して回る墮天使二隊に、雷撃系最強にして戦天使序列二位ヴァルキリー

“雷滅の殲姫プリメーラ”率いるランドグリーズ隊。

炎熱系最強の“凶狩の紅翼ティーナ”率いるヒルド隊が交戦。

アンスールは避難誘導に力を注ぐ。

激戦の果て、墮天使を何体が破壊。残った墮天使を退かせる事に成功した。

アンスールからも犠牲者が出ることなく、今回の戦いは終息した。

墮天使戦争第三戦。

また無関係な有人世界での戦い。今回は墮天使全部隊が出現。

ヴァルキリー戦天使も全部隊で墮天使と真つ向から交戦を開始。

アンスールは、伏兵として用意されていたA・M・T・I・Sと交戦を開始。

戦術で足りない魔力を補い、次々と撃破していくアンスールだったが、A・M・T・I・Sの自爆行為によって分散させられる。

それによって、地帝カーネルが闇黒系最強の墮天使“黒煌の紡ぎ手クリスト”、他墮天使三体と交戦、戦死する。

呪侵大使フォルテシアが、ブリュンヒルデ隊シリアル05“闇絶の拳レーゼフェア”と交戦。

対闇黒系魔術師用として開発されたレーゼフェアの能力により、フォルテシアも戦死する。

アンスール地帝カーネル・グラウンド・ニダヴェリール。戦死

アンスール呪侵大使フォルテシア・アウリアス・スヴァルトアール
ヴヘイム。戦死。

墮天使戦争第四戦。

滅亡世界アールヴヘイムでの激戦。

ヘルヴォル隊とゲイルスケルグ隊と、氷雪系最強“瞬凍の狩神 氷ひ月”率いるラーズグリーズ隊とプリメーラ率いるランドグリーズ隊、

そしてレンマーツオ率いるアルヴィト隊が参加、交戦する。無人世界ということもあり、アンスールはユグドラシルでの待機となっていた。

激戦の結果、カーネルを殺害したクリストを破壊する事に成功。ヘルヴォル隊にも十数体という損害を与えた。

最悪な事は立て続けに起こることを知る。

墮天使の目的は、正常な戦天使にもウイルス感染させる事だった。

墮天使は戦闘を繰り返す事で、戦天使にウイルスを徐々に、しかし確実に

感染させていた。

その結果、統括三女神システムの凍結となった。

それは戦天使という重要な戦力を失うことになるものだった。

墮天使戦争第五戦

戦天使を失ったアンスールは、墮天使とA・M・T・I・S・に苦戦を強いられる。

そこを助けてもらったのが、再編された“星騎士”だった。

「墮天使にはミッドガルドも困っています。ですので、微力ながらお手伝いします」

大人となった第五騎士“風雷グレーテル”と彼女の率いる“自由騎士団”。

同じく第三騎士“花の姫君チエルシー”と彼女の率いる“聖願騎士団”が、アンスールと共闘する事になった。

それでも戦力的には劣るアンスールと星騎士の共闘軍。

熾烈を極めた戦いの果て、雷皇ジークヘルグが、ブリュンヒルデ・シリアル04“宝雷の矛グランフェリア”と交戦。

彼女の雷撃系無効化の神器“天槍・雷界幻矛”によって魔術を全て無効化され、ジークヘルグが殺害される。

アンスール雷皇ジークヘルグ・フォスト・ニダヴェリール。戦死。

次々と戦死するアンスールメンバーに、アリスが心を閉ざし始める。元は大戦にも関係のない世界から拉致されたアリス。ここまで共に戦ってきたが、それも普通ならあつてはならない事だった。

これ以上は彼女の心が完全に失われると判断した過去ルシオンは、彼女の記憶を消し、ミッドガルドに預ける。

アンスール結界王アリス・ロードスター。強制脱退。

墮天使戦争第六戦。

有人世界（後に第四管理世界カルナログ）での墮天使全軍との激戦。ここに来て残りの星騎士シュテルン・リッターも参戦し、ゲイルスケルグ隊、ヘルフィヨトル隊を完全殲滅に成功。

ヘルヴォル隊にも甚大な被害をもたらせることに成功する。

しかし、白焰の花嫁ステアが、民間人をブリュンヒルデ・シリアル06“響嵐の弓フィヨルツェン”からの攻撃から庇い、その命を落とす。

彼女の妹セシリスもまた、ブリュンヒルデ・シリアル02“氷浪の鏡リアンシエルト”と同部隊シリアル03“炎暁の槌バンヘルド”によって戦死する。

アンスール白焰の花嫁ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイム。戦死。

アンスール炎帝セシリス・エリミング・ムスペルヘイム。戦死。

墮天使戦争第七戦。

防衛世界ビフレストでの戦闘。

カノンの魔力炉破綻覚悟の創世結界“ハースト殲滅領域”フエアテルゲン・ヴェルトール。

ヘルヴォル隊を、同隊隊長シュヴァリエルを残し全滅させる。

しかし、カノンが動けないのをいいことに攻勢に転ずるブリュンヒルデ隊。

アンスール、シュテルン・リッター星騎士の援護が間に合わない程の速度でカノンに迫るシリアル01“戦計の剣ガーデンベルグ”。

無限の呪いを宿す魔剣“呪神剣ユルソーン”を振るう。

刃がカノンを両断しようとしたその時、彼女を庇う一人の男。

プレンセレリウスが、ガーデンベルグの一撃を受け絶命する。

アンスール冥祭司プレンセレリウス・エノール・スヴァルトアール
ヴヘイム。戦死。

墮天使戦争第八戦。

ここ最近姿を現さなかったA・M・T・I・S大隊、それらを率
いるシュヴァリエルによるミッドガルド侵略。

残るアンスール、過去ルシリオン、シエル、シェフィリス、カノン
が救援へと向かう。

その通り道として大戦終結の地ヴィーグリーズへと赴いた。

そこで待ち構えていたのは少数精鋭部隊ブリュンヒルデ隊。

……ここが、英雄アンスールの終焉の地となる

ずっと黙って見ていたルシリオンが口を開く。

それを聞いたなのはたちは、涙に濡れた顔で、ルシリオンを見た。

家族であった戦天使ヴァルキリーと戦い、そして死んでいくアンスール。

これ以上の悲劇は知らないと言わんばかりに、彼女たちは泣いてい
た。

「くそ・・・！ ガーデンベルグとリアンシエルト、バンヘルドは私が引き受ける！」

シエル、シエファイ、カノンは、グランフェリア、レーゼフェア、フイヨルツエンを頼む！」

過去ルシリオンが指示を出す。そして始まるアンスール最期の戦い。もう言葉は必要ない。完全に暴走したブリュンヒルデ隊に、人の言葉は理解できなかった。

「第三級断罪執行権限解凍・・・！」

界律からの能力制限によって必要となった魔力炉リミッター術式を、過去ルシリオンは解凍。

幼少のころに組んだ天使の名を冠する中級術式で、墮天使三機を同時に相手する。

その三機は、現状の過去ルシリオン以上の魔力を扱える格上の実力者。

過去ルシリオンは得意の空戦に持ち込んで何とか持ちこたえる。

コード
殲滅せよ、汝の軍勢
カマエル

なのはの全力バスター並の魔力が籠もった一本一本の槍、計五百が三機に迫る。

が、その三機は避けることなく突貫、大したダメージを受けずに過去ルシリオンへと迫る。

空戦である以上、過去ルシリオンと三機の拮抗が崩れない。

先に拮抗が崩れたのは、シエルたちの方だった。

ミッドガルドにいるはずのシュヴァリエルからの奇襲。

彼の神器“極剣メネス”が、カノンとフィヨルツェンの砲撃戦の最中、カノンを背後から貫いた。

アンスール殲滅姫カノン・ヴェルトール・アールヴヘイム。戦死。

三対七。圧倒的に不利となったアンスール。

一時撤退の指示を出す過去ルシリオンだったが、それを許されるような戦況ではなかった。

過去ルシリオンが殿として、シエルとシェフィリスを庇い、墮天使七機と戦う。

が、リアンシエルトの真技“フリキット・ローゼン・ガーデン極寒薔薇園”が発動。

シエルとシェフィリスの足下に広がる氷で出来た薔薇の大庭園。

その無数の薔薇が一気に砕け、氷の薔薇の花弁が舞い散り、シエルとシェフィリスの足を斬り、凍結させる。

身動きが取れなくなった二人に迫るフィヨルツェンの矢型砲撃と、バンヘルドの炎熱砲撃が迫る。

「おおおおおおお！！！！」

ルイン・トリガー 真技・圧戒・歪曲空間 マーシレス・ドライブ

シエルが冷たくなった大親友カノンの遺体を背負ったまま、真技を発動させる。

システム 魔力炉に致命的なダメージを負いつつも、大好きな兄の恋人であるシェフィリスを護るための真技発動だった。

二機の砲撃が、シエルの生み出した空間歪曲によって軌道を捻じ曲げられ、明後日の方向へと進み爆散した。

この一瞬の隙に、シェフィリスが自分とシエルの足の傷を完治させる。

「シエファイ義姉ねえ!!!」

そこに直接二人の命を奪おうとグランフェリアが迫る。カノン^{コド・ニースホツグ}をシエファイリスへと預け、シエルが迎え撃つ。

「よせ！ 逃げるんだ!!! シエル!!!」

過去ルシリオンは墮天使六機と戦い傷つけられながら、シエルがグランフェリアを迎え撃つ^{システム}のを見て叫ぶ。

第二級粛清執行権限解凍

過去ルシリオンが界律の制限以上の魔力を捻り出す。魔力炉が悲鳴を上げる。

魂が叫ぶ。これ以上は界律に殺されてしまつと。

「シエルに手を出すなああああああ!!!!!!」

だがそんなこと知った事ではないと、過去ルシリオンは魔術を組み上げ発動する。

凶竜コド・ニースホツグの殲牙

呪文スベルなどの工程を全て無理やり省き、^{フレイザブリク}“神々の宝庫”から複製神器を無数に取り出す。

そしてグランフェリアに迫る神器群で構成された竜。

しかし、レーザーフェアが固有魔術“影渡り”を発動し、グランフェリアの背後へと移動。

凶竜コド・ニースホツグの殲牙の牙を構成する魔剣と聖剣を真つ向から殴り砕く。

その衝撃が最後尾にまで伝搬し、凶竜の殲牙コトド・ニクスホッグが完全に瓦解した。

「やめろおおおおおおお！！！！！！」

吐血しながら叫ぶ過去ルシリオン。

すぐさまシエルとシェフィリスの救援へと向かおうとするが、それを妨害する墮天使五機。

「邪魔をするなああああ！！」

邪神コトド・ロキの狂炎

普段の全てを魅了するような蒼い炎ではなく、憤怒を思わせる紅蓮の炎が生まれる。

過去ルシリオンの両腕両足に纏わりつき、炎で出来た両腕と両足が生まれる。

腕の長さ3m、足の長さを2mとした全てを焼き尽くす炎の戦鬼。

そして背の蒼翼にすら纏わりつき生まれた巨大な紅炎の翼。

それはさながら炎の巨人だった。

「退けええええええ！！」

紅蓮の炎の腕を振り回し、空を翔る墮天使を落とそうとする。

だがその短時間に、シエルとシェフィリスは追い込まれていく。

グランフェリアとレーゼフェア、そしてフィヨルツェンの空からの砲撃。

そして、

「シェフィ義姉様……。兄様と幸せに……！！」

「シエル!!!？」

シエルは、シエフィリスを護るために反重力を使って、ヴィーグリーズにあるアースガルド方面の転移門付近へと弾き飛ばす。そしてシエルは単騎、交戦する。

レーゼフェアの拳打を捌き、吐血しながらも重力を纏わせた、今引き出せる最高の威力を持った拳打を繰り出す。

直撃。数百mという距離を吹き飛ばしレーゼフェア。
直後、

「シエル————!!!!!!」

「ふっ……！ うぐ……。まだまだあああ！！」

グランフェリアの“雷界幻矛”に腹部を貫かれるシエル。

真技・咆哮圧殺拳
デストラクション・バイル

グランフェリアの“雷界幻矛”に腹部を貫かれながらも、シエルは文字通り最期の力を振り絞り真技を繰り出そうとした。が、過去ルシリオンの攻撃を回避し、余裕を持てたリアンシエルトがシエルへと魔術を放つ。

クリプティック・クライシス
美麗散華

「っ！！ リアンシエ」

過去ルシリオンの炎の腕を伸ばすがすでに手遅れ。

シエフィリスもシエルを護るために動くが、距離があり過ぎた。

無数の氷の花弁がシエルの頭上から降り注ぎ、押し潰した。ただでさえ切れ味の鋭い氷の花弁。それが無数に降り注いだ。今のシエルには防御出来ないほどの威力を持った術式。

「シエル！！」

シエフィリスが、カノンの遺体を転移門付近に横たえシエルへと駆け寄る。

そして見た。すでにその命を奪い取られたシエルの姿を。

アンスール拳帝シエル・セインテスト・アースガルド。戦死。

「・・・・・・・・・・」

シエフィリスの泣き叫ぶその姿を空から見た過去ルシリオン。実妹の死を知った。唯一血の繋がった最後の家族を失った。

しかし、過去ルシリオンとシエフィリスに悲しむ時間を与えない墮天使。

すぐさまシエフィリスに襲いかかるグランフェリアとレーゼフェア。過去ルシリオンにもガーデンベルグたちが襲撃を再開する。

「シエル……。カノン……。くそっ……。！ 逃げるぞ、シエフィー！！」

過去ルシリオンは、凍結した統括ノルニル三女神システムの再起動を決定した。

それは戦ヴァルキリー天使を再度戦線に復帰させるということだ。

残り七機の墮天使。数では圧倒的に勝ることになるため、短期決戦が可能と判断した結果。

両腕両足、背の翼の紅蓮の炎を爆散させ、墮天使の目晦ましにした。空戦形態へと戻り、シエフィリスへと最接近。

「ダメ！ ルシ」

シエフィリスが過去ルシリオンの背後を見て叫ぼうとする。その様子に、過去ルシリオンが振り向こうとした瞬間、

真技・望まれぬ嵐
エレメンタル・クライシス

シュヴァリエルの魔力光ハンターグリーンの竜巻を纏った“メネス”が、過去ルシリオンを襲う。回避すればシエフィリスに直撃。はせずとも相応のダメージは確実。そう判断した過去ルシリオンは、

女神の聖楯
ゴッド・シールド

女神が祈る姿が描かれた蒼い円盾を展開。真っ向からの防御ではなく、“メネス”を逸らせるように展開させた。衝突する大剣と円盾。過去ルシリオンの狙い通りに逸らす事に成功が、それによって動きを止めてしまった過去ルシリオンへと迫る第二波。

真技・瞬神の風矢
ソニック・エア

フィヨルツェンの真技が真横から襲いかかってきた。その直撃を受け、吹き飛ばされた過去ルシリオン。

「ルシ あ……!?!」

シエフィリスの胸から生える真紅の大剣の刃。
シエフィリスの背後、魔造兵装第二位の魔剣“呪神剣ユルソーン”
を手にしたガーデンベルグが立っていた。

「シエフィーーーーー！！！！」

戦闘甲冑の上半身部分は吹き飛ばされ、所々に裂傷を負った過去ルシリオンが、ガーデンベルグによって貫かれたシエフィリスを見て叫ぶ。

“ユルソーン”を抜かれ、力なく崩れ落ちそうになるシエフィリスを抱きしめる過去ルシリオン。

「シエファイ！ シエファイ！ ダメだ、目を開けてくれ！
死ぬな！ 私一人を置いて逝かないでくれ！ そ、そうだ！ 私に
はアレがある！」

コード・エイル
女神の祝福

過去ルシリオンの有する最高の治癒魔術。
死人でなければ確実に治癒する事が出来る最高クラスの術式。
だが、

「何故だ！？ 何故傷口が閉じない！！ どうしてだ！！」

“ユルソーン”の能力。無限の呪いを宿す魔剣。
この剣によって傷つけられた者には、ランダムでいくつかの呪いを
かけられる。

シエフィリスにかけられた呪い。それは絶対死。
少しの猶予時間の果て、絶対に死ぬというものだった。

“ユルソーン”の能力は、過去ルシリオンも知っている。
元は彼の複製神器だからだ。だが、今の錯乱状態の彼には関係のないものだった。

「ルシ．．．ル．．．生きて．．．ルシ．．．だけで．．．も．．．
それ．．．と、お願い．．．哀れな．．．あの子たち．．．を、
見捨て．．．ないで．．．あげて．．．」

「シェファイ！ もう喋るな！ 安心しろ、必ず助かるからな！
もう少しだ！ もう少して治るからな！ もう少しだ！ だから、
シェファイ．．．！」

「死ぬな」と泣く過去ルシリオン。
シェファイリスは最後に綺麗な笑みを見せて「大好き」と告げ、死んだ。

アンスール蒼雪姫シェファイリス・クレスケンス・ニヴルヘイム。戦死。

シェファイリスの胸に顔を埋め、ただひたすら泣き続ける過去ルシリオン。

そんな彼の状況を見捨て、墮天使たちが動き出す。

「第一級神罰執行権限、解凍。孤人戦争形態．．．顕現．．．！」

過去ルシリオンの魔力炉^{システム}全力稼働。“孤人戦争形態”。

首のチョーカーに付いていた白の南京錠が砕け散る。

それと同時に起こった吹き荒れる魔力流によって、迫ってきた墮天使が吹き飛ばされる。

界律の制限から逸脱した魔力行使。

魔力の消費が他と比べるまでも無く激しい“孤人戦争形態”。

機動力を捨てた事による戦術の激減。
“孤人戦争形態”発動の間違い。本来は、超長距離からの砲撃戦を主とする形態。

それを敵のど真ん中で発動した。一撃で終わらなければ、ただの的である。

最愛の家族と恋人を失った事による精神錯乱。

それらが彼の敵となり、ついに“孤人戦争形態”維持が出来なくなり、墮天使の攻撃を受けた。

無数の蒼い羽根が舞う中、過去ルシリオンは自分を呪った。

もう少しでシエフィリスとの約束を果たすことなく死ぬところだったと。

過去ルシリオンは、アースガルドへと撤退するために残り少ない魔力で蒼翼を展開する。

目指すはビフレストへと続く転移門。

もちろん黙って逃がす墮天使ではない。

空を翔る過去ルシリオンに追い縋りながら攻撃を放ち続ける墮天使。過去ルシリオンは、墮天使の攻撃を回避しながら転移門へと翔る。

徐々に増えていく墮天使の攻撃によるダメージ。界律からのペナルティによるダメージ。

それらが過去ルシリオンの意識を揺るがす。

そして、背後から迫るバンヘルドの投擲した神器“炎墳槌ケンテユール”に気づくのが遅れた。

回避では間に合わないと刹那に判断し、魔力障壁を張った過去ルシリオン。

衝突。“ケンテュール”が内部で生成する炎が大爆発を起こす。障壁が一瞬で碎かれ、炎に包まれながら吹き飛ばされる過去ルシリオン。

地面への墜落をなんとか耐えたものの、きりもみ状態のまま体勢が整えられない。

そこを、尚も治まらない爆炎と黒煙の中から飛び出してきたガーデンベルグが姿を現す。

突き出すように構えた“ユルソーン”が迫る。未だに体勢が整わない過去ルシリオン。
そして、

「あ……がつ……ッ！」

“ユルソーン”が過去ルシリオンの腹部を貫いた。

それと同時にかけられる不死と不治の呪い。

そして勢いよく“ユルソーン”が抜かれ、過去ルシリオンは大きく飛ばされる。

数mと離れた地面にドサツと落ち、力なく倒れ伏す過去ルシリオン。

「……ごめ……ん……。シエ……ファイ……。」

約束……守れ……。なか……。た……。」

コトド・バルドル 光神の調停

意識が落ち始める前に、最後の力を振り絞って魔術を発動させる過去ルシリオン。

全方位無差別砲撃の大魔術。それで墮天使を滅ぼそうと彼は考えた。そして放たれる蒼の砲撃。全てを飲み込まんと光が蹂躪する光景。

なのはたちの視界が光に包まれる。

これが、私の終わりだ。この後、私は、シャルと同じように^{テス}界律
^{タメント}の守護神となった

ルシオンとシャルロツテの人生を見、なのはたちの類はずっと涙
で濡れていた。

遙かに遠き刻の物語 〈ANSUR〉 ? (後書き)

ようやく過去編が終わりました。すいません。長々と三話も使ってしまった。

ANSURの流れは大体こんなものです。完全バトル物です。

悲劇いっぱい、喜劇少々の戦争話。昔コレを読んでいてくれた方には、今でも感謝しています。

こんなものでも応援してくださっていてくれましたし……。

さて、次回から本編再開で、残り三話(これは絶対。変更なし)となりました。

ではでは、もうしばらくの間、十字架を背負いし神意の執行者にお付き合ってください。

「いつてきます」 Happy day」

4月12日 PM 13:55 機動六課隊舎食堂

ルシルの光神コト・バルドルの調停で視界が潰されたと同時に、私たちの意識は現実に戻ってきた。

ルシル・・・自分がまだ生きている場面を見せなかった。

コト・バルドル光神の調停によって墮天使が撤退した後、フラフラのフェンリルが助けに来てくれて、ルシルがセイントスの王城グラスヘイムに運ばれる場面。

フェンリルによる時間凍結封印を受けて、生き長らえる場面。

“神意の玉座”との契約場面も省かれている。

（なのはたちに、自分が生きている事を知られたくないということ・・・か）

そんなにしてまで自分が死んでいると思わせたいのか、この馬鹿は。幸せを望まないと、その資格がないと。とことん大馬鹿者だ。キンゴブバカ。

フェイトにあんなに想われているのに、それを自ら突き放そうとしている。

「・・・バカ」

少し離れて突っ立っているルシルに呟く。

当然聞こえていないルシルは、モニター越しでデスクに突っ伏して寝ているリンディさんと騎士カリムにかけた術式を解いている。

「この子たち、私たちの真実知ってどんな反応するかな……？
引くかな？ 哀れむかな？ 怖がられるかもしれないな……」

食堂の床で寝かされているのはたちを見る。目から涙が零れている。

結構辛い、刺激の強いっていつか強過ぎるものだからね、私たちの時代は。

平気で人が殺されて死んでいく。それが当たり前の時代。

「それならそれでいい。だから見せたようなものだしな。

永遠の別れの時だ。親しまれているより、嫌われている方が別れやすい。

その方がこの子たちは傷つかない。優しいこの子たちにいらぬ感傷は必要ないのだから」

「そう言って、悲しそうな顔しているのはどこのどなたあ？」

「まさか。いつ私がそんな顔をした」

ルシルがなのはたちに向けた術式を解いた。

それから数分。ようやく目を覚ましたのはたち。

みんな、私たちを直視しない。これは完璧嫌われたかも。

黙って椅子に座って、俯いていたままだ。

「シャルちゃん、ルシル君……」

そんな中、口を開いたのはなのは。

赤く目を腫らした目で私たちを見て、名前を呼んでくれた。

その先に続く言葉が怖い。何て言われるのかな。

「これから……二人はどうなるの……？」

「……え？……あー、えつと……」

「……うん、私たちはこの次元世界を護る。だから戦わないと、テルミナスと」

テルミナスの目的はルシルを絶望させて亡失アーミッツティムスにする事。

その前準備として、なのはたちの命を奪う。

ルシルに殺させるつもりだったのだろうけど、それは見事失敗。

今度はテルミナス自ら殺しに来るって言っていた。ならそれを阻止するのが役目だ。

テルミナスを斃す。それが絶対条件。敗北は次元世界やルシルの終わりに直結する。

「そのあとは……？ 戦いの後、シャルちゃんやルシル君はどうなるの？」

真つすぐと私とルシルを見るのは。そしてみんなも逸らしていた視線を私たちに向ける。

その視線には恐怖も憐憫も無かった。ただひたすらに真つ直ぐな視線。

「消える。消えるんだよ、なのは。役目を終えた守護神は用済みとして消される。」

当然だ。そんな強大な力を残せば、それだけで争いの種となるのだから。

世界が争いを、滅びを回避するために呼んだ守護神が、争いや滅びの種になつては本末転倒。

そうなる前に、役目が終わると同時に邪魔物を排除する。だから消える」

「消え……る……?」

「フェイト……」

ボソツと呟くようにフェイトがそう口にした。

それを横から心配そうに声をかけるのはアルフ。

フェイトの使い魔で家族、ルシルとも共に過ごした子。

「ルシルとシャル……、いなくなるの……?」

「そつだ。今日でお別れだ、フェイト」

「っ!」

あそこまで絶望したフェイトの顔を見た事が無い。

さっきまでの記憶を見ていた時以上に酷い顔だ。

「ルシル、あなた……!」

「この方が……フェイトのためだ」

「ルシル……」

重すぎる空気が、さらにこの場を沈黙させる。

フェイトは俯いて、アルフやエリオたちは何て声をかければいいのか分からないという様子で戸惑っている。

シグナムとヴィータとザフィーラは腕を組んで、ただ目を瞑っている。ついでに。

シャルとリインはまだ小さく嗚咽を漏らしているし。ごめん、嫌

なもの見たよね。

スバルとティアナ、ギンガからも嗚咽が聞こえる。ホントにごめんね、ごめんね。

クロノとユーノは、テーブルに置かれた再誕神話の表紙の上で握り拳を固めてる。

何を考えているのかは分からないけど、出来れば嫌わなideくれたらしいな。

モニターに映るリンディさんと騎士カリムもまた意気消沈といった様子。

「そういうわけだ。みんな、今まで世話になったな」

「ちよっ、ルシル！」

ルシルが短くそう言って、その姿を消した。

位相転移だ。歩いて去るなんていう人間の行動じゃなくて、態々守護神としての力を使って食堂から消えた。

(これは完全に守護神として事を全うするつもりだ。

ここに残るなんていう選択肢を全く持っていない)

思っていた以上に難しいかもしれない。

「なあ、フライハイト。訊きてえんだけどさ。ちよっといいか?」

「え? あ、な、なに?」

組んでいた腕を解いて、顔を上げたヴィータ。

シグナムも同じように腕を解いて、私を見てきた。

「フライハイト、お前がテストメントになった理由は分かった。仲間と故郷を護るためにテストメントになったという事が、な。だが、セインテストはどうだ？ 奴はどうして、どうやってテストメントになった？ 奴の・・・」

シグナムがフェイトへと一度視線を向けた。

シグナムの疑問を耳にしたフェイトが顔を上げて、シグナムと視線が合う。

シグナムは少し言い淀んで、でも続けた。

「・・・奴の最期は見た」

それを聞いたフェイトの目からまた涙が零れる。

シグナムはそれを心配していたのだろうけど、それでも話を続けた。

「しかしお前のようにテストメントになった理由が分からない。

そこだけが省かれている。セインテストは一体何を隠している？」

「あたしもシグナムと同じだ。いきなりテストメントになった、ってことはないんだろ？」

セインテストはどうやってテストメントになったんだよ？ お前のように取引したんじゃないのか？」

「その取引内容が、セインテストの隠したい事なのかどうか・・・」

シグナムとヴィータ、ザフィーラは鋭い。着眼点が良い。さすがは歴戦の騎士。

冷静に見ていたからこそ気づけるルシルの終わりの記憶の違和感。

私は見せた。私が“テストメント界律の守護神”になったその刻を。けどルシル

は違う。

そこを、シグナムたちをおかしく思ったんだろう。

「さすがだね。シグナム、ヴィータ、ザフィーラ。もしかして他にも気づいた子いる？」

手を上げたのはクロノだ。あー、やっぱりクロノもすごいよ。

なのはたちも、シグナムたちから聞いて、ようやくルシルの終わりに疑問を持ったようだ。

「確かにシグナムたちの言う通り、ルシルは態とあの記憶の続きを隠した」

「どうして・・・なんだい？」

「それは・・・、それはルシルが・・・」

言うよ、ルシル。ファイトの想いを叶えてあげたいから。そしてルシル、あなたにも幸せになってほしいから。

「ルシルは死んでない。今も生きた人間だから」

沈黙が流れる。

「ル、ルシル君が死んでないって・・・どうということなん・・・？」

みんなが息を飲む中、はやてが神妙な面持ちで訊いてきた。ファイトも顔を上げて話の続きを待っているみたいだ。

「ルシルの魔術で墮天使は撤退。その後に、アースガルドから助け

が来た。

ルシルの使い魔フェンリル。あの子、界律から存在そのものに制限をかけられているのに、主のルシルを救うために命をかけて来た」

ルシルを護るために、自分が死ぬかもしれないのに来たフェンリル。しかも、その後に時間凍結なんて大魔術を使つて、ルシルの肉体を封印した。

そうみんなに教えた。不死と不治の呪いの所為で、人間としての生活が出来なくなつたと。

「ルシルさんの取引内容つて・・・」

「墮天使にかけられた呪いを解いて人間に戻る事。

それには墮天使ガードンベルグを破壊しないといけない。

そのための手段として、ルシルは仕方がなく界律テストメントの守護神になつたの。

それまではルシルは何だつてする。神意の玉座や界律に言われるがまま、ずっと」

エリオに答える。それを聞いたフェイトの表情が変わる。

「じゃあその墮天使を倒せば、ルシルは消えなくてもいいのか？」

「そ、そうなの!？」

クロノの言葉にフェイトが身を乗り出して訊いてきた。かなり怖い。だけど、それは出来ない。

「確かにそうなれば、ルシルは神意の玉座から解放されて人間に戻れる。」

それが私たちの生きた世界なら、ね」

「……………え？」

「並行世界、パラレルワールドって知ってる？」

目を丸くしたフェイトはもちろん、なのはたちにも訊ねる。

私の質問に答えたのはユーノだ。さすがは学者。

「それってIfの世界のことだよな。」

例えば、コインを投げたとして表の世界もあれば裏だった世界もあるっていう……………」

分かりやすい例えをありがとう、ユーノ。

「ルシルたちアンスールが墮天使によって全滅した世界は、今私とルシルのいる次元世界じゃないの。」

並行世界の一つ。今私たちがいる次元世界のアンスールは、ラゲナロクと一緒に滅んだ。

だから、この次元世界に墮天使は存在してないの」

「それってつまりは……………」

「この世界でルシルを解放する事が出来ない」

「……………そんな……………」

フェイトが絶望から座り込んだ。本当にルシルの事を想ってくれているんだ。

それなのにあの馬鹿は。もっと素直になれば良いのに、バカバカバ

カバカバカ。

「ねえ、フェイト。フェイトはルシルに残ってもらいたい？」

「え？ あ、えつと・・・その・・・うん」

くそお、頬を赤く染めて可愛いな。

さっきまで抱いていた暗い想いが晴れていくよう。

「そっか。じゃあ教えてあげる。ルシルをこの世界に残す方法はあ
る」

みんなの視線が一気に集まる。

「じ、じゃあシャルちゃんも残れるの!？」

「なのは・・・。ごめん、私は残れない。

私はもう本当に死んでいるから。残れるのは、今も生きているルシ
ルだけなんだ」

「あ・・・。そっか・・・」

私が残れない事に落ち込んでくれるなのは。

ありがとう、なのは。嬉しいよ。すごく、本当に嬉しい。

「ごめんね、なのは」

「うん・・・」

「・・・フェイト、ルシルを残す方法は教える。

あとはあなたがルシルをこの世界に残ろうと思えるように説得する。今のルシルは残る意思がほとんどない。あつたとしても、残ろうとしない」

そこが最大のネック。

「どうしてですか？ 残れるなら、やっぱり残ろうと思うんじゃないんですか？」

スバルの言葉に続くようにみんなも同じような事を言い始める。昔のルシルならそうだったろうけど、ルシルには酷い思い出がある。それが、ルシルに幸せになるという選択肢を失わせている。それにアンスールで一人だけ生き残ったという負い目もある。そこところは大丈夫だって言っていたけど、それも原因の一つに変わらない。

「ルシルにはいろんな悲劇の記憶がある。アンスールの事もそうだし、守護神としての契約の数々の中にもたくさんの悲劇があつた。

護る為には親しくなつた人をその手で殺め、逆に殺されるなんて事もたくさんあつた。

ルシルに来る界律からの契約はそんなのばかり。ルシルの心を犠牲にするような、ね。

とことん使われて、多くの絶望を体験して心が壊れ始めた」

「テストメントになってからも、そんな酷い目に遭ってきたんですか！？」

ティアナが叫んだ。この子もまたルシルにいろんな事を教わつた弟子のようなものだ。

親しくなった人の悲劇はやっぱり耐えられないんだろう。

「守護神なんてそんなもの。人権なんてもちろん存在しない。世界にとって都合のいい道具でしかないの。殺せと命令されれば殺す。」

殺されると命令されれば殺される。常に世界にとって一番の行動を取らされる」

そして少し気が引けたけど、守護神として初めてルシルが愛したガブリエラの事も話した。

愛した女性をまた護れなかったルシル。それが最大の原因であることも。

「そんなの酷いです」ってリインがまた泣き始めた。

リインをあやすはやてとシャマル。そんな二人もまた辛そうな表情だ。

「だからルシルは自分が幸せになるという選択肢を持たない。持てたとしても選ばない。自分の幸せに恐怖を抱いてると言ってもいい。」

相手を不幸にするかもしれない。それもまたルシルをキツく縛り付ける鎖」

「なんだよそれ……。お前やセインテストはそんな事をずっとさせられてきたのかよ」

ヴィータが怒りに震えた声でそう言った。

「だからこそ私は、そんなルシルに幸せになってもらいたいと思ってる。」

私以上の悲劇を背負ったルシルに。自己満足で余計なお世話かもしれないけど、それでも！」

フェイトを見てハッキリ口にする。

「この世界でフェイトと一緒に幸せになってもらいたい」

「シャル……」

「……ルシルをお願いできるかな？」

握手を求める。フェイトはゆっくりと優しく手を重ねてきて、

「うん！」

ハッキリと頷いてくれた。あとはフェイトがルシルを説得するだけ。それが上手くいけば、ルシルはこの世界で新しい生を得る事が出来る。

幸せになるかどうかはこれからのフェイトやルシル、なのはたち次第だけど、そこは何も心配してない。

だってなのはたちと一緒になんだから。不幸になる方がおかしい。

「それじゃよく聞いて。ルシルをこの世界に留める方法は」

十 十 十 十 十 十 十

シャルから聞いて、ルシルがいる隊舎の庭先に向かうためにロビーにいる。
たとえ聞かなくても、私もルシルがどこにいるのか分かった。
ルシルがいつも読書する庭先のとある場所。その場所は私も気に入っているから。

「ルシル・・・」

シャルが教えてくれた。ルシルの隠していた事実。
この世界にルシルを留める方法も。
あとは私がルシルにこの世界に残りたいと思わせるだけ。

「フェイトママ・・・」

「うん。大丈夫、任せて」

ロビーでヴィヴィオとなのはたちと一度別れる。
それにしても、まさかヴィヴィオが私たちの話を立ち聞きしていたなんて思いもしなかった。
ルシルとシャルの話のほとんどが解っていないようだったが、それでもルシルとシャルがいなくなるというのだけは解っていた。

「ルシル」

ルシルと出会って10年。いろんなことがあったね。
一つ一つ楽しかった出来事を、今でもハッキリと思い出せるよ。

「・・・少し、いいかな？ ルシル」

木に背を預けて座っていたルシルに声をかける。

ルシルは何も答えない。でも諦めない。

そもそも諦めるなんて選択肢は私の、私たちの辞書に存在しない。ルシルの反対側に回って、木に背を預けて座り込む。

お互いの顔が見える事のない逆位置。

「暖かいね。もう春だからかな」

「……何の用だ。もうじき消える存在に、何かあるのか？」

ルシルの突き放すような冷たい声。でもそれは嘘。

私がどれだけルシルの側で、ルシルの声を聞いていたのか分からない？

どれだけ必死にルシルの側にしようとしたのか、ルシルはやっぱり分からない？

「ルシルは消えないよ」

「……あの馬鹿。話したのが、私の隠していた真実を……？」

「何の事？」

嘘がバレないように努めてそう言うと、ルシルは「む」と短く唸った。

やった。ルシルから初めてカマかけで一本取った。それが嬉しくてつい笑ってしまった。

「やられた。……ああ、でもやはり知ったんだな、私が死んで

いないと」

「うん。聞いた。ルシルはこことは別の次元世界で今も生きてるって。時間が凍結された封印の中で、六千年前と全く変わらない状態で眠ってるって」

昔の魔術はすごい。今の魔法とは全然違う。比べられないほどに進んだ技術。

「ルシルがこの世界に残れる方法があることも聞いた」

今も生きるルシルだからこそ残れる裏技（ってシャルは言ってた）。シャルのように、もう死んだ人では出来ないということだ。本当ならシャルも残って、これからもずっと一緒に生きていきたいかった。

「私は……残らない。残れない」

「その理由も少しだけ聞いた。でももう許してあげて、自分を。このままだとルシル、また壊れてしまいかもしれない」

シエフィリスさんを愛して護れなくて。ガブリエラさんを愛してもまた護れなかった。

一体どれだけの絶望をルシルが抱いたのか分からない。分かるわけがない。私なんか分かっていいほど簡単なものじゃない。

「……君たちをテルミナスから護り抜けば、そんな事は無くなる。」

君たちを護れた。それを支えにして、私は、私とシャルは先へと進める。

だから、大丈夫だ。今までありがとう、フェイト。だから、さよな

」

「聞きたくない!!!」

「っ!!!」

叫んだ。ルシルの口からサヨナラなんて聞きたくない。

今まで、ルシルからサヨナラなんて一度も言われた事ない。

それなのに、こんなときにサヨナラなんて……嫌だ。

「フェイト……」

ルシルが困ったような声を漏らす。

「ルシルはここが嫌い？ そんなに残りたくない？」

「嫌いではない。が、残らない。残る理由が無い」

「理由が……無い……!」

その言葉にカチンと来た。いくらなんでもそれは酷い。あんまりだ。どれだけみんなが、私がルシルとこれから一緒にいたいのか。

私がどれだけルシルを想っているか。ルシルとの未来を望んだか……!

だったら私が、ルシルがこの世界に残る最大の理由になる。そのためにここに来た。

「ルシル!!」

立ち上がって、反対側に座るルシルの前へと移動する。ルシルは座ったままで、目の前の私の顔を見上げる。表情が読めない。無表情のようだけど、見方によっては悲しそうな表情。

「どうした……?」

顔が熱くなる。面と向かって、というか初めてだ。

一度深呼吸。スウーーーーーハアーーーーー。よし! その????な表情を変えてあげるよ、ルシル。

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは……」

ルシルの目をまっすぐに見つめる。綺麗な紅と蒼の瞳。その瞳に私の姿が映っているのが分かる。鼓動がさらに高鳴る。

「ルシリオン・セインテスト・アースガルドが……」

ここまで言えばルシルでも分かるはず。

これから私が何を言おうとしているのか。でも、ルシルの表情は変わらない。

「……好きです」

言った。初めてルシルに伝えた私の10年来の想い。

耳まで赤くなっていくのがハッキリ分かる。熱い熱い熱い、すごく熱い。

「・・・・・・・・・・」

ルシルは何も言ってくれない。

イヤ、何か言つて。お願いだから黙らないで。

「ルシ「すまない」・・・・・・・・どうして・・・・・・・・？」

さつきとは違う意味で真っ白になる。

ルシルは本当に残らないの？ 私じゃルシルを幸せに出来ないの？

「ほ、他に・・・・・・・・好きな人とか・・・・・・・・いるの？」

「いない」

「やっぱりここが好きじゃない？」

「とても大切な場所だ」

「私の事が・・・・・・・・嫌い？」

「・・・・・・・・違う、そうじゃない」

それを聞いて嬉しく思う。だけど今はそんなこと言つてられない。

どうしてルシルはそこまで自分を追い詰めるのか。自分の幸せを否定しようというのか。

それほどまでにルシルを追い詰めるのは・・・・・・・・。

「だったら！！ 何でルシルは自分をそんなに・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・私の、私の想い人はいつも殺されて逝く。」

護ると誓っても、愛すると誓っても、必ず私の手の中から零れ落ちる。

私は疫病神だ。自分が幸せになる云々以前に、一番大切な女性あいてを幸せに出来ない。

そんな私に、人を愛する事はもう出来ない。必ず不幸にしてしまうからだ。

だからフェイト。君が嫌いなわけじゃない。この場所が嫌いなわけじゃない。

怖いんだ。私が残ること、この愛おしい場所がまた何かに奪われるんじゃないかと・・・」

一瞬だけ泣き顔のような表情を見せたルシルが、私の視線から逃れるように顔を伏せた。

ルシルの心は酷く傷ついていた。六千年、そんな長い時間の間にルシルはどれだけ傷ついたんだろう。

私なんか理解できないほどの、それは凄惨な出来事ばかりを見てきたに違いない。

「それ以前に私は人殺しだ。いかなる理由とて人を一度でも殺めればもう幸福の席は無い。

私の想い人が私を置いて逝くのはその罰なのかもしれないな。

私は数多くの命の十字架を背負っている。殺めた人たちの十字架だ。その数はもう知れない。あまりにも多くの命を奪った。人を抱きしめるには穢れ過ぎている」

人殺し。俯いたままルシルが苦々しく言った。

ルシルが背負い、ルシルを縛り付ける罪科の十字架と鎖は多すぎる、重すぎる。

それがルシルの幸福という選択肢を奪う元凶。

（でも、それでも、だからこそ私はルシルを幸せにしてあげたいんだ）

その決意はもう揺るがない。

「私も一緒に背負うよ、ルシルの十字架。

私一人じゃ頼りないかもしれないし、ううん、私じゃ全然力になれない。

それでも一緒に背負うよ。これからはずっと、ルシルを一人にしな
いから」

「フェイト……いや、ダメだ。……知っているか、フェイト？

優しい人というのはな、優しいからこそ気づき、そして余計なものまで背負うことになるんだ。

優しいからというだけで、ただそれだけで辛い目に遭う事が多いんだよ。

フェイト、今の君がそれだ。私という余計な物を背負おうとしている。

だから、君の想いには応えら

「そんなの全然関係ない！ 問題ない！！

だってルシルと一緒に私は幸せ！ だからルシルも幸せ！ それで全て解決！！」

そう叫んだ。するとルシルは俯いていた顔を上げてポカンとしてい
る。

「だ、だから！ ルシルが残ることで私やなのはたちはすごく嬉し
くて、幸せなの！」

みんなが嬉しがっているとルシルだつて嬉しいでしょ！？　ならそれでもいいよ！

私は不幸なんかじゃない！　だつて好きな人と一緒にいられるんだから！

えつと、その、えつとえつと、だからルシルは残つたつていいんだよ！！

私たちが、私が今度はルシルを護るから！　みんなでみんなを護ればいい、と思うー！！」

どうしよう、自分でも何言っているのか分からなくなつてきた。

ルシルは相変わらず目を点にしてポカンつてしてるし。

一気に恥ずかしくなつてきた。今すぐここから逃げ出したいよ（泣）

「あのね、私が言いたいののは、その、だから・・・」

「・・・プツ、ククククク・・・！」

「あう、わ、笑わないで！」

ルシルが右手で両目を隠すように翳して笑いだした。

こっちはいっぱいいいっぱいで大変なのに、笑うなんて少しひどいよ？

どんだん笑い声が大きくなっていくし。うう、もう恥ずかしさで泣きそう。

「あー笑つた。随分と滅茶苦茶な事を言っていたな、フエイト。

あまりの必死さについ、な。ハハハハ、そうむくれて怒らなくてもいいだろう？」

「ひどいよルシル。私、こんなにもルシルの事・・・す、好きなのに・・・」

もう本当にメチャクチャだ。溢れてくる涙を何度も拭って大変だ。今日一日でどれだけ泣いただろう？ いろんな事が急に、しかも連続で起こり過ぎだよ。

「ありがとう、フェイト。気持ちは確かに嬉しい。その純粋な想いには応えたいと思う」

「え？」

ルシルは今何て言ったの？

私の気持ちに応えたい、ってそう確かに言ったよね？

「だが、私は・・・私は」

ルシルのその先の言葉を遮るように言葉を声に出す。

「ルシル・・・。これからも私と、みんなと一緒に生きよう？

大丈夫だよ。私は絶対に不幸なんかじゃないし、ならない。

シエフィリスさんもガブリエラさんもきつとそう。

ルシルと一緒にいられて幸せだったはずだよ。不幸なんて思ってないはずだよ」

私はそう。ルシルと一緒にだという事に意味があるんだ。

好きな人と同じ時間を過ごせるなら、それは幸せなんだと思う。

「私はルシルの事が好きです。これからも・・・私と一緒に、私の側にいてください」

左手の小指にはめていたルシルから貰った指環に優しくキスをする。

その指環をはめた左手をルシルに差し出す。
私は黙ってルシルを見つめる。私にはこれ以上の言葉は無いから。

十 十 十 十 十 十 十

私に差し出されたフェイトの左手。その小指に輝くのは私が贈った指環だ。

フェイトの想いには前々から気づいていた。これでも心から愛した女性がいるのだから。

(どうする？ フェイトはもう引き下がらない。

こんな私に好意を持った少女。優しく綺麗な少女。

さっき聞かされた言葉から、フェイトの想いは同情ではないのは解る)

だからと言ってその左手を取っていいのか？

私にそんな資格があるのか？ この優しい少女を苦しませることに
なるんじゃないか？

分からない。どうすればいいんだ。苦しむのは、十字架を背負うの
は私独りで十分なんじゃないか？

なのに、何でこんなに苦しいんだ？

フェイトの想いを拒絶しようとするほど心が軋んでいく。

(私は……フェイトが好き、なのか……?)

違う。そんな事があつてはならない。その想いは捨てる。

彼女を傷つけるな。その手を取るな。取れば彼女は不幸になる。

護りたいなら、彼女の想いを否定しろ、拒絶しろ。

私の目に映るフェイトから視線を逸らせられない。

何故だ？ 解が出てこない。私は一体どれを選択すれば良いんだ・
・？

ふと、かつて見た都合のいい夢を思い出す。

シェフィ達とグラスヘイム城の庭園で再会した夢だ。

シェフィは言っていた。私の幸せをいつまでも願っている、と。

我ながら都合のいい夢だと当時は思って自己嫌悪していたな・・・。

(・・・なあ、シェフィ。リエラ。私は・・・・この手を取って
いいのだろうか・・・?)

両拳を握りしめる。正直怖いんだ。

声を出す。震えているのが分かる。この世界に来てこれほどの恐怖
は無かった。

「フェイト。後悔しないのか？」

「絶対しない」

「私が残る方法、対人契約の事は聞いているな？」

「聞いた」

「いいのか？ 後戻りできないぞ」

「絶対大丈夫」

「きつと辛い事が待っているぞ」

「絶対そんなこと無い」

「絶対は無い。無いんだ、フェイト」

「私の絶対は絶対。だから問題ないよ」

「……まったく」

フェイトの言葉に救われた気がした。

心が軽くなるような、濃い霧が晴れていくような、そんな感じだ。シエファイ、リエラ。私は、フェイトの手を取るよ。

あなたの幸せを私たちは願ひ続ける

最後にまた二人の声が聞こえたような気がした。

やはり都合のいい言葉だ。だが、それが私の一歩を助けてくれた。ありがとう。

フェイトの左手を取って、指環に口づけする。

そしてフェイトの顔を見ると真っ赤にして、オロオロし始める。

「私の負けだよ、フェイト。私も、君の側で生きようと思う。」

これからも、私と共に歩んでくれるか？」

「うん……うん！ うん！」

次々と溢れてくる涙を拭いながら何度も頷くフェイト。

そんな嬉しそうな顔を見せられたら、こっちまで嬉しくなるだろうが。

「ルシルパパー！！」

嬉し泣きの止まらないフェイトに困っていると、まだ眠っているはずのヴィヴィオが駆けてきた。

そのヴィヴィオの後ろにはシャルやなのはたちも一緒に歩いてくる。全力で駆けてきたヴィヴィオの半ばタツクルのような抱きつき。とは言ってもヴィヴィオは軽い。しっかりと受け止める。

「ルシルパパ、どこにも行かないでね」

腰にしがみついたヴィヴィオが私を見上げてきてそう口にした。

これは……見ていたな。さっきの私とフェイトのやり取りを……。

優しくそつとヴィヴィオの頭を撫でる。

するとヴィヴィオはくすぐったそうに笑みを浮かべた。

ああ、悪くない。こういうのも、やはり悪くない。

「やっと決心したんだね、ルシル」

「ああ。満足か、シャル？」

「うん。……ちゃんと幸せになつてよね」

ここまでお膳立てされたんだ。なつてやるさ。

この世界で、フェイトたちと共に新たな時間を生きてやるよ。

フェイトの周りを囲うなのはたちも嬉しそうに抱き合っている。

さっきまでの暗い雰囲気根こそぎ吹き飛んでいるような光景に、自然と笑みが零れる。

『あとは、テルミナスの事だけだね』

シャルからのリンク。

そう、これからもフェイトたちといるには、テルミナスを斃す必要がある。

『ああ。さつきフェイトが来るまで、神意の玉座とリンクして、あの策を立てた。

上手くいけば、恐らくテルミナスに勝てる。というより絶対に勝つ』

一人ここで対テルミナス戦の事をただひたすらに考えていた。

フェイトの想いに応えるまでは自己犠牲の策だったが、応えた以上はある程度変更する必要がある。

生き残って、フェイトと対人契約を結ぶ。

『そっか。教えて、その策の内容を。私は何だってするから』

『・・・すまない、シャル』

私一人残り、シャルだけは還る。それに負い目を感じる。

だというのに、シャルは偽りのない笑みを浮かべて、

『私はもう十分だよ。これだけの思い出があれば、これからも頑張っ
つていける』

そう言った。するとシャルはヘッドロックをあまりにも唐突に私にかけた。

「痛だだだだだだ！！」

「フェイトー！ こんな頭の固い義弟だけど、よろしくねー！」

「シャル・・・、うん！」

フェイト、そこは笑みで応える場面ではなく、シャルを止めるところだ。

なのはたちもそんな笑っていないで助けてくれ。

それから一分くらい掛けられっぱなしのヘッドロック。

解放された時には酷い頭痛に悩まされていた。

「シャルちゃん、ルシル君。いつ戦いに行くの？」

＋
＋
＋
＋
＋
＋
＋

さっきまで笑みだったなのはがそう訊いてきた。

それはつまり、あとどのくらいこの世界にいられるのか、ということだ。

「えーっと、界律から何も言ってこない以上はどうしようもないかな」

現状維持で待機。それが今の私とルシルに与えられている命令。

テルミナス出現までは何もすることが無い。

「それやったら、アレ出来るな」

「そうですね、はやてちゃん」

「「?????」」

私とルシルは顔を見合わせて、首を傾げる。

アレが出来るって、何をするつもりなんだろう……？

再び食堂に案内される私とルシル。

食堂に入っていったみんなに続こうとしたら、

「セインテストとフライハイトはここで待ってる。いいか？ 絶対に覗くなよ？」

ヴィータにそう釘を刺されて、私とルシルは大人しく廊下で待っていた。

それからどれくらいしただろう。長くも無く短くも無い時間が経って、ようやく呼ばれた。

入口を潜った瞬間、パンパン！と破裂音が響いた。

それと同時に私の顔にかかる色とりどりの……紙テープ？

「クラッカー……？」

そう、今の破裂音の正体はクラッカーだ。

なのはたち一人一人がクラッカーを持っている。

「ハハ……あははは。忘れてた。今日誕生日だよ」

今朝のアリサとすずかから貰った誕生日プレゼントを忘れるほどに、いろんな事が起き過ぎた今日。

いくつかのテーブルに乗せられたパーティー料理。

すごくいい香りがする。もう人間の身体じゃないのに、空腹感が私

を襲った。

「最後ならちゃんと送りださんとな。今までお世話になったシャルちゃんの一足早い旅立ちや。

そしてフェイトちゃんとルシル君を祝う意味を込めたパーティーでもあるな」

はやてがそう言って、私とルシルを席へと案内した。

嬉しい。感激の涙が出そう。だけど、もう泣かないよ。

もう涙は必要ないから。今から最後まで必要なのは最高の笑み、ただ一つ。

「やっぱりシャーリーたちも起こそうか？

私たちだけだと少し寂しい気もするし……」

「ううん。いいよ、起こさなくても。

起きてこないっていう事はそれだけ反動が強い事だから」

テルミナスに操られて、こうして動いているのはたちはすごいとしか言いようがない。

普通ならシャーリーたちのようにしばらく寝込むはずなんだし。恐ろしい。

それから始まる最後の食事会。

リンデイさんと騎士カリムは、お祝いの言葉をくれた。

でも、もう管理局が動いている事でリンデイさんは一足早くに退場。騎士カリムも教会の仕事が溜まっているという事だった。

最後まで謝ってくれていたけど、お祝いの言葉だけで本当に十分。すごく嬉しかった。

にしても、なのはたちが作った料理も文句のつけどころの無い絶品。ルシルも本当に美味しそうに食べているし。私もニヤけるよ。それから楽しく話をしながら食事は終わった。みんながゆったりとして、なのはの作ったデザートケーキを食べていると、

「シャルちゃん」

なのはたちが綺麗に包装された箱とか紙袋を持って来た。分かる、分かるよ。誕生日プレゼントだよ。

「これ、誕生日プレゼントなんだけど……。シャルちゃん、いなくなるんだよね……。」

「……あー、うん。でも大丈夫。何くれるのかなあ？」

たとえ消えるとしても、親友たちの心の籠もったプレゼントは持つていく。

その術はもうある。というか、この世界で手に入れた物を持って還る為に組んだようなものだ。

私の創世結界“ヘルシャー・シュロス 剣神の星天城”は。

なのはたちから貰ったプレゼントの包み紙を綺麗に取っていく。

可愛い服やリボン、アクセサリなどなど。どれも私を飾る装飾品。私のようなガッツ（自覚は少々ある）な女に似合うのか分からないけど、贈ってくれるんなら大事にしないとね

で、ユーノは本？ ルシルにじゃなくて、私に本……？

なに？ 少しは頭のいい本でも読めってか？

と思ったら、いろんなプレゼントを貰った。うわっ、気を使わせたみたい。

「ありがとう、みんな。大切にに使わせてもらっから」

「うん。でもどうするの？ このプレゼント・・・」

「そうだぞ、シャル。私の英知アルサイトの書庫の蔵ようなものでもない限り、持っていけないぞ？」

思い思いに心配そうな声をかけてくるけど、だから創世結界があるんだって。

「フッフ。私はやっぱり天才だったのよ!!」

私の自信満々かつ仰々しい態度に、みんなが若干引いた。引くな引くな。

「私の右手をご覧ください。種も仕掛けもございません。ご確認を。では、1・・・2・・・3!! はい、どうぞ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「あ、それって・・・!」

「まさか・・・完成させていたのか・・・!」

私の右手の上に生まれた黒い穴を見ての反応は様々。

なのははたぶんルシルの創世結界を見たんだろう。ルシルから聞いていたし。

ルシルは軽く驚いている。何せ半年で完成させたんだから当然かな。フェイトたちは？顔。知らないなら当然かな。

記憶の中で見せられた創世結界はどれも現実に展開されているものばかりだったし。

「改めてありがとう、みんな」

包装し直して、プレゼントの山を黒い穴^{ヘルシャー・シュロス}“ 剣神の星天城 ” の宝物庫に全て送る。

送り終えた後、なのはたちが眠っているシャーリーたちの分も持ってきてくれた。

感動しながら大事に大事に宝物庫に送っていく。

「そう言えば、ルシルにはないの？」

「ん？ ああ、私は残るからな。テルミナスを斃し、戻ってきてから受け取ることにした」

ホントに良い笑みを浮かべて嬉しそうなルシル。

ほら、ルシルにはやっぱりそういう顔が一番似合うよ。

「そっか」

プレゼントも貰った。美味しいご飯もいっぱい食べた。

時間はもう16時。ちよつと短かったけど楽しく過ごせた。うん。もう十分だよ。

そして最後に、私たちのアルバムを観る事になった。

9歳という幼少からつい最近までの、たくさんの思い出が詰まったアルバム。

モニターに次々と映し出されていく笑いを誘う画像や映像の数々。

「誰だ！？ こんなものを取っておいたのは！？」

「可愛い!!」「可愛い!!」

ルシルの初女装の画像。なのはやフェイト、アリサにすぐかと初詣した時のものだ。

確か、フェイトの爆弾にルシルは泣きながらのダッシュで消えたっけ。

(懐かしいな)

小学校時代での旅行画像。そこでもまたルシルの女装、しかも映像。ルシルは自分の女装姿が出てくるたびに怒鳴って、果てには沈んだ。

「ル、ルシルさんには女装癖が・・・!?」

「誤解だあああああああ!!!!!!」

楽しいな。ホントに楽しいよ。

エリオやキャロの小さい頃(今でも小さいけど)の画像や写真で、二人が真っ赤になったりもした。

可愛いなあ、二人とも。

他にも生まれたばかりのラインの失敗映像。

「キヤーキヤー、見ないでください!! もー! はやてちゃん!」

「まあまあ。こんな可愛ええラインはなかなか見られへんで?」

ラインの猛抗議をヒラヒラかわすはやて。

スバルとギンガの大食い画像なども出てきた。

「アレだけ食べて太らないっていうのも羨ましいなあ」

それが私の素直な感想だった。

そんな二人は今さら恥ずかしがる事無いのに顔を少し赤らめていた。六課での生活の画像や映像も増えてきた。六課設立初日のものとか

みんなが笑ってみている中、私の隣に座るなのはが私の手を握ってきた。

私もそつと握り返す。すると、なのはがもつと強く握ってきた。その震える左手で。

「なのは・・・」

アルバムが見えやすいように少し暗くされた食堂。

そこで、なのはは誰にも気づかれないうちに静かに泣いていた。ううん、たぶんみんなは気づいていても、気づかないフリをしていると思う。

「なのは」

なのはの名前を口にすると、なのはは少しずつ嗚咽をこぼし始めた。

「うく・・・ひつく・・・シャル・・・つく・・・ちゃん・・・」

私はなのはの頭を胸に抱きかかえる。

なのはは何の抵抗もしないで受け入れてくれた。

何度も何度も、あやすようになのはの頭を撫でる。

「ほら、もう泣かないの。折角の美人が台無しだよ。

ねえ。今は泣いていても、別れの時はちゃんと笑っててよね」

「シャルちゃん、シャルちゃん……うつく……シャル……っ……ちゃん……」

私はしばらくなのはの頭を撫で続けた。

ミッドチルダ界律より剣劇の極致に至りし者及び天秤の狭間で揺れし者へ

破滅の使徒終極との戦場を用意したりて その場にて殲滅せよ

(……来た、か)

ルシルの方を見ると、私に視線を移して頷いた。

さあ、行こう。なのはたちを、この世界を護る為に。

「大好きだよ、なのは」

最後に力強くなのはを抱く。

この大好きな親友の温もりを忘れないために。

「シャルちゃん!!」

私が離れた事で、なのはにも分かってしまったようだ。

もうこれでお別れなんだってことが……。

なのはの大声にビクツとするヴィヴィオを始めとしたフェイトたち。

「みんな。今までお世話になりました。たった今、界律から最後の命令が来たの」

みんなが一斉に立ち上がる。

さつきまでの楽しかった雰囲気が一気に消し飛んだ。

「来たのか・・・テルミナスが」

「うん。それじゃあお願いできるかな、クロノ」

「ああ。いつでも次元航行艦を一隻出せるようにしてある。どこに向かえばいい？」

「第28無人世界。そこが戦場として用意された」

ルシルとフェイトの対人契約のために、フェイトにはルシルの元へとすぐに駆けつけられるようにしてもらわないといけない。

だからこそ、戦場になる世界の近くにおいてもらわないといけない。ミッドチルダでの戦闘ならそんな手間は要らないんだけど、万が一別の世界で戦う事になったらということ、クロノに頼んでおいた。

「分かった。その世界の軌道上で待っていればいいんだな」

対人契約。守護神、しかも不完全なルシルとマリアにしか出来ない裏技だ。

守護神は本契約を終えると、界律との繋がりが消えたことで、“神意の玉座”に還るまでの短い時間フリーな状態になる。

その状態でその世界の住人と契約を交わす。そうすることで、全ての世界に“生きている”という概念を持つルシルは、その契約者に引つ張られて新たな生を得るというもの。

もちろん肉体を得るし、成長もする。その反面、その世界のルールに則っているいろと変更される。

ルシルならきつと魔術を使えなくなるだろう。魔力炉もリンカーコシステムアに変更されるだろうし。

「ん、ありがとう」

「フェイト。テルミナスが消えたらすぐにルシルの元に行って契約ね」

「うん。大丈夫」

さすがに私たちとテルミナスが戦闘中の世界に入れるわけにはいかない。
ルシルとフェイトは頷き合って確認している。これなら大丈夫そう
だ。
もうルシルとフェイトの心配はもう必要ないかな。
あとは、

「なのは。ちょっといいかな」

「うく、つく・・・なに・・・?」

必死に涙を拭って、笑おうとしているのは。
そんななのはがとても愛おしい。だからテルミナス如きに奪わせない。
い。

「トロイメライ、預かってくれるかな・・・?」

「え?」

右手の中指にはめた待機状態となっている“トロイメライ”の指環
をなのはに手渡す。
驚いたような目をして、何度も私と“トロイメライ”を交互に見る。

「トロイメライは残していくよ。勝手だけどごめんね。
なのはたちに私の事を忘れてほしくないんだ」

そう言ったら、なのはたちの顔色が一気に変わった。

「忘れるわけない!!」

「そうだよ！ これからもずっと友達だよ！」

「もう会えなくなるとしても、私はずっと友達や!!」

「そうですよ！ あたしは絶対に忘れません！」

「あたしもです！ シャルさんと一緒に過ごした時間は忘れません」

「私もです。シャルさんとの時間はとても楽しいものでした。
だから忘れる事なんてありえないです」

「僕もです！ 僕もシャルさんの事ずっと忘れません！」

「シャルさん、わたしもずっとシャルさんの事憶えています」

「リインもです！」

「もちろん私もよ、フライハイトちゃん」

「えっと・・・、ありがとう、みんな。でもビックリしたよ。
そう・・・だよ。うん。私も絶対に忘れないよ、みんなの事」

嬉しい事を言ってくれる本当の友達たち。

だから心配せずに行けるよ。なのはたちがそう言うなら、きっと忘れなくてくれると信じられるから。

「僕だって忘れないよ。なのはの次に友達になってくれたシャルだから」

「そうだな。僕としても今までの人生の中で、一番驚かされたのはシャルだったからな。」

出会ってすぐに怒鳴られるわ、殴られるわ、で大変だったな」

「あー、そう言えばクロノはそうだったっけ？」

あはは、懐かしいな。

「フライハイト」

「シグナム……」

「預けていた勝負だが……。私の負けでかまわん」

「……へえ。どういう風の吹きまわし？」

シグナムがそんなこと言うなんて。

「お前の本当の力を見た以上、勝てるなどとは思わん」

「そう。シグナムがそう言うなら私の勝ちね。……じゃあシグナム、元気でね」

この世界での最高のライバルだったシグナムと握手を交わす。

「ヴィータも元気でね」

「おう。じゃあな、シャルロット」

「・・・ヴィータ。・・・うん、ヴィーちゃん」

「なんだそれ!？」

はいはい、こんな事でいちいち目くじら立てないの。

ヴィータの頭をナデナデする。そっとナデナデ　優しくナデナデ

「くううう・・・。記念に今日だけ許してやる」

あはは、偉い偉い。元気でねヴィータ。

「ザフィーラも今までありがとうね」

「ああ。我もお前には本当に感謝している」

狼形態のザフィーラの頭を撫でる。

フサフサだ。小さい頃に何回か乗せてもらったっけ。

「アルフ。これからはフェイトだけじゃなくてルシルもお願いね」

「あいよ。任せておきな。だからシャル、安心して還っておくれよ」

「ありがとう」

小さい子供形態のアルフを抱きしめる。温かい。それじゃ最後に、

「ヴィヴィオも元気でね」

「シャルさんも。・・・シャルさん・・・！」

「おう？ よしよし。なのはママたちの言う事聞いて、立派な女の子になるんだよ」

腰に抱きついてきたヴィヴィオを、私もしゃがみ込んで抱きしめる。うわぁ、やっぱり柔らかいなぁ、ヴィヴィオは。

「ルシル」

「ん？ どうしたフェイト？」

ヴィヴィオの抱き心地にうっとりしていると、フェイトが小さな箱を持ってルシルに歩み寄る。

あの箱はルシルの誕生日プレゼントかな。

「お守りという事で、よかったらはめて」

「・・・指環？ ああ、ありがとうフェイト。待っているよ」

「うん。待ってて。必ず迎えに行くから」

えー、あその場所だけ熱いです。

物凄き勢いである場所だけ温度が急上昇です。

「じゃあシャル。そろそろ・・・」

「あ、うん・・・」

食堂からロビーに向かう。無言のままロビーに着いて、

「・・・それじゃあ行くよ。・・・バイバイ」

なのはたちに手を振る。サヨナラは言わない。
言いたくない。だからバイバイだ。

「シャルちゃん」

なのはに呼びとめられた。

「いってらっしゃい、シャルちゃん」

「あ」

なのはに続いて、みんなも一斉に「いってらっしゃい」と言ってくれた。

もう「ただいま」って返せない私。それなのに「いってらっしゃい」って。

「・・・いってきます!!」

「いってきます!」

今の私が出る最高の笑みで言う。

ルシルも続いて「いってきます」って口にした。

「さあ行くつか、シャル」

「うん！」

外に出て、ミッドチルダのこれで最後になる空気を吸う。
いってきます。うん、良い言葉だ。

「そして、君の力を使わせてもらっぞ、マリア」

「はい。ルシリオン様」

少し離れた木陰から、桃色の外套を纏った5th・テストメント、
マリアが姿を現した。

「お願いね、マリア」

「はい」

そうして、私たちはミッドチルダから旅立った。

「いってきます」　　♪ Happy day ♪　　（後書き）

もう多くは語りません。突っ込みの方もご勘弁を。
残り二話。次回はラストバトルです。

サヨナラじゃなくてアリガトウとキミは ｝Testament｝(前書き)

作中のT e sですが、テストメントとお読みください。お願いします。

V S 終極テルミナス イメージ戦闘BGM ACE COMBAT

5 THE UNSUNG WAR

“ The Unsung War) 語られる事のない戦争) ”

サヨナラじゃなくてアリガトウとキミは 〈Testament〉

4月12日 第28無人世界 PM16:55

無人世界軌道上、宇宙空間で、なのはたちの乗る艦が来るのを待つ。

「いい？ どんなまずい状況になっても絶対に自分を犠牲にするような事はしないこと」

宇宙空間に漂いながら、隣にいるルシルに注意しておく。

折角フェイトと結ばれるというのに、こんなところで斃されてしまつては意味がない。

テルミナスの計画からしておそらくルシルを斃そうとはしないはずだけど、万が一もある。

「了解だ。私とてフェイトに誓ったからな」

「……信じるよ。絶対に無理はしない」

「誓おう。絶対に無理はしない」

ルシルの目を見る。

その目に宿るのは、テルミナスを斃すという決意と、生き残るという覚悟だ。

「……うん。あ、そうだ。ねえ、ルシル」

「ん？」

「私ね、テルミナスに一つだけ感謝している事があるんだ」

そう言うと、ルシルも笑みを浮かべて、私と同じ事を言ってきた。たぶん同じ事を考えているに違いない。絶対そう。

「テルミナスに言ってやれ。どんな顔をするか楽しみだ」

「あはは。そうだね」

格上のテルミナスとの決戦前だけど、私たちは落ち着いている。

『ルシリオン様、シャルさん』

位相空間内で待機しているマリアからのリンク。どうやらテルミナスのお出ましのようだ。

「なのはたちの艦、到着まであともうしばらく。それまで耐えるよ」

大体17、8分くらいか。・・・かなり際どい時間だ。

あのテルミナス相手に約20分も稼がないといけない。

でも、絶対に稼いでみせる。ルシルとフェイトのためにも、ね。

それ以前に、作戦の成功のためにもそれくらいは稼がないといけないんだし。

「ああ。それでは作戦通りに頼む」

「よっし！！ 見せてあげようか、アイツのシナリオを超える私たちのシナリオを。」

とことん後悔させてやるっじゃないの！！」

純白の葡萄十字“第三聖典”と“断刀キルシュブリューテ”を合成する。

そうすることで両方の特性を持った武器が出来るからだ。ルシルから教えてもらったことだけど、これはかなり便利だ。

「シャル、全ての複数術式、武装の制限を解いた。どれでも使ってくれ」

「ん。必要になったら使わせてもらおうよ」

“聖典キルシュブリューテ”を振るいながら答える。守護神の外套を消す。動きを制限されるような物は必要ない。

「行くうか。シャル、マリア」

「うん。準備はいい、マリア？」

『はい、シャルさん。いつでもどうぞ』

位相転移。一瞬で無人世界の気圏内に進入。

一面荒野で本当に何も無い。無人というより無命世界だ。でもその方が良い。必要のない犠牲は出したくない。

隣に浮遊しているルシルと顔を見合す。

ルシルも漆黒のケルト十字“第四聖典”と“神槍グングニル”を合成した“聖典グングニル”を手にしている。そして私と同じように外套を外している。

マリアはいない。あの子にはあの子の役目がある。

それに、テルミナスにその存在を知られてはいけない。
バレればそれで終わる。

『……来るぞ!!』

リンクを通してルシルが叫んだ。

それと同時に聞こえてくるアイツ特有の「クスクス」っていう笑い
声。

「クスクス。ルシリオン、シャルロッテ。さあ、語り合おうよ」

テルミナスがその姿を現した。

アイツが手にしているのは、ルシルと同じ漆黒のケルト十字。

堕ちた聖典“第四偽典”。元守護神テルミナスの固有武装。

「……行くぞ、シャル」

「ええ。……行こう!!」

位相転移を行い、上空へ移動。そこからテルミナスに向けて干涉砲
撃を無数に放つ。

この世界での最後の戦いが始まった。

無人世界の黄昏の空を飛び交う無数の閃光。

現実には干渉する“実数干渉”ではなく、幻想に干渉する“虚数干渉”
による攻撃。

正に幻想に生きる二柱と一体に合った攻撃だった。

「はああああああッ!!!」

Tesシャルロッテの“聖典キルシュブリューテ”が、テルミナス終極を処断せんと奔る。

位相転移の連続から放たれる数万分の一秒という間隔を空けての万を超える全方位からの剣閃。

それを“テルミナス第四偽典”と己の干渉能力、位相転移によって余裕で回避していく終極。

「クスクス。剣戟の極致に至りし者、ね。

その程度の腕でよく言う。剣とはこういうものよ」

“テルミナス第四偽典”を剣のようにして構え、Tesシャルロッテへと肉薄する終極。

黒の一撃がTesシャルロッテに迫ろうとしたとき、

「お?」

テルミナス終極を拘束する蒼の鎖。Tesルシリオンの干渉によるものだ。

すぐさま自らの干渉能力で切断していくテルミナス終極。

一瞬とはいえ動きを抑えられた彼女を襲う力。

エヌマ・エリシュ
天地乖離す開闢の星

動きを止めたテルミナス終極の左側面、距離にして5m弱。

波打つ空間の先、位相空間内からTesルシリオンの放った一撃が迫る。

Tesシャルロッテは「我が手に携えしは確かなる幻想」と呟きながら、^{テルミナス}終極から距離をとる。

対する終極は、先に拘束を解いた右手を迫る攻撃へと翳す。

と同時に彼女の右手と破壊の渦が衝突した。涼しい顔で受け止める^{テルミナス}終極。

そこにさらに追撃が入る。

^{エクスカリバー}
約束された勝利の剣

真技・飛刃・翔舞十閃・乱れ撃ち

未だに佇んだままの^{テルミナス}終極へと黄金の極光と桜色の無数の刃が迫る。^{テルミナス}終極は決して余裕の表情を変えることなく、左手に持つ“第四偽典”を地面へと突き刺した。

Linguistique animisque favete

引き起こされる虚数干渉による銀色の光の波。

リングイースクウェ・アニミースクウェ・ファウエーテ、汝らは言葉と心において沈黙せよ、という意味を持つ^{テルミナス}終極の干渉防御。

その波が、一瞬でTesシャルロッテとTesルシリオンの攻撃を掻き消す。

予想通りの展開に、表情を変えないまま戦闘を続行するTesシャルロッテと^{テルミナス}Tesルシリオン。

二柱は^{テルミナス}終極から距離を取り、干渉砲撃と干渉斬撃を放つ。

Tesシャルロッテの干渉斬撃とは違い、Tesルシリオンの干渉砲撃は中れば致命的とは言えないが相応の被害を齎す。

それを知っている^{テルミナス}終極は、Tesルシリオンの干渉砲撃にのみ集中

して回避していく。

「舐めてる……!」

テスシャルロットはそれを見て眉を顰める。

その眩きを聞いた終極テルミナスが静かに「クスクス」と笑う。

「気を悪くした？ でも、これが事実。あなたの干渉能力は私とルシリオンを下回る。」

その剣の能力で干渉能力を上手く高めているけど、でもまだ足りないの」

落ち着いた様子で、迫る干渉砲撃群を回避していく終極テルミナス。

テスシャルロットは「上等」と眩き、絶対切断の能力を持つ“聖典キルシュブリューテ”テルミナスを鞘に納める。

位相転移の連続。終極の索敵能力を誤魔化すためだ。

その間、テスルシリオンの干渉能力が付加された攻撃が終極テルミナスを襲撃する。

コトド・テュール 軍神の戦禍

ガンバレード・デイヴィルテイメント
銃軍嬉遊曲

万を超える完全解放された神器群。

さすがの終極テルミナスも一瞬とはいえ目を見開き驚愕した。

だが、すぐさま余裕のある表情へと戻し、

「どっつしてそこまで頑張るの……?」

O m n i a v a n i t a s

“第四偽典”を横に構え、一気に振り抜く。

オムニア・ウアーニタース、すべては空虚である、という意を持つ
干涉攻撃が広範囲に放たれる。

目に見えない終極の迎撃と、^{テルミナス}Tesルシリオンの攻撃が衝突。

^{テルミナス}互いの干涉を食い破ろうと拮抗している。そこに第二波を繰り出す
終極とTesルシリオン。

O m n i a v a n i t a s

真技・神徒の剣閃

アポストリック・セイバー

干涉能力を付加された“神剣グラム”の虹色の剣閃と、再度放たれ
た終極の干涉攻撃。^{テルミナス}

未だに拮抗している第一波を後押しするかのよう放たれた第二波
が、その拮抗を破る。

「つづつ!!」

敗れたのはTesルシリオンだった。

万を超える神器群と干涉砲撃が薙ぎ払われ、その破片が舞い散る中、
彼の放った第二波が無効化された。

一瞬の無防備状態となった彼に中る終極の干涉攻撃。^{テルミナス}

咄嗟に位相転移した事で消滅は免れた彼だが、回避しきれなかった
下半身が根こそぎ吹き飛んでいた。

しまったという表情になった終極に迫る位相空間からの攻撃。^{テルミナス}

真技・牢刃・弧舞八閃

タイミングは完璧。

Tesルシリオンを消すわけにはいかないにも拘らず、つい一撃を与えてしまった終極テルミナスが動きを止めたその一瞬。その一瞬を狙つてのTesシャルロッテの攻撃。

八つの絶対切断の刃テルミナスが終極を閉じ込める牢のように展開された。その八つの刃が終極テルミナスへと吸い込まれ直撃した。が、

「邪魔しないで」

「っ!!」

浅く刃が入ったところで、刃は停止していた。斬り裂くことなく途中で止められた刃。

「くっ・・・!!」

歯がみしたTesシャルロッテが距離を取る。

“キルシュブリューテ”の能力絶対切断。その特性は、自らの神秘を下回るものなら全て斬るというもの。

その刃が止められた。それはつまり、終極テルミナスは“キルシュブリューテ”を上回るということだ。

当然の結果だ。相手があまりにも格の高い存在なのだから。

たとえ“第三聖典”と合成させようともTesシャルロッテの干渉斬撃は、終極テルミナスに決定打を負わせられないほど弱かった。

（分かっているとはいえ辛いな。やっぱりルシルの作戦じゃないと無理か）

やはり与えられた役割通りに動くしかないと思ひ知ったTesシャル

ルロット。
少しばかりの悔しさを胸に秘め、“聖典キルシュブリューテ”を構え直す。

「……ねえ、ルシリオン。あなたの居場所は玉座じゃないの。愚かな人間を護る立場はあなたには相応しくない。

というより、罪人を護るといふこと自体がそもその間違い」

テルミナス
終極は、姿を隠したテスルシリオンに語りかける。

テスシャルロットとテスルシリオンは、時間稼ぎにはちょうどいいと判断し耳を傾ける。

「どういふこと……？」

「どういふこと？ 本当に解らないの、シャルロット？
あなたも見てきたでしょ。人間という存在がどれだけ罪に塗れた愚かなものか」

今まで余裕だけを浮かべていた終極テルミナスの表情が一変する。
そこにあるのは憤怒、憎悪、憐憫などといった負の感情だった。

「いつまで経っても争いをやめない、やめようとしもない存在。
どれだけ根絶やしにして、更生させようと努力しても、やはり争いを始める愚者。
抑えようと思えば抑えられる欲で同族たる人間を襲い、奪い、殺める。

その理由が、ただ誰でもいいから殺したかった？ 世の中つまらない？

ム力ついたから？ 相手にされなかったから？ 金銭が欲しかったから？

「^{テルミナス}終極の憤怒と憎悪の叫びは止まらない。

今の今まで抑えてきた人間という存在への感情が、今となって溢れ
だす。

「だから護る価値なんて無いッ！ ルシリオン！ シャルロット！
^{テストメント}界律の守護神となってから、何度も見てきたでしょ！？ そうでし
よ！？」

「……………確かにそうだ、テルミナス」

怒り狂う^{テルミナス}終極の近くに姿を現したテスルシリオン。
彼に続いて、テスシャルロットも少し離れた場所からその姿を現
す。

彼の言葉に少し眉を顰めるテスシャルロットだったが、彼を信じ
て何も言わずに沈黙を保つ。

「……………クスクスクス。ルシリオン 解ってくれたの？ 良か
つたあ？

じゃあじゃあ、待ってて！ ^{わたしたち}すぐにこの世界を滅ぼしてあげるから
そうしたら一緒にいこう、^{わたしたち}霊長の審判者の座へと！！」

さっきまでの負の感情が入り乱れた表情が、一気に歓喜の表情へと
変わる。

軽くはしゃぎながら、瞳を輝かせている^{テルミナス}終極。
その彼女へとテスルシリオンが口を開く。

「だが、綺麗ごとだと解っているが、それでも私は人間を信じてい
る。

テルミナス、お前が拳げた人間は全体の一握りなんだ。確かに人間

は罪深い。

許されるような軽いものばかりじゃない罪を幾つも、どんな時代でも、どんな世界でも犯す。

正直救いようのないことだってある。私も幾度もこの身に味わってきたからな」

それを聞き、テルミナス終極の表情に影が差す。

「そこまで解っているなら、どうして神意そっちの玉座にいるの!?

一握り! その一握りが存在する時点で、すでに存在する価値は無いの!!

信じる!?! 私だって信じてた!!-- これでも元は守護神だから!!--
いつかきつと人は変わる。今はダメでも、いつかは、いつかは、いつかは!!--

けど、いつかは、と信じたその結果が今の私だ!!-- 人は変わらない!!--

殺し殺され、奪い奪われ!!-- 何万年と見てきた!!-- どんなに護っても、争いを始めて滅んでいく!!--」

人間を愛し信じていたからこそ、狂い壊れ堕ちた元第四の力“儂き永遠を憂う者テルミナス”。

何万年と苦悩し、しかしその度に人は変わる、いつか争いは止む。そう信じた。

だが結局は変わらないと諦め、人間、霊長を断罪する“絶対殲滅対象”アボリュオとなった。

「もう護るに値しない!!-- 信じるに値しない!!-- 愚かな罪人ニンゲンは霊長わの審判者たしたちが粛清する!!--」

テルミナス終極は、T e s l シリオンへと干渉攻撃を放ち始める。

しかしどの攻撃もT e s l シリオンの脇を通り過ぎていく。始めから中てるつもりは無いかのように。

「テルミナス……」

T e s シャルロッテは、テルミナス終極の心情を少し理解していた。

どれだけ護つても滅んでいく人間社会。終わりの見えないお守のようなものだ。

その度に人間の本性を知り、心が冷めていく感覚を味わってきた。

それでも彼女は、テルミナス終極のように人間全て滅ぼそうとは考えない。

彼女が出会ったなのはたちを始めとした良い人がいるのもまた事実だと思っからだ。

「テルミナス！！」

T e s シャルロッテはテルミナス終極の名を叫んだ。

T e s l シリオンからT e s シャルロッテへと彼女の視線が移る。

「人の未来を諦めるにはまだ早いんじゃないの？」

「はあはあはあ…… あきらめるのが早い……ですって？

クスクスクス。私はあなたたちの何倍という時間の中で人間を見てきた。

過去、現在、未来、どんな世界でも、その全てにおいて人は変わらないとすでに知ってる。

そんな私に、諦めるのが早い？ クスクス。馬鹿を言わないで、シヤルロッテ」

冷笑を浮かべ、T e s シャルロッテの瞳から視線を逸らさないテルミナス終極。その彼女の冷たい視線から瞳を逸らさないT e s シャルロッテ。

「そう。ならいい。どっちにしてもお前を斃す事に変わりないのだから。」

お前が私たちと人間を否定するなら、お前もまた否定されても文句は言えない。そうでしょ」

「よく言う。あなたたちもまた人殺しのクセに。」

界律からの契約だから、なんて言い訳はしないでよ？

テストメント 界律の守護神もユースティティア 霊長の審判者も結局は同じ事をしているの。

罪深き愚かな人間にニンゲン 肅清を、断罪を、審判を。愚者の身勝手に世界が滅ぶ前に罪人を滅する」

「是即ち我ら共通の意義」と続けるテルミナス 終極。

T e s l シリオンは首を横に振り、“ 聖典グングニル ” に力を込め始める。

それに気づいたテルミナス 終極の表情が曇る。

そして、「どうして解ってくれないの？」と悲しそうに呟き、

「もういいよ。もういい。もう知らない。ルシリオンなんか知らない。い。」

あとで後悔しても知らない。……消えろ」

完全に戦う気になったテルミナス 終極から放たれる強大な虚数干渉砲撃。

位相転移で回避して難を逃れるT e s s シャルロットとT e s l シリオン。

『なのはたちが来るまでもう少し！ ルシル、そっちの準備はあとどれくらい！？』

『まだまだ！ テルミナスを一撃で斃すにはまだ時間が足りない！！』

二柱はリンクを通して、作戦の経過状況を確認した。
その間にも終極が二柱を討とうと干渉攻撃を仕掛けてくる。
位相転移を繰り返す事で回避し、100km以上離れた別の荒野へと戦場を変えていく。

「さっきはああ言ったけど、ルシリオン、シャルロッテ。
もう夢を見るのはやめよう。真実を潔く受け入れて、現実を見て。
どれだけ信じて、人はあなたたちを裏切る。今ならまだ間に合うよ」

D a d e x t r a m m i s e r o

二柱を拘束せんと、終極の干渉能力で編まれた無数の杭が二柱を襲う。

ダー・デクストラム・ミセロー、哀れな者に右手を与えよ、という意味を持つ銀の拘束杭。

「悪いがお前の提案は却下だ、テルミナス。
私はこの世界を、愛おしい彼女を護る。護り抜く」

「……残念だ」

コード・トール
雷神の天罰

遙か上空に展開される九つのアースガルド魔法陣。
それに気づかない終極が、T e s シャルロッテへと接近しようとしたとき、

「な……!?!」

テルミナス
終極へとピンポイントで落ちる蒼雷。

それは上空で展開されたアースガルド魔法陣から振った落雷だった。対地攻撃術式雷神コト・トルの天罰。上空から地上へ向けての急襲魔術。その突然の奇襲に、余裕とは言えないが、しっかりと跳び下がることで回避する。

「そらあああああー!!」

そこに気合を入れた雄叫びをあげながら迫るテスシャルロッテ。テスシャルロッテが持っているのは、魔造兵装第一位“戒剣・覇統天星”。

魔界最下層支配権第一位にして、最古の魔族最古四種の生き残り。

“魔統の総主ウィズ・アタナシア・フィンデッド”の固有武装。

その神秘は計りしれず、テスルシリオンの持つ“神槍グングニル”と同等。

そこに彼女自身の干渉能力を付加させ、その威力を何十倍へと増加させた。

テルミナス
終極は直感で危険な物だと判断し、干渉防御を張る。

衝突。防御テルミナスされている。しかしそれは完全な防御ではなかった。徐々に刃が終極テルミナスの干渉防御を裂いていく。

「っ！　クスクス。そんなモノがあるなんて・・・！」

O m n i a v a n i t a s

テスシャルロッテを覆うように放たれる干渉攻撃。

テスシャルロッテはすぐさま攻撃を中断し位相転移で離脱。

真技・神断福音
グロリアス・エヴァンジェル

^{テルミナス}終極へと“神槍グングニル”が迫る。

彼女は防御ではなく回避を選択。位相転移し、射線軸から離脱。そこに、また降り注ぐ蒼雷雷神の天罰。^{コト・トール}

「小賢しい真似を・・・！」

上空にアースガルド魔法陣を視認した終極は、^{テルミナス}位相転移でその場へと移動し、魔法陣を破壊した。

そこにまた迫る“神槍グングニル”が・・・五。
五つの“神槍グングニル”が、全方位から終極へと迫る。^{テルミナス}

L i n g u i s q u e a n i m i s q u e f a v e t e

銀の波が無人世界の黄昏の空に拡がる。

五つの“神槍グングニル”が瞬く間に消滅していく。

上空に気配が残っていない事を確認した終極は^{テルミナス}位相転移し、地上へと舞い戻った瞬間、

真技・^{ヘルヴォルス・カノン}時空穿つ断罪の煌き

迫る黄金の大火力砲撃。

その威力は正しく時空を穿つに値するほどのもの。

殲滅姫カノンの誇る最強にして、大戦時において最大射程を持つ砲撃魔術。

迫る砲撃に気づき、再び位相転移で回避しようとした終極^{テルミナス}だったが、

「っ!？」

両足首を、宙から生えた影の手で掴まれて動けなくなっていた。干渉能力が付加されているそれを外すには時間がかかると判断し、迎撃に変更する。

F a t a v i a m i n v e n i e n t

“第四偽典”の先端から銀の干渉砲撃を放つ。

魔術の神秘、神器の神秘、そこに付加されたT e s l シリオンの干渉能力。

対するは、ファータ・ウイラム・インウェニエント、運命は道を見出すだろう、という意味を持つ干渉能力一つのみの終極の砲撃。

衝突。虚数干渉が付加されているはずが、現実に存在する地面を吹き飛ばす衝撃波が発生する。

黄金の砲撃が次第に押され始める。それほどまでに強力無比の終極の干渉能力。

十数秒と拮抗していた砲撃戦が終わろうとしている。

終わる直前、T e s シャルロットが様々な神器を合成させた“聖典キルシュブリューテ”を構え、終極の頭上へと出現。

「これでどうだ！ 吼えろッ！！」

真技・雷神放つ天罰

合成した神器の中にあつた“天槌ミヨルニル”の力を引き出し、雷皇ジークヘルグの真技を放つ。

放電する“聖典キルシュブリューテ”を、干渉防御を張った右手で受け止める終極。

その衝撃で地面にクレーターが生まれた。瓦礫が宙を舞う中、さらに追撃が迫る。

「風牙裂千 空帝 双嵐掌!!」

砲撃戦が終わったことで、位相転移によって終極の目の前に現れた
テスルシリオンの一撃。テルミナス

終極は足を未だに影の手に取られ、右手はテスシャルロッテの対
処で使用中。

左手に持つ“第四偽典”を振るうには遅すぎる状態。

干渉能力もまたテスシャルロッテの一撃を防御するのに回してい
る。

つまり、

「うぐツ!!」

直撃を許すほかなかった。

強大な竜巻を纏った左右の掌底を受け、終極テルミナスが後方へと吹き飛ばさ
れる。

体勢を整えられる前にさらに追撃をかけようとしたテスシャルロ
ツテとテスルシリオンだったが、

Quid enim stultius quam in ce
rta pro certis habere, falsa p
ro veris?

逆に一瞬で追いつめられた。それはあまりにも理不尽な干渉攻撃。

クウイド・エニム・ストウルティウス・クウアム・インケルタ・プ
ロー・ケルティース・ハベレ、ファルサ・プロー・ウエーリース。
不確実なことを確実とみなし、誤りを真理と見なすこと以上に愚か
な事があるだろうか、という意味を持つ干渉攻撃。

その効果は対界律テストメントの守護神。守護神特有の神秘に反応して炸裂する

攻撃だった。

TesシャルロットとTessルシリオンの二柱は、頭と胴体だけを残して地面に倒れていた。

傍には二柱の武装である“聖典キルシュブリューテ”と“聖典グングニル”が突き立っていた。

そして終極^{テルミナス}は難なく着地し、地面に倒れる二柱を見て、嘆息する。

「これが結果。信じる信じない、護る護らない以前の問題。あなたたちがどう足掻こうとも終極^{わたし}には勝てない」

干涉能力によって創りだされた囿ではない事は分かっている。それゆえの彼女の嘆息だった。

「まだ・・・終わっていない・・・ぞ・・・」

砕かれていた部分を修復し、立ち上がるTessルシオンとTesシャルロット。

突き立つ各々の武装を手に取り、再び戦闘行動に移ろうとしている。

「何度やっても同じ事よ。諦めてさっさと消えてちょうだい」

「やってみないと分からないでしょー!!」

先に仕掛けたのはTesシャルロット。

無数の神器の神秘が込められた“聖典キルシュブリューテ”を脇に構え、位相転移で終極^{テルミナス}の右側面へと移動する。

位相空間から出たその瞬間、彼女は目の前の光景に目を見開き、その動きを止めてしまった。

Nemo fortunam jure accusat

「止まるなッ!!!」

Tesルシリオンの叱咤が飛ぶがすでに遅く、Tesシャルロットは“第四偽典”の一撃を受けて上空へと吹き飛ばされた。

「クスクスクス。高町なのはの姿には攻撃出来ないみたいね」

テルミナス
終極の右隣りに立つのは高町なのはの偽者。

ネーモー・フォルトゥナム・ユーレ・アックサート、誰も運命を正當に非難できない、という意味を持つ偽物を創りだす干渉能力だ。

「性質の悪い真似を……!」

上空で体勢を立て直し、地面に降り立ったTesシャルロットがそう零す。

Tesルシリオンも齒がみしながら終極を睨みつける。テルミナス

「ルシル。あとのくらい時間を稼げばいい？」

時間からしてなのはたちの艦はもう軌道上に着いてるはず。

あとはテルミナスをぶん殴ってやるだけだから」

「もう少しだ。あと数分、いやあと二分ほしい。それで間違いなく斃せるはずだ。

現にテルミナスは気づいていない。私たちの策を」

「了解。あと二分。死ぬ気で頑張るよ。だからミスらないでよ」

「了解だ。すまない、これで最後だ。耐えてくれ」

『マリアももう少しだけ頑張っつて』

『はい、大丈夫です。頼られた以上は、期待以上の働きをするつもりですから』

リンクを通して再度作戦の状況を確認する守護神三柱。

Tesシャルロットが“聖典キルシュブリューテ”を構え直し、Tesルシリオンもまた“聖典グングニル”を構え直す。

「……はあ」

^{テルミナス}終極が大きいため息をついた。そして小さく一歩右足を出した。

TesシャルロットとTesルシリオンはそれを合図として、自らの足で駆け、^{テルミナス}終極相手に接近戦を挑む。

残り二分。その間逃げに徹すれば怪しまれると判断しての接近戦だった。

「近接戦……!?!」

^{テルミナス}終極は“第四偽典”を前方に浮遊させ、その中心に左の掌を叩きつけた。

C o g n o s c e t e i p s u m

“第四偽典”より放たれる銀の無数の帯状の光線。

コグノスケ・テー・イプスム、汝自らを知れ、という意味を持つ干渉攻撃。

アースガルド
原初の神壁

Tesシャルロッテの前に出、迫る干渉攻撃を防ぐために、Tesシリオンは保有する防性術式第一位を展開する。それは、かつての魔道世界アースガルドを覆っていた障壁だ。アースガルド四王族に伝えられる最大に最高、そして最古の防性術式。

儀式魔術として分類され、発動するには数週間の儀式が必要となる。が、今は界律テストメントの守護神の干渉能力があるため、その前準備を必要とせずに発動させた。

唯でさえ強力な障壁に、干渉防御が加わったことで終極テルミナスの干渉攻撃を完全に防いだ。

驚愕に染まる終極テルミナスの顔。すぐさま対界律テストメントの守護神用干渉攻撃を放とうとする。

真技・誘いたる混沌の魔手アンフエール・カーオス

そこに、呪侵大使フォルテシアの真技が発動する。

地面を覆う漆黒の影が広がり、その影から無数の腕が伸びる。

「なにこれ・・・!?!」

どす黒くおぞましい腕が幾つも伸び、終極テルミナスを捕えようと迫る。

直感的に危険を察知した終極テルミナスは、地面を覆う影へと攻撃の矛を変えた。

実数、虚数両干渉攻撃を撃ち込み、地面に巨大な穴を開けた。

そこで、TesシリオンとTesシャルロッテを見失った事に気づく。

周囲を警戒し、索敵に力を注ごうとしたとき、

真技・飛刃・翔舞七四閃

遙か上空から降り注ぐ絶対切断の桜色の刃、その数七四。普段の七倍もある圧倒的な破壊の渦。無数に合成された神器の力を借りて初めて成った術式だ。

Linguisque animisque favete

干渉防御。銀の波が終極の頭上を流れるように展開される。降り注ぐ刃が次々と無力化されて消滅していく。

真技・牢刃・弧舞四八閃

至近へ位相転移してきたテスシャルロッテから放たれる八倍となつた剣閃。

魔術師なら回避も防御も出来ずにただ斬殺されるだろう。が、相手は人間ではない。

剣閃が到達する前に位相転移で回避する終極。

「チツ、外した・・・！」

計算したタイミングでの回避に、彼女は舌打ちし、終極を睨みつける。

終極は気に留めることなく、姿の見えないテスルシリオンを探す。

「・・・クスクス。そんなところに隠れて何をするの・・・！」

「しまっ・・・！！！」

T e s シャルロッテの脇を通り抜け、干渉能力によって姿を隠していたT e s ルシリオンへと銀の干渉砲撃が迫る。

必殺のための攻撃態勢に入っていたT e s ルシリオンは、防御も回避も出来なかった。

気休め程度の干渉防御は張られていたが、^{テルミナス}終極の干渉砲撃の前には紙も同然のものだった。

「くそ・・・！」

直撃。干渉能力が解け、胸から下が消滅していたT e s ルシリオンの姿が現れ、地面へと落ちた。

明らかに危険な状態。これ程のダメージは、その存在の存続に関わるものだった。

「ルシル！！！」

振り返ったT e s シャルロッテの顔が青褪める。

そのまま終極^{テルミナス}に背を向け、彼に駆け寄ろうとする。

その背後から迫る終極^{テルミナス}。憫笑を浮かべている。

「くっ！ 行かせな ！？」

迫る終極^{テルミナス}に気づき、すれ違いざまに互いが一撃を揮う。

だが、終極^{テルミナス}の方が上だった。T e s シャルロッテの両腕が飛ぶ。

それと同時に胴体部分にもいくつかの切り傷が現れる。ゆっくりと崩れ落ちる。

冷たい地面に倒れ伏し、「やめるおおおお！！！」と叫ぶT e s シャルロッテ。

「^{ヒトとカミ}天秤、^{コウとフコウゼンとアク}天秤、^{テラ}天秤。今なお天秤の狭間で揺れ続けるあなたへの引導、しっかりと受け止めるがいい!!」

ローズピンクの長髪を翻しながら、倒れている^{テルミナス}Tesルシリオンの元にたどり着く終極。

“第四偽典”が振りかぶられる。狙うは唯一原形を留めた^{テル}Tesルシリオンの胸部、心臓付近。

空を切る音と同時に、^{テル}Tesルシリオンの胸部へと振り下ろされた“第四偽典”。

ドオンッ!!という轟音。^{テルミナス}終極は^{テル}Tesルシリオンをこの世界から跡形も無く消滅させた。

「……呆気ない……ものね……」

あれ程恋い焦がれたというのに、今じゃ何も感じないの。こういうことかしら……?」

「ルシ……ル……。テルミナス……。貴様ああああああああッ!!」

^{テルミナス}身体を修復して立ち上がった^{テル}Tesシャルロッテは泣き叫びながら、終極へと特攻する。

手には“^{テルミナス}戒剣・霸統天星”。最強の魔造兵装だ。その力には警戒している終極は、“^{テルミナス}戒剣・霸統天星”にのみ注意を払う。

“第四偽典”を構え、迫りくる^{テル}Tesシャルロッテに干渉攻撃を放とうとしたその時、

「あがつ……!?!?」

途轍もない急な衝撃に襲われ、テルミナス終極の細く華奢な体が反り返る。
自分の身に何が起こったのか解らないからこそその困惑の表情を浮かべている。

そして、今の自身に何が起きたのか解ると、その表情が驚愕に染まった。

「バカな・・・!?!」

彼女の胴体を貫くモノが三つ。一つは“聖典グングニル”。一つは“聖典キルシュブリューテ”。
そしてもう一つ。それこそがテルミナス終極を驚愕させた原因だった。

「桃色・・・第五聖典!?! 何故5th・テストメントがいるの!?!」

胴体の中心を貫くのは桃色のラテン十字”第五聖典“だった。

破壊しようとするが、三つの“聖典”による干涉能力で、さすがのテルミナス終極もその身体の支配権を制限された。

「どう、私の迫真の演技は?」

頬を伝う涙を拭い、勝利を確信したTessシャルロットは微笑を浮かべる。

「確かにルシリオンは斃したはず! なのに、どうして!?!」

何とか顔だけを上げ、Tessシャルロットへと問い質す。

その間にも干涉能力によって、自らを貫く“聖典”を破壊しようとするテルミナス終極。

「テルミナス、お前は偽者創りが得意なのに、真贋を見極める目を持っていない。

さっきまでずっと戦っていたルシルは、マリアの干渉能力で創られた偽者よ。

お前の犯したミス、真贋を見極める目が無かった事。そして、自らの存在の強大さを自認していても、そこに何の対応策を考えていなかった事!!」

^{テルミナス}終極の目が見開く。「ありえない!」と叫び、「聖典」を破壊しようとしてさらに干渉能力を発揮する。

「マリアの、干渉能力におけるの戦闘能力は確かに弱い。でも、だからこそこういう一芸に長ける。

お前はルシルを偽者と気づかず、ひたすら本物だと思い込み戦っていた。

本物のルシルが、お前を斃すためにずっと攻撃の準備を行っていることも知らずに・・・ね!」

Tesシャルロットは、^{テルミナス}終極を抑え込んでいる“聖典”が激しく揺れ動き、破壊されようとしているのを見、“戒剣・覇統天星”でさらに貫こうとしたが、刺さる程度で止まる。

“聖典”でない以上、致命傷は与えられない、斃せない。

精々“聖典”が破壊されるまでの時間稼ぎ程度でしかないが、それで今は十分だった。

「愚かなッ! ここで終極^{わたし}を斃したところで何も変わらない!!」

「それは分からない。この先に人は変わるかもしれない」

「そんな刻は来ない!! あなたも! ルシリオンも!」

きつと真に諦める刻がッ！ 必ず完全なる絶望の刻が来る！！」

テルミナス
終極の干渉能力が外部に漏れ出す。

「Tesシャルロットは「どこまで強いのか」と零し、終極を抑え込むために、“聖典グングニル”と“聖典キルシュブリューテ”を掴んで干渉能力を流し込む。」

「「ぐっ！」」

一柱と一体の顔が苦痛と不快感に歪む。

「ねえ……テルミナス……。私たちはね、お前に……。ひとつだけ……。感謝してる」

途切れ途切れに言葉を紡いでいくTesシャルロット。

「……。感謝……。だと……。？」

「ええ……。それは……。なのはたちと……。出会わせてくれた……。こと……。」。
「どんな理由……。でも……。あの子たち……。と出会え……。た……。」

そこだけは……。感謝……。してる……。」

「……。クス。クスクスクス。とことん……。愚かな……。これだから……。人間から……。守護……。神になった……。者は……。嫌い」

テルミナス
終極が最期に微笑を浮かべる。

ローズピンクの髪で顔が隠れていて見えないが、その表情は安堵だ

その八方から同様の幾何学模様で構成された全長5mはある蒼の大剣が伸びていた。

“孤人戦争形態”。彼の最奥たる術式。

その背の歯車がさらに唸りを上げて回転する。

それと同時に、彼の前面に展開されている巨大なアースガルド魔法陣が輝きを増す。

さらに前面へと展開されていくアースガルド魔法陣。その周囲にも幾何学模様の剣翼が展開。

「ありがとう、シャル。君のおかげで、私たちはテルミナスに勝てる……！」

真技

次元世界において、後にも先にも存在しえない最強の一撃が放たれようとしている。

「アボカリブティック
再」

さらに輝きを増す魔法陣。圧倒的な光量で、位相空間内が光で満ち、視界が蒼に閉ざされる。

「ジエネシス
誕」

一瞬にして光が収束、魔法陣によって構築された光の砲塔から、放たれる最強の一撃。

アボカリブティック・ジエネシス
再誕。

最大禁呪“ラグナロク”の術式を応用した真技。

そこに、“神々の宝庫”、“英知の書庫”に貯蔵されている神器や

術式を合成させる。

そして今回、さらにT e s l シリオンとT e s マリアの干渉能力を付加させる。

T e s マリアは、この真技の準備をするための時間稼ぎ、テルミナス 終極に悟られないように偽者を創りだす事を第一として、そして、その真技に干渉能力をさらに付加させるために、T e s l シリオンに呼ばれた。

制限された界律が呼べないのなら、テストメント 界律の守護神が召喚する。

本来はあり得ず、また為したことすらも無い策。

しかし、相手があの終極だからこそ許されたことだった。テルミナス

光は奔る。位相空間から現実世界へと、テルミナス 終極を討つために。

十 十 十 十 十 十 十

来た。ルシルの真技だ。

あと数秒で、私はこの世界を去る。

シャルちゃん

士郎父さん、桃子母さん、恭也兄さん、美由紀姉さん。
たとえみんなに忘れられていても、私は忘れない。お世話になりました。

シャルロツテ

最初は敵だったけど、最後は仲良くなれた姉妹たち。

ウエンディ、あなたとはゴキネタで、一緒にもっとバカなことを話したかったかな。
チンク、ノーヴェ、セイン、ディード、オットー、ディエチも、元気でね。

シャルロット

シャルロットさん

レヴィ、ルーテシア。

あなたたちならこれからもきつと大丈夫。
ルシルも残ることだし、困った事があつたら頼りなさい。

シャル

シャルちゃん

シャルロットさん

クロノ、エイミー、リンディさん。

三人には本当にお世話になった。

これからも家族みんな仲良く過ごしてほしいな。

シャルさん

スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ。

輝かしい未来の待つあなたたちを、いつでも、いつまでも応援するよ。

だから、これからも自分の信じる道を進んでね。

フライハイト

シャルロット

フライハイトちゃん

シャルさん

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン。

出会いからしているいるあったけど、仲良くなれて良かった。

これからもはやてを支えてあげてね。あの子、なんでも背負おうとするから。

どっかのおバカさんみたいだね。すごく楽しかったよ。

蒼の極光が落ちてくる。

「さよなら、テルミナス」

真技に巻き込まれないために、閃駆を使ってその場から離脱する。もう干渉能力は使い果たしたから、そうする事でしか離れられなかった。

「……クスクス。やっと、やっと眠れるよ……」

背後から聞こえたテルミナスの落ち着いた声。

それが、テルミナスが残した最後の言葉だった。

その次の瞬間、ルシルの真技・再誕アホカリブティック・ジェネシスが落ちた。

あれ程までに手強かったテルミナスが呆気なく一瞬で消滅した。

絶対殲滅対象がナンバー？？終極、消滅

アボリユオン

テルミナス

終わった。これで、あとは私が消えるだけだ。
着弾点から拡がり始める圧倒的、絶対的な力を秘めた蒼の極光。

シャル

シャルちゃん

アリサ、すずか。
きっと私の事を忘れていると思うけど、それでも私は二人を忘れない。
私の大切な親友。二人のこれからの未来、幸せであるように願ってる。
じゃあね。

シャルさん

ヴィヴィオ。

始めは私に怯えていたけど、懐いてくれて嬉しかった。
なのはやフェイト、ルシルとこれからも仲良くね。
まあ、その辺りは全然心配していないけど。
それじゃヴィヴィオ、素敵な女の子になってね。

シャル

アルフ。

アルフにも世話になったね。いろんな意味で。
フェイトとルシルの事はお願いしたし、もういいかな。
でも、この私が頼りにしているんだから、そこところは誇っても

いいんじゃないかな？なんてね。

シャルちゃん

はやて。

すごく頑張り屋な子。それは良いところでもあるけど、無茶はダメだよ？

頼れる家族、友達がいるんだから、一人で背負おうとしないでね。これからもなのは支えてあげて。あの子もまた無茶する子だから。

シャル

フエイト。

フエイトには、ルシルの事をお願いするよ。

この世界に残ることで、ルシルはきっと今まで以上の無茶を平気でするようになるはずだから、そこを適度に止めてあげて。

だからと言って、自分も無茶はしないように。

蒼の極光が背後に迫る。

シャル

ユーノ。

この世界で、二番目に私の友達になってくれた。

そんなあなたといろいろ話が出来て面白かった。

あーそれと、なのはの事は諦めたらダメだよ？

なかなかお似合いなんだしね。なのはは激しく鈍いけど、そこは頑張り次第だよ。

シャルちゃん

なのは。

私の一番の友達、ううん、大親友だね。

思えば全てはあなたとの出会いが始まりだった。

一緒に過ごしてきた、私はすごくすごく楽しくあった。

ヴィヴィオとこれからも仲良くね。無茶だけはしないでね。

困ったときは友達を頼ってね。私は願ってるよ。そんなのはたちの幸せを。

「忘れないって約束してくれて嬉しかった」

楽しかった十年をありがとう。

「みんなの事、絶対に忘れないよ」

友達になってくれてありがとう。

「だから、私は笑って行ける」

素敵な思い出をありがとう。

「大好きだよ、みんな……」

幸せをくれたみんなにありがとう。

「うん。さよならじゃなくて……」

だから、私の一番の想いを告げて、この世界を去るよ。

「ありがとう……」

最高の笑みをつくる。

「 契約執行・・・完了」

テストメント
界律の守護神白き第三の力、剣戟の極致に至りし者

3rd・テストメント・シャルロット・フライハイト

10年という、彼女からしてみれば永遠の中の一瞬の時での契約が
今終わった。

彼女の輪郭が崩れ、その姿が桜キルシュブリューテの花弁の如く舞い散った

新暦76年 4月12日 第28無人世界 PM17:26

彼女は神意の玉座へと帰還した それは可憐な笑みを浮かべたまま
で

十 十 十 十 十 十 十

「・・・ありがとう、シャル」

メンタルリンク
シャルとの契約で生まれた契約証ラインが切れた。
それが示すのは、この世界からシャルがいなくなったということだ。
彼女は還った。神意の玉座へと。

「テルミナスの消滅を確認。お疲れさまでした、ルシリオン様」

「ああ。マリアも。あのテルミナスに勝てたのは君のおかげでもある。

ありがとうございます、感謝している」

「はい　では、私も還りますね」

マリアがそう告げて、その姿が陽炎のように揺れて消えた。

「・・・さあ、あとはフェイトを待とうか」

位相空間から出て、現実世界へと降り立つ。

私の元へと来ていいという合図は、再誕アホカリブティック・ジエネシスの蒼の極光だと教えている。軌道上から見えるはずだから、もう来るだろう。

テルミナスとの戦闘で作られた瓦礫の山に腰かけ、背を預ける。

フェイトから貰った指環を見つめ、私を好きになってくれたフェイトを待つ。

「シャル、君には本当に感謝しているよ。

私はこの世界で生きる。フェイトと、そしてみんなと共に・・・」

フェイトの私の名を呼ぶ声が、遠くの方からこの耳へと届いた。

サヨナラじゃなくてアリガトウとキミは 〈Testament〉 (後書き)

今までありがとう、シャル。

序列二位たる終極テルミナスを撃破です。そして、シャルの帰還。どうでしたでしょうか。

テルミナスが結構簡単に斃されているようですが、これ以上は半端じゃなく長くなります。

彼女は戦闘というより、彼女の背負ったモノを出したかったので、こういう形になりました。

次で一応の最終話となります。

シャルロツテ帰還イメージBGM

Xenosaga ツアラトウストラはかく語りき “Febro

nia #2”

エピソード 〈After Day〉

時空管理局本局 次元航行部第一オフィス

「ん~~~~~はぁ・・・」

「お疲れ様です、フェイトさん」

椅子の背もたれに体重を預けて思いつ切り背筋を伸ばしていると、後ろから劳いの声が出た。

振り返ってみると、そこには仕事用の資料を抱えたシャーリーがいた。

「シャーリーもお疲れ様」

私も同じように返して、椅子から立ち上がる。

今日はこれで終業。寮に帰ったら明日の準備をしないといけない。

「はい。それにしてもフェイトさん、明日からの休暇がすごく楽しみそうですね」

シャーリーの言う通り、私は明日から三日間のお休みを貰っている。エリオとキャラ、そして私の大事な彼も同じ三日間の休暇を貰っている。

久しぶりに四人でどこかに出かけるつもりだ。

「え？ な、なんで・・・？」

「だって、すごく嬉しそうな顔をしていますよ？」

無意識に顔が綻んでいたみたい。これはかなり恥ずかしい。顔をペタペタと触って確認。一度パシッと頬を叩いて、キリッとした表情に戻す。

「あはは。好きな人との休暇なんですから、ニヤけるのも仕方ないですよねえ」

「もう、シャーリー！」

シャーリーが面白そうにそう言って奥に引っ込んでいった。

でも、その通りだ。最近あまり休暇が揃わなくて、どこにも遊びに行けなかった。

一応同じ本局内にいるけど、私は執務官だから、やっぱり会う時間が少ないというのはある。

「この時間なら、会えるかな・・・？」

オフィスから出て、彼に会いに行く。向かう場所は特別保護施設。

「っとその前に・・・」

お手洗いの鏡で、いろいろとチェック。

髪は？ 手櫛で少し直す。OK。制服は？ OK。表情は？ ニコッと笑みを浮かべる。OK。

ちよっと会いに行くだけでこれだ。でも仕方ない。気になるんだから。

「よし」

再び特別保護施設を目指して歩き出す。

施設に着くまでの間に、これまでの事を思い出す。

テルミナスとの戦いからもう4年と少し。

シャルがいなくなつてからも同様に4年。

そう、もう4年になる。

機動六課も、あの戦いのあとにすぐに解散して、隊員たちはそれぞれの職場で働いている。

あの戦いの後、目を覚ました六課隊員たちの記憶の中から、操られたはやてが口にしたルシルとシャルの殺害命令の記憶が消えていた。当然テルミナスの事も綺麗さっぱり。

それに関しては良い事だと思う。あんな嫌な記憶は無い方が良い。それと、シャルの事に関して忘れてしまっていたのは地球の人たちだけだった。

アリサも、すずかも、エイミイも、なのはの家族も、みんなシャルの事を忘れていた。

なのはは泣いてた。私だって泣いた。それでアリサたちをすごく困らせた。

だって、シャルは確かにいたんだ。私たちと一緒にの時間の中に。

結局アリサたちは、ハッキリとシャルの事を思い出す事は無かった。だけど、僅かにシャルと過ごした記憶が残っている事に、今度は嬉し泣きした。

彼は言った。「これも界律が残したちよつとした奇跡かもな」って。普通なら僅かでも残ることは無いらしい。

けど、アリサたちの記憶には僅かだけど、でも確かにシャルがいた。

「フェイト、そんな嬉しそうな顔で誰に逢いに行くのかしら？」

「あ、母さん、じゃなかった。リンディ統括官」

横のドアが開いて、そこから出てきたのは私の母さんだった。て言うか、またそんな顔してたの私……？

「うふふ。そんな嬉しそうな顔ということは、これから彼に逢いに行くのね」

「若いつていいわねえ」って言いながら、母さんが微笑んだ。

「あ、そうそう。ねえ、フェイト？ いつになったら彼と結婚するの？」

「なっ！ な、なななな何を！ け、けけけ結婚！？」

「そ、そんな！ えつと、その……ま、まだ早いつて言うか……！」

「つて、その前にこんな人のいる場所でそんな話をしないでください！！！」

いきなり何を言い出すんだこの人は！？

今私たちのいる廊下には局員が何人もいる。

その視線が私と母さんに集中する。一気に顔が熱くなる。

今の私の顔はとんでもなく赤くなっているに違いない。

ついでに頭から湯気も出てる可能性がある。

「早いつて……。あなたと彼がお付き合いしているのは周知の事なんだし、それにあなたたちは強い想いで結ばれているんだから、

そういう事もそろそろ考えていかないか」と

「あーもう、分かりましたから、そういう話は家でお願ひします！」
半ば逃げるようにして母さんを置いてその場を後にする。

あれ以上は耐えられない。恥ずかしさの所為で、気を失いそうだった。

振り返ってみれば母さんは声を出して笑ってた。むうく……！
少し走って、少し乱れた息を整える。

「……結婚、か……」

別にそれが嫌なわけじゃない。というより、私が昔から望んだ事。彼と一緒に生きる。でも、何て言うか、その……ね。うん、早いんだ。そういうことだ。

「結婚がどうしたのかな？」

「ひゃう!？」

いきなり耳元で囁かれて心臓が跳ねる。

振り返ってみると、そこにいたのは、

「フェ・イ・ト・ちゃん」

「もう、ビックリしたよ、なのは」

私の親友の一人、なのはだった。

六課解散後は、昇進の提案があったのに辞退して、今でも戦技教導官として教導隊に残った。

なのはらしいといつかなんとというか……。
そんななのは右手の中指、そこにシャルのデバイス“トロイメラ
イ”の指環が輝いている。
シャルが還ってからずっと大切にしている物だ。
なのはがその“指環”^{トロイメライ}を外す事はあまりない。それほどまでに大切
な宝物。

「フェイトママ」

「ヴィヴィオも一緒だったんだ」

「うん」

なのはの隣にはヴィヴィオもいた。
たぶん無限書庫からの帰りなんだと思う。
ヴィヴィオは無限書庫の司書の資格を取得するほどの本好き。
そこところは彼に影響されたに違いない。

「あはは、ごめんごめん。これから寮に戻るの？」

「うん。その前に……」

特別保護施設に続く廊下の先を見つめる。
すると、なのははニヤニヤしながら、

「ああ、二人の邪魔したら悪いね。それじゃまたね、フェイトちゃん
それじゃあヴィヴィオ、フェイトママたちの邪魔したら悪いから行
こっか」

「うん。バイバイ、フェイトママ！」

「な、なのは！？ ヴィヴィオ！？」

そう私をからかうように言って、手を振りながら歩き去っていった。最近なのはも、はやてたちもこうして私と彼のことだからかってる。

私の反応を見て面白がってるようなんだけど、それが悔しくて反応しないように頑張ってる。

頑張ってるんだけど、これだけはどうにもならなかった。

だからいつか、いつかなのはたちが誰かとお付き合いするようになったら、全力でからかうつもりだ。

そんな私の密かな野望だったりする。

また歩き出す。彼のいるところへ向かって。

それから少し歩いて、辿りついた特別保護施設。

希少能力や特別な魔力を持って、そのせいで事件に巻き込まれた子供達を保護する施設。

彼はここにいます。

特別保護施設の職員を見かけ、彼がどこにいるのか訊いてみようと声をかける。

「すみません」

「ん？ ああ、フェイト執務官。お疲れ様です。

施設長なら、いつものところにいるはずですよ」

さすがに常連になってしまった事で、私が何を訊いてくるのか分かっているようだった。

これはこれで結構恥ずかしい。俗に言うバカップルとかそういう感

じだったりするのかな？

お礼を言いながら、この施設で最も静かで休める広場へと向かう。本局内なんて思えないほどの自然がある広場。その中にある木々のある場所。

六課でもそうだった、彼がいつもそこで読書する安らかな場所。

ここに保護されている子供たちといつもとどおりに挨拶しながら、その場所へと歩く。

いつしか私にも心を開いて、仲良くなった子供たちだ。

中には私や執務官になったティアナが保護した子もいる。

「お兄ちゃん、今寝てるよ？」

「そうなの？　ありがとう、リエッセ」

そう教えてくれたのは、ここ最近保護された女の子リエッセ。

最初は誰とも話さないし、ずっと怯えたままの子だったけど、彼と接するうちに変わった。

そこが彼のすごいところだと思う。心を閉ざした子供とすぐに仲良くなる。

だからこそ彼はこの特別保護施設の施設長にたった1年でなることができた。

「絵本読んでもらっていたら、寝ちゃったの」

「僕、これも読んでほしかったな」

「お兄ちゃんも大変なんだから、少しは我慢しなさい」

と、子供たちが少し残念そうに口にする。
彼は子供たちに本当に好かれている。

彼は六課解散後に、再び管理局に勤める事になった。

最初はまた武装隊だとか教導隊、スバルのように救助隊、果てには執務官はどうかとか話が来ていた。

けど彼はそのどれも断った。彼には、それを成せるだけの力が無かったから。

私との対人契約。それで彼は一度全てを失った。

魔術は使えなくなった。魔力量もDランク相当にまで減った。

それに空も飛べなくなった。彼が最も得意とする空戦も出来ない。残る為にはいえ、それは残酷なことだった。そう思った。

だけど、「また強くなればいい。そうしたらまた君を護れる」と言つて、彼は微笑んだ。

すごく嬉しかった。強いと思った。この人を好きになって良かったって思った。

で、彼は今ではもうSSランク。卑怯だ。反則だ。ズルすぎる。なんなのそれ!?

きつと複雑な隠しコマンドを使って裏技を発動したに違いない(意味不明)

彼が強くなるまでは私が彼を護るつもりだったのに、たった2年で私を抜いた。

ルシルのSSランクへの昇級を知ったあの時の私のへこみっぷりは凄まじかった。

ふんっ、別に泣いてなんかいないもん!

ようやく着いたそこに、彼はいた。

「ルシル」

木にもたれかかって眠っている彼、私の大切な人ルシル。
ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。
その名でルシルはこの世界に残された。

ルシルの両脇には子供が二人いて、ルシルにもたれかかって眠っていた。

三人の傍には読みかけの絵本が何冊か置かれている。
とても微笑ましい光景だった。邪魔はしたくない。
けど、ルシルも終業だし、起こさないといけない。

起こそうと思って顔を近づける。

「っ！」

ふと、ルシルの形のいい綺麗な唇に目がいった、いってしまった。
一気に顔が熱くなる。対人契約の事を思い出したからだ。
そっと自分の唇を指先でなぞる。

(私の・・・ファーストキス・・・っ！！)

あーーーーーダメだーーーーー！ 一度思い出したらもう
止まらない！

恥ずかしい！ 告白したとき以上に恥ずかしい！
仕方ない事、必要な事だと言っても恥ずかしすぎるーーーーー！！

「フェイトお姉ちゃん・・・？」

「どうしたの、フェイトお姉ちゃん？」

「ダメよ、邪魔しちゃ。今はそつとおこっね」

なんか後ろの方からありがたくない気遣いの言葉が聞こえてきた。それから、子供たちが何か言いながらこの場から去っていった。うう、ごめんなさい、変な気を遣わせて……。嬉しいような悲しいようなだけど。

「ルシル。起きて、ルシル」

何とか冷静を取り戻してから、ルシルに声をかける。

ルシルの両脇に眠る子供たちを起こさないように、でもルシルが起きるように。

む、難しい。どうやっても子供たちが起きてしまうことになりそうだ。

変に意識を集中させてルシルを起こそうと格闘すること数分、やっとルシルの目が開いた。

子供たちは……。起きてない。やった！ 妙な達成感が沸き上がってくる。

小さく万歳しながら、ルシルが完全に覚醒するのを待つ。

「ん……。フエイト……。？」

「……。っ！？ あ、しまった！ つい眠ってしまった」

「しいー。静かにしないと子供たちが起きちゃうよ」

ルシルがいきなり大声を出そうとするのを止める。

ルシルは両脇に眠る子供たちを認めて、一度深呼吸。それから落ち込み始めた。

「……うわぁ、やってしまった。他の子供たちはどうしてる？」

「え？ うん、向こうにいるよ」

指差す方には、さつき私たちから離れていった子供たちがいる。

この施設の職員たちと一緒に、それぞれの部屋に戻されるところだ。

「はぁ。あの子たちには悪い事をしたな。今度なんでも言う事を聞いてあげようか」

そう言つて、子供の一人を起こさないように抱きかかえた。

私もそれに倣つてもう一人の子供を抱え上げる。

軽い。でも温かい。人の温もりだ。

抱えた子供たちを職員に預けて、私とルシルは施設を後にした。

それから夕食を済ませるために本局内にあるレストラン街に行つて、明日からの休暇について話し合う。

どこに行こうか。お弁当にするか、その場で買って食べるか。

すごく楽しい時間だ。ルシルの仕草一つ一つにドキドキする。

「まあ、大体こんなところだろう。あとでエリオとキャロにも連絡しておかないとな」

「あ、それは私がしておくよ」

ある程度休暇をどう過ごすかの日程を決めて、レストランを後にする。

向かうは私とルシルの住まう寮。明日に備えてもう休むためだ。

寮に向かう途中、私はずっとルシルの手を握つてた。

向けられる視線。やっぱり恥ずかしいけど、でも握っていたかった。

見ればルシルの顔も若干赤い。

あはは、ルシルも照れてる。なんかそれが嬉しかったりする。ルシルってばいつも余裕の表情だから、少しつまらなかつたから。

分かれ道。男性寮へと続く道と女性寮へと続く道。

「じゃあルシル。また明日」

「ああ。フェイト、明日からのちよつとした旅行楽しみにしている」

「うん、私も！」

名残惜しいけど手を離す。

でもどつちも寮に帰ろうとしない。

「ルシル？」

「フェイト？」

お互いの名前を呼ぶ声が重なる。

それに続いた「どうかした？」というのも同時、全く同じタイミング。

そして、そつちが先に話してもいい、という譲り合いが始まる。

よくテレビとかで観るあの光景だ。それが可笑しくて二人で笑った。それで結局ルシルが先に話す事になった。

「彼女を見送るのが男というものだ。だから先にフェイトが帰るのを見送る」

そう言つて恥ずかしそうにルシルが微笑んだ。

「私はルシルを見送ろうとしてた」

私もルシルと同じような事を考えてた。

また二人して笑つ。少しの間笑つた後、

「じゃあ私が先に行くね」

だったら私はルシルの言う通りにしようと思つ。そんな事を言われたらしょうがない。

「そうしてもらえると助かる」

「ん。おやすみ、ルシル」

「ああ、お休み、フエイト」

ルシルに背を向けて自室に向かつて歩き出す。

何度も振り返つて、ルシルが小さく手を振っているのを見た。

その度に私も手を振る。もう周りの視線なんか気にならない。

それほどまでに今の私たちは、というより私は幸せだったから。

ねえ、ルシル。今度こそ私がルシルを幸せにしてあげる。

だから、ルシルも私の事を幸せにしてください。

シャル、私たち幸せになるよ。約束したからね。

きつと幸せになるつて。だからシャル、よかつたら私たちを見守つてね。

あの角を曲がれば完全にルシルの視界から私は消える。
だからこそその前に、最後にルシルに振り返った。

「ルシルーーーーー!!!!」

その大声に、ルシルがビクツと驚いた。
そんな表情も好きだなあ、なんて。

「大好きいいーーーーー!!!!」

私の想いを大きく告げた。
するとルシルは真っ赤になってオロオロし始め、そして、

「私も、私もフェイトの事が好きだ」

小さく聞こえた。でも、

「聞こえなーーーーーい!!!!」

そう言つてちよつと意地悪する。

ルシルは「何だ、この罰ゲームは」と口にした。
罰ゲーム何て酷い。だからさっきの私みたいに言わないと許してあげない。

ルシルから返ってくるのを待っていると、ルシルは大きいため息をついて、深呼吸をした。
そして、

「私もフェイトの事が好きだ!!!」

ルシルが叫んだ。今度は私が真っ赤にある番。

ルシルの想い。私の幸せ。嬉しさで涙が溢れてくる。

「また明日ね、ルシル!!」

大きくルシルに手を振って、私は自室に走りだす。

最後にチラッと見えたルシルの顔は、真っ赤になりつつもすごく幸せそうだった。

女性職員からは羨望の眼差しが私へと突き刺さる。ルシルを狙ってた女性職員も少なからずいたから。

でもあなたたちじゃダメ。ルシルは私とだからこそ幸せになる。それは過大評価と思われるかもしれないけど、ルシルに対する想いの強さは、それだけは絶対に誰にも負けていない自信がある。

「早く明日にならないかな」

想いを馳せて私は自室の扉を開けた。

1日の終わりと始まりが訪れるその扉を。

F
i
n

L
a
s
t

E
p
i
s
o
d
e
:
A
R
I
G
A
T
O

という二度と叶う事のない幸せな夢を見た。

窓から光が差し込んでくる。その眩しさに、眠りから覚めていく。目を開けると、寝室は朝日で随分と明るくなっていた。時計を見ると日が高くなっている時間、朝の12時ちょっと過ぎ。

朝日なんていう時間はとっくに越えてた。

「うわっ、寝過ぎした!」

被っていたシーツを急いで剥ぎとって、すぐに着替える。

寝ぐせの付いた髪をブラシで梳かして、外に出ても恥ずかしくないようにする。

そして、

「ごめんね。遅くなったけど、おはよう、ルシル、シャル」

写真立てに納められているルシルとシャルの映った写真に朝の挨拶をする。

それが今では朝の習慣になっている。もうこの世界のどこにもいない親友に挨拶することが。

それからルシルから貰った指環を左の小指にはめる。

この指輪は仕事中でもずっとしている。外す時なんてそうない。いつでもあなたと一緒にだということを感じていたから、ルシル。そっと指環にキスして、寝室を後にする。

「おはよう、なのは!」

キッチンで昼食の準備をしているなのはがいた。

ここはなのはの家。今はなのはとヴィヴィオの二人暮らし。

私は時々休みが入ると、こうしてお泊りに来ている。

今日もいつもどおりにお泊りに来た。

「おはよう、フェイトちゃん。でも、もうおはようって言う時間でもないよ?」

「あう、「めん。少し夢を見てて」

朝寝坊しちゃった私を可笑しそうに笑っているなのはにそう言い訳した。

「夢？」

「うん。とても幸せな夢、ルシルが残った時の夢」

なのはの質問にそう返すと、なのはは少し困った顔になって、でも、

「そっか」

とだけ笑みを零しながらそう言った。私も「うん」とだけ返した。

「フェイトちゃん、お昼どうする？ 起きたばっかだけど・・・？」

「あ、うん。食べるよ」

何故かすごくお腹が空いている。

寝起きだというのに今なら何でも食べれそうだ。

十 十 十 十 十 十 十

私がつったお昼ご飯を、フェイトちゃんと一緒に食べる。

テルミナスとの戦いが終わってからもう4年になる。

それは、シャルちゃんとルシル君が消えてからも4年ということだ。

「やっぱりなのは料理はおいしいね」

「ありがとう」

今のフェイトちゃんはすごく元気だ。

あのおとき、ルシル君からの合図でもあった蒼の極光というもの。

それが見えているとき、私たちは無人世界の軌道上にたどり着いていなかった。

どういうわけか解らないけど、第28無人世界へと艦が向かえなかった。

後でレヴィヤタンちゃんに訊いてみたところ、それは界律が何らかの理由で拒んでいたんじゃないかって事だった。

ルシル君はまた界律によって裏切られた。シャルちゃんの想いもまた同様に。

私たちは軌道上で待った。ルシル君の言った蒼の極光が生まれるのを。

でも、どれだけ待っても蒼の極光が生まれる事は無かった。

その時にはすでに全てが終わった後だった。

シャルちゃんも消えて、フェイトちゃんが来るのを待っていたルシル君も消えた。

時間切れ。シャルちゃんの言った事だ。契約終了後、テストメンは自分の意思でいつまでも残れない。

だから対人契約をするならすぐじゃないといけないって。

フェイトちゃんはずっと泣いていた。ルシル君を幸せにすると約束しておいて、守れなかったって。

それからしばらくフェイトちゃんは塞ぎこんでいた。ご飯も食べないで、ただずっとルシル君の写真や映像を観て、ずっと……。

そこにフェイトちゃんに渡された手紙。

それは第28無人世界で見つけたものだった。

ルシル君が最期に残したモノ。

私を好きになってくれてありがとう。

だから大丈夫。私はこれから頑張っていける。ありがとう、フェイト。

だから、フェイトも新しい幸せを見つけられるように、祈

りで途切れていた。

最後まで書く事が出来ずにルシル君はこの世界を去ったんだろう。それを読んでフェイトちゃんはすごく泣いた。

それから、フェイトちゃんは少しずつ元気になった。

今ではルシル君の事を笑って話すことが出来るようにまで。

ルシルに恥ずかしい格好をいつまでも見せていられないって言うて。

ルシル君。フェイトちゃんは、あれから誰ともお付き合いしようとしていません。

やっぱりどうしてもルシル君への想いが無くならないから。

ねえルシル君、私はどうすればいいのかな……？

「ただいまー！！」

ヴィヴィオが学校から帰ってきた。

ドタドタと勢いよくここダイニングルームまで走ってきた。

「ただいま！ あ、フェイトママ、おはよう！」

「おかえり、ヴィヴィオ」

「お、おかえり、ヴィヴィオ。朝はごめんね」

「うん ただいま、ルシルパパ、シャルさん」

ヴィヴィオは、私たちの集合写真に映るシャルちゃんとルシル君に向かつて挨拶する。

シャルちゃん、ヴィヴィオは元気に、そして優しい子になったよ。

「ヴィヴィオもお昼ごはん食べるよね？」

「食べるー」

シャルちゃん、ルシル君。

二人が護ってくれたこの世界で、私たちは今を生きています。

大変な事もあるし、辛い事もあるかもしれないけど、それでもきつと幸せな日々が訪れると信じて。

「それじゃあ先に手を洗っておいで」

「はあーい！」

だから、よかつたらこれからも見守っててください。

私たちの大親友。シャルちゃん、ルシル君。

魔法少女リリカルなのは 十字架を背負いし神意の執行者
F i n

T O B e C o n t i n u e d ? E x t r a E p i s o d e

Y E S ? N O ?

エピローグ（After Day）（後書き）

どうも、Last testamentです。

十字架を背負いし神意の執行者、今までご愛読ありがとうございました。

こういう結果となり申し訳ありません。シャルが去り、ルシルもまた消えました。

この小説は、このラストエピソードのエンディングを決めてから始めました。

こうなることを頭の片隅において、執筆、更新してきました。

かなり批判的な評価が来そうですが、このエンディングだけは変えたくなかつたんです。

えーそれでは、このエピソード第1話のあとがきに書いたように、この小説にはあと一章残っています。

それを始めるか、ここで完結するかは、読者のみなさんに任せようかと思えます。

続行を希望の方、よろしければどうか感想のところにYESと書いて送ってください。

ユーザーの方でなくても送れるようになっていきます。感想を書かなくとも、それだけでもかまいませんよ。

そしてもう終わりで良いと思うという方、NOと書いて送ってもらってもかまいません。

しっかりと受け止めますので。みなさんの本当のお気持ちをお聞かせください。

では、これより1週間（明日より休暇無し期間なので）（泣）ちょうどいい）受け付けます。

続行の場合、完結の場合、どちらとしてもお知らせとして更新する
予定です。

それではLast testamentでした。今までありがとう
ございました！！

シャルシルの魔術式一覧

このページでは十字架を^くで使われたシャルの魔術と魔法を紹介しよう。

最初は、シャルを剣神と言わしめる事になった最大の要因

牢刃・弧舞八閃

シャルの誇る二つの真技の内の一つだ。

居合い抜きによって加速された斬撃を四太刀同時に放ち、さらに魔力で構成された刃をさらに同時に四太刀放つ、計八太刀同時斬撃の剣技。

使っている得物が、下回る神秘であれば存在の強弱に関係なく切断できる能力を持つキルシュブリューテということもあり、高位神器による防御以外は全て無効とする。

もちろん放たれる四つの魔力刃にもその効果が現れている。

で、私の左腕を落としたのがこの術式だ」

シャル「根に持つてるのね、何度も言うくらいだから」

ルシル「そんな事はない。戦時中だったから、仕方ない事だ。

それにちゃんとくっ付いたし、のちに君を倒す事も出来た。それで借りは返したと持っている。

次は、もう一つの真技だな。

飛刃・翔舞十閃^{じっせん}

“キルシュブリューテ”の能力を完全解放することで使用可となる

対人・対軍真技。

絶対切断の概念を持った神秘の刃を対象に向けて十閃放つ術式。牢刃・弧舞八閃に比べれば回避しやすいが、威力としてはこちらが格段に上。

放たれた刃が対象にヒットすると、広範囲に絶対切断の刃が拡散し、全てを斬り裂き吹き飛ばす。

拡散しないようにも出来るため、密集地でも撃てる」

シャル「でも怖いから味方の多い場所じゃ使わなかったなあ」

ルシル「その所為で使用頻度が少なかったな。こっちとしては助かったが。」

で、次は、属性複数同時使用の対人攻撃術式の双牙系の紹介だ。

双牙氷闇刃

術式名の通り、冰雪系と闇黒系の魔力による二連撃だ。

魔法として使用した場合、トロイメライのツヴィリンゲフォルムによる二刀流斬撃となる。

トロイメライの術式発言は、ゲフリーレン・ウント・フィンダーニス、となっている。

言語はドイツ語だ。ゲフリーレンは氷結。ウントは英語でいう an d だな。フィンダーニスは闇、となる」

シャル「退屈してきたから私もやる

次も同じ双牙。

双牙氷雷刃

トロイメライ発言は、ゲフリーレン・ウント・ブリッツ

ゲフリーレンとウントは で出たから省くよ？

ブリッツは雷光ってという意味。氷雪と雷撃の二連撃」

ルシル「この双牙という術式は結構厄介だ。

一撃目の属性の抗属性防御を行った直後、別の属性で二撃目が来るからな。

下手に属性防御を行うと足元をすくわれることになる。

双牙炎雷刃

トロイメライ発言は、フランメ・ウント・ブリッツ

フランメは炎。炎熱で対象を焼き、雷撃でまた焼くという。拷問だな」

シャル「拷問って言い過ぎだよ……。

んで次は、属性を同時に扱う術式“双牙”の奥義の一つ。

滅牙翔破六天刃

無属性と土石系を除く属性六閃を対象に放つ中距離攻撃術式ね。

属性同時使用の対人攻撃術式なんだけど、あんま使わなかったなあ」

ルシル「避けやすかったしな。しかし複数の属性斬撃というのはやはり脅威だ。

しかも中距離。今から紹介する術式とのコンボは、同盟軍魔術師に多くの被害者が出た。

滅牙暴破螺旋刃

属性を同時に扱う術式“双牙”の奥義の一つ。
無属性と土石系を除く属性魔力を纏う直接斬撃、牙月閃刃の十四連撃を叩きこみ、動けなくなったところを風牙烈風刃で対象を吹き飛ばし、体勢を直される前に高ランク術式に繋げトドメ、という血も涙もない連撃術式だ」

シャル「ちよつとルシル、人を冷徹女みたいに言わないですよ。でもすごいでしょ、結構。0、0何秒の間に属性を次々と変更するんだよ？」

ルシル「生憎と私も出来る事だからそう驚く事じゃない。
トップクラスの複数属性持ちの魔術師なら鍛錬を積みれば誰にでも出来るしな」

シャル「むう~~~~」

ルシル「頬を膨らませて睨んでも可愛いとは思わないぞ、シャル。
次は、結構珍しいトラップ型の術式だ。

トーベン・ヴァート 圧縮爆弾

不可視の風を圧縮した設置型爆弾だな。

トーベン・ヴァートと名付けられていて、トーベンは荒れ狂う、猛威をふるう。ヴァートは激しい怒り、猛威という意味だ」

シャル「は、ルシル達アンスール用に組んだんだよ、わざわざ。
まあ結果は散々だったけど、一般兵（SSSランク）クラスの魔術師なら余裕で落とせたよ」

ルシル「そうだったな。被害者続出でステアがイラついていたぞ。

それでしわが増えるなって話をしていたら、焼き殺されかけた。あれは怖かったな」

シャル「それはルシル達が悪いよ。さて、次は炎熱系術式の紹介だよ。

炎牙月閃刃

炎熱系対人攻性術式。炎熱系魔力を纏った刀身による直接斬撃ね。

トロイメライ発言は、フランメ・モントズイツヒエル。

炎の三日月って意味になるよ。刀身と攻撃時の残影を三日月に喩えた結果だね」

ルシル「次は、真紅の炎を纏った刀身から放たれる爆発力の高い炎刃による一閃。

炎牙崩爆刃

トロイメライ発言は、フェアブレンネン。意味は焼却する、だ」

シャル「は、対冰雪系魔術の術式。爆発によって生まれた爆炎で凍結された物質を融かしたり、ね」

ルシル「次は、炎の槍を飛ばす対人攻性術式。

炎牙煉衝刃

直線軌道だから避けやすいと言っても、油断すると痛い目に遭う。

回避に成功し後方に過ぎた瞬間、炎槍が爆発を起こして、背後からダメージを被る事になる。

トロイメライ発言は、シュプレングェン・ランツェ。爆破する槍となる」

シャル「そんじゃ次は私がやるよ？」

対象を炎の球体に閉じ込めて、炎の斬撃・崩爆刃で炎球を斬り裂いて大爆発を起こさせる術式。

炎牙焰牢刃

炎熱系対人攻性術式で、私の炎熱系固有魔術じゃ最強の威力を誇る術式なんだ」

ルシル「その割に使う頻度が少ないよな。1setで一回だけだぞ、確か」

シャル「そうだったっけ？ まあ連発するような術式じゃないしね。さてと、次は冰雪系の術式ね。まずは冰雪系魔力の纏った刀身による直接斬撃。

氷牙月閃刃

トロイメライ発言は、シュネー・モントズィツヒエル。

シュネーは雪ってという意味で、モントズィツヒエルはさつき出たように三日月、ね」

ルシル「牙月閃刃は基本として、モントズィツヒエル、だな。次は氷で出来た羽根をいくつか飛ばす術式。

氷牙凍羽刃

トロイメライ発言は、アイス・ツアプフェン・フリーユゲル。アイス・ツアプフェンはつらら。フリーユゲルは羽根、という意味だ」

シャル「こうして見ると、氷雪系って全然使っていないなあ、私。まあヨツンヘイムの所為であんまり好きじゃないからね、氷雪系って」

ルシル「みたいだな。しかし炎熱と閃光は結構使っているぞ。というわけで、次は閃光系の術式だ。」

閃光系魔力を纏った刀身による直接斬撃。

光牙月閃刃

トロイメライ発言は、シャイン・モーントズイツヒエル。

シャインは英語と同じ、光、という意味だ。そして三日月となる「

シャル「次は、閃光系の魔力波を周囲に放つ術式。」

光牙聖覇刃

トロイメライ発言は、フンケルン・フルートヴェレ。

フンケルンはきらきら輝くってという意味で、フルートヴェレは津波ってという意味」

ルシル「のような魔力波攻撃は範囲が広いため、細心の注意が必要のようだ。」

そして次は、閃光系の魔力槍を放つ術式で、シャルの魔術の中でも最速となる術式だ。」

光牙閃衝刃

トロイメライ発言は、シュトラール・ランツェ。
シュトラールは光線。ランツェは槍という意味だな」

シャル「次は、巨大な十字架型の斬撃を放つ術式。

光牙十紋刃

トロイメライ発言は、タオフェ・クロイツ。

タオフェは洗礼。クロイツは十字架ってという意味」

ルシル「次は闇黒系だな。最初は、闇黒系魔力を纏った刀身による直接斬撃。

凶牙月影刃

トロイメライ発言は、フィンダーニス・モントズィツヒエル。
コイツだけは月“閃”刃ではなく月“影”刃となる。小さな違いだが、他の属性と違うという意味をしっかりと表している」

シャル「ま、閃でも影でもやる事は変わりないんだけどねえ」。

次は、闇黒系魔力の波を周囲に放つ術式。

凶牙波瀑刃

トロイメライ発言は、シュヴァルツ・シュトローム。

シュヴァルツは黒。シュトロームは大河、流れって意味だよ」

ルシル「を含めた闇黒系術式は、夜間戦闘で使用されると高確率

でもともに受ける。

イヴ義姉様も言っていたが、騎士のクセして性質が悪い」

シャル「そんな事言われてたの！？ ていうかルシルもそう思ってたわけ！？」

ルシル「冗談1割、本気9割だ。気にするな」

シャル「それを人は本気と言う！

私より第十騎士ナハトとか、アンスールのフォルテシアに言ってよ！
アイツらの方がよっぽど性質が悪いよ！」

ルシル「すまん、落ち着けシャル。キルシュブリューテを完全解放して切っ先を私に向けるな。

後が支えているからさくさく進めるぞ。いいな？

次は、闇黒系魔力で発生させる大きな七つの影の刃を螺旋状に放つ
闇黒系最強術式。

凶牙奈落刃

トロイメライ発言は、シャッテン・ヘレ。

シャッテンは影。ヘレは地獄を意味する」

シャル「しくしく（泣）。 は切断力を高めた影剣で、対障壁の術式として使ってた。

闇黒系で影だから、閃光系に対してはすごく弱いつて欠点もあったんだよ」

ルシル「嗚咽も漏らさずキツチリ説明って器用だな・・・。

まあ何はともあれ、次は雷撃系だな。最初は、雷撃系魔力の纏った

刀身による直接斬撃。

雷牙月閃刃

トロイメライ発言は、ドンナー・モントズィツヒエル。
ドンナーは雷、雷鳴。そして三日月だ」

シャル「あースッキリした。次は、真紅の雷槍を放つ

雷牙閃衝刃

ブリッツは稲妻、雷光。ランツェは槍。光牙閃衝刃に次ぐ速さを持つ一撃なんだよ。

続けて、雷牙月閃刃強化版なんだけど、その割に使い勝手の良い術式。

雷牙神葬刃

トロイメライ発言は、ブリッツ・エアモルドウング。

ブリッツはさつき出てたように雷光。エアモルドウングは、ちょっと魔法にしては物騒になるけど殺害っていう意味」

ルシル「シャルの思考そのものが物騒だから気にするな」

シャル「どういう意味よ!？」

ルシル「気にするな。ほら、次いくぞ。

雷牙翔裂刃

はハコにわ生徒会プロローグで登場した攻性術式だ。

雷撃系で、獣の爪のような斬撃を四つ飛ばすというものだ。私のウリエルのひとつに似ているな。

ルビのガールベル・ベファレン。ガールベルは熊手、フオークという意味で、ベファレンは襲う（恐怖や災害など）という意味となっている」

シャル「むう〜後でちゃんと聞くからね」

ルシル「はいはい。えー次は、風嵐系だな。

風の壁を対象に叩きつけ吹き飛ばす術式。

風牙烈風刃

トロイメライ発言は、ヴィント・シュトウース。

ヴィント・シュトウースは突風という意味のドイツ語だ。^{ベルガ}

風の壁とは言え、直撃すると相当のダメージを受ける」

シャル「くう、なんか流された・・・。

でも は確かに応用がいくらでも利くね。風圧を弱めて対象をそつと退かしたり、強めてペチャッと圧殺・圧壊する事も出来るし」

ルシル「なにグロい事を笑顔で言っている」

シャル「あなたの妹シエルの魔術に比べれば遥かにマシだっというの。

え〜と、次は真空の刃を放つ風嵐系対人攻性術式。

風牙真空刃

トロイメライ発言は、レーレ。
レーレは真空っていう意味。カマイタチのようなものね。
まあ切断力はそんな自然現象以上だけど」

ルシル「フツ。イヴ義姉様を前に、君の風嵐系術式は全てキャンセルされたそうじゃないか」

シャル「あんな反則風嵐系魔術師を前にすれば、どんな風嵐系魔術師も無力化されるって。

他の属性や真技を使っても、風迅王に一太刀入れられなかったんだよ、私。

さすが陸戦最速の魔術師ってね。だからうちの第一騎士オペルも負けたんだし。

んじゃ次。烈風刃と真空刃を同時に放つ一撃。風の壁に真空の刃を複数巻き込んだ合成術式。

風牙真空烈風刃

トロイメライ発言は、エヒト・オルカーン。

私の固有魔術、風嵐系最強の術式。

エヒトは真の、本当の。オルカーンはハリケーン、大暴風っていう意味」

ルシル「は連発できるから恐ろしい。基本、シャルの魔術はどれもそうだ。

ノータイムで高威力の一撃を連発してくる。一番恐ろしいのは牢刃・弧舞八閃の連発。

……そう思うと、一番の反則は君じゃないのか、シャル」

シャル「アンスールメンバーに比べたら私なんて並じゃん。

魔術キャンセル結界を張るアリス。世界間距離無視の砲撃を連射、大陸を消滅させる砲撃を撃つカノンとか。挙げたらキリがないって。はあ、よくこんなのと戦ったなあ、ヨツンヘイム連合……」

ルシル「同盟・連合どちらも化け物ぞろいだっただな。さて次は防性術式だな。まずは対魔力障壁。形状は様々だが、大半は円形だ。

我が心は拒絶する（ゼーリツシュ・ヴィーター・シュタント）

ゼーリツシュは心の、精神の、魂の、という意味だ。

ヴィーター・シュタントは抵抗、反抗の意味で、実は拒絶じゃないんだな。

ちなみに拒絶はヴァイゲルングと言う」

シャル「次は対物障壁ね。四重の六角形で構成された真紅の盾。

ハルトリーゲル・シルト

ハルトリーゲルは花水木のドイツ語読みで、堅固は花言葉のひとつ。シルトは盾という意味。堅固なる盾ってこと」

ルシル「次は、シャルの保有する固有魔術・防性術式の最高の盾。

真楯（ハイリヒ・フライハイト）

フライハイト家の紋章で構成された盾だ。

かなりの防御力を有し、かつての決戦で凶竜の穢牙コード・ニースホックを防がれた。

ちなみに、ハイリヒは聖なる、フライハイトは自由という意味だ」シャル「あれは死ぬかと思った。轟音もそうだし、肌に感じる神秘が凄まじ過ぎ。もう二度とごめんだよ。さて、次は魔法だね。私の魔法第一弾。固有魔術にはなかった射撃というのに憧れて組んだ初めての魔法。

ロイヒテン・プファイル

矢型の魔力弾。ロイヒテンは光る、輝く。プファイルは矢。よくなのはと早朝訓練してたなあ、懐かしい」

ルシル「そうらしいな。いい思い出があるじゃないか。次は、君が二番目に組んだ魔法だな。真紅色の鳥型直射砲撃。

グランツ・フォーゲル

グランツは輝き、光沢。フォーゲルは鳥という意味だな」

シャル「うわあ、コレの開発も懐かしい。

フェイトとアルフの契約記念日のお祝いに、平和利用バージョンとしてなのはスターライトと一緒に花火として打ち上げたんだよね

「

ルシル「あー憶えてる。ユーノが結界を張り忘れて大変な事になったらしいな」

シャル「あはは、そうそう。急いでその場から全力ダッシュで逃げたんだ。

アリサとすずかに見られてたつてことが後で判明したんだよね。
さて、次は・・・っと、おお、これは・・・。
真紅の片翼を背にする補助術式。

真紅の片翼 (アインス・ルービン・フリーユゲル)

アインスは1。ルービンは宝石のルビーのドイツ語読み。^{ベルカ}

フリーユゲルは翼、羽。生前は苦手で実戦じゃ使わなかったけど、
なのはにアースラから突き落とされてからは上手く扱えるようにな
った術式。

フフ、今じゃなのは以上の速さで飛べるって・・・分からないもの
よね」

ルシル「今では両翼で、天使(いや、悪魔か)のようだ」

シャル「天使ってそんな・・・いやあ〜(テレ)」

ルシル「もじもじしてどうした?・・・シャル?

聞いてちゃいない。先行くぞ。翼を羽ばたかせ、速度を上げる補助魔
法。

速度上昇

トロイメライ発言は、ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティ
ーク。

ゲシュウィンディヒカイトは速度、スピード。アオフシュティーク
「上昇、向上という意味だ」

シャル「いやあ参ったなあ っていつまでもテレてらんないね。
え〜と次は、ルシルの空戦形態の術式を利用して組んだ魔術。

空戦形態 (フォイアロートフェーニクス)

対ダイヤモンド&アルトワルド戦で使ったものね。

背に薄く細長いひし形の翼を四対出すってやつで、色は真紅。

ちなみにフォイアロートフェーニクスは、朱雀っていう意味なんだよ」

ルシル「はフェーニクス(不死鳥)というのだけでも良かったらしいんだが、それじゃ在り来たりだということらしい」

シャル「いいじゃん別に。カッコいいじゃんか、フォイアロートフェーニクス。

さてお次は、

剣神の星天城

これは私が初めて創り出した創世結界。

ヘルシャー・シュロス。支配者の城っていう意味なんだよ。

中世のお城がいくつも円形に建てられてて、その中央に闘技場があるんだ。

ルシルの宝庫と書庫の二つの特性を持った最高の創世結界」

ルシル「まさか私でさえ完成できなかった術式をシャルが組むとは思わなかった。

支配者の城。言い得て妙な術式名だよ。

複製の魔眼

これは私の固有能力である複製を疑似的に再現したシャルの新能力

だ。

複製対象は魔術・魔法。残念ながら武装の複製は出来ない。というより必要無いらしい」

シャル「当然じゃない。キルシユブリユータだからこそ私は戦える。それ以外の武装は聖典だけでいいよ。

そんじゃ次は、ルシルが十字架をくで使ったり紹介された魔術を紹介しよう。

最初は下級術式だね。

その身に焼きつけよ（フェニックス）

下級対人攻性術式の一つで、その中でも威力が高い鳥型砲撃。オートで追尾する事も出来るけど、複雑な軌道が出来ないから迎撃されやすいっていう弱点もある。

流麗なる乙女（ウンディーネ）

下級防性魔術の一つで、それほど防御力はないけどね。自身を水柱で覆って攻撃を防ぐ。不純物のない純水だから、雷撃系攻撃にも耐えられる」

ルシル「のような下級術式は幼少の頃に組んだ不完全品だ。弱くて当たり前。まあ初めて発動出来た時は純粹に嬉しかったな。次からは中級。天使の名を冠する術式だ。大戦時にも多く使った。守護神の契約先では一番使う頻度が多い。これらが世界の許す限界だという事らしい。

輝き燃えろ、汝の威容（コード・ケルビエル）

炎熱系対人・対軍中級攻性術式。

足元に私の魔力光であるサファイアブルーの円陣を最大2km展開。そこから3〜5mほどの蒼炎を噴き上げさせる」

シャル「敵軍に囲まれたときかに重宝するんだったよね？でも後方組のルシルがどうして前線に行くのかが最大の謎」

ルシル「その時その時で戦況が変わう。

出る必要があれば出るし、出なくていいのなら出ない。

罪ある者に、汝の慈悲を（コード・レミエル）

は雷撃系対軍中級攻性術式だな。

空から蒼雷で構成された十字架を複数降らせる対空地制圧術式だ。対象にその十字架が当たると小さくなって周囲に拡散、さらに広範囲へと向かって行って被害を拡大させる」

シャル「ルシルの魔術ってホント嫌がらせばかりだよな。

一对複数ばかり想定した術式を有する魔術師なんて、ルシルくらいだよ」

ルシル「そうは言っても両親がそうなるよう私を調整したんだ。

だから“孤人戦争”なんていう人をバケモノ扱いする二つ名がついたんだ。

まったく、これで人格崩壊していたらとんでもないことになっていたな」

知らしめよ、汝の力（コード・ゼルエル）

ルシル「は中級補助系術式。術式は単純な身体能力の強化だ。

発動中の術式効果の強化も可能だな」

シャル「ただでさえ強力な魔術をさらに強化ってバカじゃない？」

ルシル「私もそう思うが、やれるだけのことをやれ、だよ。」

轟き響け、汝の雷光（コード・バラキエル）

蒼雷による貫通性の高い中級砲撃だ。

直撃した対象のところにはばらくプラズマが残り続け、さらにダメージを加算していく」

シャル「最悪な置き土産ってところね。」

ホンオ・フェ（韓国のエイ料理）とか、シユール・ストレンミング（世界一臭い缶詰）とか」

ルシル「私としてはの方が遥かに強烈だと思うぞ。」

魔術を受け、さらにのようなモノが身体に残ると思うと……」

シャルシル（……別の意味で終わる……！）

ルシル「嫌な想像をしてしまった……おえ。」

光輝け、汝の威光（コード・ウリエル）

閃光系中級砲撃。ただそれだけ……だな。

燃え穿て、汝の淨炎（コード・ウリエル）

これもと同じ炎熱系の中級砲撃。ホントただそれだけ……」

シャル「なんでそんな落ち込むの？ 十分強烈な一撃だよ、どつちも。」

ルシルは高望みし過ぎ。派手な魔術なんていらぬ。

徹底的に制御された魔力とそれを扱う術。それだけで十分なんだよ」

ルシル「君が言うか。君も結構派手な術式を持っているじゃないか。いや、まあいいか。それを含めて私なのだから。」

刻め、汝の天災（コード・ウリエル）

雷撃系中級攻性術式。指先から蒼雷の斬撃を放つ術式だ。

纏ったままの斬撃と飛ばす斬撃の二種があるが、基本は飛ばす方だ」

シャル「ビビリー、ビビリー」

ルシル「うっさい。君も飛ばすだろうが」

シャル「そうだった……。さ、次行こ、次。」

吹き荒べ、汝の轟嵐（コード・ラシエル）

は中級防性として組まれた術式だね。

蒼い竜巻を発生させ攻撃を防ぎ、また対象を竜巻に巻き込ませてどつかに吹き飛ばす。

飛ばされる場所はランダムらしくて、その戦地の気候によって変わるんだって」

ルシル「大戦時、目と鼻の先で竜巻が消えて焦った事があったな（遠い目）。」

吹き飛ばそうとした連中がすぐに戻ってきて、本当に大変だった」

シャル「き、気にしちゃダメだよ、ルシル。次はね・・・これ。」

舞降るは、汝の麗雪（コード・シャルギエル）

氷雪系中級攻性術式の一つで、氷の槍を展開できる術式。

つて、なんかヨツンヘイム術式にも似たようなものがあつたけど・・・」

ルシル「決してパクリじゃない。そもそも登場する魔術の数が多過ぎる。」

たまにダブることだってあるさ。君の閃衝刃もそうだろう」

シャル「確かに。ひとつひとつ別にしようとしたら大変だもんねえ。そう考えたら作者の可哀想なオツムもなかなか思えてくるわ」

ルシル「（作者への反逆か）次は、中級攻性術式の中で第二位の破壊力と突破力がある。」

殲滅せよ、汝の軍勢（コード・カマエル）

顕現させる槍はそれぞれ別の属性を持っているため、抗属性や同属性の障壁の影響を受けずに威力を保てる事が出来る。

威力を保ったままの最大展開本数は2千。質より量にすれば倍の4千となる」

シャル「正に槍の雨あられ。広範囲を射程に収める対軍術式ね。上級にも似たような奴があるけど、威力は上級の方が遙かに上よ」

ルシル「上級は後で、だな。」

傷つきし者に、汝の癒しを（コード・ラファエル）

中級補助系術式のひとつ。自身や相手の負ったダメージを治療する術式だ。

ANSURでも十字架をくのもどちらでも多く使われた術式だな」

シャル「蒼い光なのにすごく温かみを感じるから、掛けられていると優しい気持ちになるんだ」

ルシル「お褒めの言葉をありがとう、だ。普通に嬉しいぞ。次は一気に物騒になる術式だ。」

削り抉れ、汝の裂風（コード・ザキエル）

螺旋を描くように放たれる削岩機のような嵐を対象に放つ対人中級術式。

直撃すればその名のとおり、それはもうグロい結果となる」

シャル「ラファエルが台無しだぁー！

って、ミキサーのようなモノなわけ。分かる？ ミキサーよ、ミキサー。」

想像して見て。ミキサーに人を入れて・・・スイッチ・・・オ
ルシル「あ~~~~~！！ 待て待て待て待て待て。

やめろ、そんな想像を読者の皆様にさせるんじゃない。

はあ。もし食事を摂っていたらすいません。ほら、シャルも」

シャル「どうもごめんなさいでした」

ルシル「すまんシャル。私の魔術は結構酷いものがあるな」

シャル「大丈夫。私の真技も似たようなものだし。

気を取り直して次に行こう。次はね、これだ。」

知らしめよ、汝の忠誠（コード・アブディエル）

対人中級攻性&補助術式。魔力刃を展開するというものね。

素手にでもOK、武器に付加させるもOKな応用の利く術式」

ルシル「ほとんど使わなかったが。使ったのは確か・・・シャルとの決戦だったか？」

シャル「うん。まあ私のキルシュブリューテの前には無意味だったけどね」

ルシル「言うな。次は中級第三位の術式だ。」

浄化せよ、汝の聖炎（コード・メタトロン）

屋内にて効果を発揮する炎熱系中級攻性術式。

浄化の蒼炎を建造物内に這わせ、通った道を一気に爆破するというものだ。」

爆破のタイミング、通る道、全てが遠隔操作で行われる」

シャル「で連合の砦を吹っ飛ばしたんだよね〜。

で、その後私の同僚とその当時は敵だった結界王アリスに負けた、と」

ルシル「初黒星だな。アリスの脅威はあの場から始まった。最終的には味方になってくれて本当に助かった。さて、次で中級は最後だな。」

崇め讃えよ、汝の其の御名を（コード・ミカエル）

中級術式最強の威力を誇る連続砲撃の対人攻性術式だ。使用するには空戦形態、22枚の蒼翼が必須となる。

蒼翼が低威力の砲撃を放ちながら、対象の行動を封じる檻を形成していく。

対象を封じ込める檻が完成すると、私の頭上に五枚、左右に五枚ずつ、足元に七枚の蒼翼を十字架型に展開させ、端から順に高威力の砲撃を放つ」

シャル「魔導師となって空戦形態が使えなくなった今、もう陽の目を見ることないんだよね」

ルシル「そうだな。まあ上級術式のいくつかが使えるから大して問題はない」

シャル「次はハコにわ生徒会のプロローグで登場した術式。」

浄化なせ、汝の聖水（コード・サキエル）

これは浄化の聖水で構成された女性型の天使を創り出すってやつで、普段は治癒術式。

でも攻性・防性としても扱えるんだ。汎用性の高い術式なんだよ」

ルシル「次もハコにわ生徒会で登場した術式だ。」

指し示せ、汝の星図（コード・ラティエル）

攻性術式で、対象の上空に円陣を展開。

円陣内に様々な星座を構成し、星座を形作る光球から下にいる対象に向かつて連続・同時砲撃を放つ術式だ」

シャル「って命中率が結構低いんだよね。星座だから光球に間があつてさ。

次もハコにわ生徒会プロローグで登場した術式。

屈服させよ、汝の恐怖（コード・イロウエル）

ルシルの両サイドに円陣が展開されて、そこから銀の左右一対の巨腕を創り出すって術式。

その巨腕で相手をボッコボコにする。別名は撲殺拳（笑）」

ルシル「は銀色だがその正体は岩。私の数少ない土石系魔術だ。次もまたハコにわ生徒会で登場した術式。

無慈悲たれ、汝の聖火（コード・プシエル）

炎熱系魔術。無慈悲な業火で構成された大蛇を創り出し特攻させるというものだ。

攻撃だけでなく防御にも使える応用性の術式だな」

シャル「ということで、次からがルシルの真の魔術、上級術式だよ。最初はこれだ！！

凶竜の穢牙（コード・ニーズホッグ）

固有魔術上級攻性術式。複製した武装を竜の形に組んで対象にぶつける攻撃ね。

神秘満載の無数の武装による攻撃だから、威力が半端じゃないんだよ。

ちなみに は神器を使う術式だから、もう使えないんだよね？」

ルシル「ああ。創世結界はどれも使用不可となったからな。

まあ神器を使う攻性術式はどれも人殺ししか出来ないものだ。使えなくなっただけだよ」

シャル「そっか・・・うん、そうだね。

女神の聖楯（コード・リン）

これは防性術式の第三位っていう優れもの。

蒼い円の中に女神の祈る姿が描かれた軽く芸術的な盾なんだ。

大きさや展開できる場所は任意で決定出来るんだけど、あまりに複雑な術式だから複数展開することが非常に難しいだつて」

ルシル「デザインに凝り過ぎた・・・」。

効果は折り紙つきなんだが、複数展開出来ないって・・・ダメだろ、マジで」

シャル「ちなみコレは魔導師でも展開出来るらしいよ。

まあ効果は魔術に比べて薄い上に消費も激しい。しかも発動まで時間がかかる。って最悪だね・・・」

ルシル「まったくだ。だからもう使う事はないだろうな。それにラウンドシールドで十分だよ」

シャル「なんか投げ遣りっぽいよ、ルシル。
……黙秘ですか。いいよ、それなら。先行くから。」

女神の祝福（コード・エイル）

補助系上級治癒術式だね。

これは対象が死んでいなければ、どんな怪我や病気を治すことが出来る。

だけど自分に術をかけることは出来ないっていう欠陥術式。でも効果はすごい。

この術式以上の神秘を備えたダメージには多大な魔力を消費して、術者に長時間の眠りを与えるっていう副作用が出ちゃう。

私がルートウスで刺された時、ルシルが使ってくれたのがコレ。ルシルのおかげで死ぬ事もなく、戦いぬく事が出来たんだよ。

ありがとう、ルシル」

ルシル「いきなりどうした？」

シャル「なんとなくお礼を言いたかったの。気にしないで。さ、次行こう！」

光神の調停（コード・バルドル）

全方位無差別砲撃の対軍攻性術式だね。

一対多数において効果を発揮する殲滅特化の上級魔術。放たれた砲撃が何かに着弾すると、そこからさらに広範囲に魔力波が広がって、さらに被害をもたらすってやつ。外道だね」

ルシル「何たる言い種。しかしこれこそ制圧術式だな。」

まあ無差別だから敵味方関係なく撃墜する事になってしまうが、そ

こは発動条件を厳しくしているから大丈夫だ」

シャル「敵本陣に単独で乗り込んでこれを撃つたんだっけ？
その本陣はすんごく混乱したって聞いたよ？」

ルシル「バルドルを知ったステアの提案だ。

まったく。私を単独で突っ込ませるとは恐ろしいやつだ」

シャル「どっちもどっちだと思うけど。

軍神の戦禍（コード・チュール）

これは対軍攻性上級術式だね。

神々の宝庫から神器を複数具現化して一斉に対象へと放つてやつ。
神器を組まずに雨のように降らせるのがチュールで、竜の形へと組
んだのがニーズホッグになる、っと。

組むか否かの違いね。そして効果範囲がこちらの方が広いという・
」

ルシル「君にもチュールを放ったが、無傷で乗り越えられたな、確
か。

当たるモノだけ瞬時に判断、そしてキルシュブリューテで迎撃。さ
すが剣神だ」

シャル「ありがとう　そんじゃ次。

雷神の天罰（コード・トール）

対地強襲上級攻性術式ね。

遙か上空にアースガルド魔法陣をいくつも展開して、そこから地上へ

と向けて蒼雷を対象に向けて落とすというものだね。
ピンポイントで落ちてくるし、落下速度も人間の反応速度を超えているから、回避は出来ない上防御することも出来ない」

ルシル「制御するのに一苦労だから、乱用できないのが欠点だ。」

邪神の狂炎（コード・ロキ）

これは炎熱系魔力武装術式と言う。

両腕両足に数mの紅蓮の劫火で構成された焰の腕と脚を武装する術式だ。

対ヨツンヘイム魔術師用の術式として組んだ。こうかはばつぐんだ」

シャル「足で踏まれて蒸発したり、手に捕まって焼却されたりと、それはそれは連合にとっては酷い結果だったと」

ルシル「戦争だ。勝たねば意味はない。時には無慈悲に手を下さねば、な」

シャル「重過ぎだよ、ANSUR（涙）。

復讐神の必滅（コード・ヴァーリ）

無属性の自動追尾砲撃だったっけ？

術者に敵対して攻撃を加えた対象を永続追尾する、ってやつ。
迫ってくるのが砲撃って、すごいプレッシャーだよな」

ルシル「そのプレッシャーで対象から余裕を失くさせ、確実に討つ。
後手に回らないと発動しないが、放ったが最後、相殺されるまでは
追尾し続ける」

シャル「相殺すればいいって、バカみたいな魔力だから並の魔術師じゃ対処できないんだよね」。

豊穰神の宝剣（コード・フレイ）

無属性の斬撃術式だね。常に最良の一撃を対象に放つ、というもの。ルシル「オートだから、時々身体能力を無視して振るわれる。だから結構危険なんだ、コレ。放った直後に骨折とか筋肉断裂とか。まあすぐにラファエルで治療するから問題ないが、やはり自滅による苦痛はごめんだ」

シャル「便利すぎつしよ、ルシルの魔術」。

女神の陽光（コード・ソール）

炎熱系の砲撃で、対象にヒットすると爆発することなくその場に留まって対象にダメージを与え続けるっていう術式。これの直撃を受けたらまず生き残れない。それほどまでに強大な火力を持つてるの。さてと、次からはルシルの魔術、その最奥クラスの術式だよ。

神断福音（グロリアス・エヴァンジェル）

これはルシルの保有する対人・対軍真技。

土石系を除いた魔力で構成されたアースガルドと各同盟世界の魔法陣で砲塔をつくって、完全開放した神槍グングニルを弾丸として射出する対軍攻性術式。

ビフレスト絶対防衛線戦で、侵攻してきた連合主力殲滅に活躍した

んだよね」

ルシル「まあ魔術師相手じゃなくてA・M・T・I・S・だったが、機械兵だからこそ心置きなく放てた、というところだ」

シャル「ふん……」。

再誕（アポカリプティック・ジェネシス）

あー、これはルシルの保有する対界真技だよ。

最大禁呪“ラグナロク”の術式を応用した真技でもセレスに言った通り完全なものじゃない。

神々の宝庫、英知の書庫に貯蔵されている神器や術式を合成させてさらに威力を高める。

“孤人戦争形態”でしか発動出来なくて、背にある六つの歯車から周囲の魔力を極限にまで収集する。

収集し終わると、余分な魔力で複数のアースガルド魔法陣による砲塔を組み上げる。

そこから放たれるこの真技の威力は、小惑星程度なら粉碎する程らしいんだけど、守護神時代の契約で初めて見た時、星一つを滅ぼしたてた。

まあ守護神の能力もあつたからだろうしね。けど大戦時に使われてたらと思うと正直怖いね。

その反面、反動が強くて、一度使用すれば数年は一切の魔術が使用出来なくなるみたい」

ルシル「はネブソノフスの撃破という目的の下に組んだものだ。

人間相手に使うものじゃない事は百も承知。だから戦場では使わなかった」

シャル「当然ね。こんなん使ったら、人としての道を大きく踏み外すことになってたよ、きつと。」

多層甲冑

これはルシルの防性術式第二位。

何重もの不可視の対物対魔力障壁で身を包む術式だね。

XXランク以下の魔術は全てキャンセル。

物理攻撃は高位神器による攻撃以外全てキャンセルするという超反則術式。

それでいて機動力などに影響しないというおまけ付き。って、主人公だからと言ってこれはやり過ぎでしょうが！」

ルシル「それを突破した君が何を言う！？」

それに！ 連合のトップクラス、君を含めたシュテルン・リッターは全員XXランク！

ほとんど意味はなかったよ、この術式！ せいぜい雑兵の奇襲を防げたくらいだ！」

シャル「……はあ、つくづく化け物ぞろいだよ、ANSUR。んで？ 次は何だっけ？」

原初の神壁（アースガルド）

ルシルを含めた全魔術師が有する防性術式の第一位。

魔道世界アースガルド全体を覆う障壁。

アースガルド四王族に伝えられる最大に最高、そして最古の防性術式ってこと。

儀式魔術として分類されて、発動するには数週間の儀式が必要とな

るみたい。

個人で発動することは不可能らしいんだけど、守護神の能力を使えば比較的楽に発動可能、っと」

ルシル「古代のアースガルド王族には頭が上がらないよ。

この術式のおかげで、ラグナロクによる完全滅亡を防げたのだから」

シャル「それでもすごい被害だったんだよね？

ラグナロクだけは何が何でも発動しちゃいけないってことが良く分かるよ。

そして次は、創世結界だね。

神々の宝庫（ブレイザブリク）

ルシルの有する創世結界の一つ。

複製した武装が縦横無尽に乱立する黄金に光り輝く地。

空は黄金の陽光で輝く雲が中心へと渦巻いていって、その中心には黄金の太陽があるんだよね」

ルシル「これでアグステインやヴァナヘイム女帝を斃した。

この創世結界と神器群こそが、私が神器王と謳われる所以となった」

シャル「そりゃそうよね。こんなの見せられたら誰だってそう名付けるよ。」

英雄の居館（ヴァルハラ）

創世結界の一つ。

複製した武装や術式などの当時の持ち主の情報を引き出して、使い魔とした連中の軍勢が存在する超巨大な館。

世界そのものらしいけど、展開出来るのも、ルシルが訪れる事が出来るのも館内だけみたい」

ルシル「それでいいんだ。大戦時であろうと守護神時であろうと逃げ場を用意してはいけない。

戦いの為の術式。それだけでいいんだよ、ヴァルハラは」

シャル「らしいんだけど、やっぱり変だよ、それ。

にしてもホント恐ろしいものを組んだよね。読者の皆さま、すこし考えてくださいな。

そうだなあゝゝゝ有名な型月作品の最強クラス、死徒二七祖とか、英霊とかが一斉に襲ってくる光景。怖くない？」

ルシル「まさに最強の軍勢だな（笑）」

シャル「笑い話にならないつつうの！

異界英雄（エインヘリヤル）

えっとこれは、英雄ヴァルハラの居館せかいに存在する使い魔を召喚するっていう術式。

オリジナルが同じ空間せかいに居る場合は、外見をアレンジしないと召喚出来ないようになってる」

ルシル「当然の処置だよ。オリジナルと見分けがつかないと大変な事になる」

シャル「あー、なるほど。ふゝんゝゝゝ確かに大変だ」

ルシル「何を想像すればそんなハッキリと赤面するんだ？」

シャル「ハッ！ いやあ、何でもないよ、あはは。

聖天の極壁（ヒミンビョルグ）

これも創世結界の一つ。未完成にして欠陥品だったっけ？

天地が判別出来ないほどの無限に広がる薄暗い空間。

地平線にある陽光が唯一の明かり。天地両方には中心へ向かって雲が渦巻いている。

そこら中にルーンが刻まれた大小様々な球体が存在して、天地両方からルーン文字が降ってくる。

どこか幻想的な創世結界、か。確かに私は好きだな、ヒミンビョルグ」

ルシル「十字架をくの世界で、ひとつの戦場として完成させたんだが。

球体にも意味を持たせたりと。ルシファーに乗っ取られたヴィヴィオとの戦い。

あの時のが、完成形のヒミンビョルグとなっている」

シャル「あ、そうなんだ。ようやく意味を持てたんだね、よかった。

ルーン

おっとと、魔道世界アースガルド四王族にのみ扱える最古の魔術だね。

原初王オーディンの生み出した全ての魔術の祖とも言われる術式だよ。

これと同時にラグナロクも生み出されたってわけ」

ルシル「ルーンが生み出されて良かったのかどうか・・・」

シャル「私は良かったと思うよ。だからこそルシルと出逢えたし、
なのは達の魔法も生まれた。」

まあ大戦とかラグナロクとか色々な問題が起きたけど、それでも良かったって思ってる」

ルシル「そうか。そうだな・・・ああ、確かにそうだ」

Extra Episode：シアワセの在処

新暦77年 某月 無人世界

かつては栄えていたであろうこの世界もまた滅び、そして朽ち果てていた。

所々に文明の名残である建造物が残っている。

レンガ造りの家、教会のようなもの、さらには城のようなものまである。

しかしそのほとんどが時間という波に晒され風化、そして崩れ落ちている。

遺跡。人はこの場所を見て廃墟ではなくそう呼ぶに違いないだろう。

そんな遺跡を歩く集団。

スーツの者、白衣の者、バリアジャケットの者と男女を問わず様々な遺跡を慎重に触れ、何かを調べているかのような者たちだ。

「スクライア先生」

「どうしました？」

一人の白衣の男性が、スーツ姿の青年に声をかけた。

スクライア先生と呼ばれた青年ユーノ・スクライア。

時空管理局本局超巨大データバンク“無限書庫”の司書長を務め、ミッドチルダ考古学士会の学者でもある。

掛けた眼鏡を少し上げ、呼ばれた場所へと歩いていく。

そこは未だに原形を残すほどの大きなレンガ造りの建造物だった。

ユーノは白衣の男について、中へと入って行く。

(一体どれだけの時間を過ごしたんだろう・・・?)

ユーノは今まで見てきたこの世界の遺跡を見てそう思う。

ユーノを始めとした彼ら学士会を筆頭とした調査団は、突如として次元の海に現れたこの世界を調査しに来ていた。

念のための護衛として管理局員を含めた100人からなる調査団。

「これを」

「・・・本・・・？」

ユーノが手渡されたのはボロボロになった一冊の本。
しかし本はその一冊だけではなかった。

「ここは・・・書庫だったのか・・・」

建造物の中、所狭しと納められた本の山。

そこはさながら書庫。そう呼ぶに相応しい場所だった。

他の学者たちも書庫へと集まり、慎重に書棚に納められている本を手にする。

「見た事のない文字ですね・・・」

本に記されていた文字は、何一つとしてユーノには見覚えのないものだった。

「スクライア先生、無限書庫で調査していただいても？」

「ええ、そのつもりです」

次々と本が回収されていく。

崩れないように保存の魔法をかけ、運び出される。

一通りの調査を終え、調査団は“ミッドチルダ”へと引き上げていくそんな中、ただ一人ユーノが遺跡へと振り返る。

(この光景・・・どこかで見たことがあるような・・・)

妙な既視感を覚えつつ、彼も急いで離れていく調査団へと戻る。

後にこの世界は、重要管理指定世界“オムニシエンス”と名付けられた。

同年 某月 重要管理指定世界“オムニシエンス”

遺跡内を歩く人影が一つ。

大きなリュックを背負い、服装もポケットがいくつもあつもある物。

一般人は一般人でも、その見た目はトレジャーハンターそのものだった。

現在“オムニシエンス”は、管理局の許可なく入ることは許されていない。

だが、歩く人影は許可を取ることなく“オムニシエンス”へと来ていた。

方法は不明。監視の抜け穴を通ってきたのだろうか。

無法者と呼ばれてしまうトレジャーハンターならではの方法に違いない。

「これはすごい・・・!」

都合の良い事に現在“オムニシエンス”は無入。

それゆえにトレジャーハンター・シャレードは悠々と歩いていた。真剣な表情で様々な建造物を眺めては写真を撮っていく。

そして、あの書庫へとたどり着く。

どこも壊さないようにゆっくりと入り、一冊も残されていない書庫の中に行く。

「ここが情報屋の言っていた書庫……か……」

一冊も本が残されていないことから、残念そうに呟きながらも奥へ奥へと進んでいく。

そのとき、ガラスと何かが崩れる異音をシャレードは耳にした。

彼は「今は無人のはずだ」と呟き、緊張感から嫌な汗を流す。

ゴクリと唾を飲み込み、彼は音を立てずに異音のした場所へと歩を進めた。

「……これは……隠し通路か？」

彼が目にしたのは広間の壁に空いた穴。

覗き込むとさらに先がある。薄暗く冷たい風が奥から吹いている。

先程の異音は壁が崩れ落ちた音だろうと判断する。

「この先には何が……」

彼は僅かな恐怖が心の底に生まれるのを感じたが、それ以上に好奇心が彼を支配した。

壁伝いに歩き、そしてある細長い一室へとたどり着いた。

そこは祭殿とでも呼べるような場所。

祭壇へと続く道の両側に並び立つ燭台には火が灯っている。

「この火は一体いつから・・・？」

彼は疑問を口にしつつ、祭壇へと近づいていく。そして祭壇の上にナニかあるのを視界に入れる。トラップが無いかを慎重に確認し、そつとソレを手にする。

「なんて綺麗な本なんだ・・・！」

祭壇の上に安置されていた一冊の本。

管理局の調査団が発見した何百冊もの本とは違い、どこも風化しておらず綺麗な姿を保っていた。

それは全体的に赤い本。タイトルはどこにも書いてない。

その赤い本の縁には金の装飾が施され、その金の装飾は幾何学模様となつて背表紙に伸びている。

表紙には青銀で出来ている何らかの紋章が象られたレリーフが施されていた。

そして、この本を嚴重に封印するかのようにな重にも鎖が巻かれている。

「美しい・・・美しい・・・なんて・・・美しいんだ・・・」

彼はうわ言のように「美しい」を連呼する。

その目は何かに取り憑かれたように妖しい輝きを放っていた。

「これほどの物に一体何が記されているんだ・・・？」

どうしても中身を知りたい衝動に駆られた彼は、必死に鎖を解き始める。

一本解いていくたびに、その本が脈動するような感じに襲われるシ

ヤレード。

二本、三本、四本・・・そして最後の五本目の鎖が解かれた。ゴクリと唾を飲み込み、鎖から解放された赤い本の表紙を開く。

「・・・・・・・・白紙・・・・・・・・？」

何ページも捲る。しかしどこまで行っても白紙だった。

タイトルも無く、その上何も記されていなかった赤い本。彼は肩を落とし、心底残念そうに大きくため息をついた。

「だがこれほどの立派な装飾、そしてこの遺跡から発見されたとなれば高額で取引されるはずだ」

彼は赤い本を背中に背負っていたリュックへと納め、祭壇を後にする。

シャレードが去った後の祭壇。そこにうつすらと白い影が生まれる。成人男性のような人の形をした白い影。

その影の口の部分にあたる場所が三日月のようにパカッと開く。それは歓喜を表した笑みのようだった。

この半年後、第一世界ミッドチルダ東部海上にて、一人の男性遺体が海面に浮いているのを地元民が発見する。

身元確認の結果、トレジャーハンターにしてロストログアや質量兵器などを横流しする闇のブローカー、第一級指名手配犯“シャレード・アルス”と判明。

死因は物理破壊設定とされた魔法によるものと断定。怨みによるものか、取引で何らかのトラブルが起きたか、現在調査中。

後にシャレード・アルスの荷物が荒らされている事が判明。

彼は、ここ最近知人に装飾の施された赤い本を自慢していたらしい。

その赤い本が見当たらないことから、その本が盗まれたものと推測される。
物盗りによる犯行であることも視野に含め、調査が続けられることとなった。

この3年後、新暦80年 11月。
何者かによって盗まれた赤い本によって、再び次元世界に危機が訪れる

様々な再会と別離が繰り返されていくそれは短い期間での物語。
そう、過去と現在が交錯しせめぎ合うそれは悲しい事件が。

§最終章・プロローグ§

新たな始まりは砲光の中で } First encounter }

今より約5年前、ある闘いがあった。

幾つもの世界から成りたつ次元世界の、とある世界において闘い。

次元世界の存亡をかけた全て滅ぼしかねなかった闘い、その果ての決戦。

それは人智をはるかに超えた闘い。人たる者の介入する隙の無い闘い。

両勢力の死力を尽くした決戦。そして、それは終結した。

しかし、その闘いを知る者はそう多くはない。

唯一その決戦の勝敗と真実を知る数少ない者たち。

元“古代遺物管理部機動六課”の前線組とその知人たち。

その“機動六課”の部隊長を務めていた少女、いや今では女性と言
うべきだろう。

八神はやて海上警備捜査司令。

そんな彼女は今管理局の制服ではなく私服を着ている。

ここはミッドチルダ首都クラナガン郊外、そこから少し南へ行つた
場所に建つ八神家宅。

すぐ近くに海のある高台に建っている家だ。

「ん・・・」

寢室のベッドの上で寝返りをうつはやて。

今日は、久々にはやてに訪れた三日間という短いながらもありがたい休暇の最終日。

のんびり出来る休暇を満喫するかのように昼寝に勤しんでいた。

そして今、はやては夢を見ていた。

そこは雪の降る公園。

その公園に、美しい銀の長髪、紅い瞳をした女性がいる。

彼女の名はリインフォース。

現在はやてと共に過ごしているリインフォース？とは違う。

言うなれば初代のリインフォース。

はやての人生を大きく変えた大切な家族だった女性。

「リインフォース、こんなんやめて。

破壊なんて、リインフォースが逝かんでもええ。

わたしがちゃんと抑えるから、だから……こんなん……せんでえええ！！」

『リインフォースと小さい頃の私や。

そうか。これはリインフォースが旅立った日の……』

はやての視線の先には幼い頃の、車椅子生活をしていた時のはやてがいた。

夢の内容は、愛しき主はやての未来を護る為に、自らの終焉を選択したリインフォースが天へと逝った日の事。

幼い親友のなのはとフェイト。今と変わらない姿の愛おしき家族。

そして幼少時のはやての側には、今はいないシャルロツテとルシリオンがいた。

幼少時のはやてとリインフォースが自分の想いを言い合つ。何とかするから、こんな事をしないでいいと言つはやて。対するリインフォースはそれを聞き入れない。

「主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の務め。

あなたを守るための最も優れたやり方を、私に選ばせてください」

幼少のはやては泣き始める。

「私の意志は、あなたの魔導と騎士たちの魂に残ります。

私はいつもあなたの傍にいます」

リインフォースは優しくはやてに語りかける。

その光景に、今は第三者として見守るはやての目からも涙が零れる。

「私は消えて、小さな無力な欠片へと変わります。

もしよければ、私の名はその欠片ではなく、あなたがいずれ手にするであろう新たな魔導の器に贈っていただけますか？

“祝福の風リインフォース”、私の魂はきつとその子に宿ります」

リインフォースの最期の願い。

その願いによつて今のはやてがいる。

そうして短い時間での邂逅の果て、リインフォースははやての未来を繋ぐために逝つた。

はやては尚も雪に染まる公園の中で佇んでいた。

これが夢ならもう覚めるだろうと思ひながら。

「主はやて」

背後から聞こえてきた女性の声。

はやては振り返り、自分と呼んだ声の主と対面する。

「リインフォース・・・!？」

そこにいたのは、先程天へと旅立ったリインフォースだった。しかし外見にいくらかの変化がみられる。

リインフォースの格好は、はやての知る黒い騎士甲冑ではなく、デザインは同じでも色が白へと変わっていた。

背にある二対の黒翼もまた綺麗な純白の翼へと変わっていた。それはまさしく天使と呼ぶに相応しい姿だった。

「大きくなられましたね、主はやて。

あの幼く駄々っ子だった頃とは比べるまでも無く・・・」

「駄々っ子は私やなくてリインフォースの方や!」

微笑みながらそう言うリインフォースに、はやては顔を赤くしながら反論。

するとリインフォースはさらに笑みを深める。

はやてもまた笑みを零し、

「夢でもまたこうして話が出来て嬉しい。

リインフォース、私な、今すごく幸せなんよ?

友達にも恵まれて、家族も出来て・・・。

あ、そうや。新しい家族が出来たんや。名前はアギト言うてな」

はやては今までの事をリインフォースへと話す。

リインフォース?の事、学校の事、全てを話すには圧倒的に時間が足りない。

まだまだ話したい事がたくさんあるのに、意識が覚醒していく感覚に捉われたはやて。

「あんな、リインフォース！」

「主はやての笑顔を見ただけでも十分です」

「リインフォース!!!」

世界が白に染まる。

目覚めの時だ。

「んあ・・・？」

はやてが目を覚ます。

むくりと起き上がり、ぼうつとした表情のまま窓の外へと視線が行っている。

「リイン・・・フォース・・・？」

そう呟いて、そのままパタリとベッドの上に寝転んだ。

仰向けになって視線は天井へ。それから深呼吸をした。

「リインフォースの夢見るなんていつ以来やる・・・？」

そんな彼女の夢をはやては見た。ハッキリと思いだせるほどの鮮明な夢。

「・・・うん。私は幸せや。そやから心配せんでええよ、リインフォース」

そう言って勢いよくベッドから降り、寝室を後にするはやて。

「あれ？ はやてちゃん、もうお昼寝はいいですか？」

「マイスター、まだ一時間も寝てないよ？」

リビングではやてを迎えたのはリインフォース？とアギト。

二人は融合騎とも呼ばれる人格型ユニゾンデバイスだ。

本来は30cm程の身長だが、自宅にいる際は普通の子供と大差ない体格でいる。

「うん、ちょっとな。・・・シグナムは？」

「？ はやてちゃんはもしかして寝起きで少しボケてますか？」

「なんや、リイン。私がいつボケたって？ ん？」

何気なく口にした疑問にそう返され、はやてに少しイタズラ心が生まれた。

はやてはリインフォース？の両頬をプニプニし始める。

リインフォース？はされるがままに「あう〜」と困った表情でアギトに助けを求める視線を送った。

アギトはそれを見て、もう少し見ていようか、それとも助けようかと迷った。

その思考中の間にも頬をプニプニされ続けるリインフォース？。

結局、はやてが止めるまで続いた。そう、アギトは放置を選択したのだった。

「何で助けてくれなかったですか!？」

「いやあ、楽しそうだったから、マイスターが。それにラインだって本気で嫌だったわけじゃないんだろ？」

「そ、それは・・・そうですね」

ラインフォース？がそう言い、ようやく脱線していた話が戻る。

「それで、シグナムたちはどないしたん？」

「シグナムは今日の夕飯の買い物ですよ、はやてちゃん。それに、お買い物ははやてちゃんが頼んだことですよ？」

それを聞いたはやては「そうやった」と、頼んでおいて忘れていた事に自己嫌悪していた。

昼寝に入る前、同じ休暇に入っていたシグナムに買い物を頼んでいたんだった、と。

「あーごめんな、ライン」

「いいえです」

申し訳なさそうにラインフォース？に謝るはやて。

それを気にしていないとでも言うように笑みを浮かべてそう返したラインフォース？。

「お礼に、今日はずんとおいしい夕ご飯作るな」

「はいです！...」

「おお！ 手伝うよ、マイスター！！」

八神家は今日も笑顔が絶えない家族だった。

新暦80年 11月13日 PM14:28

ミッドチルダ首都クラナガン

「今日はいつもより冷えるな・・・」

スーパーで夕飯の買い物を済ませ、車を停めてある駐車場へ向かうシグナム。

両手にぶら下げている重い買い物袋を手に、すれ違う人たちを緩やかに避けていく。

車へとたどり着き、助手席に買い物袋を置き終わり、いざ愛する家族の待つ家へと帰ろうと運転席側に回ったその時、

「なんだ・・・？」

震動を感じた。

駐車場にいる他の買い物客も感じ取れるほどの震動。

「今は・・・爆発・・・！」

周辺を見回し、遠くに黒煙が上がっているのを見、車のドアを閉めてロック。

シグナムは管理局員として、爆発によって起こった現場へと走る。

車は使わない。これから混乱している場所へと向かおうというのに、行動を制限されるような車に乗ればそれだけで到着が遅れると知っているからだ。

「くそ……、またテロなのか……！」

「一体これで何件目だ!？」

「管理局は何をしているんだよ!？」

シグナムが現場へと向かう最中、市民から怒りの声上がる。最近増えてきたテロリズム。しかも質量兵器を使用したものだ。今の管理局はテロに対しての対応に追われていた。

最近は少しなりを顰めていたが、再び首都クラナガンに悲鳴をまき散らした。

「シグナム一尉だ。状況は!？」

シグナムは炎と黒煙を上げているビルに着き、既に現場に着いているこの地区担当の地上部隊と合流する。

「お疲れ様です」と敬礼し、シグナムへと現状を告げる女性隊員。

「市民の何人かが人質として、あの隣のビルに立て籠もっているテロリストに捕まっている模様です。」

怪我人はいません。爆破されたフロア、その上下のフロアは無人でした」

「怪我人がいないことが不幸中の幸いか」

怪我人がいない事に安堵の表情を浮かべる。

そしていつもの事だった。テロを起こそうとも犠牲者が出ない。多からず怪我人は出るが、それでも死人だけは誰一人として出さなかった。

「……それと、向こうからはまだ何も言っただけですが、ですが……」

「やはり何かしらの要求はある、か。おそらくいつものあれだろうな」

「はい……。管理局体制の改革……」

管理局の掲げる魔法至上主義への不満。

人的被害は少なかったが、それでも大きな混乱を巻き起こした「S事件」。

そして、少なからず被害者を出したマリアージュ事件。

魔導師の人手不足、その所為で増える被害、犠牲……。

そこをどうにかしようとしているのが管理局反体制組織“レジスタンス”である。

魔法を使わず、どこから入手しているのか不明の質量兵器を使用する。

質量兵器を認可させる。それで現状が良い方向へと変わると信じているのだ。

「とは言え、自らもまた多くの被害を出しているのならそれは本末転倒だな」

“レジスタンス”が立て籠もっているビルへと視線を移し、呆れてものも言えないといった表情を浮かべるシグナム。

そして、予想通り、いつも通りの要求が“レジスタンス”から来た。

やはり管理局への不満を告げるだけの内容。

『 であるからして、今の管理局は腐っている！
J・S事件然り！ マリアージュ事件然り！ どちらも管理局に属する者が加害者側としていた！！』

“レジスタンス”の演説は止まらない。
ここ最近の管理局の失態を糾弾していく。
それから“アインヘリヤル”や“アルカンシエル”などの破壊兵器が認められて、どうして質量兵器が駄目なのかと説いた。

『 少しは頭を柔らかくしてもらいたい！
そこまで質量兵器を否定し、魔法にだけ頼るその体制が気に入らない！
質量兵器を少しだけでもいい。認めれば不必要な犠牲も出すことも無くなる筈だ！！』

“レジスタンス”の演説は尚も続く。
それを聞いている市民や管理局員は、いつも通りの内容、しかし頭から完全否定できない内容に頭を抱える。
確かに管理局の失態は続き、その在り方にも疑問を持つ人も増えてきた。

そこから行動を起こすのが“レジスタンス”と呼ばれる存在だった。

『 確かに、質量兵器は危険だと我々も理解している。
しかしそれは扱い方を間違った時の事だ。
使用目的をしっかりとすれば、頼れる武器になるのも事実だと我々は思っている！

だから考えてほしい。考える事を止めないでいただきたい。それだけをお願い』

それを最後の言葉として“レジスタンス”は、武装放棄し出頭すると告げた。

まずは人質を解放し、ビルの外に出す。

そして次に“レジスタンス”の六人が出てきた。

シグナムはビルから出てきた“レジスタンス”の一人と視線が合った。

シグナムは局の内外問わずに有名な騎士だった。

それを知っている“レジスタンス”の一人の男は、

「管理局は変わるべきだ。あなたもいつかは解るはずだ」

すれ違いざまに、シグナムに聞こえるように呟いた。

シグナムは何も答えず、人質立った市民へと視線を移した。

そのとき、

『いいねえ』

付近一帯に響き渡る声。

拡声機のようなもので大きくされた声が、さらに続けて発せられる。

『そういうのは嫌いじゃねえよ?』

ざわめく首都クラナガンの街の一画。

「どこからだ・・・!?!」

シグナムは、待機状態の“レヴァンティン”を手にする。

いつでもどんな事に対処できるように。

この場にいる地上部隊もストレージデバイスを手に、周辺を最大警

戒する。

次の瞬間、シグナムは言い知れない悪寒を感じた。そして、無意識にシグナムは叫んでいた。

「伏せるおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

その叫びのようなものを聞いた市民たちはビクツとし、隊員たちはそれに従って、近くににいる市民たちを力づくで伏せさせた。

キーンとフェードインしてくる甲高い音の後、頭上10m程の所で何かが連続して爆発した。

悲鳴が上がる。だがそれも爆発音で掻き消される。

爆発音で鼓膜をやられたのか両耳を抑えて蹲る者、痛みを堪えてここから逃げ出そうとする者など、市民が一斉に動に転じた。

極まる混乱の中、シグナムは、

「レヴァンティン！！」

A n f a n g

騎士甲冑を纏い、炎の魔剣“レヴァンティン”を手にして臨戦態勢に入る。

「お前たちは市民の避難誘導の方を頼む。

こちら本局武装隊、シグナム一尉。緊急時につき、飛行許可をお願いしたい」

地上部隊に避難誘導を頼み、「了解しました」という返答を聞きつつ市街地の飛行許可を取る。

ノイズ混じりの通信だったが、それでも飛行許可を取り付けたシグナムは空へと上がる。

攻撃は上空から。攻撃方法は“レジスタンス”のような質量兵器ではなく魔法によるもの。

それゆえにまだ攻撃の実行犯がいるであろう空、たといもなくとも空から不審者を探索しようと考えたシグナム。

一気に空へと翔け上がり、周囲を見渡す。

「遅かったか・・・？」

「こいつはビックリ。結構速いな・・・」

頭上から聞こえた声に、シグナムはすぐそこから離れ、声のした方へと視線を向ける。

そこにいたのは、踝まで隠すほどの純白のロングコート。

体型と声からして若い男。大体20代半ばと読んだシグナム。

フードを顔が隠れるまで被っているために、顔が見えないから声で判断するしかなかった。

「今の市街地への魔法攻撃はお前か？」

“レヴァンティン”を構え、いつでも行動できるようにしておく。

一目見た瞬間に、あの白い男は只者ではないと直感が告げたのだ。

白の男は暫し沈黙し、それから拍手しながら笑い声を上げ始めた。

「何が可笑しい・・・！」

怒気を含んだシグナムの声に、白の男は笑うのを止め、言葉を紡いだ。

「そりゃ可笑しいさ。ご高名なるシグナム一等空尉殿。

オレが犯人だと、違っていても関係者だと踏んでいるんだろ？」

それなのに態々確認を取るつつのが、なんとまあお気楽と言うか何と言うか。

でもまあそれが管理局だ。立派に務めを果たしてる。褒めこそはすれ馬鹿にするのはさすがに違うよなあ、あー分かっているとも」

余裕に満ちた態度と声の男。

シグナムは少し苛立ちを覚えたが、努めて冷静なまま話を続ける。

「それでは、お前が攻撃犯だとしてもいいのだな・・・？」

「イエス、と言いたいところだが、答えはノー。」

今のはオレじゃねえよ。オレらのお仲間による散弾砲つつう魔法だ。オレはそれがどんなのか知りたくて、空から見学してたわけだ」

中遠距離からによる砲撃魔法の一種だと判断し、シグナムはさらに周囲に気を配り始める。

オレら。つまり他にも複数の仲間が付近にいると考えてだ。

シグナムが周囲を警戒していると察した白の男は、

「無駄だよ、無駄。アイツは近くにはいねえよ」

そのシグナムの行動を無駄だと断じた白の男。

「それを信じると？」

「そっちの勝手だ。ま、こればかりは本当だって。

オレってばさ、仲間内では結構な正直者で通っているんだぜ？」

両者の距離を大体13mとして、向かい合うシグナムと白の男。

「お前たちの目的はなんだ？ 他に仲間は何人いる？」

「目的？ うーん、そうだな……。それはボスが言う事だしなあ。悪いけどオレは言えねえわ、ホント悪いね。」

あと、仲間つつうのは、ええと……。ひいふうみい……。

悪い、これ以上の情報漏えいはやめとくぜ、あつはつはつはつは！
！」

白の男から次々と入る情報。

白の男を含めた複数人から成りたつ組織で動いているという事。ボスと呼ばれる主犯格が存在している事。

目的は全てそのボスから発信されているらしい事。それから構成人数は不明。

「なるほど……。ならばお前を捕えた後で、じっくりと話を聞かせてもらおう」

シグナムが“レヴァンティン”の切っ先を白の男へと向ける。それでも白の男の飄々とした態度は変わらず、余裕に満ちていた。

「オレと闘^やるってか……。やめといた方が良くないかなあ？」

フードの上から頭を搔く仕草をする白の男。

「それはなんだ？ お前は私より強いと自負しているのか？」

威圧感を放ちつつ、白の男へとそう告げる。

「どうだろうなあ。剣じゃオレは勝てないだろうな。」

何せ相手は、今は失われし“夜天の魔導書”の守護騎士プログラム“ヴォルケンリッター”が将、烈火の将シグナム殿だしよ」

「なっ!？」

シグナムの表情が驚愕に染まる。

その事実を知るのは、管理局内でも本当に一握りの存在でしかないからだ。

それを知っていて当然とでも言うように口にした白の男。

シグナムは言い知れない不安を覚えた。

「つつわけで逃がさせてくれないっすか？ シグナム一尉殿」

「っ! 待て!！」

シグナムが一気に距離を詰める。

何故、管理局内でも第一級クラスの秘匿情報を知っているのかも含め、白の男に問い質すためにシグナムは動く。

シグナムが戦闘行動に移った事を視認した白の男は、飄々とした態度を変えずに話を続ける。

「さつきから謝ってなんだけどさ、お宅らには相応しい相手がいるんだよ、お仲間の中に。」

ソイツがお宅らを斃すんだっていきり立っててさ、大変なんだよ。だからここでオレが落とされるわけにもいかなえし、あんたを撃墜するわけにもいかないってわけだ」

シグナムの疾い剣閃を紙一重で避ける白の男。

シグナムは心の内で、「守護騎士わらに相応しい相手?」と考える。

何が相応しいのかは不明だが、おそらく良くない事だと感じたシグナム。

「でもま、こっちはこっちで逃げないといかねえし、ちょっとくらい傷つけてもいいよな・・・？」

そう言った瞬間、“レヴァンティン”を振るった右手首を掴み取った。

そして逆の右手で“レヴァンティン”の刀身を掴んでいる。

再度驚愕に染まるシグナムの表情。

剣筋を見切られた。その上で“レヴァンティン”と腕を抑えられ、攻撃をキャンセルされた。

これほどの動体視力を持つのは、シグナムが知る限り数えるほどしかない。

その数人の中に新たに追加された目の前にいる白の男。

「レヴァンティン！」

Explosion

“レヴァンティン”がカートリッジを一発ロードする。

それと同時に“レヴァンティン”の刀身に紅蓮の炎が生み出された。

「うおおいつ!? 危なねえ、ハア、それが紫電一閃か。やっぱりすげえな・・・！」

いきなりの炎によって慌てて下がる白の男。

白の手袋を外して、右手が火傷していないか確認している。

しかしそれでも飄々とした態度は変わらない。

「紫電一閃かあ。いいぜ、そんなの見せられたら、こっちも何かお返しに見せないとな」

そう言い放ち、白の男の背後に黄緑色の魔法陣が縦に描かれ始めた。その魔法陣の形状を知っているシグナムは、その魔法陣の名を口にする。

「召喚魔法陣！ お前は召喚士か！？」

「んあ？ あー違う違う。俺はそんな大層なもんじゃねえよ？ 何つつか、まあいいや。そんじゃ、その綺麗な目でよく見な。オレの大切な相棒、名は……無限の永遠^{ラギオン}」

白の男が魔法陣上へと移動する。

そして魔法陣の中央から溢れだす強大な魔力に、シグナムの背筋は凍った。

ゆっくりと姿を現す異形の姿。それはどう見ても生物ではない。今シグナムの目の前に在るソレを生物として認可すれば、そこらにある瓦礫も生物として認可しなければならなくなる。

「何だ……？ ソレは一体何だ……！？」

ソレから発せられる鼓動のような音を耳にしながら、シグナムは白の男へと訊ねる。

白の男は、そんなシグナムの困惑が嬉しいのか静かに笑いだした。ラギオンと呼ばれたソレは、無限を表す の形、その中央に永遠を表す円環が重なった姿だった。

全てが黄金で出来ているかのように神々しい金色に輝いている。

「いつか知るさ。さあラギオン。いっちょ逃げるために撃つとする

か

ラギオンの中央にある円環が回り始める。
そこから生まれる音はまるで何かしらの楽器から流れる音色のよう
に美しかった。

シグナムははつとし、“レヴァンティン”を鞘へと納め、何発か力
ートリツジをロードする。

「逃すか!!!」

シグナムが放とうとするのは飛龍一閃。

砲撃級ともされるほどの威力を有する魔力付加斬撃。
鞘から“レヴァンティン”を抜き放とうとしたそのとき、

「どつちが強いかわるつことよろしく!」

ラギオンの前面に魔力が集束していく。

ソレは魔導師が扱う集束砲と似通ったものだった。

シグナムは発射を防ごうと、先に飛龍一閃を抜き放つ。

「はああああああ!!!」

「撃て、ラギオン」

しかし間に合わず、白の男の号令の下、ラギオンから放たれた白い
砲撃。

シグナムの飛龍一閃とラギオンの放った砲撃が衝突する。

空を流れ覆っていた雲が散る。曇り空だった空が一時晴れ渡った。

威力は互角で、せめぎ合っているかに思えたが、若干飛龍一閃が押
され始める。

そこへ、

『こちら第2031航空隊。シグナム一尉、援護します!!』

シグナムと白い男たちの元へと飛んできている航空魔導師隊。

シグナムはまずいと思った。目の前にいる敵は普通ではないと。

幾度も戦線を越えてきたからこそ分かる白い男と不思議な存在たるラギオンの危うさ。

だからこそ、

『いかん！今は来るな!!』

そう念話で返した。

今こちらに向かつて来ている航空部隊では歯が立たないと分かっているからだ。

「……は？ いやいや、何やってんのさ？……んー知らねえぞ？

ううわつ、知らないつと。つたく、手綱はきちんと握ってほしいもんだね」

突如視線を彷徨わせて独り言を発する白の男。

シグナムは念話で仲間と話しているのだと判断。

だが何故態々声に出すのかは不明だったが。

「あー、もうこれはやっぱい。かなりやばいぞ、おい。

なあ、シグナム一尉。散弾砲の第二波がもうすぐここに落ちてくる。こっちに向かつて来てる仲間を失いたくないなら、相殺するしかねえよ？」

「つぐ！ うく……（非殺傷設定ではない！？）ま、待て！
貴様は一体何者だ！？」

ラギオンの砲撃が、シグナムの飛龍一閃を弾き飛ばし、シグナムのすぐ側を通過していった。

シグナムは至近を横切っていった砲撃が生んだ衝撃波にかなりの痛手を負いながら問い質す。

その質問に、白い男はこう返した。

「そうだな。一応、陽気なる勝者つつ名前をボスから貰ってる。悪いな、本名じゃなくてさ。ま、機会があつたら教えるさ。」

また……はないかもな。今度お宅らヴォルケンリッターが出遭うのは……」

陽気なる勝者と名乗った白い男とラギオンの姿がかき消える。

最後に陽気なる勝者の言った言葉は、しっかりとシグナムの耳に入っていた。

お宅らを唯一裁ける断罪者だ。それでお宅らは終わりだよ

シグナムは負ったダメージでフラつきながらも、陽気なる勝者の言っていた散弾砲の第二波に備えて、“レヴァンティン”のカートリッジを数発ロードする。

そこで合流した第2031航空隊に、今から落ちてくる散弾砲への同時攻撃を提案。

自分一人では足りないというのであれば、仲間の力を借りる他はないとして。

「レヴァンティン、行くぞ」

シグナムを始めとした第2031航空隊の魔導師たちは空を見上げる。

そして、陽気なる勝者の言っていた通りに、散弾砲であろう蒼い光球が落ちてきた。

シグナムはその魔力光を見て、ある一人の男を思い出していた。

5年前にこの世界を護り、そして去ってしまった一人の男の事を。

蒼の魔力光。それは奇しくもその男の魔力光と同じサファイアブルーだった。

(今は余計なことは考えるな。優先すべきはあの砲撃のみ・・・！)

シグナムは頭を振り、

「撃て!!」

号令を下す。

15人の魔導師が手にするストレージデバイスから放たれる砲撃魔法。

威力は落ちてくる蒼の光球とは比べるまでもなく弱い。弱過ぎた。

しかし、蒼の光球が小さくなったことは間違いのない事実だった。

これならいける、と踏んだシグナムはもう一度飛龍一閃を解き放つ。

「はあああああ!!!!」

衝突する蒼と紫の閃光。

シグナムはこれで散弾砲による攻撃は防げたと思った。

だが、蒼の光球はそこで本来の効果を発揮した。

陽気なる勝者の言っていた散弾砲という名の通りに。

突如蒼の光球が弾けた。幾つもの閃光となって周囲に散らばり、

「全員最大防御!!」

パンツァーガイスト・パンツァーシルト

シグナムの半ば悲鳴のような大声と同時に一斉に爆発した蒼の閃光群。

シグナムもまた防御へと魔力を回し、前面にベルカ式魔法陣の盾を展開。

その上で魔力を纏い防御力をさらに上げた。

航空魔導師たちは経験と直感からして、シグナムの叫びの前に防御若しくは回避行動に移っていた。

彼らは以前、あの有名な高町なのはの教導に鍛えられた部隊だった。

しかし、それでも無傷とはいかなかった。

ある者は同僚に肩を貸してもらっていたり、気を失い抱えられている者もいた。

炸裂する前に威力が減衰されていた事で、これだけの、撃墜という犠牲者が出るような被害は無かった。

「はあはあはあはあ……あ……?」

「シグナム一尉!？」

肩で息をしていたシグナムが突然落下を始めた。

それに気づき、自らも軽くないダメージを負っているにもかかわらずシグナムを受け止める女性魔導師。

「シグナム一尉!？ 大丈夫ですか!？ シグナム一尉!!」

シグナムは、先に負ったダメージとリンカーコアの負荷によって意識を失っていた。

そして、そんな彼女たちをさらに上空から見つめる一つの影。

それは女性であることは間違いなかった。

女性特有の身体のラインが、陽気なる勝者と同じ純白のコートの上から確認できるからだ。

ボソツと何かを呟き、そしてその姿はゆっくりと消えていった。

新たな始まりは砲光の中で } F i r s t e n c o u n t e r 1 }

(後書

はい、始めました真・最終章シアワセの在処。

完全バトルもののシリアス多となります。

すいません、あまり笑いどころは多くないかと思えます。

そして今現在、後編執筆中です。

今日の深夜には投稿できるかと思えます。

空の英雄を測る者たち 〈First encounter 2〉 (前書き)

このエピソード、完全にACE COMBATの影響を受けまくっています。

VS 堅固なる抵抗者マルフィール隊 イメージBGM

ACE COMBAT 5 “8492”

空の英雄を測る者たち 〈 First encounter 2 〉

新暦80年 11月13日 PM14:35

第4管理世界カルナログ

ここカルナログにある時空管理局カルナログ地上本部へと向かう三つの影。

三角形の隊列で飛行し、一糸乱れぬ軌道で空を翔ける。

その三人は、第一世界ミッドチルダに現れた男陽気なる勝者と全く同じ格好だ。

どれもが純白のコートを纏い、フードを目深に被っている。

しかし纏う空気は陽気なる勝者のような陽気さではなく歴戦の戦士のような風格だった。

【堅固なる抵抗者より各員へ。現時刻より五分後、PM14時40分。ボスより承った任務を実行へ移す】

先頭を飛行する者堅固なる抵抗者から、後ろを飛行する二人へと彼らの独自回線による念話を入れる。

【堅固なる抵抗者の右腕、了解】

【堅固なる抵抗者の左腕、了解】

堅固なる抵抗者に答える後ろを飛行する者たち。
堅固なる抵抗者の右腕は若い男の声を、堅固なる抵抗者の左腕は幼さの残る少女の声を発した。

【任務内容を確認】

【任務内容確認、了解。PM14時40分に任務を実行。第4管理世界カルナログにある时空管理局地上本部への攻撃。及び市街地への攻撃。攻撃における一般市民の死者数はゼロとする】

マルファイール 堅固なる抵抗者に答える堅固なる抵抗者の左腕。マルファイール・イスキエルド

女性特有の細さと膨らみを持つていることがコートのラインから窺い知れる。

落ち着いた口調、しかし言っている事は物騒極まりなかった。

【そして、任務妨害を行う者に対し、深き慈悲を持つて交戦すること。最低限の犠牲は止むを得ないとする】

マルファイール・テレチヨ 堅固なる抵抗者の右腕が続けて口にする。マルファイール

堅固なる抵抗者は二人から任務内容を聞き、間違いがないことを確認。

ただ静かに【うむ】とだけ告げた。

そして任務開始時間のPM14時40分。

【堅固なる抵抗者隊、任務開始】マルファイール

【【了解】】

三人は威力を極限にまで抑え込んだ射撃魔法を、眼下に広がる市街地へと撃ちこんだ。

死者が出る事はまずあり得ず、多少の怪我をするだけの射撃魔法。それが雨のように降り注ぐ。

それは白という天使のような格好でありながら、為している事は悪魔の所業だった。

市街地では市民の悲鳴が木霊する。

同時刻 カルナログ時空管理局地上本部第12演習場

『スクランブル。市街地へ魔法攻撃が行われた。

現場に最も近い教導隊第5班に出撃命令。

演習を一時中断し、現場へ急行せよ。

魔法攻撃の実行犯は尚も市街地への襲撃を繰り返している。

至急、魔法攻撃を止めさせ、襲撃犯を逮捕せよ。

繰り返す。市街地へ 』

演習場に響き渡るスクランブル放送。

ざわめき立つ演習を行っていた航空部隊に入隊したばかりの新人たち。

しかし、ざわめきその中で、航空部隊に叱咤を飛ばす者が一人。

「うつせえ！・・・あたしらは少し出てくるから、テメエらは待機！！」

小さい外見だが、それでも人より長く生きている歴戦の騎士。

“元機動六課スターズ分隊副隊長”、鉄槌の騎士の二つ名を持つヴィータ二等空尉だ。

ヴィータの叱咤に押し黙る新人航空魔導師たち。

そのヴィータの隣には、ヴィータと同じ“元機動六課スターズ分隊長”を務めた女性がいた。

管理局内外を問わず有名な航空魔導師。

高町なのは一等空尉。エースオブエースと謳われるほどの猛者である。

「みんなはウィータ二尉の言う通り待機。

……こちら教導隊第5班高町なのは一尉。任務了解しました。市街地の飛行許可を……」

ミッドチルダでシグナムを苦しめた陽気なる勝者の仲間であろう堅固なる抵抗者隊を迎え撃つべく、なのはとウィータが空へと上がった。

同日 カルナログ首都上空

市街地より地上本部へと移動を始めた堅固なる抵抗者隊。

【堅固なる抵抗者の右腕より堅固なる抵抗者へ。

敵航空魔導師、数は二の接近を確認。事前情報にあつた例の英雄二人で間違いない】

堅固なる抵抗者の右腕が少し顔を上げ、堅固なる抵抗者へと告げた。

【堅固なる抵抗者、了解。高町なのは一等空尉と守護騎士ヴォルケ
ンリッター・紅の鉄騎ウィータだな】

【現在の英雄高町なのは……。お手並み拝見といきましょう。
どれほどの腕を持つ教導魔導師なのか……】

彼ら堅固なる抵抗者隊のはるか前方に、二つの閃光がこちらに向か
つてくるのを今になって視認出来た。

赤色と桜色の魔力光。堅固なる抵抗者の右腕の索敵能力によって、
その二つの閃光が視認出来るより以前にしっかりと捉えられていた。

【では堅固なる抵抗者隊。英雄に対し最大の敬意を持って交戦せよ】

【堅固なる抵抗者の右腕、了解】

【堅固なる抵抗者の左腕、了解】

三角形の隊列から横一線の隊列へと変更される。
三人のフードの中に隠れた目が妖しく光を放つ。

（高町なのは……か。フツ、13年ぶりに見せてもらおうとしよう。
高町、あれからお前がどれほどの力を身に付けたか……）

堅固なる抵抗者は静かにほくそ笑む。
それは教師が久しぶりに生徒と再会する事を楽しんでいるかのよう
に。

同日 カルナログ首都上空

「あいつらか。市街地へ魔法攻撃なんつう馬鹿げたことしやがった
のは……!」

ヴィータが怒りを露わにして、前方にいる三人を睨みつけた。なのも同じ事を思っていたが、口には出さずに三人の航空能力をじつくりと観察していた。

「気をつけて、ヴィータちゃん。あの人たち……」

「ああ、分かってる。あいつら間違いなく強えな。新人たちをもし連れて来てたらヤバかった」

一目見ただけで分かるほどの卓越した航空能力。そのことから、相手はかなりの腕を持った航空魔導師だと判断した。

「こちら時空管理局高町なのは一尉。

市街地へのテロ行為、その他の罪状であなた方を逮捕します。武装を解いて投降してください」

なのはが武装解除と投降を促すが、それに返答しないまま飛行を続ける三人。

そして今度はヴィータが、

「大人しく投降しねえと落とすぞ？」

半ば脅迫のような事を言い出した。

それを聞いていたなのは若干困り顔になったが、すぐに真剣な表情へと戻した。

「こちら堅固なる抵抗者隊長堅固なる抵抗者。」

大変心苦しいが、そちらには従えない。許したまえ」

『『マルファイール隊？』』

聞き慣れない単語とその発音に、心の内で首を傾げるのはとヴィータ。

現在確認されている世界で使用されている言語のいずれかにも該当しないものだったからだ。

『時空管理局の空の英雄高町なのは一等空尉、そして元“夜天の魔導書”の守護騎士プログラム“ヴォルケンリッター”が紅の鉄騎ヴィータとお見受けする』

『なっ！？ なんでそれを・・・！？』

『あなたたち、一体何者ですか？（この声・・・どこかで・・・）』

ヴィータはシグナム同様驚愕しうろたえる。

理由もまたシグナムと同じ。管理局内でも知る者はかなり制限される情報を、目の前のテロリストが握っているからだ。

なのはも内心驚愕するが、努めて冷静に三人へと問いかける。

そして別の思いも生まれる。聞こえてきた声に、どこか懐かしいものを感じ取ったからだ。

『先程名乗った通りだよ、英雄。』

『マルファイール 堅固なる抵抗者隊長 堅固なる抵抗者。そして随伴するのは私の部下である・・・』』

『マルファイール 堅固なる抵抗者隊、マルファイール・デレチヨ 堅固なる抵抗者の右腕』』

『同じく堅固なる抵抗者隊、マルファイール・イスキエルド 堅固なる抵抗者の左腕』』

徐々に縮まる両者の距離。

堅固なる抵抗者隊からの自己紹介を受け、ますます混乱するのは
とヴィータ。

だが、次の言葉で否応でも戦闘を開始するほか無くなった。

『君たちの力量を実際に戦って測らせてもらおうしよう。堅固なる
抵抗者隊、交戦開始。散開』

『交戦開始、了解』

堅固なる抵抗者隊が散開し、三方向からの射撃魔法を撃ってきた。
その魔力光は碧、黄、赤の信号機のような色だった。
なのはとヴィータもまた散開し、仕方がなく応戦する。

「くそ。 teme いら、何が何でも話してもらおうぞ!!」

Explosion

シュヴァルベ・フリーゲン

「おおおらあああ!!」

8つの魔力弾を“グラーファイゼン”のヘッドで打ち飛ばす。

標的にされたのは堅固なる抵抗者の右腕。

右手を前方に翳し、黄色のシールドを張る。魔法陣はミッドチルダ
式のものだった。

全弾受け止めた後、左手の人差し指をヴィータへと向ける。

バリアブレイク・プレート

黄色の射撃魔法。三つの魔力弾が人差し指から放たれる。ヴィータは速さにバラつきのある魔力弾を誘導性のあるものと判断し、注意を払う。

回避ではなく迎撃を行うため、一つを新たに生み出したシュヴァルベ・フリーゲン単発で相殺。

一つを振り下ろした“グラーフアイゼン”で粉碎。最後の一つが目前に迫り、

パンツァーシルト

赤いベルカ魔法陣によるシールドを展開。衝突した瞬間、ヴィータの張ったシールドが容易く粉碎された。あまりの呆気なさに目を見開くヴィータ。

「何しやがった!？」

「……フツ」

堅固なる抵抗者の右腕が放った射撃魔法バリアブレイク・プレートマルファイール・テレチヨは、対防御魔法の効果をも有する魔力弾だ。

防御魔法全般のプログラムに割り込みを瞬時に掛け破壊するといふもの。

バリアジャケットにも効果がある為、直撃は即撃墜となる危険な魔法だ。

その反面、防御魔法以外には弱く迎撃されやすいというデメリットを抱える。

「さあ行くぞ」

ヴィータへと突撃してくる堅固なる抵抗者の右腕。マルフィール・テレチヨ
純白のコートははためかせ、黄色の魔力光を纏つての突撃。

「マジか!?!」

P f e r d e

ヴィータの両足に魔力による渦が発生する。

彼女の有するフェアーテと呼ばれる高速移動魔法。

突撃してきた堅固なる抵抗者の右腕をギリギリでかわし、すれ違いざまに“グラフアイゼン”を腹部へ叩きこんだヴィータ。

「ぬッ!?!」

体がくの字に折れ曲がる堅固なる抵抗者の右腕。マルフィール・テレチヨ

彼は苦悶の声を漏らし、

「おおおおらあああああ!?!」

ヴィータの気合の入った声と共に振り抜かれた“グラフアイゼン”によって、吹き飛ばされる。

きりもみ状態のまま吹っ飛ばされている堅固なる抵抗者の右腕へと、マルフィール・テレチヨ
今度はヴィータが突撃する。

「アイゼン! R a k e t e n F o r m ラケーテン・・・
ハンマアアアーーーー!!」

“グラフアイゼン”をラケーテンフォームへと変え、ヘッドブー
スターが点火、高速回転し遠心力いっぱいの一撃をお見舞いしようと空を翔ける。

なのはは、マルファイール 堅固なる抵抗者とマルファイール・イスキエルド 堅固なる抵抗者の左腕二人を相手に善戦していた。

セイクリッド・クラスターによる弾幕で相手の行動を制限し、隙あればデイバインバスターによる一撃必倒を狙う。

「さすがだ、エースオブエース・高町なのはは一尉。恐ろしいよ。凄まじい才能だ。そしてよく鍛えられている。」

これは事前情報における戦闘能力数値を上方修正する必要がある」

「……どこかで会ったことがないですか……?」

マルファイール 堅固なる抵抗者からの贅辞に質問で返すなのは。

なのははどうしても気になっていた。マルファイール 堅固なる抵抗者の声に聞き覚えがあるからだ。

だが記憶に霽がかかり、もう少しで思い出せそうなのに思い出せない状態が続いていた。

【マルファイール・デレチヨ こちら堅固なる抵抗者の右腕。 援護求む】

【マルファイール・イスキエルド 堅固なる抵抗者の左腕、 援護要請了解】

ヴィータの猛攻を受けているマルファイール・デレチヨ 堅固なる抵抗者の右腕からの援護要請に、マルファイール・イスキエルド 堅固なる抵抗者の左腕は応え、赤い魔力弾を13発、ヴィータに撃ち込む。

それに気づいたなのはが、シールド突破に夢中になっているヴィータへと念話で知らせる。

ヴィータは上手く回避でき、放たれた魔力弾は味方のシールドに衝突し大爆発を巻き起こした。

「なんて威力!!」

なのはは、射撃魔法でありながら砲撃クラスの威力を持っていた魔力弾に驚愕する。

一体どれだけの魔力が注がれていたのか。

あまりの威力になのはの背筋が凍った。

「よそ見をしている場合か、高町なのは一尉？」

ホーミング・レイ

「つく・・・！ レイジングハート!!」

Strike Stars, Standby

迫る追撃性のある三条の光線を、アクセルフィンによる高速移動で回避するのは。

その間に砲撃魔法を準備する。そして回避しきるのを不可能とし、効果を高めたシールドで防ぎきる。

そこに迫る堅固なる抵抗者マルフィール・イスキエルドの左腕。彼女が手にするのは魔力で構成された赤い投槍。

(今なら一網打尽に出来る・・・！)

ちょうどいい位置に堅固なる抵抗者マルフィールと堅固なる抵抗者マルフィール・イスキエルドの左腕が集まった事で、なのははチャンスとして砲撃を撃った。

ストライク・スターズ

なのはの周囲に発生した数個のスフィアからの射撃、そして“レイジングハート”の先端から放たれた特大の砲撃による同時複数攻撃が、二人に襲いかかる。

「迎え撃ちます」

ウンフォルエンデッド・ピーケ

迫るなのはの砲撃を真つ向から迎撃せんと赤の投槍を放つ堅固なる抵抗者の左腕。マルファイ

未完の長槍という意味を持つベルカ式の魔法だった。

桜色の砲撃と赤い投槍が正面から衝突し大爆発。

威力は互角だったことにより、砲撃と投槍は消滅した。

だが尚も残るはスフィアから放たれた幾条もの射撃魔法。

それを防がんとするのは堅固なる抵抗者。マルファイ彼の両手が前面に翳され、

デュアル・ディフェンダー

ミッドチルダ式の魔法陣のシールドが展開される。

二重に展開されたそのシールドを見て、なのはは「あ！」と声を上げる。

ようやく思い出したのだ。目の前で自分の射撃魔法を防ぎきった堅固なる抵抗者の声マルファイが誰のものなのかを。

「デミオ・アレッタ三佐・・・!?」

なのはは一人の名前を口にする。デミオ・アレッタ三等空佐。

かつてなのはが世話になったアグレッサ教導魔導師の一人。

短い期間での付き合いだったが、人柄が良いアレッタ三佐になのはは親しみを持っていた。

そんななのはデミオから教導隊員としてのイロハを教わっていた。今の教導隊員としてのなのはがいるのもアレッタ三佐のおかげもある。

それからは会う事も無く記憶の片隅に追いやられていたが、今の二重シールドを見て思い出したのだ。

「どうして……？」

なのは知らずそう呟いていた。

爆煙から無傷で現れる堅固なる抵抗者の右腕。マルフィール・デレチヨ

「おい、マジかよ。あんなのを受けて無傷って……、どんだけ堅え防御なんだ……？」

さすがのヴィータも、今ので堅固なる抵抗者の右腕マルフィール・デレチヨが落ちたと思っ
ていた。

非殺傷とはいえ、あの赤い魔力弾の威力は異常だった。

それゆえに敵の命の心配をしていた。

だが、その心配は杞憂で終わった。

「今のはさすがに肝を冷やしたな」

（フルドライブかそれ以上じゃねえと勝てねえな、こいつには……）

安堵のため息をついている堅固なる抵抗者マルフィール・テレチョの右腕を見て、ヴィータはある選択を強いられていた。

フルドライブを使って勝ちに行くか否か。

確かにヴィータのフルドライブならば彼の強固な障壁を突破できるだろう。

しかしあるデメリットもあった。

機動力、防御力が著しく低下してしまう攻撃力重視の大き目な形態だからだ。

（振り上げてる最中にさっきの魔力弾食らったら即撃墜だよな・・・）

ヴィータは横目でなのはたちの戦闘を見た。

（何してんだ・・・？）

戦闘行動を中断し、向かい合っているのはたち。

その光景を見て、一体何をしているのかと考えた。

そこに、

「教導官たる者が戦闘中によそ見とは・・・。

少し質が落ちたんじゃないか、現在の教導隊いまは・・・？」

バリアブレイク・ブレット

「うお！？」

黄色の魔力弾が8つ。それがヴィータの脇を通り過ぎていった。

驚きと中らなかつたことへの安堵が心の内に拡がる。

そして何故中らなかつたのかという疑問、その答えが瞬時に出た。

「テメエ、態と外しやがったな……！」

外れたのではなく外された。

ヴィータにとって、それは屈辱以外の何物でもなかった。

「ならば次は気をつける」

「テメエ……。上等じゃねえか」

“グラーファイゼン”をハンマーフォームへと戻し、

Schwalbe fliegen

前面に赤い魔力を纏った鉄球が次々と設置されていく。

誘導操作弾による弾幕展開、対称の行動制限、そこに強烈な一撃を与える。

よくなのはが使用する手の一つだ。

「こいつでどうだ……！」

シュヴァルベ・フリーゲン

ヴィータは何度も往復させながら“グラーファイゼン”のヘッドで誘導弾を打ち放っていく。

十数発という誘導弾が一斉に堅固なる抵抗者の右腕を強襲する。マルフィール・デレテヨ

「なるほど。悪くは無い、というよりは基本だな」

落ち着き払い、冷静に評価する堅固なる抵抗者の右腕。マルフィール・デレテヨ

迫る誘導弾をシールドで弾き、または彼の攻撃用の魔力弾で相殺していく。

だが一向にヴィータの誘導弾の数は減らない。

何故ならヴィータが次から次へと打ち放っていつているからだ。

「アイゼン!!」

G i g a n t f o r m

シュヴァルベ・フリーゲン

先程まで打っていた小さな鉄球ではなく、一回り以上大きい鉄球が四つ配置され、赤い魔力が覆う。

それをギガントフォルムとなった“グラーフアイゼン”で打ち放つ。未だに幾つかの誘導弾の対応に追われていた堅固なる抵抗者マルフィール・テレチヨの右腕へと迫る。

E x p l o s i o n

“グラーフアイゼン”が何発かカートリッジをロード。

振り上げられたギガントフォルム状態である“グラーフアイゼン”のハンマーヘッドがさらに巨大化する。

それはかつて“闇の書事件”の最終決戦で使用された一撃を放つための形態だった。

「轟天爆砕!!」

「む!?」

堅固なる抵抗者マルフィール・テレチヨの右腕から驚愕の聲が上がる。

明らかに対人に使っていないようなモノではないからだ。

あまりの光景に彼はつい動きを停めてしまい、対処していた誘導弾が何発かの直撃を受けた。

そこにサイズが大きいシュヴァルベ・フリーゲンが続々襲いかかっていく。

それにはきちんとシールドを展開し防ぐが、

「ギガント・・・シュラアアアーーーーク!!!」

そこに振り下ろされるヴィータの一撃必倒の威力を持つ“グラーフアイゼン”。

オーバー・ラウンドシールド

堅固なる抵抗者の右腕マルファイール・テレチヨの前面に何重にも重ねられたミッド魔法陣のシールドが展開される。

次の瞬間衝突。ドゴオオン!!!という轟音を立てて、地上に向けて急速落下していく堅固なる抵抗者の右腕マルファイール・テレチヨ。

「・・・あ、ヤベえ。やり過ぎちまった・・・!」

ヴィータは心底やり過ぎたと反省していた。

だがそのやり過ぎたという思いは容易く覆される。

落下途中で堅固なる抵抗者の右腕マルファイール・テレチヨが体勢を整えたのをその目で見たからだ。

「あ・・・ありえねえ・・・。まるでアイツみてえだ・・・」

ヴィータはかつて今と同様にギガントシュラクを食らわせた一人の男を思い出していた。

【堅固なる抵抗者より各員。増援部隊が迫ってきている。これによりただいまを持って任務遂行失敗とし、現空域より離脱する】

時間をかけ過ぎたことで増援部隊の接近を許した事に気づき、堅固なる抵抗者は部下二人に撤退を指示した。

【……堅固なる抵抗者の右腕、了解】

堅固なる抵抗者に答える堅固なる抵抗者の右腕。
あのギガントシユラクの一撃を受けながらも両腕の骨折程度で済ましていた。

そしてちょうどヴィータとの距離が開いていたこともあり、一切の問題無しに撤退を終えた。

【堅固なる抵抗者の左腕、了解】

自身の投槍となのはの砲撃によって起こった爆発の衝撃に動きを停めていた堅固なる抵抗者の左腕。
彼女もまたその姿を忽然と消していた。

「アレッタ三佐！！ どうしてあなたのような立派な局員がこんな事を！？」

「高町一尉。人違いではないかね？」

私は堅固なる抵抗者だ。デミオ・アレッタという名ではない」

なのはへと冷たく返す堅固なる抵抗者。

それでも引き下がろうとしないなのはは何度も「アレッタ三佐」と呼び、投降を促す。

「何してんだ、なのは!」

シュヴァルベ・フリーゲン

堅固なる抵抗者の右腕に逃げられた事でイラついているヴィータが怒鳴る。

そして堅固なる抵抗者へと誘導弾を放った。

彼はそれを大した障害ではないとでも言うように、シールドを張って容易く防ぎきる。

「チッ、逃げられちまうぞ!」

ハンマーフォームへと戻していた“グラーフアイゼン”を手に近づいてくるヴィータ。

なのははヴィータの逃げられるという言葉を聞き、

「……アレッタ三佐、あなたを逮捕します」

“レイジングハート”を向け、拘束魔法を発動しようとした。

だがその時、堅固なる抵抗者が急に上空へと視線を移し困惑と焦りを含んだ声で囁いた。

「何てことを……!【どういっつもりだ誠実なる賢者!?!】」

再度ギガントフォルムとなった“グラーファイゼン”のヘッドで打ち放った巨大な魔力弾となのはが放った砲撃が、蒼の光球へと一直線に進む。

あと数秒で衝突というところで蒼の光球が弾け辺りに拡散する。

それを見た二人は直感的に來た路を急いで戻り、さらに低空へと逃げた。

その次の瞬間、蒼の光球から分かれた幾つかの光球が一斉に爆発した。

カルナログ首都上空を蒼一色に染め上げた散弾砲と呼ばれる砲撃。

なのはとヴィータは咄嗟の機転で直撃を免れ大事には至らなかつた。

「……………おいおい。なんつうタチの悪い砲撃だよ。

なのはのクラスターより物騒じゃねえか。なあ、なのは？」

「……………アレッタ三佐……………」

「……………はあ、こちらヴィータ二尉。

敵航空魔導師に逃げられた。よってこれより帰還する」

ヴィータが軽口を叩くが、なのはは堅固なる抵抗者マルファイールの事で頭がいっぱいだった。

自分にいろいろと教えてくれた先輩、デミオ・アレッタの事が。

ヴィータは、今はなのはに何を言っても無駄だと分かり、演習場へとなのはを連れて帰還した。

空の英雄を測る者たち 〈First encounter 2〉 (後書き)

この分だと飽きられるのはかなり早いかと思い、恐怖で震えています、マジで。

非情なる再会 〈 F i r s t e n c o u n t e r 3 〉

新暦80年 11月13日 P M 15:03

時空管理局本局 次元航行部第一オフィス

本局内を慌ただしく走る幾人も、局員たち。

ミッドチルダを始めとした主要世界での同時多発テロの対応に追われているからだ。

そしてここ次元航行部第一オフィスもまた慌ただしかった。

「フェイトさん、聞きました？ ミッド首都、カルナログ首都。

他にもヴァイゼン、フェディキア、エルドラド……。管理局施設と市街地へのテロです」

「うん、聞いた。今までのレジスタンスとは違って、質量兵器じゃなくて魔法によるものだよな」

神妙な面持ちで話す執務官フェイトとその補佐シャリオ。

彼女たちもまた別件のテロの対応に追われ、今ようやく片付けたところだ。

「それと、あのですね、未確認なんですけど……」

「ん？ 何か情報があったの？ シャーリー」

歯切れの悪い、言葉を濁すようなシャリオに、フェイトは彼女の愛称シャーリーと口にして先を促す。

シャリオも覚悟を決めたのか、先程耳にした情報をフェイトに伝える。

「クラナガンではシグナムさんがそのテロリストと交戦したそうです。」

それに、カルナログではなのはさんとヴィータさんが同様に別のテロリストと交戦したみたいなんですけど……」

「ということはもう犯人は逮捕できたの？」

「……いえ、両方とも逃げられたようなんです。」

それにシグナムさんについては落とされた、なんて事も……」

「うそ……」

フェイトは信じられなかった。

今挙げられた名前は、彼女にとっては大切な親友たちである。

そしてその実力の高さも嫌というほど理解している。

その彼女たちが犯人に逃亡を許し、あまつさえシグナムを撃墜されるなんて信じられない話だった。

「シグナムさんについての事は本当に未確認なんですけど、逃亡されたのは事実らしいです」

「そっか……。相手はかなりの腕を持つ魔導師ってことだね」

シヤリオの話に納得はできないが受け入れるフェイト。

「それとあと一つ、未確認情報が……」

シヤリオが迷いの表情を見せる。

そのシヤリオの様子に何か言い知れぬ不安が去来するのを感じたフ

エイト。

そしてシャリオは意を決し、その情報の話をし始めた。

「ミッド・カルナログの首都を最後に襲った魔法攻撃なんですけど……」

その砲撃と思われる魔法の色、魔力光が……そのですね……」

そこまで言って、シャリオはさらに迷いを見せる。

さすがにそこまで聞いて気にならないわけもなく、フェイトは先を促した。

「続けて、シャリーー。そこまで言われたら気になるよ」

「……フェイトさん。その魔力光というのが、それは綺麗な蒼色だったそうです。」

サファイアブルー。あのルシルさんと同じ魔力光です」

「え？」

フェイトが気の抜けた声を出す。

今何を言われたのか処理しきれていない状態だ。

目が泳ぎ、固まったままシャリオに何を言われたのか必死に処理しようとしているフェイト。

ルシリオン・セインテスト・アースガルド。

フェイトが異性として好きになっただただ一人の男。

その男と同じ魔力光が目撃された。

しかし、

「そ、それは……それはルシルのじゃない。」

ルシルなわけがない。だってルシルはもういない。

だから偶然だよ、シャリー。魔力光が同じ人はたくさんいる。
今回だつてきつと……違う人だよ……」

震えた声で否定するフェイト。

彼女は今までにも蒼色の魔力光を何度も見てきた。

だからフェイトは今回も別人だと思ふ事にした。

「テストメント……。世界の意思“界律”の命のままに戦い続ける存在。」

ルシルさんとシャルさんもそうなんですよね……」

シャリオが静かに呟く。

元機動六課の、特にルシリオンとシャルロッテと親しい人には知らされていた。

二人の正体である“テストメント界律の守護神”と呼ばれる存在について。

「……うん、もう会えないんだ……」

シャリオはやっぱり黙っていればよかったと後悔した。

フェイトはそれほどまでに沈んでいたのだ。

手持無沙汰になったシャリオは、フェイトにコーヒーを用意しようとしたとき、

「本局内に侵入者！ 服装から主要世界同時テロ犯の仲間であると思われる！！」

侵入経路は不明！！ 現在無限書庫に向かって進行中！

本局内に待機中の武装隊、及び執務官は白のコートを纏った侵入者を発見次第投降を促し、受け入れられない場合は交戦を許可する

」

緊急放送を聞いたフェイトの表情が変わる。
無限書庫。今そこには彼女の親友であるなのはの娘ヴィヴィオとその友達がいるからだ。

「フェイトさん！」

「うん！」

フェイトは勢いよくオフィスから出、騒然としている本局内を全力で駆ける。

シャリオはそれを心配そうに見送ることしかできなかった。

時空管理局本局 C6区画 第三広場

「止まれ！！」

バリアジャケットを纏った武装隊数人がストレージデバイスを侵入犯へと向ける。

対する侵入者は陽気なる勝者や堅固なる抵抗者隊と同じ純白のコートを纏った男女の二人組だ。

一人は両手首にはめられた枷から50?くらいの鋼色の鎖が一本ずつ垂れている。

それは繋がれていた檻から解き放たれたような男だ。

そしてもう一人の女は、体格からして先程ミッドチルダ首都クラナガン上空でシグナムを見つめていた女で間違いなかった。

「止まらなければ撃つー!!」

【誠実なる賢者、先を急ぎたい】

【ならば下がっている、祝福なる祈願者】

祝福なる祈願者が隣に立つ鎖の男誠実なる賢者へと言外に目の前にいる邪魔者をどうにかしろ、と頼む。
誠実なる賢者はそれに何の文句を言わず、ただ静に右拳に魔力を纏わせ始めた。

その色は遥かなる蒼、サファイアブルーだった。

「仕方がない。撃てええええー!!」

一斉に射撃、砲撃を放つ武装隊員。
祝福なる祈願者を庇うように前に躍り出、誠実なる賢者は右拳を床に殴りつけた。
右手首の鎖もそれに随伴し、金属音を立てながら床の上で跳ねまわった。

「うわあああ!!」「」「」

「ま、眩しい!」

蒼の光が波となり、二人に迫る武装隊員たちの魔法を全て掻き消した。
効果はそれだけでなかった。あまりの発光量に、完全に視界が閉ざされていた。
目晦ましとしての効果も十分にあった。

「くそっ！」

「撃つな！ 同士討ちになる可能性がある つ！？」

ドサリと音がした。それは武装隊隊長が気絶させられ倒れた音だった。

その音を聞いた武装隊員たちは蒼の波の中、射撃魔法を撃とうとするが、それより早く誠実なる賢者の手刀によって気絶させられていた。

「相変わらず仕事が早いな」

祝福なる祈願者が誠実なる賢者へと賛辞を送る。
誠実なる賢者はただ頷くだけでそれに応えた。

「では行こう、無限書庫へ」

二人は再び無限書庫へと向かって歩き出した。

時空管理局本局 無限書庫前通路

「ユーノさん……！」

「今すぐにも安全なところに連れていくから……！」

無限書庫へと通ずる廊下のある一画、そこには無限書庫の司書長ユ

ーノと、なのはの愛娘ヴィヴィオ、その友達であるコロナとリオの四人がいた。

本局内に流れた侵入者の目指すという無限書庫。その無限書庫にいたコーノとヴィヴィオたちは、すぐ離れようとしていた。

だが、

【子供……。金髪に赤と緑のオッドアイ……。】

【戦力調査対象の一人だな】

コーノとヴィヴィオたちの目前、祝福なる祈願者と誠実なる賢者が現れた。

コーノはヴィヴィオたちを逃がすために、三人を庇うように前に躍り出る。

「この子たちは関係ない！ 頼む、この子たちだけでも逃がさせてくれ！」

「無限書庫司書長コーノ・スクライアと、高町なのは一尉の娘にして聖王のクローンである高町ヴィヴィオ」

フードの陰に隠れた口から発せられた言葉に、コーノとヴィヴィオは身構える。

コロナとリオは、どうすればいいか分からずに黙したままだ。

「誠実なる賢者、私は無限書庫へ向かう。お前は高町ヴィヴィオの戦力調査の方を頼む」

そう言って、祝福なる祈願者の姿がブレ、次の瞬間にはコーノたち

の背後にいた。

コロナとリオはそれに驚き、ユーノとヴィヴィオにしがみ付く。

「ユーノさんはコロナとリオを連れて逃げてください。」

あの人、わたしと戦う事が目的のようなんです……。クリス、セツトアップ」

「ダメだ、ヴィヴィオ！　ここは逃げないといけない！！」

「そつだよ、ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオは隣に浮遊するうさぎのぬいぐるみであるデバイス“セイクリッド・ハート”（愛称クリス）を起動させ、バリアジャケットを纏った大人モードとなった。

戦う気になっているヴィヴィオを止めようとするユーノたちだったが、相手がそれを許さなかった。

「……！」

一瞬で距離を詰めてきた誠実なる賢者^{サファイア}は、鎖が巻かれた右の拳打をヴィヴィオへの顔面へと放つ。

ヴィヴィオはギリギリのところまで首を逸らし回避に成功した。

「ユーノさん、早くコロナとリオを連れて……。つく！」

そう広くもない通路で始まった誠実なる賢者^{サファイア}とヴィヴィオの肉弾戦。疾く重い様々な打撃を受けては逸らし続け、ヴィヴィオは苦悶の表情を浮かべる。

（出来るだけ周りを壊さないように。でもそれじゃあ……。）

迫る右の蹴撃を捌きながら周囲を壊さないように気を遣うヴィヴィオ。

だがそんな甘い考えを許すような相手ではなかった。

誠実なる賢者の右手に生まれ出る蒼い魔力で構成された魔力弾。

その魔力弾、正確には魔力光を見て、ユーノとヴィヴィオは目を見開く。

そこに撃ち込まれる一発の蒼い魔力弾。

(ルシルパパと同じ・・・?)

(だけど別人だ。ルシルなわけがない!!)

ラウンドシールド

「ユーノさん!?!」

咄嗟にユーノがシールドを展開することで直撃は免れたヴィヴィオ。巻き起こる爆発と濃い爆煙。それが晴れて視界がクリアに戻った時、あまりの威力だったのか、両側の壁が著しく破壊されている。そんな破壊の光景がユーノたちの視界に入った。

「僕が時間を稼ぐ。だからヴィヴィオが二人を連れて逃げるんだ!」

チエーンバインド

ユーノの足元に彼の魔力光である緑色のミッドチルダ式魔法陣が展開される。

それと同時に誠実なる賢者へと周辺から緑色の魔力で構成された鎖状のバインドが迫る。

誠実なる賢者は左手首の枷から伸びる鎖に魔力を纏わせ、その鎖でチエーンバインドを薙ぎ払った。

「くそ・・・！」

ユーノはゆっくりと歩み寄ってくる誠実なる賢者を睨みつける。

今はいない親友と同じ魔力光を持つ誠実なる賢者に嫌悪感を抱いたのだ。

そこに、

『ユーノ！ ヴィヴィオ！ コロナ！ リオ！』

『フェイト！？』

『フェイトママー！』

『フェイトさん！！』

救いの声がユーノとヴィヴィオたちに届いた。

フェイトからの念話だ。誠実なる賢者は静かに警戒し始めた。

彼らが戦闘中に喜びの表情を作り出した、それはつまり彼らにとっ
て都合の良い何かが起こっていると判断したからだ。

ヴィヴィオとユーノから距離を開け、再度右拳に魔力を纏わせ始めた。

『フェイト。今から侵入者の一人を強制転移させて第8訓練場にする。

そっちで準備してほしい。そしてもう一人はすでに無限書庫に入
ったと思う。

そっちの方も何か対策をお願い』

『第8……。了解。すぐそこだから大丈夫。
……待って、今クロノと合流した』

『クロノだ。そっちは大丈夫なのか？ ヴィヴィオとその友達が一
緒のようだが……』

ユーノたちが念話で状況確認している最中、右掌を翳し複数の魔力
弾を斉射する誠実なる賢者。

ユーノがそれを防ぎ、ヴィヴィオが尚も迫る蒼の魔力弾の隙間を縫
うように駆ける。

そんな行動をとったヴィヴィオに対し、ユーノは「な!？」と驚愕。
しかしユーノの驚愕を余所に、ヴィヴィオの右拳に虹色の魔力が生
まれる。

『し、侵入者の一人が今ヴィヴィオと戦ってる！

相手はかなりの腕だよ。ヴィヴィオと対等に渡り合ってる!!』

『っ！ ヴィヴィオが!?!』

誠実なる賢者は自らの左手に蒼炎を生みだす。

全てを魅了するかのように美しく燃えたぎる蒼い炎だ。

(炎の変換資質……！)

ヴィヴィオは蒼光を纏う右拳と蒼炎を纏う左拳に最大警戒し、それ
でもなお接近していく。

そして、先手は誠実なる賢者の右拳から発生した魔力刃による斬撃。

「っく……!」

それを紙一重で回避するヴィヴィオだったが、間を置かず蒼炎を纏う左拳による拳打が迫る。

ヴィヴィオは迫る拳打をその場で一回転することで回避。がら空きになった誠実なる賢者の腹部へと、

アクセルスマッシュ

虹色の光を纏ったヴィヴィオの右の拳打が突き刺さった。

「つぐうつ……！」

苦悶の声を漏らし、後方へと弾き飛ばされる誠実なる賢者。

そこに誠実なる賢者を拘束せんと発動するのはユーノのリングバインド。

「よし！」

完全に拘束された誠実なる賢者はそれでも難なく着地した。

だがそれだけでは終わらなかった。さらにヴィヴィオのバインドが誠実なる賢者の両脚を捕えた。

「つ……！」

「え……？」

「離れるんだヴィヴィオ！！」

誠実なる賢者はドサリと倒れ伏し、ヴィヴィオが離脱したところでユーノの強制転移魔法が発動した。

緑色の光に包まれ、誠実なる賢者はフェイトとクロノの待つ第8訓練場へと送られた。

「大丈夫ヴィヴィオ!？」

「ケガとかしてない!？」

コロナとリオがヴィヴィオを心配して駆け寄ってきた。

ヴィヴィオは何も答えない。彼女の表情は硬く青褪めている。

それは何か信じられないモノを見たかのように凍りついていた。

その様子にさらに心配そうに声をかけ続けるコロナとリオ。

体を揺さぶってもなかなか反応しないヴィヴィオに、ユーノも駆け寄り声をかける。

「ヴィヴィオ? どうかしたのかい、ヴィヴィオ? ヴィヴィオ・・
・?」

真正面からヴィヴィオの顔を見つめるユーノ。

ヴィヴィオは何を言わないまま誠実なる賢者が転送された第8訓練場へと駆けだした。

時空管理局本局 第8訓練場

フェイトとクロノ、そして十人程度の武装隊員の前に転送されてきた侵入者誠実なる賢者。

緑と虹色のバインドに拘束されたまま床に倒れ伏している姿だ。

「時空管理局次元航行部、提督クロノ・ハラオウンだ。
主要世界へのテロ行為、時空管理局本局への侵入、公務執行妨害な
どの罪状でお前を逮捕する」

「……………」

現状からして観念したのか、誠実なる賢者は大人しく頂垂れ力を抜
いた。

それを見て、クロノが“デュランダル”の構えを解いた。

それに続いてフェイトも構えていた“バルディッシュ”をそつと下
ろす。

だがそれでも警戒は怠らない。いつでも戦闘出来るような臨戦態勢
だ。

武装隊員たちが拘束されている誠実なる賢者へと駆け寄っていく。

「こちら第8訓練場のクロノだ。

無限書庫に入ったもう一人の侵入者はどうなった？」

『こちら無限書庫のティアナ・ランスターです。いました。交戦に
入ります』

「気をつけるんだ。相手はかなりの腕だ」

『了解です』

クロノが無限書庫へと向かったティアナと武装隊へと通信を入れる。
そこで一度通信が切れる。ティアナたちと祝福なる祈願者の戦闘が
始まった合図でもあった。

「さあ立つんだ」

武装隊員たちに立たされた誠実なる賢者サファイアに視線を向けるクロノとフ
イト。

「？ おい、何を言っている！？」

そんなとき、誠実なる賢者の真横にいた武装隊員が怒鳴る。

次の瞬間、誠実なる賢者を拘束していたバインドは全て砕かれた。
自由となった誠実なる賢者はこの場にいる誰の目にも留まらぬ速さ
で、周囲にいた武装隊員たちを手刀で昏倒させた。

無限書庫前通路

向かい合つは執務官ティアナと祝福なる祈願者ノーチエブエナ。

ティアナは左手に持つ“クロスミラージュ”をガンモードのまま、
逆の右手に持つ方をダガーモードにしている。

すでに祝福なる祈願者へと投降を促したが聞き入れられなかった。

『こちら第8訓練場のクロノだ。』

無限書庫に入ったもう一人の侵入者はどうなった？』

クロノから通信が入り、ティアナは答える。

「こちら無限書庫のティアナです。いました。交戦に入ります」

『気をつけるんだ。相手はかなりの腕だ』

「了解です」

向かい合うだけで理解出来る敵の実力。

後ろに控えている武装隊員たちもそうなのか、さつきから黙したまままだ。

「もう一度通告します。手にしているその書物を置いて投降しなさい」

“クロスミラージユ”の銃口を向けられようと平然と佇む祝福なる祈願者^{エフエチ}。

彼女の左手にあるのは三冊の本だった。

それは重要管理指定世界“オムニシエンス”で発見された解読不能の本。

その内の三冊を回収するのが、祝福なる祈願者と誠実なる賢者の任務^{サファイア}だった。

「……………刃を以って血に染めよ」

「えっ!?!」

祝福なる祈願者の足元に展開された深紫のベルカ魔法陣^{ノーチェエフエナ}。

それと同時に彼女の周囲に展開されたのは血色の短剣だった。

ティアナは驚愕した。その魔法に見覚えがあったのだ。

5年前の戦い。ティアナの元上司はやてが使用していた古代ベルカ式魔法と同じものだ。

「穿て、ブラッディダガー」

Protection

ティアナは射出された射撃魔法を、“クロスミラージュ”が張った半球上の障壁で防いだ。
直撃という難を逃れたティアナを始めとした武装隊員たち。

「（こんな局内とこで全力は出せない。だけど・・・）クロスミラージュ！」

Load cartridge

「（手を抜いたら落ちるのはこっちだ）クロスファイア・・・シュート！」

オレンジ色の誘導魔力弾が5つ。
それが様々な軌道を取って祝福ノーチェブエナなる祈願者へと迫る。

「盾」

パンツァーシルト

祝福ノーチェブエナなる祈願者の前面、通路いっぱいノーチェブエナに展開されたベルカ魔法陣。
それが容易くティアナの魔力弾を全て防いだ。
そして今度はこっちの攻撃ターン順と言わんばかりに突撃する祝福ノーチェブエナなる祈願者。

フードの中に隠れた美し過ぎる真紅の瞳が光る。

シュヴァルツェ・ヴィルクング

両拳に深紫の魔力を纏わせ近接戦に持ち込んでいく。
繰り出される右拳。それをダガーモードの“クロスミラージユ”で
軌道を逸らす。

もちろんそれだけで祝福ノーチェブエナなる祈願者は止まらない。
何度も何度も左右からの拳打を繰り出していく。

「つく・・・！」

徐々に後退していくティアナ。武装隊はそれを黙って見ている事し
か出来ない。

下手に魔法を撃てば、間違いなく味方であるティアナに誤射すると
分かっているからだ。

「しまつ・・・！」

足を滑らし倒れ込みそうになるティアナ。

それを最大の好機として右拳を振るう祝福ノーチェブエナなる祈願者。

Round Shield

主の危機を助けんとシールドを張る“クロスミラージユ”。

オレンジ色のシールドに衝突する祝福ノーチェブエナなる祈願者の黒き拳打。

だがティアナと“クロスミラージユ”は知らなかった。

シユヴァルツェ・ヴィルクングに付加された効果の事を。

「がはっ・・・！？」

一瞬でシールドを破壊し、ティアナの腹部へと直撃した黒き拳打。
打撃力強化と効果破壊の能力を持つ魔力を加えて行う格闘攻撃の一
つであり、今回は障壁破壊が付加されていた。

腹部を押さえながらも後退するが、遂には片膝が折り蹲るティアナ。

「……ティアナ・ランスター執務官。

戦う場所が場所だったためにきちんとした戦力調査は出来なかったか」

そう言い残し、祝福なる祈願者はその姿を消した。
ノーチェブエナ

時空管理局本局 第8訓練場

第8訓練場を縦横無尽に翔けるのは黄金の閃光。

大剣状であるザンバーフォームの“バルディッシュ”を振るい、誠実なる賢者へと接近する。
サファイア

誠実なる賢者は右手から蒼の魔力で構成された剣でフェイトを迎撃せんと床、壁、天井を駆けては跳躍する。
サファイア

機動力においては圧倒的にフェイトが上だった。

何せ飛行しているのだから。対する誠実なる賢者は飛べないのか走りまわるだけ。
サファイア

それでも十分にフェイトとクロノを翻弄しているのだから大したものである。

Plasma Lancer

直射型の雷槍が9基展開され、誠実なる賢者へと迫る。
サファイア

そこにクロノも同時攻撃のアイシクルブレイドが降り注ぐ。

下方以外からの包囲攻撃だ。威力はかなり高く設定されている。

誠実なる賢者は急に立ち止まり、左掌を床に叩きつけた。
巻き起こる強大な魔力流。その魔力流でフェイトとクロノの攻撃を
全弾掻き消した。

「やはり生半可な魔法は通用しない、か。本当に彼と戦っているみ
たいだ」

クロノが愚痴を零す。それほどまでに似た実力。
フェイトはただ黙って誠実なる賢者を見つめる。

あまりに似過ぎた体格、魔力光、戦闘能力。
目の前にいる敵は、本当に自分が好きだった彼なんじゃないかと頭
の片隅に過ぎる。

その反面、もう一人の自分がそれを否定する。それはあり得ない事
だと。

「・・・クロノ。もう一回行こう」

「ああ。だがこれ以上はここがもたない。場所があまりにも悪過ぎ
る」

本局内の訓練施設はかなり強固に造られている。
だが、それでも限度というものがある。

今回はその限度を超えようとしていた。

相手である誠実なる賢者があまりにも強かったのだ。
これ以上、施設の事を考えて加減しての戦闘は敗北へと繋がる直
感で理解していた。

「やっぱり接近戦で撃墜しかないかな。クロノ、援護お願い」

接近戦ならばそう施設を破壊せずに済むだろうと考えての選択。

フェイトがクロノにそう告げ、再度交戦に入る。

誠実なる賢者もフェイトを迎撃するために動く。

再度衝突し合う金と蒼の閃光。フェイトのザンバーを左手でしっかりと受け止め、右手に展開した蒼剣で斬りつけようとする誠実なる賢者。

フェイトはザンバーの刀身を一度消し、体勢を崩した誠実なる賢者へと、

Plasma Smasher

至近距離での砲撃を撃ちこんだ。

フェイトの視界が黄金の雷光で潰される。

フェイトは手応えを感じていた。間違いなく直撃したと。

それは離れたところで魔法を準備していたクロノも同様に。しかし、

「くっ・・・！」

「フェイト!!!」

雷光を突き破って放たれた二条の蒼の光線。

あまりにも速いそれがフェイトの両脚を掠めた。

掠める程度だったとはいえ相当の威力があったのか堪らず両膝をつくフェイト。

クロノはフェイトの前方に姿を現した誠実なる賢者へと氷剣を11基と放つ。

しかし迫る氷剣を消したのは蒼炎の壁だった。

その蒼炎の壁の中から突撃してくる誠実なる賢者の手には蒼の大鎌があつた。
物凄い速さでフェイトへと接近してくる誠実なる賢者へと氷剣を何基も射出するクロノだったが、それを大鎌で斬り払い尚もフェイトへと接近する誠実なる賢者。

「プラズマランサー・・・ファイア!!」

“バルディッシュ”を杖代わりにして立ち上がったフェイトが射撃魔法を放つ。

その数13。真正面から迫るそれを、誠実なる賢者は大鎌で弾いては回避していき、フェイトへとたどり着いた。

ディフェンサー・プラス

振り下ろされた蒼の刃を防ぐフェイトの障壁。

一度目は完全に弾き返し、二度目でヒビが入り、三度目の攻撃で砕かれた。

四度目の攻撃がフェイトへと直撃しようとしたところで、フェイトと誠実なる賢者の間に人が入り込んだ。

「ダメッ!!」

「ヴィヴィオ!!?」

「っ!!」

フェイトを庇うようにしてその場に現れたのはヴィヴィオだった。彼女の展開したシールドは、誠実なる賢者の振るった大鎌の蒼の刃を完全とはいかずとも防いでいた。

「もうやめて!!・・・何でこんなことをするの・・・?」

ヴィヴィオの瞳から涙が零れる。

フェイトとクロノは、ヴィヴィオのその様子に戸惑い始める。

「もうやめて・・・ルシルパパ!」

「っ!?」

ヴィヴィオが口にしたその呼び名に目を見開くフェイトとクロノ。ヴィヴィオの視線の先、そこには誠実なる賢者サファイアしかいない。それはつまり、

「フェイトママ。この人・・・ルシルパパだった。さっき見えたの。フードの中の顔はルシルパパの顔だった」

「うそ・・・。嘘だよ、ヴィヴィオ?」

だってルシルは・・・ルシルはもういない。もう会えないんだよ・・・?」

フェイトの身体が足の痛みとは違う痛みで震えだす。

どうしても信じられなかった。もし本当に目の前にいるのがルシリオンならば、どうしてもこんな事をしているのが理解出来なかった。だがそれを証明するために、ヴィヴィオは誠実なる賢者サファイアのフードに手を伸ばし掴み取った。

そしてそれを一気に脱がす。現れたその顔は、

「ルシ・・・ル・・・」

「本当に・・・あのルシルなのか!？」

美しい銀の髪。ルビーレッドとラピスラズリのオッドアイ。女性と見間違うほどの整った顔立ち。それは間違いなく5年前にこの世界を去ったルシリオンだった。

「ルシル・・・ルシル、ルシル・・・!」

フェイトは泣き始めた。次から次へと溢れだす涙を拭い続ける。もう会えないと諦めていた大切な人だったルシリオンが目の前に、触れる事の出来る場所にいると。だが、

「フェイト・テストアツサ・ハラウン執務官。

そしてクロノ・ハラウン提督。あなた方の戦力を測るにはこの場所が狭い。

残念だがこれで失礼させてもらおう。近いうち、また会う事になるだろう」

「え?・・・ちょっと待って・・・?」

な、何言ってるの?　つく・・・待って、待って・・・お願い、待って、ルシル!」

「ルシルパパ!」

「ルシル!」

フェイトはもう立つことが出来ないのか転倒してしまうも、必死に手を伸ばして呼びかける。

ヴィヴィオも、クロノも、必死にルシリオンへと呼びかけるが、

「生憎と私はルシルではない。誠実なる賢者^{サファイア}。それが私の名だ」

そう言い放ち、三人に背を向ける。

そこに現れたのは三冊の本を左わきに抱えた祝福なる祈願者^{ノーチェエブエナ}だ。

【任務は達成した。……もう素顔を曝したのか、誠実なる賢者^{サファイア}】

【油断した。まさかフードを剥ぎとつてくるとは思いもしなかった】

誠実なる賢者^{サファイア}と祝福なる祈願者^{ノーチェエブエナ}は、彼ら独自の回線で繋がる念話で
そう短く会話し、誠実なる賢者^{サファイア}は脱がされたフードを再度被りなお
した。

再び隠れた彼の瞳にはもうフェイトたちは映らない。

「待つて、ルシル!!」

「では、またいずれ。フェイト執務官、クロノ提督、ヴィヴィオ嬢」

「ルシル!!」

「ルシルパパ!!」

彼はもう何を言わず、ただその姿を静かに消していった。

祝福なる祈願者^{ノーチェエブエナ}は一度だけフェイトに視線を移し、すぐに逸らして
消えていった。

残されたフェイトとヴィヴィオとクロノは、誠実なる賢者^{サファイア}が消えた
場所から視線を逸らす事が出来ずに座り込んでいた。

同日

何処かの無人世界、そこに巨大な艦があった。

それは戦艦と呼ばれる種類のものだが、それは時空管理局などが保有する次元航行艦とは全く違っていた。

その艦には帆があった。綺麗な赤い炎のような巨大帆船。

そして至るところに黄金による装飾が施されている。

大きな四つのマストがあり、帆は現在畳まれた状態にあった。

その艦内のある一室。大きく豪華な作りをしている艦長室にはいくつかの人影があった。

その全員が純白のコートを纏い、フードを目深に被っている。

その白コートドの集団の中に、ミッドチルダに姿を現した陽気なる勝者がいた。

その近くにはカルナログを襲撃した堅固なる抵抗者隊マルファイの三人。

「ただいま帰りました、マスター」

その艦長室の両開きの扉から入ってきたのは誠実なる賢者サファイアと祝福なる祈願者ノイチ。

誠実なる賢者がある一人の白コート、さらにその上から装飾の施された白マントを纏った者へと恭しく頭を下げ帰還報告をした。

祝福なる祈願者も彼に続いて軽く頭を下げた。

その祝福なる祈願者を見て、顔を逸らし舌打ちする者がいる。

その舌打ちはこの場にいた全員に聞こえたが、誰も何も言わなかった。

二人の帰還報告を受けたその白マントの手には一冊の赤い本がある。

それは2年前にトレジャーハンター・シャレードから奪われた本で間違いなかった。

「
「いえ、私は貴方の従者。これからも何なりとご命令を」

「
「ありがとうございます、マスター」

誠実なる賢者はそう言って、彼に用意された座へと戻り座った。
祝福なる祈願者はその隣の座へと歩き、誰にも気づかれないようにため息を吐いてから座った。

これで、この組織の白コートを纏った14人の幹部メンバーは揃った。

初めて顔を合わせる者もいるが、言葉を交わすことなく自分に用意されている椅子へと腰掛けている。

そしてこの場から全てが始まる。

彼らは時空管理局本局と支局、各管理世界にある地上本部などの管理局主要施設に電波ジャックを開始。

「それではマスター・至高なる卓絶者、私が宣言しましょう」

誠実なる賢者にマスターと、そして他のメンバーからはボス、またはマスター・至高なる卓絶者と呼ばれる白マントが、金の刺繍の施された白コートの男へと“赤い本”を一度預ける。

“赤い本”を受け取った白コートの至高なる卓絶者に代わり表に出る永遠なる不滅者は、時空管理局主要施設へと宣言する。

「聞こえるかな？ 時空管理局に勤める者たち。」

我々は新たな秩序に管理される新世界への門を開く者……」

このとき、全ての管理局主要施設のモニターには彼ら白コート集団が全員映っていた。

ディアマント永遠なる不滅者は一度そこで区切り、強調するかのよつに自らが属する組織名を告げた。

「反時空管理局組織“テストメント”である」

非情なる再会 〈 F i r s t e n c o u n t e r 3 〉 (後書き)

はい、本編三話目にしてルシルが敵として再臨しました。わぁ〜い！
そしてルシルと組んでいた白コートの女、もう誰かはバレバレですよ
ね？

それにしてもこのエピソードは本当にバトル続きです。

それと、ヴィヴィオって Vivid でどこまで強くなるのか分かり
ませんが、今回は少し活躍してもらいました。

アインハルトってどうなるのでしょうかねえ・・・？

少し出したい気持ちもありますが、何分まだ彼女の事が分からな
すぎる。

反時空管理局組織テストメント ～Omnipotent Traitor～

11月13日 PM16:00 ミッドチルダ北部 八神家自家用
車内

「御心配おかけして申し訳ありませんでした主はやて」

「ええよええよ。まあシャツハヤ2031航空隊の人から連絡あつてビックリしたけどな」

「そうだけ、シグナム。買い物先でテロリストと戦って負傷なんて聞かせられたらあたしだつてビックリだ」

「でも無事だったから良かったものの、シグナムをこつも簡単に落とすなんてありえないです。

相手は一体何者なんですか？」

現在、はやてとリインフォース？とアギト、そして搬送された聖王医療院で治療を終えたシグナムは、八神家へと帰る為に八神家の車内にいた

はやてたち三人は、シグナムが戦闘で負傷し聖王医療院へと搬送されたと連絡を受け、急いでレールウェイで聖王医療院へと向かい、すでに回復していたシグナムと会った。

そこで聖王教会のシスターであるシャツハからシグナムの容体を聞き、問題無しということでの帰宅途中だった。

「白のロングコート、フードを深く被った男で、グラナードというコードネーム。」

召喚魔法陣を使っていた事から召喚士かと問いただしてみたが違うらしい。

それに、我々が“夜天の魔導書”の守護騎士プログラム“ヴォルケンリッター”という事を知っていた」

「なっ!?!」

運転中のはやてが動揺したことで車が激しく揺れる。

ラインフォース?とアギトから小さく悲鳴が上がる中、はやては動揺を押し殺して立て直す。

「ちよつと待つてシグナム! その情報を知るんは局でもほんの一握りや!

それやのに何でテロリストがそんな事を知つとるん!?!」

「主はやて、私もさすがにそれは分かりません」

「あ……ごめん、シグナム」

「いえ」

静まり返る車内。

重い空気のままはやての運転する車は八神家へ向かって走り続ける。その重く静まり返った車内に、通信が入ったことを知らせるコールが鳴る。

『突然申し訳ありません』

「ギンガ? どないしたん?」

助手席の前面にモニターが展開された。そこに映るのは陸士108部隊のギンガだった。

はやくにはさつきまでの動揺はなく、今度は管理局員としての顔でギンガに訊ねる。

ギンガの纏う空気が明らかに緊急の何かが起こったことを感じさせるからだ。

『あの、すみません八神司令。説明はあとでしますので、まずはこちらをご覧ください』

『反時空管理局組織“テストメント”である』

ギンガの映るモニターに重なるようにして展開されたモニターに映る男が告げた“テストメント”という言葉に、はやくが運転する車は急ブレーキし路肩へと停車した。

同日 PM 16:13 時空管理局本局医療施設

『反時空管理局組織“テストメント”である』

モニターに映る金の刺繍が施された白コートを纏う永遠なる不滅者の口から告げられた“テストメント”という単語に反応する者がいた。

反応した者というのは“元機動六課”のメンバーだ。

今ここにいるのは、誠実なる賢者戦で負傷したフェイト、祝福なる
ファイロ
ブエナ
ノーチエ

祈願者戦で負傷したティアナ、その二人の治療を任されているシャマル医務官、シャマルの護衛であるザフィーラ、フェイトの補佐官シヤリオ、そしてヴィヴィオもいる。

コーノとヴィヴィオの友達であるコロナとリオはいない。

コーノは祝福なる祈願者に奪われた三冊の本についての調査に入り、コロナとリオはすでに自宅へと局員護衛のもと帰宅させられていた。

「テストメントって……そんな……!」

シャマルが震えた声でそう言った。

他の者たちも声には出さないが、誰もが同じ事を思っている。そんなことは有り得ないと。

「世界を、人を滅びから護るのがテストメントじゃないんですか……!?!」

「いや、フライハイトの言葉を思い出せ。

界律の命によつては滅ぼす事も有り得るのだ。

ならば、セインテストが向こう側にいるのもしや……」

ティアナにそう返すザフィーラ。

今この場にいる者にはすでにルシリオンが敵の一人である話を行っている。

確かに“テストメント界律の守護神”は多を護る為に少を滅ぼすのも一つの役目としてある。

しかしそれは、今モニターに映るのが本当に“テストメント界律の守護神”であれば、の話だ。

『最近の時空管理局の不祥事は目に余る。

レジスタンスという者たちはよく分かっている。』

法を守り、民を護る局員が悪事に加担する。実に愚かだ』

永遠なる不滅者はモニター越しにでも分かるように大きいため息をついた。
ディアマンテ

心底時空管理局に対して呆れ果てている。

『かつて誰かがこう言っていた。

管理局は警察や裁判所が一つになったような組織だ』

それは幼少の頃のなのが口にしていた言葉だった。

『これをおかしいと思わないのかね？ 実に恐ろしい事だ。

それはつまり裁判時には、検察官、裁判官、弁護人を全て管理局が兼ねている事を意味する。

どうだ？ どう見てもこれは不公平を具現したようなものだ。

場合によっては管理局の面子や利益のために、凶悪事件などがもみ消されることだって考えられる』

この放送を見聞きしている管理局上層部はすぐに電波ジャックを止めるように指示するが、魔法とは別の力が働いている事で不可能となっていた。

『もみ消された事件で一体どれだけの人間が泣いた？

それに、魔法・魔導師至上主義における被害と犠牲、これも嘆かわしい。

魔法・魔導師至上主義による反動、何か分かるか？

今君たちが抱える問題だよ。慢性的な人手不足というな。

その所為で未然に防げる事の出来た事件にも後手に回り、無意味で unnecessary 被害と犠牲が出る』

それはレジスタンスも掲げている話だ。彼らはそれをどうにかしようとする行動を起こし、そして管理局によって逮捕される。

『その人手不足を解決するための一つとして、まだ幼い子供を鍛え上げるという愚行にも手を染める。』

才能があつたから管理局へ入れ、危険な前線に送り、そして犠牲者となる。

可哀想に。その子供は才能があつたからというだけで管理局に殺された。

死ぬようなことはなくとも、それでも未来の選択肢を一方的に閉ざされている事には変わりあるまい。

どうだ、否定はできない？ 何しろ事実なのだから』

ダイヤモンド
永遠なる不滅者の言葉に、白コートの内の一人の身体が震える。見た目は小柄で、それはまだ子供のような体格だった。

『その他にも、管理外世界で見つけた才能ある子供をスカウトし、現に管理局に勤めさせている。』

その子は過労によって一度撃墜され、日常生活にも支障が出るほどの怪我を負ったそうではないか』

明らかになのは事を言っているのを、この場にいる全員が分かっていた。

『それでもその子は懸命にリハビリを行い現場復帰、今でも勤めている。』

さらに犯罪者であっても司法取引で管理局に従順を余儀なくするなどもあるな。

5年前のJ・S事件での加害者側の何人かが、今では管理局や聖王

教会での厚待遇を受けているらしいではないか。
前科者を受け入れるほどまでに切羽詰まっている諸君ら管理局、実に大変そうだ』

ダイヤモンド
永遠なる不滅者はそう言い終えた後、しばらく黙った。
モニター越しから伝わる沈痛な空気。

『まだまだ言いたいことはあるが本題に入ろう。・・・キミたち 時空管理局に朗報だ。

我々テストメントは独自に次元世界に蔓延る危機を救おう。
考えも無しに数百という世界管理を一手に引き受ける馬鹿な・・・
おっと失礼、そんな努力家な君たちにとって嬉しいニュースだろう。
まあ、それを理解しつつさらなる管理拡大を止めようとしなければ
いかななものか、とは思うがね』

呆れと嘲笑が入り混じったセルフを吐き捨てる永遠なる不滅者。ダイヤモンド
だがそれを真つ向から否定できることは出来ない。

何せそれもまた人手不足の原因であり、歴とした事実なのだから。

『無論君ら時空管理局の手は一切借りない、借りつもりなど毛頭ない。
い。

組織内で愚かで無様な権力、派閥争いを行っている君らの手を借りたとあっては、こちらもそんなくならない争いに巻き込まれかねないのだからね』

一々癪に障る言い方を止めようとしなダイヤモンドい永遠なる不滅者。
完全な挑発行為の何物でもなかった。個人的な恨みでもあるかのようだ。

『そうだな、期間は一月としようか。』

その間に次元世界で起こる事件を多く解決した方を勝ちとしよう。
不謹慎だと分かってはいるが、それが一番分かりやすい方法だろう』

「な・・・!？」

「な、何を言っているんですか、この人たち・・・」

『市街地に攻撃しておいて何を言っているのだ、こいつ?と
思っている者もいるだろう』

この放送を見聞きしている者たちの思考を呼んだように、永遠なる
不滅者はその返答を口にする。

『理由は二つ。一つ、市街地への攻撃は一種の罰のようなものだよ。
方法は兎も角として、我々やレジスタンスのように行動を起こそう
としなかった連中に対して、ね。』

護られているだけで、何か問題が起これば自分たちを護る者へ誹謗
中傷するだけの者たち。

それに対しての罰だ。魔法攻撃による犠牲者はいないだろう?
多少の混乱だけを与えただけだ。さすがにこつまで偉そうに言っ
ている我々が殺人を犯しては笑い話にもならない』

それが市街地への魔法攻撃の理由だった。

全て人任せで行動を起こそうともしない市民への罰。

『二つ、局の我々に対する対応までの時間を計らせてもらった。

ミッドチルダとカルナログはまあ及第点だったな』

「運も良かったのだろうか」と付け加える永遠なる不滅者。

ディアマンテ

『だが、ヴァイゼン、フェディキア、エルドラド。

この三つはアウトだ。遅い、遅過ぎだ。

あまりの対応の遅さにこちらから撤退命令を出したくらいだ。

これもまた魔法・魔導師至上主義による人手不足という障害によるものだな。

同じ世界内での問題に一体どれだけ時間をかけるつもりだ？

フツ……この勝負、我々テストメントの勝利で終わりそうだ』

自信が漲っているのが分かる。

『もし万が一にでも我々テストメントが負けた場合、そちらの言う事を何でも聞こう。』

管理局は人手不足なのだろう？ 我々が管理局に入ろうじゃないか。

今君らの視界に入る我々、白コートを纏う幹部は全員AAA+ランク以上の魔導師たちだ。

喉から手が欲しいほどの戦力なはずだ。それを一気に14人手に入られる。

どうだろうか？ これは破格な取引内容だとは思っただがな。

司法取引でも何でも用意してくれたまえ。君らの安いプライドなら何でも出来るだろう？

では、これから一カ月、お互いに頑張ろうではないか。

魔法・魔導師至上主義の時空管理局か、魔法・質量兵器を含めた新たな次世代管理組織テストメントのどちらかが勝利するのか』

ディアマンテ
永遠なる不滅者は最後にそう告げ、通信を切った。

“テストメント”からの一方的な通信に、本局を始めとした各主要施設の局員たちは静まり返る。

「勝手な事を……！」

「フェイトさん……」

フェイトは拳が赤くなるまで強く握られている。

「セインテスト君は、どうして彼らの仲間……？」

「それは……それは？」

シヤマルの疑問には誰も答えられない。

そして、いきなりの話で誰の頭の中にもある疑問が浮かんでは来なかった。

もし“テストメント”が勝てば、一体何を要求してくるのか、という疑問を。

ディアマンテ
永遠なる不滅者は最後まで、彼ら側からの勝った際の要求を口にしていなかった。

「レヴィに訊いてみよう。レヴィならルシルパパの事を知ってるはずだよ」

ヴィヴィオの希望ある言葉に、この場にいる全員が頷いた。

フェイトはベッドの上で静かに「ルシル」と呟き、何かしら決意した瞳で左小指にはめられた指環を見、右手でそつと撫でた。

同日 PM 16:20 某無人世界

反時空管理局組織テストメント旗艦“フリングホルニ”艦長室

「ふう、こんなところだろう」

時空管理局主要施設への通信を切った永遠なる不滅者は一息つく。そして立ち上がり、“赤い本”を自らの指導者である至高なる卓絶者へと渡す。

「おいおい、オレらは管理局に下るつもりはねえよ？」

陽気なる勝者はおどけた風に永遠なる不滅者にそう告げる。
「永遠なる不滅者はそれに「当然だ」と前置きし続ける。そして自らの座へと戻り、ドサツと勢いよく腰かけた。」

「ここに集う我々の大半は、管理局の歪んだ正義の名の下にその人生を狂わされたのだ。歪みの元凶である管理局に従順するなど生き地獄の何物でもない。それ以前に我々が管理局に負ける通りは無い。一つの隊を動かすのに何十分と掛ける連中だ。こちらが事を終えた頃にようやく姿を現すだけだ」

怒りと憎しみを含ませながら、怨敵時空管理局の名を口にする永遠なる不滅者。
それに頷き賛同する者も少なくない。彼ら“テストメント”の幹部である白コート集団には管理局に恨みを持つ者が多かった。今回時空管理局に持ちかけた一方的な勝負も復讐への一步に過ぎない。

「ですがどうするんです？ 数では向こうの方が圧倒的だ」

「話を聞いていなかったのか、聡明なる勇者。
向こうは数はあってもその使い処がメチャクチャだ。全く成って

いない。

元管理局員であるお前になら解るはずだろう？」

「堅固なる抵抗者の言う通りだ。無駄に拡大した組織ほど脆いものは無い。

我々に割く人員も僅かだろうな。幾人かの精鋭を送り込んでくるだろうが、こちらには誠実なる賢者がいる。

それだけで向こうの連中は為す術が無くなるだろう」

若い男性の声のする聡明なる勇者の疑問に答えるのは堅固なる抵抗者と永遠なる不滅者。

三人は、黙したまま艦長席の窓から差し込む夕日を眺めていた誠実なる賢者へと視線を移す。

「俺ら報復せし復讐者隊は、忌わしきヴォルケンリッターを殺せばそれでいい。

だからお前らは俺たちの邪魔を絶対にするなよ、いいな？

特に祝福なる祈願者、お前が一番の問題だ。お前にも怨みはある。

だがボスからの仲間討ちは禁じられているから仕方なく見逃しているんだ」

報復せし復讐者隊の隊長報復せし復讐者はそう吐き捨て、至高なる卓絶者に一礼をしてから部下二人を連れて艦長室を後にした。

憎しみの視線を浴びた祝福なる祈願者は黙したままだった。

その彼女に歩み寄り肩を叩くのは数少ない女性幹部5人の内の一人だった。

【あなたはあなたの為したい事をした方が良く私は思う。

私や、たぶん聡明なる勇者だって復讐とは違う個人的な目的でこの組織にいるのだしね】

【敬虔なる諦観者……】

祝福なる祈願者に敬虔なる諦観者と呼ばれた女性は、報復せし復讐者隊と同じように至高なる卓絶者に一礼をしてから艦長室を後にした。

それから続々と至高なる卓絶者に一礼して艦長室を後にしていく。艦長室に残ったのは“テストメント”の指導者至高なる卓絶者、その使い魔である誠実なる賢者、そして10代前半くらいの体格を持つ潔白なる聖者の三人だ。

「誠実なる賢者、潔白なる聖者。私はこの“赤い本”を手にしたことで力を手に入れた。

だから前々から考えていたこの計画を実行に移すことが出来た」
纏っていた白マントを外し、白コート姿を露わにする至高なる卓絶者。

その体格と声からして女性で間違いない。

そんな至高なる卓絶者のコートに手を伸ばしキュツと掴む潔白なる聖者の小さな手。

至高なる卓絶者は「ありがとう」と潔白なる聖者の小さな手に自らの手を重ねた。

すると潔白なる聖者はそれが嬉しいのか小さく笑いだす。可愛らしい女の子の声だ。

「……誠実なる賢者、最後まで私に付き合ってくれませんか？」

夕日に染まる艦長室で向かい合う至高なる卓絶者とその使い魔誠実なる賢者。

誠実なる賢者は静かに片膝をつき左手を胸に当て、最大の敬意を以つて告げた。

「イエス、マイマスター」

同日 PM20:11 ミッドチルダ 首都クラナガン 八神家

「そっか、テストメントにはルシル君がおるんやね・・・」

はやてはリインフォース？とアギトが淹れたお茶を飲みながら沈痛な面持ちでそう口にした。

現在八神家宅にいるのは八神家全員だ。

はやてたちは帰宅途中の車内で観た“テストメント”からの一方的な通信の内容の再確認、そして時空管理局本局から戻ってきたシャルとザフィーラから本局で起こったことを聞き終えていた。

「そうなんです。しかも何も覚えていないみたいなんです。

テストロッサちゃんのこと、ヴィヴィオちゃんのことも・・・全部・・・」

「マジかよ・・・。演技とかじゃねえのか？」

軽く半泣き状態のシャルの言葉に、カルナログから帰ってきたヴィータが訊き返す。

それにシャルは「それは分からないけど」と返した。

情報があまりにも少なすぎた。

ルシリオンの事、“テストメント界律の守護神”の事、反時空管理局組織“テストメント”の事。

「そういう事に関しての話ならレヴィに訊いてみたらどうだ？
あの者ならセインテストやテストメント界律の守護神の事に詳しいだろう」

シグナムが神妙な顔して一つの提案を出した。

“テストメント界律の守護神”の事に詳しいはずの元“アポリユオン絶対殲滅対象”のレヴィ・アルピーノに訊けばいいのではないかと。

「それならヴィヴィオちゃんが家に帰ってから訊いてみるって言うてたわ」

「・・・何か分かるといいですね。フェイトさんのためにも・・・」

「そやな・・・」

はやては何か深く考え、悩んでいるようだった。

アギトは意を決して何について考えていて、悩んでいるのか訊いてみた。

「マイスター・・・？ 何か心配事が・・・？」

「・・・もし、もしもテストメントと戦闘になったら、私たちは勝てるんかなって。
ルシル君の実力は私たちが良く知ってる。魔術師としての実力を」

八神家は思いだす。ルシリオンが一体どれだけのバリエーションに富んだ存在かを。

あらゆる属性を担い、あらゆるレンジに対応し、あらゆる魔法を複

製し、空戦最強とされた元管理局員。
それ以前に、

「もし、ルシル君が界律の守護神としてこの世界に呼ばれて、私たち管理局に敵対するってゆうんやったら、それは絶対に勝つことは出来ん」

5年前、^{テルミナス}終極に操られて強制的にテストメント・ルシリオンと戦った事を思い出すはやて。

干渉能力と呼ばれる世界の力その物を扱う圧倒的な戦闘能力。それを使われれば戦う以前の問題となってしまう。

「そうじゃねえ事を祈るしかねえ・・・か」

「ヴィヴィオから良い報せが来ればいいんだが」

「そうね」

暗い雰囲気にも包まれる八神家の夜は更けていく。

同日 21:06 ミッドチルダ北部住宅街 高町家

ヴィータと同じくしてカルナログから帰ってきたのは、ヴィヴィオと一緒に食事と入浴を済ませ、自室である作業を始めようとしていた。

「ルシル君がああ白いコート、テストメントの仲間だなんて。しかもフェイトちゃんやヴィヴィオの事も憶えていない……。そんなのって……。悲し過ぎるよ……。」

ヴィヴィオから時空管理局本局で起きたことを聞いたなのは。

ルシオンが、今日カルナログで戦った堅固なる抵抗者隊の仲間マルファイールで、しかも両想いだったフェイトの事すら憶えていないという事実が、なのはの心を抉っていた。

そんななのはヴィヴィオから話を聞いてすぐにフェイトと連絡を取った。

思っていたよりフェイトに落胆の色はなく、なのはは安堵した。

以前のように激しい落胆、塞ぎ込むのではないかと心配していたのだ。

フェイトの様子を確認したなのはは今、管理局のデータベースにアクセスマルファイールしていた。

堅固なる抵抗者隊の隊長堅固なる抵抗者マルファイールの正体であるうデミオ・アレッタ三佐の事を調べるためにだ。

管理局員名簿からデミオ・アレッタを探し続けて数分、ある事実へとなのははたどり着いた。

「え……。？　うそ？　これって……。どういうこと……。？」

なのはは目に映る情報に混乱しだした。

間違いなく堅固なる抵抗者マルファイールの正体はデミオ・アレッタ三佐だと思っていたのに、デミオ・アレッタの欄にそれはあり得ないことだと証明する二文字がハッキリと映し出されていた。

そう、デミオ・アレッタの欄には“死亡”という二文字があったのだ。

「デミオ・アレツタ三等空佐・・・殉職で二階級特進、一等空佐。新暦67年に第60管理世界での緊急任務中、同隊のエステイ・マルシーダ二等空尉とヴィオラ・オデツセイ二等空尉と共に消息を断つ。

その半年後に同世界において三人に遺体が発見される。死因は転落死。天然のAMFによる飛行魔法のキャンセルによるものと断定」

読みあげたデミオ・アレツタの情報に、なのはの唇が震えだす。

恩師の死を今の今まで知らなかったという罪悪感が彼女を襲った。

そして、今日カルナログ出会った堅固なる抵抗者^{マルフィール}は本当に別人なのかという疑問。

声は似ていた。だがそれは十何年も前に聞き、今となってはおぼろげだ。

同じ魔法を使っていた。それは誰かが受け継いだのなら有り得る事だ。

彼女もまたティアナにスターライトブレイカーの集束技術を教えていたのだから。

「でも・・・」

妙な共通点があった。死亡直前まで行動していた部下が男女二人。

そして今回、姿を現した時も男女二人の部下を随伴させていた。

普通なら偶然が重なったというだけで済ますような共通点に過ぎない。

「ルシル君が向こう側にいるんなら・・・。

でも、それはやっぱり有り得ない事なのかな・・・」

なのははデスクの上につ伏した。

「シャルちゃん……。分からないよ、シャルちゃん……」

なのははデスクの引き出しの中から一つの小さな箱を取り出す。そつと優しく箱を開けると、そこには大切に納められている指環が一つ輝いている。

それはルシリオンと同じくしてこの世界を去った親友の一人シャルロツテのデバイス“トロイメライ”だった。

同時刻 高町家ヴィヴィオ私室

モニターに向かって誰かと話をしているヴィヴィオ。

『そう、ルシリオンが。でもよく生きて帰れたね、ヴィヴィオ。敵となった状態のルシリオンと戦って生き残るってとんでもないよ』

「あ、うん。レヴィ、わたし、ルシルパパは全然本気じゃなかったと思うんだ。」

何か手加減されていたような感じ。ルシルパパは本当にわたしやフエイトママの事を忘れているのか少し怪しい感じがする」

モニターに映りヴィヴィオと話をしている少女、名をレヴィ・アルピーノ。

紺色の長髪を大きなリボンでまとめてサイドアップにし、そして透き通った翠色の瞳をした少女だ。

元は“絶対殲滅対象”のナンバーEX大罪の一許されざる嫉妬といアポリユオンう人外の存在だった。ベックカートゥム そんな彼女レヴィは今では人間として生きており、ヴィヴィオの友達の一人でもある。レヴィヤタン

「でね、レヴィ。訊きたいことあるんだ」

『ルシリオンがこの世界にいる理由ね。でもわたしもそう詳しいわけじゃないの。』

知っている事と言えば界律テストメントの守護神の漆黒を担う第四の力の座に就く反則存在。

今でも生存している不完全な守護神、ということくら 』

『あれ？ レヴィ、誰と話して……あ、ヴィヴィオ！ こんにちはー！』

モニターの向こうが急に騒がしくなる。

レヴィの話の途中で乱入してきたのは、彼女の姉であるルーテシア・アルピーノだ。

そんなレヴィは、いきなり背後からルーテシアに抱き着かれた事でデスクにゴツン と顔面着陸していた。

「ルーラー、こ、こんばんは……。えつと……レヴィ、大丈夫……。？」

ヴィヴィオはルーテシアに挨拶を返してから、デスクに顔面着陸したままのレヴィに声をかける。

レヴィは起きない。それはまるで死人？のようだ。

『レヴィ？ あれ？ ちょっと、大丈夫？』

ルーテシアは、抱き着いていたレヴィから離れ心配そうに声をかける。
それでもレヴィは起きない。もう手遅れ?のようだ。

「え? ホントにレヴィ大丈夫なの?」

さすがにヴィヴィオも様子が変わたと分かり、椅子から立ち上がってルーテシアに訊く。

ルーテシアも本当に心配になり、突っ伏したままのレヴィの身体を揺するうとしたそのとき、

『ナパーム・・・デス!!』

『うげっ・・・!?!?』

- DESTROYED

「ええええええええええええええええツ!!?!?」

急に立ち上がったレヴィの頭突きがルーテシアの顎にヒットする。カエルが潰れたかのような声を上げて、ルーテシアはレヴィの自室の床に沈んだ。

「ヴィヴィオ!? どうかした!?!?」

「え、あ、な、何でもないよ! 大丈夫だから!」

廊下からなのはがそう訊いてきた。それに慌てて返すヴィヴィオ。なのはは「そう。でも夜も遅いから静かにね」とだけ告げて戻って

いった。

ヴィヴィオも「ごめんなさい」と謝って、モニターに映るレヴィへと視線を戻した。

「えっと、大丈夫だった、レヴィ？ あとルールーも」

『わたしは大丈夫。石頭だしね。ルーテシアも大丈夫。こんな日常茶飯事だし、お互い慣れてるよ』

そうは言うレヴィだったが、涙目で頭頂部を擦っていた。かなり痛かったらしい。

『で、さっきの続きだけど。ごめん、ヴィヴィオ。

わたしもよくは知らないの。役に立つ情報を持っていれば良かったんだけど・・・」

「あ、ううん。気にしないで、レヴィ。わたしもこんな夜遅くにごめんね」

『時間の事なら大丈夫なんだけど・・・』

ヴィヴィオ、フェイトさんたちに無茶はしないように伝えて。

どうしてルシリオンがこの世界に再び現れたのかは分からないけど、きっと何か理由があるはず』

「うん、分かった、ありがとう。おやすみ、レヴィ」

『おやすみ、ヴィヴィオ。起きて、ルーテシア。さっさと』

レヴィとの通信が切れる。

ヴィヴィオはデスクの上に置かれた自分とルシリオンの2ショット

写真を寂しそうに眺める。

おぼろげだが、ヴィヴィオの心に残るルシリオンとの確かな思い出。温かく優しいルシリオンの手で撫でられると気持ち良かった。肩車をしてもらって楽しかった。絵本を読んでもらって嬉しかったなど。

「ルシルパパ……」

ヴィヴィオは写真立てを抱きしめながら声を殺して泣いた。

翌日 新暦80年 11月13日 正午。

“テストメント”は昨日時空管理局主要施設に流した映像をいくつかの主要管理世界の大都市へと流した。市民の反応は様々だった。馬鹿な事を、と取り合わない者。そうかもしれない、と本格的に悩みだす者。“レジスタンス”に至っては賛同者ばかりだった。そして大都市へ流れた映像には続きが追加されていた。

『我々テストメントに賛同し共に戦おうとする者たち。来たれ。我々は待っている。集え。我々は待っている。そして管理局の局員諸君。我々を止めなければ止めに来るといい。我々も君たちを別の意味で歓迎しよう。待合の場所が判れば、の話だが』

この放送の後、“レジスタンス”の溜まり場である施設に“テスト

メント”の待つ場所とタイムリミットが記されたデータが送信されてきた。

その場所の一つはミッドチルダ北部に位置する廃棄都市区画。場所を確認した“レジスタンス”は一斉に行動を開始する。

そしてここミッドチルダ西部の都市の一画にある喫茶店。

客の一部が慌ただしく店を後にしていく。彼らは“レジスタンス”の一員だった。

そんな彼らを見ている者が二人。

「おい、今すぐ隊に連絡を。奴らはテストメントとの待合場所へ向かうはずだ」

「ああ。レジスタンスとテストメントを一網打尽に出来るかもしれない」

この地区を担当する地上部隊108隊の隊員だった。

“レジスタンス”の溜まり場として利用されているこの喫茶店での潜入捜査中に運良く“テストメント”からの放送があった。

この隊員たちから報告を受けた108部隊の隊長ゲンヤは時空管理局本局へ応援要請。

“テストメント”の白コートを纏う幹部と本局所属の魔導師が再び相見えようとしていた。

反時空管理局組織テストメント ～Omnipotent Traitor～

次回からまたバトルです。

澄み渡りし海上に羽根は舞う (Seegen Ritter) (前書き)

すみません。書いていたら前話より先の話となってしまうた為に、
割り込み投降となりました。

サファイア&ノーチエブエナ戦イメージBGM
テイルズオブジァビス “At the time of far
ewell”

澄み渡りし海上に羽根は舞う 〔Segen Ritter〕

11月14日 PM12:09 ミッドチルダ南部海上

『我々テストメントに賛同し共に戦おうとする者たち。来たれ。我々は待っている。集え。我々は待っている。そして管理局の局員諸君。我々を止めなければ止めに来るといい。我々も君たちを別の意味で歓迎しよう。待合の場所が判れば、の話だが』

ここ時空管理局本局の海上捜査部に所属する次元航行船の一隻“ヴォルフラム”の捜査司令執務室に二人。

この艦の主である捜査司令のはやてと彼女の補佐であるリインフォース？だ。

「随分と挑発的やな……」

「はいです。間違いなく管理局に恨みを持っていますね」

永遠なる不滅者の言葉に、そう確信するはやてとリインフォース？。

“テストメント”は管理局に対して何かしらの恨みを持つ集団だと。

「ここまで言われたら意地でも見つけんな。」

リイン、各レジスタンス捜査部隊と協力して、テストメントをなんとしても見つけるよ。」

「了解です！」

リインフォース？は、ミッドチルダの各方面に設置されている“レ

ジスタンス” 搜索部隊や陸士部隊から情報を集め始めた。
はやて自身も、これまでの“レジスタンス” に対する調査資料へと
目を通し始める。

「セレスも今頃はいつものように怒鳴つとるんかな・・・？」

はやては軽く微笑み、そうボソツと呟いた。

そして今まさにはやての友人セレスは、本局のオフィスで監査に怒
鳴り散らしていた。

反時空管理局組織テストメント旗艦“フリングホルニ” 甲板

厚い雲を押しよけるように青空を航行する“フリングホルニ” の甲
板には幾つもの人影がある。

全員が白いコートを纏っている。“テストメント” の幹部達だ。

「つまんねえなあ。オレだってミッドチルダに行きたかったぜ」

その内の一人、陽気なる勝者は木製の手すりにもたれ掛かりながら
側を流れる雲を見つめる。^{ケラナード}

そして口にはしているのは自らに与えられた任務への不満。

「名のある魔導師や騎士は絶対ミッドチルダ派遣だろ？
オレだって緊張感のある任務に就きたいんだって」

「だったら報復せし復讐者隊のようにマスター・至高なる卓絶者に
任務場所の変更をお願いすれば・・・」

幹部のほとんどがスルーしている中、優しいのか聡明なる勇者は陽
気なる勝者に声をかけた。

それを聞いた陽気なる勝者は大きくため息を吐いた。

「その肝心のボスが表舞台に帰っちまってる以上は連絡できねえだ
ろっよ。」

なあ、誠実なる賢者、祝福なる祈願者。オレと変わってくんね?」

陽気なる勝者は、ミッドチルダ南部に於いての“レジスタンス”回
収任務を任された誠実なる賢者と祝福なる祈願者へと頼み込む。
対する二人はチラツと陽気なる勝者を見て、

「「却下」」

きつぱりと即答。碌に考える事もせずにあっさりと切り捨てた。

「変われよお！ 変わってくれよお！ オレのトコロと変われッ！」

手すりからガバツと身体を起こし、近かった祝福なる祈願者へと詰
め寄つていく陽気なる勝者。

祝福なる祈願者はそれに若干引きながら少しずつ後ずさつていく。
そこに助け船を出すのは祝福なる祈願者と同じミッドチルダ南部担
当の誠実なる賢者。

彼女を庇うかのように前に出、陽気なる勝者へと告げる。

「待て。今回の任務はあくまでレジスタンスの回収だ。」

局員と戦いに行くわけではない。そこを間違えるなよ、陽気なる勝

者」

「・・・へいへい、分かってるよ。お前の怒りを買って消されるのは勘弁だしな。」

あゝあ。いいさ、いいさ。もういいさ。もう変われなんて言わねえよ」

グラナード陽気なる勝者は背を丸くして二人から離れていく。

彼は、“テストメント”幹部に対しての任務評価権限を持つ誠実なルン賢者の有する審判攻撃を恐れ、大人しく引き下がったのだ。

彼は自分に任せられた世界での“レジスタンス”回収へ向かうために転移しようとした。

しかし何かを思い出したかのように立ち止まる。

「そうそう。カルト報復せし復讐者隊の動向には気をつけておいて損はねえよ。」

あいつら、絶対暴走するだろうからさ。ヴォルケンリッターが出てきたら、な」

振り返ってから最後にそう忠告した。

そしてその姿を消す。自らの任務地へと向かったのだ。

「すまなかった、ルシリオン」

「ああ。だが祝福ノーチエブエナなる祈願者、私は誠実サファイロなる賢者だ。ルシリオンではない。」

どうして君はいつも私の名前を間違える？ 昨日は間違えずに呼んでくれたが。

人の名前を間違えるそれはかなり失礼な事だぞ」

誠実なる賢者は、祝福なる祈願者の感謝と謝罪が含まれた言葉には答えたが、ルシリオンという言葉には異を唱えた。

「あ、ああ、すまない。そうだったな誠実なる賢者」

「これからは気をつけてくれ」

誠実なる賢者もまた任務のために“フリングホルニ”を後にしようとする。

甲板を少し歩き、ついて来ない祝福なる祈願者へと振り向く。

「どうした？ 行くぞ」

「ああ。（本当に全てを忘れてしまっているのだな、ルシリオン）」

祝福なる祈願者はそれに短く答え、誠実なる賢者の元へと駆け寄った。

そして二人はミッドチルダへと向かった。

その二人を見送った他の幹部たちもまた任務先へと向かおうとする。

そんな中、トントンと軽い足音を立てて艦内から甲板へと出てきたのは外見では最年少ととれる潔白なる聖者だ。

彼女はすでにミッドチルダへと向かった報復せし復讐者隊、艦内の自室で無限書庫から奪った三冊の本を読み耽る永遠なる不滅者、日常へと戻っている至高なる卓絶者を除く幹部達をぐるりと見てから、

「いつてらっしやい。早く帰ってきてね」

小さく可愛らしい声で送りだす言葉を告げた。

敬虔なる諦観者は「~~~~っ」と声にならない声を上げて潔白な

る聖者へと突撃、ギョツと抱きしめた。

「く、苦しいよ、敬虔なる諦観者」

「トパーシオ……すぐに帰ってくるから。それまで待っててちょうだいね、潔白なる聖者」

「うん」

トパーシオ
潔白なる聖者から身体を離れた敬虔なる諦観者は、もう一度優しく「いつてきます」と言って抱きしめる。
そして名残惜しそうに再びその身体を離し、その姿を消した。

「あ、僕も。トパーシオ 潔白なる聖者、いつてきます」

アグアマリナ
聡明なる勇者もトパーシオ 潔白なる聖者に手を振りながらその姿を消す。

「では我々マルファイール 抵抗者隊も行こうか」

「了解です」

マルファイール
堅固なる抵抗者も部下に二人に呼びかける。
マルファイール・デレチヨ
堅固なる抵抗者の右腕とマルファイール・イスキエルド
堅固なる抵抗者の左腕は敬礼しつつそう短く答えた。

「トパーシオ では潔白なる聖者、行ってくる」

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

堅固なる抵抗者隊の三人も任務地へと向かった。
「フリングホルニ」の甲板に独り残された潔白なる聖者。
そんなとき、

「俺も出る。それまでの留守は任せたぞ、潔白なる聖者」

「永遠なる不滅者？ どうしたの、今日はずっと待機じゃなかった？」

艦内から最後の一人、縁に刺繍が施された白コートを纏う永遠なる不滅者がその姿を現す。

彼は潔白なる聖者の横を通り過ぎる際に彼女の頭を右手でポンポンと軽く叩く。

彼の左手には一冊の本。無限書庫から奪われた三冊の内の一冊だ。

「ああ、本拠地へ少し、な。本のおかげでついにアレが完成する。造っておきながら二年間も眠らせておいたアレをようやく実用段階へと移行できる」

フードに隠れた潔白なる聖者の目が細められる。

「本当にアレは必要なの？ あんな危険なモノを蘇らせて・・・」

「・・・ああ、必要だ。安心しろ。アレの威力調整幅が広いのは知っているだろ？」

そして永遠なる不滅者も“フリングホルニ”からその姿を消す。

“フリングホルニ”の甲板に独りとなった潔白なる聖者。

独りとなった彼女は、両手を胸の位置で組んで跪き、澄み渡る大空

を仰ぎ見ていた。

PM:12:45 ミッドチルダ南部海上 LS級艦船ヴォルフラム
△執務室

「はやてちゃん。108部隊から情報です。」

ミッドにおけるレジスタンスの構成メンバーのほとんどが北部の廃棄都市区画に向かっている、とのことだ

「はやての補佐であるリインフォース?が報告した。」

「北部、か。・・・まさかミッドにおけるレジスタンスの全員が?」

「いいえ。どうやらここ南部にもレジスタンスが集結しているみたいなんです」

リインフォース?ははやての疑問に答え、現状で判明している事ははやての執務デスク上のモニターに転送する。

「はやては「おおきにな」と礼を口にし、それから転送されてきたデータを神秘的な面持ちで眺める。」

「北部にはシグナムとヴィータ、それにフェイトちゃんとセレスも派遣されるんやね。」

あの四人が揃つとればほとんどの事には対応できるし、まず心配はいらへんやろ。」

にしても、こんなにも早くシグナムたちが動けるっていうのも少し引っかかるな……。

ライン、これに関して少し調べてくれるか？」

「了解ですっ」

ラインフォース？は新たに任された仕事に早速取りかかる。

はやてはさらに資料に目を通し続ける。

そんなとき、執務室に通信が入ったことを知らせるコールが鳴る。

『八神司令。陸士386部隊から連絡です。』

レジスタンスは元コーラル廃棄港へ集結しているとのことですよ』

「ん、分かった。レジスタンス逮捕にはこちらも協力すると伝えてくれるか？」

『了解しました』

ブリッジの通信士にそう指示するはやて。

通信が切れ、はやてはブリッジへと赴くために椅子から立ち上がる。そのとき、

「あれ……？」

「はやてちゃん!？」

立ちくらみを起こしたかのように、フラッとデスクに左手をついた。逆の右手は胸を押さえ、痛むのかギョツと制服を握りしめている。

ラインフォース？は急いではやての元へと駆け寄り、その身体を支えようと手を伸ばす。

それを「大丈夫や」と苦笑して、リインフォース？の頭を撫でる。

「どうしたですか、はやてちゃん・・・？」

「ん？ うん・・・。なんやる？ なんか胸騒ぎというか・・・」

はやては言い知れない不安感を抱いた。

今、この瞬間にでも何か良くないことが起きるような、そんな嫌な予感というものを。

デスクから手を離し、再びブリッジへ向かうために執務室を出ようとしたその時、“ヴォルフラム”艦内に警報が鳴り響く。

はやてはすぐさまブリッジへと通信を繋いだ。

「何の警報や！？」

『八神司令！ 白コート、テストメントです！

一直線に元コーラル廃棄港へと飛行しています！』

はやてとリインフォース？の目が見開かれる。

“テストメント”の言う通りであれば、白コートを纏う幹部は全員AAA+以上の魔導師。

生半可な局員では勝てないことは間違いなかった。

「数は！？」

はやては追隨してくるモニターに向かって状況を聞きながら速足で執務室を後にする。

リインフォース？も急いで速足のはやてに追いつくように走る。

『数は2！ 推定ランクは共にシングルS！』

「二人ともSランク・・・」

リインフォース？の顔が青褪める。

現状において“ヴォルフラム”に乗っている局員や陸士部隊では戦力不足だったからだ。

はやても苦い表情を浮かべ僅かに逡巡した後、胸元から黄金の剣十字を取り出した。

リインフォース？は「はやてちゃん！？」と驚愕する。

それは間違いなくはやてのデバイス“シュヴェルトクロイツ”だ。

「私とリインが出る！ ええか？ リイン」

「はい！ もちろんです！」

二人はクルリと反転して、出撃するために上部ハッチへと向かう。その間にも通信士から情報が入ってくる。

『八神司令、映像出します』

「・・・っ！ 厄介な相手が来たな・・・！」

「！！ 蒼色の剣翼・・・ルシルさん、ですね」

はやては齒がみしながらモニターに映る白コートの一人を見る。

背から12枚の蒼い剣翼を生やす親友だったルシリオンの姿を。

そして誠実なる賢者の隣を飛行するもう一人の白コートへと視線を移す。

ナ 体格からして女性。誠実なる賢者のパートナーである祝福なる祈願者だ。
ルシリオン
ノーチェエフエ

「こつちにも本局から援軍が欲しい感じやね」

無いものねだりだと解っていないながらもそう愚痴る。

陸では386部隊が“レジスタンス”を逮捕するために動き出し、海上警備部は“テストメント”の逮捕へと動く。

上部ハッチへと着き、はやてとリインフォース？は騎士甲冑を纏う。そして二人は“ヴォルフラム”の艦上へと立つ。

『八神司令。テストメントはそのまま進路を維持、元コーラル廃棄港へ直進中。』

進路上に位置するヴォルフラムまで距離7000です』

「了解や。行くよ、リイン」

「はいですっ！ ユニゾンイン！！」

ミッドチルダ南部海上に夜天の主が降臨した。

“レジスタンス”との待合場所へと飛行する誠実なる賢者ルシリオンと祝福なノーチる祈願者エフエナ。

「まずいな。思っていた以上に早く待合場所が知られたようだ」

「管理局もあそこまで挑発されたのだ。躍起になってもおかしくはない」

「なるほど。今回ばかりはこちらのミスだな」

“レジスタンス”が一網打尽にされるかもしれないこの状況で、二人は落ち着き払って言葉を交わす。

もしもの場合には戦闘行動を以って“レジスタンス”を管理局から解放しようというのだ。

その場合、二人は100%の確率で管理局に勝てると確信している。

「……………ん？ あれは……………」

「管理局の次元航行船だ。サイズからして、確かLS級と呼ばれる艦だ」

二人の視界に入る艦船“ヴォルフラム”。

艦首をこちらに向けている以上は、すでにこちらを発見していると二人は判断。

徐々に距離を詰めていく誠実なる賢者ルシリオンと祝福なる祈願者ノーチエブエナ。

『こちら時空管理局本局・海上警備部所属艦ヴォルフラム。海上飛行中のテストメント所属の魔導師に告ぎます。

武装を解除して投降してください。繰り返します。こちら』

「ヴォルフラム、か…………艦上に人がいる。この声はその者からだろう。」

外見からして魔導騎士・八神はやてで間違いない。が、情報とは髪や瞳の色が違う。

おそらく融合騎リインフォース？と融合している状態だろう」

誠実なる賢者ルシリオンは自慢の眼を以って遠く離れたリインフォース？とユ

二ゾーンを果たしているはやてを視界に入れる。
はやてとリインフォース？の名を聞いてから、ノーチエフエナ祝福なる祈願者が何
も話さなくなつた。

「どづした？」

「いや、何でもない」

「今はレジスタンスとの合流だ。可能な限り戦わずにやり過ぐす。
ノーチエフエナ祝福なる祈願者。速度を上げ、追撃されないように振り切るぞ」

「そうか。・・・いや、了解した」

スレイプニール

ノーチエフエナ祝福なる祈願者がそう答えた瞬間、彼女の背中から純白の翼が二対
生えた。

バサツと大きく羽ばたいて、彼女の飛行速度を急上昇させた。
一気に距離を開けられた誠実なる賢者ルシリオンも負けじと速度を上げる。
ミッドチルダ南部の海上に美しい蒼と白の羽根が舞つた。

『はやてちゃん。ルシルさんたちの止まる気配はありません』

「・・・しゃあない。落とすよ。リイン、フレーズヴェルグ、ス
タンバイ」

はやては“夜天の書”を開き、“シュベルトクロイツ”を頭上高く掲げる。

使用魔法は古代ベルカ式の超長距離射程の砲撃魔法フレーズヴェルグ。

威力は抑えない。何故なら誠実なる賢者ルシオンを相手に下手な手加減は自分たちの敗北に繋がると知っているからだ。

「り、了解ですっ」

「来よ、白銀の風、天より注ぐ矢羽となれ・・・！」

はやての詠唱の後、彼女の前面に展開される巨大な白いベルカ魔法陣。

「リイン！ 『照準バッチリです。いつでもいけますよ、はやてちゃん！』」

ほな行くで！ ルシル君、手加減はせえへんよ。フレーズ・・・
ヴェルグ！！！」

三方の円陣と魔法陣中央に白の極光が生まれる。

そしてはやての術式名宣告と共に放たれる四条の白の極光が、こちらへと迫ってくる誠実なる賢者ルシオンと祝福なる祈願者ノーチエブエナへと襲いかかる。

『炸裂まで、9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・
3・・・2・・・1・・・今です！』

はやてとリインフォース？の視界に白い爆発が四つ入る。

「どないや、リイン？」

『直前で防がれましたがダメージは与えられたと思うのですが、撃墜には至ってないと思うです』

「そうか。なら降伏してくれるまで撃つよ」

はやての前面に展開されているベルカ魔法陣に再度白の極光が集束した。

『はやてちゃん・・・本当にいいんですか・・・？』

リンフォース？は、友であった誠実なる賢者^{ルシリオ}への攻撃に躊躇いを覚えていた。

それははやても同じだった。攻撃対象は彼女にとっては親友で命の恩人の一人でもある誠実なる賢者^{ルシリオ}。

だが、はやての心には彼に攻撃する躊躇いよりも大きな感情があった。

「記憶がない理由は分らんけど、フェイトちゃんを悲しませて泣かせた。男としてあるまじき行為や。これはな、私のちょっとした八つ当たりや」

フリースヴェルグ・第二波

再度超長距離砲撃が放たれる。

「これが、情報にあつたフレーズヴェルグ・・・」

はやての放つた砲撃を回避しきる前に受けた誠実なる賢者ルシリオンが呻く。
直前で張つた全力のシールドのおかげで撃墜は免れたが、それでも
軽微とは言えないダメージを負っていた。

「大丈夫か？」

祝福なる祈願者ノーチエプエナは誠実なる賢者ルシリオンに庇われたことで大してダメージは
なく、白コートの裾が破れるくらいで済んでいた。

我が手に携えしは確かなる幻想

キュアプラムス

誠実なる賢者ルシリオンは回復魔法を自身にかけ、負ったダメージを少しずつ
回復していく。

「ああ、任務続行に支障はない。しかし、炸裂範囲が予想以上に広
いな。

しかも砲弾が一つならまだしも四つときた。まず視認してからの回
避は不可能だ。

・・・仕方がない。戦闘は避けたかったが、八神はやてを落とす」

祝福なる祈願者ノーチエプエナに支えられている誠実なる賢者ルシリオンは戦闘を決定した。
祝福なる祈願者ノーチエプエナの肩がピクツと動く。

誠実なる賢者ルシリオンが何か言おうとしたその時、砲撃の第二波の煌きが視
界に入る。

「・・・っ！」

二人は急いで高度を上げて回避行動を取った。
白の極光が二人の眼下に到達。刹那、極光が収縮し一気に炸裂した。
迫る白の衝撃波に二人のコートがバサバサツと勢いよくはためく。
衝撃波によって体勢を崩しながらも、誠実なる賢者ルシオンはある砲撃を準備し始めた。

「これでどうだ・・・！」

砲撃フリースヴェルグをギリギリで回避し終えた直後、誠実なる賢者ルシオンは待機させておいた術式を発動。
彼の頭上に展開される魔法陣。それはミッドチルダ式でもベルカ式でもなかった。

雪の結晶のような模様のある正四角形。その四方の角に細長いひし形の模様が伸びている。
それを囲うのは二重の六角形のライン。それは現代では存在しえない魔法陣だった。

そして誠実なる賢者ルシオンはその魔法陣に右拳を殴りつけた。

ヘカド・カステイガル 次元跳躍散弾砲撃

罪を罰する、という意味を持つ蒼の砲撃が魔法陣から頭上高くへと放たれる。

それは、昨日ミッドチルダとカルナログを襲った散弾砲だった。
誠実なる賢者ルシオンは散弾砲を放つてすぐ、祝福なる祈願者ノーチエブエナと共に“ヴォルフラム”へと飛行を再開する。

“ヴォルフラム”艦上で、空高く飛んでいく蒼の閃光を目にしたはやてとリンフォース？。

その蒼の閃光が報告のあった散弾砲と判断したはやては、フレイスヴェルグの射線を上へと向ける。しばらくの静寂がミッドチルダ南部海上を包み込む。

『……来ました!!』

「リン！ フレイスヴェルグを全弾あの砲撃に向けて射出！」

フレイスヴェルグ・第三波

放たれた四条の白の極光が頭上高くから落ちてくる蒼の散弾砲へと向かっていく。

リンフォース？は着弾までの時間をカウントダウンする。

『……3……2……1……着弾!!』

はやての放ったフレイスヴェルグと誠実なる賢者の放った散弾砲と衝突。

ドオン!!と世界を振るわせるような轟音。海上を染め上げる莫大な光量の閃光。

はやてはそのあまりの閃光と轟音に視線を落とし、片耳を塞いだその瞬間、

『司令！ テスタメントが高速でこちらに向かってきます!!
接敵まであと……見失った!? 違っ 速っ……!!』

「……接近戦では私の方に分があるだろうか？」

「なっ・・・!?」

ブリッジからの報告と同時に誠実なる賢者ルシリオンがその姿を現す。

彼が放った散弾砲は攻撃のためではなく、はやてへ接近するのを感じつかれない為の囮として放ったものだった。

轟音と閃光によるはやてと“ヴォルフラム”の索敵能力の妨害として利用していたのだ。

「はあああああっ!!」

誠実なる賢者ルシリオンの右手にあるのは蒼の魔力刃。

それを横一闪。はやてをベルカ魔法陣ごと薙ぎ払うかのように振るつた。

誠実なる賢者ルシリオンの持つはやての情報には接近戦は不得手とされていた。だから彼は接近戦を選んだ。自らも苦手とする接近戦を。

『ブリューナク、発射です!!』

ラインフォース?がそう口にした瞬間、放たれたのは射撃魔法。

直撃するまでの刹那、誠実なる賢者ルシリオンのフードに隠れた目が見開かれる。

こんな魔法があるとは知らない。

「ぐおっ!?!」

至近距離で放たれた連続掃射の魔力弾、その数9。

それらが全て防御も何もない誠実なる賢者ルシリオンへと襲いかかった。

直撃を受けた誠実なる賢者ルシリオンが弾かれるかのように後方へと退く。

コートの前を留めていたファスナーが壊れ、彼の纏っていた白コ

トが開く。

黒を基調とした防護服が露わになった。

それは、はやてとリインフォース？には憶えのある防護服だった。

「ルシル君。大人しく捕まってもらうよ！！」

はやては掲げた“シュベルトクロイツ”を勢いよく振り下ろす。

「『クラウ・ソラス！』」

放たれる砲撃。誠実なる賢者ルシリオンを横つ跳びで回避する。

それと同時に左手をはやてへと翳し、

我が手に携えしは確かなる幻想

魔力弾を放ちつつ、ある呪文を口にした。

はやてはそれが何なのか知っていた。

スレイプニール

はやての背にある三対の黒翼がバサツと羽ばたいた。

すぐさま空へと上がり、何かをしようとした誠実なる賢者ルシリオンから距離を取る。

はやては上空からこの空域を確認した。目下には誠実なる賢者ルシリオンが未だに“ヴォルフラム”艦上に立っている。

そしてもう一人の白コート、祝福なる祈願者の姿をその視界に入れた。

はやての目が見開かれる。祝福なる祈願者ノーチエプエナの背にある二対の白翼を見たからだ。

それは昨日、彼女が昼寝していた際に夢見た大事な家族と同じモノ

だ。

「リイン・・・フォース・・・？」

『どうかしたですか、はやてちゃん？』

「え？ ううん、なんでも・・・（そんなわけない。リインフォースがおるわけが・・・）」

はやては頭からその考えを振り払い、現状為すべきことを思考する。今はテストメントの一人である誠実なる賢者^{ルシリオン}を何としても捕縛する、と。

そのとき、

「おおおおおッ！ アカシックトメント！！」

はやての足元から迫る閃光の柱。

はやてはギリギリで閃光の柱を回避したが衝撃波だけは受けてしまった。

両腕で顔を覆う。帽子が吹き飛び、はやては体勢を崩してしまう。そこに迫る誠実なる賢者^{ルシリオン}は再度 我が手に携えしは確かなる幻想と唱えた。

はやては必至に体勢を直し、

「バルムンク！！『行くですっ！！』」

誠実なる賢者^{ルシリオン}へと魔法を放つ。全方位からの直射弾だ。

彼は「なにっ！？」と驚愕の声を上げ、咄嗟にシールドを張った。しかしいくつかの魔力弾がシールドを通り抜け、彼へと殺到する。直撃。彼を覆い隠すほどの爆煙が発生した。

そのあまりの呆気なさにはやてとリインフォース？は心の内で首を傾げる。

(・・・ルシル君ってこんなに弱かったか？)

はやてはそれもまた何かの布石かとも疑う。

そして頭に過ぎるのは先程から戦闘に参加しないもう一人の白コート、祝福なる祈願者。

彼女が何らかの重要な役割を持っているのかもしれないと警戒しておく。

「っ、さすがは総合とはいえSSランクの魔導騎士・八神はやて」

ルシリオン
誠実なる賢者がボロボロになった白コートを剥ぎとった。

完全に露わとなった黒き魔術師ルシリオンとしてのその姿。うなじ付近で縛られた銀の長髪が尻尾のように風に靡いている。

リインフォース？は震えた声で「ルシルさん」と口にした。

「これ以上は時間をかけてはいられない。

ゆえに【祝福なる祈願者、力を貸してくれ】ここからは二人で戦わせてもらおう」

二人で、という言葉に、はやては遠く離れた祝福なる祈願者へと視線を移した。

だが、先程までそこにいた祝福なる祈願者の姿が見当たらない。

「いくぞ、祝福なる祈願者」

「『っ！?』」

はやてが再度ルシリオ誠実なる賢者へと視線を戻す。
彼の隣、そこにはいつの間にか移動していたノーチエブエナ祝福なる祈願者がいた。
彼女の背にある二対の白翼。白コートの上から分かる女性としての
体格。

はやては思った。もしかして、やっぱりそうなんじゃないか、と。

「……すぐに終わらせる……」

ルシリオ誠実なる賢者とノーチエブエナ祝福なる祈願者が手を繋いだ。

「「ユニゾン……イン!!!」」

「『なつ!?!』」

強烈な蒼の閃光が辺りを照らす。

視界を潰され、行動不能となっているはやての内にいるリインフォ

ース?は驚愕する。

ノーチエブエナ祝福なる祈願者と呼ばれた“テストメント”幹部は自分と同じ融合
騎だったと。

はやては別の意味で驚愕していた。これはもう間違いないと。

ユニゾンインと口にした際の声、それは忘れられない家族のものだ
った。

蒼の閃光が治まる。はやてとリインフォース?の目の前にいるのは
一人の男とも女ともとれる外見の存在。

だが体格からしてそれは男だと断定できる。

その姿は先程までのルシリオ誠実なる賢者とは違っていた。

髪色の銀は蒼に近い銀となり、瞳の色は真紅に統一されていた。

縛られていた長髪は解かれ、毛先に向かうほどふわりと左右に広が

っている。

両腕に巻きつく鋼色の鎖はジャラジャラと音を立てている。背にあった六対の蒼の剣翼は三対の翼となり、右側が白翼で左側が蒼翼だった。

防護服にも変化があった。色が黒から白へと変更されてはいるがインナースーツとズボンはそのまま、しかしノースリーブのロングコートは消えていた。

代わりにあるのは半袖の白のジャケットと白の腰マント。色は違えどもそれは間違いなく、

「リイン・フォース……、リインフォース!!!」

はやてが失った八神家の最後の一人、初代のリインフォースのものだ。

リインフォース？もまた、かつて夢の中で見たリインフォースが纏っていた騎士甲冑と全く同じだと思いだしていた。

「誠実なる賢者と祝福なる祈願者が強襲形態“祝福の騎士”（ゼーゲン・リッター）。八神はやて、リインフォース？……これで終わりだ」

ナイトメア

翳された誠実なる賢者の右手から蒼の砲撃が放たれる。（ルシリオン）はやてはショックの所為で対応するのが遅れてしまった。

『はや　っパンツァーシルト!!!』

リインフォース？は、動きを止めたままのはやてに代わりシールドを張る。

衝突。爆発が起き、シールドが破壊される。今度ははやてが爆煙に

覆われる。

小さい悲鳴を上げ、はやては落下する。その間に脳裏に過ぎり続ける、なんで?という疑問。

『はやてちゃん! まだそうと決まっただけじゃ』

『あれはリインフォースやツ! なのに・・・なんで!?!』

混乱のあまりにはやてはリインフォース?の言葉に怒鳴り返す。その間にも“祝福の騎士”ゼーゲン・リッターとなった誠実なる賢者の攻撃は続く。ルシリオ

「刃以って、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー!!!」

「なんで・・・なん・・・?」

『はやてちゃん! つく、パンツァーガイスト!!!』

血の色をした短剣が18基射出される。

高速で迫る短剣を、今度は魔力を纏って防御する障壁を展開する事で対処する。

再度はやてを襲う爆発と爆煙。彼女の落下速度がさらに上がる。

リインフォース?は必死に思考する。どうすればはやてを立ち向かわせられるか。

しかしリインフォース?も混乱の限界を迎えていた。

状況が冷静になる事を阻んでいる。相手は逢いたかった初代の祝福の風リインフォース。

それが今敵として、親しかった誠実なる賢者ルシリオと共に自分とはやてを攻撃する。

ハウリングスファイア

誠実なる賢者の両隣に大きめのスフィアが展開される。
そして、

「吼えるは闇穿つ極光、ナイトメアハウル!!」

翳された右手から再び蒼の砲撃が放たれる。
それと同時に彼の両隣のスフィア二基も砲撃となる。
再びはやてへと襲いかかる蒼の砲撃。

『はやてちゃん!!!』

パンツァーシルト

リインフォース? はありつたけの魔力を防御に回した。
その直後に衝突。 何度目かの爆発。 その範囲は今までと比べるまで
もなく大きい。
はやては黒煙を引きながら“ヴォルフラム”へと墜落、艦上へと叩
きつけられた。

「つぐ……げほつげほつ!!……リイン……フォー……
ス……」

背中に奔る激痛にはやては激しくむせる。

うつすらと目を開ける。 視界に入るのは空高くに浮遊する誠実なる
賢者。

背の翼が羽ばたく度に蒼と白の羽根が空を舞う。

撃墜したはやてを見下ろす祝福の騎士・誠実なる賢者。ゼーゲン・リッター
彼の内にいる祝福なる祈願者は、“ヴォルフラム”艦上で仰向けに倒れているはやてから目を逸らす。

「八神はやて、予想以上に危険人物だ。今後の為にここで確実に落としておくか」

誠実なる賢者ははやての魔導騎士としての実力を危険視した。ルシリオ
そのためここで完全に撃墜しておくべきだと判断を下す。

背の三対の翼を羽ばたかせ、“ヴォルフラム”へと急降下する。
徐々に倒れ伏したままのはやてへと迫る誠実なる賢者。ルシリオ

右手に宿すのは蒼の魔力。使用魔法はシュヴァルツェ・ヴィルクン
グ。

付与されている効果は、はやてを確実に倒すために障壁破壊となつた。

「悪く思つな、八神はやて。そしてリインフォース？」

はやてまであと約5mとなったそのとき、

ユニゾンアウト

祝福なる祈願者は誠実なる賢者とのユニゾンを解いた。ルシリオ
ノーチエフエナ

彼女のその突然の行動によって飛行魔法がキャンセルされ落下する
誠実なる賢者。ルシリオ

彼は驚愕しながらも空中で体勢を立て直し、“ヴォルフラム”艦上
へと着艦した。

それに遅れて着艦するのは祝福なる祈願者。ノーチエフエナ

しかしその姿は白コートではなく、純白の騎士甲冑姿となっている。
ノーチェエブエナ
祝福なる祈願者の晒された素顔は、間違いなく今は亡き八神家の一人
リインフォースだった。

昨日夢で見たままの彼女の姿に、はやてはポロポロと涙を流し始める。

「リイン・・・フォース・・・！」

彼女ははやてを庇うかのように誠実なる賢者の前に立ち塞がる。
ルシリオ

はやては痛む身体に鞭打ち、“シュベルトクロイツ”を支えにして立ち上がる。

だがそれまでだ。目の前にいる祝福なる祈願者まで歩きだせない。
リインフォース

「それは何のつもりだ、祝福なる祈願者。返答によっては君への審判攻撃も辞さない」
ノーチェエブエナ

「誠実なる賢者、我々の任務内容は何だ？」
サフィロ

お前はここに来る前に陽気なる勝者に言っていたはずだ。
グラナード
管理局員と戦うために行くのではない、と」

祝福なる祈願者の返答に誠実なる賢者の眉がピクツと動く。
ルシリオ

そして何も無い空間から新しい白いコートを取り出し、袖に腕を通す。

彼はフアスナーを上までしっかりと閉め、フードを被り、はやてと
リインフォース
祝福なる祈願者に背を向ける。

「そうだったな。・・・時間を使い過ぎた。レジスタンスと合流するぞ」

彼は背に蒼の剣翼を生み出し、“ヴォルフラム”から離れる。

祝福なる祈願者もそれに続くために、背の二対の白翼を羽ばたかせる。

「げほっげほっ・・・リインフォース!!!」

倒れ込むように祝福なる祈願者の右腕を掴み取るはやて。

ガシャンと“シュベルトクロイツ”が音を立てて転がる。

祝福なる祈願者は振り返り、涙を流すはやてをしつかりと見つめる。そして、自分の腕を掴むはやての震えた手に自らの手を優しく添えた。

「リインフォース・・・」

「・・・申し訳ありません」

「え?」

自分の腕を掴むはやての手を、謝りながら引き剥がす祝福なる祈願者。

支えを無くしたはやては後ろへとフラつき、ペタリと座り込んだ。

「つつ、リインフォース!!! なんでなん!? なんで・・・何で

こんな!」

背を向けて空へと飛び立った祝福なる祈願者へ手を伸ばし泣き叫ぶはやて。

祝福なる祈願者は振り返らない。だが、その表情はすごく辛そうなものだった。

元コーラル廃棄港へと向け、再度飛行を開始した誠実なる賢者と祝福なる祈願者。ルシリオン

祝福なる祈願者も “テストメント” 幹部の証である白コートを再び纏っていた。

そして大した時間もかけずに “レジスタンス” との合流地点である元コーラル廃棄港に到着。

二人の目に映るのは、陸士386部隊に連行されようとしていた “レジスタンス” だった。

「これは私たちの、いや私のミスか・・・」

「・・・ああ」

誠実なる賢者の言葉に生返事の祝福なる祈願者。ルシリオン

彼はそれを大して気にも留めずに、陸士386部隊から “レジスタンス” を解放するために動き出す。

ポケットに手を入れ、中から小さな物体を取り出した。

帆船の模型だ。祝福なる祈願者はそれを確認し、右手に大き目の深紫色のスフィアを生み出した。

そのスフィアへと向けて、彼女は力一杯の拳打を叩きこんだ。

アイゼンゲホイル

その瞬間、世界が震えた。

とんでもない光量の閃光と爆音が周囲一帯を襲った。

地上にいる “レジスタンス” や陸士386部隊が耳を押さえて次々と蹲っていく。

放たれたのは、範囲内の対象の視覚と聴覚を一時的に奪う他にもレ
ーダージャミングの効果をも有する空間魔法だ。

「目醒めの刻。スキーズブラズニル!!」

帆船の模型を空高く放り投げ、その帆船の名前であるという言葉を口に
した。

蒼の閃光が空を染め上げる。治まったその時、空に浮かぶ巨大な帆
船がその姿を現した。

全長が2kmはあろうかという巨大帆船。

「祝福なる祈願者、レジスタンス諸君をスキーズブラズニルへ強制
転移」

「了解した」

未だに眼下で続くアイゼンゲホイルの効果。

祝福なる祈願者は蹲っているままの“レジスタンス”を次々と甲板
へと転移させていく。

誠実なる賢者もまたそれに倣い、転移魔法を以って“レジスタンス
”を回収していく。

“レジスタンス”回収終了まで約30秒。

転移目標と陸士386部隊が動きを止めていたからこそこの時間。

「航空部隊が集まってくるまでに帰還するぞ」

祝福なる祈願者へとそう指示した誠実なる賢者へと念話が入る。

【誠実なる賢者? 至高なる卓絶者です】

相手は“テストメント”の指導者至高なる卓絶者^{ハージェ}だった。

「【どうかしましたか、マスター？】祝福なる祈願者^{ノーチエブエナ}、先にスキーズブラズニルと共に帰還してくれ」

「ああ、了解した」

祝福なる祈願者^{ラインフォース}は“スキーズブラズニル”のブリッジへと入る。すると下から昇ってくる光が生まれ、その光に“スキーズブラズニル”が包まれ始めた。光に引つ張られるかのように“スキーズブラズニル”も光の粒子となつて空高く昇つていき、そして消えた。

【……ミッドチルダ北部の廃棄都市区画でレジスタンス回収を頼んだ報復^{カルド}せし復讐者隊が暴走しているの。おそらく任務は失敗。だから彼らを連れ帰ってほしいの】

それを聞いた誠実なる賢者^{ルシジョン}は【了解】と答え、すぐさま北部の廃棄都市区画へと移動を開始した。

澄み渡りし海上に羽根は舞う ー Segen Ritter ー (後書き)

初代祝福の風リインフォースが登場ですッ！ バレバレでしたよね、やっぱり。

まあ分かるように色々と書きましたからね。

彼女をこのエピソードで出すために、2ndエピソードにおいて魔術で生き残るようにはせずに旅立ってもらったわけです。

続行しなかった場合はそのままお蔵入りでしたが、晴れて再登場です。

融合騎としての能力はそのまま。ルシルとユニゾンさせたいがための無茶です。

今回使用した魔法はPSPから拝借。はやてのブリューナク連打、アレは卑怯でしょ。

青き空は怨嗟の業火に燃えて 　　A v e n g e r s 　　J u d g e m e n t

報復せし復讐者カルド隊戦イメージBGM

うみねこのなく頃に(アニメ版) “下される審判”

青き空は怨嗟の業火に燃えて 〈Avenger's Judgment〉

11月14日 PM12:09

時空管理局本局 レジスタンス対策部隊“特務五課” オフィス

各管理世界で問題となっている“レジスタンス”に対応するために設立された臨時の対策部隊“特務五課”に用意されたオフィス。そこにミッドチルダの地上部隊第108部隊の隊長であるゲンヤから連絡が来た。

内容は現在管理局内で話題となっている“反時空管理局組織テストメント”と“レジスタンス”の待合場所が判明したという事。

その報告を受けた“レジスタンス”対策部隊“特務五課”の隊長を任されているセレス・カロラー等空佐（28歳の彼氏募集中）が数人の部下を伴ってミッドチルダへと出勤しようとしたとき、

『カロラー等空佐、君の隊のミッドチルダ出勤への許可がまだ下りていない。出勤許可が下りるまでオフィスで待機だ』

「アホかッ！ 昨日とたった今散々テストメントに馬鹿にされたっていうのに！！」

それをあっさり妨害してくるモニターに映る“特務五課”の監査に怒鳴るセレス。

セレスは灰色のセミロングの髪を右手でわしゃわしゃと掻き、

「なら、あたしが一人で出る！ それなら問題ないでしょ！

執務官としての権限を使えば、部隊じゃなくて個人で出勤できるんだからッ！！」

大声を上げ、デスクに左手をバンツ！と叩きつける。
セレスは一等空佐の階級を持ちながら執務官としての肩書も持っていた。

しかし諸事情で今は一つの部隊を任されている。
オフィス内の所々から「またやってるよ隊長」とか、「上司に向かつてすげえよな」など聞こえてくる。

『待て！ そんな勝手が許されるか！！ 減俸処分にするぞ！？』

「お好きにどうぞ！」

『おい！ 降格して指揮権を剥奪するぞ！？』

「ええ！ どうぞどうぞ！」

『く、クビにするぞ！？』

「やれるものならやってみなさいよッ！！」

出来もしない事を並べ立てる監査に怒鳴りまくるセレス。

「執務官の制服に着替えてきますので覗かないでくださいね！！」

大股でオフィスを後にしようとするセレスに、

『分かった！ 分かったから単独での行動は止せ！

今話がついた出勤準備中の局員たちと共に行くんだ！』

監査はそう言ってセレスを引き止めた。

セレスは監査に見えない角度でニヤリと笑みを零した。その笑みを見た部隊員たちは「あゝあ」とガツクリ頂垂れた。セレスはその笑みを努めて隠し、監査の映るモニターへと振り返った。

「で？ 今すぐに出られる局員たちって誰なんですか？」

『……はあ。フェイト・テストロツサ・ハラOWN執務官。そしてどういうわけか武装隊と教導隊からシグナム一尉とアギト一等空士、ヴィータ二尉のみが出られる』

「何でこんなに早く、しかもすごい局員が出せるんだ？」と首を傾げている監査。

それはこうなることを始めから分かっていたかのように早い対処だった。

セレスは「おー、フェイトたちが出てくるんだ」と嬉しそうに笑った。

セレスにとって、フェイトを始めとしたのは、はやて、守護騎士たちは10年来の友人だった。

「そんじゃまあ色々とやってくれちゃってる連中を逮捕してきますんで」

監査に敬礼したセレスはオフィスを後にした。

ミッドチルダへと向かうために、ここ転送ポートに集まった4人の魔導師と騎士。

フェイト、シグナム、ヴィータ、セレスの四人だ。

「お久しい！ 元気にしてた？ っていうかフェイト、昨日テストメントの一人と戦って怪我したっていうじゃん」

「セレス……。うん……。それは大丈夫」

セレスの元気いっぱい挨拶に、少し沈んだ笑顔を見せ、そう返すフェイト。

セレスは何かまずい事を言ったのかと思い、フェイトと同様古い友人であるシグナムとヴィータに念話で訊いてみる。

『あたし、何か地雷踏んだ？』

『まあ何と言うかいろいろと、な』

セレスに答えるのはヴィータ。

ヴィータは、もうその話題は止めてくれ、という視線をセレスに向ける。

それを感じ取ったセレスは話題を変える。

「『ふ〜ん』ていうかさ、一応あたしってあなたたちより階級上なんだけど……」

「堅苦しいのは面倒だから気軽に呼べって言ったのお前だぞ」

「そうだけござ〜」

ヴィータとセレスだけの話し声が聞こえる中、フェイトたち四人はミッドチルダへと向かった。そして、姿が消える直前に見せたフェイトの表情は決意と覚悟に満ちていた。

同日 PM 12:59 ミッドチルダ北部廃棄都市区画

続々と“レジスタンス”がここ廃棄都市区画に集結している様をピルの屋上から見つめる三人の白コート。

シグナムたち守護騎士を殺したいほどの憎悪を抱く報復せし復讐者隊の三人だ。

彼らはミッドチルダでの“レジスタンス”回収任務を至高なる卓絶者^デに直訴、そして実った。

【ヴォルケンリッターが派遣される可能性が最も高いのはここミッドチルダだ。

復讐のチャンス^{ノーチェエフエナ}を祝福なる祈願者なんぞに取られてたまるか】

しかしそれは二分の一の確率でもあった。

ミッドチルダでの“レジスタンス”回収は北部と南部の2つで行われる。

それゆえに間違いなく北部に現れるという確証はどこにも無かった。

【確かにいい機会ですが、今回の任務はあくまでレジスタンス回収。戦闘行動を禁じられていないとはいえ、下手をすると命令違反にな

るの　】

【報復せし復讐者の左腕、貴様は忘れたのかッ!?】

俺たちがこの組織にいるのはヴォルケンリッターへの復讐と言う目的のみだ!!

それを果たせればもう未練は無くなるも同然!　その後は知ったことかッ!!

報復せし復讐者の左腕へと怒鳴り散らす報復せし復讐者。
報復せし復讐者の左腕と報復せし復讐者の右腕は顔を見合わせ、

【報復せし復讐者の右腕、了解】

【報復せし復讐者の左腕、了解】

と静かに告げた。彼ら二人も守護騎士に憎悪を抱いているのは確かだった。

それを再確認し、二人は命令違反になろうとも殺害前提の戦闘を行う事を決意した。

それから約三十分後、タイムリミットまで残り半分となったとき、接近してくる魔力反応を感じ取った。

数が多い。数人程度ではない。十人は明らかに超えている。

【ん、地上部隊か?　さすがにこれだけのレジスタンスの大移動は完全に隠しきれなかったか・・・】

【まあいい。どうせ空を飛べない連中だ、空襲すればそれで終わるはずだ】

報復せし復讐者隊、己が心に復讐の業火を燃え滾らせ、憎きヴォルケンリッターを最大戦力で処断せよッ！！】

【【了解！！】】

ミッドチルダ北部の廃棄都市区画上空、復讐の鬼と化した報復せし復讐者隊は、一直線にこちらへ向かう守護騎士のシグナムとヴィータを殺害するために空を翔けた。

陸士第108部隊から“レジスタンス”追跡を引き継いだ陸士第104部隊と合流し、廃棄都市区画へたどり着いたフェイトたち。104部隊と“特務五課”の隊長であるセレスは、今も廃棄都市区画へと向かってくる“レジスタンス”の逮捕へと動く。そして本局からの応援であるフェイト、シグナム、ヴィータ、アギトは廃棄都市区画の中央付近から感じ取れる魔力反応のある場所を目指し飛行していた。

「……………なッ!？」

「凄い……………これは、殺気!？」

「ヤバい奴がこっちに向かってくるぞ、シグナム!!」

「ああ、この殺気は我々に向けて放たれている！
注意しろ、ヴィータ、テストアロツサ！」

四人はハッキリとその肌で強烈な殺気を感じ取った。しかも自分たちに向けられている事が理解出来てしまった。そして視認できるほどの距離にまでその姿を現した三人の白コート。“テストメント”の幹部を名乗る十四人の内の三人で間違いなかった。

「向こうは殺る気みてえだな。こいつはまず間違いなくセインテストじゃねえ。」

おい、テストロッサ。奴らを捕まえて、セインテストの事を聞きだすぞ」

「うん！」

ヴィータに力強く答えるフェイト。

午前中にレヴィからは大した情報がなかったとヴィヴィオからすでに聞いていた。

ならばルシリオンの仲間となっている“テストメント”メンバーを捕まえて情報を聞きだすしかないということになっていた。

そして両勢力の魔導師は10mという距離を開けて邂逅を果たした。

「見つけた、ようやく会えた。忌わしき怪物ヴォルケンリッター」

中央に立つ白コートの男報復せし復讐者が告げる。^{カルド}

「・・・テストメントだな。お前たちをテロリズム実行の容疑で逮捕する」

シグナムが鞘に納められた“レヴァンティン”の柄に手を伸ばしつつ告げる。

「殺せ殺せ殺せ殺せ」

「話を聞くような連中じゃねえみてえだぞ、こいつら」

憎悪に満ちた怨嗟の声を聞き、若干引いているヴィータが呆れた風に口にした。

昨日交戦した堅固なる抵抗者隊より話が通じないと。

「我らはテストメントが報復せし復讐者隊。

守護騎士ヴォルケンリッターをこの手で断罪するための部隊だ」

「なに・・・？」

報復せし復讐者の言葉にシグナムの目が細められる。

シグナムは昨日の事を思い出していた。“テストメント”幹部の一人である陽気なる勝者が去る直前に口に使っていた言葉を。

お宅らを唯一裁ける断罪者だ。それでお宅らは終わりだよ

(我ら守護騎士に相応しい相手・・・だったか・・・)

「貴様らの悪逆非道によって散っていった者たちの怨嗟の声にてその身を滅ぼせ」

報復せし復讐者隊の三人の足元に、大きな赤紫色の召喚魔法陣が展開される。

シグナムは昨日交戦した陽気なる勝者と同種の敵であることを察知した。

“レヴァンティン”を抜き放つシグナム。“グラーファイゼン”を構えるヴィータ。

“バルディツシュ”をハーケンフォームにして警戒するフェイト。アギトはいつでもシグナムとユニゾン出来るように、シグナムから距離を取らずに警戒する。

「……来たれ、業火の眷属！！！！」

報復せし復讐者隊は叫ぶようにこれから召喚される存在の名を告げた。

その瞬間、召喚魔法陣からどす黒い闇色の炎が噴き上がり、報復せし復讐者隊の三人を飲み込んだ。

フェイトたちはその強烈な熱波に耐えきれずに後退を余儀なくされる。

闇色の炎が集束していく。

そして炎が治まっていく中、現れたのは白コートでなく闇色の炎が燻っている漆黒の甲冑を身に纏った報復せし復讐者隊だった。

フルフェイスの兜の頭頂部からは真紅の長い羽根飾り、全身を覆う甲冑、籠手と具足には闇色の炎が纏わりついている。

手にするのは禍々しい形をした大剣。その刀身にも闇色の炎が纏わりついている。

そして中央に立つ報復せし復讐者にのみ紫色のマントがあった。

「アギト、ユニゾンだ！！」

「お、おう！！ ユニゾンイン！！」

シグナムは陽気なる勝者とラギオン以上の危うさを感じ、アギトとユニゾンを行う。

シグナムの髪と瞳の色が変わり、背からは二対の炎の羽が生まれる。フェイトとヴィータも最大警戒しつつ各々のデバイスを構え直す。

「優先目標はヴォルケンリッターの烈火の将シグナムだ」

「了解」

報復せし復讐者隊が一齐にシグナムに襲撃をかける。

もちろんそんなに簡単にいくわけもなく、報復せし復讐者の右腕は

グイータに妨害され、報復せし復讐者の左腕はフェイトに妨害され

た。

報復せし復讐者のみが唯一シグナムへとたどり着く。

報復せし復讐者の振り下ろされた大剣とシグナムの振り上げられた

“レヴァンティン”が衝突し、そのまま鏝迫り合う。

「おのれ・・・大人しく業火に焼かれ死ね、シグナム・・・！」

「ならば理由を教えろ！ 我ら守護騎士に何の恨みがある・・・！」

拮抗する鏝迫り合い。たがいに一歩も引かず、ただ問答を交わす。

「貴様らを怨む者は掃いて捨てるほどいる。忘れたとは言わせないぞ、シグナム。」

貴様らは今までどれだけの者たちを殺めてきた？
闇の書としての貴様らによって、どれだけの命が奪われた？
どれだけの家族が泣いた？ 怨んだ？ 憎んだ？」

兜の中からくぐもった男の声。

落ち着いているようにも聞こえる報復せし復讐者の声だが、その声に含まれるのは全てを呪う怨嗟だった。

「っ！ それは・・・っぐ！」

『シグナム!!』

昔の罪科を問われ、シグナムは無意識に力を緩めてしまった。そこでさらに力を強める報復せし復讐者に、シグナムは次第に押され始める。

「俺たち報復せし復讐者隊も貴様ら闇の書によってその人生を狂わされた!

それが貴様らを怨む理由だ! 殺したい動機だ!

なぜ貴様らが幸せに過ごしているのに、俺たちは幸せじゃない!? 何故だ!? 貴様らにそんな資格はあるのか!? ふざけるなッ!! 他人を大勢不幸にしておいて、貴様らは幸福の座にいる! 許せるものかッ!!」

業火に焼かれその罪を償え

シグナムは歴戦の経験と直感からすぐさま報復せし復讐者から離れる。

次の瞬間、大剣に纏わりついていた闇色の炎が爆発を起こした。

シグナムは爆発によって起きた強烈な衝撃波と熱波に気を失いそうになりながらも何とか持ちこたえる。

「アギト! 『おうよ! 猛れ、炎熱! 烈火刃!』 レヴァンテイン!」

シグナムは頭を振るい、アギトに炎熱強化の魔法を促し、“レヴァンテイン”にカートリッジロードを命じる。

Explosion

“レヴァンティン”の刀身に紅蓮の炎が燃え上がる。
シグナムは“レヴァンティン”の柄を両手で握り、

「貴様をここで必ず殺す！！」

「それでも私は、我ら守護騎士は死ぬわけにはいかんだッ！！」

今のシグナムには、いや、今の守護騎士には護らなければならない大切なものがある。

そのために死という償いだけは出来はしないと。

シグナムは闇色の爆炎から飛び出てきた報復せし復讐者へと、

「『紫電一閃！！』」

強大な炎を纏った“レヴァンティン”の刃が報復せし復讐者を真正面から捉える。

対する突撃してきた報復せし復讐者も、

憎悪は何者にも消せず

闇色の炎を竜巻状に刀身に纏わす。

闇色の炎の刃と紅蓮の炎の刃が再度衝突する。

先程とは比べるまでもない強大な大爆発が起き、青く広がるミッドチルダの大空を爆炎が染める。

その爆炎から最初に姿を現すのは、大きく肩で息をし、額から血を流すシグナムだった。

刀身にヒビの入った“レヴァンティン”を手にする右手からは血が滴り落ち、左腕は重度の火傷を負っていた。

おそらく今戦闘ではもう使用が出来ないほどの酷い火傷だ。

「はあはあはあ……大丈夫か、アギト……？」

「あたしは何とか……。つて！ シグナムは酷え火傷してんじゃねえか！」

「はあはあはあ……問題ない、と言いたいところだが、今は危なかった。

もう少し逃げるタイミングが遅ければ、私は間違いなく死んでいた。

……」

シグナムの視線は未だに残る爆炎へと向けられた。

額から流れる血を無事な右腕で拭い、左腕を動かそうとするがピクリとも動かなかった。

痛みも感じないほどのダメージを負ってしまったのだと判断する。

そのシグナムの耳に続けて爆音が届く。

フエイトとヴィータが戦っている報復せし復讐者の右腕と報復せし復讐者の左腕によるものだった。
カルド・デレチヨ
カルド・
イスキエルド

「加勢に行きたいが、このダメージでは逆に足手まといになるか……」

「当たり前だツ！ すぐに治療しねえと！！」

尚も戦おうとするシグナムに怒鳴るアギト。

シグナムが爆炎から左腕へと視線を逸らした時、爆炎の中に二つの光が煌く。

それは憎悪に燃えている報復せし復讐者の目だった。
カルド

カルド・デレチヨ
報復せし復讐者の右腕の持つ大剣から闇色の炎が生まれる。

「地獄へ堕ちろ、ヴォルケンリッター!!」

我に滾るは怨嗟の業火

闇色の炎の斬撃を振り下ろす。

ヴィータは防御することは不可能だと判断し、回避行動を選択する。

P f e r d e

ヴィータは高速移動魔法フェアテを発動したことで彼女の両脚に魔力の渦が生まれる。

余裕を持って回避したヴィータの右わき腹を素通りする闇色の炎の斬撃。

だが、

「うぐうう!!」

ヴィータは激痛に襲われ、堪らず苦悶の声を上げる。

左手で右わき腹を押さえながら、再度逆から振るわれる闇色の炎の斬撃を回避する。

今度は紙一重ではなく大きく距離を開けてだ。

「つく、確かに避けたのに・・・!」

「貴様らの手によってその命を奪われた者たちの怨嗟の声を聞け」

ヴィータの強力な一撃が、自身が負ったダメージと同じ個所である彼の右わき腹へと吸い込まれていく。

衝突する闇色の炎を纏った刃と“グラーフアイゼン”の一撃。拮抗は僅かな時間だった。一瞬で“グラーフアイゼン”のヘッド部分が粉碎されてしまった。

「うそ……だろ……？」

目の前で粉々になる“グラーフアイゼン”の破片を目にし、ヴィータは完全に動きを止めてしまった。

「今の一撃は……クリストファー……」

そこに迫る報復せし復讐者カルド・テレチヨの右腕の闇色の炎の斬撃。

ヴィータはシヨックを受けながらもギリギリのところで回避する。

「あッ!？」

「これはクライドの分だ」

刀身から伸びる闇色の炎が回避したはずのヴィータの左肩を焼く。

激痛に耐えるためにギリツと歯を食いしばるヴィータ。

彼女の口の端から赤い血が滴る。

「ば、化け物め……!」

「ああそうとも。貴様らヴォルケンリッターバケモノに対抗するために、我らは化け物になったのだ。

これは戦いではない。化け物同士の喰い合いなんだよ、紅の鉄騎ヴ

イータ。

シグナム、ヴィータ、貴様らを落とした後は、残りのシャマルとザフィーラを落とす」

カルド・デレチヨ
報復せし復讐者の右腕は大剣を構え直し、再度ヴィータへと突撃しようとした。

が、真下から空色の砲撃が彼を襲う。

咄嗟に回避はしたが、兜から伸びる真紅の長い羽根飾りが碎け散る。

「セレス!？」

「逃げて、ヴィータ!!」

今のセレスは灰色の髪をシニヨンし、黒色のインナースーツには彼女の好きなケルト十字と二対の翼の刺繍が施され、その上から白のテールコート、白の袖なしインバネスコートを羽織り、両手には白銀の籠手、白のズボン、黒のロングブーツには白銀の装甲がついている騎士甲冑姿だ。

セレスが手にするのは幅の広い槍の穂のような大剣。アームドデバイスだ。

「バカッ！ セレス！ 来るんじゃないねえ!!」

「シュリユツセル!! Explosion・Verst...
arken おおおおおお!!」

鍵と言う意味を持つ彼女のデバイス“シュリユツセル”はカートリッジを二発ロードし、フェアシュテルケン強化の魔法を発動する。

セレスは唯でさえ強力な自らの攻撃力をさらに増加させることで、友達を傷つけた報復せし復讐者の右腕を手加減なしで撃墜するため

に動いた。

「邪魔立てするなッ!!」

憎悪は何者にも消せず

「邪魔をしないでもらおうか、フェイト・テストロッサ・ハラオウン！」

「そうはいかない！ お前達に訊きたいことがあるから!!」

フェイトとカルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕の熾烈な空中戦が始まった。

黄金の雷光の刃と砲撃、闇色の炎の刃と砲撃が交錯し、互いを撃墜せんと澄み渡る青空で吼える。

「ルシル・・・、ルシリオンがテストメントにいる理由だ!!」

H a k e n S a b e r

黄金の雷光で構成された魔力刃が放たれる。

カルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕は迎撃するのも面倒といった風に回避行動をとった。

だが自動誘導性能を持つその魔力刃はしつこくハーケン報復せし復讐者の左腕へと追いつく。

慈悲すら許さぬ業火

彼は大きく身体を反らし、大剣を槍のように突き出した。すると刀身に纏っていた闇色の炎が螺旋状の槍となって、黄金の魔力刃を掻き消した。

S o n i c M o v e

フェイトは高速移動魔法を使い、一瞬にして報復せし復讐者の左腕の背後を取った。カルド・イスキエルドハーケンフォルムの“バルディッシュ”から伸びる鎌状の刃が振り下ろされる。

H a k e n S l a s h

「その程度では俺たちの憎悪は消せない・・・！」
タイミングとスピードからして間違いなく回避と防御不可だったフェイトの一撃を振り向きもせず到大剣で受け止めた。さすがのフェイトもこれには目を見開き、

S o n i c M o v e

破滅へと至る怨嗟の衝動

考える前に急いで報復せし復讐者の左腕から距離を取った。カルド・イスキエルドその瞬間に彼の背から闇色の炎が吹き荒れる。もう少し離脱するのが遅ければ、フェイトは間違いなく撃墜されていた。

「さっきのお前の質問に答えよう、ゆえにそこを退け・・・！」

カルド・イスキエルド
報復せし復讐者の左腕は大剣を横一線に払い、闇色の炎の弾丸をフ
ェイトへと幾つも飛ばす。

直射型の攻撃と見たフェイトは、防御ではなく回避を行えばそれで
処理できると判断。

フェイトの推測通りに誘導弾ではなかった炎の弾丸は彼女の脇を通
り過ぎていく。

フェイトは、質問に答える代りに仲間を差し出せという彼の交換条
件を考えるまでもなく切り捨てる。

「……なら、それなら力づくで訊き出す!!」

Trident Smasher

「力づくだと!? 管理局員とは思えない発言だ!!」

フェイトは動きを止めた報復せし復讐者の左腕へと左手を翳し砲撃
カルド・イスキエルド
魔法を放つ。

対する彼は、

慈悲すら許さぬ業火

先程と同様に大剣を槍のように突き出すことで発生した螺旋状の業
火が撃ち出される。

黄金の雷光と闇色の業火が一直線に互いへと迫る。

衝突。互いの砲撃は相殺されることなく一進一退の拮抗を見せる。
だが、

「つく!」

フェイトの砲撃魔法が負けた。
闇色の炎の槍が黄金の砲撃を飲み込み、フェイトを喰らおうと直進し続ける。

砲撃戦で負ける事を察知していたフェイトはすぐその場から離脱し、すでに報復せし復讐者の左腕の背後へと回り込んでいた。

Z a m b e r F o r m

「はあああああああ！！！！」

“バルデイツシュ”は大剣状のザンバーフォームへと変わり、目の前の敵へとその雷光の刃を落とす。

術後硬直による所為か、報復せし復讐者の左腕は避ける事が出来ずにその刃の直撃を背中に受けた。

「やった・・・？」

「惜しかったが、この程度の威力では業火の眷属の甲冑は破れない！！」

「なっ！？ S o n i c M o v e つぐうう・・・！！」

振り向きざまに振るってきた大剣を、ザンバーを盾にして離脱。
だが黄金の刀身は盾としての効果を得ることはなかった。
大剣の一撃によって一瞬で碎かれ、闇色の炎を纏う刀身がフェイトのバリアジャケットの腹部付近を大きく損傷させた。

「痛つ・・・く・・・」

腹を左手で押さえながら、フェイトは奥の手を使おうかと思案する。

真ソニックフォーム。防御を捨て機動力に力を注ぐ形態。

今彼女の戦う敵の放つ攻撃は、まず受ければ撃墜で済まずに確実に死ぬような強力さ。

一瞬のミスで殺されてしまうような綱渡りをフェイトは渡ろうとしている。

意を決し、“バルディッシュ”に真ソニックフォーム発動を告げようとしたとき、少し離れた場所から三つの轟音が鳴り響いた。

「……お前と遊んでいる間に終わってしまったようだ……」

カルド・イスキエルド 報復せし復讐者の左腕は残念そうにつぶやいた。

それはつまり、

「シグナム!? ヴイータ!?」

二人からは何も返ってこなかった。

青い空に二つの闇色の爆炎が禍々しく燃え上がっていた。

シグナムは一瞬だけ視線を逸らしただけだった。

だが、その一瞬は報復せし復讐者にとつて十分な隙だった。

彼は爆炎の中からシグナムへと一直線に向かい、その大剣を担ぐようにして構える。

もちろんシグナムもそれには気づいていた。

“レヴァンティン”の刀身に再度紅蓮の炎が燃え上がる。

「(すれ違いざまに紫電一閃を叩きこむ!) おおおおおおッ!

！」

「復讐の業火に焼かれるおおおおおお！！！」

先手は報復せし復讐者の大振りの縦一閃。

闇色の炎が尾を引く大剣はシグナムを両断せんと大気を斬り裂いていく。

後手のシグナムは、大剣の振り下ろしによる斬撃を回り込むように回避。

ポニーテールの髪の毛の先端をいくらか燃やされたが、それでも回避に成功し、

「『紫電一閃！！』」

報復せし復讐者の背中へと叩きこんだ。

いや、叩きこんだはずだった。刹那、二人の視界が黒に塗り潰される。

大剣が引いていた闇色の炎がシグナムの至近で爆発を起こしたのだ。それをまともに受けたシグナムは吹き飛ばす。

「……………づ……………あ……………うあ……………」

シグナムはアギトとのユニゾンが解かれている状態で廃ビルの中で倒れ伏していた。

右手には柄から先の刀身がない“レヴァンティン”が握られている。

「あ……………ア、ギ……………ト……………？」

瓦礫の上に仰向けで倒れているシグナムの口の端から血が漏れる。傍にアギトが倒れているのが彼女には分かっていた。だから苦しく

とも相棒の名を呼ぶ。

アギトからの返事は無いが息遣いだけは耳に届いていた。生きている。シグナムの心に安堵が広がる。

しかしすぐに意識が落ち始めたシグナムは最後に理解した。

自分たちは負けたのだ、と。

「邪魔立てするなッ!!」

憎悪は何者にも消せず

大剣に竜巻状の闇色の炎が発生する。

その一撃を以って地上からこの場へと突撃してくるセレスへと振り下ろす。

それと同時に放たれる闇色の炎の竜巻。

セレスは側面にベルカ魔法陣を展開し、それを足場として空中を斜め前方に跳び、闇色の炎の竜巻を余裕で回避する。

しかし彼女の後方へと通り抜けた闇色の炎の竜巻が突如爆発を起す。

「あがつ・・・!?!」

「セレス!!」

背中に浴びる強力な爆炎と衝撃波にセレスは一瞬意識を飛ばす。

その隙を持って報復せし復讐者カルド・デレテヨの右腕はダラリと四肢を投げ出した

セレスに蹴りを入れる。

「俺たちはヴォルケンリッター以外の殺害を良しとしない。命拾いしたな」

廃ビルへと蹴り飛ばされ外壁を突き破ったセレスは起きあがってこなかった。

「テメエ!!!」

「悔しいか？ 憎いか？ 俺たちも貴様らヴォルケンリッターに抱く負の感情だ。」

その身を持って知れたこと、それも一つの罰と思え」

カルド・テレチョ
報復せし復讐者の右腕はヴィータを殺害するために空を翔る。
ヴィータは修復し終えていない“グラーファイゼン”を見る。
ヴィータは己の情けなさに齒がみする。唇の端が切れ、血が滴り落ちる。

「裁きの時だ、ヴィータ」

我に滾るは怨嗟の業火

パンツァーヒンダネス・パンツァーガイスト

ヴィータを覆う魔力の甲冑と多面体の完全防御障壁。
カルド・テレチョ
報復せし復讐者の右腕の振り下ろした大剣が一層目の障壁と衝突。
砕けない。堅かった。だがそれで諦めるつもりもなかった。

「俺の復讐の業火を止められると思うなああああ!!!」

粉碎。そのままヴィータへと横薙ぎに振るう。

パンツァーシルト

ヴィータは全ての魔力を防御に回す。

死の恐怖がヴィータを襲う。敵は復讐に燃える異形の鬼。

目の前に迫る闇色の炎を見て泣きそうになる。

死ぬかもしれない。はやてを、リインフォース？を、なのはを、友を悲しませるかもしれない。

(これが・・・闇あたしらの書に返る罰か・・・)

カルド・テレチヨ

報復せし復讐者の右腕の大剣は、ヴィータの最後の力を振り絞って張ってシールドを容易く粉碎する。

起こる爆発。ヴィータは爆風によってシグナムとアギトと同様に廃ビルへと沈んでいった。

フェイトの顔が青くなる。

「二人がヴォルケンリッターに止めを刺すまで、もう少し俺と遊んでもらおう」

「と・・・どめ・・・」

カルド・イスキエルド

フェイトは報復せし復讐者の左腕へと振り返る。

闇色の炎が燦っている大剣を右肩に担ぎ、つまらなさそうにしている彼へと。

フェイトの中で何かが切れる。プツン、と切れてはいけない大事な一糸が。

「……………つバルディ」

「これはどういう事が説明してもらおうか、カルド報復せし復讐者隊」

この区画一体に響く男の声。フェイトの中で全てが冷めていく。この声は間違いなく彼女が求めている男のものだった。

「ルシルツッ!」

フェイトの視線の先、彼女たちのいる高度よりさらに高いところにルシリオン誠実なる賢者はいた。

背には十二枚の剣翼が蒼く煌き、手首の枷から伸びる鎖が陽の光りで鈍く輝く。

「サファイロ誠実なる賢者……………」

カルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕が明らかに怯えを含んだ声色で告げた。心なしか身体も震えているのが判る。彼はルシリオン誠実なる賢者に絶大な恐怖を抱いていた。

「邪魔をするなツ、サファイロ誠実なる賢者!」

「そうだ! もう少しで俺たちの復讐が果たせるんだ!」

「……1……」

報復せし復讐者と報復せし復讐者の右腕が復讐の邪魔をするなど怒声を上げる。

その怒声を聞いた誠実なる賢者は数を数えた。

「お前たちの任務は、ここに集まるレジスタンスの回収だ。それを勝手にしまっている所為で……」

誠実なる賢者は遠く離れた“レジスタンス”集合場所を見る。そこには陸士104部隊によって連行されている数十、百数十の“レジスタンス”がいた。

「黙れッ！ 俺たち報復せし復讐者隊の目的は憎きヴォルケンリッターへの復讐のみ！

その後の事なんぞ知ったことかッ！！」

「……2……。お前たちの任務は失敗した。すぐさま帰還しろ、命令だ」

「あと一撃で終わるんだ！ 邪魔をするというのならお前も業火に叩きこむぞ、誠実なる賢者！！」

「……3……。馬鹿が」

報復せし復讐者隊の反抗に、誠実なる賢者は怒りを含んだ声色でその口にした。

報復せし復讐者の左腕の身体の震えが尋常ではなくなってきた。兜の中からガチガチと歯が鳴る音が聞こえてくる。

誠実なる賢者はダラリと下げている左手の指をパチンツと鳴らす。
その瞬間、

「おごツ！？」

「ヒイツ！」

「な・・・、ルシル・・・！」

報復せし復讐者と報復せし復讐者の右腕の胸から蒼の刃が生える。
それは誠実なる賢者にのみ許された審判攻撃の一つだった。
蒼の刃に貫かれた二人は四肢をダラリと垂らし痙攣している。

「御苦労だったゼルファード。もう還っていいぞ」

誠実なる賢者の労いの言葉に、報復せし復讐者隊の三人が纏っていた漆黒の甲冑が再び闇色の炎へと戻り、現れた召喚魔法陣の中へと戻っていった。

甲冑姿から白コート姿へと戻る報復せし復讐者隊の三人。

「私の持つ知識にこういう言葉がある。仏の顔も三度まで、とな。
その蒼刃は三度の命令無視の罰だ。しばらく苦痛にもがいている」

フードで隠れて見えないが、報復せし復讐者と報復せし復讐者の右腕を睨みつける怒りの目があった。

「ふん、ゼルファードがいなければ何も出来ない貴様らが大層な口を叩くとは。身の程を知れ」

再度指を鳴らす誠実なる賢者。

「……頭を冷やし反省するがいい、カルド報復せし復讐者、カルド報復せし復讐者の右腕。デレチヨ」

「……お前たちにはしばらくの謹慎を命ずる」

「「ぎゃあああああああああ」

「」

カルド報復せし復讐者とカルド・デレチヨ報復せし復讐者の右腕は足元から光となって消滅していく。

シグナムとヴィータを苦しめた二人が呆気なくこの場から消滅してしまつた。

その光景を見たカルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕は身体を抱くようにして震えながら、ルシリオン誠実なる賢者へと謝り続ける。

「次は任務を忠実にこなせ。それでなら許そう」

「はい！ はい！」

カルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕は何度も頷きながらその姿を消していった。空に残つたのはルシリオンフェイトとルシリオン誠実なる賢者の二人のみ。

フェイトは、今すぐにも誠実なる賢者の元へと行きたいという想いと、撃墜されたシグナムたちの元へと行かなければならないという思い、二つの衝動に葛藤していた。

「……彼女たち……すぐにでも治療を施せば短期間での復帰が出来るだろう」

「ルシルー！」

「っ！……君は、一体誰なんだ？ 君にその名を呼ばれると心

が温かくなる。

君のその零す涙を見ると心が激しく痛む。君は、私にとって一体何なんだ？」

「ルシル・・・？」

戸惑いを見せるフェイトとルシリオン誠実なる賢者。

フェイトは何かを言わなければと思い、口を開こうとしたその時、

【そちら以外のレジスタンス回収は終了。サファイア誠実なる賢者、帰還してください】

「・・・【了解】ではフェイト執務官、またいずれ」

「待つて！」

ルシリオン誠実なる賢者は静かにその姿を消していった。

11月14日 PM19:00 某無人世界

夕日が地平線へと沈もうとしている時間、八隻の巨大帆船“スキーズブラズニル”が黄昏の空をゆっくりと翔ける。

黄昏の陽に照らされ橙色に染まる八隻の“スキーズブラズニル”の甲板上に無数の人がたむろしている。

“テストメント”幹部によって様々な管理世界で回収された“レジスタンス”たちだ。

自分たちが乗る帆船に驚愕している者、知り合いの“レジスタンス”を見つけては肩を抱き合っている連中もいる。

その八隻の“スキーズブラズニル”の後方からゆっくりと近づいてくる新たな巨大帆船。

それに気づいた“レジスタンス”たちは指を差しては口々に「アレを見る！」と叫んでいる。

次第に細部まで視認できるようになったその帆船を見た彼らは、自分たちが乗る“スキーズブラズニル”より大きく、心を魅了する美しさを有するその帆船に畏怖と敬意を抱いた。

その巨大帆船の名は“フリングホルニ”。“テストメント”幹部が旗艦とする帆船だ。

『ようこそレジスタンスの諸君。我々が反時空管理局組織テストメントだ。』

私はテストメントのナンバー2・永遠なる不滅者^{ティアマンテ}。

今日は我らが指導者至高なる卓絶者^{ハーデ}が不在の為、私が君たちレジスタンスを歓迎しよう』

それぞれの“スキーズブラズニル”の甲板に巨大モニターが展開され、永遠なる不滅者が“レジスタンス”に向けて声明を出した。

『さて、我々の目的は管理局の現体制への異議の申し立てだ。』

今日、正午に流した我々の声明を聞いてもらっていることを前提として話を進めさせてもらおう。

これより一カ月間、我々は独自で次元世界に蔓延る事件を解決していく。

そして管理局に示してやるのだ。魔導にだけ頼っている貴様らのやり方でない方法で世界を救ってやったぞ、と』

それを聞いた“レジスタンス”は暫し沈黙し、永遠なる不滅者の言葉を理解出来た瞬間に「おおおおお！！」と雄叫びをあげた。

『君らが手にする武装はすでに用意してある。』

そして任務地において、君らはそれぞれ幹部達についてもらうことになる。

どの幹部についていってもらうかはこれより決める予定だ。それは明日より行動開始だ。

今日は艦内に用意してある部屋で各自好きに過ごしてくれたまえ』

永遠なる不滅者がそう締めくくり通信を切った。

“レジスタンス”は興奮冷め止まぬまま各々艦内へと入り、身体を休める事にした。

反時空管理局組織テストメント旗艦“フリングホルニ”会議室

会議室の置かれている円卓に座っているのは陽気なる勝者と誠実なる賢者の二人のみ。

他の幹部達はすでに各自の部屋へと戻っている。

「あゝあ、やっぱりオレの危惧したとおりになったわけだ」

「ああ、ヴォルケンリッターを見て、報復せし復讐者隊が見事に暴走した」

陽気なる勝者は頬杖をつきながら苦笑している。

それに答えるのは誠実なる賢者だ。心底呆れたかのようにため息を吐いている。

「それで？ 報復せし復讐者隊は今どうしてんだ？」

「船底の蔵で謹慎中だ。私の命令に三度逆らい、その上私を業火に叩きこむとほざいた。

報復せし復讐者の左腕だけはまだマシだったため、自室待機を命じている」

「あー、そりゃダメだな。お宅に逆らったら消されるってことを忘れてんのか、あいつら？」

陽気なる勝者は円卓に置いてある酒の入ったグラスを手に取り一気に喉に流し込む。

「ぶはあっ」っと大げさに息を吐いて誠実なる賢者に「お宅も飲むかい？」と勧める。

誠実なる賢者は「結構」とだけ返し、陽気なる勝者は「美味しいのに」と小さく零した。

「だからと言って、すぐに消してやるなよ誠実なる賢者。
アイツら
報復せし復讐者隊もまたそれなりのものを背負ってんだからさ」

「それくらい承知している」

そう言って誠実なる賢者は会議室を後にする。

会議室に独り残された陽気なる勝者は立ち上がり、窓へと歩み寄って外を眺める。

夕日が落ち、赤い月が見えるその空を。

同日 PM 21:18 時空管理局本局医療施設

病室のベッドに眠る家族を見つめるのは頭に包帯が巻かれたはやて。そして彼女の目の前のベッドで眠っているのは、今日の戦いで撃墜されたシグナムだ。

包帯が巻かれ、痛々しい姿で横たわるシグナムの姿を見ながら、はやても今日撃墜された事を思い出す。

相手は五年前にこの世界を去った親友の一人、今は誠実なる賢者と名乗るルシリオン。

当初においてはリインフォース？とユニゾンしていたはやてが押し
ていた戦闘だったが、そこで傍観していたもう一人の白コート、祝
いちエブエナ

福なる祈願者が動いた。

その祝福なる祈願者が誠実なる賢者とユニゾンした。ルシリオン
そして分かった祝福なる祈願者の正体。ノーチェフエナ

その正体は、はやての未来を守り去っていった愛しき家族の一人、
初代祝福の風リインフォースだった。

はやてはリインフォースが祝福なる祈願者と名乗って、“テストメント”幹部として存在していたことがショックだった。

自分ではなく親友の誠実なる賢者とユニゾンした事にもショックだった。

そのショックから立ち直れずにはやては為す術なく撃墜された。

「リインフォース……」

はやては知らず今は敵として存在する家族の名を口にする。

撃墜したはやてに止めを刺そうとした誠実なる賢者から、はやてを庇うように立ち塞がった祝福なる祈願者。リインフォース

彼女は夢で見た通り、純白の騎士甲冑と背に二対の白翼のある姿だった。

「はやてちゃん。マリエル技官から連絡がありました。

リインちゃんとアギトちゃんが目を覚ましたって……」

病室の扉を開けて入ってきたのはシャマルとザフィーラ。

シャマルは背を向けたままのはやてに、撃墜のショックで意識を失っていたリインフォース？とアギトが目を覚ましたことを報告する。はやては「そうか。良かった」と心底安堵したため息を吐いた。

「……リインには謝らんな。

私那不甲斐無いばかりに無茶させてもって、その所為で意識不明に

なつて……。

私はラインのマスター失格や。こんなん……」

はやては齒がみし、痛む両手を強く握りしめる。

シヨックの所為で呆然自失してしまつた自分の代わりに祝福ラインフォなる祈願者とユニゾンした誠実なる賢者ルシリオンからの攻撃を全て防いだラインフォース？。

決して軽くは無い誠実なる賢者の攻撃を受けきつたその無茶の反動でラインフォース？は意識不明に陥つていた。

「はやてちゃん……」

「主、そろそろお休みになつてください。御身体に障ります」

シャマルは何て言つていいのか分からず、はやての名を口にするしかなかつた。

そしてザフィーラははやての身体を気遣つてそう口にする。

だがはやては首を横に振り、

「ヴィータの様子も見たいしな。それに考えたい事もあるんや。

今日はもう眠れそうにもあらへん。そやから……私は……」

そう言つてシャマルとザフィーラの脇を通り過ぎて病室を後にする。シャマルとザフィーラもはやてに続いてシグナムの病室を後にした。三人が向かうのはシグナムと同様に眠り続けるヴィータの病室だつた。

会話は無く、はやてたち三人は静かにヴィータの病室へと入つていった。

「ヴィータ……」

ベッドの上で眠るヴィータ。

はやてはベッドの近くへと歩み寄り、椅子に腰かける。

家族のシグナムとヴィータ、友人のセレスを撃墜した“テストメント”幹部。

はやては“ヴォルフラム”の医務室で治療を受けている時に、腹部に負った火傷の治療を終えたフェイトからの連絡で三人の撃墜を知った。

そしてもう一つ。三人を撃墜した報復せし復讐者隊の目的が守護騎士への復讐だということも知った。

「……今回の事件は、八神家にとって辛いものになるな」
わたしたち

はやてがヴィータの前髪を手で梳きながらそう呟いた。

後ろに控えるシャマルとザフィーラは何も言わずにただ頷いた。シャマルとザフィーラにもはやてからすでに伝えられている。

初代リインフォースが“テストメント”幹部の一人として生きている事を。

「……脅威対策室はテストメントに何らかの対策を立てるやろ。たぶん私たち元機動六課のメンバーが招集されるはずや」

“テストメント”幹部に対抗できる戦力はそれしかないとはやては考えている。

五年前に“聖王のゆりかご”を落とした奇跡の部隊と謳われた機動六課。

管理局上層部はおそらく機動六課を再編しようとするだろうと。

「必ずリインフォースとルシル君を連れ戻す」

はやては勢いよく立ち上がり、いつ部隊編成命令が来てもいいように動き出す。

そして翌日、はやての元に脅威対策室からある辞令が来た。

その内容ははやての予想通りのものだった。

反時空管理局組織“テストメント”対策部隊“特務六課”の指揮官への任命。

構成部隊員にはやはり元機動六課メンバーだった隊員の名が連ねられていた。

11月15日 AM10:00 ミッドチルダ北部住宅街 高町家

高町家の玄関前でなのはとフェイトとヴィヴィオが話をしていた。

「それじゃあヴィヴィオ。なのはママとフェイトママ、ちょっとの間出張に行ってきます」

「うん。・・・ルシルパパと・・・戦いに行くんだよね・・・」

「・・・うん。今のルシルの事を知る為には戦うことになるかもしれない。

ううん、まず戦うことになる。だけど、だけど必ず連れて帰るつもりだよヴィヴィオ」

朝早くになのはの元へとはやてから連絡があった。

脅威対策室から“テストメント”対策部隊“特務六課”の編成命令

が来た、と。

治療を終えてはやてに連絡した後、聖王医療院から近いここ高町家に泊まりに来ていたフェイトにもそれが伝えられた。

「本当に？ 本当にルシルパパも一緒に帰ってくる？」

正直、なのはとフェイトにはそれは分からない。

何しろ誠実なる賢者の現状が何一つとして分からない状態だ。連れ帰ることが出来るのか。今回も何かしらの契約で世界に呼ばれたのか。

ルシルオン誠実なる賢者に関しては全てにおいて状況不明だった。

「大丈夫。絶対ルシル君を連れて帰ってくるよ」

「今度こそ、きっと。一緒にヴィヴィオのところに戻ってくるよ」

なのはとフェイトは確約できない約束をヴィヴィオとした。してしまった。

しかし、約束したからにはどんな手を使っても連れ帰る、と二人は思う。

5年前のようにヴィヴィオを悲しませないと。

「それじゃもう行く時間だから。ヴィヴィオ、いってきます」

「ヴィヴィオ。いってきます」

「いってらっしゃい！なのはママ！フェイトママ！ルシルパパと一緒に帰ってきてね！！」

ヴィヴィオに見送られながらなのはとフェイトは行く。

“テストメント”を止める為に。誠実なる賢者ルシオンを連れ戻す為に。

11月15日 PM 14:50 時空管理局本局・第5会議室

幾つもの長テーブルが並べられたここ第5会議室になのはたちの姿があつた。

今、ここ第5会議室には各部署から招集された元機動六課の前線メンバーたちがいる。

その全員が沈痛な面持ちをしており、第5会議室に漂う空気は激しく重かつた。

その静寂を打ち破るかのようにはやてが声を発する。

「今日は集まってもらつてごめんな。集まってもらつた理由は他にもない。

今朝送つた招集命令通りや。脅威対策室からのテストメント対策部隊を任された。

私にみんなの力をまた借してほしい」

はやては立ち上がつて、一人一人見回していく。

なのは、フェイト、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの六人を。それぞれがはやての言葉に力強く頷いて応える。

それを見たはやては「おおきにな」と感謝を口にした。

「早速やけど本題に移させてもらつわ。状況はあまり良くない。

もう知つての通りやと思うけど、反時空管理局組織テストメントと

レジスタンスが合流した」

はやてはテーブルで囲まれたモニターを出しある映像を映し出した。

「戦力においては管理局のエースクラスの魔導師が揃い踏みテストメント。

そこに数であるレジスタンスが傘下に入ってもうた。

レジスタンスの脅威は現状そう高いものやないけど、テストメントの幹部に至っては問題ばかりや」

それは昨日ミッドチルダの南部海上で行われた戦闘だった。

「昨日、私とルシル君との戦闘と、フェイトちゃん、シグナム、ヴィータ、そしてセレス・カローラ一佐とカルド隊っていうテストメント幹部との戦闘がミッドであった」

新たに展開されたモニターに映し出されたのは、ルシリオン誠実なる賢者と戦うリインフォース？とユニゾンしたはやてだった。

重かった空気がさらに重くなる錯覚を得るこの場にいるのはたち。砲撃フリースベルクに散弾砲撃、はやての射撃魔法を受け、白コートを自ら剥ぎとりその素顔を曝したルシリオン誠実なる賢者。

目まぐるしく変化していくはやてとルシリオン誠実なる賢者の戦闘。

ここ第5会議室に再び流れた重い静寂を破ったのは、

「やっぱり・・・本当にルシルさんなんですな・・・」

「キャロ・・・」

震えた声でそう呟いたキャロだった。

親友のはずのはやてとルシリオン誠実なる賢者が熾烈な戦闘を繰り広げている

その光景に、キャラは静かに涙していた。
キャラは幼い頃にフェイトと共に色々してくれた誠実なる賢者が敵であるという事実^{ルシリオン}に苦しんでいた。

そのキャラの隣に座るエリオが、彼女の肩にそつと手を置いた。

そして誠実なる賢者^{ルシリオン}が押されつつあるその戦闘に変化が訪れる。

今まではやてと誠実なる賢者^{ルシリオン}の戦闘を傍観していた祝福なる祈願者^{ノーチェブエナ}が、彼の一声によって動き出したのだ。

『ユニゾン・・・イン！！』

その言葉と同時にその姿を変えた誠実なる賢者^{ルシリオン}に、この場にいる全員が驚愕した。

融合騎が敵にいて、しかもそのマスターを誠実なる賢者^{ルシリオン}としている。スバルとティアナ、そしてエリオとキャラはそれだけの驚愕だったが、なのはとフェイトの二人だけは違う意味で驚愕していた。

そして、次にはやてが口にした言葉でなのはとフェイトは確信し、スバルたちはさらに混乱することになる。

『リイン・・・フォース・・・、リインフォース！！』

「「「え？」「」」

「「「やっぱり・・・！！」」

なのはとフェイトははやてへと視線を向けた。

はやてはただコクリと頷いただけだったが、それだけでなのはとフェイトは分かってしまった。

再びモニターに映る親友のはやてと誠実なる賢者^{ルシリオン}の戦闘を見つめる。そんな中、ティアナの眉がピクツと動く。本局の侵入犯と同じ魔法

が使われたからだ。

そしてそれを報告し忘れていた事も思い出した。

ルシリオン 誠実なる賢者の再臨によるショックで忘却してしまっていたのだ。

もし忘れずに報告していれば、はやてが撃墜されることは無かった
のではいかと後悔する。

全ては後の祭り、後悔先に立たずだった。

そのティアナの後悔を余所に、はやてとルシリオン 誠実なる賢者による戦闘映
像は続く。

スバルたちは何故はやてがルシリオン 誠実なる賢者を“リインフォース”と呼
んだのが分からない。

ただ黙つてはやてがルシリオン 誠実なる賢者によって撃墜される場面を観てい
るしかなかった。

“ヴォルフラム”の艦上へと墜落し、その身体を叩きつけられるこ
ととなったはやて。

そこへと迫るルシリオン 誠実なる賢者。全員が分かった。はやてに止めを刺そ
うとしているのだと。

止めを刺すまであと少しと言うところで状況が変わる。

ルシリオン 誠実なる賢者の意図とは別にしてユニゾンが解かれてしまったのだ。

“ヴォルフラム”へと着艦したルシリオン 誠実なる賢者に遅れて降り立った白
コートノーチエブエナの無い祝福なる祈願者。

彼女の露わとなっているその素顔を見て、今度こそスバルたちは理
解した。

何故はやてがそこまで動揺しているのかを。

「リイン司令補の大人版・・・!？」

「瞳の色は違うけど間違いないよ・・・!」

キャロとスバルが声を上げる。ティアナとエリオもまた同じことを思っていた。

そんな彼女たちの疑問を晴らすのはなのはだった。

「リインのフルネームは分かるよね・・・」

「え？ リインフォース・・・あ、ツヴァイ！」

「リインフォース?! え!? ということは、ルシルさんとユニゾンしていたのは・・・!」

スバルたちは、はやてを庇うかのように誠実なる賢者の前に立ち塞がる祝福なる祈願者を見る。

白を基調とした騎士甲冑は、色は違えどはやての騎士甲冑と酷似している。

瞳の色を蒼に変え、目の鋭さを柔らかくすれば、間違いなくリインフォース?の成長した大人版と言えるその姿。

「そうや、この娘の名はリインフォース。初代祝福の風とも言える存在。」

もうどこにもいないはずなのに、リインフォースはまたその姿を私の前に現した。

しかもテストメント幹部の一人、管理局の敵として・・・」

「はやてちゃん・・・」

「はやて・・・」

なのはとフェイトが、俯いているはやてへと声をかける。

ただでさえ親友の事だけで大変なのに、そこにはやてたち八神家の

とつて大切な家族が敵として現れた。^{リインフォース}
それがどれだけはやての心を苦しませているか。
なのはとフェイト、それにスバルたちから心配そつな表情で見られて
いる事に気づき、はやては微笑を浮かべて、

「あー、私なら平気、大丈夫や。」

確かにリインフォースが敵やったのはすごくショックやったし、辛いよ今でも。
でもな……」

はやては自分の右手を見る。

昨日、祝福なる祈願者の腕を掴み、そして彼女の手が触れた右手を。^{リインフォース}
夢でも幻でもない。たとえ敵であったとしてもそこに存在する祝福<sup>リイ
ンフォース</sup>
なる祈願者。

一晩ひたすら思考したはやては決意した。

「ルシル君と違って、リインフォースはたぶん私の事を憶えとる。
だったら話をするまでや。そして今度こそその手を離さへん。必ず
守ってみせる」

はやての目には祝福なる祈願者と戦つてでも話をするという決意と
覚悟が表れていた。^{リインフォース}

なのはたちははやての瞳に宿るその決意と覚悟を察し、自分たちも
その手伝いをする事を決意し、頷いた。

「……次は北部で起こつた戦闘や」

流れる映像は、昨日ミッドチルダ北部に現れた“テストメント”幹
部の報復せし復讐者隊の三人。^{カルド}

そして場面は、現在治療中で席を外しているシグナム、ヴィータと

報復せし復讐者隊の戦闘へと入る。

「召喚魔法陣……、召喚士……？」

「ゼルフアード……。生物なんですか？　これは……？」

報復せし復讐者隊の足元に生まれた大きな赤紫の召喚魔法陣を見たキヤロがそう呟いた。

エリオはモニターに映る報復せし復讐者隊を飲み込んだ闇色の炎を見て戦く。

明らかに危険な存在だと理解出来たからだ。

そしてすぐ戦闘開始直後に報復せし復讐者隊が告げたその目的が流れる。

“闇の書”、“守護騎士たちによる殺人”、“復讐”。

報復せし復讐者隊の口から物騒なキーワードばかり出てくる。

事情を知るなのはとフェイトは何も言わずに沈黙を貫く。

スバルたちと闇の書事件の事は多からず知ってはいいた。

六課時代に少しばかり話を聞いたからだ。しかしその全容を知っているわけではない。

「ホンマは機密なんやけど、みんなには知ってもらわなアカンと思うんや」

はやてが語る闇の書事件の全容。

はやてと出逢う前の守護騎士たちが犯した様々な罪。

はやてと出逢ってからの守護騎士たちの過ごした時間。

闇の書、本当の名を“夜天の魔導書”と呼ばれる魔導書の終焉。

はやてたちの未来を守る為に、初代リインフォースが自らの終焉を選択し逝ったこと。

それからの八神家のこと。はやては語れることを全て語った。

「これが今までみんなに黙っとった真実や」

はやてがそう締めくくった。

スバルたちは何も言わず、ただはやてから語られた話を頭の中で反復していた。

そして一つの答えを出した。

「八神司令たちは十分に罪を償ったじゃないですか。

確かにシグナム一尉たちの犯した罪は許されないことだけど、それでも今は立派な人たちです」

スバルの言葉に頷くティアナとエリオとキヤロ。

決して許されることのない罪を今も背負って、平和のために戦い懸命に生きている守護騎士たち。

だから復讐によって殺される事なんてない、とスバルたちを言う。

死ぬことで罪から逃れるより、罪を背負って生き続ける事の方が重く楽ではない償い方だ。

それが分かるからこそその今の八神家だった。

「だから僕たちは今までどおりですよ、八神司令。

これからも八神司令たちのことを好きでい続けます」

最後にエリオがそう締めくくり、それを聞いたはやては本当に嬉しそうに感謝の言葉を告げた。

そしてこの言葉をこの場にいない家族たちにも必ず聞かせてあげたいとも思った。

「えっと、その・・・なんや。さっきの続きに行くな」

重く押し掛かっていた空気は今は無く、はやては“テストメント”
対策会議を再度進行し始める。
止まっていた映像が再生される。シグナムとヴィータとセレスが撃
墜される場面だ。

なのはたちもその光景には絶句するしかなかった。
桁違いに強かった。攻撃が通らない。その反面報復せし復讐者隊の
攻撃は確実にダメージを負わせてくる。

「強い……！」

「あんなにもあっさりとシグナム一尉とヴィータ教導官を落とすな
んて……」

「アギトとユニゾンしている状態でこんな……！」

「確かカラーラ一佐って、ヴィータ教導官と同じAAA+なのに・
」

報復せし復讐者隊の二人と戦ったシグナムとヴィータ、セレスが撃
墜された場面を見たスバルたちは戦慄した。

シグナムとヴィータとセレスの歴戦の騎士としての実力を訳の解ら
ない力でねじ伏せる。

なのはたちがモニターからはやてへと視線移す。

はやてはその視線の意味を察してコクリと頷き、シグナムとヴィー
タとセレスの現状を告げる。

「シグナムとヴィータの事ならここに来る前にシャマルから連絡が
あった。」

二人はまだ意識を取り戻してないんやけど、念話に答えてくれるまでは回復しとる。

そやけど火傷の方が思っとな以上に酷いらしくてな。しばらくの戦闘行為はドクターストップらしいんや」

命に別条がないことを知り安堵するなのはたち。

シグナムとヴィータが復帰するまでの間は自分たちがはやてを護ると決意を固める。

「リンとアギトはマリーさんと一緒にこっちに向かっとなる最中や。セレスに関しては実家の医療院に運ばれたんやけど、意識を取り戻したって今朝連絡があった」

それを聞いたなのはたちは、あれ程の攻撃を受けてそれだけで済んだ事に安堵のため息を吐いた。

下手をすれば間違いなく死んでしまうかのような激しい業火の攻撃スバルたちは正直戦いたくない相手だと思った。

「報復せし復讐者隊の相手は私たち八神家が担当する。」

シグナムとヴィータもそのつもりやし、私もそのつもりや」

はやてもはやてで覚悟していた。

報復せし復讐者隊の守護騎士へと向けられる憎悪を、最後の夜天の主として背負うのが務めだと。

そして今度はフェイトと報復せし復讐者の左腕の戦闘に介入した誠実なる賢者が映し出された。

そしてすぐに任務を放り出し好き勝手した報復せし復讐者隊を一瞬で倒した光景が映し出された。

そのあまりにも呆気ない報復せし復讐者隊の消滅に放心するしかない

いなのはたち。

「でもルシルさんはカルド隊に謹慎するよう言ってるんですからまた現れるんですね」

「どれくらい期間は分からないけど、すぐにカルド隊と戦闘になるってことは無いと思う」

「これを見たら、はやてちゃんに押されていたルシル君が何だったのか分からないよ」

思ったことを口に出していくのはたち。

そして場面はフェイトと誠実なる賢者の短過ぎる会話へと移る。

誠実なる賢者の発した言葉で、彼が全てを完全に忘れていないことを全員が知った。

少なくともフェイトの事は少なからず残っているようだ。

さらに謎が深まる誠実なる賢者だった。

ミッドチルダでの戦闘はこれで終わり、映像が途切れる。

そしてさらにモニターが幾つも展開され、様々な世界の様子を映し出した。

「テストメントが現れたんはミッドチルダだけやない。

ほぼ同時刻に第3管理世界ヴァイゼン。第4管理世界カルナログ。

第18管理世界ユークトバニア。第44管理世界オーシア。

さらに時間を開けて他の管理世界にもテストメントは現れた」

モニターに映る“テストメント”の幹部達。

そして場面が変わり、映し出されたその光景に息を飲むのはたち。管理局所属の空戦・陸戦魔導師たちを一蹴していく白コートの幹部

達だ。
マルフィール
堅固なる抵抗者隊の三人が、“レジスタンス”との合流を妨害する
航空部隊を完璧に統制の執れた空戦軌道で撃墜していく。
クラナード
陽気なる勝者は、召喚した無限の永遠と共に航空部隊をかく乱し手
玉に取る。
高らかに笑い声を上げるその姿が激しく印象に残ってしまう。

「この人の動き、・・・ストライクアーツ・・・？」

スバルがある一人の白コートの動きを見て呟く。

数少ない女性幹部の一人である敬虔なる諦観者だ。
アマテイスダ

第18管理世界ユークトバニアの陸戦魔導師を拳打や蹴りだけで吹
っ飛ばしていく。

ストライクアーツとは、ミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技
で、広義では『打撃による格闘技術』の総称のことだ。
アマテイスダ

敬虔なる諦観者の攻撃方法はまさにそれだった。

だがスバルは彼女の動きにぎこちなさを感じていた。何かが抜けて
いるかのような感覚だ。

だがそれがハッキリしない。そしてそれがハッキリしたとき、スバ
ルは思い知る事となる。

アマテイスダ
敬虔なる諦観者こそスバルが乗り越えなくてはならない相手だと。

「遠距離からの支援射撃や砲撃がすごい・・・！」

ティアナが正確な射撃と砲撃による支援攻撃を放つ白コートを見て
純粹に称賛した。

その白コートの名は聡明なる勇者。
アケアマリナ
彼の両手には二挺の銃が握られ
ている。

片方は白い大型のハンドガン。S & amp; W M500と呼ばれ
る銃に酷似した物だ。

銃身の下部には銃と同様に白い50cm程の刃が取り付けられており、黄色の魔力を纏っている。

もう片方は銃身が90mはあろうかという黒いライフルだ。

銃身の上下には1mくらいの黒い刃が取り付けられており、白銃の刃と同様に黄色の魔力を纏っている。

アグアマリナ
聡明なる勇者はその特徴的な白銃で射撃魔法を、黒銃で砲撃を放っている。

狙いは正確。アマテイスタ 敬虔なる諦観者の動きを邪魔しないように撃ちこまれる。

それぞれが管理局員を一蹴し、悠々と“レジスタンス”と合流する様子が映し出される。

そして“テストメント”の幹部達はポケットに手をつ込み、何かを取り出した。

「帆船のおもちゃ・・・？」

なのはが呟く。“テストメント”の幹部達が取り出したのは帆船の模型だった。

それを空高く放り投げ、キーワードを口にした。

『目醒めの刻。スキーズブラズニル！！』

蒼の光が発せられたと同時にモニターが激しいノイズに乱れる。

次第に蒼の光が収束していき、モニターのノイズも治まる。

そしてモニターに映るその光景になのはたちは絶句するしかなかった。

「これって・・・まさか！」

「み、見た事あります。ルシルさんとシャルさんの記憶の中で・・・」
モニターに映るのは巨大帆船“スキーズブラズニル”。それは、かつてルシリオンとシャルロッテに見せてもらった二人きの真実まことの中で出てきたアースガルド同盟軍の有する巨大戦艦だった。

「こんなものまで持ち出せるんか、ルシル君は・・・！」

ミッドチルダ南部でも同様に“スキーズブラズニル巨大帆船”が現れたとの目撃情報はあった。

だがそれを捉えた映像が無かった。ラインフォース祝福なる祈願者の放ったアイゼンゲホイルの影響の所為だ。

ジャミング効果もあるその魔法によってサーチャーが機能しなかったのだ。

そして“テストメント”と“レジスタンス”が合流を果たし、その姿を消していく場面が変わる。

「これは本格的にまずいな。再誕神話時代の戦艦となると、やっぱり神秘いうんがあるんやろね」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

はやての口にしたある単語に、口にした本人であるはやてを含めた全員が言葉を失うほどに衝撃を受けた。

“神秘”。現代の次元世界には無い力。その単語一つで複雑なパズルが組み上がっていく感覚を全員が得ていた。

早く気づくべきだったとなのはたちは思った。ルシリオン誠実なる賢者がこの世界にいる時点で真っ先に思い出すべき単語で

あることを。

はやてがコンソールを操作して、再度各管理世界に姿を現した“テ
スタメント”たちの戦闘シーンをモニターに映し出した。

「グラナードのラギオン。カルド隊のゼルフアーダ」

「フェイトさんとシグナム一尉とヴィータ教導官の攻撃が入らな
った理由が神秘によるものなら納得がいきますね」

映し出された異形の無限ラギオンの永遠と闇色の炎業火ゼルフアーダの眷属。

今ある謎に神秘というピースを当てはめていく。

「リインフォースさんもラギオンもゼルフアーダも、全部ルシル君
の使い魔かもしれない」

「エインヘリヤル、でしたっけ。ルシルさんの使い魔は」

「カルド隊の命令より、ルシルさんの命令でゼルフアーダは還りま
した。

決めつけるの早いかもしれませんが、それで間違いないかもしれ
ませんよ」

「ルシルが魔法や能力、武器を複製したと同時に、その使用者の複
製を使い魔とする力。

ルシルは初代リインフォースの魔法を複製してたはずだよ、はやて・
・・・」

無限ラギオンの永遠と業火ゼルフアーダの眷属ルシリオンが誠実なる賢者の使い魔エインヘリヤルなら、もちろん神
秘を有しているはず。

それならあの異常な強さにも納得が出来るかと全員が思った。

しかしそれと同時に思い知る。相手は神秘を有する集団で、こちらにはそれに対抗する術が無いと。

この推測が当たっていれば敗北は必至だということに。

「諦めるんは早いよ、みんな。どちらもまだどうにか出来る。

グラナードとラギオンを引き離すことが出来ればまだ勝機はある。

そしてゼルファード。カルド隊がゼルファードを召喚する前にカルド隊を落とす。

ルシル君も言うてた。“ゼルファードがいなければ何もできない”
つて。

これはかなり無茶がある策やけど、絶対に無理な話やないはずや」

はやてが苦し紛れに出した策だったが、それが実現不可能な策ではない事が分かるのはたち。

なのはたちも沈んだ気持ちをも何とか出来るという前向きな気持ちへと切り替える。

「そうだね、まだ諦めるのは早い」

フェイトが全員を見回す・

「逆にそれはルシルさんをどうにか出来れば勝てるってことですし」

「ティアさんの言う通り僕たちの推測通りなら、確かにそれで僕たちの勝ちに出来ますね」

ティアナが口にした言葉にエリオも賛同した。

優先順位が決定したことで、為すべき事が分かりやすくなった。

何としても最初に誠実なる賢者ルシリオンを捕まえる。まずはそれからだと。

モニターに今日までの誠実なる賢者ルシリオンの行動が映し出される。

まず映し出されたのは本局での戦闘だ。

「本局では飛行せずに跳躍と走行だけの移動。」

それでもフェイトさんとクロノ提督の動きに対応出来ていますね」

「魔力弾や魔力刃、魔力流による攻防。使われた属性は今のところは炎熱だけ」

「それでも防御力や反応速度はやっぱりすごいです」

キャラが、フェイトとクロノの同時攻撃を受けきり、迫るプラスマランサーを真っ向から魔力で構成された大鎌で迎撃していく誠実な^{ルシオン}賢者を見て驚嘆する。

「でもやっぱりルシル君はおかしい。ちゃんとした魔術を使う形跡が全く見られない」

本局でのフェイトとクロノとの戦闘で得られた情報。

そして次は南部海上でのはやてとの戦闘シーンが映し出される。

「ミッドとカルナログを襲った散弾砲はルシル君のもので間違いないね」

「魔術のようだけど、でもこれはまだ魔法の域かな・・・？」

魔術だったらこんなにも簡単に迎撃できるわけないし・・・」

なのはたちは知らない。昨日と二日前に誠実なる賢者が放った次元^{ベカ}跳躍散弾砲^{ド・カステイガル}と呼ばれる散弾砲が本当の威力ではなかった事を。

そしてその散弾砲が彼独自の魔法でも魔術でも複製されたモノでもない事も。

「今回はちゃんと飛行してるけど、でも空戦形態にはなってる」

「それは私もさっき見た映像で気づいた。ルシル君、空戦形態になつとればフリースウェルグだって簡単に回避できるはずなのに、剣翼だけで対処しとった」

「それに、確か“我が手に携えしは確かなる幻想”っていう呪文の後に使うのって複製された魔法とかですよ？」

「うん……。もしかして昔のように使えないのかも……」

なのはの口にした昔という言葉に、？と首を傾げるその当時を知らないスバルたち。

「なのはちゃんの言う通りかもしれないな。」

闇の書事件以前、ルシル君は界律に制限されてて攻撃用の魔術が使えなかつたんやろ？」

なのはとはやてが話す隣で、フェイトがスバルたちへと補足している。

当時のルシリオンは魔術のほとんどが碌に使えないほどにその力を制限されていた事を。

「はやてちゃんに押され始めても魔術を使う様子は無いね。そして選んだのが……」

「リインフォースとのユニゾン、ということやね」

「使われたのはリインフォースさんが使っていた古代ベルカ式の魔

法。
やっぱりルシル君の魔術じゃない」

「これはチャンスかもしれないね。魔術が使えへんのやったらそれだけでも十分に脅威レベルが低くなる」

なのはが頷く。そしてなのははやてに視線を向けられたフェイトたちも頷いた。

ルシオン
誠実なる賢者の脅威はバリエーションの豊富な魔術。

その魔術がすべてと言わずとも制限されていることは、なのはたちにとって都合のいい事に違いなかった。

そして最後に北部においての戦闘介入の映像へと切り替わったそのとき、

『特務六課へ緊急出動要請。第39管理世界エルジア・魔導紛争地域内にてテストメントを発見。』

至急、第39管理世界エルジアへ出動してください。繰り返します

『

「エルジアの紛争地域!? 管理局でも下手に手が出せないのに!」

世界名を聞いたエリオが驚愕の声を上げた。

「話は後や! ヴォルフラム、出航の準備は出来とるか!?!」

『こちらヴォルフラムのラインフォース? ですつ!』

はやてちゃん、ヴォルフラムはいつでも行けますよつ!?!』

はやての呼びかけに答えたのはラインフォース? だった。

隣に立つアギト共々すっかり回復した様子だ。
はやては少し笑みを見せ、これから共に戦う仲間へと告げた。

「よしっ！ 特務六課、この事件を必ず解決するよ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

テストメント対策部隊『特務六課』始動 〈The 6th Extra F

くはあっ！ 今回ほど文才が欲しいと願ったことはありませんよ）
泣）

絆の魔法 ～The Reviving bonds～ (前書き)

コールサインをどうするか本当に悩みましたよお (泣)

Forceだとなのは“アグレッサー1”とか言ってるし・・・。
でも結局は機動六課時代と同じにしました・・・。

聡明なる勇者アグアマリナ&敬虔なる諦観者アマテイスタ戦イメー

ジBGM

テイルズオブシンフォニア “Beat the Angel”

絆の魔法 〈The Reviving bonds〉

11月15日 PM12:32

反時空管理局組織テストメント旗艦“フリングホルニ”会議室

“テストメント”の指導者である至高なる卓絶者、永遠なる不滅者、ハーデ謹慎中の報復せし復讐者と報復せし復讐者の右腕を除く幹部達がこディアマンテこ会議室に揃っている。

「今すぐに使えるレジスタンスはほんの僅かだが、一月もあれば他の連中も立派な戦力になるだろう」

「鍛え甲斐があるというものです。中には嫌な顔をする者もいましたが」

“レジスタンス”の戦技教導を任されている堅固なる抵抗者隊、その隊長・堅固なる抵抗者と堅固なる抵抗者の左腕が、午前中の教導で思ったことを報告した。その報告を受けた幹部達はそれも当然かもしれない、とも思っていた。

「ま、覚悟とやる気の無え奴は放っておけばいいさ。」

「そう言うな。彼らにも心の準備というものが必要だろう」

誠実なる賢者がそう陽気なる勝者を諫める。

陽気なる勝者は「さいですか」と言っグラナードて、自室待機を解かれた報復せし復讐者の左腕へと視線を移して声をかける。

「さつきから元気がない拗ねた子供のような報復せし復讐者の左腕よ。」

良かったな、誠実なる賢者と永遠なる不滅者に許してもらってさ」

「っ！ あ、ああ。これからは気をつけるよ」

陽気なる勝者にそう話を振られ、フードに隠れた報復せし復讐者の左腕の顔が、余計な事を、と苛立たしげに歪む。

だがその苛立ちを声に出さないように努めてそう返した。

そして彼は誠実なる賢者へと悟られないように視線を移す。

報復せし復讐者の左腕が前々から彼に抱いていた畏怖は、今では完全な恐怖へと変貌していた。

「そんなこと言わないの、陽気なる勝者。全てが終わるまでみんな仲良く」

「おう？ ハハ、すまねえな潔白なる聖者。別にアイツを苛めてるわけじゃねえんだ。」

年長者からの忠告さ。今度は自制するよつにつてさ。

でないと怖い誠実なる賢者お兄さんに消されちまうぞ、つてな」

潔白なる聖者に袖を引つ張られながら注意された陽気なる勝者はまともな事を言っ返した。

が、それで終わればよかったものを最後に誠実なる賢者をネタにして笑いだした。

潔白なる聖者はそれが納得できなかったのか、陽気なる勝者をペシツと叩いてトテトテと椅子に座りなおした。

「あー・・・はずしたか？」

「……バカだな」「」

ルシリオン 誠実なる賢者と堅固なる抵抗者隊の三人に呆れた声でそう言われた。そこで会議室の両扉が開き、ディアマンテ 永遠なる不滅者がコツコツと足音を立てながら入ってきた。

そして空いている席へと腰掛け、この場にいる幹部達を見回した。

「マスター・至高なる卓絶者から早速任務遂行命令が来た」

円卓中央にモニターが展開され、一つの管理世界が映し出される。

「管理世界の39番、世界名はエルジア。

今このエルジアでは二国間での紛争が起きており、魔導に質量兵器といった物が錯綜している。

その拡大した戦火は管理局の次元航行部ですら現状において完全鎮圧出来ないほどだ」

繰り広げられている紛争の光景。

戦場に倒れ伏す様々の勢力に属する魔導師や全く無関係の民間人たち。

老若男女を問わないその亡骸の山に、見るのが耐えられないのか潔白なる聖者がモニターから視線を逸らす。

トパーシオ 潔白なる聖者の元へと歩み寄るのは敬虔なる諦観者。

後ろからそつと抱き締め、会議室から退室するように促す。

しかし潔白なる聖者は「ありがとう。大丈夫だから」と言って、モニターに映る惨劇を再び視界に入れる。

アマテイス 敬虔なる諦観者はもう何も言わず、彼女の隣に座ってその手を握った。

「確かにこの紛争を鎮圧するのは容易な事じゃないのは確かだ。だが、それは魔導にのみ頼っているからとも言える。スキーズブラズニルの攻防力と我々幹部、そしてレジスタンスの助力で鎮圧出来るはずだ」

「なるほど。その紛争を鎮圧できれば管理局に知らしめることが出来るな」

「ああ。魔導にだけ頼る愚考を改めるだろう」

ダイヤモンド永遠なる不滅者の考えを察し口にした堅固なる抵抗者。

ダイヤモンド永遠なる不滅者は満足そうに頷き、管理局の魔法・魔導師至上主義を改めさせるには良い機会だと続けた。

「それで、だ。ターゲットはこの紛争を陰で操る組織だ。組織名をオルキヌス・オルカ。こいつらを絶対に捕縛する」

モニターに映し出される数十人の初老の男たちと年齢層にバラつきのある男たち。

“オルキヌス・オルカ”とは、戦争によって発生する利益などに集る、兵器開発などを主とした商人たちによる裏組織。

紛争を起こしている二カ国の中にもその構成メンバーが入り込んでいる状態だった。

幹部達はその男たちの顔と情報を全て頭に叩き込んだ。

「なるほど、クズだな。それで？ まさか、テストメント総出かよ？」

「いや。俺は本拠地でアレの起動実験を行うためにパスだ。

サファイア誠実なる賢者と祝福なる祈願者と潔白なる聖者は別命があるまで待

機。
マルフィール
堅固なる抵抗者隊には引き続きレジスタンスへの教導を任せる。」

ディアマンテ
永遠なる不滅者は待機を指示した幹部達を見回す。

待機指示を受けた堅固なる抵抗者隊の三人は「了解」と答え、誠実
マルフィール
シリオン
ラインフォース
なる賢者と祝福なる祈願者はコクリと頷き応えた。

「よっしゃ！　こういう派手な事をやりたかったんだよオレは！」

待機指示が下りなかった一人である陽気なる勝者が勢いよく立ちあ
グラナード
がり両腕を掲げて吼えた。

そして同様に出撃となった敬虔なる諦観者と聡明なる勇者ペアは、
アマテイスタ
アケアマリナ
フードに隠れてはいて見えないがやる気に満ちた表情をしている。

カルド・イスキエルト
ルシリオン
報復せし復讐者の左腕はこれ以上誠実なる賢者の怒りを買わないよ
うに全力で事に当たるつもりでいる。

ディアマンテ
そして永遠なる不滅者も立ちあがり、行動開始の号令をかけようと
したとき、

「待つて。わたしも行く」

トパーシオ
「トパーシオなる聖者！？」

トパーシオ
アマンテイスタ
アケア
潔白なる聖者の参加したいという意思に、敬虔なる諦観者と聡明な
マリナ
マルフィール・イスキエルト
る勇者、堅固なる抵抗者の左腕が驚愕の声を上げる。

トパーシオ
ハーデ
「潔白なる聖者、マスター・至高なる卓絶者から君を可能な限り出
撃させるな、と命令を受けているんだが」

「わたしだって戦える。紛争を止める力がある以上、黙って待つて
いられない」

「……………分かった」

トパーシオ
潔白なる聖者の強い意志の宿った言葉に、ディアマンテ永遠なる不滅者が折れる。
トパーシオ
潔白なる聖者の出撃が永遠なる不滅者の独断で許可された事に驚愕
ルシリオン
した誠実なる賢者が二人の間に割って入る。

「待て、ディアマンテ永遠なる不滅者。マスターの許可なくして潔白なる聖者の
出撃は許されない」

「わたしは大丈夫だから。だから誠実なる賢者、行かせて」
サファイロ

トパーシオ
潔白なる聖者は目の前に立つ誠実なる賢者のコートをキュツと弱弱
しく掴み、出撃させてくれるように懇願する。

「……これは卑怯だ。マスターから潔白なる聖者の命令にも従う
ように言われている以上、許可する他ない」

ルシリオン
誠実なる賢者も忖なく潔白なる聖者の出撃を許可した。

「ありがとう、ディアマンテ永遠なる不滅者、誠実なる賢者」
サファイロ

トパーシオ
潔白なる聖者は二人に感謝を告げ、頭を下げた。

トパーシオ
「潔白なる聖者は私たちが護るから大丈夫よ、サファイロ誠実なる賢者。
まあ、最大戦力を使われたらこの場にいる誰よりも強いから逆に護
つてもらおう方になるかもしれないけどね」

アマテイスタ
敬虔なる諦観者が心配そうにしている誠実なる賢者へと声をかける。
ルシリオン
誠実なる賢者は「出来るだけ無茶しないように見てやってくれ」と

返して渋々引き下がっていった。

「……これで決まりだ。早速エルジアへ向けて出撃だ。おそらく必要になる状況は無いと思うが、場合によっては各自“最大戦力”を使用してかまわない」

ダイヤモンド永遠なる不滅者の最大戦力使用を許可するという発言に、出撃メンバーは眉を顰めたが、彼らは一応「了解」と返した。

マルファイール堅固なる抵抗者、即戦力のレジスタンスを集めてくれ」

「ああ、分かった」

こうして、“テストメント”幹部の陽気なる勝者、グラナード敬虔なる諦観者アマテイスと聡明なる勇者ペア、アグアマリナ堅固なる抵抗者の左腕、マルファイール・イスキエルト潔白なる聖者が“レジスタンス”を率いて、エルジア紛争に介入することが決定された。

PM13:50 第39管理世界エルジア 紛争地域上空

“スキーズブラズニル四番艦”甲板

かつては自然が溢れ豊かだった世界も、今では戦火によって悲惨な様へと変わり果てていた。

眼下に広がる戦火に、“アマテイススキーズブラズニル四番艦”の甲板の手すりに身体を預けている敬虔なる諦観者が一人悲しみに耽っていた。

「昔はあんなに綺麗な世界だったのに・・・」

彼女は以前来たことがあるのか変わり果てたエルジアの景色に落胆していた。

そんなとき、彼女は眼下からこの“スキーズブラズニル四番艦”へと迫る対空砲撃を見た。

紛争を起こしている二大勢力が、“スキーズブラズニル四番艦”を互いの兵器だと勘違いしての攻撃だった。

だが彼女は何ら慌てることなく迫りくる対空砲撃を見つめ続けた。

迫る砲撃が“スキーズブラズニル四番艦”へと直撃するまで残り数秒。

3・・・2・・・1・・・直撃、だったはずの砲撃が直前で消滅していた。

「まさかあのルシル君がこんな凄いものを持っているなんてねえ」

彼女は誠実なる賢者の愛称であるルシル君と口にして、話に聞いていた通りの“スキーズブラズニル・シリーズ”が誇る防御力に感嘆していた。

さらに立て続けに“スキーズブラズニル四番艦”へと迫りくる対空砲撃群。

しかしその砲撃群は先程の第一射と同様に直撃することなく消滅していく。

「あゝあ、無駄玉のオンパレードだな、こいつは」

甲板へと出てきたのは陽気なる勝者。

次々と放たれてくる魔法・質量兵器問わずの砲撃を見て「勿体ねえ」と呆れ果てていた。

そして今度はお返しと言わんばかりに“スキーズブラズニル四番艦

”の両舷から何十門もの砲塔が現れた。
ドドドドドオン！と連続して轟音が響き渡る。

「うはあ！　こういう体の奥にまで来る響きも良いもんだな！
魔導砲には無いこの良い感じの震動、たまらねえな！」

睡眠ガスの封入された砲弾が放たれると同時に起こる震動に心地よ
さを感じた陽気グラナードなる勝者のテンションは高い。

砲撃は地上へと高速で撃ちこまれ、着弾と同時に砲弾に封入されて
いた睡眠ガスが戦場を席卷していく。

「さてと。それじゃ行くぞお前ら！！」

いつの間にか甲板へと上がってきた“レジスタンス”へと陽気グラナード
なる勝者が吼える。

様々な銃火器を手にした“レジスタンス”は、これから戦場へ向か
う恐怖を拭うかのように「オオオオオオオ！！！」と雄叫びを上
げ自らの心を奮い立たせる。

『スキーズブラズニル、降下します』

“スキーズブラズニル四番艦”全区画に潔白トパーシオなる聖者の声が流れる。
次第に高度を落としていき、地面すれすれまで降下した。

地上は完全に静まったとは言えないが、それでも先程までの圧倒的
な戦火はなかった。

“スキーズブラズニル四番艦”がそり立つ崖に横付けされる。

その崖へと甲板で待機していた“レジスタンス”が次々と降り立っ
ていく。

「そんじゃま、グラナード隊。組織のアホ共をとっ捕まえて、管理

局や管理世界に紛争の真実を語らせるぞ」

「アグアマリナ隊は今なお戦っている連中の戦闘行動の停止に向かいます」

「アマテイスタ隊は要救助者の救助を最優先」

「俺は予定通り組織構成メンバーとその兵器群の無力化へ向かう」

任務実行部隊である三隊を率いる事となった陽気なる勝者と聡明なマリナアマテイスタの勇者と敬虔なる諦観者が続いて「スキーズブラズニル四番艦」を降りる。

マルフィール・イスキエルドゼルフアーダの堅固なる抵抗者の左腕は、最大戦力武装における攻防力が優れているため、部隊を率いることなく単独行動となっていた。

これで「スキーズブラズニル四番艦」に残っているのは潔白トバシなる聖者ただ一人。

彼女は再度空から砲撃を放つ役目と管制を担っていた。

徐々に上昇していく「スキーズブラズニル四番艦」を見送った後、任務実行三部隊と堅固なる抵抗者マルフィール・イスキエルドの左腕はは紛争地域へと向かった。

PM15:58 第39管理世界エルジア 紛争地域上空

“スキーズブラズニル四番艦”ブリッジ

ブリッジの玉座に腰かけ、砲塔を操作して砲撃を放っていく潔白トバシな

る聖者の元に通信が入った。
通信を入れてきた相手は誠実なる賢者だった。

「どうしたの？」

『管理局が動いたとマスターから連絡が入った事を伝えておく。
私たちテストメントへの対策として編成された臨時部隊だそうだ。
管理局の要注戦力ばかりで構成されているようで、名を“特務六課”というらしい。
そちらに現れる可能性がある。十分に注意してくれ』

トパーシオ
潔白なる聖者を囲むように幾つものモニターが展開される。

そこに映し出されるのは“特務六課”の前線メンバーの顔写真と戦力情報。

「……分かった、ありがとう。でも誰が来ても邪魔させない、絶対。

管理局が変わろうとするまで、今まで斃れていった戦友たちの無念を晴らすまで」

トパーシオ
潔白なる聖者は玉座のひじ掛けに置いてある拳をギュッと握りしめた。

小さな彼女もまた管理局によってその人生を狂わせられ、管理局の变革を願うことになった存在だった。

『君は確かに強い。しかしその分反動が強い、無茶はしないように』

「うん。分かった」

ルシリオン
誠実なる賢者との通信が切れる。

再び話し声のなくなったブリッジが静まりかえる。

「そう、絶対にまだ終われないんだ。管理局の未来のために……」

「

トパーシオ潔白なる聖者は地上で行われている紛争の現状を知る為にモニターに映し出す。

紛争を促す敵性魔導師以外の一般兵は催眠ガス砲弾で次々と無力化してはいるが、耐性を付けた敵性魔導師隊はまだ活動している。その敵性魔導師隊を迎え撃っている四人の幹部と率いている部隊。

「介入から二時間。マルフィール・イスキエルド堅固なる抵抗者の左腕の方は順調に任務遂行中。だけど、さすがに力を抑えた他の三人は簡単に済まないみたい。レジスタンスも頑張ってくれているけど……」

“レジスタンス”がスタン弾や麻酔弾といった特殊弾頭が込められた銃で応戦している様子が映し出される。

未だに動く一般兵はそれに対応出来てはいるが、やはり魔導師には上手くいっていなかった。

だが魔法に頼らずとも、相手が一般兵であろうとも、魔導師ではない彼らは十分に奮闘していた。

魔法を扱う魔導師と質量兵器を手にした一般人が共闘して一つの事件に対応している。

禁じられている質量兵器も使い方次第で十分に役に立ち力となる。それが今証明されようとしている。

突如“トパーシオスキーズブラズニル四番艦”ブリッジに警報が鳴り響く。潔白なる聖者が急ぎコンソールを操作して幾つものモニターを展開していく。

そしてその一つのモニターにある物体が映し出された。

「管理局の次元航行艦・・・！ 特務六課・・・！」

映し出されているのは、エルジアに進入したばかりの“特務六課”旗艦である“ヴォルフラム”だった。

特務六課旗艦“ヴォルフラム”ブリッジ

「こちら時空管理局・特務六課。テストメント所属艦スキーズブラズニルへ告ぐ。

今すぐ地上への砲撃及び航行を停止し、武装を解除して投降しなさい」

“ヴォルフラム”より2000m低い高度を航行する“スキーズブラズニル四番艦”へと投降勧告を出すはやて。

しかし潔白なる聖者^{トパーシオ}ただ一人の乗る“スキーズブラズニル四番艦”は砲撃も航行も停止する様子を見せない。

「司令、敵艦に生命反応はありませぬ。無人です」

“スキーズブラズニル四番艦”の内部の様子を知る為にスキャンした結果を報告するオペレーター。

艦長席に座るはやての表情が疑問に満ちた。

いくら自動^{オート}にしても大事な艦を無人にしておくなんて正気か？と。

「地上はどうなってる？」

「少し待ってください。……………来ました。

テストメント幹部の白コートを四名発見しました。

グラナード、それにユークトバニアに出現した銃剣使いと格闘家（仮）です。

そして……………シグナム一尉たちを撃墜したカルド隊が一人だけいます」

ブリッジに展開される四つの大型モニター。

一つはラギオンと部隊を率いて“オルキニス・オルカ”の構成員を拿捕しようとしている陽気なる勝者の様子。

一つは聡明なる勇者と率いる部隊が懸命に紛争を止めようと駆けまわっている様子。

一つは敬虔なる諦観者と率いる部隊が戦闘を行いながら避難し遅れた民間人の救助を行っている様子。

一つは報復せし復讐者の左腕が単独で魔導・質量兵器を破壊している様子。

「カルド隊……………ホンマ一人だけか？」

「あ、はい。間違いなく一人だけです」

漆黒の甲冑に身を包み、闇色の炎で兵器を破壊していく報復せし復讐者の左腕を見たはやては緊張した声で彼単独かを訊き、返ってきた返答に安堵の表情を浮かべた。

そしてすぐにキリッとした顔へと戻し、

「スターズ、ライトニング両隊は地上へ降下、テストメント及びレ

ジスタンスの逮捕。

と言いたいところやけど、このまま黙って紛争を見過ごすわけにもいかん。

一時休戦や。テストメントと協力して、このまま戦火の縮小したエルジア紛争を鎮圧する」

『スターズ了解！』

『ライトニング了解！』

降下ハッチへ集合していた両隊の隊長であるのはとフェイトから応答が入る。

はやては二人に「お願いや」と返し、

「シャマル、ザフィーラ。二人も地上に降りて怪我人の救助を行ってくれへんか？」

『はやてちゃん……。はい！ シャマル、ザフィーラ共に了解です！』

治癒などの補助魔法のエキスパートである医務官シャマルとその護衛としてザフィーラにも地上降下を指示する。おねがい

シャマルは、“テストメント”逮捕という任務より人命救助と紛争鎮圧を優先したはやての指示に、とても嬉しそうに答えた。

そしてはやてが降下部隊に出撃を指示しようとしたその時、

『こちらテストメント所属スキーズブラズニル四番艦。

現在任務遂行中なため、そちらの指示には従えません。

管理局所属艦ヴォルフラムに警告します。我々テストメントの妨害をするのであれば交戦を止むをえません』

“スキーズブラズニル四番艦”操主・潔白トパーシオなる聖者から通信が入る。その声色は可愛らしく幼さの残る少女のものだった。だがそんなことより驚くべきことがあった。

「な！？ 無人やなかったんか！？」

オペレーターの報告とは違って“スキーズブラズニル四番艦”に人が乗っていたことに驚愕するはやて。すぐさまオペレーターが再スキャンを試みる。

「やはり何度スキャンしても生命反応なし、と出ます！！」

同じ結果が出る事に困惑するオペレーターの声がブリッジに響き渡る。

はやては“スキーズブラズニル四番艦”を通して別のところから発信しているのかと考えるが、

「司令！ 敵艦の甲板に人がいます！」

別のオペレーターからの報告が入り、すぐさま別モニターに“スキーズブラズニル四番艦”の甲板が映し出される。

広大な甲板に一人佇んでいる白コートを。体格は小柄で、声の通り子供だと判断するはやて。

「ホンマに生命反応が出やへんのやね？」

「はい。間違いありません。敵艦に生きている者はいません！」

はやてにそう答えたオペレーターの言葉に静まり返るブリッジ。

思うことはただ一つ。それじゃあ甲板に立つあの白コートを纏った子供は何なんだ？

「こちら特務六課部隊長八神はやて二佐。

これより特務六課もエルジア紛争を鎮圧するために動く。

まずは鎮圧を優先するつもりや。そやから交戦なんてせんでもええ」

はやてが潔白トパーシオなる聖者へと音声のみの通信を入れる。

するとモニターに映る潔白トパーシオなる聖者が動きを見せた。

フードに隠れている顔がハッキリとはやてへと向き直ったのだ。

サーチャーの場所や見られている事も知らないはずなのに、それでもしつかりと自分に視線が向けられていることに息を飲むはやて。

「……それを信じると？ わたしたちテストAMENT幹部は、これまで何度も管理局に裏切られてきた。

きつとあなたたちも同じ。必ずわたしたちを裏切る」

はやてには潔白トパーシオなる聖者の声に様々な感情が入り混じっているのが分かった。

怒りや呆れ、憎しみ、悲しみ。子供にしか見えない潔白トパーシオなる聖者が発するにはあり得ないほどの強烈な敵意。

だからはやては、

「……そやな。そやつたら先にハッキリさせとこか。

特務六課はエルジア紛争を鎮圧後にテストAMENTを逮捕するために動く。

協力するんは鎮圧を終えるまで。どうや？ これならハッキリしとつて裏切りなんて言えへんやろ？」

はやてが真剣な面持ちで潔白トパーシオなる聖者へとハッキリ宣言した。

協力して紛争を鎮圧した後は、一切合切手加減なしで逮捕に行く、と。

『……うふふ……あはははは！　そうだね。うん、それならハッキリしてる。』

いいよ、鎮圧するまでは一緒に戦う。だけど鎮圧後、帰還を妨害するならこつちも手加減なしだから』

「決まりやね。それじゃ早速始めるよ！」

“スキーズブラズニル四番艦”の潔白なる聖者トパーシオとの通信が切れる。はやては降下ハッチに集合している降下部隊へと通信を繋ぐ。

「今の聞いたつたな。まずはテストメントと協力してエルジア紛争を完全鎮圧する。」

鎮圧後は一切の手加減なしでテストメントを逮捕、ええな？」

『了解！！』』

なのはとフェイトから応答が入る。

「降下部隊、出撃！！」

はやての出撃命令と同時になのはたち降下部隊は地上へと降り立っていった。

それを確認したはやては、オペレーターにある調査を指示した。

「地上におけるテストメント幹部の生命反応を調べてくれへんか？」

【 ということで、エルジア紛争を特務六課と協力して鎮圧することになったの】

“ スキーズブラズニル四番艦” の潔白なる聖者からの念話を受けている陽気なる勝者。

彼は手信号でラギオンや部隊に指示を出しながら呆れた表情をしている。

【こっちはオルキヌス・オルカのアホ共をボコボコにし終わって、最後の任務を遂行するだけなんだけどよ・・・】

“ オルキヌス・オルカ” の構成員の数人が、グラナード隊員たちによつて連行されている。

中にはラギオンの異様な姿と強さに呆然自失となって引き摺られている者もいる。

そんな陽気なる勝者率いるグラナード隊に捕まっている仲間（オルキヌス・オルカの構成員と知らない）を解放しようとする魔導師たちが、彼らグラナード隊に襲いかかってきた。

「【今さら来られても、そいつらとバトルする以外にねえだろうよあーくそっ！

騙されて無様に踊ってるお前らをどうにかしようとしてやってんだよ・・・！】

グラナード隊上空に、爆炎に照らされ黄金に輝くラギオンが現れる。中央部から白の砲撃が放たれ、グラナード隊の行く手を塞ぐ敵魔導師隊を一蹴した。

しかしさらに敵魔導師隊がさらに集まり、グラナード隊へと魔法攻撃を放つていく。
今回出撃した“レジスタンス”は魔法への防御策を一応有してはいるが、所詮は気休め程度だ。

「しまっ・・・！」

グラナード陽気なる勝者は急いでラギオンを盾にしてグラナード隊を護る。

だが敵魔導師隊の攻撃は緩まることを知らない。ラギオンに砲火が集中していく。

その間に離脱を試みるグラナード隊だったが、それを許さない敵魔導師隊と眠りから覚めた一般兵たち。

『グラナード13からグラナード・リーダーへ！ 援護をお願いします！』

グラナード無線から陽気なる勝者の耳へと入る部下たちからの救援要請。

グラナード陽気なる勝者は軽く舌打ちし、ラギオン一体では限界があると判断した。

（くそっ、殺さないようにするんじゃラギオンだけじゃ足んねえか・・・。）

どうする？ フォヴニスを出すか？ それとも最大戦力を使かって一掃するか・・・？）

グラナード陽気なる勝者は逡巡した末、ラギオン以上の戦力を召喚しようとしたとき、
フォヴニス

「サンダー・・・レイジ！！！」

上空から槍を携えた少年が落下してきて、雷撃を纏った槍を地面に突き立てた。

それと同時に地面を奔る雷光が複数の敵魔導師を襲い気絶させていく。

「おーおー、早速特務六課か・・・」

「テストメント幹部のグラナード、ですね。特務六課のエリオ・モンディアルです」

「同じくキャロ・ル・ルシエと飛龍フリードリヒ」

紛争地域の一画で、グラナード陽気なる勝者と、特務六課の騎士エリオと竜召喚士キャロが邂逅した。

ライフルをエリオたちに向けるグラナード隊に、グラナード陽気なる勝者は左手を上げ合図し、目的を果たすように無言で告げる。

もちろんそれを黙って見ている敵魔導師隊ではなく、ストレージデバイスを向けてくる。

「紛争鎮圧までは協力します。その後はあなたを逮捕しますからそのつもりで」

「・・・ハハ、言うじゃねえか。ラギオン、道を作れ」

号令と同時にラギオンから放たれる白の砲撃。

直撃ではなく生まれた衝撃波で、尚も立っている敵魔導師隊を吹き飛ばしていく。

「おい、グラナード隊はそのアホ共を連れて例の任務遂行！

オレとこのガキどもでこいつらを押さえる」

「了解です！」

「それでいいよな、特務六課？」

グラナード隊の道を作る為にラギオンへと砲撃を撃たせる合図を送る陽気なる勝者がチラリとエリオとキャロを見る。

キャロはフリードリヒの上からエリオへと視線を移す。そしてエリオは、

「いいですよ。・・・ストラダー！」

Explosion

そう短く答え、構えた“ストラダー”にカートリッジのロードを命じた。

陽気なる勝者はその姿に笑みを浮かべ、「だったらについてこい！」
と言いつつ、エリオとラギオンと共に敵魔導師隊を落とす方向に向かった。

特務六課旗艦“ヴォルフラム”ブリッジ

「降下部隊、テストメントと合流完了。紛争鎮圧、救助は順調に進んでいます」

モニターには、なのはとフェイトが報復せし復讐者の左腕と合流して“オルキヌス・オルカ”の魔導師隊と兵器との戦闘の様子が映し出される。

その他にもエリオとキャロが陽気なる勝者とラギオンと共闘するもの、スバルとティアナが敬虔なる諦観者とアマテイス隊と合流して、民間人の救助を開始したものの、シャマルとザフィーラが紛争に巻き込まれた民間人を治療している様子も映し出されている。

「……司令、テストメント幹部からは生命反応が出ません」

「……そうか……」

オペレーターの報告にはやては短く答え、静まり返ったブリッジを見回す。

ブリッジにいる隊員たちのモニターに映る“テストメント幹部”達を見る目が恐怖に満ち始める。

そのとき、エルジア紛争地域を始めとした時空管理局主要施設、複数の管理世界に放送が流れ始める。

映るのはグラナード隊と“オルキヌス・オルカ”の構成員が数人。その放送の内容は、構成員から語られるエルジア紛争の真実である。

はやての表情がまた驚愕に染まる。

管理局が“オルキヌス・オルカ”という組織を確認できたのはつい最近の事だった。

もちろんその情報は管理局内部でもまだ多くには知られていない。それを“テストメント”が知っている。その事実には驚愕していた。

『これで4年と続いたエルジア紛争も終息していくはず。』

『……協力もこれまで、ということでもいいの？ 八神はやて二佐』

潔白なる聖者から通信が入る。

「そやね。少し残念やけど協力もこれまでや。降下部隊、テストメントの逮捕へ任務変更」

はやては動揺を努めて抑えつつ、地上に降下しているスターズ・ライティング両隊へと“テストメント”逮捕を指示した。
対する潔白なる聖者も地上の幹部達に三つの指示を出す。
“レジスタンス”を優先して“スキーズブラズニル四番艦”へと帰艦させること。

“特務六課”が撤退を妨害した場合のみ交戦を許可する。
カルド・イスキエルド
報復せし復讐者の左腕は“特務六課”との戦闘は避け、“レジスタンス”の引率をすること。

「スキーズブラズニルの航行を止めさせる。アウグスト照準、目標マスト及び舵」

「了解。魔導砲アウグスト、マストと舵へ照準合わせ完了」

「……アウグスト、発射」

はやてはまず“テストメント”の移動手段である“スキーズブラズニル四番艦”を無力化しようと考えた。

それゆえに“ヴォルフラム”に艦載された長距離射程魔導砲アウグストの照準を、“スキーズブラズニル四番艦”のマストと舵へと合わせるように指示を出した。
だが、

「敵艦から強大な魔力反応！ 白コート少女からです……！」

「推定ランク・・・ッ！ SS！！」

来たれ、悲哀の天使^{メノリア}

エルジア紛争の真実を知った両軍の戦闘が終わり、パチパチと何か
が焼ける音しかしなくなつた場所に、スバルとティアナと敬虔なる^{アマテ}
諦観者が少し距離を開け向かい合っていた。

向かい合つたまま、どちらも何も言わずにただ時間だけが過ぎてい
つている。

先に口を開きその沈黙を破つたのは敬虔なる諦観者^{アマテイスタ}だった。

「あなたたちは私たちテストAMENTを捕まえるために編成された特
務部隊なんだよね？」

「そうやって突つ立つたままでいいのかな？」

「お願いします。大人しく武装解除して投降してください」

「そう言つてアマテイスタ隊を先に逃がそうとする敬虔なる諦観者^{アマテイスタ}
へとスバルが投降するように勧告した。」

「スバルとティアナは出来るだけ敬虔なる諦観者と戦わずに済ませた
かった。」

「救助活動中の彼女を見て、絶対に悪い人ではないと、だから戦いた
くないと思つていた。」

「しかし、敬虔なる諦観者^{アマテイスタ}を含めた“テストAMENT”を逮捕するのが
仕事であるスバルは、

「・・・アマテイスタさん。あなたを・・・逮捕します」

スバルが一步前に出て、臨戦態勢に入った。

それに続くように、ティアナも“クロスミラージュ”の銃口を敬虔アマテイスタなる諦観者へと向ける。

迷いを見せるスバルとティアナを見つめる敬虔アマテイスタなる諦観者は笑みを零し、「優しいんだね」と嬉しそうに呟いた。

「あなたたちには悪いけど、ここで捕まるわけにはいかないの。

アマテイスタ隊、他の二隊と合流してスキーズブラズニルへ帰還しなさい」

背後に控えていたアマテイスタ隊にそう指示し、敬虔アマテイスタなる諦観者も臨戦態勢に入る。

ティアナがアマテイスタ隊を逃がさないために、射撃魔法による威嚇射撃を放った瞬間、どこからともなく放たれてきた黄色の魔力弾がティアナの魔力弾を全弾迎撃した。

「っ!!」

「銃剣使いのテストメント・・・!!」

撤退を始めたアマテイスタ隊の行く手の奥から一人の白コートが現れる。

白銃と黒銃を携えた銃剣使いこと聡明なる勇者アクアマリナだ。

白銃の銃口をティアナに向けたままゆっくりと敬虔アマテイスタなる諦観者の隣へと並び立った。

『スバル・・・いくわよ』

『ティア・・・でも、やっぱり・・・』

ティアナが念話でスバルへと指示を出す、スバルは未だに戦うことを迷っていた。

それはティアナも同じ。敵とはいえ戦うには敬虔なる諦観者アマテイスタは優し過ぎた。

救助活動中は民間人を何度も励まし、敵であるスバルとティアナにも気を回す。

女性だからだろうか、スバルとティアナは敬虔なる諦観者アマテイスタに“母”を感じていた。

【聡明なる勇者アケアマリナ、あの子たちは優しい、だからああして迷ってる】

【はい。(ティアナも優しく、そして立派に成長してくれたな)】

【でも・・・】

【まだ捕まるわけにはいきませんね】

敬虔なる諦観者アマテイスタと聡明なる勇者アケアマリナが、スバルとティアナに向けて強烈な戦意を叩きつける。

「スバルッ!!」

「っ！ ウイング・・・ロードッ!!」

スバルの足元から水色の魔力で構成された道が付近一帯に張り巡らされる。

ティアナはそれを確認し、周囲にオレンジ色のスフィアを複数展開した。

そして、

「クロスファイア・・・シュートツ!!!」

一斉に聡明なる勇者と聡明なる勇者へと放った。

ティアナの魔力弾一斉射撃と同時に、スバルがウイングロードではなく地上での疾走を開始、敬虔なる諦観者と聡明なる勇者へと突撃していく。

聡明なる勇者は先程と同様に白銃から自分に迫る数だけの魔力弾を発射、相殺していく。

ティアナはその精密過ぎる射撃に驚嘆しながらも再度スフィアを展開し時間差射撃を放っていく。

敬虔なる諦観者は右手を翳し藍色のベルカ魔法陣のシールドを展開。回避ではなく防御を取りつつこちらへと突撃してくるスバルへと疾駆する。

それと同時に魔力弾とシールドが衝突し爆発を起こす。スバルは煙幕の中から疾駆してきた敬虔なる諦観者と向かい合う形となった。

「おおおおおおおおおッ!!!」

リボルバーキャノン

ナックルスピナーが唸りを上げ衝撃波を発生させる。その衝撃波を纏った“リボルバーナックル”が敬虔なる諦観者のシールドへと叩きつけられ、一瞬で粉碎した。

スバルは迷いながらもそのままの勢いで本体を打とうとしたが、敬虔なる諦観者は跳躍しスバルの右腕を両手で捕えた。

スバルの右腕を支えにして逆立ちした敬虔なる諦観者は、身体を捻

リスバルの顔右側面へと両足による蹴撃を叩きこむ。

「つぐ・・・！」

アクロバットな攻撃に意表を突かれ直撃を受けてしまったスバルは吹き飛ばされた。

しかし体勢を立て直しウイングロードへと着地、再度敬虔アマテイスなる諦観者へと突撃する。

敬虔アマテイスなる諦観者は真つ向から迎え撃つためにウイングロード上へと跳躍、スバルへと疾駆する。

彼女のパートナー・聡明アケアマリナなる勇者はウイングロード上を疾走するスバルへと白銃を向ける。

それを黙って見過ごすわけもないティアナは、

Shoot Barret

圧縮魔力を弾丸状に形成し、加速して撃ち出す射撃魔法を二挺の“クロスマイラージュ”アケアマリナから放つ。

それに気づいた聡明アケアマリナなる勇者は白銃をティアナへと向け、同じ射撃魔法でそれを相殺。

彼はティアナへと近接戦を挑むために、白銃で黄色の魔力弾を連射しながら接近を開始。

ティアナも同様に相殺しようかと逡巡したが、精密射撃の練度で負けている為に断念、回避と防御を選択した。

回避できるものは回避し、出来ないものはシールドを張って防ぐ。

回避・防御しながらも魔力弾を放っていくティアナだが、全弾外れ、聡明アケアマリナなる勇者の後方へと流れていく。

そうしている間に二人の距離は縮まり、聡明アケアマリナなる勇者の黒銃に取り

つけられた黄色の魔力刃を纏った黒の刃がティアナへと迫る。

Dagger Mode

直前、二挺の“クロスミラージユ”に魔力刃が形成され、黒銃の刃を受け止める。

ティアナの表情が苦痛に歪む。相手は片腕での一撃に対しこちらは両腕での防御。

それにもかかわらず聡明なる勇者の一撃が想像以上に重かったせいで、ティアナの“クロスミラージユ”を持つ両手に強烈な衝撃が奔ったのだ。

次第に後退させられつつあるティアナの視界に、空いている白銃を敬虔なる諦観者と格闘戦をしているスバルへと向けられている様子が映った。

ティアナは先程外れたのではなく外した魔力弾を一齐に聡明なる勇者へと背後から襲撃させる。

ティアナの表情と視線から、背後からの奇襲を察知した聡明なる勇者は一瞬だけティアナから意識を外す。

「っ!!」

その一瞬を見逃さなかったティアナはバックステップで強引に距離を開けた。

意識を背後の魔力弾に向けていたため、聡明なる勇者は体勢を崩してたたらを踏む。

と同時に魔力弾が一齐に聡明なる勇者へと衝突していく。爆発が起こり、爆煙によって聡明なる勇者の姿が完全に覆われる。

「……うん、やるじゃないかティアナ」

「え？」

未だに晴れない煙幕の中から聞こえた聡明なる勇者の優しい口調に、アグアマリナティアナは抜けた声を出した。

どこかで聞き覚えのある声。おぼろげとなっても、それでも絶対に忘却することは無い大切な人の声。

「クロスファイア・・・シュート」

煙幕の中から魔法の術式名が聞こえたと同時に、黄色の魔力弾が一齐に放たれてきた。

ティアナは呆然としており、迫る複数の魔力弾に何の対応も取ろうとしない。

P r o t e c t i o n

“クロスミラーージュ”が代わりに半球上のバリアを展開した。
威力は低めに設定されていたのか、アグアマリナ聡明なる勇者の魔力弾はバリアを破壊することなく弾かれた。

「う・・・そ・・・。そんな・・・だって・・・。

クロスファイア・・・は、だって・・・。」

次第に晴れていく煙幕を見開かれた目で見つつ、うわ言のような声を発するティアナ。

クロスファイアシュート。この魔法を使えるのは、ティアナ自身、ティアナを教導したなのは。

そしてこの魔法の本来の使い手であるもう一人だけ。

「お兄ちゃん・・・？」

今は亡きティード・ランスター、その人。

煙幕が完全に晴れ、そこに一人佇む白コートの青年アゲアマリナ聡明なる勇者。ライフル型の黒銃は地面に突き立てられ、白銃のみをしつかりと手にしていた。

そして彼のフードが脱げ、その素顔を完全に晒している。

その顔は間違いなくティアナの亡兄ティード・ランスターだった。

ウイングロード上で繰り広げられているスバルと敬虔なる諦観者のアマテイスタ格闘戦。

スバルは敬虔なる諦観者の動きのきこちなさの正体を確信した。

その所為でスバルの動きは鈍くなり、敬虔なる諦観者の攻撃を受け、アマテイスタ回数が増えてきた。

「（まただ・・・。今の一撃、アレがあれば間違いなく完璧だった・・・）ぐっ！！」

敬虔なる諦観者の滑らせるかのような足運び。

もしそれが“ローラーブーツ”を装着していれば、間違いなくスバルの反応速度を超える事の出来る動きになっていた。

“ローラーブーツ”装着状態の格闘技法、名を“シューティングアーツ”。

スバルが使い、彼女の師であり姉であるギンガが使うものだ。

彼女たちだけではない。かつてある一人の女性も同様に“シューティングアーツ”を修めていた。

「どうしたのスバル？ あなたの本当の实力はこんなものじゃないんでしょ？」

「っ!？」

敬虔なる諦観者の声が今までの女性のものではない別の女性の声となった。

スバルの目が見開かれる。その声を聞いた瞬間、おぼろげだが確かに残っている小さい頃の思い出が一気にスバルの意識へと押し寄せ

る。

「……さん……」

スバルがよろつきながら敬虔なる諦観者へと近寄っていく。

「お……さん……」

敬虔なる諦観者は構えを解き、両腕をピンツと左右に大きく広げる。

「なんで……?」

敬虔なる諦観者の両手両足が発光し、それが治まると彼女の両手両足は変化していた。

スバルの瞳から涙が零れ始める。

敬虔なる諦観者の両腕の装着されている“リボルバーナツクル”を見て、スバルは自分の右腕に装着されている“リボルバーナツクル”へと視線を移す。

スバルとギンガが持つこの世に左右一組しかないはずの“リボルバーナツクル”が、目の前に佇む白コートを纏う“テストAMENT”幹部・敬虔なる諦観者が持っている。

そして白コートの裾からはみ出している“ローラーブーツ”は、Aエコーのない“マツハキヤリバー”と酷似していた。

アマテイスダ
敬虔なる諦観者はゆっくりとフードに手をかけ、フードを脱いだ。

「っ!! なんて・・・? お母さん・・・!!」

「大きくなつたね、スバル」

晒された敬虔なる諦観者の素顔は、今は亡きスバルとギンガの母クイント・ナカジマのものだった。

そして敬虔なる諦観者の足元に藍色のベルカ魔法陣が現れ、

ウイングロード

スバルのウイングロードと同じ道が奔った。

絆の魔法 〈The Reviving bonds〉 (後書き)

今話もごちゃごちゃしていて申し訳ありません。
なかなか纏める事が出来ずに、結局そのまま投稿しました。

えーはい、ルシルとリインフォースだけでなくクイント&ティード
も参戦。

リインフォースと同様、随分前から参戦を決めていましたこの二人。
スパティア(略)にはちょうどいい相手だと思っています。

このまま過去と現在が交錯していきますね、はい。
ティードの一人称って結構迷っていたんですが、個人的に『僕』か
な?っと思ってみたり。

次回はトパーシオの初陣とグラナード戦になりますかね、丸々一話
じゃないかも。

戦天凍らすは涙こぼす天使 (Ghost of Princess) (前書き)

陽気なる勝者グラナード戦イメージBGM

ギルティギア “SUCK a SAGE”

潔白なる聖者トパーシオ戦イメージBGM

ヴァルキリープロファイル2 “Unrestrained St

ruggie”

戦天凍らすは涙こぼす天使 〈Ghost of Princess〉

“ スキーズブラズニル四番艦 ” 甲板

（魔導砲をチャージしている……。そう、あくまで邪魔をするんですね）

“ ヴォルフラム ” の砲門に強大な魔力が生まれるのを確認した潔白トパーシオなる聖者。

フードの中で小さくため息をつき、自身の持つ戦力を使用することにした。

「（力を貸して、メノリア）・・・来たれ、悲哀の天使」

潔白トパーシオなる聖者の足元、“ スキーズブラズニル四番艦 ” の甲板にアイズグリーントパーシオの召喚魔法陣が展開される。

一瞬の発光の後、白コートを纏った潔白トパーシオなる聖者の背に、妖精の持つような四対の光翼を生やした女性が浮遊していた。

それは美しい女性だった。身長は160cmくらいあるだろう。

虹色に輝くウェーブのかかったロングヘア、何故か涙を流す両の瞳もまた虹色に輝いている。

纏う服装は、戦場においては場違いな純白のウェディングドレス。ドレスラインはAラインとよばれるもので、ネックラインはスクエア、袖なし、長いトレーンが目立つ。

頭上に浮かぶ黄金の環が回る度にミドルヴェールがなびかせ、虹色に輝く双眸を露わにさせる。

「来てくれてありがとう、メノリア」

悲哀の天使の二つ名を持つメノリアはコクリと頷いた。

潔白なる聖者は“スキーズブラズニル四番艦”を自動操縦にして、三隊との合流地点である崖へと降下させていく。

「それじゃあ行くう」

甲板を蹴って“スキーズブラズニル四番艦”から空高くへと舞いあがる。

それと同時に、潔白なる聖者の背中にピタリとついていくメノリアの背にある四対の光翼が羽ばたいた。

どうやらメノリアが潔白なる聖者の代わりに飛行を行っているようだ。

「まずは初撃、これで確かめてみよう。メノリア、お願い」

冷徹なる極雪の凍波

メノリアは両手を突き出し、両掌から蒼い吹雪の砲撃を放った。

なのはとフェイトが対峙するのは、シグナムとヴィータとセレスを撃墜した報復せし復讐者隊の一人、報復せし復讐者の左腕。
そんな彼は、潔白なる聖者からの指示で“特務六課”との戦闘を避けなければならなかった。

「お前たちと戦うわけにもいかなかった。このまま退却させてもらおう」

「それを黙って見過ごすわけにはいきません。大人しく武装解除して投降しなさい」

なのはがエクシードモードとなっている“レイジングハート”を向けてつつ投降を促す。

フェイトも同様にライオットブレイド形態の“バルディッシュ”を一切の油断抜きで構える。

二人は始めから全力で戦う気であった。何せ相手は神秘を有するかもしれない敵。

しかしそうであっても逃がすわけにはいかなかった。

「俺なんかより、お前たちの艦の方を心配したらどうなんだ？」

カルド・イスキエルト
報復せし復讐者の左腕は大剣をゆっくりとはるか上空で待機している“ヴォルフラム”へと向けた。

それと同時に上空から響いてきたのは何かが砕け散る音。

その音になのはとフェイトは思わず“ヴォルフラム”へと視線を移す。

“ヴォルフラム”を視界に入れたなのはとフェイトは絶句した。

ここ地上からでもハッキリと判るほどに“ヴォルフラム”は襲われていた。

襲っている相手は“スキーズブラズニル四番艦”ではない。

すでに“スキーズブラズニル四番艦”はグラナード隊・アマティスタ隊・アグアマリナ隊を回収するために降下を始めていた。

“ヴォルフラム”へと攻撃を続けている閃光、なのはたちはそれが何か分かった。

「あの女の子……！」

「艦が撃沈される前に助けに行った方が賢明だと思っぞ」

なのはとフェイトはハツとして、急いで報復せし復讐者の左腕へと戻したが、

「逃げられた……！」

フェイトが悔しげに周囲を見渡すが、もうどこにも彼の姿が無かった。

なのははすぐに意識を切り替え、フェイトに「助けに行かないと！」と焦り気味に告げた。

もちろんフェイトもそれに「うん！」と強く頷いた。

そしてなのはとフェイトは、潔白なる聖者に襲われている“ヴォルフラム”へと全力で向かった。

「さて、と。エルジア紛争も何とか鎮圧できたことだし、オレらもこれで帰らせてもらわ」

陽気なる勝者は背伸びをしながら、少し離れた場所のエリオとフリードリヒに跨るキャロへとそう告げる。

もちろんそれを許すわけもないエリオは、第二形態・デューゼンフォームとなつている“ストラダー”の矛先を陽気なる勝者へと向ける。

「協力はここまでです。テストメント幹部グラナード。あなたを逮捕します」

「・・・今作戦のリーダーである潔白なる聖者から、こつ指示を受けてんだ。

“ 帰還を妨害された場合のみ特務六課との交戦を許可する” って・・・さー!!」

^{グラナード}陽気なる勝者が両腕を広げたのを合図としたのか、彼の背後にラギオンが舞い降りる。

中央部の円環が徐々に回転していき、キンコンと美しい音色のようなものが周囲に流れ始める。

『キャラ、僕がグラナードを倒す。キャラとフリードにはラギオンを押しえてもらいたいんだ』

『うん、分かった。八神司令の言っていた対抗策だね』

ここに来る直前の会議ではやてが言っていた事を実践することを選んだエリオとキャラ。

^{グラナード}陽気なる勝者とラギオンを引き離せば勝てるかもしれない、という作戦だ。

フリードリヒに跨ったキャラが上昇するのを見た陽気なる勝者は、^{グラナード}エリオから視線を逸らすことなく警戒する。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士、駆け抜ける力を。猛きその身に、力を与える祈りの光を・・・!!」

Boost Up・Acceleration・Boost

U p · S t r i k e P o w e r

「ツインブースト、スピード&ストライク！」

キャラが速力強化と打撃力強化の魔法をエリオと“ストラーダ”に掛ける。

グラナード陽気なる勝者のフードに隠れた瞳が細められ、「事前情報通りだな」と小さく囁いて笑みを浮かべた。

「ストラーダ！！」

S p e e r a n g r i f f

“ストラーダ”のヘッドブースターとリアブースターから彼の魔力光である黄色の魔力が噴射される。

軌道の読める一直線の突撃だが、それを圧倒的な速度でほぼ回避不可の一撃と成した。

グラナード陽気なる勝者は思考を巡らせる事も出来ずに、ただ回避するという本能のみで横に跳んだ。

しかし間に合わない。このままでは直撃を受ける事となる陽気なる勝者^ト。

だがそれを覆すのが陽気なる勝者の相棒ラギオンだった。

煌々たる天蓋あまみつきの天満月

エリオとフリードリヒを駆るキャラへと放たれる複数の白の円環。

エリオは強引に両足で地面を蹴って軌道を上空のラギオンへと変更した。

キャラはラギオンから離れていた事もあり余裕で回避に成功していた。

陽気なる勝者はエリオの咄嗟の判断に「ほう」と感嘆の声を上げる。

「いつけええええッ!!」

“ストラーダ”の矛先がラギオンの中央へと吸い込まれるように突き進み、そして直撃させた。

ガキイイインッ!!という金属音が鳴り響く。

エリオは手応えの無さからすぐさまラギオンから離脱し、空中で再度“ストラーダ”のブースターを点火させ、当初の予定通りに陽気なる勝者へと突撃した。

「動きは良かったが、今のままじゃラギオンは落とせねえよ」

陽気なる勝者は振り上げた右腕を勢いよく下ろし、ラギオンへと砲撃命令を出した。

ラギオンはエリオの一撃などなんてことは無いと示すように中央部を発光させる。

「フリード、ブラストレイ!」

キャロの指示と共にフリードリヒが火炎砲撃を放つ。

砲撃が放つ前にフリードリヒの一撃を受けたラギオンがよろめく。

「チッ。(さすがに格が落ちているとはいえ竜の一撃。元が同族の攻撃には現役のラギオンでも受けちまうか)やりやがったな」

エリオもキャロもそのラギオンの様子に呆然としてしまっていた。

威力としては明らかに先程のエリオの一撃の方が上だった。

それなのにフリードリヒの一撃でラギオンは確かによるめいた。

「いけるかもしれない」キヤロ、そのままフリードで攻撃を！！」

「『うん！』フリード、お願い！」

フリードリヒがラギオンへ向け攻撃を開始する。

エリオも陽気なる勝者へと接近、槍騎士としての接近戦を挑んだ。

「はあああああッ！！」

ルフトメツサー

まずエリオは“ストラダ”を振るって空気の刃を複数放った。

陽気なる勝者はそれを難なく回避し、ラギオンの方をチラッと見る。キヤロの駆るフリードリヒの機動力に若干翻弄されつつあるラギオンがそこにいた。

(ラギオンとガキどもじゃ相性が少し悪いか……)

「この状況でよそ見なんてしていいんですか……！」

自慢の速力で一気の距離を詰めてきたエリオが、一瞬とはいえラギオンへと意識を逸らしていた陽気なる勝者へとそう忠告した。

シュピリア・シュナイデン

そのまま“ストラダ”の斬撃を横一線に放つ。

陽気なる勝者はギリギリで直撃を免れるも白コートの胸部を斬り裂かれた。

「ラギオン！」

蹂躪する白光の流星

^{グラナード}陽気なる勝者が叫ぶと同時にエリオへと接近。

エリオは無手だというのに接近してきた^{グラナード}陽気なる勝者に警戒しながらも再度斬撃を放つ。

それを左腕で受け止めた^{グラナード}陽気なる勝者は、「うぐ」と苦悶の声を漏らしつつ、右手でエリオの顔を鷲掴みにし地面へと叩きつけた。それと同時に上空が光り、

「こいつはどうだ？」

^{グラナード}陽気なる勝者がその場から離脱した瞬間、ラギオンは上空へと砲撃を放ち、それが光の雨となってエリオとフリードリヒを駆るキョロに降り注いだ。

「っ！ ケリユケイオン！！」

ホイールプロテクション・プロテクション

キャロは自身とフリードリヒにホイールプロテクションを、エリオにプロテクションを使用する。

直後、二つの桃色のバリアに降り注ぐ白き光の雨。

強烈な発光と爆発が起き、周囲一帯が爆煙に包まれる。

「やり過ぎたか・・・？」

煙幕の中で佇んでいる^{グラナード}陽気なる勝者が心配そうに声を出す。

だが、すぐさま警戒へと意識を切り替える。煙幕を利用しての奇襲戦法を取ってくるかもしれないからだ。

「……っ！」

グラナード陽気なる勝者は視界の片隅の煙が分かりやすく動いたのを見た。それゆえに馬鹿正直にそこを襲撃しない。彼はその対角線に位置する地点へと、

天睨む反逆の光牙

上空にいたラギオンに白き砲撃を撃たせた。

砲撃が着弾地点周囲の煙幕を一瞬で吹き飛ばす。晴れたそこには何も無かった。

グラナード陽気なる勝者の読みは外れ、すぐさま先程動きのあった場所へと身体を反転させようとしたとき、

「はあああああッ！！！」

紫電一閃

額から血を流し、雷撃を纏った“ストラダ”を振り上げたエリオが突撃してきていた。

グラナード陽気なる勝者は再度ラギオンへと砲撃を撃たせようとする。

しかしラギオンは、エリオと同様に額から血を流しているキャロの召喚魔法の一つ、アルケミックチェーンで捕縛されていた。

グラナードさすがの陽気なる勝者もその光景には驚愕し、迫るエリオの一撃を回避しそこなった。

両腕をクロスさせて防御、かなりのダメージと共に白コートの両腕部分が焼き消えていた。

「（ダメだ、倒しきれない！！）このおおおおッ！！！」

Explosion

尚も立つ陽気なる勝者へと再度攻撃を入れるために、エリオは“ストラーダ”のカートリッジをロードする。

エリオは雷撃を纏わせた“ストラーダ”で連撃を放つ。

陽気なる勝者は紙一重で回避しつつラギオンへと視線を一瞬だけ移した。

ラギオンは、ボロボロになったフリードリヒの連続火炎砲の直撃を至近距離で受け、ゴイイイインと鐘が鳴ったかのような音を立て沈んだ。

フードに隠れた陽気なる勝者の表情が完全に驚愕へと変わる。

「紫電・・・一閃！」

「しまっ　ぐおおっ！！！」

陽気なる勝者もエリオの一撃の直撃を受け、両膝をついた。

雷撃の一撃だったためか白コートが完全に破れており、その素顔を晒していた。

若い男、20代半ばの青年とも言える。黒の短髪。前髪が紫色の目を隠す程あり、その端正な顔立ちからして、およそ戦う魔導師には見えず、事務員などが似合う風貌だ。

そして彼の服装はどう見ても管理局武装隊の共通バリアジャケットのインナースーツだった。

「武装隊の！？　あなたは管理局員なんですか！？」

「ハハ・・・くそ、やるじゃねえか」

陽気なる勝者は、悔しげというよりは膝をつかされたことに喜びを感じている風だ。
驚愕しているエリオの質問には答えようとはせずに、ただ笑みを浮かべるだけだ。

「……僕たちの勝ちです。大人しく投降してください。
そしてあなたのことやテストメントの事を全て話してもらいます。
『キャラ、大丈夫？ フリードも』」

エリオはここで陽気なる勝者から話を聞けないと判断し、事情聴取を後回しにする。
そして左腕で額から流れる血を拭い、少し離れたところにいるキャラとフリードリヒの状態を訊く。

「わたしもフリードも大丈夫。エリオ君は？」

「僕も何とか。キャラのプロテクションのおかげだよ」

ボロボロになって吹き飛んでいた帽子を拾いながらキャラがそう返し、エリオは護ってくれたことの礼を言う。

そしてキャラは四重のリングバインドで、陽気なる勝者の両手両足胴体を捕縛する。
体勢を崩しドサツと倒れ伏す陽気なる勝者は、それでも余裕の笑みを消そうとしない。

「……ガキ、とはもう言えねえな。騎士エリオと竜召喚士キャラ。」

ラギオンは確かに負けたが、それでオレも負けたと思うのは早計だぜ？」

バインドで捕えられながらもすつくと平然そうに立ち上がった陽気グなる勝者に、エリオは驚愕しながら“ストラダー”を向ける。キャラもすかさず魔法をいつでも発動できるようにする。

「騎士エリオ、局員とか関係なくこういう実戦の場合は先攻しないと負けるぞ？」

来たれ、黒鎧の毒精フォヴニス・・・！」

横たわったラギオンが黄緑色の召喚魔法陣の中に消え、陽気グラナーなる勝者の後方に別の召喚魔法陣が展開される。

かなり巨大な魔法陣だ。直径は30mと少しはあるだろう。

その魔法陣の発光量が次第に強まっていき、エリオとキャラは堪らず視界を閉ざす。

次に二人が目を開けてその視界に入れたモノは、ラギオン以上に強烈な異様をしていた。

まず全体が黒。その全長が約25m弱ほどある鏡の様な巨軀に炎が映りオレンジ色に染まっている。

その姿を見て、人はまずそれが何かこう答えるはずだ。

「さ・・・サソリ・・・!？」

エリオが震えた声で新たに現れた存在を見てそう慄いた。

サソリ。正しくその通りの姿。ハサミがあり、毒針のある尾もちやんとある。

しかし全体的に余すところ無く鎧を纏ったようなその姿、関節や鎧の隙間から翠色の光が漏れている。

サソリという生物よりはサソリ型の機械といった方がしっくりくる。

「こいつの名は黒鎧の毒精。オレのもうひとつの相棒だ」

グラナード
陽気なる勝者の姿が掻き消え、一瞬でフォヴニスの頭部の上へと移動、しかも新品同様に修復された白コートを纏っていた。もちろんキヤロのバインドもすでに無かった。

「予想外に楽しませてもらった礼だ。しっかりと受け取れ!!」

グラナード
陽気なる勝者は天を仰ぎ、両腕を仰々しく広げ叫んだ。

それを合図としてフォヴニスが血に飢えた獣のような咆哮を上げる。エリオとキヤロは、その頭部を覆い隠す鎧の隙間から光る翠色の眼に身が竦み、死の恐怖に囚われた。

フォヴニスの両のハサミが開き、中央部から翠色の光が漏れ始める。砲撃。エリオは直感的にそう判断し、死の恐怖に震えたその身体を、キヤロを護るといふ想いだけで動かす。

「キヤロおおおおお!!」

穿たれし風雅なる双爪

特務六課旗艦“ヴォルフラム”ブリッジ

「シールド出力最大！ 一撃でももらったらあかんよ！」

はやてが艦長席のひじ掛けにしがみ付きながら指示を飛ばす。

先程から“ヴォルフラム”は、A A + S Sランク、と大きく変動する魔力攻撃を受け続けていた。普通の魔力ならその程度では揺るがない艦載シールド。しかし、幹部達にはある秘密があった。その秘密によって“ヴォルフラム”が撃沈の危機に陥っていた。

『航行不能、最悪撃沈されたくなければ退いてください』

ブリッジの中央モニターに映るのは白コートの少女、トパーシオ潔白なる聖者。彼女の背後に浮遊する女性メノリアの両掌が再び光を集めていく。

「っ！ また攻撃来るよ！ スターズ1とライトニング1は!？」

「ダメです！ ジャミングと思われるモノが働いていて繋がりません!！」

はやては歯がみし両拳を強く握りしめる。

応援を呼ぼうとしても通信や念話を妨害され、自らが出ようとするも、その際には一度シールドを解除しなければならぬ。

もちろんそんな隙を見逃すはずもない潔白なる聖者はおそらく良い機会だと攻撃を行うだろう。

はやての打てる手が全て封じられ、“ヴォルフラム”は防御に徹するしかなくなっていた。

『次弾、いきます。八神二佐、降参するのもまた勇氣ですよ?』

どういわけか唯一繋がることを許されている潔白なる聖者からの通信。

はやては悔しげにその攻撃宣告を聞くしかなかった。

メノリアは、白のサテングローブをはめた右手を一度掲げ、勢いよ

く振り下ろし“ヴォルフラム”へと指差す。

吹き抜ける氷界の北風

指先から放たれた蒼い衝撃波は一直線に“ヴォルフラム”へと進み、展開されている魔導障壁に衝突した。

ブリッジにいた隊員たちの悲鳴が響く。激しく艦体が揺れ、ブリッジにいた隊員たちが踏ん張りきれずに転倒していく。

「シールドが突破されました！」

「左舷に直撃！」

「駆動炉出力85%まで低下！」

「シールド出力、尚も低下中……！」

次々と上がる“ヴォルフラム”が被ったダメージ報告。

はやては降参することも視野に入れた。このままでは撃沈される。それだけは何としても避けねばならなかった。

「次の一撃で航行不能にできます。さらにもう一撃で撃沈です。」

八神二佐、わたしはそこまでしたくありません。だから、退いてください」

トパーシオ
潔白なる聖者からの最後通牒がブリッジに流れる。

身体を起ここした隊員たちは、これにはやてがどう答えるか固唾を飲んで見守る。

しばらくの沈黙。リインフォース？とアギトが心配そうにはやてを見つめる。

はやてが口を開こうとしたとき、

エクセリオンバスター

桜色の砲撃が下方から放たれ、“ヴォルフラム”と潔白なる聖者の間を通り過ぎる。トパーシオ

ブリッジにいるはやてたちは、待ち望んだ応援の到着に緊張していた表情を少し和らげた。

『こち……ら……ターズ1……援護……ます……』

『ラ……ング1……えん……します……』

ノイズが雑じりながらもブリッジに流れるのはとフェイトの声。

これで二対一の戦況となる。しかしはやては気が気ではない。

相手はSSランクの魔力に、その上神秘を有しているかもしれない敵。

下手をすれば、なのはとフェイトの二人がかりですら負けるかもしれない。

しかし、

「ヴォルフラムはこのままスキーズブラズニル四番艦を撃沈する」

はやての指示に隊員たちは一瞬戸惑うが、それはなのはとフェイトを助けることにも意味することを察し、「了解！」と答えていく。

潔白なる聖者の護るべき“スキーズブラズニル四番艦”を撃沈さえすればそれで終わる。

はやてはそう考えた。移動手段である艦を撃沈すれば逃げられないだろうと。

幹部達は転移能力を持っているが、“レジスタンス”はそうはいか

ないからだ。

「スキーズブラズニル四番艦を、レジスタンスと合流するまでに撃沈するよ！」

スターズ1とライトニング1！ ごめんやけど少しの間、その子を足止めしてくれやんか!？」

『スターズ1了解!』

『ライトニング1了解!』

はやてはノイズで上手く伝わらないと思いながらも指示を出したが、どういわけかジャミングは無くなっており、なのはとフェイトからきちんと返答を貰った。

なのはとフェイトが、ヴェールの向こう側で涙を流すメノリアを背に従えた潔白トパーシオなる聖者と対峙する。

「エースオブエース・高町なのはと執務官フェイト・T・ハラオウン。

大人しくしててください。わたしたちの帰還を邪魔さえしなければ戦うことは無いんです」

自分たちを見逃すように言う潔白トパーシオなる聖者だったが、なのはとフェイトは、管理局員として、“テストメント”を逮捕するために編成された“特務六課”の一員として、それには領けなかった。

「あなた、名前は……？」

「……トパーシオトパーシオ潔白なる聖者。テストメント・ナンバー3、潔白なるトパーシオ聖者」

少し怪訝な表情を見せた潔白なる聖者だったが、名乗りも必要かな？と考え、組織内での序列とコードネームである潔白なる聖者を口にした。

「トパーシオ。あなたたちの目的は何？ 管理局に何か不満があるの？」

「永遠なる不滅者の声明通り。このままじゃ管理局はダメな組織になる。ディアマンテ

わたしや、他の幹部達のような犠牲者はもう出させない。

それに以前に管理局には闇がある。わたしたちは、その闇を晴らす、それだけ……！」

「犠牲者……？」

“ヴォルフラム”が“スキーズブラズニル四番艦”へと向かうのを見た潔白なる聖者は、なのはとフェイトが時間稼ぎのために残ったのだと判断。

そう簡単に撃沈される事もないと思いつつも、潔白なる聖者はなのはとフェイトを撃墜して、“スキーズブラズニル四番艦”の操舵に戻ろうと考えた。

「わたしに対しての妨害行動として、あなたたちを撃墜します。メノリア」

吹き抜ける氷界の北風

なのはとフェイトに向け放たれる蒼い衝撃波。

二人はその衝撃波が“ヴォルフラム”のシールドを突破したのを見ているため、防御ではなく回避を選択する。

「（仕方ない。どこまでいけるか分からないけど・・・）いくよ、フェイトちゃん」

「うん、なのは。（やれるところまでやってみせる）」

Photon Smasher

先手なのは。“レイジングハート”から放たれる桜色の高速砲。構えから発射までの速さに、トパーシオ潔白なる聖者は防御か回避、どちらにするか迷いたじろぐ。

そんな彼女を護るのがメノリアだった。背後から抱きつくように前屈みになり、綺麗な瑞々しい桃色の唇を開いた。

私の愛すべき主に触れるな

声にならない言霊を告げる。

なのはの放った砲撃が見えない壁に防がれる。

Sonic Move

フェイトが一瞬でトパーシオ潔白なる聖者の背後へと回り込み、ライオットブレイド形態の“バルディッシュ”を横一線に薙ぐ。

トパーシオ潔白なる聖者より先にメノリアがそれに気づき、黄金の刃を止める

ために右腕を伸ばす。

「メノリア!?」

「素手で受け止めた!?」

“バルディッシュ”を右手でしっかりと受け止めているメノリアの手からバチバチッと激しい火花が散る。

涼しい表情をヴェールの奥で浮かべ、メノリアはさらに左手を出し受け止める。

フェイトは素手で止められたことに驚愕するが退こうとはしない。彼女の親友の攻撃が来るまでは。

しかし少しずつライオットブレイドの刀身にヒビが入る。

フェイトも必死に耐えるが次第に押され始める。

潔白なる聖者^{トパーシオ}がフェイトへと右手を翳す。彼女自身の有する攻撃の前兆だ。

「『フェイトちゃん!!!』エクセリオン・・・バスタアアアーーー
ー!!!」

待ち望んだのはからの合図。

「メノリア! 防御!!!」

フェイトは“バルディッシュ”のライオットブレイドを消し、メノリアからすぐさま離れる。

メノリアは体勢を崩してしまうもすぐさま体を起こし、潔白なる聖者^{トパーシ}へと迫る砲撃に対応する。

私の愛すべき主に触れるな

ギリギリで防御に間に合う。起こる爆風でメノリアのヴェールが吹き飛ぶ。

潔白なる聖者もまた爆風で体勢を崩し、脱げそうになるフードを押さえる。

それを最大の間として、

R e s t r i c t L o c k

R i n g B i n d

「つく！」

なのはは潔白なる聖者に、彼女の誇る最高の強度を持つ拘束魔法を掛ける。

そしてフェイトはメノリアへとリングバインドを仕掛けたが、どういうわけか拘束出来ない。

疑問の表情を浮かべるなのはとフェイトだが、すぐさま緊張の面持ちへと変化する。

「この程度で……！ メノリア……！」

潔白なる聖者が叫ぶと、メノリアが拘束魔法へと手を伸ばし引き干切ろうとする。

何の抵抗もせずに引き干切られていく拘束魔法を見て、なのはとフェイトは拘束不可能と判断して、仕方なく撃墜を決意する。

ストライク・スターズ

なのはの特大砲撃が放たれる。砲撃に追隨していく複数の誘導弾に

よる多弾攻撃。

潔白なる聖者のフードに隠れた目が見開かれ、「メノリア！」と再び叫ぶ。

私の愛すべき主に触れるな

メノリアが再び攻撃を無効化する力を使う。

トライデントスマッシュャー

なのはとは反対となる位置から、フェイトが間を開けずに砲撃を放つ。

メノリアの展開した不可視の二つの壁に、桃色の砲撃と黄金の雷光が衝突する。

そして、がら空きとなっている潔白なる聖者へと複数の誘導弾が迫り、

「っ！！」

全弾直撃した。それと同時にメノリアの不可視障壁も消え砲撃の行く手を塞いでいたものが無くなったことで、砲撃が一直線に潔白なる聖者へ吸い込まれる。

巻き起こる大爆発。濛々と上がる爆煙に覆われる潔白なる聖者とメノリア。

なのはとフェイトは、爆煙の下方に注意する。

アレだけの砲撃の直撃を受けた潔白なる聖者とメノリアが気を失っていると思っっているからだ。

気絶していれば飛行出来ずに落下するしか無い。それを助けるために、二人は注意する。

だが強烈な魔力の波を感じるなのはとフェイト。

グラニッソ・ボンバルデオ
衝電爆雨

「「っ！！？」」

A c c e l F i n S o n i c M o v e

高速移動魔法で、頭上から降り注ぐ電を回避していく。

直撃を受けて気絶している、と思ったのは間違いだつたと二人は思う。

晴れていく煙幕の向こう。そこには、白コートは無く、素顔を晒している一人の少女がいた。

明らかに先天的な色ではない虹色に輝くストレートのセミロング、何故か涙を流す両の瞳もまた虹色に輝いている。

その虹色の髪と瞳は、彼女の最大戦力たる“悲哀の天使武装”^{メノリア}の影響だ。

纏う服装はメノリアの物と全く同じ戦場においては場違いな純白のウエディングドレス。

そして彼女の背からは、メノリアとは違うアイスグリーンに輝く高さ4m・幅が15mはある幾何学模様の翼が広げられていた。

「「ユニゾン！？」」

なのはとフェイトが驚愕する。しかしそれはユニゾンではない。
報復せし復讐者隊の“業火の眷属武装”^{ゼルフアーダ}と同じものだ。

“テストメント”の一部の幹部達が使役する最大戦力“武装形態”。

「事前情報以上の戦力……。甘く見過ぎてた」

涙を流す虹色の双眸を、なのはとフェイトに向ける。

正直、二人は今の潔白なる聖者を相手に真正面から戦って勝てるとは思えなかった。

ヒシヒシと感じる魔力と敵意と威圧感。

ウエディングドレスを纏った可愛らしく背伸びしたような少女だが、それは所詮外見だけ。

「メノリア、術式バックアップ」

トパーシオ
潔白なる聖者の足元に、半径10mはある巨大な魔法陣が展開される。

そのデザインは、昨日誠実なる賢者が散弾砲を使用したときに現れたものと同じだ。
ルシオン

正四角形の中に雪結晶、四方の角から伸びるひし形の模様、それを囲む二重の六角形のライン。

エバンヘリオ・フロセラル
咲きし福音

六角形のラインに沿って、縦長の巨大なアイスグリーンの氷板が六方に展開される。

魔法陣の中央にいる潔白なる聖者が右腕を大きく横に振るった。
トパーシオ

それと同時に六方に展開された氷板が炸裂したかのように六方へと広がっていく。

まず平行に一層が放たれ、上方の二層、下方の三層、ループして平行の四層、上方の五層、下方の六層、最後に平行の七層と周囲に放たれていく。

「っづく……!!」

なのはとフェイトは高速移動魔法で、迫る巨大な氷板を回避する。ゴオオオオオ！と轟音を立てながら高速で脇を通り過ぎていく氷板に、二人は恐怖した。直撃していれば、間違いなく押し潰され、圧死していたかもしれない。

セリオン・エクサラシオン
氷柱弾雨

三人の頭上に巨大な六角形の氷柱が幾つも現れる。

Sonic Move Accel Fin

二人が回避行動を取った瞬間、氷柱は高速で落下してきた。ブオン！と空気を圧していく轟音を立てながら地上へと消えていった。

Accel Shooter

Plasma Barrer

“レイジングハート”と“バルディッシュ”は何十基という魔力弾を次々と放っていく。
迫る魔力弾を見ても潔白なる聖者は慌てることなく何かを払い除けるように右腕を振るった。

ベンティスカ・パレドゥ
雪風の鉄壁

同時に巻き起こるのは潔白なる聖者を覆い隠す球体状の吹雪。
彼女へと迫ってきていた桜色と金色の魔力弾を飲み込んでいく。
なのはとフェイトは魔力弾がどうなったのかを確認する前に次の行

動へと移る。

二人は愛機のカートリッジを数発ロードし、一撃必倒のコンビネーションに賭ける。

なのはが第一波の砲撃を担当し、その初撃によって撃墜できれば儲けもの。

撃墜出来なくとも潔白トパーシオなる聖者の行動を制限させれば成功となる。

そしてフェイトが、防御もしくは回避行動を取った潔白トパーシオなる聖者の動きを瞬時に判断し、ライオットブレイドの一撃を直接たたき込むという戦法となる。

砲撃を撃つタイミングは、吹雪の防御壁に囲まれた潔白トパーシオなる聖者の姿が一瞬でも視認出来、吹雪が完全には言わずとも治まっていれば撃つ。

次第に吹雪が治まっていくのを確認した二人は、目を凝らし潔白トパーシオなる聖者の姿を探す。
そして、

「（いた！）エクセリオン・・・バス　　っ！！？」

「っ！？　な、なのはッ！！」

なのはが砲撃を撃とうとした瞬間、なのはと“レイジングハート”を襲った一撃。

“レイジングハート”のコアは無傷だが、杖の中央付近を大きく粉砕されて、空に破片が舞い散る。

激痛に歪んだ表情のなのはの両肩には、細く螺旋を描いた氷の杭が突き刺さっていた。

バリアジャケットの袖が鮮血の赤に染まっていく。

フェイトは叫び、痛みに耐えるなのはの元へと急ぎ、その身体を支

える。

フェイトはなのはの現状を信じられず、トパーシオ潔白なる聖者の事をつい意識外へと追いやってしまった。

「エースオブエース。管理局に入ってから任務中に於いての撃墜された回数は僅か一回。

無敵のエース、無敗のエース、不死身のエース。すごいですね、わたしとは大違い。

ですが、不死身のエースというのは戦場に長く居過ぎた人の過信に過ぎません。

あなたの事を言っているのですよ、エースオブエース」

治まった吹雪の中から姿を現すトパーシオ潔白なる聖者はなのはの事を称賛し、また否定する。

対するなのはは、フェイトに支えられながら“レイジングハート”のリカバリーを行っている。

なのははフェイトに「ごめん」と苦しげに告げ、フェイトは謝らないでという意味を込め、首を横に振った。

「これ以上の妨害となれば、撃墜された回数が今日で二回目になりますよ、高町なのはは一尉」

ディアブロ・クエルノ
悪魔の角

それはトパーシオ潔白なる聖者がなのはを撃墜するという宣告だ。

それと同時に、なのはの両肩を貫く螺旋状の氷の杭と同じモノが七墓、なのはとフェイトの視界に入らない位置に展開された。

フェイトは必死に思考を巡らす。トパーシオ潔白なる聖者からの攻撃は見えなかった。

そして現状戦えるのはフェイト唯一人。なのはは両肩を負傷しまとも戦えない。
圧倒的な魔力。見えない程に速い攻撃。神秘を有するかもしれない敵。
速さでどうにか出来る相手なのか、とフェイトは少し弱気になってしまふ。

「私は大丈夫だから。だからフェイトちゃん、もう少し頑張ろう」

「なのは！？ ダメだよ！ かなりの深手なんだよ！」

今もなおなのはの両肩に刺さる氷の杭を見て、フェイトはなのはの無茶を止めようとする。

なのははまた「大丈夫」と言うが、失血の所為か両腕が震えている。それ以前に刺さっているのが“氷”の杭というものにも原因がある。体内が直接冷やされ、筋肉や血管などの細胞にダメージを負わせていく状態。

フェイトは、これ以上なのはを治療せずに放っておくのは危険だと判断した。

「トパーシオ。私たちの負けで良い。だから、だからなのはを治療に行かせて」

「フェイトちゃん！？」

「……いいですよ。元より戦うつもりもなかったのですから。早く治癒魔法が使える人の所に連れて行ってあげてください」

トパーシオ
潔白なる聖者の作りだした氷の杭が、なのはとフェイトの周囲から消える。

そして彼女は、もうなのはとフェイトに興味無いとでも言うように
“ スキーズブラズニル四番艦 ” へと視線を移す。
“ ヴォルフラム ” の主砲を受けながらも、それでも撃沈することなく
停泊しているその姿に、彼女は満足そうに頷いた。

「特務六課です。止まりなさい」

シャマルが、若干怯えながら報復せし復讐者の左腕へと告げる。
カルド・イスキエルド

「風の癒し手シャマルと蒼き狼ザフィーラ……！」

三隊を率いて“ スキーズブラズニル四番艦 ” へと帰艦する最中、復
讐者とその復讐対象が出遭った。
カルド・イスキエルド

報復せし復讐者の左腕は手にしている大剣を構えたが、「くそっ！」
と悪態をついて大剣を下ろした。

「お前たちは先に行け。もうそこまでスキーズブラズニルが来ている
はずだ」

シャマルとザフィーラの前に立ち塞がり、三隊を先に帰艦するよう
に促す。

グラナード隊の2が指揮を受け継ぎ、三隊は報復せし復讐者の左腕
カルド・イスキエルド
を置いて先へと向かった。

「……それで？ 俺の前に出て来るなんて正気か？」

それでも俺は、お前たち二人を相手にしても勝てるだけの力を持つ

ていると自負している」

カルド・イスキエルド
報復せし復讐者の左腕の言葉は事実だった。

補助と防御に長けるが、その反面攻撃面が弱いシャマルとザフィーラでは、カルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕に決定打すら与えることは出来ない。

「あなたは、私たちが殺めた方の遺族なんですか？」

「それを聞いてどうする？ まさか謝りに行くのか？」

フルフェイスの兜の中から聞こえる苛立ちの含まれた声に、シャマルは足が竦みそうになったが負けじと話しを続けようとする。

「あの、私たちは」

「やめる。そんなことで許されると思うのか。

お前たちが許される時は、俺たちカルド報復せし復讐者隊によって裁かれたときだけだ」

「シャマル！！」

「待つてザフィーラ！・・・いいの」

カルド・イスキエルド
報復せし復讐者の左腕は大剣をシャマルへと突きつける。

胸に触れる大剣の堅い感触に、シャマルは今までにない死の恐怖を感じた。

いや、違う。死などではない。感じている恐怖は、自身の死ではなく愛しき家族との永遠の別れだ。

「お前たちが手に掛けた者たちの顔と名を憶えているか？」

「・・・・・・・・」

二人は答えられない。

「そうだよな。所詮は闇の書のページを埋めるためだけの贄としか見ていないのだから」

「違う！ 違います！ 私たちは！ 私たちは・・・・・・・・」

シヤマルが嗚咽も漏らしながらも必死に否定する。

カルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕は空いている左手で、フルフェイスの兜を脱ぐ。

現れた顔はまだ青年と言えるほどに若かった。

赤色がかった茶色の短髪に黒色の瞳をした青年。

兜から手を離し、地面へと落ちた瞬間に兜は闇色の炎となって消滅した。

「・・・・ジータ・アルテツア、ガウエイン・クルーガー、ジヨシユア・エルグランド」

「え？」

いきなり名前が並べられ、シヤマルの心は疑問に満ちた。

カルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕は、シヤマルに突きつけていた大剣をそっと離す。

そのまま踵を返し、シヤマルとザフィーラに背を向ける。

「あの一！」

「来るなッ！！ これ以上は耐えられない……！」

追い掛けてこようとしたシャマルへと怒鳴る報復せし復讐者の左腕カルド・イスキエルド。シャマルはビクツとし、足を止める。ザフィーラはシャマルを護るように二人の間に割って入る。

「次に会ったとき、我々報復せし復讐者隊は、必ずお前たちヴォルケンリッターに復讐の鉄槌を下す。

だがもし、このまま俺を追ってくるのであれば、今殺される覚悟で来い」

カルド・イスキエルド 報復せし復讐者の左腕の身体が薄れて消えた。

シャマルはその場にペタリと座り込んで、両手で顔を覆った。

決して消える事のない罪。たとえ当時の主の命令とはいえ、その手で刈り取ってきた幾つもの命。

それらが今、守護騎士たちを責める罪の杭として追い詰めていく。

「ねえザフィーラ。私たちは、どうすれば……どうすれば死ぬ」と以外で、彼らに許して……もらえるの……？」

「……我らの罪は決して消えぬ。この身が終えるその時まで、犯した罪と奪った命を背負って生きていくしかないのだ、シャマル」

ザフィーラが座り込んで泣き続けるシャマルへとそつと寄り添った。そのとき、

『シャマル先生！　なのはを……なのはを助けてください！！』

シャマルとザフィーラの目の前に展開されたモニターには、顔を青くして気を失っているなのはを支えたフェイトが映っていた。

テストメント考察 ｝Interval｝（前書き）

サブタイトルもなかなか良いのが思いつかないし、今回の内容もアレだし、もうクソ忙しい連休なんて大っ嫌いだあああ（意味不明）

テストメント考察 〈Interval〉

「予想外に楽しませてもらった礼だ。しっかりと受け取れ!!」

「キャロおおおおお!!」

穿たれし風雅なる双爪

フォヴニスの両ハサミから放たれる翠色の砲撃。

それが一直線にポロボロになっているキャロとフリードリヒへと向かう。

エリオはギリギリ射線から逃れているにも関わらず、キャロを護るという想いで砲撃の前に立ち塞がった。

「エリオ君!？」

「僕が護

砲撃がエリオとキャロとフリードリヒを飲み込んだ、かのように見えた。

だが実際は直撃することなく、彼らの両脇を通り過ぎていっただけだった。

しかしそれでも十分過ぎる脅威。彼らを挟むようにして通り過ぎていった砲撃が巻き起こした衝撃波で、エリオとキャロとフリードリヒは上空へと吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられた。

それで終わりだった。エリオもキャロもフリードリヒも、もうピクリとも動かなくなった。

ズドン！と鈍い音が響く。

それと同時に「かはっ」と呻きを漏らすスバル。

敬虔なる諦観者の“リボルバーナックル”の一撃をまともに受けたことによるものだ。

「スバル、今のくらいは避けなさい」

「なん・・・で・・・お・・・あさん・・・？」

腹部を左手で押さえながらも立ち上がるスバル。

しかしその目には力が無い。幼い頃に死に別れた母親と戦わなければならぬという現実が、スバルの戦意を根こそぎ刈り取った。

「あなたは自分の、管理局員としての役目を果しなさい・・・！」

敬虔なる諦観者は疾走し、スバルへと急速接近する。

スバルは無意識に構えをとって反撃に転じようとするが、しかし心がそれを邪魔する。

かつて洗脳を受けた姉ギンガとの戦闘とは違い、間違いなく自身の意思で戦っている母敬虔なる諦観者。

それがスバルの戦意を挫き、動きを鈍らせていた。

「お母さん！！」

「私たちを止めて見せなさい！！」

敬虔なる諦観者の“ローラーブーツ”を装着した右足によるハイキ

ツク。

スバルは無意識にも避けられると瞬時に判断するが、

ウイングロード

藍色のウイングロードがスバルの左顔面を通過点として頭部後方へと伸び、“ローラーブーツ”を加速させるレールとなる。

急加速したハイキックを紙一重で左腕で止めるスバル。

敬虔なる諦観者は「うん」と満足そうに頷くが、すぐさま次の一手を講じた。

スバルの下顎への左足による蹴撃。トンツと左足で地面を蹴り、敬虔なる諦観者はスバルの下顎へと爪先の蹴りを入れた。

スバルがその場でバツク宙する。そのまま地面に叩きつけられそうになるのを、敬虔なる諦観者が受け止めそつと地面に寝かせた。

横たえられたスバルは脳震盪を起こしており、完全に気を失っていた。

ティアナの震えた両手が持つ“クロスミラージユ”から放たれる魔力弾。

それをきっちり撃ち落としていく聡明なる勇者の魔力弾。

拮抗しているかのように見える戦況だがそうではない。

やはりティアナも動揺を隠せずにいた。その所為で次第に狙いが雑になっていく。

両親を早くに亡くしたティアナにとって聡明なる勇者は唯一の肉親で、射撃魔法の師で、大好きで憧れで、聡明なる勇者の遺志を継いで管理局入りを決意したくらいの大らかな人。

“ランスターの弾丸”はすべてを撃ち抜く。

それを証明するために頑張ってきて、そして今では認められて執務

官となった。
だというのに、

「僕は、ティアナには管理局員になってほしくなかった」

^{ティエダ}聡明なる勇者はティアナの想いを否定する言葉を放つ。

ティアナの心が揺れる。激しく揺れる。目を見開き、“クロスミラージユ”を持つ手がさらに震える。

「僕は、ティアナには普通の女の子として生きてほしかった。

こんな危ない仕事に就かせたくはなかった。でも、もうそれも遅い。だから……」

クロスファイア・オーバードライブ

^{ティエダ}聡明なる勇者の周囲に50はある黄色のスフィアが展開される。

「今回の事件で僕を乗り越えられないなら、そこで局員としての道を閉ざすんだ、ティアナ」

「っ！ お兄ちゃん!!」

「シユート」

一斉に放たれる魔力弾。一つのスフィアから二つの魔力弾だ。

計1000の魔力弾がティアナ一人に目がけて飛んでくる。

ティアナはもう一度「お兄ちゃん！」と叫び、防御も回避も取らずにただ目を強く瞑った。

ティアナへと迫っていた1000の魔力弾が一斉に自爆した。

巻き起こる爆煙。その中からドサリとティアナが倒れた音がした。

直撃とは言わずとも100の魔力弾の一斉自爆。それによる衝撃波と爆音がティアナの意識を刈り取っていた。

「ティアナ……。強くなつて、僕たちを止めてみせてくれ」

横たわるティアナを悲しそうに見つめ、ティエダ聡明なる勇者は左手で自らの顔面を覆った。

「ダメです！ アウグストの命中確認できません！！」

オペレーターが叫ぶ。

先程から“スキーズブラズニル四番艦”へと“ヴォルフラム”の艦載砲アウグストを放つてはいるが、なかなか障壁を抜くことが出来ないでいた。

はやては悔しげに顔を歪める。

なのはとフェイトが潔白なるトパーシオ聖者を足止めしてくれているのに、それに応えることが出来ない、と。

「司令！」

別モニターを見ていたリインフォース？が叫ぶ。

その尋常ではないリインフォース？の呼びかけに、はやては嫌な予感を抱きすぐさまリインフォース？の見るモニターに視線を移す。はやての目が見開かれる。顔を青くし、気絶しているのかぐつたりとしてフェイトに支えられているのは。

その彼女の両肩に突き刺さる螺旋を描く氷の杭。

『こちらシャマル医務官です！ 重傷者一名です！ 医療班は治療準備！！』

地上のシャマルから通信が入る。
それと同時に、

「司令！ トパーシオあいつが来た！！」

今度はアギトが叫ぶ。別モニターには、悲哀メソリアの天使武装を解いた潔白トパーシオなる聖者の姿があった。

しかし少し様子がおかしい。フラついていて、危なっかしい飛行だ。今なら勝てるかもしれないと思う。しかしはやては決意する。

「スキーズブラズニルへの攻撃中止！ スターズ1、ライトニング1、シャマル医務官を緊急収容！」

他の幹部達の逮捕に動いとる降下部隊の様子は！？」

オペレーターが強く頷き、地上の様子を複数のモニターに映し出す。その光景を見て、はやてを始めとしたブリッジにいる隊員たちは絶句した。

スバルとティアナのスターズ分隊、エリオとキャロのライトニング分隊が力無く倒れ伏しているからだ。

「こんなことつて……つく、急いで降下部隊を収容！」

はやては指示を飛ばした後、小さく「負けた」と悔しげに呟いて、拳を強く握りしめた。

(ヴォルフラムが攻撃を中止した・・・?)

トパーシオ
メノリア
潔白なる聖者は悲哀の天使武装の反動の所為で意識を失いそうになるも、何とか意識を繋ぎとめながら飛行している。

その彼女の視界に入る“ヴォルフラム”が、“スキーズブラズニル四番艦”への攻撃を中断したことに彼女は眉を顰めた。

“ヴォルフラム”がそのまま“スキーズブラズニル四番艦”から離れていく。

『トパーシオ、私たちの負けや。そやから、そっちの幹部達の戦闘行動を中止してほしい』

はやてから音声のみの通信が入る。

「八神二佐、勇気ある決断に感謝します。【テストメント各幹部、任務完了。帰艦してください】」

トパーシオ
潔白なる聖者ははやてにそう返し、幹部達に“スキーズブラズニル四番艦”へ帰艦するように指示を出す。

気を失い動かなくなったエリオたちを、フォヴニス頭部から見下ろす陽気なる勝者。

【テストメント各幹部、任務完了。帰艦してください】

「【……^{グラナード}陽気なる勝者了解】騎士エリオ・モンディアル。
……オレは、お前に決めた。来い、お前のその雷光の槍でオレ
を貫き、そしてオレの未練を晴らしてくれ」

^{グラナード}陽気なる勝者はそう倒れ伏すエリオに告げ、その姿を消した。

「スバル、私を乗り越えてみせなさい」

^{クイント}敬虔なる諦観者は気を失い倒れているスバルの前髪をそつと撫でる。

「あなたならきつと……」

^{クイント}敬虔なる諦観者の姿が消えた。

「……ティアナ。僕は待っている」

倒れ伏すティアナへと歩み寄りそう告げてから、^{ティータ}聡明なる勇者も敬
^{クイント}虔なる諦観者に遅れてその姿を消した。

特務六課旗艦“ヴォルフラム”ブリッジ

“ スキーズブラズニル四番艦 ” が三隊を回収し終えて上昇していく。それを黙って見ているしかない “ ヴォルフラム ” のブリッジにいるはやてを始めとした隊員たち。

悔しげに “ スキーズブラズニル四番艦 ” を見送っていると、

『 こちら管理局所属艦ベルキューズ、オーステイン・ウェストミンスター提督。』

特務六課ヴォルフラム、我々もテストメント逮捕に協力する。』

『 同じく管理局所属艦ヴェンジャンス艦長アストン・マーティン提督だ。我々にも手伝わせてくれ。』

『 ヴイクトリア艦長ベルニレッタ・フェラーリ提督です。私たちも協力します。』

『 ヴインセント艦長カールトン・ボクスホール提督だ。我々も助力しよう。』

“ ヴォルフラム ” のブリッジに流れる同じ管理局に所属する艦の提督たちの声。

はやてたちの表情が悔しげなものから勝利を確信した表情へと変わった。

リインフォース？がはやてに向かって、「やったですね！」と微笑みかける。

アギトも「よっしゃあ！」とガッツポーズをとった。

「こちらヴォルフラム、八神はやて二佐です。ご協力感謝します」

立ち上がりモニターに映る四人の提督に頭を下げるはやて。

四人の提督は頷き、通信を切った。

「アレだけのXV級艦に包囲されて、テストメントもスキーズブラズニルも下手に動けんへんやろ」

はやては艦長席に体重を預けて、上昇を止めた「スキーズブラズニル四番艦”を見上げた」。

“スキーズブラズニル四番艦”ブリッジ

「おいおいおいおい、なんてこった。XV級じゃねえか」

^{グラナード}陽気なる勝者が上空から現れた管理局所属艦四隻を見て、少し焦りを含んでいるがそれでも楽しそうな声を出す。

今ブリッジにいるのは^{グラナード}陽気なる勝者ただ一人。

甲板に降り立ったと同時に意識を失い倒れた潔白なる^{トパーシオ}聖者の様子を見るために、^{クイント}敬虔なる諦観者と^{テイダ}聡明なる勇者は居住区^{カルド・イスキエルド}を報復せし復讐者の左腕も機嫌が悪く、帰艦したと同時にすぐさま居住区へと引っこんでいった。

そして三隊もまた居住区にいるため、彼らは“スキーズブラズニル四番艦”に起こっている緊急事態を知らない。

「あー、しゃあねえな。^{フォウニス}黒鎧の毒精武装を使って」

『ん、^{グラナード}陽気なる勝者か？・・・まあいい、^{ディアマンテ}永遠なる不滅者だ』

陽気なる勝者が最大戦力を使うために甲板へと上がるうとしたその時、彼ら“テストメント”の本拠地にいる永遠なる不滅者から通信が入る。

「お？ 悪いが永遠なる不滅者、今立て込んでいてさ、話なら手短かに頼むぜ」

『そちらの状況はこちらでも十分捉えている。こちらに任せておけ』

「あ、おい！・・・任せておけて・・・？ まさか・・・ついにアレが完成したか！？」

一方的に通信を切った永遠なる不滅者の自信に満ちた声を聞き、陽気なる勝者はその自信の正体を察し驚愕の声を上げた。

特務六課旗艦“ヴォルフラム”ブリッジ

睨みあい続ける四隻の管理局艦と“スキーズブラズニル四番艦”。本当に“テストメント”は降参するつもりなのか一切の動きを見せようとしなない。

「司令、なにか・・・嫌な予感がするです・・・」

しかしさっきまでの余裕が消え、リインフォース？は翳りのある表

情でそう囁いた。

それははやても同じだった。一切の行動を見せないというのがかえって不気味だった。

「そやね、こついつ感じの時は良うないことが起きる前触れや」

はやても重々しい表情で、五隻の巨大艦を見つめる。

「……？　なんか、空が……光った……？」

アギトが怪訝そうに空を見上げる。

それと同時に、遙か上空から白銀の極太レーザーの襲撃。

レーザーは並列していた管理局所属艦四隻を上から切り払うかのように直撃した。

“ヴォルフラム”のブリッジに鳴り響く警報、緊急灯の光がブリッジを赤く染める。

遅れて先程より細い白銀の砲撃が“ヴォルフラム”を掠めるように振ってきた。

掠めただけだというのに激しく艦体が揺れる。ブリッジに悲鳴が上がる。

「なんや今のは！？　どこからの攻撃や！？」

「分かりません！」

「駆動炉出力が今ので100%を切りました！！」

「直撃を受けたベルキューズ、ヴェンジャンス、ヴィクトリア、ヴィンセントが落ちていきますー！！」

「ウソだろ！？ 何なんだよ今の攻撃は！？」

「たった一撃でXV級艦船を四隻も落とすのか！？」

「計測・・・出ました！ 次元跳躍攻撃で間違いありません！
物理破壊ではなく魔力結合のキャンセル！」

「駆動炉出力低下もその所為です！」

半ば悲鳴のようなものに近い報告が上がる。

四隻の管理局艦は魔力結合分析砲撃の直撃を受けたことで駆動炉が完全停止、航行不能に陥っていた。

“ヴォルフラム”は直撃を免れている為に、なんとか航行を可能としている。

しかしそれでも艦体が少しずつ傾いていこうとしていた。

「艦体の姿勢制御に集中！（テストメントはこんなもんで用意しとるんか！？）」

次第に高度を落としていく“ヴォルフラム”の姿勢を立て直すように指示を飛ばすはやて。

そして“スキーズブラズニル四番艦”が光の粒子となってその巨体を消滅させていく様を睨みつける。

圧倒的すぎる対艦攻撃、しかも次元跳躍という反則のおまけつき。

“テストメント”幹部個人の凄まじい戦闘能力。

「テストメントって、ホンマなんなんや・・・」

“スキーズブラズニル四番艦”が完全に光の粒子となり消え去った。続いて四隻の管理局艦が轟音を立てながら山間部に不時着する。

“特務六課”設立直後、エルジアでの初任務。
しかし“テストメント”幹部の圧倒的な実力と謎の次元跳躍砲撃の
前に敗れ、任務失敗となってしまった。

11月16日 午前 時空管理局本局医療施設。

エルジアでの“テストメント”逮捕任務失敗の翌日。

本局医療施設のある個室のベッドに横になっている一人の女性、な
のはだ。
潔白なる聖者^{トパーシオ}によって負わされたダメージは、どういうわけか軽度
だった。

シヤマルが両肩の治療を開始しようとしたとき、氷の杭は勝手に溶
け始め、溶けたその液体は傷を塞ぎ完全とは言わずとも癒したのだ。
始めからそうなるように潔白なる聖者^{トパーシオ}が仕組んでいたらしい。

それは優しさか余裕か、または警告か。いつでもどんなときでも撃
墜できる力を持っているという。

それはなのはたちには分からない。しかしどっちにしるこの程度で
済んだのは不幸中の幸いだった。

「なのはママ・・・」

「ごめんねヴィヴィオ。心配かけて。でもママは大丈夫だから」

右肩が若干痛むのを堪えて、なのははヴィヴィオの身体を自分に寄

せて抱きしめた。
ヴィヴィオはそれに甘えるようにそつと力を抜いて、なのはにもたれかかる。

『フェイトちゃん、スバルたちは？』

『みんなそれほどダメージは重くないってシャル先生が。
エリオはさつき目を覚まして、今は先に目を覚ましたキャラコとお見舞いに来てくれたレヴィと話をしているとと思う。』

スバルとティアナにはナカジマ三佐やギンガたちがお見舞いに来てる。でも……』

なのははヴィヴィオの頭を撫でながら、念話でフェイトへとそう訊ねる。

フェイトは言いにくそうにスバルとティアナの事を話し始める。
戦った相手が今は亡き母親と兄だったということがショック過ぎて塞ぎ込んでいると。

『それで少しは元気になってくれればいいんだけど……』

『ちよつと難しいかもね……』

なのはとフェイトは難しい顔を表には出さず、二人してヴィヴィオをそつと抱きしめた。

今回の事件は今まで以上に辛く、そう簡単には終わりを迎えられない。

本当に乗り越えられるのか。その不安を何とかかき消すように。

ベッドの上でスバルは体育座りをして、両膝の間に顔を埋めている。頭の中を駆け巡る昨日の母敬虔クワイントなる諦観者との戦闘。

信じたくない。これは夢だ。若しくは誰かが変身魔法で母に変身しているんだ。

だがスバルの心が、思いがそれを否定する。間違いなく母のクイントだったと。

「スバル……」

「……ギン姉……?」

至近で声を掛けられたスバルは、声をかけてきた姉であるギンガへと顔を向ける。

ギンガの後ろには、父ゲンヤと妹のデイエチとノーヴェとウェンデイがいた。

「スバル、大丈夫っすか？ 信じられないっすよ、スバルが負けたなんて……」

元気が服を着て歩いているような赤毛少女ウエンデイ。その彼女が珍しく神妙な顔でスバルへと声をかける。

しかしスバルは口を震わせ、何も言わない言えない。

「……八神から聞いた。母親クイントかもしれない相手と戦って負けたんだってな、スバル」

「……っつ!」「……」

ゲンヤが重々しく口を開き、ナカジマ家の娘たちは目を見開き一斉に父へと視線を向ける。

ゲンヤはその視線に頷くことで応え、そして今度はゲンヤからスバルへと視線を移す。

スバルは身体を震わせ、そして再び顔を膝に埋め泣き始めた。

「おとーさん、クイントって・・・まさか・・・」

「お母さんが・・・？ え？ どうして？ だってお母さんは・・・」

「

ノーヴェが泣きだしたスバルの様子に戸惑いながらゲンヤへと視線を移し、ギンガが信じられないといった風に声を震わす。

ゲンヤは「本物がどうかはまだハッキリと分からねえが」と前置きする。

「だが本物の可能性もあるってえのが八神の言だ。詳しくは知らねえが、どうやらルシリオンが関わっているらしい」

ゲンヤはため息をつき「アイツやシャルロット嬢ちゃんルシリオンは故郷に帰ったんじゃないかったか？」と首を傾げているが、誠実なる賢者の正体を知っているデイエチとノーヴェとウエンデイが驚愕する。

ギンガは混乱の中、誠実なる賢者の名を聞いてある種の納得を得た。ルシリオン誠実なる賢者、彼なら現代の次元世界では出来ない事も可能なはずだと。

「マジっスか・・・。だってルシリオンは・・・」

「・・・今回の事件、マジでヤバくねえか」

ウエンディとノーヴェが、今回の“テストメント”による事件の危険性に身を震わす。

ディエチは黙したまま、“聖王のゆりかご”で自分を撃ち負かしたことのある誠実なる賢者ルシリオンの事を思い出し、少し体を震わせた。

「……俺はこれから八神のところへ挨拶しに行ってくる。

遅くなるだろうから先に帰っていてくれ。あと、ティアナの元にも行ってやってくれ」

ギンガたちは「うん」と頷き、病室を後にするゲンヤを見送った。

それからスバルをギンガに任せ、ディエチとノーヴェとウエンディはティアナの元へと向かった。

「元氣そうで良かった。ルーテシアもお母さんも心配してたんだよ」

白を基調とした厚手のタートルネックのロングワンピースを身に纏い、椅子に腰かける少女、レヴィ・アルピーノ。

彼女はルーテシアの分までエリオとキャロのお見舞いに来ていた。

エリオとキャロは少し鬨りのある笑みを浮かべる。

それから二人揃って見舞いに来てくれたレヴィに向かって「ありがとう」と礼を述べた。

「……ふう、結構シャレにならない相手みたいだね、テストメントの幹部というのは」

その二人の様子から、レヴィは誠実なる賢者ルシリオンだけでなく他の幹部達

も危険な存在だと察した。

「・・・正直怖かった。あのフォヴニスとかいうサソリの存在感・・・怖かったんだ」

「エリオ君・・・」

ベッドの上に座るエリオの手が若干震えているのを見て、キャロは震えたエリオの手を自らの両手で優しく包み込む。

しかしそのキャロとて死の恐怖を思い出し、今も少し手が震えている。

「・・・これで大丈夫、つと」

レヴィが立ち上がり、膝の上に乗せていたクロークを椅子に置いて、エリオとキャロの手をさらに自分の手で包み込む。

二人からの視線を受け、レヴィは「ほら、震えが止まった」と笑みを浮かべる。

「キャロの手、温かくて柔らかくて・・・気持ちいい。ふにふにエリオの手も温かいよ。それに、やっぱり男の子だね、少し硬いかな」

「く、くすぐつたいよレヴィ!」

「ええ!? レヴィ、いきなり何!??」

レヴィが右手でエリオの左手を、左手でキャロの右手を取っていじり出す。

その突然のレヴィの行動にエリオは慌てふためき、キャロはくすぐ

「たさに破顔する。

「そうそう。エリオとキャロにはやっぱりそういつ表情が一番似合
ってる」

「レヴィ……」

それからしばらくの間、レヴィのエリオとキャロの手いじりは続いて、病室から笑い声が漏れていた。

11月16日 AM 11:03 時空管理局本局 特務六課臨時才
フィス

エルジアでの“特務六課”初任務である“テストメント”逮捕失敗の翌日。

“特務六課”のメンバーの士気は限りなく最悪に近かった。

エースオブエース・高町なのはの敗北。個人で小型とはいえ艦船一
隻を相手に出来る潔白なる聖者^{トパーシオ}。

前線メンバーの全滅。管理局が手にして間もない情報を手にしてい
るその情報網。

大型であるXV級艦船四隻を一撃で航行不能にできる次元跳躍魔力
結合分断砲撃（仮）。

「……最悪や。ホンマにあんな連中に勝てるんか……？」

「あの、はやてちゃん、あまりそついうのを口に出すのは……」
部隊長の執務デスクに展開されているモニターを見て、はやてが肩を落とす。
それを傍で聞いていたリインフォース？は、これ以上の士気低下を防ぐためにそう窘める。

「そやな……、そうなんやけど……」

はやてはコンソールを操作して“テストメント”幹部と戦う前線メ
ンバーを映し出す。

エリオとキャロとフリードリヒ、グラナード陽気なる勝者とラギオンの戦闘。

「エリオの攻撃を受けてもビクともしないラギオンが、フリードの
火炎砲で倒れた。

そんでグラナード自身もエリオの一撃を受けて膝をついた、と。で
も……」

「フォヴニス。巨大サソリの砲撃で、エリオとキャロは負けたので
すね」

息を飲むリインフォース？。黒い甲冑のようなもので全身を包んだ
ような巨大サソリ。

隙間という隙間から漏れる翠色の光がどこか幻想的、しかし実際は
凶悪。

両のハサミから放たれた翠色の砲撃から発生した衝撃波でエリオた
ちは意識を刈り取られた。

直撃していれば無事では済まないほどの威力だ。

「問題なんかは、グラナードの正体と思われるこの人……」

別モニターに映し出された一人の青年の顔写真と経歴。

その顔写真は間違いなく陽気グラナードなる勝者がエリオたちの前に晒した素顔だった。

「……メルセデス・シュトゥットガルト元三等空佐。享年26歳。

元第1801航空隊所属。任務中に同隊のディムラー元二等空尉の誤射により撃墜、その日から一年前までの間の想起障害を起こし前線から退く……」

「それから少しの間は事務員として働いていたようです」

「……そやけど、それから11ヶ月後、記憶障害が治ってすぐ事故死……」

「……不自然ですね」

はやてとリインフォース？は、陽気グラナードなる勝者の正体の候補であるメルセデスについて話し合う。

記憶障害が治ってすぐに死亡した。しかも事故を起こしたのはまたも管理局員だった。

誤射とはいえ記憶障害を起こすほどの、撃墜するほどの威力を持った魔法を撃つたのも管理局員、事故を起こしてメルセデスを死亡させたのも管理局員。

しかもその二人の管理局員もそれからすぐに事故死と任務中に殉職した。

「ザフィーラからもらった報告、カルド・イスキエルドが口にした名前も調べてみた」

メルセデスの情報が映っていたモニターに重なるようにして展開される三つのモニター。

カルド・イスキエルド報復せし復讐者の左腕が見せた素顔の他に二人の男性の顔写真、三人の経歴が映し出される。

ジータ・アルテツァ。ガウエイン・クルーガー。ジョシユア・エルブランド。

「カルド・イスキエルドの正体候補、ジータ・アルテツァ元空曹。享年23歳。

新暦54年、闇の書事件で殉職。ガウエイン・クルーガー元三等空尉とジョシユア・エルブランド元空曹長も同年、闇の書事件で殉職。
・・・」

「・・・他の二人は、カルド隊の残りの二人かもしれませんがね」

はやてとリインフォース？の表情が翳る。

“闇の書事件”の殉職者。守護騎士ヴォルケンリッターによってその命を奪われた者たち。

リンディにとって夫でクロノにとっては父であるクライド・ハラオウンもこの事件の最後に殉職している。

カルド報復せし復讐者隊の目的であるシグナムたち守護騎士への復讐。

殺した者が幸せになり、殺された者が幸せではない。怒るのも尤もだった。

「で、なのはちゃんの言ったマルフィール隊の正体かもしれないこの人たち」

さらに映し出される三人の元管理局員の顔写真と経歴。

それは以前なのが自宅で調べたものと同じ情報。

「デミオ・アレッタ三等空佐。エステイ・マルシーダ元二等空尉。ヴィオラ・オデッセイ元二等空尉。

生前は三人とも2118航空隊所属。マルシーダ元二尉とオデッセイ元二尉は、教導官としてのアレッタ元三佐の教導を受けたストライカー」

「任務中に行方不明。その半年後に遺体で発見・・・」

「そして、アグアマリナの正体候補、ティード・ランスター元一等空尉。

アマテイスタの正体候補、クイント・ナカジマ元准陸尉・・・」

さらに重なるように展開されたモニター。

映し出されるのはスバルとティアナが戦う、二人が亡くした家族の姿。

スバルの母親クイントとティアナの兄ティードが、とても大切な家族に拳と銃を向ける。

「もしみなさんが本物なら、元管理局員で殉職した人たちがテストメントの幹部として再びその姿を現した、ですか・・・？」

リインフォース？はモニターに映る殉職した9人の管理局員の顔写真を眺める。

管理局に恨みがある集団かもしれない、と二日前にはやてと話していた事を思い出す。

「辛いな・・・。私たちはリインフォース。なのはちゃんはアレッタ元三佐。

フエイトちゃんはルシル君。スバルはクイント元准陸尉。ティアナはティータ元一尉……」

もし本物だとすればそれは悲しい事だとはやては思う。

過去に亡くなった親しい人が敵になる。二人は誰にも気づかれないうようにため息をつく。

「普通なら変身魔法とかを疑うべきやろうけど……」

「ルシルさん、ですか……。でも全てルシルさんのしたこととは言えないですよ、はやてちゃん」

別モニターに南部海上戦での誠実なる賢者ルシリオが映し出される。

「……ルシルさんが一体どれだけの力を制限されていて、どこまでの記憶が無いのかが分かればいいんですけど……」

「……うあ、やっぱりそこに行きつくんやな。」

クイント元准陸尉がルシル君の使い魔エインヘリヤルやったらまだ分かる。

ルシル君は入局してすぐにクイント元准陸尉と会つとるし、当時のスバルやギンガとも会つとる。

そやけど、シュトウツトガルト元三佐やアルテツア元空曹、クルーガー元三尉、エルグランド元空曹長の四人は、ルシル君がこの世界に来る前に殉職しとる。

ティータ元一尉やアレツタ元三佐たちとは面識があつたかもしれへんけど、同じ任務に就いたことは確かなかつたはずや……」

それはつまり、今挙げた敬虔なる諦観者クイント以外の8人は誠実なる賢者ルシリオの使い魔エインヘリヤル異界英雄ではない、ということだ。

「やっぱり変身魔法なんか・・・？ そやつたら生命反応が出やんかったんはどう説明する・・・？
そもそも私たちと過ごした記憶が無ければ、ルシル君はクイント元准陸尉の事も憶えてへんのとちゃうか・・・？」

はやてがうんうん唸りながら必死に思考を巡らし、無意識に口に出してしまっている。

「テストメント。界律の守護神の事やないな、今さらやけど確実にテストメント・・・確か意味は・・・聖書、契約、証、信条、他には・・・遺言・・・。」
他の幹部達ももしかしてかつては管理局に勤めて殉職した本人、もしくはその関係者・・・？」

ついには頭を抱え出したはやてを一休みさせるために、リインフォース？はお茶を用意しようとして彼女に背を向けた時、二人のいるデスクに近づいてくる隊員が一人。

「八神司令、ゲンヤ・ナカジマ三佐がいらっしやってます」

「よお。スバルが世話になったな」

「ナカジマ三佐・・・」

その隊員の背後に控えていたスバルの父親でクイントの夫であるゲンヤが、少し鬨りのある微笑を浮かべていた。

はやてはゲンヤを奥の応接エリアへと案内し、テーブルを挟んでソファに腰掛ける。

「司令、ナカジマ三佐、どうぞです」

リンフォース？はやてとゲンヤの前に用意したお茶を置く。
はやては「おおきにな」と、ゲンヤは「ありがとな」とリンフォ
ース？に礼を告げた。

ゲンヤはお茶を半分くらい飲み、一息ついてからここへ来た要件を
告げた。

「突然で悪いんだが八神よ、もし本当にクイントだしたら、クイ
ントを逮捕した後、俺のところに連れてきてくれねえか」

ミッドチルダ西部次元港口ロビー

本局から次元船で帰った来たヴィヴィオとゲンヤを除くナカジマ家
とレヴィ。

「本当に送っていかなくていいのかヴィヴィオ」

「うん、レヴィが一緒だから大丈夫」

「バッチリこのわたしがヴィヴィオをどんな奴らからも護るよ」

今日はカルナージに帰らずに高町家へ泊まることにしたレヴィが、
北部の高町家まで送るといふノーヴェの提案を断ったヴィヴィオの
期待に応えるように自信満々にそう宣言する。

ノーヴェは「まあレヴィがいればどんな奴でも逃げるか」と苦笑。

そしてノーヴェはレヴィに、ヴィヴィオをしつかり家まで護衛するように頼んだ。

「レヴィお嬢様、もし変な奴が出てきたらフルボッコッスよ！」

ウエンデイがシャドーボクシングのように拳をリズムよく突き出す。

「過剰防衛で捕まったらシャレにならないんだけど？」

デイエチが呆れた表情で、ウエンデイの頭をコツンとゲンコツ一発。

「そのところは気をつけるから大丈夫だって」

「変人と遭遇することがすでに確定になってきてないか？」

レヴィは力加減するから問題なし、と言いたげに胸を逸らした。

そんな馬鹿な事を言っている妹とレヴィに対して冷静にツッコむノーヴェ。

「それじゃレールウェイの時間が近いから行くね」

ヴィヴィオはナカジマ家の面々に大きく手を振って別れを告げる。

レヴィもそれに続いて手を振って、同じように手を振るナカジマ家に別れを告げた。

ミッドチルダ北部タウブルク西第三区

ヴィヴィオとレヴィは快速レールウェイを乗り継ぎ、高町家のあるミッドチルダ北部の市街地に着いた。

「あ、ごめん。少し書店に寄ってもいい？」

ステーションから出てすぐに、レヴィは道路の向かい側に建つ大型書店を指差す。

ヴィヴィオは「うん」と快諾して、

「何か気になる本でもあるの？」

レヴィにそう訊ねた。

「ん？ 新刊をちょっとね。わたしもただルータシアも読んでみたいって言ってたし」

レヴィは顔を綻ばせながら、書店のある向かい側の歩道をふと端から端まで見た。

ヴィヴィオはレヴィの隣で書店のみを見ていると、隣に立つレヴィの放つ雰囲気ガラリと変わったのを感じた。

どうしたのかと思い、ヴィヴィオはレヴィの横顔を見上げる。

レヴィはある場所を一心に見つめ、そこから一切視線を外そうとしない。

「?? 何かあるのレヴィ？」

「.....」

何も答えないレヴィを不審に思ったヴィヴィオは、レヴィの隣から少し移動し、レヴィの見つめる場所へと視線を移す。

そしてようやく理解した。レヴィが何を見つめていたのかを。

「っ！！ ルシルパパ・・・！」

ヴィヴィオとレヴィの視線の先、そこには白コートを纏わずに私服であると思われる黒スーツと黒コートを身に纏った誠実なる賢者ルシリオが一人歩いていた。

テストメント考察 〈Interval〉(後書き)

急遽レヴィの参戦を決定してしまいました。

本来、レヴィをカルナージから出す予定は少し後に一回のみとしていましたが、最後のエピソードでありオリキャラは動かしやすいということ、予定変更の出陣です。

最近まではルシルvsヴィヴィオ&ノーヴェとか、だったんですけどね。

ということで、次回はルシルvsレヴィ&ヴィヴィオになります。

束の間の再会 (Father and daughter) (前書き)

くあああ！ すいません！ ヴィヴィオ参戦までいけませんでした！

東の間の再会 〈Father and daughter〉

AM11:57 “テストメント”本拠地“重要管理指定世界オムニシエンス”

“テストメント”が幾つも持つ拠点の内の一つにして本拠地である重要管理指定世界“オムニシエンス”。

三年前に、次元の海に突如として現れた数多くの遺跡が存在している無人世界。

今ここに、“テストメント”旗艦の“フリングホルニ”と移動艦“スキーズブラズニル”の全九隻による艦隊が、“アドウベルテンシアの回廊”と呼ばれる超巨大渓谷を航行している。

“アドウベルテンシアの回廊”は、全幅が300m近い巨大戦艦が九隻並列して航行してもまだ余裕のある程の幅を持つ渓谷だ。

さらに一時間ほどかけて“アドウベルテンシアの回廊”内を航行していると、九隻の艦隊の前に、左右へ広がる平均標高2000mの山脈がその姿を現した。

その山脈は全体的に見れば緩やかに円を描く形をしており、そこから“レスプランデセルの円卓”と呼ばれている。

“レスプランデセルの円卓”は、直径約520kmという広大な円形の隆起地形となっており、“テストメント”の本部を中心として広がっている。

そのまるで城壁のような“レスプランデセルの円卓”に近づくにつれ、今度はある巨大な建造物群が視界に入ってくる。

山脈と山脈の間にポツカリと空いた直径7km程のエリア内の中心にそびえ立つ、先端が六角錐となっている銀色の超高層塔。全高3kmというその銀色の塔の周りには、少し高さが抑えられた同形の塔が円形に8基そびえ立っている。

さらにその周囲には旋回式巨大砲台が10基、円形に設置されていた。

その10基の砲台と8基の小型（全高2.6km）塔の間には、ソーラーパネルと魔力供給・生成施設が20基建てられていた。

その建造物群は、“テストAMENT”本部最終防衛基地“オラシオン・ハルデイン”と呼ばれる。

「ついに動いたんだな、アレ」

“スキーズブラズニル四番艦”の船首に立つ陽気なる勝者が、感慨深げに銀色の塔を見る。

その銀色の塔こそが、昨日エルジアにおいて四隻の管理局艦を落とした砲撃を放った超兵器だった。

艦隊は徐々に“オラシオン・ハルデイン”へと近づいていく。

そのとき、先頭を航行する旗艦“フリングホルニ”のブリッジに通信が入る。

展開されたモニターに映るのは永遠なる不滅者だ。

永遠なる不滅者が口を開く前に、誠実なる賢者がモニター越しにいる永遠なる不滅者へと話しかける。

「永遠なる不滅者、マスターから私に、マスターの元へ来るよう命令が来た。行ってくる」

『そつか。了解した』

ダイヤモンド
永遠なる不滅者の了承を得たことで、誠実なる賢者はすうつと音も
なくその姿を消した。
ダイヤモンド
永遠なる不滅者は少し考える素振りを見せ、通信した本来の目的で
ある艦隊への“レスプランデセルの円卓”進入許可を出し、自らも
旗艦“フリングホルニ”へと乗り込んで本部へと向かった。

ミッドチルダ北部タウブルク西第一区

「ごめん、どうしてもあなたに会いたかったから」

住宅地郊外にひっそりと建つ館のある一室で、天蓋付きベッドの上
に横たわる女性が照れくさそうに告げる。

ベッド全体がレースに覆われているため女性の顔はハッキリと見え
ないが、声からして“テストAMENT”の指導者である至高なる卓絶
者で間違いない。

「御気になさらず。まあいきなりの呼び出しで何事かとは思いまし
たが」

誠実なる賢者は片膝をついた体勢で、レースの奥にいる彼にとって
のマスター、至高なる卓絶者へと恭しくそう返した。

少し黙った至高なる卓絶者が小さく「心配かけてごめん」とバツが
悪そうに謝り、誠実なる賢者は「謝罪は無用ですよマスター」と微
笑を浮かべながら返した。

「・・・あなたの顔も見られたし気力全快です　さて、これから
はお仕事の話。」

あなたが私のお願いに忠実に応えてくれたから、目をつけてい
たエルジアの工業廠を手中に納める事が出来ました、ありがとうございます
ございます」

「・・・それに関して一つ謝罪することがあります。申し訳ありま
せん。」

潔白なる聖者が鎮圧作戦へ参加、最大戦力を使用してしまいました」

誠実なる賢者の報告を受けた至高なる卓絶者が絶句する。

至高なる卓絶者は、潔白なる聖者に戦ってほしくはなかったのだ。

「潔白なる聖者は・・・お姉ちゃんは大丈夫なの!？」

大人の女性である至高なる卓絶者が、10代前半くらいの少女であ
る潔白なる聖者を姉と呼んだ

至高なる卓絶者が焦りの含まれた叫ぶと同時にベッドの上で勢いよ
く立ち上がる。

しかしすぐさま苦悶の声を漏らし、柔らかいベッドへと倒れ込んだ。

誠実なる賢者が「マスター!」と焦り、ベッドへと駆け寄ろうとし
たが、至高なる卓絶者が「私は大丈夫だから!」と大声で上げてそ
れを拒んだ。

沈黙が流れ気まずい雰囲気になったが、誠実なる賢者が至高なる卓
絶者の心配を晴らそうと口を開く。

「・・・潔白なる聖者は問題ありませんマスター。」

存在も瓦解してしまうほどまで弱まってはいませんので御安心を。
ですが、しばらくの休眠は必要となりますが」

「そ、そう・・・良かった。お姉ちゃ・・・潔白なる聖者は私の原動力ですから」

トパーシオ
潔白なる聖者が無事だと知って安心したのか至高なる卓絶者が「ふう」と一息ついて、うつ伏せのままだった体勢を仰向けに直す。

「いかなる理由とはいえ、トパーシオ
潔白なる聖者の作戦参加を止められなかったのは事実。」

マスター、いかなる処分でも私は受けるつもりです」

再び片膝をついた体勢に戻った誠実なる賢者がそう言うが、至高なる卓絶者はその原因が自分にあることを知っている為、「処分なんてないですよ」と告げた。

「私があなたに“トパーシオ
潔白なる聖者の命令も聞け”って命令したのがそもそもの原因だって分かっています。」

だからあなたを責めない。えっと次があれば、トパーシオ
潔白なる聖者の戦闘参加だけは許可しないでほしいです」

「了解しました」

至高なる卓絶者は「お願いね」と告げ、再び“テストメント”関連の話へと戻す。

「あとで永遠なる不滅者のところにも送りますが、次は広域指名手配を受けた違法魔導師集団の捕縛をお願いします。交戦した管理局員からすでに犠牲が何人か出ていますので、少し急いでほしいですね」

誠実なる賢者の前に、違法魔導師集団の情報が映し出されたモニタ
ーが展開される。

それは管理局の捜査資料だった。至高なる卓絶者は、管理局のデー
タバース、しかも事件の捜査資料を手に出来る立場にいた。

“特務六課”設立やエルジア紛争の陰の支配者“オルキニス・オル
力”の事もこうして手に入れていた。

誠実なる賢者は情報を頭に叩き込んだ。いつどこで遭遇しても構わ
ないように。

「状況によつては、私の管理下にある魔導兵器産業廠のいくつかに
開発させておいた試験運用済みの“空軍”の使用も認めますから」

至高なる卓絶者は「言いくるめるのも苦勞したんですよ？」と苦笑
した。

彼女の持ついくつかの肩書の一つに、管理世界では有名な“ミュン
スター・コンツェルン”の決して表には出ない若き頭首というの
がある。

未開世界の開拓などの第一次、魔導端末開発などの第二次、次元船
運航などの第三次全ての産業をまとめ上げている巨大財閥。

中でも“ミュンスター・コンツェルン”を有名としているのが時空
管理局運営への出資だ。

“テストメント”のリーダーが、敵対する組織である時空管理局運
営の大半を賄う出資者ということだ。

“テストメント”の後ろ盾は正しく管理世界において最高とも言え
た。

彼女たちが本拠地としている“オムニシエンス”の発見・調査もま
た彼女の“ミュンスター・コンツェルン”からの出資。

そのため“オムニシエンス”の管理権限を彼女は手にしていた。

だからこそ遺跡のあった北半球とは正反対の南半球に本拠地を構え

る事も容易かった。

モニターが消え、至高なる卓絶者は誠実なる賢者へと「今日はありがとう」と告げた。

それはつまり、用はもうこれで終わり、ということだ。

誠実なる賢者はそれを察し、立ち上がって、至高なる卓絶者の寝室を後にしようと身体を扉へと向ける。

「あ！ それと最後に一つ」

「なんででしょう？」

「・・・私たちを捕まえようとする特務六課。これからも油断しないように。」

なるべく情報は流しますから、常に気を配っておいてくださいね」

「・・・了解しました。それでは」

誠実なる賢者が扉を開け、至高なる卓絶者の寝室を出ていった。

一人残った至高なる卓絶者は上半身を起こし、右手を寝室の片隅にあるデスクに伸ばす。

するとそれを合図としたかのようにすぐに彼女の元に“赤い本”が飛んできた。

そのまま彼女の右掌の上へとストーンと収まった。

凝った薔薇の装飾のヘッドボードに背を預けた至高なる卓絶者は、伸ばした両脚の上に“赤い本”を置いてページを開く。

開かれたページにはビッシリと文字や模様などが記されている。

三年前、彼女の手によって殺害されたトレジャーハンター・シャレードが開いたときは白紙だったはずの“赤い本”。

しかし今は白紙ではなく文字がちゃんと記された歴とした書物だった。

「……読み手を選ぶ書物……。ディオサの魔道書」

至高なる卓絶者はその“赤い本”の事を“ディオサの魔道書”と呼び、何ページも捲っていく。

後半のページを開くと白紙だったが、すぐに白紙のページを埋めるように文字が浮かび上がってきた。

読み手を選ぶ魔道書。実際には文字が記されていたにもかかわらず、トレジャーハンター・シャレードには“ディオサの魔道書”を読む資格が無かった為に白紙に見えていたのだ。

「私の命が尽きる前に、必ず管理局を変えてみせる」

最後のページに記された文字をそっと指でなぞる。そのページにはこう記されていた。

“最大禁呪ラグナロク”と。

ミッドチルダ北部タウンブルク第三区

誠実なる賢者は以前から至高なる卓絶者に用意されていた目立つ白コートとは真逆の黒コートとスーツに身を包み、ミッドチルダ北部の市街地をぶらりと歩いていた。

三年前に初めて訪れて以来、ミッドチルダの街をゆつくり歩くことはなかった。

誠実なる賢者サファイアという名を与えてもらった仕えるべき主である至高ハな卓絶者の住まう街を見て回りたいと思い、今こうして一人歩いて見回っていたのだ。

色々を見て回った後、大型書店に立ち寄って様々な蔵書を試し読みしていく。

知識を蓄える。それが彼にとって唯一の趣味だった。

ある程度の本を読み終え、そろそろ本拠地である“オムニシエンス”へ帰ろうかと思い書店を後にする。

誠実なる賢者ルシオンは“オムニシエンス”へと超長距離転移するために、人目のない場所を目指す。

歩きだし始めたそんな彼の意識に1つの反応が入り込む。誰かに見られている、と。

気づいた事を悟られないように注意して、当初の目的通り静かに人目のない場所へと移動する。

(・・・ついてくる、か。管理局か?)

確実に尾行してくる1つの反応が管理局員だと推測する。

戦闘行動の許可を貰ってはいない以上、このまま尾行を撒くのが最良だと判断。

少し歩みを速める。角という角、路地裏という路地裏を突き進み、次第に向けられる視線が遠のいていくのが分かる。

(・・・なかなかの尾行術だったが、私をハッキリ意識しているのがかえって足を引っ張っていたな)

軽く一息つき、人気のない寂れた広場の中央へと歩を進める。
そのとき、

マナケル
紫光瞬条

ルシリオン
誠実なる賢者の足元にすみれ色のベルカ魔法陣が展開され、魔法陣から何条もの帯が出現、彼の両手両足胴体を捕える。
ルシリオン
誠実なる賢者は転倒するよりも早く両膝について転倒を免れる。
そして正確無比且つバインドに対応する隙を与えないその速さに驚嘆した。

「やゝとつ・か・ま・え・た　つと」

陽気な声を出して広場の入り口から入ってきたのはレヴィただ一人。今彼女が身に纏うのは、私服である白のロングワンピースとクロークではなく防護服だった。

藍色の長髪を普通のサイドアップではなく花飾りでポニーテールにしている。

左右と後ろのスリットが足の付け根まである立て襟の蒼いロングコート。

そのコートの前を胸部と胸下だけのベルトで留めているため、歩く度にコートが靡き細いウエストが露わになる。

膝が少し隠れる長さの黒のハーフパンツに黒の編上げブーツ。

両手には、ルーテシア特製の白のグローブ型ブリストデバイス“アストライアー”がはめられている。

ルーテシアのブリストデバイス“アスケレピオス”の姉妹機として作られた為に、デザインは全く同じとなっていた。

これこそレヴィ専用の中距離戦闘用の防護服“モード・バスター”だ。

「……ルシリオン、ちょっとだけ話をしようか『ヴィヴィオ、捕縛成功。来て』」

レヴィは腕を組みポニーテールを揺らしながら、ルシリオン誠実なる賢者へと歩み寄っていく。

レヴィがルシリオン誠実なる賢者を捕縛する数分前、レヴィはヴィヴィオへと別行動を提案していた。

渋るヴィヴィオだったが、レヴィは尾行している事がルシリオン誠実なる賢者に悟られている可能性がある^{と告げた}。

その原因が、ヴィヴィオが無意識に放つルシリオン誠実なる賢者と話をしたいという念だと教える。

「あ……ごめん、レヴィ。わたし……」

落ち込むヴィヴィオを、彼女のデバイス“セイクリッド・ハート”、愛称クリスがポンポンと頭を撫でる。

レヴィも一緒に優しくヴィヴィオの頭を撫で、「まあ仕方ないよ」「と言って苦笑する。」

「まずはわたし一人で尾行を続行。ルシリオンをバインドで捕まえる。」

捕縛に成功したら念話で連絡するから、それから来て」

「うん。お願いレヴィ」

「そうと決まれば。それじゃヴィヴィオ、少し離れて・・・うん、20mくらいかな。その距離を保ってわたしについてきて」

「わかった」

ヴィヴィオが頷いて答えたのを見て、レヴィは胸元に手を入れ、そこから六角柱のすみれ色のクリスタルの付いたネックレスを取り出す。

彼女のデバイス“アストライアー”の待機形態だ。

レヴィは「セットアップ、モード・バスター」と告げ、防護服へと変身し終える。

「ヴィヴィオに悲しい顔させた罪は重いよ、ルシリオン」

柔らかな瞳を鋭く細め、レヴィは誠実なる賢者の尾行を再開した。尾行する間、意識を可能な限り尾行対象の誠実なる賢者から外す。下手に意識すれば尾行を再開したことがバレてしまうからだ。

(それにしてもアレがルシリオン?)

レヴィは誰一人として居ない路地裏を静かに歩く誠実なる賢者を見て、そう疑念を抱く。

元が神秘そのものでもあった“大罪”^{ヘッカートゥム}だったレヴィだからこそ分かる違和感。^{ルシリオン}

誠実なる賢者という存在が歪んでいる。レヴィはそう感じた。

(5年前も界律の制限による弱体化ってやつで歪んでいたけど、今回の歪みはハンパじゃない。

無理やり力を抑え込んで・・・ううん、抑え込まれている感じ。

それに、何処かに自分の力を流してる……？)

レヴィは誠実なる賢者ルシリオンの様子を見て思考が乱れるのが分かり、すぐに思考を切り替えるよう努め、今やるべきことにだけ集中する。

そして誠実なる賢者ルシリオンが誰一人として居ない寂れた広場へと入っていったのを確認した。

レヴィは遠距離射程バインドの術式を用意、誠実なる賢者ルシリオンが立ち止まったのを確認して、レヴィは彼女オリジナルの高速バインドを発動した。

それは見事誠実なる賢者ルシリオンを捕える事に成功した。しかしレヴィの心の内は嬉しさよりも憐みの方が強かった。

「ルシリオン、ちょっとだけ話をしようか。ヴィヴィオ、捕縛成功来て。」

口ではそう告げ、念話ではヴィヴィオへと広場まで来るように告げる。

少し離れた場所からヴィヴィオが駆けてくる足音を耳にしながら、レヴィは一切誠実なる賢者ルシリオンから視線は外さない。

「……何者だ？」

誠実なる賢者ルシリオンが捕縛されたまま、レヴィに対して何者かを訊ねた。その問いを耳にしたレヴィは眉を顰める。

(わたしのことを覚えていない？ 成長したわたしだから判別できないのか、それとも大罪とかのことすらも覚えていないのか……)

腕を組んだままのレヴィは“テストメント界律の守護神”第四のカルシリオンに関する情報を知りうる限り思いだす。

世界の意思“界律”によって呼び出される最高位の抑止力“界律のテスト守護神”の中でも最強として座する一柱。死亡する前に“神意の玉座”と契約を交わし、人間として生きている状態のまま守護神となった不完全な存在。

(ルシリオンが不完全な守護神、そこに何かヒントがある・・・？それ以前に界律に呼びだされて宿敵アポリュオンの情報を失うなんて聞いたことはない。

わたしが知らないだけかもしれないけど、でもそんなことって・・・)

「レヴィ」

いつのまにやらすぐ近くまで来ていたヴィヴィオに声を掛けられ、レヴィは一度思考をカットする。

「君は・・・高町ヴィヴィオ」

ルシリオン誠実なる賢者は姿を現したヴィヴィオを見て、やはり管理局が関わっていたかと思った。

そして視線はレヴィへと移され、「君は管理局員か？」と訊ねた。レヴィはその問いに「局員なら単独で行動せずに仲間を呼んでから動く」とため息をつきながら答えた。

「さて、ルシリオン。窮屈かもそれないけどそのままのカッコで話をしてもらおう。

まず一つ。わたしの名はレヴィ・アルピーノ。元は許されざる嫉妬レウニヤタンつて名前だった」

「またか。私はルシリオンという名ではない。サフィーロ誠実なる賢者だ。

そして君の事は知らない。つまらない質問はやめていただく」

「はあ？『ヴィヴィオ、ルシリオンって自分の事すら憶えてないの？』」

ルシリオン
誠実なる賢者が自分の事すら憶えていないなんてレヴィは聞いていなかった。

ヴィヴィオはルシリオン誠実なる賢者から視線を外すことなく『あ、うん。あれ？言っただけ？』と返し、レヴィも『初耳』と返した。レヴィはいよいよ疑問の限界に達しようとしていた。

この世界で過ごした10年の事だけに留まらず自身の名前すらも覚えていない。

あり得なかった。いくらなんでも自分の事すら憶えていないなんてこれは異常過ぎるとレヴィは内心頭を抱えた。

『ごめんヴィヴィオ。わたしはもういい。少し整理したい』

『え？あ、うん……。それじゃあわたしが話をしてみる』

レヴィはさじを投げた。これ以上ルシリオン誠実なる賢者と話をしていると頭がどうにかなりそうだと思ったからだ。

念話でヴィヴィオにギブアップを告げ、ヴィヴィオとルシリオン誠実なる賢者を見守るように後ろへと下がった。

「あの・・・ルシルパパ」

「ルシルパパ？以前にも君は私をそう呼んでいたが、改めて聞く」と凄まじい間違い方だな。

高町ヴィヴィオ。先程も言った通り私の名はサファイア誠実なる賢者だ」

眉を顰めながら何度目かの名の訂正。

しかしヴィヴィオは引き下がらず、ゆっくりとさらに誠実なる賢者ルシリオンと歩み寄る。

レヴィはそれを止めようか迷ったが、ヴィヴィオを信じ、そのまま見守ることにした。

ヴィヴィオは小さなモニターを展開させた。

映し出したのは5年前の、誠実なる賢者のルシリオンサファイアではなく、ルシリオン・セインテスト・フォン・フライハイトとしての写真だった。

“機動六課”時代の集合写真。ヴィヴィオとフェイトと誠実なる賢者ルシリオの3ショット。

シャルロットとの2ショット。スバルたちの訓練風景。ヴィヴィオを肩車している写真。

次々と映し出されるその写真を見て、誠実なる賢者ルシリオンは「これは私だ」と驚愕の表情を浮かべていた。

「ルシルパパはわたしの本当のパパじゃないけど、でも確かにわたしのパパだったんだよ？」

バインドで拘束され両膝をついている誠実なる賢者ルシリオンと目を合わせるヴィヴィオ。

ヴィヴィオの瞳は潤んで、目の端には大粒の涙が浮かんでいる。

誠実なる賢者ルシリオンは「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ」と言葉にならない様子でヴィヴィオとモニターを交互に見つめ続ける。

そして、

「私は？ 私は……私は……わ、た、し、はあああああああああああああ……！！！！！！」

「「っ!?!」」

誠実なる賢者は急に叫び出し、苦しそうに頭を振り、額を地面に叩きつける。

ヴィヴィオは「やめてルシルパパ!」と叫んで誠実なる賢者のその行動を止めさせようと必死にしがみ付き、レヴィもさらにバインドを作り出して拘束する。

「ルシルパパああッ!?!」

レヴィのバインドで完全に拘束され身動き一つできなくなった誠実なる賢者。

叫びは止み、虚ろな瞳は空を彷徨う。そしてゆっくりと抱き着いているヴィヴィオへと視線が映り、「ヴィヴィ・・・オ・・・?」と小さく囁いた。

その微かな声にヴィヴィオはハツとして、「ルシルパパ!」と何度も呼ぶ。

ヴィヴィオの必死な呼び掛けに誠実なる賢者の瞳に光が戻る。すると焦点がハッキリとヴィヴィオに合い、カツと目が見開かれた。

「ルシルパパって・・・ヴィヴィオ!? な、なぜヴィヴィオが!?!」

「ルシルパパ!?!」

ヴィヴィオの瞳から大粒の涙がポロポロと零れる。

先程までのような悲しみではなく嬉しさからの綺麗な涙だ。

誠実なる賢者を力いっぱい抱きしめ、「ルシルパパ!」と何度も何度も呼んで彼の胸に顔を埋める。

（愛娘の想いの勝利、か）
ヴィヴィオ

レヴィはそんな二人の様子に泣きたくなるほどの嬉しさが込み上がってきいてた。

そして誠実なる賢者を拘束していたバインドを全て解除した。

自由になったその両腕でヴィヴィオを抱きしめ返し、そしてレヴィへと視線を移した。

「久しぶりルシリオン。わたしのこと、分かる？」

レヴィが小悪魔的な笑みを浮かべつつ自分が誰かを訊ねるが、ルシリオンは「??と首を少し傾げることで応えた。

ヴィヴィオとレヴィが顔を見合わせプツと噴き出した後に、ヴィヴィオがその答えを口にした。

「ルシルパパ。レヴィ、だよ」

「ども！ レヴィヤタン・・・というのはもう過去だから。はじめまして、の方がいいかな？ レヴィ・アルピーノです」

「なに！？ 本当なのか！？ 何でそんなに大きくなっているんだ！？」

ルシリオンはレヴィが成長していることに心底驚愕していた。

レヴィは「良く分からないけど、生定の宝玉の影響じゃない？」と返した。

ルシリオンは「そんな効果があったか、アレには？」と、抱きついたらまま離れようとしないういヴィヴィオの頭を撫でながら首を傾げている。

「レヴィー!？」

「ダメ、ヴィヴィオ! 危ないから離れて!」

レヴィはヴィヴィオを背後へと押しやり、「モード・コンバット」と小さく囁いた。

すると両手にはめられた“アストライアー”の甲にあるクリスタルコアが輝く。

レヴィの防護服が一度霧散し、すぐさま別の防護服へと変化した。ポニーテールだった髪型がツインテールとなり、風が吹く度に靡く。

防護服は冬には似つかわしくない黒のノースリーブのセーラー服。セーラー服特有の大きな襟は前後共に燕尾ジョンケラとなっている。

裾もまた襟と同様に前後共に燕尾となっていて、後ろ側の裾は膝裏までの長さがある。

捲かれている黒いネクタイにはスマレが描かれていた。

インナーは立て襟の白いノースリーブのブラウス。

ファスナー仕立ての前立ては黒のラインで、うっすらと模様が描かれている。

首元には小さな黄金に輝く南京錠が付いている。

下は黒いプリーツスカート。そしてスカートの裾から少し出るくらいの長さの黒のスパッツ、黒のブーツといったものとなっている。

これがレヴィの動きやすさを追求した近接格闘用の防護服“モード・コンバット”だ。

(歪みが強くなった気がする……。これは……。戦わざるを得ないかも)

倒れ伏したままのルシリオンに警戒しつつレヴィはヴィヴィオに管

理局に連絡するよう告げた。

ヴィヴィオは戸惑いを隠せず、返事もしないなままだルシリオンを震えた瞳で見つめている

レヴィは「ルシリオンを救いたかったら呼んで！」とつい大声で叫んでしまう。

ビクツとしたヴィヴィオにレヴィは謝りながら、「急いで管理局に連絡して」と優しく語りかけた。

ヴィヴィオはレヴィのルシリオンを救いたいならという言葉に意を決し、すぐさまもう一人の母親フェイトに連絡を入れた。

それと同時にルシリオンが立ち上がる。

ルシリオンの周囲に蒼い光が生まれ、彼の全身を覆い隠す。

蒼い光が治まった後、そこから姿を現したルシリオンは白コートを纏っていた。

ヴィヴィオとレヴィに向けられた視線には先程までの優しい感情はなく、ただ敵意のみが含まれていた。

これはやるしかない、とレヴィは意識を完全に戦闘モードへと切り替える。

「高町ヴィヴィオとレヴィ・アルピーノを後々の危険因子と認定。

マスターより戦闘許可。……すまないが君たち二人をこの場で撃墜する」

フードを被りつつそう宣告した。

再び“テストAMENT”^{ルシリオン}の誠実なる賢者へと戻った彼は、標的をヴィヴィオとレヴィに絞った。

ヴィヴィオの表情が泣き顔に歪む。せつかく取り戻したと思った誠^{ルシリオン}実なる賢者の記憶。

それがまた失われ、敵として自分たちに立ち塞がった。

「ヴィヴィオには戦わせられない。離れてて」

レヴィの両手首と両前腕、両足首と両脛にすみれ色の計四つの環状魔法陣が展開される。

翠色の瞳が睨み据えるのは再び敵となった誠実なる賢者^{ルシオン}。

レヴィは小さく「行きます」と囁き、トントンと地面を蹴った。

瞬走壱式

その瞬間、レヴィは誠実なる賢者^{ルシオン}の背後へと回り込んでいた。

それは目に留まらぬ高速移動魔法。

シャルロツテ独自の歩法“閃駆”と、フェイトとエリオの使うソニックムーブを彼女独自に混成した術式だった。

誠実なる賢者^{ルシオン}が背後に回り込まれたと気づくがすでに手遅れ。

右足の強烈な踏み込みの後、レヴィの右拳が残像を引きながら一直線に誠実なる賢者^{ルシオン}の背中へと突き刺さる。

瞬閃牙衝撃

ドゴン！！と普通の殴打では決して出ないような音が生まれた。

誠実なる賢者^{ルシオン}の身体が大きく反り返る。がレヴィの攻撃はそれで終わりではなかった。

神速の拳打・瞬閃牙衝撃は、ヒットしたと同時にそのまま対象を殴り飛ばす攻撃だが、レヴィはそこにさらに追撃を仕掛ける。

右腕にある二つの環状魔法陣が回転しながら誠実なる賢者^{ルシオン}の背中へと向かい触れた。

ハーツィーズ・ストライク

紫光破

背中に突き刺さるレヴィの右拳の先端からすみれ色の近距離用砲撃が放たれる。

人が居ないことを良いことにレヴィはそれなりの本気で砲撃を撃ちこんだ。

ゼロ距離砲撃の直撃を受けた誠実なる賢者が吹き飛ばす。

寂れた広場に粉塵が舞い、ヴィヴィオはケホツケホツと咳き込んでいる。

「レヴィ！　いくらなんでもそのコンボはやり過ぎ！！」

ヴィヴィオが誠実なる賢者の安否と広場の地面に大きく穿たれた穴を見て、やり過ぎだとレヴィを窘める。

しかしレヴィは何も答えず、自らの右拳を何度も開閉させつつ誠実なる賢者の吹き飛んだ場所から目を離さない。

（今の手応え……。少し試してみるか……）

レヴィはヴィヴィオに「これから何が起こっても文句なし」と告げ、ヴィヴィオが反論しようとするのを軽く無視して弓を引くような構えを取る。

粉塵の中から自分に放たれ続ける敵意。レヴィは粉塵の奥から光が漏れたのを視認して、すぐさま横へと跳び退く。

それと同時に放たれた蒼い光線が一直線にレヴィの居た場所へ突き刺さる。

レヴィは体勢を立て直した後、高速移動魔法・瞬走壱式を発動。

光線の放たれた位置へと移動し、指を差していた誠実なる賢者を視界に入れた。

誠実なる賢者が攻勢に出る隙を与えないようにすぐに攻撃を繰り出すレヴィ。

双破掌底打

踏み込みと同時に引いていた右腕を突き出し、強烈な掌底を放つ。ヒットした直後にさらに左の掌底を打ちこむ。

ルシリオ 誠実なる賢者は苦悶の声を漏らしつつ左の掌底のヒットに合わせて後ろに身体を引いた。

そうすることでダメージを軽減したのだ。それから何度もバックステップし、レヴィから距離を取った。

だがそこはまだレヴィの攻撃可能範囲だった。

ハイツイズ・ストライフ 紫光連砲

右足を突き出すと同時に環状魔法陣から砲撃が放たれる。

ルシリオ 誠実なる賢者はそれを回避するが、回避した場所に左足の環状魔法陣から放たれた砲撃が迫る。

それも回避するが、立て続けに右腕から砲撃、最後に左腕から砲撃と放たれる。

余裕を無くし回避行動を取っていたルシリオ 誠実なる賢者はレヴィを見失う。「しまった」と口に出した瞬間、

神衝連蹴舞

ルシリオ 誠実なる賢者の左頬へと強烈な右の蹴りが入る。

ルシリオ レヴィは誠実なる賢者の目の前に居たのだ。視線より下に潜り込んでいたということもあって彼は気づかなかった。

棒立ちだった彼の左頬を振り抜いた右足が戻り、踵が今度は右側面に入る。

そして時計回りに一回転し胸部へと蹴りを入れる。

すぐさま腹部へと蹴りを入れ、胸部、反時計回りに一回転し右頬へと蹴りを入れた。

跳躍して宙で一回転、勢いをつけた踵落としをフラついた誠実なる賢者の脳天に叩きこんだ。
顔面から地面に叩きつけられた誠実なる賢者は倒れ伏したまま動かなくなった。

レヴィは「ふう」と一息ついて、ツインテールの髪を後ろに払う。

「ここまで容易く落とせるなんて。堕ちるとここまで堕ちたわけね、ルシリオン」

憐みを含んだ視線を向け、発した言葉にも憐憫が含まれていた。そんなレヴィにヴィヴィオがゆっくりと歩み寄ってきて、レヴィの前に倒れ伏している誠実なる賢者を心配そうに見つめる。

「ルシルパパは大丈夫なの？」

「脳を散々揺らしたからどうだろう？　なあ〜んて大丈夫大丈夫」

ヴィヴィオにそう言いながら、レヴィは誠実なる賢者のフードを脱がして顔のある一点を見つめる。

「血が出ていない。（やっぱり今のルシリオンの身体は人間の肉体じゃない。魔力で構成された擬似体だ）」

三度も蹴りを入れた頬と口元を見ながらそう囁いた。

レヴィは先程誠実なる賢者を殴った手応えから、彼の身体から伝わる衝撃が人を殴った時のそれとは違うことに気づいた。

それが何なのか？と問われればレヴィは「さあ？」と返すしかないが、誠実なる賢者に関する重要な情報の一つであることは間違いなかった。

倒れ伏す誠実なる賢者ルシリオの頭の中に女性の声が届く。
その声の主は至高なる卓絶者ハーデだった。

【延命処置レベル1を停止リリース。レヴィ・アルピーノを撃墜して】

【それはいけませんマスター。それではあなたの延命処置レベルが低下してしまいます】

【大丈夫。延命処置リミッターのレベル1だけだから致命的なものじゃない。それよりレヴィは今後かなりの脅威になる可能性がある。今の内に潰しておく方が良いと思うの】

【くっ……それが命令ならば。マスター、私の魔力と能力、少しの間だけ返させてもらいます】

誠実なる賢者ルシリオの弱体化の真実、その一つが至高なる卓絶者ハーデの延命処置ということだった。

彼は自分の魔力や能力の8割を至高なる卓絶者ハーデの延命処置に回していたのだ。

至高なる卓絶者ハーデに流していた魔力の何割かをカット、自分に戻す。

誠実なる賢者ルシリオから漏れる魔力に気づいたレヴィがヴィヴィオを抱えて彼から距離を取った。

ゆっくりと立ち上がる誠実なる賢者ルシリオを見て、レヴィは「歪みが少し小さくなった」と呟いた。

「レヴィ・アルピーノを最大気危険因子と断定。この場で最優先に撃墜する」

氷神 〈Ancient Empress〉 (前書き)

お蔵入りになる予定だったレヴィの設定が次々と出てきます。
ツッコミの方はどうかご勘弁を。

氷神 〈Ancient Empress〉

時空管理局本局 “特務六課” オフィス

フェイトは自分のデスクで頬杖をついて、はやてに聞いた“テストメント” 幹部の事を考えていた。

任務中に殉職した管理局員が何らかの術で蘇り、“テストメント” を組織したのではないか、という内容だ。

フェイトはあまりの内容に大きいため息をついた。

それからヴィヴィオが家に帰ったかどうか確認するために通信を入れようとしたとき、ヴィヴィオから通信が入った。

フェイトはいいタイミングだ、と思いながら繋げる。

『フェイトママ！ 今ルシルパパとレヴィが戦っているの！』

焦りに染まるヴィヴィオの声とその内容にフェイトは目を見開いた。

『高町ヴィヴィオとレヴィ・アルピーノを後々の危険因子と認定。マスターより戦闘許可。……すまないが君たち二人をこの場で撃墜する』

泣き顔に歪むヴィヴィオの映るモニターから、ヴィヴィオの話が真実だという証の音が聞こえた。

「ルシル！」と大声を上げて勢いよく椅子から立ち上がるフェイト。ヴィヴィオがフェイトにどうすればいいか訊ねる。

「場所を教えてヴィヴィオ。地上部隊に連絡を入れるから！」

フェイトはヴィヴィオから今どこに居るのかを聞き出し、

「はやてー！」

「うん。フェイトちゃん行ったって！ 地上部隊へは私が連絡入れとくー！」

フェイトとヴィヴィオの通信を聞いていたはやてに出撃許可を取るフェイト。

「うん！」と力強く答えたフェイトは、オフィスから駆けだした。

「レヴィ・アルピーノを最大気危険因子と断定。この場で最優先に撃墜する」

そう告げた誠実なる賢者の周囲に蒼いスフィアが8基展開される。パチンつと指を鳴らし、魔力弾を一齐にレヴィへと襲撃させた。レヴィは瞬走壱式を発動、容易く回避する。しかしそこで気づく。ヴィヴィオへと迫っていく魔力弾。レヴィはすぐさま引き返してヴィヴィオの盾になる。シールドを張り直撃に備えていたレヴィだったが、8発の魔力弾はシールドに当たる直前に炸裂、閃光弾として放たれた魔力弾でレヴィのヴィヴィオの視界を潰した。

我が手に携えしは確かなる幻想

激しい閃光の奥から誠実なる賢者の詠唱がレヴィの耳に届いた。

背後に庇ったヴィヴィオを抱きかかえてその場からすぐに後ろへと離脱する。

しかし離脱した場所には誠実なる賢者がすでに待ち構えていた。

レヴィはしまったと思うと同時に抱えていたヴィヴィオを突き放す。それがレヴィの最大の間隙となり、誠実なる賢者はレヴィの胸倉を掴んで持ち上げる。

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

誠実なる賢者の足元に幾何学模様の円が展開され、そこから強烈な閃光が螺旋を描いて噴き上がる。

その光の奔流の中、レヴィは魔力を全て防御に回し呻きながら耐える。

突き放されたヴィヴィオが「レヴィー！ー！」と叫んでいる。

奔流が止み、レヴィは何とか耐えられたと思ったが、それで終わりではなかった。

誠実なる賢者がレヴィを勢いよく地面に叩きつけ、背中から叩きつけられたレヴィが「かはっ」と咽る。

「さあ行くぞ」

ラディウス・テンペスターズ

幾何学模様の円がひと際強く輝き、先程以上の光の奔流が噴き上がった。

光が天へと昇り切り、寂れ静かだった広場がさらに静寂に包まれる。誠実なる賢者は叩きつけた力なく手足を広げるレヴィをさらに持ち上げる。

それを見たヴィヴィオは「クリス、セットアップ」と告げ、大人モードとなった。

誠実なる賢者が大人モードとなったヴィヴィオへと視線を移した瞬間、レヴィは目をカツと見開き、自分の胸倉を掴む彼の右手首をガシツと両手で力強く掴む。そうして両脚を上げて誠実なる賢者の腹へと蹴りを入れ、両脚の環状魔法陣から砲撃を放つ。だが間一髪でレヴィから離れた誠実なる賢者に二条砲撃が当たることはなかった。

「レヴィ！ 大丈夫！？」

「なんとか……。結構魔力を持っていかれたけど、まだまだ戦える。」

それよりヴィヴィオ、大人モードになってどうするの？ 戦うつもり？」

「……。戦う。それでルシルパパを止められるなら。ホントは嫌だけど、それでも……。わたしも戦う」

「……。分かった。いくよヴィヴィオ」

「うん、レヴィ」

構えを取る二人を見つめる誠実なる賢者は静かに 我が手に携えしは確かなる幻想 と囁いた。ヴィヴィオとレヴィが一気に距離を詰め、誠実なる賢者へと拳打と蹴撃をそれぞれ放つ。

左右同時から仕掛けられたヴィヴィオの拳打を裏拳でいなし、レヴィの蹴りを前腕で受け止める。

二人はすぐさま誠実なる賢者の側から離脱し、

「デイバインバスターッ！」

「ハーツィーズ・ストライク
紫光破！」

二人は右拳を突き出して砲撃を放つ。

ルシリオン誠実なる賢者は慌てることなく迫る砲撃に手を翳し蒼の盾を斜めに
して展開する。

二つの砲撃は盾によって軌道を上へと逸らされ、空高くに消えてい
った。

ルシリオン誠実なる賢者は左右に広げたままの両の掌から蒼の砲撃を放つ。

ヴィヴィオとレヴィはそれを半身横にずれる事によって回避するが、
それを読んでいたルシリオン誠実なる賢者は砲撃を放ったまま身体を時計回りに
回転させる。

放たれ続けている砲撃がしなりながら回避した二人へと迫る。
さすがのレヴィもそんな事をするとは思わなかった為に驚愕の表情
を浮かべ、咄嗟に上空へと逃げる。

それはヴィヴィオも同じで、迫る砲撃を回避するために上へと跳躍
した。

ナイト・オン・ザ・ブラッドライアー

ヴィヴィオとレヴィの足元から黒い竜巻が生まれ、二人を飲み込ん
だ。

二人は頭の中に流れてくる不愉快な衝動に、二人は堪らず叫び声を
上げる。

着地することかなわずドサリと地面に叩きつけられ、苦悶の声を
漏らした。

ルシリオン誠実なる賢者はレヴィただ一人を標的としている為、距離的に近い
ヴィヴィオに目もくれずにレヴィへと近づいていく。

ソニックシューター・アサルトシフト

ヴィヴィオの周囲に虹色のスフィアがいくつも展開され、一直線に誠実なる賢者へと迫る。

誠実なる賢者は両手首にはめられた枷から伸びる二本の鎖を手にして振り回すことで、迫る魔力弾を全弾弾き返した。

レヴィはヴィヴィオが稼いだその時間で体勢を立て直し、背を向ける誠実なる賢者へと駆け寄る。

「こんのおおおおッ!!!」

崩山嵐蹴牙・砲双掌

跳躍したレヴィは、振り向いた誠実なる賢者の胸部を踏みつけるような蹴りを入れる。

そこから誠実なる賢者の胸部に数回踏みつけるような蹴りを入れ続けた。

レヴィは最後に彼が仰け反るほどの全力の蹴りを入れ跳躍、地面に着地したと同時に両掌底を打ちこんだ。

同時に両腕の環状魔法陣が一つなり、大きくなった環状魔法陣からゼロ距離砲撃が放たれる。

すみれ色の光が広場を染める。吹き飛んだ誠実なる賢者がヴィヴィオの元へと行くのを見たレヴィは、ヴィヴィオに向けて「やっちゃんえ!!!」と叫んだ。

「ごめんねルシルパ・・・!」

ヴィヴィオは身体を捻って右拳を引き、右足の踏み込みと同時に右拳を突き出す。

誠実なる賢者は体勢を整える事が出来ずに腹部にヴィヴィオの拳打がドゴン！と音を立てて刺さる。

デイバインバスター

拳打の後のゼロ距離砲撃の直撃を再び受け吹き飛ばす。
その衝撃に誠実なる賢者はバウンドしながら地面を転がり続けるが、両手を地面について何度もバツク宙勢を殺して、地面に着地する。

脱げたフードを被りなおし、我が手に携えしは確かなる幻想と告げる。

追撃に来ていたレヴィへと「小賢しい・・・！」と言い放ち、全身に蒼い炎を纏わせた。

グラントヴァイパー

迫るレヴィへと体勢を低くして高速で突進する誠実なる賢者。
蒼炎の塊が自分に迫ってくるその光景にレヴィは息を飲み、全力で跳躍した。
しかしレヴィのその選択は間違いだった。

誠実なる賢者も跳躍し、空中に漂うレヴィへと蒼炎の対空突撃が迫る。

しかしレヴィはニヤッと笑みを浮かべ、「瞬走弐式」と囁いた。
その瞬間、誠実なる賢者の視界からレヴィの姿がかき消える。
空中で一人蒼炎の中から周囲を見渡す。そして発見する。

そこは地上、レヴィはヴィヴィオの隣に佇んでいた。彼は「疾い」と驚嘆した。

全身に纏っていた蒼炎が消え、誠実なる賢者もまた地上へと降り立った。

レヴィが使ったのは空中用の高速移動魔法・瞬走式。
それを発動し、突撃の射線上から地上へと離脱していた。

（今のは結構ヤバかったかも……。というかゼロ距離砲撃をあんなに受けて平然ってどれだけ？）

（どうしてルシルパパは始めからこんなすごい力を使わなかったんだろう……？）

距離を大体40mと開けた位置で対峙する誠実なる賢者ルシリオンを見て、ヴィヴィオとレヴィはそれぞれ思う。

ゆっくりと誠実なる賢者ルシリオンが歩み寄ってくるのを確認した二人は警戒する。

徐々に狭まる三人の距離。レヴィは「ブースト、レベル3」と囁いた。

すると両手にはめられた“アストラライアー”の甲にあるクリスタルコアが輝く。

レヴィの両手足に展開されている環状魔法陣が一つずつ増え、計12となった。

そしてレヴィの翠色の瞳が薄く輝く。

「レヴィ！ それはやり過ぎじゃ」

「ルシリオンの異常に堅い防御を抜くならこれくらいしなないと。

やられる前にやれ、それが今のわたしに突き付けられた現実……」

ヴィヴィオの言葉を遮り、ドツと汗をかき始めたレヴィは誠実なる賢者ルシリオンを睨みつける。

レヴィは心配そうにしているヴィヴィオに「大丈夫だから」と微笑

み、大きく深呼吸してから誠実なる賢者へと歩み寄っていく。
距離が少しずつ狭まる。残り30、25、20、15、10……。

瞬走壱式

レヴィの姿が消える。身体強化を重ねがけした今のレヴィは正しく目に見えぬ疾風だった。

誠実なる賢者の目の前、体勢を低くしたレヴィが現れ、彼を上目づかいで睨みつける。

誠実なる賢者の目がレヴィの居る下へ向こうとしたときにはすでに彼女は攻撃態勢に入っていた。

レヴィは両手を地面につき、両足で誠実なる賢者に足払いを掛けた。ガクつと体勢を崩す誠実なる賢者にアッパーを食らわし仰け反らせる。

すぐさま彼の左側へと一歩踏み込み、回し蹴りを背中に叩きこみ、彼は宙に浮かぶ。

「うぐつ」と呻いた誠実なる賢者への連撃はまだ続く。

レヴィは跳躍し、右足を垂直に上げ腹部に踵落とし、と同時に砲撃を決める。

地面に背中から叩きつけられた彼はバウンドした。

すぐさま地上へと移動したレヴィは、バウンドして地面から離れていた誠実なる賢者の背中を蹴り上げ、さらに浮いたところを連続回し蹴りで空へと打ち上げていく。

レヴィは再び誠実なる賢者より高い位置まで跳躍し、両手を組んで思いきり彼の胸部へと振り下ろす。

組んだ拳の振り下ろしと同時に放たれる砲撃を受け、誠実なる賢者は高速で地面へと落ちていった。

しかし誠実なる賢者は地面に叩きつけられる前に体勢を整え、ズンツと地面がめり込むほどの勢いで着地した。

「おのれ・・・！」

レヴィを視界に入れるために上を見るが、すでにレヴィは彼の背後へと移動していた。

空中用の高速移動魔法・瞬走式で移動し終えていたのだ。

レヴィが「うふふ・・・ふふふふ」と楽しそうに笑い声を漏らす。ブーストのレベル3の副作用・興奮。気持ちが昂り悦楽状態に入るものだ。

長時間の悦楽状態は中毒ものになるため、レベル3には時間制限が定められていた。

レヴィが回し蹴りで誠実なる賢者の首を背後から襲撃する。
首に強烈な蹴りを入れられた誠実なる賢者が吹き飛ぶ前にレヴィはその場で一回転し、彼の脇腹に肘鉄を打ちこむ。

斬裂爪閃

レヴィの両手の各指先から、すみれ色の2cmほどの魔力爪が生まれる。

まずは左手で振り下ろしの一撃を入れ、すぐさま右手の振り上げの一撃を入れて身体を浮かせる。

そして独楽のように高速回転して、魔力爪を連続で誠実なる賢者の身体に様々な角度から叩きこんでいく。

それだけでなく回し蹴りも入れていく。すると、パキイインと何かが割れた音が周囲に響いた。

誠実なる賢者の身を護っていた障壁が砕けた音だ。

彼の目が見開かれる。想定外の事態だった。そんな彼へとレヴィの
斬裂爪閃の最後の一撃が迫る。

ルシリオン 誠実なる賢者はギリギリのところまで蒼の盾を張り、レヴィの攻撃を
弾いた。

「あは・・・あはは・・・やるう」

弾かれ砕かれた魔力爪を見つめつつそう賛辞の言葉をルシリオン 誠実なる賢者
に送る。

そしてすぐさまレヴィは突撃を開始。近距離用砲撃ハーツィース・ストライク 紫光破を両腕の
環状魔法陣から放つ。

ルシリオン 誠実なる賢者は回避を選択。放たれた二条の砲撃をやり過ごす。

しかしレヴィの猛攻は止まらない。瞬走一式でルシリオン 誠実なる賢者の右横
へと現れ、

煌蹴連昇破

後ろへ振り上げた右足を思いつきり少し離れたルシリオン 誠実なる賢者へと蹴
り上げる。

すると爪先からすみれ色の光の線が生まれ地面を走り、その一直線
に伸びた線から前方へ向けて閃光が噴き上がる。

それが全てルシリオン 誠実なる賢者を襲撃した。

「うふふふ、どう？ お気に召しました？」

直撃を受けて宙へと飛ばされたルシリオン 誠実なる賢者を見て、それは楽しそ
うに笑みを浮かべるレヴィ。

ルシリオン 誠実なる賢者は身体を捻り着地。先程までとは違いフードの中で痛
みに顔を歪めていた。

「さあ、もつとわたしと踊ろう」

レヴィのその態度に誠実なる賢者は「冗談ではないわッ!!」と吼え、地面に両手を叩きつけた。

蒼い閃光が地面を四方八方に奔り、光の奔った地面を爆破させた。粉塵が彼とレヴィを覆い隠す。視界が最悪の中、誠実なる賢者はレヴィの気配を手繰り寄せ、ハッキリと位置を特定した。

我が手に携えしは確かなる幻想

儀符・オーレリーズサン

彼の周囲に赤、黄、青、緑四色の球体が現れ、白く発光した瞬間四条の砲撃を放った。

レヴィは魔力増加をすでに察知し、直感的に四条の砲撃の射線より離脱した。

粉塵が一瞬で吹き飛び、視界がクリアになる。

レヴィは広場を見渡すが、誠実なる賢者を視界に入れる事が出来ない。

(消えた・・・上!?)

と、上空を見るが居ない。
その瞬間、

インディファレント・ジャツジメント

レヴィの足元より無数の光の粒子となっていた誠実なる賢者が噴き上がってきた。

レヴィが宙へと吹き飛ばされる。誠実なる賢者はそのさらに上で実

体へと戻り、さらに追撃を仕掛けようとする。

雷震球

ルシリオン
誠実なる賢者は両手を頭上に掲げ巨大な雷の球体を生み出す。

両手を振り下ろしレヴィに雷の球を落とそうとしたとき、傍観せざるを得なかったヴィヴィオがここで動く。

高く跳躍し、レヴィを抱きかかえてその場からすぐさま離脱する。

ルシリオン
誠実なる賢者は「逃すか」と囁いて、雷の球を小さく分けて誘導弾として利用、ヴィヴィオに抱えられたレヴィを追尾させる。

（このまま逃げた方が良いかもしれない。今のわたしたちじゃたぶんルシルパパに勝てない……！）

レヴィを抱えて広場から逃走を図ろうとするヴィヴィオ。

フェイトと管理局の応援を待たずして逃走することはやはり辛かったが、レヴィの事を思えば苦にはならなかった。

だからこそ念話で、レヴィに撤退を告げる。

『レヴィ、何とかしてルシルパパから逃げる。もうこれ以上は無理だよ』

『……ヴィヴィオ、あと少し粘るよ。今ルシリオンを倒しておかないと絶対まずい。』

そんな気がする。だから……一か八かのムーンライト……行くよ』

受けたダメージ量によりブーストのレベル3が強制解除、レヴィは冷静を取り戻していた。

ルシリオン
そして誠実なる賢者の障壁が失われている今こそ倒すべきだと判断

した。

「っ！？ そんなダメージで撃てるわけ っ！」

レヴィのムーンライトという単語にヴィヴィオは驚愕し、その提案を無茶だと嗜めようとしたが、レヴィの瞳に宿る決意と覚悟の眼光に口を噤まざるを得なくなった。

背後から迫ってきていた雷撃の魔力弾が足元に突き刺さっていく。体勢を崩されながらも転倒することなくヴィヴィオは駆け抜け、

アクセルシューター・アサルトシフト

上空でこちらを見下ろしている誠実なる賢者へと9発の魔力弾を放つ。

先程までの誠実なる賢者なら直撃を受けても問題なかったが、障壁の無い今は魔力弾を回避、それから一直線にヴィヴィオとレヴィの元へと飛んでくる。

レヴィは「決めてヴィヴィオ。わたしたちでルシリオンを助けよう？」とヴィヴィオに告げる。

「……分かった。やろう、ムーンライト……！」

ヴィヴィオもここで誠実なる賢者を倒す覚悟を決めた。

ヴィヴィオは、レヴィに「もう立てるから」と告げられ、走りながらレヴィを降ろす。

レヴィと並列して広場を走るヴィヴィオは、まずは布石となるバインドを成功させるためにどう誠実なる賢者を誘導するかを考える。そして思いついたのが彼女の母であるのは直伝の拘束魔法。

ヴィヴィオはいきなり立ち止まり反転、空から滑空してくる誠実なる
リオン

る賢者と対峙する。
眉を顰める誠実なる賢者だったが、あくまで標的はレヴィと判断してそのままヴィヴィオの上を通り過ぎようとした。

「わたしが相手・・・！」

ヴィヴィオが跳躍し誠実なる賢者の軌道上に立ち塞がった。

「ならば君から落とそう」と宣言した誠実なる賢者は速度を緩めることなく突撃して、蒼の魔力を纏わせた左拳を振るった。

ここで誠実なる賢者は選択を謝った。砲撃かまたは無視をすればよかったのだ。

バインディング・シールド
捕縛盾

ヴィヴィオの展開したベルカ魔法陣のシールドに衝突する誠実なる賢者の拳打。

ピシッとひび割れる音がしたその時、シールドから幾条もの鎖が伸び誠実なる賢者の身体を何重にも捕えた。

ヴィヴィオはすぐさま誠実なる賢者へと魔力を纏わせた拳打と蹴撃を何発も叩きこむ。

そして最後に「リボルバー・スパイク！！」という掛け声とともに打ち下ろしの回し蹴りを叩きこんだ。

地面へと叩きつけられた誠実なる賢者の真下にすみれ色の魔法陣が展開される。

それは最初に誠実なる賢者を捕えた高速捕縛魔法・紫光瞬条で、さらに彼を何重にも拘束し地面に縫いつけた。

誠実なる賢者を中心として5mと離れた場所にヴィヴィオと“モード・バスター”形態となっているレヴィが対角線上に立つ。

の砲撃となり、バインドで身動きの取れない誠実なる賢者を飲み込んだ
地面に着弾した砲撃がドーム状の衝撃波となつて広場をすみれ色に
染め上げ、光と音を完全に消し去つた。

集束砲撃魔法ムーンライト・ブレイカー。

術者レヴィ（モード・バスター時）、砲撃を放てる者（レヴィが砲
撃担当時は彼女とは別の集束技術を持つ者が必要）が揃うと扱える
集束砲撃魔法。

レヴィ独自の集束技術を用いた複数人（最大三人）で完成させるこ
とが出来る術式。

上下に展開された魔法陣が術式発動に参加した魔導師の魔力を吸い
上げ自動で攻撃に転用する。

参加した魔導師の魔力が高ければ高いほど効果は高まり、最初の光
の奔流の威力や噴出時間などが変動する。

命名は、レヴィとルーテシアとティアナによる試し打ちの際、その
見学者の一人であるなのは。

集束されたすみれ色（集束担当がレヴィだったため）の光球が月に
見え、オレンジ色の砲撃がすみれ色の光球を照らす太陽（砲撃担当
がティアナだったため）に見えたことからそう名付けた。

ちなみに、レヴィ、なのは、フェイトの三人で行つた際、あまりに
威力が高くなり過ぎて暴発自滅したという伝説もある。

先程まで熾烈を極めていた戦闘が行われていた広場に静寂が訪れる。
ボロボロになつた地面に座り込んでいるレヴィとヴィヴィオは、誠
実なる賢者が居るであろう場所へと視線を向けていた。

粉塵が完全に晴れた広場のある場所に、完全に意識を失っている誠
実なる賢者が倒れ伏していた。

指一つピクリとも動かない。

「勝った・・・？」

「勝っちゃった・・・？」

レヴィとヴィヴィオが信じられないといった風に顔を見合わせ、互いの頬を抓る。

二人は同時に「痛い」と言っつて、お互いが手を離し抓られた自らの頬をさする。

夢ではない。レヴィとヴィヴィオは一か八かの賭けに勝利し、見事誠実なる賢者を撃破することに成功したのだ。

二人は張り詰めていた緊張から解放されドサリと後ろ向きに倒れ込んだ。

大の字で寝転がって薄暗くなってきた空を見上げ、ヴィヴィオは完全に疲労からすぐに眠ってしまった。

ヴィヴィオの寝顔を見ながらレヴィは管理局が来るのを待った。

それから少しすると、待ちに待った管理局車両のサイレンの音を耳にしたレヴィは、

「これで何とかなればいいなあ」

首だけを動かし、力なく倒れている誠実なる賢者を見つめながら呟いた。

「うそ・・・誠実なる賢者が・・・あのルシルが負けた・・・。
やっぱり、延命処置のレベル1だと彼の本領は・・・発揮できない」

至高なる卓絶者がベッドの上で苦しそうに胸を押さえながら誠実なる賢者の敗北に驚愕。

しかしその原因が自分の延命処置ということを知っているため、彼女は心の内で自分を責める。

【・・・ルシ 誠実なる賢者！ 聞こえる？ 誠実なる賢者！】

至高なる卓絶者が“テストメント”幹部独自の回線で呼びかけるが一切の返答がない。

彼女は両手で顔を覆い隠し「完全に意識が落ちてる・・・。」と悲しそうに小さく囁いた。

それから延命処置のレベル1を再開させ、自分の身体を数分とかけて万全へと持っていく。

二日間寝たきりだった身体の調子を確認してストレッチ。そしてクローゼットの中に納められていたスーツを手取る。

スーツを取った際にそれに引っかけかかりパサッと落ちたある衣服。

それは管理局の制服だった。至高なる卓絶者の肩書の一つには管理局員というものもあった。

しかし彼女が“ミコンスター・コンツェルン”の頭首ということは管理局内では誰も知らない。

何せ彼女は決して表舞台には出ずに、頭首代行を表舞台へと送っているからだ。

至高なる卓絶者は管理局の制服をクローゼットに掛け直し、慣れた

手つきでスーツを身に纏っていく。

そして「ふう」と一息ついて、どこからともなく“テストメント”幹部の証である白コートを取り出し纏う。

それから自分の女性としての身体のラインを隠すための白マントを取り出し羽織る。

白マントの中に隠れた右手には、いつのまにか赤い本“ディオサの魔道書”があった。

「私の大切なルシルを早く助けにいかないと……。待っててルシル。すぐ行くから」

誠実なる賢者の愛称であるルシルを愛おしそうに口にしながら、フードを目深に被った至高なる卓絶者はその寝室から姿を消した。

力なく212部隊の隊員に両側から支えられて連行される誠実なる賢者。

レヴィと騒がしさから目を覚ましたヴィヴィオはその姿をただ悲しそうに見ていた。

レヴィにとつては今の生活をくれた大恩人である誠実なる賢者。そんな彼が敵となり、彼と戦い、彼を撃墜し、そして彼は管理局に連行されていく。

ヴィヴィオにとって彼はなののように本当の親ではないが、それでも大好きなパパだ。

記憶が戻った時は本当に嬉しかった。もうこれで戦わなくても良いんだと心底安堵した。

しかし彼は突如苦しみ出し、再び記憶を失い敵となった。救うため。その思いだけで戦って撃墜した。そして彼は、はやてが応援要請した212部隊に連行されていく。

「ルシルパパ……。これでもうルシルパパと戦わなくても良いんだよね……。？」

「……。ルシリオンは誰かに操られている上に記憶操作を受けている。

たぶんこれは確定と見ていい。だから嚴重な監視体制の元、ルシリオンはもう外に出られない。

この事件が完全に解決するその日まで……。待とうヴィヴィオ。ルシリオンが戻ってくるまで」

レヴィは、元の姿に戻っているヴィヴィオを後ろから抱きしめながらそう優しく語りかけた。

ヴィヴィオは零れ落ちる涙を手の甲で何度も拭いながら「うん」と頷いた。

これで一件落着と思った。レヴィもヴィヴィオもその場に居る212部隊も。

支えられていた誠実なる賢者ルシリオンが護送車へと入れられたその時、

「私の大事な同志を返してもらおうか」

広場に若い男の声が響いた。

212部隊に緊張が走る。もちろんレヴィとヴィヴィオも周囲を警戒する。

「氷漬けにされる前に我らが同志を解放したまえ」

コツコツと靴音を鳴らしながら白マントを羽織った外見からでは性別が確認できない一人の人間が歩いてくる。

それは声を男のものへと変えた至高なる卓絶者だ。

212部隊の面々がストレージデバイスを一斉に至高なる卓絶者へと向ける。

それを見ても歩みを止めずに誠実なる賢者の居る護送車へと向かっていく。

再三に亘る投降勧告を無視した至高なる卓絶者に、212部隊の分隊長が「撃てええ！」と号令をかけた。

至高なる卓絶者へと迫る幾つもの砲撃。

しかし至高なる卓絶者はただゆっくりと歩を進め続け、防御も回避も取ろうとしない。

砲撃の直撃まで2mを切ったところで、至高なる卓絶者は「凍れ」と囁いた。

瞬間、迫ってきていた魔力の塊である砲撃がまるで物質のように凍りついた。

ガシャアアン！と音を立てて氷漬けにされていた砲撃が砕け散っていく。

この場に居る全員がポカンと呆けた表情をしている。

唯一レヴィはまともにも思考出来ており、至高なる卓絶者の異常さにいち早く気づいていた。

魔力を凍結させる魔法。いくらなんでも有り得ない現象だと。

そして至高なる卓絶者のマントの中から異様な“力”を感じ取っていた。

至高なる卓絶者はレヴィからの視線に気づき、誠実なる賢者を倒し

たレヴィをフードの中から睨みつける。

至高なる卓絶者の目が見えずともレヴィは無意識に構え、ヴィヴィオを後ろへと追いやった。

思うことはただ一つ。戦えるか、その一点のみ。しかしそれは不可能だった。

誠実なる賢者との戦闘で魔力をほとんど使い切っているからだ。

ヴィヴィオがレヴィの私服のクロークにしがみ付きながら「レヴィ」と緊張に満ちた声を出す。

護送車からレヴィへと進路を変更しようとした至高なる卓絶者だったが、誠実なる賢者を救い出すことを優先として踏み止まる。

レヴィから視線を外し、またコツコツと靴音を立てて護送車へと歩いていく。

レヴィは無意識に構えを取っていた事に気づき、大きく深呼吸して構えを解いた。

(どうする。このままじゃせっかく倒したルシリオンが解放されるでも、今のわたしじゃ……)

ただ黙って見ている事しか出来ない悔しさに歯噛みするレヴィ。

ヴィヴィオもどうする事も出来ずに、レヴィのクロークを強く握り締めているだけだ。

そんな二人を余所に地上部隊は至高なる卓絶者に攻撃を加えていく。しかし次々と魔力が凍結されていき決定打を与える事が出来ずにくた。

「退け……！」

至高なる卓絶者の命令口調の囁きがレヴィには聞こえた。

レヴィに緊張が走る。これは何かまずいと、すぐにこの場から逃げ

の方が良いのではと。

「これで最後だ。大人しく同志を解放しろ」

「この・・・ふざけるなッ!!」

至高なる卓絶者の最後の命令に激高した分隊長は、自らが持つスト
レージデバイスを構え至近距離で砲撃を放った。
マントの中に隠れた“ディオサの魔道書”が光を放つ。

レヴィは背筋が凍りつく感覚を得た。これは絶対にまずい、ここか
らすぐに逃げると。

すぐさまレヴィはヴィヴィオを横に抱え上げて、全力でこの場から
離れるために疾走する。

ヴィヴィオは突然のレヴィの行動に驚くが、レヴィの焦りが滲んだ
真剣な横顔を見て、何も言わずにキュツとレヴィの服を握り締めた。

センチンシア・コンテナトリア
愚かしき者に美しき粛清を

そしてそれは起こった。

レヴィは全力疾走しながら背後へと振り向く。

世界が一変していくその様を見て、レヴィは心が、そして身体が恐
怖に震えた。

潔白なる聖者と誠実なる賢者が一度は展開した六角形の魔法陣を足
元に展開させた至高なる卓絶者を中心に全てが凍りついていく。

抉れた地面も、212部隊も、車両も、砲撃も、大気も、何もかも
が凍っていく。

(違う! これは魔法じゃない!!)

レヴィは、全力で駆ける自分のすぐ後ろにまで冷気が迫り、地面を

凍結させていくその様子を見た。

走る速度を上げる。息遣いが荒い。心臓が早鐘を打つ。疲労で身体が重い。

それでも自分とヴィヴィオの為に速度を決して緩めることなく走り続ける。

(もう少し・・・！)

迫る冷気のスピードが遅くなっていくのを確認したレヴィは、広場を出れば逃げ切れると確信した。

そして広場から抜けたところで転倒。ヴィヴィオを下敷きにならないようにレヴィは身体を捻って自分の身体をクッションにする。

仰向けに倒れたままレヴィは肩で息をし何度も咽る。

ヴィヴィオが「レヴィ！」と泣きそうな表情で叫んでいるが、無茶が重なったことで意識が徐々に落ちていつているためレヴィには聞き取れない。

(・・・魔法・・・じゃない・・・。間違い・・・なく・・・
魔術だ)

そう思ったところでレヴィの意識が完全に途絶えた。

「これは・・・！」

フェイトが広場へ到着したときには事はすでに終わっていた。

1.6 km四方の広場の7割強が凍結され周囲に強烈な冷気を放つ

ている。

そして212部隊の面々や車両はまるで氷塊を掘って作ったようなのオブジェとなっていた。

すぐさま応援に来た別の地上部隊に、氷漬けになった隊員たちの治療の処置を指示する。

「フェイトママ！」

「ヴィヴィオ！」

フェイトがヴィヴィオとレヴィの姿を探していた時、ヴィヴィオの方から声をかけてきた。

フェイトはフラついたヴィヴィオへと急いで駆け寄る。

「フェイトママ。レヴィが……」

ヴィヴィオは事の簡単なあらましを話しながらレヴィを休ませている場所へと案内する。

フェイトがヴィヴィオに案内された場所は広場の外周に設置されているベンチだった。

ベンチで横にされているレヴィ。今は静かに寝息を立てて眠っている状態だ。

ヴィヴィオもフェイトが来たことで緊張の糸が切れたのか、フェイトにもたれかかるように眠りについた。

「ヴィヴィオ!? ……お疲れ様、ヴィヴィオ、レヴィ」

フェイトはヴィヴィオを優しく抱きかかえ、レヴィを病院へと向かう車両へ運んでいた女性隊員たちに預ける。

そしてフェイトは現場指揮を始めた。

PM19:50 時空管理局本局 “特務六課” オフィス

『 ということ、氷漬けにされていた212部隊は全員一命を
取り留めた』

はやてのデスク上に展開されているモニターに映るフェイトがそう
報告した。

212部隊の隊員たちは重度の凍傷を負ったが、至高^{ハーデ}なる卓絶者が
手加減したのか誰一人として死者が出る事はなかった。

「そうか。それは良かった。・・・それで、それもルシル君の仕
業・・・なんか？」

はやては訊きづらそうにフェイトに訊ねた。

至高^{ハーデ}なる卓絶者が現れたことをはやては知らないからの質問だった。

『ううん。違うみたい。待って、レヴィが話してくれるから』

フェイトが横にずれ、フェイトの隣にレヴィが現れ二人一緒にモニ
ターに映る。

レヴィはもう完全回復したようで、「お久しぶりですはやてさん
と微笑みながら挨拶した。

はやても「久しぶりや。元気そう良かったわ」と返した。

「それでレヴィ、悪いけど話してもらってもええか？」

はやては本題を切りだした。

『うん。えっと、まずは……ルシリオンの事だけど、ルシリオンの記憶が一時的に戻りました』

「『っ！』」

はやてとレヴィの隣に映るフェイトが目を見開いた。

フェイトが「ルシルの記憶が戻ったの！？」とレヴィの両肩を掴んで訊ねた。

レヴィは「落ち着いてフェイトさん」と宥める。フェイトはハツとして「ごめん」と謝った。

「レヴィ、どういうことなん？ ルシル君の記憶が戻ったっていうんは……」

はやては努めて冷静にレヴィに訊ねる。

レヴィは頷いて、広場で起きたことを話し始めた。

『ヴィヴィオが、ルシリオンに機動六課時代の写真を見せたんです。するとルシリオンは動揺して、急に苦しみ出して……そうしたら記憶が戻ったんです』

「過去の自分の映る写真を見て思い出した……？」

『だと思いません。ですけど、急に異常な叫び声を出して苦しみ出しました。』

両手首に枷が生まれて鎖が伸びてきて、そして首に環状魔法陣が展

開かれて、ルシリオンの首を締め付けるように消えました。そうしたらルシリオンの記憶がまた消えて、戦わざるを得なくなつた、ということです』

レヴィが悲しそうに話した。

それを聞いたはやてとフェイトが考え込む。

『それで結構重要な情報だと思っんですけど、ルシリオンは記憶を書き換えられて操られている可能性が高いです』

『ルシルの記憶が書き換えられて』

「操られてる!?!」

フェイトとはやての驚愕の叫びに両手で耳を塞いだレヴィ。

レヴィは耳を塞いでいた手を離し、話を続ける。

『えっと、ルシリオンがサファイアロとかいう状態に戻ったら「マスターから戦闘許可」とか言っていましたし、ほぼ間違いはないかと』

「マスター……」

『それじゃつまり、そのマスターとかいうのをどうにかすれば……』

「ルシル君を解放できる、ということやねおそろくは……」
フェイトとはやては一つの希望を見出したため、表情が若干明るくなる。

しかしレヴィの表情は晴れない。マスターというのに心当たりがあ

り、しかもおそらく本気ではない“力”を目の当たりにしたのだから。

『確かに解放できるかもしれませんが、そのマスターというのは一筋縄ではいかないと思います』

「??？ どういうことやレヴィ?」

レヴィには珍しい後ろ向きな発言に、はやてはそう訊ねる。

『たぶんマスターというのは広場と212部隊の人たちを凍結させた男の事だと思えます』

『確かにあんな光景を見れば一筋縄じゃないかな相手なのは間違いないよ。』

でも、ルシルを解放することが出来れば、きっと他の幹部達の妙な力を無くすことが出来るはず』

「それだけでも十分相対する価値はあるな」

フェイトとはやては至高なる卓絶者^{ハーデ}をどうにかすれば全てに決着がつくかもしれないと考えた。

『そのマスターなんですが、魔術師である可能性があります』

「『な・・・!?!?』」

フェイトとはやての何度目かの驚愕。

『最後の、広場を凍結させた術、アレからは強烈な神秘を感じまし

た。
ルシリオンやシャルロッテが扱う魔術と似た神秘。だからあの男が使った広域凍結も魔術だと思います』

レヴィから告げられた“特務六課”にとって最悪と言っても過言ではない情報。

敵に魔術師が居る。それが何を示すのか。はやてとフェイトは良く解っている。

戦ってどうにか出来る存在ではない。思い出すのはかつてルシリオンとシャルロッテの二人の記憶で耳にした言葉。

神秘を打倒するにはそれ以上の神秘を以ってあたえるべし

現代の魔導師では過去の魔術師には勝つことは出来ない。

『ルシリオンの記憶を書き換えるなんて、魔術くらいのデータラメが無いと出来ないはず』

「そんな・・・やっぱり今回の事件は、私らじゃ解決できへんのか・・・？」

はやてが背もたれに体重を預け、天井を見上げている両目を右腕で隠す。

レヴィの隣に映るフェイトも完全に呆けている。思考がほぼ停止した状態だ。

誠実なる賢者をどうにかすれば何とかなる。そう思っていたときに、その彼を操る魔術師の可能性のある存在が敵に居る。

『それでなんですけど・・・はやてさん、わたしもそちらの特務六課に入れてもらえませんか？』

レヴィイからの突然の“特務六課”へ参加したいとの言葉に、はやてとフェイトは啞然とする。

『わたしなら、万全で切り札を使った状態のわたしなら何とか対抗できるはずなんです。

この身はかつて神秘であり、そしてこの身をこの世界に繋ぎとめる生定の宝玉。

あれもまた神秘の塊。5年前ほどの神秘は扱えませんが、それでも一切の神秘の無い皆さんよりかはまともに戦えると思います』

レヴィイの最大の切り札“許されざる嫉妬化”^{レヴィヤタン}。

“生定の宝玉”に宿る神秘を解放して擬似的に神秘を扱うことを可能とする術。

許されざる嫉妬としての“力”は5年前に本体を消したために使えないが、誰も扱えない神秘を扱えることだけでも十分だった。

はやてはどうするか迷う。レヴィイの言う通り自分たちは神秘を使えない。

確かにレヴィイは心強い戦力になることに間違いなかった。

しかしレヴィイは民間人。その彼女を巻き込んでいいのかいいのか迷っていた。

それを察したレヴィイは『わたしにも手伝わせてください』とハツキリと告げた。

レヴィイの瞳に揺らぎはない。その本気の瞳を見たはやては、

「……………分かった。レヴィイ・アルピーノを、民間協力者として特務六課に迎え入れる」

『はやてさん……………ありがとうございます』

レヴィ・アルピーノの“特務六課”への参加がここに決定した。
この後、ルーテシアに連絡を入れたレヴィは散々怒られた。

くろがねの戦鳥 〈AGUILAS〉 (前書き)

文字数削減のため、これからはデバイスの発言(術式名を除く)を日本語にします。

アギラス戦イメージBGM ACE COMBAT5 “Grab
acr”

10月7日 前半部加筆修正しました。

くろがねの戦鳥 〈AGUILAS〉

11月26日 時空管理局本局

ヴィヴィオとレヴィが誠実なる賢者^{ルシリオ}を撃破、そして至高なる卓絶者^{ハーデ}が表舞台に出たあの日から十日が経過した。そして、ここ本局内にある第8訓練場に咆哮と激しくぶつかる金属音が響き渡る。

「レヴァンティン！」

「グラーフアイゼン！」

騎士甲冑を身に纏ったシグナムとヴィータが激しい戦闘を繰り広げている。

それはリハビリでもあった。鈍った身体を無理やり叩き起こす実践さながらの模擬戦。

数日という期間をベッドの上で過ごした二人は、完治したと同時にこういう模擬戦を重ねていた。

互いのデバイスが相手に突きつけられ、今日の模擬戦も終わりを迎えた。

「……はあ。なあシグナム」

ヴィータが“グラーフアイゼン”を肩に担ぎながら、“レヴァンティン”を鞘に納めているシグナムに声をかける。

シグナムは「何だ？」と返し、ヴィータへと振り向く。

「あたしらが眠っちまってた間に状況は結構変わっちまった。カルド隊の事もそうだが、ラインフォースも敵に居るってのが……」

「ああ、そうだな。主はやてから聞いた話には少し堪えた」

シグナムとヴィータは眠りにについている間も念話での受け答えは出来ていた。

が、はやては二人が目を覚ますのを待つてから“テストメント”幹部の事を話した。

殉職した管理局員が何らかの術を以って蘇ったのではないかと。

ラインフォースが敵に居る事、報復せし復讐者隊カルドの正体候補である殉職した管理局員の事も話した。

シグナムは正体候補の管理局員の顔写真を見て、自らが殺めたことのある者だと思いだした。

ガウエイン・クルーガー元三等空尉。かつてシグナムの斬撃・紫電一閃によってその命を断たれた管理局員。

「あたしもだ。ジョシユア・エルグランドって奴の顔はうつすら覚えてる」

ヴィータは大きいため息をつき、過去に自分が殺めた者の事を思い出した。

本当に報復せし復讐者隊カルドが自分たちの殺めた者ならば、復讐されてもおかしくはないと、二人の気が重くなる。

「シグナム、ヴィータちゃん」

「ライン？ あ、やべ。もう会議の時間か」

訓練場の入り口から二人を呼んだのはリインフォース？。ヴィータの前に現時刻が表示されたモニターが展開され、“特務六課”の会議時間だと気づく。リインフォース？は「はいですよ」と少し呆れた風に微笑を浮かべる。

そして三人は、“特務六課”に用意された会議場へと向かった。

シグナムとヴィータとリインフォース？が会議場へと着いた時にはすでにメンバー全員が揃っていた。

なのは、フェイト、はやて、シャマル、ザフィーラ、アギト、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、レヴィの11人。

シグナムとヴィータとリインフォース？の三人は空いている席へと向かい座る。

「みんな揃たな。・・・さてこの十日間、テストメントはいろんな管理世界に出没しとる。」

そして管理局が人手不足という理由で後回しにした多くの大小問わすの事件を次々に解決」

はやてが全員を見渡しながら話を切りだした。

そして“テストメント”がどのような事件を十日という短期間で解決してきたのかがモニターに映し出される。

本当に小さな事件、事故・災害救助、広域指名手配犯の確保という大きな事件まで手広く手をつけていた。

「そのことから管理世界のいくつかがテストメントと協力してはど

うか、という案を上層部に出してきた」

「それで上層部は何て言ってるの？」

「現状維持、ということや。テストメントは確かに未解決事件を解決しとるけど、管理局への犯罪行為がそれで消えるわけやない。六課わたしらや局員たちへの公務執行妨害だけでお釣りがくるような感じやしな。

そのことから上層部は、このままテストメントの捜査を続行するよう指示してきた」

なのはの問いに、はやては現状維持のまま捜査続行と返した。

沈黙がここ会議室に流れる。その沈黙を破るようにフェイトが口を開く。

「それで、捜査の現状維持、と返答した世界はどうやってきたの、その事に対して」

「思つとつたよりあっさり引いたようや。現状維持の管理局を様子見、といったところやな」

「そう、なんだ。良かった・・・のかな？」

「そやな。良かったと言えは良かった」

はやての微笑を浮かべてのその言葉に、はやてを除くメンバーから安堵のため息が出、緊張感が支配していた会議場の空気が緩まる。はやてはそんなメンバーに頷いて、そしてすぐさま真剣な面持ちへと変える。

「そんでここからが本題や。ようやくヴォルフラムの駆動炉がまともにも動くようになった」

“特務六課”の旗艦“ヴォルフラム”の駆動炉は、次元跳躍魔力結合分断砲撃（仮）によるダメージによってここ数日稼働しない状態だった。

駆動炉が長期間に亘って稼働しなかった原因は未だに不明。

そして“ヴォルフラム”とは違い、砲撃の直撃を受けた四隻の艦は、本局のドッグに着いたと同時に駆動炉が再起不能となり、廃艦処分が決定していた。

「で、テストメントが出没した各管理世界の地上本部からの調査報告がこれや」

モニターに映し出されたのは“スキーズブラズニル”の複雑過ぎる転移記録。

多重転移を繰り返して転移先を巧妙に隠している。

だが管理局の探査網からは完全に抜ける事は出来なかったようだ。

“スキーズブラズニル”がとある管理世界へ数多く寄ることがデータから見て取れた。

「ここがテストメントの拠点やったら捜査する必要がある。そやけど・・・」

モニターに映し出されるのは、ここ十日間で活動した“テストメント”幹部と“レジスタンス”たち。

そこには圧倒的な火力で違法魔導師を狩る報復せし復讐者隊の三人カルド、誠実なる賢者と祝福なる祈願者がユニゾンを果たし祝福の騎士となルシリオンり、ラインフォース“レジスタンス”を率いて内紛を治める姿。ゼーゲン・リッター

「レジスタンスの装備がエルジアの時と桁違い・・・！」

「物理攻撃をほとんど無効化してますよ・・・！」

「それだけじゃなくて魔法攻撃もです」

「動きも全然違う。この短期間でこんなに動きが良くなって・・・！」

“レジスタンス”の着こんでいるロングコート風のバトルスーツの効果、そして洗練された集団・戦闘行動を見て驚愕する面々。それだけでなく手にしている武器にも目が行き、その威力に啞然となる一同。

「持つてる銃、魔導師の防護を完全ファイルドに抜いてダメージを与えてますね」

「そや、幹部たちだけじゃなくてレジスタンスもまた脅威になりつつある。」

魔導師にも対抗できる程の武装を手に入れたレジスタンス。そして圧倒的な戦力を持つ幹部達」

十日間で魔導師にも対抗できるほどの力を手にした“レジスタンス”。

短期間で魔導師への脅威レベルが急上昇していた。

「・・・ねえはやてちゃん。スキーズブラズニルが必ず立ち寄るこのオーレリアって・・・」

「第35管理世界オーレリア。37年前まで第50管理世界レサス

との戦争において様々な兵器を開発していた世界や。
今はもう兵器産業はしてへん。そやけど、もしかするとレジスタンスの武装と何らかの関係がある、かもしれへん」

なのはの神妙な表情での言葉に、腕を組んで椅子にもたれたはやてがそう返す。

「まさか・・・秘密裏に開発している武装をテストメントに流して
るってのか？」

それを聞いたヴィータが信じられないといった風にそう口にする。
シグナムは「うむ」と頷いて、はやてへと視線を移す。

「主はやて、テストメントとの協力を提案した世界にオーレリアは
？」

「無い。無いんやけど・・・」

シグナムの問いにははやては即答。
しかしオーレリアと“テストメント”の関係を疑っているのか表情は晴れない。

「そやからハッキリさせるために、これからオーレリアへと向かう」
はやてが立ち上がって全員を見渡す。
そしてスバルとティアナへと視線を移して、

「スバル、ティアナ。行けるか？」

そう訊ねた。万が一敬虔なる諦観者と聡明なる勇者と出会ったら、

二人と戦えるのか、という意味を含んだ問いだ。

スバルとティアナは即答することは出来ず、少し黙ってから「はい」と返答した。

「リインフォース？が「それではヴォルフラムへ」と言って会議場の出入り口へと向かおうとしたとき、はやてが「待った」と止める。

全員は椅子から立ち上がった状態のまま止まってはやてへと視線を移す。

「……ヴォルフラムやなくてオーレリア行きの次元船でオーレリアへと向かう」

「どうということ？」

「……そして私たちがオーレリアへ向かうのを誰にも言わんように」

はやての突然の言葉にすぐさま訊き返したフェイト。

はやては少し考えた後に秘密裏にオーレリアへと向かうことを言外に告げた。

「私は……管理局内にステートメントに通じとる局員が居る可能性を疑つとる」

全員の表情が驚愕に染まる。

はやては俯き、話を続けていく。

「フェイトちゃんとティアナは分かるな。

ステートメントが解決してきた事件、中には公表されていない事件もある。

それはつまり……」

「管理局の捜査資料が外部に、テストメントに漏れている・・・？」
「なのはがはやてに訊き返す。
俯いていたはやては顔を上げて、なのはの疑問に自分なりの考えを告げる。」

「情報屋からって事もあるけど、どちらにしても管理局内には外部に情報売る局員が居る可能性は否定出来ん、ということや。
そやからこれから可能な限り秘密裏に動くつもりや。」

六課の行動は、信頼できる人以外には口外無用、ええな？ みんな「はやての念を押しした言葉に、全員が少し逡巡してから「はい」頷いた。」

しかしそれは味方になる者たちをも突き放す、ということだった。

テストメント本拠地“オムニシエンス”

“オムニシエンス”の南半球にある“レスプランデセルの円卓”の中央に一基の塔がそびえ立っていた。
それは天を衝く円柱の塔“エヘモニアの天柱”。“テストメント”の始まりの地。

その最上階に円形に並べられた13の肘掛椅子に腰かける11人の白^{ハーデ}コート^{トパーシオ}を纏う幹部達。

至高なる卓絶者と未だに眠りについている潔白なる聖者を除く11

人だ。

「なあ、ボスから何か連絡はないのか？」

そのひとつに座る謹慎の解けた報復せし復讐者が踏ん反りながら、誰にとも言わずそう訊ねる。

「いいや。二日前から連絡はない。フツ、それにしても報復せし復讐者、暇なら広域指名手配犯の一人でも捕縛してきたらどうだ？ 退屈なのだろ」

答えたのは永遠なる不滅者。そして報復せし復讐者へと暇なら働いてこい、と口にする。

報復せし復讐者は「お前はいつもここに閉じ籠って馬鹿じゃね？」と嫌味で返した。

永遠なる不滅者はそれに対して気にも留めずに黙りこんだ。話すだけ時間の無駄とでも言うかのように。

そんな彼らの中央に一つのモニターが展開される。映っているのは至高なる卓絶者だった。

『遅れてごめんなさい。オーレリアの阿姆斯特ル社から私のところに連絡が来たのだけど、その内容というのが、特務六課がオーレリアに現れたそうなの』

少し焦りの含んだ声で至高なる卓絶者は幹部達へとそう報告した。阿姆斯特ル社は、第三管理世界ヴァイゼンのカルドヴルフ・テクニクスと並ぶ魔導端末メーカー。

そしてオーレリアとレサスとの戦争時、オーレリアの兵器を開発する産業を営んでいた。

今では魔導端末などの研究・開発を盛んに行っている。

そして“ミコンスター・コンツェルン”の公にはされていない子会社ということ、至高^{ハーデ}なる卓絶者の命令によって“レジスタンス”の武装、及び空軍^{アキラス}と呼ばれる航空兵器を秘密裏に開発、“テストメント”へと引き渡していた。

「オーレリア基地は、ここオムニエンスへの無断進入を阻む為の障壁発生を担う拠点の一つ、失うわけにはいきませぬね」

『ええ、六課はアムストル社へ捜査協力を申し込んで、公の工場の査察をいくつか終えたそうよ。』

一応、基地の方に関してはまだ知られていないようだけど、知られるのも時間の問題かもしれない』

『^{デアアムンテ}永遠なる不滅者の言う通り、“オムニエンス”には“ミコンスター・コンツェルン”に無断で進入出来ないようにする障壁がある。その障壁発生を担う拠点の一つがオーレリア基地だった。』

『一つくらい陥落しても問題はないのだけど、それでも護れるのなら護っておきたい』

「分かりました。直ちに」

突然“EMERGENCY”と赤く点滅するモニターが警報と共に展開される。

『^{デアアムンテ}永遠なる不滅者はすぐさま回線を開き、“Sound only”と表示されたモニターから漏れる戦闘を行っているらしき音に眉を顰めた。』

『こちら第九拠点オーレリア基地！ 管理局からの襲撃を受けてい

ます！ 至急応援をお願いします！」

「あゝボス、どうやらそつちへの連絡もこつちへの連絡もとてつもなく遅かったようだぜ」

オーレリアに配置されている“レジスタンス”からの緊急通信。
陽気なる勝者は冷静に至高なる卓絶者へとそう告げ、至高なる卓絶者は「そのようですね。ごめんなさい」と頭を下げた。

「待て。オーレリアには空軍のさそり座部隊が配備されていたはずだ。
さそり座部隊はどうしたんだ？」

堅固なる抵抗者が冷静にモニター越しに居る“レジスタンス”へと訊ねる。
未だに爆発音の止まないモニター越しからの返答はすぐさま来た。

『相手は例の特務六課なんです！ エスコルピオンは苦戦を強いられています！』

「……やはり六課のエースの前には我ら以外は後れを取るといふことか」

「そのようだ」

“特務六課”の戦力を知る幹部達は納得したように頷いていた。
そして永遠なる不滅者が「至急応援を送る。それまで持ちこたえろ」と告げ、「レジスタンス」は「了解！ 可能であれば御早く！」と答え通信を切った。

「ではマスター・至高ハーデなる卓絶者。早速応援に向かいます」

『お願いします』

至高ハーデなる卓絶者はもう一度頭を下げ、そして通信を切った。

不滅者デアアマンデが幹部達を見回し、「さて、誰が行くかだが・・・

？」と告げた。

不滅者デアアマンデのその言葉に、彼と誠実なる賢者ルシリオンと祝福なる祈願者ラインフォースを除く全員が自分が行くと主張した。

第35管理世界オーレリア　ネベラ山

“特務六課”と“空軍アギラス”の戦闘が開始される少し前まで時間は遡る。

はやてたち“特務六課”は、アムストル社の社員の一人から「二年前、ネベラ山に何かの工場を建てたって聞いたけど」という情報を基に、ネベラ山へと赴いていた。

ネベラ山に入り搜索を開始するが、しかし行けども行けども工場らしき建物は見えてこない。

指揮官のはやてとラインフォース？、そしてレヴィを除く“特務六課”は車を降り、防護服へと変身して空と地上からの搜索に入る。

『・・・こちらライトニング1。それらしき建物を発見』

搜索開始から十数分、フェイトは目標発見の報告を各員に入れる。

フェイトの目下には大きな縦穴がいくつもあり、そのいくつかの縦穴の底に工場らしき建物が何棟もあった。各員に場所の位置を報告しようとしたその時、“バルディッシュ”が警告を発する。

地上から何かが迫ってくる、と。フェイトが警戒に入った瞬間にそれは来た。

高速である一つの縦穴から飛び出してきた黒の影が五つ。

フェイトは直感的にソニックムーブでその場から離れていた為巻き込まれることはなかった。

フェイトは上空へと昇っていった影を視認しようと空を見上げる。

「フェイトちゃん！」

「テストロッサ！」

「なのは！ シグナム！ ヴィータ！」

フェイトの元へと駆け付けたのはなのはとシグナムとヴィータ。

なのはは「今の見た？」とフェイトに訊ね、フェイトは「速くて良く見えなかった」と答える。

シグナムとヴィータは愛機を構えた状態で黒い影を必死に目で追う。

そして四人の視界に、空へと飛び上がって来た黒の影の正体が映る。その正体を見たのはとフェイトは驚愕し、「うそ・・・」と知らず呟いた。

ヴィータは「おお！」と、シグナムは「ほお」と少し感嘆したような声を上げた。

こちらテストメント空軍アギラス所属・第二航空隊さそり座部隊^{エスコルピオン}。

貴殿たちは我らが領内に無断で侵入した。すぐさま立ち去るなら良し。立ち去らない場合は実力行使となる

影の一つが悠々と空を飛びながらなのはとフェイトに警告する。

四人は“テストメント”という単語に反応し、すぐさま臨戦体勢に入る。

なのはははやてへと通信を入れる。敵はAIを搭載した“無人戦闘機”だと。

そう、五つの黒い影は間違いなく管理世界ではもう見る事の無い戦闘機だった。

完全なる質量兵器。主翼は前進翼、機体左右と下部に取り付けられた3面カナード、上下に張り出した大型エンジンユニットに接近配置された内向き斜め垂直尾翼で構成される翼形状。

機体の大きさに比べて翼面積は小さめ。

左右の大型エンジンユニットは上下に大きく張り出していて、左右の間隔もかなり広い。

左右エンジンユニットの間には上下展開式のエアブレーキが装備されている。エンジンノズルは垂直方向に可動する2次元偏向ノズルが採用されている。

コックピットは人間の頭部大のグラスキャノピーで、中にはAIのクリスタルコアが納められている。

そして左右の尾翼には六芒星を背後にしたサソリのエンブレムが描かれている。

『スターズ1交戦します！』

『ライトニング1交戦します！』

『スターズ2交戦！』

『ライトニング2交戦!』

フェイトとヴィータとシグナムは上空を旋回飛行するさそり座部隊エスコルピオン五機へと接敵する。

なのははその場で射撃魔法・アクセルシューターを10基展開、射出した。

エスコルピオン・リーダーより各機。警告を無視した魔導師2名、騎士2名、撃墜するぞ

了解

魔導師ニンゲンと戦闘機部隊キカイの空戦が幕を開けた。

スバルたち地上搜索部隊へと届く空戦開始の合図たる爆発音、その連続。

キャラが心配そうに空を見上げていた時、エリオが「伏せて」と静かに囁いた。

スバルとティアナもすでに無造作に伸びた草木に隠れていた。4人の前を慌ただしく走るのは、ここに来る前に映像で見た新武装の“レジスタンス”だ。

ライフルやハンドガンを手に「何故ここがバレたんだ!？」と口々に言いながら周囲の護りを固めるために動いていた。

『どうします?』

『応援が現れる前に捕縛する。こちらスターズ4、これより敵施設付近のレジスタンスを掃討します』

『こちらロングアーチ2。了解です。気を付けてくださいティアナ。幹部達がいつ出てくるかも分かりませんから』

指揮車両に居るリインフォース？が答え、幹部達の注意するように忠告する。

ティアナは『了解』と返し通信を切る。

『スバル、エリオ、キャラ、行くわよ！』

ティアナは“クロスミラージュ”を一つはガンモード、一つをダガーモードにする。

スバルもいつでも交戦できるように意識を切り替え、エリオも“ストラダー”を構える。

ティアナはキャラに『バインドお願い』と念話を送り、キャラも『はい、合図ください』と返す。

“レジスタンス”の数人が何かの報告をするためか一か所に集まった。それを好機だと判断したティアナはすぐさま合図を送る。

リングバインド

キャラは数人の“レジスタンス”を三つのリングバインドで拘束した。

“レジスタンス”は突然の出来事に対処できなかった。が、拘束された一人が仲間を呼ぼうとしているのか通信を入れようとしていた。ティアナは「させない！」と“クロスミラージュ”を構え、手加減なしのスタンバレットを人数分放つ。

ティアナのスタンバレットは、多くの局員が用いるスタン設定の魔力弾をティアナが独自に改良したものだ。打撃効果と高電圧の神経刺激によって相手を無効化し、まとも受ける丸一日は動くことが出来なくなる。

「あががががが」と痙攣した“レジスタンス”たち。

しかしまだ倒れないために、スバルとエリオが高速で接近。

彼らの腹や首に打撃を与え意識を刈り取った。“レジスタンス”はバタリと倒れ伏した。

スバルたちは頷き合い、隠れては姿を現した“レジスタンス”を昏倒させていくという地味な作戦に入った。

大空を高速で翔ける五機編成の漆黒の戦闘機隊エスコルピオンさそり座部隊。漆黒の翼が大気を切り裂きながらなのはたちと互角の空戦を繰り広げていた。

「くっそ、速え！」

ヴィータが“グラーファイゼン”を振り上げながら必死に追いかけるも、複雑な機動のエスコルピオン隊に攻撃を与える事が出来ずに空振りが続く。

直接攻撃が出来ないのなら射撃魔法で、という手段を先程から取るなのはだったが、射撃魔法・アクセルシューターの速度では追いつくことが出来なかった。

「私のスピードなら・・・！」
S o n i c m o v e

フェイトが高速移動魔法・ソニックムーブで一気に距離を詰める。そして並列したところでザンバーフォームとなっている“バルディッシュ”を振り下ろす。しかし、

「AMF!?!?」

雷光の刀身がエスコルピオン隊の一機に触れようとした瞬間に消滅した。

フェイト、そしてそれを離れていたところで見えていたなのはたちの表情が驚愕に染まる。

魔力結合を分断するフィールドAMFによる障壁だった。

AMF正常稼働を確認。各機、敵戦力の掃討に移れ

エスコルピオン・リーダーより全機へと攻勢に出るように指示が出る。

エスコルピオン隊全機は 了解。攻勢へと出ます と答える。

背後から高速で迫るシグナムとヴィータを撃墜するためにコブラ軌道を取り、シグナムとヴィータをやり過ごす。

そして、前方に六角形魔法陣を展開、漆黒の砲撃を放った。

「うお!?!」 「むっ!」

シグナムとヴィータはギリギリで回避に成功。

そして前方から迫る五機のエスコルピオン隊の上へと移動しすれ違いざまにシグナムは紫電一閃を、ヴィータはギガントフォルムへと変形させた“グラーファイゼン”を叩きつけた。

しかしかなりの強度を持つAMFにより決定打を与える事が出来な

い。

「チツ」と舌打ちするヴィータをあざ笑うかのように五機のエスコルピオン隊は一瞬で後方へと距離を開けていく。

「レイジングハート、どこが弱点とかない？」

砲撃を撃つ瞬間にもAMFが解除されませんでした。

ですが、空気と魔力を取り込んでいると思われる部位にだけAMFがありません。そこを攻撃すればあるいは

攻撃の通用しないエスコルピオン隊を見て、なのはは愛機“レイジングハート”へと訊ねる。

“レイジングハート”は少し間を開けた後に一つの打開策を提示した。

空気と魔力を取り入れる部位。エアインテークの事だとなのははすぐに察した。

『フェイトちゃん、ヴィータちゃん、シグナムさん。』

前方、空気と魔力を取り込むエアインテークにはAMFが無い。だから

『真正面からのガチンコ、か。よっしゃ！』

『了解した。私とヴィータで誘導する。おまえとテストロッサで撃墜しろ』

『了解！』

シグナムとヴィータが誘導役を買って出、すぐに行動に移る。

シグナムは“レヴァンティン”をシュランゲフォルムにしてエスコ

ルピオン隊の軌道を妨害する。

エスコルピオン2から各機。まずは遠距離攻撃の無い騎士二名を撃墜することを提案する

エスコルピオン5は2に同意

エスコルピオン2の提案に次々と同意していくエスコルピオン隊。そしてエスコルピオン・リーダーが最後に同意し全機に命令を下す。騎士であるシグナムとヴィータを優先して撃墜せよ、と。エスコルピオン隊は散開し、一斉の二人を狙い始めた。

なのはとフェイトは待ち伏せを知られない為に一定の間隔で砲撃や射撃を放っていく。

しかし全方位AMFによって防がれてしまう。

ヴィータが雄叫びをあげながら“グラーフアイゼン”を振るい、エスコルピオン隊の一機にすれ違いざまに叩きつける。

攻撃を弾いたエスコルピオン3は 何度やっても同じだ、諦めろとヴィータを諭す。

しかしヴィータは「やってみなきゃ分かんねえだろおがッ!!」と聞く耳持たずといった風に怒鳴る。

そんなヴィータに迫るエスコルピオン4の漆黒の砲撃。

ヴィータはすぐさまその場から離れ、エスコルピオン3はスライズバツクで砲撃を回避、そのままシグナムへとロツクオンする。

「レヴァンティン!!」 Explosion

シグナムは自分に敵が向かって来ている事を知り、鞘へと納めている“レヴァンティン”のカートリッジをロード。そして一気に抜き

放つ。

飛龍一閃

砲撃級の魔力付与斬撃がエスコルピオン3へと一直線に向かう。直撃、そして爆発が起きる。爆煙の中から無傷のエスコルピオンが現れる。

無駄な足掻きを と憐憫を含んだ機械声でシグナムに語りかける。シグナムは「フツ」と微笑を浮かべ、そして「やれ。テストアロツサ」と囁いた。

Plasma Barrer

シグナムの背後に控えていたフェイトが手にする“バルディッシュ”が術式を告げた。放たれた雷光の魔力弾が10基、エスコルピオン3のエアインタークへと吸い込まれる。

なに・・・っ!?

フェイトはシグナムの手を引いてソニックムーブでエスコルピオン3の軌道上より離脱。そして二人の後方へと高速ですれ違って行ったエスコルピオン3は強烈な閃光に包まれ爆散した。なのはとヴィータと交戦していた残りのエスコルピオン隊はその光景を信じられないといった風に見ていた。

エスコルピオン2から各機。3が撃墜された。どういうことだ？

リンクからの映像が途切れ詳細不明。各機最大警戒を怠るな

警戒しろ。単独戦闘は危険だ

各機、各個撃破へ作戦変更だ。確実に一人ずつ撃墜する

エスコルピオン3が撃墜されたことで警戒レベルを跳ね上げたエスコルピオン隊。

そして攻撃対象を一人ずつとして戦闘行動を再開した。

エスコルピオン3の撃墜成功に、この空戦は勝てると確信したなのはたち。

そんなのはとヴィータへと再度砲撃を放つエスコルピオン・リーダーと2と4。

そこに5が参加し、二対四となった。

なのはの射撃・砲撃はAMFに弾かれ、ヴィータの一撃も空振る。苦戦を強いられている二人へフェイトとシグナムが応援に向かう。ここで四対四となり戦況が安定する。

思っていた以上に厄介な奴らだ。全機、こうなれば帰還を考えるな。道連れにしても撃墜しろ

互いに決め手が打てない事に焦り始めたエスコルピオン・リーダーからの捨て身戦法の命令。

エスコルピオン隊全機が 了解 と即答、無茶な軌道も平気でするように始めた。

「デイバイン……バスタアアアア……！」

ヘッドオンしたエスコルピオン5へとなのはが桜色の砲撃を撃つ。しかしエアインタークには入れる事が出来ずにAMFに弾かれた。

だがなのははすれ違いざまにアクセルシューターを右のエインテークにねじ込んだ。

爆発。機動がフラついた5へと、ヴィータがトドメのシュヴァルベフリーゲンを左のエインテークにブチ込んだ。

やられた・・・！？

エンジンが停止したことで推力を失ったエスコルピオン5は墜落し爆散した。

エスコルピオン・リーダーが 魔導師が我らの弱点に気づいていたとは と驚嘆の声を上げた。

おのれ・・・！ よもや数コンタクトで知られようとは・・・！

エスコルピオン4が前面に展開した六角形魔法陣よりマシンガンの如く魔力弾を連射していく。

四人は一斉に散開。なのはとフェイトとヴィータは迫るエスコルピオン4に魔力弾を撃ちこんでいく。

しかし4は連続ロールすることによってエインテークへの攻撃を弾く。

4に続いてリーダーと2も一斉に攻勢へと移る。

常にロール飛行を維持し、エインテークへの攻撃を完全に無効化していた。

味方への誤射をものともしない魔力弾の雨が四人を襲う。

『くそつ。どうすんだ！？』

ヴィータが全力で回避行動をとりながら誰とも言わずに怒鳴るように訊ねる。

なのはたちも手をこまねいている。バインドで動きを止めるか、と

も考えたが一瞬で却下。

AMFがある以上バインドを構成する魔力は掻き消される。それ以前に戦闘機という巨大かつ高速で動くようなものを捕縛出来るほどのバインドは無い。

これで終わりのようだな魔導師。大人しく落とされる

エスコルピオン・リーダーが諦めると言外に告げる。

もちろん諦めるつもりもない四人が必死に思考を巡らすもなかなか良い手が思い浮かばない。

そんなとき、なのはは右手の中指に光る指環に視線を移す。

お守りとしていつも持ち歩く親友シャルロットのデバイス“トロイメライ”の指環。

「（力を貸して、シャルちゃん）トロイメライ！！」

なのはは“レイジングハート”を左手に持ち替え、右手に起動した“トロイメライ”を携える。

今のなのははさながら騎士のようだ。右手に長刀を、左手に長槍を持つ騎士。

フェイトとヴィータとシグナムは、久しぶりに起動している“トロイメライ”を見て無意識に笑みを浮かべていた。

「トロイメライ、ゼーゲフォーム！」 S i l e n c e F o r m

長刀からチェンソーのような大剣へと変形した“トロイメライ”。なのはは向かって来ているエスコルピオン4にアクセルシューターを連射。

フェイトもそれに続いてなのはに近づこうとするリーダーと2にプラズマバレットを連射する。

フォトンスマツシャー

しまっ

エスコルピオン・リーダーが地上の戦況をデータリンクで確認したその一瞬、なのはの高速砲・フォトンスマツシャーがリーダーの右のエアインテークを撃ち抜き、右翼もろとも爆発、消し飛ばす。それでもなお飛行するリーダーへのトドメとしてフェイトが砲撃・プラズマ・スマツシャーを放った。

直撃。エスコルピオン・リーダーも爆散、撃墜された。

残りエスコルピオン2のみ。

しかしエスコルピオン2はすでに終わっていた。

リーダーの撃墜により戦術リンクシステムに一瞬エラーが発生。

そのエラー解除に用いた三秒。その三秒の間、2はロール機動を停止していた。

その隙をもちろん見逃すはずもないのはとフェイトは、同時に射撃魔法を2のエアインテークに撃ち込んでいた。

こんなことが・・・

エスコルピオン2はそう言い残し爆散していった。

『こちらスターズ1。敵航空戦力全機撃墜。これより地上搜索部隊と合流します』

地味な作戦で何十人という“レジスタンス”を昏倒させたスバルたち地上搜索部隊は、縦穴へと進入し下へ下へと降りて行った。広大な底へと辿り着いた四人は、薬剤工場という名目のさそり座部エスコルピ隊射オシ出基地へと近づいていく。そこは天然の要塞のようだった。自然が生み出した絶壁の縦穴の底に建造された基地。

『誰も出てこない……。地上で昏倒させた連中で全員だったのかなあ……。？』

『そうかもね。だってここはほとんど自動運用されているみたいだし』

『幹部達が居ないということはあまり重要な拠点じゃない、ということなんでしょうか？』

『それを調べるのよ。警戒を怠らないで。慎重に行くわよ』

『了解！』』』』

ティアナの指揮の下、スバルたちは基地内を調査しようとする。

その時、基地の奥の洞窟から「おいおいおい」と声が漏れてきた。四人は構えを取り臨戦体勢に移る。

「礼儀を知らないようだな。人様の家に許可なく土足で入り込むとは」

その言葉と同時に洞窟から闇色の炎が噴き上がる。

それを目にしたスバルたちの心の内に絶望が広がっていく。

闇色の炎。それはシグナムとヴィータとセレスを撃墜した報復せしカルド

復讐者隊の証だからだ。

ガシャガシャツと音を立てながら洞窟から出てきたのは漆黒の甲冑を身に纏った報復せし復讐者隊だった。
甲冑のいたるところに闇色の炎が燦り、手にする大剣も同様に闇色の炎が燦っている。

「よお、騎士エリオ。お前が居てくれてオレは嬉しいぜ」

「グラナード……！」

報復せし復讐者隊だけでなく、黒鎧の毒精の頭部に立って腕を組んでいる陽気なる勝者も姿を現した。

そして最後にもう一人。完全に素顔を晒した一人の男。

髪色は蒼に近い銀、瞳の色は真紅に統一されている。

蒼銀の長髪は毛先に向かうほどふわりと左右に広がっている。

両腕に巻きつく鋼色の鎖はジャラジャラと音を立てている。

背には三対の翼があり、右側が白翼で左側が蒼翼だった。

それは間違いなく、

「ルシルさん……！」

誠実なる賢者と祝福なる祈願者のユニゾン形態“祝福の騎士”だ。

今この場に五人の“テストAMENT”幹部が揃っていた。

戦力的にも圧倒的に不利。それ以前に戦いにすらならない。

後ずさっていく四人。それを見た陽気なる勝者が「待てよ騎士エリオ」とエリオを名指しで止める。

エリオは自らを奮い立たせるように咆哮し、“ストラダ”を構え

る。
キヤロは「エリオ君!？」とエリオの袖を引つ張り戦つことを止めようとする。

「……あなたたちに訊きたいことがあります」

ティアナが前に躍り出て、幹部達へと訊きたいことがあると口にする。

それは時間稼ぎだった。なのはたちが来るまでの。闇色の炎が縦穴の上まで達していた。

なのはたちはきつと気づいているはずだと信じて、ティアナはこの時間稼ぎに賭けた。

「話す事はない。ヴォルケンリッターはどこに居る?」

「こつちの話听不懂あなたたちに話すことはありません」

報復せし復讐者のフルフェイスの兜から覗く瞳がティアナを貫く。
ティアナは逃げ出したい衝動を抑え、話を続けようと懸命に立ち振る舞う。

その二人の間に割って入るのは祝福の騎士・誠実なる賢者。
ゼーゲン・リッター
ルシリオン

彼は「訊きたい事とは?」と真紅の瞳をティアナに向けながら訊ねる。

「……あなたたちは、管理局に勤めて、そして殉職した元管理局員なんですか?」

「……何故そう思う?」

ティアナへと報復せし復讐者の右腕が訊ねる。
カルト・デレチョ

すると今度はスバルがそれに答え始める。

「アマテイスタという人はあたしのお母さんで、アグアマリナという人はティアナのお兄ちゃんだから。

それに、グラナードとカルド・イスキエルド。エルジアで二人が見せた素顔は官局員のデータベースにあった。殉職者として……載っていた」

^{グラナード}陽気なる勝者が「まああんな完全に見られたらバレルよな、やっぱり」と手を叩きながら笑った。

その様子にキャロが「それじゃあやっぱり」と呟いた。すると顔を隠している報復せし復讐者隊は兜を取り、^{グラナード}陽気なる勝者も自らフードを取った。

「その通りだ。俺達はかつて管理局に勤め、そして任務中に殉職した亡霊」

ココアブラウンの髪をオールバックにした30代後半と思しき男性がそう告げる。

彼は報復せし復讐者。生前の名はガウエイン・クルーガー。シグナムによってその生を、未来を奪われた局員。

「俺達はヴォルケンリッターへの復讐のために」

スキンヘッドの20代後半と思しき男性。

彼は報復せし復讐者の右腕。^{カルド・テレチヨ}生前の名はジョシユア・エルグランド。ウィータによってその命を奪われた局員。

「この手で必ず奴らを叩きつぶす」

赤色がかった茶色の短髪に黒色の瞳をした青年。

彼は報復せし復讐者の左腕。生前の名はジータ・アルテツァ。
“闇の書”暴走時に死亡した。

「オレは管理局上層部への恨みとか、未練とかのために」

黒の短髪の20代半ばの青年。陽気なる勝者。

生前の名はメルセデス・シュトゥットガルト。死因は公には事故死。

「他の人もそうなんですか？」

「教えるのは自身の事だけだ。さあこっちは話したぞ。
ヴォルケンリッターはどこに居る？」

キャロの質問の即切り捨てる報復せし復讐者。
兜を被り直し、大剣を構えてスバルたちへと歩み寄ろうとする。

「我らはここだ！！」スバル！ 防火障壁！」

シュツルム・ファルケン

縦穴上空から一筋の光が降ってきた。

それはシグナムの愛剣“レヴァンティン”の弓形態シュツルム・フ
オルムでのみ放てる一撃だ。

一直線に報復せし復讐者の頭上を襲撃し、彼は矢を払うように大剣
を振るう。

大剣と矢が衝突した瞬間、紅蓮と闇色の炎が爆ぜる。

スバルはシグナムの念話の通り防火障壁・ファイアプロテクション
でティアナとエリオとキャロを護る。

爆煙が縦穴内を覆い隠す。噴煙の中、祝福の騎士・ゼーゲン・リッター 誠実なる賢者は風を起こして縦穴内より全ての煙を地上へと出す。視界がクリアになったそこには、アギトとユニゾンを果たしたシグナムと、リインフォース？と合流しユニゾンを果たしたヴィータ。そしてなのはとフェイト、対神秘のレヴィも一緒に居た。

九対五。喜ぶべきだが、しかし現状それに意味は無い。

幹部達は一人で数人分の力と、なのはたちには無い神秘を有しているのだから。

「ははは、来たなヴォルケンリッター！！！」

報復せし復讐者の咆哮と同時に彼の甲冑から闇色の炎が噴き上がる。レヴィが「アイツが一番厄介・・・！」と歯がみし、そして、

「ルーテシア、チカラ 魔力を借りるよ」

そう囁いて“生定の宝玉”へと未だに流れ込むルーテシアの魔力を解放。

レヴィの身体が神秘を宿し“レヴィヤタン 許されざる嫉妬化”する。

それを本能的にまずいと直感した報復せし復讐者隊は、カルド 今だけレヴィへと標的を変える。

慈悲すら許さぬ業火

報復せし復讐者隊は一斉に大剣を槍のように突き出し、炎を螺旋状にして撃ち出した。

レヴィはなのはたちに「他をお願いします！！」と頼み、シグナムとヴィータを引き連れ交戦に入る。

闇色の炎がレヴィの張った障壁に衝突。大爆発を起こす。闇色の炎は障壁にヒビを入れ、徐々にヒビが大きくなっていく。ヴィータは「ダメか・・・？」とレヴィを見る。しかしレヴィは「問題無し」と返した。そしてレヴィは障壁によって威力が弱まっていく闇色の炎を相殺するべく神秘の一撃を放つ。

M o r s c e r t a / 死は確実モルス・ケルタ

すみれ色の閃光が障壁諸共闇色の炎を消し飛ばす。驚愕に染まる報復せし復讐者隊は、直接大剣で斬り捨てる為に接近してきた。

「ここじゃ思いつ切り戦えない！ 外に出ます！」

「ああ！」 「おう！」

レヴィはなのはたちを巻き込まない為に地上へ出る事を提案し、シグナムとヴィータはそれに賛同して縦穴から出て行った。

「逃すかッ！！」と報復せし復讐者隊も三人に続いて縦穴から出て行った。

「やっとうるせえのが行ったな。さて、オレたちも戦おうぜ騎士エリオ」

「あゝあつっ」と手うちわで顔を仰ぎながら陽気なる勝者がエリオへと視線を向ける。グラナードそしてエリオの返答を聞かずにフォヴニスへと砲撃発射の合図を送った。

フォヴニスの両ハサミが開き、エリオを中央としたのはたちへと

砲撃が放たれようとしたその時、

「ぐおっ!?!」 「があっ!?!」 「ごふっ!?!」

上空から報復せし復讐者隊の三人が墜落して来て地面に叩きつけられた。

さすがにこれは異常事態だとして陽気なる勝者はフォヴニスに砲撃を中止させる。

そして祝福の騎士・誠実なる賢者が「何事だ!?!」と上空を見上げた。

「まったく」

凜とした女性の声が縦穴に響き渡る。

なのはたちも空を見上げ、そこに浮遊する女性の姿を見て驚愕に目を見開いた。

「何を考えているわけ? この現代に“魔族”を、しかも幻想一属を引っ張りだすなんて」

その女性は脹脛まであるアクアブルーの長髪を風に靡かせ、アザレアピンクの双眸でこちらを見下ろしている。

白のブラウス、背に三対の翼を携えた葡萄十字が刺繍された黒のベスト、赤いネクタイ。

白のプリーツスカートに白のニーソックス。黒のローファーという出で立ち。

そして右手には彼女の身長（推定165cm）と同じくらいの桜色の刀身を持つ長刀を携えている。

なのはは無意識にその女性の名を口にした。

「シャル・・・ちゃん・・・！」

背に真紅の両翼を背負った女性。5年前に別れた親友シャルロッテ・フライハイトがそこには居た。

彼女の周囲にはレヴィとヴィータとシグナムが戸惑いの表情で浮遊している。

シャルロッテはゆっくりと降下してきて、“テストメント”幹部達となのはたちの間に降り立った。

そしてシャルロッテはなのはたちへと振り向き声をかけた。

「あなたたち、少しは腕があるようだけど相手が悪いわ。

ここは私に任せてあなたたちはここから離脱しなさい。ハッキリ言っ
つて足手まといよ」「

シャルロッテは、なのはたちの事を知らない他人とでも言うように感情の無い声でそう告げた。

くろがねの戦鳥 〈AGUILAS〉 (後書き)

はい、お待たせしました！のでしょうか？

猪突猛進・暴走ノンストップ特急なシャルロツテ・フライハイトの再臨です！

が、少し様子が変。シャルの事も含め、次回で色々と真実を明かしていく予定です。

ちなみにテストメント空軍アギラスの戦闘機のモデルはACE C OMBATシリーズのファルケンです。

再臨せし紅翼の剣騎士 〈Charlotte Freiheit〉

レヴィとヴィータとシグナムの三人は縦穴より出、空で報復せし復讐者隊を迎撃するために臨戦態勢に入る。

『わたしがアイツらの甲冑を砕きますから、生身が露出したら二人は……!』

レヴィは念話で、ヴィータとシグナム、ユニゾンしているリインフォース?とアギトにそう作戦とも言えない力押しの打開策を提示。ヴィータは『分かりやすいな!』と返し、シグナムは『分かった、頼んだぞ』と返す。

リインフォース?とアギトは『了解!』と二人の中で敬礼をした。

『このままヴォルケンリッターとレヴィ・アルピーノを撃墜するぞ!』

『了解!』

報復せし復讐者隊の三人の手にする大剣に燦る闇色の炎が噴き上がる。

そしてレヴィをこの場に限り優先目標として、三人は彼女へと一直線に突撃していく。

レヴィは真下から突撃してくる報復せし復讐者隊の纏う甲冑を破壊するために、

『これでも喰ら

』

神秘の内包された砲撃を放とうとした。が、そこに乱入者が舞い降りた。

レヴィたちの頭上から、真紅の両翼を生やし長刀を携えた天使が「退きなさい、その子」とレヴィに向かってそう言い報復せし復讐者隊へと突撃していく。

摩くアクアブルーの長髪と桜色の長刀と真紅の両翼。

その特徴的な乱入者が誰なのか一瞬で分かったレヴィたちは驚愕に目を見開き一切の動きを止めた。

「新手か！」と報復せし復讐者が乱入者の姿に多少困惑するが、彼はすぐさま「構うな、撃墜しろ！」と、報復せし復讐者の左腕と報復せし復讐者の右腕へ命令する。

二人はヴォルケンリッターでもなく管理局でもないその乱入者の撃墜命令に対し、少し逡巡したが「了解」と返答した。

「止まらないわけね」

乱入者は報復せし復讐者隊が勢いを止めずに向かってくる事に呆れを表した。

そして手にする桜色の長刀を報復せし復讐者隊の三人へと叩きつけた。

バキンツ！と音を立てて漆黒の甲冑の腹部付近が粉碎、報復せし復讐者隊の三人は出て来たばかりの縦穴へと墜落していった。

「まったく。何を考えているわけ？ この現代に“魔族”を、しかも幻想一属を引っ張りだすなんて」

乱入者の女性は縦穴に居る“テストメント”幹部達に聞こえるように声を出す。

そしてゆっくりと縦穴内へと降下していき、コツツと静かに地面へ

と降り立った。

なのはたちはその乱入者の姿を見て、レヴィたちと同様に驚愕に目を見開く。

そしてなのはは無意識にその乱入者たる女性の名を口にした。

「シャル・・・ちゃん・・・！」

シャルちゃん。5年前、ルシリオン誠実なる賢者と同様にこの世界を去っていった親友シャルロット・フライハイトの愛称だ。

正しく乱入者はシャルロット・フライハイトだった。

なのはたちは突然のシャルロットとの再会に戸惑い、そして次第に嬉しさが心の底から湧き上がっていた。

なのははシャルロットへと駆け寄ろうとするが、その前にシャルロットが振り向き口を開いた。

「あなたたち、少しは腕があるようだけど相手が悪いわ。」

ここは私に任せてあなたたちはここから離脱しなさい。ハッキリ言っ
つて足手まといよ」

その声には親しさなんてものが何一つとして無かった。

親友に対してあり得ないほどに感情の無い声。

それを聞いたなのはたちはしばらく思考が停止した。

「聞いているの？ 邪魔だからどこかに行っていなさい、と言っているの」

シャルロットが桜色の長刀“キルシュブリューテ”を一か所に集まるのはたちに突きつける。

その姿に信じられないといった風に硬直するなのはたち。

シャルロットは「はあ」とため息をついて、幹部達へと視線を戻す。

「巻き込まれても文句は言わないでよね。離れないあなたたちの自己責任よ」

そう言い放ち、シャルロツテはふと祝福の騎士ルシリオへと視線を移した。そして「なるほど、そういうこと」と呆れた風にそう口にした。

「誰かは知らねえが、外野は大人しくしてもらおうか・・・！」

グラナード陽気なる勝者が両腕を広げると同時にフォヴニスの両ハサミ、それだけでなく背部の甲冑が開き、翠色の淡い光が漏れていく。そして尻尾の毒針部分の先端にも翠色の光が集束していく。

「黒鎧の毒精フォヴニス。上層魔界の幻想一属・・・。相手に不足なし。来なさい!!」

翠閃に穿たれる罪人

両ハサミから背部から尻尾から翠色の光線が雨のように放たれる。シャルロツテは左手を前方に翳し「我が心は拒絶する」と告げた。ゼーリッシュ・ヴィーターシュタントシャルロツテの前方に真紅の円形の盾が作りだされ、迫る光線群を防ぐ。

が、範囲攻撃だった光線群はシャルロツテの背後に居るなのはたちにも迫る。

シャルロツテの表情が“しまった”という焦りに染まる。先程までの無感情が嘘のようだ。

「させない!!」

レヴィが上空からすみれ色の拡散砲撃を放ち、なのはたちへと迫る

光線群を撃ち落としていく。

シャルロッテは表情に出してはいないが心底安堵したように一息つき、「よかった」と本当に小さく誰にも聞こえないように呟いた。そして、シャルロッテはすぐさまフォヴニスへと疾走する。

陽気なる勝者はフォヴニスへ迎撃させようとするが、シャルロッテの方が疾い。

フォヴニスの身体の下へと潜り込んだシャルロッテは、“キルシュブリューテ”でフォヴニスを両断しようとする。

しかしフォヴニスの腹の甲冑が開き、そこから漏れる翠色の閃光が無数の針となつてシャルロッテを襲撃する。

「くっ、やっぱり正式な召喚じゃない以上全力は出せないか……！」

歯がみし、歩法“閃駆”ですぐさまフォヴニスの下から脱出する。

そこに迫るのは祝福の騎士だ。彼は蒼い魔力で構成された大鎌を振り上げながら、「何者だ？」と問うた。

シャルロッテは「……あなたと同じ」と小さく答え、“キルシュブリューテ”で迎撃に入る。

“キルシュブリューテ”と大鎌の衝突。衝撃波が周囲に広がる。

しかし拮抗は一瞬、大鎌は粉々に砕け祝福の騎士を弾き飛ばす。

シャルロッテは「風牙烈風刃！」と“キルシュブリューテ”を斬り上げる。

と同時に暴風の壁が空中で体勢を整えようとしていた祝福の騎士を襲い、さらに弾き飛ばす。

そんなシャルロッテへと迫る危機。

起き上がった報復せし復讐者隊の三人が技後硬直のシャルロッテへ

縦穴内が集束砲撃の衝撃波に拡がっていく。
そしてなのはもまた縦穴より脱出し、地上でフェイトたちと合流し
たと同時に縦穴より桜色の閃光が噴出する。

「…………やるわねあなた。名前は？」

少し呆れ気味のシャルロッテがなのはに右手を差しだしながら名前
を訊ねた。

なのはたちの表情が凍る。先程もシャルロッテは自分たちの事を憶
えていないような発言をしていたが、緊急時ということでの態度と
言葉だと無理に思い込んでいた。

しかし、親友であるなのはに名を訊ねたことで、シャルロッテは自
分たちと過ごした10年を憶えていないのだと思い知った。

「あのシャルちゃん……」

「…………どうして私の愛称を知っているの？」

ううん、それより少し慣れ慣れしいわ。初対面の人間に対してそれ
は少し礼儀がなっていないんじゃない？」

「っー！」

なのはの表情が一気に悲しみに染まる。

それを見たヴィータがいち早くシャルロッテの目の前へと移動し、
胸倉を掴みあげた。

「どういうことだよシャルロッテ！！まさかあたしらを憶えてね
えってのか！」

あたしらはまだいい！ だけど、けどなのはの事を憶えてねえの
だけは許さねえッ！！！」

「止せヴィータ！」 『ヴィータちゃん!!』 『姉御!!』

激昂するヴィータを止めに入るシグナム。そしてリインフォース？とアギト。

フェイトはなのはの肩を支え、スバルたちはどうすればいいのかわからずに戸惑っている。

レヴィは黙ってシャルロッテを見詰めているだけだ。

「何なんだよ……！ セインテストは操られて記憶が無え。

おまえも、おまえは何で記憶が無えんだよ……！」

ヴィータがシグナムによってシャルロッテから引き離される。

「忘れないって約束はどこ行ったんだよ……！」とヴィータは悔しげに呟いた。

シャルロッテは乱れた服を直し、ヴィータ達を余所に縦穴へと視線を移す。

「下級の幻想一属でも一筋縄ではいかないか」

そう囁いてから再びなのはたちに視線を戻して「早く逃げなさい」と口にした。

なのはたちもまた身を乗り出して下へと視線を移すと、縦穴の底から幹部達がこちらを見上げていた。

「あーやってくれた」

グラナード
陽気なる勝者がフォヴニスの頭部の上で砲撃のダメージにより片膝
をついていた。

カルド
報復せし復讐者隊は大してダメージが無かったのか平然と立っ
てい
る。

ルシオン
そしてユニゾンを解いた誠実なる賢者は、シャルロツテの一撃にか
なり
のダメージを負ったのか祝福なる祈願者に支えられつつ、

「今の砲撃で障壁発生装置が破壊されたようだ。

もうこの基地に価値が無い上使い物にならない、破棄することを提
案する」

ダイヤモンド
本部“エヘモニアの天柱”に居る永遠なる不滅者にそう通信を入
れ
る。

永遠なる不滅者は、

『そうか・・・その基地の管理局にデータを取られるわけにはい
かないな。

5分後、こちらでデータを回収し、基地を管理局に利用されないよ
うに、念のため破壊する。

お前たちは配置されていた部隊を回収した後帰還しろ』

と告げて通信を切った。

「回収するには時間稼ぎが必要だ。報復せし復讐者隊、頼めるか」
カルド

「ああ、問題ない。こちらから頼みたいくらいだ」

「ヴォルケンリッターとの戦闘は望むところ」

「しかし、乱入者とレヴィ・アルピーノは脅威だ。」

報復せし復讐者と報復せし復讐者の右腕は時間稼ぎを快諾するが、
報復せし復讐者の左腕はシャルロッテとレヴィを脅威として洪る。
そして視線が陽気なる勝者へと集まる。

「……分かった。オレも行くぜ。フォヴニス!!」

フォヴニスが咆哮を上げ、その身体を光の粒子と変えて陽気なる勝者へと纏わりつく。

一瞬の発光の後、そこにはフォヴニスと融合した陽気なる勝者が立っていた。

翠色の甲冑姿。色が違うだけで甲冑はゼルフアーダ武装の甲冑と同じ。

唯一の違いは背から生えるハサミの付いた二つの腕と毒針の付いた尻尾。

陽気なる勝者がフルフェイスの兜から「これ疲れるんだよなあ」と愚痴を零す。

「私も行くっ」

そう口にしたのは祝福なる祈願者だ。そしてそれを聞いた報復せし復讐者隊の雰囲気が変わった。

「貴様と共闘など出来るか」

「今は少しでも戦力が必要だろう」

報復せし復讐者の反対を余所に祝福なる祈願者は二対の翼を羽ばたかせている。

”が迫りくる。
それもベルカ魔法陣のシールドで防ぐ祝福なる祈願者。

「答えるリインフォース。我らの事を憶えているのなら、何故主はやての元へ帰らない・・・！」

拮抗する三人の攻防。祝福なる祈願者は「ブラッディダガー」と囁き、血色の短剣を複数展開射出した。

シグナムとヴィータは至近で放たれたにもかかわらずシールドで防いだ。

「答えてください！ どうしてわたしたちが戦わないといけないのですか！？」

嗚咽の混じったリインフォース？の問い。
祝福なる祈願者はその問いに対して静かに「これもまた未来のためだ」と答えた。

「あのさ！ あたしアギトってんだ。少し前から八神家の一員として過ごしてる。」

だからあんたと話す資格って言うかさ、その・・・」

「ああ、知っている。これまで騎士たちと共に主はやてを護っていてくれていたそうだな、感謝する。
今の私のように八神家の一員としての資格が無い者に畏まる必要はない」

シグナムの内に居るアギトへと「ゆえに気にすることなく言いたい事があれば言えば良い」と告げた。

『だったら訊くけどさ！ 未来のためだって言うんだったら、何もそっちに必要は無えんじゃねえかな！！』

「…… 『私はルシリオン同様縛られ、そしてルシリオンと繋がっているからこそルシリオンによって縛られている。』

だからこそ今の私に出来る範囲で、お前たちをこちら側から護ってみせる』 深き闇に穿たれよ……！」

ハウリングスファイア

レインフォース 祝福なる祈願者は思念通話でシグナムたちに心の内を告げつつ高速で飛行し、巨大なスファイアを六基設置していく。
レインフォース そして祝福なる祈願者は深紫色の一条の砲撃を放った。

ナイトメアハウル

と同時に六基のスファイアからも砲撃が放たれる。
レインフォース シグナムたちは祝福なる祈願者の本音を聞き、心が安堵の想いに満ちる。

そして照準が態とズラされて放たれた砲撃を余裕で回避しつつ、

『ならば教える。テストメントを率いているのは誰だ』

そう訊ねる。しかし祝福なる祈願者から返って来たのはその答えではなかった。
レインフォース

『教えられない。先程言った通り私は縛られている。』

それゆえにこれ以上はルシリオンに察知される可能性が高い。

烈火の将。紅の鉄騎。祝福の風を継ぎしレインフォース？。

私は、願いどおりに再びお前たちと逢えた事を嬉しく思う……』

祝福なる祈願者ラインフォースの表情が緩まる。

それはかつてとはいえ愛おしい家族へと向ける優しい微笑だった。

『そして新たな守護騎士アギト。お前に頼みたい。

これからも守護騎士の一員として主はやてたちを護ってあげてほしい』

シグナムの内に居るアギトに、願いを一つ託す。

『……最後に、すぐにこの地から離れてくれ』

デアボリック・エミツシヨン

祝福なる祈願者ラインフォースが「闇に染まれ」と呟き、少し間を開けてから離れたところで戦闘しているのはたちを巻き込みかけない程の一撃を放った。

シグナムたちは、祝福なる祈願者ラインフォースの目配せのおかげもあり、すぐさまその場から離脱することに成功した。

空を飛ぶことの出来ないエリオたちに代わり、レヴィとフェイトの二人でフォヴニス武装形態グラナードの陽気なる勝者と空戦を繰り広げていた。

「邪魔をするなよ、オレは騎士エリオと戦いたいんだよ……!」

穿たれし風雅なる双爪

背から生える腕の先端のハサミから翠色の砲撃が放たれる。

レヴィは“モード・コンバット”となり、瞬走式で回避しつつ負けじとすみれ色の砲撃を放ちつつ、

「エリオにご執心！？ あの子に何をさせるつもり！」

最接近し打ち下ろしの右拳打を叩きこみ、環状魔法陣よりゼロ距離砲撃を放つ。

バキンと音と共に、陽気なる勝者の甲冑にヒビが小さく入る。

「マジかよ！？」と驚愕する陽気なる勝者へと高速で接近するフェイト。

フェイトがライオットブレード形態の“バルディッシュ”の斬撃をその小さなヒビへと叩きこんだ。

しかしヒビが入っているにもかかわらず全くダメージを与えていない。

「退けよ！！」

「やっぱり私たちが勝てないの・・・！」

陽気なる勝者の振り回された尻尾を回避しつつフェイトが悔しげに囁く。

レヴィはフェイトに向かって「そんなことない！ 連携で必ず勝てます！」と告げる。

フェイトは弱気になっていた自分を叱咤し、レヴィの言葉に「うん！」と頷き応えた。

「それじゃあ再度わたしが甲冑にダメージを与えて碎きます！ ですから・・・！」

光牙閃衝刃・連閃

高速の突きを繰り返し、真紅の魔力槍を次々と放っていく。
報復せし復讐者は大剣に燦る闇色の炎を噴き上げさせる。

憎悪は何者にも消せず

そして闇色の炎を迫る無数の魔力槍へと叩きつける。
爆発。しかし報復せし復讐者の炎は槍を相殺することが出来ずに、
爆煙の中から飛び出してきた14基の魔力槍の直撃を受け墜落して
いった。

「邪魔をするなああああ！！！！」

報復せし復讐者の右腕と報復せし復讐者の左腕が同時にシャルロッ
テへと襲撃を仕掛ける。

シャルロツテは報復せし復讐者の右腕に真空の刃・風牙真空刃を十
閃以上放ち牽制、そのいくつかが直撃し弾き飛ばされる。

報復せし復讐者の左腕の斬撃は物理障壁・ハルトリーゲル・シルト
で受け止める。

しかし拮抗は一瞬、障壁は一瞬で碎けシャルロツテの至近距離で闇
色の炎が爆ぜた。

「シャルちゃん！！」

四人の戦闘を傍観することしか出来なかったなのはが叫ぶ。
シャルロツテはその声に応えるかのようにすぐさま体勢を整え、

「凶牙波瀑刃！！」

大きく“キルシュブリューテ”を振るい、漆黒の波を出現させる。
その強烈な光景に絶句する中、カルド・イスキエルト報復せし復讐者の左腕は闇色の炎の
槍で迎撃に入る。

慈悲すら許さぬ業火

螺旋状の槍が大波に孔を開ける。
兜の中で笑みを浮かべたカルド・イスキエルト報復せし復讐者の左腕だったが、そんな彼
に桜色のバインドが仕掛けられる。

レストリクトロック

なのはの有する最高のバインド魔法だ。
しかしカルド・イスキエルト報復せし復讐者の左腕がそれを碎けない訳もない。が、なの
はにとつて一瞬彼の動きを止める事が出来ただけで十分だった。
動きを止めたその隙にシャルロットが一瞬で距離を詰め、

雷牙月閃刃

真紅の雷撃を纏った“キルシュブリューテ”を叩きこんだ。
カルド・イスキエルト報復せし復讐者の左腕の甲冑の背部が碎け散る。
彼から力が抜け、地上へと真つ逆さまに墜落していった。

そして真紅の雷撃は消えることなく辺りに拡散し、シャルロットへ
突撃してきたカルド・テレチヨ報復せし復讐者の右腕の振り上げている大剣に一齐に
落ちた。

だがそれでもカルド・テレチヨ報復せし復讐者の右腕は痙攣しつつ動き続ける。

「はあはあはあはあ……さすがに調整を終えていないとキツイ
な……」

シャルロツテは大きく肩で息をしながら報復せし復讐者の右腕を睨みつける。

そして互いが動こうとしたとき、膨張していく球体がなのはたちへと迫ってきた。

なのははすぐにシャルロツテへと近寄り、彼女の手を取り、デアボリック・エミツションの効果範囲から離脱する。

その場に残された報復せし復讐者の右腕は何も出来ずに呑まれていった。

空戦の出来ないスバルたちは拘束していた“レジスタンス”の護送を命じられていた。

空に誠実なる賢者が居ないことをすでに連絡で知っている為、四人は警戒しつつそれでも素早く“レジスタンス”を拘束している場所へと向かう。

そして拘束場所に辿り着いたスバルたちが目にしたのは、誠実なる賢者オシによって次々と転送されていく“レジスタンス”だった。

「ルシルさん！」

「！……邪魔をしないでもらおうか」

ほとんどの転送を終えた誠実なる賢者ルシリオンは、背後に居るスバルたちに振り返る。

そして手に蒼い大鎌を生み出し、調子確かめるように振り回した

後構えた。

『どうしようティアナ』

『やるしかないでしょ！ ルシルさんにはどうやらムラがあるみたいだし、叩けるうちに叩いておく方が断然いい！』

スバルの念話に、ルシリオン誠実なる賢者の様子からそう決断したティアナがそう答える。

その念話を聞いていたエリオも『それじゃあ戦うということが良いんですか』と訊ねた。

ティアナは『ええ。リインフォースさんともユニゾンしてないし、四人がかりならいけるかもしれない』と返す。

「四人、か。今の私では苦戦は必至だが、しかし落とされるわけにもいかない！！」

ルシリオン誠実なる賢者が大鎌を振るい、衝撃波をスバルたちに放ち彼女たちの視界を潰す。

その隙に残り三組の転送を終える。そして目を覆っていたスバルたちに突撃。

Set up · Dagger Mode

振り下ろされた大鎌を受け止めるティアナのダガーモードの“クロスマイラージュ”二挺。

十字に構えられたダガーを突破することが出来ないルシリオン誠実なる賢者の大鎌。

「はあああああ！！！！」

咆哮するスバルとエリオが誠実なる賢者へと迫る。
その二人の背後にはキャラコが足元に桃色の魔法陣を展開させ詠唱していた。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を。我が乞うは、疾風の翼。
槍騎士と拳闘士に、駆け抜ける力を、すべてを貫く力を」

Boost Up・Strike Power・Boost
Up Acceleration

「ツインブースト、スピード&ストライク！」

キャラコの補助魔法の効果を受けたスバルとエリオが急加速し、誠実なる賢者が撃撃体勢に入る前に攻撃態勢に入った。
スバルの“リボルバーナックル”のナックルスピナーが唸りを上げ、エリオの“ストラーダ”の穂先が帯電する。

ストライクドライバー

二人の同時攻撃が誠実なる賢者へと直撃しようかというとき、彼は地面を蹴りティアナを支えにして逆立ちする。
ティアナは「え？」と漏らし、すぐに誠実なる賢者の体重を支えきれずに体勢を崩す。

Round Shield

“クロスミラージュ”がティアナへと迫るスバルとエリオの攻撃を防ぐためにシールドを展開。

「うわっ……！」 「まずい……！」

スバルとエリオは勢いの付き過ぎた自身の攻撃を全力で止めようとする。

そして何とかティアナのシールドに衝突するギリギリと止める事に成功した。

ティアナから跳躍し、上空で逆立ち体勢のままの誠実なる賢者がそれを見て「惜しかったな」と残念そうに呟いた。

「アクロバットな動き、気をつけないよスバル！ エリオ！」

「分かってる！ ティアナもさっきのようなのはダメだよ！」

ウインググロード

スバルは誠実なる賢者を自分たちの戦闘領域に閉じ込めるために縦横無尽に道を作り出した。

「マツハキヤリバー、ギア・エクセリオン！」

All right buddy・A・C・S・Ignition

スバルに答えた“マツハキヤリバー”に魔力の翼が左右に生まれる。“マツハキヤリバー”のフルドライブ。魔導師としての、戦闘機人としての能力を運用可とする。

「行くよエリオ！」

「はい！ ストラード、フォームドライブ！」

Form Dreii · Unwetter Form

“ストラーダ”の形状が変化する。

ヘッドブースター部と石突部分に黄金の突起が伸びる。

エリオの電気変換資質を最大限に強化する形態だ。

スバルとエリオはウインググロード上を疾走し、ルシオン誠実なる賢者へと上
下左右からと臨機応変な攻撃を入れていく。

ルシオン誠実なる賢者は何とか二人の攻撃を捌き直撃だけは免れているが、
少しずつ対応出来なくなっていく。

ティアナとキャロはそんなルシオン誠実なる賢者へと撃墜の為の一撃を用意
する。

キャロはティアナの弾速と威力を高める補助魔法・ブーストアップ・
バレットパワーを発動。

「クロスファイア・・・」 Cross Fire Full B
urst

ティアナの周囲に展開された複数のオレンジ色のスフィアの輝きが
さらに強まる。

攻撃準備が完了したことを前線でルシオン誠実なる賢者と戦うスバルとエリ
オに念話で報せる。

「シューーーーーーット!!!」

エリオがルシオン誠実なる賢者の大鎌を弾き飛ばしたのを見て、ティアナが
すぐさまクロスファイアを放った。

木々が生い茂るネベラ山の中、スバルたちと誠実なる賢者の戦いを遠くから観ている二人の白コート。

その一人聡明なる勇者がライフルの黒銃を構える。

ヴェロシテイ・レイド

黄色の高速砲撃を放つ。

そしてもう一人、彼のパートナーである敬虔なる諦観者が、すぐさま木々の上を飛び跳ねながら誠実なる賢者の元へと向かう。

「早くティアナたちをこの地から逃がさないと……！」

聡明なる勇者も敬虔なる諦観者に続いて空を翔けて向かう。

突如撃ち込まれた砲撃に、ティアナのクロスファイアの大半が掻き消される。

そして誠実なる賢者は残りのクロスファイアを余裕で迎撃し終えた。

「黄色い砲撃……！ お兄ちゃん……！？」

ティアナが砲撃の発射地点を一瞬で判断し、視線をそちらに向けた。それと同時に、ティアナの至近距離に降りた敬虔なる諦観者が

拳打を彼女の腹部に打ち込む。

「お母さん!!!」

スバルが、ティアナを吹き飛ばした白コートの正体を一瞬で見抜きお母さんと叫ぶ。

敬虔なる諦観者は「今を防ぐのね」と驚嘆の声を上げた。

そう、ティアナは咄嗟に腹部に小さなシールドを張り直撃を免れていたのだ。

宙で体勢を立て直し、キャロの隣に着地した。

そこに、聡明なる勇者も到着し、敬虔なる諦観者の隣に降り立った。スバルたちは誠実なる賢者たちに挟まれる形で包囲された。

【誠実なる賢者、大丈夫だった？ それとも余計なお世話だったかな？】

【いや、正直助かった。乱入者の一撃でかなりのダメージを負ってしまった。

今の私は、四人がかりで挑まれて勝つことは難しかっただろう。感謝する】

敬虔なる諦観者が独自回線の念話で誠実なる賢者にそう意地悪っぽく言う。

誠実なる賢者は、それに真面目に受け答えた。

そんな中、エリオが“ストラダ”を構えるのを見て、

「待ってくれ。僕たちは戦いに来たわけじゃないんだ」

聡明なる勇者が弱々しいがそれでもエリオに続いて臨戦態勢に入る

スバルと妹であるティアナに右手を翳してそう告げる。

「そうよ。私たちはあなたたちにここからすぐに離れてもらいたいの」

「ど、どういうことですか・・・？」

エリオの疑問に答えるのは敬虔なる諦観者で、「もうすぐここに次元跳躍砲撃が落ちてくるの」と正直に教えた。

スバルたちの表情が青褪める。次元跳躍砲撃。エルジアで見た白銀の砲撃だと察したからだ。

誠実なる賢者は「あと何分だ？」と聡明なる勇者に訊き、聡明なる勇者は「二分切つてますね」と答えた。

「・・・というわけだ。交戦はここまでにし、早々にこの地から立ち去ることをお勧めする」

そう言つて誠実なる賢者の姿が消えた。

「・・・ルシル君がそう言うんだから、早くここから離れて」

「お母さん！！」

「スバル。私たちは管理局の闇を完全に消し去る。

今はそれまで傍観していなさい。もし、それでも向かってくるのなら、私と戦う覚悟をしてからにしなさいスバル」

敬虔なる諦観者はスバルにそう告げ、その姿を消した。

「ティアナ・・・僕もそうだ。僕たちテストメントの改革が終わるまで何をしないでいてくれ。でも向かってくるなら、僕はティアナを止めるためにこの引き金を撃つ」

「お兄ちゃん！！」

聡明なる勇者もティアナにそう告げてからその姿を消した。スバルたちは二人の言葉に少し呆然としていたが、すぐさまはやてを始めとした六課メンバーに緊急通信を入れた。

テストメント本拠地“オムニシエンス”

“テストメント”本部“エヘモニアの天柱”への路を守護する最終防衛基地“オラシオン・ハルディン”の中央にそびえ立つ銀の塔が静かに動き出す。

永遠なる不滅者より砲撃命令。目標・第35管理世界オーレリア・第9基地

銀の塔の管制を一手に担うAIが砲撃照射準備に入る。

各管制システムへ通達。電力・魔力精製・供給開始

了解。精製・供給開始

銀の塔の周りに設置されている魔力供給・精製、電力供給を担うAIから返答が入る。

強力な次元跳躍砲撃を放つ為の準備が着々と始まる。

“オムニシエンス”の魔力を供給しつつ基地内部でも魔力を生成していく。

そしてソーラーエネルギーでさらに砲撃に必要なエネルギー量がクリアされていく。

照射エネルギー量・・・クリア。照射エネルギー値計算・・・クリア。

照準座標調整・・・クリア。砲撃術式効果を物理破壊に設定開始・・・クリア。砲撃準備完了

銀の塔の最上部に位置する管制室にポツンと造られているAIコアが次々と準備完了の報告を各管制システムと永遠なる不滅者へ入れる。

『砲撃カウントダウン30秒設定・・・開始』

カウントダウン30秒設定。カウント開始

永遠なる不滅者からの指示にAIは答えると同時に銀の塔の先端、六角錘の天辺に白銀の閃光が発生する。

次第に直視できないほどの強烈且つ巨大な閃光となっていく。

・・・20・・・15・・・10 / 9 / 8 / 7 / 6 / 5 / 4 / 3 /
2 / 1、発射

その瞬間、“オムニシエンス”の南半球の空が白銀に染まった。

直径80mはある極大砲撃が空へと撃ち上げられ、砲撃は空に生まれた波打つ空間に吸い込まれて行った。

砲撃照射成功。次元跳躍成功。砲撃は順調に第9基地へと進行中。標的到達まで残り90秒……

ウソつきな仮面 〈Mask of lie〉

「ここにあの砲撃が!？」

なのははキャラからの通信を受け、その表情を焦りに染めた。

シャルロツテが「何かあったの?」と訊き、なのはは彼女の手を取って真剣な面持ちでこう告げた、「一緒に来て、お願い」と。

「どこへかは知らないけど、こつちも情報が欲しいし・・・いいわ、ついてく」

シャルロツテはなのはの手をキュツと優しく握り返す。

なのははそれが嬉しいような悲しいような複雑な思いになった。

「それならついて来てくれますか」

「ええ、エスコートよろしく」

なのはは久しぶりにシャルロツテと同じ空を飛べた事に、シャルロツテに気づかれないように静かに涙を流した。

シグナムは祝福なる祈願者^{ラインフォース}に視線を移し、

「先程の“この地から離れてくれ”というのは、ここに砲撃が来るから、ということではないのか?」

と訊いた。レインフォース 祝福なる祈願者はただ黙って小さく頷いくことでそれが
真実だと教えた。
ヴィータは「くそっ」と舌打ちし、「行くぞシグナム!」とその場
からすぐに離脱する。

「レインフォース……お前は……」

「行ってくれ烈火の将」

レインフォース 祝福なる祈願者はシグナムにそう告げ、シグナムたちがここから完
全に離れるのを確認してから転移した。

「レヴィ、急いでここから離れるよ!」

次元跳躍砲撃がここに来るといふ連絡を受けたフェイトが、意味も
分からず首を傾げていたレヴィを急かす。

「え? あの、砲撃が来る、というだけでどうしてそんなに慌てて
いるんですか……!?!」

レヴィは、フェイトの焦りの原因を知らない為にそう訊ねる。
フェイトは全力で飛行しつつレヴィに振り向くことなく、焦ってい
る原因である砲撃について説明する。

「次元跳躍砲撃、しかも魔力結合分断っていう効果があるの!」

直撃でXV級艦の駆動炉を再起不能にする！ 私たち魔導師が受け
たらリンカーコアなんて……！」

レヴィの顔色が青褪める。

フエイトの言う通り艦を落とすほどの砲撃を受ければただでは済ま
ないことくらい理解出来るからだ。

レヴィは「急ぎましょう！」と飛行速度をさらに上げた。

「くそッ！
祝福なる祈願者あああああ！！！」

シャルロツテと祝福なる祈願者の一撃で報復せし復讐者の右腕のゼ
ルフアーダ武装は解けていた。
彼は怒号を上げ地面を殴りつけた。

「何をしている……。早くこの場から離れるぞ……。」

報復せし復讐者の左腕に支えられた報復せし復讐者が告げる。

報復せし復讐者の右腕は「何故そう冷静でいられるのかッ!?」と
八つ当たりのように叫ぶ。

報復せし復讐者の左腕は「今はここから離れるのが最優先です」と
諭すように告げる。

「あの女は味方をも巻き添えにしたということで誠実なる賢者に肅
清されるだろう。」

「ただ憎くとも俺たちは手が出せない以上はそれで良しとしなけ
ればならない、分かるな」

「っ！ 随分と優しくなつたんですねクルーガー三尉・・・！
俺は今すぐにもあの祝福おんななる祈願者を八つ裂きにしたいというの
にッ！」

お前もだアルテツツア空曹！ 闇の書暴走で死んだお前も何で冷静
でいられるー！！」

「エルグランド空曹長、そんなんじゃまた誠実サフイーロなる賢者に肅清され
ますよ」

完全に怒り心頭で暴走している報復せし復讐者の右腕は報復せし復
讐者の左腕スキエルドのその言葉を聞いて彼に掴みかかる。

「エルグランド、今はこの場から離脱することを考える。砲撃が来
るまで一分を切っているぞ」

報復せし復讐者の言葉に報復せし復讐者の右腕は報復せし復讐者の
左腕カルドの胸倉を掴んでいた手を離し、

「必ず貴様らの息の根を止めてやる・・・ヴォルケンリツタアア
アアアーーーーー！！！」

彼は空に咆哮しその姿を消した。報復せし復讐者の右腕カルド・テレチヨに続き二人
もまたその姿を消した。

その三人のやり取りを見ていた陽気グラナードなる勝者。

「嵐の前触れか」と呟いてから彼もその姿を消した。

そしてその数十秒後、“オムニシエンス”の“オラシオン・ハルデ
イン”にそびえ立つ銀色の塔より放たれた次元跳躍砲撃が、ネベラ

山に建設されていた数基の基地をピンポイントで消滅させた。

時空管理局本局

廊下にたむろしていた管理局員たちの視線がある一人の女性に集中する。

視線を一手に受ける女性シャルロツテは大して気にも留めずに、なのはたち“特務六課”に囲まれ廊下を歩く。

『あの、何かすごい視線を感じるんですが……』

『受けているのはあたしたちじゃなくてシャルさんだよエリオ』

『近くに居るわたしたちにも視線が……突き刺さって』

『これくらい我慢しなさい三人とも。シャルさんがまたその姿を現したんだから、これからもっとすごいことになるわよ、きっと』

シャルロツテの後方を歩くスバルたちは、シャルロツテに向けられる視線に巻き込まれ音を上げていた。

そんな彼女たちの耳には「ねえ、シャルロツテさんじゃ」だとか「5年ぶりに見たけど変わらず可愛い」だとか「出身世界に帰ったんじゃない」だとか「ほら、ルシリオンさんが例のテロリストに居るって噂」だとか、いろいろとヒソヒソ話が届く。

『やっぱり未だに人気なんだねシャルさん』

『ファンクラブがあったって言うくらいだしね』

『シャルさんは僕たちの味方なんでしょうか・・・？』

『それはこれから分かることよ。今は八神部隊長たちに任せましょ』

四人の念話での話はそれで終わり、あとは黙って六課の会議室へと歩いた。

自分たちの事を憶えていないというシャルロッテの細い背中を見つめながら。

会議室で、はやてとなのはとフェイト、その三人に向かい合うように一人座るシャルロッテ。

シグナムたちも同伴しており、空いている席へと各々座っている。そしてこの場で唯一の民間協力者であるレヴィは、先程からシャルロッテを無言で見詰めていた。

「それでシャルロッテさん。次元船での話の続きといきたいんですけど、ええか？」

はやてたちは、次元船内でシャルロッテから「シャルちゃんなんて馴れ馴れしいから、少し考えてくれるかしら」と言われたために、堅苦しくシャルロッテさんと呼ぶようにしていた。

「ええ、八神はやて。こちらとしても訊きたい事があるから、ギブ

アンドテイクということで」

その細く綺麗な脚を組んで、シャルロツテははやてをフルネームで呼ぶ。

これもまたシャルロツテからの提案だった。

慣れ合うつもりはないとのことと、これからはなのはたちをフルネームで呼ぶということだった。

その提案を聞いた時、なのはたちは本当に辛そうな表情をしていた。はやては「それならそちらからどうぞ」とシャルロツテに話を促した。

「なら御言葉に甘えて。あなたたち、あいつらの情報はどこまで掘んでいるの？」

「あいつら、とはテストメントの事でええんかな？」

はやての“テストメント”という単語に反応するシャルロツテ。

「シャルロツテさん。界律の守護神のテストメントじゃないんですよね、彼らは？」

「何故界律の守護神の事を・・・」

「憶えていないのなら話します。私たちはシャルロツテさんとルシルと5年前まで一緒に過ごしていました。

そして5年前の4月12日。シャルロツテさんとルシルは、テルミナスというアポリュオンと戦って、神意の玉座に還った・・・」

フェイトの話の内容に、シャルロツテは「そう」とだけ答えた。

そして、

「終極テルミナスって、もしかしてクスクスって笑い方する15歳くらいの女の子だった？」

シャルロツテは終極テルミナス独特の笑い方を真似ながらそうなのはたちに訊いた。

なのは「うん、そうです」と、絶対の存在だった終極テルミナスを思い出し身震いしながら答えた。

「あー、それ先代の事だ。確かに先代の終極テルミナスは私とルシリオン、マリアの三柱で斃した。

うんうん、そうそう、確かに斃したわ、3千年以上も前に、ね」

シャルロツテの口から出てきた3千年前という単語に、なのはたちは「え？」と抜けた声を出した。

六課メンバーでもさらに長く生きているシグナムたち守護騎士ですら言葉を失っていた。

レヴィは世界と“界律テスタメントの守護神”の間に時間のズレがあるのは知っていた為さほど驚いてはいなかった。

「3千年前って、そんな・・・あれからまだ5年しか」

「この世界では、でしょ。私たちの時間では、終極テルミナス、先代のヤツを斃してから3千年以上経過している。

・・・なるほど、ようやく解った。何故あなたたちが私の事を知っていたのか」

シャルロツテは謎が解けスッキリしたとでも言つように「うん〜〜」と背筋を伸ばした。

そして「ふう」と一息ついて、再び口を開く。

「これであなたたちも解つたでしょ、あなたたちの事を私が憶えていないのも無理ないわ。」

テルミナス
先代終極撃破からここ3千年、アポリュオン絶対殲滅対象との戦争が激化するわ、くだらない人殺しの契約が延々と来るわで大変だったから」

シャルロッテから語られた話の内容に啞然とするしかない六課メンバー。

この世界では5年前の話だったのに、シャルロッテたちにしてみれば3千年以上前も過去ということにただただ啞然とするしかなかった。

「で、さっきの続き。よりもよってテストメントを名乗る愚か者の情報、教えてほしいんだけど?」

「・・・それは、捜査情報やから教える事は出来ん」

はやては少し考える素振りをし、かつての親友シャルロッテの言葉を断つた。

シャルロッテは「そう、でも」と前置きし、

「あなたたちはかつての私と過ごしたのなら理解できるでしょ、今のあなたたちではあいつらには敵わない」

と、“特務六課”の“テストメント”に対する戦力不足を口にした。今回無事に戻れたのはシャルロッテとレヴィの神秘を扱える者が居たからこそ。

それが解っているからこそ、はやてたちは口を閉じざるを得なかった。

「だから、私があいつらを殲滅する、あなたたちの代わりにね。その為の情報が必要というわけよ。どう？ あなたたちは黙って観ていればいいだけ。決して悪くない話だと思うのだけど？」

シャルロツテの提案に絶句する一同。
なのはが立ち上がって、

「そんなのダメ！ シャルちゃ シャルロツテさん一人じゃ・・・！
だって、今日だってカルド隊との戦いで危なかった時があったじゃない！！」

脚を組んだまま座るシャルロツテに詰め寄る。

「高町なのは。それは私がこの世界に訪れて、シャルロツテという存在を調整出来ないまま戦ったからよ。
しばらくこの世界で過ごせば調整は終わり、そしてあいつらを殲滅出来るだけの力を手に入れる事が出来る」

「っ！ でも、それでも・・・！」

「なのは・・・。シャルロツテさん、その調整というのが終わるまで時間をくれませんか？」

フェイトが立ち上がり、隣に立つなのはを見上げるシャルロツテにそう提案する。

はやては「そやな」とフェイトに賛成し、

「シャルロツテさん、少し考える時間を、答えを出せる時間をくれ

「ませんか？」

「はやても立ち上がって、シャルロツテにそう提案した。」

「……ええ、構わないわ。それじゃあ私はそれまでどうしようか……？」

シャルロツテは二人の提案を呑み、自身の存在の調整完了とはやてたちの答えが出るまでの時間をどう過ごすか考える。するとなのはが、

「あの、良かったら私の部屋で……」

と少し遠慮気味にシャルロツテへ提案した。

それからはやてに「それでもいいかな？ はやてちゃん」と許可を取ろうとした。

「まあええやる。とその前にシャルロツテさん、最後に一つええやるか？」

シャルロツテは「どうぞ」とはやての質問を促す。

「テストメントとは、ルシル君とはホンマに仲間とちゃうんやね？」

「今回のルシリオンとは仲間じゃないわ。今の彼は……まあその話はどうでもいいわ」

（それが一番聞きたいことなのに……）

シャルロツテの誠実なる賢者ルシリオンがどうでもいい発言に、フェイトが人

知れずガクリと肩を落とした。

「そつか。信じるからな」

「ええ、信じてもらって損はないわ、絶対に」

シャルロツテは立ち上がり、右手を胸に添えてハッキリと告げた。
信じてくれていい、と。

はやてはそれに頷き、

「うん。それじゃしばらく一緒するんやから、ここに居るメンバーの紹介をするな」

とシャルロツテに六課メンバーを一人一人紹介する。

六課メンバーを紹介されている間、シャルロツテはしっかりとそれぞれの顔と見ていた。

誰にも知られないようにどこか懐かしげな表情をしながら。

“特務六課”のメンバー紹介が終わり解散した後、シャルロツテを“ヴォルフラム”の居住区に案内しているのは、休憩に入っているスバルとティアナとエリオとキャロとレヴィを除くメンバーは、オフィスへと戻ってきてから各々の席でそれぞれ思考に耽っていた。

はやては今回のオーレリアでの戦闘、そしてアムストル社の“テストメント”関与の疑いに関する報告書を作成しつつ、度々頼杖をつきながらシグナムたちから聞いた祝福なる祈願者リインフォースの本心を何度も頭

の中で反復していた。

「テストメント」側から護る、という裏切りの危険行為を祝福リインフなる祈願者はしている。

それがはやてを嬉しく思わせ、また心配事の種だった。

バレればそれでどうなるか想像は硬くない。死、その一点だと思つとはやては身体の震えが止まらない。

(リインフォース、頼むから無茶だけはせんといて……)

「はやてちゃん。良かったですね、リインフォースがわたしたちと敵対する理由がわたしたちの事を想ってくれての事だったなんて」

「リイン……そやな。そやけど、やっぱり危ない事や。

無茶だけは絶対にせんでほしい。生きているからこそこの今の関係やからな」

リインフォース？の淹れてきたお茶を口に含みながら、はやては祝福リインフォースなる祈願者の事を想った。

フェイトもまた自分の席で思考に耽っている。

誠実ルシオンなる賢者の確かな現状を知るであろうシャルロッテですら自分たちの事を憶えていない。

しかも3千年という時間が経過していた事にもショックを受けていた。

シャルロッテがそうなら誠実ルシオンなる賢者もそうなのではないか、と。

3千年でどれだけ人は変わるだろうとフェイトは考えるが答えは出ない。

そこまで考えたところで「あれ？ ちょっと待って」と一人ゴチた。

（あれ？ 何で？ おかしい。今のシャルはやっぱりおかしい。もしルシルも3千年以上の時間を過ごしたなら、記憶書き換えとか関係なく元からシャル同様に忘れていないはず。でもルシルはヴィヴィオの事もレヴィの事も憶えていた。だったらシャルだって憶えているはずだ。だってあんなに強く約束したんだから、「絶対に忘れない」って）

急に立ち上がったフェイトにシグナムが「どうした」と訊ねた。フェイトはオフィスの出入り口に向かいながら「少し確かめたい事があるんだ」と答えて、「ヴォルフラム」へと歩を進めた。

「フェイトさんどうしたんだ？」

アギトが神妙な表情でフェイトが出ていったことに首を傾げた。シグナムはそれに「さあな。もしかすると私と同じ見解に至ったのやもしれん」とお茶を啜りながらそう答えた。すると隣のヴィータが「どういうことだよ？」と訊ねてきた。

「ふむ。お前のように頭に血が上っていたり、高町やテストアロツサのように冷静ではいられなかったからこそ見落とす物がある、ということだ」

「なんだよそれ？ もったいぶらずに教えるよ」

「あたしも知ってるえ。シグナム、どういうことなんだ？」

ヴィータとアギトに訊ねられたシグナムは、自分が立てた推測を話し始めた。

ここ休憩スペースでも思考に耽る五人が居た。

スバルは母敬虔なる諦観者クイントについて、ティアナは兄聡明なる勇者ティータについて。

“テストメント”の管理局改革が終わるまで何もしないで傍観している、という言葉。

そして、それでも向かってくるのなら戦うつもりで来い、という言葉。

言われた通りに待つのが正しいのか。それとも戦っても止めるのが正しいのか。

それが二人を悩ましていた。

そんな二人から少し離れた位置のソファに腰掛けるエリオとキャロとレヴィの三人。

「スバルさんとティアナさんもそうだけど、なのはさんたちも辛いことばかり・・・」

キャロが「わたしたちは何か出来ないのかな・・・」と沈んだ表情で両拳を握りしめる。

キャロもそうだが、エリオもまた過去の知人が“テストメント”には居ない。

だからこそ辛い思いを共有できないのだ。それが自分たちを無力と思わせる事になっていた。

「お？ エリオとキャロじゃん。こんちにい」

休憩スペースに入ってきたのはセレス・カローラー佐。

カルド・デレチヨ
報復せし復讐者の右腕によって撃墜されてからは自宅療養していた。

「あ、カローラー佐。こんにちは」

「こんにちはは、カローラー佐」

「うんうん っと、そっちの子はレヴィちゃんだったか？ こんにちは
ちい」

「あ、はい、レヴィ・アルピーノです。（この人……まさかね）

「おー、はじめまして、セレス・カローラー佐です。よろしく！」

挨拶もそこそこにして、セレスは自販機で清涼飲料水を購入して再びエリオたちの元に来た。

「カローラー佐、もうお身体は良いんですか？」

「ん？ おお！ もう大丈夫！ 完全復活！つ て言いたいんだけどねえ〜」

キヤロに身体の心配をされたセレスは元気を示すように両腕を振り回す。

が、すぐに灰色のセミロングの前髪を掻き上げながら「はあ」と盛大にため息をついた。

その様子に「どうしたんですか？」とエリオが訊ねた。

「ちょっと身体の調子が悪くなってね。あ、撃墜のダメージじゃないから。」

だから少しの間長期休暇を取ってきたんだ」

そう言つて胸に右手をそつと添えた。
絶句するエリオとキヤロ。レヴィだけはセレスに気づかれないうちに彼女の身体を上から下へと見回す。

「だからあたしの特務五課は別の隊長を据える事になつちゃつてねえ。

ま、レジスタンスはテストメントと合流、というか組み込まれてるから、レジスタンス対策の五課ははやての六課に協力することになると思つよ」

セレスは「ぷはあっ」と一気に飲料水を飲み干し、

「それじゃあ行くね」

と手を振つて、休憩スペースを出たところでフェイトと鉢合わせ、ぶつかりそうになる。

その瞬間、セレスの姿がブレ、フェイトの背後に移動していた。レヴィの目がすうっと細まる。

「ごめんセレス！　というかセレス！？　いつ現場復帰してたの！？」

「ん、まず謝るのはグッド。で、復帰したのは今日で30分前、だけどすぐに長期休暇。

でもどうしたの、そんなに急いで。結構危ないよ。

まあ男共は強く美しいフェイト執務官と廊下の突き当たりで衝突、嗚呼嬉し恥ずかし恋に発展、みたいなの？」

両手を組んで祈るようなポーズを取ったセレスがそんな事を口にした。

「意味が解らないんだけど……。っとシャルに訊きたい事があって急いでたんだ！」

セレスの古い展開の話にフェイトは少し呆れ、すぐに急いでいた理由をセレスに教える。

セレスの片眉がピクリと動く。

「シャルって、あのシャルロット？ 何？ シャルってば出身世界に帰ったんじゃないかってっけ？」

そんでルシルと一緒に実家の事業を継いだとか何とかって話じゃん」

「え？ あ、それは……。そうんだけど」

「カローラ一佐、噂聞いてますよね。ルシルさんがテストメント側に居るって。

あれって本当なんです。しかも操られている上に記憶まで書き換えられているようなんです」

「マジで！？ うわあ、それだったらシャルも黙ってないというわけか」

セレスはエリオの話に「なるほどね〜」と納得したように何度も頷く。

「まあ、あたしはここでリタイアだけど、自宅から応援してるから」

「まったねえ〜」と手を振りながら、本当に調子が悪いのか解らないほど元気な様子でフェイトたちの視界から消えていった。

「っと、私もシャルのところに行かないと・・・!」

フェイトが自分の目的を思い出してハツとし、「ヴォルフラム」に向かおうとする。

そんなフェイトにレヴィが「わたしも一緒に行っていいですか？」と訊ねた。

「え？ あ、うん。いいよ、一緒に行こう!」

「はい!」

“ヴォルフラム”の居住区に用意されたなのはの部屋に、部屋の主であるなのはと居候となるシャルロツテの二人が居た。

「あ、そうだ。シャルロツテさん、これ・・・」

なのはが右手の中指にはめていた指環をそつと外し、シャルロツテへ差し出した。

シャルロツテは「私、そつちの気は無いんだけど」と若干引き気味で後ずさった。

「ッ！ ち、違うよ！ そつじゃなくて！ コレは元々シャルロツテさんのものだから!」

なのは頬を紅潮させながら怒鳴るように反論。

シャルロッテは「冗談だから本気にしない」と言って、デバイス「トロイメライ」の指環を受け取った。

「少し待っててください。何か飲み物を持って来ますから」

と言って、なのははシャルロッテを残して部屋を後にした。

「はあ〜（シャルちゃんとまた逢えたのは嬉しいけど、また始めから仲良くなるしかないのかなあ）・・・はあ〜〜」

自室を後にしたなのはは肩を落としながらため息を何度もついた。

「あ、何飲むか聞いておいた方が良かな・・・」

そう思ったたなのはは来た道を戻り自室の前へと戻ってきた。

そして扉が音もなく開き、なのははシャルロッテに声をかけようとした。が、声が出る事はなかった。

「久しぶりトロイメライ。元気だった？ ていうかデバイスに元気だった、なんておかしいか」

なのはは絶句し両手で口を覆う。

シャルロッテは確かに指環に向けて「トロイメライ」と名を呼んだからだ。

何せなのははシャルロッテに指環デバイスの名前“トロイメライ”を教えない。

シャルロッテは、なのはが戻ってきた事に気づかないのか、“トロイメライ”との会話を続ける。

我らの事をお忘れではなかったのですかマイスター

「……忘れるわけないよ。だってなのはたちは私の親友だよ。それに、別れる前に約束したんだ。絶対に忘れない、って。

だから何十何百何千何万とどれだけ時間が経とうと私はなのはたちを忘れない……そう、絶対に」

では何故、御親友の方々の事を忘れていたフリをしていたのですか？

「何か怒ってない？」

答えてくださいマイスター

「だって、今回はすぐに別れる事になるんだよ。

そんなの辛いんだよ私は。だったら忘れたフリして他人のまま、一人で今回の事件を解決しようとした」

シャルロッテは俯きながらそう“トロイメライ”に答えた。

だそうですよ、なのは嬢

「ッ!？」

“トロイメライ”のその言葉で、ようやくシャルロッテはなのはの存在に気がついた。

振り向いた彼女の視線の先、なのはがポロポロ涙を零しながらなら「シャル……ちゃん……」と嗚咽混じりに名前を呼んだ。

そしてフラフラとした足取りでシャルロッテに歩み寄っていく。

「なのは……。トロイメライ、後で憶えてなさいよ。えっと……久しぶり。元気そうで良かった、なのは」

シャルロットが気まずそうな微笑を浮かべながら、親愛を込めて「なのは」と呼んだ。

なのはの抑えていた感情が溢れだす。

「シャルちゃん！ シャルちゃん！ シャルちゃん！ シャルちゃん！ シャルちゃん！」

シャルロットへと駆けだし、その勢いそのまま抱きついた。

「のわっ！」とシャルロットはなのはの勢いの付いた抱き着きを受け止めきれずに転倒した。

「痛ったあゝ。まあ、なのは。少し見ないうちに泣き虫になったんじゃない？」

「シャルちゃんの所為だからね！ あんな嘘をついて、すごく悲しかった！」

「すごく辛かった！　すごく……すごく……！」

シャルロットは胸の上で泣き続けるなのはの頭を優しく撫で続ける。するとなのはも落ち着きを取り戻してきて、「シャルちゃんのバカ」と呟いてシャルロットの上から退いた。

「ごめん。ホントにごめんね。私一人の感情で、なのはたち……なのはを苦しめた」

目の前に座り込むなのはの額に自分の額をコツンと合わせ、嘘をつ

いたことを心の底からシャルロッテは謝罪した。
なのはの涙に濡れた瞳を見詰め、シャルロッテはもう一度「ごめんね」と謝った。

「それじゃあ、これから一緒に居られるの？ たとえ短い時間だとしても」

「嘘がバレた以上はそうするしかないでしょ」

なのはとシャルロッテは笑みを浮かべ、もう一度抱き締め合った。親友の温もりを感じるために。嘘ではないことを確かめるために。そんな二人を、部屋の外から見つめる二人。フェイトとレヴィだ。

シャルロッテの視線が廊下に向いている事に気づいたなのはは、シャルロッテ同様扉、廊下の方へと視線を移した。

そこには少し頬を赤らめたフェイトとレヴィがポツンと立っていた。

「すみません、お邪魔しました。ごゆつくりと続きをどうぞ。

フェイトさん、お邪魔してはいけないので、帰りましょう」

レヴィがなのはとシャルロッテから視線を逸らしつつそう言った。

フェイトの袖を引っ張って、もう一度「お邪魔虫は退散しましょう」と言った。

なのはとシャルロッテはどういうことか解らず、今の自分たちの現状を見た。

4：瞳は涙に潤んで、頬を赤くした少し制服が乱れ（転倒時）ているなのは。

3：そんなのはと同様に衣服に少し乱れ（転倒&抱き着き攻撃時）のあるシャルロット。

2：そんな二人が静かで誰も居ない部屋（なのはの部屋だから当然）で抱き締め合っている。

1：そして二人の顔はとても近い。すごく近い。それはもう近い。どうしようもなく近い。

0：それはつまり、見ようによつては……

そこまで思考が行き着いたなのはの顔が一気に赤く、それは真っ赤になる。

対するシャルロットは「あははは」と笑い声を漏らしていた。

「なのは。その、恋愛は人それぞれだから。私は気にしないよ?」

「ご、誤解だよおおおおおおお!!!!!!」

なのはは視界から消えていくフェイトとレヴィを追いかけようとした。

しかしその時、背後から嗚咽が聞こえたことでなのはは追いかけることなくシャルロットへと振り向いた。

そしてなのはの視界に映ったのは、両の手の甲で涙の零れる目を擦るシャルロットだった。

「シャルちゃん……?」

「また逢えて良かったよお……! なのは! なのは! なのはあ!」

今度はシャルロッテが子供のよう泣き出した。
なのは、先程のシャルロッテのように優しき彼女を抱き締め頭を
撫で続けた。

「シャルちゃんだって、泣き虫だよ……」

「やっぱりシャルは忘れていたフリをしていたんだね」

“ヴォルフラム”から“特務六課”のオフィスへと戻る廊下を歩き
ながらフェイトがそう口にした。
レヴィも「そうですね」と返しながらフェイトの隣を歩く。

「これでルシリオンの事も分かりますね」

「あ、うん。……たぶんこの事件の解決は早いよ。
シャルが私たちにもたらしめてくれる情報は、きっとテストメント打
倒に必要なものばかりのはずだから」

「……魔族、か」

オーレリアでシャルロッテが口にした“魔族”という単語をレヴィ
も口にした。

「 というわけで、ごめんなさい。みんなの事を忘れていたと嘘ついてました」

“ 特務六課 ” の前線メンバーが集まった会議室の前で、シャルロツテはメンバー全員に頭を下げた。

彼女ははやくに全てを説明し、嘘をついていた事を謝る機会が欲しいと頼んだのだ。

「 つたく、人騒がせだよなお前。どれだけあたしらを悲しませりやいいんだよ」

ヴィータは頬杖をつき、シャルロツテとは別の場所を見ながら不機嫌そうにそう口にした。

「 ごめん」

「 セインテストはしゃあねえとしても、お前はちゃんと憶えていたんだ。」

それなのに嘘をつくなんて信じらんねえ」

シャルロツテの謝罪する姿も見ないでヴィータは続ける。

「 えつとなヴィータ。シャルちゃんも反省しとるし、な？」

「 甘いよはやく。シャルロツテはあたしらの約束を破ろうとしたんだ」

“ 絶対に忘れない ”。その約束はヴィータにとっても大切なものだ

った。

だからこそ許せなかった。嘘をつかれた事が。理由は理解できたとしても、それでも許せなかった。

「フライハイトもこうして頭を下げた謝っているんだ。許してやれ」

「そうよヴィータちゃん。フライハイトちゃんだって嘘をつきたくてついたんじゃないんだから」

「フライハイトの気持ちも察してやれ、ヴィータ」

「そうですよヴィータちゃん。シャルさんだって辛かったんですよきつと」

「そうだぜ姉御。そろそろ許してやってもいいんじゃないか？」

八神家一同からの説得にもヴィータはムスツとして答えなかった。悪かったと思いつながら、ヴィータのその態度に少しカチンと来たシャルロッテが、

「ごめんって謝ってるじゃん。このチヴィータ」

とボソリと呟いた。

普通は聞こえない音量だったが、会議室が静まりかえっていた事もあり全員にその呟きが聞こえていた。もちろんヴィータにもだ。

「あ？ 今なんつった？」

ようやくシャルロッテを見、そして先程以上の不機嫌さを以ってそ

う声を出した。

しかし今度はシャルロツテが無視を決め込む。

「なあ？ 今、あたしの事をチヴィータつつたろ」

「しつかり聞こえてんじゃん。チヴィータチヴィータチヴィータ」

チヴィータと連呼した後、頭の後ろで腕を組み、口笛を吹くシャルロツテ。

「何であたしがチヴィータなんだ？ あ？」

「だって、八神家の末娘のリインに身長超されてるじゃん。プウー」

右手で口を覆いつつ可笑しさのあまりに嘔き出しました、と言った風なポーズを取るシャルロツテ。

シャルロツテのその態度に、ヴィータの怒りのボルテージが最高潮に達した。

「上等だコラッ！！ グラーファイゼンの頑固な汚れにしてやる！！」

待機状態の“グラーファイゼン”を胸元から取り出すヴィータ。

椅子に右足を掛けたまま“グラーファイゼン”を起動して、シャルロツテにヘッドを突きつける。

シャルロツテも右の中指にはめた“トロイメライ”を起動させようとする。

「やってやるうじゃない！ トロイメライ！ 久々に私に騎士甲冑を！」

了解です。特別モデルの騎士甲冑を起動します

“トロイメライ”の言葉に、シャルロットは「へ？ 特別？」と首を傾げ、レヴィが「あ」とやっっちゃったと言った風に右手で顔を覆った。

そしてシャルロッテを覆い隠す真紅の閃光が会議室をも照らし出す。メンバーは眩しさから目を逸らした。真紅の閃光が晴れたと同時に聞こえてくる声。

「助け求める声あればすぐさま直行？ どんなお悩みもドンと来

おい

愛刀トロイメライでスパッと（斬り殺して）見事に解決する謎の美少女

その名は、美少女魔法剣士リリカルシャルロッテ？ ここに推・参
！！」

ドオーーン！！と効果音と共に、赤紫色のゴスロリ（ウサ耳&ウサ尾付）に身を包んだシャルロッテ（ポーズ付き&ものすごい笑顔）の周辺にいくつもの小さな花火が咲く。

その光景に絶句する六課メンバー。ヴィータもそのシャルロッテの姿に怒りを忘れ呆然としている。

ただ一人レヴィだけが両手で顔を覆ったまま人知れず必死に笑いを堪えていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

会議室に痛い静寂が流れる。

そして、

特別モデルの騎士甲冑の生成完了

と“トロイメライ”が告げた。

その瞬間、シャルロツテが「なんじゃこりゃあああああああ
！！！！」と咆えた。

「何、今の恥ずかしいセリフ！？ ていうか誰が騎士甲冑を変更し
やがった！？

ていうか美少女魔法剣士って痛すぎ！！ ていうかゴスロリだけで
も十分だっというのに！！」

会議室を包んでいた静寂が六課メンバーの笑い声で吹き飛んでいく。
頭に生えた白いウサ耳を取ろうとするシャルロツテの顔が真っ赤に
なっていく。

「なのは！ これはどういうこと！？ 嘘ついてた私が言うのも何
だけど、親友の証をいじったのはなのは！？」

「親友の証、っていうよりは形見じゃね」

「グイータ、シャアラツツツツツプッ！」

「ち、違うよ！ 私は知らないよ！」

ものすごい剣幕のシャルロッテに、なのははたじろぎながらも何も知らないことを告げる。

「それじゃあ誰！？ マリエルさんとか！？」とシャルロッテが咆える。

「あ、そう言えば、レヴィとルーテシアが一度トロイメライを貸してくれて事があつたよ」

なのはのその言葉にシャルロッテがグルリと首を回して、尚も笑いを堪えているレヴィを見た。

「お前かあああああああ！！！！」

「っ！ は、話を聞いてシャルロッテ！ こ、これには訳が」

「問答無用じゃあああああ！！！！」

“トロイメライ”を振り回し、逃げるレヴィを追うゴスロリシャルロッテ。

「わあああああ！ アカンよシャルちゃん！ 暴れたらアカン！！」

「フライハイトが戻ってきたらすぐこの騒ぎか」

「でもこの感じ、わたしは好きですよ」

「あはは・・・あたしもこの騒ぎは好きな方かな」

「あの、巻き込まれる前に逃げた方が・・・？」

「止める方が良いんじゃないかしら。被害が大きくなる前に、ね」

その後、空いている訓練場へと強制転送されたシャルロットとレヴィは派手にバトったとき。

ウソつきな仮面 く Mask of lie く (後書き)

おおおおお！ 前回の予告通りのところまでいきませんでした！
すいません！ 思っていた以上に文字数が増えに増え、ここで切ら
してもらったことにしました。

テストメントの真実 〈Incarnation of desire〉

11月26日 PM17:00

テストメント本拠地オムニシエンス 本部“エヘモニアの天柱”

第35管理世界オーレリアから帰還した幹部達が、“エヘモニアの天柱”のエントランスホールでたむろしていた。

そして怒声がホールを蹂躪する。その声の主は報復せし復讐者隊の三人だ。

彼らの怒声が向けられているのは誠実なる賢者と祝福なる祈願者だ。

「どついうことだ誠実なる賢者！ 何故祝福なる祈願者を肅清しない！」

「祝福なる祈願者のあの一撃に巻き込まれた俺達は撃墜しかけたのだぞ！」

「それなのに祝福なる祈願者に対してお咎め無し、というのは納得できない！！」

祝福なる祈願者を背後に控えさせている誠実なる賢者はため息をついて、彼女を罰しない理由を怒鳴り散らす三人に告げる。

「デアボリック・エミッション。お前たちもどついうモノかは知っていたはずだ。

回避出来ずに巻き込まれたのはお前たちの失態だ。ゆえに彼女を肅清するに値しない」

「まさか俺達をも巻き込むなどと誰も思わないだろうがッ!」

ルシリオン
誠実なる賢者の言葉にさらに激昂する報復せし復讐者の右腕。
カルド・テレチョ
最早掴みかからんとする彼に、誠実なる賢者は話を続ける。

「それはお前たちの気の持ちようだ。時にはそれくらいの攻撃を必要とするだろう。」

それがオーレリアでの一件だった、ということだ。
とはいえ、特務六課の魔導師を落とすことが出来ず、味方だけを落としたそれは褒められたものではないがな」

「そ、そうだ! あれ程の一撃を放っておきながら祝福なる祈願者は六課の魔導師の誰一人として被害を与えていない!!」

こればかりは許せるものじゃない! 誠実なる賢者! 粛清を!!」

ラインフォース
祝福なる祈願者に集中する幹部達の視線。

彼女は先程から一切の動きもせず佇み、言い逃れもしようとせず
その視線を受け入れている。

誠実なる賢者はそんな彼女の全てを受け入れるという姿勢に、

「最初の決定通り祝福なる祈願者に粛清はせず嚴重注意とする」

ここに戻ってくる前に告げた祝福なる祈願者への罰を再び言い渡した。

この場に居る幹部達が一齐に誠実なる賢者に振り向き、当事者である祝福なる祈願者ですら顔を上げて誠実なる賢者を見上げた。
もちろんそれに納得することが出来ない報復せし復讐者隊。

「陽気なる勝者! お前も被害を被っただろう! 何か言ってやれ!」

「は？ オレ？ まあ・・・なんだ。まあいいんじゃない？ それでこうして無事なわけだしさ」

急に話を振られた陽気グラナードなる勝者だったが、面倒な上過ぎたこととしてぶつきらばうに応えた。

その陽気グラナードなる勝者の返答に、フードの中に隠れた報復せし復讐者隊カルド三人の顔が啞然となる。

その時、エントランスにカツカツと足音が響いた。

「一体こんなところで何をしていますか？」

「マスター！」 「ボス・・・！」 「マスター・至高ハーデなる卓絶者」

突如その姿を現した至高ハーデなる卓絶者に向け、幹部達がそれぞれの呼び方ハーデで至高なる卓絶者を呼んだ。

「どうしたのですか、何か問題でも・・・？」

至高ハーデなる卓絶者の顔を覆い隠すフードの中から鈴のような美しい声が漏れる。

その声に冷静にならざるを得ない報復せし復讐者隊カルドは「いいえ」と答え、最上階へ続く直通転送装置に入っていた。

「いいえいいえ。何もありませんよボス。お帰りなさい」

陽気グラナードなる勝者が仰々しく頭を下げた後、至高ハーデなる卓絶者の行く手から退いた。

「御帰りなさいませ、マスター」

誠実なる賢者が頭を下げ、そして至高なる卓絶者の右斜め後方へと移動する。

至高なる卓絶者は「ただいま帰りました。オーレリアでの一件の報告を後でお願います」とこの場に居る幹部たちを見回した。

それに幹部達は「了解」と答え、転送装置へ入っていく至高なる卓絶者に続いていく。

【・・・誠実なる賢者、何故私を庇うような事をした。

あれでは報復せし復讐者隊から憎まれるかもしれない・・・】

そんな中、祝福なる祈願者が誠実なる賢者へとそう訊ねる。

【庇う？ これは当然の結論だと私は思っている。

君の攻撃によって、被害を被ったのはこちらだけ。これは確かに問題だ。

しかし回避しきれなかった彼らにも問題がある】

誠実なる賢者は逆位置に立つ祝福なる祈願者を流し目で見ながらそう返し、さらに続けていく。

【デアボリック・エミッションの効果、それを私たちは知っていた。

六課の魔導師も至近に居たにもかかわらず回避しきっている。

ならば報復せし復讐者隊と陽気なる勝者にも可能なはずだ。

六課との戦闘でダメージを負ってしまったようだ、それでも油断していなければ回避できた、と私は判断している】

【・・・そうか・・・。ありがとう、感謝する】

小さく頭を下げて礼を述べた祝福なる祈願者。

【礼を言われる程の事はしていないのだが……。受け取っておく
うか】

ルシオン 誠実なる賢者は素っラインフォース気なく祝福なる祈願者の感謝の言葉を受け取っ
た。

同日 PM 17:48 時空管理局本局

「ああ~~~~んもお~~~~！ や~~~~ら~~~~れ~~~~た~~~~！
何なのよおあれ~~~~！！ く~~~~や~~~~し~~~~い~~~~！！」

暴走して会議室を破壊しないようの処置として訓練場に強制転移さ
れたシャルロッテとレヴィ。

その二人のバトル後、再び会議室へと向かう廊下を歩くシャルロッ
テが悔しげに声を荒げていた。

当然局員たちの視線が一気にシャルロッテへと集中する。

「えつとシャルちゃん。悔しいのは分かるけど、もう少し声のボリ
ュームを下げて、お願い」

そんなシャルロッテを宥めるのがなのはだ。
が、しかしどこか彼女は嬉しそうな表情をしている。

「何だよシャルロッテ。レヴィに後れ取ってんじゃねえかよ」

ヴィータが頭の後ろで腕を組みながら面白いものを見たときと笑っている。

「むう」。昔は転移 砲撃 転移 砲撃の繰り返しだったのに、何さっきのアレ。

「どんだけ体育会系に進化？ 拳法使い？ 動きも先読みも凄いの一言だよ。」

「しかも一人前に美少女になってるし、性格も変わり過ぎだしさあ・・・笑える方向に（笑）」

エリオとキャロに挟まれ歩いている成長したレヴィを見ながら、シャルロッテは先程の戦いを思い出していた。

調整を終えていないことで身体が鈍い、それを抜きにしてもレヴィは強かったと思う。

捌くのがやっとな連撃、と同時に放たれる砲撃。

二発のクリーンヒットを貰ったことがシャルロッテの心を揺さぶった。

「でも、ま」

そして幸せそうに笑みを浮かべてエリオたちと話すレヴィを見て、

「あの子、あんなに可愛い笑顔が出来るようになったんだね・・・。ルシルも喜ぶだろうねえ」

そう彼女も嬉しそうに笑みを浮かべた。

フェイトが「うん・・・そうだね」と寂しそうに頷いた。

「それでなシャルちゃん。会議室に戻ったら・・・」

はやてが後ろからシャルロツテに耳打ちする。

“テストメント”に関する情報を今すぐにも聞きたいはやては神妙な面持ちだ。

「あはは・・・ごめん、はやて。さっきの続きだね」

重要な話へと行く前にシャルロツテの暴走が起こり、先延ばしになっていた。

さすがに責任を感じているのか苦笑いしながら謝った。

そんな中、

「「シャル!!」」

廊下を移動するシグナムとザフィーラを除く六課メンバーの背後から、シャルロツテの愛称が呼ばれる。

一斉に背後へと振り返る六課メンバー。そこに居たのは、

「おお！ クロノとユーノ！ 久しぶり!!」

シャルロツテを呼んだのはクロノとユーノだった。

なのはとフェイトとはやてもそれぞれ彼ら二人の名を呼んだ。

クロノとユーノも軽く挨拶を交わす。

「なにになに？ 男二人が女の子一人捕まえてどうするの？」

シャルロツテはニコニコと意地悪そうな笑みを浮かべながら、クロノとユーノの元にスキップで近づいていく。

そんなシャルロツテに振り返りながら、「女の子って歳かよ」とヴイータは一人ツツコミを入れていた。

「うるさいあなあヴィータ婆ちゃん。永遠の21歳をなめんよ」とシャルロット。
もちろんヴィータも「婆ちゃんってなんだ!？」と背後からのシャルロットの言葉に勢いよく完全に振り返る。

「まあそんなことより、どうしたの二人して？」

「聞けよ!」

スバルたちに「まあまあ」と窘められている怒鳴り続けるヴィータ。

「だったらシグナムとシャルマルはどうなんだよ!？」

あたしより外見では歳いつてるシグナムとシャルマルは婆さん以上つてか!？」

とヴィータは咆え、とばつちりを受けたシャルマルは「ええええ!？」

ひどおゝい!」と泣き崩れた。

そんな外野を余所に、シャルロットはクロノとユーノと会話を続ける。

「どうしたの?じゃないよシャル。どうして君までこの世界に!？」

「どうしてって・・・それを今からはやてたちに話すんだけど・・・

」。

ユーノの問いに、はやてに振り向きつつ答えるシャルロット。

「良ければ僕たちも参加したいのだが・・・」。

『はやてからの報告で、管理局内部に裏切り者が居る可能性があるのは知っている。』

その為に僕とリンディ総括官のところまで情報を規制するにした』い
いだろうか?」

クロノの念話が六課メンバーとシャルロッテとレヴィに届く。

“特務六課”の部隊長であるはやてが「こちらからお願ひします」と頭を下げた。

場所は再び会議室に代わる。

「そんじゃ、私に訊きたい事を何でも訊いて」

と、シャルロッテが一人立ったまま六課メンバーとクロノとユーノを見回した。

そして最後にフェイトに視線を移し、そのまま視線を固定。

なのはたちも「??」とシャルロッテに続いてフェイトへと視線を移す。

「え? なに? 私が何?」

フェイトが集まる視線に耐えられずに動揺しだす。

「フェイトは訊きたい事あるんじゃない?」とシャルロッテがニヤニヤしながらそう訊ねる。

そこでフェイトとなのはたちはシャルロッテの言葉と視線の意味に気づいた。

「……じゃあテストメントの事、シャルの知ってる範囲で教えて」

「ルシルの事を訊いてくると思ったけど……。そう、大人だねフ

「エイト」

「ルシルの事もすぐに知りたい。だけどそれは私個人の想い、私情だから後にする」

シャルロットはフェイトの言葉に「アイツはホントに想われてるね」と呟いた。

そして、「はやて、テストメントに関する情報を、手にしている者は全て教えて」とはやてに頼む。

はやては「了解や」と答え、モニターを展開、今までの“テストメント”の映像音声などを映し出していく。

シャルロットは椅子に腰かけ、モニターを一心に見入る。

はやては、ここ最近の管理世界で問題になっている“レジスタンス”からの説明に入る。

「レジスタンス、かあ。5年で結構危うくなってきたね、この世界も」

説明を聞き終えたシャルロットがボソツと呟く。

そして本題たる“テストメント”の情報、まずはエルジアまでの映像を食い入るように見つめる。

「始まりは11月13日のミッドチルダ。

首都クラナガンを襲撃した散弾砲撃……。これはルシル君の仕業やと判明しとる。

そしてグラナードと名乗るテストメント幹部との初邂逅……」

「同日、カルナログ首都を襲撃したマルフィール隊……」

この時モルシル君の散弾砲が落ちてきた」

「同じく13日。本局を襲ったサファイアことルシル君と、ノーツエブエナことリインフォース」

シャルロットが「そう言えばリインフォース居たよね、オーレリアに」と顎に手を当てながら呟いた。

はやてたち八神家は何故リインフォースが居るのかを知りたい衝動に駆られたが、先程のフェイトの同様に私情ということで後に回す。

「翌日14日。再びミッドに現れたテストメント幹部・カルド隊とルシルとリインフォース。」

南部海上ではやてちゃんとリインガルシル君とリインフォースと交戦するけど……」

「リインフォースの事で動揺してもうてな。落とされてしもた」

「面目ないです」

はやてとリインフォース？が気まずそうに頭をかく。

「そして北部の廃棄都市区画でカルドとカルド・イスキエルド、カルド・デレチヨのカルド隊と交戦」

「しかし私とヴィータ、カローラは為すすべなく撃墜された」

「……みたいね。この場合は仕方ないよシグナム。」

相手が良くない。それでセレスは大丈夫だったの？」

「あ、さっき会いましたよカローラー佐と。少し休暇を取るそうです」

エリオが答える。シャルロツテは「無事ならいいや」と安堵のひと息をついた。

「その他の管理世界にもアグアマリナ、アマテイスタが出現。しかも二人の正体はスバルの母親クイント准陸尉と兄ティーター尉なんや」

スバルとティアナが俯く。

「テストメントの幹部達は、かつて管理局に勤めていて、そして殉職した局員みたいなんだ」

「実際、カルド隊の三人とグラナードは、オーレリアで認めとるしな」

なのはとはやての言葉と同時に映し出される幹部達の生前のプロフィール。

シャルロツテは「死者・・・亡霊・・・スヴァルト式かウトガルド式か」とブツブツと考え事をしている。

「これが私たち特務六課設立までの経緯や。

妙な技や武器、再誕神話に出てくる帆船スキーズブラズニル・・・。

シャルちゃん、ここまでで何かあるか・・・？」

「・・・まあ大体の事は理解したよ。なるほどね、敵の正体はそれなりに分かった」

はやての問いにシャルロツテがそう答え、この場に居る全員の雰囲気緊張感に染まる。

シャルロツテは「ふう」と一息ついてから、ゆっくりと口を開いた。

「まず敵に魔術師が居るのは確定。それもかなり厄介な最高位、王族クラスの魔術師がね。」

あとどこの魔術師なのかも大体判明。サファイア、ノーツエブエナ、カルド、マルフィール、アグアマリナ、アマテイスタ……。これは“連合統一言語”だね」

「連合統一言語……？」

ユーノが興味深そうに身を乗り出してシャルロツテに訊き返す。

「うん。大戦時に使われていた主要言語のひとつ。」

極凍世界ヨツン Heim に属する連合世界、特に主要世界においては共通の言語で、ヨツン Heim 語とよく言われてた。

幹部達の名前の意味は、サファイアはサファイア。カルドは薊。グラナードはガーネット。

ノーチエブエナは聖夜。マルフィールはアイボリー。アグアマリナはアクアマリン。

アマテイスタはアメジスト……。宝石や花の名前が付けられているわけだ」

シャルロツテの口から語られた情報に、やっぱりと言った風な表情をするのはたち。

「で、そいつらを纏めるのが主要連合世界の内のどれかの力を継いでいる魔術師。」

ヨツン Heim か、ヴァナ Heim か、ウトガルドか、スリュム Heim どの道一筋縄にはいかない強敵なのは間違いない」

シャルロッテは大きくやれやれと言った風にため息をついている。するとレヴィが「わたし、魔術師に遭った」と手を挙げた。

「ホント？ レヴィ、どんな魔法陣を使っていたか分かる？」

「正四角形の中に雪の結晶みたいのがあった。その四角形の四方の角からひし形の模様が伸びて、それを覆う三重の六角形……」

レヴィがその魔法陣の形をなぞるように指を宙で動かす。

シャルロッテは魔法陣の特徴を聞いただけで「あちゃあ……」と右手で顔を覆った。

そして「そいつ、凍結の魔術を使ったよね」とレヴィに確認を取り、レヴィは「うん」と即答した。

「ヨツン Heim 式の魔法陣だ。敵はニヴル Heim と同じ氷雪系のエキスパート、ヨツン Heim の魔術師。

これは手強いなあ……。どれだけ腕があるのかは分からないけど、苦戦しそう。」

「……ねえ、その魔法陣使ってる映像とかつてある？」

「あ、うん。待って……。その魔法陣を使うのは三人居るの。」

一人はルシル君。そしてレヴィと会った魔術師。そしてトパーシオって別の幹部」

なのはがそう答え、コンソールを操作する。

映し出されたのはエルジア紛争でなのはとフェイトを苦戦させた潔白なる聖者^{トパーシオ}。

そしてレヴィとヴィヴィオの元に現れた至高なる卓絶者^{ハーデ}だ。

潔白なる聖者が次々と放つ猛威を振るう氷雪系魔術に、なのはとフェイト以外の全員が絶句する。

至高なる卓絶者の広域凍結には、想像以上のモノだったことで開いた口が閉じないような状況だ。

「ヨツン Heim 術式の中でも高位の術式だね、これらは……。王族の血筋が残っていたか、それともまた別の……。ちよつとみんなに訊きたいんだけど、ここ最近何か変わったことない？ 妙な事件があった、とか。妙なロストロギアが発見された、とか」

「ロストロギアか何なのかは分からないけど、3年前に妙な世界が次元の海に突如現れた。

そこから解読できない蔵書が見つかったんだけど……」

ユーノが手を挙げ、シャルロッテに報告。

シャルロッテは「その本、見せてくれる？」と言い、ユーノは「少し待ってて」と無限書庫へと駆け出した。

ユーノが戻ってくるまでの間、シャルロッテはいろんな事件などを聞いていた。

そしてはやてがある事件を口にする。トレジャーハンター・シャレード強盗殺人事件。

シャルロッテは話に出てきた“赤い本”というものに興味を示した。

「どういうデザインか分かる？」

「何人かから目撃証言は取ってあるよ。

縁取りは金、その金から装飾が伸びて、背表紙に何かの模様を作つとる。

で、表紙には青銀みたいなもので紋章が象られたレリーフが施されてたみたいや」

“赤い本”のイメージ画がモニターに映し出される。

シャルロツテは「うそ……これって……」と驚愕に目を見開いた。

その様子に、この“赤い本”が“テストメント事件”の最重要フアクターであると誰もが理解した。

「ディオサの魔道書……！」

シャルロツテの呟きに、リインフォース？が「ディオサの魔道書、ですか？」と訊き返した。

「^{ディオサ}女神の魔道書。確かにこれがあれば大抵の魔術は扱えるかも……。

……これは一種の魔術式が記された事典のようなものね。連合の魔術式はもちろん、中には同盟の魔術も載ってるらしいって話を生前聞いたことがある」

「そんなものをどうしてシャレードは持ったんやろ？」

「問題はもうそこには無いよ、はやて。この現代に在ってはいけな
い物。」

絶対に消滅させなければならぬ遺物。過去を生きた私がしないと
いけない後片付け」

シャルロツテは両拳を強く握りしめ、そう固く決意した。
そこに戻ってきたユーノ。彼は何冊か抱えていた。

「これがその世界、今はオムニシエンスと名付けられた世界の書庫
で見つかった蔵書だよ」

一冊を渡され、シャルロツテはパラパラとページを捲っていく。

そして次の一冊も手にとってページを捲っていく。
全てを速読した後、シャルロットは「どれもヨツン Heim 語だ」と
口にした。

「そのオムニシエンスって世界、さらに詳しく調査する必要がある
と思う。」

ひよっとしたら、テストメントが連れてる魔族に関係する世界かも
しれない」

「魔族……。そう言えばオーレリアでも言っていたけど……」

「私とルシルの記憶の中に出てきたでしょ。」

自我を持つ砂漠。魔石と呼ばれる鉱石の集合体。人の肉体を持ちな
がら頭部が魔石。

犬（正確には狼）耳と尻尾を生やした女とか。アイツらみんな魔族。
この人間の住む表層世界とは別位相に存在する裏層世界の住人。

業火の眷属ゼルファード、黒鎧の毒精フォヴニス、無限の永遠ラギ
オン。

こいつらは魔族の中でもひと際異質な、幻想一属と呼ばれる種の魔
族なの」

話についていけずに当惑する六課メンバーたち。

シャルロットは「まあいきなり長々しく言われても無理だよな」と
苦笑した。

それからゆっくりと“魔族”の説明に入っていく。

人型の魔人属。獣型の魔獣属。そのどちらにも入らない肉体が無く、
無機質なモノでありながら生きている幻想一属。

“魔界”の構造。上層、中層、下層、最下層の四層で構成された世
界。

下へ行くたびに“魔族”の実力が高くなっていく。
フォヴニスとゼルファードとラギオンは、最も弱い上層に棲む幻想
一属だとシャルロッテは説明する。

「アレで最弱の魔族なんですか!？」

「最弱って言うのは少し違うけどね。まあ弱い方なのは間違いない
よ。」

大戦時では雑兵も良いとこの戦力だった。戦力になったのは下層と
最下層の魔族だけ」

「そんな・・・」

「マジかよ・・・アレで弱いつてのか・・・」

エリオにそう答えるシャルロッテ。

実際に戦って負けたからこそ信じたくない事実。

シグナムとヴィータとアギトも同じ思いだった。

ゼルファードやフォヴニスやラギオンは、シャルロッテたち過去の
魔術師たちにとっては視界にすら入らない雑魚。

その雑魚に撃墜された自分たち。それがあまりにもショックだった。

「でもなのはとフェイトを苦戦させた悲哀の天使メノリア。アレは
確か中層の魔人。」

数いる魔人の実力はピンキリだけど、メノリアは魔人の中では中位
に食い込める実力者だったはず。

正直戦って生き残ることが出来たなのはたちは奇跡だよ。本当に良
かった・・・」

シャルロッテがなのはとフェイトを見ながらそう言った。

メノリアと戦って無事に帰って来られたのは奇跡だと。

「……続き行くな。えっと、魔族を召喚するにはいくつかな必要なモノがあるんだ」

と、シャルロットは指を立てていく。

「一つは魔界と魔族の存在を知る知識。一つは魔族召喚術式。一つは魔力。」

そして最も重要なのが魔界と繋がる唯一の世界ギンヌンガガブ。魔族を召喚するにはギンヌンガガブという世界が必須。

もしかしたら、そのオムニシエンスという世界がそうかもしれない。信じたくないけど」

「……分かった。オムニシエンスの事に関しては僕に任せてくれ。」

すぐにチームを編成してオムニシエンスを再調査させる」

「僕も行くよ」

クロノとユーノが立ち上がり、会議室を後にしようとする。

シャルロットはクロノとユーノの背中に「お願いね」と告げた。

クロノは振り向かず手を挙げ振るうことで応えた、「任せておけ」と。

そしてユーノは「帰ってきたらもつと話を聞かせてくれると嬉しいな」とシャルロットに微笑みかけた。

二人は会議室を後にし、それぞれ“オムニシエンス”の調査に必要な準備を始めた。

「……テストメントの強さの正体は魔族ってことでええんやな」

「そうね。でもいくら何でも魔族と融合するなんて正気の沙汰じゃない。
ない。」

あんなこと
武装を続けていたら絶対に心が壊れる・・・！」

シャルロツテが「信じらんない」とため息をつく。

「フライハイト。魔族を武装するなんて出来る事なのか？」

「普通は不可能。だけど幹部達には肉体が無い。
殉職した局員つて言うのは間違つてないかもね。」

実体があるように見えるけど、実際亡霊なんだもんアイツら。
だから理論上は可能になる。だけどさっき言った通り正気の沙汰じゃないし、続けたら壊れる。間違いなく、ね」

「そうなのか？　しかし亡霊・・・か」

シグナムが、そしてヴィータやシャルマル、ザフィーラたちが深く考え込み始めた。

かつて自分たちが殺めた局員。復讐の炎にその身を委ねた過去の亡霊。

“幻想一属”と融合するという危険な事をしてでも復讐したという強烈な憎悪に、シグナムたち守護騎士は本当に参ってしまった。

「シャルちゃん。亡霊ということは蘇ったわけじゃないんだよね？」

「そうだよなのは。人は蘇らない。それは全ての世界に定められた絶対の掟。」

たぶん幹部達は、ディオサの魔道書を持つヤツによって、この実数世界に残っていた強い想いを固定された幻想。

彼らは一種の残留思念かな。強過ぎる未練を残していることで虚数世界に旅立ってない幽霊だね早い話」

シャルロツテはリンフォース？が淹れてきてくれたお茶を「ありがとう」と微笑みながら礼を言い、ゆっくりと飲みながらそう説明した。

魔術によって、強い未練を“存在”^{ヒトガタ}として固定されている幻想、それが“テストメント”の幹部達だと。

シャルロツテの言う“実数世界”^{げんじつ}に留まり、“虚数世界”^{あまのよ}に逝けないまま彷徨っている強い想い。

確固とした肉体を持たないゆえに“魔族・幻想一属”とも武装出来る。

しかしそれは諸刃の剣。使用し続ければ壊れる。自我の損失、そして暴走、その果ての・・・。

「それにしても幻想一属を選択するなんて、魔術師はルシルのファミリーネームの意味を知っているというわけか・・・」

シャルロツテの独り言に、キャラが「どういことですか？」と訊ねた。

「ん？ キャロたちはルシルがどんなファミリーネームだったか憶えてる？」

「えっとフォン・フライハイト・・・ですか？」

「んん、それより前。私の家に養子となる前のやつなんだけど、スバルたちは知らなかったっけ？」

スバルがそう答えたのを聞いて、シャルロットとルシリオンがこの次元世界に現れた頃から付き合いがあったのはたちが「フォン・シュゼルヴァロード」と答えた。

シャルロットは「その通り！」と右の人差し指を立てつつ説明に入る。

「フォン・シュゼルヴァロード。これはルシルが最下層魔界のある一國を治める魔人から貰ったモノなんだ。

フォン・シュゼルヴァロードは魔族の幻想一属を統べる事が出来る特別な性なんだよ」

「それってすごいことなんですか？」

“魔界”や“魔族”の種類など全く知らなかった上に理解できない。当然の事だが、ゆえにその特別さがよく解らない六課メンバー。

「結構ね。しかも性を貰ったと同時に求婚もされたようだし。

ルシルが人間に戻ったら、あの双子は結婚するつもり満々みたい。

もしルシルがあの子の求婚に乗って手を出したらロリコンも良いところだけだね」

シャルロットの口から飛び出た求婚や結婚という単語に啞然とする六課メンバー。

特にフェイトはその中でも呆然としていた。

いち早く復帰したなのはが「でも待って。平行世界云々というのはどうしたの？」と訊ねる。

「魔界に、ここ次元世界における平行世界なんて概念は通じないよ。魔界は単一だからね。どの次元世界のどの時代なんて全然関係なく繋がっている」

そう説明してから、シャルロツテは「解らなくても別にいいから、深く考えないで良いよ」と付け足した。

「さてと。それじゃあフェイト、お待たせ。ルシルの事を話そうか」
テーブルに頬杖をついてニヤニヤしながら、シャルロツテはフェイトにそう告げた。
フェイトは「う、うん。お願い」と少し頬を紅潮させて小さく頭を下げた。

「くっそあく！ ルシルの奴、フェイトにこんだけ想われて・・・
幸せ者め！！」

そんなフェイトを見たシャルロツテはバンバンとテーブルを両手で叩く。

「でもま、フェイトも結構な幸せ者なんだよ」

シャルロツテが急に真剣な面持ちでそう言ったので、フェイトたちは息を飲んでその続きを待つ。

「ルシルもね、あれからずっとフェイトの事を想っていたんだよ。ここ3千年、ルシルはいろんな契約を受けて、いろんな世界で戦ってきた。」

その中で、ルシルの事を好きになる娘も当然出てくる。だけど、ルシルは残らなかつた。
何故だか分かる？ ルシルは、もう逢うことの出来ないフェイトを忘れられなかつたから。

ルシルはいつもフェイトの事を想ってた。ある契約で一緒になって、

私と結婚したときもそう。

話すことはこの世界での思い出。まあ私もこの世界での10年は最高だったからそういう話は好きだったけどね」

シャルロツテから語られるさらなる驚愕話。

シャルロツテとルシリオンが結婚していたことに、六課メンバーはまた呆然となった。

そして今度はヴィータがいち早く復帰。

「お前、セインテストと結婚したのかよ!？」

「そこは今関係ないんだけどヴィータ」

ヴィータのツツコミをスルーするシャルロツテ。

シャルロツテは「コホン、それは置いて」と言ってから、

「え〜っと、何が言いたいのかというと、ルシルは今でもフェイトを想ってる。

だからフェイト。ルシルはあなたが救ってあげて、今度こそ」

と、フェイトの真正面まで来てそう告げた。

フェイトは「うん!」と強く頷いた。

「そんじゃ、何故ルシルと私が再びこの世界に来たのかを説明するね。

まずはルシル。ルシルが不完全な^{テストメント}境界の守護神[?]ってことは憶えてる?」

シャルロツテの問いに各々頷いて応える六課メンバー。

「ん。で、不完全だからこそその問題というのがあるんだけど。その内に一つによって、ルシルは今この世界に来ている。それが、界律による契約召喚じゃなくて人間による対人契約召喚」

「対人契約召喚？」と首を傾げる面々。

シャルロットは「そう、つまりは」と前置して、

「世界の意志じゃなくて人の意志によって、不完全な界律テスタメントの守護神を召喚するというものなんだ」

「そんなことが出来るの!？」

「知識と召喚儀式と魔力と媒介、そして強烈な運。

普通は世界の意志の執行者である界律テスタメントの守護神を狙って召喚するのは不可能。

だけど、たまに召喚することが出来る。だから運がいるの。

で、その偶々成功して召喚されたのがルシル。召喚者はとことんツイてるね」

シャルロットは広域凍結を発動させた至高ハーテなる卓絶者の映るモニターを見る。

フェイトが「シャル、その媒介って何？」と訊ねる。シャルロットは少し迷ってから告げた。

「・・・指環。フェイト、あなたが最後の日にルシルに贈った指環。」

アレが、ルシルの召喚を成功させた最大のファクター」

「それってつまり、ルシルの指環はこの世界に残って、そしてそれが敵の魔術師の手に渡っていた、ということ？」

フェイトの辛そうな顔を見たシャルロツテは、

「そう。指環がこの世界に残っていたからこそルシルは偶然にも再びこの世界に來られた。

その結末が記憶操作された上に操られているということだけど・・・。

でも魔術師は知っていたわけじゃないと思う。偶々儀式をしたらルシルが召喚された。

その原因が指環にあることにもきつと知らないはず。本当に運のあるヤツだよ」

そう答えた。フェイトは「そう、なんだ。そこだけでも感謝しないといけないのかな・・・」と呟いた。

「というわけで、今回のルシルは、敵の魔術師によって奇跡的に召喚された存在。

それが、ルシルがこの世界に居る理由。記憶操作がされている理由は、たぶん裏切り封じ。

親しくて、しかも恋仲だったフェイトと会えば、間違いなく裏切られると判断したんだらうね」

「ということは、敵の魔術師はルシル君とフェイトちゃんが親しいのを知っている・・・？」

なのはのその言葉に、他のメンバーたちの顔色が変わる。

そんな事を知っているのは管理局だけなのだから。

はやてが「ということは、テストメントの魔術師が管理局内部トツブに居る、ということになるんか？」と青褪める。

「そう断言するのはどうかと思うけど、可能性はあるかな」

シャルロットが、管理局内部に“テストメント”と直に関係をもつ
局長が居る事に同意する。

「まあその辺りはクロノやリンディさんたちの情報規制に任せよう。
それで、私がここに居る理由なんだけど、結構簡単な事。

ルシルに召喚された。それが、私がこの次元世界に来ることのでき
た理由」

「ルシルに召喚された・・・？」

「うん。いきなりなんだけど、この世界に居るルシルから召喚要請
を受けたんだ。

たぶんルシルが正気に戻っていた数十秒の間だね。
操られている間のルシルは、神意の玉座に居る本体ルシルとの繋がりを持
たないらしくって。

正気に戻ったことで繋がった短時間、この世界のルシルが自分とあ
なたたちの危機を察知して、本体ルシルを通して私に救援要請を出した。
だから私もこの世界に来られた。まあ正式な契約召喚じゃないから
弱体化してるけどね」

シャルロットが語った数々の真実。

六課メンバーは、思っていた以上に“テストメント”という組織が
現代離れしていたことに当惑するしかなかった。

そんな六課メンバーの様子を見て「ここで一度休憩を取ろうか」と
シャルロットが提案。

部長長のはやてが代表して「そやな。少し休憩しようか」と六課メ
ンバーを見回した。

はい、今回はテストメントの真実でした。

まあ全てを明かしたわけじゃないですけど、大体がこんなものです。ANSUR時代の魔族・魔界設定を、この最後のエピソードでフル使用。

フォン・シュゼルヴァロードや幻想一属等々。ああ、どんどんリリカルなのは世界観から遠ざかって(ホント今さら)・・・すいません。

教えて！ 剣神シャルせんせー！！ ～Interval 2～ (前書き)

サブタイトルの軽さの割に、そうライトな内容でもない、ような・・・？

教えて！ 剣神シャルせんせい！！ 〈Interval 2〉

11月26日

テストメント本拠地オムニシエンス 本部“エヘモニアの天柱”

最上階に、円形に配置されている肘掛椅子が13。

腰かける幹部は十二人。潔白^{トパーシオ}なる聖者を除く十二人だった。

その13の椅子の中央には一つのモニターが展開されている。

映っているのは一人の男性。歳は50代と思われる男で、名をクライスラー。

若き女頭首^{ハーデ}至高なる卓絶者の代行として“ミュンスター・コンツェルン”の表の頭首として公に顔を出す男だ。

『 ということなのですが、いかがいたしましたでしょうかお嬢様』

その男クライスラーに“お嬢様”と呼ばれた至高^{ハーデ}なる卓絶者は、報告された案件に思案する。

その報告とは、オーレリア・アムストル社に管理局の強制捜査が入るといふ事だ。

最上階に沈黙が流れる。その最悪を阻止することが出来なかったオーレリア基地に出向いた幹部達が軽く頂垂れている。

（さすがにあそこまでハッキリとテストメント^{わたしたち}との関わりを知られればダメですね。

仕方・・・ありませんか。アムストル社には悪いですが・・・）

フードの中に隠れた至高^{ハイデ}なる卓絶者の瞳がある決意に満ちる。
そして彼女はゆっくりと口を開く。

「とても心苦しいのですがアムストル社は切り捨てます。

ミユンスターとの関係に繋がる情報はすぐさま抹消してください。

アムストル社社長、ミスター・グラスには、テストメントを支持・
協力は独断だと証言するように言及を。

その代わり、彼や社員には、ミユンスターの予算から今後の生活に
必要な資金を提供するともお伝えください」

至高^{ハイデ}なる卓絶者は、前面に展開されたグラフや数字が描かれたモニ
ターを見ながらコンソールで操作、数字を書き換えている。

書き換えられたデータがモニター越しに居るクライスラーへと届き、
彼は『かしこまりました』と頭を下げた。

「要件はそれだけで良かったかしら？」

そう至高^{ハイデ}なる卓絶者が訊ねる。するとクライスラーは『いいえ』と
答えた。

『つい今しがたなのですが、管理局よりオムニシエンスへの調査の
ために進入許可を頂きたいと連絡がありました。』

返答を待つてもらっていますがいかがいたしましたでしょうか？』

至高^{ハイデ}なる卓絶者は「少し待ってください」と告げ、一度通信を切る。
そして通信を聞いていた幹部達の顔を軽く見回し、

「みなさんの意見はどうでしょうか？」

と訊ねた。そして口を開くのは報復^{カルド}せし復讐者だ。

彼は「管理局が来たのなら徹底的に叩き潰した方がいいのでは？」と申告する。

それを真正面から反対するのが永遠なる不滅者だ。

「何を馬鹿な事を。ここで完全に敵対行動を取れば、世間から一気に叩かれる。」

ここはレスプランデセルの円卓の結界を最大レベルにまで上げ、位相をずらし、不干渉にして管理局の目を欺き乗り切る」

報復せし復讐者の意見を真つ向から切り捨てた永遠なる不滅者。

最上階に険悪な空気が流れる。永遠なる不滅者はそれを気にも留めずに話を続ける。

「マスター・至高なる卓絶者。下手に管理局の調査を断れば」

「逆に怪しまれるという事ですか。そうですね、私も貴方の意見には賛成します。」

分かりました。みなさんもそれでよろしいですね？」

至高なる卓絶者の確認に、頷いて賛同する幹部達。

それを確認した彼女は再度クライスラーとの通信を繋げ、「管理局に進入の許可をお願いします」と告げた。

クライスラーは『お嬢様の仰せのままに』と恭しく一礼した。

至高なる卓絶者は彼との通信を切り、ここ“オムニシエンス”に障壁を発生させている基地へと通信を繋げる。

「テストメント・リーダー・至高なる卓絶者です。」

各基地へ通達します。オムニシエンスの障壁レベルを0へ変更」

“テストメント”の主たる至高なる卓絶者からの直々の指示に、各

基地の通信士は緊張、しかしそれを光栄に思いながら『了解しました！』と答えた。

そして通信を切り、先程の通信士たちの対応に苦笑する至高^{ハイ}なる卓^デ絶者。

「レスプランデセルの円卓の結界を最大レベルに変更します」

とコンソールを操作して、“レスプランデセルの円卓”の結界レベルを引き上げた永遠^{デアマンテ}なる不滅者。彼は続いて、

「てんびん座部隊。カブリコロニオ やぎ座部隊。アクワリオ 水がめ座部隊。各部隊は円卓へ帰還せよ」

と“オムニシエンス”全域の哨戒任務を請け負っている空軍^{アギラス}三隊に命令する。

SOUND ONLYと表示されたモニターが中央に展開され、

『てんびん座部隊了解』 『やぎ座部隊了解』 『水がめ座部隊了解』

と各隊のリーダーから返答が入った。

「……これより管理局の調査が入るので、スキーズブラズニル及び空母ナグルファルは出られません。

そのため、調査が終わるまでは幹部のみで任務を遂行していただきます」

至高^{ハイデ}なる卓絶者がコンソールを操作して、幹部達の目の前に小型モニターを展開させる。

表示されているのは管理局の捜査情報。

未解決である小さな事件から大きな事件まで、いろんな情報が表示されている。

「各自遂行したい任務を決め、出撃してください。」

「ディアマンテ永遠なる不滅者。マルワイール堅固なる抵抗者隊。ここには私が残りますから、貴方達も出撃してください」

「『『『了解しました』』』」

「ディアマンテ永遠なる不滅者とマルワイール堅固なる抵抗者隊の四人は一礼した。

「それでは。テストメント幹部、出撃してください」

「ハーデ至高なる卓絶者の号令に、幹部達は一齐に立ちあがり「了解」と一礼し、エントランスまでの直通転送装置に入り、その姿を消す。」

「あ、サファイアロ誠実なる賢者は残ってください」

「ラインフォース祝福なる祈願者と共に転送装置に入ろうとしていたルシリオン誠実なる賢者を名指しで呼び止めるハーデ至高なる卓絶者。」

「私ですか？ ……了解しました」

「では、私は一人で行く事にしよう」

立ち止まり振り返ったルシリオン誠実なる賢者にそう告げるラインフォース祝福なる祈願者。

「すまないな祝福なる祈願者」

「いや、気にするな。それではマスター、失礼します」

祝福なる祈願者は至高なる卓絶者に一礼し、転送装置に入り姿を消す。
ルシリオ
誠実なる賢者は自分のペアである祝福なる祈願者を見送り、再び至高なる卓絶者に視線を戻す。
ハイデ

「マスター権限発動」

その言葉が発せられたと同時に誠実なる賢者の瞳から光が失せる。
ルシリオ
直立不動のまま佇む誠実なる賢者に、至高なる卓絶者は口を開く。

「ルシル。シャルロッテに関する詳しい情報を教えてください」

十 十 十 十 十 十 十

リインが淹れてくれた何度目かのお茶を飲む。
それにしても5年で変わるものは変わるものだ。
私は少し離れた場所で集まっている5人の姿を見つめる。

エリオは背もグンと伸びて、どこからどう見ても一人前の男の子。
キャラは・・・少し残念な部分もある。だけど本当に可愛らしい女の子になった。

スバルとティアナも5年でビックリするほど大人びた。
そして一番信じられないのがレヴィ。初めて会った時は全然分からなかった。
ただどすみれ色の砲撃を見て、あのレヴィヤタンだってようやく分かった。

しかも砲手から拳法使いにジョブチェンジ。だというのに砲撃も健

在。厄介この上ない。

「ふふ」

と、その子たちの凄まじい成長ぶりについて笑ってしまった。
すると「どうしたの？」ってなのはが訊いてきた。見られていたよ
うだ。

「5年つてすごいなあって。スバルとティアナは凛々しくなったし、
エリオはカッコよくなつたし、キャラもさらに可愛くなつたし。
んで、なのはとフェイトとはやては……」

と一度区切つて、なのはとフェイトとはやてをゆっくり観察。
ジロジロ観られるのが恥ずかしいのかなのはは身体を抱いて「な、
何かな……？」と言つた。
フェイトとはやても私の視線に気付いたのか私の方に振り向く。
だから私は、

「老けたね」

そう一言ポツリと囁いた。

「」「酷っ!!」「」

おお！ 綺麗な具合に声がダブった。

「老けたつて女の子に言うようなセリフじゃないよ!？」

「観られとつたかと思つたら、いきなり酷いことゆうなシャルちゃ
ん!!！」

「まだ24歳なんだよ私たち！ それなのに老けたって……！」
私に詰め寄ってくる親友s。
まずった。口にする言葉を間違えた。

「えっと、大人びて綺麗になったねって言おうとしたんだけど、つい老けたねって……」

「大人びたと老けたって全然違うよ」

半眼で見ってくる（ちょっと怖いよ、マジで）親友sについて気圧され、椅子に座ったまま後ずさる。

するとなのはがいきなり抱きついてきた。私はもちろんその突然さに驚いて、身体に無駄な力が入る。

「お仕置きだよ。抱きつきの刑、なんて」

「はい？」

ついそんな抜けた声で訊き返してしまった。

「じゃあ私もお仕置き！」

「私もや！」

なのはに続いて、フェイトとはやても子供みたいに抱きついてきた。当惑する私だけど、親友sの温もりがすごく優しくて柔らかくて、なんだか泣きそうになるほど幸せな時間だと思った。

だから私も前のなのは、左のフェイト、右のはやてをの背中に腕を

回して抱き締める。
んで、抱き締めて密着することで分かることもある。

「……にしてもフェイト、また大きくなったんじゃない、胸」

「ふええ!？」

ちよつと左手を動かしてフェイトの胸を、5年前を思い出しながら大きさを比べてみる。

当然フェイトは変な声を出して私から離れる。するとなのはもはやても顔を引き攣らせながら離れようとする。

「逃・が・さ・な・い・よ」

久々のスキンシップなのだ!

元々ははやてのスキルを私が継承して、その上はやてから免許皆伝?も貰った。

逃げ出そうとするのはとはやてを腕に力を込める事で逃がさないようにしようとしたけど、思っていた以上に二人の力は強かった。

「し、シャルちゃん、その……ダメだよそういうのは。ね?」

「そ、そうやで。もう私らも若くないしな」

「ほお、ピッチピチの24歳でまだまだ若いと言っていたのはどのどなたかなあ?」

「その手の動きはかなりまずいよシャル!」

徐々に後退していく親友s。

無論私は追う。一定の距離のまま膠着する私たち。
これは埒が明かないな。こうなれば……

「閃駆で一気に……」

「……そこまでする!?!?!」

親友sは自分の身体を抱くように後ずさりしながら絶叫。
いざ!というときに、頭頂部から目ん玉へと突き抜ける衝撃が私を襲った。

「あいたあツ!?!」

「いい加減にしるフライハイト」

シグナムだ。シグナムが“レヴァンティン”の鞘で、私の頭を叩いたんだ。

て言うか痛い! どうしようもなく痛かったよ今の一撃!
目から火花が出た、とか、ピヨってる、とかだよ今の私……(泣)
両手で頭頂部を押さえて蹲る。くそお、ホントに痛い。あ、涙出てきた。

「……た、助かったあ……」

安堵のため息をついてる親友s。

それ以前に私の心配をしてほしいものだ。

「痛いじゃん! 何するのヤツ!」

頭を押さえながら勢いよく立ちあがって、シグナムへと振り返る。

するとシグナムは担いだ鞆で右肩をトントンと叩いてから呆れ顔でため息一つ。

「お前が悪い。先程のお前は犯罪者一歩手前だったぞ」

「確かに。セインテストを女装させてた時くらいにヤバかったな。もしくは暴走したシャマルくらいだな」

「何でまたそこで私を出すの!？」

ヴィータも参戦。けど何故かのんびりお茶を飲んでいたシャマルをまた引き合いに出した。

シャマルもまたイジられやすいキャラになりつつあるのかもしれない。ご愁傷さま。

だから私の事で巻き込まれたシャマルを慰めてあげようかなあ、と思っ

「シャマルも大変だよね・・・」

と言ったら、

「ええ!？ 何でかフライハイトちゃんから憐れみの目で見られた上に同情された!?!？」

シャマルがさっきの廊下でのように泣き崩れちゃった。

あれ? 何でシャマルは泣いちゃったの? て言うか憐れんだ目なんかしてないし、同情も・・・少しした。ごめん。

「あゝあ、シャマルを泣かしちゃったな、シャルロツテ」

「ええ！？ 全面的に私の所為！？ むう、異議あり！！ ヴィータにも非があると私は思います！！」

ヴィータが私に罪を丸ごとなすり付けのを阻止するために挙手。

「却下！！ 異議は認めねえ！！」

ヴィータも挙手。こうなれば徹底抗戦だ、こんちくしょー！！

「「あだツ！？」」

と思ったら再び突き抜ける衝撃が、今度はヴィータにも襲いかかった。

二人して頭を押さえて痛みにも悶絶。だからシグナム、鞘で叩くのやめて。ホントに痛いから。

んで、そこから始まるお説教タイム。もちろん私とヴィータは正座だ。

シグナムの説教を聞き続けて数分経過。

「まったく・・・」

ようやく終わった、と思いたい。だから、続きに行くかもしれない危機をここで・・・挫く！！

シグナムが口を開く前にこっちが先に口を開く。先を取る戦法なり！

「だって仕方ないじゃん。さっきも言ったとおりここ3千年、絶対^{アポ}殲滅^{リュオン}対象との戦争激化とか殺人とか、そんな契約ばつかったんだもん。

まあそれだけじゃないけどさ、でもようやくこんな時間を過ごせる

おっぱいまじんがあらわれた。えいえんのロリがあらわれた

「今のはシャルロットが全面的に悪いよな？」

「そうだな。フライハイト、弁明はあるか？」

「ありません、ごめんなさい」

シャルロットはおおげさにどげざした。

シャルロットはしあいにかけて、しょうぶにしようりした
2000けいけんちをもらった。シャルロットは“シャルロット2
nd”にしんかした。

シャルロットは“どげざ”をおぼえた。“くつきをよむ”をおぼえ
た。

シャルロットはすこしかなしくなった。ぜんステータスが3さがつ
た

(作戦通りにさっきの空気が吹き飛んだし、まあいいか)

シヤマルと私だけがどうしようもない被害を受けたけど、それでも
みんなの表情は少し明るくなった。

これからはちゃんと考えてから口にしないとダメだな。

「そんじゃ、そろそろ続きの話にいこうか」

ゆっくりと立ち上がって、みんなを見回す。

するとそれぞれがコクリと頷いて、自分の席に戻っていった。

シヤマルも「くすん。いいもんいいもん」と呟きながら席に戻った。
後でマジ謝りしよう。うん、そうしよう。

「と言っても大体話したから、これからは質問タイム！
名付けて、教えて！剣神シャルせんせー！のコーナー！ わあ〜い
！！

さあ！ 私のスリーサイズ以外なら何でも訊いて！ ヘイ！ カマ
ーンカマーン！！」

「凄いテンションの高さですね、シャルさん・・・」

リインが苦笑いしながらそう言ったから、私は「元気だけが私の取り柄だから！」と即答。

みんなは「確かに」って一斉に頷いた。少しは“だけ”っていうのを否定してください。

そんな私のガツクリ頂垂れた心を余所に、

「はい。結構大事な事なんで訊いておきたいんですが・・・」

エリオがいち早く、礼儀正しく挙手。立派になって、お姉さんは嬉しいです。

「どうぞどうぞ」

だから今の私に出来る最高の満面の笑みで質問を促す。

「あ、は、はい。えっと僕たちに、テストメント幹部と戦える術はあるんでしょうか？」

エリオの質問の内容に、みんなが頷いては自分もそう訊こうとした、とか言いだした。

なるほど。確かにそのことに関しては何も触れてなかった。

「ホンマか!？」 「本当に!？」 「「「「「本当にですか!？」」」」」
「「「本当なのか!？」」 「「「いいもんいいもん」」 「シヤマ姉・・・」
「シヤマルよ・・・」

「あるよ。だから落ち着いて。ね？」

一斉に立ち上がって訊き返してきたシヤマルとアギトとザフィーラ以外の全員に落ち着くように諭す。
みんなはゆっくりと座り直す。

「方法は実に簡単。目には目を、歯には歯を、神秘には神秘を。
はやて。未使用かつ魔力が充填されていないカートリッジを出来る
だけ用意して」

「っ!! まさかシヤルちゃん・・・!!」

はやてが、私が何をするつもりなのか察して絶句する。
なのはたちもそうだ。私の幹部を打倒する方法が何か察して絶句し
てる。

「そうだよ。私の神秘が宿った魔力をカートリッジに充填して、そ
のカートリッジを使うことでみんなも神秘を使う。
これでアイツらの神秘を有するという優位性は崩れる。
ならあとは実力がものを言う。どう? みんなの実力ならきつと勝
てると思うんだけど」

軽くみんなを見回す。

はやては少し考える素振りをして、シグナムとヴィータへと視線を
移す。

「……シグナム、ヴィータ。どうや？ カルド隊に勝てそうか？」

「おそらく、いえ、間違いなく。カルド隊の強さはあの炎による爆発力によるもの。」

あれを抑える事の出来る術を使えるのであれば、私でも勝てます」

「あたしもだよはやて。あの気持ち悪い黒い炎をどうにか出来るなら勝てる」

シグナムとヴィータはしつかりと自信に満ちた声で答えた。

私も実際にカルド隊ってやつと少し戦ったけど、間違いなくシグナムとヴィータの方が実力は上だ。

神秘の高さだと私の方がゼルファードやフォヴニスやラギオンより上。

そう、たとえ弱体化しようともだ。

だからカルド隊の問題はクリアしたと言っても過言じゃない。

でも、さすがに悲哀の天使メノリアは難しいかもしれない。

アイツばかりは私が相手しないといけない。それに王族クラスの魔術師。

なのはたちにはきつと荷が重い。それに、ヨツンヘイムの魔術師とは因縁だ。

私が片付けないと……。

「あのシャルさん。僕はグラナードにその……気に入られたというか目を付けられたというか、なんですけど。」

僕でもグラナードやフォヴニスに勝てるんでしょうか……？」

エリオがかなり自信なさげにそう訊いてきた。
グラナードとフォヴニスのコンビ。エリオが勝てる確率は現状じゃ
弾きだせない。
だって、

「エリオ、私の存在の調整は明日の夕方にも終わるから、そのと
き一戦お願い」

「え？ あ、はい。えっと、良いんですけど・・・？」

「現状のエリオの実力がいまいち分からないからね。それで決める
よ」

そう、エリオの実力が現状どこまでなのかが分からない。
だから無責任に、勝てるから大丈夫、なんて口が裂けても言えない。
きっちり判断してから相手を決めていくしかない。

エリオは私の意図が分かって、礼儀正しく立ち上がって「お願いし
ます！」と頭を下げた。

私が頷くと、エリオは椅子に座り直して、キャロと頷ずき合ってい
た。

「あ、でもそれだとカートリッジシステムを搭載したデバイスを持
つ魔導師じゃないとダメってことになるよね」

なのはが拳手して確認してきた。

「まあ、それはそうだけど・・・」

実際に幹部達と戦うのはこの六課だけなんでしょ？ だったら十分
じゃない？」

と返す。カートリッジシステムのデバイス持ちはなのはにフェイト、シグナムとヴィータ。

それでスバルとティアナとエリオ。レヴィはどうやら神秘を扱えるようだし度外視。

はやてとシャマル、ザフィーラにキャロは……指揮や援護だし問題ないと思うんだけど。

「んー、そっか」

なのはが少し微妙だけどまあ納得した表情を浮かべて手を下した。私は「そんじゃ次の質問を受け付けるよ」とみんなを見回す。

次に「はい」と挙手したのははやてとリインの二人。

お互いを見合わして、リインが手を下げたところを見ると先にはやてが質問することになったようだ。

「……リインフォースの事なんやけどな。」

その、リインフォースはこの世界に残ることが出来るんやるか？」

「リ、リインもその質問です！ シャルさんはリインフォースをこのまま留めること出来ますか？」

はやての質問にリインも賛同して、私にリインフォースをこの世界に留める事が出来るか訊いてきた。

そして視界の端で、スバルとティアナがピクツと身体を震わしたのが見えた。

考えている事が手に取るように分かった。でも二人とも。ごめん、それは無理なんだ。

「……リインフォースの事に関しては、たぶん大丈夫。」

こんなこと言うのはシグナムたちにすごく失礼だけど、ここは敢えて言うね。

リインフォースの心や想いは確かだけど、究極的には人間じゃない。だから今のレヴィのように、そして現在のリインフォースように固定することは出来ると思うよ。」

人でない者を残しても界律はさほど干渉してこない。レヴィが良い例だ。

だから元より神秘も無くが人でもないリインフォースならきつと大丈夫だ。

契約方法は魔術側マジックになるけど、私が残っている間に行えば上手いく。

「ホンマか？ ホンマにリインフォースを残せることが出来るんか？」

はやてがフラツと立ち上がって訊き直してきた。

リインやシグナムたち八神家からの強い視線を感じる。

そっか、そうだよ。あんな別れ方をしたんだもん。

今度こそ幸せにしてあげたいよね。

「はやて、リイン、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、アギト。あとシヤマル。」

大丈夫。あなたたちの家族リインフォースはこの世界に留まれるよ。」

はやてがポロポロ涙を零し始めた。

リインも泣きだして、それを見たはやてが「なんやリイン、泣いとるんか？」と言って、リインも「はやてちゃんこそ」と涙を袖で拭いながら微笑んだ。

ここでようやくシャマルも

「良かったですー。でもついみたいない方にショックを受けましたあ」

とまた塞ぎ込んだ。なんかもういろいろとシャマルは面倒だ。

「でも、スバル、ティアナ。あなたたちには悪いけど、クイントさんとティードさんは残れない、残ってはいけない。

二人の事を想うなら、あなたたちが二人を眠りにつけてあげて」

「……はい」「はい」

スバルとティアナには酷な話だ。

死んだお母さんとお兄さんが敵で、最終的には別れが決定しているこの事実。

どうにかしてあげたいけど、さすがの界律わたしの守護神でも死者蘇生は不可能だ。

それに、界律テストメントの守護神を辞める事になっている私じゃ……もう限られた力しか使えない。

「……次はどんな質問かな？」

またまた重い空気に満ちたこの会議室。

過去わたしたちが現代みんなと関わりと暗い空気こゝろになる運命にでもあるのだろうか？
それはそれでかなりキツイ。ていうか最悪だ。

若干心が折れながらも誰も手を挙げないところを見ると打ち止めかな？と思った矢先、キャロが「はい」とどこか遠慮したように弱々しく手を挙げた。

私は「どうぞ」って促して、キャラの質問を待つ。

「あの、カートリッジシステムの無いデバイスを持たないわたしは戦えないんでしょうか？」

「ただみなさんの戦いを観ている事しか出来ないんでしょうか？」

キャラは、観ている事しか出来ない自分を不甲斐無く、無力だとか思ってるんだろうか？

そんなことはない。戦う者にとって護るもの、観てくれているものが居るといっただけで戦う勇気をもらえる。

エリオならキャラという具合だ。でも、それで納得しないのが今のキャラなのかもしれない。

「キャラ、そんな事はないと私は思うよ。どうしても戦いたいつて言うんなら、フリードかヴォルテールを召喚して。

あの子たちならそれなりにエリオを支援攻撃ができると思うから」

そう言うと、エリオとキャラが「あっ！」と何か大事なことを思い出したかのように声を上げた。

そしてエリオが「もう一つ訊きたい事がありました！」と立ち上がった。

どういう質問なのかは分かるから、先にその答えを口にする。

「どうしてフリードの攻撃がラグオンに通ったのか、だよな。」

答えは簡単。フリード、というよりはフリードの祖先が元は魔族だから

この答えには全員が「え？」と抜けた声を出した。

それもそうか。まさか身近に魔族の血を受け継ぐ存在が居たなんて想像することも無いから。

特にキャロとエリオの二人が一番思考が追いついていないみたいだ。

「さっき説明したよね。魔族の種類には獣型の魔獣属があるって。フリードやヴォルテールのような竜はね、魔族・魔獣属・竜種って分類に入るんだ。

ルーテシアの白天王、地雷王、ガリユー。あの子たちも元は魔族がこの表層世界に留まって棲みついた遠い祖先の末裔。だから少なからず神秘を有している。だからラギオンに攻撃が通った」

初めてこの世界でフリードのような竜種を見た時の私が受けた衝撃はすごかったなあ。

まさか竜種が現代の表層世界に棲みついて、しかも生態系に組み込まれているなんてそれはもう驚いた。

「そ、そうなんですか・・・？」

キャロは肩に乗っているフリードの頭を撫でる。

エリオもまたフリードの背を撫でて、深く考え込み始めた。

いきなりの話にそりゃ驚くわ。普通なら知ることの無い事実。

それを知る機会を得たエリオとキャロは幸せなのか否か、それを決めるのは二人だ。

「でも、一つ忠告。フリードの攻撃じゃラギオンは倒せてもフォウニスには倒せない。

ヴォルテールでやっと決定打といったところね。

まあ私の神秘を宿したエリオの一撃ならもつと簡単に決定打を与えられると思うけど。

そここのところはエリオとキャロで決めてね」

ということでは会議はこれにて終わりとなった。
時間は気づけば夜の7時過ぎ。肉体じゃないから空腹は感じない。
だけど何か食べたいなあ。

「他の六課メンバーには明日紹介するな。と言ってもシャルちゃん
は有名人やし、そんなことせんでもええと思うけどな」

とはやての言。私ってばまだ人気者らしい。

確かに本局に着いてからというものの視線をヒシヒシと感じてたけど。
まあ好かれているんだから悪い気はしない。うん、しない。

んでもって今日はここで解散。

“ヴォルフラム”ってはやての艦（船持ちって凄過ぎ）の居住区へ
移動開始。

さてと、今日と明日で調整を終えないとダメだね。

それまでははやてたちには悪いけど“テストメント”との交戦を待
ってもらうしかない。

今後の事を考えながら、夕食・入浴を済まして、私はなのはの部屋
に到着。

そして、久々の人間らしい生活に感極まりながら、私はなのはと同
じベッドで眠りについた。

だというのに、なのはが少し距離を開けようとする。

「何で私から離れようとするかな？」

昔は一緒に寝たのに……。

「だって、シャルちゃんに襲われたりでもしたら……」

今日のはちょいとしたスキンシップなんだよ、なのは。
だから……ここはもう少しからかってあげようか。ふふふふ。

「……………ぐへへへへ」

わざとらしく嫌な笑い声を出しながらなのはに迫る。

するとなのはの右拳に魔力が、それは綺麗な桜色の魔力がパアッて輝いて。わぁ、綺麗！

「……………っ！！」

ちょっとした冗談なのに、魔力パンチで殴るなんて酷いよ……

(泣)

実際は軽く小突かれただけなんだけど、何の対応もしなかった私にはキツイ一撃。

ベッドからドサリと落ちた。というより落とされた。

「シャルちゃんは床か椅子で寝てね」

「ええ！？ 久しぶりに会った親友に何たる仕打ち！」

ベッドから落とされて床で痛み悶えていると、なのはの口からそれは冷たいお言葉が。

私に背を向けて縮こまるように眠るなのは。

ちょっとした悪ふざけの代償は孤独の眠り、か。フツ。

「なのはあ〜(泣)」

結局私はなのはに泣きついて、温かく柔らかなベッドで眠ることが出来た。

†

†

†

†

†

†

†

†

反撃開始！のちょっとその前に・・・ ～Interval 3～

11月27日 AM06:45 “ヴォルフラム” 居住区

シャルちゃんがルシル君にこの世界へと呼び出されて二日目の朝。昨夜は、シャルちゃんが色々馬鹿な事言ったりやったりして少しうっん、やっぱりすごく楽しかった。

そんな私は、隣ですうすう寢息を立てているシャルちゃんをじっくり観察中。

5年前に別れた時から何の変化も無い、だけど息を飲むくらいに綺麗な肌と髪。

同性でもドキドキするくらいにシャルちゃんは美人だ。もう変わらない、変わることも出来ないシャルちゃん。

いつの間にかシャルちゃんの歳を追い抜いて、私は、私たちは今を生きている。

「・・・やっぱり翠屋のケーキは最高だよ・・・むにゃむにゃ・・・」

「・・・プツ。シャルちゃん、今の寢言？」

すっごく幸せそうな笑みを浮かべて眠っているシャルちゃん。

寢言に出るほど翠屋の事を好きでいてくれたことをすっごく嬉しく思う。

でも、お父さんたちやアリスちゃんやすずかちゃんは、シャルちゃんとルシル君の事を憶えていない。

でもシャルちゃんはみんなを憶えている。どういう気持ちなんだろう。

う。

自分だけが憶えていて、でも相手は自分を何も憶えていない。

「シャルちゃんとルシル君は、いつもそういう世界で過ごしてきたのかな・・・？」

それがどれだけシャルちゃんとルシル君にとって残酷な事か、私が知った気であるわけにはいかない。

想像は出来ても理解できない、してはいけない。理解したと思った時、それは自分の驕りでしかないのだから。

「・・・ん・・・うん？・・・なのは・・・？」

「おはよ、シャルちゃん」

半開きの目のままムクリと身体を起こして「ん~~~~」と背筋を伸ばすシャルちゃん。

「ふう」と一息ついて、シャルちゃんは「おはよーございま」まで言っ、す、と言いつ切る前にすう〜と寝息を立て始めた。

シャルちゃんの奥義・座ったまま寝る、だ。他にも秘奥義・立ったまま寝る、もある。

「ほら、シャルちゃん起きて。今日はミッドに降りるんでしょ」

そうなのだ。今日は私とシャルちゃんとレヴィの三人でミッドに行くことになっている。

昨日の夕食時、シャルちゃんが突然「ミッドに行きたあ〜い」と言いだしたのだ。

どの道シャルちゃんの言う“調整”というのが終わらないと私たちは幹部と戦えない。

だからその調整を行っている間に、久しぶりにミッドを観て回りたいとのことだ。

「……はっ！ そうだった！ えっとえっと、朝食時に他の六課メンバーに挨拶。

そんでもって夕方までミッド散策。夕方にエリオと模擬戦。それからカートリッジに魔力チャージ開始。

よし！！ 今日の予定はこれで決定！ そんじゃ早速着替えますか！！」

覚醒したら覚醒したで物凄いハイテンション。ちょっとついていけそうにもない。

でも、着替えてってシャルちゃんどうするんだろ？ 元から着ていた服しかないんだけど……。

我が言の葉は幻想紡ぐ鍵

それはまるでルシル君の“我が手に携えしは確かなる幻想”という呪文だった。

シャルちゃんがそう告げた後、シャルちゃんの手元には冬モノらしい服があった。

見憶えのある服だ。それもそのはず。だってその服は、

「これ、なのはが私にくれた誕生日プレゼント。

すごく大事にしてるんだよ。でもごめんね、あまり着る機会が無いんだ」

5年前に私がシャルちゃんに贈った誕生日プレゼントの服だった。

白のワンピースに黒のパーカー。少し厚手だから、今のミッドなら十分暖が取れるはずだ。

そそくさと私が貸していたパジャマを脱ぎ始めたシャルちゃん。そういうことが出来るなら、どうして昨日から使わなかったんだろっ？

「フンフン　っと、どしたのなの？」

「ほえ？」

いきなり声をかけられて、そんな声を出してしまった。

考え事してたから気づかなかったけど、さつきから私、着替えてるシャルちゃんから視線逸らしてなかった。

うわぁ、同性とはいえまじまじと着替えを見てたなんて・・・これは恥ずかしい。

「あ、ううん。何でもないよ・・・」

顔が熱くなるのが分かりながらそういうと、シャルちゃんは「変なのは」って笑いながら服を着出した。

それから私も着替えて朝食の時間までシャルちゃんと話す。

昨日の夕飯やお風呂、眠る前に話せなかった事。シャルちゃんがあるからどういふ事をしてきたのか、とか。

どうやらシャルちゃんとルシル君は、テルミナス撃破という偉業を成したことで、積極的にアポリュオンとの戦いに参加することになったとのこと。

でもそんな戦いの中でも、心落ち着ける契約もあつたらしい。

その度に私たちの事を思い出してたって、シャルちゃんは少し恥ずかしそうに告げた。

「でも嬉しいよシャルちゃん。そっか、それだと私たちは光栄に思

わないといけないんだろうね」

ある意味神様なシャルちゃんにそこまで想われる私たちって何気に
凄いのかもしれない。

そんな事をシャルちゃんに言ったら、

「ん〜どうだろ？　なのはがそう言ってくれると嬉しいんだけど
ね」

シャルちゃんは苦笑した。

そして朝食の時間になって私とシャルちゃんは食堂に向かった。

そこで紹介される六課の隊員たちにシャルちゃん。

隊員の中にシャルちゃんのファンクラブメンバーが居たことでそれ
はお祭り騒ぎになって、シグナムさんが鎮圧（物理的）なんてこと
になった。

大変だったけど、それでもやっぱり楽しいという感情の方が遥かに
上だった。

十
十
十
十
十
十
十

AM09:51 ミッドチルダ首都クラナガン

なのはとレヴィと一緒に、久しぶりにミッドの地に降り立った。

本当ならフェイトたちも一緒の方が嬉しいんだけど、さすがに全員
では無理だった。

それにしてもこの空気、まさかもう一度吸う事が出来るなんて思い

もしていなかった。

これはルシルに最大の感謝をしないとダメだね。

「で？ どこを観て回るのシャルちゃん」

「フフフ。なのは、昨日言った通りにヴィヴィオに私の事話してないでしょうね？」

なのはの質問にそう答える。

私がミッドに来た理由の一つにヴィヴィオに会って、ついでに驚かすというのがある。

その他にも元ナンバースの様子を見たいというのもあるし。

ナカジマ三佐のところへチンク、デイエチ、ノーヴェ、ウエンデイが養子になるなんて、それはもうビックリだ。

んで、セインとオットーとデイドが、騎士カリムとシスター・シヤツハのところに。

そして私にとっての一番のニュース、あのルキノがグリフィスと結婚したいたことにも驚いた。

いやあ、機動六課時代からもしかしたら、なんて思っていたけど、まさかこうも早く結婚まで行くとは。

あー、でも5年でそこまで行くのは普通なのかな？かな？

「え？ あ、うん。サプライズ・・・なんだよね？」

だからシャルちゃんの事については何も話してないよ。

でも、シスター・シヤツハには敷地内に入る許可を取る為に話したけど・・・」

「ん！ よし。そんじゃ・・・いざ参らん、St・ヒルデ魔法学院」

笑った罰だ。そして昨日私に恥ずかしい格好をさせた罰！
勝手に騎士甲冑のデザインを変更したその悪魔の所業！
トロイメライのコアに“閃駆”の術式があるかどうか調べるだけならまだしも、騎士甲冑を変更して、レヴィの防護服のデザインのネタにしていたというその行い！

どうしてわざわざ私の“トロイメライ”でするのか理解不能！
別の誰かのデバイスを使えば良かったのにさ！ ていうか“トロイメライ”も断らずに快諾した事実にもビックリ、プツンだ！
訊けば、マイスターが居なくなり、自分を使用してくれる騎士が居なくなったことで暇だったのです。だって。
そりゃ悪かったけどさ！ だったらあの時、騎士甲冑を生成する前に一言くらい断りを入れるおおおおお！！

はあはあはあはあはあ……。
というわけで、しばらくグリグリアタックを受け入れろ、レヴィ・アルピーノ！！
私は、私とレヴィへと集まる視線もなんのその。観たい奴は観て行け。

さあ寄つてらっしゃい！観てらっしゃい！ 痛みに悶えた涙目の美少女レヴィですよ！
超お得な見学料はタダ！ そのお兄さん、どうですかっ！？ 可愛いですかっ！？

「急がないとレールウェイの時間に間に合わなくなるよ？」
グリグリグリグリグリグリグリグリ……
なのはの言葉もなんのその。グリグリアタック続行中。

「痛いって！ シャルロットェ〜！」

「わははははは！ ごめんなさい、はどうしたあー！」

「……シャルちゃん、レヴィ。私と……いっぺん、お話ししてみる？」

透き通るなのは冷めた声が私とレヴィの耳に届く。

「「ごめんなさいでしたッ！」」

こめかみをピクピクさせながら目の笑ってない笑顔を浮かべるなのは、私とレヴィはすぐさま整列して頭を下げた。

しかもさっきのワード、どうしてか“いっぺん、死ん〇みる？”に聞こえた。めっちゃ怖かったよお（泣）

騒ぎも治まって、私とレヴィはなのはの後ろに続いてレールウェイのステーションへと向かう。

街中を歩く中、私たちの耳に届くあるニュース。

『第35管理世界オーレリアを代表する魔導端末メーカー・アムストル社に、反時空管理局組織テストメントとの癒着の疑いがあるとのことで強制捜査が行われています』

なのはが立ち止まって、モニターへと視線を移す。

女性キャスターの読むニュースの内容は、私たちが関与した出来事だ。

テストメント。私の“最後の戦い”を飾るには相応しい相手だ。

かつては同じ連合世界だったヨツン Heim。だけどどちらかと言えば味方ではなく憎き敵だ。

ミッドガルドを脅して、私たち“天光騎士団”を強制的に連合軍に組み込んだヤツら。

その末裔と戦える。でもこれは八つ当たりだ。当の魔術師はその時代を生きたヤツじゃない。

だけど、ヨツンヘイムの血族である可能性の魔術師を討てる。

これはかなり重要だ。この時代に、あの時代の血を残しちゃいけないんだ。

「シャルちゃん。今度こそルシル君は残れるよね……？」

なのはの突然な問いかけ。

「……フェイトとルシルが対人契約を行うには、ルシルの契約者の魔術師を倒して、ルシルとの契約を解除させる。

それからルシルをボコにして、消滅寸前までダメージを与えて魔術師との繋がりを無理矢理断つ。

このどちらかを成しえて初めてルシルを残せることになる。」

手っ取り早いのがルシルをボコにする方法だ。

現状のルシルはメチャクチャに力が抑え込まれてる。

レヴィに聞いた通り、ルシルの力が魔術師に流れ込んでいる事が最大の原因だ。

理由は不明だけど、それならルシルを倒す方が簡単かつとても早い。

でも、それに成功するとルシルの戦力は期待できない。

ルシルは人間となって、そして魔術師ではなく魔導師になる。

神秘の無い味方を増やしてもこの戦いじゃあまり役に立たないのだから。

まあ敵戦力を削れるんだから、どういったタイミングでも問題はな
いような気もする。

「今度こそ私は、フェイトちゃんとルシル君に幸せになってほしい。そう思うんだ」

「そうだね。でも、なのはも幸せになんないとダメだよ？」

「相手も身近に居るんだし、そろそろ将来を考えないと。シングルマザーも大変でしょ」

「相手？ 私にそんな人、身近に居ないんだけど・・・。それにヴィヴィオと二人でも十分幸せだし」

マジで言っただけですかこの娘は・・・。

ユノ。あなた、この5年の間に一体何をしていたの？

ホントにこのまま“ずっと仲の良い友達でいましょうね”って事にするつもりか？

「そう。だけど、あなたはもっと視野を広めなさい。

これは長い間存在してきた私からのありがたいお言葉。覚えていて損は無いですだから」

「え？ あ、うん・・・」

なのはの鈍さに呆れながらも、レールウェイを乗り継いで（とどころどころでウィンドウショッピングして）辿り着いたのはSt・ヒルデ魔法学院。

今日は授業が午前中までということ、私となのはとレヴィは草陰に隠れてヴィヴィオの姿を探す。

『すっごい楽しみだなあ　レヴィと組んでルシルを倒したあの戦い、とんでもなく強くなってるじゃん』

昨日見たヴィヴィオとレヴィ対ルシルのバトル。

あの小さく可愛かったヴィヴィオがとんでもなく強くなってる事に
もう興奮した。

えっと何だっけ？ そうそうムーンライト・ブレイカー。

あれは魔法じゃなくて魔術の域だった。あんな術式を組むレヴィに
は驚かされるよ。

それについていくヴィヴィオにもビックリだ。

『そうだよ。ヴィヴィオは毎日すごく頑張って鍛えてるから。
じゃなくて、どうして草陰に隠れる必要があるの？

もっと普通に再会すればいいと思うんだけど……』

『普通の再会じゃサプライズじゃないでしょうが。

もっとインパクトのある再会じゃないとつまらないよ。

そう、何を隠そう私がつまらない』

胸を張って、えっへん。フェイトの持ちネタだ。

『ならシャルロツテ。というのがインパクトのある再会なわけ？』

草陰の中でひっそりと下校している生徒たちに目を光らせながら念
話で会話する。

『現在必死に思案中』

レヴィにそう返す。するとなのはとレヴィは大きくため息。

なによなによ。普通じゃないサプライズなんてすぐには思いつかな
いってば。

そんなこんなでヴィヴィオの姿を探していると、生徒たちの数が減

っていた。

まずい。もしかしてヴィヴィオを見逃した？

『なのは』

『たぶん大丈夫。ヴィヴィオ、お友達と学院の図書館に寄ることがあるんだ。』

もしかしたら今日も図書館に寄っているかも……』

それならいいんだけど……。

もし私たちが見逃していたら、それは悲しい事態が私たちを襲う事になる。

待つてども待つてども来ないヴィーヴィオ　　だ〜けどその子はお〜うちに帰ってたあ〜・・・なんて。

それを知らずに待ち続ける私たち。しかも草陰に隠れてひっそりと悲惨過ぎる。

『・・・あ、来た!!』

レヴィからの念話で、この後に起こりえたかもしれないバッドエピソードの回避に安堵しつつレヴィの視線の先を見る。

居た。確かにヴィヴィオだ。5年で大きく成長したヴィヴィオが、友達二人と楽しそうに話しながら歩いてる。

そして、何か用事があるのか友達二人はヴィヴィオと別れて別の方向へ向かって歩き出した。

んで、ヴィヴィオはそのままこっちに向かってきた。

『わあわあ　ヴィヴィオだよ！　うわあ、ホントにヴィヴィオだ！』

すごい！　私の目の先、すぐそこにヴィヴィオが居るよ！　ねえなのは……』

『ちよつとシャルちゃん。私の愛娘^{ひと}を見つけてそんな幻の珍獣を発見しました、みたいな感じで報告しないで』

私のテンションに呆れているのか苦笑を浮かべるのは。だつてこつちに来てから映像でしか観てないヴィヴィオがすぐそこに居る。

憶えてるかなあ？ ルシルの事は憶えてるみたいだし、私の事もきつと憶えていてくれるはず。

あゝ、でももし、もしも私の事憶えてなかったら……やばい。何か泣きそう。

頭を抱えて唸っていると、『ほら、シャルちゃん。早くしないと……となのは。』

確かにこのままじゃヴィヴィオは私たちに気づかずに行っちゃう。どうしようどうしようどうしよう……あ、これでどうだ!!

『レヴィー!』

『な、なに!?!』

『私とレヴィーでヴィヴィオを襲う!』

『はい?!』

なのはとレヴィーが首を傾げて、こいつ何言ってるの? って顔をした。

『サプライズ! 私が直でヴィヴィオの実力を測る!!』

『はああああー!?!』

驚く二人を余所に私は 我が言の葉は幻想紡ぐ鍵 と詠唱する。
これはルシルの呪文を自分なりにアレンジしたものだ。

ルシルの固有能力“複製”。

あれを疑似的に再現した私独自の固有魔術“複製の魔眼”。

それで覚えた“力”を、私の創世結界“ヘルシャー・シユロス 劍神の星天城”の書庫に貯蔵する。

そしてさっきの呪文で使用する。ルシルの“アルヴァイト 英知の書庫”と同じ能力だ。

そう、何を隠そう早い話が完全なパクリなのだッ（自慢げ）！！

んで、今持つてる術式のほとんどはルシルから貰った物。

この3千年の間に、ルシルと同じ契約になった時に“アルヴァイト 英知の書庫”に入れてもらって出来るだけ覚えた。

それでも6割程度しか覚えきれてないけど。まったく、どんだけ複製してるんだか。

『って、シャルロツテ。わたしに変身して何するつもり！？』

『これもサプライズの一環ゆえに』

レヴィの姿に変身して、ヴィヴィオがどこまで反応できるか（というか驚いた顔が見たい）を確かめる。

レヴィがぎゃあぎゃあ言ってきたけど無視。

私が楽しみたいんだよー！（本音）

ヴィヴィオが通り過ぎていって、背後からの奇襲の舞台は整った。

レヴィの腕を引っ張って、いざ、ヴィヴィオに突撃だあああああああ
あ！……！

『やだっ！ そんなことしたらわたしの好感度が落ちるでしょ！』

というのに抵抗を止めないレヴィ。

奇襲するのがレヴィ、そしてレヴィに変身している私。

下手をすれば確かにレヴィへの好感度は落ちるし、シスターに見つかればお説教（無論私は逃げる）。

ハイリスクだ。そう、レヴィに限って言えば、ね……。

『よし。行こう！』

『話し聞いてた！？ 嫌われたくないんだってば！ こんなアホな事で！』

抵抗を依然としてやめないレヴィ。

だったら、これでどうだ！

我が言の葉は幻想紡ぐ鍵

詠唱と同時にレヴィの周りに淡い真紅の光が生まれる。
そして光が晴れると同時に姿を現すレヴィ。

「……………こ、これは……………」

なのはがレヴィの姿も見て一歩二歩と後ずさってく。

レヴィはそのなのはの様子に首を傾げて、小さく可愛らしい口を開いた。

「みゃうう〜？……………？？？？」

出たのは人語じゃナツシング。

「みゃう？ みゃ？ みゃうみゃう！？」

「か、可愛い・・・」

レヴィは人語が話せなくなったことに混乱しだし、なのははレヴィの姿と言葉に落ちた。

レヴィが勢いよく私に振り向いて、そのフワフワした身体を近づけてきた。

「みゃう！ みゃうみゃう！ みゃああう！ みゃ・・・シャルロット！ これはどういづつもり！？」

お、早速念話でのコミュニケーションを見つけたか。

さすがに念話にまでは影響を及ぼすことが出来ないんだよね、この変声術式。

「いや、そのままの姿が嫌だっていうから、着替えさせてあげたんじゃない。

ヒマラヤンの着ぐるみにさ。可愛いよレヴィ。そのもふもふフワフワしたヒマラヤン姿」

「みゃうーう！ みゃあう！」どこを間違えてそういつ結論に至るのが全然理解できない！！」

今のレヴィの姿は白いヒマラヤン（フワフワしたネコで、とても可愛いのだ！）の着ぐるみだ。

顔だけひよこつと出していて、それが余計に可愛らしく見える。

「シャルちゃん。これは確かに可愛いけど、どこがサプライズにな

るのが分からない」

「みやあう、みやあみやあうー！」なのはさんの言う通り！
ていうかなのはさん！ 苦しいです！ 抱き締めるのは良いんです
が、力が強過ぎます！！」

なのはが神速の動きでレヴィに抱きついて、そのフワフワしたレヴィの身体に顔を埋めている。
フツ、恐るべしヒマラヤン・レヴィ。エース・オブ・エースのなのはを意図も容易く陥落するとは。

「これで行けるよね。そんじゃ、レヴィ……ゴー！」

「みやあーうー！ みやあみやあーう、みやーう！」

『だ・か・ら！ もう少し違った路線のサプライズを考えてってば
！！』

「何が不満なわけ？ 言語をみやう、から、もきゅ、にでもすれば
いいの？」

しょうがないなあ。いいよ。もきゅ、に変更すれば良いんでしょ？
ついでにヒマラヤンから桃色がかった羊にしてあげるから」

「みやあううー！！！！！」そんなこと誰も望んでなああー！
ーい！！」

ついには頭を抱えはじめて唸り始めるレヴィ。

少しイジメ過ぎたか？ でも私の楽しみのためにもう少し頑張って
もらおうと

苦悩に悶えるレヴィと別の意味で悶えるなのは。

そんな二人を見つつ、私は自分の変身を解いて、別の誰かに変身し

ようとした。んだけどその時、

「シャル・・・さん・・・？」

その声が耳に届いたことで全ての終わりを察した。

ギギギ、という擬音が聞こえそうな感じで私は声のした方へと振り返る。

そこには、ヴィヴィオが信じられないと言った風に私を見ていた。

「それに、なのはママと・・・レヴィ？」

「あ」「みゃうう」見つけた」・・・」

視線が混じり合うヴィヴィオと私たち。

サプライズ云々という計画は水泡に帰してしまった。

こうなったらもう普通でいいや。丸投げだあ！

「久しぶり、ヴィヴィオ」

「・・・シャルさん・・・シャルさん！！」

「おお！？」

再会の挨拶をしたと同時に、ヴィヴィオが飛びついて来たと言ってもいっくらいの勢いで抱きついてきた。

ふわりとした良い香りのする綺麗な金髪が私の鼻をくすぐった。

「ヴィヴィオ・・・」

ヴィヴィオを抱き締めて実感する。

5年前、別れる時も抱きついてきたヴィヴィオを抱きしめた。
あの小さく幼かったヴィヴィオがこんなに大きくなって。

「ホントに久しぶり」

少し強くヴィヴィオを抱きしめた。

十 十 十 十 十 十 十

シャルロットに散々遊ばれて、ヴィヴィオを驚かせるというサプラ
イズも無くなつて、心労が溜まる一方だった今日この頃。

レールウェイの車内、シャルロットの前に座るヴィヴィオの笑顔を
見たら、そんな軽いストレスも吹き飛ぶというものだ。

今わたしたちは聖王教会本部に向かっている最中。

シャルロットは姉妹たちと会いたいらしいし、ヴィヴィオはイクス
にシャルロットを会わせたいみたい。

「それでねシャルさん！ ウェンディってば」

そして今のヴィヴィオは興奮冷め止まず、と言ったところだ。

もう会う事の出来ないと思っていたルシリオンは敵として、記憶操
作された形で再会。

シャルロットの事もまた会えないと思っていたのは間違いない。
でも、そんなシャルロットとこうして楽しく会話できる。

それがヴィヴィオのとってもすごく嬉しい事なんだ。

「あははは！ ウェンディらしいって言えばらしい！」

「・・・・・・・・あ」

「オットー、デイド。そのリアクションは逆に少し寂しいなあ」

男装のオットーと、その妹デイド（こっちは修道服が似合うなあ）の登場だ。

私を見て指を差して絶叫し続けるセインよりかはマシだけど、それでももう少し反応が欲しかったり。

「まあいいや。久しぶり、セイン、オットー、デイド」

「あ、ああ・・・ホントにシャルロッテ？」

ようやく絶叫をやめたセインの私かどうかを確かめる発言。

んー、口で答えるより実際に私かどうかをその目で確認して見せてセイン。

閃駆

「・・・・・・・・っ!?!?」「」「」「」

一瞬でセインの背後に回る。手にするのは魔力を固定させた魔力剣。でもセインもなかなかの反応を見せる。彼女の能力“ディーブダイバー”が発動。

地面を潜行して私からすぐさま距離を取った。

「な、ななな何をいきなり・・・!?!?」

突然の事だというのにしっかりと反応したセイン。

私の持つ真紅の魔力剣を指差して口をパクパク。あなたは金魚か鯉ですかあ？

「ごめんごめん。でもこれで私が本物だったことは分かったでしょう？」

「だからっていきなり閃駆！？　それで斬りかかってくるのはないと思うけどー!?」

軽く涙目なセイン。魔力剣を消して、セインへと近づこうとすると「ぎゃあああ！」って今度は別の意味で絶叫する。

まずいなあ。どうやら今の私は嬉しさのあまりにちょっとやり過ぎるようだ。

「まあまあ、落ち着いてセイン」

「陛下、ようこそいらっしやいました」

セインを宥めるヴィヴィオに、オットーとデイドが恭しく一礼。

（へえ、オットーとデイドってあんな顔が出来るようになったんだ〜）

オットーとデイドの表情が以前に比べて随分と豊かになった。きつとこの環境が、あの娘たちをすごく良い方向に変えたんだ。

『シャルちゃん。どう？　あの娘たちの現在の様子を見て』

なのはが私の隣にまで寄ってきて、念話でそう訊いてきた。

私は「うん」って頷いて、ヴィヴィオたち5人が賑やかに話してい

るその光景を見詰める。
眩しいくらいの一ひと時。だから言う事はただ一つだ。

『良いね。セインとオットーとディード。すごく良い顔してる』

かつては敵だったけど、今ではああして笑いあえる仲にまで。

5年という年月がみんなにとって本当に大切ななんだって、私は思った。

「シャルさ〜ん!」

ヴィヴィオが私に手を振りながら駆け寄ってくる。

どうしたんだろう? あ、そういえばここに来る前に会わせたい友達がいるって言うてたっけ。

えっと確かイクスヴェリア・・・? その子も元はベルカの王様だっけって話だ。

そしてセインたちも一緒に駆け寄ってきたんだけど、セインだけは何か逃げ腰だ。

いつでも私からダッシュで逃げるといった感じ。

「え〜っと、シャルロツテ。まずは騎士カリムに挨拶してもらいたいんだけどさ」

「え、あ、うん。分かったけど・・・セイン、そこまで引かないで、お願い」

反省するから(形だけ)、そんなビクつかないで。

そっとう行動されるとお姉さんは少し悲しくなるよ。

「いや、なんかもう……無理」

両手を振りながら苦笑するセインが遠く感じるよ。

「別にコンクリ詰めにして、カドス海に沈^{チン}するわけでもないんだし。そこまで私を怖がらないでほしいなあ。というかあんなだけでビビるなセイン」

「結構無茶言うよねシャルちゃん」

「いきなりあんなのされたら誰だって引くよ」

「シャルさん、わたしも引きそうです」

おお、気がつけば私は孤立状態。

オットーとデイド以外は明らかにセイン派に属してる。

私がオットーとデイドに視線を移すと、二人は私からスッと視線を逸らす。

巻き込むな、と言外に告げてる。そうですか。今の私は孤立無援なんだ……そうなんだ。

「……それではご案内しますので、こちらへ」

妙な空気のまま、私たちは騎士カリムの執務室に案内された。

反撃開始！のちよつとその前に・・・ Int e r v a l 3 (後書き)

シャルにかつてのような馬鹿をさせるにはどうしても必要だと思つたルシルの有する複製術式。

ですからシャルはルシルの能力を丸パクリ。彼女の最後の暴走はまだまだ続く？

シャルをおバカさんと思う人は拳手 〈Interval 4〉

時空管理局本局“特務六課” オフィス

「なのはちゃんたちは今頃カリムのトコやるか・・・」

シャルちゃんに頼まれた未使用カートリッジの発注要請を終えて、ミッドに向かったなのはちゃんとシャルちゃんとレヴィの事を思う。シャルちゃんの現状で引き出せる力を取り戻すための“調整”ゆうんを終えるまでの空いた時間を過ごすためのミッド観光。

5年やとそう様変わりせえへんから私らはちよつとした変化にも気づかんけど、シャルちゃんにとつては3千年振り以上のミッド。私らでは気づかへんそのちよつとした変化に、シャルちゃんはきつと気づいて一喜一憂するんやろね。

そんなシャルちゃんを見てみたいけど、残念ながら私は部隊長。そんな理由でここを空けられへん。

（まあなんや。シャルちゃんに楽しんでもらえればそれでええな）

シャルちゃんにはこれから手伝ってもらわなアカン。その前に、少しでも楽しんでもらえれば・・・。

久々に再会できた大切な親友に頼るしかない私って・・・ちよう自己嫌悪やな。

そこにラインが「お疲れ様です」とデスクにティーカップをそつと置いてきた。

「おおきにな」

お礼を言いつつカップを手に取って口に含む。
美味しい。ラインのお茶は誰にも負けへんくらいに美味しい。

「シャルさんのおかげで、このテストメント事件が解決するのも時間の問題ですね」

ラインの屈託の無い確信を得たかのような笑み。

私もそう思う。思うんやけど、何かひどい胸騒ぎがする。

言い知れへん嫌な予感、というものを。

でもそれは杞憂かもしれへん。そやから、

「そやな。テストメントが出した一カ月ゆう期間までに終わるとええな」

忘れそうになるけど、“テストメント”は一カ月とゆう期間を指定して、管理局と事件解決数勝負をとする。

“テストメント”が負ければ、彼らは管理局の管理下に入る。

向こうが出してきた条件やけど、幹部達の目的からしてそれは絶対に無い。

カルド隊はシグナムたち守護騎士への復讐。

グラナードはどうやら上層部への復讐。あと未練がどうのって言うとならしいし。

死因である事故関係に何かしらあるのかもしれない。

クイント元准陸尉とティータ元一尉は管理局への復讐やなくての純粹な改革やと思う。

他の幹部とは纏う空気が違う。二人は本心から改革を願ってる。

そして魔術師とトパーシオ、ダイヤモンドはどうかはまだ分からへ

ん。

そやけどトパーシオは管理局の改革を望んどると私は思う。

エルジアでのなのはちゃんとフェイトちゃんとのやり取りは聞いてるし。

ディアマンテ。彼が一番の危険人物（亡霊？）やと私は思つとる。

幹部達の中でも一番管理局に恨みを抱いとる気がする。

モニター越しでしか見とらへんけど、それでも言葉の端々に暗い感情を感じる。

そして魔術師。ルシル君を召喚して、幹部達を生み出したこの事件の首謀者。

それぞれの目的を持った幹部達を纏めるゆうことは、それら全ての目的を魔術師も持つてるゆう事かもしれん。

マルフィール隊の正体はまだ確定やあれへんけど、もし本当にアレツタ三佐の部隊やとすると、やっぱりグラナードと同じ事故死における真実。

事故原因が管理局と関係があつて、そやから管理局に対する恨みがある……。

情報が少ないな。こつちも並行して調査した方がええかもしれへん。で、リインフォースは、シグナムたちの話しやと私らとまた逢う事が目的らしい。

私は、願いどおりに再びお前たちと逢えた事を嬉しく思う

ヴィータから聞いたリインフォースの思念通話を一言一句間違えずに反芻する。

この世に彷徨う強い想いを固定されて人の形となった、それが幹部達。

“願いどおりに”。ラインフォースを確固たる存在にしとるファクター。

そやけど、幹部達の想いが叶えられたらどうなるんやろ？

シャルちゃんは亡霊言つとるし、やっぱり成仏？ この場合は昇天言うんやろか。

どっちにしても消える事になるんかな？

(シャルちゃんが帰ってきたら訊いてみよ)

私の知る情報じゃここらへんが限界みたいや。

ラインの淹れたくれたお代りを飲みながら、親友の帰りを待つことにした。

十 十 十 十 十 十 十

聖王教会本部

オットーとティードに案内された辿りついて騎士カリムの居る執務室前。

ここに来るのも随分と久しぶりだ。スカリエツティ事件の時でも数えるくらいしか来てないし。

そんな事を考えてると、オットーがコンコンとドアをノック。

「騎士カリム。なのは様、ヴィヴィオ陛下、シャルロッテ様をお連れしました」

自分で言うのも何だけど、私に対する敬称で“様”っていうのが一番無い。

有り得ない。そこまで立派じゃないよ、私。

この場だけかもしれないけど、それでも“様”ってというのはどうも……。

騎士シャルロッテとかでいいのに。これから……はあるかどうか分からないか。

じゃあここで直すように言ってもダメかもね。

オットーに答えるように部屋の中から「どうぞ」って返答が来た。この世界の時間にすれば5年ぶり。私としては3千年ぶりの再会になる。

オットーが扉を開けて、視界にこの部屋の主の騎士カリムが入る。

「お久しぶりです、シャルロッテ様。

はやてやなのはさんに聞いた時は驚きましたが、騎士の中の騎士である剣神シャルロッテ様とまたお会いできて、騎士として光栄です」

優雅に一礼する騎士カリム。動きに一切の無駄が無い。

今の私（生前でも怪しい）には到底真似できないなあ。

………というか、ちょっと待て。

「ええ。騎士カリムもお元気そうだなによりです。

というか騎士カリム？ その騎士の中の騎士って……シャルロッテ様って……えつと……」

騎士カリムの中で私はどういった位置づけにされてるんだろう？

私が少し戸惑っていると、騎士カリムは？？？といった風で首を少し傾げて口を開いた。

「私たちベルカの騎士は、シャルロッテ様を始めとしたかつての騎士の方々の末裔。

私たち現代の騎士にとっては、正しくシャルロッテ様は雲の上の人ですから遙か古き時代の騎士の御一人であるシャルロッテ様に敬意を表すのは当然のことだと思っています」

屈託の無い微笑みは相変わらず。本当に綺麗な女性だ。

それより騎士カリムは、どうやら私とルシルが見せた大戦時の記憶に影響されたみたいだ。

かなり大げさだけど、確かにベルカの騎士は私たちの末裔とも言えたりする。

でも、だからってそこまで敬意を表すのもどうかと思うよ、ホント。それに雲の上の人って言い過ぎ・・・まああなたが間違っていないけど。死んでるし、守護神だし。

「そ、そんな大げさな。それに様付けって・・・。えっと、前みたいに騎士シャルロッテとかでいいんですけど・・・というか騎士シャルロッテでお願いします」

堪らず頭を下げてください。

「シャルロッテ様がそう仰るなら・・・。騎士シャルロッテ」

顔を上げると、また深く一礼している騎士カリムに戸惑う。

私は隣や後ろに居るなのは達に助けを求めろ。

でもみんな、騎士カリムの様子に目が点。ポカンってしてる。

（ダメだ。なのは達、オットーとディードですらフリーズしてる。

ここは話題を切り替えるしかない！）

。 「き、騎士カリム。その、挨拶もここまでにして・・・えっと・・・

あ、ヴィヴィオ。私たちが今日ここに来た理由、何だっけ？」

ヴィヴィオへと話を振る。

手っ取り早く本題に入るのが一番の解決法だ。

「え？ あ、う、うん！ イクスのお見舞いに来ました。

それで、シャルさんにイクスの身体を診てもらおうと・・・思って・・・」

イクスっていうのはイクスヴェリアの愛称。

でも、診てもらって。イクスヴェリアは病気が何かなのかな・・・？

そこんところはまだ説明されてないし。

私をわざわざそのイクスヴェリアと会わせたい、診せたいということとは、その子にかなりの問題があるみたいだ。

「そうですね。魔術師でもある騎士シャルロットなら、イクスを目覚めさせる方法をご存知かもしれませんし・・・」

視線が一斉に私に集中する。

それに、さっきまで怯えてたセインすらもまるで継るような目を向けてくる。

これはいよいよ結構なプレッシャーが襲いかかってきたよ。

話しが長くなると思ったのか騎士カリムは、

「すみません。席に案内もせず。オットー、デイド。お茶を用意してくれるかしら」

オットーとデイドにお茶の用意をお願いしつつ、陽の当たる席へと案内された。

そこはスカリエツィ事件の、機動六課設立の真実を知ったあの場所だ。

席に座ってオットーとディードがお茶を用意しているのを見ながら（にしても様になってるなあ）情報整理を始める。

ここに私が連れて来られて理由は、ヴィヴィオがイクスヴェリアという友達と会わせたいからという事。

古代ベルカのガレア王国とかいう国の王さまだった女の子。

ちよつと前に起こったマリアージュ事件でスバルに助けってもらったらしい。

ベルカの王族関係でヴィヴィオとも親しくなった。

大体こんなところだ。ヴィヴィオから聞いたイクスヴェリアに関する事は。

ディードの淹れたミルクティーの美味さにビックリしながら、ヴィオと騎士カリムのイクスヴェリアについての話に耳を傾ける。

大体は先にヴィヴィオから聞いた話だった。

で、もちろんその先もあった。

聞くところによると、どうやらイクスヴェリアは現代の医療技術でも治療不可な機能不全を陥っているらしい。

そのことで自然に目覚める事はもう無いのだということだ。

「・・・もしかしたら、シャルさんやルシルパパの使う魔術なら何とか出来るかもって思ったの」

ヴィヴィオが沈んだ表情でそう締めくくった。

現代の医療技術で治せない程の機能不全を起こしてる少女イクスヴェリア。

聞いたただけだとそう難しいことは無いかもだけど、そう簡単に出来ず、なんて言えない。

魔術だって万能なんかじゃない。無限の可能性を感じさせる魔術にだってもちろん限界はある。

でも可能性はある。イクスヴェリアを治せる可能性は。

「ということなので、騎士シャルロット。一度イクスを診てもらっても構いませんか？」

騎士カリムに頼まれるまでもない。私の力で誰かの助けになるなら考えるまでもなくやる。

でももし私でもダメだったら、敵であるルシルの魔術に頼るしかない。

女神の祝福。コード・エイルルシルの医療系の上級魔術なら確実にいける。でもそれにはとんでもない問題が私たちの前に立ち塞がる。

第一にルシルを魔術が扱える状態でここに連れて来ないといけない。早い話が生け捕って強制連行、そんなもって言う事を聞かす。

その前にもまだ問題がある。ルシルは無茶な能力封じをしていることだ。

それにその能力封じを解決させても、今度は界律からの制限があるかもしれない。

やっぱり問題だらけだ。しかも問題の解決方法がどれも難度MAX。ルシルをボコにするのは残念ながら少し待った方がよさそうだ。

「あのさ、シャルロット、あたしからもお願いするよ」

セインが深く頭を下げてきた。

彼女はイクスヴェリアの世話係をしているそうだ。

私がお子を目覚めさせることが出来るかもしれないと分かれば、さっきまでの私との距離もどうでもよくなるだろう。

だからこんなに必死に頭を下げて頼んでくる。

「・・・その前に一つ。私だって万能じゃない。出来ないことだってある。それを理解してほしいの」

セインの両肩を掴んで頭を上げさせる。

そんなもって頭をポンポンと軽く叩いてそつと優しくなでなでする。セインはポケーっとして私にされるがまま頭を撫でられ続けている。

「シャルさん・・・それじゃあ・・・」

「私の力で人助けができるなら、それがどれだけ私の喜びか。でもさっき言った通り私は万能じゃない。出来ないこともある」

ヴィヴィオが歩み寄ってきて、今度はヴィヴィオの頭をそつと撫でる。

するとヴィヴィオとセインの表情がペアって明るくなってく。

「「そ、それじゃ今すぐにも！！」」

「おつとと」

物凄い勢いでヴィヴィオとセインが詰め寄ってきたから少し後ずさる。

うん、まあ今すぐにも診てあげたいんだけど、それにも少し問題があったりする。

「ごめん。今ははまだ無理。今の私は正式な契約での召喚じゃない事で力が弱まってる。」

だからもう少し待ってほしい。ある程度力が戻るときまで」

「そっか……。でも、その力が戻ればもしかしたら、ってことでもいいんだよね？」

セインが少し悲しげな表情になったけど、すぐに笑みに変えてそう訊いてきた。

「もしかしたら、ね。過度な期待はさせたくないから、あくまでも“もしかしたら”って言っとく」

イクスヴェリアがもしかしたら起きるかもしれない。

それだけでヴィヴィオとセインは嬉しいみたい。

期待に応えてあげたい。この子たちの表情に翳りをつくりたくない。だから調整を終えたら、出来る限りのことはしてあげよう。

そして帰る前に一度イクスヴェリアのお見舞いをする事になった。騎士カリムとオットーとデイドとは執務室で別れて、セインの案内の元、イクスヴェリアの眠る一室に向かう。

「実はさ、ルシリオンがこの世界に来たって聞いた時、真っ先にイクスの治療をお願いしようって思ってたんだ」

廊下を歩いていると、セインがいきなりそんな事を言い出した。

「でも、あたし達の事を憶えてない上に敵対関係にあるって聞いてさ、結構落ち込んだんだあ」

頭の後ろで腕を組んだままセインは続ける。

私となのはに挟まれたヴィヴィオの左手と手を繋ぎながら、黙ってセインの話聞く。

「そして今度はシャルロット、あんたが来てくれた。
しかもルシオンと違って記憶もあるし、昔どおりにバカのまんま
だったし」

「セイン……。そつかあ……。私ってばバカだったんだあ。
。。
へえ、そつかそつかあ……。初めて知ったよお、私ってバカな
んだあ……。おいコラ」

かなり失礼な事をほざいたセインは「あははは！」なんて笑いだし
て私に振り向いた。

ああもう可愛いなその笑顔は！ でも、いいよ。ちょっと遊んであ
げるよ、セイ~~~~ン。

セインに向かって~~~~ダ~~~~ツシュ！！

「ほいほい」

「つく、デープダイバー……！」

壁に床に天井に潜り込んで私の腕から逃げる水色娘。
閃駆で先回りしようとしても、

「ふんぎやつ!?!」

「シャルちゃん！」 「シャルさん！」

「あはははは！ 大丈夫シャルロット〜？」

「おんのねえ~~~~」

壁に突っ込んだ私を後ろで指差しながら笑いやがるモグラ娘。メリメリと音を立てながら壁から顔を引き剥がす。うわぁ、壁に私の顔がくつきりと……。このままじゃ本格的に壁のオブジェになってしまう。何か布石を立てないと捕まえられないなあ。

「ヴィヴィオ、レヴィ。て・つ・だ・え」

「え？」 「ええ~~~~~やだ」

「二人とも。教会内で騒いだらダメだよ」

ヴィヴィオは戸惑って疑問符、レヴィはバツチリ理解して拒否。なのはは呆れ半分焦り半分なご様子。あー、あと少し待って。

するとセインが「それはルール違反だよ、シャルロツテ」なんて言うけど無視だ、この水色モグラ娘。

というかルール無視って何だ？ いつから私はモグラ叩き……、あくなるほど。

手持ちハンマー二刀流のような反則と言いたいわけか。んなものは無視だ！

「レヴィはどうか知らないけど、ヴィヴィオに手荒なマネは出来ないよねえ、セイン」

セインを挟むようにして立つ私となのは達。

じりじりとセインににじり寄って、そして私は足を止める。止めざるを得なかった。

だって、奥に居るなのは後ろには……

「セイン？ 一体何をしてるのですか？」

「し、シスター・シャツハ!？」

腕を組んで仁王立ちをしているシスター・シャツハ。

表情は笑み。だけどさっきのなのはみたいに目が笑ってないよ。

なのはとヴィヴィオとレヴィが挨拶をすると、シスター・シャツハは本当の笑みを浮かべて応えるけど、セインに顔を戻すとまた目の笑ってない笑顔に。これは怖い。

「セイン、ディープダイバーは遊びで使ってはダメだと言いましたよね?」

「え? これは、その、なんて言うか・・・」

セインがチラチラ私に視線を向けてくる。

言外に“助けて”って視線だ。う~~~~ん~~~~・・・。

暴力シスターがあらわれた。

シャルロット2ndはどうする?

たたかう

どうぐ

なかま

にげる

ダメだ。威圧に巻き込まれて逃げれない。(へ? なんで?)

シャルロットは2ndどうする?

たたかう

どうぐ

なかま
にげる

なのはとヴィヴィオとレヴィは戦闘に参加できない。
シャルロット2ndはどうする？ (なんてこと！ ていうか私は
関係ないんじゃない？)

たたかう
どうぐ
なかま
にげる

ダメだ。威圧に巻き込まれて逃げられない。

(ちよっ！？ 何で！？ 私がどうして威圧に巻き込まれないとダメなの！？)

シャルロット2ndはどうする？

(こっぴごうなら……！)

たたかう
どうぐ
なかま
にげる

<<戦闘コマンド>>

セインを差し出す
セインを囮にする
セインを見捨てる
セインを旅立たせる

シャルロット2ndの“セインを見捨てる”二つげき

「お久しぶりです、シスター・シャツハ」

「騎士シャルロット！ ええ、本当に。」

なのはさんから連絡を受けた時は、それはビックリしました。騎士カリムとはもうお会いになりました？」

「はい。でもあそこまで私を敬うというか何というか、にはビックリしましたけど」

「私も騎士シャルロットには敬意を抱いていますよ。」

何せ貴女は、私達ベルカの騎士の祖先とも言える遙か古き時代の騎士なので、

「そ、そうですね・・・あはは。え〜っと、それじゃあ私となのはとヴィヴィオとレヴィは、イクスヴェリアのお見舞いに行く途中ですのぞ」

私のセインの名前を出さなかった話を聞いたセインの目が少し潤む。そして小さく首をフルフル。見捨てないで、って必死に訴えかけてくる。

するとシスター・シャツハは「そうですね。あの、この壁のくぼみは・・・？」と訊いてきたので、

「聞いてくださいシスター・シャツハ。」

セインってば変に私をからかってきて、だからちよつと懲らしめてあげようと思っただけだ・・・。

でも、それなのにセインはさらにディープダイバーで私を玩んだんです」

よよよ、と嘘泣き。セインの顔色が青褪める。
奥に居るなのはとレヴィは「はぁ」と大きくため息。ヴィヴィオは苦笑。

「セイン。少し話をしましょう。」

騎士シャルロッテ、なのはさん、ヴィヴィオ、レヴィ。またいらしてください」

「えええええ！？ た、助けてシャルロッテ！

謝るから、って痛いシスター！ 極まってる！ 関節極まってるよ！？

ちよっ、待つ、シャルロッテエエエエー！ー！ー！ー！ー！ー！！
「！」

ドナド ドナ ドナ~~~~~..... （小学校時代の音楽の時間が懐かしい）

シスター・シャツハに右腕の関節を極められたまま連行されていくセインの叫喚が廊下に響き渡る。

さよならセイン。私、アナタの事、忘れる時まで忘れない、といいなあ。

暴力シスター改めシスター・シャツハは、セインを連れて去っていった。

脅威は去った。シャルロッテ2ndは1000経験値をもらった。

「それじゃあヴィヴィオ。イクスヴェリアの部屋まで案内して」

さっ、セインの事はもう忘れて、当初の目的を果たそうか。

なのはとレヴィはもう呆れてものも言えない状態。

ヴィヴィオは「セイン大丈夫かなあ」とセインを心配してる。優しいなあ。

そんで、ヴィヴィオに案内された辿り着いたイクスヴェリアの眠る部屋。

ここに来るまでに、セインの叫び声が聞こえたような気がしたけど、うん、やっぱり気の所為だ。

部屋に入るとベッドに静かに眠る一人の女の子イクスヴェリアが居た。

ヴィヴィオが歩み寄って行って、イクスヴェリアの手を取って優しく自分の両手で包み込む。

私もヴィヴィオに続いてベッドに歩み寄る。

ベッドの側のドレッサーには写真立てが大小一つずつ置いてあって、飾られている写真は小さな方はスバルとイクスヴェリアのツーショット。

大きな方にはいろんな写真が飾られている。学院で見かけたヴィヴィオの友達やナカジマ姉妹などなど。

「シャルさん、イクスを診てもらっても良いですか？」

「ええ、任せて」

ヴィヴィオにそう答えて、私はイクスヴェリアの額にそっと手を置く。

我が言の葉は幻想を紡ぐ鍵

詠唱。書庫からルシルから貰った調査系の術式を発動、イクスヴェリアの状態を確認する。

魔術で回復出来るかどうか。私に治せるかどうか。治療に必要な何か手掛かりは無いかと思っ、この子には悪いけど記憶を少し覗かしてもらおう。

見えるのは、私にとっては見慣れた風景。

灰色の空、不毛の大地、血染めの泥濘、幾多の亡骸、壊れた武器の山。

妙な人型、マリアージュって奴を生み出しては戦地に送り出すイクスヴェリア。

目覚めてはその繰り返し。繰り返し。繰り返し。繰り返し。

私達の時代に比べればマシ・・・だなんて言えないな。

戦場のあり方に於いて、マシだとかそうじゃないとかそんな事を比べてちゃいけない。

血が流れて、命の灯が消えて、慟哭、憎悪、復讐、また血が流れて。戦場の大小関係なく命が消える事には変わりない。

貴い命なんてものが安く思えるほどに容易く消えていく。

そして、マリアージュ事件ってやつ記憶になる。

スバルとの出会いから始まって、今のように眠りに入るまでの記憶。短過ぎるけどすごく温かな思い出。これは私が踏み込んだじゃない領域だ。

すぐさまイクスヴェリアの記憶を覗くのを止める。

「……………ふう」

一息つく。ヴィヴィオが「どうですか？ 何とかなりそうですか？」と訊いてきた。

う……………ん……………。結論から言えば……………

「うん、私でも何とかかなりそう・・・かな。
ある程度力が戻れば儀式魔術も扱えるようになるし、ルシルから貰った複製術式の中にもこういう普通じゃないのを治す術式もあるし・・・」

ルシルの複製術式の中には、複雑過ぎる術式だけど人を救う術式が多い。

次いで攻性、補助、防性（防御嫌いだしなあルシル）って感じた。

「ほ、ホントですか!？」

ヴィヴィオが立ち上がって勢いよく私にしがみ付いてくる。

レヴィもそう。「本当にイクスを治せるの!？」と詰め寄ってきた。落ち着くように二人を宥めながら、

「今すぐじゃダメだけど、調整を終えたらいけると思う」

そう告げる。んだけど、それがさらに二人を煽ることになった。

「本当ですか!？」を繰り返すヴィヴィオとレヴィ。

いや、だから、本当だって言っているじゃない。

「落・ち・着・い・て、二人とも！ イクスヴェリアは治せる！

明日朝早くに儀式をやってみるから、今日はこれで解散！ OK！
？」

二人の頭に手を置いてわしゃわしゃと全力で撫でる撫でまくる。

そんなことを少しの間続けて、二人が落ち着いた（強制）ところで止める。

二人はくしゃくしゃになった髪のまま「あう〜」と目を回していた。なのはと二人してヴィヴィオとレヴィの髪を手櫛で直しつつ、

「それじゃあ今日はもう帰ろう。私もこれから予定あるし」

そう告げる。二人は「うん」って頷いて応えた。

それから騎士カリム達（セインの姿が見当たらない）に挨拶してから教会を後にする。

まずはヴィヴィオを自宅に送るために、高町家へ向かう。

その間に、ヴィヴィオは友達にメールを、レヴィもルーテシアにメールを送ってるみたい。

「あの、シャルさん。イクスが起きるところ、みんなも一緒に、っていうか、その・・・」

ヴィヴィオがそこまで言っただけで口ごもる。

どうやらヴィヴィオは遠慮しているみたいだ。

それはそうだ。ヴィヴィオのその友達に魔術を見られても良いですか？ってことなんだろう。

う〜ん、別に見られても良いかなあ……。魔術って言われないと気づかれないと思うし。

それ以前に魔術という存在を知る人なんて、私とルシルと関わったのは達しかいない。

だったら見られても困るようなものじゃない。

「いいよ、その友達を連れてきても。って私が許可していいのかわからないけど。」

その辺りはシスター・シャツハにでも訊いてみて」

そう答えるとヴィヴィオは可愛らしい笑顔を浮かべて元気よく「ありがとう！」とお辞儀、そしてメールの文字入力を再開。

ニコニコしたヴィヴィオを高町家のハウスキーパーであるアイナさ

んに預けて別れる。

そして私達は本局へと戻る。

本当ならチンクとかにも挨拶しに行きたかったけど、向こうは仕事
中だし邪魔するわけにもいかないということで断念。
まあ、近いうちに連絡でも入れよう。

管理局本局・六課オフィス

「ただいまー！」

六課のオフィスに入ると同時に右手を上げて挨拶。

するとみんなが「おかえりなさい！」って返してきてくれた。
凄く嬉しかった。5年前は“ただいま”って言われることは無かつ
たから。

それから、私に用意されたデスクへと向かう最中にスバル達が物凄
き勢いで駆け寄ってきた。

「……シャルさん！ イクスを治せるって本当ですか！？」「……」

オフィスに響き渡る四人の声。

至近距離で四人の音響口撃を聞いた私は軽く意識が遠のいた。
何とか意識を繋ぎとめて、教会での出来事を話す。

「イクスが……起きる……よか……た……よかつたあ……」

「

スバルが、イクスヴェリアが目覚めると知って泣き出した。

今日イクスヴェリアの記憶を見た時、スバルが最もイクスヴェリア
と親しく近かった存在だ。

そして明日朝早く教会に行くことを、はやてに許可を取る。
喜び合っていた四人だったけど、エリオただ一人が私に歩み寄ってきた。

「・・・シャルさん。僕はいつでも良いですよ」

「ん。私も調整が終わったし、早速やろうか。はやて、場所取り大丈夫だった？」

エリオとそれなりに本気な模擬戦をするため、はやてに場所を用意してくれるように頼んでおいた。

するとはやては部隊長のデスクから手を振りつつ「第2に、30分だけなら取れたよ」と答えてきてくれた。

30分。十分だ。一応エリオの戦闘に関しては映像で確認済み。
それでも実際に戦ってみたい。何せエリオは、出力リミッター付きとはいえフェイトを負かしたことがあるらしい。

そこだけを聞けばグラナード・フォヴニスピアと十分渡り合えるだろう。

だけど、グラナード達と戦える術を手に入れたとしても、エリオはフォヴニスの威圧感に押される嫌いがある。

それを克服しないと、勝てる戦いを落とすことになりかねない。

そして個人的な目的。

あの小さかったエリオが、私相手にどこまでついてこられるか、それを確かめてみたい。

「よし！ それじゃ、エリオ。行こうか」

「はい！ お願いします！！」

そして私とエリオは本気で戦った。「あれ！？ 何で省略！？」うん、エリオ。何言ってるのかな？

もちろん私の勝利。まだまだ抜かれるわけにはいかない。「僕、結構頑張ったじゃないですか！？」うん、少し黙っていいよね。

結論から、キャロのバックアップ付きであれば、十分フォウニスと融合したグラナードと戦えるレベルだと判断。「酷いですよお、シヤルさん」男はドンと構えてなさい。

「そんじゃはやて。カートリッジなんだけど・・・」

「うん、シヤルちゃんのお願い通りに届いとるよ」

今日最後の予定。カートリッジに私の魔力を充填する作業。奥から隊員達数人でカートリッジが納められたボックスを運んできた。

おお、結構な量だなあ。数えるのが面倒・・・な以前に数えたくない。

「シヤルちゃん。無茶せんでもええよ。少し休んでからでも・・・」

「大丈夫。^{システム}魔力炉が活発な今の内にやっつく方がいいんだよ」

両手にカートリッジを掴めるだけ掴んで魔力を流し込む。

充填完了して、また掴めるだけ掴んでまた魔力を流し込んでいく。んだけど、そんなジツと見られてると少しやりづらんだけど・・・。

「な、なんか話をしない？」

私に視線を向けているのは達に話しかける。
そしたらまずははやてが話し始める。

「質問なんやけど。幹部達は、想いを人型に固定されたんやろ？
その想い、未練を叶えたらどうなるん？ リインフォースは私らと
再会するのが想いらしいんやけど、今も存在しとるし」

「消えたら困るんやけど」と締めくくるはやて。なんだあ、仕事の
話しかあ。

まあいいや。未練があるからこそ魔術師の魔術によつて存在出来る
幹部達。

その未練が無くなつたらどうなるか。

「まあ消えるでしょうね。でもリインフォースが消えないのは、彼
女が未来を願っているからでしょ？

はやてやシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、そ
してアギト。

八神家との未来を想っているからこそ、リインフォースは存在する。
それくらいははやてにだって分かっている事でしょうが」

「え、うん。そやな。私らもリインフォースとの未来を願つとる。

そつか・・・リインフォースもそう願ってくれているんやな」

はやてが嬉しそうに一息ついた。

他の幹部達に関してはノーコメント。何せ復讐云々ばかりらしいし、
成功しても消えるとは限らない。

そして、次はスバルとティアナからの質問だ。

「お母さんとティアのお兄さんは、魔族持ちだと思えますか？」

「もしそうなら、それなりの覚悟を、と思ひまして」

家族と戦う気になったのかな？

そんな顔をしてしまったのか、スバルとティアナは苦笑しながら、私の疑問に答えてくれた。

「ギン姉達に相談してみたんです。お父さんやギン姉なら、お母さんとも戦うかどうか。」

まあお父さんは魔導師じゃないから戦うとは少し違いますけど、でもギン姉は・・・」

「それで？」

「はい。ギン姉は、“私は母さんの、“テストメント”の真意を知りたい。」

そのために戦わないといけないのなら、私は母さんとも戦う」と言っていました。

あたしも知りたいんです。お母さん達の事を。だから・・・」

「もう逃げているだけじゃダメだと。向きあわないとダメだと。そう思ったんです」

二人の目には今朝までの迷いの色は無い。

あるのは向き合う覚悟と戦う決意の色。

「なるほど。良い目だよ二人とも。」

答えは、そうだね。たぶんだけど魔族持ちじゃない。

何故なら昨日も言ったように魔族との融合は、戦力を得る代わりにアイツらの存在する証“想い”を削っていく。

クイントさんとティータは、きつとあなた達の成長した姿を確認することが目的だと思う。

次いで管理局の改革。それだったら魔族なんていらないでしょ？」

全ては私の推測でしかない。だけど、これで間違いないという確信もあつたりする。

親が子と戦うのに、魔族なんていう反則は必要ない。

それを聞いた二人は深く考え始めて「ありがとうございます！」とお礼を告げてから自分のデスクに戻って、また考え込み始めた。

気がつけばカートリッジへの魔力充填も三分の一が終了。

やっぱり黙々とこなすより、誰かと話している方がずっと早く終わる。

そして話は私の、今日の教会でのセインとのやり取りになった。

「でき、セインってば私がバカだって言うわけ。失礼しちゃうねえ？」

「は？ だってセインの言う通りおまえバカだろ？」

ヴィータがどこからともなく私をバカ呼ばわり。

シグナムを自分の席で頷いてるし、レヴィすら「やっぱり」って、やっぱりってなんだコラー！！！

「ちょっと待って！ どうして私がバカなわけ！？」

それはまあバカ騒ぎはするけど、それイコールバカってことはないんじゃない！？」

「いやあ、分かんねえぞ。はやてー、シャルロツテの学校の成績ってどうだったー？」

「シャルちゃんの成績？　なのはちゃん、フェイトちゃん、どうやったっけ？」

「えっと、小学校の時はそんなに悪くは無かったよ」

「中学の時だと理系以外はほぼ全滅だったけど、うん、悪くなかったよ」

「それは悪い分類だろ」

くうく、バカにしてえくく。

「ちょーーーと待った！　私はこれでも生徒会の役員、しかも会長になったことだってあるんだよ！」

この3千年の間の契約の中には学校生活と魔術のお仕事を両立するのがあった。
その高校の生徒会会長にもなったんだよ。どうだ？　すごいでしょうが？

「し、シャルロッテが・・・」

「生徒会の会長・・・！」

うんうん、驚いているね。見たか、私はバカじゃない。会長だって務めるんだぞ。

胸を張ってふんぞり返っていると、

「その学校・・・可哀想だな」

「ああ。おそらくまともに機能していなかっただろうな、その生徒会は」

「ううん、学校自体が混沌としていて、生徒は乱れ、暴動・略奪、その果ての国内最低のお祭りバカ学校に・・・」

あれえ？ 想像していた反応とは全然違うよお？

ヴィータとシグナムとレヴィが物凄く私が会長を務めていた高校を憐れんでいる。

「そこまで言う！？ ちゃんと機能していたもん！ 生徒会の仕事だってちゃんとしてたもん！」

「ほう？ どんなふうにしてたんだよ、シャルロット」

何かヴィータが前にもまして突っかかって来る気がする。

これは一度私の立場を思い知らせてあげないとダメなようだ。

「ヴィータちゃん、シャルちゃんが可哀想だよ」

「そつやでヴィータ。信じたらなアカンよ」

・・・はやて、なのは。そう言ってる二人もあんまし信じてないよね？

何か言葉の端々にちょっとした同情が垣間見えるのは、私の気のせいかな？

私が身体を震わしていると、フェイトが「落ち着いてシャル。シャルはすごいよ」って言うってくれるけど、私宥められてる！？ 小さい子供にするように宥められてる！？

「で？ そののところはどうなんだ、フライハイト？」

「よおーく聞くがいい。生徒会は立派に機能していたわ。だって、“ああん、私、こんな多い仕事できなあゝゝい”って言うたら男子どもが馬車馬のように働いてくれるんだもん」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

いやゝ、本当に楽しかったなあ。

ちよつとお願いすれば代わりに男役員どもが働いてくれるから、放課後は結構遊んでいられた。

まあその度に副会長ルンに怒られていたけどさ（物理的&精神的に）。

「やっぱバカだ」

「ていうかバカだ」

「どうしようもなくバカだな」

「「シャルちゃん……」

「シャル、もうフォローできないよ」

私の好感度という名の株が絶賛大暴落中。

「今日からおまえはバカロツテでいいよな。おい、バカロツテ。茶
ティーカップを差し出してくるちびっこヴィータ。」

「んな！？ むう~~~~、うっさい！ チヴィータ、ミニータ、プチータの究極3段活用！！ 私だってそう呼んでやる！！」

「意味わかんねえええ！！！！つつか三段活用の意味知ってんのか！？」

「知るかああああ！！！！」

「おまえ、生徒会長じゃなかったのかッ！？ つつか成績が良くねえとなねえんじゃねえのかッ！？」

「そんなことどうでもいいわああああ！！！！」

推薦だったし、知らない間の組織票だったし、ほとんどルシルに頼りきりだったし。

「何でキレてんだよ！？」

「チヴィータ、ミニータ、プチータの究極3段活用！！それはチヴィータ、ミニータ、プチータの究極3段活用が私を怒らせ様なことをほざいたからだッ！」

「マジでそう呼ぶか！？ バカロツテ、アホロツテ、ボケロツテの三段活用！」

ロゲンカ・じゃれあいつて名前のコミュニケーション。

ヴィータは昔と違ってさらに本気で来てくれる。それがすごく嬉しい。

だから……

眠り姫の目覚め 〈Ixwelia〉

11月28日 午前

昨日の約束通り、イクスヴェリアを覚醒させるために私達は教会前に来ている。

メンバーは、はやてに許可をもらって同行したスバルとティアナとエリオとキャロとレヴィ。

本当なら任務中の六課メンバーが本局を空ける事はそう簡単に許されない。

なのはだつてそうだったけど、そこは私の事を考えてくれたはやてのおかげだ。

それなら何故スバル達が同行できたのかというと、今日、この後私達は“テストメント”の本拠地と思われる“オムニシエンス”に向かうからだ。

というわけで回想です

夕飯の後、恒例の会議室に集まった六課メンバー。

部隊長はやて、分隊長なのはとフェイト。

分隊副隊長シグナムとヴィータ。

ロングアーチのシャマルとリインとアギト。

各分隊員のスバルとティアナとエリオとキャロ、そしてフリード（は違うか）。

そして遊撃隊の私とレヴィとザフィーラだ。

「フライハイト。そろそろこの身体を元に戻せ」

「まだダメ。いいじゃん、そのままです。可愛いよ、シグナム」

シグナムを見下ろしながら、シグナムの提案を却下。

するとシグナムが人知れずガクリと頂垂れた。ププ、可愛いのにねえ。

そして今度はヴィータが「悪かった。だから元に戻してくれ」と姿が見えないのに、どこからかそう謝ってきた。

「わたしも謝るから、お願いシャルロッテ。元に戻して（泣）」

レヴィも私服じゃない、管理局内じゃ絶対に見ない服を着用中。

顔を赤くしながら、超ミニなウェディングドレスのスカートの裾をギューギュー下に引っ張ってる。

「レヴィ！？ 今度は胸が危険な事に！！」

「っ！ あわわわわわわわわ！」

完全肩出しだから、下に引っ張れば引っ張るほど上が下にずれ落ちる。

そうなる見えちゃうわけで、そしたら今度は上に引っ張るわけで、すると下が見えちゃうわけで・・・。

完全に残念なスパイラルに陥るわけです。

さすがにこれ以上はエリオが大変な事になるので、レヴィの罰はこれにて終了。

指パッチンで、服装を元のロングワンピースに戻す。

「しくしくしく・・・。シャルロッテに辱めを受けました・・・」

「シャルちゃん。これはやり過ぎ」

確かに。するとシグナムとヴィータも「こっちも元に戻せ」と抗議してくる。

生憎二人は大して問題ないから放置のまんま。しばらくその姿で過ごすがいい。

「まあなんや。シグナムもヴィータももうちょっとシャルちゃんに付き合ってたてな」

はやてがシグナムを抱きかかえて膝の上に乗せる。それほどに今のシグナムは小さかった。何せ、

「こんなデフォルメしとる三頭身なシグナムは可愛えしなあ」

ねん〇ろいどみたいになった（というより私がした）デフォルメ・シグナムだからだ。

はやてに頭を頼りされて、シグナムは少し戸惑ってるようだけど満更でもなさそう。

アギトに「こんな可愛いシグナム見たことねえ」と戦慄していた。

で、ヴィータと言えば、ミクロツタのまんまでいます。この会議室のどこかにいます。

“ウォー　ーを探せ”以上に難しいけど、声を頼りにすれば見つかるかもしれない。

まあそんなこんなで本題。

“オムニシエンス”の調査に向かったクロノとユーノから調査資料が現地から送信されてきた。

魔術関係になるから、魔術を知るいつものメンバーだけでの閲覧と

なっている。
で、最初に観た遺跡とやらで確信。“ギンヌンガガブ”で間違いなかった。

“ヨツンヘイム”王族の建てた神殿。生前見たことがあるから間違いない。

そして“アドウベルテンシアの回廊”と“レスプランデセルの円卓”。
私がかつて“風迅王イヴィリシリア”と闘って負けた舞台もちゃんと残ってた。

(・・・空間が歪んでる。魔法じゃない、魔術による空間歪曲か？)

空間の歪みが見える。だけどおそらくクロノ達には見えていない。見えていたら、それも報告してくれるはずだし。

まあ結果的に大きな収穫なのは間違いない。

“オムニシエンス”は、“テストメント”と深い関わりを持っている。

「はやて。明日、私達もオムニシエンスへ行こう。

テストメントと何かしらの関係、オーレリアのような拠点である可能性がある。

ううん、もしかしたら本拠地かもしれない」

魔族を唯一召喚出来る世界“ギンヌンガガブ”。

そこを本拠地としても何もおかしくなんてない。

というか、“レスプランデセルの円卓”を包み込むような空間の歪み。

アレは魔術による結界の可能性大。疑うには十分過ぎる。

みんなが絶句する中、はやてが「了解や」と、どこかに通信を繋げ始めた。

「シャルちゃん。もし、もしオムニシエンスがテストメントの本拠地で、この事件が終わったら、シャルちゃんは……」

私の隣に座るなのはがそう訊いてきた。

「まあお役御免で消えるでしょうねえ。あはは、昨日この世界に来て、明日でお別れ。」

何て言うかまあ、短いけど濃い三日間だったねえ」

正式な契約召喚じゃないし、もう一つの理由からしてそう長くは留まれない。

それに長引けば長引くほどまた別れが辛くなるから、終わったらすぐに去ろう。もちろん笑顔で。

「そ、そっか……」

うおおい！？ 物凄い勢いでなのは達の覆う空気が重くなって！！あれ！？ シグナムですらそんな悲しげな顔するの！？

「早過ぎるよ。そんなの……早過ぎる……」

「あーもう。そんな沈まない！ 確かに寂しいけど、これからも私達が過ごした時間を忘れなければ大丈夫！」

沈んだみんなに喝！ と言っても、おそらく私はみんなの事を忘れるだろう。

私がいみんなの事を憶えていられるのは“界律テスタメントの守護神”として存在しているからだ。

でも、私はこの戦いを終えたら“界律テスタメントの守護神”の座を降りる事になっっている。

消える。生前の記憶も。守護神としての記憶も。全てがリセットされる。

それが私の“輪廻転生リインカーネーション”。

私の存在たましいが崩れかけてきている。このまま守護神を続ければ、存在わたしは消滅して、転生出来ずに永遠の無に囚われる。

その前に魂わたしは“神意の玉座”から解き放されて、“界律”へと戻り正常な輪廻転生を行う。

どこの“界律セカイ”、どこの時代じかんに転生するかももちろん分からない。でも、また人としての人生を歩めるといっているのであれば、それは幸福な事かもしれない。

けどやっぱりなのは達との思い出が消えるのだけは悲しい……。これがもう一つの、私が留まらない理由だ。

「そ、そうだよ。私達がどんなになってもシャルちゃんを忘れない。い。」

そうしたら、シャルちゃんはいつまででも私達と一緒に。そうだよ。」

なのはの言葉に賛同するみんな。

ありがとう。そしてごめんなさい。私は、みんなの事を今度こそ完全に忘れる。

「……クロノ君に明日オムニシエンスに向かう事を話した。

でな、幹部達は私らが、レジスタンスに関してはクラウドディアの武

装隊と五課に任すことにしたわ」

「え？ よかったの？」

「明日で最終決戦言っただら、こっちも派手に動かなアカンくなる。

それに、前みたいに幹部達に怯える必要も無くなった。

真正面から戦える術を手に入れたんやしな。むしろこっちから会いたいくらいや。

そやから情報が漏れても大して問題やあらへんやろ」

おお、はやてがいつになくバトルモードに突入。

まあはやてにとって重要なのはリインフォースのことだろうけど。。。

確か“特務五課”はセレスの部隊だっけ。

あーでも部隊長が代わるらしいし、セレスにもお別れの前に挨拶しておきたかったなあ。

「そうゆうわけや。みんな、明日の決戦に備えて、今日はもう休んでな。以上、解散！」

これにて回想終わり

というわけで、今日これから最終決戦なのです

そして、私達の他にはヴィヴィオと友達の……

「はじめまして！ コロナ・ティミルです！」

「リオ・ウエズリーです！ はじめまして！」

「はじめまして。シャルロツテ・フライハイトです、よろしくね」

コロナとリオ。昨日、ヴィヴィオと一緒にいた子達だ。

うわぁ、可愛い。ルシルのような弟（今は違うけど）より、こついう妹が欲しいなあ

そしてもう一人。ヴィヴィオたちに比べれば少し年上な感じのする女の子。

雰囲気からしてかなりデキる子だ。この子は強い……。

「はじめまして。アインハルト・ストラトスです。

ヴィヴィオさんにはいつもお世話になってます」

「ストラトス!？」

私の驚愕に、事情を知らないコロナとリオとアインハルトはビクッとしてしまった。

「あの、何か……？」と少し引け腰でアインハルトが訊いてきたから、私は笑顔で謝罪する。

「あ、ごめんごめん。何でもないので」

ストラトス。

かつての同僚に同じファミリーネームを持つ騎士がいたから、少しビクッしただけだ。

それから私達は騎士カリムに挨拶をして、目的であるイクスヴェリアの元へと向かう。

その間にもヴィヴィオの友達と話す。ヴィヴィオとの出会いとか、これまでの思い出話とか。

そんなこんなで着いたイクスヴェリアの部屋。

「じゃあちよつと準備があるから部屋の外で少し待ってて」

そう言ってみんなには部屋の外で待っててもらおう。

さすがに準備を見られたら違和感を与えてしまう。本当に魔法？っていう違和感を。

今後、ヴィヴィオ達への質問攻めを回避するためにも、準備は見せないでおこうと思った私なりの配慮のつもり。

扉を静かに閉めて、ゆっくりとイクスヴェリアの元へと歩み寄る。

「待っててね。今、あなたの未来を取り戻すから」

そうイクスヴェリアの頭を撫でる。

そして 我が言の葉は幻想紡ぐ鍵 と詠唱。

使用術式は“苦境を通じ神聖なものへ”。

ルシルの持つ治療系の複製術式の中でも上位。

コード・エイル女神の祝福には及ばないけど、イクスヴェリアの身体を治すくらいなら大丈夫なはずだ。

フォルトウナー・アサザ身体サマグナエ・サヒエンティアエ・ノーン・テツレト「逆境は、大いなる知恵を持つ者を脅かさない」

詠唱、第一節。

ベッドを中心として幾何学模様の魔法陣が描かれる。

ダビト・デウス・ヒース・クオクエ・フイーネム「神はこれらの困難にも終わりを与えるだろう」

詠唱、第二節。

イクスヴェリアの眠るベッドを包み込むように淡い桃色の光が生ま

れる。

「運命は望む者を導き、
欲しない者をひきずる」
ドゥークント・ウオレンテム・
ファータ・ノーレンテム・トラフント

詠唱、第三節。

光がイクスヴェリアだけを包み込むように伸びて、イクスヴェリアを覆う。

「困難を克服して栄光を獲得する」
ペル・アスベラ・
アド・アストラ

詠唱、第四節。

イクスヴェリアの体内に入り込むようにして、桃色の光は消えた。

「幸先のよい光が昇る」
プロスベラ・ルクス・オリトゥル

詠唱、終節。

イクスヴェリアの身体が淡く光り出して、すぐに消えた。

これで準備完了だ。あとは術式宣告。それで、この術式は完成する。

「入ってきて」

扉を開けて、廊下で待っていたスバル達を部屋に招き入れる。

みんなは静かに部屋に入って、ベッドに眠るイクスヴェリアを見詰める。

そして私は「苦境を通じ神聖なものへ」と術式宣告。
ペル・アングスタ・
アド・アウグスタ

部屋に一瞬だけ風が生まれた。暴風と言ってもいいくらいのもので、小さく悲鳴を上げるヴィヴィオとそのお友達。

「シャルさん・・・？」

風が止むと、スバルが心配そうに私を見てきて、私は頷いてイクスヴェリアを見てみなさい、と視線で告げる。スバルもコクリと頷いて、静かにイクスヴェリアの眠るベッドに近づいていく。

「イクス?・・・イクス?」

ベッドのそばで膝をついて、スバルは何度もイクスヴェリアの愛称で彼女を呼び掛ける。そして、

「・・・ん・・・スバル・・・?」

イクスヴェリアが目を覚ました。

彼女の第一声は「スバル」。彼女にとって大切な友人の名前。歓声が沸く。スバルは泣いて、イクスヴェリアを抱き起こしてギュッと抱き締めたり。それを窘めるティアナも若干涙目。ヴィヴィオ達も友達同士で抱き合って喜んだり。

(良かった。最後の日に、こんな多くの笑顔を見れて)

私は静かに部屋を後にする。あの部屋の中じゃ私はちよつと浮くから。

何せ私はイクスヴェリアとは友人でもなければ知人ですらない。

「シャルロット!」

息を切らしながら私の名前を呼んだのはセインだった。その後ろにはシスター・シャツハにオットーとディード。

「もしかして・・・イクスは・・・！」

「うん、今起きて、スバル達にもみくちやにされてる」

そう言うと、セインは身体を震わせて、思いつきり頭を下げた。

「ありがとう、シャルロッテ。本当に・・・ありが・・・とう・・・」

声が震えてる。嗚咽混じりの感謝。

私はセインの肩に手を乗せて頭を上げさせる。

「私の方こそありがとう。ほら、セインも行ってきたら」

そう言うと、セインはシスター・シャツハに視線を送る。

その視線の意味を察したシスター・シャツハは「行ってきなさい」と優しく告げた。

セインは「ありがとうシスター！」とお礼を言って部屋の扉を開けて入って行った。

それを見送って一息ついていると、

「お疲れ様です、騎士シャルロッテ。少し休んでいってください」

とシスター・シャツハに誘われて、私は何故か騎士カリムの部屋に案内された。

昨日と同じように騎士カリムの部屋に入ると、もちろん騎士カリムの姿があった。

しかもお茶の用意まで万全な状態で。始めから私を誘う気だったみたい。

軽く挨拶を交わして、イクスヴェリアに関しての感謝をここでももらった。

「イクスヴェリアはもう大丈夫だと思います。

術式も成功しましたし、これからはみんなと同じ時間を過ごしていきますよ」

淹れてもらった紅茶を飲みながら、イクスヴェリアに施した術式の成功を報告。

騎士カリムは「そうですか。それは何よりです」と本当に綺麗な微笑みを浮かべた。

それから他愛もない世間話をしていると、扉がノックされる。シスター・シャツハが扉を開けると、そこにはセインが居た。

「シャルロット。イクスが会いたって言うてるから、会ってあげてほしんだけど・・・」

私が騎士カリムに視線を向けると、彼女は「どうぞ、行ってきてください騎士シャルロット」と微笑んだ。

私は「一度失礼します」と断りを入れてから、またイクスヴェリアの部屋に向かう。

着いた時にはスバル以外が廊下にたむろしていた。

『シャルさん。たぶん魔術の話になるかもしれないので、あたし達は少し席を外しておきます』

と、ティアナが念話でそう言ってきた。

ティアナのその配慮に感謝を言いつつ、私は一人イクスヴェリアの部屋に入る。

視界に入るのは、ベッドの上で上半身を起こして座るイクスヴェリ

ア。

そしてベッドの傍らの椅子に腰かけるスバルが居た。

「イクス。この人がさつき話したイクスを治したシャルさん。

『あの、シャルさん。イクスにシャルさんが魔術師であること教えてしまいました……。』

その、どう治療したのかとか訊かれたもので、すいません……。』」

『あはは、うん、まあそれは気になるでしょうね。

何せ眠る前に治療不可で、いつ起きるか分からないって聞かされたんでしょ？

それなのに、治療されて目覚める事が出来た。どういう経緯でそうなったのか知る権利はあるよ、イクスヴェリアには。だから気にしないで、スバル』

現代の医療技術じゃ治せない。それなのに目覚める事が出来た。

ならどうやって治療したか、なんて気にならない人の方がおかしい。まあヴィヴィオの友達には強引にでも納得してもらわないといけな
いけどね。

「あ、はじめまして、イクスヴェリアと申します。

スバル達と同じ時間を過ごす未来を授けてくれた事、感謝してもし
きれません」

可愛らしい声、と年相応じゃない丁寧過ぎる態度。

うん、こつと子供らしい仕草を見てみたい。

「うん、はじめまして。シャルロツテ・フライハイトです。

うん。寝顔からして可愛かったから、こつと話をとさらに可
愛いなあ」

「え？ あ、あの・・・ありがとうございます・・・？」

そうそう。そういうテレた感じ（何故か疑問符な感謝）がとってもキュート。

「いえいえ。あつとそうだ。イクスヴェリア、どこがおかしいところ無い？」

術式は成功したから問題ないはずなんだけど、気づいたことがあったら言つて」

スバルが譲ってくれた椅子に座りつつ、イクスヴェリアの様子を見る。

「はい。変なところ、と言つのでしょうか。そういうのはありません。

すぐく身体が楽なんです。今すぐにでも出掛けられるような、そんな感じですよ」

両腕を軽く振つて、元気ですアピール。

とても可愛いですよ、イクスヴェリア。あーもっと早く出会えていればなあ。

「そつか。でも、少し診せてもらつね。少し身体に触れるけど、いいかな？」

一応こつちでも状態確認しておかないと。

「はい、どうぞ。シャルロツテ様」

あー、この子もシャルロット様・・・か。
実年齢がどうであれ、こんな子供にまで“様”付けされるのはちょっと・・・。

だから、「私の事はシャルでいいよ」と微笑みながらそう返す。

「それでしたら、わたしのこともイクスとお呼び下さい」

「うん、イクス。っていうか私にまでそんな堅くならなくえもいいんだよ？」

私としてももつとフレンドリーな感じの方が好きだしね」

「えっと、シャルがそれで良いというのでしたら・・・」

イクスを横にして、彼女の胸に手をそつと添えて 我が言の葉は幻想紡ぐ鍵 と詠唱。

イクスの現状把握開始。バイタル正常。リンカーコア正常。マリアー
ージユの核生成の能力の損失。

「（損失！？ やばい、どうしよう）え〜つと、イクス。マリアー
ジユの核の生成能力が犠牲になっちゃった・・・んだけど、よかつた？」

イクスの唯一の戦力と言えるマリアージユ。

その核の生成能力を失うということは、彼女の戦う力が無くなるということだ。

まあ指揮・命令能力が無いということだし、あっても困るようなものとも言えたりするけど・・・。

だけど、私の治療で、勝手に消してしまったのは事実。

「・・・いいえ、困るところか助かります。」

今のわたしにはあの子たちへの命令権も指揮権も無いのです。管理できない力なら、無くなった方がいいんです」

どこか安堵したような、それでいて少し寂しそうにイクスが言った。イクスがそう言うなら良かったんだろ。

（あーよかった。返してください、なんて言われたらどうしようも出来なかった）

私も安堵のため息。

「問題はそれくらいかな。あとは健康そのもの」

イクスの胸から手を離す。

するとイクスが手を伸ばしてきて私の手をキュッと掴む。

「どうしたの？」と訊くと、イクスは「ありがとうございます、シヤル」って年相応な微笑みを浮かべた。

「どういたしまして」

少し迷ったけど、イクスの頭をそっと撫でる。

するとイクスはくすぐったそうにして、それから小さく笑い声を出した。

「良い子、というものです。以前スバルに教えてもらいました。とても、すごく気持ちいいです」

「スバルには負けるかもだけどね」

イクスと二人してスバルを見詰めると、スバルは「あはは」と嬉し

そつに頬を掻いた。

私がイクスに出来るのはここまで。あとはスバル達に任せよう。

「それじゃあイクス。私はそろそろ行くね」

最後に優しく頭を撫でる。

「はい。シャル、本当にありがとうございました。

この御恩はいつまでも忘れません。これから少しずつでもお返ししていきます」

「そんなこと気にしないでいいよ、イクス。

イクスがイクスらしく生きて、みんなと一緒に楽しい時間を過ごしていく。

それが私への恩返しだと思ってほしいな。それなら私も嬉しいから」

それが、私のこの子への願い。

楽しい時間を生きる。イクスがそんな時間を過ごしてくれることこそが私への報酬。

イクスは「はい」と綺麗な笑みをを見せてくれた。

私は先に部屋を出る。私を待っていたのかセインが廊下に立っていた。

聞くとヴィヴィオ達は教会の応接室で私とスバルを待っているとのことだ。

「本当にありがとうシャルロッテ」

応接室へと続く廊下で、セインがまたお礼を言ってきた。

「さつきもお礼をもらったから、そう何度もいいよセイン。それに、最後の最後で私はあんな可愛い笑顔を見せてもらった。それだけで満足満足」

「最後の最後って・・・？」

「うん。今日で最後。これから私達はテストメントの拠点に向かう。そこで決着がつけば、私はそこでお別れ。だから最後の最後ってわけ」

守護神としての最後の戦い、その最後の中での最後の人助け。その報酬は最高の笑顔。これほどの最高の終わりはない。

「え！？ 待つてよ！ シャルロットが来たのって一昨日だよね！？ それなのにもうお別れなんて早過ぎるよ！！」

隣を歩いていたらセインがいきなり私の前に躍り出て、半ば叫ぶようにそう言ってきた。

「仕方ないよ。それが界律わたしの守護神なんだから」

ポンポンとセインの頭を軽く叩く。そしてさっきのイクスのように撫でる。

「ありがとうセイン」

袖で目を擦るセインを置いて私は先を歩く。

少しすると、セインは私の隣にまで駆け寄ってきて、「ありがとう。あたしも忘れないから」と嬉しい事を言ってくれた。

隣を歩くセインの頭をもう一度優しく撫でる。

応接室に着くと、ヴィヴィオ達ちびっこからのお礼の嵐。
いやあ、可愛いちびっこに囲まれて感謝されるなんてもう最高だね
それだけじゃなくて、

『久しぶりい、シャルロツテ』

「……誰？」

テーブルの中央に展開されているモニターに映る一人の少女が手を
振ってる。

知ってる知ってる。うん、知ってる顔だけど、知らない表情だ。

そう言うと、ティアナ達は苦笑。「まあそういう反応も……分かる」
とレヴィが呟いている。

『ルーテシアだよ、シャルロツテ。まさか覚えてない？』

「憶えてる。憶えているからこそこのリアクションだのご理解を」
ニッコニコな笑みを浮かべてるルーテシア。

聞いてたよ。ルーテシアの性格がガラリと変わった（元に戻った）
ってことは。

でも実際に見てみると、レヴィの時と同じようにやはりドカンとく
る衝撃。

5年前のルーテシアの、あの静かな（暗い、とは言えない）雰囲気
からしてホント変わり過ぎ。

「それにしてもホント変わったね、ルーテシア」

『前はよく言われたよ』

頭の後ろを搔きながらテレ笑いなルーテシア。

『そうそう。シャルロット、こっちに来る予定とかある？
来てくれたらサイコーのおもてなしで歓迎するよ。』

「あ！ その時は手合わせお願いしますシャルさん！」

目をキラキラさせてるルーテシアとヴィヴィオ。

私が今日でお別れであるという事を教えようとするけど、その前にそんなヴィヴィオの様子を見た友達のコロナとリオ、そして少し遠慮気味なアインハルトが、

「あの、シャルロットさんは・・・」

「お強かったりするんですか？」

私の強さとかに興味があるのか、その子たちはそんな疑問を私達に投げかける。

三人の疑問に苦笑する私の事を知るティアナ達。その苦笑の意味は何かなあ？

「シャルさんは強いよ。なのはママやフェイトママより強いし」

「。。。えっ!?!?」

ヴィヴィオの返答に、それはもうビックリするヴィヴィ友トリオ（ヴィヴィオの友達三人の略）。

そんな怪物を見るような目をしないでね、ホント傷つくから。

それになのはとフェイトも結構なモンスターだよ、私から見れば。

「エリオ君も昨日シャルさんと模擬戦して……ね？」

「あはは。改めてシャルさんの凄さを思い知ったよ」

昨日の模擬戦を思い出したのかエリオがどことなく沈んでる。

十分奮戦したからそんな沈むことないと思うんだけど、というか胸を張れエリオ。

「あ、あの、それならわたしも手合わせをお願いします！！」

アインハルトがノリ気だ。じゃなくて闘る気だ。

うわあ、この子もすごい目がキラキラしてる。あれ？ この子……バトツ娘？

「え〜っと、ごめんね。もしかしたら今日で帰るかもしれないんだあ」

ヴィヴィオとルーテシアは私の言っている事が解ったのか啞然。でも解らないヴィヴィ友トリオは首を傾げて？？？状態。

「私の過ごす世界ってなかなかこっちに帰って来れない管理外世界だから、一度ミッドを去ると会えないんだよ」

ちよっと苦しい嘘。

管理外世界と管理世界の繋がりはまず無い。あつたとしても少ない。だからこそ通じる嘘。するとアインハルトは「そうなんですか、少し残念ですね」と言葉とは裏腹に心底残念がる。

「相手してあげたいのは山々だけど、今からすぐに管理局の仕事だ

し。ホントごめんね」

「あ、いえ、そんな。こちらこそ無理を言っすいません」

「いやいや、ご期待にそえないでごめんね」

「そんなそんな、お気になさらないでください」

何故かごめんなさい合戦が勃発。

こうなるとなかなか止まらなくなるんだよね、経験からして。それを止めるようにヴィヴィオがかなり悲しげな顔で口を開く。

「シャルさん、もう帰っちゃうんですか・・・？」

わたし、もう少しシャルさんとお話しして遊んで・・・わたしの成長見てほしかったです・・・」

『そっか。シャルロッテ、もう帰っちゃうんだ。すごく残念だけど、仕方ないんだよね』

「ま、私は帰るけど、ルシルは残る予定だから、おもてなしはルシルにやっちゃって。」

「ていうかルシルで散々遊んじゃっていいからさ」

ルシルは絶対残す、今度こそ。

そして散々みんなを悲しませた罰を償わせる。フフ、遊ばれる、という形でね。

「あれ？ ルシルさんってヴィヴィオのお父さんのことだよな？」

「あ、うん。本当のじゃなくて、言い方は悪いけど形としてのパパ。」

「ただ、それでもわたしの大切な、すごく大好きなルシルパパなんだ」

ルシル、今のヴィヴィオの言葉、あなたに聞かせてやりたい。

「お待たせしましたあ」

「もういいの？」

「はい。帰ってきたらゆつくりと話せますから」

スバルが戻ってきたことで、本局に帰る支度をする。そろそろ本局に帰らないといけない時間になったから。

「そつか。そんじゃそろそろ行こうか」

騎士カリム達教会組とヴィヴィオ達に見送られながら教会を出る。

「シャルさん」

「ん？」

ヴィヴィオに呼び止められて振り返ると同時に、ヴィヴィオは私に抱き着いてきた。

5年前と同じ。お別れの前の最後の抱擁。

「元気でね、ヴィヴィオ」

「シャルさんも。お元気で……いつてらっしやい」

「うん。いつてきます」

こうして私達は、ヴィヴィオ達に見送られながら教会を後にした。

十 十 十 十 十 十 十

時空管理局本局 “特務六課” オフィス

シャルちゃん達が教会に行っている間に、“テストメント”に関する情報を纏める私とフェイトちゃんとはやてちゃん。

『でも、これって結構まずいことだよな』

念話で二人に話しかける。

『そやな。ひよつとしたら管理局最大の危機かもしれん』

『オムニシエンスがテストメントの拠点。』

そうになると、オムニシエンスの管理を行っているミュンスター・コンツェルンは・・・管理局の敵・・・』

最悪の展開が脳裏に浮かんで気が気じゃない。

“ミュンスター・コンツェルン”は時空管理局の運営に必要な資金の大半を賄う出資者だ。

その“ミュンスター・コンツェルン”が“テストメント”と通じていて、本格的に敵対するとなると、

『圧倒的に管理局は不利。下手すると経済攻撃を受けるかもしれへ』

ん。そうなると当然・・・』

『外からじゃなくて中から瓦解する、だね。

艦船製造もデバイス製造もミュンスターの系列会社がやっていることだし。

もし持久戦に持ち込まれたら、テストメントとミュンスターの勝利は不動になるよ』

“ミュンスター・コンツェルン”の資金・技術が全て“テストメント”に流れると管理局の敗北は必至だ。

ただでさえ管理局の運営には莫大なお金がかかっているのに。

『正直、この事件の結末がどうなるか分からん。

魔術師と幹部達をどうにかすれば終わるんか、それともそれが始まりになるんか』

『でも、向こうが敵対しようと考えているなら止めないと』

“テストメント”と“ミュンスター・コンツェルン”の繋がりがどこまでなのかが分からないと、管理局が文字通り“終わる”かもしれない。

でも解決を伸ばせば、幹部達の私達がまだ知らない本当の目的が成就するかもしれない。

『まずは目の前の問題を押さえてこつ。幹部達を止める、それが最優先。

ミュンスター全体がテストメントの味方とも限らへんしな。そやからそつからの問題は後々上層部と相談しながらや』

まずは“テストメント”幹部の問題を片づける。

それが私達の“特務六課”の任務。

「はやて。シャルロット達が戻ってきた」

「そうか。……みんな、これで最後や。特務六課、出勤!!」

オフィスに、はやてちゃんの号令に応える隊員たちの「了解!!」
という一声が響いた。

眠り姫の目覚め ｛Ixwelia｝（後書き）

イクスヴェリア覚醒。アインハルト登場。

もう少し彼女達の出番を増やしたかったです。構成上これで限界です。

さて、次回からまたバトル続きとなります。反撃開始です。

アドウベルテンシアの回廊 〈First Battle Line〉(前書き)

アドウベルテンシアはスペイン語で、警告、という意味です。
レスプランデセルはスペイン語で、輝く、という意味です。
エヘモニアはスペイン語で、覇権、という意味です。

アドウベルテンシアの回廊戦イメージBGM .hack//G.U. 再誕“『力』の行方”

アドウベルテンシアの回廊 〈First Battle Line〉

特務六課旗艦“ヴォルフラム”ブリッジ

『特務五課の部隊長ウィリス・ジープスター三等空佐です』

「特務六課部隊長八神はやて二等空佐です」

『あのJS事件を解決に導いた八神二佐とその部隊と同じ任務に就ける事を光栄に思います』

「あ、ありがとうございます・・・」

これから一緒に“オムニシエンス”へ向かう仲間となる五課の部隊長とはやてが挨拶している。

ジープスター三佐の社交辞令に苦笑交じりで答えるはやて。

ジープスター三佐はセレスの昔馴染みの側近らしくて、かなり出来る武装隊員らしい。

そして今回の任務の打ち合わせを終え、ようやく“オムニシエンス”への出立となる。

「　　そういうことで、レジスタンスの逮捕はそちらに一任することになると思っています」

『了解しました。その事に関しては任せてください』

通信が切れ、はやてはどこか疲れたような表情。

そして私達の乗る“ヴォルフラム”と五課の旗艦、LS級“アガメ

ムノン”は“オムニシエンス”へと針路をとった。

“オムニシエンス”へと向かっている最中、私はみんなに“カートリッジ・シャルロット産”（産地直送）の説明をもう一度する。

「それじゃ昨日のおさらいってことで。

私の魔力が充填されたカートリッジは一発ロードするだけで結構な力が出る。

だから連続ロードは出来るだけ避けてね。するとしても最大三発まで。

デバイスどころかみんなの身体やリンカーコアにどんな影響が出るか分からないから」

手に取った一発のカートリッジを親指で上に弾き飛ばして、そしてキャッチ。

カートリッジを指の上でクルクル回しながら説明を続ける。

ていうか痛ったあゝ、親指の爪が……（泣）カッコつけ過ぎた。気を取り直す為に一度コホンと咳払いと。

「ロードしたカートリッジの効果時間は使う魔法の消費魔力によって様々。

でもフルドライブやリミットブレイクの時は当然短くなるから気を付けてね。

レイジングハート、バルディッシュ、レヴァンティン、グラーフアイゼン、マツハキャリバー、クロスミラージュ、ストラーダ。

あなた達も気を付けて。決して無茶はしないように」

両手を腰に当てて前屈みになりながらみんなの相棒デバイスに語りかける。

すると“レイジングハート”もみんな、無口な“バルディッシュ”でさえもちゃんと答えてくれた。

「よし、良い子たちだね。さて、後は向こうの出方次第だけど、誰がどの幹部と戦うかを決めよっか。それでいいかな、はやて」

「ええよ。そこんところはプロのシャルちゃんに任せるわ」

「ん、ありがと」

この部隊の部隊長なはやての許可も取った。

「と言っても、それぞれ因縁のある連中ばかりだし、今さらな気もするけどね」

そうなのだ。どういうわけか“テストメント”の幹部のほとんどが六課の前線組と繋がりを持つ。

偶然かそれとも必然か……。あー、そう言えば何かの契約ん時に誰かが言ってたっけ。

この世界に偶然は無く、世界の全ては必然の中で廻っている

魔術師が管理局員なら当然か……？

どっちにしても“絶対殲滅対象”^{アポリユオン}並に性質が悪いことこの上ない。

「そんじゃまずはシグナムとヴィータはカルド隊ね」

「ああ。了解だ」

「望むところだ。今度はぜってー負けねえ」

カルド隊の目的は守護騎士への復讐。

正直な話、本当にシグナム達を戦わせていいのか分からない。たとえカルド隊が（他の幹部もそうだけど）本人じゃない未練の塊ねがいだとしても、もう一度その手で殺さないといけないということだ。

かつて殺めた人が亡霊となってまで復讐しに来て、そしてまたその亡霊を斃す。

解決方法としては手放して推奨できない。だけど、シグナム達を死なせたくない。

だからカルド隊には消えてもらおう。彼らの未練ねがいが叶わずとも。

「……えっと、はやてはどうしたい？」

リインフォースと戦う？ まあ形だけの戦いになるだろうけどさ」

リインフォースも出てくるはずだ。

彼女の目的がどうであって私達と戦うことになるのは間違いない。何せ裏切りがバレたら消滅は確定。嫌々でも形だけの戦いは仕掛けてくる。

「でも私は部隊の指揮をせなアカンし……」

「大丈夫ですよはやてちゃん。

わたし達が幹部との戦いに集中出来るように五課とクロノ提督の部隊が居てくれるのですよ？」

それにヴォルフラム・スタッフははやてちゃんの指示が無くてもデキる人達です。

ですから、はやてちゃんもリインフォースを助けるために出ていいのですよ」

「リイン……そやな。うん！ リインフォースの相手は私が引き受ける」

リインの説得ではやても参戦決定。

本当に“ヴォルフラム”のスタッフを信頼しているからこそその決断。いつかの“アースラ・スタッフ”の事を思い出す。

「それじゃあはやてはリインフォースね。次に、なのははマルフィール隊でいいんだっけ？」

マルフィール隊の正体は今だ推測の域。だけどほぼ確定に近いのも確か。

かつてのなのはを教導したデミオ・アレッタ三佐がマルフィール隊の隊長。

師弟対決になるというわけだ。本当にマルフィールの正体がアレッタ三佐なら。

「そう・・・だね。うん、マルフィール隊は私に任せて。

あ、でもあともう一人サポートがほしいかな・・・。さすがに一对三は辛いから」

「あ、それならわたしがなのはさんのサポートします」

なのはに答えるレヴィが挙手。

レヴィか。レヴィにはディアマンテとかいう幹部が出てきた際のアタッカーにしようと思っていたけど、さすがになのは一人じゃ厳しいというのには賛成だから、

「ん、お願い。それじゃあなのはとレヴィでマルフィール隊の相手をしてもらっね」

レヴィの提案を通す。まあディアマンテはなかなか前線に出ないよ

うだしね。

出てきたら私が相手をしてあげればいいか。“真技”を使えば一気に決められるはずだ。

「エリオとキャラはグラナードという事をお願いするけど」

「あ、はい。僕もそのつもりですから」

「わたしもそれでいいです。エリオ君のサポートは任せてください！」

グラナードはもうエリオしか見ていないし、エリオ以外の相手は認めないだろう。

だからエリオとキャラに任せるしかない。

「さて、スバルとティアナは・・・」

二人に視線を送ると、スバルとティアナは強く頷いて応えた。私もそれに頷く事で、二人に頑張るように言外に告げた。そして最後に・・・

「フェイトは当然・・・ルシルの相手をしてもらう」

「うん。分かってる。私がルシルと戦う。これだけは誰にも譲れないから」

フェイトがルシルから貰った指環を眺めながら強く決意する。

現状のルシル相手ならフェイトでも十分倒せるはずだ。

たとえヴィとヴィオと戦った時のように少し力を取り戻したとしても、それでも今のフェイトなら互角に渡り合える。

「で、私が魔術師、トパーシオ、もしのディアマンテの相手をする。でもこの対戦カードは絶対じゃない事は忘れずに。場合によっては集団戦になることもあるから、そのときはお互いをサポートしつつの戦闘をお願い」

向こうが集団戦を仕掛けてきたら、下手に相手に固執すると足元をすくわれるかもしれない。

その時は、誰もがみんなをサポート出来る戦術でいかないとね。

「シャルちゃん、その、三人を相手に一人で大丈夫・・・？」

「ん？ ん～～～～、たぶん大丈夫」

SSSの魔力と限定解放したキルシュブリューテによる真技。魔族一体につき一回の真技。

「十分勝算はあるから、心配はいらないよ、なのは」

身体能力と扱える魔力と魔術は、JS事件当時より少し上な私。上層の“幻想一属”はもちろん中層の魔人メノリアでも十分勝てる。

『八神部隊長。オムニシエンス軌道上に到着しました』

“ヴォルフラム”の会議室にアナウンスが流れる。

「これで決着がつくかもしれない大事な一戦や。そやから部隊長としてひとつ命令する。絶対にみんな無事にここに戻ってくる事。」

相手は一筋縄にはいかん連中ばかりや。無茶はせんように。

助けが必要なときは遠慮なんてせずにすぐ連絡。ええか？」

はやてが立ち上がって、私達を見回しながらそう言った。私達も強く頷いて「了解！」と答える。

大丈夫。私がみんなを護りきってみせるから。

「アガムノンに通達。ヴォルフラムに続いてオムニシエンスに降下。」

そしてクラウディアと合流した後、テストメント拠点と思われる地区に進行」

『了解しました』

「ルキノ。オムニシエンスに降下や」

『了解です』

はやてがブリッジと操舵室に指示を出した後、私へと視線を向けてきた。

何だろう？って思っていると、はやてはゆっくりと口を開いた。

「シャルちゃん。みんなに、最後に何か言っとくことあるか？」

はやての心遣い。この戦いで決着するのであれば私は去るから。

「特にないかな。私の言いたい事ははやてがさっき言ったし。

みんなが無事にミッドに帰る事。それが私の願い。それを守ってくれるなら、それでいいよ」

「というわけや。シャルちゃんに安心して還ってもらうために気張

らなアカンよ」

テストメント本部 “エヘモニアの天柱” 最上階

「管理局の調査はまだ終わらないようですね・・・」

14の椅子の一つに腰かけた至高なる卓絶者が中央に展開されているモニターを見ながら呟く。

映っているのは、ここ“オムニシエンス”の調査に来ている管理局の局員たち。

そんな彼らが“レスプランデセルの円卓”の周辺に集まりだす。

しかし、“円卓”全体を囲う結界によって、侵入できないどころかその存在にすら気が付いていない。

人の意識にすら干渉出来る結界。それは内外の物理・意識の干渉を断つ魔術だった。

彼女が「無駄な事を」とほくそ笑んでいる中、ここ最上階にアラートが鳴り響く。

コンソールを操作してモニター画面を“オムニシエンス”上空の映像へと切り替える。

そこに映し出されたのは、二つの艦影。

「照合確認。・・・っ！ 六課のヴォルフラムと五課のアガメム
ノン・・・！」

管理局の艦船情報と照り合わせて二隻の正体を知る至高なる卓絶者^{ハーデ}。彼女が発した言葉には焦りが多分に含まれていた。

「彼の剣神、シャルが向こうに居るんだ。円卓の結界くらい見抜けて当然だろう？」

声ができる方には、鋼色の鎖で両手両足を椅子に繋がれた誠実なる賢者^{ルシリオン}が囚われていた。そして明らかに様子がおかしい。彼は間違いなく記憶を取り戻している状態だった。

「確かにそうですね。あなたから取り出した情報からしてこうなる事は予想出来る事態。」

まあ事態が早く動いたことで少し焦りましたが……」

「もう止めてはどうだ、ファビオラ・プレリユード・セ」まだ止められない「デ・ヨツンヘイム……」

ルシリオンの口から至高なる卓絶者の名^{ハーデ}が告げられるが、半ばが彼女の一言によって伏せられた。

しかし“プレリユード”と“ヨツンヘイム”。その二つの名は間違はなく“極凍世界ヨツンヘイム”の皇族の証だった。

「私達は、私はまだ歩を止めるわけにはいかないのです。まだ何も終わっていない、始まっていないのだから……」

「こんな事をせずとも話し合いの場を設ければ」

「話し合い？ 管理局の上層部が素直に応じるとでも？」

確かに中には私達の事に理解を示してくれる方も居るかもしれませ

ん。
ですが、それはあくまで一握り。管理局上層部の間はそのを許さない」

^{ハーデ}至高なる卓絶者が胸の内を語っていく。

彼女の言葉に乗せられているのは憐れみと怒りと、ひたすらな虚しさだった。

「ルシル、^{あなた}界律の守護神なら理解できるでしょ。

人という生き物は、下手に権力や富を手に入れると貪欲になる。

さらに富を、権力を、と。上を上を上をひたすら目指して下の者を蔑ろにして簡単に切り捨てる。

今の管理局の、昔もそうですが、上層部の局員はそんな方ばかり」

「待つんだ。ならばリンディ統括官はどうだ？ 彼女なら私達のよ
うな存在に理解がある」

「そうですね。リンディ統括官なら。ですが、私はまだ管理局を許
すつもりはありませんし、改革を止めるつもりもありません」

頑^{ハーデ}なとして至高なる卓絶者は頭を縦に振らない。

「……それならば最後に一つだけ。ダイヤモンド、いや、メサイア・エルシオン。

あの男は今すぐにでも消すべきだ。あの男は危険過ぎる。

メサイアの目的は、君の目的を喰らい、呑み込み、全てを

「彼にはまだ居てもらわなければなりません。

もしあなたの危惧が現実になるなら、あなたの粛清権限で十分です。
それでもダメな場合、私が直接手を下せば何も問題ありません」

話はこれで終わりとも言うつように至高なる卓絶者は“オムニシエンス”の障壁発生を担う各拠点に通信を入れるためにコンソールを操作。

そして最後に彼女はルシリオンへと視線を移し、口を開いた。

「ありがとうございます、ルシル。それではもう一度眠りについてください」

「待
」

我との契約の下、汝、我が剣となり盾となり翼となりて、我が命を果たせ

ルシリオンは意識を失ったのかガクリと頂垂れる。

その様子を確認した至高なる卓絶者は各拠点へと通信を繋げた。

通信内容は“オムニシエンス”の障壁の稼働。彼女は管理局と戦わずにこの場を乗り切ろうと考えたのだ。

障壁には任意の存在を“オムニシエンス”外に排除するという効果もある。

至高なる卓絶者は、今はまだ管理局と完全な敵対は危ういと判断している。それゆえに障壁さえ展開出来れば、管理局を一人残らず戦わずして“オムニシエンス”より強制的に排除が可能となる。

「各基地へ通達します。至急、オムニシエンスの障壁を発生させてください」

「こちらフォスカム基地！ 申し訳ありませんマスター・至高なる卓絶者！」

障壁発生システムに異常が見られ、修復までしばらくかかりそうです！』

第28管理世界フォスカムに建設された拠点からの返答に、フード中に隠れる至高なる卓絶者^{ハーデ}の表情が凍る。

『エストバキア基地了解しました！』

『ウステイオ基地了解！』

『フェティギア基地了解です！』

他の拠点からは望み通りの返答。しかし、一つでも欠ければ障壁は発生しない。

それほどまでに複雑なシステムの元に成りたっている技術だからだ。すぐにでも修復してください。修復完了の後、私の許可は必要ありません。すぐにでもシステムを稼働させてください」

『り、了解しました！ 至急取り掛かります！』

各拠点との通信が切れる。

至高なる卓絶者^{ハーデ}は頭を抱えなくなったが、その前にやるべき事があるとしてすぐに行動に移す。

それは各世界に散らばった幹部達の招集命令。

障壁発生までに時間稼ぎが必要となるかもしれない。

しかし“レジスタンス”や“空軍^{アキラス}”だけでは“特務六課”を抑えきれないのは明白。

そのための幹部招集だった。

「こちらエヘモニアの天柱。緊急事態につき、至急オムニシエンスへ帰還してください」

十 十 十 十 十 十 十

“オムニシエンス”の南半球、シャルちゃんの言う“テストメント”の拠点と思われる地区“アドウベルテンシアの回廊”に着き、そこで待機していたクロノ君の“クラウディア”と合流した私達“特務六課”と“特務五課”。

はやてちゃんとシャルちゃんが、クロノ君とジープスター三佐と作戦の相談をしている中、私はブリッジから眺められる“アドウベルテンシアの回廊”と名付けられた渓谷を見詰める。

本当に広い渓谷だ。幅は数km。大型一隻と小型二隻が並列してもまだまだ余裕がある。

(ここがシャルちゃん達、かつての魔術師達が戦った舞台・・・)

そう思うと身体が震える。再誕戦争の舞台のひとつ“ギンヌンガガブ”。

それがここ“オムニシエンス”。何故か現代に突如蘇った世界。背後に誰かの気配を感じたと思ったら、「なのは」と呼びかけられた。

振り向いてみると、そこにはフェイトちゃんが居た。

私の隣に立って、私と同じように“回廊(アドウベルテンシアの回廊って長い)”を見詰める。

「いよいよだね、フェイトちゃん」

「うん。5年前の約束、今度こそ守らないと」

フェイトちゃんの横顔はすごく凛々しくて、惚れ惚れするくらい力ツコよかった。

そんなとき、ブリッジにシャルちゃんの「艦を停めて」という声が響く。

はやてちゃんはルキノにすぐに指示。モニター越しのクロノ君達にも聞こえているから、「クラウドディア」と「アガムムノン」も停止するよう指示を出している。

『ここから先の山脈、空間の歪みのある場所、レスプランデセルの円卓。

魔術による結界が張られてる。私が消しに行くから、それまで待ってて』

シャルちゃんの念話が私達にも届く。

はやてちゃんは『うん、お願いするわ』と返して、クロノ君達にも待機をお願いする。

シャルちゃんは右手をヒラヒラ振りながら「ちょっと行ってくるね」「って軽く言っってブリッジを後にしようとしたとき、ブリッジにアラートが鳴り響く。

「前方より魔力反応！ 数は……100を超えています！」

「後方よりさらに強力な魔力反応！ これは……テストメント幹部です！」

スタッフの報告と同時にブリッジのモニターに映し出される映像。前方に広がる左右に伸びる山脈“レスプランデセルの円卓”。その“円卓”のポツンと途切れている何も無い場所から、武装した“レジスタンス”と“アギラス”と言われる戦闘機の編隊が突如現れた。

そして私達の後方から迫りくる“テストメント”の幹部達。魔族とすでに融合を果たしているカルド隊。フォヴニスの頭部に立っているグラナード。

リインフォース。そして、マルフィール隊の三人は白コートのままで飛行している。

姿が見えないのは、ルシル君とクイント元准陸尉とティータ元一尉、トパーシオ、ディアマンテ、魔術師。

「ホンマにここでビンゴみたいやな。六課前線メンバーは緊急出撃！クロノ提督、ジープスター三佐。レジスタンスと敵航空戦力は頼みますー！」

『了解した。安心して任せてくれ』

『五課も全力を尽くします！』

はやてちゃんから出撃命令が出た。

私はシャルちゃんとフェイトちゃんで見合してコクンと強く頷く。

「私も出る！ブリッジは任せたで！」

いくよ、なのはちゃん、フェイトちゃん、シャルちゃん」

「了解！」「」

これで最後になる事を祈りつつ、私達“特務六課”は“ヴォルフラム”から出撃、さつき決めた幹部と戦うために空を翔ける。

十 十 十 十 十 十 十

あちこちで戦闘音がする中、なのはさんと一緒に対峙するのはマルフィール隊。

「デミオ・アレッタ三佐。そして、エスティ・マルシーダ二尉とヴィオラ・オデッセイ二尉。

あなた達の正体はそれで間違いありませんね？」

なのはさんはそうマルフィール隊に確認する。

すると、マルフィールの隊長らしき人が深く被ったフードを手に取って脱いだ。

現れた素顔は30代後半くらいのおじさん。彫の深い顔、短く刈り上げられた黒髪が印象的。

「久しぶりだな、高町。こうしておまえとデミオ・アレッタとして話す日が来るとは思ってもいなかったが」

「アレッタ三佐……。アレッタ三佐達の目的は、管理局の改革？
それとも」

「復讐さ」

なのはさんの言おうとした事を、遮るように先に口にしたアレッタ三佐。

後ろの控えている他の二人のフードが動いた。どうやら顔をアレツタ三佐へ向けたみたいだ。

「それはやっぱりアレツタ三佐達の死因に関係しているんですか？」

「そうだ、と言えば、おまえはどうするんだ、高町。許してくれるのか？ 俺達の復讐を」

アレツタ三佐の問いかけ。

なのはさんは少し黙って、そしてきっぱりとアレツタ三佐に言った。「止めます」って。それを聞いたアレツタ三佐は人懐っこい笑みを浮かべて「そうこないとな」と大きく笑いだした。

「なら今から俺達堅固なる抵抗者隊と、おまえとそこの嬢ちゃんマルファイナルは本当の敵となった。

手加減はしない。俺達の未練ねがいのために、ここでおまえ達を倒す。

と言いたいところだがこちらにも事情がある。今すぐここから引き取り願うぞ。

行くぞ！ オデッセイ！ マルシーダ！」

「了解！！」

「来たれ！！」

三人の足元に碧色の召喚魔法陣が展開される。魔族召喚だ。

出させるわけにはいかない。相手の戦力向上を黙って見過ごすのはバカだ。

それが分かっているからこそ、なのはさんも「レイジングハート」を構えつつ、わたしに視線で「先制をお願い」って合図を送ってきた。

わたしは頷いて応え、瞬走式でマルフィール隊に突っ込む。

今のわたしの防護服は“モード・コンバット”。つまり接近戦用の防護服だ。レンジは近距離クロスになるけど、砲撃による煙幕で視界を潰すようなマネは出来ない。それに直接ぶん殴って確かな手応えが欲しい。

“生定の宝玉”発動のキーワード「ルーテシア」と呟く。そして身体中に神秘を巡らす。

「レイジングハート！」 Load cartridge .
Blaster set

背後からカートリッジをロードして魔力を増大させたのはさんの存在感を強く感じた。味方で良かったと今ほど強く感じた事は無い。それほどまでに強く感じる。

「はあああああああ！！！」 斬裂爪閃

両手の指に魔力爪を生成。

両腕をクロスさせて、大きく左右に開くように両腕を振るう。

だけど、ガキン！とマルフィール隊の前面の見えない壁にわたしの攻撃が防がれる。

それでもわたしは諦めない。爪を立てて不可視の壁を無理矢理こじ開けようとする。

「やるな嬢ちゃん。だがタイムアウトだ」

壁を少しこじ開けたところでアレッタ三佐の一言。ぞわりと背筋に悪寒が走る。これはまずい。

本能的にすぐにマルフィール隊の側から瞬走式で離脱。
その瞬間、なのはさんが複数のデイベインバスターをマルフィール隊に向けて撃った。
起こる爆発。シャルロツテの神秘満載の複数砲撃の連続着弾だから規模が半端じゃない。

「どうレヴィ。今ので防げたと思う？」

「たぶんダメだと思います。何か魔法陣からすでに出かかってましたし」

なのはさんの砲撃着弾のその瞬間、わたしはマルフィール隊の足元の召喚魔法陣から何かが出てきたのを見た。

未だに晴れない煙幕の中からそれなりの威圧感が放たれてくる。そして強烈な風が吹き荒れて、マルフィール隊を覆い隠してた煙幕が吹き飛んだ。

「あれは・・・鳥？」

「と、鳥は鳥でも普通じゃない鳥ですよ、アレ・・・」

わたし達の視界に映るマルフィール隊の背後に居る三羽の鳥。
全体的に赤い身体。だけどそれは単純な生物じゃないと分かる。
そう、あれはどう考えても“魔力”のみで身体を構成されている鳥だ。

「魔族・幻想一属・鳥種、赫羽の荒鳥ファノ。俺達堅固なる抵抗者マルフィール隊に与えられた相棒だ」

アレツタ三佐が、首を突き出してきたファノって呼ばれた鳥の頭を

撫でる。

するとそれが気持ちいいのかファノは「キュウキュウ」と鳴いた。というか感覚なんてものがあるのだろうか、魔力の塊なのに。

「どこまでついてくれるか、見せてもらおうか！」

目も眩むというか開けていられないほどの発光。

光も止んで目を開けると、そこには赤い甲冑を身に纏った三人の姿。背からは二対の赤い魔力が噴き出して、まるで鳥の翼を思わせる。

そしてリーダーのアレッタ三佐の甲冑にだけマントがある。

カルド隊と同じというわけだ。

「レヴィ、いくよ」

「はい、なのはさん」

なのはさんは深呼吸して“レイジングハート”を構え直して、わたしも一度深呼吸して拳を構える。

見据えるは倒すべき敵マルフィール隊。

Photon Smasher

展開された“ブラスタービット”三基と“レイジングハート”本体から桜色の高速砲が4つ撃ち出される。

それに続いてわたしを瞬走式で突撃。彼らがなのはさんの砲撃に対処する隙を狙って一撃を打ち込む。

だけど、相手はやはり鳥ということだった。

「疾い!!!」

マルフィール隊の姿がかき消える。

そして残像を引きながら、向こうから接近戦を仕掛けてくる。

わたしの元に二人のマルフィール隊。確かマルフィール・イスキエルドとマルフィール・デレチヨ。

なのはさんの元にはマント付きのアレッタ三佐が向かったみたいだ。

「まあいいか。かかっておいでよ、わたしがあなたたちの相手だ」

この身に敗北は許されない。

ルーテシアの盾として、“特務六課”の一員として、己の存在意義のため。

「レヴィ・アルピーノ・・・参ります！」

十 十 十 十 十 十 十

私に一对一を仕掛けてきたマルフィールことアレッタ三佐。

レヴィに二人向かった事が気になるけど、今はこっちに集中しないと足元をすくわれる。

「今はまだ管理局と完全に敵対したくないというのがボスの意向。だが、今だけは俺達と戯れてもらうぞ、高町・・・！」

翔け抜ける速攻の陽虚鳥

ドン！と爆音。アレッタ三佐の背にある翼が大きく爆ぜた音だ。

一直線の突進攻撃。だけど速度が普通じゃない。これはルシル君の

空戦モード並かそれ以上だ。

A c c e l F i n

こつちも高速移動魔法で対処。全力で横に避ける。

だけど、紙一重のすれ違いざまに叩きつけられた衝撃波がとんでもない威力だった。

大きく体勢を崩される。そこに、反転してきたアレッタ三佐の再突進。

今さら回避は出来ないと判断。なおも続くシャルちゃん的神秘効果を信じてシールドを展開する。

バインディング・シールド
捕縛盾

近接封じのシールド。ドゴン！ととんでもない音を出しつつ、アレッタ三佐の突進を防いだ。

もしシャルちゃんのカートリッジが無かったら今ので私は終わってた。

そしてすぐさまアレッタ三佐を捕えるためのチェーンバインドが発動。

ただアレッタ三佐はそれより早くに離脱したことでバインドから逃れた。

（疾い。バインド単発じゃ捕えきれそうにないかな・・・）

バインドの単発発動じゃおそらく捕まえきれない。

戦術を練っていかないとダメだという事だ。

それなら、アクセルシューターと“ブラスタービット”を操作して相手を誘導する。

対象を誘導する。シャルちゃんと組んで、初めてフェイトちゃんと戦った時の戦術だ。

Acceler Shooter

いつも通りのアクセルシューター・・・じゃない！

明らかに大きさが違う。ヴィータちゃんのコメートフリーゲン並に大きい。

それに魔力光もいつもの桜色じゃなくて白に近い。

さっきのフォトン・スマツシャーやバインドは普通に見えたのに、シューターだけ激変。

神秘とは思っていた以上に強い力のようです。振り回されないように注意しないとイケませんね

“レイジングハート”が冷静に分析。

確かに今の私は、よく分からないかなりの高揚感を得ている。

リンカーコアが活発を通り過ぎて暴走しているような、でもそれが何だか心地よかったり。

たった一発のロードでこれだ。複数、連続でロードしたらシャルちゃんの言った通り何が起こるか分からない。

「でもこれならいける・・・！」

巨大シューターをアレッタ三佐に向けて八基射出。

それと同時に“プラスタービット”三基も向かわせる。

そして最後の四基目を奇襲用に使ったために上空に待機させておく。

「なるほど。フライハイトが味方に付いた事で魔族に対処できる術を入れたということか」

管理局員としてじゃなく魔術師としてのシャルちゃんの情報が漏れている。

だからこそアレッタ三佐は、私が対処してきたことにも驚きを見せなかったわけだ。

シャルちゃんが魔術師だっことを知っているのは私達六課とそれに近い人達だけ。

その中にテストメントと通じている人は絶対に居ないのは確か。ルシル君から引き出したのかもしれない。記憶操作ができるくらいだし。

アレッタ三佐は高速機動でシューターを難なく回避していく。でもまだ終わりじゃない。“ブラスタービット”からの多方向砲撃。撃つタイミングは少しだけどずらす。ルシル君に教わった術だ。

複数攻撃時は、着弾のタイミングを同時よりずらした方が相手を損耗させる

着弾が同時の場合は瞬間的な防御で済むけど、ずらした時は永続的に防御しないとイケない。

それが相手の損耗をさらに促すということだ。

それに、攻撃の種類によっては足止めの効果もある、って言った。

アレッタ三佐は残念ながら防御じゃなく回避を選択して易々と避けていく。

でもまだだ。そこに私自身も高速砲フォトン・スマッシャーの連続放射。

さらにシューターを新しく生成（今度は意識的に小さくした）、十数基と射出していく。

弾幕の嵐が一斉にアレッタ三佐に向かっていく。

風駆ける大天の散り羽根

アレッタ三佐の翼がひと際強く輝いて、赤い羽根による竜巻を発生させた。

私の攻撃が全て弾き返されていくけど、そこに私は上空に待機させていた“ブラスタービット”をコントロール。

竜巻の中心、アレッタ三佐の居る場所へと砲撃を撃った。

十
十
十
十
十
十
十

あたしとシグナムが対峙するのは復讐の炎カルド隊。

すでにリインとユニゾンしたあたしと、アギトとユニゾンしたシグナムはバツチリ臨戦態勢だ。

「よくもここまで来れたものだ。だが、ここがお前たちの終焉の地となる」

「時間稼ぎを命じられているが、ちょっとした不注意で殺しても問題ない」

「そうだな。わざとでないならば仕方が無い」

時間稼ぎつつつのが気になるが、どっちみち向こうは端から殺る気みてえだし、返り討ちにしてやるまでだ。

シグナムと視線を交わして合図。

カルドのリーダー、ガウエイン・クルーガーはシグナム。

カルド・デレチヨ、ジヨシユア・エルグランドはあたし。
残りのカルド・イスキエルド、ジータ・アルテツアは、交戦中、
手の空いているときに落とす。

「アイゼン！」「レヴァンティン！」

Explosion

シャルロツテのカートリッジを試しに一発ロードする。

ドクンと胸が高まる。こいつはとんでもねえ代物だ。

身体中に奔るシャルロツテの神秘の魔力。今まで感じたことが無い
高揚感。

今なら何でも出来そうな気がする。あー、そっか、これが……
これが……

「（魔術師の力……！）ハハ……」

つい笑みを漏らしちまう。

胸の高まりを意識的に抑えていると、リインが「すごいですねヴィ
ーちゃん。これが神秘なんですね」と話しかけてきた。

あたしは「ああ。アイツら、こんな風にいつも戦ってたんだな」と
返す。

抑えるのも大変なこんな高揚感の中でアイツらは戦っていたんだ。

見ればシグナムも同じなのか、表情には出しちゃいねえが高ぶって
いるのが分かる。

“レヴァンティン”を一度振るって、「ふむ」と頷いてる。

「お前たちには悪いが、あたし達は落ちるわけにはいかねえ」

「主の笑みを終の果てまで護り抜く。それが我ら守護騎士ヴォルケンリッター」

そうだ。だからカルド隊の復讐には応えられねえ。

それがさらに恨みを買ったとしても、あたしらはお前達カルド隊を倒す。

「いくぜ！ リイン！ アイゼン！」

『はいですつ！！』 Jawohl

「ヴィータに遅れを取るなよ、アギト、レヴァンティン」

『おつよ！！』 Jawohl

二人で同時に仕掛ける。カルド隊は散開してあたしとシグナムの攻撃を避ける。

向こうが散開したことで、あたしはシグナムと顔を見合わせ、

「ヴィータ、リイン。負けるなよ」

「シグナムとアギトこそ、はやてを悲しませるような事になんなよ」
空いている拳を突き合わせる。

シグナムがカルドとイスキエルドに向かったのを見送って、あたしもカルド・デレチヨのトコに突撃する。

デレチヨは大剣を大きく振り上げたまま、あたしと同じように突撃してきた。

テートリヒ・シュラーク

「そおおらあああああああ!!!」

憎悪は何者にも消せず

「おおおおおおお!!!」

気合と共に、デレチヨに向かって思いつきり“アイゼン”を振り下ろす。

向こうも竜巻状の闇色の炎を纏った大剣で迎撃態勢。

ヘッドと刃が衝突。以前だったら、あたしは吹き飛ばされて“アイゼン”も粉々にされてた。

だけど、今は違う。あたしも“アイゼン”も、きちんとデレチヨと拮抗出来る。

「吹つつつつつ 飛べえええええええ!!!」

力比べなら負けねえ。激しい火花を散らしながら拮抗を少しずつ崩していく。

デレチヨが苦悶の声を漏らしたのが聞こえた。行ける・・・! 思いつきり振り切るようにさらに力を入れる。

「つく・・・!!」

デレチヨは耐えきれなくなったのか自分から離れた。

あたしはすぐさま追撃に入るために“アイゼン”をラケーテンフォームへと変える。

ヘッドのブースターが点火。その場で回転して、一気にデレチヨに接近する。

ラインが寂しそうにそう返してきた。
それが叶うかは分からねえが、もしまだシャルロツテが還っていな
かったら言いてえな、ありがとう、って。
その為にはまずコイツらを倒さねえと。

“アイゼン”のヘッドでコメートフリーゲンを打ち出す。

慈悲すら許さぬ業火

デレチヨは大剣を連続で突き出して、闇色の炎の槍でフリーゲンの
迎撃に入った。
だがその隙がテメエの敗北を呼ぶ。食らいな、全てを粉碎するあた
しの一撃を。

「轟天爆碎！！」

ギガント・シユラーク

巨大化した“アイゼン”の一撃を、デレチヨに向かって振り下ろし
た。

散々苦汁を舐めさせられた六課がようやく反撃を開始。次回もまた反撃？

えー、ここで今さら？かつ必要ないんじゃないかね？という事を書きます。幹部達のコードネームの意味ですね。

大体スペイン語、ひとつだけイタリア語を使用してます。

翡翠⇨スペイン語でハーデ。

至高なる卓絶者は、翡翠のジュエルメッセージの一部から起用。

ダイヤモンド⇨スペイン語でダイヤモンド。

永遠なる不滅者は、ダイヤモンドのジュエルメッセージの一部から起用。

永遠、だけは“永続”というものから変えています。

ガーネット⇨スペイン語でグラナード。

陽気なる勝者。これもガーネットのジュエルメッセージから起用してます。

トパーズ⇨スペイン語でトパーシオ。

潔白なる聖者。これもジュエルメッセージより起用していますが、聖者に関しては“神聖な善”から変更してます。

サファイア⇨スペイン語でサファイロ。

誠実なる賢者。これもジュエルメッセージより起用してます。

アイボリー (象牙) ⇨スペイン語でマルフィール。

堅固なる抵抗者。これも同様にジュエルメツセージから起用。

薊^レスペイン語でカルド。

報復せし復讐者。これは薊の花言葉の一部を起用してます。

薊の花言葉つて、なんか暗いものばかりですよねえ。

ポインセチア^レイタリア語でノーチエ・ブエナ（聖夜）

祝福なる祈願者。これはポインセチアの花言葉を少し変更したものです。

元は、“祝福する”と“聖なる願い”と“幸運を祈る”となります。リンフォースにピツタリ、というか彼女のためにある花言葉だと思っっていたり。

アクアマリン^レスペイン語でアグアマリナ。

聡明なる勇者。これもジュエルメツセージより起用。

勇者。彼一人で違法魔導師を追い、残念ながら殉職したティードを称えて。

アメジスト^レスペイン語でアマティスタ。

敬虔なる諦観者。これもジュエルメツセージより起用。

女帝の洗礼　↳ Emperatriz　Baptismo

“ヴォルフラム”から出撃して、最初に私が当たったのは幹部じゃなく“アギラス”。

人格型のAI搭載の戦闘機編隊。クロノの部隊と“五課”の支援部隊も頑張っているけど、次々と現れる“レジスタンス”の波の所為で対処しきれていない。

エースかストライカークラスの魔導師でないとダメだなんて、これは少し厄介だ。

『スバル、ティアナ。あなた達も下を少し手伝って』

二人の戦う相手、クイントさんとティータが居ない事で、支援部隊の援護に回す。

地上に居る二人から『了解！』との返答。

『こちら特務六課シャルロツテ・フライハイト。
同隊スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター。
クラウディア武装隊及び特務五課の支援部隊の援護に入ります』

『いいのか、シャル。そつちも大変なんじゃないのか？』

クロノからの念話だ。すつごい久しぶりな感じ。

エイミイとは上手くやってるの？とか、子供は元気？とか訊きたくなっただけど、生憎と今は実戦の最中。

『問題ないよ。私達を誰だっと思っててるの？』

『……フツ、そうだったな。分かった。援護、感謝する』

念話が切れる。さて、やってやりますかっ！
気合を入れるために両手で頬をパンツと叩く。

『出来るだけこちらで受け持つから、そっちも頑張って』

『あ、はい！ お願いしますっ！』

離れた場所に居る航空隊員達に激励。すると何か興奮気味な男性隊員がそう返してきてくれた。

私はもう一度「一緒に頑張ろうっ」って言うと、離れた場所から「おおおお！」って雄叫びが聞こえた。

あはは、まあ頑張ってくれるならそれでいいや。

さて、私の視界に入るこっちに突き進んできた“アギラス”から今のところ神秘は感じられない。

だから“キルシュブリューテ”を使うまでもないかな。

「トロイメライ、準備は良い？」

Ja

この世界での相棒“トロイメライ”を手に、“アギラス”を見据える。

カブリコルニオ
やぎ座部隊リーダーより各機、エース狩りだ

雑魚に構うな。特務六課の魔導師を最優先に仕留める

エスコロビオン
さそり座の二の舞は踏むな。情報通りならば、この女が例の部隊の最強だ

“アギラス”の声が耳に届く。カプリコルニオ。それがこいつらの部隊名らしい。

私の事はすでに知れ渡っているらしい。まあ三日目となればそれくらいは当然か。

オーレリアじゃ幹部相手に暴れたし。

八機編成のカプリコルニオとの距離が徐々に縮まる。

私は動かない。向こうからわざわざ来てくれるんなら、それを迎撃するのみ。

カプリコルニオ全機の前面にヨツンヘイム魔法陣が展開される。

魔力砲か。んでもって防御が対魔力フィールドAMF。

これは普通の魔導師にはちとキツイ。だけど……

「こっちはお前達のようなモノとも何度も戦ってるんだ……よっ！！」

先制攻撃。真紅の魔力刃を八閃放つ。

狙いはエアインテーク。魔力と空気を供給する戦闘機にとって最重要部位。

だけどまあそいつらはそれなりの機動力で回避するわけで。

「なるほど。まあ疾いのは分かった」

回避運動と共にぶっ放してきた黒い砲撃が八。

威力は大体AAA-あるかどうか。武装隊の一般的な隊長より上だ。でもこれでも出力を押さえている可能性も視野に入れておく。

(それでもわたしの敵じゃない事には違いないんだけどね)

魔力を纏わせた“トロイメライ”で、砲撃を斬り裂いて霧散させていく。

ヨツンヘイムの魔法陣からしてちよびつとでも神秘でもあるのかと期待したけどなんてことは無い。

単純、現代の魔力だった。当然、私の敵じゃない。

「三枚に下ろされたい奴から来なさい！」

“トロイメライ”の剣先をカプリコルニオに突きつける。

十 十 十 十 十 十 十

「よお、騎士エリオ。そんで、そのパートナーの竜召喚士キヤロ」

僕とキヤロの前に現れたグラナード。そしてのパートナーのフォヴニス。

グラナードは、フォヴニスの頭の上で腕を組んだままこっちを見下ろしながら、僕達に挨拶してきた。

僕はそれに答えずにただ黙って“ストラダー”の矛先をグラナードに向ける。

(大丈夫、大丈夫だ。シャルさんとの模擬戦のおかげで、フォヴニスの威圧感はもう感じない)

フォヴニスなんかよりシャルさんの方がずっと怖かった。

だから何も怖くなんて無い。僕は、僕に与えられた役目を果たすだけ。

「良い目になったな。いいぜ、その目。戦いがいがある。オレの未練、お前なら叶えてくれると信じたのは間違いじゃなかった」

「未練？ 管理局への復讐、ですか……？」

そう訊き返す。するとグラナードは、静かにフードを脱いで僕を見つめる。

感情が読めない目だった。僕を見ているようで何か別のモノを見ている。

「管理局の上層部、のまた一部の将校だけだな。まあそれがひとつだ。

もうひとつの目的、未練は……騎士エリオ、おまえがその槍でオレを斃す事」

「「っ!?!」」

今、グラナードは、僕に斃されることが未練だって言った……？
どういうことだ？ 斃されることが未練？ 普通は逆なんじゃ……？

「っって思っている顔だな、騎士エリオ」

考えている事を読まれた。そんなに顔に出ていたのか……？

グラナードが心底面白いとでも言うように子供のような笑みを浮かべた。

「これはオレの目的にも繋がるが、オレは管理局のある将校の謀略によって殺された。」

そう、謀られて死んだ、殺された。オレはそんな形での死なんか望んじゃあいない。

オレは、オレは武装隊として、せめて戦いの中で死にたかった。」

「だから、だからエリオ君と戦うんですか？

自分を斃させるために。そんなことで、エリオ君にあなたの未練^{おもい}を背負わせるんですか!？」

「キャラ口……」

僕の後ろに控えていたキャラ口が、前に躍り出て一生懸命にそう言った。

対するグラナードは、小さく「女には分からないか……」と、笑みとも言えない冷たい笑みを浮かべてそう呟いた。

「オレは、管理局員として、何かを守るために戦いたかった。その結果が死ぬ事になったとしても、だ。だが、結局それは叶えられなかった。」

憧れた組織に入り、自身を鍛え、経験を積み、任務をこなした。

信じていたんだ。世界が平和になるための過程にオレは居て、その手伝いをしている。

信じていたんだ!! 管理局を! だが実際はどうだ!?

アイツらは都合が悪い、世間に出てはいけない事を知ったオレを謀り、殺したツ!!」

グラナードの放つ怒りの空気に、キャラ口はたじろいで後ずさった。僕はそんなキャラ口の左手を取って、落ち着かせるために「大丈夫」

って微笑みかける。

けど実際僕も吞まれそうだ。キャロの体温を感じているからこそ、まだ落ち着いていられる。

「オレは！ オレはそんな結末のために管理局員になったのではない！！！！

はあああああああ……。すまん、話が逸れたな。

だからせめて、オレを嵌めたヤツらに復讐し、最期は好敵手ってやつと戦って逝きたかったんだ……」

「グラナード……」

どう声をかければいいか分からない。

信じてきたモノに裏切られて、その上騙されて殺された、だなんて……。

管理局は、本当にそんな組織なのか？

思い出すのは幼少の頃。

フェイトさんとルシルさんと出逢う前の頃。

信じてきた世界が僕を裏切った。だから世界そのものが僕の敵となった。

憎んだ、世界を。恨んだ、世界を。否定した、世界を。

けど、僕は出逢ったんだ。こんな僕に手を差し伸べてくれて、新しい世界をくれた家族に。

全てが変わっていく。消えていく。癒されていく。

「まあどつちにしる戦わないといけないのは違くない。だから……

」

伏せていたフォヴニスが立ち上がる。

黒い甲殻の隙間や穴の中に揺らめく翠色の光が一際強く輝きだした。

「キャロ！」

グラナードは、新しい何かを手にする前にその命が断たれた。

どれだけ悔しかったか、僕には到底解るものじゃない。

その結果が、復讐したい。その強過ぎる未練ねがいによって再びこの世界に舞い戻った復讐者。

「うん！ 我が乞うは疾風の翼。城砦の守り。撃砕の矛。槍騎士に、一騎当千の加護を」

これは僕の身勝手だ。だけど、それでも、僕はあなたを止めたい。そんな想いのままでまた逝かせたくない。

グラナード、僕はあなたの未練を叶えさせずに、それでも満たしてあげたい。

だから、あなたのもうひとつの目的、僕が背負います。叶えさせます。

復讐ねがいという未練が消え去ってしまうような戦いの果てに、僕があなたを……。

Triple Boost Up.

キャロのブーストの効果が僕と“ストラーダ”を強化する。

僕は“ストラーダ”に「いくよ」と声を掛け、“ストラーダ”も Jawohl！ といつも以上に強く答えてくれた。

「僕があなたを斃します！！」

「ハッ！ さあいくぜ！！」

穿たれし風雅なる双爪

フォヴニスの両ハサミが開く。エルジアで見せた砲撃だ。一撃、その衝撃波で僕とキャロを昏倒させた大威力砲撃。先手必勝。シャルさんが言ったことを実践する。

下手に後手に回るとジリ貧になるから、攻められるときに攻めなさい

僕は“ストラーダ”のカートリッジを一発ロードする。

「うく・・・！」

なんだこれ！？ 今までで一番強烈な・・・高ぶりが・・・！

「エリオ君！？」

「だ、大丈夫・・・大丈夫だよ、キャロ・・・」

何とか高ぶりを抑えて一度深呼吸。

放たれた二つの砲撃を、高速移動のソニックムーブで回避して一気に距離を詰める。

速さも尋常じゃないほどにパワーアップしている。

キャロのブーストの効果だけじゃないのは確か。

これがシャルさんの力・・・とんでもなくすごいモノだ。

(でもこれはこれで・・・いい感じだ!!！)

リンカーコアが暴れ出しているような少しの苦しみ、それ以上の高揚感。

その高揚感に身を委ねて、僕は駆ける。見据えるのはフォヴニス、だけど狙うのはフォヴニスじゃなくて……

「^{オレ}本体を狙ってきたか……！　だが、甘ええええ！！」

始めからグラナードただ一人。

光が漏れ始めた右のハサミが僕に向けられた。

信じるんだ。シャルさんの言葉を。僕と“ストラーダ”を。キャロの力を。

「はああああああ！！」　S p e e r　S c h n e i d e n

再度砲撃が放たれる。それに向かって“ストラーダ”の斬撃を放つ。視界いっぱい迫る翠色の光。その光を僕の“ストラーダ”は、

「斬り裂いた……！？」

砲撃を真つ二つに斬り裂いた。グラナードの驚愕の声が耳に届く。これなら僕は勝てる。そう、グラナードがこのままで来るなら。着地してすぐさまもう一度ソニックムーブで最接近する。

「いいぜ、騎士エリオ！！　フォーヴニースツッ！！」

翠閃に穿たれる罪人

フォヴニスが咆えて、両ハサミ、背部の甲殻が開き、尾の先端にも光が集束していく。

オーレリアでシャルさんに使った攻撃だ。

僕は念話でキャロに離れているように告げ、キャロを巻き込まないようにする。

放たれる翠色の光線の雨。

ソニッククムブの連続発動で避けて避けて避けまくる。

地面を削り取っていく光線。破片と粉塵がこの一帯を覆っていく。視界が狭まる。でも、見えるんだ。翠色の両目ひかりが目印になってくれている。

「おおおおおおおおおおおお！！」

大きく跳躍。狙うはグラナードただ一人のみ。

紫電一閃

十 十 十 十 十 十 十

「少しぶりやな、リインフォース」

私の目の前、私に未来をくれた最愛の家族の一人リインフォースが居る。

リインフォースは白の防護服姿で、私の事をじっと見つめている。

「リインフォース・・・」

「まだ、私をそう呼んでくれるのですか・・・？」

「当たり前や。ノーチェブエナやろうがなんやろうが、リインフォ

「ースはずっと変わらん私達の家族の一人リインフォース。家主の私がそう言うんやから、これは絶対やで」

最高の笑みをつくる。

誰が何と言おうとそれだけは絶対に変わらへん不動の事実。

「そう、ですか。それは、とても光栄なことですね」

リインフォースの微笑み。あの頃と何ら変わらん、ううん、もっと綺麗な微笑。

でもすぐに無表情に戻して、静かに拳を構えた。

「やっぱり戦わなアカンのやね。・・・ええよ、必要な事なんやろ？」

リインフォースが裏切り者とバレへんようにするには、どうしても私ら“六課”との戦闘が不可欠。

だったらそれに付き合うのが家主として、そしてマスターとしての務め。

決意を固めて、“シュベルトクロイツ”をリインフォースに突き出す。

リインフォースも、右拳をゆっくりと“シュベルトクロイツ”の先端にコッソと当てた。

「時空管理局テストメント対策部隊・特務六課部隊長、八神はやて二佐」

「テストメント幹部、ノーチェブエナ祝福なる祈願者」

決闘前の名乗りを上げる。騎士としての礼儀。

その瞬間、二人同時に距離を開ける。先手は……もらっよっ！！

バルムンク

直射弾をあらゆる包囲から射出する。

ラインフォースは、防御やなくて突進することでバルムンクを回避。

「いきます……！」

シュヴァルツェ・ヴィルクング

突進の勢いのまま、黒い魔力を纏った拳打を放ってきた。

そやけど全力やないんは分かるよ。だってこんなにも簡単に回避できるんやからね。

半身横にずれて、ラインフォースをやり過ごす。

『なあ、ラインフォース。どうしたらラインフォースは解放されるん？』

適当に射撃魔法ブリューナクを撃ち込みながら、思念通話で語りかける。

ラインフォースは何かを探るように周囲を警戒して、そして思念通話に答えてきてくれた。

『……ルシリオン、彼が私の存在を握っています。ですが、どうすればいいのかは私にも分かりかねます』

ラインフォースはブラッディダガーを私に向けて放ち始める。それを、同じブラッディダガーでオート迎撃。撃ち落としていく。

リインフォースを救うにはルシル君をどうにかすればええんか。そやけど今、確かこの戦場にルシル君はおらんかったはずや。視線を、“レジスタンス”や“アギラス”の出てきた山脈えんたくの、ポツカリ空いた空間に向ける。

『あそこの中に居るんやな……。なあ、リインフォース。もし、ルシル君をどうにもせんとリインフォースを連れ出したらどうなるん……。？』

クラウ・ソラス

ナイトメア

一度大きく距離を取って、二人同時に砲撃を放つ。威力は互角。もちろん二人とも威力は意図的に抑えてあるから。

『おそらく、私は粛清されてしまうかと。』

ルシリオンは……。マスターから幹部に対して粛清権限なるものを授かっています。

幹部カにそれを防ぐ手立てはありません。どういふものは報復せし復讐者隊ルドが一度見せています。』

リインフォースは、マスターとゆうところを少し言い淀んだけど、それでも続けて話してくれた。

カルド隊が一度見せた。それを聞いて思い出すのは、シグナム達が撃墜されたあの戦いの最後。

ルシル君がカルド隊を一瞬にして倒したアノ場面。

アレがそうか……。予備動作も何もない一撃。確かにアレは防げへんな。

『威力や効果は、ルシリオンの判断によって変わりますが、本格的な裏切りと判断されれば確実に消滅させられてしまいます』

『厄介な力を持つとるんやな、ルシル君は・・・』

無理に連れ帰ったらそれでバッドエンド。ルシル君にリインフォースを消される。

やっぱルシル君をどうにかせんと前には進めへんのやな。

『ある・・・八神二佐。ひとつお願いがあります』

リインフォースが、たぶん“主”と言いかけたのに、わざわざ八神二佐と言い直した。

少し胸が痛んだ。こんなときくらい、前みたいに呼んでほしかった。でも、それよりお願いというのが気になる。先を促すと、リインフォースは、

『彼を、ルシリオンを救ってほしいのです。』

おそらくもうご存知かと思いますが、彼は操られているだけなので

そう言つて、今気が付いたんやけど、リインフォースは右サイドの前髪を留めとるヘアピンをそつと撫でる。

そのヘアピンは光沢を放つ綺麗な赤。私やリインが使おうとるようなヘアピンに似とる。

あれ？ あれれ？ ちょい待ち。リインフォース、もしかして、それはルシル君から貰ったやつか？

どういうことや？ 二人はそういう仲なんか？ 私らが悩んで苦しんどの間にも二人は・・・。

そう思ったなら、何かこう、ルシル君とリインフォースが「うふふ」、
「あはは」といったデートな感じの光景が浮かんできた。

「そんなん許さんよおおおー！ー！ー！ー！」

そんなん今のルシル君にはありへんことやけど。うん、分かつとるよ。

「っ！？　だ、ダメなのですか・・・！？」

二人の関係（とんでもない妄想やけど）反対の大声に、リインフォースがビクツとはねた。

分かつとるよ、これは私のただの妄想やってことは！

でも！　でもな！　今のリインフォースの表情は怪し過ぎるんや！
私が知らんうちにそんな乙女な表情するようになったんが嬉しいよ
うな悲しいような悔しいような。

何やこの気持ち、モヤモヤ感・・・。あっ、そうか、そうなんや。
これが・・・

「うちの娘はやらん！ってやつなんやな！」

アカン。少し思考が暴走気味や。このままやと大ボカしでかすかも
しれん。

自分を落ち着かせるために深呼吸を二度三度繰り返して、気を取り
直す。

コホンと咳払いして、不毛な恋をしようとしとる（妄想レベルMa
x）愛しき娘リインフォースを説得しようと試みる。

「あのな、リインフォース。ルシル君にはフェイトちゃんが」

「っ！ 主はやて！ 今すぐにここから、オムニシエンスから逃げてください！」

ルシル君にはフェイトちゃんとゆう恋人が居る、と口にしようにしたところで、リインフォースが物凄い剣幕でそう言ってきた。その尋常やない様子に、私は周囲を軽く見回して気づいた。

「なんや・・・アレ・・・？ ちやう。知つとる、見た事ある・・・」

今まで視界に無かった、映らなかったあるモノが私の視界に唐突に入った。

知つとる。アレは、シャルちゃんとルシル君の記憶の中で見た魔道兵器。

確か名前は・・・

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

「アギトツ！！」

『おうよ！ 猛れ、炎熱！ 烈火刃！』

紫電一閃

愛剣“レヴァンティン”に紅蓮の炎を纏わしての一閃、きわめて単純だが絶対の信頼を置く一撃・紫電一閃を放つ。

剣閃の向かう先はカルド。かつての私が殺めた男だ。

カルドは手にする大剣で迎撃をするのか、大きく横に薙いできた。

激突する私の“レヴァンティン”の紅蓮の炎とカルドの大剣の闇色の炎。

「つく・・・！ 貴様・・・っ！」

「許されようとは思わん。恨まれても憎まれても仕方が無い事をしてきたのは事実だからだ。

だが、それでも私はここで死ぬわけにはいかんのだ」

「貴様らの主・・・八神はやてのためか・・・」

周囲に二色の炎が散っていく。

鏑迫り合いは完全に拮抗し、少しでも気を抜けば押し切られる。

カルドの実力を読み違えていた。確かにこの男の実力は高くはない。それは当たっている。しかし問題なのが、カルドを動かす原動力“復讐心”。

それがカルドを強くしている。

「そうだ。私達に居場所を与えてくれた・・・愛おしき存在^{こゝろ}。

何に於いても守るべき大切な存在^{こゝろ}。故にこそ、同じ相手に、敗北は許されない・・・！」

さらに力を強める。私が少しずつ押し始め、拮抗が崩れ始める。

だがそこに邪魔が入る。こちらに迫るのはカルド・イスキエルド。

闇色の炎を刀身全体に纏わせた大剣を担ぐように突進してきて、裂帛の気合と共に私に大剣を振り下ろす。

私は鞘、そしてその上からシールドを展開する。

二重の防御。フライハイトの神秘^{チカラ}が発揮されている今ならこれで防げるはず。

イスキエルドへの防御態勢のまま、カルドとの鏖迫り合いを続行する。

片手になったことで押していた“レヴァンティン”が押され、再び拮抗する。

イスキエルドの大剣がまず一層目のシールドに衝突。

莫大な闇色の炎がシールドを隔てて周辺の大気を焼いていく。

「そのまま燃え尽きる・・・燃え尽きてしまえ・・・！」

左右の腕が徐々に押され始めるのが分かる。

一対二でこうまで苦戦するのか・・・。ヴォルケンリッターの将が聞いて呆れる。

『シグナム！！』

「『安心しろ、アギト』おおおおおおお！！！」

咆哮と共に“レヴァンティン”でカルドの大剣を捌き、全力の蹴りを顔面へと入れる。

足の装甲とカルドの兜が激突した金属音とは別に鈍い音が耳に届く。まともに私の蹴りを受けたカルドが吹き飛ぶが、私は気にも留めずに、イスキエルドへと“レヴァンティン”を振るう。

イスキエルドは防御でもなく迎撃でもない回避を選択し、私の側から瞬時に距離を置いた。

「相手が神秘を手にしただけで、俺達が後れを取るだ・・・。」

「魔族があれば、復讐は果たせるはずだったのに・・・。」

カルドとイスキエルドが俯きながらそう呟いているのが聞こえる。

「お前達の復讐という想いは確かに強い。だが、我らの主を思う想いの方が遥かに強い」

殺したい想いか守りたい想い。どちらの方が強いとは決められん。しかし、我ら守護騎士に限って言えば、守る想いの方が強いと断言できる。

「ふざけるなよ……。何が強いだ。そんなモノ、俺達が根こそぎ刈り取ってくれるわッ!!」

「俺達の炎が、貴様程度の炎に敗れてなるものかッ!!」

我に滾るは怨嗟の業火

二人同時に闇色の炎による斬撃を飛ばしてくる。ならば証明しよう。これが、私の想いの強さだ。

“レヴァンティン”を横一文字に構え、もう一発カートリッジを口ードする。

全身を駆け抜けるフライハイトの神秘を宿した魔力。身体が軽くなる。今まで感じた事の無い高揚感。

「はあっ!!」 S t u r m W i n d e

放射状に衝撃波を打ち出す。

闇色の炎が、不可視の衝撃波によって掻き消されていく。

その光景に驚愕しているのか、一切の動きを止めたカルド隊へと一気に接敵する。

アギトが『直撃！ これで決まりか！？』と興奮気味に様子を窺っているが、私としては喜びより、虚しさの方が大きい。

「油断はするな、アギト。今まで戦ってきた者達とは文字通り次元が違う」

『分かってるけどさ、あたしらの火竜一閃をまともに受けて無事なはずがねえよ』

そうは言っが、やはり油断は出来ん。

初めての交戦の時も、その油断で撃墜された。

『……ん？ なっ！？ シグナム、アレ！ 後ろっ！！』

いきなりのアギトの焦り様。何だ？ と思い、前方への警戒を怠らぬよう、言われた通りに後ろを見る。

「アレは……！」

移した視線の先、そこには見覚えのある建造物が佇んでいた。

十 十 十 十 十 十 十

「なかなか数が減らないよお、ティア」

「弱音吐いてないで、きつちりしごとしなさいっ！」

お母さんとティアのお兄さんが居ないことで、あたしとティアはシ

ヤルさんの指示に従って、地上の“レジスタンス”相手に奮闘している。

クロノ提督のところの武装隊や“五課”の人達も頑張っているけど、一向に“レジスタンス”の数が減らない。

それはそうだ。何せ“レジスタンス”はあるゆる管理世界に居るのだから、その数は計り知れない。

「隙ありい！！」

と、あたしに向かって“レジスタンス”数人が銃を向けてきた。あの人達のトリガーに掛かっている指に力が入るのが見える。

クロスファイアシュート

でも焦る事なんてない。あたしには長年組んでいたパートナーがっているんだから。

ティアの魔力弾はすごい精度で“レジスタンス”の人達の武装を弾いていく。

そしてあたしが止めに一撃必倒の打撃を鳩尾に入れておしまい。

これをひたすら繰り返す。もうどれだけ殴ってきたか数えられなくなってきた頃、“ヴォルフラム”から通信が入った。

『スターズ3、4！ アグアマリナとアマテイスタの接近を確認しました！』

アグアマリナとアマテイスタ。お母さんとティアのお兄さんのコードネーム。

ティアと頷き合って、お母さん達の居る位置を聞き返す。

返ってきたのはお母さん達が居る位置は遙か後方とのこと。

『特務六課スターズ3と4。テストメント幹部との交戦に移る為、この戦域から離れます!』

そう通信を入れると、あちこちから頑張れよ、とか任せたぞ、って声援が返ってきた。

嬉しいのは嬉しいんだけど、相手はお母さんとお兄さんなわけで。でもみなさんはそれを知らないわけで。何だか複雑な気分になったり……。

『行くわよバカスバル! あたし達が二人を止めるんでしょっ!』
ティアがそう念話で言い放ちながら先行していく。

あたしも『うん』と強く頷いて、ティアの後に続く。

でも“レジスタンス”があたし達の行く手を拒もうと立ち塞がる。

鋼の軛

そんな“レジスタンス”を閉じ込めるように、白い帯が地面から生えてきた。

「往け。たとえ我に神秘が無くとも、お前達の道くらいはつくれる」

狼形態のザフィーラが佇んでいた。

あたしとティアは「お願いします!」と頭を下げつつ、ザフィーラの脇を通ってお母さん達の元へと急ぐ。

大混戦だった戦域から少し離れた場所。そこにお母さんとティアのお兄さんが居た。

向こうもあたし達に気がついたのか歩くのを止めて、ただあたし達の方を見る。

「お母さん。お母さんは、お母さんの目的は何？」

「お兄ちゃんも。お兄ちゃんは どうして、何が目的でここに居るの？」

問い質す。お母さん達の目的を知りたい。

そう、“テストメント”の目的としてじゃなくて、未練ねがいの方が知りたい。

「さっきね、ギンガやゲンヤおんさんにも同じ事訊かれた」

「え・・・？ ギン姉とお父さんに・・・会ったの・・・？」

予想外の返しに呆然となる。

お母さんはただコクリと頷いて、被っていたフードを脱いだ。

視線はひたすらあたしに向けて、お母さんはゆっくりと話を話し始める。

「ついさっきまでミッドである違法魔導師集団を追っていたの。

追い詰めるところまで行っていたんだけど、ゲンヤおんさんの108部隊に捕捉されててね。

それで少し話をしたの。そして、今のスバルのように訊かれた、目的は何？って」

「それで、どう・・・答えたの・・・？」

「それは・・・、って！ 何をするつもり！？」

お母さんがあたし達の背後を見て、驚愕の声を上げた。

ティアのお兄さんも「何を考えているんですか、マスターは!？」
とあたし達の背後を見て驚いている。

あたしもティアも後ろを振り向く。

そこには、さっきまでは確かに何も無かったモノがあった。
だけど今は違う。しっかりとそこに存在している。

「ねえ、スバル。アレ、もしかして・・・大きさが違うけど・・・」

「う、うん。シャルさんとルシルさんの記憶の中で見たアレ、だよ
ね・・・」

大きさ、というより高さは二倍くらいだけど、確かにアレだ。

「スバル、今すぐここオムニシエンスから離れなさい」

「もうすぐ障壁が展開され直す。その前に、ここから離れた方が良
い」

お母さんとティアのお兄さんは、少し焦り気味でそうやってきた。

十 十 十 十 十 十 十

ルシルが居ない事で、私はクラウドディアの武装隊や“五課”の混成
支援部隊の援護に回っている。

その大半がシャルと合流しての敵の航空戦力“アギラス”の掃討。

「結構減らしたね、シャル。これで地上の部隊が動きやすくなれば
いいんだけど」

もう何機目かの“アギラス”を撃墜し終えて、シャルと声をかける。

「そうだね。にしても、ルシルは何をしているんだろう・・・ね？
愛しのフェイトがこんな戦場で待ち恋い焦がれているというのに。
はあ、時間にルーズというか何というか・・・はあ」

「ルーズも何も約束してないから。恋い焦がれても・・・まあ少し
は。

じゃなくて！　って・・・シャル、アレ・・・」

シャルに振り向いて、気づく。

“レスプランデセルの円卓”のポツンと空いていた空間に、さつき
までは無かったモノがあった。

銀色の、高さが3kmくらいの塔が一基。その周りにも円形に八基
の銀の塔。

さらにその周りに円形状に設置されているソーラーパネル、かな？
と何かの建物が二十基。

さらにさらにその周りに十基の砲台が円形状に設置されているのが、
こんな遠く離れた場所からでも分かる。

「ちよーっつと待て。おいおいおいおいおい。

そんなモノまで引つ張り出してくるのか、ヨツンヘイムの魔術師・

・！」

「ねえ、シャル。アレって、アレ、だよね・・・？」

完全に呆れ果てているシャルに訊ねる。

シャルは大きいため息をついて、

「ヴァナヘイム帝都防衛魔道砲塔エンペラトウリス・バウティスモ。高さが尋常ないけど、間違いない。あんなモノを・・・何考えてるわけ？」

頭を抱えて唸り始めた。

地上部隊と航空部隊がざわつき始めてる。

「ちよつ、ちよい待ち！ 撃つつもり！？」

「え！？ 撃つって何をツ！？」

私とシャル、二人同時に焦り始める。

何せ一番高い中央の塔“エンペラトウリス・バウティスモ”の先端に、白銀の閃光が生まれたからだ。

白銀の光。それを見て一瞬で理解した。

アレだ。アレが、艦の駆動炉の魔力結合を分断したあの次元跳躍の砲撃だ。

「くつ！ どれだツ！？ どれを狙っている！？」

シャルが“トロイメライ”を待機形態の指環に戻して、右手に“キルシュブリューテ”を。

我が言の葉は幻想紡ぐ鍵 と詠唱して、取り出した黄色い短槍を左手に携える。

さらに強くなる白銀の光。そして、それは放たれた。

遙か上空。何もないところへと。そして、空に波紋が浮かんで、その波紋へと吸い込まれた白銀の特大砲撃は消えた。

次元跳躍したんだ。狙いは何なのかは分からないけど、何処かの世界の何かが・・・消された。

「何を狙ったのかは知らないけど、とりあえずはよかった」

シャルが小さく安堵のため息。そして左手に持っていた黄色い短槍を消した。

私も「そうだね」って返すけど、シャルとは違って、素直に安心できない。

あの砲撃の威力や効果は知っている。ほとんど回避が出来ずに防衛も出来ない。

そんなモノに狙われたのが何なのかが気になって仕方がない。

「……フエイト、来たよ」

「え……?」

声をかけられて顔を上げると、シャルがある場所を指差していた。

私はその指の差す場所に視線を移す。そこには蒼い翼を背負ったルシルが居た。

だけど今までとの唯一の違いは、ルシルが空戦形態だったことだった。

テストメント本部“エヘモニアの天柱”最上階

「これは一体どういうことですかっ、ダイヤモンド永遠なる不滅者!!」

至高なる卓絶者は椅子から立ち上がって、モニターに向かって怒鳴る。

そしてすぐに咳き込み、大きく肩で息をしながら、モニター越しに居る永遠なる不滅者を睨みつける。

しかし彼は、ただ静かに『必要な事だったからです』と弁明する。至高なる卓絶者は椅子に座り直し、ひとつため息をつき、先を促した。

『追跡していた違法武装集団の次元航行艦を発見。

なかなか尻尾が掴めない連中でしたので、これを好機と思い、洗礼の一撃を使用。

少しお待ちください・・・5、4、3、2、1、着弾・・・』

モニター越しの永遠なる不滅者は、落ち着き払ってそう言い、

『敵艦の撃沈を確認。マスター・至高なる卓絶者。私の選択した任務はこれにて完了です』

そう締めくくった。至高なる卓絶者は「乗組員はどうになりましたか？」と訊ねる。

永遠なる不滅者は事もなげに

『無論全員死にました。わざわざ管理外世界で悪事を働く集団です。生かしておいても無意味でしょう』

と告げた。それを聞いた至高なる卓絶者は大きく嘆息し、

「その件に関してはもう何も言いません。相手の自業自得という事にしましょう。」

用が済んだのでしたら、今すぐに結界を展開し直してください」

納得はいかないようだが、撃沈された違法武装集団の非道さにも怒りを覚えていた彼女は、それも仕方が無い事だと諦めた。

そして、“レスプランデセルの円卓”の結界を戻すように言うが、ディアマンテ永遠なる不滅者は首を横に振った。

『このままオムニエンスの障壁が展開されるまでオラシオン・ハルデインの砲を使う方が良いかと思えますが？』

「どういうことですか？」

心臓付近に手を添えて深呼吸を繰り返す彼女は訊き返す。

『お解りなはずです。戦況は芳しくありません。』

アギラス三隊の内、カプリコルニオが全滅。

残りの二隊も半壊状態。レジスタンスに関して被害は深刻です。

幹部達に関しても、特務六課の連中に苦戦を強いられている。

ならば、オラシオン・ハルデインの防衛システムで時間稼ぎを行う方が効率的、かつ確実です』

ハーデ至高なる卓絶者にもそれくらいの事は理解していた。

このままでは押し切られる可能性がある事くらい。

自分自身や永遠なる不滅者ディアマンテが出撃すれば、まだ押し返すことくらい簡単なことも理解している。

しかし今は出られない。何故なら誠実なる賢者を縛っている制限を二段階も解いているからだ。

誠実なる賢者の“力”を喰らっているからこそ今もこうして生きていられる。

その“力”を少しとはいえ返した。その状態で自ら戦線に出れば、
どういふ異常が身体に出るか分からない。

それ以前に今こうしているだけでも辛そうにな表情を浮かべている。
無論それは見えない。フードの中に隠れているのだから。

それに、彼女はまだハッキリと表舞台に出たくなかった。いや、目
的が果たされた後であっても出たくはなかった。

彼女は思案する。そして結論し、永遠なる不滅者ディアマンテに命じた。

「アギラス及びレジスタンスに後退命令。オラシオン・ハルディン
の防衛システム始動。

各幹部に、各部隊の後退援護を。ですが、防衛システムはあくまで
牽制砲撃としなさい。

決して当ててはいけません。いいですね、永遠なる不滅者ディアマンテ」

『了解しました。砲撃による防衛線を築きます』

通信が切れる。彼女は自らの胸、心臓付近に手を添えて、鼓動する
自分の命を感じる。

(日常生活にすら支障が出てきた。戦闘になればどうなるか・・・)

最強の戦力を持ちながら最弱の身体。
情けない。と、彼女は一人自嘲した。

番外編：それは少し前の出来事

§ ナカジマファミリーとお母さん §

西部エルセア 陸士108部隊隊舎

「なあギンガ。おまえ、クイントがもし俺達のところに出たら、どうする?」

この108部隊の部隊長であり私の父であるゲンヤ・ナカジマ三佐からの問い。

私は今淹れてきた湯呑を父さんの座るデスクの上に置いたまま手を止める。

私の母さん、クイントが反時空管理局組織“テストメント”の幹部の一人として存在している。

スバルからのメールで母さんに関する情報をもらっている。

もちろん八神二佐からの許可もある。そしてよく相談されるようになった。

母さんと戦うべきかどうかとか。あの子はすごく迷っていた。

当然かもしれない。だけど今は乗り越えてくれたみたいで少し安心している。

「私は、戦います。理由はどうであれ、母さん達のやっていることは管理局員として見過ごせません」

スバルに言った事をもう一度口にする。

管理局こそが絶対の正義なんて言わない。でも“テストメント”も正義じゃない。

人はそれぞれ違う正義を持っている。そう、絶対唯一の正義なんてものは無いんだから。

だから私は母さんの、“テストメント”の真意を問い質したい。そのために戦わないといけないのなら、私は母さんとも戦う。

「そうか。・・・そうだな」

「父さんはどうなんですか？ 母さんと会ったら・・・？」

今度は私が質問する。父さんは母さんと会ったらどうするんだろう。その質問の答えを聞く前に、部隊長室にアラートが鳴り響く。

そして次に父さんの面前にモニターが展開、映るのは私たちナカジマ家の次女チンク。

『チンクです。広域指名手配を受けた違法魔導師集団の一人を108部隊の管轄エリアにて発見。』

しかもテストメントの幹部と思しき連中との交戦にて発見とのこと。です。

そして彼らは現在、森林地区へ向かっているとのこと。です。』

「違法魔導師とテストメントが交戦？・・・分かった。八神にはこちらから連絡を入れる。」

「・・・ギンガ。後から俺も行く。先行して八神達の到着を待」

「あ、待ってください！ 六課は、テストメントの拠点に今日向かうとスバルが・・・！」

遮るようにそう口を挟む。

スバルの話だと、今日、“特務六課”は“テストメント”の拠点と
思われる世界に行くとのことだ。
そこで、母さんとの決着をつくかもしれないとも言っていた。

「なに！？……そりゃあ参ったな。黙って見過ごすしかねえの
か……？」

『あの、テストメントの幹部の件なんですが、今そちらに送って映
像データを観てもらえますか』

チンクから送られてきた映像データ。

映っているのは、広域指名手配を受けた違法魔導師。

そして、その違法魔導師を追う二人の“テストメント”幹部。

その内の一人を見て、私と父さんは驚愕した。

「クイントか！？」「母さん！？」

実際はフードで顔が隠れているから判別できないけど、母さんだと
いう証が映っている。

両腕に装着された“リボルバーナックル”と両足に装着された“口
ーラーブーツ”。

そして藍色のウイングロード。この三つの要素が、母さんである事
を証明していた。

「俺も出る。車を回してくれ」

『了解しました』

父さんがチンクにそう指示して、急いで出動する準備を始めた。

そんな中、父さんが私を見て、「俺も、必要なら戦う。それが俺の

答えだ」と言った。

それに呆けていると、父さんは「ボケつとするな、行くぞ」と言つて私の背中を一発叩いた。

私は「了解です！」と返し、部隊長室を後にした。

ミッドチルダ西部エルセア・森林地区

市街地で労働力としての獲物を物色していた違法魔導師。

そこに突如姿を現した“テストメント”幹部二人に、その男は戦闘を選択した。

しかしそれは間違いだった。殺しの腕に自信はあった。

だが、幹部の怒りを買っている男は何もすることが出来ずに敗北。

そして逃げるといふ選択肢を選ばざるを得なくなっていた。

男は走りながら左腕を押さえ、流れ出る血を止めようと必死だった。

「くそつくそつくそつくそつ！ アレがテストメントって奴らかよ！」

運が無かった。ただそれだけだった。

そんな男の足元に黄色い魔力弾が撃ち込まれる。

バランスを崩し転倒しそうになるのを必死に堪え、体勢を立て直す。さらに撃ち込まれる。全弾足元。男に当てるつもりは無いらしい。

「バカにしゃがってえええつ！！ 俺で遊んでんじゃねえぞおおお

お！！！！」

そう悪態をつきながら男はひたすら林の中を駆け抜ける。今向かっている市街地に居る仲間と合流すれば何とかなるかもしれない。

そんな淡い期待を胸に秘めながら。

「大人しく投降するか、それともこのまま逃走を続け痛い目を見るか。

どちらか好きな方を選んでください」

聡明なる勇者の声が林内に響く。すぐ近くから語りかけてくるような錯覚を得た男は、急いで周囲を勢いよく見回す。

そして頭上に影が差したことで男は上を見る。

そこに聡明なる勇者は居た。生前は空戦魔導師。

走り回る男を空から追跡することは容易かった。たとえそこが飛行の軌道が遮られる林の中だとしてもだ。

「くつつそおおお！！！」

男は胸元から拳銃を取り出し、聡明なる勇者へ向かって連射。

もちろんそんなモノが通用するはずもない。見えない壁に弾かれたかのように弾丸の軌道が逸れていく。

「……ならば、ここで裁きを受けるんだ」

聡明なる勇者の右手に白銃が出現する。

そしてその銃口を静かに男の額に向ける。男は「ひっ」と怯えを表す。

トリガーに掛けた指を引こうとした聡明なる勇者だったが、前方か

ら魔力弾が数発襲いかかってきた。
聡明なる勇者はその魔力弾を早撃ちで全弾迎撃する。

「助かった！」

男はそう叫んで林の中をさらに速さを上げて走り抜ける。

聡明なる勇者は左手に黒銃を出現させ、その銃口を魔力弾の発射地点に向ける。

【どうします、敬虔なる諦観者？】

しかし返答は来ない。聡明なる勇者は再度敬虔なる諦観者へと呼びかける。

三度目の呼びかけで、【ごめんなさい。なんだっけ？】と返ってきた。

【どうしたんですか？と訊くのも野暮ですか。

このエリアの管轄は108部隊。クイント元准陸尉の旦那さんと娘さんたちの居る部隊ですよね】

聡明なる勇者は黒銃を降ろし、再度男の追跡を始める。

敬虔なる諦観者は【ええ、そうね】と返し、そのまま無言となった。

【会っていきますか？ 誠実なる賢者の居ない今なら少しくらい話
が出来ますよ】

男を再発見した聡明なる勇者が白銃から魔力弾を放ちつつそう告げる。

敬虔なる諦観者は【会っていいのか、少し迷ってる】と答えた。

男が林を抜けたのを視認した聡明なる勇者は、少し高度を上げてか

ら林を抜ける。

そして視界に車の中に乗り込もうとしていた男を確認。

「逃がさない」

クロスファイアシュート

車のタイヤ四つをピンポイントで撃ち抜く。

そして車の中から数人の男が出てきた。中にはデバイスを持っている者もいる。

聡明なる勇者は白銃と黒銃両方を構え、射撃と砲撃を放っていく。
男達は逃げまどいながらも反撃を開始。しかし聡明なる勇者に当た
ることは無かった。

ウイングロード

敬虔なる諦観者が宙に奔らせた藍色の道が盾となったのだ。

そしてそのウイングロード上を疾走する敬虔なる諦観者は、男達へ
と最接近。

両手に装着された“リボルバーナックル”や、両脚に装着された“
ローラーブーツ”が男達を吹っ飛ばしていく。

「……1 / 2 / 3 / 4 / 5 / 6……6人。

マスター・至高なる卓絶者からの情報だと、あと8人は居るらしい
ですよ」

地上に降り立ち、倒れている違法魔導師集団の数を数える。

そしてついでにデバイスを踏みつけて破壊していく。

「動くなッ!!」

二人の耳に届く怒鳴り声。

視線を移すと、違法魔導師集団の仲間であろう男達が人質を取っていた。

数は6人。残りのメンバー内半分以上が揃った。

その内の一人が「武器を捨てろ！」と言いながら、人質に拳銃型のデバイスを向ける。

人質にされた女性二人は恐怖から泣いている。

アグアマリナ
【聡明なる勇者】

【分かっています】

敬虔なる諦観者は“リボルバーナックル”と“ローラーブーツ”の武装を解き、遠くに投げ捨てる。

聡明なる勇者もまた白銃と黒銃を投げ捨てる。

「よし。聞きわけの良い奴は嫌いじゃない」

また別の男が二人の武装へと近づき手にする。

「重ッ!?!」と驚愕し、二人がかりで一つの武装を抱えては仲間の元へと戻る。

「なあ、あんたらがテストメントってやつなんだろ？

管理局に対して盛大なケンカを売ったヤバい連中。

だよ？ ものは相談んだけどよ、俺らも仲間に入れてくれねえかなあ？」

人質に銃を突きつける男がそう言った。

フードの中に隠れた敬虔なる諦観者と聡明なる勇者の眉がピクリと動く。

そして聡明なる勇者が「どうしてですか？」と問い、違法魔導師集団の真意を量る。

「そりゃあ、あんたらと同じさ。管理局が邪魔なんだよ。

あんたら局が邪魔だからケンカ売ったんだろ？ だから俺達は、あんたらとなら上手く付き合えると思ったわけよ」

「……勘違いも甚だしい。人身売買しているようなお前達と同じにするなよ？」

クロスファイア・オーバードライブ

聡明なる勇者達の周囲に黄色いスファイアが50基展開される。

男達は「人質がどうなってもいいのか!？」と青ざめた表情で咆える。

二人は答えない。ただ人質にのみ注意を払っている。

「くそっ」と悪態をつく男。聡明なる勇者はため息をつき、口を開く。

「撃ってみればいいじゃないですか。その女性二人が本当に人質であれば、ですが」

聡明なる勇者のその言葉と共にスファイアが輝く。

男達、そして人質にされていた女性二人も胸元から拳銃型のデバイスを取り出した。

そして一斉に二人に銃口を向けるも、その前に聡明なる勇者のクロスファイアが放たれる。

「少し観察すれば分かる。衣服の下にある銃くらい。それ以前にこんな人気の無い場所で、女性二人だけで一体何をすると……？」

威力を最小限にして、長く苦しむように魔力弾の雨を男達に当て続けた。

制圧完了。非殺傷設定とされていても、違法魔導師集団の衣服はロボロで身体中は酷く腫れている。

うめき声も漏らしつつ這いずって逃走を図ろうとしている者も居る。しかし聡明なる勇者は、その者の行く手に魔力弾を撃ち込み、“逃げられると思うな”と示す

「少しやりすぎじゃないかなあ？」

「これくらいでちょうどいいんです」

違法魔導師追跡中、返り討ちに遭い殉職したティード・ランスター。それゆえに聡明なる勇者は違法魔導師に対して憎悪を抱いていた。クイント敬虔なる諦観者は彼の肩をポンつと叩き、「回収して情報を吐かせれば任務終了」と告げ、倒れ伏している男達に近づく。

「止まりなさい」

その時、二人の耳に届く停止勧告。

周囲を見渡せば、隠れていたのかどこからともなく管理局員がずらりと立ち並んで二人を包囲し始めた。

108部隊だ。その内の一人ギンガが代表して、再度二人に今度は降伏勧告を出す。

「武装を解除して、大人しく投降してください」

「ギンガ・・・」

ポツリと敬虔クイントなる諦観者が漏らす。

そしてもう一人、敬虔クイントなる諦観者の視界に入る男、彼女の夫ゲンヤだ。

「クイントおまえなんだろう？」

ゲンヤはそう一言。俯いた敬虔クイントなる諦観者はただ静かにフードを脱ぐ。

ギンガの顔が悲しみから嬉しさからか、どちらにしても泣き顔に歪んだ。

「久しぶり、ゲンヤあなた。ギンガ」

十 十 十 十 十 十 十

母さんが現れたと知った日から映像でしか見た事の無かった母さんがそこに居る。

目頭が熱くなる。視界が滲む。

「大きくなったね、ギンガ。それに、すごく綺麗になった」

そう言って微笑む母さん。子供の頃に見せてくれたままの笑顔だ。

そして今度は父さんに視線を向けて「男手ひとつでよくこんなに綺麗に育てられたね」と少しからかい気味な笑い声。

「スバルも立派になっていたし、ギンガも綺麗になっているし。それに、チンクとデイエチとウエンディ。あとここに居ないようだけど、ノーヴェって子もいるんですよ。」

すごい大所帯になって、お母さん、すごくビックリしてる」

母さんの視線が、今度は私の両隣に立つチンクとデイエチとノーヴェに向けられる。

どうする。母さんにとって、チンクは、母さんの上官ゼスト・グラ
ンガイツを殺めた張本人。

直接的じゃなくても母さん達の最期に関わりがある。

それを知っているから、チンク達元ナンバーズと呼ばれた私の妹達
が息を飲んでいる。

その様子に気づいた母さんは「あなたたちのこと恨んでないから安
心して」と微笑みかけた。

「私はしっかりと自分の死を受け止めてる。

まあ確かにレジアス中将には恨みを持っていただけ、今じゃそれも
無い。

だから復讐なんてしたいと思っていない。だから安心してもらって
いい」

母さんは確かに言った。自分の死を受け止めて、誰も恨んでいない
と。

それだったら、どうして……

「どうして母さんは現実「コ」に居るんですか？ テスタメントの、母さ
ん自身の目的は何？」

そう残酷な事を訊く。実の子供に、どうして存在いしているの？と訊
かれて平気な親なんてきつといない。

すると母さんの微笑みは消えて、苦笑といった感じの笑みになって俯いた。

「教えてくれねえか。おまえが、今もなお彷徨うその理由を」

父さんも寂しげな表情と声でそう訊いた。

八神二佐から幹部達の正体の事は聞いている。

“テストメント”の幹部達は、強い未練を、おもい“テストメント”のリーダーによって人型に固定された亡霊であって想いそのものだって母さんは「そんなの決まっているでしょ」と顔を上げた。

「子を想わない親がどこにいるというの？

私だって本当はもつと生きたかった。死を受け入れたといっても、その思いだけは消えない。

ギンガヤスバルの成長をもつと見ていたかった。おとうさんとももつといたかった。

みんなとどこかに旅行に行つて、遊んで、笑つて、お母さんらしい事をもつとしたかった」

泣き笑いのような表情になった母さんを見て、私はもう堪え切れずに声を出して泣いた。

私だつてもつと見ていてほしかった。もつといろんな事を教えてほしかった。

もつとどこかに遊びに連れて行ってほしかった。ただ、お母さんが居てくれるだけでも良かった。

「それに、新しく家族になったチンク、デイエチ、ノーヴェ、ウエインディ。

あなた達とも一緒に過ごしてみたい。一気に娘が増えて、お母さん、すごく嬉しい。

一緒に買い物に行ったり、時にはケンカしたり、それでも笑っていただける家族。

そんな時間を……私は、望んだ」

「母上……」「お母さん……」「ママリン……」

チンク達は、少し躊躇いながらそう母さんの事を呼んだ。

お母さんはかぶりを振って、「はい」と綺麗な笑みを浮かべた。チンク達から緊張が抜けていくのが分かる。

私は涙を拭って、しっかりと母さんを見詰める。

「それが、おまえの目的なのか……」

「……いいえ。それはこの世界に存在する私の未練^{おもい}。私の目的は^{ねがい}別」

と思っただら違っていた。母さんの目的は別にある。

この場にまた緊張感が漂う。

「あなたが今後、管理局の闇によって壊されるかもしれない。

そんな最悪の未来を来させないようにするために、私はテストメントに居る、居続ける。

管理局の有する闇を、その闇によって謀殺された幹部達^{わたしたち}の手で消し去る。

時空管理局の改革。それが、私の目的であり……」

「僕の目的でもあります」

母さんに続いて、今まで黙って見ていてくれたティアナのお兄さんがそう言った。

管理局の改革。“テストメント”の幹部の大半は生前管理局員だという話も聞いている。

管理局に謀殺された。それが今度は私達に及ぶかもしれない。そんな未来を無くすために、母さんは存在していたということだった。

「だから、スバルにも言ったの。私達の改革が終わるまで待っていなさい、って。

結局、あの子がどういう選択をしたのかは分からないけど・・・」

母さんのその言葉に、私は口を開いていた。

「スバルは、母さんと戦う覚悟を決めました。だから、きっとスバルは母さんと戦います」

私のその言葉に、母さんは何かを言おうとしたようだけど、口をぐんぐんで驚いたような表情になった。

「六課と五課が、私達の本拠地に攻めてきたって連絡が入った。フフ、ギンガの言う通りスバルは私と戦う覚悟があるみたいね」

母さんは踵を返す。転移する気だと瞬間的に解った。

駆けだす。母さんの元に。手を伸ばす。母さんの背中に。

「ギンガ。私が、あなた達の未来を守るから」

「母さん!!!」

母さんの姿が完全に消える。

伸ばした手は空を切り、勢いの付いた私は足がもつれて転倒する。

すぐに顔を上げた先には誰もいない。

それが、私達ナカジマ家と母さんとの初の顔合わせだった。

~~~~~

§ルシリオンとリインフォースと迷える少女§

これは、ルシリオンと、小さな勇者だった高町なのはのその娘ヴィ  
ヴィオ、そしてレヴィ・アルピーノとの戦いから数日後の話だ。  
ルシリオンの数日前の戦いで負ったダメージも回復し、再び私ノー  
チエプエナと任務に就いている。

今回は荒事ではない事から、マスターが気を回してくれているのか  
もしれない。

男女の機微には疎い、というよりは全く解らない私でも、マスタ  
ーがルシリオンに向けている空気くらいは読める。

曰くルシリオンは鈍い。

明らかにルシリオンは、マスターの事を異性とは見ていない。

それでもマスターは、ルシリオンの身体を気遣ってか、この緩い任  
務を回した。

と、私は推測する。当たっているかどうかは不明だが。

チラリと隣を歩くルシリオンを見る。

私がこの男ルシリオンと出会ったのはかなり前の話。  
未だ私が“闇の書”の管制プログラムだった頃だ。  
心優しき我が主、八神はやてを蝕む呪いとも言える“闇の書”の侵食。

それを食い止めるためにリンカーコアを蒐集し、“闇の書”のページを増やそうとする守護騎士達。  
それを止めるために動く管理局の小さな勇者達。  
ルシリオンはその小さな勇者達の一人だった。

幾度の想いと刃の衝突を繰り返す。

その戦いも終結し、私が主はやての未来を守る為に消滅を選んだあの日。

私は主はやてとの別れを済まさずに儀式を始めた。  
主はやてを悲しませなくなかったから。

しかし、ルシリオンともう一人の勇者シャルロット・フライハイト。  
あの二人は私の思いとは裏腹に主はやてを連れてきてしまった。

ねえリンフォース、あなたは別れを告げるとはやてが悲しむ  
と思ったから、こうして黙って逝こうとしたんでしょ？

でも目を覚まして、そこにあなたがもういないと知ったら、はやて  
が余計に悲しむと何故わからないの？

フライハイトはそう私を叱った。というよりは諭した。

そうだな、と私は思った。何も告げずに消えることが、かえって主  
はやてを悲しませる。

そんな単純な事にすら気づかなかった。

ルシリオンとフライハイトの二人のおかげで、私は主はやての心に

最悪の傷を付けずに済んだ。  
感謝してもきれない恩だ。

私は主はやてにも守護騎士達にも小さな勇者達にも別れを告げる事が出来、そして穏やかなまま天へと逝くことが出来た。

「どうした、ノーチエブエナ祝福なる祈願者。私の顔に何か付いているか？」

あまりに長い時間ルシリオンを見ていた事に気づく。

私は「いや、何でもない」と素っ気なく返し、「そうか」とルシリオンが言つてまた歩き出す。

そう言えば、ルシリオンとこういつた時間を過ごすのは二年ぶりくらいか。

私がマスターによつて再びこの生の世界へと戻された時、そこにはすでにルシリオンは居た。

そしてトパーシオ。あの小さき強者も居た。

私が最初に得たのは混乱。何故、私は再び身体を得たのか。  
次に感謝。再び私というものを確かな存在にしてくれたことへの、  
だ。

マスターの説明を聞く。

私が消えてから十数年後の世界である事。

そこで知った。ルシリオンという存在の正体を。

だが実際どうでもよかった。主はやてや我ら守護騎士達の恩人の一人に違いは無いのだから。

しかしルシリオンは何も覚えていなかった。自分の真の名すらもだ。

理由はハッキリしているが、それを問い詰める気はない。

ルシリオンには悪いが、私はマスターに大きな恩が出来たのだから。

それから、これからどうするのかという話になった。  
マスターの目的は、管理局の改革と小さな復讐。

その改革に私は乗った。

主はやてたちにも起こりうる可能性を完全に否定できずにいたのだから。

主はやて達が、信じてきた管理局に裏切られ謀殺される。  
そんな未来だけは許せなかった。

そして私とルシリオンはパートナーとなった。

融合騎としての能力すらも再現されていた事にも驚いたが、ルシリオンとのユニゾンがあっさり出来た事にも驚いた。

その時だった。私とルシリオンに繋がりが生まれたのは。

だからこそこのパートナー。それから二人してよく行動するようになった。

だが、主はやてとその御友人達、守護騎士達と戦うことになった今、  
私は……。

「ママ~~~~~!!」

人ごみの中、小さな子供の泣き声を耳にした。

私はその鳴き声のする元へと駆ける。

後ろからルシリオンが「待てっ!」と止めてくるが、私はそれを無視して探す。

私は、嫌なんだ。小さな子供の泣き顔というものが。

主はやての事を思い出してしまう。

辿り着いた先には案の定小さな女の子が泣いていた。

ママ、ということから、母親とはぐれた迷子なのだろう。

道行く人も声をかけようとしますが、その少女の人の話を聞かない程の泣き声に諦めて通り過ぎていく。

「（その程度の事で諦めるな、馬鹿者ども・・・！）どうした？  
母親とはくれたのか？」

私は少女の元に歩み寄って、しゃがみ込んで視線を合わし、そう訊ねる。

しかし少女は泣き喚くばかりで、会話になりそうもない。

だが私はそれで諦めるつもりはない。この少女の泣き顔を笑顔にしたいのだから。

「待て、と言っているのに。君はアレか？ 主人の言う事を聞かない犬か何かか？」

と、背後からかなり失礼な事を言いながらルシリオンが追いついてきた。

「私はお前のパートナーであってペットになつたつもりはない」

ルシリオンに振り向いて怒り半分呆れ半分でそう返すと、ルシリオンは「冗談だ」と言った。

ルシリオンが冗談を言うなど初めてだったこともあり、少し呆けてしまった。

するとルシリオンはそんな私に小首を傾げ、それから少女へと視線を移した。

「迷子か」

「ああ、そのようだが、話が聞けない以上は探してやることも出来

ない」

私が頭を悩ましていると、ルシリオンは 我が手に携えしは確かなる幻想 と詠唱した。彼の手に現れるのは、小さな手のひらサイズの白つさぎのぬいぐるみ。

それを足元に置いた。少女の目にそのぬいぐるみが入ったのか、少女は少し泣きやんだ。そのぬいぐるみが動き出して、その上踊り始めると、少女は完全に泣きやんだ。

少女は目を丸くして、ルシリオンをじっと見た。

ルシリオンはニコリと笑って、少女は「お姉ちゃんのおさぎさん、すごいね!」と言った。

時間が止まる。そう比喻してもおかしくない状態になった。

「……おねえ……ちゃん……?」

「……プッ」

つい嘖き出してしまった。

私もこの三年ですっかり変わってしまったものだ実感する。

ルシリオンが少女に分らないようにジロツと私を睨んでくるが、無視する。

「お・に・い・ちゃ・ん、なんだ。今度は間違えないようにね」

「あ、ごめんなさい……お兄ちゃん」

子供心に分かってしまったのだろう。



ルシリオンの笑顔が本当は笑顔じゃない事を。

「怖がらせてどうするサファイーロ」

「怖がらせてなどいない。いや、そんなことより、君、お母さんかお父さんは？」

素っ気なく返し、すぐさま少女に家族の事を訊ねるルシリオン。すると少女の目にまた大粒の涙が浮かぶ。

これは阻止しなければ、おそらく大変な事になる。

それが分かっているからこそ、ルシリオンはさらにぬいぐるいを追加させ、踊らせる。

私達の目の前に、アニマルズの小さなサファイーロ劇団が出来てしまっていた。

しかしそのお陰で、少女は泣くことなく笑顔になった。

「なるほど。母さんと買い物途中ではぐれたのかあ」

今度は優しく語りかけるルシリオンが上手く少女から事情を聴きだし、少女の頭を優しく撫でる。

「うん。それでね、えっとね、ママを探したの。でもどこにもいないの」

この少女はどうやらはぐれた時はその場から動かない、という鉄則を知らないらしい。

いや、道に迷った時、だったか？ どちらにしろはぐれた場所から大きく移動したらしい。

私はルシリオンへと【サファイーロ、この少女の母親を探したいのだが】と提案すると、意外にも【分かった。この付近を探してみよう】

と即答で返ってきた。

ルシリオンは少女を肩車し、私達は少女カタリナの母親を探すために動き出した。

背が高いルシリオンが肩車しているため、カタリナは人ごみの上から母親を見つけやすくなる。

そんな中、散々泣き喚いたせいかカタリナのお腹がくうくと鳴った。見ると、腹に手を添えて、少し顔を赤くしたカタリナが「おなかすいた」と呟いた。

「歩きながらも食べられるモノを探そうか。【我々に空腹という概念が無いが、カタリナは違う。】

時間的に見ても昼は過ぎている。歩きながら、もしくはカフェテラスで食事を探るのがいいと私は思うが】」

驚いた事にルシリオンは的確なプランを立てて提案してきた。

私はそれに賛同し、軽く周囲を見回してファーストフード店を発見。店内に入り、早速注文。カタリナは最初は遠慮していたが、空腹に耐えきれなくなったのかキツチリ注文した。

よかった。世間の常識を散々蓄えたおかげで恥をさらさずに済んだ。

それにしても店内に居た客や店員の視線が私やルシリオンに集中していたが、あれはどういうことなのだろうか。

“テストメント”の幹部というのがバレたというのは考えづらい。何せ顔を晒していない。管理局が公開したというのなら話が別だが、そのような情報は入ってきていない。

何はともあれ再びカタリナの母親の搜索を開始。

もちろん昼食を済ませながらだ。

しかしなかなか見つけないことが出来ない。

母親の方も探しているはずだが、一向にぶつかることがない。

【どう思うサファイア口。まさか、と私は思っているのだが】

【私もそこに行きついていて。最悪それだな。

母親がカタリナとはぐれた事に気づいていない。

普通ならありえない事だろうが、母親が気づかないほどに何かに集中しているか、それとも別の理由か】

そうでない事を祈る。母親の方もきつとカタリナを探している。

そうでないのなら、私の多少の怒りの矛先に立つてもらおう事になる。

昼食も済ませ、シヨッピングモールへと移動して搜索開始。

するとルシリオンの肩の上に居るカタリナが、「ここから来た」と教えてくれた。

つまりはこのエリア一帯で母親とはぐれたという事だ。

さらに人ごみが増えるが、知った事ではない。

人通りの多い所を選び、カタリナの母親を探す。

そんなとき、広い通路の真ん中に小さな店を構えたアクセサリーシヨップに目が行った。

ヘアピン。主はやてやリインフォース？の髪にもあった。

手に取って見てみる。主はやてやリインフォース？に似合いそうだ。そう思っていると、背後からカタリナを降ろしたルシリオンが覗き込んできた。

「珍しいな。それが欲しいのか祝福なる祈願者」  
ノーチェブエナ

「ん？ いや、そうではなく」

言い切る前に、ルシリオンは私の手からヘアピンと別のヘアピンを取り、店員に「いくらだ」と訊き、お金を払った。唾然としていると、ルシリオンはヘアピンを私とカタリナに手渡した。

「君が物欲しそうな表情を見せるのは珍しい。というより初めてじゃないか？」

実際はそうではないんだが、折角贈ってもらったのだ。ここは素直に礼を言うのが一番だろう。

「あり」

「彼女さんにプレゼントとは、お兄さん、やるねえ」

ありがとう、と言おうとした矢先に、女性店員はとんでもないことを言った。

ルシリオンは「そうではない」と返すと、店員はすまなさそうに謝り、

「あ、奥さんだ！ お子さん連れているからそうだよねえ」

と話を大きくしてきた。

私はルシリオンのの方を見上げると、ルシリオンと目が合った。ふいっつつい視線を逸らしてしまった。何故だ？

結局、店員はルシリオンの話を聞かずに私達を送り出した。ルシリオンはもうどうでもいいのかため息をついていた。

私は早速カタリナにヘアピンを付ける。

うさぎの装飾が施された可愛らしいものだ。

買ってくれたルシリオンと、ヘアピンを付けた私に「ありがとう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」と笑うカタリナ。

「先程は言いそびれたが、ありがとう、サファイア口」

ヘアピンで右サイドの前髪を留めつつ礼を言う。

「いや。君はこの三年の間、マスターから受け取った金を一切使わなかっただろう。」

先程も言った通り、物に興味を持った君が珍しくてね。

そのヘアピンは、私なりの記念というものだ」

そう言つて、カタリナを再び肩車し「搜索再開だ」と言つて歩き出した。

私もすぐにルシリオンの隣へと並び立って歩き出す。

（夫婦、か。私には永遠に縁の無いものだが・・・）

周囲から見れば、私とルシリオンは夫婦に映るのだろうか。

そう考えると、少し気恥ずかしいものだな、と思う。

それからシヨップینگモールを歩いていると、カタリナが「ママ！」と大声を上げた。

カタリナの指差す方には、セールだか何だか知らないが、バッグ（おそらく高級品）の争奪戦をしている女が居た。

なるほど。娘の呼びかけにも気づかないほどに熱中しているわけか。怒りがふつふつと湧いてくる。子にとって唯一の親が一体何をしている・・・！！

【抑える、祝福なる祈願者。私達の目的は、カタリナの母親を探す事だ。ノーチエブエナ】

ここから先は、私達が踏み行つてはいけない領域だ】

私の肩を掴んでそう思念通話を送ってきたルシリオン。

ルシリオンはそつとカタリナを降ろし、「もうはぐれないようにするんだぞ」とカタリナの頭を撫でながらそう言った。

「うん！　ありがとう！　お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

「あ」

咄嗟に手を伸ばすが、カタリナは母親の元へと走っていく。

いや、これでいい。ルシリオンの言う通り、ここから先は私達が入つて行つてはいけない領域。

私は踵を返そうとしたとき、カタリナがこちらに振り向いてもう一度「ありがとう！！！」と大きく手を振った。

私とルシリオンは顔を見合わせ、フツと笑みを浮かべた後、カタリナに手を大きく振った。

これでカタリナとの話は終わりだ。

ミッションコンプリート。

とは行かなかった。本来の任務に戻らないといけない。

私とルシリオンは歩きだす。与えられた仕事を片付ける為に。

番外編：それは少し前の出来事（後書き）

なんとなあ〜〜く書いた、ルシリイン？のお話。

前半とはえらい空気が違う。前半まとも？で後半ネタ？ですね。

銀髪同士（チンクはダメですよ、犯罪ですから）かつ仕事のパートナーということで、熱にうなされつつフワフワ浮かんだ今回。

お願いですから、引っ込め！なんて言わないで（泣）

お気に召さなければ即刻消しますんで、今回の後半のみ……。

えー、次回は、第一次オムニシエンス決戦の決着をお送りします。

あ、病欠って、なんだかワクワクしません？

学生の場合は、寝てる間にも友人は授業中。ザマア、とか。

私は熱が出ようが寝ません。だって、寝る時間が勿体無さすぎだから！！

白き羽根が散る 〽 Noche Buena 〽 (前書き)

点滴うつて即回復する単純な身体を持つ私。

帰ってすぐにキーボード打ちまくり。いやだなあ、サボりじゃない  
ですよ？



白き羽根が散る　Noche Buena

「はあああつー!!」

ハーツィース・ストライフ  
紫光連砲

マルフィール隊二人の移動先を読んで、四肢に展開している環状魔法陣から連続砲撃を放つ。

だけど、二人の疾さはかなり厄介で、当たりそうなのに当たらないということがさつきから何度も繰り返される。

次に接近戦を挑もうとして瞬走式で接近するけど、

「私達<sup>マルフィール</sup>堅固なる抵抗者隊の翼を折る事は不可能」

「だから大人しく退いてくれると助かるんだが・・・」

風雅なる赫沫の散々華

イスキエルドは翼の先端をわたしに向けて、先端から無数の赤い羽根を撃ち出してくる。

（防御だと押し切られる。ここは避けておかないと・・・!）

威力がたとえ小さくてもあんなハンパじゃない数の攻撃、立ち止まったらそれで終わりだ。

瞬走式

最初の数の暴力とも言える第一波を大きく避けてやり過ごす。

数の減った第二波は紙一重で、最低限の動きで回避する。そんなわたしに、

#### 翔け抜ける速攻の陽虚鳥

デレチヨが物凄い速さで突進してきた。

あ、っと思った瞬間には目の前。無意識的にシールドを前面に展開する。

ドゴンツ！と轟音を耳にしたと思った時にはすでにわたしは大きくは弾き飛ばされていて、きりもみしながら落下していた。

急いで体勢を立て直して、現状を確認するために周囲を見回す。

それで分かったのは、二人が赤い弾丸となって空を飛んでいるということ。

そして二人の軌道がカクツと曲がって、わたしを目指してまた突進してきた。

（一人はやり過ぎして、一人は迎撃・・・今っ！）

横への回避じゃなくて、一人目の頭上を跳び越えるような回避。

とんでもない衝撃波が襲ってくるけど、その衝撃波を利用して速度を上げて、頭上から突撃してくるもう一人へと突っ込む。

まずはシールド。衝突。またすごい轟音。でも今度は弾かれずに耐えきって、

#### 弧咬崩陣

障壁破壊の効果を高めた術式の右足の蹴りを弧を描くようにして打ち込む。

デレチヨは回避じゃなくて防御姿勢をとった。何故ならわたしの左

手が、デレチヨの兜の羽根飾りをガツチリ掴んでいるから。激突。ガシャアアン！！と両腕の籠手と甲冑の胴体の大半が砕け散る音が響く。

掴んでいた羽根飾りが千切れて、デレチヨは吹っ飛んでいった。

「エステイー!!」

イスキエルドが、デレチヨの本名のファーストネームを叫ぶ。それに応えるようにデレチヨは体勢を整えて、「大丈夫だ」とハツキリ返した。

(甲冑だけしかダメージを与えられなかったか・・・)

無事というならそうなんだろう。

デレチヨの甲冑が復元されていく。本当に面倒で厄介だ、魔族・幻想一属。

ならもう一度、と思っていた矢先に、例の白銀の次元跳躍砲撃が放たれるのを見た。

発射地点と思われる場所に視線を移すと、いつの間にかそこにそびえ立つ銀色の塔が数基。

シャルロツテの言っていた結界によって隠されていたみたいだ。

「どづいうことだ・・・!?!」

向こうもそれには驚いているようで、完全に動きを止めている。

どづやら予定外の事みたい。でも、これはチャンスでもある。

瞬走式式をスタンバイ。発動、というところで、マルフィール隊の二人は頷き合って、それからすぐにわたしに背を向けて、塔の方に向かっていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？」

ポツンと取り残されたわたしは、構えをとったままその場に立ち尽くした。

十 十 十 十 十 十 十

「轟天爆碎！」

ギガントフォームの“アイゼン”をカルド・デレチヨに向かって振り下ろす。

技後硬直で動けないデレチヨは、無理矢理でも腕を動かして闇色の炎が渦巻いた大剣を思いつき振り上げた。

デレチヨ、そいつは無駄な事だ。あたしと“アイゼン”の一撃は、全てを粉碎する。

ガツンとあたしの両手に伝わってくる衝撃。手応えありってやつだ。そのままの勢いで最後まで“アイゼン”を振り切る。

“アイゼン”をハンマーフォームに戻して肩に担ぐ。

あたしの視線の先、地上にはデレチヨが居る。あたしがやっておきながらだけど酷い有様だ。

大剣は粉々に砕けてるし、甲冑の方も原形を留めてねえ。

それでもなお立ち上がるうとしている。そこまで強いんだ、あたしらへの復讐心は。

胸が痛む。今までの敵と違って、全然気持ちよくねえ。

そんなとき、頭上を白銀の極太砲撃が通過していつて、波打った空に吸い込まれて消えちまった。

砲撃の発射地点へと振り向くと、バカ高え塔が幾つも建っていた。

ありゃシャルロットやセインテストの記憶の中で見た……

「確か、女帝の洗礼だっけか・・・？」

局の艦を沈めた砲撃だつてのはすぐに分かった。  
あんなもんそう在っていいようなもんじゃねえからな。

「まだ・・・だ・・・！ 何っ！？ 後退支援！？ 知った事・・・  
くそっ！！」

下から悪態をつくデレチヨの声が聞こえた。

視線を戻すと、また闇色の炎ゼルファードと融合したデレチヨが、  
あたしに背を向けて塔の方にすっ飛んでいった。

「何だ？ 何かあつたんか・・・？」

相手を失ったあたしは、ただ嫌な予感して、デレチヨを追い掛ける  
為に飛んだ。

＋ 十 十 十 十 十 十 十

アレッタ三佐への奇襲は失敗に終わった。

上空からの砲撃は、赤い砲撃に相殺された。

竜巻は相変わらず止むことなく、私の攻撃を弾いていく。  
半端な砲撃は通用しない。だったら・・・。

“ プラスタービット ” をコントロールして、アレッタ三佐の竜巻を  
四方からロックオンする。

私は “ レイジングハート ” に 「 カートリッジロード 」 と指示。

All right . Load cartridge と答え  
てくれて、シャルちゃんのカートリッジを一発ロード。

「スターライトブレイカー・マルチレイド、スタンバイ」

“レイジングハート”と“ブラスタービット”四基に魔力が集束していく。

アレッタ三佐も魔力の凄まじい増大に気づいたのか、竜巻の密度を減らして視界を確保している。

でもそれがアレッタ三佐の敗北に繋がる。防御を薄くして、この一撃を防ぎきる事は絶対に出来ない。

「（狙うは戦闘不能。やり過ぎて消滅させてはダメ・・・難しいけど）やるしかない!」

かなりの綱渡りだけど、アレッタ三佐の自慢の防御力は嫌というほど知っている。

だから、これを受けても・・・きつと大丈夫。

「見てください、アレッタ三佐。これが高町なのは今の力です・・・!」

Starlight Breaker Multi-Raid

一度収縮した魔力が、今度は一気に爆ぜて特大の砲撃となった。

一直線にアレッタ三佐の竜巻に向かっていって、大爆発を起こす。直前までアレッタ三佐の離脱は確認できなかった。ただ見えなかったのか、あのまま受けたのか。

答えはすぐに出た。煙幕が晴れてクリアになると、アレッタ三佐がずっと奥の方に居た、甲冑の大半が砕けた様で。

「スターライトブレイカー。防ぐ自信はあったんだが、そう簡単に

はいかないな」

半分以上砕けた兜を放り捨てて、そう苦笑しながら言った。

「アレツタ三佐。投降してくれませんか？」

「投降？ 俺達が人間じゃないのは知っているだろう、高町。だから俺達幹部に投降という選択肢は無い。そもそも、目的からして、管理局に下るなど・・・ありえん！！」

これ以上の戦いも無駄だからと思つての投降勧告だったけど、アレツタ三佐は受け入れてくれなかった。

そうだ。今さら応じるわけもないのは分かっていた。でも、私はアレツタ三佐とこれ以上戦いたくはなかった。

来る、そう思つて身構えた時、頭上を流れる白銀の閃光。

私はそれを見て、エルジアとオーレリアで見た次元跳躍砲撃だとすぐに分かった。

どこから撃たれたのかと周囲を見ると、すぐに視界に入るとんでもなく高い塔が数基。

高さは変わっていても、それはシャルちゃんとルシル君の記憶の中で見たモノだと思いだす。

「どういうことだ？ 何故円卓の結界を解除して洗礼の一撃を・・・！？」

(アレツタ三佐も事態が呑み込めていない・・・?)

困惑しているアレツタ三佐の声に、これが予定外の事態だというのが分かる。

そしてアレッタ三佐は少し黙って、

「勝負は一時預ける。が、追ってくるのであれば再戦だ」

と言い放って、再び甲冑を身に纏って塔の方に飛んでいった。

追ってくるのであれば再戦。どういうことかは分からないけど、このまま黙って見過ごすわけにもいかない。

だから私は、アレッタ三佐を追い掛ける為に空を翔ける。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

### 紫電一閃

大きく跳躍して、“ストラーダ”の雷撃の一閃をグラナードに直接斬りかかる。

煙幕でお互い視界が潰されているけど、こっちはフォヴニスという目印があるから、よく分かる。

視界にハッキリとグラナードを捉える。ほぼ背後からの奇襲。あと少して攻撃が届くというところで、

「そんな魔力を迸らせたお前に気づかないとでも思ったのか？」

背を向けながらグラナードは僕に向かってそう呆れた声を出した。

フォヴニスの尾が僕を叩き落とそうと物凄い速さでしなる。

「ストラーダ！！」 Vorsto

今さら逃げる事も出来ない。だつたら突撃。フォヴァ・シユトウニス

“ストラーダ”を突きของ構えにして、グラナードへ一直線に突撃を仕掛ける。



足元スレスレに尾が通過する。突風はすごいけど、今の僕には何の障害にもならない。

尾が戻ってくる前に、グラナードの元に辿り着いた。

目の前には驚嘆の表情を浮かべるグラナード。“ストラーダ”の矛先が突き刺さろうとしたその時、

#### 資格無き者への審判

視界が翠色に染まる。次の瞬間には、僕は空を舞っていた。

何をされたのかが分からない。全身の感覚が働いていない。

視界の端に“ストラーダ”が舞っているのが見えた。いつの間にか手放していたみたいだ。

「エ・・・く・・・」

そのまま地面に落下しようとしていた僕を助けたのはフリードに乗ったキャロ。

何かを叫んでいる？　口元を見て、「エリオ君」と僕の名前を叫んでいるのが分かった。

キャロが治癒魔法を使ってくれているのか徐々に感覚、特に痛みが襲いかかってきた。

閉じかけていた目をしっかりと開ける。すると頭上を流れる白銀の光を見た。

いや、そんな事より僕はどうして？と思考を働かせる。

楽になってきた事で上半身を起こして、地上、グラナードとフォヴ二スを探す。

けどどこにもいなかった。キャロに視線を向けると、キャロは首を横に振って、

「あの銀色の砲撃の後、すぐにあの塔の方に向かってっただよ」

キャラの視線の先を僕は見る。そこには銀色の塔が数基と砲台がい  
くつか。

シャルさん達の記憶の中で見たモノと似ている。

「キャラ、僕はどうして・・・？」

「・・・エリオ君がフォヴニスの背中に乗った途端、フォヴニス  
の背中から光が噴き出したの。」

エリオ君はそれをまともに受けて吹き飛ばれて・・・」

思い出した。足元からフォヴニスの翠色の光が噴き出してきて、僕  
はそれを防御も回避も出来ずにまともに食らったんだ。

なのにこの程度のダメージで済んだ。手加減されたのかもしれない。

「・・・グラナードは塔に向かったんだよね」

「え？ うん、うん・・・行くの、エリオ君？」

「うん。グラナードは僕が止めるって決めたから」

だからここでのんびり寝ているわけにはいかない。

キャラは少し黙った後、“ストラーダ”を手渡してきてくれた。

「フリード。わたし達を塔へ運んで」

僕はしっかりと“ストラーダ”を受け取って、キャラとフリードと  
一緒に塔へと向かった。

十 十 十 十 十 十 十 十

『シグナム、アレが何なのか知ってるのか？』

「ああ。フライハイトとセインテストの時代の代物だ。

確か名は、女帝の洗礼、エンペラトウリス・バウティスモ」

アギトは二人の記憶を見ていなかった。だから知らんだろう。

当時はセインテストとその部隊に容易くとはいかずとも陥落されていたが、現代にとってあれ程危険なモノはそうはないだろう。

ドンツ！と爆発音が響く。火竜一閃による爆炎が、闇色の炎によって吹き飛ばされた音だ。

空を染め上げる漆黒の闇の中、二つの人影が徐々にその輪郭を現していく。

アギトが『信じらんねえ』と戦慄しているが、これもまた想定内。簡単に斃せるとは思っていない。

“レヴァンティン”を構え、相手の出方を見る。

しかし二人は私達に仕掛けようとはせず、闇色の炎の弾丸となり、塔へと飛んでいった。

取り残された私達は、少し考えすぎさま二人の後を追った。

十 十 十 十 十 十 十 十

空戦形態のルシルが一直線にどこかへ向かっている。

もちろんそれを妨害する私とフェイト。

フェイトはプラズマランサーを十八基。私は雷牙閃衝刃を連続で放つ。

ルシルは当然のごとく気がついて、流れるような動きで、全弾紙一

重で回避していく。

『気を付けてフェイト。結構やるようになってる』

『うん。一切の無駄が無い動き。今まで以上だね』

空戦形態となつていているんだから当然なんだけど、レヴィとヴィヴィオと戦つた時以上の戦力を取り戻している。

ルシルがこつちに視線を向け、すぐさま元の軌道で飛んで行くことする。

シカトされるのもム力つくから、遠距離用の魔術を連発してルシルの行く手を完全に遮る。

もう一度こつちに視線を向けてくる。フードの中から覗くその双眸には明らかにイラつきが見える。

それでも私達と戦おうとしない。

それはつまり私達“特務六課”と戦闘することが目的じゃないという事だ。

なら何が目的なのか。その答えは、ルシルが目指す場所にあった。

「向こうには確かはやてが居るよ、シャル」

はやてが居るといふ事は、そこにはリインフォースも居るといふ事だ。

ならリインフォースとユニゾンすることが目的か、それとも別の目的があるのか。

どちらにしてもルシルの好きにはさせない。

フェイトと頷き合つていざ、というところでクロノと“五課”のジープスター三佐から通信。

『幹部達が地上部隊に襲撃を仕掛けてきた！ 六課はどうなっている！？』

『一撃で部隊が分断されました！ 至急応援をお願いします！』

周囲を確認すると、確かに幹部達が地上部隊に攻撃を、というよりは牽制攻撃を放っていた。

幹部達と戦っていたはずなのは達はどうしたんだろう、と通信を繋げようとしたとき、

『すみません！ 今そっちに向かっています！』

なのはの通信が入ってきた。

するとシグナム達からも今向かっているとの通信が入る。

無事ならそれでいいんだけど。どうしてこんな事態になったのか。

気にはなるけど、今はルシルをどうにかするのが優先となる。

背の翼を羽ばたかせて突撃する。その間にも通信が入り続ける。

『こちらヴォルフラム！ 前方の建造物群からオーバースの魔力を感知！』

螺旋を描きながら互いに背後を取ろうと飛び、一瞬のすれ違いざまに“キルシュブリューテ”でルシルの右サイドの剣翼を粉碎する。それと同時に“ヴォルフラム”からの通信を聞き、ルシルからふと視線を“エンペラトウリス・バウティスモ”に移す。

中央以外の塔の先端に白銀の光が生まれていた。

どうやら一番高いのが次元跳躍砲で、他のはここの防衛用の砲塔らしい。

一番外側の回転式の砲台にも同じように白銀の光が灯る。そして計十八の白銀の砲撃が、支援部隊と後退を始めていた“レジスタンス”の間に撃ち込まれた。

「砲撃で防衛線を築くわけか。幹部達は支援部隊とレジスタンスを引き離す役目なわけだ」

砲撃で“レジスタンス”の撤退完了までの時間稼ぎをするつもりらしい。

こうなったらこちらも後退するしかない。今無理に攻め込むと、砲撃の餌食になるに違いない。

ルシルがまた剣翼を作り出して、私から大きく距離を取った。

風牙真空刃でルシルを追撃。ルシルは紙一重で避けながらさらに距離を開けていく。

だけど、そこはフェイトが待ち受ける攻撃範囲内。

ルシル。私が考えも無しに追撃していたと思わないことね。もう遅いけど

「プラズマ・・・スマツシャー！！！！」

フェイトは左手を翳して、プラズマスマツシャーを放った。

十 十 十 十 十 十 十 十

私が待ち構えていた位置にルシルを誘導してくれたシャルに感謝の視線を向けて、そして用意していた砲撃をルシルに向けて撃った。

ルシルは左手に大鎌じゃなく長槍を作り出して、スマツシャーの先端に投擲、スマツシャーが長槍に掻き消されていく。

長槍の勢いはなくならず、そのまま私に襲いかかる。

長槍を回避。すぐにルシルの姿を確認しようとしたけど見失ってるのに気づいた。

しまった。と思った矢先に真下からルシルが目の前に現れる。

「ルシ　っ！」

掌底が私の胸、正確には心臓の位置に打ち込まれるようとしている。ほぼ無意識にザンバーフォームの“バルディッシュ”の刀身を盾にして一撃目は防御。

すぐさま放たれた二撃目のハイキック。身体を縮めて回避。後ろ髪が蹴りで起きた突風に遊ばれる感覚を得る。

身体を撥ね上げるようにしてルシルの背後（翼が本当に邪魔だけに）に回り込む。

### ジェットザンバー

“バルディッシュ”を一閃。ルシルはバック宙することで私の攻撃を回避。

そこに迫るシャルの魔力刃。

「コード刻め・・・ウリエル汝の天災・・・！」

「「魔術!?!」」

ルシルの指先から蒼雷の斬撃が放たれて、シャルの真紅の魔力刃を相殺した。

ルシルはさらに私たちから距離をとって、右手を頭上にかざしてヨ

ツンヘイムの魔法陣を展開した。

ベカド・カステイガル  
次元跳躍散弾砲撃

魔法陣から放たれる蒼いスフィアが十二基。

そこに“ヴォルフラム”から通信が入る。記録されていた散弾砲の魔力を感知した、と。

今空に放たれたのが散弾砲なら、明らかにまずい状況だ。

「シャル！」

「私が対処する！ フェイトはルシルをお願い！！！」

威力はおそらく今まで見せてきた以上のものに違いない。

だからここは確実に対処出来そうなシャルに任せないといけない。

ルシルはそれつきり戦おうとはせずに、はやとリインフォースの居る場所へ行こうとしていた。

後れを取った。先行したすぐさまルシルを追い掛ける。

ルシルを追って飛行する中、地上の現状が視界に入る。

八基の塔と十基の砲台から放たれる砲撃によって“レジスタンス”に近づけない支援部隊。

幹部達と再び戦いを始めたなのは達。ほぼ混戦状態と言ってもいい。“クラウディア”、“ヴォルフラム”、“アガムノン”。三隻の艦載魔導砲が、“エンペラトウリス・バウティスモ”とその周囲の施設に向けられて放たれるけど、見えない障壁で完全に防がれている。

すぐにでも救援に行きたいけど、私はルシルを追う事を優先した。



それが、私の役目だから。

十 十 十 十 十 十 十

シャルちゃんから通信が入る。

『はやて！ そっちにルシルが向かってる！ 理由は分かんないけど、フェイトと私が行くまでルシルから逃げて！』

一方的に通信が切れる。何でかは分かる。空から落ちてくる蒼いスフィア。散弾砲や。

それに向かっていくくんは真紅の斬撃。シャルちゃんが散弾砲に対処しとるゆう事や。

部隊長の私は何もせんといんフォースと偽りの戦うだけ。それでも、

「リインフォース！ ルシル君が来とる、逃げるよ！」

私はリインフォースの未来を手に入れる為に今は出来る事をする。ルシル君が来ると知ったリインフォースの表情に陰りが差す。リインフォースの手をとって、何処か隠られる場所を探そうとするんやけど、こんな開けた溪谷内やとどこにも無い。

「八神二佐。ルシリオンに私の裏切りがバレたとなれば」

「アカン！ そんなんアカン！ リインフォースはこれから、今度こそ私らと一緒に時間を生きるんや！  
今度こそ私はリインフォースを幸せにするんや！ そやから、こんなところで……」

リインフォースだけでも逃がした方がええかもしれへん。それまでは私が時間を稼ぐ。たとえルシル君が相手やとしても、こっちは絶対に譲らん。

リインフォースの右手を握る手に力を入れてギュッと握りしめる。リインフォースもそれに応えるように握り返してくれた。

「リインフォース。逃げて。私が時間を稼ぐから」

「っ！ いけません主はやて！」

そう止めてくるけど、もう遅かったようや。

頭上から舞い落ちてくる蒼い光の羽根。上を見ると、小さな蒼い点が見える。

リインフォースもそれに気づいて、

「っく・・・サフィーロ。私に何か用か？」

と上を見上げながらそう言う。

少しの沈黙の後、リインフォースは私をお姫様抱っこして物凄い速さで戦闘真っ只中の戦場を目指して飛ぶ。

見るとリインフォースの表情は悲しみと焦りと怒り、複雑な色に満ちとった。

そして肩から後ろを覗くと、蒼い点、ルシル君が私らを追って来とるんが分かった。

「リインフォース・・・」

「ルシリオンは、私を裏切り者として処断せよと命令を受けたそうです」

「誰にや・・・」

ルシル君にそんな命令を出したヤツに激しい怒りが生まれる。リインフォースはただ小さく「永遠なる不滅者<sup>ディアマンテ</sup>」と呟いた。そいつがルシル君にリインフォースを消せと命令した。許せへん。そんなん・・・絶対に・・・。

コード  
轟き響け、バラキエル 汝の雷光

背後から飛んでくる蒼い雷光の砲撃。

解る。これは間違いなくルシル君の魔術とゆうことが。リインフォースは振り返ることなく砲撃を避けてく。

「私はルシリオンと三年もパートナーを組んでいたのです。彼の考えくらいは分かります」

そう言いながら深紫色の大きいスフィアを設置してく。

六基目のスフィアが設置されたと同時に、

ナイトメア・ハウル

ルシル君に向けて放たれる砲撃。

ルシル君は砲撃を避けては左手に持った槍で裂いていった。

私も見とるだけじゃアカンと思って、リインフォースの腕の中で魔法を準備。

「いくよ。遠き地にて、闇に沈め。・・・デアボリック・エミッシヨーン！」

遠隔操作でルシル君の真ん前に発生させる広域空間魔法。

チラツとしか見れんかったけど、ルシル君は間違いなく突っ込んだ。神秘の無い私の魔法やけど、ほんの少しだけでも時間稼ぎになるはずや。

そう思った。そやけど、

フォトンランサー・ファランクスシフト

デアボリック・エミッションを突き破るように、黄金の雷の魔力弾が無数に飛び出してきて襲いかかってきた。

(フェイトちゃんの子供の頃の・・・！)

映像でしか知らん子供の頃のなのはちゃんとフェイトちゃんの戦いで見た魔法。

そやけど威力は段違い。威力・数・速度。どれをとってもフェイトちゃん以上。

ラインフォースが大きくよろける。アカン、私を抱えとる所為や。数発がラインフォースの左の大きい方の翼を吹き飛ばした。

「ラインフォース!!」

「大丈夫です。しっかりと掴まっています。主はやて」

笑みを浮かべようとしようやけど、全然笑ってへんよラインフォース・・・。

何も出来へん、ううん、足手まといでしかない自分の無力さに歯がみしながら、背後に居るルシル君へと視線を向ける。

フードが脱げとるルシル君の目は真っ直ぐにラインフォースの背中を。

そして右手を翳しとる。なんか来る。来てほしくない最悪な結末が。

「リイ」

トライデント・スマツシャー

リインフォースに教えようとしたとき、真上から黄金の砲撃がルシル君を襲った。

ルシル君はこっちに集中しとったんか避けきれずに直撃、爆ぜた雷光に巻き込まれた。

「はやて！」

「フェイトちゃん！！」

真上からフェイトちゃんが降りてきた。

リインフォースに降ろしてもらって、フェイトちゃんにお礼を言う為に近寄ろうとしたとき、

光輝<sup>コトキ</sup>け、汝<sup>ウリエル</sup>の威光

ルシル君の蒼い砲撃が、黄金の雷光を吹き飛ばし私らに迫る。

リインフォースとフェイトちゃんが前に躍り出て、二人同時にシールドを展開。

一層目のリインフォースのパンツァーシールドはすぐに碎かれるんやけど、フェイトちゃんのラウンドシールドで完全に防いだ。

「残念だよ、祝福<sup>ソーチエフエナ</sup>なる祈願者。この手で君を肅清しなければならぬ」とは

ルシル君が姿を現しながら、リインフォースに悲しげな表情を向け

てそう言った。

粛清。完全な裏切りには消滅を以って償わせるゆうことや。

「ルシリオン、いや、サファイア。私は確かにマスターに恩があり改革にも賛同した。」

しかし、主はやてとその守護騎士と戦うことはしたくない。だが、だからと言って改革を止めるつもりない。私は」

リインフォースの言葉を最後まで聞かんと、ルシル君は残像を引きながらリインフォースに迫ろうとする。するとフェイトちゃんがルシル君に向かって突撃、「バルディッシュ」で迎撃する。

「行つてはやて！ シャルのところに！！」

ルシル君の蒼槍と鐔迫り合いしながらフェイトちゃんがそう言ってきた。

親友を置いていくことに少し躊躇いもあったけど、

「ごめんフェイトちゃん！！」

「・・・すまない、テストロツサ」

リインフォースと一緒にシャルちゃんのところへ向かう。シャルちゃんやったらリインフォースを救える。そう信じて。

“エンペラトウリス・バウティスモ” 管制室

“エペラトウリス・バウティスモ”最上階の管制室、ポツンと設置されたAエコアの真正面に佇む永遠なる不滅者<sup>ディアマンテ</sup>。彼の周囲にはいくつものモニターが展開され、“アドウベルテンシアの回廊”で起こっている戦闘を映し出している。

【各幹部に通達。レジスタンスの撤退完了を確認。円卓の結界を再始動。砲撃による支援は無くなる。

特務六課との戦闘を切り上げ、誠実なる賢者をサポート出来る者は裏切り者である祝福なる祈願者を処断せよ<sup>ノーチエブエナ</sup>】

【報復せし復讐者隊了解。というより俺達にやらせる】<sup>カルド</sup>

【そつだ。裏切り者への粛清という大義名分が許される今、俺達に復讐させる】

報復せし復讐者隊からの返答に【好きにしろ】と返す永遠なる不滅者<sup>カルド</sup>。

報復せし復讐者隊は狂喜の雄叫びを上げ、通信を切る。

他の幹部からは返答がなかったが、少しして堅固なる抵抗者隊から

【了解】と来た。

そして次に、陽気なる勝者と敬虔なる諦観者と聡明なる勇者から、<sup>グライナード</sup> <sup>クイント</sup> <sup>ティイダ</sup>

【ならオレ達はこのまま戦闘続行。六課の足止めをするぜ】

【あの両隊が行けば、もう十分でしょう？】

【僕たちはここに残ります】

と返答が来た。永遠なる不滅者は思案して、【任せた。俺もすぐに向かう】と返し、通信を切る。<sup>ディアマンテ</sup>

グラナード  
陽気なる勝者達だけなのは達を相手に完全に足止め出来ないと判  
断した為の出撃。

そして最後に一発砲撃を放った。位置は幹部と“特務六課”の戦地  
のど真ん中。

もちろん当ててはいない。当てれば自分が至高なる卓絶者に何をさ  
れるか分からないからだ。

モニターに映し出される戦場。

戦闘は噴煙によって一時中断されているようだ。

そんな激しい煙幕の中から報復せし復讐者隊と堅固なる抵抗者が飛  
び出す。

リインフォース  
目標を祝福なる祈願者として。

そして彼は踵を返す。足元には白銀の召喚魔法陣。

彼は一言囁く。「来たれ」と。召喚魔法陣が一際強く輝き、徐々に  
その姿を現す魔族。

それは……

「頼むぞ、アルトワルド純雷の皇馬」

銀に輝く雷光で構成された騎馬だった。

口に30cm程度の白い柄を咥え、その柄の左右から刃渡り1m程  
度の、柳葉刀のような銀の刀身が伸びている。

ディアマンテ  
永遠なる不滅者はアルトワルドに跨り、管制室より姿を消した。

十 十 十 十 十 十 十 十

ルシルの散弾砲を何とか全弾処理して、全力でフェイトを追う。

そこにフェイトから、私のところに二人を向かわせた、との念話が入る。



(よし、ここでリインフォースとはやてを契約させる)

我が言の葉は幻想紡ぐ鍵　と詠唱して、儀式魔術をひとつ準備する。

やることはルシルがルーテシアとレヴィの時にしたのと似たようなものだ。

リインフォースに核をつくって、はやてのリンカーコアとリンクさせる。

それで今のシグナム達と同じ存在になるはずだ。

### 翔け抜ける速攻の陽虚鳥

だというのに邪魔をしてくるのは……

「どいつだっ!？」

背後から迫ってくる何かを察知して振り向くと赤い弾丸っぽいのが三。

愚直なまでの一直線の突撃。私はひらりとかわしてすぐに、やっってしまった、と後悔する。

何もリインフォースを狙うのがルシル一人とは限らないんだ。

すぐさま後を追いかける。んだけど、疾すぎる。

徐々に離されていくのが分かる。

ならば、と振るうは愛刀“キルシュブリューテ”。

発動する術式は、最速の一撃・光牙閃衝刃。

一直線に紅光の槍が向かっていく。そして上手く具合に避けられたけど、その回避に使った0、何秒のラグが私を近づけさせるには十分な稼ぎになった。

すると三つの内の一つが反転してきて、その姿を露わにした。

赤い甲冑の・・・たぶん女。それと数が三ということは、こいつは、

「マルフィール・イスキエルド」

で間違いない。私を足止めするつもりだろうけど、速さだけで、一人で私を足止めしようだなんて・・・。

「甘く見られたもの、ね!!」

牢刃・弧舞八閃・絶対切断能力無しバージョン

すれ違いざまに単なる斬撃の檻を放つ。

“キルシュブリューテ”の能力・絶対切断を解放していないから甲冑だけを粉碎するにとどまっている、と思う。

何せ確認せずに残り二人のマルフィール隊を追い掛けたんだし。

そして視界に入るはやてとリインフォース。と戦うマルフィール隊の二人。

私は「はやて!」と叫んで乱入する。

二対二、じゃないか。はやては神秘を扱えないんだから実質一対二。うっん、それも違う。はやてを庇いながら戦うんじゃそれ以上のハズレを追う事になる。

それなのにリインフォースは一步も引かずに戦った。

「リインフォース、これを飲んで!」

ハイリヒ・フライハイト

真楯を全面に展開してマルフィールの猛攻を防ぎつつ、リインフォ

ースに手渡すのは彼女の核となる宝玉。

ルシルの持っていた“生定の宝玉”程の代物じゃないけど、核とするには十分だ。

リインフォースはしつかりと受け取って、飴玉サイズの宝玉を飲み込んだ。

そこに、

『ごめん！ ルシルに突破された！』

とフェイトの念話が来た。次の瞬間には、ルシルがリインフォースの背後に来ていた。

ルシルの持つ蒼槍が真楯を破壊しようと猛威を揮うけど、今一つダメージを与えていない。

だけど、マルフィール隊の攻撃。それに、

「裁きの刻だ、祝福なる祈願者アアアアー！！！」  
ノーチエフエナ

どす黒い炎を全身から噴き上げるカルド隊まで来てしまった。

さすがにこれは防ぎきれないかもと思い、私一人だけシールドの境界から出て迎撃に移る。

その時、ルシルによってシールドが破壊されてしまった。

ガシャアアン！という音が耳に届く。それはまるで終わりを告げるかのような最悪な音だった。

十 十 十 十 十 十 十 十

ルシル君の右手がリインフォースに伸びる。

アカン。そう思って身体を動かそうとするけど、断然ルシル君の方が速い。

そやけど、

「……っ！」

ルシル君はリインフォースに伸ばした右手を止めて、苦悶の声を漏らした。

「ルシル君？」 「ルシリオン……？」

「……出来ない……」

と、ルシル君は言って手を引つ込めた。何か知らんけど助かった。

「安心するのは早い……！」

シャルちゃんの怒声。そうやった。まだ何も終わってへん。

### 光牙聖覇刃

シャルちゃんがカルド隊とマルフィール隊に向けて光の波を放った。赤い無数の羽根と闇色の炎の竜巻と衝突する真紅の光波。ルシル君もそれに巻き込まれて姿が見えんくなる。視界が何や分からへんものに潰れてしもって、何も見えんくなったとき、グツと私の腕を引いてくれる誰か。

硬くてゴツゴツしとって、体温なんてない冷たさが伝わってくる。視界が開けた時、目の前に居ったんは、

「ミスった。ノーチエフエナ祝福なる祈願者じゃない。八神はやてだ」

「カルド……！！！」

カルド隊の隊長カルドやった。  
さらに強く握られて思いつきり引っ張られたから「痛っ!」と声に出した。

「主はやて!」「はやて!」

リインフォースとシャルちゃんの声が後ろから聞こえた。

「何をしている報復せし復讐者!」  
カルド

「何をしている?だと。それはこっちのセリフだ、誠実なる賢者。  
サファイア  
粛清、処断しろと命令が出ているにもかかわらず、出来ない、だと?  
馬鹿を言うなよ。だがまあそれでこの手で祝福なる祈願者を消すことが出来るのだから感謝しているが」  
ノーチエブエナ

「うく・・・!」

首に腕を回されて締め付けられて、その上大剣の刃を頬に突き付けられた。

最悪や。この先の結果が予想出来てもうて泣きたくなる。

「今すぐその手を離し、八神はやてを解放しろ、報復せし復讐者。  
カルド  
それでは完全に敵対行動となり、マスターの意向に逆らう事になる」

「本当にそうか? 俺達の今の目的は祝福なる祈願者の処断。  
ノーチエブエナ  
八神はやては、その為に必要なファクターだ。そいつが大人しく粛清される為の、な」

私を人質にして、リインフォースを逃げれんようにする。  
シャルちゃんは動けんへんし、私も動こうとすればどうなるか分か

らん。

殺される事はないんは確かやろうけど、多少の怪我は覚悟せなアカンやろな。

「やれ、報復せし復讐者の右腕、カルド・デレチヨ報復せし復讐者の左腕」カルド・イスキエルド

なのはちゃん達が来るまで待つ事も出来ん。

リインフォースは小さく「申し訳ありません」と謝った。  
一番聞きたくない言葉。

シャルちゃんが動こうとしたとき、マルフィール隊の二人がそれを制止させて、武装を解くように言っている。

いやや、こんなん。こんな結末……絶対に……

「いやや!！」

私の叫び声に應えるように、私を捕えるカルドと、リインフォースを迫ろうとした残りの二人を襲うすみれ色の砲撃。

「レヴィ!！」

姿は見えへんけど、間違いなくレヴィの砲撃。

それに対処するために、カルドは私を捕えとる力を緩めた。  
チャンス。そう思った瞬間には行動に移った。

“シュベルトクロイツ”で思いつきカルドの兜を突く。  
さらに緩んだ腕から逃げ出して、リインフォースの元へと……。

十 十 十 十 十 十 十

レヴィの素敵なタイミングでの砲撃。

私はすぐさま“トロイメライ”を起動させて、マルフィールとマルフィール・デレチヨに遠心力いっぱいの一撃をお見舞いする。マルフィール・デレチヨにはヒットしたけど、マルフィールは避けた。

だけどそれで十分。はやての方も上手くやって逃げれてるし、レヴィが居れば勝てる。

はやてが解放されているなら、あとはリインフォースをどうにかすればいいだけ。

レヴィに支援を求める為に念話を、と思った矢先、ボロボロになったレヴィが落ちてきたのが見えた。

「レヴィ!？」

レヴィに腕を伸ばして受け止める。それが隙になってしまった。

内を拒みし不落の羽根檻

マルフィールとデレチヨによる羽根による檻が、私とレヴィを捕えた。

何か私の魔力が弱まってきた。これ以上最悪な事態はない。

「やられた・・・!」

歯噛みしながらも、まずは腕に抱えた意識の無いレヴィを診る。

防護服のあちこちに斬られた痕。そこから覗く白い肌には焦げた跡。炎によるものじゃないのは分かる。これは、雷撃による火傷跡だ。

『なのは! ヴィータ! シグナム! スバル、ティアナ、エリオ、キャロ!』

呼びかけの念話は返ってこない。この檻によって妨害されているのか、それとも、

(お願い・・・誰か・・・答えて・・・！)

答えられない状況に陥ってしまったのか・・・。

＋  
＋  
＋  
＋  
＋  
＋  
＋

シャルちゃんとボロボロのレヴィが、マルフィール隊の羽根の檻に閉じ込められた。

今の状況を少し失念するほどなレヴィの有り様。

レヴィがあんな事になったんなら、さっきまでレヴィが居ったはずの場所に残つとるなのはちゃん達は？と思った。

そやけど、親友と家族の心配をする時間すら与えてくれへんのが、

「そこで大人しく見ている、サファイロ誠実なる賢者」

カルド隊。ラインフォースにも復讐の炎をぶつけようとする。

ルシル君はもう何も言わなくなった。諦めの表情や。

「ルシル君！　ラインフォースを助けてっ！！」

無駄な事やというのは分かっとする。

案の定、ルシル君は・・・動いてくれた。

「・・・せめて、パートナーである私が、ノーチエブエナ祝福なる祈願者、君を  
粛清する」



確かに動いてくれた。それも最悪な方向に。

ライトニングバインド

「……なにっ!?」「……」

「フェイト・テストロッサ・ハラウンか!」

「邪魔な……!」

そんなとき、ルシル君とマルフィール隊を捕える黄金のバインド。カルド隊は、デレチヨだけが捕まった。あと二人が自由のまんま。私はカー杯に未だに姿が見えへんけど「フェイトちゃん!!」と助けを請う。

リインフォースは、シャルちゃんとレヴィを捕える檻を破壊しようとする。

アカン。リインフォースはまず逃げて、と声に出そうとしたとき、

彼方より我らが望みし裁きの刻

私ら全員を覆うほどの大きな闇色の炎の球体。

見ればカルドもイスキエルドも、捕まっとなったデレチヨの姿もない。直感的に理解してしもうた。カルド隊は、私らを覆うこの炎の中に居る。

「リインフォース! デアボリックエミッションを同時に」

苦肉の策として瞬時に思いついたんが空間作用型の広域殲滅魔法。そう提案しようとしたとき、リインフォースの背後から全身炎となつとるカルド隊の一人が飛び出してきた。

私は、もう何も考えへんとリインフォースを助けるために身体を無意識的に動かした。

リインフォースを突き飛ばして避けさせる。んやけど、私がその一撃に掠つてもうて、背中の中の羽の大半を焼け散らされた。

「主はやて!!」と叫ぶリインフォース。私は「大丈夫や」と笑みを、出来とるかは分からんけどつくる。

「かわされたぞ、もう一度だ」

「次は外すな。邪魔ものが乱入してくる前に決める」

「復讐の業火、その刻め、闇の書……!」

リインフォースに支えられながら、カルド隊の怨嗟の含まれた声を聞く。

ヒシヒシと伝わってくる恨み、怒り、いろんな黒い感情。

私にも向けられたそれに身体が震える。と、今度は三人同時の突進攻撃が来た。

私はリインフォースを助けるために身体を動かそうとしたんやけど、それより早くにリインフォースが私を突き飛ばした。

「リインフ  
」

私を突き飛ばしたリインフォースは笑つとつた。

闇色の炎の砲弾となったカルド隊に呑み込まれたリインフォース。それと同時に、私らを閉じ込めとつた炎の球体と、シャルちゃんを閉じ込めとつた赤い羽根の檻が崩れていく。

「あ……あ、ああああ……ああああ……リインフォー……」





ルムに戻った“グラーフアイゼン”を手放して落下。

それを受け止めるシグナム。シグナムも酷い状態だ。騎士甲冑のところどころが破けて、ポニーテールも解けてストレートになっている。

そしてなのは。なのはも結構な疲労を見せている。

防護服もレヴィやヴィータ達と同じようにボロボロ。

何があったのかを訊こうとする前に、

『ディアマンテ永遠なる不滅者より各幹部へ。今戦闘は終結した。ただちに帰還せよ』

と、この場に通信が流れる。

視線を向けた先、ひとつのモニターが展開されていて、そこにフィドを被った男が居た。

ディアマンテ。こいつはヤバい。何となく本能的に悟った。

周囲から一瞬で気配が消える。見ればもうどこにもルシルやマルフィール隊はいなかった。

そして最後に、

「貴様らを地獄の業火に叩きこむまで、報復せし復讐者隊オレたちは何度も！ 何度でも！ 何度でも、貴様らの前に現れてやるッ！！」

ずっと下の方からカルド隊の捨てゼリフが響く。

それっきりカルド隊の気配も消えてしまった。

『手荒なマネをしてすまない。手加減はしたので、それほど酷いダメージじゃないはずだ』

フードに隠れて見えないけど、ダイヤモンドは確かになのは達を見ている。

それで察した。こいつが、なのは達をこんなにボロボロにした張本人だ、と。

なのは達は黙って、ただひたすらモニターの向こうに居るダイヤモンドを睨みつける。

『君達に一つ伝えておくことがある。今、ここオムニシエンスに、障壁展開のための準備が進行されている。

発動すれば、我々テストメントにとって余所者となる存在を強制的に世界の外へと排除する、というものだ。

意味はご理解できただろうか。このままその場に留まると、生身で世界の外にはじき出されるという事だ』

私を含めたみんなの表情が驚愕に変わる。

もしそれが本当なら、生身で宇宙遊泳するということだ。

いくら魔導師だろうが何だろうが、生身でそんなことになったら生きていけるわけもない。

『すぐに帰艦し、自らの艦あしでお帰り願おう。それでは、これで失礼するよ』

モニターが消える。

私達はそれから何も声には出さずに、“ヴォルフラム”へと戻った。今回の戦い、私達は負けた。

“オムニシエンス”より三隻の管理局の艦が飛び去るのを、“オムニシオン・ハルディン”から見詰める誠実なる賢者ルシオン。

そんな彼に歩み寄って行くのは陽気なる勝者だった。

「どうしたよ。そんな寂しい背中見せてさ」

「いや・・・祝福なる祈願者の事を少しな」

「そう、か。まあ裏切り行為をしていたんだって言うならしゃあねえだろ？」

アイツもアイツなりの覚悟で裏切っていたんなら、こうなることも覚悟していたんじゃない？」

「・・・そうか」

誠実なる賢者はそれつきり黙りこみ、「さつさと忘れる」と言っ  
て去っていく陽気なる勝者を見送る。  
誠実なる賢者は一息吐き、その歩を“エヘモニアの天柱”へと進  
めた。

## 第61管理世界スプールス

“オムニシエンス”よりそう遠くない管理世界のひとつスプールス。そのスプールスの満月を映す湖の畔に、一人の女性がフラフラと現れた。

彼女は長い銀髪を靡かせ、真紅の双眸、少し焦げて破けた純白の衣装を着た女性。

その女性は間違いなく焼滅したはずの祝福なる祈願者だった。

彼女はかなり弱っているのか何度も躓き、転倒しそうになる。

そしてひとつの大木に背を預け、ゆつくりと座り込んだ。

「私は・・・何故・・・？」

そう一人呟く。振り返ってみれば、記憶にあるのは、報復せし復讐者隊の闇色の炎に全身を包まれ、燃やされそうになった時の事。消滅を覚悟した。確かに自身の身体が消えていく感覚を得ていた。しかし、消えることなくこうして存在し続けている。何故か。その答えはすぐに分かった。

「フライハイトの・・・あの球・・・」

胸の奥底から感じる妙な“力”の鼓動。

そして全てを克明に思い出す。完全に消滅する前に、転移して炎から逃げたことを。

(どういう理屈かは解らないが、あの時呑んだ球のおかげか・・・。それに・・・)

祝福なる祈願者は気づいた。誠実なる賢者との繋がりが途絶えていることに。

彼女は推測する。消滅寸前まで行ったことで、誠実なる賢者との繋がりが消えたのではないかと。

「ルシリオン・・・」

奇跡的に燃えて消える事の無かったヘアピンをそつと撫でる。

三年と繋がっていた誠実なる賢者との繋がりを失った。

彼女は少し寂しいような気持ちになり、それでもこうして存在しているという嬉さで、その寂しさを無理矢理晴らした。



そして彼女はゆっくりとまぶたを閉じていく。

完全にまぶたが閉じ、彼女はそれっきり動かなくなり静かに眠りに  
ついた

そう、彼女が慕う家族の力となる為に必要な“力”を取り戻すまで。

白き羽根が散る 〈Noche Buena〉 (後書き)

幹部最初の脱落者はノーチエブエナとなりました今回。

でもリインフォースは健在？とはいかずとも存在しています。

あはは、消しませんよお、彼女は。まあ最終的に……どうしようか？いや、本当に。

あ、それと、今回は途中で区切ることなく一気に終わりまで行きたかった所為で、結構な長さになってしまいました。

それでも途中で止めることなく最後まで読んでくださって、感謝です。

## 戦い終わって ～Last interval～

11月28日 テスタメント本部 “エヘモニアの天柱” 最上階

14の椅子の一つに、足を組んで、その上腕を組んで一人座る至高なる卓絶者の目の前、そこには“特務六課”を始めとした防衛戦に出撃した幹部達が並列して正座させられていた。

しかし唯一その場に堅固なる抵抗者の左腕の姿はなかった。

シャルロットによって撃墜された彼女は、受けたダメージのフィードバックで存在に損傷を受け、眠りについていた。

「祝福なる祈願者の裏切り行為に対しての処罰はまあ理解しましょう。」

「で・す・が！ 永遠なる不滅者、報復せし復讐者隊には少々やり過ぎ感が否めません。」

もう少しやり方といったものがあるでしょう？」

彼女は大きく嘆息し、件の四人を見詰める

「あのまま私が戦闘中止の指示を出さなければ、永遠なる不滅者、あなたは特務六課の方々を本当に撃墜していたでしょう？」

「なのは達と永遠なる不滅者、陽気なる勝者、敬虔なる諦観者、聡明なる勇者の戦闘を止めたのが彼女だった。」

「だからこそなのは達は、はやて達の元に向かうことが出来た。が、結局全てが終わってしまった後だったが。」

「いえ、それはマスター・至高なる卓絶者のご意思に逆らう事にな

りますので。

ですから私は手加減をし、やり過ぎないように細心の注意を払っていました。

それでもヴィータとレヴィ・アルピーノが意識不明になったのは、私の力が思いのほか強かった、という事です。

その件に関しては深く反省しています」

ディアマンテ  
永遠なる不滅者は深く頭を下げ、「処罰は受けます」と告げた。

「報復せし復讐者隊、何か弁明はありますか？」

「……いいえ。何もありません」「」

「……一度、みなさんには冷却期間が必要のようですね。

テストメント・リーダーとして、あなた方に四日間の謹慎を命じます」

至高なる卓絶者がそう告げると、幹部達は「了解しました」と答え、立ち上がって最上階を後にしていく。

そして最後に一人誠実なる賢者に、【あなたはここに残ってください】と告げる。

誠実なる賢者は立ち止まり、至高なる卓絶者に振り返り「何か御用でしょうか？」と訊き返す。

「祝福なる祈願者がいなくなって、あなたはどう思っていますか？」

「……その質問の意図は正直量りかねますが……。

そうですね、こう何か半身を失ったような感覚を得ています。

三年。長くもなく短くもない期間でしたが、私と彼女は繋がっていた。

それがあのような形で失われた事に関しては、少々残念、寂しいです  
ね」

胸に左手を添え、ルシリオ誠実なる賢者はそう答えた。

「それは本心？」

「はい。それに、私の戦力を安定させるのが出来るのも彼女だけです。」

毎回、マスターの命を危険にさらして力を取り戻していたのでは私  
はお荷物もいいところ。

その事から見ましても、ノーチェブエナ祝福なる祈願者、彼女は私にとっては大切  
な存在でしたね」

「……ふふ。まるで恋人みたいなことを言うのですね、あなた  
は」

「恋人、ですか？ そう言ったものは理解しかねます。」

確かに大切には思っていましたか……」

考える素振りを見せている彼に、彼女は「私の事はどうですか？」  
と訊いた。

しかし彼は思考に耽っていた所為で聞き取れず、「何か言いました  
か？」と訊き返す。

彼女は咳払いし、「何でもありません！」と怒鳴るように返した。  
何故怒鳴られたのか解らない彼は、ただひたすらに首を傾げていた。

『……ま、まあ話はこれで以上です。自室に戻り謹慎してくだ  
さい』

『了解。マスターが御意思のままに』

誠<sup>ルシリオ</sup>実なる賢者は一礼し、最上階を後にした。

至高<sup>ハーデ</sup>なる卓絶者は「ふう」と一息吐き、手元にコンソールを出し操作、目の前にモニターを展開させる。

「アギラス撃墜数十四機。レジスタンス逮捕数48人。

そして幹部が……一人。状況はあまり樂觀視できないですね……」

映し出されたのは今回の防衛戦で被った“テストメント”の被害状況。

失った戦力は、全体的に見れば“テストメント”にとっては一割にも満たない。

各拠点に配置している戦力を集結させれば簡単に取り戻せる数字。しかし、それでも彼女にとっては大切な仲間だった。

「もう、最後まで往けそうにないですね……」

管理局との勝手ながらの約束の日まで残り15日。

彼女は立ち上がって、姉<sup>トパーシオ</sup>潔白なる聖者の眠る部屋へと向かった。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

### 時空管理局本局

時刻は朝の7時ちよい過ぎ。日にちは11月の29日。

3時くらいに“オムニシエンス”から帰って、メンバーの大半が医

務局へ運ばれるのに付き添ってしばらく過ごした後、私は一人“ヴォルフラム”のなのはの部屋に戻って、ある映像記録をいくつか眺めていた。

なのはの“レイジングハート”を始めとしたデバイスに記録されていた映像だ。

そして放たれたサーチャーの映像。内容は一番気になるダイヤモンド戦。

私のカートリッジを使ったなのは達でも勝つことの出来なかった相手。

始まりは白銀の砲撃によってなのは達と幹部達の戦闘が中断された辺り。

煙幕が晴れた時にはマルフィール隊とカルド隊の姿が無かった。

(この後、私がマルフォール隊と当たったわけだ)

そして、エリオとキャロとグラナード、スバルとティアナとクイントさんとティータの戦いが始まる。

そして数が合わず立ち尽くすなのは達。で、そこに現れたのが、

「っ！！ アルトワールド!?!」

ダイヤモンドと、そいつが乗るアルトワールド純雷の皇馬。

アルトワールドと言えば、それなりの力を持つ幻想一属で、その棲み処は中層となっている。

格の高さで言えば魔人メノリアと同格か少し上。

「こいつもシュゼルヴァロードの名で召喚されたのか・・・。

あーもう！ ルシルってばとんでもないことばっかしてくれちゃっ

て！」

ここには居ないルシルに怒鳴り散らす。  
もう少しビンタでもパンチでも食らわしておけばよかった。

『君達の相手は私がさせてもらおう』

アルトワルド尉跨るディアマンテがなのは達に向けて宣戦布告。  
そして始まるなのはとシグナムとヴィータとレヴィの四人とディアマンテの戦い。

先手を仕掛けたのはレヴィ。瞬走壱式で上手く懐に潜り込んだ。んだけど、すぐその場から姿を消すディアマンテ。

アルトワルド  
純雷の皇馬は文字通り自我を持つ雷の化身。

幻想一属の中には様々な自然界の化身がいる（炎とか水とか影とかね）。

特にその中でも光や雷や風といった種はケタ違いに速い。

その雷たるアルトワルドの瞬発力に関しては、幻想一属・自然種の上位とされてる。

ディアマンテを見失ったレヴィの一撃は空振り。

『エクセリオン……バスタアアア……!!』

姿を現したディアマンテに追撃を仕掛けるなのはのエクセリンバスター。

それすらも消えるような疾さで回避。

『レヴァンティン!!』 Schlange form



シグナムのシュランゲフォームとなった“レヴァンティン”による連結刃結界。  
それによってダイヤモンドの身動きを封じようとしたんだと思う。けど、

我が往くは天の霸道

銀雷の砲弾となって強引に突き破るダイヤモンド。

『おらあああああ！！！』

そこに迫るヴィータのギガントシュラクの一撃。  
よしっ、タイミングはバッチリ。あまりにバッチリ過ぎて逆に恐ろしい。

だけど振り下ろされた“グラーフアイゼン”がピタリと止まる。

『『『』』』』なっ・・・!?!?』』』』

なのは達の驚愕もごもつとも。

何せギガントシュラクが、ダイヤモンドの持つ剣の先できっちり受け止められているからだ。

気合の咆哮と共にさらに力を込めるヴィータ。だけどそこからピクリとも動かない。

力押しじゃヴィータよりダイヤモンドの方が上みたい。

そんなダイヤモンドの背後から迫るレヴィとシグナム。

弧咬崩陣

紫電一閃

ヴィータの一撃によってダイヤモンドの身動きが封じられているか

からこそ可能な挟み撃ち。

二人の攻撃が当たる、というときに、

### 拒みし者の光漬す雷幕

モニターが銀の雷光に染まって何も見えなくなる。

モニター越しで観ている私でもあまりの発光量にクラってきたんだから、実際に戦っていたなのは達はもつと……。

まったく、下手すれば失明ものだ。殺さなきゃ何でもいっていうわけ？

(予想以上にヤバい相手ね、ダイヤモンド)

ノイズに乱れたモニター画面がクリアになる。

なのは達の視力が戻るまでちゃんと待っているダイヤモンドの姿が映し出された。

もしこれがマジなバトルだったら、なのは達は確実に落とされている。

なのは達もようやく視力が戻ってきたのか、ダイヤモンドを見詰める。

『てめえ、どういっつもりだ？ さっきの隙であたしらを落とさせた。』

なのに、何でなにも仕掛けてこねえ……？』

ヴィータが少しヒビの入った“グラーフアイゼン”に視線を移して、すぐさまダイヤモンドを睨みつける。

ダイヤモンドは、その質問に答える。

『裏切り者を粛清するまでの時間稼ぎ。これが質問の答えだ』

『裏切り者？』

『ノイチェブエナ祝福なる祈願者。君達はリインフォースと呼んでいるな』

なのは達の表情が凍る。そしてすぐにヴィータが、

『ふざけんなっ！ そんなこと絶対え許さねえ！！ アイゼン！！』

J a w o h l ! E x p l o s i o n . R a k e t e n f  
o r m

そう叫びながら、ラケーテンフォルムになった“グラフアイゼン”を振り回す。

ブースターの加速力を持つてもダイヤモンドを捉えることが出来ず、瞬走式を連続発動したレヴィとの波状攻撃でも掠ることすらできない。

『レヴィ。この中ではお前が一番疾い。』

フライハイトとテストロッサが向こうに居るが、数としては不利だ』

『だからお前が援けに行ってくれ！！』

紫電一閃

『でも、わたしが抜けたら・・・』

ハーツィース・ストライフ  
紫光連砲

シグナムもヴィータとレヴィに交じって近接戦をダイヤモンドに仕

掛ける。

なのはもアクセルシューターで支援攻撃。徐々に、だけど確実にディアマンテを追い詰めていく。

『行って、レヴィ！　ここは何とかするから！』

S a c r e d C l u s t e r

“レイジングハート”のセリフと共にシグナム達が一斉に離脱。

放たれた三つのスフィアが爆散、小さな弾丸が無数にディアマンテを襲う。

そこに、“モード・バスター”となったレヴィの特大砲撃ハーツィーズ・ドライブ紫光掃破が撃たれた。

(なのはの散弾クラスターにレヴィの極太砲撃、悪くはないけど……)

『大人しく待っていてくれればいいものを……！』

ディアマンテがそう言ったと同時に、なのはとレヴィの攻撃がヒット、大爆発を起こした。

それを最大のチャンスと思ったのか、レヴィは『分かりました！　任せてください！』と言って、その戦域から抜けようとした。

でも、

疾駆せし破軍の騎馬隊

煙幕の中からとんでもない数のアルトワルドの群れがなのは達に向かって突撃してきた。

おそらくアルトワルドの身体を構成する銀雷で作り出したフェイク、偽物に違いない。

だけど、本物と偽物の境界線なんてほとんどはない。だって同じアルトワールドを構成する銀雷なんだから。まさしくこの時だけはアルトワールドは増殖した、と言える。

「アルトワールドをこんな風に使う奴、初めて見た」

ダイヤモンドとアルトワールドの相性は、今までアルトワールドを召喚した魔術師の誰より合っている。

アルトワールド銀光の波に飲み込まれたなのは達。そんな中から一人レヴィだけが飛び出してきた、そのままその戦域から離脱した。

（なるほど。レヴィをあんだだけボロボロにしたのはコレだったわけね）

アルトワールドの偽物の群れが駆け抜け終わってその姿を消した。それと同時に、本物とダイヤモンド、なのは達の姿も映し出される。なのは達はボロボロだった。私達と合流した時と同じ。防護服の所々が裂けてる。

『一人取り逃がしたか。まあ手負いが一人向かったところで事態は変わらない』

ダイヤモンドは剣先を、息も絶え絶えなのは達に向ける。ダメだ。ダイヤモンドは強い。なのは達じゃまず勝てない。それでもなのは達はデバイスを構えて臨戦態勢に入った。ダイヤモンドもそれに応えるように身体を屈めて、突進する体勢になった。

でも、ダイヤモンドはすぐに身体を起こして、なのは達に背を向けた。

そして『撤退命令を受けた。これ以上の戦闘は望まないそうだ』と言ってその姿を消した。

なのは達は互いに顔を見合して、『スバル達はヴォルフラムに帰艦、待機！』と指示してから、すぐにレヴィの後を追っていった。

地上で繰り広げられていたスバル達の戦闘も突然の相手の撤退で終わりを迎えているようだった。

これで一通りの事は知った。

記録映像を切って、なのは達の居る医務局に行こうとしたとき、通信呼び出しのコールが鳴る。

私はそれに応えて通信を受けて、モニターを展開、クロノが映し出された。

『シャル。君に訊きたい事がある。時間は良いだろうか？』

『ええ、大丈夫。どこに行けばいいの？』

クロノに呼び出された私は、かつてグレアム提督と面接したあの応接室に向かう事にした。

十 十 十 十 十 十 十

カルド隊ん時よりかはマシな怪我だったあたしは、すぐに治療を終えて、はやての病室に来た。

扉を開けると、そこにはすでにあたしを除く八神家が勢ぞろいしていた。

頷き挨拶をして、静かに扉を閉めてはやての眠るベッドに歩み寄る。

「はやては？」

そう訊くと、シャマルは首を横に振った。

はやては昨日、「ヴォルフラム」に運ばれてからずっと起きない。シャマルの話じゃ、リインフォースを目の前で失ったシヨックで目を覚まさないという事だ。

「今度こそ、あの子とも過ごさせる未来を手に入れられると思っていたのに……」

シャマルが指で目の端に浮かべた涙を拭った。

あたしだってそうなると思ってた。だけど、それはもう叶わねえ。あたしらがあの時、きっちり自分達の役目、カルド隊を斃してりゃこんなことにはならなかった。

「グイータちゃん、自分を責めたらダメです」

あたしの心を読んだかのように、リインが悲しげな表情でそう言うてきた。

そして、いつの間にか思いっきり握りしめてた拳にそっと触れてきた。

「責任はお前だけのものではない。私も、同じだ。あの時、カルドとカルド・デレチヨを討っていれば、と」

シグナムもあたしと同じこと考えてた。

すると今度はアギトが「そうだけ」って、リインと同じような事を言っつて、シグナムに寄り添った。

「主は、我とシャマルで看ている。お前たちは寝ていないだろう？」

少しは休んでいた方がいい。フライハイトが何かしらの打開策を立てているかもしれん」

「そうね。あなた達四人は、少しでも休んで体力を回復しておいた方がいいわね」

「それを言ったらシャマルとザフィーラも大変だったんだろ？」

ザフィーラはレジスタンス相手に暴れたっていうし、シャマルだって負傷した隊員達をずっと看てたんだろ」

二人があたしらに休むよう言ってるけど、その二人だってあたしらに負けないくらいに疲れてるはず。

「確かにそうだけど、シグナム達の相手は私達が相手にするのは違うから。」

だからあなたたちには万全の状態でいてほしいの。もう、誰も失いたくないから。」

これ以上はやてちゃんを悲しませないように」

そう言われるともう何も言えない。

ここはシャマルとザフィーラに任せて、あたしらは休むことにした。

十 十 十 十 十 十 十

「うん、ママは大丈夫だから。次に帰るときはちゃんとルシルパパも一緒だから、ヴィヴィオも良い子で待ってて」

医務局の待合室の片隅で、ヴィヴィオが登校する前に、ヴィヴィオ



に今回の戦いで終わらなかつた事を報告。

それはそれでヴィヴィオにすごく心配させたけど、大丈夫だよ、って笑みをつくる。

ヴィヴィオももう子供じゃないから、たぶん私達が負けたことに気づいているかもしれない。

だけど、それでも『うん！』って笑って返してくれた。

信じてくれている。だからそれに応えるのが親としての責任。

「それじゃあ切るね。いつてらっしゃい、ヴィヴィオ」

『うん、いつてきます！』

通信を切って、一息つく。

考える事は今回浮き彫りになった“テストメント”の本拠地“オムニシエンス”の防衛力。

次元跳躍の“エンペラトウリス・バウティスモ”。正確無比の防衛砲が十八基。

意図した相手を強制的に世界外に排除する障壁と呼ばれるモノ。

それらは幹部たち以上に厄介と言ってもいい。

上手く内部に入り込めたとしても、障壁に邪魔されたり、最悪、次元跳躍砲で撃沈されたりするかもしれない。

管理局の艦にアレを防ぐすべも回避する術もない。

狙われたら最後、確実に落とされる。

「・・・私じゃ何も思いつかない。今度もシャルちゃんに頼るしかないの・・・？」

それらに対する対抗策が何一つとして思いつかなかった。

私は、シャルちゃんに頼ることしかできないことに歯がみした。

「思いつめたらダメだよ、なのは」

「フェイトちゃん……」

執務官の制服を着たフェイトちゃんがいつの間にかすぐ側まで来ていた。

それから、コーヒーの入った紙コップを手渡してくれる。

私は「ありがとう」とお礼を言いつつ受け取ってコップに口を付ける。

ほど良い熱さと苦さが、思考の迷路に迷い込んでいた私を落ち着かせる。

「思いつめたり、自分を追い込むと良くない事ばかりが起きる。

だからなのは、今は辛いかもしれないけど……」

「そう、だね。うん、ありがとう、フェイトちゃん」

フェイトちゃんの言う通り。私はここで折れたらダメだ。

シャルちゃんに頼ってしまうけど、全てを任せるんじゃなくて自分出来る事をする。

手伝えることがあれば手伝って、シャルちゃんや、みんなと一緒に進めばいい。

そう決めると、とたんに眠気が襲ってきた。

そう言えば昨日から寝てないんだった。

どおりでこんなにも眠く……って、ここで寝ちゃダメだ。

それからフェイトちゃんに部屋まで送ってもらって、私はすぐに眠りについた。

十 十 十 十 十 十 十

『 ということらしいの。母さんとティアナのお兄さんの目的は』

あたしとスバルは思いのほか軽傷だったから、“ヴォルフラム”での治療だけで完治。

今思えばお兄ちゃんもクイントさんも全然本気じゃなかった。

向き合う覚悟を決めた今だから分かる事。だからこそあたしとスバルは、うちみと小さな内出血だけで済んだ。

それから本局に帰ってからは少しの仮眠。

そして、スバルに呼ばれて部屋に行くと、スバルはギンガさん達と通信していた。

そこで聞いた。お兄ちゃんとクイントさんの本音、その目的<sup>ねがい</sup>を。

「あたし達のために、お母さんは、お母さんとティーダさんは・・・

」

管理局が一枚岩じゃないからこそその悲劇。

本局に來るとそれが際立つて分かる。派閥なんてものが闇に隠れて存在していることに。

上層部のそんな闇が選択した私腹とかによって謀殺された局員。

それが“テストメント”幹部のもう一つの顔。

そしてお兄ちゃん達は、あたし達がそんなことにならないように、今の内に管理局を変える。

それが二人の“テストメント”としての最大の目的だった。

『ママリンは言ってたっス。あたし達と生きたかったって。』

でも、それは叶わない。だからあたし達の未来だけは守るって」

ウエンデイのあんな沈んだ顔見たことない。

『スバル、母上は何か言っていないかったか？』

チンクにそう訊かれたスバルは、“オムニシエンス”での戦いを思い出しているのか深く考え込み始めた。

あたしはあたしで思い出す。お兄ちゃんとの戦いを。

お互いのクロスファイアシュートが決定打にならない弾幕戦。いろんな弾種を撃つけどどれも相殺されて。接近戦に持ち込まれるとお兄ちゃんの方が上手で。

だからこそ使おうとしたお兄ちゃんにはすでに知られているかもしれないあたしの奥の手である幻影と集束砲。だけどそれは使わなかった。集束砲は時間がかかるし、幻影に関しても、一度姿を隠してから発動じゃないとすぐにバレてしまう。

ティアナの覚悟と決意は分かった。だけど、僕にも引けない覚悟と決意がある

戦いの最中にあたしに見せたお兄ちゃんの少し寂しげな顔。

ギンガさんから聞いたお兄ちゃん達の目的を知った今ならその寂しげな顔の意味も分かる。

お兄ちゃん達は死んでもなおあたし達の事を想っていてくれた。

あたし達の為。だけどそこに立ち塞がるのがあたし達だった。

あたし達が引かないなら、お兄ちゃんたちも引けない。

「お母さんは・・・そう決めたら貫き通しなさい、って」

スバルの言葉にチンクは『そうか』だけ言って黙り込んだ。今度はギンガさんがスバルにこれからどうするのか訊ねる。スバルは少し考えたあと、

「管理局員としてお母さんを止める。それがあたしの貫く道だから」そう揺るぎの無い想いを口にした。驚いた。スバルだったら少しは迷いを見せると思っていたのに、そんなそぶりを全然見せない。

『そう、そうね。うん、それがスバルの決めた事なら、母さんも文句はないと思う』

ギンガさんは少し辛そうだけど、それでもスバルを後押しした。するとギンガさんはあたしにも『ティアナも大変かもしれないけど、お兄さんを乗り越えるんだよね？』と訊いてきた。あたしはスバルに、喋ったの？と視線で問い質す。スバルは小さく頷いて、『ごめん』って念話で謝ってきた。

『あなたの口は本当に軽いのね』

『自慢じゃないけどティアの事になると、ね』

『本当に自慢じゃないわね。少しは反省してよね』

『ごめんなさい』

そんなやり取りをして、あたしはギンガさんに答える。

「はい。お兄ちゃんは、乗り越えられないなら、そこで局員として

の道を閉ざすんだ、と言つてました。  
だからあたしは兄を乗り越える為にもここで止まるつもりはありま  
せん」

あたしは局を辞めるつもりはない。お兄ちゃんに何と言われても。  
たとえそれがお兄ちゃんの未練おもいに逆らう事になつてもだ。

他人から見ればバカな事だと、兄の想いを裏切るのか、と言われる  
かもしれない。

あたしだつてお兄ちゃんに甘えたい。だけどそれはダメなんだ。

『おお！ スバルもティアナもカッコいいっス！』

『茶化さないの。二人にとってそんな明るい話じゃないんだから』

デイエチにそう窘められるウェンディだけど、今はそのテンション  
に助けられている気もする。

それから少し世間話をした後、あたしは自分の部屋に戻つて眠つた。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

「ふっ……！」

病室の片隅で、ジャブを数発打つべし打つべし打つべし！

蹴りも数発打つべし打つべし打つべし！

一度深呼吸。うん、調子はなかなか悪くない。

「ダイヤモンド……！」

本来だったらアイツがわたしの相手となっていた。  
“オムニシエンス”に向かっている途中に、シャルからそう聞いた。  
なのに、わたしの拳は掠りもしない。砲撃も通用しなかった。  
通常の状態じゃもう勝つ事は出来ない。

「情けない・・・！」

コンビネーションを打ちながら、最後に振り返ると同時に正拳突き。

「ふっ！？」

「え？」

いつの間にかわたしの病室、背後に来ていたエリオをノックアウト。  
スロー（に見えるだけ）でくず折れるエリオを見て、キャロと二人  
して抜けた声を出した。  
ちよっぴり沈黙。そしてすぐさまキャロの悲鳴。

「レヴィちゃん、エリオ君に何の恨みが・・・！？」

エリオを抱き起こしたキャロ。

わたしは両手を前に突き出して、違う違うと手を振る。

「ち、違う！ 違うよ、これは事故だって！ ちよっと犬に噛まれ  
た感じの、だよ！？」

「げほっげほっ。い、犬に噛まれた以上の大事故だよ、レヴィ。え  
ほっ」

思いつきり咽ながらエリオがお腹を押さえてフラフラ立ち上がる。

「う、確かに手応えからして結構綺麗に鳩尾に入った、かも・・・  
・・・えっと、ごめんなさい。わざとじゃないので許して下さい」  
ホントにわざとじゃないとしても謝らないとダメだ。

だから頭を下げてください。するとエリオは優しく受けとめてくれた。

エリオと二人で笑い合う。と、キャラの視線が・・・なんか少し、痛いかも・・・？

「それはそうと、二人はもう大丈夫なの？」

わたしがディアマンテ戦から離れる時、その時のキャラはほぼ無傷。魔力の消費こそあっても、身体的なダメージはなかった。

けどエリオは違って、グラナードとの戦いでそこそこダメージを受けていた。

「それを言ったらレヴィは？ わたし達の中で一番ダメージが大きかったのはレヴィだって、シャル先生から聞いたよ」

質問を質問で返されてしまった。というか、わたしが一番というのは知らなかった。

「あーそうなんだ。まあ見ての通り、実感してもらった通り、かな  
最初にキャラを見て、次にエリオを見た。

見てもらって分かるように、軽くストレッチ出来るほどに回復で、実感してもらった通り、悶絶しにくず折れるほどの力も戻った。

『よかった。レヴィが何ともなくて。心配したんだよ』



「ルーテシア!? え? なんで!？」

いきなりモニターが展開されたと思ったら、手を振るルーテシアが映った。

キヤロとエリオを見ると、「昨日の内にメールして・・・」ってキヤロが答えた。

わたしとしては嬉しいけど、でもルーテシアに心配させたくはなかった。

だってわたしは強くないといけない。ルーテシアの剣として、盾として。

それなのに、負けて、それで心配させたとなると・・・

『その顔、もしかして変な事考えてない、レヴィ?』

たとえば、レヴィがよく言ってるわたしの剣と盾としての矜持っていうの。

負けたから、その資格が無い、なんて思っているんじゃない?』

開いた口が塞がらない、というのはこういうことかもしれない。

わたしが思っていた事を、ルーテシアはひとつも間違えずに言った。わたしの様子を見て、ルーテシアは「やっぱり」って言って、

『我が妹ながらバカだねえ・・・はあ、わたしとレヴィは主従じゃなくて姉妹!』

もう! わたしの事を大事に思ってくれて、守ってくれるのは嬉しいけど、一人で抱え込もうとしないの!』

「う、ごめんなさい、お姉ちゃん」

ついルーテシアをお姉ちゃんと呼んでしまう。

こう、ルーテシアに正論とかで押し切られると、そう呼んでしまう癖がわたしにあったりする。

『ん、よし。レヴィ、負けたなら二倍にも三倍にも四倍にもして返してあげればいいよ。』

最終的に勝っちゃえばいい。エリオとキャロもそう。ね？』

ルーテシアのその言葉に、わたしもエリオもキャロも頷いて応えた。そうだ。今回負けたんなら、今度は勝てばいい。

「ルーテシア、ありがとう。わたし、間違えそうだった」

わたしにはまだブースト3が残ってる。

短期決戦に持ち込んで、ディアマンテが魔族と融合（するかどうかは分からないけど）する前に斃す。

ブースト3発動時間は最大3分間。それがわたしに許された勝利までの時間。

それから少しみんなで話して、次の戦いに備えて眠る事にした。

十 十 十 十 十 十 十

「呼び出してすまないな、シャル」

応接室に入ると同時にクロノが立ち上がってソファに座るよう勧めてきた。

私は「気にしないで」と返して、もう一人の友人ユーノが座る向かいのソファに座る。

クロノも私に続いてソファに座る。と、それを合図のように私が今入ってきた扉から一人の女性局員。

彼女の手にはティーカップとソーサーが三客あるトレイ。

私達の間にあるテーブルに「どうぞ」と透き通った綺麗な声でホットコーヒーの入ったティーカップを置いていく。

「ありがとう」って言うと、はにかみながらお辞儀して、「失礼します」と言っただけを後にした。んだけど、

「あれ〜？ 私何かやった？ 普通にお礼言っただけなんだけど・・・」

最後のあのテレ笑いのようなモノが気になる。

何か私におかしなことがあったのかな？と思っただけで色々自分の髪や顔、服装を見るけど別段おかしなところはない、と思う。

「君はその性格から女性の局員にも人気があったそうだけど」

「彼女も君のそんなファンの一人だったんじゃないかな？」

と、クロノとユーノが苦笑いでそう言ってきた。

そして「そっちの道に進むとなのは達が悲しむぞ」ってクロノが言ってきたので、飲んでいたコーヒーを危うく鼻から出しそうになった。

げぼげぼ咽て、こんにゃろあと、お返しとばかりに反撃。

「クロノこそあんな可愛い子に変な気を起して不倫とかやめてよ？ そんなことしたら間違いない、その首リアルに飛んじゃうんだから」というより私が飛ばすから」

私は耐えたけどクロノはダメだった。

口を咄嗟に塞いだけど指の間から漏れる黒い液体。

思いつきり咽て私を睨んでくるけど、こっちはこっちで小悪魔的な  
笑み、ニタアと返してやる。

ユーノが「あーはいはい。ストップストップ」と割り込んできて、  
クロノにハンカチを渡す。

「本題に入る前にこれほど疲れるとは・・・」

「ホント、私たち一体何やってんだろ」

ちよっぴり反省。

「で、クロノとユーノが私を呼んだ理由って何？」

大体見当はついてるけどね。

「もちろんテストメントに関する事だ。

今回の戦いで浮き彫りとなった敵地の圧倒的すぎる砲撃による防衛  
能力。

そして、実際に体験してないから分からないが、対象を世界外に排  
除するという障壁。

それらに対抗する術を今までユーノと相談していたんだが・・・」

「砲撃の方に関しては推測だけどいくつか立てた。だけど障壁に関  
してはさっぱりって感じなんだ」

やっぱり。でも“女帝の洗礼”への対抗策を推測とはいえ立てたの  
はやっぱりすごい。

さすがは最年少で司書長とか、学者になっただけの事はある。

「なるほどね。じゃあユーノ。その推測、聞かせて」

ユーノから聞かせられる“女帝の洗礼”に対する対抗策は私と似たモノだった。

というよりは同じと言ってもいいくらい。

「確かにね。あの施設内にあるソーラーパネルのようなやつ、アレと付近にある建物。

それらが何かしらの重要な役割を持っていると私も見てる」

今日の前に展開されているいくつかのモニター。

映し出されているデータは、“女帝の洗礼”が放たれたときに算出されたあの戦域の魔力濃度。

砲塔の周囲にある建物にかなりの魔力反応があるのが見て取れる。そしてそれが全て“女帝の洗礼”に向かっている事も。

「このことからして、周囲の施設は陥落させれば・・・」

「女帝の洗礼は撃てなくなる、と見ていいかもね、確かに」

さらにソーラーパネルのようなモノも一緒に破壊して回ればおそろく落とせる。

大戦時にはそんなものなくても撃てた“女帝の洗礼”だけど、現代じゃそうはいかないという事だ。

でも、もうひとつやり方がある。もしそれらを破壊して、その策を採られたらさすがに対抗するのは無理だ。

だから、

「同時進行で、女帝の洗礼本体を破壊する」

私の推測した最悪の方法を探られる前に“女帝の洗礼”を破壊する。

「そんなことが出来るのか!?!」

「あんな大きいものを破壊するだなんて、艦載砲でも届かなかつたんだよ!」

そう驚いてるけど、それを言ったら最初から“女帝の洗礼”は攻略出来ないじゃない。

「まず話を聞きなさい。確かに艦載砲じゃ破壊するどころかその前のシールドのようなもので防がれる。

私だってその光景を見ていたから百も承知。

・・・まずはあの砲塔群の攻略。艦載砲を撃てども弾かれるシールド有り」

人差し指を立てて説明を始める。

あの“レスプランデセルの円卓”を隠していた結界とはまた違う結界が砲塔群を覆っている。

どちらも魔術による結界だというのはすでに分かっている。

だからこそ、

「私が全力を以って結界を破壊する。若しくは結界を解かないといけない状況に持ち込む」

私とその役を担う。魔力的にも能力的にも知識的にも私が一番適しているし、なのは達には幹部戦がある。

まあ私もそうだけど、なのはたち以上の魔力を有している私しかない。

クロノとユーノは、もうそれしかないとも思っているのか反対はしてこない。

それともこうなった私を止めるのは無理なのだと諦めてるのかも。

「結界が解けたと同時に手の空いている戦力が施設攻撃。

女帝の洗礼じゃなくて、もちろん他の砲塔とかパネルとか魔力供給施設とかを集中的に、ね」

「通用するなら艦載砲で薙ぎ払ってもいいのだろうか？」

「そこところは任せる。でも味方は巻き添えにしないでよね。

で、女帝の洗礼本体。アレは確実に落とす。たぶん施設の中でも一番の防御力を持つと思うから、私が外壁を無理矢理こじ開けて侵入塔内をこれでもかというくらいに破壊し尽くす」

外部のエネルギー供給システムを破壊しても撃てる方法。

それがさらなる魔族召喚や幹部達の魔族を使つてのエネルギー調達出来るかどうかは分からないけど、出来たとしたら大戦時と同じ砲撃になる。

だからそんな事が出来ないように内部を破壊し尽くす。

「シャル、君にも幹部と戦う予定があるんだろう？」

「そんなハードな事をして平気なのか？」

「心配してくれるの？　ありがとう、クロノ。」

でも問題ない。真技三発撃てるだけの余裕を残しておけば勝てるから」

人が聞けば樂觀し過ぎると思うかもしれないけど、もうそれしかない以上は仕方ない。

下手になのは達をこれ以上の危険に晒したくないし。

「・・・そうか。なら砲塔群に関しては一応の解決だな」

「問題はオムニシエンス全体を覆う障壁なんだけど。シャル、何か手はある？」

「・・・ごめん。正直、それにはお手上げな状態なんだ。

テストメント  
「テストメント界律の守護神状態なら楽に解決できるけど、一魔術師としての私じや世界を覆う結界を破壊する術はない」

ユーノにそう答えると、それっきり黙りこむクロノ達。

それはそうだ。私に期待していたんだろうけど、そんな私ですら解決できないとなると全てが破綻する。

さっきの“女帝の洗礼” 攻略も無駄になるというもの。

それを分かった上で話した私は少し意地が悪いのだろうか・・・？

「シャル、ひとついいか？」

「なに？」

「オムニシエンスを覆う障壁というのも魔術によるものなのか？」

「・・・たぶん違う。けど似たようなものと思う。

世界を丸ごと覆うなんて魔術なんてモノ、大戦時においてもたった一つ。

魔道世界アースガルドを数千年と護ってきた最古の術式の一つにして最強・最高の防性魔術原初の神壁。アースガルド

とは言っても、今のルシルや敵の魔術師がどう足掻こうとも使えないモノ。



だからオムニシエンスの障壁は、たぶんルシルから聞きだした術式を応用した超絶に劣化した術式……だと思う」

としか考えられない。魔術の術式を使っているからこそその効果だろうけど、だからと言って魔術になるわけじゃない。

アギラスや“女帝の洗礼”とかからして、神秘を扱うのは幹部達だけ。

それなら“オムニシエンス”の障壁も、何らかの術を使って発動し続ける魔法と見ていい。

「……確定じゃないのか？」

「情報が少な過ぎ。さすがの私にもどうすればいいかなんて見当つかない。

あ、聖王のゆりかごの時みたいに艦隊を引っ張りだして、アルカンシエルクラスの砲撃で突破とかできないの？」

それなら何とかなるかもって思って訊いてみる。

「そんな無茶できるか。何せまだテストメントはそこまでの悪影響を出していない」

「出していない、って、結構好き勝手やってるじゃん。それでも許可と下りないわけ？」

「確かにテストメントは管理局相手に犯罪行為を行っているが、それ以上に局が後回しにしていた事件・事故を速やかに解決している。それらの功績が、彼らを擁護する連中を生み出しているというのが現状だ。

上層部の中にもテストメントを支持しようという意見が最近チラホ

ラ出てくるといふ始末」

「だからこれ以上勝手をすると、六課を監察する立場にあるクロノやリンディさん、そして六課にもいらぬ火が飛ぶ可能性があるんだ」

「いつその事、全部そいつらに話したい状況ね。」

「テストメントの正体や幹部達の目的とか。そうすればアツサリな気もするけど・・・」

「それが出来たら苦労しない、というやつだ。」

「そもそも殉職した局員が蘇って復讐しに来た、なんて信じてもらえるわけもない」

「魔術を知っている僕達だからこそその心労だね」

「・・・はあ」「・・・」と大きく嘆息する私達。

それから少し私達なりに“オムニシエンス”の障壁をどうしようかと相談していると、ここ応接室にコールが鳴る。

クロノがそれに応えて出ると、リンディさんの映るモニターが展開された。

『クロノ・・・。あ、シャルロットさん。ちょうどよかった』

リンディさんはどこか緊迫した様子。

クロノが「何かあったんですか？」と訊くと、リンディさんは少し溜めてそれに答えた。

『上層部の幹部会で決議された事なんだけど、管理局はテストメントを支持、テストメントの返答によってはこれから協力していきたい、』と』

リンディさんから告げられた事に、私達は何も言えなかった。

戦い終わって ｾLast interval ｾ(後書き)

ようやくここまで来ましたよ・・・。

次回から、物語は最終話までノンストップで全力ダッシュ。

次々といろんなものと決着をつけていきます。

## 悲しく愚かな宣戦布告 〈Wail and Fury〉

11月29日 テスタメント本部 “エヘモニアの天柱” 最上階

「 ということ、時空管理局より私達テストメントとの協力関係を築きたい、との提案がされました」

14の内の1つの椅子に座る至高なる卓絶者が、目前に展開された11のモニターに向かってそう告げる。

11のモニターに映るのは堅固なる抵抗者の左腕を除く謹慎中の幹部達と、今の今まで眠りについていた潔白なる聖者だ。

「返答に関しては時間をもらっています」

「待つてもらっている、という事は、マスター・至高なる卓絶者は迷っているということですか？」

永遠なる不滅者が怪訝そうにそう訊ねると、至高なる卓絶者は「私が管理局の申し出に応じると？」と訊き返す。

「そうではありません。その提示に対しての答えは一つのみです。それを、猶予を貰う必要があるのかということ、です。」

わざわざ我々に報告せずともマスター・至高なる卓絶者の意思のままに“拒否する”でいいではありませんか？」

「随分と突っかかって行きますね、永遠なる不滅者。猶予をもらうその何が不満なんですか？」

一番小柄な少女、潔白なる聖者がそう言うと、彼は『不満ではなく不安なんだ』と返した。

彼にとつて管理局は敵、絶対の敵でしかない。だというのに協力体制となると、彼が再び手にした時間の中で組み上げた予定が全て崩れさる。

それだけは何としても避けたかった。だから、彼は……。

『（ここまでだな。至高なる卓絶者は確かに提案を拒否するだろうが、ここは完全に管理局と決別させるのが一番だ）では、最後に一つだけ言わせてもらいます。

我々の復讐を裏切らないでほしい、と』

幹部達の会議は、永遠なる不滅者のその言葉に対する至高なる卓絶者の「分かっています」という静かな返答によって終わった。

会議が終わり、彼、永遠なる不滅者は、自身の部屋でコンソールを操作していた。

誰にも悟られぬよう、ある情報を纏め、とある場所に送信しようとしている。

（失敗だったな。祝福なる祈願者が残っていればもう少しやり方があったが）

ある程度情報を纏め、彼は時期を見て送信しようとそのデータを保存した。

そして管理局内部に居る彼独自の内通者への連絡も視野に入れる。そのデータがとある場所、管理局に送られた時、その内通者に連絡を入れた時、全ての歯車が彼の思惑のままに回り始める。

十 十 十 十 十 十 十 十

私とクロノの居る“六課”に用意された会議室に、なのはとフェイトが呼ばれた。

はやては未だに深い眠りの中。当然のことながらここに居ない。

「休んでいるときにすまない。局とテストメントの状況が変わりつつある」

「何かあったの、クロノ君？」

「・・・ああ。上層部がテストメントと保有技術力に恐れをなしで、と言うよりは技術力に目がくらんで、テストメントと協定を結ぼうと考えている」

なのはの問いにクロノが苦々しくそう答えた。

なのはとフェイトの顔が信じられないといった驚愕の色に染まる。リンデイさんから聞いた話だと、上層部は“テストメント”の持つ技術力に、特に“女帝の洗礼”に目を付けてるって話だ。

「そ、そんな！ だってそんな事になったら」

「落ち着け、フェイト。まだそうと決まったわけじゃない。

向こうからの返答がまだだからな。だが、おそらく答えは・・・」

「突っぱねる、と、私とクロノは思ってる」

何せアイツらは改革と復讐という目的を持った管理局の現体制と過去に怨みを持った集団だ。

そんなアイツらが管理局と協力体制をとるなんて考えられない。だから間違いなくそんな提案を突っぱねる。

「だが上層部はそう思っていないだろう。」

「だから、君達、特務六課に無期限の活動休止命令を下した」

「無期限の活動休止!?!」

「テストメントからの返答が来る前にこれ以上の関係悪化を望まない、という事だよ、なのは、フェイト」

少々熱くなり始めた二人を宥めるように上層部の思惑を私なりに考えて言う。

私が冷静でいる事がなのはとフェイトには効いているのか、二人は椅子に座り直した。

重い静寂が流れる。私独り動こうにも、前と違って独りで解決出来るような問題じゃないのは分かってる。

「僕に出来る事があれば何だってやりたいが、今は上層部に従うしかない。」

要件は以上だ。三人とも待機しておいてくれ。事態が動けばその時に呼び出す」

ここは従うしかない。

私達は「了解」と答えて、この事を他のメンバーに伝える為に“六課”のオフィスに戻ることにした。

そしてこの数日後、12月2日。事態は大きく動く。



十 十 十 十 十 十 十 十

夢を見る。以前にも似たような感じのもんを見たことがある。雪に染まる空と、私が今立つとる公園。

“テストメント”が動き出した日に見た夢と同じやつ・・・。

「主はやて」

「リインフォース!？」

声がする。リインフォースの声や。

公園のどこを見回しても姿が見えへん。

何度も「リインフォース!!」って呼びかけるんやけど、声がするだけで見つけれへん。

会って謝りたい。助けられんくってごめん、って。

どれだけ走りまわって捜したやろう。

変に疲労を感じながら、一本の木に手をつけて少し休む。

夢やというのに妙に意識がハッキリとあるし、普通の夢やない事は薄々気付き始めた。

「主はやて」

「どこなん!？ リインフォース!!」

何度目かの叫び。それでも聞こえるんは「主はやて」ゆうリインフォースの声。

今度は闇雲やなくて、声のする方をここで判断することにした。

「主はやて」

目を閉じて、しっかりと耳を傾ける。  
何度目かの「主はやて」を聞いて……

「っ！ リインフォース！！」

今度こそ聞きわかる。声のする場所を目指して走る。  
少し走って辿り着いた人は噴水のある小さな広場。  
その縁に俯いて座つとるリインフォースを見つけた。

「リインフォース……」

ゆっくりと歩み寄って、目の前にまで近づく。  
するとリインフォースは私を見て立ち上がった。

「リインフォース……その、ごめんな！

私、リインフォースを守れへんかった！ 今度こそ一緒に生きよう  
って思つとつたのに！

それなのに、私は……私は……っ!？」

リインフォースは右の人差し指を私の唇に当ててきた。

そして首を横に振って、見惚れてしまうほどの笑みを浮かべてきた。  
そんなリインフォースの笑みにボケーっとしとると、

「主はやて。さあ、起きてください。皆が待っています。そして私  
も」

「……私も？ どういうことや!？ リインフォースはもうおら  
へんのやろ!？」

夢やかからかもしれへんけど、そんな期待させられるような事をリンフォースは言ってきた。

だから訊き返してみるんやけど、リンフォースは笑みを浮かべたまんまで何も答えてくれへん。

「我ら美しき貴女やてむの元に集いし騎士。いつも貴女の側に……」

「リンフォース……？」

それと同時にものすごい吹雪が吹き荒れて、視界を完全に閉ざされてしまう。

意識が遠のく、とゆうよりは、私が目を覚まそうとしとる。

全てが白になる世界に向けて「リンフォース！」と呼びかけ続ける。

最後に聞こえたんは、

また逢えますよ、我が主はやて

リンフォースの優しく穏やかな声やった。

目を開ける。最初に視界に入るんは白い天井。

何度かお世話になつとる医務局の天井やというんはすぐに分かった。首を動かすと、ベッドの側に置かれとる椅子に座って、ベッドにうつ伏せで眠る頭頂部が二つ見えた。

「ヴィータ、リン……」

私は体を起こして、二人の頭を優しく撫でながら「ごめんな」って謝る。

日時表を確認すると、時刻は8時過ぎ、日にちは11月やなくて12月になっとった。

四日も眠っとつたらしい。これはさすがに眠り過ぎやと思って、二人を起こさんように気を付けてベッドから出ようとしたんやけど、

「・・・ん・・・うあ？ はやて・・・？ はやて！」

「ほえ？ どうしたですか、ヴィータちゃん・・・って、はやてちゃん！！」

起こしてもうた。

口元によだれを垂らした跡のある二人が勢いよく起き上がって、それはもう体当たりと言わんばかりの抱きつきをしてきた。

何度も何度も私の名前を呼んでくれる愛おしき家族。

私はそれに「ごめんな」って謝ることしか出来へん。

それから頭を撫でていると、ようやく二人も落ち着いてきた。

「はやてちゃんが全然起きないですから、リン達は本当に心配したんですよ」

最後にリンがみんなの気持ちを代弁するように言って、私は何度も「ごめんな」とか「ありがとな」とか返してようやくこのやり取りも終わった。

それからすぐに制服に着替えて“六課”のオフィスに向かう。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

はやてちゃんがオフィスに顔を出した。

もちろん隊は歓迎ムード一直線。四日間も眠っていた以上は仕方ない。

そしてはやてちゃんは取り囲んでいるみんなに向かって、

「みんなに心配かけてしまった事はホンマにごめん。

でも私はもう大丈夫やから。これからもよろしくお願いします」

そう勢いよく頭を下げてから敬礼した。

私達も「お願いします！」と敬礼、微笑みをみんなでかわす。

はやてちゃんは一直線に部隊長の執務デスクに向かって、

「・・・ふう、ここに来るまでにヴィータとリインに聞いた。

管理局がテストメントに協力を求めとることも、六課が現在活動休止命令を受けとることも。でも・・・」

椅子に腰かけて、神妙な面持ちでそう切り出した。

スバルとティアナとエリオとキャロ、そしてレヴィを除く前線組ははやてちゃんのデスクの前に集まる。

「うん。シャルちゃんとクロノ君も言っているし、私達もそう思っている。

テストメントはその提案を絶対に呑まない。それは、今私達がかかっている彼らの目的に沿わないから」

「復讐と改革、そこに協力するという選択肢はない、ということやな」

シャルちゃんに視線が集まると、シャルちゃんは「上層部は樂觀してるけどね」と苦笑。

そう、上層部はそうは考えていないようで、何度も「テストメント

”に協定を結びたいと提案しているとリンディさんから報告を受けてる。

“ステートメント”からの返答は未だに無いようで、だからこそ私達“六課”は動けない。

「起きてても何も出来へんとゆうことか。でも、なのはちゃん達は何か掴んどるんとちゃうか？」

まさか、ずっと何もせえへんと待機しとった、なんて事はないんやろ？」

はやてちゃんは私達を信じている、という笑みを見せる。

確かにはやてちゃんの言う通り、私達は何もせずに黙っていたわけじゃない。

「・・・うん、活動休止命令を受けたこの三日、私達はひたすら情報を集めた。

そして、信じたくない情報に辿り着いたよ」

フェイトちゃんがあるデータをデスク上に表示させる。

はやてちゃんがそのデータを見終わるまで私達は一言も話さなかった。

どれくらい時間がたっただろう。はやてちゃんは「ふう」と一息ついて、

「そうか・・・。これが真実なら・・・私は・・・」

はやてちゃんが両手で顔を隠して、とても辛そうにそう呟いた。

私達だってこれが真実であってほしくない。何かの間違い、ただの偶然だと思いたい。

いろんな人達の協力のもと、上層部に感付かれないうちに私達が全

力を以つて調べ上げた情報。

その内の一つが嘘だと思いたい悪夢のようなものだった。

まず一つは復讐を目的としている幹部達の死因。

グラナードことメルセデス・シュトゥットガルト元三等空佐。

彼はとても優秀な魔導師で、平和を愛し、管理局を信じていた。

でも、当時の本局少将、現スチュード・ベーカー中将の犯罪組織との癒着を知った。

それを公にしようとして、彼は謀殺された。

マルフィール隊ことデミオ・アレッタ元三等空佐、エステイ・マルシード元二等空尉、ヴィオラ・オデッセイ元二等空尉のアレッタ部隊。

天然のAMFによる墜落事故死、それがアレッタ三佐達の死因と公表されている。

でも、それも違った。偶然の事故を装った必然の事件。

彼らもまた上層部の一部の将校の不正を知り、その口封じとして謀殺されてしまった。

「おそらく未だに正体の掴めないダイヤモンドとトパーシオも、これに準ずる殉職者で違くないかと」

「ベーカー中将。裏で結構ヤバい事やってるって昔から囁かれてた」

シグナムさんとヴィータちゃんがそう付け加えた。

私もベーカー中将の後ろ暗い噂話は何度か聞いた事がある。

そしてトパーシオ。彼女の正体に関してはある程度分かっている。

私達が調べ上げた情報が確かなら、だけど。

「でもこれ以上の正確な真実は調べられない。下手をしたら首が飛

ぶから」

フエイトちゃん言葉に、はやてちゃんは「そうやな」と返す。クビを覚悟でいけばいいんだろうけど、今はまだここで脱落するわけにはいかない。

時期を見て、クロノ君達の協力を確かにしてから動かないといけない。

悔しいけど、悲しいけど、今はそれが最善だと思う。

「完全に隠蔽されていると見て違いなから、もうこの話は私たちには手に負えない」

でもこれはあくまで噂などの確証の無い情報から立てた推測。

証拠を掴もうにも、これ以上は越権行為になって追われる羽目になる。

ううん、もしかしたらアレッタ三佐達のように謀殺される可能性だってある。

こういうのを危惧して、クイント元准陸尉やティーダ元一尉が“テストメント”として存在している。

そしてもう一つ。前々から手を回して捜査していた“ミュンスター・コンツェルン”と“テストメント”の関係。

これはもう間違いなく黒。管理局に協力的な内部協力者から、ここ三年の間に“オムニシエンス”への物資搬送が多くあったのと。

おそらくあの砲塔群を造る為の物資で違いない。

設計図とかもあれば、と思ったけどそれ以上は協力者にも迷惑がかかる為に断念。

「アギラスもレジスタンスの武装も、ミュンスター・コンツェルン



の作品のようやな」

はやてちゃんが“ミyunスター・コンツェルン”の捜査資料を見て苦々しく告げる。

「アギリス開発の確証はないけど、開発部が秘密裏に何か造ってたって話は出てる」

「レジスタンスの武装についても確証ではありませんが、そういう動きがあったそうです」

正直、たった三日（丸ごとと言っても）の間にここまで情報が集まるとは思ってもみなかった。

巨大過ぎる大財閥“ミyunスター・コンツェルン”もまた一枚岩じゃない、ということだった。

「管理局への出資者が、テストメントの後ろに付いとるとは、な。予想はしとったけど、ホンマに最悪としか言いようがあらへん」

重い空気の中、次の捜査資料の話へと進む。

これが最も重要で、信じたくなくて、嘘であってほしいデータ。

それが、“テストメント”に漏れていた公にされていない事件の捜査資料の数々。

管理している部署、局員はもちろんそれぞれ違う。

でも、許可さえ取ればその捜査資料を閲覧することも可能だったりする。

そして、“テストメント”に漏れていた捜査資料を担当部署・局員以外で閲覧した局員を調べ上げた。

それぞれ全く関連性の無い局員ばかりで、それぞれの上官から頼ま

れて閲覧したのだという。

その上官達もまたあまり互いの関係が少ない局員ばかり。さらに、またその上官の上官という局員に頼まれた、と繰り返す。明らかに意図的に複雑化して辿られないようにしてある感じ。

でも私達は最後にまで辿り着いた。ゴールにあったある局員の名前。それが私達が信じたくないという情報だった。

「……セレス・カローラー等空佐……」

はやてちゃんの呟きに、私達はまた黙りこむ。

セレスさんは、JS事件が始まる前からの友人のような先輩だ。シャルちゃんのように明るく誰とでも気兼ねなく接することで、その人の深いところまで入り込む。

「正直、あたしは信じたくねえ。だってセレスはすごく良い奴なんだ。だから、これもなんかの間違いに違いねえんだ。だってアイツ、あ

たしらの今住んでる家を見つけてくれたんだ。

シヤマルがいつまで経っても見つけられなかった家を、アイツは深い知り合いでもないのに快く探してくれてさ」

ヴィータちゃんの気持ちも分かる。

誰だって信じたくなんかない、こんな事。

「でも、これ……」

もう一つの捜査資料。それには今まで殉職してきた局員の名前が記されている。

その中にはもちろんアレッタ三佐達の名前を載っている。

そしてその内の一つに、セレスさんが“テストメント”との関係を

思わせる名前がある。

「フィレス・カローラ三等空士。殉職。享年11歳……」

11歳。トパーシオの身長からして大体同じくらいの歳だ。改革と復讐を目的とした“テストメント”。設立者がもしセレスさんなら、動機は十分だ。

「……シャルちゃん。一つええか？」

「どうぞ。私に言える事、出来る事なら何でも」

「セレスがホンマにテストメントと通じと思うか？　そして、セレスが魔術師やと思うか？」

はやてちゃんは真っ直ぐシャルちゃんを見詰めて、そう訊いた。シャルちゃんは一拍置いて、

「5年前まではただの魔導師だったのは間違いない。けど、もし彼女がヨツンヘイムの血を受け継ぎ、ギンヌンガガブの発見、ディオサの魔道書の入手によってその血が目覚めたのだとしたら……」

そこまで言って黙り込んで、「あとは、分かるでしょ」と締めた。はやてちゃんはデスク上に展開されているモニター群を消して、おもむろに通信端末を開いた。

「ここからは私の独断や。みんなに責任はない」

私達はやてちゃんのその発言に何か言おうとしたら、シャルちゃ

んが、任せよう、って視線を送ってきた。  
迷ったけど、私達はそれに頷いて、私達の隊長はやてちゃんのことを信じる為に黙った。

十 十 十 十 十 十 十

はやてが通信端末を使って誰と連絡を取ろうとしているかはすぐに分かった。

案の定、サウンドオンリーのモニターから聞こえてきたのは、

『はい、セレス・カロラです』

セレスの声。懐かし過ぎるセレスの透き通った声だ。

はやては「はやてやけど、急にごめんな。ちょお話したい事あって」とすまなさそうに謝りながらも続ける。

『おお、はやて。どしたの？ 何か困った事でもあった？』

「う、うん。まあそんなところや。でな、セレス。今、セレスはどこに居る？」

はやて、その質問はダメだよ。もう遅いけど。

『ホント急だね、はやて。もちろん自宅だよ』

体調不良で休暇貰ったんだから、どっかに遊びに行ったらどんな処罰が下されるか分かんないし』

モニター越しで笑うセレス。

「会って話す事って出来るか？ お見舞いしたいんやけど」

『……いいよ。どこで？っていうか、あたしの家か、やっぱり。あ、でも少し時間くれる？ 主治医が来る時間でさ。診察が終わってからならいいんだけど』

セレスは少し間を置いてから、そう話を続けた。

そういえば、セレスって結構なお金持ちの家の生まれだって聞いたな。

そんなお嬢様（実に見えない。人の事言えないけど）なセレスの主治医っていうくらいだから、カローラ家お抱えの医者だろう。

「うん。それやったら終わったら連絡くれるか？」

『ん、了解　まあすぐに終わるだろうから、ミッドに降りて待っててもらってもいいからさ。そんじゃまたあとでねえ』

通信が切れてモニターも消える。

そしてはやては私を見て、「一緒に行ってくれるか？」と言ってきた。

どうやら私に直接セレスを見てもらって、本当にセレスが魔術師なのか確かめてほしいみたいだ。

「どっかに隠れてセレスを覗けばいいんだね。了解だよ、はやて」

「そんな変な言い回しせんでも……」

そして、私とはやてがミッドに降りることが決定。

なのは達は管理局で待機。大勢で押し掛けて行ったら怪しまれる以

前に迷惑だ。

まあセレスの性格からして迷惑だと思つ事はまずないだろうけどね。

「ねえ、シャル。もし本当にセレスがテストメントの魔術師なら、私達はどうすればいいのかな・・・？」

「どうもこれも管理局員としての仕事を全うするべきじゃないの？ 私は私の為すべき事、ディオサの魔道書を破壊するつもりだし。だから、フェイトはフェイトの思う通りにやればいいんじゃない？ たとえば、間違っている友達を止めるのが友達の役目、だとかさ」

フェイトの迷いに私はそう答える。

管理局の改革には反対しない。やり方は別としてね。

復讐は、そうだなあ、友達なら止めるという選択肢を持つてもいいんじゃないかな、と思う。

けど生前の私は復讐心の塊だったから復讐を止める権利も無いし、絶対ダメとも言わない。

地球のドラマの1シーンにこういうのがあった。

被害者は遺族に対して復讐することを望まないで幸福を望む、つてやつ。

初めてソレを観た時、そんなバカな、つてよく馬鹿にしていた。

そんなわけないじゃない。理不尽に命を、未来を奪われておきながら復讐を望まない被害者が居るか？

居るわけがない。きっと誰だつて自分を殺した者への強烈な憎悪を残す。

実例が今私達の敵としているわけだし。

だから私としては復讐心を抱くのは仕方がない事だと割り切ってる。そついう世界を、人を9千年近く見てきたんだし、当然の帰結だ。

でも、今回のカルド隊の復讐ばかりは止めさせてもらおう。これは余りにも身勝手な話だって自分でもきつちり理解してる。だけど友達が復讐の対象になったんだから、こればかりは許してもらいたい。

「八神部隊長、送信先不明のデータが送られてきたのですが」

と、一人の隊員がそう言って報告してきた。

私達は顔を見合わせて、そのデータをはやてのデスクに送ってもらった。

再び展開されたモニターに映し出される激しいノイズ。

そのノイズが次第に弱まっていって、そして映し出される大きな屋敷。

隅の方に日にちが表示された。新暦79年の7月。今から大体1年ちよつと前のモノだ。

そして映るのは確かセレスの屋敷だった気がする。

どうしてこんなモノが？と考えているうちに、映像に変化が見られた。

どこからともなく帰宅したセレス。その後続くある人物二人を見て、私達は確信する事になった。

「ルシル君とリインフォース・・・!？」

セレスに続いてモニターに映り込んだのは紛れもないスーツを着たルシルと黒のワンピースを着たリインフォースだった。

そしてまたノイズが奔って映像が切り替わる。

次はつい最近の日にちで11月の16日。ヴィヴィオとレヴィガルスルと戦った日だ。

セレスの屋敷から出てくるスーツ姿のルシルが映り込む。

「そんな・・・それじゃあ本当にセレスさんが・・・!?!?」

なのはがシヨックを受けてる。ヴィータとシグナムですらもだ。この映像がどこから、とか、誰が、なんて疑問を忘れてしまうような衝撃。

「・・・まずは・・・まずはセレスから話を聞く。今は・・・それからや・・・」

映像を切ったはやてが、意気消沈といった風にそう言った。

「・・・あ、この映像の送信先を何でもいいから調べて!」

なのはが思い出したかのように隊員達に指示を出す。

隊員達は「了解しました」と返して、判明するとも分からない送信先の調査を始めた。

「はやて・・・」

「大丈夫や。シャルちゃん、セレスから連絡来たら・・・」

「ええ。一緒に行つて、セレスが本当に魔術師なのかどうか見てみる」

それから30分もしない内にセレスから連絡が来て、私とはやてだけでセレスの元に向かった。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十



シャルちゃんと一緒にミッドの北部タウブルクにあるセレスの屋敷に着いた。

郊外のしんみりとした広大な土地にポツンと建つ屋敷。

正門の呼び鈴を鳴らすと『どうぞー、入ってきてー』と可愛い声が返ってきた。

前なら元気やなあ、って思うようなセレスの声も、今やと悲しいとしか思えへん。

門が自動で開いて、私一人で入る。

シャルちゃんには隠れてもらって、セレスが本当に“テストメント”の魔術師なのかを見て確かめてもらう。

まだセレスがそうやと確定したわけやあらへん。

ただ何も知らずにルシル君とリインフォースと知り合いなのかもしれないへん。

でも、それは無いと心の内でハッキリしとる。

一年半も前から、もしくはずっと前からルシル君とリインフォースと会ってたんなら、私らに絶対連絡するはずや。

それにフェイトちゃんがルシル君に特別な想いを抱いとる事はセレスも知つとる。

それやのに何も教えてくれへんかった。それはつまり、知っていないから報せなかった。

「おーい！ こっちこっち！」

屋敷へ続く石畳を歩いとると、どこからともなく聞こえた私を呼ぶセレスの声。

周りを見渡すと、庭先のずっと奥に白い石柱を数本円形に立てた小さな庭園が見えた。

その石柱に囲まれた庭園の真ん中で、セレスが手を大きく振つとつた。

私は一度深呼吸して決意を固めて、そっちに向かって歩き出す。

「ようこそ、はやて。でもまさか一人で来るなんてねえ。

友人のお見舞いに友達を連れて来ないなんて、ちょーっとつれないんじゃない？」

「あ、ごめんな。都合が私一人しかつかんくって」

「あつと、別に責めてるわけじゃないんだからそこまで沈まなくてもいいんだよ？」

苦笑するセレスに勧められるままに白いアームチェアに座る。

12月の寒さが一切感じられへんこの庭園からまた庭を見渡す。冬やのに枯れてへん木々。どうやらここの庭は気温操作が行われとるみたいや。

そんなズレた事を思つとると、セレスはそのまま自分の席に戻って、私の為のお茶を淹れてくれようとする。んやけど、

「って、病人が接客っておかしいやろ!？」

あまりにセレスが自然な動きを見せるから、そこまでされやんと分からなかった。

セレスは「まあまあ、趣味だから」と笑みを浮かべて続きをしとるし。

さっきまでガチガチになつとつた自分がどこかに行つてもうた。

「うん、やっといつもののはやてに戻ったね。

どうしてそんなに緊張してるのか分からなかったけど、やっぱりは

やてにはそういふ雰囲気の方が合ってる」

「あ」

ティーカップを私に差し出すセレス。

セレスはやっぱり優しかった。

そんなセレスを疑わなアカン事に私は……。

『（ちやう。確かめる為に今、ここに私は居るんや）シャルちゃん、どないや？』

どこかで私とセレスを見とるシャルちゃんに念話で訊ねる。

でもなかなか返って来ない返事。どうしたんやろ？と思って、もう一度訊こうとしたところで返ってきた。

『……セレスは……セレスは、魔術師だ』

『……そうか』

シャルちゃんの迷いの見える返答に、私はそれしか返せへんかった。今も笑顔で自分の淹れたお茶に満足しとるんか何度も頷くセレスが目映る。

私は「セレス」と呼びかける。セレスは「ん、本題かな？」とティーカップを置いて私を見つめ返してきた。

「私が今何の任務に就いとるか、セレスは知つとるよな？」

「もち。テストメント対策部隊の特務六課の部隊長だよな」

「……私の信頼する仲間が調べてくれた。」

テストメントに関する事を出来るだけ多く、な」

「うん、それで？ そんな話をあたしにする理由は何？」

「もう、終わりにしやんか・・・」

いつもの様子と全く変わらんセレスにそう告げる。

セレスは変わらずニコニコしとったけど、私がそれつきり黙ると、

「・・・はあ、シャルがそっちに付いた時点でこうなる事は予想出来た。

で？ もしかしてこの家の周りはすでに包囲されているのかな？」

そう言つて、また違う意味を含んだ笑みを浮かべた。

私は「この事を知つとるんは六課の隊長陣だけや」と返す。

するとセレスは「ありがとう、はやて。まだ捕まるわけにはいかないから助かるよ」とお辞儀してきた。

そんな私がセレスに、

「やっぱりセレスはテストメントと関わりのある魔術師なんやな」

と言うと、セレスは居住まいを直してハッキリと、

「そうだよ。あたし、ううん、私がテストメント設立者にしてリーダー、至高なる卓絶者です」

口調を変えて、そう完全に自供した。

戸惑いつつも私が「動機は、フィレス・カローラ三等空士の殉職か？」と訊ねる。

セレスは「それもありますけど、そうですね」と丁寧にそう返して

きた。

「この口調、おかしいですか？　ですがこれが私の素ですので了承のほどを。」

さて。はやて、貴女は今の管理局をどう思いますか？

私達テストメントの事を調べたのですから、ある程度の管理局の間を知ったはずです。

私達はそれを無くし、新たな世代の局員達の未来を守る。

それが私達の目的。復讐ツミというのはその過程で起きる上層部掃除なのですよ」

ティーポットをカチャカチャ鳴らして、新しいお茶をカップに注ぐセレス。

私の方にも注ぎながら「毒なんて入っていないので安心して下さい」と言った。

もちろんそんな事言われんでも分かっとなる。

「・・・確かに管理局の中には自己利益の為に悪事を働く局員は居る。」

それに関しては、私も憤りを感じるとし、どうにかしたいとも思う」

「ならば、私達テストメントに協力しませんか？

より良い管理局の未来の為、その未来の局員の為に、現状で腐りきったゴミを掃除する。」

そして信頼でき管理しやすい局員を上層部に配置する。さすれば、利益の為に下の局員を謀殺するようなゴミはいなくなる」

右手を差し出してくるセレス。握手を求めとるゆうことや。

迷う。セレスの言い分も分かる。クイント元准陸尉やティード元一尉の目的もそう。

未来の管理局と働く局員の為に現在のの上層部を切り捨て、管理局の体制をつくりなおす。

『はやて、迷わないで。一番の近道はそれかもしれないけど、ただそれには・・・え？』

シャルちゃんからの念話が変わるところで途切れた。

そして次の瞬間、セレスに何重ものバインドが仕掛けられた。

「「な・・・！？」」

セレスと二人して驚愕の声を上げる。

そして次に、ここ庭園を包囲するように武装隊が十数人と転移してきた。

次々と変わる状況に思考が追いつかへん。

その間にもセレスへと殺到していく武装隊員。

白亜の丸テーブルに押さえつけられるセレスが私を見る。

「はやて？・・・あれ、おかしいですね？

どうして、武装隊が居るのですか？ 六課の隊長陣しか知らなかったのではないのですか？」

虚ろな目で私を見て、そう訴えかけてくる。

私はそんなセレスの視線に耐えられんくって、つい視線を逸らしてしまう。

そやけど、それは今一番やったらアカン事やった。

「っ！ あは・・・あははは・・・そう、そうゆうことですか。

始めから私を逮捕するつもりだったという事ですね、八神はやて二佐」



私はシャルちゃんに抱えられて、この屋敷を囲う塀の上に移動した。

そして目の前に広がる光景。屋敷も庭も武装隊も何もかも全てが空色の氷に覆われた。

そして今まで私が居った場所に、セレスは居た。

セレスは私とシャルちゃんに気付いて、こっちを鋭い目つきで睨みつけてきた。

「もう、いいです。このような茶番ファルスはもうつんざりです。

テストメント・リーダーハーデ・至高なる卓絶者より全幹部へ通達」

白コートをどこからともなく取り出して羽織って、

「コード・デセスヘラシオン私は全てに絶望した」

と空を仰いでそう言った。

私はシャルちゃんにどういう意味や？とゆう視線を送ると、シャルちゃんは「絶望」と答えた。

けどそれだけで何も起こらへんかった。そう、ここでは何も。

「愚かしき時空管理局よ。私は反時空管理局組織テストメントがリーダーハーデ、至高なる卓絶者。

今日、この日この瞬間を以って、私達テストメントはあなたたちに宣戦布告する。

己が犯し隠してきた罪によって裁かれ消え逝きなさい」

フードを被って素顔を晒さへんようにしてから、セレスは私達管理局に宣戦布告を行った。

私とシャルちゃんはただ黙って見とるしかなかった。



それほどまでに受けたショックが大きかった。

「もう改革などとゆう生易しい手段は結構ですよ。

一度管理局という体制を徹底的に破壊しましよ。ええ、それが一番の方法。

さよふなら、はやて。次に会う時、私達は殺し合う敵同士となるでしよ。」

フードの中から見えたセレスの泣き笑いの表情。

私とシャルちゃん呼び止めにも答えやんと、セレスはその姿を消した。

## 時空管理局本局

至高なる卓絶者ことセレス・カロラ、真名をファビオラ・プレリ  
ユード・セレス・カロラ・デ・ヨツンヘイムの第一級命令“私は  
ド・デセスペラシオン  
完全に絶望した”が発動。

その命令によつて、謹慎中にも拘らずある目的を持った幹部が動き出した。

管理局本局に姿を現したのは堅固なる抵抗者隊と陽気なる勝者の四人。

その内の一人、陽気なる勝者がある男性局員の元に現れた。

その男の制服に付いた階級章から、男は中将であることが見て取れる。

男の名はスチュード・ベーカー。陽気なる勝者の正体メルセデス・シウトウツトガルトの暗殺を企て部下に実行させた張本人。

「な、何故だ！ 何故、死んだはずのお前がここに居る!？」

「お宅を殺す為になんざ蘇ってきたに決まってるんだろが。．．．来たれ、フォヴニス」

グラナード陽気なる勝者の足元に生まれる黄緑色の召喚魔法陣。

そこから顔を出す黒鎧の毒精フォヴニス。フォヴニスの姿を見たベーカー中将は恐怖によって呼吸困難に陥る。

「おいおい、そんな死に方させねえよ。喰っちまいな、フォヴニス。散々痛めつけてからな」

「く、来るな！ 来るな来るな来るなッ！ く ぎゃあああああああー!!」

ベーカー中将は這いずって逃げようとしたが、上半身だけ出したフォヴニスの二本のハサミによって散々壁に叩きつけられ、弱まったところを足から喰べられ始める。

ベーカー中将の悲鳴と、彼の身体の何かが引き千切られる音、砕かれる音を最高の音楽とし、その光景をただひたすらに嗤って見学していた陽気なる勝者は、咀嚼し終えたフォヴニスを戻して、彼の執務室を静かに後にした。

ここ本局のある将校の執務室に別の幹部が姿を現す。

現れたのは三人の幹部、マルクワイール堅固なる抵抗者隊の三人だ。

彼らもまた、自分達を謀殺した将校四人をその手で復讐する為に管

理局に足を運んだ。

そんな彼らの姿を見たその四人の将校もまた「何故ここに居る!？」という疑問の中で、赫羽の荒鳥ファノによって無残にバラバラに斬り刻まれた。

そう、足先から徐々に、失血死させないようにしながら苦痛を与え続けるといふ、非道の方法によって。

そして別の将校の執務室。

60代後半くらいの将校がモニターに向かって怒鳴る。「話が違うではないか!」と。

将校の名はライレー・ブルックルンズ少将。

彼の面前に展開されているモニターに映るのは永遠なる不滅者<sup>ダイヤモンド</sup>だった。

『話?』

「っ! カローラー佐を八神二佐の前で捕まえれば、君がテストメントのリーダーとなって私に協力する、という話だ!」

そう、彼こそが永遠なる不滅者<sup>ダイヤモンド</sup>の指示によってセレスの元に武装隊を差し向けた張本人だった。

ブルックルンズ少将は永遠なる不滅者<sup>ダイヤモンド</sup>にそう唆されて、今回の彼直轄の武装隊出動に走った。

その結果、セレスは管理局に宣戦布告した。友達<sup>はやてたち</sup>に裏切られたと勘違いして。

そして“特務六課”に届いた送信先不明の映像データもまた彼の仕業だ。

全てが永遠なる不滅者<sup>ダイヤモンド</sup>の謀った事だった。

『あー、そういう話もあったな。すまない、ブルツクルンズ少将。どうも死んでからはモノ覚えが悪くなったようだ』

「は？ 何を言っている！？ 死んでからだ！？ そんな冗談を聞いている暇は っ！？」

突如フードを脱いだ永遠なる不滅者の素顔を見たブルツクルンズ少将の表情が凍りついた。ダイヤモンド

それもそのはず、若かりしときに共に過ごした友の顔だったからだ。

「め、メサイア・エルシオン曹長・・・」

『久しぶりだな。お前らに殺されて以来だから大体40年ぶりくらいか』

モニターの向こうには青年とも言える男が居た。

綺麗な紫陽花色のサラサラした髪。鷹のように鋭い青い双眸。

メサイア・エルシオン元陸曹長。そしてかつての医療局にも所属した名を馳せた医務官。

「ど、どうして・・・何故、あなたが・・・！」

気が動転して背後の壁にドカッとぶつかるとブルツクルンズ少将。

その目に浮かぶのは戸惑いと恐怖。人を呼ぼうにも、その思考が働かない。

「あ、う、あ」と言葉にならない声を出すばかりだ。

『決まっているだろう？ お前達に復讐する為だ。』

徐々に、そして確実にお前たちを苦しめ、社会的に殺し、最後に命を刈り取る。

まずはお前からだ、ライレー・ブルツクルンズ』

モニターが消えたと同時に、彼の執務室に数人の武装隊が入ってきた。

「何事だ！」とブルツクルンズ少将が怒鳴ると、進入してきた武装隊の隊長が、

「ライレー・ブルツクルンズ少将。あなたを、テストメントへの機密情報漏えいの罪で逮捕します」

ブルツクルンズ少将は始めからこうなるように仕組まれていたのだと諦め、大人しく連行されていった。

そして最終的に自分は永遠なる不滅者に殺されるのだと延々震えていた。

これが第一級命令“私は全てに絶望した”。

コード・デセスヘラシオン

幹部個人の目的を手段を問わずに好きに遂行していい、そして管理局への敵対行動を取ってもいい、という制限解放。

もう引き返せない、引き返すつもりもないセレスの下した最悪の命令だった。

悲しく愚かな宣戦布告 〈W a i l and F u r y〉 (後書き)

アンチ管理局が酷くなってきた事に、みなさんの反応がどうなるか恐れ始めた今日この頃。

あまりに急な展開となりましたが、もうこれでお互いが引けない状況になりました(私ももう引けない(泣))

次回からは、予定としてまず幹部四連戦となります。

スバル、ティアナ、エリキヤロ、 と、それに相対する幹部達との最終戦となります。

時空管理局本局

シャルとはやてを見送って1時間半くらい後、本局内に流れる最悪の結末を報せる音声。

『愚かしき時空管理局よ。私は反時空管理局組織テストメントがリーダー、至高なる卓絶者<sup>ハーデ</sup>。』

今日、この日この瞬間を以って、私達テストメントはあなたたちに宣戦布告する。

己が犯し隠してきた罪によって裁かれ消え逝きなさい』

その声は間違いなくセレスの声だった。

管理局への宣戦布告。向こうで何かがあったに違いない。

だけどそれを知る時間すら無かった。本局内に侵入者を知らせるアラートが鳴り響く。

そして次に、オフィスに流れる“六課”に対する応援要請。

その内容は、

「テストメント幹部達が将校達を殺害している!？」

幹部達が本局の上層部、将校達を殺害したというそんな最悪の報せだった。

ついに強硬手段で復讐をしに来てしまったということだった。

考える時間も悩む時間も無く、私達“六課”前線組は防護服を着用して現場に急行する。

翔け抜ける速攻の陽虚鳥

突き辺りを曲がった瞬間、赤い弾丸が視界いっぱいに入った。ほとんど無意識的に、

デیفエンサー・プラス

ラウンドシールド

パンツァーシルト

私は半球上のバリアを、その前面に、なのはとヴィータのシールドが展開される。

次の瞬間に轟音が一つ、二つ、三つと続いた。

マルフィール隊三人の猛烈な突進攻撃。

一つ目でヴィータのシールドが破壊されて、二つ目でなのはのシールドにヒビ、三つ目で破壊された。

そのまま私のバリアに衝突、ヒビは入ったけど破壊される事なく弾いた。

「アレッタ三佐!!!」

私達の目の前にその輪郭を現すアレッタ三佐をリーダーとしたマルフィール隊。

そんな彼らの素顔を隠す兜の中からくぐもった声が聞こえた。「お前達だけは違うと思っていたのに」って。

その瞬間、彼らの姿が消えて、その奥から翠色の光がこちらに向かってくる。

穿たれし風雅なる双爪

「相殺しますっ!!!」



レヴィが私達の間をぬって前に躍り出て砲撃を撃った。

そして見事に本局に被害を出すことなく相殺する事に成功した。

対峙するのはフォヴニスと融合した緑色の甲冑姿のグラナードだ。

「特務六課……ん？ 騎士エリオか」

「グラナード……本当に復讐を……？」

今度はエリオが前に出て、“ストラード”を構えながらそう訊いた。グラナードは今まで見せたことも無い下卑た笑い声を上げて、

「ああ、殺してやった。フォヴニスで散々ぶつ叩いた後に、フォヴニスに喰わしてやった。

ベーカールの阿鼻叫喚、ベーカールの肉が喰い千切られる音、骨が碎かれる音、どれもが最高に興奮した！」

そんなあまりに残酷な事を平気で、心底面白いとでもいう風に言った。

私達が何かを言う前にさらにグラナードは話を続ける。

「これでオレの願いはひとつ叶った。もうひとつの願い。

オレが認めた相手と死闘を繰り広げて、勝敗がどうであれオレが消える。

だというのに、幻滅だぜ、特務六課。管理局そっちから協定を提案しておきなから、ボスを逮捕しようなんざ、そりゃないんじゃないかねえか」

ボス。今なら誰を指しているのか分かる。セレスだ。

つまりこういう事態になったのは、管理局がセレスを逮捕しようとしたということだ。ただ、

「待って！ それは何かの間違い」

「間違い？ 現にボスの家にまで武装隊が出張って逮捕しに来てんだよ。」

あーあ、可哀想にな。友と信じていたお宅らのリーダーに騙されてだからよ。エリオ・モンディアル。お宅にはオレと闘う資格はもう無い」

そんなことあるわけが無い。だって、セレスが“テストメント”のリーダーである確証を取る為にシャルとはやてはセレスの元に向かったんだから。

だから、現状に於いてはセレスに“テストメント”と繋がりがあるといふ情報も持っている局員なんて・・・

(居るわけが無い・・・！)

居るとすれば、その武装隊を送った局員は、“テストメント”の誰かと繋がっている。

たぶん今回のこの騒動は、その局員と幹部の誰かによって仕組まれた事。

私達管理局と“テストメント”の関係を一気に最悪な敵対とするために。

「ちょっと待って！ それはおかしい！」

なのはがそう叫んだ。たぶん私と同じ考えに至ったんだ。

でもグラナードは、話をする気も無い、とでも言うようにその姿を消した。  
幹部達が退いた事で、本局内は被害状況確認のために一気に慌ただしくなる。

十 十 十 十 十 十 十

## 第61管理世界スプールス

鳥のさえずりが聞こえる。意識が覚醒していく。  
まぶたを閉じていても分かる光量。朝だという事だ。  
目を開ける。最初は寝起きで慣れない光の為にすぐにまぶたを閉じる。

「っ・・・く・・・」

右手で影をつくり、今度はきちんと目を開ける。  
何か夢を見ていたようだが、夢を見るように出来ているとは思えないからおそらく気のせいだろう。

日の光にも慣れ周囲を見渡す。場所は湖畔の側にある森林に立つ大木。  
当然ながら眠りについた時から一步として移動していない。  
大木にもたれながらゆっくりと立ち上がる。

「身体は・・・活動に支障なし。ユニゾン・・・可。転移・・・不可。戦闘・・・不可・・・」

自らの存在の現状を確認。

結果知りえたのは、ただ動けるだけで現状では単独での戦闘は出来ない、ということ。

これでは真つ向から“テストメント”と戦う事はできない。

「・・・すまない、マスター、ルシリオン。こうなれば、私は・・・」

完全な裏切り行為を今からこの手で行う。

コンソールを前面に展開。ついでにここはどこで今日は何日から調べると、管理世界スプールスで今日は12月1日。

そしてどうでもいいが、時刻は12少し前、朝ではなく昼だった。随分な時間を眠りに費やしていたようだ。

次に管理局と“テストメント”に関する一般公開されている情報<sup>ニュース</sup>を閲覧。

そこで分かったのは、あの戦いから管理局も“テストメント”も動いていないという事だった。

互いに何かしらあったのだろうが今の私に知る術はない。

だから今は用事を済ます。慣れない所為でなかなか手古摺るが、それでも操作を続ける。

「私は、管理局に・・・特務六課に付きます」

最後のキーを押して、おそらく主はやてたちが一番苦勞しているであろう“オムニシエンス”の障壁に関するデータを送信、コンソールを閉じる。

一息つき、ある事をするために歩を進めて湖に近づく。

人としての身体ではない以上、汗もかかなければ空腹にもならない（しかし睡眠は必要だという何ともおかしな話だ）。

しかし最初の一年はマスターに付き従って一般人と同じような生活をしていたこともあり、人らしい行動、特に身体を洗うという行動を自然にとるようになってしまっている。

とはいえ、ここ最近“テストメント”としての活動が多忙だったため身体の洗浄は手抜き状態だ。

「久しぶりだな、湖での水浴びも」

幹部がまだ私とルシリオンとマスターとトパーシオだけだった頃はこういうことをしていた（もちろんルシリオンはどこかにやっていたが）。

そんな昔とも言えない思い出を思い出しながら、着ている服を脱ぎ裸となって湖に入る。

（身体的な損傷は完全に治っている・・・？

これもフライハイトの恩恵ということなのだろうか・・・？）

完全に傷一つなくなった肌を、冷たい（が、気にはならない）湖水を片手ですくって洗う。

いろいろと気になる事はあるが、私には到底理解できないような“力”が働いているのだろうと無理やり納得する。

最後に長い髪を洗ってから湖を出、カルド隊の炎によって少し損傷した服を着る。

そして最後にルシリオンから贈ってもらったヘアピンで髪を留め終了だ。

「まずは服をどうにかしなければならぬ・・・」

服がボロボロでは地域警邏に目を付けられるかもしれない。

そうならないように近くに小さな街がある事を祈り、“女帝の洗礼”

に関するデータを纏めつつ私は湖畔を後にする。

最後にもう一度ニュースを観る為にモニターを開く。

すると数分までと打って変わって管理局と“テストメント”の速報をしていた。

キャスターが速報ニュースを読み上げた。その内容は驚愕するほどのものだった。

「テストメントが・・・管理局に・・・宣戦布告!?!」

この数分で、状況はとんでもない方向へと変化、悪化していた。

「急がなければ!」

私は何としても主はやて達と合流する為、次元港を探す為に走る。

十 十 十 十 十 十 十 十

私とはやてが本局に戻ると、本局は私達がミッドに降りる前とは全く違っていた。

慌ただしく駆けまわる医務官達と局員達。中には武装隊の姿もあった。

なのは達からの連絡によると、将校の何人かが幹部の手によって殺害されたとのことだ。

そして私達が本局内に向かっていている間にも事態は変わっていった。

本局へ来るために乗った次元船内に流れる主要管理世界にも放映されていると思うある映像データ。

それは本局の上層部、一部の将校達による幹部会の様子を映した隠

し撮りされたもの。

内容は“テストメント”の持つ技術力を手に入れる為に協定を結ぶフリをして、幹部達を一網打尽にしよう、というものだった。

「上層部は……ここまで……！」

はやてが手を白くなるくらいにギュツと握りしめていた。

その他にもこれまで管理局が犯し隠してきた不正などが流れる。

一部とはいえ、信じていた管理局の嫌な部分を見たら、仕方ないでもこれは、

「どうやらこれは仕組まれた事態のようね。セレスの意思とは関係なく、別の幹部によって」

私達が、三日という短い時間とはいえ全力で調べ上げた情報を、何故武装隊を送った上層部が知っているのか。

答えは一つ。“テストメント”の幹部の中に、管理局と協定を結んでほしくない奴が居る。

そいつが上層部の将校の誰かにセレスの事をリークしたに違いない。

「ダイヤモンド……許せへん、こんな。絶対に……！」

それからはやては本局に着くまで一言も話さなかった。

そして今、本局に到着してすぐにはやてはある場所へ一直線に向かう。

もちろんひとりにするわけにもいかないから私も同行する。

そして着いたのは、逮捕した犯人を一時的に閉じ込めておく留置所ある程度進むと、武装隊が数人、あるひとつの扉の前で待機していた。

まずは敬礼、そして入室の許可を取ってもらい、堅く閉じられていた扉が開く。

はやてに続いて中に入る。と、リンカーコアの働きを封じるリミッター付きの手錠をかけられた将校、名前は確か・・・

「お話を聞かせてもらってもいいですか、ブルックルンズ少将」

そうそう。ライレー・ブルックルンズ少将。

俯いてぶるぶる震え続けるブルックルンズ少将の目がはやてと私を見る。

少将は少しの間、言い淀んで、

「こんな事になるとは思わなかったんだ。私は・・・こんなことに・・・」

頭を抱えて唸り始めて、「違う。私はこんな事望んでいない」って繰り返す。

それでもはやては詰問をやめないで、何度も「何があったんですか？」と訊ねる。

そんなのが1〜2分くらい続いて、さすがに私はイラつき（ほぼキレた）始めたので、

「ディアマンテにでも誑かされたか？」

と、顔にも態度に出さないうで、努めて冷静な口調にして、でも強めにカマをかけてみると、少将の身体がビクツと大きく震えた。

ビンゴだ。はやてと頷き合って、さらに続ける。

そして分かったのが、やっぱりディアマンテが裏で糸を引いているという事だった。



十 十 十 十 十 十 十

シャルちゃんとはやてちゃんが戻ってきた。

そして告げられるミッドで起こった事。

セレスさんが魔術師で、武装隊によって逮捕されそうになった事、それがはやてちゃんが手引きしたって勘違いされた事、そしてさっきの宣戦布告。

「ブルツクルンズ少将が全部吐いたわ。少将はダイヤモンドと結託しとった。」

セレスを捕まえて、ダイヤモンドがリーダーとなったら管理局、少将個人に協力する、ってな」

「そんな・・・！ それじゃカラーラ佐は味方のダイヤモンドに裏切られたってことですか！？」

「おそらくダイヤモンドは管理局との協定を何としても邪魔したかった。」

だからこそ完全に敵対させる為に、こんな事を仕組んだんでしょね」

「彼の目的も復讐だから、ですか・・・？」

「そや。・・・ダイヤモンドの正体も少将から聞き出せたから、今から説明するな」

はやてちゃんがモニターを出し、かなり古い局員データを表示。

映し出されたのは一人の青年。名前をメサイア・エルシオン陸曹長。40年も前に殉職したとされる陸曹長と医務官の肩書を持つ局員のデータだった。

「医務官としての任務中に殉職。任務地は内乱続く管理世界となつて間もないサンサルバシオン。サンサルバシオンの人は、独自の技術で局に戦いを挑んだ。そして負けた。そして派遣されたのはエルシオン医務官の配属されている医療班と当時三尉だったブルックルズ少将の配属されている護衛の部隊が派遣」

当時の資料が次々に表示される。

「でも、まだ残つとつた抵抗勢力との交戦に入って、結果、局はその地区の一掃の決断を下した。

医務官として仕事を全うしようとした医療班は、その命令を聞かず医療行為を続行。

そしてそれは起こつた。ブルックルズ少将の部隊は、医療班もろとも反抗勢力を艦載砲で・・・」

だけど、はやてちゃんの言うこととは全く違う内容だ。

はやてちゃんはそのままで言つて押し黙つた。

私が代わりにその資料の続きを読んでいく。

「護衛部隊の隊長ローバー一尉の証言によると・・・え、なにこれ？

治療班が抵抗勢力に寝返つた事で、仕方なく抵抗勢力とともに鎮圧・・・これつて・・・！」

真実が隠蔽されて改竄されている。

彼らの復讐したいという気持ちも徐々に分かってきてしまった。これは酷い。いくら被害拡大を防ぐためとはいえ、切羽詰まっていたとはいえ仲間を撃つなんて……。知りたくなかった、けど知らないといけない管理局の深い闇。大きくなり過ぎた組織には必ず付き纏う問題だ。意気消沈している私達に、

「八神部隊長！テストメントの構成員であると思われるレジスタンスが市民を率いて暴動を起こしている、との連絡が入りました！」

「その他にも幹部と思われる白コート集団が各管理世界の地上本部支局を襲撃！ 応援要請が入っています！！！」

次から次へと入る最悪な報告。

「じゃあない。・・・幹部が姿を現しするのはどこの世界や!？」

「はい、カルナログ。オーシア。ユークトバニアの三つです！」

「状況変化！ その三世界の本部の将校や一部の局員を襲撃した後、すでに撤退を終えています！」

「襲撃された局員たちは、先に放映された映像で不正を働いたとされた局員と判明！」

先手後手どころか手を回すことすら出来ないほどに速く事を成していく幹部達。

管理局による管理が始まって以来の最悪過ぎる状況が私達を襲っている。

「どうすればええんや・・・？ 動いて到着した頃にはもう何かも終わっとる。」

そんな相手をどう捉えれば・・・!!」

ダンツ！とデスクに両手を叩きつけて、顔を歪ませるはやてちゃん。  
“テストメント”の本拠地である“オムニシエンス”へ仕掛ければ幹部達も防衛のために不正局員の襲撃を止めて来るだろうけど、その“オムニシエンス”に入れない以上はどうしようもない。

「八神部隊長！ 解読不明の文書データが」

「解読ふめ「見せて!!」・・・おお・・・」

はやてちゃんがそれに答える前に、シャルちゃんがすぐにその隊員のデスクに向かった。

解読不明の文書。ヨツン Heim 語って呼ばれるモノなんだとすぐに分かった。

シャルちゃんが真剣な表情でモニターを眺めて、そして急に笑い出して「よっしやあー!!」って現状には似つかわしくないテンションで叫んだ。

「はやて！ ウステイオ、エストバキア、フォスカム、フェティギアの地上本部に連絡して！」

「どういう事や、シャルちゃん・・・？」

「オムニシエンスの障壁の解除方法が分かった！  
今言った世界に障壁発生システムが置かれてるテストメントの拠点があるみたい。」

そこを潰せばオムニシエンスに進入出来る!!」

私達の前に、四つのマップが表示されているモニターが展開されて、拠点の位置と思われる座標が光る。

「少し待て、フライハイト。その情報は真実なのか？  
またディアマンテや他の幹部による罠かも知れんぞ・・・！」

シグナムさんの言う通りだ。

この状況でこのタイミングでの、一番知りたい情報が送られてきた。それを罠だと怪しむのは当然のことで、私だって信じられない。

「・・・最後はこう締めくくられてる。しかも音声付データ。よく聞いて、はやて」

『必ずまた貴女のもとに集うことを誓って。ノーチェブエナ』

オフィスに流れる女性の声。間違いなくこの声は・・・

「リン・・・フォース・・・！」

「今の、間違いねえ・・・リンフォースの声だ！」

「生きていたんですよ、はやてちゃん！ リンフォースは今も生きてるんですよっ！」

「よっしやーっ！...！」

はやてちゃん達八神家の面々が本当に嬉しそうに泣き笑いで喜び合う。

今の状況でこの雰囲気は不謹慎だと分かっているけど、それでも嬉し

い事だ。

そんな中シャマル先生がリインフォースの居場所を訊いたけど、ネットワークに問題が発生しているみたいでトレース出来なかった。でも、

「リインフォースもきつと動いてくれとるはずや。

ウステイオ、エストバキア、フォスカム、フェティギアへ連絡！

拠点の座標を送信後、私ら特務六課も出るよ！」

はやてちゃんの指示が飛ぶ。それに「了解！」と答える私達。

「ごめん、提案したい事があるんだけどいいかな？」

と、そこでシャルちゃんが小さく右手を上げた。

十 十 十 十 十 十 十

私は右手を小さく挙げて提案。

はやてに「聞かせて」って促されたから遠慮なく話す。

「六課の戦力を四つに分けることを提案したいんだけど」

「どういうことか聞かせてもらってもええか？」

そう言うと、やっぱり詳細を求められた。

当然の事だし、私の考えをみんなに説明する。

「現在、幹部は途轍もないスピードで各管理世界の施設や支局を襲

撃し回ってる。

それに対応しようにも、私達にはそんなスピードはない。だからこそおびき出す。

拠点を奇襲、その場に留まって幹部達を釣る。そして決着。それが一番手っ取り早い」

スバルとティアナの元には間違いなくクイントさんとティーダが来る。

これで先ず二人の幹部。シグナム達の元にはカルド隊。これで五人エリオの元にはグラナード（何か闘う資格が無いだのなんだの言われたらしい）が来る、と思いたい。これで六人。

残り一か所には誰が来るかは分からないけど、最低でも一人は来るはずだ。

「みんなを囿にするようにで本当に悪いと思ってる。

幻滅されても仕方ないだろうね。だけど、このままだと状況はもっと悪くなる。

だからここで決めておかないと、って思うんだ」

「・・・幻滅なんてしないよ」

「そうやな。こればかりは手段を選んどつたらアカンし、私もシヤルちゃんに同意するわ」

「そうでもしないとこの状況はきつと変わらない。だから、私もその手でいいと思うよ」

なのはとはやてとフェイトが私の提案にそんな優しい声で賛成してくれた。

するとシグナム達もスバル達も同じように賛成を示す頷きをしてく

れた。

「ありがとう、みんな」

みんなの優しさにお礼を言う。

「決まりやな。それやったら組み合わせはどないする？」

「んと、確実なのはスバルとティアナ、エリオとキャロ、シグナム達。

残り一組は推測になるからどうしようかと思うんだけど。

他のみんなはいつでもフォローは入れるように待機しておく、って  
いうのはどうかな？」

「最後のー組、わたしが・・・わたしが行きます」

レヴィが遠慮したように手を挙げた。

レヴィの相手は一応ディアマンテという事にしたけど、正直、レヴィに勝てる相手とは思えない。

それにディアマンテが出張るかどうかと考えれば、まずアイツは出て来ない。

何せ姿を現して前線に出たのは先の戦いの一回だけ。

なら、出てくるのは・・・

「なのは。なのはもレヴィについて出てくれる？」

「え？ うん、私はそれでもいいけど・・・。

もしかして、アレッタ三佐達マルフィール隊が来るかもしれないって考えてる・・・？」



「おそろくね。トパーシオはエルジアでの一戦から出て来ない。ルシルが来るっていうのも可能性あるけど、どっちかと言えばマルフィール隊が来そうなんだよね」

ルシルじゃなくてマルフィール隊。

セレスはおそらく姉のフィレスと、そしてルシルを側に置くはずだ。何せセレスこそがルシルのファンクラブの創設者（知ったのは機動六課卒業前）なのだ。

だからこそ、セレスはこういう状況なら姉フィレスと想い人のルシルをしばらく自分の元に居させると思う。

私だって何か辛い時があれば好きな人や大切な人に側に居てほしいと思うから。

「ではこれで決まりだな。守護騎士わたしたちはウステイオへ行こう。それでいいか、ヴィータ？」

「あたしはそれで構わねえ。ラインとアギトもそれでいいよな？」

「はいです」「おうよ！」

「それじゃあ私とレヴィはエストバキアで。それでいい、レヴィ？」

「はい。それで構いません」

「それならあたしとティアは・・・」

「フォスカムにしましょ。廃棄都市区画内にあるみたいだから、陸戦魔導師のあたし達には好都合よ」

「では僕とキャラ口は平地のフェティギアへ行きます。それでいいか

な、キャロ」

「うん。広い場所の方がきつと戦いやすいだろうから、わたしはそこでいいよ」

「決まり。残りの私達は、いつでもフォロー出来るようにヴォルフラムで待機ってことで」

ある程度の作戦を立ててところで、はやてがどこかに通信を入れようとしたとき、通信が入ったっていう報せのコールが鳴る。

はやてがそれに応えると、クロノが映るモニターが展開。

それとほぼ同時にはやての「ちようどええとこに」っていうセリフと、クロノの「急ぎの話があるんだが」っていうセリフが重なった。

「えーと、クロノ君から聞かせて」

「あ、ああ。管理局はテストメント幹部に対して出頭するよう呼び掛け、それが受け入れられない場合は実力行使で対処する、という決議がなされた。

結果、テストメントはそれには答えず、なおも管理局施設への襲撃を繰り返している。

つまり、君達六課を含めた管理局は、テストメントを潰すこととなった」

クロノから聞かされた話に、誰も何も言わない。

もうどつちが悪だとか正義とかそういう問題じゃなくなってきたいるからだ。

管理局は犯し隠してきた罪を曝け出されて開局以来最悪な状況に追い込まれた。

“テストメント”はそれに乗じて不正を働いた局員に対して攻撃と

いうあまり賢くない選択肢を取った。

でも、管理局全体がそんな悪い局員ばかりじゃないのは確か。不正を働いた局員の総数だって全体から見えれば5%にも満たないはず。

居る時点で悪いとも思っけど、人間である以上そういう欲を持ってしまっても仕方ない。

まあ同じ局員を自己利益の為に謀殺したっていう連中には当然の報いだろっけど。

『・・・あー、僕からは以上なんだが・・・。そっちはどうだ？ 応援要請とかが入っているんじゃないのか・・・？』

「そのことやけど、オムニシエンスの障壁の問題をクリアする為に、六課を動かす。

今から六課の方針を纏めて送るから見てもらってええやるか？」

『分かった。こちらで出来る事は何でもやるっ。』

艦隊だとか大隊を出せ、と言っのなら出せるように努力をしよう』

「おおきにな、クロノ君。シャルちゃんと少し相談して決めるわ」

通信を切って、私に顔を向けるはやて。相談も何ももう決まってるでしょうが。

“オムニシエンス”という世界丸ごとひとつを攻略するには管理局の抱える戦力の大半が必要だってことが。

魔族を有する幹部は私達“六課”が何とかしてみせる。

だけど砲塔群に関しては管理局のフォローが無いとおそらく落とせない。

それに戦闘機部隊のアギラスにも航空部隊の助力が要る。

そしてもうひとつ忘れちゃいけないのが“スキーズブラズニル”艦隊。

四日前の戦いには出て来なかったけど、危機に陥ったらおそらく出してくる。

それに対抗するためにはこちらにも高出力の魔導砲を積んでいる艦隊が必要だ。

私の推測だと“スキーズブラズニル”一隻に対して、こっちは大型のXV級艦を三隻くらいないとまず相手にならない。

ルシルのレプリカ・“スキーズブラズニル”だからこそ神秘が無くとも力押し of 魔導砲で何とかなるはずだ。

そう私の考えを話す。するとはやては「やっぱりシャちゃんが居ってくれてよかった」って嬉しい事を言ってくれた。

それからすぐに私の話した事を纏め上げてクロノのところ送った。そして“六課”メンバーをオフィスに整列させて、出撃の合図へに入る。

こういう場合でもやっぱりやるんだ、って感心。んで、少し焦り。時間が無いよ、はやて。

「ええか。テストメントは今までと違って暴走しとる。

かなり危険な戦いになると思う。そやけど、これ以上の悲しい戦いは絶対に止めやなアカン。

そやから、みんなの力、私に貸してください」

やっぱりはやてはすごい子だ。

はやてがそう言い終えた瞬間、オフィス内の士気が一気に膨れ上がったのが分かった。

上に立つ者としての、下を引っ張って共に歩いていく力がはやてにはある。

だからこそ隊員達は「お願いします!!」って一糸乱れずに応えら  
れる。

「特務六課、出撃!!」

## 第9 無人世界軌道上 グリユーエン拘置所

グリユーエン拘置所の奥の奥、ある一つの牢内に白コートを纏った  
男が現れる。

そしてその牢に捕えられている男が「久しぶりだね」と気さくに、  
友人と話をするような軽い口調で挨拶した。

捕えられている男は紫の髪に金の双眸をしている。名をジェイル・  
スカリエッティ。

五年前の都市型テロJS事件の首謀者だった男だ。

「随分と面白い事をしているそうじゃないか。」

フフ、私ももう少し時を待っているべきだったかな、エルシオン曹  
長、いや元曹長か」

スカリエッティの牢に現れたのはメサイア・永遠なる不滅者<sup>ディアマンテ</sup>だった。  
彼はフツと笑い、「どうだろうな」と素っ気なく返した。

「40年以上も前に死んだ君が、二年前、私の前に姿を現した時は  
驚いたよ」

「こっちはお前が牢に入れられたと知った時驚いたし、お前と会う為にどうしようかと悩んだんだが？」

「だが君はこうして私の前に監視網を掻い潜って姿を見せている。それでいいじゃないか」

グリユーエン拘置所は高レベルのセキュリティによって監視されている。

しかし、亡霊と言っても過言ではない“テストメント”幹部は、意識すればカメラに姿を映らないようにすることも可能だった。

とはいえ、そのような事が出来ると知っているのは彼、永遠なる不滅者<sup>ンテ</sup>だけだが。

「結果論だな。と、本題に入らせてもらおうか。まずは、AMFシステムに関して礼を言う」

「アギラス、と言ったかい？ それに搭載するという話だったが、役に立っているのなら私としても嬉しいよ」

カメラに背を向けるスカリエッティは、彼に対してそう笑いかける。そして彼もまた「ああ、本当に感謝している」と再度礼を口にした。“テストメント”の航空戦力である人格型AIを搭載した戦闘機“アギラス”のAMFは、スカリエッティがガジェットドローンに使用していたモノの発展型だった。

とはいえ、エアインタークというウィークポイントの所為でその本来の効果も発揮できずに撃墜されているのが現実だが。

「それで、今日ここへ来たのはこの為だけなのかい？」

スカリエッティがそう訊ねると、彼は「いや」と首を横に振った。

「ふむ」と唸ったスカリエツティ。しかし次の瞬間にその表情が驚愕に染まる。

「無限の欲望ジエイル・スカリエツティ。

マルファイール堅固なる抵抗者隊に代わり、俺が彼らの復讐を執行しよう」

マルファイール堅固なる抵抗者隊、かつてのアレッタ部隊の死の原因であるAMF。それはもちろん天然などではなく、スカリエツティが実験と称してアレッタ部隊の殺害を企てた連中の計画を利用して試験運用したものだ。

ゆえに、スカリエツティは堅固なる抵抗者隊にとって復讐すべき対象の一人だ。

「ごぶつ・・・！ なんの・・・つも・・・り・・・！？」

スカリエツティの背中から生える赤い液体に染まる腕。

その腕の持ち主はもちろん永遠なる不滅者だ。ディアマンテ

多量の血液を吐き、スカリエツティは彼にもたれかかる。

「一度滅びるべき管理局の闇は俺の損得関係なく排除する。

それに、お前をこれ以上生かしておいても、いつか弊害になる可能性がある。

ならば今の内に排除しておこうと思ったままで。

ああ、安心しろ。お前の保有していた技術力はすでにこちらで回収した。

だからこの世界に未練なく逝けるだろう？」

スカリエツティにそう耳打ちし、用済みだからもう消える、と宣告した。

そして純雷の皇馬アルトワルドの能力を使い、蘇生できないように

スカリエツテイの体内を雷撃で焼き滅ぼす。

今は失き管理局最高評議会によつて創り生み出された稀代の天才ジ  
エイル・スカリエツテイ。

かつては地上本部を手玉に取り管理局を利用した彼は、永遠なる不  
滅者<sup>ンテ</sup>に利用された揚句、呆気なく人知れずに殺害された。



あれえ？ 今回でスバルとクイントを決着させるつもりでしたがおかしいなあ？

気づけば1万文字越えて、思わぬところで予定外の1話を追加してしまいました。

というわけで次話に持ち越しです。

想いの全てをこの一撃に 〽Revolver Knuckle〽 (前書き)

クイント・アマティスタ最終戦イメージBGM ゼノギアス“飛翔

”

想いの全てをこの一撃に　　Revolver Knuckle

12月2日　PM　14:29　第28管理世界フォスカム

あたしとティアは、“テストメント”の拠点のあるフォスカムの廃棄都市ドイパームに来た。

そこでフォスカムの地上・航空部隊と合流して、他の三つの世界に向かったのはさん達の合図を待つ。

同時に全ての拠点に襲撃を仕掛けることで、幹部達を否応でも分散させるのが狙いだってシャルさんは言ってた。

「ティア、上手く行くかな・・・？」

「あたし達が上手く行くようにするのよ」

そう言ったつきりティアは黙った。

そう、だよ。あたし達がしっかりしないとこの戦いはきつと終わらない。

必ず“テストメント”に勝って・・・ううん、止めるんだ。そしてまたいつもの日常に帰るんだ。

決意を胸に秘めて待機していると、フォスカムの地上部隊の人が来た。

「八神司令より連絡が入りました。1分後、1430時に作戦開始だそうです」

「分かりました。ありがとうございます」

残り1分。みんなで笑いあってるだけですぐに経つのに、こういう状況になるとすごく長く感じる。

左手に装着した“リボルバーナックル”にそっと触れて優しく撫でる。

お母さんとティータさんが来てくれる事を祈って、ただじっと待つ。そして、

「時間よー!ー!」

ティアの号令で、あたし達は拠点に向かって一気に駆けた。

場所が廃棄都市区画ということもあって、死角に入り込みやすい。だから拠点の居るはずの“テストメント”構成員にはまだ気づかれてない、はず。

『ティア、上手く行き過ぎてると思うんだけど、大丈夫かな・・・?』

『あんだねえ、もう少し前向きに考えないと足元すくわれるわよ』

『前向き過ぎても考えものだと思うんだけど・・・』

『じゃあいい感じで緊張感保ってなさい』

『いい感じ、ってどういう感じ?』

『自分で考えなさい。以上!』

廃棄ビルや瓦礫の陰という陰を利用して、拠点にまで複数の武装隊と一緒に向かう。

ただどここまで“テストメント”の妨害を受けないのもおかしい。

そう思ったからティアに念話で訊いたんだけど、なんかはぐらかされた感じがする。

いい感じ、ってどういうのだろうって考えていると、“オムニシエンス”の障壁を発生させている拠点の近くまで辿り着いた。

なんてことはない普通の白い建物。“機動六課”時代の隊舎みたいな感じだ。

拠点の周囲にも人の姿は見えない。ティアに視線を向けると、

『ポジティブに考えれば奇襲が気づかれてない。何せ管理局あたしたちに拠点の位置が知られているなんて思っただろうから。

で、ネガティブに考えれば、これは私達を誘き出す罠、ってところね』

ティアはそう二つの可能性を提示してきた。

成功か失敗かのどちらか。でも、どっちにしてもあたし達のするべきことは……

『反撃に転じられる前に、障壁発生装置を破壊する。そして幹部の撃破』

ということだ。

そしてティアの言う通り幹部が現れたらあたし達が戦線に参加して、神秘の扱えないフォスカムの部隊の人達は下がってもらおう。

ここまででは打ち合わせをしたから問題は無いんだけど……

「それでは、我々フォスカム地上部隊と航空部隊で襲撃を掛けます。テストメント幹部が姿を現した時はお願いします」

「分かりました。お願いします」

「お願いします」

フォスカム拠点攻略戦に参加する部隊の女性の隊長さん、グラーズ三佐がそう言つて、後ろに控えてる数十人の地上・航空部隊の人に手振りで合図。

両部隊の人達はその合図に頷いた瞬間、一気に拠点になだれ込んでいった。

一系乱れない統制のとれた動き。グラーズ三佐はかなり凄い人だということが一瞬で分かった。

見送つた後、あたしとティアは少し離れた廃棄ビル内へ移動する。出来るだけ近く、でも戦闘に巻き込まれないように、そしてすぐに参戦できる離れた位置。

あたしとティアは幹部戦に備えて待機しておかないといけない。だからこそこうして隠れて見ているだけしか出来ない。

戦域の状況をサーチャー越しで見る。

突然の奇襲に慌てた様子の構成員が銃を片手に拠点から出てくる。でも姿を現すのは構成員だけ。アギラスが出て来ない。

と思つたらやつぱり出てきた黒い戦闘機アギラスの・・・1、2、3、4・・・十三機編成部隊。

加勢したい気持ちをも何とか抑えていると、戦域で交錯する通信があたし達の元に流れる。

『噂の航空戦力アギラス計十三機を目視！』

『弱点は判明している！ 1 on 1ではなく、可能な限り複数人で一機を撃墜しろ！』

『第一隊、第二隊、第三隊、拠点内部に進入！ 引き続き任務続行！』

完璧過ぎって言うてもいいくらいの統制のとれたフォスカム部隊と統制されているけど遥かにレベルの落ちるフォスカム拠点の構成員部隊。

地上の勝敗はどっからどう見てもフォスカム部隊の勝利で間違いない。  
あとは、

『アルファ隊、負傷者2！ 医療班！』

裏切りと争いの絶えない人間如きが、我ら栄えある獅子座<sup>レオン</sup>部隊の牙から逃れられると思うな

航空隊とアギラスによる空戦。そんな空での交錯する通信が入ってきた。

航空隊の人が二人が撃墜された。ティアを見ると、“クロスミラージユ”を力強く握ってた。

ティアだって行きたいんだよね。あたしもそうだよ。見ているだけだなんて辛い。

だけど、幹部を相手にするなら、少しでも魔力を温存していないとダメだ。

たとえお母さんだとしても、今度は本気で来そうな気がするから。

それから地上・航空部隊の中からケガ人が出たとか、アギラスを撃墜したってという報告が何度か入る中、ついに待ち望んだ報告が入った。

『こちら第四隊！ 障壁発生システムと思われる装置の破壊に成功

！』

『テストメント構成員から確証を取りました！ 我々の勝利です！』

『あ、アギラスが転移、撤退していきます！』

“オムニシエンス”を守る障壁を発生させる装置を破壊した。

これでひとつ目の目的は果たせたんだけど、結局、お母さんどころか幹部は誰一人として来なかった。

ティアを見ると、あたしの視線に気づいたのか「油断はしない方がいいわ」って安堵半分緊張半分でそう言ってきた。

そして、いまだに戦闘を続行しようとする構成員の捕縛に入って少し、あたしとティアがこの世界に赴いた目的が来た。

『こちらベータ隊！ 白コート、幹部二名を確認！』

『グレース三佐です。幹部との戦闘は避け、構成員の逮捕を続行。

幹部は特務六課に任せます。ナカジマ防災士長、ランスター執務官、お願いします』

グレース三佐に「了解！！」と返す。

幹部二名。以前までならルシルさんと初代リインフォースさんペアか、お母さんとティーダさんペアの二択だったけど、今は間違いなくお母さんとティーダさんのペアだ。

「行くわよ、スバル！」

「うん！ ウイング・・・ローードツッ……！」



帯状魔法陣の道を架けて、一気に戦域に乗り込む。

そこにはモニターで見た通りの光景が広がっていた。

アギラスの残骸。負傷した隊員達と構成員達を搬送する医務官と隊員達。

幹部っていう援軍が来た事で士気を高める構成員と戦う部隊の人達。そして空に人影が二つ。藍色のウイングロード上を走るお母さんと、飛行魔法で空を翔けるティーダさん。

「スバル、部隊を巻き込まないようにここから少し離れるわよ！」

後ろを走るティアの提案に『了解！』って答えて、ウイングロードの行き先を変更しようとしたとき、目の前にノイズが奔った。

でもすぐに止んだから気のせいかと思った。だけど、また視界にノイズが紛れる。

（なに・・・！？　こんなときに視覚異常なんてシャレにならない

）  
「スバル！！」　Buddy　！！

ティアと“マツハキヤリバー”の悲鳴のような呼びかけに意識が前に向く。

未だにノイズが少し紛れる視界に入るのはお母さん・・・じゃない・・・？

誰？　お母さんだよ？　え？　お母さんってこんな顔してたっけ？

「クロスファイア！！」　Shoot　！！

背中からお母さんに向けて放たれるティアのクロスファイアが六基。次の瞬間、あたしはティアに押し倒された。

そして頭の上を通過していく藍色のウイングロードとお母さん。

「何ボサツとしてんのよ！　しっかりしなさい！！」

また来ます！

かぶりを振って、ティアに右手を引かれて立ち上がった。さっき見たお母さんの顔。今までと全然違う、見たことないあの表情。

これはおかしいと思ってティアに話そうとしたら、

嗚呼、目醒めよと声がする

上からティードさんの黄色い砲撃が降ってきた。

“マツハキヤリバー”と“クロスミラージュ”がシールドを張ってくれたおかげで直撃しなかった。ただ、

「え？　なに　きゃあ！？」

「ティア！！　先程と同様の突進が来ます！　つく・・・！！」

ティアが物凄い速さで降下してきたティードさんに抱えられて連れ去られた。

混乱していると、またウイングロードごと突撃してくるお母さんが視界に入る。

視覚のノイズもまだ続いているし、ティアはティードさんに拉致され、一体どうなっかって考える暇も無く・・・

ミ失うノハ私かそれとモ貴方か

真正面から受けるのは危険だと判断して、ウイングロードの軌道をずらして、お母さんのウイングロードと並列させた。

お母さんはすれ違いざまに、ナツクルスピナーが唸ってる右の“リボルバーナツクル”による拳打を放ってきた。

直感で分かる。今までと比べモノにならないくらいの威力を持つてるってことが。

「お母さん!!」

しゃがみ込むようにして避けて、背後に通り過ぎていったお母さんを見る。

明らかに敵意むき出しの攻撃。背中から伝わる嫌な空気。そしてさつき見た表情。

全部が全部おかしかった。お母さんじゃない、まるで何かに操られて……

「まさか……!!」

嫌な予感が頭の片隅を過ぎる。

あたしは、ウイングロードを反転させてあたしと向かい合ったまま佇むお母さんを見詰める。

もう一度「お母さん!!」って呼びかける。だけど返事をしてくれない。

“リボルバーナツクル”を装着した両腕をダラリと下げて、身体を少し左右に揺らす俯いたままのお母さん。

推測が確信へと向かってく。明らかに様子がおかし過ぎる。

そしてあたしの推測は、お母さんの様子の完全な変化によって確信になった。

空を仰ぐように顔を上げてフードの中から見えたお母さんの顔は、さつき見た通り無表情。

そして眼球は黒くて、虹彩は黄金で、どこを見ているのかも分からない虚ろ。

以前と違う点がもうひとつ。両頬に黒い鉤爪みたいな模様が浮かんでた。

それに口を開いて何か言ってるように聞こえる。

「@ ? . . . 3 \* h \$ w ?」

人語ですら無かった。聞き取れない言葉。

間違いなかった。お母さんは誰かに意識を乗っ取られてる。

それは誰の所為か。考えられるのは . . .

「ディア . . . マンテ . . . !」

としか考えられない。カローラ 佐の可能性だつてある。

だけど、真つ先に浮かんだのがディアマンテの顔だった。

そう考えると、ティアを連れ去ったティータさんもまた操られているんじゃない、つてことに至った。

ティアの事もすごく心配なんだけど、

三失うノ八私かそれとモ貴方か

お母さんはお構いなしで攻撃してくる。

さつきと同じウイングロードごとの突進攻撃から繰り出される精確なのかどうかも分からない拳打と蹴撃のコンビネーションを打ってくる。

あたしはそれを避けるかバリアで弾くかで対処。

フードが脱げて、お母さんの変異してしまっている顔が露わになる。

やっぱりあの優しい表情は見る影もない。  
お母さんの攻撃を捌くその間に、

『シャルさん、聞こえますか!?!?』

“ヴォルフラム”で待機してるはずのシャルさんに通信を入れる。  
するとすぐに『状況は分かっている。ごめん、まさかこうなるなんて  
思わなかった』って返ってきた。

『どづいつ、つく、ことですか・・・!?!?』

勢いの無くならないお母さんの連撃をギリギリで捌き続ける。

そして大振りの左ハイキックを受け止めて、そのまま突っ込んで押し倒そうとする。

ただとお母さんの身体をピクリとも動かすことが出来ない。

お母さんは跳んで、左足の蹴りをあたしの顔めがけて打ってきた。

咄嗟に掴んでいるお母さんの右足を全力で上に押し上げる事で、左足の蹴りの軌道を頭上に逸らす。

その間にもシャルさんとの話を続ける。

『クイントさん、そしてティードはある魔族に囚われている。

魔族名は、幻想一属、暴力の災渦ゲヴァルトゼーレ。

対象に無理矢理とり憑いて凶暴化させて精神を食べる、幻想一属の中でも最悪な奴よ。

で、そんなヤバい奴を二人が使うとは思えない。つまり、誰かが二人と魔族を無理矢理融合させた、そう考えられる』

シャルさんの無理矢理って言葉と精神を食べられるって言葉に反応する。

想いの塊とも言えるお母さん達がとり憑かれたらどうなるの・・・??

それにティードさんにも。やっぱり様子が変だっと思ってんだ。  
お母さん達に魔族を無理やり融合させたと思うダイヤモンドに激しい怒りが沸いた。

「つつ……！ シャルさんは、ダイヤモンドだ……思いますか……？」

『セレスとは考えづらい。ならダイヤモンドでしょうね』

シャルさんはそう即答した。

私をミタシてくれますか

ぞわつと背筋に悪寒が走る。

お母さんはあたしから距離を取って、聞きとることが出来ない叫び声を上げた。

その瞬間、お母さんの身体のおちこちから黒い影が沸き上がる。

その影が集束して、両肩から伸びる細く長い影のたくさんの眼が浮かぶ腕になった。

すると視覚のノイズがさらに強くなったり突然止んだりする。

どうやらあのゲヴァルトゼーレの影響みたい。

「アレが……ゲヴァルトゼーレ……？」

ゲヴァルトは猛威。ゼーレは確か心って意味だったっけ……？

古代ベルカ語はイクスの影響で少し覚えた程度だからうる覚えだけど……。

警戒して構えを取っていると、気持ち悪くうねうね揺れる黒い腕がゆらつと動いたと思ったら、

「っ……!？」 Protection

視認できないほどの速さで襲いかかってきた。

“マツハキヤリバー”が咄嗟にバリアを張ってくれなかったら危なかった。

『スバル、そしてティアナ。私が代わりに行って戦うから、あなた達は』

「待つてください！ このままあたしに闘わせてください！」

Load cartridge ウイングロード

カートリッジを一発ロードして、お母さんに接近する為にウイングロードを伸ばす。

そして「ギア・セカンド！」って指示、出力をさらに上げて機動力を上げる。

「はあああああ!!！」

そして突撃。お母さんの両肩から伸びる腕が襲いかかってきた。

それをシールドで弾いて尚も接近。するとお母さんは直接攻撃に転じてきた。

先にお互いのウイングロードが衝突。バキバキって砕ける音が響く。そして今度はあたしとお母さんの番。お互いが右腕を引く。

ナツクルダスター

この渴きをダレガ癒してくレルの

あたしとお母さんが繰り出すのは、ナツクルスピナーを高速回転させて威力を上げた正拳突き。

お母さんの一撃は首を逸らすことでギリギリで回避できた。

顔のすぐ横を過ぎた衝撃波がとんでもなく少意識が飛びそうになるけど耐える。

そしてあたしの一撃はいつの間にか戻ってきていた左肩の影腕に防がれていた。

すぐに右手を引いて、お母さんから距離を少し取る。

『・・・二人がそう言うなら私は引つ込むよ。』

あ、それじゃあ二人にひとつアドバイスしとく。よく聞いてね。

ゲヴァルトゼーレは最悪な性質なわりに性根が呆れるほど弱い。

ある程度ダメージを与えれば簡単に引き剥がせる。それはつまり・

『

また襲いかかってきた二本の影腕を強化されたバリアで弾き飛ばす。

「お母さんを昏倒させるだけのダメージを与えれば勝ち、ってことですね！」

そうシャルさんの後を口にする。

ティアも同じようにティードさんと戦うことを決めたみたいだ。

そう、こればかりは他に人には譲れない。

『そうゆうこと。スバル、ティアナ。やらせて下さいって言ったんだから、絶対に勝つ事、いい？』

「はい、勝ちます!!」

お母さんを救う為に、あたしは絶対にお母さんに勝つ。



そして、出来ればダイヤモンドを一発殴る。ううん、二発三発、何発でも殴る。

そのためにはまず、

「お母さん。絶対にあたしが助けるから・・・！」

ゲヴァルトゼーレによって暴走してるお母さんを止めないといけない。

「@ ? 3\* h \$ W」

ううん、なんて言ってるのかは分からないけど、頑張るよ。

攻撃され続けた所為でバリアも限界になって、無数のヒビが入る。ならこのままバリアごと突っ込んで、ゼロ距離の一撃を入れる。

「マツハキヤリバー、ギア・エクセリオン。お願い」

Gear Exelion・A.C.S・Drive Ignition

“マツハキヤリバー”の側面から大きな二対の羽が生まれる。

魔導師としての力と戦闘機人としての力をフルに扱える事が出来るこのモード。

これなら今のお母さんともきつと渡り合えるはずだ。

「行くよっ！ All right buddy うおおおおお

おおおおお！！」

ヒビの入ったプロテクションを前面に展開したまま突撃する。

懐に潜り込んで一撃。危険だけど一番確実な方法。

お母さんもまたあたしと同じように突撃してきた。さつきと同じ画だ。お互いが右腕を引いて、そして攻撃範囲内に入った瞬間、打つ！

「っはあああああああ！！！」

リボルバーキャノン

「§！！！」

この渴きをダレガ癒してくレルの

最初にプロテクションが砕け散る。

そして衝突するあたしの右拳とお母さんの右拳。

お互いの右手の装着された“リボルバーナックル”のナックルスピナーが激しく回転する。

あたしも譲らない。お母さんも譲ろうとしない。密着点から火花が散り始める。

この競り合いの勝敗を決めるのは力でもなく魔力でもない、ただ強い意志！

「いっつつっつけえええええええ！！！」

“マツハキヤリバー”がさらに出力を上げてくれる。

そして徐々にお母さんの右拳を押し始めた。

でもここで忘れてたらダメなのが、お母さんの左手にも“リボルバーナックル”があつて、両肩から魔族の影腕が生えているということだ。

案の定お母さんは競り合いで負けると判断したみたいで、その三つの腕を攻撃に使ってきた。

Protection EX

なのはさんが使っているプロテクションEXと同じ魔法を発動。そこにシャルさん特製の神秘という魔力のカートリッジでさらに強化。

さっきまで使っていたプロテクションとは強度が違うから、完全に防ぎきる。そして、

「デイバイン・・・バスターアアアー！！！」

お母さんの右拳を捌いて、すぐさま近距離砲デイバインバスターを放つ。

ほぼゼロ距離での一撃だったからまず回避は出来ないはず。

砲撃はそのまま突き進んで消えて、勢いを殺せなかったお母さんは落下、だけどウイングロード上に余裕で着地した。

その姿は異様。白コートは完全に破けて無くなって防護服が露わになるんだけど、ゲヴァルトゼーレの所為でほとんど黒い影に侵食されてる。

「ア、あアアああアア・・・ああアアああアアアア  
—————！！」

お母さんが突然身体を抱いて苦しみだした。

『急いで、スバル！ このままじゃクイントさんはそんな悲しい姿のまま消えてしまうー！！』

シャルさんからの焦りしかない通信が入った。

お母さんが、あの優しく綺麗なお母さんが、あんな訳も分からない影に侵食された姿で消える。それだけは絶対にダメだ。

ウインググロード

何としてもお母さんをゲヴァルトゼーレから救い出す。ウインググロードを空に張り巡らして足場にする。そしてウインググロードを疾走して一気に接近。

「お母さんを・・・返せえええー！！！」

リボルバーシユート

ナックルスピナーの高速回転で生み出された衝撃波を撃ち出す。その一撃を、影腕は腕を交差することで防ぎきった。だけど神秘に強化された衝撃波の勢いには耐えられないで、ウインググロードから宙に弾かれる。あたしはお母さんに向かってダイブ。空中で一撃を入れて、近くのウインググロードに着地する、という算段だ。もう一度デイバインバスターの準備に入る。交差すると同時に一撃を入れる為に。

「当たれえええー！！！」

デイバインバスターを撃った瞬間、影腕が頭上のウインググロードを掴んでお母さんを引き上げた。当然あたしの砲撃はお母さんに当たらないで地上のビルへ向かって炸裂した。

あたしも急いで着地しないといけない。そう思ったときには遅く、

背中に誰かが居る気配を感じて振り向く。  
お母さんは飛び降りて、あたしのすぐ後ろにまで接近していた。  
振り下ろされる左の“リボルバーナックル”による拳打。

### トライシールド

背後にベルカ魔法陣のシールドを展開して拳打を防ぐ。  
でもすぐに右の拳打、そして二つの影腕がシールドを破壊しようとする。  
迫る。

### Wing Road

ウイングロードを足元に敷いてレールにする。  
そして強制的に体勢を崩してお母さんの攻撃を紙一重で避けて、今度はあたしがお母さんの背後をとる。  
影腕が反転される前に一撃を・・・

「マツハキャリバー！！ Load cartridge リボルバー・・・」

“リボルバーナックル”のカートリッジをロード。  
ナックルスピナーの高速回転で生まれた衝撃波をそのまま拳に纏わせる一撃を、

「キャノン！！」

「？x# ！?!?!?!?」

お母さんの背中に打ち込んだ。  
さっきまで止んでいた視覚のノイズがまた奔る。

それが隙となつて、

「うえ・・・うそっ!?!」

真つ逆さまに落ちるお母さんの影腕があたしの身体に巻きついた。結果どうなるか。もちろんあたしもお母さんの落下に釣られて落ちる。

そのままの勢いで地面に背中から叩きつけられた。息が止まる。視界に、あたしを支点に宙返りして、静かに着地するお母さんの姿が見えた。

「@ ? 9 \* h \$ w 「

空を仰ぎながら、でも視線はあたしを見下ろして、身体を左右に揺らしながら進んでくるお母さん。

咽ながらも身体を起こして何とか立ち上がる。と、同時に疾走してくるお母さん。

両腕を後ろにして、ナックルスピナーを高速回転させての疾走。あたしは体勢を整える為にプロテクションを張つての回避行動に入る。んだけど、それを邪魔する影腕。

あたしの左右に伸びて前後しか動けないっていう制限をかけてきた。

三矢うノ八私かそれとモ貴方が

お構いなしに突進してくるお母さんは、両腕を突き出すような両拳の一撃を打ってきた。

あたしはそれを、受けるんじゃなくて跳ぶことで回避した。

そのまま宙で一回転してお母さんの背後をもう一度とる。

それと同時に、

## リボルバーキャノン

一撃を打ち込んだ。お母さんの身体は大きく反り返って、吹き飛んだ。

追撃を仕掛ける。こんなんじゃないぶんお母さんを暴走させてるゲウアルトゼーレを引き剥がせない。

吹き飛んで滑空しているお母さんは、影腕を地面に突き立てて制動をかけて止まる。

と、同時にそのままの体勢で影腕の勢いを利用してこっちに突っ込んできた。

一瞬で距離が数十cmにまで縮む。今さら方向転換できる距離じゃないと判断したあたしは、前転してお母さんの顔面に踵落としを仕掛ける。

ドゴン！と鈍い音。その音は当たった音じゃなくて影腕に掴まれた音だった。

「つく・・・！」

そのまま宙に引っ張られて、そして地面に叩きつけられる。

というところでウイングロードを発動。力任せにウイングロードを疾走することで叩きつけられる攻撃を回避。

そのまま右足を掴む影腕ごとお母さんを引っ張りまわす。

そしてガクツと動きが止まる。左の影腕ががちりとウイングロードを掴んでいるからだ。

なら、と、お母さんに向かって疾走を再開。

だけどそんなにあたしの思い通りにはいかない。

あたしの右腕を掴む影腕が、あたしを勢いよく振り回す。

さすがに今度はウイングロードで、っていうのは無理だ。

視界がぐるぐる回る中、一気に振り下ろされて、今まで以上の力で

地面に叩きつけられた。

全ての感覚を一瞬失う。痛いのかも目を開けているのかも分からない。

何とか感覚を取り戻して痛みに悶える中、ノイズ混じりの視界に映るお母さん。

その顔は涙で濡れて・・・涙・・・？

お母さんが泣いてる・・・？ まさか・・・意識がある・・・？

「おかあ・・・さん・・・？」

空を仰ぎながら目だけはあたしを見るお母さんが泣いている。

それにゲヴァルトゼーレの影腕の拳動が少し変になっているのが分かる。

痙攣してるっていうか動きたくても動けないっていうような震え。ダメージで身体が軋んでいるけど「おおおお！」って叫んで力を込めて立ち上がる。

まだ戦えるだけの魔力も気力もある。何よりお母さんを助けたいって想いがある。

「待ってて、お母さん。すぐに、あたしがお母さんを助けるから」

お母さんを昏倒させるだけの威力を持った一撃。

振動拳、はちよつと行き過ぎかもしれない。下手したらお母さんと・・・。

でも、あたしの仕事は幹部を止める事。それは勝たないといけない事。

それはお母さんを倒す事。でも、お母さんをあのまま倒してそれでいいの？

ダメ。お母さんを助けたいならゲヴァルトゼーレだけを倒さないと



いけない。

だから最強の一撃である振動拳は使ったらダメだ。

Buddy ！！

“マツハキャリバー”の声で思考を止めて前にのみ意識を集中させる。

視覚のノイズが止んだ今、視界に入るのは突進してくるお母さん。涙が宙を流れていくのが見える。

「力を貸して、マツハキャリバー、リボルバーナックル」

All right buddy !

もう小細工も何もいらぬ。真つ向からのシューティングアーツで決める。

“マツハキャリバー”の側面から生える二対の羽を小さくして格闘戦向きに変更。

そしてあたしもお母さんに向かって疾走開始。

一瞬で距離が縮まって、拳打と蹴撃の激しい猛襲が始まる。

お母さんの連撃を捌いては受けて悶えて、あたしの連撃も捌かれては当たって。

もう魔法も何も無い。純粋なシューティングアーツっていう体術のみでの闘い。

「スバ ル§」

「え・・・？」

お母さんの右の拳打を捌いたと同時に聞こえた声の中にあたしの名

前があつたように聞こえた。

それがまたあたしの隙となつた。こういう大事な時に隙をつくつてしまふあたし。

左の拳打を捌ききれなくてまともに胸に受ける。息が出来ない。当たつたと同時にわざと身を引いて衝撃を減らして少し離れたところに着地。

「ただど威力を殺せなくて吹き飛びそうになるのを“マツハキャリバー”の走行機能のひとつアブソーブグリップっていうグリップ力を高めるシステムのおかげでその場で耐えきる。」

「げほつげほつ・・・はあはあはあ・・・！」

咽ながらも大きく深呼吸して息を整える。

その間、お母さんは左右に身体を揺らしながらゆつくりと進んできて、あたしが態勢を整えたと分かると同時にまた突進してきた。今度は何があつても隙はつくらない見せない。

また始まるお互いの拳打と蹴撃の応酬。捌いては当てて、受けては捌いての繰り返し。

と、ここで今まで沈黙してたゲヴァルトゼーレの影腕が動いた。

あたしの首を掴もうと伸びてきた影腕。だつたけど、ピタツと止まつた。

そしてさっきまでみたいに痙攣を起こす。するとお母さんも動きを完全に止めた。

もしかするとお母さんの意思がゲヴァルトゼーレを抑え込んでいるのかもしれない。

だつたら今が最大のチャンス。

お母さんから受け継いだこの“リボルバーナックル”と、あたしを救ってくれた憧れの魔導師ひとの砲撃魔法をもう一度、お母さんを救う

為に。

あたしが20年の時間の中で育んできた想いの全てをこの一撃に込めて、お母さんを救い出す。

「はああああああ！！！！」

お母さんへと“リボルバーナックル”の一撃を打ち込む。

今までに無かった不可視の障壁とお母さんを侵食している影に防がれて、激しい火花を散らす拳打の行く手が拒まれる。

「うおおおおおおお！！！！」

Load cartridge

障壁を突破する為にさらに“リボルバーナックル”のカートリッジを、シャルさんに言われた限界数三発を連続ロード。

視覚のノイズが一気に増える。ほとんど視界が潰されてしまった。

身体中が軋む。ただ痛みは感じない。そしてリンカーコアが暴れまわるのがハッキリと分かる。

でも、お母さんを救う為に今は……！！

「あたしの想いの全てを込めたこの一撃……！！」

影が徐々に散っていく。それに見えない障壁を少しずつ貫いていつてる感覚を得た。

そしてガシャアーン！って障壁が砕けた音が耳に入る。

今だ。今こそこの一撃を……！！

「お母さんを助ける為に……！！」

左腕に発生させたスフィアをお母さんの腹部へ。

「届けええええー！！！！！！」

右の“リボルバーナックル”で膨れ上がったスフィアを殴りつけて、あたしの全力の一撃ディバインバスターを放った。砲撃の光が膨れ上がって、視界がノイズ以上の白に染まる。

撃ち終わった後、一気に脱力して座り込んだ。

大きく肩で呼吸しながら、お母さんが居るはずの場所を見詰める。瓦礫が崩れたことで砂煙がすぐくてまだお母さんを確認できない。

「はあはあ・・・おかあ・・・はあはあ・・・さん・・・はあはあ・・・」

もう一步も動けないほどの疲労感なただけど、お母さんの姿を今すぐにも確認したい一心で立ち上がる。

当然フラついて何度も転びそうになる。でも何とか耐えてゆっくりでも進む。

普通に“マツハキヤリバー”を進めば10秒もしない距離を時間をかけて進み続ける。

その間に砂煙を治まっていつてよく見えるようになる。

「お母さん・・・？ お母さん・・・？ お母さん！」

呼びかける。だけど返事はいつまで経っても返って来ない。

さすがに不安になって何度も「お母さん！」って呼びかける。

さらに進もうとしたとき瓦礫に蹴躓いて倒れそうになった。

けど、あたしは誰かに受け止められた。顔を上げるとそこには、

「・・・ホント、強くなったわね、スバル。おかあさん、負けちゃった」

「・・・おかあ・・・ん・・・お母さん・・・！ お母さん！」

ボロボロだけど正気に戻ったお母さんがあたしを支えてくれていた。あたしは嬉しくってお母さんに抱きついた。触れられるところにお母さんが居る。

「あーあ。さっきまでの勇ましかった子はどこに行ったのやら」

そう笑ってあたしの頭を撫でてくれる。

離れたくない。ずっとこのまま一緒に居たい。

そう思うと涙が止まらなくなる。

泣き止まないあたしを、お母さんは寝かせて膝枕してくれた。

「もぉ。20歳にもなって手のかかる子ね。でもおかあさんらしい事が出来て良かった。っていうのが今の本音でもあつたりするんだけどね」

そう微笑んで、あたしの前髪をそつと撫でてくれる。

本当に小さい頃にお母さんは逝ってしまった。だからこんな時間は無かった。

今がすごく幸せな時間。今をずっと望んでいた。失くしたくない。だけど、それは叶えられない想い、願い、夢。

「・・・ダイヤモンドには気をつけなさい、スバル」

突然真剣な表情になって、お母さんはそう言った。

「お母さん！ やっぱりダイヤモンドがお母さんに・・・!？」

ゲヴァルトゼーレを強制的に融合させた・・・？  
と、口にすることなくお母さんは察してくれてコクリと頷いた。

「私とアグアマリナ・・・ティーター尉の目的は純粋な管理局の改  
革。

そして遺した家族を守る事。復讐じゃないからこそ、第一級命令が  
下されたと同時にダイヤモンドは私とティーター尉を弊害とした。  
そして半ば不意打ち的にダイヤモンドは他の幹部達に黙ってゲヴァ  
ルトゼーレを私達に融合させた。結果は・・・分かるよね」

その結果、お母さんとティーターさんは暴走した。

ダイヤモンド、メサイア・エルシオンって人の管理局に対する恨み  
が他の幹部達以上だってことが分かる。

でも、それでもやっぱり許せない。お母さんとティーターさんを無理  
矢理戦わせるような事をするなんて。

「あなたの部隊長さん、八神二佐。その子がマスター・・・セレス  
を裏切ったっていうのもどうせダイヤモンドの謀略なんだよね・・・  
？」

「どうして、そう思うの・・・？」

「だって、私の自慢の娘を選んでくれて、そしてスバルがついてい  
く人なんだから、あんな汚い手を使うはず無いって、そう思うから」

何かこそばゆい。褒められるとすごく嬉しいのにとても恥ずかしい。  
ギン姉に褒められるのとまた違った嬉しさが込み上がってくる。

やっぱりお母さんはあたしのお母さんなんだ。

「・・・さてと。あの小さくて泣き虫なスバルの成長をこの目で見たし、おかあさん、もう逝くね」

最後にポンツとあたしの頭を優しく叩いた。

さっきまでの温かな気持ちがスツと消えて、すぐにお母さんが居なくなるっていう寂しさがあたしの心を満たす。

がばつと起きたら、お母さんは離れた場所に立っていた。

居なくなる。お母さんがあたしの目の前から消えて居なくなる。

「お母さん!?!」

急いで駆け寄る。するとお母さんはこれで最期だっというのにニコニコな笑顔。

「おとうさんやギンガ、チンクにディエチ、ノーヴェ、ウエンデイにもよろしく言っておいて」

「そんなの！ お母さんが逢って直接言えばいいよ!?!」

まだ辿りつけない。必死に手を伸ばす。

「生まれ変われたら、またあなた達のおかあさんになりたいな」

「あたしだって、何度でもお母さんの娘になりたい!?!」

あんなにも近かったお母さんが今じゃ遠い。

うつすらと姿が揺らぐのが見て取れた。消えてしまう。

「スバル。これからもあなたの信じる道を歩いて。そして、あなたの抱く想い、信念は何があってもあなたは信じ切つて、何ものにも負けない事」

お母さんは大きく手を振って、バイバイ。

「お母さん！！ おかあ うあ！？」

涙で視界が滲んで、お母さんの姿が見えなくなる。

そして何かに蹴躓いて派手に転んだ。すぐに目を袖で拭って顔を上げる。

まだ涙で滲む視界には二人の人影が入った。

そこに居たのは消えていないお母さんと、そのお母さんの両肩に後ろから手を置いた……

「シャルさん……！？」

「よく頑張ったね、スバル。さて、クイントさん。あなたにちょっと協力してほしい事があるんですけど」

お母さんの肩越しから顔を出すシャルさんはあたしに労いの言葉を言った後、お母さんに協力を申し出た。



想いの全てをこの一撃に　　Revolver Knuckle　　(後書き)

母娘対決の勝者はスバル、ということになりました。

スバルもJ.S事件から5年と多くの経験を積んでいるでしょうから（クイントには遥かに劣るでしょうけど）、苦戦はしても勝つてくれるだろうと思いましたので。

それにクイントも魔族の所為で暴走状態。冷静な判断は出来ていなかった、という事でお願います。

さて、クイントはここでは消えることなく、シャルに捕まって何かに協力させられという事になりました。

ランスターの弾丸は全てを撃ち抜く 〉MY answer 〉(前書き)

ティード・アグワマリナ最終戦イメージBGM

魔法少女リリカルなのはStrikers“流星の射手”Them

e of Tiana 〉”

## ランスターの弾丸は全てを撃ち抜く 〈My answer〉

あたしとスバルは、“テストメント”の拠点のあるフォスカムの廃棄都市ドイパームに降り立った。

そこでフォスカムの地上・航空部隊と合流して、他の三つの世界に向かったのはさん達の合図を待つ。

同時に全ての拠点に襲撃を仕掛けることで、幹部達を否応でも分散させるのが狙いだってシャルさんは言ってた。

「ティア、上手く行くかな・・・？」

「あたし達が上手く行くようにするのよ」

スバルが不安そうにしながら少し弱い声色でそう言ってきた。

だからあたしは自分にも言い聞かせるようにそう返す。

こんなところで躓いたら、これから先上手くいくわけがない。

だからこそあたし達に失敗は許されない。

やり遂げる。そう決意を胸に秘めて待機していると、フォスカムの地上部隊の方が来た。

「八神司令より連絡が入りました。1分後、1430時に作戦開始だそうです」

「分かりました。ありがとうございます」

報せに来てくれた隊員の方にそう返す。

14時30分に行動開始。待機状態の“クロスミラージュ”にそっ  
と触れる。

大丈夫。幹部が来てもあたしとスバルならきつと上手くいく。

未だに恥ずかしいから面と向かってハッキリ言えないけど、スバルと一緒にならどんなことも乗り切れるって思ってる。そして、

「時間よ!！」

時間になった事であたしは号令をかける。そしてあたし達は拠点に向かつて一気に駆けた。

拠点のある場所が廃棄都市区画ということもあって、死角が多く簡単に姿を隠せて懐に入り易い。

だから拠点の居るはずの“テストメント”構成員にはまだ気づかれてないはず。

『ティア、上手く行き過ぎてると思うんだけど、大丈夫かな・・・?』

スバルの後ろ向きな念話が来た。

実際あたしもそんな後ろ向きな考えをしだしていた。

スバルと同じ思考なんてシヨックなような嬉しいような微妙な感じだ。

『あんだねえ、もう少し前向きに考えないと足元すくわれるわよ』

『前向き過ぎても考えものだと思うんだけど・・・』

『じゃあいい感じで緊張感保ってなさい』

いい感じってどんなのか言ってる自分でも分からない。

緊張し過ぎてすこし思考にバグが・・・。

『いい感じ、ってどういう感じ?』

案の定スバルもそうだった。

『自分で考えなさい。以上!』

自分でも答えられない問いだから放り出した。

そんなやり取りを終えて、廃棄ビルや瓦礫の陰という陰を利用して、拠点にまで複数の武装隊と一緒に向かう。

ただどここまで“テストメント”の妨害を何一つとして受けないのもおかしい。

『ポジティブに考えれば奇襲が気づかれてない。何せ管理局あたしたちに拠点の位置が知られているなんて思っていないだろうから。

で、ネガティブに考えれば、これは私達を誘き出す罠、ってところね』

でも、初代リインフォースさんから情報が漏れているなんて知られてないからこういう状況は必然だとも思う。

だからあたしがスバルに示した二択の一つ、罠はまずないはずだ。まあ結局のところどっちにしてもあたし達のするべきことは・・・

『反撃に転じられる前に、障壁発生装置を破壊。そして幹部の撃破』  
ただそれだけだ。

「それでは、我々フォスカム地上部隊と航空部隊で襲撃を掛けます。テストメント幹部が姿を現した時はお願いします」

「分かりました。お願いします」

「お願いします」

フォスカム拠点攻略戦に参加する地上・航空両部隊の指揮を任せられた隊長、グラーズ三佐がそう言つて、グラーズ三佐の後ろに控えていた数十人の地上・航空部隊の人に手振りだけで合図。

両部隊の隊員達がその合図に頷いた瞬間、一気に拠点に侵入していく。

一切の無駄のない統制のとれた動き。最高でも20代後半（実年齢は知らない）に見えるグラーズ三佐の指揮官としての腕はかなり高いということが一瞬で分かった。

両隊を見送つた後、あたしとスバルはここから少し距離の開いた廃棄ビル内へ移動する。

出来るだけ近く、だけど戦闘に巻き込まれないように、そしてすぐに参戦出来るちょうどいい位置だ。

あたしとスバルはこの場所で幹部戦に備えて待機しておかないといけない。

早速戦闘が開始された戦域の状況をサーチャー越しで見る。

突然の奇襲に慌てた様子の構成員が銃を片手に拠点からわらわらと出てくる。

だけど姿を現すのは構成員だけで、警戒していた航空戦力のアギラスが出て来ない。

ここには配置されていない？と思った時、空から大気を切り裂く音が聞こえたと共に姿を見せた黒い戦闘機アギラスの十三機編成部隊。今すぐにでも加勢したい気持ちを抑えていると、戦域で交錯する通信があたし達の元に流れる。

『噂の航空戦力アギラス計十三機を目視！』

『弱点は判明している！ 1001ではなく、可能な限り複数人で一機を撃墜しろ！』

『第一隊、第二隊、第三隊、拠点内部に進入！ 引き続き任務続行！』

完璧過ぎるって言うてもいいくらいの統制のとれたフォスカム部隊と、統制されているけど遥かにレベルの落ちるフォスカム拠点の構成員部隊。

地上の勝敗はどっからどう見てもフォスカム部隊の勝利で間違いない。

あとは、

『アルファ隊、負傷者2！ 医療班！』

裏切りと争いの絶えない人間如きが、我ら栄えある獅子座部隊レオンの牙から逃れられると思うな

航空隊とアギラスによる空戦。そんな空で空戦を繰り広げている航空隊とアギラス間で交わされる通信が入ってきた。

負傷者二名。航空隊の人が二人も撃墜された。

あたしは無意識に“クロスミラージユ”を力強く握っていた。

だけど、幹部を相手にするなら、少しでも魔力を温存していないといけない。

それがあたしとスバルに任された大事な仕事。

それから数十分の間、地上・航空部隊の負傷者、アギラスを撃墜したという報告が何度か入る中、あたし達が待ち望んだ報告がついに

入った。

『こちら第四隊！ 障壁発生システムと思われる装置の破壊に成功！』

『テストメント構成員から確証を取りました！ 我々の勝利です！』

『あ、アギラスが転移、撤退していきます！』

地上部隊が“オムニシエンス”を守る障壁を発生させる装置を破壊した。

これでひとつ目の目的は果たせたんだけど、幹部は誰一人として現れなかった。

隣に居るスバルからの視線に気づいて、「油断はしない方がいいわ」って釘をさしておく。

このまま現れないならそれも仕方ない。だけど現れたらすぐに行動に移れるように。

そして、いまだに戦闘を続行しようとする構成員の捕縛に入って少し、あたし達がこの世界に来た目的が現れた。

『こちらベータ隊！ 白コート、幹部二名を確認！』

『グラス三三佐です。幹部との戦闘は避け、構成員の逮捕を続行。幹部は特務六課に任せます。ナカジマ防災士長、ランスター執務官、お願いします』

グラス三三佐に「了解！！」と返す。

幹部二名。現状で二人一組の幹部ペアはお兄ちゃんとスバルの母親クイントさんしかないない。



「行くわよ、スバル！」

「うん！ ウィング・・・ローードツツ！！」

スバルは帯状魔法陣の道ウィングロードを架けて、先行するスバルに続いて一気に戦域に乗り込む。

ウィングロードの下、そこはモニターで見た通りの光景が広がっていた。

アギラスの残骸。負傷した隊員達と構成員達を搬送する医務官と隊員達。

幹部という援軍が来た事で士気を高める構成員と戦う両部隊。

そして空に人影が二つ。藍色のウィングロード上を走るクイントと飛行魔法で空を翔けるお兄ちゃん。

『スバル、部隊を巻き込まないようにここから少し離れるわよ！』

前を走るスバルに念話でそう言うと、スバルは『了解！』と返す。だというのにそのままお兄ちゃん達に突っ込もうとする。

「スバル！！」      B u d d y    !!

すぐ前までクイントさんの疾走するウィングロードが来ているというのに、スバルはそのまま突っ込んでいく。

だからあたしは左手に持つ“クロスミラージュ”の銃口を前に向けて、

「クロスファイア！！」      S h o o t    !!

クロスファイアを六発撃つ。それと同時にスバルに飛びついて押し

倒す。

クロスファイアを避ける為にウイングロードの軌道を上に変更したクイントさんが倒れ伏したあたし達の頭上を通り過ぎていった。

「何ボサツとしてんのよ！　しつかりなさい！！」

また来ます！

かぶりを振っているスバルに右手を差し出して、スバルを立ち上がらせる。

明らかに様子がおかしいのは分かってる。よく見れば、スバルの瞳にノイズが奔っているのが見えた。

視覚障害？　もしそうならスバルは下がらせた方がいい。

そう思って声をかけようとしたとき、

嗚呼、目醒めよと声がする

上からお兄ちゃんの黄色い砲撃が降ってきた。

“クロスミラージュ”と“マツハキヤリバー”がシールドを張ってくれたおかげで直撃しなかった。

だけど、

「え？　なに　きゃあ！？」

すごい速さで降下してきたお兄ちゃんは、あたしのお腹に手を回してどこかに連れて行くこうとする。

ウイングロードに踏み止まるうとしたけど空を飛ぶお兄ちゃんの力に勝てるはずもなく、一瞬でスバルが視界から居なくなる。

「お兄ちゃ・・・ひっ・・・！！？」



(明らかにお兄ちゃんは異常。あの目、あの模様・・・何かがあったとしても思えない)

一番の心当たりは魔族。

でもシャルさんの考えやあたしの考えから見てもお兄ちゃん達が魔族に手を出すとは思えない。

ならあれはどう説明する。真っ先に浮かぶのが“テストメント”幹部の中で一番怪しいダイヤモンド。

誰が知る其が終の果て

ほとんど直感だった。あたしは前へ全力で跳んだ。

するとさっきまであたしが居た場所に魔力弾が降り注いだ。

前転して立ち上がり、周囲を見回すと、白コートを纏ったお兄ちゃんの姿が見えた。

右手に白い拳銃。左手に長く黒いライフル。二挺の銃身の上下に付いている刃が鈍く光る。

お兄ちゃんは空を仰ぎながら、身体を左右に揺らしてゆつくりと歩いてくる。

試しに「お兄ちゃん」と呼びかけてみる。だけど返事はなかった。

返ってきたのは白銃から放たれた魔力弾。威力は今まで以上。

あたしは横っ飛びして回避。お兄ちゃんは休むことなく魔力弾を撃ち続ける。

それをまた横っ飛び、またはバックステップで避けていく。

そこに、

『ティアナ、聞こえる！？』

“ヴォルフラム”で待機しているシャルさんからの通信が入った。

あたしは『聞こえます！ お兄ちゃんの事なんです！』って答えると、

『状況は分かっている。ごめん、まさかこうなるなんて思わなかった』

そう謝ってきた。あたしは無言で続きを待つ。

その間にもお兄ちゃんの攻撃を紙一重で避けて、どうしても避けきれない場合はシールドで軌道を逸らす。

ルシルさんから教わった防御法。受けるより逸らす方が効率的だ、  
っていう教え。

シャルさんは『ティードもそうだなって』って言った後、

『クイントさん、そしてティードはある魔族に囚われている。

魔族名は、幻想一属、暴力の災渦ゲヴァルトゼーレ。

対象に無理矢理とり憑いて凶暴化させて精神を食べる、幻想一属の  
中でも最悪な奴よ。

で、そんなヤバい奴を二人が使うとは思えない。つまり、誰かが二  
人と魔族を無理矢理融合させた、そう考えられる』

そう知りたかった事を教えてくれた。

さっきの、ティードもそうだなって、というのはスバルのお母さん  
も同じ状況という意味だったんだ。

あたしの心の揺らぎにでも気づいたのか、お兄ちゃんは左手に持つ  
黒銃の銃口を向けてきた。

魔力が集まっていく。集束砲撃。威力はきつと今まで以上。

ステップで回避。ダメ、避けきれぬ確信が無い。

防御。それもダメ。防ぎきれぬ威力じゃない事は感じ取れる。

だったら、もう一つの回避方法を選択する。

黒銃の銃口の光が一際強くなった瞬間、あたしは“クロスミラージ

ユ”を右サイド、大体10mくらい先の廃棄ビルの大き目な窓に向けてアンカーショットを撃つ。

「クロスミラージュー!!」

失われし誓いの綺羅星

アンカーの魔力系を引き戻す勢いでその場からビルの中へ全速離脱。それと同時に放たれた砲撃は大きくて、単なる防御じゃ簡単に貫かれるほどのものだった。

ビルの中に入って幻術の魔法を用意していると、シャルさんからの通信が入った。

『スバル、そしてティアナ。私が代わりに行って戦うから、あなた達は』

「いえ、このままあたしにやらせてください。兄は妹のあたしが必ず止めます」

シャルさんの言葉を半ば遮るようにそう言った。

Load cartridge . Fake Silhouette

その間にも二挺ともカートリッジを一発ロードして発動させたフェイクシルエットで、あたしの幻影を数体発生させる。

あたしは現れた幻を見て、やっぱりすごいと驚く。

訓練として本局で数回シャルさんのカートリッジを使ってフェイクシルエットを使った。

神秘を得たことで今までに無かった完全な存在感、気配がある。

余程のことがない限り絶対に気づかれないっていう自信がある。

あたしは窓際からこのフロアの奥に進んで射撃のベストポジションを探す。

接近戦じゃまず勝てない。射撃の腕はお兄ちゃんがまだ上。

砲撃の威力もチャージ時間があんなに短いのに高い。

ならお兄ちゃんが持つていない幻術を駆使して、お兄ちゃんを止めてみせる。

『・・・二人がそう言うなら私は引つ込むよ。』

あ、それじゃあ二人にひとつアドバイスしとく。よく聞いてね。

ゲヴァルトゼーレは最悪な性質なわりに性根が呆れるほど弱い。

ある程度ダメージを与えれば簡単に引き剥がせる。それはつまり・・・

『

このフロアの天井裏に潜り込んでいると、シャルさんからそんなアドバイスが送られてきた。

それに、スバルもクイントさんとこのまま闘う事を決意したようね。

「つまり、兄を昏倒させるだけのダメージを与えればいいんですね。

・・・？」

元よりそのつもりだったことだ。

ゲヴァルトゼーレ何ていうイレギュラーが紛れこんだけど、どちらにしてもお兄ちゃんとは決着をつけないといけない。

『そうゆうこと。スバル、ティアナ。やらせて下さいって言ったんだから、絶対に勝つ事、いい？』

「はい！ もちろんです！」

それつきりシャルさんとの通信は切る。

ビル内にお兄ちゃんの不規則な足音が響いてきたからだ。

天井裏から覗くと、左右に身体を揺らしてフラフラしながら歩くお兄ちゃんが見える。

このフロアの柱という柱の陰に待機させている幻影を動かす。

タイミングは・・・もう少し、まだ早い、まだ、まだ・・・今！！

### クロスファイアシュート

お兄ちゃんを幻影で包囲、それと同時にあたしを含めた幻影の一斉射撃。

お兄ちゃんは両手に持った白銃と黒銃の銃口を幻影のあたしに向けた。

それはつまり、本物と偽物の区別がついていないってことになる。まだ確証じゃないけど、もしそうだったら勝率は高くなる。

誰が知る其が終の果て

嗚呼、目醒めよと声がする

白銃からは十発ぐらいの魔力弾、黒銃からは黄色い砲撃が放たれた。それで幻影の魔力弾のほとんどは消されたけど、本命の本物の魔力弾はそのままお兄ちゃんに直撃した。

「@ ? 3\*h\$w ?!?!?」

吹き飛んだ。直撃を受けたお兄ちゃんの白コートは弾け飛ぶ。

柱の一基に背中から叩きつけられて、ドサリと倒れ込んだ。

これで勝ちならどんなに楽か。だけど、そんなに甘くなんてない。

俯いたままのお兄ちゃんがスツと立ち上がる。と、同時に身体中か



ら黒い影が沸き上がってきた。

お兄ちゃんは苦しいのを耐えるように背を預けている柱を黒銃の刃で斬りつけてボロボロにする。

「っ！！ アレが・・・ゲヴァルトゼーレ・・・！」

影はお兄ちゃんの両腕と二挺の銃を呑み込んで固定されていく。

両腕と二挺の銃が影と完全に同化して、どこか魅力のあった二挺の銃は禍々しくなった。

お兄ちゃんが顔を上げてあたしの方を見た。背筋に悪寒が奔る。

お兄ちゃんの顔で、あんな虚ろで異色の目をしていてほしくない。それと同時に、

誰が知る其が終の果て

白銃（もう白じゃないけど）をあたしに向けてきて瞬時に魔力弾を数発撃ってきた。

“クロスミラージユ”がシールドを展開して何とか直撃は免れたけど、撃つたと同時にお兄ちゃんは跳んで、あたし居る天井裏まで来て目の前に立った。

数センチも無い距離で目が合う。お兄ちゃんの目に映るあたしの顔は怯えていた。

無意識的にバックステップで距離を開ける。

「 3 c k 0 1 y y p ? ? 」

お兄ちゃんも一足飛びで追いついて来て、影そのものと言ってもいい黒銃を振るって眼のような模様が浮かぶ刃を奔らせる。

咄嗟にダガーモードにしたままの“クロスミラージユ”を交差して受け止めるけど、あまりに力が強くて、

「きゃ・・・っ！」

弾き飛ばされて倒れる。でも何とか受け身を取ってその勢いで立ち上がる。

顔を上げると白銃をあたしに向けているお兄ちゃん。

体勢を整える前に撃った。回避？防御？間に合う？どうしよう？

P r o t e c t i o n

“クロスミラージュ”がプロテクションを張ってくれた。

だけど三発目で壊されて、足元に一発、右肩に一発掠めた。

痛みに耐えて、すぐさま反撃のために直射・誘導両方の魔力弾を撃ちながらその場から離脱する。

ただとお兄ちゃんはそれを防ぐでもなく避けるでもなく受けた。

それでも平然と立っているのを見て、並の魔力弾じゃ通用しないことが分かった。

(砲撃か集束砲じゃないとダメかも・・・！)

天井裏から飛び降りて、体勢を整えられる場所を探して走ろうとして、

誰が知る其が終の果て

すぐ目の前を魔力弾が足元へと通り過ぎた。

だから足を止めざるを得なかった。振り向く。天井裏から覗くお兄ちゃんの顔。

虚ろなんだけどあたしを射抜いているその目。やっぱり怖い。

「くっ……！」

違う。今はそれより体勢を整える為に……。

フェイク・シルエット

突発的に幻影数体を作り出してあたしの元に集わせる。

そして一斉にバラける。お兄ちゃんは本物と偽物に区別がついてないはず。

だからこれで少しは時間が稼げる、と思う。

「  
」

お兄ちゃんも天井裏からこのフロアに降り立つ。

ギョロって目を動かして、周囲に散っていくあたしの幻影を視線で追い掛ける。

そして幻影の方に向かって行って黒銃の銃口を向け、

嗚呼、目醒めよと声がする

砲撃を撃った。砲撃でかき消えて幻影と分かるとまた別の幻影に目を向けた。

これはチャンスかもしれない。幻影に魔力弾を撃たせ続ける。

お兄ちゃんは幻影なんて知らずに迎撃態勢に入って魔力弾を撃ち込んでいく。

もちろん幻影だから素通りしていく。

「クロスミラージュ、このまま幻術維持」

Yes, master

消されていくと同時にまた新しい幻影を作り出してお兄ちゃんの前に出す。

時間を稼いで思考する。今すぐにも使えるのはフォントムブレイザー。

それで勝てるかどうか分からない。スターライトの方が確かかもしれない。

でも今はそんな余裕が無い。集束中を狙われたらアウトだ。

Phantom Blazer, Standby

だから砲撃を選択する

右手に持つ“クロスミラージュ”をブレイズモードにして銃口を幻影に対処しているお兄ちゃんに向ける。

ファントムブレイザー

トリガーを引いて砲撃を撃った。

こっちに振り返るお兄ちゃんの目は虚ろ・・・じゃない!?

しっかりといつも通りの目であたしの方を、向かってくる砲撃を捉えている。

黒銃を今さらのように砲撃に向けて、

「僕を越えてみせろっ、ティアナ!!”

クロスファイア・アサルトドライブ

今までのように聞き取れない言葉じゃない理解出来る言葉でそう叫んだ。

それと同時にクロスファイアを集束させての砲撃バージョンを撃つ

てきた。

どうして？とか思っている暇もない。

一瞬で臨界点まで高めたその砲撃があたしの砲撃の行く手を塞ぐ。拮抗するあたしとお兄ちゃんの砲撃。そこに、

「クロスミラージュ！」

「まだまだ！！」

クロスファイアシュート

クロスファイアシュート

あたしは左の“クロスミラージュ”を、お兄ちゃんは影に染まったままの白銃をお互いに向ける。

そしてあたしとお兄ちゃんの絆とも言える魔法クロスファイアシュートを十発撃つ。

撃った直後にあたしは横に跳び退いて押され始めていた砲撃を捨てる。

案の定あたしの砲撃は完全に押されて掻き消された。

それにさつき放ったクロスファイアは全弾相殺された。

だから、

「次！」

全力でフロア内を駆けながら魔力弾を撃っては柱の陰に隠れるを繰り返す。

お兄ちゃんも同じように魔力弾を撃ちながら駆けて、柱の裏に隠れて盾にする。

あたしも柱の裏に隠れてお兄ちゃんの出方を見る。

(精密射撃だとまだあたしの分が悪い・・・か。  
幻術によるかく乱は・・・かなり賭けっばい)

どういうわけかゲヴァルトゼーレによる暴走から脱したお兄ちゃん。  
そんな今のお兄ちゃんに幻術が通用するか分からない。  
でもお兄ちゃんに無くてあたしに有るモノと言ったら幻術しかない。

#### フェイクシルエツト

だから何度でも幻術を駆使してお兄ちゃんを打ち負かす。  
背を預けている柱から顔だけを出して様子を見る。  
お兄ちゃんが動いた気配はない。ならここで仕掛ける。  
一斉にじゃなくて一人ずつ、そしてタイミングをずらしてお兄ちゃん  
が隠れているはずの柱に向かわせる。

すると魔力弾が何発を柱の陰から放たれていく。  
どうやら今の状態でもお兄ちゃんに幻術を見敗れる術は無いらしい。  
その間にスフィアを二十基展開。通常ならもう少し溜めが必要だけ  
ど、シャルさんの魔力のおかげでほとんど時間がかからなかった。  
そこでふと思う。

(スターライトのチャージ時間ももしかして短縮されているんじゃない  
・・・)

確証は無いけど通常時よりかは間違いなく短縮されているはず。  
それにここまで周囲に魔力が満ちている状況もなかなか良い方向  
だ。  
スターライト使用も視野に入れつつ、幻術に対応しているお兄ちゃん  
の居る柱へ向かって、

## クロスファイア・フルバースト

待機させておいたスフィアを一齐に放つ。

全弾集中砲火。フロア、ビル全体を揺るがすほどの爆発による振動。それでもあたしは転倒しないよう走ってこのフロアから下のフロアに向かう。

だけどその前に、

「幻術。なかなか真贋が判別できない。やるな、ティアナ。だけど・・・」

## インパルス・ストライカー

お兄ちゃんの声が響く。そして、粉塵の奥からものすごい光量が発せられる。

次に振動。視界が揺れる。そしてビキビキッって嫌な音が足元からした。

走りながら下を見ると、床一面に亀裂が入っていた。

お兄ちゃんはどうやらこのフロアを下に落とすつもりのようなのだ。

「無茶苦茶　しまっ・・・!?!?」

階段までもう少しというところでさらに強い振動。

その所為で蹴躓いて転倒。それと同時に崩れていく床。

床と一緒に落ちる前にアンカーショットを天井に向かって撃つ。

「はあはあはあ・・・あやうく一緒に落ちるとこ」

「まだまだ甘いな」

アンカーショットで天井にぶら下がったまま居ると、背後からお兄ちゃんの声。

しまった、と思った時にはもう遅くて、空を飛んでいるお兄ちゃんは黒銃の刃で魔力糸を切断した。

未だに砂塵に覆われている下のフロアに落下する最中、あたしを見降ろすお兄ちゃんと視線が合う。

少し楽しそうなお兄ちゃん。何だろう、こうしてお兄ちゃんと闘っているあたしも……って……

「楽しいわけなあああいつー!!」

結構命がけなバトルを楽しめるほどの余裕も無いし、戦闘狂でもないから全然楽しくない。

フローターを使って視界が最悪なフロアに降り立つ。

そこに、

#### クロスファイアシュート

容赦なく降り注いでくる魔力弾の雨。

紙一重で（ほとんど掠ってる）避けていると、魔力弾の起こす風で粉塵が少し晴れる。

チラツと見えたお兄ちゃんに向かってあたしも負けじとクロスファイアを撃つ。

そこから始まったのがクロスファイアの応酬。  
でも下に居るあたしには圧倒的に不利な戦況。

（今すぐお兄ちゃんをあの高みから落としてやりたい）

本気でそう思い始めた。これではまるで兄弟ゲンカみたい。

「あ」って声を出す。あたし、今、少し笑ってた……？



本当に小さい頃に亡くしたお兄ちゃん。

どんな形であれ、あたしとお兄ちゃんは今だけという時間に存在している。

話せる場所に居る。触れられる場所に居る。

そう、なんだ・・・あたしは、それが嬉しいんだ。

「どうしたんだティアナ。そんなので僕を越えて行けるのか？」

クロスファイアの雨が止む。この間に一手を打っておく。

あたしはそれに「あたしはお兄ちゃんを越えていく」って返す。

するとお兄ちゃんは少し黙った後、

「そうか。それだったらこんなところで躓いているわけにもいかないな」

と返してきた。

粉塵が完全に収まっていつて視界がクリアになる。

見上げると、宙に静かに佇むお兄ちゃんが居た。

あたしは「うん」と答えて、左の“クロスミラージユ”の銃口をお兄ちゃんに向ける。

「テストメント幹部アグワマリナ。あなたを逮捕します」

宣言。するとお兄ちゃんは、

「やってみてくれ。ティアナが今まで学んで高めてきたその力で」

と言って、白銃を向けてきた。

睨みあい。すごく長く感じたけど、実際にしてみれば数秒間。

「クロスファイア・・・シュートツッ!!」

同時に撃つ。あたしは十一発。お兄ちゃんも同じ十一発。

お互いの間で相殺し合うクロスファイア。そしてお兄ちゃんが直接向かってきた。

振るわれる黒銃。だけどそれは、

「幻術!？」

あたしの視線の先に居る幻影あたしが攻撃を受け、揺らいでまた元に戻る。お兄ちゃんが混乱しているのが分かる。クロスファイアを本物なのに身体が偽物。

まさかあたしが床下に居るなんて思っても居ないはず。

あたしは素早く床下を移動して上半身を出して、

クロスファイアシュート

お兄ちゃんを包囲するように配置した幻影に紛れて撃つ。

そしてすぐに床下に潜る。これはかなり地味でカッコ悪い。

だけど手段は選んでいられないのも確か。

上からステップを繰り返してあたしの攻撃に対処している音がする。暴走状態じゃない今は魔力弾でも防御しないといけないみたい。

また離れた所から上半身を出す。

でも、

「見つけた・・・!」

ヴェロシティ・レイド

黄色い高速砲が目前にまで迫る。

## P r o t e c t i o n

“クロスミラーージュ”がギリギリのところまでプロテクションを展開、直撃は免れた。

ただど衝撃だけはどうしようもなくして周囲の床板ごと吹き飛ばされる。

転がっている最中に頭を打ったのか額から一筋の血が流れる。

「・・・どうして見つかったのか、知りたい顔だな、ティアナ」

グローブで額の血を拭いながらお兄ちゃんの方を見ているとその声をかけられた。

そんな顔をしていたつもりはないけど、そう言われたのならそうなんだろう。

すると無言のお兄ちゃんの周囲に黄色スフィアが集まってきた。

「簡単だよ。サーチャーを使ったんだ。探索用の魔力スフィア。周囲3m圏内の物体の動きを察知して、術者である僕に点滅することとで報せる。」

生前、デバイスを持っていたときはデバイスが教えてくれたけど、この神器にそんな機能は無いからね。

だから点滅なんて原始的な方法を取らざるを得なかったけど、それで十分だったというわけだ」

そう言って白銃・黒銃両方の銃口を向けてきた。

というか神器？ やっぱりあの二挺の銃は普通の武装じゃなかった。

「僕の勝ちだ、ティアナ。今からでも管理局を辞めて別の仕事に就

いてくれ、頼む」

最後通告。冷たい言葉とは裏腹に本当にあたしを心配しているのが分かる。

お兄ちゃんにこれほど想われて幸せ、だと思う。ただ、

「あたしは・・・辞めるつもりはない。それにまだ・・・」

D a g g e r M o d e

「この闘いを諦めたつもりもない!!」

二挺の“クロスミラージユ”をダガーモードにして突進。

お兄ちゃんは「ティアナツ!!」って叫んで、でも否応なく迎撃態勢に入った。

まず左手の“クロスミラージユ”を振るって魔力刃を奔らせる。

それに対してお兄ちゃんは左手の黒銃の刃で受け止める。

激しい火花が散る鏝迫り合い。その最中に右手の“クロスミラージユ”の銃口を向ける。

至近距離での一撃をお見舞いするために接近戦を挑んだんだから。

「クロスファイア・バーストドライブ!!」

さっきお兄ちゃんが使ったクロスファイアの砲撃バージョン。

当然あたしも使える技術だ。驚愕するお兄ちゃんを余所にトリガーを引いて撃った。

視界が白に染まる。至近距離だからこっちにも少なからず衝撃が来る。

バックステップで衝撃を逃して、体勢を整えてすぐさまクロスファ

イアを煙幕の中に叩きこむ。

もう一切合切の迷いも手加減もあってはいけない。

それじゃあ負ける。だから強気に立ち向かう。

撃ち続けていると煙幕の中からお兄ちゃんがこっちに向かって走ってくる。

「まだまだああー！！！！」

迫るクロスファイアを二挺の銃の刃で斬り裂いていく。

次は足元を狙って撃つ。バックステップで少し後退した後、さらにステップで避けていくお兄ちゃん。

今までのように飛ばせばもつと速くて確実に避けられるのにそれをしてないお兄ちゃんを疑問に思いつつ、攻撃を続行。

「ランスターの弾丸は・・・全てを撃ち抜く・・・！」

あたしはそれを証明する為に管理局に入って、ずっと頑張ってきたんだ。

エルジアではお兄ちゃんにその想いを否定されたけど。さつきも辞めるように言われたけど。それでも・・・。

僕を乗り越えられないなら、そこで局員としての道を閉ざすんだ

それがあたしの事を想ってくれている事だとしても。

真っ直ぐお兄ちゃんを見る。視線が交差する。

お互いに引けない強い意思がある。

お兄ちゃんもあたしに二挺の銃を向ける。

同時にトリガーを引いた。左右一発ずつの直射弾。

あたしの魔力弾はお兄ちゃんの二挺の銃を弾き飛ばして、お兄ちゃん

んの魔力弾は左手に持つ“クロスミラージユ”を弾き飛ばした。

そこでこのフロアの空気がガラリと変わった。

身体が突然震えだす。寒いから？ 違う、そうじゃない。

これは・・・恐怖・・・!?

この何とも言えない空気を放つお兄ちゃんを見る。

目が合った。その目はまた黒く染まって虹彩が黄金に戻っていた。

「aaaaaaa!!!」

また人語じゃない言葉で咆えた。

それと同時に今までなりを顰めていたゲヴァルトゼーレが動き出す。影がお兄ちゃんを飲み込んで薄紫色の甲冑となった。魔族との融合。右腕だけが影のまま大きくて長い砲身になった。

後であたしは知る。

お兄ちゃんの持っていた銃、白銃は“浄化せし白帝”、黒銃は“凱旋せし黒皇”っていう名前、その二つの神器を手に行っているおかげでお兄ちゃんは完全に暴走する事がなく自我を保っていた。

だけどあたしはその神器を弾き飛ばしたことで、抑止力を失ったお兄ちゃんを取り込まれた、と。

お兄ちゃんの姿がブレる。一瞬で間合いを詰められた。

左手があたしの首を掴んで、そのままあたしを押し倒して馬乗りになる。

「っあ・・・はっ・・・が・・・!」

首が締まって満足に息が出来ない。

右手に持つ“クロスミラージユ”の銃口を甲冑に押し当ててトリガ

ーを引き続ける。

但至少し動く程度で引き剥がせない。

視界の端に弾かれたもう一挺の“クロスミラージユ”が目に入る。空いている左手を伸ばして・・・取った。

二挺の“クロスミラージユ”をフルフェイスの兜に向けて連射。そこでようやくお兄ちゃんは離れてくれた。

「げほっげほっげほっ・・・はあはあはあ・・・おに・・・い・・・ちやん・・・」

「??」

お兄ちゃんは完全に自我を失くしていた。

「・・・クロスミラージユ、カートリッジロード。レストリクトロック」

Yes, master. Load cartridge.  
Restrict Lock

二挺の“クロスミラージユ”のカートリッジを全弾ロード。

心臓が跳ねる。身体がすごく熱い。リンカーコアがとんでもなく活発になっている。

けどこれくらいしないと、きっとあの甲冑は破壊できない、お兄ちゃんを解放できない。

「あ・・・ぐっ・・・あっ・・・うく・・・」

「aaaaaaaaaaaaa!!--」





両手に持つ“クロスミラージュ”のトリガーを引いて先制砲撃を放った。

それと同時にお兄ちゃんの砲撃も放たれる。

視界が光に満ちて何も見えなくなる。世界から音が無くなる。

視界が揺れる。光だけの世界の中、あたしの意識はここでプツンと切れた。

夢を見る。小さい頃、お兄ちゃんのおぶってもらった時の事。

仕事で疲れているのにあたしと遊ぶ為に時間を割いてくれた優しい大好きなお兄ちゃん。

大きくて温かくて、そして優しい背中。

「・・・あ・・・あたし・・・？」

まどろみの中、あたしは目を覚ました。

誰かに・・・背負われてる・・・？ 誰？

あ、もしかしてまだ夢の中かもしれない。

だってさっきまでお兄ちゃんと闘って・・・

「・・・つて、あたし！！」

一瞬で現状がおかしい事に気づいて身体を起こすと「わっ！？」って声が聞こえた。

それは今あたしを背負う人の声だった。

「お、お兄ちゃん・・・！？」

「・・・負けたよ、ティアナ。完膚なきまでの僕の負けだった。」

ティアナはもう僕の手の届かないところにまで飛んで行けるんだな」

あたしを背負っていたのはお兄ちゃんだった。

どうして？だとかいろいろと聞きたい事がある。だけど今は、今だけ……

「お兄ちゃん!!」

お兄ちゃんの背中に思いつきり抱きついた。「わわっと」って困惑の声。

本当はもう歩けると思うけど、もう少しこのままで、お兄ちゃんの温かさを感じていたい。

「ティアー……!!」

スバルの声。前を向くと、そこにはシャルさんとスバル、そしてスバルを隣で支えているクイントさんが立っていた。

「あはは……!!」

フォスカムの拠点攻略戦は、あたし達の完全勝利に終わった。

ランスターの弾丸は全てを撃ち抜く。My answer (後書き)

うーん、ティアナのスターライトの詳細が良く分からない。

フロントムシフトってホントはどんな？ モードってどれ？

それ以前に、クロスミラージュのティアナに対する呼び方変わり過ぎ。

STRIKERSではYes sirだし、サウンドステージではYes, ma'amで、VividではYes master。一つに絞ってくれえええー！！

もう、Yes masterでいいか、このやるー！！

それが僕達の歩む道 (Belief and Pride) (前書き)

メルセデス・グランド最終戦イメージBGM

魔法少女リリカルなのはStrikers“若き槍騎士”Them  
e of Eriol”

## それが僕達の歩む道 〈Belief and Pride〉

12月2日 PM 14:25 第25管理世界フェティギア

僕とキヤロは、“オムニシエンス”の障壁を発生させるシステムのある拠点に赴いた。

ここは自然豊かな世界フェティギア。そのモンテブリーズ平原に、このフェティギアの地上本部に席を置く航空部隊と地上部隊と一緒に待機している。

拠点のある場所は、今僕たちが居るところから大体2km先の平原のど真ん中。

たぶん奇襲にならない。あまりにも平地過ぎるから隠れる場所が何も無い。

そして今僕たちは、他の拠点のある二つの世界に向かったのはさん達の合図を待っている。

同時に全ての拠点に襲撃を仕掛けることで、幹部達を否応なく分散させるのが狙いだってシャルさんは言ってた。

(でも・・・本当に僕のところにグラナードは来るんだろうか?)

本局で会った時に言われた。僕にはもうグラナードと闘う資格はない、と。

相手が誰であれ、理由がどうであれ、認めてくれた事は素直に嬉しかった。

だけど、ディアマンテの所為でそれは白紙に戻った。それに、幻滅した、とも言われた。

そして止めようとしていた復讐を止めることも出来なかった。

結局、僕はグラナードを救う事は出来なかったんだ。

「エリオ君・・・あんまり思いつめちゃダメだよ？」

こういう残念な結果になっちゃったけど、それでもまだ全部が終わっちゃったわけじゃないよ」

「キャラ・・・うん、ありがとう」

隣に座るキャラが僕の左手を取って握ってきた。

それですごく安心出来る。キャラとの付き合いももう6年くらいになるのかな。

“機動六課”設立の時に初めて会って、それから一緒に居ることが多くなつた僕のパートナー。

いつの間にか僕の中でフェイトさんやルシルさん以上に大きくなつていった大切な存在<sup>ひと</sup>。

そう思うと少し顔が熱くなった。そのままキャラを見ていると、

「あ、ご、ごめんなさい！」

キャラは僕の視線に気づいて謝って、何だか顔を赤くして僕の手を取っていた両手を離そうとした。

だけど今度は僕がキャラの手を取る。

「っ！ え、えっと・・・エリオ君・・・？」

「あ・・・っと、何か落ち着くから、よかつたらもう少しこのままで・・・」

「あう・・・う、うん」

そのまま手をつないだまま無言で待つ。  
すると一人の武装隊の人が歩み寄ってきて、

「八神司令より、1430時に行動開始、との連絡が入りました」

「了解しました」

そう報告してくれて、敬礼して答えると、武装隊の人もまた敬礼して移動指揮車に戻っていった。

14時30分。あと3分で、ここはきつと戦場になる。

3分なんて、いつものように笑い合っていればすぐにでも過ぎる時間。

ただどこから戦いになると思うとすごく長く感じられる。

僕の左手を握るキャラの右手の力が強まる。

「・・・大丈夫だよ、キャラ。僕達はきつとこの悲しい戦いを乗り越えられる。」

だって僕達はあの特務六課の一員なんだから」

“特務六課”の一員。それだけで強くなれる気がする。

あんなにすごい魔導師達と一緒に一年と短かったけど訓練に励んだ  
“機動六課”時代。

その時の教えを胸に戦えば、どんな苦境も乗り越えて行ける。

するとキャラも「うん、そうだね！」って笑ってくれた。

よかった。キャラはたぶんこれから起こる戦いに緊張していたんだ。  
もし僕の言葉でその緊張が解けたんなら嬉しい。

「時間だ。各員、出撃っ！！ てめえら、絶対に帰ってこいよ！」

フェティギアの両隊を指揮するランボルギーニ二佐の号令が下され

て、両隊は「オオオオ！」って吠えながら一斉に拠点のある場所を目指して移動を始めた。

元より奇襲するつもりがなかったみたいだ。

そして僕とキャロは幹部戦に備えて待機する事になっている。

僕達も一緒に戦いたいけど、少しでも魔力もカートリッジも温存しておきたかった。

元は八神部隊長達の考えだけど、僕もそう考えていた。

「おい、その二人！ こっち来て待ってるっ！」

指揮車に残って前線の全体指揮をするランボルギーニ二佐がコーヒカップを片手に僕達を呼ぶ。

僕とキャロは断る理由も無く、指揮車の中に入る。

入った瞬間、コーヒの香りが充満し過ぎていてビックリした。

「まあ座れ座れ。大事な客人に持て成しもしないんじゃないじゃランボルギーニの名が廃るってな」

豪快に笑うランボルギーニ二佐は60歳くらいの快活なおじさん（少し失礼かも）で、上下関係隔たりなく接する人だ。

空いている椅子に座ると、ホットコーヒの入ったカップを手渡された。

それに「ありがとうございます？」と少し疑問形のお礼を言うと、

「あー気にすんな。あんな寒空でじつと座ってるのも辛いだろ？

ここで前線の様子を見ながら待っている方が賢明だぜ。

とは言っても、防護服には防寒機能もあるが。まあ気分だな」

そう笑いながら前線の様子を映し出すモニターの方に視線を移した。



僕とキャロも不謹慎な気がしてならないけど「いただきます」と言  
つて、コーヒーを飲みながらモニターを見る。

映るのは、地上部隊と銃を武装した“テストメント”の構成員の戦  
い。

そして航空部隊は、翼に蟹のシンボルが描かれた黒い戦闘機アギラ  
ス一五機編成部隊と交戦を開始した。

「お前達はお前達の仕事に来るまでここでじっと待ってる。

なあに、んな心配そんなツラしてなくても、すぐにテストメントの  
拠点くらい落とせるさ」

勝つ事を信じて疑わないランボルギーニ二佐。

するとキャロが「どうしてそんなに自信があるんですか？」って訊  
ねた。

「簡単さ。今出てる奴らはみんな俺の大事な仲間だからな。

仲間かぞくを信じるのに理屈も何もいらねえよ。いるのはただ信頼だけさ。  
はは、ちよいとクサかったか？」

そう言つて、自分のカップにコーヒーのお代わりを注いで苦笑。と  
いうより照れ笑い。

無償の信頼で繋がっているフェティギアの、ランボルギーニ二佐の  
部隊。

なんか良いな、って思っていると、「もう一杯どうだい？」と勧め  
てくれたので「いただきます」って答える。

実はさっきまで緊張で喉がカラカラだった。だからこんなにおいし  
いコーヒーだと進む。

「えっと、そういうのすごく素敵ですね」

キヤロがカップから口を離して、ランボルギーニ二佐に微笑みながらそう言った。

「特務六課もそうなんじゃないか？ 俺から見ても良い部隊だよ。若い連中が管理局の未来を担っていくつてのは良いもんだ。

だからよ、テストメントの言い分もまあ分からなくもねえんだ。さつきまで流れていたテストメントの目的つてやつな。

管理局の未来を担う若者の為に、私腹を肥やす今の上層部を一掃する……」

僕達とランボルギーニ二佐の間に一つのモニターが浮かび上がる。モニターに映るのは若い頃のランボルギーニ二佐と数人の武装隊員。それぞれの人の顔を見ていく。そしてある一人の男性を見て、驚愕する。

キヤロもそうみたいで、カップを取り落としそうになっていた。ランボルギーニ二佐の隣に立って笑っているのは間違いない……

「俺の隣に居る一見真面目そうな奴、メルセデス・シュトゥットガルトつて言つてな。

俺が今まで世話見てきてやった仲間かそくの中でも悪ガキでな。

腕は良いんだが、まあよく仲間内でバカやってよ。俺に面倒を掛けまくつた悪ガキ。

だが、突然事故死なんかしやがつてよ。仲間かそくにはよく言ってるんだ。俺より先に死ぬんじゃないやねえぞつてな。だというのにメルセデスは先に逝いちまった。

確証はねえんだがメルセデスもきつと……いや、何でもねえや、忘れてくれ」

メルセデス・シュトゥットガルト。グラナードの正体だ。

ランボルギーニ二佐とグラナードは昔からの知り合いだった。

そしてランボルギーニ二佐は気づいているんだ。  
グラナード、シュトゥットガルトは事故死じゃなくて殺されたんだ  
って。

でもそれを証明する事は出来ない。泣き寝入り……。

『エリオ君。グラナードの正体の事、教えた方がいいのかな……？』

キャラロが念話でそう訊いてきた。

僕もそうしたいけど、でも現状幹部の正体に関しては“六課”以外に他言無用。

変に混乱させるような事態を起こさないようにするためにだ。  
でも、ランボルギーニ二佐になら話しても良いかもしれない。

もしかしたらグラナードが現れた時、話し合いが出来るかもしれないからだ。

『怒られるの覚悟で話してみようと思う』

キャラロにそう返すと、キャラロは頷いて賛成してくれた。

モニターを消して、寂しそうにコーヒーを飲むランボルギーニ二佐に声をかけようとしたとき、

『こちらシグマ・4！ 白コート、幹部一名を確認しました！！』

「っとと、来やがったか！ 頼むぜ、お二人さん！！」

拠点の陥落を終えていない状況で姿を現した幹部。

一人ということはグラナードかもしれない。

モニターに映る幹部の体型からして男。

シャルさんの予想通りなら、ルシルさんもダイヤモンドも現れない

はず。

それならやっぱりグラナード、ということに……。

「……行こう、キャラー！」

ランボルギーニ二佐にグラナードの事を話しておきたかったけど、今はまずグラナードのところに。

「う、うん！ フリードッ！」

### 竜魂召喚

真の姿“白銀の竜”になったフリードに乗って、グラナードの居る戦場に向かう。

グラナードの居る場所に向かう途中、

槍騎士と竜召喚士……。間違いはない、特務六課だ

蟹座部隊・リーダーカンセルより各機。裏切りの六課魔導師を最優先で撃墜せよ

こっちにアギラス二機が来た。

僕は“ストラダー”を構えて、キャラも“ケリユケイオン”をサイドモードにして迎撃に備える。

まずはこっちが先制。フリードのブラストレイがアギラス二機に向かう。

それをロール機動で回避して、僕達の脇を通り過ぎていく。

すぐさま反転してきて、面前にヨツンヘイムの魔法陣を展開、砲撃が来る。

キャラがフリードに「気を付けて」と身体を撫でると、フリード

は一鳴き。

アギラスの魔法陣が一際強く輝く。

(・・・来る！)

だけど、僕達が行動するよりも、アギラスが砲撃を撃つよりも、航空隊がこっち向かって来るよりも、それよりも、何よりも早く・・・

「そいつはオレんだ。邪魔すんじゃねえよ」

穿たれし風雅なる双爪

翠色の砲撃が僕達の背後から迫る二機のアギラスを文字通り消滅させた。

砲撃が来た方、声がかっきりと聞こえた方を見る。そこには、

「陽気なる勝者より蟹座部隊全機。六課の魔導師はオレが落とす。  
だから手を出すんじゃねえよ。お前らは偽善者を片付ける」

拠点より少し離れたところに、フォヴニスに佇むグラナードが居た。

そして頭上に居る僕達をフォドの中からしっかりと見つめている。それから後ろに振り向いて拠点とは別の方を見て、フォヴニスを反転させてそっちに歩き出した。

「エリオ君。もしかして・・・」

「うん。グラナードは僕を誘っている。あの先に来るように・・・」

フリードに向かってもらおうように頼んで、拠点を遠く過ぎてその小さな丘に降り立つ。

グラナードは完全に拠点を防衛しようとしていない。

グラナードがここに来た理由は拠点の防衛じゃなくて、もしかして・

「グラナード・・・僕と、闘う為に・・・？」

自惚れとも取れる発言。

グラナードはフォヴニスの頭から跳んで、トンツつと地面に着地した。

「仕方なく、だ。本局でお宅らと別れて、それから何度か施設を襲撃した。

その中で戦った局員どもは全然ダメだ。何にも楽しくねえ。全く燃えねえ。

そこでふとお宅の顔が浮かんだのさ、エリオ・モンディアル。

それで分かっちゃまった。オレと闘うに値するのは、どこを探しても・

・・・お前しかいないとなあ！ 騎士エリオよおー！！！」

### フォヴニス 黒鎧の毒精武装

翠色の光が視界いっぱい広がる。

視界がクリアになったとき、僕達の目の前にはフォヴニスと融合した甲冑姿のグラナードが居た。

シャルさんとの泣きそうな特訓で慣れたとはいえグラナードからは変わらず威圧感を感じていた。

だけど今のグラナードからは何も、威圧感なんてモノが感じられない。

(これが・・・本気のグラナードなんだ・・・！)

激しい威圧感は無く、あるのは静かな闘気。

手が、身体が震える。けどそれは恐怖からでも寒さからでもなくて、  
そうだ、嬉しいんだ。

闘うに値する一人の男として認められているのが、僕は嬉しいんだ。

「キャラ。キャラとフリードは拠点攻略に行つて」

“ストラーダ”の矛先をグラナードに向けつつ、後ろに控えている  
キャラそう告げる。

当然キャラは「わたしも一緒に戦う！」って言うってくれるけど、

「ごめん。本当に勝手だけど、僕は、僕一人の力でグラナードに勝  
ちたいんだ」

グラナードに警戒しながらキャラに振り返る。

胸の前で手を組んで、すごく心配そうな顔を見せるキャラ。

心配かけて、無茶を言つてごめん。だけど、男として、キャラを僕  
一人の力で守れるようになる為に、

「グラナードは僕が越えないといけない最初の壁なんだ」

僕一人で闘い、そして勝つ。

エルジアのように、キャラ大事な存在を守れない事にならないように。  
僕は僕だけの力でグラナード試練を乗り越えてゆく。

「・・・八八、察してやってくれ、召喚士キャラ。」

男には、どうしても引けない一線つてもものがあるんだよ。

だが、せめてブーストだけは掛けて貰え。でないとマジで死ぬぞ」

「そ、そうだよ！ だったらせめてブーストだけでも・・・！」

「いいんだ。キャラにここまで付き合わせておいてすごく勝手だけど、僕は・・・！」

沈黙が流れる。チャンスなのにグラナードは腕を組んで待っている。やっぱりグラナードはこういう場面では律義で、優しいんだ。

そして僕とキャラはさっきから見つめ合ったまま。

するとキャラは少し俯いて、それから顔を上げたキャラの表情は、

「・・・分かったよ。エリオ君がそう言うなら、わたしは手伝わない。

だから応援する。エリオ君、絶対にグラナードに勝って戻ってきてね」

僕が勝つと信じてくれている凜としたもので。

フリードに跨って空へと飛んだキャラに「必ず」と答える。

キャラを見送り終えると、グラナードが「若いつて良いねえ」と感慨深げにそう言った。

「ストラーダ、フォーム・ツヴァイ・・・！」

Explosion・D?sen Form

“ストラーダ”のブースター数を増加しての突撃力アップ。

僕がグラナードに唯一勝っているスピードで圧倒してかく乱、ヒットアンドアウェイで勝つ。

グラナードも組んでいた腕を解いて身構える。背中に生えるハサミの付いた二本の腕と尾。



その三つが僕の方に向く。交わる視線。遠くで爆発音が響いたそれを合図として、

「特務六課、竜騎士エリオ・モンディアル。行きます！」

「テストメント幹部、グラナード陽気なる勝者。行くぜえ……！」

ソニックムーブ

翠閃に穿たれる罪人

ソニックムーブと“ストラーダ”のブースターで一気に距離を詰める。

対するグラナードはハサミと尾から無数の光線を放ってくる。

光線の軌道が読める。シャルさんのカートリッジ、神秘のおかげだ。避けて避けて避けまくる。ここまでは第一次オムニシエンス決戦と同じ。

ただど攻撃を避ける事が出来てもこっちの攻撃が当たらなかつたら意味は無い。

「はあああああ！！！」

メッサーアングリフ

「甘ええええっ！！！」

光線を避けきつて、接近出来たところで電撃が付加された魔力刃での攻撃。

だけど命中直前で、左のハサミが“ストラーダ”を挟みこんだ。そして今度は右のハサミが身動きの取れない僕の方に向く。

「どうした、騎士エリオ！ お前の力はこんなものか！？」

穿たれし風雅なる光爪

僕に向くハサミだけに翠色の光が灯る。

こんな至近距離で受けたら間違いなく負ける。それ以前に死ぬ。

光が臨界点に達して砲撃が放たれるその直前に、

「紫電一閃！！」

電撃を纏わせた拳打でハサミの側面を打って、僕に向いたハサミを別のところに向けさせる。

それと同時に放たれた砲撃は地面を焼いて、大きな裂け目を作り出した。

威力が桁違いに上がっている。このまま居たら今度は直撃させられてしまう。

もう一度左手に電撃を纏わせて、「ストラダー」を挟みこんでいる右のハサミを殴りつける。

ハサミが少し開いたのを見てすぐさまグラナードから離れる。そして少しの膠着。だけどそれは一瞬。すぐさま戦闘再開。

「ストラダー！」 Vorsto

石突部分のリアブースターを使って突進。

真正面からの刺突攻撃。グラナードは僕に向けて砲撃を撃とうとしたけど、途中で止めて回避行動をとった。

“オムニシエンス”で僕が砲撃を斬り裂いた事を思い出したようだ。大きく跳んで僕から距離を取ったグラナード。

ただどまだ僕の攻撃は終わってない。

フェアフォルクゲング  
「追撃ッ！」

使っていないかったレフトサイドブースターを点火させ、避けきった安心感で油断しているグラナードに追撃をかける。

いきなりの僕の方向転換に、グラナードは避けようとするけど身体が追いつかない。

だけどそれを無理矢理身体を捻じって掠める程度にダメージを抑える。

「やっぱり楽しいぜ。お前との闘いは！ なあ！？」

背後から聞こえた歓喜の叫び。

すぐさまライトサイドブースターを使って反転。

振り向いた先、すでに二つのハサミによる砲撃体勢に入っているグラナードが居た。

穿たれし風雅なる双爪

放たれる二条の砲撃。僕に集束するように放たれた砲撃。

それは僕を頂点にした三角形のような状態と言える。

だから恐れずに砲撃の間のスペースに身を躍らせる。

一気にグラナードの懐に入り込む。

「はあああああああああ！！！」

ライトサイトブースターとリアブースターを同時点火。

高速回転しながら接近して、遠心力いっぱいの一撃を叩きこむ。

「ぐおあ！？」

砲撃を撃つた後の硬直で防御もろくに出来なかったグラナードは面白ほど吹き飛んだ。咄嗟に構えて直撃を防いだ腕の甲冑が砕かれて破片をまき散らしている。

だけどグラナードは何度かバウンドした後すぐさま宙で体勢を立て直して着地。

「やるじゃねえか・・・！」

ここで僕は確信した。

グラナードとフォヴニスがバラバラだと僕の勝率はかなり低い。だけどフォヴニスと融合して人間大になっているグラナードに十分勝てるってことが。

「だがまだだッ！」

そびえ立つは冥府の支柱

グラナードは尾を地面に刺した。

すると僕の立つ周囲の地面からビキビキって音がし始める。

そして次の瞬間、至るところから翠色の砲撃がまるで柱のように突き出してきた。

S o n i c M o v e

とりあえずその場から動く。

目に見える攻撃なら避けやすいけど、足元から突き出してくる攻撃はなかなか察知できない。

ただこの攻撃の救いは、突き出してくる直前、地面が光るってことだ。

それに気を付けていれば直撃だけは免れる。

地面からの砲撃が止んで、一度仕切り直しとなった僕とグラナードの闘い。

するとグラナードは突然飛ぶように地面スレスレで僕に向かってきた。

まさかのグラナードからの接近戦。一瞬戸惑うけど、

「この・・・っ!」

レフトサイドブースターだけを点火、ブースターの勢いで加速された斬撃を振るう。

それを左のハサミで受け止めて上に逸らすグラナード。

当然僕の懐がガラ空気になる。そんな僕の顔に迫るグラナードの右手。

ガシツと僕の顔を掴んで、吹っ飛ばした。一度バウンドして着地、体勢を整える。

顔を上げた時、すでにグラナードは僕の目の前にまで来ていた。

閉じた左のハサミを僕の腹部に押し当て、僕の身体を持ちあげる。

「もっとだ! もっと上があるはずだ! そいつを見せてみる!

そう、極限を超えてみせろっつ!」

#### 天地穿つ戦慄せし翠星

バカッとハサミが開く。視界に映るのはハサミの中に煌く翠色の魔力スフィア。

すぐさまソニックムーブで逃れようとしたその瞬間に攻撃は放たれる。

## トライシールド

“ストラーダ”の機転。僕に直撃する前にベルカ魔法陣のシールドが展開される。

それで直撃は免れたけど、スフィアは僕をシールドごと空に打ち上げた。

冗談にならない高度にまで打ち上げられる前にソニックムーブでなんとか離脱。

空中で体勢を整えて、グラナードから少し離れた場所に着地する。

でも明らかに攻撃のチャンスだったにもかかわらず、グラナードは僕が地面に降り立つまで何も仕掛けてこなかった。

それが返って怪しい。何かがあるんじゃないかって疑いたくなる。

「咲け」

“ストラーダ”を向けていると、グラナードがそう囁いたのが聞こえた。

すると空が翠色の光に染まる。そして、無数の光線が空高くから降り注いできた。

グラナードが打ち上げたあのスフィア。アレが空で炸裂して光線となって降り注いできたんだとすぐに理解した。

「な・・・っ!?!」

さっきまでの光線の雨とはまた威力が違った。

細い光線なのに、その威力はまさに砲撃。次々と地面を穿っていく。舞い散る破片に頬が切れて血が流れる。だけどそんな事を気にしていられない現状。

なかなか止まない砲撃クラスの光線の雨。

この戦域そのものからの離脱を考えての全力かつ連続のソニックム

ーブ。

「おっと逃がさねえぞお・・・おあらっ!!」

少し振り向くと、グラナードのハサミが伸びてきているのが目に入った。

右前方に跳ぶように方向転換。ズドンツと僕の左隣りの地面に二つのハサミが突き刺さった。

「外したか！」

何とか光線の雨の範囲外に出て、グラナードに身体を向ける。

未だに降り注ぐ雨の中、ひっそりと佇むグラナードは、トントントとステップを踏み始めていた。

そして、

「あーやっぱりオレには接近戦の方が合ってるよなッ！」

そう言った後、また物凄い速さで接近してきた。

ランボルギーニ二佐に見せてもらったあの画像データ。

それに映っていたグラナードが持っていたのは長槍型のデバイスだった。

メルセデス・シュトゥットガルト。名前からしてベルカ出身であってもおかしくない。

僕と同じ槍騎士。だから接近戦に強くて当たり前だ。

「ストラーダ！ Form Drei・Unwetter Form  
rm うおおおお!!」

“ストラーダ”を、僕の電気変換資質を最大限にまで高める形態に

変形させる。

接近してきたグラナードに振り向きざまの、

### サンダーレイジ

“ストラーダ”のヘッド部分に接触した対象とその周囲に電撃を打ち込む小規模範囲攻撃を叩きつける。

その攻撃をグラナードは二つのハサミで挟むという方法で止めた。だけど、

「つぐううう・・・うおおおおああああ！！？」

シャルさんの神秘満載の魔力によって効果を高められているこの一撃の威力は高い。

さすがのグラナードも完全防御が出来ずに感電しているのが見て分かった。

たぶん完全防御出来ると思っていたところでの感電に、グラナードは驚きからか一切の動きを止めた。

僕に巡ってきた最大にしておそらく最後のチャンス。

「おおおおおおおおお！！！」

### シュタールメツサー

独楽のように回転して、電撃を纏わせた“ストラーダ”の魔力刃の連撃を叩きこむ。

未だに身体が自由がきかないグラナードは防御も回避もしないで受け続ける。

10回以上斬り付けた時、グラナードの腕とハサミの腕が動いた。痺れが取れてきたみたいだ。だからこそ、最後の一撃に全力を込め



る。

「いっけえええええ！！」

全力の振り下ろし。咄嗟にハサミを交差させて防御したグラナード。だけど、左のハサミは僕の一撃、というよりシャルさんの神秘に耐えられずに粉碎された。

グラナードのフルフェイスの兜から「バカな・・・っ!?」って困惑の声が響いてきた。

まだ行けると確信。距離を取らずにさらに連撃を叩きこむ。振るってきた尾を“ストラーダ”の柄で受け止めて、しゃがむようにして捌く。

かなり手が痺れたけど、このチャンスだけは絶対に逃さない。立ち上がりの勢いで、刺突を繰り返す。グラナードは背を逸らすことで避けて、バックステップで僕から距離を取ろうとする。

「逃がさない！ ストラーダー!!」

*Explosion · Zerschlagen Spie*

カートリッジを二発ロード。さらに魔力を、威力を、神秘を増加する。リンカーコアが荒れ狂う痛みを耐えてソニックムーブで距離を詰める。

そして、“ストラーダ”の刺突。でも矛先はギリギリ届かなかった。グラナードが不発だと安堵しているのが分かる。だけど、この魔法は直接攻撃じゃない。

そう、この魔法は僕にとって唯一の・・・遠距離攻撃魔法。

「ツェアシュラーゲン・シュピースツ!!!」

「ぐおおああああああああああああああああ！！！！？」

“ストラーダ”の矛先から激しい電撃の槍が放たれて、グラナードを貫いた。

グラナードは甲冑の破片をまき散らしながら何度もバウンドして、最後は両手を地面につき跳ねて着地した。

そしてガクツと膝を折って座り込んで、俯いたまま動かなくなった。

「はあはあはあはあ・・・やった、のか・・・？」

ツエアシューラーゲン・シュピース。オリジナルはシャルさんの魔術・雷牙閃衝刃。

この三日間、捜査の合間に僕がシャルさんとの模擬戦の中で会得した遠距離魔法。

グラナードとの決着の為だけに身に付けた魔法だ。

息を整えて、“ストラーダ”を構えたままグラナードを見詰める。グラナードは動かない。でも倒したとも思えない。

何か、嵐の前触れのような嫌な感じがする。

十数秒くらい待って、警戒しながら近づこうとしたとき、

「・・・くく・・・くくく、はははは、あーはっはっはっはっはっはっは！！！」

最高だ！ こいつは面白い！ 前情報に無い魔法じゃねえか！

オレのフォヴニスがここまでポロポロにされちまうとはとんでもねえ！

だがまだ足りねえな！ もっと！ もっとだ！ もっと激しいバトルをしようぜ！」



両手を地面について獣のような体勢を取ったグラナードは尾を、僕  
じゃなくて拠点の方角に向けた。  
まさか、そう思った時にはもう遅く、グラナードの尾から、

### フォヴニス的光

ソニックブームを発生させながらの砲撃が、キャロたちの居る戦場  
に向かった。

振り向く。砲撃は一直線に戦場に向かって炸裂した。  
大地に縦一線の傷を付けた後、遅れて爆炎が上がる。

「な・・・っ!? キャロオオオオーーーー!!!」

あそこにはキャロが居た。ランボルギーニ二佐も居た。同じ管理局  
の仲間が居た。

安否を確認するためにすぐさま通信を繋げる。

だけどノイズが紛れるだけで何も返って来ない。

なら念話は? . . . . . キャロの声が返って来ない . . . ?

「. . . . . グラナアアアーーーードオオオーーーー!!!」

グラナードに跳びかかって押し倒す。

ほとんど無意識に“ストラダー”じゃなくて素手でグラナードの顔  
を殴っていた。

何回も何回も何回も何回も何回も何回も、殴って殴って殴って殴っ  
て . . . . .

「soうだ . . . いi顔だ、騎士E R i o . . . !

もつとda! 激s Iい感情を見せる! 怒れ! 憎め! 怨め

! 良心つていutaガwo外se!!!」

グラナードは笑顔だ。殴られても痛みがないとでも言うつように笑い続ける。

そんな僕とグラナードに影が差す。それだけじゃなくて声もする。翼を羽ばたかす音もする。

あまりの怒りで我を忘れていたから気づくのに遅れた。

この声は、この音は、ずっと前から聞き慣れた僕にとってあって当たり前前のモノ。見上げるとそこには、

「キャロ！ フリード！」

「エリオ君！！！」

キャロとフリードが居た。

大きく羽ばたきながら地面に降り立ったフリードから降りてくるキャロ。

キャロの無事を確認した途端、僕がどれだけキャロの事を想っていたのかハッキリと分かった。

あそこまで我を忘れるほどにまで怒れる僕は……。

「良かった……無事で、本当に良かった……キャロ」

「あ、う、うん。その、拠点を制圧した事でわたし達の仕事は終わったから、念のために離れていたんだ。

えっと、ほら、もしかして次元跳躍砲が来るかもしれないし、だから……」

しどろもどろで説明するキャロ。

落ち着いたから気づいたけど、フリードから降りてきたのはキャロ

だけじゃなかった。

もう一人、ランボルギーニ二佐もそこには居た。視線は僕じゃなくて、仰向けで倒れているグラナードにのみ注がれている。

『拠点制圧をしているときにランボルギーニ二佐にだけ話したの。グラナードの正体がメルセデス・シュトゥットガルトで、その目的が復讐とエリオ君と闘うことだって』

ランボルギーニ二佐とグラナードを見てみると、キャロからそんな念話が来た。

まさかの再会がこんな形だなんて、二人の今の心境がどうなのか分からない。

声をかけることも出来ない雰囲気キャロと二人で黙って見ていると、ランボルギーニ二佐が突然グラナードの身体をゲシツと蹴る。

「えええええ!?!」

するとグラナードは「痛ツ!?!」と言って身体を起こした。何か一触即発な空気が漂い始めた気がする。

「よお、メルセデス。後輩にえらいやられようじゃねえか」

「・・・うつせえよ、鬼隊長オヤジさん。油断しただけさ、まだ負けちゃいねえ」

ランボルギーニ二佐と話すグラナードからはさっきまでの危険な感じが一切無くなった。

生前親しかった人との再会だからだろうか。その表情は少し嬉しそうで、だけどそれ以上に寂そうで悲しそうで。

「そんな妙なモンの力で勝ってお前は嬉しいのか？」

ランボルギーニ二佐がフオヴニスの甲冑を見てそう言った。

グラナードはそれに対して何も言わない。その顔は言われなくても分かってるって顔だ。

するとランボルギーニ二佐は懐から細長い結晶を取り出して、それをグラナードに差し出す。

「これは・・・！ オレのデバイス・・・黄昏の戦槍！」  
デンメルング

あの結晶はグラナードが生前使っていた長槍型デバイスの待機モードらしい。

デンメルング。確か夜明けや夕暮れって意味だったっけ？

「槍騎士の先輩として、槍騎士の後輩に腕を見せてやれよ、メルセデス。」

お前にはそんなつまらねえ力より、騎士としての力の方が合う。違うか？」

グラナードはしばらく逡巡して、デバイス・デンメルングを手にとった。

ランボルギーニ二佐が僕の方に振り向いて、

「もう一度、このバカと闘ってやってくれ。今度は騎士の決闘としてよ」

そう言って頭を下げた。僕の答えはもう決まっている。

「僕の方からお願いします。グラナード。いえ、騎士メルセデス・

シュトウツトガルト」

スピーアフォルムに戻した“ストラータ”を構える。  
するとグラナードはゆっくり立ち上がって大きく深呼吸。  
そして、

「・・・あばよ、フォヴニス」

そう呟いてフォヴニスとの融合を解いた。

光となって消えていくフォヴニスを見送ったグラナードはデンメルングをギュツと握りしめて、僕を見た。

その表情は晴れやかと言っても良いくらいのスッキリした顔だった。

「メルセデス・シュトウツトガルト。行くぜ・・・！」

デンメルングを起動して武装隊の防護服を着用、2 m近い全部が白の長槍を構えた。

僕もその名乗りに応えるように「エリオ・モンディアル。行きますよ！」と返す。

静まり返る丘。戦闘開始の合図はフリードの「きゅくるー」っていう鳴き声だった。

十 十 十 十 十 十 十

エリオ君と生前の騎士としての姿に戻ったグラナードの決闘が始まった。

それはお互いが引かない激しい闘いで、だけど二人ともすごく楽しそう。



「こんのおおおおー！！！」

「どこ見てんだッ!? 脇が甘いぞ!」

魔法を何一つ使わない純粹な槍術だけの決闘。

そのまるで踊っているような闘いは、グラナードがエリオ君を鍛えているような感じで進む。

わたしの隣でエリオ君達の闘いを見守るランボルギーニ二佐は小さく笑って、

「あんなに楽しそうに闘いやがって。バカ息子が・・・!」

制服の袖で目を拭った。わたしは見ないフリをする。

今はそれが良いのになって思うから。

そうしてわたしも二人の闘いを静かに見守り続ける。

そして、どれくらい時間が経っただろう。ついに決着の時が訪れた。

ガキイン! っていう激しい金属音、そしてドサリと人が倒れる音、最後にガシャンとデバイスが地面に落ちた音がした。

「エリオ君!!」

尻もちをついているのはエリオ君。

勝ったのはグラナード、そして負けたのがエリオ君だった。

エリオ君のデバイス“ストラダー”は柄の途中で折れていて、静かに地面に転がっている。

わたしは急いでエリオ君の元に駆け寄る。

「はあはあはあはあ・・・ごめん、キャロ・・・はあはあ、僕、負けた、はあはあ・・・」

大の字になって丘に倒れこむエリオ君が、駆け寄ったわたしを見て謝ってきた。

わたしはどう答えていいのか分からなかった。だけど、わたしは自然に、

「うん。負けちゃったけど、すごくカッコ良かったよ」

そう大して実も無い言葉を口にしていた。

そこで、もう少し気の利いた言葉でも言えば良かったのに、なんて激しく後悔。

でもエリオ君は、「そっか」って微笑んでくれた。

カサッって草を踏む音がした。振り向くとグラナードが側まで来ていた。

「どこ見てんだ？　引き分けだよ、騎士エリオ」

そう言つて“ストラダー”と同じように真っ二つに折れている白い槍“デンメルング”を見せてきた。

穂から石突まで余すところなくひび割れて、半ばあたりで折れているその槍を。

それから“デンメルング”を待機モードにして、ランボルギーニ二佐に放り投げた。

「鬼隊長さんオヤジ、そいつさ、よかつたら、これからの世代の局長ヤシのために役立ててやってくれ。

それで、役目を終えたら初期化して、オレの墓にでも供えてくれればいいさ」

「そいつが、お前の遺言か？」

「そうだな……。ああ、それが、オレがこの世界に最期に遺す遺<sup>テスト</sup>言だ」

ランボルギーニ二佐にそう話して、最後にわたしとエリオ君に振り向く。

「さて、と。そんじゃそろそろ逝くわ。なかなか楽しかったぜ、騎士エリオ。」

オレが最期の時間を過ごすには勿体ねえくらいに充実した闘いだつた、感謝してる」

「騎士メルセデス！ あのを！ えっと、僕達！ 六課はカローラー佐を裏切つてなんかいない！」

身体を起こしたエリオ君がそう言うと、グラナードは「だろうな」つて返してきた。

それつてつまり知っていた、つてことになるのかな……？

「薄々は気がついていたさ。冷静になりゃあおかしな点ばかりだ。だが、ボスはそうはいかねえ。完全に絶望して、管理局を目の敵にしてるはずだ。」

それについてくサファイア口とトパーシオも当然だ。

カルド隊ももうそろそろ限界だろうな。マルフィール隊もどうだかな」

嘆息して、踵を返してわたし達に背を向けた。

そしてグラナードは足を止めて最後に、

「なあ騎士エリオ、召喚士キヤ口。お前達はこれからどんな道を歩

きたい？」

そう訊いてきた。わたしとエリオ君は顔を見合わせて頷く。

「自分の決めた信念に誇りを持って突き進む……」

「それが僕達の歩む道、これから歩みたい道だと思います」

そう答えると、グラナードは少しだけこっちに振り返る。

その表情は満足そうな笑みで……。

「……そうか。忘れんなよ、その心を」

そう一言。グラナードの身体が白く光って、粒子となって天に昇っていった。

「……キャラ、ヴォルフラムに連絡をお願い。

僕は少し……疲れ……眠りたい……」

「エリオ君!？」

グラナードの終焉を見送ったことで気が緩んだようで、エリオ君はわたしにもたれかかるようにして眠りについた。

エリオ君をそつと動かして倒し、わたしの膝枕に頭を預ける。

それから“ヴォルフラム”へと通信を繋げる。

「こちらフェティギア拠点制圧チームのキャラです。

拠点制圧完了しました。それと、グラナードは……還りました」

グラナードの最期はどう言っているのか分からなかったから、還っ

た、という事にした。

『……そうか。お疲れ様や、キャロ。それにエリオも。迎えを出すからしばらく待機しとってな』

八神部隊長に「了解しました」と返して通信を切る。

「……俺がボウズを運ぶよ」

ランボルギーニ二佐のその提案を丁重に断りする。

「もう少しだけ、このままで……」

わたしの膝枕で眠るエリオ君の頭をそつと撫でる。

小さい頃にフェイトさんやルシルさんにしてもらった事。

そしていつか、大きくなって、大事な人が出来たらしてみたかった事。

「あ、雪……」

見上げると、空からは雪が降っていた。

それが僕達の歩む道 〈Belief and Pride〉(後書き)

あー、12月15日。連載一周年目だ・・・。

密かに一周年以内で完全完結させようと目論んでいたのですが、失敗だあ。

何のためにゲームや車いじりを封印していたのやら・・・(そこまでするか?)

まあそんな話は放っておいて、幹部グラナードの終焉となりました今回。

なんかエリオとキャラのノロケ話してみたいで締まらない(汗)でもまあ、お年頃ですし大目に見てやって下さいな。

それに、エリキャラはフェイトとルシルを見て過ごしてましたし(苦笑)

次回で幹部最終戦の前半戦が終わります。

さて、すでに決定しているサブタイトル通りに進めばこのEXエピソードも残り9話。

もしかしたら文字数とか気にしてしまうので増えるかもしれません。ということ、もうしばらくお付き合ってください。

あ、ちなみに次回からまた一話ずつの投稿となります。

悲しみの砲光は冬空を照らして 〔Celestial Birds〕 (前書き)

あー何かコールサインとか面倒になってきた。もう名前がいいですよね……？

マルフィール隊最終戦イメージBGM

ACE COMBAT 5 THE UNSUNG WAR

“

Winter Storm”

悲しみの砲光は冬空を照らして　～Celestial Birds～

12月2日　PM　14:20　第9管理世界エストバキア

“オムニシエンス”を護る障壁の発生を司る施設を制圧するため、私とレヴィは件の施設のある離島が臨める防波堤に居る。

「島・・・か。厄介なところにあるなあ・・・」

応援部隊としてのエストバキア航空部隊には離れた位置で待機してもらっている。

いくら何でも防波堤にずらりと武装隊が並んでいたら、「今から攻撃に行きますのでよろしく！」と言っているようなものだからだ。ちなみに地上部隊も借りられたけど、施設が海上だと文字通り手も足も出ないため待機してもらっている。

「勝敗を決するファクターは空戦能力、ということになりますね、これは。」

念の為にもわたしとなのはさんも出た方がいいのでは・・・？」

「そうだね。シャルちゃんには幹部が出てくるまで魔力を温存するように言われたけど、そこは注意していればおそらく大丈夫だとは思っ」

私の右隣りに居るレヴィの話にそう答える。

するとレヴィは「わたしが可能な限りフォローしますので安心して



ください」なんて心強い事を言ってくれた。  
私はレヴィに「お願いね」と微笑んで返す。  
それから数分して、「ヴォルフラム”のはやてちゃんから通信が入った。」

『なのはちゃん、レヴィ。今から5分後、1430時に制圧開始でお願いするわ』

『なのは、レヴィ。そっちの拠点は海上らしいから、地上部隊は期待できないと思う。』

だから二人とも、“幹部が出てくるまで魔力を温存するように言われたけど、そこは注意していればおそらく大丈夫だとは思う”って考えてるだろうから、今の内に言っとく。

二人が制圧戦に参加することは許す。だけど幹部が来るのは間違いないから、それまでに魔力と体力を消費し過ぎないように。以上！』

一言一句間違えてないシャルちゃんに少し引きながら（盗聴とかしてるんじゃない・・・？）も、拠点制圧戦への参加を認めてくれたのは素直に感謝。

というか、完全にシャルちゃんが仕切っちゃってるよ・・・まあいいけど。

通信も切れて、今度は私が待機してもらっている航空・地上両部隊に、1430時に制圧開始との連絡を入れて、時間までひっそりと待つ。

そして、

「レイジングハート！」「アストライアー！」

「セットアップ！！」「」

All right . Barrier Jacket , Ex  
ceed Mode

防護服を着用して、航空部隊に「お願いします！」と通信を入れると同時に施設のある離島を目指して一直線に飛ぶ。

エストバキアの航空部隊、総勢60名が私とレヴィに続いて施設を目指す。

そして結果として奇襲は成功。島にギリギリまで近づくまで動きを示さなかった施設要員。管理局が来た<sup>わたしたち</sup>と知ると否や急いで銃による迎撃に移ったけど、余程飛行が苦手な魔導師じゃないと当たらないような攻撃ばかり。

それを察した構成員達は、次の手段として自動魔力砲台による対空砲火を行ってきた。

これはかなりの精密さで、私とレヴィを除くエストバキア航空隊が被害を受け始めた。

そこで私とレヴィが砲台制圧を買って出て、早速砲台制圧に動き出す。

「前から思ってたけど、レヴィってなんて言うか・・・魔砲少女って言葉が似合うね・・・!」

Photon Smasher

高速砲の連射で施設周辺に設置されている砲台を破壊していく。

「魔法少女、ですか？」と首を傾げるレヴィに、「魔法じゃなくて砲撃の砲で魔砲少女。どう？」って説明すると、レヴィは少し考える素振りをした。

「なのはさん・・・はい、そっくりそのままお返ししますね」

ハーツィース・ドライヴ  
紫光掃破

満面の笑みを浮かべる “モード・バスター” 形態のレヴィが放つ特大砲撃。

私の破壊した砲台は砲身が折れる程度だったけど、レヴィが破壊した砲台は紙屑のように弾き飛んでいく。

レヴィの砲撃を見たエストバキア航空隊は若干引いて、レヴィの浮かべる笑みで顔を赤くしたり青くしていた。

「知ってますよ、なのはさん。幼少時は元より今でも個人砲台としては最強らしいじゃないですか」

ハーツィース・ストライフ  
紫光連砲

レヴィの四肢にある環状魔法陣からの四連砲撃。

それで二基の砲台を沈黙させて、航空隊の道を作り出した。

航空隊は島へと降り立って、“テストメント” 構成員の逮捕と障壁発生装置破壊に乗り出す。

それを援護するレヴィ。これは私も負けていられない。

「それは買いかぶり過ぎだと思うけど・・・！」

エクセリオンバスター

エクセリオンバスターで砲台一基を沈黙させることに成功。

「それにレヴィの方が派手で威力も凄まじいし。さっきのドライヴとか、ルシル君を一撃のもとに下したムーンライトとか」

ヴィヴィオと組んでルシル君と闘った時のムーンライト・ブレイカー。

その場に居る魔導師によって威力は異なるけど、ヴィヴィオと二人で弱体化しているとはいえルシル君を倒した事には正直驚いていた。

Load cartridge

シャルちゃんのカートリッジとは別の、局から支給されている通常カートリッジを二発ロード。

「それを言ったら、なのはさんのスターライトもとんでもないじゃないですか。

それにバスター二種、スターズ、クラスター、どれを見てもなのはさんの方が魔砲しょ……」

レヴィがハツとした表情になって口をつぐんだ。

「……どうせもう少女じゃないですよ、もう二十四歳ですよ」

少女の“しょ”で口をつぐんだレヴィに少し不機嫌そうに言うと、

「ち、違うんです！ 少女、なんてかえって失礼かなと思ったんですよ！

だ、だから、その、ですね、なのはさんは素晴らしくて優しくて温かくて綺麗で、いつかわたしもそうなりたいなあ、なんて、そう目標にしているお姉さんなんです！

ですから、“少女じゃねえだろ、もう”なんてこれっぽっちも思っ  
てませんから！」

慌てふためくレヴィが、私に背を向けて別の砲台に砲撃を撃ち込み

ながらそう返してくる。

明らかに最後のやつの方が本音っぽいのは気のせいかな？

「フフ、そう」って笑ったら、レヴィが「ヒイツ！ お助け！」って怯え始めた。

そこでどうして怯えられるのかが分からない私は少しへこんだ。

その間にこちらに砲口を向けてきた砲台が一基。

### Acceler Shooter

気を取り直してシューターを発射間近の砲口の中にピンポイントシユート。

当然砲身は内から破裂して使い物にならなくなった。

それを見たレヴィが「精確過ぎて感動です！」っていう褒め言葉を贈ってくれた。

うん、もう怯えていないようで良かった。でもまだ少し引つかかるよ。

「ありがとう、レヴィ。さ、油断せずにこのまま全基潰すよ」

「了解ですッ！！（ハチの巣にされるかと思った）」

それから空に残っている十名ばかりの航空隊員と一緒に全ての砲台を破壊した。

「制圧開始から30分……。一向に現れる気配がない、おかしいですね」

空での仕事を終え、施設内制圧の報を待つ私とレヴィ。

すみれ色のベル力魔法陣の上で女の子座りしているレヴィが、幹部が現れない事に疑念を抱いている。

もちろん私もそう。幹部だけなら転移でもすれば数分とかからずに来れるはずだ。

何せエストバキアこそがどの拠点よりも “オムニシエンス” に一番近いのだから。

だから他の拠点よりこちらの拠点の方が最も早く状況が変わるはず。そしてそれは突然に起きた。全身に悪寒が走る。それと同時に “ヴォルフラム” から通信が入った。

『エストバキアに強大な魔力反応が転移してきます！ 気を付けてください！！』

私はシャルちゃんのカートリッジとマガジンを用意。

レヴィも立ち上がって、気合を入れる為か両頬をパチンと叩いている。

#### 風雅なる赫沫の散々華

空が一瞬だけ赤く光ったのを感じとった私とレヴィは、すぐさまその場から離れる。

遅れて降り注ぐ私達二人だけを狙って来た無数の赤い羽根。

航空隊は幹部が来たのだと察してくれたようで、自主的に私達から離れてくれた。

広く澄み渡る青空を見上げると、攻撃じゃない赤い光で構成された羽根がひらひら舞っている。

そして “ソレ” は私達の目の前にまで降りてきた。絶句する。

『まさかピンポイントで施設を制圧しに来るとは……。どこで情報を得た、高町……。？』

私の目の前に居る “ソレ” の頭の一つからアレッタ三佐の念話によ

る声が聞こえてきた。

（まさか目の前に居る“コレ”が・・・アレッタ三佐率いるマルフ  
イール隊・・・？）

戸惑う。だけど、そうなんだと理解するしかない。

目の前に居る三つ頭・六枚翼へと変わってしまったっている“赫羽の荒  
鳥ファノ”が、今のマルフイール隊の姿なんだと。

「敵に教えるとも思っているんですか？」

「敵、か。そうだな。管理局は今や俺達テストメントの敵。  
ならば早速お前達を撃墜させてもらおうか・・・！」

レヴィの言葉にそう返したアレッタ三佐、ファノが中と下、二対の  
翼を大きく羽ばたかせた。

途轍もない突風が起きる。何とか耐えようとしたけどこの風圧には  
耐えきれないと判断して、身を任せて吹き飛ばされる。

吹き飛ばされる中、風の流れを肌で感じて自分の機動に利用する。  
レヴィも同様に上手い具合に突風の中を泳ぐように飛んで、施設か  
ら大きく距離を取ろうとする。

私達と幹部の闘いに航空隊員達を巻き込まないようにするため。

### 翔け抜ける速攻の陽虚鳥

そんな私達に突撃してくる巨大な赤い砲弾と化したファノ。

今のマルフイール隊は全長5m近いファノの姿となっている為、翼  
を広げたらさらに大きく見えるから威圧感が普通じゃない。

風の流れに逆らわないように、ただどしっかりと回避できるように  
飛ぶ。

ギリギリでの回避の所為で、すれ違いざまに叩きつけられた衝撃波によってまた吹き飛ばされる。

「レイジングハート!!」

Load Cartridge · Blaster set

シャルちゃんのカートリッジをロードしブラスターを発動。対幹部戦用へと“レイジングハート”と共に意識を切り替える。少し離れた位置で過ぎ去ったファノを見据えるレヴィに視線を送る。レヴィはわたしの視線に気づいて、念話を送ってきた。

『接近戦じゃ話にならないと思うので、わたしはモード・バスターのまままで戦闘を続行します』

『了解』

レヴィとそう話して、上空へと軌道を変えたファノへと意識を向ける。

「アレッタ三佐、話があります」

上空を遊泳するファノ、アレッタ三佐へと話しかける。

レヴィが私を見て戸惑っているのが分かる。だけど、まずは誤解を解いておきたかった。

セレスさんの逮捕未遂の一件は、全てがダイヤモンドの仕組んだ事だと。

はやてちゃんや私達はセレスさんを裏切ってなんかいないと。

『話？ 今さら貴様ら管理局の偽善者の話を聞く耳など持ち合わせ



ていない』

『大人しくここで終焉を迎えなさい、エースオブエース』

生死繰り返す永劫円環

私に応えたのは、デレチヨのマルシーダ二尉とイスキエルドのオデッセイ二尉。

左右の頭から発せられる念話だった。そして私一人に標的を絞って急降下してきた。

もう一度「アレッタ三佐！」って呼びかける。

『敵を何かを語りたければ、まずは圧倒的な力で、相手をねじ伏せてからにしる、高町！！』

返答は敵意に満ちた拒絶の言葉。

Master！ 「なのはさん！」

聞く耳を持たないアレッタ三佐達マルフィール隊。

話が出来ないなら、聞いてくれないなら、戦つてでも話を出来るようにする。

結局はこうなるんだろうな、と少し思っていた自分が居る。

そう、いつもと同じだ。だから私は、マルフィール隊に勝って、話を聞いてもらう。

頭上から迫るファノに“レイジングハート”を向けて、

エクセリオンバスター

砲撃を撃つ。エクセリオンバスターは真っ直ぐファノに向かってい

く。

自信からなのかファノは防御も回避もせずそのまま突っ込んでくる。

もしかしたら私と相討つことが目的なのかもしれない。

“レイジングハート”はそれを察してくれて、アクセルフィンを発動、私をファノの軌道上から退避させてくれる。

そして私の砲撃に真っ向から挑んだファノは、

『うぐ・・・！』『きゃ・・・！』『ぐお・・・！』

胴体に穴を開けて、赤い光粒子をまき散らしながら海に落ちていく。三人の苦悶の音が頭の中に響いてくる。

これは予想外だった。まさかこんなにも簡単にダメージを与えられるなんて思いもしなかった。

視界に入ったレヴィも私と同じ事を思っているのか驚いている顔をしている。

ただど今がチャンスだと思っただけで、

「このまま倒します！」

レヴィは両手をファノの方に突き出して、両手の環状魔法陣を併せて一つにする。

それと同時にレヴィの前面にはベルカ魔法陣が展開されて、周囲の魔力が集束していく。

私は無意識にそれを止めるために口を開こうとした。

あまりにも早く終わり過ぎる。もう少し話が出来ないか、お互いが理解出来ないまま、本当にこれで終わってしまった方がいいのか。

「レヴィ！ 待っ

」

止めに入る前に放たれるレヴィのすみれ色の集束砲。

ハッキリと目視できるほどのソニックブームを生みだしながら直進していく。

落下を続けるファノまでもう少しというところで、ファノの三つの頭部が迫る砲撃に向いた。

だけどファノは何もせずにレヴィの砲撃を受け入れた。

ファノを飲み込んだ砲撃はそのまま海面に着弾して、炸裂した。

足元に広がるすみれ色の半球上の衝撃波。

威力はさつき私が撃った砲撃より上。私の砲撃で胴体に穴が開くのなら、レヴィの砲撃だと間違いなく原形を留めないほどのダメージのはず。

「・・・アレッタ三佐・・・」

衝撃波も治まりつつあって、足元の様子を窺う事が出来る。

見たのは海にポツカリ空いた大穴。そこに海水が流れ込んで、大きな渦を作り出し始めた。

まさかこんなにもあっさり終わってしまうなんて、結局、誤解を解くことも満足に話す事さえ出来なかった。

「・・・まだですよ、なのはさん。まだ、います・・・！」

「え・・・？」

神妙な面持ちで足元に広がる海を見渡しながら、レヴィはそう私に告げてきた。

あの集束砲をまともに受けて無事なんて、正直信じられない。

「なのはさんは感じ取れないかもしれませんが、わたしにはハツキリと分かるんです。」

ファノという魔族が放つ神秘の脈動が　　っが・・・っ!？」

### 天壤翔けし赫羽の魔鳥

今まで以上の疾さで海面から飛び出してきたファノの体当たり攻撃。胴体にじゃなく大きく広げられた翼をまともに受けたレヴィは、大きく身体を折って空高く吹き飛ばされた。

「っ・・・!？　レヴィーーーーー!!！」

私はすぐさま空を舞うレヴィの元に飛んで受け止める。

「レヴィ!？　しっかりして、レヴィ!!！」

口元から流れる血を袖口で拭いながら何度も呼びかける。

『まずは一人だな。次はエースオブエースを撃墜する』

『『了解』』

### 英雄墜とせし滅天の三つ首

ファノの三つのくちばしから放たれる赤い三条の集束砲。

レヴィを左腕で抱えながら、アクセルフィンで射線上から離脱する。離脱し終えたと同時にファノへと“レイジングハート”を向けて、

Excillion Buster

砲撃を撃った。

「ただ、確かにさつきはダメージを与えられたはずなのに、今度は穴を開けるどころか傷一つ付けることなく弾き返された。驚いていると、アレッタ三佐の念話が頭の中に響いてきた。」

「どうした、高町。この程度で動きを止めているようじゃ生き残れないぞ」

### 英雄墜とせし散華の三つ首

くちばしから、今度は放射状に拡散してくる無数の光線を放ってきた。

レヴィを抱えながらの回避が出来るほど甘くない攻撃な為、私はカートリッジを一発ロードして効果を高めたシールドを前面に展開、防御に徹する。

なかなか止まない攻撃に耐えていると、

「ごぶっ、げほっげほっ・・・なの・・・はさん・・・？」

「???・・・げぶっ、わたし・・・あ、ごめんなさい！」

私の腕の中で気を失っていたレヴィが目を覚ました。そうしたら謝りながら私から離れようと身体を捻る。

「ちよっ、動いて大丈夫なの!？」

「も、もう大丈夫、です・・・。戦闘中、ダメージにより気を失った場合、魔力を全て治癒に回すように設定していますので。ですから、もう戦闘続行できるまで回復してます」

「・・・そう。それならいいんだけど・・・。」

もし辛かったら遠慮なく言って。ヴォルフラムで待機してるシャルちゃんかフェイトちゃんを呼ぶから」

ここはレヴィの言葉を信じて、彼女を支える腕を解く。  
レヴィは「ご心配なく」って笑みを浮かべてすぐ、

「痛かっただろうがっ、このやるおおー！ー！ー！！」

ハーツィーズ・ドライヴ  
紫光掃破

まるでシャルちゃんやヴィータちゃんみたいな事を叫んで、特大砲撃をシールドの脇から撃った。

レヴィの砲撃の方がファノの光線より威力が上なのか、光線を蹴散らしながらファノに向かつて突き進んでいく。

ファノは攻撃をやめて、だけどその場から動こうとしなかった。  
直撃。左サイドの真ん中の翼が吹き飛んだ。

「……っ!?!」

やっぱりおかしい。まるでわざと攻撃を受けている感じだ。

レヴィも同じことを考えているようで、ファノを疑問の視線で睨みつけている。

そんな私達の戸惑いを余所に、ファノは左右、上と下だけの翼を大きく羽ばたかせて先端をこちらに向け、

風雅なる赫沫の散々華

無数の羽根を撃ってきた。

私はアクセルフィンで、レヴィは瞬走式式でそれぞれ射線上より退避する。

退避し終えたところで、私とレヴィはファノへと、

「デイバイン・・・バスターアアアーーーー!!!」

「ハーツィース紫光・・・ドライウ掃破!!!」

左右から同時に砲撃を撃った。攻撃直後で動けないファノへと直撃。ただ直撃して右サイドの中と下の翼を吹き飛ばしたのは私の砲撃だけで、レヴィの砲撃は私のエクセリオンバスターのように弾かれた。

ここである推測が立った。その確証を得る為に、今通用したデイバインバスターを、修復された右サイドの翼に向けて撃った。案の定、私のデイバインバスターは弾かれた。確定だ。

『レヴィ、今の見てどう思う?』

英雄墜とせし散華の三つ首

放射状に拡散してくる光線群をアクセルフィンで回避しつつ、同様に回避を行っているレヴィに訊ねる。  
するとレヴィはもう一度掃破ドライウを撃って、弾かれたのを見てコクリと頷いた。

『・・・どうやら一度受けた攻撃に耐性がつくみたいですね。  
これは下手に威力の高い攻撃を撃つと、わたし達の打つ手がなくなります。厄介』

そう、これはかなり厄介な状況だ。  
一度受けた攻撃の耐性をつくり、二度と決定打にならないようにする。

どうしてファノが私達の攻撃を避けなかったのかこれでハッキリした。

私達の攻撃手段を完全に無くし、ファノへの対抗手段を潰す為だ。

『さすがに気づいたようだな、高町、お嬢さん。』

犠牲の果てに手に入れた力だ。どうする？ 攻撃すれば攻撃するほどお前達の打つ手が無くなるぞ』

アレッタ三佐の念話。その通りだ。

低威力の攻撃だと決定打にならない。

高威力の攻撃だと一撃で決めないと耐性をつくられる。

そう、一撃でファノを撃墜するほどの魔法じゃないと意味がない。

それと気になったのが、犠牲、という言葉。

一体何を犠牲したんだろう・・・？

『大人しく引け。今こそ管理局は変わらねばならない』

続いてデレチヨ、マルシーダ二尉の念話が響いてくる。

それと同時に私に向かって突撃してくるファノ。

“レイジングハート”を一度向けるけどすぐさま降ろして軌道上より回避。

『そうよ。復讐を成し遂げた今、あとは管理局というシステムをリセットし、次代の為に新たな・・・シス・・・テムを、下・・・切り捨・・・ない組織・・・を・・・つく・・・り・・・』

イスキエルド、オデツセイ二尉の念話が入るけど、後半は途切れ途切れで上手く聞きとれない。

ファノも完全に動きを止めて、左の頭部がゆっくりと項垂れ始める。マルフィールの左手。<sup>イスキエルド</sup>あの項垂れた左の頭部はオデツセイ二尉なの



かもしれない。

『アレッタ・・・長・・・先に・・・逝って・・・』

『ああ、先に逝っていてくれ、ヴィオラ』

『・・・カローラ・・・サファイア・・・ロ・・・未来を・・・』

頂垂れていた左の頭部の天辺、そこから赤い光粒子が出てきて、天へと昇っていった。

オデッセイ二尉の声はそれっきり聞こえなくなった。

頂垂れていた頭が上がる。だけどその目はさっきまで光沢を放っていたモノと違って、明らかに暗くて深い、生物としての目じゃなくなっていた。

「犠牲・・・。それは、あなた達の自身そんざいそのものが犠牲になる、と捉えてもいいんですよね・・・？」

レヴィが天に昇っていった光粒子を見送った後、ファノへと視線を向けてそう言った。

私は訊き返すように「え？」と、ほとんど無意識にそう口にしていった。

『そつだ。元より俺達は未練、想いというモノをボスの力によって集約、固定された不確かな存在だ。』

それが魔族と呼ばれる超存在いぶつと融合すれば薄れ欠けて行くのは必然。そして今回の俺達マルフィール隊とファノ三体の完全融合。

しばらくすれば俺という存在も完全に消えるだろう。

だが後悔はしていない。三人同意の上での結末だからな』

「・・・どうして・・・どうして・・・？」

『俺達の復讐もくてきはすでに果たされた。もうこの生の世界に未練はないが、俺達に再び身体じかんを与えてくれたボスへの礼がまだだ。

ゆえに、この身を心を犠牲にしても彼女の願いを果たす為に、俺達は戦う。

だから彼女の邪魔をするお前達を何としてもこの場で落とす・・・！』

私の問いにアレッタ三佐はそう答え、大きく翼を羽ばたかせて鳴いた。

そして三つのくちばしと三対の翼を大きく広げて、

### 秘奥なる禁断の御光

計九条の砲撃を撃ってきた。しかも一瞬じゃなく持続する砲撃。

こちらでも連続で大きく避けないといけなくなった。

防戦一方。一撃でファノを倒せる魔法はどれも発射まで時間が必要だ。

だから常にこっちに向いてくる砲撃の中、チャージするのは至難。

『分かるな、高町。戦いに慈悲などありはしない。

そう、死闘において二等賞の席など無い。そこにあるのは敗北、死、という結果のみだ』

「アレッタ三佐！！」

『迷うな。道は一つだ。己の信念に従い行動する、それだけだ。

だからこそ、俺も教え子であるお前を討とう。それが俺の意思だからだ』

どれだけの魔力がこの砲撃に次ぎ込まれているのか。  
放たれてから一度も途切れずに掃射され続ける九条の砲撃。  
私とレヴィはひたすら避けて避けて避けて避けて避ける。  
そんな中、レヴィから念話が入る。

『なのはさん！ スターライトの準備をしてください！』

『スターライトって……。そんな時間なんて……。  
それに、レヴィのエクステンドでも倒せなかったのに、私のスター  
ライトで倒せるとは限らない……。！』

『それはたぶんわたしの込めた神秘が弱かったからです。  
でもシャルロッテの神秘を扱えるなのはさんの集束砲ならいけます  
！』

そう提案してくる。

『チャージ時間はわたしが稼ぎますので、なのはさんは集束に力を  
注いでください』

レヴィの言う通り、もうそれしかないのであるかもしれない。  
アレッタ三佐達はもう私達を倒すべき障害としか見ていない。

『……。分かった。時間を稼いで、レヴィ』

『了解しました。お任せ下さい！』

なら、もうこちらも本気で、手加減無用で行くしかない。  
集束砲スターライトブレイカーの準備に入る為に、レヴィとファノ

から大きく距離をとる。

ファノの右の頭部がこちらに向こうとしたとき、レヴィが急接近して頭部に一撃入れて、射線を上にずらしてくれた。

「レイジングハート。ブラスター2。ブラスタービット展開」

All right . Blaster 2nd , Ignition

“ブラスタービット”四基起動、レヴィとファノの周囲に射出、展開する。

そして私は“レイジングハート”を構えて、チャージに入る。

十 十 十 十 十 十 十

なのはさんはアレツタ三佐ともつと話がしたかったと思う。だけでもうこれ以上の防戦はこっちの身が持たない。だからこそ集束砲を撃つように勧めて、なのはさんは賛成してくれた。

あとはファノの姿になってるマルフィール隊を一撃で倒せるほどの威力までチャージする時間を、わたし一人で稼げばいいだけ。わたし達から距離を取ろうとしたなのはさんへと右の頭が動く。

「どこを見てるのっ！」

### 瞬走式

砲撃群をスレスレで避けながら急接近。

ゼロ距離で砲撃を撃つて、無理矢理くちばしを上逸らせる。  
そしてまた瞬走式で距離をとって、

「アストライアー。モード・コンバット」

ポニーテールにロングコートとハーフズボンという中遠距離戦用“  
モード・バスター”の防護服から、ツインテールにセーラー服とミ  
ニスカート、スパッツという近接格闘用の“モード・コンバット”  
の防護服へと変更する。

近接攻撃力と瞬間機動力重視の戦闘モード。それで時間を稼ぐ。

「アレッタ三佐、マルシーダ二尉。私は、私達は、アレッタ三佐達  
を討ちます」

「『やってみるがいい』』」

風雅なる赫沫の散々華

左右上下の翼をなのはさんの居る場所へと向ける。  
もちろん撃たせるつもりはない。

斬裂爪閃・断絶

両手から魔力爪を発生させる。その長さは大体4m弱。付加効果は  
魔力結合分断。

大きく腕を広げて、それを思いっきり振り下ろしてファノの両翼を  
全て斬り落とす。

すぐさま回転して、胴体に一撃入れようかと思ったけど、やっぱり  
耐性がついていて簡単に弾かれて魔力爪は粉碎された。

(本当に厄介。もしなのはさんのスターライトでも生き残らたら・・・)

次はわたしのムーンライトを仕掛ける。

それでダメなら、シャルロットに出張ってもらうしなくなる。

それはなんだか情けないから嫌なんだけど・・・。

そんな事を考えていると、ファノの翼が修復されていくの分かった。

「もうこの空を飛ばせない!!」

ハーツィース・ストライフ  
紫光連砲

修復されていく三対の翼をもう一度中距離砲で散らす。

通じたところを見ると、少しでも効果や術式が変わると同種の魔法でも効くみたいだ。

(それなら・・・!!)

英雄墜とせし滅天の三つ首

落下していくファノは三つのくちばしが開いて、その中から集束砲を撃ってきた。

わたしは瞬走式で回避して、ファノの胴体へと降り立って、

「斬裂爪閃!!」

もう一度魔力爪を生み出す。効果は断絶と違って何も無い。

腕をクロスさせるように振るって胴体を斬り付ける。

結果は推測通り。少し術式をずらして変えるだけで通用した。

ファノの胴体に、わたしが振るった10本の爪の傷痕が刻み込まれ

た。

『おのれ・・・!』

『レヴィ!!』

なのはさんからの合図が来た。最後にもう一発。

### 瞬閃牙衝撃

魔力を纏わせて強化した拳打を叩きこむ。

ファノは魔力で構成された魔族。右の拳が胴体の表面を砕いて穴を開けた。

そしてすぐさま瞬走式でファノからずっと上空へと遠ざかる。

### スターライトブレイカー・マルチレイド

なのはさんの“レイジングハート”と“ブラスタービット”から放たれた桜色の冗談じゃ済まされない集束砲。

眼下を染める桜色の閃光に少し眩みながらも、ファノがどうなっているかを確認するために視線を逸らさないでおく。するとなのはさんが来て、

「終わった・・・?」

そう訊いてきた。正直、あんな集束砲を受けて無事にいる方がおかしい。

だけど、次第に晴れてきた光の中、うつすらと影が見えた。

「なのはさん・・・」

「・・・レヴィ。次、お願い」

わたしは両腕を構えて、なのはさんは“レイジングハート”を構える。

完全にファノを覆う光が無くなって、わたし達の視界に入ったのは二つの人型だった。

赤い甲冑に身を包み、マントを靡かせるマルフィール。

そしてもう一人、甲冑を着こんだマルフィール・デレチヨ。

「まさか・・・強制的に融合が解かれるような事態になるうとは・・・」

「隊長。kokoからは、一対いtiのtatakaiを・・・E  
ースオbuエースha、隊ちよUが・・・」

「っ！・・・マルシダ。・・・分かった。お嬢さんの方は任せ  
たぞ」

「ryoukai」

フルフェイスの兜から覗く輝く目がわたしとなのはさんに向けられる。

なのはさんを見ると目が合って、言葉を交わさなくても分かる。

頷きあって、それぞれが闘うべき相手の元へと翔ける。

「アレッタ三佐！」

「高町っ！」



なのはさんとアレツタ三佐は高速機動で衝突しながらわたしとデレチヨから離れていく。

そしてわたしは、少し様子がおかしいデレチヨと対峙する。

見据えるは己が倒すべき敵ただ一人。一対一なら、わたしは負けない。

「これで決着だ、マルフィール隊！」

### 瞬走弐式

「終わるnOはお前T a t iの方だ。古きシステムY o!!」

### 翔け抜ける速攻の陽虚鳥

真正面からぶつかる。肩上でガシッと両手を組み合って拮抗。

体格差は向こうの方が上。こうして両手の組み合いを続ければ押し負けるのはわたしだ。

だから、

### 崩山嵐蹴牙

「はああああああ!!!」

向こうが動く前に先制攻撃をとらせてもらう。

身体を折って、デレチヨの胸部へと踏みつけるような蹴りを連続で入れる。

デレチヨが私と組んでいる両手を離そうとするけど、わたしはそれを離さない。

このまま至近距離で攻撃を続け、反撃に転じられる前に落とす。蹴って蹴って蹴って蹴って蹴って蹴り続ける。すると甲冑からピキッとひ

び割れる音がした。

「調子niiノるなよっ!!!」

両手を無理矢理下に引かれて、デレチヨに背を向ける形での逆さ状態になってしまった。

直後に背中に奔る衝撃と激痛。硬い具足による蹴りが背中に打ち込まれた。

息が詰まる。唯一の救いは両手を放してくれた事。

さっきのわたしのように掴みつけて何度も攻撃を入れられたら負けてた。

### 風雅なる赫沫の散々華

背にある一对の翼を向けてきて、無数の羽根の弾丸を撃ってきた。何度も見ているから瞬走式で紙一重で避けていく。

するとデレチヨは羽根を撃ち続けながら突撃してきた。

何発かの羽根を受けながらも軌道上から退避、すぐさま通り過ぎて反転してきたデレチヨへと、

### ハイツィーズ・ストライク 紫光破

近接用砲撃を撃ち込む。

デレチヨはロールしながら回避してそのまま再度突撃してきた。

残像を引きながらの複雑な機動。わたしはそれをじっと観察しつつ連続砲撃連砲ストレイクを四肢の環状魔法陣から放つ。

一発目と二発目は避けられ多。そして三発目が掠って、四発目が直撃した。

デレチヨの動きが一瞬停止する。その一瞬を見逃さず、無駄になんてしない。

「紫光瞬条マナクル!!」

デレチヨの背面にベルカ魔法陣を展開、そこからいくつもの帯が出てデレチヨを魔法陣に拘束する。

すぐさま“モード・バスター”へと移行。

両手をファノへと突き出して、両腕にある環状魔法陣を一纏めにする。

前面にベルカ魔法陣を展開。周囲の魔力を魔法陣へと集束させていく。

「これで……最後だッ!!」

ハーツィース エクステン  
紫光掃破・昇華

ムーンライト・ブレイカーに次ぐ集束砲をもう一度放つ。

ファノと違う今、耐性を受け継いでいるとは思えないから通用するはずだ。

デレチヨは最期の置き土産とでも言うように翼を広げて、

「先に逝っています。隊長……!」

破濤なる赫羽の真煌

わたしの撃った集束砲の脇を過ぎて一直線に向かってくる。  
エクステン

昇華がデレチヨを飲み込んだのを視認してすぐ、デレチヨの最期の砲撃が視界いっぱいに入る。

魔力を前面に展開しているベルカ魔法陣に流し込んで、術式を魔力集束から魔力防御へと変換、シールドへと変更する。

結構無茶してるけど、撃墜されるよりはマシだ。

直後に砲撃が衝突。バカみたいに大威力の砲撃の所為で魔力が根こそぎ持っていかれる。

「耐えろおおー！！！！」

ひび割れたシールドをこれ以上破壊されないように維持する。

そして、砲撃は止んで、わたしは大きく安堵のため息を吐いた。

「はあはあはあ・・・勝っても、はあはあ・・・何も嬉しくないな・・・」

目の前に広がる空と海を見ながら、嬉しさより悲しさが満ちる胸に手を添えて小さくため息をついた。

十 十 十 十 十 十 十

### Acceler Shooter

アレッタ三佐へと15基のシューターを様々な軌道から狙い撃つ。

迫るシューターを悠々と回避して、私に左手を翳してきて砲撃を撃ってきた。

私もアクセルフィンで余裕を持って回避。高速砲フォトンスマッシュを連続で撃つ。

「アレッタ三佐！！」

「これがエースオブエースの翔る空、か。何とも言えない緊張感だな」

アレッタ三佐の翼から赤い羽根が数十枚、複雑な機動で飛んできた。シューターを操作していくつかを迎撃。残りはエクセリオンバスターで一掃する。その間に、

#### 翔け抜ける速攻の陽虚鳥

赤い砲弾となつて突撃してくるアレッタ三佐。迎撃するために、

#### セイクリッド・クラスター

拡散攻撃クラスターを撃つ。放たれたスファイアがアレッタ三佐へと向かい、周  
囲で炸裂、無数の魔力弾の包囲網となつてアレッタ三佐を全方位か  
ら襲撃する。

だけどアレッタ三佐はそれに構うことなく突撃を止めないで一直線  
に向かつてきた。

#### ラウンドシールド

回避するには遅すぎた為にシールドを張つて防御。

衝突。でもアレッタ三佐は距離をとることなく、そのままシールド  
を突き破ろうと翼を羽ばたかせた。

フルフェイスの兜の奥に輝くアレッタ三佐の目と合う。  
言い知れない恐怖が全身を襲う。人としての目じゃないような気が  
したからだ。

“ブラスタービット”四基を操作して、アレッタ三佐へと四方から  
砲撃を撃つ。

アレッタ三佐は私から距離をとることで回避。そしてすぐに翼を広

げて、

### 破濤なる赫羽の真煌

翼の前面から赤い砲撃を撃ってきた。

威力は高い。だけど一直線過ぎてアクセルフィンで簡単に回避出来た。

「忘れるな、高町・・・歴史の・・・変わRi目・・・時代が動くとき・・・何かsiraの・・・犠牲・・・が・・・生まれ・・・る・・・」

「アレッタ三佐・・・？」

「・・・ボス・・・先に・・・逝って・・・」

アレッタ三佐はダラリと頂垂れたまま動かなくなった。

何度も「アレッタ三佐」と呼びかけ、何度目かの呼びかけで頂垂れていた顔を上げた。

「！！！！」

「っ・・・！？」

アレッタ三佐が聞き取れない言葉で叫んだ。

それと同時に私に向かって突進を仕掛けてきて、私は無意識に“レイジングハート”を向けてエクセリオンバスターを撃っていた。

直撃。晴れていく煙幕の中から姿を現すアレッタ三佐の兜は碎け落ちて、その素顔を晒していた。

「……どうして……こんなことに……」

その目は虚ろで、何も映していないのが分かった。表情からは何も感じられない。死人と同じ、アレッタ三佐の姿はあつてもはそこにはもういない。

結局、誤解も解けず、アレッタ三佐のまま逝かせてあげることも出来なかった。

「……!!!」

もう一度吼えるアレッタ三佐だったモノ。

そして真っ直ぐな軌道で私の元へと再度向かってくる。

ただ少し身体をずらすだけで回避出来て、ソレはそのまま通り過ぎ  
て反転。

また突進してきた。そしてまた避ける。突進。避ける。突進。避ける。

視界が涙で滲んで揺らぐ。もう見ていられない。こんなアレッタ三  
佐の顔を、動きを。

「レイジングハート、ディバインバスター……行くよ」

All right . Load cartridge

シャルちゃんのカートリッジを二発ロード。

せめて、私が幼少の頃より共に歩んできたディバインバスターで、  
アレッタ三佐を送り出す。

それが教え子が師に送る最後の手向け。

ソレは大きく私から離れて停止。大きく羽ばたいて突撃を再開。

私は“レイジングハート”を向かってくるソレに向けて砲撃の準備  
に入った。

「 a a a a a a a a a ! ! ! 」

翼を身体に巻きつけて回転、ドリルのような状態になって速度を速めてきた。

「・・・さようなら、アレッタ三佐……。ダイバイン……。バスタアアアー！！」

撃った。一直線に進む砲撃は、そのまま直進してくるソレを呑み込んで、そのまま海上へと着弾。

大きな爆発が起きて、空に弾けた海水が雨のように降ってくる。

着弾点から目を逸らさずに佇んでいると、レヴィがいつの間にか傍に来ていて、「大丈夫ですか？」と、少し悲しそうな表情で訊ねてきた。

「・・・うん。私は、大丈夫。レヴィ、何か感じる？」

「・・・いいえ。もう、何も感じません・・・」

「そ・・・つか。私達、勝ったんだ・・・」

「はい。わたし達の勝ち、です。わたし達は、勝った・・・んです・・・」

しばらく無言でその場に留まっていると、施設の方からエストバキア航空隊の人が来た。

施設制圧を完了し終え、航空隊は防波堤のところで待機しているとのことだった。

三人で防波堤へと降り立つ。私達の前で整列した航空隊の人数は制



圧開始時から見て半数近くに減っていた。

そこで改めて報告を受ける。施設の制圧を完了して、そして障壁発生システムの破壊に成功。

死者はゼロ。負傷者が多かったけど、命に関わる怪我だけは負っていないとのことだった。

私は“六課”を代表して今集まってもらっている航空隊に礼を告げ、任務を達成したことを告げる。

湧き上がる歓声。そんな中、私は“ヴォルフラム”へと通信を繋ぐ。

「こちらエストバキア拠点制圧チームの高町です。

拠点制圧及び障壁システムの破壊に成功しました。

それと、ここで対峙したマルフィール隊を撃破しました」

『了解や。お疲れ様、なのはちゃん、レヴィ。』

これですべての拠点を落とした事になるんやな』

はやてちゃんはそう神妙な面持ちで返してきた。

どうやら私とレヴィが任されたエストバキア施設制圧が一番遅かったようだ。

ということとは、

「幹部達の現状はどうなっているの、はやてちゃん」

『えーっとな、それはなのはちゃんとレヴィが戻ってきたら詳しく話すけど、倒せた幹部はグラナードとマルフィール隊だけなんや』

「え？ スバルやティアナ、それにシグナムさん達は・・・？」

はやてちゃんの口にした名前の中に無かった幹部、カルド隊とクイント准陸尉とティード二尉。

担当はシグナムさんとヴィータちゃん、そしてスバルとティアナだ。一体何があったんだろう……？

『なのはちゃん、レヴィ。まずはヴォルフラムに戻ってきてくれるか？

そこで治療と、完了した全拠点制圧の詳細、そして今後の事を話すわ』

私とレヴィは顔を見合してから、「了解」と口にした。

悲しみの砲光は冬空を照らして　　C e l e s t i a l　B i r d s　　（後書き）

すう……難産ツツツ！！（マイク片手に咆える）

幹部最終戦の前半、その最後の相手はマルフィール隊となりました。が！ 何だこれ！？ マルフィール隊戦がもうメチャクチャな気がしてなりません（泣）

他の幹部達の戦いの様子、そして結末はすいぶん前から決定しているというのに、マルフィール隊だけは投稿寸前まで悩みに悩んでいました。

何か書き辛いよ、マルフィール隊（泣）。動かすにくいよ、マルフィール（略）

一体どれだけ書き直させれば気が済むんだよ、マルフィー……。

全ての終わりと始まりが集う世界 ｝War for the Ambiti

第二次オムニシエンス決戦イメージBGM

ACE COMBAT 04 “Megalith - Agnu

s Dei - ”

# 全ての終わりと始まりが集う世界 〈War for the Ambition〉

新暦81年 12月2日 PM13:30 エヘモニアの天柱・最上階

今までは14とあつた幹部が座する席も半数の7となっている。最上階に、一人席に座る幹部が居た。

メサイア・エルシオン元陸曹長。コードネームを永遠なる不滅者<sup>ダイヤモンド</sup>。

彼はただ一人で最上階へと昇り、襲撃を受けた拠点の様子をずっとモニターで観ていた。

そしてすべての拠点が陥落したのを観て彼は小さくため息を吐く。

(やはり敬虔なる諦観者<sup>アマテイス</sup>と聡明なる勇者は裏切つたか。<sup>アゲアマリナ</sup>)

まあいい。どうせ誠実なる賢者<sup>サファイア</sup>に処理させれば問題ないのだから。しかし、どうしてこうもピンポイントで障壁システムのある拠点を襲撃できたんだ・・・?)

背もたれに身体を預け、腕を組んで唸る彼は思考する。

しかしいつまで考えても解が出ない事に苛立ちを覚え、意識を切り替える。

彼は手元にコンソールを展開し、計画を次の段階に移す為に操作する。

その計画とは元よりテストメント・リーダーである至高なる卓絶者<sup>セレス</sup>が最終フェイズとして組んでいた計画の一つだ。

「永遠なる不滅者よりオラシオン・ハルディン管制システムへ。<sup>ダイヤモンド</sup>  
魔力供給、生成開始。電力は貯蔵しているものを使用」

オラシオン・ハルディン管制システム了解。照射エネルギー充填

まで240秒

彼は次元跳躍砲掃射塔“エンペラトウリス・パウティスモ女帝の洗礼”を始めとした“オラシオン・ハルデイン”の管制システムへと指示を出す。

管制システムは指示に従い、次元跳躍砲発射の準備に入った。

彼は次に至高なる卓絶者セレスが予てより組んでいたプログラムを起動させた。

それと並行して時空管理局本局を始めたとした主要施設へと通信を繋げた。

「我らが思いを踏み躪りし管理局よ、前置きという時間すら惜しいので単刀直入に伝えよう。

これより管理局主要施設に保管されている全データを、我らがエヘモニアシヨの天柱へと移させてもらおう。

そして、データを移し終わった施設から順に次元跳躍砲で破壊させてもらおう。

避難するなら今のうちだ。砲撃による崩壊に巻き込まれて死にたいというのであれば止めはしないがね。

それでは早速データ回収に移らせてもらおうか。避難するのなら急ぎたまえ、以上」

一方的に通信を繋げておきながら、また一方的に切った永遠メサなる不滅者。

フードの中に隠れる彼の表情はどこか楽しそうな笑みだった。

先程起動したプログラム通りに、管理局施設から“エヘモニアの天柱”のデータバンクへとデータを次々と移していく。

そしてもう一度“オラシオン・ハルデイン”の管制システムへと通信を入れる。

「チャージ完了後、照準合わせ。目標、第3無人世界軌道拘置所ア

ルドラ。

続いて第13無人世界軌道拘置所クサンティツペ。続いて

彼は無人世界の軌道上に建造されている拘置所ばかりの名を挙げていく。

そして管制システムを反論することなく「了解」と、破壊リストにその名を追加していく。

チャージ完了。照準、第3無人世界軌道拘置所アルドラ。

照準座標調整・・・クリア。砲撃術式効果を物理破壊に設定開始・・・クリア。

砲撃準備完了。洗礼の一撃・・・発射

白銀の閃光、洗礼の一撃がアルドラへと向けて放たれた。

アルドラ。凶悪な次元犯罪者を収容しているところとして有名な拘置所だ。

そこへと向けて放たれた次元跳躍砲。

目標まで、10、9、8、7、6、5、4、3、2、着弾。目標の破壊を確認

彼の前面に新しく展開されたモニターには次元跳躍砲によって破壊されたアルドラが映っていた。

彼はその光景に何も思うことなく「次弾発射用意」と指示。

管制システムは「了解。再チャージ」と答えた。

（さて。次はここに乗り込んでくるであろう管理局への対策だな）

全てのモニターを一度閉じ、新たなモニターを面前に展開させた。そこに映し出されているのは・・・

「ジェイル・スカリエツィ。お前の技術を使わせてもらおうか」

彼によって殺害されたスカリエツィの作品の一つ、“ガジェット・ドローン”の改良型がずらりと並ぶ光景だった。

十 十 十 十 十 十 十

“ヴォルフラム”・ブリーフィングルーム

四つの拠点を制圧してきたのは達が戻って、シャマルを筆頭とした医療チームの治療を受けている中、私とフェイトとはやてはブリーフィングルームでみんなが集まるのを待つ。

私とはやては、私が留まらせたクイントさんとティータから聴取を終え、ただ椅子に座って待つ。

そしてフェイトは、作戦待機中に入った“スカリエツィが何者かに殺害された”という報せからずっと黙りこんでいる。

長年追っていて、そして5年前のJS事件で逮捕。だというのにその結末が殺害された。

フェイトからしてみれば色々考える事があるんだろうから、私とはやてはフェイトをそっとしておくことにした。

それから少しして、扉の開閉音と共に「ただいま戻りました」との声が届く。

振り向くと、会議室に入った瞬間にスバルとティアナを除くメンバーは絶句、しばらく硬直していた。

扉付近で突っ立って戸惑っているそんなのは達に、

「えつとなあ、まずは座ってくれるか・・・」



はやてがそう促したことで、なのは達は長テーブルの両側に設置されている椅子へと座っていく。  
みんなが落ち着いたところで、はやてが部隊長席からみんなを見渡す。

「さて。まずは、どうしてこの場にテストメント幹部のクイント元准陸尉とティード二尉が居るか説明するわ」

はやてがそう話を切り出して、話の後を継ぐために私も事情を知らないなのは達を見る。

そう、なのは達が絶句してフリーズしていた理由は、ここ会議室に幹部の一員であるクイントさんとティードが居る事だった。

私はそれを説明にする為に口を開いた。

「クイント元准陸尉とティード元二尉には、オムニシエンス攻略の戦力として六課についてもらうために残ってもらった」

クイントさんは消える前に捕獲して、ティードは気を失っているテイアナを介抱している最中に通信を繋げて留まらせた。

スカウト文句（軽く脅しとも言いかもしれない）は、

家族に迷惑をかけたまま居なくなつて、本当にそれでいいの？  
本当に？

だ。まあ他にも言葉をかけて無理やり留まらせた。

「信用できるのか？ 理由はどうであれ元はテストメント幹部。

我々を裏切らないという保証はあるのか、フライハイト。そして・

」

そう言うと、当然疑いというのも出てくるわけで。

疑問を抱いているはずのなのは達を代表してシグナムが私へとそう訊き、次にクイントさんとティードへと冷たい視線を送った。

スバルとティアナがそれに答えようとするけど、それを手で制すクイントさんとティード。

二人は立ち上がった、

「信用できないのは当然の事だと思います。

私達はそれだけの事を今までしてきたんですから。

ですが、すでに暴走を始めたテストAMENTは、いいえ、ディアマンテは何をしでかすか分からない」

「僕達の目的はあくまで管理局の現体制に異を唱え、よりよいシステムへと変革すること。

復讐を誓っていても、改革を目的とするカローラー佐もそうです。

そして、その側近のディアマンテもそうだ、と思っていた。

だけど、僕とクイント准陸尉に魔族を強制憑依させたことで、すでに彼は正気じゃない」

魔族の強制憑依という単語に、驚愕に眉を顰めるなのは達。

それで大体事情を理解してくれたみたいだ。

“テストAMENT”幹部内はすでに瓦解し始めているのだと。

ディアマンテを放っておけば最悪の事態になりうるのだと。

「テストAMENT・リーダーのカローラー佐をも欺き、彼独自の計画が始まっている今、私達はテストAMENTを止める義務がある。

それが今まで幹部として存在していた私達の最後の役目、そう思っています」

そう締めくくって、シグナムの視線を受け止めるクイントさんとテ  
ィーダ。

シグナムは腕を組んだまま視線を逸らさず考え込んだ後、立ち上が  
って二人に右手を差し出した。

「・・・ご協力、感謝します」

「・・・こちらこそお願いします」

二人はシグナムの手をとって握手を交わした。

なのは達も納得しているような顔してるし、とりあえずは二人の協  
力問題は解決かな。

はやては「うん」と頷いて、話を先に進め始める。

「スバルとティアナのフォスカム拠点制圧はこういう形で決着した。  
次はエリオとキャロのフェティギア拠点。二人とフェティギア部隊  
のおかげで無事制圧。」

そして幹部の一人、グラナードを送り出すことが出来た。ホンマお  
疲れ様やったな」

私はフォスカムに出向いていたからエリオとグラナードの決着を途  
中までしか見られなかった。

だけどエリオの満足そうな表情を見たら、全部とはいかなくても納  
得できる決着を迎えられたんだな、と思った。

フェイトの隣に座るエリオ、そのエリオの隣に座るキャロも本当に  
よく頑張った。

「そしてウスティオ拠点のシグナム、ヴィータ、ラインとアギト。  
結果は見て通り、四人とも無事で戻ってきてくれた」

「でもカルド隊は出て来なかつたんだよね。アイツらなら絶対手段を選ばずに突っかかって来ると思っていたんだけど……」

そう言うと、シグナム達ウステイオ拠点制圧チームは黙り込んだ。そうなのだ。ウステイオの拠点に向いたシグナム達のところに幹部は、カルド隊は姿を現さなかった。

出てきたのはアギラスの二部隊。映像で見てとれたエンブレムからして射手座のサヒタリオと牡牛座のタウロ、計30機。

結局、その内のほとんどがシグナムとヴィータによって撃墜されていた。

「つまんねえモンだったぜ？　まるで始めっから捨てているような感じでさ」

「クイント准陸尉、ティータ二尉。何か知りませんか？」

ヴィータが少し不満そうに呟いて、リインがクイントさん達にそう訊ねた。

「ただ返ってきたのは「分からない」だった。」

セレスの第一級命令が発令されてすぐに幹部は散り散りになって、それつきり会う事なくディアマンテに魔族ゲヴァルトゼーレを憑依させられたという事だった。

「どういわけがあるにせよ、ウステイオの拠点は落とせた。」

それだけは確かや。そしてなのはちゃんとレヴィのエストバキア拠点制圧。

幹部マルフィール隊の三人を送り出せた、ってことでええんやっとな……？」

「う、うん・・・マルフィール隊は・・・倒せたよ」

なのはがそう言い淀みながら答えた。レヴィも何かおかしいし。エストバキアで何かなのはにとって辛い事でもあったのかもしい。

気にはなるけど、訊いていいのかどうか分からないから、話してくれるまで待とう。

はやてとフェイトは“ヴォルフラム”で様子を観ていたから分かっているようで、少し悲しそうな顔をした後、はやてはキリツとした表情に戻して話を進める。

「これでオムニシエンスを守る障壁は無くなった。

そうゆうわけで、テストメントのこれ以上の暴走を止める為に

「

はやての話はエマージェンシーを報せる警報で掻き消された。

直後にブリッジのオペレーターから通信が入って、本局に居るクロノからの通信をこっちに回してくれた。

『今いいか？ というより緊急だからこのまま進めさせてもらうぞ。先程、本局を始めとした局の主要施設へとテストメントから通信が入った。』

内容からしてかなりまずい状況だ。すぐにも管理局の有する戦力はオムニシエンスへと向かう事になった』

モニターに映るクロノはかなり緊迫した様子で、モニター越しから物凄い慌ただしい雑音が聞こえてくる。

私が代表して何があったのか訊いてみると、クロノは信じられない事を口にした。

『例の女帝の洗礼の砲撃で、偽善の象徴である時空管理局本局を破壊する、と。』

そんな事をすれば未曾有の混乱に陥ると思っていたんだが、律義にも本局を含めた主要施設にある管理、管理外世界に関するデータを現在進行形で回収している。

それだけでなく、凶悪次元犯罪者が収容されている拘置所も砲撃で既に二基破壊された。

それで今、管理局全体は大慌てだ。これは本気だと。だから君達六課もすぐにオムニシエンスへと向かってほしい』

会議室に居る全員が絶句する。

まさかそんな大それた方法をとってくるなんて思いもしなかった。何とかそれぞれ了解と答える。

『それとシャル。君の提案についてだが、こちらで手配しておいたから、オムニシエンスで合流出来るはずだ』

「そっか、うん、ありがとう、クロノ。それじゃオムニシエンスで」

さすがクロノ。結構無茶なようなお願いだったのに聞いてくれて。

フェイトとはやてを除くみんなから疑問の視線が集まるけど、それは後のお楽しみということで、小さく「秘密のお話」と言っておく。

『・・・管理世界標準時間1800時ジャストに一齐にオムニシエンスへと仕掛ける事になっている。』

シャル、そして特務六課、君達が頼りだ。くれぐれも遅れないでくれ』

クロノとの通信が切れ、会議室に重い沈黙が流れる。

そりゃそうだ。管理局が物理的に破壊されるとなればどれだけシヨ

ツクなことか。

そんな沈黙を最初に破ったのは、

「え……つと、とりあえずオムニシエンスへ行く、んだよね……？」

今だに信じられないと言った風のフェイトだった。

「そ、そうやな……。ルキノ、本局へは戻らんとこのままオムニシエンスへ向かう事になった。」

針路、テストメント本拠地オムニシエンス。速度最大」

『了解しました。針路をオムニシエンスへと変更します』

「……まさか管理局をあの砲撃で破壊するなんて……。信じられない……」

それに続いてはやてになのはとなった。

“ヴォルフラム”の行き先を“オムニシエンス”へと変更、最後の戦いへと赴く事になった。

そして話は“女帝の洗礼”による管理局主要施設破壊の件となる。

「お母さん。前からそういつた話はあつたの？」

スバルの問いと同時にみんなの視線がクイントさんへと集まる。するとクイントさんは「ええ」と、本局への直接攻撃の話があったことを認めた。

「なんだそれ？ それもまさかセレスの考えた事なんか？」

「・・・そうです。管理局施設破壊は、計画の最終フェイズとして組みあげられたもの。」

僕達テストメントの本部エヘモニアの天柱のデータバンクへとデータを送り、天柱を本局の代わりとして世界管理の中心とするというものです」

ヴィータの問いにティータがそう答えた。

また何とも言えない沈黙が・・・。

「・・・みんな、ちよつとええか？　まずこれを観てほしいんやけど・・・」

はやてがそう切り出して、テーブルの上に幾つかのモニターを展開させる。

表示されるのは・・・拠点制圧作戦の最中に、リインフォースから“ヴォルフラム”へと送られてきたデータ。

モニターに映るを画像を観て、クイントさん達が驚いている。

「これは・・・まさか・・・」となのはが口にして、はやてがみんなを見回して頷いた。

「テストメントの本拠地オムニシエンスの正確なデータや。」

今、ティータ元二尉が言つとつた本部のエヘモニアの天柱ゆうんはコレやな」

表示されたのは塔の設計図らしきもの。

全高1000m。各所の説明書きにはミッド語が使われ、塔の名称である“エヘモニアの天柱”にはヨツン Heim 語が使われている。

“レスプランデセルの円卓”内のほぼ中心に位置するように建造された“テストメント”の本部だ。

当然こんな情報がある事に驚愕する元幹部のクイントさん達。



二人には元幹部ノーチェブエナ、リインフォースのことはまだ話してない。

“六課”のみんなに協力関係を認めさせてから、情報提供者であるリインフォースの事を話そうと、はやてとフェイトと話しあつたらだ。

ここでようやく二人に説明した。リインフォースは消滅せずに生き残って、そして私達に情報をくれた事を。

「そう、だつたんですか……。彼女が居なくなつてサフィーロは落ち込んでいたんで、彼女が生きていると知れば、サフィーロは喜ぶかもしれないなあ。

……って、え？ あれ？ 何でこんなに静かになるんですか？ 僕、何か言つてはいけない事を言いましたか？」

ブリーフィングルームがシンと静まる。その様子に困惑するティータ。

さつきまでの管理局そのものの崩壊の危機という緊張感が、ルシルの所為で別の緊張感に変わってくよお（泣）  
そんな変な緊張感の中、声を発したのは、

「サフィーロって、確かルシルの事だよね……？」

なに？ リインフォースの事で落ち込んだ？ それってどういうこと……？」

フェイトと、

「やっぱり、ルシル君とリインフォースはそうゆう関係なんか……？」

はやての二人。それになんか八神家も変な空気出してるし。

ヴォルケンズ

エリオとキヤロは若干震えてるし。スバルとティアナは苦笑して震えを誤魔化そうとしてるし。

なのははなのは「浮気はダメだよね・・・？」と口にしながら、それを伝えるべきフェイトから目を逸らしてるし。

ルシル、出来るか分からないけど、もし記憶が戻っている状態のあなたに会ったら殴らせてね。

それから、フェイトとの契約後のルシルを何らかの形で犠牲する<sup>イケニエ</sup>ことを条件にして決着、本筋の話を進める。

「こほん、えー、話が逸れたから戻すな。

少し予定が早まったけど、オムニシエンス攻略戦の担当をここで決めさせてもらう。

何か意見あったら遠慮なく言ってな」

そしてあらゆることを想定した話し合いの結果、それぞれが担当する戦闘が決まった。

私はディアマンテとトパーシオと“女帝の洗礼”。

ラインフォースから送ってもらったデータには内部の詳細、設計図があつたから大助かりだ。

そしてなのはと協力してセレスを逮捕する。

フェイトはルシルとの一騎打ち。前からそうだけど、これはフェイトの意思だ。

シグナムとヴィータは、もちろんカルド隊と戦う事になった。

はやては“ヴォルフラム”で待機、“六課”の指揮を執ってもらう。その方がラインフォースとの合流が楽そうだからと私が決めさせてもらった。

正直ラインフォースが“オムニシエンス”へ来るか分からないけど、居場所が判らない以上はその方がいい。

まあ彼女も彼女で動いているだろうからきつと来ると私は思ってる。

そして上手くリインフォースと合流出来れば、そのまま契約を交わしてユニゾン。

というか、ユニゾン自体がはやとリインフォースを繋ぐための契約となるようにしておいた。

ユニゾン出来れば、そのままカルド隊撃破に参加。

その後、劣勢となっているかもしれない戦闘に参加してもらおう予定だ。

そしてエリオとキャロとレヴィは、私がクロノに頼み込んだある“戦力”や航空部隊と一緒に“アギラス”殲滅に出てもらう。

スバルとティアナは、ザフィーラとクイントさんとティータ、私がもう一つクロノに頼んで寄越してもらった部隊と地上部隊と一緒に構成員達の逮捕に向かってもらう。

そして最も重要な勝利条件の一つである最終防衛基地“オラシオン・ハルデイン”攻略。

ヨツンヘイム語で 祈りの庭 という意味を持つ“オラシオン・ハルデイン”は、五つの兵器で構成されている事がデータから判明している。

まず一つ目が本体とも言える次元跳躍砲塔“女帝の洗礼”一基。

その外周にそびえる“女帝の洗礼”防衛用の砲塔“騎士の洗礼”八基。

さらに外周に建造されている侵入者を拒む為の砲台“アインヘリヤル”十基。

最後に、次元跳躍砲に必要なエネルギーを賄うソーラーパネルと魔力を生成・供給する建物が二十基、だ。

そして“オラシオン・ハルデイン”全体を管制するシステムが“女帝の洗礼”管制ルームにあるというのが判明した。

魔力生成・供給施設が管制システム、そのどちらも完璧に潰せれば、

残りの砲塔群も全て沈黙するらしい。

ちなみに施設の方は、スバル達が上手くいけばそのまま制圧してもらうように頼んだ。

「それにしても、こんなところでアインヘリヤルって名前を耳にするなんて・・・」

なのはが“オラシオン・ハルディン”のデータを観てそう呟いた。  
“アインヘリヤル”。今は亡きレジアス中將が推し進めていた計画の一端を担っていた魔導兵器。

“オラシオン・ハルディン”の一番外側にある十基の回転式砲台の名称が“アインヘリヤル”だった。

5年前のJS事件で破壊された物も“ミユンスター・コンツェルン”の作品だったのかもしれない。

会議も終わり、一度解散した私達は、“オムニシエンス”到着までに夕食を採り、それぞれ休むことになった。

十　十　十　十　十　十　十

PM17:51　ヴォルフラム・ブリッジ

私ら“六課”もようやく“オムニシエンス”の軌道上へと辿り着いた。

“ヴォルフラム”が到着したときにはすでに大型のXL級が十三隻、中型のL級が十五隻、計二十八隻の艦が揃った。

そのうちの一隻、クロノ君の“クラウディア”からの通信がここブリッジに入る。

『よく来てくれた。先程送ってもらった六課の方針・・・了解した。こちらは六課をサポートするように動く事が決定している。』

だから安心して背中を任せてくれて構わない』

「何から何までホンマありがとう。これで六課も気兼ねなく動けます」

『いや、正直な話、君達に頼らざるを得ないというのが現状だからな。』

情けない限りだが、君達をサポートするしか出来ないんだ。

だからこそ何だってやるさ。・・・さて、それでは時刻になったら一斉に降下する。

ヴォルフラムもそのつもりでよろしく頼む』

「了解しました」

クロノ君との通信が切れる。背もたれに身体を預けて一息つく。おそらく“テストメント”との問題は今日、この戦いで決着することになる。

色々な事があり過ぎて長く感じたけど、実際は“テストメント”が現れてから一カ月も経ってないんやなと思う。

「・・・シャルちゃん」

降下ハッチ近くの待機室に居るシャルちゃんへと通信を繋げる。

シャルちゃんは『どうしたの、はやて』と優しい声で返してきた。れた。

「これできつと最後になるんやろ？ その・・・」

『???・・・あー、はいはい。みんなに言っておきたい事とかだよ  
ね？』

そうだなあゝ……うん……ありがとう、かな。  
うん。ありがとう。私がみんなに言っておきたいのはそれだけ。  
短い間だったけど、また同じ時間を過ごせた事に感謝を』

シャルちゃんはホンマに綺麗な笑顔でそう言った。

ありがとう。シャルちゃんらしいわ。

それから作戦開始時間まで、他愛ない話、そやけど楽しい時間を過ごした。

そして、運命の時間、18時ジャスト。

「時間や！ ヴォルフラム降下開始。アドウベルテンシアの回廊に  
進入後、全部隊は降下、各自作戦通りに行動開始。」

管理局施設に砲撃が放たれる前に何としてもテストAMENTを止める

よッ！！」

ブリッジから、そして降下ハッチから、了解、と返ってくる。

これで最後や。セレス、ダイヤモンド、絶対に止めさせてもらうか  
らな。

そしてシャルちゃん。これで最後かもしれんから、ここでもう一  
度言っておくな。

「ありがとう」

管理世界標準時間 P M 18:00

オムニシエンス時間 P M 16:30 エヘモニアの天柱・最上階

永遠なる不滅者<sup>メサイア</sup>はただ一人最上階の中央に展開されている巨大モニ  
ターを眺めていた。

映しだされているのは“オムニシエンス”へと降下してきた管理局の二十九隻の戦艦。

彼は「フツ」と笑みを零し、“オラシオン・ハルディン”の結界を解き、

「永遠なる不滅者より全勢力へ通達。我らが主マスター・至高なる卓絶者の心を踏みにじった偽善者どもがここオムニシエンスへと降り立った。

協力を求めておきながらのマスターの逮捕未遂。許されるモノではない。

ゆえに偽善に満ちた管理局へ罰を与える！！ 出撃っ！！」

彼は次々と各部署へと指示を出していく。

かつては“レジスタンス”と呼ばれていた“テストメント”構成員による武装隊。

スカリエツティの技術力を流用して開発された“ガジェット”の改良型。

？型と称されたカプセル型に、？型と称された大型の球状型が揃えられている。

そして“アギラス”。全ての機体を集結、新たにロールアウトした機体を含め、その機数は百三十機を超えている。

それら全てを迎撃に向かわせた彼は、次に“オラシオン・ハルディン”の管制システムへつ指示を出す。

「アインヘリヤル？から？、騎士の洗礼？から？、全砲門を回廊へ変更。

目標は管理局所属艦二十九隻。女帝の洗礼はチャージ続行。次弾目標、時空管理局支局」

オラシオン・ハルディン了解

“女帝の洗礼”の周囲を守護するすべての砲塔・砲台が動き出す。  
“レスプランデセルの円卓”から距離1km付近に二九隻の艦が降下を終え、一斉に武装隊が進軍を開始している。

「大人しくしていれば、我が支配する新世界で下僕として生きられるものを」

椅子の上にふんぞり返りながら鼻で笑う永遠なる不滅者。  
そんな彼の居る最上階へと姿を現すのは、

「はあはあ・・・やはり・・・来たのですね、管理局、はあはあ・・・」

「マスター、やはり休んでいた方がいいのでは・・・？」

「セレス・・・」

苦しそくに肩で息をする至高なる卓絶者と、彼女を隣で支える誠実なる賢者。

そしてセレスの“テストメント”設立の動機となった殉職した彼女の姉潔白なる聖者。

真名をアウローラ・プレリウド・フィレス・カローラ・デ・ヨツンヘイムの三人だ。

三人は幹部の席のある中央まで向かい、至高なる卓絶者は己の席に座り、誠実なる賢者と潔白なる聖者は彼女の両隣の席に座る。

「はあはあ・・・ふう・・・【カルド隊、聞こえますか？】」

【・・・ボSu、聞こえます】



至高なる卓絶者は幹部独自の回線での念話で、報復せし復讐者隊へと呼びかける。

報復せし復讐者隊は現在まで“エヘモニアの天柱”で待機していた。何故なら第一級命令発令により怒りと憎しみで暴走寸前だったため、一般市民への被害を恐れた誠実なる賢者が待機を命じていたからだ。

応じたのはリーダーである報復せし復讐者だったが、既に存在に異常をきたしていた。至高なる卓絶者達はそれに対し眉を顰めたが、そのまま念話を続ける。

【・・・待機命令を解きます。これが最後です。あなた達の願いを果たしなさい】

【【了解しました。Bossuに感謝W〇】】

彼女は念話を切り、永遠なる不滅者へと視線を移す。

「はあはあ、ダイヤモンド、あなたも出撃してください。指揮は私が執ります」

「・・・っ！ 了解しました。出撃します・・・！」

永遠なる不滅者はフードの中で不満に顔を歪めたが、それを悟られないように最上階を後にした。

至高なる卓絶者はそれを見送り、肘掛にもたれかかり激しく咽る。誠実なる賢者と潔白なる聖者が彼女の元へと駆け寄り、背中を擦ったりして落ち着かせる。

「げほつえほつ、ありが、とう．．はあはあ．．ふう．．。あなた達にも命令します。トパーシオ、全てが終わるまであなたは自室で待機」

「なつ．．!? どういう事、セレス!? どうして私は待機なの!?」

潔白なる聖者の口調が急に大人びて、彼女は至高なる卓絶者へと抗議を訴える。

それは姉として妹へ口にした初めての不満だった。至高なる卓絶者は姉潔白なる聖者へと、その桃色の瞳を向けた。

「お姉ちゃん。お願いだから言う事を聞いてください」

「っ．．．分かった。トパーシオ了解．．。」

【サファイア、妹をお願い。無茶をしないように止めてあげて】

至高なる卓絶者の弱々しい視線と縋るような言葉に潔白なる聖者は渋々了承した。

そして最上階を後にしようとし、最後に誠実なる賢者へと念話を送った。

誠実なる賢者は【了解】とだけ答えて、潔白なる聖者の背を見送った。

「サファイア．．少し．．いいですか？」

彼女は右隣りに控えている誠実なる賢者へと呼びかけながら手を握る。

彼は「どうしました？」と至高なる卓絶者の目の前まで移動して片

膝をつき、最大の礼をとって彼女の濡れる桃色の双眸を見詰める。  
至高なる卓絶者は少し間を置いた後、静かにこう告げた。

「マスターとして、あなたに最後の命令を出します」

そう言っただけで彼女は身体を折って、誠実なる賢者の唇に自らの唇を重ねた。

数え切るのも億劫な数の航空・地上部隊員達が“アドウベルテンシアの回廊”内を進軍する。

そんな彼らの目に移るのは壮絶な光景。

最終防衛基地“オラシオン・ハルディン”の砲塔・砲台から放たれ続ける砲撃。

それらが全て自分達が降りてきた艦へと向かい、そして艦は最大出力のシールドを張って防御に徹するという状況。

そして航空隊へと迫る軽く百数十機を悠に超える黒き翼を持つ“アギラス”。

その中でも彼らが驚いたのは、地上を進む数百機の“ガジェット”の存在だった。

「恐れるな！俺達がここで勝たなければ、管理局は破壊される！中でも本局の破壊だけは何としても防がねばならない！

時空管理局と“テストメント”の最後の戦い、第二次オムニシエンズ決戦。

管理局と世界の存亡を懸けた決戦の火蓋が切って落とされた。

ここの通行料は高いぞ。もちろん出世払いは不可だ

さあ、決着をつけようか！ 偽善者共め！

斃れたすべての戦友たちの無念よ、蘇れ……！

“アギラス” 百数十機のリーダー格から、二百人を超える航空隊へと通信が入る。

確認出来るエンブレムは十。すでに全滅しているエスコルピオン蠍座部隊とカプリコ山羊座部隊を除く全ての部隊がここに揃っていた。

『この戦闘に勝って、あなたたちテストAMENTを止めて、世界の平和を取り戻す！』

平和を取り戻す、だと？ この戦いの火種を生み出した管理局が、ふざけるなッ！

航空隊員の一人がそう“アギラス”部隊の先頭を翔けるアリエス牡羊座部隊・リーダーへと返す。

すると人工AIでありながら鼻で笑うという人間臭さを以って返答するサヒタリオ射手座部隊・リーダー。

この会話が開戦の合図となり、“オムニシエンス”の空で人間と機械の熾烈な空戦が始まった。

人としての小ささを活かした事細かな機動の航空隊と、大きな機体とAMFを活かしたダイナミックな機動の“アギラス”部隊が衝突する。

しかしエアインテークが弱点だと判明しているが、上手くそれを突けない航空隊が少し押され始める。

そこに航空隊を巻き込まないように、

「フリード！ ヴォルテール！」

ブラストレイ  
ギオ・エルガ  
大地の咆哮

エリオとキャロが駆るフリードリヒと、その後方に佇むヴォルテールから炎熱砲撃が放たれる。

一斉に回避運動を執った“アギラス”だったが、何機かが直撃を受け消滅した。

そして今度は“モード・バスター”のレヴィによる砲撃が、航空隊と空戦を繰り広げる数機の“アギラス”を捉える。

しかし撃墜させることが出来ずに終わり、「あーもお」とレヴィが不満そうに呟いた。

レヴィが一人“アギラス”の密集空域へ向かった直後、エリオとキャロの二人が乗るフリードリヒへと上空から迫る“アギラス”が六機。

エンブレムは少女の横顔にリボン、乙女座部隊だ。

レヴィがそれに気づき反転してくる。

レヴィが戻るより早く六機の乙女座部隊がフリードリヒへと砲撃を撃とうとしたが、その瞬間、遙か後方より途轍もないエネルギーを伴った砲撃が一直線にその六機を破壊していった。

「アレは・・・!」

「なんで・・・!?!」

「ええええええええ!!?!」

振り返った視線の先、キャロの従えしヴォルテールと並ぶ巨大な白き怪物が居た。

エリオとキャロとレヴィは驚愕する。そしてそんな三人に通信が入り、一つのモニターが展開された。

『やっほー！ 間に合って良かった 今からわたし達も参加するから』

「ルーちゃん!?」「ルー!」「ルーテシア!? なんで!?!」

モニターに映るのはルーテシアだった。

そして先程の砲撃の主は白天王。ルーテシアの従える使い魔のようなものだ。

ルーテシアは白天王の左手に乗り、この戦場へと姿を現した。

『詳しい事は省くけど、シャルロツテに呼ばれたから。』

少し危ないかもしれないけど、友達を手伝ってあげて、って』

シャルロツテがクロノに頼んでいた事とはこれのことだった。

“オムニシエンス” 攻略の戦力向上。シャルロツテは、以前からルーテシアの白天王に目を付けていた。

今は薄れている魔族としての血。そして魔力とは言え、その圧倒的な出力による攻撃手段。

そんな白天王を従えるルーテシアを参戦させる。

シャルロツテがクロノに頼んだ願いの一つが今、エリオとキャロとレヴィの元へと舞い降りた。

『とりあえず、まずはあのアギラスとかゆづのを破壊し尽くすよ。白天王!』

ルーテシアの号令の元、白天王の腹部にあるクリスタルから砲撃が放たれた。

キャロも負けじと「ヴォルテール!!」と指示を出し、ヴォルテールに砲撃を撃たせる。

ここに、二巨大生物と“アギラス”部隊の戦いが始まった。

ところ変わり地上。

三百人以上の地上部隊と共に“アドウベルテンシアの回廊”内を駆けるのは“特務六課”の地上班。

迫る”ガジェット”と武装構成員達との戦闘を繰り広げながらも、徐々に“レスプランデセルの円卓”の入り口”オラシオン・ハルデイン”へと進撃する。

進撃する三百人近い地上部隊の先頭で“ガジェット”を粉碎しては武装構成員を吹っ飛ばしていくのは、

「ガジェットだろうが構成員だろうが、どれだけ集まっても・・・」

ヴァリアブルシュート

「もうこれ以上の暴走はさせない!!」

クロスファイアシュート

「退けええええッ!!」「退きなさい!!」

リボルバーナックル

リボルバースパイク

ストームトウース

「邪魔しないでほしいっスよ!!」

エリアルキャノン

「大人しく道を開ける……!!」

オーバーデトネーション

「邪魔をしないで!」

イノームスカノン

「やるわね、みんな……!!」

アンチェイン・ナツケル  
繋がれぬ拳

“特務六課”のティアナと協力者ティード、スバルとミッドチルダ西部の一地方を管轄する108部隊。

つまりゲンヤ・ナカジマ三佐の率いるナカジマ家姉妹達だった。

何故彼女達が居るのかと言うと、これもまたシャルロッテの提案だった。

彼女は、母クイントとの最後の時間を、たとえ戦場であっても共に過ごしてもらいたい、とクロノに頼み込んでいた。

そしてそれは許可され、こうして母クイントと娘達のギンガ、チンク、デイエチ、スバル、ノーヴェ、ウエンディは同じ時間を過ごしていた。

ちなみに父ゲンヤもすでにクイントと再会と短い時間だったが二人だけの話も終え、今はある一隻の艦内で待機している。

「お見事です、母上」

「さすが母さん。無駄のない良い一撃でした」



「あら、チンクもギンガもなかなかよ」

「あたしは！？ あたしはどうっすか！？」

ウエンディは元気いっぱい自分を指差し、

「あ、あたしも、どうだったかな・・・か、母さん・・・」

ノーヴェは少し恥ずかしそうにしながら、

「あたしはどうでしたか、お母さん」

デイエチは少し遠慮気味に、それぞれクイントへとそう訊ねる。

「ちよつ、そんな事言ってる場合じゃないよ！？」

「まだまだ来ますよ！」

迫り来ていた“ガジェット”群を一掃してすぐにクイントへと集まるナカジマ家姉妹。

スバルとティアナが何陣目かの“ガジェット”群と武装構成員へと指をさして注意する。

そこに「おおおおお！！」と咆哮が響く。

## 鋼の軛

地面から白い帯が幾条も突き出し、“ガジェット”を貫き破壊しては武装構成員達を捕えた。

それらはスバル達の後方に佇む狼形態のザフィーラの仕業だ。

ザフィーラはゆっくりと先頭のスバル達の元へと歩み寄り、

「お前達家族の再会に水を差すのはやぶさかだが、時間もそうはない。急ぐぞ」

そう告げ、さらに迫りくる武装構成員達と“ガジェット”群を見据える。

ザフィーラの言葉を聞いたスバル達はそれぞれ頷き、再度地上部隊と共に進撃を再開した。

そして空と地の狭間を飛行するのはシャルロッテを先頭とした“特務六課”飛行隊。

目標は、新たに姿を現した敵戦力、八隻の“スキーズブラズニル”艦隊。

管理局の戦艦は、“騎士の洗礼”と“アインヘリヤル”の砲撃の的として機能している為、なかなか動かせない状況だ。

動こうにも“騎士の洗礼”と“アインヘリヤル”による絶え間なき砲撃がそれを妨害し、常に最大シールドを展開しなければ撃沈させられてしまう。

それに、戦艦というのが無くなれば、次の目標は航空・地上両部隊となる。

そのような最悪の結末を回避するためにも、そのまま砲撃の的にして徹するしかなかった。

『スキーズブラズニルは全体的に魔力障壁を張っていて、神秘を扱える私達しか突破できない。』

そこで、私達はここで分散して各スキーズブラズニル内に侵入、その巨体を支えるコアを破壊する。

コアは確か操舵室にあるはずだから、発見次第、即時破壊ってことでよろしくー！』

シャルロットは、なのは、フェイト、アギトとユニゾンしているシグナム、リインフォース？とユニゾンしているヴィータへとそう告げる。

そして、彼女が憶えている“スキーズブラズニル”の見取り図データを“トロイメライ”から各デバイスへと送信する。

受信を終えた事を確認したなのは達はそれぞれ『了解』と返し、五人は一斉に散開して戦場へと向かおうとする“スキーズブラズニル”の甲板へと突撃していった。

### スキーズブラズニル一番艦・甲板。

水色の刀身を持つ長刀型デバイス“トロイメライ”を手にしたシャルロットは一对の真紅の翼を羽ばたかせ、“スキーズブラズニル一番艦”の障壁を突破して甲板に降り立った。

全長2000m、全幅300mの巨大帆船“スキーズブラズニル”。その操舵室のある内部へと進入するために甲板を歩きだそうとしたとき、“ガジェット”？型と？型、その数四十機が姿を現した。

「・・・面倒だし、時間もかけられないから手早く終わらせてもらうよ。」

トロイメライ！ Explosion 炎牙 Verbrenne  
n 崩爆刃！！

シャルロットは真紅の炎を纏った刀身から放たれる爆発力の高い炎刃による一閃を甲板目掛けて打ち込んだ。

直後、甲板は船体を揺らすほどの大爆発を起こし、迫り来ていた“ガジェット”群諸共甲板は内部へと崩れ落ちた。

「あゝあ、結構もろいな。やっぱりオリジナルに遠く及ばないレプ

リカか。  
とは言っても、八隻も召喚すれば一隻に対する神秘ももろくもなるか」

崩壊に巻き込まれないように宙に避難していたシャルロッテは“トロイメライ”を右肩に担ぎ、ゆっくりと降下、ずっと奥に青く光るコアを見つけ、

「はい。これでまずは一隻。げきちん」

Explosion・Schatten・H・olle

シャルロッテはカートリッジを四発連続ロードし、“トロイメライ”の刀身に漆黒の影を纏わせる。  
そして大きく振り上げ、

「凶牙奈落刃！！」

術式名の叫びと共に振り下ろした。  
振り下ろされた刀身から七つの影が螺旋を描き真っ直ぐにコアへと向かって、コアを粉々に粉碎した。  
それから数秒、“スキーズブラズニル一番艦”の船体が大きく揺れ始め、高度を徐々に落としていく。  
シャルロッテは崩壊に巻き込まれない為に脱出しつつ、

『えーっと、キャロカルーテシア、聞こえる？』

“アギラス”相手に戦っているキャロとルーテシアに念話を入れる。  
そして彼女は二人に対しあるお願いをした後、次の“スキーズブラズニル六番艦”へと目指す。

そして、“スキーズブラズニル一番艦”は地面に沈む前にボロボロと崩れ去り消滅した。

#### スキーズブラズニル二番艦・甲板

なのははシャルロッテのカートリッジを一発ロードして、二番艦の障壁を突破、甲板へと降り立った。

直に降り立って、「大きい・・・」と、その大きさを改めて実感していた。

「レイジングハート。シャルちゃんから貰った見取り図から見て、操舵室はどこ？」

ここから船尾へと向かって距離800m。ちょうど船体の真ん中です

なのはは“レイジングハート”からの返答に思索している。

すると、前方から“ガジェット”の群れがこちらに向かってきているのが見えた。

「レイジングハート、ここからガジェットとコア、纏めて撃ち抜ける・・・？」

もちろんです。マスターと私の前に撃ち貫けぬものなどありません

なのはの問いに自信満々で答える“レイジングハート”。

それを聞いたなのはは、

「あはは、そうだね。それじゃあディバインバスターで一気に決め

るよ……!」

戦時下でありながら笑みを零した。

そしてなのはデイバインバスター・エクステンションによって、

“スキーズブラズニルニ番艦”は沈んだ。

スキーズブラズニルニ番艦・内部

“スキーズブラズニルニ番艦”内部を黄金の閃光が目にも留まらぬ疾さで翔ける。

フェイトも他のメンバー同様にシャルロツテのカートリッジを一発ロードして障壁を突破、そのままの勢いで内部へと突撃していた。

「バルディツシュ、操舵室まであとどれくらい……?」

「このまま直進。距離400m」

「ん、了解」

通路を全速力で飛行して操舵室を一直線に目指すフェイト。

そんな彼女の前に“ガジェット”の?型が姿を現す。

フェイトは一瞬の迷いも見せずに、

「プラズマランサー Get Set ファイア!!」

前方の“ガジェット”?型へと五基のプラズマランサーを射出。

神秘対策の無い“ガジェット”は、AMFを展開していたにもかかわらず防げず、フェイトの攻撃を受け爆散した。

フェイトはスピードを落とさずに直進、そして広い操舵室へと辿り着いた。

「これがコア……」

フェイトの目の前に、細長い正八面体の青いクリスタルが浮いていた。

フェイトは“バルディッシュ”をザンバーフォームへと変え、

「はああああああ！！！！」

ジェットザンバー

コアへと全力の振り下ろしの一撃を叩きこんだ。  
火花を散らし拮抗する黄金の刃とコア。

そしてパキンツと音が操舵室に響き、コア全体にヒビが走っていく。  
フェイトは任務完了と判断して、すぐさま“スキーズブラズニル三番艦”から脱出するために、操舵室を後にした。

スキーズブラズニル四番艦・甲板

「アイゼン！」

Schwalbe Fliegen

ヴィータは、甲板上に群がる“ガジェット”へと誘導操作弾を精確に打ち込んで、魔力を纏った鉄球弾を操作、次々と“ガジェット”を爆散させていく。

一機残らず掃討し終えて、甲板へと降り立つ。

『ヴィータちゃん、カルド隊との戦いを前に無茶してませんか？』

「心配すんな、無茶なんてしてねえよ。それよりさっさとコイツを沈めねえと……」

リインフォース？にそう返し、ヴィータは見取り図を面前に展開。そしてすぐ真下にコアのある操舵室があることが判明。

「なんか楽な仕事だったな。まあその方が助かるんだけどさ」

『そうですねえ。でも、油断はダメですよ？』

「分かってるよ。アイゼン、ギガントフォーム」

J a w o h l · G i g a n t f o r m

“ グラーフアイゼン ” を小型のギガントフォームへと変えたヴィータ。

そしてヴィータは目の前に自信の頭部以上の大きさを持つ鉄球を作り出し頭上に飛ばす。

「そおおらあああ!!」

K o m e t F l i e g e n

真紅の魔力を纏った鉄球を、ギガントフォームとなっている“ グラーフアイゼン ” のヘッドで打ち出す。

そして打ち出されたコメートフリーゲンは甲板を突き破り、ヴィータの足元に位置する操舵室、そのコアへと一直線に進み粉碎した。その様子を眼下に出来た穴から見たヴィータとリインフォース？は、

「よっしや！ 次だ！」



『はいですっ!』

ゆっくりと崩れゆく“スキーズブラズニル四番艦”を後にした。

### スキーズブラズニル五番艦・甲板

シグナムは、足元に展開したベルカ魔法陣の上で目を瞑り、眼下に存在する“スキーズブラズニル”五番艦の操舵室、そこにあるコアへと意識を集中していた。

彼女が手にしているのは、大型の弓となった“レヴァンティン”。遠距離戦闘用の形態ボーゲンフォルムだ。

甲板には、バラバラに切断された“ガジェット”の残骸が散らばっている。

シグナムは障壁突破と同時に甲板に群がっていた“ガジェット”を、シュランゲフォルムの“レヴァンティン”で一掃していた。

「翔けよ、隼……!」

シグナムはゆっくりと魔力で出来た弦を引く。

そして彼女の右手に、もはや槍とも言つていい長さの矢が生まれる。狙うべきは操舵室にあるコア、ただ一点のみ。

シグナムの双眸は、たとえここから視認できずともしっかりとコアを認識した。

S t u r m   F a l k e n   ! !

そして矢は放たれた。一直線にコアへと突き進み、何の対抗も受けずにシュツルムファルケンはコアを射抜き粉碎した。

『おお！ さっすがシグナム！ 何でも出来るんだな！』

「お前が私と共に居てくれたからこそだ。

コアを失った以上、このスキーズブラズニルはそう長くはないだろう。

急いで離れるぞ、アギト」

『おつよ！』

アギトは嬉しそうに答え、シグナムは激しく揺れ始めた“スキーズブラズニル五番艦”から離脱した。

メリークリスマス！

本格的に寒くなってきた今日この頃、みなさん風邪とかは大丈夫ですか？

私は元気よく世の御家族、恋人達の為にクリスマスケーキを作り続けてます（泣）

さて、今回は結構詰め込み過ぎて長くなってしまいました。すいません。

どうか途中で飽きずに読んでやってください。

さてさて、ついに始まった最終決戦。現状では予定通りに終わりそうです。

あと・・・七話かな？ 今年中にもう一話は更新できそうです。

さてさて、次はどの幹部が旅立つのやら、フッフ、です。

清浄なる優しきもの・運命を切り拓く翼・白き純潔の希望 } Liei } (前

第二次オムニシエンス決戦イメージBGM

ACE COMBAT 04 “Megalith - Agnu

s Dei - ”

清浄なる優しきもの・運命を切り拓く翼・白き純潔の希望　　〈 L i e i 〉

オラシオン・ハルデイン　“女帝の洗礼”管制ルーム

管制ルーム、その中央に位置する球状のA I コアは、淡々と全砲塔・砲台を操作し、管理局の艦隊へと砲撃を撃ち続ける。

そんな管制ルームにこだまするのは傍受されている両勢力の通信。特に激しいのは、空で戦う“アギラス”と航空部隊の通信だった。

『忘れるな。生き残ることが、勝つことだぞ！』

『大丈夫だ。俺たちには心強い味方が、特務六課がついてる！』

『オメガ隊、シグマ隊、アルファ隊に負傷者32！　医療専用艦へ  
搬送！！』  
インヴォーク

『オスカ一尉が墜とされた！？　誰か、指揮を引き継いでくれ！』

ハハハ。墜ちるのは怖いか、人間？

我らとのドッグファイトで勝てるつもりなのか？　人間風情が、  
我らの餌食となれ

ビスシス魚座部隊12、ヘーミニス双子座部隊3・5・10が撃墜された

『見たか、この野郎！！』『管理局を甘く見るなよ！！』

うつろたえるな。単なる偶然の差だ。勝敗の先送りにすぎん

『くそつ、こんな規模の空戦はJS事件以来だ!』

なんてことだ! あの二体のデカイ怪物に、すでに五機以上墜とされたぞ!

『俺達は世界の平和のために飛んで戦っているんだ! 邪魔をするな!』

お前達の言うその平和の下、あらゆる世界で今も血が流れている。それを食い止めようとしているのは我々も同じだった。

だがな、お前達が俺達を裏切った。だからこそ、こうして血で血を洗うバカな戦争が始まった

『なら、どうして始めから管理局と手を取り合わなかった!?!』

組織内部で醜い争いをしている管理局に、誰が協力を求めるか? 理想だけでは血は止められんし、争いも無くならない。

こうなってしまった以上、どちらかが完全に滅ぶまで戦うしかないのだよ、人間

理想だけで空を飛ぶと死ぬぞ、青二才

どこまで我らアギラス驚とやりあえるか、空戦で確かめさせてもらうぞ

『バカ野郎どもが・・・!』

『俺達の飛び方を貫けばいい、それが俺達の勝利へと繋がるのだから』

熾烈を極める空戦。両勢力に被害が続出していた。

地上もまた激しい戦いを繰り広げている様子が通信から窺えた。そして、

管理局所属艦一隻の撃沈を確認。引き続き、騎士の洗礼及びアインヘリヤルによる砲撃を続行

“女帝の洗礼”の管制システムが戦況を告げる。

管理局のL級艦船“シャノン”が、“騎士の洗礼”の一撃によって、“アドウベルテンシアの回廊”に沈んでしまっていた。

戦場となっている“アドウベルテンシアの回廊”で続いている管理局・“テストメント”、二大勢力の戦争。

戦況は“特務六課”と協力者たちの力によって徐々に管理局側へと傾きつつあるが、

管理局所属大型艦、さらに一隻の撃沈成功

“テストメント”側もまた、ただでは負けていなかった。

今度は大型のXL級艦“センチュリオン”が煙を立てながら沈んでいく。

チャージ完了。照準、時空管理局支局。

照準座標調整・・・クリア。砲撃術式効果を物理破壊に設定開始・・・クリア。

砲撃準備完了。洗礼の一撃・・・発射

放たれる次元跳躍砲。目標は次元空間内にある管理局支局。

上空へと一直線に向かい次元跳躍しようというところに、洗礼の一撃へと迫る三条の砲撃。

衝突。洗礼の一撃の射線がわずか数度といえど本来の軌道から逸れてしまい、次元跳躍することなく天へと消えていった。

管制システムにエラーが発生する。不発に終わることなどなかった  
為に、演算システムに異常が生じていた。

全システムを強制再起動。チャージを再開。目標は同じく時空管  
理局支局に設定。

次弾の射線を変更。直上に砲撃を掃射、妨害を受けないように次元  
転移させる

管制システムは再び次元跳躍砲、洗礼の一撃を放つ為にエネルギー  
をチャージし始める。

十 十 十 十 十 十 十

「ホントにシャルさんの言うとおりで上手くいつちゃった・・・」

わたしはフリードの上で、“女帝の洗礼”の次元跳躍砲の軌道を逸  
らす事に成功したことにビックリする。

地上に降ろしたエリオ君の代わりにフリードに乗ることになったル  
ーちゃんも驚いているみたい。

『キャロ、ルーテシア、ありがとう！』

そんなわたし達の元にシャルさんから通信が入る。

シャルさんの言う作戦。それはついさっきわたしとルーちゃんに言  
い渡されたもので、ヴォルテールと白天王の全力砲撃を次元跳躍砲  
にぶつけて相殺するというものだ。

相殺は出来なかったけど軌道を逸らして次元跳躍だけは防げる事に  
成功した。

「あ、はい。でも相殺は出来なかったんですけど・・・」





おのれ、六課の竜召喚士！

六課の魔導師は生かして帰すな。確実に仕留める

そんなわたし達の乗るフリードに、また“アギラス”が迫りくる。彼らの通信が聞こえる。わたし達を撃墜、殺すのだと。

私はルーちゃんに「掴って！」と告げ、フリードに迎撃に移るようお願いします。

フリードは一鳴きして大きく反転、こっちに向かってくる“アギラス”三機の真正面から突撃する。

わたしとルーちゃんは、

「いけええええ！！！」

シューティング・レイ  
トードス・ドルヒ

“アギラス”の弱点、エアインタークへと射撃魔法を撃つ。だけどわたし達の攻撃はエアインタークを外れて、AMFによって掻き消された。

高速ですれ違う。反転速度はフリードの方が遙かに上。

「フリード……」

こっちに機首を向けた“アギラス”に指をさして、

「ブラストレイ！！！」

フリードに火炎砲を撃たせる。“アギラス”三機は回避行動を執るけど、その内の一機が避けきれずに呑みこまれた。

他の二機はそのままわたし達へと向かってきて、砲撃に吞まれた“アギラス”も爆炎を突き破って姿を現した。三機の前面にヨツンヘイムの魔法陣が展開された。わたしとルーちゃんももう一度射撃魔法をスタンバイ。

消える！！

「ウイングシューター！」「パンツァー・ウム・ライセン！」

そして向こうが砲撃を撃つより早く高速射撃魔法を撃つ。

わたしの高速シューターは一機のエインタークの両方を撃ち抜いた。

“アギラス”は バカな・・・！ と驚愕の声と一緒に爆散した。

そしてルーちゃんも、ティアさんの使うヴァリアブルシユートと同じAMFを貫通する事が出来る多重弾殻射撃魔法で残りの二機のエインタークを破壊、その内の一機も爆散した。

そしてもう一機、エインタークから火を噴いているにも関わらずにそのまま突っ込んできた。ただ、

これで勝ったと思うな！ 勝負はまだついていな

ハーツィース・ドライヴ  
紫光掃破

「わたしが居る限り、二人には手を出させないよ・・・！」

苦戦を強いられていた航空隊の支援から戻ってきたレヴィちゃんの一撃で、最後の二機も爆散した。

レヴィちゃんはフリードに「ちよつとごめんね」と一言断りを入れてから背中に降り立って、

「ルーテシア、キャロ、ケガない？ 大丈夫だった？」

そう、わたしとルーちゃんの心配をしてきた。

もちろん無傷なわたし達は「大丈夫」って答える。

レヴィちゃんはわたし達の身体を見回して「良かったあ」って安堵のため息。

「それなら、今度はみんなでひと暴れしようか・・・！」

十 十 十 十 十 十 十

「……………」「……………」

目の前で何隻もの“スキーズブラズニル”が沈んでいく光景に、あたし達地上班と地上部隊は啞然。

「やっぱりすごい……」

あたし達全員の思っている事を代表して口にしたのは、さつき合流したエリオ。

ギン姉達はもちろん、お母さんとティードさんさえも“スキーズブラズニル”が簡単に撃沈された事に驚いている。

そして最後の一隻があたし達と“オラシオン・ハルディン”の間に落ちていく。

そんなあたし達は今、“テストメント”の地上戦力の“ガジェット”と武装した構成員達との戦闘を地上部隊に任せて後方についていく。

“オラシオン・ハルディン”攻略の一端を担っている為に、地上部隊の前線隊長さんから魔力と体力を温存するように言われたからだ。

それに、“ヴォルフラム”であたし達“六課”の全体指揮を執る八神部隊長からも通信でそうするように指示を出されてる。

「六課って、なんていうか凄過ぎっスねえ」

“ライディングボード”の上に胡坐をかいて座るウエンデイが、沈んでいく“スキーズブラズニル”から脱出したシャルルさん達を仰ぎ見てそう呟いた。

あたしとティアはそれに対して、

「六課って言うよりも、なのはさん達やシャルさんがすごいんだと思うけど・・・」

「そうね、あたし達には無理だわ・・・単独であんなの墜とすなんて・・・」

そう返して、ちよっぴり落ち込む。

でもそれに反論するのがお母さんとティーダさんで、

「今の二人の実力なら十分に落とせると思うけど」

「僕もそう思うなあ。あの崩壊の感じからして、スキーズブラズニルのコアを直接叩いたと思う」

「だからあんなにも綺麗に崩れていくんだから」

お母さんはあたしを、ティーダさんはティアの頭をポンポンと叩いた。

するとウエンデイが「あたしもやってほしいっス！」と、また騒がしくなる。

お母さんは「はいはい」と嬉しいそうにウエンディの頭を優しく叩いた。

ギン姉達も声には出さないけど顔には出しているのがあたしにでも分かって、お母さんは一人ずつポンポンと頭を叩いた。

「え〜つと、ティアナ、僕もやろうか・・・？」

「・・・あ、その・・・いいです」

ティアとティードさんはそんな感じで。

ティアも恥ずかしがらずにやってみらえばいいのになあ、なんて。戦時下なのにこんな揺るんだ空気で居るあたし達は、直後、途轍もない殺気を感じとって無意識に構えた。

目の前に居る地上部隊が一斉に道を開けた。というよりは無意識に飛び退いた感じた。

「あ・・・！」

ずっと前方、あたしの視界に入る三つの人影。

“オラシオン・ハルディン”の入り口に佇んでいるのは、漆黒の炎を身に纏うカルド隊だった。

「ヴォルケンリッターはどこだ？」

十 十 十 十 十 十 十

『シグナム、ヴィータ！ カルド隊が姿を現した！

近くにスバル達と地上部隊が居る！ 至急、撃破に移って！！』

「了解！！！！」

“ヴォルフラム”のはやてから緊迫した通信が入った。

シグナムとヴィータは「了解！」と答えて、“オラシオン・ハルデイン”へと視線を向けた。

私となのはとフェイトも同様に視線を向ける。

ここからでもハッキリと分かる闇色の炎が揺らいでいるのが見える。

「急ぐぞ、ヴィータ！ カルド隊をオラシオン・ハルデインから遠ざける！」

シグナムはヴィータにそう言い、“レヴァンティン”のカートリッジを一発ロード。  
ヴィータもまた、

「分かってる！ リイン、アギト、行くぞー！！」

『はいです！ いつでも！』 『シグナム、姉御、あたしもいつでもいいぜ！』

リインとアギトにそう言いつつ“アイゼン”のカートリッジを一発ロードした。

そして最後に、私達へと振り向いて、「女帝の洗礼は任せたぞ」と私達は「任せておいて」と返し、急降下していく二人を見送った。

「スバル、ティアナ、エリオ。カルド隊はシグナム達に任せて、地上部隊と協力して施設制圧をお願い」

地上班にそう通信を入れ、『了解しました！』との返答を受け取ったと同時に、なのはとフェイトを見回して、三人で頷き合う。

すでに管理局の艦隊に損害が出ている今、これ以上“オラシオン・

ハルディン”を放っておくわけにはいかない。

すぐさま出来る限りの破壊工作のために、一直線に“アインヘリヤル”へと向かう。

だけど私達の前に立ちはだかる白コートの姿が一つ。

「ディアマンテ・・・！」

アルトワルドに跨り、砲撃を撃ち続ける一基の“アインヘリヤル”の上に立つディアマンテ。

「なのは、フェイト。悪いけど、地上班と協力して施設制圧、頼める・・・？」

ディアマンテから視線を逸らさず、なのはとフェイトにそう告げる。正直、セレスとルシルとの戦いを控えた二人にこれ以上の負担はかけたくはない。

下手に疲労していたら勝てない相手だから。

だけど、それを承知で二人は「任せて」と即答してくれた。

そして戦場を空としたシグナム達と入れ替わるようにして、なのはとフェイトは地上に向かった。

私は、上空を目指すシグナムとヴィータ、カルド隊とすれ違う。

一瞬だけ目が合った。シグナムとヴィータの目に込められた思い、“負けるな”。

確かに私は受け取った。だからこそ、

「ディアマンテ、さっさと終わらせてもらおうから」

“トロイメライ”を待機モードにして、代わりに“キルシュブリュート”を携える。

脇を通り過ぎていく砲撃群。そのいくつかを切り裂いて無力化しつ



つ、一直線にダイヤモンドに向かう。

「大人しくしていればいいものを・・・！」

その言葉と同時に、“女帝の洗礼”から次元跳躍砲が真上に向けて放たれた。

視界が白銀に染まって、視力を潰されないように左手で顔を覆う。にしても、さすがにアレはヴィルテルと白天王であつてもどうにもならない。

「何に向けて砲撃を撃った！！？」

ダイヤモンドへ怒鳴るように問い質す。

「管理局支局だ。データを回収し終えた順に破壊すると言っただろう？」

六課の連中にもそういうような連絡が入っているんじゃないのか？」

それが当然とでも言うように答えた。

支局。本局に比べれば小さいとの話だけど、避難が済んでいなければ・・・。

「なんてことを・・・！」

### 風牙真空刃

真空の刃を放ちつつダイヤモンドに接近する。

対するダイヤモンドは、アルトワルドのスピードによって簡単に回避。

真空刃はさっきまでダイヤモンドが乗っていた“アインヘリヤル”

に直撃したけど、破壊は出来なかった。

(威力が足りなかった・・・?)

我が往くは天の霸道

今度は向こうの攻撃<sup>ターン</sup>。雷そのものとなつて突撃してきた。疾い。けどまだ見切れる速さだ。だから私は行く手を遮るように、

「っ・・・光牙・・・聖霸刃!!」

真紅の光の波を叩きつけるように前方に放った。

その隙に、私がこの三千年の間に手に入れた力を解放する。

真紅の両翼をピンと張るように伸ばす。

そして、両翼の付け根から新たな翼を背中から生成。

私の周囲に魔力で出来た真紅の無数の羽根が舞う。

私の背から生えるのは、ルシルの剣翼を基にして作り上げた私の新しい翼。

「フォイアロートフェーニクス  
空戦形態、顕現」

ルシルの剣翼や空戦形態の術式はすでに熟知している。

だからこそ私も扱うことが出来るようになった。

この、私の背から伸びる八枚の細長いひし形の紅翼による、ルシルと同じ空戦形態を。

私が放った光波も消え、アルトワールドに跨ったダイヤモンドが姿を見せる。

私は“キルシュブリューテ”の剣先をダイヤモンドに向け、一言。

「大人しくするのはお前の方よ」

「それはこちらのセリフだよ、シャルロツテ・フライハイト」

ディアマンテはそう言うと“女帝の洗礼”へと向かっていく。私もアルトワールドに跨っているディアマンテを追いかける為に飛行を開始。

“アインヘリヤル”から“女帝の洗礼”までの直線距離、約6kmを全力で飛行。

こつちも本気で飛んでいるのに、それでも前方のアルトワールドとの距離12mで拮抗。  
フォイアロートフェーニクス  
空戦形態を使えなかつたら戦いにならなかつた。

(騎士の洗礼・・・よおし・・・！)

“騎士の洗礼”の外壁スレスレを飛ぶ。と同時に“キルシュブリューテ”を“騎士の洗礼”の外壁に突き立てる。

刃は外壁を突き貫けた。イケる。解放しなくても神器なら余裕で外壁を破壊できる。

激しい火花をまき散らす“キルシュブリューテ”の剣先から、私の扱える雷撃系上位の魔術を“騎士の洗礼”の内部に放つ。

「雷牙・・・神葬刃！！」

刃を抜いてそのまま止まらずに飛行を続行。

後方から爆発音、大気を揺るがすほどの震動が周囲に広がる。すると、ここ“オラシオン・ハルディン”内に、どこから流れているのか分からないけど通信がこだまする。

騎士の洗礼？が沈黙。？番基の砲撃掃射システムに異常発生。  
砲撃掃射システムの再起動は不可、断念。？番基を破棄

デバイスのような声。データにあった管制システムのものだと分かった。

何はともあれ、“騎士の洗礼”の一基を陥落させてやった。

「やってくれたな！！」

ディアマンテが上半身を捻ってこっちに向く。

フードは脱げていて素顔を晒している。

左手の指の間に白銀に輝く雷のナイフらしきものが四本。

ディアマンテはスナップを利かせてそれを投げつけてきた。

#### 追従する破滅の銀雷花

私はロール機動でやり過ぎした。

直感。すぐに頭だけを動かして後方を見る。

するとナイフがすぐそこまで迫っていた。誘導操作弾のようなものだ判断。

ならば、と、回避でなく迎撃に移るのみ。

私は飛行速度を緩めないで、

#### ロイヒテン・プファイル

射撃魔法を十三基放つ。

対象を視認している状態で放てばオートで追尾する機能を持つ、私のがなのはのディバインシユーターを基にした最初に会得した魔法。

魔術じゃないのが少し心配だけど、神秘のある私の魔力で構成されているのだからきつと大丈夫。

後方から連続して起こる爆発。迎撃は成功のようだ。

そう思った瞬間、再度直感が働く。今度はちゃんと身体ごと振り返

ってシールドを張った。

直後、視界いっぱいには花のように広がる白銀の雷光。

「炸裂弾・・・っ!!」

あまりの轟音と閃光に耳を塞いで目を閉じる。

視覚が一時的に最悪なレベルにまでマヒしてしまう事だけは防がないと・・・。

そうでないと、ダイヤモンドに殺される。

『全ての剣士の頂点に立った最強の騎士、剣神シャルロットと戦えるとはな』

「（念話！？）がはっ・・・!？」

お腹に鈍い衝撃。白い世界、視界にうつすら映るのはアルトワルドの頭・・・？

突進をお腹にまともに食らったのか・・・？

そして宙に浮く感覚、次に背中に奔る鈍い痛み。咽る。

背中から地面に落ちたようだ。仰向けでいると視覚が徐々に戻り始める。

最初に見えたのはアルトワルドの前脚。踏み潰されると判断する前にすでに身体は動いて、転がるようにして避けた。

すぐさま立ち上がって閃駆で距離を取る。

（ダイヤモンドが何か喋ってる・・・？）

聴覚がやられた。口は動いているけど声は聞こえない。

でも、他の感覚が生きている以上は・・・

「何言ってるのかわからないけどさ、私はまだ戦える・・・！」

## 閃駆

十 十 十 十 十 十 十

“ヴォルフラム”のブリッジに入る緊急通信。

内容は、“女帝の洗礼”の次元跳躍砲によって、管理局支局の三分の一以上が破壊されたというものやった。

半壊の被害。支局はもう何もせんでも次元空間に沈んで、壊れて消えていく事になる。

唯一の救いは、支局の避難は終えていた事や。

「これ以上は撃たせられへんな・・・」

“女帝の洗礼”による次元跳躍砲はもう撃たせるわけにはいかん。

それに“騎士の洗礼”と“アインヘリヤル”による艦隊への砲撃。

アレらにもすでに私ら艦隊は損害を被つとる。

「キャロ、レヴィ、そしてルーラー！」

三人もオラシオン・ハルデインの攻略へ向かって!!」

“アギラス”掃討を担当する三人に向けて通信を入れる。

『え？ あの、でもそうすると、アギラスへの戦力が・・・』

「アギラスは航空部隊の底力で何とかなる！」

それに、私も空に上がる事にした。神秘の無い私でも、アギラスくらいは墜とせるからな」

それに、管理局の援軍はまだまだここ“オムニシエンス”に向かつとる。

私達と“テストメント”の大きな違いは、その組織の大きさにある。いろんな管理世界からの援軍。そやけど、“テストメント”にはそんな戦力は無いはず。

確かに“女帝の洗礼”を始めとした兵器による戦力は管理局以上や。でも数では間違いなくこっちの方が上。質で勝てんへんのやったら数で勝つ。

それにもまた問題はあるけど、一つの敵を前に、管理局内での争いなんてやってられへんし。きつと上手く協力して戦つてくれるはずや。

「そやから三人とヴォルテールと白天王は、オラシオン・ハルディンの制圧を。これは命令や」

『『『り、了解です!!』『』『』』

私は艦長席から立ち上がって、ブリッジのスタッフ達を見回す。スタッフ達は私の勝ちに対して肯定を示すために頷いてくれた。私は頭を下げて「ありがとう、行ってきます」と告げてブリッジを後にした。

十 十 十 十 十 十 十

地上部隊と協力して、フェイトさんとなのはさんが合流した僕達地上班は、“オラシオン・ハルディン”の魔力・供給施設、ソーラーパネルを制圧するために、

「ストラーダ!!!」

“ガジェット”群の掃討をしている最中だ。  
フェイトさん達も、地上部隊の人達もみんな、これ以上の被害が出ないように精いっぱい戦ってる。

ソニッククムーブ

“ガジェット”？型三機の攻撃を避けつつ、接近して“ストラーダ”で破壊していく。

どれだけ破壊したのか分からないけど、すで十機は破壊したはずだ。そんな最中、空から連続で起きる爆発音が聞こえてきた。

シグナム一尉とヴィータ教導官達が、カルド隊と戦っているものだ。空を見上げるのを止めて戦闘再開しようとしたとき、“女帝の洗礼”の先端が白銀の光を灯した。

「また撃つのか!？」

“オラシオン・ハルディン”内に、さっきのデバイスの声ような放送が流れる。

チャージ完了。照準、第3管理世界ヴァイゼン・地上本部。  
照準座標調整・・・クリア。砲撃準備完了。洗礼の一撃……………  
発射

次元跳躍砲がまた撃たれた。今度はヴァイゼンの地上本部。

辺りが騒然となる。所々で戦闘を繰り広げている地上部隊の隊員達の叫びだ。

聞こえてきた言葉から、あの騒いでいる隊員達はヴァイゼンからの応援部隊というのが分かった。



守れなかった、と、悲しんでいる。僕達もまた止められなかった。そこに、フェイトさんとなのはさんから、魔力の供給と生成をする施設を二基制圧した、と通信が入った。そしてすぐに、

第三・第四施設大破。<sup>ジェネレーター</sup> 魔力供給・生成システムにエラー。

再起動・・・不可。第三・第四施設<sup>ジェネレーター</sup>の破棄を決定。

第三・第四を除く施設<sup>ジェネレーター</sup>の稼働率をアップ。

・・・洗礼の一撃、目標まで、10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、着弾。

目標、第3管理世界ヴァイゼン・地上本部センタービルの破壊に成功。

次弾エネルギーの供給開始

“オラシオン・ハルディン”にこだまする放送。

ヴァイゼンの地上本部は守れなかった。だけど、次は撃たせない。絶対に！！

「行くよ、ストラダ。もうこれ以上は撃たせない！！」

十 十 十 十 十 十 十

「ヴァイゼンの地上本部が・・・！」

制圧した施設から別の施設へと向かう最中に流れてきた放送。

ヴァイゼンの地上本部を破壊して、さらにどこかの管理局施設を破壊するために再チャージするっていう内容だった。

私とフェイトちゃんて制圧した施設二基程度じゃ、“女帝の洗礼”は止められない。

私は、前を飛ぶフェイトちゃんへと念話を送る。

『フェイトちゃん、次の発射までどれくらいか分からないけど、これ以上は撃たせられない』

『・・・うん。ここは分散した方がいいかもしれない。でも・・・』

『私とフェイトちゃんは、この後、セレスさんとルシル君との戦いがある。』

『ただ、このまま温存とか言っていたら・・・』

『もつと被害が大きくなる・・・。シャルもダイヤモンドとの戦いで大変だし、シグナム達もカルド隊と今も・・・』

空から小さい爆発音が連続で続く。

シグナムさんの紫とヴィータちゃんの赤、そしてカルド隊の黒が、高速で空を翔けているのが分かる。

一応、はよてちゃんからさっきキャラ口達をこっちに向かわせるって連絡はあった。

でもすぐには来れないはず。だから、

『フェイトちゃん』

『キャラ口達が来るまで、私となのはで出来る限りの事をやるっ』

私とフェイトちゃんは横に並んで拳を突き合わせる。

そして、私とフェイトちゃんは別れて施設制圧に乗り出す。

十 十 十 十 十 十 十

わたしはルーテシアとキャラ口を置いて先行、“オラシオン・ハルデ

イン”の入り口に辿り着く。

“女帝の洗礼”の次元跳躍砲に必要なエネルギーを担う施設には地上部隊が向かってる。

ならわたしは、“アインヘリヤル”を沈めてやろう。

形態は“モード・バスター”のまま。わたしの砲撃で、砲台を破壊してやる。

管理局艦隊に向けられている砲口から撃ち出される砲撃に当たらないように脇を飛ぶ。

「ガジェット……。スカリエツティの遺品、か」

真下から光線を撃ってくる“ガジェット”の群れ。

わたしは“アインヘリヤル”から放たれる砲撃の上へと移動することとで光線をやり過ごす。

そして、砲撃が途切れたその瞬間に、“アインヘリヤル”の砲口の真ん前へと移動。

「さすがに砲口にシールドなんて張ってないよね……！」

ハーツィース・クラッカー  
紫光裂破

射撃魔法を直接砲身の中に撃ちこむ。

砲口内が光つたのを見てすぐさま離脱。

直後に爆発が起きて、“アインヘリヤル”の到る所から爆炎が噴き上がる。

まずは一基を破壊。このまま全ての“アインヘリヤル”を破壊してやろう。

とは思っけど、“オラシオン・ハルディン”の広さは直径にして約8 km。

地上部隊のほとんどが施設制圧に動いてる。

“騎士の洗礼”と“アインヘリヤル”制圧しているのはそう多くない人員。

「悩んでても仕方ない。今はやれるだけの事をやってやれ、だ」

わたしは沈黙した“アインヘリヤル”から、別の“アインヘリヤル”を目指して飛ぶ。

十 十 十 十 十 十 十

アインヘリヤル？、大破。？番基の破棄を決定。

第一施設、ジエネレーター大破。女帝の洗礼の砲撃掃射システムに遅延発生

“オラシオン・ハルディン”内にもう一度放送が流れる。

あたしは、一緒に施設を制圧したお兄ちゃんを見る。

お兄ちゃんは「やったな、ティアナ。でも、まだまだこれからだ」と言っ、また別の施設を制圧するために移動を始め、あたしも急いでお兄ちゃんの後を追うように走る。

正直、お兄ちゃんと同じくして一緒に戦える日が来るなんて思わなかった。

「こうして妹ティアナと共に戦えるなんて、少し嬉しいような悲しいような、複雑な思いだよ」

前を走るお兄ちゃんが少し躊躇いがちにそう言った。

お兄ちゃんはあたしと同じ事を考えていた。

本来なら、こんな事は起きない。お兄ちゃんはすでに亡くなっているのだから。

あたしは、カローラ一佐に少しだけ感謝する。

もう一度お兄ちゃんと同じ時間を過ごせる機会をくれた事に。

「あたしも、あたしもお兄ちゃんと一緒に戦えて・・・嬉しい」

「そっか。ありがとう、ティアナ」

「ありがとうはまだ早いんじゃない？」

「・・・ああ、そうだ。全てが終わったら、もう一度言おうかな・・・？」

お兄ちゃんとの別れの時間が近づいてきてる。

それは必然で、回避できない絶対の現実。だから、神様、もう少しだけでいいです。

「ガジェットだ。行くぞ、ティアナ！」

「はい!!」

お兄ちゃんと一緒に居させてください。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

あたし達ナカジマ家は、ひたすらに施設、ソーラーパネルの破壊を行っていた。

“ガジェット”の数も武装構成員もほとんど見かけなくなった。

「チンク姉！」

「ああ！ 姉に任せろ・・・!!」

## ランブルデトネイタ

チンクの放ったナイフによって、また一つソーラーパネルが吹き飛んだ。

それもチンクの能力“ランブルデトネイタ”のおかげ。

金属を爆発物に変える、戦闘機人としての能力。

それがあるからそう苦労せずにソーラーパネルだけは簡単に破壊できる。

「それにしてもオラシオン・ハルディンって広過ぎっスね。」

内周を回りながら施設を破壊とかってメンドー過ぎっス」

「そんなこと言ってる暇なんてない。早くしないと、次の砲撃が撃たれちゃう」

「デイエチの言う通りだぜ、ウエンディ。」

みんな頑張ってたんだ。これ以上の被害を出さない為にも、あたしらがやるしかねえ」

「分かってるっスよ。でも少しは休みたいな〜って思っただけっス〜」

そんな話をしていると、施設から爆発音。

お母さんとギン姉の二人で制圧しに行っているんだけど、あの施設の様子から見てもう終わったみたい。

二つのウイングロードがあたし達のところまで伸びてきて、その上を走る二人が見えた。

あたし達は二人に「お帰りなさい」と言うと、二人も「ただいま」と返してくれる。

「こつちは終わったけど、みんなの方は・・・って、聞かなくてもいいみたい」

お母さんはバラバラになったソーラーパネルを見て、「さすがうちの娘達ね」と笑った。

やっぱりお母さんに褒められるのはすごく嬉しい。

でも、この戦いが終わったら、今度こそお母さんは居なくなる。

ごめんなさい。あたし、今、終わらなければいいのになんて思った。

「スバル・・・？ どうしたの？ 調子悪い？」

「ギン姉・・・ううん、大丈夫！ 行こう、みんな。次の砲撃を撃たせないために！」

ギン姉の心配に、あたしは無理矢理明るく振舞う。

お別れは辛い。したくない。だけど、あたしはここで立ち止まれない。

＋ 十 十 十 十 十 十 十

ダイヤモンドとの戦闘の最中、はやてから通信が入った。

正直、受け答えするような余裕はないけど、私は通信に応える。

「どうしたの、はやて。出来れば手短にお願い・・・！」

### 風牙真空烈風刃

ダイヤモンドへと風の壁に真空の刃を複数巻き込んだ一撃を放つ。ただ雷そのものであるアルトワルドの力で回避される。

本当にあのスピードは厄介だ。真技を当てる自信が無くなった。

『フリングホルニとナグルファル。その二隻の攻略法って知ってるか？』

「は？ 何でまたその二隻の名前が出て・・・」

はやてはこんな状況で無意味な事は言わない。  
なら、信じたくないけど・・・

「出てきたのね、フリングホルニとナグルファルが。このオムニシ  
エンスに・・・！」

アルトワルドから放たれる雷撃砲を回避しながらそう訊き返す。

私は飛行の途中で、生前に二度、ジュエルシード事件でルシルと最  
期に闘ったときに使った魔術を発動。

そのまま距離を開け、ダイヤモンドへと魔力刃を連続で放ち続ける。  
ダイヤモンドは手に持つ剣でそれを弾き返していく。

『そうなんや。アギラスは残り少ないんやけど、今度はスキーズブ  
ラズニル以上の大きさの帆船が二隻現れた。』

ヴォルテールも白天王もそれに邪魔されて動けへんし、艦隊からも  
すでに三隻の損害が出とる』

最悪だ。ルシルは何てモノを持ち出してくるんだ、まったく・・・！  
“フリングホルニ”と“ナグルファル”。アースガルド同盟軍の保  
有していた戦艦だ。

その戦力、その大きさ、共に“スキーズブラズニル”以上。撃沈方  
法は、

「・・・ごめん、はやて。私にも分からない。」



ナグルファルは、たぶんスキーズブラズニルと同じ、操舵室にあるコアを潰せばいいと思う。

だけど、FRINGホルニはきっと違う。

魔術を生み出したアースガルドの魔道技術の粋を結集して造られた旗艦。

神の加護を受けし不沈艦FRINGホルニ。対抗手段は……無い」

ディアマンテを睨みつける。

さつきから“オラシオン・ハルディン”内に流れる放送。

“アインヘリヤル”もジェネレーターと呼ばれる施設もすでに半壊なのは達も地上部隊もよくやってくれている。

なのに、ここに来て“FRINGホルニ”という反則を持ってくるなんて……。

「再誕神話に登場する不敗なる艦FRINGホルニ。さすがの剣神といえど焦るか」

「貴様……！」

このタイミングで出してくるなんて、狙っていたとしか考えられない。

ダメだ、抑える。戦場に怒りを持ちこんだら自滅の道を歩く事になる。

深呼吸して、何とか冷静を保つ。

『はやて、クロノは何て言ってる？』

はやてに通信じゃなく念話を繋げる。

『18時まで間に合わなかった援軍が集まって来とる。』

すでにX級艦が八隻来てくれた。それで艦隊による一斉砲撃で対抗するって。

だから、せめてオラシオン・ハルディンの砲撃だけはどうかしてもらいたい、って』

『・・・了解。はやて、あなたもオラシオン・ハルディンの攻略に参加して。六課全体で、ここを潰す』

『了解や。全力で向かう。キャロとルーラーも一緒に連れてくけどええか？』

『お願い。出来るだけ戦力が欲しい』

念話を切る。はやての広域魔法なら、施設なら簡単に制圧できる。

私はさつさとダイヤモンドを斃す為に“キルシュブリューテ”を構え直す。

戦闘再開のその前に、

『オラシオン・ハルディン攻略中の六課メンバーへ！

至急女帝の洗礼へ集合！ 女帝の洗礼を制圧する！！

その前にみんなにやってもらいたい事があるから、よく聞いて！』

ここ“オラシオン・ハルディン”内に居る六課メンバー念話を入れる。

そして、みんなにお願いする“女帝の洗礼”停止への布石。

ダイヤモンドの戦闘中に何度か“女帝の洗礼”に攻撃を向けたけど、全然ダメージを与えることが出来なかった。

私一人で、戦闘中では突破できないという事だ。

だから、みんなには外壁に穴を開けてもらう。

「かかってきなよ、ダイヤモンド。こっちは時間が無いんだ・・・  
さっさと終わらせる！」

みんなへのお願いを終え、戦闘再開の為に挑発。

「お前がかかってこい、剣神・・・！」

だというのに、ダイヤモンドも挑発。睨み合う。

「・・・お前が来い！！！」

光牙閃衝刃

深淵より来る雷霆

私が放つ紅光の槍とアルトワールドが放った銀雷の砲撃が真つ向からぶつかる。

私達の間にも二つの閃光が炸裂する。視界が光に埋め尽くされる。

(来い、来い、来い、ダイヤモンド！)

直後、お腹に響く轟音が閃光の中から聞こえて、閃光を全て吹き飛ばした。

私の目に映るダイヤモンドは、アルトワールドから落ちて、地面へと落下していく。

そしてアルトワールドもまたダメージによってか姿が揺らぐ。  
見事に決まった。私がさつき周辺にバラ撒いた魔術圧縮爆弾<sup>トケン・サート</sup>

不可視の大気を圧縮して設置する機雷のようなものだ。

ダイヤモンドはそれに突っ込み、ダメージを負った。

アルトワールドから離れた以上、もうお前には・・・

「勝ち目はない!!」

私はこれでお前との戦いにピリオドを打つ。

十 十 十 十 十 十 十

シャルからの念話の通り、全力で“女帝の洗礼”を目指して飛ぶ。私も、なのはも、そして“女帝の洗礼”へと走る三つのウイングロード、スバル達も向かつてる。

“オラシオン・ハルディン”の終焉は近い。そう思える。

“アインヘリヤル”は残り三基という放送が流れた。

“ジェネレーター”と呼ばれた魔力供給・生成施設もまた半数の十基を破壊し終えている。

“騎士の洗礼”はまだ一基しか破壊出来てないけど、それでも“女帝の洗礼”を停止させれば全てが止まる。

「もう少し……!!」

空から聞こえるシャルとダイヤモンド、シグナムとヴィータとカルド隊の戦闘音。

そして、“オラシオン・ハルディン”に流れる放送。

緊急命令受諾。次弾標的を、時空管理局本局に設定。

洗礼の一撃のチャージを再開。砲撃照射まで360秒

「な……っ!? なのは!!」

「う、うん! 急がないと本局に向けて次元跳躍砲が撃たれる!!」

さらに速度を上げて、“女帝の洗礼”へと急ぐ。砲撃が撃たれるまで、残り6分。その間に何としてもシャルの願いを果たす。

そして辿り着く“女帝の洗礼”の根元、白銀の外壁。

「なのはさん！ フェイトさん！」

少し遅れて、スバル達が辿り着き、そしてレヴィ、エリオとザフィーラ、ティアナとティード元一尉、最後にはやてとキャロとルーテシアが揃った。

みんなが頷き合って、早速始める。“女帝の洗礼”の外壁破壊を。たとえ破壊出来なくても、シャルの一撃で破壊出来るほどにまで弱らせればいい。

「ナカジマ家姉妹！ ここが正念場よ！」

「……………はいッ！！」「……………」

作戦開始。全員が物理破壊設定の魔法を使うことになる。

クイント元准陸尉の号令に応えるナカジマ家の姉妹達。

まずはチンクの力、オーバーデトネイションによる攻撃。

投擲されたナイフは外壁に当たったと同時に爆発。

すぐにスバル、ギンガ、クイント元准陸尉の“リボルバーナックル

”による拳打と、ノーヴェの“ガンナックル”による拳打。

それが無傷だった外壁に打ちつけられるけど、弾かれる。

スバル達は一斉にその場から引いて、

「合わせるっスよ！ デイエチ！ ティアナ！ ティアナのお兄さん！」

「何でウエンデイが仕切るの？」

何でかウエンデイの指示のもと、同時に放たれる高威力の砲撃。大爆発。だけど外壁が壊れた気配はない。すぐに、

「打ち壊すツツツ!!」

“モード・コンバット”のレヴィによる猛烈な連撃。

最後にゼロ距離の近接砲撃を撃つて、離脱。

すぐにエリオの対グラナードの為に覚えた一撃、雷槍。

ザフィーラの連撃。フリードの火炎砲、と続くけど一向にヒビすら入らない外壁。

そして私となのはとはやてによる同時砲撃。

それでも傷がつかない外壁。

「おまえら、どけええええええええ!!!!」

背後から聞こえたヴィータの声。

一斉に振り向くと、“グラーフアイゼン”をツェアシュテールングスフォルムにしたヴィータがこっちに向かって来ていた。

私達は一斉に外壁から離れる。

「ブチ貫けえええええええええ!!!!」

ヘッドのドリルが火花を散らしながら外壁を突破しようとする。

私は外壁から空へと視線を移す。ヴィータがここに居るといふ事は、シグナム一人でカルド隊と戦っているという事だ。

すると、シグナム一人で抑え込むのは出来なかったようで、カルド隊の内の一人がこっちに向かって来る。

私達が構えようとしたとき、何を思ったのかはやてが躍り出た。

「ヴィータの邪魔はさせへん！ 夜天わたしの主が相手や、カルド隊！！」

私となのはとレヴィが、神秘の無いはやてを守るために前に出ようとしたその時、

「ちよつとごめんよ！」

私達とカルドの誰かとの間にディアマンテが落ちてきて、カルドの一人の背中を踏みつけるようにシャルが落ちてきた。

呆気にとられる私達に視線で、離れていて、と送ってきたシャル。シャルはもう一度カルドの一人の背中を踏みつけて、立ち上がるうとしたディアマンテへと疾走。

“キルシュブリューテ”を構えて、

牙突

十 十 十 十 十 十 十 十

ディアマンテを貫いたシャルちゃんの疾走を止まらんと、一直線に外壁へ向かう。

ヴィータもその様子に気づいてすぐさま攻撃を止めて、シャルちゃんに道を開けた。

直後、ディアマンテを外壁に叩きつけたシャルちゃんは、

「ありがとう、みんな。行ってくるよ」

と私達にお礼を告げた。

ディアマンテから“キルシュブリューテ”を抜いて、ほぼゼロ距離で光の一撃を撃ち込んだ。

視界が真紅に染まる。視覚が元に戻った時、外壁に穴が開いとして、シャルちゃんとディアマンテの姿は無かった。これで、本局に砲撃は撃たれへん。シャルちゃんが中に入った以上、私達の勝ちや。

「はやて！」

ヴィータの叫び。やってしもた。私の後ろには、カルドの一人が居ることを失念しとった。

振り返る。目に映るカルドの大剣。目を逸らせへん。瞑ることも出来ん。

こんなところで死ぬんか？ リインフォースとの約束もまだ果たせてへんのに？

愛する家族を、友達を、仲間を置いて、私は、ここで死ぬんか？ そう思った時、

「私の主に手を出す事は、誰であろうと許さん」

待ち望んだ、愛しい家族の一人の声が聞こえた。

直後にカルドの一人は殴り飛ばされて、遠くの方にガシャンと音を立てて倒れ伏した。

殴り飛ばしたのはもちろん、

「御無事ですか、主はやて。それと、お待たせして申し訳ありません」

大きな白い一枚布を身体に巻いただけのリインフォース。

その格好はまるで小さい頃に本で読んだ天使のような女神のような



神々しい姿。

それに、辺りに純白の羽根が舞つとるから、さらにリインフォースを神秘的にする。

「リインフォース!!!!」

私はリインフォースに飛びつくように抱きつく。

そんな私らのトコまでヴィータが走ってきて、「遅えよ、リインフォース！ 遅刻だぞッ！」って泣き笑いの表情でリインフォースの背を叩いた。

『そうですよ！ わたし達を待たせ過ぎです！』

リインの思念通話。リインフォースは「すまない」と謝って、私を力強く抱き返してきた。

「主はやて。私とユニゾンを、また共に戦ってくださいか？」

「・・・当然やッ！」

私ももう一度強く抱きしめる。

そして、

「ユニゾン・・・イン!!!!」

リインフォースとユニゾンを行った。

胸の内に広がるリインフォースの力強くて、優しくて、温かい思い。全てが白い空間。私とリインフォース、二人だけが存在しとる精神世界。

『主はやて。よろしければ、私に新たな名を頂けませんか？』

『新しい名前？ リンフォースやったらアカンの？』

『祝福の風リンフォースの名はすでに受け継がれています。』

『ですから、私がこれから主はやてと騎士達と共に歩む為に、新たな名を頂きたいのです』

『そう言われて、私は考える。』

『いろんな知識を総動員して、小さい頃にルシル君から教わった花言葉の知識を選ぶ。』

『うわっ、なんやこれ、こんなまるで両親が子供に名前を付けるみたいや。』

『微妙な恥ずかしさにうるたえながらも、かつてと同じように……』

『……汝に新たな名を贈る。』

『清浄なる優しきもの・運命を切り拓く翼・白き純潔の希望……』

『リンフォース、と呼ぶのはこれで最後になる。』

『だから最後に小さく「リンフォース」と呟いて、彼女の両手を取る。』

『リエイス』

『新しい名前、“リエイス”、と告げる。』

『リエイス……ありがとうございます。我が主はやて。』

『この身、この魂、全ては愛おしき家族の為に……』

『この瞬間、私とリンフォースが繋がった感覚を得た。』

ユニゾンすることが契約する事。シャルちゃん、ホンマありがとう。視界が現実の光景に戻る。みんなの視線が集中する。そして、

「おのれ・・・生きていたのか祝福なる祈願者！」  
ノーチエブエナ

リエイスに殴り飛ばされて遠くで倒れとつたカルドの一人が立ち上がりながら、身体中から闇色の炎を噴き上げさせる。

『カルド・デレチヨ。私はもうノーチエブエナではない。憶えておけ。私は、清浄なる優しきもの・運命を切り拓く翼・白き純潔の希望、リエイスだ！！』

烈火の将シグナム。紅の鉄騎ヴィータ。風の癒し手シャマル。蒼き狼ザフィーラ。祝福の風リインフォース？。烈火の剣精アギト。そして今ここに、私ら八神家最後の一人、希望の翼リエイスが舞い降りた。

「そうか・・・ならばバキサマ諸共滅ぼすまでだッ！！！」

私とヴィータ、カルド・デレチヨは、シグナムとカルド隊の待つ空へと上がった。

はい、リインフォースがついに参戦です。

はやてとユニゾンを果たし契約、正式に八神家の一員として復活です。

そして新たな名前をはやてに贈ってもらい、“リエイス”と名を変えました。

リインフォース・アインス（1という意味ですね）より、やっぱり生まれ変わったという意味で、別の名前を付けました。

ちなみに“リエイス”は造語です。

花の“百合”をドイツ語にしたL i e i eと、“白色”のドイツ語

であるW e i i (ヴァイス)を組み合わせて“白百合”<sup>リエイス</sup>としました。

彼女の騎士甲冑も翼も白く変更してますし。

というか、この新しい名前の為に変更したようなモノですし。

3587

あ、何故百合にしたかと言えば（聞かなくてもいい？ まあ聞いてやってください）、百合を始めとした、竹島百合、姫百合、百合水仙、鬼百合、透百合、グロリオサなどなど。

それらユリ科に属する花の花言葉はどれも彼女にピッタリと判断しましたので、百合を採用しました。

さて、次回から幹部最終戦の後半戦をやっていきます。

第一戦は、復讐の業火カルド隊との決着となります。

完結まで、残り六話。

遙かなる夜天に集いし騎士 〈Heilig Requiem〉(前書き)

カルド隊・第一ラウンド・イメージBGM

ACE COMBAT 6 “MAIN THEME”

カルド隊最終戦イメージBGM

ACE COMBAT 6 “CHANDELIER”

Heilig Requiemハイリヒ・レクイエム 神聖なる鎮魂歌、となります。

遙かなる夜天に集いし騎士 〈Heilig Requiem〉

主はやてとユニゾンを果たし、私は“リエイス”という新たな名を授かった。

そして烈火の將の居る空へと上がっている最中、主はやての内に居る私は間に合って良かったと安堵していた。

あと少し転移が遅れていれば、私は主はやてを守れていなかった。

(間に合って本当に良かった)

スプールスで次元船を探しているとき、“女帝の洗礼”が軌道拘置所に支局、ヴァイゼンの地上本部を破壊したと知り、私は転移能力を優先して回復するように念じてみた。

すると、私の思い通りに転移能力が使用できるようになった。

すぐさま“オムニシエンス”への転移を開始。

しかしどうも転移が上手くいかず、幾つかの世界を跨ぎ、ポロポロだった服がさらにポロポロになり、半ば裸になりつつも何とか布(勝手に拝借、所持金すべて置いてきた)を手に入れ、ようやく転移に成功、そして主はやての危機を救うことが出来た。

(何はともあれ、私はこうして今、主はやてと共に在る)

私はリエイス。今、愛おしき家族と共に、カルド隊の復讐<sup>おもい</sup>心を背負いにゆく。

十 十 十 十 十 十 十 十

「『シグナム!』」

カルドとイスキエルドを一人で抑えるのも限界と思った時、私の名を呼ぶ声がした。

カルドの大剣を捌き、イスキエルドの斬撃を回避、“レヴァンティン”で弾きながら視線を少し下に向ける。

そこにはフライハイトの願いを果たしに行ったヴィータ。

そして、黒ではなく白い翼を背負い、髪の毛の長さが私くらいになっている主はやてがこちらに向かって来ていた。

『シグナム、マイスターのあの姿・・・まさか』

「ああ、そのまさかだろう。まったく、リインフォースめ。散々家族を待たせおつて・・・」

緊迫化でありながら、私は笑みを零す。

今度こそ、彼女も我々と共に過ごせるのかと思うと。

「余裕だな、シグナム！」

慈悲すら許さぬ業火

「仲間が来て嬉しいか？」

我に滾るは怨嗟の業火

カルドの炎槍とイスキエルドの斬撃が迫る。

この二人、デレチヨもそうだったが、以前より強くなっている分様子がおかしい事に気づいた。

言葉の端々に、何とも言えない違和感を感じる。

しかし確認する術もないために気にしないように戦い続ける。

二人の次の攻撃が下に向かわないように、上へ移動してやり過ごす。

「シグナム、アギト、大丈夫か!？」

私の隣へと並んだ主はやて、そしてヴィータ。

デレチヨもまたカルドとイスキエルドの元に並ぶ。

そして主はやては私へと視線を移し、胸元に手を添え、

「シグナム、アギト。リインフォースに新しい名を付けたんやけど・・・」

そう告げた。すると私へと思念通話が入る。

『リインフォース改め、リエイス、という名を授かった。烈火の将、烈火の剣精。よろしく頼む』

リエイス、か。良い名を授かったではないか。

しかし、その前に言っておかなければならぬ。

様子のおかしいカルド隊への警戒をそのままに、主はやてへとある提案をする。

「ああ、よろしく頼む。が、主はやて、リエイスの我々への呼称はどうでしょう?」

リエイスは我々の事を二つ名で呼ぶ。

それは直しておかなければなるまい。

「そうやな・・・リエイス、これからはみんなの事を二つ名やなくてちゃんと名前で呼ぶ事、ええな?」

『え、あ、はい』



リエイスは少し戸惑っているようだが、これから八神家として過ごす以上は倣ってもらわなくてはな。

もう少しゆっくりと話したいが、今は生憎と戦闘中。

カルド隊から向けられる殺気が急に膨らみ、強く押し付けられるような錯覚を得る。

「シグナムとアギトはカルドを。ヴィータとリインはデレチヨを。私とリエイスはイスキエルドを。それでええな、みんな」

主はやての意思の強さが分かる。

カルド。私が殺めたガウエイン・クルーガー。

デレチヨ。ヴィータが殺めたジヨシユア・エルグラント。

イスキエルド。闇の書暴走に巻き込まれ亡くなったジータ・アルテツア。

それぞれが手に掛けた相手を、もう一度この戦いで手を掛けねばならない。

残酷なものだ。しかし、我々は勝たねばならない。

だからこそ我々は背負う。カルド隊の恨みも怒りも、その全てを。

「構いません。それが私の役目ですから」

「あたしもそれでいい。だけど、はやてにまで背負わせたくない」

ヴィータの思いは解る。私だってそうだ。

我々の心優しき主には、出来うる限り闇を背負わせたくはない。

しかし、主はやては、我々の主だから一緒に背負う、と言うだろう。

「おおきにな、ヴィータ。そやけど、これは最後の夜天の主として背負わなアカンことや。」

みんなの罪も、カルド隊の想いも、主として、そして家族の一員として、一緒に背負う」

主はやての戦う決意と殺す覚悟に満ちた声。

ヴィータも主はやての想いに触れ、もう何も言わなくなった。

「私ら八神家の仕事、カルド隊の撃破。・・・行くよ・・・！」

「『了解！』」

私達は散開して、それぞれが向き合つべき相手と戦う為に空を翔ける。

十 十 十 十 十 十 十

“女帝の洗礼”の外壁をなのは達のおかげで突破することが出来、私は“女帝の洗礼”内部を最上部目指して飛ぶ。

内部は吹き抜けとなっていて、内壁にびっしりと繊細な機械部品が所狭しと並んでいる。

もちろん私は“キルシュブリューテ”と“トロイメライ”の二刀流で、

「とつとと壊れるおおおーっっっ！！」

### 双牙炎雷刃

機械部品を徹底的に破壊していく。

それを止めようと私の後方から砲撃を撃ってくるのは、

「やめろッ！！」

深淵より来る雷霆

アルトワールドと融合して銀色の甲冑を身に纏うダイヤモンド。

私はその砲撃を避けずに“キルシュブリューテ”で軌道を逸らして、内壁にぶつけさせる。

爆発。ダイヤモンドから、しまった、というような気配を感じる。

バカな奴。ここで砲撃を撃てばどうなるか怒りで忘れてる。

「やめろって言われて、はい、そうですね、って聞くとおぼろげな  
!?」

だからこそ、ダイヤモンドは接近戦を挑んできた。それこそバカな事。

身体能力は生前に比べれば制限の所為で低いけど、フォイアロートフェーニクス空戦形態で空戦レベルを生前以上にカバー。

「もう諦めろ、ダイヤモンド！ お前はもう私に勝てない！！」

最上部まで、螺旋軌道を描きながらダイヤモンドとの剣戟を繰り広げる。

速度は私が少し負けてる。だけど、戦いの場としては私が有利。

たとえ攻撃を外しても、内壁に攻撃が当たればそれでいい。

だけどダイヤモンドは内壁に注意を払わないといけない。

そう、“女帝の洗礼”内部に入った瞬間、この戦いの勝敗は決まっていた。

「「おおおおおおおおおッッ！！」」

互いが高速の連撃を撃ち続ける。

ダイヤモンドの甲冑を少しずつ砕き、私の騎士甲冑にも傷が増えていく。  
そして頭上に天井。設計図で見た管制ルームに辿り着いた事を示す。左手に持つ“トロイメライ”で鳥型砲撃を撃ち込み、天井を破壊、最上部、管制ルームに侵入した。

(・・・アレが女帝の洗礼、オラシオン・ハルディンを統括するA  
Iコア・・・！)

だっ広い管制ルームの中央に、球状のコアを見つけた。  
それと同時に放送が流れる。

オラシオン・ハルディン管制ルームに侵入者。

エネルギーチャージ86%。エマーゼンシー・シークエンス。

洗礼の一撃の照射準備、カウントスタート。10、

全力チャージじゃなくてもカウントを始めた。

私はコアへと、

「撃たせるかああー！ーッッ！！」

双牙閃凶刃

攻撃を撃ち込む。だけど、それを阻むのがダイヤモンド。  
私とコアとの間に立ち塞がって、私の攻撃を弾いた。

「偽善の象徴は、滅びなければならない!!」

撃滅せし雷王の右手

8

白銀の雷で作られて巨大な掌。

私は“キルシュブリューテ”と“トロイメライ”でそれを斬り裂き、そのままダイヤモンドに突っ込む。

「退けえええーっ!!」

7

“トロイメライ”を振るい、ダイヤモンドの剣を封じる。  
そしてすぐさま“キルシュブリューテ”で直接本体へと一撃。  
ダイヤモンドは“キルシュブリューテ”の刃を左手で白刃取り。

6

私はダイヤモンドを蹴り飛ばし、コアへと疾走しようとする。  
だけど私の足を掴んで転倒させるダイヤモンド。

5

身体を捻って上半身を起し、ダイヤモンドに“キルシュブリューテ”と“トロイメライ”を叩きこむ。  
ダイヤモンドの両腕を切断。両脚を解放されてすぐさまコアへと閃  
駆で近づく。

だけどそれより早く、ダイヤモンドが私の前に回り込む。

4

「目醒めよ、キルシュブリユートーテ!!」

「王よ！ 愚かしき者共に死の鉄槌をツツ!!」

3

「真技……!!」

“キルシュブリユートーテ”の能力を限定解放。  
鞘へと納め、ダイヤモンドにタツクル。コアへと叩きつける。

2

「牢刃・弧舞八閃!!」

十 十 十 十 十 十 十

「追ってこいよ、デレチヨ!!」

「一対一とは、嬉*s i*い事をして*k u R e*るじゃないか、紅の鉄騎  
ヴィータ……!!」

あたしを追うようにデレチヨが飛んでくる。

あたしはフリーゲンを、後方から追ってくるデレチヨに撃ちながら、  
さらにスピードを上げて“オラシオン・ハルディン”の奥、“レス  
ブランドセルの円卓”に進入する。

シャルロツテとセインテストの時代、多くの英雄が戦って散ってい

った戦場。

何の因果か、またこの“円卓”で戦いが起きている。

「（もうこの辺でいいよな・・・）リイン、これで最後だ、いくぞ」

『はいです。いつでもどうぞ、ヴィータちゃん』

あたしは急停止、そして身体を捻って反転。  
すぐ目の前にまでデレチヨが迫っていた。

あたしは野球のバッターのように“アイゼン”を構えて、ストレー  
トに入ってきたデレチヨへと振りかぶる。

あたしの一撃を、咄嗟に構えた大剣の腹で直撃を防ぐデレチヨ。

火花を散らして拮抗。デレチヨは大剣を少し傾けて“アイゼン”を  
捌き、あたしへと蹴りを入れてきた。

（コイツ・・・やっぱり強くなってやがる・・・？）

“アイゼン”の柄でなんとか蹴りを受け止めるけど、威力が強くて  
弾き飛ばされる。

“アイゼン”を持つ両手が痺れる。一体カルド隊に何があつたんだ？

『ヴィータちゃん！！』

リインの声にハツとして、デレチヨに意識を向ける。

我に滾るは怨嗟の業火

大剣を振り下ろして、闇色の炎の斬撃を撃ってきた。

あたしは高速移動魔法フエアーテを使って回避、突撃してきたデレチヨへと  
“アイゼン”を振るう。

デレチヨは“アイゼン”の柄を左の裏拳で弾いて、あたしの懐に潜り込んできた。

### パンツァーヒンダネス

本来は全方位のバリアのパンツァーヒンダネスを前面一点集中で展開。

何とかギリギリでデレチヨの攻撃を防ぐことが出来た。連撃を喰らわないように距離を取る。仕切り直した。

「今のは危なかったな・・・」

『デレチヨの様子、やっぱりおかしいですね』

「だな。近接戦の腕が今まで以上。それに、アイツが放ってる空気が妙に重い」

デレチヨはあたしから視線を逸らさず宙に佇んでる。

フルフェイスの兜の奥に光る目。嫌な感じというか、こいつは・・・恐怖・・・？

何があったのかは知らねえけど今のデレチヨはなんかヤバイ。

とそこに、“オラシオン・ハルディン”に流れる放送がこの“円卓”にまで聞こえてきた。

えー、テストス。管制システムを破壊、オラシオン・ハルディンの制圧に成功。

本局は守られた。繰り返しまーす。管制

シャルロツテの声。確かに“騎士の洗礼”からの砲撃が止まっているのが分かる。



さすが、としか言いようがねえぜ、まったく。  
いろんな事に安堵。だけどすぐにデレチヨへと意識を集中する。

「・・・悪魔め・・・お前達の墓ha俺達が掘る」

デレチヨは背中に炎の翼を生やして突っ込んでくる。  
悪魔め、か。そついや昔、なのはに言ったな、あたしも。

Schwalbe Fliegen

フリーゲンを八基、向かってくるデレチヨに放つ。  
そしてカートリッジを二発ロード。もう慣れちまったのか前のよう  
な高揚感はない。

デレチヨは甲冑全体に炎を纏って、フリーゲンを相殺しやがった。

「どうした？ その程度の威力では俺は止めRareんぞ・・・！」

火の粉をまき散らしながらの突進を回避する。

「止められるものなら止めてみせる。お前のその鉄槌で俺を殺した  
時のように！！」

言い表せない違和感が急に無くなったような気がした。

慈悲すら許さぬ業火

「アイゼン！！」

Schwalbe Fliegen

反転したデレチヨが放つ連続突き。炎の槍を無数に飛ばしてくる。奴の甲冑から炎が途絶えた今、一撃を叩きこむチャンス。

もう一度フリーゲンを八基放って、フェアートを発動、槍群の中を縫うように突撃。

その間に、

「アイゼン！ フォルムツヴァイ！！」

J a w o h l · R a k e t e n F o r m

“アイゼン”をラケーテンフォルムに変える。

槍群を抜けたと同時にブースターを点火、遠心力いっぱいの一撃を、

「そおおらあああー！ー！ツツ！！」

ラケーテンハンマー

デレチヨに向かって振りかぶる。デレチヨは咄嗟に大剣でガード。

だけど今度は捌けねえはずだ。ラケーテンの一撃を捌くのは不可能だから。

大剣を破壊するつもりで力を込める。デレチヨの方も大剣の柄を両手で持った。

もう少し、あと少しで突破できる。

火花の中に見えたデレチヨの妖しく光る目。

それで何となくこう思った。ああ、こいつはもう引き返せねえ一線を越えたんだ、って。

「おのれおのれおのれおのれおのれ……！！」

また、俺を殺そうというのか！？ 紅の鉄騎！！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！ もう殺されるのは嫌だ！！

そつだ、俺がお前を殺す！ だからお前が死ね！ 死んでしまえ！  
シネシネシネシネ！」

耳元で叫ばれたような錯覚を覚えるデレチヨの怨嗟。  
あたしは歯を噛み締めて耐える。今まで以上に伝わってくる。  
あたしに向けられたとても暗く深い狂気と言ってもいい憎悪。

「っ！・・・デレチヨ、いや、ジヨシユア・エルグランド。  
謝って許されんなら何度だって謝る。だけど、この命だけは譲れねえ。」

あたしの命は、はやてのものだから・・・！」

勝手な話だつて自分でも分かつてるさ。

でも、あたしは生きていたいんだ。はやてと、家族と、友達と、仲間とこれからも。

だからさ、デレチヨ、あたしはもう一度この手でお前を斃す。

お前のあたしに対する憎しみも恨みを全て背負っていく。

「・・・すまねえ」

さつき放つておいたフリーゲンを操作して、デレチヨの背後へと向ける。

デレチヨは本格的におかしくなつて「コロセコロセコロセ」を連発している。

直撃。デレチヨの背中爆発が起きる。

大剣から力が抜けて、あたしの一撃が大剣を弾き飛ばす。

一回転。さらに一撃をデレチヨの本体へと叩きつける。

火花を散らしながら甲冑を少しずつ砕いていく。

そこに、

「っが・・・!?」

デレチヨが殴ってきた。あまりのことで一瞬呆けた。殴り飛ばされて間合いが開く。遅れて右頬に鈍い痛みが走る。そして口の中に広がる鉄の味。口の中が切れた。

「てめえ・・・!」

口の中に溜まった血を吐き捨てて、項垂れるデレチヨを睨みつける。あたしは騎士だ。だから女の顔を殴るな、とは言わねえ。だけどやっぱムカつく。

「女の子の顔を殴るなんて、最低ですね!」

ラインがあたし以上に怒り心頭。逆にあたしは冷静を取り戻す。

あたしは乾いた笑みをこぼして、無手で構えたデレチヨを見据える。今のデレチヨからは怒りも憎しみも感じない。あるのは、

「シネコロセシネコロセシネコロセシネコロセシネコロセ」

狂気だけだ。シャルロツテが言っていた事はこれなんだと知る。

魔族との融合は自滅行為。圧倒的な力を手に入れても最後は壊れるだけ。

今のデレチヨは、もう壊れてしまって自我を無くしたデレチヨの形をしたモノだ。

「お前は自分を失くしてまで、あたしに復讐したかったのかよ・・・?」

“アイゼン”を構えて、カートリッジを二発ロード。ラケーテンフォームからギガントフォームへと変える。先に動いたのはデレチヨ。背中に炎の翼を生やして突撃してきた。あたしはまず大型の鉄球を作り出して魔力付加、ソレを“アイゼン”で打ち出す。

#### コメントフリーゲン

そしてフリーゲンに追いかけるように飛ぶ。デレチヨは避けようとせず、真つ向からフリーゲンの迎撃に出た。もう避けるっていう選択肢はアイツの中には無い、っていう予想は当たってた。

デレチヨは闇色の炎を纏った右の拳打でフリーゲンを止めた。ただどカートリッジ二発分の神秘を有するフリーゲンは簡単には碎けない。

「シネエエエエエエエエエエツツ！！」

デレチヨは左の拳打をフリーゲンに打ち込もうとした。それより早くあたしは、

「ギガント・・・シユラアアアー・・・クツツツ！！！」

デレチヨの拳打と拮抗しているフリーゲンに“アイゼン”を叩きつける。

その直後にデレチヨの左拳打がフリーゲンに打ち込まれる。だけどあたしの一撃を打ち返す事は誰であつても出来ない。

『「いつけええええー！！！！！！！！！」』

全力で“アイゼン”を振り切る。

目の前で強烈な爆発。視界が白に染まる。うつすらと見えたのは、デレチヨの籠手とフリーゲンが砕けていく様子。

あたしはその爆発をもともせず、その場で一回転。

まだあたしの目の前に居るはずのデレチヨに向けてもう一発、ギガントシユラークを打ち込んだ。

手応えがあった。そして耳に届くガシャアアンっていう甲冑が砕け散った音。

視界がクリアになる。デレチヨは甲冑の破片をまき散らしながら地上へと落ちていく。

そして、「俺……諦め……必ず……」と残して、無数の光の粒子となった。

『……勝ちましたね、ヴィータちゃん』

勝ったっていうのにリインは全然嬉しそうじゃねえ。

「……ああ……」

そんなあたしも全然嬉しくねえけど。

あたしはまたデレチヨ、ジヨシユア・エルグランドをこの手に掛けた。

相手が思いが具現化された亡霊だからと言っても、確かに意思のある一人の存在。

「……ホント、全然嬉しくねえよ。こんな戦いで勝ちつて……」

「……ヴィータちゃん……。え？ ヴィータちゃん、アレ……」

「!

ラインの声で俯いていた顔を上げる。  
あたしの目に映ったのは……。

十 十 十 十 十 十 十

「来い、烈火の将シグナム。俺とお前の決着の場へ案内してやらう」  
カルドは私にそう告げ、“レスプランデセルの円卓”へと向け飛び始めた。  
戦いの場をここではなく別の場所へ変えてくれる事に関しては感謝した。

下手に“オラシオン・ハルディン”で戦いを行うと、下に居る仲間達を巻き込みかねないからだ。

それだけは何としても防ぎたかった事。ゆえに私はカルドへ付いていく事にした。

視界の端に主はやてとカルド・イスキエルド、ヴィータとカルド・デレチヨが映る。

どうやら主はやて達も“円卓”内で決着をつけるらしい。

『なあ、いいのかよ。畏かもしんねえぞ、シグナム』

『畏なら畏で構わん。それらを全て打ち破ればいいだけの事だ』

『……ま、そりゃそうか。あたしとシグナムならなんだって出るんだもんな』

『ああ、その通りだ』

アギトと短い会話をしていると、前を飛ぶカルドの飛行速度が落ち始めた。

私もそれに倣い速度を落とす。そしてカルドは止まり、私も約20mの距離を開け止まる。

こちらに振り返るカルド。その手には闇色の炎が渦巻く大剣が握られている。

どうやらこの空域一帯を戦場とするらしい。

周囲を軽く探ってみるが、罠などのようなモノは何一つとして感じられん。

「安心しろ。罠など使うものか。正面よりお前に戦いを挑み、勝利する。」

そうでなければ、俺の内に燃え盛る復讐の業火が消えん」

先程まで感じていた違和感がカルドから消えた、ような気がした。

「そうか。ならば、私も真正面からお前を打ち負かそう」

“レヴァンティン”を構える。一瞬が長く感じられる睨み合い。

そして、ほぼ同時に間合いを詰め、お互いを両断するために各々の得物を振るう。

互いの刃が衝突し、激しい火花をまき散らす。

一瞬の鏝迫り合い。同時に剣を引き、すぐさま私とカルドは連撃を繰り出す。

お互いが、あらゆる角度から、あらゆる速度で、あらゆる軌道で敵を討たんと刃を奔らせる。

その度に私とカルドの間に激しい金属音と火花が散る。

『なんだよ、コイツ！ 何でこんなに強くなってるんだよ!?!』



アギトの言うことも尤もだ。

以前までは魔族ゼルファードの火力に頼った攻撃だけだったのに対し、今日は見事な剣さばきだ。

刀身の長さが約150cm、幅が約25cmはある大剣を、まるで重さが無いとでも言うように容易く振るっている。

しかも切り返しを含めた大剣を振るう速度も並ではない。

「身を、心を、汝が持つ全てを捧げよ」

「なに・・・？」

互いが必殺の連撃を弾き返しながらいると、カルドが小さく囁いた。私はほぼ無意識にそう訊き返していた。

業火に焼かれその罪を償え

パンツァーガイスト

返ってきた答えは、大剣の刀身に燻っていた炎の爆発。

私は爆発の瞬間に、魔力を身に纏い防御力を高めるパンツァーガイストを直感的に発動した事によって撃墜を免れた。

一度大きく距離を取り、仕切り直しとなる。そこに、

えー、テストス。管制システムを破壊、オラシオン・ハルディンの制圧に成功。

本局は守られた。繰り返しまーす。管制

フライハイトの声に乗る放送が聞こえてきた。

これで管理局施設への砲撃の危機は去ったという事だ。

「女帝の洗礼が落ちたか。しかしそんなモノはどうでもいい。俺達に必要なのは、お前たちヴォルケンリッターの死、そのみなのだから」

憎悪は何者にも消せず

大剣の炎が刀身に巻きつくように螺旋状となる。それを大剣を横に構えながら突進してくるカルド。

「アギト」

『おつよ！ 烈火刃！』

“レヴァンティン”の刀身に、アギトの炎熱強化によって威力の高められた炎を付加させる。

そして私も真つ向から突進。“レヴァンティン”を振り上げ、

「『紫電一閃！！』」

「我らに勝利をッ！！」

間合いに入った瞬間に振り下ろした。

縦一閃の“レヴァンティン”と、横一線の大剣が衝突する。

その瞬間、世界から音が消えたような気がした。

至近距離での大爆発。私は爆炎と爆風に吹き飛ばされながらも態勢を整える。

パンツァーガイストを持続的に発動していなければ、今で間違いなく死んでいた。

「はあはあ・・・」



横一線に斬り裂いた。

すれ違い、そして背後に居るカルドが小さく「まだ終わりじゃないぞ」と呟いた。

振り返り、もう一度一撃を与えようとし気付く。

カルドは光の粒子となって消えていくことに。

私は勝った。しかし胸に去来するのはやはり虚しさだけだった。

「……む？　なんだ……？」

十　十　十　十　十　十　十　十

「今度こそ貴様を地獄の業火に叩き落とす！」

私はリエイスの言う通りに“オラシオン・ハルデイン”から離れる為、“レスプランデセルの円卓”に進入する。

地上にたくさん仲間が居る場所やと全力で戦えへんから。

そんな私らを追いかけてくるイスキエルドの怨嗟の声。

ここまでハツキリした憎悪を向けられるんは初めてで、やっぱり辛い。

『申し訳ありません、我が主。我らの罪を、主にまで……』

「謝らんでええよ、リエイス。一緒に背負う言つたやん」

守護騎士のみんなの主として、最後の夜天の主として。

私も全てを背負う。どれだけ辛くても悲しくても、それが私の背負わなアカン責任。

『……主、この空域で迎え撃ちましょう。私が全力であなたをバツクアップします』

リエイスがそう告げる。と同時に頭の中に入ってくる数多くの術式。戸惑つとると、リエイスが『ルシリオンの魔術を私なりに魔法へとアレンジしたものです』と言ってきた。

ドカンと来る衝撃。ルシル君の魔術を魔法に変換したってことか!? まあ確かにルシル君の魔術の名前や効果はどこか私の使う古代ベル方式に似とる。

というよりは、私の使う魔法がルシル君の魔術に似とる。そやから相性は合つとるかもしれへんけど……ええんかな、こなんん勝手に……?

『問題ありません。私はこの三年、ルシリオンの半身でした。ですから私にも彼の力を扱う資格があります。』

彼も私の魔法を使いますし。彼のものは私のもの、私のものは彼の<sup>わたし</sup>のもの、なのです』

私の思つとる事を察したかのようにそう言ってきた。

しばらく見やんうちにリエイスがおかしくなつてしまた。

リエイス、それはジャインの法則言うんよ?

言いたい事はたくさんあるんやけど、今はまず……。

「あーもうなんや。リエイス、フォロー頼むで!」

『はい、我が主。お任せを』

戦闘に入ろうとしたとき、耳に届く“オラシオン・ハルディン”の放送。

シャルちゃんの声が流れとるんが分かる。内容は“女帝の洗礼”の機能停止の成功。

本局に次元跳躍砲が撃たれへんかった。

(私らは私たちの役目を果たすだけやな)

覚悟を決めて急停止、振り向きざまに魔法を撃つ為に術式準備。視界に映るイスキエルドは慌てた様子も無く大剣を構えようとする。

私は“シュベルトクロイツ”の先端を向けて、

「クラウ・ソラス!!」

砲撃を撃つ。イスキエルドはロール機動で砲撃を避けて、

「お返しだッ!」

慈悲すら許さぬ業火

大剣を突き出して、闇色の炎を螺旋状の槍にして放ってきた。

そやけど狙いが甘い。簡単に避けられた。そして、新魔法の条件がこれで整った。

早速リエイスから送られてきた魔法を放つ。

「ヴァーリ!!」

“シュベルトクロイツ”から放たれる射撃魔法、その数、たったの一基。

それがイスキエルドに向かって一直線に進む。

私とリエイスは次の魔法をスタンバイ。ヴァーリを大剣と炎で迎撃しようとするイスキエルド。

そやけど、ヴァーリは軌道を変えて、もっかいイスキエルドに向かう。

ヴァーリの魔法効果は追尾。術者、つまり私に敵対行動を取って攻撃した者、イスキエルドにヒットするまでオートで追い掛け続ける射撃魔法。

「小賢しい・・・！」

ヴァーリを処理しようとするイスキエルドを追撃するために、

『ハウリングスファイア、スタンバイ』

私を中央として上下左右にスファイアを設置。

「『ナイトメアハウル！！』」

前面に五つ目のスファイアを設置して、“シュベルトクロイツ”の先端で打つ。

ヴァーリを迎撃出来ずに直撃を喰らったイスキエルドに、リエイスの同時多弾砲撃を放つ。

全弾直撃して爆発に呑み込まれるイスキエルド。

リエイスに『油断なさらないように』と注意を呼びかけられた。

我に滾るは怨嗟の業火

その直後に、煙幕を吹き飛ばしながら炎の斬撃が幾つも飛んできた。

ヘルモーズ

瞬間的な高速移動魔法ヘルモーズを使って、射線上から離れる。

イスキエルドは私に向かって突進。振り下ろされた大剣を半身ずらして避ける。

直後に斬り返してきた大剣を“シュベルトクロイツ”の柄で受け止める。

「おのれ……ノーチェブエナの近接戦の技術を取り入れたのか、  
夜天の主……！」

『リ・エ・イ・ス、だ。次は間違えるな、イスキエルド』

「知ったことか。どういう名だろうと、お前が俺の仇である事に代わりない……！」

業火に焼かれその罪を償え

『離れてください、主！』

ヘルモーズ

視界が闇色の炎一色になる。鏢迫り合いしとつた大剣の炎の爆発。  
私より先にリエイスがヘルモーズを発動してくれたおかげで呑み込まれずに済んだ。  
爆風が、シグナムくらいの長髪となった私の髪を靡かせる。  
爆風に押されるようにイスキエルドとの距離が大きく開く。  
イスキエルドは大剣を何度も振るって、

我に滾るは怨嗟の業火

慈悲すら許さぬ業火

斬撃と槍を交互に撃ってきた。

私はまたヘルモーズで連続攻撃を避け続け、接近してきたイスキエルドを視界に捉える。



リエイスが『この魔法で決着をつけましょう』と告げてきた。  
私はあんま自信がなかったんやけど、確実に勝てる魔法ではあると  
思ってた準備する。  
そして、

「『フレイー!』」

“シュベルトクロイツ”を白光の剣へと変える。

イスキエルドから嘲笑が聞こえた気がした。

私は“シュベルトクロイツ”を脇に抱えるようにして、イスキエル  
ドの右脇腹へと全力で振るった。

イスキエルドは大剣で私の一撃を捌こうとした。そやけど、

「な……に……!??」

「……私らの勝ちや、イスキエルド、ううん、ジータ・アルテ  
ツツア元空曹」

私の“シュベルトクロイツ”は、狙った右脇腹やなくて左脇腹を裂  
いた。

フレイ。術者が下手でも最良の一撃を勝手に放ってくれる近接斬撃  
魔法。

その分、私のような近接・格闘戦に向かへん身体をしとる術者には  
かなりキツイ。

今の一撃も腕の骨が折れそうやったし、筋肉も悲鳴を上げとる。  
そやから今日はもう使わん。とゆうかもう使わん、身体が持たへん  
し……。

「……なんて……こと、だ……」

ゼルフアードの甲冑が消えて、白コート姿になったイスキエルドの輪郭が崩れる。

勝ったんや。イスキエルドは光の粒子となって崩れていく。その直後、どこからともなくイスキエルドと同じように光の粒子が集まってきた。

カルドとデレチヨやとすぐに分かった。

カルド隊の想いのカケラ、それが一つに集まっていく。

「主はやて!」「はやて!」「はやてちゃん!」『マイスター!』

「シグナム! ヴィータ! リイン! アギト!」

シグナムとヴィータとリインとアギトの声が届く。

シグナムとヴィータが私のところに集まる。

そして私らの視線は、一つになったカルド隊の想いに向く。

「リエイス、あれはどういうことなんや・・・?」

『申し訳ありません。私にもよくは。しかし、ただ一つ言えるのは、まだ終わってはいない、ということです』

リエイスの言葉が途切れた直後に、カルド隊の想いの周囲に闇色の炎が渦巻くように現れた。

そして炎は大きくなって、ある一つの形となった。それは・・・

「巨人・・・!」

ヴィータが呟く。私らの前に姿を現したんは漆黒の炎の巨人。

大きさは3mくらいで、輪郭が炎のように揺らいどる。

『魂と引き換えにするほどの願いなんてものは、決して希望から生まれるものじゃない。そうした願いを生むのは常に絶望と憎悪のみだ』

イスキエルドの声、念話が届く。

私たちは一斉に相棒デバイスを構えて、戦闘に備える。

巨人の顔、目に当たる部分に宝石のような綺麗な赤が生まれる。

『お前たちへの復讐もこれで終わりだ。さあ、来い、ヴォルケンリッター。』

俺が、俺達が、お前達の死神になる。行くぞッ！！』

### ゼルフアーダの黒焰

全身から私らに向けて熱波を放つカルドの巨人。

両手の掌を向けてきて、特大の炎熱砲撃を撃ってくる。

私らは散開して、カルドの巨人の背後に回り込む。

「リエイス！」 「リイン！」 「アギト！」

『はい、我が主！』 『はいです、ヴィータちゃん！』 『おうよ、シグナム！』

クラウド・ソラス

火竜一閃

コメートフリーゲン

がら空きの背中に、一斉に魔法を放つ。

直撃、爆発を起こす。そやけど、カルドの巨人は気にも留めへんと振り向きざまに左腕を振るってきた。

私たちは一斉に回避。私は上、シグナムとヴィータは下へ。大気が燃やされて、空間が揺らいどるんが分かる。

「暖簾に腕押し、糠に釘、か・・・！」

シウトウルムヴィンデ

シグナムは炎熱攻撃やなくて衝撃波を打ち込む。カルドの巨人の身体に穴が開く。そやけどすぐに塞がる。

「諦めてんじゃねえぞ、シグナム！」

コメートフリーゲン

消費の激しいコメートフリーゲンの連発。シグナムはヴィータに「私がいつ諦めた？」と言いながら何度もシウトウルムヴィンデを放つ。巨人の身体がポロポロになるんやけど、完全に倒れる前に修復される。

私も負けじとブリューナクやブラッディダガーのような連発できる射撃魔法を撃ち続ける。

『三対一でこの様が、夜天の主、ヴォルケンリッター』

夜天墜とし

カルドの巨人は、全身から全方位へと炎弾をばら撒いて弾幕を張る。私はヘルモーズで、ヴィータはフェアータで避け続けて、シグナムは直撃するモノだけ“レヴァンティン”で斬り裂いてく。途切れたところで、“シュベルトクロイツ”の先端に雷撃を纏わせ



そこに、シグナムが修復途中の右拳へ飛竜一閃を打ち込んだ。右拳が丸々吹き飛ぶ。カルドの巨人から『なに!?!』っていう驚愕の声が漏れる。さらに、

「こいつでどうだッ!」

『強烈な行きますよ!』

Z e r s t ? r u n g s   H a m m e r

ツェアシュテールングスフォームの“アイゼン”を頭上に振り下ろすヴィータ。

その一撃を左掌で受け止めるカルドの巨人。ドリル部分が徐々に左手を構成しとる炎を粉碎して周囲に散らしていく。

掌を貫通する“アイゼン”。やった!と思った時、カルドの巨人は掌を閉じて、“アイゼン”のヘッドを鷲掴みにした。

アカン。そう思って、左手にバルムンクを集中砲火。シグナムもまた飛竜一閃を放つ。

ヴィータも何とか左手から逃れようともがく。

『貴様の相棒グラーファイゼン。塵一つ残さず燃やし尽くしてやる』

我らが左手は全てを燃やす業炎

左掌から炎が噴き上がる。

それとほぼ同時に、ヴィータは“アイゼン”をハンマーフォームにすることで左掌から離脱。

ギリギリで炎から逃れたヴィータも“アイゼン”も無事なのが分かる。

左右の腕の修復に専念しとるんかカルドの巨人は動かなくなった。

「あつぶねえー。あと少してアイゼンが完全に壊されてた・・・！」

「下手に接近すると塵一つ残されずに燃やされる、ということか」

シグナムの独り言を聞いた私は、

『みんな聞いて。私のラグナロクで巨人を倒す。』

そやからチャージ時間をシグナムとヴィータで稼いでほしいんやけど、ええか？』

私の持つ最大の一撃で決める事をみんなに思念通話で告げる。

その為に時間稼ぎをシグナムとヴィータに願う。

『もちろんです。何秒でも何分でも何時間でも、時間を稼いでみせます』

『あたしも。はやてに指一本触れさせないように頑張る。な？ リイン、アギト』

『もちろんです』

『あたしに不可能なんてない。だからマイスター、安心して任せ』

そう快く承諾してくれた。

そして二人は、修復を終えたカルドの巨人へと向かっていく。

私は二人の背に「おおきにな」と告げて、少し離れたところまで移動して、足元と前面にベルカ魔法陣を展開。

一撃で決められるように魔力をチャージする。

『ラグナロクの術式をスタンバイ。術式を集束砲へと変換・・・完了。』

魔力の集束を開始。チャージ完了まで60秒』

リエイスがラグナロクの発射シークエンスを進める。

私はシグナムとヴィータとカルドの巨人の戦いを注意深く見守る。

周囲を飛行しながら少しずつカルドの巨人へと攻撃を加えて傷を負わせる二人。

カルドの巨人も二人を落とそうと両腕を振るったり、炎弾の弾幕を張る。

炎弾のいくつかが私の元に飛んできた。私は視線を逸らさずに見つめる。

「させねえッ！」

ヴィータが私と炎弾の間に割り込んで、ギガントフォームの“アイゼン”で打ち返した。

そしてすぐにカルドの巨人へと飛んでいく。

うん、心配なんかしてへん。絶対に守ってくれるって信じとるから。

『やはり紅の・・・いいえ、ヴィータは心強いですね。』

もちろんシグナムもそうですが。私達は安心してこの一撃の準備に集中出来ます』

『そやる？ シグナムもヴィータも、ここにおらへんけどシヤマルもザフィーラも最高の騎士や。』



私ら八神家は、強い絆で結ばれた最高の家族なんやで」

『そうですね。あなたの元に集う騎士は、最高の家族です』

だから私は家族の為に戦うんや。

と、シグナムのシュランゲバイセンがカルドの巨人の右手首を斬り落としたんが見えた。

修復し始めた右手首にシュワルブフリーゲンで追撃するヴィータ。ヴィータを払おうとした左手首をも斬り落とすシグナム。

“アイゼン”をギガントフォルムに変えたヴィータのギガントシュラクがカルドの巨人の頭部に叩きつけられた。

大きく俯くカルドの巨人。そこに、シグナムはシュベルトフォルムに戻した“レヴァンティン”の紫電一閃を切り上げるように額に打ち込む。

『おのれえええー！ー！ー！ー！』

額から黒炎を噴き上げるカルドの巨人の咆哮が直接頭に叩き込まれた。

意識が飛びそうになるのを耐える。そこにリエイスからのチャージ完了の報せ。

私はシグナムとヴィータに向けて退避の思念通話を入れる。

二人は最後にシュトウルムヴィンデとコメートフリーゲンを放つてから退避。

「響け、終焉の笛」

詠唱を終えて、シグナムとヴィータに両掌を向けたカルドの巨人へと、

「『ラグナロクッ！！』」

三条の白い集束砲を放った。

カルドの巨人は二人からラグナロクへと両掌を翳して黒炎の砲撃を撃つ。

ラグナロクは黒炎の砲撃を掻き消して、そのままカルドの巨人を飲み込んだ。

白の光と黒の炎の大爆発。私の両隣に来たシグナムとヴィータと一緒に見つめる。

視界がクリアになって私たちの目に映るんは人の姿に戻ったカルド隊三人。

その三人から念話が私らへと入る。

『ああ、ここまでやって勝てなかった俺達の負けだ』

『約束だ。忘れるな。お前達が過去に殺めた者たちの事を』

『それが、今の俺達が最期にお前達に遺す呪いだ』

『そして、最期の最期まで全力で生きて罪を償って行け』

『それが、お前達に課す、復讐者を代表した俺達からの罰だ』

『それで許してやる。お前達がどこまで俺達との約束を守ってその生を終えるか、遙か空の高みで見届けてやる』

私らにそう言い残して、カルド隊は今度こそ光の粒子となって天に昇っていった。

ユニゾンを解除した私らは、天を見上げて一礼した。約束すると。そして私らは“オラシオン・ハルディン”で待機しとるはずのみん

なと合流する為に、“オラシオン・ハルディン”を目指して空を翔ける。

## 遙かなる夜天に集いし騎士 〈Heilig Requiem〉 (後書き)

あけましておめでとございます。

今年も、十字架を背負いし神意の執行者(残りわずかですが)、そして、次回作(タイトルは伏せておきます)をよろしくお願いします。

さて、はやてがリエイスとユニゾンしたことで手にした新魔法をちよいと説明しますね。

まず、射撃魔法ヴァーリ。

オリジナルはルシルの上級魔術“復讐神の必滅”コド・ヴァーリ。

効果は同じで、術者に敵対して攻撃を加えた対象を永続追尾する、というものです。

唯一の違いは、はやては魔力弾ですが、ルシルは砲撃です(笑)

元ネタは古代北欧を支配していた「血の復讐」の掟のために生まれたアース神族ヴァーリ。

バルドルという光神、または希望神を、邪神ロキに騙されて殺した盲目神ホズを殺す為だけに生まれた神ヴァーリ。

復讐、という一点から考えた後手必殺の魔術です。

で、移動魔法ヘルモーズ。

オリジナルは無く、今回改めて追加したものです。

一応ANSUR時、ルシルの空戦形態をヘルモーズとしていましたが、最近まで忘れてました。

元ネタは北欧神話のアース神族最速の神様ヘルモーズ。

次に斬撃魔法フレイ。

オリジナルはルシルの魔術“豊穡神の宝剣”コド・フレイ。

効果も同じです。常に最良の一撃を対象に放つ、というもの。まあルシルは接近戦をあまり得意としない砲主ですから、使ったのは一回だったような気が……。

元ネタは北欧神話の豊穡神フレイの持つ名の知れない神剣。

無敵無敗の剣で、ひとりでに斬りかかる剣。

だというのに、そんな大事な剣を恋した女のために手放し、結局武器の無いフレイはラグナロクで戦死。

最後に、電気変換打撃魔法ツールハンマー。

これはルシルの魔術というより、戦友の雷皇ジークヘルグの神器と真技ミヨルニルのパクリです。

元ネタも雷神トールの槌ミヨルニルの別名です。

そういえば、Force に出る予定のはやてのヘイムダルってどんな魔法なんだろう……？

お姉ちゃんは妹を守るものだから (Hermana Mayor) (前書き)

フィレス・トパーシオ&メノリア戦イメージBGM

ACE COMBAT 6 “THE LIBERATION O

F GRACEMERIA”

皇女アウローラ・P・フィレス・C・D・ヨツン Heim 最終戦イメ  
ジBGM

Kingdom Hearts ? “The Other Pr  
omise”

Hermana Mayor = エルマナ マジョール = 姉

お姉ちゃんは妹を守るものだから　　H e r m a n a　　m a y o r　　

“エヘモニアの天柱”・ファイルス潔白なる聖者私室

ベッドの縁に腰かけ一心に複数のモニターを眺めるファイルス潔白なる聖者。映し出されているのは、全長50km・全幅7kmとある大渓谷“アドウベルテンシアの回廊”の中間辺りで行われている艦隊戦。戦闘機隊“アギラス”は全機墜とされ、今現在、旗艦“フリングホルニ”と空母“ナグルファル”の二隻は、管理局所属艦三十二隻（さらに増えていく）とヴォルテールと白天王に包囲されるようにして艦載砲による激戦を繰り広げている。

（これ以上増えれば、いくらなんでもナグルファルは墜ちてしまう）

彼女はそう危惧し、また別のモニターに視線を移す。

“オラシオン・ハルディン”の自動砲撃システムは制圧され、カルド報復せし復讐者隊と永遠なる不滅者は敗れた。

十四人と居た幹部も、今となつては裏切り者を除いて彼女を含めた三人。

彼女は決心した。このまま“特務六課”のメンバーに攻め込まれれば、妹セレス至高なる卓絶者は負ける。

だからこそ、私も戦おう、と。

（ごめんね、セレス。もう黙って見ていられない）

彼女の姿が揺らぎ、この部屋から消失した。

十　　十　　十　　十　　十　　十　　十　　十

“女帝の洗礼”の外壁にもたれかかるようにして、みんなは休憩をしている。

地上部隊は拘束された構成員達を、艦隊戦に参加せず構成員収容艦として用意されたL級艦船“コンウォーリス”と“フランドール”へと連行していった。

そして私とシャルちゃんとフェイトちゃんは、ある程度休憩を挿んで“エヘモニアの天柱”に乗り込む為に、

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

静かなる癒し

“オラシオン・ハルディン”まで出向いてもらったシャルマル先生に治癒魔法をかけてもらっている。

他のみんなもシャルマル先生に回復してもらっている最中、はやてちゃん達が戻ってきた。

シャルマル先生がはやてちゃん達に気づくと、ものすごい笑顔で突進、抱きついた。

「みんな無事でよかった・・・！」

目頭を拭って、はやてちゃん達の上から下を見回して無事を確認。

そしてシャルマル先生とザフィーラはリインフォース、うっん、リエイスへと歩み寄って、

「おかえり、リインフォース」

そっと抱き締めた。その温かな光景を見て、良かった、と思う。

今度こそ、みんなが一緒に過ごせる未来を手に入れたはやてちゃん達。



リエイスはシャマル先生を抱き返した後、名前が変わった事を知らないシャマル先生へと、

「ただいま、シャマル、ザフィーラ。それとシャマル、私は主はやてから新たな名を授かった。

清浄なる優しきもの・運命を切り拓く翼・白き純潔の希望、リエイス。これからはそう呼んでくれ」

「え、そうなの？・・・リエイス。うん、すごくいい名前ね」

「そうだろう？ 主はやてから授かった名だ。良い名で当たり前だ」

「そこまで言ってもらえるのは嬉しいんやけど、ちょっと恥ずかしいな」

シャマル先生の治療中に談笑して、シャマル先生は今度ははやてちゃん達にも治癒魔法をかける。

治療の最中、シャルちゃん、私が私とフェイトちゃんを除くみんなに提案していた事をはやてちゃん達にも話し始める。

「連戦で本当に悪いんだけど、天柱へ乗り込む私となのはとフェイト以外の神秘を扱えるみんなまでフリングホルニとナグルファルを墜としてほしい。

まず先に墜としやすいナグルファルね。一斉に乗り込んで内部を徹底的に破壊。

上手く行ったらフリングホルニ。コイツも内部を可能なだけ破壊してほしい。

あと帆とかも壊しちゃって。みんなならきつと出来るから」

作戦とも言えない作戦だけど、それでもみんなは力強く頷いた。

「破壊ならあたしとアイゼンの専売特許だ。な、アイゼン？」

Ja

「姉御にだけ良いカツコさせねえぞ、な、シグナム」

「ああ、そうだな。私とお前の炎で墜としてやろう」

「僕も頑張りますよ。ね、キャロ、ルー、レヴィ」

「うん！ わたしはみなさんをしっかりサポートします」

「わたしは外から白天王とヴォルテールと一緒に艦隊の協力をする」

「わたしもルーテシアの護衛として外から攻めるよ」

「それじゃあ私とギンガとスバルは中での破壊活動ね。」

あと、チンク達は残念だけど地上でお留守番ね」

「お手伝いできないのは悔しいですが、母上の言う通りに我々は地上で待機しましょう」

「仕方ないよね。神秘っていうのが使えないんじゃない」

「ああ、こればかりはな」

「えー、そんなのイヤッスよ。つまんないっス」

「ウエンディ、私の娘ならちゃんという事を聞いてね」

「むう、ママリン、そのまま居なくなっちゃうとか嫌っスからね、ちゃんと帰ってきてほしいっス」

「大丈夫。ちゃんと戻ってきて、おとーさんにも、みんなにもきちんと挨拶をしてから旅立つから」

「・・・ティアナ。僕達も艦内での破壊活動だ、いいね」

「はい。望むところです」

“フリングホルニ”と“ナグルファル”攻略組は、艦隊戦が繰り広げられている戦場に向かう準備をし始めた。

そして私達も、“エヘモニアの天柱”に行く為に立ち上がる。するとはやてちゃんがシャルちゃんのところまで駆け寄ってきて、シャルちゃんを抱きしめた。

「これできつと最後や。そやから・・・元気でな、シャルちゃん。ありがとう」

「・・・こっちこそありがとう。みんなも元気でね」

ここでシャルちゃんと別れるみんなにとって、シャルちゃんと直接会って話すのはこれで最後だ。

みんなもそれに気づいて、思い思いにシャルちゃんとお別れの挨拶を交わしていく。

リエイスさんもシャルちゃんに握手を求めて何度もお礼を口にしてる。

ここに来る前に立てた作戦通りに行けば、私がシャルちゃんを送り出す事になる。

一カ月と居る事の出来なかつたシャルちゃん。私は最後は笑つてシャルちゃんを送り出すことが出来るのかな・・・？

「さて、お別れの挨拶も出来たし、行こうか、なのは、フェイト」

「もういいの・・・？」

「ほら、よく聞くでしょ。別れは長引けば辛い、って。

こうしてみんなが笑顔でいる中でお別れした方がなんか良くない？」

そう言つてシャルちゃんはみんなに手を大きく振つた。

みんなもそれに応えようと手を上げたその時、“オラシオン・ハルデイン”に異変が起きた。

“女帝の洗礼”の周囲を空色の光の線が走つて妙な図形を描いていく。

さらに“女帝の洗礼”からいくつもの光線が地面を走つて周囲に伸びていく。

私達がその突然の事態に戸惑っている中、シャルちゃんは一人空に上がる。

空から現状を把握するみたい。そして、

### 冷徹なる極雪の凍波

“円卓”の方角から、シャルちゃんに向けて蒼い吹雪の砲撃が放たれてきた。

シャルちゃんは私達より早くに気づいていたようで、余裕で砲撃を交わして降りてきた。

私達の元に降り立ったシャルちゃん表情はさつきと全然違つて緊迫したものだ。

声をかけていいのか分からず、シャルちゃんを見ていると、

「ここから先は通行止めです。大人しく下がりなさい」

空から女の子の声がした。

誰かはすぐに分かった。さっきの吹雪の砲撃の時点でもう分かっていた。

視線を声のした方へと移す。そこには小さな女の子トパーシオ、そして彼女の背後に浮遊しているウエディングドレスを身に纏った魔人メノリアが居た。

神秘を扱える私達は臨戦態勢に。神秘を扱えないシャルマル先生達を背後に庇う。

「一体何を企んでいる？」

シャルちゃんが数歩踏み出して前に躍り出る。

手には鞘に納められた“キルシュブリューテ”。

地面に降り立ってすぐにそう訊ねられたトパーシオ、ううん、フィレス元三等空士は口を開かない。

「空からこのオラシオン・ハルディンを見て愕然としたよ。」

オラシオン・ハルディン全体が一つの儀式魔術の魔法陣、儀式場となっている事に、ね。

しかも私でさえ知らない儀式魔法陣だ。オラシオン・ハルディン、意味は祈りの庭。

もっと早く気付くべきだった。だからもう一度訊くよ。セレスは何をしようとしている？」

「……今の私ではセレスの真の目的がどこにあるのか、どこに行こうとしているのかも分からない。」

でも、あの子はもう引き返そうと思っていない。ならその先にある

ものは何か、ある程度予想はつく」

フードを脱いで素顔を見せるフィレス。

その髪は灰色のセミロングで、瞳は綺麗な碧色。

セレスさんをそのまま小さくしたような姿。

間違いなく管理局データの殉職者欄で見たフィレス・カローラ空士だ。

シャルちゃんはフィレスの言葉に「自滅覚悟の暴走でもするつもり？」と訊き返す。

「自分諸共世界を滅ぼすことくらいはしそつよね、今のあの子は」

「何でそんな悠長な事を言っとるん！？ そんなんやめさせやなアカンー！」

「よく言うわ。セレスをこんな選択を取らざるを得ないような状況に追い込んだ管理局の駒が・・・！」

話し合いという机上の戦争は行わることなく過ぎて、今の力による戦争が始まった。

もう話し合いでは終わらない。だからあの子の気の済むまでやらせて、私はそれに付き合う。

あなた達がそれを阻止しようというのであれば、私は全力であなた達は殺します」

フィレスの背後に浮遊するメノリアから殺気が放たれる。

エルジアでの敗北を思いだす。どこからともなく氷の杭を打ち込んできたあの攻撃を。

私は周囲を最大警戒。いつでも戦闘行動に移れるように身構える。

「私達全員を殺す？ 本当出来るの、そんなことが・・・？」

あなたがエルジアでの一戦から今まで姿を現さなかった原因は、メノリアとの融合が原因でしょ？

あなたは魔族融合を行うと、他の幹部たち以上に存在おもいがひどく崩れる。

だからその修復期間とせずと前線に出なかった。融合すれば自滅する、だから戦わない。

当然ね。中級の魔人メノリアと同化して未練と言う酷く脆い存在であるあなたが無事なわけがない。違う？

「だったらどうだというのですか？　それが真実だとしても私の勝利は揺るがない。

それにメノリアを武装せずあなた達に勝てばいいんですから。

そしてすべてを終えたあと、私はセレスの元へと帰り、あの子の全てを許す」

「どうしてなん？　セレスのお姉さんやったら、止めるんがお姉さんやる・・・？」

「だってお姉ちゃんは妹を守るものだから」

フィレスがそう告げた瞬間、頭上光るのに気づいた。

一斉に上を見る。私達に迫って来ていたのは、白銀の砲撃だった。

ハイリヒ・フライハイト

真楯

シャルちゃんの盾が私達全員を護るように展開されて、砲撃を防いだ。

ヴィータちゃんが「管制システムを破壊したんなら、何で動いてんだよ!？」って怒鳴った。

今の砲撃は間違いなく“騎士の洗礼”からの砲撃だった。

シグナムさんがシャルちゃんとリエイスさんに「どういうことだ？」  
って訊ねると、二人が答える前にファイレスが口を開いた。

「剣神シャルロッテが破壊したのは確かにオラシオン・ハルディン  
全体を統括するシステムコア。

ですが、それはあくまで砲撃システムを効率的に動かす為だけの自  
動掃射システムに過ぎません。

知りませんでしたか？ オラシオン・ハルディンは手動のプログラ  
ミングでも動くんですよ。

まあジェネレーターが無い以上、次元跳躍砲はもう撃てませんけど」

最後の辺りは完全にリエイスさんに向けての発言だった。

リエイスさんは何も言わずにただはやてちゃんを守るように佇んで  
る。

それにしてもファイレスの言う通りなら、誰かが“オラシオン・ハル  
ディン”の砲撃システムを手動で起動しているということだ。

誰が？ もちろんセレスさんかルシル君のどちらかではない。

「散開！！」

健在である“騎士の洗礼”七基から次々と私達に向けて砲撃が放た  
れてくる。

私達は散開して回避。ファイレスとメノリアとの戦闘を開始。

神秘の扱えないシャルマル先生達は私達の邪魔にならないようにこの  
付近一帯から離れていく。

そして神秘の扱える私達は現状解決のための手段を念話で話し合う。

『なのはちゃんとフェイトちゃんとシャルちゃんはセレスを止め  
に行つて！』

ファイレスは私らで何とかするから！』



はやてちゃんがそう提案してきた。  
それに反論するのはシャルちゃんです。『いくら何でも無茶よ!』と返した。

それにまた反論するのはシグナムさんで、『今は一刻も早くカローラを止めるのが先決だ!』と怒鳴った。

みんなが沈黙する。そんな中に撃ち込まれてくる砲撃。

この場所と“騎士の洗礼”間の距離もそうだけど、威力も発射スピードもすごく遅くなって射線も甘いから余裕で回避出来る。手動でのプログラミングというのは本当みたいだ。だけど、

### 冷徹なる極雪の凍波

ファイレス、メノリアから放たれる攻撃が厄介だった。

あまりに正確、あまりに無慈悲。当たれば間違いなくただじゃ済まない。

『……分かった。なのは、フェイト。ここはみんなを信じて、私達はセレスの元へ向かう』

『……了解。なのは、行く』

シャルちゃんとフェイトちゃんからそう告げられる。

私ははやてちゃん達に視線を移す。目の合ったみんなは力強く頷いてきた。

私もシャルちゃんに『了解』と返して、みんなにも『気をつけて』と告げた。

「ここから先へは行かせない! メノリア!」

吹き抜ける氷界の北風

メノリアの指先から放たれる蒼い衝撃波。  
私とシャルちゃんとフェイトちゃんはギリギリで避けきれた。  
さらに追撃してこようとしたメノリアへと、

ハーツィース・ドライウ  
紫光掃破

レヴィが砲撃を放つ。そのおかげで、私達はフィレスを突破するこ  
とが出来た。

追撃されないようにさらにスピードを上げて飛ぶ。

“オラシオン・ハルディン”を抜ける前、“騎士の洗礼”の一基に  
近づいたシャルちゃんが、

「一基でもいいから潰しておいた方がいいよね・・・！」

光牙十紋刃

巨大な十字架型の斬撃を放って、砲撃発射直前だった“騎士の洗礼  
”の間回り破壊した。

砲撃は撃たれることなく、その“騎士の洗礼”は機能停止した。

「急ぐよ、二人とも・・・！」

「うん！！！」

私達三人は、セレスさんとルシル君の居る“エヘモニアの天柱”を  
目指して空を翔ける。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

“エヘモニアの天柱”へとこれ以上誰も往けないように、“オラシオン・ハルデイン”を覆う氷のドームが一瞬で造られた。するとこのドームが造られてから“騎士の洗礼”の砲撃が無くなった。

だから氷製ドームとなった“オラシオン・ハルデイン”の中、わたし達は全力で一人と一体の敵に集中して戦うことが出来ている。でもドームを透過してくる夕日に変な色になってて妙に気持ち悪いけど……。

ハーツィース・ドライウ  
紫光掃破

トパーシオ、じゃなかった。フィレスに何度目かの砲撃をお見舞いする。

だけど、このフィレスって人、と言うかメノリアっていうのが半端じゃなく反則。何度撃っても、どれだけ撃っても、

私の愛すべき主に触れるな

見えない障壁で難なく防いでくる。

だけどわたしの攻撃を防いだことで生まれる隙。

その隙を突いて攻撃を行うシグナムさん達近接戦チーム。

「紫電一閃!!」

氷には炎、というのはフィレスとメノリアにも有効のようで、シグナムさんの一撃はしつかり避ける。

でも避けた先に待ち構えるヴィータさんが“グラーファイゼン”を大きく振るう。

「おらあああーッッ!!」

Flamme Schlag

ヘッドの命中時に着弾点を燃焼させるヴィータさんのフランメシューラク。

メノリアがいち早くそれに対処する。

静かにそびえる浄化の氷盾

蒼い氷の壁が生まれて、ヴィータさんの一撃を防御。

炎熱攻撃によって蒸発した氷の壁から生まれる蒸気で視界が潰される。

こうなったら下手に動けない。わたしは対ダイヤモンド戦の為に温存しておいたブースト3の発動タイミングを計る。

そんなとき直感が働いた。戦闘時でのわたしの直感はなかなかのものだと自負しているし、シグナムさんやヴィータさんからも墨付き。

だからわたしは、

『皆さん伏せてください!!』 『『全員伏せるッ!』』

戦闘に参加している皆さんに念話でそう告げる。

わたしと同時に、シグナムさんとヴィータさん、リエイスさんの声も重なる。

それに驚くことなくわたしは地面に伏せた。その直後、

裁断せし凍刃の円波

頭上を回転しながら通過する氷の剣。

視界を潰していた蒸気もそれで吹き飛んだ。

わたしが最初に見たのはスバルさん、ギンガさん、クイントさんの三人がファイレスに向かう様子。

最初はギンガさんの拳打、次にクイントさんの蹴撃、最後にスバルさんの振動拳のピンポイント攻撃。

私の愛すべき主に触れるな

威力は申し分ないのに、どれも簡単に防がれた。

わたしはこの間に近接戦用の“モード・コンバット”へと形態変更を行う。

『レヴィ・アルピーノ、近接チームに参加します!』

『了解。気をつけてな!』

遠距離ははやてさんとティアナさんとティードさんに任せる。

ナイトメアハウル

スバルさん達が障壁に弾かれて吹き飛ばされた直後にはやてさんの5つの砲撃。

爆発。粉塵の中からメノリアに抱えられたファイレスが出てきた。

わたしとエリオはすかさず瞬走壱式とソニックムーブで距離を詰める。

ここでわたしは、

「アストライアー、ブースト3」

奥の手のブースト3を発動した。

十 十 十 十 十 十 十 十

八神部隊長の砲撃から逃れたフィレスへと突撃する僕とレヴィ。

距離はすぐに縮まって、僕とレヴィはフィレスさんを左右から挟むような位置取りをした。

“ストラーダ”のヘッドブースターの推進力による突きスピーアアングリフを放つ。

メノリアはヴェールとドレスの裾を翻しながら独楽のように回転して避けた。

メノリアとすれ違って、拳打を放とうとしているレヴィと目が合う。イっちゃってる目だった。

ブースト3を発動したんだとすぐに理解した。僕は連撃を放とうとしていたけど急遽中止。巻き込まれないように離脱する。

「さあ、わたしと一緒に踊りましょう」

### 瞬間牙衝撃

ドオン！と衝撃音。レヴィの神速の拳打はメノリアの左脇腹にクリーンヒットしていた。

吹き飛ぶのを耐えたメノリアの表情が苦悶に変わり、フィレスさんは「メノリア！」と心配の声を上げる。

動きが止まった今がチャンス。一斉に攻勢に出る僕達。

レヴィの鋭い蹴りが、フィレスさんを庇うようにして防御に構えたメノリアの右腕に防がれる。

背後からスバルさんとギンガさんとクイント元准陸尉のトリプルナツクル。

静かにそびえる浄化の氷盾

氷の盾に防がれる。僕とシグナム一尉の真正面からの斬撃。

我が愛すべき主に触れるな

不可視の障壁で難なく防がれた。直後、真上からヴィータ教導官の急襲。

メノリアは雪渦を纏わせた左腕を頭上に掲げる事で、“グラーフアイゼン”のギガントシユラクを防いだ。

地面に亀裂が走る。それほどまでに強烈なヴィータ教導官の一撃。ここまでやっても決定打を与えられなかった。

『たかが人間風情が調子に乗るな・・・！』

僕達の攻撃を全て防いだメノリアから頭の中に叩きつけられる美声による毒。

身が竦んだ。直後、

我が名はメノリア

視界がひっくり返る。僕は宙で体勢を整えて着地する。

メノリアから40mくらい吹き飛ばされていた。

どういふ方法で吹き飛ばされたのかも検討がつかない。

そして八神部隊長のクラウ・ソラス、ティアナさんのクロスファイア・フルドライブ、ティード元一尉の砲撃がメノリアを襲う。

『我が愛おしき主君に手を出す事は許さん』

また声が聞こえた。さつき聞こえたのも、今のもメノリアのものと分かる。

外見もすごく美人で、声もまたすごく綺麗だった。

そしてメノリアが左腕を頭上に掲げると蒼い吹雪が起こって、八神部隊長達の砲撃を弾き飛ばした。

「あはは！ すうごおい！ でも負けないよお！！」

レヴィがハイテンションで突っ込んでいく。

メノリアの声で戦意が失くなりそうだった僕もレヴィに続いて、

「ストラーダ！」

メノリアへと突撃する。

十 十 十 十 十 十 十 十

どれだけ“リボルバーナックル”の一撃を打ち込んでも、メノリアの防御力を突破できない。

八神部隊長達も一緒に戦って攻撃しているのに……。

レヴィもハイテンションでフィレスさんを庇うメノリア相手に格闘戦を挑んでいるけど歯が立たない。

エリオが雑ざる。シグナム一尉とヴィータ教導官も一緒に四方から攻撃するけど、

我が名はメノリア

また見えない何かで吹き飛ばされて距離を無理矢理開けられる。

近接チームが離れた直後に放たれるティア達遠距離チームの砲撃。

それもまた跳ね返される。今までの魔族とあまりにもレベルが違い



過ぎる。

「強過ぎるよ……」

勝てない、かもしれない。弱気になる。

心が折れそうになる。すると背中を思いっきりバチン！と叩かれた。振り返るとお母さんがあたしの目を見詰めている。

視界の端に映るギン姉はコクンと頷いて、

「スバル。私達は勝てないかもしれない。でもね、勝つ必要はないの。

なのはさんとフェイトさんとシャルさんがカローラ一佐を止めることが出来るまで、フィレス元空士をここで足止めする。

それが多分私達の役目だと思う」

そうあたしに告げた。勝つ必要のない戦い。

でも負けちゃいけない戦い。この戦いの勝敗は、心が折れない方が勝つ。

両頬を力強く叩いて弱腰になっていた気合を入れる。

「スバルも覚悟を決めたところで、行こうか、ギンガ、スバル」

「はい！」

ウイングロード

三人それぞれのウイングロードでフィレス元空士を庇うようにして戦い続けるメノリアに最接近。

フィレス元空士が「メノリア、上！」とあたし達を指してくる。

我が声に応えよ雪精

空を見上げたメノリアの口から空へと蒼い吹雪が吐き出される。あたし達は警戒しながらも接近する事を止めない。近づく。そしてあたしは見た。吐き出された雪が小さくて無数の人型となってあたし達に向かって来ている事を。あたしは前面にシールドを張って突っ込もうとしたけど、雪人形は難なくシールドを破壊、あたしに直接体当たりしてきた。

(ただの雪なのになんて威力・・・！)

身体中に奔る激しい痛みに意識が飛びそうになる。シールドだけじゃなくてウイングロードも破壊されたあたしは落ちる。

(急いで・・・体勢を整えないと・・・)

「スバル、大丈夫!？」

落下するあたしを受け止めてくれたのはギン姉。ギン姉も直撃を受けたみたいで、額や頬から血を流してた。

「一度メノリアから離れる。私が盾になるからギンガはスバルと一緒に離れて!」

お母さんがあたしとギン姉を庇うように、追撃してくる雪人形の迎撃に入った。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

スバルとギンガさんは何とか無事なのをここから確認できた。  
あたしとお兄ちゃんと八神部隊長は遠距離からの支援砲撃を担当して、近接チームの援護に入っている。  
あたしはクイントさんを援護する為に、

『クイントさん、援護射撃行きます』

と念話を送る。クイントさんは『お願いね』と返してきた。

あたしは残り少ないシャルさんのカートリッジをロードする。

シャルさんの魔力にも神秘にも慣れてきたせいか、リンカーコアから来る痛みがもうあまりない。

「クロスファイア・・・シューッ！」

あたしが撃つと同時にお兄ちゃんもクロスファイアを放った。

お兄ちゃんのクロスファイアはあたしよりも正確に雪人形を撃墜していく。

「射撃魔導師にとって焦りは最大の敵だ。

大丈夫。ティアナならすぐに、今日にでも僕を追い越していく」

そう言つて、雪人形を次々と撃墜していくお兄ちゃん。

あたしも負けないようにクロスファイアを撃ち放っていく。

スバル達の後退の支援が終わって、次は前線で戦うシグナム一尉達の援護に入る。

まずは一番接近して手数が多いレヴィ。あの動きの激しさからしてブースト3の発動中だと判断する。

（それにしても、ブースト3発動中のレヴィって、あたしは苦手なのよね・・・）

あのぶっ飛んだテンションにはついていけない。  
それは兎も角、“クロスミラージユ”二挺の銃口をメノリアへと向ける。

距離は変わらず84m弱。周囲にスファイアを十四基設置。

前線メンバーの動きを予測して、クロスファイアを三発発射。

それと同時に有効かは分からないけど、障壁突破の多重弾殻射撃ヴ  
アリアブルシュートを二発放つ。

あたしのクロスファイアは、二発はシグナム一尉とエリオへと攻撃  
を加えようとしたメノリアの両腕を弾いて、一発は外れた。

ヴアリアブルシュートも残念ながら通用しなかった。でも、

「ナイスフォローだ、ティアナ。前線の複雑な動きをちゃんと読ん  
でる。」

今のフォローのおかげで、レヴィという子がメノリアに一撃与えら  
れた」

お兄ちゃんが本当に驚いたように褒めてくれた。

褒めてくれた事は、素直に嬉しいと思った。

十 十 十 十 十 十 十

「うふ、ふふふ・・・あははは！」

ティアナのフォローもあって、笑い声を上げるレヴィの拳打がメノ  
リアの腹に突き刺さった。

あたしとシグナムとレヴィはメノリアへの追撃、エリオにはファイレ  
スの確保に動いてもらう。

レヴィは「まだまだ行くよー！」と心底楽しそうに前のめりになっ  
ているメノリアの胸へと飛び回し蹴りを食らわし、メノリアを吹き

飛ばす事でフィレスから遠ざけようとする。

だけどそんなに甘くはなかった。メノリアはレヴィの右足首をその細い手でガツチリ掴んで地面に叩きつけて放り投げた。

レヴィには悪いがあたしとシグナムはそれを最大の間として最接近。

「今度こそブチ貫けえええー！ー！ー！ツツ！ー！」

ラケーテンハンマー

「紫電・・・一閃！！」

先にあたしの一撃。メノリアは裾の長いウエディングドレスだって言うのにスカートを優雅に翻しながら右足で“アイゼン”のヘッドの側面を蹴って軌道を逸らしやがった。

“アイゼン”のドリルヘッドが地面に突き刺さる。

視界の端でメノリアを捉えると、シグナムの一撃を一回転することかわして、上げたままの右足のかかとをシグナムの右頬に叩きこんでいた。

(コイツ、格闘戦も強え・・・！)

あたしには魔族のランクとかそうゆうのは全然分かんねえ。

だけど、メノリアが普通じゃないのはどんなマヌケでも理解できる。

これで中級。コイツの上にはさらに上級と最上級が居る。

どんだけ化け物ぞろいだっただよ、シャルロツテとセインテストの時代の奴らは。

あたしはすぐさま“アイゼン”を斜め上に切り上げるようにして振るう。

シグナムもほぼ同時に、蹴りを食らった反動を利用して一回転、“レヴァンティン”をメノリアの首筋に向けて振るう。

我が名はメノリア

またとんでもねえ衝撃波を放ってきやがった。

この衝撃波の前に、あたしのラケーテンでも歯が立たなねえ。

吹き飛ばされたあたしは宙で体勢を整えて着地する。

シグナムも同様に着地。メノリアへと視線を向けると、レヴィだけが倒れていた事で吹き飛ばされねえで立ち向かった。

「遅れを取るな、ヴィータ・・・！」

「分かってる！」

急いでレヴィのフォローに回る為に駆ける。

あたし達より先にティアナとティータ元一尉のクロスファイアがメノリアに向かう。

メノリアは、クロスファイアを防ぐ手段として、レヴィの身体を持ち上げて盾にしゃがった。

「レヴィ!!!」

あたしに放り投げられたレヴィを何とか受け止める。

あたしもシグナムも意識をレヴィに向けた。それが隙になった。

一瞬で距離を縮めてきたメノリア。あたしはレヴィを抱えているから何も出来ずに横っ飛び。

シグナムはすれ違いざまに紫電一閃を叩きこむ。

『邪魔をするな、人間システムですらない虚構風情が！』

ただメノリアは紙一重のバックステップで紫電一閃を避けた。

仕切り直しとなる。あたしが抱えているレヴィが「痛った〜」と言  
いながら起きた。

「大丈夫かよ……？」と訊ねると、レヴィは「結構効いた〜」と  
涙目で答えた。

メノリアが吹雪の砲撃を放ちながら突撃してきた。  
あたし達三人は砲撃を横つ跳びで回避して構える。  
すると、

「うふふふ、でもお、これでわたし達の勝ちです」

マナクル  
エクステンド  
紫光瞬条・昇華

それはザフィーラの鋼の軛のようなすみれ色の帯。

それが九条くらい地面から伸びてメノリアを貫いて、繭のようにメ  
ノリアを覆い隠した。

「はあはあ……すいま……せん……わたしは……これまでの……  
ように……」

レヴィは最後まで言えずにそのまま深い眠りに就いた。

遠くの方から「メノリアアー……！！」っていうはやとエリオに  
よって拘束されてるフィレスの叫びが聞こえる。

フィレス個人の戦闘は、メノリアとの融合状態のみ。

だからメノリアさえ斃せればあたし達の勝ちだ。

この中で大威力を放てるのはリエイスとユニゾンしてるはやてだ。  
眠るレヴィを抱えたあたしを含めた全員の視線がはやてに集まる。

「遠距離攻撃を持つみんなで決めるよ。それくらいしやなきつとメ  
ノリアは斃せへん。」

ヴィータとリン、スバルとギンガとクイント元准陸尉、エリオは

「ファイレスを拘束な」

あたし達はそれぞれはやての指示に答えて、ファイレスの拘束を引き継ぐ。

ファイレスが「やめて！」と懇願してくるけど、こればかりは聞けない。

メノリアは危険過ぎる。ここで絶対に斃しておく。

レヴィの拘束繭に少しずつ異変が現れる。蒼く繭が凍っていつている。

はやてが「急ぐよ！」と指示を出して、攻撃組がカートリッジを連続ロードしていく。

そしてメノリアの繭を囲むような位置について、

「フロントムブレイザー！」

「インパルスストライカー！」

「火竜一閃！」

「ソール！！！」

ティアナの砲撃から始まって、ティード元一尉の砲撃、シグナムの振り下ろしの斬撃。

最後にはやての炎熱砲撃。はやての砲撃が炸裂して大爆発を起こすんだけど、爆炎や爆風は周囲に広がることなく集束していく。

そして最後に、空へととんでもない炎柱が昇って、ドームの天井に穴を開けて消えた。

「メノリア・・・？」

何重ものバインドで拘束されたファイレスが膝を折って座り込んで、炎が渦巻くメノリアが居た場所を見詰める。

あたし達も炎を見詰める。あんな炎熱砲撃を受けて無事なはずはね



え。

炎も消えて、煙も次第に晴れていく。視界にはもうメノリアの姿はなくて、

「メノリア……！」

あたし達の元にひらりと飛んできたメノリアのヴェール。

背の高いシグナムがそれを手に取って、両腕のバインドが解かれた  
ファイレスに手渡す。

あたしにでも分かるくらいヴェールからは何の力も感じねえ。

だからシグナムもヴェールをファイレスに手渡して、スバル達もバインドを解いた。

“オラシオン・ハルデイン”を覆う氷のドームが崩れていく。

メノリアが消えたことで、メノリアの造ったドームは壊れていくようだ。

「ファイレス・カローラ三等空士。セレス・カローラの逮捕にご協力を  
をお願いします」

はやてがファイレスに向かってそう告げた。

十 十 十 十 十 十 十

メノリアが負けた……。

セレスが私付きの守護者として召喚してくれたメノリアが……。

あの子のヴェールを手渡してくる守護騎士シグナム。

あの子の造ったドームが音を立って崩れていく。

夜天の主、八神二佐が私に視線を合わせるようにして片膝をついた。

「ファイレス・カローラ三等空士。セレス・カローラの逮捕にご協力

をお願いします」

そんな申し出をしてきた。セレスの逮捕？ その協力？  
セレス、あの子にだってもう時間はない。だから今日という日を好きに過ごさせようとしていたのに、全てが狂い壊れた。

ヴェールに視線を落とす。するとどうしてかメノリアの顔が見えた。幻想だつていうのは分かる。メノリアは居ない。

ここまでできた以上、私も覚悟を決めるしかない。  
魔力の粒子に還元されていくヴェールをキュツと抱きしめる。

「（そんな悲しい顔しないで、メノリア）・・・お姉ちゃんは妹を守るもの」

「え・・・？」

私の呟きを訊き返してくる八神二佐。

私は顔を上げて、もう一度、三回目のセリフを口にする。

「お姉ちゃんは妹を守るものでしょ？ だからその申し出は断ります」

これで最後。力を貸してね、メノリア。

それが貴女の願いであれば、わたくしはどこまででも

メノリアの声が聞こえた気がした。

私はメノリアの消えかけているヴェールを私の想いそんざいに取り込んだ。  
服装がメノリアと同じウエディングドレスへと変化する。

閉じていた目を開ける。と、私を見て驚愕している八神二佐達が映る。

「テストメント幹部トパーシオ・・・いいえ、もう幹部としてじゃないですね。

アウローラ・プレリユード・フィレス・カローラ・デ・ヨツンハイム、参ります」

小さい頃に公言する事を禁止された真名を口にし、最期の戦いに臨む。

セリオン・エクサラシオン  
氷柱弾雨

十 十 十 十 十 十 十

私らは一斉にウエディングドレスを身に纏ったフィレスから離れる。予想外やった。まさかヴェールだけでも魔族融合できるやなんて・・・。

私らの頭上に生み出された巨大の氷柱が、ドームの破片と一緒に落ちてくる。

それだけやなくて、“女帝の洗礼”とモノと思しき白銀の機械片も落ちてくる。

『こうなったらもうしゃあない。フィレスを倒してでも協力してもらおう・・・！ みんなも覚悟してな』

みんなに念話を送る。そやけど返ってくるんは迷いしかない無言。私やってもう戦いたくない。でも、フィレスから放たれる殺気が酷く冷たくて鋭い。

みんなも分かつとる。そやから『了解』と返ってきた。

頭上から落下してくる氷塊や機械片に気を付けながら、魔法を準備する。

「フィレス・カローラ！もう止すんだ！」

紫電一閃

「あたしらはセレスを救いたいんだ！」

フランメシュラーク

シグナムとヴィータが仕掛ける。

エリオはレヴィを避難させる為に戦域を離脱中。

「救いたいのであれば、このままセレスをそつとしておいてください。

それがあの子のためなのですから・・・！」

フィレスは二人の攻撃を完全に見切つて、踊るようにして避けた。

「「「おおおおおツツ！！！！」」」

背後からのスバル達の奇襲。それすらも華麗に避けて、その直後に、

「軽い行きますよ」

ディオサ・ブーニヨ  
女神の鉄拳

地面から人数分の氷で出来た巨大な拳は突出してきた。

私はヘルモーズでギリギリで避けられた。やけど耳に短い悲鳴が届く。

ティアナのものと分かる。氷拳が碎けて散る中、視界に映るのは

頭から血を流して倒れ伏したティアナと、ティアナを診ようとしているティエダ元一尉。  
スバルもティアナ達に近寄ろうとしたけど、

ディアブロ・クエルノ  
悪魔の角

「あぶ」

危ない、と注意するより早くスバルの両腕と両足に螺旋状の氷の杭が一杭ずつ打ち込まれて、同じように氷の杭によってティアナの“クロスミラーージュ”の銃身が粉碎された。  
スバルの悲鳴がこだまする。

「スバル!!!」

「援護!!!」

「了解!!!」

助けに入ろうとするギンガとクイント元准陸尉を援護する為に私は  
フィレスヘ二十六基のブラッディダガーを射出。  
シグナムとヴィータもそれぞれ炎熱攻撃で援護。  
そやけど、

デフェンデル・テクララシオン  
守護宣言

作り出された氷の壁に当たった直後、ダガーは全部凍結粉碎されて、  
シグナムとヴィータの炎熱攻撃も通用しなかった。  
これはまずい。メノリア以上にフィレスの防御力が高い、高過ぎる。  
私はもう一度炎熱砲撃ソールをリエイスに準備させる。

ギンガと戻ってきたばかりのエリオには、

『ギンガ、エリオ！ 二人はスバルとティアナをシャマルのところへ！』

スバルとティアナの戦線離脱を念話で伝える。

二人は『了解！』と返して、スバルとティアナをそれぞれ背負って戦域から離れる。

「今の私がテストメントの最強である事を覚悟してください」

エスバード・デ・ラクリマ  
涙する皇剣

離脱する四人を尻目に、両手に氷の剣を携えたファイレスが突撃してくる。

私は“シュベルトクロイツ”を向けてソールを撃とうとする。

それより先に、左の氷剣で“シュベルトクロイツ”の中間を真っ二つにされた。

あまりに早く無慈悲な一撃に恐怖が全身を支配する。

そんな私へと迫る右の氷剣。

「させるものかッ！」

それを私のすぐ側に来たシグナムの炎を纏った“レヴァンティン”が防ぐ。

私はシグナムにお礼を言い、距離を開けて“シュベルトクロイツ”の修復に入る。

クロスファイアシュート

罅迫り合いをしとるシグナムとフィレスに向けて放たれるティード元一尉のクロスファイア十三基。

シグナムの強化された炎でも溶けやん右の氷剣をそのままに、左の氷剣を振るって冷気を放つ。

その冷気がクロスファイアを凍結させて無力化した。

それを最大の間としてヴィータとクイント元准陸尉が攻勢に出る。

「はあああああああッッ!!」

二人の裂帛の気合の共に繰り出される一撃を、フィレスは何事でもないように氷の盾で防いだ。

それと同時にリングバインド。色は藍色やからクイント元准陸尉のものや。

「なに・・・!?!」

身動きを一瞬とはいえ封じられたフィレスに私は、

「『みんな離れて!』・・・ソール!!」

メモリアを蒸発させた炎熱砲撃ソールを放つ。

フィレスの防御力からしてこれくらいの威力は無いとまともにダメージが与えらへん。

残つとる氷の盾諸共呑み込む白い炎。警戒する。これで勝ったと思わん。

レフィナド・ランサ  
洗練されし氷牙

案の定、爆炎の中から氷の槍が幾つも飛んできた。

それぞれ横つ跳びで回避。そして爆炎の中から疾走してきたフィレ

すが、

「裏切り者への制裁がまだでした」

クイント元准陸尉へと左右の氷剣を振るう。

咄嗟にウイングロードを足元から宙に奔らせて避けるクイント元准陸尉。

標的を失ってたたらを踏んでいるフィレスへと、シグナムが火竜一閃を横一線に薙ぐ。

氷剣をクロスさせることでシグナムの一閃を防ぐフィレス。に、テイダ元一尉が背後から迫る。

「ティアナとその親友達をこれ以上傷つけさせない！」

黒銃の刃でフィレスを突き刺そうとしたそのとき、

ベンティスカ・パレドゥ  
雪風の鉄壁

フィレスを包むように球体状の吹雪が起こる。

シグナムとテイダ元一尉が吹き飛ばされる。

強い。フィレスはあまりにも強過ぎる。

吹雪の壁への対処法を考える。ソールでもアカンかったフィレス自身の防御力。

ラグナロク、しかないかと思う。それでもアカン気がする。

ドームの天井は大きく崩れて、そこから綺麗な夕焼けの空が見える。

「あたしとアイゼンのツェアシュテールングスで何とかこじ開けてみる」

ヴィータがそう提案してきた。



正直それでも上手くいくかどうか……。

ディアブロ・クエルノ  
悪魔の角

それは一瞬やった。どこからともなく放たれてきた氷の杭。それらが一撃で私らの持つデバイスを破壊した。

“ シュベルトクロイツ ” の柄も、“ レヴァンティン ” の刀身も、“ グラーファイゼン ” ヘッドも、“ リボルバーナックル ” を装着した両腕も、“ 白銃と黒銃 ” を持った両手も。

思考が止まる。あまりに突然過ぎて、あまりに精確過ぎて。

ファイレスを包む吹雪が爆発する。視界が吹雪で潰された上吹き飛ばされた。

『 これで私の勝利です 』

ファイレスからの念話。直後に地面に叩きつけられた衝撃が全身を襲う。

苦悶の声を上げながら、長く続いた吹雪が止んで視界が戻るのを待つ。

ようやく吹雪が止んで、私はうつ伏せで倒れたままの状態で顔を上げる。と、また思考が止まった。

「 え……？ シグナム……？ ヴィータ……？ リイン……？  
アギト……？ 」

私の家族が、大切な家族が、私が守らなアカン家族が……

「 あ、あ……ああ……あああ……あああ……あああッッ！！  
！」

叫ばずにはいられんかった。

私の家族が“女帝の洗礼”の外壁に、氷の槍に貫かれて礫にされとる光景なんやから。

「死んではないし、大切な器官も傷つけていないので安心してください。

かつてのエースオブエースと同じ、溶けた氷が傷を癒します。

私がエヘモニアの天柱に戻るまでの短い間ですので・・・では」

その言葉で、ギリギリのところまで怒りの暴走を踏みとどまる。

何とか立ち上がってフィレスを睨みつける。

視界の端にはシグナム達と同じように氷の槍で地面に礫にされとるクイント元准陸尉とティード元一尉の姿。

理由は分からへんけど私だけが無事やった。

そこで気づく。リエイスの声がさっきから聞こえへんことに。

「リエイス!? リエイイス!!」

私はただユニゾンして私の中に居るリエイスを呼び掛け続けている。じやりつと砂を踏む音。フィレスが雪となって崩れていくドームを後にしようとしとる足音。

止めた方がいいのかもしれない。そやけど、私一人やと戦いにすらならへん。

家族も守れんとただフィレスを見送るしか出来へん私は、自分の無力さと情けなさに涙を流す。

フィレスがゆっくりと空に浮かんで、“円卓”に飛んでいった。

両膝について、完全に座り込んだ。両手を前について、声を殺して泣く。

「・・・ひっ・・・シャマ、ル・・・つく、・・・う、助けて・・・

「・

避難しとるシャマルに思念通話を送る。

お姉ちゃんは妹を守るものだから　　く　H e r m a n a　m a y o r　く　（後書き）

ヨツン Heim 皇族の末裔としての力を大いに揮った幹部トパーシオ、  
フィレス・カローラによって六課前線メンバー半壊。

予定通りに進んでいますので残り四話。これなら今月中（休日返上  
で）に完結させられそうです。

何せバトルパートは面白いほど、そして悲しいほど文字数が増えて  
いくので楽であり苦ですから。

いや、最終話で引っかかりそうな気も・・・うん、どうだろうか。  
・・・？

何はともあれ、次回、フェイトとルシルの決戦となります。

？炎熱砲撃ソール

オリジナルはルシル、と白焰の花嫁ステアと炎帝セリスの魔術。  
対象にヒット、炸裂して周囲に拡散する爆炎と爆風を対象に収束さ  
せ続けることで持続的に対象にダメージを与え続け、総合ダメージ  
量を増やす、というもの。

北欧神話、太陽の女神さまソールの名を冠しています。

私が貴方と望む未来へ往く為に ｝F a t e ｝(前書き)

フェイトVSLシリオン イメージBGM

Xenosaga ツアラトウストラはかく語りき“hepati

ca)(KOS-MOS)”

私が貴方と望む未来へ往く為に 　　F a t e 　　

私となのはとシャルは、ルシルとセレスの居る“テストメント”の本部“エヘモニアの天柱”を指して、ひたすら広大な“レスプランデセルの円卓”の空を翔ける。

「見えてきた・・・！」

私達の視線の先にはすごく高い塔が一基そびえ立っているのが微妙に見える。

あそこに、あの塔にルシルが居る。私が向き合うべき相手が、戦うべき相手が。

しばらく飛んで、ようやく塔の輪郭がハッキリしてきた。そのとき、

轟き響け、コード 汝の雷光バラキエル

光輝け、コード 汝の威光ウリエル

燃え穿て、コード 汝の淨炎ウリエル

塔の方から放たれる雷撃、閃光、炎熱、三属性の砲撃。

雷撃砲はなのは、閃光砲はシャル、炎熱砲は私に狙いを付けていた。私達はそれぞれの軌道で砲撃を避ける。その直後に、

次元跳躍散弾砲撃ヘカド・カステイガル

蒼い閃光が空高く上がって、光線を引いて地上に落ちてきた。

散弾砲独特の軌道。スピードを上げながら地面スレスレを飛ぶ。

頭上20mくらい上で炸裂した散弾砲はいくつかのスフィアとなっ

て広範囲に分散、直後に全弾爆発、衝撃波が私達を襲う。

「あの馬鹿ルシル。絶対に殴ってやるんだから……！」

シャルが愚痴を零す。殴るところか殺しそうな勢いな気がする。

何とか衝撃波を抜けて、“エヘモニアの天柱”をしつかりと視界に納める。

入り口と思われるところに、白い鳥居のようなモノが何十基とトンネルみたいに立っていた。

「トラップ臭いけど……。なのは、フェイト。止まらずに一気に突っ切るわよ」

「了解」

三人並んで通っても上下左右に余裕のある鳥居のトンネルに進入する。

空を染め上げる夕日がどこか物悲しい。まるでこれで全ての最後だというような気がして。

距離にして300m近いトンネルを飛行していると、塔の入り口である大きな両扉が見えてきた。

畏は結局無かった。無い方がいいんだけど、少し拍子抜けだ。

「私がこじ開ける。トロイメライ！」

J a w o h l · G l a n z V o g e l

シャルが両扉目掛けて真紅の鳥型砲撃グランツフォーゲルを撃ち込んだ。

扉が塔内に向かって吹っ飛んだ。

シャルは私となのはに「最大警戒。油断は無し」と告げてきて、私達は頷く事で応えた。

私は“バルディツシュ”をアサルトフォームのまま構えて、“エヘモニアの天柱”の中に進入した。その直後に、

コード  
舞降るは、シャルギエル  
汝の麗雪

氷の槍がいくつも飛んできた。

ゼーリッシュ・ウイーター・シュタント  
我が心は拒絶する

私達の前面にシャルの対魔力障壁が展開されて、氷槍を全弾弾き飛ばした。

シャルが床に着地する。私となのはもシャルに続いて床に降り立った。

私達の視線の先、この直径200mくらいはあるエントランスホールの奥に彼は居た。

「やはり君達が来たか。サファイア口ではなくルシリオンとしては久しぶりか。

相変わらずのアホ面なシャル。それに、なのはとフェイト。もうすっかりとした女性だな。

フフ、もう君達を少女と子供扱いは出来ないな。・・・二人とも綺麗になった」

「……っ……！」

ルシルのかすかな笑みと一緒に私達に向けられた親しげな呼びかけ。今のルシルはまるで私達が知っている、友達としてのルシル、私が



好きになつたルシルだ。  
ルシルが奥から中央に向かって歩いてくる。  
シャルもゆっくりと歩き出して、私となのはも続いて中央に向かって歩き出す。

「ルシル、もしかして記憶戻つてんの・・・？」

「・・・ああ、憶えているとも。先代テルミナスによって召喚された契約での出来事も」

ホールに響く四人の靴音。そしてルシルとシャルの会話。

ルシルの記憶が戻つてる。それはつまりセレスがルシルの記憶を元に戻したという事だ。

どういうつもりで？ セレスはルシルに何をさせるつもりなの？

「記憶が戻っているなら、セレスが何をしようとしているのか教えてくださいなさい」

「教える義理はない。私は記憶が戻ろうと、彼女の従者である事に代わりはないのだから」

シャルの質問にルシルがそう答えた。

セレスの従者だから、セレスの目的は教えないって。

胸が締め付けられるような苦しみが生まれた。

どうして私じゃなくて、いつも別の女性むすめがルシルの側に居るの？

「セレスはヨツンヘイム皇族の末裔かなんかでしょ？

アースガルドの筆頭であるセインテスト、その最後の王のあなたがよく従者と口に来るわね」

「・・・そうだな。最初、彼女がヨツンヘイム皇族の末裔と知った時、真名を聞いた時、確かに殺意が沸いた。だが、彼女は現代を生きる人間だ。末裔だからと言って私に恨まれる道理はない」

靴音を鳴らしながら互いが徐々にホール中央に近づく。

私となのはは、ルシルとシャルの放つ空気に言葉を発することが出来ずに、シャルの後ろをただただついていくだけ。

「そう・・・私となのははこれからセレスを止めに行く。

変な儀式魔術を使おうとしているし。だからさ・・・大人しく道を開けてほしいんだけど」

シャルが歩みを止めるとルシルも足を止めた。

私となのはも足を止めて、10m先に佇むルシルを見据える。

「私がそれを許すとても？」

我が手に携えしは確かなる幻想

ルシルの複製術式や武装を使う時の詠唱。

私達は一斉にデバイスを構えて臨戦体勢に入る。

私は念話でシャルとなのはに、

『なのはとシャルは先に行つて。ルシルの相手は私だから』

とそう告げると、シャルからは『分かっている。頑張んなさいよ』、

なのはからは『今度こそ一緒に帰ろうね』って激励してくれた。

私は『うん。ありがとう、なのは、シャル』と返す。

そして最後にシャルにだけ、

『シャル、本当に今までありがとう。私、きつとルシルと幸せになるから』

と告げる。するとシャルは、

『あなたが居れば大丈夫。ルシルをよろしくね』

と返してきた。胸の内に広がるシャルの温かな想い。

私はシャルの背中を見詰めて、「うん」と強く頷いて応えた。そして、

「行　　つがはっ・・・!？」

ルシルが先に動こうとした瞬間、シャルが閃駆で先制攻撃。

シャルはルシルの顔面を思いっきり振りかぶった拳で殴ってた。

吹っ飛ばルシルが床に叩きつけられて、3、4回バウンドして倒れ伏した。

「あなたが六課のみんなに与えた悲しみ、あとちよつとした混乱とか、それら全てを今の一撃に込めた。

痛かったでしょ？ 重かったでしょ？ 理由はどうであれそれがあなたへの罰よ。行くよ、なのは!」

「うん！ フェイトちゃん、頑張つてね・・・!」

「うん！ なのはも気を付けて・・・!」

ここに私達が来た時にルシルが立っていた転送装置へ向かうシャルとなのはを見送る。

鼻を押さえたルシルが立ち上がって、二人を妨害しようとする。

### ブリッツアクション

陸戦においての高速移動魔法でルシルに最接近。

“バルディッシュ”をハーケンフォームにして、その雷撃の鎌の刃を奔らせる。

ルシルはバック転しながら刃を避けて私から距離を取った。

私は転送装置の前に立ちはだかつて、なのはとシャルの転送を妨害させないようにする。

背中から二人の気配が消える。転送を終えたようだ。

「残念だったね、ルシル。なのはとシャルはセレスを止めに行ったよ」

ルシルの顔を見詰める。けどルシルの表情は余裕。

なのはとシャルがセレスの元に向かったのに、ルシルは余裕の表情を崩さない。

そこから考えられる事はただ一つ。

「元より彼女達は通すつもりだった」

ルシルはそう返してきた。

やっぱりルシルは始めからなのはとシャルを通すつもりだったんだ。ならどうしてここで待ち構えていたのか。それはきつと・・・。

「私と戦う為に、このエントランスホールで待っていたのルシル？」

「そうだ。フェイト、君をこの場で足止めすることこそ、私がセレスから承った最後の命令だ」

「最後の命令・・・？」

最後ってというのが引つかかる。

ルシルの記憶を戻して、最後の命令として私と戦わせる。

そこに何の意味があるのかが読み取れない。

「私がセレスから受けた命令は、現在私が出せうる能力を以って全力で君と戦うというものだ。

そして、私が負けた場合、私はフェイトの言う事を何でも聴く。

私が勝った場合、私とセレスの望み通り、私は帰還する、という戦闘後の結末付きだ」

「帰還って・・・そんな！ どうして!？」

私は叫ぶように訊き返した。

この私との戦いでルシルの今後が決まる。

私が勝てば、ルシルは私の言う事を聞く。つまり対人契約が出来る。そして私が負ければ、ルシルは“神意の玉座”に帰還する。

勝敗に関係なく、どっちにしてもセレスはルシルと別れる事になる。それがセレスの望みだということも。本格的にセレスの考えが読み切れなくなった。

「フェイト。私は君に勝つつもりだ」

「え・・・？」

ルシルは何を言っているの？

私に勝つ？ それってつまり私と対人契約しないで、また私の前から居なくなるといふこと？

嘘、なんで？　だってルシルも私の事が好きなんだよね？　そのはずだよな？

「理由はどうであれ私達は世界に混乱を招いた。

しかもその混乱の元凶が私達の時代の産物である魔術だ。

私はその償いとして、再びシアワセを手にする事なく消えるつもりでいる。

・・・すまないな、フェイト。また君と一緒に生きることが出来ない」

ルシルはそう言って頭を下げた。口を開くけど声が出ない。

ただ歯を噛んで、“バルディッシュ”の柄をギュツと力強く握りしめる。

ダメ。今は泣くべきときじゃない。40mの高さはある天井を仰ぎ見る。

落ちつけ、心。私がルシルに勝てばいいんだ。

息を吐きながら頭を下げたままのルシルへと視線を移す。

「ルシル。この5年で私だって強くなったつもりだよ」

ルシルが顔を上げる。余裕じゃなくて悲しげな表情。

「私があなたと望む未来へ往く為に・・・！」

Load cartridge · Limiter break,  
Riot Zamber Stinger

“バルディッシュ”を、リミットブレイクフォーム・ライオットザンバーの二刀流ステインガーにする。

防護服はインパルスのまま。

ルシルの魔術の手数の方多さと威力からして防御を捨てるソニックフォームは危険だと思うからだ。

「ただドマントだけ外す。陸戦時はインパルスで。そして空戦時は……」

（シャルに協力してもらって組んだセインテストフォームで……）

三日間の調査と並行して組んだ空戦形態の術式セインテスト雷天使フォーム。私がルシルと空戦をすることを想定した切り札。

試験発動の時、かつてのルシルの空戦形態時のスピードと互角の数値を叩きだした。

これで私は空と陸の両方でルシルの速さを越えたことになる。

シャルからのアドバイスを思いだす。私からは空戦を仕掛けちゃいけない。

空はルシルの領域。そこに私から行くのは何かしらの対抗策があると悟られるから、だという話だ。

だからルシルから空戦を仕掛けてくるまでは陸戦で。

「ルシル、あなたを倒します！」

### ブリッツアクション

一瞬で距離を詰めて、左手のステインガーを横一線に薙ぐ。

ルシルは蒼い魔力で作り出した長槍を突き立てることで受け止めた。お互いに動きを停めて、お互いの顔を見詰める。

私とルシルの交わる視線。するとルシルが口を開いた。

「ならば私も、セレスの従者としての最後の命令を遂行する。

本気で行くぞ、フェイト。ついて来られるのならついて来い……

「！」

長槍を回転させてステインガーを弾くルシル。

私は体勢を崩されないように左手を引いて、独楽のように回転して右のステインガーを、または左のステインガーを連続で斬り付ける。ルシルも長槍で私の連撃を受け流しては紙一重で避ける。押す。押す。押す。押す押す押す押す押す押す。ルシルに反撃の隙を一切与えずに、

「はあああああああッッ！！」

私は前進しながら連撃を。ルシルは後退しながら防御を。ルシルから「くっ・・・！」って苦悶の声が聞こえた。直感が働く。私はルシルから距離を取って間合いを開けた。その直後に、私がさつき居たところに槍が三本落ちてきた。間合いが開いた事で、

プラズマランサー

ルシルはさつき詠唱した複製の力を発動してきた。撃ってきたのは私のプラズマランサーだった。数は18。直撃コースはその内の9。私はブリッツアクションで距離を取りつつ同じランサーをスタンバイ。

誘導操作で今度は全弾向かってきた。ルシルに警戒しながら、

「プラズマランサー、ファイア！」

同じ数で迎撃。ルシルへ最接近する為のプロセスを考える。

一度距離を開けたら最接近は難しい。ルシルの魔術もそうだけど複製術式も厄介でそれを許さない。



何度も奇襲は通用しない。いくら力が制限されているからと言って  
もだ。

アクセルシューター

クロスファイアシュート

ソニックシューター

プラズマバレット

ルシルの周囲に展開された冗談じゃ済まされない数のスフィア。  
スフィアは色からして私となのはとティアナとヴィヴィオのものだ。  
ルシルは「これはどう対処する？」と言った後、指を鳴らして一斉  
に放ってきた。

ブリッツアクション

避け続ける。まずはそれからだ。  
放たれた魔力弾は軌道を変えることなく床に突き刺さっていく。  
助かった、誘導操作として追尾して来なくて。追尾してきたら対処  
が辛かった。  
回避し終えたその直後、

「その身に刻め」

ニーベルン・ヴァレスティ

背筋に悪寒が走る。シャルのカートリッジを一発ロードしてディフ  
エンサー・プラスを展開した。

ルシルが投擲してきたのは、装飾の施された芸術品のような長槍。

拮抗は一瞬。槍は簡単にバリアを粉碎してきた。私は咄嗟にしゃが  
んでいた事で直撃は免れた。

私はその場に留まる事を良しとしないで、すぐさま床を駆ける。

「どうした、フェイト。このままでは私は勝ってしまうぞ？」

「それはないよ。だって私がルシルに勝つんだから・・・！」

「ならもう少しギアを上げたらどうだ？」

コト 殲滅せよ、カマエル 汝の軍勢

ルシルの頭上に100は優位を超える槍群が展開された。カマエルだ。

負けじとプラズマランサーの限界数20基を展開。全然足りない。

ルシルは「ジャツジメント蹂躪粛清」と指を鳴らした。私も「ファイア！」と号令。一斉に私とルシルの間で衝突していく槍、槍、槍、槍、槍、槍。

でも圧倒的に数の足りない私のランサーは、ルシルのカマエルに呑み込まれた。

「恐れるな、私・・・！」

直撃コースの槍だけを注意して、二刀のスティンガーで弾き飛ばしていく。

「はあああああ・・・」

腕を振るい続けて、何とか捌ききった。肩で大きく息をする。

ルシルを見る。ルシルは消えることなく床に突き立っている槍群の奥で腕を組んで、ただじつと私を見ていた。

舐められてる。私がカマエルに対処している間にも攻撃できたはずなのに。

と、そこまで思ったところで、あれ？って思った。

(私に勝つつもりなら、もう少しやり方があるはずなのに……。どうしてこんな回りくどいというか手を抜いているというか……。)

ある可能性を考える。もしかしてルシルは迷っているのかもしれない。

還ると口にするけど、やっぱりここに残りたいんじゃないのか。無意識か意図的にか、ルシルは手を抜いている、のかもしれない。ルシルの迷い、か。このカードはきつと私に有利になるものだ。

「何を突っ立っている」

我が世界よつより出でよ 貴き英雄よ

「この詠唱は……！」

ルシルが使い魔エインヘリヤルを出現させるときのものだ。ルシルの両隣の床に蒼い円陣が生まれた。

「狂気の月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバ。  
ラディカル・グッドスピード、ストレイト・クーガー」

一人の背の高い男性とウサギ耳のある女の子が現れた。ウサギ耳の女の子の視線が少し痛い。その男性からは「お嬢さん、お名前は？」との質問。

私は少し躊躇いながらもフルネームを答えた。

「コホン。クーガー、行くぞ。鈴仙は、分かっているな？」

「・・・はい、分かってます。あのフェイトを倒せばいいんですよ」

ウサギ耳の女の子、鈴仙さん？が私を睨みながら懐から何枚かのカードを取り出して、男性、クーガーさんとルシルの両脚に同じ具足が構成された。

私は最大警戒でステインガー二刀を構える。

「それじゃあ行きますよ、フェイトさん！！」

「フェイトじゃなくてフェイト」

ルシルとツツコミが被りながらお互いが疾走する。

「衝撃のファーストブリットオオツツ！！」

疾い。確かに疾いけど直線過ぎる。

シャルに比べれば遅い。だから容易く二人の蹴りをステインガーで捌こうと受け止める。

だけど捌く事が出来ずに硬直。そこで両腕が塞がれたのに気づいた。直後、鈴仙さんの双眸が妖しく光るのを見た。

赤眼 『ルナティックプラス  
望見円月』

ディフェンサープラス・ラウンドシールド

咄嗟にシールドとバリアを展開する。

両腕から重みが消えた。流し目で見るとルシルとクーガーさんの姿が無い。

それより、なおも続く赤い光線の防御に徹する。シールドが突破さ

れる。

バリアに衝突。意識を集中して魔力をバリアに注ぎ込む。

「・・・何とか、耐えきった・・・？」

光線が途切れる。ホールにある姿は私と、奥に居るルシルの二人だけ。

エインヘリヤルの二人は召喚が切れて居なくなっていた。

「むう、エインヘリヤル異界英雄はデメリットの方が大きいな」

少し疲れている表情のルシル。

ゆっくりと中央にまで歩み寄ってきて、床に突き刺さったままの炎槍と光槍を手にした。

二槍を構えたルシルに警戒して私もスティンガー二刀を構える。

そこで私はルシルの心を揺さぶるために、

「ねえ、ルシル。憶えてる？ 私と初めて会った時のこと」

思い出話を始める。ルシルの表情は今のところ変わらない。

ブリツアクションで突撃。ルシルは両手の槍を投擲。

半身ずらして回避。直後に背後から爆発音と衝撃波が襲ってきた。

ダメージはないけど体勢が完全に崩された。

連続で投擲される槍が身体を掠っていく。

（この距離で外した・・・？）

今度は直撃コースの槍が二本。それを無理矢理横つ跳びで避けた。

「初めて会った時、ジュエルシールドを巡って戦ったよね・・・！」

## プラズマランサー

10基のランサーを、タイミングをずらして放ち続ける。  
床に刺さったいろんな属性の槍が迎撃。私とルシルの間で爆発、煙幕が発生。

煙幕の中にプラズマバレットを撃ち込んでいく。

「けど私とアルフは簡単に負けて。でも事情を話したらルシルは協力してくれるって・・・！」

## フォトンスマツシャー

煙幕を突き破って桜色の砲撃が向かってきた。

ブリッツアクションで回避。避けた先に撃ち込まれ続けるなのはの砲撃。

視界に入るルシルの前面には、放射状に桜色のミッド魔法陣が4つ展開されて、そこから連続で砲撃を放っている。

「つく・・・！ それから一緒にジュエルシードを探してくれて、私はすごく嬉しかった！」

危ない時には助けてくれて！ いつも見守ってくれて！ お母さんの事は残念だったけど、私はなのはとシャルとも友達になれた！」

途切れたところを狙ってプラズマスマツシャーを撃つ。

ルシルはミッド魔法陣を放棄して射線から離脱した。

手に生み出した雷槍を投擲。私は左のステインガーで弾き飛ばした。

「それからアリサにすずかとも友達になれたし、学校に通うことも出来た！」

そしてはやて達とも知り合えて、出会いは戦いだっただけど、それでも友達になれたよ！  
リンディ母さんにクロノとエイミー！ 家族になれて嬉しかった！  
ルシルとも家族になりたかったけど、今思うと家族にならなくて良かった！」

### 復讐の宝珠

妙な魔力弾がら発飛んできた。私が動くときと射線が揺らいだことから、追尾弾だと判断する。  
シールドを展開。だけどすり抜けてきた魔力弾。私は驚きを意志でねじ伏せ、ステインガーで叩き伏せる。  
だけど一発迎撃出来ずに、

「つつあああああああッ!?」

直撃を受けて魔力弾は巨大化、全身を覆われる。  
魔力弾の内部で全身を貫かれるような激痛に叫ぶ。  
魔力弾から解放されて、私は両膝を床につく。

「はあはあはあ・・・ルシ・・・ル・・・はあはあ・・・」

膝立ちで居る私を見詰めるルシル。

私も肩で息をしながらルシルを見ると、ルシルは私から目を逸らした。

そう、やっぱりそうなんだね。

私は足に力を込めて、ルシルを連れ戻す為に立ち上がる。

「諦める、フエイト。諦めてくれ・・・頼むから」

「諦めない。私は諦めないよ・・・諦めるもんか・・・！」

ルシルの悲しげな表情での懇願。

そんなルシルを笑顔にする為に、私は勝つ決意を新たにす。

カートリッジを一発ロード。プラズマランサーを10基射出する。

それと同時に思い出話の続きを口にする。

「初めての初詣を憶えてる？」

ランサーを迎撃しようとしたルシルが、私の話を聞いて動きを一瞬止めた。

ルシルにランサーが掠っていく。私は「ターン！」と号令を掛け、ランサーの軌道を変えて、再度ルシルに突撃させる。

「ルシルの初女装。男心？っていうのかな、それを知らずに私が可愛いつて褒めたり。

シャルとアリサが悪乗りしたり。ルシルが泣いて、声を掛けてきた男性を片っ端からふっ飛ばしたりしてさ・・・！」

### プラズマバレット

我が手に携えしは確かなる幻想

### 旋衝破

「フェイト、卑怯だぞ・・・！」

ルシルはそう不貞腐れながら、アインハルトの技を使ってバレットを投げ返してきた。

ステインガー二刀で弾き飛ばす。どうしてアインハルトの技が使え



るのが分からない。

「私が、というよりはサファイア口がD S A Aに参加した選手達の能力を片っ端から複製したようだ」

私の考えを察したようで、ルシルは律義に答えてくれた。

3年も前からルシルとリエイスは居たそうだから、セレスに連れられて観戦しに来ていた、ということらしい。

ううん、それより今は・・・。

「・・・初めて知ったバレンタインっていうイベント。

なのはやはやて、なのはのお母さん達に教えてもらいながら作ったチョコ。」

でも、ルシルが時々私達と一緒に行動しているのを同級生に見られて、いつの間にか学校の女子達にモテて、学校でルシルに渡してほしいって女子がクラスに押し掛けてきて・・・！」

ブリッツアクションで接近を試みながら話し続ける。

ルシルは私を接近させないように弾幕を張ってきた。

シールドを展開。接近を断念してもう一度距離を開ける。

「私、それがなんか気に入らなくて、ルシルに冷たくしてたよね・・・！」

「・・・ふふ、ああ、憶えているよ。あの時のフェイトほど手強いと思っただ事はない」

ルシルが思い出話に乗ってきた。その表情は微笑。

ほら、ルシルにはそんな表情の方がずっといい。

あのもやもやした気持ち。アレってやきもちだったんだってあとで

分かった。

その後、ルシルに悪いことしたなあ、って落ち込んだりもした。しばらくシャルとエイミィが私をからかうためのネタになったっけ。

「冬が過ぎて春。みんなでお花見もした。夏、学校と管理局、両方の休みを何とか合わせてみんなで海に行ったよね」

ランサーとバレットの複合弾幕を張りつつ、もう一度接近を試みる。ルシルを中心として床に円陣が展開される。この魔術は知っているから、すぐさま戻る。

輝き燃えろ、ケルビエル 汝の威容

蒼炎が円陣から噴き出して、私の攻撃を全て灰塵にした。

私は炎が途切れるのを見計らって、ブリッツアクションでルシルの元へと疾走する。

吹き荒べ、ラシエル 汝の轟嵐

ルシルを守るように蒼い竜巻が生まれる。

効果は確か攻撃を弾き返し、突っ込んできた対象を吹き飛ばす防性術式。

私はスティングアーを連結させて、カラミティへと形態変化させる。

「はあああああッ!!」

竜巻を縦一閃。刀身が折れるけど、竜巻もまた切り裂かれて勢いを失くしていく。

再度スティングアーにして、驚愕しているルシルへとダッシュ。

ルシルは蒼い大鎌を作り出してきて、スティングアーの一閃を受け止

める。

純粋な力勝負じゃ私は負ける。だから押し負けて弾き飛ばされた。ルシルの大鎌も砕け散る。私は何とか着地して、ルシルを見据える。振り出しに戻る、だ。

「それで一人だったシャマルがナンパされて、あまりのしつこさにシグナムとヴィータがキレそうになって・・・！」

「ああ、そこをシャルが何とも言えない手段で乗り切ったんだっとな。

シャルは君とアリサを連れて、シャマルとナンパしてきた男共にこう言った」

ルシルが楽しそうに私の話の後を口にし始めた。

そして私達は申し合わせたようにシャルの爆弾発言である、

「お母さん」

と同時に口にした。今思い出しただけでも大笑いしそうだ。

ナンパしてきた男達は「チッ、子連れかよ」って言って立ち去って、シャマルはそれっきり沈んでた。

あれからシャマルに対してのタブーの一つとして“お母さん”っていうのが挙げられる。

もちろんヴィータはそれを笑い話として捉えてるから、何とも始末に負えない。

そついう私も面白い話の一つとして捉えてるんだけど、これはシャマルには内緒だ。

「あ」

同時に声を出す。私はいつの間にかルシルの懐にまで到達していた。ルシルは唾然とか呆然っていう表情。

私はステインガーを振るう。ルシルも迎撃する為に手に蒼い光剣を作り出した。

そこから連撃の応酬が始まる。私はルシルが間合いを開けようとするのを妨害する為にスピードを落とすことなく連撃を放ち続ける。

「秋は紅葉狩り・・・！ また冬が来て・・・！」

その何度も楽しいを繰り返して、エリオやキャロと出逢って・・・！ 三人っていう組み合わせだけど遊びに出かけて・・・！ すごく幸せな時間を過ごせた！！」

繰り返しのうちに、なのはとルシルが撃墜された事件もあった。

當時を思い出すとすごく悲しくて辛い。だけど、なのはもルシルも自分の力で乗り越えた。

バキン！っていう音が耳に届く。ルシルの剣が砕けた音だ。

ルシルの顔から完全に余裕が消えた。ステインガーの剣先がルシルの防護服を少し裂く。

ルシルはまた剣を作り出して、私の連撃に対処する。

徐々に後退していくルシルを追撃する私。さつきと同じ構図だ。

ただどさっきのように私に槍を落として来ない。

理由は分からないけど、それなら押し続けるまでだ。

「それから中学を卒業して、本格的に管理局の仕事 시작했다・・・！」

セレスと会ったのは大体この時期だった。

はやて達の家探しが難航していて、使わなくなった別荘が何かを譲ったのがセレス。

まさかセレスとこんな事になるなんて思いもしなかった。

「そして、ルシルとシャルは管理局を勝手に辞めた・・・！  
あの時、私は本当に怒っていたんだから・・・！」

すごく怒ったし、すごく悲しかったし、すごく悔しかった。

そんな大切な話を相談されないうまま、事が終わった後に知る。

これほど友達として力不足と思った事はない。

ルシルの剣をまた砕く。左のステインガーの刃がルシルの右頬に切り傷を負わせる。

「でも、相談されていてもきつと私達は理解できなかったんだろうね・・・！」

界律の守護神テストメント。ルシルとシャルの背負う十字架さだめを私達は何も知らなかった・・・！」

「しまっ  
」

ルシルの動きが止まる。エントランスホールの壁に背中がぶつかったためだ。

私の薙ぎ払いをしゃがむ事で避けたルシルは、そのまま私の背後に通り抜けようとした。

それを妨害するために、ルシルの頭上から目の前へとランサーを撃ち放って阻止。

私は時計回りに回転して、右のステインガーを切り上げるように振るった。

当然それを防ぐためにルシルは再度作り出した剣で防御。

起きあがり途中のルシルは踏ん張りきれずに、無理矢理立たされる事になる。

ルシルの剣が頭上に弾き飛んで、私の背後に落ちた。

「はあはあはあはあはあ……」

ルシルの首筋と胸にスティンガーの刃を近づける。

私は見上げて、ルシルは見下ろす。お互いの顔の距離は10cmも無い。

お互いの激しい息遣い。お互いの鼓動も聞こえそうな感じ。だけど、それほどまでに密着しているけど、全然恥ずかしくない。

「はあはあ、お願い、ルシル。負けて……はあはあ……」

「つく、はあはあ……ダメだ。私は……消えなくては……」

「……分からず屋」

「君の方こそ……!」

「……痛っ……!」

ゴツン、と鈍い音。突然のルシルの頭突き。

それが隙となつて、ルシルに押し飛ばされた。

たたらを踏みながら転倒しないように気をつける。

その間にルシルは私から距離を取った。また振り出しに戻った。

こうなつたら雷天使フォームで空戦をこつちから仕掛けようか。

陸では私の方が速い。空でもルシルと同等以上の速さを得ることが出来た。

だけど踏み止まって、陸戦を続行する。

「はやては部隊を立ち上げて、最初の任務でルシルとシャルと再会できた。

レリックを巡るスカリエッティとの戦い。そこで私達はヴィヴィオ

と出逢つて・・・」

息を整えて臨戦態勢。ルシルも周囲に槍群を展開した。

コード  
カマエル  
殲滅せよ、汝の軍勢

ジャッジメント  
「蹂躪粛清」

また100を超える様々な属性を持った槍群を射出される。

私は二刀を左手に持ち、前面に展開したミッド魔法陣に右手を翳し、

「トライデント・・・スマツシャアアアーーーー！！！！」

カマエルに向けて砲撃を撃ち、出来る限りの数を減らしに行く。

二人の間の頭上で大爆発が起きる。私はその間にもルシルへとブリツツアクションで接近を試みる。

「ルシルとシャルのテストメントとしての敵、ペッカートムによるスカリエツティ一派の計画の乗っ取り。

だけど二人は勝って、私達はJS事件の終結させることが出来た・・・！！」

放たれてくる様々な属性の魔力弾や砲撃を、私は避けてはステインガーで斬り伏せる。

ルシルは攻撃を放ちながら、私から距離を取ろうと床を駆ける。

「残り半年の試験運用期間。ルシルとシャルは残ってくれた。

すごく嬉しかった。そして廃艦工程に行く前のアースラでの祝勝パーティー。

シャルが酔って大変な事になったりして・・・！！」

今度は簡単にルシルへと接近出来た。

もう陸戦でならルシルを圧倒出来るとは言えなくても負ける事はきつとない。

ステインガーを連結してカラミティへ。ルシルへ向けて横薙ぎ。

ルシルはしゃがんで回避。動きを停めた一瞬を狙ってステインガーに戻して最接近。

刺突を半身ずらして避けたルシルへ横薙ぎ。ルシルは魔力剣で防ぐ。そこにもう片方のステインガーを叩きつける。またルシルの剣を砕く。

「ルシルに贈ってもらった指環が外れなくなったり、六課の宿舎で起こった精神が入れ替わる事件、シャルがスバル達のエインヘリヤルで訓練して大変なことになったり・・・！」

ルシルが作り出した剣を弾き飛ばして、右のステインガーでルシルを袈裟斬り。

ルシルのコートを裂くだけに留まった。そこからまた私の連撃。

「六課の慰安旅行。遊園地でたくさん遊んで、ショッピングしたり、ベルカ自治領の観光地に行ったり・・・！」

ルシルの防護服のコートに傷が増える。ルシルの剣も砕かれる早さが短くなってきた。

「ホテルでまたシャルが酔って、王様ゲームで精神的に死にそうになったり・・・！」

そして最終日。温泉で、混浴になる事を知らなかった私達がバツタリ遭って・・・！」



右のステインガーを縦一閃。ルシルは防ぐことも避けることも出来ずに直撃を受けた。

裂かれた左肩を押さえて私から距離を取ろうと必死になっている。

傷つきし者に、コト 汝の癒しをラファエル

ルシルの左肩から漏れる蒼い優しく温かな光。

治癒術式のラファエルだ。私はこれ以上の回復をさせない為にスピードをさらに上げて手数を増やす。

防戦一方のルシル。いつになったら空戦を仕掛けてくるのか。

「魔法で吹っ飛ばして、隊舎に戻ってからルシルとヴァイス陸曹を庭先の木に釣るして・・・！」

それからスバル達の昇級祝いパーティ。そこでもまたシャルがやってくれたよね・・・！

巨大化するキノコで私達は大きくなって、それを解決するためにルシルはボロボロになったり・・・！

さらにシャルのケーキの所為で、ルシルは幼女化に記憶障害になっただよね・・・！」

ルシルの表情はもう泣きそうなものだった。

私の思い出話によるものなのかは分からない。

だけど、ルシルから戦意が消えていくのだけはなんとなく分かる。

「そして、テルミナスの強襲。操られた私達はルシルとシャルと戦う事になった。

その戦いも終わって、ようやく知り得たルシルとシャルの隠してきた真実・・・！

二人の人生があまりに壮絶過ぎて、すごくショックだったんだよ・・・！」

ルシルの弱々しい剣戟。私は簡単に弾く。  
ルシルの懐がから空きになって、私は肩から突進、ルシルを押し倒す。

馬乗り状態になって、ルシルを見下ろす。

「憶えてる？ 私の告白・・・」

「・・・ああ」

「・・・私も一緒に背負うよ、ルシルの十字架。

私一人じゃ頼りないかもしれないし、ううん、私じゃ全然力になれない。

それでも一緒に背負うよ。これからはずっと、ルシルを一人にしな  
いから」

一言一句間違えずにもう一度告げる。

好きな人と一緒に居られるから幸せ。

ルシルはただ黙って聞いて、

「・・・すまない」

そう呟いた後、私を襲う衝撃波。

私はルシルから大きく離れた場所に飛ばされた。

何とか体勢を整えて着地。視線をルシルへ。ルシルは宙に居た。もちろん空戦形態で、だ。

私も宙へと。そして、

「バルディッシュ、お願い」

Load cartridge · Over drive · S  
aintest form

対空戦形態ルシルの雷<sup>セインテスト</sup>天使フォームを発動した。

十 十 十 十 十 十 十

心を揺さぶられ、心身ともにボロボロになった私は空戦形態を執つた。

もうどうしていいのか解らない。だから、空戦形態でフェイトと戦う事にした。

今の私が出せる全力こそが空戦形態下での戦闘なのだから。

「バルディッシュ、お願い」

Load cartridge · Over drive · S  
aintest form

フェイトの姿が雷光で見えなくなる。

次にその姿を見せたフェイトを見て、私は知らず呟いていた。

「天使・・・！」

今のフェイトは天使と言っても過言じゃない姿だった。

防護服はソニックへ。背中から生えるのは私の蒼翼と似た黄金の薄く細長いひし形の翼が3対。

そして頭上に翼と同じ黄金の雷光で構成された円環。

フェイトの閉じていたまぶたが開き、薄く光る真紅の双眸で私を見据える。

結っていた金系の長髪も解け、ゆらゆらと揺らいでいる。

美しい。今のフェイトを見て、ただそんな単語しか頭に浮かばなかった。

「これが対ルシルの為に開発した新魔法、雷天使を冠するセインテストフォーム」

私のファミリネームを冠した空戦形態。

おそらくシャルに協力してもらったんだろう。

彼女もまた私の空戦形態を手になしようと頑張っていたから。

それにしても雷天使、か。ああ、ピッタリだよ、その姿には。

「ルシル、行くよ・・・！」

「っ・・・！？」

フェイトを見失う。その直後、腹に突き刺さる衝撃。

真正面からフェイトは突進して、“バルディッシュ”ではなく拳打を放って来ていた。

前のめりになる。あまりの衝撃に息が出来ない。すぐさま顎へと掌底が打たれる。

今度は反り返る。反撃しようとするが、それより早く、

「私は、あなたとこれから生きる為に、絶対に勝つつつ！！」

回し蹴りが腹に突き刺さる。耐えきれずにホールの壁へと叩きつけられる。

セレスを生かす為にまだまだ力を失っているとはいえ、そんな事は問題にならない。

今のフェイトは疾い。そして強い。私が押されている理由は単純にそれだけだ。

そして何より負けている理由。それは・・・

「届け・・・私の想い・・・!!!」

両腕を頭上でクロスさせて、宙返りして踵落としを決めてきたフェイトの一撃を防ぐ。

重い一撃だ。それが最大の理由。私とフェイトでは想いの強さが違う。

迷いしかない私では、今のフェイトに勝つのは不可能だ。

（くそ、思い出せ。私の魔術は何のためにある？ 何のために手に入れた？）

それは大切な存在ひとを守るため

フェイトの拳打を上へと飛ぶことで避ける。

フェイトの華奢で綺麗な右拳がホールの壁を貫いた。

殺す気が、と突っ込みたいが、そんな余裕はどこにもない。

フェイトは壁から拳を抜いて、私を追ってきた。私は壁を蹴って中央へと飛行する。

（なら、今はどうするべきだ？ 守るべき存在フェイトは敵だ。矛盾だ。守るべきための魔術チカラを使って、守るべき存在フェイトを倒さなければならぬ）

一瞬で私の頭上へと移動してきたフェイト。

私は魔力で大剣を生成し、振り向きざまにフェイトへと叩きつける。が、私の大剣はフェイトのクラミティによって一瞬で破壊された。そしてすぐさまドロップキックを胸部に打ち放たれる。

床へと急落下。宙で体勢を整え、両脚で着地。はい、クレーターの

完成だ。

すぐさま視線を上へ。しかし、

「遅いよ、ルシル……！」

「な……っ!?!」

すでにフェイトは私の背後へ降り立っていた。

ガシャアアンとガラスが砕けたような音が背後から聞こえた。

私の空戦形態を維持する翼が破壊された音だ。

振り返る。そこに居るのは雷光の翼を背にした天使フェイト。

（……ああ、そうだ。この感じ……私は、君と……戦いた  
い。

それほどまでに今の君は強く、そして私の魔術師としての闘争心を  
駆りたてるんだ……!）

再度空戦形態を執る。魔力の大半を持っていかれたが、それに見合  
う価値はある。

（守るべき彼女に負けるのだけは嫌だ。私は、彼女を守るために強  
くなくてはいけない。

だから、結末がどうであれ、私は、フェイトに負けることは……  
出来ない……!）

フェイトの瞳に映る私の表情は、どこかふっ切れたものだ。

「フェイトオオオオー……ッッ……!」

コード  
知らしめよ、  
ゼルエル  
汝の力

左手に槍を生成し、術式強化のゼルエルを槍に付加させる。これでそう易々と破壊されないはずだ。もう一度、ホールの空へ上がる。

「ルシルウウウーッッッッ！」

フェイトはカラミティをのままで、私を追ってきた。

お互いがヒットアンドアウェイの戦法と執る。

突撃しては一撃を与える為に互いの武器を振るい、防がれては距離を取る。

そしてまた突撃して武器を振るい、そしてまた離れる。その繰り返し。

「やっと、ルシルらしくなった・・・！」

「そういう君は本当に強くなった・・・！」

何回目かの衝突、その鏖迫り合いでの会話。

表情は互いに笑み。見据えるべきは戦い、そして勝つべき相手のみ。そしてまた離れ、大きく弧を描くようにフェイトを目指す。

途中、私は今扱える中で最高の威力を引き出せる砲撃術式をスタンバイ。

砲撃魔術師としての私の一撃だ。これが全力だ。

「はあああああッッッッ！」

最後の衝突。一瞬音が消えた。直後、互いの武器が同時に粉碎される。

私は槍そのものを。フェイトは“バルディッシュ”の刀身のみを。





私のスマッシュヤーがルシルのウリエルを呑み込んで、そのままルシルへと直撃した。

砲撃はそのままルシルごとホールの壁へと突っ込む。ホールを揺るがす爆発と衝撃波。セイントストフォームを解除するというより強制的に解除された。

身体中が悲鳴を上げている。反動が強過ぎるんだ、このフォーム。立つのもやっとで、アサルトフォームに戻した“バルディッシュ”を杖代わりにする。

魔法の爆発による煙幕も次第に晴れていく。その間に呼吸を整える。これで決まっていなかったら、私の敗北は確定だ。

煙幕も晴れ、ようやくルシルの姿を視認できた。

「……私の勝ちだよ、ルシル」

大きく抉れたホールの壁の奥で、瓦礫にもたれかかるようにして座り込んでいるルシル。

俯いているから表情は見えないけど、間違いなくルシルは戦闘不能だ。

“バルディッシュ”を突いて、ルシルの元へと歩み寄っていく。たった100m。その何でもない距離が今では遙か遠くに感じる。ようやくルシルの元に辿り着き、しゃがみ込んでそっとルシルの顔を覗き込む。

まぶたを閉じて、眠っているような表情。視界に光が満ちる。

「ルシル……!?!?」

ルシルの足元から光の粒子となってゆっくりと消えていく。敗北によって召喚が解かれて、“神意の玉座”へ還るんだ。私はルシルが完全に消えてしまっ前に、

「聞こえてないかもしれないけど、今一度あなたに伝えます。ルシル。私は、あなたの事が好きです。だから、これからも私と一緒に、私の側にいてください」

かつての告白と同じ事を告げる。

そして対人契約。ルシルの唇に、私の唇をそつと重ねた。ファーストキス。

その直後、視界が暗転。気づけば私はどこかのお城の、玉座の間とかがピツタリはまる場所に居て、大きな肘掛椅子に座ってた。

「え？ 何が・・・？ こっつて・・・どこ・・・？」

軽くパニックを起こす。いきなりこんな豪華な大ホールに居れば、誰だってパニックを起こす。

「ようこそ、ヴァルハラへ。フェイト・テストロッサ・ハラウン」

ハツとして、声のした方、真正面へと視線を移す。

私が座っているような大きな肘掛椅子。そしてそこに座って居たのは、

「ルシル・・・じゃない。もしかして、ルシルのお姉さん・・・？」

ルシルと瓜二つの女性。ルシルの鋭い目つきと違って、柔らかな双眸。身長はたぶん私と同じくらい。装飾の凝った純白のドレスを纏って、ドレスの裾は床にまで流れてる。

ルシルの記憶で見た妹のシエルさんとはまた違う魅力的な女性だ。だからこそ、選択肢は二つ。ルシルのお母さんかお姉さんのどちらか。

でもルシルはお母さんの事を嫌っているようだったから、私は「お

姉さん」と口にした。

「ええ。はじめまして、ゼフィランサス・セインテスト・アースガルドよ。  
ルシルと対人契約したそうね。まあだからこそ私の元に居るのだけ  
れど」

「あの、それはつまり・・・ルシルのお姉さんが私をここへ・・・  
」？

「そうよ。ルシルと対人契約した者は例外なく、その精神をここに  
連れて来られる」

「どうして、ですか？」

「ん、最終試験と言ったところかしら。

本当に、ルシルと未来を歩む覚悟があるのかどうかを、私が審判す  
る為に」

最終試験なんて聞いてないよ、シャル、ルシル。

まさかここで不合格って言い渡されて、ルシルと永遠の別れ・・・  
なんてことはないよね？

そう思うと一気に緊張してきた。ルシルのお姉さん、ゼフィランサ  
スさんはそれを察したのか、笑顔で「リラックス～リラックス～」  
と言ってきた。

あ、何かそれで不安が小さくなったような気がする。

「さて。最終試験なんて大仰な事を言ったけど、その実は簡単な事。  
正直に私の問いに答えよ、フェイト・テストロツサ・ハラオウン」

「は、はい！」

ビシッと居住まいを正して、ゼフィランサスさんの問いを待つ。

「ルシルの正体と、ルシルが今までしてきた事、背負っているモノは知っています？」

「はい、知っています」

「それでもなお、貴女はルシルと共に在りたいと？」

「はい、私はルシルとこれからもずっと一緒に居たいです。

それに私は誓ったんです。私じゃ足りないかもしれないけど、ルシルの背負うモノを私も背負っていきたくって」

「……………ホント、シエフィリスに似てるけど、でも違うわね」

「??? あの、何か仰いましたか？」

ゼフィランサスさんが何か呟いたようだけど聞き取れなかった。

だから訊き返してみたけど、ゼフィランサスさんは「気にしないで」と笑みを浮かべた。

「ルシルも貴女の事を想っているみたいだし、きっと大丈夫ね。

フェイトさん。不出来な弟だけど、ルシルの事をこれからよろしくお願いします」

ゼフィランサスさんは椅子から立ち上がって、私に歩み寄りながらそう告げてきた。

私は慌てて立ち上がって、ゼフィランサスさんの元へと駆け寄り、

「はい。必ず、ルシルを幸せにしてみせます」

そう告げた。するとゼフィランサスさんは「それはどっちかって言うとルシルのセリフよね」と綺麗に笑った。

私も「そ、そうですね」と苦笑。ゼフィランサスさんは急に私を抱きしめた。

「貴女とルシルに、遥か高き祝福の恩寵があらん事を」

囁かれた祝福の言葉。私がお礼を口にしようとしたとき、また視界が暗転。

そこは現実の世界。私はルシルにキスした時と同じ体勢だった。

夢？・・・じゃない。ゼフィランサスさんの感触も温かみも香りも残ってる。

「ゼフィランサスさん・・・ううん、義姉さん。私は必ずルシルと幸せになります」

どういうわけか一切のダメージが無くなって綺麗になっているルシル。

対人契約の影響かは知らないけど。傷一つとしてないルシルを抱き起して、ホールの無傷な場所まで運んで、

「ルシル、一緒に幸せになろうね」

膝枕をして、そつと前髪を撫でる。

背後からジャリって砂を踏む音がした。

ハツとしてそちらへと視線を向け、驚愕に目を見開いた。

「そう、なんだ。・・・サファイア・・・口は・・・負け、たん・・・だ・・・」

「ファイレス・カロラ・・・!？」

ここ“エヘモニアの天柱”の入り口の壁にもたれかかるようにして、ウエディングドレスを纏ったファイレスが立って居た。

私が貴方と望む未来へ往く為に　　F a t e　　(後書き)

ついに決着、ルシルとフェイトの運命<sup>バトル</sup>。

ルシル、次元世界に残留決定となりました。うわあ、何か凶器が飛んできたあ？

コホン。え、フェイトの15年の想いも叶い、これからどんな未来を歩むんでしょうかね。

そしてルシルはに待ちつける犠牲<sup>イケニエ</sup>としての未来は？

貴女が思い描いた物語の果て へ Ace of Aces へ (前書き)

徹夜し過ぎて目が痛い・・・(泣)思考能力低下中・・・  
でも止まらない。だけど止めない。止めてなるものか!!!

テストメント・リーダー・セレス・カロラ最終戦イメージBGM  
ACE COMBAT ZERO “ZERO”



貴女が思い描いた物語の果て 〈Ace of Aces〉

夢を見た。それは幼い頃の夢。

私にとって世界そのものと言える大切な存在あねが死んだ。

それを報せてきた男達。お姉ちゃんの部隊の上官や管理局の幹部達。彼らは言った。「君のお姉さんはひとつの世界を護った」って。

そして「立派に戦って、何千という命を救ったんだ。彼女は栄光ある死を迎えた。

我々は彼女を、フィレス・カロラ三等空士を誇りに思う」とも。

「そんな他人セカイどうだっていい！！ 返して！ わたしの世界を返し  
てよ！！」

私の姉フィレスは、仕事で多忙な両親に代わって私の面倒を見てくれた人。

魔導の才能があり、管理局にスカウトされ、海の部隊に配属された。そして、ある凶悪事件の前線に立たされて、その結果、死んだ・・・。

私の大好きな、世界わたしの中心だったお姉ちゃんは、悪かんりきよくに奪われた。永遠に。

それからだった。胸のずっと奥に管理局と争いを止めない世界への復讐心を燃やし宿したのは。

両親は、世界一つを守って死んだ姉フィレスを誇りにした。

ふざけるな、だ。私にとって最愛の姉が居なくなつた。それを誇りに思え？

冗談じゃない。だから私は両親が他界した後、“ミユンスター・コンツェルン”を人知れず継ぎ、管理局に黙つたまま両立した。

さっさと偉くなつて、ふざけた考えを捨てない上層部を一掃するために、昇格だけを目指して突っ走った。偉くなればなるほど見えてくる腐りきつた上層部。

「私を変えてみせます。こんな偽善に満ちた組織を・・・！」

それから表は管理局員、裏は“ミンスターコンツェルン”のCEOとして動いてきた。

昇格に有利な資格も獲り、私はただひたすら上を目指して頑張っていた。

そんなある日、頭の中に聞こえてきた何者かの声。

どこかの座標と思われるその声に導かれるまま、その座標へとコンツェルンの次元航行船を向かわせ、そして発見した。

かつての古き時代に“ギンヌンガガブ”と呼称された世界を。

私は知っていた。再誕神話がおとぎ話ではなく実際に起きた戦争だという事を。

アースガルド世界の中心に戦いを挑んだヨツンヘイム皇族。祖父母から聞かされた私達の真実。

私は早速管理局との協力でギンヌンガガブを調査した。

だけど失敗した。まずはコンツェルンだけで調査すれば良かった。

私が自由に動く隙がない。そこで、屈辱だがトレジャーハンターのシャレードとかいう犯罪者に依頼した。

結果、その男は“女神の魔道書”ディオサを手に入れてきた。

言い値で買い取ると言っただけど、やはり私が管理局員だと知っていた彼は案の定脅してきた。

元々犯罪者のシャレード。こうなれば殺すだけだった。

私は大して罪悪感を抱かず、でも嫌悪感は抱いた。下らない人間を殺した、と。

「すごい・・・これが・・・魔術・・・!!」

“女神の魔道書”<sup>ディオサ</sup>に記された膨大な魔術の知識。

その中には召喚術式というモノが在った。早速試しに発動した。媒介は、どこで拾ったのかさえも思い出せない指環。

召喚されたのは、驚いた事に私の初恋の相手であるルシリオンだった。

私は驚き、彼も驚き、そして私の真実と彼の真実を話し合った。

点と点が線で繋がった。再誕神話に登場するアースガルドの英雄アンスールが一柱、神器王ルシリオン。

彼に惹かれていたのは、きっと私の内に流れるヨツンヘイムの血の所為だと思った。

それから何度かの衝突の後、私達は主従を誓い、契約。ルシルを従える事になった。

「フェイトに逢いたい？」

ルシルとフェイトの関係は知っている。

だから私は気になって、そう訊ねた。返ってきたのは「逢いたい」の一言。

私はマスター権限を使って、ルシルの召喚時からの記憶を片っ端から隠蔽した。

奪わせない。もう誰にも、大事な人を奪わせない。

それから私は、管理局改革の為に魔術を行使し続けた。

姉フィレスを喚び、いつか弊害になるかもしれないはやて達の壁となる為のリインフォース。

最初の一年はこの四人で普通に過ごした。とても楽しいひと時だった。

本格的に活動する為に、さらにメンバーを喚び出し、補助戦力の魔

族を召喚した。

さらにコンツェルンの資金と技術を総動員して、オムニシエンスと名付けられた私達の本拠地に施設を建設。

ある程度設備も戦力も整ったところで、私達“テスタメント遺志による改革者”の名を次元世界に知らしめた。

「……ん……」

私は目を覚ます。体勢は眠る前と同じ、椅子に腰かけたまま。

お姉ちゃんが戦いに出て、止めようとしたけど、お姉ちゃんの言葉を聞いて、諦める。

だからせめてお姉ちゃんをサポートするために“騎士の洗礼”を動かした。

そこから先が思い出せない。ということはそこで意識を失って眠りについたという事なんだろう。

「呼吸が、少し……楽……ですね……」

私の時間はもう残り少ない。おそらく今日、私は逝く。

だからルシルを解放した。ルシルはきつとフェイトに負けるだろう。必死になって、ただひたすら前に突き進むフェイトに勝てるだけの力がルシルに無い。

彼の力の6割強は未だに私を生かす為に、この胸の内にあるのだから。

「ルシ……ルには……幸せに……なってもらい……たいもの、ですし……」

でもどうか、願わくは、私の事を忘れないでほしい。

そう願う、大きく深呼吸して、身体を万全とはもう行かなくてもそ

れなりの好調へと整える。  
階下フロアの侵入者を探知したセキュリティから報告が来て、自動でモニターが展開される。

「・・・なのはとシャル・・・」

映り込むのは通路を飛行するなのはとシャルの二人だけ。  
ルシルに命じた通り、そこにフェイトの姿はなかった。

「順調、ですね・・・」

幹部ももう私とお姉ちゃんルシルだけ。こうなる事は分かっていた。  
た。

ディアマンテ、メサイア・エルシオンが独自に管理局の将校と繋がっている事も知っていましたし、彼独自の計画も知っていた。

原因は知っている。肥大化していく復讐心の塊となったメサイア・エルシオンと、彼に憑き始めた私を呼んだ声の主である王の放つ遺志の波動の所為だ。

結局邪魔だった二つの遺志はシャルによって消されたみたいで、私としては助かりましたね。

「でも、ある程度感謝しないといけませんね。

彼らのおかげで、こうして管理局との最後の戦いを始められましたし」

元から管理局と戦う予定だった。

時期としては早過ぎましたし準備不足だったということもあります  
が、私の状態からしてこれが最高のタイミングなのでしょう。

ですが一つ許せないのは、はやく達の心を傷つけたという事だけ。

「謝っておきたいですが、それももう叶わぬ願い・・・ですか」

はやて達に裏切られたと思いい怒りをぶつけましたが、冷静になってみれば有り得ない事。

はやて達と付き合っていたら、裏切りなんて事は絶対しない子達だと分かっていたのに。

でも私はあの時、はやてが視線を逸らしたことで傷ついたのは本当だから、時期が早いと知りながらも管理局に宣戦布告した。

「ごめんなさい」

どうか神さま。罪深い私を、もうしばらくの間、この世界に生かしてください。

そして最期の最期まで、私の本当の目的がなのはとシャルに気付かれませんように。

十 十 十 十 十 十 十 十

ルシル君はフェイトちゃんに任せて、私とシャルちゃんはセレスさんを止める為に“エヘモニアの天柱”の最上階を目指す。

「あーもう！ どうせなら最上階まで直通にしろっての！」

シャルちゃんが愚痴を零しながら先頭を翔ける。

私達が入った転送装置の転移先は、最上階の1つ下のフロアに固定されていた。

迷路のように入り組んだ通路を、スピードを落とすつつ飛行する。

そして、最上階へと通じる転送装置を発見。

私とシャルちゃんは床に降り立って、お互いを見合わせる。

「準備は良い、なのは？」

「うん。大丈夫。いつでも行けるよ」

きつと話し合いではセレスさんは止まらない。

戦う事になるだろう。シャルちゃんですら警戒する氷結の魔術師と。そして、これがきつと二度と出来ない、シャルちゃんとの最後の共闘。

泣かないよ。まだ何も終わっていないんだから。

「よし。行こう、セレスの元に」

シャルちゃんの後が続いて転送装置に入り、視界が一瞬閉ざされる。視界が元に戻り、私の目に映るのは大きな円形のホール。

その中央に椅子が三つ。その内の一つにセレスさんは腰かけていた。今のセレスさんは、灰色の髪をシニヨンして、黒色のインナーズーツ、その上から白のテールコートを着て、白の袖なしインバネスコートを羽織っている。

両手には白銀の籠手、白のズボン、黒のロングブーツには白銀の装甲が付いている騎士甲冑姿だ。

「ようこそ、我らが城エヘモニアの天柱へ。

歓迎します。剣神シャルロット、エースオブエース・高町なのは」

セレスさんが立ち上がると同時に椅子が消失。

何も無いホールとなった最上階で、私達は対峙する。

「セレス、今すぐ儀式を停止して。何をするのは知らないけど、良くない事なんですよ？」

「良くない？ どうしてそう思うのですか？  
もしかしたら世界にとって良い魔術かもしれませんよ？」

セレスさんの左手にはディオサの魔道書。右手にはデバイスの両刃ツセル剣。

シャルちゃんは「なら効果を教えなさい。それで判断するから」と  
問い質した。

私は魔術の話には口を出さない。情けない話、意味が解らないから。  
「かつての古き時代と同じ事をしようと思つのです。

破壊による新たな創造を次元世界に起こそうかと・・・そう、ラグ  
ナロクを」

「な・・・っ！」

今、セレスさんはラグナロクと言った。

この場合のラグナロクははてちゃんの魔法じゃなく、シャルちゃ  
んとルシル君の記憶で観たアノ・・・！

「何を考えている！ ラグナロクなんて発動したら、本当に全てが  
消えて無くなる！

何が破壊と新たな創造だ！ 創造なんて出来ない！」

シャルちゃんが本気で怒鳴る。ラグナロクはシャルちゃんの死因で  
もある。

そして界律の守護神テストメントとなった最大の要因。

大戦時は、ルシル君とフノスさんのおかげで世界の完全滅亡は防げ  
た。

でも、それでも被害は甚大で、今の次元世界が誕生した。



「そんなの間違ってる！ セレスさん！」

私も大声でセレスさんに声をかける。

「……なのは、シャル。人生には無数の選択肢がある。だけど、その選択肢の中に絶対の正解なんてものは無い。

選んだあと、それを正しいものに変えていく。人生とはそういうものでしょ？

そして私は、世界のやり直しト、という選択肢を選んだ。

その選択が良いものか悪いものかは、後々の世界が決めてくれますし、それ以前に私が良いものへと運ぶつもりです」

セレスさんがそう告げた後、“ディオサの魔道書”が光となって“シユリュツセル”の刀身に入っていく。

そして“シユリュツセル”を構えた。やっぱり戦うしかないみたいだ。

ゴゴゴゴ、と地鳴りのような音と振動が足元から伝わってくる。

周囲を見渡すと、天井が中心から四方八方に裂けて、花卉のように開いていくのが見て取れた。

「そう、これは滅亡おわりではなく、新たな歴史セカイの始まり」

開いていく天井に釣られるように壁もまた開いていく。

そしてここ最上階に完成したのは、開いた花のような大きな舞台。

「なのは。セレスは最悪殺しても止める。分かるよね？」

「……そうならないように祈るだけだよ」

シャルちゃんは“キルシユブリューテ”を、私はカートリッジを二

発連続ロードした“レイジングハート”を構える。  
お互いは一瞬も視線を逸らさず、相手の動きを見る。

「っ……っ」

ゲバルド・ラファガ  
神速獣歩

閃駆

アクセルフィン

私が息を呑んだのが合図となって、私達はそれぞれの高速移動法を使う。

シャルちゃんとセレスさんは床を駆け、お互いが持つ剣の刃を奔らせる。

私はシャルちゃんの邪魔にならないように空へと上がって、いつでも援護が出来るようにしておく。

シャルちゃんとセレスさんの刃が衝突、衝撃波が私のところにまで届いた。

そこから始まる二人の円舞のような剣戟。周囲に散る火花が綺麗だと、場違いな思いを抱く。

「セレス、私の話を聞いて……！」

雷牙月閃刃

「……聞きましょう……！」

イエロ・コリン  
氷奏閃

雷撃を纏う“キルシュブリューテ”と冷気を纏う“シュリュッセル”の剣戟。

二人の剣戟を観て、私は本当にこの場に居ていい存在なのか分から

なくなつた。  
戦闘に割り込めない私は別にこの場に居なくてもいいんじゃないか、と。

「ラグナロクを発動した。世界をリセットする。  
でもね、やり直しどころか消滅の域に行くのがラグナロクなのよ？  
どつという理由で、どつという基準で世界を滅ぼすといふの……！」

「こんな偽善と裏切りに満ちた世界、私はもう耐えられない。  
だからラグナロクを、そんな過ちだらけの世界だけに向かつて発動する。」

それならばある程度の世界を存続させることが出来ますから、人類は滅びない」

「待つて！ はやてちゃんも私達もセレスさんを裏切っていない！  
アレは全部ディアマンテが仕組んだ事なんです！」

「もう知つた事ではありません。賽は投げられた、といふやつです  
激しい剣戟の最中にそう告げるけど、セレスさんは聞き入れてくれ  
なかつた。」

罅迫り合いとなつた二人。そこを狙つて、私はセレスさんにバインドを仕掛ける。  
セレスさんの両腕と両足、胴体にリングバインド、完全に拘束した。  
シャルちゃんが「ナイス！ なのは」って褒めてくれた。  
良かった。私がここに居られる理由を見つけることが出来た。

「色々言いたい事があるけど……。セレス、あなた一つ重大なミス  
を犯してる。」

さつきも言つたように、ラグナロクは例外なく世界を食い殺す。

それを、狙った世界に発動する？ 無理だし無謀だし不可能よ。  
ラグナロクは制御できない魔術。あなたの暴走は基盤けいこくからして破綻  
している」

「制御できない？ それはおかしな話ですね。」

ルシルの真技がどういうモノかをお忘れですか、剣神シャルロット」  
バインドで拘束されていても余裕の笑みを消さないセレスさんがそ  
う告げた。

意味が解らず、シャルちゃんへと視線を送ると、余裕なセレスさん  
を警戒していたシャルちゃんの表情は青褪めていた。

ルシル君の真技。私が知っているのは、大戦時の記憶で見た対人の  
グロリアス・エヴァンジェル。

そう言えば、もう一つ対界の真技が在るとか無いとか・・・。

「お気づきですよ？ そう、再誕あさなの字を冠するアポカリプティッ  
ク・ジエネシス。

アレは、ラグナロクの術式を応用し、その圧倒的な力を制御できた  
唯一の絶対真技」

パキインと音が響いた。私のバインドが凍らされて粉碎された音だ。  
自由になったセレスさんはシャルちゃんへと“シユリユツセル”を  
振るつ。

シャルちゃんの動きが一拍遅れた。今の話がシヨックだったみたい。  
だから私は“レイジングハート”をシャルちゃんの前へと瞬時に伸  
ばして、セレスさんの一撃を受ける。

そこでシャルちゃんもシヨックから立ち直って、私達を跳び越える  
ように前へ跳躍してセレスさんの背後に降り立つ。

と同時に真紅に光り輝く“キルシュブリューテ”を一閃。

デフェンデル・テクララシオン  
守護宣言

それよりも早くセレスさんの背後に氷の壁が突き立った。

けど、シャルちゃんの一撃の前には無意味な事だった。

一刀両断された氷の壁。私の目に、驚愕しているセレスさんの顔が映る。

シャルちゃんの二撃目がセレスさんに向かって奔る。

センチンシア・コンテナトリア  
愚かしき者に美しき肅清を

直感。私とシャルちゃんはほぼ同時にセレスさんから離れて空へと上がる。

その直後、セレスさんを中心に床が凍り付いていく。

「シャルちゃん、今の話・・・」

「確かにルシルの真技ジエネシスの術式を得ているなら、可能かもしれない。でも、そんな簡単な話じゃない。ルシルだって完全に制御出来ないんだから。」

だからそんなの上手く行くわけがない。絶対に次元世界そのものが滅亡する・・・!!」

炎牙崩爆刃

炎の斬撃を床に放ったシャルちゃん。床を凍らせていた氷が一瞬で蒸発する。

セレスさんはその前に私達と同じ空へと上がった。

睨み合うシャルちゃんとセレスさん。私もまたしつかりと見据える。

「さあ、続きと行きましようか。全てをやり直す為に・・・！」

レフィナド・ランサ  
洗練されし氷牙

“シュリユツセル”を横薙ぎに振るった軌道に出現した氷の槍、その数14。

それが音も無く飛んできた。私達は上下に回避して、

「デイバイン・・・バスタアアアー！！！」

私が口火を開く。私はずっと共に歩んできた砲撃で。

砲撃は一直線にセレスさんへ。だけど当たる直前、砲撃は先端から凍り付いて、そのまま凍波が私の構える“レイジングハート”の先端にまで迫る。

軽くパニック状態。急いで砲撃を止めないと、私まで凍結される。

「なのはー！！！」

砲撃を放ち続ける“レイジングハート”まで凍波が残り数十cmと迫った時、シャルちゃんが砲撃を“キルシュブリューテ”で寸断してくれた。

そのおかげで何とか凍波から逃れることが出来た。

「ありがとう、シャルちゃん。助かった」

「お礼はいいよ。親友を助けるのに理由なんていらなないんだし。でも今度は気を付けて」

シャルちゃんはそう言って、セレスさんへと向き直る。  
セレスさんは“シュリュツセル”を水平に構えて、十字に振るった。

ベタロ・アニリヨ  
雪花飛翔

氷で出来た花弁が何枚も高速回転しながら飛翔してきた。

シャルちゃんは私の前に躍り出て、炎の斬撃で全て斬り払った。

「人間は必ず過ちを犯す、そういう生き物です。解ってます、それくらい」

今度はシャルちゃんがセレスさんへと最接近。

真紅の炎を纏わせた“キルシュブリューテ”で直接セレスさんへと斬りかかる。

また二人の剣戟が始まる。私はアクセルシューターをスタンバイ。

「小さな過ちならば気付くのは難しいですけど、知らずとも簡単に修正できます・・・！」

通用するかは分からない。ううん、まず通用しない。

でも、何かシャルちゃんを手伝えることが出来たら、と思って、私は自分の魔導に意志を込める。

「そして大きな過ちは小さな過ちに比べ、気付くのは容易いです。が、それを過ちだと認めないときもあります・・・！」

セレスさんの独白は続く。

シャルちゃんは黙って“キルシュブリューテ”を振るい続け、私も黙って二人の戦況を見る。

「誰も彼も自らが正しいとし、過ちに気付かない、気付こうとしない……！」

氷が蒸発する音と蒸気が二人の間に立ち上る。

それでもセレスさんは勢いを止めずに、“シュリユッセル”を振るい続ける。

シャルちゃんもまたセレスさんの連撃を防いでは捌いて反撃。

「たとえ気付いたとしても、修正するのは途方に暮れるほど難しいから諦める。

だから……くだらない争いはいつまでも続き、そして終わらない……！」

「だからその争いを治める為に世界丸ごと滅ぼすって？」

随分と乱暴な考えを持つようになったのね、セレス……！」

セレスさんは力負けして弾き飛ばされる。だけどすぐさま体勢を整えて、

エバンヘリオ・フロセラル  
咲きし福音

足元に巨大なヨツンヘイム魔法陣を展開。

六角形のそれに沿うように巨大で縦長の氷板が生まれる。

エルジアでフィレスが私とフェイトちゃんに放ってきた攻撃だ。

「制御されたラグナロク、その圧倒的な“力”で世界を滅ぼし、その恐怖で止まらない戦争を全て終わらせる。

このオムニシエンスで起きている争いを、次元世界最後の争いとする為に……！」



セレスさんが左腕を横に振るうと同じに六方へと氷板が真っ直ぐ拡散していく。  
その内の一枚が私とシャルちゃんへと直撃コースで迫ってきた。  
私はエルジアでのように回避を執ろうとしたけど、

### 炎牙煉衝刃

シャルちゃんが迫る氷板に炎槍を一直線に放った。  
そしてシャルちゃんは私の袖を引っ張って、私を側に立たせた。  
直後、迫る氷板の孔を私達は通過した。こういう対処法はきつとシャルちゃんだけにしか出来ない。  
すぐさまセレスさんへ接近を試みるシャルちゃんだったけど、

「・・・私が過ちなのであれば、あなた達は私を倒しなさい。  
ですが、私が正しいのであれば、あなたは私に倒されなさい。  
世界がどちらかを生かすのか、この戦いの結末が教えてくれる!!」

### セリオン・エクスラシオン 氷柱弾雨

私達の間には巨大な六角形の氷柱が幾つも壁になるように連続で降ってきた。  
シャルちゃんは接近を断念。“キルシュブリューテ”を構えたまま、途切れるのを待つ。  
私は結局何も出来ていない。役に立っていない。砲撃は通用しないし、バインドも簡単に碎かれる。  
魔導師の私と魔術師のセレスさんでは圧倒的に格が違い過ぎる。

「なのは。なのははまだ全力を出し切ってもいないのに、自分は役に立ってない、なんて思っていないよね・・・?」

「それは・・・」

思ってた。そう思ってたよ、声をかけられるついさっきまで。シャルちゃんは突然“キルシユブリューテ”を縦一線に振り払った。すると氷柱の一つが真つ二つに割れて、その破片がさらに振つてくる氷柱の軌道を障害して、氷柱のバリケードがドミノ倒しのように崩れていく。

「弱音は全力を出し切って、通用しなかった時に吐きなさい。なのは私でさえも認めるエースオブエースなんだから、さ。もうちょっと自信を持って、やってみようよ・・・！」

シャルちゃんの姿がかき消える。一気にセレスさんの元へと接近していた。

そしてすぐさま始まる剣戟の嵐。最悪セレスさんを殺そうとするシャルちゃん。

それをさせないようにするためにはどうすればいい？ もちろん私の魔法でノックアウトすればいい。

「レイジングハート、カートリッジを三連ロード。

ブラスター2。スターライトの準備と並行して他の砲撃の準備もお願い・・・！」

・・・Yes, my master

シャルちゃんに言われた連続ロードの限界数、三発をロード。

さらにブラスターで魔力を増大させる。凍結された砲撃は、全力でも何でもない一撃だった。

負けて当然。だから今度は本気の全力で。

チャンスを見逃すな。今はただじっと待つんだ。

十 十 十 十 十 十 十

まさかラグナロクなんて方法を引つ張りだすなんて思いもしなかった。

しかもルシルの真技の術式を流用して制御するなんて・・・。

セレスは相当キているようだ。どうしてヨツンヘイムの関係者って言うのは、こう暴走してくれるんだろうか。

というかそれ以前に、こうメチャクチャやっているのにどうして界律が働かない？

先代テルミナスの力は消えて、次元世界は正常になっているはずなのに。

(セレスの奴、まだ何か細工しているな・・・！)

この世界に再び喚ばれて、事情を聴いて、第一に考えたことがソレだった。

魔族を現代に出現させて、界律が黙っているはずがないんだ。

なら考えられるのは、セレスが魔術を使って、界律を誤魔化している。ほぼ禁呪の域だ。

思考を止めずに“キルシュブリューテ”を一閃。“ディオサの魔道書”と融合して神器化した“シュリユッセル”を弾く。

セレスは大きく弾かれて後退。だけど、

「は・・・っ！」

だけどすぐさま刃を戻して、私へと斬りかかってくる。

その一撃を真正面から受ける。受けた場所から“キルシュブリューテ”の刀身が凍っていく。

私は“シュリユッセル”を捌いて、セレスを押し退ける。

「どうして魔族をあれだけ召喚しておいて界律は何もアクションを起こさない・・・？  
だからこう考えてる。あなたが禁呪に手を出しているじゃないか、  
って」

凍りついた“キルシュブリューテ”に炎を纏わせて解凍。  
炎を振り払って、“キルシュブリューテ”を脇に構える。  
セレスは反応を示さない。返ってきたのは声じゃなくて、

ペンティスカ・レモリーノ  
極雪轟嵐

攻撃。“シュリユツセル”の刀身に吹雪を纏わせ、私に向けて放ってきた。  
私はそれを大きく横へ移動することで回避。そこへ、

ストライク・スターズ

私の背後から脇を通ってセレスの放った竜巻へと、なのはの大砲撃が突っ込んできた。  
砲撃に追隨してきたシューターの一基が私を掠める。うわっと、危ねえ。

なのはの砲撃はセレスの竜巻の中心を見事撃ち抜いて竜巻を拡散させて消し、技後硬直で動けないセレスへと真っ直ぐ進んで、そして呑み込んだ。  
直後に桜色の閃光が爆ぜる。

「・・・お見事」

あれこそなのはの砲撃だ。見ていていつそ清々しい。

背後に居るであろうなのはへと視線を移すと、きちんと油断せずに爆ぜた閃光を見詰めているのが見える。私もきつちり油断せずに最大警戒で、セレスを呑み込んだ閃光を見詰める。

インバシオン・ローボ  
制圧せし氷狼

閃光を食い破つて来たのは、氷で構成されて冷気を纏う狼、その何十頭という群れ。

私は出来るだけなのはに到達する狼の数を減らす為に炎の斬撃、炎牙崩爆刃を連続で打ち放つ。

姿の見たセレスとの間で大爆発。爆炎を突破してきた狼、その数・・・22。空を駆ける氷狼が私に襲いかかり、また脇を通り抜けて行こうとする。

『私は大丈夫・・・！』

なのはからの念話。ここはなのはを信じるべきか否か。私は・・・

『ごめん、お願い！』

なのはを信じる事にした。

何頭かが私の脇を通り過ぎて、背後に居るなのはへ向かっていく。そして私は、自分に襲いかかって来た14頭の狼を片っ端から斬り伏せる。

夕日が狼達を照らして、反射する夕陽が眩しくて仕方がない。一瞬眩しさに目を閉じそうになった。それが隙となつて、

「痛っ、女の子のやわ肌を噛むな、ケモノ!!」

左腕と右足に噛み付いてきた二頭の狼。

全身に炎を纏って、噛みついて放さない狼を蒸発させ、残りを粉碎した。

なのはの事が気になりながらもなのはを信じて、セレスとの戦闘を再開するために動こうとしたその時、

「イルシオン・コンテネル  
魔道抑制結界・・・!!」

魔力がちから一気に抜け、騎士甲冑すらキャンセルされて飛行できなくなつた私は、眼下に広がる“エヘモニアの天柱”の最上階に落下した。

十 十 十 十 十 十 十

私に向かつてきた氷で構成された8頭の狼。

シャルちゃん私の事を思ってくれて半数以上の氷狼を引きつけてくれた。

だから私は、私を信じてくれたシャルちゃんに応える為にも・・・

「レイジングハート!!」

All right・Acceler Shooter

アクセルシューター16基を、冷気を引きながら空を駆け、口を大きく開けて襲いかかってくる氷狼へと放つ。

さらに“ブラスタービット”を三基展開させる。

シューターを避けては直撃を受けて身体を少しずつ砕け散らしていく氷狼。

アクセルフィンで噛みついてくる氷狼から離れて、“ブラスタービ

ツト”三基から砲撃。

シューターと砲撃で氷狼を誘導して、一か所に集めた氷狼を砲撃とシューターで一扫する。

だけど最後のー頭が前身だけで突進してきた。私は、

A c c e l F i n

フラツシューインパクト

左拳に魔力を圧縮して纏わせ、アクセルフィンの突進力を利用した一撃を氷狼の鼻っ面に叩きこむ。

昔は“レイジングハート”でやっていた事だけど、成長した今なら拳で十分だ。

最後のー頭を粉碎して、全頭を掃討完了。シャルちゃんの居る場所へと振り向くと、

「シャルちゃん!？」

シャルちゃんは騎士甲冑じゃなくて、黒のタートルネックトップ、淡い桜色のワンピース、白のカーディガンっていう私服姿。

その私服姿で“天柱”の最上階の床へと落下していた。

私はすぐさま対象を浮遊させるフローターをシャルちゃんに掛け、ゆっくりと最上階の床に降ろした。

レフィナド・ランサ  
洗練されし氷牙

セレスさんは、そんなシャルちゃんへ向けて氷槍を放とうとしていた。

私はアクセルフィンで、シャルちゃんを守るためにセレスさんの前に立ち塞がる。

その直後、氷槍を4本撃ち込んできた。ラウンドシールドを展開して防ぎ、“ブラスタービット”を操作してセレスさんへと多弾砲撃を放つ。

セレスさんは避けようともせず砲撃の直撃を受けた。どうして？だとかより、まずはシャルちゃんの現状把握だ。

「シャルちゃん、何で私服姿に・・・！？」

「たぶんヨツンヘイム術式の魔力炉を強制停止させるヤツだと思う。ごめん、なのは。魔力炉が回復するまで私は戦えない」

最悪な状況だった。シャルちゃんが戦えない。

という事は、私一人でセレスさんと戦わないといけない。

無理だ。シャルちゃん抜きで勝てるような相手じゃない。

シヨックを受けていると、背後からドサツと何かが落ちた音がした。振り返ると、そこにはセレスさんが床に倒れ伏していた。

「え・・・？」

まさかさっきの砲撃で決まったの？

分からないけど、でも“レイジングハート”を構えたまま警戒する。

セレスさんが“シユリユツセル”を突いて立ち上がった。私は目を見開いた。

顔は青褪めて、口の端から血を流しているそのセレスさんに。

セレスさんは大きく咳き込んで、空いている左手で口を覆う。

指の隙間から漏れる赤い血。違う。砲撃によるダメージじゃない。

もっと別の原因だ。咳き込み方からして・・・病気・・・？

「やっぱり。セレス、あなた・・・」



「……確かに、ゲホツゲホツ、はあはあ……シャルの言う通りです。」

私は禁呪、うぐ……に手を出した……これは、つつ、その代償……!」

本当に辛そうなセレスさん。口端から漏れる血を袖で拭いとる。

私は「今すぐ病院へ!」と提案するけど、シャルちゃんが「もう助からない」と告げてきた。

「助からない? セレスさんが? 嘘、だよな……?」

だけどシャルちゃんも、セレスさんですら首を横に振った。

私は知らずに「なんで?」と訊いていた。セレスさんはまた咳き込んで、深呼吸して息を整えた。

「世界を敵に……はあはあ、回してもいいほど、私はゲホツ、お姉ちゃんの事が好きだった……。」

だから、お姉ちゃんを、つぐ……死に追いやった管理局……つ、世界に……復讐を……!」

セレスさんから放たれる世界全てに対する敵意。

「禁呪のひとつ、界律接触。に近いものでしょうけど……。」

禁呪は一度使用すれば、その者の命を根こそぎ刈り奪っていく。

魔族召喚やラグナロクのペナルティをその身に全て受ける。その為の禁呪なんですよ……?」

シャルちゃんは悲しげに告げた。

対するセレスさんは俯いたまま呼吸を整えるだけで精いっぱいなのよ  
うで返事をしない。

『念話にて失礼します。そう、ですね・・・。』

それで大体合っています。でも後悔はしていません。改革と謳っておきながら、その実、単なる復讐者でしかない私にはお似合いな罰です。

それに元より短命の身。たった2、3年の差でしかありませんしね』  
口頭じゃなく念話。顔を上げたセレスさんは狂気が含まれた笑みをしていた。

もう後戻りしない覚悟。死んでもいいから果たそうとする決意。それに短命？ 初耳だった。セレスさんはそんな気配を一切見せなかった。

『ラグナロクの術式完成まで残り僅かとなりました。まずは手始めに、憎き管理局の本局と、エルジアのように世界内で争いを続けるいくつかの世界に向けて発動しましょうか』

まるでご飯の献立を考えるかのような気楽さでそう言った。

“シユリュツセル”を構え直して私を見詰めてくる。

「なのは、あなたが止めてあげて。今、彼女を止めることが出来るのはあなただけ。

優しいあなたに背負わせたくはないけど、お願い、世界を守るのはあなただけなの・・・!」

『行きますよ、エースオブエース!!!』

ゲバルド・ラファガ  
神速獣歩

姿がかき消えて一瞬で間合いに入られた。

振り下ろされる“シユリユッセル”を“レイジングハート”で受け止める。  
火花を散らしながらの拮抗。私の真正面に居るセレスさんが吐血する。  
でも浮かべているのは笑み。泣きそうになる。

「どうして・・・どうして・・・どうして!？」

そんな叫びと一緒にセレスさんを押し返す。

セレスさんは簡単に離れて、でもすぐさま“シユリユッセル”を横薙ぎに振ってきた。

私はバックステップで避けて、“レイジングハート”を向けようとする。

「なのは!！」

世界を守るために友達を撃つ。迷い、戸惑い。それが私の動きを堅くした。

そんなのお構いなしに攻撃を加えてくるセレスさん。私は防戦一方になる。

『誰からも頼られるエース。その頂点に君臨するエースオブエース。あなたが幼い頃からその細い肩に押しつけられた称号。辛かったでしょ？』

才能があったから、常に頼られ、常に期待され、常に羨望を受けたあなた。

逃げたかったのではないですか、そのプレッシャーから』

「聞いちゃダメ、なのは!！」

何度も振るわれる“シュリユツセル”を何とか防ぎきる。

頭の中に響いてくるセレスさんの声。シャルちゃんが何か言ってる・・・？

「エースとして戦場に送り込まれ、戦い、傷つき・・・落とされ。

空で戦う以上、常に死と隣わせ。墜ちればそれで終わり。今度は死ぬかもしれない。

あなた、本当に続けられるの？ 愛娘のヴィヴィオを独り残して・・・？

ヴィヴィオの顔が思い浮かんだ。

私が居なくなってしまった時、泣き叫ぶヴィヴィオの顔が。

一瞬動きを止めてしまい、隙となる。強い剣戟によって弾き飛ばされて尻餅をつく。

セレスさんの何度目かの吐血。それでもセレスさんは笑みを消さない。

「私が争いをこの次元世界から失くす。

あなたや他の魔導師が戦場に二度と立つことが無いように、これ以上の犠牲者が出ないように・・・！」

そう、家族を失う悲しみと憎しみを背負うのはもう私だけで十分ッ  
！！！！」

「っつ！！」

セレスさんの最後の言葉、そこには狂気が一切無かった。

あるのは純粹な願い。そう思えた。だからこそ驚いた。

セレスさんがハツとして、すぐに狂気的笑みを浮かべ直す。

今なら分かる。わざとらしく、演技臭い。

「うん、怖いよ、本当はいつも怖かった。みんなに希望を与える名エースオブエース。負けられない、負けちゃいけない。そんなプレッシャー、本当は重荷だった」

そう言いながら立ち上がる。

そして“レイジングハート”を構え直す。

「でも、それは自分が望んで今まで歩んできた道の結果。

だからこそ私は逃げ出さずに、全てを背負って空を翔けてきた。

これからもそう。私は、自分が選んだ道を歩み続ける。

どれだけ危険でも、その先に笑顔を取り戻せる人が居るのなら、私は戦う、戦い続ける」

私はシューターを20基展開。セレスさんは念話で『そう』と一言。どこか嬉しそうな笑みを浮かべたのはきつと気の所為なんかじゃない。

「セレスさん、もう止める事は出来ないんですか・・・？」

『人の足を止めるのは絶望ではなく諦め。

人の足を進めるのは希望ではなく意志。

私には意志がある。今すぐにも命を落とそうと、私は最期まで歩みを止めない』

ベタロ・アニリヨ  
雪花飛刃

アクセルシューター

飛来してきた氷花弁をシューターで迎撃。

セレスさんが疾走してくる。シャルちゃんが魔法も魔術も使えないのに、起動した“トロイメライ”で防いだ。

「シャルちゃん!?」

「空へ上がって、なのは。陸戦じゃなのはは不利」

「・・・うん、わかった」

私はもう一度空へと上がる。

セレスさんもシャルちゃんとの罅迫り合いを止めて空に上がってきた。

私はセレスさんに勝つ。辛くても、勝たないと、ダメなんだ・・・。

“レイジングハート”を向け、ブラスタービット”三基を操作して四方から高速砲フォトンスマッシャー。

セレスさんは回避。避けきれない砲撃だけ“シュリュッセル”で裂いていく。

私は攻撃を止めずにシューターで弾幕を張って、セレスさんがそれに対処している内に、

「エクセリオン・・・バスタアアアー!!!」

砲撃を放つ。セレスさんは左手を翳して、

カンシオン・デ・コンヘラシオン  
氷星の大賛歌

空色の砲撃を撃ってきた。衝突したバスターが凍結されていつて、二つの砲撃が同時に消えた。

着弾点には氷の破片が舞い散って、薄暗くなってきた空に散る。

セレスさんは吐血しながらも接近戦を挑んでこようとして、私は砲

撃戦を望んでいるからアクセルフィンで距離を取る。

その間にもシューターや“レイジングハート”と“ブラスタービツト”の砲撃で弾幕を張り続ける。

『世界の数だけ歴史があり、世界の数以上に英雄と謳われる人はいる。

その英雄の名は語り継がれて後世に残っていきますが、英雄と共に戦って殉じた者の名は霞に消えていく・・・』

セレスさんの念話が届く。

イエロ・コリン アキラス  
氷奏閃・翔閃

冷気の斬撃を幾つも放ってきて、シューターと砲撃を相殺。私にも迫ってきたからアクセルフィンで回避をする。

『なのは、あなたは前者ね。でも、その他の人はどうかしら？

殉職者という数字にされて、人々の記憶にちゃんと留まるかしら？  
答えはノー。勇敢に戦ったのに、印象に残らなければ、死んだ者は数字にされる・・・』

「それは・・・」

ストライク・スターズ

カンシオン・デ・コンヘラシオン  
氷星の大賛歌

同じタイミングでの砲撃。凍結されかけたけど、今度はセレスさんへと届いた。

桜色の閃光が爆ぜる。その閃光の上から飛び出してきたセレスさん

が“シユリユツセル”を振るった。

レフィナド・ランサ  
洗練されし氷牙

氷槍が8本飛んでくる。直線軌道だから避けるのは簡単。

“ブラスタービット”三基から砲撃。セレスさんは吐血したことで対処に遅れて直撃した。

今ならバインドが通じるかもしれない。そう思い、レストリクトロツクを用意。

『お姉ちゃんは、損害1という数字になった。』

始めの頃は、11歳での殉職だと世間を騒がした。

だけど人は忘れていった。時間は全てを洗い流していく・・・!』

ディアブロ・クエルノ  
悪魔の角

氷の杭。エルジアでフィレスが使った魔術。そして私の敗因。

今度もまた対処する前に全身を掠って行って、切り傷を負わしている。

痛みに耐えながらも球体状の全方位障壁オーバルプロテクションを展開。

氷の杭を防御しつつ、“ブラスタービット”三基でセレスさんへと砲撃を放つ。

セレスさんは鋭い機動で踊るように回避していく。

『こうしている間にもラグナロクの発動が迫る』

「セレスさん!!」

アクセルシューターと砲撃で氷の杭の迎撃を行い、ある程度数が減



つたところでプロテクションを解除。  
もう時間が無い。いつの間にか最上階に“オラシオン・ハルディン”に描かれた魔法陣と似たモノが描かれていた。  
シャルちゃん“トロイメライ”で床を斬りつけて魔法陣を破壊しようとしているのが見える。

『急ぎなさい、なのは。世界を守りたいのなら、私を落としてみせなさい。』

私を倒さなければ、ラグナロクの術式は止まらない……!』

イエロ・コリン アギラス  
氷奏閃・翔閃

冷気の斬撃。アクセルフィンで回避しながらフォトンスマツシャーを連射。

セレスさんは“シュリュツセル”で全弾を斬り裂きながら突撃してくる。

そして突然姿がかき消えた。見失った。「上!!」とのシャルちゃんの叫び声。

“レイジングハート”を頭上に掲げた上でラウンドシールドを展開。その直後に、シールドに振り下ろされた“シュリュツセル”の一閃。

「く……っ!」

シールドは一瞬で砕かれて、“レイジングハート”の柄の中央に衝突。

見上げる私の目には、青いを通り越して血の気の無い白い顔色になっているセレスさんの顔。

私は耐えきれずに弾き飛ばされて、体勢を整える前に最上階の床に叩きつけられた。

「なのは、大丈夫!？」

「う、うん・・・大丈夫・・・」

駆け寄ってきたシャルちゃんに支えられながら立ち上がる。

「もう時間が無い。酷な事だけど、セレスを早く倒さないと・・・」

「分かってる。分かってるけど・・・」

床に描かれた魔法陣の発光量がさらに強くなってる。

ラグナロクの術式の要である上空に佇むセレスさんを見上げる。

肩で大きく息をして、もういつ倒れてもおかしくないほどの疲労が見て取れる。

そんな時、“オラシオン・ハルディン”の方角から強い発光。

『ラグナロクの発動準備完了の合図ですよ。』

さあ、完全発動するまでに私を倒せますか、エースオブエース!！」

「なのは、急いで!！」

私は頷いて応え、空へと再び上がる。

雨のように降ってくる氷の弾丸。私は最小限の動きで紙一重に避けていく。

『急ぎなさい、なのは!！」』

連続ロールしながらカートリッジを三連ロードし、エクセリオンバスターを放つ。

セレスさんは“シュリュッセル”で弾き飛ばしながら、私へと降下

してくる。

すれ違いざまのお互いのデバイスへと一撃。衝撃波がすごい。お互いが大きく距離を取る。セレスさんは“シュリユッセル”の刀身に魔力を集束させていく。

こちらも全力で行かないと勝てないほどの集束率。

だから私も“レイジングハート”と、セレスさんの周囲に四基と増やした“ブラスタービット”を展開して、それぞれに魔力を集束させる。

『何をしているのですか！ 撃ちなさい！ なのは！！』

セレスさん。あなたはやっぱり、ラグナロクを発動する気が元からないんじゃないですか？

セレスさん。何でそんなに必死になって私に撃たれようとしているんですか？

セレスさん。あなたの本当の目的は一体何だったんですか？

『撃ちなさい！！！！』

「セレスさん！！！！」

スターライトブレイカー

頭上に掲げた“シュリユッセル”を振るおうとしたセレスさんへと五方からスターライトブレイカーを撃ち込んだ。

視界が桜色の閃光で完全に閉ざされる。目を細くして爆ぜる閃光を見詰める。

刀身が半ばから砕けた“シュリユッセル”が閃光を裂いて飛んできて、最上階の床へと突き刺さった。

私の視界に、力無く落下していくセレスさんの姿が入る。

「セレスさん！」

飛んでも間に合わない判断してフローターを発動。  
ゆっくりと降下するセレスさんをシャルちゃんが優しく抱きしめた。

十 十 十 十 十 十 十

セレスがスターライトブレイカーを受けたと同時に魔法陣が消滅した。

“オラシオン・ハルディン”の方角から見えていた発光も今は無い。  
ラグナロクは発動しなかった。

「セレス……あなたは一体何を目指していたの……？」

床へ横たえたセレスへと話しかける。

なのはとの戦闘中の念話は私にも届いていた。

「セレスさん！？ シャルちゃん、セレスさんは！？」

なのはもボロボロなのに、やっぱりセレスを心配している。  
私は何を言わずに、ただ目を瞑るセレスの顔を見るだけだ。

「セレス……」

私でもなのはでもセレスでもない第三者の声。  
声のした方へと振り返る。そこに居たのは、

「「ファイレス……！？」」

はやて達と戦っていたはずのフィレス・カローラ。  
なのはと声が重なる。まず驚愕。そしてはやて達の安否。次にフ  
イトとルシルの事。

ここにフィレスが居るといふ事は、はやて達は負けたといふ事だ。  
それにエントランスホールで戦っているはずのフェイトとルシルを  
素通りした？

私となのはの表情から察したのかフィレスは、

「誰一人と、して・・・殺めて・・・ません・・・から・・・。

フェイト、と・・・サファイ・・・口も、無事・・・手を、出して・・・  
ない・・・から」

フラフラとした足取りでこっちに歩み寄って来ながらそう告げた。  
フィレスの存在感ももう希薄だ。あともって1分も無いといったと  
ころだろう。

確かにこれならフェイトとルシルに手を出す事は出来ないはずだ。

「セレ・・・ス・・・もう、いいの・・・？」

寝かせているセレスの側に座り込んだフィレス。

セレスの目がうつすらと開いて、覗きこんでいるフィレスへと視線  
を移す。

セレスは小さく頷いた。何がいいのかが解らない。だけど唯一解る  
のは、セレスの目的は達せられたといふ事だ。

十 十 十 十 十 十 十 十

すぐく眠い。身体に力が入らない。

これが、死、ということなのでしょうか・・・？

「セレ・・・ス・・・もう、いいの・・・？」

お姉ちゃんの声が聞こえる。私は眠いのを僅かの力で耐えて目を開ける。

ウエディングドレス姿のお姉ちゃんだ。見たのは三回目だけだよっぱり綺麗ですね。

お姉ちゃんの、もういい？という問い。私は頷く事で応える。

私は世界に示したかった。決して殉職は尊いものなんかではないと。一人の命が消えて悲しむ家族が居るんだって。

管理局はそれを軽んじているんだって。だから知らしめたかった。私のように復讐心を抱く遺族が居るんだということ。

だから命を賭してでも思い知らせたかった。今の管理局の危険性を。その為に悪事に手を染めた局員を何人も殺害した。

それくらいはしなければ、きっと管理局は変わらないと思ったから。問題は“今回の事件”<sup>テストメント</sup>を世界がどう捉えるかですけど・・・。

(最期に・・・叶う、なら・・・ら・・・テスト・・・メント・・・の存在が・・・良き影響、で・・・ありま・・・すよう・・・に・・・)

もうダメ。眠くて仕方ありません。

最期にお姉ちゃんの顔を脳裏に焼き付けて、私は静かに瞳を閉じる。もう眠りましょうか。ひどく疲れてしまい・・・まし・・・

十 十 十 十 十 十 十 十

セレスは静かに目を閉じた。

なのはが何度も呼びかけるけど、セレスからは二度と返事が返って

くる事は無かった。

「テストメント……は、もう……役目……を終え……た、のね……。  
じゃあ……一緒に……逝こう……か……セレ……ス……」

フィレスも、セレスの後を追うように光の粒子となって天に昇って逝った。

“テストメント”は、たった今、その役目を終えた。  
結局、セレスが何を望んでいたのかは分からなかった。  
私はセレスが亡くなったことで泣いているのはを見る。

そしてゆっくりと立ち上がって、“ディオサの魔道書”と融合した  
“シユリユツセル”へと向かう。  
魔力もようやく戻り、魔術を記す“ディオサの魔道書”の完全破壊  
という目的を果たそう。

こんなモノ、これからの次元世界に必要なない代物だ。  
私は“シユリユツセル”を手に取り、魔力炉を再起動、<sup>システム</sup>魔術を使っ  
て“ディオサの魔道書”を分離させる。

「なのは。あなたはセレスを連れて、もう帰りなさい」

「え……？ シヤルちゃん……？」

「なのは、私とはここでお別れ。結局戦いばかりだったけど、楽しかったよ」

息を呑むなのは。その顔は忘れていたなあ。

口をパクパクしているのはへと歩み寄って、剣のアクセサリー型の待機モードにした“シユリユツセル”を手渡す。

私はなのはをそっと抱き締める。すると、なのははまた声を出して泣きだした。

まあ、お別れするときくらいはやっぱり笑顔でいてほしいよ。でも仕方ない。セレスが亡くなったばかりじゃね。

だから泣き止むまで抱きしめていようかと思ったけど、

「さ、もう行きなさい。私は後始末をしてから還るから。今までありがとう。大好きだよ、なのは」

「シャルちゃん・・・！」

私は立ち上がって、座り込んでいるなのはを立ち上がらせるために手を引く。

立ち上がったなのはは袖で涙を拭って、私に笑顔を向けた。

「シャルちゃん、ありがとう。私もシャルちゃんの事大好きだよ」

そう嬉しい事を言ってくれたなのはの頭を撫でる。

気持ち良さそうに目を細めたなのは、「それじゃあ行くね」と告げて、セレスを背負った。

ゆっくりと転送装置へと歩いていくなのは。私はなのはの姿が見えなくなるまで見送るつもりだ。

転送装置の真ん前で立ち止まって、私へと振り向くなのは。

最後のお別れかな？と思っていると、なのはの表情が凍りついたといてもいいようなモノになった。

「シャルちゃん！！！」

なのはが突然叫んだ。その直後、



何かが通り過ぎた。それに何か腕とか身体に衝撃が奔った気がする。

「このディオサの魔道書は……王われのモノだ」

この声……そんな……だつて……。

声のした方へと振り向こうとして、視界が反転。

私は倒れていた。なのはの悲鳴が聞こえる。

視線を自分の身体に巡らす。そこでようやく気付いた。

私の左腕が……どこにも無い。それに、左脇腹がごっそりと抉り取られていた。

傷口から漏れるのは赤い血じゃなくて、私という存在を構成する魔力の粒子。

「シャルちゃん！ シャルちゃん！ シャルちゃん！」

ああ、よかった。今の私が肉体を持つ人間じゃなくて。

血なんかを流してたら、綺麗なものはがもつと汚れちゃうところだった。

私は頭だけを動かして、私の身体をこんなのにした奴へと視線を向ける。

「なんで……まだ存在している……ダイヤモンドー！」

そこには右手に剣を携え、左手に“ディオサの魔道書”を手にして  
いる私の左腕を持つダイヤモンドが居た。

アイツは確かに私の牢刃しんぎでバラバラにして消滅させてやったのに……  
どうして？

「我は、全てを統べるに相応しきヨツンヘイムが皇帝アグステイン・プレリユード・マラス・ウルダンガリン・デ・ヨツンヘイム。……久しいな、剣神シャルロット・フライハイトよ」

アグステイン・プレリユード・マラス・ウルダンガリン・デ・ヨツンヘイム。

大戦の最終決戦、ヴィーグリーズ決戦で、ルシルの“フレイザブリク神々の宝庫”によって討たれた皇帝の名だ。

そして中立だった複合世界ミッドガルドを大戦に巻き込んだ憎きクズ王だ。

「バカな……！」

そう一言。それが精いっぱいだった。

貴女が思い描いた物語の果て ｝ A c c e s s ｝ (後書き)

セレスも逝き、フィレスも逝きました。

これでテストメントは事実上の消滅ですな。

戦いもようやく終わり、シャルも還ろうとしたときに現れるラスボスの古代の王さま。

もう皆さまお忘れてしょうけど、このエピソードのプロローグの最後に登場した白い影です。

ということに残り二話。次回はラストバトル。

この後は、思考能力回復の為に私が少し遊びを入れたどうでもいいコーナーです。

読む必要も全くありません。どうぞリターンをして飛ばしてやってください。

セ「セレスと」

フィ「フィレスの」

セ&フィ「ヨツン<sup>スペイン</sup> Heim 語こ・う・ざ？」

セ「このエピソードの重要人物であるのに関わらず出番が少ない私

セレスと」

フィ「その姉フィレスがお送りするヨツン Heim 術式の単語の意味を教えるコーナーです」

セ「別段知らなくてもいいと思いますけど、他のエピソードではルシルの術式やシャルの術式の単語を説明していましたが、それなら最後ということもあってヨツン Heim 語もやってやるうという話です」

フィ「ぶっちゃけ出番が欲しいから出しゃばっただけです」

セ&フィ「……（泣）」

セ「グスッ、まずは私がよく使った対地凍結術式である

センチンシア・  
コンテナトリア  
愚かしき者に美しき肅清を”

センチンシア・コンテナトリア。有罪判決、という意味なんです  
ね、実は。

ええ、有罪判決を下すんです、私が。刑の内容は“永久凍結”  
です  
？でも解かせます」

フィ「えつと、次は……陸戦用高速移動術式の

ゲバルド・ラファガ  
神速獣歩

ゲバルドっていうのは、最速の哺乳類って言われてるチーターの事  
ですね。

んで、ラファガというのが突風。突風のチーターってことです。ど  
んなだ？っていうツッコミは却下します」

セ「どんどん行きましょう！ 対空地強襲術式、大きな氷の六角柱  
を落とす

セリオン・エクサラシオン  
氷柱弾雨

セリオンというのはつらら。エクサラシオンは流れ星っていう意味なんです。雨のように降ってくる流れ星。そこにつららという意味の単語を入れただけですな」

フィ「次は、近中距離射撃術式に分類される氷槍を放つ

レフィナド・ランサ  
洗練されし氷牙

レフィナドっていうのは、術式名に出てる通り洗練された、という意味。

ランサは分かりますよね？ 槍って意味なんですよ」

セ「そう言えば、私一度も使ってませんでした。この攻防一体の術式

ベンティスカ・パレドゥ  
雪風の鉄壁

ベンティスカ。それは吹雪という意味を持ち、パレドゥは壁を意味しています。

吹雪の壁。もちろん中は安全圏で何ともありませんよ？ ええ、それはもう何も……」

フィ「下手すれば自滅モノだから注意が必要なんだよね……。さて次は、氷で刀剣類を作り出す

エスパード・デ・ラケリマ  
涙する皇剣

エスパードって結構有名どころの漫画が扱っているから知っている

人も大勢いるはず。

そう、剣、という意味。真ん中の“デ”、これは英語でいうofです。くの。

ラグリマは涙を意味します。涙の剣。刀身から滴る水からこの名が付けられています」

セ「大戦時では扱いづらい事もあり、霜やけ、凍傷云々な魔術師続発、みたいです。

次に紹介するのは、氷の壁を作り出す防性術式

デフェンデル・デクララシオン

### 守護宣言

デフェンデル。ディフェンスに似てますよね。そう、守るという意味なのです。

デクララシオン。これは宣言という意味です。守りを宣言する。誰に？ 周囲に」

フィ「まずいよセレス。文字数がハンパじゃない。

と言いつつゆっくり進めるのがカローラ姉妹なのですよ

次は全方位から奇襲を仕掛ける螺旋状の氷の杭弾幕

ディアプロ・クエルノ

### 悪魔の角

意味はそのまんま。ディアプロは悪魔。クエルノは角。

どこにも杭なんてない。螺旋なんてない。いいじゃないですか!」

セ「そうですね。もう出番がないんですし、これくらいゆっくりやらせる、ですね。

次は対地における物理攻撃。足元から氷製の拳が突き出してくる

ディオサ・プーニヨ  
女神の鉄拳

これもまた 同じで、意味はそのまま。ディオサは女神。プーニヨは拳。

もう少しカツコイイ単語であってほしかった。拳プーニヨ」

フィ「形は術者によって変わるみたい。

みんなはダメだよ？ 人差し指を立てちゃ。刺さるから。どこに？  
女の子に訊くな。

次は術者の周囲を制圧する圧殺術式。巨大な氷の板を六方に飛ばす

エバンヘリオ・フロセラル  
咲きし福音

エバンヘリオ。これは福音って意味だね。術式効果からして有り得ない単語だよね。

フロセラルっていうのは咲くっていう意味。福音が咲くってどんなだ？」

セ「は、相当な高位の術式で、使用者は当時でも数えるほどだったみたいですよ。

それを簡単に扱えるお姉ちゃんはやっぱりすごいです！

次は、氷の花弁を飛ばして対象をプツリ断ち切る攻性術式

ペタロ・アニリヨ  
雪花飛刃

ペタロは花弁という意味を持っていて、アニリヨは環という意味を持ちます。

花輪カッターですね。ブーメランブーメランブーメランブーメラン  
「振り付きあり

フィ「何かノッているセレスを置いて先へゴーします。  
ヨツン Heim 術式における基本中の基本。 武器に冷気を纏わせ切断  
力を上げる

イエロ・コラソン  
氷奏閃

イエロは氷ですね。 イエローではないですよ  
コラソン。 コラと怒られて損では決してありません。 つまらないで  
すね、ごめんなさい。  
コラソンは心という意味です。 氷の心。 そうでない人と人を斬れない  
ということですね」

セ「はあはあはあ。 踊り疲れました。 もう残り僅かですね、了解で  
す。

次は、ヨツン Heim 術式に珍しい砲撃です。

カンシオン・デ・コンヘラシオン  
氷星の大賛歌

カンシオンは歌という意味があり、コンヘラシオンは氷結という意  
味も持っています。  
そこに“ ” がありますから、氷結の歌となります。 音波じゃな  
いですよ、魔力砲です」

フィ「 は音痴でももちろん撃てます。  
えーと、次は、対軍攻性術式だね。 氷でできた狼の群れを突撃させる

インバシオン・ローボ  
制圧せし氷狼

インバシオンは侵略っていう意味で、ローボは狼。  
侵略する狼になるわけだ。 狼に侵略される人間で……まあ強い



けど、狼」

セ「の狼の形もまた術者それぞれ。芸術家の魔術師が使えば、ビツクリなお値段に。  
次は・・・私がシャルに使った反則術式の一角、魔力炉システムを強制停止させる

イルシオン・コンテネル  
魔道抑制結界

これは皇族クラスでしか使用できない術式です。  
イルシオンは幻想。コンテネルは抑える。幻想を抑える、ですね。  
魔術師は幻想そのものと言っても過言ではありませんし、抑えられたら一発で終了です」

フィ「最後をいただきい！！ルシルしか扱わなかった術式。  
対空地広範囲殲滅攻性術式。通称、散弾砲と名付けられた

ペカド・カステイガル  
次元跳躍散弾砲撃

ペカドっていうのは罪っていう意味。カステイガルは罰する。  
罪を罰する。こんな制圧術式を扱う外道が、誰の罪を罰するって言うんだか」

セ「残念、お姉ちゃん。まだ一つ残ってますよ。最後は私です  
対象に吹雪の竜巻を突っ込ませる攻性術式

ベントイスカ・レモリーノ  
極雪轟嵐

ベントイスカ、はもう出ましたね。吹雪という意味です。  
レモリーノは竜巻。吹雪の竜巻となります。凍ります。吹っ飛びま

す。

そして粉々になります。絶対に対処しないとデスりますので要注意

セ「えー、このコーナーの終了時間となりました。

早いです。もう少し喋らせてほしいです。出番が無さ過ぎです（泣）

ー

フィ「まあこれで十分かなと思う私ですが、でもやっぱりもう少し出番が欲かった（泣）」

セ「はあ、作者をボコボコにして鬱憤を晴らしましょう。ね、お姉ちゃん」

フィ「そうだね 今すぐにも殺りに行くっ?」

セ&フィ「それではご機嫌よー!!--!」

『桜』それは出逢いと旅立ちを告げる花 〈Last testament〉

やってしまいました。3万字超え・・・やり過ぎた。

でもどうか、どうか最後まで読んでやってください（泣）

それにしても今話、対ルシル戦、対セレス戦がピークだったと思  
知らされる結果に（血涙）

EXエピソード・ラストバトルイメージBGM

ACE COMBAT 5 “The Unsung War”

『桜』それは出逢いと旅立ちを告げる花 〈Last testament〉

「あゝあゝー痛かったですう〜（泣）」

リインがボロボロ泣いて、傷口が綺麗さっぱり無くなった腹を撫でる。

けどま、そりゃ痛いに決まってる。いくら治るんだとしても、腹を槍で貫かれりゃ誰だって泣く。

一応経験済みのあたしは泣いてねえ。痛いけど泣かなかった。つうか泣けるか！

それにしても、結構早い段階でフィレスの槍は消えた。

フィレスが居なくなってる、はやてがシャマルに助けを呼んで、それから一分としない内だったし、一瞬で傷も癒えたし。

まあそのおかげでこうして動き回れるんだけどさ。

「アギト、お前はどうか。もう大丈夫か？」

シグナムもあたしと同じようにケロツとして、リインの隣に座り込んでるアギトに声を掛ける。

「な、泣いてねえ・・・あたしは泣かなねえ・・・！」

そう言っただけで、少し涙目で涙声。

我慢しなくなっただけいいのになあ、アギトの奴。

「まだ調子悪い子は言っただけ、本当に」

あたしらのところにシャマルが戻ってきた。

シャマルは気を失ったリエイスの事を診ているはずだけど・・・。

「シヤマル。リエイスはもういいのか？」

「え？ ええ。リエイスはやっぱりブラックアウトダメージだったけどもう意識も回復したし、今ははやてちゃんと一緒にクロノ提督と通信してる」

ブラックアウトダメージ、か。一度ラインにも起きた。

あん時はあたしが不甲斐無い所為で、騎士ゼストの攻撃から庇ってくれたラインが意識を失った。

ラインは結構かかったけど、そっか、リエイスはもう回復してんだな。よかった。

それを聴いて安堵。あたしは泣き止んできたラインの元へ行って、よしよしと頭を撫でてやる。

「シヤマル、スバル達の様子はどうなんだ？」

「良好よ。癒しの風でダメージは回復出来たし。クイント元准陸尉達とお話してるわ」

アイツらも無事ならそれでいい。

そう思っていたら、はやてから通信が来た。

内容は、管理局艦隊が相手にしてた“フリングホルニ”と“ナゲルファル”が消失したってものだ。

「それってつまり、フェイトさんがルシルさんに勝ったってことですか・・・？」

鼻をすすりながらラインが訊いてきた。

あたしらは顔を見合わせて、ラインのそれに頷いて応える。

二隻の戦艦はセイントテストが複製によって喚び出したモノだ。それが消えたつてことは、戦艦を維持する事が出来なくなった状況に陥った。

つまりはテストロッサに負けて還っちまったか、それとも対人契約が成功したか……。

「テストロッサちゃんならきつとセイントテスト君と出来たはずよ、対人契約を」

「だな」

『とゆうわけでな、ヴォルフラムが全速でこっちに向かってくる。』

私らは搭乗して、エヘモニアの天柱へ向かい、仲間を迎えに行くよ』

はやての通信に、あたしら八神家守護騎士一同、「了解！」と答えた。

これでテストロッサとセイントテストの決着がついたのが分かった。だけど地面に描かれた光る魔法陣はまだ消えてねえ。

(セレス。お前はまだ続けるのかよ。もう、これ以上は……)

“アドウベルテンシアの回廊”を見詰めながら、セレスの事を思う。

十 十 十 十 十 十 十

「あ……」

両腕の修復を終えたばかりのティータさんが小さく声を上げた。

僕の視線の先に置かれている白銃と黒銃が光となって消滅していく。

「……ルシル君が負けたのね。その二挺の銃はルシル君のモノだから」

クイントさんが呟く。ルシルさんが負けた、と。

僕が誰とも言わずに「フェイトさんがルシルさんに勝ったんですね」と告げると、ティードさんが「そうだろうね」と答えてくれた。

きつと対人契約を成功させたんだ。そう思いたい。

「エリオ君、今度こそルシルさんと一緒に帰りたいね」

「うん。でもきつと帰れるよ。今度こそは」

キャロにそう答える。僕とキャロにとって、ルシルさんはフェイトさんと同じ親のようなもの。

だから、今度こそ一緒に生きていきたいと強く思う。

『六課メンバーへ』

そこに八神部隊長から通信が入る。

内容は二隻の戦艦“フリングホルニ”と“ナグルファル”が消失したというもの。

そして僕達はこっちに向かっている“ヴォルフラム”に乗って“エヘモニアの天柱”へ向かうというものだ。

僕達は「了解」と答えて、“ヴォルフラム”が来るのをただじっと待っていた。

十 十 十 十 十 十 十

“オラシオン・ハルディン”に到着した“ヴォルフラム”に搭乗して、私とリエイスはブリッジに入る。

するとブリッジスタッフから「おかえりなさい」との出迎いの挨拶。私は「ただいま」と返してから艦長席に座って、ルキノ操舵長に「針路、エヘモニアの天柱」と指示。ルキノ操舵長から『了解』と返り、傷ついた“ヴォルフラム”は動き出す。

“オラシオン・ハルディン”の魔法陣が今も消えてないゆうことは、セレスはまだ儀式を止めずに戦つとる、とゆうことになる。それを止められるんはなのはちゃんとシャルちゃんだけ。私らに出来るんは、戦い終えた仲間を迎えに行つて、そしてセレスを連行することだけ。

「セレス……もうやめにしやへんか……」

知らずそう呟いた時、“オラシオン・ハルディン”から生まれる強烈な閃光。

閃光はあまりにも強く、薄暗くなった空を染め上げる。それと同時に“ヴォルフラム”の艦体が大きく揺れる。

「オラシオン・ハルディンから強大な魔力反応！  
魔力値測定……不可！ 振り切れてしまいます！」

「ヴォルフラム駆動炉に異常発生！ 出力が低下！」

以前にも似たような報告があつたんを思い出す。

これはエルジアでの“女帝の洗礼”の一撃が掠つてつた時と同じ。私はまずルキノ操舵長に艦体姿勢の制御の指示を出して、続いてメインモニターに“オラシオン・ハルディン”の映像を出させる。映りだされるんは魔法陣が今まで以上に発光している状況。そして上空にも閃光。それは“女帝の洗礼”の先端に集束していつて、直径4m弱の漆黒の光球となつた。



ソレには見覚えがあった。それは遙かに古き時代。シャルちゃんとルシル君の記憶の中で見た、最古にして最凶の魔術……

「……ラグナロク……」

で間違いないやろ。セレスの持つ“ディオサの魔道書”には数多くの魔術が記されとるって話やったし。

ラグナロクの事くらいは載っとるはずや。そやけど、

「ラグナロクなんて何を考えとるんや、セレスは……！」

これはあまりにもやり過ぎ。改革でも復讐でもない。

これは完全にそんなレベルを超えとる。

振動と一緒に“ヴォルフラム”が徐々に高度と速度を落としていくんが分かる。

「これはまるで……あの魔力塊に駆動炉の魔力を吸い取られていくような……」

スタッフの一人がそう呻く。

ラグナロクの球体が周囲の魔力を集束させていっとるんやろな、と思う。

こればかりはどうしようも出来へん。

(シャルちゃん、なのはちゃん……任せたで)

祈る。二人ならきつとセレスを止めてくれるとはずやと。

“ヴォルフラム”の艦底がいよいよ地面に近づいたその時、

「オラシオン・ハルディンから魔力反応消失！  
駆動炉正常稼働、出力回復しました！」

そう報告が上がる。メインモニターに映る“オラシオン・ハルディン”。

地上の魔法陣も“女帝の洗礼”の先端にあつたラグナロクも綺麗さっぱり無くなつとる。

私は小さく安堵のため息を吐いて、すぐさまルキノ操舵長に「艦体を立て直して、針路そのまま。目標エヘモニアの天柱」と指示を出す。

(良くやつてくれた。シャルちゃん、なのはちゃん・・・)

ラグナロクが撃たれへんかった。セレスが負けたとゆうことやろう。私は背もたれに体重を預けて、もう一度安堵のため息を吐く。

これから忙しくなるわ。まずはセレスとの話し合いから始めて・・・。

「待つとつてな、セレス。今、行くからな」

十 十 十 十 十 十 十

ようやく“ヴォルフラム”の振動が治まった。

ここ待機室であたし達はモニターを眺めていた。

“オラシオン・ハルディン”の映像を。強烈な閃光、ラグナロクを、でも、きつとなのはさんとシャルさんがカローラー佐を止めてくれたんだらう。

ラグナロクが発動する事はなかった。シャルさんとルシルさんの記憶を観て知っているラグナロクの脅威が消えた事にみんなが安堵のため息。

そして、すぐに待機室に悲鳴が上がる。ビクツとしてモニターから悲鳴を上げたギン姉達へと視線を移す。

「お母さん・・・!?!」

あたしの目に映るお母さんの足元が半透明になって、ゆっくりと光の粒子となって消えていく。

ティアも「お兄ちゃん!」って叫ぶ。ティーダさんもお母さん同様に足元から光の粒子となって消えていく。

あたし達は混乱しているのに、当のお母さんとティーダさんは落ち着き払ってる。

「カローラー佐が負けたことで、私達を保っておく魔術効果が切れたのね」

「そつみたいですね。僕達はここまでのようだ」

二人がそう言っつて、あたし達はこれでお別れなんだと理解した。涙が溢れてくる。嗚咽も止まらなくなった。だって、仕方ないよ・・・。

お母さんがギン姉達を一人ずつ抱きしめて、頭をそつと撫でていく。あたしも「こつちにおいでスバル」って呼ばれたから、涙を袖で拭つてお母さんに抱きしめてもらう。

「シグナム一尉。ひとつお願い、いいかしら?」

「はい。出来る事でしたら」

「夫と、ゲンヤ・ナカジマ三佐と話がしたいんだけど」

お母さんの願い。あたしは顔を上げてお母さんを見て、シグナム一尉を見る。

シグナム一尉は少し考える素振りをしてすぐに頷いた。

「分かりました。通信を繋げます。……………どうぞ、クイント元准陸尉。

ヴィータ、リイン、アギト、エリオ、キャロ、ルーテシア、レヴィ。我々は席を外すぞ」

ヴィータ教導官達は頷いて、待機室から静かに出て行った。

あたし達ナカジマ家と、ティアとティードさんだけにしてくれた。

あたしはお母さんから離れて、モニターに映るお父さんと話を始めたお母さんを見詰める。

ギン姉達の嗚咽。少し離れた場所で話をしているティアとティードさん。

本当にこれで最後なんだと、嫌でも実感する。分かっていたのに、いざ別れの時となると信じたくない。

あたしの両手が握られる。右手はギン姉、左手はディエチ、その隣にチンク。

ギン姉もチンクも片方の手をノーヴェとウエンディの手と繋いでる。そして姉妹みんなで、少しずつ消えていきながらお父さんと話すお母さんを見詰める。

「……………おとーさん。私はおとーさんと一緒になれて本当に良かった。

短い間だったけど、こうして娘達と同じ時間を過ごせて、一緒に戦えたりして、すごく幸せだった」

『そうかい。そいつは良かった。……………クイント、もう迷うなよ』

「ええ。・・・もう大丈夫。もう迷わない。  
だから笑って逝ける。おとーさんや娘達に見送られて旅立てるなん  
て、おかあさんは幸せね」

お母さんが笑った。だけど目の端に光るもの、涙があつた。

またあたしの涙が溢れてくる。あたしは耐えられなくなって、お母  
さんへと抱きつく。

あたしに続いてギン姉も、ディエチも、ノーヴェも、ウエンデイも、  
チンクでさえもお母さんに抱きつく。

「見送りは笑顔で。と言いたんだけど、自分が泣いてちゃ世話な  
いよね」

お母さんから温もりや感触が消えていく。

「じゃあね、みんな。おかあさん、これからもずっとみんなの事を  
見守っているから」

それがお母さんの最期の言葉だった。

お母さんは光となって、その姿を完全に消した。

十 十 十 十 十 十 十

「お兄ちゃん」

あたしは待機室の奥に設置されているベンチに座り、あたしの隣に  
座るお兄ちゃんに呼び掛ける。

お兄ちゃんは「ん？ なんだい、ティアナ」と返して、あたしの頭  
を胸に抱くようにしてきた。

あたしは何の抵抗もせず受け入れ、お兄ちゃんの胸に体重を預けて

ゆっくり目を閉じる。

お兄ちゃんと過ごした幼少時を思い出す。

今、確かにお兄ちゃんはここに居る。触れられるし、体温もあるし、何より話せる。

「あたし、このまま管理局員として、執務官として立っただけいい、よね？」

「・・・ティアナが決めて、歩む事を選んだ道だ。

ティアナに負けた僕がそれを拒む事はもうできない。

だから、いいんだよ。僕はティアナの事を信じているから、どこまでも行っただけいいんだ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

お兄ちゃんもあたしにもたれかかるようになってきた。

でも感触はあるけど重さは感じない。お兄ちゃんの姿は屋気楼のように揺らいでいる。

頭にそつと手を置かれたのが分かる。お兄ちゃんに撫でてもらう。

うん、あたしはもう大丈夫。だからお兄ちゃんも安心して。

「それじゃあ逝くよ。やんちゃんもいいけど、少しは女の子らしくな

フツとお兄ちゃんの感触が消えた。

閉じていた目を開けると、ベンチに座っているのはあたし一人だけ。

「・・・最期の言葉でそれはないじゃない・・・お兄ちゃんのバカ」

あたしは天井を見上げるようにして涙が零れないように小さく笑っ

た。

十 十 十 十 十 十 十

「シャルちゃん・・・！」

「泣かないで・・・なのは・・・。知ってるでしょ。私はしぶといつて、さ」

なのはを宥めながら、失った左腕と左脇腹を、セレスとの戦いで周囲に満ちた神秘を取り込んでなんとか修復。

身体の修復を終えて立ち上がるうとしてフラつく。でもなのはがそつと支えてくれたことで立ち上がる。

「ね？ 剣神シャルちゃんは無敵なんだから」

おどける様になのはに告げると、なのはは「・・・うん」と微笑んだ。

見据えるは、ダイヤモンドの姿をしたヨツン Heim 皇帝アグステイン・プレリユード・マラス・ウルダンガリン・デ・ヨツン Heim。

「・・・どうしてお前がここに居る・・・！？」

アグステインこそ私が最も嫌い憎むヨツン Heim の王。

「頭が高いぞ、剣神。王である我にはもつと礼儀を示せ」

どこぞの契約で遭った金ぴか王を思い出す。あーム力つく。

頭の中が沸騰する。もう我慢できない。今すぐにでも消してやりたい。というか消す。

“キルシュブリューテ”を取り出し、純粋な敵意と殺意を刀身に込める。

「・・・そう睨むな。もう良い。寛大である我は貴様の問いに答えてやるが。」

しかし、その現代ミンゲンの女。貴様は頭が高い。王である我の前であるぞ、跪け」

アグステインは自分の身体に“ディオサの魔道書”を取り込みつつなのはに指を差し、跪くように命令した。  
プツン。モーーーダメだ。今のでコイツは、私に最後の一线を踏み越えさせた。

### 閃駆

「クズ王風情が！！ 私の親友に命令するなツツ！！」

閃駆で間合いを詰めながら戦闘甲冑を着用、そして“キルシュブリューテ”を横一闪。

### エスパーダ・デ・ラケリマ 涙する皇剣

ただどアグステインは私の一撃を氷の剣で受け止め弾いた。  
ならば、と刀身に炎を纏わせた斬撃、炎牙月閃刃をお見舞いしてやる。

アグステインは氷剣を二刀に増やし、右で防御、左で攻撃というスタイルを執ってきた。  
連撃を繰り返すけど、氷剣を解かすことが出来ない事に苛立ちを覚える。

そして何度目かの鏝迫り合い。アグステインは「我に何かを聞いた



「かったのではないのか？」と告げてきた。  
私は怒りをもう無理矢理抑えて、一度距離を取った。

「えっと・・・シャルちゃん・・・あの人・・・」

「見ちゃダメ、聞いちゃダメ。なのはの目と耳が穢されるから。」

私は大丈夫だから、なのははもう行って。ごめんね、こんな別れ方で」

これ以上なのはを巻き込みかねない。

私とクス王の戦いに巻き込んで、なのはが傷ついたら二度と立ち直れない。

きつと来世でも引き摺ってそんな気がする。

なのはは「でも・・・」と躊躇っているけど、私は「大丈夫」と笑みを返す。

「・・・バイバイ、シャルちゃん。またね」

「・・・うん。バイバイ、なのは。またどこかで」

左拳を突き合わせる。そしてなのははセレスを背負って、転送装置の中へ消えていった。

それを合図として私は殺気を放ちまくる。もう耐える必要はない。

「それじゃあもう一回訊くけど、どうしてお前がここに居る!？」

「ふむ。我は待っていたのだ。我が末裔が、我の声を耳にする時を。そして届いた。セレス・カローラという末裔の耳に、な。」

そら、もう理解出来るだろう？ セレスにディオサの魔道書を読ませて、心の内に溜めこんでいた願いを爆せてやった」

そして耐えられないからやっぱり斬りかかる。  
炎牙月閃刃の一閃をお見舞いしてやるために閃駆で接近。

ディオサ・ブリーニヨ  
女神の鉄拳

呆れたという風な顔をしたアグステインが私の問いに答える。  
足元に魔力を感じて閃駆で後退。直後、目の前に氷の拳が突き出し  
てきた。

すぐさま炎を纏わせたままの“キルシュブリューテ”で18分割。  
破片の雨を突っ切って、余裕をかましているアグステインへ、

炎牙煉衝刃

「馴れ馴れしくセレスって言うなッ!!」

炎熱の槍を飛ばしながら、セレスの名を当然とでも口にするアグス  
ティンに激昂する。

アグステインは「我が末裔の娘ゆえ、貴様の許可は要らんだろう？」  
と鼻で笑いながら私の炎槍を避ける。

「さて続きだ、剣神よ。その結果が、この争いということよ。

あの娘も残り僅かの人生を、我が与えた魔術によって思うがままに  
生きた。

結末はあのような下らぬものだったが。いやはや、なかなかの暇つ  
ぶしだったぞ、ククク・・・!」

何だそれは・・・。それはつまり、セレスが動いたのは、全部コイ  
ツの所為?

コイツが現れなければ、たぶんセレスは胸の内に復讐心を宿したま

ま強い未練を遺して逝つたのだろつけど、でも、コイツが楽しむ為だけにセレスはあんな大変な事を選んで実行したんじゃない。セレスの最期が馬鹿馬鹿しくて可笑しいと笑うアグステイン。今度は急激に冷めていくのが分かる。

「・・・お前の目的は・・・何だ？」

“キルシュブリューテ”を握る右手が痛い。

それほどまでに力を込めてしまう。だって許せないから、目の前のコイツが。

だから、

### 双牙炎雷刃

まず左斬上げ一閃。炎熱の斬撃を飛ばして、すぐ右斬上げの一閃で雷撃の斬撃を飛ばす。

アグステインは氷剣二刀を振るって迎撃。閃駆で一氣に間合いを詰め、炎牙月閃刃の振り下ろし。

「ふんっ！」と気合を入れたアグステインは氷剣を交差させて私の一閃を受け止めた。

そのままの体勢でまた硬直。私は意地になってアグステインの脳天に“キルシュブリューテ”を叩きこむ為にさらに力を入れる。

「・・・むう、知れた事を。今度こそ世界を手にする為に決まっておろつ。

かつては神器王によって我が命は断たれたが、今度はそうはいかん。ヨツンヘイムこそが世界を統べるに相応しい存在だという事を示してやるつ。

管理局だと？ くだらん。その上、科学へと身を墮とした魔導師？ そのようなものなど生きる価値の無い存在よ・・・！」

「黙れ！ 現代の魔法は、古代の・・・大戦時の魔術に比べればずつと優しい！  
それになんだ？ ヨツンヘイムが世界を統べるに相応しい！？  
そんなくだらない考えの所為で大戦が起こり、何百という世界が滅んで、数えきれない人命が失われた！」

私は脳天振り下ろしを諦めて、右足の蹴りをアグステインの鳩尾に打ち込む。

よろけたところに“キルシュブリューテ”の斬り上げ。

二刀の氷剣を弾き飛ばして、“キルシュブリューテ”の刺突をすぐさま放つ。

だけどアグステインの両手にはすでに新しい氷剣が握られていて、二刀による剣戟によって刺突の軌道を逸らされた。

だけどすぐさま横薙ぎ。また受け止められるけど、今度は防がせない。

「私も・・・私もその大戦の所為で死んだんだッッ！！」

怒りを“キルシュブリューテ”に籠め、全力で振り切る。

氷剣を切断したけど、アグステインはしゃがむことで紙一重で避けた。

追撃。けどその前にアグステインは、

ゲバルド・ラファガ  
神速獣歩

高速移動法で私から離れる。

「だからなんだ？ 騎士ならば戦死は本望だろう？」

さて、続きだ。だがこのような下界でも我を楽しませてくれた者も

居る。

名は確か・・・メサイア・エルシオン、とかいう男の亡霊だったか。あやつの中に渦巻く復讐心は実に気持ち良かった。結局は貴様に消されたがな」

私がディアマンテを消す前、彼が最期に言った“王よ、愚かしき者共に死の鉄槌を”っていうセリフ。

王って最初はセレスの事だと思ってた。だけど、ディアマンテの言葉はアグステインの事を指していたんだ。

「ゆえに、余興の時間は終わりだ。これより我が直接世界を統治しようというのだ。これで満足か、剣神よ」

アグステインの身体が光の粒子となって分散した。

そしてすぐに収束。ディアマンテの姿から、正しくアグステイン本来の姿になった。

外見年齢は30代前半。蒼いツンツン髪。灰色の瞳。服はヨツンヘイム皇族の赤を基調とした金の装飾が施された戦闘甲冑で、地球で見た闘牛士の正装のようなものだ。

そして生前、私にちょっかいを出してきたあの頃の姿だ。

「・・・フ、フフフ・・・アハハハ・・・！」

ええ、満足よ。もう十分理解した。アグステイン、貴様はこの場で消さなければならぬ存在ということが・・・ね!!」

この世界を支配するとほざくクズ王アグステイン。

やっぱりコイツはもうこれ以上存在してちゃいけない。だから、

「とつとつ消えろおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！」

十 十 十 十 十 十 十 十

フィレスを見送ってから数分、転送装置からなのはが姿を現した。それになのはが背負っているのは紛れもないセレス。

私とついさつき目を覚ましたルシルは、「なのは！」と呼びかけながらなのはへと駆け寄る。

なのはも気づいて「フェイトちゃん！ ルシル君！」と少しスピードを上げて歩きだす。

私はなのはを見回して軽傷である事を確認。そしてセレスへと視線を向け、気付いた。

「……セレス……」

顔は血の気の無い色をしていた。

それに呼吸をしていない。セレスは・・・死んでいた。

フィレスに聞いた通りだ。フィレスが最上階へ行く目的。

もう時間の無い妹のセレスの最期を見届ける為に行くんだ……つて。

信じられなかったけど、その真剣な瞳に私はフィレスを見送った。

そして今、セレスは冷たい身体となって、なのはに背負われて現れた。

フィレスが居ないのも、セレスの最期を見届けたからなんだろう。

私となのははルシルへと視線を移す。

ルシルはもしかしてこうなる事を知っていたかどうか訊く為に。

私達は口を開く前に、ルシルが先に告げてきた。

「詳しい話は後にするが、セレスは元より短命だったらしい。

だからこそ、さらに命を縮める魔術に手を出してまで、彼女自身の願いを叶えようとした。

そういう私もそれを知ったのはフェイトと戦う直前だったんだがな。

・・・」

ルシルの声には悲しみが満ちていた。

私達は何も言えず、ただ沈黙することしか出来なかった。

そして私は「シャルはもう還ったの？」となのはに訊ねる。

「ううん。シャルちゃんはまだ戦ってる」

「え？ 戦ってるって・・・一体誰と・・・？」

もう幹部は居ないはずだ。リエイスとクイント元准陸尉とティード元一尉。

この三人はすでに幹部じゃないと言えるし・・・。

「ディアマンテ。というよりはその存在を乗っ取った、っていうのかな。

乗っ取った人、アグステインなんとかヨツン Heim っていう王様らしいんだけど・・・」

なのはから返ってきた名前を聞いた直後、ルシルから鋭い何かが放たれる。

私となのはは本能的にルシルから距離を取ってしまった。

「アグステイン、だと・・・！」

「知っているの、ルシル」

呻くようにそう口にしたルシルに訊ねる。私は内心ビクビクしてる。本当に今のルシルの事が怖い。私達の様子に気づいたルシルは「すまない」と謝ってため息、殺気を消した。

ルシルはなのはへと歩み寄って「私がセレスを背負おう」と告げて、  
なのはは頷いてセレスを床に降ろした。

「アグステイン・プレリユード・マラス・ウルダンガリン・デ・ヨ  
ツンヘイム。

私が大戦時、その最後の戦いであるヴィーグリーズ決戦で討伐した  
王だ。

奴は連合が劣勢に立たされたと知るや否や前線で戦う臣民を見捨て  
て逃げようとした王族の風上にも置けんクスだ。

君達に見せた記憶でも出てきたはずだが、憶えていないか？ いや、  
憶えていない方がいい」

セレスを背負って出口に向かいながら話を続けるルシル。

憶えてる。ルシルの事だから忘れるはずもない。

なのはと目が合う。二人して頷いた。なのはも憶えてるみたいだ。  
そしてセレスを背負ったルシルが真っ直ぐ出口に向かいだした事に  
啞然とする。

「・・・今の私達が最上階へ向かったところでシャルの助力にはな  
らない。

かえって足手まといになるだけだ。悔しい事だが・・・」

分かってはいた。5年前にちゃんとシャルから聞いた事だ。

対人契約をしたルシルは魔術師じゃなくて魔導師となるってことを  
その世界で人間として生きる事になる以上、ルシル自身の存在がそ  
の世界のルールに合ったモノに変換される。

だから魔術師としての魔力炉システムも、魔導師のリンカーコアに変わって  
しまう。

「シャルちゃんのカートリッジを使ってでもダメなの、ルシル君？」



「アグステインがどれだけの力を備えているのか分からない以上、下手に参戦できない。シャルがなのはを帰したのは、自分達の戦いに巻き込みかねないと判断したからだろう。だからなのは、フェイト。彼女の想いの為にも私達は生きて帰らねばならない。分かってくれるな？」

「……うん」

ルシルの真剣な表情、そして本当に悔しげな声に、私となのはは否応なく頷くしかなかった。

そして私達は“エヘモニアの天柱”の外へ出た瞬間、遙か頭上から小さいけど爆発音が連続で聞こえた。

シャルは戦っている。私達の世界の為に。今もこうして……たった独りで。

「なのは、ルシル。……悔しいね……」

「うん」「ああ」

結局最後は人任せ。私達の生きる世界なのに。

この世界で生きる私達はただ去り、かつてこの世界を生きたシャルが戦う。

それが無性に辛くて悔しくて悲しかった。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

炎牙崩爆刃

炎熱の斬撃を飛ばし、アグステインも氷雪の斬撃を飛ばす。もう何回繰り返し、また衝突して相殺される。

皇帝アグステイン。当時の二つ名は冷血王アグステイン。自分が良ければそれでいい、という自己中心の権化。

全ては部下任せ。だというのに気に入らなければ即死刑。だから前線にはなかなか出なかった。で、ヴィーグリーズ決戦でのこのこ出てきてルシルに殺された道化。

(だっていうのに・・・コイツ、強い・・・！)

ヨツンヘイム皇族に名を連ねる魔術師。その頂点たる皇帝の名は飾りじゃなかったということか。

さっきからコイツはキツチリ私の攻撃のタイミングを計って反撃してくる。

面倒だ。さっさと決めてやる。その目に焼き付けよ。これが劍神シヤルロツテの・・・劍閃。

「目醒めよ、キルシュブリューテ・・・！」

限定解放。解放時間は10秒。十分だ。

私は閃駆で間合いを詰めながら“キルシュブリューテ”を鞘へと納める。

アグステインの顔色が変わった。さすがに知っているか、私の真技を。

9秒。私は射撃魔法ロイヒテン・プファイルを斉射。

8秒。アグステインは冷気の甲冑を纏ってプファイルを凍結防御。

7秒。右足に炎熱魔力を纏わし前転、床に思いつき踵落とし。

6秒。二人の間に立ち込める爆炎。

5秒。私は爆発の反動でアグステインを跳び越えるように爆炎を突っ切って跳躍。

4秒。アグステインの背後を取った。

「真技……牢じ　　つな……!？」

私は真技の発動直前で“キルシュブリューテ”を抜く事が出来なかった。

やられた。牢刃の弱点を知られてた。

アグステインは抜こうとした“キルシュブリューテ”の柄尻に回し蹴りをして抜けないようにした。

牢刃・弧舞八閃の発動条件は居合抜き。それを封じられれば不発で終わる。

この真技を封じられたのは生前では風迅王イヴィリシリアただ一人だけ。

死後、テスタメント界律の守護神となつてからは防がれる事はあつても不発にされた事は一度も無いのに……。

(コイツ……!)

よりもよつて、こんなクズ王に不発にさせられるなんて……。今まで以上の怒りが私の心に満ちていく。生前からの憎き相手だから当然。

硬直している私とアグステインだったけど、アグステインから「剣神の真技もまるでお遊戯よの」と安い挑発。

乗るな、私。乗ればコイツの思うつぼ……。なんだけど……!

「いつまで私のキルシュブリューテ剣神の魂を足蹴にしてんのよ!!」

私は反時計回りに回転することで、左足を乗せていた“キルシュブ

リユーテ”が突然無くなったことでガクンと体勢を崩しすアグステイン。  
その一瞬の隙に回転した遠心力を利用して、アグステインの背中へと魔力を纏わせた鞘を叩きつける。  
うめき声を漏らしたアグステインが吹っ飛んで、最上階から……落ちた？

「あーもう！ なに落ちてんの！」

落とした自分を棚に上げて、私はアグステインが落ちた場所へと駆け寄り下を覗き込む。

あー、居たよ。壁に氷剣を突き立てて足場にしてるアグステインが。私は追撃。炎の斬撃を飛ばす炎牙崩爆刃をアグステイン目掛けて放つ。

あろうことかアグステインは足場の氷剣から跳んで私の斬撃を避けた。

確かアグステインは飛翔術式が使えないはず。

「追撃のチャーンズ」

私は床から宙に飛び出して紅翼を生成。

落下するアグステイン目掛けて突撃して、

「そおおおおらあー！ ツツ！」

光牙十紋刃

十字斬を飛ばす。アグステインは氷剣に吹雪を纏わせて、

十紋刃を相殺してきた。だけど、今の私は大戦時と違って空を飛べる。

さらに距離を詰め刀身に炎を纏わす炎牙月閃刃の連撃を繰り出す。アグステインは宙で体勢を整えられないというのに器用に二刀の氷剣で捌ききる。

焦るな。冷静に。空である以上、私の方が有利なんだ。地上に着く前に……。

「貴様を斃す！」

「我は世界を統治する王ぞ！」

ディアブロ・クエルノ  
悪魔の角

私の周囲に氷の杭が50以上は展開された。

「だからそれを止めるって言うてんの！！」

迫る氷杭を“キルシュブリューテ”や炎を纏うことで迎撃防御。そのまま突撃して全力で薙ぎ払いを放つ。アグステインは避ける事が出来ないから氷剣を脇に構えて防御。

「一騎士如きがヨツンヘイムの覇道を止められるものか！！」

アグステインは氷剣を掲げるようにして“キルシュブリューテ”を逸らし捌く。

だけど私はすぐに一回転して遠心力を利用した一閃を振るって、また防御したアグステインを“天柱”の外壁へと叩きつける。

「魔術師わたしたちの時代はとっくの昔に終わってる。いい加減気づけ」

「フフ・ハハハ。我が存在している以上は終わってはおらん。それに終わっているというのであれば、また起こすまでだ。」

いや、それが今の我の目的だ。我独りで魔導師共と戦争をし、打ち勝ち、勝利の美酒で世界統治を祝う。

ふむ。これほど面白い祭りはそうはない。剣神、貴様もそう思うだろうっ？」

めり込んだ壁から立ち上がるアグステイン。

コイツにはもう何を言っても無駄だって、私は理解していたはず。そうだ。もう話す事なんてない。だから止めを刺そうとしたところで、

「愚かよな」

「なに・・・？」

アグステインが私じゃなくてもっと遠い場所を見据えてそう呟いた。畏か？ そう警戒しながら振り向くと、こっちに向かってくる“ヴォルフラム”が視界に入った。

何で来たの？ 当然なのは達を迎えに来たに決まってる。でもタイミングが良くない。

「幻想一属シユゼルヴァロードの創造主の御名において召喚する」

ハツとしてアグステインへと視線を戻すと同時に“キルシユブリユ―テ”を振るう。

ただとすでにそこにアグステイン居なかった。視線を周囲に彷徨わせてそして発見。

地上へと落下しながらも魔族召喚の儀式を行っていた。  
私は儀式を中断する為にすぐさまアグステインへと突撃しながら、

### 光牙閃衝刃

最速の一撃、真紅の魔力槍を幾つも放つ。

だけど、アグステインに当たる直前、闇色の炎が盾となって私の一撃を防いだ。

業火の眷属セルフアードだ。それだけじゃない。

地上に落ちる前にアグステインが降り立ったのは真紅の魔力鳥、赫羽の荒鳥フアノ。

その周囲に純雷の皇馬アルトワルドが一頭。

そして、黒鎧の毒精フォヴニスー一体が地上に居た。尾が“ヴォルフラム”に向けられているのが視認出来る。

「まずは貴様が投げ所としていた者共からだ」

「やめるおおー……ッッ!!」

十 十 十 十 十 十 十

私は冷たくなったセレスを背負い、こちらに向かっていているという“ヴォルフラム”を待っていた。

セレスの死を聞いたはやては気丈に振舞いつつもやはり目の端に涙を浮かべていた。

友をこのような形で喪ったのだ。泣いていいはずなのに、はやては耐えていた。

通信も切れ、私達はただ待つ。私の左隣にはなのは、右隣にはフェイトが佇んでいる。

先程から会話は無い。それも仕方がない事だろう。

「ん？　なんだ、この魔力反応は・・・？」

「どうしたの、ルシル君？」

そんな時、前方から妙な魔力反応を感知した。

この身にすでに神秘はないとしても、感知出来るだけの力はある。

私はフェイトとなのはを庇うように前へ出、魔力反応のある地点を見詰める。

そして、ヨツンヘイム魔法陣が展開、そこからフォヴニスが召喚された。

召喚されたばかりのフォヴニスの尾は、艦体を見せた“ヴォルフラム”に向けられていた。

「くそ、アグステインの仕業か！！」はやて！　フォヴニスが撃ってくるぞ、防御だ！」

はやてに通信を入れる。すぐさま“ヴォルフラム”にシールドが張られたのが分かる。

フェイトとなのはが砲撃を撃たせないためにフォヴニスへと突撃していく。

私は無力だ。神秘を扱えなくなったその瞬間、私は魔族と戦う術を失った。

フェイトとなのはの二人はフォヴニスへと砲撃や斬撃を与えていく。しかし、

### フォヴニスの光

尾から翠色の砲撃が“ヴォルフラム”へと向かって放たれた。

シールドに衝突。防ぎきれるかと思った矢先、シールドを突破し艦



体を掠っていった。

発射ギリギリでフォヴニスを討ったおかげだろう。それで尾が揺らぎ砲撃の射線がずれたんだ。

安堵しつつゆっくりと消滅していくフォヴニスを眺める。

空を見上げ、視力を強化する。シャルとアグステイン、それに魔族が何体か居た。

「アグステイン！・・・ん？ セレスの亡き今、もしかすると・・・」

追加召喚された魔族を見た私は、魔導師となった私でも戦える手段に気づき、シャルへと念話を繋げる。

『聞こえるか、シャル！ 界律が正常に戻った今、君の“アレ”が発動できるはずだ！』

十 十 十 十 十 十 十 十

フォヴニスの砲撃は“ヴォルフラム”に直撃することなく掠っていた。

おそらく最期、高町なのはとフェイト・テストロッサの攻撃によって射線をずらされたのだろう。

「魔族。ゼルファードにフォヴニス、ファノにアルトワールド。

そして・・・ヨツンヘイムの王・・・アグステイン言ったか？

いくらシャルちゃんでもたった一人やとあの数はキツイはずや・・・

！

ブリッジの艦長席から立ち上がった主はやては決意したかのようにそう告げた。

私は「出ますか？」と訊ねると、主はやては「来てくれるか、リエイス？」とそう返してきた。

答えは決まっている。私は「もちろんです」と返す。

「シグナム、ヴィータ、リイン、アギト、エリオ、レヴィ、戦闘準備。」

シャルちゃんの負担を少しでも減らすために、私らも出るよ。

シャルとキャロとルールーはなのはちゃんとフェイトちゃんの治療、ザフィーラは護衛。ええな？」

『了解！！』

ナカジマ姉妹とティアナ・ランスターは待機だ。

彼女達の肉親であるアグアマリナとアマテイスタが還った事はシグナムからの通信で聴いている。

主はやてはそんな彼女達に待機を無言で指示。

しかし、ティアナ・ランスターとスバル・ナカジマから、『一緒にいきます』との通信が来た。

艦長席にのみ展開されたモニターに、ナカジマ姉妹とティアナ・ランスターの決意に満ちた顔が映し出される。

主はやては少し彼女達の顔を見詰め、「みんなで行くよ」と微笑んだ。

彼女達もまた「了解！」と答え、そこでモニターを切る主はやて。

「行くよ、リエイス」

「はい」

そして私達は、シャルロツテとアグステインの戦いを妨害する魔族討伐に出た。

十 十 十 十 十 十 十

風雅なる赫沫の散々華

ファノの散弾のような羽根を避け、

我が往くは天の霸道

白銀の雷弾となつて突っ込んできたアルトワールドも避け、

慈悲すら許さぬ業火

ゼルフアーダの突進を“キルシユブリユート”で弾き飛ばす。

そこに迫るアグステインの、

インバシオン・ローボ  
制圧せし氷狼

氷狼の群れ。その数軽く50頭越え。

私は一頭一頭相手にするのも面倒だから、広範囲を制圧する光の波を放つ光牙聖覇刃を連続で周囲に放つて、何頭かに噛みつかれながらも何とか一掃する。

通り過ぎていったアルトワールドとゼルフアーダが反転。また私へと突っ込んでくる。

それにファノのくちばしからの砲撃も追加。

「そらそらそら！ 踊り止めると丸焦げにされるぞ、剣神！！」

手を叩いて高笑いするアグステインに私は完全にブチ切れる。

捨て身でいいからアグステインをバラバラにしてやるうかと思いな

がら回避を取った時、ルシルから念話が来た。  
内容は……なるほど。うん、確かに。今来たよ、ルシル。  
ルシルの念話で一気に冷静になれた。感謝だよ。

界律より剣戟の極致に至りし者へ。魔術師としての制限を解放。  
現代に存在するを許されぬモノを討て

「3rd・テストメント・シャルロッテ、了解」

界律からの魔術師としての能力全開放許可を受諾。

身体に満ち溢れる魔力。私は今取り戻す。剣神シャルロッテを。  
アグステインが「何だと!？」っていう驚愕の声を上げているのが  
聞こえた。

「シャル、私にも戦わせてほしい」

ルシルからのお願い。きっと私がルシルから聴く最後の願いだ。

私は「一緒に戦おう」と返し、ルシルからも「よろしく頼む」と返  
ってくる。

アグステインはさらに魔族を追加していく。

アルトワールドが3頭になり、ファノが4羽になり、ゼルファードが  
5体となり、フォヴニスも2体追加、無限の永遠ラギオンも4体召  
喚された。

目を閉じれば感じ取れる。なのはとフェイトがはやて達と合流して、  
追加された魔族との戦闘を始めた。

「さあ、始めようか。剣戟の極致に至りし者シャルロッテの最後の  
契約を!!!」  
ラスト・テスト  
メント

私は、夜空へと変わりつつあったこの世界に“創世結界”を展開させた。

セレスを除く全員を取り込むように、最後の決戦の場を。

十 十 十 十 十 十 十

世界が変わった。私達はいさつきまで“オムニシエンス”に居たのに。

中世の巨大なお城や幾つもの塔が見え、私達は桜の花弁が舞う庭、広大な闘技場となっている場所に佇んでいた。

「すごい・・・！」

私はフェイトちゃんと一緒にシャルマル先生とキャロの治療の最中だった。

それが突然視界は光で閉ざされて、気が付けばこの光景。みんなも啞然としている。

でも、すぐに冷静になる。シャルちゃんとルシル君の記憶で観たし、現に私はJS事件で一度体験したことがある。

そうだ、ここは“創世結界”と呼ばれる世界。魔術師達の目指す頂点のひとつ。

「我が城に集う親友達！ 私と一緒に戦ってくださいか!？」

シャルちゃんが蒼空となった天上で叫んだ。

魔族もこの光景に驚いているのか動きを止めている。

でもそのおかげで私達はそれぞれ顔を見合わせることが出来て、「もちろん！」と答える事が出来た。

『あ、それとこの世界での魔法は全て魔術に変換される。だからカートリッジなしでも戦えるから。……その、ありがとう、みんな』

シャルちゃんからの念話だ。最後の感謝を聴いて俄然やる気が出た。よし！ そうと決まれば……。

「行くよ、みんな!!」

治療が一気に終わって、私達は戦闘を再開した。

十 十 十 十 十 十 十

シャルの“創世結界”で始まる最後の戦い。

私はエリオとキャラの三人で、強敵だったフォヴニスと戦う。

「フェイトさん、エリオ君！ ブースト行きます!!」

でもキャラのサポートで強化された私とエリオの敵じゃない。

「ストラーダ、ツェアシユラーゲン・シユピースッ!!」

エリオの“ストラーダ”から放たれた雷槍が光を溜めていたフォヴニスの左ハサミに直撃、粉碎した。

そして私はライオットザンバー・カラミティの“バルディシユ”を振るって、フォヴニスの右ハサミを斬り落とす。

ソニックムーブ

一気に尾へと接近して、ハサミと同じように斬り落とす。

「一閃必中!!」

メッサーアングリフ

エリオは“ストラダ”によるトドメの一撃をフォヴニスの頭部に撃ち込んだ。

そのまま頭部を裂いていく。裂かれた部分から翠色の魔力が漏れ、フォヴニスが崩れ落ちた。

動かなり消えていくのを確認して、私は空へ。エリオとキャロはラギオン数体へと向かう。

十 十 十 十 十 十 十

「うおおおおおおッ!!」

鋼の軛

狼形態のザフィーラさんいくつもの拘束糸がフォヴニスを腹部から貫く。

わたしはそれでも動き続けるフォヴニスへ向かって、

ハーツィース・ドライヴ  
「紫光掃破!!」

特大砲撃を撃ち込む。それとほぼ同じタイミングで両ハサミから放たれる砲撃。

わたしの砲撃の脇を通って、真っ直ぐわたしに向かってくる。

「クラールヴィント、お願い!!」

## 風の護盾

シャマル先生の防御魔法が翠色の二つの砲撃を完璧に防いだ。シャマル先生の「レヴィちゃん！」という呼びかけに「はい！」と力強く答えて、わたしは瞬走壱式で最接近。

### 翠閃に穿たれる罪人

わたしの砲撃によってヒビが入りまくったフォヴニスから、雨のように降り注ぐ光線を放たれた。

わたしは直進する。ザフィーラさんの鋼の輓が幾つも折り重なってトンネルを作ってくれた。

さらにシャマル先生の障壁もトンネルの上に展開されている。

だからわたしは何も恐れずに直進できる。そして、「モード・バスター」へと形態を変え、

「食らえええええー！ー！ー！ツツ！ー！」

ハーツィズ エクステンド  
紫光掃破・昇華

スタンバイしていた砲撃を、フォヴニスの頭部目がけて撃ち放った。すみれ色の閃光が晴れて、ようやく視界がクリアになる。

わたしの目の前には、頭から尻尾の方まで穴が開いたフォヴニスが居た。

そしてゆっくりと崩れ落ちて行って、消滅した。

『やったね、レヴィ』

ルーテシアからの念話に、わたしは笑顔で「みんなの勝利だね」と返した。



「レヴィちゃん、次はラギオン掃討よ！」

「了解です！」

シャマル先生の指示に答え、ラギオンとかいう魔族の元へ急ぐ。

＋  
＋  
＋  
＋  
＋  
＋  
＋

「レヴァンティン・・・！」

シュランゲバイセン

“レヴァンティン”の連結刃による結界を展開させ、ファノ三羽の翼を斬り落としたところを閉じ込める。  
そこに主はやての、

『「遠き地にて、闇に沈め」』

デアボリック・エミツシヨン

殲滅魔法が発動される。翼が無いファノ三羽は為す術なく呑み込まれる。

私は“レヴァンティン”をシュベルトフォルムへと戻し、

「アギト、火竜一閃」

アギトにそう告げる。今ので消えてくれればいいが、もし残っているのなら、と。

アギトは『よっしゃ！ アホ鳥どもに食らわして、焼き鳥にしてや

れ！』と意気揚々と返した。

デアボリック・エミツシヨンの効果が切れ、その姿を現したファノが三羽。

所々が崩れ、今にでも消滅しそうだが反撃される可能性もある。ゆえに、

「『剣閃烈火！！』」

火竜一閃

左手に生成した炎剣をファノに向かって薙ぎ払う。

火竜一閃はファノ二羽の胴体を寸断し、一羽の頭部を消滅させた。三羽のファノはゆっくりと落下を始め、消滅していった。

『シグナム。次に行くよ！』

「はい！」

ゼルファードと戦うヴィータと高町の元へと向かう。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

「ううおおおおおツツ！！」

振動拳

ウイングロード上に来た一体のラギオンを殴り付ける。

大きく弾き飛ばされたラギオンの先、同じようにウイングロードとエアライナー上に居るギン姉とノーヴェが構えを取って待っていた。

## リボルバースパイク

まずノーヴェの回し蹴り。鐘を鳴らしたかのような甲高い音が響く。

## ストームトゥース

ギン姉のコンビネーションが決まる。

打ち下ろしによる防御破壊。打ち上げる直接攻撃に二連撃。

あたしは碎けていくラギオンへ最接近。もう一度振動拳を打ちつける。

ガシャアアン！と音を立てて、ラギオンは粉々になっていく。

「やったわね、スバル」

「うん。ギン姉、ノーヴェ。次に行こう！」

「えええ！」「おう！」

視線の先、ティアとチンクとウエンディの三人組と、エリオとキヤロとディエチの三人組が残りのラギオンと戦っている。

一体居ないことから、きつとティア達が片付けたんだ。

あたし達も遅れていられない。お母さんの娘として恥ずかしくないように。

十 十 十 十 十 十 十

「エクセリオン・・・バスタアアアーーーーッ！！」

空に蠢く黒い蛇のようなゼルフアーダに目掛けて砲撃。

ゼルフアーダは輪になって、その輪の内を通過する私の砲撃。

砲撃をやり過ぎたゼルファードはそれが嬉しいのかウネウネ踊り出して、両端が人の手の平に変化、拍手を شدした。

「遊ばれてんじゃねえかよ！　しっかりしろ、なのは！」

「ヴィータちゃんこそさつきから遊ばれてるよね！」

「うっせえな！　あたしが遊んでやってんだよ！」

『いいえ、ヴィータちゃんの方が完全に遊ばれてますよ』

ヴィータちゃんの“アイゼン”の一撃はさつきから空振り続き。

そしてフリーゲンを放てば、自分の身体である炎をバットの様な棒状に変形させて打ち返してくるゼルファード。

さつきからカキーン！と音がしているのはその所為だ。

これを遊ばれていると言わなければなんて言うだろう、と少し真剣に考える。

「いい加減にしゃがれってんだ！！」

シュワルベフリーゲン

また何基かのフリーゲンを放つ意固地なヴィータちゃん。

ゼルファードはまた幾つも枝分かれした棒状に変形して、フリーゲンを一度に全て打ち返した。

ホームランだった。ランナー回れ回れ。じゃなくて、私は“レイジングハート”をバット状のゼルファードへ向け、

エクセリオンバスター

砲撃を撃つ。ゼルフアーダが何かしようとしたけど間に合わずに呑み込まれて消滅した。  
ヴィータちゃんは余計な事をみたいなの視線を向けてくるけど、今はチャンスだったし。  
すると私がさつきまで相手していたゼルフアーダが突進してきた。さらに大人しかった他のゼルフアーダまで。どうやら怒りに触れてしまったみたい。

シュランゲバイセン

ハーケンセイバー

ナイトメアハウル

連結刃がゼルフアーダの行く手を遮って、一瞬動きを止めたところにフェイトちゃんとはやてちゃんの魔法が直撃する。  
私はそれを見逃さずにもう一度エクセリオンバスターを撃って、ゼルフアーダを掃討した。

「なんやヴィータ。遊ばれてたなあ」

「守護騎士としていかなものかと思うぞ」

『姉御。あんだだけ打たれちまうと交代ものだけ？』

『ヴィータは学習しない猪突猛進娘、つと・・・メモメモ』

「あ、てめっ、なにメモとか言ってるんだよ、リエイス！」

はやてちゃん達に色々言われてるヴィータちゃん。

それを眺めているとフェイトちゃんが「大丈夫？」と声を掛けてきてくれた。

私は「うん、大丈夫」と答えて、轟音がし続ける城の方へ視線を移す。

「アグステインはルシルとシャルの因縁だから邪魔出来ない」

「うん。私達は待とう。シャルちゃんとルシル君を出迎える為に」

十 十 十 十 十 十 十

「アルトワールド、神器王と剣神を撃ち滅ぼせ！！」

疾駆せし破軍の騎馬隊

なのは達を巻き込まないように移動した場所、本城のエントランスホール。

強力な防衛力を持つ大ホールで私とルシルは、アグステインとソイツが率いるアルトワールド3頭と戦っている。

アルトワールドが数えきれない群となって放電しながら突撃してる。

「シャル！」

「お願い！！！」

ルシルのやろうとしてしている事を察して、私は大ホール端へ退避。その直後に、

輝<sup>コト</sup>き燃えろ、汝<sup>ケルビエル</sup>の威容

円陣が大ホールに展開される。効果範囲は直径60m。

ギリギリ私に届かない位置にまで円陣のラインが引かれ、アルトワ

ルドとアグステインを呑み込むように蒼炎が噴き出した。

『……ダメか。シャル、戦闘準備』

『了解。ルシル、私を巻き込まないですよ？』

『そんなヘマはしない。君とどれだけの付き合いをしてきたと思ってる』

蒼炎の中、アルトワールドが放電することで発生した半球状の障壁を展開。

アグステインを守るように展開されているのが見て取れる。

二階のバルコニーに陣取っているルシルからの念話に答え、“キルシュブリューテ”を振り切って魔力刃を飛ばす。

(それにしても本当に反則よね、ルシルってばさ……)

ルシルはもう魔術は使えない。でも魔法となっても魔術の術式は使える。

そう、神秘が無くなったこと以外、ルシルは魔術師と変わらない。

その分、“創世結界”は扱えないから複製された異世界の術式や武器、神器は二度と使えないし、ルシルの固有武装“グングニル”も使えない。

だからルシルはいつかデバイスを持つだろう。きっと槍型だろうなあ、と思う。

「当たれッ!!」

私の魔力刃は蒼炎を裂き、アルトワールドの雷障壁を寸断、アグステインに当たろうというところで、一頭のアルトワールドが盾になった。

蒼炎も消える。それと同時に私は閃駆でアグステインへ疾走。

「最後まで我の盾として役割を果たせ、魔族！」

消滅しかけているアルトワールドを足蹴にして、私の行く手を遮る壁として利用。

私は怒りをぶちまけずに瞳に宿してアグステインを睨みつける。小さく「ごめん」と消滅していくアルトワールドに謝り、

炎牙月閃刃

真っ二つにして突っ切って、アグステインに最接近する。

アグステインは舌打ち。それだけで胸がスツとする。ザマア（笑）私は“キルシユブリユーテ”を一閃。回避を取ったアグステインの前髪を浅く切り裂いた。

あーもう惜しい。追撃しようとしたところで、左右からアルトワールドが突っ込んできた。

私はルシルを信じて、さらにアグステインへと踏み込む。

殲滅せよ、<sup>コード</sup>汝の軍勢<sup>カマエル</sup>

ルシルの槍群が二頭のアルトワールドに降り注いで貫く。そして槍は爆発して、アルトワールドを消し飛ばした。

「これで貴様も終わりね、アグステイン！」

双牙炎雷刃

「また我が覇道を拒むというのかッ、神器王オオオーーッッッ！」



アグステインが叫びながら私の攻撃を必死に避けきり、氷剣で反撃しようとした。  
「……」

コード・ウル  
弓神の狩獵

ルシルの蒼い魔力弓から放つ長矢型砲撃がアグステインの氷剣をピンポイントで粉碎した。

動きを止めたアグステインへと“キルシュブリューテ”を横薙ぎ。それでも新たに作り出した氷剣で必死に防御するんだけど、生前と同じ身体能力となった今の私の一撃は防げない。

私の一閃は音も無く氷剣を真つ二つにして、アグステインの右腕を浅く裂いた。

漏れるのは血じゃなく魔力の粒子。

「おのれおのれおのれッ！ この朽ちぬ身体ならば永遠に在り続け、今度こそ世界を統治出来るというのにッ！！」

「有限は体を縛り、無限は魂を縛る。無限と永遠の命なんてものは単なる悪夢だということを、覚えておきなさい」

「……アグステイン。貴様はシャルに言ったそうだな。」

「世界を統治するためにまた世界に大戦を起こすのもいい」と……  
「！」

セカンドパレルセット  
第二波装填

ホール天井近くに展開される100は超える様々な属性を持つ槍群。

私は巻き込まれないように避難する。直後、

「もうそのような世迷言を口にするな……！」

ジャツジメント  
蹂躪粛清

雨のように槍が降り注いでくる。

一斉にじゃなくてアグステインの逃げ場を作って誘導しておいて、別の槍でその逃げ場諸共潰す。

ルシルもやつぱりお怒りのようだ。そしてカマエルも降り終え、私は支柱の陰から頭だけを出す。

「バカ……な……せつか、く……こうして……世界に……  
干渉……」

ホール中央、身体中に槍が突き刺さって倒れているアグステインが居た。

哀れなものだ。魔族を召喚しなければ、きっと私の方が負けていた。アグステイン。結局自分の“力”を信じ切れず、勝利を魔族に委ねた事で自分に敗北を招いた王。

私はゆっくりホール中央へと歩き出して、二階部分から支援攻撃をしてくれたルシルも飛び降りて着地して私に並ぶ。

「トドメは君が刺すか、シャル……？」

「……うん。私にやらせて」

“キルシュブリューテ”を強く握り、祖国を大戦に巻き込み、家族と仲間、私自身を死に追いやった憎き王へ歩み寄る。

それにしても、まさか最後の契約で復讐を果たせるなんて思いもし

なかった。

倒れているアグスティンと目が合う。彼はフツと微笑んだ後、

「ゆえに認めるものかツツ!!」

最後の悪あがきをした。視界が強烈な閃光で潰される。

次に襲ってきたのは強烈な爆風。踏ん張るけど吹き飛ばされる。

壁に叩きつけられると思ったけど、そうなることなくそのまま吹き飛ばされ続ける。

訳も分らず閃光の中で体勢を整えようとしたとき、誰かに抱きしめられる感触を得た。

次に私を抱えた誰かが着地する衝撃が少し伝わってくる。

この感じは・・・そう、やっぱりあなただよね。

「ルシル・・・」

「大丈夫か、シャル・・・」

目を開けると、私をお姫様抱っこしてるルシルの顔が見え、次に周囲を見る。

そしてようやく状況がハッキリとした。

私の“創世結界・劍神の星天城”<sup>ヘルシャー・シュロス</sup>の本城の前半分が瓦礫の山と化していた。

「シャルちゃー！！！！ん！！」 「ルシル！！！！！！」

私とルシルの名を呼ぶ声が聞こえる。振り向くとなのは達がこっちに向かって来ていた。

私はルシルに降ろしてもらって、私達の側に辿り着いたなのは達を見る。

見たところ大きな怪我はしていない。ほぼ無傷で魔族を掃討するその強さ、やっぱりすごい。

「あはは・・・また逢ったね、なのは」

「え・・・あ、うん。また逢ったね、シャルちゃん」

ついさっきお別れを済ませたのに、なのはやフェイト達とまた再会した。

でも、やっぱりゆっくりとお別れをしたいと思う私にとっては嬉しい事だ。

「シャルちゃん、アグステインとかゆうんはどうしたんや？」

はやてに言われて、ここで初めてアグステインの姿が見えない事に気づく。

私達はそれぞれ周囲を見渡すけど、アグステインの姿が見えない。まさか自爆？と思うけど、すぐにそれはないと切り捨てる。

「おのれ！！　なぜ高貴なる我がこのような存在になってまで・・・」

どこからともなく響いてくるアグステインの憎悪に満ちた声。

するとルシルとシグナムとリエイスが同時に「上だ！！」と叫んだ。一斉にその場から離れる。見上げるより先に離れたのはほとんど無意識だ。

その直後、頭上から何かが落ちてきた。轟音と地震と衝撃波、そして瓦礫が私達を襲う。

瓦礫は運よく当たらず、衝撃波も何とか耐えて、すぐさま何かが落ちてきた方へ振り返ると、

「……っ、お前はどこそそのRPGのラスボスかああー  
ーッッ!？」

そうツツコミを入れてしまった。

アグステインは居た。居るんだけど、召喚されていた魔族達と融合して怪物になっていた。

足元はサソリであるフォヴニス。その背中にはアルトワールドとゼルファードとラギオンが折り重なるような胴体があつて、白銀の雷で構成された右腕、闇色の炎で構成された左腕。

胴体の背中からはファノの赫い翼が生え、頭部らしき部分にはアグステインの上半身。

『かつての、夜天の書の暴走プログラムを見ているようだ』

はやての内に居るリエイスからの念話が届く。確かにそんな感じだ。さて、今、怪物と化したアグステインを包囲するように私達は配置についているわけだけだ。

これはちょうどいい。絶対包囲のまま集中砲火してくれる。

「最早誰一人として生きては帰さん……!」

頭上からアグステインの声が聞こえてくる。

私は念話で、全員に『空を飛べる子はアグステインを狙つて。飛べない子はフォヴニス部分を集中砲火。お願い出来る?』と告げる。返つて来たのは「了解!」の一言。それがすごく嬉しかった。

私は「それじゃあ……戦闘開始!」と号令を掛ける。

本当は、魔術師としての能力を全て解放された今、私一人でも十分勝てる。

だけど、これが最後だつて言うなら、私はなのは達と一緒に戦つて

おきたかった。

(我が儘よね、こんなので・・・)

空戦が出来る私達は空へ上がって、出来ないスバル達とレヴィは足であるフォヴニス部分へ攻撃を加え始めた。

「これで最後だ、アグステイン!!」

### 風牙真空烈風刃

突風の中に真空の刃を詰め込んだ一撃を放つ。

アグステインは烈風刃をアルトワルドの雷腕で消滅させる。

「なのはとはやてとヴィータは射撃・砲撃で炎腕と雷腕に集中砲火。フェイトとシグナムは私と胴体へ。シャル、アグステイン本体は君に任せる」

「……………了解!」

「任せて、絶対に決めるから!」

ルシルの指示の下、私達もアグステインや胴体部分へと攻撃を加え始める。

「今度こそ、我がヨツン Heim が勝利する! 敗戦の屈辱などもうたくさんなのだ!!」

雷腕と炎腕が広げられて、私達の居る高度へ向けて無数の雷弾・炎弾が放たれる。

一斉に回避行動。避けきつた子から攻撃態勢に入る。

「レイジングハート!!」

デイベインバスター・エクステンション

「行くぜ、リイン！ アイゼン！」

『はいです!!』 Jawohl !!

コメートフリーゲン

「行くよ、リエイス！」

『ええ、行きましょう!!』

クラウ・ソラス

なのは達の砲撃・射撃魔法が怪物の両腕を削り取っていく。そこにルシルとフェイトとシグナムが胴体部分へと最接近。私もアグスティンへと向かって飛ぶ。その最中にルシル達の会話が耳に届く。

「魔導師になつたからと言って遅れるなよ、セインテスト・・・！」

『遅れんなよー』

紫電一閃

「誰に向かって言っている、シグナム、アギト。今の私は絶好調だ・

・・・!

それより、私の攻撃に巻き込まれてくれるなよ、シグナム」

「コード殲滅せよ、カメル汝の軍勢

「魔導師になつてもこんなに強いなんて・・・これじゃあ私がルシルを守れないよ」

ジェットザンバー

私に向けられる火炎砲と雷撃砲をかわしつつアグステインの元へと辿り着いて、“キルシュブリューテ”を一閃。  
直後、ガクンと体勢を崩した怪物。その所為で薙ぎ払いが空を切る。下を見ると、スバル達がフォヴニスの両ハサミの砲撃に対処しつつも足を破壊していた。

「知れ、アグステイン。お前は神器王ルシルが相手じゃなくても負ける」  
視線を戻し、アグステインへと静かに告げる。

「なのは、炎の鞭がそっち行つたぞ!」

「大丈夫、かわせる!」

「ヴィータ! 雷弾や、気を付けてな!」

雷と炎の両腕も再生しきる前になのは達の集中砲火で崩れていく。

「どうした、シグナム。もう疲れたか?」



「何をバカな。お前こそ疲れているのではないか？ 動きが散漫になってきたぞ・・・？」

「二人とも、何を張り合ってるの・・・？」

胴体部分も再生するより早く損傷が増えていく。

派手な魔法じゃなくても十分強力な三人（ルシルは例外だけ）だからこそだ。

「魔術師より格の低い魔導師が我に傷を負わせたのは貴様が手を貸したからにすぎん。

そう、剣神、貴様がこの創世結界を張らなければ、あのような現代まの人間共に後れを取る我ではない！！」

エスパーダ・デ・ラケリマ  
涙する皇剣

上半身だけとなっても私と戦うつもりらしい。片手に氷の大剣を作り出す。

なら少し付き合っただけよ。そしてハッキリと敗北を実感した上で退場してもらおう。

もう私達の勝利は揺るがない。“特務六課”。私の親友達と協力すれば、古代の王ですら斃せる。

下から爆発が起きる。それを合図として私はアグステインへと突撃。鞘に納めた“キルシュブリューテ”を完全開放する。

「地獄へ還れ、アグステイン・プレリユード・マラス・ウルダンガリン・デ・ヨツンヘイム！！」

「うおおおおおおおッ！」

完全解放されて、“キルシュブリューテ”っていう神秘より下の存在を全て断ち切る“絶対切断”能力が刀身に宿る。その必殺の一撃で、その以下の存在、振るわれた氷の大剣を音も無く切断する。

「せめてもの手向け・・・受け取りなさい！！」『全員アグスティンより離脱。真技で決める』」

私は大きく距離を取って、視界内に存在する怪物を見据える。

みんなが一斉にアグスティンの怪物から離れていくのを確認して、もう一度“キルシュブリューテ”を鞘に納める。

我が最強の真技、牢刃・弧舞八閃に並ぶ、もうひとつの斬撃を・・・ここに。

「真技・・・！」

“キルシュブリューテ”の柄を取る。そして、

「飛刃・翔舞十閃！！」

「剣神・・・シャルロツテエエエー！！！！」

抜き放つ。と同時に絶対切断の概念を持つ桜色の3m近い刃が十閃放たれる。

飛刃は一直線にアグスティンへ到達。そのまま怪物ごとバラバラに斬り刻んでいく。

あれならきつと“ディオサの魔道書”も一緒にバラバラになったはずだ。

「まったく。シャルロツテ、なんて馴れ馴れしく呼ばないでほしい

わ

長い後ろ髪を払いつつ、消滅していく怪物の破片を見詰めながらそう呟く。

アグステインも消え、私はゆっくりとみんなの待つ地上へ降下していく。

そう、今度こそ本当のお別れを告げる為に……。

私はゆっくりと地面に降り立つ。出迎えてくれたみんなにピースサイン。

「ありがとう、みんな。勝てたよ、みんなのおかげで」

今の私に出来る笑みをつくる。みんなも笑顔になって、歓声を上げる。

失ったものは多く、手にしたモノは何も無い。だけど、今、事件は終わりを迎えた。

「……さてと。よし、笑顔のまんまでお別れといこう」

そう言うと、歓声の音がピタツと止まった。

私は指を鳴らして、“ヘルシャー・シユロス 劍神の星天城”に創ってある桜の花弁をに舞い散らせる。

「出逢いと旅立ちの花……桜。最後にピツタリじゃない？」

「シャルちゃん……」

私は笑顔で一人一人を抱きしめようと思う。

みんなにありがとうを伝えるために、みんなの幸福を願うために。お別れの言葉は“さよなら”じゃなくて“ありがとう”。

抱きしめ終えた子から現実世界へ還すために術式を整える。

「ありがとう。ウエンディ、ノーヴェ、ディエチ、チンク、ギンガ」

5人の「ありがとう」をしっかり胸に刻んで、まず5人を還す。

「ありがとう。スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ルーテシア、レヴィ」

6人の「ありがとう」をしっかり胸に刻んで、6人を還す。  
次は、

「ありがとう。リイン、アギト」

「はい！ ありがとうございます、シャルさん！」

「ありがとう、シャルさん！」

リインとアギトを還す。

「ありがとう。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リエイス」

「ああ。ありがとう、フライハイト」

「ありがとな。・・・じゃあな、シャルロツテ」

「ありがとう、フライハイトちゃん」

「感謝している、ありがとう、フライハイト」

「シャルロツテ。私に未来をくれてありがとう。この恩、絶対に忘れない」

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リエイスの5人も還した。

桜の花弁は止まらず、この世界に舞い散り続ける。

「シャルちゃん。ホンマにおおきにな。リエイスの事もやし、いろんな事に」

「うん。はやても、ありがとう。これからもみんな仲良くね」

私ははやてを抱きしめたまま、はやてを現実世界へ還した。

「えっと、次は私でいい、かな・・・？」

「・・・ありがとう、シャル。シャルのおかげで、私はルシルとこれから生きていける」

フェイトは両手を胸の上に重ねて、そう微笑んだ。

「いやあ、それはフェイトの頑張りでしょ。

フェイトが頑張ったからこそ、ルシルが残る事が出来た。でしょ、ルシル？」

フェイトの隣に佇むルシルに訊く。

「・・・そうだな。フェイトの力だ。シャルは何もしてない。だから礼はいらな　痛ッ、蹴るな蹴るな」

事実だからしょうがないけど、ムカつくからルシルのふとももを何度も蹴る。

逃げ出したルシルはもう放っておいて、私はフェイトをそっと抱きしめる。

「あはは。うん、でも、それでもありがとうだよ、シャル」

「フフ、そっか。なら受け取るよ、フェイトのありがとう。私も、ありがとう」

私の腕の中からフェイトが消える。フェイトも還した。

「ルシル、次はルシルね」

私がルシルを呼ぶと、ルシルは「だな」と言って戻ってきた。なのは「いいの？」と訊いてきたけど、私としてはやっぱりなのは最後がいいから頷く。

ルシルは私の前に立って、右手を差し出してきた。私はその手を取り、握手。

「ちゃんと幸せになりなさいよ？ でないと許さないんだから」

「分かっているよ。きっと幸せになってみせる。ありがとう。それじゃあ、また後で」

「うん。また後でね、ルシル。でも、この世界でのルシルとはこれで最後だから・・・ありがとう」

対人契約を行ったその瞬間、“神意の玉座”に居る本体と目の前に居る分身との間の繋がりは途切れる。

だから、アグステインとの戦闘も、こうして話している私達との会話も、これからののは達と過ごす時間も本体には届かない。<sup>ルシル</sup>だからこそ今のルシルとの別れを惜しむ。最後にキュツと右手に力を込める。

最後に微笑み、ルシルを還す。握手していた今は何も握っていない右手を戻す。

次に、最後にお別れをするのは私の・・・大切な親友<sup>ひと</sup>。

「なのは。またトロイメライを預かってもらえないかな・・・？」

「うん。喜んで、だよ」

“トロイメライ”の指環を手渡す。

なのはは左手の中指にはめて、そっと右手をその上から重ねて愛おしそうに抱きしめる。

それがすごく嬉しくて、でも寂しくて、私は小さく「バイバイ、トロイメライ」と呟く。

そして、顔を上げたなのはは「シャルちゃん」と私の名を呼びながらそっと抱きついてきた。

私も「なのは」と名を呼んで、なのはの背中に両手を回す。

「ありがとう。ありがとう、ありがとう、シャルちゃん」

「うん。うん、うん。ありがとう、なのは」

少しの間、なのはを抱きしめたまま。なのはもそう。

みんなの顔も、声も、温もりも、私はその大切な思い出を全て忘れるだろう。

だけど、それでも私は魂に刻み込む。親友達の全てを。

「なのは。帰ったらユーノに伝えて。

オムニシエンスで見つけた本は全て処分してほしい、って。魔術に関するモノは、もう現代には必要のないモノだから」

「うん」

「あと、クロノやリンディさん達にも、ありがとう、って」

「うん」

「ヴィヴィオとそのお友達にも、ありがとう、って」

「うん・・つく・うん・・っ・・」

なのは小さく嗚咽を漏らし始める。

でもハッキリと泣かない。私はなのはの背中から両手を離す。

するとなのはも私の背中から両手を離して、俯きながら一歩後ろに下がった。

「えへへ、泣かないよ。お別れは笑顔で、だからね」

顔を上げたなのはの目の端には涙が浮かんでる。

だけど表情は綺麗な笑み。うん。本当に綺麗な笑顔だよ、なのは。

なのはが泣かないんだから私も泣かない。返すのは笑みだ。

「ありがとう、シャルちゃん。元気でね」

「ありがとう、なのは。なのはも、元気でね」

握手を交わす。そして私達は笑顔のまま別れた。



握るモノが無くなった右手を、胸の上に添えて左手を重ねる。  
私は蒼空を仰ぎ見る。桜の花弁が尚も散るその世界の空を。

「……解ってるよ、界律。本当の最後の契約はちゃんラスト・テストメントと片付ける。

なのは達がオムニシエンスから離れるまでは、今はそっとしておいてよ」

私は私服姿へと戻って、本城へと視線を向け、本城に向かってゆっくりと歩き出す。

瓦礫地帯を過ぎて、私の宝物がある宝物庫へと足を運ぶ。

そこにはなのは達から貰ったプレゼントとか、この三千年の間に巡ってきた世界で気に入ったモノが多く収められている。

私はプレゼントの服を次々と着ては鏡の前でクルリと回る。  
もう二度と着ることができないから。最後にまた自分の服に着替えて、ユーノから貰った本を読む。

どれだけ時間が経っただろう。10冊は読み終えた。

なのは達はもう“オムニシエンス”から遠く離れたはずだ。

「ヘルシャー・シュロス 剣神の星天城……解除」

桜吹雪が舞う世界が消えていく。

現実世界へと私も還り、地平線から昇る陽に目を細める。

長かった一日が終わって夜明けを迎えた“オムニシエンス”の大地。界律とリンクしてなのは達の反応を探查。この世界付近に居ない事を確認。

「契約執行能力……顕現」

形態じゃなくて能力のみを顕現。

最期くらいはお気に入りの服で迎えたいから。  
手にするのは純白の葡萄十字“第三聖典”。

「オムニシエンス・・・いいえ、ギンヌンガガブを消滅させる」

それが私に与えられた本当の最後の契約。ラスト・テストメント

私は現実・物質に干渉する実数干渉能力を最大限に発揮。

“第三聖典”を頭上に掲げて、地面に向けて一気に振り下ろす。

“ギンヌンガガブ”の核に虚数空間を作り出して、この世界を内部から瓦解させていく。

震動が起こり始める。次第に大きくなって、背後にそびえる“エヘモニアの天柱”がゆっくりと崩壊していく。

地面に亀裂。陥没。“ギンヌンガガブ”が終わりを迎える。

「契約執行完了・・・！」

全てが白に染まる広さも何も分からない空間。  
ただその空間にあるのは、淡く碧く輝いている直系5メートル近い  
光球。

そして、それを囲むようにして存在しているのは11の玉座。

玉座1つ1つで色が違い、背もたれの上にそびえ立っている十字架の形も様々だ。

そしてその玉座に座っている11の人影も、それぞれ色違いの外套を羽織っている。

ここは“神意の玉座”、またの名を“遥かに貴き至高の座”と呼ばれる最高位次元。

あらゆる世界の意思“界律”が交差する、全てが在って、全てを識る究極の根源。

「終わっちゃった……」

その玉座の内の1つ、純白の玉座に座する女性が残念そうに呟いた。3rd・テストメント・シャルロツテだ。

そんな彼女に「お疲れさまでした」と労いの言葉を送る5th・テストメント・マリア。

「ん、ありがとう、マリア」

シャルロツテは微笑みながらマリアへ感謝を告げ、スッと玉座から立ち上がり歩き出す。

彼女が向かう先、そこには漆黒の玉座に座する4th・テストメント・ルシリオンが居る。

ルシリオンはそんな彼女に気づき、組んでいた腕と足を解き、俯いていた顔を上げる。

シャルロツテはルシリオンの玉座のひじ掛けに座り、そして口を開こうとしたが先にルシリオンが言葉を紡ぎ出す。

「……約一万年の界律の守護神<sup>テストメント</sup>、お疲れ様、シャルロツテ」

「ありがとう、ルシリオン。私はここまでだけど、ルシリオンはまだ続くんだよね・・・？」

「ああ。墮天使が見つからない以上、もうしばらく現状のままだ」

「大変だね・・・。その、さ、フェイトと対人契約した分身体の事なんだけど・・・」

意を決したように本題を切りだすシャルロッテ。

「私は何も心配していないよ。あの優しい子達と過ごせるのなら、残った私の分身体はきつと幸せにその余生を過ごささるろう」

「そ、そうじゃなくて！ だから、私は・・・貴方の事が、その・・・心配で・・・」

最後の方は声がしぼんでいき、ボソボソと呟きになっていた。

しかしルシリオンにはしっかりと届いており、彼はひじ掛けに座るシャルロッテへと視線を移す。

「・・・大丈夫だよ、シャルロッテ。私はもう大丈夫だ。だから、心配せずに旅立ってくれ」

綺麗な満面の笑みをシャルロッテへ向かるルシリオン。

彼女は少し赤面して、小さく「うん」と頷き、ルシリオンの前へ移動。

そしてそつとルシリオンにキスをした。唇を離れたシャルロッテは満面の笑み。

「それじゃ、そろそろ行くね・・・。さようなら。またどこかでね、

私<sup>ルシル</sup>の初恋

「ああ。さようなら。またどこかで会おう、私<sup>シャル</sup>の憧憬」

それが、二人が交わした最後の会話。

“神意の玉座”より3rd・テストメント・シャルロツテの姿が消える。

彼女は新たな人生を歩む為に、無限と存在するどこかの界<sup>せかい</sup>律へと旅立った。

「行ってしまいましたね、シャルさん」

主を失くし空席となった第三の力の玉座を見てマリアがルシリオンへ向けてそう声を掛けた。

「ああ・・・そうだな。もし願って叶うなら、今度は争いとは無縁な人生を歩んでほしい」

ルシリオンはそう祈った。今度こそ平和な世界でシャルロツテが過ごせるように、と。

そして、彼に届く新たな契約。

「・・・さて、もう少し頑張るとしようか」

ルシリオンは契約を求めてきた世界へとリンクを開始、分身体を送り出した。

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

「春先か・・・というか・・・またか」

新たな契約先は、どういう因縁かまた地球、そして日本。

界律から情報が入るが、この世界で高校生として過ごせ、としかない。意味が解らん。

この世界での設定を閲覧。肉体年齢は15歳。ノルウェー人。エトセトラ・・・。

そして最後に、今日はこれから入学する高校の入学式当日。

(頭が痛い。何だこれ・・・?)

あまりの事態に頭を抱える。

こういうわけの解らない場合、かなりの確率でふざけた契約だ(次元世界は例外だったが)。

しかしまあ納得しよう。ああ、しよう。だがな、界律よ。さすがにこの仕打ちはないんじゃないか？

道路脇に設けられているカーブミラーに視線を映し、鏡に映る私の姿を確認する。

(小ささ。身長が低過ぎだろ、さすがに・・・)

150cmあるか無いかギリギリといったところだ。

もう少女にしか見えない。性別は男だ。なのに外見はもう少女なんだよ(泣)

泣きごとを言っても仕方がないから、すでに制服姿となってい

るし鞆も持っているし、まずはこれから通う事になる高校へ行こう。他の新入生からの奇異な視線（男子からは微妙な、女子からは熱い）が向けられる。

ところどころから「可愛い」だとか、「女の子じゃねえのか!？」だとか、「男でも構わねえ、好きになった」だとか、「お友達になりたあゝい？」だとか聞こえる。

泣きそうになるのを耐えつつもなんとか入学式を終え、教室へ。そして自己紹介が始まる。そして私の前の席の女子が立ち上がる。

「東中出身、涼宮ハルヒ。ただの人間には興味ありません。

このクラスに、宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居たら、あたしのところに来なさい。以上!!!」

教室が静まりかえる。自己紹介からしてインパクト大だな、この子は。

涼宮ハルヒ、か……。ここで、界律から妙な情報が流れてきた。どうやら私は彼女によって異世界人代表としてこの世界に喚ばれたらしい。

降り立った瞬間からこの世界に違和感を覚えていたが、いやはや……。とりあえず自己紹介の番が回ってきた事で立ち上がる。

「……今年度から日本の学校に通う事になった、ルシリオン・セイテスト・フォン・シュゼルヴァロード。

外見通り日本人でなくノルウェー人。あと男です。女ではありませんん

色々な意味で騒がしくなりそうな契約だ。

ま、せいぜい楽しんでやるさ。なあ、シャル……?

だがこの数週間後、私の心はポツキリ折れることになる。

SOS団？ いいさ、入ってやるさ。界律から涼宮ハルヒに従うよ  
う指示を受けているのだから。

現状この団で一番小さい朝比奈みくる先輩（より身長が低い事に  
泣いた）と同じマスコットと言われてもいいさ。

けどな、涼宮ハルヒ。その前に私は、いや、俺は“男”なんだ・  
・。

「セイントテスト君はみくるちゃんと同じようにメイド服ね」

な・の・に！ くそ、また女装の日々かよ・・・・orz

「まあなんだ。頑張ってくれ、セイントテスト」

「キヨン・・・・君もかい（泣）」

俺の肩に手を置いて頷くキヨン。もうSOS団には味方がいなかった。



『桜』それは出逢いと旅立ちを告げる花 〈Last testament〉

長つ！ すいません、ごめんなさい、申し訳ありません！！

散々切り詰めたんですが、文字数が3万超えになってしまいましたよ（泣）

前後編にすることも考えたんですが、どのみち文字数は変わらないために1話としました。

ここまで読んで下さった皆さんには最大の感謝を。ありがとうございます。

でももし読みづらいつかありましたら、前後編に変えますので、その時は感想の悪い点などをお願いします。

さて、この“十字架を背負いし神意の執行者”も次回で本当の最終話となります。

今回ほど、というよりは普段より文字数が少ないため、きっと読みやすいかと思えます。

あとちなみに次回作は“涼宮ハルヒの憂鬱”とあまり関係ないです。

あとがきまで長文、本当にすいません。Last testament  
ntでした。

願わくは幸せが多くある日々でありますように (前書き)

これで完結となります。応援して下さい皆様へ。ありがとうございました。

願わくは幸せが多くある日々でありますように　〜 Epilogue

親愛なる大親友シャルちゃんへ

シャルちゃん、お元気ですか？ 私、高町なのは毎日元気です。  
シャルちゃんは界律テストメントの守護神だから元気だよ、って言いそうだけど  
ね。

でもね。ルシル君からね、聞いたんだよ。シャルちゃんの事を。

シャルちゃんは新しい人生のために界律テストメントの守護神を辞める事になっ  
ていたって。

だからきつとシャルちゃんはどこかの世界で人として過ごしている  
んだよね？

男の子かな？ 女の子かな？ でもきつと元気な子になってるって  
思っているよ。

でも、どうして教えてくれなかったのかな？ って、ルシル君から聞  
いた時思った。

きつとみんなもそう。それでね、ルシル君はこう言ったんだよ。

君達に忘れないでと言っておきながら自分が君達を忘れる事に  
なる。

おそらくそれが辛かったんだろう。察してやってほしい

シャルちゃん。たとえ私達の事を忘れてしまっても、私達がシャル  
ちゃんを忘れない限り、たとえ忘れたとしても、私達はずっと親友  
だよ。

「つと・・・うん」

メールを打つのを中断して一息吐く。

送信先の設定はシャルちゃんが昔から使っていた通信端末。繋がる事はこれから先永遠にないモノだ。でもこのメールは私の心の整理だ。

だから送ることもきつとない。それを承知でメールを打ってる。

「セインテスト、アウト！ ペナルティー、アスレチック一周な〜！」

ヴィータちゃんの楽しそうな声が届く。

私は声のした方、ルシル君の居る場所へと視線を移す。

ルシル君がルーテシアの設計開発したレイヤー建造物で組まれた訓練場でヴィータちゃんにしごかれてる。

そして今、重りを両手足に付けられてウォールアクトをしていたルシル君が手を滑らせて落ちそうになった。

だからペナルティー。アスレチックを一周するように告げられた。

「頑張れえ〜、ルシルパー！」

「頑張ってくださいあ〜い！」

「頑張ってください」

「おう、ありがとう！」

ルシル君はヴィヴィオとお友人達の応援に手を振って応える。

そんなルシル君と一緒にフィジカルトレーニングをしているフェイトちゃんとエリオ、スバルとティアナとノーヴェも応援。

「ル〜シル〜、ファイト〜！」

「ルシルさん、頑張れ〜!!!」

そんな微笑ましい光景からもう一度通信端末へと視線を映して、メル打ちを再開。

シャルちゃん。私達は今、休暇が揃ったことで“カルナージ”にオフトレッサーに来てます。

私とヴィヴィオの高町家。フェイトちゃんとルシル君とエリオとキヤロ。

はやてちゃん達八神家に、スバルとティアナとノーヴェの大所帯。それと、ヴィヴィオのお友達のコロナちゃん、リオちゃん、アインハルトちゃん。

そしてイクスちゃん、イクスヴェリアちゃんの愛称ね、も来てるんだよ。

少し話が逸れるけど、イクスちゃんもヴィヴィオ達と同じSet・ビルデ魔法学院に通う事になったんだ。

今では学校にも馴染んで元気いっぱいに今を過ごしてるし、イクスちゃんも魔法を少しずつ扱うようになってきたんだ。それでね、イクスちゃんに今幸せかを訊いてみたら、

はい。とても幸せです。本当はシャルにも今のわたしを見てもらいたかったです。

すごく残念です。でも、シャルは言ってくれました。わたしが楽しく過ごすことこそが、シャルにとっての幸せなんだ、と。

ですからわたしは生きます。これからもずっとヴィヴィオ達みんなと楽しく

だって。そう話してくれたイクスちゃんはとっても可愛い笑顔だっ

たんだよ。

すごく楽しそうな日々、これもシャルちゃんのおかげだね

で、話を戻して。そうだね、まずはあれからの事を話そうか。

早いものでセレスさん達“反時空管理局組織テストメント”との最後の戦いから1年と5カ月が過ぎました。

というか、まずはこれから伝えるべきだったね。ごめんね。

“テストメント事件”と称されることになった事件の事後処理はすごく大変だったんだよ？

失った支局やヴァイゼン地上本部の再建、破壊された次元航行艦の建造。

幹部達に殺害された将校達、大小様々だけど悪事に手を染めた局員達の送検。

それに管理局の組織体制、魔法・魔導師絶対主義の見直しなどの上層部内での混乱。

管理世界からのバッシングもすごかった。対応に追われた日々はほとんど眠れなかったし。

今はようやく落ち着いて、以前と同じとまでは言えないけど管理局は活動しています。

“テストメント事件”。最重要情報の魔術や魔族に関しては結局伏せた。

数千年以上前に技術だとか、説明しても上層部は信じられないと思うし、たとえ信じたとしても、今度はルシル君に矛先が向くと判断されたから。

魔術。魔法以上の効果を有する最古の遺産。もう魔術師じゃないルシル君への詰問ってことになったら困るし、もう魔術を扱える人はいないし、復活させる事も出来ない。

だから魔術は伏せた。今回の事件はロストロギア“ディオサの魔道書”によるものとして処理された。

幹部達の事は包み隠さずに全部報告された。これは必要な事だと思うから。

“デイトサの魔道書”によって蘇った期間限定の復讐者にして改革者、と。

それと破壊された施設の再建に関しては元“ミンスター・コンツェルン”のおかげで早々に完了した。

えっと、“ミンスター・コンツェルン”の事も話しておくね。

事件後、コンツェルンは解体しちゃったんだけど、今でも各企業は管理局運営のための資金提供は続けてる。

管理局への技術支援・提供だとか、罪滅ぼしって感じでもないけど、そういう事も続けてる。

それがトップだった人の最後の命令だったんだって。

でね、驚いた事にセレスさんがコンツェルンのトップ、CEOだったんだよ。

道理で“テストメント”と繋がっているわけだ。二つの組織のリーダーが同一人物、セレスさんだったんだから。

私達“特務六課”が最後まで明かす事が出来なかった謎が解けた瞬間だった。

それとね、セレスさんが生前にコンツェルンの上層部にいくつか指示を出していた事があって、それが管理局上層部を少し悩ませることになってたんだけど……。

1つ目は危険地域への航空隊派遣より先に、あの戦闘機部隊“アギラス”を投入すること。

まず非人格型AIに徹底制御された“新世代アギラス”が先発すること、航空隊の人為的被害を抑えるというものなの。

“テストメント事件”に投入されていた人格型AI搭載の“旧世代アギラス”は、元々“新世代アギラス”のテスト機として開発・運

用されていたみたい。

空戦魔導師の人数は少ないし危険な仕事だから、管理局は試験運用として三カ月の間だけ前線投入したんだ。

（一度同じ空を飛んだけど、確かにあの性能なら文句無し・・・かな）

結果は合格。凄まじい戦果を挙げて、今は元コンツェルンや他の魔導端末メーカーだとかが協力して“アギラス”を製造してる。

まだいろいろと倫理的な問題があるみたいだけど、それでもやっぱり人命には代えられないって話。

正式配置はまだ先だけど、すでに何機かが紛争世界、特に重度の自然災害現場に送り込まれて活躍してる。

二つ目は、“レジスタンス”が装備していたリンカーコアが無くても扱える魔力・エネルギー銃や特殊弾頭、ロングコート風のバトルスーツの正式運用化。

人員不足の解決法の一つとしてセレスさんが考えていたらいいんだけど。

事件中に投入されたこれらの装備もまた今後の改良型の為のテスト運用だったみたい。

これもいろいろと検討されて、魔導師と装備者の陸戦混成編隊が組み立てられて試験部隊として今も活動中。

そして、“テストメント”幹部だったルシル君とリエイスさんの事も話すね。

二人の顔は管理局に知られているし、執行妨害や傷害、多くの罪を犯してきた。

ルシル君とリエイスさんは状況からして加担していたとはいえ無実とはいかなかった。



でも、セレスさんの遺書が見つかったり、リンディさんやクロノ君、騎士カリム達のおかげで重い刑だけは防げたんだ。ルシル君は以前は管理局員、一佐まで上り詰めたエリートでもあったし、それも手伝って管理局任務の従事に落ち着いた。リエイスさんも同様に管理局任務の従事となつたよ。

ルシル君はその実力（空戦形態を含めた神器使用の上級術式を失つたみたいだけど十分強い）で、執務官のフェイトちゃんの戦闘補佐パートナーとしてシャーリーと三人で海を駆けまわってるよ。

フェイトちゃんは一緒にいられる時間が増えたことが嬉しそうで、でもルシル君が戦う事に悲しんでいたりと複雑そうかな。

フェイトちゃんが事務処理のため本局に居る時、ルシル君は特別保護施設で子供達の面倒を看てる。

どっちかというところちがルシル君の本業な感じ。子供達に大人気だし。

クロノ君も「どういうわけかルシルは子供受けがいい」って褒めるのかどうかは分からないけどそう言ってたし。

そしてリエイスさんははやてちゃんの海上警備部に配属されて、今は“ヴォルフラム”の専属戦力として頑張ってるよ。

（セレスさん・・・）

蒼く澄み渡る空を見上げて、目を閉じて春の風を感じる。

セレスさんの真実が記された直筆の遺書の内容を思い出す。

管理局の掲げる魔法・魔導師主義の危険性。その主義の所為での被害と犠牲、人員不足。

殉職した局員の遺族が抱く心情。管理局の未来を案じての敵対という形を取った変革活動。

そして、ルシル君とリエイスさんの無実を証明するための情報。

二人を洗脳した云々、二人の今後を気遣っている事が書かれていた。

そして逮捕された“レジスタンス”の事にも温情を以って今後を考えてほしい、ともあった。

それらの書かれた日付は、信じるのなら“テストメント”が活動する以前のものだった。

つまりは始めからこういう結果になることを見越しての遺書だったってということ。

私達はずっとセレスさんの手の平の上で踊っていたんだと思うと、少し怖かった。

今度は訓練場の開けた場所に居るはやてちゃん達へと視線を移す。

「ほお、近接格闘戦もなかなかの腕に仕上がったな、リエイス……」

「主はやてを守るための術だ。私に出来得るものであればどれにでも手を出そう……!」

紫電一閃

シュヴァルツ・ヴィルクング

シグナムさんの“レヴァンティン”による剣術とリエイスさんの深紫の魔力を纏わせた拳法による異種格闘。

建造物の壁を蹴っては空中で衝突を繰り返す凄まじい攻防戦だ。

「二人とも頑張ってたな!」

「行け行け、リ・エ・イ・ス!」

「押せ押せ、シ・グ・ナ・ム!」

シグナムさんとリエイスさんの模擬戦を見学して、はやてちゃんはリンとアギトと一緒に応援している。

とても楽しそうな三人。はやてちゃんは決戦の後も泣かないようにしていた。

でも、セレスさんの遺体を前に一人つきりになったらはやてちゃんは声を殺して泣いていた。

偶然見かけた私は黙ってその場を後にして、その後、私ももらい泣き。

はやてちゃんが泣いているのを見たのはそれっきり。それからはずっと気丈に振舞っていた。

(親友としてはもっと弱いところを見せてもらいたくないな、なんて)

そう思いながら、メール打ちを再開、しようとしたところで私の方に向かってくる誰かの気配を感じて指を止める。

「なのはちゃん達は今休憩中かしら？」

「あ、シャマル先生。はい、少しインターバルを挟んで、キャロの射撃訓練の続きをしよう」と

シャマル先生だった。シャマル先生は私が通信端末を開いているのも見て、

「あ、ごめんなさい。メール中だった？」

そう謝ってきたけど、私は「送ることのないものですから」と苦笑しながら返した。

疑問符を浮かべるシャマル先生に話す。メールは心の整理の為のも

ので、送り先もシャルちゃんの通信端末だから送らない、と。

「そう。・・・あ、そうだ。もうお昼も近いから、このまま休憩に入ってもいいと思うんだけど」

「え、もうそんな時間ですか？」

時間を確認すると12時まであと数分。

確かに午前の訓練はもう切り上げた方がいい。

少し離れたところでルーテシアとレヴィと話しているキャロに「お昼にするから午前はここまで」と声を掛ける。

キャロは「ありがとうございます！」とお辞儀をして、ルーテシア達と一緒にフィジカルトレ組のところに向かう。

「そう言えばシャル先生、料理の腕をメキメキ上げてるってはやてちゃんに聞きましたよ」

「うふふ、そうなの 今日のお昼も何品が作ったから、期待してね」

シャル先生はそう言って、上機嫌で戻っていった。

はやてちゃんから聞いたところ、リエイスさんが凄まじい勢いで料理の腕を上げたらしくて、それを悔しく思ったシャル先生も必死に料理の勉強を始めたみたい。

今では趣味が料理だって言うくらいのもり込んです。

でも創作料理の試食で犠牲者が出ている事も・・・あったりする。医者が病人増やしてどうするだ？ってよく怒られてる。

私も防護服からトレーニングウェアへと戻り軽くストレッチをして、お昼ごはんが用意されているロッジへ向かう。

その途中、先に切り上げていたはやてちゃん達と合流。私とはやてちゃんを先頭にしてロツジに向かう。

「もう一歩が届かないな。やはり剣の騎士の名は伊達ではないな」

「そうは言うが、私とレヴァンティンを相手に真っ向から殴り合うおまえも尋常ではないぞ」

シグナムさんとリエイスさんの模擬戦は、背後から聞こえる二人の会話からしてシグナムさんが勝つたみたい。

「ホンマ凄かったなあ。レヴァンティンの腹を裏拳でいなして、片方の拳打で攻撃、それも防がれたら蹴りが飛んでくるんやもんなあ」

「でも、なかなかいいところまで行ってたですね」

「いやいや、まだまだ。近接戦でシグナムに勝とうなんざ10年早え」

「何故アギトがそこまで威張るんだ・・・？」

シグナムさんとリエイスさんのダブルツッコミ。

沈黙。そして笑い声。リエイスさんが加わった八神家は本当に楽しそうだ。

隣を歩くはやてちゃんをチラリと見る。はやてちゃんも小さく笑っていた。

（シャルちゃん。シャルちゃんは私達にたくさん笑顔をくれたんだよ）

ロツジに着いて少し。先に着いていた私達が食卓に料理を並べる手伝いをしていると、「お待たせ〜！」の声と一緒にフィジカルトレ組が来た。

準備も終わってそれぞれが席に着こうとしているなか・・・

「ルシルは私の隣でいいよね」「ルシリオンは私の隣でいいな」

フェイトちゃんとリエイスさんの声が重なる。

来た。来たよ、この時間が。ルシル君は小さくため息。

フェイトちゃんとリエイスさんの交わる視線の間に火花が散るのが見える。

「テストロツサ。おまえは仕事場でいつも一緒だろう。」

なら、今の時くらいは私がルシリオンの側に居たとしても構わないだろう?」

「リエイスは家族と一緒にいいんじゃないかな? ね、はやて?」

フェイトちゃんに話を振られたはやてちゃんが「あー・・・」と返答に困ってる。

そこにメガーヌさんが登場。ルシル君の隣にまで歩いて行って肩をポン。

「あらあら。ルシル君はモテモテね　でも二股はダ・メ・よ?」

「二股をしているわけではありません。リエイス、君ははやての隣でいいじゃないか。私は・・・私は・・・?」

ルシル君が座ろうとしない。というか座れない。

ルシル君にみんなの視線が集まっているから。

どこに座るかによってルシル君の今日の今後が決まる。でも、どこに座ってもバッドエンドだな、と思っているのはきつと私だけじゃないはず。

みんな座ろうとする体勢のまま硬直状態。さすがにこのままじゃ料理が冷めると思ったのかメガー又さんが、

「ほら、ルシル君。私の隣なら大丈夫でしょ」

椅子を一つ持ってきて、自分が座る椅子の隣に置いた。

「あ、本当に助かります。フェイト、リエイス。私はメガー又さんの隣にするよ」

心底安堵しきつたルシル君の笑み。でもルシル君、たぶんそれもバッドエンドだよ。

「へへ、人妻にも手を出すんだ、セインテスト」

ヴィータちゃんが爆弾を投下、そのまま何食わぬ顔で席に着いた。はやてちゃん達八神家もヴィータちゃんに続いて静かに席に座っていく。

ヴィヴィオ達も「わ、わたし達はここだね」と友達同士並んで座っていく。

「ルシリオンさんがわたしとレヴィのパパになるの？」

まあいろんな事を知ってその話聴くの好きだからいいけど。ね、レヴィ？」

「ん？ うん。まあ・・・お母さんがいいんじゃない？」

ルシル君に標的が絞られた集中爆撃。

ルシル君が小さく「性質の悪いボンーマンか、君らは」と呟いて、その顔色が一気に青くなる。

二人はきつと面白がつてそんな事を言っただらうけど、ルシル君にとつては拷問でしかない。

シャルちゃん。シャルちゃんが言っていた“ルシル君を犠牲<sup>イケニエ</sup>する”  
つてというのが今まに行われてるよ……。

「あらあら。こんなおばさんじゃ嫌よねえ、ルシル君

でも、ルシル君が私でも良いって言っんなら……再婚しても……

」

なんとルシル君の味方だったはずのメガー又さんもノリでした。それにしてもすごい演技力。頬を赤らめるのも自然過ぎて恐い。

「な……!?! いや、何言つて、メガー又さん!?!」

「満更でもなさそうじゃねえか」

「おい！ さつきから君は何だヴィータ！ 何か恨みでもあるのか

!?!」

「べつに〜（笑）」

孤立無援なルシル君。ごめんね、ルシル君。私は、私達は変なおー  
ラを出してるフェイトちゃんトリエイスさんを止めれそうにないよ。  
ルシル君がギギギつていう擬音が背後に見えそうなくらいの感じで  
エリオとザフィーラに視線を送る。

同性である二人に救援を求めたいみたい。だけど、エリオとザフィ  
ーラはルシル君から視線をフツと逸らして、



「ごめんなさい、ルシルさん。僕には強敵すぎます」

「すまん。許せ、セインテスト。我には荷が重すぎる」

謝った。私はきつと忘れない。あれほど絶望に染まったルシル君の表情を。

フェイトちゃんがルシル君の側へスキップで寄っていく。

ああもうその軽やかなステップが逆に恐怖を煽るよ……（ルシル君ビクッとしてるし）。

「ルシル」

ルシル君の両手を取って、ニコニコしてるフェイトちゃん。

その後、Thunder Arm と“バルディッシュ”が一言。

ルシル君の悲鳴がこだまする。バチバチ音をさせて、短く切ってる銀髪が逆立ったルシル君がバタリと倒れた。

フェイトちゃん、ヴィヴィオ達が怯えてるからそこそこにしておいてね。

「大丈夫かルシリオン？ まったく、酷い事をする女もいるものだ。どれ、私が手厚く看病してやろう。見せてみる」

すかさずリエイスさんが動く。ルシル君の頭を抱えて膝枕。

もう見てられないよお。わなわな震えてるフェイトちゃんが恐過ぎだよお（泣）

「何をしてるのかな、リエイス？」

「見て分からないか？ おまえの電撃でダウンしたルシリオンを看ている」

「いいよ。私がやつちやつたんだから私が看る」

「いいや。おまえに任せるとまた仕出かすかもしれん。

ここは私に任せて食事をするがいい。主はやて、少し席を離れます」

「リエイスこそはやて達とごはんしたら」

マンガで見た事ある光景。ルシル君の両腕を二人が引つ張り合う。

私達はもう関わり合いたくないから「いただきます！」とお昼ごはんを食べ始める。

「二人ともいい加減にしてくれ。これくらい自分で治せる」

背後からルシル君の声。何の防御も無く軽傷なんて恐れ入ったよ。

綺麗な蒼色の魔力光が一瞬だけ光って消えた。治癒術式のラファエルは健在だ。

結局、ルシル君はメガーヌさんの隣。フェイトちゃんはキャロの、リエイスさんはラインの隣に落ち着いた。

最初は痛い静寂だったけど、ヴィヴィオ達が楽しい話題を振ってきてくれたおかげで楽しい昼食となった。

そして片付け。

それぞれ分担して始めるんだけど、さっきの謝罪としてルシル君が一手に引き受けた。

私達は最初は断ったけど、ルシル君は「いいからいいから」と微笑んで、私達を送り出した。

まあそこまで言うなら、と私達は午後の訓練に備えて一休みさせて

もらおう。

明日の私達大人組とヴィヴィオ達子供組合同のオフトレツアー二日目恒例の練習会について話し合っていると、

「リエイスがいつの間にかおらへん」

「さっき川に行くって言ってましたけど・・・」

はやてちゃんに答えるノーヴェ。

川には、私とフェイトちゃんとはやてちゃん、シグナムさんとヴィータちゃん、ノーヴェ以外のみんながいるはずだけど・・・。

でもこの場に居る他のみんなはこう思ったに違いない。嘘だな、と。実際私がそう思っているんだし、みんなの表情からして間違いない。

行き先はきつと・・・

「ルシルのトコだ・・・！」

フェイトちゃんがブリッツアクションでマジダッシュ。

私達は放っておいて、今度は午後の管理局組だけの訓練試合のためのチーム分けを考える。

問題はルシル君をどっちにするか。槍術・双剣術・双銃技、ピンポイントの精密射撃から広範囲制圧攻撃っていうオールレンジ戦を全てこなすルシル君は厄介だ。

しかもルシル君の自作デバイス“ラインゴルト”の補助でそれらを同時に発動できるって反則さ。

これは明日の練習会の組分けにも影響する重要な話だから真剣に考えていると、

ムーンライトブレイカー

すみれ色の閃光が空を染めた。

あの発光量、レヴィのムーンライトで間違いない。

ルシル君が一体何をすればムーンライトを放たれるだけの事になるんだろう。

お仕置きにムーンライトを引っ張りだすフェイトちゃんに軽く戦慄しながらも話しを続けていると、フェイトちゃんとリエイスさんが戻ってきた。

ただどルシル君がいない。きっとあの広い空に旅立ってしまったんだ……。

「何もあそこまでしなくてもよかつたんじゃないか、テストロッサ」

「う……でも、リエイスの所為でもあるんだから反省してよ」

フェイトちゃんも罪悪感を抱いている。

小さく「私ってここまで独占欲強かったかなあ？」と呟いている。

「つつかさ、そこまで気になるんだつたら、さつさと結婚しちまえよ、おまえら」

頭の後ろで腕を組んで告げるヴィータちゃん。

今日のヴィータちゃんはどことん爆撃犯に徹するようだ。

あわあわ慌てだした（なんか可愛い）フェイトちゃんを置いて話を進める私達。

「結婚したとして、ファミリーネームなどはどうするんだ？」

「う……ん、フェイト・テストロッサ・セインテスト・ハラオウン・フォン・シュゼルヴァロード、とか？」

「どこの芸術家の名前だ？」

「フォン・シュゼルヴァアロードは要らないんじゃないかな・・・？」

私も参加。“フォン・シュゼルヴァアロード”は貰いものらしいし、神秘を失って人として在るルシル君が名乗る必要性も感じられない。で、ファミリーネームに関してははやてちゃんが「それはルシル君と要相談やな」と締めた。

「でもそんな・・・結婚ってまだ早いよ」

赤面しながらもやっとの思いで喋るフェイトちゃん。

「早いつつてももう26だぜ？ 早くしねえと行き遅れるんじゃないか？」

「ぐ・・・」

ヴィータちゃんの爆弾にグサリと来る26歳組の私とはやてちゃん。フェイトちゃんは相手ルシルくんがいるからいいけど、相手すらいない私達には笑い話にもならない。

でもいいもん。私には娘のヴィヴィオがいるもん。それでいいんだもん。

それにまだ26だもん。まだまだこれからだもん。

「うく・・・今まで受けた言葉んなかで一番効いた・・・。でも、結婚かあ。それもそうやなあ。それやったらリエイスも諦めるやろ？」

がさりと言がする。私はそつちに視線を移すと防護服姿のルシル君がいた。  
基本的なデザインは大戦時から着用してる戦闘甲冑とあまり大差ない。

違いと言えばロングコートがノースリーブじゃなくなったことと、首のチョーカーと南京錠が無くなったくらい。

それとデバイスの待機モードの“三つの蒼銀の指輪”が右手の人差指、中指、薬指にはめられてる。

「そうですね……。一夫多妻制の世界にでも行きましようか」

何でその発想！？ 強敵過ぎだよ、リエイスさん。  
全員ポカンってしてるし、私もきつとそんな顔してるよ。

「やっと見つけた……。では今は一体何の話をしているんだ……？」

「お、生きてたか。いや、おまえとテストロッサの結婚についてだな　むぐう！？」

そこまで言っつて口をフェイトちゃんに防がれたヴィータちゃん。

ルシル君は聞こえなかつたという風に惚けるけど、若干気まずそうだからきつちり聞こえてたみたいだ。

フェイトちゃんの顔はもう真っ赤だ。口と鼻を塞がれてるヴィータちゃんも赤くなつてきた。

「フェイト、手を離さないとヴィータが昇天するぞ？」

「うえ？ あ！ ご、ごめんヴィータ！ 大丈夫！？」

「げほつげほつ、殺す気が!?　　ったく、そろそろ決めるよなあ」  
何はともあれ結婚話に関してはまた後日という旨を念話（もちろんルシル君抜き）で決定。

でもそろそろ決めた方が良いと思うんだけどなあ、フェイトちゃんとルシル君。

これでスムーズに話が進むかと思いきや、

「そうか・・・私は捨てられるのだな。あれほど色々ルシリオンに尽くしたというのに・・・」

ホロリと涙を一滴零すリエイスさんがまた話をそっちに戻そうとしている。

フェイトちゃんとはやてちゃんとシグナムさんとヴィータちゃんが硬直。

私とノーヴェはこの場から逃げたい一心に駆られる。

「な、何を言い出すんだリエイス・・・?」

そう言いながらルシル君が若干後退。

本能か直感か、この場がすでにデンジャーゾーンである事を察知したみたいだ。

はやてちゃんが少し背伸びびしてルシル君の右肩を、シグナムさんが左肩をわしつと掴む。

逃げ道は防がれた。ルシル君が物凄い勢いで汗をかいている。

「尽くしたって言うけど、ルシル君、リエイスに何させたん?」

「いえ、セレスに記憶を隠蔽されていた期間の記憶は無いので分かりません」

何故か敬語になるルシル君。

「ひどい、私とあれだけユニゾンいっしょになっ  
ていながら用済みとなっ  
たらポイなんだな・・・」

泣き崩れるリエイスさん。ホント、一番性格変わったのはリエイス  
さんだよ。

こんな楽しい人じゃなかったよ、“闇の書事件”のとき。

というか、一緒になっただけというのはユニゾンの事なんだろうなあ  
とボケーとした頭の中で考える。

「ちよーつと話をしよか、ルシル君」

「だな。いろいろ訊きてえしな」

「我らの家族を泣かした以上は覚悟はしておけ、セインテスト」

「ちよつ、待ってくれ！ 一緒ってというのがユニゾンの事だと気づ  
いているだろ!？」

はやてちゃん達に連行されていくルシル君。

そんな4人を見送る私とフェイトちゃんとノーヴェ、そしてリエイ  
スさん。

さすがのフェイトちゃんもユニゾンの事だと気づいているようで何  
も言わない。

それ以前にリエイスさんが「ふう」と一息吐いて、今さら「まあユ  
ニゾンの事だが」と呟いた。

やっぱり嘘泣きだった。連行されていくルシル君が「今の聞いただ  
ろう!？」  
リエイスが認めたぞ！ 認めたぞ!」と言っている。



認めたとぞつて二回言った。大した地獄耳。けどはやてちゃん達は止まらない。聞こえたのはルシル君だけだった。

「ふむ。真面目な者をからかうのは確かに楽しいな」

「「「鬼だ・・・」」」

今日のルシル君はリエイスさんのからかい実験によってポロポロにされてたわけだ。

哀れ過ぎるよ、ルシル君（涙）。さすがに同情する。これはあんまりだ。

ノーヴェが「様子見てきます」と告げて去っていくのを見送って、私はリエイスさんの声を掛ける。

「どうしてこんなことを・・・？」

「リエイスはルシルの事が好きじゃなかったの？」

私とフェイトちゃんに振り向きリエイスさん。

「好きは好きだが、それは異性ではなくパートナーとしての好き、なのだろう。」

いや違う。きっと私は彼を異性としても見ていたのだ。知らぬ間に。

だが、私は人間ではない。テストアロッサ、私はおまえのように彼を幸せには出来ん。

だからこそ、今日のこれは彼への想いを断ち切るためのものだ」

そう言つて目の端に涙を浮かべつつも綺麗に微笑んだりリエイスさん。嘘泣きじゃなく本当の涙。フェイトちゃんはそんなリエイスさんを

抱きしめた。

そんなこんなでルシル君とフェイトちゃんとリエイスさんの三角関係は終わりを告げた。

まあルシル君ははやてちゃんとヴィータちゃんの射撃魔法の逃げる的にされていただけ。

でも女の子を泣かした罰だと思えば軽いものだと思うよ、うん、私は。

「で、午後の訓練試合のチーム分けは・・・これや!」

モニターに映し出されるチーム表。

参加しないけど応援してくれる為に集合したヴィヴィオ達も含めた全員が啞然。

一言で言えば、ルシル君VS全員。集団リンチとも言える血も涙も無い分け方だった。

「おい、ちょっと待て。イジメとしても逆に清々しくて泣けるどころか笑えてくるぞ」

「古代の英雄様やったら乗り切らなアカンで？　なあルシル君」

はやてちゃん達にも説明したんだけどなあ、リエイスさんの本心（もちろん本人の許可あり）。

でもやっぱり最後に泣いたってことを話したのがまずかったか。

「フツ、仕方ないな」

「そうだね。ここは私達が頑張ろう」

リエイスさんとフェイトちゃんがルシル君の側へ行く。

それから一悶着（ルシル君がリエイスさんとユニゾンしたり）あったけど、ちゃんとチーム分けをして試合を開始するためにそれぞれが両陣営に分かれて配置に着く。  
だから私も、つとその前に……。

シャルちゃん。私達はシャルちゃんが守ってくれた今を生きるよ。

だから、最大の感謝をこめて、ありがとう。またどこかで逢える事を楽しみに。

親愛なるシャルちゃんの親友を代表して。高町なのはより

「なのはママー……！」

「なのはー！」

「はーい！ 今行くよー！」

大きく手を振ってるヴィヴィオとフェイトちゃんに答えて、私はみんなのところへ駆ける。

どうか、願わくは幸せが多くある日々でありますように。

「お待たせー！」

そして、どうかどこかで過ごしているシャルちゃんにも幸せが多くある日々が待っていますように。

?  
?  
?  
A  
n  
o  
t  
h  
e  
r  
  
E  
p  
i  
l  
o  
g  
u  
e  
?  
?  
?  
?

そこは何かしらの船のブリッジらしき場所。

数人のスタッフがそれぞれの座席に座り、各々が黙々と仕事をしている。

そんなスタッフの中で楽しそうに談笑している茶色い髪と水色の髪  
の二人の少女。

茶色い髪の少女は、自分の仕事場である椅子に座りながら、背後に  
佇むもう一人の水色の髪をした少女に話しかける。

「でもさあ、クロノ君とイリスちゃんって相性良いから、結構お似  
合いだよね〜」

青い制服、茶色い髪の少女に“イリスちゃん”と呼ばれた青い制服  
を着た水色の髪の少女は、

「エイミー、あまりに突然すぎてわたしはどう反応すればいいのか  
分からないんだけど？」

と苦笑い。エイミイは「なんとなく」とイリスに振り向いて笑った。イリスはブリッジに話しに出てきた“クロノ”が居ない事を確認して、エイミイに答える。

「うーん、それはないよ、エイミイ。それにクロノってわたしのタイプじゃないし」

クロノは知らぬ間に一人の少女にフラれてしまった。

エイミイは「あらら。可哀想なクロノ君」と苦笑して、

「へえ〜。そうゆうの初めて聞くけど。それじゃあどういう人がタイプなの?」

とイリスに男性のタイプを訊こうとする。

イリスはいぶかしんだが、いつもの大して意味も無い話だとした。

「そうだなあ、クロノと違って年相応に背が高く、銀髪で、オッドアイで、からかいがいのある真面目な人」

「……………」

ブリッジ内がいろんな意味で静寂に包まれた。

エイミイの隣に座る青年がチラチラとイリスへと視線を向ける。

「うっわあ、理想が高いというか9歳でタイプが具体的すぎて引くというか……。」

そんな人が居れば是非に会ってみたいね。でも、どうしてそんなに具体的なの?」

「さあ? 気づけばそんな風になってたって感じてかな。」

こうね、心がそういう人を望んでるといふかなんというか、だね。だから、クロノはエイミィにあげるよ。二人の方がお似合いだし」

イリスは考える素振りをしながら、物心が付く前から気になっている人物像を語った。

そしてクロノを、彼の意思を完全無視してエイミィへと献上しようとしていた。

「あはは。未来の選択肢が一気に限定されちゃった」

そうは言つが満更でもなさそうなエイミィ。

「でもフライハイト家の御令嬢のタイプが聞けるなんてニュースだよね」

「あー、その御令嬢っていうのが嫌いだから管理局に入ったんだよ。知ってるくせに。古代ベルカから続く家柄なのに、わたしに女の子らしくしなさい、って。

わたしは令嬢云々の前に騎士だつて言うの。あんな家に居たんじゃ息がつまるよ」

イリスは不機嫌そうに言い、エイミィは「大変だねえ、ホント」とイリスの頭を撫でた。

イリスは「まあ、子供扱いしてえ〜」と頬を膨らませたが、気持ち良さそうにしている。

「でもリンディ艦長やグラシア家のおかげで、こうしてわたしは世界の為に戦える」

イリスは艦長席に座るこの艦“アースラ”の艦長リンディに振り向

く。

リンディはイリスの視線に気づき、ニコツとして小さく手を振って、イリスも少し照れながら手を振った。

それから少しして、“アースラ”の目的となる映像がメインモニタに映し出される。

映し出されたのは、大樹が動き、その大樹と戦う白の少女と黒の少女とオレンジ色の狼。

「イリス」

「はい、任せてください」

イリスはリンディに答え、ゆっくりと歩を進め、転送装置へと向かう。

「あれ？ イリスちゃんが行くの？ クロノ君は？」

「クロノのようなお堅い融通のきかないのが行ったら話がこじれるかもしれないじゃない。」

見たところわたしと同年代みたいだし、同じ女の子が行った方がいいと思うんだよね。

それに、クロノは動けないじゃない。リンディ艦長有するお茶型決戦兵器を間違つて飲んで」

「あゝ、そうだったね・・・」

二人はリンディに聞こえないように小声で話す。

イリスが転送装置の前にまで来たところで、リンディは彼女に今回の任務を告げる。



「これより現地での戦闘行動の停止、ロストロギアの回収、両名からの事情聴取を」

「任務拝命。了解しました」

そう答えると同時にイリスの服装が変わる。

きつちりとした青い制服から全体的に白となったフレアードレス。インナースーツも白で統一され、前立てのラインは蒼。上まで閉められたファスナーの飾りには桜の花弁が施されている。

アウターは前立てのない白いシボシロョートジャケット。

白銀の籠手と具足。そして右手には彼女の身長と同じくらいの桜色の刀が握られている。

「転送可能領域に到着しました」

「それじゃあ、イリス、お願いね」

「はい、リンディ艦長。よし、行こうか、キルシュブリューテ」

りよゝかゝい、戦やって殺やりましょう

イリスの携える刀から陽気な声がもれる。

イリスは“キルシュブリューテ”と名付けられた刀をコツンと叩き、足元に魔法陣を展開させた。

「違うバカ剣。止・め・る・の。まったく、誰に似たのか・・・」

貴女です、マイスター

「うっさい。もあ・・・コホン。気を取り直して、イリス・ド・シ

ヤルロツテ・フライハイト……いつてきます!!!」

魂<sup>ココロ</sup>はあらゆる世界と時間を巡り巡って、其<sup>ココロ</sup>が果てなく望む在るべき地へといつかは還る。彼女の魂<sup>ココロ</sup>もまた……

「わたしはイリス・ド・シャルロツテ・フライハイト。

個人的にはイリスよりミドルネームのシャルロツテっていうのがお気に入り

つとと、そうじゃなかった。え〜と、あなたの名前は？」

「あ、えつと……なのは。高町なのは、です」

???魔法少女リリカルなのは 十字架を背負いし神意の執行者?  
???

「ん。よろしく、にゃのは」

「違っ……! なの・は、です!」

「うん、にゃのは」

「な・の・は! もしかしてわざと!」?

「いやいやあ、よろしく、高町」

「名字!? そんなに発音しにくいの!?(泣)」

「泣かない泣かない。冗談よ。高町、なのは……。なのは。うん、いい名前ね、なのは」

??? All Episode Fin Thank you f  
Or reading???

最後のあ・と・が・き (前書き)

予定外ですよ。

最終話のあとがきにコレを投稿したら途中でプツッリ切れてました。少し経ってから気づき大慌て。一話として、出すことになりました。

## 最後のあ・と・が・き

“シャル” 「それじゃあ、いつくよあ〜！ あせ〜の〜！」

“全員” 「C・C・レ〜ン〜！」

“シャル” 「ちっが〜〜う！ いやいやいやいや。

どうして!？ 何故!？ どこからC・C・C・モンが出てくるの!？  
て言っかどうして管理世界組がC・C・レモンのCMを知ってんの!？」

“スバ&ティア&エリ&キャ&ルー&レヴィ” 「神のお告げ？」

“シャル” 「いやいやいや。そんなお告げする神様ってどうなの!？」

“なのは” 「まあまあ、少し落ち着こうよシャルちゃん。  
でも今のはシャルちゃんの所為でもあるよ?。」

“シャル” 「まさかの責任転嫁!？ しかも親友から!。」

“なのは” 「だってさっきの掛け声からしてそっちに繋がってもし  
ようがないもん」

“はやて” 「あ〜、そうやなあ。あせ〜の!〜って聞くと思い出すも  
んなあ。

C・C・レモンのCMで聴くフレーズ。水 寺清子さんのアレ」

“リイン” 「シャルはZ ROが好きでしたよね、そういえば」

“シャル” 「カロリーゼロ。乙女にとっては魅了のこ・と・ば？」

“シャル” 「あゝ、もうどうでもいいから、今度はしっかりね。

それじゃあテイク2！ 行くよみんな！ せーの！」

“全員” 「魔法少女リリカルなのは・十字架を背負いし神意の執行者、完結おめでとー！ー！」

“シャル” 「決まった やれば出来るんだよ、ぶつつけ本番でもさ」

“ルシル” 「それにしても本当に完結まで行くとは思わなかったな。私とシャルのオリジナルストーリーであるANSURは未完で消滅したというのに」

“シャル” 「そうだねえ。ま、私は第一章・大戦編でデスったからあんま興味ないけど」

“フェイト” 「まあ、そんな事を言っちゃダメだよシャル。シャルにとっても自分が生まれたオリジナル作品なんだから」

“シャル” 「あ、うん。ごめんなさい。親作品には文句言いません。はあ、でも感慨深いよね。こうしてなのは達の世界に来て、そして終わりを迎えられるなんて」

“シグナム” 「お前に限ってたがな。しかし感慨深いというのは賛成だ」

“リエイス” 「私も2ndエピソードからの復活を無事果たすこと

が出来た。  
連載開始前から私の復活の構成が出来ていたとはいえ、何とも奇跡な事か」

「シャル」 「読者の皆様がLastからExへの続行を願ってくれたおかげよね。

もし完結でいいなんて来てたらリエイスは無かった事に。ホントよかった」

「フェイト」 「だね。それに私達が9歳の頃からの事が語られて、最終話では26歳という年齢。よく続いたと思うよ」

「ルシル」 「確かな。あんな小さかったフェイト達が今ではこんな大きくなって」

「なの&フェイ&はや&シャル」 「セクハラ？」

「ルシル」 「は!?!」

「アギト」 「ルシルさん、女の子の身体的特徴を堂々と言っちゃダメだろ」

「ルシル」 「何なんだ本当に！ 最終話だけでなくあとがきまでこの扱いか!?!」

コード  
殲滅せよ、  
カマエル  
汝の軍勢

「キャラ」 「あわわ、お、落ち着いてくださいルシルさん！」

「エリオ」 「だ、ダメですよ！ こんなところでカマエルを使った

ら大変な事に！」

しばらくお待ちください

“シャル” 「まったく。軽い冗談なんだから受け流してよ」

“なのは” 「でもどっちかというと非は私達にあるよね」

“はやて” 「そやな。悪い事したわ。ごめんな、ルシル君」

“ルシル” 「むうむう！（そう思うならバインドを解け、コラ！）」

“フェイト” 「分かってくればいい、だって。優しいねルシルは」

“ルシル” 「むうー！ー！（フェイトオオオー！ー！）」

“スバル” 「なのはさん達、結構ひどい」

“ティアナ” 「あたし達くらいは最後まで優しく接してあげましょ」

“ルーテシア” 「それはそれでかえって哀れな気が・・・」

“レヴィ” 「ルシリオンのキャラというか立ち位置も結構変わったなあ」

“シャル” 「そう言えば、最終回って一気に一年以上後のことだったけど、中間辺りはどうだったの？」

“リイン” 「たとえばどんなのですか？」



“シャル”「そうね・・・まずルシルのデバイスってなに？  
ラインゴルトって名前らしいけど・・・。双剣・双銃・槍、だっけ？  
そんな機能を持つてる自作デバイスってこと？」

“ルシル”「気になるなら【ANSURについて】を閲覧してくれ。  
色々といじったから、それなりに楽しめるモノになったはずだ」

“シャル”「オツケー　　そんじゃあ、ヴィヴィオとルシルの再会  
はどうだったの？」

“なの&ルシ”「あ〜〜」

“シャル”「あ〜〜って何さ。何かあったわけ？」

“なのは”「う〜ん、普通だったよ。ね？　ルシル君」

“ルシル”「はあはあはあ。やっと解放か。酷い目に遭った。

で？　ヴィヴィオとの再会の話だったか。気になるなら再現しよう  
か。

へい、ヴィヴィオ、カモンカモ〜ン！」

“全員”「古〜い」

“ヴィヴィオ”「呼ばれて飛び出て　　どうも、高町ヴィヴィオで  
す」

しばらくお待ちください。セット組み上げ中。しばらくお待ち  
ください

“シャル”「高町家の玄関を再現。さあ、思う存分見せてくれちゃ

つて！

シーン64-C、タイトル：ルシルとヴィヴィオ、父子の再会。ア  
クション！！」

“なのは”「呼び鈴押してピンポン」

来客の顔を見せる為に小型モニターが展開

“ヴィヴィオ”「なのはママ！！」

ガチャリと玄関の扉が勢いよく開く

“ヴィヴィオ”「おかえりなさ・・・っ！ ルシル・・・パパ・・・  
？」

“ルシル”「えっと・・・ただいま、ヴィヴィオ」

見つめ合う父と子。ヴィヴィオの目から一滴の涙が

“ヴィヴィオ”「パパ・・・ルシル、パパ・・・ルシルパーパー  
！」

“ルシル”「ヴィヴィオ！」

ヒシッと抱き締め合うルシルとヴィヴィオ。母であるなのはの  
頬にも一筋の雫が流れ落ちる

“シャル”「カーツト！ なんだ、普通じゃん」

“なのは”「最初に普通だったって言ったよ」

“ ヴィヴィオ ” 「 えへへ、ルシルパパ 」

“ ルシル ” 「 よしよし。いい子いい子だ 」

“ フェイト ” 「 私よりなのはとヴィヴィオの方がルシルの家族っぽい 」

“ シャル ” 「 フェイト、恐いから恐いから。変なオーラ出さないで。だったら最終話に出てたように結婚しなさいよ。幸せになるよって言ってたのは嘘だったの？ 」

“ フェイト ” 「 うえ！？ ここでその話を持つてくるの！？ 」

“ リンディ ” 「 そうなのよ。ちょっと聞いてシャルロッテさん 」

“ クロノ ” 「 そうだな。そろそろ決意を固めてもらいたいものだ 」

“ 全員 ” 「 いつの間に！？ 」

“ リンディ ” 「 どうも、フェイトの母親のリンディです 」

“ クロノ ” 「 兄のクロノだ 」

“ エイミィ ” 「 そして、フェイトちゃんの義姉でクロノ君の妻エイミィです！ 」

“ シャル ” 「 あ、エイミィ……その、私の事憶えてないよね…… 」

“エイミー”「本編じゃないから憶えてるに決まってるよ」 お  
久あ、シャルちゃん」

“全員”（身も蓋も無い事を言ってるなあ〜）

“アルフ”「おいおい、あたしを忘れてもらっちゃ困るぞ〜」

“シャル”「アルフまで。あはは、ハラオウン家勢ぞろい……。えっと、嬉しいんだけど……。どうしたの？」

“アルフ”「聞いてくれよシャル。フェイトってばなかなかルシルとの結婚に踏み出さないんだよ。」

小さな頃から好きだって言ってるのにさあ、どうしたらいいんだよ」

“リンディ”「もう26よ。うちのクロノとエイミーでももつと早かったのに。」

どうしたらいいのかしら？ シャルロツテさん、何か良い案ないかしら？」

“フェイト”「ちょっと母さん！ アルフ！ もあ！ こっちで話そう！」

“エイミー”「ルシルくん！ ルシル君も一緒においで〜！」

“ルシル”「リンディさん、エイミー。フェイトがまだ早いと言っているのなら、まだいいんじゃないか？

というか結婚だけが幸せじゃな」

“リンディ”「お義母さん、もしくは、お義母さま、って呼んでね、ルシリオン君」

“エイミィ” 「あ、私は、義姉さん、でいいよあ」

“ルシル” 「……………(汗)」

“クロノ” 「僕は今まで通りで、クロノ、でいい」

“アルフ” 「まったなあ、シャル」

“シャル” 「……………行っちゃった。まあ、いいか。

え〜と……………次は何の話しようか？ 何かない？」

“スバル” 「この何でもアリな世界なら……………イクス〜！」

“イクス” 「はい。呼ばれて飛び出て、です。……………ちょっと恥ずかしいですね」

“シャル” 「おお、イクス。どうしたの？」

“イクス” 「この場をお借りして、シャルにお礼をしようかと」

“シャル” 「お礼なんて、そんなのいいのに。」

最終話で出てたようにイクスは楽しい日々を過ごしてるんでしょ？  
それが私にとっての報酬。だからいいんだよ、イクス」

“イクス” 「そう言われてもわたしが納得できないんです。  
ですから、その……………あの、横になつてもらえますか？」

“シャル” 「横になればいいの？ まあそれくらいなんでもないけど。」

これでいいんだよね・・・っと、ああ膝枕してくれるの？ ありがとう」

“イクス” 「はい・・・えっと、ごう・・・どうですか？ 気持ちいいですか？」

“シャル” 「あ・・・うん、気持ちいいよ。

イクス、頭を撫でるの上手いね。すごく気持ちいい」

“イクス” 「いい子いい子、です」

“シャル” 「すごい報酬だあ〜？これ。

そう言えばさイクス。魔法の練習してるんだよね？ どんなの？ ミッド？ ベルカ？」

“イクス” 「あ、はい。ミッド式で治癒魔法を習ってます」

“ヴィヴィオ” 「そうなんです！ 聞いてくださいシャルさん！ イクス、お医者さんになるって夢があるんですよ！」

“シャル” 「うお！ マジで!？」

“イクス” 「はい。かつてこの身は戦のためにありました。ですから、いつか人を助けられるような事をしたいと思っていました。

半ば諦めていましたが、シャルのおかげで新しい日々を、自由な日々を手にすることが出来ました。それなら夢を追ってみようと。シャルのように、どんな病気でも治せるような・・・。

って、ちょっと恥ずかしいですね。夢を語るというのは「

“リオ” 「そんなことないよ！　すごいよー！」

“コロナ” 「うん！　ちゃんとした夢を見つけてるなんてすごい！」

“アインハルト” 「すごく羨ましいです。立派な夢です」

“ヴィヴィオ” 「いつの間に!？」

“コロナ&リオ” 「ついさっき」　シャルロツテさんこんにちは

「

“アインハルト” 「先程こっそりと。シャルロツテさん、こんにちは」

“シャル” 「こんにちは　ゆっくりしてってね、三人とも。

それにしても、そっか、お医者さんかぁ。イクスならきつとなれるよ。痛みを知っているんだから」

“イクス” 「はい！」

“シャル” 「ふわぁ、すごく気持ち良くなって眠くなっちゃった。

このまま眠りたいけどまだ続きがあるから、名残惜しいけどここままでだね」

“イクス” 「あ、そうですか。シャル、本当にありがとうとついでにしました」

“なのは” 「幸せそうだね、シャルちゃん」

“シャル”「当たり前だよ〜？ イクスの膝枕の上に頭を撫でてくれたんだよお？」

これが幸せじゃないんだって言うんだよお？

はあ、なんて至福の時。でもまだ終われないんだよね〜と。

次は・・・あ、そうそう。これ裏話なんだけど、実はセレスが決戦の日、なのは達を揺さぶるために、構成員に命令してヴィヴィオ達の学校に攻め入って、それをヴィヴィオ達が迎え撃つってという話があったって知ってる？」

“リオ&コロナ”「そうだったんですかああ！？」

“アインハルト”「それはつまり、私達の出番が丸ごとカットされたという事ですね。」

それが事実ならちよつと許せません。

私だつてもつと出番が欲しかったです。それが戦闘というのなら尚更。

ヴィヴィオさん達もそう思いますよね？」

“コロナ”「アインハルトさんが黒くなってる・・・」

“リオ”「ん〜、確かに暴れてみたかったかなあ」

“イクス”「わたしは無くなってよかったと思います。」

皆さんお強いですけど、やっぱり危ない事はしてほしくないのだから

“シャル”「あはは。アインハルト。あとで試合してあげるから、今はとりあえず落ち着こつ。ね？」

“アインハルト”「え？ あ、はい！ お願いします！」



“ ヴィヴィ&リオ&コロ&イクス ” (うわあ、すごく嬉しそう)

“ シャル ” 「でも結局やんなかった。Vividの進行状況からして止むなくカット。

それと、女帝の洗礼の外壁突破シーン。あれにも裏話があって、Forceで使われてるAEC武装をなのはとヴィータが使って破壊するっていう設定もあったんだよ」

“ なのは ” 「え、うそ。本当に？ 私のフォートレスとかも？」

“ ヴィータ ” 「マジか！？ あたしのウォーハンマーも出る予定だったのかよ!？」

“ エリオ ” 「あの、僕のストライクカノンとか」

“ スバル ” 「あたしのソードブレイカーもですか？」

“ シャル ” 「残念。なのはとヴィータだけ。でも、これもForceの進行状況からしてカット。

まあこのエピソードの構成時、Forceの事を知らなかった作者だったから元々使わない話だったし、大して問題は無かった。

実際こんな裏話って結構あるんだよ、このEXエピソード。

たとえばリエイスがはやてを助けるシーン。

アレって実は当初、はやてが空母ナグルファルと戦って、艦載砲で撃墜されかけるところをリエイスのエミッションで救助、ナグルファルを轟沈させるっていう話だった」

“ はやて ” 「そうなんか！？ メツチャ無茶しとるんやな、私！」

“ シヤマル ” 「空母相手に単独戦闘ってはやてちゃん……。神秘

もないのに一体どうやって……?」

“リエイス” 「そちらの方が私はカッコよくないか?」

“シャル” 「まだあるよ。何とはやてとシャマルとザフィーラが神秘を得るための方法を私が提示するってやつ」

“ザフィーラ” 「む? そうなのか?」

“アギト” 「何でやんなかったんだ?」

“シャル” 「方法は、私と、魔術師としての契約をすること。つまりは、キ・ス?」

“全員” 「あゝゝゝ、それはダメ」

“シャル” 「でしょ? だから出さなかった。お蔵入りね。  
あと他には、ルシルとフェイトの決闘。実は創世結界・フレイザブリク神々の宝庫  
内で戦うってやつ」

“フェイト” 「それ負ける! 私、絶対負けるから! 勝てないよ、  
そんなの!」

“全員” 「おかえりなさい」

“シャル” 「おかえり、フェイト。話はまとまった?」

“フェイト” 「あ、それならルシル一人に任せてきた」

“全員” (ああ、なんか可哀想)

“シャル” 「それと、トロイメライが女帝の洗礼のコアを破壊する為に犠牲となつて、コア諸共粉碎されるっていうのもあった。まあ結局は、私かなのはに手渡すシーンの為にお蔵入り。

他には・・・アグステイン戦。アグステインが召喚した魔族の中に最下層の奴が出てきて、私達は大ピンチ。

それを助ける為に、最下層支配権の一柱にして現シュゼルヴァロード頭首のルリメリア、リルメリア姉妹が現れるっていうもの」

“全員” 「????????」

“シャル” 「まあそうよね。そういう反応になるよね。

早い話、決戦時の私、剣神状態より遥かに強い味方が二人現れるっていうこと」

“なのは” 「うわぁ、戦力バランスがすごい事になるね、それだと」

“ティアナ” 「お蔵入りして当然ですね。どれだけハイレベルバトル。

あたし達おいてけぼりを喰らいますよ。シャルさん以上が出てくるってなると」

“シャル” 「当然却下。ま、元々本気じゃない設定だったから」

“ルーテシア” 「もし出す事になっていたら、どんな魔族だったの？」

“シャル” 「候補としては、“鮮血湖フィーブレンヒアサド”。

大戦でアンスールを撤退させた幻想一属・“魔砂漠ネブソノフス”と並ぶ最強クラスの幻想一属。

転移移動する自我を持つ真つ赤な湖で、自分の湖中に獲物を引き摺りこんでじっくり融かして捕食」

“全員”「怖あ」

“シャル”「だねえ〜。あ、そうそう。ひとつ気になってる事があるんだ。

ルシルが空戦形態を失くしたんなら、フェイトが管理局の空戦最速魔導師になっただってことだよな？

雷天使、セインテストフォームがあるんだから。ひょっとして現代最速じゃないの？ フェイト」

“フェイト”「あ、シャル。その事なんだけど、もう使えないんだ雷天使。

アレってシャルのカートリッジの魔力じゃないとダメっぽくて、普通のカートリッジじゃ起動できないんだよ」

“シャル”「マジ？」

“フェイト”「マジ。まあアレはルシルの対空戦形態の魔法だから、もう使う事は無いんだからいいんだけど」

“アリサ”「ちよつとちよつと！ 物騒な事話してないで、そろそろ私達を出しなさいよ！」

“すずか”「だ、ダメだよアリサちゃん！ お呼ばれしてないのに勝手に出てったら！」

“なのは&フェイト&はやて”「ええええー！？」

“シャル” 「アリサ・・・すずか・・・！」

“すずか” 「久しぶり、シャルちゃん。ごめんね、仕方ない事とはいえシャルちゃんの事を忘れちゃって」

“アリサ” 「でもここでなら、ちゃんとあなたの事を認識できるから安心しなさいよ」

“ルシル” 「なんだ二人とも来てたのか。ん？ なんだ、シャル、泣いているのか？」

“シャル” 「な、泣いてなんかないもん！」

“アリサ” 「ルシル。あなたの事も忘れちゃってるけど、ここから認識できるわ」

“すずか” 「というか、最近会ったばかりだよな？ もちろん昔のルシル君の事は憶えていないから、はじめまして、だったけど」

“シャル” 「え？ 三人ともテルミナス戦後で会ったの？」

“なのは” 「えっと、つい最近地球に里帰りしたとき、ルシル君も一緒だったからその時に、ね」

“アリサ” 「驚いたわよ。フェイトが男と二人っきりで楽しそうに話してんだから。」

目を疑って、こっそり尾行して、何とハラウン家に一緒に入ってしまったのを見て卒倒しかけたわよ」

“すずか” 「地球で撮ったシャルちゃんとルシル君と一緒に映った

映像や写真からは二人が消えてるから、当然ルシル君を知らなかった私達はもうビックリしちゃって」

“はやて” 「そんで二人、いや、アリサだけが私らを問い詰めたんやったなあ」

“ルシル” 「そして何故か私はアリサに首を絞められた。死ぬかと思っただ」

“アリサ” 「し、しょうがないじゃない！　なんか悔しかったんだから！」

“すずか” 「私達の中で一番早い彼氏持ちで、アリサちゃんの首絞めはほとんど八つ当たりだよな」

“シャル” 「へへ、ルシルってば苦労してるねえ、ザマア（笑）」

“ルシル” 「何故だ！？　君も私の幸せを願ってくれていたんじゃないのか！？」

“なのは” 「まあまあ。それでルシル君。リンディさん達とお話は終わったの？」

“ルシル” 「ん？　ああ、まあな。現状維持だよ。

さつきも言った通り、結婚だけが全てじゃない。

それに、私とフェイトには、エリオとキャロという息子と娘がいるんだからな」

“エリ&キャロ” 「ルシルさん・・・」

“ ヴィヴィオ ” 「 ルシルパパ、わたしは？ 」

“ ルシル ” 「 当然ヴィヴィオも私の大切な娘だ 」

“ アリサ ” 「 それにしてもルシル。なのはとヴィヴィオ、フェイトとエリオとキャロと家族、しかも父親役って、いつか刺されるんじゃない？ 」

“ リンディ ” 「 あらゝ 大変ねえ、ホントゝ 」

“ クロノ ” 「 笑い事じゃないですよ、母さん。気をつけるよ、ルシル 」

“ ルシル ” 「 ああ、気をつけよう。本当に 」

“ アルフ ” 「 ルシルゝ、大変だなあ。ま、刺されない事を祈るよ 」

“ 全員 ” ( 祈るだけなんだ・・・ )

“ ユーノ ” 「 そろそろ僕も出してほしいんだけど・・・ 」

“ なのは ” 「 あ、ユーノ君 」

“ ユーノ ” 「 ルシル以上にあんまりな扱いだよ。

最終話のアナザーエピソード。白い子と黒い子とオレンジ色の狼。僕が出てないよ ( 泣 ) 。そりゃフェレットモードだから気付かれなかったのだろうけど、最後のなのはとシャルの名乗りシーン。

そこですら僕が出て来ない。イジメ？ これってイジメだよ ( 泣 )

“全員”（うわぁ・・・）

“シャル”「ごめんごめん。それじゃあ改めまして。

管理局無限書庫の司書長、ユーノ・スクライア先生です」

“ユーノ”「どうも、ユーノ・スクライアです。やっとまともに喋れたよ」

“レヴィ”「本編じゃなくてあとがきだけだね」

“全員”（…………レヴィ…………）

“ユーノ”「…………う…………うあああああ（泣）！！」

“なのは”「あ！ユーノく…………ん！！」

“ルシル&クロノ”「少し話をしてくる」

“全員”（可哀想）

“ルーテシア”「こら、レヴィ。事実だとしても言っちゃいけないことだってあるんだよ」

“レヴィ”「は〜い、ごめんなさ〜い」

“アギト”「ルールーも何気に酷いな」

“シャル”「三人が戻ってくるまでなんか話しないと。

あ、そう言えば、シャルの料理の腕が上がってきたっていう奇跡が起きてるみたいだけど、本当なの？」



“ シャマル ” 「 ひどい！ 私だって頑張れば料理くらい出来るもん！」

“ リイン ” 「 でも創作料理ですでに何人かが病院送りにされてますよ。わたしとヴィータちゃんとアギトもそうです」

“ ヴィータ ” 「 ありや酷かった。マジでお花畑が見えた気がしたし」

“ シグナム ” 「 最初の犠牲者はヴィータとリインとアギト、おまえ達だったな。」

シャマルの試作ケーキだと知らずに冷蔵庫にあったショートケーキを食べて病院送り。

倒れていたおまえ達を発見したときは驚いたぞ」

“ リエイス ” 「 生クリームで一人一文字ずつ “ ケ ” 、 “ ー ” 、 “ キ ” とダイイングメッセージを書いて・・・（泣）」

“ ヴィー&リイン&アギト ” 「 死んでない死んでない」

“ シャル ” 「 うわあ、乙女をケーキで地獄に落とすって大罪だよシヤマル」

“ シャマル ” 「 うえ〜ん（涙）」

“ はやて ” 「 まあ今やとホンマに美味しいもの作るよ。努力のおかげやな」

“ ルシル&クロノ ” 「 戻ったぞ」

“ユーノ” 「ごめん。ちよつと人生が嫌になつて」

“全員” (わぁ重~~~~い)

“シャル” 「あー、でもごめん。もうそろそろお別れの時間になつちやつた」

“全員” 「ええええええええ!!?」

“ユーノ” 「……orz」

“ギンガ” 「ま、待つてください!」

“チンク” 「我々の出番は!??」

“ディエチ” 「喋りたりないよ!」

“ノーヴェ” 「あたしはまあ最終話でも喋つたから十分だけだな」

“ウエンディ” 「ひどいつスよ! なんでこれだけしか喋れないんすか!??」

“セイン” 「ウエンディはもう調子乗るな! バトル仕切つてたじやん!??」

チンク姉達はまだいいよ! あたしって一話しか出てないよ!」

“オットー” 「僕はもう十分」

“ディード” 「私はもう少し話したかったです」

“ 故スカリエツティ ” 「 私は殺されただけ。 いやあ、インパクト過ぎて泣きそうだよ 」

“ 管理局組 ” 「 スカリエツティ!?! 」

“ 元ナンバーズ ” 「 ドクター!?! 」

“ レヴィ ” 「 何で出てくんのさ、カスリエツティ 」

“ ルーテシア ” 「 カス、じゃなくて、スカ。スカリエツティだよ 」

“ ヴィータ ” 「 なんつうフォローだよ。 てか、わざとか? ルーテシア 」

“ メガーヌ ” 「 あらあら。 うちの愛娘に酷い事をしてくれたクソ外道じゃないですか 」

“ 故スカリエツティ ” 「 な!?! うあ・・・ぎゃあああああああああ  
ああ!?! 」

“ 全員 ” ( 因果応報、自業自得 )

“ 故クイント ” 「 スカリエツティが出ていいんなら私も出る 」

“ ナカジマ家 ” 「 ええええええええっ!?! 」

“ 故ティータ ” 「 だったら僕も出ますよ! 」

“ ティアナ ” 「 お兄ちゃん!?! 」

“故ゼスト”「ならば俺も出させてもらおう」

“アギト”「ダンナ！」

“ルー&レヴィ”「ゼスト！！」

“故セレス”「ちょっと待ちなさい！　なら私も出ます！」

“故フィレス”「喋れる機会あらば、すかさず参上します！」

“シャル”「おいおい」

“ヴァイス”「そいつらが良いんだって言うなら俺も出せえ！」

“シャーリー&ルキノ&アルト”「なら私も出ます！」

“カリム”「あら、なら私も出させていただきますでしょうか」

“シャツハ”「それでは私も出ましょう」

“全員”「　§　」

“シャル”「うえ！？　なんかすごい人数になってきたよ！　しかも幽霊さんまで登場してるし！」

「ってゆうかうるさあゝい！　一斉に喋るなあー！！　シヤラ  
ツプシヤラツプ！」

“ルシル”「落ちつけシャル。キルシュブリューテを取り出してどうする気だ。」

「まったく、次回作の予告でもして少しは落ち着け」

“なのは”「そ、そうだよ、シャルちゃん」

“フェイト”「え〜と、今度はどんな小説なの？」

“はやて”「まさか、ANSURの最終章とか、一話目からまた、とかするんか？」

“ルシル”「それは無理だな。一からやり直すって、どれだけ時間かかると思ってる？」

それに最終章の予定もない。ANSURは完結することなく終わるだけだ」

“シャル”「そうそう。それに一からなってなったら、みんなのアイドルの私が敵になる上くそ真面目キャラ。

そして最後は死ぬんだよ？ それに出番も少ないし、誰も望まないっしょ」

“ルシル”「シャルのアイドル云々はどうでもいいとして。

理由は私が言った通りだから、ANSURはなし。で、次回作は・・・」

“シャル”「シャルをおバカさんだと思う人は拳手”って、メッチャ失礼過ぎ。

まあそこで出てきた【私が生徒会会長】になっただってやつ。憶えてる？

それをやるうと思ってるみたいよ、うちの作者。私とルシル、他数名による生徒会ストーリー！。

名付けて、【ハコにわ生徒会！】。カミングスーン！」

“ルシル” 「大変だったな、あの契約は。精神的に参った」

“全員” 「 § # 」

“シャル” 「だ・か・ら！ 一斉に喋らない！ 聞き取れないでしようが！

まったく、あーもお、最後の最後までグダグダなんて・・・！  
とりあえず、最後はビシッと決める！ いい！？ これで最後よ！

“魔法少女リリカルなのは・十字架を背負いし神意の執行者” はこれにて完結！

今まで応援して下さいました皆様へ！ せうのっ！！」

“全員” 「ありがとうございましたーーーー！！」

## 最後のあ・と・が・き（後書き）

どうも、Last testamentです。

まずは、今まで応援して下さい、ありがとうございます。

これにて完結となります。ここまで来れたのは皆様のおかげだと思っております。

シャルシルとリリカルなのは話はこれで終わりですが、シャルシルにはもう少し頑張ってもらおう予定です。

それが次回作の“ハコに生徒会！”。シャルを会長とした学校生活。

いつお届けできるか今のところハッキリと告知出来ませんが、そちらの方も応援して下さいと嬉しいです。

それでは、これにて魔法少女リリカルなのは 十字架を背負いし神意の執行者、完結です。

御愛読していただき、ありがとうございました！！

????????????

一体どれだけの時を過ごしたのだろうか。

魂はじりり砕けた信念で満ちている

ああもう思い出せそうにない。それほど長く。

信じた未来の果てに辿り着いたのは破滅へ続く道

これまで一体どれだけの命を奪ってきたのだろうか。



永遠の中をただ独り

― 一体どれだけの出会いと別れを経験したのだろう。

たった一度の幸福も許せず

― 一体どれだけの手を振り解いてきたのだろう。

死に逃げることもさえも許せない

― 一体どれだけの憎悪と憤怒を受けてきたのだろう。

怨まれるのは当然の罪で

― 一体どれだけの死をこの身に受けたのだろう。

憎まれるのもまた当然の罰

― 一体どれだけ私は悔やんだのだろう。

故に理解されようとは思わない

一体どれだけ資格も無いのに泣いたのだろう

それが唯一の償いなのだから

一体どれだけ幸せを望んでいたのだろう。

奪い去った幾多の命の十字架を背負い彷徨い続ける

一体どれだけ命を救えたのだろう。

彼の者はきつと

だが、それももう終わり。ああもう終わりなんだ。

壊れ果てた魂こゝろで生きていた

愚者と賢者は紙一重5th・テストメント・マリア

「ルシリオン様。私が契約中の世界にてようやく発見しました」

くくついに彼の解放の時が来たくく

「貴方を玉座に縛る元凶、墮天使です」

くく対峙するはかつての恋人と共に作り出した子供達くく

「行こう。天秤の狭間で揺れし者の最後の戦いへ」

くく一万年以上の時を越え、彼は守護神として、魔術師として最後の戦いへ。しかしくく

陸のエースオブエース：イリス・ド・シャルロツテ・フライハイト  
「時空管理局・特務騎士団団長イリス・ド・シャルロツテ・フライハイトです。」

そこの銀髪の人、武装を解除して投降しなさい・・・ってゆうか、どっかで会ってない？」

イリスを支える厳しい先輩騎士フィレス・カローラ

「副団長のフィレス・カローラよ。大人しくイリスの言うことを聞いた方が身のためよ」

フィレスの妹にしてイリスの義妹セレス・カローラ

「第一騎士のセレス・カローラです。なんか貴方とは初めてじゃない気がしますよ？」

くく降り立った地で彼の前に立ちただかるのはかつての仲間達。

黄金の閃光フェイト・テストロツサ・ハラオウン

「私は執務官フェイト・テストロツサ・ハラオウンです。」

そしてこの子はバルディツシュ。……あなたの名を聞かせてください」

最後の夜天の主八神はやて

「特務六課部隊長の八神はやて言うんやけど、少くし時間をもらってもええか？」

悪いようにはしゃへんで安心してもらってもええよ」

空のエースオブエース高町なのは

「私の名前は高町なのはです。お願いです。話を聞かせてください。私達にも手伝えるかもしれないから、だから話を聞かせて。ルシリオンさん」

くく愛しい彼女達との再会を素直に喜べないルシリオンくく

「話すことなど無い。これは私と彼らの問題だ。邪魔をしないでもらおう」

「〜大切だから共に居たい。大切だから共に居られない。故に突き放す〜」

「君達はこの件から手を引け。そしてもう私に関わるうとするな。死にたくなければ」

「〜次元世界に争いを呼ぶのは、今は墮天使と称されし元戦天使の第一世代ブリュンヒルデ隊と第六世代ヘルヴォル隊の将〜」  
ヴァルキュリー

氷浪の鏡リアンシエルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア  
「お父様。罪深き我ら墮天使に死の鉄槌を。私達はそれだけを待っています」

焰暁の槌バンヘルド・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア  
「如何な裁きとて受け入れる次第。しかしそれは私を斃してからです」

宝雷の矛グランフェリア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア  
「父上ではなく、現代の人間が私と戦おうなんて。私を殺していいのは父上だけよ」

闇絶あんぜつの拳レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア

「さすが剣神。でも、所詮は現世の人間だね。前世の剣神なら兎も角、今の君は僕の敵じゃないよ」

響風きょうふうの弓フィヨルツェン・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア

「わたくしは自分を許せないのです。ですから、お父様に殺してもらうまで、わたくしは自らの終焉を選ばない」

戦導せんどうの鉄風てつふうシュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア

「なあ親父。俺つてとんでもない親不孝者だったよな。だからさ、サクツと殺してくれ」

「その手で、洗脳され堕ちた子供達を破壊するために彼はグングニルを取る」

「久しぶりだな、ガーデンベルグ。お前に掛けられた呪いのおかげで随分と遠回りしたよ」

「だが待っていたのは自我を取り戻し、自らが犯した罪に苦しむ子供達」

戦計せんけいの剣ガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア

「俺は最後まで戦い続ける。それが墮天使を率いてしまった俺の義務だから。」

だから、俺を完全破壊する気をお願いするよ、父さん。でないとな俺は……」

「そして彼は協力者たちと共に自らの運命を切り開く」

「特務騎士団と特務六課は、ルシリオンさん、あなたに協力します」

「決戦の場は、彼にとって全ての始まりと終わりの世界ヴィーグリーズ」

「ルシリオン・セインテスト・アースガルド」

「ガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア」

「今こそ全てに決着をつける時!!」

「火花散らすは神造、魔造ともに最高クラスの神器」

「目醒めよ！ 神槍グングニル!!」

「起きろ！ 呪神剣ユルソーン！！」

〳〳墮天使戦争の果て、ルシリオンは如何なる道を進むのか〳〳

「真技！・・・クロリアス神断・・・エヴァンジェル福音！！」

原作：魔法少女リリカルなのは×オリジナル作品ANSUR

脚本：Last testament

ANSUR アンスール

今は失われし第一章『大戦編』&第二章『墮天使戦争編』

小説家になろうにて公開中の『界律の守護神編』

そして今、最終章『墮天使戦争完結編』がその幕を開ける。

神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルド

「私は・・・君が望んでくれるのなら、これからを君と共に歩んで  
いきたいと思う。」

だから、死が私と君を分かちその日まで、私の側に居てくれるか？

・・・  
┌



??????????

「うん・・・私も、これからをあなたと一緒に生きていきたい」

{} ANSWER ? The Last Testament of  
Rusyllion?

アンスール?ザ・ラスト・テストメント・オブ・ルシリオン?{}

2012年元旦・・・始動

???????? (後書き)

ハイ、今は4月1日の午前中です。今日が何の日か知っていますよね？

そして今日のイベントには12時までという時間制限があります。

その為に現時刻8:18に投稿。

しかし、今年はこのうのはいけないらしいのです。

以下はウィキペディアであったのですが・・・

2011年3月11日に発生した2011年東北地方太平洋沖地震を受けて政府は被災者感情を考慮し、『2011年特定行事自粛特別措置法』（通称：エイプリルフル特措法）を施行し、2011年のエイプリルフルの自粛を求めた。これによって、2011年は日本国内で嘘を付く事ができなくなったが、この法案には非難の声も多数上がっている。

自粛したかったのですが、機会はもう来ないと思ったので投稿しました。

震災に見舞われた方々に、この場をお借りしてお見舞い申し上げます。

魔道世界アースガルド。

それは、人間の住まう“表層世界”という単一次元の中心に位置すると言われている“氷零世界ニヴルヘイム”、“煉生世界ムスペルヘイム”に並ぶ三大原初世界、そのリーダー格。

“アースガルド”は海上に在るたった一つの大陸“聖域イザヴェル”以外がすべて海となつていゝる世界だ。

ならば“アースガルド”に住まう人間はその一つしかない“聖域イザヴェル”にだけ住んでいゝるのか？

答えはNo、それは違つゝ。“聖域イザヴェル”に人間は誰一人として住んでいゝない。

なら無人世界か？それも違つゝ。

“アースガルド”の人間が住んでいゝるのは、遙かなる空に浮遊してゝる四つの大陸だ。

“聖域イザヴェル”よりそびえ立つ“支柱塔ユグドラシル”。

全高2万mという超が幾つも付く高層建築物“支柱塔ユグドラシル”の半ば辺りを囲むように四大大陸がして浮いている。

四つの王族がそれぞれ四大大陸を治めている。

“アースガルド”最初の王にして、“魔術”と呼ばれる能力を生み出した【原初王オーディン】の末裔である“神聖なるもの王族”<sup>セインテスト</sup>の治める“グラスヘイム”。

そして“清廉なるもの王族の治める“ヴィーズブラーイン”、“境<sup>ワ</sup>界なるもの王族”<sup>イルトゥティス</sup>の治める“アンドラング”、“絶対なるもの王族”<sup>クルセイド</sup>の治める“ギムレー”の四大浮遊大陸がある。

その内のひとつ“グラスヘイム”大陸の中央には途轍もなく巨大な宮殿がある。

その名を“ヴァルハラ宮殿”。一つの町がすっぽり入るくらいの大きさだ。

元々はセインテスト王族が住まう宮殿だったが、今は大陸と同じ名を冠する“グラスヘイム城”に移っている。

今回の話は、千年と続いている“大戦”が終結する前のお話。

大戦を終結させるための、同盟世界の王族（生まれつき魔力量が半端じゃない）のみで構成された少数精鋭部隊“アンスール”が設立され、大戦に参戦する半年前のお話。

舞台は“ヴァルハラ宮殿”。セインテスト王族の代わりにその宮殿に住まうことになった住民達のお話となる。

セインテスト王領グラスヘイム大陸・ヴァルハラ宮殿

広大な宮殿内に何千と在る部屋。

ここは中でも会議室としての色合いが強い豪華絢爛な大部屋。窓と天井は全てステンドグラスのとなつているため、差し込む日差しの色は様々で、室内を幻想的にしていた。その部屋には幾つもの人影が集まっている。

部屋の中央、巨大な円卓に座する人影は、セインテスト王族の代わりにここ“ヴァルハラ宮殿”に住む事になった者たちだ。

そんな彼らはこう呼ばれている。完全自律稼働人型魔道兵器“ヴァルキリ戦天使”と。

“ヴァルキリ戦天使”は完全自律稼働人型魔道兵器と云われる通り人間ではない。

外見はどこからどう見ても人間だが、実際は魔術などの技術によって創り出された人工的な存在だ。

そんな彼らは、自らの生みの親であるセインテスト王族の現王【ルシオン・セインテスト・アースガルド】と同盟世界の一つ“氷零世界ニヴルヘイム”の王族・第二王女【シェフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム】をそれはもう途轍もなく慕っている。

実際に、ルシオンはお父様、父上など父が付く呼称、シェフィリスはお母様、母上など母が付く呼称で呼ばれている。

「さて今回、各隊の隊長格の貴女達に集まってもらったのは他でもありません」

円卓に座する一人の少女型の“ヴァルキリ戦天使”が立ち上がった。名を【プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア】。

彼女は第七世代ランドグリーズ隊の隊長を務めることになっている。美しい金の長髪を赤いリボンで結ってサイドアップにし、角度によって色の変わる瞳を持つ女性型。

同盟軍の制服とも言えるハイネック・前後の裾が燕尾の黒い（色は個人で違う）長衣、ロングコートを着て、彼女独自の裾の部分に金の刺繍が施された黒のハーフパンツ。

“雷滅の殲姫”というコードネームを持つ雷撃系最強の彼女は他のヴァルキリー“戦天使”を見回す。

「貴女達に一つお尋ねします、今日の暦は何なのか判りますか？」

今、円卓に座している八人全員が少女・女性型だ。

しかも全員が八つある部隊の隊長と副隊長である。

男の隊長・副隊長の姿はもちろん無い。ここは今、乙女の秘密会議場なのだ

とはいえもう一人少女型の副隊長が居るが、都合（システム最終調整）が悪く来られなかった。

「今日は、えっと・・・フェブルアーリ・トレーディエ、だね」

プリメーラの問いに答えたのは十歳くらいの少女だ。

シブルーのふわりと広がるロングストレート、チエリーピンクの大きな瞳、少し釣り目だがそこが何となく可愛らしい。

名を【ナーティア・ヒルド・ヴァルキュリア】。第三代ヒルド隊の副隊長を務めることになっている。

彼女は制服ではなく灰色のブラウス・赤いリボン、スクエアの白いロングワンピース。

腰辺りから前開きとなって、黒いプリーツスカートが見えている。

いつも被っている白いボーラーは、今は取って膝の上に置いている。コードネームは“凶狩の蒼水”。ルシリオンとシエフィリスが新たに作り出した水流系術式の完全機。

「ええ、その通り。本題ですが、私達ヴァルキリーの親であるお父

様の誕生日フェブルアーリ・フェムテが近付いています。

そこで、お父様をお慕いしている少女・女性型を代表するヴァルキリーで、その誕生日にお父様に何かを贈りたいと思ったのですが・  
」

プリメーラはそこで区切り、少し逡巡した後小さく項垂れる。  
その様子に首を傾げる他の“ヴァルキリー戦天使”達。そこに一人の女性が、

「あはは。何を贈ればいいのか判らない、ということよね？ プリ  
ム」

プリメーラの愛称プリムと口にしながら、プリメーラの凶星を突くのは、第一世代ブリュンヒルデ隊の副隊長【リアンシエルト・ブリュンヒルデ・ヴァルクユリア】。

“氷浪の鏡”のコードネームを持つ氷雪系第二位の“ヴァルキリー戦天使”。  
髪はシアンブルーのインテーク、背中まで伸びる髪は毛先が外へ向かってカールしていて、頭頂部から一本の髪（俗に言うアホ毛）が伸びている。

純白のフリルの付いたハイネックのロングワンピース。胸元にはサファイアのブローチ。  
その上から青のクロークを羽織っている。

「そうなんです、リアンシエルト。大戦参加前ですし、お父様はお忙しそうですね、ですからお邪魔も出来ませんし。

はあ・・・ですがお父様を慕う私は何かしたいと強く思っています」

「いつそ告白でもすれば？ 大好きです。母以上に父上のことが大好きです、って」

「……………な……っ!?!?」「……………」

告白すればいいという提案を口にした者以外が絶句する。

提案した女性、【ティーナ・ヒルド・ヴァルキュリア】はヒルド隊の隊長で、コードネームを“きよつしゆ凶狩の紫炎”。

スカレットの足元まで伸びる髪、アクアブルーの瞳は鋭い。

前後燕尾な赤色がかったセーラー服。上から制服の黒のロングコート。彼女独自の黒のハーフズボン。

副隊長のナーティアの姉で、炎熱系最強の“ヴァルキリー戦天使”、そして最も特攻主義なミサイル女。

そのティーナの提案に顔を真っ赤にして口をあわあわ震わすプリメーラ達。

「な、ななな何を言って・・・！こ、こここ告白なんて恐れ多い・・・！」

特にうるたえているのは10代前半くらいの少女【ソアラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア】。

プリメーラの部隊ランドグリーズの副隊長を務めることになっている、コードネーム“戦駆の騎将”を持つ外見に似合わぬ騎兵だ。

アースガルド王族特有の銀髪。額を大きく出したM字型の前髪、後ろ髪は一对のストレートのおさげ。

スカイブルーの瞳は深く澄んでいる。膝下まである白のセーラーワンピース・黒リボン。そして蒼いワンピースと同じ長さのエプロン。

「コホン、小さい子をからかって、ティーナは悪い子だね〜」

そんなソアラの慌てふためく姿を「クク」と笑いを噛みしめているティーナを窺める女性。

前髪を分けて額を少し出したマドンナブルーのショートヘア、ホライズンブルーの瞳は少し釣り目。



制服の長衣は白。上から制服である青いロングコートを着ている。彼女の名は【氷月・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア】。コードネーム“瞬凍の狩神”を持つ、第四世代ラーズグリーズ部隊の隊長を務めることになっている氷雪系最強の“戦天使”。彼女も頬を赤らめていたが、自分の冷気でクールダウンさせたようだ。

「と、とりあえず言葉よりも、もっと喜んでもらえるようなモノが良いと思うのだけど・・・」

「愛の告白っていう言葉でも十分父上は喜ぶと思うけど？」

「愛の告白かぁ・・・お父様にフラれるの前提でソレはシステムの自壊行為かも。」

この大事な時期にお父様に告白して、フラれたショックで頭ん中が異常発生したら、それこそ終わりだよ？」

「うわぁ、それは嫌ですね・・・。修復時に今までの会話記録を見られたらもう生きていけません・・・」

「でもティーナの提案は悪くないと思うよ。」

もちろん愛の告白は行き過ぎ、もとい恥ずかし過ぎ、さらにフラれるのが確定してるから無理だけど、お父様の心に残ってくれるようなメッセージを贈るのは良いと思う」

プリメーラ、ティーナ、ナーティア、ソアラ、リアンシエルトがそれぞれ言いたい事を言っていく。

それから幾つかの案が出されていく。肩もみ、お茶くみ、模擬戦の相手など。

しかし言い出しっぺのプリメーラが難色を示す。もっといい案は無

いのかと。

氷月と他の二人はただ黙って聞いているだけだ。そこに、

「だったら、ここは王道の手料理でいいんじゃないの？」

今まで黙っていた一人の女性が挙手し、そう提案する。

二世代アルヴィト部隊の副隊長、“双剣の帝”のコードネームを持つ【ミスファイ・アルヴィト・ヴァルキュリア】だ。

ロングの金髪を白リボンで結び、ふわりとしたポニーテールにしている

いつもキリツとした彼女のジェードグリーンの瞳も、ここにアルヴィトの隊長が居ないことで柔らかなものになっている。

足元まである長衣は灰色。そして黒のジャケット・黒の前開きスカート。

そのミスファイは挙手して、真っ先に挙がりそうだった手料理という提案をする。

静まる円卓。ここに居る誰もが手料理と真っ先に考えていた。確かに考えていた。が、あえて誰も口にはしなかった。

「あのグラスヘイムのセインテスト王でありながら、家事が得意という父さま相手に、料理経験が一切無いあたし達が料理を振舞う。どういう結果が待っているのか火を見るより明らかだわ」

黙っていたもう一人の女性が小さく挙手しながら、手料理という案をバツサリ切り捨てる。

彼女は【アーフィ・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア】。氷月を隊長とするラーズグリーズの副隊長だ。

コードネームは“げんかい幻界の司書”。遠距離からの儀式魔術を主とした

攻撃・支援を行う機体だ。

オレンジ色のセミロングの髪はウェーブが掛かっていて、オパールブルーの瞳はクリッとしている。

薄い桃色のブラウスに赤いネクタイ・赤ブレザー、黒のプリーツスカートという格好だ。

そんな彼女アーフィとティーナとミスフィを除くメンバーが「うっ」と胸を押さえた。

彼女達の父ルシリオンは何でもこなす。一国を治める王でありながらも暇があれば家事でも何でもする。

そのため、いつしか料理の腕前がなかなかのものになっていた。で、対する“ヴァルキリー戦天使”は料理などしたことがない。日頃から戦闘機能の調整、時間があれば人間の手伝いをしている。

しかし料理は範疇外だ。だから手料理を振舞うという案を口に出せなかった。

「みんなの心配はごもつとも。一度も料理をしたことのないあたし達が料理をして、父さまを満足させられるかと言えば、んなの無理っしょA h a h a だね。

でもね、一朝一夕で上手くならないのは人だけ」

アーフィの言わんとすることが何なのか察したプリメーラとリアンシエルトは待ったをかける。

「料理機能のプログラムをインストールすれば、労せず料理が出来るって言いたいのですよね？」

「確かに即料理の上達者になるけど、それはなんか違うんじゃないかな・・・？」

「反則というか何というか・・・。お父様に出すのが失礼な気が・・・」

「二人にそう言われたアーフィは「まあそれが嫌なら別の方法だよ」と溜息。

そこに氷月が「なら料理の出来る方に習えば？」と提案する。再び沈黙する円卓。さらにミスフィが「学習機能をフルに使えば、お父様の誕生日までには十分間に合うと思う」と続ける。

「それなら努力しての上達ですから、反則っぽくはない、よね？」

ナーティアが姉のティーナに訊く。

ティーナは「どっちにしる、想いがあれば何でもいいじゃない？」と返す。

ソアラが「それじゃあお父様へのプレゼントは、わたし達の手料理で決定ですか？」と八人の“ヴァルキリー戦天使”を見回す。

氷月が今回の乙女秘密会議（仮）の議長であるプリメーラに視線を送り「どうする？ プリム」と訊ねる。

「私もそれでいいと思います。誕生日に手料理のプレゼント・・・最高では？」

目をキラキラさせているプリメーラがリアンシエルトへと視線を向ける。

「最高、かな。お父様に喜んでもらえるのなら何でもやる。

それがお父様の得意な料理となれば、褒めてくれるかもしれないね」

リアンシエルトもまた目を輝かせてプリメーラに答える。

そんな彼女達をこっそりこの部屋の外、扉を少し開け、回廊より覗き見する人影が一つ。

(うわぁうわぁ、面白い事になってる！ ルシルに手料理を振舞うって、どんだけモテるのアイツ！  
もしかして女の子型のヴァルキリー全機に好意を持たせるようにプログラムしてるんじゃないでしょうね・・・?)

女性だ。燃えるようなカーディナルレッドの髪はインテーク・長い後ろ髪を背中で結っている。

つむじから二本のアホ毛が伸びていて、気のせいか意思を持つようにピョコピョコ揺れている。

オリエンタルブルーの瞳は興味津々といった風に輝いている。

彼女の名は【ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイム】。アースガルドと同盟を結んでいるムスペルヘイムの王族・第一王女だ。

ニッコニコな笑みを浮かべているステアはプリメーラ達に気付かれないようにその場を後にする。

回廊をスキップしながら進むステア。着ている厚手の白ブラウス・赤リボン・ロングの白ブリーツスカート、ムスペルヘイム軍将軍としての階級章が襟に付いた真紅のロングコートがその都度はためく。その顔は何かを企てているような悪戯っ子の顔だった。

? ? ? ? ? ?

#### ヴァルハラ宮殿・調理室

宮殿内に幾つもある調理室の内、使用人の賄いを作るためだけの調理室へ移動したプリメーラ達。

プリメーラ達は全員髪を後ろで結び、料理の邪魔にならないように

している。

この調理室には10台のキッチンが置かれ、彼女達は分かれて、それぞれの料理を製作している。

そんな彼女達を見守っているのはステアだ。

「レシピとか要らないの。味や見た目なんて言うのは二の次っ。手料理に一番必要なのは想い・・・そう、愛なのだっ！」

手を胸の前で組んで、その場でクルクル回りながらそう力説する。プリメーラ達は「はいっ、先生！」と返事。

ステアは悪戯心からプリメーラ達に何の知識も与えず料理をさせた。手料理には愛、味は要らない。それを強引に押しまくって。もちろん渋った彼女達だったが、ステアはこう言って説得した。

ルシルは完璧じゃなくたって、努力した結果を好む

ルシリオンの性格を知っている彼女達はそれで納得した。そして今、調理室内は戦場となっていた。

「あわわっ、調味料を間違えました〜(泣)」

「大丈夫 そのミスを帳消しになるように味を整えればいいんだから」

「痛っ！・・・初の被ダメージが包丁による自傷・・・orz」

「大丈夫？ ていうか不器用なのね、氷月」

「あああああああっ！ 火が食材に燃え移ってる！」

「うわっ？ ナーティア、水！」

「あ、はい！ 真技っ！」

「待った！ ボヤにも入らない火事に真技ってダメっ！」

ナーティアを押さえこむミスフィ。

その間にティーナが燃えている食材を手にして流し台にポイ、蛇口から水を出し消火。

大事にはならなかった。だが騒ぎは収まることを知らない。

「食材が逃亡した!？」

「にゃあああああああああつ!？ 足にタコが絡みついでるっ！

ダメ！ 気持ち悪い・・・！」

「誰かアーフィの足に絡まってるタコを剥がすの手伝って！」

「イヤイヤイヤイヤイヤヤ・・・プチ」

「アーフィがキレた！」

「押さえろ！ 儀式魔術を発動されたら調理室が吹っ飛ぶ！」

「調理室どころか私達も吹っ飛びますって！」

「キャハ 黒コゲにしちゃうから」

「アーフィの性格が変わっちゃってます！」

「アーフィはキレると性格が可愛い方向に変わる、っと。ルシルとシェフィに報告ね」

「ステア様も止めてくださいよっ！」

そんな騒ぎの果て、ようやく料理が完成した。

調理室の床にへたり込んでいるプリメーラ達。

タコに穢されたと喚いたアーフィに至ってはうつ伏せに倒れているまま。

「とりあえず試食ね。適当に見繕ってくるから待ってて」

唯一元気なステアが調理室を後にする。

それから一分と経たない内に扉が開く。

ステアが誰か連れて戻ってきたのか、と扉へと視線を向けるプリメーラ。

そこに居たのは、

「あれ？ 調理室で何やってるんだ？」

「ガーデンベルグ、シュヴァリエル」

二人の男性型“ヴァルキリー戦天使”だった。

一人は【ガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア】。

第一世代ブリュンヒルデ隊の隊長を担う、“せんけい戦計の剣”つるぎのコードネームを持つ。

銀髪にアップルグリーンの瞳、黒の長衣・スラックスに灰色のロングコート姿。

もう一人は【シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア】。



第六世代ヘルヴォル隊の隊長を任された、“戦導の鉄風”のコードネームを持つ風嵐系最強の“ヴァルキリー戦天使”。

オリエンタルブルーのツンツン頭、ワインレッドの目。前開き黒八イネツクタンクトップ・レザーパンツ・白のロングコート姿。

「ん？ 料理を作っていたのかよ。珍しい、というよりは初めてじゃないのか？」

シュヴァリエルが大きなキャスターに置かれた数々の料理を見て驚いている。

ガーデンベルグも続いてキャスターに歩み寄って、「何でまた料理なんかを？」とプリメーラ達に訊ねる。

「明後日、フェブルアーリ・フェムテはお父様の誕生日。何か贈り物と思って、手料理に挑戦してみたのだけど」

「へえ〜。見た目はちょっと崩れてるけど、美味そうじゃん」

プリメーラに料理をしている理由を聞き感心したガーデンベルグは、置かれた少し不格好な料理を見てそう褒めた。

シュヴァリエルも「親父もこれは喜ぶな」と感嘆。

「でしょ？ 今、ステア様が試食する誰かを連れて来るって出てったばかり」

リアンシエルトが胸を張る。

「あ〜、だからあんな嬉々としてスキップしてたのか」

「ああいう時のステア様は何を仕出かすか判んねえんだよなあ〜」

シュヴァリエルはここに来る前にチラツと見かけたステアを思い出して少し身震い。

ステアは途轍もなく頭の良い戦略家。戦場においては最強だろう。そこは尊敬している。が、ひとたび日常に戻ればそれはもう悪戯っ子なのだ。

だから日常で嬉々としている場合、何かしらの企みを考えている可能性がある。

それを実際に目の当たりにしているシュヴァリエルは、今回も何かしら悪戯を考えているのではないか、と思った。

「とりあえず、先にどう？ 結構量もあるし、二皿くらい食べてもまだ余るし」

リアンシエルトがガーデンベルグに一皿差し出す。

ガーデンベルグが「それなら頂くよ」と受け取ったその時、

「お待たせえ〜 試食係を連れてきたよ。って、なんだ。私と入れ違いだったんだ、ガーデンベルグとシュヴァリエル」

ステアの陽気な声が開かれた扉から聞こえてきた。

ステアの背後、そこには二人の青年と少年が居た。

「レンマーツォ、天星……」

ボケーっとしていたティーナが彼らの名を口にした。

青年の方は【レンマーツォ・アルヴィト・ヴァルキュリア】。

“せいてん 星天の槍”のコードネームを持つ、第二世代アルヴィト隊の隊長で、閃光系最強の“ヴァルキリー 戦天使”。

ココアブラウンの髪はライオンのたてがみのように逆立っている。

ダークブルーの瞳は切れ長だが、どこことなく優しげなものだ。

黒のハイネックタンクトップ・レザーパンツ・白のロングコート姿。

「レンマーツオが食べてくれるのですか・・・？」

「ああ、ステア様から頼まれた、ということもあるけど、俺自身も食べてみたい」

ミスフィは戸惑ったように自分の所属する部隊の隊長であるレンマーツオに訊ねる。

レンマーツオは微笑みながら、テーブルに置かれた料理を見回す。

「父さんに出す料理の試食だったっけ？試食とはいえ僕らが先に食べていいのかな・・・？」

【てんせい天星・ヘルフィヨトル・ヴァルクユリア】。

第五世代ヘルフィヨトル隊の隊長で、コードネーム“せいがん星貫の射手”を持つ、超長距離からの狙撃を得意とする。

まだあどけない少年で、チョコレートブラウンのショートヘア、シルバーグレーの瞳は少女のようにマルツとしている。

白の長衣に黒のハーフパンツ。それがさらに彼を子供っぽく見せる。天星も料理を見回して、そう言っていると、

「いいからいいから。ささ、座りなさい。あなた達の隊長か副隊長が作った自信作だよ。」

ちゃんと味わって、それなりの感想を言うこと」

ステアがこの場に居る男性“ヴァルキリー戦天使”を隣の使用人用食堂から持ってきた椅子に座らせていく。

ステアの口にした自信作というのを信じ、四人の男性“ヴァルキリー戦天使”は

フォークとナイフを手に、「おいしそうだな」、「少し不格好なのが初々しくてグッド」などと思い思いに喋りながら一口パクリと食べた。

直後、

「くくくぶふうっ!?」「くくく」

口に入れたモノを勢いよく噴いた。

「汚ないっ!」と悲鳴を上げる女子組。男子組は激しく咽で、飲み物を探す様に手を激しく動かす。

テーブルに人数分置いてあったジュース(もちろん手作り)の入ったコップをほぼ同時に手にして飲み干す。

するとまた、

「くくくぶはっ!?」「くくく」

鼻から口からとジュースを吹き出す。

今度は「鼻が、鼻が痛い!」、「酸っぱいぞ、コレ!」、「目の前が暗くなってきた?」、「そんな、強制シャットダウン・・・だとい!?」とパニックに陥る。

食べる前は感嘆していた四人は、今は地獄に立たされている。

口直しをしようにも、どれがアタリでハズレか判らない。もしくは全てがハズレかもしれないと軽く失意に落ちる。

何とか自制心を保って怒りに任せて暴れなかった四人は、息も絶え絶えにキャスターに突っ伏す。

それをオロオロしながらどうしようかと戸惑う女子組。

「ス・・・ステア様・・・コイツらに・・・試食・・・させ、ました・・・か・・・?」

シュヴァリエルが突っ伏したままステアにそう訊く。  
するとステアは、

「ううん、させてない。だってそれじゃ面白くないでしょ？」

そうキツパリと答えた。男子組は「ステア様あ・・・」と呻いた後、システムが強制ダウン。

激マズ料理によって、四人の隊長が過被ダメージによる強制シャットダウンとなって動かなくなった。

しんと静まるキッチン。プリメーラ達は、自分達の作った料理でこんな事態になるとは思いもしなかったことで、かなり沈んでいる。

「ま、最初は誰だって上手くないって。それじゃもう一度チャレンジね」

ステアはさっきの地獄絵図をなかった事にし、再度チャレンジするように言う。

プリメーラ達は料理機能のアップロード、最低でもきちんとしたレシピが欲しいと頼むが、ステアはそれを柔らかく叱責し、

「想いを料理にすれば絶対に美味しくなる。

ルシルだってそう言ってるんだから、あなた達にだって出来る。だってあなた達はあのルシルの娘なんだから」

そう力説。プリメーラとリアンシエルとナーティアとソアラはそれで納得。

氷月とティーナとアーフィ、倒れたレンマーツオを見るミスフィは、

（ただステア様が楽しみたいだけじゃ・・・）

と同じことを思っていた。

? ? ? ? ? ?

### 支柱塔ユグドラシル地下・ノルンの泉

“ユグドラシル”の地下深くにある“ノルンの泉”。

そこは“統括<sup>ノルニル</sup>三女神システム”と呼ばれる巨大な結晶体が置かれる聖域。

“<sup>ヴァルキリー</sup>戦天使”全機を統括するシステム【アプリコット・ノルン・ウルド】。

連合世界を監視する目を担うシステム【エリスリナ・ノルン・ヴェルダンディ】。

アースガルドとビフレストを繋ぐ門を開閉するシステム【リナリア・ノルン・スクルド】。

その三女神の本体である結晶体の前に男女一組が居た。

宙に浮く幾つものキーボードをものすごい速さで叩き、次々とプログラムを立てていく。

「ルシル、こっちは終わったよ」

「解った。こっちももう直に終わるよ、シエファイ」

一人は女性と見間違うほどの相貌である男性【ルシリオン・セインテスト・アースガルド】。

セインテスト王族の王であり、“<sup>ヴァルキリー</sup>戦天使”と現在進行形で開発中の

「統括三女神システム」の開発者。ノルニル

そしてもう一人は「シェフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム」。足首まで流れるシアンブルーの長髪はツースイドアップ。桜色の瞳は大きく吸い込まれそうなほど綺麗だ。紫色のハイネックロングワンピース・白のクローク、頭にはパーパー。

彼女もまたルシリオンと同じ開発者だ。そしてこの開発作業が二人の距離を縮め、二人を恋人とした。

「アプリコットとエリスリナはいつでも起動可能。リナリアは最終調整。あと三日とあったところか」

ルシリオンは泉の中央にある水晶体を見ながらキーボードのキーを叩く。

シェフィリスは「そうだね。早く目覚めさせてあげないとね」と、ルシリオン同様にキーを叩く。

そんな二人の面前にモニターが浮かぶ。そのモニターに記されている文字に、二人は「はい？」と気の抜けた声を漏らした。

「ちょ、どういうこと？ ガーデンベルグとレンマーツオと天星とシュヴァリエル、隊長機四機が同時に機能停止・・・？」

「何があつたんだ・・・！？」

二人は急いでその四人の現状を知るために、「ヴァルキリー 戦天使」統括システムのアプリコットを起動する。

いくつかキーを叩いた後、水晶体の前に一人の少女が現れる。チェリーピンクの長髪はサイドアップ。ルビーレッドの瞳はぱっちりとしている。

薄紫の前開きのセーラーロングワンピースに大きな赤リボン。

胸元にはひし形の開きがあり、胸の谷間がチラリと見える。そして肩部分がふっくら膨らんでいる半袖の黒ロングコート。両腕には黒のドレスグローブをはめている。

「お初にお目にかかります。お父様、お母様」

アプリコットがスカートを少し摘み上げて一礼する。

挨拶もそこそこにし、ルシリオンとシェフィリスは早速隊長機が機能停止した原因を調べさせる。

「え〜と、これは言っていないのかどうか迷うのですが・・・」

アプリコットはすぐに原因を解明した。

しかし言い淀む。ルシリオンとシェフィリスは首を傾げ疑問符を浮かべる。

「お母様だけにならお話ししてもよろしいかと」

「私だけ？ よく解らないけど、原因が判ったのなら聞くよ」

ルシリオンは頷き、シェフィリスとアプリコットの念話が終わるのを待つ。

すると突然シェフィリスが笑いだし、「アプリコット、機能停止した子達をすぐに再起動。また停止したら起動を繰り返して」と指示を出す。

アプリコットは「了解しました」と一礼する。

「原因は一体何だったんだ？ シェフィ」

ルシリオンはシェフィリスに訊ねるが、シェフィリスは笑うだけ。



アプリコットに視線を移そうとも、アプリコットも微笑み、水晶体の中に消えた。

ちよっとした疎外感を感じたルシリオンは、

「言わないと・・・こうだっ」

シエフィリスをギュッと抱きしめる。シエフィリスは頬を赤らめて大人しく体を預ける。

「うあ、ルシル・・・。わひゃっ!? ちよ、ダメ! あははははダメだつてばあははははははは!」

が、ルシリオンは背中に回した手でシエフィリスの背中をくすぐりだす。

ルシリオンの腕の中でくすぐったさから逃れようと暴れ出すシエフィリスの目には涙が浮かぶ。

シエフィリスの弱点は敏感過ぎる背中をくすぐられること。それを知るのは彼女の親族と恋人のルシリオンだけだ。

それでもシエフィリスは言わない。自分達の子供が、父親であるルシリオンのために奮闘していることを。

それを秘密にしようとしているのだから尚更。

「はあはあはあ・・・ひ、酷いよ・・・ルシル・・・」

結局喋らなかつたシエフィリスの強情さにルシリオンが折れ、解放泉を囲う砂浜に仰向けで倒れ、肩で息をしながら恨み事を言うシエフィリス。

ルシリオンは彼女の隣に座り込んで、「ごめんごめん」と笑みで返す。

「むう、許さないんだからね」

プイっとルシリオンから顔を逸らすシェフィリス。  
ルシリオンとシェフィリスの甘々な時間はまだ終わらない。

? ? ? ? ? ?

ヴァルハラ宮殿・調理室

「はい、いらっしやうい」

ステアが三人の男性型“ヴァルキリー戦天使”を迎え入れる。  
その三人も各隊の隊長・副隊長だ。

「今度はクルーガーとクリストとレイルか」

「あの、ステア様・・・？ 俺達もそうそう暇じゃないんですけど」

アーフィが生贄にやってきた三人の名を口にする。

【クルーガー・ヘルフィヨトル・ヴァルキュリア】。  
天星の補佐を務める副隊長で、コードネーム“砂礫の烈鎖”れっさを持つ、  
土石系最強の“ヴァルキリー戦天使”。

シルバーグレーの長髪をうなじで結び、シーグリーンの瞳はやや垂  
れている。

黒の長衣にストラックス・白のロングコート姿。

「私達を呼んだのは、父上への誕生日プレゼントとしての手料理の

試食、でよかったですね……？」

【クリスト・ゲイルスケルグ・ヴァルキュリア】。

第八世代ゲイルスケルグの隊長を務める闇黒系最強の“ヴァルキュリア戦天使”で、“こくお黒煌の紡ぎ手”のコードネームを持つ。

ガーネットの長髪をポニーテールにし、ブラウンの瞳は切れ長の長衣にスラックス姿。

「姉さんも参加してたんだ。ガサツな姉さんに、父さんに出せる料理なんて作れるの？」

「うっさいな。上手くなくても心が籠ってれば大丈夫なんだよ」

最後に【レイル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア】。

シュヴァリエルの補佐を務めるヘルヴォル隊の副隊長。

アーフィの弟で、彼女と同じ儀式魔法を主とした戦闘設計の元に開発された。

コードネームは“法界の司書”。

アッシュグレイのプラチナシヨート、黄色の優しげな瞳に丸眼鏡。

ハイネツクの黒シャツに、白のクローク。

「はいはい。とりあえず試食を済ませちゃって」

ステアに言われ、三人の男子組が席に座る。

少し離れたところで椅子に座って俯いているガーデンベルグ達に気付いたクリストが、

「彼らも試食したのか……？」

そう誰にとでもなく訊く。プリメーラ達は苦笑して「まあ、ね」と

濁した。

クリストは「そうか」とだけ言つて、ナイフとフォークを手にする。クルーガーとレイルも続いてナイフとフォークを持つ。

そして女子組の視線が集中する中、男子組はパクリと料理を一口。モグモグと口を動かしている。女子組は成功したと思つた。

先程は口に入れてすぐに吐き出した今は亡き（死んでねえよっboy ガーデンベルグ以下一同）ガーデンベルグ達。

しかし今度のクルーガー達は吐かずには咀嚼している。頷いていた三人の咀嚼が急に止まる。直後、

「……だあ~~~~~（涙）……」

口をだらしなく開け、咀嚼していたモノを涙と一緒に滝のように流した。

女子組の悲鳴が上がる。しかもさっき以上の悲鳴だ。何せさっき以上に見るに絶えないモノと化しているからだ。

しかし男子組はお構いなしに側にあったジュース（手作りパート？）の入ったコップを勢いよく手にして飲み干す。

「いぶあつー!？」

バタン!

するとジュースを噴いて、そのままリアクションも無しに三人は同時に床に倒れた。

ここで、男性型の隊長・副隊長が全滅した。

「……………これ以上はルシルとシェフィに怒られるかも」

さすがにステアもこれ以上の悪戯は危険と判断。

ルシルがよく使うレシピ本を、がっくりと項垂れるプリメーラとり

アンシエルトとナーティアとソアラに差し出す。  
当然、この場に居る女子組は、

(やっぱり始めからレシピを見せてもらえば良かった)

と同じ後悔をしていた。

? ? ? ? ? ?

### ヴァルハラ宮殿・サンクリスト空中回廊

スタンドグラスで作られた空中回廊を歩く三の人影。  
どれも140cmギリギリオーバーという小柄な体格、子供だ。

「そう言えば、さつきからヴァルキリーの隊長達がステアに呼ばれてどっかに行ってるけど、何やってるんだらうね?」

先頭を歩く10歳くらいの少女が、隣を歩く少女に訊ねる。  
声をかけたのは【シエル・セインテスト・アースガルド】。

セインテスト王族の第二王女。ルシリオンの実妹だ。

銀のツインテールを揺らし、ルビーレッドとラピスラズリのオッドアイは釣り目で、活発的な印象。

紫の長衣は腹部辺りで左右に分かれて、その下は前開きのスカート、さらに下は黒いロングプリーツスカートとなっている。  
そして白のロングコートといった格好だ。

「さあ? ステア様のことですから、きっと大変な事になっている

「のでは？ なんなら観に行ってみます？」

シエルにそう訊き返すのは、シエルと同じ背格好の少女【カノン・ヴェルトール・アールヴヘイム】だ。

アースガルドの同盟世界のひとつアールヴヘイムの王族・第四王女セミロングのプラチナブロンドはサラサラで、歩くたびに見惚れてしまうほどの流麗さで揺れる。

ライムグリーンの瞳は大きく、純粹な輝きを放っている。

フリルがたくさん付いたハイネックの純白のプリンセスタイプのドレス。

さらに上から前開きの桃色のドレスを着ている。

「んんん、巻き込まれるのは嫌だけど、仲間外れにされるのももっと嫌だから、行ってみようか。ラスティアもいいよね？」

シエルはカノンにそう答え、もう一人の子供【ラスティア・ゲイルスケルグ・ヴァルクュリア】に同意を求める。

先程ゲロったクリストの補佐を務める副隊長。コードネーム“終葬<sup>しゆうそう</sup>の奏旗<sup>そうき</sup>”を持つ、最後の戦天使<sup>ラストアンバー</sup>。

シャトルズイエローのショートヘア。額には留め具の無い紐状のアクセサリー、白銀のラリエットを付けている。

エメラルドグリーンの瞳はおっとりな垂れ目。

青いノースリーブの長衣、ふとももまで長さのある青のロングブーツだ。

「うん、いいよ。あたしもスティア様から招集を受けてたから」

「決まり。じゃあ行こう」

シエルとカノンとラスティアは、隊長・副隊長が集まって行ったヴ

アルハラ第三区画へと歩を進めた。

? ? ? ? ? ?

### ヴァルハラ宮殿・調理室

今まさに調理室内は死屍累々といった地獄だった。

アプリコットによって再起動されたガーデンベルグ達。

そこでこの場から離脱出来れば良かった。が、ステアによってまた試食することになり、何度目かの機能停止に陥っていた。

この時、“ウルドの泉”に居るルシリオンは原因を知らず、それはもう気が気ではなかった。

「レシピ通りでも機能停止させるほどの腕って・・・」

ステアが料理下手なプリメーラ達に戦慄していると、バタリ、と音が調理室内に響く。

倒れたのは調理をしていたミスフィだ。

自分が作った料理の味を整えるために一口食べた瞬間に倒れた。

ミスフィ・アルヴィト・ヴァルクユリア自滅

「ミ テイいいいいーーーーーッ!!!!!!」

「ミキ イって誰よ。ちよつと大丈夫? ミスフィ・・・?」

誰とも知れない名前を叫んだティーナにツツコミを入れるアーフィ。

心配そうにミスフィの元に歩み寄る女子組だが、その内の一人ソアラがミスフィの使っていたフライパンを覗く。  
単純な肉と野菜の炒め物だ。色鮮やかですごく美味しそうだ。

「すごく上手なのに、どうして卒倒するのかな・・・？」

ソアラはフライパンに顔を近づける。

そこでふと良い香りがした。料理としても十分な香ばしいモノだが、それとは別の香りが漂っている。

「この香り・・・どこかで・・・」

キッチン内をうろろろして、色んなモノの匂いを嗅いでいく。

ミスフィを機能停止者エリア（調理室の隅っこ）にずるずると引き摺っているリアンシエルトを横目に、ソアラは香りの元に辿り着く。そしてどうして？という疑問が頭の中を駆け巡る。

「どうして洗剤の香りが料理から漂ってくるんだろ・・・？」

食器を洗う洗剤の香りが炒め物から匂ってくる。

何で？と考えていると、ナーティアがソアラに近づき「どうしたの？」と声をかけた。

ソアラは話す。するとナーティアが「そういえば」と話し始める。

「ミスフィが食材を床に落としたからって洗ってたよ。たぶん洗剤で」

「・・・だからだね」

料理から洗剤の香りがする。それは何故か？



それは食材を洗剤で洗ったから。食べられるモノじゃなくなるのも当然だった。

「チーッス　僕らブリュンヒルデ隊が隊長を回収しに来たよっ」

調理室の扉を開けて入って来たのはブリュンヒルデ隊の残りのメンバーだ。

元気な挨拶で先に入って来たのが「レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア」。

“闇絶の拳”のコードネームを持つ、対闇黒系魔術師用の拳闘士。少女でありながら一人称を「僕」とする少年のような少女だ。

バイオレットのショートヘアはカチューシャを付けていることでインテーク化。

クリムゾンの瞳はネコ目で、口もどことなくネコ口だ。  
ハイネツクの黒セーター。白のロングコートという格好だ。

「いきなり大声を出しちゃダメよ、レーゼ」

レーゼフェアの愛称レーゼと口にしながら彼女を窘めるのは【フィヨルツェン・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア】。

“響嵐の弓”のコードネームを持つ狙撃型の弓兵だ。

チエスナットブラウンのセミロング、ブロンズレッドの柔和な瞳。  
赤紫のブラウスに黒ネクタイ、黒のフリルスカート姿。

「失礼しますステア様」

続いて一礼して入って来たのが「グランフェアリア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア」。

“宝雷の矛”のコードネームを持つ、対雷撃系魔術師用の槍兵。

ロングストレートの金髪はテールアップ、スカイブルーの若干鋭い

瞳。

黒のブラウスに赤のネクタイ、白スーツに白ロングコートといった服装。

「・・・いつから食すという幸福行為の元であるキッチンが地獄になったのだ？」

最後に、渋い声をさせて入ってきたのは「バンヘルド・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア」。

“焔暁の槌”のコードネームを持つ、対炎熱系魔術師用の鉄槌兵。ワインレッドのセミロングの髪はオールバック。赤のワイシャツ・スラックス、白のロングコート。

バンヘルドはキッチンの隅に転がる隊長格達の無様な姿に嘆息。

「へえ〜。ホントにプリムたち料理してるんだあ」

レーゼフェアが遠慮なくドカドカと室内を歩き回り、ふとミスフィのフライパンの前で止まる。

おいしそうだなあと表情が物語っている。

そして無遠慮に近くにあったフォークを手に取り、

「それはダメっ！」「」

ソアラとナーティナの制止も空しく、レーゼフェアが洗剤の香りをする炒め物を食べた。

ふむふむと頷きながら咀嚼してごっくんと飲み込む。

「ねえ？　なんか変な味が混ざってるよ、コレ。ダメだ、不味い」

苦い顔になったものの、ミスフィのように機能停止はしなかった。

フィヨルツェンに「もう少しオブラートに包んで」と呆れられながらチヨップを喰らうレーゼフェア。

「ごめんごめん。謝るから・・・って、誰に謝ればいい？」

レーゼフェアはソアラに訊ね、ナティーナが隅で転がるミスフィを指差す。

少し考える素振りをしたレーゼフェアが口を開く。

「あゝ、何と云うか、ご愁傷さま？」

「こら、勝手に殺さないの」

レーゼフェアとフィヨルツェンの親子のようなやり取り。

グランフェアとバンヘルドがコツコツと靴音を鳴らしながらグツタリしているガーデンベルグへと歩み寄る。

「一体どれだけの劇物を作れば我らヴァルキリーを機能停止に出来るのだ？」

バンヘルドがキャスターの上に置かれている料理を見て、本気で考え込む。

そこにガシャンと言う何かをひっくり返した音が室内にこだまする。

「レーゼ！？」

音の原因はいくつものボールが落ちた事によるものだ。

そして傍に倒れ、小麦粉まみれになっているレーゼフェア。

フィヨルツェンが急いで駆け寄り、レーゼフェアを抱き起そうとするが重い。

レーゼフェアは機能停止していた。遅れてダメージが浸透したのだ。

レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア戦死

「あゝあ、何でこんな事になったのかなあゝ・・・？」

室内の状況に頭を抱えるステア。

そこにまた来客。シエルとカノンとラストティアだった。

「シエル様とカノン様、今この調理室は危険エリアですので、お引き取りを。」

ラストティア、お二人を今すぐこの調理室からお連れして」

プリメーラが慌てて扉の前に居る三人の前に行き、ラストティアに二人を連れて調理室から離れるよう伝える。

「危険って何が？　すごく良い匂いだから、お腹すいたよ。どれなら食べていいの？」

タタタとキャスターに駆け寄り、上に乗っている料理を見比べて行く。

プリメーラ達は血の気が引いた。被害者がまだ“ヴァルキュリア戦天使”だけで済んでいる。

機能停止はしても死にはしない。が、人間であるシエルやカノンが食べればどうなるか。

寝込むくらいならまだいい。しかし万が一にも最悪な事になれば、父ルシリオに合わせる顔がないどころか殺される勢いだ。

一斉に「ダメですうー！ーッ！」とシエルにダツシュし、あるうことが食べられる前に食べてやれ作戦を執った。

絶句するステア。そしてガーデンベルグを看ていたバンヘルドとグ

ランフェリア。

「……………つづく……………!?」「……………」

どれだけ不味くとも吐き出すといつとんでもない恥を犯さないように努める乙女達。

肩を振るわし、口元を両手で押さえ、涙をポロポロ流そうとも必死に呑み込もうとするプリメーラ達。

ゴクンと呑み込んだ音が聞こえた。その直後、バタバタと倒れていく。

調理組……………全滅

「どうしよう。マジでルシルに殺されるかもしれない……………」

ステアが跪いて頭を抱える。

今日、フェブルアーリ・トレーディエ。

アースガルド同盟軍の主力となる予定だった“ヴァルキリー戦天使”の隊長と副隊長が、たった数時間、しかも自らの作った料理で全滅するという事件が起こった。

犠牲者

調理組代表

プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア

調理組メンバー

リアンシエルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア

ナーティア・ヒルド・ヴァルキュリア

ティーナ・ヒルド・ヴァルキュリア

ソアラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア

氷月・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア  
アーフィ・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア  
ミスフィ・アルヴィト・ヴァルキュリア

試食係という名の悲しき犠牲者

ガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア  
シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア  
レンマーツォ・アルヴィト・ヴァルキュリア  
天星・ヘルフィヨトル・ヴァルキュリア  
クルーガー・ヘルフィヨトル・ヴァルキュリア  
クリスト・ゲイルスケルグ・ヴァルキュリア  
レイル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア

事故死

レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア

本当に悲しい犠牲者

フィヨルツェン・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア

黒幕・被告人

ステア・ヴィエルジエ・ムスペルヘイム

裁判官

ルシリオン・セインテスト・アースガルド  
シエフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム

弁護士

無し

判決

一カ月間、恥ずかしい格好・化粧で過ごす

? ? ? ? ? ?

### 支柱塔ユグドラシル・大ホール

「ヴァルキリー戦天使」の隊長格全滅事件より三日後のフェブルアーリ・フェムテ。

“ユグドラシル”の1フロア、千人を収容してもまだまだ余裕のある大ホールで、盛大なパーティーが行われていた。

会場に今日の主役であるルシリオンが現れると、歓声と拍手が轟く。

「今日、私のためにこれほど素晴らしいパーティーを開いていただき、ありがとうございます」

ルシリオンの挨拶から始まり、アースガルド同盟の代表【フノス・クルセイド・アースガルド】の音頭となる。

「では、セインテスト王ルシリオンにかんぱ〜い」

一斉にジュースや酒の入ったグラスが掲げられ、「かんぱ〜い!」と響く。

立食パーティーとなったルシリオンの誕生記念パーティー。ヴァルキリー並べられた料理の2/3はプリメーラを始めとした“戦天使”によるものだ。残りは使用人のシェフだが。

「お、美味しいな、コレ」

ルシリオンが“ヴァルキリー戦天使”製作料理を食べて感嘆する。

隣に立つシェフィリスも「おいふい〜」とフォークを銜えながら、頬に左手を添えてウツトリとしている。

二人は自分達の子供達が努力して上達した手料理を食べられることが出来て、純粹に感動していた。

他の“アンスール”メンバーもそれぞれの場所で舌鼓を打っている。

「マア〜スウ〜タア〜」

そこに、甘ったるい声を出しながら走ってくる少女が一人。

漆黒のロングストリート・ブラックオニキスのような瞳。頭の上には犬耳。

しかし肌は白、美肌だ。その白い肌の露出度が高い漆黒のドレスを纏っている。

その少女はルシリオンの元まで近寄って、トンっとジャンプしてルシリオンに勢い良く抱きついた。

「ちよっ、コラっ！ 何してんのフェンリル！」

シェフィリスがルシリオンにがちり抱きつく少女【フェンリル】の引き剥がしに入る。

ルシリオンはフェンリルに向かって「久しぶりだなあ、フェンリル」と、彼女の頭を撫でる。

「何してんの、って・・・マスターに誕生日プレゼントの熱い抱擁だよ。」

私はマスターの使い魔、その前に神獣だから当然お金なんてない。だ・か・ら、体でプレゼント？」

フェンリルが恥じらいながらシェフィリスにウィンク。



顔を真っ赤にして絶句するシェフィリス。どうして二人の仲が最悪とまで言わなくても悪いのか真剣に悩むルシリオン。

「シェフィリス様はお金があるんだから、それはすごいプレゼントを用意してるんでしょうね・・・？」

「それは・・・！」

シェフィリスが言葉に詰まった直後、ルシリオンの背後から走ってくる二人の少女。

【リオ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア】と【ミオ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア】と言う名の双子の“ヴァルキュリー戦天使”だ。

共にインテーク、毛先がふわりと広がるサファイアブルーの長髪。

チエリーピンクの瞳は、リオは柔和、ミオは釣り目だ。

服装は白ブラウス・赤リボン、青のフレアースカート、黒の前開きスカートだ。

「お父様あ〜？」

双子はルシリオンの背中に飛び付いた。

「おっと」とたたらを踏み、首を動かして背後を見やるルシリオン。

「わたしも体でプレゼントしま〜す」

「あたしは、その、あの、あたしも・・・キャ？」

妹ミオが恥じらいもなくそう言い、姉リオが顔を真っ赤にして最後まで言えなかった。

わなわなと口を震わして、フェンリルとリオとミオを見るシェフィリス。

そして、

「だったら……だったら私もおーおーおーっ！」

「シエファイ、今そんな勢いのあるハグを喰らったら、私でも支えきれな」

シエファイリスすらそんな事を言い出し、ルシリオンに抱きつく。

さすがに四人分の体重を支えられないルシリオンは転倒。

リオとミオは転倒前に離脱。倒れたルシリオンを押し潰すのはシエファイリスとフェンリルだけだ。

そんな彼らを離れたところで見ているフノスは、

「仲が良くて、本当の家族みたいですね」

と、少し寂しげに微笑んだ。

## ????????その2（後書き）

どうもです。完結させておきながら、何度も更新するLast testamentです。

さて、エイプリルフルで投稿したANSUR最終章の嘘予告。

このたび、正式連載が決定いたしましたことを、この場をお借りして報告します。

予告とは少し内容が変わる予定ですが。

で、今回は戦天使のお話を出しました。

不完全燃焼ですが、どうかお許しください。

堕天使となる前、ブリュンヒルデ隊とシュヴァリエルが味方だった時、一体どんなキャラだったのかを紹介するための今回でした。

もう少しブリュンヒルデ隊の出番を増やすべきでしたとちよっぴり反省。

あと、メインタイトルについてですけど、予告では

ANSUR?The Last Testament Of Rurion

でしたが、やはりなのは達が関わっている以上、

魔法戦記リリカルなのはANSUR

にするべきか本気で迷ってたりします。

どちらがいいでしょうかねえ……？

## Episode Future：輝ける未来への道標（前書き）

ここに来て、新章を開始してしまいました。

いやぁ、申し訳ありません。完結させておきながら何度も更新したり新章始めたり。

AN SUR 最終章、メインタイトルは『魔導戦記リリカルなのは AN SUR』に決定。

で、連載開始までもうしばらくお待ちください。

Force の設定を色々と使いたいので、Force 原作がもう少し進むのを待っているのです。

ですから連載開始までの間、新章『輝ける未来の道標』編でお暇をお漬しくください。

## Episode Future：輝ける未来への道標

時空管理局と次元世界を未曾有の混乱に陥れた“テストメント事件”が終結して約9カ月。

管理局の隠蔽してきた不祥事による犠牲者の遺族と“ロストログリア・デイオサの魔道書”によって引き起こされた今回の事件は管理局と次元世界を大きく揺るがした。

本事件の首謀者であった「セレス・カローラ元一等空佐（故）」の本宅より発見された手記より、本事件を起こした動機、管理局の在り方の危険性などが公表され、さらに世界を揺るがした。

その事から各管理世界からの管理局へのパッシングは物凄く、その対応に追われた職員の中にはストレスで長期休暇・辞職する者も続出。

しかし、不祥事を働いた局員の送検、これまで以上の誠意を以っての事件・事故の解決に心血を注いだ管理局の信用も徐々に回復している兆しも見てとれる。

そんな対応に追われ慌ただしかった時空管理局の本局にも少しずつ静けさが戻りつつあった。

§彼の選んだ決別の仕方§

時空管理局本局内に存在するとある施設。

今、その施設内で一組による戦闘が行われていた。

多くの閃光が入り乱れ、互いを撃墜しようと施設内を奔る。

「レイジングハート！」

All right . Accel Shooter

一人はエースオブエースと称される空戦魔導師、高町なのは。彼女の白のバリアジャケットは完全な戦闘形態であるエクシードモード。

その事から相手は一筋縄ではいかないようだ。

なのははバスターモードの“レイジングハート”を大きく振り、誘導射撃魔法アクセルシューターを20基放った。

シューターは複雑の軌道を取り、なのはと相對する相手を包囲するように周囲を高速で飛翔する。

「さすが・・・！」

ハイネックの膝下まである前開き黒長衣・スラックス・編み上げブーツを身に纏う相手は苦笑し、様々なマニューバでシューターの包囲から逃れようとする。

しかし、

「手強い・・・！」

シューターも同様に追いかけてくるため、それは包囲し続ける牢獄となっていた。

相手がシューターに対処している最中、なのはが静かに動く。

「これで・・・！」

Excellion

なのはは“レイジングハート”の先端を複雑な機動を取る漆黒の相

手に向け、

「どう！？ ルシル君！」

B u s t e r

高威力の誘導制御、反応炸裂型中距離砲撃であるエクセリオンバスターを放った。

漆黒の相手、なのはに【ルシル】という愛称で呼ばれたルシリオンは「くっ」と漏らし、シューターのダメージとエクセリオンバスターのダメージを天秤に掛ける。

答えは考えるまでもない。ルシリオンはバスターよりシューターによる被ダメージを選択。

バスターが着弾するより早くシューターの包囲へ突貫、いくつか着弾したがシューターの包囲より離脱。

バスターの直撃も回避。そして、ルシリオンはなのはへとキツとした視線を向ける。

「魔力が増大・・・ルシルの大技！？」

「クラールヴィント！ 結界の出力をアップ！」

J a

そんなルシリオンを見たこの施設・模擬戦専用訓練場の二階部分に設置された見学室に居るユーノとシャマルが訓練場内に展開した結界のレベルを上げる。

二人は模擬戦することとなったルシリオンとなのはのバカみたいな魔力で施設を破壊されないように、結界を張ることになっていた。もちろん訓練場にも結界を張れるシステムがあるが、それだけでは

心許ないということ、サポートのエキスパートであるユーノとシヤマルが駆りだされた。

「防御をお勧めするぞ、なのは！」

コード  
天壤よ哭け、エネディエル  
汝の剛雷

ルシリオンの背後に蒼雷の球体（成人の頭部大）が七基生み出された。

それらは、ルシリオンに言われた通りいつでも防御が出来るように警戒しているのはへ、なのはを包囲するようにゆっくりと飛んでいく。

そして、

「ジャッジメント  
爆滅肅清！」

ルシリオンの号令によって、七基の蒼の雷球エネディエルは一斉に炸裂。

エネディエルは雷撃を纏う球状の衝撃波となって拡大していく。

「これは・・・！ レイジングハート！ お願い！」

O v a l P r o t e c t i o n

なのはを包み込む桜色をした球状の魔法障壁。

仲間の保護や状況確認、防御に専念せざるを得ない時に使用される全方位防御だ。

炸裂した七基のエネディエルの衝撃波に呑まれたなのは。

この模擬戦を見学室で見学しているフェイトと八神家が固唾を飲んで見守る。



(あれ・・・？ 思っていた以上に威力が無い・・・？)

プロテクション内でふと疑問を浮かべるのは。

確かに魔力の増大を感じ、危険度の高い攻撃魔法と判断。

しかし防御に回ってみれば、大して威力が無いことが判った。

それでもAAA-ランクの魔力はあるだろうが。

なら、この魔法は何のために？ ルシリオンの警告は何のために？  
なのはの顔色が変わる。それはミスをしてしまったという焦りの色だ。

「第二波、たぶん本命が来る！ カートリッジロード！」

All right . Load cartridge

尚も治まらない衝撃波の中で、なのはは“レイジングハート”にカートリッジのロードを命じる。

なのはは悟った。エネディエルは布石だ、と。

防御を誘う警告。魔力増大を見せることで信憑性を高めたことで、なのははつい乗ってしまった。

ルシリオンは神秘を失い魔術を扱えなくなった。が、魔法となってもその脅威は無くならない。

だからこそなのはは過剰に構えてしまった。

(リンカーコアはやはり出力に問題ありだな。

システム  
魔力炉で出来ていた事が全く出来ない・・・。特に書庫を失ったのが一番痛いな)

衝撃波に吞まれたなのはを見詰めながら、ルシリオンは魔術師と魔導師の違いである魔力炉とリンカーコアの差を確認して、かなりの

レベル低下に肩を落とした。

(とりあえずは予定通りなのはとの模擬戦を決着させないとな)

ルシリオンは衝撃波が次第に治まっていくのを見て、急いで本命の一撃をスタンバイ。

ルシリオンの前面に蒼光の円陣が展開。彼は左腕を大きく引いて、左拳に蒼光を纏わせる。

「浄コト壊なせ……」

円陣の中央に蒼光の球体が生まれる。

ルシリオンは引いていた蒼光を纏わせた左拳を、前方にある大きく膨れ上がった光球へ、

「汝ザクザゲルの光輝……！(ん？……何だこれは……！?)」

殴り付けた。円陣より放たれる直径4mと蒼の光球。

ザグザゲルはなのはの元へ一直線に飛来していく。

しかし、エネディエルの衝撃波がギリギリ治まったことではプロテクションを解除、すぐさま射線上より離脱する。

直後、ザグザゲルが床に着弾。拳大に縮小した後、一気に半球状に炸裂拡大。

プロテクション・パワード

なのははカートリッジを一発ロード。

左手を迫るザグザゲルに翳し、バリアを展開させた。

ルシル君の魔法ザグザゲルをカートリッジ分の魔力で強化したプロテクションで防ぐ。  
でも、

(さっきのエネディエルよりずっと威力が高い・・・！)

押され始める。何とかその場に踏ん張って耐える。

少しずつ威力が治まっていって、何とか耐えきった。

そしてすぐに私はルシル君の姿を探す。ルシル君はすぐに見つかった。

見つかったんだけど・・・

「・・・って、ルシル君？ えっと、ルシル君・・・？」

ルシル君は床に倒れてた。私はどうしてルシル君がそんな事になっているのかが判らず、一部始終を見ていたと思うモニター越しに居るフェイトちゃん達に首を傾げなら視線を移す。

するとフェイトちゃん達もよく見えなかったのか首を傾げる。

「セインテスト君、大丈夫？」

シヤマル先生がルシル君に駆け寄って、私のところにはユーノ君が来た。

「大丈夫？ どこか痛めてない？ なのは」

「うん、どこも痛くないよ。それにしてもルシル君は？」

ユ一ノ君の心配にそう返して、シャル先生に診てもらっているルシル君を見る。

フェイトちゃんは一度私を見て、私は心配ないよって頷きでフェイトちゃんを置きなくルシル君のところに向かわせる。

フェイトちゃんは「ごめんね」って口パクで謝って、ルシル君とシャル先生に歩いていった。

遅れてはやてちゃん達八神家が訓練場に降りてきて、私のところに向かってくる。

「どやった、なのはちゃん。ルシル君との模擬戦は？」

はやてちゃんがルシル君を見ながら私に訊いてきた。

「うん、その、言い難いんだけど、やっぱり弱くなってるのかな・・・？」

最後のザグザゲルには焦っちゃったけど、全体的に何かぎこちないっていうか・・・」

ルシル君が最後に戦ったのは“テストメント事件”の最終決戦。

ルシル君とシャルちゃんの因縁の相手だったアグSTEIN何とかヨツンヘイム（覚えられない）が最後だ。

事件終結後は聴取とか裁判とか色々あって、今日まで体を動かすなんてことはなかった。

だからかもしれない。ルシル君がどこかおかしかったのは。

「ふむ。私も高町と同じ感想だな。セイントテストの魔導師としての初陣はアグSTEIN王だったが、あの時は魔術師時と同じように戦っていた。

しかし先程の高町との模擬戦にはあの時のような鋭さが全くない。

早い話が弱い」

「ぶっちゃけんなあ、シグナム」

腕を組んでウンと頷いたシグナムさんにヴィータちゃんが苦笑を返す。

そこに「はは、否定は出来ないな」と声が。

私達は一斉に声の主であるルシル君へと視線を移す。

そこにはフェイトちゃんに支えられて佇んでいるルシル君。

「大丈夫？ ルシル君」

「ああ。大丈夫だ。模擬戦の相手、ありがとうなのは」

「うん。どういたしまして」

ルシル君のお礼に笑顔で返す。でもルシル君の表情は晴れてない。

このままお話しと行きかけたけど、訓練場の使用時間が終わりが近づいたから私達は訓練場を後にする。

向かうは食堂。お昼が近いし、早い内に席を確保する事も出来るし、ちようどいい。

無限書庫で仕事が出来たと連絡が来たユーノ君とはここまで。

ユーノ君と分かれた私達は、まだガラリとしているシツティング・ピユッフエ方式の食堂に着いて、みんなそれぞれ食べたいご飯を用意して一番奥の席に座る。

で、早速フェイトちゃんがルシル君に質問。

「でもルシル。一体どうして気絶なんて・・・？」

ルシル君がピシツと硬直。それでみんなも食べるの中止して硬直。

「ルシリオン、言いたいくないのなら言わなくともいいんだぞ？  
無理に訊き出すような事を私はしたくないしな」

ルシル君の右隣に陣取ったりエイズさんが、ルシル君の左隣を陣取ったフェイトちゃんをチラリと見て微笑んだ。

フェイトちゃんの口元とこめかみがヒクツてなったような気がする。

「でももし原因が体調にあるなら大変だし、ここはちゃんと訊かないと。私、ルシルのことが心配だし」

今度はリエイスさんの口元とこめかみがヒクツてなった。表情は微笑みだけど目が笑ってないよ。

ルシル君達の向かい、はやてちゃんの隣に座るラインとアギトが目に見えて嫌な汗を流してる。

「そうね。さっき診たときは異常はなかったのだけど・・・。  
セインテスト君。本当に体は大丈夫？ 私は医者だから何でも言うてね」

「そ、そうやで、ルシル君。みんな心配してるんや。原因が体調やないんならええんやけど・・・」

シヤマル先生とはやてちゃんにそう言われたルシル君は、「ふう」と小さく溜息を吐いた。

高い天井を見上げて、ルシル君は喋り出した。

「・・・かった」

「え？」

ルシル君がボソツと何か言ったけど聞こえなかったから訊き返してしまっただ。

ルシル君は少し黙って、恥ずかしいのかそっぽを向いてまた口を開く。

「間に合わなかったんだ。障壁を展開するのが」

「あ？・・・つうことは、だ。セインテスト、お前・・・ひよっとしてアレか」

ヴィータちゃんが口に運ぼうとしていた肉団子をポロッと落とした。ルシル君が何を言いたかったのか解った私達は絶句。

だってそれはルシル君の真実つよみを知る私達にとつて信じられない現実。

「そっだよヴィータ。なのはを撃墜する前にザグザゲルによって自滅したんだよ、わたしは」

誰も反応を示さない所為かルシル君の頬が少し赤くなっていくのが判る。

白い肌と銀の髪だから余計に赤みが目立つ。

「えっと、その、ね。落ち込んだじゃダメだよ？ ルシル」

「そっだぞ。元は魔術師というものだったのが急に魔導師となったのだ。

こういうことが起きてもおかしくはない・・・と思う」

「別に落ち込んでなんか・・・いない」

落ち込んでる。絶対落ち込んでる。  
ガツクリ肩落としてるし、フェイトちゃんとリエイスさんに頭撫でられても何も言わないし。

「ぶっ……くくく、あはははははははははは！」

あの！ あの 세인트テストが自爆！？ ありえねえ！ あはははははははははは！

「おい、ヴィータ、ダメだろ、笑っては、くく」

「ちよっ、ヴィータちゃん！ シグナム！ 笑っちゃルシルさんが可哀想ですよ！」

ヴィータちゃんはテーブルをバシバシ叩いて涙を流しながら爆笑。シグナムさんもルシル君から目を逸らしてヴィータちゃんを窺めるけど、どう見ても肩を震わして笑いを我慢してる。

リインが気遣わし気にルシル君をちらちら見ながらヴィータちゃんとシグナムさんを窺める。  
そしてさらに沈むルシル君。もう見てられないよ（涙）。

「ルシルさん。あたしのハンバーグあげるよ」

「あ、じゃあわたしもあげますよ」

リインとアギトが自分の皿からハンバーグをルシル君のさらに移す。ヴィータちゃんがリインに「いいのかよ、好物だろ？」と訊くと、リインは、

「いいですよ。ルシルさんが喜んで元気になってくれるなら」



すつごく可愛い笑顔で答える。んだけど、でも目が、視線がルシル君の皿に移ったハンバーグから離れない。やっぱり食べたいんだろ  
うなあ。

アギトも「あたしもいいんだ。相棒シグナムの非礼の謝罪だから」とシグナムを視線で射貫く。

ヴィータちゃんとシグナムさんが「うっ」とすまなさそうに顔を伏せる。

「リイン、アギト・・・優しいな、ありがとう。」

本当にありがとうだが、その優しさが今は・・・辛いんだあああああああああっ！！！！！！」

ええええええええええ！？

ルシル君が立ち上がって、食堂をダッシュで走り去って行ってしまった。

それはもう私達はそれを止めることが出来ないほどの速さで。硬直する私達の中で一番最初に動いたのは、

「ルシル！ ごめん、お昼は先に済ませておいて！」

フェイトちゃんだった。

フェイトちゃんも長い髪を揺らしながら走って食堂を後にする。

リエイスさんもフェイトちゃんに続こうとしたけど、思い直したみたいで静かに席に座る。

「あれ？ あたし、ルシルさんに何か酷いことやったのか・・・？」

「わたしも何かしたのでしょいか・・・？」

アギトとリインが困惑してる。

そこにザフィーラが「お前たちの所為ではない」と二人を安心させる。

「問題があるのはシグナムとヴィータだ。

今までのセインテストからすれば信じられぬ事だろうが、それをあ  
あも笑うのは失礼だぞ。

仮にも我々より長く存在し、その存在を懸けて戦ってきた、本来な  
ら敬意を払うべき男だ」

狼形態のザフィーラに窘められたヴィータちゃんとシグナムさんは  
反省したようで、ルシル君に謝ろうと席を立つんだけど、

「ヴィータ、シグナム、ちょお待ち。今はフェイトちゃんに任せ  
方がええ」

はやてちゃんに待ったをかけられる。

フェイトちゃんとルシル君、二人を想つての事なんだろうなあって  
思った。

だけど、

「お昼ごはん残すんはアカンよ？ ちゃんと食べやな勿体ない」

違った。ご飯を残す方がはやてちゃんには問題らしい。

ヴィータちゃんとシグナムさんは黙って「はい」と頷いて座り直  
した。

フェイトちゃん。ルシル君の事をお願いします。

私達はお昼ご飯を残さないように、フェイトちゃんとルシル君の分  
までしっかり食べる所存です（涙）

「お残しは許しまへんで」

「はやて・・・ソレ、忍　まの食堂のおば　」

「おば・・・、続きはなんやらなあ？　なあ、ヴィータ」

「な、何でもないです（怯）」

目の笑ってない笑顔なはやてちゃんに戦慄しつつ、私達は黙々と箸を進めた。

＋＋＋　Sideなのは　フェイト　＋＋＋

食堂を飛びだしたルシルを探して本局内を駆ける。

時折立ち止まって、目を瞑ってルシルの存在を探查する。

ルシルをこの世界に留まらせるために行った“対人契約”。

その恩恵なのか目を瞑ってルシルの事に集中すると、ルシルがどこに居るのかアバウトながら判るようになった。

「・・・見つけた」

ルシルの存在を確認。私はそこに向かってまた走りだす。

そして辿り着いたのが、ずっと前にルシルとシャルから管理局を辞めるとその口から聞いた時の公園。

噴水近くのベンチに座っているルシルを発見した。

「バカだよな、私は。今さらプライドなどあるわけもないのに」

ルシルは私に気付いていたのか、そっと歩み寄っていた私に視線を

向けてきた。

私は何も言わずにルシルの隣に座って、ルシルがもつと弱音を、弱音じゃなくても今の気持ちを話してくれるように無言で待つ。

「シャルの結界内で戦った時、魔導師となっても十分戦えると信じていた。

しかしどうだ。久しぶりに戦ってみれば全部にタイムラグが生まれていた」

ルシルは俯いて話を始める。私は「うん」と相槌を打つ。

今はまだ何も言わない。言うべきところじゃない。

「リンカーコアの魔力生成速度、魔術と魔法では異なる術式発動のタイムラグ……。

ザグザゲルの時、私は炸裂する魔力波に対する障壁を展開しようとした。

だが間に合わなかった。魔術師としてなら余裕だったのが、魔導師ではギリギリどころか……。

情けない。頭に体が追いついていない。魔力値が高くとも使いこなせないのなら意味がない。

これじゃあ君を守ることが出来ない。私は何のために……」

そこでルシルは深い溜息を吐いた。

私はまた相槌を打って、ルシルの頭に拳骨を一発振り下ろす。

「痛っ？ いきなり何をするんだ、フエイト」

私に殴られたことでルシルがようやく私を見る。

そこで気付いたみたい。今の私がちょっと不機嫌だということに。

口を噤んだルシルの目をじっと見て私も自分の気持ちを話す。

「ルシル。私はいつまででも守られてるつもりはないよ。私だってもう大人だし、守られてばかりじゃないんだよ？それに私は本気のルシルとだって戦って勝ったんだし」

“テストメント事件”の決戦。そこで私は、セレスの延命の為に“力”が制限されていたルシル（それでも十分強かった）と一対一で戦って勝利をおさめた。

だからこルシルは今こうして私の隣に存在している。そう、私だってルシルに守られてるばかりじゃない。

「私だってルシルを守りたい、支えたい。

何のために私はルシルをこの世界に留まらせたと思うの？

それはルシルに私を守らせるためじゃない。一緒に生きていくためだよ。

だから、そうやって自分を卑下しないで。私と一緒にこれから強くなっていけばいいんだよ」

「フェイト……」

「ね？ だから気にするなとまでは言わないよ。

でも焦ることはないと思う。まだまだこれからだよ、ルシル」

ルシルは「そうか」とだけ言って喋らなくなった。

話し声がしなくなった公園。だけど少しずつ同員がお弁当を食べるために集まってくる。

そこで、きゅ〜と私のお腹が鳴る音。ルシルが私を見る。

聞かれた。一気に顔が熱くなる。ルシルから見れば今の私はそれはもう真っ赤な顔をしてるだろう。

「……お腹空いたな。食堂へ戻ろう、フエイト。昼食の再開だ」  
ルシルがベンチから立ち上がり、私に右手を差し出してきた。  
私はその手を掴んで、ルシルに引っ張ってもらおうような形でベンチから立つ。  
繋いだ手は離さない。ルシルは離そうとしたけど私が阻止。  
そのまま公園を後にして食堂を目指す。たぶんなのは達の事だから、私達を待っているかもしれない。

「いいのか？ こんな堂々と手を繋いで局内を歩くなんて……」

「ん？ 私は全然気にしないけど（ホントはかなり照れる）。ルシルは気にする？ 恥ずかしい？」

「いや、まあ……いいか」

「じゃあこのままで」

私が半ばルシルを引っ張るようにして前を歩く。  
私達に向けられる局員の視線が何だ。見たい人は見ればいい（ホントは見ないで）。  
そして戻ってきた食堂。思った通りなのは達がさっきと同じ席で私達を待っていてくれた。

「あのよ、セインテスト。さっきは、その、悪かった」

「私も謝ろう。すまなかった」

ヴィータとシグナムがわざわざ席を立てルシルに頭を上げて謝った。

さすがのルシルも当惑してるみたい。ポカンってしてるし。でもすぐにいつものキリツとして、でも優しい表情に戻ると、

「いや、いいんだ。怒ってないから頭を上げてくれヴィータ、シグナム。」

それにこっちも下手に落ち込み過ぎた。もう私は大丈夫だ。な？  
「フェイト」

二人の肩をそつと優しく掴んで頭を上げさせて、自分にも非があったと謝った。

そして私に振り向いた。私はさっきの会話を思い出して「うん」と頷く。

するとなのはとはやてが、

「え？ なになに？ 二人で何かお話したんだよね？」

「その二人の間にだけ解るアイコンタクトみたいなんがめっちゃ気になるんやけど？」

興味深々と言った風に目を輝かせて私にだけ詰め寄ってきた。

私はルシルにヘルプを求めようとしたけど、ルシルはすでにリインとアギトを連れて好きなデザートを奢るつもりなのか選ばせてた。

ならば、とシグナムとヴィータを見るけど、ふいつと視線を逸らされた。

じゃあ次はシャマル先生。だけどシャマル先生はなのはとはやて側だった。

ザフィーラは耳をピンと立っていると、はやてに「少し席を外します」と告げて、ルシル達の元へ歩いていった。

最後にリエイスを見るけど、私を助けるつもりは元からないようで、始めから視線を逸らしてた。

「テストロツサちゃん。一体どんな話をしたの？」

「気になるなあ〜」

「フェイトちゃん、私ら友達やる？ ちょこつとでもええで、聞きたいなあ〜」

どうして女の子はこついう手の話が好きなんだろう。

もう仕方なしにさっきの公園の事を話そうかと思った時、

「はやてちゃん！ ルシルさんにクレープ奢ってもらいました」

「あたしもあたしも！ さっきのハンバーグのお礼だつて！

気持ちだけで十分嬉しかったからって、奢ってもらった」

リンとアギトが豪華なトッピングのクレープを両手に戻ってきて、すぐ喜んでる。

そこにルシルも戻ってきた。

「みんなの分も貰って来た。トッピングはこつちで適当に決めたがよかったか？」

ルシルの手には二つ、人間形態になっているザフィーラの手にも二つのクレープが。

なのは達は「え？」と差し出されたクレープを見詰める。

リンは片方のクレープをはやてに。アギトも片方をシグナムに差し出し、ザフィーラはヴィータとシャマル先生、そしてルシルがなのはとリエイスにクレープを差し出す。



「えっと、ルシル君？ 私らにもええの？」

「ああ、ザフィーラに君達はデザートがまだって聞いてね。だったらリインとアギトへのお礼ついでにと思ったんだが・・・余計な事をしたか？」

「あ、ううん。ありがとうルシル君。いただきます」

「おおきにな。いただきます」

「あたしとシグナムにもいいのかよ・・・？」

「どうぞ遠慮なく」

「・・・そんじゃいただくわ。ありがとな」

「む、ならばその厚意は受け取らねばならんな。いただきます」

「ありがとうセイテスト君。いただきます」

「私にもか。・・・ありがとう、ルシリオン。いただきます」

なのは達はそれぞれクレープを受けとって、満面の笑みでクレープを頼張る。

というか、私には何も無いの？ あれ？ どうしてかなあ・・・？  
(泣)

「私とフェイトはまだ昼を済ませてないから、食後に一緒に食べよう、フェイト」

「あ、そっか。食前のデザートはおかしいもんね」

私とルシルはお昼ご飯を二口くらいしか食べてない。

そして私達は買い直した（代金はヴィータとシグナム持ち）お昼ご飯を食べた。

＋＋＋ Sideフェイト はやて ＋＋＋

フェイトちゃんとルシル君もようやく昼を済ませた。

それでフェイトちゃんも私らと同じようにクレープを頼張っとして、ルシル君はそんなフェイトちゃんを優しげな眼差しで見守ってる。

sonだけで「ごちそうさま」と言いたいんやけど、まあ今は目を瞑るか。

「ルシル君。さっきの話の続き、いいかな？」

なのはちゃんが話しを切りだす。

私らはフェイトちゃんとルシル君が居らん時にちょっと話し合った。ルシル君の不調の原因を。まあ結局は判らん、というんが私らの答えやったけど。

ルシル君は「ああ」と答えて、

「そうだな、まずは体調不良による発動ミスじゃないと言っておく」  
そう話し始めた。

「やはり魔術と魔法における発動時間と魔力生成速度のタイムラグが原因だ。」

魔導師の体なのに魔術師として戦おうとした。その感覚のズレだな。アグステイン戦では感覚が研ぎ澄まされてそのズレを無意識に修復していたようだ。

しかしなのはとの模擬戦。多少の違和感があったが問題ないだろうと判断して戦い、ザグザゲルを発動。

そこで強烈なズレとなっていることに気付き、そのズレを修復しようとしたが間に合わず、防ぐことが出来ずに自滅した、ということなんだ」

「そう言えば昔から言いつつたなあ、そんなこと。

まあ原因は魔術師と魔導師の性能差ゆうことやな。で？ 何か解決策とかあるか？」

私はルシル君を見詰めながら訊ねる。

ルシル君は一週間後から管理局の仕事に参加することになった（もちろんリエイスも）。

それまでにルシル君を何とかせなアカン。ルシル君のためにも。

私らは黙ってルシル君が口を開くんを待つ。

そしてルシル君は閉じていたまぶたを開けて、その解決策を私らに話した。

#### 六日後：時空管理局本局・第二特別訓練場

見学室に居る私らはモニターを眺める。

モニターに移つとるんは訓練場に投影された海上に浮かぶ廃墟街。

その廃墟街の中央に立つルシル君と、ルシル君の模擬戦の相手を買って出たフェイトちゃんの二人だけ。

これから始まるルシル君とフェイトちゃんの模擬戦の見学者は6日

前と同じメンバー。

「D S A A公式試合用のタグによるライフポイントがゼロになったら負け。」

それでいいよね？ フェイトちゃん。ルシル君」

『うん、問題ないよ。ね？ ルシル』

『えっと、このタグに表示されている数字がライフポイントで、これがゼロになったら負け、でいいんだよな・・・？』

モニターに映るルシル君はタグを見詰めてちよつと困惑顔。

フェイトちゃんがルシル君に歩み寄って色々と説明、何や微笑ましいなあ。

ルシル君も大体理解したようで、フェイトちゃんにお礼を言って、

『すまない。こっちの準備は万端だ、いつでも始めてくれていい』

モニター越しでなのはちゃんを見るルシル君。

フェイトちゃんはルシル君から離れて“バルディッシュ”を起動、執務官の制服からインパルスフォームのバリアジャケットになる。

『付き合いさせてすまないな、フェイト』

『ううん。私がやりたかっただけから』

ルシル君が右手をフェイトちゃんに向けて翳す。

“三つの蒼銀の指輪”が右手の人差指、中指、薬指にはめられとる。アレがルシル君の言うところの解決策や。

『ラインゴルト・・・セツトアップ』

ルシル君が一瞬だけ光に包まれて、そしてその姿を現す。

管理局員の制服からルシル君の記憶の中で見たアースガルド同盟軍の制服ゆう黒い前開きの膝下まであるハイネック長衣・スラックス・編み上げのロングブーツ。

そして黒のロングコートを羽織るように肩にかけとる。

「アレがルシル君のデバイス・・・ラインゴルト」

「双銃剣か。セインテストの得意レンジのミドルとロング対応だな」  
なのはちゃんとヴィータが、ルシル君の両手に持つ白銀の銃剣を見て感想を言う。

ルシル君の言うところの解決策。それはデバイスを持つことや。魔術師としての演算能力についていけない魔導師のリンカーコア。それがルシル君の動きを悪くする。なら、デバイスの演算能力をしばらく主として、徐々にルシル君自身の演算能力を魔導師感覚として慣れさせていけばええ。

魔術師としての自分と完全に決別する。それがルシル君の出した答えやった。

「おそらく双銃剣だけではないな。人差し指の指環がそうだろうが、残り二つの指環が残ったままだ」

「そうやるね。にしても、まさか一週間もせんうちに三つもデバイスを作るなんて、さすがと言うかなんというか」

私もシグナムに同意。そしてルシルの凄さに改めて舌を巻く。モニターに映るヴィータの顔にも警戒の色が強く見える。

静まり返る訓練場と見学室。

「それでは……始め!!」

なのはちゃんから試合開始が告げられる。

++++ Sideはやて ルシル++++

『それでは……始め!!』

試合開始だ。私はすぐに“ラインゴルト・フロースヒルデ”二挺をフェイトに向ける。

トリガーを引き、手始めに直射魔力弾をそれぞれ5発、計10発放つ。

当然フェイトは、

「バルディツシュ！」

ブリッツアクション

陸戦用の高速移動魔法ブリッツアクションによる回避。

フェイトが私に突っ込まずに距離を置いたのは、私がデバイス制御に慣れるまでは攻勢に出ないつもりだからだろう。

仕方がないとはいえ、やはりショックだ。フェイトに手加減されている。

だが、フェイトと共に強くなる。その誓いがある限りそのショックもすぐに薄れ消える。

「この模擬戦で私はどこまで魔導師になれるだろうか・・・？」

コード・アトウニエル

コード・アブドウクスエル

左の“フロースヒルデ”からは炎弾を。右からは元閃光系の魔力弾をそれぞれ20発放つ。

中級魔術は全て魔法の術式へと変換した。

しかしあまりに術式が複雑になってしまう魔法もあったため、その元となる魔術は捨てた。

まあその捨てた魔術の大半は管理局法に則れば黒も黒、真つ黒だからどの道使えない。

とはいえ、大戦から今日まで共に歩んできた魔術だ。失うというのは寂しいものだ。

それに属性にも変化が生じた。閃光（どうしても全て無属性に変換される）と闇黒（複雑すぎて諦めた）、無属性の中（毒とか音波・重力など）からもいくつか失った。

H a k e n f o r m

フェイトは“バルディッシュ”をアサルトからハーケンへと変形させ、迫る炎弾を回避、魔力弾を切断していく。

まだまだフェイトは余裕のようだ。ここで私は、

コード・アンピエル

背に10枚（2枚減ってしまった（涙））の剣翼を作り出す。やはり私は空で戦う者。

陸戦より空戦の方がもっといい動きが出来る。そう思いたい。

魔術の時は名すら無かった剣翼アンピエルを展開し、一気に空へと

昇る。

フェイトも続いて空に上がり、いつでも私の攻撃に対応出来るように“バルディッシュ”を構える。

右の“フロースヒルデ”だけをフェイトに向け、

「コード・・・」

銃口の前にサファイアブルーの小さなミッド魔法陣を展開。

「バラキエル！」

トリガーを引き、撃ち放つのは蒼雷の砲撃。

フェイトが回避に移ろうとしたのを察してすぐさま左の“フロースヒルデ”の銃口を、フェイトの回避先を予測して向ける。

コード・アルダエル

トリガーを引く。しかしすぐには発動せずに約1秒のタイムラグのあと炎熱砲撃が放射。

「くっ・・・！」

やってしまった。また魔術としてのタイミングで発動しようとした。1秒など、フェイトの速さを持つてすれば余裕で回避できる。当然アルダエルは回避された。

「プラズマ・・・スマッシュアアアアーーーーッ！」

ここでフェイトが攻勢に出てきた。

私も回避を選択。その場から離れ、すぐに反撃のための術式を・・・



（って！ また私自身の術式演算による術式発動をしようとした！）  
デバイスの処理速度に合わせていかなければ私は魔導師として二流  
となってしまう。

でも私は数千年と魔導師だった。たった数日・数週間で魔導師にな  
れ、というのもどだい無茶な話・・・ああもう、なに弱音を吐いて  
いるルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。  
今日一日で変わる必要はない。この模擬戦で少し形になればいいだ  
けだ。

「プラズマランサー、ファイア！」

フェイトのランサーが七基。全弾直撃コースで飛んできた。

コード・ピュリキエル

前面に対魔力障壁を展開。ランサーを防ぐ。

しっかりとデバイスに処理させて、右の“フロースヒルデ”から、

コード・フトリエル

反撃の無属性砲撃フトリエルを放つ。

その間に左に“フロースヒルデ”に別の術式をスタンバイさせる。

「コード・ザグザゲル」

放つのは私がデバイスを持つに至る事になった要因であるザグザゲ  
ル。

6日前の魔術師感覚で発動した術式ではなく、今日は完全に魔導師

としての発動した術式だ。前回のようなミスは犯さない。

## Sonic Move

フェイトは炸裂範囲から急速離脱。

私も高度を上げて設定してある炸裂範囲外に退避、ザグザゲルをフェイトに向けて連射する。

フェイトは知らない。すぐに気付くだろうが、炸裂範囲は発射前にその都度設定できるようにしてある。

たとえ気付いたとしても常に変化するため、的確な炸裂範囲が判らず、範囲以上に距離を取らないといけない。

だからフェイトは、

## ブリッツアクション

無駄に魔力を使って逃げ回らなければならない。

防御に回っても同じこと。回った時点で防御に専念しないとイケなくなる。

そこを別の魔法で追撃すれば、おそらくフェイトに勝てる・・・はずだ。

右の“フロースヒルデ”でザグザゲルを放ちフェイトを動かし続け、左の“フロースヒルデ”で、

「コード・アルダエル！」

炎熱砲撃アルダエルを放つ。フェイトの動きを止めてはいけない。

ブラズマスマッシャーやトライデントスマッシャーのような砲撃を撃たせないために。

フェイトの主力砲撃は必ず立ち止まっただけの発動だ。

射撃のバレットやランサーはおそらく迎撃・回避すれば対処しきれ

る。

問題なのは……

(接近戦クロスに持ち込まれたら、おそらくアウトだな)

一応“ラインゴルト”には接近戦用のデバイスがある。

“ラインゴルト”というのは三つあるデバイスの総称だ。

“フロスヒルデ”は射砲撃戦用のデバイス。他の二つは近距離クロスと中距離ミドル対応となっている。

しかし“フロスヒルデ”以外はまだ調整中だ。さすがに6日で全機完成とはいかなかった。

まあ基本的に“フロスヒルデ”を主とするつもりだから問題はないが。

(接近を許さないためにも、ここで手を抜くわけにはいかない)

だから弾幕を張って、フェイトが私に接近するのを困難にする。

ここまで来た以上は勝っておきたい。

すまない、フェイト。少しギアを上げていくぞ。

++++ Sidellシル フェイト++++

コード・ザグザゲル

戦闘開始すぐは動きが硬かったルシルだけど、デバイスやリンカーコアに慣れてきたのか徐々に良い動きをしてくるようになった。

そんなルシルは私を接近させないように、そして砲撃を撃たせないように炸裂弾ザグザゲルを連射してくる。

炸裂範囲にバラつきがあるザグザゲル。たぶんだけどデバイス“ラインゴルト”で設定しているんだ。これは厄介だ。大きく距離を取ったら全然範囲が狭くて、ならばと小さく距離を取ったらとんでもなく広い範囲になって呑み込まれる。だから動きを止めずに常に距離を大きく取らないといけなくなる。

「しかも炎熱変換の砲撃も連射してくるし・・・！」

コード・アルダエル

ザグザゲルを回避している最中に砲撃で追撃。ルシル、ちよつとタチが悪いよ？

「プラズマランサー・・・！」

Get set

スフィアを周囲に展開させたまま回避行動を続ける。

(少しでも隙があればいいんだけど・・・)

その隙と言うのはすぐにやってきた。

ザグザゲルが突然止んだ。ルシルが右手に握る“ラインゴルト”のグリップ下から蒸気が噴き出している。

“ラインゴルト”の不調？ ルシルの表情も、しまった、って顔してるし。

それなら今、このチャンスを逃すわけにはいかない。

「ファイア！」

待機させておいたプラズマランサーを全弾射出。

ルシルは蒸気を噴いている“ラインゴルト”を消して、左手に持つ“ラインゴルト”から放つ炎熱砲撃でランサーを迎撃。

ここで一気に攻めないと。持久戦になったら、私より魔力が多いルシルが有利だ。

### ハーケンセイバー

“バルディツシュ”を振るって雷光の魔力刃を放つ。

ルシルは砲撃による迎撃じゃなくてラウンドシールドで防御した。

私は一気に接近する。ルシルはそんな私に銃口を向けて、

### コード・アブドウクスエル

また砲撃じゃなくて魔力弾を30発くらい撃ってきた。

私はハーケンで斬り裂きながら直進。何かしらの問題が起きたんだと確信。

畏の可能性もあるけど、ここで接近しておかないとまたザグザゲルで距離を取らされる。

「はあああああああッ！」

### ハーケンスラツシュ

ハーケンフォームの“バルディツシュ”による直接斬撃。

ルシルは“ラインゴルト”の銃身下の刃で受け止める。

### Plasma Lancer

ルシルの背後にランサーのスフィアを八基展開。

ルシルはすぐに気付くけど対処されるより先に、

「ファイア！」

ランサーを射出。でも着弾直前にラウンドシールドが展開、ランサーを防御される。

だけど、このままクロスで押し切れればいいだけだ。

“ラインゴルト”をハーケンで捌いて、切り返してルシルに斬撃を叩きこむ。

「つぐ・・・！」

今回はお互いにフロントアタッカーと言うことで、ライフポイントは3000。

今の斬撃は直撃、だから400も削った。このまま連撃を放つ。

距離を取ろうとするルシルを追撃。“エヘモニアの天柱”での決戦を思い出す。

あの時は本当に苦労したけど、今は・・・簡単に接近できる。

何度かルシルの防御を掻い潜って斬撃を叩きこんでいく。

こっちも反撃されて800ほど削られたけど。でもルシルの方が圧倒的にダメージを負ってる。

そしてルシルのライフポイントが1000を切った時、

「づつ・・・！ やはりクロスだともうフェイトの方が強いな・・・！」

コード・バラキエル

「ゼロ距離!?!」

ルシルのオウндаメージ覚悟の雷撃砲。

視界が雷光で潰されて、私自身も大きくダメージを負った。爆発によって吹き飛ばされるけど、何とか体勢を整える。

「けほっけほっ、・・・今ので900削られちゃった」

残り1300ポイント。でもルシルだって相応のダメージを被ってるはず。

ルシルを探して、ルシルを見つけた私は自分の甘さを呪った。

コード・ラファエル

「ラファエル治療術式・・・！」

そうだった。ルシルは私にはない治癒魔法があるんだ。だから多少の無茶は出来る。そしてルシルの両手には“ラインゴルト”があった。

今度はこっちが、しまった、だ。千載一遇のチャンスを逃した。

コード・ザグザゲル

コード・バラキエル

炸裂弾ザグザゲルと雷撃砲バラキエルの連射。

また回避に移らないと。でも、ここで引いたら次のチャンスに來るまでに負けるかもしれない。だっただらもう・・・

「突っつ貫ッ！！」

突撃。降り注ぐザグザゲルとバラキエルの合間を縫ってルシルへと

接近を試みる。

ルシルは後ろに飛び引いて距離を取りながら二種の魔法を放ち続ける。

私もランサーを何度も展開して真っ向から反撃。

ここでルシルはザグザゲルをやめて、炎熱砲撃アルダエルを撃ってきた。

ザグザゲルは何かに当たらないと炸裂しない。すでに当たるモノが近くにならない以上、ザグザゲルは無意味と思ったみたい。

（直線的な砲撃ならもっと避けやすいよ、ルシル！）

### ソニッククムープ

ある程度接近出来たから、ソニッククムープでルシルの背後へと高速移動。

すぐに私へと振り向くルシルは振り向きざまに銃口を向けてきた。射砲撃が撃たれる前に“バルディッシュ”で左の“ラインゴルト”を弾き飛ばす。

### リングバインド

ルシルの両手足を拘束、したと思った。

だけでももう一挺の“ラインゴルト”を持つ右腕の拘束に失敗。

その銃口はすでに私のお腹へと向けられていて、対処しようとする前にルシルはトリガーを引いた。

＋＋＋ Sideフェイト なのは＋＋＋



「お疲れ様、フェイトちゃん、ルシル君」

模擬戦を終えた二人に労いの言葉を掛ける。

フェイトちゃんは「ありがとう、なのは」って返してくれて、ルシル君は溜息を吐いてから「ありがとう」。

まあ仕方ないよね。最後の最後で不発なんて。

ルシル君の右腕はフェイトちゃんのバインドをギリギリ逃れて、そのまま至近距離での一撃を放とうとした。

でも魔法は発動しなかった。原因はもちろんルシル君しか判らない。あとはどうなるか。もちろんフェイトちゃんのずっとターン。

ルシル君は健闘むなくポイントをゼロにされた。見てて酷かった。

「どやったルシル君。自作とはいえ本格的なデバイスでの戦闘は？」

「そうだな・・・魔導師としての感覚も少し掴めてきたし、よかったよ」

俯いていた顔を上げてはやてちゃんに答えるルシル君。

はやてちゃんは「そっか。それはよかった」と安心したように笑った。

私達は訓練場を後にして、それぞれの職場に戻るまでの間ずっと話し続ける。

他愛もないけど楽しくてとても素敵な時間。

「そう言えば、私はどこに配属されるんだ？」

ルシル君が思い出したかのように私達に訊いてきた。

この中で知らないのはルシル君だけだ。まあ意図的に黙ってたし。

ニヤニヤするはやてちゃんを不審に思ったのかルシル君は一步後ずさった。

「ルシル君は、フェイト執務官付きになる予定や」

「は？・・・フェイト執務官付きって、執務官補佐の事か？  
ちよつと待った。私はそんな資格を持ってないぞ」

喜ぶんじゃないかってうるたえるルシル君。

「予定、言つたやる。今から執務官補佐の試験を受けることになつ  
とるで、よろしくな」

さらにルシル君はポカンとした。

少しフリーズしてから「今から！？」と大声を上げる。  
驚くのも無理ないよね。あまりに突然過ぎるし。

「そうだよルシル。午後は予定開けておいてって母さんに言われて  
たでしょ？」

「それはそうだが、まさか執務官補佐の試験なんて・・・突然過ぎ  
ないか？」

「ルシルは私の補佐になるの嫌？」

「え？ いや・・・」

「もしかしてはやての海上警備部に行きたかった？ リエイヌも居  
るし」

「ち、違つ・・・！」

「それともなのはかなあ？ 教導隊にでも行くの？」

「お、おお落ち着けフェイト。誰も嫌なんて言ってないぞ！」

「じゃあ行こう サクツと行こう？ 合格しに行こう？」

「はい？ わっと、腕を引っ張らなくても自分で歩け・・・ちよつ、フェイトさあ~~~~ん・・・!!？」

フェイトちゃんに連行されていくルシル君に手を振って見送るはやてちゃん。

「えっと、頑張つて。ルシル君」

私はとりあえず応援する。

ルシル君は見事執務官補佐の試験をパスして、後日、晴れてルシル君はフェイトちゃんの補佐になった。

「フェイトに連行されている間、ずっと落ちたら許さないって無言で、しかも満面の笑顔でプレッシャーを掛けてたんだ。

絶対に落ちられない状況だったんだよ・・・（泣）」

「うん。頑張ったね、ルシル君（涙）」



Episode Future：輝ける未来への道標（後書き）

レヴィ

「はいはい、一度は完結した十字架を背負いし神意の執行者が帰って来ましたっ」

ルーテシア

「やったね　でも、わたし達の出番はあるの？」

レヴィ

「それは判りません！」どキツパリ

ルーテシア

「・・・あゝだから出番があとがきなんだ・・・」

レヴィ

「でも待つてれば、いつかはきつと出番が・・・！」

ルーテシア

「期待はしない方が良いかも。それで？　今から何するの、レヴィ」

レヴィ

「フッフッフ。何もすることがないからゲストを呼んでます。

AN SURの主人公ルシオン・S・F・シュゼルヴァロードでっ

す！」

ルシル

「また訳の解らない事になっているな。しかもレヴィとルーテシア

がMCか」

ルーテシア

「こんにちは」

レヴィ

「よかつたね、ルシリオン。シャルロットが居ないから実質的な主演に返り咲きじゃないの？」

ルシル

「それはどうだろうな。シャルが居ないからと言って私が主役とは

限らないんじゃないか？」

ルーテシア

「うーん、そうかなあ。1stからExtraはシャルロットとなのはさん達との出逢いと別れを描いた物語ってことになってるけど？」

ルシル

「まあ確かにそう言う想いで連載してきたらしいからな、ウチの作者は」

レヴィ

「だったらこのFutureはルシリオンとフェイトさんの、みたいなヤツになるんじゃないの？」

ルシル

「・・・どうだろうな」

レヴィル

(メツチャ目が泳いでる)

ルシル

「と、とりあえずこのEpisode Futureは、アグステイン戦とエピソードの空白期を描いた物語だ！」

レヴィ

「エピソード後の話もあるようだけど？」

ルシル

「うく・・・あくまで予定に過ぎないじゃないか」

ルーテシア

「はあ。じゃあその話はここまでにしよう。」

ルシリオン、今回で魔術師としての自分と決別したってことになってるけど、術名の表示がカタカナオンリーになったのはその所為？」

ルシル

「(やっともな内容に・・・) ああ。漢字でルビを振っていたが、魔法となったということで漢字を排除した」

レヴィ

「それじゃあウリエルはどうするの？ 閃光砲・炎熱砲・雷撃斬と三つあったけど」

ルシル

「ウリエルは雷撃斬だけに絞った。閃光系が無くなった以上は意味はないし、炎熱砲は今回使ったアルダエルという名に変えた」

ルーテシア

「そうなんだ。じゃあ属性を失ったって話だけど、どれだけの魔術を失ったの？」

ルシル

「ここで言うにはスペースに問題があるな。」

まあ幾つかの完全に殺害目的な術式を失ったとだけ覚えておいてくれるだけでいい」

レヴィ

「へえ。おっと、もう時間だね。それじゃ今回はここまで」

「次回（あればいいなあ）でまたお会いしましょう」

レヴィ

「バイバイ~~~~イ」

ルシル

「何か疲れた・・・」

感謝の気持ちはいつまでも（前書き）

突然ですが、シャルが恋しいいいいいーっ！

あの猪娘がいないと、馬鹿な事が全然出来ないやり辛いでしょう  
もない……。

こうなったら……Lastでお蔵入りになったエピソードを……  
……って、どっち道シャルが居るからこそじゃないか……（号泣）



## 感謝の気持ちはいつまでも

＋＋＋ S i d e リンフォース？ ＋＋＋

みなさん、おはようございます、リンフォース？です。

今日は、わたしのオリジナルでもある初代祝福の風・リエイスの事を紹介します。

クレーム対策やらで遅れに遅れた裁判も終わって、はやてちゃんとわたしの居る海上警備部に配属されることになったリエイス。

融合騎としての能力も健在な上、単独戦力としても管理局トップクラスなのです。

管理局従事となつてからまだ日は経ってないですけど、“ヴォルフラム”スタッフとも打ち解けてます。

( 今日も朝早いですね )

現時刻は朝の6時半。今日は八神家全員が揃う滅多にない休日です。わたしも普通ならこの時間は寝てるんですけど、リエイスの事を紹介するために頑張つて起きました

ですからちよっぴり眠かったりしますけど・・・ふわぁ。

そんなわたしはこの時間に起きるリエイスをこっそり観察中。

「今日もいい陽気だな」

リエイスは黒のトレーニングウェアを着て、靴ひもを結んでいます。毎日の習慣、早朝トレーニングに出かけるようです。

そして最後に銀色の長い髪をシグナムのようなポニーテールにして、「よし」と気合を入れました。

そんなリエイスはわたしを大人にしたような姿（正確にはわたしの姿がリエイスを子供にしたような、ですけど）で、すっごく美人さんなのです。

「それって遠回しに自分も美人って言うてないか？」

「うるさいですよアギト。地の文にツッコミを入れなくてください」

いつの間にか背後に佇んでいたアギトの事は放っておいて、リエイスが帰ってくるのを待ちます。

「それにしても何やってんだ？」

「リエイスを観察してるんですよ」

「何でまたそんな突拍子もないことを・・・？」

アギトが心底理解できないって顔で訊いてきた。

「まあ何となくと言いますか義務感と言いますか」

「なんだそれ。まあいいや。観察すんなら追いかけてねえとダメなんじゃねえの？」

アギトが指を差すのは玄関のずっと先、リエイスの後ろ姿です。

「いや、無理ですよ。アレについて行くなんて」

わたしはどちらかと言えば体育系じゃなく文化系です。

そんなわたしが、軽く流しているとは言ってもそれなりの速さで走るリエイスについて行けるはずがないです。

ついて行ける云々以前の問題、疲労で逝ってしまうこと請け合いです。

それが解っているからこそアギトも、

「だ〜か〜ら〜、あたしらにはあたしらなりのやり方ってのがあるだろ」

そう言って笑う。少し考えて、「あっ」とそのやり方に行きついた今のわたしとアギトは10歳くらいの姿を取ってますが、わたし達にはもう一つの形態があります。

「モードチェンジ」

30cmくらいの妖精形態フェアリー・モード（命名ははやてちゃんとルシルさん）に形態変化。

しゃらん と華麗にへんし〜んです

「というか、アギトまでどうして?」

わたしの隣で浮遊しているアギト。

アギトは「面白そうだからついてくよ」と、わたしを置いてリエイスを追って行った。

わたしもすぐにアギトと追う。

追いつくと、アギトは「おっそいぞ、リイン」って不満そうに言うてきた。

「わたしを置いて急に飛び出したアギトの言うことじゃないですよねっ！」

「わっバカ！ リエ姉に気付かれるだろっ」

わたしの口を覆い隠してきたアギト。

視線の先、ポニーテールを揺らしたリエイスが走ってるです。

犬の散歩をしているお爺さんとお婆さんと挨拶を交わしたりするリエイスを観ていると、本当に良かったと思えます。

リエイス、リインフォースの後継として生まれたわたしリインフォース？。

ずっと逢いたかった、ずっとお話したかったです。でも叶わない事だと諦めてしまいました。

そんなリエイスとこうして一緒に過ごせる事がとても不思議で、それ以上に嬉しくて……。

リエイスを蘇らせてくれた今は亡きセレスさん、そしてリエイスを世界に留まらせてくれたシャルさんにありがとうと言いたいです。

「あ、リエ姉が止まった……？」

リエイスは防波堤を越えて、砂浜に降り立ったです。

そのまま軽くストレッチに入って、シャドー？とかいう仮想敵を相手に体を動かし始めました。

リエイスの戦い方を眺めていると、

「リイン、おまえってさ」

「なんですか？ アギト」

「リエ姉を元にして生み出されたんだよな・・・」

アギトがわたしとリエイスを見比べながら呟いた。

「急に何を言い出すかと思えば・・・まあそうですよ。外見を見ていれば判ると思うですが・・・?」

「リエ姉ってシグナムみたいな気高さがあるよな。スゲエ美人だし」

「な、な何が言いたいですかね?」

「見た目だけそっくりでおまえはチンチクリンだよな」

カチンと来ましたよ。

わたしは怒りを押さえて「そういうアギトだって出逢った時からチンチクリンな派手な恰好してましたよね。見てて恥ずかしかったです」と言い返す。

すると今度はアギトの動きが止まったです。

「リエインが幻影で大人の姿になっても、リエ姉とはきつと雲泥の差だよな」

「な、ななな・・・っ! そんなことないですよっ!

わたしだって大人の姿になれば、たぶんシャルさんのような綺麗で面白い人になれますっ!」

「確かにシャルさんは綺麗で面白くて良い人だったけど、シャルさんのようになりたいとは思わねえな・・・」

「・・・言わないでください。よく考えればわたしもそうです」

わたしの知るシャルさんの巻き起こしたトラブルを思い出して、シャルさんのように明るくて誰とでも仲良くなれるところは尊敬できますが、あのイタズラ好きなどころだけは正直願い下げです。よく犠牲になっていたルシルさんを思い出すと、泣けてきますし。

「そこで何をしている？ リイン、アギト」

「「あ」

防波堤の上に立って、わたしとアギトを見上げているリエイスと目が合ってしまった。

手招きをするリエイスの元まで降りて、どうして尾行していたのか訊ねられる。

腕を組んで仁王立ちなりリエイスの視線を受けたわたしとアギトは、ちよっぴり泣きそうです。

「えっと、リインの奴が・・・」

「あ！ 何言ってるですかアギト！ リエイスを追おうと言ったのはアギトですよっ！」

アギトの裏切り発言に反論します。

確かにリエイスを観察していたのはわたしですけど、リエイスを尾行し始めたのはアギトの方。

まあついてきた事に関してはわたしの自己責任ですけど・・・。

「別に怒っているわけではない。しかし、そうだな。

いい機会だ。リイン、アギト。二人とも子供の形態に戻れ」

アギトと顔を見合わせて、リエイスの言う通りに妖精形態から通常形態へと戻る。

リエイスは続いて「騎士甲冑装着」と言ってきました。

さすがにそれは、と思って戸惑っていたのですけど、アギトがそれはもう有能な犬のように言われた通り騎士服に早変わり。

『リインも、ほら。もしかしたらなんかの特訓させられるかもしねえ。』

ここは大人しくリエ姉の言うことを聞いた方がいいぜ、きっと』

アギトの焦りの含んだ思念通話。

リエイスもわたしが騎士服になるのを待っていますし、仕方なく騎士服へ。

「よし。それではここから家まで走るぞ」

「「え、？」」

リエイスに背中を叩かれて、わたし達はたたらを踏む。

ここからお家まで3kmもありませんが、でもわたしにとってはそれは遙か遠く。

「さ、行くぞ　飛行魔法なんてズルはもちろん許さないからな」

「「ひいひい~~~~~~~~!!!!」」

ああ、どうやらわたしはここまでのようですよ・・・。

++++ Sideリインフォース? ヴイータ　++++

朝起きてみたら、玄関で仰向けで倒れてるリインとうつ伏せで倒れてるアギトに気付いた。

しかもスゲエ汗。ぜえはあぜえはあ、って見るからに疲労MAX。特にリインの顔色がマジでシヤレになんねえ……。

つうか何で騎士甲冑なんか着てんだ？

「な、なあおいリエイス。リインとアギトに何させたんだよ」

玄関の先、庭でストレッチしてるリエイスに声をかける。

リエイスがストレッチを中断して、あたしへと視線を向けてきた。

「ん？ ヴィータか。二人には私のトレーニングに付き合ってもらったのだ。」

とは言っても、帰りのランニングだけだが」

そりゃ御苦労さんだ、リイン、アギト。よく頑張ったな。

あたしは8割がた死体になってるリインとアギトに、「水、要るか？」と訊いてみる。

「ぜえはあぜえはあ、み、み、みす……くらい……」

「はあはあはあ、あね……ご……あたしにも……」

哀れだ、リイン。呂律が回ってねえ……。

アギトは、地球暮らしん時にアリサさんに借りたDVDに出てきた貞 みてえに這ってきた。

あたしは「待つてる」と告げて、二人分の水を取りに行く。

そこに、



「どうかしたのか？ ヴィータ」

あたしヴォルケンリッターら守護騎士のリーダー、シグナムが起きてきた。

ちようどいいタイミングと思ったあたしは、シグナムに事情を話してラインとアギトの汗を拭く為のタオルを用意するように言っとく。シグナムは「解った」とだけ言って、タオルを取りに行った。

あたしもコップ二つに水を注いで、玄關に戻る。

ラインとアギトは騎士甲冑から私服に戻って、シグナムに抱きかかえられて汗を拭いてもらっていた。

「ほら、水だ」

「はあふうふう、あ、ありがとうございます、ヴィータちゃん」

「ありがとうございます姉御〜」

あたしからコップを受けとった二人は水を一気に飲み。

それから少しして、ようやく落ち着いてきたラインとアギトは風呂に向かった。

二人を見送ったあたしとシグナムは、自前のタオルで顔を拭きながら戻ってきたリエイスへと声をかける。

「しかし何でまたラインとアギトがリエイスのトレーニングに付き合ってたんだ？」

「あの二人自ら参加したとは思えん。何があつたんだ？ リエイス」

「ラインとアギトはどういうわけか私を尾行しているな。」

ちよつとからかい半分で走らせてみたんだが・・・まさかあそこま

で体力が無いとは・・・」

あいつら何やってんだよ。つうかお前も何やらせてんだよ。  
ラインとアギトとリエイスに呆れていると、

「さて。では私もシャワーを浴びようか」

リエイスはライン達が先に向かったバスルームに向かう。  
あたしはシグナムと顔を見合わせてリビングに戻ろうとしたとき、  
バスルームからラインとアギトの悲鳴が聞こえた。

「どうした!?!」

バスルームに突入して、あたしは・・・きっとシグナムも目を点に  
してんだろうな。

「ひゃうううう!!」

「リ、リエ姉~~~~、もう勘弁してえ~~~~っ!!」

信じたくなえが、リエイスがラインとアギトの胸を神妙な面持ちで  
弄もよほつてた。

今はもうやってないけど、リエイスがやってることは昔のはやてそ  
のままだ。

あたしももちろんやられたし、つうかはやてと仲が良い奴は全員や  
られてる。

「・・・ヴィータ」

「・・・ああ。アイゼン」

シグナムがこめかみを押さえて、呻くようにあたしを呼んだ。  
あたしはシグナムの意思を察して、“アイゼン”を静かに起動。  
助走のために数歩下がって、ダツシュ、そしてジャンプ。

ちよーバカな事をしているリエイスのド頭目たま掛けて“アイゼン”を  
振り下ろす。

あーくそ。あたしの“アイゼン”がいつしかツツコミ用ハンマーに  
なりそうぞで恐れ。

とにかく、リエイスの頭を粉碎しないように力を押さえてブツ叩く。  
“アイゼン”の一撃を受けたリエイスがリインとアギトを解放した。

「痛いじゃないか。ツツコミにグラーフアイゼンはやり過ぎだと思  
うぞぞ？」

「アホか。なに朝っぱらからセクハラしてんだ。つかホントに変わ  
ったよな、お前」

リインとアギトにタオルを巻いているシグナムを横目に、涙目でそ  
う訴えてくるリエイスに“アイゼン”を突き付ける。

あーもうその前にタオルかなんかで隠せよな、こんちくしょー。  
あたしの意思が伝わったのか、バスタオルを体に巻くリエイス。

「これが八神家のスキンシップではなかったのか？」

「は？ ってあれ？・・・わっ！？ ちよっ、やめろ・・・！」

リエイスを一瞬見失ったと思ったら、背後に回り込まれてスキンシ  
ップって言う名のセクハラを受けた。

ギガントフォームで吹っ飛ばそうかとするのを理性でギリギリ押さ  
えこんで、ジャンピング頭突き。

手応え、じゃねえな。頭応えがあった。リエイスの顎を確実に捉えた。

背後からドサリってリエイスが倒れた音がした。

「つたく、一体何の影響でここまでバカになっただよ・・・？」

あたしら全員に見下ろされた仰向けに倒れてるリエイスは、わきわきと両手を動かして、何度も頷いてやがる。

そしてあたしとリインを何度も見比べる。なんだよ、何が言いたいんだよ。

「ふむ。ヴィータはリインより小さいんだな。フツ」

あはは、こつからあたしの記憶が無えんだけど、まあいいよな。

++++ Sideヴィータ はやて +++++

ドォーン！と大きな音で目を覚ます。

家が少し揺れたようやし、一階でなんかやつとるんやるか？

ベッド脇のモニターに表示されとる時刻は朝の8時半前。

久々の休暇ゆうことでちよお寝過ぎたな。

パジャマから私服に着替えて、階段を下りる。

で、一階に下りてすぐフローリングの床に波打つとる銀髪が。

「リイン？ リエイス？・・・」

この八神家で銀髪なんはリインとリエイスだけや。つまりはそのどつちか。

窺うようにそろそろと近づいて、私は見た。

「え？・・・リエイスうう~~~~~~~~つ！？」

バスタオル一枚でぶっ倒れとるリエイスを見て、私は寝起きすぐやつて言うのに思いつきり叫んだ。

「つまり、リエイスの失礼な発言で怒ったヴィータが、アイゼンでリエイスを沈めた、ゆうことやな」

リビングのL字型ソファの縦棒部分に座るシグナムとヴィータ、それにリインとアギトとリエイスに訊ねる。

ソファに座る（横棒部分）私とシャマル、ソファの側に座るザフィーラ（狼形態のな）の視線を受けたみんながそれぞれ頷く。

あれ？ でもこれって私にも非があるんやろか？

あのスキンシップは元々私がやったことやし・・・。

「ねえ？ リエイイス。どうしてあなたは知っているの？」

はやてちゃんがそういうスキンシップをしていた事に・・・」

シャマルがリエイスに少し遠慮しとる感じで訊ねる。

言われてみればそうや。リエイスは私が9歳の頃に居なくなつて、25んときに“テストメント”の一人として蘇つた。

その間の事なんてリエイスが知るわけないし・・・。

「そのことか。私はルシリオンとそれなりに深いところまで一緒になつていた」

ヴィータとシャマルとリインとアギトの頬が赤く染まる。

ちやうよ、4人と。きつとリエイスはユニゾンの事言ってるんや。とゆうかそう思わなルシル君を……ふふふ。

アカンよおルシル君。フェイトちゃんがおるのに、二股なんて……。

「ふふ、ふふふ……」

「ど、どうしたですか、はやてちゃん……?」

「主はやて? 少し怖いですよ……?」

「あ、コホン。まあなんや。で?」

なんでか引いとるリインとシグナム。

とりあえずリエイスの話の続きや。

「ルシリオンとのユニゾン。私はそこでルシリオンの今までを知りました。

彼が界律の守護神となる前、大戦と呼ばれていた時代でどう過ごしていたか。

守護神となつてから、主はやて達と出逢うまでどういった事をしてきたのか。

私が居なくなつてから、みんながどう過ごしてきたか。全て知りました」

リエイスはすぐ悲しそうな顔をして淡々と語る。

ルシル君の過去がどうやったかは大体知ってる。

悲しい顔になんのも無理ない。それだけ辛い人生やった、ってそう言うたらルシル君がまるで……。

(死んだような言い方だな・・・)

アカン。バカな事考えてしまつとる。

「とうわけで、主はやての好むスキンシップが騎士達や御友人の方々を胸を揉むという事をルシリオンの記憶の中で知ったのです」

「なるほどなあ。てかさ、はやてがああいうスキンシップする時つてさ、周りに男が居ない時に限つてだつたよな？」

ヴィータに「もちろんや」と答える。

周囲に男性がおつたらやるわけではない。見せもんちやうし。もし見られたら絶対に口封じのために、まあ色々とな。

「じゃあなんでセインテストは知つてんだ？」

リビングがシューシューンとなる。

そう言えば、どうやったやろ。ルシル君の前でもそんなことしとつたかなあ？

うーん、思い出せんなあ・・・でもリエイスが知つとるんやったら、ルシル君も見ただことあるつてことやし。

「あ、セインテスト君？ おはよう 今いいかしら？」

『シャマル？ おはよう。つてなんだ、八神家が勢ぞろいじゃないか。』

おはよう。はやて。リエイス。ヴィータ。シグナム。ザフィーラ。リン。アギト』

いつの間にかシャルマルがルシル君に通信繋げとるし。

律義にみんなの名前を呼ぶルシル君に、私はそれぞれ挨拶を返す。そこにヴィータが『一個お前に訊きたい事があるんだけどさ、今時間いいか?』と訊いて、ルシル君は『少しだけなら構わないが』と答えた。

『あつと、少し待ってくれ。フェイト、先に行っていてくれ』

モニター越し、映つとらへんけどフェイトちゃんの『ん? 通信?』

誰から』ってゆうんが聞こえた。

そしてモニターの端からフェイトちゃんがひょっこり顔を出して、映りこむ。

『あれ? はやてにシグナム達も。おはよう。どうしたの?』

そんなフェイトちゃんとルシル君に事情を話す。と、フェイトちゃんの顔がみるみる赤くなっていく。

そんでルシル君は『プライバシーの侵害なんてレベルじゃないな』ってへこんだ。

『何でそう言うことを訊くかなあ君達は。』

男の私にとって答え辛いにもほどがあるって判るだろ?』

まあそうやるな、と思う。こんな話、女同士でも恥ずかしいな。そやけどお構いなしに話を進めようとするヴィータ達。

「で? どつちなんだよセインテスト。見せられてた? それとも見てた?」

『はあ……。前者だな。君達は知らなかっただろうが、はやてが』



そのスキンシップをしている時の映像がシャルから送られてくるんだよ。

どうしろっていうんだ。そんなモノを送られて、知らずに再生して、そのあとで顔を合わせた時の妙なく・う・き！」

私まで頬が熱くなんのが判る。なんや、ごめんとしか・・・。

とゆうかシャルちゃんの隠し撮りはホンマ判らへんな。

モニターに映るフェイトちゃんが徐々に外へ外へ映らんように移動していつとる。

ルシル君もそんなときの事を思い出したんか若干頬を染めて、デスクをバシバシ叩く。

“テストメント事件”後のルシル君は表情がハッキリするようになった。

“終極テルミナス戦”前まではどこか一線引い妥妥た感じやったけど、今はありのままを見せてもらえとるって思う。

やっと本当の親友になれることができた感じやな。

『っと、これからフェイトと仕事だからもう切るけど』

「あ、あーごめんな朝からこんな話で」

『はは、全くだ。まあ普通の話ならいつでも歓迎だよ、はやて』

ルシル君が私らを見渡して笑顔で小さく手を振る。

それに私らも手を振り返して通信を切る。

「セインテスト君、幸せそうですね」

「ああ。よく笑うようになった」

シヤマルとシグナムも良い方向に変わったルシル君を見て嬉しそうに微笑む。

まあそんなこんなで八神家の朝は過ぎていったのでした。

＋＋＋ Side はやて リエイヌ＋＋＋

「そうそう。リエイスは包丁さばきが上手やな」

「そうですか？ ありがとうございます、主はやて」

朝食を終え、私は今主はやてに料理を習っている。

私が料理を習う理由は色々とある。

主はやてが仕事で疲れている時に、代わりに料理が出来れば主はやての負担が少なくなる。

八神家の末娘であるリインとアギトは料理が出来る。腕もなかなか負けてはいられない。

だというのに本来、料理が出来ればいいはずの上の娘であるシグナムとヴィータとシヤマルは出来ない。

今まで何をやってきたのだろうか。つい先日シヤマルの料理を食べてみたが微妙過ぎて感想に窮したものだ。

シグナムとヴィータは論外問題外。あの二人はしない方がいい。それだけしか言えん。

（私の料理はルシリオンに喜んでもらえるだろうか・・・？）

私はルシリオンの全てを知り、数年と共に居た事で彼を慕うようになった。

恋、だというモノなのかは判らない。ただ彼には幸せになってもら

いたいのだ。

私が見たルシリオンの数千年という長い時間の記憶。悲しいものばかりだった。中には、友を作り、学校に通い、人並みの生活をして楽しそうなものもあった。

しかし最後は結局、たくさんの色々な種類の別れだけだった。

戦い傷つき、そして死ぬ。想いを寄せられても切り捨て、諦めて、身を引いて消える。

この感情はもしかすれば同情かもしれない。しかし、それでも……。

「よしつ。切った野菜を添えれば完成や

なんやリエイス。初めてやのにすごく上手やけど、なんでなん？」

皿を取りだす主はやての背を見詰めながら、私はその疑問の答える。

「それは……これもルシリオンの記憶から受け継いだものです。ルシリオンはもちろん主はやての調理も見ました。見よう見まねです」

私リエイスとしての腕ではなく、主はやてとルシリオンのコピーだ。どうしても二人の動きを真似てしまう。私は私の動きで料理を試してみたが、いつの間にかコピーしてしまっている。

「そうか。私も役に立つとるんやったら嬉しいな。

あ、記憶ってことはもしかしてルシル君のレシピとかある？」

「え？ あ、はい。あります。幾つか憶えていますので試しに作ってみますか？」

ルシリオンとのユニゾンで得た知識や魔法にはメリット・デメリット

トがあると改めて思う。

魔法に関してはメリットだろうが、知識に関してはデメリットだ。まあいい。これから少しずつ自分のやり方というのを確立させていけばいいのだから。

「そうやなあ、うん、やってみよか。ルシル君のことやですごいレシピあるんやろ？」

次元世界に無いようなやつとか。結構気になっとったんや〜。材料教えてもらえるか？ シグナムたちにお使い頼むで。

あ、でも次元世界に無い食材を使うやつはアカンなあ・・・」

「その辺りは代替でもいいかと。どの世界でも食材は似通っていたようですので」

私は憶えている限りのレシピを主はやてに教える。

ルシリオンには後で私から謝っておこう。

主はやての興味深々と言った風にメモを取る姿を見ていると、今さら、無しです、などとは言えない。

シグナム達を買い物に行かせ、私と主はやては私の作った料理を試食。

「うん。なかなかやな。これやったらすぐに上手くなるやるね」

う〜ん、主はやてがそう言ってくれるが、何とも不味くもないし美味くもない。

まずい、これではシャマルの料理にケチをつける資格がない。料理の腕を真似たとはいえ、味付けまでは真似できなようだ。なんなんだ、この中途半端さは。

いや、それでいいのか。味付けくらいは私だけのモノでありたいのだから。

「主はやて。これからも時間があれば・・・」

「もちろんええよ　私からお願いしたいくらいや。

すごく嬉しいよりエイス。こうして一緒に料理出来るんが」

主はやてはそう笑って、私の作った料理を食べてくれる。

私も微妙な自作料理を食べながら、主に微笑み返す。

「私ですよ、主はやて。私が夜天の書の頃より願ったこの日常。

愛おしい家族と過ごす、何でもないですがそれでも幸せな時間・・・

」

今こうして私が主はやてや騎士達と共に過ごすのは奇跡だと言っても過言ではない。

多くの助けがあつて、私はここに居る。感謝してもしきれない恩だ。

「ホンマに感謝しやなアカンな。セレスにも、シャルちゃんにも、ルシル君にも」

「ですが礼を出来るのは今となつてはルシリオンのみ・・・」

主はやて達がルシリオン達と出逢ったこともまた奇跡だ。

私達はどうかやら奇跡の叩き売り市場に迷い込んでしまっているらしい。

だが、だからこそ今なんだ。

「そうやなあ。近い内にルシル君にはきちんとお礼しやなアカンな。いつも言葉だけやし。ちゃんとした形ででも」

「そうですね……。ルシリオンに喜んでもらえたらいいな」

さすがにまだ出せないモノだが。

しかしルシリオンの記憶の中にあつた、ヴァルキリーの開いたバー  
スデーパーティ。

その中でも不格好な料理もあつたようだったが、ルシリオンは気に  
せずに食べていた。

彼は心がこもっていればいい派だ。だから今の私の料理でも喜んで  
・くれるだろうか。

「へ、へえ。リエイスが料理習いたい理由って、ルシル君やったん  
やなあ」

「あ、主はやて……。？」

そこには妙に迫力のある主はやてが居た。

++++ S i d e r i e i s    ルシル++++

「うおっ！？　なんだ！？」

空を翔けていると全身を駆け抜ける悪寒に襲われた。

なんだ、前にも似たような同じ種類の悪寒を感じた事があるような  
ないような。

「ルシル！　ボサツとしてる場合じゃないよ！」

プラズマバレット

質量兵器の闇ブローカー集団を潰す為に駆り出された私とフェイト。そして今は戦闘中。前衛のフェイトに「すまない！」と謝り、先日完成させた“ラインゴルト”、その存在意義である三機同時魔導術式並列処理をフル稼働させる。

クロオストウア・ミーネ・マディラ・ハティア・マルキダエラ  
火統べりし猛烈なる赤天、其は天使マルキダエラ

リーエ・ティートリア・ハティア・アースモデル  
土統べりし不動なる緑天、其は天使アースモデル

アウダー・メイラ・ティムリア・ハティア・アンブリエラ  
風統べりし流動なる黄天、其は天使アムブリエル

ロツト・ストリエラ・マデイエ・ハティア・ムリエーラ  
水統べりし創造せし白天、其は天使ムリエル

クロオストウア・ミーネ・アストル・ハティア・ウエルキエラ  
光統べりし守護せし金天、其は天使ウエルキエル

リーエ・ティートリア・ウートリス・ハティア・ハマリエラ  
闇統べりし破壊せし黒天、其は天使ハマリエル

アウダー・メイラ・ソルバディータ・ハティア・ズリエーラ  
雷統べりし洗練なる青天、其は天使ズリエル

『フェイト、カマエル行くぞっ！』

『了解！ 一気に決めちゃって！』

フェイトが射程範囲外へ離脱するのを確認。

敵の妙な機械兵器がフェイトを追撃しようとする前に、

「コード・カマエル・・・ジャツジメント！」

コード・カマエルの詠唱、そして発動。

2ヶ塔台の本数の場合は詠唱など要らないが、

「千槍の嵐、その身に刻め」

詠唱を用いると4ヶ塔（最大で1050）の数を展開する事が出来るようになる。

槍一本につきAAAランクの魔力を込めている。早々防がれない。魔導師となってまだ日も浅いが、それなりに頑張れていると思う。

（シャル。君は今どこで生きているのだろうか・・・）

長年の相棒であり、ときには敵同士でもあった彼女を想う。

シャル。私は今フェイトと共に生きている。君のおかげでもあると思う、ありがとう。

＋＋＋ S i d e l シル はやて＋＋＋

リエイスから教えてもらったレシピどおりに料理を作る私とリエイス、そしてラインとアギト。

盛り付けとかはシャルマルが手伝ってくれとる。

この日常は親友からの贈り物。楽しそうに笑うみんなを見ると、



嬉しさのあまりに泣いてしまいそうになる。  
そやから私は毎日欠かさず感謝をする。

「シャルちゃん。ホンマにありがとな」

今はどこかで人として過ごしとるはずのシャルちゃんにお礼を言う。

「主はやて、そちらのスープの味見をお願いします」

「あー！ 何やってるですかアギト！ つまみ食いはダメですよ！」

「いいじゃん少しくらい。料理をする奴の特権だよ、つまみ食いは」

「ほらほら、ケンカしないの」

「あはは、しゃあないなあアギトは」

賑やかな日々が、いつまでも続きますように。

感謝の気持ちはいつまでも（後書き）

レヴィ

「ねえ、ちょっと待って。砂粒程度とはいえ、もしかしたら、と期待してたのにどうして出番が無いの？」

ルーテシア

「新章の第二話は八神家の話だったね。当然、わたし達が出るような回じゃないと思うけど・・・」

レヴィ

「つまらないいゝゝゝゝっ！ 誰も望んでないよ、こんな真面目な話なんて！」

ルーテシア

「ここらから。そんなこと言っちゃダメ」

レヴィ

「わたし達にはアギトって言うパイプ役が居るのに、どうしてどうしてどうしてえええゝゝゝゝっ！」

ハーツィーストライウ  
紫光掃破

ルーテシア

「お、落ち着いてレヴィ。とりあえず、ところ構わず砲撃を撃つのはやめよ？」

ルシル

「騒がしいと思って来てみれば、何をやっているんだ？」

ルーテシア

「あ、ルシリオンがわたし達唯一の出番のあとがきに不法侵入してきた」

レヴィ

「なにをおおおう！？ 本文で出番がある奴は、わたし達の許可なくして出てくるなっ！」

ルシル

「素で怖いな、今のレヴィは。しかし、少しは大人しくしてやれ。ウチの作者も大変なのだから」

レヴィ

「フンだ、知ったことじゃないもん。」

同時連載なんてしなければよかつたと今さら激しく後悔してるおバカさんの事なんて」

ルーテシア

「そんなこと言っていると、あとがきからも追放されるかも・・・」  
ボソツ

レヴィ

「うく、だって・・・テストメント事件のような活躍したいもん」

ルシル

「要するに暴れたいだけか。シャルの自称後継者はどうやら別の意味での猪娘のようだな。」

そもそも接点が少なすぎる。ミッドに移住するか管理局にでも入れ。

それなら出番が増えるかもしれない。それが嫌なら通信で声オンリーでもいいが」

レヴィル

「え〜〜〜〜〜〜」

ルシル

「どうしろというんだ。まあいい。もう少し待ってやってくれ。全力でエピソード全体の流れを練っているのだから」

レヴィ

「もし出番が無かったら・・・殺」

ルーテシア

「レヴィがどんどん黒くなってく・・・」

ルシル

（退散退散）

ここは海鳴、始まりの街　〜喫茶翠屋の喜劇編〜

++++ Sideフェイト++++

「え？　海鳴に里帰り？」

モニターに映るなのはに訊き返す。

担当していた事件も終わって、四日間の休暇に入る前日。

エリオとキャロが同じ期間に休暇が取れないと判って、本当に落ち込んでいた時になのはから通信が来た。

その内容というのが、「里帰りしてみない？」というものだった。

『うん。テストメント事件以前から今日まで一度も帰ってなかったでしょ。』

だから近い内にも顔を出そうかなあって思ってたんだ。

私もちょうど明日から三日間だけ休暇入ってるし、フェイトちゃんのオフシフトを思い出して誘ってみたんだけど・・・どうかな？』

そっか。もうそんなに海鳴に帰ってないんだ。

あまりに慌ただしかったから、そこまで気が回らなかった。

でも、うん。ちょうどいいかもしれない。

「うん、私も帰るよ。そうだ、はやても誘おうよ、なのは」

『それについては確認済みだよ。はやてちゃん達も私と同じ三日間の休暇だった。』

『どうやらリンディさんやクロノ君が帳尻合わせしてくれたみたい』

「そつか。母さんとクロノが……。いつも私達に黙って頑張ってくれて……」

『だね。特にクロノ君なんてホントに何も言わないから困るよね』  
お礼を言われるのがあんまり好きじゃないクロノは、私達の知らないところで私達の事に頑張ってくれている。  
休暇を合わせてくれたり、でも私達はそれを知らずに楽しんで。でもどうせだったらエリオとキャロの方も何とかしてほしかったかも……。

『ホント、フェイトちゃんのお兄ちゃんは困ったものだね。つと、話を戻すけど。今回の里帰りは私とフェイトちゃんとヴィヴィオ。』

はやてちゃん達八神家。そして……』

「ルシル、だね」

なのはは『うん。でも……』と頷いて口を噤んだ。  
私もそう。ルシルを連れていって、ルシルは大丈夫なのかなって考える。

“テルミナス”との戦いを終える前に発覚したことを思うと。

『海鳴のみんなはルシル君やシャルちゃんの事を覚えてない。一緒に撮った写真やビデオからも消えてて、全てが無かったことになつて……』

ルシルとシャルはそれについては何も言わなかった。  
それが当たり前前の事なんだって。

きつとそう言うことを何度も繰り返してるからなんだろうけど、私達はやっぱり辛い。

ルシルはみんなを覚えているのに、みんなはルシルを知らない。その時のギャップを想像するだけで、胸が苦しい。

もし私がルシルやシャルの立場で、久しぶりに親しかった人達と逢って、はじめまして、とか、どなたですか？、って言われたらしばらく落ち込むかも。

『ルシル君の事だからそんな問題無いよって言いそうだけど・・・』

「うん。きつとこう言うだろうね。」

“たとえ今までの私のことが忘れられていたとしても、これからまた友達になつて思い出を作っていけばいい” って「

なのはに同意して、ルシルの口調と声色を真似て言う。

するとなのはは『似てる似てる』って笑い始めた。

ウケた。私はなんだか調子に乗ってしまったようで、

「そう？ それじゃあ、“私と夜景の綺麗なレストランで食事をしないか？”」

ピシッと流し目でなのはを見詰めそう言って、ファサツと前髪を払う動作をする。

『あははっ、ないっ、それはないよフェイトちゃん！

ルシル君がそんなキザな事するわけが、あはははははは！』

どうしよう。何か楽しくなってきた。

私はデスクに片肘をつけて頬杖、右手にシャンパングラスを幻視し

て、

「フツ、君の瞳に乾杯」

シャンパングラスを揺らす。そしてウイंक。

『ぶはっ！ あははっ、やだそんなルシル君っ、あははははっ！  
あと古過ぎだよ、そのネタ、あはははははっ！』

なのはがデスクに突っ伏してお腹を押さえて悶える。  
それからルシルの口調と声色を使った“ルシルが言わないこと語録”  
”でなのはを笑わせていた。

『ひいひい、く、苦しい・・・も、もうやめて・・・フェイトちゃん  
ん・・・！』

笑い過ぎたせいでなのはの顔は真っ赤、涙まで浮かべてる。  
まさか私にこんな笑いの才能があったなんて・・・。  
私はさらに調子に乗って、ルシルのモノマネを再開しようとした。  
そこに、

「随分と楽しそうだな？」

「『っ！?』」

いきなり声を掛けられてビクッとなった私となのは。  
振り返ってみると、マグカップ片手にジト目で私とモニター越しに  
居るなのはを眺めていた。

私は「い、いつから見てたの？」って声を振り絞って訊いてみた。  
ルシルの肩が少し揺れてる。もしかして、怒ってる・・・？



「君が、たとえ今までの私のことが忘れられていたとしても、これからまた友達になって思い出を作っていけばいい」、ってところ「ギヤアアアアアアアアツ！」

ものすごくいいタイミングで私の恥ずかしいところを全部見られてたあああっ！

恥ずかしさのあまりに私の顔が赤くなったのを見たルシルは大笑い。ルシルの肩が揺れていた原因は怒っているんじゃないかと笑うのを我慢していたからだっただけ。

『ぶはっ！ ダ、ダメ・・・ルシル君の顔見ると、さっきのフェイトちゃんのモノマネが、ぶっ、くくあははははははははははっ！』

なのは・・・。ごめん、今は笑わないで。

ダメージが全部私に来るから。冷静になってみれば、私はすごく馬鹿なことやってました。

ルシルはなのはに、「笑い過ぎだぞ、聞いてたこっちにもダメージが来るんだからな」って嘆息。

調子に乗っていた自分が本当に恥ずかしい・・・（泣）

「それにしても随分言われていたな。なんだっけ？ 君の瞳に乾杯？」

今の私にはグサリとくるよ、ルシル。

なのはの笑い声がどこか遠くになっていく気がする。

『はあはあはあ・・・笑った笑った。こんなに笑ったのって久しぶりかも』

「ここまでへこんだのも久しぶりだよ・・・orz」

なのはが一頻り笑って、そして私は大恥をかいて、ようやく話は本題へと。

ルシルに海鳴への里帰りを提案すると、ルシルは少し考えて口を開いた。

「久しぶりに海鳴へ行くのもいいな」

そこに憂いの感情はなかった。

『本当に大丈夫？　さすがにアリサ、エイミィ、なのはの家族にだって忘れられているんだよ？』

でも心配で、念話でそう訊いてみる。

ルシルは小さく笑って私の頭の上に手を置いて、そっと撫でてきた。

『たとえ今までの私のことが忘れられていたとしても、これからまた友達になって思い出を作っていけばいい』

『むっ、ルシルのいじわる』

ルシルは私がモノマネで言ったセリフをそっくりそのまま返してきた。

「はいはい、ごちそうさま」

それじゃこれで決まりってことで。詳しい話は今夜にでもはやてちやんを交えて決めよう」

こうして私達は一年以上ぶりに海鳴市へ帰省することになった。

＋＋＋ Sideフェイト なのは＋＋＋

第97管理外世界、そこには私達の生まれ育った地球がある。管理外。それはつまりミッドを始めとした管理世界がその世界に不干涉を貫かなければならない証。だから管理世界間を繋ぐ次元航行船が通ってるわけでもなく。

「私用で転送ポート使用って、前々から思っていたけど軽く職権乱用だな」

「セインテスト、それダジャレか？」

「アカンよルシル君。10点にも満たへんよ？」

ルシル君が呟く。ヴィータちゃんがすかさずツッコミを入れる。そしてはやてちゃんが採点。点数は一ヶタ台らしかった。

(んー、私からしてみればマイナス、かな)

わざとじゃないにしても、今のはいただけないよルシル君。

私達は本局の転送ポート施設から海鳴市・高町家道場に到着。以前まではすかちゃんの家の庭に設置してもらっていたけど、すかちゃんも今では社会人。

当然家を空けている事が多い。だからいつまでもお世話になって迷惑はかけられない。

ということ、お兄ちゃんがすかちゃんのお姉さんである忍さんとドイツに行ったことで使う人が居なくなつた道場に転送ポートを

移した。

「久しぶりの海鳴の街、セインテスト君の今のお気持ちは？」

シャル先生がマイクを持っているかのようにルシル君へ右手を伸ばす。

ルシル君は「悪くない」って微笑んだ。

そして次にシャル先生はリエイスさんに右手を伸ばした。

「リエイスにとっては本当に久しぶりよね。何か思うことはある？」

「そう・・・だな。当時はほとんど魔導書として活動していたから、八神家宅以外の思い出はそう無い。

しかし、主はやたと出逢うことのできた世界だ。感慨深い、と思っている」

リエイスさんは大きく深呼吸して、「また来ることが出来てよかった」って微笑んだ。

私達は道場を出て、まずは高町家が経営してる喫茶翠屋へ向かうことになる。

翠屋に向かう途中、

「視線が痛いんだけど・・・」

ルシルが悲痛に満ちた声でそう呟いた。

当然私達は原因を知ってる。ルシル君以外はみんな女性。

ザフィーラは子犬フォームになってるから除外。

自分で言うのも何だけど、今ルシル君の周りに居る私達は結構な美人だと思う。

そこにたった一人だけ男性のルシル君が居る。以前はそういうのに

鈍感だった私だけど、今なら判る。  
ルシル君は周囲の男の人からものすごい嫉妬に満ちた視線を受けている。

「大丈夫？ ルシルパパ」

「あ、ああ。ありがとうヴィヴィオ。私は大丈夫だ」

ヴィヴィオの何気ない、ルシル君を思つての優しい一言。

だけどそれが周囲にどう捉えられるか……。

ザワツと周囲の空気が妙な方向に変わったのが肌で判った。

ヴィヴィオもすでに実戦を経験済みだから、周囲の空気が変化したことに気付いたみたい。

私の左手を握る右手に力が込められた。

「おいおい、何か殺気だつてんぞ周囲の男共」

ヴィータちゃんが頭の後ろで手を組みながら、呆れたように周囲を見回した。

シグナムさんの「追い払うか？」っていう言葉に、「ダメですよシグナム」って止めに入るリイン。

そこにルシル君が「仕方ない」と嘆息して、見てんじゃんねえよって視線を怨嗟の声を呟いてる男の人達に向けた。

ルシル君の本気の視線を受けて、逃げ出さない人はそうはいない。私達を変な視線で見っていた男の人達は一目散に逃げ出した。

「ルシル君、さすがに素人さんにあんな殺気をぶつけちゃダメだよ……」

私はルシル君をそう窺める。

確かにさつきまでの状況なら仕方ないかもだけど、でも今のは本気入り過ぎ。

そんなこんなで男性を追加しようということではファイラに人間形態になってもらって、私達は翠屋を目指す。

その道中、ルシル君は「あ、あの古本屋はもうないんだな」「公園だったのにはマンションか」「お、懐かしい」って一喜一憂、ちよつと子供っぽかった。

そして一年以上ぶりの翠屋に到着。私を先頭として翠屋に入る。

「お、なのは。おかえりっ」

「うん、ただいま、お父さん」

出迎えてくれたのはお父さんだ。

昨日帰ることを連絡しておいたから、お父さんも私達に驚くことはなかった。

フェイトちゃん達はそれぞれお父さんと挨拶を交わして、店の奥の席に向かう。

ここで問題が発生。フェイトちゃんが行って一番最後になった私とヴィヴィオとルシル君。

お父さんの視線がルシル君に向く。この時、私はつい忘れてしまっていた。

お父さんもルシル君のことを覚えてないってことに。

あれだけフェイトちゃんと心配していたのに……。

「こんにちは土郎おじさん」

まずはヴィヴィオがお父さんに挨拶。

お父さんも「いらっしやいヴィヴィオちゃん」とにこやか。

前にヴィヴィオを連れて来た時、お父さんのことをお祖父ちゃんと

呼ばせるかどうかって議論になった。

その時はまだお父さんは若かった（今でも十分見た目が若いから、娘としてもかなり驚いてるんだけど）から、おじさんということになった。

そしてヴィヴィオはお父さんとお母さんの作った料理が大好きで、海鳴に戻ったら絶対に食べたいって言うほど。

「はじめまして。私はルシリオン・セインテ」

「なのはママ、ルシルパパ、早くっ」

ルシル君が初対面らしくお父さんに自己紹介をしようとしたところで、ヴィヴィオの一切の悪気の無い爆弾が投下された。

ピシリと全てが止まる感覚。お父さんの顔が笑みのまま固まってる。ここでルシル君の表情が凍りついたのが見て取れた。私もきつとそう。これはまずい状況だっですぐに察した。

「あ、あのねお父さんっ、まずは話を」

「パパだとおおおおー！ー！ー！ー！ツツ！ー！ー！？」

お父さんは私が説明する前に絶叫した。

今日の翠屋は私達のために貸し切ってくれていたおかげでお客さんに迷惑はかからない。

かからないけど、ヴィヴィオがビクツとして、ルシル君が冷や汗を流してる。

「な、なななののはっ！？　パ、パパパパ、パパって何のことだっ？」

お父さんがルシル君の両肩をガシツと鷲掴んで、私を見ることなく訊いてきた。

私がちやんと説明する前に、厨房から「あら、どうしたの?」とお母さんが現れた。

よかった。お母さんが居てくれればお父さんの暴走を止めやすくなる。

そう思っていたところに、

「誰が妹なのはの旦那だつてええええーっ!?!」

「お兄ちゃん?!?!」

ドイツに居るはずのお兄ちゃんが扉を破壊しそうな勢いで入ってきた。

私を始めとしてフェイトちゃん達をぐるりと見回して、お父さんに捕まってるルシル君をロツクオン。

そのままルシル君のところにまでズカズカと歩み寄っていった。

「いつからだつ? いつから妹とそう言う関係になつたんだつ?」

「いや、まずは話を」

「ダメだぞ、恭也。ここはきちんと男同士腹を割って話さないとな」

「痛つ? あの、すいません。指が肩にめり込んでいるんですけど?」

お父さんとお兄ちゃんに揉みくちやにされていくルシル君。

そこにフェイトちゃんから、『なのは、なのはとルシルとヴィヴィオの関係を土郎さん達に話さなかったの?』っていう念話が。



私は『すっかり忘れてたよお』とちよつと泣きが入った返事をした。先にテーブルに座っているフェイトちゃんが、あちゃあ、とでもいう風に頭を押さえた。

「土郎さんっ、恭也っ。少しは落ち着いてっ」

お母さんが割って入って、ルシル君を二人から解放、さすが頼りになる。

ルシル君もお母さんに「助かりました、ありがとうございますっ」って頭を下げた。

「いいえ、どういたしまして。えっと・・・」

「あ、遅れて申し訳ありません。

私はルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードといえます。

いつもなのはさんにお世話になっています」

うわっ、ルシル君に“なのはさん”って呼ばれるのすっごい久しぶりだ。

「まあご丁寧に。私はなのはの母、桃子です。そして、夫の」

「土郎だ」

「そして息子の」

「恭也だ」

あれよあれよとお母さんに仕切られて自己紹介が済んだ。

そしてそのまま私とヴィヴィオとルシル君の関係を説明。

するとお父さんとお兄ちゃんも「そうだったのか」ってそれはもう嬉しそうだった。

いつまでも娘・妹離れできないなあ、二人とも。ちよつと引くよ？

「それじゃアルシリオン君。念のためにもう一度訊くが、本当なのはとはそう言った関係じゃないんだね？」

「しつこいよっお父さん！ ルシル君は私じゃなくてフェイトちゃんの恋人なのっ！」

「ぶはっ!?!？」

あまりにもお父さんがしつこくてそう言ったら、対面に座るフェイトちゃんが飲んでいた水を吹いた。

すぐさまフェイトちゃんの隣に座っているルシル君が布巾でテーブルを拭く。

謝るフェイトちゃん、それを受け止めるルシル君。

お父さんとお兄ちゃんも二人の間に流れる空気を察して、ようやく私とルシル君に何も無い事を信じてくれた。

「もう。ごめんね、ルシル君、フェイトちゃん」

厨房とカウンター席に退却していったお父さんとお兄ちゃんを横目に、二人に謝っておく。

私がここに来る前にきちんと説明しておけばこんな面倒なことにならなかった。

「気にしないでくれ。ある程度は覚悟の上だった」

ルシル君は寂しそうに微笑んで、

「私も気にしてないよ。まあいきなりの恋人発言には驚いたけど」  
フエイトちゃんは頬を赤く染めて微笑んだ。

そしてお父さんとお母さん力作の昼食とデザートを頂いた。  
私の隣に座るヴィヴィオも凄く嬉しそうで、ルシル君も「この味、  
懐かしいな」って笑った。

昼食も終わって隣のテーブルに座るはやてちゃん達とお喋りしていると、

「さつきは本当にすまなかったね、セインテスト君」

食器を片付け終えたお父さんがルシル君に謝りながら歩いてきた。  
そしてお兄ちゃんはカウンター席からこっちを窺ってる。

「いえ、お気になさらず。あとルシルと呼んでもらっても構いません。  
ん。

ああそつだ。一言だけ言わせてもらっても？」

お父さんは「ああ」とだけ言って聴く体勢になった。  
ルシル君は頷いて、

「土郎さん、そして恭也さんも。娘であり妹であるのが大切な  
のも解ります。

ですが、だからと言って、なのはの近くに居る男性にそう突っかか  
っていくのはどうかと思います。

なのはも十分大人です。恋愛だつてするでしょう。いつか特定の男  
性と一緒になるかと思えます」

その言葉にお父さんとお兄ちゃんの顔が引きつった。そして私の顔は少し赤くなってるかもしれない。

「それなのにあなた達二人は、気に入らないからと言ってなのはの選んだ男性に攻撃を？」

もう一度言わせてもらいましょうか。娘を、妹を大切に思うのなら、なのはを信じてあげてください。

それが、父として兄としての務めなのではないですか？」

キツパリと言われたお父さんとお兄ちゃんは俯いて、しばらく黙った。

そこにパチパチって拍手の音が。厨房から出てきたお母さんだ。

「良い事を言ってくれたわあ。ありがとう、えつと、ルシル君。

実は困ってたのよ。未だに結婚しないのはが心配だって言ったら、士郎さんは“なのはは嫁に行くなくてもいい！”なんて言うし。

恭也も士郎さんに同意するし。やっぱり同じ男性からの言葉の方が効くのよね」

お母さんは沈んだ二人の背中を優しく叩いた。

でも、ここで折れないのがお父さんとお兄ちゃんだった。

「だがな、桃子さん。やっぱり男親っていうのは娘がとても大切なんだよ」

「可愛がった妹の幸せは確かに願うけど、それでもやっぱり嫌なんだよ」

もう、えーえー、だよ。

私、どういった反応を示せばいいのか判らないよ？

助けが欲しくてみんなを見回すけど、目が合いそうになつたら逸らされた。

むう、薄情者お。

「ル、ルシル君つ。君も俺達の気持ち解るはずだつ。そ、そうだなあ・・・君には妹とか居ないのか？」

「くくくくくくくつ！」「くくくくくくく」

みんなが息を呑む。ルシル君の事情を知るみんなだからだ。

もちろんルシル君のことを何も憶えてない何も知らないお父さん達は今の失言だつて判らない。

だからこそ、ルシル君に残酷な事を訊いたなんて知る由もない。

ルシル君は小さく「居ます」つて答えた。居ました、じゃなくて、居ます。

そう答えたルシル君の心情は判らない。だけど・・・辛いに決まってる。

これ以上、ルシル君の心を傷つけさせないために止めに入ろうとしたけど、

『いいんだ。なのは、フェイト、みんな。このままで』

ルシル君から念話が来た。

フェイトちゃんは『でもっ』と返すけど、ルシル君は何も言わなかった。

私達は仕方なくお父さんに話を続けさせた。

「そうか。じゃあその妹さんで想像してみてくれ。

とても大切に可愛がつっていた妹が突然、好きな人が出来た、結婚します、なんて言ってきたら君はどうするっ？」

「こう言う場合、ヴィヴィオちゃんの事についても想像してみてください」

「え？ わたし、ですか？」

ウチの親バカとシスコン兄が大変御迷惑をおかけしております。どうしようもない二人ですが、もうしばらくお付き合ってください。ヴィヴィオが自分を指差して、いきなり自分が話に出てきた事に困惑する。

私はヴィヴィオに「気にしないでいいからね」と言っておいた。

「ルシル・・・？」

フェイトちゃんが俯いたままブツブツ言ってるルシル君を心配そうに覗きこむ。

私も聞き耳を立てて、ルシル君の呟きを耳に入れる。

聞こえてきたのは、「シエルが結婚？ ヴィヴィオに彼氏？」といった呪詛のような暗い呟き。

そして、

「ふざけるなああああああああッ！」

この日一番の絶叫を聞きました。

ビクツとしたヴィヴィオとリインとアギトが可哀想。

「シエルが結婚だっ？ おいおいおい、私が許すとも思っているのかあ？

それにヴィヴィオが彼氏を連れてくる？ おーっつと、それは許せんっ！

「どのどいつだ？ 可愛い妹と娘をたぶらかすクソ野郎はっ！？」

あのルシル君が残念なことに壊れてしまいました。

急に立ち上がってそう叫び、お父さんとお兄ちゃんに向き直って、

「今なら解りますっ！ お二人の気持ちがつ！ 大事な妹を、大切な娘を嫁にやるう？」

冗談じゃないっ！ この馬の骨ともしれない野郎に任せられるかって話です！」

「「おお、同志よ！」」

ガシツと握手を交わした。

お父さんとお兄ちゃんの言葉によって壊れてしまったルシル君に、私達は呆然とするしかなく……。

お母さんがボソツと「もう。男ってみんなそうなのかしらね」と溜息を吐いた。

そこにヴィータちゃんが勇気ある参戦。

「じゃあさ、セインテスト。お前にとって娘同然のキャラはどんなんだよ？」

「フツ。キャラについては何も心配していない。

何せすでに息子同然のエリオという相手が居るんだからなッ！

あの二人ならいつまでも応援していつでも祝福しようじゃないか！」

エリオとキャラが聞いたら卒倒するかもしれないなあ、恥ずかしさで。

「そんじゃあさ。仮にお前とテストロッサの間に子供が出来て、そ

の子供が成長して彼氏が出来たら？」

フェイトちゃんの顔が今までにないくらいに真っ赤になって、「バカ、もう知らない」ってテールブルに突っ伏した。

どうしよう。今のフェイトちゃん、すっごく可愛い、ていうか可愛過ぎだよ。

そして話に出てきたもう一人のルシル君は、

「そんなの認めるかあああああああッ！

娘が欲しかったらこの私を倒して、どれだけ娘を大切に想っているか見せてみるおおおー！

「なあセインテスト。今のお前、マジでヤバいぞ」

「はやてちゃん、ルシルさんが怖いですう（泣）」

「ルシルさん、どうしちゃったのかなあ？ 何かおかしいものでも食べたのかなあ（泣）」

リンとアギトがはやてちゃんにしがみ付いて、暴走したルシル君に涙目で引いてる。

シエフィリスさん、ガブリエラさん、見てますか？

お二人が愛したルシル君が物凄い勢いで壊れていつてます。

私にはもうどうする事も出来そうにありません。ごめんなさい。

「よしっ。………クロノっ！ 訊きたい事があるんだがっ」

ええええええええええッ！？

ルシル君が何のつもりかクロノ君に通信を繋げた。

貸し切り状態だから良かったものの、もしお客さんが居たらと思う



とぞつとしない。

ルシル君のあまりに突然の行動に全員が啞然となる。

『いきなりどうしたんだ、ルシル。君が僕に通信してくるなんて初めてじゃないか？』

「そうか？ ああそうかもな。早速本題に入らせてもらおうが。」

クロノ、君の娘のリエラ、彼女が大きく成長して彼氏、最悪結婚相手を紹介してきたらどうするっ？」

クロノ君もまさかルシル君からの初めての通信で、そんなバカなことを訊かれるとは思いもしなかったに違いない。だつて目を点にして、何を言ってるんだ？、みたいな顔してるし。

『はあ、ルシル。そんなバカな事を訊くな。当然、僕は・・・』

クロノ君は大きく溜息を吐いて、

『その相手をブツ殺す！！』

物騒な事をほざいた。何気に“デュランダル”を起動してるし。冗談じゃなくて真剣だ。あの目は本当に実行に移しそうだ。

「やはりそうか！ そうだよな！」

『そうとも！ 僕の可愛い娘リエラをどこの男に渡してなるものかッ！』

「まったくもってその通りだ！ 娘は永遠に俺の娘だっ！」

「俺だつて忍との娘に彼氏とか紹介されたら、その相手をぶった斬

る！」

そこにお父さんとお兄ちゃんも賛同して、男だけのバカ騒ぎに発展。

「でもお父さん。お姉ちゃんが彼氏を連れてきた時、ここまで暴走しなかったよね？」

「あはは、何を言ってるんだ？ 美由紀は美由紀、なのははなのはだ」

今お父さんはさらりと最低な事を言っちゃったよ。

お姉ちゃんが誰かと付き合おうが結婚しようが、私に比べればそれがどうでもいみたいなことだよ、今の発言。

さすがにお兄ちゃんも今のお父さんの失言に引いたのが、「それはどうかと思うぞ、父さん」って嘆息。

そしてお母さんが、「土郎さん、少しお話をしましょうか」って笑顔でお父さんの襟首を掴んだ。

お父さんがハツとして、「待ってくれ」って怯えを見せるけど、もう手遅れだ。

厨房の方に連行されていくお父さん。午後からの通常営業に差し支えない程度でお願いするよ、お母さん。

『ハラオウン提督！ 仕事中に何をしてるんですかっ！？』

クロノ君との通信も、クロノ君の副官らしき人の声でプツリと切れた。

そしてルシル君は、「よしっ、今度はナカジマ三佐に！」とか言い出したから、

「もうやめんか、馬鹿者っ！」

シグナムさんの手刀で一時的に黙らされた。  
お兄ちゃんも連行されたお父さん、撃墜されたルシル君を見て妙な汗をかいてる。

兵どもが夢の跡、ならぬ親バカシスコン共が夢の跡、だ。

「うく、な、なのはっ、ヴィヴィオに彼氏が出来て、そして結婚するとか言い出したら君も反対だろう!？」

「ええええ!？　ここで私を無理矢理参加させるって、ルシル君は鬼なの!？」

ルシル君が即復活して、私に話を振ってきた。

どうしたものかとルシル君の暴走に心底困惑してるヴィヴィオを見ながら、ヴィヴィオがもつと大きくなった姿を幻視。

そして家に男の子を連れてきて恋人宣言、そして将来の結婚の……。

なのはママ。わたし、この人と結婚したいです

もしそう言われたら私は……うん。

「私は応援するよ。娘の事が本当に可愛いからこそ祝福する」

「え~~~~~」

ルシル君とお兄ちゃんの残念そうな声がシンクロ。

私は、私の意見が信じられないと言った風の二人に、「娘離れが出来ないのは男親だけだよきつと」って言う。

そこに、

「私も解るよっ!」

「はやて!?!」「はやてちゃん!?!」「主はやて!?!」「マイスター!?!」

本来、私達女子派であるべきはやてちゃんの突然の裏切り。

「やっぱり嫌や。大好きな家族が、娘が誰かと一緒になるんはっ!」

「ほら見ろっ、なのはっ。女親でもあるはやてが私達と同意見だぞっ」

「なんでそんなに嬉しそっかなあ?」

もうルシル君は哀れを通り越して残念な人になってます。

はやてちゃんもはやてちゃんて握り拳で力説してるし。

ねえ、見てよはやてちゃん。はやてちゃんの娘達が目を点にしているよ?」

「そやからルシル君っ。リエイスは渡さへんよっ!」

「そこでどうしてリエイスが出てくるんだ?」

ルシル君が訊き返すと、はやてちゃんの顔から表情が消えた。かなり怖い。

そして、はやてちゃんは「ルシル君のアホおおーっ!」と叫んで、

シュヴァルツヴェイルクング(仮)

「おぐつ!?!」

魔力を纏わせた鉄拳をルシル君の鳩尾に叩きこんだ。  
それからしばらくルシル君は起きなかった。

「ここは海鳴、始まりの街　〜喫茶翠屋の喜劇編〜（後書き）」

ルシル

「いつその事、私を殺してくれええええーッ！」

ルーテシア

「はい、初っ端から絶叫してるルシリオンだけど、気にしないでね。でも・・・うんうん、そう叫んでしまいたいのも解らないでもないよ」

ルシル

「今回の私はどうかしていたんだっ！　アレは私じゃない！　私の偽者に違いない！」

ルーテシア

「はいはい。現実をしっかりと受け止めないと、もっと残念なことになるよ？」

ルシル

「くっそっ、恥ずかすぎる・・・！　ここまで暴走したこと、そうそう無いのに・・・」

ルーテシア

「今回のアレがルシリオンの素なら、これからのお付き合い、少し考えたいかも」

ルシル

「私も第三者の立場なら、ルーテシアと同じ意見だ・・・、だから

こそへ」む」

ルーテシア

「はぁ……。レヴィはレヴィで閉じこもっちゃったし。

今のルシリオンとはあんまり話たくないし……。というわけで、

今回はここまでっ！」

ルシル

「今の私はそれだけダメ男なんだろうか……。orz」

ここは海鳴、始まりの街　～親友再会編～

++++ Sidellシル++++

私は少し前までは“界律テスタメントの守護神”だった。

その役目としていろんな世界で多くの命を救ってはそれ以上に奪い去ってきた。

だからこそ、私自身が“殺害される”ことを前提とした契約にも文句を言わずに執行してきた。

そう、何故ならその時には既に死ぬことというが怖くなどなかったのだから。

当然だ。守護神として存在している事は死んでいると同義と言っても過言じゃない。

契約先の世界で死んでも所詮それは分身体。“神意の玉座”に在る本体は傷一つ付かない。

だから自分の命など大して苦もなく捨てられるようになる。

それに、命を奪い去っておきながら殺されたくない、などというのも都合のいい話だ。

生きて、ルシル

シエファイ。今、私は君の言葉を思い出している。

守護神時代では霞に消えていたその当たり前の言葉を。

何でだろうな。今になってハッキリと思いだせるんだ。

生きていたい。死にたくない。理由は判ってる。今の私は・・・生きているんだから。



「この変質者がああーっ！」

でもすまない。私はまだ生きていたいが、もう逝ってしまいそうだ。

私と生きましょう

どこかの契約先で聞いた銀髪戦乙女の言葉と共に迎えが……。あれって「行きましょう」と「逝きましょう」を掛けてるって噂だったなあ……。

あーダメだ。意識が朦朧としてきたせいで、妙な事を考え始めてしまった……。

「あたしの親友になんてことしてんのよあーっ！」

私の首に掛けられた細く綺麗な指。

その10本の指が私の首を的確に締め上げる。

頭がクラクラする。脳へ酸素が運ばれなくなってきたから、というのもあるがそれ以前に鈍器で殴打されたからだ。

それが無ければ、私の首を絞めている女性に抵抗する事も出来た。

しかし当たり所があまりによくなかったのか、ついさっき起こした軽度の脳震頭が彼女の一撃で重度にレベルアップ。

威力も申し分なかった。やれやれ、君は昔から私に唯一暴力を揮っていたな。

（ああどうしてこんなことになったんだっけ……？）

意識が遠ざかりそうになる中、ふとこうなった原因を思い出す。

ようやく手に入れたフェイト達と共に同じ時間を過ごすという幸せ、それを終わらせるラスボスがまさか……

「ア、アリサ！ 誤解！ 誤解だからっ！」

君だとは思わなかったよ、アリサ・・・がくつ。

「きゃああああああっ！？ ルシルっ！？」

ああもう本当にどうしてこうなったんだろうな・・・？

＋＋＋ S i d e l シル フェイト＋＋＋

お昼も過ぎて午後2時、私達はここで別行動になる。

なのはとヴィヴィオはこのまま翠屋に残って、はやて達ははやてのご両親のお墓参りと石田先生に挨拶しに行く予定だ。

そして私とルシルは、アルフとエイミー、そしてクロノとエイミーの子供であるカレルとリエラの待つハラオウン家に向かうことになっている。

「それじゃ明日、すずかちゃんとアリサちゃんを交えてショッピングってことで」

「了解や。待ち合わせはここ翠屋やな」

「約束の時間は、朝の9時でよかったよね」

翠屋の前でなのは達と分かれて、ルシルと二人並んでハラオウン家に向かっていると、

「痛たた……。まさかはやての一撃で落ちるとはなあ……」

ルシルがはやてに殴られたお腹を擦る。

あのルシルをたった一発で気絶させるなんて、はやても随分と強くなつたなあ。

しかも結構な時間が経っているのに、ルシルはまだ痛そうにしてる。

「しかもすごい恥ずかしい事をベラベラと……」

ルシルが私を視界に入れないようにそっぽを向いた。

だから私まで恥ずかしくなってきた。ヴィータが変な事を言うからだ。

仮にお前とテストアロツサの間に子供が出来て、その子供が成長して彼氏が出来たら？

思い出すとまた顔が熱くなってきた。

私はルシルが大切だ。ルシルと対人契約した際に会ったルシルのお姉さんであるゼフィランサスさんにも、その・ね、あの、だからうん、そう、義姉さん、みたいなことを言っちゃって。

それはつまりは、ルシルとけ、けけけ欠陥！ じゃなくて欠陥！でもなくて欠陥！……違う違う、その、結……

「おっと」

「え……っ？」

って、いきなり腕を掴まれてルシルの胸に引き寄せられた。

さっきまでの思考が一瞬で吹っ飛んだ。ほとんどフリーズした頭でどうしてこんな事になってるのかとルシルを見上げる。

「ほら、前をしつかり見てないとぶつかるだろ？」

ボケーとしたままルシルの視線の先へ首を動かしてみると、私の進行方向には電柱があった。

ルシルは私が気付かずに突っ込もうとしていたのを助けてくれたみたい。

とりあえず「ありがとう」ってお礼を言って、ルシルから離れる。ルシルは「行こうか」とだけ言って歩きだす。私も遅れないように続く。

「随分と深く考えごとをしていたようだけど、何か悩みとかあるのか？」

い、言えない。恥ずかしすぎるから、何か、何か別の話題を……。ふと、“海鳴公園”、と書かれた案内板が目に残る。

「な、何でもないよ。あ、そうだルシル。海鳴公園だって。行ってみない？」

く、苦しい……。自分でもあからさまに不自然だと思っ話逸らした。

ルシルだってそう思っているはずなのに、「ならいいんだ」って深く追求してこなかった。

そして、私の苦し紛れに言った、海鳴公園へ行こうっていうことも受け入れてくれた。

海鳴公園の中を並んで歩いて、私とルシルは思い出に浸る。

「ルシル。ここ、憶えてる？」

私達が今居るのは小高い丘の上。

わたしとルシルにとって思い出深い場所なんだけど、ルシルは憶えているかな？

もし忘れられていたら結構ショックかも。でも、それは杞憂だった。

「もちろんだ。ここで、私はフェイトとアルフと出逢ったんだ」

ルシルは即答してくれた。そう、ここで私達は初めて出逢った。

出逢い方は最悪だったけど。ルシルも「いきなりケンカを売られて驚いたけどな」と苦笑。

「あの時は本当にご迷惑をお掛けしました」

謝って、少し沈黙。何となくそれが面白くて二人で笑った。

それから公園内をぶらりと歩いた。見るのはどこも思い出のある場所だ。

初めてクロノと会った場所、なのはと最後に戦った場所、なのはと一度お別れした場所。

「あれから15年以上経ってるのに、今でもハッキリと思いだせる」

「私からすれば3千年以上前だが、色あせることなく憶えているよ」

私達普通人とルシルとじゃ脳の記憶容量が違い過ぎるよ。

それから少しの間、私達は海を眺めながら思い出話をした。

“エヘモニアの天柱”の時、ルシルを動揺させようとしていた時とは違って、ただ純粹に。

「・・・少し冷えてきたな、そろそろ行こう」

海から吹く風は冷たくて、一瞬だけど私が体を震わしたのを見て、ルシルは私に右手を差し出してきた。いつもは私から差し伸べる手。けど今はルシルから……。

「うんっ」

ルシルの右手を掴む。優しい温かみを持つその右手を。私達は海鳴公園を後にして、ハラウン家を目指す。道中はほとんど会話が無かったけど、それでも居心地のいい時間だった。

そして9歳の頃からの実家であるマンションに到着。

「……あれ？ 鍵がかかっている……」

玄関のノブに手を掛けてみると、鍵が掛かっているようで動かなかった。

確か今日、エイミィは休みのはずだから家に居るはずなんだけど……、買い物かな？

もしかしてアルフも付いて行ったのかも。カレルとリエラは遊びに行ってるのかな？

とりあえず鍵を開けて、

「どうぞぞー」

ルシルを迎え入れる。ルシルは「お邪魔します」って言って入っていく。

私も続いて玄関を潜って、久しぶりの実家の空気を肌で感じた。

「懐かしいなあ。最後に訪れた時と比べてあまり変わってない」

「最後つて・・・ああそつか。ルシルとシャルの誕生日の時・・・」  
ルシルとシャルの誕生日パーティを準備するために、はやては二人に休暇を出した。  
そして二人は海鳴に戻って、ミッドに帰って来たときに“テルミナス”が来たんだ。

「・・・湿っぱい話だったな。やめよう」

「だね。そうだ、何か温かいモノでも飲む？」

少し冷えた体を温めるために、何か用意しよう。

キッチンに入って・・・、よしっ、久しぶりに作ってみますか  
ホットミルクティー。

ちよつと手間がかかるけど、折角だからルシルに御馳走したい。

「ティーカップは、つと・・・あったあった」

「フェイト、私も手伝おうか・・・？」

「大丈夫。ルシルは見てるだけでいいよ、簡単なモノにするつもりだし」

「そつか・・・なら、お手並み拝見ということぞ」

私が色々と用意しているのをジッと見てくるルシル。

うん、確かに見てるだけでいいよって言ったけど、

「あの、そこまで見られるとちよつとやり辛いかなって」

一つ一つの拳動を見てくるから妙なプレッシャーが、だから、

「あつ・・・っ！」

「フエイ　っが!？」

ミスった。熱湯を入れて温めていたティーカップに左手をぶつけて入った熱湯が跳ねて左手に掛かった。

私は驚いて左手を大きく引いてしまったから、左手がちょうどいい位置に在ってしまったルシルの下あごを強打。

ルシルの体がグラリと揺れるのを視界の端で捉えた。

でもルシルは懸命に倒れないようにと、体を支るために手を伸ばしたんだけど、運悪くティーカップに手を突っ込んだ。

こうなったらもうダメだ。熱さのせいで手を引っ込めた勢いでティーカップが床に落ちてパリン。

ついでに熱湯も床に広がる。ルシルは私にもたれかかってきて、その勢いまま二人して倒れ込んだ。

運よくカップの破片とか広がった熱湯が無い場所に倒れ込んだから、ルシルに覆いかぶされたような体勢になってる私にケガはなかった。

「いつつ・・・ちよっ、ルシル!?　ごめん、大丈夫!？」

頭を打った所為かちよつと涙が出た。

それ以上に抱きつかれているようなこの状況にビククリして泣きそっうだ。

「こっちこそ、すまん、少し、待って、くれないか・・・」

私の上に乗ってるルシルを退かそうにも、下手に退かせればカップの



破片の上に、つてことになるかもしれないから断念。

くう、すごく恥ずかしい。これだとまるでルシルに襲われてる感じだ。

よかった。今、この家に誰も居なくて……。一応、エイミィやカレルとリエラにもルシルが大切な人つてことは知ってるけど、やっぱり誤解されかねない。

「フエイト!?!」

聞こえるはずもない声が耳に届いた。

ドタドタと足音を鳴らしてこの家に入ってきたのは、ここに居るはずのない親友が二人。

ルシルの肩越しから見えたのは、切羽詰まった表情で私と未だに倒れ込んでいるルシルを見降ろしているアリサとすずかだ。

「あ、ああああ、な、なななな何してんのよ、あんたああー  
ーッ!」

アリサが近くにあつた鍋を引つ掴んで、ルシルの後頭部目掛けて思いつき振り下ろして殴打。

私の顔の横にあるルシルの顔から、「うっ」ってうめき声が。

そしてアリサは鍋を放り投げて、両手で私からルシルを引き剥がした。

すずかは私のところに駆け寄ってきて、「フエイトちゃん、大丈夫!?!」って本当に心配してくれているんだって判るほどの声色と表情を見せてきた。

だけど、あまりに突然の事態だから思考が追いつかない。

「この変質者がああーっ!」

アリサは動けないルシルの首を絞めた。ここで私は再起動。私の一撃を下あごに受けて軽い脳震頭を起こしたルシル。そこにアリサの鍋による後頭部殴打。脳震頭はさらに重度のモノになった可能性が。

だからそんなルシルが今のアリサに抵抗できるわけもなく、されるがままに首を絞められている。

うん、状況確認。アリサを止めないと死人が出る。しかもルシルが。そして、なのは事を責められないなあと思った。

アリサとすずかにルシルの事を教えるのすっかり忘れてたからだ。どうして一番肝心な事を連絡しないのかなあ、私は・・・？

「あたしの親友になんてことしてんのよおーっ！」

アリサがルシルの首を絞めたまま吼える。

まずい。ルシルの顔色が土色になってきた。

「ア、アリサ！ 誤解！ 誤解だからっ！」

＋＋＋ Sideフェイト アリサ＋＋＋

まったく。今日は親友たちが久しぶりに帰郷するっていうのに、休日出勤だなんて堪ったもんじゃないわ。

一応、明日の日曜日はみんなでショッピングでもして遊ぼうって約束はしていた。

でも今日の休日出勤が無ければ、こうして不貞腐れている今でもきつと遊んでいられたはずだ。

「もう夕方だからなのはちゃん達もきつと戻ってきてるよね・・・」

？」

助手席に座るすずかが残念そうにぼやいた。

すずかも休日出勤。エンジニアとして働くすずかは、昔語っていた機械工学の仕事に就いている。

サクツと仕事をカタして、家に帰ろうかというところで見かけたから送っていくことになった。

「なのは達は10時くらいに到着ってメール来てたから、今頃それ  
ぞれの家に居る。って、フェイト？」

「フェイトちゃん？」

車を走らせていると、反対側の歩道を歩く見覚えのある金髪を発見。まああたしも金髪だけど、フェイトのはすごく長いから良く判る。判るんだけど、フェイトは一人じゃなかった。隣に背の高い銀髪の男が居た。

見た限り背の高い女性とも見て取れるけど、体格は男で間違いないから、確実に男だ。

だから正直迷った。もしかして人違いなんじゃないかって。でもこのあたしが親友を見間違うはずもない。

「今のフェイトちゃん、だよね・・・？」

「あの隣の男は何なんのよ・・・？」

あたし達はフェイトと銀髪男を追うことにした。

ここでのなのは達、もしくはフェイトに直接連絡を入れておけばよかったと後で後悔することになるんだけど、この時のあたし達は本当に動揺しててそこまで気が回らなかった。

そもそもなのは達が銀髪男の事に関して何も言っていないのが悪いっ！  
そして二人はあるうことかハラオウン家のマンションに入っていた。  
た。

「アリサちゃん。あの男の人ってフェイトちゃんの何なのかな・・・？」

「やっぱり仕事関係で上司か部下？ それとも・・・考えたくないけど恋人？」

「え？ えええええええっ！ フェイトちゃんに恋人お！？」

「しいーっ！ 気付かれるでしょ。それを確かめるんでしょうが」

コソコソと後を付けて、ハラオウン家に入っていくのを視認。  
たぶんこの時間ならアルフが居るはず。玄関前まで気配を消して近寄る。

扉の前で聞き耳を立てる。会話は聞こえない。だけど何かがパリンと割れる音とドサッって重い音がした。

嫌な予感がする。ドアノブに手を掛けて、すぐに中に入る。勘違いとかなら後で謝ればいいんだし。

で、あたしは見た。フェイトを押し倒して覆いかぶさっている銀髪男を。

割れたティーカップ。争った跡？ ううん、そんなのどうでもいい。フェイトの目の端に涙が見えた。プチ。頭の中の何かが切れたのが自覚できる。

そっからはよく憶えてない。我に帰ったとき、フェイトが「やめてっ」ってあたしを止めようとしてた。

「アリサちゃんっ、まずは話を聞かないとー！」

そこにすずかも参加。あたしはいつの間にか銀髪男に馬乗りになって、その綺麗だけど男らしい太い首に手を掛けていた。あたしは急いで手を離して銀髪男の上から跳び退く。

「大丈夫！？ ルシル！」

「ケホツケホ・・・ああ、大丈夫だ」

フェイトの様子からして、ルシルって呼ばれた銀髪男はフェイトにとって余程大切な人みたいだ。

そのルシルがフェイトに支えられながら立ち上がって、あたしを見てきた。

怒鳴られる？ 当たり前か。事情も聞かずに鍋で殴って、その上首を絞めたんだ。

恨み言で済めばラッキー。下手したら警察沙汰になるかも。

「勘違いさせてしまったようですまなかった」

なのに、ソイツは怒るところか自分に非があるって頭を下げて謝った。

言葉に詰まる。なんて言えばいいのか判らない。判らないから、とりあえず、

「あたしもごめんなさい」

謝ろう。それが一番いいに決まってる。

それから四人で割れたカップの破片やら濡れた床を掃除しながら、さっきの事情説明（事故だった）をして、次に自己紹介をすることになった。

「私はルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。執務官としてのフェイトを補佐をしている。まあ執務官補佐、というものだ。」

あと、みんなからはルシルと呼ばれているから、二人もそう呼んでくれていい」

長い名前。“フォン”とか、どっかの貴族みたい。

うつすらと見え隠れする物腰もなんかも上流階級の感じだし、そういうパーティに参加していてもきつと違和感がない。

それにしても、よく見たら男っぽくないっていうか・・・女装とかしたらすごく似合いそう。

(この人、生まれてくる性別を間違ってるんじゃないの)

そんな事を思ったら、以前にもそんな事を思ったような気がした。どうせ気のせいだろうけど。だって、あたしとルシルは初対面なんだし。

でも何でかなあ？ ルシルの事を妙に懐かしく思うんだ。

「それじゃあるシル君。わたしは月村すずかです。すずかと呼んでください。」

でもそつかあ、フェイトちゃんの補佐さんだったんだねえ」

「判ったわ、ルシル。あたしはアリサ・バニングスよ。」

アリサでいいわ。すずかにフェイトやなのは、はやてとは小学校からの親友よ」

「ああ。よろしく、すずか、アリサ」

何でだろう。フェイトがすごく悲しそうに顔を伏せる。

それにルシルも。フェイトほどハッキリと顔に出ないけど、何処か寂しそう。

すごく引っかかる。何かこう胸が苦しいっていうか。そう思うからあたしは……。

「あのさ、フェイト。今すぐになのはやはやと連絡取ってくれない？」

出来れば、空間モニターってヤツ有りで。顔を見て話したいから」

「ア、アリサちゃん……？」

「え？ うん、いいけど……」

フェイトがなのはとはやてに空間モニター越しで通信したいってことをお願いしてる短い間に、あたしはルシルに、耳を貸して、っていう手振りをする。

ルシルはすぐにあたしのところに来て、あたしの口が届くようにしやがんでくれた。

「あたしさ、あんたの事見て何か懐かしいなあって思ったんだけど、どっかで会った事とかない？」

そう耳打ちすると、明らかにルシルの顔に動揺が浮かんだのが判った。

でもすぐに「さあ？」って誤魔化した。さあ？、だって。誤魔化しにその選択はダメよ。

確定。あたしはルシルとどっかで会ったことがある。

でも思い出せない。一度見たら忘れないような外見なのに。

「アリサ、繋がったよ」

『あ、アリサちゃん、すずかちゃん。こんばんは』  
『そして久しぶり』

『すずかちゃん、アリサちゃん、久しぶりやな』

「うん、久しぶり。なのはちゃん、はやてちゃん。今日はごめんね」  
なんて、すずか達は能天気挨拶してる。

ただあたしが挨拶を返さないで、しかもジト目だからか、なのはとはやては困ったように『あはは』と苦笑い。

あたしは二人に返事しないで、早速本題を切りだすことにした。

「ねえ？ どうしてあたしとすずかにルシルの事を教えてくんなかったの？」

『え？・・・ええっ？ アリサちゃん、ルシル君の事、もしかして思い出したのっ！？』

『そうなんか！？』

「ち、違っぞ、なのは！ アリサはそう言う意味で言ったんじゃない！」

もしかして思い出したの、か。やっぱり会ったことがあるんだ。ここでののはとはやてが、しまった、みたいな表情になった。もう遅い。だったら教えてもらおうか。

あたしがルシルと会っておきながら、どうして綺麗さっぱり忘れているのか。



「ち、違つぞ、なのは！ アリサはそう言う意味で言ったんじゃない！」

なのはとはやてがアリサの言葉に勘違いして自滅した。

いや、私にも非があつたな。今の発言は口頭じゃなく念話にするべきだった。

まったく。この問題は未然に防げるモノだというのに、どうしてこ  
うなつたのか。

彼女達は午前中、翠屋で同じ問題を起こしているのに、また同じ轍  
を踏んだ。

海鳴に来るまでに私の事をちゃんと連絡しておけば、こうはならな  
かった。

フェイトとなのはとはやて。今回の三人のうっかりレベルは、随分  
昔の契約で会つたことのある“遠坂凜”クラスだ。

そう、超ド級の破滅的うっかり。

「あの、ルシル君。もしかして私とも会つたことあるの？」

さすがが私へと振り返つて、信じられないと言つた風に訊いてきた。  
どう答えるべきか。もう隠し通せるほどのレベルじゃない失言だつ  
たしな。

でも実際、すずかやアリサに私の真実を話そうという話は以前から  
拳がっていた。

だが私はそれを止めた。“界律”の影響というどうする事も出来な  
いレベルとは言え、かつての友人の事を忘れてしまつていた。

それがすずかとアリサの心にどういったダメージを与えるか判らないからだ。

だったら教えることなく、忘れてしまっているままでいい、ということにしたのだ。

だと言っのに……

「このうっかり屋め」

翠屋の一件の後で確認しておけばよかったと後悔。

「『』ごめんなさい『』」

呆れつつ半眼でフェイト達を見回すと、フェイト達は申し訳なさそうに頭を下げた。

そこに、「ただいま〜！」と元気な声が聞こえてきた。

ここリビングと玄関から続く廊下を隔てる扉が開き、入ってきたのは、

「あれ？ おかえりフェイトちゃん。いらっしやい、すずかちゃん、アリサちゃん。そして、ルシル君。

んで、なのはちゃんとはやてちゃんにはこんばんはあ」

エイミイだった。エイミイとは本局で何度か会っているから、まあ問題ないだろうが、現れたタイミングがちよつと悪い。そして、

「お、フェイト、おかえり〜      おおっ、ルシルもおかえり〜」

アルフが両手にエコバッグを持って、リビングに入ってきた。

以前までは10歳にも満たない子供形態だったが、今は昔のように

10代後半の少女姿だ。

ここ数力月の間に判明した、私の魔力をフェイトに供給できるといふ恩恵が魔導師となった今でも可能ということで、アルフの維持に必要な魔力はフェイトと私が折半している形だ。

ルシルは無駄に魔力持つてるんだしさ、どうせなら有効活用しよう。

あんたの魔力なら大歓迎だしさ、フェイトの負担も今よりもっと軽し、良い事尽くめじゃん

アルフからそう言われ、フェイト経由で魔力を送った。

今ではフェイト2割で私が8割。うん、ほとんど私がフェイト経由でアルフに魔力を供給している。

言ってみれば、ある意味アルフも私の“使い魔”ということだ。

『おいおい、アルフ。ここは、おかえり、じゃなくて、いらっしやい、だよ……』

アルフにも、すずか達には私の真実は教えないと言い含めておいたんだが……。

念話でアルフにそう告げると、『しまった。ごめんルシル。嬉しくつてつい……』としょんぼりした。

そこまで落ち込まれるとこっちが申し訳なくなるよ。

エイミイはアルフの発言を大して気にも留めず、「夕飯すぐに作るから待ってて〜」とキッチンへ入り、アルフも「手伝うよ」と続いた。

さあどうしようかこの状況。クロノとエイミイの子供達が帰ってくる前に決着しないと、ダメだろうなあやっぱり。

「話してくれる、よね？ あたし達親友なんだし」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、そしてルシル君私とアリサちゃんにも関係してる事で何か隠してるなら、やっぱり私達にも話してほしいなあ」

ああもうダメだ。二人は笑顔なのに放たれるプレッシャーが凄まじい。

なのは達が私に、どうしようか、という視線を向けてきた。

『なあルシル。アリサとすずか、この際にエイミイにも教えてもいいんじゃないか？』

アルフからの“もう諦めらめて話しちゃえよ宣告”。

腕組みして溜息、魔術があればこの数時間程の記憶を隠蔽するくらいできるんだが。

私は「・・・はあ。仕方ない。すずか、アリサ」と二人に視線を移す。

私はフェイトに、“地球・日本・海鳴市”に有ったアルバムの類と、“ミッドガルド・フェイト達が持っていた”アルバムの類を用意させる。

「持ってきたよ、ルシル」

「ああ。テーブルの上に置いてくれ」

エイミイとアルフが夕飯の用意をしている音をBGMに、ソファに四人で腰かけ、二つのモニターになのはとはやてを交えて話を切りだした。

「まずは・・・そうだな。すずか、アリサ。私とフェイト達との付

き合いがどれくらいになると思う？」

私の問いに、二人は数日の間から一年ちよいって答えが返ってきた。

その基準はおそらく“テストメント事件”前から今日までの期間だろう。

その前の海鳴への帰郷の際に私がいなかった事、今日まで私という存在の連絡を受けていない事から導き出したに違いない。しかしその答えは……。

「ハズレだ。私とフェイト達との付き合いは、彼女達が9歳の頃から続いている」

「はあ？ そんな昔からの！？」

「え？ うそ、だよな？ そんな小さな頃からの付き合いだったら、私やアリサちゃんにもちゃんと紹介してくれるはずだよ？」

信じられないと言った風に反応を示す二人。

そこでフェイトが用意したアルバム類だ。

まずはこの海鳴市のハラオウン家に置いて有ったアルバムを開く。

(やはり映っていないな……)

どの写真にも私やシャルの姿が映っていない。

“界律”からの修正が働いた所為だ。存在していなかった事にされた。

すずかとアリサが私が開いたアルバムを覗き込んでくる。

そこで私はフェイトに、ミッドに有ったアルバムデータを開くように指示。

フェイトは頷いて、魔導端末を操作。テーブルの上に写真データが表示されたモニターを幾つも展開する。

二人はそちらにも目を向け、そして「え？」と漏らした。

二つの写真には相違点がある。私とシャルが映っているか否か、という相違点がある。

「どうということよコレ・・・？ この銀髪の美少女っぽいってまさかあんななの？ ルシル・・・？」

美少女とか言うなよ。今でも傷つくんだよ、それ。

「それにこの水色の髪の女の子・・・私、知らないよ？」

すずかのセリフに、フェイト達の、特になのはの顔色がハッキリと変わった。

それはそうだ。私以上にすずか達と付き合いがあったシャルの事を、悪気やわざとではないとはいえ、“知らないよ”、なんて言われたらやっぱりショックだろう。

そういう私も少なからず傷ついている。この場にシャルが居たら、彼女は泣いていたかもしれない。

アリサはすごい勢いでテーブルの上に置かれているアルバムをめくり、そしてフェイトに写真データをめつと見せるように言う。

いつの間にかエイミイもこちらを覗き込むような形で参加していた。

「あんだ達、もしかしてあたし達を騙そうとかしてる？」

だってあり得ないでしょ、こんなの。だって憶えてないだもん、ルシルやこの女の子の事。

だったらそこに行きついちゃうでしょ？ アルバムの写真は今さらイジれないけど、フェイトの写真データはやるうと思えばやれ」

『違つよっ!』

アリサの言葉を、なのはの悲鳴のような否定が遮った。  
なのはの映るモニターへと全員が目を向ける。なのはは・・・泣いていた。

「なのは!？ ちょっ、なに泣いてんのよっ!？」

「え？ えっと、なのはちゃん？」

突然泣き出したなのはに、激しく狼狽するすずかとアリサ。  
なのはは嗚咽を漏らしながら何度も『違っ』と否定の言葉を続けた。

「そっだよ、アリサ、すずか。そうじゃない。違っんだ。」

確かにルシルとこの水色の髪の子、シャルはいた。特にシャルは、私達と同じ聖祥小と中学に一緒に通ってた」

フェイトがその当時の写真データをモニターに表示させた。

小学校の制服を着て、シャルを含めたフェイト達が楽しそうに笑って通学している。

中学校の制服を着て、何か良い事でもあったのか肩を抱き合って笑いあってるシャル達。

テーブルの上に置かれたアルバムにも同じ写真がある。

だがそこにシャルは映っていない。シャルの居るべき場所がポツカリと空いていた。

『詳しい話は長くなるで今は出来へんけど。すずかちゃん、アリサちゃん。』

確かにシャルちゃんは私らの親友やったんや。もちろんルシル君もな』

はやても小さく嗚咽を漏らしながら、二人に告げる。

『詳しい話は明日にするよ。でもね、これだけは言っておきたいんだ。

シャルちゃんは、私達の友達。何物にも代えられない・・・大親友、なんだよ・・・』

なのはが何度も手の甲で涙を拭いながら、万感の想いを込めて告げた。

黙るしかなくなったすずとかアリサ。幼馴染三人にこうまで言われたら嘘だとは思えなくなっただらう。

私へと視線を向けて、

「あたし達は、本当にルシルやシャルって子と友達だったの？」

アリサが沈痛な面持ちで訊いてきた。私はただ首肯する。

シヨックを受けたように目を見開いて、私から目を逸らすアリサ。次にすずかが、

「だったら、だったらどうして？ どうして私とアリサちゃんはそんな大切な事を憶えてないの？」

若干涙目になりながら訊いてきた。

これもまた長くなる話。今、ここで詳細に話す時間はない。だから今は、

「世界がそうなるように仕組んだからだ」

そう言うしかなかった。



詳しい話は後日ということになって、すずかとアリサは渋々帰宅した。

なのはとはやてはルシルにもう一度「こんな事になってごめんなさい」って謝って、ルシルは「シャルの事を思えば、こうなった方がよかったのかもな」って、小さく微笑んだ。

そして夕食を私とルシルとアルフ、エイミィとカレルとリエラで頂いて、夕飯の片づけをしている時、

「ねえフェイトちゃん。私ね、ずっと引つかかってたんだ」

エイミィが話し始める。

「クロノ君やお義母さんがさ、ジュエルシード事件や闇の書事件とかのデータを私に見せないようにしてた事があつたんだ。

結構さりげなくで自然なんだけど、何処か不自然さもあって、でも気になるほどじゃないから何とも思わなかった。

でも、今日のフェイトちゃん達のやり取りを見て、判つたんだ。

ルシル君とシャルちゃん。二人の事を憶えていない私が、二人が解決に協力してくれた事件の資料を見て不審に思うんじゃないかって、クロノ君達はそう思ったんだろうね。

だから二人が関係している資料を私から遠ざけた・・・」

エイミィは「教えてくれたらよかったのに」って寂しげに苦笑した。私は「ごめん」としか言えなかった。するとエイミィは、

「フエイトちゃん。教えて。どうして私もルシル君とシャルちゃん  
の事を憶えてないのか。」

フエイトちゃんが教えること出来る範囲でいいから」

皿洗いを中断して、私を真っ直ぐ見てきた。

私も皿拭きを中断して、真っ直ぐ見詰め返す。

『ルシル、エイミイに話すけどいいよね・・・？』

マンシヨンの屋上でアルフと格闘戦の模擬戦をしてるルシルに念話  
で訊く。

返ってきたのは、『ああ。私も参加するから、少し待って　へぶ  
っ！？』だった。

へぶっ？・・・？　あーごめん、ルシル。ひよっとしてタイミング  
が悪かったかな？

この後、少し頬を腫らしたルシルが戻ってきて、カレルとリエラが  
寝たのを確認してから話に移った。

エイミイはずっと黙って聞いていて、そして最後に、

「本当に遅れたけど・・・。おかえり、ルシル君」

って、ルシルに微笑んだ。

ここは海鳴、始まりの街　〜親友再会編〜（後書き）

ルーテシア

「お？　おかえり、レヴィ。引きこもりはもういいの？」

レヴィ

「わたしをニートみたいに言わないでよ。ちょっと気分転換にクロ  
ーゼットから転移して出掛けてたの」

ルーテシア

「（何でまたクローゼットから？）へ、へえ。それで？　どこに行  
つてたの？」

レヴィ

「ウチの作者のところ。わたしを本編に出す様に直談判に行っ  
てきた」

ルーテシア

「うわぁ、そこまでやっちゃうんだ。その行動力に、お姉ちゃん  
引いたよ」

レヴィ

「でも言えなかった」

ルーテシア

「それはまたどうして？　そこまで行っただんなら、砲撃でも何でも  
使って脅迫って言う名のお願いが出来たのに」

レヴィ

「ルーテシアもなかなか危険思考になってきたよね。だつてさ、ANSUR 完結編の、まあシーンがバラバラだけど、いくつかのプロットを執筆してたんだもん。何か邪魔し辛い雰囲気だったから、側に有った広辞苑を投げつけて帰ってきた」

ルーテシア

「（十分邪魔してるよそれ）お、おおっ！ それでそれで？ もしかして読んできた？」

レヴィ

「うん、まあちょっとだけ。とりあえず、ルシリオンが……」

ルシル

「私がどうしたつて？」

ルーテシア

「もう何も言わないよ？」

レヴィ

「ルシリオンが……“鬼”だった」

ルーテシア

「人格面で？」

ルシル

「おいっ」

レヴィ

「それもあるけど」

ルシル

「あるのかっ!?!」

レヴィ

「特務六課が苦戦してた敵の何人かを瞬殺したり、事もあろうになのはさんとフエイトさんを撃墜したり、泣いているはやてさんを無理矢理横に寝かせて、お腹を触ったり」

ルーテシア

「きゃああああああああああっ!」

ルシル

「あああああああああああああっ!」

レヴィ

「うるさい」

ルシル

「嘘だよなっ!?!」

レヴィ

「それはどうかな?(フッフ、困れえ困れえ)」

ルーテシア

「ルシリオン、しばらく話しかけないでね」

ルシル

「嘘だと言ってくれえええええー!」

ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路そのいちく（前書き）

完結編のストーリーを本格的に考えだしてしまったせいで、こっちが若干疎かに・・・。

あーもう、Forceのシグナムよ、早く復活して専用武装を見せてくれ・・・。

ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路そのいち

＋＋＋　Sideはやて＋＋＋

これからすずかちゃんとアリサちゃんにルシル君とシャルちゃんの事を話するため、私らはアリサちゃんの家に向かっている最中。

予定やと集合場所は翠屋やけど、すずかちゃん達とするんは魔法関係の話。

魔法を知らん一般の人がおる翠屋やと色々不都合とゆうことになって、アリサちゃんの家が集まることになったんが今朝の7時前、アリサちゃんからの連絡で決まった。

私となのはちゃんのうっかりミスが今回の事態を招いたと思うと、やっぱり気が滅入る。

「でもさはやて。これっていい機会だつてあたしは思うよ？」

「やっぱさ、アイツ・・・シャルロツテはみんなの心の中にいたほうがいいと思う。」

「アリサさんやすずかさんにも、あたしとしては憶えてなくてもせめて知っておいてほしい」

「グイータ・・・」

「・・・なんて、らしくねえこと言っちゃまった。やっぱ今の無し。」

グイータはすぐくええこと言ったのに、恥ずかしくて今の話を撤

回するって言いでした。

そこにシグナムが「そう思っているのはお前だけではない。私もそうだ」って言ってる、それはもう優しい眼差しをヴィータに向けた。

「やめるっ、そんな目で見んなっ」

「ヴィータちゃんはいつまで経ってもテレ屋さんですね」

「うっせえよりイン！ あ、シャルもそんな目しやがって！」

「えええっ？ 普通にしてたのに怒られたっ！？」

「姉御、諦めて素直になれって。シャルさんの事大好きだったんだろ？」

「ち、違っ、バカそうじゃねえよっ！ やっぱ友達としてだな……」

「だからそういう意味での、好き、なんだろう？ なあ、アギト？」

「おうよっ。姉御は一体何を勘違いしたんだ？」

シグナムとアギトのやり取りに、ヴィータが今まで見せたこと無いくらいに顔が真っ赤になった。

ヴィータはアギトの“好き”ってゆう単語にどんな意味を持たせたんやろうな

俯いて肩を震わすヴィータ。ちよっ、アカンよヴィータ。こんな朝っぱらから叫ん

「~~~~っ！ 敵だっ！ お前ら全員あたしの敵だっ、バカヤロ



「ーーーーッ!!」

「む？ 何故話に絡んでいない私まで敵なんだ？」

だら~~~~。思い空しくヴィータは絶叫。

リエイスはリエイスでいきなりのヴィータからの敵対宣告で困惑。  
日曜の朝。時刻は午前8時過ぎ。

せつかくの休日、朝寝坊をしたいかと思つとるかもしれん人が少なからずおるはずの住宅街。

その住宅街の中心で怒りを叫ぶヴィータ。私たちはそこから逃げるようにして全力ダッシュ、いいタイミングで停留所に停まったバスに乗る。

「「「ヴィータ・・・」」「「ヴィータちゃん・・・」」「姉御・・・」

「す、すまん・・・。でもお前らだつて悪いんだからなっ」

まあそんなこんなで、なんとか運良くアリサちゃんの家方面に向かうバスに乗れて、私たちはアリサちゃん家に向かう。

その途中、私とヴィータの後ろの座席に座るリエイスが身を乗り出してきて、

「主はやて。御友人にルシリオンとシャルロツテについての話をする際、やはりアルバムや映像を見せながら、ですか？」

そう訊いてきた。私は「まあそれしか方法ないしな」って答える。

魔術師のルシル君ならいろんな方法を選べるんやろうけど、今のルシル君は私らと同じ魔導師や。

ほとんど万能と言える魔術はもう使えへん。そやったら、私たちは根

気よー話すしかない。  
フェイトちゃんからも、エイミーさんにルシル君の真実を話した、  
って連絡が来たしな。

エイミーだけどね、信じてくれたよ。

ルシルと初めて顔を合わせた時、私とのやり取りを見て、昔からの  
付き合ってるみたいに仲良過ぎって思ってたんだって。

だから、アルバムとかで見せた写真や映像もすんなり受け入れてく  
れたよ

ルシル君がエイミーさんと裁判前には会った事は話に聞いとる。  
その時はその場にいなかったからどついうやり取りをしたのかは詳  
しく知らんけど、エイミーさんにとっては初対面になってしまいうル  
シル君。

そのルシル君と15年以上家族として過フェイトごしてきた義妹ちゃん、二  
人のやり取りを見てそう思うんなら、それはもうお熱い感じやった  
に違いない。

(シャルちゃんが知ったらどんな風にルシル君をからかうんやろ?)

それはもうハイレベルなからかいに違いない。

そんな事を思つとると、リエイスが、

「もしかしてお忘れですか？ ルシリオン以外に魔術を扱える者が  
もう一人いることに」

静かな口調で言ってきた。リエイスに言葉に一瞬だけ思考が止まる。  
そしてすぐに理解する。そうや、リエイスは言うつつた。

ルシル君の魔術ヴァルハラによって召喚されたエインヘリヤルで、  
その後にセレスの“ディオサの魔道書”によって想いとして確立さ

れて、マスター権をルシル君からセレスに変更、そして“テストメント幹部”になった存在・・・やったっけ？

まあええわ。リエイスは魔術でその存在を今も固定されとるこの世界でただ一人だけの魔術師でもあるとゆうことや。

「私の中には、ルシリオンのから受け継いだ魔術式が多く保管してあります。

複雑すぎる術式は単独では完璧に扱えませんが、ですが何か役立てることがある思います」

単独では、なあ。ユニゾンすれば出来るゆうことやな。

「・・・そやな。ルシル君にちよつと訊いてみるわ」

通信端末を取りだして、ルシル君宛てにメールを送信。リエイスの力が役に立つとええなあ。

++++ Side はやて ルシル++++

通信端末に送られてきたはやてからのメール。

内容は、リエイスの魔術（元々は全部私のモノだ。サファイア口の中に大半を蒐集されていた）を使って、すずかとアリサの記憶を取り戻せないか、というものだった。

（・・・出来る、だろうか・・・？

界律によって処理された記憶だ。欠片も残っていなかったら、いくら魔術でも・・・）

試した事、試そうと思ったことすら無い方法だ。

それに“界律”によるこういう記憶処理は、どこまでの影響力を誇っているかどうかも知らない。

記憶処理については知ってはいるが、それはただ知っているだけ。

完全に理解なんてしていない、そういうものだとか。

私の“界律”に対する知識は所詮そう言ったレベルだ。

そんな“界律”に処理された記憶を取り戻すなんて……。

（何せこう言った誰かの記憶を取り戻す云々というケースに出くわす事なんてまずないからな……）

「どうしたのルシル？ さっきから眉間にしわを寄せて難しい顔してるけど……」

深く考え込んでしまっていたようで、フェイトが歩く私の前に躍り出て上目づかいでそう訊いてきた。

百聞は一見に如かず。通信端末のメール画面をフェイトに見せる。

フェイトは「リエイスの魔術で記憶を戻すっ？ 出来るのそんな事？」と驚いている。

「判らない。同じ因果律の世界に召喚されることはそうそう無い。あつたとしても数十年後か数百年後かの未来か過去。

数年の空白、しかも界律の記憶処理を受けた世界のある複数世界に再召喚なんてことはこの一万年弱の間で初めてかもしれない」

そもそも前回の召喚自体からして異例だった。

“終極テルミナス”が地球の“界律”に接触し、それによって私とシャルが召喚された。

それだけならまだまだ大した問題じゃない。

次元世界のように複数の世界の集合体、その内の一世界に召喚され

ることは今までもあった。

活動の場はもちろん守護神を召喚した一世界を軸としていたから、本契約執行を“界律”より言い渡されても、その一世界から私達の存在が抹消されるわけじゃない。

だが前回、“テルミナス”の計画によって召喚された地球に留まらず数十という世界にいいように使われた。

そして、それなり数の知り合いを作っていた地球ではなくミッドチルダで本契約が言い渡された。

結果、地球の“界律”から不要とされた私とシャルの存在が抹消、高町家を始めとしたすすか達の記憶からも消えた。

（本当に異例尽くしだな。感謝はしているが、やはり恨むぞテルミナス）

現テルミナスではなく先代テルミナスに対して、心の内で呪う。

「そっか・・・それじゃあ今こうしてルシルと一緒に歩けるのは本当に奇跡なんだね」

フェイトが私の話を聞いて、私の隣に戻った後そう呟いた。

そもそもフェイト達と出逢ったこと自体が奇跡なんだがな、私からしてみれば。

何となくフェイトと手を繋ぎたい衝動に駆られ、そっと彼女の手に触れる。

フェイトは何も言わず、そっと優しく握り返してくれた。

「・・・まあやってみないことには判らない。少しでもシャルの記憶が残っていれば・・・おそらく」

「きつと大丈夫。何となくだけどね、すすかやアリサの中にシャル

が生きてる気がする」

フェイトはそう言っただけで私の手を引いた。私はフェイトに釣られ、何かを期待しているかのように少し歩く速さを上げたフェイトにたづいていく。そうだな。アリスはうつすらとだが私の事を憶えていた。なら、シヤルのこともきつと・・・。

++++ S i d e l シル アリス++++

あたしの家、その応接室になのは達が集まった。

用件はもちろん昨日の話の続きを、もつと詳しく聞くためだ。

初対面であるはずのルシルのこと、憶えてすらいないシヤルって子のこと。

フェイトに見せてもらったアルバムと、私とすずかの知るアルバムの違い。

両方を見て初めてアルバムに違和感を持った。

ポツカリと空いた人一人分の空白。今まで気にもならなかったけど、両方を見比べてハッキリと違和感を持つことが出来た。

だから、シヤルって子が本当にいたんじゃないかって思える自分が今ここに居る。

「それじゃあ聞かせてもらおうかしら」

ソファに腰掛けるなのは達を見回す。

そしてルシルが小さく挙手したのを見て、あたしは先を促す様に頷く。

「アルバムなどを見て語るのでは時間がかかり過ぎる。ということ、こちらからの提案だが、君とすずかの記憶を取り戻す術を試したいんだが……」

「私とアリサちゃんの記憶を取り戻す？ そんな事が出来るの？」

「可能性としては限りなく低い。が、もし上手くいけば、ただ聴いて知ったという曖昧なものじゃなく、私とシャルの事を自分の思い出として思い出す方が遥かに良い」

「それはそうでしょうけど、出来るの？」

すずかと二人して訊くと、ルシルははやての隣に座るリインとそっくりな女の人を見て「リエイス」と名前を呼んだ。

さつき初めてリエイスさんと会った時、リインが知らない間に大人になったってすずかと一緒に驚いたし。

でもすぐに後ろからひよっこりリインが現れて、そこで思い出した。初代祝福の風リインフォース。リインが生まれる前にはやて達から話は聞いていた。

初代のその子がいなくなったからこそそのリインだったはずだけど、気になるその話はまた後にするつもりだ。

「じゃありエイイス、久しぶりのユニゾンだ。準備はいいか？」

「ああ。私はいつでも構わないぞ、ルシリオン」

ルシルとリエイスはソファから立ち上がって、私達の座るソファから少し離れる。

そしてルシルとリエイスがそっと手を重ねて指を絡めた。

ふと二人の奥に居るフェイトとはやてが視界に入る。

(うわ、なんか少し不機嫌っぽい)

フェイトはなんか膨れっ面。「手なんか繋がなくなっちゃっていいのに」  
ってボソツと呟いてる。

そしてはやてはジト目でルシルを見てる。

「瞬四角関係?とか思ったけど、はやての目はそういうものじゃない。」

あの目は知ってる。ウチのパパが、あたしの恋人になりたいと立候補してきた男達(当然それなりの御坊っちゃん)に見せる目だ。

娘は渡さん、そう言った親バカにしか出来ない目……。

はやて、あんた……いつからそういうキャラになったの?

「ユニゾン……イン」

リエイスが光となってルシルの中に消えて、ルシルの姿が眩むほどの光に包まれる。

あたしはその強い発光にまぶたを閉じて、次に開けたとき、あたしは……

(綺麗……)

ルシルとリエイスが一つになったその姿を見て、見惚れてしまっていた。

二人の髪の色は銀だったけど、蒼の近い銀になっている。

瞳の色は微かに光る真紅に統一されて、蒼銀の長髪がフワリと広がっている。

そして背中から六枚の翼が生えていて、右側が白、左側が蒼と左右別の色だ。

見ようによっては絵画とかで観る天使とか女神とかだ。男だけど。



あたしの隣に座るすずかも「すごく綺麗・・・」ってウツトリした目で呟いてる。

「さて、それじゃあ全員隣の人と手を繋いで輪を作ってくれ」

ルシルにそう言われたあたし達は、理由を聞くまでもなく手を繋いで輪になった。

ルシルはあたしとすずかの間。ねえフェイト。別に疚しいことしてらんじやないんだから、そんな不機嫌そうな顔しないでっば。

フェイトの独占欲が強いことにちよつと驚き、そしてルシルの今後について心配する。

万が一浮気なんてしようものなら、ルシル・・・フェイトに殺されるかも・・・。

「わ、私達の中に有る記憶をすずかとアリサに観せ、えー・・・二人に残されているかもしれない私とシャルの記憶を呼び覚ましてます」

フェイトとはやての発する妙な負の気配を察してカルシルは妙に落ち着かない感じで話す。

なのはやシグナムさん達もそわそわしてるし。

「では行くぞ。リエイス、術式“呼び覚ます、汝の普遍”スタンバイ・・・。

・・・よし、コード・エモニエル・・・！」

頭の中からバチって音がしたこと思ったら、視界全体が黒に塗り潰された。

まどろみの中、あたしを呼ぶ声に気付く。目を開けるとそこに居たのは・・・

『子供の頃のあたし・・・達・・・？』

聖祥小学校の制服を着た子供の頃のあたし、なのは、すずかの三人が居た。

そしてあたしの周りには大人のなのは達が居る。

仲良く下校している。そしてなのはが何かに誘われるように走りだす。

今でも憶えている。この後、なのはは運命との出逢いを果たす。

『ユーノ君と初めて逢った場面だね』

なのはが懐かしそうに呟く。

子供のあたし達は林道の途中で、傷ついてグッタリとしたユーノを見つけた。

それから動物病院へ。そして夜。なのはが魔法を手にした瞬間・・・。

『なのはママが初めて魔導師になった時・・・これが・・・。なのはママ、すっごく可愛い』

『え、あ、いやあ、その・・・ちょっと恥ずかしいかも・・・』

ヴィヴィオが感慨深そうに呟いた後、顔をキラキラ輝かせてなのはを見上げた。

そしてなのはは文字通り魔法少女を体現したその姿を娘に見られて、顔を赤く染めて動揺してる。

なのはの魔導師としての初陣も無事に乗り切って、その翌日、夕方の神社の境内。

防戦一方のなのはと、一方的な攻勢に出る化け物と化した犬と戦い。

なのはがよろける。そこに犬が猛然と突進してきた。すずかが『危ないっ！』って叫ぶんだけど、これは過去の話。この後、なのは波動にして乗り切るんだらうって思っていた矢先、

「風牙真空刃」

女の子の声が静かに響く。

それと同時になのはに突進していた犬の足元に何かが落ちて、犬の行く手を妨害。

犬はそこで攻撃をやめて距離を取った。

「状況は分からないけど、助けてもよかったんでしよう？」

あたしは声の出所へと視線を移す。

そこにその子はいた。水色の長髪を風に靡かせた女の子。シャル。なのは達がそう呼ぶ、あたしとすずかの親友だった子。

身長と同じくらいの刀を持って仁王立ち。顔立ちはもちろんのと同じくらいの子供何だけど、その表情は大人びてる。

『なのはちゃん。この映像、って言うのかな？ これは本当の起きたことなんだよね？』

『そうだよすずかちゃん。私がユーノ君と魔法と出逢ったその次の日に、私はもう一つの奇跡と出逢った。

それがシャルちゃん。シャルロツテ・フライハイト。かけがえの無い、大切な友達』

なのはが右手を胸に添えて、左手を右手の中指にはめられた指環を愛しむように覆った。

そう言えばその指環の事も気にはなっていた。あの男っ気の無いなの

はが指環。

ユーノからの贈り物……かな？ でもあの表情は違うわね。フェイトからルシルのことは聞かされず、はやくからはリエイスのことを聞かされず、その果てになのはとユーノが知らぬ間に付き合ってた、なんて事になったら泣くわ、あたし。

ま、話の流れからして、シャルって子から貰ったモノなんでしょうね。

そしてなのはとシャルの共闘にの末、犬を見事に元に戻すことに成功。

それからなのはとユーノとシャルの自己紹介、そしてユーノとシャルによる魔法談義。

なのははこの時はまだ素人だから二人の弾む会話についていけずに、夕日を眺めて途方に暮れてた。

『私もなのはちゃんとシャルちゃんの出逢いは話で聞いたただけやったけど、こうして観ると面白いな』

『特にこの何とも言えないなのはの途方の暮れっぷりがな』

『酷いよヴィータちゃん』

ヴィータちゃんが、子供のなのはのポケーとした顔を見て笑った。なのはがへこむ。確かに子供のなのはの顔を観ていると少し可笑しい。

そして、シャルがなのはの家にホームステイするって話題になる。

『あの、これもやつぱり……』

『このホームステイは、世界の意思が決めたことだ。』

シャルと後でたぶん出る私は、テストメント界律の守護神と呼ばれる存在なんだが……」

映像がビデオのように一旦止まる。

そしてルシルから、そのテストメントとかいうヤツの説明を受ける。正直信じられない話だった。ただでさえルシルとシャルのことでいっぱいなのに、世界の意思だとか抑止力だとか……。でもなのは達、ヴィヴィオですらその表情は真剣そのもの。だから嘘じゃないんだろ。

「まあ今となつては関係ないから、その辺は流してくれていい」

ルシルがそう告げると、映像の一時停止が解かれてまた進む。

高町家でシャルが見せた涙。そして少し語られたシャルの家族。

シャルは泣き疲れてそのまま眠つて、なのはもそれに付き添つてその日は一緒に眠った。

その翌日。シャルに海鳴市を案内するのは。会話の中にはあたしとすずかの名前が出て、

「次はお待ちかね 私の友達を紹介するね」

なのはがシャルの手を引いて、すずかの屋敷に連れてきた。

月村家のメイド長ノエルさんに案内されて、二人はあたしとすずかの元に来た。

「すずかちゃんとアリサちゃん、二人はこうしてシャルちゃんと逢つたんだよ」

なのはがあたしとすずかを見た。

でも、やっぱり思い出せない。確かに少し懐かしさを覚え始めたけ

ど、それでも・・・。

あたし達の微妙な表情を察して、なのはは苦笑いして、シャルへと視線を戻した。

子供のあたし達は自己紹介して、そして話に花を咲かせている。

あたしは笑ってる。すずかも楽しそう。からかわれたなのはが頬を膨れさせて、シャルが笑いながら謝る。

出逢って一時間と経たないで、シャルはもう子供のあたし達の長年の友達だったように、あたし達の輪の中に居た。

『えっと、どうかな？ 何か少しは思い出しそう？』

フエイトがあたしとすずかに少し遠慮した風に訊いてきた。

あたしとすずかは顔を見合して、小さく首を横に振った。

『まあこんなにすぐに記憶が取り戻せたら苦労などしない』

ルシルは淡々と告げて、あたし達の記憶奪還作戦は続ける。

なのはとシャルとユーノ三人によるジュエルシードっていうアイテム搜索物語りを眺める。

プールで、あたし達が水の化け物に水着を剥ぎ取られたの・・・

『ルシル君は見ちゃダメえええー！』

『その目を閉じろおおー！』

『痛つつつたああああああっ！？』

なのはとすずか、そしてあたしは一斉にルシルの顔面にビンタを喰らわした。

顔を両手で押さえて、それでも目を開けようとするルシルにあたし

達三人は突撃。

三人分の体重を支える事が出来なかつたみたいで、痛みでフラついていたルシルは簡単にあたし達の下敷きになる。

なのはとすずかは、ルシルの胸の上に顔があることに気付いて、「きゃっ」て短い悲鳴を上げてすぐに離れたけど、

『早く先に進めろおおー！』

あたしはルシルに馬乗りになって、両目を塞ぐように両手を付いて怒鳴る。

上に乗つかつてるより、子供の頃とは言え裸を見られる方がずっと恥ずかしい。

そして呆然としてたフェイトが『何してるのアリサっ！？ ルシルの上から退いてっ！』ってあたしをルシルの上から退かそうとする。なんとかプール騒動の間、ルシルの視界を潰すことに成功してプール騒動は終了、あたしはようやくルシルの上から退く。

『酷い目に遭った』

『わ、結構腫れてる』

『それはこっちのセリフよっ！』

右手で自分の頬を擦り、ヴィヴィオに左の頬を擦られてるルシルが  
咳く。

そんなルシルにあたしはズビシツと指を差しながら吼える。  
今まで黙ってあたし達のやり取りを傍観してた周囲からは、

『哀れだなセインテスト』

『ルシルさんはもうこういうキャラで確定のようですね』

『機動六課の頃から兆しはあったけどな』

『そうなんだ。あたし、J S事件の時のルシルさんのこと詳しく知らないから、なんか新鮮だなあ』

『まあなんや。こうゆうハプニングはこれからも何て事無い日常として捉えるんが一番やな』

『そうですね』

八神家は笑い話として片付けようとしている。

そりゃ被害の無いあんた達は気楽でいいわよね。

そんなこんなで無駄に疲れたあたし達の記憶奪還作戦はまだまだ続く。

又イグルミの行進、学校でのお化け退治、翠屋FCの子が持っていたジュエルシードによる大樹暴走。

そして場面はさすがの家へと変わる。そしてここで、

『私とシャルちゃんは、ユーノ君と同じようにジュエルシードを探し求めてたフェイトちゃんとルシル君と出遭った』

ジュエルシードで巨大化したネコに対して容赦なく攻撃を加えるフェイト。

この頃のフェイトのことは話してしか聞いたこと無いから、当時の何の表情もないフェイトに驚く。

『この時のフェイトママ、ちょっと怖いね』



『ガーン!』

ヴィヴィオの何気ない一言でフェイトは轟沈した。  
なんか『判ってるけど、私もそう思うけど』って念仏のように繰り返して呟いてる。

で、フェイトとアルフと一緒に現れたもう一人の黒外套に仮面なんて怪しさ爆発なのが、ルシルってわけだ。  
訊いてもいないのにルシルは、

『外套と仮面は正体を隠すためだ。決して変な嗜好なわけじゃない。それと、これは守護神の正装だ。趣味が悪いとか思わないでくれ』

なんか弁明を始めた。適当に『へ〜』とだけ返しておく。

なのはとシャルは、変装したルシル相手に負けた。

そして次は海鳴温泉にみんなで行った場面なんだけど・・・。

『またかああー!ー!ー!』

『見ちゃダメええー!ー!』

『ぐぼお・・・っ!?!?』

温泉の脱衣所であたし達が服を脱ぎ始めた場面になって、あたしは竜巻 風脚をルシルに喰らわす。

綺麗に鳩尾に入ったあたしの華麗な蹴りにルシルがよろけ、そこになのはとすずかの左右からダブルビンタ。  
パチー!んってそれはいい音だった。

『いい加減にしておけよ三人ともっ!』

特になのはっ! この記憶は君のだった! 非は私じゃなくて君に有

るんだよっ！

そもそも、大して成長もしてない君達の裸を見てどうか思うような変態じゃないっ！』

ルシルが半ばキレて怒鳴った。うん、まあそうなんだろうけどね。でもそうやって言われるとちょっとムカつくあたしもいるんだなあこれが。

とりあえずあたし達はルシルを殴っておいた。

『ここまで理不尽なこと、そうそう無いな・・・フウ』

仰向けで倒れながら、なんか微妙にカツコいい息を吐くルシル。

フェイトとヴィヴィオがそんなルシルを労わるように『大丈夫？』  
って優しく声を掛ける。

そこで映像の中のあたし達は、そこを素顔を晒したルシルと初邂逅。  
言葉は交わさなかったけど、でも確かに会っていた。

それから次々と場面は変わっていく。あたしがなのは上の空な態度にイラついて怒鳴ってケンカ状態になって、でもシャルがあたしを諭してくれたことで、後を引くようなことにはならなかった。

『そう言えばこの時・・・あたしってどうやってなのはと仲直りしたのか憶えてない』

映像の中じゃシャルのおかげで治まった。

あたしの記憶の中にはこの時のやり取りは残ってる。  
でも仲直りした経緯が思い出せない。

またこの感覚。今まで何とも思わなかった思い出に違和感が次々と生まれてくる気持ち悪さ。

『私もだよアリサちゃん。』

今思えばすごくおかしいのに、なのに今の今まで全然不自然に思わなかった。

アルバム的事もそう。昨日、家に帰ってアルバムを見て、その不自然さに気付いたくらいだし。

ねえルシル君。これが界律とか言う世界の意思によって、記憶処理が施された証拠なのかな？』

すずかの問いに、立ち上がったルシルが首肯した。

『正直ここまで界律の記憶処理が手抜きとは思わなかったが、二人が自分の記憶に違和感を持ったのは上々だ。

で、どうだ？ 少しは思い出したような感覚とかはないか？』

『うーん、なんか引っかけりはあるんだけど、でもまだハッキリとは……』

『あたしもそうかな。あんたに抱いた懐かしさっぱいのは感じてるんだけどさ』

首を横に振る。なのは達はちょっと沈むけど、ルシルは違った。

『それでいい。やはり二人の中にもシャルが残っているようだ』

ルシルが見せた微笑にドキツとした自分がいる。

ふと視線を感じてそっちを見ると、フェイトがジト目であたしとルシルを見てた。

とりあえず、そんなんじゃない、って意味の首振り。

フェイトはそれで安堵したのか溜息を吐いて、ルシルの横顔を見上げた。

（こわ）。ダメだ、今のフェイトはあたしの知ってるフェイトとは違う）

ルシルに関して下手に喋ったり行動に移したりするとマジでやばそう。

まあそんなこんなでまだまだまだ続く記憶（略）の旅。

いつの間にかジュエルシード争奪戦も終わって、なのは達とフェイト達がお別れの時になってた。

お互いのリボンを交換するシーン。

『いいなあ。わたしもリオやコロナ、アインハルトさんとかと私物交換とかしたくなっちゃった』

ヴィヴィオが友達と、なのはとフェイトがしたような事やってみたって顔を輝かせてる。

そして時が流れての冬。フェイトとルシルとのビデオメールのやり取り。

フェイト達が海鳴市に引越してきて、

「まあここまでの女の子に囲まれると、ルシルまで女の子に見られることになるからね。」

それがイヤだから残ったんだと思うよ」

「ルシルの後ろ姿を見たら誰だって女の子だと思うわよ。前から直接見ても女の子に見えるんだから」

子供のあたしはシャルに同意して笑う。

「アリサちゃん、それはルシル君に失礼だよ」

「ずかはその思わないの？　だってルシルって家事も出来るんですよ？」

生まれてくる性別を絶つっつ対間違ってるわよ。

ねえねえ、女の子の服を着せたら似合うと思うんだけど、どうかなシャル？」

「それいい」

フェイトが聖祥に通うことになったり、ルシルが飛び級で海外の大学を卒業してるって聞いてあたし達は驚いたり忙しい。

そしてあたしが、昨日懐かしいと思ったセリフが出てきた。

(まさか本当に同じような事を言ってたなんてね・・・)

そんなやり取りを眺めた後、あたし達は大人となってるルシルに視線を移す。

ルシルはサッとあたし達からの視線から逃れるようにそっぽを向いた。

あーきつと女装させられたんだ、と察した。あたしの所為かもしれないと思うと謝りたくなかった。

そしてまた子供のあたしへと視線を戻して、この時のあたしってなんてバカなのかしらって呆れた。

『ていうかなんであたしらの初遭遇バトルが抜けてんだよ？』

『いや、必要ないだろ？私達とヴィータ達の戦闘。違うか？』

『いやいやいや。だったら今までのもあんまし要らなくねえか？』

『あ、酷い。私となのはの出逢いを要らないとか』

『だったら飛ばされるこっちのことも考えるよテストロッサ』

『だってヴィータ達ってこの時あんまり話に絡んでこないし、戦い以外に』

『うぐ、確かにそうだが・・・って、お前らもほとんどそうだったじゃねえかつ』

『はいはいストップストップだよフェイトちゃん、ヴィータちゃん』

『ビミョーにフェイトちゃんにもものすごい寂しいこと言われたけど、事実そうやからしゃあ無いよヴィータ』

『ごめんなさい』

『実際必要なのはシャルとすずか達との絡みなんだし、まあしばらくは我慢な』

そして、最早お約束と言ってもいいんじゃないかって感じの場面。そう、スーパー銭湯での出来事。脱衣から銭湯内での言動全てが流れる。

今度はこの場に居る女性全員から青褪めるルシルへの、

『見るなあああー！ー！ー！』

『『見ちゃダメええー！ー！ー！』』

『見たらアカー！ー！ー！』

『『さつさと目を閉じるセイントストおおー！ー！ー！』』

『きゃあああああっ！ セイントスト君のエッチー！ー！ー！』

血も涙もない暴力を用いた、見ないでっという訴え。自分も参加しておきながらなんだけど、これは酷いって思う。ボコボコにされて倒れたルシルに、銭湯に参加してないから平気なヴィヴィオとリインとアギトが向かった。

『きゃあああああ！ ルシルパーパーッ！？』

『ちよっ、大丈夫ですかルシルさん！？』

『つつかルシルさんの中に居るリエ姐も大丈夫なんだろうな！？』

肩で息をするあたし達、そして悲鳴を上げるヴィヴィオ達。なんだこれ？

なんとかこのシーンも乗り越え、ルシルも死の淵から乗り越えた。そもそもここは精神世界ということらしくて、実際肉体にダメージは届いてないとのこと。

でも痛いことに変わりはないから、『少しは自重しろ』って、ルシルとリエイスから本気で全員怒られた。

それからクリスマスイヴ。当時あたしとすずかが知らなかったなのは達とはやての家族との因縁。

激しく、そして悲しい戦いの後、その当時リインフォースだった頃のリエイスさんとはやてのお別れのシーン。

不覚にも泣いてしまった。だって悲し過ぎるし感動過ぎるでしょっ？はやてのために自らの終焉を選んだリインフォースさん。

リインフォース、リエイスさんの遺言っばいのを受けとったはやては魔導師としての道を選んだ……。

そしてこの日、なのは達から魔法の存在を教えられた。

『ホントに驚いたわよこの時。いきなり次元世界だとか魔法だとか。』

でも実際に見ちゃったし。なのはとシャルとフェイトが戦ってんの。だから否応なく信じるしかなかったんだよね、確か』

私がそう言つと、なのは達は『え？』て呆けた。

『アリサちゃん。今すごく自然に、シャルちゃん、つて・・・』

すずかにそう言われて、あたしもあまりに自然にその名前“シャル”って口にしたことに驚いた。

『順調だな。さあ先へ行こうか。もう少しだ』

ルシルが嬉しそうに言う。

なんかその笑みを見ると、こつちまで嬉しくなる。

もう少しで、あたしはシャルとまた逢える。

聴くだけじゃなくて観るだけじゃなくて知るだけじゃなくて、本当に思い出すことでまた親友になれる。

その足音はゆっくりと近づいて来てる。そう確信が持てた。



ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路そのいちく（後書き）

レヴィルルシル

「……………」

ルシル

「その、なんというか……落ち込むな。な？」

ルルテシア

「まさかまさかの追憶編……しかも、そのいち、って……。」

レヴィ

「現在じゃなくて過去なんて……出番があるわけが無いよ……。」

ルシル

「いや、あとがきとは言え今のところ全話出てるんだ。」

ほら、準レギュラーのスバルとティアナ、エリオとキャラはまだ出番じゃないから登場してない」

ルルテシア

「まだ、っていうことは出番があるんだ……？」

レヴィ

「それとき、完結編の話になるけど、完結編に当然わたしはいないんだよね。」

だってわたし、この作品オリジナルキャラだし。なのに唯一の登場作品なのに出版無しって……。」

ルシルルテシア

（落ち込み度がハンパじゃない……。）

レヴィ

「いいな〜。ルルテシアは原作登場キャラで。」

きつと完結編でも出番があるんだ。羨ましいな〜〜ウフフフ、フフフ」

ルシルーテシア

(なんか病み始めた・・・?)

???

「あーっはっはっはっはっはっは！

あなたが落ち込むなんてらしくないんじゃない!?」

レヴィルー

「誰!?!」

ルシル

「・・・そんなバカなっ！ どうして君がここに居るんだっ!?!」

???

「約5カ月の期間を経て、十字架を背負いし、に華麗に復活！

讚え、崇め、敬うがいい。我が名はシャルロッテ！

この作品の真なる主人公にして、みんなの心にいつまでも生きるみ

んなの友達也!」

レヴィルーシル

「バカなあああー!」

ルシル

「というか転生してハッピーエンドだったのに、またこの作品でアホ面を晒す気か?

大人しく引っ込んでいた方が、君の好感度が下がらないんじゃないか?」

シャル

「アホ面とか言うな。あと好感度ってなによ。

アリサとすずかが私を思いだそうとしてるんでしょ?

そして次回からは子供の頃の私が出るらしいじゃない。

そうと知ったら黙っているわけにはいかないぜっ」

レヴィ

「この作品から去ったキャラにすらあとがきに登場されたら、わたしはもう・・・orz」

ルーテシア

「仕方ないよレヴィ。これが主人公鼻肩ってやつなんだよ」  
シャル

「ま、とにかく。短い間だけど、お世話になるんでよろしく」  
ルシル

「……はあ、また私がシャルにいじられる話がお届けされるの  
か……?」

「ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路その二つ　く」

＋＋＋ Sideなのは＋＋＋

私達の記憶の旅はまだ続く。

クリスマスを終えて、子ルシル君がシャルちゃんの手によって初めて女装させられた初詣。

あの時は本当に驚いたなあ。それと同時にショックだったよ。

男の子に負けた。子ルシル君の女装は可愛くて、それでいて綺麗で、だけど可哀想で。

『うわあ、なんか悔しいわ。その上ルシルの女装を推奨する私もどうかと思うわ』

アリサちゃんが頭を抱えて何か苦悩してる。

すずかちゃんはずすかちゃん、『すごく可愛い』って、記憶の中と違ってハッキリと大きな声で言っちゃった。

『ルシルパパ・・・泣いてるの？』

『泣いてないよヴィヴィオ。これは心の汗だ』

涙を、心の汗、だって言う人初めて見たよ。

しかもそれがルシル君から聞くことになるなんて思いもしなかった・・・。

子ルシル君だけが被害を受けた初詣も終わって、その数日後のイベントが始まった。

『ルシル君。また入浴シーンがある思い出だから、今度からは事前に目を隠してね』

『当然。もう痛いのはごめんだ』

それは冬休みの終盤、高町家・ハラオウン家・月村家・バニングス家の四家合同旅行。

はやてちゃん達が本局で忙しい時に私達だけ旅行なんて、って思っていたけど、

『私らの事で遠慮されたらこっちが気を遣う。そやから気にせんで楽しんできてな。やったな』

はやてちゃんは当時言った事をもう一度口にした。

私ははやてちゃんに振り向いて頷き、流れる思い出の映像へと視線を戻す。

子供の私達は、海鳴温泉に着いてすぐに露天風呂へ直行。

全員がルシル君へと視線を移してきちんと目を閉じているかを確認。そのルシル君は、背にある翼で目を覆い隠していた。翼の上からさらに両手で目の部分を隠す徹底ぶり。

なんかちよっぴり罪悪感が……。確かにルシル君は悪くなかったんだよね。

で、露天風呂の入浴シーンはカットは割愛させてもらった。

大人になって当時を思い出すと、あの時は少し頭がおかしかったかも、って思えるほどの騒ぎっぷりだったから。

子供の私達は入浴を済ませて、昼食までの空き時間。  
温泉Ⅱ卓球なんて安易な思考の下、卓球場に集まった。

「ただの卓球試合じゃつままないし、何かルールを決めて、その上で罰ゲームっていうヤツにしない？」

シャルちゃんがシェークハンドのラケットをブンブン振り回しながらそう提案してきた。

卓球場に集まってるメンバーは、私、アリサちゃん、すずかちゃん、シャルちゃん、フェイトちゃん、ルシル君、アルフさん、ファリンさんの8人。

ユーノ君とクロノ君は残念ながら仕事。二人にも悪い気がしてたけど、はやてちゃんのように笑顔で、行っておいで、なんて言われたらどうしようもない。

「いいわよ。その挑戦、受けて立とうじゃない！」

シャルちゃんの提案に真っ先に乗ったのは子アリサちゃん。  
子アリサちゃんはシャルちゃん同様シェークハンドのラケットを手に、ビシッとシャルちゃんに突き出した。  
運動神経の良い子すずかちゃんと子フェイトちゃんも、

「じゃあ私も参加しようかなあ」

「みんながやるなら私も」

って、ラケットを手を取って行った。

アルフさんは「あたしはそこんところはサッパリだから見学するよ」  
って不参加表明。

参加するのはこれで奇数の7人。1人溢れることになる。

残るは私と子ルシル君。子ルシル君は「じゃあ俺は審判でいいな」  
って言って不参加を表明。

先を越された！ これじゃあ運動が苦手な私が参加することになっ  
ちやう。

何とかしてルシル君をその役割から引きづり降ろして、審判の座を  
どうにか奪い取るうと考えていた時、

「あ、マスター命令でルシルは強制参加ね」

「……は？」

シャルちゃんがニヤリって笑いながら、子ルシル君を硬直させるよ  
うな事を言った。

当然子ルシル君は「そんな下らない命令を下すな馬鹿マスター。そ  
もそもいいのか？ 男が混じって」って訊いた。

外見が女の子っぽいルシル君でも実際は体力のある男の子だ。

それに対してシャルちゃんは、

「運動神経の良い子が揃い踏みだから問題ないでしょ。」

ていうかルシル。アリサとすずかを甘く見てると火傷するよ？」

ルシル君を挑発するような事を言ったのけた。

シャルちゃんはルシル君にハンを与えるところか普通にやっても  
負けるかもしれないって告げた。

「そういうことっ ルシル、手加減なんかしたら負けるわよ」

子アリサちゃんも子ルシル君を挑発。

さすがに子ルシル君も「上だ。あとで後悔しても知らないからな」  
って不敵な笑みを浮かべた。

やったよ神様っ。私は労することなく審判っていう見学者の席に座ることが……

「あ、なのはもちろん参加ね。数は奇数になっちゃうけど、何とかしてみせるから気にしないで」

「何とかしないでいいし、気にしなくてもいいんだけどね……」

出来ませんでしたよ……トホホ（涙）。

シャルちゃんは私にも言外に、出ないと許さない、ってプレッシャーを掛けてきた。

誰にも聞こえないようにボソツと呟く。でも一人にだけ聞かれていた。

「なのは。うちのシャルが迷惑を掛けてすまないな」

ルシル君は小声で謝ってきて、私の頭をそつと撫でてくれた。

私は「ううん。シャルちゃんは何も悪くないよ」って返した。

シャルちゃんは常に友達を想って行動する。今回だって私を仲間外れにしたくないからだと思う。

でもねシャルちゃん。当時の私はお世辞にも運動神経が抜群に良いってわけじゃないんだよ？

今でこそ教官とかやってるけど、ホント子供の頃の私は酷かった。卓球場の周りに立つメンバーの中では私が断トツ最下位だ、もちろん運動神経で。

そこに子すずかちゃんが私とルシル君のところに来て、

「頑張ろっねなのはちゃんっ　ルシル君、私負けないよ」

屈託の無い笑顔で言われたらもう断れないわけで、私は「あはは、



うん。頑張ろう・・・」って、苦笑するしかなかった。それぞれがラケットを手にし終え、シャルちゃんが仕切る卓球ゲームが幕を開けた。ゲームは古今東西（山手線ゲームとも言われるアレ）で、ご丁寧にもこの卓球場には円形の卓球台が置かれてあった。私達みたいな事をしようって人が他にも居たのかもしれない。ネットは十字に張られていて、一度に四人プレー出来るようになってる。

「じゃあまずは私、ルシル、なのは、すずかの四人ね」  
ジャンケンで決まったシャルちゃん達がスタンバイ。うう、体力機動力、全員圧倒的に私より上だよ（涙）。

「なのはっ！ お題によってはあんたでも十分にやり合えるはずよ」  
子アリサちゃんの応援の声に、当時の私は、それもそうだな、って思った。  
そうだよ。コレは純粋な体力じゃなくて知力勝負だ。  
お題にしっかり答えを言っつて、ちゃんと球を打ち返せばいい。  
罰ゲームはやっぱり私かもって落ち込んでたけど、まだ私は天に見放されてない。  
それにメンバーに関して私ツイてる。シャルちゃんとルシル君が居る。  
きつと二人で潰しあってくれるはずだ。

「ふふふふ」

「あの、なのは？ ちょっと怖いんだけど・・・」

シャルちゃんが、低く笑う私を見て引いてた。  
今こうして観てる大人の私でも、子供の私が見せたあの笑みは無い、  
って思う。

「それじゃあゲームスタートね。誰かが3回アウトになったら終了  
ね。

古今東西、聖祥小の先生の名前！ 宮崎先生」

シャルちゃんがルシル君に向かってピン球を打つ。

けどシャルちゃん、そのお題はどうかと思うよ今でも。だって、

「そんなの知るかつ！ とりあえず伊藤！」

聖祥小に通ってないルシル君が圧倒的に不利だよ。

律義に答えてるけど。しかも伊藤先生って確かにいるし。

もしこの時、シャルちゃんがフルネームで答えてって言うたら、  
ルシル君はきつともっと怒ってただろうなあ。

ただでさえちよつと怒ってるんだもん。乱闘になってたに違いない。  
ピン球は子すずかちゃんのところに行って、「坂野先生」っていう  
答えと一緒に私のところに来た。

私は「高木先生」って答えながらラケットを振った。

「……はい、なのは1アウト」

ラケットは空しく空を切って、ピン球は私の背後に落ちた。

答えが判っても打ち返さないと意味ないよね……やっぱり。

落ち込む私を放って、シャルちゃんと子ルシル君が衝突する。

「……おい、シャル。一体どういうつもりだ。

俺に答えられないお題って、随分と舐めたことをしてくれるじゃな

いか。

偶然、伊藤先生がいたらしいから良かったものの……」

ルシル君は私をチラッと見てきた。

私がちゃんと打ち返して、あのまま続いているれば、きっとルシル君がアウトになったた。

そこを喜びたいけど、私がアウトになったことで素直に喜べない。そんな顔してる。

私はそこはかとなくエヘツと笑って、気にしないでと言外に伝える。

「適当に名字を言っておけば当たるじゃない。

あなたの記憶力なら日本人の名字くらい完全網羅、答えられるでしょ？」

「馬鹿か。そんなモノを記憶してどうする。友人知人の名字だけで十分だ。

もう君はお題を出すな。俺となのはとすずかの三人で出題する。いいな？」

「ええー。どうせ私に答えられない奴出すつもりでしょ？ 卑怯者おー」

「どの口が言うか。じゃあアウトになった、なのは。君がお題を出してくれ」

ルシル君が私に勧めてきた。それに首肯して、それぞれ定位置に戻る。

向かいに立つシャルちゃんから無言のプレッシャー。

向かって右側に立つルシル君が近寄ってきて、小声で、

「なのは、シャルのことは気にせず思いついたお題でいいんだ。大丈夫。どんなお題を出そうともシャルには何一つ文句は言わせない」

安心出来る事を言ってくれた。

「あ、うん。じゃあ・・・古今東西、漢数字の一のつく四字熟語で一期一会っ」

一の付く四字熟語で好きなモノを言って、すずかちゃんに送る。すずかちゃんは「一致団結」ってルシル君に送って、ルシル君は「夷険一節」とシャルちゃんに送る。

シャルちゃんは「一攫千金\$」とそれは笑顔で、私へソフトに返してきた。

私は「一意奮闘」って、また意味の好きな四字熟語を答えて返す。意味は、心を一つのこと集中し、奮い立って戦うこと。また、力いっぱい努力すること、だ。

子すずかちゃんは「一生懸命」、子ルシル君は「一意専心」ってまた難しい事を言ってシャルちゃんに打つ。

シャルちゃんは「ホントにあるんでしょねソレ？ 一挙両得\$」と私に戻す。

私は「一家団欒」と、また好きな四字熟語を答える。

ラリーを眺めていたすずかちゃんが「何かシャルちゃんって、お金とか利益とか言う意味を持った四字熟語を答えるね」って呟いた。そしてアリサちゃんは「ルシルはルシルで、自分に何かを課す様な事ばかりよね」ってルシル君を見て肩を竦めた。

今の私なら判る気がする。シャルちゃんはどこか「何かを得たい、変わりたい」って感じ。

子ルシル君は「ただ役目を全うすればいいっていうある種の諦観」

めいた感じ。

“界律の守護神テストメント”としての時間、大戦という哀しい時間を過ごした二人。

答える四字熟語には、そんな二人の無意識的な想いが込められてた、と思う。

子すずかちゃんが「一日一善」、子ルシル君は「一心精進」、シャルちゃんは「一粒万倍\$」、そしてまた私。

結構長く続くなあって思った。もう少し早く終わると思ってた、自分自身がアウトで。

でもそろそろ知ってる四字熟語が少なくなってきた。

だから一番有名な「一石二鳥」って答えて返すことしか出来なかった。

子すずかちゃんは「一世一代」で返して、子ルシル君は「一刻千金」って答えてシャルちゃんに打つ。

そしてシャルちゃんは「一家心中?」って答えて、私に打ってきた。耳を疑った。

「アウトッ!」

ルシル君のアウト宣告。

シャルちゃんが「ええー!」って不満そうに言うけど、さすがにそれは違うよ。

そもそもどうしてソレをチョイスするのかなあ?

「だって、一、付いてるし、ちゃんと漢字が四つじゃん」

「確かにそうだが、一家心中を四字熟語に括るのはやめろ。」

しかも、俺達は今家族旅行に来てるんだよ。そこで、一家心中、はないだろう。なあ」

ルシル君が本当に呆れ果てていた。

結局、この後国語関係のお題が続出して、子ルシル君0、子すずかちゃん1、私2、シャルちゃん3ということだ、

「第一回戦はシャルの負け。ザマアみるお」

子ルシル君が私達の第一回戦を閉めた。

シャルちゃんは「うっさい」って子ルシル君にドロップキック。

下着が見えただの何だのって騒ぎになって、子ルシル君はシャルちゃんにボコられた。

二回戦は、子アリサちゃん、子フェイトちゃん、ファリンさん、そして敗者シャルちゃんとなった。

「ファリン頑張つて（ドジで怪我しないように）」

「あ、はいっ。任せてくださいすずかちゃんっ（頑張つて勝ちますね）」

そして始まる古今東西第二回戦。

今回の古今東西卓球の自称ゲームマスター・シャルちゃんを差し置いての、

「そんじゃお題は簡単なモノからね。球技の種類でいきましょう」

子アリサちゃんからのお題提示。

シャルちゃんは「まあいいけど。手加減しないからねアリサ」って、子アリサちゃんに宣戦布告。

子アリサちゃんは不敵に笑って、「返り討ちにしてあげるわ」って、ビシッとラケットを突き出した。

子フェイトちゃんは「球技球技」って、お題の答えを必死に思案中。フェリンさんはニコニコしながら、ゲームが始まるのを待ってる。

「じゃあ始めるわよ。古今東西、球技の種類。野球」

子アリサちゃんがファリンさんへとピン球を打つ。

ファリンさんはいきなり自分のところに来るって思わなかったように、

「、わわっ？ サ、サッカーッ！」

お題に答えながら、あろうことかラケットをフルスイングした。

打ち返されたピン球はすごい勢いで子アリサちゃんの眉間を強襲し、ファリンさんの手からすっぽ抜けたラケットは、シャルちゃんの右頬をビンタするかの如く襲撃、パチーン！っていい音させた。

「…………痛つつつたああああああっ!?!」

絶叫が卓球場にこだまする。

子アリサちゃんは額を押さえてその場で蹲って、シャルちゃんは右頬に手を添えながら床をゴロゴロ転がった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

涙目でひたすら頭を下げて謝るファリンさん。付き合っただけの子すずかちゃん。

お腹を抱えて大笑いする子シル君とアルフさん。軽く呼吸困難に陥ってる。

子フェイトちゃんはどうしようかとオロオロしていて、それはすごい騒ぎ。

なんとか落ち着いて、

「とんだハプニングがあったけど、ゲーム再開ね」

リンゴみたいに赤くなってる右頬を擦りながら、シャルちゃんが再開を告げる。

そしてメンバーに変化が。自責の念でファリンさんが退場、代わりに子ルシル君が卓球台に立つ。

「じゃあさつきと同じお題でいくわよ。古今東西、球技の種類。ビリヤード」

子アリサちゃんが子ルシル君へと打つ。子ルシル君は「ゴルフ」って、子フェイトちゃんにそっと打つ。

子フェイトちゃんは「ドッジボール」と初めての卓球だからか、また子ルシル君に打ち返した。

子ルシル君は気にすることなく、「ラクロス」って、それはもうフルスイングでシャルちゃんへと打った。

「ふざけんなっ馬鹿ルシルッ！ ボウリン、グッツ！」

シャルちゃんも負けじと全力返し。

そこから始まつちやったシャルちゃんと子ルシル君の目にも留まらない応酬。

「テニスッ！」

「バスケッ！」

「ゲートボールッ！」



「バドミントンッ!」

なかなか終わりそうにない二人だけの古今東西。ただ6週くらいの応酬を終えて、

「はい、ハンドボール」

二人のその応酬は突然終わった。

子ルシル君がシャルちゃんから打ち返されたピン球の勢いを完全に殺して、暇そうにのんびり構えていた子アリサちゃんへと送った。

「なっ!?! この・・・!」

子アリサちゃんがその突然さに焦るけど、ギリギリで打ち返した。そこにシャルちゃんと子ルシル君の、「アリサ、アウト」という宣告。

そう、子アリサちゃんは返球に気を取られて、お題に答えてない。子アリサちゃんが「ルシルううーッ!」って怒りに吼える。

そして記憶を観てるアリサちゃんも、ルシル君に向かって『それで男なのっ!?!』って怒ってる。

ルシル君は『油断してる君が悪い』って取り合わない。

で、記憶の方も大体同じやり取りをしている。

子ルシル君は、「アリサの頭の良さは聞いている。だから搦め手で落とす」って堂々と言った。

子ルシル君の考え、それは理系文系共に成績優秀な子アリサちゃんをターゲットにして、3アウトにすること。

シャルちゃんと子フェイトちゃんが文系が苦手ってことは知ってる

子ルシル君。

運動能力は高いけど、その辺りを突けば勝てると踏んだ。でも子アリサちゃんは二人のように一筋縄じゃいかない。だからシャルちゃんに仕掛けて二人だけの闘いを行った。で、子アリサちゃんの注意力を散漫にさせて、いいところで子アリサちゃんに奇襲。

見事奇襲は成功。子アリサちゃんに1アウト取らせた。

「ふ、フンツ。ネタが判ればもう油断なんてしないんだからっ！ 次のお題！ 体の部位の入った慣用句でいくわよっ！

フフフ、あたしが負けるなんて有り得ないわ。このお題で、シャルかフェイトを負かすッ！

さあ覚悟なさい！ 血も涙もない！」

子アリサちゃんは、まさに今の自分を明確に表してる慣用句を言って、ピン球をシャルちゃんへと打った。

ゲームを私と同じように見学してる子すずかちゃんが「血も涙もなあって、今の子アリサちゃんの事だね」って苦笑。

私と同じ事を思っていた。そうだよ、あれはちよっとひどいよね・  
・。

シャルちゃんは、

「最悪だっ。白い目で見るっ」

って、子アリサちゃんに反撃。

でもピン球は子ルシル君の元へ。あー、子アリサちゃんと子ルシル君に向けてのメッセージか。

「胸糞が悪い」

子ルシル君のバッドメッセージ。それは誰に宛てたものか、それとも単なる偶然か判らないけど、今言うようなモノじゃないよね？ピン球は子フェイトちゃんの下へ。子フェイトちゃんは、

「鼻をくじく」

つて、これまた意味深な答えを言って、子アリサちゃんへ打ち返す。慣用句で会話つばいのが出来てるよ。何か剣呑な雰囲気だけど。

「眼中にない」

おおっと。子アリサちゃんからまるで挑発めいた答えが飛び出す。

「血が騒ぐ」

その挑発を受けとったシャルちゃんが、目の笑ってない笑顔で子ルシル君に打つ。

「身の程を知らない」

さらにつ。子ルシル君の挑発めいた答え。

「胸騒ぎがする」

子フェイトちゃんは何やら不安がありそうだ。

そう言う私と子すずかちゃんも同じような事を思ってますっ。ピン球はまた子アリサちゃんの下へ。

「歯牙にもかけない」

さらに挑発。今日の子アリサちゃんは随分とやる気だ。  
シャルちゃんと子ルシル君が鼻で笑うようなしぐさをした。

「舌が回る」

シャルちゃんが嘲り笑うように、子アリサちゃんのピン球を子ルシル君へ送る。

子ルシル君は小さく溜息を吐いて、

「頭が痛い」

と答えた。何かその気持ち解るよ子ルシル君。

参加してない私でさえそう思うんだし。参加してる子フェイトちゃんと子ルシル君の苦労は計り知れない。

子フェイトちゃんへと来るピン球。子フェイトちゃんは何も言わな  
いで空振りした。

子フェイトちゃんが「もう出て来なかったよ」って恥ずかしそうに  
笑うと、卓球台を覆っていた不穏な空気が薄まってく。

子ルシル君が子フェイトちゃんへ歩み寄って、何か褒めるように優  
しく頭を撫でた。

そして子フェイトちゃんの耳元に口を近づけて何かを言ってる。

子フェイトちゃんは「え、でも、いいのかな？」って少し困惑気味。  
子ルシル君はただ微笑むだけ。

「さて。シャル、アリサ。フェイトが次のお題を発表するぞ」

「古今東西、世界の祝日。えっと、国名と一緒に答えて。

あとクリスマスやお正月・新年っていう世界共通のはダメ。

もう一つ、日本の祝日も簡単過ぎてダメ。日本の祝日を答えたら即  
アウト。

最後に。一度出た国はもう使えないから。  
じゃあ行きます。ミヤンマー・ダザウンモン月の満月」

子フェイトちゃんが子ルシル君へとピン球を送る。

子アリサちゃんとシャルちゃんは「はい？」と首を傾げる。

見学してる子供の私達もそんな感じ。大人の私達も頭の上に？マークが浮かんでるはず。

その間にも子ルシル君が「ノルウェー・精霊降臨祭」って答えて、呆けてる子アリサちゃんに送球。

「え？ あ、ちょ、アメリカ・リンカーン誕生日！」

子アリサちゃんは焦りながらも何とかクリア。

シャルちゃんは「そう来たか」って悔しげに呟いて、

「ドイツ・マリア昇天祭・・・！」

と、子フェイトちゃんに返す。

子フェイトちゃんは一切の迷いなしで、

「ハンガリー・聖イシュトバーンの日」

全然解らない祝日をスラスラと答える。

そして子ルシル君に送球。

「イタリア・聖アンブロジーヨの日」

これまた聞いたことの無い祝日を答えて、子アリサちゃんへ送球。

子アリサちゃんは「えっとえっと」ってオロオロして、

「カナダ・英霊記念日！」

でもきつちりと答えて送球。

こういうことに詳しいらしい子ルシル君と子フェイトちゃんから、アウト、って宣告が無いからあるんだろっなあ。

そしてシャルちゃんは、

「何かズルしてない？ ブラジル・カーニバル！」

子フェイトちゃんと子ルシル君に疑いをかける。

でも「証拠もないのに変な言いがかりはよせ」って子ルシル君に睨まれる。

子フェイトちゃんは苦笑。そして、

「メキシコ・聖母グアダルーベの日」

そう答えて、子ルシル君へ送球。

「コロンビア・聖ペドロの日」

なんか子フェイトちゃんと子ルシル君の解答が似てる。

やっぱりさっきのヒソヒソ話でお題と答えを事前に決めていたんじゃない。

だって、子フェイトちゃんがいきなりこんな難しいお題を出すはずないし、しかもスラスラと即答できるはずもない。

当時、子供の私はそう考えてた。でも大人せいじんになった今・・・よおく判ってる。

さすがにシャルちゃんと子アリサちゃんも気付いて、でも子ルシル君の睨みが効いてるのか何も言わない。

「あー・・・オーストラリア・女王誕生日！」

子アリサちゃん、何とかクリア。

そして、シャルちゃんは・・・

「・・・知るかああああああっ！」

ピン球を思いつきり打って、子ルシル君の顔面目掛けて返した。

でも子ルシル君はちよつと首を傾げるだけで回避。

シャルちゃん、1アウト決定。子フェイトちゃんと子ルシル君が八イタツチを交わす。

「なあフェイトちゃん、ルシル君。

なんで二人の解答は似とつて、そしてフェイトちゃんはあるなスラ  
スラ答えられるん？

あんなゲーム前の短いヒソヒソ話だけやったら、決めるのは難しく  
ない？ やつぱり・・・」

「そのやつぱり、だ。魔導師の特権、念話を使った」

はやてちゃんにそう答えるルシル君。

「ヴィータちゃん達は『卑怯だな』って呆れていた。

当時の私達は、まさか真面目な二人がそんなズルをするわけないつ  
て思いこんでたからこそ、念話を使ってるのを見逃していた。

「少し灸を据えてやるうって、な。だからこんな手段を講じた。

当初はアリサを潰す予定だったが、やはりシャルも世界の祝日なん  
て知識はそう無かったようだ」

「むう、確かにあたしにも非があったかもね。下手に熱くなりすぎ

てた。

でもあんたも似たようなことしてたよね？』

『フエイトに気を遣わせ、自らアウトを取りに行かせるような真似をさせた時点で、君とシャルは重罪だ。

私のは単なる戦法。アリサ、君のやり方と一緒にしないでもらいたいな』

『えっと、あの時はホントに答えが出て来なかったって事もあったんだよ』

それから第二回戦は、星座、花の名前、十字架のある国旗等々つて続いて、子ルシル君0、子アリサちゃん1、シャルちゃん2、子フエイトちゃん3で、子フエイトちゃんが負けた。

第三回戦に行こうかというところでタイムアップ。

昼食にしようって、子供の私達を迎えに来たお姉ちゃんとエイミィさん。

お昼ごはんを楽しくお喋りしながら済ませて、午後はまた温泉に入っつて。

夜は夜で、子ルシル君がシャルちゃんの例のマスター権限で女装&お父さん達のお酌をさせられたり歌を唄わされたりと、子ルシル君だけ地獄だった。

そんな楽しい時間を過ごした当時の私達。色褪せることの無い大切な思い出だ。



「ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路そのにつ　く（後書き）」

シャル

「やつほーっ。この作品の神主人公シャルだよー」

ルシル

「漢字が違っぞ。神、ではなく、真、だろうが」

レヴィ

「もうそんな事どうでもいいけどね」

ルーテシア

「妹が出番が来ないからってなんかグレてる・・・」

シャル

「あはは、ごめんごめん。もうちょっとやらせてね。

あと一話か二話。突き詰めればきつとあと一話で過去が終わるから」

ルシル

「その後はその後で、例のストーリーを持つてくる予定で、レヴィとルーテシアが出てくる可能性があまり無い」

レヴィ

「・・・いいもん。あとがきの支配者って名乗るから。

本編だけが全てじゃないもん。さっさとこのエピソード終わらせて、完結編始めれば。」

第一話のプロットも書き終えて、あとは清書だけすればいいんだしさ」

ルーテシア

「拗ねてるレヴィ、なんか可愛い……。抱きついちゃおう？」

レヴィ

「おわっ？ なになになに？ いきなりルーテシアがハグ魔になった！」

シャルシル

「いやあ、姉妹愛？ だな」

レヴィ

「観てないで助け ひゃうっ？ ど、どこ触ってんのルーテシア！」

ルーテシア

「よいではないかよいではないか む？ わたしの妹のクセに出るトコ出るようになったねレヴィ」

シャル

「それじゃまた次回。そのさん、でお会いしましょう」

レヴィ

「にやああああああああああっ！」

ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路そのさん　く（前書き）

ああ参りましたホント。節電を徹底していたら自宅で熱中症　気付  
けば病院。

死ななくてよかった。みなさん、今年も暑いので気を付けましょう。

「ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路そのさん　く

＋＋＋ Sideフェイト＋＋＋

冬休みが明けて、小学3年最後の学期が始まった。

騒がしかった旅行を終えてすぐに子供のルシルは管理局へ正式に入局を果たした。

ルシルと過ごす時間が一気に減ったことに知らず落ち込んでいる過去の自分を見て、少しは隠せないのかなあ、と思う。

そして一月は足早に過ぎて行つて、二月となった。

そう、二月三日。地球の日本だけにある行事、豆撒きの日。

「地球には変わった行事があるのね」

「リンディさんはいくつ食べるんですか？」

母さんが、炒った豆の枳リンディを手になのは達の説明に驚いていた。

当時はまだ家族じゃ無かったから、私は、母さん、じゃなく、リンディさん、と呼んでいた。

私のふと口にした質問に、リンディさんがニコツとして、「20粒

」と答えたから、子供の私達は子供心ながら察して適当に流した。放課後、ハラオウン家に集まったなのは、シャル、アリサ、すずか、そして私の5人は豆撒きのスタンバイに入っている。

「いい？　そろそろ帰ってくる鬼二匹。かなりの強敵だから油断しないように」

「本当に良いのかなあこんなことして・・・？」

二ヒヒと口の端を吊り上げるシャルに、子供のすずかが困惑しながらそう呟いた。

子供のなのも「ちよつと気が引けるなあ」って苦笑

そんな私も今回の行事は良いとしても、ぶつける相手にちよつと気が引けていた。

でも子供のアリサは、

「日本の伝統行事をその身に受けて学べるんだから良い事なんじゃない？」

もつともらしい事を言った。でも顔は悪戯つ子のような笑み。

単純に鬼、その内の一人に対して豆をぶつきたい衝動からそんな事を言ったんだって今なら判る。

玄関前で私達はただひたすら待つ。スタンバツてから10分くらい。通路から話声が聞こえてきた。シャルが勝手に鬼判定とした、二人の声が。

聴き耳を立てて、扉越しから聞こえてくる声と足音に集中する。

「はあ。やはり髪を切った方がいいのか・・・？」

「中性的な顔立ちにその長い髪だからな。しかしそのおかげでツカミは良かったじゃないか」

「何が良いものか。挨拶したら、可愛い、と女性局員に頭を撫でられたり抱きつかれたりして。」

男性局員からは妙に優しくされるし・・・。将来、同性に付き纏われたらどうしよう、いや本当に「

「その時は温かく見守ってやるから安心してくれ」

「薄情者、助ける」

あれれ？ さっきまでの気後れが嘘みたいに無くなっていく。  
女の人に撫でられた？ 抱きつかれた？ 当時と全く同じ思いになる。

柀に入った豆をわしつと掴み取る子供の私。

シャルが小声で「各員、射撃用意」と炒り豆を掴み取って振り上げ、いつでも投げられるような体勢になった。

子供なのは達も渋々掴み取って投げる体勢になった。

玄関のドアノブがガチャリと動く。音もなく開いていく扉。

そして、

「「ただい」

二人の姿が扉の陰から出てきた瞬間、シャルの「鬼は外おーっ！」の掛け声とともに私達は炒り豆を投げつけた。

「クロノバリアアアアーッ！！」

それは本当に一瞬の出来事。

私達は鬼、ルシルとクロノに炒り豆を投げつけた。

完全な不意打ち、奇襲、強襲。半ば通り魔的犯行。

それなのにもかかわらず、ルシルは咄嗟にクロノを前面に押し出して盾にした。

「痛つつつたああーっ！？」

ビシバシとクロノに直撃していく炒り豆百数粒。

特に威力の強かったシャルとアリサ、そして私の投げつけた炒り豆が顔面ヒット。

痛みに顔を押しさえて蹲るクロノを放置して、シャルが「バレていただとおっ!？」って、再度炒り豆を掴みあげる。

「君の考えなどお見通しだ・・・!」

ルシルの手には、お店で買ってきたのか炒り豆の入られた袋があった。

中身の炒り豆をサツと掌の上に乗せて、「シャルは外おおーっ!」とシャルに向かって投げつけた。

シャルは「アリサガードッ!」って、アリサの制服の袖を引っ張って盾にした。

「ちょ きゃあっ・・・!」

アリサ、戦死。死因は味方の裏切りによるショック死。

「って、あたしを盾にするなんていい度胸じゃないシャルツ!」

「アリサ、あなたの尊い犠牲は忘れない・・・!」

「あたしもあなたの盾にされた恨みを忘れない!」

一触即発。シャルとアリサは本当に仲が良かった。

良いコンビっていうのかな。一見ケンカっぽいやり取りだけど、心の底から楽しんでるってことが良く判る。

今だってバトル寸前な雰囲気。けどそれは二人にとっては遊びの延長だ。

オロオロ焦りだす子供なのはとすずか。それは二人を止めようとか  
じゃなくて・・・

「余所見厳禁だぞ、二人とも」

ルシルがフツとニヒルに笑う。

二人はルシルを放っておいていいのかどうかに焦っていた。  
シャルとアリサはハツとしてすぐに炒り豆を掴みとってルシルにぶ  
つけるべく構えた。

そのルシルの後ろから、

「鬼はあ外おおっ！」

「ヴィータ!? あいたあっ！」

伏兵の如く登場したヴィータが、シャルに入り豆を投擲。  
予想外の敵兵出現に、シャルは動きを一切止めてしまっ  
てヴィータの投げつけた炒り豆にヒット。

「ざまあねえなフライハイト」

ここから始まる、第一回節分豆撒き決戦・放課後の陣。inハラオ  
ウン家。

ルシルとヴィータ、さらにシグナムとシャル先生が共闘。

「ごめんなあ、ルシル君に買収されてもうて。

そやから、シグナム、ヴィータ、シャル。シャルちゃんを迎え撃  
てーっ  
」

「了解です!」「応よ!」「はあ〜い?」



車椅子のはやても参加。だけど無敵キャラという位置づけ。車椅子じゃ炒り豆攻撃を避ける事が出来ないから。まあ当たってもいいと本人は言うから、

「買収!? ちょっとルシル! はやてに何を・・・!」

「俺が数多く有するレシピの中でも上位の10品目で買収した・・・!」

シャルの炒り豆攻撃が、早速はやてに向かう。

「ただどヴィータが「甘えっ!」と車椅子を押して射線上より退避させる。」

すかさずシグナムが「食べ物粗末にすることには気が引けるが、そういうモノだと言うのなら!」と苦悶しつつも炒り豆投擲。それにしてもレシピで買収。子供心に、私も料理が出来ればその大切さが解るのかな?、なんて思ってたな。

「なのは! フェイト! アリサ! すずか! こっちも負けてらんないからね!」

「くくくええくくくくく」

なんかもう勝てる気がしなくなって、というよりはいい加減やり過ぎ感でいっぱいになって不満を漏らす子供の私となのはとすずかでも結局、シャルとアリサがルシルとヴィータの挑発に乗りに乗って自滅するまで豆撒きは続いて、クロノの「いい加減にしるおおー!」っていう叫びで幕を下ろした。

もちろん使った炒り豆はみんなで美味しく頂きました。

「ルシル、もつと食べなさいよ。6千粒くらい」

「なら君も6千粒以上食べる」

その時は、そんなに豆が無いよ、って笑い話で終わった。

歳の数だけ食べる。ルシルとシャルにとってはそれが妥当な数だった。

まあ仮に有ったとしても、それだけ食べる事が出来るかどうかは今であつても無理だろうけど。

＋＋＋ Sideフェイト なのは＋＋＋

2月。その月にはあるイベントが用意されている。

その日に近づくにつれて、街はもちろん学校も少し浮足立つ。

「バレンタイン・・・？」

子フェイトちゃんが聞き慣れないイベントに首を傾げる。

教室は、数日後に控えたバレンタインデーの話題でもちきりだった。小学3年とは言え、やっぱり色恋話には敏感なのだ。

「バレンタインかぁ。それは翌月の見返りを期待しての先行投資。

相手が相手なら、こつちがチャチなモノでも返しがとんでもない高級品ってこともあるから、送る相手は選ばないとね」

「そっなんだ」

「」「違っ違っ」「」

シャルちゃんの説明に納得する子フェイトちゃんに、子供の私とす  
ずかちゃんとアリサちゃんがツッコミを入れる。

簡単にバレンタインデーを説明。気になる男の子に買ったでも手作  
りでもいいからチョコレートをあげる日だってことを。

子フェイトちゃんは「気になる男の子、か・・」とポケーとしただ  
した。

うん、きっとルシル君の事を考えているんだね、判りやすい。

「それじゃあなのは達は誰にあげるの？」

子フェイトちゃんの無垢な疑問。

気になる男の子・・・、いませんけど何か？

子フェイトちゃんだけが特別なんだよこのグループで。

そこにシャルちゃんが、

「なのははいるよね、あげる男の子。フェイトはもちろん、アイツ  
だよね」

そんな事を言うものだから、私達の話聞いていたらしいクラスが  
ちよつとざわめく。

子フェイトちゃんはほんのり頬を赤く染めて、私は私で「居たっけ  
？」と返す。

この時のクラスの男子の反応は喜と悲の両方だった。

シャルちゃんは「ユーノが居るでしょうが」と、やれやれって肩を  
竦めながら呆れた。

「えっ、ユーノ君っ？ あ、そうか。友チヨコだね」

あれ？ 友チヨコは同性にあげるモノだったっけ？

男の子にあげる場合は、義理チョコ？ んー、でも友チョコの方が印象が良いよね。

シャルちゃんが、マジで？、みたいな顔で私を見詰めてきた。

(今になっても判らないんだよね、この時のシャルちゃんの反応は)

それから話は、家族や友達にあげるチョコをこの機会に手作りしようっていう方向へ進んだ。

「それじゃあバレンタイン当日まで、手作り修業ってことで」

学校が終わって、バニングス家へ直行。

材料や設備が豊富なのと、高町家やハラオウン家はあげる対象が居るから、秘密でチョコづくりをするには向いてない。

「今日は誘ってくれてありがとな」

「うっん、はやてちゃんが折角こっちに帰って来れたのに、かえって迷惑じゃないかなって思ったんだけど」

「そんなことないよ。シグナム達はもう管理局の仕事しとって戻って来れへんかったから、ちょお暇しとったんや」

チョコを作る女の子一名追加。

子はやてちゃん。今日はザフィーラが付き添いらしくて、今は人間形態でバニングス家のSPのみなさんと何かやってる。

で、早速チョコづくりを始める。お菓子作りの経験者は・・・いない。

子供の私は手伝い程度で、一から作るなんてことはなかった。

子はやてちゃんは料理はするけどお菓子作りは初めて。

子すずかちゃんと子アリサちゃんもなかった。子フェイトちゃんももちろん無い。

「ま、チョコなんて溶かして型とって冷やして終わりっしょ？ 経験なんていらんないいらんない」

シャルちゃんが市販のチョコを、あるうことが“キルシュブリュール”で目にも留まらない速さで刻みながら笑う。

さすがにみんなでシャルちゃんを止めて、包丁を手にチョコを刻む。さて、シャルちゃんが言ったように子供の私達はチョコづくりを甘く見てた。

言うは易し行うは難し。シャルちゃんも、私達もそのフレーズを思い知る。

「うわっ、チョコにお湯が！ やり直しだあ・・・」

「ちよっ、何やってんのフェイトッ!？」

「ルシル、紅茶が好きだから、この紅茶のトリュフを作ろうかなと」

「よく読んでフェイトちゃん！ 茶葉を入れるんであって、液体の紅茶を入れるんじゃないよっ?」

「アカン！ ボールの底が闇黒面になっとなる!」

「って！ なにチョコ食べてんのはシャル!」

「なんか一口齧ったヤツを、間接キスだね？、みたいなノリで渡せば喜んでくれるんじゃないの？」

「ていうか売れるんじゃない？ このメンツ、全員顔の出来が素晴ら

しいし」

「……それダメ!!」「……」それアカンやる!？」

そんなこんなで何とか固めるまで行って、いざ試食。

その日、子供心にかなりの傷を負った。それはもう酷い有様だったよ、味が、硬さが。

で、初日は失敗だけして終了。次の日、テンパリング（温度調整）をしていなかったことに気付く。

まともなチョコに作ることに成功。試作品が上手くいったことで、調子に乗ってしまう。

さらにレベルを上げたチョコづくりを開始。結果、

「……おええ」「……」

女の子にあるまじき失態を晒す羽目に。

下手に凝ったモノを作るには経験不足だと自己認識。

シンプル・イズ・ベスト。それがみんなの出した結論。

そしてバレンタイン当日。朝早くに魔法の練習と理由を付けてバニングス家へ。

それぞれ渡す相手を想ってチョコづくりに勤しむ。

「はやてちゃん、シグナムさん達にチョコ渡せたかな・・・?」

子ははやてちゃんは昨日のうちにチョコレートを愛する家族のために完成させて、昨夜本局へと発った。

さすが毎日料理しているだけあって、このメンバーの中で最も早く、そして完成度の高いチョコを作った。

シャルちゃんは「絶対喜ぶよシグナム達。特にシャルなんて泣いて喜びそうよね」と笑う。

映像を観てるシャル先生が当時の事を思い出したのか『あの時はホント嬉しかったです』と嬉し泣き。

子供の私達はチョコを作り終えて、子アリサちゃん家のリムジンで学校まで送迎してもらった。

学校全体がそわそわとして、妙に落ち着かない。

「男子達は朝から熱心に靴箱待機かぁ。御苦労さまね」

正面玄関に着くと、上級生らしい男子生徒達が自分の靴箱の前でウロウロしている。

当時、私達と関係の深い男子（ルシル君やユーノ君にクロノ君とか）と比べてしまつて、今まで思いもしなかった憐れみみたいのが生まれた。

そもそも朝から靴箱の前で待つてたんじゃ女の子が入れにくいって判らないのかなあ？

エントランスの靴箱で立ちつくす男子生徒達をスルーして、みんなとお喋りしながら教室へ。

「あの一！」

教室でお喋りしている私達のグループのところへ来た別のクラスの女の子。

手にしているのはチョコが入っているような包装紙でラッピングされた箱。

みんな揃って首を傾げていると、

「このチョコ、銀髪の男の子に渡してほしいの！」

顔を真っ赤にして、チョコを差しだしてきた。

銀髪の男の子、それは子ルシル君の事だった。

その女の子だけじゃなかった。たぶん上級生のクラスからも数人。子ルシル君にチョコを渡したいって人が集まってきた。

「え、どうということ？ どうしてルシルがこんなに大人気なわけ？」

「……………ルシル君っていうんだあ？」「……………」

話を聞くと、昨日の放課後に子ルシル君が学校前に来たみたい。

その時、余所見運転の暴走車が、目の前に居る女子生徒達に突っ込みそうになった。

女子生徒達はあまりに突然の出来事に硬直して逃げ出せなかった。

そこを助けたのが子ルシル君ということだ。

突っ込んできた暴走車に回し蹴りを一発。暴走車の軌道を無理やり正常に戻した。

暴走車は急ブレーキ。そしてドライバーは自分の余所見運転を棚に上げて、

“おいガキ！ なに人様の車に蹴り入れてくれてんだコラ！？”

と怒鳴り散らしたのだと言う。

でも残念なことに相手は当時でも最強な子ルシル君。

力でもそうだけど、その知識量はハンパじゃなくて、日本の法律や心理学を駆使してドライバーを精神的にボロボコにしたそうだ。

ドライバーは“すみ”ま“ぜんでじだ？”と泣きながら逃げた、と。そして最後に子ルシル君は、

“たまにはフェイト達と一緒に帰ろうと思って寄ったんだが、思いがけないことになったな？”

と言ってお礼の言葉を受けとることなく去ったということだ。



で、子ルシル君の口から出た、フェイト、っていう名前を頼りにこの教室にまで来たとのことだ。

もちろんお礼としてバレンタインのチョコ持参で。

シャルちゃんが姦しく騒ぐ女子生徒達からチョコを受けとって、「渡しておくから安心して」と言っつて、一応名前（ルシル君に返しをさせるため）を聞いてから帰した。

「はあ。ルシルの奴、うちの学校の女子にまでモテだすつて・・・」

シャルちゃんが渡されたチョコを見て呆れている。

そして子供の私の隣に立つ子フェイトちゃんは何かご機嫌斜め。

この頃の子フェイトちゃんが知らなかった、やきもち、というものだ。

それから放課後まで子フェイトちゃんは、子ルシル君の名前が話に出る度にムスツとして溜息ばかりに吐く。

一度バニングス家に寄って、朝作ったチョコを取りに戻る。

そしてお待ちかねのチョコ渡し。

まず最初に子供の私とシャルちゃんがお父さんとお兄ちゃんにチョコを渡す。

とても喜んでくれて、渡した自分も凄く嬉しかったのを憶えている。

そして問題のハラオウン家に向かう。子フェイトちゃんとアルフさんに中へ通されると、

「おかえり」

リビングのソファで管理局のデータ処理をしていた子ルシル君のお出迎え。

ソファの上に置かれている管理局の制服の上着やネクタイを取って肩に掛ける。

私達はそれぞれソファに腰掛けて行つて、上着があつた場所にシャルちゃんが座つて、

「はい、バレンタインチョコ」

カバンから今朝作った自作のチョコを素っ気なく渡す。

子ルシル君は「毒味？」と首を傾げて、シャルちゃんはイラツと「自信作じゃああああッ！」と吼えて、無理矢理チョコを子ルシル君の口に詰め込んだ。

子ルシル君はもがきながらも咀嚼し終えて呑み込んだ。

「突然何を……つて、素で美味しいな。大した出来じゃないか。……ありがとうシャル。美味しかった」

「う、うん……。どういたしまして。ほら、フェイト」

「……」

シャルちゃんに呼びかけられても子フェイトちゃんはどこかムスツとしてる。

シャルちゃんはニヤリとして、

「そうそう。ルシル、これ昨日のお礼だつて言つて」

カバンから預かつておいたチョコの山をテーブルの上に並べた。

子ルシル君は「誰から？」と訊き、子供の私が説明。

「あ……昨日のアレか。全く、いい大人が散々喚くから少し本気を出してやつた。」

にしても……名前も知らず顔も憶えてない上偶然助けたという形

になっただけなんだが・・・」

子ルシル君は心底困ったようにテーブルの上に並べられたチョコを見た。

でも最後には「ま、貰える物は貰っておこうか。甘い好きだしな」と言っただけで嬉しそうに微笑んだ。

はい、そこで子フェイトちゃんはやきもち指数が急上昇。

「フェイトちゃんもルシル君にチョコを作ったんだよ。ね？ フェイトちゃん」

子すずかちゃんがそう言うと、子フェイトちゃんは「そんなにたくさんあるならもう要らないよね」と早口で返した。

それから数日、子フェイトちゃんは自分のイラつきの原因が解らず、子ルシル君に冷たかった事は言うまでもない。

++++ Sideなのは はやて++++

「海だあああああああッツ！！」

シャルちゃんが両腕を振り上げて絶叫。

子供の私らが来とんのは海鳴市内にある市営ビーチ。

季節は8月の夏真っ盛り。4月に私も聖祥に通うことになって、翌月の5月、ルシル君とは4カ月遅れでなのはちゃん、フェイトちゃん（シグナム達はもっと早くやけど）も正式に管理局入り、私はもう一月遅れての6月に正式な特別捜査官となった。

そして久しぶりに全員の休暇が揃ったことで、シャルちゃん提案の下、私らは海に来たとゆうわけや。

「いよつしゃああッ！ 今日はどこん遊ぶよッ！」

シャルちゃんが更衣室にまっしぐら。

ルシル君が「こんな暑い中、なんてテンションだ」って頂垂れとる。両手両肩、そして首に荷物を掲げとるルシル君は女の子の荷物運搬係。

ザフィーラはビニールシートやパラソル、貴重品や海で遊ぶための道具の運搬係。

ヴィータが「おーいフライハイト！ 水着忘れてんぞッ！」って全カダツシュ中のシャルちゃんに呼び止める。

「おっとつと。ルシル、持ってきてえ」

「ほざきやがれ。君がここまで取りに來い」

ルシル君はシャルちゃんの荷物だけをドサツと砂浜に落とした。

シャルちゃんは「ひどく〜いッ！」とお怒りの様子や。

結局・ゆづよりは当然同じ女子更衣室を目指す私らがルシル君に預けとつた水着の入った荷物を受けとつて、シャルちゃんと一緒に着替えに向かった。

水着に着替えて、パラソルで影を作つたビニールシートの上で荷物番しとるルシル君とザフィーラのところへ戻ると、

「って、どないしたんルシル君？ 変身魔術まほうで大人になつて・・・？」

「「うわあ、ルシル君カッコいい」」

「うん。綺麗でカッコいいよルシル」

「あなた、世の男の人を敵に回すために生まれてきたんじゃないの？」

ルシル君がどういうわけか大人の姿になつとつた。

なのはちゃんやフェイトちゃん、すずかちゃんにアリサちゃんがそれぞれ大人バージョンのルシル君に頬を染めたりしとる。

「で？ 折角の休暇に魔術で大人になるなんてどういうわけ？」

シャルちゃんがルシル君を覗き込みながら訊ねた。

ルシル君はポツポツと喋りだす。私らに遅れて男子更衣室へ向かったルシル君。

更衣室に入った途端、男の人達から悲鳴をあげられた。

「その後こう言われたんだ。“女子更衣室はここじゃないよ？”と・・・俺は、男だ（涙）。

男の水着を着て、その上で女に間違われて騒がれてもしたら精神がすり減るのは必至。

なら絶対に女性に間違われない大人の姿になるしかないだろ？」

ルシル君は大きく溜息。私らも「ああ」と納得するしかなかった。

大人に変身しとるルシル君はザファイーラみたいな筋肉質やないけど、それでも女の子の人には見えへんくらいの筋肉はついとる。

確かにこれやったら間違われることはないやろね。その分、

「セインテスト。周囲の視線がお前に集まっているぞ」

シグナムの言う通り、周囲の女の人からの視線をほとんど独り占め。ここでルシル君も「そういうシグナムにも視線が集まっているな」

と言っ。

女の人の視線はルシル君、男の人の視線はシグナムに集まっとする。二人ともホンマ美人さんやし、当然と言えば当然なことや。

「とりあえず荷物番は俺とザフィーラに任せて、みんなは楽しんできてくれ。それで構わないか、ザフィーラ？」

「セインテスト、お前も主はやて達と共に遊んできても構わんぞ？」

「いやいい。ここでユーノが来るまでみんなを眺めることにするよ」ルシル君のその言葉にシャルちゃんが「眺めるって、ルシルのエッチ」って恥じらうように体を抱いた。

アカン、アカンよシャルちゃん。ルシル君の顔が今まで見たこともないような無表情や。

シャルちゃんは「冗談が通じない男はモテないぞお」言っって荷物の中から日焼け止めクリームを取り出して、

「ルシ」

「フェイト達と仲良く塗り合うように。俺は一切関わらないからな」

喋る前にルシル君からの先制口撃。

するとシャルちゃんは「それでも男？ 女の子のやわ肌を合法的に触れる絶好のチャンスなのに。ねえ？」って、私らの同意を求めてきた。

子供の私らはホンマにその返しに困って、ただただ顔を赤く染めるだけ。

そこに助け舟。

「まあ、フライハイトちゃん。はやてちゃん達をからあんまりから  
かっっちゃダメよ」

シャマルがシャルちゃんに「メツ、だぞ」って、ウインクしながら  
のお叱り。

シャルちゃんは「はい」と返事しながらジェルを手につける。

「はやてちゃんに塗るのは私の役目なんだから」

そしてシャマルも持参したジェルを手につけながら、

「はやてちゃんに塗るのは私なんだから」

両手をわきわき動かしながら近づいて来る。

なんやその怪しい手の動き、直感ながら身の危険を感じてまっ。

「シグナムとヴィータちゃんも塗ってあげるから、そこで横になっ  
て」

目がなんや犯罪者っぽくなるとるよシャマル。

シグナムとヴィータもシャマルの放つ空気に身を引いとる。

そしてシャルちゃん達は、

「大人しく横になって身を任せればいいんだって!」

「いやだって今のシャルちゃん目、絶対まずいって!」

「今のシャルに塗られるくらいなら、死ぬほど恥ずかしいけどルシ  
ルに縫ってもらった方がまだマシだよ!？」

「ぎゃあ捕まった!? た、助けなさいルシル!」

大騒ぎ。アリサちゃんに助けを求められたルシル君はと言うと、

「ねえお兄さん。暇ならあたし達と一緒に遊ばない?」

逆ナン? っていう状態やった。

ルシル君は、連れと来ているから、って丁重に断つとるけど女の人達は諦めへん。

んー、確かに今の大人バージョンルシル君を連れとつたら自慢になるやろね。

ルシル君は仕方ないと言った風に溜息をついて、私らの元へ、正確にはシグナムの隣にまで来て、

「すまないな。俺は生憎と既婚者なんだ。なあ? シグナム」

シグナムの肩を抱いて引き寄せた。

私は絶句、ヴィータも絶句、シャルも絶句、ザフィーラすらも絶句、シグナム啞然。

ちよお離れたところで騒いどったシャルちゃん達も目を丸くして呆然。

「えええ? それ嘘でしょ? だってその奥さん、あたし達に何も反応しなかったじゃん」

「それは俺を信用してくれているからだよ」

え、なに? 今私らの中で何が起きとんの?

私が今だ混乱しとる中、ヴィータとシャルは事の成り行きを見守るつもりかニヤニヤしだした。



見ればシャルちゃんも笑いを堪えるのが必死みたいな顔してニッコニコ。  
そんでなのはちゃん達は顔をリングみたい我真っ赤にして視線を逸らした。  
フェイトちゃんは・・・未だシヨックから抜け出せへんようや。  
この中で最も混乱しとるはずやったシグナムがルシル君の考えをいち早く察して、

「そういうことだ。私はお、夫を信頼している。だから夫の事は諦めて、早々に立ち去れ」

シグナム自らルシル君の腕を抱いた。

女の人達は「つまんな〜い」って愚痴を零しながら去ってった。

静寂が私らを包む。最初に口を開いたんはルシル君で、「すまん助かった」と、シグナムに頭を下げた。

「き、気にするな。こちらとしてもお前には大きな借りが幾つもある。  
今ので少しでも返せるのであればそれでいい。そう思ったただけだ」

「シグナムの奴テレてんのかよ」

「断じてテレてなどいない！」

シグナムはルシル君を突き飛ばして、からかうヴィータに怒鳴る。

まあ遊ぶ前から大騒ぎやったけど、あとは順調に楽しく遊べた。

途中いろいろあったけど。例えば、ビーチボールでなのはちゃんと遊んどると、

「お、今度はシャルマルがナンパされてんのね〜」

シャルちゃんが砂浜を見て、「シャルも美人だしねえ」って笑う。うちの家族はホンマにモテるんやなあ。鼻が高いやら寂しいやら。見ればシャルはやっぱり断ろうとしとる。そやけど、それが却って男の人達を心をくすぐるようや。さらに距離を縮めて、強引に話を進めようとしとんのが判った。

「ねえ、あれって放っておくのまずいんじゃない？」

「うん。さっきのようにルシル君、それともザフィーラさんに助けを呼ばないと」

アリサちゃんとすずかちゃんが焦りだした。

そこにフェイトちゃんが「あ、シグナムとヴィータ」と漏らす。

シャル達のところへ不機嫌さMAXなシグナムとヴィータが近づいていく。

そしてシャルちゃんが「やっばい。アリサ、フェイト、来て」と言うて、二人を引っ張って、シャル達のところへ向かう。

私とすずかちゃんとなのはちゃんも続いて、シャルちゃんに耳打ちされたアリサちゃんとフェイトちゃんの行動を見守る。

「そう言わずにさ、俺達と遊ぼうって」

「あのー、さっきから言っていますけど連れが居ますので、他を当たってくださいませんか」

そこにアリサちゃんとフェイトちゃんが登場。

二人はシャルの両手を握って、

「お母さん」

と一言。シャルマルはきよとんとして、男の人達は「チッ、子連れかよ」「子持ちか。よく見たらどこか老けてたよな」と言うて去った。

シグナムとヴィータが合流。俯いたままのシャルマルに声を掛けるんやけど、シャルマルは無言のままや。

「いやあ、シグナムとヴィータがキレたらさっきの男共がどんなひどい目に遭うか判らなかつたからさ。

よかつたじゃん。どっちにも被害がなくて。なんて平和的解決」

シャルちゃんがそう言うのと、シャルマルが顔をバツと上げて、

「うわあ〜ん、ひどお〜い。私が被害受けてるよフライハイトちゃん、グス（泣）。

子連れに見られるほど老けてるって言われたあ〜〜〜（大泣）」

砂浜にへたり込んで泣きだしてしもうた。

事の原因でもあるシャルちゃんへ視線が集中。

「え〜私の所為？ 暴力沙汰にならないように知恵を絞ったのに、どうして非難されなきゃなんないの〜？」

シャルちゃんもガツクリ肩を落とした。

それからシャルマルはその日一日黄昏で、シャルちゃんは何事もなかったように遊んどった。

みんなの記憶を繋げ、一つの映画のようなモノと化したこの旅路も終盤。

今観ているのは、私とシャルがこの次元世界より去る当日の朝。誕生日と設定されている4月12日の早朝、久しぶりに再会したアリサとすずかと別れるシーンだ。

「じゃあ私も向こうで開けさせてもらうね。・・・じゃあ行くね。次に会う時まで元気だね」

シャルがアリサとすずかからバースデープレゼントを受けとり、頬を綻ばせている。

当時の私も顔にはあまり出さなかったが喜んでいたものだ。

「シャルちゃんとルシル君も。元気だね」

「次に会うときって、結構すぐじゃないの？ えっと、今度ははやての6月だし」

転送ポートに乗り、二人との別れを惜しみつつ、

「じゃあ二ヶ月後にまた会おう」

「それまでバイバイ　アリサ、すずか」

私とシャルは手を振り、叶うことのなかった再会を約束した。

「うん。バイバイ、シャルちゃん、ルシル君」

「じゃあね二人とも」

すずかとアリサも手を振り返しながら見送ってくれた。

これがシャルとすずかとアリサが顔を合わせ、そして話した最後のシーンだ。

術式を解除。視界が真っ白に塗り潰され、アリサの家のリビングへと意識が戻る。

全員無言のままソファに腰掛けたまま。もしこれでダメならば、仕方ないがシャルは忘れ去られたままということになるのだが……。

「すずかちゃん!？」

なのはが大声を出す。見ればすずかが泣いていた。

アリサもグスつと鼻をすすりながら、両手の甲で目を擦っている。

「お、思い出したよ……シャルちゃんの事……もちろんルシル君の事も、だよ」

「全く。あんたやあんな馬鹿な親友をどんな理由であっても忘れるなんて、あたしはどれだけ薄情なのかしらね」

シャル。聞いたか？ これもまた一つの奇跡なのだろうな。

“界律”の影響によって記憶を操作され、私と君の事を忘れ去られた。だがな、

「ホント!？ 本当にシャルちゃんの事が判るの!？」

「うん……うん! 思い出したよ全部! 今までであった思い出の中に、確かにシャルちゃんとルシル君がいる!」

「あースッキリしたわ。さっきまでの気持ち悪さがない」

アリサとすずかは確かに私達の事を思い出した。私はリエイスとのユニゾンを解除し、フェイトとなのはとはやてに抱きつかれているアリサとすずかを眺める。

「やったなセインテスト」

ヴィータが私の背をパシんと叩いてきた。

シグナムやシャマル、リエイスもそれぞれ私の肩を一度ポンっと優しく叩いて微笑んでくれた。

ヴィヴィオも「よかったねルシルパパ」と、私の右手を握ってくれ、私はその小さな手を握り返すことで応えた。

「ルシル君」「ルシル」

すずかとアリサが歩み寄ってきた。

目の端に浮かぶ涙。二人はそんなのお構いなしに微笑んで右手を差し出してきた。

「おかえり」「」

「……ああ、ただいま。アリサ、すずか」

二人の握手に応え、私は目頭が熱くなるのをグツと堪えた。

するとアリサが「なにあなた、泣いてんの？」と、上目遣いで覗きこんできた。

「泣いてるのは私じゃなく君だ」

「えー、ルシル君も泣いてるよ」

すずかも、あはは、と漏らしながら私の顔を見てくる。

「で？ シヤルは今どうしてんの？」

「・・・シヤルは・・・シヤルは今頃どっかの世界でのんびり暮らしているんじゃないか？」

そう願うよ。シヤル、今の君は戦いとは無縁な世界で、一人の女性<sub>ト</sub>として幸せに過<sub>レ</sub>しているよ。

「ここは海鳴、始まりの街　く追憶の旅路そのさん　く（後書き）

なのは

「私達の友情は・・・」

シャル&なの&フェイ&はや&すす&アリ

「永遠不滅ですッ！」

ルーテシア

「えっと、はい、そういってらっしゃいます」

レヴィ

「いいなあ。わたしも絶対に失われない友情みたいな欲しい」

シャル

「レヴィにも居るじゃん。エリオやキャロ、それにチンク達がさ」

レヴィ

「あ、うん。そだね。シャルロツテの言う通りだ」

アリサ

「にしてもまったくさあ、界律ってやつには文句を言ってやらないと気が済まないわ」

すすか

「うん。私達からシャルちゃんとルシル君の思い出を奪うなんて。いくら神様のような存在でも、許さないんだから！」

シャル



「くうく、嬉しいぞこのこの！一応上司な界律だけど、この際言うておこう。  
ふぎけんなバーカバーカ。勝手に親友たちから私とルシルの記憶奪ってんじゃねえーよ。んでもってザマアみるお〜」

なのは  
「でも本当に良かったあ。シャルちゃんとルシル君の事を思い出してくれて」

はやて  
「そやなあ。特にシャルちゃんは友達を大切にひとつたからな〜」

フエイト  
「どんな理由でも、自分が忘れられているなんて辛いに決まってるよ」

シャル  
「うん。辛いよやっぱし〜くあ、言えない。転生してみんなの記憶全部ぶっ飛んでるなんて」

ルーテシア  
「はあ、良い話だったね〜。さてさて。今後のこのエピソードの予定は？」

レヴィ  
「完結編はやっぱりまだ？メインヒロインも決定してるけど・・・」

シャル  
「さあ？そこんところは判らないから、次回のルシルにでも訊い

て。

んで、今後の展開だけど、かなり迷いが生じてるっぽいよ。  
というわけで、短い間の復活だったけど、出番があったから十分だよ。

ていうか、完結編でホントに望まれてんのか心配よね。

っと、もう時間。長引く別れは辛いんでサクッと行こう。そんじやバイバイ？」

ここは海鳴、始まりの街　く親バカは永遠にく（前書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

パティシエ仲間とフランスに2週間ほど行ってきました。

レベルアップのためのお勉強旅行もといスウィーツ食べ歩き旅行です。

そのおかげもあり、はぁ・・・3キロも太ってしまった・・・（泣）

ここは海鳴、始まりの街　　親バカは永遠に

＋＋＋　S i d e l シル　＋＋＋

「昨日よりちよつと冷えるかなあ・・・？」

なのはが車の窓から晴れた空を見上げながら言った。

ミッドチルダは安定した気候のおかげで冬はそれほど寒くはない。

確かに日本の冬は寒いが、現在は3月下旬（あと数日で4月）ということもあって、さほど寒さは感じられない。

しかしミッドの気候に慣れてしまっていると、比較的暖かい今日でも寒く感じるかもしれない。

「そう？　あんた達はミッドの気候が染みついているから余計寒く感じるんじゃない？」

「うん、そうなのかな・・・？」

アリサが私を考えていた事を代弁し、助手席に座るなのはから飴玉を貰っている。

今私達はアリサの家から出て、車二台でショッピングへ出かけている最中だ。

一台目はドライバーであるすずかと八神家だ。

八神家全員は入りきらないと言うことで誰がこちらに移動するか一騒動あり、リエイスが、そちらに乗せる、という無言のプレッシャーを放っていたが結局はザフィーラとなった。

ということでは二台目はドライバーのアリサ、私とフェイト、なのは、ヴィヴィオ。そしてザフィーラ（子犬フォームでヴィヴィオの隣に座っている）だ。

「そつえばさるシル」

口の中で飴玉を転がしているのかコロコロと音を鳴らしながら、アリサがバツクミラー越しに私を見てきた。

私もバツクミラーに映るアリサに視線を移し、「どうした？」と先を促す。

「テストメント、だっけ？ あたし達、テストメントの説明だけ聞いて、あんた自身の事はまだ聞いてないんだけど。

あんたつてさ、テストメントになる前はどついう人間だったの？」

「ア、アリサ・・・！」

隣に座るフェイトが窺めるようにアリサの名を呼ぶ。

私は「聞いてもつまらない話だと思つが？」と、フェイトを手で制して答える。

「知つておきたいのよ。なのは達が知つていてあたし達が知らないのつて、なんか仲間外れにされてるようでさ」

“テストメント界律の守護神”の在り方とどうやって選ばれたのかを教えてあるからか、アリサは出過ぎた事を訊いているという自覚があるよう目で少しばかり伏せた。

まあ今さら隠すような事じゃないか。目的地に着くまでの暇潰しとして話そうか。

「そうだな。まず名前だが、ルシリオン・セインテスト・アースガルド、これが本名だ」

「へえ。フォン・シュゼルヴァロードって貴族っぽい名前だし、本当の貴族だと思っただけで違っただけだね」

フォン・シュゼルヴァロードの名の持ち主は確かに貴族だ。魔界でとびっきりの、な。そして私は貴族ではなく・・・

「ルシルパは貴族じゃなくて王族なんですよアリサさん」

ヴィヴィオが私の代わりに告げた。どこか誇らしげなのは気のせいかな？

アリサが「何？ あんたもそんな王族とか凄い家柄出身だったの！？」って驚愕。

あんたも？と思い、「ああ」とすぐに察した。ヴィヴィオも一応王族の血筋だ。

「ルシル君は王族は王族でも、王様だったんだよね・・・？」

「はあッ！？ 王様！？ その国で一番偉い、あの王様！？」

車の拳動が乱れる。危ない、危ないぞアリサ。

何とか立て直したところで、なのはのケータイが鳴り、なのはが「もしもし、はやてちゃん？」と受けた。

はやての声が少し漏れ聞こえた。さっきの車の拳動不審が何事かと心配してくれているようだ。

なのはは「今、ルシル君がテストメントになる前の話をアリサちゃんにしててね。ルシル君が王様だったっていうのにアリサちゃんが驚いちゃってそれで・・・」と説明。

はやての他にすすかの声が聞こえ、はやてがすすかに今の挙動不審の理由を説明して……

『ええっ！？ ルシル君って王様だったの！？』

すすかの大声と共にはやて達の短い悲鳴がケータイから響いた。

後ろを見れば、すすかの運転している車がフラ付いていた。

どういうことだ？ 私が一国を治めていた王というのがそこまで信じられないのか？

「そこまで驚くことか？」

「だってあなたの事を知ることとしては、実は王様でした、なんて言われても信じられないでしょ」

『でも子供の頃のルシル君はどこか気品があったし、もしかしてお金持ちの出身だったのかなあって最初は思ってたよ』

アリサとすすかは真逆の感想を抱いたようだ。

アリサは私が少しずつ変わり始めていた頃から。

すすかは初めて逢った時の事を思い出しての感想だ。

とはいえ王と言っても行政は任せっきりで王らしい事なんて多くしていなかったな。

王に即位したのは16歳。グラスヘイムの大半が滅んだのは22歳。その間は大戦に参戦するための下準備、本格参戦していたから、行政官達に7割くらい任せていた。

早く戦争を終わらせ、平和な時代を取り戻す。そうすれば民は喜ぶ。生まれた時にはそこに戦争があり、平和な時代という事を知らない大戦参加世界の民。

だから勝って終結させることだけが絶対目標とし、それだけを目指した。

終結させたらさせたで“ラグナロク”という大破壊。

報われない。だが、その果てに今の次元世界があるというのなら……。

『じゃあルシル君はいくつの頃から王様やってたの？』

「16歳で即位だな。当時は別段珍しくなかったぞ、10代で王になるのは。

義妹にフノスという娘がいたが、彼女は14歳で女王になった。

一番若くて10歳で女王になったという子供（夢幻王プリムスだな）もいた。

本当に若い王が列挙した時代だった」

すずかにそう答えると、アリサが「凄い時代だったってゆうのは解ったわ」と驚いていた。

簡単に人が死に、容易く世界が終わりを迎える時代。それが私とシヤルに生きた時代だ。

「とりあえず話はここまでだな」

道路上の標識に、目的地の巨大ショッピングモールへの案内が記されている。

到着だ。だから私の話はここで終了。さあ荷物持ちとして頑張ろうか。



ショッピングモールに着き、ウィンドウショッピングを始める私達  
ある程度回って昼食も終えて、のんびり友達と買い物を楽しもうと  
していたのに、大人数のおかげで結構目立つ私達は、よほど暇なの  
が男の人達によく絡まれる。

ついさつきも、ルシルとザフィーラ（もちろん人間形態）がしつこ  
いキザッたらしい男の人達を追い払った。

「やれやれ。休日にナンパしかやることのない野郎ばかりとは」

ルシルが両手に持った袋を持ち直しながら首を横に振る。

そう言うルシルもさつき女の人に声を掛けられてた。

写真を一緒に撮ってください、とか。ルシルはモデルじゃないって  
ば。

けどルシルは、写真だけなら、なんて言って受けてたけど。むう、  
なんで？

「でもルシル君とザフィーラが居ってくれて本当に助かるわぁ」

はやてが安堵しながら言う。

アギトもそれに賛同して、「シグナムと姉御に任せたら警察沙汰に  
なっちまうもんな」と、イラつき始めてるシグナムとヴィータをチ  
ラッと見た。

「はやて達が美人なのは認めるし声を掛けてえってというのは判るけ  
どな」

「外見が良かろうが中身が軟派な男なんぞ誰が認めるか。

そもそも先程の髪を染め、過剰なアクセサリーを身に付けた男なぞ  
が主はやてと釣り合う訳がない」

ヴィータとシグナムはうんうん頷いて、娘を持つお父さんみたいな事を言い出した。

はやてが「なんやこれやとどっちが親か判らへんな」って笑う。

「そうです。はやてちゃんのお相手はもっと立派な人じゃないといけないです」

リインが誰か想像してるのか腕を組んで「むう〜」と唸り始めた。シヤマル先生も「見た目も重要だけど、さっきのような軽い人はペケよね」ってシグナム達に賛同。

「なのはやフェイトはどうだ？ ヴィヴィオがああいう軽い男と付き合つとなれば」

リエイスが私となのはに話を振ってきた。

まさかりエイスから話を振られるなんて思わなかったから、私は「え？」って訊き返していた。

でもその前に、これは昨日のアレのパターンだよ。恐る恐るルシルを見る。

「百歩譲ってヴィヴィオが男と付き合うことになるうが、あんなチヤラ男が彼氏になるのだけは絶対に認めるものか。というか付き合いうこと自体認め むぐっ？」

「ダメだよルシル君」

「シヨップینگモールの中心で親バカを叫んじゃ周りに迷惑がっ」

やっぱルシルは悲しいかな、親バカモードになって吼えようとし

た。

私となのはが同時にジャンプしてルシルの口を二人がかりで塞ぐ。ヴィヴィオは「あはは」って苦笑を洩らした。

「てかルシル。あんたってホントに色んな人から恨み買いそうよね」

「もう大丈夫だフェイト、なのは。で？ 私がどうして恨みを買うと？」

私となのははルシルの口を解放して、ルシルはアリサの言葉に訊き返した。

アリサは「だってさ」って前置きして、

「外見は男が嫉妬しそうな美形。んで女にとつても負けを認めざるを得ない顔立ちに肌。それに生まれが王族。頭よし運動神経よし。性格はまあまあ」

つてルシルを褒めてるようで貶すような事を言った。

ルシルが「私の性格はあまり良くないのか？」と素でへこんでた。さすががすかさず「そ、そんなことないよルシル君」ってフォロワーを入れた。

あ、それは私の役目だったのに。

「で、これが一番妬まれる要因ね」

「私？」

アリサが私となのはを指差した。

意味が判らずになのはと二人して首を傾げてみる。

「本当のじゃなくてもあんたは、パパ、と呼ばれてる。なのはとフェイトなんていう美人ママ二人いて、ヴィヴィオって娘が居る。どうだっ！」

アリスがまるで探偵ドラマとかで観そうなポーズ（右掌をビシツとルシルに突きつけた）をとった。

「いや、どうだって言われても・・・まあ羨ましいんじゃないか？ああ、そうだな、確かに今の私の立場は恨まれるかもしれないな。フェイトとなのはとヴィヴィオ、それにエリオとキャロ。みんなと家族、しかも父親としての立場にいられる私は、たとえ恨まれても受け入れられるほどに嬉しくて充実してる」

ルシルが頬をポリポリ掻きながら照れたように返した。

あ、なんか今のルシルは新鮮だ。なのはも、ヴィヴィオのパパでいられることが嬉しいって聞いて照れ笑い。

うん、ちよつと胸がチクってしたけど、今回は嬉しさの方が上回る。だってエリオとキャロのお父さん役も嬉しいって言ってくれた。

「現在のルシル君<sup>いま</sup>って、その、すごく良い表情が出るようになったね」

「うん。色々な事から少しずつでも解放されたから、かな・・・？」

さすががコソつと耳打ちしてきたから、こっちも耳打ちで返す。

ルシルは多くの事を背負い過ぎてた。人間となって少しは荷を降ろせたようだけど、それでもまだ多くの事を背負ってる。

私の役目は、今も背負い続けてる荷を降ろしたり一緒に背負う事だと思っ。

さすがは私の顔をじつと見て、「そっか。フェイトちゃん、苦勞し

「そうだね」って微笑んだ。

「え、うん。でも私が選んだことだから、絶対に大丈夫」

後悔なんてない。あるのは未来に待っているきつと幸せな時間だ。

「フェイトママー！」

「すずかー！」

ヴィヴィオとアリサが私とすずかを呼んだ。

いつの間にか話は終わってて、私とすずかは置いてけぼりを喰らいそうになってった。

二人で「今行くよー」って応えながら、みんなの元へ歩いていく。そして次はどこへ行くこうか、って話をしていると、アリサとすずかが立ち止まってとあるエリアを見た。

はやてが「ゲームセンター？ がどうしたん二人とも？」と訊ねた。アリサ達が見ていたのは、アミューズメントエリアへ案内する電光掲示板に記されたゲームセンターの文字。

「ちよつとシャルの事を思い出してた」

「シャルちゃんと最後に逢った日の前日、ゲームセンターで遊んだんだよね」

二人は懐かしそうに通路の先にあるゲームセンターを眺める。私達も、シャルがゲームセンターで楽しそうに遊ぶ姿を幻視する。みんなから噴き出したような笑いが漏れた。誰もが想像できるシャルの姿。

「久しぶりに勝負してみる？ ルシル。ま、あたしが勝つけど」

アリサがハンドルを握るような動きでルシルに戦いを申し込んだ。対するルシル君は「ゲーセンで勝負って言う歳か？」って考え込んだ。

アリサの挑発的な笑みが固まる。小さく「歳・・・？」って呟く。ルシル、もう少し発言を考えようね。アリサが固まった笑顔のままアミューズメントエリアへ続く通路を進んでいく。私達は仕方なしにアリサに続いて行くことにした。

アリサは止まることなく、ゲームセンター入り口付近に置かれたパチンコグマシンの前に立ってお金を入れた。グローブをはめて拳を打ちあう。二度深呼吸して、

「四捨五入すればまだ25だこんちくしょー！ーッ！」

「……………」

許されるだけの助走をつけて怒声と一緒にミットを殴った。記録は・・・208。

アリサは「チッ、もう少しイケると思ったんだけどなあ」ってご不満の様子だ。

それにしても私達はまだまだ20代なんだから、歳、って言葉にそこまで反応しなくても。

「ほら、ルシル。一切のズル無しでやってみてよ」

「仕方ないなあ。すまない、ザフィーラ。荷物預かってくれ」

ルシルがザフィーラに手に提げた袋を手渡す。

ザフィーラの持つ袋が両手合わせて2ヶタに突入。

そしてルシルは渋々グローブをはめて、野球のフォームのように片足を上げてる。

力強く踏み込み。勢いを一切殺さずに前傾姿勢に入ってミットを奥に押しこむように殴り付けた。

ミットは大きく軋みを上げて倒れた。近くに立ってたアリサや、離れた位置に居た私達もビクツてなった。

ただいまの記録は・・・

「はあ！？ 999うう！？」

アリサの倍以上。測定値MAXだ。でも当然の結果だと思う。

ルシルはヒョロっとして見えるけど、女のアリサ以上に筋力があるし毎日鍛えてる。

アリサが大きな声にならないように努めながら「魔法とか使ったんじゃないでしょうね？」と訊いた。

「そんなズルはしない。元々私とアリサじゃ身体能力が違うしな。それに、こいつにはコツがあるんだ。記録はミットを殴った時じゃなく、このミットが倒れ込んだ時の衝撃を計るものだ。

だからアリサのようにミットを単純に殴っただけじゃダメなんだ。さっきの私のように振り抜いてミットを奥に叩きつけるような一撃を出さないと」

ルシルはそう説明してもう一度アリサにグローブを渡した。

殴ってみろ、ってことなんだろう。今度はアリサは渋々グローブをはめて、ルシルに言われた通りにミットを殴った。

一打目より勢いよく倒れ込んだミット。その記録、266。記録上昇。

アリサが「おお」って驚きの声を上げた。

「結局は拳打の打ち方次第なんだよコレは。今のヴィヴィオだって上手く殴れば結構な記録を叩きだせるんじゃないか？」

まあ残念ながら16歳以下は出来ないようだけどな」

パンチングマシンには年齢制限が掛けられてた。

ヴィヴィオが「ホントだ。残念」って、肩を落とした。

「どれ。ならば今度は私が挑戦してみよう」

「ふむ。面白そうだな、私もやらせてもらおう」

リエイスとシグナムが腕捲りしながらパンチングマシンに歩み寄っていく。

どうやらゲームセンターで遊ぶことになってしまったみたいだ。

「あはは、しゃあないなあ。少し遊んでこか」

「シグナムとリエイスは子供ですね」 「シグナムもリエイスも子供だね」

「うふふ。しょうがないですね」

「たく。これだからバトルマニアは」

八神家、ゲームセンターに入店されました。

なのはとヴィヴィオとすずかと顔を見合わせる。

「……仕方ないね」 「……」



私達もみんなに倣ってゲームセンターに入りまゝす

++++ Sideフェイト ルシル++++

買い物途中、ゲームセンターで寄り道。  
みんなそれぞれ好きな、気になったゲームの筐体に散らばって行っ  
た。

「ありがとう、ザフィーラ。預けていた荷物を受け取るう」

ザフィーラに預けていた荷物を受けとろうとしたが、

「このままで構わん。おまえはヴィヴィオやテストアロッサ達と共に  
遊んでくればいい。

それが父親としてのおまえの役目だろう、セインテストよ」

そう言つて、荷物を持っていながらも私の背を押した。

私は「しかし」と踏みとどまるが、

「長い間、父親と遊ぶ事おまえが出来なかつたヴィヴィオが今この場に居  
る。

優先順位だ、セインテスト。こういう荷物持ちは、我に任せておけ  
ばいい。

今は、長らく離れ離れになっていた家族と遊べ」

そう頑なに言われれば、私としても頷いて従うしかない。

私はザフィーラに「ありがとう」と感謝を告げ、店内へと歩を進め  
る、

それにしてもさつきからドカンドカンとうるさいな。

音の元凶はパンチングマシンにハマったシグナムとリエイスだ。

二人揃って連続MAX999を叩きだしている。

いつの間にか増えていた見学者（特に男が多い）がどよめく。

男共の視線は、殴る際に揺れるシグナムとリエイスの胸部に向けられ、恋人らしき女性を不機嫌にさせている。

どうしてこう男はそういう視点ばかりなんだ？ 同じ男として情けないぞ。

「シグナム、リエイス。そろそろやめて、はやて達と合流したらどうだ。」

「というか壊してないだろうな。連続記録MAXなんて」

いつまで経っても終わりそうにないため、それ以上にこれ以上続けられて破壊されでもしたら面倒なので、二人に歩み寄って止めに入る。

男共からは「チツ、羨ましい奴め」「勝てねえ」「男居んのかよ」等々文句を垂れる。

女性達は「キレー」「え、男の人？」「うわ、うちの彼氏が平均以下に見える」って私に関する事を言う。

その女性、隣の彼氏が素で落ち込んでいるぞ。

「セインテストの言う通り、だな。せつかく家族揃っているのだから」

「どちらかが先に999以下までやるつもりだったが、ルシリオン  
の言う事なら仕方がない」

リエイスはまだ私をパートナーとか思ってるんじゃないだろうな・・・  
？

シグナムとリエイスをはやてのところへ向かうのを見送り、さあどうしようか。

とりあえず見て回ろうか。リインとアギトは太鼓の達人で、シヤマルとザフィーラが見守っているのを確認。

すずかとヴィータはクレーンゲームで、アリサが二人の後ろでアドバイスらしき事を言っている。

2人はなかなか苦戦しているな。特にヴィータがさっきから「あ！」って声を上げる。

「あ、ルシル君。ルシル君ってこれ上手だったよね」

「ん？ まあシャルと一緒に空にしたことがあるぞ」

私に気付いたすずかに手招きされて歩み寄って行く。

景品はどれも可愛らしいぬいぐるみばかりだ。すずかもまだまだ子供だな。

私は「自分で獲った方が達成感があるんじゃないか？」と一応訊いておく。

「んー、そうなんだけど・・・」

「しょうがないわねえ、すずか。ほら、ルシル。やってあげなさいよ」

「いや、アリサがやったらどうだ？ アドバイスしていたくらいだろ」

そう言つと、アリサが「うっ」とたじろいだ。

ん？ もしかしてアレかアリサ。確かめるために、アリサの両肩に手を置いて見詰める。

「ちょ、何すんのよ。フェイトって恋人がいてあたしに手を出さなんて許されるとでも思ってたんの？」

アリサの突拍子もない発言に「馬鹿を言うな」と呆れつつ、アリサを回れ右。

すずかが私の意を汲んでお金を投入。さあアリサ。君の言うアドバイス通りにレッツプレイ。

アリサは「なるほどね。いいわよ、やってやるわよ。見てなさいよっ」と振り返って意気込んだ。

さて、ヴィータはどうだ？　アリサのアドバイスらしき事を実行しているようだが。

狙いは騎士甲冑の帽子にも付いている“のろいうさぎ”のぬいぐるみ。

懐かしいな。まだ残っているものなんだな。

「どうだヴィータ、いけそうか？」

「ちょっと待て、話しかけんな。……あー！　このアーム、弱すぎるんじゃないかねえのかッ！」

私の所為か？　違うよな？

隣のクレインゲームをプレイするアリサも「あゝあゝあゝ！」と大声を上げる。ダメだったか。

ヴィータは「ちくしょー。やっぱりこのアーム弱くねえ？」とボタンの八つ当たり。

これ以上ヴィータをイラつかせて壊されても困るな。

仕方なしにヴィータの頭にポンと手を置いて下がらせる。1コイン投入。

ほいほいほいと。“のろいうさぎ”を二匹ゲット。

「ヴィータ、プレゼントだ」

「は？ プレゼントってなんのだよ？ なんか祝うようなことあったかあたしに」

「プレゼントするのに理由なんか要るか？ が、要るって言うならそうだな……」

「さすがとアリサがシャルの事を思い出した時、ヴィータは喜んでくれた。」

「ヴィータは今もシャルの事を大切に想ってくれている、それに対する礼だ」

頭を撫でると、「ふん、そう言う事なら貰っておいてやるよ」とそっぽを向いて、それでも“のろいうさぎ”を大事そうに抱きしめてくれている。

昔から変わらずに素直じゃないなあヴィータ。手を払われない程度には優しくなったか。

「ま、その、なんだ。ありがとな」

ヴィータのいきなり素直な感謝に驚いたが、「どういたしまして」と、からかうような事はせずに受け取る。

「ルシル君、よかったらこっちのも獲ってくれるかな？」

「ああ。って、なんだアリサ。結局一つも獲れてないのか」

「う、うるさい。今日は偶々調子が悪かったんだって。」

「そ、それに獲りやすいヤツと獲りにくいヤツがあって、これは獲り

にくいヤツなのよ」

「アリサちゃん、言い訳は見苦しいよ？」

「さすが、あなたはどっちの味方なのよッ」

さすがが私を見てきた。そうだな、つまりはそういうことだ。

「それはもちろん」

さすがと同じセリフを言っただけでまずそこで区切り、1コイン投入。軽快にボタンを押し、そして……

「景品を獲った方だろ」「景品を獲った方だよね」

ジリに出てきそうなぬいぐるみをアリサに見せながら同時に告げる。

アリサは「ぬぐう」と呻いた。はい、アリサ撃墜の完了。

それじゃあ少し本気を出して、遊んでやろうかクレインゲーム。

「あんだ、それ以上獲ってどうすんの？」

アリサに声を掛けられハッと気付く。

背後に立つさすがとアリサとヴィータの腕の中にはいくつもものぬいぐるみ。

まずい、久々にプレイしたから加減を忘れてしまっていた。

「いや、これは……。フェイトたち全員にもプレゼントしようかと」

「でもこれは多過ぎだと思つよルシル君」

「つつかシグナムとリエイスにぬいぐるみはどうだろうな・・・？」  
ヴィータに言われ想像してみる。

シグナムとリエイスがぬいぐるみを愛おしそうに抱きしめて顔を綻ばせている光景を。

ヴィータも想像したのか、

「ねえな」「ないな」

同じ結論に達していた。シグナムは特に想像がつかない。

シャマルなら余裕でいける。どこか子供っぽいしな、シャマルは。だがシグナムは・・・ないな、としか思えない。リエイスはギリギリか？

すずかとアリサは、とにかく袋を貰ってくる、と店員を探しに行つた。

ヴィータもそれに遅れて続いていった。・・・さあてと次は・・・。

「ハッ！」

「なんのッ！」

何だアレは？ ゲームセンターで決して生まれる事のない衝撃波が生まれているぞ。

しかもその元凶はまたあの二人だ。何やってるんだよ本当に。

「エアホッケーって衝撃波が出るゲームだったか・・・？」

シグナムとリエイスが熱中しているエアホッケーのテーブルの側に

立つはやての元に歩み寄る。

はやては私に気付き、「お、ルシル君」と小さく右手を上げ、こちらもお、はやて」と小さく左手を上げる。

「はやても大変だな。シグナムとリエイスのお守とは」

「まあ私は親であり子でもあるしな。家族が楽しんでるのを観んのが一番の幸せや」

「そうか。そうだな。さすがフェイト達の中で最も早く子供が出来たはやてママだ」

「あはは、なんやそれ。でも、はやてママか・・・ええかもなあ」

会話はそれで終わり、お互い一步も引かないゲームを観戦する。

シグナムとリエイスのエアホッケーはもうゲームではなくバトルだ。

「これでどうだッ、紫電一閃！」

シグナムがパレットを右薙ぎ一閃、パックを全力打ち。

対するリエイスは、高速で返ってきたパックを、

「甘いぞシグナム！ シュタルク・シュラーク！」

さらに打ち返す。シュタルク・シュラーク、強力な一撃か。そのままだな。

ラリーはまだ続き、そろそろパックが限界なんじゃないかと思える。だが終わりは突然訪れた。パックが大きく弾かれて、はやての顔目掛けて飛んできた。

咄嗟にはやてを押し倒す様に抱きつき、はやての顔面直撃を防ぐ。



後頭部付近に衝撃が奔る。当たったか？と思ったが、ファサツと後る髪が解けて広がるのが判った。どうやら飛んできたパツクが髪を結っていたヘアゴムを断ち切ったらしい。

「主はやて！」

シグナムとリエイスが血相を変えていた。まったく、この二人は……。

「えーと、ルシル君……、そろそろ起こしてもらえると助かるんやけど……恥ずかしいし」

そう言えばはやてを抱き寄せて倒れたままだ。

すぐさま「すまない」と謝りつつはやての上から退き、彼女の右手を取って立ち上がらせる。

「あんな、シグナム、リエイス。本気になって遊ぶのは良いが加減を知れ。」

最悪、はやての顔にシャレにならない傷痕が付いていたかもしれないんだぞ」

「「申し訳ありませんでした、主はやて」」

しゅんとして謝る二人。

「まあ私はルシル君のおかげで大事にならんかったからええけどな。それよりも私はええから、ルシル君には謝らなアカンよ、シグナム、リエイス」

親に叱られたような暗さの残ったシグナムとリエイスが私へと体を向け、頭を下げた。

「すまない、そして身を呈して主はやてを守ってくれた事を感謝する、セインテスト。お前のおかげで自害は免れた」

自害で・・・ああシグナムは本気のだ。

はやてが後ろで苦笑いして呆れている。

「ありがとう、ルシリオン。本当に感謝している。お前の方はケガはないか？」

「まずは頭を上げてくれ二人とも。私は問題ない。とりあえずはパツクの探索だな。どこかに転がっていないか、何かを破壊したりしてないかを確認しないといけない」

「それなら私とリエイスがやろう。元より我らの失態だからな」

「そういうことだ。・・・ルシリオン、少しそのままに居ろ」

リエイスが私の真正面に立つ。

そして続けて「礼だ、目を閉じる」なんて言ってきた。

このセリフで、どうしようもないほど鈍い男なら頭上にクエスチョンマークを浮かべて大人しく目を閉じるだろう。

だが私は鈍くない。礼、目を閉じる、この二つから連想される、リエイスが私にやろうとしている事を察する。

「おい、リエイス。少し待て。お前は何をしようとしている・・・？」

「そ、そうや！ ルシル君にはフェイトちゃんがある！  
それやのに・・・、アカンよ！ はやてママは許さへんよ！」

シグナムとはやてママも察したのか止めに入る。

私も「礼は要らないから、そういうのはもっと大事にとっておけ」と諭す。

だがリエイスは「むう、良いから大人しく目を閉じろ」と上目遣いで言い、続けて、

「でなければお前の恥ずかしい過去を、女性局員オンリーのネットワークに流す」

なんとということでしょう。匠リエイスは恐ろしい事に脅迫してきました。

あつれ〜？ 礼を断れば脅迫されるなんて、どこの理不尽伝奇ノベルゲームですか？

リエイスには、私のこれまでの経験の記録を覗かれている。

まあ当然の如く、私の失敗談なども多く知っているだろう。リエイス、厄介過ぎる。

おそらくこの次元世界で最強の敵かもしれない・・・。

「さあ、礼を素直に受け取るか、それとも陰で女性局員達からヒソヒソ噂話されるか、二つに一つだぞ、ルシリオン」

「うく・・・判った。これでいいのだろ」

大人しく目を瞑る。あとでフェイトやなのは達に色々説教を受けそうだが、秘密暴露よりかは・・・マシじゃないな、へこむ。

暗闇の中、「よお考えてリエイス！ その道は荒れ道やで！」「ここで止めねばテストアロツサに顔向けできんな」と聞こえてくる。

だがリエイスはやめるつもりはないのか、私の右頬に触れてきた。

次に前髪に触れて・・・パチンパチンと何かの音が聞こえた。  
リエイスが後ろへ回るのが判る。ヘアゴムを失って広がる後ろ髪を・  
指で梳いて束ねてる・・・？  
そしてまたパチンと音がした。

「ふむ。もう目を開けていいぞルシリオン」

リエイスの落ち着き払った声。よかった、馬鹿な真似をしないで。  
目を開けると、満足そうに笑みを浮かべるリエイスと、微妙な表情  
を浮かべるはやとシグナムが視界に映り込む。

「よし。では主はやて。シグナムと共にパツクの探索をしてきます」

「え、あ、うん。いつてらっしやい」

小さくお辞儀をして去って行くリエイスとシグナム。  
残された私ははやてを見やると、はやてはポシエツトの中から小さ  
な折りたたみの手鏡を出した。

「なんや、これがリエイスのお礼のようやよ」

「・・・あー、なるほどな」

パチン、という音の正体を見た。

左前髪を留めている赤いヘアピン。留め方ははやてやライン、リエ  
イスと同じバツテン。

首の後ろに手を回す。後ろ髪にはバレッタと思しき装飾具が付いて  
いるようだ。

「えっとな、うん、似合とるよルシル君。私らとお揃いやな」

はやてが自分の髪を留めているヘアピンを指でなぞる。

お揃い、か。お礼だつて言うなら無下には出来ないよな、やっぱり。リエイスはシャルのように面白いから、という理由じゃないはずだ。だから正直なところかなりキツイが、仕方ない。しばらくはこのままでいよう。

「さて、はやてはこれからどうする？」

「ん？ 私は、そうやなあ・・・リンとアギトのところに行くわ。ルシル君は？」

「フェイト達のところへ行こうと思う」

「そつか。それじゃ、また後でなルシル君」

はやてを見送り、結構広いゲームセンター内をまたうろつく。

「ルシル」「ルシル君」「ルシルパパ」

騒々しいゲームセンターの中でもハッキリと聴きとれる声がつ。フェイトとなのはとヴィヴィオが手招きしている。とにかく行ってみよう。

「どうしたん おわっ？」

近づいて行ったら腕を3人に掴まれて引っ張り込まれた。

3人に引っ張り込まれた筐体、それは・・・

「プリクラ？」

だった。どうして引つ張り込まれるのか判らなかったが、

「一緒に撮る、ルシルパパ」

「ヴィヴィオは真ん中ね」

「ほら、なのはもヴィヴィオもルシルも並んで」

「あ、ああ。どこでいいんだ？」

楽しそうだから、というか私自身も3人の笑顔が嬉しくてどうでもよくなった。

ヴィヴィオが真ん中、なのはがヴィヴィオの右隣、フェイトが左隣、私がヴィヴィオの後ろに立つ。

ヘアピンやバレッタに関しての説明をしながら、立ち位置やポーズを何度か変えて撮った。

私とフェイトのツーショットや、ヴィヴィオとのツーショット。さすがになのはとのツーショットはなかったな。

「これじゃあ私達、ルシル君のハーレムってやつだよ」

私を真ん中にしたモノはまさしくそう見える。

いや、そもそも、今度はルシル君が真ん中でいこう、と提案したなのはの責任だろ？

「<sup>ヴィヴィオ</sup>愛娘をハーレム要員にすれば、<sup>わたし</sup>父親は間違いなく変態として扱われ逮捕されるな」

そんな結末イヤ過ぎる。いくら子煩悩であつてもそれはいけない。

落書きコーナーへと向かい、「仲良しファミリー、っ」というようになのは達が思い思いに色んなものを描いていく。

ヴィヴィオも楽しそうに鼻歌交じりで私たち四人囲うように？やらやら描いていく。

さすがにそれは恥ずかしいな。とはいえ楽しんでるフェイト達は邪魔出来ないから大人しく外に出て待つ。

落書きを終えて、シールとなった写真を取り出すのは。

「うん、良く撮れてるよ」

「うわあ、ホントだ　ルシルパパ、見てみて」

ヴィヴィオが嬉しそうに私とのツーショット写真を指差して笑いかけてくれる。

ヴィヴィオの笑顔を見て胸が熱くなる。父と娘、か。

私は屈んで、「ああ、よく撮れてる」と微笑み、

「ど、どうしたのルシルパパ・・・？」

「ルシル？」　「ルシル君？」

ヴィヴィオを抱きしめる。この世界で、成り行きとはいえ父となつて、娘が出来た。

だというのに父親らしい事は全然できなかった。遊ぶ事もそれほど出来なかった。

それなのにヴィヴィオは私の事を憶えていてくれた。また父として見てくれた。

「少しは父親らしく、一緒に楽しめる事が出来ただろうか・・・？」

「あ。・・・うん、すごく楽しいよ。ルシルパパと一緒にだもん。なのはママもいて、フェイトママもいてくれる。今日は、最高の日だよ」

ヴィヴィオが私の背中に手を回した。父娘の抱擁。

ヴィヴィオの、楽しい、その一言がとても嬉しかった。

「ルシルパパ、これからも一緒に買い物とか鍛錬とかに付き合ってくれる？」

「ああ、約束だ。大切な愛娘と過ごせるなんて、父親としてとても嬉しいよ」

最後にもう一度ヴィヴィオを抱きしめた。

それから、はやて達八神家とすずかとアリサと合流して、それはもう何度もメンバーをいろいろ変えてプリクラを撮りまくった。

その後にトーナメント制レーシングゲーム大会も行い、以前のよう  
に私に邪魔アイテムを集中砲火してくるアリサの所為でビリだった。  
それなりに時間が潰れ、そろそろ引き上げようかとしていたところ  
で、フェイトが一つの台の前で立ち止まった。

「どうかしたのか、フェイト」

「え？ あ、何でもないよ！」

わたわたと手を振って、何かを誤魔化そうとしている。  
台を見せまいとしているようだ。だが、

「「相性診断？」」



ラインとアギトが左右から回り込んで、その台が何をするものかを告げた。

先を歩いていてなのは達が「どうしたの？」と戻ってきた。フェイトはもう観念して、

「その、ね。すこ〜しルシルとの相性が気になったというか。

あ、信じてるんだよ、私とルシルの相性はきつとバツチリだって」

肩を落しながら釈明めいたことを言った。

私もフェイトとの相性はなかなかのものだと思っが、気になっているのならやってみるか。

フェイトにやってみようと言げると、「でも、もし悪かったら」とさっき言っていた事が思いっきり揺らいでいた。

信じているんじゃないかったのか？

「大丈夫だよフェイトちゃん。みんなもフェイトちゃんとルシル君の相性はバツチリだって信じてるよ」

なのはにそう自信満々に言われ、フェイトは頷いてお金を投入。

まずフェイトが性別や誕生日と入力し、続いて私が男、誕生日4月12日と入力。

誕生日を見てリエイスが「ん？」と漏らした。

「ルシリオン。前々から思っていたのだが、これからずっとその偽りの誕生日のままなのか？」

リエイスのその言葉に、私とリエイス、シグナムとザフィーラを除く全員が「へ？」と抜けた声を出した。

私も「は？」と漏らす。何でみんなはそんなに間抜けな顔をするんだ？

全員硬直したまま言葉を発しない。まず最初に破ったのは、

「ええっ？ 私、ルシルの誕生日が本物だとか偽物だとか、初耳な  
んだけど！」

じゃあルシルの本当の誕生日っていつ！？ とうかがどうしてリエ  
イスが知っているの!？」

フェイトだ。ものすごい勢いで詰め寄ってきた。怖いですが、フェイ  
トママ。

待てよ、確かに言った。間違いない言った。いつかは憶えてないが、  
言った・・・はずだ。

だが忘れていたというならもう一度言おうか。それにはまずフェイ  
トを冷静にさせないと。

「とりあえず落ち着けフェイト。今教えるから、な？」

まず、私の誕生日はフェブルアリー・フェムテ。この世界の暦で言  
えば2月5日だ。

で、どうしてリエイスが知っているのかと言うと、リエイスは私と  
ユニゾンしたことで、今まで歩んできた時間の記憶を共有した、と」

「そうだったけ？ えっとそれは置いといて、2月5日!？ とつく  
に過ぎてるよ!」

「何で今まで黙ってたのルシル君・・・!」

「いやまあこの世界で与えられた誕生日をそのまま使うのが当然だ  
ろ？」

界律にもそのまま登録されてしまっているし、君達にも根付いて  
しまっている」

だから言う必要もないって思っていたんだが、まさかこんな形で知られることになるとは。

しかも半ばキレ気味で詰め寄られるなんて、世の中判らないものだな。

フェイトにそうやって説明すると、「確かにそうかもしれないけどと勢いがなくなる。」

「とりあえずは、どうする？ この世界でのルシリオンわたしか、それともオリジナルのルシリオンわたしか、どっちの誕生日で診断しようか？」

「え、あ、う、えと・・・どうしようか？」

「まずはセインテストのオリジナルの誕生日でやってみるよ、テストタロツサ」

ヴィータがそう言いながら私達の代わりに入力していく。

しばらくお待ちくださいの表示の後、相性度がバンツと出た。

「・・・・・・・・49%・・・・・・・・？」

フェイトがガクツと四つん這いになって「たったの49%・・・と叫びた。」

本気でへこんでいるフェイトに、なのは達が一斉にフォローに入る。

「しょ、所詮ゲームだよフェイトちゃん」

「そつだよフェイトママ。ただのゲームだよ」

「そつや、ゲームなんかじゃ二人の本当の相性度は出せへんよ」

「そうよテストタロツサちゃん。私達はあなた達の相性がどれだけいか判っているわ」

「そ、そうかな？ うん、そうだよね」

「でもさすがに49%ってのは酷過ぎんだろ？」

「ガーンorz」

「ヴィータ！」「ヴィータちゃん！」

立ち直りそうだったフェイトが、ヴィータの口撃で再度轟沈。

はやてがどうにかフェイトを立て直そうと「あー、今度は4月12日の方でやってみやへん？」と、私のもう一つの誕生日を入力していく。

さあ、今度の相性度は？ フェイトが祈るように画面を見ている。頼むからさっきのように50%を切っていませんように。

「・・・見てルシル！ 98%だつて！」

フェイトに腕を思いつきり引つ張られ、台の前に連れて来られる。さっきまでの落ち込んで暗かったフェイトの表情は今は晴れやか、満面の笑みだ。

98%か。かなりすごい数字じゃないか？

「この世界のセインテスト君とは相性が最高に良くて、本当のセインテスト君とはあまり良くないのね」

シヤマルがそれはもう余計な事を言いやがった。

だがフェイトはトリップしているようで聞こえていないようだ。

そこまで言われると、かなり恥ずかしいんだがな。

「にしてもホントあんたは面白いわねえ。

二つの誕生日を持ってて、それで相性の診断結果も二つあるなんてなのは達もやってみれば？　なんか面白そうだし。あたしもやってみよつと」

アリサがとんでもない事を言い出した。

面白いつてアリサ。結果によっては悲惨な目に遭いかねないぞ、主に私が。

で、アリサは渋るなのは達を言葉巧みに説得し、私と誰かの相性調べとなつてしまった。

「シヤマル、あとで胃薬を用意してくれないか？」

「うふふ。セイントテスト君も大変ね」

「笑話で済めばいいんだけどな」

当事者の私を置いて、アリサを筆頭に相性診断を勝手に始める。もう好きにしてくれ。それで相性診断の結果なんだが・・・

この世界での誕生日4月12日。

第1位：フェイト・テストロツサ・ハラオウン：98%

第2位：高町ヴィヴィオ：86%

第3位：高町なのは：85%

第4位：八神はやて&ヴォルケンリッター（リイン・アギト・リエイス除く）：74%

第5位：アリサ・バニングス：73%

リエイスは の結果に大いに不満があるようだったが、スルーされた。

私のオリジナル誕生日2月5日。

第1位：八神はやて&ヴォルケンリッター（リイン・アギト・リエイス除く）：99%

第2位：リエイス：96%

第3位：リインフォース？：91%

第4位：アギト：88%

第5位：高町なのは：62%

の結果についてはあまりに予想外だった。

というかなんだこれ、八神家が1位から3位で90%超え？

アギトは4位で90%以下、だがそれでも88%と高い数字を叩きだしている。

（これは何か意図的なモノが働いているのか・・・？）

はやて達と目を合わせると、フルフルと首を横に振った。こっちも振った。

そうだよな、細工できるようなモノじゃないしな。

「凄い結果ですね。わたし達八神家とルシルさんの相性がとんでもないですよ」

「あかし以外は90%超えかよ」

リインとアギトが色んな意味で戦慄している。

この結果にフェイトがまた轟沈した。そして今度はリエイスが満面の笑みだ。

「ほお、我らとセインテストはこの世界以外では相性抜群なのだな」  
「リエイスが今までに見たことねえくらいの笑顔で逆に怖えんだけ  
ど」

やめてくれ、これ以上はフェイトが立ち直れなくなりそうだ。  
そこに助け船を出してくれたのはヴィヴィオで、

「ルシルパパ。シャルさんの誕生日も、ルシルパパのように二つあるの？」

話題をシャルへと変えてくれた。ナイスだ、ヴィヴィオ。

心の中で称賛を送りつつ、シャルの誕生日に興味を持ち始めたのは達に教えることにする。

「シャルの本当の誕生日は確か・・・ノヴェンベル・セクストンデ。11月16日だ」

そして彼女の命日が、デセンベル・ニーオンデ。

12月9日。千年以上続いた大戦終結日にして表層世界の終焉、次元世界誕生の日だ。

「シャルの二つの誕生日も調べてみよつと」

またアリサを筆頭にして、相性診断を始める。  
で、その結果と言つのがコレだ。

この世界での誕生日4月12日。

第1位：高町なのは：100%

- 第2位：フェイト・テストロツサ・ハラオウン：98%
- 第3位：アリサ・バニングス：96%
- 第4位：八神はやて&ヴォルケンリッター（リイン・アギト・リエイス除く）：95%
- 第4位：月村すずか：95%

彼女のオリジナル誕生日11月16日。

- 第1位：高町なのは：99%
- 第2位：八神はやて&ヴォルケンリッター（リイン・アギト・リエイス除く）：98%
- 第3位：フェイト・テストロツサ・ハラオウン：95%
- 第4位：リインフォース？：93%
- 第5位：高町ヴィヴィオ：90%

す、凄まじいシンクロ率・・・。

「何と言いますか、私とシャルちゃんってすごい相性抜群なんだね」

「100と99・・・なのはとシャルは運命の相手としか思えないね」

「残念やったなあ、なのはちゃん。同性同士やなかったら結ばれただで」

「他の子との相性も全部80以上だし。シャルってどれだけ他人と相性良いの・・・？」

「シャルちゃんの人格なら、なんか納得出来ちゃうけど」



驚愕に戦慄と様々な思いが生まれる。

シャル、君はどこの世界へ行ってもすぐに誰とでも仲良くなっていたな。

そして、おそらくこの世界が一番だと思う。たぶん次元世界こそ彼女の在るべき世界。

もしかしたら君の転生先は……。フツ、そんな奇跡があってもおかしくないな。

ちなみに私とシャルの相性度は、オリジナル誕生日で2%、4月12日で92%だった。

＋＋＋ S i d e l シル なのは＋＋＋

アミューズメントエリアを後にして、次に温泉、最後に夕食、帰宅という予定に戻す。

そのために、邪魔になる多くなった手荷物を車に置きに行ったアリスちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん、ルシル君を見送る。

ちなみにザフィーラは私達の護衛兼ナンパ男撃退係として残ってもらってる。

四人を背中が見えなくなつて、私達は先に温泉エリアへと向かう事になった。

その道中、「あ、ちょっと待ってなのはママ」と、ヴィヴィオが私を呼び止めた。

「どうしたの？」って、ヴィヴィオの指差す方へと視線を向ける。そこにはアクセサリーショップがあつて、ヴィヴィオがそこへ向かうとする。

「ルシルパパのヘアゴムがダメになつたみたいだから、プレゼント

「したいなあって」

「うん」

シグナムさんとリエイスさんがよろける。

ルシル君のヘアゴムが切れたのって二人の所為みただから。

二人は小さく「申し訳ありません」って頂垂れながら謝った。

「そうゆう事やったら私がお金を出そか？ 家族の失態は、家長の責任やしな」

「はやてさん、ありがとうございます。でも、わたしがルシルパパに贈り物をしたいんです」

ヴィヴィオが可愛過ぎる。親としての鼻屑目、とか言われそうだけど違う。

惜しい、惜しいよルシル君。今のヴィヴィオのちょっと恥じらいのある笑みを見逃したルシル君は残念過ぎる。

まあ見たら見たら、また親バカモードになって大変な事になりそうだけどね。

「よしっ、それじゃあヴィヴィオ。一緒にルシルパパ似合う髪留めを探そっか」

「うんっ」

ということ、ルシル君へのサプライズプレゼント作戦開始。

ルシル君達が戻ってくるまでに決めないといけないって事で、急いでアクセサリーショップに入る。

はやてちゃん達も続いて自分達用のヘアアクセを見て回ってる。

「なのはママ、コレはどうか？」

ヴィヴィオが真つ黒なりボンを見せてきた。

確かにルシル君の銀髪には、というより、ルシル君には総じて黒が良く似合う。

シャルちゃんも言ってたし、私だってそう思う。

「それとも赤かなあ？ ルシルパパってどれも似合うから、すぐに選べないな。」

うん、でもルシルパパはリボンよりヘアゴムの方がいいんだよね・  
・？

黒のヘアゴム？ 赤のヘアゴム？ それとも別の色のリボン、ヘア  
ゴム・・・むう」

ヴィヴィオはすごく楽しそうにルシル君に贈る髪留めを選ぶ。

本当はもっと時間をかけて選びたかったようだけど、ルシル君達が  
そろそろ戻りそうだったから切り上げる。

「喜んでくれるかなあ、ルシルパパ」

プレゼント用に包装してもらった小さな箱を大切そうに胸に抱くヴ  
ィヴィオ。

ヴィヴィオ。それは要らない心配だよ絶対に。

「心配いらねえよヴィヴィオ。ぜってえ喜ぶって、アイツ」

「ルシルさんの親バカっぷりはすごいですからね。」

「セインテスト君はきつと叫ぶわね。ヴィヴィオちゃんへの永遠に

朽ち果てぬ愛をッ？」

うん、親子愛だよ、親子愛。シヤマル先生、“親子”、を付けてください。

付けないとルシル君が危ない人だというように聞こえますし。

ほら、ヴィヴィオが「あ、愛、ですか・・・？」って、照れてながらも困ってるじゃないですか。可愛いからいいですけど。

「そうだよヴィヴィオ。ルシル君は絶対に喜んでくれる。

シヤマル先生の言うように叫ぶくらいにね。親子愛をね、うん、親子愛」

「そ、そっか、そうだよね。まあ、シヤマル先生！」

「や〜ん、ヴィヴィオちゃんか〜わい〜い〜い？」

「わぶっ？」

シヤマル先生がヴィヴィオを抱きしめて、くるくる回り始めた。二人の周辺にハートマークが乱舞してるのが幻視できる。

「あれ？　なのは達どうしたの、まだこんなところで・・・？」

フエイトちゃん達が戻ってきていた。

もちろんルシル君もいて、「先に行っていなかったのか？」と訊いてきた。

シヤマル先生はヴィヴィオを降ろして、背中をそつと押した。

「なのはママ・・・」

「うん、渡してあげて」

ヴィヴィオは頷いて、ルシル君の元へ駆け寄る。

「ん？ どうしたヴィヴィオ・・・？」

「ルシルパパ。あの、コレ・・・」

ヴィヴィオが差しだしてきた包装された箱を見て、ルシル君は「コレは・・・？」と受け取って訊ねる。

「ルシルパパにプレゼント。少し遅めで、少し早めなバースデープレゼント」

「っ、私に、ヴィヴィオからの誕生日プレゼント・・・。あ、開けてもいいか？」

「うんっ。あ、でも喜んでもらえるか判らないけど・・・」

「どんなものでも嬉しいに決まっているだろ？ ヴィヴィオ愛娘からのプレゼントなのだから」

ルシル君は丁寧に、それはもう壊れモノを扱うように包装紙を解いていく。

長方形の白い箱を開けて中身をそっと取り出した。

「ヘアゴムとリボン・・・」

「ルシルパパのヘアゴムがダメになったでしょ。」

帰れば代わりのゴムとかあるけど、でもこれくらいしか思いつかな



なんとかルシル君を落ち着かせて、私達は予定通りに温泉に入って夕食を済ませた。

あとでザフィーラに聞いたんだけど、ルシル君が私たち女性組と別れてすぐにクロノ君とか知り合いの男性に、ヴィヴィオがどれだけ可愛い娘か自慢しまくってたらしい。

あー、ルシル君、もう引き返せない場所まで行っちゃったんだね。。。

そして帰り路の車内。ルシル君を真ん中に、ヴィヴィオが左、フェイトちゃんが右と言うように座ってる。

「なあ、フェイト、なのは」

「ん？」

「どこの世界、いつの時代、やっぱり家族というのは素晴らしいな」  
自分の胸にもたれかかって眠ってるヴィヴィオの頭を撫でながら、ルシル君がとても綺麗な微笑みを浮かべた。

私とフェイトちゃんは考えるまでもなく「そうだね」って首肯した。うん、家族を持つのはすごく素晴らしい事で、とても幸せな事だ。

「ありがとう」

ルシル君はそう一言。私達は声には出さず、頷くことで応えた。すずかちゃんの運転する車は、みんなと一緒に泊まる事になってるすずかちゃんの家を目指して走る。

（久しぶりに帰ってきた海鳴での休暇は、大成功だったかな）

色んな事が多くあり過ぎて驚くこともあったけど（特にルシル君の

崩壊)、それでもいい休暇だったって事はハツキリと言える。  
助手席の窓から外を眺める。またこんな楽しい休暇を過ごせる日が  
来ますように、と。  
誰にも気付かれることなく、私は指を組んで、そんな願うまでもな  
いような事を願った。



ここは海鳴、始まりの街　〜親バカは永遠に〜（後書き）

ルーテシア

「どうしたのレヴィ、こんな夜中にコンコンと？」

レヴィ

「・・・あ、ごめんねルーテシア。起こしちゃった？」

ルーテシア

「それはいいんだけど。って、なにその格好？」

頭に変な輪っか乗せて、しかもロウソクを刺してるし。熱くないの？  
それに、金槌？　それで何を叩いてるの？　レヴィ」

レヴィ

「あ、これ？　なんか願いを叶えるおまじないらしいんだけどね。  
藁で作った人形に、わたしのお願いを聞いてほしい人の私物を埋め  
込んで、その人形に釘を打ち込んだって。

やる時間も大体決まってる、夜中の2時くらいじゃないと効果が無  
いって話」

ルーテシア

「へえ〜。だからこんな夜遅くにね。

にしても随分と変わったおまじないなんだね。

ところで、レヴィの願いつてやっぱり本編での登場？」

レヴィ

「正解！」

ルーテシア

「（もうそれしか思いつかなかったし）そっか。ところで、誰の私物をその藁人形に埋め込んでるの？」

レヴィ

「えっへん。それはもちろん……」「ニヤリ？」

それゆけボクらの魔拳少女リリカル レヴィたん (前書き)

こつも暑いとすぐにグロッキーになり書きたくても書けないという  
今日この頃(扇風機 on 1 y じや間に合わないっす)、完結編にお  
けるシャルロットの戦闘スタイルを『十字架を背負いし』から  
『本編・第一章：大戦編』のものに戻そうと決めてみたり。



どうしてそんなことを感じていたのか判らないけど。でもね、今この瞬間にそんな気分の悪さが吹っ飛んだ。一体どうしたんだろう、わたし。

「ヒューッヒツヒツヒツ、ようやく来たのね、このわたしの時代が！（自分で言ってる意味不明だけど）アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ、へへへへへへへへ」

パシーン！

「あいたあっ?!」

ふとももをパシパシ叩きながら、どうしようもなく笑いが止まらなかった所に、「怖いわっ!」と、後頭部をこれでもかかってくらいに強く叩かれた。

後頭部を両手で押さえながら振り向く。わたしの背後に立っていたのは、

「い、痛いよルーテシア・・・」

ルーテシア・アルピーノ。わたしの大好きなお姉ちゃんだ。

ルーテシアの一步斜め後ろには、ルーテシアの召喚獣のガリユーが控えていた。

そんなルーテシアが手にしているのは大きなハリセンで、アレでわたしの後頭部をブツ叩いたんだ。

わたしは「むう」って不満を視線に乗せてルーテシアを見詰める。

「こんな早朝から屋根の上でなに気味の悪い笑い方してるの、レヴイ・・・?」

「む、ルーテシアだってよくここでバカ笑いしてるじゃん」

ルーテシアだってバカ笑いをよくしてるくせに。どうしてわたしだけ叩かれなれないといけないんだろ？

するとルーテシアは「わたしはいいの。ほら、そろそろ次元港へ行くよ」なんて、あまりに身勝手な事を言っちゃった。

でもそんなことよりもっと大切な事も口にした。

ここカルナージに訪れる臨行次元船の停泊する、カルナージ唯一の次元港へ行く時刻。

「あや？ もうそんな時間？」

今日は、それに乗ってルーテシアと一緒にミッドの首都クラナガンへ出掛ける予定だ。

ここでひとつお知らせ。無人世界であるここカルナージには定期便がない。

だからはやてさん達、管理局の友達に船を手配してもらおうしか外世界に出られる術がない。

そんな超不便な環境に、ちよつとばかり不満があつたりする。

というわけで、わたし達が乗ろうとしてる便に乗り遅れると、予定が全て吹っ飛ぶ。あらまあ大変だ。

「そう。もうそんな時間だよ。ガリユー」

ガリユーは昔と変わらずにルーテシアを肩に座らせて、トンツと屋根から地面へと飛び降りる。

わたしも続いて屋根から地面へとピョンっと飛び降りて、着地と同時に膝を曲げて衝撃吸収。

すぐに膝を伸ばして両腕を広げてポーズ。遅れて風圧で捲れていたワンピースの裾がフワリと降りる。

「10・0。お見事。でもパンツ丸見えで減点ね。3・12」

「ええっ？　パンツ見えたくらいでそこまで減点されるの!？」

「レディはお淑やかに憤ましく、だよ」

「わたしの名前と淑女レディを掛けたダジャレ？」

「違う。レヴィだったらそういうのに疎いでしょ？」

「バリアジャケットのモード・バスターだって少なからず露出してるし。特に歩くとおへそがすぐ見えるし」

「そうかなあ？　それを言ったらルーテシアの方が露出してるんじゃないの？」

「ルーテシアのバリアジャケットは完全肩出しビスチェのワンピースだから、胸から上は裸じゃん。

それに比べたら、わたしのバスターやコンバットは遥かにマシだよ。遠距離戦用のモード・バスター時のバリアジャケットは、左右と後ろのスリットが足の付け根まである立襟の蒼いロングコートにしてる。

そのコートの前を胸のトップとアンダーのところだけベルトで留めているから、ルーテシアの言うように歩く度にコート下部分が流れてお腹が露わになる。

んで、膝が少し隠れる長さの黒のハーフパンツに黒の編上げブーツ。一応コートの下に胸を覆う白タンクトップを着てるから、コートを脱いでもポロリとはならない。

(うん、やっぱりルーテシアより断然マシ)

近中距離戦用のモード・コンバット。

黒のノースリーブのセーラー服にしてある。可愛いでしょ？

セーラー服特有の大きな襟シヨンペラは前後共に燕尾になってて、裾もまた襟と同じ様に前後共に燕尾となつてて、後ろ側の裾は膝裏までの長さがある。

黒いネクタイにはスマレが描いてある。わたしの魔力光がすみれ色だからね。

そして、インナーは立て襟の白いノースリーブのブラウス。

フアスナー仕立ての前立ては黒のラインで、首元には黄金に輝く小さな南京錠。

下は黒いブリーツスカート。スカートの裾から少し出るくらいの長さの黒のスパッツ、黒の編み上げブーツって感じ。

(ほら、やっぱりルーテシアの方が露出してるとよ)

「そう言われると、確かにわたしの方が露出してるかも……？でも、レヴィはさっきのようによく動くから見えちゃうんだってば。去年のインターミドル。わたしの応援の時にも足を思いっきり上げてパンツが見えそうになるのを止められてたし」

「あんな場所で、わたしのスカートの中を見ようする人なんていないよ。」

観客は全員試合に釘付けなんだし。それに、ちょっとくらい」

「それがダメだって言うの。まあ、少しは気にして」

「うい」

これからは気を付けよう。わたしだって好き好んで見せるわけじゃ



ないんだしね。

それから二人一緒に家の中へ戻って、階段を二段飛ばしで駆け上って私室へ赤のポストンバッグを取りに行く。

バッグにはミッドに2泊3日するための着替えとか詰め込んでいる。宿泊場所は高町家。なのはさんが仕事で空けるって事で、その間わたしとルーテシアが泊まる事になった。

わざわざわたし達が行かなくても、ヴィヴィオがコロナ達の家泊まりに行けばいいんじゃない？って話はなし。

わたしとルーテシアだったまにはクラナガンのような都会に遊びに行きたいし。

それにヴィヴィオが折角誘ってくれたんだから、ここは友達として行かないとね。

「行こうか、アストライア」

デスクの上にある10cmくらいのスミレ色をした六角柱型クリスタルのネックレスを首に掛ける。

ルーテシア特製のブーストデバイス“アストライア”の待機モードだ。

“アストライア”は、ルーテシアのブーストデバイス“アスクレピオス”の姉妹機として作られたから、起動時はもちろんグローブ型だ。

「ルーテシア、レヴィ」

一階に降りたところでお母さんと呼ばれる。

にしても、わたしはポストンバッグを自分で持つてるのに、ルーテシアはガリユールに白のトロリーケースを運ばせていた。ずるい。

「コレお弁当。船の中で食べてね」

「ありがとうママ!」「ありがとうお母さん」

お母さんから青色と黄色のランチ巾着を受けとる。

ルーテシアが「わたしのもそこに入れて〜」って黄色のランチ巾着を差し出してきた。

わたしは「しょうがないなあ」って愚痴っばい事を苦笑しながら零し、ポストンバッグに自分とルーテシアのランチ巾着も一緒にしまい込む。

「二人とも。忘れ物とかない?」

「「ないです」「」

「よしっ。それじゃいつてらっしやい」

「「いつてきま〜すっ」「」

こうしてわたしとルーテシアは、アルピーノ邸を後にした。

とうかさルーテシア。最後の最後まで、船に乗り込むまでガリユに荷物持ちさせるのはどうかと思うんだけど。

十十 Sideレヴィ ルーテシア十十

4時間の船旅を終えて、わたしとレヴィはミッドの首都クラナガンの次元港に降り立った。

どこを見ても人人人。いつもはたったの4人（ガリユ含めてね）しかないカルナージ暮らしだから、やっぱりこう賑やかだと心が

躍る。

で、ヴィヴィオ達の学校が終わるまでの間、わたし達と置いてくれる場所まで送ってくれるはずのディードの姿を探すんだけど……いない？

「ディード、まだ来てないのかな……？」

「うーん、道が混んでるのかもね……？」

ディードが車で迎えに来てくれる手筈だったんだけど、エントランスにその姿がない。

とりあえずエントランスの真ん中で突っ立っているのもどうかと思つて、待合室へと向かう。

待合室に入ったと同時に、ディードからの連絡が入った。

『お嬢様、レヴィお嬢様。ディードです。まずは申し訳ありません。どうも事故があったようで渋滞に引っかかってしまいました』

『ヤッハー、ルーお嬢様、レヴィお嬢様』

ディードの映るモニターに、割り込むようにセインが顔を覗かせてきて掌をヒラヒラと振る。

するとディードが『運転の邪魔です、退いてくださいセイン姉様』つて、セインをモニターの外にまで押し出した。

「「なんだ、セインもいたんだ」」

『ひどいっ！』

モニターの外側からセインが喚く。

「いやだつて何でいるの？ デイードと違ってセインはわたしとル  
ーテシアのお迎え頼まれてないでしょ？」

「なんかレヴィお嬢様が冷たい。迎えについて来るのは当たり前。  
友達が来るって言っただから、迎えに行きたいって思つのは変じや  
ないと思うんだけど」

「本心は？」

「……サボりの口実に使わせていただきました」

「アウトツ！」 「セイン姉様、それは……」

セインつてば、お迎えを仕事サボりのための理由にしたなんて。  
これはちよつと許しがたいかなあ。シスターシャツ八に報告しな  
い。

デイードは話を戻すために「コホン」って咳払いを一度。

「そういうわけですので、もうしばらくお待ちいただけますか？」

モニターの向こうで、ハンドルを握りながら申し訳なさそうに目を  
伏せるデイード。

セインは「すぐに行くからもう少しだけ待っててね」って右掌だ  
け出して振ってる。

当然それは仕方がない事だつて思うわたしとレヴィは、

「うっん、気にしないで。港内のお店とか回って時間潰すから」

「そうそう。だから着いたらまた連絡ちよーだい、デイード」

遅刻くらい気にしないで、って伝える。

デイドは『ありがとうございます。では、到着すれば連絡しますので、それまでもうしばらくお待ちください』って会釈。

セインはまた顔を覗かせて『待っててね〜』ってニコニコ笑顔を見せて、通信が切れる。

「じゃ、デイド達が来るまでブラリとしますかっ」

レヴィが床に下ろしていたポストンバッグを肩に提げる。

わたしも「だね」と、待合室を出るレヴィに続く。

とりあえずは、ママへのお土産の候補探し。買うのはもちろん帰る時。

今買うと荷物がかさばるしね〜。

「う〜、わたしもルーテシアのようなローラー付きにしとけばよかった・・・」

少し見回ると、何度も肩からズレ落ちそうにポストンバッグを上げるレヴィが弱音を吐く。

さすがの体力自慢も鬱陶しい事には弱いつてことだ。

わたしは「ロッカーに預ける？」って訊ねてみるけど、レヴィは「それもメンドー出し」って渋った。

だったら文句言わないで、とか思ってたなら、レヴィが両手にポストンバッグのベルトを持って差しだしてきた。

「ルーテシア。そのケースと交換しよ？」

「や」

「一文字拒否!？」

本気でへこんでるわけじゃないのに、ガンって肩をガックリ落とした。

「しょうがないなあ」って、わたしはボストンバッグの二つある持ち手の一つを持つ。

「ルーテシア・・・？」

「お姉ちゃんが妹に頼られたんだから・・・って、そんなに重くないんだけど」

レヴィのボストンバッグは思っていたより軽い。

それもそのはず。だって入ってるほとんどが着替えなんだから。

「ただの重いだけだったら問題ないんだけど、軽いからこそズレ落ちてくるんだよね・・・それをいちいち上げるのが激しくメンドい」

「あー判る。うん、それだったら肩に提げないでえ・・・」

ボストンバッグを受けとってレヴィの後ろに回る。

肩に提げるのが鬱陶しいなら、「これでいいんじゃないの？」とボストンバッグを縦にしてレヴィに背負わせる。

はい、問題解決。レヴィが「なるゝ」。ボストンバッグだから背負うなんて考えに至らなかった。さっすが「なんて随分と持ち上げてくる。」

そんなやり取りをしながらお土産屋を見て回って時間を潰している  
と、「キヤアアッ!」って複数の悲鳴が搭乗ロビーの方から聞こえてきた。

そっちの方へ慌てて振り向くと、人波がここエントランスにまで逃げ惑うように押し寄せてきた。

「ここで待っててルーテシア！」

### 瞬走ぎ式

「へ？・・・って、ちょっとレヴ　　ってもういない!?!」

レヴィは陸戦高速移動魔法を使って、呼び止める暇も無く搭乗ロビ―に向かった。

「あーもあつ！」と頭を抱える。レヴィの正義感から生まれるその猪突猛進的な行動力には困る。

それが嫌ってことじゃないけど、レヴィの身にも危険が降りかかることだってある。

それが心配。レヴィはわたしの大切な妹で、一人の女の子なんだから。

「お姉ちゃんだって頑張るんだからね、レヴィ！」

ひしめきあう人波の流れに逆らうようにわたしは搭乗ロビ―へと急ぐ。

+++++Sideルーテシア　レヴィ+++++

支柱の陰に身を潜ませて、仕事が出来るって感じの7人のスーツ男の様子を窺う。

6人がデバイスらしき銃を所有。1人はジェラルミンケースを大事

そうに抱えてる。

側にはバインドで拘束された親子一組と男3人女2人。

受付カウンターの奥に職員の頭が・・・見えるだけで8人。

犯人はロビーに6人、受付カウンター奥に1人の計7人。

(一人じゃ無理、か。ティアナさんやルシリオンのような精密射撃シャープシュー手が居てくれたら楽に瞬殺出来るんだけど)

わたしは精密射撃が苦手な方だ。

とは言ってもわたしだって奴らのデバイスに当てるくらいなら出来る。

だけど正確に連続かつ反撃できないほどの高速で撃ってデバイス破壊、んでバインドで捕縛するとなると、わたしの集中力じゃ無理。

相手が3人くらいならたぶん出来る。けど・・・6人、下手すればまだいるかもしれないから一人じゃ突っ走れない。

「なんとということだ。お前達の所為でとんだ騒ぎになってしまったではないかっ！」

何か良い手が無いかと思案していると、気難しそうな顔をしたケースを抱える男が怒鳴り始めた。

会話を聴いていると、どうやら連中は一種の産業スパイと犯罪組織に武器を流すブローカーのようだ。

“テストメント事件”で騒ぎになった“ミュンスター・コンツェルン(もう解体されたけど)”の子会社から、“テストメント”の構成員が装着していたリンカーコアが無くても魔導師になれるバトルスーツ、そして戦闘機“アギラス”の開発詳細が記されたデータを盗んだ。

で、その取引現場のここでトラブル。一般人が荷物を取り違えた。



(マヌケなことしてくれちゃってさ、もお)

連中がその一般人とトラぶって、キレた連中が人目を無視してデバイスを突きつけた。その結果がこの大騒ぎ。

ウキウキ気分でクラナガン到着直後にトラブル遭遇。  
ギヤアギヤ騒ぎだす連中には溜息しか出て来ない。

『ちょっとレヴィ！ 下手に首突っ込むとまずいって！』

ルーテシアからの念話。

『判ってるけどね。でも……アイツらをこのまま見過ごす事なんて出来ないって』

恐怖から泣き喚く男の子。

昔(と言ってもJ.S事件んとき)の暴走ルーテシアや生前のわたしを見ているようで胸が苦しくなる。

お母さんとお父さんが「この子だけでも逃がしてください！」って泣きながら懇願してる。連中が「うるせえっ！」って怒鳴る。もう見てられない。

その場から瞬走式で離れて、「アストライア、起きて」と“アストライア”を起動させてバリアジャケットを装着。

モードは近距離戦用のコンバット。近接用射砲撃を撃てるし、何より陸戦機動力が高い。

最悪わたしの体を盾にして、人質達を逃がす事が出来るし。

『レヴィ！ あーもおすつかりコンバットヤルキ形態になってるし！』

『ごめんで。それより手伝ってくれない？ 何とかしてあのおバカさん達を沈めたい』

合流したルーテシアに搭乗ロビーの状況を説明する。

『人質が居て、そこにわたしとレヴィだけって……。さすがにしんどいと思うよ。ここは近くの陸士隊の到着を待った方が』

『でも』

ガシャーンと何かが壊された音と悲鳴が搭乗ロビーから響いてきた。ダメ、やっぱりのんびり待っててられない。意を決して向かおうとしたところで、

『ヤツハー 困った時のセインちゃん、ただいまとうちゃく』

『遅れて申し訳ありませんでした。お嬢様、レヴィお嬢様』

セインとデイドからの念話。

搭乗ロビーへ無音で向かいながらも二人からさらに外の状況を教えてもらう。

近くの陸士部隊の到着まであと数分。そして、執務官としてフェイトさんとルシリオンも来るらしい。

どうしてかは判る。“テストメント事件”の関係者だったルシリオン。

“テストメント”として活動していた大半の記憶が無いって言うてもその一味だった。

だから、これから有効利用されようとしている“アギラス”とかの技術が悪用されたくないんだと思う。

『アイツら、魔法で施設破壊ってバカじゃないの!?!?』

見ればソファやオブジェが壊されてる。

泣いていた男の子が今は泣かないように必死になってる。

待っててね。もう少しで助けてあげるから。

それに、一人の男の人が頭から血を流してる。たぶんデバイスで殴られたんだ。

犯人の一人が「コイツが間違えなきゃこんな事にはならなかったのよ」って愚痴りながらその男の人を蹴る。

『セイン、デイド。これ以上黙ってられない。手伝って』

『オツケー。それじゃその状況を教えてレヴィお嬢様』

『判りました。わたしに出来る事でしたら何でもいたします』

二人からの承諾も得た。見てろよおおマヌケさんども。

わたしのウキウキ気分を害したその罪、100倍返して償わせてやる。

セインとデイドに搭乗ロビーの状況を説明。

『犯人達から離れてる人質は少しずつあたしのディープダイバーで連れだすとして』

『犯人に近い人質の解放はやっぱりこっちが動かないとダメ、だよね』

犯人の意識を全部こっちに向けさせないと親子と男女5人は解放できそうにない。

するとルーテシアが『わたしが一般人を装ってアイツらの前に入る』なんて事を言い出した。

さすがにこれは全員で止める。だけど、

『わたしももう見てられない。ケガ人が出てるし、これ以上待つてるともつと酷い事が起きるかもしれない』

もう揺るぎそうにないルーテシアの決意に燃える瞳。

でもそれはわたしの役目だ。わたしはルーテシアの妹、そして守護者だ（ルーテシアはこの言い方嫌いだけど）。

ルーテシアの右肩にポンと手を置いて首を横に振る。

『わたしが行くよ』

わたしのバリアジャケットなら私服に見える。まず疑われない。

でもルーテシアのは明らかに浮く。この場じゃ絶対に浮く。

確かにルーテシアのも私服に見えるよ。見えるかもしれないけど、でもやっぱり浮く。

わたしはグローブを外してスカートのポケットにしまい込む。

『それに、ルーテシアはインターミドルに出たんだよ？

もしアイツらがそれを知っていたら、人質はもちろんルーテシアも危ないんだ』

そう言うところルーテシアは『確かにそうだけど』って渋々折れた。

作戦会議はここまで。サインが準備出来たところで行動開始。

ポストンバッグを預けたルーテシアを下がらせて、わたしは近くにあるお手洗いの中へ瞬走壱式で入る。

そこでわざと大きな音を立てる。するとどうなるか……

「おい！　そこで何をしている！」

当然、女子用のお手洗いにまで入ってきた（この時点で殴ろうかと思っただ）犯人がわたしに気付く。  
ソイツは銃型のデバイスを突きつけてきて、わたしは怯える演技をしながら両手を上げる。

「あの、大きな音とか声が怖くって隠れてました・・・」

するとソイツは「来い」って乱暴にわたしの腕を引っ張って、親子さん達の近くにまで連れて行こうとする。

ここでわたしは「いやっ！」と暴れる。ソイツは「大人しくしねえか」なんて脅してくる。

あーもお今すぐにボコりたいけど、人質の安全が第一だ。とりあえず暴れた拍子にソイツの頬を叩いておく。スツキリ。

そうすれば、ソイツは怒って意地でもわたしを捕らえようとするだろう。

わたしはお手洗いから出て逃げ出そうとする。「待てっ」って呼び止めてくるけど、誰が止まるか、んべえ。

「おい、ソイツを捕まえろっ。人質にする！」

「足速っ!？」「俺好みの女の子だっ」「何やってんだドジ！」

6人（1人脱落）中4人がわたしを追い始めた。

わたしは捕まらないように、受付から離れるように気を付けて逃げ回る。

『レヴィお嬢様、もう少し頑張って!』

セインが受付カウンターの奥に居る職員達の脱出を進める。

まずカウンター奥の犯人を階下へ退場させる。これで監視が消えた。

すぐに職員達を階下へ脱出させて行く。

階下じゃセインが職員を“ディープダイバー”で連れだして、ディードが下で受け止めるって流れ作業が続いてるに違いない。

『大丈夫。コイツら全然ダメ。超一流の魔法戦を潜りぬけてきたわたしの敵じゃないよ』

数を利用しないで一纏めになって追いかけてくるから逃げやすい。それにカウンターに居た仲間が消えたことにも気付いてない。馬鹿すぎる。

ここでようやくソイツらは銃口をこっちに向けて、魔力弾を撃ってきた。

当てるつもりのない威嚇射撃だ。もしこれで泣きも喚きもせず冷静でいたら怪しまれるか。

『レヴィお嬢様！ 職員全員の脱出完了！』

「『ありがとセイン！』きゃああああああつー！」

頭を両手で押さえてその場に蹲る。どう？ この演技は。

犯人達が「手間取らせやがって」って、わたしの元へと下卑た嗤い声を出しながらゆっくりと歩いて来る。

クズ男ども。そのムカつく面をあとで殴るから、今の内に笑ってればいいよ。

「ほぐら捕まえた」

「言う事聞かないと気持ちいい事しちゃうぞ？」

2人の犯人が両肩に手を置いてきた。

両腕を掴まれて立たされようとするけど、最後の抵抗とでも言うように蹲り続ける。

チラツと親子さん達を見る。わたしを心配しているような表情でこつちを見たり、顔を逸らしてる。

その親子さん達近くのを銃を持った犯人が、イラついた顔して一歩一歩とこちらへ向かってくる。

犯人全員の意識が全部わたしに向いた。バーカバーカ。わたしに踊らされているとも知らずに。

「いい加減にしるよガキ！」

「うぐ・・・痛い！」

後ろ髪を乱暴に引っ張り上げられて否応なく顔を上げさせられる。

ゴツン。おでこに銃口を当ててきた。さっきからわたしの事が好きだとか気持ち悪い事を言ってる犯人が「殺すなよ、俺が貰うんだから」なんてほざいた。

欲しかったらあげるよ。このわたしの強烈な拳打を、ね。

そしてずつとわたしを見てればいい。ほら、人質の親子さんがこのロビーから消えたよ。

そこでジェラルミンケースを持った男が「人質が消えた！」って叫んだ。

わたしに集まっていた犯人達が一斉にわたしから視線を逸らす。やっぱり馬鹿だ。

「いつてらっしやいませ」

### 瞬閃牙衝撃

気持ち悪い男のお腹に拳打を打ち込む。

突然の抵抗に、その男は為す術なく食らって吹っ飛ぶ。

残り4人が呆気にとられる。目を大きく見開いてわたしを見た。

その隙が命取りだったってことを牢屋で海より深く反省してなさい。

「破・・・ッ！」

掌底をわたしの後ろ髪を引っ張った男の胸に入れ、その男を吹っ飛ばす。

武装者残り3人。こっちに向かってくる途中だった男が人質に振り返ろうとする。

なるほど。この男はなかなか頭が良い。わたしを止めるための人質にしようってことだ。

### 瞬走壱式

「お帰りくださいませ〜お客様」

でも残念。高速移動魔法でその男に最接近。

男の銃を持つ右腕を掴む。そのまま背負い投げの体勢に持っていく。もちろん普通じゃないよ？ 本来は背が先に床に着くけど、わたし

のは腹から先に床に着く。  
つまり、

「ぎゃあああああああああ！」

顔面、胸、腹、その・・・えっと、男の人にとってとても大事なところが、勢いよく床に打ち付けられるってこと。

投げられたその男が顔や大事なところを押さえながらのたうち回る。ポタポタと顔から流血。



「お帰りはそちらじゃありません〜ん」

マナクル  
紫光瞬条

ジェラルミンケースを持った男が逃亡を図ろうとしたから、高速バインドをプレゼント。

ミイラ巻きにしてそのまま放置する。残り2人。

今さら逃げたって無駄だと言うのに、その2人はわたしに背を向けて逃げようとする。

瞬走き式

先回り。2人の行く手を遮るように仁王立ち。

「お帰りなさいませ〜お客様」

「ヒッ」って小さく悲鳴を漏らして急停止した2人。

咄嗟に銃口を向けてくる。そんな震えた手で当たるわけが・・・

「ないでしょっ!」

二人の間を通るようにダツシユ。すれ違い様に、

瞬閃牙衝撃・二拳打ち

1人に右拳打、1人に左拳打をプレゼント・フォー・ユー。

呻き声を出しながら吹っ飛ぶ2人を「た〜まや〜」っと見送る。

ミッシヨコンコンプリート。念話で『こちらレヴィ。犯人の全滅を確認』とルーテシア達に送る。

するとすぐに陸士部隊が突入してきた。

小隊長さんらしき人に「君、ケガはないかい？」って訊ねられて、「わたしより犯人の心配した方がいいかもです」と答えておく。

「レヴィーっ！」「レヴィお嬢様ーっ」「

ルーテシアとセインとデイドが駆け寄ってきた。

わたしも大きく手を振って「おーっ！」「って元気&無傷アピール。「大丈夫？ どこか痛くない？」ってわたしを抱き寄せながら心配するルーテシア。

「大丈夫。髪を引つ張られたくらいだし」って苦笑。あんなザコに傷ひとつ付けられ様なわたしじゃないのです。

「人質は全員無傷。犯人グループは壊滅。お手柄ですね、レヴィお嬢様」

「セインとデイドが居てくれなかったらこんな簡単に終わらなかつたよ。」

だからありがとう。セイン。デイド」

「いえ、お役にたてて良かったです」

「人質救出。うん、これだけ事件解決に協力しておけば、シスターシャツハからのお説教も無くなるかもだし」

「動機が不純過ぎる……」

事件解決に気を緩めて笑っていると、「レヴィ」って声を掛けられた。

振り向いてみると、そこには執務官の黒い制服のフェイトさんと、本局員の青い制服を着たルシリオンとシャリオさんが居た。

フェイトさん達と軽く挨拶を交わし終わると、「聞いたぞレヴィ。たった一人で暴れたんだってな」ってルシリオンが呆れ口調で言った。

「だって小さな子供いたし、殴られてケガした人だっていたんだもん。」

もしその暴力が子供に向かったら嫌だったから。わたし、間違ったことしてない」

別に注意されたとか怒られたわけじゃないのに、プイツと顔を逸らす。

ルシリオンは本当に驚いた風に見開いて、でもすぐに「そうかって笑った。

わしつと頭を掴まれて、そつと優しく撫でられる。

「本当に良い子だな、レヴィは」

「むっ、子供扱いしないでよ。もう子供じゃないし。ていうかもおやめろよお」

口ではそう言うけど、ヴィヴィオが言った通りこれは気持ちいい。これはプロだね、ルシリオン。そう、頭を撫でるプロだよ。

顔が気持ち良さでとろけそうになるのを自覚してハツとする。

ルーテシアとセインとデイド、それにフェイトさんとシャリオさんもニヤニヤしてた。

「べ、別に嬉しくなんかないんだから！」

ガァーって吼えるようにルシリオンの撫で攻撃から離脱。

というかさつきから「ツンデレ」言うなセイン。

「えっと、一応事件に関係しちゃったって事で事情聴取したいんだけど。いいかな？」

フェイトさんがわたし達の事を微笑ましく眺める。

そこに、「このガキがあああああッ！」って怒声が響いた。ルシリオンが動く。わたし達を庇うように、わたしが背負い投げ決めた男との間に割り込んだ。

男は、顔面から流血してるのもお構いなしに、陸士部隊の制止を振り切って、隠してたデバイスを起動、ゴツイ銃をこっちに向けてた。ザワって体が震えた。ルシリオンから発せられる魔力が原因。

男がトリガーを引いて、赤い魔力弾を撃った。フェイトさんがルシリオンに遅れて動く。

魔力弾は、蒼い魔力で覆われた左掌を突き出したルシリオンへ。

### ソニックムーブ

フェイトさんはソニックムーブで男の取り押さえに。

もう何も怖くなんてない。ルシリオンがわたし達の前に立って守ってくれるんだから。

グシャ。放たれた魔力弾がルシリオンの左手に握り潰された。

「私が盾となっている時点で、レヴィ達には指一本として触れる事は出来ない」

潰された魔力弾を確認するようにルシリオンは左掌を開いて振る。蒼い燐光がハラハラと零れて綺麗だった。

「くそっ！ 放しやがれ！！」

フェイトさんに取り押さえられた男がまだ足掻くけど、陸士隊からのバインドを何重にも掛けられてようやく沈黙。連行されていく犯人グループを黙って見送って、ようやく終了……だったらよかったんだけど。

この後、僅かとはいえ事情聴取をくらったのがメンドーだった。まあ担当がフェイトさん達だからそれだけで済んだんだけど。

で、解放されて、次元港を後にしようとしたところで、

「ルーテシア、レヴィ。今日から二泊三日、泊まってくれるんだっ  
たよね？」

フェイトさんが確認してきた。そのためにクラナガンに来ただけ  
ど。

まさか、フェイトさんとルシリオンが帰ってきたからやっぱりいい  
や、なんてことにならない……よね？

「そつか。ありがと。私とルシル、それになのはもまだ帰れそうに  
ないから、ヴィヴィオをよろしくね」

「レヴィ、ルーテシア。何かあったら連絡してくれ。全力で帰って  
くるから」

「仕事が残ってるので、どんな手を使っても帰って来れませんよ、  
ルシリオンさん」

「バカな。もし家事をされていて何かあったらどうする。たとえば火  
事とか」

「心配し過ぎだよルシル。ヴィヴィオもルーテシアもレヴィも子供じゃないんだから」

「怪しい男が家に侵入して」

「はいはい。ルシリオンさん、ヴィヴィオちゃん達は強いですから、少し見ない内にダメな方向に変わったルシリオンに絶句しながら、フェイトさんとシャリオさんに連行されてくルシリオンを見送った。

「ヴィヴィオの言う通りとんでもない親バカになっちゃたね、ルシリオンさん」

「あたしはアリだなあ。昔のルシリオンさんってどっか近寄りがない雰囲気出してたし。」

ああやってどこにでもいそうな親バカなお父さんっていうのは好きだな。なんていうかシャルロット化？」

「それはそれで近寄りがたい感じがしますが・・・」

まあとりあえず。ルシリオンは徐々におバカな方へと壊れていくだろうって感じ？

++++Sideレヴィ フェイト++++

地上本部へ帰る途中、私の運転する車の助手席に座るルシルが溜息を吐いた。

それは落胆じゃなくて安堵から来る溜息だっていう事は判る。

産業スパイに盗まれたデータは、言わばセレスの遺品だ。

“テストメント”が生み出した“アギラス”やバトルスーツなど。それらはこれからの世代に有効的に利用されるべき“力”。セレスもそれを望んだ。

それを悪用しようだなんて許せない。だからそのデータが狙われているかもしれないって情報が来て、私とルシルは動いた。

後手に回ってしまったけど、データは無事に取り返す事が出来た。

「今回はレヴィ達に大きな借りが出来ちゃったね」

レヴィ達が動いてくれなかったら、人質にもつと負傷者が出ていたかもしれない。

ルシルは「そうだな。フフ」って、私に同意したあと小さく笑い声を零した。

後ろの座席に座るシャーリーが「どうしました？」って訊ねた。

「レヴィの事で少しな。JS事件の時の彼女と現在の彼女のギャップが可笑しくて。

この世界から離れていて、次に会ったらあんなに良い子になっていた。

許されざる嫉妬レヴィヤタンではなく、レヴィ・アルピーノとして生きている。

今回はちよつと無茶をしたが、それでも褒めてやりたいと思う」

JS事件の時のレヴィ、それとルーテシアは物静かだった。

それが今じゃあんなに明るくて、優しく、面白くて、可愛い女の子になった。

シャーリーが「そうですねえ。あ、でもルシリオンさんも変わったっていう事では同じですよ？」って首を傾げる。

「昔の同僚と会う度よく言われるよ。お前変わったな、って。自覚しているから文句は言えないが。良い意味でのセリフだからな。……フェイト、シャーリー。私が変わって、二人はどう思う?」その問いに考える時間なんて要らない。だから私は即答する。

「ルシルはルシル。どれだけ変わっても、その思いはずっと変わらないよ」

「わあ。ごちそうさまですフェイトさん」

バックミラーに映るシャーリーが少し頬を染めて笑う。し、し、し、し、しまったあああああああああ！

「何をそんなに赤くなってるんだ?」

「もお、ルシルのバカ!」

アクセルを無意識に踏み込む。

「おいフェイト。スピード出し過ぎ。ここはサーキットじゃないぞ」

「フェイトさん、テレテ可愛い?」

「やあああああああっ!」

恥ずかしさのあまり絶叫しながら、私はなくな、車走らせた。





それゆけボクらの魔拳少女リリカル レヴィたん (後書き)

レヴィ

「見たっ!? 見た見た見た見た見た見た見た見た見たっ!?」

ルーテシア

「やっと、やっと本編に出られたああーっ!」

レヴィ

「新エピソード登場を祝して宴会じゃーっ!」  
「やっぱりっ! 見たか、今回のわたしの大活躍を!」

ルーテシア

「見たああーっ!」

レヴィ

「アーツハツハツハツ!」

ルーテシア

「この日をどれだけ待ち望んだか・・。  
これも前回のおまじないのおかげだね

ねえねえレヴィ。わたしにもあのおまじないの詳しいやり方教えて

」

レヴィ

「いいよ ちょっつと耳貸して。」「」「」「」「」「」

ルーテシア

「ふむふむ」

ルシル

「……なあレヴィ」

レヴィル

「「おわっ!? ビックリした!」」

ルシル

「それ、願いを叶えるおまじないじゃなく、相手を呪い殺す呪術だぞ」

レヴィ

「呪い?」

ルシル

「ああ。気を付けた方がいいぞレヴィ。

人を呪わば穴二つ、という言葉があつてな。レヴィ、誰を呪つたか知らないが、もしかしたら次回辺りで、それはもう酷い目に遭うんじゃないか?」

ルーテシア

「……ごめん、レヴィ。少しの間、離れて暮らそ?」

レヴィ

「え、うそ? ルーテシアがわたしを見捨てようとしてる?

ね、ねえルシリオン。助けて……って、いない!?

いつの間に

あああああつ! そそくさと逃げ出してるっ!

ルーテシ

もいない! やだやだやだやだ! わたしを1人にし

ないでよおお!」

## そら来たみんなの魔法モデル リリカルガールズ（前書き）

くふふ、ようやく本エピソードの最終話までの流れを確定。

どれだけの話数かはハッキリと判りませんが、年内には完結編へ入れそうな気がします。

『ハコにわ』も完結させてからと思っていましたが、完結編は下手すれば『十字架』以上の長編（なにせ・・・ニヤニヤ）になるやもしれませんし、すぐにでも始めないと辛いかもです（おもに歳関連）。『ネギま』 『ハコにわ』との3作同時連載・・・となりますかね・・・。

ま、完結編が小説家になろう卒業作品になるのは確かですな。

本当なら『C3シーキューブ（なにおう！？）』や『終わりのクロニクル（まおい）』といった作品にも手を出したかったのですが。

## そら来たみんなの魔法モデル リリカルガールズ

＋＋＋ Side ヴィヴィオ ＋＋＋

午前までの授業も終わって、わたしは今日から家に泊まることになってるルールとレヴィの居る聖王教会を目指す。

あ、もちろんわたしだけじゃない。友達のコロナとリオ、それにイクス、アインハルトさんも一緒。

アインハルトさんはレヴィと組み手をしたいみたいで、こっちにレヴィが来ると知ってちょっと嬉しそうです。

イクスは聖王教会がお家だから、帰るってというのが正しいのかな。

「ミッドでルーちゃんとレヴィちゃんに逢うのってインターミドル以来だね」

「うんつ。だから今日から3日はとことん遊ぶつもり」

コロナにそう答えただけど、わたしは“テストメント事件”の時に逢ってる。

でも今回のような楽しい事じゃなくて、操られたルシルパパとの戦いで、だ。

ううん、その事は忘れよう。だって、ルシルパパは確かにこの世界に居て、お話しできるし遊ぶことだって出来る、だからもうそれだけでいいんだ。

「あ、あれってクラナガンの次元港だよな？」

リオが緊急ニュースを放送してる巨大モニターを指差した。

確かにクラナガンの次元港で・・・あれ？　ちょっと待って。ルルーとレヴィがミッドに降りるのは、そのクラナガンの次元港だった、よね。

「あの、ルーテシアとレヴィは大丈夫なんでしょうか？」

「あ！　イクスの言う通りだよ。船が到着する時間と被ってるし！　連絡取れるかな・・・！？」

「待つてくださいコロナさん。ニュースをよく観てください。今映っています民間協力者、というのは・・・レヴィさん、それにセインさんとデイドさんでは？」

慌てるイクスとコロナを止めたアインハルトさんが指を差す。

一般人の撮影した映像に、どうも見覚えのある防護服を着た女の子が映り込んで・・・。

それに教会の修道服を着た二人。レヴィとセインとデイドで間違いない。

ルルーは映ってないようだけど、絶対あの場所に居る。

そのレヴィたち民間協力者のおかげで、犠牲者が一人も出なかったって紹介されてる。

「あ、フェイトママ！　それにルシルパパも！」

フェイトママとルシルパパがインタビューされてる場面に移った。

だからつい声を大きくしてしまった。周囲からの視線が強まる。

わたしは、えっとみんなも苦笑いをして、その場をどうにか誤魔化し切れた。

別に隠してるわけじゃないけど、なのはママもフェイトママもすごい有名人。

というか“機動六課”や“特務六課”とか、大きな事件を解決した部隊の前線の人達は漏れなく有名人。

中でも有名なママ達。その娘となると、やっぱり大変だったりする。

「ヴィヴィオのお父さん、すっごく綺麗でカッコいいよね」

「うんうん。美人ママに美人パパ。羨ましいぞ〜」

コロナとリオにほっぺを突かれる。大切な家族が褒められると、とっても嬉しい。

あ、でも美人パパって言うのはルシルパパちょっと嫌がるかも。

わたしは謙遜しないで「もちろんっ。自慢のママとパパだよ」って笑う。

フェイトママとルシルパパ（この前プレゼントしたヘアゴムをしてくれる）がインタビューを受けてるのは地上本部みたい。

ミッドに降りてきてたんだ。でもすぐに帰っちゃうんだろうな。

すごく残念だけど、仕事があるって言うてたし。だからルールとレヴィが来たんだから。

「ヴィヴィオさんのお父様とは一度きちんとお会いしてご挨拶したいですね」

「ルシリオンさんと話したのってモニター越しだったもんね」

「うん。ヴィヴィオの友達としてちゃんと話してみたかった」

「わたしもお会いして、シャルの事でお礼を言いたいです」

ルシルパパはわたしの友達にも人気者です。嬉しくてふにやっつてなる。

ルシルパパとは“テストメント事件”が解決してから半年くらい経って、ようやくモニター越しで話す事が許された。

その時に、ルシルパパにわたしの大切な友達を紹介できた。

でも通信できる時間が限られてて、ちゃんと出来なかったけど。

それ以来、ルシルパパとリオ達との接点はほとんどないって言うてもいいかもしれない。

「たぶんこれからはちゃんと会えると思う。

もうそれほど管理局から制限を受けてないみたいから」

管理局従事っていう形からしての行動制限を受けてたけど、もうそんなことはない。

だから地球、なのはママの出身世界まで旅行に行けたんだから。また行きたいなあ。

「洗脳されて操られてた、んだよね、ルシリオンさん。ニユースで持ちきりだったから憶えてるよ」

「ヴィヴィオさんのお宅で拝見した写真に写っていた、ヴィヴィオさんのお父様と紹介されていた方がニユースで取り上げられていたのを見て本当に驚きました。

お母様ともどもとても有名な方だったのでですね」

「元管理局本局の超一等空佐<sup>エリート</sup>で、管理局史上最強の空戦魔導師<sup>スカイマスター</sup>。これを聞いただけで、なんていうか、こう・・・うわって感じ？」

「リオ、それだけじゃ解らないよ」

リオは両腕をブンブン振って興奮気味。

えっと、アインハルトさん？　なんでそんなにニヤニヤしてるんで



すか？

無言なのがかえって不気味で少し怖いです・・・。  
イクスに「ニヤけてますよ？」って指摘されると、「恥ずかしいところを見られました」ってちょっぴり反省モード。

「いつかお手合わせ出来ればいいのですが・・・」

やっぱりそんな事を考えていたんですね、アインハルトさん。でもそういうわたしも一度今のルシルパパと戦ってみたって気持ちがある。

今までにも真つ向から戦った事はあるけど、一度はバエルって人に操られて（あんまり憶えてないけど）。

2度目は“機動六課”の隊舎で、テルミナスって人に操られて（それもつつすらだけど）。

3度目は本局で、操られていたルシルパパと。4度目は公園で、ルールと一緒に戦った。

どれもお互いの意思じゃない中での戦い。だからカウントに入らない。

今の、成長したわたしを見てほしい。ちゃんとお互いの意思がある中で。

「今年もインターミドルの予選会前にカルナージに行きますから、そこでなら、たぶん」

「それは楽しみですね」

アインハルトさんが胸の前に持ってきた右拳をギュって握る。

ごめんなさい、ルシルパパ。勝手に約束してしまいました。

それから今年のインターミドルの目標とかの話をしなから、聖王教会へ向かった。

＋＋＋ Side ヴィヴィオ レヴィ＋＋＋

次元港からデイドの運転する車に揺られて辿り着いたのは、ベルカ自治領の聖王教会本部。

ここ聖王教会で、ヴィヴィオ達と待ち合わせする約束だ。

デイドは車を駐車しにいつて、わたしとルーテシアは、セインの案内で敷地内を歩いている。

そこに、「セイ~~~~ン」って伸びた声がどこからか聞こえてきた。聞き覚えあり。

わたしとルーテシアの前を歩いていたセインがビクツとなって固まる。

三人揃って、声のした方へと視線を移す。そこに居たのは・・・

「う、シスターシャツハ・・・！」

「「オットー」」

両手を腰に当てて仁王立ちしているシスターシャツハと恭しく会釈してるオットー。

シスターシャツハは半目でセインを軽く睨んだ後、わたしとルーテシアを笑顔で見た。

「いらっしゃい。ルーテシア、レヴィ」

「長旅お疲れさまでした。ルーテシアお嬢様、レヴィお嬢様」

ビクつくセインを横目に、わたし達は「いらっしゃいました」

と返す。

そしてシスターはまたセインを見て「話があるので、あとで私の部屋に来なさい」と問答無用な感じで告げた。

セイン、大ピンチ。さあこの場をどう乗り切るの、セイン。

「ちよ、ちよつと待つてシスターシャツハ!

確かに掃除サボって抜け出したのは悪いって思うけど、でも今回はそのサボりのおかげですごく役に立っただよ!」

やっぱり次元港での活躍っていうカードを切るんだ。

まあそれくらいしかないし、セインもそれで説教が無くなるって読んでたし。

で、その切ったカードの効果はというと・・・

「次元港での事件なら、先程フェイトさんとルシリオンさんから窺いました。

デイドと共に人質救出に一役買ったそうですね」

「お、おお、そうそう、そうなんだよ! あたしが現場に居たから、被害も少なかったんだから!」

「そうですね。あなたのデープダイバーがあつたからこそその結果だというのは解りました」

「さっすがシスターシャツハ、話しが解るう」

お、これは決まったかな。思いの他シスターシャツハの反応が良い。セインもどこか勝ち誇った、やい、これでお説教は無しだぜ。って顔をしてる。

セインはスキップしそうな感じで「そんじゃあたしがルーお嬢様と

レヴィお嬢様を案内するからっ」って、シスターシャツハの脇を通り過ぎようとした。

「だけど、むんずつと襟首を掴まれて「ぐへえっ？」ってカエルがぺしゃんこになった時のような呻き声を漏らすハメに。」

「げふつえほつえほつ。し、シスターシャツハ・・・？」

いきなり襟首を掴まないでよ。危うく目ん玉がポーンするところだったじゃん」

咽ながら抗議するセインだけど、シスターシャツハは謝罪とは別の言葉を告げた。

「話はまだ終わっていませんよセイン。」

つまり、それはそれ、これはこれ、です。私の言いたい事が解りますね？」

「え、え〜と・・・サボった事に変わりないから、お説教はしちゃうぞ　ってこと・・・？」

シスターシャツハがニコリと笑った。

はい、セインの淡い期待が砕け散りました。切り札は没カードへ転落。

ルーテシアと二人で苦笑いしながら、セインの絶望に染まった表情を眺める。

「ではオットー。私はセインと大切なお話があるので、お二人をご案内してください」

「た、助けてルーお嬢様！　レヴィお嬢様！」

何か見たことあるよこの構図。えっと、どこだったかなあ……？  
あ、そうそう。シャルがイクスを診察しに来た日にも似たような事  
があったっけ。  
んー、セインはどうやらこういう星の下に生まれたのかもしれない。  
常にお説教をくらうスキル……そんなの嫌過ぎる……。  
必死に助けを乞うてくるセインを、わたしは「またね〜」って手を  
振って見送った。

「それではお部屋にご案内します。陛下と御学友の皆様が来るまで、  
そちらでお待ち下さい」

「はい」

セインの事はもう忘れちゃって、わたし達はオットーに続いて教会  
内へと足を踏み入れた。

大きな噴水のある広場を通っていると、噴水の前でレトロなカメラ  
で写真を取っている女性がこっちをじーって見てきたのに気付く。  
オットーもその視線に気付いて、わたしとルーテシアを庇うかのよ  
うに女性とわたし達の間立つ。

そんでわたしもルーテシアを背後に庇うように立ち位置を変える。

「あ、ごめんなさい。変に警戒させちゃったみたいね。

アタシはグロリア・ホド・アーレンヴォール。ミッドチルダへは仕  
事で来たの。

で、今はちょー有名な聖王教会を観光中なの、クフフ？」

骨董品とも言えるごついカメラを胸の高さまで掲げて笑う。

グロリアは赤いグロリオサがプリントされた白生地の上シャツとシ  
フオンスカート姿。

写真家か記者、そんな辺りの仕事をしてる人かな、と思ったりもし

た。  
ただそれよりわたしは、グロリアの身に付けている物品、そのデザインに注目してる。

(なにあれ？ あんな偶然ってある？)

耳飾りは、右が黄金のローヌ十字で左が翡翠の聖ペトロ十字。  
指環は白銀のマルタ十字と鋼色のロシア十字。ネクタイピンは燈黄のギリシャ十字。

偶然にしては出来過ぎてるというか。

色も形も“テストメント界律の守護神”の武装・聖典とおなじ。1stの白銀に2ndの黄金に6thの翡翠に8thの燈黄に10thの鋼。  
でもどう気配を探っても魔力のない人だし。やっぱり偶然？ でも偶然にしてはちよつと。

んー、念のためにもあとでルシリオンに連絡入れておいた方が良かったなあ・・・。

「仕事、ですか。ではこの子達へは何かご用が・・・？」

「そんな警戒されるとやっぱ悲しいんだけど。

そうね、ただ景色や建物を写すだけじゃつまらないって思ってる。  
だからちよーどいいモデル、特にかあいい女の子を見繕ってたってわけ」

『ねえ、レヴィ。あのグロリアって女の人、ちよつとマズいかも・・・？』

『ルーテシアもそう思う？ 気を許したら何か変な事されそうな感』

さつきからこつちを見てニコニコ笑う。ちよつと危ない人だ。暴走したシャルの危険度と同等、そんな感じだ。

オットーと話し合うグロリアは、「何枚かで良いからモデルになつてほしいなあ、なんて」って頭を下げた。

そこにあるのは純粹な願い。嫌な感じはしないし、ちよこつとだけでもいいかな？なんて思う。

ルーテシアをチラツツて見ると、肩を竦めて「ま、いいんじゃない」って苦笑。

「お二人がよろしいのであれば、僕としては何も言いませんが・・・」  
ただ、このお二人に危害を加えるような仕草を少しでも見せればただでは済まさないのだから

「だいじょぶだいじょぶ。クフフ、やったやった」

グロリアはその場でクルクル回って機嫌の良さを表す。

ピタツと止まって、「まずは一枚」ってシャッターを切る。

「ん。アタシの事はグロリアとでも呼んでね。で、えっと、名前を訊いてもいいかな？」

「ルーテシア・アルピーノです」

「妹のレヴィ・アルピーノ」

お互いに自己紹介した。彼女は「姉妹かあ。クフフ、それは素敵だ」って微笑む。

まあ写真を撮られるだけで、あれだけ喜んでもらえるってというのはこつちも嬉しい。

「クフフ。それじゃ、まずは噴水の前で、二人並んで」

そんなこんなで色々ポーズを取りながら撮影って事になった。

＋＋＋ Sideレヴィ ルーテシア＋＋＋

「クフフ。いいよいいよお？」

えーっと、どうしてこうなったのかなあ？

レヴィと向かい合って、両手を取り合って頬をくっつけて視線はカメラのレンズへ。

そこでフラッシュ。レトロなカメラのシャッターを切るグロリア。これで何枚かな・・・？ 少なくとも10枚は撮ったと思う。

枚数的には少ないけど、ポーズとかで色々疲労が溜まる、特にメンタル面で。

「次！ 次はどういう風に撮るの！？」

「今度は、この衣装を着て撮ってもらおうよ！」

ほら、ルーお嬢様、レヴィお嬢様。あたしの貸したげるからっ」

特に疲れる要因が、 の声の主x2。

二人に訊ねられたグロリアは「聖王教会に所属する人ってもっとお堅い感じだと思ってあけど、シスターがこんなにノリの良いなんて、嬉しい誤算だよ、クフフ」って心底楽しんでいる。

「セイン、シャンテ。またシスターシャツハに怒られるよ？」



「それなら大丈夫」

セインに修道服を胸に当てられたレヴィが嘆息けど、二人はお構いなし。

シスターシャツハはどうやら少し本部を空けているよう。だからそんなに余裕を見せてる。

シャンテがそれを注意深く眺めて、「あーダメ。レヴィっちの方が胸あるし」と悪気のない一言。

セインが硬直。静かに自分の胸を見下ろしてぺたぺた触って、次にレヴィのそれなりに大きな胸を見た後、がくりと両膝をついた。

レヴィはレヴィで「レヴィっち言っな。次言ったら判るよね？」と警告。

「クフフ。シスターセイン。そんなに落ち込まなくてもいいよお。世の中は胸の大きさが全てじゃないってどこかのレディーが言ってたよ」

「グロリアさん。説得力がゼロなんですけど」

全員の視線がグロリアの豊満な場所へと一点集中。

まあグロリアは大人の女性だし、子供なわたし達より大きくて当たり前だよな。

レヴィはシャンテから、へこんだままのセインから引っ手繰った修道服を受け取って、

「どこで着替えようかなあ・・・？」

「こっちこっち。この植え木の陰で着替えればいいよ」

シャンテにそれなりの大きさの植え木の陰に引つ張り込まれる。ちよつとちよつと。周囲には参拝客（見えるだけじゃ数人だけ）が居るのに、堂々と着替えられるわけが・・・

「近くに空き部屋とかないの？ さすがにこんな空の下で、下手すれば痴女の疑いが掛けられてしまうような行動したくないんだけど」

「そ、そう！ うちの大切な妹にそんなはしたないマネさせるわけには・・・！」

「でもこの近くに空き部屋はないはずだし。大丈夫だって、ちゃんと人が近づかないように注意するから」

「じゃあ仕方ないか」

「そんなあっさり！？ 待ってレヴィ！」

やっぱりレヴィの感性はどっかおかしい。

グロリアも「そこまでして着替えなくても」って、嬉しい事に止めに入ってくれる。

そこに、セインがようやく復活して、

「あたしのデーパーダイバーで空き部屋まで連れてって、着替えさせてまた戻ってくればいいよ」

そう提案した。こんな外で着替えるよりは断然マシだ。

その案に反対意見は当然無くて、セインと手を繋いだレヴィが地面に潜っていった。

待ってる間にも、わたしとシャンテは二人で写真を撮られることになっただけど、

「待つててば！ セイ ほえ？」

レヴィとセインが一分もしない内に戻ってきた。  
この場に居る全員が、レヴィの今の格好に啞然となる。  
だって今のレヴィの格好は……

「レ、レヴィ……？ ハツ、い、今すぐ服を着てッ……！」

「~~~~~ッッ！！！！ いやああああああああああ  
あああッッ……！」

レヴィが体を抱くようにして、悲鳴を上げながらしゃがみ込んだ。  
フレッシユグリンの下着姿で、いきなり人目のある場所に登場し  
た所為だ。

すぐにセインが「ごめん！ すぐにどっかの部屋に……！」って、  
レヴィを自分の体で隠す様に抱きついて潜っていった。

わたし達、グロリアを含めて周囲を見渡す。男の人は……運良く  
居ないのを確認。

ご年配の女の人達が目を丸くしてこっちを見てて、わたし達は必死  
に誤魔化す事に。

「う、う……。セインに辱められた」

「ごめん！ ホントにごめんなさい……！」

私服のワンピース姿で戻ってきたレヴィがガツクリ肩を落としてる。  
一体何があったのか訊いてみたら、入る空き部屋入る空き部屋に着  
替えようとした直後に人が入ってきたみたいで、ようやく大丈夫だ  
と判断したところで服を脱いだ。

その直後に人が入ってきて、急いでディープダイバーで脱出。脱出した先にも人目があつて、気付けばこっちに戻ってきてしまったということだった。

「うっん、もういいよセイン。ただ運が悪かったただけだから」

「不幸中の幸いで、男の人に目撃者が居なかったってことだけど」

「ごめんなさい。アタシが写真を撮らせてってお願いしたから」

「そんな、グロリアに悪いとこなんてないよ。

はあ。それにしても何だったのかなあ……。人を呪わば穴二つつて」

「なにそれ？」

「何かよく判んないんだけど、下着姿でここに出て来た時、人を呪わば穴二つつて聞こえた気がして……。きつと気の所為だと思ってる。どういう意味か考えてみるけど、結局意味が解らないから切り上げる。」

「あつ、居た居たーっ！」

この声は。振り向くと、こちらへ向かってくるヴィヴィオ達を発見。駆け寄ってきたヴィヴィオ達と挨拶する。今ばかりはセインもシャンテもしっかりと挨拶。

相手は、聖王教会の象徴たる聖王の子孫とも言えるヴィヴィオだからね。

そして話題は次元港での出来事変わる。

「レヴィさん、お怪我などはありませんでしたか？」

「心配してくれてありがと、アインハルト。」

わたしは全然問題無しだよ。こっちはマジな戦争を潜り抜けたんだし。

あんな数だけのド素人相手に遅れはとらないって」

「そうは言いますが、危ない事には変わりないですから」

「ルルーも大丈夫だった？」

「一応ニュースで民間協力者は無傷って出てたけど」

アインハルトとイクスに心配されてるレヴィは、照れくさそうに頭をかく。

わたしもヴィヴィオとコロナに心配されるけど、わたしはほとんど何もやってない。

リオが「うん、本当に何も無いみたい」って安堵してくれた。

「あ、そうだ聞いてよっ。あたしさ、人質救出に貢献したのに、シスターシャツハに説教くらったんだよ！？」

まだ言ってるんだセイン。その話はもう過ぎたことなのに。

話を聞いたイクスが「セイン、また掃除などをサボったんじゃないんですか？」って訊くと、セインは少し黙った後「うん」って頷いた。

ヴィヴィオ達の反応は「それは自業自得だよね」って嘆息と苦笑を洩らす。

わたしとレヴィとシャンテは「そうだよね」って同意していると、

袖をくくん引つ張られる。

グロリアだ。両目にキラキラな を浮かべてる。ま、眩しい・・・。

「もしかして、この子達って貴女と同じインターミドルで活躍した・

・・・」

「うん。ヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオ。大切な友達だよ」

「やっぱりっ　ねえねえ、あの子達も撮りたいんだけど。アタシ、ファンなんだよね　」

キラキラ度がハネ上がったのは気の所為じゃない。

たぶん止めてもグロリアは勝手に交渉に入るんだろうね。

だったら何か問題を起こす前に、わたしから事情を説明して協力を取り付けた方がいいかも。

雑談してるヴィヴィオ達に、「ちょっといい？」と声をかけて説明開始。

グロリアも「アタシに記念と思い出をお願いしますー」と頭を下げてくださいる。

「いいですよ。あ、撮ってもらった写真とかあとでもらえますか？」

「クフフ。もちろんですよヴィヴィオちゃんっ」

「じゃあ撮ってもらおっかな。アインハルトさんとイクスも、いいよねっ？」

「え？　あの、撮られた写真などは一体どうなるのでしょうか・・・？」

アインハルトは、自分が撮られた写真の行方が気になるよう。  
そう言えば、その事について何も訊いてなかった。ちょっと不注意  
だったかな？

「あーだいじょーぶ。モデルに無断で公表とかしないから。信じて  
写真は単なる趣味で、撮った写真はアタシのアルバムにしまっただけ。  
だから安心して、アタシに写真を撮られる方がいいのさ、クフフ」

アインハルトは「そう、なんですか。ヴィヴィオさん達が良いと言  
うのであれば」ってノリきじゃないにしても嫌じゃない、と。  
アインハルトが折れたら、もう残りのメンバーの心配はいらない。  
コロナとりオも初っ端からノリ気だし、ヴィヴィオとイクスもアイ  
ンハルトが良いと言った事で笑みを浮かべてる。

「クフフ 今日は何て運のいい日なの。主よ、感謝いたしますッ。  
ということ、さっそくみなさんには仲の良いシーンを見せてもら  
いましょうか。

シスターセイン、シスターシャンテ。お二人もどうぞ一緒に」

お騒がせシスターズも本格参戦。早速ポーズをとってるし。そして  
パシヤリ。

グロリアはどれだけ嬉しいのか頬をピンクに染めてニッコニコ。

「ささ、ずずいっとこっちへ来てくれたまえ。可愛く撮ってあげる  
から。

そうね、まずはヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんから先撮ら  
せてね。

もちろんそのウサギさんとネコさんも一緒にね。クフフ」

グロリアに手招きされて、ヴィヴィオとアインハルトは顔を見合わせる。  
導かれるままにグロリアの指差す場所に立って、アインハルトが一言。

「あの、このティオは猫ではなく一応雪原豹なんですが」

「え？ あー、それは失礼。でも、ニャアって鳴くし、てつきりネコかと。」

この子のお名前を訊いていいかな？ 名前があるならそつちで呼ばないと」

「あ、はい。この子はアスティオン。愛称は、ティオ、といいます」

「ティオちゃん、ね。よろしく、アタシはグロリアっていうの」

「ニャア」

軽い自己紹介が交わされる。にしても、ここでも言われちゃったか。アインハルトのデバイス・アスティオン（愛称はティオ）の外見は、どう見てもネコに見える。

気を取り直すためか、グロリアがコホンと咳払いして、

「ヴィヴィオちゃん、この子はウサギで良いよね？ ウサギに見えて実は耳の長い白クマとか」

「あはは、ウサギで合ってますよ。この子の名前は、セイクリッド・ハート。」

愛称は、クリス、といいます。クリス、ご挨拶して」



宙に浮くクリスが、グロリアの元まで飛んで、その短い右脚をスイッと差し出す。

「お、おお。握手を求められてる？ クフフ、よろしくねクリスちゃん。

クフフ。それじゃ、ヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃん、それにクリスちゃんとティオちゃんも、このレンズを見てね」

まずは二人を自然に立たせて、その腕にパートナーを抱きかかえさせる写真を一枚。

それから若干のポーズを付けさせて二枚。クリスとティオだけで一枚って撮る。

「じゃあ次は、コロナちゃんとリオちゃんとイクスちゃん」

「はい？」「き、緊張しますね」

次に指名されたコロナ達が、ヴィヴィオ達と入れ替わるようにグロリアのカメラの前に立つ。

そのトリオで、数枚ポーズを変えた写真を撮られる。

今度は場所を変えて、配置にポーズに防護服って色々変えて大撮影会。

「じゃあ今度は、みんな肩を組んで・・・スマイルスマイル」

++++ S i d e l i n e ++++ レヴィ ++++

いつの間に増えたギャラリーの視線の中、夕日を背にわたし達は嘖

水に腰かけて並ぶ。

セインとシャンテの姿はない。オットーとデイドに連行されていたから。

隣の子（わたしは、右にルーテシアで左にリオ）と手を繋いで、お互いの人差し指を立ててピースサインをつくる。

「んーいいですよー　　クフフ、それではラスト一枚いきまーす  
」

パシャッとシャッターが切られる。

かなりの疲労感とそれ以上にこんなに楽しい時間を過ごせた嬉しさで胸がいっぱいになる。

みんなそれぞれ顔を見合わせて、やり遂げた感の笑みを浮かべる。

「みんなお疲れ様。クフフ、とってもいい写真が撮れたよ。

現像したら、そうだね、ここ聖王教会に送るから。それまでお楽しみって事で」

グロリアが差しだしてきた右手の意味を察して、わたし達は握手に応えていく。

「さて、そろそろ帰らないと。今日はホントにありがとうだね。すごく楽しかった。

またどこかでアタシを見かけたら、声をかけてくれると嬉しいな」

ヴィヴィオとコロナが「こちらこそありがとうございました」「すごく楽しかったです」と感謝を返す。

イクスが「グロリアさんはこれからどちらへ？」と訊ねると、グロリアは「西部行って南部、東部、最後に首都と回ってから次元港って予定」って答えた。

ミッドチルダの一周旅行みたいな感じだね。ん？ 次元港ということとは、グロリアはミッドの人間じゃないんだ。

「そうそう。これ訊いとかないと。今年のインターミドルにはみんな出るの？」

「……………もちろんですっ……………」

「わたしはまだ決めてないかな」

ルーテシアとヴィヴィオとコロナとリオとアインハルトは即答。みんなはそのために毎日トレーニングを欠かしてないし。前回よりもっと上の成績を目指してる。

わたしは未だに悩んでる。ルーテシアとぶつかるのが嫌なんだよね。トレーニング旅行で、ヴィヴィオ達がカルナージに訪れた際の陸戦試合の時は、試合って形だからちゃんと戦うけど、大会のような本気の戦いとなるとどうも気が引ける。

ルーテシアは気にしないって言ってるんだけどね。

「わたしは出ないと思います。わたしは医療系を専攻してますから、スタイルが戦闘向きではないので」

イクスは攻撃系の魔法はあまり習得してない。治癒魔法を主とした補助型だ。

目標は、現代の医学じゃ治せないと言われた自分を治したシャルロット。

でもあれは魔術だから、その境地にまでたどり着けないって事は解ってるみたい。

それでも少しでもシャルロットに近づきたいって話を以前聞いた。それが恩返しとも。シャルロットがそれを聞いたら、やっぱり喜ぶ

だろうな。」

「そっか。応援してるから頑張ってるね。それじゃ、バイバイ」  
わたし達が見送る中、グロリアは大きく両腕をブンブン振りながら、去っていった。

「んーっ。撮影大会がこんなに長引くなんて思わなかったね」

コロナが背伸びしつつ、きっとみんなが思ってる事を代弁してくれた。  
ホント夕方になるまで付き合う事になるなんて思いもなかった。  
そこでふとヴィヴィオが時刻を確認。

「もうこんな時間・・・」

「もうちょっと遊んでいたかったけど、もう帰らないと」

「そうですね。残念ですけど。でもとても楽しかったです」

「うんっ。すごく面白かった」

コロナとリオとアインハルトは時間的にもそろそろ帰らないといけないみたい。

「コロナ様、アインハルト様、リオ様は僕が車でお送りします。  
そして、陛下とルーテシア様とレヴィ様は・・・」

「私がお送りいたします」

グロリアと入れ違いで来たオットーとデイド。  
二人がそれぞれ車で家まで送ってくれる事になった。  
駐車してある車の元まで一緒に行つて、オットーの運転する車が見えなくなるまで見送る。

「じゃあアインハルトさん、リオ、コロナ。また明日」

「はい。ヴィヴィオさん、ルーテシアさん、レヴィさん。ごきげんよう」

「またね、ヴィヴィオ、ルーちゃん、レヴィちゃん」

「バイバーイ」

「デイド。陛下達の事は任せた」

遅れてわたし達もヴィヴィオの家に向かう事になった。  
そう言えば高町家に訪れるのつて随分久しぶりかも。

「ただいま~~~~っ」

「お邪魔しま~~~~す」

高町家に着いた時には陽も暮れて、すぐさま夕食の準備に取り掛かる。

「食材はなのはママ達が買い込んでくれたから好きに使って良いつて」

「了解　それじゃなに作る？」

「それぞれの得意料理で良いんじゃない？」

わたしはそう提案。3人で話し合った結果、種類はオムライス一点。だけど味付けは3人バラバラで、ってことになった。一度に三つの味を堪能できるって寸法なのだ。

「わたしは普通のオムライスなら作れるけど」

「じゃあわたしはバターライスのオムレツを作ろっかな」

ヴィヴィオはノーマル（チキンライスだね）。ルーテシアはバターライス（ちょい手抜き感）の奴。

んー、ならわたしは・・・よし、いつちょアレを作ってみますか。わたしはヴィヴィオに「カレー粉ってある？」って訊いて、ヴィヴィオに場所を教えてもらう。

「レヴィ、まさか・・・アレ作るの・・・？」

「うん、そのまさか。カレー、チャーハン、オムライス。

わたしの好きなご飯を一緒くたにした伝説級の宝具。

その名もドライカレーオムレツ。意中のあの子のハートを狙い撃ち

スナイピング

ー

右手で銃をつくって、ルーテシアの胸にドッキューン

カロリーだとかそんな気にしない。だって十分魔位置に動いてるしね。

好きなモノは好きなんだから。

というわけで、それぞれ作るオムライスを決定した事で調理開始。

黙々と、時には雑談しながら作っていると、ピピピ、ってコール音が鳴る。

「あ、なのはママからだ」

展開されたモニターに表示されているのは、なのはさんの名前。ヴィヴィオがコールを受けて通信を繋ぐ。

『ヴィヴィオ』　ちよつと気になって連絡しちゃった　』

教導官の制服を着たなのはさん。仕事が終わったばかりみたい。

「こっちは大丈夫だよ、なのはママ。今ね、ルールーとレヴィと一緒に晩ご飯作ってるの」

調理中の鍋とかを見て、なのはさんは『そっか。今日はカレー？』って微笑む。

わたしの料理を見てそう推察するけど惜しいです。

「あ、レヴィがね。えっと、ドライカレーオムレツ？っていつのを作ってるの」

『おお、それはまたすごい。私は食べたことないけど美味しいってよく聞くよ』

なんと。わたしと同じ境地に立っている人がすでに居たなんて。ヴィヴィオとなのはさんのほのぼのした会話を聴いていると、モニター越しから二つの声が漏れてきた。

なのはさんが『フェイトちゃん、ルシル君。お疲れ〜』って、その声の主に労いをの言葉を掛ける。

「フェイトママとルシルパパもそこにいるの?」

なのはさんが『いるよ』と言うと、なのはさんの両隣りからひよっこり顔を出すフェイトさんとルシリオン。

ヴィヴィオの表情がパツと明るくなる。

まずフェイトさんが『ごめんね、ヴィヴィオ。今日は一緒に居られなくて』って手を合わせて謝った。

「うん。お仕事だからしょうがないよ。あ、ニュース観たよ。インタビューのやつ。」

フェイトママもルシルパパもキリッとしててカッコ良かった」

『ありがとう、ヴィヴィオ。ほら、ルシルも』

『ああ。ごめんな、ヴィヴィオ。さっさと仕事を片付けて帰るから』

「うん、気にしないで。ルールーとレヴィと一緒に居てくれるから平気。」

あ、そうだ。ルシルパパ、アインハルトさんの事憶えてる?」

『もちろんだ。ヴィヴィオの大切な友人の事を忘れるわけがない。』

それでヴィヴィオ。その、アインハルトがどうかしたのか?』

「えっと、アインハルトさんが一度ルシルパパと手合わせしてみたいて。」

だから勝手になんだけど、次のカルナージでのオフトレツアーでならきつと戦えるよって約束しちゃったの。ごめんなさい」

ヴィヴィオが申し訳なさそうに謝る。



モニターに映るのはさん達が顔を見合わせて、ニツコリ笑った。

『そうか。魔導師いさまの私で期待に応えられるか判らないが、その時は手合わせを願おう』

『『よかったね、ヴィヴィオ』』

怒られるかもって俯いてたヴィヴィオが顔を上げて、微笑んでるのはさん達を見る。

『その次のオフトレツアーにちゃんと参加できるように、仕事を溜めこまないようにしないとな』

『そうだね。じゃあルシル。こっちのデータ処理をお願いね』

こっちからは見えない、フェイトさんが表示したデータを見たルシリオンが硬直した。

なのはさんが『ルシル君？』って声を掛けると、『あははははは』ってちよつと壊れた感の笑い声を上げた。

フェイトさんも『やつぱりそうなるよね』って嘆息交じりの苦笑い。どうやらわたしとルーテシアがこっちに居る間は逢えないみたいだ。

『じゃあヴィヴィオ。なのはママ達はちよつと仕事の話があるから今日はこれでバイバイ。』

ルーテシア、レヴィ。ヴィヴィオのことお願いね』

「うんっ。お仕事頑張っつてね、なのはママ、フェイトママ、ルシルパパ」

「任せて わたしとレヴィが居る限り、ヴィヴィオの心配は要ら

ないから」

なのはさん達とヴィヴィオとルーテシアが手を振る。

ここでわたしは、「ルシリオン。今日、ちよつと気になる事があつたから後で連絡していい？」って訊ねる。

「ん？ ああ、判った。私一人の時間がいいなら0時以降に連絡入れてくれ」

「0時移行ね、判った」

念のために、グロリアの事を訊いてみよう。

わたしから見れば一般人なんだけど、十字架のアクセサリーの事がどうも引つかかる。

思い過ごし、杞憂ならいいんだけど。

みんなの視線がちよつと痛いけど、グロリアの無実がハッキリするまでは言えない。

＋＋＋ Sideレヴィ ルシル＋＋＋

本局の局員寮に用意してもらっている私の部屋で、レヴィから話を聴いていた。

フェイトとなのはに先程まで隠し事はダメって散々説教を喰らったが、レヴィが私に話、となるとどう考えても“界律”関係と覚えてしまう。

だから何とか誤魔化す・・・ことは出来ず、まず話を聴いてから教えると誓わされた。

「グロリア・ホド・アーレンヴォール？ それは何かのギャグか何かか？」

『どづいうこと？』

モニターに映るレヴィが首を傾げる。

「いいか。グロリア、ホド、アーレン、ヴォール。そのどれもが“栄光”を意味する単語だ」

『栄光・・・？ あっ！ アポリュオンのナンバー？？<sup>グロリアム</sup> 栄光！！』

レヴィはすぐにしまったって顔をして口を噤んだ。

どうやらヴィヴィオとルーテシアはもう眠ってしまったっているようだ。レヴィは大きな声を出さないように注意しながら話を進めてくる。

『じゃあ今日会ったグロリアって、グロリアムだったっていうの？』

「いや、それはないな」

『即答つて。何で断言できるのルシリオン』

何でも何も、テルミナス撃破からセレスに召喚されるまでの約3千年。

その間に“絶対殲滅対象”<sup>アポリュオン</sup>と色々あったからなんだが・・・とりあえず今言える事を言っておこうか。

「現在、絶対殲滅対象の16座席に栄光の座がないからだ。

そもそも16座席ですらない。今は13座席となり、ずっと空席の

ままだった栄光の座は消えた。

栄光グロリアムの他には空虚ウアーニターズ、威厳ディグニターズが消えている。

それに、夢想ソウニウムは革命レースノワエへ、支配インペリオールムは恩寵グラーティアへ、覚醒アギトは叡智スキエンティア、という風に名を変えている」

『……そ、それだけ消滅させてきたって事、だよね……』

「ああ。滅ぼして滅ぼして滅ぼし続けた結果だ。まだ湧いてくるがな。

とは言え、そのグロリアという女が、ピンポイントで界律テストメントの守護神の聖典と同じデザインの十字架を持っていたのは確かに気になるな」

レヴィの話だと、アークの白銀マルタ、ティネウルヌスの黄金ロレーヌ、雪姫翡翠ペトロ、プリンス・オブ・レイエンスの燈黄ギリシャ、フヴェルトヴァリスの鋼ロシアを持っていたらしい。

同じデザインだけならそう深く考える必要のない問題だ。なぜなら十字架のデザインは数が限られているからだ。

問題は、色がそれぞれの聖典と同じ配色ということだ。

偶然として片付けるには看過できない確率。

しかし、

「私達にはどうする事も出来ない。私はもう守護神ではなく、レヴィも殲滅対象じゃない。

もしグロリアが本当に絶対殲滅対象アポリュオンの一体、もしくは操られている一般人だとしても手は出せん。

私達には対抗する術を持ち合わせていないからだ」

すでに人の身である私には神秘はない。

レヴィも、“テストメント事件”以来、神秘を扱う事が出来なくな  
った。

お互いに完全な人間になったという事だ。  
神秘を打倒するにはそれ以上の神秘を以って当たるべし。この真理  
は永遠だ。

だからこの件には手を出せない。

『そう、だよね……。本当に本当の偶然ならいいんだけど』

「ああ、そうだな。そう願うしかない」

もし奇跡のような偶然なら嬉しいんだが。

ま、本当の“絶対殲滅対象”<sup>アボリユオン</sup>と関係している存在なら、“界律の守  
護神”<sup>テスト</sup>の誰かが動く。

その守護神に任せておけばいい。

『話は大体こんなところ』

「教えてくれてありがとう、レヴィ。あまり役に立てなくてすまな  
いが」

『うっん。聞いてもらっただけで十分。』

・・・心配ないよね？ もしものときは、守護神の誰かが来てくれ  
るよね？』

「ああ。絶対殲滅対象<sup>アボリユオン</sup>の現れるところに界律<sup>テストメント</sup>の守護神あり、だ」

レヴィは少し気持ちが楽になったのか、安堵した微笑を浮かべる。

私は最後に「レヴィ。明日明後日とヴィヴィオの事、頼んだ」とお  
願いしておく。

レヴィは『任せておいて。悪い虫がつかないように見とくから』と親指をグツと立てた。

それから二人で、おやすみ、と挨拶を交わし通信を切った。

「魔力も感じなければ神秘も感じない、か。ただの偶然で十字架を持っていた、ということであればいいんだが」

モヤモヤ感に気味の悪さを抱いたが、それ以上にデータ処理の疲労から来る眠気の方が強い。

フラフラとベッドに倒れ込み、私の意識は数秒とせずに途切れた。

そら来たみんなの魔法モデル リリカルガールズ（後書き）

レヴィル

「……………」

ルーテシア

「人を呪わば穴二つ……。ルシリオンさんの言ってた通りになっ  
たね」

レヴィ

ビクッ「た、確かに大恥をかいた……。藁人形に釘刺したから？  
たったそれだけで、呪いが掛かるっていうの……？」

ルシル

「下着姿を衆目にさらすとは……。哀れだな」

レヴィ

「うぐ！ べ、別に男の人に見られたわけじゃないもん！」

ルーテシア

「でも見られた事には変わりないよね」

レヴィ

「がはっ。ル、ルシリオン……。もうこれで大丈夫だよね？

呪いはこれでもう起こらないよね？（泣）今度は素っ裸ってことは  
ないよね？」

ルシル

「……………たぶん大丈夫だろ？」

レヴィ

「たぶんって言わないでえええー！ー！ーっ！！」

「今月、テイルズの新作が発売するという事で、たぶん更新速度が落ちるかと思えます。」



まだいるよ みんな大好き リリカルアクトーズ

＋＋＋ Side ヴィヴィオ ＋＋＋

聖王教会本部の大講堂の舞台裏。

わたしとアインハルトさんとコロナとリオとイクス、そしてルー  
ーとレヴィは、私服とは違う衣装を着て佇んでいた。

ついでにセインも、同じように舞台衣装を着て「何でこんな事に  
って呟いてる。」

「き、緊張しますね」

「インターミドルの時と同じくらいドキドキする」

アインハルトさんとコロナが緊張からか身震いしてる。

そんなわたし達に、騎士カリムが「本当にごめんなさい、みなさん  
って申し訳なさそうに、でもどこか楽しんでいるような表情を浮か  
べながら小さく頭を下げた。

頭を下げられたわたし達はただ「気にしないでください」と返す。

こうなったのは、始めは勘違いからだっただけ、けど今は自分の意  
思でこの場所に立ってる。

「ありがとうございます、みなさん。」

それでは、聖王教会本部主催。著者グローイ、スヴィーウルの詩  
”。

公演開始まで残り1分。大丈夫です、必ずみなさんの劇は成功しま  
す」

わたし達は「オーツ！」と右拳を頭上に掲げた。  
練習も短かったけどたくさんした。みんな、すごく頑張った。  
プロの人達に比べれば拙いけど、それは大目に見てほしい。  
あと1分でわたし達は、大講堂に立って演劇をする。  
わたし達それぞれ頭の中でセリフや動きを何度も反復し直す。  
あ、そうそう。どうしてこうなったのかと言うと、それは今朝にま  
で遡らないとダメ。

? ? ? 回想です? ? ? ?

P i P i P i P i 朝だよ P i P i P i 朝だよ

目覚ましコールが朝の訪れを報せてくる。

暖かな春（もう夏に差し掛かるかな）の朝陽が窓から入ってきて、  
カーテン越し部屋を明るく照らす。

もそもそとベッドで身じろぎする。わたしの隣、すぐにはルー  
ルの寝顔が。

反対側にはレヴィが・・・あれ？ いない。三人一緒に、わたしの  
ベッドで眠ったのに。

まずは目覚ましコールを止めて、ルールを起こさないように上半  
身を起こして、レヴィの姿を探す。

「あ

すぐに見つけた。きちんと捜すこともなく簡単に。

レヴィはベッドから落ちていて、バックドロップを食らったような  
姿勢で眠ってた。

なんて器用な。落ちたら普通起きるんじゃないのかな・・・？

小さく苦笑しながらベッドから降りて、レヴィを横にしてあげる。レヴィはちょこつと身じろぎしたけど、起きる事はなくそのまま眠り続けた。

わたしはパジャマからトレーニングウェアに着替えて、早朝ランニングに出かけようとすると、

「はにやう・・・？ ヴィヴィオ？」

レヴィが寝惚け眼でわたしを見ていた。

わたしが「ごめんね、起こした？」って謝ると、レヴィは「いつもは大体この時間に起きてる」って上半身を起こした。

「ランニングに行くの？ だったら一緒に行つていい？」

「え、いいけど・・・。大丈夫？ すごく眠そうだけど・・・」

「だいじょ〜ぶ。待つてて、すぐに着替えるから」

レヴィはもそもそと立ち上がつて、フラつきながらもトレーニングウェアに着替えた。

ルールーには、ランニングに行つてきます、ってメッセージを残しておいて、わたしとレヴィは早朝ランニングに出かけた。

ランニング中、レヴィが「なんかすごい首が痛い。なにかしたかな？」って首を捻つてた。

やっぱりバックドロップの事は気付いてなかったみたい。

家に帰つてくると、玄関にまで良い香りが漂つてきた。

二人で「ただいまーっ」って言うと、奥からルールーの「おかえりーっ」が返ってくる。

ダイニングキッチンに向かうと、ルールーがエプロン姿で朝ごはん

を作ってくれてた。

手を洗ってテーブルに着く。三人一緒に「いただきますっ」「って手を合わせた。

「わたし一人置いて、二人だけで出掛けるなんてズルい」

「あはは、ごめんごめん。ルーテシアはグッスリ眠ってたし、起こすのはどうかなあって」

ルルーはちよつと不機嫌。フォークをお口に銜えて、レヴィを下から覗きこむように上目遣いで見詰める。

レヴィもトーストを齧りながら、ルルーの視線から逃げるように明後日の方を見る。

ルルーは「ま、起こさないでくれたのは優しさだからいつか」って笑みを浮かべて、不機嫌オーラを消して朝食再開。

レヴィと二人して安堵の溜息「ほっ」と吐いて、今日のこれからの予定を確認する。

「昨日、デイドが送ってくれた時に言ってた、聖王教会でやる演劇を観に行くんだよね？」

「半年に一回催されるイベントで、今回は演劇なんだっけ？」

「うん。小さな子どもやお年寄りの人が楽しめる、難しい内容じゃないから面白って」

昨日、デイドに送ってもらってる時にわたし達が今日の予定はどうしようかって話し合ってたら、

“陛下。明日、聖王教会の大講堂で演劇が催されますので、よろし

ければ観覧なさってはいかがでしょうか？  
内容としてはそう難しいのではなく、広い年代のみなさまにも楽しめる喜劇だと聞いてます？

デイドがそう提案してきてくれた。

お昼過ぎからの公演だし、午前中には準備してるところとか見学しようかって話をした。

この事はもちろん昨日の内にコロナやリオ、アインハルトさんといクスにも伝えてある。

みんなもオットーから劇の話を聞いてたみたいで、二つ返事で一緒に演劇を観る事に賛成してくれた。

「それじゃあ朝ごはんを食べたら、聖王教会へゴー」

「オー」

それから、立てた予定通りにわたし達は聖王教会へ向かった。

途中でコロナ達とも合流して、辿り着いた聖王教会なんだけど……。

「どうかしたのかなあ？ 劇団の人達も居ないし、シスターたちも忙しそう」

リオの言う通り、それらしい人達を見かけない。

みんなでウロウロしていると、「あ、みなさん！」と声を掛けられた。

イクスだ。オットーとセインを連れて、わたし達のところにまで駆け寄ってきた。

軽く挨拶を交わして、今聖王教会で起こってる問題を聞いた。

「え？　じゃあ今日のイベントは中止になっちゃうんですか？」

「いえ、まだ中止とは決まってるわけではないのですが・・・」

イクス達の話によると、劇団の人達が事故によって来るのが難しいって。

すでに今回のイベントの告知も回ってるし、そう簡単に中止に出来ないみたい。

それを聞いたレヴィが「上はどうするって言ってるの？」って訊ねた。

「んー、あたしらシスターやブラザーで何か催し物、大聖堂で詩を歌うーとか、大講堂で神父達フザーの有りがたいお話しーとか、教会騎士の指南抗議いーとか」

そう教えてくれたセインが最後に「勘弁してよ」って頂垂れた。

するとオットーに「それも修道騎士やシスターとしての務め」って諫められる。

「歌うのが嫌ならさ、本来の劇でもやればいいじゃん」

「レヴィお嬢様、どっちにしる舞台に立たないとダメじゃん」

「じゃあ一生懸命に詩を歌うしかないよね」

「ルーお嬢様まで。なんだかアルピーノ姉妹が最近冷たい・・・」

セインはどうしても舞台に立ちたくないみたい。

目立ちたがり屋だし、こういうイベントなら真っ先に首を突っ込みそうなのに。

「でもわたしは、セインが歌ったり劇してるとこ観たいなあ〜。それに、劇に参加するってなんだか楽しそうだし、きつとハマるよ」

「だったらヴィヴィオも出てよ。とゆうかこの場に居る全員が出ればいいじゃん！」

? ? ? 回想終わりです? ? ?

セインのあの発言が、周囲に居た関係者や参拝に来ていた人達に聞かれて、聖王陛下<sup>わたし</sup>が劇に出るの? だったら観ないといけない、みたいな騒ぎになっていって、受けてもいないのにそれは瞬く間に広がっていった。

騎士カリムを始めとしたみなさんが、それは間違いです、って告げようとしたけど、わたしが出るって知った人達の楽しそうな顔を見て、わたしは出る決意をした。

だったら、と、アインハルトさん達も一緒に出てくれるって言うてくれた。

騎士カリムとシスターシャツハは今からでも遅くないって止めてくれたけど、わたし達は首を横に振った。

で、数分もしたら劇の登場人物を演じる役者の中にわたし達の名前が拳がっていた。

後戻りは出来ない状態。騎士カリムやシスターシャツハに散々お説教をくらったセインも、そもその原因として強制参加。

公演開始の13時半。それまでにわたし達は演技やセリフ回しをひたすら練習した。

「きつと上手くなります」

「そうですね。私達が上手くいかせます」

まず最初に登場するわたしとアインハルトさんが、舞台に拳がってスタンバイ。

「アインハルトさん。頑張りましょうね」

「はい。精一杯演じさせていただきます」

アインハルトさんと拳を突き合わせる。

『みなさな、お待たせいたしました。』

著者グローイ。“スヴィーウルの詩”。開演です』

シスターシャツハの開演を告げる声。

目の前に降り下がった幕が開いていく。

500人は入る大講堂は満員で、奥の方には立って観てる人もいる。

『それは、とある王国に住まう幼き英傑達が巻き起こした珍騒動でした』

語り部を担当することになったイクスの語りが始まると同時に、わたしとアインハルトさんをスポットライトが照らし出す。

++++ Side ヴィヴィオ なのは++++

「ヴィヴィオが劇に出るっ!?!?」



本局のレストラン街に、ルシル君の驚愕の声が響き渡る。

フェイトちゃんが「声が大き過ぎるよ！」ってルシル君の袖を引っ張った。

「夫婦漫才を始めるなら余所でやれよ〜」ってヴィータちゃんがからかうと、当然フェイトちゃんは顔を真っ赤にして「ヴィータ！」って怒鳴る。

「はい、休憩時間とは言っても静かにね〜」

私がニッコリしながら忠告すると、3人は静かになった。

私とヴィータちゃん、そしてフェイトちゃんとルシル君は、偶然バツタリと会って一緒に昼食をとろうしていた。

その時、聖王教会のシスターシャツハから連絡。

ヴィヴィオ、それにお友達が来れなくなった劇団の代わりに劇をするということ。

「こうしてはいれない。今すぐ聖王教会に行かなければっ！」

「とりあえず落ち着けセインテスト。てめえはまだ仕事終わってねえだろうが」

「そうだよルシル！ まさか私とシャリーに押し付けたりしないよね!？」

ヴィータちゃんとフェイトちゃんが半ば暴走しだしたルシル君を止めに入る。

で、ルシル君は「そうだな。忘れそうになっていた。だが、すまん」って、フェイトちゃんとシャリーに仕事押し付ける気満々で踵を返そうとした。

さすがにこれにはフェイトちゃんも「ライトニングバインド」と魔法を発動。

ルシル君は見事捕獲されてしまいました。

『ご安心を。劇はしっかりと記録しますので』

するとルシル君は「永久保存しますから高画質でお願いします」「っ  
てお願いした。

『お任せを』と返すシスターシャツハとルシル君は親指をグツと立てた。

「あ、そう言えば演目はなんですか？」

私がシスターシャツハと話している横で、

「ヴィヴィオ達が出るなら、どんな演目でも素晴らしい出来になる  
と思うぞ」

「セインテスト。少しは親バカを自重しとかねえと愛想尽かされん  
ぞ？」

「あう・・・別にそれくらいじゃ私のルシルに対するゴニョゴニョ  
・・・」

ごちそうさまって言いたくなるようなやり取りをしてる。

で、シスターシャツハの返事は『著者グローイの“スヴィーウルの  
詩”というものですが』という、聞いた事のない作品だった。

聞いていたフェイトちゃんとヴィータちゃんも首を傾げているけど、  
ただルシル君だけが顔を青くしていた。

静かになったルシル君の事が気になったヴィータちゃんが、ルシル

君に「どした？」って訊くと、「もう一度言っていただけですか？」と再度訊ねた。

シスターシャツハがもう一度答えると、

「記録しないでください。というか違う演目になりませんかね・・・？」

話しかけたヴィータちゃんじゃなく、モニター越しに居るシスターシャツハへ弱々しく話しかけた。

シスターシャツハは『さすがにそれは。もう練習も佳境ですし、他の演目にするには時間が』って、ルシル君の様子に困惑の表情を浮かべながら返した。

するとルシル君は「私の黒歴史が・・・何でこの時代に残ってるんだ？」って呻きだす。

「ねえルシル。ルシルはもしかして知ってるの？ “スヴィーウルの詩”」

フェイトちゃんが呻くルシル君に訊ねた。

ルシル君はしばらく黙ってたけど、意を決したかのように口を開いた。

「知ってるも何も私が人間だった時に書いた、いわゆる日記のようなものなんだが・・・」

ルシル君の答えに、シスターシャツハを除く私たちは「え？」って訊き返してた。

シスターシャツハは「やつぱりルシリオンさんに関係したモノでしたか」って納得している様子。

ルシル君が人間だった時に書いた日記？ だって、そんなバカな事

が……。

“ディオサの魔道書”のように神秘に保護された代物なら残っていてもおかしくないけど、単なる日記が数千年と存在してるわけが……。

「ど、どういう話が、訊いてもいい？」

「私が11歳の時、だったか。両親から久しぶりに許された休日だ。姉さま・ゼフィランサスと、イヴ姉様の三人で、アースガルドの四大陸を支える塔ユグドラシルへ向かった時の話だ。

……シスターシャツハ。ソレを一体どこかで手に入れたモノか判りますか？」

「えつと、ひと月くらい前にですね、八神家達はやてが訪ねまして……」

ルシル君が「あー、何かもう結末が見えてしまっている」と呆れながら、どこかに通信を繋げようと展開したモニターに触れる。

あ、そうか。現在いま、ルシル君の過去について一番詳しい人が八神家に一人いる。

フエイトちゃんもヴィータちゃんも、その誰かの事が判って溜息を吐いた。

「はい、はやてです。つて、ルシル君か、どうしたん？」

「突然すまないな、はやて。リエイスを出してくれ」

「リエイス？ なんやルシル。リエイスになんか用か？」

はやてちゃんがジト目でルシル君を見詰める。きつと妙な方向に思考が行ってるなあ。

ルシル君が嘆息交じりに事情をかくかくしかじかと説明すると、

『あーそう言えば、リエイスがそんな本を持つとったなあ。』

リエイスが自分で書いた本や。それやのに著者をグローイにするし、本の名前を決めやんし。

おかしいと思つとつたら。そつか、リエイスはルシル君の日記を書き写したんやな』

はやてちゃんは『リエイスにも困つたもんやなあ』つて苦笑。

ルシル君は「まったくだよ。リエイスはシャル以上に厄介だ」つて肩を落とした。

シャルちゃんはルシル君の過去で遊ばない。リエイスさんには悪気はないんだろうけど、誰も深く知らないルシル君の過去を、自分だけは知っているんだぞ、つて示したいんだろ。

だつてリエイスさんはルシル君の事を・・・自覚してるのか判らないけど。

『あの、ルシリオンさん。よろしければ、どうして著者の名前がグローイなのか、教えていただいても？』

「あ、あー・・・グローイというのは、私達セインテストが統治していたグラスヘイムの臣民が私に付けた敬称だ。

グローイ。輝く者、という意味を持つている。幼少から王位に即位するまでの間、臣民にグローイと呼ばれていた」

シスターシャツハの問いに答えたルシル君は、昔を思い出しているのか遠い目をして天井を眺めた。

しんみりしていると、モニターにリエイスさんが現れた。

はやてちゃんからすでに事情を聞いているのかリエイスさんは、

『お前の子供の頃の活躍を、いつでも目に通す事が出来るようになるために書いた。』

確かに無許可だったのはすまないと思っっているが、これも・・・フフ』

リエイスさんが意味深な笑みを浮かべると、フェイトちゃんが「ずるい！ リエイスだけずるい！ 私も読みたい！」って、リエイスさんを、その、僻んだ。

フェイトちゃんは可愛いなあ。ルシル君の事を全部知ってしまったるリエイスさんにやきもち。

だけどルシル君は「勘弁してくれ」って頭を抱えた。ホント大変だねえ〜。

「リエイス。書き写したのは一冊だけだよな？」

『・・・ああ・・・』

リエイスさんは判り易く視線を逸らしたうえで、妙な間も開けて答えた。

一冊だけじゃないんだ、書き写したの。妙な沈黙が流れる。

ルシル君が「今処分しろ、すぐ処分しろ、さっさと処分しろ」と、問答無用に言う。

でもリエイスさんは「却下」と一言。ルシル君の眉が寄った。

はあ。これは長くなりそうかな？ 私はヴィータちゃんとシスターシヤツハとアイコンタクトをとる。

意志疎通完了。コクリと頷き合って、ルシル君とフェイトちゃんとリエイスさんのトライアングル会議が始まったのを横目に、私達は3人に気付かれないように離脱を計る。

チラツとリエイスさんの背後に居るはやてちゃんを見ると、口パクでゴメンなと手を合わせてた。

(こっちもゴメンね)

私達も手を合わせて謝罪を示し、そそくさとその場を後にした。

? ? ? ? ? ?

スワイウル  
旅人の詩  
ゲロイ  
リエイス  
著者輝く者ルシリオン

語り部イクス

『それは、神々の住まう世界のとある王国グラスヘイムの王女達が巻き起こした珍騒動です』

全幅40m、奥行10mの大舞台をスポットライトが照らし出す。舞台には、立体映像を作り出す機器よって作り出された、宮殿の外壁が映し出されていた。そして、そのヴァルハラ宮殿と謳われる宮殿の庭に二人の美しい少女、ヴィヴィオとアインハルトだ。ヴィヴィオが登場した事で、客席が歓喜にどよめく。

語り部イクス

『王国グラスヘイムには、それは美しい王女がふたり居ました。姉の名はソリン。ソリンは、とても明るく活発で、すぐにどこかへ飛びだしていく王女様です』

ソリン(ゼフィランサス) アインハルト

「私はソリン。今日も私の大好きな妹と一緒に遊びに行きましょう」

ソリン（無鉄砲者という意）役を演じる、真つ白なドレスを身に纏ったアインハルトが、普段の彼女があまり見せない満面の笑顔で、

語り部イクス

『妹の名はグローイ。姉ソリンと同じく、それは美しい王女様でした。』

活発なソリンより元気いっぱいな女の子でした』

グローイ（ルシリオン）「ヴィヴィオ

「私はグローイ 今日大好きなお姉様と一緒に遊びに行きたいな〜？」

グローイ（<sup>ルシル</sup>男だが、配役上女に変更された）役を演じる、黒いドレスを身に纏ったヴィヴィオに手を差し出し、ヴィヴィオも差し出された手を取った。

ソリン・アインハルト

「ねえグローイ。今日は、ミュルクヴィズに遊びに行こうか」

グローイ・ヴィヴィオ

「ミュルクヴィズにですか？ いいですよ。いつもの腕試しですね」

語り部イクス

『暗い森という意味のミュルクヴィズ。そこには屈強な、それでいて人畜有害な怪物ベムブルが棲んでいます。』

ソリンとグローイは、幼いながらも腕っ節の強い魔法使いでした。



ですから、よく二人は腕試しとして、自分を鍛えるためにベムブルを相手に戯れていました。

二人は早速そのミルクヴィズへ行くための準備をし、向かいました」

スポットライトが消え、舞台上が闇に包まれる。

機器によって作り出された宮殿の外壁が消え、仄暗い森の中の映像に切り替わる。

スポットライトが暗さを演出するために薄く灯り、ドレスから防護服（子供サイズ）に着替えたヴィヴィオとアインハルトを照らす。

語り部イクス

『ミルクヴィズに赴いたソリンとグローイの前に、猪のような怪物ベムブルが現れました。二人は早速戦い始めます』

立体映像相手にヴィヴィオとアインハルトは「やあっ！」「はあっ

！」と殴り蹴ったり。

小さな観客達こどもたちがわーわー声援を投げかける。

次々と現れるベムブルの幻が、ヴィヴィオとアインハルトの攻撃を受けて、完璧なタイミングで消えていく。

しかし数がどんどん増えてくるベムブルに、二人が次第に押され始める（演技をする）。

イクスが『さあみんなっ。王女様達が負けないように、応援しよう！』と、客席に向かって告げる。

すると、子供たちやその親たちが「頑張れー！」とさらに応援。

その甲斐あって、最後のベムブルに二人のダブルパンチがヒット、消滅した。

ソリン・アインハルト

「ふう。よしっ、今回のベムブル退治も無事終了っ」と

グローイ・ヴィヴィオ

「これでしばらくはミルクヴィズの怪物たちも大人しくなるね」

語り部イクス

『怪物たちのリーダー格であるベムブルの群れを退治した事で、ミルクヴィズ周辺の街の平和がまたしばらく約束されました』

スポットライトが消え、また舞台上のセットが変わる。

次のセットはどこかに林道。ヴィヴィオとアインハルトは足踏みしているが、背景が流れる事で歩いているように見えていた。

ソリン・アインハルト

「水筒の水が切れちゃった。こうゆうときに、無限に湧き出す小瓶とか魔法があつたらいいのに」

グローイ・ヴィヴィオ

「そんな便利なモノ、このガラス Heim にはないよ？　というかどこにもないし。

水は、私のも切れちゃった……。そうだ、ヴィンダールヴのところにいこう？

ここからなら、ヴァルハラ宮殿に戻るよりヴィーズブラーインに続く転移門ゲートの方が近いから」

空になった水筒を掲げて中身を覗き込むアインハルト。

その上で妙なことを口走る。ヴィヴィオがそれに対し呆れ、水を手に入れるためにヴィーズブラーイン（レアーナ王族の治める大陸）へ行こうと持ちかける。

語り部イクス

『ソリンとグローイは、街へ向かうより早く辿り着けるゲートと呼ばれる転移するための門へ向かう事にしました。』

行き先は、彼女達の親友ヴィンダールヴ王女の居る国ヴィーズブラーイン。

そこは、清廉なる聖水とまで謳われる湧水が多く、グラスヘイムや他の国にも有名です。

二人はその水を求め、ヴィーズブラーインに行く事を決めました。』

景色が再度変わり、大きな門、そしてヴィーズブラーインの城ヒミンビョルグの庭へと変わる。

語り部イクス

『ゲートを通り、グラスヘイムの隣国ヴィーズブラーインの城ヒミンビョルグに辿り着いたソリンとグローイを迎えたのは、王女ヴィンダールヴでした。』

ヴィンダールヴ  
風の妖精（イヴィリシリア）レヴィ

「いらっしゃい、ソリン、グローイ。ゆっくりして行ってね」

若草色のドレスを身に纏ったレヴィが、ヴィヴィオとアインハルトを出迎える。

装飾テーブルに着き、ティーカップに口を付ける三人。

ソリン・アインハルト

「ん〜おいしい？ ね、ヴィンダールヴ。このおいしい湧水が、無限に湧き出す小瓶とか、そうゆう魔法を教えてください」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「有り得ないし在りません。そんな便利な魔法や道具があれば、こっちが教えてほしいわあ」

グローイ・ヴィヴィオ

「やっぱりそうだね。そういうのは自分で開発しないと」

ソリン・アインハルト

「だったら、ヴィンダールヴ作ってよ」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「何で私がそんなメンドクサイ事を。あなたが作りなさいなソリン」

語り部イクス

『新しい魔法や道具を作れ作れと言い合うソリンとヴィンダールヴ。さほど重要でもない事なのに、なかなかどうして白熱してしまうのか。』

そんな二人のやり取りを見かねたグローイが、ある提案を二人に告げました』

グローイ・ヴィヴィオ

「もぉ。それだったらみんなで作ればいいよ。」

それならお姉様もヴィンダールヴ姉様もバカな言い合いしなくていいし」

ソリン&ヴィンダールヴ

「バカつて。お姉ちゃん達に向かって・・・くすん」

語り部イクス

『ですが結局はグローイの提案通り、三人で湧水を無限に湧き出す魔法、もしくは道具を作る事にしました。

そのために、三人は必要な知識を手に入れるためにどこへ行けばいいか考えます』

グローイ・ヴィヴィオ

「やっぱり神なる叡智ミールミルの安置された、ユグドラシル最上階に行った方が・・・」

ソリン・アインハルト

「そうね。魔法を作るにしても道具を作るにしても、どっち道知識が必要だし」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「そう。それじゃ行ってらっしゃい、ソリン。気を付けてね、グローイ」

ソリン・アインハルト

「あなたも来るのよ、ヴィンダールヴ」

語り部イクス

『こうして、ノリノリのソリンと仕方なしのグローイ、そして強制的に同行する事になったヴィンダールヴは、ユグドラシルという大きな大きな塔へ向かう事になりました』

スポットライトが消え、また立体映像が切り替わる。

大きな塔ユグドラシルの入り口、その門の前だ。

門の前に、一人の少女が佇んでいる。その少女の正体は・・・

ペンチル  
ペテン師・ルーテシア

「おっと待ちなお嬢さんたちい。ここは行き止まりい。ユグドラシルは神さましか入れないしい？」

語り部イクス

「門の前に立ちほだかるのはギンナルという少女。ソリンとグローイとヴィンダールヴもまた、神さまの親を持つ子達です。」

その事を話す三人でしたが、まだ幼いという事で神さまの一員として認められませんでした。

三人もそんなのは認めないと反論しますが、聞き入れてもらえません」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「だったら勝負しましょ。私達が勝ったら、大人しくユグドラシルの門を開けなさい」

レヴィが真つ黒なクロークを纏うルーテシアにビシツと人差し指を差す。

ルーテシアは「キヒヒ、いいよ。そんならお前達の得意な事で良い。負けないしい」と、挑発的に髪を描き上げる。

語り部イクス

「最初の勝負は、グローイとギンナルの大食い対決となりました」

ヴィヴィオとルーテシアの前に、大皿に乗ったオムライスが用意された。

レヴィが「レディ・・・ゴー！」と号令をかける。

ヴィヴィオがスプーンを片手に食べ始める。

しかしその直後に、レヴィの「そこまでっ！」と終了を告げる声か。

ギンナル・ルーテシア

「大食いが得意だっけ？ 遅いし遅いしい」

語り部イクス

『グロイーが10分の1を食べ終えたところで、すでにギンナルはなんと皿まで食べ終えていました』

ヴィヴィオの方は本物で、ルーテシアの方は立体映像。始めから勝負になるわけのない戦いだった。

ヴィンダールヴ・レヴィ

「今度は私よ。私は風神の娘ヴィンダールヴ。もちろんかけっこが得意なの」

ギンナル・ルーテシア

「ほうほう。じゃあ今度はかけっこだね。今度も勝つしい」

語り部イクス

『ヴィンダールヴとギンナルがスタート位置に着きます。用意・・・ドン！』

走ります走ります。ヴィンダールヴは一生懸命、全力で走ります。ですが、対するギンナルは涼しい顔で軽々追い抜き抜いて先にゴールしてしまいました。

ヴィンダールヴもギンナルの前に完敗してしまいました』

背景だけが流れ、レヴィは足踏み、ルーテシアは本当に走っていた。

ギンナル・ルーテシア

「よっわ。それで風神の娘なんて笑わせるしい。さあお次はどんな勝負にするしい？」

ソリン・アインハルト

「なら今度は私と勝負です。私はこう見えて力持ち。次は私と力勝負です」

アインハルトがズビシツとルーテシアを指差す。

語り部イクス

『ソリンは腕まくりをして、カコブを見せつけます。

するとギンナルは、その力勝負を快諾しました。勝負方法は仔犬を持ち上げるといふもの。

ソリンは馬鹿にするなど言いますが、その仔犬を持ち上げる事は出来ませんでした』

アインハルトが、犬のぬいぐるみを持ち上げられない演技をする。

ギンナル・ルーテシア

「は〜い、しゅーりょー 何が力自慢だしい。はい、次々だしい」

ソリン・アインハルト

「そ、そんな・・・」がくっ

語り部イクス

『ギンナルは、ソリンが落ち込んでいるのを横目に次の勝負を持ちかけます。

ここでふと、グローイとヴィンダールヴが首を傾げました』

グローイ・ヴィヴィオ

「ちょっと待って。あなたは どうして持ち上げないの？」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「ちゃんとゲームしないと。ほらほら」

語り部イクス



『グロイーとヴィンダールヴがギンナルに、さあさあ、と詰め寄ります。』

ギンナルは何かと理由を付けて次の勝負に進もうとします。

ここで、三人はギンナルが自分達と視線を合わせようとしないうちに気付きました』

ソリン・アインハルト

「あ、思い出したっ。あなた、ペテン師ギンナルねっ！」

ギンナル・ルーテシア

「おおっ。バレちゃったしい」

語り部イクス

『ギンナルは、幻影魔法を使ってよくイタズラをする少女でした。』

その事を思い出した彼女達は、今までの勝負の結果を疑い始めます。幻影を使われて、ズルをしたんじゃないかと詰め寄りました』

ギンナル・ルーテシア

「あつはー、そうだし。ちなみに私も幻影で本体は別ところ。

じゃあ君達の疑問を教えるから去るしい。まず最初は、大食いで私が勝った事について。

その時、私は“炎”だったしい。だから、皿まで一緒に炭にしちゃったしい。

んで、かけっこ。あの時の私は“思考”だったしい。どれだけ速くても思考の速さには勝てないしい。

最後に、力勝負。実はあの仔犬はあ……」

語り部イクス

『ギンナルは、側で寝転がっていた仔犬を見て、指をパチンと鳴らしました。すると……』

それは巨大な犬、いや、真黒な狼の立体映像が作り出された。

ギンナル・ルーテシア

「驚いた？ 実はフェンリルを幻影で仔犬に見せていたんだしい」

語り部イクス

「三人はその大きな狼フェンリルに驚きました。

フェンリルは、その大きな口で以って世界を丸ごと飲み込むとまで言われる狼。

いくら力自慢のソリンでも、巨大なフェンリルを持ち上げられるわけがありませんでした」

ギンナル・ルーテシア

「さっ、答えは解ったかなだしい？ それじゃ私はこれにて失礼させていただきます」

語り部イクス

「ギンナルは逃げるようにどこかへ走り去って行きました。

フェンリルも本来の姿を震わせながら、どこかへとすっ飛んで行きます。

彼女達は嘆息しながらギンナルとフェンリルを見送り、当初の目的ユグドラシルの中へと入っていきました」

舞台が暗くなり、景色がまた変わる。

白亜の巨石が積み重ねられて構成された塔内へと。

語り部イクス

「ソリンとグローイとヴィンダールヴは、黙々とユグドラシルの頂上目指して歩きます。」

その途中に、またもや何者かが佇んでいました。ユグドラシルの下層部一帯の管理人ラタトスクという名の大きなリスです」

ラタトスク・コロナ

「や、やあやあユグドラシルにいらっしやい

ボクはラタトスク。さて、ここで君達に訊ねたいんだ。

どうしてユグドラシルに来たんだい？ 管理人の一人として黙って通すわけにはいかないんだ」

リスの着ぐるみを着たコロナ（首のところ顔が出る）が、大きなドラグリのぬいぐるみを抱きかかえながら問うてきた。

ソリン・アインハルト

「私達は、ユグドラシルの頂上にある神なる叡智ミーミルのとこまで行きたいの」

ラタトスク・コロナ

「ミーミル？ ミーミルの叡智を借りてどうするの？」

グロイー・ヴィヴィオ

「清廉なる聖水を無限に湧き出させる魔法を作ろうかと」

ラタトスク・コロナ

「なんておバカな事を。そんな魔法を作るためにミーミルの叡智を頼るなんて」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「第三者に言われると確かにバカな事をしようとしてるって判るわ」

ラタトスク・コロナ

「でも、なるほど。悪意を持ってミールを利用してしようというなら止めるけど、それくらいのお遊びなら許そうかな。

あ、でも魔法じゃなくて道具にするならもっと簡単だけど」

語り部イクス

『ラタトスクが、魔法を作るより道具を作った方が簡単だと告げました。

どうやらラタトスクは、彼女達の望みごとを解決させる手段を知っているようです』

ソリン・アインハルト

「ラタトスク。それは一体どういう事なの？」

ラタトスク・コロナ

「ユグドラシルの頂上に、フレースヴェルグという大きな鷲がいるの。

そのフレースヴェルグの宝に、どんなものでも生み出せる魔法の石白グロツティがあるの。

それを使えば、きつと君達の望むモノが手に入るよ」

語り部イクス

「それを聞いた彼女達は、ミールではなく、どんなものでも生み出せる魔法の石白グロツティへと目的を変えました。

魔法を新しく作るのは面倒で、だったらもっと楽な方法にしようと思っるのは当然でした』

ヴィンダールヴ・レヴィ

「じゃあグロツティを貰いに行くという事で」

ラタトスク・コロナ

「そうそう。君達にお願いがあるんだ。ボクも一緒に連れて行ってくれないか？ 久しぶりにフレースヴェルグに会いに行きたいんだ」

語り部イクス

『ラタトスクとフレースヴェルグはそれなりの仲良しでした。時折、ラタトスクは頂上にいるフレースヴェルグに会いに行きますが、最近行っていない事でこの機会に会いに行こうというのです』

グローイ・ヴィヴィオ

「もちろんだよ。ラタトスクも一緒に行こう」

語り部イクス

『こうして冒険仲間が四人となり、ユグドラシル頂上に居るフレースヴェルグに会いに行く事になりました。一体どれだけ階段を上ったでしょうか。そろそろ頂上へ辿り着くというところで、上の階に続く階段のある部屋にまたもや何者かが居ました』

ラタトスク・コロナ

「厄介な人が出てきたね。君達、気を付けて。アルヴィーズだよ」

全てを識る者・セイン  
アルヴィーズ

「待て、その女子たち。あた　わ、我はアルヴィーズ。ここより上は、私の願いを聞き届けてからじゃないと行けないぞ」

語り部イクス

『立派なおヒゲを生やしたおじさんアルヴィーズがそう言って通せんぼしました。』

アルヴィーズはとても物知りで、ですが物知りだからこそ我がまま

なおじさんでした』

マントを羽織ったセインの鼻と口の間には見事にカールしているピヨンと伸びたヒゲが二本。

あごにもヒゲがあり、リボンで可愛らしく結われている。

ソリン・アインハルト

「大人しく道を開けてよ。こっちはユグドラシルの管理人のラタトスクが居るんだから」

ラタトスク・コロナ

「いきなりユグドラシルに住み着いて、早く出て行きなさい」

アルヴィーズ・セイン

「嫌じゃ。ん？ その娘は可愛いの。よし、その娘を嫁に貰おう。そうすれば通してやる」

語り部イクス

『アルヴィーズは、ソリンを指差して、ソリンを嫁に寄せせば、道を開けると言いました。』

これにはソリン以上に、妹であるグローイがすごく怒りました』

グローイ・ヴィヴィオ

「そんなの絶対ダメっ！ 姉様を渡すくらいなら力づくで・・・！」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「ちょっと待って、グローイ。ソリンも来て。ラタトスクも。

アルヴィーズ。少し話し合ってくるから待ってなさい」

語り部イクス

『ヴィンダールヴは力づくで通ると怒るグロイーを引つ張って、ソリンとラタトスクも一緒に連れて一つ下の階へと戻りました。どうして邪魔をするのかとグロイーはヴィンダールヴにも怒ります。ソリンもグロイーと同じ考えだったのか、みんなで戦えば勝てると思います』

ラタトスク・コロナ

「ボクは戦うのは反対。アルヴィーズは強い。そのたくさん蓄えた知識で、色んな魔法を使えるから。単純な腕力より全てに通用する知識の方が強い時だってある」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「そうゆうこと。力押しで勝てる相手じゃない。だからなんかの策が要る。それを今から考える」

語り部イクス

『そうして四人は必死に知恵を絞ります。相手は全てを識る者アルヴィーズ。そのアルヴィーズに対抗できる術を考えました。』

ですがなかなか浮かびません。そこに・・・』

ギンナル・ルーテシア

「お困りって感じい？」

ソリン&グロイー&ヴィンダールヴ

「ギンナル！ どうしてここに!？」

ギンナル・ルーテシア

「面白そうだからずっと覗いていたんだしい。それで困ってるようだから、さっきのイタズラの償いとして手伝っ

てあげようと思ったんだしい」

語り部イクス

『最初はまた騙されるんじゃないかと心配していた彼女たちでしたが、ギンナルの幻影はとても役に立つ、魅力的な能力でした。

ギンナルの幻影を使う事を第一と考えて、再び作戦を練ります。

そして結論が出ました。早速準備に取り掛かる五人。

準備を終え、ギンナルを階下に残して、ソリン達は再びアルヴィーズの居る階に戻ってきました。

もちろん幻で創った花嫁衣装を身に纏った、幻影によってソリンの姿となった“炎”を連れて。

本物のソリンにも幻影が掛けられ、猫の姿となっています』

猫役はもちろんアインハルトのデハイスパートナーであるアステイオン。

アルヴィーズ・セイン

「おお、花嫁衣装を用意していたのか。素晴らしい！

これならすぐに婚礼の儀を行えそうだな。少し待っておれ」

語り部イクス

『ウエディングドレスを着た偽ソリンを見たアルヴィーズは拍手。

そして指を鳴らすと、部屋に白い光が満ちました。光が切れ、次の瞬間には部屋の中には豪華な料理が幾つも並べられていました』

アルヴィーズ・セイン

「さあ食べてくれ飲んでくれ。めでたいめでたい、わっはっはっは」

語り部イクス

『アルヴィーズは突っ立っていた偽ソリン達をテーブルに着かせます。』



階下では偽ソリンを操作しているギンナルによって、ギンナルは料理に手を付けます。

それはものすごい勢いで料理が消えて行きました。先程のイタズラと同じ、料理も皿も灰すら残さず燃えてしまっているからです』

ヴィンダールヴ・レヴィ

「作戦その一。ソリンを幻滅させよう。女の子らしい仕草を何一つさせずに、アルヴィーズがソリンを嫌うように仕向ける」

アルヴィーズ・セイン

「どれどれ。花嫁は食べてくれているか・・・って、何だこのすごい食欲は！」

語り部イクス

『アルヴィーズは驚きました。たくさん用意した料理がすでに半分以上無くなっていったからです。

偽ソリンは黙々と食べ続け、もとい燃やし続けます。アルヴィーズの驚きようを見て、本物のソリン達は、これで決まった、と心の中で喜びます』

アルヴィーズ・セイン

「わっはっはっは。たくさん食べる娘は愛おしい。

一生懸命、メシを頬張るその姿、我は気に入ったぞ！」

語り部イクス

『ですが、アルヴィーズはそんな事を気にしませんでした。残念！』

アルヴィーズ・セイン

「どれどれ。そのヴェールの下に隠れた可愛い顔を見せてくれ。ん？ おお！？ なんだこの凄まじい眼差しは！？ 血走って火が

噴出しているようではないか！」

語り部イクス

『炎たる偽ソリン。その両目は火が漏れ出そうなほど鋭く細められていて、アルヴィーズをギロリと睨んでいました。』

その様子を見たグローイが、姉様はあんな怖い目はしないもん、と小さく溜息を吐いていました』

アルヴィーズ・セイン

「ハッ。そうか、その熱い眼差しは、我へ送る熱愛の表れなのだな。睨んでいるように見えたのは、我をよく見ようとして細めたからだな」

ラタトスク・コロナ

「とんでもないバカですね」

語り部イクス

『ラタトスクの呟きに、アルヴィーズ以外の全員が頷いて同意しました。』

ソリンを幻滅させよう作戦の失敗ということも同じように決めました。

そしてすぐさま次の作戦を開始します』

グローイ・ヴィヴィオ

「あの、アルヴィーズ？　姉様は、とても頭がいい人が好きなんです。」

だから、ここであなたの知識を披露して下さいませんか？」

アルヴィーズ・セイン

「おお、いいともいいとも。ならばどんな事でも構わん。」

「どんどん我に問いかけるがよい。我は全てに答えてみせよう」

語り部イクス

『アルヴィーズは胸を張って、訊ねられる問いに答えてみせると言います』

ヴィンダールヴ・レヴィ

「教えてアルヴィーズ。人の子の前に在る大地、それぞれの国では何て呼ばれてるの？」

アルヴィーズ・セイン

「答えてみせよう。人の間では大地<sup>イェルス</sup>。アースの間では原<sup>フォルド</sup>。ヴァンの間では道<sup>ヴェク</sup>。ヨツンの間では緑なるもの、と呼ばれている」

グローイ・ヴィヴィオ

「教えてアルヴィーズ。遙か空に広がる天は、それぞれの国でなんて呼ばれてるの？」

アルヴィーズ・セイン

「人の間では天<sup>ミンク</sup>。アースの間では一星の撒き散らされたるもの《フリュールニル》。ヴァンの間では風を織るもの<sup>ヴァントオウニル</sup>。ヨツンの間では上の国と呼ばれている」

ラタトスク・コロナ

「教えてアルヴィーズ。人々に見えるあの月は、それぞれの国でなんて呼ばれてるの？」

アルヴィーズ・セイン

「人の間では月<sup>マーニ</sup>。アースとヴァンの間では欠けるもの<sup>ミュリン</sup>」

ヨツンの間では韋駄天<sup>スキュンデイ</sup>、と呼ばれている」

グローイ・ヴィヴィオ

「教えてアルヴィーズ。人の子らが見るあの太陽は、それぞれの国でなんて呼ばれてるの？」

アルヴィーズ・セイン

「人の間では太陽<sup>ソール</sup>。アースとヴァンの間では南<sup>スナ</sup>の輝き。ヨツンの間では永遠<sup>エイグロー</sup>に輝くもの、と呼ばれている」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「教えてアルヴィーズ。人の子らの前で燃える火は、それぞれの国でなんて呼ばれてるの？」

アルヴィーズ・セイン

「人の間では火<sup>エルド</sup>。アースの間では焰<sup>フニ</sup>。ヴァンの間では揺らめくもの。ヨツンの間では貪欲<sup>フレキ</sup>なるものと呼ばれている」

語り部イクス

『次々と問いに答えて行くアルヴィーズ。』

終わりが見えそうにない質問大会と思われましたが、その終わりは突然やってきました。

今まで黙々とご飯を食べていた偽ソリン。その偽ソリンの様子が変わったのです。

偽ソリンの正体は“炎”。それが大きく膨れ上がり、ソリンの姿が崩れてそれは小さな太陽になってしまいました』

アルヴィーズ・セイン

「なんだと!?! 貴様ら、我を騙したのかああーっ!」

語り部イクス

『アルヴィーズは、その小さな太陽から逃げるように消えてしまいました。』

アルヴィーズは太陽が苦手なのです。陽に当たると、最悪石になってしまふからです。

それをギンナルから聞いた四人は、最初の幻滅作戦で上手くいかなかったら、可哀想だけど太陽を使おうと決めました。

最後の質問作戦は、偽ソリンが太陽となるまでの時間稼ぎでした。作戦は見事成功。

アルヴィーズは運良く石にならずに逃げる事ができました』

ギンナル・ルーテシア

「上手く行って良かったしい。じゃ、幻影を解くしい」

語り部イクス

『ギンナルが指を鳴らすと先程と同じように光が生まれ、幻影も解かれました。』

そしてギンナルも追加され、冒険仲間が五人となり、その五人はユグドラシルの頂上を再び目指して歩き出します』

景色が変更される。塔内から屋上へと。石畳の床に、五人は立つ。

ユグドラシルの頂上。そこに一人の少女が、デフォルメされた鷲にきぐるみを着て立っていた。

フレースヴェルグ・リオ

「あれー？ ラタトスクじゃん、久しぶりー」

語り部イクス

『ソリン達一行の前に、ユグドラシルの頂上に棲まう大鷲フレース

ヴェルグが現れました。

早速フリースヴェルグに、ここまで来た理由を告げる』

フリースヴェルグ・リオ

「あー、それでグロツティが必要っていうわけか。

でもグロツティは私の大切な宝。あげるわけにはいかないな」

ラタトスク・コロナ

「だったら、借りるだけ。しかもここで使うから」

ソリン・アインハルト

「お願いフリースヴェルグ。ここまでの苦勞を無駄にしたくないです」

グロイー・ヴィヴィオ

「お願いします。ここで何もしないで帰るって事になったら、しばらく立ち直れそうにないです」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「今の私達に出来る事であれば何でもしますから。

グロツティを使って、魔法の道具を作らせてください」

ギンナル・ルーテシア

「まあ私はどうでもいいんだけど。でもこの子達も苦勞していたのは観てきたい、どうか使わせてあげてほしいって思うかもだし」

語り部イクス

『フリースヴェルグの大切なモノを使わせてもらうため、彼女達は心からお願いをした。

その誠意に溢れたお辞儀に、フリースヴェルグは答えを出します』

フリースヴェルグ・リオ

「出来る事なら何でもするって言ったね。それは嘘じゃないね？」

語り部イクス

『その確認に、彼女達は、仕方ない、とコクリと頷きました。』

フリースヴェルグは満足そうに笑って、彼女達にひとつ条件を出しました』

フリースヴェルグ・リオ

「私はあまりユグドラシルから降りちゃダメなんだ。

私の羽ばたきで生まれる風は鋭くて、何でも斬っちゃうの。

その所為で、友達が出来なくて。ラタトスクはたまに遊びに来てくれるけど毎日じゃない。

私だって毎日来て、なんて言えない。でもそれじゃ寂しいんだ。だから、グロツティを使う条件。それは、私と友達になること」

語り部イクス

『涙ながらに言うフリースヴェルグに、彼女達も涙をうつすら浮かべて、その条件に対して答えを告げます』

ソリン・アインハルト

「いいよ、友達になろう！ 自慢が出来るよ、フリースヴェルグと友達になったなんて」

グローイ・ヴィヴィオ

「私ももちろんいいよっ！ 毎日じゃないけど、きつと遊びに来るから」

ヴィンダールヴ・レヴィ

「そうね。そうだ、フレーズヴェルグ。来るなら私の国ヴィーズブラインにおいで。」

あそこは風の国だから、あなたの羽ばたきで起こる風もきつと抑えられるよ」

ギンナル・ルーテシア

「こっちからお願いしたいかもだし。フレーズヴェルグと友達・・クス、イタズラの範囲が広げられるしい」

フレーズヴェルグ・リオ

「本当か！？ やったあつ！ 約束だよつ、友達だからねつ！」

語り部イクス

『こうして、フレーズヴェルグと友達になったソリン達一行は、魔法の石臼グロツティを使う事が出来ました。

生み出されたのはもちろん清廉なる聖水が無限に湧き出す小瓶、それを六本。

それぞれ一本ずつを持ち、友達の証となりました。

それから、ソリン達は何度もフレーズヴェルグの居る頂上まで登り、フレーズヴェルグに乗ってヴィーズブラインへ遊びに行くという、とても楽しい時間を過ごしましたとさ』

ヴィヴィオとアインハルトとコロナとリオ、そしてルーテシアとレイとセインが、舞台上に整列して、

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

観客に綺麗なお辞儀をした。

すると割れんばかりの拍手喝采が、ヴィヴィオ達を称える。



劇は見事成功。それは観客の反応を見る限り間違いなかった。

?  
?  
?  
?  
?

劇が行われた聖王教会の大講堂。

外にまで聞こえてくる拍手喝采を聞きながら、一人の女が講堂より出てきた。

「クフフ。可愛い可愛い可愛過ぎる？ サイコーのプレゼントを貰っちゃったわ」

グロリア・ホド・アーレンヴォールだ。

昨日と同じく古めかしいカメラを手に、夕暮れに染まる空を見上げて笑っている。

それから何度も「可愛い」と口にしながら、その場を後にした。

まだいるよ みんな大好き リリカルアクターズ（後書き）

ルシル

「はあ、懐かしいなあ。」

ゼフィランサス姉様とイヴィリシリア姉様の三人で、冒険した話だ。ANSURの大戦編完結を祝して投稿した、ゼフィ姉様が初登場したエピソードだ」

レヴィ

「それにしてもすごい連中が居るんだね。」

イタズラ好きのギンナルにリスのラタトスク、頭いいけど太陽が苦手なオヤジに大鷲フレイスヴェルグ」

ルシル

「ANSURの時はもっとカオスだったぞ。」

今回は、神秘やら何やら色々足りない世界での再現でしかも劇だからな。

当時のエピソード通りに再現したら世界バランスが吹っ飛ぶ。

今回だつて立体映像やら無茶をしているというのに」

ルーテシア

「そんなにすごいお話だったの？」

ルシル

「ああ。最後のフレイスヴェルグとのやり取り。」

アレは今回だけのオリジナル。ANSURの時は、もっと無理難題を押し付けられた。

本来の姿のフェンリルやヨルムンガンドと戯れたりな。中級術式（天使の名を冠する）の誕生がこのエピソードだったり、まあ色々

だ  
」

レヴィ

「ルシリオンは11歳の時から苦労してるんだね。

しかも大食いキャラだったし、すごく明るい子だったし。

苦労ばかり味わって、今のルシリオンになったって言うなら判るかも。

それとも、やっぱりレヴィレヴィオが演じたから、明るいキャラになったの？」

ルシル

「いや、子供の頃の私は大体あんなだったな。

ゼファイ姉様と過ごせる時間を楽しみにして、子供らしさを残したいって頑張っていた」

ルーテシア

「やっぱりルシリオンさんは苦労人」

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜(前書き)

リリカルなのは「ロストロギア」。

ということ、最終話まで古代の遺物を使ってのお話になります。

サブタイトルから判る通り、もちろんなのは達の時代の物ではなく・

・

VS?????戦イメージBGM

BAYONETTA『Temperantia In Forog

oing Pleasures』

ようこそ　ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜？〜

一同は思う。どうしてこうなったのか？と。

彼女達が居るのは、それは大きな大聖堂。

ステンドグラスから差し込む色鮮やかな明かりは幻想的で、その場に居る者を魅了する。

静まり返る聖堂内。その一番奥、祭壇前には、キャソックを着た神父と、1組の男女が純白のタキシードとウェディングドレスを着て佇んでいる。

それを見守る参式者たちの誰もが引き攣った笑みを浮かべていた。中には怒りやら何やらで顔を赤くし、肩を震わせている者もいる。小さい子供が見たら即逃げ出すような、それほどまでに恐ろしい表情だ。

そんな誰もが祝していない中、結婚式は静かに進んでいく。

「汝ルシリオン。この女ヴィータを妻とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻ヴィータを想い、妻ヴィータのみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

神父、ココアブラウンの短髪にバイオレットの三白眼の男、アンスールの一人にして死んだはずの“地帝カーネル”が、参式者と同様引き攣った笑みを見せるルシリオンに問う。

「……誓います」と厳かに誓いの言葉を告げた。

それを聞いた、フェイトとリエイスとはやてのこめかみがピクツと動く。

コロナとリオ、アインハルトとイクスは、仲の良い知り合いの結婚

式ということで、頬を朱に染めていた。リンフォース？とアギトも同様だ。

ルーテシアとレヴィは、面白い事になった、と嬉しそうに口端を歪める。

だがヴィヴィオは面白くなさそうに、やはり陰のある表情を浮かべていた。

そう、たとえこの結婚式が単なる偽物の演技だとしても、だ。

神父カーネルは、今度は新婦ヴィータへと誓いの問いを投げかける。ヴィータは演技だから仕方ないと思いつつも若干頬を染め、つかえつつも誓いの言葉を「ち、ち誓・・・う・・・」と告げた。

「では指輪の交換を」

ルシリオンとヴィータが交互に指環を、その薬指にはめていく。

フェイトとリエイスの纏うオーラが徐々に、しかし確実に黒くなっていく気配。

2人の側に居るのはとはやとリンとアギト、そしてエリオとキャロが怯え始める。

スバルとティアナも同様。少しずつフェイトとリエイスから距離を取ろうと動く。

そして、結婚式最大の見せ場とも言えるシーンへと突入する。

神父カーネルが「それでは、誓いの口付けを」と告げると、ヴィータの顔がさらに赤くなった。

フェイト達の嫉妬や怒りのボルテージが最高潮へ。コロナ達子供は「キヤー？」と黄色い歓声をあげる。

『ヴィータ、フリでいいんだ。実際にする必要なんて』

『あ、当たり前だろ！マジでやってたまるか！馬鹿！何言っ  
てんだ！変態！ロリコン！』

『とりあえず落ち着け。深呼吸だ、深呼吸。それと、あとで憶えている。私はロリコンじゃないし変態でもない』

念話で確認し、ヴィータは『判つてらい』とぶつきらぼつに返す。背の小さいヴィータに合わせるためにルシリオンは片膝をつく。そつとヴィータの被っていたヴェールを上げ、その小さく細い華奢な両肩に手を置く。

ルシリオンが徐々にヴィータへと顔を近づけていき、さらにさらに顔を真っ赤にさせたヴィータが背を逸らして逃げようとする。

「ヴィータ」

「判つてるつつうの！ あーもう！」

ヴィータも覚悟を決め、背を逸らすのをやめてルシリオンへと顔を近づける。

ここで神父カーネルが一言。「フリではなく、きちんと誓いの口付けをしないといけませんよ？」と告げた。

ピシツと硬直するルシリオンとヴィータ。きちんとこの結婚式イベントをクリアしなければ先には進めない。

それが判っているからこそ、ルシリオンは念話で『ヴィータ。頬に軽くで、な？』と提案する。

『頬だろうがなんだろうがキスされることに変わりねえー！ー！ー！』

『叫ぶなヴィータ！ 頭に響く！』

そこからルシリオンは必死に説得し、何とかヴィータの了承を得る。

ヴィータは『あとではやて達に色々言われそうだ・・・』と肩を落とす。

ルシリオンも『私の場合、命があるかどうかも判らない・・・』と、フェイトをチラリと横目で見た。

瞬間、ルシリオンは悟った。ああ、このイベントが終われば私は死ぬ、と。

フェイトは周囲にバチバチと放電している。頬をプクツと膨らませ半眼で睨んでくる。

だが、ここで止めることは出来ない。さらに唇を、ヴィータの朱に染まる綺麗な頬へと運んでいく。

ルシリオンの唇がヴィータの頬に当たるかどうかというところで・・・

「フリでもダメえええーっ!」「アカあーっ!」「それ以上は認めん!」

ブリツアクション

ユニゾンからのヘルモーズ

フェイトと、リエイスとユニゾンしたはやてが、高速移動魔法を使ってルシリオンとヴィータを引き剥がしにかかる。

これには黄色い歓声をあげていたリンやアギトやコロナ達、面白い事になったと声を殺して笑っていたルーテシアとレヴィも啞然としました。

「おい、フェイト、はやて、リエイス!」

ルシリオンに怒鳴られて、ようやく自分達がやってはいけない事をやってしまったという事に気付くフェイト達。

ヴィータも先程まで顔を赤くしていたが、自分をルシリオンから引



き離れたはやてを青い顔で眺める

「やってしもた・・・」

冷静になったはやて、フェイトもルシリオンから軽い拳骨をコツンと受けながら、このエリアの管理人である地帝カーネル・グラウンド・ニダヴェリールを見る。

彼の足元に、ガンメタルグレイに輝く、三重八角形魔法陣が展開される。

内側と外側が時計回り、真ん中の魔法陣は反時計回りで回転し、それぞれの間には幾何学模様の文字のようなモノが点滅を繰り返す。一番内側の八角形内にはアंक（上の先端が円の十字架）が描かれ、両サイドに一切の丸みのない翼が描かれている。

ニダヴェリール紋、またをニダヴェリール式魔法陣だ。

「おーい、邪神<sup>スネル</sup>ロキの遊戯場の数少ないルールを違反したぞ、ルシール」

カーネルの陽気な声と共に、右手に、赤紫色の雷のようなジグザグの刀身を持つ両刃剣が携えられる。

神造兵装“剛霸剣<sup>フロツテイ</sup>突き刺すもの”。無圏世界ニダヴェリールの有する神器だ。

カーネルの臨戦態勢を見て、ルシリオンも臨戦態勢に移行しながら、ティアナとスバルに指示を出す。

「ティアナ！ ヴィヴィオ達を教会の外へ避難させる！」

「り、了解！」

「スバル！ ウィングロードでヴィヴィオ達を空へ避難！ 地上に

足を付けさせるな！」

「あ、はい！ マツハキヤリバー！」

教会の外へ走りだすスバル達。続いて、

「エリオ、キャロ、ルーテシア、レヴィ。君達も外へ！ ヴィヴィ才達の護衛に就け！」

と指示を出す。エリオ達も「了解！」「任せて！」と応えて外へ向かって走り出した。

カーネルはそれを見送り、「良い判断だな、ルシル。さすが俺の魔術を知る戦友だ」と言い、“剛覇剣フロツテイ”を肩に担いだ。

「ルシル君！ えっと、私達ってカーネルさんに勝てるの！？」

なのは達もデバイスを起動させ臨戦態勢に移った。

ルシリオはなのはの問いにすぐさま答える。

「所詮はこのゲーム世界における、ルール違反の強制戦闘ペナルティを私達に科すためのNPCらしいからな。

確かに強いだろうが、オリジナルに比べれば遥かに弱いだろうな」

ルシリオンは二挺一対の銃剣型デバイス“フロースヒルデ”を両手に携えた。

ヴィータが“グラーフ・アイゼン”を構えて「来るぞ！ 古代の英雄アンサーの一人が！」と興奮気味に叫ぶ。

聖堂に残ったルシリオン達の目前に、あるメッセージテロップが浮かび上がる。

戦闘参加メンバー4名を選んでください

戸惑うルシリオン達だったが、それを決定しない事には先に進まないと判り、作戦会議を開く。

まず最初に、全員がルシリオンに問う。カーネルさんはどんな魔術師なの？と。

「かつての私とシャルの記憶で見たと思うが、地帝カーネルは、土石系最強の魔術師で、陸戦魔術師の天敵だ。

そして攻防力も凄まじい。半端な近接攻撃ではカーネルの防壁を貫くことは不可能。

だからそうだな・・・中遠距離に優れ、かつ突貫力のあるメンバーを選出した方がいいな」

「カーネル殿のことをよく知っているセイントに決めてもらった方が早そうだ」

シグナムの言葉に、全員が賛成の意思を見せる。

ルシリオンは少しばかり思案し「ならば」と前置きして、

「なのは、はやて、ヴィータ、そして私で行こう」

「うん、判ったよ」

「了解や、って・・・リエイスも入れて私ひとりでええんやるか？」

「突貫力ってやつだな。よっしゃ、鉄槌の騎士ヴィータとアイゼンの一撃、英雄に見せてやる」

なのはは“レイジングハート”を強い意志を示すかのようにギョッ

と握りしめ、ヴィータも“ グラーフ・アイゼン ”を何度も素振り、はやてはリエイスとユニゾンしたことで伸びた髪をポニーテールにしながら疑問顔を浮かべる。

「ユニゾンしている状態なら一人としてカウントされると思うが・・・。  
もしダメなのであれば、シグナム、君に出てもらいたい」

「ああ、了解した」

ルシリオンははやてのそう答え、もし二人としてカウントされた場合は、シグナムをメンバーに入れると告げる。

「ねえルシル。私じゃダメなの？ 何かメンバーの選択に妙な他意があるような気が・・・」

フェイトがどこか納得できないといった様子でルシリオンに問いかけた。

もちろん他意などなく、純粋にカーネル攻略の事を考えてのメンバー選択であるため、他意がないことを示すために説明をし始める。

「フェイトとカーネルの、属性における相性が悪いんだ。土石系に、雷撃系の攻防はほぼ通用しないと言ってもいい。フェイトの攻撃にはほぼ電気変換が行われる。だからカーネルほどの土石系術師にダメージを与えることは・・・不可能だ」

「そ・・・つか。うん、判った。ごめん、変なこと言っつて」

フェイトは力になれないことのショックからガクリと肩を落とした。ルシリオンは、目に見えて落ち込んでいるフェイトに「このゲーム

を進めていけば、おそらく他のアンスールメンバーも出てくるだろう。その時に力を貸してくれ、フェイト」とフォローを入れ、フェイトの頭を撫でる。

少しボケーンとした後、「あはは、その時は頼ってね」とフェイトは微笑む。

戦闘参加メンバーは、高町なのは・八神はやて（リエイス）・ヴィータ・ルシリオンでよろしいですか？

というメッセージテロップが宙に浮かびあがる。

ルシリオンはメンバーを見回し頷く。なのはとはやてとヴィータも頷いた。

はやてとリエイスのユニゾンで一人とカウントされたことで、

「リイン、あたしらもユニゾンだ！」

「はいです！」

ヴィータもリインとユニゾンを果たす。

もう一度確認メッセージテロップが表示され、それでいいのだという事を示すために四人が一步二歩とカーネルとの距離を縮める。

すると、今まで居た聖堂が突如として消え、辺り一面何も無い大地となった。

戦闘不参加メンバーは遥か頭上。先に避難していたスバルやティアナ達も、フェイト達の側で浮いている。

V S ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

其はアンスールが地帝カーネル

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? V S

私達の遙か頭上に、それぞれのヒットポイントバーが表示される。まさしくゲームに登場するようなデザインだ。

「さあお仕置きの時間だ……。行くぞ！」

カーネルが“剛覇剣フロツティ”を勢いよく地面に突き立てた。神器王ルシオンと並ぶ大英雄<sup>アンスール</sup>・地帝カーネルとの戦闘の幕が開いた。

++++Side:ルシル++++

まさかこの世界で戦友と、カーネルと戦う事になるなんて思いもしなかった。

だが所詮は虚構の存在。この“邪神ロキの遊戯場”<sup>スネル</sup>と呼ばれるゲームの世界が、私の記憶から抽出した幻影。

「<sup>アデー・ギホル</sup>汝は強大にして永遠なり、<sup>アドナイ</sup>わが主よ！」

カーネルの詠唱。いきなり儀式魔術、もしくは真技を発動させて勝負を決めるつもりか。

これは少しばかりの思考すら許されない、か。まあ相手が相手だ。私は、なのはとはやてとヴィータに「空へ上がれ！」と語調を強めて言う。

三人は私の様子から、カーネルが発動しようとしている魔術の危険性を察してくれたようですぐに空へ上がってくれた。

## コード・アンピエル

遅れて私も背に10枚の剣翼を創り出して空へ上がり、カーネルを見下ろす。

と、ここで自分の身に起こっている異変に気付いた。

まさか、と思い、魔法の術式とは別の・・・かつての私に宿っていた“力”を・・・

オーヴェスト・オニチエ  
西方の黒燿穿

ノルド・トパーツィオ  
北方の黄燿穿

エスト・ザツファイロ  
東方の蒼燿穿

スッド・ルビート  
南方の紅燿穿

その直後、地面からオニキス、トパーズ、サファイア、ルビー、四鉱石の剣山が突き出してきた。

カーネルは、地中に存在する鉱石類すらも操り攻撃手段とする。空に居る私達を落とそうと、次々と突き出してくる。

「儀式魔術を発動するための時間稼ぎだ。なのは、はやて、砲撃を頼む。」

ヴィータはラケーテン、出来ればツェアシュテールングスで待機。カーネルの防壁を、儀式が終わるまでに突破し、一気に決める!」

「了解! レイジングハート、行くよ!」

All right, my master

エクセリオンバスター

「リエイス！ ハウリングスファイア！」

『行きます！ ナイトメア・・・』

「『ハウル！！』」

なのはの構える“レイジングハート”から桜色の砲撃が、はやての周囲に白のスフィアが七基展開され、七条砲撃を同時に掃射。気を取り直して、

「殲滅せよ、汝の軍勢！」

私の意思の元、周囲に100の槍軍が展開される。

魔術式から魔法式へと変換する際に失わざるを得なかった属性、閃光・闇黒が意図も容易く発動出来た。

何故魔術を取り戻す事が出来たのか？と深く考えまい。今はただ・・・。

「（カーネルを黙らせるのみ！）蹂躞肅清！！」

二人の砲撃に追隨させるようにカマエルを一斉に降らす。

なのは達が、失ったはずの魔術を扱っている私を見て驚いている。私はただ『今はカーネルに集中だ』と念話で告げて、視線に、説明は後だ、と込める。

「おい、ルシル！ どうせ使うなら上級術式にしろっ！」

カーネルは“剛覇剣フロツティ”をもう一度地面にズドン！と突き



立てる。

すると地鳴と共に鉾石剣山が全て砕け、迫っていた私達の攻撃を乱反射させて明後日の方へと弾き返した。

上級？ まさかいくら何でも上級術式まで使えるなんてことは……。

「火より地を、粗者より微者を、緩やかに巧みに分別つべし。地より天に昇り、天より地に降り、上者と下者の効力を収む」

カーネルの詠唱が進む。この詠唱は……真技！

なのは「ブラスター2！」と告げ、ブラスタービットを3基展開。そしてすぐさまビット3基から砲撃を放ち、悠然と佇んでいるカーネルを撃ちに行く。

テッラ・スクード  
大地の防壁

しかしカーネルを守るように地面が盛り上がり自然の盾となる。衝突。なのはは続けて“レイジングハート”から、

「ストライク……スタアアーズッ！」

特大砲撃&シューター9基を放った。

次々と爆発を起こしていく。私とはやても顔き合い、

「女神の」

「「「ソナーレ陽光！」「」」

私はデバイス“ラインゴルト・フロースヒルデ”を待機形態の指輪に戻し上級術式を発動。

はやてと共に炎熱砲撃をぶつ放す。カーネルの顔が驚愕に歪む。それはそうだ。  
はやてが、私と白焰の花嫁と炎帝セシリスだけの固有魔術を使ったのだから。カーネルを護っていた盾が大爆発を起こす。空まで立ち上ってくる爆煙。

「何だよ、おい。もしかして決まったか・・・？」

『いいえヴィータちゃん。カーネルさんのHPバーが全然変わってません』

濛々と挙がる煙幕の中でさえもハッキリと視認できるHPバーに変化なし。

当然だな。今の攻撃全てはダメージを与えることなく詠唱を止めるためのものだ。

まあダメージを与えられたら儲けものだな、とかは思っていたが・・・。

今はカーネルの真技を食い止めただけで十分だ。

「なんでそこのお嬢さんがお前のソールを使うんだよ・・・!？」

アッヴェント・ピオニキレ  
先駆けし者の顕現

カーネルの疑問に満ちた声と同時に、頭上に強力な魔力反応が生まれる。

なのは達もその強大さからしてハッキリと感じたらしく、一斉に頭上を仰ぐ。

ソレを見て真っ先に反応したのははやてで、「え？　ちよつ、あんなんアリなん!？」とそれはもう驚く。

「アレって、まさか・・・隕石いいーっ!?」

なのはの悲鳴通り、こちらへ向かって摩擦熱で轟々と燃える隕石がいくつか降ってくる。

なのはが「あればっかりは防ぎようがないよ!？」と焦りだす。

私は念話で『隕石は私が対処する。散開してそれぞれ別々の位置からカーネルへと弾幕を張ってくれ』と、なのは達に指示を出す。

リインが『あんなものをどうにか出来るですか・・・?』と訊ねてきた。

「ああ。久しぶりの大魔術・・・行くぞっ!」

上級術式の中でも“真技”に近い術式のひとつ、フレイヤの発動を準備する。

地上に6つの、円形に配置されたアースガルド魔法陣。

さらに私を中心として円形に6つ、頭上にも同様に円形に6つのアースガルド魔法陣を展開、三階層の魔法陣がゆっくりと回転し始める。

横から見ればトライアングルのような構図となっているだろう。

隕石から発せられる熱が届き始める。『安心しろ、絶対に君達に傷一つ付けさせない』と告げ、

### コード・フレイヤ 女神の大戦火

全18のアースガルド魔法陣から、閃光系・闇黒系・炎熱系・氷雪系・風嵐系・雷撃系、6属性の特大砲撃を、落ちてくる隕石群へ向け発射。

持続的照射ではなく途切れ途切れの連続で放たれるため、最終的に100以上の砲撃が放たれることになる。

大気を震わせ空へ向かって行く砲撃に、なのは達は耳を押さえて「

う、うるさい・・・！」と呻いた。  
とりあえず「すまない」と謝り、粉碎された隕石の危険度を確認。  
パラパラと破片が降ってくる。それすらもカーネルにとっては攻撃  
手段となりうる。

「散開！」

「り、了解！」「よっしゃ！」

ゆえになのは達をバラけさせ、「吹き荒べ、汝の轟嵐」と蒼き竜巻  
を発生させて破片を吹き飛ばす。

ファルチエ・ギリョッティーナ  
砂塵裂碎刃

「つく・・・！」

地上を覆っていた煙幕を切り裂いて、私達へと放たれてきた砂で構  
成された大鎌の刃。

私のところには30近い砂刃が。なのは達にはそれぞれ10近い砂  
刃が向かう。

上級術式が扱えるなら、間違いなくアレが発動出来るはず。

ギリギリで回避しながら、剣翼10枚を背中から離し、新たに薄く  
細長いひし形の翼10枚を展開。

コード・ヘルモース  
瞬神の飛翔

計20枚の翼を背にした空戦形態へと移行、余裕を以って砂刃を回  
避する。

回避し終えてすぐになのは達の様子を確認するため視界に捉える。  
なのははオーバルプロテクション（全方位を球状に覆う障壁）、は

やてとヴィータはパンツァーヒンダネス（多面体の完全防御モード）で防ぎきっていた。

この世界では、魔法と魔術に差というモノがないという事がハッキリと確認できた。

「これこそ最強の剛中の剛なれ。いかなる神妙にも克ち、あらゆる堅固をも貫くなれば」

カーネルは微笑を浮かべながら私を見上げ、早口で詠唱を続けていた。

まずい。そう思った時にはすでになのは達が動いていた。

はやてが“シュベルトクロイツ”を水平に構え、「仄白き雪の王、銀の翼以って、眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹……！」と詠唱。

はやての周囲に四つの立方体が生まれる。

「『アイテム・デス・アイス』  
氷結の息吹』！」

四つの立方体から地上に向けて四条の光が落ちる。

地面に着弾したと同時に熱を奪い、カーネルの攻防手段である大地を凍結させていく。

カーネルは自分を囲うように地面を隆起させて、自らが凍結させるのを防ごうとする。

そしてカーネルは上空からの攻撃対策として頭上に、

ヴォルティチェ・サッピア  
砂塵渦巻く城壁

大量の砂が渦を作り、あらゆる攻撃や侵入者を拒む蓋となった。

「ツェアシュテールングス……！」

そんなモノ関係ないともいうように、ヴィータがツェアシュテールングスフォルムの“グラーファイゼン”を振り上げたままの状態  
で突撃。

カーネルは、迎撃のために未だ凍結されていない地面から無数の岩塊を浮かび上がらせる。

クストーデ・ムニツイオーネ  
守り人の壁壊弾岩

高速で射出される人間の頭部大の岩塊。

ヴィータは構わずに突っ込む。おい、と思ったが、視界の端になのはを捉え、突撃をやめない理由を察した。  
そうか、ならば私もなのはを手伝おう。

なのはの周囲には20基のスフィアが展開されており、最初はブラスタービット3基から砲撃を放ち、続けて、

「いつけええーっ！」

アクセルシューター

三条砲撃と20基のシューターを、ヴィータに迫る岩塊へとぶつけ軌道を逸らす。

私もサファイアブルーの魔力弓を創り出し、

「コード弓神の・・・ウル狩猟！」

左手で弦を引き絞って、創りだされた2m弱の矢を放つ。と同時に矢は無数の光線となって岩塊を貫き粉碎する。

ヴィータの行く手を拒む物は完全に無くなった。

ヴィータはそのまま岩壁へ「ハンマアアーッ！」と裂帛の気

合と共に“グラーファイゼン”を振り下ろした。  
はやての魔法によって凍結されていた部分は容易く砕いていく。が、凍結されきっていない岩壁にドリルヘッドが拒まれる。

「ブチ貫けええー！ー！ー！っ！っ！」『いつけええー！ー！ー！で  
すっ！！』

だが岩壁を突破しようとしているのは、鉄槌の騎士ヴィータと“グラーファイゼン”、そしてリインだ。

私達のレベルに合わせていると思われるNPCカーネルの魔術の前でも十分な脅威。

とは言え、ヴィータだけに任せているわけにはいかない。何せ……

「斯くて世界は創造られき。奇しき変成のそこより出づるべきこと、  
斯かる次第なり」

カーネルは真技を発動するために必要な詠唱を続けている。

そこに、ガキンと金属同士が衝突した甲高い音が。ヴィータが「なんか硬えもんが……!？」と呻いた。

「地中に在る鉄鉱石やらダイヤモンドを操作して岩壁の中を硬化しているようだな」

### 邪神コード・ロキの狂炎

両腕両足に数mの、紅蓮の劫火で構成された焰の腕と脚を武装する術式を発動。

すると「あつっ!? ちょっとルシル君!」「なんか一言くれへんかな!?!」「いきなりは勘弁しろよ、セインテスト!」となのは達が若干お怒りの涙目。

「すまない」と、つてさつきも謝った気が……。

「と、とりあえず、だ。はやて、氷結の息吹を頼む」

「え？ ……あ、了解や！」

はやてが私の行おうとしている事を察してくれ、すぐさま詠唱に入る。

まずはヴィータを防壁から離し、なのはを空へと上がらせ、ブレイカーの準備に移らせる。

右の焔腕を硬化した岩壁に殴りつけ、鋼鉄となっている防壁を熱する。

そしてすぐさまはやてが、アーテム・ニース・アイセス「氷結の息吹」と詠唱し、一つの立方体から氷結魔法を照射、熱した部分を急激に冷却する。そう、熱疲労だ。

途轍もない蒸気が周囲を覆うが、そんなものは風嵐系の魔力で気流を生み出し散らす。

もう一発、と今度は左の焔腕で殴りつけようとしたところで、

インタツイオーネ・ロッチャ  
押流し呑み込む地波

「『え……！？』『』『』『』な……！？』『』『』」

目前にそびえ立っていた防壁がこちらへ倒れ込むように一気に崩れ、岩石・砂塵・土泥となって押し寄せてきた。

体のあちこちに岩石がぶつかり鈍痛が奔るが、構わずにすぐさま空へと上がる。

「はやてちゃん！ ヴィータちゃん！」というなのはの切羽詰まった悲鳴が聞こえた。

急いで周囲を見回してみると、はやてとヴィータの姿がどこにもな



い。

「巻き込まれたのか!？」

独り言のつもりだったが、なのはは青い顔をして「うん!」と頷いた。

なのははすでに「レイジングハート! エリアサーチ!」と桜色の光球を散布し、はやたとヴィータの搜索に入っていた。空を仰げば、二人のHPバーが黒くなっていた。つまり、HPは0だ。

私も10分の2程度を削られている。

私も二人の搜索に入りたかったが、かつての戦友はそれを許してくれそうになかった。

コルボ・ダルマー・タ・ディ・カーネル  
地帝が率いし大軍勢

岩石や土泥で創り出された、100体以上のゴーレム軍が私となのはを見下ろす。

どいつもこいつも3m弱の巨体に、岩石で出来た剣やら槍やら斧やら盾やらを携えている。

「なのは、二人の搜索を任せてもいいか・・・?」

「うん。そっちはルシル君一人になっちゃうけど・・・」

「問題ない。一体として君のところに行かせはしない」

「っ! うんっ。こっちは任せて!」

なのはが空へ上がって搜索を開始。

それを合図としたかのようにゴーレム軍も進撃を開始。手っ取り早くカーネルを沈める事が出来ればいいんだが、その姿を完全に晦ましている。地中に潜って様子見、真技の詠唱を続けている可能性大。

「一対一でお前と戦うなんていつ以来だろうな・・・カーネル！」

コード  
カマエル  
殲滅せよ、汝の軍勢

最高威力を保ったままでの最大展開数である2千の槍群を、「蹂躪ジャツ粛清！」と指を鳴らし、雨あられという風に射出する。

本当なら、チュールやニーズボッグなど神器を使用した上級術式を使用したかったが、創世結界の使用だけは認めてもらってないようだ。3ケタのゴーレム軍に対し4ケタの槍群。雷撃系を除く属性を内包した槍群がゴーレムを貫いていく。中には突破してきて私と肉薄しようというゴーレムも出てくる。

「この劫火を前に・・・生き残れると思うな・・・！」

巨大な斧を振り下ろしてきたゴーレムを貫き手で貫き、内部から焼き滅ぼす。

さらに一体、また一体と槍群を突破してきて、巨剣の薙ぎ、巨槍の刺突、と揮ってくる。

まずは劫火の蹴りで武器を溶かし無力化。両の腕でゴーレムの頭を鷲掴んで、上半身を吹っ飛ばす。

セカンドパレル  
セット  
「第二波・・・装填」

もう一度、今度は威力を底上げした900の槍群を展開。すぐさま「蹂躪粛清！」と指を鳴らし射出して、ゴーレムの残党を

貫き滅する。

破片が降り注ぐ中、ふと20m前方の地面がもこもこ動いているのに気付く。

「カーネルか・・・？」

地上スレスレを滑る様に飛行し、動いているポイントの真上で浮遊する。

動きが強くなってきた。いつでも攻撃できるように構える。

「ぶはっ！」「」

ポコツと地面から顔が二つ飛び出してきた。

「はやて！ ヴィータ！」

行方不明だった二人だ。二人は、ぺっぺっ、と口内に入った土を吐き出している。

『なのは、二人を見つけたぞ！』となのはに念話を送り、ロキを解除して二人を助けるために素手で土を掘り返す。

しかしはやては安堵するより、「アカン！ 私らよりカーネルさんを」と切羽詰まっている。

ヴィータも「あたしらは大丈夫だが」と、最後までいう事は出来なかった。

何故なら、私の首筋に“剛覇剣フロツティ”の刃が当てられたからだ。

今さら背後に気配が一つ。私のはやてとヴィータの救出に意識を集中してしまったのを隙として背後に回り込んだようだ。

「戦場で、敵に背後を取られてしまうほどの隙を生むような行動を

取るなんてな。

「・・・お前のその優しさは好きだが、自分と同格の相手をしている最中でその行動は危ういぜ」

「「わっ!?!」」

はやてとヴィータが地面から飛び出す様に脱出。

二人の周囲の土が、二人を下から押し上げたようだ。

だが二人はそのまま空へと上昇していく。カーネルに「二人に何をしました？」と訊く。

「あの二人は失格だ。イリダツイオーネ・ロッチャ 押流し呑み込む地波に巻き込まれた時点で二人のHPはゼロになった。

脱落者は退場。見学してる他のお嬢さん達と一緒に見学班だ」

何とか視線を上に向け、フェイト達と合流しているはやてとヴィータ、ユニゾンが解けたのかりエイスとリインも一緒だ。

とりあえずは何事もないようで一安心。さて、次はこの状況を打開する術だな。

そこに、なのはからの「ルシル君、大丈夫!?!」という念話が届く。

「ああ、大丈夫だ、と言いたいところだが。少しまずい状況だ」

「・・・私に出来ることは?」

「私諸共でいい。カーネルに全力砲撃をお見舞いしてくれ」

なのはが息を飲むのが判った。

少し間が開いて、「うん、判った。ルシル君を信じるよ」と答えた。持つべきものは、この世界における戦友しんゆうだな。

「さて。もう一人のお嬢さんは、っと」

カーネルがキヨロキヨロと周辺を見渡している気配。だが首筋に当てている“フロツティ”には一切の油断はない。

「敵前で舌舐めずりとは。土石系属性の王が笑わせるな」

「おっと。下手なマネは無しだぞルシル。

共に技を磨き、共に死線を潜り抜けた来た友でも容赦はしない。

まっ、安心しろ。この世界での死は、しばらくの行動不能になるだけだ」

やはりゲームの世界。死、という概念はないようだ。

“邪神<sup>スンベル</sup>ロキの遊戯場”。原初王オーデインと義兄弟の契りを交わした、当時のヨツンヘイム王、ロキ・プレリユード・オリオール・テリウス・デ・ヨツンヘイムが創造せしゲーム。

大戦時にも噂には聞いていた。が、どうしてこの時代に……？

(っつて、やはりあの女の仕業か……！)

ふとカーネルが「お前の現在の仲間は、俺達と同じくらいにクレイジー<sup>アンスール</sup>だな」と苦笑した。

ここまで届く桜色の淡い光。ああこの魔力波は、スターライトブレイカーか。

確かに全力で、とは言ったが……ブレイカー？

避ける事は出来ないし、防ぐにもそれなりに上位の盾でないと……。

まったく、君というやつは……。素直でいいんだが、もう少し……。いや、頼んだのは私だ、文句は言うまい。

「スターライトお……ブレイカアア……ッッ!!」

頭上から落ちてくる桜色の極光が4つ。マルチレイドだ。

私は右手で“フロツティ”の刀身を鷲掴んで首筋から離す。

ゆっくりとカーネルへと首を回し、ニヤリと口端を歪ませて見せつける。

「さあカーネル。お前はどつする。私の親友のブレイカーは、キツツイぞ?」

「見りや判る。あれは凄まじいな。大戦時、俺達と同じ魔力量を持つていたら、それなりの兵になれたな。

が、魔力があつても所詮は雑兵どまり。砲兵は、孤人戦争と殲滅姫で十分だよ。

というわけで、あのお嬢さんは俺達、最高位魔術師の敵じゃない」

カーネルは楽しそうに頬を緩め、「真技」と呟いた。

詠唱が終わっていたのか! “フロツティ”を鷲掴んでいる私の右手を振り払い、カーネルは“フロツティ”を両手で持ち地面に突き立てようとする。

「させるかつ!」

デバイス“ラインゴルト・ヴェルグンデ”を起動、左手に携えた“ヴェルグンデ”で“フロツティ”が地面に突き立てられるのを阻止。カーネルは怪訝そうな表情を浮かべ、ブレイカーを防御するために、

地面を盛り上がらせ、防壁とする。次いで、なのはを墜とすために

ノルド・トパーツィオ  
北方の黄耀穿

トパーズの剣山を突き出させる。直後に、防壁にブレイカーが直撃。爆音と共に視界が桜色に満ちる。しかしそれだけだ。爆音と閃光、衝撃波は届く。

だがブレイカーの本体は私とカーネルには届かない。崩れては再生し、再生しては崩れ、また再生。

カーネル  
地帝の強みはこれだ。大地の全てがカーネルの味方だ。

だから土石系は強い。陸戦においてはまず間違いなく最強。

だから土石系の術式は最高難度。だから私は苦手。その代わり土石系術師は空戦を苦手とする。

「俺の防壁を突破できるのは、アンスールのメンバーだけだ」

再度“フロツティ”を突き立てようとするカーネルへ呐喊。

両手に持つ“ヴェルグンデ”の柄尻を連結させて、一番しっくりする“神槍グングニル”と同じ形状とする。

先制攻撃は頂こう。独楽のように回転しながら、連続でカーネルへ刃を奔らせる。

「二剣一对のハンド・アンド・ア・ハーフ・ソード？」

おい、ルシル。グングニルはどうした？ 形状は同じでも、それはないだろ」

カーネルは余裕を以って私の一撃一撃を弾いていく。

私は「グングニルは失った。が、このヴェルグンデは私が一から作った相棒だ」と笑って見せる。

「なるほど。ソイツは概念兵装というわけか。神造兵装に比べれば見劣りするが、いいだろ。付き合ってやる」

“ラインゴルト”を開発したときには神秘を失っていたので、神器には入らないんだが……。

エスト・ザツファイロ  
東方の蒼耀穿

ブレイカーが治まると同時に、カーネルはさらになのはへと攻撃を加えていく。  
激しく心配だが、ここはなのはを信じ、私はカーネルを墜とすために動く。

真技の詠唱は終わっている。発動条件である“フロツティ”を地面に突き立てる、それを妨害し続ける。  
隙を見て砲撃で一気に決める、というのがいいだろう。

『なのは、大丈夫か……？』

『大丈夫、かな。何とか避けきれてるし。でも、ごめん。フォローに回れないかも』

『気にしないでいい。なのはは自分自身の事を考えてくれ。危ないと思ったら離脱してくれていい』

『うっん、それはちょっと、だね』

なのはは私を置いていくことに抵抗があるようだ。

なら下手に説得してこじれるのも面倒だ。なのはの行動は、彼女自身に一任しよう。

彼女とて数多くの戦線を潜ってきたんだ。心配するのは野暮、か……



・？

“ヴェルグンデ”の連結を解き、二刀流としてすぐに、

「はあああああああつっ！！」

コード・フレイ  
豊穰神の宝剣

常に最善の一撃を自動で放つことのできるフレイを発動。

筋肉や骨がミシミシと鳴るが、傷つきし者に、汝の祝福をで回復させる。

カーネルから余裕の表情が失われた。私の剣戟に合わせ捌こうとしたその瞬間に、全く別の軌道に変わるからだ。

忙しなく“フロツテイ”を振るい続けるカーネル。こちらもカーネルを押し続けるために剣戟の手を緩めない。

「とことん厄介だな、お前のコード・フレイは……！」

「その分代償があるが、お前の真技を封じられるなら安いものだよっ！」

私とカーネルの間や周囲には火花しかない。

ただ“ヴェルグンデ”を振るい続ける。時に連結させ、また解き、と繰り返しながら。

何合切り結んだか。ふとどれだけ続けられいいのか、と思った時、

サッピァ・スバード  
砂刃裂波

研ぎ澄まされた砂の刃が足元から無数に生えた。

咄嗟に剣戟を止め、互いにバックステップをし、攻撃範囲から離れる。

直撃だけは免れたが、私は右腕と左肩と左足を浅く裂かれ、カーネル自身も幾つからの裂傷によってダメージを負っていた。オウングメージ覚悟の離脱。カーネルとの距離は約11m。私は砲撃を撃とうとした。カーネルの目論見を阻止するために。

「真技」

ディストルツイオーネ・モンド  
母なる大地が終わる刻

だが間に合わなかった。無情にも地面に突き立てられた“フロツテイ”。

僅かな時間の静寂。しかしすぐに地鳴りから大地震へと激変する。足元から突き上げてくるような強烈な衝撃。立ってられないために空へ上がる。

直後、世界は終わりを迎える。至る所の地面が10数mと隆起し、または数mと陥没し、無数に地割れが起き、地割れからは溶岩が噴き出て、ほぼまっ平らだった大地の姿はもうどこにもない。

大戦時、無数の敵兵がその命を奪われた、陸戦魔術師殺しの大魔術。

「ルシル君！ これって、こんなのって・・・！」

なのはが顔を真っ青にして、私の元へ飛んできた。

私がおかを言う前に、未だに滅びへと向かっている大地から無数の岩塊が飛来し、そびえ立つ大地の塔が崩れ、その土砂が倒れ込んできた。

私はなのはの手を引いて、一気に上昇。世界崩壊に巻き込まれないためにはもう空へ逃げるしかない。

「ルシル君とシャルちゃんの記憶で疑似体験したけど、実際に体験するとこんなに怖いなんて・・・」

私の右手を握る力が強くなった。

そこに、「おい、イチャつくのは後にしとけ」とからかうような声。

なのはがバツと手を離す。だがそれは恥ずかしさからではなく、至近距離からカーネルの声が聞こえたことによる恐怖からのものだ。直後、私となのはを中心として四つの岩石の塔が突き出てきた。どれも全高50mはある。

その塔の頂上から、“フロツティ”を上段に構えたカーネルが落下してくる。

「私に空戦を挑むとは、気が狂ったかカーネル！」

コト  
カマエル  
殲滅せよ、汝の軍勢

落下してくるカーネルへ向けて、咄嗟に展開できた500の槍群を射出。

だが、四方にそびえ立つ塔の側面からカーネルを護るように岩石やら土砂で出来た柱が突き出し、カマエルを次々と防いでいく。

くそっ、私は何て考えの甘い。先程も自分で思っていたじゃないか、全ての大地がカーネルの味方だ、と。

カマエルを防ぎきったことよって崩れかけていた柱が、おそらく“フロツティ”の一撃で完全に根元が破壊され、ある程度の形を保ったまま私達を押し潰さんと轟音と共に落ちてくる。

「それで勝ったと思うな！」

コト  
フシエル  
無慈悲たれ、汝の聖火

蒼炎の大蛇を12体生み出し、落下してくる柱に巻きつかせてその

まま明後日の方へと向かわせる。  
残るはカーネルのみ。私は魔力弓を生み出し、弦を引き絞る。

「カマエル以上の威力を持った弓神の矢……どこまで防ぎきれ  
る！」

弓神の狩獵  
コード・ウル

放たれた矢がすぐさま無数の光線となる。

決まった。いくら何でもこればかりは防ぎようがないはずだ。

四方の塔から幾つもの柱が枝のように伸びてくるが、そのどれをも貫通しカーネルへと向かうウル。

私達とカーネルの間に在る幾つもの柱が邪魔でよく見えないが、

「あつ！ カーネルさんのHPがすごく減ったよ！」

カーネルのHPを示す黄色い部分が残り3分の1辺りまでになって  
いた。

とりあえずこのままここに留まるのはよくない。そう判断し、なの  
はと共に四方の塔から離れる。

離れてすぐ、四方の塔が音を立てて崩れていく。

「なのは。あとは私一人で片付ける」

「え？……うん、判った。ごめん、あんまり役に立てなかった」

「そんなことはない。カーネルを相手にここまで戦った。胸を張っ  
ていい」

なのはは「うん」と頷き、フェイトたち見学者の居る場所にまで飛

んで行った。

ジガンテ・ブリーニヨ  
巨人の鉄拳

濛々と空まで上る煙幕の中から、巨大な岩石の前腕部が幾つも飛来してきた。

空戦形態を維持しているため、直撃を免れるように空を翔ける。

さらに周囲から岩石の塔が幾つも幾つも突き出してきて、そこから巨拳が飛んでくる。

気付けば全方位からの巨拳の雨あられ。次第に避けきれなくなり、不覚にも一発まともに食らってしまった。

直下に吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられてようやく止まる。

「ようこそ、ルシル。最後の決着の場へ」

「ぐっ、げほっ、か、カーネル……！」

そこは、円形の闘技場だった。広さは半径200mといたくらか。

土砂によって周囲を囲まれている。戦う環境としては一方的に不利だ。

その闘技場の中央、傷だらけのカーネルが佇んでいた。

私は立ち上がり、ラファエルでダメージを回復していく。

カーネルは文句を言わない。というか言わせてたまるか。

「ペナルティで始まったこの戦いだ、正直ここまでやる必要があるのか?と問い始めた……」

「奇遇だな、カーネル。私もだ。ここまで本気になるってどうかと思っ……」

「「だが」」

お互いに武器を構える。カーネルは“剛霸剣フロツテイ”を。私は無手だ。何せ接近戦などするつもりは端からないのだから。

「「男には引き下がれない時がある！」」

サッピア・スパイダ  
砂刃裂波

コート・ヴァーリ  
復讐神の必滅

20近い砂の刃が地を滑るように迫る。

私は、術者に敵対して攻撃を加えた対象を永続追尾する砲撃ヴァーリを放つ。

互いに相手の攻撃を回避。しかしカーネルは追尾してくる砲撃に迎撃のための魔術を使わなければならない。

カーネルは迫る砲撃に、

「食らいやがれえー！ー！ー！ツツ！」

スッド・ルビーノ  
南方の紅耀穿

ルビーの剣山を自分と砲撃の間に挟み、砲撃を拡散させていく。

良い手だ。それにきっちり私のところにも剣山を突き出させている。軽く体を宙に浮かせ、突き出してくる剣山の間を縫うように回避し、ヴァーリを連発。

相手がどこに居ても勝手に追尾してくれるヴァーリだ。

ヴァーリの軌跡を辿り、反応した場所へ向けて決めの一撃を撃つ。

ヴァーリは私と同じように剣山の隙間を縫って、カーネルを討つた

めに光の尾を引いて行く。

ジガンテ・ブリーヨ  
巨人の鉄拳

ジガンテ・ピエーテ  
巨人の蹴撃

闘技場を囲む土石から、私を押し潰そうと拳と足首から下が降ってくる。

避けて避けて避けまくる。途中でウルを掃射し、迎撃破壊を行う。互いにダメージは無し。カーネルは上手く剣山を盾にして避け続ける。

こうなれば、一度全てをリセットした方がいいな。  
フレイヤやエーギルと並ぶ大魔術・・・バルドルで。

アイン・ギメオ・タウヘイト・フィーメム  
「汝は尊き光の寵愛を受けし者」

中空に、回転する七つの円環が合わさり球体を形作る。

その中央には私の魔力光サファイアブルーの魔力球が発生、徐々に大きくなっていく。

今思えば、バルドルは集束砲なんだな。周囲の魔力を集束させていく。

「バルドルだと！？ 根こそぎこの場を吹っ飛ばすつもりか！」

「何を焦る、カーネル。お前の真技とて世界を吹っ飛ばすほどに強烈な術式だろうが」

危険性で言えば圧倒的にカーネルの真技の方が高い。

カーネルは、バルドルを阻止するために円環球体へと攻撃を加え始める。

無駄な事を。詠唱から始める儀式魔術として発動したバルドルは、無詠唱発動の時とは違い、他からの妨害は受け付けない。バルドル。それはかつてのアースガルドにおいて全ての存在から愛された王の名。ゆえに、詠唱という加護を授ければ、発動を妨害されることはない。そう、魔道王フノスの真技以外では決して。

「その御名の下、エウヴァグ・エー其に刃突き立てし者へ・・・」

円環球体からキイーンと甲高い音が流れ始める。カーネルが目に見えて焦りだし、術者である私を墜とそうと躍起になり始める。

コルボ・ダルマータ・デイ・カーネル  
地帝が率いし大軍勢

「アツサルト往けっつっ!!」

ゴーレムが先程の100体を越える数で押し寄せてくる。魔力の集束率は最大じゃないが、さすがにあの数のゴーレムに一斉に攻撃されたら終わりだな。仕方ない。詠唱を中略して、必要な残りの詠唱を告げる。

「アイン・カフテータ・ミュー・コラ汝は左手に希望を携え、ラメッド・レーシユクセイ右手には閃光を携える」

振りかぶられた巨剣やら巨斧を避け、私は高らかに叫ぶ。

「エイメイ・スインテットそして全ての者にその御名を轟かせ！」

コド・バルドル  
光神の調停



円環球体の中央で神々しく輝く蒼の球体から、下方限定として砲撃の雨が降り注ぐ。

本来は全方位へ向けられる完全無差別砲撃だが、“闇の書事件”でリンフォースが改編したように下方限定とした、何せ空には大切なフェイト達が居る。巻き込んでしまっただけでは意味がない。

砲撃が地面に着弾すると、半球状の蒼い衝撃波が全てを破壊しようと広がっていく。

ゴーレム軍も3発で全滅。そして・・・

「だあああああつ！ 負けたああああーっ！っ！」

カーネルの断末魔。カーネルは咄嗟に防壁を造ったが、バルドルの破壊力の前には無力。

一発二発は防げようと、8発9発と続けられればどうしようもない。

カーネルのHPバーが黒に染まり、ガシャンと砕けた。

「私の勝ちだな、地帝カーネル」

「あーはいはい。俺の負けだけ、孤人戦争ルシリオン」

++++Side:ヴィヴィオ++++

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」

わたしとコロナとリオ、それにアインハルトさんとイクス、ルーラーにアギトも絶句してた。

ルシルパパが大昔の英雄で、次元世界誕生に立ち会った魔術師だつていうのは知ってた。

すごく強くて、今の魔導師なんて足元にも及ばないって聞いた。でもだからって、

「こ、これが・・・ヴィヴィオさんのお父様の實力・・・。わ、私に勝てる、でしょうか・・・？」

「無理無理無理無理無理。アインハルトさん、戦いにすらならないよっ!」

「強いとか弱いとかの話じゃないよう・・・。(怯)」

「今のが・・・魔術師の戦い・・・なんですね」

やり過ぎだよ、ルシルパパ! わたしの大切な友達が怯えきつてるよ!

なのはママやティアナさんのブレイカー衝突なんて可愛いものだよっ!?

「すげえな、やっぱ。セインテストの全力って見てて怖えわ」

みんながそれぞれ今の戦いの感想を言い合っていると、景色がガラリと変わる。

そこは、大聖堂へと移動させられる前にわたし達が居た場所。遊園地のような街中で、派手な建物が建っていて、陽気な音楽が流れてる。

目の前には入場ゲートのようなモノがあって、

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ

と書かれてる。そのゲートの先、大きなマス目で道が造られてる。

「というわけだ。今がお題をミスったり、拒否ったりしときのペナルティー。」

今のようなバトルを回避したいなら、出されたお題をキツチリクリアすること。判ったか？」

ルシルパパと戦ってたカーネルさんが、大きなサイコロを手に説明した。

なのはママ達は言う。これじゃまるで人生ゲームのようだって。

(はうゝ、どうしてこうなっちゃったんだろう・・・?)

わたしは人知れず肩を落として溜息を吐いた。

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（後書き）

レヴィル

「わたし達ってまるで空気！」

レヴィ

「はい、始めました。今日のレヴィルのコーナー」

ルーテシア

「名前なんてあったんだ」

レヴィ

「今付けた。にしても何っ？ 今回は丸ごとバトルじゃん！」

しかも、アンスールのメンバー同士のガチンコ！ 世界だって滅ぶわっ！」

ルーテシア

「お、落ち着いて。でもあんなのに巻き込まれたら死ぬって絶対」

レヴィ

「判ってるけどさ、うん、判ってるよ。」

でも今までわたしとルーテシアが活躍してたのに、いきなり出番が無しってあんまり過ぎる！」

ルーテシア

「じ、次回からはちゃんとあるみたいだし、今回だけは、ね？ 我慢しよう」

レヴィ

「むう。しょうがない。そんじゃまた次回って事で」

ルーテシア

「バイバイ」

カーネル

「って、おい！ 俺のニダヴェリール語講座は!？」

レヴィル

「文字数の問題により却下」

カーネル

「そんなバカなあーっ！っ！」

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へくく

++++ Side : レヴィ +++++

ミッドで過ごすのも今日で最終日。

午前中は、コロナ達みんなと最後のショッピングへ、って事になってる。

集合場所はクラナガナーのショッピングビル。だったんだけど、わたし達は今聖王教会に集合してる。

イクスにお呼ばれたからだ。イクスの部屋で紅茶を御馳走になりながら、

「これが、グロリアさんから送られてきた写真です」

「おお、綺麗に撮れてる」

アンティークテーブルの上にある、謎の女グロリアが撮った写真を眺める。

初めて会った時に開催された撮影会の写真に昨日の演劇の写真。

どれもこれもアングルバツチリな、プロが撮影したと言ってもいいくらい。

ヴィヴィオ達が色々写真を手にとって、昨日の演劇の思い出を喋り出す。

「うわっ、すごい。グロリアってプロのカメラマン？」

「私、こんな顔してたんですね演劇の時」

ヴィヴィオとアインハルトは主人公役だった。

だから写真も多い。というかどこから撮ったの？って思えるような写真もある。

全然気付かなかった。完全に演劇に意識を向けてたし。むう、わたしとしたことが。

「ヴィヴィオとアインハルトは良いなあ、ドレスで。

私もドレスを着てみたかったなあ。でも主役は恥ずかし過ぎだし。

んー、そう言ったらラタトスク役でもよかったとも言える・・・？」

「あたしもフレースヴェルグ、だっけ？ でよかったかな。

練習の時、なかなかセリフとか憶えられなかったから。

出番も終わりの方で、それに短かったからミスしなかった」

配役はくじ引きで決めて、コロナとアインハルトが主役の二人になった。

で、コロナは主役として舞台上に立った時の事を想像してセリフ練習をすると、緊張からかよくセリフを噛んでいた。

結局治らなかったから、代役としてヴィヴィオと交代。

出番とセリフの少ないラタトスクってことになった。

リオもおんなじで、セインと役を交代したんだよね。

言っちゃ悪いけど、リオは演劇役者に向いてない。

憶えない、噛む、動きカクカク。演じようとする、どうも不自然になる。

だから出番の少ないフレースヴェルグってことに。まあ文句は無いようで、喜んでセインと代わってた（セインはおじさん役になってへこんでた。合掌）。

「語り部でしたわたしもちゃんと撮ってくれたんですよ」

「イクスも頑張ったもんね　語り部って重要な役だから」

「そうそう　語り部って、ある意味主役だよ。さっすがイクス！」

わたしもルーテシアに続いて、イクスの活躍を称える。

イクスは「あ、ありがとうございます」ってテレで、ほんのり頬を染めながら俯いた。

わたしもみんなの写る写真を手に取った。うん、ベストアングルで撮られてるなあ、わたし。

警戒すべきグロリアの写真だっことを忘れてニヘラって笑ってる  
と、

召喚ソウエンされたし召喚ソウエンされたし召喚ソウエンされたし

ドクンと心臓がハネた。視界がグラって揺れる。

意識が遠のくの耐えていると、ドタバタってルーテシアやヴィヴイオ達が倒れてくのが揺らぐ視界の中で見えた。

「グ、グロリア・・・！　やっぱりあの女・・・！？」

アンテイクテーブルに手をついて、倒れる体を支える。

だけど力が抜けた足がガクガク震えて、へたり込むように床に座る。あーダメだ。座ってるのも難しい。コテッと横になるしかない。

横になったら一気に意識が薄れ始めた。

「さい・・・あ・・・く・・・」

グロリアに悪態をつくと同時に、完全に意識が途切れた。でもそれも一瞬のようで、すぐに視界が開けた。



ポツンと立ってて、さっきまでのが夢のよう……おおおう!?

「な、なななな何!? ドコ!? って、ココは遊園地!?!」

「あ、起きた? 声をかけても何にも言わないし。寝てるんじゃないかって思っても目開けてるし」

「目を開けたまま眠ってるレヴィ、ちょっと怖かったかも」

聖王教会から派手な音楽が鳴ってる遊園地のような場所へいつの間にか移動。

驚いていると、ルーテシアとヴィヴィオがわたしの顔を覗き込んでた。

見れば、イクスの部屋に居た全員がいきなりの異変に驚いて、啞然としてる。

一体どうして? 決まってる。グロリアの仕業に違いない。あの写真に何か仕掛けを施していたんだ。

警戒していたのに! 一番大事なところで気を抜いた!

「ね、ねえっ。ここってどこ? 私たち、イクスの部屋に居たのに……?」

「そ、そうですね。おそらく強制転移……でもないですし……」

「うん。魔法が発動した気配も全然なかったし……」

コロナとインハルトとリオが今の状況を魔法に結び付けて、色々考えを出してく。

巻き込んだ。まったく無関係なコロナ達を。

『レヴィ。何か知ってるんじゃないの？　なんか様子がおかしいよ．．．』

ルーテシアが真っ直ぐわたしの目を見て念話で訊いてきた。隠している情報じゃないよね。まずは神秘云々を知ってるルーテシアに話そう。

ある程度判っている事をルーテシアに教えた。

グロリアがもしかしたら昔のわたし．．．ベシカートゥムレヴィヤタン“大罪・許されざる嫉妬”と同じ“絶対殲滅対象”の一体なんじゃないか？って。

そしてこの異変もグロリアが何かしたんじゃないか、写真に何か仕掛けたんじゃないかって。

『グロリアが！？．．．ルシリオンさんにこの事は？』

『うん、昨日の夜に話した。でももし仕掛けてきても対抗する術が無いって。

わたしもルシリオンも、もう人間だし。対抗する守護神が現れるのを待つしかないって』

ルーテシアが『そんな．．．！』ってショックで俯いた。

でもわたしは『大丈夫。きつと友達のアイツが来て、わたし達を守ってくれる』と手を握る。

ルーテシアもわたしの言った、アイツ、が誰かを察して、

『そう、だね。うん、きつとシャルロッテが来てくれる！』

不安げだったルーテシアが安心したように微笑んだ。

きつと、きつと必ずシャルロッテが来てくれる。

だってこの世界と一番繋がりがある守護神はシャルロッテだから。

＋＋＋ Side：レヴィ なのは＋＋＋

今日半日頑張れば、ヴィヴィオの待つ自宅へ帰れると思うと嬉しさが込み上げてくる。

それに、ルーテシアとレヴィにもお世話になったし、何かお礼が出来たらいいんだけど。

私が自宅に帰る頃には二人はミッドを発ってるし。

お礼の連絡くらいはしておかないといけないよね。ちゃんとしたお礼は後日って事で。

「なあ、なのは。聞いたか？ 新世代アギラスの試作機が、近々現場で試験運用されるって話」

ヴィータちゃんが紙コップを私のデスクに置きながら、そう話しかけてきた。

私は「ありがとうヴィータちゃん」とお礼を言いながら、コップに口を付けて一口。

「おいしい。そうなんだ。上手くいくといいね。セレスさんの願いのためにも」

「だな。で、だ。噂じゃあたしら教導隊と一緒に飛ばせて、空戦のデータ収集をやりたいとかなんとかって」

「それって戦えって事？ ただ一緒に飛ぶだけじゃ、旧世代からの引き継ぎデータで十分だし」

戦闘機アギラス。空戦魔導師の先遣として予定されてる、ある種の

デバイス。

犯罪者との戦闘機能はもちろん、自然災害現場での活躍を見通しているんな機能が積み込まれるって聞いている。

「人間は日々進化ってこつたる？ アギラスも学習機能があるし、あたしやなのはのようなトップクラスと戦った方がレベルアップの工程が省ける。ってあたしは思ってる」

「あはは、自画自賛だねヴィータちゃん」

「当たり前だろ？ マジなんだから」

そんな話をしていると、同じ部署のベルタ（三等空尉の21歳で、結構エリートだった）が「なのはさくん、ヴィータさくん」と、私とヴィータちゃんの名前を呼びながら駆け寄ってきた。

“機動六課”時代の私とヴィータちゃんに憧れて、教導隊の道を目指した女の子。

何ていうかテンションがシャルちゃんぽくて、ヴィータちゃんもフアーストネームで呼ぶくらいにすごく良い娘だ。

「おう、ベルタか。どうしたよ」

ベルタは右手に何か封筒を持っていて、「お届けモノですよ」と差し出してきた。

ヴィータちゃんがソレを受け取って、カサカサと中身を確認する。

「ん？ 写真だな。あたしとおまえのだ。つか、コレ・・・隠し撮ったやつじゃね？」

ヴィータちゃんの聞き捨てならない言葉を聞いて、「えっ？ 隠し

撮りっ?」と私も写真の内容を確認する。  
写真に写っていたのは、演習中の仮想敵役として空を飛んでいるところ。

想像してたちよっといかがわしいモノじゃなくて心底安堵したけど、  
でも……

「確かにこれは隠し撮りだね。撮影許可も現像許可も下りてないし」  
「ベルタ。コレ、どうしたんだよ」

「え、えっと、グロリア・ホド・アーレンヴォールっていう方から  
ですけど。」

とても大切なモノで、絶対になのはさんとヴィータさんに渡してほしいと。

あ、名刺もちゃんと貰ってますよ。さすがに誰か判らない人から受け取るほど間抜けじゃないですからね」

グロリア・ホド・アーレンヴォール。

つい1時間くらい前にルシル君から聞いた名前だ。アポリュオン“絶対殲滅対象”  
”かもしれない、正体不明の女性。”

その人からの写真。何かあるかもしれないからすぐに手放す。

ヴィータちゃんも写真から手を離して、グロリアの名刺というのを警戒しながら受け取る。

「ヴァイゼンの写真家みてえだな。こっちの確認はあたしが取るから、なのははセインテストに連絡入れとけ」

「判った」と、すぐさまルシル君に通信を繋げようとして……

ウヘニ・ウヘニ・ウヘニ  
召喚されたし召喚されたし召喚されたし

視界がグラッと揺れた。デスクに両手をついて、椅子から転げ落ちる無様は免れた。

「ヴィータちゃんも私と同じようにデスクに手をついて、朦朧とする意識を覚まそうと頭を振ってる。」

「ベルタが何か言ってる？ ああ、大丈夫ですか、って心配してくれてるんだね。」

「でもごめん。これは結構キツイ……。でもこれだけは伝えておかないと……。」

「ルシ……。ル、君……。に……。連絡……。」

それが精いっぱいだった。完全に意識が落ちる。と思ったら、すぐに目を覚ました。

「だけど、やっぱり異変は起こっていた。ぼけーっと佇んでいる私は、煌びやかな場所、何かに例えるなら遊園地のような場所に居た。」

「本局からいきなりこんな場所に移動するなんて、何も知らない一般人ならパニックになるだろうけど、私は今まで散々こういう不思議体験をこなしてる。」

「だから冷静に辺りを見回して……。ヴィータちゃんを発見。」

「「ヴィータちゃん！」と駆け寄って、放心状態のヴィータちゃんの肩を揺する。」

「んあ？　なのは？……。あつ！　おい、なんだこりゃ！？」

「よかったあ。私もさっき気が付いたんだけど、妙なところに飛ばされちゃったね。」

「陽気な音楽が流れるここは、どこをどう見ても遊園地。」

「ここに連れてくるのがグロリアって人の狙いだしたら、一体何を」

企んでいるのかサツパリだ。

とりあえず「帰る方法を探さないと」と、歩きだす。

ヴィータちゃんも「まあた妙な事になっちまったな」と嘆息してついできた。

＋＋＋ Side：なのは はやて＋＋＋

「主はやて。顔色があまり優れないようですが・・・」

「そうか？ 朝寝坊もしたし、そんなことないと思うんやけど？」

自宅で休日を家族と過ごす（ヴィータがおらんのは寂しいなあ）、そんな幸せの中、シグナムがそう心配してくれた。

あーでも体調は悪くないけど、頭を悩ませる問題を抱えとるんは事実やな。

そこに、「じゃあ今日のお買い物は、はやてちゃんはお留守番しててくださいね」とシヤマルが私の額に手をやりながら言う。

「マイスター、風邪かっ？ 頭痛いのかっ？」

「シヤマル。はやてちゃんは風邪なんですか？ 喉は痛くないですか？」

アギトとリインが、私とシヤマルに詰め寄る。

シヤマルは私の額から手を離して、「はやてちゃん、あーん、してください」って。

「だ、大丈夫やって。ダルくもないし、頭と喉も痛ないしな」

「ダメですよ、はやてちゃん。本人が気付かないだけかもしれないせ  
んし」

有無を言わさん真剣な表情で私を見てくるシヤマルに、私は「了解  
や」て口を大きく開ける。

なんや。視線が集中して小恥ずかしいなあ。もう子供やないんやで  
私。

で、結局は健康体やってゆうのが判ってみんな安堵する。

心配されるんは家族としては嬉しいんやけど、ちょお大げさやった  
かな・・・？

「うーん、顔色が良おないように見えたんは、きつとアレの事で考  
えごとしとつたからやな」

みんなでソファに座ってお茶しとる時にする話やないけど、これ以  
上、私の体調がって心配させるのも気が引ける。

だから今朝から悩んどるアノ問題に触れる。そう、グロリア・ホド・  
アーレンヴォール。

テルミナスやペツカートウムと同じ“アポリュオン”の一体かもし  
れへんてゆう存在。

今朝早くにルシル君から連絡を貰った。ヴィヴィオ達とその要注意  
存在が接触した、と。

でも対抗策が無い、守護神に任せるしかない、って。指をくわえて  
待つしかないってゆう事や。

「私は、ルシリオンの記憶で何体か見ましたが、私独りでは戦いに  
ならないと解ります。

人間となってしまう以上、私とユニゾンして魔術を扱えたと  
しても今のルシリオンでは手も足も出ないでしょう」



「うーん、ペッカートウムの連中ならいざ知らず、テルミナスってどんな奴かは知らねえけど、あたしはそんなに心配しないかな・・・」  
リエイスが重苦しい事を言った後、アギトは両手を頭の後ろで組んで、そう言った。

リンも「わたしも、です。だってわたし達にはとても心強い仲間が居ますから」って笑う。  
強いなあ、二人は。でも二人の言う通りや。私らには、同じ世界に居らんくても心で繋がった仲間が居る。

「ふむ、そうだな。もしそのアーレンヴォールという女がアポリュオンであったなら、それを討つ守護神が必ず来る。その守護神は十中八九・・・」

「シャルちゃんやな」「フライハイトちゃんね」

この世界と一番繋がりが、絆があるんはシャルちゃんだけ。  
もしかすると、もう一人の、守護神としてのルシル君が訪れたりしてな。

もしシャルちゃんが来たら、ほんの少しでも話し出来たりするんやるか？

出来たらええな。そう強く思う。今度のシャルちゃんはどれだけの時間を過ごした後のシャルちゃんやろ？

また忘れたフリとか、の心配はいらんな。またしたら今度は怒るよ？

「おはよーございまーっすっつ！」

って、いきなり元気いっぱいな声が。

この声はミウラやな。今年もインターミドルに向けて、ザフィーラ

やシグナム、ヴィータと特訓中。

シヤマルが「いらっしやーい」って玄関へパタパタ駆けてゆく。そしてリインとアギトがテキパキとお茶やお菓子を準備してく。

んー、この手際の良さ。さすが八神家の家族やな。

「おはよーございますっ。はやてさん、師匠、シグナムさん、リインさん、アギトさん、リエイスさん！」

「朝からテンションMAXですねー、ミウラ」

「そこが好ましくもあるんだがな」

ミウラはあれよあれよと迎えられて、リインとアギトが用意したお茶とお菓子を食べていく。

でもふと「あ、忘れるとこでしたっ」ってポケットから封筒を取り出す。

白い封筒で、八神家様へ、と綺麗な手書きの文字が。ミウラから一番近かったリエイスが受け取る。

「差出人は書かれていないな。ミウラ、これは誰から・・・？」

「ここに来る途中に、綺麗な、でも子供っぽい感じの女の人からですっ。なんか、大事なモノだとか」

んー、大事なモノやったら直接持ってきてほしいなあ。

リエイスがカサカサと封筒を開け始めて、中身も私達に晒した。

「写真やな」「」「」「写真ですね」「」「」「写真だな」「」

この場に居る一人につき一枚の写真が7枚。

ヴィータのは無い、な。私とリンとリエイスは事件解決会見を開いた時の。

シグナムとアギトはどっかの現場での。シャマルとザフィーラは本局の医務局での。

私達のはまあ撮られとっても不思議やない場面やけど、シグナム達のは有り得へん。

捜査時に、一般人が写真は撮るのはアカンことになつとる。

撮るにしても局から許可が下りるとる特別な人（記者とか）だけとかやし、現像する際も事件の重要な、まだ公に出てほしくない部分とかが撮られてないか確認されやなアカン。

それやのに、シグナムとアギトの写真は明らかに無許可かつ隠し撮り。

「ミウラ。コレを渡してきた人の名前、判るか？」

意識を休日モードから仕事モードへ切り替える。

ミウラも私らの雰囲気から察してくれたんかお菓子を食べる手を止めた。

「えっと、長い名前で・・・グロリア・ホド・・・ごめんなさい、あとは・・・」

「十分や、ミウラ。ありがとな！」

グロリア・ホド。それだけ判れば十分や。

ヴィヴィオ達と接触しただけじゃ飽き足らず、私らにも手を伸ばしてきたな。

ここからは迅速に、や。すぐさまシル君に連絡を。

たとえ何も出来なくても、接触を図ろうとしとる事実だけでも伝えとかな。

ルシル君に通信を繋げようとしたとき、

ウエー・  
ウエー・  
ウエー・  
召喚されたし召喚されたし召喚されたし

ガシャン！とティーカップが割れる音と、何か重いモノが倒れるドサツとゆう音。

「リインさん！？ アギトさん！？」

リインとアギトが力無く倒れとつた。意識が無いくらい見て判る位に体に力が無い。

私にも強烈な視界の揺れが起こって、倒れそうになる体を何とか踏ん張って支える。

ミウラの悲鳴がどこか遠い。ああ、あんなに戸惑って可哀想に。

シャマルが二人に駆け寄ろうとしたところで、シャマルがグラッと揺れてそのまま倒れた。

ザフィーラが「シャマル！」ってシャマルに駆け寄る。

でも、ザフィーラも「なんだ・・・これ・・・は・・・」って言って倒れた。

攻撃？ ううん、ちゃうな、もっと別な“力”で強制的に意識を刈り取られとる。

まるでテルミナスがやったように。アカン、私ももうそろそろ限界や。

頭が重い。シグナムもリエイスも片膝をついて、それでも倒れようとはせん。

「はやてさん！？ シグナムさん！ リエイスさん！」

いきなりこんな見せてもってミウラには悪いことしたな。

なんとか笑みを浮かべて、「ごめん、な・・・管理局・・・ルシリオ

ン・・・に・・・連絡・・・」と残す。

私らが倒れたことを知ってもらったかなアカンやる。ミウラが「ルシリオンさんに連絡すればいいんですか!？」って訊き返した事に対してうんと頷く。

それを見て、私は意識を手放した。んやけど、うたた寝して急にハッとした感じで目を覚ます。

「あれ・・・? なんやこの妙な感じ・・・」

さつきまで眠って夢を見とったみたいな・・・寝起きでふわっとした浮遊感。

って、ちやうやる私! 辺りをよお見回してみ!

「遊園地・・・!?!?」

陽気な音楽と鳴り響いて、煌びやかな装飾が施された建物がズラリと並んどうる。

それだけやない。シグナム達が放心状態で突っ立つとる。シグナム達の名前を呼びながら駆け寄る。

そやけど反応なし。まるで蠟人形のようなやけど、触れると柔らかいし温かい。

ジューツと見ると、「主はやて・・・?」とシグナムがようやく反応を示してくれた。

シグナムを皮切りとして、シャマルにザフィーラ、ラインにアギトにリエイスと次々と起きてく。

この異変の中でも冷静に(もう慣れた感やしな)一か所に集まって、

「それじゃ、現状確認や。と言つても意味解らん、としか言いようないけどな」

円陣を組んで八神家家族会議を開く。

まあどんだけ考えても現状打破する術なんて判らへんし、そやけど何もしやんわけにもいかんしなあ。

で、結論としては、「とりあえず動く、やな」と奥に続く道を指差す。

「私とシャマルが先頭を歩きます。リエイス、ザフィーラ。おまえ達は殿だ。頼めるか？」

「そうね。はやてちゃん達は真ん中で。何があっても私達が守りますっ！」

「ああ。ザフィーラ、何があっても主はやて達を守るぞ」

「無論だ。如何な事態が起ころうとも守り抜く」

ホンマに頼りになる家族やなあ。家主として誇らしいわ。

「わ、わたしもはやてちゃんを守れますっ！」

「あたしだって守れるぞっ！ リインは後ろな、あたしはシグナムとシャマ姉と一緒に前だ！」

「やってやるですよ！」

アギトもリインもやる気満々で私の護衛を買って出た。

えーっと、まあお願いします・・・としか言えへんよねもつ。

やる気に水差すのもなんか悪いしな。SPに囲まれた要人氣分を味わいつつ、私ら八神家は先へ進む。

＋＋＋ Side: はやて ティアナ＋＋＋

「そう言えば、ルーとレヴィ、こっちに来てるんだけど。知ってた・・・?」

「うん。ヴィヴィオからメール来てたよ。昨日、聖王教会で演劇やったって」

あたしはミッドに降りて、スバルと一緒に休暇を過ごすと思ってた。

思ってたんだけど、スバルのやつ、今日の午後から先端技術医療センターでの定期検診の予定を入れていた。

だから午前中しか遊べない。まったく。そうゆう大事な用事を今朝まで忘れてるってどうゆうこと!?

まあ明日の夕方まではいるつもりだから、今日明日の半日ずつでも十分か・・・?

「そうそう。画像も添付されてたのよね」

「コロナとリオの着ぐるみ姿可愛かったな」

「セインのおじさん姿には笑ったわ、あははは!」

そんな話をしていると、突然スバルの表情が険しくなって、「ティア、あれ」ってある場所を指差した。

指先を追ってみると、一人の女性が数人の男性に囲まれていた。

友達同士で楽しく喋ってるって感じでもない。ピリピリしてる空気を感ずる。

管理局員として見過ごすわけにはいかない。何かの事件に発展する前に止めないと。

スバルと頷き合って、その集団の元へ駆け寄る。男性の一人から、「あゝ？」と漏れる。

「管理局執務官ティアナ・ランスターです。どうなさいました？」

最初はあたしとスバルの登場にイラツとしたような顔をしたけど、あたしが名乗ると一気に恐縮して、「え、いや、何でもないっすよ？ 本当に何でもないんで」と慌て始める。

さっきまでの凄んでたのに。まあその方がやりやすいからいいけど。チラツと女性とスバルを横目で見る。スバルは女性が乱暴を受けてなかったか体を注視して、ほつと小さく安堵の溜め息、そのまま「何かありました？」と女性に訊ねる。

「クフフ。いやいやあ。大したことはないよ？ ちよつと絡まれたけど、乱暴とかは今のところ受けてないから気にしてない」

変わった笑い方する女性ヒトだな。じゃなくて、ジロツと男性達を見る。

男性達の表情がヒクツと引き攣った。どうせこの後、疚しい事しようとしてたんじゃ？

さらに詳しい事情でも、と思つたら、「だから何もされてないとおんなじ。とゆうことでその人達は解放してもオツケー　クフフ？」と女性が笑う。

「本当にそれでいいの？　もしかしたらまた・・・」

「クフフ。問題無しっ。別に力づくでどうにか出来たし。」

こう見えて、結構強いんだよ？　男数人に囲まれても十分殲滅出来



るくらいに、ね？」

悪寒。解る人には解る、妙な威圧感が放たれた。

ニコニコな笑顔で、すごく可愛いのに、一瞬・・・死を感じ取った。そうゆうのに慣れてるあたしやスバルでも数歩後ずさった。

だったら一般人の男性達は？ 見れば顔面蒼白で、ガタガタ震えてる。

「クフフ。これでも魔法に自信はあるのだっ

一人旅が多いからさ、鍛えていってわけ。　って、ごめん、なんか加減知らなくて。だいじょぶ？」

ペコって頭を下げ、本当にすまなさそうに謝った。

顔をあげた時には、もうさっきの威圧感はなく、ぽわわんとした空気を放ってた。

とりあえず危険人物じゃないのよね？ その女性がいいと言っただから、男性達を解放、改めて女性に向き直る。

「一般人に“力”は振るわないよお、さすがに。

人を傷つけてもいいよって許可も貰ってないし。　というか守る側だしね。

そーゆうわけで、アタシは話し合いであの場を切り抜けようとしたんだよ。クフフ」

そんな傷つけてもいいって許可を出すような人が居るっていうのが信じられない。

それに、守る側？　そう言えばこの人、何やってる人なんだろう？

それに名前もまだ聞いてないな。

名前や職業を好奇心と警戒心から訊ねようとしたところで、

「おお、そつだそつだ。有名人と出逢つた記念に写真撮つてもいい？」

その女性は肩から提げてたトートバッグからカメラを取り出した。スバルが「有名人？」と首を傾げると、女性は特徴的な「クフフ」と笑う。

「えつとえつと・・・数年前に、聖王のゆりかごを墜とした機動六課？」

「テストメントつてゆう組織を数日で壊滅させた特務六課？の一員・・・」

うん、ちょー有名人じゃん。スバル・ナカジマちゃんとティアナ・ランスターちゃんでしょ？」

ちゃん付けされたのつていつ以来だろう？

そんな明後日な事をふわつと考えていると、スバルが「お願いしますっ」つてあたしの腕に絡みついてきた。

「ちよつと、くつつき過ぎっ、離れなさい！」と語調を強めて言うけど、「いいじゃん」つて聞く気はないようね。

「そうそう、スバルちゃんの言う通り。仲が良いんだから、そのくらの密着くらいいどうつてことないない

つと、そこのベンチに座つてもらおつかな、クフフ？」

近くにあったベンチに二人で腰かけて、こっちに向けられたレンズを見詰める。

パシャつとシャッターが切られる音。カメラの下部から、ジー、とプリントされた写真が出てくる。

その女性は「やっぱモデルが良いと華やかだね」、クフフ」とニコニコ写真を見て笑みを浮かべる。

モデルが良い。それはつまり容姿が褒められてるって事で。今まで生きてきて、容姿を褒められた事なんてないから、かなり嬉しかったりする。

「ありがとうございます　えーと、そう言えば名前聞いてませんでした」

スバルが申し訳なさそうに言う。

あたしも「よろしければ職業の方もお聞かせください」と続ける。

「お？　職質ってやつだね　良き哉良き哉、クフフ」

もう数回パシャパシャと写真を撮って、「よしっ。このくらいで十分でしょ」と満足げにカメラをしまい込む。

ベンチに座るあたし達のところまで来て、写真を差しだしてきたから受け取る。

「おお、すごい綺麗に撮れてる！　もしかして職質ってカメラマンとかですかっ？」

「クフフ。アタシの名前は、グロリア・ホド・アーレンヴォール」

「「っ！！」」

今朝、ルシルさんから届いたメールにあった名前・・・！

要注意人物。その正体、下手すれば“アポリュオン”かもしれないっという。

グロリアは続ける。「職業は、ヴァイゼンの風景写真家。だったらいいなあ」と。

召喚ソウエンされたし召喚ソウエンされたし召喚ソウエンされたし

視界が揺れる。意識が飛ぶ・・・!?

もう喋ることも動くことも出来ないほどに頭が重い。

スバルがコテツとあたしとは反対側に倒れて、「ティア・・・」つて呻く。

あたしは気丈にグロリアを睨みつけ、何が目的?と、声が出ないから口の動きだけで問い質す。

「クフフ。秘密　ただ、これがあなた達の為だっということは忘れないでもらいたいかなあ〜」

グロリアの満面の笑み。最後に「ちょっとだけおやすみ〜」と聞こえた。

視界が暗転。陽気な音楽が、あたしの目を覚まさせた。

閉じたまぶたの裏からでも判るほどに周囲が明るい。

ゆっくりと目を開け、驚き・・・はもうなかった。ああ、またこう

ゆう不思議体験か、みたいな事が頭に浮かぶだけ。

グロリアに襲われなかっただけマシというものだ。

「スバル!」

少し離れたところで呆然と佇んでいるスバルを見つける。

駆け寄って肩を揺する。最初は一切の反応が無かったけど、何度目かの「スバル!」で、「ティア?」と返してくれた。

安堵の溜息。意識もハッキリとしたスバルと、この遊園地内に在る街のような場所を見回す。

「とりあえず」

「動くつきゃない、だね」

じっとしてても始まらない。ただ陽気な音楽が流れるだけで状況の変化なし。

もしかすると他に誰かいるかもしれないから、脱出方法と並行して知り合い捜し。

あたしとスバルだけにちよっかい掛けてくるなんて思えない。

「ねえ、ティア。ヴィヴィオ達も来てたりして」

「コロナとリオとアインハルトは魔術とかそうゆう超常事象を知らないから、もし連れて来られていたらパニックを起こすかもね」

そんなあつてほしくない事を、もう起きているかもしれないと思いつつ話しながら、あたし達は先に進んだ。

++++ Side : ティアナ エリオ++++

キャロと二人で、ルシルさんから送られてきたメールの内容に目を通す。

グロリア・ホド・アーレンヴォール。もしかしたら“アポリュオン”かもしれない存在。

僕たちが戦って ううん、戦いにすらならない相手が、またこの次元世界に訪れているかもしれない。

「でもどうしてヴィヴィオのところに来たのかな・・・？」

「テルミナスのようにルシルさんを狙って、親しい関係者から攻め

ていく・・・って考えられるけど」

「ただ、ルシルさんはもう“テストメント界律の守護神”でもない、僕たちと同じ人だ。」

「だから今さら手を出してくるなんて有り得るんだろうか・・・？  
目的が判らない。」

「僕はまだ10数年しか生きてないんだから、ルシルさん達のように  
数千数万年と存在してきた連中の目的を判るわけもなく。」

「ただ警戒しておくように、と。断定出来ないからこそ、そして対抗  
出来ないから警戒に留めるしかない。」

「今は、うん、僕たちの仕事をやろう。何も起きてないからどうす  
る事も出来ないし」

「うん。フリード、お願い」

「自然（動植物だ）の観測・保護、密漁者の逮捕など。それが自然保  
護隊の仕事だ。」

「そしてここ最近、ある希少な花の密漁者が現れる事が多くなってき  
た。」

「だからこそ今日もパトロールに出ないと。いつ来るか判らないから  
フリードに乗って、希少花の生息地へ空から向かう。上空からなら  
すぐに密漁者を発見できる。」

「あつ、エリオ君！ あれ・・・！」

「今日に限って現れる密漁者が数名。」

「僕は「フリード！」と、手綱を握る手に力を込める。」

「フリードはそれだけで察してくれて、すぐに急降下、密漁者に向け  
て突撃する。」

ある程度高度が下がって、フリードから飛び降りながら“ストライダー”を起動。

「動かないでくださいっ！ 保護観察隊所属、エリオ・モンディア・ル……？」

密漁者へ“ストライダー”を突きつけながら、所属と名前を告げて……って。

「エリオ君、これ、いつの間に……!?」ってキャラが、密漁者の状態を見て驚いている。

空から見た時、密漁者は確かにバラバラに動いていたのに……「一体何が起きて……？」と戸惑うしかない。

だって密漁者は全員倒れていて、しかもバインドのようなもので拘束されていた。

空から地上に降りるたった数秒の間、その間に僕やキャラに気付かれないように密漁者を拘束した。

誰が?ということもあるけど、その、誰が、が今どこに居るのか、だ。

「キャラ、注意して。誰か隠れてる……!」

「強化しとこうか、エリオ君……?」

お願い、と言おうとしたところで、ガサガサとすぐ後ろの草木を踏む音、そしてパシャッと何かの機械音が。

気配が一切なかったのに。そんな驚きをねじ伏せて、

ブリッツアクション

距離を開けると同時にキャラを庇うように移動する。

“ストライダー”を構えて、その誰かを視認する。女の人だ。オレンジ色のセミロングヘア。黄金の瞳はまるっとして、優しい顔立ち。

真っ白なロングフレアワンピース。色んな十字架のアクセサリーを身に付けてる。

手にはカメラを持っていて、カメラの下部から出てきた3枚の写真をニコツと眺める。

「クフフ。あー、彼らは貴重な自然を害そうとしたから、ちょっとお置きしたのよね。」

ごめんね。人を守るのも仕事なんだけど、こーゆう自然を守るのも個人的な仕事なんだよ。」

ネックレスがキラんと光る。確か、黒のケルト十字？と白の葡萄十字？だ。

ルシルさんとシャルさんが守護神として持つ武器と同じデザイン。その女の人は人差し指と中指に挟んだ写真をピツと投げ飛ばしてきた。

一枚は僕へ、一枚はキャロへ。もう一枚もキャロへ。すごいコントロールで、苦もなく受け取る事が出来た。

僕のは、地上に降り立って“ストライダー”を構えた瞬間のもの。キャロのはたぶん、キャロ自身とフリードのモノだろう。

「あ、自己紹介しとこっか。グロリア・ホド・アーレンヴォール。よろしくっ。」

まさか本当に来るなんて。戦う！？無理だ、まともに戦えるわけがない。

どうにかして逃げる？ 追いつかれるに決まってる。ダメだ、何をやっても。



(でも・・・！)

キャラをどうにかして逃がさないと。出来れば僕も。

フリードに視線を送る。僕が少しでも時間を稼いで、フリードはキャラを逃がす。

フリードが小さく頷いたように見えた。

「ストラーダ、いくよっ！」

### ルフトメッサー

“ストラーダ”を振るって、グロリアに向けて真空の刃を4つ放つ。少し魔力が残ってしまふから、僕の魔力光である黄色が目立つ。

視認出来ると言う事は、それだけで回避や防御のタイミングも計らねえると言う事。

でもそれがどうした。本命じゃなくて布石にすればいいだけの事。

Load cartridge · Form Drei · Un  
wetter form

### ブリッツアクション

“ストラーダ”を、電気変換資質を最大限に強化するための形態ウンヴェッター・フォルムへ。

そこから高速移動。背後から、僕を呼ぶキャラの必死な声が聞こえた。

グロリアがルフトメッサーを避けるのを確認。ここで想定外のこと

が。グロリアはその場から動かずに上半身だけを動かして避けた。

左右どちらかに大きく避けると踏んでいたのに、だ。

「ちょっと！ アタシに戦闘の意思はないんだけどっ！？」

そう言いつつも僕へと真つすぐ伸ばす右腕。

先端の掌は開いていて、鷲掴みしようとしているみたいだ。

グロリアと僕の間にはトライシールドを展開、直撃だけは免れようとした。

でも、そう、始めっから解っていた。相手が人間じゃなかったら、魔法なんて役に立たないって。

ちよんと触れた指先がシールドを容易く粉碎した。

(やられる・・・！)

そのまま僕の首へと向かってくる右腕。

“ストライダー”のブースターでの方向転換するには遅すぎる。

なら、このまま交差法で、通用するかもどうか怪しいけど、紫電一閃を・・・！

アルケミッククチェーン

地面から幾つもの鎖が噴き出してきて、僕を宙に押し上げた。

グロリアが鎖の壁に突っ込む。「むぎやっ！？」って呻き声が。

「エリオ君！」

頭上からキャロの声が。見上げてみれば、フリードから身を乗り出して、僕へと手を伸ばすキャロが居た。

僕はその手を取って、フリードへと移動する。と同時にアルケミッククチェーンが吹っ飛ばされる。

グロリアだ。こつちを見上げて「降りてこ〜い！」ってピョンピョン跳ねていた。

本当に“アポリュオン”？とか思いたくなるけど、実際には知っているのはペッカートウムとテルミナスの二体だけ。

あんな陽気な人？が居ても・・・おかしくない・・・？

ウヘニ・ウヘニ・ウヘニ  
召喚されたし召喚されたし召喚されたし

突然だった。視界が揺らぐ。さらにガクンと振動が。

フリードが気を失っていた。キャロは悲鳴より先に「起きてフリード！」って叫んだ。

でも起きない。背中にドンと軽い衝撃。キャロも意識を失っていた。僕ももう限界だった。声も出ない、体も動かない。このまま何もしないと地上に叩きつけられる。

(グロ・・・リアの・・・仕業・・・！？)

受け止めてあげるといふ風に両腕を大きく開いているグロリアを見た。それで視界が暗転。気を失ったと自覚できた。でも、すぐに意識を取り戻す。

だけど、そこはさっきまで居た場所じゃなくて・・・。

「遊園地・・・？ キャロ！ フリード！」

離れたところにポツンと佇んでいたキャロ。側にはいつもの小さな姿に戻ったフリードが床で丸まっていた。

急いで駆け寄って、何度も名前を呼ぶ。

「エリオ君・・・？」

ようやく反応が返ってきたことで安堵が胸に満ちる。フリードも遅れて「きゅくるー」と鳴き声をあげた。僕たちは少し見回って状況を確認。強制転移させられたか、もしくは夢のようなモノに引き摺り込まれたか。僕たち人間の常識なんて通用しない事が出来る連中だ。いろんな可能性が考えられる。

「エリオ君、どうするの・・・？」

「うん。このまま動かないでもいいも埒があかない。だからとりあえずはこの道を真っ直ぐ行ってみよう」

僕たちは歩き出す。この先に何が待っているかも判らないけど、動かなくちや始まらないから。

++++ Side: エリオ ルシル++++

最悪だ。朝からなんでこう苦しまなければならぬんだ。隣に居るフェイトが覗きこんできて、「ルシル」と心配そうにしている。

君とて私に気を遣ってるほど余裕はないだろうに。先程から私の元へ来るある連絡が、私とフェイトの心に軋みをあげさせる。

ヴィヴィオ達が倒れた。なのはとヴィータが倒れた。はやて達が倒れた。スバルとティアナが倒れた。エリオとキャロとフリードリヒが倒れた。

揃って意識不明。ただ、倒れたと言っても脳波を見る限り睡眠に入ったというのが、まあ救いだ。

「まさか本当にこうもあからさまに私と交友関係のあるみんなを襲うとは……！」

どうしてそつとしておいてくれないんだ。

先代テルミナスとの決戦前の、フェイトからの告白の時に吐露した想いを思い出す。

私の想い人はいつも殺されて逝く。

護ると誓っても、愛すると誓っても、必ず私の手の中から零れ落ちる。

私は疫病神だ。自分が幸せになる云々以前に、一番大切な女性を幸せに出来ない。

そんな私に、人を愛する事はもう出来ない。必ず不幸にしてしまうからだ。

だからフェイト。君が嫌いなわけじゃない。この場所が嫌いなわけじゃない。

怖いんだ。私が残ることで、この愛おしい場所がまた何かに奪われるんじゃないかと

それが現実になるかもしれないという恐怖感が私を押し潰そうとする。

人間になった。フェイト達と幸せを築けるんじゃないか。さあ一緒に過ごそう。

ハッ、なんだそれは。“力”が有ろう無かろうが、結局はこういう帰結か？

4th・テストメント・ルシオンという存在であった以上、こうなるのが当然か。

「ルシル……震えてる……」

机上で握り拳となっている右手に、そつと手を重ねてくれたフェイト。優しい柔らかさ。人の温もり。散々拒絶してきて、だが望んで得たモノ。失いたくない。

「フェイトさん、ルシルさん。お二人宛に何か届いてますよ？」

シャーリーが白い封筒を手に歩み寄ってきた。

なのは達が倒れ、その事で参っている私とフェイトというこの状況だ。

彼女は、私とフェイトをからかうようなことはせず、スツと封筒を差し出してきた。

二人で「ありがとう」と礼を言い、封筒から二枚の写真を撮りだす。倒れたなのは達の共通点。側には写真があった。倒れた全員が写る写真が。

「私とルシルの写真だね・・・」

「ああ。なのは達と同じ状況に陥れば打開策が見つかるかもしれない」

「が、このまま一生目覚めないかもしれない。分の悪い賭けのようなものだ。」

「私はいい。いや、本当は嫌だが、私が代わりとなってなのは達が目覚めるというのであればその選択も・・・」

「自分一人だけ犠牲になる、なんて言い出したら殴るからね」

フェイトの怒気を孕んだその言葉に、私はただ「ありがとう」とだ

け答える。

ウエニ・  
召喚されたし召喚されたし召喚されたし  
ウエニ・  
ウエニ・

その直後、来た。視界が揺れる。頭が重い。精神干渉によるものだ。私は椅子に座っていたから良かったが、フェイト立っていたことでそのまま倒れ込もうとした。重い体を必死に動かし、私へと力なく倒れてきたフェイトを抱き止める。

シャーリーの「フェイトさん!？」という悲鳴がどこか遠くに感じる。

口を開くのも辛いが、

「シャーリー……みんなを……連れ戻しに……行ってくる……!」

そう告げる。歪む視界の中で、シャーリーは息を飲み、「必ず皆さんと一緒に帰ってきてください」と言った。

ああ、帰ってくるとも。精神が取り込まれた先に何があるうとも、必ず……!

決してフェイトを落とさないようにしっかりと抱きかかえ、私は意識を手放した。

「……ル……ルシル……シル……ルシル!」

暗い闇の中、私を呼ぶ声がする。

フェイトの声。耳にすると安心出来る、彼女の声。

暗闇が晴れていく。意識の覚醒だ。

「ルシル!」

パチン！と景気の良い音が、遅れて頬から伝わってくる痛みがじんじんと……？

ハツと目を開ける。目の前にはフェイトが佇んでいて、「よかったあ」と安堵していた。

左頬に手を置く。熱くはなっていない。あれ？ 今、思いっきり叩かれなかったか？

「どうしたの、ルシル？」

「え？ あ、いや……。なあ、フェイト。今、私の左頬の叩かなかったか？」

「ううん。やだなあ、ルシル。もしかして寝惚けてるの？」

「……だつたら何で目を逸らす？」

まあいい。悪気があったわけじゃなく、ただ目を覚まさなかった私に非があるんだろう。

目を覚まさなかった私を心配した、そういうことにしよう。

とにかく現状の把握だ。今、私とフェイトが居るのは、陽気な音楽が流れる遊園地内にある広場のような場所なんだが……

「なんて言うか、すごろくのような道があるね」

「ああ。というか、入場ゲートに思い切り見知った名前が載っているんだが」

すごろくのマス目のような道のスタート地点に設けられた入場ゲート。

そこにはこう描かれている。



ようこそ　ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ

ロキ。その名を持つ男は、大戦が始まるさらに昔に存在していた。我が先祖の原初王オーディンと義兄弟の契りを交わしたヨツンヘイムの王。

オーディンが生み出した、魔術の祖たる“ルーン”を利用して、ロキによって作り出された最古の玩具。

どうしてこの現代にそのような代物があるのか。という疑問はもうどうでもいい。

「ロキ？　ルシルの知ってる人なの？」

フェイトに「まあな」と短く返す。

そこに、「フェイトちゃん！　ルシル君！」と、私達の名を呼ぶ声が。

振り返ってみると、なのはとヴィータがこちらに向かって駆けていた。

なのは達だけじゃない。八神家にヴィヴィオ達、スバルとティアナ、エリオとキャロとフリードリヒも、四方八方からこちらに向かって来ていた。

これで意識不明になった全員が揃ったわけだ。

大人達と合流できたヴィヴィオ達は安堵、だが若干混乱しているため、なのは達が落ち着かせようと話をしている。

とりあえず事情を知らないヴィヴィオとその友達を除く全員に、

『聞いてくれ、みんな。ここは、邪神スネメルロキの遊戯場という魔道具の中だ。

そうだな・・・すぐろくだと思ってくれていい。単純にゲームなんだ。出る方法は簡単、クリアすればいい』

そう念話で伝える。すると当然、『その、スンベルってというのは魔術で創られたって事だよな？ グロリアって魔術師関係なの？』と、疑問が出てくる。

『テルミナスも魔道具に似たようなモノを使ってきたからな。とはいえ正直に言えば、未だに判断出来損ねているというのが現状だ。』

どうしてわざわざここスンベルに、精神を取り込むという回りくどい手を取ったのか・・・』

『私らに危害を加える気はない、ということなんかなあ・・・？』

はやての疑問はもつともだ。危害を加える気なら、すでに私達はこの世に生きていないだろう。

色々考えたい事があるが、まずは『なのは。ヴィヴィオ達には、ロストログリアだと伝えてくれ。何も解らないままじゃ本当に不安は拭えないからな』と伝える。

『うん、判った。でもヴィヴィオにも伝えていいんじゃないかな・・・？ ヴィヴィオも魔術を知る側だし』

『ルシリオン。わたし、ここに来るまでにヴィヴィオに言っちゃったんだけど。』

グロリアがアポリュオンかもしれないけど、この世界も何かの術で創られて連れて来られたんじゃないか？って』

レヴィが参加。むう、そこまで言っているならヴィヴィオにも伝えておかないとダメか。』

とそこに、キャロから『誰か近づいてきます！』と焦りを含んだ念

話が届く。

念話を受け取った全員が防護服を装着、警戒態勢へ入る。私とフェイトとシグナムが一番前へ。

なのは達はヴィヴィオと友達を囲むように展開、どこから襲撃を受けてもいいようにだ。

建物の陰からこちらへ向かって来ていた人物の姿が露わになる。目を疑った。なにせ・・・

「か、カーネル・・・!？」

戦友のカーネルだったからだ。両サイドに居るフェイトとシグナムが息を飲んだのが判った。

当たり前だ。私とシャルの記憶の中で見た、私と同じアンスールの一人が目の前に居るのだから。

だが、だがカーネルは死んだ。もうこの時代には居ない。

カーネルは、アースガルド同盟軍の軍服、黒の長衣にスラックス、編み上げロングブーツ、ロングコートという出で立ち。

現在の私の防護服と同じデザインだ。だからこそ、ヴィヴィオ達からの視線を背中に感じた。

「いらっしやいませ、ルシル。そしてその仲間たち。神々の遊戯場スネル邪神ロキの遊戯場へ。

俺はカーネル・グラウンド・ニダヴェリール。1stエリアの管理人をやってる」

そつだ、確かスネルに誘われた対象の記憶から、特に親しい知人を読みこんで実体化させる、と聞いたことがある。

「そこで少し怯えてる可愛らしいお嬢さん達。安心してくれ。

ここはゲームの世界。そつだな、夢の中だと思ってくれ。

お嬢さん達の体は今頃、現実世界で眠ってるはずだ。で、起きる方は簡単。

このゲームをクリアして行ってゴールすればいい」

カーネルは、事情を呑み込めていないヴィヴィオ達に微笑みかける。

「ゲーム・・・？　どういったゲームなのですか？」

アインハルトが気丈にも問う。カーネルは「すごろく、は知っているか？」と微笑を浮かべ、16面体のクリスタルのようなサイコロを生み出す。

ミッドではあまり馴染みのないゲームだからな、すごろく。

アインハルトやコロナ、リオ、イクスは首を横にフルフルと振った。

「そつか。じゃあ簡単にルール説明だ。よく聞いとけよ？」

このサイコロを振って、出た数だけ・・・このマス目の道を進む事が出来るんだ。

1が出たら1マス、2が出たら2マス進むって感じだな」

あのカーネルが子供相手にゲームのルール説明？

プツ、こんな状況だというのに笑ってしまった。

するとカーネルが説明を中断して、「何笑ってるんだよ、ルシル。

親友の俺が何か可笑しなこと言ったか？　ん？」と半目で睨んでいた。

「いやいや。目付きの悪さに定評があつて、よく小さな子供に恐れられていたお前が、子供とまともに会話していると少しな」

「目付きが悪いだけで、俺自身は子供好きで優しいんだぞ。

子供が俺を見て、ヒツ、って怯んだの見てショック受けていたの知

っているだろ？」

懐かしいな、その話。アンスールとして初陣を飾る前、最終調整していた頃のものだ。

また笑ってしまう。ああ、目の前に居るカーネルは幻影に過ぎないと解ってはいても、やはり親友なんだ。

「とにかく、お前との話は後だ。まずはお嬢さん達にルールを教える。

目が、先に進んでください、って言っているからな。えー、どこまで言っただけ？

あーそうだ。マスにはいろんなお題が書いてあってな。立ち止まったらそのお題をクリアしないとダメってわけだ」

親友にして戦友のカーネルの姿を眺める。

アインハルト達の目にはもう混乱はなく、カーネルにルール説明をただ聴いている。

いつか有り得たかもしれないカーネルと子供たちが遊ぶ風景。それが目の前に在る。

たとえ幻影であっても、私は見ている。確かに見ているんだ。

「で、お題をミスしたり拒否したらキツツイお仕置きが待ってる」

お仕置きという言葉にビクッとなったコロナが、「あの、お仕置きってどうゆう・・・？」と恐る恐る訊ねる。

「それを今言ったら面白くないだろ？ 具体例で言ったら、スタート地点に戻る、変な髪形や服装になる、姿が他の生き物になる、とか」

「うわあ、あとの二つとか嫌かも・・・」

リオが苦笑しながら言うと、カーネルが「一番キツイのは、そのエリアの管理人とバトルだ」と告げた。

これにはアインハルト達は首を傾げ、カーネルの正体を知る私達は絶句した。

カーネルは言った。1stエリアの管理人をしている、と。なら他のエリアには・・・

(シェフィヤシエル、フノスも居るのか・・・！？)

チラッとフェイトを見る。フェイトもこちらを見ていた。

不安げな目だ。そうだな。シェフィリスが居るかもしれない。

それは、フェイトにとってあまり気分のいい話じゃないかもしれない。

だが、この世界で・・・いや、もう私のパートナーはフェイト一人だ。

フェイトを安心させたいがために、彼女の左手に右手をそつと重ねる。

握り返される右手。ああ落ち着く・・・というか、フノスやシエルが出てきたら最悪過ぎる。

(フノスに勝つ？ シエルに勝つ？ というかアンスールに勝つ？ 不可能だ！)

同じアンスールだからこそ理解している。アンスールの異常な強さを。

まあ鍛えたのは、私とイヴ姉様とステアとジークヘルグだが。

特にフノス。彼女に勝つなど絶対に無理だ。当時の私ですらおそらく勝てない。

魔道王フノス・クルセイド・アースガルド。彼女こそ真に最強の魔術師なのだ。

「あー、ひとつ言っておこうか。俺はオリジナルじゃない。管理人として厳粛に、プレイヤーがちゃんとゲームを進めるか説明面倒だな。

だからそんなに強くない？と思う？気がしたりしなかったり？といわけだ？」

意味が解らん。しつかり最後まで説明しろよカーネル……。オリジナルじゃないのは解っているんだよ、馬鹿。

まあオリジナルに比べて弱い、と思っておけばいいんだな……。？

「説明するよりやってもらった方が早いな。百聞は一見に如かず？だったか。

おい、ルシル。まずはお前が代表してサイコロを振れ」

カーネルが16面体サイコロを放り投げてきた。

フェイトから手を離し、飛んできたサイコロを抱き止める。

そうだな。クリアしなければならぬ。でないとここから脱出できない。

グロリアが何を企んでこんな事をするのか未だに判然出来ないが、先に進まなければいけないのは確か。

「よっ」とサイコロを放り投げる。プラスチックが転がるような音を出しつつサイコロが転がる。

出た数字は最高の16。数字が確認できたと同時に、足元に光る円陣が生まれ、私を呑み込む。

「っと、あの円陣は転移させるためのものか……」

視界が光に包まれたと思えば、私はあるマスの上に移動していた。後ろを振り返ると、フェイト達の居るスタート地点があった。次いでマス目に書かれているお題を見る。目を疑った。

何度も目を擦る。が、変わらずそこに書かれているお題。

ある種の地雷、死亡フラグだと認識。どうにか不正してお題を変えられないかと思案。

結論。ム・リ　お仕置きというのが引っかけで、不正を働けない。

『あなたは突然、見知らぬ異性と拳式をあげることになっちゃった。  
。ルレットを回し、出たその数字のプレイヤーとレッツ・ウェディング？』

死ぬ、と思った。突然過ぎるだろうが。馬鹿げている。

余計な事にどこからかお題の内容を読み上げる声。しかも聞き覚えあり。

ゼフィランサス・セインテスト・アースガルド。ゼフィ姉様の声で間違いない。

(ゼフィ姉様に逢える、のか・・・!?)

たとえ偽者、幻影でも構わない。心底逢いたい、ゼフィ姉様に。

あとシスコン言うな。今、誰か私にそうツツコミをいれただろ？

でも一つ文句を言いたい。お題の内容を読み上げた時の声色。

内容からしてイラッとしているというのに、それを増長させるようなテンション。

それでさらにイラッとした。こっちは下手すれば・・・ダメだ、考えるな。

フェイトを見ないようにしつつ、目の前に現れた光で構成されたル



ーレットを回す。

「おーい、6が出たんだが　　おおっっ!?!?」

カーネル達の居るスタート地点へ振り向くと、すでにそこは聖堂内。気が付けば着ている服も真っ白なタキシード。シャルとの結婚式にも着たことがある。

問題はそこじゃないんだ。私の相手に問題がある。フェイト達が、あわあわ、と口や肩を震わせている。

「な、なななな・・・相手ってあたしかああああーっっっ!?!?」

真っ白なウェディングドレスを着ているヴィータが顔面蒼白で絶叫。

「新郎ルシル、新婦ヴィータ。お前達二人の結婚式を始めろぞ」

神父服へと着替えているカーネルがトドメの一撃を口にした。

参式者となるフェイト達もドレス姿となっていて、目は限界まで見開かれていた。

ああ、どんなめちゃくちゃな結婚式になるのやら・・・。

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（後書き）

レヴィ

「確かに出番あったけどさ、まあいいけどさ、どうしてスンベルに  
来たのか説明する回だしさ」

ルーテシア

「だったら膨れてないで、ほら、今日のレヴィルのコーナー？  
わぁパチパチパチ・・・空しい・・・orz」

ルシル

「膨れているなよ、レヴィ。次回から大変だぞ。

一体何をさせられるか判らないんだからな。出来ればアンスールと  
戦うような事態は避けたいから、しっかりお題をクリアしないと」

レヴィ

「ぶつぶつ、勝手にわたしとルーテシアのコーナーに乱入するな」

ルーテシア

「でもそうだよな。アンスールが戦う場面ってわたし見てないから、  
他のメンバーがどんな魔術使うのか知らない」

ルシル

「バカみたいに強いって思っておけばいい。

だから、かなりいや〜なお題でもクリアする、という決意と覚悟を  
持っていないければ、な」

レヴィ

「ゲームなのにどうしてそんなガチな意志を持たないといけないの

「？」

ルシル

「……ま、とにかく頑張るぞ」と

レヴィル

（逃げた……）

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜（前書き）

エースコンバット・アサルトホライズン、買いました。

・・・ダメだよ、主人公の顔&名前を設定しちゃ（涙）

ナンバリング（フじゃない）されていなかったのでちよいと不安でしたが、的中。

サントラだけが唯一の救い、か・・・。

三回目にしてアンスール2人目とバトル。駆け足ですいませんですが、バトルだけじゃないですよ。馬鹿をさせたいですよ。アインハルト達ですよ。

V S ??? ? ? 戦イメージBGM

テイルズ・オブ・エクシリア『己を信じて』

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へく〜く

++++Side:なのは++++

ルシル君と同じアンスールのメンバーだったカーネルさんとの戦いも終わって、あまりのとんでもバトルに戦慄しているヴィヴィオ達に同情。

そういう私も、実際に地帝カーネルという大英雄と戦い、未だに体の震えが止まらない。

ルシル君の記憶で見えて知っていたけど、体験して改めて理解出来た。アンスールは確かに最強だ、って。

「おい、カーネル！ 次に進ませてあげてくれーっ！」

16マス進んだ先にポツンと居るルシル君が大声でそう言う。

するとカーネルさんは「まだルールを言い終えてないぞーっ！」と返す。

「ルシルはしばらく放っておくとして。このスンベルはいくつかのエリアに分かれていて、俺のような管理人が居る」

ルシル君に聞かれたようで、「放っておくとはなんだあーっーっーっ！」ってルシル君が叫ぶ。

カーネルさんは「うっっせえぞ、ルシル！ お嬢さん達にルールの説明中だ！ 少し黙ってるっ！」とまた叫び返す。

「コホン。なんだっけ？ あー、そうそう。さっきのようにお題を拒否ったりすると、様々なペナルティーを科せられるっていうのは

話したな。

そのペナルティーの一つに管理人とバトル。だがこれはある種のチャンスなんだ。

負ければそのエリアのスタート地点に戻されるが、勝てばエリアをクリアせずとも次のエリアへ進む事が出来るってわけだ」

「え？ それじゃアルシルはカーネルさんに勝ちましたから・・・」

フェイトちゃんがそう言うと、カーネルさんは「うぐ。そうなんだよなー、勝つ自信はあったんだがなー」って肩を落としながら、黙ってるルシル君の方へと向き直り、右手の中指を立てて見せた。

当然、ルシル君もいきなりそんな挑発めいた事されたら怒るわけで、「上等だコラア。さっきの続きをやるうってか、おい！」なんて、まず使うところを見ないやんちゃんな男の人口調を使ってノってきた。一触即発の気配。さすがにこんなところで、あんなデタラメな戦闘をまたされたら命がいくつあっても足りない。

「まあまあ。ルシル君もカーネルさんも落ち着いて、な？」

子供の前で、そうゆう大人げない事するんはどうかと思うよ？」

はやてちゃんがカーネルさんの前に立ちはだかった。

すごいよ、はやてちゃん。カーネルさんは「そうだな。すまないな、お嬢さん」と素直に謝る。

遠く離れたルシル君は「離れる、はやて！ ソイツに近づくなっ。何をされるか判らないぞ！」なんて、まだやる気を見せてる。

ルシル君。どれだけカーネルさんを陥れたいの？ というか仲悪いの？

「フツ。無駄だぜ、ルシル。俺は大人だからな。そんな挑発には乗らないぜ。」

さて。それじゃあ1stエリアは、俺を倒したという事でクリアとなった。

次のエリアへ移動させるから、ちょっと集まってくれるか？」

「あの、ルシルパパはどうなるんですか・・・？」

ヴィヴィオがおずおずと訊ねる。するとカーネルさんは「パパ？」  
って目を見開いた。

ルシル君とヴィヴィオを交互に見回して、「ルシル！ お前、いつ子供なんてつくりやがった！？」と言った。

ルシル君がそれに対して何か言い返そうというのを無視して喋り続ける。

「母親は！？この中に居るのかっ！？ だったら羨ましいぞ、おい！  
というかあまり似てないな・・・？ オッドアイだけは受け継がれてるが。

ん？ そういやそこのお嬢さんもオッドアイだよな。おいおいおい、まさか二人も子供をつくって」

ヴィヴィオとインハルトちゃんに詰め寄って、顔を近づけて二人を眺めるカーネルさん。

さすがにそこまで女の子をジロジロ見るのはどうかと思うんだけど・・・。二人も引いてるし。

シグナムさん達がカーネルさんの行動を止めるために動こうとしたところで、

「ヴィヴィオとインハルトが怯えるからその辺にしておけ、馬鹿者おーーーーっ！」

全力疾走で戻ってきたルシル君のドロップキックが、見事カーネル

さんの後頭部に直撃。

「げべらっ！？」って妙な苦悶も漏らして、カーネルさんは床をズリズリ滑って行った。

ルシル君は、「そんなプライベートな問題に楽しげに首を突っ込むな、ボケ！」ってヴィヴィオとアインハルトちゃんを守るかのよう  
に、カーネルさんと2人の間に割って入る。

「話は聞いていたぞ。お前を倒した事で、このエリアをクリアしたんだな。」

「ならもうお前と関わっていられないな。というわけでさっさと次のエリアに飛ばせ」

「痛つきたいなあ。ああ、もう行っちゃまえ。バーカバーカ、ルシルのアホー。」

「だが忘れるな？　ここで俺を退けたとしても、この奥には俺以上の魔術師が居るってことを」

「あ、あれ？　カーネルさんてこういうキャラだったの？　記憶の中だともっとカッコ良かった気が・・・？」

「ううん、それより。それは他のアンスールのメンバーが居る事を示している、という事でいいんだよね？」

「アンスールの事を知るみんなと顔を見合わせて、最後にルシル君を見る。」

「アンスールと戦うのはどうせお題を拒否した場合だけなんだから？　なら警戒する必要はないな。お題をきっちりクリアすればいいだけなのだから」

ルシル君は冷静に告げる。確かにそうだ。戦うのはペナルティーの時だけみたいだし。



たとえ戦う事になって負けたとしてもスタート地点に戻されるだけ。みたいなんだけど、カーネルさんは肯定も否定もしない。あの顔。隠し事してる顔だ。そう思ったところで、足元に光の円陣が生まれた。

「とにかく遊べば判る。じゃ、お嬢さん達を2ndステージへ転送するぜ」

光の円陣がゆっくりと上がってきて、足元から消えていく。そこでルシル君が、「おい、私はどうなるんだ!？」って、カーネルさんの胸倉を両手で掴んで揺する。見ればルシル君だけ何も起きてない。カーネルさんがニヤリって口端を歪めた。

「わーっはっはっはっはっ！ ルシル。お前は一人で歩いて次のエリアへ行けい！」

「お、お前ってやつは・・・！」

そんな二人のやり取りを見ながら、私達は次の2ndエリアへと転送された。

えっと、ルシル君。待ってるからね？ クロスカウンターを決めた二人がうつすらと見えたけど、大丈夫かなあ・・・？

++++ Side : なのは ルシル++++

「はあはあはあはあ・・・本当に私だけ居残りか・・・」

カーネルと遊び半分の殴り合いを終え、二人揃って仰向けに倒れている。

私の愚痴に「ざまあーみるおー」と笑うカーネルを小突いてやる。

「あーもう痛いなあ。お返しだ・・・！」

食らう前に跳ね起き上がって回避。仰向けに寝転がったままのカーネルは私を見上げる。

その不満そうな顔に向けて、このゲームが創りだしたキャラクターであると解つていてもある質問を投げかける。

「なあ、カーネル。お前の知る情報を全て教えてくれないか」

「・・・俺がお前の記憶から抽出された単なる幻だつていうのは理解しているだろ？」

だったらその質問に意味はないよな？ だから答えは、なんにも知らないぜ、だ」

そうだよな。邪神<sup>スンベル</sup>ロキの遊戯場内のキャラクター。

外界の事情など知るわけもないよな。まったく。グロリアは一体何を企んでいるんだ。

外界関係の情報はもう得られそうにないな。ならもう一つの質問と行こうか。

「そう言えば、先程の戦い。お前、固有能力を使わなかったな。手加減か？」

「石化の魔眼か？ そりゃ使わないだろ、やっぱり。」

魔眼系の固有能力は抑えが効かないからな。オリジナルでもフェイクでもそれは同じ。

「というかあのお嬢さん達を相手に、俺たち魔術師の固有能力はキツ過ぎるだろ？」

「たぶん他の固有能力持ちのアンスールも使わないと思うぞ。」

「フノス様とカノンの空間干涉。セシリスの灼現の魔眼。ま、レンとアリスは使わざるを得ないと思うがな」

「万が一フノスが出てきて戦闘するとなれば、空間干涉を封じる事が出来るのなら何とかなるかもしれないな。」

「レンとアリスは・・・まあ仕方ないか。あの2人にとって固有能力イコール魔術だからな。」

「カーネルも立ち上がり、このエリアの奥へと指差した。」

「行けよ。お前の現在いまの仲間が待ってるぞ」

「そうだな。カーネル、お前・・・お前達には悪いが未来未来に行くよ。だがいつか必ずみんなの元へ往く日が来る。それまで待っていてくれ」

「あいよ。気長に待ってるわ。でも生き急ぐようなことだけはするなよ。」

「無様でも良いから生きようとしろ。いいな？」

「・・・ああ。ありがとな、カーネル」

「感謝を告げ、このエリアの奥を見据える。」

「ゴール地点が見えそうにないな、うん。仕方ない。剣翼を出して空を飛ばば・・・」

「あ、言い忘れてたが、ズルが出来ないようにここボードフィールドじゃ魔術も何も出ないぞ」

「……はは……ははは。本当に歩いて行けってか！」

私もフェイト達と同様に転移させるように頼もうか（もちろん力づくで）！

++++ S i d e l シル はやて++++

転送された先、そこはさつきと同じような煌びやかな街中やった。唯一の違いは、さつきは夜やったけど、今度は空が青いということや。

周囲を見回してみる。やっぱりルシル君の姿がどこにもないなあ。

「ルシルパパ、やっぱりおいてけぼりを……？」

「そうみたい。ルシルさん、大丈夫かなあ……」

「歩いてここに来るみたいだから、どうなんだろう？」

「カーネルさんってどこかイジワルしそうな感じだったし、何か妨害とか？」

「あーあるかも。なんか仲良いのにちょっとしたことでもケンカする悪友みたいなの？」

ヴィヴィオとキャロ、エリオとスバルとティアナがここに居らんルシル君を心配中。

カーネルさんのエリアがどれだけ広いかわらんけど、歩いて来るん

やったらどんだけ時間がかかるか。

「主はやて。周辺を探索してみました。危険性のあるトラップなどはありませんでした」

「そうか。ありがとな、シグナム、リエイス」

いきなり変な事態に陥る事態はないとゆう事やな。

なのはちゃんとフェイトちゃんに視線を送って、頷き合っ。

フェイトちゃんが「みんな、集まって」って、みんなを集合させる。

「ありがとございます、そこのお方。手間が省けました」

鈴の鳴るようなどても綺麗な声。一切の気配がないから気付かんかった。

一斉に声のした方へ振り返る。そこには一人の、息を呑むほどに綺麗な女性が居った。

とても艶やかなカーディナルレッドの長髪をツインテールにして、その二つの房をドーナツのように輪っかにしとる。

その髪を結う真っ白なりボンがウサギのように逆立って、歩くたびに揺れる。

透き通るほどに真っ青なウルトラマリンブルーの瞳に見詰められた私はつい視線を逸らしてしまう。

ルシル君やさっきのカーネルさんと同じアースガルド同盟軍の軍服姿やけど、色はちょっと目に痛い真紅。

ああ見たことある顔や。そう、確か名前は・・・

「ようこそ、スンベルの第二領域へ。この領域の管理人のセシリス・

エリミング・ムスペルヘイムです」

炎の世界ムスペルヘイムの王女で、炎熱系最強の魔術師の片翼。炎帝セシリスさんや。

コロナとリオが「綺麗な人・・・」「髪もきれー」てうっとりしながらセシリスさんを見詰めとる。

セシリスさんはその褒め言葉が聞こえたんかコロナとリオに「ありがとう、お嬢様方」て微笑み返す。それだけでコロナとリオは顔を真っ赤にしてふにやってなる。

「では、早速ゲームの開始と参りましょう。カーネルよりルールの説明を聞いていますね？」

私達はただコクリと頷く。アカン。カーネルさんとは別格に緊張してまう。

アンスールのリーダーのフノスさんが出てきたら、私、緊張のしすぎで倒れるかもしれへん。

セシリスさんは「それは重畳。では、どなたから賽を振りますか？」て16面体のサイコロを創り出す。

そこに、フェイトちゃんが緊張した面持ちで「あの、ルシルがまだ来てないんですけど・・・」と言う。

「・・・気にしないでください。さあ、始めましょう」

ん？ どうして目を逸らすんや？ やっぱり何か問題が起きとるんやるか？

「でも」と食い下がるフェイトちゃんやったけど、「しばらくすれば到着します」てピシヤリと言われたことで押し黙るしかない。

こうしとつても先に進まんし、しゃあないな。サイコロを振る1番手として拳手。

「貴女が一番手という事でいいのね？」

セシリスさんがコツコツとブーツを鳴らしながら私の元へ来て、「どうぞ」ってサイコロを手渡してきた。

それにしても、どうゆうマスがあるか判らへんから怖いわ、このゲーム。

子供の頃に遊んだボード版やったら上から見るだけでどんなお題があるか判るし、ある程度そのマス目を狙ってサイコロを振れる事も出来たんやけど。

そんなちよつとしたズルが出来へん。

「気を付けてね、はやてちゃん。あと出来れば簡単なお題を出して」

なのはちゃん。それは無理な話や。判つとるやろ？

手を合わせてお願いポーズをしとるなのはちゃん達に、一応努力するということ意味を込めた力強い頷きを試みる。

深呼吸を数回。よっしゃ。行くよ、どうとでもな〜れ

ポインとサイコロを放物線上に放り投げる。コキンと床に落ちて転がるサイコロを眺める。

「・・・8、やね」

出た目は8。セシリスさんが「ではマス目までどうぞ」と、道を開けてくれる。

私はみんなに「じゃ、先に行つとるな」って手を振って、トントンとスキップ気味に先へ進む。

そして8マス目で立ち止まって、マスに書かれとるお題を見る。

そこには・・・

『ラッキーマス　もう一度サイコロを振る権利があなたに与えられるのですっ

さあ、そのマスに止まりしラッキーなプレイヤーよ。再びその歩みを進めたまゝえ！』

セリスさんの振り向いてみると、同性でも惚れそうなニコリと笑みを見せてきた。

そういえばアンスールの女性メンバーは全員美人さんやったなあ。

私のところにまで転送されてきたサイコロをキャッチ。今度は16を出したるか。

一気にマスを進めて、速攻でゴールへ。そやけど狙って出すんは何か怖いなあ。

妙なペナルティーを科せられそうや。

「はやてちやーン！　16を出しちゃえー！」

みんなの声援に、「任せてなー！ー！」と腕を大きく振って応えるよっしや。ポイとサイコロを放り投げる。コロコロ転がるサイコロ。

そんで出た数字は・・・「16やー！ーっ！」やった。最高の運やな。

これならこのエリアを早々にクリアできそうや。で、16マス進んで・・・

『あー残念。突然のサイクロンに巻き込まれちゃった。振り出しに戻る。ごめんね』

足元から竜巻が発生。てゆうか、ごめんね、ちやうわっ！  
なんやム力つく！　そう思うても竜巻に勝てるわけもなく、



「ひゃああああああっ！」

吹っ飛ばされた。マリ ブラザーズ3の笛使用時みたいな気が付けばスタート地点。私を見とるみんなに「ただいま・・・？」と挨拶。

少しの沈黙の後、みんなから優しい「おかえり」が返ってきた。アカン、泣きそうや。

めっちゃ意気込んでの予期せぬ帰還。私、今日の運悪いんやろか？

「では二番手に参りましょうか。どなたが振ります？」

++++Sideはやて ルシル++++

なんとか2ndエリアに到着（何とか転送させてやった）。したのはいいが、到着した直後に強制転送。

そこは、晴天に恵まれた、全てが白い石畳の大きな広場だ。何かしらのお題を行うための場所だろうか？

「ルシル君！」 「ルシルパパ！」

背後から声をかけられた。なのはとヴィヴィオだ。

振り向けば、シグナムとアギト、ティアナとキャロとレヴィ以外が居た。

みんなの元へと駆け寄り、そして話を聴くまでもなく現状を理解した。

「まさか・・・セシリスと戦うのか・・・!？」

今居るこの石畳の広場の中央が数mと窪んでおり、その窪んだ底には円形の、まるで闘技場のような広場が広がっていた。

その闘技場の中、片刃の刀身が二つ並んでいる（峰が向かい合った）真紅に輝く大剣“煉星剣レーヴァテイン”を携えたセシリス。

すでに臨戦態勢に入っている、アギトとユニゾンしているシグナム、そしてティアナ達が居た。

「レヴィが出したそのマス目の内容が、ボーマスっていうものだったんだけど」

ボーマス？ ボーナズとマス目をかけたダジャレか？

フェイトの口からそんな間抜けな単語を聞く日が来るとは。

いやいや。そんなことより、だ。

「そのボーマスというのが出て、このエリアの管理人のセシリスと戦うハメになったわけか」

聞けば、ボーマスでの相手は管理人だけではないらしい。

管理人はもちろん、私達の中から誰か、そして謎のゲストキャラ、という3つの選択肢があったらしい。

決定方法はルーレット。そして運悪く管理人を引き当てたという事だった。

そんなルール、カーネルの奴言ってなかったぞ。

あの馬鹿。ルールを説明するならちゃんと最後までしろよ。

「そうなの。あと、管理人側のキャラクターと戦う場合、一度戦闘に参加した人は、味方が全員戦ってからじゃないと出られないんだって」

「だから私はやてちゃん、ヴィータちゃんにルシル君は、他のみ

んなが戦闘しないとずっと出れなくて」

「つまり、セインテスト君達がもう一度戦うためには、ヴィヴィオちゃんやアインハルトちゃん、それにコロナちゃんとリオちゃんとイクスちゃんが戦ってからじゃないとダメって事よね」

シヤマルのその言葉に一番反応したのはコロナとリオとイクスだ。私とカーネルとの戦いが余程シヨックだったらしく、少し怯えている。

だから、もしかしたら自分達もあんな馬鹿げたレベルの戦いに出ないといけないと判り、

「わ、私は無理ですっ。あ、あんなすごい戦いを自分達もやれって・・・！」

「あんなの負け戦じゃないですか。あたし、勝つ自信が無いです」

「わたしは一切の攻撃魔法を習得してないですから、一番足手まといかもしれない」

ずーんと沈む三人。だが忘れていないか？

別にアンスールと絶対戦わなければならぬって事はない。

それに、仲間内での戦闘、ゲストキャラが居るみたいだな。

もし万が一にもアンスールと戦う事になった時、アインハルト達にはカノンと戦ってもらえばいいだろう。

ひとつ問題があるとすれば、カノンが出てくる前にアインハルト達が参戦しなければならぬ事態に陥った場合。

そうだったら・・・すまない、諦めてくれ。

「ルシルさん。セシリスさん相手に、シグナムさん達のメンバーで

勝てるでしょうか？」

エリオが心配そうに訊いてきた。シグナムとアギトのユニゾン。中遠距離のティアナ。オールレンジのレヴィ。サポート力のあるキヤロ。

かなり良い布陣だが、シグナムを出したのは失敗だ。ここはフェイトかエリオの方が良かった。

ステアとセシリスの扱うムスペルヘイム王家式魔術の一つに、シグナムとアギトの火力を無力化する術式が存在している。

それを使われたら、いくらシグナムとアギトとはいえ遅れを取ることは間違いない。

「あのメンバーを選んだのは誰だ・・・？」

「ルシル君とシャルちゃんの記憶の内容を思い出して相談して、最終的にはシグナムさんが決めた」

シグナムの事だ。おそらくティアナ達は全員サポートに回すだろうな。

それもかなり危険な状況になってからだ。騎士としての誇りがそうさせるはずだ。

騎士というのは誇りがあればどこまででも戦いを貫こうとする。

つまり、自分を支える誇りを失わない限り諦めない、途轍もなく厄介だが、しかし憧憬を抱ける対象だ。

「シグナムの奴。同じ炎熱の剣士としてやる気みてえだったぞ」

「扱う武器の名前もレーヴァテインとレヴァンティンという共通点だし。やっぱり関係とかあるのかな？」

私は、そう首を傾げているスバルに「ミッドとベルカは大戦時代から確立している世界だから、名前くらいは伝えられていてもおかしくないだろう」と答えておく。

はやての使う古代ベルカ魔法には、大戦時、そして私の魔術にも存在する名称（ヘイムダルやフリースヴェルグ）が使われている。

「それでルシルさん。エリオの質問の答えはどうなんですか？」

リンの問いに「そうだな。こう言っては悪いが、シグナムではなくフェイトを出した方が良かったかもしれない」と答えると、全員が息を飲んだ。

そう言えば、魔術師など知らないアインハルトやコロナ、リオは付いて来れているのだろうか？

ここまで巻き込んでおいて騙し続けるというのも気が引けるが……。

「ムスペルヘイムの魔術師は、全ての炎熱系を統べる術者と言っても過言じゃない。

炎熱系魔力には耐性があるし、セシリスやステアのような王家術式を扱う術者にはもっと高位の炎熱封じがある。

だから相性的にはシグナムは間違いなく劣勢。それを覆すには、魔法に頼らない純粋な剣技で上回り、尚且つ味方のサポートを上手く利用するしかない」

「そんなにまずい相手なんか……セシリスさんて」

「あの、ヴィヴィオさんのお父様。先程から聞き覚えのない単語がいくつか出てきているのですが。」

付いて行けていないのは私とコロナさんとリオさんだけのようですし、その、教えていただいてもよろしいでしょうか？」

アインハルトのその問いに、魔術を知る全員が私を見詰めてくる。教えていいのか、と。私は頷くことで、教えてもいい、と応える。

「まず、今から話すことは全て真実だ」

そこまで言ったところで、闘技場内にカーマインの魔力光が生まれため中断。

一斉にセシリスへと向けられる視線。セシリスの足元に、ムスペルヘイム式魔法陣が展開されている。

正五芒星と逆五芒星を合わせた十芒星。その中央には円があり、小さな十芒星が描かれている。

そして十芒星を囲う二重円の間にくつものルーン文字が描かれている。そういう魔法陣だ。

「始まるな……。話はこの戦いが終わってからにしよう」

炎帝セシリスを相手にどこまで戦えるのか。

シグナム、アギト、ティアナ、キャロ、レヴィ。頑張ってくれ。

+++++ Sidellシル シグナム+++++

我々が対峙するのは、遥かに古き時代の英雄アンスールの一人、炎帝セシリス。

私と同じ炎熱の術式を扱い、しかも携える武器の名称も似通っている。

時代的に見れば、私のオリジナルとも呼べる相手だ。

「それではそろそろ開戦と参りましようか。  
コホン。アンスールが炎帝セシリス・エリミング・ムスペルヘイム  
参ります」

VS? ? ? ? ? ? ?

其はアンスールが炎帝セシリス

? ? ? ? ? ? ? VS

セシリス殿が“レーヴァテイン”を正眼に構える。

私も同様に“レヴァンティン”を正眼に構え、

『キャラ。私に強化を頼む。ティアナとレヴィ、お前たち二人には  
悪いがしばらく待機していてくれ。

アンスールが炎帝セシリス。一度、一対一で闘ってみたかった相手  
なのだ』

思念通話で、共に戦ってくれる仲間にあまりにも身勝手な指示を出  
す。

判ってくれ、とは言うまい。だが、かつてのセインテスト達の記憶  
で垣間見たセシリス殿の強さに心が震えた。

そのような彼女に、私の騎士<sup>ツルギ</sup>の魂が届くか、届いたのならどこまで  
通用するか。

その結末を見てみたいのだ。三人から返答が来る。

『了解しました。ティアナ・ランスター、待機します』

『えっと、了解です。レヴィ・アルピーノ、シグナムさんに託しま  
す』

『キャラ・ル・ルシエ、了解です。強化の方は任せてください』

三人は私の身勝手な我が儘を受け入れてくれた。

『すまない、感謝する』と最大の感謝の意を込めて告げる。

三人の力強い頷きを見、私は改めて待っていていてくれるセシリス殿を見据える。

「我が乞うは、疾風の翼、城砦の守り、破碎の力。

火炎の剣騎士に、駆け抜ける力を、清銀の盾を、力を与える祈りの光を」

トリプルブーストアップ・スピード&ディフェンス&ストライク

キャロの強化魔法が私を包み込む。

セシリス殿が少し驚きの表情を見せたが、すぐさま消し去る。

「守護騎士ヴォルケンリッターが剣の騎士シグナム。参らせていただきます」

こちらも名乗りを上げたことで、決闘の準備は終わった。

あとは戦闘開始の切欠だけ。だがその切欠はすぐに訪れた。

私とセシリス殿の間に、白い何かが落ちてきた。石片だ。

自然に落ちてきたものではないな。おそらくセインテストだろう。

その石片が地面に……落ちた。それを合図として戦闘開始。

「行くぞ、アギト！ レヴァンティン！」

『応よ！』 Jawohl !!!



一足飛びで距離を詰める。先手は頂こう。キャロの強化のおかげで体が軽い。

“レヴァンティン”のカートリッジを二発ロードし、刀身に炎を纏わせる。

炎帝は私の炎熱剣戟を受けるかわすか。さあ、どちらだ！

「『紫電・・・一閃！』」

振り上げた“レヴァンティン”を全力で振り下ろす。

セシリス殿の“レヴァティン”に動きは・・・あった。

「良い剣閃ですね」と涼しげに言い、振り下ろされる“レヴァンティン”を真っ向から退けるように“レヴァティン”を振り上げた。二振りの剣が衝突。衝撃波が途轍もなく、“レヴァンティン”の炎がすべて吹き飛んだ。

「おおおおおおおっ！！！！」

そのまま押し続ける。セシリス殿から「くっ」と苦悶の声が漏れる。しかし私は押し合いを終えて引く。直感が告げたのだ、距離を開ける、と。再び一足飛びで後退。

アセツソ・ゲーミ  
熱波震断刃

「良い勘をしているんですね。騎士というのはいつの時代も素晴らしい」

セシリス殿の“レヴァティン”の様子がおかしい。ただでさえ真っ赤だった刀身が、さらに赤みを増している。まるで炎に熱せられた直後の鉄のようだ。

「貴女の紫電一閃でしたか？ 炎を纏う術式。私のこれは……！」  
説明の途中で突撃してくる。受けていいのか？ いや、駄目だ。  
あの攻撃は受けていいものではない。横薙ぎに振られた一閃を避ける。

### パンツァーシルト

避けきれそうになかった返しの一閃を防ぐために障壁を展開するが、防ぐどころか私に攻撃が届くまでの時間稼ぎすらできなかつた。  
ギリギリで身体を捻る事で直撃だけは免れた。

「数千度の高熱を纏うものでして、派手さはないですが、威力はありますよ？」

ただ効果時間はあまり長くはないですけど……！」

再度の襲撃に備えさらに距離を開けつつ、

『ブレネン・クリューガー……！』

アギトの炎弾が、迫るセシリス殿に殺到していき直撃、連続で爆発を起こしていく。

さらに距離を開け、「アギト、烈火刃だ。火力を底上げしたい」と告げる。

頭上にあるセシリス殿のライフゲージに変化は……ある。僅かだがダメージを与えられたようだ。

『おっしゃ！ 任せろい！ 炎帝だかなんだか知らねえが、あたしらの炎を見せてやる！』

## 烈火刃

“レヴァンティン”の刀身に業火が纏う。見据えるは未だに晴れない爆煙の中に居るであろうセシリス殿。どのような事態が起きようとも対処出来るように意識を研ぎ澄ませた直後、

「さあ、参りましょう・・・！」

## 炎熱波神断刃

リベラサオン・ブレイザ

カーマインに光輝く6m近い長さの剣閃が幾つも飛来してきた。横っ跳びで回避を行いつつ、回避しきれない剣閃には迎撃を行う。

“レヴァンティン”を振るい、真っ向から切り捨てる。ふむ、大した威力ではないな。

一閃目を中央で裂き、二閃目も裂き、三閃、四閃と真っ二つに切り捨てていく。

が、五閃目で異変。寸断出来ていたのが、明後日の方向へ弾き飛ばすことしか出来なかった。

次いで六閃、七閃と弾くだけに留まる。そして終わりは唐突だった。八閃目を弾くことも出来ず、そのまま迎撃に振るった“レヴァンティン”と拮抗することになってしまった。

「どこまでこの術式に耐えられるのか、見せていただきますね」

さらに追加されていく剣閃が、“レヴァンティン”ごと私を後方へ吹き飛ばそうとする。

少しでも気と力を抜けば間違いなく全ての剣閃に斬られる。故に退けない。

今さら捌くことも出来ない。防御を行おうともすでに懐に入られて

いるため無意味だ。

パンツァーガイスト

念のための魔力バリアを纏う。どこまで威力を軽減してくれるかは判らないが、無いよりはマシだろう。

『シグナム！ レヴィ達に援護を頼もう！ 騎士としての誇りも解るけどよ、負けちまったらそれまでじゃねえか！』

アギトの若干涙声の入った提案。それに対し何かを答える前に、私は目を見張った。

今までの剣閃の真の狙い、この術式の本当の姿が目の前に存在していた。

セシリス殿は猛る業火を刀身から伸ばした“レーヴァテイン”を頭上に掲げ、

「ダール・ア・センテンサこれで終わりです！」

さらに一閃、今度は単なる光の剣閃ではなく業火の刃。

手を離せないこの状況。動いたのはアギトだ。私の頭上に生み出される小さな太陽。

『相殺でなくてもいい。せめて威力を減らしてやる！』

轟炎

セシリス殿が放った業火の刃へと太陽が一直線に向かう。

衝突。大爆発を起こし、迎撃に成功したかと思われたが・・・。

『全然衰えてねえっ！？』とアギトが叫ぶ。業火の刃が、“レーヴァ

ンテイン”と拮抗している幾つもの剣閃に触れた。

++++Sideシグナム レヴィ++++

大爆発によって生まれた爆音で聴覚を潰された。

ついでに視覚まで潰されたっばい。目を開けているのか閉じてるのかも判んない。

とにかく、『シグナムさん！ アギト！』って念話で二人の確認を取る。

だけど一向に返事が来ない。まさか今のバカみたいな攻撃で、シグナムさんとアギトが負けた・・・？

『ティアナ！ キャロ！ そっちの状況は！？』

『最悪よ！ 耳鳴りが酷くて気持ち悪いわ』

『わ、わたしも目が見えない・・・』

3人揃って視聴覚を潰されてしまったみたい。

離れた位置に居てこの被害。ほぼ直撃と言ってもいいシグナムさんとアギトは絶望的だ。

次はわたし達を撃破するために動くかもしれないセリス。

すぐさま“アストライア”を起動。防護服は近中距離用の“モード・コンバット”。

『一方的に負けるは嫌だから、わたしは一矢報いたいんだけど。ティアナとキャロはどうする』

たとえ二人が手伝ってくれなくてもやる。負け戦であってもここまでやられたら黙ってられない。

すると『あたしも乗った。援護は任せなさい』とティアナ。『サポートは任せて、レヴィちゃん』とキャラ。

『そんじゃいつちよ魔導師の底力を見せてやるっか！』

二人からの承諾も得た。相手はルシリオンと同じアンスールのメンバー。

簡単に勝てる相手じゃないのは重々承知。視界が徐々に戻っていく。両拳を打ち合わせて気合充填。つてところに・・・

「うそ・・・シグナムさん・・・!？」

視界に入ったのは、ボロボロになりながらもセシリスと戦っているシグナムさんの勇ましい姿。

遠目だから確信じゃないけど、シグナムさん・・・目、閉じてない？

『キャラ。あたしとレヴィが援護するから、シグナム一尉を召喚、すぐに回復して！』

ティアナの念話にわたしとキャラは『了解!』と応えて、わたしは陸戦用高速移動魔法・瞬走壱式を発動。

ティアナもクロスファイアをスタンバイ。その間にセシリスの背後へ一気に距離を詰める。

シグナムさんとのマジ斬り合いの最中だっというのにセシリスはハッキリとわたしの姿を視認してた。

防御か回避か迎撃か。どれが来るか判らないけど、もう後には引けない。

「はああああああああっ！」

### 孤咬崩陣

障壁破壊効果を持つ、弧を描く右蹴りを放つ。

普通の相手だったらただの蹴りだと思つて障壁を張るか避ける。

障壁を張ったらそのまま突破してヒット。避けても次の攻撃に繋がればいいだけ。

で、セシリスはシグナムさんの目を閉じていても的確な剣戟の前に回避は出来ないって判断して、

「そんなハッキリと見える蹴りですから、何かしらの効果付与がある、ですよね」

シグナムさんの“レヴァンティン”と鏢競り合いしつつ、空いた左手でわたしの右足を掴んできた。

何かを考える前に、「もらったっ！」と左足の蹴りを頭部目掛けて放つ。

だけどあと一歩遅かった。セシリスは蹴りが届く前にわたしをブン振り回して放り投げた。

### 瞬走弑式

でもまだまだ。空戦用高速移動魔法で、宙を蹴って再度セシリスを襲撃。

キャラによるシグナムさんの召喚が始まるのを視認。

セシリスもそれに気付いて止めようとするけど、

「させない！」

ハーツィース・ストライフ  
紫光連砲

左腕を突き出して近接砲撃を照射。セシリスは回避に移った。よしっ。シグナムさんがキャロのところへ転移完了。あとは回復を待つまでだ。

こっからは手加減無用。左足、右腕、右足と連続で突き出して砲撃をぶっ放す。

「面白い術式ですね。ですが、その程度の砲撃では通用しませんよ。・・・」

アルマメント・ウウカオン  
轟煉甲冑

セシリスの足元から炎が噴き上がって、それを甲冑のように纏ってわたしの砲撃を全て燃やし尽くした。べ、別にシヨックじゃないもん。想定していたしい。

炎の中に佇むセシリスが“レーヴァテイン”の剣先をこっちに向けてくる。

これはまずいって思うね。そう思った矢先、『レヴィ！ フルバースト、いくわよ！』とティアナから念話が入る。

すぐさまシグナムさんを治療しているキャロやティアナを巻き込まないような位置へ退避。

クロスファイア・フルバースト

魔力弾の集中砲火。それを見つつ、中遠距離戦用の“モード・バスター”へ変更。

わたしのように殴り合いの近接戦タイプじゃ危なすぎる相手だ。モード変更を終えてすぐ、



クロスファイアが炎の障壁に阻まれているところに砲撃をぶつ放す。  
“モード・バスター”時の砲撃は、“モード・コンバット”の時より当然威力が高い。  
だからストライフのように完全無効化されないと踏んでいたんだだけど。

セシリスは何を思ったのか纏ってた炎を全部“レーヴァテイン”の二つの刀身の間に集束させた。

直感が働く。すぐさまこっちに向けられている剣先の射線上から必死に離脱。

「<sup>ソール</sup>女神の陽光」

ボソツと呟いた術式が耳に届いた。ルシリオンの大炎熱砲撃と同じ名前。

直後、二つの刀身をバレルのように見立てて、炎を螺旋状に纏ったレーザーが放たれた。

衝撃が凄いのかセシリスさんが後ろによろける。そんなのだどうでもいいや。

レーザーはわたしの砲撃を瞬殺して、螺旋状に纏う炎で残りのクロスファイアを吹っ飛ばした。

レーザーはそのまま壁に衝突。とんでもない大爆発を起こして、衝撃波やら爆風でわたし達を無様に地面に転がした。

「こっつわっ！ 怖っ怖っこっわっ！」

すぐさま立ち上がって尻餅をついてるセシリスを見る。

わたしの視線に気が付いたのか急いで立ち上がって「コホン」とか咳払いしてる。

とりあえずみんなの無事を確認するために『生きてる人は返事プリーズ！』って念話を送る。

『けほっ、こっちは大丈夫。キャラ、シグナムさんは？』

『シグナムと『アギトだ』。私達は無事だが、キャラが今のでゲームオーバーになってしまった』

『ごめんなさい。瓦礫が後頭部に当たってライフゲージがゼロになっちゃいました』

頭上を見れば、確かにキャラのゲージが黒に染まってる。って、わたしとティアナのゲージも3分の1くらい削れられてるし。

うへえ、とか思っていると、シグナムさんが『みなには迷惑をかけた。すまない』と謝罪してきた。

『い、いえ、あたし達も言う事を聞かずに手を出しましたし』

『謝るのは私の方だ。それに、感謝もだ。ありがとっ、お前達のおかげで助かった』

シグナムさんが一番セシリスと近いわたしのところに歩いて来る。

そして“レヴァンティン”を構えて、『レヴィ、ティアナ。援護を頼めるか？』と。

返答は決まってる。『任せてください！』だ。

「アレだけのダメージをそこまで回復させるとは。

あの年端もいかない小さな少女は大変素晴らしい治癒術者のようね」

遠くから「ち、小さくないもんっ、これでも16歳だもんっ！」「っ

て必死に否定するキャラの声が。

セシリスは律義にも「16・・・ごめんなさい」って謝った。

キャラが「素直に謝れるのもちよっとショック!？」って叫んでる。もう放っておこう。

「1対3。では、こちらも本気で行かせていただきます・・・ね!」

シャーマ・レアオ  
疾駆せし業火の獅子

「く・・・っ!」

巨大な炎を纏って炎塊となったセシリスが、倒れ込んでいるかのような低い体勢で地面スレスレを飛んできた。

セシリスの突進を、わたしとシグナムさんは左右に分かれて跳び退いて回避。

後方に通過していったセシリスに安心・・・なんて出来なかった。

通過していった轍には炎がメラメラ燻ぶっていて、

「離れるレヴィ!」

エスプロザオン・ピラール  
爆連柱波

轍から炎の柱が幾つも連続で噴き上がって、その衝撃波で軽く意識が飛びそうになった。

頭を振って、何とか持ち堪える。そこにドンッと胸を突き飛ばされて、尻餅をつく。

驚いて顔を上げると、シグナムさんとセシリスさんが鏝迫り合いをしていた。

++++Sideレヴィ シグナム++++

『「はああああああああっ！」』

“レヴァンティン”を振るい、セシリス殿を若干押し始めた。

純粋な剣技では少しばかり私に分があるようだ。無論セシリス殿の剣技も素晴らしい。

疾いのは当然として、一撃一撃が重く手が痺れ、“レヴァンティン”を取り落としそうになる。

だが、「フライハイトの剣戟に比べれば・・・！」と、気合いの一撃を振るう。

「つづ！ 剣神と刃を交えたことのある者とは・・・！」

弾き飛ばされたセシリス殿が微笑む。私と距離が開いたことで、

ハーツィーズ・クラッカー

紫光裂破

クロスファイアシュート

レヴィとティアナの射撃魔法、計26基が全方位からセシリス殿を襲撃する。

セシリス殿は“レヴァンティン”を振るい、次々と魔力弾の迎撃に成功するが、

「うぐ・・・があっ！」

残り3基の内の2基の魔力弾が迎撃される前に炸裂し、無数の小型の魔力弾となってセシリス殿にダメージを与えた。

残り1基はティアナの魔力弾だったが、クロスファイアではなくスタンバレットだった。

感電したことでよるけたその隙を突き、「紫電・・・一閃！」と斬りかかり、セシリス殿に直撃させることに成功した。

セシリス殿は「づ・あ、う、やってくれますね、騎士シグナム・・・」と、“レーヴァテイン”で体を支えるも片膝をついた。

彼女のライフゲージは半分を切っている。このまま押し切れるのか・・・？

いや、セシリス殿の表情にはまだまだ余裕がある。

『真技を使われる前に決めた方がいいな。ティアナ、ブレイカーの準備を頼む。』

レヴィはそのまま射砲撃での援護を頼む。アギト、隙を見て捕獲輪だ』

『『『了解！』』』

「作戦会議は終わりですか？　なら、ファイナルラウンドと行きましょっ」

カバスイダーチ・フォルタレスイメント  
炎帝形態顕現

「な・・・っ!?!」

炎のように揺らめくカーマインの魔力を身に纏う。

ただでさえ艶やかなカーディナルレッドの髪がさらに煌き、ウルトラマリンプルーの瞳は黄金に輝いている。

セシリス殿が「参ります」と告げ、私はその姿を完全に見失った。

直感が働き、“レーヴァテイン”を盾のように体の横に掲げた直後、途轍もなく重い“レーヴァテイン”の一撃が来た。

「ぐ……あ……！」

両腕がギシギシと軋みを上げる。何とか耐え“レーヴァテイン”を捌く。

距離を開けるために後退しようとするが、彼女はそれを許そうとしない。

ステップで接近してくる。苦し紛れの紫電一閃を振るうが、容易く“レーヴァテイン”に防がれた。

ダール・ア・センテンサ  
「これで終わりですよっ！」

ヘキエイン・インフェル  
火煉爆焰焼打

私の身長を越すほどの半球状の炎を前面に押し出す様に纏った左拳打。

まずい、この直撃を受ければ間違いなく一撃で落とされる。

パンツァーシルトとパンツァーガイスト、役に立つかは判らないが魔力付加した鞘を盾代わりとする。

全力の防御に焰拳がヒット。視界が炎一色に染まる。大爆発が起き、爆風と衝撃波を耐えようとはせず、吹き飛ばされるままに体を任せ

ホールディングネット

「シグナムさん！」

レヴィの発動した網状の緩衝魔法のおかげで壁に叩きつけられることはなかった。

「すまない、レヴィ」と感謝を告げ、痛む体を引き摺りながらもセ

シリス殿と対峙。

セシリス殿は刀身に目を覆い隠したいほどに眩しく猛る炎を纏わせ、  
た“レーヴァテイン”を上段に構え、

「レーヴァ天壤滅する……テイン原初の劫火！！」

振り抜いた。と同時にあまりにも巨大な業火の剣状砲撃が放たれた。  
全力で空へと上がり、回避に集中する。防御など無意味なこととは出  
来ない。

私という標的を失った剣状砲撃が壁へと当たり、根こそぎ吹き飛ば  
す。

とんでもない火力だ。そこに、「もらったあぁっ！」とレヴィの声。

ハーツィース エクステン  
紫光掃破・昇華

レヴィの集束砲だ。セシリス殿は技後硬直で動けないでいる。

そのまま直撃した。スミレ色の魔力光が周囲を照らし出す。

さらに、「スターライトブレイカー、行きます！」とティアナから  
連絡が入る。

私とレヴィはすぐさま効果範囲から離脱。その直後に放たれるのは、

「スターライトオ……ブレイカアア……ツツ（ファントムス  
トライク）！！」

橙色の極光。チラリと姿が見えたセシリス殿がもう一度極光が呑み  
込まれた。

セシリス殿のゲージはあと僅か。レヴィとティアナの攻撃は間違い  
なく通用している。

ここで一気にダメージを与えるしかない。

「アギト！」

『応よつ！ 剣閃烈火・・・！』

左手に剣を模した炎剣を創り出す。私の有する魔法の中で最大火力を誇る一撃だ。

「『火竜・・・！』」と左腕を振ろうとしたところで、セインテスの「ダメだ、シグナム！」との叫び声。一体何事かと思う前に、すでに私は左腕を振るっていた。

### 火竜一閃

炎剣が伸び、その一撃を、煙幕の中から姿を現したセシリス殿へ向けて振るった。

セシリス殿は防御も回避も行おうとしない。ただ空いた左手を迫る火竜一閃に伸ばした。

（まさか素手で受け止める気なのか？ 火竜一閃を！？）

### サクラメント・チムスッベル 原初煉界の炎王絶技

だがそれが現実となった。セシリス殿は何の苦もなく炎剣を鷲掴んだ。

私達は絶句する。さらに驚愕の事態が起こる。火竜一閃の炎が、セシリス殿の左手に吸収されていく。

まさかセインテスの先程の言葉は、この事についてだったのか？

「ル〜シル　ちよつとダメじゃない？ 私の事を教えよ〜とするのは。」

私、騎士シグナム達の事をなんにも知らないというのに」



セシリス殿の吐いた溜息と共に纏っていた魔力が消える。

“レーヴァテイン”を肩に担ぎ、今までの丁寧な口調とは打って変わり、気安い口調でセインテストを窺める。

「つい、な。しかし今はシグナム達の味方を」

「私の味方でもあるでしょ？ あるよね？ あると思います」

ニコニコ笑うセシリス殿の微笑みにセインテストは少したじろぎ、降参の意なのか両手を上げた。

「まあ今ので判ったでしょうから説明しましょうか。」

私の扱うムスペルヘイム王家式魔術には、敵の火炎熱を吸収し、自らの力へと変換出来る術式があります。つまり」

「つまり、シグナム一尉やアギトの火炎攻撃は、一切通用しない。それどころか、あなたを強化、そして回復させるファクターになる、ということですね」

「正解です。私のライフゲージ、ほぼ回復しているでしょ？」

確かに。まさかトドメとして発動した魔法が、セシリス殿を回復する事になるうとは。

これにはショックを隠せそうにもない。ここまで共に戦ってくれたティアナとレヴィとキャロに申し訳が立たない。

「騎士シグナム。貴女の炎熱魔法は、もう私には通用しません」

“レーヴァテイン”の剣先を私に向け、そう宣告した。

そうだろうな。そうだろうが、私の攻撃魔法に全て火炎が付加されるわけではない事を見せてくれる。

“レヴァンティン”をボロボロと崩れそうな鞘へ収め、カートリッジを3発ロード。

セシリス殿は「なるほど。炎熱攻撃ばかりではない、という事ですか」と言い、“レーヴァティン”を正眼に構える。

私も“レヴァンティン”を正眼に構え、「ファイナルラウンドの続きと参りましょうか、炎帝セシリス殿」と告げる。

「ええ。徹底的に潰して差し上げましょう」

互いに微笑みあう。ティアナとレヴィが「怖い」とか言っているが、怖くはないだろう？

現状、セシリス殿を撃破する方法は一つ。レヴィの複数魔導師による連携集束砲ムーンライトブレイカーのみ。

ティアナとレヴィの二人に、『ティアナ、レヴィ、おまえ達のムーンライトで決めてもらいたい』と提案する。

『時間稼ぎは私に任せてくれ。必ずおまえ達に繋げてみせる』

『了解しました。レヴィ、お願いね』

『おおっしっ！ やったるぜい！』

二人の承諾も得た。ならば、セシリス殿の隙を作るために頑張らなければな。

シヤーマ・レアオ  
疾駆せし業火の獅子

セシリス殿が炎塊となって低姿勢で突進してきた。

大きく横つ跳びし回避。先程と同じように轍から火柱が幾つも連続で噴き上がる。すでに効果範囲からは離れているため脅威ではない。セシリス殿は停止し、

「はっ・・・！」

リベラサオン・フレイヤ  
炎熱波神断刃

カーマインに光輝く6m近い長さの剣閃が幾つも飛来してきた。今度は受けに回らない。飛行で回避し続ける。途切れたところで、鞘から“レヴァンティン”を抜き放つ。

飛竜一閃

シュランゲフォルムと化した“レヴァンティン”による砲撃級斬撃。セシリス殿が驚愕に目を見開き、だがすぐさま余裕の表情へと戻す。

「素晴らしいつ！」

エフヒサオン・ウルカニカ・チ・ドラガオン  
炎炎竜天昇牙

“レヴァティン”の刀身に火炎を纏わせた状態で真っ直ぐ上空へ跳躍。

炎の竜のように天へ昇るその姿。飛竜一閃を真っ向から上空へと弾き返した。

「まだだっ！」

シュランゲバイセン・アングリフ

弾かれた連結刃を操作して、宙空に居るセシリス殿を包囲しつつ突撃させる。

「連結刃とはまた珍しいですね！」と、迫る剣先を弾く。が、完全に破壊されない限りはいつまでもどここまででも追撃する。追撃しては捌かれ、追撃しては捌かれ、を続ける。

「これは意外と厄介な・・・ならば！」

セシリス殿は“レーヴァテイン”の刀身に連結刃を絡ませる。ギチギチと刃が擦れ合う音が響く。そして、

「アセツソ・ゲーミ熱波震断刃・・・！」

数千度の高熱を発して攻撃力を上げる術式を使い、「次戦は出れませんし、壊れてもいいですよね」と刀身に絡ませていた連結刃を破壊した。

そのまま私の元へと突撃してきた。“レヴァンテイン”をシュベルトフォルムへと戻す。

刀身が半分になってしまっているが、戦闘不能になっただけではない。

まず迎撃するのはアギトの炎弾ブレネン・クリューガー、数は11基。

「武器が折れてもやはり戦いを続行するんですね、騎士は」

余裕で炎弾を切り捨てていく。今度は私だ。

紫電一閃で迎撃。拮抗はしたが、やはり攻撃力は断然“レーヴァテイン”が上回り、

「これでもう立ち向かっては来れないですね？」

「くっ……！」

『レヴァンティンが！』

アギトの悲鳴。“レヴァンティン”がジュージューと音を立てて真っ二つに断ち切られた。切断面は熱せられた鉄の如く真っ赤。だが、まだだ！

シュトウルムヴィンデ

ほとんど刀身の無い“レヴァンティン”を振るい、衝撃波を発生させ至近距離でぶつける。さすがに想定外の反撃だったのか、セリス殿は「うぐっ？」と呻き声を漏らし、吹き飛んだ。だが両足で軽やかに着地し、

疾駆せし業火の獅子

シャーマ・レアオ

炎塊となって低姿勢の突進攻撃。見るのは三度目。

先程よりさらに速いようだが、それでも直線的な突進故に避けやすい。

と思った矢先、行く手にムスペルヘイムの魔法陣が生まれ、それを方向転換するための足場とした。

魔法陣を蹴る事での急な方向転換に対処できない私は、「がはっ！？」と、その突進の直撃を受けた。

踏ん張る事も出来ずに弾き飛ばされ、背中から地面に叩きつけられる。

『シグナム!』

アギトの心配にも答えられないほどのダメージを受けてしまった。体内をめちゃくちやにされたように気持ち悪い。だが倒れたままではいるのはまずい。

「シグナム一尉!」「シグナムさん!」

ファントム・ブレイザー

ハーツィース  
エクステンド  
紫光掃破・昇華

ムーンライトをいつでも発動出来るように準備していたはずの2人からの援護砲撃。

アルマメント・ウウカオン  
轟煉甲冑

足元より噴き上がる炎を纏い、二条の砲撃をかき消す。

それと同時に立ち上がった私に、「今、楽にしてあげます」と、セシリス殿が疾駆してきた。

“レヴァンティン”はもう使えまい。ならあとはこの身一つでセシリス殿を止めるのみ。

振るわれた“レヴァティン”を半身ズラして避け、ラリアットを放つ。

首が閉まり呻き声を漏らすセシリス殿をそのまま腕で拘束。

「アギト!」

捕獲輪

ここで、アギトが捕獲輪を発動。セシリス殿の左腕と右足を捕獲した。

突然の拘束に、セシリス殿は一瞬驚愕。しかし捕獲輪を破壊しようと拘束されている部分に炎を集中した。

今こそ好機。セシリス殿の腰に両腕を回してしがみ付く。

「一体何を!？」と驚きの声を上げているセシリス殿を、捕獲輪が破壊されるとほぼ同時にバックドロップ。

ズドン!と後頭部から地面に叩きつけられたことで、一瞬とはいえ隙を生まれた。

『レヴィ!』

「任せてください!」

マナクル  
紫光瞬糸

チエーンバインド

セシリス殿を拘束していくスミレ色の拘束糸と橙色の鎖。

抜け出そうともがいているが、もう遅い。セシリス殿を中央としてティアナとレヴィが対角線上に立つ。

準備は整った。巨大なベルカ魔法陣が三人の足元と頭上に展開される。

「ああああああああっ!」

二人の裂帛の気合の咆哮と共に、頭上と足元の魔法陣から橙色とスミレ色の幾つもの閃光が断続的に噴き出し、セシリス殿を呑み込む。

「ううがああああああっ!」

二色の閃光の中からセシリス殿の断末魔が聞こえてきた。だが、その閃光すら呑み込もうとする炎が生み出される。これには焦り、ティアナとレヴィが頭上の魔法陣へ跳躍。

レヴィが魔法陣に手をつく。レヴィが集束役で、ティアナがトリガー役のようだ。

魔法陣の直下にスミレ色の光球が発生、周囲の魔力を集束させて巨大化していく。

「はあはあはあ……そんな魔力を、こんな至近距離で……！？」

セシリス殿が本格的に焦りだし、拘束を解こうとさらに炎を体から噴出させる。

ビチビチブチブチと拘束条が焼き切れていく。急げ、レヴィ、ティアナ。

そして、ティアナが“クロスミラージュ”の銃口を魔法陣の中央に当てた。

後はトリガーを引き、魔法陣の直下にある巨大な光球に砲撃を撃ち込めば……。

「ムーンライトオオ……ブレイカアアア……ッ！！」

炎帝セシリスを撃破するための最後の一撃が放たれた。

++++Sideシグナム ティアナ++++

決まった。レヴィのムーンライトは、発動に参加した魔導師の魔力



をも使う集束砲。

今回はあたしとレヴィ2人分の魔力、そして周囲の魔力、かなりの高威力になったはずだ。

スミレ色の閃光によって潰されてた視界が元に戻り始めて、ようやくセシリスさんのライフゲージを確認した。

間違いなくゲージは黒く染まってる。それが示すのは、あたし達の勝利だという事だ。

だけどまだ実感がわかず、勝利の喜び合う事もないままベルカ魔法陣から降りる。

その直後、

「ああ、本当に負けるかと思いました」

うそ・・・でしょ？ ゆっくりと背後に振り向く。

そこにはボロボロだけど、確かにしっかりと両足で立って、螺旋状に燃え上がる炎を足元に発生させてるセシリスさんが居た。

ちよつと待ってよ。だって確かにライフゲージは黒に染まって・・・いない！？

よく見れば徐々にゲージが黄色くなっていく。

「まさか、ずっと発生させてた炎を吸収して回復し続けてたの!？」

たぶんレヴィの言う通り。ムーンライトを受けてる間にも炎を吸収し続けて、ライフがゼロにならないようにしていたんだ。

さっきみたゲージ、たぶんよく見れば僅かに残っていたのかもしれない。

セシリスさんがコツコツと軽い足取りで歩きだす。

そして、それは一瞬。姿を見失ったと思ったらシグナムさんの背後に居た。

炎を纏った“レーヴァテイン”を縦一閃。炎の壁をシグナムさんと

の間に生み出して、大きな半球状の炎を纏った左拳で炎の壁を殴りつける。

「これにて貴女とは決着です！」

アウテンチカ・ヘキエイン・インフエルノ  
真炎焦火煉爆焰焼打

視界が大爆発によって真っ白になる。また視聴覚を潰された。ただ視界の方はすぐに回復。耳鳴りは全然治らないけど。

そして一番に視界に捉えたのは、場外にまで吹き飛んだシグナムさんの姿。

シヤマル先生とキャロとイクスに治癒魔法を掛けられている。

セクレト  
「真技・・・！」

今まで以上の巨大な炎の竜巻を纏わせた“レーヴァテイン”を地面に突き刺した。

セシリスさんから闘技場全体を覆い尽くそうとする炎の渦が拡がり始める。

地面に足を付けていたら間違はなく呑み込まれると思って中にミッド魔法陣を展開、足場として避難する。

レヴィも飛行魔法で空へと避難。闘技場全体の地面を覆い尽くした炎の渦。

それが宙に居るあたしやレヴィを呑み込もうと噴き上がってくる。さらに上へ上へと避難。高さはもう4mくらいまでになった。

オールドン・シャールヴィ  
「顕現せよ劫火・・・！」

炎の渦がセシリスさんの居るであろう中心へと逆戻りしていく。炎の過ぎ去った所々には小さな炎の塊が燻ぶってる。

セシリスさんの姿が視認出来た。“レーヴァテイン”を様々な軌跡で振るって、足元に在る炎の渦を振り上げつつ刀身に集束させている。

そして、

「インモルターウ・ブルガトリオ其は秩序を再誕するもの!!!」

“レーヴァテイン”の剣先を地面に擦りつつ思いっきり振り上げた。セシリスさんの足元から10数mくらいの火柱が立ち昇る。さらに炎の渦がもう一度広がり始める。

その速さはさつきと比べられないほどに速く、炎の渦に触れた地面に燻ぶっていた炎が巨大な火柱となってさらに天を衝く。

炎の渦が壁へと当たり、壁に沿って一気に噴き上がる。

(闘技場の空陸全てが攻撃範囲なわけね、結局は)

防御も無意味だと判っているから、もう何もしないままに足元から噴き上がってきた炎の渦に呑まれることにした。

これがゲームだけの魔術じゃなくて、実際に行われていた戦争に使われた魔術だなんて……。

心底この時代に生まれて良かったとしか言いようがない。

十十Sideティアナ フェイト十十

シグナム達が負けた。今は横にされて眠ってる。

ただ気を失ってるだけで、どこにも外傷はない。そういう仕様だそうだ。

カーネルさんの攻撃で負けたはやてとヴィータもそうだったし、ひ

とまず安堵。

「やり過ぎだセシリス！ 真技を使うまでもなく、もう決着はついていただろうが！」

ルシルがセシリスさんに詰め寄って怒鳴り散らす。

でもセシリスさんは「やるからには徹底的に、だよ。ルシル」と指で耳栓しながら告げる。

「さて。ではお題をミスしたペナルティーを発動します」

「話は終わってないぞっ！」

ルシルを無視してそう告げて、指を鳴らす。

ポンつと間抜けな音と一緒にシグナム達が煙に包まれた。

あれ？ これ、なんかデジャブ。“機動六課”時代でも似たような事が……。

「……キャロ？」

「あ、あれ？ エリオ君達が大きくなった!？」

一番最初にリタイアして意識のあるキャロが騒ぎだす。

私たち全員の目はキャロとシグナム達に集中。

「き、キャロさんが……二頭身になってしまいました……？」

アインハルトが呟く。キャロ達は小さくなって、しかも二頭身の人形みたいになっていた。



ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜（後書き）

ルーテシア

「今日のレヴィルのコーナー！って、レヴィは今回はお休み。  
ゲストとして、今回大活躍した炎帝セシリスさんと、前々回活躍し  
た地帝カーネルさんです」

セシリス

「こんにちは、アンスールの炎帝、ムスペル Heim 軍の爆撃<sup>バクゲキキ</sup>姫のセ  
シリスです」

カーネル

「そう言えば前々回の俺って、ほとんど喋れなかったよな。ま、い  
いや。アンスールの地帝カーネルだ」

ルーテシア

「セシリスさんって、相手によって口調が変わるようですけど・・・  
」

セシリス

「私は原初三大世界・煉生世界ムスペル Heim の王家の王女として、  
本当に親しい友人以外には素顔を隠さないといけないと思うのです。  
王女としての威厳、厳格な姿勢。窮屈ですけど、それが王族として  
の姿ですから」

ルーテシア

「そうなんですかあ。にしてはカーネルさんは陽気というか何とい  
うか、王族らしからぬ性格ですよね」

カーネル

「おい、ちょっと聞き捨てならないな、お嬢さん。  
王族だからと言って堅苦しい態度は肩が凝るだけだつて。  
それに、親しみを持てるような陽気な性格だと部下達と結構良い関  
係になるんだぜ」

セシリス

「だからって碎け過ぎだと思っただけどなあ。むう」

カーネル

「ほら、そういう感じの方が人気出るぜ、セシリス」

ルーテシア

「わたしもその方がいいと思います。近寄りがたかつた雰囲気が消  
えますし」

セシリス

「とはいえ、もうすでに手遅れよね。もう死んでるんだし」

カーネル

「だなあ」

ルーテシア

「え、えつと、えつと・・・あ、ルシリオンとカーネルさんって仲  
悪いの？」

カーネル

「ん？ いや、アンスールのメンバー13人のうち4人しか男居な  
いんだぜ？」

自然と仲良くなるし、しかもガキの頃からの友人・・・ああ、悪友

って感じが。

仲が悪そうに見えても本当に悪いわけじゃない」

セシリス

「そう言えばそうね。男女の比率なんて気にしていなかったけど」

カーネル

「それはつまり俺達を男として見ていなかったってことだよな。

それはそれでシヨック。ルシルはまあ女みたいだからどうでもいいけど」

セシリス

「別にそういうわけじゃ。戦時中なんだから男女の関係なんて夢のまた夢よ」

ルーテシア

「本当に大変だったんですね。えっと、もう時間ということので、今日はこれまで！ バイバーイ」



ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（前書き）

まずい、年内に終わらせる事が難しくなりそう。

積みゲーが増える一方。新作スイーツ開発に胃が・・・ストレスが胸やけが（涙）

嘘予告で言った2012・元旦。どうかその期日にまでは終わらせたい。

もし終わらなかった場合、強制的に完結編を連載してしまおう、0、1、2話はもう書き上がってますしね。

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜

++++Side:ルシル++++

1mくらいの二頭身となったシグナムとアギト、キャロとティアナ、そしてレヴィ。

シグナムとアギトははやたとシャマルやリインにいいようにされ困惑、半分不機嫌半分嬉しそうだ。

レヴィはルーテシアに、キャロはフェイトに「可愛い？」と揉みくちゃに。

ティアナは、スバルに「ティア、お人形みたいでカワイイ！」と全力の抱きつきと頭撫でまわしを受け、「ちょっとやめなさいよ、スバル！」と振り払おうとするが、体格差と腕力で負けているせいでパタパタ四肢を振るうだけで終わっている。

「では、お次はどなたが賽を振りますか？と、その前に。一つ提案があるので、聞いていただけませんか？」

私の隣に立つセシリスが軽く挙手しただけで、離れた場所にいるコロナとリオがビクツと身構える。それにセシリスがショックを受けたようで、私をチラチラ見てくる。カーネルと同様、自業自得だ。少しは手加減くらいしておけばよかったものを。

という事でそっぽを向いてやる。横目でチラリと見ると、「フオロー無しなんて酷い」と頂垂れた。

「それで、セシリスさん。提案というのは？」

「あ、そうでした。一人一人賽を振っていてもあまりにも時間がかりますから、チーム分けをしようと思います」

先を促したなのはに、セシリスは復活してそう答える。

ヴィヴィオも首を傾げつつ「チーム分け、ですか？でもどうしてですか？」とそう続く。

セシリス曰く、「天の意思です」だそうだ。よく意味は解らんが、時間がかかるのもまた事実。

「私はそれで良いと思うが。みんなの意見はどうだ？」

「サクツと終わらせて現実に帰らねえとな。あたしはセシリスの案に賛成だ」

「ルシリオンが決めたことならば従おう。好きなようにしてくれ、私を」

八神家代表ヴィータとリエイス（はやては聞いてないからな）の了承は得た。

リエイスは少々おかしな発言をしていたが、その辺りはスルーさせてもらおう。

「ヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオ、イクス。君達はどうだ？」

キャロとレヴィの元でたむろしていたヴィヴィオ達に声をかける。私に声をかけられるなんて思いもなかったのかキョトンとして、一泊遅れて自身を指差す。

そうそう、と頷き、彼女達のところにまで歩いていく。

「巻き込んだ形となってしまったが、それでも今は一緒に戦う仲間だ。」

仲間である君達の意見を聞く。おかしいことはないと思っただが？

なのは達は私の考えについてはどうだ？ 私は間違っているだろうか？」

「うん。ルシル君と同じ意見だよ。ヴィヴィオ、それにアインハルトちゃん達も、何か意見があつたらなんでも言つてね」

私はセレスやリエイスと一緒にインターミドル予選から観戦していたよ。当然記憶操作されていた頃だ。

サフィーロとしての仮人格が観戦していたため、全く記憶にないんだが。

「んー、じゃあ。わたしもセシリスさんの提案を呑んでもいいと思う。みんなはどうかな？」

ヴィヴィオがリーダーとなり、アインハルト達へ決を採る。

アインハルトの「私もそれで構いません」という返答を筆頭に、コロナもリオもイクスも賛成の意を告げていく。

二頭身キャラを全力で可愛がっていたフェイトも、「私も賛成。エリオとキャラはどう？」と決を採り、「僕もそれで良いです」「早くクリアした方が良いもんね」とエリオとキャラも賛成。

「セシリス。そういうことだ。チーム分けとやら、受け入れる」

「感謝を、みなさん。ありがと、ルシル。では早速チーム分けを」

私たち全員の胸元に数字が浮かび上がる。私は、4、だ。

「では、三つのチームに分けます」と、サイズが少しおかしい回転式抽選機ラポン（商店街のくじ引きでよく見かけるアレ）がドンと出てきた。

「ではお一人ずつ回してください。赤の玉が出た方は赤チーム、青の玉が出た方は青チーム、黄の玉が出た方は黄チームとなります。ゲームはこれより個人個人ではなくチームで進行することになり、手間が色々和省ける、ということだ」

セシリスの説明も終わり、抽選機へとヴィヴィオら子供達がどこか楽しそうに喋りながら真つ先に並び始めた。

それに微笑む私たち大人。私達も並び、抽選機をガラガラと回す。ちなみに取っ手に届かない二頭身sは、シグナムははやて、アギトはシャマル、キャロはフェイト、ティアナはスバル、レヴィはルーテシアが脇に手を通して抱きかかえる。そして、3チームのメンバーが決定。

「随分と何らかの意図が働いているようなメンバーだな」

「はあ、私はルシルと一緒にじゃないんだね・・・orz」

フェイトが引くほど落ち込んでいる。私とは別のチームになったからだが。

でも、それはとても嬉しいことだ。頬が緩むのを止める事が出来ない。

フェイトの頭にポンと手を置き、「ありがとう、フェイト」と撫でる。

「えへへ？」と、それだけで機嫌が良くなるフェイト。撫でられるのってそんなに良いものなのか？

自分の手で頭を撫でてみるが……よく判らないな。

「何してるのルシル？ 撫でてほしい？ だったら撫でてあげる？」

セシリスは「んー」と頑張って背伸びして、不器用ながらも私の頭を撫でる。

うーん、まあ気持ち良いな。それは確かだ。するとフェイトが「わ、私も撫でたげる」と、これまた頑張って背伸びして、私の頭を撫でる。

「ど、どうかな？ 気持ちいい？」

「あ、ああ。フェイトは撫でるのが上手いな」

セシリスとは違う気持ちよさ。セシリスの撫で方も気持ち良かった。だがフェイトのはもっと良かった。っと、みんなからの視線が気になり始め、フェイトは「あ」と少し頬を赤らめて手を引っ込めた。するとリエイスが大股早歩きで近づいてきて、セシリスやフェイトのように「むー」と背伸びして頭を撫でてきた。

「うむ。満足だ。話を進めてくれ」

リエイスはそう言うてはやて達八神家へと戻っていった。微妙な空気が流れているな。

「あー、コホン。ちょうどいい感じにリーダーが判りやすく分かれているな。

じゃあ、赤チームリーダー・はやて、青チームリーダー・なのは、黄チームリーダー・フェイトの元へそれぞれ集合だ」

手をパンパン叩き、チームごとで集合するよう仕切る。

赤チームは、はやて・リイン・イクス・シグナム・アギト・ルーテシア・レヴィ。

黄チームは、フェイト・エリオ・キャロ・シャマル・スバル・ティアナ・ザフィーラ。

青チームは、なのは・ヴィヴィオ・アインハルト・コロナ・リオ・ヴィータ・リエイス、そして私だ。

「それではゲーム再開と行きましょう。どのチームが一番手になりますか？」

フェイトとなのはとはやては何を言うまでもなくジャンケン。

その結果は、「青チーム、ということだ」となのはがチョコキのまま拳手。

なのはが青チームリーダーとして、セシリスからサイコロを受け取る。

「いきます」と決意に満ちた顔でサイコロを放り、出た数字は3だ。青チームの私たちは、赤チームと黄チームのメンバー達にそれぞれ「行ってきます」と告げ、なのはとヴィータを先頭に、ヴィヴィオ達、そして最後尾が私とリエイスと続く。

3マス目に辿り着く。と、早速ゼフィ姉様のハイテンションなアナウンスが流れる。

『大変大変！ 危険生物が逃げちゃったよっ！ みんなで協力して、危険生物を捕まえよう！ オオーッ！』

ちよつとした戦闘があるかもしれない事を示す内容だった。

転送が始まる中、メンバーを見回す。アンストールメンバーでない以上、このメンバーなら余程の事がない限り負けるはずもない。

なら、このお題は必ずクリアしてくれる。二頭身の人形みたいな姿

にされてなるものか。

++++ Sidellシル アインハルト++++

転送された先、そこは青空の広がる平原でした。少し離れたところにはとても大きな城がそびえ立っているのが見えます。

それにしても、さわやかな風が心地よくて、空から降り注ぐ温かな陽光も手伝って眠くなりそう。

「ここは・・・グラスヘイム城の北庭園か・・・!」

リエイスさんがそう言って、ヴィヴィオさんのお父様へと向き直る。

「ああ。間違いないな、私の城の庭だ」

「ここが、ヴィヴィオさんのお父様の城!？」

そう言えば、地帝カーネルさんはヴィヴィオさんのお父様を神器王などと呼ばれていましたけど・・・。

「えっ!？　ここってルシリオンさんのお城なんですかっ!？」

「もしかしてすごいいお金持ちだったりします!？」

コロナさんとリオさんに詰め寄られたヴィヴィオさんのお父様は、

「元、だけどね」と寂しそうな顔で苦笑い。

ここで先程までの疑問を思い出す。知らない魔法陣に言語。

普通では考えられない現象を起こす魔法の数々・・・。



ヴィヴィオさんのお父様、カーネルさん、そしてセシリスさん。どれだけ強い魔導師であっても一人で起こすことがまず不可能な魔法を、何の苦もなく連発するあの発動の速さ、そして異常な威力。

「ルシル君、危険生物っていう話だけど、何か心当たりは？」

「心当たりが多すぎて困るな」

「どんだけ危険なサファリパークなんだよ、おまえんち」

リオさんの二つの変換資質にも驚きましたが、ヴィヴィオさんのお父様の変換資質はそんな比ではなかった。

電気、炎熱、氷結。それだけでなく影のようなモノまで。それを同時に扱ってました。

多くの謎がある方々です。私は意を決して、先程の聞きそびれたお話の続きを聞きたいがために、

「ヴィヴィオさんのお父様。先程のお話の続きをしてもらっても構いませんか？」

「あ、私も知りたいです。教えてもらってもいいですか？」

「あたしもあたしも！ ヴィヴィオは知ってても当然だけど、イクスも知ってるみたいだし」

コロナさんとリオさんもヴィヴィオさんのお父様に歩み寄る。

そこにヴィヴィオさんが「えっと、とりあえずはお題をクリアした方が・・・」と言い、なのはお母様とヴィータさんもそれに同意しました。

「そうだな。アインハルト、コロナ、リオ。私の事に関しての話は、お題を行いながらでいいか？」

「あ、はい。ヴィヴィオさんのお父様がそれでよろしければ」

コクリと頷く。話はお聞きたいですけど、お題のクリアを邪魔するのは嫌ですし。

ですからそう答えたのですが、ヴィヴィオさんのお父様は左手を顎に当て考え込み始めます。

何か失礼な事を言ってしまったのでしょうか？ 心配になり、ヴィヴィオさんに「何か失礼なことを・・・？」と小声で訊ねる。

ヴィヴィオさんは「大丈夫ですよ、アインハルトさん」と笑みを浮かべるだけでした。

「アインハルト。私に対するその、ヴィヴィオさんのお父様、という呼称。

以前の通信の際でもそうだったが、毎回は面倒じゃないか？

気軽にルシルと呼んでもらっても構わないぞ？ コロナとリオもだ」

力なく「はあ」と応えてしまう。あの真剣な風に考え込んでいたものですから拍子抜けを。

コロナさんとリオさんは「判りました、ルシルさん！」と、素直に受け入れて早速呼んでいる。

後は私だけ。えっと、ルシルお父様？ それはさすがに照れくさい気が。

妥協案として「ルシリオンお父様・・・」と呼んでみる。これもこれで照れてしまう。

ルシリオンお父様は「ああ。改めてよろしくな」と、私とコロナさんとリオさんに笑みを返してきた。

それから私達は周辺の探索を行いつつ、ルシリオンお父様から色々

と話を聞いた。

「再誕神話、というものは知っているかい？」

事情を知らない私とコロナさんとリオさんは首を横に振る。

「再誕神話は、今から数千年以上前、次元世界誕生のきっかけ、千年以上続いた世界魔道大戦を神話化したものなんですよ」と、ヴィオさんが草を掻きわけながら教えてくれた。  
強い引っかけりを憶える。次元世界誕生。神話化した。  
それはつまり実際に起こったという事、なんででしょうか？

「あはは、信じられない、といった感じだな。まあ当然の反応だが、ヴィオオの説明通り、再誕神話には、次元世界という仕組みを創り出したファクターが記されているんだ。

次元世界。元々は全ての次元は一つで、単一世界と称されていた。だが大戦の終戦と同時に起こったラグナロクによって次元は分断され、現在の次元世界という形になってしまった」

事情を知るなのはお母様とヴィータさん、そしてリエイスさんも真剣な面持ちで聴いている。

そこには私達に嘘を吐こうとか騙そうという雰囲気は一切感じられない。

再誕神話。それが本当の事だと考えて話を聞かないといけない。

「でも、ルシルさんとその再誕神話って関係あるんですか？

数千年前の話なら、今のルシルさんとあまり関連が見えないんですけど・・・」

と、私と一緒に木々の枝の上を見上げるコロナさん。

私は、自身の事とヴィオオさんの事を思う。ヴィオオさんは、

かつての聖王オリヴィエをオリジナルとしている複製体<sup>クローン</sup>。私も、霸王家直系の子孫、そして霸王イングヴァルトの記憶と霸王流を引き継いでいる。

ルシリオンお父様も、もしかするとそういう類いの御方では……？

「ここからが、さらに信じられない話だと思うが、聞いてくれ。

再誕戦争は千年続いた大戦を本題としたものだ。で、大戦には大小600の世界が参加していた。

その大戦の中心は、アースガルド、ムスペルヘイム、ニヴルヘイム、アールヴヘイム、スヴァルトアールヴヘイム、ニダヴェリール、6世界のアースガルド同盟軍。

ヨツンヘイム、ヴァナヘイム、ウトガルド、スリュムヘイム、そしてミッドガルドのヨツンヘイム連合軍。この11の世界だ」

「ニダヴェリールとムスペルヘイムって、カーネルさんとセシリスさんの……」

それですけど、ミッドガルド……。ただ似ているだけ？ ミッドチルダと。

リオさんに、ルシリオンお父様は「実は私の名前、本当はルシリオン・セインテスト・アースガルドなんだ」と言いました。

それが示すのは、やはりルシリオンお父様は、再誕神話時代の世界の子孫。

ルシリオンお父様が続きを話すべく口を開こうとしたとき、

「ウウオオオオオオオオオオオオツッ！！」

何かしらの咆哮が轟いた。私は身構え、周囲を警戒する。

何かに遮られているのか辺りは暗くなる。空に何かいる。

私達は一斉に空を見上げる。とそこにソレは居た。巨大な黒い影が

落ちてきて地面に降り立つ。

それは巨大な漆黒の狼。あまりの大きさに、私は息を呑む。

「フェ、フェンリル・・・！」

ルシリオンお父様が絶句。フェンリル。昨日、私達が演じた劇の中で登場した名前。

コロナさんも気付いて、「フェンリルって、演劇の・・・」と劇に参加した私達を見る。

なのはお母様が「危険生物って、まさかフェンリルさんの事？」と、ルシリオンお父様へ駆け寄りました。

ルシリオンお父様もなのはお母様もフェンリルの事は御存じのようです。

「なるほど。確かにフェンリルは危険生物だな」

ルシリオンお父様は小さく呟いて、呆れた風に溜息を吐きました。余程、別の意味で危険な狼のようです。

+++++Sideアインハルト ヴィヴィオ+++++

ルシルパパとなのはママにフェンリルと呼ばれた大きな狼。

“スヴィーウルの詩”の話に出てきていたキャラクターの1つだ。

“スヴィーウルの詩”は、ルシルパパが子供の頃のものだったルシルパパから聞いている。

それにしても、フェンリルって実際に見ると大きい、本当に大きい。フェンリルは凄く綺麗な女の人の声で「我が名はフェンリル。此度、汝らのお題とやらを手伝うことになった」って言って、全身が光に

包まれてく。  
そして、

「マア〜〜スウ〜〜タア〜〜?」

まだ消えない光の中から、若い女の人飛びだしてきた。  
足首にまで伸びる艶やかな黒い髪、蒼い瞳、真っ白な肌、真黒なフリルとレースがたくさんあるドレス姿。  
頭の上にはピンツと立った犬耳、お尻にもフサフサした尻尾があつて、勢いよく振られてる。

その女の人勢いよくルシルパパの胸に飛び込んでいった。

「マスター? マスター? マスター? マスターの匂いだあ〜〜  
? はわあ〜〜?」

女の人のもものすごい勢いで頬擦りしてる。フェイトママが見たらどうなるんだろ?

ルシルパパが「とりあえず、さっさと離れるフェンリル」って女の人フェンリルさんの顔を掴んで押し返す。

さっきまでの堅苦しい口調が嘘みたいに子供っぽい口調になって、  
「ふはあ、満足うう」ってうつとりしてる。

「さて。改めて名乗るね。私はフェンリル。マスター・ルシリオンの使い魔ね

気軽にリルちゃん? って呼んでね えー、お題は、私を捕まえるって事でいんだよね。

ルールの説明をするから、かる〜く聞いてちょうだい」

ルール説明を軽く聞いてって。うん、やっぱりちゃんと聞いた方がいいんだよね?

ルシルパパを見ると、「すまないが少し付き合っただけで済ませよう」と頭を下げた。

ルシルパパ、昔、リルちゃんに苦勞させられたんだろうね。何か想像できるよ。

リルちゃんは尻尾フリフリしながら説明を続ける。

「今から100個の箱を用意します。私はその内の一個に入って隠れるの。」

で、マスターたちは頑張っただけで私が隠れてる箱を見つけて、私を捕まえてください。

あ、見つけても油断しないこと。大人しく捕まるような私じゃないので、私の居た箱からみんなが開けちゃったハズレ箱へ移動しちゃいます。

そしてシャツフル、振り出しに戻っちゃってわけなの。

だから可能な限りハズレを開けないようにしないと、延々かくれんぼ&鬼ごっこが続くよ。

それが嫌なら、箱から箱へと移動中の私を妨害・・・ま、攻撃ありって事で」

それでルール説明が終わったようで、リルちゃんが「何か質問があったら受け付けるよ?」ってわたし達を見回す。

ルシルパパが「フェンリル」と拳手すると、リルちゃんは「下着の色? 今日は何?」とか言い出して、すぐにルシルパパから「そのネタは古い」って拳骨を喰らった。

「お前への攻撃はありらしいが、お前からの反撃はどうなんだ?

正直な話、お前の実力はアンスール並に高い。反撃などされては敵わん」

「あー、えっと、出来る限り攻撃はしないけど、防御はさせてもら

うから。

だって一切の防御もしないでマスターの攻撃を受けてたら、私……

「

リルちゃんはなんか頬を赤らめて、恥じらいながら自分の体を抱いた。

あ、何か嫌な予感。ルシルパパはすでにリルちゃんを叩く体勢に入ってる。

リルちゃんはそれも構わずに「服が破けて乙女の柔肌を晒しちゃう、キヤ？」って両手を頬に当てて、イヤンイヤンって首を横に振り続ける。

ルシルパパは「さ、ゲームを始めようか、みんな」って無視をしちやった。

「……マスターが冷たいよお。でもそろそろ始めないとダメだよね。じゃあ……ゲームスタンバイ！」

リルちゃんが右腕を頭上に掲げて高らかに叫んだ。

その直後、目も開けていられないほどの突風が起こって、ルシルパパとリエイスさん以外のわたし達は「きゃあああああっ！」って悲鳴を上げて、めちゃくちゃに乱れる髪を押さえてしまう。

そこでふと気付く。ルシルパパは防護服のスラックス。リエイスさんは騎士甲冑のタイトスカート。

なのはママとヴィータさんは防護服のスカート。わたしとインハルトさんとコロナとリオは私服のスカート。

そしてこの突風。私が押さえてるのは髪。ハツとして、急いでスカートの裾を押さえる。

突風が止んで、ようやく目を開ける事が出来た。

「ねえ、ルシル君。見た？ 見たよね？ うん、信じてるよ」



なのはママが、わたし達を見ないように上を見上げてるルシルパパにニコニコ笑いかけてるんだけど、こ、怖い……。

グイータさんも「あーあ、やっちゃまったな」って“アイゼン”を起動させようとしてる。

アインハルトさん達もスカートを押さえたままで、ルシルパパにスカートの中が見られた事が判って顔を赤くしてる。んだけど、きつとわたしも赤くなってるかも。ちよつと顔が熱いし。

「ま、待て。不可抗力だ。み、見たのも最初だけで、すぐに上に視線を移した」

「じゃあ見たんだよね」「見ちまったんだよな」

「私もひらひらスカートにすればよかったな」

なんかリエイスさんだけおかしなことばかり言ってるような気が。とにかく今は、全然笑ってない笑顔でルシルパパに詰め寄ってくなのはママ達を止めないと。

ルシルパパだつてわざとじゃないんだし。わたしと同じ事を思ってくれたアインハルトさんも、なのはママたちを説得しようとして動いてくれた。

だけど止めに入る前に、

「サクツとゲームを進めたいから、もう始めちゃうよ」

仔狼モードにチェ〜ンジ

ルルちゃんがまた光に包まれて、次に姿を現したら仔犬みたいになつてた。

さすがになのはママ達もリルちゃんが動きだした事で、ルシルパパを許さざるを得ない状況に。  
全員がリルちゃんを見る。そしてわたし達の周囲、広範囲にポツンポツンとある宝箱のような箱にも。  
さっきの突風でここまで飛んできたみたい。リルちゃんが「わんっつてー鳴きすると、全ての箱の蓋が一斉に開いた。」

「じゃあ、ゲーム……」

R A D  
下リ

リルちゃんの目前にRのような文字が浮かび上がった。  
そして四肢に力を込めて、「スタート!!」と、フェイトママのブリッツアクションみたいな速さでどこかの箱に入りこんだ。  
そしてまた突風が。今度はすぐにスカートを押さえ収まるまで耐える。

うつすらと目を開けると、ルシルパパが必死に両手で顔を覆いながら、100個の宝箱と一緒に風に飛ばされてた。  
目を隠すのに集中し過ぎて、踏ん張りきれなかったみたい。

(ルシルパパ……ごめんね?)

風が止んで、ルシルパパは3つの箱に押し潰されるように落下。  
激突直前に何とか抜け出して、両足で着地。何事もなかったようにわたし達に背中を向けた。

十十 Side ヴィヴィオ なのは十十

“闇の書事件”でお世話になったフェンリルさんを捕まえる事になった。

とりあえずルシル君にデコピンのお仕置きをヴィータちゃんと一緒に済ませて、作戦会議。

「セオリーで言えば、分散して捜しだすのが一番だが・・・」

「あまり箱を開け過ぎると、その分リルちゃんの逃げ場を作っちゃうんですよね？」

「リエイスとコロナの言う通りだな。つっても開けなきゃ捜せねえし。」

この数じゃ待ち構えんのもムズいし。どうするよ、セインテスト。フェンリルの思考はお前がよく知ってんだろ。お前の使い魔だし」

「アイツの思考を完全に読むなんて神でも無理だ。私がどれだけ苦労したか」

ルシル君が袖で目を何度も拭う仕草をする。

記憶の中じゃそういうのは無かったから判らないけど、かなり苦労したっばい。

「とにかく、だ。まずは様子見。適当にやってみよう。感覚を掴まないと対策も立てられない」

「私もルシリオンお父様に賛成です。リルさんがどういった風に動くのを見ておきたいです」

「それじゃあそれで行こうか。ヴィヴィオ、コロナちゃん、リオちゃん、アインハルトちゃん。」

みんな、防護服着用。どんなことにもすぐに対応できるように、ね

「……はいつ！」「……」

「クリス！」

「テリオ！」

「ブランゼル！」

「ソルフエージュ！」

「……セーットアップ！」「……」

ヴィヴィオ達が防護服を着用し終え、一番近くにある箱に歩み寄る。で、誰が開けるかなんだけど。全員が全員の顔を見回す。そしてあ  
る一人に集中。

「ま、男の私が行くべきだよな。判っていたさ。言いだすタイミングを逃したただけだ」

そう、ルシル君だ。この青チームで唯一の男性。

こういう場合でのレディファーストなんて言わせないよ？

ルシル君が箱の蓋に手をかける。そこにリエイスさんが「私も付き合おう」ってルシル君の横に並んだ。

頷き合って、ガツと箱を開けた。その瞬間、箱の中からボクシンググローブ2つが勢いよく飛び出してきた。

ルシル君とリエイスさんが首を逸らして避け……あ。

「……いっつ　へぶっ！？」

ルシル君とリエイスさんが同時に真ん中へと首を逸らした事で頭がゴチン と衝突、すぐさまともに顔面にパンチを食らっちゃった。どうして逆に避けなかったのか。パンチはそれをさせないような軌道で飛んできたから。

どれだけの威力だったのか？ 二人は空高く舞い上がって、ドベシャツて落ちた。

「うぐ、パンチ事態は痛くはないが、ルシリオンの頭突きは効いた・・・（涙目）」

「ハズレだから何も無い、と思っただけは良かったが、やはりこういう類いのトラップがあったか・・・」

ぶつけた頭を押さえて、呻きながら立ち上がるルシル君とリエイスさん。

思いつきりぶつけてたし、それは痛いよねえ。

ヴィヴィオ達とヴィータちゃんに心配されながら、ルシル君とリエイスさんが戻ってきた。

「つ、次は・・・なのは、ヴィータ。大人の君達が開けるべきだよな」

「そつだな。子供にさせるようなことではないな」

ちよ、ちよつとルシル君、リエイスさん、目が据わってるよ？

ジリジリとにじり寄ってきて、ルシル君が私の肩を、リエイスさんがヴィータちゃんの肩をポンと叩いた。

でも一理あるのかな？ チラツとヴィータちゃんを見る。

すると「じゃあねえな」って肩を竦めながら歩きだして、閉じられ

た箱へ向かう。

私達も続いて、私はヴィータちゃんの隣へ。ヴィヴィオ達は、ルシル君とリエイスさんが守るように一番後ろ。

「開けるぞ、なのは。覚悟はいいな？」

「いつでもいいよ」と答えて、一緒に蓋に手をかける。

「せーのっ」と警戒しながらも勢いよく開く。するとモクモクと煙が出てきた。

バックステップで後退。その煙の中から、大きく真つ白なユキウサギが二羽出てきた。

「「「かわいい？」「」「可愛いですね」

ヴィヴィオとコロナちゃんとリオちゃんが黄色い声を上げる。

アインハルトちゃんもほわぁっとなってるね。うん、確かに可愛いけど。

ドスンドスンと二足歩行で歩いてくるんですけど？ これは逃げちゃダメなんだよね？

反撃しそうになるのを耐えて、ただじっと待つ。2m近いユキウサギが前脚をバツと広げて、

「「わふっ？」「」

いきなりのハグ。わっ、フカフカだあ？

背中に回された前脚がポンポンと優しく叩いてくる。

もしかして私達もユキウサギの背中に手を回さないでダメって事？これはハズレじゃなくて別の意味でのアタリかな。私も手を背中に回して、フカフカの背中をポンポンと叩く。

このフカフカ加減がなんとも。夢心地でいると、ちよっと息苦しく

なってきた。

ハグの力加減が強くなってきた？ 離れようと動くけど無理。そして、

ベアーハッグ

「あがつ！？」 「ぐへえっ！？」

ヴィータちゃんと二人して呻き声を漏らしてしまう。

ユキウサギが一気に力を強めてきた。思いっきり締めつけられてる。これ、子供の頃、シャルちゃんがアイアンクローと同じようにやってきた……

「べ、ベアーハッグ……！ 痛たたたたたたたっ！」

今の私はかなり海老反ってる。背骨や肋骨がミシミシ軋みを上げて……る。

横ではヴィータちゃんが「ギブギブギブギブっ！」ってユキウサギを思いつきり殴ってる。

ま、まずい。窒息しそう。胸がつぶされて息が出来ない、けほっ。私もユキウサギの背中を全力で殴り続ける。そうしてユキウサギが煙となって消滅、やっと解放された。

「はああああ、死ぬかと思った」

「二個目でもう挫けそうだ」

「なのはママ、大丈夫？」

「ヴィータはなのはより胸が無いからさほど苦しくはなかっただろ」

「うつせえよっ、リエイス！　なのはもテスタロツサもデ力くなりやがってよっ！

大きけりやいってもんじゃねえんだよっ。それに無くても十分苦しかったっつうの！」

「ちよっ、ヴィータちゃん！　やめっ、あん？」

「ヴィータ。私の胸はお前に揉まれるためにあるのではないぞ？」

「くつつそお、久しぶりに触ったけどめっちゃ柔らかえっ！　なんだよコレ！」

何を思ったのかヴィータちゃんが私とリエイスさんの胸を揉んでいた。

男のルシル君が居るのに酷過ぎる！　問題のルシル君は、

「さて、次は誰が行こうか？　あそこのお姉さん達はちよっと忙しいから、先に行って箱を見てみよう」

ヴィヴィオ達を連れて別の箱のところへ移動中。

思いつきりスルーされてる！？　助かるような、でももう少しリアクションがあってもいいような。

何とかヴィータちゃんの行為をやめさせて、ルシル君達を追いかける。

「待たせたな。それで、今度はそれを開けるのか？」

ルシル君達はすでに狙いを定めていて、一つの箱の前に並んでいた。



「うん。みんなで決めたから。あ、開けるのもわたし達が行います」

「私達は仲間なので、子供だからと言ってやらないわけにはいきません」

「うん。なのはさん達には任せるわけにはいかないもんね」

「そうゆうことです。なのはさん達は見ててください」

そこまで決意が固いなら、見守るのが大人、だよな？

ルシル君達を試してみる。ヴィータちゃんは「ま、見せてもらおうか」って見物モード。

リエイスさんも「フォローが必要だと判断すれば手伝えいいだろう」と同じく見物モードになっちゃってる。

「なのは。彼女達のことを尊重しよう。なに。それほど危ないトラブルはないだろ」

「うん……。じゃあ任せるね」

私も見物モード。万が一のためにすぐに動けるように力を抜かない。ヴィヴィオ達が箱の蓋に手をかける。私の隣にいるルシル君がいつでもフォローに入れるように身構えるのが判った。

「……開けます」「」

ガチャリと音を立てて開く蓋。そして勢いよく開け放つ。

箱から何か飛び出してきた。ヴィヴィオ達はすぐさま飛び出てきた何かを迎撃。

ポチャツと地面に落ちる何か。ものすごい見覚えのあるソレ。子供の頃、アリサちゃんの家でやったゲームに出てきた、それは有名な植物。

「パッくんフ　ワー・・・」

大きな丸い赤い頭に白い斑点模様。大きく開く口にはギザギザの歯が並んでるアレ。  
ガジガジしてるパ　クンフラワーを初めて見たヴィヴィオが「気持ち悪い」って引いてる。

「なあ。こういうのって避けていいもんなのか？」

ヴィータちゃんがパッくん　ラワーを興味深そうに眺めながら漏らす。

どうなんだろう？　さっきの私とヴィータちゃんは何もせずに耐えたけど。

ヴィヴィオ達に迎撃された　ックンフラワーがしおしおと枯れていくのを見ていると、

「っ！」「みぎゃっ!?!」「」

ヴィヴィオとアインハルトちゃんが立っていた場所から勢いよく跳び退いた。

そしてコロナちゃんとリオちゃんの頭には、コントの様な金タライが落下。

ゴワン、と音を立ててコロナちゃんとリオちゃんの頭に落ちたタライが地面に落ちる。

「痛つつたあ~~~~い！（涙）」

「やっぱりちゃんと受けなきゃいけねえみてえだな」

「みたいだね。大丈夫二人とも？」

「はいい……（涙）」

頭を押さえてる二人の頭を撫でる。

パクンフラワーを迎撃して、タライを回避したヴィヴィオとアインハルトちゃんの方を見る。

きつと何かしらの追撃があると思っていたんだけど、何も起りそうにない。

ルシル君も周囲を警戒しているけど、何も無いのか首を傾げてる。

「わたしとアインハルトさんは二重で避けたからもう打ち止めなのかな……？」

「油断はできませんね。気を抜かないようにしましょう」

「二人だけ何も無いなんてズルい」

リオちゃんが恨めしく言う。いやあ、避けたら避けたあとが怖いよ？

もしまだ終わってなかったら、もっと痛いのが待ってるかも。

「とりあえず次の箱へ行こう。このまま居て、別のトラップがヴィオとアインハルトに襲いかかるのを待つのも馬鹿らしい」

「うん、そうだね。それじゃ気を取り直して次へ行こう」

警戒しながら、いざ次の箱へ、という時にそれは起こった。  
ガブツ、と何かが噛まれた音。ヴィヴィオとアインハルトちゃんが  
ピシッと硬直してる。

「~~~~~つつつ!!!?」

二人が声にならない悲鳴を上げる。よく見ると、二人のお尻に黒い  
鉄球のようなモノがある。

さらによく見る。こ、これはパツ　ンフラワーと同じゲームに出て  
くる・・・

「ワン　ン!」

ヴィータちゃんと重なる。顔が付いてるよ、やっぱり。

地面に鎖で繋がれてるワ　ワンが、なんとヴィヴィオとアインハル  
トちゃんのお尻に齧りついてた。

これは痛いっ。しかもワンワ　の齧りつきはまだ終わってなくて、  
ガジガジとお尻を噛んでる。

さすがにこれはまずい。私は「引き剥がすの手伝って!」とお願い  
する。

ヴィータちゃんは“アイゼン”でポツコボコに殴りつけ、ルシル君  
とリエイスさんは魔力で槍を削り出して、　ンワンの口の中に突っ  
込んでこの原理を応用して無理やり開けた。

それで何とか二人を助け出すことに成功。でも歯型が付いてる二人  
のお尻がなんて言うか痛々しい・・・(涙)

「傷つきし者に、<sup>ラファエル</sup> 汝の癒しを」

とりあえずこの中で治癒が出来るルシル君が、遠隔でのラファエル  
発動(当たり前)。

治癒も終わって、さっきの事は全て忘れよって流れになって次の箱へ。

なかなか見つけれなくて手分けして探索。しばらくして、

『なのは、ヴィータ、アインハルト、コロナ。6つ見つけた、来てくれ』

ルシル君からの念話。早速指定された場所に行くと、ルシル君とヴィオ、リオちゃんとリエイスさんが待っていた。

周囲にはあと5つの箱があるんだけど、ルシル君がヴィオ達に訊いたみたい。

この中のどれにフェンリルが入っていると思う？って。で、全員が迷うことなく指差したのが・・・

「てか思いっきりコレがアタリって書いてあんじゃない」

箱には確かに、コレがアタリ、って書いてある。

全力で罨だと本能が告げてくる。これを開けるのにはちょっと勇気が要るかも。

「ルシルさんが、リルちゃんはとってもバカでアホでボケでマヌケでノー天気な雌犬だけど、でも嘘は吐かない雌犬って教えてくれたんです」

リオちゃんがキラキラ笑顔で凄い事言っちゃってるよ！

ルシル君をギラツと一睨み。「子供に何言わせてんの！」って怒鳴る。

め、雌犬って、そんな、子供が知っていいような・・・。

「なあ、なのは。君は一体何を連想したんだ？ オス犬、メス犬。」

「これの何がおかしい？」

「察してやれよ、セインテスト。なのはのやつ、きつと年齢制限が掛かるような」

「ぎゃああああああああああつー!!」

悲鳴を上げてヴィータちゃんのセリフをかき消す。

わ、わわわ私、今、すごい事を一人で勘違いして考えて・・・！  
ヴィヴィオ達が私の様子を見てちよつと引いちゃってる。ああ、なんてことorz  
ルシル君のバカ！ 普通に狼って言えば良いのに、わざわざ雌犬つて。

ズーンと落ち込む。ヴィヴィオが「なのはママ？」って声をかけてきてくれた。

でもヴィータちゃんが「今はそつとしておこう、な？」ってヴィヴィオを止めた。

うぐっ、その優しさが今はちよつと辛いよ。

++++Sideなのは ヴィータ++++

「で？ 今度は誰がその箱を開けるんだ？」

なのは達とアイコンタクト。うん、と頷きあつて、「最初はグー！」とジャンケン。

とそこに、アインハルトが「待つてください」と入ってきた。

「もしルシリオンお父様の言う通りルシルさんが嘔吐きでなかったら、

間違いなくこの中にリルさんが居るって事ですよね。  
なら、捕獲する人が多い方がいいんじゃないでしょうか」

「『『『あ』』』」

アインハルトに言われて気付く。そりゃそうだ。

あたしら、気付かない内に仲間を陥れようとか考えてた。  
やばい、これはかなり反省するべき思考だ。

「アインハルトの言う通りだな。ヴィータ、四方400mで封鎖領域を頼めるか？」

セインテストが役割を決め出す。ま、文句はねえが。

あたしは「任せろ」と、“アイゼン”を待機からハンマーフォームにする。

セインテストは続けて「なのははレストリクトロックを。バインド関係を一手に引き受けてもらう」と告げ、なのはも「了解」と返す。

「ルシリオン。私はどうすればいい？」

「リエイスはフェンリルの防壁破壊に務めてもらう。」

シュヴァルツェ・ヴィルクング。その効果を障壁破壊としてほしい」

リエイスは精神を集中するためか両拳を打ち合わせて気合を入れている。

セインテストは「私とヴィヴィオ達は、フェンリルへの攻撃組だ」と続ける。

それを聞いたコロナとリオが目に見えてビクツとした。

「君達を巻き込んでしまうような術式は使わないから安心してくれ」

セインテストに優しく言われたコロナとリオは「はい」と頷く。確かにカーネルとの戦闘を見りゃ、誰だって巻き込まれてしまうかもって思うわな。役割分担も終わり、いざ、箱を開こうとなる。

「アイゼン。封鎖結界を展開、四方400mだ」

J a w o h l . G e f ? n g n i s d e r M a g i e

まずセインテストの指示通りに封鎖結界を張る。

これで結界外へは出られねえ。と思う。フェンリルの出方によっちゃ抜かれるかも。

なのはは結界内にバインドをいくつも設置していく。発動はなののはの意思だから、間違ってもあたしらに発動することはない。

「各自、戦闘準備を。準備が終わり次第、箱を開ける」とセインテストが告げる。

それを聞いたコロナが「創主コロナと魔導器ブランゼルの名の下に・・・！」と詠唱。

「叩いて碎け、ゴライアス！」

コロナの背後にゴーレムが生成されていく。

これで全員の準備が終わったわけだ。それを確認したセインテストが箱の蓋に手をかける。

「いくぞ」と、セインテストが一拍置いて・・・開けた。

開けた瞬間に「だあいせ〜〜か〜〜いつ」ってフェンリルが飛び出してきた。

あたしとなのはは結界維持とバインドに力を注がねえといけないから、戦闘はヴィヴィオ達に任せるしかねえ。



「って！　なのコレ！？　結果が張ってあるじゃない！　ズルイ！」  
フェンリルがあたしの結界に気付いて、抜ける穴が無いか探しているのかキョロキョロ周辺を見回す。

そこに、ヴィヴィオとアインハルトとリオが突っ込む。  
セインテストとリエイスとコロナは待機だ。

フェンリルが人間形態に戻って、「一発目から戦闘を仕掛けてくるなんて・・・！」と、ヴィヴィオ達を迎撃するために向かって行く。

「アインハルトさん！　リオ！」

「はいっ！」「おおっ！」

ソニックシューター・アサルトシフト

ヴィヴィオが急停止して、周囲にスフィアを10基展開。

アインハルトとリオはそのまま突っ込んでいく。フェンリルはドレスの裾をビリビリ破いてスリットを作る。

動きやすくするためだな。けど、それって反撃するのか？　まずはアインハルトの、

霸王断空拳

足先から練り上げた力を拳足に乗せて打ち出す打撃。

フェンリルの表情がニコツと笑みに変わる。

フェオ  
FEOH

フェンリルは余裕を持ってアインハルトの右二の腕を掴んで攻撃を

止めた。

間髪いれずにリオの攻撃。足に雷撃を纏わせての蹴撃。

### 轟雷炮

タイミングは完璧だった。だけどフェンリルは雷撃が纏っているのも構わずにリオの足首を掴んで止めた。

雷撃を纏った足首を掴んでいてもビクともしないフェンリルに、リオが愕然とする。

「リオさん！」

### 霸王空破断

アインハルトの檄にリオは再起動。そして一撃は見事にフェンリルの腹に決まった。

フェンリルが苦悶の呻き声を漏らしてよろめく。それでもアインハルトとリオを掴んで放さない。

「見事！ ですが、今ので私を捕まえたのならクリアでしたのに」

「「あ」「

二人がしまったっていう風にポカンとした。おい、そりゃダメだ。思いっきり隙を作っちゃった。フェンリルが二人を振り回して投げ飛ばす。

そこに、ヴィヴィオのシューター10基が襲いかかる。

「シエル様の武術、カノン様の射砲撃に比べれば、見戯に等しいですわね」

C E N  
ケン

フェンリルは両手に炎を纏わせて、シューター10基を拳打で碎いていく。

ここでセインテストが動いた。コロナのゴライアスの対角線上へ移動、フェンリルを挟み打ちする構図だ。

「ゴライアス！ パージブラスト！」

ロケット・パンチ

「<sup>コード</sup>屈服させよ・・・<sup>イロウエル</sup>汝の恐怖！」

セインテストの両サイドに蒼の円環が展開、そこからゴライアスの腕と同じくらい太い左右一对の銀色の腕が出てきた。

ロケット・パンチとイロウエルによる挟み撃ち。そこから離れようとしたところに、なのはのチェインバインドが発動、フェンリルの胴体と四肢を拘束した。

「こいつは決まったか？」

Y R  
ユル

フェンリルが指を鳴らすと、半透明の球体状の膜が展開。

直後に二つの巨大な拳が膜に衝突した。ガアン！と轟音と衝撃波。

ロケット・パンチとイロウエルが弾かれる。けど左のイロウエルすくに膜にぶつけられる。

「さすがルーンのか。全ての魔道の原型。並の防御力じゃないな。

だが、この世界ではその優位性も意味はない。コロナ！」

「はいっ！　ゴライアス、連続パンチ！」

再生した腕でゴライアスが連続で障壁を殴り続ける。

セインテストもイロウエルでボッコボコに殴り続ける。

あんな攻撃を防御も無しで食らったらひとたまりもねえな。

セインテストが「リエイス！」と合図。「ああ！」とリエイスは答えながら、黒い魔力を両拳に纏わせた。

「シュヴァルツェ・・・ヴィルクング！！」

リエイス、セインテスト、ゴライアスの三方からの連続拳打が始まる。

リエイスを中心に、徐々に結界にヒビが入っていく。そして完全に砕け散った。

フェンリルが「わああ」ってまったく焦ってない風に肩を竦め、

IS  
イス

フェンリルを縛るチェーンバインドが一瞬で凍結、粉碎。

迫るゴライアスとイロウエルを、「それゆけ私のナイスパンチ！」  
って両腕をグルグル回して、

TEUR  
テュール

拳を打ち込んで迎撃しやがった。

衝撃が全部に伝わったのかイロウエルが根元まで粉碎、ゴライアスも同じように粉碎。

破壊された衝撃に吹き飛ばされたコロナを、アインハルトとコロナ

がナイスキャッチ。

そしてフェンリルへリエイスとヴィヴィオが突撃していく。

「好きにやれヴィヴィオ。私とルシリオンが合わせる！」

「えっ、あ、はい！」

「はい、ごめんね？ サクツと結界を突破させてもらうから」

リエイスの連撃を右手で捌きながら左手を空に掲げた。

その隙に、飛び付いて捕まえようとするヴィヴィオだったが、フェンリルはよほど気配察知が上手いのか軽々避けやがる。

「アイゼン、出力を最大！ 何があっても結界を突破させるなっ！」

カートリッジをロード。封鎖結界の出力を上げる。

魔力の大半を持っていかれちゃったが、サクツとお題をクリアするにはこの一発目で決めなきゃな。

ヴィヴィオの腕を掴んで投げ飛ばし、リエイスの蹴りを掴んでまた投げ飛ばす。

レストリクトロック

なのはの最強のバインドがフェンリルを拘束する。

「今だっ！」って、セインテスト達が一齐にフェンリルに跳びかかるが、フェンリルは「やめてよして触らないでビビデバビデブー」  
「なんてアホな歌を歌いながら、」

「お願い、私を助けてえ〜アル　ック〜」

異変。指一つ動かさねえ？　なのは達もそうなのか口々に動けないって言ってる。

「対象を拘束するルーン、ニードだ。私の記憶の中のフェンリルは使えないはずだが」ってセインテストが悔しげに呟く。

そしてまたフェンリルは自分を拘束してるバインドを凍結させて破壊した。

「ゆるりと結界破壊をさせてもらおっかなあ・・・て、あれ？」

アクセルシューター

ソニックシューター

ブラッディダガー

双龍円舞  
クリエーション  
創成起動

ま、体が動かなくなっても魔法が使えなくなるわけじゃないよな。なのはとヴィヴィオのスフィア計31。リエイスのダガーが20。リオの炎龍と雷龍召喚。コロナもまたゴライアスを創り出した。セインテストは何もしねえが。なにか企んでるって感じだな。

「でもでもお、動けない以上は私を捕まえるなんて夢のまた夢のお話、でっす！」

フェンリルが大きく跳躍。それに合わせて、「シューーット！」  
「ゆけっ！」「いつけえーっ！」「もう一回ロケット・パンチッ！」って一斉に攻撃がフェンリルに向け射出。

フェンリルはお構いなし。振り切るつもりかそのまま真っ直ぐ上に伸びて行って、

「リルリルキーーーーック！」

ウル  
UR

宙で反転して蹴りを一発。ガシャアアン！と蹴り割られた。たったそれだけで、あたしと“アイゼン”の全力の封鎖結界が貫かれた。そしてフェンリルに追いついた攻撃。でもフェンリルに焦りは一切ねえ。

ユル  
YR

また展開される半透明の球体状の障壁。なのは達の攻撃は全て弾かれて無力化された。ここでようやくセイテストが動く。あたしらの周囲にアースガルド魔法陣が3つ展開される。

コード  
破り開け、  
メファシエル  
汝の破紋

コード  
懲罰せよ、  
マキエル  
汝の憤怒

3つの魔法陣から、炎龍、雷龍、光龍が飛び出してきて、そのままフェンリルを覆う膜に巻きついていつて締めつけていく。

「ルシルさん、リルちゃんの結界を破るにはやっぱりリエイスさんの魔法じゃないと・・・」

「いや、大丈夫だよりオ。3頭の懲罰の龍マキエルには、障壁・結界を破壊する効果のメファシエルを付加させている」

セインテストがそう答え、リオから視線を逸らして俯く。  
なんかボソボソと呪文のようなものは詠唱してんな。  
そう思っていたら、体が自由に動くようになった。どうやらセイン  
テストはあたしらの拘束を解くために何かしてたみてえだ。

「ルシル君!?」「ルシルパパ!?」「ルシルさん!?」「」

悲鳴を上げるなのは達。セインテストの体が傾いてゆっくりと倒れ  
ていこうとしてた。

++++Sideヴィータ ルシル++++

「大丈夫ですかルシリオンお父様!」

倒れそうになったのを、一番近くにいたアインハルトが支えてくれ  
た。

「ありがとう、大丈夫だ」と礼を言い、自力で立とうと試みる。  
が、やはりニードの解呪、ユルの障壁を突破するためのメファシエ  
ルに、気力体力が根こそぎ奪われ足に力が入らない。

普段のメファシエルなら大した消費はないが、やはりルーンを対象  
とするとどうしても消費が高い。

また倒れそうになり、今度はなのはトリエイスが私を背中から支え  
てくれた。

「あ、ルシル君、危ないって」

「無茶をするな、ルシリオン」



「ああ、すまない。だがまだ落ちるわけにはいかない」

マキエルに締め付けられ軋みを上げているフェンリルの障壁を見上げる。

シャッジメント

「粉碎肅清」と指を鳴らし、マキエルの締め付け力を一気に高める。しばらくの拮抗の後、ガシャン！と障壁を粉碎、フェンリルはマキエルの呑みこまれた。

これで気を失ってくれていれば助かるんだがな。だがその願いはもろくも崩れ去る。

「どつつつせええー！ー！」

マキエルを中から粉碎して姿を現したフェンリルは、本来の姿たる巨狼だった。

落下中、なのはの空間に設置されていたバインドがいくつも発動していくが、フェンリルの巨体の前では意味をなさなかった。

ズドン！と大地を揺るがして着地。高みから私達を見下ろしている。

「あつぶなかつた。マスター、本気で私を墜とそうとしたでしょう。」

このお題は私を捕まえるんであって倒すんじゃないよ。忘れてないよねツ？」

再び人型へと戻るフェンリルが、怒りの所為で赤みを帯びた頬を膨らませながらジト目で睨んできた。

「憶えているとも。だが、これくらいしなければお前を捕まえるなんて無理だ」

とは言え、もう私は一步も動けない上魔術を使う事も出来ない。なのは達に任せるか、それとも奥の手を使うか。出来ればなのは達に任せたい。

「まあいいか。じゃ、もう一度、私を捜しだしてね」とウインクするフェンリルが、先程開けた二つの箱の方角へと視線を向けた。

「させません！」

### 霸王空破断

アインハルトの放った一撃を裏手で弾き飛ばし、

「リボルバー・・・スパイク！」

ヴィヴィオの打ち下ろしの回し蹴りを頭突きで弾き、

「うおおおおらああああっ！」

### テートリヒ・シユラーク

ヴィータの一撃を人差し指と中指で受け止め、デコピンの要領で弾き飛ばし、

「雷神装！」

リオのアレは確か加速魔法だったか。だがフェンリルはしっかりとリオを捉えており、放ってきた拳打を掴んで思いつきり投げ飛ばした。

私を支えていたのはトリエイスも攻撃に参加、というところで、

高速移動のルーンをまた発動した。  
今回フェンリルを見つけられたのは運良く判りやすい箱を見つけたからだ。

次も同じ箱があるかどうか判らない今、ここで逃せば一体どんな苦労が待っているか。

仕方ない。こうなったら奥の手だ。

「フェンリル！ 散歩に行こう！」

そう叫ぶ。なのは達が「はい？」と首を傾げつつ私を見てくる。

災厄を呼ぶ最悪のワードを言ってしまった。ドドドドと地鳴りのような音と振動が。

「マア〜〜スウ〜〜タア〜〜？」

ハートマークを振りまきながらフェンリルが戻ってきた。

しかも最悪な事に狼形態ではなく人間形態で、だ。

以前、人間形態のフェンリルに押し倒されもがいていた時、シエフイに見つかって酷い目に遭った。

フェンリルが全力ダツシュの勢いのまま、ジャンピング抱きつきをしてきた。

「うごおっ！」

顎に頭突き。視界が揺れる。ただでさえ体が動かないのに、今のがトドメとなった。

完全に仰向けになって倒れる。それに気付かないのかフェンリルはなんの謝罪も無しに頬擦りを続ける。

「マスター？マスター？マスター？　マスターとお散歩だあ、やったあーっ」

嬉しさからの興奮で顔を赤くしながら満面の笑みを向けてくるフェンリル。

フェンリルに良い様にされている間、とりあえず視線でなのは達に合図を送る。

なのは達は察してくれて、ゆっくりとフェンリルと私を包囲するよう移動。

それぞれは右手を伸ばし、フェンリルの肩や背中をポンッと叩く。

「っっっつかまゝえたっ」

よしっ、クリアだ。フェンリルもハツとして、キョロキョロなのは達の顔を見回す。

「さ、退いてくれフェンリル。私達の勝ちだ」と告げてやる。と、フェンリルは「ほえ？　散歩は？」って呆然と訊いてきた。

もちろんするわけない。フェンリルを逃がさないための嘘だ。だから「嘘だ」と告げる。

ボケーとしたフェンリルの大きな瞳からポロポロ大粒の涙が溢れて零れてきた。

「あ、ルシル君がフェンリルさんを泣かした」

ボソツとなのはが私を非難する声色で呟いた。

それだけでなく、ヴィータも「ひでえ、女を騙して泣かせるなんて」と冷たい視線を。

リエイスですら「今のはないな。謝れ、ルシリオン」と一睨み。

あれ？　何故非難されているんだ？　お題を無事、そして早急にク

リアできるのに。

「ルシルパパ。リルちゃんが可哀想だよ」

「ルシリオンお父様。いくら何でも今の嘘はいけない気が・・・」

「クリアするためだからと言って、リルちゃんを泣かせちゃうような嘘はちよつと・・・」

「うん。謝った方がいいとあたしは思う」

気が付けば私は女子達の敵になっていた。何、この理不尽さ。

「ひつく、うつく、うう、ひう」と嗚咽を漏らし、こぼれる涙を何度も拭おうと袖で目を擦るフェンリルを見る。

こっちが泣きたい気分だよ。ギシギシ軋む左手を何とか上げ、フェンリルの頬に添えて、指で涙を拭いさる。

「うつく、マスター・・・？」

「もう泣くな、フェンリル。すまなかった」

「じゃあ散歩は？」

「なしだ」と返すと、フェンリルはヒクツと引きつり、また泣きだした。

そしてまた注がれる非難の冷たい視線。どうしろっていうんだ？

なのは「もう。散歩くらいしてあげなよ、ルシル君」と、私を見捨てる発言をしてきた。

「マスター。私、散歩、行きたい」

フェンリルの散歩。諸君、フェンリルと、そんな美少女と二人つきりでの散歩くらいどうってことないだろ、逆に嬉しいだろ、とか思っているだろ？

だが、それは真実を知らないからこそ言える意見。そう、フェンリルの散歩はトライアスロンなんだよっ！

数十分で終わるような優しいものじゃないんだよ・・・orz・  
あとどれだけ可愛くても実際は途轍もなく大きな狼だし。

「なあ、セインテストが泣いてんぞ」

「ええっ！？ ど、どうして!？」

昔を思い出してつい涙が。フェンリルが「泣いちゃヤダ」と、袖で私の涙を拭った。

「じゃあ散歩も無しでいいよな」と言うと、「好きなだけ泣いていいよ？」と頬を思いつきり引っ張られる。

数分後、なんとかフェンリルを落ち着かせ、妥協案を提示する。

「あーもう好きなだけくっついてる。散歩をするよりかは果てしなくマシだ」

抱きつかれている方が何倍もマシ。そう、ただ抱きつかれているだけなのだから。

それで満足したのかフェンリルは小さく可愛らしい声で「うん」と頷いた。

大人しければ何も問題ない子なんだがな、本当に。本つつっ当に！少しばかりの抱擁の後、ようやく転送が始まる。フェイト達の待つボードフィールドへの帰還だ。

「じゃあここで別れだな、フェンリル」

視界が白に染まる中、フェンリルの寂しそうな顔を見た。

ヴィヴィオ達が「バイバイ、リルちゃん」と手を振り、フェンリルはコクリと頷く。

フェンリルが離れていくのが判る。大丈夫だよ、フェンリル。必ず、お前の元に帰る。

それまでは待っていてくれ。

「またな、フェンリル」

++++ S i d e l シル フェイト++++

3マス目に光が生まれる。なのは達が無事にお題をクリアして帰ってきたんだ。

まずなのはの姿。次いで、ヴィヴィオ、ヴィータ、アインハルト、コロナ、リオ、リエイスと出てくる。

そして最後にルシルが……あれ？　なんか女の人に押し倒されていない？

「わっぷ？　ちよっ、なんてついてきてるんだお前！」

ルシルに馬乗りになってる女の人が「行っちゃだあ〜」で、ルシルの胸に何度も頬擦りを……！！

その上、何を考えているのかルシルの首筋や頬をペロペロ舐めはじめた。

プツン。頭の中で何かが切れた音がしたような気がするけど、うん、気のせいだよな。

「フェ、フェイトさん？ え、ちよつと、どこ行くんですか？」

エリオがそう訊いてきて、「ちよつとそこまで」と笑みを浮かべて答える。

エリオはそれつきり訊いてこなくて、ただ「いつてらっしゃい」と送りだしてくれた。

うん、良い子だねエリオ。

「うわあ、何やルシル君。めっちゃすごい事されとるなあ」

そ、そうだよな。すごいよね、あれは許せないよね。というかりエイスもなに黙って見てるの？

そこは止めようよ。ルシルにそんな、ちよつと、えつと、Hなことしてるんだから。

“バルディッシュ”を起動させて、ルシル達のところへ向かう。

「フェイト！？ 待ってくれ！ これは違うんだ！ 憶えているよな、コイツ！

フェンリルだよ！ 狼、いや犬だよ！ これは、そう、犬なりのスキンスリップなんだって！」

やだなあ、ルシル。そんな言い訳みたいなこと言わなくてもいいよ狼、犬、うん、どう見ても女の人だね。耳とか尻尾はあるけど、でも今は人だ。

フェンリル。憶えてるよ。“闇の書事件”のときにお世話になった恩人だ。

でも今はちよーーーーーつと許せないかなあ。うふふ。

「フェイトちゃん、落ち着こう、ね？」



なのはが立ちはだかる。私は「大丈夫、落ち着いてるよお」と答える。

「マスターにチュウー？」

そこから先、私は何をやったか憶えてない。

よつこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（後書き）

レヴィ

「結局バトルじゃん！」

ルーテシア

「はい、始まつちやっただ今日のレヴィルのコーナー」

レヴィ

「バトルだよっ！ 結局バトルだよっ！ しかもわたし達出番ないよっ！」

ルーテシア

「そんなに叫んじゃ頭の血管が切れるってレヴィ！  
それに、出番なら前回あったよ。ないのはわたしの方だよ」

レヴィ

「はあはあはあ。そつだよね、うん、ごめんね」

ルーテシア

「判ってくればいいよ。さて、今回もANSURのキャラクター  
が活躍したよね」

レヴィ

「ルシリオンの使い魔フェンリル。なんて言うかバカな娘？」

フェンリル

「バカって酷い。貴女も十分バカって話じゃない。ボケ担当の剣神  
の後継だっけ？」

レヴィ

「なにおう！ ルシリオンに頬擦りして、拳句の果てにはチューシたくせに！ そっちの方がバカじゃん！」

フェンリル

「使い魔としての愛だよ。別にチューくらい普通だつて。何をそんなに怒って・・・あ、あーそうゆうこと。貴女、そうゆう経験が無いんだ」

レヴィ

「それが何！？ リリカルなのはじゃそれがノーマルなの！ リリカルなのはをANSURのノリに染めるんじゃないっ！」

フェンリル

ピク「ていうかあ、貴女も元はANSUR第三章・界律の守護神編の専用エネミー・アポリュオンじゃない。なのに、それを言っちゃう？ 言っちゃうんだあ。チツ、お前、どこ中だよ」

レヴィ

ピク「残念、わたしは学校に通ってないもん。あと今はしっかりリリカルなのはキャラだもん」

フェンリル

ピク「あっそう。それはともかく、あーだから教養の無い顔してるんだね。ごめんね、おバカさんだから学校に行けない、っていうか入れな」

レヴィ

プツン「表出るやあーっ！」

フェンリル

プツン「じょうとーだっ！」

ルーテシア

「今日はこれにて！ うわっ、危ないって二人とも！」

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（前書き）

元旦までもう2カ月を切ってしまいました。

まずいです。ですからもうサクサクとダッシュで何とかして終わらせませます。

V S ? ? ? ? 戦イメーシ B G M

魔法少女リリカルなのは A ' s 『金の閃光』

よつこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へくく

+++++Sideはやて+++++

フェイトちゃんによる虐殺ショーも終わって、見せられないよモザイクってゆう処理を掛けられとるルシル君に合掌。

ルシル君を好きだけ殴ったフェイトちゃんが「はっ、私は一体何を・・・？」とか言うて目をパチクリ。

ヴィヴィオ達はそんなフェイトちゃんにドン引き。フェイトちゃんもようやくルシル君のあり様に気付いて、

「ルシル！？　すごい怪我！　ひどい、誰がやったの！？」

お約束なことを素で言うとするし・・・怖いわあ。

フェンリルさんも最初の一発で気を失つとするし、こん中で最強なのはフェイトちゃんやな、間違いなく。

そんなこんなので、シャマルとイクスの治癒魔法、静かなる癒しで復活を果たすルシル君とフェンリルさん。

「ごめんなさい、ルシル、フェンリルさん」で、フェイトちゃんは自分の暴走を恥じて謝る。

「まあなんとというか・・・全面的にフェンリルが悪いよな」

「ええー、マスターだって抵抗しなかったし」

「したっ！　離れる、どけ、と言ったぞ確かに！　もう抱きつくとかやめてくれ」

ルシル君は必死やなあ。まあこれ以上フェイトちゃんの逆鱗に触れたくないんやな。

“バルデイツシュ”を無言で振り回してルシル君をボコにしたフェイトちゃんは正しく金の悪魔……。

フェンリルさんは「だって嬉しかったんだもん」て俯いて、寂しさが伝わってくる声色で呟いた。

あ、みんな（フェイトちゃんですら）が一斉にルシル君に非難の視線を……。

「うぐっ」て、ルシル君が見とつて可哀想になるほどたじろぐ。

「そろそろ戻つてはどんなのフェンリル？」

そんな中、セシリスさんだけが何も変わることもなく口を開く。

みんなの視線はルシル君からセシリスさんへ。

フェンリルさんは「もう少しくらいいいでしょ、セシリー」って言いながらあつかんべー。

セシリスさんは大きく溜息を吐いて、どうしてかルシル君を睨みつけた。

何やる、今日のルシル君には涙が出るくらい同情してしまう。

「好きにして。コホン。では次は黄チームでしたか。賽をどうぞ」

黄チームのリーダーであるフェイトちゃんがサイコロを受け取る。

フェイトちゃんは一度みんなを見回してから、サイコロを放り投げた。

私たちはサイコロを固唾を呑んで見詰める。そんで出た数字は14や。ついさつきも出た数字や。そう、レヴィイが出して、セシリスさんと戦うハメになったマス。

「ボーマスですね。とりあえず14マス目へどうぞ」

セシリスさんに促されて、フェイトちゃんたち黄チームが歩を進める。

ボーマスは戦闘を行うためのマスや。そのエリアの管理人がゲストキャラ、そして仲間内からランダムで。

勝ったらエリアクリア。負けたら……。シャマルとリインに抱っこされとる二頭身シグナムと二頭身アギトを見る。

あんなふう面白い格好にされる。見る分には可愛いけど、なるんはちよつと御遠慮や。

「えっと、じゃあ行つてきます」

私たちは「いつてらっしやい」って見送るんやけど、みんなの声に覇気はない。

ただのお題をしに行くんなら元気に送り出せるけど、戦闘しに行くのを、しかも相手がまたセシリスさんやったらと思うと、な。

あと戦つてないんは、フェイトちゃん、シャマルとザフィーラ、スバルにエリオにルーラー、そしてヴィヴィオ達やな。

そんな中、ルシル君だけが「フェイト、君が戦えばどんな敵が来ようとも勝てる」って強く頷いた。

「えっと、それって喜んでいいのか怒つていいのか反応に困るんだけど……」

でも、うんっ。ありがと、ルシル。それは、私を信じてくれてるって思つていいんだよね」

フェイトちゃんがニコツて笑う。重かった足取りが軽くなったなあ。

そして、「頑張ろう、みんな！」と声を張り上げ、それに「おおっ！」と応えたメンバーを引き連れて14マス目へ向かった。



その間、「マスター。彼女、シエファイに似てますね。そこに惹かれましたか？」ってフェンリルさんがタブーに近い事をルシル君に訊いた。

シエファイリスさんの事を知っとる私らは硬直、知らんルールーやレヴィ、アギトにヴィヴィオ達は首を傾げる。

フェイトちゃんとシエファイリスさんの外見はそっくり。性格もどこか似とる。

「いいや。確かにフェイトと初めて逢った時、シエファイの面影を重ねた。

だがそれも数日の間。それからはきちんとフェイト個人として見ている。

ハッキリと言えるよ。私は、フェイト・テストロツサ・ハラオウンと言つ一人の女性に惹かれている、と」

聞いとるこつちが恥ずかしさで赤面モノやで、ルシル君。

見れば、シグナムとリエイスを除く全員が顔を赤くしとる。

フェンリルさんはその答えに満足したみたいで、「そうですか。それは嬉しい事です」って、綺麗な満面の笑みを浮かべた。

『おおっと！ ラッキーチャンスなボーナス的なマス、ボーマスだよっ

戦闘し勝利すればゴールすることなくエリアクリア　でもでも負ければじ・ご・く？

さあ、まずは運だめしのルーレットだ。それで対戦相手を決めちゃおうー！』

陽気な女の人の声のアナウンス。その直後、胸元に数字の9が浮かび上がる。

それより「一体誰の声や？」って無意識に漏らしてしまつ。

何気ない疑問。答えてくれたんは近くに居ったルシル君やった。

「ああ、この声は私の姉ゼフィランサスだよ、はやて」

「そ、そうなんか！？ なんやノリのええ人やなあ・・・」

ルシル君のお姉さんの事は名前しか知らんけど、かなり陽気な人らしい。

ルシル君も「ゼフィ姉様はいつも陽気に振る舞っていたからな」と懐かしそうに遠い目をした。

そんなルシル君から視線を逸らす。と、ルシル君の気配がフツと消えた。

「ルシル君が消えた！？」

なのはちゃんが慌てると、みんなも慌てだす。

そんな中、毅然としたるセリスさんが「どうやらルシルが、戦闘に繰り出されたようですね」と静かに告げた。

「では、私達もバトルフィールドへ向かい、神器王ルシリオンと貴方達の誰かとの戦闘を観戦しましょうか」

私も転送が始まる。誰をルシル君と戦わせればいいのか考えながら、私の視界は白に染まった。

+++++Sideはやて ルシル+++++

いきなり飛ばされたと思えば、何とも不思議な空間に独り佇んでい

た。

地平線まで広がる地面は全てがステンドグラスとなっている。  
ステンドグラスに描かれているのは、私を含めた“アンスール”の  
メンバー、そして私とシエフィの子供である“戦天使”と“救済三  
女神”。

ヨツンヘイム連合の主力だった“四天王”、“特務十二将”、“A  
M・T・I・S”、“シュテルン・リッター”の姿もある。

「上は・・・そうか、君達か・・・」

そして、遙か頭上には今現在の仲間、フェイト達が描かれている。  
それだけでなく今まで出会ってきた、プレシアとアリシア。グレア  
ム提督にリーゼアリアとリーゼロット。

スカリエツティと姉妹たち。セレスたち“テストメント”のメンバ  
ーの姿もある。

足元は過去、頭上は現在未来というわけか。フェイトのステンドグ  
ラスを眺めていると、「ルシル！」と本人の声が。

「フェイト・・・みんなも・・・。ハハ、私が君達の相手にする  
事になってしまったよ」

苦笑しか出て来ない。フェイト達も戸惑っているようだ。

しかし、これはある意味チャンスだ。私が負ければそれでこのエリ  
アをクリアできる。

だがその考えが読まれていたように、「ルシル。何もせずにただ負  
けるような事があれば・・・解っているよね？」とセシリス。

自然と舌打ちが出た。それもお構いなく、「ではメンバーの選出を」  
とフェイト達に告げる。

「ルシル。戦闘参加メンバーが決まるまで、貴方はそのまま待つて

いて」

セシリスがそう言うと、フェイト達は青い半透明の膜に覆われ、空へと上がっていった。

ステンドグラスの地面に残る私とセシリスとフェンリル。

「ルシル。貴方が本気で戦って負けると思っ？」

「誰が相手になるかによつては・・・判らないな」

「マスターが負けるわけないじゃん。馬鹿だなあ、セシリーは」

フェンリルがそう言ってくれるが、私とて無敵じゃない。

だから「負けるときは私も負ける」と言つてやる。それでもフェンリルは「でもマスターは無敵だもん」と聞かない。

戦えるメンバーの中には、私が苦手とする機動力重視の近接タイプが二人も居る。

「どうやらメンバーが決まったようね」

私と戦う四人が四つの膜に入り降りてきた。

メンバーの中には予想通り、私の苦手とするタイプの2人が居る。

フェイトとエリオ。そして、シヤマルとザフィーラ。

おそらくフェイトが前衛のガードウィング。エリオが中衛のセンターガード。

シヤマルは後衛のフルバック。基本は回復役に徹すると見ていいだろう

ザフィーラは、魔法からして固定ポジションにはおそらく就かないな。

「ルシル。貴方には悪いけど、これもルールだから」

セシリスがすまなさそうに顔を曇らせ、私の額に左手の人差し指と中指を当ててきた。

見ればフェンリルも顔を伏せ、小さく「ごめんなさい」と謝ってきた。

「第二領域管理者セシリス・エリミング・ムスperlヘイム。プレイヤー、ルシリオン・セインテスト・アースガルドの精神にアクセス」

そこで、私の意識が途切れてしまった。くそっ、恨むぞ、セシリス。

+++++Sideルシル エリオ+++++

今まで以上の不思議な空間の中で、僕達はルシルさんと対峙する。けどルシルさんの様子がおかしい。セシリスさんに額を触られてから、一度も喋らない。

それに表情がまったくと言っていいほど変わらない。

フェイトさんが「ルシル？」って呼び掛けても反応なし。セシリスさんに何かされた？

「それでは、神器王ルシリオンと、フェイト・T・ハラウン、エリオ・モンディアル、騎士シャマル、騎士ザフィーラによる戦闘を開始します」

セシリスさんがそう告げて、空へと上がる。

フェンリルさんは一度ルシルさんを見て、次に僕達へと視線を移し

た。

「今のルシルは、過去のルシル。だから、手加減なんて期待しない方が良い。」

さすがに戦力バランスが崩れるから、40%程度にまで能力制限はしたけど、それでも本気で来るから・・・強いよ?」

信じられない事を言い捨てて、フェンリルさんは空へ上がって行った。

フェイトさんが「待って!」と止めるけど、フェンリルさんは止まらない。

「テストロッサちゃん・・・」

ルシルさんの瞳に光が戻る。だけど、その瞳には僕の知る優しさが無い。

自分の体の調子を確認するように両手を見詰めて開閉する。

「よし」と両拳を目の前で打ち付けて、ギリリと光る双眸を僕達に向けてきた。

「来るぞ! こうなつては戦うしかあるまい!」

VS? ? ? ? ? ? ? ?

其はアンストールが神器王ルシリオン

? ? ? ? ? ? ? ? VS

頭上に人数分のライフゲージが表示される。

「4対1か。しかも異様に制限が掛けられているな。誰だ? こんな事をしたのは?」

まあいい。私はアンスールが神器王ルシリオン。すまないが、君達を墜とさせてもらおう」

純陸戦形態・疾駆せし、<sup>コード</sup>汝の瞬風<sup>ヤエル</sup>

ルシルさんの背中から蒼く輝く魔力の剣翼が生えた。

ただどいつもものとは違う。いつもなら1mはあるのに、今回は30cmくらいし、数も12枚じゃなくて半分の6枚。

ルシルさんの体が数cmだけ浮いて停止。飛ぶんじゃなくて浮く魔術……？

「さあ、武器を構えろ」

元より戦うしかないんだ。ここは全力の本気でやらないと、間違はなく負ける。

それが判っているからこそフェイトさんも“バルディッシュ”を構えた。

「今度も私が勝つよ、ルシル……！」

「今度も？ 良く判らないが、いいだろう。お前の魔道、私に見せてみる！」

ルシルさんが地面を滑るように高速で後退しながら、体の周囲に小さなアースガルド魔法陣を七つ展開。

フェイトさんがそれを見て、「作戦通りをお願いしますっ！」と僕達に指示を出す。

ルシルさん相手に時間を掛けるのは愚策。だから……

(短期決戦でルシルさんを墜とす！)

僕をチラッと見たフェイトさんに頷く。

フェイトさんと僕は同時にブリッツアクションで突撃する。

フェイトさんの“バルディッシュ”はハーケンフォーム、僕の“ストラーダ”はデューゼンフォームだ。

「<sup>ジャッシュメント</sup>七天肅清！！」

轟<sup>コード</sup>き響け、<sup>バラキエル</sup>汝の雷光  
凍<sup>コード</sup>て砕け、<sup>サルツイエル</sup>汝の氷槍  
燃<sup>コード</sup>え焼け、<sup>セラテイエル</sup>汝の火拳  
削<sup>コード</sup>り抉れ、<sup>ザキエル</sup>汝の裂風  
煌<sup>コード</sup>き示せ、<sup>アダメル</sup>汝の閃輝  
呑<sup>コード</sup>み食せ、<sup>ライラエル</sup>汝の夜影  
穿<sup>コード</sup>ち流せ、<sup>マヌエル</sup>汝の水瀑

七つの魔法陣から、雷撃、氷雪、炎熱、風嵐、閃光、闇黒、水流だ  
っけ？、七属性の砲撃が放たれた。

ブリッツアクションの発動終了と共に、フェイトさんと僕は大きく  
横っ跳びで回避。

七つの砲撃が向かう先にはザフィーラとシャマル先生が居る。

でも心配は要らない。ザフィーラはシャマル先生の前に躍り出てい  
て、七つの内、直撃する光の砲撃に対して、

「おおおおおおおおおッ！！」

鉄壁の構え・烈鋼牙

真っ直ぐルシルさんへと砲撃が反射される。

僕とフェイトさんの間を通過して、反射されるなんて思わなかった



らしいルシルさんに直撃する。

僕は「ストライダー！」と、ヘッドブースターと石突のリアブースターを点火、爆煙から飛び出してきたルシルさんへ突撃する。

「まさかシエフェ以外に私の魔道を跳ね返されるとは思わなかったよ、狼男君」と、氷の上を滑るようにクルクル回って「ストライダー」の刺突をかわした。

すぐに斬り返す。だけどその一閃は当たるとはなかった。移動が速過ぎる。

そうか。足がついていないから摩擦が無い。だからあんな滑らかに、そして高速で動けるんだ。

でも相手はフェイトさん。その速さにちゃんとついていってる。

「はあああああッ！」

ハーケンスラッシュ

「むっ、この少年といいお前といい、疾いな・・・！」

高速で連続に振るわれる“バルディッシュ”を舞うように避け続けるルシルさん。

僕はルシルさんを挟み討ちするように駆け、“ストライダー”の穂先から魔力刃を伸ばす魔法シユタルメツサーを発動、フェイトさんの攻撃を避けたと同時に斬りかかる。

ルシルさんは「楯」と一言告げて、僕とフェイトさんに向けて両掌を向けた。

よしっ、避けずに防御に回った。

コード  
暴力防ぎし、  
ビュルキエル  
汝の鉄壁

“バルディッシュ”と“ストライダー”の一撃を防いだルシルさんの

蒼い光の盾。

押し切るように見せかけ、僕とフェイトさんはさらに力を入れて、ルシルさんの意識を防御へ回させる。

「はあああああああッ！！」「」

今使っている魔法、フェイトさんのハーケンスラッシュ、僕のシユ  
タールメツサーには障壁貫通の効果がある。

だからか少しづつ盾にヒビが入って行く。これでさらにルシルさん  
の意識を僕達に向けさせる事が出来るはずだ。

ルシルさんが「多層<sup>ユスメル</sup>甲冑が使えればこのような盾など要らないとい  
うのに・・・！」って悔しそうに呻く。

そこにシヤマル先生から『テストロツサちゃん、エリオ、行きます  
！』と合図が入る。

『いつでもどうぞー！』

『お願いします！』

このままルシルさんの動きを封じ続け、シヤマル先生の魔法で決め  
る。

シヤマル先生の魔法・旅の鏡。ルシルさんのリンカーコアを手中に  
収める事が出来れば、降参を促す事が出来る。

だけど、ルシルさんは何かしらの違和感を感じたようで、僕とフ  
ェイトさんの攻撃を受けるのも構わずに盾を消した。

「うがあっ・・・くう・・・！」

直撃だった。でもそのおかげで、シヤマル先生の魔法を受けること  
はなかった。

宙から伸びるシャマル先生の手を見て「肉体の一部転移だと!?」  
って驚きながら、斬られた場所に手を翳すルシルさん。

まずい。きつとラファエルを使う気だ。でも避けられた後の事もちやんと決めてある。

ザフィーラが「鋼の軛!」と、幾条もの棘をルシルさんの足元から突き出させる。

魔法を使う隙を与えない。ルシルさんが舌打ちして、間を縫うように避けていく。

「プラズマランサー・・・ファイア!」

真っ直ぐ飛んで行く雷撃の槍が16基。鋼の軛が射線を邪魔しないように、そしてルシルさんを逃がさないようにしながら行く手を開ける。

そして僕は“ストライダー”の全てのブースターを使って空へ跳び上がって、ルシルさんの頭上へと向かう。

コト  
吹き荒べ、汝の轟嵐

でも断念せざるを得ないことに。ルシルさんを守るように蒼い竜巻が発生。

フェイトさんのランサーもザフィーラの鋼の軛も全て粉碎されてしまふ。

僕も穂の両サイドにあるサイドブースターの左を点火させ反転、ヘッド・リアブースターを使って離脱して、地面に降り立つ。

『セインテスト君自ら閉じ籠ってくれて、チャンスかも。もう一度行くわ』

シャマル先生が“クラーレヴィント”でもう一度旅の鏡を創り出す。



次にフェイトさんを見た瞬間、僕はブリッツアクションでフェイトさんに跳びかかって突き飛ばしていた。  
フェイトさんの足元に小さな黒い水たまりの様なモノが生まれて、そこから6つの平たい影の手が出てきてフェイトさんに絡みつこうとしていたからだ。

コード  
闇よ誘え、カムエル  
汝の宵手

突然突き飛ばされたことでたたらを踏んだフェイトさんが、「エリオ！？」と驚いていた。  
ただとすぐに事情を察してくれて、

「バルディッシュュ！」

僕の両脚に纏わりついてる平たい影の手を、ハーケンフォームに戻した“バルディッシュュ”で斬りつけようとしたとき、ルシルを守っていた竜巻が爆ぜた。

不意を衝かれたフェイトさんが耐えられずに吹き飛ばされた。

僕は影の手に捕まっていた事で吹き飛ばされることはなかったけど、“ストラーダ”を手放すことに。

「だったら、これでどうだ！」

紫電一閃

両拳に雷撃を付加させる。“ストラーダ”に付加させるのが一番いいんだけど、手元に無い以上は仕方ない。

腰にまで絡みついていた影の手を両手で鷲掴んで放電。

まるで影が雷撃を全部吸収しているみたいで・・・まったく通じてない！？

とそこに『一人目の脱落者は君か、エリオ』って、少し呆れている声色の念話が。

「ルシルさん・・・!?!」

視線の先、宙から伸びるシャマル先生の右腕を影の手に引つ張らせているルシルさんが居て、ただじつと僕を見ていた。その優しい目は知っている。僕達と一緒に過ごしてきたルシルさんの目だ。

フェイトさんは僕に意識が向いている所為かルシルさんが元に戻った事に気付かず、僕を解放しようと駆けてきていた。

「エリオ、今助ける！」

放電しているハーケンフォームの“バルディッシュ”を振り降ろす。

コード  
知らしめよ、ゼルエル  
汝の力

ガキインという音と一緒に“バルディッシュ”が弾き返された。弾かれたことで上手く姿勢が整わない状態のフェイトさんに新たな影の手が伸びる。

影の手は真っ直ぐ“バルディッシュ”に絡みついて、フェイトさんの動きに制限を掛けようとした。

「甘いな。私の魔術の中に術式強化があったことを忘れたか？ フェイト」

「え？ ルシル、まさか元に戻ってるの・・・？」

「つい今し方な。まったく、どうしてこう私は誰かに操られるとい

うパターンが多いんだ？

前の契約先でも、そのずっと前でもあったぞ。私はそんなに軽い男じゃ  
」

ルシルさんが何か悲嘆に暮れ始めたとき、それは起こった。

ルシルさんの隣でシャル先生を引つ張っていた影の手が、ようやくシャル先生を引つ張り込む事に成功した。

けどあまりに勢いが強かったせいで、飛び出してきたシャル先生がルシルさんと激突。

「きゃっ？」「あ痛ーっ？」

ドサリと倒れ込むルシルさんとシャル先生。

あ、フェイトさんからなにか冷たい空気が漂ってきた。

シャル先生はルシルさんを押して倒しているような体勢で、「痛たたた」とシャル先生が僅かに頭を起こす。

そして気付いた。自分がルシルさんの上に居る事。自分の胸でルシルさんの顔を押し潰している事。

ハッキリと判るくらいに顔を赤くしたシャル先生は「いやあー  
ーっ！」とビンタ。

偶然の事故なのに……。理不尽過ぎてルシルさんが可哀想だ（涙）。

しかも今のビンタで、ルシルさんのライフゲージがまた減って、いよいよ半分以下になっていた。

シャル先生、つ、強い……？

そう、あれは事故。だからルシルを責めるのは筋違い。  
シャマル先生も「ごめんなさい！」って謝りながら、慌ててルシルの上から退いた。  
むう、ここまで独占欲が強いのは自分でも引いちゃうなあ。もっと余裕を持たないと、うん。

牙獣走破

暴力防ぎし、コト 汝の鉄壁ビュルキエル

シリアスモードが粉々だったその時、ザフィーラの遠距離からの突撃飛び蹴り。  
ルシルも咄嗟にシールドを張って防御。ザフィーラはすぐに後退して、

「おおおおおおッ！」

双破壊壁打

間髪いれずに弓を引く構えを見せ、引いていた左腕を突き出して左拳打を放つ。

その一発でルシルの盾にヒビを入れ、すぐさま踏み込みからの右拳打を放つて、盾を粉碎した。

ルシルの表情が驚愕に染まる。「これはレヴィの技!?」と。

そう、レヴィの格闘魔法はザフィーラと一緒に編み出したものだから似ていて当然。ルシルはこの事に関しては未だに知っていないかったただけだ。

後退しようとしたところで、シャマル先生の魔法が発動。

「ごめんなさいね、セインテスト君」



## 戒めの鎖

“クラールヴェイント”の魔力ワイヤーが、ルシルの四肢をギリギリで捕まえていた。

そこに、ルシルへと決まる、ザフィーラのアップー気味のフック。呻き声を漏らしてルシルが大きく体を折った。やっぱりルシルが戦って傷つく姿は見たくない。

エリオもシャマル先生もザフィーラもそう。ルシルと戦うのにとっても嫌な顔をしている。

「げぼつげぼつ、これはある種の試合だ。手加減は無用！」

吹雪コトけ、バルビエル 汝の凍波

ルシルの周囲から宝石のような透明感のある大きささまざまな氷柱が突き出してきた。

シャマル先生の戒めの鎖には、捕縛対象の魔力発露を阻害する効果もあるのに、ルシルはそれを力づくで破った。

という事は、それなりに強力な術式で間違いないという事。

すぐに離れたいけど、“バルディッシュ”とエリオが影の手に捕まっただまま。

ザフィーラが引き千切りにかかるけど、なかなか影の手は壊れない。ルシルが指を鳴らす様に構えた。やっぱり氷柱の攻撃はまだ完成してないんだ。

「拘束が解けないならば、セインテスト自体を墜とせばいい！」

冷気によって凍結粉碎されたワイヤーの拘束から解き放たれたルシルがザフィーラの迎撃に入る。

足元からの鋼の軛と、ザフィーラから放たれる拳打と蹴撃を、ルシ  
ルはまた舞うように避けつつ魔力で創った長槍を振り回して捌く。  
その間に、私とエリオはシャマル先生の助力で何とか抜け出そうと  
頑張る。

ここで、私は自分の間抜けさを呪った。

「バルディツシュ、スタンバイフォーム！」

一度待機モードに戻して影の手から逃れ、そしてまた起動、ザンバ  
ーフォームとする。

これでエリオに専念出来る。と思った矢先、「お仕置き執行」と、  
ジャッジメント

小さいながらもルシルの判決を下す声が聞こえた。

氷柱へ視線を向ける。けど、あれ？ 何も起ってない・・・？

「え？ なに？ ちょっと、やめ、あははははははははは！」

いきなりのエリオの笑い声にビックリ。

見れば、影の手がエリオの体中を這い回ってくすぐっていた。

シャマル先生と一緒にガクツと脱力。でも笑い話にならなかった。

エリオのゲージがどんどん減っていつてる。

「え、ええーっ？ くすぐられてもダメージを受けるのっ？」

「シャマル先生！ 今はエリオを助けてあげないと笑い死んじやい  
ます！」

涙をポロポロ流しながら笑い続けるエリオ。

必死に影の手をどうにかしようと試みるけど、ビクともしない上に  
こっちにまで伸びてこようとした。

それでシャマル先生が若干引いた。もし捕まったら、自分達もくす

ぐられる可能性大。

保身が特攻。まさにデッド・オア・アライブ。さっきみたいにハーケンフォームに変えて、影の手の切断に掛かるけどなかなか刃が通らない。

ザンバーだと大き過ぎてエリオを傷つけるかもしれないし。

闇黒系の術式は随分と柔軟性に優れているみたい。もう、面倒だなあ。

そして、「はい、エリオが脱落だ」とルシルが告げた。と同時にザフィーラの拳打を受けて吹っ飛んだ。

「はあはあはあはあはあ……ご、ごめんなさい、僕は、ここまで、はあはあ、のようです……」

笑い過ぎて呼吸困難に陥ってるエリオが球状の膜に包まれて空へと昇っていく。

エリオのゲージが黒に染まっていた。エリオ、くすぐりで敗北……プツ。

ダメダメ。笑う事じゃない。それにしても、ルシルも随分と性質の悪い攻撃をするものだ。

もしかして、さっきの事を根に持っていたりして……？

「くつ、痛つつ。まずは一人だな。次は、そうだな……シャル、君に決めた」

ルシルに標的とされたシャルル先生がビクツとする。

だけどザフィーラが「もう誰一人として墜とさせん！」と突撃を掛ける。

私も攻撃に参加するために、

「ソニックフォームで決める……!」

完全機動力重視の戦闘スタイルへ。防御力は無に等しいけど避けられ  
ばいい

“バルディッシュ”も二刀一対のライオットザンバー・ステインガ  
ーへと変える。

そう、この形態でルシルと戦って勝ったんだ。今回もきつと勝てる。  
だって一人じゃないから。

ルシルも私のスタイル変化に気付いて、しまった、っていう表情に  
なった。

ふふん、陸戦では負けないよ、ルシル。

『シャマル先生はここで待機しててください』

### ブリッツアクション

ザフィーラの攻撃を捌き続けては受けている（やっぱり近接格闘戦  
だと下位グループだね）ルシルに最接近。

安堵の溜息と一緒に『判ったわ』と言うシャマル先生に苦笑。

「はああああああつ！」

左のステインガーでまずは様子見。ルシルは右手にも魔力槍を創り  
出して防御。

私とザフィーラの攻撃を二槍で防いだルシル。でも、少し余裕とい  
うか何かを企んでるような表情を見せた。

ザフィーラは気付かない。ああ、私にしか判らないルシルの僅かな  
表情の変化なんだ。

『ザフィーラ、ルシルから離れて。何か企んでる！』

『承知した』とザフィーラが答えて、一緒に離脱した瞬間、二槍が爆発。

小さな魔力の短剣となって周囲に拡散した。

危なかった。あのまま気付かなかったら今ので墜とされていたかも。

「さすがだな、テストロッサ。セインテストの表情の僅かな変化でも読み取ったのか？」

「そんなところ・・・！」

咲き乱れし、コード 汝の散火マルキダエル

ルシルは両手に蒼炎の塊を生み出し、放つ直前に合一してから私達へと放ってきた。

明らかにただの魔力弾じゃないのが判る。案の定、それは普通じゃなかった。

「爆散ジャンジメント粛清」と指を鳴らして、大きめの炎塊が爆散、無数の炎弾となって襲いかかってきた。

鋼の軛

ディフェンサープラス

幾条もの拘束条が盾になるように突き出して、私は半球状のバリアを展開。

それにしても鋼の軛って汎用性が高いからいいなあ。攻防縛、三つの効果を持つてる。

ルシルの攻撃は全て鋼の軛によって防がれた。ディフェンサーを解除した直後、

「真技！」

この戦いの中で一番聞くことのない単語が、鋼の軛の向こう側に居るルシルから聞こえてきた

うそ……。だってルシルの誇る二つの真技は、“神槍グングニル”とルシルの全力であるEXランクの魔力が必要なはず。

じゃあ今のは聞き間違いなの？ そう思った直後、向こう側から強烈な雷撃が空へと上がった。

上から雷撃を落とすつもり？ バツと上を見上げる。だけど何も無い……。？

混乱していると、鋼の軛の根元が蒼い雷撃で吹き飛んで、真っ直ぐこっちに飛んできた。

雷撃砲！？……。じゃない！ ルシルが蒼雷を纏って突進してきたんだ！

「標的変更だ。まずはザフィーラ、君を墜とすッ！」

蒼雷を纏った目にも留まらない右フックがザフィーラのお腹に直撃、背中から蒼雷が突き出る。

普通なら今の一撃で決まっていた。でもザフィーラは咄嗟に魔力障壁を纏っていた。

咽ながらもルシルの右腕を掴んで、至近距離からの右拳打を入れようとする。

でも、また見えない左拳打がザフィーラのお腹にヒット。重量のあるザフィーラの体が浮く。

「天環……」

ルシルの連続打撃がザフィーラに入っていく。

術式名からしてルシルのモノじゃない。複製？ でも今は使えない

はずなのに。

うっん、そんなことよりザフィーラを助けないと。ブリッツアクシヨンで最接近。

放電されている中を突っ切って、ステインガー二刀を同時にルシルへと振り下ろす。

戦って傷つくのが辛いと言ってる場合じゃないほどに、今のルシルは危険だ。

ザンツとなんと抵抗もなく刃が通った。苦痛の呻き声も漏らしたし、効いてないわけじゃないのに……

「どうして!?!」

ルシルの連続打撃は止まらない。最後に強烈な蹴り上げが決まる。ザフィーラが勢いよく空高く舞い上がった。遅れてルシルも跳び上がる。

ルシルが通過した宙には大きなアースガルド魔法陣が展開された。ルシルはザフィーラを追い越して、蒼雷を纏った踵落としを決めた。蒼雷を引いてアースガルド魔法陣に落下するザフィーラへ、ルシルもまた落下し始めた。

「襲雷華!?!」

真技・天環襲雷華

魔法陣に叩きつけられて仰向けに倒れていたザフィーラに右拳打を打ち込んだ。

と同時に、轟音が世界に響き渡る。ザフィーラを襲った雷撃が、まるで花が咲いたように周囲に拡散していく。

魔法陣の真下へ突き抜ける蒼雷はまるで花の茎。あまりの事態に思考が止まる。

でも、魔法陣が消えたことで落下し始めたザファイラを見て、シャル先生の「ザファイラ！」という悲鳴に再起動。

### ソニックムーブ

一気に空へと上がってザファイラを担ぐように抱える。

チラッと見えたルシルの顔はいつも通りのもので、さっきみたいに操られてない。

そのままシャル先生の元へと向かい、ザファイラを預ける。

「むう、今のは効いた。気を付ける、テストロッサ」

「「ザファイラ!?!」」

アレだけの攻撃を受けて意識がある事に驚いた。

間違いなく今ので決まったって思ったのに。ザファイラのゲージを見る。

目を疑った。大ダメージは確かだけど、それでも完全に黒に染まっ  
てなかった。

5分の1くらいがギリギリで残ってる。

「一体どういう事……?」

「真技とはいえ、それほど威力が高くない、という事だ。シャル」  
シャル先生の疑問に答えたルシル。

ルシルは続ける。ルシルの真技>上級術式>謎の真技II 中級術式と  
いう構図だつて。

「ちなみに今のは、ライメツ雷滅のセンキ殲姫プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァ



ルキュリアの真技だ。  
ヴァルキリーの扱う真技は、もともと私の未完成魔術式や試験的に組んだ術式をインストールしたもので、その後、彼らが独自に昇華したものだ。  
だからその気になれば、私でも複製が扱えなくても発動出来る。  
まあその分未完成のままだから劣る、つまり威力が無い、ということだな」

ルシルはそう説明した後、「真技」ってまた告げた。  
もうさせない。ブリッツアクションで最接近を試みる。

「この短い剣翼、純陸戦形態のヤエルというんだが、これもまた未完成なんだ。

だと言っのに、よくもこんな過去の失敗作を仲間の前で晒してくれたなあ、昔の私」

自分自身に対して呆れ果てているルシル。

まあ未熟な昔の自分を、自分の知らないところで知られるっていうのは嫌だよな。

ルシルはコード・ウルのような蒼い魔力弓を作り出す。

### プラズマランサー

「ファイア！」と、姿勢を変えられないルシルに向けてランサーを12基射出。

ルシルは弓を構えたまま滑るように避ける。アレが未完成？ 十分に役に立ってるよ。

ランサーよりは威力が劣るし遅いけど、そのかわり誘導性能が良い。だから、ルシルが良く使う弾幕包囲がし易い、プラズマバレットを15基射出する。

それとほぼ同時に、弓に番えられる蒼く細長い暴風の矢。

「アーク・ヒーリックス  
蹂躪せし螺旋角!!」

放たれる小型の竜巻。バレットが竜巻に巻き込まれて消滅する。  
ブリッツアクションで全力回避。そのままルシルへと突撃する。  
突撃の最中にも私の周囲にランサースフィアを8基展開。

「おおおおおッ!」

ステインガー二刀で連続斬り。ルシルをステインガーといつ放たれるか判らないランサー両方に意識を割かないといけない状況に追い込む。

ルシルは必死に斬撃を避け続ける。なら避けられないように、

「ファイア!」

逃げ道を4基のランサーで防ぐ。ルシルが一瞬硬直する。  
その隙を見逃すほど私は間抜けじゃない。ステインガーを十字に振るいながら、残りのランサー4基を射出。

「つぐあああつ」

斬撃は避けられたけど、4基のランサーの直撃に成功。  
よろけるルシルへ左のステインガーを横薙ぎ。ルシルはその一閃を、  
新たに創りだした魔力槍で受け止めた。

「今のは効いたよ……テストメント事件の決戦を思い出す……  
!」

「そうだね。だから今回も私が勝つんだよッ！」

「それは無理だな。あの時は大半の魔術を使えなかったが、今はそうじゃない。真技」

3度目の真技発動宣言。ルシルの足元にアースガルド魔法陣が展開される。

どんな攻撃が判らないから困る。仕方なしにルシルから大きく距離を取る事にした。

“バルディツシュ”・ライオットザンバー・ステインガーを、大剣のライオットザンバー・カラミティへと変形させる。

そしてステンドグラスのフィールドに変化が起きた。

「水!？」

どこからともなく水が溢れてきて、数秒で足首くらいにまで水位が上がってきた。

「大戦当時、水流系という属性を使うのは後にも先にもたった4人だけ。

私、シエファイ、そして、凶狩キョウシュの蒼水ナーティア・ヒルド・ヴァルキユリア、湖麗の妖精ミオ・ランドグリーズ・ヴァルキュリアだな。で、今から発動するのは水流系完全機ナーティアの真技だ・・・」

水がチャプチャプ揺らめきだす。次第に波が生まれて、所々から水柱が立ち昇って竜巻となった。

まさかあの竜巻で攻撃をするの!？ あんなものに呑み込まれたらきつと無事じゃ済まない。

ルシルがスツと左腕を空へと掲げたのを合図としたように水の竜巻

の外側に、水で構成された蛇の様なモノが螺旋を描きながら纏わりつく。

## 旅の鏡

「セインテストオオーーーーーッッ！」

## 守護の拳

シャマル先生の転移魔法・旅の鏡で転送されたザフィーラの奇襲。でも読まれていたようにルシルとザフィーラの間から水柱が噴き上がって壁となり、ザフィーラの攻撃を防いだ。

「これで我を封じたつもりか？ 神器王よっ！」

## 牙狼鋼破陣

ザフィーラの右腕を呑み込んでいた水柱が弾け飛ぶ。ザフィーラの右拳の先端から二の腕まで削岩機のような螺旋状の魔力が纏わりついている。ルシルがそのまま右拳を突き出してきたザフィーラから距離を取ろうとする。

私を、そしてシャマル先生を忘れちゃダメだよ。カラミティで攻撃を加えようとしたところで踏みとどまる。水と電気。誰もが判るこの二つの属性の危険性。急いで“バルディッシュ”を魔力刃無し of 戦斧形態アサルトフォームへと変える。

「引いている、テストアロツサ。この状況でお前の魔法やデバイスは危険だ」

そうか。ルシルは私の攻撃を封じるために……。でも、それはちょっと甘い考え。アサルトフォームでも十分戦えるって事を忘れてるんなら、思い出させてあげる。

ブリッツアクション

「これでも十分！」

++++Sideフェイト ルシル++++

ザフィーラが厄介過ぎる。私の一手一手を潰してくる。

だからプリム（プリメーラの愛称）の真技で一気に決めようとしたんだが、倒し切れなかった。

全ては振り出しに戻り、フェイトのアサルトフォームによる通常打撃、ザフィーラの効果も判らない打撃、そして、一発逆転を行えるシヤマルの旅の鏡、そのすべてに警戒しながら事を進めることに。

「はあああああああッ！」

二人の攻撃を高水圧の壁で防ぐ。そして二人の背後から水の砲撃。水のフィールドを作り、全ての水を攻防に使い敵対者を確実に倒す。これがナーティアの真技・フラット・エンバリア瀑波大帝国だ。戦術としてはカーネルの陸地操作と同じで、水がある限りいつまでも戦える。

そして水は、万物の中で最も流動し、形を変えやすい至高の属性。その分、操作するのにかなり集中力が要る。

水面に両手をつ込み、ただグツと水を掴んで引っ張り上げる。

「ぎゃあっ」「むおっ」

それだけで波が発生する。フェイトとザフィーラは波に足元を掬われ転倒。  
もう一度、ブーツ裏にパチャパチャ当たる水面へと左手を突っ込み、掬うように前方へ振り抜く。  
いくつもの水弾となり、起き上がり途中のフェイトとザフィーラを襲う。が、

### 風の護楯

シャマルの障壁が割って入り、水弾を全て弾き返した。

「これ以上好き勝手させないわよ、セインテスト君！」

もっとも私から離れているシャマルが勇ましく言い放った。  
左右の“クラールヴィント”から伸びる計4つのペンデュラムが高速で飛来。

障壁が消えたと同時に、ザフィーラが突撃してきた。もう一度、押し流してくれる。

両手を突っ込み、術式計算……術式完成。水を掴み引っ張り上げ……られない!?!?

「しまっ……!」

「うおおおおおおおッ!!」

ズドンと腹に入るザフィーラの強烈な拳打に、意識が揺さぶられる。大事なところで術式をミスった。水フィールドの維持だけにして、攻防は扱いやすい別のの属性にしておけばよかった。が、それも後の祭り。ザフィーラは拳を組んで、下あごを打ち上げ

るよつに振り上げてきた。

今ので完全に脳が揺さぶられ、平衡感覚を失ってしまった。だが何とか踏ん張って転倒阻止。

さらにミスに気付く。どうして今までダメージを受けて早々にライフを発動しなかったのか。

ライフがもうない。あと数発、何らかの攻撃を受ければ負ける。

「クラールヴィント、お願い！」

### 戒めの鎖

今ここで使われてほしくない魔法が発動した。

強力な拘束力を有するシャマルの捕獲魔法・戒めの鎖。

シャマルのマシンガントークも苦手だが、この地味に嫌がらせじみた補助魔法の数々も苦手だ。

水のフィールドが消え去っていく。この状況で維持できるほど器用じゃない。

フェイトとザフィーラとシャマルに包囲される。何かをしようものならすぐさま魔法を使うだろう。

「ルシル。どうする、まだやる？」

“バルディッシュ”をハーケンフォームにし、雷撃の刃を突きつけてきた。

結構容赦ないな。だが、それが当然の処置だよ、フェイト。

「私の負けだ。さあ、私のライフをゼロにしてくれ。そうでないと終わらない」

「……判った。少し痛いけど、我慢してね」

## プラズマバレット

フェイトの周囲にスフィアが9つ展開される。

そして、「ファイア」と一発一発、間を開けて、バレットを放ってきた。

その都度に、「痛い」と言う私の心情を察してくれないか？ ひと思いに砲撃で決めてほしい。

こんなイジメみたいな終わり方・・・あんまりだ（泣）。

9つで終わらなかつたため、さらにスフィアを展開して、結局14発目で私のライフがゼロになった。

「この勝負、フェイト・T・ハラオウン、エリオ・モンディアル、騎士シヤマル、騎士ザフィーラの勝利とします！」

セシリスがそう告げたことで、正しく終わりを迎えた。

転送が始まる。バトルフィールドからボードフィールドへ行くために。

視界が白に染まり、目を開けた時には、セシリスとフェンリルの姿は無く、2ndエリアの景色でもなかった。

それはともかくさつきまではボロボロだったのに、ボードフィールドに戻るに完全に回復するんだな。

この仕様は素直にありがたいな。戦いのダメージをここにまで持ってきたくない。

「ここ、まさか3rdエリア・・・？」

私のところに駆け寄ってきたフェイトが辺りを見回す。

カーネルのエリアは夜の遊園地。セシリスのエリアは昼間の遊園地で、今度は夕陽の遊園地だ。間違いなく3つ目のエリアだろう。



にしても、セシリスに文句が言えなかったな。ルールかは知らないが、人を勝手に操作するなど言語道断。途中で自我を取り戻せたから良かったものの。あまり気分は晴れない。

「ねえ、ルシリオン。さつきから人の声がするんだけど・・・」

レヴィが周囲を見回しながら、そう報告してきた。

私も耳を澄ましてみる。しかし聞こえない。「私は聞こえないな」と返す。

「私も聞こえないけど・・・みんなはどう？」

なのはにも聞こえないようだ。なのはの確認によって、聞こえる者と聞こえない者が要ることが判明。

聞こえる者と聞こえない者。それぞれ共通点があった。

「聞こえるのは、ヴィヴィオ、アインハルトちゃん、コロナちゃん、リオちゃん、イクスちゃん」

「うん、微かにだけど聞こえるよ、なのはママ」

「何でしょう？ 会話と言うよりは何か呻いているような・・・？」

「アインハルトさん、怖いこと言わないでくださいいゝ（怯）」

「もしかして透明人間の声かなあ？」

「透明人間、ですか？ 居るのでしたらお会いしてみたいですね」

ヴィヴィオ達はいつもの調子だな。何もおかしなところは無い。

「それに、エリオにキャラもだね」

「はい。大人の様な声と」

「子供の声も聞こえます」

「んで、ヴィータとリインとアギト、ルルーとレヴィも聞こえるようだな」

「なんかイラつくよな、こついの。もっとハッキリしろてえの」

「ちょ、ちょっと怖いかもですね。不思議現象には慣れてるとはいえ」

「こんなんでビビってんなよ、リイン。あたしらは最強のメンバーの中に居るんだぜ」

「アギトの言う通りだよ。ルシルさんはもちろん、なのはさん達も居るんだし」

「そうそう。わたしだって居るんだから、なんにも心配要らないって」

聞こえない者は、ヴィヴィオ達以外。そう、共通点は……

「20歳以上が聞こえず、以下が聞こえる、ということのようだな」

「ちょっと待てよ。あたしだって20歳は軽く超えてんぞ。なのに

なんで聞こえてんだ？」

「それはヴィータの外見が子供だからだろう」

ということだ。子供には聞こえて、大人には聞こえない声。

一体何だ？ 声などは無属性音波系となるが、アンスールの中にその属性を扱う魔術師は居ない。

なら……あ、似たような事が出来る奴が居る。

私の幼馴染で親友、そして戦友でもある男……名は……

「よく来たなっ！ ここは3rdエリアだっ！」

頭上から良く知る声が響いてきた。見上げると、人影が降ってくるのが判る。

ソイツは地面に叩きつけられる前に、ソイツ自身の固有能力によってフワリと浮き、静かに着地した。

「オレがこのエリアマスターだ。名前は、プレンセレリウス・エノール・スヴァルトアールヴヘイム、よろしくなっ！」

「ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜」（後書き）

レヴィ

「そこに居るのに、出番が無いって一番つらい現実だよね」

ルーテシア

「そうだよ。セリフはあったけど、あれだけじゃ……」

ルシル

「おいおい。それを言ったらイクスはどうなるんだ？ 君達以上に  
出番が無いぞ？」

レヴィル

「あ」

ルシル

「それに、ちゃんと安心しろ。次回ははやて率いるチームの出番。  
つまり」

レヴィル

「わたし達にもようやく出番が……！」

ルシル

「ま、レンのエリアだから、一筋縄じゃいかないと思うけどなあ」

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（前書き）

蔵のどこかに埋もれているエコーナイトというPSゲームの探索発掘ついでに、捨てられたと思っていたANSURの設定ノート、最後の一冊を発見。

中2の時、毎日図書館に通って外国語辞書や伝奇を引いていたのが懐かしい。

う〜ん、完結編連載を前にしてこの発見・・・ラッキー

よつこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜

++++Sideレヴィ++++

三つ目のエリアは綺麗な夕陽に染まる遊園地。

新しいエリアに来た事で、体が元に戻ってる、よつしゃあつ！  
で、わたし達は今、このエリアのマスターと対峙していた。

夕陽の所為でハッキリと判らないけど、蒼い長髪をポニーテールにした若い男の人。

服装はルシリオンやカーネルさん達と同じ長衣（色はたぶん深紫）  
にロングコートに編み上げのロングブーツだ。

「オレがこのエリアマスターだ。名前は、プレンセリウス・エ  
ノール・スヴァルトアールヴヘイム、よろしくなっ！」

左手を腰に当てて、右手の親指を自分に向けながら自己紹介したプ  
レンセリウスさん。

ルシリオンが彼に対して「レン、お前が来たか」で、嬉しそうに声  
を弾ませて笑いかける。

「おう、親友！ 随分とハーレムを楽しんでいるみたいじゃん、羨  
ましいね〜」

「アホな事を言うな。とりあえず、お前を倒せばクリアだな」

ルシリオンがいきなりプレンセリウスさんの撃破を宣告、指をポ

キポキ鳴らし始める。

みんなが唾然となる。プレンセレリウスさんも「随分と舐めてくれるじゃないか、ええ？」ってジト目でルシリオンを睨んだ。

「ルシルパパ、もし戦う事になったら、相手はわたし達になっちゃうんだけど・・・」

ヴィヴィオにそう言われたルシリオンは、「おそらくヴィヴィオ達でも勝てると思うが」って信じられない事を言った。

ヴィヴィオ達でも勝てるアンスールの魔術師？ 今までの戦いを見たら、かなりの実力者でも束になっても勝てないって感じなのに。

「おーいおいおいおい。もしかしてその女の子でもオレに勝てるって思っているのか？」

そこまで弱くないぞ、オレ。確かにアンスールの中じゃ一番敗北数が多いけどさ」

これまたとんでも発言。ルシリオンとプレンセレリウスさんの二人だけのやり取りを眺めながら、わたし達は二人から数歩引いて、

「ルシルさんの仰る通りでしたら、ここは戦闘してクリア、という選択肢を取りますか？」

うわあ、あのイクスが珍しく力押しな意見を出してきたよ。

スバルも「イクス、結構大胆な考えを出すねえ」ってビックリしてるし。

「なのはさん達は、ルシルさんとシャルの記憶を見たんですよね？ プレンセレリウスさんの実力、というかどんな魔術を使っていたんですか？」

ルーテシアが、ルシリオンとシャルロッテの記憶を観たのはさん達を見回す。

わたしとルーテシアとアギトは、記憶を見ることなく海上隔離施設に戻ったから、ルシリオンとシャルロッテがどんな風に生きて死んだのか知らない。

ここでまたアインハルト達が首を傾げる。もうルシリオンからじゃなくても、事情を知るのはさん達が話せばいいのに。

「どうだったっけ？ どのシーンも衝撃的だったからよく憶えてない、かも？」

「私もやなあ。ルシル君とシャルちゃんの事で、プレンセレリウスさんの事はあんま憶えてないわ」

なのはさんとはやてさんは頭を捻って「うーん」と唸る。

フェイトさんも「ルシルの事でいっぱいだったからほとんど憶えてない・・・」と言って頂垂れる。

そこに、ティアナが拳手して「プレンセレリウスさんって、結構謎だったのは憶えてますよ」と言った。

キャラも続いて、「そうですね。何か見えない力を使って、戦っていた記憶があります」なんて、謎が深まる事ばかり出てくるなあ。

「つうか、プレンセレリウスさんってさ、情報を集めるのを仕事にしてなかったか？」

ヴィータさんがそう言ったことで、なのはさん達が「そう。そうだったよね」って賛同してく。

結局は謎。でも情報集能力には長けてるみたい。まあそれが直接的な戦力になるかはどうかは別だけど。



話が一段落したのか、ルシリオンが「そろそろ始めるか」って、プレンセレリウスさんを連れて歩いてきた。

「セシリスから話は聞いてる。三つのチームに分けて進めてるんだってな。」

えーっと、次はどのチームがサイコロを振るんだ？」

はやてさんが「あ、私らや。プレンセレリウスさん、今度は私が振ることになってるんやけど」と挙手。

プレンセレリウスさんが「お、了解。いやあ、君もまた可愛いなあ」って、はやてさんに近づいて褒める。

はやてさんは嬉しそうだけど、でも苦笑して、顔を少し後ろに逸らす。

「おおきにな、プレンセレリウスさん。でも、ちょーっと近いかもしれないから・・・」

「いくら英雄とはいえ、主はやてに手を出すのは許容できんな」

「そついうこつた。顔は良いけど、それだけじゃはやてと釣り合わねえぞ」

（元の姿に戻った）シグナムさんの“レヴァンティン”と、ヴィータさんの“グラーフアイゼン”が、はやてさんとプレンセレリウスさんの間に割って入る。

「そんなつもりは始めからないさ。女性の容姿を褒めるのは男として当然だろ。」

あ、だからってお世辞じゃなく、可愛いと思ってるってのは本気で本当だから」

「え、あ、ありがとな。なんや、そこまで褒められるんは初めてやから照れるわ」

本気で頬を赤らめて照れるはやてさん。そしてシグナムさんとヴィータさんの視線は、プレンセレリウスさんの親友っていうルシリオンに向けられる。

「ちょっと待て。そこでどうして私に非難の視線を向けるんだ？」

「「なんとなくだ」」

「このスンベルに来てからというものの、精神ダメージが蓄積しているきがしてならない」

ルシリオン・・・頑張つて！ そんなやり取りを終えて、ようやく本題に入る。

プレンセレリウスさんからサイコロを受け取ったはやてさんが「出来るだけ簡単なお題が出ますように」って祈りながら、サイコロを放り投げた。

コキンと綺麗な音を立てて地面に落ちて、コロコロ転がっていく。じいーとサイコロを眺める。サイコロが止まって、その数字をわたし達に晒した。

「13、だな。それじゃあ、はやてちゃんだっけか？ はやてちゃんのチームは13マス目へどうぞー！」

「馴れ馴れしいぞ、レン。すまないな、はやて。シグナム達も。」

コイツはどうも子供の頃から女の子とすぐ仲良くなるうとする奴だから・・・気を悪くしたら謝る」

ルシリオンがプレンセレリウスさんの襟首をグツと引っ張って、はやてさんから離していく。

プレンセレリウスさんは「友達になろうとして何が悪いんだよ。疚しい気持ちは無いって知ってるだろ」と、体を捻って抜け出す。

「気にせんでええよ、ルシル君。じゃ、赤チーム、行くよーっ！」

わたしも赤チームだから、「ルーテシア、イクス、行こう」って、二人を連れてはやてさんの元に向かう。

なのはさん達に「行ってらっしゃい、頑張ってね」と見送られて、夕陽に照らされるマスを歩く。

そして13マス目に到着。ルシリオンのお姉さんらしいアナウンスが流れる。

『あなたは肝試し目的で大きな廃屋敷へ来ちゃったよ。』

何も無くて、さあ帰ろうと屋敷を出ようとしたけど出られない。閉じ込められちゃった？

実は居た屋敷の主を捜して見つけ、屋敷から出してもらおうっ、フアイトおっ、エスケープ、オオー！」

肝試し？ 聞いた事がない単語だけど・・・？ 廃屋敷で何をやるの？

ルーテシアもイクスも「????」って首を傾げてる。アギトは知ってるみたいで、「ああ」とか呆れた感じ。

「き、肝試し、ですか・・・？ 嫌ですう・・・」

ラインが怯え始めた。怯えるようなことなのかなあ？

疑問が晴れない中、転送が始まる。視界が白に染まって、視界がク

リアになったら、そこは豪華な造りをした屋敷の中。  
床にはレッドカーペットが敷かれてるし、壁にも絵画が飾られてる。

「それにしても暗いなあ。どっかに明かりとか」

ピカツと閉じられたカーテンの向こう側から激しい雷光。

雷光は廊下を照らして、遅れてゴロゴロと轟音が。

そこでようやく気付いた。あれ？ あれれ？ もしかして、わたし一人しかいない・・・？

嘘、嘘だよな？ 肝試しっていうのが判らないこの現状で一人つきりってヤバ過ぎる！

連絡を取り合いたいたために念話・・・って、ノイズが酷くて誰にも念話を通らない！

最悪すぎるよ、この状況。こんな事なら肝試しって何なのか聞いておけばよかった。

「ルーテシア！ アギト！ はやてさん！ シグナムさん！ リイン！ イクス！」

チームのみんなの名前を呼びながら、わたしは搜索に移った。

途中で電灯のスイッチと思しきモノをカチカチ押すけど、電気は点きそうにない。

とりあえず雷光を頼りにして、近くにある部屋から捜してみようと思う。

豪華な屋敷らしくなんらかの様子が彫られた木製のデザインドアで、金のプレートにはゲストルームって彫られてる。

ギギイと軋みを上げる扉を開けて入る。

「うっわあ、結構ボロボロだなあ。床が軋むし穴も開いてるよ・・・」

「

穴に足を取られないよう、床を踏みぬかないように探索。  
見れば家具も天井のシャンデリアもボロボロだし、本当に廃屋だ。  
この部屋の明かりのスイッチをカチカチ押しまくるけど、やっぱり  
点かない。  
嘆息しつつ、部屋の隅に置かれた真ん中でV字に折れてるベッドに  
近づくと、  
よく見るとベッドの上にはアウトフレーム状態（子供の姿）アギト  
が横たわっていた。

「アギト！」

アギトに駆け寄って、肩を揺すりつつ名前を呼び続ける。  
すると「うあ？ レヴィ・・・？」ってすぐに目を覚ましてくれ  
た。

安堵の溜息を吐いて、「アギト、何でまたこんなところで寝てんの？」  
と訊いてみる。

「全然憶えてない。転送されてからレヴィに起こされるまでずっと  
寝てたんだと思う」

意識を失った状態でここに転送されてきたって事、かな・・・？  
とりあえずここから出て、みんなを捜そうと提案しようとした時、  
「アゝアゝ・・・アゝアゝアゝ・・・アゝアゝ」って苦しみに呻  
く人の声が聞こえてきた。

「うおっ？ マジで出るのかよ、アレ！」

アギトの言うアレって言うのは解らないけど、ともかく「アストラ  
イアー、コンバットで起動」と、防護服“モード・コンバット”に



ギリギリと頭を締めつけられて「痛ッ」と漏らす。ていうか放せ、この！  
ジタバタ暴れるけど、どの攻撃も体をすり抜けてダメージが入ってない。

「テメエツ！ レヴィを放せよっ！」

ブレネン・クリューガー

アギトの炎弾が幽霊に殺到。でも全部すり抜けて、部屋を破壊するだけに留まった。  
うっん、爆風によってわたしは幽霊から抜け出す事が出来た。

「退くよアギト！ 攻撃が通用しないなら逃げるしかない！」

「ああ！」

幽霊の呻き声を背中越しに聞きながら部屋から脱出。  
えっと、わたしが来たのは左からだったから今度は右へ行こう。  
少し走ってから、さっき出てきたドアを見やる。幽霊は追って来ない。  
でもあの一体だけと限らないから油断は出来ない。

「ほらっ、早速別のが来たし！」

「おゝおゝあゝあゝあゝおゝおゝ」

執事服の幽霊さんがいらっしやいました。

もちろん半透明、しかも唸るチェンソー持ってるし。

執事ならもつと相応しい得物があるよね！？ たとえば・・・銀の

トレイとか！

そんな執事幽霊は僅かに浮遊しながら近づいて来る。

「くそつ、逃げるしかねえっていうのが気に入らねえっ！」

「そうは言っても攻撃が通用しないんじゃないよね・・・」

呻き声を漏らしながら追いかけてくる執事に意識を向けながら、どうにか出来ないか考える。

解決策も出ないまま走り続け、いよいよ廊下の端が見えてきた。行き止まりだったらシャレにならないんだけど。ううん、きつとあそこは角で、あの角を曲がれば廊下が続いているはず。きつとそつだ。さあ端に到着！

「「行き止まりかよっ！！」」

端に到着してみれば、なんと悲しいかな行き止まりでござる。ギユインギユインとチェーンソーの唸りが。振り返れば、執事が胸を掻き毟りながら「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ」と呻き続けて近づいて来る。

どうする。逃げ場はなし。窓から飛び降りるって選択肢はあるけど、閉じ込められたって事からして、きつと開かない。

あとは、わたし達と執事の間にある扉に入るか、だ。冷静に考えると、顔グチャ幽霊は、部屋を出て追いかけて来なかった。

たぶん幽霊の行動範囲がある一定に決められているんだ。顔グチャはゲストルーム、そして執事はこの廊下。

「アギト、あの扉に入るよ、ついて来て」



「はあ？　幽霊なんだからすり抜けてくるって！　部屋じゃ逃げ場  
ねえぞ！」

「いいからっ。ほら、行くよっ！」

アギトの左手を取って、ドアへとダッシュ。  
わたし一人なら陸戦高速移動魔法・瞬走壱式で行くけど、アギトが  
居る以上は走らないと。

あともう少しで、というところで、執事がスゥーと消えていった。

「あれ？」「

速度を落として歩く。キョロキョロと周囲を見回すけど、執事の姿  
はどこにもない。

アギトが「何だか知らねえけど、今の内に逃げようぜ」って、廊下  
の先を指す。

わたしは「うん」って頷いて、来た道に戻ろうとしたその時、

「あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　ツツ！！」

「「ぎゃああああああああっ！！？」」「

すぐ後ろからさっきの執事が現れて、耳元で気色悪い呻き声を叫ば  
れた。

咄嗟にアギトの肩に腕を回して前方にヘッドスライディング。  
その行動は正解だった。わたしとアギトのちょうど腰があった場所  
を、執事がチェインソーで薙いでいた。

好き勝手やってくれるじゃん、執事のクセして。そしてまた執事が  
スゥーと消えた。

「もうその手には引つ掛からないって教えてあげる！」

アギトを脇に抱え上げて、一目散に逃げる。

すると、廊下に何十枚つてある窓がパパパパパン！と連続で割れていく。

「きゃっ?」「うおいつ?」

窓の外にはさっきの執事とはまた別の幽霊、大きなハサミを持った庭師（首が異様に傾いてる）が宙に浮いていて、声には出てないけど肩を上下に大笑いしてやがるよこの野郎。  
睨みつけると、ソイツは外の暗闇の中に消えていって……

「がああああああああつ！」

チェーンソー執事がチェーンソーを振り下ろす体勢で目の前に現れた。

やばい、避けきれない。最悪を覚悟したその時、パツと辺りが明るくなった。

でも闇に慣れていた所為で眩し過ぎ。そんな中でわたしは見た。

明かりが付いたと同時にチェーンソー執事が明かりを嫌うように消えていったのを。

「明かりの中じゃ存在できないんだ……」

「明かりのスイッチを押してもダメですね。点きません」

カチカチとスイッチを押しますが、廊下の天井に釣らされてます電灯に明かりが点りません。

「あう〜、もう限界ですう〜」

リンさんはもう今にも泣いてしまいそうです。

転送の光が消え、気が付けば、わたしはリンさんと二人きりでした。

「雷が唯一の明かりとなっていていますが、視力を悪くしそうですね」

屋敷の外は悪天候、雷が鳴りつぱなしです。

ですがそのおかげで廊下は雷光で明るくて、暗さはあまり感じられません。

ですけど雷が鳴る度に「ひゃう！」とリンさんが小さな悲鳴を上げて、わたしの左腕にしがみ付いてきます。

いきなり力強く引つ張られるので転びそうになってしまいます。ですけど、なんとか転ばないように耐えます。

それがちよつと大変ですね。

「リンさん、大丈夫ですか？ 雷くらい平気だと思っていましたが」

雷光や雷鳴という自然現象はもちろんミッドにもありますし、フェイトさんの電気変換魔法と触れ合ってきた時間からして慣れているものだと思っていましたから、雷に怯えるとは思いませんでした。

「違つんですよ、イクス。ただの雷ならわたしも全然怖くないです。でもこの雰囲気の中での雷はどうも苦手です。うう、こんなお題・・・あんまりです。ひゃあっ！」

バキバキ！と近くに雷が落ちたようで大きな音が轟き、リインさんが両手で耳を押さえて蹲ってしまいました。

リインさんの言うこの雰囲気、というのはよく解りませんでした。気にならない雷と苦手な雷があるようです。

「では手を繋ぎましょう。そうすれば少しは気が紛れるはずですから」

わたしの姿はまだ幼さの残る子供ですけど、でも実はとっても長生きしてます。

聖王オリヴィエ陛下や霸王イングヴァルト陛下よりずっと前の時代からですね。

とは言え、神器王ルシオン陛下たちアンスールやシャルからすればずっと子供ですけど。

少し逸れましたがつまり、ちょっとお姉さんぶってみたかったりするのです。

リインさんはわたしの腕を掴んでいた両手を離して、私が差し出した左手を右手で握り返してくれました。

「ありがとうございます、イクス。やっぱり誰かと触れ合っていれば恐怖が和らぎます」

リインさんがホッと安堵の息。リラックスできたようで、医者を目指す身として、そして友達として嬉しい事です。

リインさんと手を繋いで、はやくさん達を捜し合流するために、ひとまず廊下を歩いて移動を続けることになりました。

念話の通じない中（たぶん何らかの障害が掛けられているのかと）、

「はやてちゃーん！ シグナムーっ！ アギトーっ！」

「ルーテシアさーん！ レヴィさーんっ！」

声を出して呼びかけながらひたすら廊下を進みます。

「あ、階段ですっ……、えっと、下か上か……どっちに行きましよう？」

豪華な造りをしている階段ホールに辿り着きました。

ラインさんに訊ねられて、考えているところに、雷が突然止んで辺りが闇に包まれた。

わたしとラインさんは無意識に「きゃっ？」と小さな悲鳴を上げて、お互い握っている手に力を込めます。

「あ、明かり、明かりはどこですかっ？ これ、このパターンはデンジャー過ぎます！」

「お、落ち着いてください、ラインさん！ 灯りは点きませんよっ」

何に恐れているのか解りませんが、かなり慌て始めました。

目が慣れるまでしばらくかかりそうですし、この暗闇が原因だとすれば……。

わたしはベルカ魔法陣を展開します。魔法陣から漏れるわたしの魔力光フォゲットミノーットの光を明かりとしました。

こういう時には本当に便利ですよ、魔法陣の展開。

「ああ、そうか。魔法陣を灯り代わり……にすれば……ひっ！

出・・・！」

リンさんの両目が限界にまで開いて、口をパクパクと開閉で？ 続きは何でしょう？ リンさんは震えながら、右の人差し指で階段を指しました。

人差し指が指している方へと視線を移動。？？ シックなドレス姿の女性が居ますね。

階下から音もなくわたし達の居る階へと上ってこようとしています。ふと違和感が。あの方、半透明ですねえ。何かの魔法でしょうか？ しかも白目をむいてますし、それに歩いているのではなく浮いて移動しています。

「オ〴〴オ〴〴オ〴〴ア〴〴ア〴〴ア〴〴アッ！！」

「ひいやあああああああッ！！」

半透明の女性があげた苦悶の悲鳴を聞いたリンさんが大絶叫。キーンと耳鳴り。あの、リンさん、驚いたのは解りますけど、ここまで絶叫するようなことでは・・・って。

「出た出た出た出た出ちゃいましたああー！！！！ッッ！！」

リンさん、半透明の女性から逃げるように踵を返して全力ダッシュ。

手が繋がれたまま、しかも放して頂けないので引張られることに転んでしまえば引き摺られること確実と判断。必死に足を動かして走ります。

「あのっ、リンさん！ 出来ればもう少しペースダウンを！ わたし、もう体力が・・・！」

20mと全力で走ったところで息切れ。もつと体力をつけておけばよかったと後悔。

予定の無い日は学校と治癒魔法の勉強に時間を割いていますし。

一応、時々はヴィヴィオ達に付き合っただけで体を動かしてはいますが、所詮は本格派とエクササイズ派。

わたしの体力はみなさんに比べればこのようなちっぽけなモノですよ、はあ。

「だ、ダメですダメですよ、イクス！ 捕まったら憑依されたり操られたり呪われたり最悪死んでしまったりするかもしれないんですよ！？って、追いかけてきてるっ！」

リンさんはよほど混乱しているのか、滝のように涙を流して目がグルグル回ってしまってます。

必死に走っている中で背後を見ますと、先程の半透明の女性が自分の胸を掻き毟りながら、「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア」と呻き声を上げつつ追って来ていました。

廊下を走っていて、それは突然起こりました。リンさんが目の前から消えたのです。

正確には床を踏み抜いて腰の辺りまで落ちていました。

すると当然わたしを引っ張っていましたがリンさんが止まったことで、

「きゃあっ！」

走っていた勢いを急になくすことは出来ず、繋がれた手が伸ばしきられて急停止する事になってしまい転倒してしまいました。

リンさんが「ごめんさいです。でも助けてください！」と大パニックを起こしながら抜けだそうと暴れ出します。

わたしはリンさんの両手を取って引つ張り上げようと思いますが、腰の辺りまで落ちてしまっている事でなかなか救出する事が出来ません。

「来たですうー！ー！ー！ー！」

徐々に迫って来ている女性を見て、リンさんが涙を流しながら絶叫。

仕方がありません。大切な友人のため、首から下げているクリスタルの鍵を手に取ります。

「いきますよ、ティファ」

J a w o h l , M u t t e r

鍵型のデバイス“ティファレット”から 了解です、母上 と返答。

はやてさんとリンさんとルーテシアさんの協力の下、一生懸命作ったデバイスです。

名前の由来は、再誕神話・・・ルシルさんとシャルの生きていた時代に登場した医者の名前です。

アンスールの風迅王イヴィリシリア陛下と戦い敗れ、瀕死の重体となったシャルを救った医療騎士ティファレット。

わたしを目覚めさせてくれた恩人シャルを救った恩人、それはつまりわたしの恩人でもある、なんて勝手に思っています。

「彼の者を捕らえて。穏やかなる風の縛鎖よ」

ブリーゼ・ケツテ

空気圧を魔力で操作することで生み出す、わたしの魔力光に輝くそ

リーゼ・ケツテ



よ風の鎖。

いつか現場に出て、暴れる患者さんを押さえる事を想定して組んだものです。

女性の足元に展開させたベルカ魔法陣から出現させたその風の鎖で女性を拘束しようと試みましたが、「あれ？」と首を傾げる事に風の鎖は女性をすり抜けてしまい、拘束することができませんでした。

「何やってるんですかイクス!？」

「え？ あの、リインさんは女性が近づくのがお嫌のようですし、女性の方も苦しんでいらっしやるようですので、一度拘束して、治療魔法をお掛けしようかと・・・」

「そんなの無理ですよっ！ アレは幽霊、ゴースト、ゲシュペンスト！ 実体の無いオバケさんですよっ！」

リインさんにそう言われて、ようやく理解出来ました。

そうですね、半透明ですし実体ではないですね。あと、幽霊って初めて見ました。

「ちょっと感動しました」

「感動!? ありえねえですよっ！ って、そう言ってる間にそこまで来てるですよーっ!!」

リインさんの恐怖メーターが振りきれってしまったようで、頭を抱えて髪を振り回し始めました。

わたしとしては今の髪を振り回すリインさんの方が怖いです。

「それ以上近づかないでください！」

「イクス!?!」

リインさんと女性の間に割って入り、女性を睨みつける。

わたしの首へ伸ばされる半透明な両手。おそらく障壁を張っても通り抜けられるのでしょうかね。

指先が首に触れる、というところで、廊下の電灯がパツと灯りました。

突然の発光は闇に慣れていたため眩し過ぎて目を閉じます。

「あれ・・・?」「」

次に目を開けた時、わたしの前に女性の姿はありませんでした。

「どうしてでしょうか?」と独り言を漏らすと、リインさんが「電気が点いたから、でしょうか・・・」と、大きく安堵の溜息を吐きました。

とりあえずリインさんを引っ張り上げましょう。リインさんの両手首を掴み、「んんーっ!」と一生懸命引っ張る。

なんとかリインさんの救出に成功。廊下に座り込んで、金のプレートに図書室と彫られた大きな両開き扉の前で休憩に入ります。

十十Sideイクス ルーテシア十十

「あかんアカン阿寒あかんアカア~~~~~ンツ!」

「幽霊つてホントに厄介なやつなんですねぇ~~~~~っ!」

私とはやてさんは、今現在暗闇に包まれた廊下を全力疾走中。  
何故かと言うとそれは・・・雷が止んだと同時に「うふふふふ」  
って女の人の笑い声が聞こえてきて、剣を持った半透明なメイドさ  
んが現れて、しかも襲ってきたから。  
メイドが剣を持って追いかけてくるってありえない！

？ ？ ？ 回想です？ ？ ？

「じじは・・・きゃっ」

転送された直後に轟いた雷に悲鳴を上げた。

今のは心臓に悪い。ドキドキとつるさい心臓が落ち着くのを待って  
いるとまた雷が轟いた。

そして気付く。今、この場所には私しかいないって事に。

こんな何が起こるかも判らないところで独りぼっちはキツ過ぎっ！

『レヴィ！ アギト！ はやてさん！ リン！ イクス！』

最悪は立て続けに。念話がみんなに通らない。

また雷が轟く。一瞬、今居る廊下と思しきところの先、人影っぽい  
のが見えた。

よく目を凝らしてみるけど、そんな人影は無い。白い雷光の中で見  
間違い・・・？

ふと壁を見れば、廊下の天井にある電灯を点けるスイッチを発見。  
明かり確保のために押すけど、壊れているのか元々電気が通ってい  
ないのか点かない。

「とりあえずみんなを捜さないと・・・」

雷は止まる事を知らないで鳴り続けて、でもそれが明かりになるから助かりはする。

壁に手をついてゆっくりと、何故か足音を立てないように歩いて進む。

そしてある扉の前を過ぎた時、たった今通り過ぎた扉が勢いよくバン！と開いた。

「っ~~~~~~~~!!!!」

声にならない悲鳴を上げる。しかも肩にポンって手を置かれた。バツと振り返ると、そこに居たのは・・・

「ご、ごめんな、ルールー。驚かせてしもうたな」

「はやてさん」

騎士甲冑のままのはやてさんだった。

緊張の糸の切れて、その場に力無くへたり込む。

はやてさんが「うわぁ、ホンマにごめん！最初に声をかければよかったなあ」って、何度も謝ってきてくれた。

声より先ずは扉をもっとゆっくり開けてほしかった。

私は「気にしないでください、はやてさん」と立ち上がる。

「それよりもはやてさんも一人なんですか？」

「うん。気が付いたらこの部屋のベッドで眠ってな。」

一人やっつてことに気付いて焦って出てきたら、ルールーが居ったって感じやなあ」



だけではやてさんのフワリと翻っていた騎士甲冑のオーバースカ  
トがスッパリ切られてビツクリ。

「うっそ・・・」

防護服ってそう簡単に破壊されるようなモノじゃないよ？

これはまずいつて戦慄。防護服の防御力がまるで紙のようだ。

メイドさんはまだ首を掻きながら剣を振るってきて、また衝撃  
波を放ってきた。

「ルルー！」

「はいつ！」

防護服がダメなら、きっと防御魔法も貫通するはず。

これはもう逃げに徹するしかない。踵を返して、それはもう記録が  
出るような速さでダッシュ。

けど衝撃波の速度はそれ以上で、私とはやてさんの間を通過してい  
った。

「防御がダメでも攻撃はどうなんやる!？」

「やってみますかっ！」

ブラッディダガー

トードスドルヒ

私とはやてさんが展開したのは高速射撃の短剣、計40。

チラッと振り向いて追いかけて来ているの確認。そして一斉に射

出。

40のダガーがメイドさんに当た・・・らなかつた！

すり抜けたよ、全部！ はやてさんが「やつぱアカン！ さすが幽霊クオリティ！」って、気になる単語を叫びながらダツシユ続行。

「思い出したわっ！ プレンセレリウスさんの魔術は幽霊を操るってゆうやつやつ！」

「幽霊を操る！？ アンスールのメンバーってそんなことも出来るんですかっ！？」

幽霊を操るなんて、魔術師恐るべし。

次元世界の主要世界の中じゃ幽霊って言うのは所詮は噂の域を出ず、ハッキリとは信じられていない。

だけど、辺境世界とかじゃ結構ポピュラーで、幽霊の存在を信じる人も居る。

私も信じている側、というかルシオンさんとシャルロットの“システム律の守護神”、それにレヴィも今はこうして生きているけど、元々は“レヴィヤタン許されざる嫉妬”っていう一種の亡霊だった娘と出逢っているから。

だから信じられる。幽霊っていう超常現象を。

「たぶんこの屋敷の主ゆうんはプレンセレリウスさんの事や！」

「プレンセレリウスさんを捜しだせばクリアって事で　っ！？」

目的がハッキリしたところで、衝撃波が私の右腕をバツサリ通過した。

グラッと視界が揺れる。はやてさんは私の右腕が斬られた事に気付いて「ルールー！」って駆け寄って来てくれた。

「大丈夫かルーラー！ ケガはっ！？」

「うくっ……って、あれ？ 全然痛くない……？」

二人して私の右腕をジツと眺める。けれど傷一つ負ってない。

今のは幻覚？ 斬られたように見えただけ……？

だけどその考えは間違ってた。斬られた二の腕部分の防護服が魔力に還元されて消滅した。

でも傷は無い。ということは……

「防護服だけ破壊して、人体にはなんにも影響が無いゆうことか」

「それって、結構まずいですよね……」

「そうやな。場合によっては裸にされるゆうことや」

血の気が引く。幽霊の攻撃で裸にされる……い、嫌過ぎる！

バツとメイドさんの方に振り向く。けどその姿はどこにもなかった。私に攻撃を加えてから居なくなっていたみたい。

「と、とりあえずシグナム達と合流や！」

「は、はいっ！」

立ち上がってこの場から離れようとした時、また「うふふふふふ」って笑い声が。

そっちを見ると、さっきの脱がし屋メイドが出てきた。

考えることは何も無い。ただひたすら逃げる、もうそれだけ。

それからひたすら逃げて、その間に私もはやてさんもいるんな所が



斬られた。

なんとか胴体を斬られずに済ませているから裸にはなっていない。  
消えては出てきて衝撃波で避け、消えては出てきて衝撃波で避け、  
を繰り返す。

? ? ? 回想終わりです ? ? ?

「うふふふふ」

「「また出たああーッ!」」

今度は向かおうとしていた先から出てきた。

キキィとブレーキをかけて急停止、反転しようとしたところでパ  
ッと明るくなる。

「「眩しっ!」」

突然の明かりに慣れるまで手を目の上に翳して、メイドさんから逃  
げようとしたところで気付いた。

「メイドが居らん、消えとる・・・」ってはやてさんが周囲を見回  
して、私も見回すけどどこにも居ない。

「「どうやら電気が点くとアカンようやな」

「「幽霊ってそんなモノでしたっけ・・・?」

とりあえず助かった事に安堵の溜息を盛大に吐く。

この屋敷に転送されてからというものの、思念通話は通じんし亡霊がよく出る。

単独でこの暗闇に包まれた屋敷の部屋という部屋を探索したことで、亡霊との遭遇率が異様に高かった。

こちらの攻撃は無効、しかし亡霊の攻撃は有効で、しかも防御をすり抜ける。

それについては大した問題ではなかった。単純に回避すればいいだけの事だ、

唯一気に入らなかったのは、子供の亡霊に武器を持たせ襲いかからせるというものだ。

「主はやて達はおそらく大丈夫だろうが、リインは怖がっているやもしれんな」

海鳴市で過ごしていた頃、主はやてと御友人達が観賞していたホラ

ー映画やゲームを見て、リインは泣きっぱなしだったからな。

それからというものの、こういう如何にもが苦手となってしまっている。

「む。ここは……三階配電室……？」

ウロウロと探索して辿り着いたのは、金プレートに三階配電室と彫られた鉄扉。

配電室という事はこの暗闇をどうにかする事が出来るはずだ。

不快な金属音を立てる鉄扉を開け、部屋に入った直後、鉄扉が勢いよく閉じた。

「があ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、っ!!」

作業服らしき衣服を纏った亡霊が現れた。

チツ、こんな大して広くない部屋では逃げ場がない。

亡霊の攻撃を受けてどうという影響があるのか判らん以上、あまり受けたくはない。

亡霊は呻き声を上げ、体を前後に大きく振りながら近づいて来て、突然飛びかかってきた。

横っ跳びで回避し壁に背を預けた。と、カチツと明かりのスイッチが押される。

当然点かない。ここに来るまでにいくつもスイッチを押してきたからな、判っている。

「とにかく配電盤を操作し明かりを点けよう……!」

レバーとスイッチがある古びた金属の装置を見やる。

もう一度飛びかかってきた亡霊をやり過ごし装置へと飛び付き、レバーを降ろしスイッチを押した。

操作方法が正しかったようで、この部屋に明かりが点く。

「亡霊が消えた・・・? そっか、明かりの中では存在できないのか・・・」

亡霊の姿が消えてきた。それで理解した。

この明かりこそが唯一の対手段なのだ。

部屋が明るくなったことで、壁に貼られた屋敷の見取り図に気付いた。

「地上四階地下一階、か。今居るのは三階で・・・ん?」

見取り図の南館、北館、西館、そして私の居る中央館に点在する点。それが動いているのが判った。なんだ？と考え込む前に解った。中央館にある点の一つ。場所は、今私の居る三階配電室。そこにある点は動かない。

そして別館にある点はどれも二つ一組。つまり、

「この点は、我らの現在位置を示すものなのか・・・！」

胸の内に安堵が広がる。主はさて達は単独ではなく二人一組で行動している。

私のように一人でなくよかった。それが判っただけでも大収穫、ゆえに意識をもう切り替える。

見取り図を見れば、この屋敷は大きく四つのブロックに分かれている。

私の居る三階配電室は中央館。図書館などの施設がある南館。

使用人寮のある北館。客人を招くゲストルームが密集している西館。

見取り図を見る限り、かなり巨大な屋敷のようだ。探索に苦勞するわけだ。

「屋敷の主が居るとすれば・・・中央館の四階、館主室。この上か・・・！」

頭上を見上げる。待っている、館主とやら。

とその前に、四階配電室の場所を確認しておこう。

おそらく四階も明かりが点いていないだろうからな。

まずは四階配電室を目指そう。主はさて達がいつ中央館の四階に来てもいいように。



「ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜」（後書き）

レヴィ

「やっと出番！ しかも結構喋ったよっ！」

ルーテシア

「私も いやあ、今回が途中で終わったっていう事は、次回も出番があるって事だね」

レヴィ

「もうこのお題のまま最終話まで行っちゃえばいいのに」

ルーテシア

「それはちよつと遠慮かな。さて、アンスールのメンバーもついに三人目。」

幽霊を操るっていつかなり特殊な魔術師、プレゼレリウスさん」

レン

「よっ。呼ばれた気がしたから来たけど、いいんだよね？」

ルーテシア

「どうぞどうぞ。じゃあ自己紹介をお願いしますっ」

レン

「ん、おう。あー、アースガルド同盟軍・情報部官及びステア参謀補佐。」

で、アンスールの一人、冥祭司プレンセレリウス・エノール・スヴ  
アルトアールヴヘイムだ。

レンって呼んでくれ。プレンセレリウスなんて長いからさ」

レヴィ

「オツケー。じゃあ、レンは幽霊を操る魔術師らしいけど・・・」

レン

「正確には魔術じゃなくて固有能力だな。霊媒つつ固有能力者な  
んだ、オレ。

前線で戦死した戦友から情報を聞きだしたり、また幽霊を前線の敵  
陣に飛ばして情報操作させたりと、後衛向きの能力なんだよ」

ルーテシア

「ああ、だからアンスールの中で一番負けてるって・・・あつ」

レン

「いいさ、気にするな（涙）。事実だし。雑兵（SSSランク）程  
度なら幽霊を憑依させたりして同士討ちさせたりできるんだが、主  
力級にはあんま通用しないんだよな」

レヴィ

「あ、質問。レンってどういった戦い方するの？ もっと詳しく教  
えて〜？」

レン

「おっと、そいつは秘密だ。それは、オレと戦う時に実際に体験し  
てくれ」

レヴィール

(戦う事がもう確定してる……)

レン

「というわけで、今回はここまで。次回でまた会おうぜ」

レヴィル

「勝手にコーナー終わらされた!？」



よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（前書き）

活動報告にも書いたように、動画投稿サイト（YouTube）に馬鹿みたいに動画（のイメージBGMなど）をアップロードしたり、新人に仕事を教えたり、完結編データを消されてブツンしたり、と色々問題が発生していて更新が遅れてしまいました。

V S 冥祭司プレゼリウス戦イメージBGM

E C H O N I G H T # 2 眠りの支配者『Real Intent

i o n  
』

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜

++++Sideアギト++++

幽霊の恐怖・・・いやいや、あたしは何にも怖くねえっ！

えっと、幽霊が出てきた驚き・・・そう、驚きから解放されて安堵してることだ

だっていうのに、「やっぱり念話は通じないね。しょうがない。探索再開するよ、アギト」ってレヴィはサクサク進もうとする。

本当はもうちょっと休みたかったけど、ルーとマイスター、特にリンとイクスが心配だから、んなこと言ってられねえ。

「シグナムはともかくルー達が大変な目に遭ってるかもしれないしな」

「いやあ、はやてさんも十分凄いから問題ないかも。

というか、わたしやアギトのように2人1組で合流してそうじゃん」

「あんなん偶然だろ？」

「うーん、推測になっちゃうけどさ、この屋敷って四つのエリアに分かれてるでしょ？」

2人1組って分けたら、ちょうど4つのチームになるんだよ。

ま、一人溢れるけど、それがシグナムさんだったらいいなあ、みたいな？」

「そんな希望的臆測・・・でも、そうだったらいいよな」

そんな事を言い合いながら立ち上がった、ルー達が居ないか搜索再開。

一つ一つ部屋の扉を開けて、電気が点いてなかったら幽霊出現の前に即スイッチ押し、つてのを繰り返す。

「あ、ちよつと待つて。この屋敷の見取り図っばいのが貼られてある！」

その内の一つの部屋の明かりを点けた時、レヴィが部屋の奥に突撃。よく見えたなあとか思いながら続く。レヴィが「ふむふむ」つて見取り図を眺めながら何度も頷く。

あたしも見取り図を見て、この屋敷の全体図をようやく把握する事が出来た。

「てかさ、見取り図のこの点つてなんだ？ 動いてるように見えるんだけど」

見取り図には七つの点がある。ただそれだけなら大して気にならない。

でも動いてるんだよなあ、どう見ても。レヴィも確認して「おお、ホントだ」つて右人差し指でチョンチョン突く。

「これつて、まさか……。アギト、一人で部屋を出てみて」

「は？ なんでさ？ 何か意味あんのか？」

「じゃあいいや。わたしが出るから、アギトはこの点を見てて」

レヴィは一つの点を指した後、そう言つて部屋を出ていった。

一体なんだよ。つて思つて見取り図をもう一度見てみると、点が二

つ並んでる3組の点の中の1組に異変。

並んでた2つの点が分かれて動いた。そういうことか！ この点は、あたしとレヴィを示してるんだ。

「どうだったアギト。その点、動いたでしょ？」

「ああ！ この点は、あたし達の現在位置を示してるんだ。じゃあ、他2組の点も……！」

「みたいだね。誰と誰が組んでるのか判ないけど、ちゃんと合流出来てるんだよ」

それを聞いて安心した。マイスター達は一人じゃない。でも気になる事も。点が1つだけのもある。それがいったい誰なのか。

さっきレヴィが言ったようにシグナムならいいんだけどな。シグナムなら幽霊とか何とも思わないはずだし。

「さて。今、わたしとアギトが居るのがココ、西館3階の一室だね。で、このお題のクリア条件である屋敷の主は……ココ！ 中央館四階の館主室！ ココにこの屋敷の主が居る！」

レヴィが壁に貼られた見取り図のある一点を思いつきり指で突いて、人差し指がグキツた。

「痛たたたた！」って人差し指を左手の五指でニギニギしてから、右手チョップで「痛いなあコラッ！」と机を真つ二つに壊した。八つ当たりだぜ、あれ。おーい、見つともねえぞお、レヴィ。

「もう行くぞお。一番先に主をとっ捕まえるんだから」

「おお、いきなり強気だねえ。でもそれは難しいんじゃないかなあ。この中央館に居る誰かが三階配電室を操作してくれたから明かりが点いたんだよ」

「だったらその誰か（絶対シグナムだ。あたし達の中で一番幽霊とか無視して動き回りそうだし）が四階配電室に行くだろ？ あたしらはそのまま館主室を目指せば――」

「いや、だからね？ その誰かが操作するにしても、一番乗りを目指すことは、明かりが点くまでわたし達は幽霊の出る闇の中に居る事になるんだよ。」

それで良いって言うなら行こう。今すぐ中央館四階へ」

それはちよつと嫌かもしんねえ。またあんな思いして逃げねえとダメってんなら、一番乗りはやめよう。

だから「よしっ、中央館の四階に明かりが点いてから館主室ってとこへ行こう」と言う。

レヴィがニヤアなんて嫌な笑みを浮かべやがる。

「アギトってば結構怖がりなんだね」

「うっせえよ！ 別に幽霊なんか怖くねえっ！」

「んっ。じゃあ行こう、今すぐ中央館へ！」

レヴィがあたしを脇に抱え上げて、中央館へ続く渡り廊下を目指し始めやがった。

「降ろせ降ろせ！」って暴れるけど、レヴィのバカ力の前にそいつは無意味な抵抗だった。

「だって怖くないんでしょ？ 怖くないのならサクッと進んだ方が  
良いって」

「やめるバカ！ 案外一番乗りって言うのが好きそうなりインに譲る  
うっと思っただよっ！」

「わたし、もう一度幽霊に遭ってみたいんだよね。なんかクセにな  
っちゃった？」

「レヴィのアホオオーーーーーーッ！！！！」

結局、あたしとレヴィはすぐに中央館へと移動することに。  
頼むから中央館に居るのがマジでシグナムであってくれ。

それで、あたし達が四階に向かっている間に、四階の明かりを点けて  
おいてくれ（泣）。

+++++Sideアギト リイン+++++

明かりが点いたことで、わたしとイクスは休憩がてら今後の事を話  
し合う事にしました。

イクスは他人任せにせずに動こうという意見。わたしは正直もうい  
やですう。。。。

「リインさん、怖いのは解りますけど……」

「イクスは感動していたですよね……？」

幽霊を見て感動って言うてましたし……解ります、なんて説得力

が・・・。  
ですけど他人任せ、はやてちゃん達を放っておくのも嫌です。  
どんなに怖くて嫌でも・・・わたしは夜天の守護騎士の一人なので  
から。

本当は今すぐにでも、こつやつて悩むことなくはやてちゃんを捜さ  
ないといけません。

そう、ですよね・・・。わたしは・・・

「わたしは祝福の風リインフォース？。はやてちゃん達、大好きな  
家族とお友達を守るのがお仕事ですっ」

そう意気込んで立ち上がる。

イクスも「その意気です、リインさん！」って立ち上がる。

そうして始まった探索。内心ビクビクしながらこのフロアのいくつ  
もの部屋の扉を開けて

「クスクス」

「誰か笑ってるですうー！ー！ー！ーッ！」

「すぐに明かりをつけましょう！」

を繰り返して、辿り着いたある一室。

そこで大切な情報源、この屋敷の見取り図を見つけました。

それから手に入れた情報はかなり重大なモノで、お題のクリア条件  
である主の居場所と思しき館主室の場所、そのフロア全体に電力を  
供給する配電室の場所、そして・・・

「この点は、たぶんわたし達を示していると思います」

イクスの指差す場所には黒塗りの点、全部で7つ。  
2つ1組が3つ。単独が1つですね。その単独の点が中央館の三階配電室から移動始めました。  
他の組より動くのが速いですから、おそらくシグナムですねえ。  
この迷いが一切感じられない清々しさのある行動の速さは。  
つまりはやてちゃん達は一人じゃなくて、誰かと組んでいる・・・？  
それなら安心できますね。

「えーと、ではまず中央館へ続く渡り廊下を目指しましょう。  
全館の三階には明かりが点いているようですし、中央館の三階から四階へと上がるのが一番です」

「そうですね。では行きましょう、イクス。みんなもきつと中央館を目指しているはずですよ」

わたしとイクスとは別の二つ一組の点が中央館へ続く渡り廊下を指して動き出しているのが見て取れますし。

イクスも「はいっ、行きましょう」って頷いて、わたしとイクスは中央館へ行くために・・・えっと、走るのはちよつとなので、歩きだします。

部屋を出、廊下を歩き、辿り着いたのは中央館へ続く渡り廊下の扉

「いくですよ、イクス。覚悟は決まっています・・・よね？」

わたしはちよつぱり逃げ腰です。こ、怖いものは怖いですが、これはしょうがない事ですっ。

対するイクスは「いつでも大丈夫ですよ」ってニッコリ。ですが、どこか緊張しているのが判りました。

三階の渡り廊下は屋外の石橋らしいですから、明かりが無いと思ってもいいです。



幽霊が平気であつても、いつ現れるかどんな幽霊かが判らない事に  
変わりないですから、やっぱり緊張くらいはしますよね。  
だからもう一度、今度はわたしの方からイクスの右手を掴み取りま  
す。

「扉を開けたらすぐに走りますよ、イクス」

「はいっ。行きましよう、リインさん」

頷き合つて、両扉を勢いよく開け放つ。つて、覚悟していたのに石  
橋には明かりがありました。

天井から吊るされたランプは屋内の伝統に比べれば弱々しいです。  
ですけど、それでも心強いには変わりないです。ランプは確かに  
明かりになつて、幽霊を近寄せないのですから。

「やったですつ。明かりが点いているならラクショーですよ、イク  
ス」

「そうですね、これなら幽霊も襲つて来れないですね」

イクスの右手を引いて石橋の先にある中央館の両扉を目指します。  
ですが、やっぱりホラー映画やゲームで観たように一筋縄じゃいか  
ないです。

中央館まで残り半分というところで、背後からパリンパリンパリン  
つてガラスの割れた音が連続で聞こえてきました。

それはランプが割れた音だつてすぐに理解したです。スタートから、  
そして頭上を過ぎてゴールまでのランプまで全部割れて、

「急ぎましようリインさん！」

「はいですっ！」

一目散に走り出す。闇に包まれた石橋。それが示すのは……

「ひっく、ママぁ……ママぁ……うっく……どこぉ？ こわいよぉ」

急ブレーキをかけて立ち止まり、最悪なことに中央館の扉の前に現れた幽霊を見詰める。

5、6歳の男の子です。両手の甲で何度も両目を擦っては「ママ、どこ？」ってすすり泣いてます。

相手が人間の男の子でしたらすぐにでも駆け寄って、お話を聞くですのに。

半透明のその姿が、その思いを問答無用で断ち切ってしまうです。

「リインさん、どうしましょうか？」

「えっと……どうしましょう……？」

男の子の幽霊が居なくなると進めそうにないですし。

うんうん考え悩んでいますと、「リインさん、わたしに何かあった場合、お気になさらずに先に進んでください」ってイクスがわたしの手を放して、男の子の幽霊に向かって行ったしまいました。

「ちょっと、危ないですよイクス！ 確かに放っておけない気持ちは解るですけど、相手は……！」

「ですが、この子をどうにかしない事にはきつと先に進めませんか  
ら。」

そうになると、わたしかリインさんのどちらかが声を掛ける事になり

ます。

そこで考えますのは、どちらが先に進んだ方が今後のためになるか。わたしは補助一点の魔導師ですが、リインさんは攻防補助どれも扱えます」

「だからイクスひとりで犠牲になるということですかっ!？」

ちよこつと怒りモードに突入ですよ。

ズンズンと大股歩きでイクスに追いついて、もう一度イクスの右手を取りました。

「わたしも一緒にですよ。もし何かあってもシグナムが、こういうのに強そうなレヴィも居るですし、はやてちゃんにルーも居ます」

ここで脱落する事になってもきつとみんながクリアしてくれます。ですから怖くなんて・・・やっぱり怖いですう〜(涙)。

「ありがとう、リインさん」

「わたしはごめんなさいです。嫌な役をやらせてしまつところでした」

「いいえ・・・では、いきましよう」

2人手を繋いで、嗚咽を漏らす幽霊の男の子に近づきます。

襲われるかどうか心配ですけど。まず「どうしたの?」ってイクスが話しかけました。

男の子は顔を上げずに「ままとはぐれちゃったの」とだけ言って、また声を出して泣き始めました。

襲われることはなかったですが、これはこれは大変ですネ・・・。

どうしたものとイクスと一緒に考えていた時、最悪な事態が起きてしまったです。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝッ!」

「ッ!?」

わたし達が出てきた南館の両扉の前に、一人の女性の幽霊が出現しました（泣）。

その女性霊は「私の子供を苛めたのはお前たちかつ!」なんて、とんでもない勘違いを起こしちゃってました!

「ち、違いますよっ! 泣いていたので、どうしたのかなって声をかけていただ って!」

気が付けば石橋の手摺の向こうに大木が4本浮いてました。

根に泥が付いていますから、きつと勘違いをしていますお母さん霊が引っこ抜いたと思うです。

まさかあの大木で攻撃をしてくる・・・んでしょね、やっぱり。

「ちがうよっ、ママ! おねえちゃんたちは、なってるぼくをしんばいしてくれたただけなんだ!」

「え?」

背後に居た男の子がいつの間にか目の前に現れていて、わたし達を庇ってくれました。

あれ? あれれ? なんか良いお話になっていく予感が。

お母さん霊が「ぼうや・・・」って、浮かせていました大木をゆっくり降ろしていました。

助かったって安堵の溜息。男の子はわたし達に振り向いて、

「ありがとう、おねえちゃんたち。おれいにいいことおしえてあげる。」

ブレンセレリウスさまはおとなしくつかまらないからきをつけてね」と言った後「バイバイ」とお母さん霊のもとに走って行って、わたし達に手を振りつつお母さん霊と一緒に消えて行きました。

「ブレンセレリウスさんがこの屋敷の主なんですね」

「大人しく捕まらない、ということは・・・部屋から出て逃げる、ということでしょうか・・・？」

かなり重要なお話をしてくれた男の子に感謝しながら、わたし達は中央館三階に続く両扉を開けました。

↑↑↑Sideライン はやて↑↑↑

明かりが点いたことで楽に探索出来て、ある部屋でこの屋敷の見取り図を見つけた。

で、今は中央館に続く渡り廊下を目指して走ってる。

「はやてさん、明かりを点けたのって・・・！」

ルルーは確信に満ちた目をしてそう訊いてきた。

私もルルーとおんなじ事を思っとなる。そやから「シグナムやるね」と答える。

私らの中で一番動揺せず、真つ直ぐ行動するんはシグナムとしか考えられへん。

「やつぱり……。あ、あの扉の先にある渡り廊下を進めば中央館だ……！」

両扉が見えてきた。これまた凝ったデザインドアやな。向かい合わせの男女の天使や。扉の前で一度立ち止まって、

「ルルー、準備はええか？」

ルルーは強く頷いて応えた。よっしゃ、なら行こか。私も頷いて、一緒にドアノブに手を掛ける。

見取り図からして、三階の渡り廊下は屋内の廊下やなくて屋外の石橋。

つまり暗闇の中を進む事になる、ゆうことや……。そやで気を引き締めやんとな。

扉を開ける。そこは案の定明かりの無い暗闇に包まれた全長40mくらいの石橋。

石造りの天井にランプがぶら下がってるけど、全部が割れて使い物になってない。

両側の手摺の向こう側、鬱蒼と広がる森が見える。

「?? はやてさん、嫌な音がするから急いだ方が……」

確かにシャキンシャキンてゆう金属音がフェードインしてくる。

どっかで聞き覚えのある音やな。えっと、どこでやったかなあ……?

まあ今はとにかく中央館へ入った方がええな、今から行く中央館三階は明かり点いとるで安心出来る。

「はっはっはっはっはっはっはっ」

「っ！？」

いきなりの笑い声にビクつとなつてしまった。うっん、覚悟したのにな。

考える間もなく中央館の入り口へと走り出しながら声のした方を見  
てみる。

手摺の向こう側、宙に浮く作業衣の青年が居つた。首が異様に傾い  
とつて、手には大きな(140cmくらい)ハサミ。

庭師さんやるか？ 庭師さんの幽霊は笑い声を上げたまま私らへと  
突撃してきた。

「ルールーしゃがんでっ！」

しゃがんだ直後、開いとつたハサミを私らの頭上で勢いよくシャキ  
ンと閉じた。

追撃から逃げるために、立ち上がりの勢いで前へ前へと全力ダツシ  
ユ。

というかな？ あんなに切断チョンされて、ホンマに防護服が斬られる  
だけで済むんか？

一応全力で逃げたおかげで追撃されることなく中央館に入る事が出  
来た。

「はああはああはあ・・・」

二人して扉に背を預けて、息を整える為に何度か深呼吸。

はあ、明るいつてええなあ。改めて電気のありがたさを思い知るわ。  
息も整つて、いざ四階へゴーヤ。頭ん中で見取り図を展開して、四

階へ上がる階段ホールを目指す事にした。

「シグナムさんはもう明かりを点けてくれているでしょうか・・・？」

「どうやる。やっぱり館主が居る階やし、結構な幽霊が潜んでるかもしれない」

シグナムは中でも突っ切って行くやるね、それはもう勇ましくても攻撃は通用せん。防御もまったくの無意味となると、やっぱり機動力重視の逃げ足が必要や。

まあシグナムは走るの速いし、頭の回転も速い。だからそんなに心配は要らんやるね。

そんなこんなで辿り着いた階段ホール。四階に明かりはまだ点いてらんない。

「シグナムさん、大丈夫かなあ・・・？」

ルルーがボソツと独り言を呟く。

私らより最も早いうちに配電室に行けたり館主室に行けたりするシグナム。

それやのにまだっちゆうことは・・・なにかあったって思ってもええな。

「ルルー、まだ明かり点いてないけど行こう思う。残っことるか？」

「私も一緒に行きます。シグナムさん一人に任せておくなんて出来ませんし」



ということ、闇に包まれた四階へと上がった。その直後、早速幽霊のお出ましや。

綺麗なダークスーツを着たなかなかのイケメンさん。

閉じとったまぶたを開けて、濁った白目を向けてきた。

あー、イケメンが台無しや。でもなんやろ、プレゼンセリウスさんに似とるな、この人。

「来るか!?!」

一旦階段を降りて退避か、踵を返して配電室とは真逆へ逃亡か。

それとも幽霊の横をダッシュで通り抜けて、配電室にまで逃げきるか。

幽霊がゆっくり手招きしてきた。いやあ、そんなに釣られて行くような子供やないよ?

「って、ちよおなんや!?!」

「引き寄せられる!?!」

踏ん張ってみても手招きされるたびに見えへん力で引き寄せられてしまう。

そやったら、「ルールー。この力を利用して、一気に脇を通り抜けるで」って提案。

ルールーは快く快諾してくれた。よしっ。タイミングを計る。

「いち」

「この」

「「さんっ!?!」」

同時に駆けだして、幽霊の左右からそれぞれ通り抜ける事に成功。「ルルー、振り返らずに一気に距離を開けるよっ！」と言って、多少引き寄せられる感覚を得ながら、全力で足を動かす。そのおかげで幽霊の引き寄せる力から抜け出せた。

「よっしゃっ！ このまま配電室に向かうよ！」

レッドカーペットが敷かれて、壁にはズラリと絵画が飾られとる廊下をひた走る。

にしても、絵画に描かれとるのってルシル君の記憶の中で出てきた子供の頃のブレンセリウスさんとフォルテシアさん、シエフィリスさん（の子供姿は初見やな）・・・そしてルシル君。

それだけやなくて、さっきのイケメンさんも子供のブレンセリウスさんと一緒に笑とる絵もあつた。

並べてみればやっぱ似とる。あ、そうか・・・ここは、スヴァルトアールヴヘイム。

ブレンセリウスさんの家なんやっ！

「はやてさん！ 配電室ですっ！」

ルルーに声を掛けられて思考を一旦停止。

私らの前に重苦しい鉄扉が見えてきた。見取り図を思い出して、「間違いないな」と頷く。

背後から「まゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝッ！！」って苦悶に満ちた叫び声。って、随分とおかしな悲鳴やなあ。

脇目も振らずに鉄扉に突撃。蹴破るように鉄扉を開けた。

まず最初に目に入ったんが・・・

「シグナム!?」「シグナムさん!?」

配電装置と思しき装置の前に女の子座りしてへたり込んだるシグナムや。

明らかに様子がおかしい。シグナムも一応（めっちゃ失礼やけど）女の子やけど、女の子座りだけは絶対にせん。

元より“レヴァンティン”を手放すなんて。床に転がっとなる“レヴァンティン”を見る。

シグナムは戦いの場では絶対に“レヴァンティン”を手放さへん。

「どうしたんや！ シグナム！」

急いで駆け寄って、シグナムの肩に手を置いた。するとシグナムはビクツとなつて、

「いやあああー！ー！ーっ！」

「っっ！！？」「」

私の手を肩で振り払って大泣きし始めた。

ルールーと二人して啞然となる。「やだあ、もお怖いのだよお」つてグスグス泣きじゃくるシグナム。

ルールーは何が起きたんか解らずにただ「どうしたんですかシグナムさん！」つて混乱するだけ。

私は何とか冷静でいられる。このシグナムの変わり様。プレンセレリウスさんの魔術にやられたんか？

深く考えようとすると、配電室の中に呻き声が聞こえてきた。

「アカン！ ルールー、まずは明かりを確保やつ！」

装置に急いで駆け寄る。ルールーはこの配電室の明かりのスイッチ

を押しに行った。

え〜と、どれを操作すれば点くんや？ あーまあ、スイッチをポチツと押してからレバーを下げてみる。すると、パツと室内が明るくなった。

「なんとか襲われずに済んだなあ」

「ですねえ〜。それにしてもシグナムさんは・・・」

シグナムは明かりが点いたと知るや立ち上がって「わあ、明かり・・・ やつと点いたあ」ってくるくる回り始めた。

プツ。アカン、笑ったらアカンよ私。あんな指を組んでお祈りポーズして回るシグナムはかなりレアやけど、忘れてあげた方がええモンや。

ルールもシグナムから目を逸らして「うぷぷ」って必死に笑いを堪えとるし。

「なあシグナム。ちょっと聞きたい事があるんやけどええか？」

「聞きたい事？ うん、いいよっ」

ブフツ！ シグナムだって女の子シグナムだって女の子シグナムだって女の子。つて女の子。

念仏のように繰り返す。うん、そうやもんな、シグナムは永遠の19歳やし、おかしなところはな、メツチャ可愛ええよ？。

ルールはもう限界なのか、笑いを必死に堪えるあまりに顔が酷い有様に。

「どうしてシグナムはここで怯えとったん？」

「えつとねえ、明かりを点けようとして、そしたら幽霊が来たの。いきなり目の前に出てきて、何かをする前に身体に入ってきたのお。そしたら急に怖くなっちゃったの」

その事を思い出したんかまたグスって泣きそうになった。

「もう大丈夫やつ！ 明かり点いたから怖ないよ」って宥める。

「うんっ、そうだよねっ」って満面の笑みに早変わりするシグナムに、「そうや」って微笑み返す。

にしても今の話やと、シグナムには何かの幽霊が憑依しとる・・・ゆうことやな。

「魔法に幽霊とかみたいなのを被う術式なんて無いしなあ」

ほぼ科学と化しとる魔法と神秘みたいな超常の魔術。

「手っ取り早いんはプレンセレリウスさんの確保やな」

そう決断を下す。ルールも「元に戻す方法がそれしかないなら捜しましょう」って賛同してくれた。

シグナムにその事を説明すると快諾（メツチャ笑顔で頷いてくれた。写真欲しいな）。

で、放置されとった“レヴァンティン”は待機モードにして、私が預かることになった。

廊下を出てすぐに明かりのスイッチを押しに行く。幽霊に遭遇することなく明かりを点け、いよいよ館主室へゴー！

「明かりも点いた事やし、そろそろライン達と合流出来るかもしれんなあ」

「そうですねー。レヴィはこういうの強そうだし早く合流したいか

も」

試しに思念通話をリイン達に通した見たんやけど通じん。ま、中央館の四階に来たんなら自然と合流出来るか。で、結局誰とも逢わんと館主室に到着してもうた……。

「もしかしてシグナムさんに丸投げするつもりでいるんじゃない？」

「んな不吉なこと言わんといてルールー。少しでも戦力がほしいんやし。」

プレンセレリウスさんが大人しく捕まってくれろと限らんからなあ」

私にべったり腕を絡めて引っ付いとるシグナムの顔を見上げると、シグナムはきよとんと首を傾げるだけ。

うん、シグナムに戦力外通告を出そうな私。シグナムはちょこっと・というか全く役に立ちそうにない。

「合流するんを待つか、それともこのまま突入か、二つに一つ」

私とルールーの2人でどうにか捕まえられるか？

でも逃げるとも限らんし、大人しく捕まってくれるかも。

あーでも今までの事からして一筋縄じゃいかんのがアンスールや。頭を抱えそうになると、館主室の豪華な扉の奥から物音がした。

(もしかして逃げ出そうとしとる!?)

もしそうならこれ以上は待てやん。ルールーに視線を移す。

ルールーは察してくれて強く頷いて応えてくれた。

するとシグナムも空気を察したんか「怖いけど、私も頑張りゆ!」

つてメツチャ噛んだ。

「ブフツ！」

もおこんな時に緊張感が何もあらへん。でも、助かった、今ので無駄な力みが消えたわ。

三人で頷き合つて、扉を勢いよく開け放った。

「逃がさへんよプレゼンセリウスさん！」

かなり広い煌びやかな館主室。

その奥の豪華な執務デスクにプレゼンセリウスさんは居った。

「いやあ、女の子に逃げさないうって言われると困るなあ」って、別に何も困つてへんような顔して椅子から立ち上がった。

「よくここまで来たね。歓迎するよ。ようこそ、我がエノールの屋敷へ」

私らの前にまで来て、仰々しくお辞儀して迎え入れてくれた。適当に受け取っておき、早速本題に入らせてもらう。

「私からの願いは二つ。まずはシグナムを元に戻してくれるか？」

「それは出来ないなあ。それを含めてのゲームだから。ああでも何も心配は要らないよ。オレの泣き虫な妹が憑依してるんだ。

別に害もないし、時間が経てば勝手に出ていくだろ」

「ホンマに何も悪影響は無いんやな？」

「ルシルの友に嘘は吐かないって」

「……その目、信じるよ？」

「信じていいぜ。絶対敵以外には嘘を吐かないのを信条にしてるしさ」

オレンジ色の双眸からは嘘を吐いとするような意思は見られへん。

害がない事だけでも良しとしよ。次いで「じゃあもう一つ」と言い、「シユベルトクロイツ」を握る右手に力を込める。

「このゲームをクリアする条件。プレンセレリウスさんを確保する事」

ルールーとシグナムと一緒にプレンセレリウスさんににじり寄る。

「それも聞けないなあ。もっとオレ達と遊ぼうぜ」って気楽に言ってきた。

プレンセレリウスさんの足元にミッドナイトブルーの魔力光に光る魔法陣が展開された。

二重円の中に正五角形と逆五角形を合わせた十角形、その中に円、また中に六角形とゆう魔法陣。

V S ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

其はアンストールが冥祭司プレンセレリウス

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? V S

ガシャアン！と天井に吊るされてたシャンデリアが粉々に碎け散った。

室内が暗闇に満ちる。と、廊下からもガラスが碎ける音が連続で響いてきた。



「この暗闇の中、オレを抜けだす事が出来ないほどに捕縛するか。または倒す事が出来ればクリアってことにしよう」

フリュイヤン・ファントム  
騒がしき我が友よ

室内に置かれとる机や椅子、書棚がガタガタ震えだしてフワツと浮いた。

世に言うポルターガイスト現象や。生で見んのは初めてやなあ。

つてそうやなくて！ 相手はプレンセリウスさんで、生身？の人間や。

幽霊やないって事は攻撃は通じるはず。

「ルールー！」

「「先手必勝！」」

トーデスドルヒ

バルムンク

多方向からの同時射撃。そやけどプレンセリウスさんの周囲に浮いとった物が一斉に間に割って入って来て防いだ。

爆発による煙幕と残骸が室内に満ちて、視界を悪くしてしまう。

「ルールー、シグナム。部屋を出て！」と指示を飛ばして、「クラウ・ソラス！」と砲撃を煙幕の中に撃ち込む。

さらに爆発。手応えは感じられへんかったから避けられたな。

二人が部屋を出たんを確認してから私も後に続いて部屋を出る。

「ダメ、はやてさん！」

ルルーにドンと突き飛ばされる。

尻餅をついて、なんや？と確認して状況を理解した。

明かりが無い。つまり、敵はプレンセレリウスさんだけやのうて・

「逃げ場の少ない屋内戦、しかも脱出不可となれば、オレ、結構強いんだぜ？」

アルメ・オプスキュリテ  
暗闇に踊る亡霊

十何人という幽霊が居った。15mは離れとるけど、それはもう怖い光景。

で、ルルーが私を突き飛ばしたんは、その内の一人が私にナイフを投げたから。

ゴツゴツと靴音を鳴らして館主室から出て来るプレンセレリウスさん。

(逃げ道は……。やれるか？ いや、やるんや！)

“シュベルトクロイツ”の先端を床に向ける。

なのはちゃん程やないけど、床を撃ち抜いて階下へ一旦離脱。でいこう！

「クラウ　「って砲撃を撃とうとしたところで、

「ブリーゼ・ケツテ！」

フォゲットミノーットに輝く風のバインドがプレンセレリウスさんを捕縛。

引き千切りに入ろうとしようとしたプレンセレリウスさんへ間髪いれず

に、「捕らえよ、凍てつく足枷！」とリインの、

フリーレン・フェツセルン

凍結捕縛する魔法が発動。二重の拘束に捕らわれてしまったプレンセレリウスさん。

さらに、幽霊たちの背後からすみれ色の砲撃が来て、幽霊たちをすり抜け私達の居る足元の床を撃ち抜いた。

「はやてさん！ ルーテシア！」

リインとイクスが来て、レヴィとアギトも続いて来てくれた。やっと全員集合やな。でも再会を喜んだる暇さえない。

プレンセレリウスさんを捕縛しとる氷にヒビが入ってくし、幽霊たちも呻き声の合唱しながら近づいて来る。

「みんな、一旦階下へ離脱！ 作戦を練るよ！」

「「「「「了解！」「」「」「はーいつ」

シグナムだけはニッコニコな笑顔でバンザイしながら応えた。事情を知らんリイン達が「え？」ってシグナムを見る。私は「話は後やっ！」って、レヴィが撃ち抜いた穴から三階へと飛び降りる。

++++Sideはやて レヴィ++++

「じゃあシグナムは幽霊に憑依されてあんな……」

一階まで降りて、中央館の中心にあるダンスホールに一時避難。ここだけはミラーボールや床に置かれたライトが壊れずに残っていて、ダンスホールを明るく照らしていた。そのおかげで幽霊が出る事がない、ということで避難所に決定。直に床に座って、作戦会議を焦らず行える事になった。

「そうなんや。プレンセレリウスさんの妹さんが憑依しとるらしいわ」

アギトの何とも言えない問いに答えるはやてさん。

シグナムさんはミラーボールの七色の光にキヤツキヤツ騒いでる。クールなシグナムさんがなんて・・・なんて面白い事に！

動画を撮影しようにも上手くいかずに断念。デバイスの機能は戦闘関連だけの事にしか働かない事に気付いた。しょうがない。脳裏に焼き付けるか。

「プレンセレリウスさんは結構厄介や。アンスール最弱つても嘘みたいにな。

一切の攻撃が通用しやんくて、私らの防御を無視する攻撃ができる幽霊。そんな厄介な幽霊を自在に操れる」

「幽霊は確かに厄介だけど、プレンセレリウスさん本体さえどうにかすればいいんだよね？」

「ルーテシア、言うのは簡単だけど幽霊の壁の中に避難されたら・・・ん？」

そこまで言つて、あれ？と首を傾げる。

はやてさんは言った。捕まえるか倒す事が出来ればクリア、だって。攻撃は幽霊をすり抜ける。じゃあ捕まえるじゃなく倒すって事にな

つたら幽霊の壁なんて何の障壁にもならない。

遠距離からデカイ魔法を撃ち続ければ、きっと届いて、倒す事が出来るんじゃない……？

ヒットアンドアウェイ作戦。幽霊の攻撃に当たらないように撃っては逃げ撃っては逃げ。

この事をみんなに伝えてみる。はやてさんも同じ考えに辿り着いた。でも……

「プレンセレリウスさん自身の戦闘能力が曖昧すぎて、ホンマにこれで上手くいくんか判らん」

「シグナム。ルシルさんの記憶の中で出てきたプレンセレリウスさんの戦い、憶えてますか？」

「えー？ ううん、憶えてないですからあゝ、残念！」

シグナムさんは役立たず、と。もしこの時の事、シグナムさんは元に戻っても憶えてるんなら、一体どんな反応を示すか凄興味がある。。  
つとと、今はそんな場合じゃないんだよね。よしっ、判らないなら判るようになればいい。

「とりあえず。はやてさん、まずわたしが一人で行ってきます。プレンセレリウスさんの実力、というか防御力を調べて、この作戦が上手くいくかどうかを確認してきます」

「は？ ちょっ、待ちいレヴィ。一人は危険すぎや。私も」

「ううん、一人で行きます。瞬走式がありますし、簡単に逃げられますよ」

陸戦機動力が高いわたしが一番適任だ。

撃って逃げ回って、プレンセレリウスさんの戦力調査。うん、楽勝それを判ってくれたからこそ、はやてさんも「任せてもええか？」って言ってくれた。

「はいっ」と頷いて、みんなに「んじゃちょっと行ってきます」と告げてダンスホールから出た。

「早速出たね！」

数秒と走らない内に老若男女の幽霊が5人。全員が執事服とメイド服って姿だ。

プレンセレリウスさんはとととと。魔力探査を行って、魔力の高い位置を探る。

発見。二階をゆっくり移動中。頭ん中に屋敷の見取り図を思い浮かべてとととと。

頬を両手でパチンと叩いて気合を入れる。幽霊の頭上を飛び越えるために、まずは壁を蹴って天井へ。

すぐさま天井を蹴って幽霊の背後に着地、一気に距離を開けるために、

### 瞬走走式

陸戦高速移動魔法を発動。一足跳びで15m移動する。

このまま階段ホールを駆け上がって、プレンセレリウスさんの背後に回る。

で攻撃を決めて観察。反撃を喰らう前にトンスラ。はやてさん達に報告。というわけだ。

ストロベリー・マレディ・クシオン

お間抜けには無様な踊りが似合いだぜ

「うわっと、何っ!？」

階段ホールに着いた途端、上の階から光の尾を長く引く光弾が6つ飛んできた。

よく見れば光の先端は口を大きく開けた人の顔をしてる。

ギリギリで回避できたけど、追尾性能があるようで「ああ・・・ああ・・・あ・・・あ・・・」って呻きながらまた飛んでくる。

アレくらいなら絶対ヤバイ。そう本能が告げてくる。

だから全力で引き離そうとするけど、懲りずについて来る。

### トライシールド

通用しないって解つていてもベルカ魔法陣のシールドを展開。

案の定人の顔した光弾はシールドを難なく通過。面倒だなあ、もお! じゃあこのままついて来ればいいよ。光弾を引き連れてU字階段を何段も飛ばして二階へ。

廊下に足がついた瞬間、光弾がわたしのお腹を背後から貫いた。

全身に奔る悪寒。光弾はわたしを通過したあと霧散して消えていった。

「・・・ん? んん? あや、なんともない・・・?」

嫌な感じはしたけど、体のどこにも異常が無い。

じゃああの光弾は何だったんだろ? ううん、それより今はプレンセリウスさんだ。

魔力探査を行って、プレンセリウスさんが未だに二階をうろつろしてるのを確認。

畏か? 誘ってるのかもしれないけど、今はやるっきゃない。

「つてうわあっ!?!」

走ろうとした時、自分の足に躓いて転んでしまった。

なんてドジ。急いで起き上がって走ろうとして、今度は何も無いのに転んだ。

「こんにやるおっ!」つて自分のドジさにイラつきながら疾駆再開。つて今度はレッドカーペットの折れ目に躓いて転んで鼻を強打。鼻血ブー。

「お、おかしい・・・いくら何でも転び過ぎだコレ!」

鼻血を親指で拭いとして、この超絶ドジに疑問を抱く。

あの光弾を受けてからだ、こんなに転ぶようになったのは。

まさか相手のドジを誘発する術式? そんなバカな・・・。

今度は自分の足元を最大で注意しながら疾駆再開。

(意識を向けたらどうってことないみたいだね・・・)

何とか転ばずに、徐々にプレゼンセリウスさんの魔力反応の近くにまで来れた。

視線の先に曲がり角。その先に居るはず。走るスピードを落とそうとして、

「みぎやつ!?!」

また転んだ。意識が足から曲がり角に向いた瞬間に足がもつれた。

直後、すぐに起き上がらないといけない状況で周囲から笑い声が聞こえたと思ったら幽霊数人に包囲された。

バツと勢いよく立ち上がって、でも最悪なことに「あうちっ?」右足首をグキツた。



痛いけど座り込むのだけは耐えて、前方に居るコックコートを着たシェフの幽霊を睨みつける。

「襲って来ない・・・？」

幽霊たちは包囲するだけで何もしてこない。

けどそんな疑問はすぐに解消。曲がり角の先から、さっきの人面の光弾が9つ飛んできた。

デブレシオン・ファントム  
お前に憂鬱を贈るぜ

ドジを誘発されて、攻防無視する幽霊による包囲されてる今・・・避けきれない。

すぐそこまで迫って来ていた光弾を睨みつけ、9つ全てをこの身に受けちゃった。

視界が傾く中、曲がり角から姿を現したブレンセリウスさんを見た。

左手には、はやてさんの“シュベルトクロイツ”の様な黄金に輝く十字杖？・・・うっん違う、十字槍を持ってた。

++++Sideレヴィ イクス++++

レヴィさんが偵察に出て数分。静まり返っていましたがダンスホールの扉がガチャッと開きました。

一斉に身構え、扉の陰に隠れて見えない相手に警戒します。

ルーテシアさんが「レヴィ？」と声を掛けますと、レヴィさんが無言で姿を露わにしました。

この時点でわたしは、もちろん皆さんも気付きました。レヴィさん

が異常なのを。

「レヴィ？ 何かあった・・・？」

「おい、レヴィ。だんまりじゃ判んねえよ」

「んー？ ねえねえ、レヴィどうしたの？」

ルーテシアさんとアギトさんとシグナムさんに声を掛けられても返事をせず、ただ俯いたままフラフラとわたし達のところはまだ歩み寄ってくるだけです。

確定。レヴィさんはプレンセリウス殿下に、もしくは幽霊たちの攻撃を受け、シグナムさんのように・・・。

「イクス。レヴィを捕縛してくれるか？ プレンセリウスさんに操られとる可能性がある」

はやてさんは苦々しくわたしに指示を出しました。

わたしは「判りました」と頷いて応えました。まさかこんな形で友達を拘束することになるなんて思いもしませんでした。

「ティファ。シュテーレン・フェッセルン」

レヴィさんに両手首と両足首、両腕ごと胴体をリングで拘束します。シュテーレン・フェッセルンは名の通り、魔力生成を妨害する拘束魔法です。

患者さんが苦痛に耐えられずに魔力運用で暴れるのを防ぐための魔法。

シヤマル先生の戒めの鎖ほどの効果はありませんが。

「イクス、ヤな役させてごめんな」

わたしは「いいえ」と首を横に振り、ダンスホールの床に横たわるレヴィさんに駆け寄り寄るルーテシアさんとアギトさんを見、遅れてわたし達も駆け寄ります。

わたしも含め皆さんが思い思いにレヴィさんに声を掛けますが、

「もうダメだよ・・・あんなのムリだよ・・・もう喋んのもやだよ・・・  
・てゆうか全部が面倒くさいんだよ」

レヴィさんは後ろ向きな事しか言ってくれませんでした。

話し合いの結果、レヴィさんは底抜けに明るいシグナムさんに任せる事にし、

「まさかこん中で一番速いレヴィがあんな事になるなんてな」

「プレンセレリウスさんの攻撃みたいなことは教えてくれましたけど。  
でもどういった攻撃なのかは言ってくれませんでしたね」

「しかもレンジも判らねえ。近距離か遠距離か」

「推測になるけど、たぶん遠距離からの攻撃だと思う。」

レヴィはモード・コンバットのままで戻ってきたし。近接ならまず遅れは取らないから」

わたし達はプレンセレリウス殿下の攻撃について話し合う事になりました。

ですがやはり情報不足という事もあり、すぐに暗礁に乗り上げる事に。

思考の迷路に迷い込んでしまっている中、

「ねえレヴィ、何かお話ししようよお」

「喋るなんて面倒くさい・・・あー何かもう起きてるのも面倒だよ。寝よ」

ニコニコ笑顔のシグナムさんとずーんと暗い影を落とすレヴィさんの会話が聞こえてきました。

見ればシグナムさんは「つまんなあ〜い！」とプクウと頬を膨らませていて、お話してくれないレヴィさんにご立腹のご様子。

レヴィさんは本当に寝るつもりなのか目を瞑っていて、シグナムさんに揺すられても反応しません。

「・・・しゃあない。ライン、私とユニゾンや。デアボリック・エミッションで墜とす。

これで決まるとは思えへんけど、少なくとも多少のダメージは与えられるはずや」

「了解です」

「アギト、ルールー達はここで待機しとつてな。巻き込んだら笑い話にもならへんし」

はやてさんがすまなさそうにそう指示を出してくれた。

お役に立てないのは心苦しいですけど、適材適所という言葉くらいは知っています。

ですから「判りました。御武運を」と了解の意を示す。

「了解、マイスター。はあ。あたしの出番はなしか」

「しょうがないよ、アギト。「こ」ははやてさん達に任せよ」

ルーテシアさんとアギトさんも了承し、はやてさんはリインさんを呼びます。

そして「ユニゾン・・・イン！」とユニゾンを終え、

「それじゃ行ってくるな」

『いってきますっ！』

はやてさんとリインさんを見送り終え、手持無沙汰になってしまいました。

「ねえねえ！ 誰かお話してよぉっつ！」

シグナムさんがピョンピョン跳ねながらわたし達のところへ来ました。

どうやらレヴィさんが完全に自分を相手にしてくれないと解り、諦めたようです。

「シグナム・・・お前、もう少し幼い外見だったらよかったのにな・・・（涙）」

アギトさんはただ人差し指で目元を擦る仕草をするのみでした。

十十 Sideイクス はやて十十

幽霊が一人も居らん事を疑問に思いながらプレンセリウスさんを飛んで（いつの間にか飛べるようになって）搜索開始。まずは一階。天井に釣られとる小さなシャンデリアは全部砕けて使い物にならんなあ。

一階をぐるりと一周してプレンセリウスさんが居らんのを確認。

『幽霊が出ませんね・・・』

「そつやな。まあ出てくれへん方が都合がええわ」

なんの妨害もなく二階へ続く階段ホールに到着。

つと、階段の踊り場に出たわ。「あはは」って笑う、フリルの多いドレスを纏った女の子の幽霊が。

止まるか？ いや、このまま突っ切って二階へ進入するつ。

飛行速度を上げてU字階段前半を飛行、少女霊の頭上で反転、壁に両足をつけて三角蹴りして後半を飛行、二階の廊下へ。

止まらんとそのまま二階の探索を開始する。

『はやてちゃん、いつの間にあんなアクロバットな飛行が出来るよ  
うに・・・？』

「ん？ たまたま出来たんよ？」

親友<sup>なのは</sup>ちゃん達の飛ぶ姿を見とつたら、私も出来る気がしたんや。

まあもう一度やってって言われても出来るかは微妙に怪しいけどな。廊下をひたすら飛んでプレンセリウスさんを搜索しとると、

### 亡者境界 カオ・ムル

前方に、床から湧き上がる大きささまざまな幽霊の顔だけで構成され

た壁が廊下いっぱいに作り出された。

『はやてちゃんストオオooooooooooooッブ!!!』

急ブレーキ。なんとか顔の壁に突っ込むことなく止まれて安堵。  
というかな……

「リ、リイン……、あのな、もうちょい声のボリュームを下げてくださいるか？」

『ごめんなさいです、はやてちゃん。でもでも突っ込んだりでもしたらもつと大変なことになってましたよ絶対!』

そこはまあ同感やな。床から生まれては天井で消えるいくつもの幽霊の苦悶に満ちた顔の壁に、『ですからはやてちゃん、早く離れた方が良いですよあっ!』ってリインがそう涙声で訴えてくる。

確かに見てて気分のええモンやないな。何か気分的に攻撃も撃ち難いし。

来た道に戻るために反転しようとしたとき、全身に悪寒が奔った。考える間もなく飛行魔法をキャンセルして降りたち、その場に頭を抱えて蹲った。

トウース・シャルジュ  
全霊突撃せよ

その瞬間、頭上を飛び過ぎ去ってく無数の幽霊の顔。

気付かんとおっいたら間違はなく食らったわ、あんな受けたらアカンもんを。

立ち上がって振り返ってみれば、さっきまであった顔の壁が無くなっとなつた。

「おお、今を避けるんだ。気配察知はなかなかもんだな、あんな」

『「ブレンセレリウスさん！」』

20m先の曲がり角から、私の“シュベルトクロイツ”に似たる黄金に輝く十字槍を手にしたブレンセレリウスさんが出てきた。

十字槍は“シュベルトクロイツ”の先端をもっと長くして、柄をもっと装飾に彩った感じ。

「オーツス。今度はあんたが来たのか。さっきの娘もなかなかだったが。」

さて、あんたはどこまで避けられるのか、見せてもらうぜ。さあ行くぜ、ミスティルティン」

ブレンセレリウスさんが十字槍（ミスティルティンゆう名前みたいやな）をクルクル回して先端を向けてきた。

キャヴァリエ・エキップ  
先駆けし者らよ

ブレンセレリウスさんの前に、馬の幽霊に乗った槍騎士霊が縦列で六騎現れた。

踵を返して飛行再開。直後に「突撃トゥース！」と号令が掛けられて、騎兵隊が無音で駆けてきた。

「リイン！」

『はいですっ！』

クラウ・ソラス



砲撃を騎兵隊の奥、プレンセレリウスさんに向け発射。

砲撃は騎兵隊をすり抜けてそのままプレンセレリウスさんへと向かっていって・・・爆発。

結果を見る前に曲がり角にきた事で減速、さつきみたいに壁に一度着地して飛び立つように飛行再開。

チラッと後ろを見ると、騎兵隊は律義に一度止まってから方向転換、んで疾駆再開。

プレンセレリウスさんはどうなんやろ？ あの場合に留まっとるか移動しとるか。

留まっとるんならこのまま二階を一周すれば背後に回れるけど・・・。

ストウツベルグ・ア・マレティ クシオン  
お問抜けには無様な踊りが似合いだぜ

前方からミッドナイトブルーに光る魔力弾・・・って、何や顔が飛んで来たッ!?

人の顔した光弾が6。ラインが『ぎゃあつ、なんか来たですうーッ!?!』ってパニック。

とりあえず落ち着こな、ライン。軌道を見極めて・・・急速バレルロール。

全弾回避して「どんなもんや!」ってガッツポーズ。

『今日のはやてちゃんはアクロバットが冴えてますねっ』

「現実に戻ったら出来やんかもしれへんけどな・・・!」

曲がり角が見えてきた。減速して反転、壁に両足をつき、方向転換を終えて飛行再開。

来た道を見れば騎兵隊もちゃんと迫って来とる。壁とかすり抜けて

来ればええのに、ホンマに律義やなあ。

まあそんなことされるのも困るんやけど。騎兵隊から逃げてもう一度曲がり角を曲がる。

次を曲がればプレセレリウスさんが居るはず……。

「つて、新手か……！」

アルシエ・エキップ  
弓引きし者らよ

弓兵5人が横列に並んで弓を構えとつた。

そして放たれる矢。さっきの光弾より直線的やで避けやすい。速度を落とすことなく弓兵隊の頭上を通り過ぎる。

「おお？ なんやすごい事になつたな……！」

騎兵隊と弓兵隊が衝突してめちやくちやに。幽霊同士やのにぶつか  
るみたいやね。

そして騎兵隊と弓兵隊は解けることなく消滅してつた。

最後の曲がり角を曲がって……つて、プレセレリウスさんはど  
こにも居らんかつた。

「移動したんか……。でもどこに……。？」

『……っ！ はやてちゃん！』

パンツァーシルト

ラインが私の背後にシールドを展開。遅れて振り向くと、いつの間  
にかプレんセレリウスさんに回り込まれとつて、“ミスティルテイ  
ン”による刺突を繰り出しとつた。

穂先が触れとる地点からシールドにヒビが入ってく。シールドが破壊される前に急速後退してすぐに、

「ブリューナク！」

魔力弾を高速連射。プレンセレリウスさんは“ミスティルテイン”を前方で回転させて弾いてく。

そやけどそれは隙を作る事になる防御方法や。この隙を見逃すほど馬鹿やないよ？

「ブラッディダガー！」

『撃ちます！』

多方向からの高速多数射撃。プレンセレリウスさんの表情が焦りに滲む。

振り払った“ミスティルテイン”の防御を抜いて直撃、爆発を起こして私との間に煙幕が出来た。

さらに距離を開けて、ブリューナクを連射。

「うふふふ」

っと忘れるとこやった。相手はプレンセレリウスさんだけやないんや。

真横から現れた女性霊の抱擁をクルリと舞うようにして回避。すぐさま煙幕の中にクラウ・ソラスを撃ち込む。

そやけど、

「痛った~~~~。お返しだっ！」

あの顔の光弾が煙幕の中から何の前触れもなく飛んできて、クラウ・ソラスをかき消した。

しかもその数が今までの比やない。廊下いっぱいにはブワツとや。

これはアカン。踵を返して飛行、全速離脱。呻き声を上げながら追ってくる無数の人面光弾。

『追いつかれちゃいます！』

判つとるけど、これでも今まで以上に速く飛んでる。

「アカン」追いつかれる……。と諦めようとした時、通り過ぎようとした階段ホールから伸びてきた腕がお腹に回って、階段ホールへと引つ張り込まれる。

全力飛行の途中にそんな事されたから「うげっ？」って呻き声を出したまう。

「って、シグナム！？」

私を引つ張り込んだんはアギトとユニゾンを果たしたシグナムやった。

それに、「主はやて。みなは中央館より避難しました」って元に戻つとるし。

迫って来てた人面光弾をシグナムのおかげでやり過ぎす事が出来、リインは『何とかなってみたいですね』と安堵。

で、私はと言うと、

「シグナム、ホンマにいつものシグナムなん？」

「申し訳ありません、主はやて。その話はもう忘れていただいても

よろしいでしょうか・・・」

『元に戻った瞬間のシグナム、マイスターとリインにも見せたかったぜ』

「アギト。今すぐその口を閉じなければ・・・斬る」

『面白かったのになあ』

どうやら憑依されとった間の記憶があるみたいやなあ。

“機動六課”ん時もリインと精神が入れ替わってとんでもない目に遭ったし。

シグナムはこうゆう不幸な目に遭いやすい星の元に居るんかも。

まあシグナムの元に戻った時の事も気にはなるんやけど、今はプレンセレリウスさんの事や。

「そつやな。で、さっきの話やけど・・・」

「はい。デアボリック・エミッションを使うという話は聞き及んでいます。

ですので発動の邪魔にならないように、みなを中央館から北館へと避難させました」

「そつか、うん、それなら気にせんでええな。じゃあシグナムを避難してな」

みんなは避難したようやけど、このままやとシグナムとアギトも巻き込んでまう。

シグナムは少し逡巡したあと、「いえ、私とアギトは残ります」って首を横に振った。

『デアボリック・エミッションって発動まで結構時間が掛かるから、あたしとシグナムはプレンセレリウスさんの足止め兼マイスター達の護衛ってこと』

「ええ。そのためにアギトとユニゾンをし、戦闘力を強化したのですから」

『ですけどシグナム、アギト。エミッションに巻き込まれたら、さすがに無傷じゃ済まないですよ』

そう、デアボリック・エミッションはバリア発生阻害効果のある魔法や。

いくらユニゾンして強化されとつても巻き込まれたら軽くない被ダメージは必至。

シグナムとアギトもそれは承知やった。巻き込まれてもええ覚悟。二人はそれを持つとつた。

「我々諸共で構いません。プリンセレリウスは思っていた以上に強敵、いえ、難敵です」

だからシグナム達ごと撃て、言うんか？

私の心情を察してかシグナムは「ご安心を、主はやて。私とアギトとて簡単に墜とされるつもりはありません。デアボリック・エミッション、耐えきってみせます」って笑った。

私がおか言う前に、「行くぞ、アギト！」と階段ホールから飛び出して行った。

『はやてちゃん……』

「しゃあない、シグナムとアギトを信じるしかない。下に降りて、発動の準備に取り掛かるで！」

『…………はいですっ！』

信じとるよ、シグナム、アギト。

++++Sideはやて シグナム++++

「ん？ 実妹<sup>テッサ</sup>に憑依されてた娘じゃないか。もう解放されたみたいでなにより」

主はやてとリインと別れ、対峙するのは冥祭司ブレンセリウス。こう言うてはなんだが、先程戦ったセリス殿に比べれば彼自身の戦闘能力低い。

しかし亡霊を操り、憑依させ、その効果で相手を無力化する。絡め手を得意とする術者だ。

私の様な真っ直ぐな戦い方をする騎士にとっては厄介この上ない。が、引いてなるものか。

「ああ。随分と恥をかかせてもらった。私の痴態の目撃者が少なかったことが不幸中の幸いだ」

テッサという少女の霊に憑依されていた間の記憶はある。

今すぐ記憶から消し去ってやりたい。ようやく解放された時、私はアギトとルーテシの三人で手を取って円陣を作り、スキップしながらクルクルと回っていた。

「あんな恥をかかせてもらった礼を貰ってくれ、冥祭司プレンセリウス殿」

“レヴァンティン”のカートリッジをロード。刀身に火炎を纏わせる。

プレンセリウスとの距離は約10mもない。一足跳びで十分間合いに入れる距離だ。

半歩前に進み出ると、プレンセリウスの周囲に5つの人面の光弾が光の尾を引いて周回。

遅れて元に戻ったレヴィの話によれば、ドジを誘発、もしくは憂鬱になるとのことだ。

憂鬱に関しては憑依されている間にもレヴィの事を見ていたから判る。

「紫電・・・！」

ストゥベレット・マレディ クシオン  
お間抜けには無様な踊りが似合いだぜ

一気に間合いを詰める私へ飛来する人面光弾。  
複雑な軌道だが、そういう手合いとは今までに幾度と剣を交えてきた。

高町のシューター然りセインテストの射撃然り。複雑さの中で見える確かな道筋。  
それを見つけ、

「一閃！！」

「うおっ！？」

合間を縫ってプレンセリウスに肉薄。



“レヴァンティン”を振り下ろし、叩き伏せる。が十字槍を水平に構え、紫電一閃を防ぐ。衝突面から激しい火花が散る。このまま押し切るのもいいが時間がかかり過ぎる。

そう判断し、“レヴァンティン”を引き、だが距離は開けずぐさま横薙ぎの一閃を振るう。

それをバックステップで回避し、今度はブレンセレリウスが刺突を放ってきた。

穂に何かしらの付加効果があるのか、ミッドナイトブルーの半透明な渦が出来ていた。

念のために受けに戻らず回避を選択する。大きく後退したその直後、

#### デアボリック・エミッション

主はやての広域殲滅魔法デアボリック・エミッションが発動。咄嗟に床より離れ飛行、全力ですぐ側の階段ホールから階上を目指す。

「なっ!? なんだコレ!? 障壁が貫かれる!?!」

姿は見えないが、確実に巻き込まれたようだな。

そう言う私もデアボリック・エミッションの効果範囲に巻き込まれそうだ。

『パンツァーガイストで全面防御! シグナムは飛行に集中してくれ!』

『了解した。防御はお前に任せるぞ、アギト』

#### パンツァーガイスト

全身を覆う魔力の障壁。その直後に完全に効果範囲内に入ってしまった。  
荒れ狂う魔力流の中、何とか防御を貫かれんように頑張ってくれたアギトのおかげで効果範囲より離脱が出来た。  
結局は四階の天井にへばりつく様な情けない格好となったが、墜ちるよりはマシだろう。

++++Sideシグナム はやて++++

私を中心として発動させたデアボリック・エミッションの効果が見える。

プレンセレリウスさんがどうのと言う前にシグナムの事の方が気掛かりや。

たぶん完全に効果範囲から出るんは不可能やから巻き込まれる可能性の方が高い。

「リイン、シグナムとアギトが心配や。二階へ行くけどええか？」

『もちろんです！ 何かあってからでは遅いですしすぐにでも行きましょう！』

リインの了承も得たことで、急いで二階へと上がろうとした時、視界が真っ白な光で覆われる。

これ・・・転送が始まる合図や！ ということは・・・

「プレンセレリウスさんを墜とせたゆう事か・・・!?」

『もしくはシグナムがプレンセレリウスさんを逃げられないように捕まえたか、です!』

答えは判らんけど、このお題をクリアしたとゆう事だけは判った。次に視界がクリアになった時、そこはプレンセレリウスさんの管理する夕暮れの遊園地やった。

ぐるりと見回せば、リイン、ルールー、レヴィ、イクスはもちろん、シグナムとアギトもちゃんと居った。

「シグナム! 大丈夫やった? ケガとか残ってへん?」

「はい。御覧の通り私もアギトも無事です」

「ちよつと危なかつたけど、でも無事だよマイスター」

二人の笑顔に、ようやく心配が無くなる。

「ルールー達も何ともないな・・・?」

「はい。結構際どいところまでデアボリック・エミッションが迫ってきましたけど、なんとかみんな無事です」

ルールー達も大丈夫そうや。まあ巻き込みそうになつた事にはゴメンやな。

そしてイクスが「プレンセレリウス殿下・・・」ってスタート地点の方を見て呟く。

見れば、ルシル君達となんか話をしとるプレンセレリウスさんの姿があつた。



ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（後書き）

レヴィ

「わたし達の出番が終わっちゃった！」

ルーテシア

「今回も始まりましたレヴィルのコーナー」

レヴィ

「わたしの最後って何！？ とんでもないダメ人間だったじゃん！」

ルーテシア

「喋るのも面倒だから寝ようって発想はすごいなあ」

レヴィ

「あんなのわたしのキャラじゃない」

ルーテシア

（確かに常に元気いっぱい猪突猛進的なのがレヴィだし）

レヴィ

「にしても今回のアンスールはホントに厄介だったね」

ルーテシア

「あー、色んな精神干渉を付加された幽霊を憑依させるってやつ。ドジに憂鬱。まだありそうだな。でもこの二つを戦場で食らったら最悪だね」

レヴィ

「確かに。好き勝手蹂躪されちゃっつね。ドジは致命的な隙を生むし、憂鬱はもう論外」

ルーテシア

「本当にゲームの中だけで助かったあ。命を懸けた実戦だったら全滅してるよきつと」

レヴィ

「だねえ。それじゃ、今回はここまで！」

ルーテシア

「次回、最終エリアに突入。管理人はあの人！」

よつこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へへへへ(前書き)

?????&?????戦イメージBGM

シャイニングフォース・イクサ『最終決戦』

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜

++++Sideなのは++++

はやてちゃん達がお題をクリアしたようで、マス目のところに戻ってきた。

そしてプレンセリウスさんが私達の居るスタート地点に現れた。どこか疲れている様子だけど・・・、お題の中で疲れるような事でもやっていたのかもしれない。

「どうだったんだ、レン。はやて達のお題の合否は？」

ルシル君がそう訊ねる。するとプレンセリウスさんは首を横に振った。

それってもしかしてダメだったっていう事？ だったらどうしてスタート地点に戻って・・・

「クリアだよ。いやあ、参ったね。デアボリックとかいう魔法？に一本取られたぜ。」

アレ、防御を貫いて来るのな？ 自分で言ってる情けないけど、アンスールメンバー中じゃ一番防御力が低いオレには防ぎきれなかったわ」

「お前なあ、首を横に振るとかやめろよ。はやて達がミスをしたのかと思うたぞ」



私達みんなも同意見だからうんうんって頷く。

でもアインハルトちゃんとコロナちゃん、リオちゃんだけは上の空。それも当然かもしれない。ルシル君は教えた。自分の正体、再誕神話、大戦、魔術、アンスールなどなど。

当然そんな事をすぐには信じてもらえないって思っていたけど、さすがに今までのアンスールの戦いを見ていれば嫌でも納得、信じるしかない。

だからルシル君とプレンセレリウスさんに恐縮してしまっている。千年続いた戦争を終わらせた遙か古代の英雄、世界滅亡の危機を救った救世主、次元世界誕生に立ち会った者……。そんな反応を示すのも仕方ない。

「早とちりする方が悪いだってそれは。オレ、一言もミスしたなんて言っていないぞ」

「だからこういう場合は縦に触れ。……ってお前、わざとやったな……?」

ルシル君がジト目に睨みつけると、プレンセレリウスさんは悪びれる様子もなく「バレたか」ってニコツと笑う。

なんて紛らわしい。というか何でそんなことしたのかが解らない。だからみんなで嘆息。アンスールのメンバーの日常はこんな緊張感のないものだったのかなあ……?」

もうプレンセレリウスさんの会話はルシル君に任せよう。

「もういい。じゃあ次は……私たち青チームだな。レン、サイコロを」

ルシル君はサイコロを受け取るために右手を差し出すけど、プレ

セレリウスさんは無言で右手で制した。

そして、「あの娘達はオレを倒した。その時点でこのエリアはクリアだ」って聞き捨てならない事を告げた。

「え？ それってどういう・・・？」

「あの、戦うっていうお題じゃないのに・・・？」

「ん？ ああ、オレは管理人だぜ？ 管理するエリア内のルールは全部一任されるんだよ。」

だからさっきのお題で、オレを倒したらこのエリアをクリア、っていうルールに変更したんだ。

負けるなんて思ってみなかつたしなあ。でも負けちまった、あはは」

私とフェイトちゃんの疑問に、プレゼレリウスさんは苦笑いで答えてくれた。

「お前、それははやて達を侮り過ぎだ。彼女達は強い」ってルシル君は呆れていた。

ルシル君に認めてもらえる。コレって実は結構すごい事なんだよね？

「だな。というわけで、名残惜しいけど次のエリアへ案内しようか」

私達の足元に光が溢れる。視界が白に染まろうとしている中、「次で最後だ。ま、頑張ってくれ」ってプレゼレリウスさんの優しいげな声が聞こえてきた。

次で最後。じゃあ次のエリアをクリアすれば脱出できるんだね、このスネルっていうゲームの中から。

グロリアが全ての発端だった今回の事件。でも、スバルやティアナ、エリオとキャロから聞いた話から見れば。

(グロリアがアポリュオンの可能性は低い)

はやてちゃん達がお題をしている間、私達が話していたのはルシル君達の正体者だけじゃない。

グロリアの事もだ。スバルとティアナから聞いたのは。

傷つけてもいいという許可を貰っていない、守る側。

そしてエリオとキャロの話は。人を守るのも仕事、戦闘の意思はない、というもの。

“アポリュオン”なら考えられない言葉。でも同じ“アポリュオン”で似たような娘は居た。

レヴィだ。“アポリュオンの番外位・大罪ペッカートゥムの嫉妬レヴィヤタン”。

ルーテシアとアギト、今は亡き騎士ゼスト共に過ごしたレヴィヤタンは、“ペッカートゥム”を裏切ってルーテシア達と一緒に過ごす事を選んだ。

(環境によって考えが変わるアポリュオンも居るって事で良いんだよね・・・?)

ルシル君はある可能性が導き出した。

グロリアは“アポリュオン”じゃなくて“界律の守護神テストメント”じゃないかって。

知らない名前、姿形。つまり“神意の玉座”に在る本体君ルシルと今ここに居る分身体君ルシルの繋がりが消えた後に入ってきた新しいメンバー。

“守護神テストメント”も色々とメンバー交代があるみたい。

元4th・テストメントの“終極テルミナス”とかも居たことだし不思議じゃない、らしい。

(ならグロリアの目的は?)

ルシル君は言う。グロリアは私達を守るためなんじゃないか、って。  
“アポリュオン”の誰かがまた来て、それで私達を狙っていて、それを防ぐために来たのがテストメント・グロリア。ってことに。でも結局は推測の域で、ルシル君は「頭の片隅にでも置いておいてくれ」ってことで話し合いは終わった。

(でもその推測が正しい気がする。でも、それだったらどうしてシヤルちゃんじゃないんだろう・・・?)

話し合いが終わった後、ただその疑問だけが私を悩ませた。

++++Sideなのは フェイト++++

視界が白からクリアになると、そこはもう夕暮れの遊園地じゃなかった。

地平線の彼方まで続く平原。朝焼けの空。そして今度のマス目の道は平面じゃなくて空へ向かって螺旋状に伸びてる、まるで天へ駆け昇るための螺旋階段。

「綺麗なところだね・・・」

「うん。なんか自分の存在がちっぽけに思えてくる」

なのはにそう答える。それほどまで綺麗、とても落ち着ける場所だった。  
みんなもそれぞれ深呼吸したり、朝日に目を細めて眺めたりしている。

私も綺麗な朝焼けの空を眺めていると、「最後のエリアとしては素

晴らしい光景だな」とルシルが隣に来て言った。

「うん」と答える。転送する直前に聞こえた、「次で最後だ。ま、頑張ってくれ」というプレッセルリウスさんの言葉。

正直なところ、アンスールのメンバーが全員出てくると思っていたけど。

「ここをクリアすれば現実に帰れるんだね」

「そうだな。本当はシエル達にも逢いたかったが、そう上手くはいかないか」

「シエフィリスさんにも、だよね・・・？」

ルシルは意図してなのか無意識なのか判らないけど、シエフィリスさんの名前を一番に出さなかった。

妹のシエルさんの名前を一番先に言ったことはおかしなことじゃない。

でも、どうしてかそう思った。するとルシルは「そうだな。シエフイにも逢いたいが、だが今は君が私の好きな女性だから」なんて不意打ちに告白めいた事を言われた。

一気に顔が、ううん、全身が熱くなる。ルシルの顔から視線を逸らして俯く。

「ル、ルシル・・・不意打ちにはちょっと気をつけてほしいかも・・・」

「??? 不意打ち? 一体何を指してそう言ってるんだ?」

判ってないんだね、ルシル。いきなり、好きだ、なんて言われたら驚くし、何より恥ずかしくて穴があったら今すぐ入りたい。

ちよつと頭を冷やす時間が欲しいから「ちよつとごめんね」と告げて、なのはとヴィヴィオ達の元へダッシュ。

「フェイトちゃん・・・？」

「どうしたのフェイトママ、顔が真っ赤だよ？」

「え？ ううん、何でもないよヴィヴィオ。えっと、アインハルト達はちよつとは落ち着いた？」

ルシルの事を知って恐縮、極度の緊張からあまり喋らなくなった。ヴィヴィオは乾いた笑い声を出して、「気にすることないよって言ったんだけど・・・」って当惑してる。

そこにアインハルト達が、

「もう大丈夫です。とても驚きましたし、今でも少し戸惑いがありますが、ですが。」

「うん。でも結局は現在いまが大事って事なんだよね」

「そうそう。ヴィヴィオは凄いママ達とパパが居て羨ましいな」

「アインハルトさん、コロナ、リオ・・・、ありがとう」

よかった、ヴィヴィオ達の方はもう大丈夫みたいだ。

なのはと笑みを交わしていると、どこからか涼しい風が吹いてきた。

「ようこそ、スンベルの第四、そして最後のエリアへ」

遅れて綺麗な女性の声が響いてきた。

一斉に声のした方へと振り向く。そっか、やっぱりあなたが出てくるんだ。

ヴィヴィオ達、アギトとルーテシアとレヴィ。アンスールのメンバーの顔を知らない子達が口々に、「私に似てる」、って言う。そう、そこには私と似た顔立ちのひとりの女性が佇んでいた。

蒼く綺麗な長髪はツースイドアップ、柔らかな桃色の瞳、きめ細かな白い肌。

この時点で私なんかよりずっと美人orz。身に纏っているのは装飾の施された足元まで隠す白いワンピースに白のクローク、そして白いパーハを被ってる。

「シエファイ……、そっか、最後の管理人は君か」

「うん。ルシル。みなさん、私、蒼雪姫<sup>ソウセツキ</sup>シエファイリス・クレスケンス・ニヴルヘイムがこの最終エリアの管理人を務めさせていただき  
ます」

ルシルとシエファイが見詰め合ってる中、レヴィが「何アレ？ ルシリオンとシエファイリスさんってどんな関係？」って、私にして見ればちょっと禁句っぽい事を誰にとは言わず訊いてきた。

そこにヴィータが「ああ、セインテストの恋人だよ、昔のな」ってきっぱりと事実を告げた。

さすがにそんな答えが返ってくるなんて思ってたレヴィ、知らないヴィヴィオ達も呆然となった。

「えっと、うん、ルシルが人げ　ううん、テストメントになる前だった頃の恋人で、同じアンスールの魔術師、そしてニヴルヘイムの王女様、だったかな」

人差し指で頬を掻きつつ、私はシエファイリスさんの知る限りの事を

告げた。

もっと詳しく言えば、“ヴァルキリー”と“ノルニル”っていう、シグナム達のようなプログラム生命体を、ルシルと共に創り出した天才でもある。

そしてその作業の中で、二人は恋人になった……ってルシルは言っていた。

考え込んでいると、みんなが同時に「あ」って漏らした。なんだろう？って思っただけ意識を外界に向け、私も「あ」って漏らした。

シエフィリスさんがルシルの胸に飛び込んで抱きついていて、胸に顔を埋めていた。

なのは達から気遣いの視線を感じる。でも、あれはしょうがない、しょうがないよ。

だから「私は大丈夫だから」とみんなに言う。私がシエフィリスさんの立場だったら同じ事を絶対にやってるから。

「ごめんなさい、現在のルシルには恋人が、居る、んだよね……？」

「ああ。大切な女性が出来たよ」

私へと視線を向けるルシルとシエフィリスさん。

オロオロしてしまうけど、そんなのじゃダメだって自分を奮い立たせて、シエフィリスさんと目を合わせる。

するとシエフィリスさんは「そっか。うん、可愛い彼女さんが出来たようで嬉しいよ、ルシル」ってすごく可愛らしい笑顔を見せた。

ルシルがあの人を好きになったのが解る。私だって今の笑顔にドキツとした。

「それじゃ早速本題に入ろうか。レン達から話は聞いている。チーム分けをしていて、次は青チームという事で良かったんだよね……」



「？」

「ああ。なのは。サイコロは君が振ってくれ」

「えっ？ あ、そっか。うん、判った」

「さあ、どうぞ。貴方達の運命を定める大事な一振りよ」

シェフィリスさんの両手の上に現れるクリスタルの様な16面体のサイコロ。

なのはは一步一步とシェフィリスさんの元へと行って、サイコロを受け取った。

なのはは青チームのメンバーであるルシル、ヴィータ、リエイス、ヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルトを一通り見回してから「それじゃあ行くね」と告げて、サイコロを放り投げた。

地面に落ちて、コロコロと転がったサイコロが出した数字の目は・・・

「11、だね。じゃあ青チームのみんなはどうぞ、天奔る階段へ」

シェフィリスさんが螺旋状のマス目の道へと招き入れる仕草をする。なのはたち青チームは集まって、「いつてきます」と私達に告げ、私達も「いつてらっしゃい」「頑張つて」と返して見送る。

なのは達が螺旋状のマス目を歩いて行って、11マス目に到着した。そしてこの場に流れるのはルシルのお姉さん、ゼフィランサスさんのアナウンス。

『大変大変！ ある魔術師の家から魔道書が盗まれちゃったっ。』

君達は魔道書を盗んだ泥棒さんから魔道書を取り返そうっ！ オオ

ーッ！』

お題の内容が読み上げられた後、なのは達は転送された。

++++Sideフェイト　リエイス++++

転送された先、そこは青空の広がる平原と森林。

私達は平原のど真ん中で、視線の先に森林があるという風だ。

それにしてもお題の内容からして夜かと思っていたのだが・・・  
真昼間だな。

「泥棒を捕まえるという事で暗い夜の中でのお題かと思っていたのですが・・・」

「うん、そうですね。キラキラな青空・・・」

アインハルトとヴィヴィオが空を仰ぎ見ながらぼやく。

ヴィータも「まったく。白昼堂々の泥棒なんざ碌なもんじゃねえ」とぼやく、それにルシオンが「昼だけでなく夜の泥棒も碌なモノじゃないがな」と呆れる。

「でも、どこに泥棒が居るんだろ・・・？」

「やっぱ森の中・・・？」

コロナとリオが森へと視線を移した。

おそらくそうだろう。こんな広い、視界を遮るような場所にこのこ現れるわけがない。

そうと決まれば話は早く、私達は森を目指す事になった。

「なのはママ、ルシルパパ。わたし達の事は気にしないで先に空を飛んで行っても……」

「その方がもつと早く泥棒を見つけられるかもしれないですし」

「わたし達は下から捜します」

「たぶん、それが効率的……だと思えますから」

「ルシリオン、高町。空と陸、二手に分かれ捜索した方が良いのではないか？」

空を飛べないヴィヴィオとその友人達の気遣いをそう言い直す。

ルシリオンと高町は一度ヴィヴィオを見、そしてルシリオンは「妙に気を遣わせてしまつてすまないな。ああ、ここはヴィヴィオ達の案を聴こう」と頷く。

む、確かに言いだしたのはヴィヴィオだ。が、案という形としたのは私なのだが。

高町が「じゃあチーム分けはどうする？」とルシリオンに訊ねる。

「私となのはが空、ヴィータ達は陸だ」

「おい、お前となのはだけって少なすぎねえか？ あたしかりエイスを……」

「ヴィータ。ルシリオンの魔術の中に、こついつた状況に相応しい術式がある。」

高町とルシリオンとその術式があれば空からの捜索は十分だ」

コード・イシユリエルという、魔法で言えば広域探索魔法サーチャーの術式だ。それがあれば人数の問題を無しにできるだろう。

「……そうかい。そんじゃ空を任せていいんだな？ セインテ  
スト」

「ああ。任せてくれ、ヴィータ。君の方こそヴィヴィオ達の事を任  
せるぞ」

「判つてらい。お前こそなのはの事を任せっからな」

「判っている」

「じゃあヴィヴィオ、みんな。ここで一旦別れて搜索に入るから。  
みんな、気をつけてね」

「うんっ」「……はいっ」「」

こうして私達は空と陸に分かれ、空へと上がっていったルシリオン  
と高町を見送り終えた私達は泥棒の搜索を開始した。

生い茂る木々の中、私は殿を務め、最後尾で周囲を警戒しつつ念入  
りに捜す。

潰す相手は泥棒、とは言っているが、おそらく相手はアンスールの  
誰かだろう。

泥棒から最もかけ離れた英雄だ。問題は、誰が、なんだが……。

「誰を相手にしたとしても一筋縄ではいかないな」

「リエイスさん？」

「いや、何でもないよ。ほら、足元を注意しなければ転んでしまうよ、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオの足元を指差す。根が大きく出ていて天然のトラップになっていた。

躓く前に指摘する。ヴィヴィオは「あ、ありがとうございます」と小さく会釈して礼を告げた。

それから少しして、先頭に行くヴィータが「おい、足跡だ。まだ新しいから、ひよっとして近くに居るかもしれねえ」と、私達に警戒するよう促してきた。

みんなはすでに防護服となっているし、元より警戒は怠っていないが、さらに警戒するように心がける。

ポラール・リヒト  
黄金極光

ここより約300mほど離れた場所より黄金に輝く砲撃が天へと昇った。

砲撃の先、そこにはルシリオンと高町が居た。ヴィヴィオが「なのはママ!」と、高町の名を呼ぶ。

だが何も心配することは無い。高町の側には彼が居る。

コード  
ケムエル  
護り給え、汝の万盾

蒼に輝く無数の円盾が組み合わさった巨大な円盾が、迫り来ていた黄金の閃光を完全に防いだ。

高町が円盾より少し身を乗り出し、「レイジングハート」の先端を地上へ、正確には砲撃を撃った術者へと向けた。

エクセリオンバスター

そして放たれる桜色の砲撃。私達が向かおうとしていた地点に着弾。着弾点で爆発を起こし、粉塵を舞い上がらせている。

『ルシリオンより全員へ。相手はアンスールの魔術師、センメツキ殲滅姫カノンだ！』

射砲撃戦特化の魔術師で、私と同様に近接格闘戦を苦手としているっ』

カノン・ヴェルトール・アールヴヘイム。

アンスールの一人で、ルシリオンの弟子ゆえの砲撃戦に特化した、最強の射砲撃魔術師。

固有能力は確か空間干涉。射砲撃を転移させるのを主としていたな。つまり相手の頭上や目前、背後に転移させてゼロ距離着弾させたり出来る。

それに最大射程がとんでもない。通常の超長距離砲撃で最大90km超。

転移砲撃の場合、もう射程という概念が無くなる。

そして、カノンの強みはもう一つある。魔術師の目指す高み、ディヴ“神アイン・ポイントの力の一つ、創世結界だ。

創世結界・殲滅領域フェアティルゲン・ヴェルトール。

結界内すべてが砲門となり、全方位からの無限数連続砲撃を可能として閉じ込めた対象を殲滅するというものだ。

そんな全力ルシリオンクラスの射砲撃魔術師を相手にして、ヴィヴィイオ達が勝てると？

『私となのは以上に格闘戦を得意とする君たち地上班なら墜とせなにつ！？』

ルシリオンからの念話。しかしルシリオンは全てを言いきる前に驚愕の声を荒げた。

その直後に、

ルイン・トリガー  
「庄戒」

私達は見た。ルシリオンと高町がものすごい勢いで地上に落ちていくのを。

あの突然とした墜落の仕方。ルシリオンの記憶の中にも出てきたものだ。

「なのはママ！ ルシルパパ！」

「先走るなヴィヴィオ！」 「ヴィヴィオさん！」 「ヴィヴィオ！」

ヴィータ達の制止を聴かず、ヴィヴィオは二人の落下地点に走っていく。

アインハルト達は私とヴィータを見、どうしていいか判断を仰ぎようとしていた。

私はヴィータに「お前に任せる」と告げる。私より誰かを動かす経験値の高いヴィータが指揮を執った方が良いだろう。

「・・・行くぞつ。相手は二人。あたしの記憶が正しけりや、砲撃戦特化のカノンと格闘戦特化の魔術師の二人一組だ。」  
ツーマンセル

アインハルト達はカノン・・・銃を持つてる奴を。あたしとリエイスは・・・シエルだ」

「了解つ！」 「承知した」

私達は少し遅れてヴィヴィオを追いかけ始めた。

コロナが「あの、シエルっていう人もアンスールなんですよね・・・」

？」と私とヴィータに訊ねた。  
それに答えるのは私だ。コロナだけでなく、アインハルトとリオにも聞こえるように説明する。

「そうだ。当時、近接格闘戦においては最強とされた魔術師で、重力を操作する。

だから空に居ても、ルシリオンと高町のように重力で地上に落とされてしまう。

そして、重力を纏った拳打、蹴打は障壁を容易く砕く。

ゆえに格闘戦では最強として名高い。それが拳帝シエル・セインテ・スト・アースガルド・・・ルシリオンの実妹だ」

「……っ！」「」

3人は、この場にルシリオンの妹が居るということにまず驚きを見せた。

アインハルトは「格闘戦最強の英雄・・・」と少しばかり戸惑いを見せる。

コロナも「重力を操るなんて。勝てるわけが・・・」と諦めモードに入り、リオは「でも遠距離からの射砲撃なら」と冷静に戦術を練っている。

誰かが何かを言う前に、前方より連続で爆発音が轟いてくる。

「チツ、もう始めてやがる！ それぞれ自分が担当する相手に集中！アインハルト達の相手カノンは金髪で、二挺銃か大砲を持つてる！」

「……判りましたっ」「」

木々の向こう、蒼、桜、紫、金、という4つの魔力光に溢れていた。そして、私達もアンスールの最強コンビ戦場の妖精との戦闘に参戦



する。

+++++SideryEis ルシル+++++

カノンの砲撃を防ぎ、ヴィータたち地上班に念話を送っている最中、ギンツと鈍い音が耳に届いた。

「なにっ!?!」

ああそうか。カノンが居れば、シエルが居ても何らおかしくはないよな。

拳帝シエルと殲滅姫カノン。二人で一つの戦力“フロント・フェアリー戦場の妖精”なのだ。

全身に重く押し掛かる目に見えない力。シエルの重力操作を受けるのも本当に久しぶりだ。

私となのはは重力増加術式ルイン・トリガーで強制的に墜落させられた。

「なのはっ!」

「ルシル君……!?!」

墜落途中、なのはの右の二の腕を掴んでこちらに引っ張り抱き寄せ

る。なのはには悪いが少し我慢してもらおう。すぐさま対重力の術式をスタンバイ。

正直な話、私の自前の重力術式は弱い。シエルほどの強大な重力操作は出来ない。

だが、少しくらいは相殺し落下速度を落とせるはずだ。私となのはを中心に重力操作を行い、落下速度を徐々に、しかし確実に落としていく。

地面まであと3mというところで、足元に向け爆風を発生させ、さらに落下速度を落とす。

ズンツと着地。次いで抱き寄せていたなのはを降ろした。

「えっと、ありがと、ルシ」

「取り合えず話は後、だな」

「?? あっ、シエルさん、カノンさん・・・！」

「あっ、兄様！」

「ルシル様、先程のお手並み、お見事です」

「あー、でも女の人を抱き寄せるのってどうかと思う」

シエルは、私よりかは短いがそれでも長い銀髪を赤いリボンでツインテールにし、ルビーレッドとラピスラズリのオッドアイは若干釣り目。

同盟軍の前開きの黒長衣、半袖の黒ボレロと膝下まである黒のハーフパンツの裾にはルーン文字の金の刺繍、黒タイツ、黒のブーツには白銀の脚甲。

そして両腕には、私が創り贈った白銀の籠手型神器“月狼ハティ”と“陽狼スコール”。

「姿は10歳のままか・・・」

カノンは、ストレートなセミロングの金髪。ライムグリーンの柔らかな双眸。

フリルとレースとリボンがあしらわれた純白のゴシックドレス。フリルの付いた膝上までのスカート。裾からはドロワーズが少し覗いている（全部隠れるようにしなさいと言っていたんだがな）。

白のオーバースカートの両腰には銀の装甲板があり、“星填銃オルトリンデとグリムゲルテ”を収める可動式のホルスターが付いている。

編み上げのロングブーツも白。両手にはグローブ。

そんな黒シエルと白カノンを見てみると、幼少時代のフェイトとなのはを思い出す。

「仮にも王族が泥棒の真似事など許せるものじゃないなあ」

「だってこれがわたしとカノンに与えられた役目だもん」

V S ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?  
其はアンスールが拳帝シエル&殲滅姫カノン  
? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? V S

カノンが“星填銃オルトリンデ”の銃口を私達にスツと向けてきた。すぐさま私となのはは左右に飛び退くよく距離を開ける。

ポラール・リヒト  
黄金極光

刹那に放たれる黄金の極光。何のチャージも無しで、なのはのフルバスターと同程度の威力を有する砲撃を撃ち出せる。

「ルシル君！」と砲撃の向かい側からなのはの声。私は「カノンは

任せる！」と返し、実妹シエルと対峙する。

シエルは私と試合が出来る事が嬉しいのか喜色満面で、足元にアメジストに輝くアースガルド魔法陣を展開させ、両拳に不可視の重力を纏わせた。

「フォトン・スマッシュアアーッ！」

「高速砲、ですね。なら、こちらも・・・！」

シユネル・アングレフ  
疾光砲弾

なのはとカノンの高速砲撃の撃ち合い。

砲撃は二人の間で衝突してせめぎ合い、結果は相殺という形に決着。なのは達の事も気にはなるが、任せると言った手前信じるしかない。そう、今は自分が相手にしなければならぬ相手に最大に意識を向けなければ。

すでにシエルは私より2mと離れていないところにまで踏み込んで来ていた。

「はあああああッッ！」

フェアリー・バイト  
圧壊拳

受けてはならない、防いでもならない、強力な拳打。

私は迫る拳打を体を大きく沈ませることで回避し、頭上を過ぎた右腕を左手で掴み取り、右掌から無属性の砲撃をゼロ距離で撃ち込む。しかし、やはり私の妹。私が何をしようとしているのかよく知っている。

自分の右腕を掴んでいる私の左手を支点として跳躍し宙で一回転、砲撃を回避。

そのまま左腕を捻るようにして私の背後に着地。  
当然私はしゃがんでいた事もあって体勢を崩してしまい、最悪尻餅  
をついてしまう。

「フェアリー 破壊・・・拳ツ！」

そんな私に振り下ろされるシエルの重力を纏った左拳打。  
シエルの腕から急いで手を放し、飛び跳ねるようにしてその場から  
離脱。

地面に着弾したシエルの拳打が直径8m、深さは大体3mくらいの  
クレーターを生み出した。  
衝撃に吹き飛ばされてしまいが、空中で体勢を整えて着地。

「コード・ヴァーリ 復讐神の必滅

カウンター砲撃のヴァーリを3条放つ。

術者に敵対して攻撃を加えた対象を永続追尾するという効果を持つ  
ソレは、曲線を描いてシエルへ迫る。

“ハティとスコール”には属性攻撃を半減させる防御効果を付与し  
てある。

それゆえに属性のある攻撃を行えば、容易くその威力を半減させら  
れ、シエル自身の魔術で殴り弾き飛ばされて完全に防御される。

故に一番決定打を与える可能性のある無属性で攻撃しなければなら  
なくなる。

「我ながら厄介な神器を贈ってしまったものだ、なっ！」

「コード・ラフレイ 豊穰神の宝剣

とは言え、シエルの拳打の威力をもってすれば無属性だろうが無効

化されてしまう。

ヴァーリを殴り弾き飛ばして最接近してきたシエルに対して、発動すれば常に相手の一枚上を行く剣戟を出せるフレイを発動。今し方創りだした魔力剣が、シエルを防御の上から斬り捨てようと蒼い閃光の尾を引いて空を走る。

そこに、明後日の方から黄金の魔力弾が一基飛来。

シエルの脇腹を目指していた魔力剣を撃ち碎いた。視界の端に映るカノンは“グリムゲルテ”をこちらに向け、“オルトリンデ”から放たれる射砲撃でなのは動きを制限していた。

「さっすがカノン！ 最高のパートナーだ、よっ！」

フェアリー・バイト

破壊拳

「ぐぐおあっ!？」

アッパー気味の拳打が腹に突きささる。やっぱり重い一撃だな。意識が一瞬飛ぶ。体内がメチャクチャにされたような気持ち悪さ。気が付けば私は空を舞っていて、しかし体が自由に動かせない。完全にシエルの重力の檻に支配された。シエルが地面で待ち構えているのがうつすらと見えた。

あの体勢……おい、今の私に真技を繰り出そうと言っのかっ!？

+++++Sideルシル ヴィヴィオ+++++

そこに辿り着いた時、ルシルパパが小さな女の子の一撃によって空にまで吹き飛ばされていた。

なのはママも女の子の二挺の金色の銃から放たれる射砲撃で苦戦し

ていた。

わたしは考える間もなく、ルシルパパを完全に墜とそうとしていた銀髪の女の子の元へ走る。

その女の子がわたしの接近に気付いた。ルシルパパと同じ銀髪に蒼と紅の虹彩異色。

ルシルパパの妹さんで間違いない。名前は確か・・・

「シエルさん・・・！」

「お？ 新手の登場だね。いいよ、掛かっておいで！」

ソニックシューター・アサルトシフト

周囲に魔力スフィアを幾つも展開して、「ファイアツ！」と射出。

高速射撃のソニックシューター、その複数射出して弾幕を張るアサルトシフト。

それで一度シエルさんの出方を見る。受けに回るか避けるか。

でもシエルさんは、「甘いよっ！」って真っ直ぐ弾幕の中を突っ切ってきた。

シューターは何か見えない力で無理やり射線を変更されて、変のところに飛んで行った。

「残念っ。出直してきてね・・・！」

耳にギンツツという鈍い音が届いた。シエルさんの右拳が歪んで見える？

直感が告げてくる。この攻撃は絶対に受けちゃダメだし防御に回ってもダメだって。

受けたらさっきのルシルパパのように信じられないほどに吹き飛ばされる。

フェアリー・バイト  
圧壊拳

バックステップからの横っ跳びで完全に攻撃範囲から出る。  
シエルさんもステップで追い縋って来て、

シュワルベフリーゲン

そこに赤い魔力を纏った鉄球弾が8つ、シエルさんに殺到していく。  
でも、シエルさんが「ルイン・トリガー圧戒」って呟いた瞬間、ヴィータさんのフリーゲンが全部地面に墜落した。  
そしてわたしも上から見えない何かに押し付けられるようにその場  
にうつ伏せに倒れ込んでしまう。

「なに、これ・・・!?!」

両手について体を起こそうと思っても、それ以上に押し潰される力  
の方が強くて起き上がることが出来ない。

「ヴィヴィオを解放してもらおうっ!!」

ナイトメア

落下途中のルシルパパを受け止めて抱えたりエイズさんが砲撃を放  
つ。

シエルさんは両拳を胸の前で打ち付けあった後、「フェアリー・バイト圧壊拳!!」つ  
てリエイスさんの砲撃を真っ向から殴って相殺した。  
そのおかげなのかも判らないけど体が自由になって、すぐに起き上  
がってシエルさんから離れる。



「大丈夫かヴィヴィオ！　　たく、先走りやがって、危ねえだろうがッ」

「ごめんなさい・・・」

「そのくらいにしておいてあげてくれ、ヴィータ。」

大切な母親と父親が危険な状態だと思ったんだ。取り乱してもおかしくはないだろ」

リエイスさんがそう言っただけで、ヴィータさんも「まあ解らねえわけでもねえけどさ」ってそっぽを向いて、シエルさんへと視線を移した。

シエルさんはただじっとこっちが動くのを待っていてくれる。

リエイスさんはシエルさんに注意しながら「ヴィヴィオ、ルシリオンを離れた場所に頼めるか。その後は高町達と合流して殲滅姫の撃破を頼む」と、抱えていたルシルパパをわたしに預けた。

「あ、はいっ、判りました・・・大丈夫？　ルシルパパ」

そう訊くとルシルパパは小さくうめき声を漏らして、「ああ、大丈夫だ。ラファエルで治療すればすぐ動ける」って言って微笑んでくれた。

よかった。さつきザフィーラにも殴られていたけど、明らかにダメージはこっちの方が大きい。

ルシルパパに肩を貸して近くの木にまで移動。ルシルパパを木の幹にもたれさせて座らせる。

「じゃあわたし・・・」

「ああ、なのはや友達の元へ行ってくれ。私も動けるようになった

らヴィータ達に加勢する」

ルシルパパと右拳を打ち付けあって、わたしは遠くへ移動しながらも攻防を繰り返してゐるのはママ達の元へと走りだす。

++++Sideヴィヴィオ リオ++++

英雄。あたしが知るのとは古代ベルカとかの時代の人達の事。

でも今のあたし達が相手にしてるのはもつと昔、次元世界が生まれる前の時代の英雄。

ルシルさんやリエイスさん、なのはさん達からアンスールとか大戦とかの話聞いた時、正直信じられなかった。

けどその真剣な顔を見ていたら、それが本当の出来事だったんだって思うしなくなつて、それにルシルさん達の戦いのレベルが異常なのも大きかった。

現代の魔導師のすべての上を行く古代の魔術師。魔法の原型の魔術を使う人たち。

「リオ、気を抜いちゃダメ!!」

「え……？ あっ！」

コロナの声にハツとして、今のあたしがどれだけ危ない状況なのか判った。

カノンさんっていう射砲撃の英雄が持つ金色の銃があたしに向いてた。

シュネル・アングリフドゥーオ  
疾光砲弾・双砲

砲撃が放たれる。あたしを丸ごと飲み込めるほどに大きな砲撃。今からじゃ避けきれないし、防げるほどの障壁を張れない。

「リオちゃん！」

プロテクションEX

どうする事も出来なかった時、なのはさんが展開した半球状のバリアがあたしを守ってくれた。

でも砲撃は一つだけじゃなくて、もう一発の砲撃がバリアに衝突。すぐにヒビを入れていった。

こうなったらバリアが突破されたと同時に射線から抜け出そう。

両脚に力を込めて、目はバリアと砲撃の設置点に集中。

パキン、と音がしたと同時にしゃがみ込んで、完全にバリアが割れたと同時に低姿勢でダッシュ。

背後を過ぎ去っていく砲撃から放たれる熱。受けてたら絶対に墜とされてた。

+++++Sideリオ コロナ+++++

なのはさんの展開したバリアが突破された。

でもリオは砲撃が直撃する一瞬でそこから離脱して、なんとか無事。わたしはリオにもう一度「ボーっ」としてちゃダメだよリオ！」って怒る。

リオは「うんっ、ごめんっ！」って謝って、

「今度はこっちから行かせてもらおうよっ」

## 双龍円舞

炎と雷、二頭の龍を召喚させてカノンさん目掛けて突撃させた。

カノンさんの数えるのも面倒な魔力弾の弾幕（もう金色の壁みたい）に押し切れなかったアインハルトさんが巻き込まれないように離脱して、そこに二頭の龍が弾幕の中を突き進んでく。

でもやっぱり弾幕が厚過ぎて、リオの二頭の龍はカノンさんに到達する前に粉碎された。

『なのはさん。ロックバインドで牽制しますから、なのはさんのバインドを決めてもらえますか・・・？』

『っ！ うん、もちろんっ。コロナちゃんだけじゃなくて、リオちゃんもアインハルトちゃんも何か手が浮かんだら遠慮なく言って！ 私に出来る事なら何でも手伝うからっ！』

『はいつ、お願いしますっ！』

「何か良い案が出ましたか・・・？」

## ヴァント・ケーゲル 弾幕結界

またわたし達とカノンさんの間に黄金の魔力スフィアが壁のように立ちはだかる。

そしてカノンさんは発射はまだかと待機してる無数のスフィアの壁の向こう側。

スフィアの隙間から見えるカノンさんと目が合った。ビクツとなる。わたしより小さい女の子なのに、すごい威圧感。

あれが・・・本物の英雄・・・！ レベルというより格が違うの

が理解出来てしまう。

「ロ、ロックバインド・・・！」

だけど、こつちもただじゃ負けられない。ううん、きっと勝ってみせる。

地面の物質を操作して相手を捕らえるロックバインドを発動。スフィアの内の四つが動く。スフィアは弾丸となって、カノンさんを捕らえようとした岩石の拘束条を撃ち抜いて粉碎した。

レストリクトロック

でもそれで終わったと思ったら大間違い。

わたしのバインドを無力化したと油断したその瞬間に、なのはさんのバインドがカノンさんを捕らえる。

「デイバイーン・・・バスタアアーーーーッ！！」

間髪いれずなのはさんは砲撃をスフィアの壁に撃ち込む。

砲撃によって撃ち抜かれた部分のスフィアから周囲のスフィアへと連鎖的に誘爆していつて、辺りに爆煙が立ちこめる。

「ゴライアス！」

ロケット・パンチ

それもお構いなしにロケット・パンチを突撃させて、カノンさんを狙う。

なのはさんのバインドは簡単に抜け出せないから、きつとさっきの砲撃も食らったはず。だけど、

二つの金の巨大砲撃がロケット・パンチを粉碎して、えっと・・・10、11、・・・数えるのも嫌になるほどの魔力弾が飛んできた。

なのはさんのバインドからこんなに早く抜け出すなんて・・・。リオとアインハルトさんはわたしと同じように盾としたゴライアスの後ろに。

そしてなのはさんは、魔力弾で相殺したりシールドで防御したり回避したりとすごい事をやってのけてる。

「ルシリオンお父様は、カノンさんは接近戦に弱いので私達でも十分に勝てるよと仰っていましたが」

「まず近づけないんじゃないでしょうか・・・」

「あの馬鹿みたいな弾幕を越えないと、勝機が無いつてことかあ」  
ゴライアスの体が少しずつ削れていってる中、どうやってカノンさんの懐に飛び込むか考える。

十十Sideコロナ ヴィータ十十

「ラケーテン・・・ハンマアアー・・・」

ラケーテンフォームとした“アイゼン”の遠心力いっぱいの一撃。シエルはグッと両脚に力を込めたように踏ん張りを見せて、右の掌

を翳してきた。

重力で止める気か？ だけどここの高速の強打、重力をも突破してやる。

衝突する“アイゼン”とシエルの掌。 だけど衝突の衝撃が手に伝わらない。

フワツと包み込まれるような感覚だ。 でもすぐに、

インバクト・ヴォイド  
武装殺し

「うおっ！？」

“アイゼン”が急に重くなって、ズンツと地面に“アイゼン”のヘッドがめり込む。

何とか持ち上げようとするけど、ピクリともしねえ。

苦戦していると、「どうしたの？ もしかして重くて持てない？」ってシエルが笑う。

「アイゼンにだけ重力を掛けやがったのか！」

問いに対する答え。 耳にギンツツ鈍い音が届く。 重力操作が行われた合図だ。

シエルの左拳が歪んで見える。 重力を纏わせたんだ。

「その通りっ 対武器所有者の重力術式だ・・・よっ！」

フェアリー・バイト  
圧壊拳

動けないあたしに重力パンチを放ってくるシエル。

“アイゼン”を手放すしか避けられない。 でもそこに、

「おおおおおおおおおッッ！！」

シュヴァルツェ・ヴィルクング

顔の横から黒い魔力を纏ったりエイスの左腕が伸びてきて、シエルの拳打と真っ向から打ち合った。

馬鹿やるーっ！って思った。魔力を纏わせたくらいで相殺できるような攻撃じゃねえ。

でも、あたしの目の前に居るシエルの顔が驚愕に歪んだのが判った。

「うっそっ！？」

シエルが声を上げたと同時に“アイゼン”に掛けられてた重力が解けた。

すぐさまシエルの腹目掛けて振り上げるけど、シエルはバックステップでギリギリ避けた。

コト  
屈服させよ、  
イロウエル  
汝の恐怖

避けた先、着地したばかりのシエルの頭上に蒼い円陣が出来て、頭上からデケエ銀色の拳が勢いよく落ちてきた。

シエルは慌てることなく左の掌を拳に翳して、「ニクス・フォース反重力」って告げた。

すると拳の落下速度がガクンと落ちて、トンっとシエルの掌の上に乗った。

「兄様。忘れたの？ 重力は上下に働く力。だから頭上からの攻撃は一切わたしに通用しないって事を」

呆れた風にそう言った後、シエルはポンっと拳を頭上に放り投げ、



ゆっくりと落下してきた拳に拳打一発。

たったそれだけでデケエ拳がバラバラの粉々に砕け散った。やっぱ強えな、重力つてえのは。半端な攻撃は全部重力の壁に防がれるし、さっきのように武器限定に重力を掛けられたら攻撃手段が無くなっちゃう。

まあ体そのものに重力を掛けられるよりかはマシだけだよ。

「もう大丈夫なのか、ルシリオン」

「ああ。大丈夫だ。それよりリエイス。さっきシエルの重力をキャンセルしたな」

「あ、それはあたしも思ってた。何やったんだよ」

「シユヴァルツェ・ヴィルクングだ。あれは打撃力強化と効果破壊の魔法。」

だからさっきは重力を拳に纏うという効果を破壊したんだ」

あー、だからか。つつかさ「セインテスト。お前も似たような魔術無いのかよ？」だ。

だけど「無いな。そういった術式はアリスの方が得意だ」って首を横に振った。

アリス？ ああ、結界王だっけか？ 大戦の時、セインテストに初黒星を与えたつつう。

「へえ、そういう術式があるんだ。結構怖いね、魔法というのでもね」

シエルの体が若干浮いた。そして一度トンと足をついた後、地面を蹴ったものすげえ速さで突っ込んできた。

まずはルシルが魔力の槍を40基ほど展開してシエルの行く手に射出。

だけどそんなもん始めっから無いもんだっていう風に突っ込んで、地面に突き刺さった魔力槍を粉碎しながらまだ突っ込んでくる。

「私が止めるっ！ ヴィータ、ルシリオン、頼むぞっ！」

シュヴァルツェ・ヴィルクング

「「応ッ！」」

リエイスが両拳に黒い魔力を纏わせて、あたしらの前に躍り出た。突っ込んでくるシエル、構えを取って待ち構えるリエイス。あたしとセインテストはいつでもフォーローに回れるように“アイゼン”を構え、

「ラインゴルト・フロースヒルデ！」

右手の人差し指の指環が光って、セインテストは両手に白銀の銃剣を手にした。

「とおつげえ~~~~~~~~きッ!!」

「はあああああああアッ!!」

先制はリエイスだ。まずは左拳打を放って、対するシエルも「今度は簡単にキャンセルされないよっ」って左拳打。

衝突。とんでもねえ衝撃波が起こる。目を左手で庇いながらもしっ

かりとリエイスの姿を見る。

リエイスがガクンと膝を少し折るのが見えた。でも、それでも膝をつかないように必死に耐える。

ああすげえよ、お前。重力の一撃を押さえ込んでるなんて。

リエイスはシエルの左拳打を捌いて、間髪いれずに右拳打を打ち込む。

シエルは体勢を崩されたまま・・・回し蹴りで迎撃した。

「なにっ？・・・ぐあっ！」

右拳打を左蹴りで捌かれた後、右蹴りをまともに受けたりリエイスが吹っ飛んだ。

セインテストがすぐに抱き止めたけど、それでも衝撃を完全に抑え込む事が出来なかったから、セインテストも一緒に吹っ飛んだ。

「よそ見注意！フェアリー・バイト 圧壊拳ッ！」

「チツ・・・！」

パンツアーヒンダネス

“アイゼン”を両手で持って水平に構え、柄に一点集中のバリアを展開。

ズドンツと轟音。とんでもねえ重い一撃。踏ん張るけど、コイツは・・・ダメだつ。

踏ん張りきれずに吹っ飛ばされる。「ヴィータ！」ってあたしを呼ぶセインテスト。

背中に回されるセインテストの腕。一気に抱き寄せられる。でもやっぱり衝撃はそう簡単に柔らがねえ。

結局、あたしとセインテストは吹っ飛ばされることに。

「咲き乱れし、汝の散火!!!」

吹っ飛ばされてる中、セインテストが“フロースヒルデ”から人間の頭部大の蒼い炎の塊を放った。  
リエイスはその術式がなんなのか判ったみてえでシエルから離れる。シエルも「散弾・・・!!」って言った後、ニヤリって笑った。

リジエクト・メネス  
超重力装甲

「爆散粛清!」

蒼炎の魔力弾がシエルの近くで爆散、無数の小さな炎弾となって襲いかかる。

なのはのセイクリッド・クラスターのようなもんだな。  
無数の炎弾は、歪んで見えるシエルに触れることが出来ずに全弾霧散していく。

「立ち止まったな、シエル」

コード・ウル  
弓神の狩猟

なんとか着地したと同時にセインテストが魔力弓を創りだす。コード・ウルってやつだ。

蒼い槍の様な矢を放って、矢は放たれた直後に無数の光線となって、防御に徹してるシエルに殺到、連続で爆発を起こしていく。  
だがセインテストはそれだけで終わらせようとしなかった。

コード・ウル  
弓神の狩猟×10

セインテストは連続でコード・ウルを放ち続けやがった。そのあまりの容赦の無さに唾然となる。リエイスも「やり過ぎではないか？」って戸惑ってるし。だけどそんなのはただの杞憂だった。爆発の中から強大な魔力を感じ、シエルはあの爆撃の中でも墜ちてねえっ！

ジオ・ストライク  
重力圧縮砲

「のわあっ!?!」

セインテストがいきなりあたしを突き飛ばしてきたから転んじまった。

なにすんだっ!?!って言おうとしたところに、あたしとセインテストの間を通過するアメジストの砲撃。

砲撃が通過した地面を見れば、思いつきし抉れてやがった。

「重力を前方に飛ばす攻撃だ。巻き込まれたら体が潰されるぞ」

「んなのを使うか普通!?!」

シエルはあたしらを殺す気か?殺す気なのか!?

そこに「受けても死なないようになってるから大丈夫だよ?」ってシエルの声。

煙幕の中からシエルが出てきた。ありえねえ、あんなだけ爆撃されたのに、あまりダメージを受けてねえ。

「兄様、容赦が無さ過ぎるよ? あやうく負けるところだった」

「こちらは始めから勝つつもりだが?」

「んー、だよな。でも、わたしも勝ちたいから、今から本気で行くよ」

シエルがそう言っつて、ニカツと白い歯を見せるような笑みを浮かべた後、両拳を顔の前で打ち付けあつた。

今までは全力でも本気でもなかったつてか？ ああ上等だ。こつちだつて、と気合いを入れていると、「しまった・・・！」つてセインテストが何かに気付いたみてえだ。

「どうした、ルシリオン」

「戦場の妖精はシエルとカノンだけじゃない。どうしてすぐに気付かなかつたんだ。」

アリスだ。アリスを入れて戦場の妖精なんだ。シエルもカノンも盗まれたという魔道書を持っていなかった！

「そうか！ 戦場の妖精は、ヴィーグリーズ決戦からアリスが加入してトリオになつたんだ！」

「何でそんな大事なこと忘れてんだおめえらつ！」

セインテスト、お前もアンスールの一人つつつか部隊の中心人物だつたんだらうが。

するとシエルが「あゝあ、バレちゃつた」つて言つて肩を竦めた。

「気付くの遅いよ、兄様。そつ、魔道書はアリスが持つてるんだよ。わたしとカノンは、アリスが逃げるまでの時間稼ぎ係なんだあ」

「そついうことかよ。おい、セインテスト。お前、責任とつてアリスを追いかける」

「責任で……。いや、しかし……」

「心配すんなって。あたしとリエイスでシエルを抑えてやるから」

シエルから視線を逸らさずにそう言うと、シエルは「へえ。わたしを抑える、かあ。期待しちゃうよ？」って小首を傾げて可愛い笑顔を向けてきやがった。

うん、まあ可愛いんだけどさ、でもなんかムカつくんだよな、その余裕が……。

「リエイス、ユニゾンしてくれ」

「……。判った。ルシリオン、行ってくれ」

リエイスもあたしの案に乗ってきた。多数決だ。

セインテストは「無茶だけはするなよ」って言って、

### コード・ヘルモーズ 瞬神の飛翔

背中から薄く細長いひし形の翼を10枚、ひし形の翼の間に10枚の剣翼を展開した。

空戦形態ってやつだ。シエルが「行かせないよ、兄様！」って突撃してくる。

目くらましが必要だな。だから「ユニゾン、イン！」と、リエイスとユニゾン。

ユニゾンした時に起こる魔力流と閃光で、シエルの視界を一瞬だけ奪う。

その間にセインテストは空へ。

「やってくれるじゃん。てゆうか誰？」

今のあたしの姿を見たシエルが何度も左右に首を傾げる。そりゃそうだろうな。今のあたしの身長はリエイスとおんなじだ。髪の色や瞳の色、騎士服の色もリインとユニゾンした時とおんなじだけど、リエイスとユニゾンするとなんてか身長がグッと伸びるし髪も伸びる（胸の大きさをだつてシグナムに負けてねえ）。それだけじゃねえ。背中から、はやてやりエイスの様な翼も生えるんだな、これが。色が黒ならはやてのとお揃いなんだけどな。残念ながら、あたしの翼はリエイスの影響で白だ。

『グイータ。私はどうすればいい？ 補助に徹底するか、それとも』

『ガンガン行きてえから、お前も攻撃に参加しろ』

『了解した。行こう、グイータ』

「『おうよ』つつわけで、こつからのあたし達は手強いぜ？ 覚悟しろよ、シエル」

シエルにギガントフォルムにした“アイゼン”を突きつける。

大人の姿だから、ギガントフォルムも小さく見える。ま、扱いやすくなるから問題ねえけど。

シエルは「そこなくっちゃ！」って余裕を崩さない。

お互いに構えを取る。睨み合いがほんの少し続いて、

ニクス・フォース  
反重力

シエルが浮いた。来るっ。そう思った直後、シエルが地面を蹴って



突撃してきた。

「行くぜリエイスッ！」

『ああ！』

++++Sideヴイータ アインハルト++++

ヴイヴィオさんと合流して、なんとかカノンさんを打ち倒せないかと頑張ってはみましたが、魔力弾と砲撃の連射弾幕の前に一時撤退を余儀なくされた。

木々の陰に隠れてカノンさんと睨み合いながらも、なのはお母様とヴイヴィオさん、コロナさんの射撃魔法でカノンさんと牽制し合いつつ、カノンさんの攻略法をみなさんと検討。検討した結果、一つの案が出ました。

『まずはゴライアスを突撃させて』

『私とレイジングハートが、A・C・S・ドライバーで続いて』

『私とヴイヴィオさんとコロナさんとリオさんがなのはお母様に続き』

『最接近が成功したところで一斉に格闘戦に持ち込む』

最初のゴライアスは完全に途中で破壊されてしまわずです。

なのはお母様の身に危険がありますが、なのはお母様は『大丈夫。』

私とレイジングハートなら最後まで行ける』と言って下さいました。

『これで勝てますよね・・・？』

『ヴィヴィオ。これで勝つんだよ。大丈夫。みんなの力を合わせればきつと勝てる』

なのはお母様にそう元気づけられたヴィヴィオさんは『そう、だよ。うんっ』と自分の頬を張る。

それで気合が入ったようで、ヴィヴィオさんの顔からは迷いが完全に無くなった。

『それじゃあみんな。作戦開始。必ず勝とう！』

『うんっ！』 『うんっ！』

作戦開始です。まずはコロナさんが新たに『蘇れ巨神！ 叩いて砕け、ゴライアスっ！』とゴライアスを再創成。

コロナさんが『ゴライアス、ゴーツ！』と号令をかけると、ゴライアスはカノンさんへと真っ向から突撃していく。

「性懲りもなく、ですか。いいでしょう。殲滅姫、そして黄金砲台の二つ名を持つわたしカノン。受けて立ちますっ！」

ボラール・リヒト  
黄金極光

ロケット・パンチ

カノンさんの放つ大きな金の砲撃。それにゴライアスは右の腕のロケット・パンチ。

間で衝突した二つの攻撃は、ロケット・パンチの粉碎という形で決

着。

ですがすぐに左のロケット・パンチが放たれる。カノンさんは慌てることなく、

「シュネル・アングリフ  
疾光砲弾」

高速砲を二連射し、ロケット・パンチの速度を落とした後に「黄金ポラール極光」とトドメの砲撃。

ゴライアスは両腕を失いながらも突撃を再開。

アクセルシューター

ソニックシューター・アサルトシフト

コメット・ブラスト

双龍円舞

ゴライアスの突撃を援護するためのなのはお母様達の射撃魔法。

カノンさんが「なるほど。そういう手で来ますか」と感心したように頷くのが見えた。

そしてカノンさんは二挺の銃を地面に向け、引き金を引いて六発の魔力弾を地面に撃ち込んだ。

足元から強力な魔力反応を感知。誰が何を言うまでもなくその場からすぐに退避。

シュトラール・トゥルム  
天衝砲閃

直後、先程まで私たちの居た場所から二つの砲撃が噴き上がり、天へと昇っていった。

そしてカノンさんへと向かって行っていたゴライアスといくつもの援護射撃が四つの砲撃の壁によって完全に無力化されてしまった。

「考えは良いですけど、黄金砲台わたくしに容易に近づけると思わないでください。  
オルトリンデとグリムゲルテの前に、貴女たちは歩みを止めるしかありません」

すごい。接近するまでのプロセスを悉く潰されてしまう。

これが遙か古代の英雄の力。ですが何かあるはず。カノンさんへ接近する方法が。

必死に思考を巡らせて、最接近へのプロセスを思い浮かべては却下を繰り返す。

何をどうやっても途中で迎撃される場面の想像ばかり浮かんでくる。とそこに、カノンは中空へ視線を彷徨わせ、ほんの一瞬だけ目を見張ったのを確認。

「ごめんなさい。こちらの事情が変わりましたので、ここより本気で皆さんを撃墜させていただきます」

カノンはそう言った後、オーバースカートの両腰にある装甲に付いているホルスターに“オルトリンデとグリムゲルテ”を収めた。「シュヴェルトラウテ」と告げたカノンの両手の上に、全長2mほどの大砲が現れる。

色は銀と蒼。ディエチさんの持つイノーマス・カノンをもっと角ばった物にすれば、カノンの持つ大砲のような物になる、そんな感じですよ。

カノンさんが“シュヴェルトラウテ”を脇に抱え直し、

「では行きますね。三天穿つ砲滅閃シュトラッフェ・カソーネ!!!」

両腰のホルスターが動いて、“オルトリンデとグリムゲルテ”の銃口もこちらに向いた。

何を思うことなく射線から離れることを第一に逃げる。逃げるしかない。

その直後に視界が金に染まる。今までに無かった強烈なマズルファアに視界が潰される。

黄金の砲撃が三つ同時に放たれて……私の意識はそこで途切れてしまった。

++++Sideアインハルト　なのは++++

「うそ……」

直径50mはあるクレーターの底、意識を失って倒れてるヴィヴィ才達。

一切のチャージ無しに私の全力スターライトブレイカー並の砲撃を三発同時に撃ったカノンさん。

知っていたのに。カノンさんがどれだけすごい砲撃手なのか。

「あとは貴女だけですよね？」

カノンさんが“シュヴェルトラウテ”の砲口、“オルトリンデとグリムゲルテ”の銃口もこちらに向けてきた。

急いでその場から空へと上がる。防御は無意味だから、逃げ道の多い空に移動した方が断然いい。

アクセルフィン

シュトラーフエ・カノーネ  
三天穿つ砲滅閃

強烈なマズルファイア。と同時に放たれる三条の砲撃。ギリギリで回避出来たけど、通過して行った際に起きた衝撃波に体を崩されてしまう。

シユネル・アンケリフシユテルメン

疾光砲弾・連弾

そこに高速砲の連射。バスターを撃った衝撃で無理やり射線から離脱、そのまま体勢を整えて回避に専念。でも避け続けるけど次第に掠るようになってきた。

これはまずい。動きを少しでも止めてもしたら……。それなら。制動を最小限にして、

「ブラスト2！ ブラスタービット展開！ フォトン……スマッシュアアアーッ！」

“レイジングハート”とブラスタービット四基から高速砲フォトン・スマッシュアアアーッとお返しと言わんばかりに撃つ。

カノンさんと私の間で衝突しあう高速砲。連続で爆発が起きる。私はすぐにその場から移動して、

「ストライク・スタアアアアアズッ！」

砲撃とシューターの同時射砲撃を、カノンさんが居るはずの煙幕の中に撃ち込む。

カノンさんはあまり動かない。迎撃能力に自信があるからだと思う。現に今までの攻撃や接近を完璧に迎撃している。これなら格闘戦が弱くても領けるよ。

シユトラール・トゥルム

天衝砲閃

地面から強力な魔力反応。すぐにその場から移動。地面から空に向かって噴き上がる黄金の砲撃、その数29。だけど問題は砲撃の数でも威力でもなかった。

「包囲された!？」

そびえ立つ砲撃の壁。逃げ場を封じられた。

唯一の逃げ場は上か下か。どっちに逃げても追撃砲が来るはず。

「だったら迎え撃つ！」

周囲に満ちた魔力を集束させる。勝てる手段があるとすれば、もうスターライトブレイカーしかない。

すでにカーネルさんに完全防衛されて負けているけど。でも!

煙幕が晴れた中、カノンさんが私を見上げていて。その表情はどこか楽しそう。

カノンさんの足元に魔法陣?が描かれた。色はフェイトちゃんと同じ金色。

というかアレは魔法陣って言うてもいいのかわからない。

たぶん鳥が横を向いている図形。と言っても精確な鳥じゃなくて、よくマンガとかで見た光マークに、それを覆うような角ばった広げられた片翼という感じ。

「カーネル様からお話は伺っています。高町なのはさん。貴方の砲撃は、大変素晴らしいものだ」と

そうなの? 私の砲撃がルシル君以外のアンスールに褒められていたなんて、嬉しいな。

つとと。気を抜いちゃダメだ。カノンさんも“シュヴェルトラウテ”の砲門だけをこちらに向けている。

「現在のルシル様の御友人の方々の中でも射砲撃に優れているようですね。」

「今から発動する魔法も、貴女が絶対の自信を持つものだとは判断します。」

「ですから、わたしも最強の一撃を以って貴女を倒したく思います。」

“シュヴェルトラウテ”の砲身の両サイドに描かれてる幾何学模様が光を放つと薬室の後部がスライドして、砲弾を装填する部分が出てきた。

カノンさんは蒼銀に輝く実砲弾をどこからともなく取り出して、装填する部分に砲弾を置いて薬室に戻す。

すると“シュヴェルトラウテ”の銃床の末端にある排出口から蒸気が噴出する。

「あれって・・・ベルカのカートリッジシステム!？」

カノンさんの持つ神器“オルトリンデとグリムゲルテとシュヴェルトラウテ”は、ルシル君が創った物だけど。

でもその当時はベルカ式とかデバイスとかカートリッジシステムとか無いのに。

「ま、まさか古代ベルカで使われたカートリッジシステムのオリジナルって、ルシル君発祥!？」

「高町なのはさん。もう準備はお済ですか?」

「え? あ、はいっ。いつでも行けますっ」

集束は終わってる。カートリッジも可能な限りロードしたし、いつでも発射できる。



カノンさんは「そうですか。ならば」と改めて“シュヴェルトラウテ”を抱え直した。  
私も“レイジングハート”を握る両手の力を込める。お互い、この一撃が最後だ。  
私の負けか、勝ちか、相殺か。どちらにしてもこの戦いに決着がつくことに変わりない。

「スターライト……！」

「真技。<sup>ルヴォルス</sup>時空穿つ……！」

「ブレイカアアア……！ツツ……！」

「<sup>カノン</sup>断罪の煌き……！」

++++Sideなのは ルシル++++

ヴィータ達となのは達の戦場から何度も爆発が起こる。

そして気がかりだったなのは達とカノンの戦いは、最悪なことに砲撃戦となっているようだ。

なのは達はおそらく全滅するだろう。カノンを相手に射砲撃戦を仕掛けるのは自滅行為だ。

カノンの攻略法。それは肉を切らせて骨を断つ。

つまりは何かしらの犠牲を払って接近しなければならぬ、ということだ。

無傷で勝てる相手ではないのだから、アンストールは。

「いや、なのは達が全滅するような事態になる前に、アリスを捜し

だして魔道書を奪取する」

それが最善だ。魔道書を持って逃走しているのは結界王アリス・ロイドスター。

ヴィーグリーズ決戦からアンスールに加入したメンバーだ。

元々はヨツンヘイム連合の主力の一つ、特務十二将の一人だった。

そんなアリスは、大戦に無関係だった世界から拉致されて無理やり連合兵にされた経緯を持っていた。

当然アリスは参戦することを拒んだそうだ。当たり前だ。結界展開能力が飛び抜けていようと、その他はただのどこにでも居る10歳の子供だったんだ。

連合は考えた。史上最高クラスの天才結界術師としてのアリスをどうやって参戦させるか。

その結論が、アリスを魔術と薬物で洗脳するという事に。

「今思い出しただけでも腹が立つ。アグスティン……！」

ヴァナヘイム侵攻戦の折、アリスを保護して治療、洗脳を解くことに成功。

本当はそのまま彼女の出身世界に帰す予定だったんだが、アリスはアンスールとして戦う事を選んだ。

「見つけた……！」

森林を抜けた平原。そこをひた走る人影が一つ。

走るたびに風に靡くターコイズブルーの長髪が陽に当てられ燦々と輝いている。

高度を落として、「アリス！」と背中に呼びかける。するとビクッと肩を跳ねさせ、こちらへと振り返る少女。

「ル、ルシル様！ も、もう追いつかれちゃったんですかわたし！？」

アリスは私の顔を見るなり頬を朱に染めて、見ているこっちが悪い事をしたような気になってしまっただけにあたふたと慌て始める。

平原に降り立って「とりあえず落ち着こうな、アリス」とアリスの頭を撫でてやると、「はふう」と気の抜けた表情になる。

私の視線はアリスの左腕が抱えている件の魔道書へ・・・ん？

（魔道書？ どう見ても動物図鑑なんだが・・・）

「ここにいらっしやるという事は、シエルとカノンを破り、包囲を突破されたんですね」

「ん？ いや、仲間たちに任せてきたんだ。だからシエルとカノンはまだ戦っているはずだ」

森林からは爆発音が続いているしな。仲間たちが頑張ってくれている。

だから、私もここで頑張らなければ。なのは達にあわす顔が無いというものだ。

それを聞いたアリスは「よかった」と安堵の笑みを見せる。

「アリス。大人しくその魔道書を渡してくれないか？」

「ごめんなさいです。わたしも戦場の妖精の一角として退けません」

アリスは、彼女自身の誇りとしている同盟軍の制服である長衣（色は青）を握りしめた。

結界王。名の通り結界術式においては右に出る者は居ないとされるほどの術者。

だがその力は、誰かを補助した時に真価を発揮する。単独戦闘においては、アリスはあまり強くない。

が、そこを油断すると痛い目を見る。結局は彼女もアンスールなのだ。

「ルシル様は色々制限がお有りと聞いてます。ですので、わたしも僭越ながら創世結界と真技を制限しますね」

「アリスに手を抜かれる、か。まさかこんな日が来ようとはな」

「ご、ごめんさないですっ！ 不愉快にさせてしまったんでしたら謝りますっ！」

ペコペコ頭を下げ続けるアリス。くっ、心が痛む。

無意識による精神攻撃は相変わらずか、アリス。いや、私の記憶から再現しているのだから当たり前か。

「いや、怒っていないよ。だから謝らなくていい。さあ、始めようか、アリス」

「あ、はいっ。アンスールが結界王アリス・ロードスター。参りますっ！」

+++++Sideルシル　リエイス+++++

“ グラーフアイゼン ” の柄が、シエルの左拳打によって粉碎された。

続けざまに放たれる右拳打。向かう先はヴィータの腹部。しかし「甘えっ！」とヴィータは柄の短くなった“グラーファイゼン”で迎撃。

“グラーファイゼン”の打撃で右拳打を捌いたと同時に、

「『シュヴァルツェ・ヴィルクング！』」

ヴィータの左拳に効果破壊の魔力を纏わせ、シエルの右頬目掛けて拳打を放つ。

だがシエルは左手でヴィータの拳打を余裕で受け止めた。

重力はキャンセルしたようだが、そんなことなどお構いなしと言った風だ。

そして腕をグイッと引っ張られてしまう。体勢を崩し、顔面に迫るシエルの右拳打。

「チツ」と舌打ちをしつつ首を逸らして回避。

「おおおらあああああッ！！」

ハンマーシュラク

体勢を整えないうちに柄の短いままの“グラーファイゼン”の打撃を放つ。

シエルは掴んでいた手を放し、バックステップで回避。した直後にはもう目の前にまで接近してきている。

先程からこういった攻防を繰り返していた。ヴィータと私は本気だし全力だ。

だがシエルは「結構持つね」と余裕を崩さない。こちらは肩で大きく息をしているというのに、シエルは息一つ乱してはいなかった。

「判ってたけど……。コイツ、強え」

ヴィータが悔しげに漏らす。勝たせてやりたい。柄を再生させたヴィータは、“グラーファイゼン”をラケーテンフォームへと変形させる。ギガントフォームは通用しなかった。どれだけ重量のある強大無比の一撃であつても、重力操作によってインパクトを最小限に軽減させられる。ハンマーフォームもだ。簡単にいなされて柄を粉碎された。

「だからって守護騎士が負けるわけにはいかねんだよおーっ！」

ラケーテンハンマー

リシエクト・メネス  
超重力装甲

「うおっ！？」 『むっ！？』

“グラーファイゼン”が地面に墜落、ズドンと轟音を立ててめり込む。

「これで終わりっ！ 真技！」

全身に重く押し掛かる重力。まずい、ヴィータの体が動かない。シエルが嬉々として迫ってくる。シエルの真技は確か二つあったはずだ。

超重力を広範囲に亘って掛けるルイン・トリガー強化版と、重力の拳打と蹴打で相手に連撃を与えるモノ。どっちを受けても必倒・・・いや、必殺となる魔術だ。

『デアボリック・エミツション！』

だがそう簡単に終わらせてなるものか。私は、希望の翼リエイス。家族に友に仲間に希望を与えるべく存在するのが私だ。

ここでヴィータに、シエルに勝てるという希望を与えねば。

ヴィータを中心として広がっていく広域殲滅空間魔法は、こちらへ突撃して来ていたシエルを呑み込んだ。

「や、やったのか・・・？」

デアボリック・エミツションの効果切れ、視界がクリアになった。私達の視線の先、仰向けに倒れているシエルが居る。ピクリとも動かない。

ほぼ直撃。シエルは攻撃に転じる際、重力による防御を一切行わない。

攻撃は攻撃、防御は防御としての重力を扱う。攻防同時に重力を操作することが出来ないようだ。

だから真技の発動をしていたシエルは、防御を行う事が出来ずにデアボリック・エミツションへ突っ込み、その威力を余すことなく受けてしまった。

『途中で攻撃から防御に切り替えたようだが、すでに遅かったようだ』

「そうかい。はぁー！ー！。疲れたあ、もう二度と戦いたくねえよ、シエルとは」

ヴィータがその場に座り込んで、そのまま仰向けに倒れ込んだ。

ふふ、同感だよ。私としても重力の一撃など二度と受けたくはないさ。

「痛~~~~~い」

「『なっ!?!』」

信じられない光景がそこにはあった。シエルがピョンっと起き上がって、長衣についた砂埃をパンパンと払い始めた。

そんな馬鹿な！ 防御無しで受けて、あんな軽ダメージで済むような魔法ではない！

「今のは本当に危なかったよお。防護を貫こうとするなんて。でも、ね。」

この程度じゃわたし、拳帝シエルは墜とせないよ?」

「ありえねえ」 『ありえない』

起き上がる気力すら奪われた私達は、こちらへ軽快なステップで近づいてくるシエルを見ることしか出来なかった。

だが、私達は見捨てられることはなかった。シエルが立ち止まり、「えええっ!?!」と声を張り上げた後、

『ゲームクリアー~~~~』

ゼフィランサスのアナウンスが流れたのだ。

+++++Sideリエイス ヴィヴィオ+++++

「はあはあはあ……わたし達の、勝ち、です……!」



「そうですね。わたしの敗北、という事で構いません」

カノンさんの首筋に背後から右手を掛けて、左手はディバインバスターの発射体勢。

わたしはカノンさんの砲撃の直撃を受けなかった。コロナとリオ、アインハルトさんが庇ってくれたから。

だからクレーターの底で意識を失ったフリをして、機会を窺ってた。そしてなのはママとカノンさんの最強の砲撃同士の勝負。

結果は、なのはママのスターライトブレイカーの完全敗北。

撃ち負けた。衝突した時は拮抗していたんだけど、でもすぐにカノンさんの砲撃がブレイカーを突破して、なのはママを呑み込んで、墜落させた。

「貴女の母君はお強いですね。いくら出力制限が掛けられているとはいえ、わたしの最強の真技と僅かでも拮抗を見せたのはすごいです」

「自慢のなのはママですから」

「そうですね。……おめでとございます。この勝負、そしてこのお題共に貴女方の勝利です」

「え？」

『ゲームクリアー……ッ』

ルシルパパのお姉さんのアナウンスだ。

足元に光が溢れる。転送が始まった合図だ。

「カノンさん！」

「どうかルシル様の事をよろしくお願いしますね」

今まで見せたことがないすごく綺麗な笑顔だった。

++++Sideヴィヴィオ ルシル++++

「負けちゃいました。残念です」

アリスが肩を落とす。魔術絶対封印結界・一方通行の聖域や真技・イセリアル・ケイジ無限結界牢。

なにより創世結界・走馬灯の迷宮を使われなかったから、それほど苦労はしなかった。メモリアル・ラビリンス

まあサンダルフォンや真技が使われていたとしてもそう簡単に後れを取るつもりはない。

「ふふ、私としてもお前に負けるのは二度と御免だからな」

「むう。そんな事を言われると意地でも勝ちたくなっちゃいますっ」

「残念。もう終わりだよ、アリス」

アリスから奪取した魔道書をヒラヒラと見せる。

お題は、魔道書を盗んだ泥棒から魔道書を取り返す、だ。

つまり私が魔道書を手にした瞬間にクリアしたという事だ。

『ゲームクリアーッ』

ゼフィ姉様のアナウンスが流れる。よしっ、まずは一つ目だ。  
フェイト達とはやて達も、これから行うお題をクリアできればいい  
んだが。

足元に光が生まれる。転送の合図だ。

「今度会ったら負けませんかっ！」

素敵な笑顔を浮かべ意気込んでいるアリスに手を振りながら、私は  
転送に身を任せた。

それにしても、次、か。この先のお題で再戦とかがあるんだろうか？

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（後書き）

アリス

「わたし、要らない子なの？」

レヴィル

（ど、どうしてここにアリスさんが!?!）

シエル

「すいませ〜ん、うちの末っ子を回収しに来ました」

カノン

「無断でごめんなさい。失礼します」

レヴィル

（シエルさんとカノンさんまで!?!）

シエル

「アリス、見つけ とういかそんな隅っこで膝抱えて何やってんの？」

カノン

「帰りましょうアリス。この部屋の主であるお二人に迷惑です」

レヴィル

「（わたし達のことだよ〜?!?!）迷惑なんてとんでもないです!?!」

シエル

「ごめんね、邪魔しちゃって。ほら、アリス。帰ろ？」

アリス

「わたし、全然出番が無かったです。まあルシル様を相手にしたんだから当然のような気がしますけど」

レヴィ

（わたしみたいなこと言ってる・・・）

ルーテシア

（レヴィみたいなこと言ってる・・・）

シエル

「いくら何でも真技を制限したのは間違いだよ。

数少ない攻性術式の一つである真技を封じたら、さすがに兄様には勝てないって」

カノン

「ですね。元よりアリスは単独戦闘はあまり得意じゃないですし。

誰かのサポーターとして戦場に立った方が、結界能力を發揮できますから」

シエル

「だからこそわたし達は、3人で戦場の妖精フロント・フェアリーになったんじゃない」

アリス

「シエル。カノン」

シエル

「まあ今回はちょっと失敗しちゃったかもだけど。気にしない気にしない」

カノン

「（このまま出番少ない云々の話題から逸らしていきましょう）そうですね、アリス。また3人で頑張りましょう。それに、わたしも負けたんです。シエルだって引き分けですし」

シエル

「時間があれば勝ってたよ絶対」

アリス

「時間……。わたしが早々にルシル様に負けてしまって、魔道書を奪還されたせいですよね」

シエカノ

（しまった！）

レヴィ

「えー、まだまだ掛かりそうなんで今回はここまで」ボソボソ

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へへへへ(前書き)

?????戦イメージBGM

アナザー・センチュリーズ・エピソード2『箱舟』

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜

++++Sideフェイト++++

なのは達が戻ってきた。なにもペナルティーを受けてる様子はない。クリアできたんだ、よかった。でもかなり疲れてる様子。激しいお題だったみたい。

なのは達を見ていると、私の視線になのは達は気付いて、手を振ってきた。

手を振り返すと、疲れてる顔を笑顔に変えてまた手を振り返してきた。

「見事お題をクリアできたようね。じゃあ次は、黄チーム・・・だよね？」

「あ、はい」

「貴女は・・・ルシルの彼女さんだね。どうぞ、幸運があらんことを」

シエフィリスさんからサイコロを受け取る。

「ありがとうございます」ってお礼を言ってからサイコロを放り投げた。

コロコロ転がって、数字の目を上にして止まる。

「16ね。じゃあ16進んでね」



「みんな、行くよ」

エリオとキャラロ、シャマル先生とザフィーラ、そしてスバルとティアナに声を掛ける。

全員で頷き合って、はやて達に「頑張つて！」って見送られながら螺旋状のマス目の道を歩き上がっていく。

目的の16マス目に向かう途中、11マス目に居るのは達と合流。

「あ、気を付けてフェイトちゃん。アンスールが普通のお題でも出てくるから」

「え、そうなの？　じゃあ疲れてる顔してるのって・・・」

アンスールの誰かと戦ったからなんだ。それなら疲れて当然かな。特にヴィータがうんざりしたように肩を落として「あたしら、シエルとカノンと戦って、それはもう酷い目に遭ったんだよ」って大きく溜息。

シエルとカノンって、ルシルの実の妹と弟子だったよね・・・？  
ルシルをチラッと見ると、

「ヴィータとリエイスのユニゾン形態は、シエルを相手に時間切れで引き分け。」

カノンと戦ったのはとヴィヴィオとアインハルトとコロナとリオは、ヴィヴィオ以外が撃墜。

ヴィヴィオは一人カノンの懐に入り勝利を収めたという結果だ」

「す、すごい！　カノンさんってすごく強いだよねっ？」

「あ、でも完全に勝ったわけじゃないんです。勝ちを譲ってもらったというか」

カノンさんに勝ったっていうヴィヴィオに、スバルが興奮。でもヴィヴィオはあまり嬉しそうじゃない。勝ちを譲ってもらった、ってというのが原因みたい。

するとルシルが「カノンに気付かれずに背後を取った。それだけで十分誇れることだぞ」ってフォローを入れて、ヴィヴィオの頭を撫でる。

「ヴィータとリエイスも。時間切れとは言え、シエルを相手に粘り負けなかった。

なのはとコロナとリオとアインハルトも、ヴィヴィオの勝利へ繋いだ。すごい事だ」

「そうよね。負けなかったって時点でもうすごい事よね」

シヤマル先生もうんうん頷いて、シエルさんとの引き分け、カノンさんに勝利した青チームのみんなを労う。

そこにティアナが「あの、ルシルさんは一体何を？」と訊いた。そういえば、ルシルだけ何もやってないよね、今の話だと。

「私か？ 私はアリスと戦っていた。お題のクリア条件である魔道書の奪取。

アリスが魔道書を持っていて、クリアするために一戦交えた」

「アリスさんって確か・・・結界王・・・？ ルシルさんに初めて黒星をつけたっていう」

「まあな。だが今回は勝ったぞ。だからクリア出来たんだ」

キャラコがおずおずと訊いて、ルシルは苦笑しながら答えた。

たった一つのお題で3人のアンスール、か。私達のお題でも複数のアンスールが出てきたとしたら・・・。

ダメ。どんなお題の内容でも勝てる気がしない。特にフノスさんとイヴィリシリアさん、そしてステアさん。

フノスさんは、次元世界が創られた元凶“ラグナロク”を、ルシルの助力があつたとはいえたつた一人で撃滅、封印した大英雄。

イヴィリシリアさんは、連合の中で最強の剣騎士と謳われたシャルに打ち勝つた程の実力者。

ステアさんは、セシリスさんと同じ炎熱系最強の術者で、策略においては最高の頭脳、創世結界も持つてる。

(フォルテシアさんとジークヘルグさんも途轍もない実力者だし)

それに、シエフィリスさん。冰雪系最強の魔術師。

同じ冰雪系のヨツンヘイム術者なんて目じゃないほどの強大な・・・。

なのは達と別れて、16マス目へと歩を進めて・・・到着すると、

『天の山なるヒミンビョルグに招かれた客人達よ・・・ぷぷぷ、ぷぷぷ。』

・・・あー、残念。我が儘な女王さまのゲームを受けないといけなくなっちゃった。

女王さまと楽しくゲームして、頑張つて勝つてね　そしたらクリアよ　』

ゼフィランサスさんのアナウンスが流れた。

ヒミンビョルグ。女王さま。えっと、アンスールで、その単語が当てはまるのは・・・。

そこにルシルが「イヴ義姉さ　イヴィリシリアだ！　風迅王イヴ

イリシリアが相手だ、フェイト！」って声を荒げて告げてきた。その直後に転送が始まる。視界が白に染まって、クリアになった時にはもう景色が違っていて。

「うわあすごい・・・」

「どこかの教会かしら・・・？」

「天井が凄い高い・・・！」

キャロとシャマル先生、エリオが驚きの声を漏らす。

私達の居る場所。そこは大きな大きな白を基調とした空間。

床にはアースガルド魔法陣とルーン文字がいくつも描かれたレッドカーペット。

イメージ的には子供の頃にアリサに見せてもらった写真、カンタベリー大聖堂の身廊に近いかも。だからとても綺麗なところだ。

「え、えつと、お、オーツホツホツホツホツ！」

あ、よく来たな、妾の城ヒミンビヨルグに。あー、歓迎しようぞ、魔導師たちよ」

たどたどしい、ものすごく演技臭い声がどこからともなく。

身廊（ということにしておこう）のずっと奥、アプス（身廊の奥の半球状に飛び出た空間）に大きな玉座があって、そこに座る一人の女性。

綺麗な銀色の長髪。髪型はルシルと同じインタークで、ストレートの後髪は首の辺りから左右にフワリと分かれてる。

翡翠色の宝石のような瞳は、今は複雑な感情に満ちていて、どうやら演技を嫌々させられて葛藤してるみたい。

格好はドレスじゃなくて同盟軍の制服の長衣（白）、青のロングプリーツスカート、茶色いブーツ。

「あの、演技とかしなくても・・・」

「・・・そう。ありがとっ、そう言ってくれど助かるわ」

私が気の毒に思っどそう言っど、イヴィリシリアさんは額に手をやっど溜息。

そしど改めて、

「ようこそ客人たち。私は風迅王イヴィリシリア・レアーナ・アースガルド。」

今回のお題・・・女王さまの我が儘なゲームに付き合っど？を担当することになりました。

悪いのだけど、貴方達も我慢して付き合っどね・・・はあ」

自己紹介をして、最後にまた大きな溜息。

すごい。何をするまでもなくイヴィリシリアさんはダウン寸前だ。でもこのままじゃ話は進まないし、閉じ込められたままだから、本題に入っどもらおっど思っど声をかけようとしたとき、先にイヴィリシリアさんが私達を見て告げる。

「ああごめんなさいね。貴方達も半ば巻き込まれている形なのよね。ではお互いのために、早速本題に入らせてもらおっどかしら」

イヴィリシリアさんは玉座から立ち上がっど、ブーツをゴツゴツ鳴らしてこちらに歩いてきた。

その途中に、今回のお題の説明を始める。

「みなさんは、隠れ鬼、という遊びを御存じかしら？」

私達は顔を見合わせて、知らないという事で首を横に振る。

イヴイリシリアさんはコクリと頷いて、「幼少の頃、私とゼファイ、ルシル、レン、フォルテ、シエファイ。それに使用人達と遊んだゲームです」と懐かしそうに微笑んだ。

「隠れ鬼とは、鬼ごっこことかくれんぼ。二つのゲームを一緒にしたもの」

イヴイリシリアさんからルールの詳細が告げられる。

私たち黄チームは、ここレアーナ王城ヒミンビョルグの中央区をエリア（区画を分ける目印は扉の色で、中央区から別区に繋がる扉は全部赤らしい）として隠れる。

鬼であるイヴイリシリアさんが私達を搜索。私たち全員が捕まったらゲームオーバー。

普通のかくれんぼとの違いは、たとえ見つかっても逃げ切る事が出来ればアウトにならないということ。

そして捕まった誰かを救う事も出来る。イヴイリシリアさんに一撃を与える、という方法でだ。

それで、すでに捕まった仲間を一撃につき一人解放できる。

そして私達の勝利条件は、30分という制限時間を逃げ続ける。

またはイヴイリシリアさんにだけ用意されるHPを0にする。

随分と私達に有利なルールだけど、そんな優位性を簡単に崩すのがアンスールって判っているから、誰も何も言わない。

「では今より30分間。貴方達が隠れる猶予を与えるから。

どうぞ、ここ玉座の間より出で、我が城の装飾を目で楽しみ、香りを鼻で楽しみながらお逃げください。

ああ最後にもう一度。くれぐれも別区画に行かれませんかようお願

ね

背後にある大きな両扉が、ガタン、と音を立てて開いた。

++++Sideフェイト スバル++++

玉座の間から出て、前と左右に伸びる豪華な廊下を見る。

あたしは「どうしますか？」ってフェイトさんとシャルル先生とザフィーラに訊く。

あたしよりかは正しい道を示す事が出来るはずだから。

「かくれんぼでも鬼ごっこでも一人で行動した方が良い、と相場が決まっているが」

「問題は見つかった場合。隠れ鬼のルール。見つかったても捕まらなければセーフ。でも・・・」

「逃げきるための戦力を考えれば、一人でいるのは危険ということね」

ザフィーラとフェイトさんとシャルル先生が、そしてティアとエリオも「難しいですね」って考え込む。

むう。見つかりさえしなければいいって事だけど。そう簡単に30分も隠れきることが出来るとも思えない。

だってここはイヴィリシリアさんの城なんだから。

みんなで唸っていると、「こうしていてもダメですね。とりあえずどこかに隠れないと」ってティアが。

「そうね。・・・そうだ、三手に別れましょう」

「そうですね。さすがに全員が纏まっていると一網打尽にされてしまいます」

「じゃあチーム分けはどうします?」

シヤマル先生のチーム分け案にフェイトさんが賛成。

それにエリオがどういった風のメンバーに分けるか訊く。

時間もかけるのもまずいっていう事でそう深く考えられずに決まった、あたしとティアとシヤマル先生、フェイトさんエリオとキャロ、そして単独行動っていうザフィーラの3チーム。

「私の嗅覚を駆使すれば、イヴィリシリア殿から逃げ切れる可能性が高い。

みなには悪いが、万が一の保険として我は単独で身を隠す事にした  
い」

ってというのがザフィーラの考え。

これにはフェイトさんもシヤマル先生も、ティアやエリオにキャロも賛成。

あ、もちろんあたしも賛成。少しでも多く勝算のある方法を取っておきたいし。

たとえあたし達が全滅してもザフィーラ一人生き残ってくれば勝ちになる。

「それじゃみんな。イヴィリシリアさんは一筋縄じゃない相手だけど、でも勝つよ」

「「「「はいつ!」「」「」「ええ!」」



こうしてあたし達は三手に分かれて、イヴイリシリアさんに見つからないように、そして捕まらないようにするために、身を隠す場所を捜すことになった。

あたしとティアとシヤマル先生は右へ。フェイトさんとエリオとキヤロは左へ。

ザフィーラは真っ直ぐ。ひとり玉座の間から大きく離れるために。

「にしてもあたし達ってツイてるのかツイてないのか微妙よね」

ティアが一つ一つの部屋と、見つかった場合の逃走経路を確認しながらそんな事をぼやいた。

シヤマル先生も「そうね」って頷く。あたしは「どうゆうこと？」って訊き返す。

「イヴイリシリアさんは間違いなくアンスールの中でも最強クラスの魔術師。」

そんな人が相手ってというのがツイてない。でも、お題の内容は隠れ鬼。

戦うんじゃなくて隠れて見つからないようにすること。戦いを回避できるってというのがツイてる」

「ティアナの言う通りね。見つけたりさえしなければ衝突することなくお題をクリアできる」

「そっか。ある意味ラッキーなお題ってことか」

納得。見つからないように隠れて、見つかったら逃げて隠れて。

うーん、すごい大変なお題だなあ。

それからは無言で探索して、それぞれ自分の決めた部屋に隠れるこ

とになった。

ティアは三階の豪勢な部屋。たぶんイヴィリシリアさんの部屋だと思う。

家族のみなさん、ルシルさん達アンスールの肖像画が壁にあったし、シヤマル先生は四階。そこも豪勢だったけど使われている感じじゃなかった。

家族の部屋かもしれない。そしてあたしは最上階の時計塔、その頂上。

「たぶん下から捜していくから、見つかるまで時間を稼げるはず……」

安直だけど、でも間違いないはずの考え。

それに、ここ時計塔はかなりゴチャゴチャしてるんだし、そう簡単に見つかることはないはず。

まあ歯車や振り子の音がうるさいのがちょっと辛いけど……。見つかるよりはずっとマシだね……。

十十 Side スバル エリオ十十十

フェイトさんとキャラと廊下を走って、部屋と逃走経路を確認していく。

もし見つかって逃げる事があったら、迷わずにイヴィリシリアさんから逃げないと捕まってしまうから。

それなのに……こんなこと考えるのはダメだって思っているんだけど。

でも、どうしても思い出してしまう。考えてしまう。

イヴィリシリアさんは、大戦時において陸戦最速の魔術師。

ルシルさんとシャルさんの記憶の中で見た、シャルさんとイヴィリシリアさんの決闘、その結末を憶えていれば、見つければ逃げることは絶対に出来ないって。

「うん。キャラとフリードはこの部屋の方が良いかな」

四階に着いて少し探索したあと、フェイトさんがある一室の扉を開けて室内を指差した。

僕はキャラと顔を見合わせてから、キャラとフリードと一緒に室内を覗き込んだ。

キャラが「わあ？」って喜色の声を漏らす。うん、女の子が好きそくな部屋だと思う。

フェイトさんに続いて僕達も部屋に入る。シャンデリアの明かりの下、僕達を迎えてくれたのは……。

「すごいぬいぐるみの数。子供部屋かなあ……？」

室内中に溢れかえるぬいぐるみの数々。動物はもちろん人の姿をした物もある。

「……きつとイヴィリシリアさんが子供だった頃に使ってた部屋じゃないかな」

僕は壁に掛かった大きな肖像画を指差して言う。

銀色の髪に翡翠色の瞳。背格好はキャラよりちよっと小さいくらいの女の子が、両親と思しき男の人と女の人の間にある大きな椅子に座ってる絵だ。

イヴィリシリアさんって結構ファンシー好きなんだなあ。イメージからして……うん。

そう言うのは勝手にイメージで決めちゃダメだ。

「ぬいぐるみの中に隠れるのが良いかな。キャラの防護服の色なら紛れ込みやすいし、フリードも見方によってはぬいぐるみだし」

「それに四階なら搜索されるまで時間があるから余裕を持って隠られる、ですね」

フェイトさんの告げた理由に僕がそう付け加える。

きつと一階から搜して来るはずだ。隠れ鬼のエリアはヒミンビョルグ城の中央区だけ。ただ中央区だけって言うても十分に広大。全部の部屋を一つ一つシラミ潰しに搜すには骨が折れそう。

だから上の階に行けば行くほど隠れられる可能性が高い。

「じゃあわたしとフリードはここに隠れるね」

キャラとはここで一旦お別れだ。部屋を後にして、僕とフェイトさんは別の隠れる部屋を搜す。

そして残り時間も少なくなってきたことで決まった僕が隠れる場所。四階の上、最上階。そこには四つの階段があつて、時計塔、尖塔に続いているのが判った。

僕はその内の一つの階段。尖塔へ上がるための階段を上がって、尖塔の頂上の物置の様な場所に隠れることになった。

そしてフェイトさんと言つと、

「ど、どういうつもりなんですかフェイトさん!？」

「どういうつて……。私は二階に隠れる。で、見つかったら可能な限りイヴィリシアさんを引き付けて時間を稼ぐ。」

あとはみんなが頑張ってくれば勝てる……。ってゆう風に考えた

「ただけど・・・」

「そんな自分だけが犠牲になる精神、誰も喜びませんよ！」

と言う事で僕は怒ってる。イヴイリシリアさんはシャルさん以上に強い。

そしてフェイトさんはシャルさんより・・・弱い。

いくらイヴイリシリアさん達アンスールが僕達に合わせて実力に限を受けているからって・・・。

フェイトさんがイヴイリシリアさんを少しでも抑えるなんてことが出来るわけが・・・。

「誰も犠牲になろうなんて思ってないんだけど・・・。

でも、うん。そんな風に捉えられたんなら謝るよ、エリオ。ごめん。もちろん私だって見つかるつもりないよ。それに簡単に捕まるつもりも負けるつもりもない」

フェイトさんの真剣な表情。たぶんフェイトさんは有言実行するつもりなんだ。

こうなったフェイトさんはもう言葉を曲げない。僕が折れるしか・・・。

「私は大丈夫、無茶なんてしないから。ほら、エリオも早く隠れて」

「・・・絶対に無茶はしないでくださいね」

「うん、約束するから」

フェイトさんはニコって笑って張り去っていった。

約束、か。だったら安心できるかな。フェイトさんは約束は絶対に

破らないから。

僕は尖塔へと続く階段を上り、尖塔内部の螺旋階段をさらに上がって頂上の一室、物が多く置かれた一帯に身を隠した。それから数分経って、

『時間です。ではこれより30分。隠れ鬼を行います。』

みなさま、どうぞ息を潜めお隠れ続けてください。隠れ鬼・・・スタートです』

陸戦最速にして風嵐系最強の魔術師イヴィリシリアさんとのゲームが始まった。

? ? ? ? ? ?

ヒミンビョルグ城の玉座の間の奥、玉座に腰かけていたレアーナ女王イヴィリシリアが立つ。

右手より溢れ出るライムグリーンに輝く魔力が次第に剣の形を取っていく。

そして細く綺麗な右手に収まる一振りの大剣。“神剣ホヴズ”と銘を打たれた神器。

“神槍グングニル”や“神剣グラム”と同様クリスタルのような両刃の刀身を持ち、いくつものライムグリーンの光球と渦巻く風を纏っている。

「30分・・・。どうしようかしら。すぐに終わってしまうわ」

イヴィリシリアが玉座の間より出、頬の左手を添えてまず最初にそっ漏らした。

あらゆる風を支配する風迅王。移動においては風を操作し永続的に最高速で動ける。

ゆえにどれだけ広いヒミンビョルグ城の中央区であるうとすぐに全室回れる。

「瞬風」

イヴィリシリアが一言。彼女がフワリと風の方で2cm程浮く。

それはまるでルシリオンの純陸戦形態・疾駆せし、汝の瞬風に似ていた。

いや、ルシリオンのヤエルが、イヴィリシリアの瞬風に似ているのだ。

それは当然の事。ヤエルは元タイヴィリシリアより授かった術式なのだから。

「やっぱり少しは手を抜いた方がいいのかしら・・・？」

「ダメ。やるからには本気でやってよ？ イヴ」

イヴィリシリアの背後に一瞬だけ銀色の閃光が弾け、そこには先程までは誰も居なかった一人の女性が佇んでいた。

アースガルド王族特有の銀髪は膝裏まであるロングストレート。

そしてセインテスト王家特有のルビーレッドとラピスラズリのオツドアイ。

足首まであるロングファーコートを着ていて、生地や毛皮の配色からしてまるでサンタクローズ。

コートは腹部から前を閉じておらず、黒のタイトスカートと黒タイツを晒している。

茶色い編み上げのロングブーツをゴツゴツ鳴らし、イヴィリシリアへと歩み寄っていく女性、ルシリオンとシエルの実姉ゼフィランサスだ。

「ゼファイ。．．はあ。あなたね、妙なお題を考えて配置しているのは．．．?」

「まあね。スンベルを起動させたマスターから全権管理を一任されているのだし。」

お題は、マスターの記憶から抽出したのを適当にアレンジしたんだけど．．．ダメ?」

ゼフィランサスは自分の口元で合掌して首を傾げる。

男ならそんなゼフィランサスの仕草に一発でノックアウトだろう。

イヴイリシリアは大してリアクションもせず流して「もう少しまともなお題を出してあげなさいよ」と呆れる。

それに対してゼフィランサスは「もう遅いよ。お題内容の変更は無理だもん」と笑う。

「そんなことより話を戻させてもらうけど、相手役は本気でルシル達とやってって話。」

それがマスターの意思であり、マスターの代理人を務める私の意思。これ、命令ね」

イヴイリシリアの額をツンツンと突きつつ、ゼフィランサスはそう告げた。

「はあ。了解したわ。あーそくだ。外界そとでの問題はもう終わりそうなの?」

「うん。マスターからある程度状況が流れてくるから判る。もう少しで終戦ね」

「そう。ならこのスンベルでの遊戯も終わりね。まあ私としてはル



シルが元気そうにやっているのを見ただけでも十分だけど」

イヴィリシリアはくるりと踵を返し、スンベル全権管理者ゼフィランサスに背を向ける。

「ゼファイ。最後は、シェフィとルシルを二人だけにさせなさい。それくらいの職権乱用は構わないでしょ？」

イヴィリシリアはそう告げ、ゼフィランサスからの返事を聞くこともなく廊下を滑るようにして移動を開始、ゼフィランサスの視界から瞬く間に消え去った。

去っていった幼馴染の後ろ姿をずっと見詰め、ゼフィランサスは、

「そうだね。それも、いいかもね」

と呟き、出現した時と同じように銀の閃光が弾けた後に忽然と姿を消していた。

? ? ? ? ?

イヴィリシリアは廊下を高速で移動し、いくつもの扉を素通りしていく。

フェイトたち黄チームを探索するという事を忘れてしまっているかのような見事な素通りっぷりだった。

「さすがに一階には居ないわよね？ でも裏をかこうとしているかもしれないし、二階へ上がる前に念のために探索しておこうかしら」

ボソツと漏らし、緩慢な動きでゆっくりと停止、その場で浮遊。目をスツと瞑り、“神剣ホヴズ”を持っていない左手を持ち上げ、

「風査」と告げる。

微風の流れが生まれ、イヴィリシリアの居る場所へと集束していく。イヴィリシリアの下に集う微風によって揺れる美しい銀の前髪の手先を弄り、彼女は確信に満ちた声色で「一階には居ないと再確認」と告げた。

再び滑るように移動し、豪華な階段ホールに到着。足をつけることなく階段を上り、二階へ到着。

「風査」

イヴィリシリアは目を瞑り、先程と同じ再び術式名を告げる。

彼女の下へと集う微風。イヴィリシリアの肩がピクリと僅かに跳ねる。

ゆっくりとまぶたを開けられ、エメラルドグリーンの双眸に鋭い光が宿る。

(二階に一人居るわね。おそらくシェフィに似た、ルシルの新しい恋人という・・・フェイト・・・)

イヴィリシリアは確信に満ちた表情。風査という術式からの判断だ。風査とは、屋内においては抜群の効果を発揮する探査術式だ。

屋内に満ちている大気を操作し己に集束させ、風が運んできた匂い、あるべきではないイレギュラーな魔力を感知、そこから異物がどこに居るかなどを判別する。

イヴィリシリアは一階やここ二階でも大気を集束させ、ヒミンビョルグ城に在ってはおかしな匂いと魔力を感知した。

フェイトは気付いているだろうか。自分が隠れている部屋に僅かな風の流れが生まれていた事を。

(ルシルの現パートナーを務める娘……。どれだけの腕か見せて

もらおうっかな)

イヴェリシリアは移動を開始。一直線にフェイトの隠れている部屋を目指す。

アースガルドの紋様が刺繍されたレッドカーペットの上を音もなく高速で駆け抜け、とある扉の前に来て停止。

ヒミンビヨルグ城の中央区は、レアーナ王家や他の三王家の客人を宿泊させるゲストルームが密集している。

イヴェリシリアが止まった一室もまたゲストルームで、ルシリオンがよく使った部屋だった。

彼女は今度は心の内で(風査)と告げ、目の前の扉の中から風を集め・・・確信した。

(間違いなく居るわ)

金のドアノブに左手を掛ける。音を立てないよう細心の注意を払い、扉をゆっくりと開けた。

天蓋付きのベッド。クローゼットにデスクなどの家具の数々。

イヴェリシリアはぐるりと室内を見回し、風査を使わずに目視と、直感という名の気配察知能力からフェイトの隠れている場所を捜し出そうと動いた。

+++++Sideフェイト+++++

うそ。こんなに早く私が隠れている部屋を捜し出すなんて。

扉の向こう側からガタガタと物音がして、私は息と気配を全力で殺してさらに蹲る。

私が居るのは部屋の奥の扉、シャワールームの脱衣所の天井近くに

設置された収納ラックの中。

一応私はシャワールームと脱衣場を隔てるカーテンの替えに包まれている。

だけど、こんな短時間で私の隠れている部屋を当てたということからして、発見される可能性が高い。

(魔術を使ったのかな・・・？ やっぱりそうだよね)

魔術は使わなくて言っていなかったし。でも少しは加減が欲しかったかも。

隣室から音がしなくなって、シャワールームの扉が開けられた。心臓が跳ねる。

カーテンが開かれる音がした。すごいドキドキする。もちろん楽しいからじゃない。

とそこに私の隠れている収納ラックがガチャツと開かれた。

うわぁ、背中にピリピリ視線を感じるよぉ(涙)。見つかりませんように、ってひたすら祈る。

祈りが通じたのかラックの扉がまた閉じられた。心の中で思いつきり安堵の溜息をついた瞬間、

「見つけましたっ」

「っ!？」

勢いよく扉が開かれた。ハッキリと、見つけた、なんて言われたらもう隠れ通すのは無理。

でも、魔法を使ってもいいのかなぁ・・・？ きつといいんだよね・・・。

一撃与えてもいいってルールもあることだし。

「どうぞ魔法を。すぐに捕まえるのもつまらないから」

イヴィリシリアさんにそう言われたら・・・うん、じゃあ作戦通りに。

「ここで足止めさせてもらいます」って告げ、カーテンに包まれたままラックから降りる。

V S ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

其はアンスールが風迅王イヴィリシリア

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? V S

“バルディッシュ”をハーケンフォームで起動させて・・・包まっていたカーテンをバツと剥いでイヴィリシリアさんへと放り投げる。

視界潰しと身動き制限。かなり汚い手だけど、これくらいしないと初手を決める事が出来ない。

「ズルい手でごめんなさい！」

ハーケンスラッシュ

カーテンを頭から被ったイヴィリシリアさんに謝りながら、それでも容赦なく斬撃を放った。

シャワールームは広くて（さすがお城）、ある程度“バルディッシュ”を振り回してもまだ余裕があるから、結構遠心力ありの一撃。

“バルディッシュ”の電撃の刃は一直線にイヴィリシリアさんへと向かって、

「こつという手による奇襲が成功して被害を受ける。それで初めてズルい手だと考えているから、気にしないでいいわ」

そう言つて、手にしていた剣で私の一撃を受け止めた。

目に見えていないはずなのに的確な防御。それにいつの間にか斬つたのか、カーテンを細切れにしていた。

私とイヴィリシリアさんの間に舞うカーテンの破片。そして私の喉元に突きつけられたルシルの“グングニル”のようなクリスタルの剣。

「このまま大人しく捕まる？ それとも足掻く？ どちらでもどうぞ、魔導師」

「もちろん諦めずに足掻くつもりです・・・！」

プラズマランサー

イヴィリシリアさんへ至近距離からのランサーを8基射出。

バックステップで回避して行つて、壁に背をぶつけようとしたところに再びランサーを4基射出。

イヴィリシリアさんは、剣を片手でクルクル回してランサーを弾き飛ばした。

私の有する射撃魔法の中で最速のランサーではもうダメージを与える事が出来ないと見ていい。

「今度はこちらのターンという事でいいのかしら？」

烈風

剣を掬い上げるように振り上げて生み出された風。

帯状の風の円環がいくつも合わさって球体を形作った暴風だ。

### ブリッツアクション

床を壁を天井を蹴って暴風から逃げる。

暴風がシャワールームの壁に当たって・・・爆風となって壁を根こそぎ粉碎した。

ええーっ？ 本当に今さらだけど、戦闘になったら城を壊すことに・・・。

床に着地して、イヴイリシリアさんを見る。イヴイリシリアさんは「まあ現実ではないのだし」って若干目を泳がせながら言った。

あ、やっぱりあまり良くないんだ、壊すの。

「ええ、そうです。こんなのは被害の内に入りません」

イヴイリシリアさんが少し体を沈めて、剣を脇に構えた。

直感が働く。突っ込んで来ると。そして私の直感は当たった。

### 疾風

イヴイリシリアさんの姿を完全に見失ってしまう。

ふと左頬を撫でる微かな風。咄嗟に左側に“バルディッシュ”を立てて柄を盾とした。

その直後にガキインと衝突音。すぐそこにイヴイリシリアさんが居た。

押し負けてなるもんかって思いで“バルディッシュ”を握る両手に力を込める。

「その細腕でよく耐えられるものね」

「イヴィリシリアさんこそ細くて綺麗な腕、それに手も・・・！」  
“バルディッシュ”をぐるりと回してイヴィリシリアさんの剣を捌く。  
“バルディッシュ”をぐるりと回してイヴィリシリアさんの剣を捌く。ただど体勢を崩せない。逆に捌いた私の方が体勢を崩された。すぐさま鋭い一閃が横一線に奔ってくる。体勢を直そうとはせずにそのまま倒れ込むように体を前へと沈める。

#### プラズマバレット

ランサーに比べて威力も速度も劣るバレットだけど、誘導制御が出る分、対象を包囲しやすい。  
床に左手をついて前転、バレット13基をイヴィリシリアさんへと発射。

#### 風陣

イヴィリシリアさんが床に剣を突き立てて、暴風の壁を創り出した。ルシルの竜巻型の防御結界ラシエルみたいな感じ。バレットは暴風の壁に無力化。  
私も風圧でシャワールームから吹き飛ばされて、ベッドの上にポヨンと落ちる。  
暴風の壁が治まる。だけどそこに居るはずのイヴィリシリアさんが・・・居ない!?

#### 疾風

フワッと微かな風が背後から吹いてきた。  
背後に回り込まれたと思ってすぐさま前へ跳んで逃げる。  
4mと前に移動してベッドへと振り返る。そこには剣を思いつきり



振り払った状態で佇んでいるイヴイリシリアさんが。  
あの一瞬で距離を詰めてくる（の割に判りやすい。きっと力が制限されているからだと思う）攻撃が連続で使えるのか・・・ここで確かめる！

プラズマランサー

「ファイア！」

イヴイリシリアさんの足元に3基、左右に2基ずつ、頭上に2基、計9基。

イヴイリシリアさんは「風陣」って左手を床についた。そして巻き起こる暴風の壁。

ランサーが全基弾き飛ばされた。そしてベッドはバラバラに粉碎された。勿体ない。

ベッドだった物の破片が室内に舞う中、「ターン！」と弾かれたランサーを再射出。

弾かれては「ターン！」と再射出を繰り返しつつ、並行して別の魔法をスタンバイ。

“バルディッシュ”のカートリッジを三発ロード。左掌を暴風の壁に翳す。

「トライデント・・・スマッシュアアアーツツ！」

心の中で部屋を壊す事を全力で謝りながら最大威力の砲撃を放つ。

一直線に砲撃は進んで衝突、一瞬の閃光が爆ぜ、遅れて爆風が室内に満ち溢れる。

粉塵から逃れるために廊下に出て、イヴイリシリアさんが出て来るのを待つ。

全力の砲撃だったけど、防御結界に撃ち込んだんだから決まったと

は思えない。

「けほっけほっ。大人しそうな顔をしていても結構遠慮がないのね、あなた。けほっ」

「本当にごめんなさい」

砂塵に咽ながら出て来たイヴィリシリアさんに頭を下げて謝る。

でもほとんどダメージが入ってなかったなあ。クリーンヒットさせないとやっぱダメか。

頭を上げるとイヴィリシリアさんと視線が交差する。

イヴィリシリアさんはパンパンと服を叩いて「あーあ。この部屋、ルシルのだったのに」ってポロポロになった部屋を見た。

「え……!」

「はい、隙あり」

「しま……っ!」

ルシルの名前を使われて隙を作られて、背後へ回り込まれた事に反応が遅れた。

すでに攻撃に入ってるイヴィリシリアさんから逃げ切るのは無理だから、

ディフェンサー・プラス

背後に一点集中のバリアを展開。遅れて振り返る。

ディフェンサーはイヴィリシリアさんの一撃をちゃんと防いでくれていた。

イヴィリシリアさんの「はい、隙あり」って声がなかったら危なかった。

「あ、惜しい」

「プラズマバレット・・・、ファイア！」

バリアの向こう側に居るイヴィリシリアさんへとバレット9基射出。イヴィリシリアさんはバリアを貫こうとしていたのを切り上げて、バレットから逃げようと離脱。

バレットを操作して追いつらせる。暴風の壁を作る隙を与えない。逃げ続けるか別の手段で防御か迎撃するか。

イヴィリシリアさんの手の内を出るだけ晒させて、その手を封じる手段を考える。

そう、私はイヴィリシリアさんを封殺するつもりだ。まあイヴィリシリアさんが本来の力を出せるならそんな無謀なこと出来ないけど、今みたいに私達のレベルに合わせて力が制限されているなら、きつと出来るはず。

「逃げるのは簡単だけど、それじゃあつまらないわよね。ふふ、受けて立つー！」

## 旋風

振り向きざまに剣を振るって生み出したのは風の円盤、数は10。風の円盤は誘導操作が出来るようで、バレットの射線上へと移動してバレット全弾と衝突。バレットが真っ二つにされて消滅。円盤はそのまま私へと迫ってきた。

ならこっちも同効果の魔法を使わせてもらおう。“バルディッシュ

”を横一閃。

ハーケンセイバー

“バルディツシュ” 本体から離れて高速回転しながら飛んで行く電<sup>ハ</sup>撃の刃。

私のハーケンセイバーとイヴィリシリアさんの風の円盤。切断力はどっちが上か勝負。

ハーケンセイバーがまず一つ目の風の円盤と衝突。ちょっと拮抗したあと円盤を切り裂いてそのまま二つ目、三つ目、四つ目と衝突していく。

これはまずい。数は向こうの方が上だから、衝突するたびに威力も回転速度も落ちていく。

「それなら何発でも・・・！」

ハーケンセイバー×3

“バルディツシュ”を振るって、ハーケンを撃ち出す。

一発目のハーケンが五つ目の円盤によって消滅、五つ目の円盤が二発目のハーケンと衝突して消滅。

このまま何事も無ければハーケン二発が届く。だけどそんなに甘くない。

イヴィリシリアさんは剣を槍のように構えていて、

「槍嵐」

と告げて剣を突き出した。ドリルのような竜巻の槍が三つ。

これはルシルのザキエルの本数増加バージョン？

三つの竜巻の槍が螺旋を描いて、円盤を巻き込み、ハーケンを弾き

飛ばして迫ってくる。

「受けるのも防ぐのも無理かも。うっん、無理」

そう判断して踵を返す。逃げた直後に一つ目の槍が壁に突っ込んで、壁を穿って粉碎、外へ飛んで行った。

残り二つからブリツツアクション連発で逃げつつ、新しい隠れ場所を探す。

そして二つ目が床に墜落。床を抉り粉碎してそのまま階下へ突き進んでいった。

(コントロールが難しいのかな・・・?)

そもそも幅が4mはある廊下と言っても限度があるよ、あの風の槍の魔術。

それなりに大きな三つの槍が螺旋を描くから廊下にいっぱいはい。

少しでも軌道がズレれば壁や床に突っ込んでみましょうがない。

けどそのおかげで残り一つ。その残り一つも壁を突き破って外へ。

今の私はツイてるかもしれない。

(えっと、この先が・・・)

ヒミンビヨルグ城のマップを顔の左側面に展開。少し行った先に階段ホールがある。

階下に行くか階上か、または二階に留まるか。三択だ。

問題はイヴェリシアさんがどう動くか。私に標的を絞ったままついて来るか。

それとも諦めて階上に向かうか。そうになったら意味がない。ということとは、

「このまま二階で頑張るしかない、かな」

## 神風

鬼ごっこ継続を決めてすぐ。後方から前方へと駆け抜ける強烈な突風。

前髪や後髪、マントが強くはためいて、一時的に視界が潰される。そこに、全身に悪寒が奔った。急停止。すぐさましゃがみ込んだ。頭上に何かが通過した気配。

「素晴らしい気配察知能力ね、あなた」

背後から聞こえてきたイヴィリシリアさんの驚嘆の声。

前方に跳んで距離を開ける。振り向きざまに“バルディッシュ”を一閃。

「ただそこにイヴィリシリアさんは居なくて。あれ？ そう思った一瞬が最大の間になっていた。」

「王手」

背後から伸びる剣が私の首筋に当てられた。

「一瞬でまた背後に回られた？ そんな気配なんて一切なかったのに。そんな疑問が顔に出たのか、イヴィリシリアさんは「どうしてか知りたい？」って訊いてきた。」

この質疑応答。時間稼ぎに使える。そう思って「はい」って答える。

「じゃあ何から聞く？」

「い、一番最初の突然の突風を」

「神風の事ね。あれは高速移動の術式よ。あなたが使った移動系魔法のような、ね。」

私自身を風とし、中距離を高速移動することが出来る。それであな  
たを追い抜いたわけ」

それからイヴィリシリアさんは「屋内だと発動したのがよく判るで  
しょ」って同意を求めてきた。

確かにすごい突風だったから、二度目からは察知できる。屋外だと  
そういった突風が起こっても不思議じゃない。

うん、と頷いていると、「他には？」って訊いてきて、この最悪の  
状況を作ることになってしまった原因を知ることにした。

「いつの間にまた私の前に移動したんですか？」

「ああ最後のね。私は始めからあなたの前に居た、ということよ」

「え？ だって声が後ろから・・・？」

「風嵐系は、無属性音波系と紙一重なの。」

魔力で私の声を壁を使って反響させ、あたかもあなたの背後に居る  
と誤認させた。

見事あなたは引っかかり、背後に私が居るものだと思い、私の待ち  
構える前方へ移動」

「そうとは知らず、私はイヴィリシリアさんに背を向けた」

「そういうこと」

やられた。声を武器にしてくるなんて思いもしなかった。

私は観念して“バルディッシュ”を待機モードに戻した。

「まず一人を確保っと」

こうして私が最初に捕まった捕虜一号になった。

++++Sideフェイト ティアナ++++

ゲームが始まってから9分が経った。

階下から聞こえ伝わって来ていたとんでもない爆発音や振動がパタリと止んだ。

誰かがイヴイリシリアさんに見つかって、戦って、おそらく負けて捕まった。んだと思う。

一体誰が？ 戦闘時間の長さから言って、考えたくないけどフェイトさん辺り。

フェイトさんだったら、残るあたし達の誰が戦ってもイヴイリシリアさんに勝てないという事だ。

そこにアナウンスが流れた。

『こちらイヴイリシリア。あなたたち黄チームのリーダーを二階で確保。残り6人』

『ごめん、みんな。捕まっちゃった』

アナウンスはそれだけ。でも十分に伝わった。最悪な状況だった。フェイトさんだって端から戦おうって思ってたはず。逃げるために戦って、負けた。

実力云々もあるけど。それ以上にフェイトさんが逃げきれない相手



だってというのが最悪だわ。

あたしたち黄チームの中じゃフェイトさんが最速。そのフェイトさんが逃げきれない。

つまり見つかった時点でアウトだっていうこと。

「あたしの幻術はどうなんだろ・・・？」

大戦中には、幻影魔術においては最高位の夢幻王プリムスっていう子供が居た。

最強の幻術の使い手とも戦った（はずの）イヴィリシリアさん。

だからあたしの幻術なんて簡単に見破られる可能性がある。っていうか高い。

大きく溜息を吐いていたら、部屋の扉を開ける音がした。

（大丈夫。きつと大丈夫。信じれば救われる）

何度もそう唱える。今のあたしはオプティック・ハイドで姿を消してるし、フェイク・シルエツトで偽者を二体用意。

この部屋のベッド下とクローゼットの中に隠れさせている。

そっちに引つかかってくれれば・・・まだ勝算はある。

自分の幻術を信じる。今はそれしかない。お願いだから引つかかって。

「見つけた。・・・って、あれ？ 幻影!？」

クローゼットを開ける音の後、イヴィリシリアさんの驚きの声が聞こえてきた。

やった！ あたしの幻術がイヴィリシリアさんにも通用してる。って、気配を悟られるような言動は厳禁。

もちろん最初から視線だって向けてない。視線を感じて居場所を当

てられる可能性もあるから。

「驚いた。幻影術者が居るのね。しかもかなり精密な。すごいよね、魔法での幻術も」

イヴィリシリアさんの声には驚嘆と喜色が見える。

あたし、結構すごい。ルシルさん以外のアンスールから幻術を褒められた。

どうしよう、すごい嬉しい。真の英雄の一人が認めてくれてる。

嬉しさのあまり「くっ」って笑い声が漏れた。ドキツとする。そして自分を呪う。

どうか聞こえていませんように。でもその願いは容易く砕け散った。

「見つけた」

あたしが隠れていたのはシャンテリアの上。

その声に反応して下を見てみれば、イヴィリシリアさんと目が合った。

バレた！ どうする！？ イヴィリシリアさんの翡翠色の瞳から目を離せない。

それとも攻撃？ あ、そうか。フェイトさんを助ける方法がある。

見つけたんならここで捨て身の一撃を与えるっていうのも悪くない。

それでフェイトさんを解放できるんだから。よ、よし。やってやるわ、やってやるわよ。

「・・・む、ハズレみたいね。この部屋には居ないっつと」

意気込んでいたら、イヴィリシリアさんがフツと視線を逸らして、部屋から出ていった。

鎌を掛けられてたんだ、あたし。あ、あああ危なかつたあ~~~~~  
(涙)。

安堵の溜息と一緒にポロリと涙が。こ、怖かった。これ、このゲー  
ムは寿命が縮むわ。

涙を拭って、バクバクうるさい心臓を落ち着かせようとしていたら、  
フツと風が頬を撫でた。

窓は、開いてないわね。気の所為・・・？

とそこにまた扉が開いて、イヴェリシリアさんが入ってきた。

また心臓が早鐘を打つ。息も気配も殺して、視線もイヴェリシリア  
さんから外す。

「やっぱり、シャンデリアの上に居たのね」

数十秒とせずにハッキリと告げられた。

視線を下へ。イヴェリシリアさんとまた目が合った。  
でも今度は視線が外れない。姿の見えないあたしがシャンデリアの  
上に居るって確信して見ている。

幻術を解く。これ以上は無駄に魔力を消費するだけだから。

「あなた、すごいよね。最初はまんまと騙されたわ」

「お褒めに与り光栄です、イヴェリシリアさん」

右手の“クロスミラージュ”はそのまま、左手に持つ“クロスミ  
ラージュ”だけをダガーモードへ。

イヴェリシリアさんも右手に持つてる宝石のような綺麗な剣を少し  
持ち上げた。

真正面から戦って勝てないのは百も承知。だから搦め手を使わせて  
もらう。

ダガーを横薙ぎ。ガキン、と斬ったのはシャンデリアを天井に釣っ

ている鎖。

当然シャンデリアは落下する。あたし諸共、だ。  
イヴイリシリアさんが目を見張ったのが判った。とりあえずごめん  
なさい。

床に落ちる直前にジャンプ。そして床にシャンデリアが落下、ガラスや金属が壊れて周囲に散乱する。

(今だ！)

フェイク・シルエット

イヴイリシリアさんが目を破片から庇うために剣を翳した。

視界封じに成功したことで、あたしは自分の分身を10体創り出す。  
キャロのブーストが無いとこれが限界。そして本物のあたし、そして偽者一体を残して残りが一斉に部屋から飛び出て一目散に逃走開始。

偽者をベッド下へ飛び込ませて、

「面白い事をしてくれる娘じゃない。で、あなたは本物？ それとも偽者？」

あたしは無言で突っ立ったまま笑みを見せる。

内心冷や汗ダラダラ。フェイク・シルエット発動中、あたしは動けない。

だからこんな演技をする事に。でもうまく行けばやり過ぎせるし、奇襲が成功するかもしれない。

ハイリスク・ハイリターン。フェイトさんを解放するためだ。恐怖に打ち勝つ。

「どっちかしら・・・ん？ なに？ レーザーポインター・・・？」

イヴィリシリアさんは自分の右頬に照準を合わせている赤い光に気付く。

シルエットの一体を呼び戻して狙いを付けさせたものだ。

「さすがに本物だけ居残るなんて有り得ないわよね・・・！」

踵を返して、偽者へと一足跳びで最接近、剣を振るって斬り裂いた。消滅するシルエット。そのタイミングに合わせてあたしは姿を消す。オプティック・ハイドを発動。

「さっきの娘はどこに・・・？ また透明になって姿を晦ませているのかしら」

その通りです。イヴィリシリアさんはあたしを捜して室内を歩き回る。

ここで先にベッド下に潜ませていたシルエットを動かす。

ベッド下から飛び出させた。イヴィリシリアさんをこの部屋から遠ざけるために。

作戦通りに「待ちなさい！」ってシルエットを追いかけて部屋を出て行った。

少ししてから全ての魔法を解除して、ベッド下へと潜り込む。

(イヴィリシリアさんはおそらく戻ってくる)

あたしを諦めて別の誰かを捜しに行くかもしれないのに、何故かそう思う。

なんていつかイヴィリシリアさんは律義な性格そうだし、一度狙いを定めたらとことん拘るような。

ベッド下でクロスファイアのスフィアを8基スタンバイ。いつでも

射出できるようにしておく。  
フワッと頬を撫でる風に気付く。まただ。

(さっきも窓も開いてないのに風が吹いて・・・まさか！)

ある推測に行きついた。イヴィリシリアさんは風を操る魔術師の頂点。

この微かな風で、あたし達の居場所を探っているんだとしたら・・・

どの部屋に隠れているのが判るんだったら、イヴィリシリアさんに不利な隠れ鬼のルールにも納得がいく。

30分で見つける事もきつと可能だ。あたしの推測は正しかったよ  
うで、イヴィリシリアさんが戻ってきてきて室内の搜索を再開。

そしてベッドの前で立ち止まって、片膝と左手をついた。ベッド下を覗き込むつもりだ。

ゆっくりと体を折って視線をベッド下へ。

「っ！」

「シューット！」

目が合ったと同時にクロスファイアをイヴィリシリアさん目掛けて  
射出。

この距離、そしてその体勢。避けきるのは難しいはず。でも甘かつた。

強烈な風が吹いた。あたしを覆い隠していたベッドが吹っ飛ぶ。

そしてあたしも床を這うような爆風によって無理矢理立たされてしまった。

クロスファイアはもうどこにもない。対処された。

「本物とご対面ね・・・！」

振るわれる鋭い一閃。解除していたダガーモードを再発動。イヴィリシリアさんの剣戟を、右手に持つダガーモードとした“クロスミラージユ”で受け止める。

もちろん受け止めきれるなんて思ってない。少しでも至近距離での一撃を与えるために。

左手の“クロスミラージユ”の銃口をイヴィリシリアさんの胸へと向け、

シュートバレット

圧縮魔力を弾丸状に形成して、加速して撃ち出す射撃魔法を放つ。当たる。そう思った時には既にイヴィリシリアさんの姿はどこにもなくて。

確かに目の前に居て、しっかり目で見ていたのに、完全に見失った。ううん、一度だけ視界を閉じた。そう、まばたきの時に。

「王手」

背後から剣が伸びてきて、首筋に刃を当てられた。

あたしは降参の意を示すために“クロスミラージユ”を待機モードにして、背後に居るイヴィリシリアさんへと差し出す。

「結構。武装解除はしなくていいわ。ただ大人しく捕まってくれただけで」

こうしてあたしは二人目の捕虜として捕まった。

? ? ? ? ?

「こちらイヴィリシリア。あなたたち黄チームの幻影術師を三階で確保。残り5人」

フェイトに続いてティアナを捕まえ、玉座の間に閉じ込め終えたイヴィリシリアの顔に焦りが滲みでる。

15分で二人。残り五人を15分で捕まえなければならない。間に合うわけがない、と。

「思っていた以上に手強かったわね」

フェイトとティアナに苦戦したことを素直に認め、純粹に二人の強さを称賛していた。

#### 瞬風

フワリと体を浮かせ、高速で階段ホールへ向かい、到着。

そして階段を高速で上って行き四階に到着したイヴィリシリアは、早速魔術を発動する。

#### 風査

四階全ての部屋より風を集め、どの部屋に黄チームのメンバーが隠れているのかを探查。

閉じていたまぶたを開き、「三人か」と呟いた。四階に三人隠れているのを確認したイヴィリシリアは、現在地から一番近い両親の部屋を目指した。



＋＋＋Sideシャマル＋＋＋

ゲーム開始から15分が経過した。下の階から轟いていた音も揺れも無くなって。

テストロッサちゃんの時と同じ。3階にはティアナが隠れていたから、もしかしたらティアナが戦っていたのかも。

『こちらイヴイリシリア。あなたたち黄チームの幻影術師を三階で確保。残り5人』

「幻影術師・・・、ティアナ・・・」

私たち黄チームの中で幻術を使うと言ったらティアナだけ。

途切れ途切れの戦闘音からして、テストロッサちゃんのように戦い続けだったというわけじゃないみたい。

つまり、見つかつては逃げて隠れて、また見つかつては逃げて隠れて、を繰り返したということよね・・・？

たぶん幻術を駆使したからこそ、逃げる事が出来たんじゃないかっと思う。

「けどそれだけの事をやっても逃げ切る事が出来なかった・・・」

解ってはいいた事だけれど、やっぱりアンスールは一筋縄じゃいかないのね。

ちよつと諦めモードに入ってしまったって、ダメダメ、って頭を振る。

はやてちゃん達もなのはちゃん達も頑張ってお題をクリアしたんだから。

それに制限時間も残り半分。イヴイリシリアさんは15分で二人し

が見つけて捕まえられなかった。

このまま行けば間違いなく私たちの勝ち。うん、勝てる。

「????？」

勝てる可能性に気付いたことで意気込んでいるところに、前髪がフワリと揺れた。

キョロキョロ室内を見回す。窓も扉も開いていないのに・・・風・・・？

気の所為と片付けるには不自然。風。それはイヴィリシリアさんを最強たらしめる属性。

とそこに、この部屋の扉を開ける音が。入ってきたのはイヴィリシリアさん。

室内を軽く見回していて、クローゼットやベッドの中に下、シャンデリアの上を覗き込んでいる。

(そう言えば、この隠し部屋の事・・・やっぱり知ってるわよね・・・?)

運良く見つける事の出来た隠し部屋に隠れている私。

家族の肖像画をいじっていたらスライド、隠し部屋が出てきて、すごく楽しくなつてつい中に隠れてしまったのよね。

描かれていた仔猫の目に穴が開いていて、そこから室内の様子を見る事が出来る。

今もその穴から室内を搜索しているイヴィリシリアさんを見詰める。

「さつきから視線を感じるんだけど・・・見つからないわね」

その呟きに、急いで穴から覗くのをやめる。

だけどそれは失敗で、「あ、パツタリやんだ。居るわね、確実に」

つてさらに注意深く搜索し始めた。  
そして、「あーそう言えば、父様と母様の部屋には隠し部屋があつたわね・・・」って肖像画に近づいてくる気配。  
頭を抱えて蹲る。最悪な結末にまっしぐら。

(こつなつたら・・・！)

肖像画の裏に立って、迎撃態勢に入る。

接敵と同時に攻撃。テストロツサちゃんとティアナを解放するため  
に決めないと・・・。

“クラールヴィント”をペンダルフォルムにする。

肖像画がゆっくりとスライドして行って・・・。

(今ッ！)

両手の指輪から伸びる魔力紐チュウの先端にあるクリスタル4つを、肖像  
画のスライド途中だったイヴェリシリアさんに向かわせる。

ジャストタイミング。だったけど、ペンデュラムが当たる直前、イ  
ヴェリシリアさんの姿がかき消えた。

大きく後退していて、セインテスト君の“グングニル”のようなク  
リスタルの刀身を持つ剣でペンデュラムを弾いた。

「よく隠し部屋を見つけたものね」

「運が良かったんですよ。結局は見つかってしまいましたけど」

### 風の足枷

前方に小型の竜巻を三つ発生させる。

風の足枷を見たイヴェリシリアさんが「ほお。風嵐系最強たる私に

対して風の魔法」って口の端を歪めた。

こゝこゝ怖い。ど、どうしよう。怒らせちゃったのかしら・・・？

「魔法の中には風嵐系の属性が無いと聞いていたから。ちょっと嬉しい」

か、かかか可愛い？ イヴイリシリアさんの笑顔って可愛いでもすぐに「ではどこまで私について来られるか、見せてちょうだい」と言っつて、刀身に風を纏わせた剣を×字斬り。

#### 旋刃

放たれる真空の十字斬。フライハイトちゃんの真空刃みたい。

イヴイリシリアさんに向かって行っていた風の足枷が切断される。切断力は高いのは判ったわ。それだったら・・・

#### 風の護盾

渦状の盾を前方に展開。十字斬を防ぎきることに成功。

うん、突破されることなく防ぐ事が出来たわ。

私の防御力は、イヴイリシリアさんの攻撃力に負けていない。それが判ったのが良かった。

「それなら直接斬るまでの事・・・！」

#### 疾風

イヴイリシリアさんの姿がかき消える。

風の護盾の前に、もう一度小型の竜巻、風の足枷を3つ発生させる。私から攻勢に出るのは自滅行為。私は補助型。だから待ち構えるし

かない。  
イヴィリシリアさんがただ攻防一体の足枷と語盾に突っ込んで来るのを。

「この程度の風、そよ風にも満たないわっ！」

姿を現したのは護盾のすぐ前。イヴィリシリアさんの背後に在る足枷が全て横一線に断ち切られていて消滅していく。

そしてイヴィリシリアさんはすでに剣を薙ぐ体勢に入っていて。バックステップで護盾から離れる。防御力に自信はあるけれど、もし斬られた時のために。

目にも留まらない鋭い一閃。ベッドルームと隠し部屋を隔てる壁が横一文字に切断される。

それでも護盾を斬る事は出来ていなかった。驚愕しているイヴィリシリアさんと目が合う。

このチャンスを逃すわけにはいかないわ。

### 荒ぶる嵐

風の砲撃を護盾もろとも、驚いて硬直しているイヴィリシリアさんへと撃つ。

### フウリン 風鱗

やった！？ 間違いなく避けきれなかったはず。

現にイヴィリシリアさんが隠し部屋の反対側の壁際に居るんだからでも、ダメージが入った様子はないわ。あの状況で完全に防がれた、という事ね。

良く見れば、刀身にライムグリーンに煌く魔力が鱗のように折り重なって盾のようになってる。

「今のは結構危なかったわ。焦って防性術式を使ったくらい」

イヴイリシリアさんは鱗の盾を解除して剣を構える。  
今のチャンスを活かせなかったのは大きな痛手だわ。

ジリジリと少しずつ距離を詰めて来ようとしているイヴイリシリアさんに、私はこのお題のクリアを確信した。

私一人にもう5分を費やしてる。ここで私が捕まったとしても、ザ  
フィーラ、それに速さに定評のあるスバルとエリオが居る。

あとキャロも。ただ見つかったら即アウトな気がするけれど。

このまま粘って粘って、時間いっぱいまで粘り切ってみせる。

「時間もそう残っていないから。早々に捕まえさせてもらおうわ」

## 疾風

イヴイリシリアさんの姿がかき消える。

テストロツサちゃんやエリオのブリッツアクションやフライハイト  
ちゃんの閃駆とは違う高速移動術。

イヴイリシリアさんの姿を消している時間が長い。

だから次に姿を現すまでの時間で精神が擦り切れそう……。

左の後ろ髪がフワツと揺れるのを感じた。……来る！

タイミングを合わせて、イヴイリシリアさんを引っ掛ける魔法を……

・！

「今っ！」

## 旅の鏡

イヴイリシリアさんが出現するのに合わせて（100%勦）旅の鏡

を発動。

でも勘を信じて良かった。剣を全力で振り抜いて硬直しているイヴイリシリアさんの真後ろに転移成功。

今さらながらに「な・・・っ!?」って驚きの声を上げるイヴイリシリアさんの背後へ、

「ペンダルシユラク！」

両手のペンデュラム四つを向け放った。最初の1発は当てることに成功。

残り3発は、姿をかき消すことで回避された。欲を言えば2発当たった。

そうすればテストロッサちゃんとティアナの二人を一度に解放出来たのに。

### 旅の鏡

反撃を受けないようにもう一度転移して廊下に出る。

あとは全力で走る。さっきまで居た部屋から「やってくれるっ！」って怒声が。

ヒィー！ 今捕まると何をされるか判らないから、もう一度旅の鏡で一階へと転移した。

?  
?  
?  
?  
?

イヴイリシリアはシャマルを追いかけることなく両親の部屋に一人佇み、自らの不甲斐無さに怒りを見せていた。

“神剣ホヴズ”を床に突き刺し、柄尻に額をゴツンと当てて。

「ただ逃げられるならまだいいとして、まさか一撃貰うなんて・・・」

イヴイリシリアは、いや、魔術師なら誰もが動きを止めざるを得なかった。

シャマルの転移魔法・旅の鏡。魔術師には出来ない、出来る者も居るかもしれないが、基本は出来ない個人転移。

大戦時、個人で転移することは難しい術式だった。わざわざ転移門と呼ばれる大掛かりな儀式魔術でのみ転移を行っていたのだ。

ゆえにシャマルの様な個人で、しかも高速での転移術式に、魔術師のイヴイリシリアは遅れを取るしかなかった。

「こちらイヴイリシリアです。捕虜となっている二人のどちらか一人を解放します。」

二人で相談し、決まった時点で再度隠れてください」

穏やかな声でヒミンビョルグ城中央区にその声を流すイヴイリシリアだったが、額には青筋、こめかみもピクピクと動いている。よほど悔しかったようだ。シャマルの攻撃を喰らったことが。

「はあ。雷撃術師と幻影術師。どちらが解放されても厄介だわ」

あらゆる面で制限されてしまっているイヴイリシリア。

速度面ではフェイトとほぼ互角。ティアナには幻術を駆使され時間稼ぎをされた。

その二人のどちらかともう一度相対して捕まえ直し、自分に一撃入れたシャマルを捕まえ、そしてまだ見ぬスバル、エリオ、キャロ、ザフィーラを搜索し、戦い、捕まえなければならぬ。

それを残り僅かな時間で全てこなさなければならぬ。



「……こうなれば真技で一気に……。って何を馬鹿な事を考えているの私は」

少しでも真技を使おうとした事に自己嫌悪に陥り、“ホヴズ”の柄尻にゴツンゴツンと額を打ち続ける。

イヴイリシリアの真技、テンチンケン天地刃巻・天壤裂破は広域天壤殲滅攻性術式だ。

使えば今隠れている黄チームメンバーを見つけることは出来るだろう。

もちろん中央区を根こそぎ吹き飛ばすことで、だ。

しかしそれでは隠れ鬼として成立しない。だから使わない使えない。

「……はあ。やれるところまでやりますか」

額を打ち付けるのを止め、“ホヴズ”を床から抜いて肩に担ぐ。

踵を返し部屋を出、「風査」と告げて探査術式を発動。

「反応は二つか。さっきの娘はもういいわ。他の二人に標的を変えよう」

シヤマルがこの階に居ないと判ると、イヴイリシリアはもう色々諦めた。

このお題は自分の負けだと。だからこそ

## 瞬風

「せめて今度はどんな魔法が見れるのか楽しみたいわね」

先程までの鬱屈はどこへやら。そんな期待を抱きながらイヴイリシ

リアは廊下を翔ける。

+++++Sidell+++++

少し先のマスが白く光る。フェイトたち黄チームが戻ってくるようだ。

光も治まると、そこにはフェイト達が疲れた顔をして佇んでいた。シャルだけはニコニコと満足そうな顔だが。ふふ、フェイト達はイヴ義姉様に揉まれたな。

「フェイトママ〜〜！」

ヴィヴィオが両手を大きく振ってフェイトを呼ぶ。

フェイトは「ヴィ〜ヴィ〜オ〜〜」と力なく手を振り返してきた。

「フェイトお母様もそうですが、皆さん疲れていますね」

「ルシルさん。イヴイリシリアさんって強いんですか？」

「ああ、強いぞ。陸戦最速で、風嵐系という風の属性最強だからな。君達が戦ったカノンですら手も足も出ないような相手だ。

ちなみに私も陸戦では勝ったことがないし、シエルも勝率は3割を切る」

コロナにそう答えると、カノンと激戦を繰り広げて負けたヴィヴィオ達が苦そうな表情を見せてきた。

ヴィータも「そっぴやフライハイトの奴も大戦ん時に負けてたな」と戦慄し、リエイスも「確か真技が強烈だったな」と苦笑いだ。

リエイスの言う通りだ。イヴ義姉様の真技は強烈だ。

「フェイトちゃん。お題の方はどうだったのー？」

なのはが心配そうに訊ねると、フェイト達は親指をグツと立ててニコツと笑った。

そうか。イヴ義姉様を相手にクリアをもぎ取ったか。さすがだな。内容を聞けば、懐かしき隠れ鬼をイヴ義姉様とやったそうだ。というかなんてフェイト達に不利なお題なんだ。

最初はフェイトとティアナが捕まり、シャルルがフェイトを解放に成功。

それはつまりイヴ義姉様に一撃与えたという事だ。だからあんなに機嫌が良いんだな。

だが優勢もそこまでだった。残り僅かな時間でフェイトとスバル以外が捕まったそうだ。

しかし二人の頑張りのおかげでザフィーラとシャルルを解放。

そこからはシャルルを逃げに徹しさせ、フェイトとスバルとザフィーラがイヴ義姉様と全力戦闘、時間切れにまで持ちこたえた、というのが結末だった。

「順調だな」

私たち青チームに続いてフェイトたち黄チームも見事にお題をクリアした。

さあはやて。君たち赤チームも私達に続いてクリアをしてくれ。

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（後書き）

レヴィ

「今回も始まったレヴィルのコーナー」

ルーテシア

「あれ？ 出番が一切なかったのに随分と機嫌が良いんだね」

レヴィ

「何か色々と吹っ切れた。もういいや、って感じ？」

ルーテシア

「わたしとしても毎回暴走するようなレヴィの相手をするのはちょっとだし」

レヴィ

「あっはっはっ。だからもう流れに身を任せようと思ったり」

ルーテシア

「（達観しちゃったわけか）なるほどね。さて、今回は、風嵐系最強の剣士イヴィリシアさんが登場したわけなんだけど」

レヴィ

「強かったねえ、やっぱり。最後の方は省かれていたけど、解放されちゃったメンバーも含め、最終的に黄チームを半壊させたもん」

ルーテシア

「ブレンセレリウスさんを相手にしたわたし達は幸か不幸か。よく

判んないなあ」

レヴィ

「絶対不幸だよorz」

ルーテシア

「ほら、落ち込まないで。えっと、それじゃあ今回はここまでっ」

レヴィ

「さっきのお題、無かった事になんないかな」

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へへへへ(前書き)

V S ? ? ? ? ? 筆頭アンスール戦イメージBGM

魔法少女リリカルなのはA's - THE GEARS OF D

ESTINY『トーマ・アヴェニール』

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜

+++++Sideリイン+++++

フェイトさんたち黄チームが無事に戻ってきました。  
わたし達のすぐ側に居るシエフィリスさんが何も言わないところを見ますと、お題をクリアしたのは間違いないようです。

「なのはちゃん達に続いてフェイトちゃん達もクリアかあ。これは私も頑張らなアカンなっ」

はやてちゃんがダブルガッツポーズで意気込んでいます。  
二連続でお題をクリアという良い流れをわたし達で止めないようにしないとイケませんね。

シエフィリスさんに「じゃあ次をどうぞ」とサイコロを手渡されたはやてちゃん。

「よっしゃっ。どんなお題でもアンスールの誰でもどんと掛かって来いっ！」

さすがにアンスールの誰でもというのは勘弁です。  
あとお題もどんなものでもというのもちよっと嫌ですね。

サイコロが綺麗な音を立てて転がって、わたし達の向かうマス目の数字を出しました。

みんなで「13」と漏らす。青チームと黄チームに続いて二ケタの数字。かなり絶好調かもです。

「ほんなら行こか。私らの戦場へ」

はやてちゃんがそうビシツと螺旋状のマス目の道に指差すと、「はやてさん、カッコいいですね」とイクスが惚れ惚れしたようなうっとり顔を見せる。

「うむ。確かに戦場になるかもしれんな。お題によっては」

「もう本気でアンスールの人と戦いたくないんだけどな」

シグナムはアンスールの魔術師と戦う事にやる気を見せて、アギトは隣でがっくり肩を落とす。

同感ですよ、アギト。わたしだってもう本気だとか全力でのバトルは御免です。

ルールーとレヴィは「次はどんなお題か楽しみだね」「楽しければ何でもいいよ」って緊張感のないやり取りをするだけ。

もしアンスールと戦うようなお題だった場合、最前線に立てコイツうゝ、です。

「あ、はやてちゃん、シグナムさん達も。どんなお題が出てても頑張っつてね」

「アンスールのメンバーの半数はもう出てきているが、まだ出て来ていないメンバーは厄介な魔術師ばかりだ」

「お気を付け下さい、主はやて。ルシリオンの言う通り、未だ姿を見せないアンスールは強い魔術師ばかりです。

白焰の花嫁ステア。雷皇ジークヘルグ。呪侵大使フォルテシア。そして人類史上最強の魔道王フノス」



それと氷雪系最強のシェフィリスさんですね。

戦闘のお題でなくても戦うような事になるという話を聞いて、わたしはもう心が折れそうです。

なのはさん達と少しお喋りして、13マス目を再び目指す。

前方のマス目に居るフェイトさん達と軽く頷き合ってから、13マス目の上へと足を乗せる。

『世界最強のチームとドッジボール対決う〜ッ　ドンドンパフパフ

相手チームを全滅させて、最強という栄光の座を勝利と共に掴み獲れッ！』

ドッジボール。それはまだ良いとして・・・、最強のチーム!?

この時点で最悪なお題だという事がビシバシ伝わってきて・・・。

ぐるりと周囲を見回せば、わたしたち赤チームも、なのはさんたち青チームも、フェイトさんたち黄チームも、あゝあゝ、みたいな諦めムード。

足元から光が漏れだす。お題を行うフィールドへと転送される合図。

「なんと言うか・・・頑張ってくれ」

転送が始まっている中、ルシルさんだけがわたし達から目を逸らし、声援を送ってくれたんですけど、目を見て言っただけです。

未だに姿を現さないというアンスールのみなさんが一斉に相手として出来たら・・・。

もう考えるのも憂鬱で。「はあ〜」と大きな溜息しか口から出ません。

視界が一度白に染まって、次にクリアになるとそこはもう別世界。

スタジアムのような場所で、足元に広がるコートは、普通の球技コートの3倍くらいはある。

「とゆうか、何でなのはちゃん達やフェイトちゃん達も居るん？」

「さあ？」

はやてちゃんの視線の先には、青チームと黄チームの面々。

チームを代表して、なのはさんとフェイトさんが同時に首を傾げて  
そう一言。

チーム毎でお題をする時、他のチームは待機のはずです。それが一  
緒に転送されるといふ事は、全員でお題を行うといふ事……？  
他のみなさんも一緒に転送されて来て当惑気味。

「お、来た来た。いらっしやあ〜い」

スタジアムの入場ゲートから聞こえてきた陽気な女性の声。  
一斉にそっちに向き直って、全員が絶句しました。わたしもあまり  
の光景に目が飛び出るかと。

「フノスとシエファイ以外が揃い踏みか」

ルシルさんが呻く。ルシルさんの言う通り、そこにはフノスさんと  
シエファイリスさんを除いたアンスールのメンバーが居ました。

す、すすすすごい現場ですう。もしここにフノスさんが居れば、わ  
たし、絶対に気を失います……。

わたし達を迎える声を出した主、ステアさんが先程から大きく右腕  
を振りながらアンスールのメンバーを引き連れて歩いてきた。

今、私はちよつとした同窓会気分を味わっている。

シエフィとフノスが居ないとはいえ、それでも揃ってしまったっている  
アンスールメンバー！

今まで逢つてきたシエルとイヴ義姉様とカノンとアリス、カーネル  
とセシリスとレンは後方を歩き。

その前方に居るのが、前髪以外が僅かに逆立つたオレンジ色の髪、  
光を移さないバイオレットの双眸。

白の長衣にスラックス、そしてロングコートを着込んでいる、雷皇  
ジークヘルグ。

「ど、どうすればええかなルシル君？」

「とりあえず話を聞かないと判断がつかないな」

ウイスタリアのセミロングの髪に眠たそうなトロンとしたオレンジ  
色の双眸。

紫色の長衣にスラックス、黒の肩掛けショールにオーバースカートの呪侵大  
使フォルテシア。

そんなアンスールメンバーを引き連れ先頭を歩くのが、カーディナ  
ルレッドのインテーク、長い後髪を背中で結い、頭頂部から二本の  
アホ毛を伸ばしている、白焰の花嫁ステア。

厚手の白ブラウス・赤リボン・ロングの白プリーツスカート、ムス  
ペルヘイム軍將軍としての階級章が襟に付いた真紅のロングコート  
を着ている。

「私、ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイムが今回のお題の総責  
任者よ。」

もうゼフィ様のアナウンスで知っていると思うけど、お題はドッジ  
ボール。

内野に居る私とジークとフォルテをアウトにしたらそっちの勝ち。で、逆にそっちの内野が全滅したら私達の勝ち。制限時間は10分。時間切れの場合、アウトになった人数で勝敗を決める。それと、念話などの通信は禁止。これが基本ルールね」

ステアがルール説明をし、どこからともなくボールを取り出して右人差し指でクルクル回しだす。

そして「ジーク。お願い」とルール説明をジークに引き継がせる。ジークは嫌そうな顔一つせずに「判った」とルールの説明をしていく。

「このドツジボール、まず顔面はセーフとなる事は憶えておいてください。

それと、ただのドツジボールでは面白みがないという事で、そちらは魔法、こちらは魔術の使用をアリとします。

アウトの判断基準は・・・、そうですね、実際に見てもらった方が良いかもしれない。

カーネル、レン、セシリス、フォルテシア、シエル。手伝ってください」

ジークに名を呼ばれたシエル達が三人一組となって別れる。

ステアがジークにボールを放り投げ、受け取ったジークが「見ていてくださいね」と私達に向け微笑を浮かべた。

なのは達からほわぁ？とした空気が流れてくる。ジークは格好いいからな、解る。

(フェイトは・・・よかった。ジークの微笑にやられてない)

そしてジークは左手に、黄金に輝く柄の短い鉄槌“天槌ミヨルニル”を出現させる。

カーネルも刀身が雷のような大剣“剛覇剣フロツティ”を。  
レンはケルト十字の様な穂を持つ十字槍“葬槍ミスティルティン”を。

セシリスは刀身が二つある大剣“煉星剣レーヴァティン”を。  
フォルテは2m弱ある深紫色の柄、その上下にある刃渡り1mの曲線を描く赤紫色の刃を持つ大鎌“宵鎌レギンレイヴ”<sup>ショウレン</sup>を。  
シエルは両腕に白銀の籠手“月狼ハティと陽狼スコール”を。

「ステア。その子達から何かしらの質問があつたならちゃんと答えてあげてください」

「了解つす、ジーク」

「シエルさんのような神器なら解るけど・・・、ドッジボールなのに武器を・・・？」

「ま、見てれば解るよ。それじゃあゲームスタート！」

なのはの何気ない独り言にステアが耳聴く答え、ジーク達にゲーム開始を促した。

そして始まるドッジボールの説明試合。先行はジーク、フォルテ、レンのチーム。

ジークがボールを高く放り投げ、「いきますっ」と落ちてきたところを“ミヨルニル”で打ち放った。

この時点でもうドッジボールじゃないな。シエル、セシリス、カーネルのコートへと高速で飛んでいくボール。

「来いやっ！」

カーネルが“フロツティ”をバットのようにつまみ、飛来したボール

を打ち返した。

それを見たアンスールを除く全員の心の声はきつと、えええー！っ！？だろう。実際、私がそうだ。

ボールをキャッチせずには相手コートへ打ち返す。普通なら打ち返した本人がアウトだ。

だがアウトではないらしく、ボールの応酬は続く。そこにステアが「これからアウトを見せるね」と私達に告げた。ステアの視線を受けたシエル達が一斉に頷く。

「レン、あなたがアウトねっ！」

シエルがそう宣告して、飛来したボールを全力で殴り返した。

ボールはレンの左肩にドガンッ！と当たった後、コート外へと飛んで行った。

ステアが「レン、アウト！」と告げる。だがレンはそれどころじゃない。

レンはシエルの強烈な一撃を受けた肩を押さえて蹲っていた。しかし誰もがスルー。哀れ。

「ということで、ボールが顔や頭以外にぶつかってコート内や外に落ちればアウト。

それ以外は基本セーフです。返ってきたボールをキャッチせずには打ち返したとしてもアウトにはなりません。

ぶつかり、味方が自分が取ることが出来た場合もセーフという事になります」

「そういうことね。体に当てられて、ボールが下に落ちたらアウト。あと武器に当たって、相手コートに返す事が出来なくてもアウトね。ま、これだけに注意していてくれれば良いってわけ。だから、こんな事も出来る」

シエル達のチームにある動きが生まれる。

シエルが一人コートに残り、セシリスとカーネルは外野へ移動した。その隊形は三角形だ。三角形の中心に、ジークとフォルテ、未だ復活していないレンが。

まずは内野のシエルがボールを殴り、外野のセシリスへと飛ばす。飛んできたボールを“レーヴァテイン”で打ち、カーネルへと送球。今度はカーネルが“フロツティ”でシエルへとボールを再び打ち返す。

そしてシエルがまたセシリスへ、セシリスからカーネルへ。ああなるほど。

「キャッチして投球体勢に入って投げる。この工程が省けるから・・」

「そーゆうこと。あーいう風に超高速のパス回しが出来る。これのでかなりの確率で相手チームを翻弄出来るってわけ」

フエイトの眩きにステアはそう返す。確かに上手く繋げる事が出来れば翻弄出来るな。

私達はそのメリット、デメリット両方あるルールに唸っていると、ドゴン！と鈍く大きな音が聞こえた。

ハツとしてコートへと目を向けると、シエルのボールがレンの顔面を捉えていた。

痛つつつたああ〜。あれは痛い。ボールがレンの顔面にめり込んでいるぞ。

ヴィータとアギトが「ひでえ」と戦慄している。というか全員がドン引きだ。

「顔面セ〜〜フ！」

「いや、セーフも何も完全に再起不能だろう」

ステアへ冷静にツッコミを入れるリエイス。私たち全員がうんうんと頷き同意を示す。

しかしステアは大した問題でもないと言いたげにニコリと笑い、「じゃあ魔術・魔法を使つてのプレイを説明するから」とレンの身に起きた大惨事をスルー。

コートの中でバタリと倒れたレンへと駆け寄るステア以外のアンスールメンバー。

ジークに「ルシル。緊急です。治療術式をお願いします」と頼まれ、私は「ああ」と二つ返事で答え、レンのぶっ倒れているコートへ駆け寄る。

「……おい、生きてるか？」

ボールのラインがクツキリと顔面に刻まれたレンの顔を見ての第一声。

シエルが隣で「顔に当てるつもりはなかったんだよ？ ホントだよ？」と私に何度も言い訳を繰り返す。

わざとぶつけたと言うなら、兄として怒らないといけませんが。目は本当にわざとじゃないと訴えている。

「ああ、解ってる。シエルは良い子だからな。偶然当たったんだもんな」

傷つきし者に、コート 汝の癒しを

「うんっ。ありがと兄様。やっぱり兄様はシエルを信じてくれるんだね」



レンの顔だけでなく全身にラファエルを掛けつつ「当たり前じゃないか」とシエルの頭を優しくポンポンと叩く。  
シエルは気持ちよさそうに目を細めて「嬉しいなあ」と破顔する。  
とそこに、

「おいコラ。人の顔面に殺人ボールを直撃させといてニコニコしてんなよ」

ラファエルの甲斐もあり、レンが見事に復活。そしてギラツとシエルの睨みつける。

シエルが「なんかごめんね」。痛かった？」とそれは軽い口調で謝った。

レンの額にクツキリ浮かぶ青筋。私はシエルに「ほら、ちゃんと謝れ」と軽く頭を小突いてやる。

「あたっ？ むう、顔にボールぶつけてごめんなさい」

「ということで、レン、すまないがこれで許してやってくれ」

シエルに続いて私も頭を下げる。兄として妹の不始末にも付き合わないとな。

レンはそれで渋々だが許してくれた。ふう、シエルとレンのケンカ一歩手前の仲裁なんてすごい久しぶりだな。

とりあえずこれで問題は解決だ。「それじゃ戻るな」とシエル達に言うてからフェイト達のところへ戻る。

「お疲れ、ルシル。シエルのお転婆っぷりにも困ったもんだね」

「お前がそれを言うかステア」

すれ違いざまにそう言われ、ステアの方がお転婆だったと言い返す。フェイト達に迎え入れられ、「ステア。続きを頼む」とルール説明の先を促した。

ステアは「了解。それじゃジーク。魔術・魔法使用時のプレイの説明ね」と告げ、再開される説明試合。

先行は再びジークチームから。ジークがボールを上には振り投げ、「ミヨルニル」を構える。

そして足元にジョンブリアンに輝くニダヴェリール魔法陣を展開。

ジエネラツイオーネ・ディ・エネルギー・エレットリカ

ジークの身体から稲妻が放電。「アックームロ」と告げ、稲妻は“ミヨルニル”へと集束していく。

ボールが良い高さにまで落ちてきて、“ミヨルニル”が振るわれる。

「アツサルト・ステツラ・・・！」

術式名が告げられたと同時に“ミヨルニル”がボールを捉える。

ボールがジョンブリアンの雷光を纏い、高速でシエル達のコートへ飛来。

受けに回るのはシエルだ。ギンツと鈍い音が耳に届く。両拳を打ち付け合い、

フェアリー・バイト  
「圧壊拳！！！」

雷塊となっているボールを重力の拳打で打ち返した。

ボールは再びジーク達のコートへ。今度はフォルテが受けに回るようだ。

“レギンレイヴ”をクルクルと回し、足元にスヴァルトア ヴヘイ

△魔法陣を展開、上下の刃にベルフラワーの影を纏わせる。

ソンプル・エベイスト  
復讐者の黒閃

自分の体を軸として“レギンレイヴ”をクルリと回し、ボールに×十字の二連撃を打ち込む。

一撃目でボールの威力を激減させ、二撃目で頭上に跳ね上げる。

フォルテが下がり、落ちてきたボールの真下に“ミスティルティン”を頭上に掲げたレンが待ち構える。

「喰らいなシエルツ！」

デストリユクシオン、ファントム  
野郎どもブチ壊しちまいな

やはり根に持っていたのか、レン。

レンは“ミスティルティン”でボールを打ち、幾体もの亡霊をボールへと纏わせシエルへと返す。

ヴィヴィオ達から軽い悲鳴が上がる。当然か。ボールには苦しげな人間の顔が幾つも纏わりついているのだから（しかも呻き声付き）。なのは達も引いている。レンのお題に参加したはやて達はというと、

「プフ、アカン。シグナムのレアな姿を思い出してもうた」

「主はやて！？ 決して口外しないという約束です！」

「シグナムさんシグナムさん。ギャップ萌って知ってます？」

「知らんっ！！・・・む、そう言うレヴィ、お前も散々な目に遭っていたな」

「うく。止めましょう。お互いの身を滅ぼしかねません」

レヴィとシグナムが握手を交わした。君達は苦勞したんだな。

レンが従える亡霊の付加効果はいずれも厄介で、亡霊の攻撃を受けたらドジにされるわ憂鬱にされるわ精神を子供にされるわと大変な目に遭う。

レヴィとシグナムはおそらくその類にやられたんだろう。

「はい、シエル、アウト！」

「おっしやあああああつ！」

コートへと目を向ければ、シエルが女の子座りでペタンとコートに座り込んでいた。

そしてレンは何度もガッツポーズを決めている。大人げないなあ、お前。

シエルは仰向けに寝転がって「あゝんもう、やられた〜」と悔しそうにジタバタ。

「見てもらったように魔術・魔法を使う事によってボールの威力や球速が変わるし、使った術式によっては効果がボールに現れるって憶えておいてね。

それと、魔法術を使ったボールは、魔法術じゃないと返せないしキヤッチ出来ないんだけど、味方の魔法術ボールなら魔法術無しでキヤッチも出来るし返せる。

じゃあここまでで何か質問ある子、手を挙げてね〜」

「あ、はい」となのはが手を挙げる。ステアに「はい、どうぞ」と指され促されたなのは、「このお題、もしかして私たちも参加ですか？」と訊ねる。

その疑問はもつとも。このお題を出したのは、はやてたち赤チームだ。

それなのに私たち青チームとフェイトたち黄チームまで召喚されている。

それはつまり……

「そうだよ。赤チームのメンバーだけだと辛いでしょ？」

みんなの視線がはやてたち赤チームに向けられる。

はやて、ライン、シグナム、アギト、ルーテシア、レヴィ、そしてイクス。

むう、確かにこのメンバーでステア達を相手にドッジボールはキツイナ。

ルーテシアが「か、勝てないですよね？」と、はやてとシグナムに遠慮したかのように小声で呟く。

そこにレヴィが「絶対ムリ」とバツサリ言った。

「レヴィの言う通りやな。そや、ルシル君。ルシル君から見てどうやろ？」

「はやて達には悪いが、赤チームだけでは勝てないな。ここは他のチームから誰かを入れた方が良さだろう」

私の意見はすんなり通ることになった。

ステアから「内野に5人、外野に3人、計8人チームね」と説明され、私達は誰が参加するか作戦会議に入る。

まず最初に出てきたのが、

「近接型と中遠距離型。バランス良く入れるか、それとも近接型だけで攻めるか」

赤チーム・リーダーとして今回のお題の総指揮を執るはやてが全員を見回す。  
それにヴィータが「近接型の方がまあ打撃のモーションも少なねえし隙もない、と思う」と意見を出す。

「向こうのチームの内野って全員が近接型だし、こっちも内野を近接型で固めた方が良いんじゃないかな・・・？」

フェイトがそう纏めとも言える意見を出した。

その意見に反対はなく、私達のチームの内野は近接型で固めることとなった。

問題は、誰が内野に入るかになってくる。内野には五人ということだが。

そこにリエイスが挙手して、「私の意見を述べるなら、内野には基本、武器を持たない者が入るのが良いと思う」と意見を出した。

「私もリエイスの賛成だ。いくらコートが広いとはいえ、やはり武器を持つと身動きが制限されやすい。

それに高速弾が来た時、咄嗟に周りを気にせずに迎撃が出来るのは・・・」

「武器を持たない者、か。我もリエイスの意見に賛成しよう」

シグナムとザフィーラはリエイスの意見に同意を示す。

はやてが「みんなもそれでええか？」と同意をみんなに求め、少しの間後、リエイスの意見にそれぞれ賛成していった。

最後に私も「それで良いと思う」と言っておく。それからの話し合いの結果、

「内野は、ヴィータとラインのユニゾン、ザフィーラ、リエイス、スバル、レヴィ。」

「それで外野は、私、ヴィヴィオ、アインハルト。このメンバーで行こう」

「はやてが参加するメンバーの名を挙げていく。」

「何故このお題に不利な感じのはやてが参加しているのかと言うと、」

「このお題を出した人は私やし、なんもせんのはアカンやろ」ということだ。

「まあ内外ともかなりの実力者ぞろい。ヴィヴィオとアインハルトも十分やれるだろう。」

「ステア！」

「ん？ 誰がやるのか決まったみたいね」

私の呼び掛けに答え、ステア一人が歩いてきた。

私もステアへと歩み寄っていき、「ああ。彼女達が、お前達に勝つ子達だ」と自信満々に言っただけでやる。

背後から「やめてルシル君」とか「挑発しないでルシルパパ」とか「ルシルさん、ハードル上げないでくださいよ」とか、弱気な発言が聞こえてきた。

ステアがニヤニヤする。そのツラ、あとで悔しげなものにしてやるよ。

「ステア。お前には吠え面をプレゼントしてやる」

「お？ ほほお。面白いじゃん。私に負けっぱなしのルシルちゃんが大きく言っただわ。」

「いいよ、私に勝ったら、キスでも何でもしてあげちゃう？」

「アホか。お前のキスなんぞ要らん。あとちゃん付けするな」

両腕で胸を寄せ上げるようなポーズを取ったステアに嘆息。

私にはフェイトが居る。あ、だからと言ってフェイトにキスされた  
いとかじゃないぞ。

いかん、馬鹿な思考の流れだ。コホン、と咳払い。

「少しはテレてよ。ふう、どんなに時間が経っても頭が固いんだから。」

ま、私に勝ったらちゃん付けをやめてあげるよ。とりあえずそのメ  
ンバーで練習を15分くらいやって、チームワークを・・・って必  
要ないって顔ね」

ステアのニヤリとした笑みと言葉に、私は後ろに居るはやて達へと  
振り返る。

はやてたち参加チームはすでにコートに入っていて、ステア達を待  
ち構えていた。

「連合のクズ共を一匹一匹焼き殺していく時以上の高揚感 楽し  
い楽しい10分間になりそっ」

「はあ、お前なあ。そういう血生臭い話を、ヴィヴィオたち子供に  
聞かれるようなミスだけは絶対にするなよ」

「解ってるってば。・・・さてと。見るからにデキそうなのが揃っ  
てるし。」

フフ、フフフフ。ダメ、にやけちゃう。コホン。アンズールが白焰  
の花嫁ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイム」



「さあ、いざ戦場へ参ろうぞ・・・!!」

ステアが純白の炎で構成されたウェディングドレスを纏った。

当然と言えば当然かもしれないが、黄金の三叉槍“劫火顕槍シンマラ”を携えた。

というか、初っ端から花嫁モードとは馬鹿か、お前はっ!

私の非難の視線を受け流し、白焰のヴェールの奥にあるオリエンタルブルーの瞳をギリリと光らせる。

ステアの変わりように、何も知らないヴィヴィオ達が驚きの声を上げている。

ステアに続き、ジークとフォルテ、外野組シエルとレンとカーネルもコートへ向かった。

「ルシル! こっちで見学しよう!」

「あ、ああつ。頑張れ、はやて、みんな」

イヴ義姉様とセシリスとカノンとアリスは待機か。

まあ当たり前か。カノンとアリスの身体能力は、お世辞にもあまり良くない。

セシリスの炎熱魔術は、ステアの炎熱操作の影響を諸に受ける。

だから戦場ではステアと同じエリアには立たない。セシリスとて炎熱最強だが、やはりステアの方が一枚上なのだ。

イヴ義姉様の場合、ステアの馬鹿みたいな炎が嵐に巻き込まれ、周囲に要らぬ被害をもたらす場合がある。というかあった。

今回の限ってそんな心配は要らないだろうが、念のためだと判断しての事だろう。

「ルシル。ステアさんのアレ、やっぱりまずいよね・・・？」

「だな。だが、はやて達はきつと勝つ」

フェイトにそう答えると、フェイトは「そうだよな」と強く頷いた。アップを始めたはやて達とステア達を見る。と、背筋に言い知れない悪寒が奔る。

まずい。ステアあの笑み、何か馬鹿な企みを考えている笑みだ、アレは。

その予感は的中。内野と外野に居るはやて達が、ステアの純白の炎に包まれた。

なのは達から悲鳴が上がる。特にシグナム達ヴォルケンリッターの反応が一番速く。

「待て、シグナム！」

「退けセインテスト！　いくら何でもあのような不意打ちを」

「なんやコレええー！ー！ー！ー！っ！」

完全にキレているシグナムの前に立ちはだかり行く手を拒む。

突然ここスタジアムに響き渡るのははやての悲鳴だった。

シグナムがハツとしてコートへと向き直る。そして「は？」と間抜けな声を漏らす。

はやて達の無事を確認した全員が目点を点にして呆然。私ひとり額に手をやり大きく溜息を吐いた。

「ブ、ブルマ・・・？」

シャマルが力なく呟く。そう、はやて達の衣服がガラリと変わって

いた、騎士服からブルマという体操服に。

もちろんザフィーラやジーク、レンとカーネルはブルマじゃない、  
ハーフパンツだ。

もし男もブルマだったら直視できん。哀れ過ぎて。ステアに多少の  
情けがあつて助かる（私が参加していたら絶対にブルマにされてい  
るな）。

そしてステア達も体操服姿だった。両手を腰に当てて仁王立ちのス  
テア、胡乱な瞳とやる気の見えない無表情を崩さないフォルテ、シ  
エルは嘆息。もう泣きたいくらいに頭が痛い。

「はやてちゃんには悪いけど、よかった。私、出なくて」

「うん。さすがにこの歳でブルマはちよつと・・・」

なのはとフェイトが本気で安堵している。はやてはさつきから「2  
6歳でブルマつてアカンやろ!? 恥ずかし過ぎやっ!」とシャツ  
をグイグイ下に引っ張る。

ちなみに、全員のシャツにはゼツケンがあり、それぞれ名前が丸い  
字で書かれている（すてあ、とか、れうい、とか、じーく、とか）  
。

「ちよ、はやて!?! あんまり下に引っ張ると胸うえが! ってコラあ  
ーっ! 野郎どもはこっち見んじゃねえーっ!」

### シュワルベフリーゲン

ヴィータも、うーいた、と書かれたゼツケン付きのシャツとブル  
マ姿に顔を赤くしていたが、はやての行動に顔を青くし、私たち男  
全員（ザフィーラ除く）にフリーゲンを撃ってきた。

ジークとレンとカーネルは余裕で迎撃。私もラウンドシールドで防

御。

エリオだけがはやてから目を逸らし、フリーゲンも律義に受けて・  
・倒れた。

エリオ。律義を貫くのもいいが、時と場合を考えなければ酷い目に  
遭うぞ？

「エリオ君っ!？」

目を回しているエリオへキャロとイクス、遅れてルーテシアが駆け  
寄る。

ん？ フェイトはエリオの様子を・・・？ つ！ 悪寒パート2。  
しかも僅かに殺気。

ポンと肩に手を置かれ、グイツと体の向きを変えられる。目の前に  
はニコニコ笑顔のフェイトさん。

「ルシル。はやてに、はやて達に対して何か言う事は？」

「はい。ごめんなさい」

「もしはやて達を変な目で見たら・・・決るよ？」

「（何をだああー！！！！）すみませんでしたっ！」

キツチリ腰を折って、恥ずかしい格好をさせられ赤面しているはや  
てとヴィータとスバルに全力で謝罪。

とまあこんな騒動も終わり、最終的に全員が体操服姿のままでのゲ  
ーム開始となった。

『はい。時空管理局とアンスールによるドッジボールの開始が迫っ  
てきました』

ゼファイ姉様の綺麗な声がスタジアム内に流れた。

何事だ？と思つて辺りを見回していると、ティアナが「ルシルさん、あそこですっ！」と指を差し教えてくれた。

そこで、私は今回のお題の中で一番の驚愕。フェイト達も「あ……！」と驚きの声を漏らす。

『今回のゲームの実況を担当する、神壁の乙女ゼファイランサス・セインテスト・アースガルドですっ』

実況席には、ゼファイ姉様を含めて三人。

『えっと、みなさんの試合を観戦することになりました、魔道王フノス・クルセイド・アースガルドです』

私達アンスールの創設者にしてクルセイド王家の女王、アースガルド四王家の頂点に立つ真王、そして魔術師史上最強の魔術師、魔道王フノス・クルセイド・アースガルドが、ゼファイ姉様の左隣に座っていた。

フノスが私に向けて小さく右手を振り、誰もが見惚れる笑顔を浮かべ、口パクで「ルシル」と名前を呼んでくれている。

私もフノスに伝えて右手を小さく振り、口パクで「フノス」と名前を呼んでやる。

フノスはそれでニコニコと太陽みたいな心が温かくなる優しい笑顔を浮かべる。

本当に可愛い妹分だなあ。

『同じく、蒼雪姫シエフィリス・クレスケンス・ニヴル Heim です。ルシル。恋人の前で他の女の子にデレデレするのは感心しないよ』

シエフィは、ゼフィ姉様の右隣りに座って、少し不機嫌気味な溜息を吐いた。

『ちよっ、シエフィ!? 別にそんなのじゃないよっ!? ルシルの恋人さん! ルシルにそんな気は絶対にならないから、責めないであげてっ!』

『あはははははっ! ひいひい、面白過ぎよあなた達! ぶふっ、あはははははっ!』

これは一体何という名前の拷問なんだ?

あと、どうしてそこまで笑えるのが私には解らないんですが、ゼフィ姉様。

フノスの説得に、フェイトは「えっと、えーと、うん、気にしてないよ」と苦笑。

頭痛の次は腹痛が。いや胃痛がしてきた。

「審判は私、神狼フェンリルがやらせてもらうから、ズルは出来ないって事を忘れないでね」

足元まで伸びる艶やかな黒髪を翻して現れるフェンリルなんだが、審判が体操服である必要性を感じない。

精神疲労で倒れないことを祈っていると、「ア、アンストールが全員揃っちゃった・・・」となのはが恐縮してしまっている。

正直、今さらだぞ。そもそも私からしてみればなのは達は現代での英雄だ。

過去か現代かの違いでしかない。

「ゼフィ様! フノス様! シエフィ! そろそろ始めたいのをお願いしますっ!」

「りよーかあ〜い。では管理局のみんなにアンスール側の選手の紹介をしましょう。」

アンスールチームを率いるのは、煉生世界ムスペルヘイムの女王にして将軍、そしてアンスールの参謀役、炎熱系最強の大魔術師、白焰の花嫁ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイム！」

「どうもどうもお〜」

ゼファイ姉様の紹介を受け、ステアがコート内野で右腕を大きく振って、ヴィータたち内野や外野のはやて達に笑顔を振りまく。

「続いて、闇庭世界スヴァルトアールヴヘイムの女王、他人を呪わせたら右に出る者はいない、闇黒系最強の魔術師、呪侵大使フォルテシア・アウリアス・スヴァルトアールヴヘイム！」

「よろしく。お互いに手加減無用でやろう」

フノスに紹介されたフォルテは僅かに頭を下げてから、ヴィータ達に左拳を突き出す。

ヴィータがそれに「おう」と同じように左拳を突き出した。

「続いては、無圏世界ニダヴェリール皇帝、アンスールの先槍、雷撃系最強の魔術師、雷皇ジークヘルグ・フォスト・ニダヴェリール」

「正々堂々、よろしくお願いしますね」

ジークはヴィータへと歩み寄り、わざわざ片膝について身長を合わせて（それでもまだ合わないが）握手を求め、ヴィータは僅かに頬

を染めて差し出されたジークの握手に応えた。  
とそこに「セインテスト君。ちょっといいかしら」とシャマルに声を掛けられた。

「ジークヘルグさんの目の事なんだけど……。あれは見えていないのよね」

「ああ。ジークは目が見えない。それでもハッキリと行動できるのは、魔術による能力だ。  
大気中の僅かな電気を感じ取って、最大半径500m内に何が在るか誰が居るか全て把握できる。  
それに聴覚も優れているから、ジークには絶対に奇襲は通用しないんだ」

ゼフィ姉様達によるシエルの紹介の最中に、シャマルの質問に答える。

千里眼。それがあからジークは強い。アンスールの紹介も終わって、ようやくゲーム開始。

『それでは、時空管理局選抜チームとアンスールチームによる、制限時間10分間のドッジボール!』

『試合……、せえの』

『『『開始っ!』』』

VS ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?  
白焰の花嫁ステア筆頭アンスールチーム  
? ? ? ? ? ? ? ? ? ? VS



? ? ? ? ?

審判であるフェンリルがコート中央に立ち、両サイドに立つステアとリエイスを交互に見る。

その手には白いバレーボール。ジャンプボールをするため、ステアとリエイスはジャンパーという事だ。

フェンリルがボールを高く放り投げ、二人のジャンパーは勢いよく跳び上がった。

ステアとリエイスの身長にほとんど差はない。単純、ジャンプ力による勝負となる。

バシツとボールを叩く音。ボールが一直線にスバルへと吸い込まれていく。

そう、リエイスが一步の差で勝つたのだ。

スバルの“リボルバーナックル”のナックルスピナーが高速回転しだし、

「リボルバー……キャノンツ！」

スピナーで発生する衝撃波を拳に纏わせたまま殴りつける魔法がボールへ。

ゲーム初っ端から魔法によるボールの威力と速度強化。

スバルの一撃がボールを捉え、一直線にフォルテシアへと向かって行く。

『おおつとおつ！ 初っ端から攻めの出た管理局チーム！』

拳打に打ち放たれたボールは、アンストールコートへ一直線！』

超高速弾。フォルテシアが右手に握っていた大鎌“宵鎌レギンレイヴ”の柄が分かれ、フォルテシアは大鎌の二刀流となる。二つの“レギンレイヴ”の刃にベルフラワーの影が纏わりつく。

ソンプル・エベレスト  
復讐者の黒閃

左の“レギンレイヴ”がボールを止め、跳ね返る前に右の“レギンレイヴ”が一撃が入る。

ボールに円状の刃の影が幾つも纏わりつき、高速でヴィータ達へいや、外野へ向かう。

影を纏うボールの行く先、そこにはシエルが待ち構えていた。

『シエルの重力は凄いですから、管理局のみなさんは気をつけないと大変ですね』

フノスが管理局チームに注意を促す。シエルも「フノス義姉の言う通りだよ」と笑う。

そのシエルの右腕に装着された白銀の籠手“月狼ハティ”の拳部分に重力が纏わされた。

「まずは一人！」

フェアリー・バイト  
圧壊拳

ドゴンツ！という轟音。ボールに纏わりついていた影が根こそぎ吹き飛び、代わりに重力がボールを覆う。

重力を纏うボールが一直線にザフィーラへ向かう。距離的にはリエイスの方が近かったが、シエルはシュヴァルツェ・ヴィルクングという重力を無効化する術を有しているリエイスに警戒していた。

## 牙狼鋼破陣

ザフィーラは両拳の先端から二の腕まで削岩機のような螺旋状の魔力を纏わせた。

ズドンツ！と轟音。ザフィーラはボールを両腕だけでなく体を使って受け止めていた。

コートには二本の轍。ザフィーラがボールの勢いを殺すまでに作ったものだ。

「うげえっ！？ 止められたっ！？」

「馬鹿なっ！ いくら何でもシエルの重力を力づくで抑えるなんて」

『これはすごいっ！ 犬耳さんがシエルの重力球を受け止めたああーっ！』

『これは、本当に驚きましたね』

シエルとステア、ゼフィランサスとフノスが本気で驚いている。

いや、ルシリオンを除くアンスール全員が驚愕の表情を浮かべていた。

魔導師のレベルに合わせて魔力出力や身体能力が約60%制限されているとはいえ、魔術師シエルの重力と真っ向からぶつかり勝つことの出来たザフィーラ。

ルシリオンだけが「さすがだな、守護獣ザフィーラ」と満足げに笑みを浮かべた。

『確かに。でも、無傷とはいかなかったようですね』

「おい、ザフィーラ大丈夫かよ……？　おい、意識あるか？」

「……む……？　ん？　あ……ああ問題ない」

「問題無いという顔ではないな。顔が青いぞ、ザフィーラ」

ヴィータとリエイスがザフィーラに歩み寄って、気遣いの声をかけていく。

外野に居るはやても「ザフィーラ、大丈夫か？」と声をかける。

「問題ありません、主はやて。それに、ヴィータ、リエイス。心配をかけたな」

「無茶はアカンでな」

「おい、ゲームを再開するよー？」

「すまぬ。我らからのボールということで構わないのだな？」

「ええ。　管理局チームからスタートです」

フェンリルがゲームをし切り直す。ザフィーラは頷き、投擲体勢に入ろうとした。

が、それを止めるのがヴィータだ。「少し休んでろ。あたしから始める」とボールを受け取ろうとして、ピタッと動きを止める。チラツとフェンリルに視線を送る。これはセーフなのか？と。

「内野内でのボール受け渡しは……まあいいか。でも同じ人ばかり渡すのはダメだからね」

ヴィータは「すまねえ」と一言謝ってから、ザフィーラからボールを受け取る。

ヴィータの携える“グラーフアイゼン”はギガントフォルム。ヘッドが大きい形態だ。

内野に居るチームメイトを見回し、頷き合う。次に外野に居るはやととヴィヴィオとアインハルトを見、また頷き合う。

「行くぜ、オラツ！」

ポーンとボールを頭上に放り投げ、落ちてきたところを“グラーフアイゼン”で打つ。

魔法弾ではなく通常弾だ。しかも速度もとんでもない。

受けに回るのは、「私が行きましょう」と“ミヨルニル”を構えて待ち構えるジークヘルグ。

飛来したボールを魔術無しの“ミヨルニル”で打ち返す。向かう先は、レヴィだ。

レヴィもまたヴィータ同様に魔法を使わず、ただの拳打で自軍の外野に居るアインハルトへと打ち返す。

アインハルトもまた魔法を使わず、対面に居るヴィヴィオへと打つ。速度は確かに速い。が、内野のステア、フォルテシア、ジークヘルグにとっては受け止められる速度。

だが取らない。余裕でもあるが、何より見てみたいのだ。魔法と言うものを。

ヴィヴィオは右拳に虹色の魔力を纏わせる。

「はあああああああッ！！」

ヴィヴィオの裂帛の気合の咆哮。さらに高密度となる魔力。

アンストールチームの内野に居るステアとフォルテシアとジークヘルグが身構える。

そして放たれる右拳打　ではなく、魔力を纏っていない左拳打。

『フェイントだぁぁーっ！』

ボールは緩やかな弧を描いて管理局チームの内野へと向かって行く。警戒の身構えの必要が無くなったことで、少し力を抜いたアンサーチーム。

その僅かな気の緩みを見逃さなかった管理局チーム。動いたのはリエイスとレヴィだ。

「シュヴァルツェ・・・！」 「瞬間・・・！」

同時にボールへと最接近。アンサーチームはどちらがボールを打つのか判断がついていない。

リエイスとレヴィが横に並んで同時に拳打体勢に入る。

リエイスの左拳には黒色、レヴィの右拳にはすみれ色の魔力が。

「ヴィルクング！」 「牙衝撃！」

放たれる二人の異色の拳打。ボールを捉えたのはその内に一つ。ボールが纏っているのはすみれ色の魔力。一撃を入れたのはレヴィだった。

コートの境界線が一番近かったステアのふとももへ向かった高速で飛んで行く。

ステアは“シンマラ”で弾こうとする。が、“シンマラ”の石突きがコートをガリガリ削る。

その一瞬のタイムロスがステアの動きを鈍らせた。バシッとボールが当たる。

もしこれで内野の誰もかボールをキャッチ出来ず、地面に落ちればステアのアウトとなる。

しかしステアに当たって跳ねたボールは運良くフォルテシアの頭上。フォルテシアは“レギンレイヴ”を魔力へと還元し消滅させ、落ちてきたボールを両腕でしっかりとキャッチした。

「残念。私が、キャッチした。ステアは、アウトじゃない」

「おっと！ 管理局チーム残念！ フォルテがステアをアウトから救った！」

「わあ、惜しかったですね。でも凄いです、管理局チームのみなさん」

両手を胸の前で合わせて、心の底から管理局チームを称賛するフノス。

ステアがフォルテシアへと歩み寄り、「ありがとねフォルテ。あっさりアウトになるとこだった」とハイタッチを求めながら感謝を述べる。

フォルテシアは「しっかりして、リーダー」とハイタッチに応えた。

「よおしっ！ 今度はこっちがアウトにするぞ！」

ステアは純白の炎によって構成されたウェディングドレスとヴェールを解除した。

白い火の粉となって消滅していく。ステアは思った。ドレスとヴェールは邪魔だと。

本気で戦う事を決めての奥義発動だったが、それがかえって邪魔になっていた事が今のピンチで判った。

「ステアが花嫁を解除した・・・？」

『たぶんやり辛いと思っただと思えます。花嫁は本来の戦闘中にこそ効果を発揮する形態ですから、さすがにドッジボールで使う術式じゃないかと』

ゼフィランサスが疑問に首を傾げ、シエフィリスがそう答えを示す。ステアも「そうなんだよね。完全に空回りだった」と自分自身に呆れていた。

「時間も無いしさつさとゲームを再開してね」

フェンリルに急かされ、ステア達はそれぞれ構えを取る。

ボールを持つのはフォルテシア。そして無手。“レギンレイヴ”はどこにも無い。

フォルテシアも選択したのだ。神器ではなく小回りの利く徒手空拳で行こう、と。

続いてステアも“シンマラ”を消し、空いた両手を握って拳にし、打ちつけ合わせる。

『お？ アンスールチームも管理局チームのように無手でゲームをするみたいね』

「むう。ステアさんとフォルテシアさんは神器が無くても強いんやろか、やっぱり・・・？」

「おそらく強いかと。神器？というのは武器の事ですよ・・・？武器を持つ人は、必ずと言っていいほど徒手空拳にも長けてますから」

はやてにそう答えるアインハルト。ヴィヴィオも「見るからに、ですよ」とステアとフォルテシアを注意深く眺める。



フォルテシアははやて達の視線をやり過ぎし、投擲体勢に入る。内野に居るヴィータ達がグツと腰を低くし、フォルテシアのボールに最大警戒。

「行く」

ボソツと一言。その直後にフォルテシアはボールを投擲。通常弾だ。受けるのはスバル。“リボルバーナックル”で殴り返す。これもまた通常弾。

スバルもただ単に強烈なストレートをボールに打ち込むだけ。だがそれでも十分な攻撃力。

迎え撃つはジークヘルグ。光を映さないオレンジ色の双眸がハッキリとボールを捉え、

ジエネラツイオーネ・ディ・エネルギー・エレットリカ

発電、という意味のニダヴェリール語の雷撃系補助術式。

ジークヘルグの身体から、ジョンブリアンの強烈な稲妻が放電される。

「アックームロ」と告げる。蓄電、という意味だ。放電されていた稲妻が“天槌ミヨルニル”のヘッドに集束されていく。

「アツサルト・ステツラ！」

ボールを捉える、雷撃系の頂点に立つ王と神器による一撃。

突撃する星、という意味の攻性術式。本来は、ジークヘルグが生み出した雷球を撃ち出す術式だ。

雷光を纏い、超高速でリエイスへと迫る。威力は説明試合の時とは桁違いに強い。

だがそれでも外野に居るシエルが「ダメ！」と言う。が、もうすで

に手遅れ。

リエイスは腰を低くし構えを取る。「シュヴァルツェ・・・！」と  
呟き、右拳に黒い魔力を纏わせる。

こちらも今まで以上の黒の魔力を纏い、その黒の魔力は拳だけに収  
まりきらないとでも言うように周囲にまで伸びている。

「ヴェルクングー!!」

真っ向から雷光纏うボールを殴りつける。

ボールと拳の接点から周囲へと雷撃が拡散していく。

リエイスから「うぐつ」と苦悶の呻きが漏れる。勢いを止められず、  
ジリジリと後退していく。

そこに、「踏ん張れリエイス！」とザフィーラがリエイスの両肩に  
手を置き、支えとして踏ん張る。

ヴィータ達も手伝おうと駆け寄ろうとしたが、ザフィーラの制止の  
視線を受け・・・次の行動のために構える。

信じたのだ。リエイスを、ザフィーラを。

「一撃で止まらないなら・・・!!」

シュヴァルツェ・ヴェルクング

リエイスの左拳にも黒の魔力が纏う。間髪入れずに一撃。

それでようやく雷光が消し飛び、ただのボールへと戻った。

リエイスは止めたのだ、雷撃の英雄の一撃を。しかし、ボールはそ  
のままアンスールコートへと戻っていく。

管理局チーム、観戦しているのは達も「あっ」と目を見開く。ボ  
ールの向かう先、そこには・・・

「いらつしゃ~~~~いつ」

ステアだ。ゆるいスピードで向かってくるボールを待ち構えている。ステアの右腕に純白の炎が纏わりつき、彼女はそのままボールへと拳を突き出した。

「ヘキエイン・インフェルノ  
火煉爆焰焼打」

半球状の炎を前面に押し出す様に纏った拳打がボールを捉えた。

ヘキエイン・インフェルノ。地獄の鎮魂曲、という意味のムスペルヘイム語。

先のお題で、炎帝セシリスが使ったムスペルヘイム王家式・炎熱系攻性術式。

純白の炎を纏ったボールが、備えが何一つとして出来ないリエイスとザフィーラへ向かって行く。

管理局組全員には諦めの空気が。そしてアンスールチームもリエイスのアウトを確信。

しかし、

ブーストレベル3・瞬走壱式

「やらせないよっ」

火炎球がリエイスへ到着するより早く、リエイスとボールの間に割って入る一人の少女。

管理局組全員が「レヴィ！」とその少女の名前を口にする。

黒のノースリーブのセーラー服。セーラー服特有の大きな襟は前後ジョンヘラ共に燕尾。

裾もまた襟と同様に前後共に燕尾となっていて、後ろ側の裾は膝裏までの長さ。

捲かれている黒いネクタイにはスマレが描かれている。

インナーは立て襟の白いノースリーブのブラウス。

ファスナー仕立ての前立ては黒のラインで、うっすらと模様が描かれていて、首元には小さな黄金に輝く南京錠が付いている。

下は黒いプリーツスカート。そしてスカートの裾から少し出るくらいの長さの黒のスパッツ、黒のブーツ。

それが、割って入った少女レヴィ・アルピーノが動きやすさを追求した近接格闘用の防護服“モード・コンバット”だ。

「いっつつくよおおーっ！」

レヴィは火炎球に何の恐れも抱かず、それどころかニッコニコな笑みを浮かべ、「斬裂爪閃・断絶うっ？」と十指の先から魔力爪を作り出し、左の爪で炎を斬り裂き、右の爪でボールを弾き返した。

斬裂爪閃・断絶。魔法効果を斬り裂くという能力を持つ、魔力斬撃魔法だ。

ステアの目が驚愕に見開かれた。意図も容易く返されたことに。

「ボサツとしないで下さい、ステア！」

ジークヘルグがステアの前に躍り出て、雷光纏う“ミヨルニル”でボールを跳ね返す。

向かう先はレヴィ。レヴィの笑顔は崩れない。しかし動かない。動けない。

ステアの火炎球を難なく返したかのように見えたが、実際には両腕がまともに動かせないほどにマヒしていた。

「避けてレヴィ！」

スバルの声に反応したレヴィは横っ跳びして、雷光纏うボールをやり過ぎす。

雷球はレヴィの背後に居たスバルへと突き進む。そのスバルはすでに迎撃態勢に入っていた。

“リボルバーナツクル”を振りかぶり、「ナツクルダスタアアー！ツッ！」と突き出す。

“リボルバーナツクル”で魔力を圧縮し、全身や拳を強化、強化された拳で打撃を放つのがナツクルダスターと呼ばれる打撃魔法だ。雷球と“リボルバーナツクル”が衝突する。

「あああああああああああッッ！！！」

スバルが咆哮する。“マツハキャリバー”のホイールが空転、火花を散らしながらも押されまいとコートを噛みしめる。

しばらくの拮抗。そして終わりは必ず訪れる。スバルは耐えきれず、ボールを頭上へ大きく打ち上げた。

内野の誰かがキャッチ、もしくはアンスールコートに返せなければ、スバルはアウトとなる。

だが運命のイタズラか。ボールが徐々に内野から離れていく。

風だ。上空は地上より風が強く吹いている。そして……ボールは観客席に落下した。

「管理局チーム、スバル・ナカジマ……アウトッ！」

『ついにゲームが動いた！ 管理局チームより初のアウト！』

しかし、スバル選手の頑張りは凄いものでした。みなさん、温かい拍手を！』

フェンリルによるスバルのアウト宣告。

ゼフィランサスが、スバルの雄姿を褒め、この場に居る全員に拍手を求める。

「ごめんなさい。あたし、アウトになっちゃいました」

「いや。ゼフィランサスさんの言う通り、よくやったよ」

「そつや。よおやったよスバル。あとは私らに任せとき！」

はやて達に優しい言葉を掛けられながら、スバルはコートを後にした。

フェンリルはスバルが退場したのを確認して、「それじゃあゲーム再開するね」と告げ、右手にボールを出現させた。

「ボールはアンスールチームからになるよ」

ポーンと投げられたボールがフォルテシアの腕に収まる。

管理局チームが一斉に身構える。フォルテシアは魔術を使用せずにボールを外野のシエルへと回した。

シエルは「ナイスパス」と左手でキャッチし、重力操作が行われた際に発生するギンツという鈍い音が全員の耳に届いた。

管理局チームの視線がキツと細まる。シエルの一挙一動に警戒する。

「外野で一度回すよ。まずはカーネルから行く」

わざわざ宣告するシエルに、管理局チームはもちろんアンスールチームも啞然となる。

しかしそれが虚言である可能性もあると判断できる。故にこそ管理局チームの表情に焦りや緊張が浮かぶ。

頭上にボールを放り投げ、シエルは重力を纏わせた“ハティ”を振りかぶる。

「フェアリー・バイト  
「庄壊拳！！！」

重力によって速度・威力が増加されたボールが……ドガンツ！と轟音を立ててレンの鳩尾に直撃した。

「ぶべらぼはっ！？」と珍妙な断末魔を漏らし、レンは重力ボールの勢いのままに吹っ飛び、キランとお空の星となった。

スタジアムに静寂が訪れる。遅れて「えええええーっ！？」という大合唱。

シエルを除く全員が驚愕に目を飛び出させていた。

『ど、ということシエル！？ これも事故なわけ！？』

『レン……飛んで行っちゃいました。あ、ボールだけが戻ってきた』

ゼフィランサスは実妹シエルに聞いただし、フノスは呑気にプレレンセリウスが消えた空を仰ぎ見るだけだ。

シエルは「事故、うん、事故だから……気にしないで、ねっ！」ともう一度“ハティ”に重力を纏わせる。

落ちてきたボールの落下地点を読んでダッシュ。落下地点に到着し、

アクセラレーター  
重力加速門

シエルの前面に球体状の重力場が発生。

さらに前面に円盤状の重力場が縦に立てられた状態で発生、それが12と横に伸びて連なり、一種の砲塔となる。

落下してきたボールが球体状重力場に呑み込まれ、フワリと浮かぶ。

「天誅ううーっ！っ！」

重力を纏わせた左の籠手“スコール”の拳打がボールを打った。

グラヴィティシヨナル  
シャッジメント  
すべて粉碎滅せし重力加速破壊砲

ボールが球体状重力場より出、重力場砲塔を通過していく。  
加速加速加速加速。一枚の縦重力場を通るたびに加速され、威力を  
上げていく。

だが砲口はカーネルに向けられているまま。管理局チームではなく  
味方を狙っている。

最後の縦重力場を通過し、目にも留まらぬ速度で射出されたボール。  
一直線にカーネルへと突き進み・・・直撃。カーネルは断末魔どこ  
ろか声すら出せずに吹っ飛び、プレンセレリウス同様、キラんと  
お空の星となった。

「シエル！ さすがにもう事故とは言わせない！」

ステアが怒鳴る。だが完全に怒っているようではなく、どこか笑う  
のを我慢しているかのように口端がヒクヒクと歪んでいる。

どうやら味方だったプレンセレリウスとカーネルが面白いほど吹っ  
飛んだのがツボにはまったようだ。

『シエル。一体どうしたの？ レンとカーネルが何かした？』

シエフィリスが優しく語りかける。実兄ルシリオンと結婚し、いず  
れ自分の義姉となるはずだったシエフィリスに問われて、シエルも  
渋々だが答える。

曰く、プレンセレリウスとカーネルはコソコソ話していた。ドツジ  
ボールをプレイするたびに揺れる女子プレイヤー達の胸の事を。  
管理局チームはもちろん、チームメイトであるステアやフォルテシ  
アの胸についても、だ。

戦闘甲冑や防護服や騎士服ならばさほど揺れる云々はなかったのだ



ろろが、女子プレイヤーは全員体操服。

どうしても緩い体操服だから、揺れてしまうのは必然。

シエルとて、しょうがないよね綺麗だし大きいし、と思って何も言わなかった。

ただ、最後の最後にプレンセリウスとカーネルはシエルへと視線を移し、溜息を吐いた。

「どうして子供の頃の姿？」だとか「19歳のシエルは凄い美人だったのにな」と憐れみと失望の視線を向けられた。

ここでプツンとキレた、ということだった。

「それならしょうがないな、うん。レンとカーネルは退場という事で」

「はあ。我が弟ながら何を考えているのか。申し訳ない、管理局チームの女性のみなさん」

「うちの、アホな弟が、馬鹿をして、すいません」

ステアとジークヘルグとフォルテシアが、内外に居る管理局チームプレイヤー達に頭を下げた。

フェンリルも「ホント馬鹿。マスターやジークの事を少しは見習えば良いのに」と嘆息。

いきなり話を振られ、女性陣の視線を一齐に受けるルシリオンが一步二歩と後退。

ジークヘルグは目が見えないことが幸いして難を逃れていて、彼は誰にも気付かれぬように小さく安堵の溜息を吐き、「頑張ってください、ルシル」とかつての親友に声援を送った。

「ルシルは、そうだよな、変な目で友達を見ないよね・・・？　そういう約束したもんね・・・？」

「ルシル。エッチな人になっちゃったの……？　嘘だよね……？　ルシルはいつだって紳士だもんね……？」

現恋人のフェイトと旧恋人のシエフィリスからの強烈なプレッシャーに、ルシリオンは同情してしまうほどにたじろぐ。

そして一言。「あ、当たり前だ」と気丈に振る舞いつつ告げた。

ルシリオンはしばらく女性陣からの視線に耐えていると、フェンリルの「再開するよ」との声が上がり、ようやく視線から解放された彼の額には大粒の汗があった。

「あ、でもメンバーが足りなくなっちゃったなあ」

アンスールチームの外野に居るのは、満足そうに佇んでいるシエル一人のみ。

シエルは「一人でも十分なんだけど」と、ピヨンピヨンと跳ねては横移動を繰り返し、瞬発力を見せてつけている。

だが外野全面をカバーは出来ない。それほどまでにコートは広い。

「だったらさ。ルシルを入れちゃおうよ」

「はあ！？」

ステアの提案に、ルシリオスが、何言っているんだお前？みたいな顔をする。

これには管理局組から猛反発。一番最初に反対を申し出たのはフェイトだった。

「ちよつ、ルシルは私達の仲間だから、そっちのメンバーに入れるのはおかしいと思いますっ！」

「あら？ ルシルだって元はアンスールなのよ？ 別におかしくな  
いと思うけど」

「ステア。この世界での私はもうアンスールじゃなく管理局なんだ。  
だから」

「ルシル。こっち来て。でないと、呪う」

「判った。すまないな、フェイト、みんな。今回だけは私はアンス  
ールだ」

フォルテシアの呪う発言に、意図も容易く意思を覆すルシリオン。  
そのあまりのアツサリさに管理局組は最初は呆然。言葉の意味が浸  
透し始めて「ええええーっ！？」と大合唱、パート2。  
フェイトが管理局組を代表してルシリオンへと駆け寄り、「ルシル、  
どうして!？」と問い質す。

「フォルテの脅しには逆らえないんだ。許してくれ」

『おお？ 我が弟ルシルが、フォルテの脅しに情けなく屈し、敵で  
あるアンスールチームに寝返った!』

『フォルテ。その脅し方はどうかと思いますけど・・・』

「大丈夫。フノス。そんなに酷い、呪いは、かけないから」

ルシリオンにとって、いや、アンスールの誰もが恐れるフォルテシ  
アの呪い。

余程の対魔力（最低XXランク）が無ければ抵抗することも出来ず

に一方的に呪われ、その果てに一体どのような酷い目に遭うか判らない。

現在のルシリオンの最大魔力はSSSランク。フォルテシアの呪いから逃れる事が出来ない。

ルシリオンは思い出す。大戦時、フォルテシアの逆鱗に触れ、呪われたヨツンヘイム連合軍の魔術師達が辿った末路を。

「えっ！？ なに！？ どうかしたルシル！」

「セ、セインテスト君！？ どうしたの顔が真っ青だし震えてるわ！」

「ルシル君の顔が酷い事に！？」

フェイト、シャマル、なのはの三人が、ガクガクブルブルと震えだすルシリオンに戸惑う。

冷静なシグナムですら「むう。フォルテシア殿は一体どれだけ恐ろしいのだ？」と、フォルテシアを僅かに怯えた色を浮かべる双眸で見詰め唸る。

「ということですまない。フォルテに呪われ、フェイト達に痴態を晒すような事だけはしたくないんだ」

ルシリオンはそう言って、コートへと向かって行った。

そこまで真剣な表情、そして痴態という単語に、なのは達は見送るしかなかった。

外野に居るシエルの下へ歩いて行くルシリオンへ、アンスールチームの内野組が声を掛ける。

「おかえり、ルシル。また同じ戦場で、味方同士として戦えるなん

「ね」

「うん。嬉しい。ルシルを、呪わなくて、よかった」

「すみません、ルシル。本当なら止めるべきでしたが・・・」

「いや。ステア、私は外野で良いんだな？　というか外野しかやらないがな」

「それで結構。キリキリ働けえ」

「了解。ヘジエンチ・ドミナル戦場の策略姫・ステアのお言葉のままに、か」

ルシリオンはステアの二つ名の一つ、支配する指揮者という意味のヘヴェンチ・ドミナルと口にし、彼女に振り返ることなく手を振り返しながら、実妹シエルの待つ外野へ向かう。

とそこに、「ルシルパパ」と声を掛けるヴィヴィオ。ヴィヴィオの側に歩み寄ったアインハルトも「ルシリオンお父様・・・」とおずおずとルシリオンを呼んだ。

はやても「ルシル君が相手かあ。いややな」と苦笑しながら、ルシリオンを見る。

「ごめんな、ヴィヴィオ。はやてもアインハルトも」

「ルシルパパ・・・。うん・・・」

ヴィヴィオの寂しげな表情を見、ルシリオンは決意した。このゲームに参加した本当の理由を実行に移す決意を。

「兄様っ？」

トテトテと駆け寄ってきて抱きついてきたシエルを、「おう」と抱き止めるルシリオン。

ルシリオンは、自分の胸に顔を埋め、頬擦りを繰り返すシエルの頭を優しく撫でる。

兄と妹の触れ合い。ルシリオンはシエルの耳元に口を近づけ、「頼みがあるんだ」と囁いた。

+++++ S i d e l シ ル +++++

シエルの協力を取り付け、私は作戦を実行に移す。

ここから先、管理局チームから誰もアウトを出さずに、ステアとフォルテをアウトにする。

ジークもアウトにして完全勝利と行きたいが、おそらくジークをアウトにするのは無理だ。

そんな考えを持ち、実行に移すとするとこれは完全な裏切り行為だ。だがな。

フォルテ、たとえお前に呪われてしまおうとしても、私は管理局チームを勝たせる。

「それじゃあ・・・管理局チームからのボールだね」

フエンリルがヴィータへとボールを放り投げる。

ボールをキャッチしたヴィータが私へと振り向き、「セインテスト。てめえが内野だったらぶつけられたのにな」と不機嫌そうにそう漏らした。

私は何も言わず、ただウォームアップする。ヴィータの不機嫌な視線が逸らされるのを感じ、ホッと一息。

本気で怒っているな、ヴィータは。リエイスやレヴィからも非難の視線を今だ感じるが、まあヴィータよりはマシだ。

「チツ。しゃあねえ。どうにでもなれってんだっ！」

### ギガントハンマー

ギガントフォルムの“グラーフアイゼン”に打たれるボール。それにしてもヴィータの攻撃は通常か魔法かの区別がつきにくいな。打ちだされたボールは内野に居るステア達でなく、外野コート奥に居るヴィヴィオへと向かう。

外野から攻めさせる気か……？

「アクセル……スマツシュ！」

虹色の魔力光を引きながら放たれるヴィヴィオの拳打。

ボールは外野コート右サイドに居るはやてへ。はやては先端が白い魔力の覆われた“シュベルトクロイツ”をバットのよう振りかぶり、

「クロイツ……シュラークツ！」

全力でボールを打った。白い魔力を纏ったボールは一直線にステアへ。

ステアの両手に白焰が纏わりつく。グツと腰を落とし、キャッチ体勢に入る。

ズンツ、と衝突音。ステアが両腕と上半身全体を使ってボールをキャッチ。

僅かに足が浮いたように見えたが……それほどの威力だったか。

「いつつたあゝゝい。胸がヒリヒリするう（涙）」

ステアはボールを右わきに抱え、左手の人差し指で涙を拭う仕草をする。

だがすぐにボールを放り投げようと投擲体勢に入る。私へと向けて、だ。そうか。私に友を討て、と。

上等だ。ならば早速、お前をアウトにさせてもらおうかステア。

アインハルトに視線を送る。頼む。察してくれ、アインハルト。君の使う霸王流。それが・・・！

アインハルトが私の視線に気づき、顔だけを動かして私を見詰め返してきた。

・・・違う。頬を赤くしてほしいわけじゃないんだ。いや、見詰められても困ります、みたいに目を逸らしてほしいわけじゃなくて。

（気付いてくれ、おーい）

だが私の真剣な眼差しにようやくアインハルトは何かしらの意図があるかと読んでくれたようで、もう一度視線を向けてくれた。

私は頷くことで応える。ハツとしたアインハルトはすぐに意識的に無表情にし、私の意図を図ろうとしてくれる。

「（アインハルトの霸王流。私の水流系。この二つでステアを落とせる）行くぞつ、ステア！」

アインハルトへの合図として、アインハルトからステアへと勢いよく視線を動かす。

気付いてくれ。まずはステアからアウトにする、君の力、霸王流でステアが「おつ？ おお、ハハハ。やる気じゃん、ルシル」と超満悦な笑みを浮かべる。

気付いていないな。ステアの演技力は涙を誘うほどに下手。だから、



気付いていない、という嘘を吐いていないのが判る。

「てめっ、セインテスト！　なんでやる気になってんだ！」

「ルシリオン。お前は、本当に・・・？」

リエイスの悲しげな表情には心が痛むが、今は、今だけは・・・。  
白焰の花嫁。戦場の策略姫。戦地見下ろす悪魔。・・・ステア。策  
略において一度も勝つことの出来なかつたお前を・・・裏切ると  
いう形で潰してみせる。  
足元にアースガルド魔法陣を展開。使用術式は明確なモノじゃない  
が・・・。

「そんじゃ行くよっ」

私へと放り投げられるボール。左腕に水流系魔力を纏わせる。

さあ行くぞアインハルト。飛んできたボールへ向け、拳打を打ち込  
む。

と同時に水流系魔力と目に見えないほどの透明度を持った水膜をボ  
ールに纏わせる。

その対ステア用ボールはアインハルトではなく・・・

「わたしを狙ったの！？」

ブースト3が解け、冷静に戻っているレヴィが驚きの声を上げ、迫  
ってくるボールへの対処に悩みだす。

頼むから受けに回るなレヴィ。君に当てるつもりはない。だからそ  
こを動かないでくれ。

このボールは、ステア、お前のためだけの攻撃だ。

レヴィがボールへの対処を迷っている間に、ボールはカーブを描い

てアインハルトの下へ向かう。

そうなるように拳打を打ち込んだ。始めからアインハルトへ飛ばすと疑われるからな。

アインハルトが動く。どうか私の意図を察してしてくれ、アインハルト。

「霸王流・・・！」

### 旋衝破

勝った。賭けに勝ったぞ、私は。アインハルトは見事に使った、旋衝破を。

旋衝破は、射撃魔法を反射でもなく吸収放射でもない、弾格を破壊せずに受け止め投げ返すという技術。

これなら私の魔力を弾かずにそのまま攻撃に転用出来る。ステアの唯一苦手とする属性、水流系のみまで。

アインハルトがボールをステアへと向け放つ。さあステア。受けるか、避けるか、どっちだ？

（避けないだろう？ お前は。自分の能力を信じているのだからなっ！）

案の定、ステアは右拳に白焰を纏わせた。拳打を打つ体勢に入る。

そして・・・放った！ 炎と水が衝突する。それで起きるのは必然の現象。

ドオンッ！という爆発。水蒸気爆発だ。コート全体が爆煙で覆われる。

「これは事故かっ！？ ルシルの放ったボールを利用したアインハルト選手の攻撃を迎え撃ったステア！」

ただどどういうわけか大爆発！ 一体何が起こったのー！ー！ー！  
！？』

ステアはもう気付いているだろうな。と、足元にボールが転がって来た。

さよならステア。私の・・・「勝ちだ」と笑みが浮かぶのを抑えられない。

煙が晴れていき、状況をようやく確認できた。アンスールコートから目を離さない。

「うく・・・やられた・・・！ ルシル！ 謀ったわね！？」

ステアは右手首を押さえて、コートに座り込んでいた。

「偶然だよ、ステア。悪かったな」と私は知らん振りを決め込む。

そんな私に「絶対嘘だっ。嘘に決まってるっ」と噛みついて来るが、知らないものは知らないなあ（笑）。

「すごいよインハルトさん！ ステアさんをアウトにするなんて！」

「え？ あ、はい。本当に、その、奇跡みたいですね」

インハルトはギクシャクした態度でヴィヴィオに応じる。

私へと視線を送ろうとしていたのを察して、私はヴィヴィオとインハルトからシエルへと向き直り、シエルへ歩み寄る。

そしてシエルを抱き上げて、頭を撫で、さらに額にキスをする。

これが報酬ということらしい。私がアンスールを裏切るのを黙って見過ごすことへの。

「ありがとう、シエル」

「ううん。どういたしまして兄様」

「ああーっ！ シエルも裏切ったなあああーっ！」

シエルもまた私の背に両手を回し、ギュッと抱きしめ返してくれた。たとえ本物のシエルじゃなくても。この温もりも、この香りも・・・確かにシエルなんだ。

負け犬の遠吠え状態のステアはもう完全無視。シエルは「ごめんね」と軽い口調で謝った。

「ルシル。あなた、わざと水流系のボールをアインハルトさんに向くようにしたでしょ？」

「・・・そうだよ、シェフィ。君には嘘を吐きたくないから答えよう。」

私がこのゲームに参加したのはフォルテの脅しに屈したからじゃない。

管理局チームの一員として参加し、アンスールチームに勝とうと考えたからだ」

本当なら黙っておきたかったが、たとえ幻だとしてもシェフィに嘘を吐きたくない。

だからそう言うと、ステアが「裏切り者おおーっ！」と吼え、シェフィは『やっぱり』と、ヴィータは「なんだよ、そういうことか」と不機嫌そうに呟き、リエイスは「信じていたぞルシリオン」と少し疑わしい事を言ってきた。

リエイス、君は思いつきり非難の視線を向けていたよな私に。

「ありがとう、アインハルト。私の意図を読み取ってくれて。おか

「げでステアをアウトに出来たよ」

「えっ？ その・・・いえ、ルシリオンお父様の考え通りに出来て良かったです」

礼を言うと、アインハルトはホッと安心したように微笑みを返してくれた。

「フェンリル。ゲーム再開だ。それとも、私を外すか？ ステア、フォルテ、ジーク」

確認を取る。敵として認識された私をゲームに残しておくわけがない。

「せめてフォルテをアウトにしてからの退場と行きたかったが。シエファイ・・・。いや、彼女を責めるのは筋違いだ。嘘を吐けずに明かした私が悪い。だというのに、」

「うっん。ルシルには、そのまま、残ってもらおう」

「お？ ほお、良いのかフォルテ？ 私は敵だぞ。シエルも協力してくれる。」

「つまり味方はジーク一人だけ。お前とジークの二人だけで、この子たち管理局チームに勝てるか？」

「勝てる。だって、私と、ジークには・・・真技が、ある」

くっ、その手段を取られる前に勝負を決めておきたかったんだが。管理局チームに緊張が奔る。フォルテの真技はまだしもジークの真技はマズ過ぎる。

そこにステアが「憶えてろ」と捨てゼリフと共にイヴ義姉様に連れられて退場。

はっはっはっは、ザマア。ちゃんとすぐに忘れてやるから安心しろよ。

「フェンリル。ボールは管理局チームからでも構いません。試合再開と行きましょう」

「あ、はい。それじゃあ管理局チームからのボールという事で」

フェンリルからリエイスへと渡るボール。

リエイスがキャッチして、私へ継るような視線を向けてきた。

この中で、私と同じくらいアンスールに理解があるのはリエイスだ。フェイト達に見せた記憶。もちろん見せなかつた記憶もある。というかそちらの方が多い。

だがリエイスは全てを知っている。私が人間だった時、これまでどういった契約をしてきたかまで。

だからこそフォルテの真技発動宣告が必要以上に効いている。

私は何も言えず、ただコクリと頷くしか出来ない。

「出来る事をやるしない、ということか」

シュヴァルツェ・ヴィルクング

黒い魔力を纏わせて右拳打をボールに打ち込み、フォルテへと飛ばす。

対するフォルテも「復讐者は踊り護る<sup>ヘルゼウエランス</sup>」と告げ、幾条もの踊る影を右拳に纏わせたのち、飛来するボールに影纏う掌を翳した。

そして影が掌の前で折り重なり盾となり、その直後にボールが衝突。効果破壊の魔力を纏ったボールは、少しずつ影の盾にヒビを入れて

いきながら直進。

「やる。でも……私の、影は、それ以上」

ついにはボールの勢いは止まり落下を始める。と、フォルテが落下するボールを蹴り上げてキャッチ。

セーフだ。これでボールはアンスールチームの物となる。

フォルテがボールをいじりながら「ジーク。真技、いける？」とジークに訊いた。

緊張は最高潮へ。ジークの返答は……？

「ええ、いつでもいけますよ」

お……終わった。“ミヨルニル”のヘッドの装飾に刻まれた敵の撃滅、力、強化、勝利、魔力、超越のルーンが輝きだす。

耳を無意識にでも手で閉じざるを得ないほどの爆音。目を開けているのか閉じているかも判らないほどの閃光。

視聴覚が通常に戻って、誰もが絶望を抱かざるを得ない状況がそこにはあった。

「この一撃で、必ず、一人が、アウトになる。誰から先に、アウトになる？」

全員の視線はそう告げたフォルテじゃなく、もはや雷そのものとなっている“ミヨルニル”を持つジークに向けられている。

“ミヨルニル”のあの形態。ジークは二つの真技の内の一つ、雷神放つ破滅の雷を使う気だ。

いくら制限されているとはいえ、神造兵装の6位の“天槌ミヨルニル”による一撃。

「なあ、ジーク。真技を使うのはやめないか？」

「いいえ。そちらにシエルが居る以上、こちら手加減は出来ません」

「・・・いいのか？ シエルの重力は正しく空間を歪めるものだ。いくらあなたの真技とて下手をすれば落とされる。それは解っているよな・・・？」

「無論ですよ、ルシル。ですが・・・もう引けません。ニヨルニルをこの形態にした以上は」

確かに。もう後戻りはできない、か。すでに臨界点だ。こうなれば私は「私に指揮をさせてもらえないか？ はやて」と、管理局チームのリーダーであるはやてに訊ねる。

「そっちなあ。・・・みんなはどうや？」

「ルシルパパはアンスールの事に詳しいし、手伝ってくれたら心強い、です」

「あたしは・・・しゃあねえか。セインテストの奴のおかげで一人アウトに出来たし」

「ヴィヴィオとリエイスに続いてザフィーラ、レヴィ、アインハルトも認めてくれた。」

「最後にはやてが「決まりやな。というわけで頼むわ、ルシル君。シエルさんも」と頼み笑みをくれた。」

「シエル。手伝ってくれるか？」



「うんっ。わたしはいつまででもどこまででも兄様と一緒に」

「ありがとう。ザフィーラ。鋼の軛をコート境界へ展開。何十と重ねて盾としてくれ」

「承知した。鋼の・・・軛！」

アンスールチームと管理局チームのコートを隔てる中央ラインから、管理局チームコートの3分の1辺りまでの範囲で鋼の軛が発生。何重にも重ねられた鋼の軛は城壁と化す。にしても本当に便利だな、鋼の軛は。

「シエル。あの壁の後ろに重力障壁を」

「了解です、兄様。ディストーション・ディターレント歪曲せし空間多層障壁」

鋼の軛の壁に寄り添うように展開される壁状の重力場。これで鋼を突破されたとしても、そう易々とリエイス達へは届かない。

「リエイス、ザフィーラ、レヴィ。君達は外野ギリギリまで来てくれ。

ヴィータとザフィーラは中央、リエイスはザフィーラの隣り、レヴィはヴィータの隣で待機。

重力場を突破してきたボールはおそらくさほど威力が無いはずだ。だからキャッチが出来ればしてくれ。とは言え、もちろん無理はないでほしい。

何せ外野にはシエルや私が居るのだから」

「了解した」「承知した」「判った」「オツケー」

さあ準備は整った。「来いッ、ジークッ！」と鋼の軛の向こう側に居るジークに告げる。

「良いでしょう。あなたの策が勝つか、私の真技が勝つか・・・」

「「勝負っ！」「」

「真技・・・、雷神放つ破滅の雷！！！」

爆音と強烈な閃光がスタジアムに満ちる。“ミヨルニル”でボールを打っただけでこれだ。

次に鋼の軛からミシミシと嫌な音が漏れてくる。突破されている音だ。

鋼の軛が保ったのは二秒。二秒でボールは鋼の軛を突破し、シエルの重力障壁へ突入。

まずいな、これは。予想より威力が衰えていない。隣に居るシエルに「キャッチ用意」と告げる。

「判った。んんー、やっぱりジークの真技には敵わないな」

真技に対して通常の防御障壁だ。完全に封殺出来るなんて甘い考えは持っていない。

せいぜい少しは威力を衰えさせることが出来てよし、程度だ。

雷球を徐々に重力場を突破しようと直進してくる。

「すまない、みんな。キャッチはシエルと私で何とかする。みんなはボールの射線上からどいてくれ」

リエイス達にそう指示を出す。リエイス達も雷球の威力がさほど衰えていないのを察し、文句ひとつ言わずに言う事を聞いてくれた。シエルに相談もせずに指示を出したんだが、シエルは「あは。兄様に頼られるとやっぱり嬉しいな？」と右腕に抱きついてきた。

「ありがとう。それじゃあシエル。頼めるか？」

「もちろんっ。任せてっ」

シエルは重力場を突破しようとしているボールの飛び出してくる軌道の前に立ちはだかる。

その直後、雷光を撒き散らしながら重力場を突破してきたボールの対処に動くシエル。

「真技！！」

シエルの四肢に今まで以上の重力が付加される。

グツと腰を落とし、目の前にまで迫って来ていた雷球へと・・・

デストラクション・  
天壤蹂躪するは神なる拳バイル

重力によって、最早肉眼じゃ捉えられない程に加速された拳打・蹴打が連続で打ち続けられる。

この真技の本来は型は、地上での連撃後に相手を空に打ち上げて、空でさらに連打、ルイン・トリガーで対象を地面に墜落させ、そして最後にシエル自らも重力を掛け、地上に叩きつけられた相手に高速・超重量で落下してトドメの一撃を与えるというものだ。

トドメの一撃はその都度変わるが、どんな一撃であっても必殺だ。

「そおおおおらああー！！！！！！」

シエルの咆哮と同時に放たれるアッパー。それでボールに纏わりついていた雷光が完全に弾かれた。ボールは空高く舞い……………

「クロイツ……シユラアアーークツ!!」

“シュベルトクロイツ”を振り被って跳んでいたはやての下へ。

フォルテが勢いよく振りかえる。フォルテがアウトラインのギリギリに立っていた。

ジークの真技に巻き込まれないようにするためだ。そして放った後もその場から動かなかった。

誰も、シエルにすらジークの真技を止められるなんて思わなかったからだ。

フォルテは完全に振り返ることなく、その場から全力で飛び退く。少しでもはやてから距離を取りたいからだろう。

「この……!」

復讐者<sup>ヘルゼ</sup>の……………

フォルテの右腕に影が纏い、折り重なって盾となろうとしていたが途中で止まる。

ボールがフォルテを素通りしたからだ。そう当てるつもりはなかった。

フォルテが身構えて拍子抜け、そこから体勢を整えてボールへと振り向くその僅かな隙。

さあそこを突け、レヴィ。

瞬間牙衝撃

ジークがフォローに回ろうと動く。が、ジークはコート中央、若干左寄り。

だがレヴィは、ジークの反対であるコート右端に居て、しかもすでに拳打を放っている。

ボールが打たれ放たれた。ここでようやくフォルテが管理局チームコートへと振り返る。

しかしフォルテもまた幾度と視線を越えてきた英雄。反応しきるところが出来た。

ボールを紙一重で避けようとする。迎撃ではなく回避に回ったのは、迎撃に必要な動きが出来ないほどにまでボールが接近していたから。そして、たとえ外野に居るはやて達から高速追撃が来ようとも迎撃できる体勢を整えられると判断したからだろう。

「っ!!?!?」

ボールの軌道が変わる。野球で言うスライダーだ。

ボールが回避行動を取ったフォルテを追いかけるように軌道を変え、バスツと音を立ててフォルテの足の甲に直撃。

ボールは跳ねる。はやて達の居る外野へと。フォルテが手を伸ばす。ここでボールをキャッチ出来なければフォルテのアウト。

制限時間はもう残り少ない。ジークは残るが、逃げに徹すれば・・・  
・「勝てるぞ」。

フォルテの指がボールに触れた。かのように見えたが、無情にもボールはフォルテを嫌うようにそのまま直進。

「わっつっ!」

バシッつとボールが両腕に収まる。そう、ヴィヴィオの両腕の中に。

「……………あ、フォ、フォルテ、アウト！」

フェンリルの宣告。フォルテシアは「やられた」と無表情のようである。実際は悔しそうな表情を浮かべ、コートを出ていった。

「ヴィヴィオ！ もうボールをジークに向けなくていいつ。味方同士でのキャッチボールだつ」

「あ、うんつ！ アインハルトさん、パス行きますつ」

「はいつ、どうぞつ」

「ルシルツ！ 君は……！」

「すまないな、ジーク。下手にあなたをアウトしようと思張るより、無難に逃げさせてもらつ」

ジークにボールが回れば負ける可能性もある。

それほどまでに手強いんだ、ジークは。それに千里眼の精確さも。パス回しを1分弱続けた。途中で「なあ、セイントテスト。完全勝利やりてえ」と不平を漏らすヴィータや、「セイントテスト。これは卑怯なのではないか？」と洩るザフィーラから非難を受けたが、私は即切り捨てた。

この状況を打破する力を持つのがジークなのだから。そして……

「ゲーム終了~~~~~！！ 管理局チームの勝利い~~~~~っ！」

フェンリルがゲーム終了を告げ、管理局チームの勝利を宣告。

コート内に居るはやて達、コート脇で観戦していたフェイト達から歓喜の聲が上がる。

そんな中、シエルが「兄様、兄様　報酬ちよーだい？」と勢いよく抱きついてきた。

両腕でシエルを抱き上げて、頭を撫で、そして額にキス。シエルは「勝たせたんだから、頬にも」と追加注文。  
仕方ないな。両頬に一回ずつ軽く触れるだけのキスをする。

「大好き兄様あ〜？」

シエルを抱っこしたままでいると転送が始まった………私以外が。

フェイト達は色んな意味で世話になったアンスールへと「ありがとうございました」と礼を告げ、私より先に転送された。

居残りか。まあ嫌じゃないが。シエルを降ろすと、「ルシル」と私を呼ぶシエフィ。

「ん、どうした？」

「外界での問題がもう終わりそうなんだ。たぶん、次のお題で終わり、だと思っ」

「外界の問題？　ちよつと待て。私の記憶から抽出されたんだよね、みんな……？」

だったら外界だとかそんな事が判るのか？　カーネルは知らないと言っていたぞ。

それに、確かに私の記憶から抽出した……、ああ、そうか。そういうことか」

カーネルとの会話を思い出す。カーネルは言った。「ルシルから抽

出された」と。

目の前に私が居たというのに、お前から、じゃなく、ルシルから。ルシル。その名が表す存在は何も一つじゃない。一つは私。そしてもう一つは……

「4th・テストメント・ルシリオン。そうか。スンベルのマスターは……守護神の私か」

テストメント・ルシリオンが次元世界に来ている。

なら、グロリアが“絶対殲滅対象”<sup>アポリュオン</sup>なわけがない。グロリアはきっと、シャルの……か。

私の推測はいよいよ真に迫ったな。にしても私とグロリアの二柱が召喚されるようなアポリュオンか。

一体誰だ？ 判らないが、天使アンジェラスと現終極テルミナスのどちらが出なければいい。

「話し終わったルウゥゥシルウウゥゥゥゥ？」

「わぷっ？ ゼフィ姉様……！」

シエフィと話している間、ずっとそわそわしていたゼフィ姉様がついに痺れを切らして抱きついてきた。

ゼフィ姉様の両腕に頭をロックされ、ゼフィ姉様のふくよかな胸に押さえつけられる。

ゼフィ姉様の香りだ。子供の頃にもこうやって抱きしめてくれた……。

でも。あの、ゼフィ姉様。く、苦しくなってきたんですが。その……。

「ゼフィ義姉さま。ルシルが窒息してしまいます」



助け船を出してくれたのはフノスだ。ゼフィ姉様も「わっ？ ごめんルシル」とようやく解放してくれた。

「プハッ。と息を吐き、「大丈夫です、ゼフィ姉様。ありがとうございます、フノス」とフノスに礼を言う。」

フノスは「いいえ。その、お久しぶりです、ルシル」と頬を朱に染めながら微笑んでくれた。

今、目の前に居るフノス達に、久しぶり、という時間的概念があるのかどうかは不明だが、そう挨拶してくれたのなら応えなければな

「ああ、久しぶり、フノス」

そわそわしているフノス。あ、そうか。フノスの頭に右手を置いて、優しく撫でる。

フノスも好きだったよな。私やゼフィ姉様、イヴ義姉様に撫でられるのが。

フノスの顔がふにゃつと破顔。あはは、可愛いなあ。

とここで、私の足元に光。転送が開始される。もつと話したかったな。

「えへへ？ また遊べたらいいね、兄様っ」

「ルシル！ 憶えとけっ！ どつかのお題で会ったら、コテンパンのフルボッコにしてやるんだから！」

「上等っ。返り討ちにしてくれるっ！」

ステアの捨てゼリフにそう返してやる。

「ありがとう、シエフィ。貴重な情報、助かった！」

シェフィは「うん」と右手を小さく振って見送ってくれた。  
私は転送されている最中でも大きく左腕を振って返した。  
みんなと逢うのがこれで最後だとしたら、自然と、な。

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜〜（後書き）

レヴィ

「つつしやあつ！！ 見たか、このヤローツ！」

ルーテシア

「うわっ！？ 急にどうしたのレヴィ・・・？」

レヴィ

「活躍したよ、今回のわたし！ しかも決勝ボール！

変化球による奇襲。フォルテシアさんのビックリした表情を思い出  
すだけで・・・ううおおりやああああああああつ！」

ルーテシア

「（フォルテシアさんの表情、あんまり変わって無かったような気  
がするけど）はいはい。嬉しかったんだね。」

レヴィ

「えへへ。嬉しかったあゝ よおしつ！ この調子で最終エリア  
は完勝でクリアだ！」

シャル

「ちよおおーっ！と待ったああーっ！っ！っ！っ！」

レヴィ

「え？ えええーっ！っ！っ！？」

ルーテシア

「シャルロット!?」

シャル

「Ja ! みんなのシャルロット・フライハイトですっ! まず  
は、一言物申す!」

レヴィル

「ど、どうぞ・・・」

シャル

「今回、私も出るはずだったんだよ! カーネルとプレゼンセレリウ  
スが退場したあと、颯爽登場! 銀河一美少女シャルちゃん!」

レヴィ

「美少女って歳じゃ・・・」

ルーテシア

「レヴィ、しいー」

シャル

「ルシルとシエルと共闘して何やらかんやらかくしかじか云々  
かんぬん、って」

レヴィ

「そ、そうだったんだあ・・・」

ルーテシア

「何で没になっちゃったんでしょうね?」

シャル

「こつちが聞きたいよぉ〜（泣）。なんかさ他にも、フォン・シユゼルヴァロード姉妹が出たり、とか」

ルーテシア

「フォン・シユゼルヴァロード？ ルシリオンさんの御親戚？」

シャル

「ううん。生粋の魔族。ルシルにフォン・シユゼルヴァロードのファミリーネームを与えた姉妹なんだけどね。」

もしあの二人が出てきて、私が出なかつたら猛抗議していたね。てか結局私も姉妹も出てないわけ。

くそお。出番があるって聞いて、やっほーい気分だったのにい。

あ、他にもあつてね」

レヴィル

（長くなりそう・・・）

よつごそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜?〜 (前書き)

????? 戦イメージBGM

風のクロノア〜世界が望んだ忘れもの〜 『KING OF SO

ROW』

「ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へ〜?〜?〜」

+++++Sideなのは+++++

ステアさん達とのドッジボール勝負を終えて、私達はマス目の道へと戻ってきた。

戻って来ての私の第一声は「はあ。緊張したあ・・・」だった。

だってアンスールのメンバーが全員揃うんだもん。しかもフノスさんが出てきてさらに緊張。

本能的に畏敬の念が生まれてしまう。フノスさんは言わば次元世界を生み出した母だからかもしれない。

フェイトちゃんも「そうだね。試合と合わせてすごく緊張した」と微苦笑を浮かべる。

「見てたよレヴィ！ アンスールをアウトにしてビックリしたっ」

「わぶっ？ ルーテシア、危ないって。落ちちゃうよ・・・」

「すげえぞ、ホントにつ！ レヴィが当てたから、さっきのゲームに勝ったようなもんだし」

「はいっ。あのグツと曲がったボールは見事フォルテシアさんの意表を突いてましたね」

ルーテシアやアギト、イクスちゃんに揉みくちやにされるレヴィ。

はやてちゃん達も八神家で労い合ってるし。じゃあ私は、「ヴィヴ

イオ。アインハルトちゃん。お疲れ様あ「だ。  
リオちゃんとコロナちゃんと喜び合ってるヴィヴィオとアインハルトちゃんの元へ行く。

「なのはママ、フェイトママ。うんっ。ルシルパパとシエルさんが手伝ってくれたから勝てたんだよっ」

「はい。ルシリオンお父様の素晴らしいパスのおかげで、私はステアさんをアウトにできましたし。

フォルテシアさんは、レヴィさんが変化球を打てたからこそアウトに出来ました」

「そう言えば・・・ルシルさんが居ないですよね・・・？」

コロナちゃんが辺りを見回してそう言った。

そこで初めて気付く。ルシル君の姿がどこにも無い。

あれ？一緒に転送されたんじゃない・・・？また置いてけぼりにされた・・・？

フェイトちゃんを見ると、

「あ、ルシルはたぶん転送されなかったと思う。何か話があったんじゃないかな・・・？」

幻と言っても確かにそこに存在しているから。シェフィリスさんやシエルさん達アンスールのみなさんは「

そう言っつて、どこか寂しそうに微笑んだ。

現在いまは同じ時間を過ごしているルシル君だけど、でも本物のルシル君と一緒に過ごしたのはアンスールのみなさんだ。

うっん。偽物だとか本物だとかに区別するのは失礼過ぎるよね。でも、それが事実なのは変わらない。



どう声をかけようか迷っているところに、目の前に白い光が生まれた。  
きつとルシル君が転送されてきたんだ。光が治まると、そこにはやつぱりルシル君が居た。

「おかえりルシル」

真つ先にルシル君の側へと歩み寄って、さっきまでの寂しそうな顔から同性でもドキツとする笑みを見せてルシル君を迎えるフェイトちゃん。  
ルシル君もフェイトちゃんの笑みに笑みを返して「ああ。ただいま、フェイト」と応える。  
うん、やつぱり二人はお似合いだと思う。入り込む隙間なんて無いよ。

「すまない、みんな。話があるんだ。聞いてくれないか」

ふと真剣な顔となったルシル君が、私達をぐるりと見回す。  
ステアさん達に勝って喜び合つのを中断したみんなに、ルシル君が語る。

それは、ルシル君が少し前に語った推測が正解だったことを示した内容だった。

「今回の事件の首謀者は、恥ずかしながら守護神の私だった。」

ここに居る私とテストメント・ルシリオンとはもう別存在なんだが・・・すまない。

だが、ちゃんと理由あつての事だというのは解ってほしい」

さすがに責めないよ、そんなに頭を下げなくても。みんなも解つたから。

守護神のルシル君は私達を守るために、ここスンベルに避難させた。グロリアも敵じゃなくて、ルシル君とシャルちゃんと同じ守護神。

「でも。どうしてシャルちゃんじゃなくてグロリアなのかな・・・？」

結局はその疑問に辿り着いちゃうんだよね。

私の疑問を発端として、視線と、「何か知ってる？」っていう問いがルシル君に集まる。

ルシル君は少しの間沈黙して、「関連性があるとは言っても、絶対にシャルが召喚されるといっわけじゃないんだ」って眉間にしわを寄せた。

そっか。残念だなあ。ほんの少しでも良いから逢えるんだったら逢いたかったんだけど。

「遅れてごめん。少し立て込んで」

シエフィリスさんが少し先のマス目の上に姿を現す。

立て込んで、って何かあったのかな？もしかして外界での問題、テストメントのルシル君とグロリアと、アポリュオンの誰かの戦いが（はまだルシル君の推測だけ）終わったのかな・・・？

「えっと、次は・・・」

「シエフィリスさん。私たち青チームの番です」

「そうだったね。ではサイコロを」

シエフィリスさんの前に出て、サイコロを受け取る。それぞれのチームが一勝ずつ。このまま連勝したい。

そのためには、かる〜いお題を出したいなあ。

あ、ここでサイコロを振ってもいいのかな？ 落ちたりしない？

「あ、勢いよくサイコロを振っても落ちないから安心してね」

それを聞いて安心。ポイッと放り投げる。

コキーン と綺麗な音を立てて落ちて、キンキン と転がるサイコロ。

出た数字は16。あのサイコロで出せる最高の数字だ。

「よしっ。それじゃ、みんな行くよっ」

チームメンバーのヴィヴィオ、ルシル君、アインハルトちゃん、コ罗纳ちゃん、リオちゃん、ヴィータちゃん、リエイスさんを順繰りに見る。

みんなと頷き合って、16先のマスを目指して歩き出すと、みんなから「がんばって」って声援を贈られた。

私達も「いってきますっ」「うん、頑張る」って応じながら進み続ける。

そして辿り着くと、ゼフィランサスさんのアナウンスが流れる。

『ラッキーマス もう一度サイコロを振る権利があなたに与えられるのですっ』

さあ、そのマスに止まりしラッキーなプレイヤーよ。再びその歩みを進めたま〜え！』

「やったね、なのはママ」

「だね〜」

つと、目の前にサイコロが落ちてきて、何とかキャッチ。両手でサイコロをいじりながら空を見上げる。螺旋階段の様な半透明のマス目の道。

一つ一つのマス目は大きく長いから、たぶんあと少しでゴールに着きそう。

でもルシル君の話通りなら、次のお題で最後かもしれない。出したお題によっては、もうアンスールの人たち全員と逢うことは出来ない。

ルシル君を見る。私の視線に気づいて、その意味を察したらしいルシル君は「大丈夫だよ。気にせず振ってくれ」と言ってくれた。

「うん。じゃあ……えいっ」

サイコロを放り捨てる。綺麗な音を立てて転がるサイコロを見詰める。

そして出た数字は……「16!？」だった。連続で最高数字16を出しちゃった。

「すごいっ！なのはママすごいっ!」

「はい。連続で16を出すなんて……」

「つつかさ。今の16二連続で運を使い果たして、今からやるお題は最悪なんじゃね?」

「やめてよヴィータちゃん。そんなこと言われたら、フノスさんとバトル、みたいなことになっちゃっよ」

最悪な展開が頭に浮かぶ。フノスさんは、ルシル君以上に強い魔術師で、魔術師の王。

いくら魔力の出力制限があるって言っても、きっと戦って勝てる相手じゃない。

だけど、フノスさんとの戦闘。それはあくまで可能性だ。ヴィータちゃんが言ったようなことは絶対はない・・・はず。

かぶりを振って嫌な想像を追いだす。ここで立ち止まっているわけにもいかないから、私たちは再び歩き出す。

「ルシルさん。フノスさんってやっぱり強いんですか？」

そう言つてリオちゃんはルシル君の隣に駆け寄る。

ルシル君は「今まで見てきたアンスールの誰よりも強いよ」と即答。リエイスさんも「最も戦火が激しかった大戦末期。その当時最強という事は・・・」

つて続ける。

最後にヴィータちゃんが「魔術師最強つてわけだな」と締めた。ヴィヴィオやアインハルトちゃん達がブルツと肩を震わせる。

恐怖から緊張からか、それとも別の感情からか。・・・っと、着いたね。

見上げればゴールをすぐ上。手を伸ばせば届きそう。

『このお題は全員参加！ ルールは簡単。ゴールを目指す。ただそれだけっ！』

移動方法などの手段は一切問わず。さあ頑張つてゴールを目指せよ、諸君！』

ゼフィランサスさんのアナウンスが流れる。

私はお題の内容に安堵。しかけたけど、油断は出来ない。

足元に光が生まれる。転送が始まる合図。視界いっぱい光が満ちて、一度完全に視界が真っ白に染まる。

視界が元に戻つて、ようやくお題を行う世界が目の前に現れる。

「ここは……ビフレスト、か」

ルシル君が辺りをぐるりと見回して、ポツンと呟いた。  
ビフレスト。確か、魔道世界アースガルドに繋がる唯一の道のある世界。

私も辺りを見回してみる。足元に広がる白い円状の石畳。かなり大きい。

目測で直径1kmくらい。石畳の端に沿って大きくて高い円柱が数多く立っているからそう測れる。

周囲に光が溢れる。光が治まった時、そこにはフェイトちゃんたち黄チームと、はやてちゃんたち赤チームが居た。

一か所に集まって、ゴールと言うのがどこにあるのかをルシル君に訊いてみようとしたりとここで、

「あ、みなさん揃っていますね。それではゲームを始めましょうか」

女の子の少し幼い声。その声の主を目にした時、ヴィータちゃんが「あーあ」って嘆息。

ちよつとヴィータちゃん！絶対に私の所為じゃないよっ！あの人が出てくるのはっ！

「改めて自己紹介をさせていただきますね。アンスールが魔道王フノス・クルセイド・アースガルドです」

私達に重く押し掛かる絶望感。フノスさんだ。フノスさんが現れた。現れちゃったよお（涙）

ふくらはぎまで流れる銀色のロングストレート、白のロングコート、

丈の長さが違う白いロングフレアスカートと3重にしたオーバースカートのそれらが、歩くたびに揺れる。

フノスさんが歩み寄って来て距離が縮むたびに、私は後退したい気持ちになる。

単純に怖いんじゃないかと恐れ多いから。本能が同じ目線に立つなっ  
て告げてくる。

「ルールを説明いたします。ゼフィ義姉様が仰っていた通り、みなさんはゴールを目指してください。

ゴールはここから南西に20kmほど先にある転移門です。

その転移門を通過する事がお題のクリア条件となっております。」

フノスさんが真っ直ぐゴールの転移門がある方向を指差した。

私達もそっちに目を向ける。さすがに距離があるから見えないけど。

「ですが。転移門を囲う防壁の入り口の扉には仕掛けがありません、二人一組でないと開かないんです。

ですのでたった一人が辿り着いてもゴールできません事を御了承してくださいね」

二人一組、か。なんだろう、直感がこう告げてくる。

フェイトちゃんとルシル君を先に行かせろ、って。

チラツとフェイトちゃんとルシル君を見る。みんなも二人を見ているのが判った。

「そしてもう一つ。不肖私、フノスが皆さんの行く手を妨害しますので、頑張って二人くらいは逃してあげてくださいね。

そうでないか・・・私に全滅させられちゃいますよ?」

確定だ。フノスさんは、フェイトちゃんとルシル君を先に行かせた

いんだ。

一体どんな理由があつてかは解らないけど。フノスさんは何を企んでいるんだろう？

私は「すみません。ちょっと時間ください」と緊張しながら拳手をすると、フノスさんは「はい、どうぞ」と微笑を向けてくれた。

「ありがとうございます」とお礼を言つてから、みんなを集めて円陣を組む。

「みんなはどう思う？」

「明らかにフェイトちゃんとルシル君を先に行かせようとしとるな」

「え？ あ、やっぱりそうなのかな・・・？ フノスさんにずっと見られていた気がしてたから」

「そうだとしても私は残つた方が良いんじゃないか？ フノスの強さは反則だ。

お互い制限されているから、フノスを相手にして手も足もでないという状況にはならないはずだ。

それに二人一組なら、スバルとティアナ、ルーテシアとレヴィなどと言つたベストペアも居る」

フェイトちゃんとルシル君もどうやら気付いているみたい。

でもルシル君は、自分が残つてた方がいい、って私達の案をやんわり拒否。

そして突然話を振られたスバル達は挙動不審に。結構大役だもんね、この中から先に行くのって色んな意味で。

そこにリエイスさんの援護射撃。ルシル君の援軍じゃなくて、私達の・・・。



「ルシリオン。お前も判っているはず。ゴールまでの道のりに果たして何も試練が無いと言い切れるのか、と。」

私の考えはとしては、いいえ。<sup>ナイン</sup>そんな甘いわけがない。間違いなく・・・」

「・・・シエファイ、か・・・」

「そうだ。お前とテストタロツサを先に行かせようとしたのは、おそらくシエファイリスが待っているからだ。」

お前たち以外の他のメンバーが行ったとして、勝てるのか？ 氷雪系最強の魔術師相手に？」

ハツとする。そうか。リエイスさんの言う通りだ。

アンスールの魔術師が一つのお題に複数人現れ始めたこの最終エリア。

今回もそうかもしれない。フノスさんは、フェイトちゃんとルシル君、そしてシエファイリスさんの三人だけの時間を作りたいんだ。

ルシル君が俯いて、沈黙する。どうしよう・・・えっと。うん、ここは・・・。

「ごめん、みんな。協力して。フェイトちゃんとルシル君の二人を先に行かせる。いいよね？」

半ば強引に同意を求めてみる。リエイスさんの考えは推測だろうけど、でもそれが正解だと思う。

シエファイリスさんは待ってる。ルシル君を。フェイトちゃんを。だから二人を向かわせないと。

みんなもそれを解ってくれたから、みんな頷くっていう形で賛成の意を示してくれた。

「ありがとう、みんな。それじゃフェイトちゃん、ルシル君。多数決で決定だし、このお題を出した青チームのリーダーとして・・・お願いする。」

二人は先に行つて。フノスさんは私達が相手するから」

「そうやな。それに、100%勝てへんやろうけど、最強の魔術師にどこまで私らの魔導が届くか試してみたいしな」

「それはいいですね主はやて。テストロッサ、セインテスト。そう言うわけだ。お前達は、お前達の仕事をこなしてこい」

「フェイトママ、ルシルパパ。行ってきて。大切なことなんだよね？ この選択はそれをお手伝いするなら」

「<sup>ウイウイオ</sup>愛娘に言われたんだ。もう反対意見は許さないぞ」

リエイスさんに詰め寄られて、ルシル君もついに「判った。任せるつて折れた。」

フェイトちゃんは始めから従ってくれるつもりだったようで、こくんと頷いた。

これで決まり。私が代表としてもう一度フノスさんと話す。

「お待たせしました、フノスさん」

「いえいえ。では、始めましょうか。みなさん。みなさんの誇りでありパートナーを構えてください」

フノスさんの右手に虹色の魔力の光が生まれる。右手から溢れ出る光は徐々に集束していつて剣を形作っていく。

「神造兵装第二位、神剣グラム……」

ルシル君がフノスさんの小さくて白く綺麗な右手に収まる大剣の銘を言う。

ルーンが多く刻まれた、上に向けてゆるりと曲線を描く黄金の柄。柄幅いっぱいから伸びる二等辺三角形の刀身（幅40cm・長さ1m弱）は、ルシル君の“グングニル”と同じ薄い水色のクリスタル。

私達もデバイスを起動。“レイジングハート”の先端はフノスさんへ。

「ブースト3！」

初っ端から出し惜しみなくの全力。ブラスタビットも四基展開。

「お互いに準備が完了しましたね。では。コホン。

アンスールが将、魔道王フノス・クルセイド・アースガルド……。参ります」

VS ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

其はアンスールが魔道王フノス

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? VS

始まった。始まってしまった。魔術師の頂点、英雄の中の英雄、次元世界を生み出した母……。フノスさんとの戦闘が。

「行って！ フェイトちゃん、ルシル君！」

エクセリオン・バスター×5

クラウ・ソラス

ファントム・ブレイザー×2

ハーツィース・ドライヴ  
紫光掃破

一斉に散開して、私、リエイスさんとユニゾンしたはやてちゃん、ティアナ、レヴィ（モードバスター）の4人が目晦まし（ダメージが入れば儲けもの）のための砲撃をフノスさんへと放つ。

フノスさんはその場に佇んだまま、砲撃の雨にその小さな体を自ら矢面に立たせる。

コスベル  
多層甲冑

爆発が連続で起こって、フノスさんが爆煙に包まれる。

「行こうルシル！」

「………ああ！」

コード・ヘルモース  
瞬神の飛翔

フェイトちゃんが空に上がって、ルシル君も空戦形態になってフェイトちゃんに続いた。

フノスさんがそれを妨害しないか注意していたんだけど、やっぱり何もなかった。

今の砲撃で墜とされたわけじゃないのに。

「ありがとうございます。私の意図を察していただいて」

煙幕の中からフノスさんの声。煙幕が晴れていって、傷どころが汚れ一つとしてない綺麗なままのフノスさんが居た。フノスさんはトントンとその場でステップを踏みながら「ルシルからすでに話を窺っているかもしれないが」と私たち全員顔をしっかりと見ていく。

RAD

突然、その姿を消した。一瞬だけ見えたRのような光の文字。フェンリルさんが使っていた、アレはルーン魔術。背後にザツと石畳を踏みしめた音。振り向こうとする。その僅かな時間の間に、ガキーン！という衝突音が周囲に響いた。ここで完全に振り向くことが出来た。目に映るのは、フノスさんは“グラム”を薙ぎ払い終えていて、“グラム”と真っ向から鏢迫り合っているシグナムさんだった。シグナムさんの背後にはイクスちゃん。フノスさんが私達を眺めていたのは、標的を絞るためだったんだ。

「バインドだ！」

シグナムさんが吼えるように指示を飛ばした。バインドが使える魔導師全員が一斉にバインド魔法を発動しようとした。対象はもちろんフノスさんただ一人。こんな敵一人味方多数の密集地で攻撃なんてしたら誤射する可能性がある。だから捕縛してしまうのが一番の攻略法。だけど、

柄から剣先へと伸びるように発生した突風が、“レヴァンティン”  
ごとシグナムさんを吹き飛ばした。

フノスさんをその場に留めるストッパーが居なくなつて、自由の身  
となつたフノスさんが当初の標的であるイクスちゃんへ向かおうと  
した。

フノスさんの背後へブラスタースタービットを三基を向かわせる。

「させないっ！」「行かせないよっ！」「させませんっ！」

ヴィヴィオとスバルとアインハルトちゃんが立ちはだかる。

挟み討ち。他のみんなもチャンスを探いつつ、すでに攻撃態勢に入  
つてる。

ヴィヴィオたち三人とブラスタースタービット四基の前方包囲網、リイン  
とユニゾンしたヴィータちゃん、ザフィーラ、レヴィ、コロナちゃ  
んとリオちゃんの後方包囲網。

フノスさんの双眸が怪しい光を放った。何かやるうとしてる。

ヴィヴィオ達が動く。フノスさんは……ニコって笑った！？

「魔道王の名は伊達ではありませんよ？」

コード  
輝き燃えろ、ケルビエル  
汝の威容

フノスさんを中心にして展開される虹色の光に輝く直径10m弱の  
円陣。

ルシル君が持つ魔術と同じモノが目の前に現れた。

口を開く。言うべきことは、そこからすぐに逃げて、だ。

だけど声が出る前に　　うつんそれ以前に、

「逃がしませんよ？」

円の縁に沿って膜が展開。ヴィヴィオとアインハルトちゃんとスバルを閉じ込めた。

その直後に、フノスさんの魔術が無情にも発動された。

円陣全範囲から虹色の炎が勢いよく噴き上がって、ヴィヴィオ達を呑みこんだ。

「魔道王。それは、大戦に参加した数億と言う魔術師の中でも最強クラスであるアンスール。

そのアンスールの扱う最高位の魔術を、真技を含めて全て扱える。

それが私なんです。

もちろんルシルの様な固有能力・複製ではありません。純粋な技術で修得しました」

フノスさんの声が炎の中から聞こえてくる。ただヴィヴィオ達の声はしない。

これはちよつと反則だ。ルシル君の場合、自分以外の術を使う時は呪文を詠唱する。

だからある程度の覚悟や対応を考えられる。でもフノスさんは何の前触れもなくアンスールの魔術を使っつて話だ。

今まで見てきた魔術や真技、か。どうかカーネルさんの真技だけは何とか思う。

「ゆえにこそ、仲間達は私に付けてくれたんです。魔道王、という二つ名を」

炎の中から誇らしげなフノスさんがゆっくりと歩き出てきた。

両脇に、ぐつたりとして身動き一つしないヴィヴィオとアインハルトちゃんを抱えて。

遅れて炎が治まる。そこには倒れたスバル。破壊されたブラスタ―

ビット四基。

フノスさんがゆっくりと二人を地面に下ろす。攻撃のチャンスなんだけど、砲撃じゃヴィヴィオ達を巻き込んでしまう。

「あ、この戦闘においてはライフゲージなどはありません。復活出来れば再び参戦できますので、治癒が出来る方に診てもらおうのもいいでしょう」

RAD

フノスさんはヴィヴィオ達から遠く離れた場所に移動。

「シャマル、イクス。三人をお願いや。他のみんなはフォローに回るよ」

はやてちゃんがシャマル先生とイクスちゃん、そして私達に指示を出す。

初手は私が受け持つ。“レイジングハート”の先をフノスさんへと向ける。

はやてちゃんも周囲に大きな魔カスファイアを四基展開した。

「ストライク・・・！」「ナイトメア・・・！」

受けに回るつもりなのか、フノスさんは微動だにせず待っていてくれる。

これって。もしかしたらこのまま待機していると、フノスさんも何もしないで待機するのかな？

はやてちゃんも同じことを考えたみたいで、私とはやてちゃんは砲撃発射体勢で止まる。

するとフノスさんも動きを止めた。でもすぐに“グラム”を頭上に



掲げた。

「ごめんなさい。私としてはこのまま何もせず・・・いいえ、ちょっとばかり皆さんとお話したいなあ、とか思っていたんですけど、ゼフィ義姉様の指示ですので」

虹色の雷光が“グラム”から迸って、天を衝いた。やっぱりそんな好都合にいくわけがないか。

「スタアアーーーーズッ!!!」「ハウルッ!!!」

すぐさま攻撃再開。私はバスターとシューター数基を同時に放つスターズを。

はやてちゃんは“シユベルトクロイツ”と周囲に展開したスファイアからの複数同時砲撃ナイトメア・ハウルを、そしてフノスさんは、

「ツァクマキオン雷聖の・・・セイバ剣閃アアーーーーッ!!!」

“グラム”を振り下ろして、虹色に輝く雷光の剣状砲撃を放った。

私とはやてちゃんの複数砲撃と、フノスさんの先の尖った雷剣砲撃が衝突。

勝敗は・・・

「アカン！ 負けた！ みんな逃げて！」

フノスさんの砲撃の余裕勝ち。一斉に散開して、雷剣砲撃の効果範囲から離脱。

「続けて行かせていただきますね。風嵐の剣ツルギは優雅に！」

アムフリオン・セイバー  
風聖の剣閃

「火炎熱の剣は激烈に！」

アトウニエリオン・セイバー  
炎聖の剣閃

「閃光の剣は荘厳に！」

アダメリオン・セイバー  
光聖の剣閃

「闇黒の剣は苛烈に！」

カムエリオン・セイバー  
闇聖の剣閃

「氷雪の剣は美麗に！」

サルツィオン・セイバー  
氷聖の剣閃

フノスさんがまるでルシル君やカノンさんの様に砲撃を連発してくる。

唯一の救いは、倒れてるヴィヴィオ達の方には攻撃をしないでくれる事だ。

砲撃を避けつつ、その場から動かないフノスさんをみんなで囲うように包囲する。

シャマル先生とイクスちゃん、その二人の護衛としてシグナムさんとティアナが、ヴィヴィオ達のところへ向かう。

「シュトウルム・ヴィンデ！」

「クロスファイア・・・シューツツ!!」

ヴィヴィオ達のところへ駆けだしたシャマル先生、そしてシグナムさんとティアナの攻撃を皮切りに・・・

「そおおらああーっっ!!」

シュワルベフリーゲン

「フリード、一緒に行くよっ!!」

ウイングシューター

「きゅくるっ!!」

ブラストレイ

「全員、フノスさんに集中砲火!!」

ナイトメア・ハウル

「「はいつ!!」」

コメットブラスト

双龍円舞

「一か所に留まらないで！常に移動して、標的にならないように!!」

私もそう指示を飛ばしながら空へと上がり、

セイクリッドクラスター

圧縮魔力弾を三発発射。フノスさんの迎撃は当然間に合わない。私が攻撃を放つまでに物量攻撃が殺到していたから。

ここでフノスさんが剣状砲撃連発での迎撃をやめて、回避のために動いた。

R A D  
下リ

高速移動のルーン。でもその前に「逃さんぞっ！」と、

鋼の輓

ザフィーラがフノスさんを包囲するように鋼の輓を出現させた。

鋼の輓で出来た檻の中にクラスターと一緒に閉じ込められたフノスさん。

フノスさんの姿が見えなくなる直前、クラスターがフノスさんの至近距離で炸裂。

今頃、クラスターは無数の小型魔力弾となって、フノスさんに襲いかかっているはずだ。

みんながチャンスだと判断。今度は中遠距離攻撃が出来るみんなで一斉砲火をしようとしたとき、

ミカエリオン・セイバー  
大聖の剣閃

鋼の輓の檻が、内側から全方位へと放たれたいくつもの剣状砲撃で吹き飛んだ。

私の方にも二条の砲撃が迫って来て、

## アクセルフィン

高速移動で射線上から離脱。そこから連続で迫りくる砲撃。もう周りだとかを気にしている余裕がないほどに速く、そして大きい砲撃。

いくつか避けることに成功。だけど、アクセルフィンの効果が一度切れるタイミングで砲撃が迫る。

## アクセルフィン

本当にギリギリでの回避に成功。

でもすぐ側を通り過ぎていった砲撃の衝撃波が凄まじくて、意識を揺さぶられる。

体が揺らいで落下する感覚。なんとか自分自身を対象を浮遊させる補助魔法フローターを掛けることで、墜落だけは免れた。

“レイジングハート”を杖代わりにして立って顔を上げる。……  
・そして、知る。

多方向同時砲撃での被害は鋼の軛だけじゃなくて。

「こ、これじゃまるで……ルシル君のバルドルみたい……」

十十Sideなのは はやて十十

「う……あ……?」

……少しの間、気を失ってたみたいやな……?

うつ伏せで倒れとった私は両肘をつけて上半身を起こそうと奮闘。

と、全身に鈍い痛み。私・・・なんで倒れとつたんやる・・・？  
記憶の混濁。ザフィーラがフノスさんを捕らえて・・・、私らはそ  
のチャンスを活かそうって一斉攻撃をやるうとして・・・。

「いつつ・・・あ、そうや。フノスさんが魔術を・・・！」

思い出して、バツと顔を上げる。そして現状を理解。

口が震えて声が出やへん。名前を・・・、家族の名前を呼ばな・・・  
アカンのにっ！

「はや・・・て・・・大丈夫・・・夫・・・？」

「主はやて・・・お怪我・・・は・・・？」

「ヴィー・・・タ・・・、ザフィー・・・ラ・・・。うん、大丈夫や・・・  
二人のおかげで・・・」

ヴィータとザフィーラが、私を守るように目の前に居った。

二人ともロボロボで、もう戦闘を続行することは・・・出来へん。  
私がそう答えると、ヴィータは「おっしゃ」と、ザフィーラは安堵  
の息を。

でもそれだけ言うと、ヴィータとザフィーラがドサツと倒れた。

「ヴィータ！ ザフィーラ！」

這って二人の元へ急ぐ。距離は5mくらい。歩きならすぐやのに、  
今は遠い。

あと1mってところで、私とヴィータ達の間、

「騎士としての務め。この目で確かに見させていただきました。」

ヴィータさんとザフィーラさん、でしたよね。主君の盾となつて、私のミカエリオン・セイバーを真っ向から防ぎきつたその雄姿、感動いたしました」

フノスさんが降り立った。

こんな時やのに、大英雄のフノスさんから贈られた愛しい家族への称賛が嬉しい。

最初に上半身を起こし、膝立ちして、“シュベルトクロイツ”を支えとしてやつと立つ。

全身に痛みが奔るけど、ヴィータとザフィーラに比べたらこんな痛み、何でもない。

肩に掛かる砂ぼこりの付いた後髪を後ろに払う。ふと違和感に気付く。

『リエイス？ リエイス！？ リエイス！』

リエイスからの反応が無い事に気付く。ユニゾンは解けてない。

呼び掛けに応じてくれへん。まさか、ブラックアウト・・・！？

ブラックアウトは、術者の魔力が大きな純粹魔力ダメージや使用のしすぎによって尽きて、意識を失うことを言う現象なんやけど・・・。

リエイスも私を守ってるために魔力を使い過ぎて、気を失ったかもしれないへん。

「八神はやてさん。どうします？ 杖を構えた時点で戦闘の意思ありと判断し、攻撃を再開させていただきま あら？」

ロックバインド

レストリクトロック

フノスさんを拘束するんは地面が鎖と化したバインドと、桜色のバインド。

一拍遅れて「はやてちゃんっ！」って私を呼んでくれたんは・・・  
「なのはちゃんっ！」や。

コロナもロボロなりオに肩を貸して、ゴライアスを創成してくれてる。

さらに、私の背後から脇を抜けてフノスさんへと突撃するんは・・・

シユランゲバイセン

シユランゲフォルムとなつとる“レヴァンティン”。

未だにバインドの拘束から逃れてないフノスさん。このままやと危ない。

そう思ったけど、結局は杞憂。フノスさんはジツと自分に迫る“レヴァンティン”の剣先を見詰める。

クリュスタックス・アントス  
「天花麗盾」

白銀の雪の結晶の様な盾が展開されて、“レヴァンティン”の一撃を防御。

それだけやない。氷の盾に突き刺さって止まった“レヴァンティン”が氷結されてく。

これは、冰雪系の魔術？ 術式名から言うて、シェフィリスさんの魔術かつ。

この隙に、私は降り立ったなのはちゃんの助けを借りてフノスさんから距離を取る。

「まずい！ アギト！」



剣先から徐々に柄の方へ侵食していく氷結。

シグナム！・・・って、あんなにボロボロで、もう立つのもやっと  
みたいやのに、あんなに激しく動いて・・・。

それ以上の氷結を防ごうと、シグナムは“レヴァンティン”の刀身  
に炎を燃え滾らせてく。

そやけど、シグナムの火炎すら氷結してくフノスさんの氷結。“レ  
ヴァンティン”を抜こうにももうビクともせん。

「ゴライアス！！」

コロナが大声でゴライアスへ指示を出した。

フノスさんがゴライアスを見て「ゴーレムですか。土石系術師は現  
代にも居るんですね」と感心。

私を避難させてくれたのはちゃんも「何とかしないと」って離れ  
てく。

私も、と思ったんやけど、上手く魔力を生成できん。なんて無力な  
んや。

私のために、ヴィータとザフィーラとリエイスを失って。

そんで今はシグナムがピンチやのに、魔法が使えんから助けられへ  
ん。

「ドリルクラツシャーパンチッ！！」

「エクセリオンバスターアアアアアッ！！」

ロケット・パンチに高速回転を加えたゴライアスの一撃となのはち  
やんの砲撃が、バインドに捕らわれたままのフノスさんへ向かう。  
フノスさんは俯いてた顔を上げて空を仰ぎ、

「トール・シルシキル  
復讐者の凶塔」

一言。フノスさんの足元に、直径2mくらいのスヴァルトアールヴヘイム魔法陣が展開。

魔法陣の縁に沿って、漆黒の影が高速で天へと伸びる。

その直後に“レヴァンティン”の刀身が影に寸断されて、ガシヤアアン！と勢いよく粉々になった。

そこから連鎖的に崩壊が始まる。寸断された部分から柄へと“レヴァンティン”の刀身が崩れてく。

炎をも凍らせた氷をもうどうする事も出来ん。だからシグナムは為す術なく“レヴァンティン”を失うのを見るしかなかった。

そして私は見上げる。それはさながら影の塔。その塔は、迫って来とったなのはちゃんとコロナの一撃を防いだ。

アヴェルス・ビュニオン  
降り注げ黒針

影の塔から、いくつもの針の様なモノが勢いよく突き出してきた。

まさに針の雨。「みんな、逃げてっ！」ってなのはちゃんが退避を促す。

塔から伸びる針の雨は地面を突き穿って、石片を周囲に撒き散らし  
ていって……

「はやてちゃんっ！」「主はやて！」

私に迫る5本の針。しまった、完全に直撃コースや。魔法は・・アカン、まだ使えへん。

私を突き飛ばそうとシグナムが突っ込んでくる。けど間に合わんのは確実。

なのはちゃんも足元に魔法陣を展開して、何らかの魔法を使おうとしとるけど、それも間に合わん。

避けるしか……。そやけど、針の軌道と間隔が悪い。どこへ跳

んでも必ず1本が当たる。  
そもそもまだ体を自由に動かせるほど回復してへん。

(ごめんな、ヴィータ。ザフィーラ・・・)

目をギュツと瞑る。せつかく護ってくれたのに、私は何もせんまま負けて・・・。

(・・・リエイス・・・！)

諦めかけたその時、『主はやて！』って、私の内に居るリエイスからの念話。

胸の内が温かくなる。判る。感じる。リエイスの温かさや。

『主はやてをこれ以上傷つけさせないっ！』

パンツァーシルト

前面に展開される深紫色のシールド。リエイスの魔力光や。

その直後に1本の針がシールドと衝突。接着点から激しい火花が飛び散る。

そやけど完全には防ぎきれてない。でも逃げるには十分な時間は稼げた。

すでに突き刺さった4本の針の間を抜けて、その場から離れる。  
うん、体は楽になつとる。もう大丈夫や。

『申し訳ありません、主はやて。私が気を失ってしまったばかりに・・・』

「ええよ、リエイス。それに謝らなアカンのは私の方や。

私がしつかりしとれば、リエイスはブラックアウトにならんだし。ヴィータとザフィーラも戦闘不能にならなかった。シグナムのレヴァンティンだって」

そうや。フノスさんのミカエリオン・セイバーをちゃんと避けとれば、こんな最悪な状況にならなかったのに。

「主はやてが気に病む事ではありません。それに、レヴァンティンは私のミスです」

『そうですよ。私達がダメージを負ったのは自己責任です。

ヴィータとザフィーラも、主はやてが自分を責めるのを辛く思うはずです。

ですから主はやて。御自分を責めないでください』

シグナムとリエイスが優しく、でもちょっと厳しさのある声でそう言う。

アカンな。シャルちゃんにも言われたことやのに。何でもかんでも背負い過ぎる、って。

他の人の責任を勝手に背負うのは、ある意味傲慢やって。

私は「ありがとう」とだけ返す。謝るんはちよお違うやるし。

「はやてちゃん、大丈夫・・・？」

「なのはちゃん。うん、もう大丈夫や」

なのはちゃんにそう答えて、辺りを見回す。酷い有様やった。

石畳はミカエリオン・セイバーゆう砲撃で見る影もなくボロボロで土を覗かせとる。

未だそびえる影の塔から伸びた針が元石畳に突き刺さって、小さな

クレーターを作り出して・・・、てゆうか、あんなん受けたら、死ぬんちゃうの？

まあそれはともかく。無事であるメンバーの数の少なさに膝が折れそうになる。

こうして無事であるんは、私とリエイス、なのはちゃん、シグナム（レヴァンティン無し）とアギト、コロナ、リオ（座り込んで、もう戦える様子やない）だけ。

「シャマル・・・」

「申し訳ありません、主はやて。高町もすまない。護りきれなかった」

シグナムが心底申し訳なさそうに頭を下げる。

ヴィヴィオ達の側に倒れとるシャマルとティアナ。

シグナムがボロボロなのはみんなを守るうとしたからなんやな。

でもダメやった。フノスさんの魔術はそれほどまでに強力とゆうことか。

なのはちゃんは「仕方ないですよ」って首を横に振る。

「あの、これからどうすれば・・・？」

リオに肩を貸して歩いてきたコロナが、影の塔から目を逸らさんと尋ねてきた。

今の戦力で立ち向かえるような相手やない。そもそもたった一つの魔術で壊滅状態やし。

それやったら戦力をもう一度整わす。そのためには。この中で治癒魔法を使えるのは・・・。

「リエイス。みんなを回復できるか？」

『出来ます。ですが、全員を一度にとはいけませんので、優先順位が出来てしまいますが』

時間が掛かるとゆう事やな。その間、フノスさんがどう動くか。てゆうか、さつきから何のアクションを起こしてへんけど・・・何やる・・・？

そう思っとなら、影の塔の中からフノスさんが話しかけてきた。

「そろそろ戦闘再開と行きましようか」

影の塔全体にピシピシとヒビが入ってく。

アカン。今の状態での戦闘は確実に敗北へ一直線や。

『とにかく。このメンバーを最優先に回復させますっ！ 静かなる癒しよ、癒しの恵みを我らに運べ』

静かなる癒し

私を中心としてみんなのケガはもちろん、魔力・体力や防護服の回復が行われる。

その間に影の塔が消滅した。フノスさんと目が合う。

フノスさんが微笑したあと、

サルツィオン・ブレイド  
氷聖の宝剣

“グラム”の刀身に冷気のようなものが纏わりついた。

フノスさんが突っ込んでくる。私らの中で一番最初に動いたんは、

「アギト！ あれを使うぞっ！」

レヴァンティン・アインエツシエルングフォルム

シグナムやった。“レヴァンティン”の刀身は全然修復を終えてない。

その代わり紅蓮の火炎が柄から噴き上がって、それはさながら炎の剣となる。

シグナムはその炎の剣で、フノスさんの“グラム”と打ち合った。

「未完成ゆえ不安があつたが、上手くいって良かった・・・！」

“グラム”に纏つてた冷気が根こそぎ消し飛んだ。

少しの罅迫り合いの後、シグナムが“グラム”を捌くと、大きく体勢を崩したフノスさん。

炎剣を切り返して、フノスさんを追撃するシグナム。

R A D  
ラド

フノスさんの胸元にRのようなルーン文字。

高速移動のルーン魔術を使う気や。

雷神装

そやけど、ルーン魔術発動よりも早く動くリオ。

立ちはだかったリオを前にして動きを止めるフノスさん。

その背後から迫る炎剣。そしてリオは攻撃やなくて離脱準備に入る。

女神の護盾  
コトヘシシ

とそこに、フノスさんの四方を囲うように展開される四つの盾。

円形で、中央には女神が祈つとる画が描かれたある種の芸術品の様なアレは……。

「ルシル君のリン!? それを同時に四つも!」ってなのはちゃんが驚愕。

私もそうや。オリジナルを有するルシル君ですら一度に一つしか展開出来へんのに、フノスさんは一度に四つを展開。

炎剣が防がれて、リオは盾が展開された時の衝撃波に弾かれて後退。

「私はルシルの一番弟子なんです。ですから師であるルシルの魔術は得意ですよ

たとえば……そうですね。ルシルから教わった魔術のアレンジが、コレです」

カマエリオン・ブレイズ  
殲聖の宝剣軍

「アレは……コード・カマエルかつ!」

シグナムの言った通り、頭上に作り出されたんは無数の槍……やなくて剣。

色は虹色一色で、見ると少し目が回る感じ。ってそんなこと考えとる場合やない。

シグナムが「コロナ、リオ、全力で逃げろっ!」って二人のフォロ―に回る。

「リオちゃんは私が! リオちゃん、掴まって!」

「任せる! コロナ、掴まれ!」

なのはちゃんがリオを左手で抱きかかえて、シグナムも左手でコロナを抱きかかえた。



で、私はと言うと、『主はやて。今の内に皆の回復を』とゆうことで、まずは回復役としてシャマルを最優先。そして中遠距離の魔法を扱えるティアナとレヴィを、突貫力のあるヴィータ、防衛力としてザフィーラを優先的に。空に上がって、向かうのはぐったりとして動かへんシャマル。

「剣軍800かぁ・・・ちょっと足りないかもですね。追加、いきまず」

ルフト・アングリフ  
殲滅爆撃

フノスさんの口から飛び出した有り得へん言葉に続いて、空にイラストとする程の数の魔力スフィアが。

見たことある。カノンさんの魔術や。4ケタ単位の魔力弾の雨。えっと、フノスさんの・・・

(アカン・・・3ケタでも4ケタでもどっちにしても脅威や)

剣先を真下に向けて待機しとる剣軍の間に煌く虹色の魔力スフィア。なんとゆうか夜空(青空やけど)に輝く星々、みたいな？

避けきることはまず無理やな。範囲が広すぎる。

フノスさん。アンスール全員の魔術を全部扱えるって、ルシル君なみに卑怯や(号泣)

うん。防御できるやるか？ ってところに、リエイスからの念話。

『主はやて。少々無理をすれば、おそらく半分は迎撃できます。』

ですが、その分治癒魔法に回せる魔力を失い、回復できる人数が減ってしまいます』

『どっちを選択してもゲーム バーっばいなあ、それ』

なのはちゃん達はぐんぐん距離を稼いどるけど、それでもまだフノスさんの魔術の範囲内。

私もなのはちゃんもシグナムも避けることは何とか出来るはず。

そやけど問題は、避けとる途中でフノスさん自体からの攻撃が来ないかどうか。

来たら間違いなく墜とされる。

『たとえばどんなん？』

『剣軍と魔力スフィアにデアボリック・エミッションを撃ち込みます。』

一つで威力が足りるかどうかは判りませんから、連発することになるかと』

デアボリック・エミッションの連発、か。

リエイスとユニゾンしとつてもそれはちょおキツイかなあ。

答えが出る前に、「殲滅ジャッジメント粛清！」ってフノスさんが振り上げた“グラム”を振り下ろした。

地上と宙空に居るすべての敵を墜とすための暴力が落ちてきた。

『いけませんっ！ 主はやて！』

『リエイスに任せる！』

『判りました。出来る限り抑えて、いきます』

デアボリック・エミッション・アルプトラウム・ベフライウン  
グ

グンと魔力が勢いよく引き出されて一気に使われる感じ。そして発動するデアボリック・エミッションのバリエーション。私を中心として一つ、三方に各一つ、計四つのデアボリック・エミッションを、ベルカ魔法陣形に同時発動させる。

『くっ、完全には無効化できない……！』

魔力剣も魔力弾も完全無効化とはいかんけど威力と速度は弱く出来た。

でも……エミッションの中で、私は、私達は思い知った。

奥義・キュリオテック・セイバー主天聖の剣閃

視界いっぱい溢れる虹色の……雷光。

それで私の意識は完全に途切れた。

++++Sideはやて シグナム++++

(よもやこれ程とは……、さすが魔道王ということか……！)

フノス殿の降らせる魔力剣と魔力弾が掠めようと止まるわけにはいかない。

必死に回避行動を取っている最中、『シグナム！』『シグナムさん！』と、アギトとコロナが半ば悲鳴に近いほどに私の名を叫ぶ。

何事か、と思う前にすぐに察する。上空ばかりに気を取られ、前方に降り注ぎ始めた魔力弾の滝に気付くのが遅れた。

だからと言って止まるわけにもいかん。すでに空から数十本の魔力剣が降って来ている。

「コロナっ、少しキツイかもしれんが辛抱してくれっ！」

「はいっ！」

左脇に抱えているコロナの腹に回している左腕に力を込める。

少し苦しいかもしれんが、落としてしまふよりかは遥かにマシだろ  
う。

右手に携える炎剣形態の“レヴァンティン”を振りかぶり、

『「剣閃烈火！！」』

### 火竜一閃

柄より伸びる炎剣を伸ばし、空より降り注いできたいくつもの魔力  
剣を迎撃する。

炎剣によって横一線に寸断された直後、魔力剣の雨が連鎖的に爆発  
を起こしていく。

迫って来ていた魔力剣の迎撃には成功。しかし魔力剣に遅れて降り  
注いできた魔力弾の雨が黒煙を突っ切ってきた。

今の“レヴァンティン”は刀身を破壊され、火炎のみで刀身が構成  
されているアインエツシエルングフォルム。

ここスネルで新たに組んだばかりの、火竜一閃を持続させる魔法  
なんだが。

現状の問題は“レヴァンティン”のカートリッジ補給口が無い、と  
いうことだ。

ゆえに火竜一閃はそう何度も使えない。

それはつまり何度も迎撃することが出来ない、ということに他なら  
ない。

グ  
デアボリック・エミツション・アルプトラウム・ベフライウン

どうにか迎撃する術がないかと思案するより早く。

主はやてによるデアボリック・エミツションが、放たれた直後の魔力剣・魔力弾と我々の間で発動。

しかも4つ同時にだ。主はやてもリエイスも随分と無茶をなさる。しかしそのおかげで、デアボリック・エミツションを通過してもなお降り注ぐ魔力剣・魔力弾の数、速度、威力が衰えていつている。

「シグナムさん！ フノスさんが！」

コロナが指差す方角。そこには虹色の雷光を“グラム”の刀身に集束させているフノス殿の姿が。

誰を狙っている？ それは考えるまでもなく。フノス殿が体を向けている方角の先には、デアボリック・エミツションの中心、主はやてが居た。

「主はやて！ リエイス！」

今のこの状況下では声が届かぬのは解っている。が、叫ばずにはおれん。

奥義・主天聖の剣閃  
キュリオテテック・セイバー

放たれる特大の雷撃の剣状砲撃。砲撃は一直線に主はやての元へと突き進む。

デイバインバスター・エクステンド

そこに、高町の砲撃が、フノス殿の砲撃を迎撃しようと脇から伸びてきた。だが無駄だった。高町の砲撃など問題にならないとでもいうようにかき消す。

いかん。フノス殿の砲撃を止めることは出来ん。

為す術なく見守り、砲撃は主はやてを中心として広がっているデアボリック・エミッションに直撃。

砲撃はデアボリック・エミッションを一瞬で消滅させ、主はやてとリエイスを呑みこみ、そのまま通過していった。

「主はやて!」「はやてさん!」「マイスター!」

砲閃の中から落下していく主はやての元へ翔ける。ユニゾンは解けていない。が、主はやてはもちろん、リエイスもブラックアウトで気を失っている可能性がある。

全てのデアボリック・エミッションが消え去ったことで、先程までの苛烈な攻撃が再開される。

魔力剣・魔力弾の雨をかわし、もう少して主はやての元へ辿り着けるといふところで、

「『消えたっ!?!』」「」

忽然と姿を消す主はやて。辺りを見回すが、姿は見えない。

R A D

背後に気配。そして強大な魔力反応。

背後に誰が居るかは判っている。振り向きざまに聞こえるフノス殿の声。

「はやてさんは転送させました。気を失っていましたし。あなたはずでに両手が埋まっていますしね」

振り向く勢いのままに炎剣を振るい、フノス殿に叩きつける。が、炎剣は直撃することなく、不可視の障壁らしいもので弾かれた。いや、弾かれただけに留まらず、炎剣は完全にかき消されてしまった。

「あ、安心してください。あなたと彼女も気を失おうとも転送しますので」

カムエリオン・ブレイド  
闇聖の宝剣

振るわれる“グラム”。もはや柄だけの“レヴァンティン”で防御するが、フノス殿の魔術の前では防御にすらならなかった。

++++Sideシグナム　なのは++++

シグナムさんとアギト、コロナちゃんが撃墜されてしまった。

リオちゃんがその光景に、体を震わせているのが判る。

そうだよね。フノスさん一人にここまでされて、怖いよね。

「残るは私とリオちゃんだけか・・・」

「なのはさん・・・。どうすれば・・・？」

どうするか。か。打ち止めたのか魔力剣・魔力弾の雨は止んでる。でもそんなのが無くてフノスさんは十分に強い。一番最初からし

て異常。

一斉攻撃を受けても傷どころか服が汚れてさえもいなかった。強力な障壁を張った証拠だ。その障壁を、私とリオちゃんで突破できるかどうかは鍵なんだけど・・・。無理だ。アレだけの砲火を受けても突破できなかったんだから、二人だけで障壁を貫くなんて出来るはずが・・・

ラド  
RAD

「いいえ。これでチエックメイトです」

「っつ！！」

アクセルフィン

背後から声が出たと瞬間にはその場から緊急離脱。

アクセルシューター

苦し紛れのシューター11基。距離を取りながらもチラリとフノスさんを見る。

シューターはフノスさんへ直撃・・・しなかった。当たる直前でかき消されてる。

エクセリオンバスター

飛行を止めることなくエクセリオンを放つ。

リオちゃんが「ダメですつ。当たってません！」と声を荒げる。

不可視の障壁、か。って、ん？ 不可視の障壁？ 前にもそういう単語を聞いたような・・・。



考えた結果、辿り着いた答え。「まさか・・・多層甲冑!?」だった。他にも候補があるけど、一番しっくりきたのが、ルシル君の有する防性術式・多層甲冑。フノスさんも言っていたし。

私はルシルの一番弟子なんです。ですから師であるルシルの魔術は得意ですよ

「正解です。多層甲冑ゴスペル。魔力制限の所為で持続できず、数秒間だけの展開となってしまうですが、今の私にでも発動できます」自嘲気味のフノスさん。最悪過ぎる。

多層甲冑は、対魔力と対物理の障壁を何重にも纏う障壁だ。たとえ今の私とリオちゃんが魔力障壁を貫いたとしても、物理障壁で拒まれる。

いよいよもって詰んだ。もう・・・ここまでだよ・・・。

「ごめん、リオちゃん」

「・・・あたしもごめんなさい。足手まといになっちゃいました」  
「そんなことないよ。やっぱり元々からこういう結果になっていたはずだから」

フノスさんと戦う。そう決まった時点でもう負けていたんだ。フノスさんが“グラム”に深紫色の闇を纏わせ始めた。これで決着か。

「でも最後まで諦めずに足掻いて見せるッッ!!」

急停止して背後に振り向く。私を追っていたフノスさんへと“レイジングハート”を向け、

「デイベイイーン・・・バスターアアアアッッ!!」

至近距離での全力バスターを撃ち込んだ。

? ? ? ? ? ?

フノスは右手に携えていた“神剣グラム”を落とし、両手で頭を抱えて「やっちゃいました」と自己嫌悪に唸りだした。彼女の周囲にはぐったりと倒れたのはトリオ、シグナムとコロナ、はやて。

これでフノスと戦っていた管理局組は全滅だ。

「魔力出力を10%にしても、皆さんには強すぎたんですね・・・。あうう、私つてばなんてミスをおお・・・」

両膝をつき、果てには両手もついてガツクリ頂垂れた。

そして「私つて馬鹿? うん、馬鹿。やっぱり馬鹿なんだ」とさらに自分を責めだす。

フノスは最大限気を遣って戦い、しばらく長引かせようと考えていた。

だが、その策は見事に潰れた。彼我の戦力差を計り損ねたからだ。あまりに強大過ぎる魔力を有する魔術師の王フノス。

そう、そもそも彼女と戦って、戦闘が成立するはずがなかったのだ。

「えーっと……。とりあえず……か、回復させた方が良いのかな……？」

良いんだよね。うん、戦闘は終了したということですしね」

フノスはようやくやるべきことを考えつき立ち直る。

“グラム”を手に取り、立ち上がって、一番近いなのは元へ歩き出した。

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へくくくく (後書き)

レヴィ

「・・・一瞬で負けた・・・」

ルーテシア

「さすが魔道王ということかあ」

レヴィ

「という感じで今回も始まったレヴィルのコーナー。」

うん、解ってた。解ってたよ。フノスさんに勝てるわけないって事くらい。

でもあまりに理不尽な幕引き。戦闘も一方的。ずっとフノスさんのターンだったよ」

ルーテシア

「そうだね・・・って！ ちよつ、レヴィ。あそこ。柱の陰からフノスさんがこつちを覗いてる」

レヴィ

「ええっ？ 魔道王って謳われてる人がそんな・・・あ、ホントだ」

ルーテシア

「とりあえず手を振ってみよ？・・・あ、振り返してくれた」

レヴィ

「じ、じゃあ手招きを・・・あ、来た」

ルーテシア

「えっと。アンスールの魔道王、フノス・クルセイド・アースガルドさんです」

フノス

「皆さん、こんにちは。ご紹介に与りましたフノス・クルセイド・アースガルドです」

ルーテシア

「それにしてもお強いですね、フノスさん。えー、同い年？」

フノス

「私は16なのですけれど」

レヴィ

「じゃあわたし達と同い年ですね・・・」

フノス

「そうなのですか？ それは親近感がわきますね」

レヴィル

（わからないよ。同い年である圧倒的戦力差って・・・）

レヴィ

「フノスさんもやっぱり他のアンスールのように制限されていたんですよね・・・？」

フノス

「はい、もちろんです。最大出力を10%にまで抑えました」

レヴィ

「（１０％！？　１０％であの威力！？）そうなんですかあゝ、あははは。（もう笑うことしか出来ない）」

フノス

「ですけど・・・それでもまだ強すぎたようで・・・。ごめんなさい。

あまりに理不尽な幕引きで。戦闘が一方的で。ずっと私のターンで

レヴィル

（き、ききき聞かれてたああーっっ！）汗ダラダラ

フノス

「あっ！　責めているわけではありませんし、私もそう思いましたから、気にしないで頂けると助かります」

ルーテシア

「ごめんなさい。でも、ルシリオンさんの一番弟子っていうことですし、やっぱり強いのも当たり前なのかなあって」

フノス

「中遠距離魔術はルシルに、近接格闘・剣術はイヴに教わったんです。

ホントは猛反対を受けたのですけどね。でもやっぱりアースガルドの二王として、戦場に出ないわけにもいきませんでしたから」

レヴィ

「猛反対？　ものすごい魔力と、複製じゃなくて純粋に魔術を憶えて扱える才能。」

だから最強の魔術師に成り得たんですね？」

フノス

「その、私は体が弱く、短命とされていたんです。ですから魔術行使は寿命を縮める、と」

ルーテシア

「あ……そうだったんですか……」

フノス

「ですから大戦に本格的に参加したのはヴィーグリーズ決戦のみで、相手も連合最強の魔獣、喰滅狼ウリベルト・ツェレストティツァ・カーナス・フレイオルター体のみなのです」

レヴィ

「連合最強……。それでも勝ったんですね……。？ フノスさんは魔術師最強なんですから」

フノス

「いいえ。残念ながら三戦三引き分けでした。ふう、彼女、強かったですよ」

レヴィル

「どんだけええーーーーーっつ！？」

フノス

「ふえ！？ 一体どうしました！？ そんな全力で叫んで！？」

レヴィル

「い、いえ、なんでも……」

フノス

「はあ、そうですね。それならいいのですが」

レヴィ

「あつと。あとがきが長くなるのはあまりよくないらしいので、今日はここまで！」

フノス

「あら、そうですね」

ルーテシア

「はい、そうですね。ではまた次回でお会いしましょうっ！」

フノス

「さようならー」



よつこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へくくく (前書き)

V S 蒼雪姫シエフィリス・C・ニヴル Heim 戦イメージ BGM

テイルズ・オブ・ジ・アビス 『Eternal mind』 (変わ

らぬ想い) 『

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へくくく

++++Sideフェイト++++

なのは達と別れて、私とルシルは二人でゴールだという転移門を指して飛ぶ。

前を飛ぶルシルに「みんな大丈夫かな・・・？」って尋ねる。

答えは判ってる。ルシルとシャルの記憶の中で見た、ルシル以上の魔力と威力を有する魔術を扱うフノスさんを相手にして勝てるわけがない。

「どの程度制限されているかは判らないが、フノスに勝つのは不可能だ。

カーネルの話だと固有能力だけは使わないらしいから、さすがに瞬殺されることだけはないだろうが・・・」

ルシルがスピードを落として私の横に並び、苦々しい表情を浮かべてそう答えた。

やっぱりダメなんだ。ちょっと期待したんだけど、ルシルがハツキリそう言ったから、なのは達は今頃・・・。

「・・・気にはなるだろうが、気に病む事じゃない。はやてが言っていただろ？」

どこまで自分達の魔導が通用するかを試してみたい、と。だから友として今は・・・。」

「そう・・・だね。うん。私達は私達の仕事をしないとダメなんだよ

ね・・・！」

ルシルも「そうだな」って微笑みを浮かべた。  
みんなは私とルシルのために頑張ってくれてる。

それを無駄にしないためには、私達が為すべきことを為す、それだけだ。

気持ちを切り替えて、真っ直ぐと前を見る。視界に入るところまでも青い空と二つの月。

どこかミッドの空を思わせてくれる。そして下は平原が続いていて、大小の湖や池が点在。

こんな綺麗な世界が戦場になったなんて悲しく思える。

「・・・見えた来たぞ、フェイト。アレがアースガルドへ繋がる唯一の転移門、ヘイムダル門だ」

そこには白亜の壁（高さは200mくらい）が円形状（直径3kmくらい）に建てられていて、そしてその壁の中央にソレはある。

扉。うん、大きな扉だ。幅は大体80mくらいで、高さは壁と同じくらいだから200m、ちょっと足りないくらい。

ルシルが「降りよう」と言って降下していく。そんなルシルに私は声を掛ける。

「ねえルシル。えっと、上空から進入できるんじゃないかな、これ・・・？」

。ガラ空きだし、わざわざ降りなくてもいい感じがするんだけど・・・。  
ルシルは降下するのを一度停止して「まあ見ていてくれ」と言っ  
て、左掌をヘイムダル門に翳す。

掌の前に展開されるサファイアブルーのアースガルド魔法陣。

「そうだった。フェイト。私から少し距離を置いてくれ」

「あ、うん。判った」

ルシルに言われた通り、ルシルから数mくらい離れる。

私が離れたのを確認したルシルが頷く。

「燃え焼け、コード 汝の火拳セラティエル」

魔法陣が一際輝いて、そして放たれる蒼い炎の砲撃。

真っ直ぐヘイムダル門へと向かって行って・・・、目に見えない何かに遮られて防がれる。

それだけじゃなくて、炎熱砲撃はこれまた真っ直ぐルシルに跳ね返ってきた。

迫ってきた炎熱砲を避けたルシルが「というわけだ」って肩を竦めた。

なるほど。上空からの侵入は出来ないってわけか・・・。

「・・・でもルシル。それなら説明してくればよかったのに」

あんな危ないマネしないでほしかったよ。

まあ元はと言えば私が発端だから、そんなことを言うのもちよっと悪い気がする。

「確かめたかったからな。もしかして障壁が無いんじゃないかと。

結局、障壁は健在だったな・・・。やっぱりフノスの言う通り正攻法で行くしかないだろう」

ルシルが降下再開。私も続いて高度を落としていく。

降りている最中、転移門へイムダルを囲う白亜の壁を見ることになったけど、びつしりとルーン文字が刻まれていて、少し不気味に思えた。

そんなことを思いながら地面に降り立って、唯一の入り口だと思う扉を眺める。

「さて。コイツはどう考えてもシェフィの仕業だな」

「うん・・・ルシルが言うならそうなんだろうね」

これまた大きい両開き扉がこれもかっていうくらいに氷結されていて開けられない。

ルシルの言う通り、こんな事が出来るアンスールはシェフィリスさんだけ。

キョロキョロと辺りを見回すけど、姿はどこにも見えない。氷結させてそのまま撤退？ さすがにそんなわけないよね・・・？

「ルシル。炎熱系で融かすことは出来ない？」

そう提案してみる。ルシルは考える素振りすらせずに「ムリだ」って即答。

うーん、やっぱりか。記憶の中で見たシェフィリスさんは、炎熱系の魔術すら難なく氷結させていたから。

「私の炎熱系術式の火力じゃシェフィの氷結は融かせない。たとえシェフィの魔力が制限されていたとしてもおそらく・・・」

ルシルがそこまで言ったところで、

「氷を融かすズルはダメだよ、ルシル」

ドキツとしてしまうほどに綺麗な声が耳に届く。  
声のした方へ振り返ろうとした時、視界が閉ざされてしまうほどの吹雪が起きる。

“バルディツシュ”を持っていない左腕で顔面を庇って、ただ耐える。

数十秒くらいの吹雪も止んで、目を開けて・・・絶句。景色がガラリと変わっていて。

「冷た・・・ふう。随分な挨拶だな、シエフィ。初っ端から氷結<sup>干</sup>女帝<sup>リュースニル</sup>の城を発動か」

ルシルが自分の身体に積もった雪を払いながら呆れ果てる。

ルシルと私の視線の先に、装飾の施された足元まで覆う蒼いロングワンピースに、胸元に赤い大きなリボンをあしらった白のクロークを着こんだシエフィリスさんが佇んでいた。

私がシエフィリスさんよりソレから視線を逸らさずにぼけーっとしているから、ルシルが「ほら、フェイト。雪を払え」って、私に積もった雪を払いだした。

ここで再起動。「ごめん。ありがと」って雪を払うのを引き継ぐ（というか自分に積もってるんだからルシル任せはおかし過ぎ）。

「氷結女帝<sup>エーリュースニル</sup>の城を発動させたという事は、やはり戦うつもりか？」

ルシルが私の前に躍り出て、シエフィリスさんとその後ろに在る物を真っ直ぐ見詰める。

私ももう一度見る。シエフィリスさんの背後にそびえる青い氷で出来た城を。

中央と左右に一棟ずつ塔があって、その間に居館がある簡単なデザインの城なだけだ。

ただ建つてるだけじゃないのは確かだから、何かしらの補助術式サポーターか増幅術式ブースターの可能性がある。ルシルとシャルの記憶の中には出なかったから効果が判らない。

「うん。敵対者とは魔道を交えて語る。フェイトさんともぶつかつておきたかったし」

「ゼフィ姉様の持論だな」

「えっと、なのはも似たような考えを持つてるよね。あと、私って敵意持たれてる？」

「そう言えばそうだな。いや、敵意は持ってないだろ・・・」

「ルシルの言う通りだよ。敵意じゃないし、もちろん嫌ってもない。むしろ私はルシルと貴女の仲を祝福しているし。感謝でいっぱいだよ。」

「ぶつかり合いたっていうのはね、貴女への興味からなんだよ、フェイトさん」

シエフィリスさんがニコツと微笑みかけてくれた。

「よ、よかったあ。今までの演技で、実際は私を嫌ってました、なんてオチじゃなくて。」

「ホッと安堵の溜息を吐く。」

「それじゃあ確認するね。早い話が私をノックアウトすればOK。そうすれば入り口を閉ざしてる氷結が解除されるから。解り易くて良いでしょ？」

頭に被った毛皮ファーの無いパーハを取って、上に放り投げた。

私は釣られてパパー八の行方を目で追う。パパー八は空で凍りついて砕けた。

一体何だったんだろ？ 雪となつて降ってくるパパー八の破片からシエフィリスさんへと視線を戻す。

と、シエフィリスさんの着ている衣服が変わっていた。

蒼い燕尾シャツにフレアロングスカート、腰に巻いているオーバースカートは前開きのフレアスカートで色は白。

スカートの裾から覗く黒いブーツ。肩に羽織っている白の袖なしインバネスコート。

髪型はツーサイドアップじゃなくて耳下で髪を束ねたツインテール。それが、シエフィリスさんの魔術戦のための戦闘甲冑。記憶で見ただ通りの格好だ。

「シエフィ。二対一でいいのか？」

「うん、いいよ。あなたとゼフィ姉様の弟子として、恥ずかしくない魔道を見せる。」

だからルシルとフェイトさんの二人を相手にしても勝つ自信があるよ。

それじゃあ始めよう。スンベル最後のお題、最後の戦いを……！」

V S ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?  
其はアンスールが蒼雪姫シエフィリス  
? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? VS

シエフィリスさんの右手にアイスグリーンの光が溢れて集束。

光は杖を形作って……その姿を露わにした。一言で言えば杖。



1 m半くらいの長さの棒状クリスタル（蒼だからサファイア？）が捻じれていて、縄のような杖になってる。  
クリスタルは先端で分かれて、球体状のアメジスト？（紫色だから、たぶん）を三方からがっちりキャッチしてる。

「コレ、神造兵装第10位・神杖ガンバンテインって言うてね。私のために在る神器と言っても過言じゃないの」

“ガンバンテイン”の先端を私達に向けて、ニコニコ笑みを浮かべた。  
するとルシルが「しまったっ！ フェイト散開だっ！」って私の肩を叩いた。  
ルシルの切迫した声に、私は考えずに空へ上がる。ルシルも私と逆方向に向かつて飛んだ。

ドリ・エギエネス  
雪槍乱穿

空に上がった直後、“ガンバンテイン”の先端にあるアメジストから、吹雪の砲撃が放たれた。  
吹雪の中にはたぶんだけど氷の槍が幾つも巻き込まれてるのが見えた。

吹雪だけだと思って防御に回ったら、氷の槍で防御を削られて終わるかも。

それにしても、あんな笑顔であんな冗談じゃ済まされない攻撃を使うなんて。

シェフィリスさんが空に居る私とルシルを見上げて「あ、外した」って漏らした。

「不意打ちとは・・・いい度胸じゃないか、シェフィ」

ルシルが“ラインゴルト・フロースヒルデ（双銃剣）”を起動させる。  
私も“バルディツシュ”を大鎌ハーケンフォームにして、両手で構える。  
と、シエファイさんがルシルの“フロースヒルデ”を見て、左手を顎に当てて考える仕草をする。  
えっと、この間に攻撃とかしていいのかなあ・・・？

「エリア・マスターの権限において。ルシルに神器、神槍グングニルの使用を許可します」

「・・・いいのか？」

「ルシルが本気じゃないと意味ないから」

ルシルは“フロースヒルデ”を指輪に戻して「グングニル」と告げると、ルシルの左手に“グングニル”が現れた。

これで本当の戦闘開始になるみたい。それを示すかのように、シエフィリスさんの背後に建つ氷の城に動きが。

三棟の塔と居館の至る所に開いている窓らしき穴から光が漏れだす。光がパタリと止んで・・・

ディアトン・アストレス  
「氷帝城塞の砲撃・・・撃てええー！ツツ！！」

穴という穴から巨大な雪玉が数十と飛び出してきた。

よく見ると、雪玉の表面には雪だるまの様な顔が。あ、可愛い。

「じゃなくてっ・・・！！」

ソニックムーブ

避ける。避けるけど数がハンパじゃない。視界いっぱい真っ白な雪玉だ。

それなら回避だけじゃなくて迎撃を。雪玉の軌道に注意しながら一瞬だけ停止。

「ハーケン・・・セイバーッ！」

“バルディッシュ”を振るって雷撃の魔力刃ハーケンを放つ。

ハーケンは雪玉を切断していきながらエーリューズニルへ向かい・・・当たる直前で氷結されて粉碎された。

ハーケンくらいじゃビクともしないということか。切断力は抜群なんだけどな・・・。

回避を再開したところに、『フェイト、止まってくれ』ってルシルからの念話。

もう雪玉が幾つか迫って来ていたけど。うん、ルシルを信じよう。

### 弓神の狩獵コード・ウル

止まった直後、無数の蒼い光線ウルが私を追い抜いて行って雪玉を粉碎ルシルの上級術式だ。ウルだったら、エーリューズニルを壊せそうと思っただけで、ウルが全弾氷結されて粉碎。

雪玉と氷結されたウルの破片が宙を舞って、陽光が反射してキラキラ光る。

凄く神秘的な光景で思わず見惚れてしまいそうになる。こんな状況じゃなかったら、ルシルとゆっくり眺めていたいなあ。

「やはりウルのような拡散攻撃じゃ突破しきれないか」

「あ、でも雪玉攻撃は何とかなったね」

「あは、そうだね。雪玉攻撃だけは、ね」

すぐ目の前にシェフィリスさんが居た。全然接近に気付かなかつた。いくら意識が散漫（ちよつと）。本当にちよつと）になっていたと言つても、全然気付かないなんて有り得ない。

すでに振りかぶっていた“ガンバンテイン”を勢いよく振ってきた。“バルディッシュ”を前面に掲げて防御態勢。その瞬間に衝突。

シェフィリスさんはすぐに右手を“ガンバンテイン”から離して振りかぶった。

「凍破……！」  
ティモリア

冷気を纏った拳打による攻撃だと判断。

現に振りかぶられた右拳の周囲の空気が凍っていつてる。

シェフィリスさんが私の目を見てる。これは……誘われてる……？

だったら私も付き合わないと。そして、勝つッ。

「プラズマ……アームツ！」

私も右手を“バルディッシュ”から離して振りかぶり、雷撃を纏わせての拳打を放つ。

シェフィリスさんが笑みを浮かべる。真っ向からの同種の魔法の打ち合いが嬉しいのかな？とか思ったり。

「誅拳……！」  
ヒモナス

“バルディッシュ”と“ガンバンテイン”が離れてすぐに雷撃と冷気の拳打が私達の間で衝突。

拳の接着面から冷気が周囲に飛び散って氷の結晶と化し、雷撃の閃光を乱反射する。

だから視界が眩しさで潰されて目を閉じざるを得なくなった。

リーヴスランル  
氷零世界の箱舟

何かすごい音（何かが砕けたような）がしたけど、目を開けていたられないから何が起きているかは判らない。

それに、シェフィリスさんも同じはずなのに攻撃を続行しているから、もうそつちに意識を割けない。

こっちも負けられずに右拳にさらに力と魔力を込めて押し返す。

「おお、結構粘るんだ。いいね、いいよ。じゃあちよつと付き合つて。」

私と貴女の対一で。ルシルには邪魔されないようにしたから」

天上隔離結界

まぶたを閉じても意味のない真っ白に染まる視界の中、シェフィリスさんがそう言った。

最後の、対一の後がちよつと聞こえなかったけど。

でも、うん、望むところ。シェフィリスさんには負けない、負けられない、負けたくない。

光の乱反射にも慣れてきて、少しだけ目を開ける。

「私は貴女にすつごく感謝してる。私は、魂だけの存在としてルシルの内側から外界を覗いてきた。

だから知ってる、解ってる。ルシルがどれだけ苦しんだのか、傷ついていたかを」

「魂・・・？（つと、気を抜いたら負ける！）」

「はい、隙あり」

「うわっ・・・！？」

気を取り直した時に妙な力みを入れてしまったせいで体勢を僅かだけ崩した。

その隙を突いたシェフィリスさんの“ガンバンテイン”による殴打でもなんとか“バルディッシュ”で防御することに成功。で、私は衝突の衝撃に弾かれてシェフィリスさんとの距離が開く。

スイエラ・ハゴス  
月花氷塵

シェフィリスさんの周囲に無数の氷の礫を巻き込んでいる小型の竜巻が7つ発生。

試しにプラズマランサー5基を撃ち込んでみるけど、全弾弾かれたというより削岩機に掛けられたように先端から粉碎されて消滅。

「そう。私とシエルとカノン、三人の身体と魂は、今なおルシルの創世結界の一つ、英雄の居館内にあるんだ」  
ヴァルハラ

シェフィリスさんの言葉に、私はルシルの記憶の中での出来事を思い出す。

ヴィーグリーズで起きたアンスールの終焉という悪夢。

堕天使に殺害されるシェフィリスさんとシエルさんとカノンさん。

ルシルは確か・・・シェフィリスさん達の身体を転送していたよう  
な・・・。

そう思い出していると、竜巻が少しずつだけ迫っている事に気付く。

なら距離を取って中距離魔法で弾幕を張り、隙があれば最接近して反撃の隙を与えないように連撃。これで行こう。

## ソニックムーブ

シエフィリスさんから大きく距離をとる。

するとシエフィリスさんが「エクリクスイ爆破」と告げ、竜巻が一斉に爆発、氷の礫を周囲に撒き散らす。

礫は回避。その間にシエフィリスさん本体へと、

「プラズマバレット・・・、ファイアツ！」

バレット魔力弾15基を射出。シエフィリスさんは回避を選択。

だけどバレットを誘導操作が可能な魔法。操作してシエフィリスさんを追撃させる。

さらに、自動追尾のハーケンを飛ばす。飛ばした後で“バルディッシュ”を大剣ザンバーフォームへ。

「おつとと。えつと、だから私達はまだ輪廻転生を終わりにしている。ルシルも含めて、私達はあの悪夢の時から解放されていないってわけ」

クリュスタッロス・アントス  
天花護盾

シエフィリスさんの前面に巨大な雪の結晶の様な盾が展開。

盾に触れたバレットが全弾氷結されて粉碎。切断力高いハーケンですら無力化された。

さすが炎熱すら氷結する事が出来る魔術師。

雷撃系の私に、シエフィリスさんの護りは突破できない。・・・とは思わない。

何か手段があるはずだ。防御をかくぐってダメージを通す方法が。

「その事をルシルは知っているんですよね？」

「たぶん知らない。私とシエルとカノンの魂が、今もなお自分の内に閉じ込められているなんて。」

知ったらきつとさらに自分を責める。だからこれは私と貴女の二人だけの秘密ね」

シエフィリスさんが人差し指を唇に当てて、微苦笑を浮かべる。

それは私も賛成だ。今まで、ううん、これからもまだまだ自分を責めるだろうルシル。

たとえルシルが“神意の玉座”に在る本体ルシルと繋がっていないのだとしても、この情報を知ったらきつと、さらに自分を責めるはずだ。

「まあその辺りはいいか。究極的に何が言いたいのかって言うところ

「フェイトさん。ルシルを好きになってくれて、ありがとう」

「っ！・・・シエフィリスさん・・・」

見惚れてしまうほどの笑顔。だけどどこか寂しそう。

そう、だよ。ルシルは、シエフィリスさんにとっても恋人だった。だからルシルの幸せを願いながらも、やっぱり辛いんだよね。

好きな人が自分じゃない女性ひとを愛するとなると。私もセレスに抱いた感情だ。



私に用意された敵、氷結女帝の城の氷を再利用して創られた氷雪製の戦艦氷零世界の箱舟。エリユーズニル  
リーヴスラシル

リーヴスラシルは、シエファイが得意とする氷雪造形魔術の中でも凶抜けて強大な作品だ。

これで、“天光騎士団”の第八騎士サー<sup>アハト・リッター</sup>II グラシオンとその騎士団を全滅させたのだから。

おっと。思い出に浸っているような状況じゃなかったな。

ネメスイ・テイケオスイニ

天罰氷覇

ティモリア・テイケオスイニ

断罪凍波

氷結効果が付加されている魔力砲撃と魔力弾による弾幕。

それらが下に向かないようにするのに苦労する。

迎撃も防御も意味をなさない程に強力な攻撃で、下手に防御に回ると、防御の上から氷結される。

フレイザブリク “神々の宝庫”が扱えれば力押しでどうとでもなるが、現状、色々と制限されてしまっている身としては荷が重すぎる。

（それにしても。シエファイはフェイトに一体何の用があるんだ？）

私とリーヴスラシルを、わざわざ結界を張って空に隔離する理由が判らない。

二対一でもいい、って言っていたのに。考えが何かしら理由で変わったのか？

まあいい。どういう考えであろうと、まずはリーヴスラシルを沈めなければ話が進まない。

リーヴスラシルの攻略法は、まず動力である左右20本のオールを

破壊しなければならぬ。  
ということだ、

「では早速一本目の破壊と行こうか……！」

力神の化身 「コード・マグニ」

筋力・魔力と言った全ての“力”を強化するマグニを発動。中級ゼ  
ルエルの強化版だ。

利き手である左手に携える“グングニル”を振りかぶり、「いけっ  
！」と投擲。

投げれば必ず当たる、という“グングニル”の能力・必中必殺に頼  
った一撃は、右サイドの一番前のオールを貫き破壊。

一仕事を終えた“グングニル”は閃光の尾を引いて私の手元に戻っ  
てくる。

ネメスイ・ディケオスイニ  
天罰氷覇

甲板に浮遊している球体状の砲撃照射システムからの砲火が一層激  
しくなる。

だが空戦形態ヘルモーズである以上、そう簡単に撃墜されたりはし  
ない。

浄化せよ、コード 汝の聖炎 メタトロン

燃え焼け、コード 汝の火拳 セラティエル

輝き燃えろ、コード 汝の威容 ケルビエル

無慈悲たれ、コード 汝の聖火 フシエル

咲き乱れし、コード 汝の散火 マルキダエル

邪神の狂炎 コード・ロキ

炎帝の劫火 コード・スルト

「……運命の三女神・其は編む者……！」

回避中に炎熱系術式を複数発動。どれも形にはせず炎だけだが、まあそれはともかく、神造兵装第一位たる“神槍グングニル”に、人間の技術である魔術を纏わせるにはウルドが必要となる。

まったく。扱う人間を選ぶわ、魔術を付加させるにも専用の術が必要だと面倒な槍だ。

だがその分の働きをしてくれるので文句は……まあ、無い。

「さあ二発目だ！ 今度は一気に消し飛ばしてやる！」

蒼炎を“グングニル”の上下にある二つの穂に纏わせて投擲。

蒼炎を引いて右サイド全てのオールに向かって行く“グングニル”を見送りつつ、

「コード・ヴァーリ復讐神の必滅……！」

私に対して攻撃を仕掛けてきた相手を自動追尾する砲撃ヴァーリを六条発射。

迎撃されない限り、そして砲撃を構成する魔力が切れない限りは一度ロックオンした相手を永続追尾する。

標的は砲撃を放ち続ける球体状砲台。ヴァーリは迎撃のために放たれる砲撃を回避しながら、確実に砲台へと向かい……破壊。

さらに破壊。もっと破壊。最終的に六条のヴァーリは甲板上で暴れ回り、18の砲台を破壊。

ティモリア・ディケオスイニ  
断罪凍波

まだ健在である12の砲台の内、2つの砲台から、氷の結晶が集ま

つた、まるでモーニングスターの先端部のような砲弾が撃ち出される。だが狙いは甘く、2つの砲弾は私の両サイドを通り過ぎて行った。2つの砲弾が衝突したのか、背後でガシャアアン！とガラスが割れたような音が轟く。

ネメスイ・デイクオスイニ

天罰氷覇

間髪入れずに放たれる一条の砲撃。これは直撃コースだったために回避。

何気なく砲撃の行く先を見、そこで自分の大きな過ちに気付いた。さっきの照準のズレた2つの砲弾。あれはミスじゃなかったんだ。

(もつと怪しんでおけっ私！)

自分の馬鹿さ加減に腹が立つ。砲弾を構成していた氷が砕けて無数の破片となり、砲撃を拡散するための反射板へと砲撃は進む。こうなってはもう覚悟するしかない。

「避けて避けて避け続けるっ！」

乱反射による無差別軌道砲撃。ちよつとした油断が命取りだ。

+++++Sideルシル フェイト+++++

「「っ!?!」」

私とシェフィリスさんの間に振ってきた極太の砲撃。その数4。

地面に着弾した砲撃が爆発を起こす。でも巻き起こすのは爆炎じゃなくて氷雪と冷氣。

地面が露わになった時、そこは一面銀世界。全てが氷結されていた。問題は空。どこから砲撃が？だった。ここで私は思いだす。ルシルは一体どこ？って。

その答えが、さっきの上空からの砲撃だった。

「ちょっとルシル！　しつかりリーヴスラシルの攻撃を受け持って！　危うく私とフェイトさんに当たりそうだったでしょっ！」

シェフィリスさんが空を見上げて怒声を飛ばした。

ルシルはここよりずっと高い空に居た。しかも戦ってる。

今まで気付かなかった自分の間抜けさを痛感してしまっほほどに巨大な氷雪製の船と。

長さ200m・幅20mくらいの船体の両側から巨大なオールが左右それぞれ・・・ん？

左右で数が合わない。ああそうか。ルシルが破壊したんだきつと。確認出来る8本のオールが飛び出していて、空を漕ぐように動いてる。

それに、たぶん船上からさっき降ってきた砲撃と同じような攻撃がルシルに狙いを定めて放たれ続けている。

「仕方ないだろ！　避けなければ墜とされていたんだ！

はあ・・・それはそうとフェイト！　ケガはないか!？」

「私は大丈夫！」

「そうか。すまん、次は気を付ける！　シェフィもすまなかった。というか、今回のリーヴスラシルの攻撃、性質が悪くないか!？」

「ルシルの腕が鈍ったんじゃないの!？」

「……そんなまさか」

ルシルが蒼い閃光の尾を引きながら空を縦横無尽に翔けながら砲撃や魔力弾を避ける。

でもちゃんと回避の最中でも、

コード・ソール  
女神の陽光

特大炎熱砲撃ソールを連発。リーヴスラシルに直撃。爆炎が噴き上がるのが見える。

でも爆発音が聞こえない。そもそも魔力反応も察知できないし。

だから気付かなかったんだ。ルシルとリーヴスラシルって言うあの巨大船との戦いに。

ルシルを掠める砲撃。堪らず「ルシル!」って叫ぶ。

一瞬だけ私を見て頷いた。大丈夫だ、って意味を込めた視線付きで。なら私もと思つて、頷き返した。ルシルを安心させるように。

ルシルはそのままリーヴスラシルとの戦闘に意識を向けて、光となつて空をまた翔けだす。

「ねえフェイトさん。私ね。死んだ今でもルシルが好き。永遠に変わらない想い。」

墮天使たちを救つて、テストメントから解放されて、アースガルドに戻つて、私達の魂を解放して……。

それでね。もし生まれ変わって、そしてルシルと再会出来たら」

下リ・エギエネス  
雪槍乱穿

「私はまたルシルを好きになる。そして、もし貴女もその場に居た

としたら。・・・私は貴女に勝つ」

氷の槍を複数含んだ吹雪の砲撃。そして、シエフィリスさんからの宣戦布告。

生まれ変わった後の世界での話だけど。でもだからと言って世迷言だなんて流すわけにはいかない。だって・・・

### ソニックムーブ

砲撃を回避して、すぐさまプラスマスファイアを周囲に六基展開。プラスマスファイアは本来プラスマランサーの発射体だけど、ランサーとして使わずに別目的のための利用も出来る。

スフィアの電気を全てザンバーの刀身に蓄積させて、さらにカートリッジもロード。

「雷光一閃・・・!」

雷光を放つ“バルディッシュ”を掲げて、

「私だつて・・・負けないッ!!」

### プラスマザンバーブレイカー

縦一線に振るい、限界にまで威力を高めた雷撃砲を、強い想いと一緒に撃ち放つ。

放った瞬間、チラツと見えたシエフィリスさんの表情は・・・  
笑みだつた。

アミナ・ヒルゴス  
氷零冥塔

シェフィリスさんの前に氷の柱が4棟、並列して突き出してきた。その直後にブレイカーが氷柱に着弾。雷光を周囲に迸らせながら大爆発を起こす。

氷結されなかつた事に僅かな期待を持つ。でも反撃に備えて警戒。

オラサルマハティ  
氷領結界

徐々に私とシェフィリスさんを隔てる粉塵が治まっていく。

完全に晴れると、氷柱のど真ん中に大穴が開いていて、その奥に片膝をつき、“ガンバンテイン”を杖代わりにして立ち上がるうとしていたシェフィリスさんの姿が確認出来た。

大穴と片膝をつくシェフィリスさん。ブレイカーが通った証拠だ。

「あ痛たた。ビルゴス冥塔アントスじゃなくて護盾にするべきだったかな。あはは」

それでも笑みを崩さない。それに思ったよりダメージが入ってない事にシヨック。

「結構すごいんだね」と、立ち上がったシェフィリスさんが私を真っ直ぐ見詰めてきた。

こちらも見詰め返す。どんな言葉も、想いも、心も。全部受け止めたいから。

「貴女の言葉には確かな意思がある。あはは。ルシルは本当に幸せ者だよ

ルシルね。貴女と出逢う前にも行く先々の契約執行世界で何度か告白を受けているんだけど。聞いた？」

ハラズイ・ウエロス  
電翔連弾



四棟の氷柱が一斉に崩れて、無数の氷の弾丸となって強襲してきた。

### ソニックムーブ

高速移動魔法で回避。防御力が弱い私にはアンスールの魔術を防御する、なんて選択肢はないから。

回避中、シェフィリスさんへと「詳しくは聞いてないですけど」と答える。

ルシルからそういった話は聞かないし、聞きたくない。

だからそういう事柄の話をするのは主にシャルだ。

そんなシャルも詳しくは喋らなかつたから、別世界での契約での事はあんまり知らない。

「そつか。・・・私は見てきた。相手の女の子達を。良い子ばかりだったよ。」

でも、ルシルは断ってきた。私の事はもちろん。ガブリエラって娘の事があつたから」

クスイフォス・ヒモナス

### 氷装零剣

“ガンバンテイン”全体が氷に包まれて、杖から剣へと変化した。

剣と化した“ガンバンテイン”を脇に構えて、微苦笑を浮かべながらシェフィリスさんが突進してきた。

記憶の中でのシェフィリスさんが近接戦闘をした場面は確か無かつたような・・・？

でもルシルが私達に見せたのはほんの一部（本当にグロテスクな場面などは飛ばしたって話だ）だけだから、その飛ばされた場面の中にあつたかもしれない。

「あ、それは知ってます。ルシルが自分の幸福を捨てた最大要因、

ですよね・・・っ!」

「そう・・・っ!」

お互いが全力で振るったザンバーと“氷剣”ガンバンティンが衝突。

ザンバーの刀身は氷結されずにちゃんと鏝迫り合いが出来てる。

シェフィリスさんがそうならないようにしているからかもしれないけど。

「そうそう。でね。私・・・ルシルが断るたびに、やった、って思ったの」

「・・・何となくですけど・・・解る気がします・・・!」

さらに力を込めて、シェフィリスさんごと“氷剣”ガンバンティンを弾き飛ばす。たたらを踏んでいるシェフィリスさんへザンバーを一閃する。ただど・・・

(外した!?)

確かに間合いに入っていたのに、シェフィリスさんに当てる事が出来なかった。

大振りだったことで大きく体を開いてしまった。その隙をつくシェフィリスさん。

体勢を低くして突進してきた。振るわれる“氷剣”ガンバンティン。

あ、でも・・・間合いがおかしい。シェフィリスさんの位置からの一撃だったら半歩下がるだけで避けられる。

だったら紙一重で避けて、すぐさまカウンターを打ち込む。それで行ける、って思った。

「が・・・っ!？」

直撃だった。左腕にしっかりと決まる“氷剣”<sup>ガンバンティン</sup>の一撃。切断力が無いことが幸いだった。剣で斬られたというよりは、鈍器で殴られた感じ。

下手に足に力を込めてその場に留まろうとせず、殴られた衝撃に任せて吹き飛ばされる。

そうすることで衝撃を出来る限り減らせるから。3mくらい飛ばされて、でも何とか体勢を整えることに成功。

よかった。体勢を整えるまでに追撃されてたら終わってた。

(今・・・剣が伸びたような・・・?)

そう。 “氷剣”<sup>ガンバンティン</sup>の剣先が突然伸びたように見えた。

でも見ると “氷剣”<sup>ガンバンティン</sup>の刀身の長さは始めと同じ。変わってない。間合いを計り損ねた? ううん、さすがにそれはない。

シャルやシグナムといった高位の剣士と何度も何度も試合ったんだ。だからこの目で見て、すでに何度か交えた以上、刀身の長さを計り損ねるなんてまずない。

「左腕、大丈夫? 折れないように気を付けたんだけど」

「お、折れてはいないですけど・・・すごく痛いです」

左腕が痺れて動かせない。動かすにはちょっと時間が要るかも。

「それは良かった。あと謝罪はしないから。・・・えっと、話の続きなんだけど。」

それって、やっぱり嫉妬、だよな。ルシルを取られたくないって」

解ってる。今は戦闘中。攻撃を入れたその相手に謝ることはない。そして。嫉妬。そう、私も抱いたことがある感情。だから解る。シエフィリスさんの気持ちだ。

エフオドス・ニヒ  
凍波裂閃

振り上げられた ガンバンティン “氷剣” が縦一線に振るわれた。放たれるのは、放射状に広がる12の冷気の剣状砲撃。回避のために急降下。

シエフィリスさんが追翔してきた。振り向きざまにザンバーを一閃。今度も直撃出来る間合い。それは確かだった。確かなのに……

(また外した!?)

ザンバーはシエフィリスさんを掠める事も出来ずに空を切る。

そのまま突っ込んできたシエフィリスさんのショルダータックルを、

ソニックムーブ

ギリギリで回避することに成功。それにしても判らない。

どうしてか間合いを計り損ねる。だから攻撃が当たらない、避けられない。

「ルシルの事を思えば……そんな感情を抱くのは良くないって判ってる」

マスティギオ・ヒモナス  
氷装零鞭

氷剣が砕けて、代わりに“ガンバンティン”の先端にあるアメジストから氷で出来た鞭が伸びてきた。

「だから……。だから貴女がルシルに告白した時、私はルシルの背中を押した。幸せになっただっていいんだよ、って。貴女がした告白の台詞を聞いた時、ああこの娘にならルシルを任せられるな、って思ったから。ゼファイ様も認めているようだし。うん、嫉妬しちゃうけど、でも、嬉しいんだ」

「シエファイリスさん……」

全長50m程の氷の鞭がしなる。剣以上に軌道が読みづらい。それに、もしかた間合いを計り損ねたりしたら……。ううん、弱気になるな。

きつと何かしらの魔術を使っているんだ。それを見破ることが出来れば……。

(一応アレをやってみようかな……)

シグナムのシュランゲバイセンに似ていることが良かった。

また若干の間合いのズレを感じるけど、何とか避けることが出来る。

プラズマランサー

試しにランサー8基を射出。だけど変幻自在の動きを見せる氷の鞭に全弾弾かれた。

やっぱり。目視しているのと実際の鞭の軌道が微妙に違う。

「じゃあ……。これなら……。疾風迅雷！」

ザンバーの刀身が帯電する。この魔法なら、きつとこの違和感の正

体を潰すことが出来る。

「スプライト・・・ザンバアアーーーーッッ!!!」

術者周辺の空間に発動されている結界や補助魔法の効果を破壊できるスプライトザンバー！。

効果は期待通りあった。私達の周囲を覆っていたキラキラ光る何か  
が吹き飛んだ。

目に見えないほどに小さな小さな氷の欠片だ。そうか。乱反射が原因だ、間合いを計り損ねたのは。

「お、おおっ。結界がこんなにも簡単に壊された・・・！ それに、  
マステイギオ  
零鞭まで・・・」

やっぱり結界が張ってあったんだ。間合いのズレはその結界の効果  
だったんだ。

結界破壊だけじゃなくて、氷の鞭も破壊出来た。氷で何か創るのは  
補助術式のようだ。

「・・・シエフィリスさん」

「ん？」

「私・・・、私は・・・。ありがとうございます。ルシルとの仲を  
認めていただいて」

構えていたザンバーを降ろして頭を下げる。

シエフィリスさんは虚を突かれたようにポカンとしたまま無言。

あれ？ あれれ？ もしかしてという言葉の間違った？ ありがとうございます、  
より、ごめんなさい、の方が良かったのかな？

戸惑っている、シェフィリスんが大笑いし始めた。

「いやいや。ううん。こちらこそありがとう。何かスッキリした。そうそう。ルシルと十年以上一緒に過ごしたんだからもう判つてると思うけど、ルシルって時折、自分を二の次にして行動するから」

「あはは。もう嫌と言うほどに判ってます」

「ふふ。彼の手綱を握るのは結構しんどいかもだけど、愛があればラクシヨ―だよな」

「あ、ああああ愛いいいいいい、愛ですかっ!?!」

いきなり愛だとか言われると困る。いやいや、もう26歳なんだから、これくらいでパニックを起こす方がおかしいんだろうけど。ほら、シェフィリスさんも、急にどうしたの?みたいな顔してるし。

「愛だね」

「愛ですかあ」

「貴女とルシルの愛ですよ」

「.....あう」

二人して空を見上げながら、しみじみとそう呟き合う。

空は、ルシルがリーヴスラシルを轟沈させた直後で、砕けていく船体が雪となって消えていつていた。

するとシェフィリスさんが「さて。この勝負は私の負けと言つことの良いかな?」って同意を求めてきた。

「え、でも……。シエフィリスさんは全てを出し切っていないですよね？」

真技だとか、水流系術式だとか、色々と……」

「なに？ 真技を使ってほしかった？ そんなこと言うなんて勇者ね、貴女。」

私の真技は結構すごいよ？ いくら制限が掛けられているからと言っても、防御はもちろん余程の運が無いと回避も出来ない」

「知っています。プスイフロス・エヴィエニス・ヒヨノスイエラ・カタストロフィ……でしたよね？」

シエフィリスさんの真技だけは良く憶えてる。というか忘れられない。

でも名前の方はうる覚えだから、間違ってたら恥ずかしいなあ。けどそんな心配は無用だったようで「よくご存じで」って笑ってくれた。

「超広域絶対氷結殲滅真技。プスイフロス・エヴィエニス区ヨノスイエラ・カタストロフィ氷葬大結界・真百花繚乱。」

アンストールの中で、この真技に真っ向から受けに行けるのは、フノスとルシル、ステアくらい。

だから使わない。使いたくない。というわけで、この戦いは、貴女とルシルの勝ち」

シエフィリスさんは“ガンバンテイン”を魔力に戻して霧散させた。武装解除。本当の本当にこれで決着みたいだ。

「話が終わったならこの結界を早く解除してくれ、シエフィ！」



そう声がして、また空へと視線を戻す。と、ルシルが何も無い宙に四つん這いになって、宙をドンドン叩いていた。何をやっているんだろう？ 結界だとか言っているけど。

シエフィリスさんをもう一度見る。すると「忘れてた」って舌をペロツと出した。

「術式解除つと」

指をパチンと鳴らすと、空がひび割れて、パキイーンと割れた。本当に結界があつた。あーそうか。ルシルとリーヴスラシルの戦闘に気付かなかつた理由が、今の結界なんだ。

「今のはね、天上隔離結界と言っただけ。術式名の通り、空を隔離する結界。

大戦時、空からの奇襲にも備えないといけなかったから、この結界で、野営地と空を隔離したってわけ。

結界を通り抜けられる魔術は、術者である私と、私が許可した魔術師だけ。

だから空からの奇襲は成功しない。で、結界があると知らずに攻撃したら、私に報せが入る。

だから味方を動員して地上から一斉砲火してカウンターすることが出来たりするんだ」

ということらしい。それだけじゃなくて、その都度その都度で別の効果を付加できるみたい。

「はあ、早く気付いてほしかったな」

「ごめんね、ルシル。フェイトさんとお喋りしてたらすっかり忘れちゃった。

ね、フェイトさん？ 女同士の話と戦い、かなり楽しかったよね」

「え、あ、はい」

いきなり話を振られたからビックリした。この反応で変に思われな  
いかな・・・？

シエフィリスさんにそう言われたルシルは「まあ男がいなければ気  
兼ねなく話せることもあるか」って納得済み。

あはは、やっぱりシエフィリスさんの話なら真っ正直に信じちゃう  
んだ。

いやいや。実際に楽しかったから（ドキドキした）嘘じゃないけど、  
シエフィリスさんの言ってることは。

「それじゃ氷結を解いて、二人にはゴールをしてもらおうか」

+++++Sideフェイト ルシル+++++

三人で地上へと降り、ヘイムダル門を囲う壁に設けられた扉へ向か  
う。

凍りついた扉の前へ着き、シエフィー一人が扉へ近づいて行く。

扉へと両掌を翳し、「術式解除」と告げる。それに呼応して解凍さ  
れていく扉。

シエフィはそのまま扉へ両手をつき、ゆっくりと扉を開けていく。

「さあどうぞ。ルシル。フェイトさん。この先に在る転移門へイム  
ダルを潜れば、お題クリアよ」

ホテルマンのような仕草で私とフェイトを招き入れるシエフィ。

「行くうか、フェイト」

「うん。ルシル」

最後にシエフィに別れを告げようとしたところでそれは起きた。

「「「っ!?!?」「」」

地震だ。しかもかなり激しい。カーネルの真技ほどではないが、だが強い。

倒れ込みそうになったフェイトとシエフィの肩を抱いて支えてやる。という私ももう立っていられない。だからゆっくりと二人を座らせることに専念。

しばらく地震は続き、収まったところでさらに異変。

「空が割れる!?!?」

フェイトが空を見上げて叫ぶ。フェイトの言う通り空が割れ始めていた。

結界が砕けたような生易しいものじゃない。このスンベルと言う世界自体が割れているような感じだ。

そこにシエフィが「そんな嘘っ!?!?」といきなり声を張り上げた。

驚く私とフェイトに、シエフィは小さく「ごめん」と謝った。

何かしらのアクシデントが起きたのは間違いない。そしてそのアクシデントを私は目の当たりにした。

「そうか……。お前が次元世界に現れたからこそ私とグロリアと言う守護神が召喚されたのか……。!?!?」

割れた空より顔を覗かせるソレ。見間違うはずもないソイツに、私は悪態をつく。

私の言葉を聞いたフェイトが「アレって、やっぱりアポリュオンなの？」と訊いてきた。

答えはもちろんイエス。“絶対殲滅対象”<sup>アポリュオン</sup>はナンバー??：永遠アエテルニタス。

「おいおい。テストメント・ルシリオンとグロリアは何をやってるんだ・・・？」

? ? ? ? ? ?

### ミッドチルダ軌道上

第一世界ミッドチルダと二つの月の間、無限に広がる宇宙空間。

その宇宙空間に展開されている現実と隔絶する結界内、そこには三つの人影があつた。

フード付きの外套<sup>マント</sup>と神父服<sup>キャソック</sup>と目や鼻や口の穴が開いていない仮面は全て漆黒。

左手に2m近い漆黒のケルト十字型の錫杖を持っている。

黒き第四の座に座する、天秤の狭間で揺れし者4th・テストメント・ルシリオンだ。

「グロリア。アエテルニタスのスンベル侵入を許してしまった」

「もおつ、何やってるのルシリオン！ アタシの可愛いヴィヴィオちゃん達がいるんだからしっかりしてよっ」

「いつヴィヴィオ達がお前のものになった？」

テストメント・ルシリオンに怒鳴る女性、グロリア・ホド・アーレンヴォール。

フード付きの外套マントと神父服キャノンクと目や鼻や口の穴が開いていない仮面は全て純白。

右手に2m近い純白のバートシス十字型の錫杖を持っている。

彼女、グロリアこそが剣戟の極致に至りし者3rd・テストメント・シャルロットの後継、星狩りの覇道を歩む者3rd・テストメント・グロリアだ。

「歓談中に悪いんだけどさ、アエテルニタスが戻ってくるまでは大人しくしてよねっ」

そして最後の一人。身長が140cmあるかないかの少女がニツと口端を歪め、テストメント・ルシリオンとグロリアに指をさす。

テールアップにしている赤い髪を揺らし、黄金に輝くツリ目の双眸を妖しく光らせる。

格好は蒼いロングエプロンドレスで、白のエプロンの腰紐を留めるのは大きなリボン。

目立つ真つ赤なロリータシューズを履き、足の甲で留めるストラップには薔薇を模った装飾が付いている。

「クフフ。絶対殲滅対象風情が。いきなり出てきてさ、すっ込んでよ。」

そもそも私のヴィヴィオちゃん達には指一本触れさせないつつの

「いやだから、ヴィヴィオ達はいつお前のものになったんだ？」

「うっさい喋んな！ ふんっ。その余裕もすぐに消してやるんだから。」

あんたたち天秤と星狩りはこのあたし、ユースティティア霊長の審判者がナンバー？  
始原プリンキピウムが粛清するんだから！！」

「上等！！」

テストメント・ルシリオンとグロリアは顔を覆う仮面を取り放り捨て、各々が持つ錫杖を構え直した。

ようこそ ロキのロキによるお客様のための遊戯城へくくくく（後書き）

レヴィ

「オー、今回も始まったレヴィルールのコーナー」

ルーテシア

「残すところあと一話みたい」

レヴィ

「うげ、もう!? わたし、あんまり活躍できなかったのにつ」

ルーテシア

「まあまあ落ち着いて」

レヴィ

「落ち着いていられないよ！ 完結編って、わたし出ないんだよ!? 次の最終話でわたしという存在が読者のみんなにどれだけ印象を残すか。

つまり、わたしがどれだけ出るかに懸かってるんだよ。わたしの存在意義!!!」

ルーテシア

「あ、そう言えばそうか。わたしはまあ出る予定があるらしいから別に気にしないかな」

レヴィ

「う、うつつ、うつつ、裏切り者おおーッッッ!」

ルーテシア

「ちよっ、レヴィー!? うわっ、速い!  
……えっ、ではまた次回。最終話でお会いしま  
しょー」



輝ける未来への道標〜Hopeful Future〜(前書き)

Happy New Year!! あけましておめでとうござい  
ます!

笑ってはいけなを見ていて、気付いたら年が開けてました(毎年  
そう)。

まず年内に終わらせることが出来なかった事について謝罪します。  
すいませんでした!

そして、完結編を開始できなかったことも謝ります。ごめんなさい  
でした!

今月中に必ず一話目を投稿する所存です!! ですのでもうしばらく  
お待ちください。

11th・アポリュオン・アエテルニタス戦BGM

魔法少女リリカルなのはA's THE GEARS OF DE  
STINY『ラストバトル』

## 輝ける未来への道標〜Hopeful Future〜

+++++Sideなのは+++++

フノスさんの治療術式コード・エイル（正確にはルシル君の術式か）で回復された私達。

「えっと、まずはすいませんでした。思ったように力加減が出来ませんでした」

円陣を組んで座ってフェイトちゃんとルシル君がゴールするのを待っているなか、私の隣に座るフノスさん（みんな、緊張するから隣は遠慮したいです、とか言って）が申し訳なさそうに謝った。

どひいーっ！ 心臓に悪過ぎる！ 王様が、超絶に偉い王様が謝っちゃってます！

「い、いえ。お気になさらずに。私達の修行不足が原因ですから。ね？ みんな」

みんなに同意を求める。フノスさんは言っていた。魔力出力を1割にしていた、って。

それであのデタラメな威力。ああやっぱり強かった。というか次元が違い過ぎる。

判ってはいた事だけど。あれ程までに速攻で墜とされるといっそ清々しいかも。

「そうやなあ。最初からフノスさんに勝てへん思ってたけど、もう少し粘れるとも思ってた。」

それが出来へんかったのは、単純な話、私らの力不足ゆうことやな」

「だからもつと強くなって、負けないようになんないと」

「そうね。守りたいものをしっかりと守れるように」

はやてちゃんの賛同を皮切りに、みんながそれぞれ思い思いに言うていく。

一通り黙って聞いていたフノスさんが「よかった。ラグナロクから世界を守れて」と微笑を浮かべた。

みんなは口を噤み、ニコニコと笑みを浮かべるフノスさんへ視線を向ける。

私達の視線が自分に集まった事に気付いたフノスさんは「あ」と漏らし、

「そのですね。思い上がりかもしれませんが、私とルシルがラグナロクを食い止めたことで、今こうして皆さんが伸びやかに魔道の鍛錬を行えるような世界があるとすれば、食い止めた本人としては嬉しいなあ、と」

そんな考えを持ってしまったことが恥だというように頬を朱に染めた。

思い上がりだなんてこと絶対はない。その通りだ。フノスさんとルシル君のおかげで、今の生命溢れる次元世界があるんだ。

そう思うと、やっぱりフノスさんには畏敬の念しかない。ルシル君は・・・その、ね。

もう友達としての時間が長すぎるせいで畏敬はちょっと。でも尊敬はしてる。

「御謙遜を。あなたとルシリオンのおかげで今の次元世界があるのです。」

私達、現代を生きる者達にとって、次元世界を創りだしたあなたとルシリオンは、世界の母と父同然とも言えるでしょう」

リエイスさんがそれはもう大仰な事を言っちゃった。

ラグナロクが元は一つだった次元を数千以上に分断して、次元世界の大元を創りだした。

で、ルシル君とフノスさんが協力してラグナロクを撃破、封印。

その最中に次元世界という新しいシステムが崩壊しないように、フノスさんは空間干渉能力、ルシル君も複製・空間干渉能力を使い、次元世界を確立させた。

それが、単一次元世界の終焉、複数次元世界の誕生、即ち再誕の真実だ。

あ、リエイスさんの言ってる事、大仰でも何でもなく紛れもない事実だ。

父と母のくだりは意味解んないけど。

「私とルシルが夫婦ですかっ!?!」

っとフノスさんが怪しいリアクションをしましたよ。

一気に耳まで赤くなつて挙動不審になる。この反応、フェイトちゃんがよくやるやつ。

好きな人との事で何かしらのからかいを受けた時とか。

それからフノスさんは訊いてもいないのに、本当ならルシル君と結婚するのが自分だったとか、でもシエフィリスさんを恨んでないとか、祝福してたとか、けどルシル君への想いを完全に断ち切れなかったとか……。

途中で割り込めるような様子じゃなかったから、私達は啞然とした

まま聞くしかなく……。

「ですから……ハッ。すみません！ まったくもって関係ない話を長々と！」

フノスさんって、面白い。記憶の中では凄い魔術師だったのに。なんだっけ？ ウリベルトっていう魔族さんとの戦闘は、まさに神話とかに相応しい激戦だったし。

あ、でもルシル君の記憶に初めて登場した時、何も無いところで転んでたっけ。

ルシル君も、ドジ神に愛された、とか言ってたし。天然さんなんだね。

色々と暴露しちゃったことでそれはもううるたえ始めたフノスさんを何とか落ち着かせ、

「恥ずかしいところをお見せしてしまい、すみませんでした」

一度シーンと静まり返ったところに、リオちゃんがおずおずと挙手。アインハルトちゃんとコロナちゃんも何か訊きたそうな子してる。私達がどうしたのかを訊く前に、フノスさんが「どうしました？」と微笑を浮かべて優しく尋ねる。リオちゃんは少し言い淀んだ後、

「さっきの話なんですけど……次元世界を創ったって一体どういう……？」

次元世界って、ラグナロクによって生まれたんじゃない……？」

あれ？ その質問……。あ、そう言えばさっきは言ってなかったっけ。

さっきはルシル君の正体や大戦、魔術、ラグナロク、次元世界誕生

のきっかけなどの説明はした。  
でも次元世界誕生の詳細は省いてた。当然さっきの会話の内容は気になるよね。

もう一度ちゃんと事情を知るみんなでアインハルトちゃん達に次元世界誕生の事を詳しく説明する。

「ルシリオンお父様もフノス様も、そんなにすごい方だったので  
ね・・・！」

「じ、次元世界をたつた二人で確立させたなんて・・・。昔の魔導師って、うっん、魔術師ってそんなにすごい事が出来たんですか！？」

「コロナさん、でしたか。いいえ、誰も出来るわけではないのです。

生まれ持った固有能力・・・ええと、現代にも似たようなモノがあったりしますか・・・？」

フノスさんが私達にそう尋ね、はやてちゃんが「レアスキルや固有技能などが近いかと思えます」と答える。

アインハルトちゃん達はフノスさんとはやてちゃんのそのやり取りに頷いて、理解を示した。

「私とルシルが固有能力・空間干渉能力を使えたからこそ出来た事なんです。

あ、空間干渉能力とは、そのままの意味で、空間を操ることの出来る能力の事です。

それですね、能力を使ったからと言って上手くいくかどうかは自信はありませんでした。

世界を確立させる。それは、人間が起こすには行き過ぎた奇跡。

ですけどやらねばなりませんでした。無限とも言える生命を救うには、それしかありませんでしたから」

フノスさんは両手を重ねて胸に当て、当時の事を思い出しているのか俯いてしまう。

フノスさんは世界を救った。その代償として、ただでさえ短命とされていたその命を使い果たしてしまった。

大戦終結から一年後、フノスさんは天に旅立った。ルシル君は言った。

これから起きる墮天使戦争を知らずに逝けたのは幸せだった

ようやく真実を知ったアインハルトちゃん達も俯き、何か思う事があるのか沈黙。

私達も何も言わず、ただ空を見上げたり、遠くを見詰めたりとする事に。

でもそんな静かな時間はすぐに終わりも告げた。地震だ。ヴィヴィ才達が悲鳴を上げる。

「大きいっ！」

「これ、もしかしてカーネルさんが起こしてるの……!？」

「いいえ！ これは地震ではありません！ 空間そのものに震動が・

・

え？・・・なに？・・・スンベルに・・・侵入者!？」

座っているのも辛いほどに揺らいている中、フノスさんは具現させた“グラム”を支えに立ち上がる。

それにしても気になる単語。スンベルに侵入者。十中八九、“アポ

リュオン”だ。

私達がフノスさんを見上げる中、フノスさんは静かに「魔力出力50%解放・・・！」と告げた。

その瞬間、私達は見た。50%とは言え、本気になったフノスさんの神々しい姿を。

コバルトブルーの綺麗な瞳が微かに輝いて、全身を包む虹色の魔力をドレスのようにして纏ったフノスさんが、

「空間干渉・・・ドライブ・・・！」

そう一言告げると、すぐに揺れが弱くなった。

それから数秒とせずに完全に揺れが収まって、私達はゆっくりと立ち上がる。

「フノスさん。今の、侵入者と言うのは・・・？」

「あ、はい。どうやら外界で問題が発生したようで。どうやらテストメント・ルシリオンとテストメント・グロリアが敵の侵入を防げなかったようですな」

そう尋ねると、フノスさんは申し訳なさそうに答えた。

敵。それが“アポリュオン”で、守護神のルシル君とグロリアが二人がかりでも侵入を拒めなかったのなら、かなり危険な存在なんじゃない・・・。

“アポリュオン”の事を知っている私は、はやてちゃん達も顔が青くなる。

「ルシルからある程度話を聞いているかもしれませんが、テストメント・ルシリオンは敵から皆さんをお守りするために、このスンベルに皆さんの精神を取り込ませたのです。」



敵、アポリュオンのアエテルニタスというらしいのですが、そのアエテルニタスの狙いは、テルミナスと出遭い、尚且つ戦闘をした皆さんの魂と精神。

魂と精神を内包した肉体自体を取り込めることが出来ればよかったです。スンベルにはそれほど力がありませんから、取り込める精神だけ、というのが現状です」

ここで、あれ？って思うところが一つあった。

私でもそうなんだから、本人達はもつと、あれ？だろう。

「あの、すみません。私、テルミナスという方のことを知らないのですが・・・」

アインハルトちゃんが代表して小さく挙手。コロナちゃん達も「わたしもです」と続く。

そう、アインハルトちゃんとコロナちゃんとりオちゃん、それにイクスちゃん。

あとヴィヴィオとルーテシアもレヴィも、テルミナスとは戦ってない。

アインハルトちゃん達に関してはテルミナスに遭ってすらいない。

「そうなのですか？ それは申し訳ないことを」

「あ、いえ。ただ何ででしょう？と思っただけです」

アインハルトちゃんとフノスさんのお辞儀合戦が始まった。というところで、空が割れた。

境界が割れたようなものじゃなくて、このスンベルって言う世界自体が割れているような感じ。

青空が割れて開いた穴の向こうに広がるのは夜空。

流星群のような幾条もの光が色んな軌道で流れていて、こんな状況じゃなかったら見惚れるほどに綺麗。

でもそんな綺麗な景色をぶち壊す様にソレは現れた。夜空の穴から出てきたソレを見たみんなが一斉に息を呑む。

「アイツが、アエテルニタスって奴か・・・！？」

「アポリュオンとは人型だけではないのだな」

アエテルニタスを見て、ヴィータちゃんとシグナムさんが引いてる。と言いか私も含めて全員が引いてる。フノスさんですら「おお」と及び腰。

アエテルニタスの姿を簡潔に説明するとすれば・・・人の頭がい骨の集合体。

先端には額から三本の角を生やした巨大ドクロがあつて、普通なら首の骨が伸びているはずところからブドウのように無数の小型（それでも1mくらい）のドクロが連なっている。

ドクロだけで構成された蛇、もしくは龍。それがアエテルニタスだった。

『ようやく4thの結界を抜けたか。しかしプリンキピウムの助力でやっとは』

頭の中に直接聞こえてきた男の人の声。誰のものかはすぐに判った。こちらに空洞の目を向けているアエテルニタスの声だ。

4th。守護神のルシル君のことだ。それに、プリンキピウムの助力。

“アポリュオン”は二体居たんだ。

『見つけたぞ人間ども。さあ我を崇めよ、我を称えよ、我を愛せよ、

我を敬え。

汝を呪え、汝を恨め、汝を憎め、汝を悲しめ。その果てに我に許しを請え。

しかし我は貴様ら人類を審判し、肅清し、断罪し、殲滅し、蹂躪し、駆逐し、消滅しよう。

その目に焼き付けよ、その耳に轟かせ、その下らぬ魂に刻め。

我は霊長の審判者ユースティティアが??、永遠アエテルニタス也』

V S ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

其はアポリュオンが永遠アエテルニタス

?? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? VS

そんなめちやくちな・・・どこまで人を嫌って、自分が好きなの？

あ、でもシャルちゃんが言ってたっけ。“アポリュオン”は、人間に絶望して堕ちた元守護神か、人間の罪によって滅んだ世界の元“界律”の化身かのどっちかって。

どっちにしても恨まれても仕方ないってことか。

そんな時、フノスさんが私達を庇うように前に躍り出て、“グラム”の剣先をアエテルニタスに向けた。

「皆さんは下がってください。ここは我々アンズールが引き受けます」

フノスさんがそう告げた。すると、フノスさんの周りに白い光がいくつも溢れる。

転送されてくる。誰が？ 決まってる。さっきフノスさんが言った。光が治まる。そこにはやっぱり・・・アンズールのメンバーの姿が。

「魔道王に呼ばれ、アンスールが白焰の花嫁ステア、只今参上  
と」

純白の炎で出来たウエディングドレスを着たステアさんがピースサ  
イン。

左手には、白い炎が纏っている黄金の穂を持つ三叉槍“シンマラ”。

「同じく。アンスールが風迅王イヴィリシリア、フノス王の命によ  
り推参しました」

イヴィリシリアさんは、ルシル君の“グングニル”やフノスさんの  
“グラム”と同じクリスタルのような刀身を持つ剣を胸の前で掲げ  
た。

「アンスール・戦場の妖精が拳帝シエル、登場っ！」

シエルさんが右拳を高々と上げて名乗りを上げた。

「アンスール・戦場の妖精が殲滅姫カノン、参上です」

カノンさんはお辞儀して、両手に黄金の銃“オルトリンデとグリム  
ゲルテ”を携えた。

「お、同じくっ。アンスール・戦場の妖精が結界王アリス、参上し  
ましたっ！」

アリスちゃ コホン、アリスさんが何度もお辞儀する。

だってアリスさんって呼ぶより、ちゃん付けの方がしっくりきちゃ  
う。

シエルさんも、シエルちゃんの方がしっくりきそうなんだけど。まあいいや。

カノンさんは、その・・・さん付けがしっくりくる。だって纏う雰囲気大人っぽいし。

「アンスールが呪侵大使フォルテシア。颯爽呪い殺しに来ました」

こっわっ！ 無表情でさらりと言うから余計に。

フォルテシアさん。さすが呪いで相手を侵して、あの世へ連れて逝く冥府の大使。

そして左手には柄の上下に刃がある大鎌“レギンレイヴ”。

「アンスール、雷皇ジークヘルグ。フノス王の命により推参」

ジークヘルグさんは柄の短い黄金の槌“ミヨルニル”を両手で持つて胸の前に掲げる。

「やっと戻って来れたぜ。アンスールが地帝カーネル、華麗に降臨」

カーネルさんは雷のようなジグザグの刀身を持つ剣“フロツティ”を肩に担ぐ。

「まったく。あつと、アンスールが冥祭司プレンセレリウス。ようやく登場」

プレンセレリウスさんは最初うな垂れていて、でもすぐに背を伸ばして名乗りを上げた。

そして右手には、はやてちゃんの“シュベルトクロイツ”のような杖、じゃなくて槍を持つてる。

そして最後にフノスさんが“グラム”を胸の前で掲げて、

「アンスールが魔道王フノス。ルシルの大切なお友達は必ずお守りします」

『フフフ、ハハハハツ。人間ですらない幻想如きが、我を相手に戦えるとても？

図に乗るな。戦いにすらならぬわ。早々に消え去るがいい』

アンスールの登場に、アエテルニタスは笑い声を上げた。

頭に直接入ってくる念話だから、これがもう不愉快極まりない。

だけどフノスさん達は怒りを一切見せない。それどころか余裕の笑み。

アエテルニタスの言う通り、フノスさん達アンスールは幻だ。

ただでさえ強大な“アポリュオン”。その一体を相手に戦いが成立するなんて……。

不安になっていたところに、空から何か降って来て、アエテルニタスの前に勢いよく落ちた。

それは……

「解ってないなあ。正しく頭の中が空っぽってわけだ。ドクロなだけに」

ルシル君のお姉さんのゼフィランサスさんだった。

肩に掛かった銀の長髪を後ろに払って、両手を腰に当てて仁王立ち、アエテルニタスを貶す言葉を吐く。

何とうかすごい女性ひとだなあ、ゼフィランサスさんって。さすがルシル君のお姉さん。

とうかシャルちゃんを彷彿させる。どちらかと言えばシャルちゃんんが似てる、なんだけど。

『その目と髪……、4thの肉親か？ だとすれば私の精神を逆撫でするその言動にも得心が行く』

「あらそう。あなたは弟の世話になっているわけか。それなら弟に感謝しなさいよ」

『たわけがっ。この永遠たる我が、元人間の界律にんぎょうの守護神の世話になるものかっ』

「私の愛しい弟が人形だ？ ほざくなドクロがっ。ハッ、何が永遠よ。」

すでにデッドエンドの成れ果てのドクロのクセにさ。笑わせるわっ  
「！」

『どこまで我を虚仮にするか、幻如きがっ！ とつとと失せよ！』

「失せるのはそっちよっ。それとも強制的にご退場させられたいわけっ？」

『なにい？ いや、良い事を思い付いた。先代終極と戦ったという人間どもの精神を喰らうのは後回しだ。』

まずは貴様ら、人間の下らぬ記憶の残滓たる幻影を滅ぼし尽くし、破片となった貴様たちを4thの前に突き出してやるっ』

「上等よっ。幻だからって舐めてると消し飛ぶぞッ、ドクロッ！」

完全に置いてけぼりを食らってる私達やアンスールのみんなは、ただキレてるゼフィランサスさんとアエテルニタスの会話を聞くしかなくて。

というか本当にすごいんですけどゼフィランサスさん。一歩も引い

てない。

最後に、中指を立てたゼフィランサスさんが踵を返してこちらに向き直る。

フノスさん達アンスールのメンバーの顔を見回して、「アンスール全メンバーの制限の全解放許可を、スンベルマスターへ申請」と口にした。

それから数秒とせず、ゼフィランサスさんがニヤって口端を歪めた。

「……………全解放許可を確認。それじゃあみんな。見せてあげよう。」

人類最強と謳われたあなた達アンスールの魔道を、あの分からず屋に……………！」

ゼフィランサスさんの宣言に、アンスールのみんなが「了解!!！」と応じる。

その一言を言った直後、ものすごい魔力流が発生した。あまりの衝撃波に、私達は後退せざるを得ない。

「す、すごい……………！これが、アンスールの本当の力なのですね……………！」

「ア、アインハルトさん！それより体を固定しないと危ないですよっ—！」

「そういうヴィヴィオも危ないって—！」

「あわわっ、踏ん張っても飛ばされちゃうよ……………！」

「み、みなさん！しゃがんだ方が良いかと……………！」



ヴィヴィオ達がスカートを押さえて、必死に飛ばされないようにしてた。

私はすぐに「ヴィヴィオ！ コロナちゃん！」って一番近かったこともあり、

「なのはさんっ。コロナはあたしがっ！」

私はヴィヴィオを、スバルがコロナちゃんの肩を抱いて支える。

「シグナム、シャル、リエイス！」

「……はいっ！」「」

はやてちゃんに名前を呼ばれたシグナムさんとシャル先生とリエイスさんが、リオちゃんとアインハルトちゃんとイクスちゃんを背後から支えた。

その五人より小さなリンとアギトは、すでにはやてちゃんが支えている。

「って、うわあっ？ キャロ!?」

「ええっ!? キャロ、軽過ぎだよっ！」

キャロが飛ばされそうになって、慌てたエリオとルーテシアがそれぞれ手を取って戻し、レヴィが抱き止めて支えた。

私達のちよっとしたアクシデントに気付いたステアさんが「うわあごめんっ！」って謝って、

「ちよっとみんなっ。すぐに魔力制御して放出停止！」

そう言ってくれた事で、アンスールの魔力放出が治まった。  
みんな、ほっ、と安堵。魔力放出で人が飛びそうになるなんて思い  
もしなかった。

『貴様らの下らぬ茶番に付き合っている暇はない。早々に滅してく  
れるわっ！』

Linguisque animisque favete /  
汝らは言葉と心において沈黙せよ

アエテルニタスの頭部にある三本の角の先が深紫色に光って、三条  
の砲撃を放ってきた。  
それを迎え撃つのは、

「天壤滅する……原初の劫火！」  
レーヴァ ティン

火炎を纏わせた“レヴァンティン”を振り下ろして、火炎の剣状砲  
撃を放つセシリスさんと、

「エミツスリオーネ・コツレンテ・エレットリカ！」

バレーボール大の雷球を創りだして“ミョルニル”で打って、雷撃  
の砲撃として放ったジークヘルグさんと、

「オプスキュリテ・エミスイオン  
復讐者の凶煌閃……！」

“レギンレイヴ”を前面で高速回転させて、周囲から溢れ出てきた  
闇を柄の中央へ集束。

私のブレイカー並に大きくなった紫色の闇が……放たれて砲撃と  
なった。

アンスール三人による全力砲撃。放たれた時に生まれた衝撃波が凄まじ過ぎるよ……!

アエテルニタスの砲撃と衝突。セシリスさん達とアエテルニタスとの間で拮抗。

そこに、

「<sup>セラフィック</sup>熾天聖の……<sup>セイバ</sup>剣閃アアー……ツツ!!」

フノスさんが振り上げていた“グラム”を振り下ろして、虹色に輝く火炎剣状砲撃が放たれた。

セラフィック・セイバって言う名前の火炎砲撃が一直線にアエテルニタスに突き進んで、

『ぐおっ!?!』

直撃。アエテルニタスが苦悶の声を漏らしてよろけた。

攻撃が効いた! アエテルニタスも『馬鹿な!?!』って驚いているし。

「解った? 私達は既にテストメントの加護を受けているから、攻撃を通すことが出来るし、防ぐことも出来るというわけ」

ゼフィランサスさんが得意げに告げた。

++++Sideなのは フェイト++++

雷に炎に闇。最後に虹色の炎。

フノスさん達がアエテルニタスと攻撃を交えているのが判る。

まさか戦っているの！？ だって相手は“アポリュオン”なのに。

「ルシル！ ゼフィ様から召集命令！ アンスール全メンバーの能力を全解放して、アレを斃すって！」

シエフィリスさんがルシルに振り向いて、ルシルが「私もか・・・？」と尋ねる。

アンスールの全メンバー、ということはルシルも入るんだよね・・・？

あれ？ でも・・・外界に居る守護神のルシルやグロリアは・・・？

「当たり前！ 外のルシリオン達は別のアポリュオンと戦ってるみたいなの！」

だから自分達でアエテルニタスを斃すんだって言うてて！」

「そうか・・・判った。フノスが居れば何とかかなると思うが。」

フェイト、私は行かないといけないんだが。君はどうする？」

「決まってるよ。一緒に行く。なのは達もその場に居るだろうし合流しないと」

なのは達との合流のためって言ったけど、本音はルシルとシエフィリスさんの二人だけを行かせて、私ひとりが見送る側なんて嫌だったから。

ルシルは「よしっ。じゃあ行こう」って微笑んでくれた。そしてシエフィリスさんは、

「決まりだね。というか、フェイトさんが行かない、って言っても連れていくつもりだったけどね」

笑顔で右手を差し出してくれた。その手を取って握る。  
シエフィリスさんも優しく握り返してくれた。すごく柔らかくて温かな手。

「じゃあフェイトはなのは達と合流。私とシエフィは参戦だ」

「ええ」「うんっ」

私達は空へ上がって、アンスールと“アポリュオン”のエアテルニクスが戦う戦場へ向かった。

++++Sideフェイト ルシル++++

シエフィとフェイトって本当に仲が良くなったのだろうか・・・？

(まあ元から仲が悪いというわけじゃないが・・・)

私がリーヴスラシルと戦っている間に話をしていたようだし。いや、嬉しいんだが。私の隣で、二人が手を繋いで空を翔けていることで、ちょっととした疎外感が。

そこにシエフィが「フェイトさん。もしかしたらこれで最後になっちゃうかもだから・・・」とフェイトに話しかけた。  
フェイトは「はい」と頷き応える。

「お幸せにね。あ、皮肉とかじゃなくて、純粋な気持ちだからねっ」

「・・・はいっ」

何か照れくさい。でも、「ありがとう、シエフィ」と礼を言う。フェイトも「シエフィリスさん。ありがとうございます」と礼を言った。

それにしてもシエフィの笑顔を見るのもこれで最後かと思うと寂しいな。

とそこに「ルシル、シエフィ、聞こえてる?」というゼフィ姉様からの念話が届いた。

私とシエフィは「聞こえます」と返す。

『よしつ。そこからドクロ狙えたりできるよね?』

いきなりの問いだったが、私とシエフィは「もちろん」と答える。

10km圏内なら届く。シエフィにも超長距離砲の術式がある。と  
どうか教えたしな。

するとゼフィ姉様が「あのム力つくドクロに一発かましちやっ  
て」と何やら不機嫌な感じの声で指示してきた。

一体アエテルニタスと何があつたんだろうか。いや、アエテルニ  
タスとはとことん人間嫌いだから当然か。

永遠アエテルニタス。奴は人間の業によって滅んだ世界の“界律”  
が具現化した“絶対殲滅対象”だ。

ゆえに人間に対しては傲岸不遜。だからゼフィ姉様と衝突してい  
てもおかしくはないな。

そう思っているところに、「あ、そうそう。フェイトさん」と今度  
はゼフィに話しかけた。

『え? あ、はい、なんででしょうか?』

『なのはさん達には私たちの戦闘に巻き込まれないようにしてある  
から安心してね。』

もちろん貴女も合流次第、決して戦闘に巻き込まれないようするか

らね』

『はいっ、ありがとうございますっ！』

ゼファイ姉様との念話はそれで切れた。

なのは達の無事が確保されているなら、もう何も問題は無い。

ということと射程圏内に入る。左手に携えるは“神槍グングニル”。

シェフィは“神杖ガンバンテイン”を携え、「長距離砲かあ」と若干不安そうだ。

魔力生成・・・、お、リンカーコアでも本来の力を引き出せる。

っと「わっぷ？ ルシル、魔力流が・・・！」とフェイトがよろけてしまっていた。

「すまん」と謝り、“グングニル”の上下にある二つの穂に集束させる。

「このままいくぞ、シェフィ」

「ん、了解」

私は槍投げ選手のように“グングニル”を振りかぶり、シェフィは“ガンバンテイン”を両手でしっかりと掴み、先端をアエテルニタスへ向ける。

フェイトは少し速度を落とし後退。いい判断だ。並列飛行のままであればもろに衝撃を受けるからな。

「エクリプスイ天射・・・！」

“ガンバンテイン”の先端より高水圧の特大水流砲撃が放たれる。水流砲撃の周囲を別の水流が螺旋を描き纏わりついて、軌道を逸らさないようにしている。

数秒とせずアエテルニタスに直撃、よろけるのを確認。だがこれで終わりじゃない。

「カルディア矛砲ッ！」

未だに続く水流砲撃が一気に氷結していく。

水浸しになっているアエテルニタスもまた然り。直撃した尾の方から胴体へと凍りついていく。

水の砲撃で濡らした後、一気に氷結する。それがシエフィの水流・氷結の砲撃だ。

「往けッ、グングニルッ！！」

間髪いれずに“グングニル”を投擲。放った以上は必中。

氷結されようと回避しようとするアエテルニタスだが、私の“グングニル”からはもう逃れられない。

遠目で見ても判る。“グングニル”はアエテルニタスの尾を貫き、粉碎した。

「やったねルシル」

「頭をカチ割るつもりで放ったんだがな」

一応シエフィが掲げてみせたハイツチに応え、二人して頷く。

そして共にフェイトへと手を差し出す。「え？」と漏らすフェイトだったが、手を引つ込めない私とシエフィを交互に見、パシンとハイツチに応えた。

『さっすが私の弟だよ。アエテルニタスが驚いたり怒ったりと面白いよっ』



ゼフィ姉様からの喜色いつぱいの念話。

期待に添えることが出来たようだなによりだ。

それから間もなくゼフィ姉様と合流することが出来た。

フェイトも「それじゃあ頑張っつてね。ルシル、シエフィリスさん」

となのは達の元へ向かう。

そのなのは達は、干渉防御結界の中だ。外界に居る私かグロリアのどちらかが展開しているんだろう。

あれなら戦闘に巻き込まれることはまずないだろう。

そして私はアンスールのみんなと会話することなく、頷き合つこと意思疎通。

それで十分だ。

「オリジナルでない故に久しぶりと言っておこうか、アエテルニタス」

『下らぬ。オリジナルであろうが何だろうが貴様が4thである事に変わらない』

P o t e n t i a   s a n a t / 力は療す

“グングニル”に貫かれた尾が再生していく。

やはり一撃で核を潰さないといけないか。にしてもいつ見ても永遠の姿は変わらないな。

人の成れの果てである頭蓋骨で体を構成するその悪趣味さ。いい加減にしてもらいたいものだ。

「ほら、ルシル、シエフィ。アンスールみんなは名乗りを上げたから、二人も名乗って」

ゼファイ姉様に背をポンと叩かれ、シェファイと二人して微笑。

「アンスールが神器王ルシリオン・セインテスト・・・アースガルド」

「・・・アンスールが冰雪姫シェフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム」

フォン・シュゼルヴァロードかアースガルドかで迷ってしまった。しかしこの場ではアースガルドを名乗ろう。

アエテルニタスは『名乗る必要など無い。早々に消えるのだからなッ!』と吼える。

Omnia vanitas / すべては空虚である

空洞の目から滴り落ちる赤黒い液体。それはまるで血液。というか血液だ。

食らった人間から搾取した血液。奴のどこに溜まっているのかは判らないがな。

血液はバシャバシャと地面に落ち、大きな血溜まりを形成していく。そして血溜まりから生まれ出る頭部の無い骸骨兵の群れ。

『さあ往け、愚者どもよ』

アエテルニタスの号令が掛かると同時に襲いかかってきた。

馬鹿なことを。“テストメント界律の守護神”の加護を受けている以上、どれだけ戦力を出そうがアンスールに意味はない。

アンスールの先槍たるシエルとイヴ義姉様、それにセシリスとジークが呐喊していく。

私達は待機。様子見と言ったところだ。アエテルニタス本体が動け

ば迎撃すればいい。

「蹴散らしてやるっ!!」

フェアリー・バイト

圧壊拳

シエルは四肢に重力を纏って、迫りくる骸骨兵に拳打と蹴打を打ち込んで粉碎していく。

シエルに続いて走っていったジークが立ち止まり、シエルの通った道の左右に分かれた骸骨兵へと、

「突っ込み過ぎないようにしてくださいねシエル・・・!」

アツサルト・ステツラ・コルポ・ダルマータ

創りだした雷塊を“ミヨルニル”で打ち、無数の雷弾として放つ。次々と掃除されていく骸骨兵。私とシエフィが来なくても十分だよね、間違いなく。

「セシリス、一気に行くわよっ!」

「了解っ!」

ジークの後方で骸骨兵を掃除していたイヴ義姉様とセシリスが動く。イヴ義姉様が顔の前で掲げている“神剣ホヴズ”に風を集束させていく。

その間、セシリスがイヴ義姉様に襲いかかってくいく骸骨兵を蹴散らしていく。

いつ見ても良いコンビだな。

「セシリス！」

「いつでも！」

イヴ義姉様は一度“ホヴズ”の剣先を降ろし、すぐさま一気に振り上げる。

“ホヴズ”の刀身に纏わりついていた風が蜘蛛の巣のように周囲へ伸びていき、アエテルニタスを囲う風の檻と化す。

イヴ義姉様の真技、天地刃巻・天壤裂破だ。本来、天壤に張り巡らせた風の檻を炸裂させ、無数の風の刃として檻の内外に居る対象を切り刻む、というものだ。

が、今回はセシリスが居る。風嵐系と炎熱系による合成真技の発動の準備が整う。

#### 空間干涉転移

シエルとジークとセシリスが消える。フノスの固有能力・空間干涉による転移だ。

私の側に転移されたシエルが「ただいまっ」と抱きついて来て、カノン「ただいま戻りました」と会釈。

私は二人の頭を撫で「お疲れ」と労う。3人の転移を確認したイヴ義姉様とセシリスが頷き合う。

「真技！」

「天地刃巻！」

「天壤焰破ッ！」

風の檻が一気に燃え、大爆発を起こし、目の前が真っ白に染まった。

ここで、様子を窺っていたアエテルニタスがようやく動きを見せた。

Nemo fortunam jure accusat / 誰も運命を正当に非難できない

アエテルニタスの頭部やら胴体を構成するドクロの穴という穴から、砲撃が放たれる。

一斉に散開する。シエルとカノンを両脇に抱え、空へと上がる。同様に空へ上がったステアが「もうサクツと終わらせちゃおうよ」と“劫火頭槍シンマラ”を頭上で振り回し、

「劫火よ、我が槍に顕現せよ……!」

ノーブリ・コンプスタオン  
劫火を顕す焰王の魔槍

純白の炎そのものと化した“シンマラ”を投擲。

“シンマラ”は一直線に進み、アエテルニタスの砲撃を蹴散らしながら胴体に着弾。

純白の爆炎がアエテルニタスを覆う。ステアが痺れを切らして馬鹿なことをする前に、

「仕方ない。アエテルニタス！ これから一気に決めに掛かる！ 覚悟しろっ!」

『おのれえええー!』

爆炎の中から飛び出してきて激昂するアエテルニタス。

テルミナスやアンジェラスに比べれば、お前など敵じゃないんだよアエテルニタス。

そう、テスタメント“界律の守護神”でなくとも守護神の干渉能力の加護があれ

ば、私たち人間でも斃せるって事なんだよッ！！  
左脇に抱えるカノンに「アレ、やってみせてくれないか？」とお願いしてみる。

カノンの返答は、「よろこんで」だった。シエルが「おおっ、アレやるんだ」とテンションを上げる。

Linguistique animistique faveite /  
汝らは言葉と心において沈黙せよ

三本の角より砲撃を放ってくるが、どれも私達には当たらない。

「サクツと、撃退。闇の中で、踊り狂え」

モウエ・ミゼリコルド  
復讐者の呪殺杭

「お？ 俺も手伝うぜフォルテ！」

エスト・ザツファイロ  
東方の蒼耀穿

上空からベルフラウ色の影の巨大杭が落ち、アエテルニタスを標本にするかのように地面に縫い留めた。

さらに地面よりサファイアの尖塔が突き出し、アエテルニタスを貫く。

だが、アエテルニタスを斃すには足りない。核を壊さない限り、延々再生を繰り返す。

「行きます。すう・・・はあ・・・。開け開け、わたしの心。開け開け、わたしの世界。

其は地を穿ち、天を穿つ星。来たれ来たれ、わたしの星。行け行け、わたしの星」

カノンの詠唱が始まる。と、アエテルニタスが顔をこちらへ向けてきた。

カノンの魔力変動に気付いたようだ。

S i b i i m p e r a r e e s t i m p e r i o r u m  
m a x i m u m / 自分を支配することは、支配のうちで最大のものである

アエテルニタスは口を開き、レンの魔術のように無数の亡霊を飛ばしてきた。

しかし残念。こちらには霊媒のプロが居る。冥府の祭司たるレンだ。レンは両腕を大きく広げ、「来いッ！ お前らの無念はオレが引き受けてやるッ！」と亡霊の群れの受け入れ体勢に入った。

亡霊の群れは誘われるがままにレンへ突撃。すべてが体内に入った。

「ああ、辛かっただろうな。だけどな、オレが救ってやる」

レンは左手を胸に添え、自分の中に入りこんだ亡霊と会話するかのよう沈黙。

『馬鹿なっ！ 幻如きが怨恨の渦を受け、正常で居るだど！？』

アエテルニタスが心底驚愕している。正直、私も驚いている。

本物のレンならば出来るだろうが、まさか今のレンに出来るとは。予想としては、ただ霊媒能力で亡霊たちを単純に従わせるのかと。

「 いざ目覚めん。いざ開かん。そして、いざ行かん。

知れ、これぞわたしの心。見よ、これぞわたしの心。聞け、わたしの心、その名は……」

カノンはそこで一度区切り、

「フェアテイルゲン・ウェルトール……穢滅領域……！」

創世結界の銘を告げた。世界が変わる。大魔術師カノンの世界へ。

++++ Sidellシル なのは++++

空に避難させられている私達は、世界が変わる様を目の当たりにした。

水晶のような大地に蒼い満月が光り輝く夜天。カノンさんの創世結界だ。

記憶の中に僅かだけでも出てきた光景。アムティスって言う巨人との決戦で使われた時だ。

この変化した世界に、「これも、魔術……!?」ってコロナちゃんが見せた。

それに答えたのはリエイス。このメンバーの中で一番魔術に詳しい。

「そうだ。創世結界と呼ばれる結界魔術で、術者がイメージした世界を創りだす、というものだ。」

複雑過ぎる術式ゆえに、発動まで漕ぎつけられた魔術師は少なく、発動出来た魔術師は例外なく大魔術師の称号を与えられる」

「イメージした世界を創りだす結界、ですか……」

「確カルシルパも持つてるよね」



「アンストール内では、ルシリオン。カノン。ステア。アリスの四人だな」

それってすごい事なんだよね。世界を創る魔術を扱える魔術師が4人も居るアンストール。

という話をしているところに、カノンさんの創世結界が真価を發揮する。

アエテルニタスの周囲に、黄金に輝くアールヴ Heim 魔法陣が無数に展開された。

カタストロフエ  
殲滅砲火

放たれる黄金の砲撃。連続、または同時にと放たれ続ける。

アエテルニタスは闇の杭やサファイアの尖塔に貫かれて動けないから、面白いほどに直撃していく。

これは・・・ちょっと酷い。たとえ動けないにしても逃げ場がない。何せ世界全体が砲門なんだから。だけど、相手が相手だった。

『煩わしいわッッ!!』

F a t a   v i a m   i n v e n i e n t / 運命は道を見出す  
だろう

アエテルニタス全体から波のように放たれる深紫色の衝撃波。

カノンさんの創世結界が崩れていって、またさっきまで居た青空の下に戻ってきた。

十十 Sideなのは   ルシル十十

カノンの創世結界の術式は弱かったか。

地面に降り立っている私達はアエテルニタスを見上げる。

するとステアが「やってくれるじゃない。だったら、わたしの創世結界を見せてあげる」と言い、二カツと歯を見せる。

あ、ダメだ。ステアが本気の全力モードに入ってしまった。

「我が内に在るは、原初より途絶えぬ紅蓮の劫火、天地焼き払いし神性の浄火。

現世を侵すは、燃え盛りし炎神の息吹、響き渡るは炎魔の咆哮。

其の心に刻み込め、我が心は、全てを焼き尽くし燃え滾らせる火炎の楽園……」

ステアは“シンマラ”を地面に突き立て、「劫火ムスベルヘイムが支配せし煉界！」と創世結界の銘を告げた。

もう一度世界が一変する。全てが紅蓮の炎。足場は少なく、立っていられる足場以外は全てが溶岩。

その溶岩の到る所から火柱が噴き上がり、大気を焼いている。

空は見えない。空にも炎が流れているからだ。

「またこの類いの結界か。先程と同じように消し飛ばしてくれるわッ！」

F a t a v i a m i n v e n i e n t / 運命は道を見出す  
だろう

カノンの創世結界を消し飛ばした衝撃波をもう一度放つ。

だが無駄だ。ステアの創世結界の術式は、カノン以上に強固。

故にアエテルニタスは「崩せないだど!？」と驚愕するしかない。

ステアが溶岩の上を走り、「当然。目醒めよ、劫火顕槍シンマラ！」

と笑い、白焰のウェディングドレスを翻しつつ“シンマラ”を解放する。  
純白の炎と化した“シンマラ”を手にアエテルニタスへ最接近し、大きく跳躍。

「真技！！」

アエテルニタスの角目掛けて超高速で振るわれる“シンマラ”。  
白焰の斬撃が連続で、しかも着弾点を数ミリもズレずにヒットさせる。

アエテルニタスがステアを振り払おうとするが、残念ながらここはステアの世界。

溶岩から噴き上がる火柱がバインドととなって、アエテルニタスを拘束。

ドラゴオン・ブルガトリオ  
「咬み殺す神焰！！」

最後に刺突。着弾と同時にゼロ距離炎熱砲撃。ガシャァン！と角が根元から吹き飛んだ。

同時にステアの創世結界が消える。そこにシエルが「真技」と叫び、立てた親指を下に向ける。

はしたないぞ、シエル。それはともかくとして発動するのは、

ルイン・トリガーシレス・ドライブ  
「圧戒・歪曲空間ッ」

ルイン・トリガーの強化版マーシレス・ドライブ。

超重力を掛けられたアエテルニタスが為す術なく地面に落下。

フォルテが動く。前面で“レギンレイヴ”をバトンのように高速回転させ、「真技」と放る。

“レギンレイヴ”は重力を掛けられ動けないアエテルニタスの周囲

を一周。

“レギンレイヴ”が通過したところには、影で構成された“レギンレイヴ”がいくつも見え始める。

「エグゼキューション復讐神が希うは……」

手元に戻ってきた“レギンレイヴ”をパシッと取り、もう一度放る。今度はアエテルニタスへ向かって一直線に突き進み、

「シユアール絶対なる終焉」

着弾。と同時に周囲に待機していた40近い影の“レギンレイヴ”も一斉にアエテルニタスへ。

着弾。着弾点から巨大な影の刃が天を衝くように伸び、アエテルニタスが切り刻まれる。

このまま一気に撃滅する。ジークが“ミヨルニル”を解放し、「真技」と告げる。

雷そのものと化した“ミヨルニル”を振りかぶり、

「ミヨルニル雷神放つ破滅の雷!!!」

投擲。“ミヨルニル”も、私の“グングニル”のように一度投擲すれば必ず直撃する。

それゆえに、このジークの真技は絶対に回避できない。防御に回っても、威力や神秘が強すぎて防ぎきれない。

それはアエテルニタスも同様。砲撃とも見える“ミヨルニル”は、アエテルニタスの右の角を粉碎した。

『馬鹿な……このような……ことが……』

もう見るも無残な姿。元より無残な頭蓋骨姿だが。  
アエテルニタスの胴体を構成する頭蓋骨に無傷なモノはない。  
先端の頭部ももうボロボロだ。が、

P o t e n t i a   s a n a t / 力は療す

再生されていく。私はカノンの肩に手をポンと置く。

カノンは「お任せを」と頷き、「星填砲シュヴェルトラウテ」を具現させ脇に構える。

シエルが具現された砲弾を、「シュヴェルトラウテ」の薬室の後部がスライドして出た部位に砲弾をセット、薬室に装填する。

“シュヴェルトラウテ”の銃床の末端にある排出口から蒸気が噴出する。

「真技。<sup>ヘルウォルズ</sup> 時空穿つ・・・断罪<sup>カノン</sup>の煌き!!!」

カノンはトリガーを引き、超特大砲撃を撃ち放った。

アエテルニタスの残りの左角　どころか額部分まで吹っ飛ばした。

『有り得ぬ有り得ぬ有り得ぬ有り得ぬううー！！！！！』

ここでアエテルニタスが逃亡を計った。哀れだな。

散々人間<sup>みんな</sup>を侮辱しておきながら、その人間<sup>みんな</sup>に背を向けるか。

先代も先々代もその前も、アエテルニタスは逃げるといふ選択だけはしなかった。

「結界王の名において、絶対に逃がしませんっ！」

アリスが両掌をアエテルニタスへ翳す。そして「真技」と告げる。

アエテルニタスを閉じ込める三角形の桃色の結界。  
結界をさらに結界で閉じ込め、さらに結界が結界を閉じ込める。  
最終的に、アエテルニタスを封じ込めた結界を含め、計30の結界  
が展開。

空に浮かぶ結界牢。アリスは満足げに頷き、

「イセリアル・ケイジ  
無限結界牢！」

指を鳴らしつつ告げた。アエテルニタスを閉じ込めていた第一層の  
結界牢が爆発。

だが衝撃は逃げれない。結界を結界が閉じ込めているからだ。

一層目が爆発、二層目が爆発、三層目が爆発と、連鎖的に結界牢が  
爆発していく。

爆発しても衝撃が外へ逃げないため、一層目に閉じ込められた対象  
は全ての爆発を受けることになる。

だからこそ……全30の爆発を受けたアエテルニタスが地面へ  
落下していく。

「シェフィ」

「ん。真技のスタンバイだね。起きて、ガンバンテイン」

シェフィが“ガンバンテイン”を解放し、真技のスタンバイを始め  
る。

グツと膝を折った後、一気に伸ばして跳躍。

その直後にアエテルニタスが墜落。胴体を構成するドクロが周囲に  
散らばり、周囲のドクロを取り込み胴体とし、独立して動き出す。  
そしてシェフィはアエテルニタスの上空で停止。

## 真技

真下に居るアエテルニタスへ“ガンバンテイン”の先端を向け、八方に冰雪砲撃を放つ。  
着弾したところに巨大な氷塔が生み出され、周囲を一気に氷結。八塔から中心に居るアエテルニタスへと氷結の魔力流が周囲を氷結させながら突き進む。  
そして着弾。アエテルニタスが完全氷結され、墓標のように氷の尖塔が突き立った。

フスイフロス・エヴィエニ区ヨノスイエラ・カタストロフィ  
氷葬大結界・真百花繚乱

一瞬で完成された冰雪の要塞。私たちアンスールは干渉防御の加護があるため効果を受けずに居られるが、何も無ければアエテルニタスと同じように氷漬けた。

「いつ見ても綺麗ですよね・・・」

アリスがうつとりと頬に手を添える。見る分なら綺麗だな、この幻想的な冰雪要塞。

敵からしてみれば綺麗なんて思うことなくあの世逝きだが。

シエフィが「ふう」と息を吐きながら降り立った。みんなで「お疲れ」と労い、

「それじゃ最後はルシルとフノスに決めてもらおうか」

ゼフィ姉様が背中を思いつきり叩いてきた。痛くはないが驚いた。ゼフィ姉様に入れ替わるように、カーネルが私の胸を裏拳で小突き、

「だな。行ってこいよ、ルシル。スカツとするぜ？」

「そうだな。スカツとするにはぶつけどころが必要だしな」

ジークがポンつと左肩に手を置いて、

「ええ。元よりアレはあなたの敵でしょう」

「今は関係ない、とは言えないからな」

フォルテが右袖をキュツと弱々しく引つ張り、

「ルシル。自分の不始末、しっかり後片づけ」

「了解だ。ミスしても呪うなよ？」

「………ニヤ」

怖い。フォルテ、本音を言おう。本当は、お前の呪いが一番怖いんだ。

セシリスが“レーヴァテイン”の刀身を向けて来て、私は“グングニル”の穂をカツンと当てると、

「フォルテの言う通り、しっかりと役目を果たさないといけないからね」

「ああ、任せてくれ。自分のになった役目くらい果たしてみせるさ」

セシリスは「よしっ、行っておいで」と肩を叩いて去る。

アリスはトテトテと歩み寄って来て、

「ルシル様。わたし、役に立てたでしょうか？」



なんて訊いてくるから「もちろん。さすがアリスだ」と頭を撫でてやると、ふにやっと破顔。

そこにステアが近寄って来て、腹に拳打一発打ってきやがった。

「何をするんだ、おい」と睨みつけると、ステアは私の胸にもたれ掛かり、額をトンつと当て、

「私のすごいパワーをお裾分けしたんだって。どう？」

「……ああ、効いた、色々な意味で。ありがとな」

「どういたしまして」

ステアと入れ替わるようにイヴ義姉様に来て、

「アースガルド・セインテスト王として、恥ずかしくない一撃を。ね」

「もちろん了解です、イヴ義姉様。見ていてください」

「ええ、見ておきますね」

イヴ義姉が離れたところに、レンが「よう」と片手を上げて挨拶。私も「おう」と返し、ほぼ同時に右前腕を×字になるように当て合

「おら、カツ」悪い姿見せたら承知しないぞ、ルシル

「馬鹿を言うなよ、レン。サクッと決めてくれる」

最後に右拳を突き出し合わせ、頷き合う。  
レンが離れると、カノンが私の前に立ち「あの」と言い淀む。

「カノン。カノンもありがとう。すごい活躍だった。さすが私の弟子だ」

「あつ、はいっ。ありがとうございますっ、ルシル様っ」

カノンも頭を撫でてやる。気持ちが良いのか安心しきった表情を見せる。

そこに「兄様あゝゝ？」と腰に抱きついて来るシエル。

カノンと一緒に頭を撫でる。ニコニコと笑みを崩さないが、閉じられたまぶたの端に涙が浮かんだのが見えた。

「シエル……?」

「ううん、何でもないよ。兄様、頑張ってね」

「……ああ、頑張るよ。お前達を解放して見せるから」

私は知っている。シエルとカノン、シエフィの魂が“ヴァルハラ英雄の居館”に捕らわれている事くらい。

護るためだった。なのに、実際は捕らえてしまっていて、輪廻転生させずにいる。

自分を呪った。殺したくなかった。だが出来ない。ガーデンベルグたち“エケリゴリ墮天使”を解放するという約束だ。

「っ!……うん。待つてる」

シエルが離れて、最後にシエフィが私の前に立つ。

俯いているシエフィの前髪をそつと分けて、額に軽いキスをする。  
あとでフェイトにボコボコにされるかもしれないが、どうか許してほしい。

「馬鹿。フェイトさんが見てるのに……」

「解ってる。私が馬鹿だといつくらい。それに、フェイトなら解ってくれるさ」

シエフィがもたれ掛かって来て、「ホントに馬鹿。……ありが」と呟いた。  
そう呟いてすぐに離れ、「いってらっしゃい」とフノスの前に送り出す。

「ルシル。一緒に行こう」

「そうだな。行こう、フノス。これで終わりだ」

フノスと二人で氷結されたまま動かないアエテルニタスを見上げる。  
ピシピシとヒビが入っていく様を見ると、さすがにまだ生きているようだ。

「起きて、神剣グラム」

「目醒めよ、神槍グングニル」

共に神造兵装の一位と二位を解放。

フノスは“グラム”を頭上に掲げ、刀身に虹色の魔力を纏わせる。

私は空へ上がり、右手をアエテルニタスを翳し、前方に七つの魔法陣が顕現させる。

無と風嵐のアースガルド、氷雪のニブルヘイム、炎熱のムスペルヘイム、閃光のアルヴヘイム、闇黒のスヴァルトアルヴヘイム、雷撃のニダヴェリールの魔法陣だ。それを立てて並べて展開しているため、それは連なる魔法陣による一種の砲塔だ。

「「真技!!」」

先手はフノス。“グラム”の刀身を包む虹色の輝きが伸び、巨大な光剣となる。

「アホストリック  
神徒の・・・剣閃アアーーーーッッ!!」

“グラム”を振り下ろし、虹色の巨剣はアエテルニタスを切断、そのまま前方に放出されて剣状砲撃と化す。

「グロリアス  
神断  
」

その場で反時計回り。遠心力でさらに勢いをつけるために。そして“グングニル”を魔法陣の砲塔へと投げ放つ。まずは手前のニダヴェリールの陣に穂先が当たり、陣が収縮、“グングニル”へと吸収される。続いてスヴァルトアルヴヘイムの魔法陣に当たり、“グングニル”に吸収される。という現象が続き、そして最後にアースガルドの陣を吸収し、

「エヴァンジェル  
福音ッ!!」

“グングニル”は銀の閃光となつて一気に加速、射出される。目指すは胴体が真っ二つになっているアエテルニタス。

着弾。視界いつぱいが閃光によって真っ白に染まる。閃光が治まった時、そこにはもうアエテルニタスの姿はどこにも無かった。

++++ Sidelerシル テスタメント・ルシリオン++++

『ルシリオン。アンスールってすごいんだね。ちょっと干渉能力で加勢するだけで、アエテルニタスを撃破しちゃったよ』

始原プリンピウムとの戦闘中、先にスンベルへと向かっていたグロリアからリンクが来た。

私の計画通りだ。フノス達なら、干渉能力の加護を付加させるだけで十分すぎるほどの戦力となる。

ゆえに『当たり前だ』とだけ返す。そして私の前でイライラとしているプリンキピウムが、

「あんのアホ骨っ。結局負けちゃったのかよっ！」

地団太を踏む。本当にガキだな。「あたしが行っていれば」とか言っているが、貴様が行ったところで結果は変わらない。

どちらにしてもアンスールを相手にすれば待っているのは敗北のみだ。

「残念だったな。お前達の敗北だ、プリンキピウム」

「くうう~~~~、天秤めえ・・・！憶えてるよっ、次会ったら絶対の絶対に消滅させてやるんだからっ！」

そう捨て台詞だけを残し、プリンキピウムは逃げた。  
はあ、助かった。あと少し遅れていれば、負けていたのは私だった。  
この身はもう限界に近い。いつシャルのように壊れてしまうか……。

「早く、早く墮天使<sup>エケリゴリ</sup>を救わなければ……！」

このまま“墮天使<sup>エケリゴリ</sup>”を発見できずに消滅、という結末だけは免れなければ。  
でないと……

「シエファイ、シエル、カノン。お前達の魂を救えない……！」

私が人間に戻るため、シエファイ達の魂を解放するため、私はまだ消えるわけにはいかない。

+++++Sideテストメント・ルシリオン　なのは+++++

終わった。ルシル君とフノスさんの真技によって、アエテルニタスは完全に消滅。

空へ避難させられていた私達は、私達を避難させていたゼフィランサスの意思の下にゆっくりと地上へ降ろされていく。  
少し離れたところで、ルシル君はアンスールのみんなと最後の挨拶をしていた。

私も挨拶をしたいんだけど、邪魔する事だけはしたくない。

「おーいっ……！」

そんなことを思っていたら、ゼフィランサスさんが手招きしてくれた。

私達は顔を見合わせ、ルシル君達のところへ歩を進める。

ゼフィランサスさんが一步前に出て、私達を順繰りに見た。

「アエテルニタスが妨害してきた所為でメチャクチャになったけど、でももうスンベルでのゲームも終わり。問題だった敵アエテルニタスも消えた。

外界に居たもう一体も去ったって、今連絡が来たの。だからね・・・」

そう告げられた後、私達の背後に大きな両開き扉が突然現れた。ギギギ、と扉がて前に開いた。扉の先は白い光でいっぱい。

ゼフィランサスさんが扉を指差して「その扉を潜れば、現実に戻るから」と微笑んだ。

待ち焦がれた現実へ戻る方法が目の前に。でも、こんなあっさりと終わっていいのかな・・・？

「アンスールを代表して、お別れのご挨拶をさせていただきますね」  
フノスさんが両手を胸の上で重ねて、一步踏み出した。

他のアンスールのみんなは微笑みを浮かべる。というかルシル君はこっち側だよな？

まあシエルさんとカノンさんとアリスさんに腕に抱きつかれたり、袖を掴まれたりしているから仕方ない事かもだけど。

「まず理由がどうであれ多大な迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

その中でも皆さんに少しでもお楽しみいただけていればと願うばかりです。

それでは最後に。皆さん、ありがとうございましたっ！」

フノスさんのお辞儀に続いてアンスールのみんなも「ありがとうございましたっ！」と続いた。

そして最後に「フェイトさん。ルシルのこと、よろしくね」とシエ  
ファイリスさんがフェイトちゃんに握手を求めた。

フェイトちゃんも「はいっ」と握手に応えて、ルシル君を見る。

ルシル君は照れ臭そうに「まあ上手くやっていくさ」って微笑を  
浮かべた。

私達も「楽しかったです。ありがとうございましたっ！」とお辞儀  
をした。

次に頭を上げた時、アンスールの姿はもうどこにも無かった。

「みんな、行ってしまったよ。まったく。最後まで見送ってくれて  
もいいたろうに」

ルシル君は明後日の方を向いて空を見上げていた。

ヴィヴィオが「ルシルパパ、泣いてるの？」って尋ねる。

私はヴィヴィオの肩に両手を置いて、首を横に振った。今は、そっ  
としておきたい。

フェイトちゃんがルシル君の側へ行つて、「ルシル」と名前を呼ん  
で寄り添った。

「はやてちゃん。先に行こうか・・・」

「そっやな。みんな、今はルシル君をそっとしとこな」

はやてちゃんは賛成してくれて、みんなを扉へと導く。

踵を返して出口である扉へ歩き始めた直後、『今こそ好機！』っ  
て頭の中に響く声。



「まだ生きていたのかアエテルニタス！」

出口の向こう側、アエテルニタスの頭部が地面から飛び出してきた。アエテルニタスは大きく口を開けて扉を噛み砕く。うそ、出口が無くなった!?

『奴らが居なくなるのを待っていて正解だった。当初の目的である貴様らの精神をいただく』

「くっ、グングニルが使えない・・・! みんな逃げろ！」

ルシル君が私達を庇うように戦闘に躍り出て、双銃剣“ラインゴルト・フロースヒルデ”を起動させた。

逃げろ、だなんて。そんなことが出来るわけないよっ!

私は“レイジングハート”をエクセリオンモードで起動させ、みんなもそれぞれデバイスを起動させていく。

「逃げろと言って」

「ルシルを一人置いて逃げられるわけない！」

「そっいうことや! みんなで戦えばなんとか」

『なるわけが無かるうが、たわけめっ!』

Quid enim stultius quam in certata pro certis habere, falsam pro veris? / 不確実なことを確実と見なし、誤りを真理と見なすこと以上に愚かな事があるだろうか

空洞の目に深紫色の閃光が灯る。一際強き輝き、たぶん砲撃だろう  
攻撃が来る、と覚悟した時、

「クフフ。たわけはお前だ、アエテルニタス」

どこからともなく女性の声。特徴的な笑い声。

声のした方、空を見上げてみる。と、何かが勢いよく落ちてきてい  
る……？

その何かが私達とアエテルニタスとの間に着弾。アエテルニタスの  
方にだけ向けられた衝撃波が放たれて、アエテルニタスを後方に吹  
っ飛ばした。

「白い十字架……！ あれ？ でも……あれ？」

レヴィが、その落下してきた十字架を見て驚愕。

気持ちは判る。だって私の知っている白い十字架は、横棒が垂れて  
いる葡萄十字架だ。

それなのに、今日の前にある十字架は違う。四方に伸びる棒の先端  
が三つに分かれた十字架だ。

私達を救ってくれた十字架に遅れて落ちてきた人を見て、混乱は極  
みに達した。

うそ……。その純白の外套も、純白の神父服も、全部シャルちゃ  
んが着ていたはずなのに。

なんで？ なんで別の人　グロリアが着ているの？

「クフフ。言ったよね？ ヴィヴィオ達に指一本でも触れたらぶっ  
飛ばす、って。

まったく。おお、ヴィヴィオちゃん達、大丈夫だった？ ケガとか  
してないよね？」

グロリアは心配そうにヴィヴィオやアインハルトちゃん達の元へ行く。  
その途中でルシル君とすれ違って「あなたとは、久しぶり、で良いんだっけ？」って訊いて、でも返しを聞かずにそのままヴィヴィオたち子供の前へ。

「グ、グロリアさん……！」

「クフフ。そうだよ。黙っててごめんね。改めて自己紹介。  
星狩りの覇道を歩む者3rd・テストメント・グロリアですっ」

今……確かに言った。3rd・テストメント、って……。  
じゃあシャルちゃんは？ 3rdってシャルちゃんの座していた玉座のはず。

私はルシル君へ視線を向ける。フェイトちゃん達も、混乱によって弱々しくなってる視線をルシル君へ。

『おのれ……、また我の邪魔をするか、3rd!!』

アエテルニタスが怒鳴る。グロリアが「クフフ。お前達を狩るのがアタシの仕事だってこと忘れてるわけ？」って笑う。

そして白の十字架に右手を翳すと、十字架はグロリアの手元へ戻ってきた。

キャッチした十字架をクルクル回した後、

「クフフ。プリンキピウムはすでに撤退済み。お前は見捨てられたって事。」

あとはあたしに狩られるのを待つだけ。理解してもらえた？」

祈れ祈れ、逝き先が楽園であれと。願え願え、苦無く逝けるようにと

投擲された十字架は、白い閃光の尾を引いて一直線にアエテルニタスへ。

Linguistique animistique faveite /  
汝らは言葉と心において沈黙せよ

三本の角から放たれた砲撃が途中で一つとなつて、十字架に向かつていく。

グロリアが「クフフ。無駄だつてば」って鼻で笑う。言う通り無駄だった。

十字架は砲撃を拡散させながら突き進んで……アエテルニタスを根こそぎ吹っ飛ばした。

「はい、後片づけ完了つと。あゝあ、これでヴィヴィオちゃん達ともお別れかあ、残念」

グロリアが頂垂れながらも指を鳴らすと、アエテルニタスに破壊された扉が再生される。

これで現実に戻れない、なんて心配は解決したんだけど。でも……

「グロリア。どうしてグロリアが白なの？ シャルロッテはどうしたの？」

「え？ シャルロッテって、先代3rd・テストメントだよな？ あれ？ そのルシオンに聞いてないの？ 先代は、新たな人生を始めるために解放されたんだよ、神意の玉座から」

レヴィが真つ先に疑問をぶつけて、グロリアはその疑問に答えた。私はルシル君の前まで歩いて「ルシル君。どういうこと？ シャルちゃん・・・え？ 新たな人生って何？」ってルシル君の両肩を掴む。

「セインテスト。お前は知っていたのか？ 嘘を吐いていたのか？ グロリアがシャルロットの後継だと。そしてテストメントであった事を」

シグナムさんが後ろからそう問い質した。ルシル君が返答する前に、グロリアが「そのルシリオンは知らないよ。だってアタシが守護神になったのって最近だし」と答えた。視線はまたルシル君へ。ルシル君は「黙っていようと思っていたんだがな」と前置きしてから説明してくれた。

「シャルは、テストメント事件の終わりと共に神意の玉座を離れたんだ。

理由としては魂の劣化。人間の魂は脆い。だから数千年以上と守護神をしてきたシャルも限界が近かった。続けられれば魂が破損し、生まれ変わること 輪廻転生が出来なくなってしまう。

そうならば永遠に無の中を彷徨わなければならない。そうなる前に、解放されたんだ。

だから、今頃はどこかの世界で普通の人間として過ごしているはずだ」

それが真実だった。シャルちゃんは人として新しい人生を過ごすために、“テストメント”から解放された。これって喜ぶべきなんだよね・・・？

「ルシル君。じゃあどうして教えてくれへんかったん？ 隠す必要ない話やる？」

「……君達に忘れないでと言っておきながら自分が君達を忘れる事になる。」

シャルはおそらくそれが辛かったんだろう。だから言わなかった、言えなかった。

それを察してやってほしい。私は、シャルのそんな葛藤を知っていたから黙っていた」

悲しそうに顔を歪めたルシル君が答えた。優しいシャルちゃんならあり得る話だった。

私達が傷つくと思っただ。約束しておいて、今度こそ本当に忘れてしまうことで。

そんなわけではないのに。私達の事を忘れるのは、生まれ変わるための通過点。

必要な事なんだ。忘れられるのは悲しいけど、それがシャルちゃんのためなんだったら、私は辛くない。

「シャルロツテの奴、馬鹿だな。そんなくらいで嫌いになんかなるかよ……」

「そうですね。たとえシャルさんがあたし達を忘れたとしても、あたし達は絶対に忘れません」

「うんっ、ティアの言う通りだよ。シャルさんを忘れるなんて出来ないよ」

「はいっ。僕も忘れません。というか生まれ変わったって言うのは祝福するべき話ですよ」

「うん。どこかの世界で人として生きて幸せになっているんだっただら、喜ぶべきだよな」

ヴィータちゃんとティアナとスバル、それにエリオとキャロの言う通りだ。

「人としてどこかで……。もしかしたらどこかで逢えるかもしれないね。」

そうしたら、わたしの成長した姿を見てもらえるかもしれない」

「イクスがお医者さんを目指すのってシャルさんの影響だもんね」

「そうなるって嬉しいですね。出来れば剣士としての能力を引き継いでもらっていいば嬉しいのですが」

「あはは。アインハルトさん、シャルさんと試合するの諦めていなかったんですね」

「生まれ変わったシャルさん、きっと強いかもしれないよね」

イクスちゃんの医者になるっていう夢は、シャルちゃんが示したと言っても過言じゃない。

ヴィヴィオやみんなも応援しているし。イクスちゃんなら夢を叶えて、きっと多くの命を救えるよ。

「もし生まれ変わったシャルロッテさんを見つけることが出来たら、絶対にホテル・アルピーノにご招待しないとね」

「うん。最高のお持て成しをご提供しないと。絶対に満足させて

やるんだから」

ルーテシアとレヴィは、シャルちゃんの生まれ変わりを早速招待する計画を進めてる。

この世界や時代に生まれ変わるわけじゃないのは解っているはずだけど。

でも、うん。解っていてもやりたいんだよね。シャルちゃんのために、何かを。

「水を差すようで本当にごめんなさいなんだけど、外のルシリオンから連絡。

スンベルの起動時間がもう限界なんだって。だから・・・」

グロリアが心底申し訳なさそうに時間切れを告げた。

そう言えば空がゆっくりと暗くなっていった。世界が閉じようとしているんだ。

「そっか。じゃあみんな。帰ろう。みんなきつと心配してる」

このスンベルへ召喚される際、私達は意識を失って倒れていた。外じゃ大きな問題になっているかもしれない。名残惜しいけど、すぐに現実へ帰った方が良いのは確か。

踵を返して出口の扉へ向かう。その途中、ヴィヴィオ達はグロリアへ感謝を告げ、手を振ってお別れを惜しんだ。

次々と扉を潜っていくみんなを見送り、最後に私とフェイトちゃんとはやてちゃん、そしてルシル君だけとなった時、後ろを振り返る。

「あつ、ルシル君！」

グロリアの隣、そこには守護神の格好をしたルシル君が佇んでいて、



私達に小さく手を振っていた。  
グロリアは涙をポロポロ流して、扉の向こうに消えていったヴィヴィオ達になおも手を大きく振り続けている。  
守護神のルシル君とグロリアに手を振り、私達も扉を潜った。  
さあ帰ろう。私達の生きるべき世界へ。

+++++Sideなのは フェイト+++++

早いものでスンベルでの一件から二ヶ月が経った。  
スンベルから戻って来た時、私とルシルはストレッチャーで医療局へ運ばれている最中だった。

つまりスンベルで色々やっている間、現実世界じゃ数分と経っていなかったって事だ。

私達が倒れた事の真相は、テストメント“界律の守護神”の事を知る母さんやクロノ達にだけ話した。

当然驚かれたけど、無事だったから良かった良かった、って結論に行きつくわけで。

まあ大きく騒がれるよりかは良いんだけど。

「ルシルパパ、遅いね。どこに行っちゃってるんだろ？」

ヴィヴィオがどこかへ行っただけのルシルの事を気に掛ける。

今、私達はミッドの首都クラナガンの次元港の待合ロビーに居る。  
昨日まではカルナージのホテル・アルピーノで合宿旅行を行っていて、今日ミッドに帰って来た。

それで、待合ロビーに着いた途端、ルシルは「少し待っていてくれ」って言ってどこかへ走って行った。

「大にしては長えよな」

「ヴィータちゃん。もう少し女の子としての慎みを持ってください」

「姐御……。せめてトイレにしては、くらいにしておかねえと」

そんな八神家の会話を聞きながら、私はある事を考える。

スンベルから帰ってからずっと考えている事で、これで何度目か判らない。

ルシルに直接聞いてもいいんだけど、今のルシルにその答えがあるのか判らないし、あつたとしても答えてくれるか判らない。

（シャルは魂の劣化でテストメントを続けられなくなった。

じゃあルシルは？ ルシルは魂じゃなくて精神だっていう話だ）

もしかしたら守護神のルシルにもそういう劣化が起きているかもしれない。

魂より精神の方が脆い気がする。だからシャル以上にかなり危うい存在なのかも。

でも神意の玉座から解放されない。解放されたら最後。ルシルは生きることの出来ない肉体に戻ることになる。

しかも精神は崩壊寸前で。もう“テストメント”になる事も出来ないだろうし。

そうなつたら“墮天使”を破壊することが出来ない。ルシルは永遠に時間凍結封印された結界の中。

シエフィリスさんとシエルさんとカノンさんの魂も永遠に“ヴァルハラ”に捕らわれたまま。

（ルシル、……守護神のルシルは本当に大丈夫なのかな……？）

「どうかしたテスタロツサちゃん。さつきから思い詰めたような顔をしているけど。」

何か不安ことがあるのなら相談に乗るわよ?」

答えの出ない、底の見えない不安。最悪の結末を想像してしまったことに後悔。

そこにシャマル先生が顔を覗きこんで、気に掛けてくれた。なのはとはやても私の様子に気付いて、

「調子悪い? だったら帰りの運転、シグナムさんに代わってもらおう?」

「それがええよ、フェイトちゃん。少し顔が青いし、無理したらアカン」

気遣いの言葉を掛けてくれた。私は・・・少し迷った後、さつきまで考えていた事を、ヴィヴィオ達に聞こえないようになのは達に告げた。

「なるほど。確かに今の守護神のルシル君って、シャルちゃんが生メンタだった時間より長く守護神をやってるはずだから、精神が劣化していてもおかしくないよね」

「精神なんて擦り切れやすいなあ。こうして生きとる私らでもストレスとかあるし。」

私らよりずっと重い問題を抱えとるルシル君がいつ・・・その、壊れてしまってもおかしくないなあ」

「しかも契約内容がまた酷いのがセイントテスト君です。もしかすると、スンベルではやてちゃん達が見たというセイントテスト君は、

すでに危うい状態だったのかも・・・」

どうだっただろう。あの時のルシルの様子を思い出してみる。

おかしな様子はなかったはず。少し元気がないようには見えただけ。

「あ、ルシルパパが戻ってきたよ。なのはママ、フェイトママ」

ヴィヴィオのしている先、ルシルが小走りで戻ってくる姿。

ルシルは一直線に私達のところへ来て、「すまない。随分と待たせてしまった」って謝る。

「遅いぞ、ルシリオン。子供たちが待ちくたびれているじゃないか」

「すまない、リエイス。ヴィヴィオ達もごめんな」

「いいえ。お気になさらないください」

「ルシルパパ、どこに行ってたの？」

「ああ、少し買い物をしていたんだ。どうしても今日中に買っておいきたくてね」

ルシルはそう言って私に振り向いて、ポケットから小さな箱を取り出した。

蒼い小さな箱をルシルは私の前に差し出してきて、

「ここに居るみんなが証人になってくれる。フェイト。私と」

箱をパカッと開けて、中身を私に見せてきた。

私の両隣りに居るなのははやてが息を呑むのが判った。



結婚だなんて早いつていつも先送りしてきた。今の関係を崩す勇気が無かったから。

でも今、目の前に居るルシルは勇気を出してくれた。私も、勇気を出さないと！



「はい。よろしく、お願い、します。ルシル」





輝ける未来への道標〜Hopeful Future〜（後書き）

レヴィ

「終わっちゃった……」

ルーテシア

「終わっちゃったね〜。ということで始まりました、レヴィルのコーナー・ザ・最終回」

レヴィ

「終わっちゃったよ……」

ルーテシア

「終わっちゃったね〜」

レヴィ

「終わっちゃ」

ルーテシア

「ストップ。確かに出番がどうしようもなく少なかったけど。見て。最後のシーン。ハッピーエンドだよ。良いなあ、プロポーズ。良いなあ、プロポーズ。」

わたしもいつかプロポーズされたいなあ？」

レヴィ

「は？ ルーテシアを嫁にやる？ ルーテシアはずっとわたしのお

姉ちゃんだもん！」

ルーテシア

「おー、レヴィが今までに見せたことないほど燃えてる。嬉しいこと言ってくれるね」

レヴィ

「ルーテシアあー。わたしはここまでだけど、完結編でも頑張ってるね」

ルーテシア

「レヴィ……。うん、完結編でも頑張る。でも、レヴィの居ない世界なんて嫌だ。」

だから……。だからレヴィがどんな形でもいいから出られるように直談判する！」

レヴィ

「ルーテシア……。う、うう、ひっく、っう、ありがとう」

ルーテシア

「当たり前だよ。わたしはレヴィのお姉ちゃんなんだから。大好きな妹のためだったら、わたしは並行世界すら支配して見せる！」

レヴィ

「うわあああ~~~~ん、お姉ちゃん~~~~ん!!」

ルーテシア

「待っててね、レヴィ。絶対に説得して見せるから！」

はい、ということでは十字架を背負いし神意の執行者はこれにて完結です。

フェイトがプロポーズを受けた後の話は、皆さんの御想像にお任せします。

ただ言えることは、ルシルとフェイトは幸せになった、ということです。

この世界でのルシルは幸せを得、フェイト達と先に進む事が出来ました。

ですが、オリジナルのルシルはまだまだ歩みを止めたまま。

その歩を進めるかどうかを記すのが、ANSUR 完結編『魔道戦記リリカルなのはANSUR』となります。

それでは皆さん、近いうちにお会いしましょう。Last t e s t a m e n t でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0049j/>

---

魔法少女リリカルなのは?十字架を背負いし神意の執行者

2012年1月1日01時56分発行